別記様式第４号（その２）

教　育　研　究　業　績　書

令和５年３月31日

氏名　大　西　　雅　博

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
器楽合奏・器楽演習（打楽器）・マーチング	マーチング、器楽合奏、打楽器、アンサンブル

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事　　項	年月日	概　　要
１　教育方法の実践例		
・器楽演習（パーカッション）	平成26年４月～平成29年３月	奈良学園大学において、マーチングバンド部の監督を務める傍ら、非常勤講師として「器楽演習（パーカッション）」の授業を行う。アンサンブルを中心に打楽器の技術を習得し、幼稚園の演奏会、オープンキャンパス等で演奏を披露した。
２　作成した教科書、教材		
・「ドラムトレーニング Vol.1～4」作曲		名古屋芸術大学音楽学部演奏学科の非常勤講師として、「器楽特殊研究」(1～4年生　21人）において、自作の「ドラムトレーニング Vol.1～4」を使用。
・ドラムライン in NUA 作曲		ドラムラインのオリジナル楽曲を作曲。
・アルメニアンダンス NUA オリジナルマーチングコンテ制作		名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァン第11回定期演奏会ステージマーチングのために、オリジナルのドリルデザインを作成。
・ボレロ NUA オリジナルマーチングコンテ制作		名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァン第12回定期演奏会ステージマーチングのために、オリジナルのドリルデザインを作成。
・メリーウィドゥ NUA オリジナルマーチングコンテ制作		名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァン第13回定期演奏会ステージマーチングのために、オリジナルのドリルデザインを作成。
・ジャグラーNUA オリジナルマーチングコンテ制作		名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァン第14回定期演奏会ステージマーチングのために、オリジナルのドリルデザインを作成。

3　教育上の能力に関する大学等の評価		
・名古屋芸術大学における授業評価	平成22年4月 ～平成29年3月	当初 3 年間のシラバス、及び学生の反応が評価され、4 年目より選択授業にも関わらず、演奏学科弦管打コースの新入生は全員履修する運びとなった。そしてその後毎年、名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァンの定期演奏会において、オープニングステージを任されることとなる。
・奈良学園大学における授業評価	平成30年4月～	人間教育学部教授に就任。 「器楽演習」「器楽合奏」「合奏指揮法」「基礎ゼミナール」「人間教育学ゼミナール」等の授業とともに、マーチングバンド部顧問を務める。
4　実務の経験を有する者についての特記事　　項		
・愛媛県吹奏楽連盟マーチング講習会講師	平成19年～ 現在に至る	平成19年9月より毎年２回、愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会が開催されている。中学校・高等学校を中心に2校から3校が選択され受講の対象となる。基本動作からフォーメーションまで、各団体の希望に応じた指導を行う。
・愛知県吹奏楽連盟マーチング講習会講師	平成25年～ 現在に至る	平成25年7より毎年、愛知県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会が開催されている。中学校・高等学校を中心に、基本動作からフォーメーションまで、各団体の希望に応じた指導を行う。
・日本マーチングバンド協会関西支部 ３D講習会講師	平成29年～ 現在に至る	兵庫県立総合体育館において、マーチン協会関西支部主催３D講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成25年～ 現在に至る	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーングコンテストの特別アドバイザーを務め全団体のDVDにアドバイスを録音する。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成16年～ 現在に至る	姫路パルナソスホール。及びたつの市総文化会館において、毎年１月にアンサンブコンサートの審査と講評を務める。
5　その他		なし

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年月日	概　　要
1　資格、免許		
・中学校教諭一級普通免許（音楽）	昭和57年 3月31日	昭五六中一普第4678号(愛知県教育委員会)
・高等学校教諭二級普通免許（音楽）	昭和57年 3月31日	昭五六高二普第5413号(愛知県教育委員会)
2　特許等		なし

3　実務の経験を有する者について特記事項 「指導実績」		
・大阪市立菫中学校マーチング講師	平成 25 年 11 月 24 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 26 回全日本マーチングコンテストにおいて、金賞受賞。
・ＩＰＵ環太平洋大学マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ部アドバイザー	平成 25 年 12 月 14 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ協会主催、 第 41 回全国大会において、大編成の部金受賞。
・大阪市立菫中学校マーチング講師	平成２６年 11 月 23 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 27 回全日本マーチングコンテストにおいて、金賞受賞。
・奈良学園大学マーチングバンド部監督	平成 27 年 2 月 14 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ協会主催、 第 14 回マーチングステージ全国大会優秀受賞。
・大阪市立菫中学校マーチング講師	平成 27 年 11 月 22 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 28 回全日本マーチングコンテストにおいて、金賞受賞。
・奈良学園大学マーチングバンド部監督	平成 28 年 2 月 21 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ協会主催、 第 15 回マーチングステージ全国大会講評特別賞受賞。
・奈良学園大学マーチングバンド部監督	平成 28 年 12 月 18 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ協会主催、 第 44 回全国大会において、大編成の部銀賞受賞。
・大阪市立菫中学校マーチング講師	平成 29 年 11 月 19 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 30 回全日本マーチングコンテストにおいて、金賞受賞。
・奈良学園大学マーチングバンド部監督	平成 29 年 12 月 17 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ協会主催、 第 45 回全国大会において、大編成の部銀賞受賞。
・奈良学園大学マーチングバンド部顧問	平成 30 年 12 月 16 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ協会主催、 第 46 回全国大会において、大編成の部銀賞受賞。
・奈良学園大学マーチングバンド部顧問	令和元年 12 月 15 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ協会主催、 第 47 回全国大会において、大編成の部銀賞受賞。
・奈良学園大学マーチングバンド部顧問	令和 2 年 12 月 19 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ協会主催、 第 48 回全国大会おいて、「グッド・パフォーマンス賞」受賞
・大阪市立堀江中学校マーチング講師	令和 3 年 11 月 21 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 34 回全日本マーチングコンテストにおいて、金賞受賞。

・奈良学園大学マーチングバンド部顧問	令和３年 12 月 12 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ協会主催、 第 49 回全国大会において、大編成の部金賞受賞。
・奈良学園大学マーチングバンド部顧問	令和４年 12 月 11 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ協会主催、 第 50 回全国大会おいて、大編成の部銀賞受賞。
４　その他		
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 25 年 8 月 10 日	愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会において、講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 25 年 8 月 18 日	愛知県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会において、講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 25 年 9 月 16 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・島根県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 25 年 10 月 20 日	島根県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会において、講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 26 年 9 月 20 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 26 年 9 月 28 日	川之江体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会の講師を務める。
・兵庫県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 26 年 11 月 8 日	武庫川樹脂大学において、兵庫県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 27 年 8 月 19 日	愛知県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会において、講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 27 年 9 月 21 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 28 年 8 月 29 日	川之江体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 28 年 ９月 19 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 28 年 ９月 24 日	西条市体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会の講師を務める。
・日本マーチングバンド協会関西支部 ３D 講習会講師	平成 29 年 3 月 5 日	兵庫県立総合体育館において、マーチング協会関西支部主催３D 講習会の講師を務める。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 29 年 8 月 24～25 日	川之江体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 29 年 8 月 27 日	愛西市立佐織体育館において、マーチング講習会の講師を務める。

・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 29 年 9 月 18 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・日本マーチングバンド協会関西支部 ３D 講習会講師	平成 29 年 11 月 4 日	奈良学園大学体育館において、マーチング協会関西支部主催３D 講習会の講師を務める。
・日本マーチングバンド協会関西支部 ３D 講習会講師	平成 30 年 ７月１日	アミティーホールにおいて、マーチング協会関西支部主催３D 講習会の講師を務める。
・平成 30 年度全国高等学校総合体育大会「東海総体」開会式のマーチングステージを演出する。	平成 30 年 7 月 30 日	三重県営サンアリーナで開催された、全国高校総体開会式のマーチングステージにおいて、メインステージの演出を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 30 年 8 月 19 日	愛西市立佐織体育館において、マーチング講習会の講師を務める。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 30 年 9 月 1 日	川之江体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 30 年 9 月 24 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	令和元年 7 月 13 日	松前町体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	令和元年 8 月 18 日	愛西市立佐織体育館において、マーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	令和元年 9 月 22,22 日	春日井市体育館において、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・日本マーチングバンド協会関西支部 ３D 講習会講師	令和元年 11 月 9 日	福島区民センターにおいて、マーチング協会関西支部主催３D 講習会の講師を務める。
・兵庫県高等学校文化連盟 高等学校総合文化祭の講評	令和元年 11 月 16 日	ベイコム総合体育館において、高校総文祭マーチングバンド部門の講評を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	令和 2 年 8 月 30 日	初の試みである、オンラインでのマーチング講習会を開催し、講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	令和 2 年 9 月 21 日	８月に引き続き、オンラインでのマーチング講習会を開催し、講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	令和 3 年 10 月 3 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	令和 4 年 8 月 23 日	松前町体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	令和 4 年 9 月 19 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。

「各大会の審査員」		
・沖縄県吹奏楽連盟 沖縄県マーチングコンテスト審査員	平成 25 年 9 月 22 日	沖縄コンベンションセンターにおいて、沖縄県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 26 年 1 月 12 日	姫路パルナソスホールにおいて、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・福岡県吹奏楽連盟 福岡県マーチングコンテスト審査員	平成 26 年 6 月 15 日	サンパレス福岡において、福岡県マーチングコンテストの審査員を務める。
・沖縄県吹奏楽連盟 沖縄県マーチングコンテスト審査員	平成 26 年 9 月 15 日	沖縄コンベンションセンターにおいて、沖縄県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 27 年 1 月 12 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・福岡県吹奏楽連盟 福岡県マーチングコンテスト審査員	平成 27 年 6 月 14 日	サンパレス福岡において、福岡県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 27 年 1 月 10 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・福岡県吹奏楽連盟 福岡県マーチングコンテスト審査員	平成 28 年 6 月 12 日	サンパレス福岡において、福岡県マーチングコンテストの審査員を務める。
・沖縄県吹奏楽連盟 沖縄県マーチングコンテスト審査員	平成 28 年 9 月 10 日	沖縄コンベンションセンターにおいて、沖縄県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 28 年 1 月 8 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・沖縄県吹奏楽連盟 沖縄県マーチングコンテスト審査員	平成 29 年 9 月 9 日	沖縄コンベンションセンターにおいて、沖縄県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 30 年 1 月 7 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・四国吹奏楽連盟 四国マーチングコンテスト審査員	平成 30 年 10 月 8 日	西条市体育館において、四国マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 31 年 1 月 13 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・日本マーチングバンド協会北陸支部 マーチングバンド北陸大会審査員	令和元年 11 月 4 日	福井県民体育館において、マーチングバンド北陸大会の審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	令和 2 年 1 月 12 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・日本マーチングバンド協会北陸支部 マーチングバンド北陸大会審査員	令和 2 年 10 月 28 日	オンラインで、マーチングバンド北陸大会の審査員を勤める。
・三重県吹奏楽連盟 三重県マーチングコンテスト審査員	令和 3 年 11 月 3 日	上野市ゆめドームにおいて、三重県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	令和 4 年 1 月 9 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。

・兵庫県吹奏楽連盟 兵庫県マーチングコンテスト審査員	令和４年 ９月 11 日	グリーンアリーナ神戸において、兵庫県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	令和５年 １月８日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（機関紙投稿） 1　どうなる？今後の部活動	単著	平成26年 10月21日	教育PRO	自らの経験を基に、今後の部活動のあり方について考察する。
2　「勝つ」ということ	単著	令和3年11月	日本部活動学会会報 第１２号	部活動に関わる様々な見地からの記事をリレー形式で掲載する～部活動古今東西～に、部活動の意義について提言する。
（学術論文） 1　日本におけるマーチングの未来像	共著	平成 25 年 ３月	環太平洋大学研究紀要 2012 年度 vol.2 (第７号)	日本独自のマーチングにつて、今後の方向性を考察し、提言する。
2　新しい打楽器練習法	単著	平成 26 年 12 月１日	人間教育学研究第 2 号	教育現場における打楽器の技術を、より短時間に能率よく習得する方法を提言する。
3　新しいマーチング指導法	単著	平成 27 年 12 月１日	人間教育学研究第 3 号	日本におけるマーチングの現状を検証し、悪しき既成概念を排除するための指導法を考察する。
4　マーチングにおける基本動作の効率的練習法	単著	平成 28 年 ３月 19 日	奈良学園大学紀要第４集	従来の概念にとらわれず、教育現場における効率的な指導法について、検証し提言する。
5　スクールバンドにおける指揮法への一考察	単著	平成 28 年 12 月１日	人間教育学研究第 4 号	木管楽器・金管楽器・打楽器の短時間練習法と、合奏指導における効果的な指揮法を考察する。
6　演奏の妨げとなる過緊張（上がり）の軽減について	共著	平成 31 年 ３月 10 日	奈良学園大学紀要第 10 集	俗に言う「あがり症」について検証し、音楽の授業を通して、過緊張を軽減する方法を提言する。
7　意欲的に取り組むための音楽科指導法の一考察	共著	平成 31 年 ３月	奈良学園大学オンラインジャーナル第２巻第２	音楽の授業における歌唱指導・合唱指導の難しさを検証し、生徒の自主性を高めるための指導法を考察する。
8　新しい時代に向かう鑑賞教育	共著	令和元年 ９月	奈良学園大学紀要第 11 集	鑑賞教育の実態について、問題提起と共に、今後の方向性について考察する。
9　音楽教科における実践的合奏指導法	共著	令和２年 ３月	奈良学園大学紀要第 12 集	基本練習を核とした、効率的な器楽指導のあり方について考察する。

（研究ノート） 1　部活動の経営に関する研究	単著	平成 29 年 3 月 10 日	奈良学園大学紀要第 6 集	中学校における部活動経営と、大学生の社会性を高めるための組織づくりを比較し、その関連性を研究する。
2　音楽科における合唱のための発声練習法	共著	令和元年 9 月	奈良学園大学オンラインジャーナル人間教育　第２巻第８号	短期間で効果的な指導法について、実践結果をもとに提言する。
（オリジナルマーチングコンテ制作） 1.　松山市立津田中学校吹奏楽部	単著	平成24年6月	松山市立津田中学校吹奏楽部	アメリカングラフィティーをテーマにマーチングを構成・演出。37 名を対象にオリジナルのマーチングコンテを制作。全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、第 25 回全日本マーチングコンテストにおいて、銀賞受賞。
2.　大阪市立菫中学校吹奏楽部	単著	平成25年～29年	大阪市立菫中学校吹奏楽部	ジャズをテーマに構成演出。 全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、全日本マーチングコンテストに 4 回出場し、優秀な成績を収める。
3.　平成30年度全国高等学校総合体育大会「東海総体」開会式	単著	平成30年7月	三重県高等学校合同バンド	平成 30 年度全国高等学校総合体育大会「東海総体」のメイン開会式において、マーチングコンテを作成し、ステージの演出を務める。
4.　大阪市堀江中学校吹奏楽部	単著	令和 3 年 11 月	大阪市堀江中学校吹奏楽部	アフリカをテーマにマーチングを構成・演出し、全国大会初出場を果たす。全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、第 34 回全日本マーチングコンテストにおいて、金賞受賞。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和５年３月３１日
氏名　住本　克彦

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
生徒指導論、教育学	生徒指導、心理学、教育学、道徳指導、教育相談、学校カウンセリング、進路指導、いのちの教育　等

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 環太平洋大学における授業実践	平成 21 年度 ～平成 27 年度	映像機器活用による教育プログラムの実践や、構成的グループ・エンカウンター等のグループ活動の導入を図り、学生の理解力が向上するように工夫した。また、参加型・体験型の授業展開を中心とし、また毎時間、具体的な事例を通して考えさせる学習形態を取り入れることで、学生の実践力を高め、理解力を深めることができるように工夫した。さらに、毎時間学生に授業の感想を含む、小テストを実施し、学生全員にコメントをフィードバックし、学生一人一人に適した双方向での個別指導も実践した。
新見公立大学における授業実践	平成 28 年度 ～平成 31 年度	ＩＣＴ機器活用による教育プログラムの実践や、筆者が専門である（「構成的グループ・エンカウンター公認リーダー」の有資格者）構成的グループ・エンカウンターのグループ活動を活用し、学生の理解力やコミュニケーション能力が向上するように工夫を重ねた。このような参加型・体験型の授業展開を中心とする学習形態を取り入れることや具体的事例を基に考えさせる実践的授業展開を心がけることで、学生の実践力や理解力を深めることができた。さらに、毎時間学生に授業の感想を含む、小テストやレポートを実施し、次の週には学生全員に教師のコメントをフィードバックすることで、学生一人一人に適した双方向での個別指導も重ねた。
奈良学園大学における授業実践	令和２年度 ～現在に至る	ＩＣＴ機器活用による教育プログラムの実践（オンライン授業と対面式授業の併用）や、構成的グループ・エンカウンターのグループ活動を活用し、学生の理解力等が深まるように工夫を重ねた。コロナ禍ではあったが、可能な限り参加型・体験型の授業展

		開を中心とする学習形態を取り入れることや具体的事例を基に考えさせる実践的授業展開を心がけることで、学生の実践力・理解力を深めることができた。さらに、今まで継続してきた、毎時間学生に授業の感想を含む、小テストやレポートを実施し、次の週には学生全員に教師のコメント等の評価をフィードバックすることで、学生一人一人に適した双方向での個別指導も重ねている。
２　作成した教科書、教材 「次世代の教育原理」（大学教育出版）【再掲】	平成 25 年度	環太平洋大学教育経営学科の授業、「教育相談の理解」「生徒指導・進路指導論」等で使用し、実践的内容で、わかりやすいと大変好評であった。
「教育原理　事始め」（大学教育出版）【再掲】	平成 31 年度	新見公立大学看護学科の授業、「教育相談の理解」「生徒指導・進路指導論」等で使用し、好評であった。
「新しい視点から見た教職入門」（大学教育出版）【再掲】	平成 31 年度（令和 3 年度第 2 版改訂・令和 5 年度第 3 版改訂）	「教職入門」の教科書を作成し、第 1 部第 6 章「教育制度の改革」（pp. 125-134）、「アクティブ・ラーニング」（pp. 135-136）、第 2 第 6 章「教員採用試験」（pp. 267-280）を執筆し、新見公立大学授業「教育学総論」「教育実習・事前事後指導」において使用した。奈良学園大学においても、「教職入門Ａ（初等）」、「教職入門Ｂ（中等）」の科目で使用し、好評であった。
「プロフェッショナルをめざす保育者論」（教育情報出版）【再掲】	平成 31 年度（令和 5 年度改訂）	新見公立大学健康保育学科の授業、「保育者論」等で参考書として使用した。『子どもの保健と安全』教育情報出版第 1 章・第 4 節：「地域における保健活動と子ども虐待防止」について執筆。虐待をいかに 防止し、早期に適切な対応をしていくかについて、そのシステム構築の重要性について詳述した。また、第 9 章・第 7 節：「子どもと悪性腫瘍」についても執筆。保育者・教育者が、子どもの病気についての知識を持つことの重要性について強調。がん教育の推進についても提唱した。実践的な内容で、理解しやすいと大変好評であった。
「エンカウンターでいじめ対応が変わる・教育相談と生徒指導のさらなる充実をめざして」（図書文化社）【再掲】	平成 31 年度	新見公立大学健康保育学科「教育学総論」・看護学科「教育相談」「生徒指導論」でテキストとして作成した。いじめ予防保育・教育展開の実践的著書である。住本は編著者である。序章１・２（pp. 10-21）、第 1 章第 3 項（pp. 38-41）、同第４項（pp. 42-

		47)、同コラム 2(pp. 56-57)、第２章第１項(pp. 70-75)、同第２項(pp. 76-79)、同第４項(pp. 84-113)、同コラム 4(pp. 114-115)、第３章第１項(pp. 118-123)も執筆。実践的内容のため、全国の教育現場からの問い合わせも多数ある。「学校園等で教育相談を充実させる手立て」「生徒指導実践におけるいじめ予防の実際」「いじめを起こさないクラスづくりの実際」等を詳述した。また、組織的対応の重要性、早期発見・早期対応のシステム作りの留意点についても具体的に解説した。奈良学園大学においても、「生徒指導・進路指導論Ａ（初等)」、「生徒指導・進路指導論Ｂ（中等)」の科目で使用している。
「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 921 号『相手も自分も大切にする話し方ってなに？』」（健学社）【再掲】	令和 2 年 11 月	開発的カウンセリング技法のアサーション・トレーニングの具体例（思いやりを持ったコミュニケーションの取り方）をビジュアル教材として示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材通巻第 922 号『声のかけ方、注意の仕方で伝わり方が変わる！』」（健学社）【再掲】	令和 2 年 11 月	開発的カウンセリング技法のアサーション・トレーニングの具体例（自他を大切にしたコミュニケーションの取り方）をビジュアル教材として示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材通巻第 923 号『自分に合ったストレス解消法を見つけよう』」（健学社）【再掲】	令和 2 年 11 月	開発的カウンセリング技法のストレス・マネジメント教育の具体例（リラクゼーション法の実践）をビジュアル教材として示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 933 号『自尊心を高めるってどういうこと？』」（健学社）【再掲】	令和 3 年 3 月	自尊感情を実感することの大切さ、それを育てるポイントについて、ビジュアル教材として示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材通巻第 934 号『自尊心を育てよう！』」（健学社）【再掲】	令和 3 年 3 月	自尊感情を育てるための実践例をビジュアル教材として示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）

「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材通巻第 935 号『リフレーミングをやってみよう！』」（健学社）【再掲】	令和 3 年 3 月	短所を長所に読み替えるリフレーミング技法について、ビジュアル教材として示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 956 号『怒りの気持ちどうしたらいい？』［小学校用］（健学社）【再掲】	令和 4 年 1 月	開発的カウンセリング技法のアンガーマネジメント法の具体例（怒りを感じた時の対処法について：別のものに視点を向ける・誰かに相談する等）をビジュアル教材（Ｑ＆Ａ方式）としてイラスト入りで示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 957 号『ルールがある意味とアサーティブな話し方』［小学校用］（健学社）【再掲】	令和 4 年 1 月	開発的カウンセリング技法のアサーション・トレーニングの具体例（ルールがある意味：廊下を走らない等についてについて「攻撃的な伝え方」・「受動的な伝え方」・「アサーティブな伝え方」それぞれどの伝え方が望ましいかを考えさせる例）をビジュアル教材としてイラスト入りで示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 958 号『怒りのコントロール方法』［中高校用］（健学社）【再掲】	令和 4 年 1 月	開発的カウンセリング技法のアンガーマネジメント法の具体例（怒りをコントロールする方法について：6 秒数えて深呼吸・その場を離れる・怒りを点数化する等）をビジュアル教材としてイラスト入りで示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 959 号『ルールがある意味とアサーティブな話し方』［中高校用］（健学社）【再掲】	令和 4 年 1 月	開発的カウンセリング技法のアサーション・トレーニングの具体例（ルールがある意味：食事中の黙食等について「攻撃的な伝え方」・「消極的な伝え方」・「アサーティブな伝え方」それぞれどの伝え方が望ましいかを考えさせる例）をビジュアル教材としてイラスト入りで示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 968 号『心と体の健康観察をしよう！』」［小学生用］（健学社）【再掲】	令和 4 年 8 月	「困ったことがあったとき、付箋に書き出して気持ちの整理をする」「一人で抱え込まないで誰かに相談してみよう（気の合う人探し等）」「やる気が起き

		ないときは、深呼吸して『私がんばっているよ！』のメッセージを送る！」「プラス思考とスモールステップで乗り切ろう！」他、『心と体の健康観察をしよう！』のテーマで、小学生対象の保健教材を作成した。
「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 969 号『日頃からできる心の健康観察法』」［小学生用］（健学社）【再掲】	令和 4 年 8 月	「自分なりのストレス発散法を見つけよう！（音楽を聴く等)」「情報をコントロールしよう！」「食事をきちんと摂ろう」「自分が嫌になったとき、脱出可能だと自身を信じる（誰にでもあることだと脱出可能だと信じる等)」他、『日頃からできる心の健康観察法』のテーマで、小学生対象の保健教材を作成した。
「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 970 号『心と体の健康観察をしよう！』［中高校生用］（健学社）【再掲】	令和 4 年 8 月	「不安なときは、気晴らしスイッチを探してみよう！」「孤独感を感じたときは、『気の合う人探し』をしよう」「困ったことがあったとき、付箋に書き出して気持ちの整理をする」「一人で抱え込まないで誰かに相談してみよう」他、『心と体の健康観察をしよう！』のテーマで、中高校生対象の保健教材を作成した。
「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材通巻第 971 号『日頃からできる心の健康観察法』」［中高校生用］（健学社）【再掲】	令和 4 年 8 月	「しんどいときは、自分にプラスメッセージを送ろう！」「自分なりのストレス発散法を見つけよう」「食事は朝昼晩 3 食をきちんと摂ろう」「自分自身にプラスのメッセージを送ろう！」「人と繋がろう（話してみよう）！」他、『日頃からできる心の健康観察法』のテーマで、中高校生対象の保健教材を作成した。
『新しい視点からの教育社会学』大学教育出版：令和 4 年 3 月発刊【再掲】	令和 4 年 3 月発刊	令和 3 年度中の執筆と編集を終える〈テキストとしての活用予定・A5 判・200 頁〉第 1 章：教育社会学のアプローチ　第 2 章：教育社会学から見たカリキュラム　第 3 章：キャリア教育と教育社会学　第 4 章：現代社会における高等教育　第 5 章：福祉の視点から見た教育社会学　第 6 章：多様化する家族のあり方　第 7 章：不登校・いじめ問題　第 8 章：子どもとメディア利用　第 9 章：特別支援教育　第 10 章：マイノリティーとジェンダー　第 11 章：自殺予防の視点から　第 12 章：教育社会学の課題と展望　以上の 12 章立てで、住本は、7 章･12 章執筆担当予定。

『コンパス教育相談』建帛社：令和４年３月発刊【再掲】	令和４年３月発刊	「教育相談」テキストとしての活用・B5 判・200 頁〉第 1 章:教育相談の意義　第 2 章: カウンセリングの理論と実際　第 3 章: 子どもの発達と教育相談　第 4 章: 教育相談におけるアセスメント　第 5 章: 子どもの問題行動と教育相談（事例から考える）　第 6 章: 開発的カウンセリング技法の活用　第 7 章: 保護者支援と教育相談　第 8 章: 校内システムと教育相談　第 9 章: 医学と教育の連携　第 10 章: 学校の危機対応　第 11 章: 教師のメンタルヘルスと教育相談　第 12 章: 専門機関との連携と教育相談　以上の 12 章立てで、住本は、1 章･4 章･6 章執筆担当。
『教職ライブラリ　教職入門－教育学のエッセンスから学ぶ－』建帛社：令和５年３月発刊【再掲】	令和５年３月発刊	「教職入門」テキストとしての活用・B5 判・132 頁〉第 1 章: 第 1 章：教育への基本的視座　第 2 章：日本教育史　第 3 章：西洋教育史　第 4 章：教員の身分と服務　第 5 章：教員の資質向上と研修　第 6 章：教育改革の現状　第 7 章：教員としての仕事と生きがい　第 8 章：学級経営・ホームルーム経営の基本　第 9 章：生徒指導の実際　第 10 章：教育実習，教育実習事前・事後指導，教職実践演習　第 11 章：教員採用試験について　第 12 章：教員のメンタルヘルス　以上の 12 章立てで、住本は、1 章･11 章･コラム（1 章・3 章・8 章・11 章）執筆担当。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 環太平洋大学における学生による授業評価アンケート結果	平成 25 年度	双方向授業や、事例を通して学ぶ学習形態、参加型・体験型学習形態等を取り入れ、全担当科目で９５点以上の得点を上げ、学生の満足度が非常に高い（『平成 25 年度 大学最優秀教員賞』受賞。『平成 26 年度　学生による授業評価「受講生 100 人以上の講義部門」最優秀教員賞』受賞)。
環太平洋大学採用時等における学長からの評価	平成 25 年度	心理士としての実務経験も豊富であり、兵庫県教育委員会の指導主事としての研修指導もあり、小学校教師としての具体的な学級経営力も高く、小学校教員を養成する学級経営学科の教員としては、教育力が高く、その活躍が期待できる。

環太平洋大学における次世代教育学部　教育経営学科長としての学長からの評価	平成 25 年度～平成 27 年度	教育経営学科長として、学科をまとめ、主に教員を目指す学生のために、「人間力」「教育力」「国際力」を高め、資質の高い教員を育成した。平成 25 年度 公立学校教員採用試験に 30 名を合格させるチーム力も備えている。
環太平洋大学理事長からの評価	平成 26 年	教職センターを中心として、次世代教育学部をまとめ教員採用のための準備カリキュラム実施し、平成 26 年度教員採用試験の 1 次試験の採用者を、延べ人数で 100 人以上出した。リメディアル教育を構築してきた組織力を評価する。
公立大学法人　新見公立大学　新見公立短期大学理事長・学長からの評価	平成 28 年度～平成 31 年度	前任校からの学科長経験を生かし、幼児教育学科長として、学科運営で手腕を発揮している。平成 31 年度からの短大の 4 年制への移行でも本学組織の中核となって事業を進めた。兵庫県教育委員会の主任指導主事としての研修指導経験（行政・事務経験も豊富）もあり、公立学校教師としての学級経営力・生徒指導力・教育相談力も高く、保育教諭を養成する幼児教育学科長・健康保育学科長（両学科長兼務）として、当該教員採用以降の平成 28 年度～平成 30 年度も進路決定率 100%を達成した（例年ほぼ 100％が保育者採用）。組織運営力の高さはもちろんのこと、学生からの信頼も厚く、授業力も高く、本人担当の授業教科では、学生授業アンケートでは常に、80％以上が大変満足しており、平成 30 年度の「保育者論」では、「本授業内容については大変満足している」の回答 100％を達成している。平成三一年度、短期大学を四大化する中核となっての功績も評価したい。さらなる活躍が期待できる。
奈良学園大学における学生による授業評価アンケート結果	令和２年度～現在に至る	対面式とオンライン授業の併用の中においても事例から学ぶ学習形態や参加型・体験型学習形態、学生全員にコメントを書く双方向授業等を取り入れ、全担当科目で平均点以上の授業評価結果[5 点満点で、4.6 点以上の満足度得点。令和元年度後期 15 時間学生授業アンケート結果：82 人受講科目は、「4.66（「総合的に満足している」項目：5 段階評価）」]で学生の満足度も非常に高い。その後も、「4.660」～「4.85」で推移している。

奈良学園理事長からの評価	令和２年度 ～現在に至る	生徒指導、教育相談等の専門性を活かし「2020 年度 奈良学園 いじめ問題対応教員研修」講師等も担当、奈良文化高等学校、奈良学園中学校・高等学校、奈良学園小学校、奈良学園幼稚園、奈良学園登美ヶ丘中高等、学園全体の教育実践の充実に寄与できる得がたい人材である。令和 4 年度より「学園共同研究（「いじめ防止・対応等、教職員研修プログラム」の開発に関する研究－『学校法人奈良学園』における『教育相談活動（生徒指導含む)』のネットワーク強化－）も採択し、学園全体の研究教育活動も中心となってリードしている。
奈良学園大学学長からの評価	令和２年度 ～現在に至る	今までの専門職・役員等の経験（公立大学学科長・新見市教育委員等）を活かし、大学中期計画策定委員会　等において自主的に建設的意見を述べ、学部運営はもとより大学運営を支援している。人間教育学部人間教育学科員〈小学校専修のリーダー〉として、「人を支える人づくり」運営に全力で協力している。令和 3 年度より「大学評議会・評議員」「小学校専修長」、令和 4 年度より「自己点検評価委員会・委員長」「保育教職課程委員会・副委員長」「財務委員会・副委員長」「小学校専修長」として大いに活躍している。

４　実務の経験を有する者についての特記事項 文部科学省研究指定「社会人基礎力育成カリキュラム開事業」に係る Q-U 結果分析・各担任面談」「講師」	平成 25 年度	各担任からは、検査結果をどのように読み取ればいいか、それを次年度の活かせるような適切なコメントをもらったと高評価を得た。
岡山市教育委員会主催「共に成長し合う学級集団づくり推進事業：研究モデル校　岡山市立竜操中学校及び同中学校区における市立小学校 3 校」「講師」	平成 25 年度	生徒指導上課題の山積している中学校区の生徒指導、教育相談への指導助言者として、学校現場、特に道徳教育を核として学級経営に関して話した。
岡山県立東岡山工業高等学校主催事業『思春期サポート事業』講師（スクールカウンセラー）：年間 12 回	平成 25 年度	『思春期サポート事業』として、継続的に学校に入り「キャンパスカウンセラー」を務めた。特に不登校生徒の面談においては、100％再登校できた。
兵庫県稲美町教育委員会主催事業「稲美町生きる力を育む小・中連携推進委員」『副委員長』	平成 25 年度	稲美町の各学校園の生徒指導・教育相談をサポートした。
兵庫県立上郡高等学校主催「文部科学省研究指定『社会人基礎力育成カリキュラム開発事業』における運営指導委員会」「外部委員・講演会講師」	平成 25 年 5 月	日常的な指導だけでなく、長期的なカリキュラム開発を中心になって進めた。
兵庫県立こどもの館主催「カウンセリング研修 出張講座「講師」（会場：兵庫県立但馬長寿の郷（対象は、教員、保育士、保健師、児童福祉施設、教育相談施設の相談員　等）	平成 25 年 5 月	人間関係力を高めるカウンセリング技法－構成的グループ・エンカウンターの活用－について、具体的実践的に学べたと、70 名の受講者の高評価を得た。
兵庫県稲美町立加古小学校主催「稲美町立加古小学校校内研修会「自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点について」「講師」（稲美町立加古小学校）	平成 25 年 6 月	自尊感情を高めるための小学校の発達段階に応じた指導上の留意点について、すぐに実践できる、具体的な研修内容であった。特に小学校高学年の児童理解が自尊感情に大きな影響を与えると指導した。
兵庫県教育委員会・播磨西教育事務所主催「播磨西（中播磨地区）生徒指導研修協議会「講師」（会場：姫路市勤労市民会館）	平成 25 年 6 月	小・中・高・特別支援学校教職員 110 名を対象に、『いじめの未然防止、早期発見、早期対応について-積極的な生徒指導の推進-』で講師を務めた。
広島県立教育センター主催「 専門研修講座『学級（ホームルーム）経営【そこが知りたい！つながる学級（ホームルーム）づくり】講座：児童生徒理解に基づいた学級（ホームルーム）経営と保護者との信頼関係づくり』」「講師」（広島県立教育センター）	平成 25 年 6 月	小・中・高・特別支援学校教職員 80 名を対象に、『児童生徒理解に基づいた学級（ホームルーム）経営と保護者との信頼関係づくり』のテーマで講師を務めた。保護者にも具体的でわかりやすい内容で、学校ですぐに実践したいと、受講者から好評であった。
福崎町立福崎東中学校主催「生徒指導校内研修会：生徒理解とアイチェックの活用についてⅠ」「講師」（福崎町立福崎東中学校）	平成 25 年 7 月	福崎町立福崎東中学校教職員 50 名を対象に、『生徒理解とアイチェックの活用について』の講師を務め、分析結果、今後の手立ての指導助言を重ねた。

兵庫教育大学大学院「学校教育研究科心の教育実践コース専門科目：キャリア教育実践プログラムの開発：非常勤講師（[ストレート対象授業（1 限目）、現職院生対象授業（2 限目）夜間コース対象授業（7 限目）（サテライト）]担当	平成 25 年 7 月	キャリア教育実践プログラムの開発『エンカウンターによるキャリア教育』」のテーマで「講師」を務めた。キャリア教育を進める際、エンカウンター技法を活用することで、児童生徒の自己理解が進み、教師自身のコミュニケーション力も高めると論じた。
明石市教育研究所主催「事務職員初任者等研修講座：「講師」（明石市教育研究所）	平成 25 年 7 月	『コミュニケーション能力を高めるために』のテーマで講師を務めた。
兵庫県内教育研究所連盟　第 1 回教育相談研究協議会「講師」（会場：尼崎市立教育総合センター）対象：兵庫県内教育研究所長	平成 25 年 7 月	「教育相談からみたいじめ問題とその対応」の研究協議会の講師を務めた。教育相談と道徳教育からのアプローチが好評だった。
兵庫県西宮市教育委員会主催「『学級経営研修』「講師」（会場：西宮市立総合教育センター）	平成 25 年 7 月	カウンセリング技法と道徳教育を活用した学級づくりー開発的カウンセリング技法や心理テストの実践的活用法を学ぶー」の指導をした。
明石市教育研究所・明石市立藤江幼稚園主催「教職員研修会」「講師」	平成 25 年 7 月	「教員の資質向上について」の講演を務めた。絵本の紹介など体験を通して指導した
姫路市市立安室東小学校主催「不登校防止校内研修会」「講師」（姫路市市立安室東小学校）	平成 25 年 8 月	「未然防止と初期対応・事例研究会」の講演を務めた。不登校防止を道徳教育と関連付けて話した
・前半：倉敷市立児島中学校主催「校内研修会」「講師」（会場：倉敷市立児島中学校）・後半：岡山市立灘崎小学校主催「校内研修会」「講師」（会場：岡山市立灘崎小学校）]	平成 25 年 8 月	岡山県からの依頼で、前半は『 総合質問紙調査「アイチェック」を活用した学級づくり 』を指導し、後半は『 総合質問紙調査「アイチェック」を活用した学級づくり 』研修会」の指導をした。
兵庫県相生市立若狭野小学校主催「教職員研修会」「講師」（相生市立若狭野小学校）	平成 25 年 8 月	「自他の肯定感を高め、仲間と共に伸びる児童の育成-カウンセリング技法を活用して」を講演した。自他の肯定感を高め参加者が親密になった。
西脇市教育委員会主催「夏季集中円熟期教職員研修会」「講師」（生涯学習まちづくりセンター大ホール）	平成 25 年 8 月	『ストレス・マネジメントー学校におけるストレス・マネジメント教育の実際ー』」の講師を務めた。実践的内容でよかったと好評であった。
赤磐市教育委員会主催「 赤磐市立高陽中学校ブロック研修会」「講師」（会場：赤磐市立中央図書館：赤磐市立山陽小学校・山陽西小学校・高陽中学校：教職員 100 名）	平成 25 年 8 月	「自己肯定感の育成をもとに学力向上を図る」の講師を務めた。生徒指導の困難な中学校区であり、喫緊の課題が山積しているが、自己肯定感アップを生徒指導の一環として捉えたいと意見が出た。
鳥取県教育委員会主催「hyper-QU 活用研修会」「講師」　（会場：伯耆しあわせの郷）	平成 25 年 8 月	「いじめ問題の解消につながる hyper-QU の活用の仕方」の講演をした。学級のアセスメント法の実際

		を学べる内容だった。
鳥取県教育委員会主催「『子どもたちの社会性を育む事業』地区別研修会」「講師」（講義・指導助言）（会場：①鳥取市立稲葉山小学校　②鳥取市立中ノ郷中学校）	平成 25 年 8 月	いじめ問題「『子どもたちの社会性を育む事業』地区別研修会：①子どもの居場所を確かなものにする学級経営－hyper-QU の活用を通して－②心の教育を通した集団づくりーハイパーQU を活かしてー」の講師を務めた。学級のアセスメント法、hyper-QU の実際を学ぶ研修会だった。
岡山市教育研究研修センター主催「 岡山市教職員研修講座」「講師」会場：岡山市教育研究研修センター・対象：岡山市小・中・高等学校教職員 50 名対象	平成 25 年 8 月	「学級集団アセスメント研修講座」において講師を務めた。学級集団アセスメントの実際について、演習を通じて理解することができた、教育現場へ持ち帰り広げたい等、受講者に大変好評であった。
尼崎市立教育総合センター主催「 道徳教育研修講座（１）:「講師」（尼崎市立教育総合センター）	平成 25 年 8 月	『命の大切さ』を実感させる道徳指導の在り方について考えるー」において講師を務めた。
山梨県立都留高等学校主催「高校生への授業・講演」「講師」（対象者：全校生　710 名）］	平成 25 年 9 月	「体験を通して学ぶ『命の教育』－『アイチェック』を通して考える互いを認め、高め合う人間関係の構築についてー」において講師を務めた。
千葉県立幕張総合高等学校主催研修会「講師」（会場：千葉県幕張高等学校・対象者：教職員 70 名）	平成 25 年 10 月	「アイチェック」を活用した学級づくりー「心の教育」をベースにしてー」において講師を務めた。
岡山県立倉敷南高等学校主催「教育相談・人権教育教職員研修会」「講師」（会場：岡山県立倉敷南高等学校）	平成 25 年 10 月	『人権教育をベースにした教育相談の進め方ーカウンセリング技法を活用してー』」において講師を務めた。カウンセリング技法の実際を学ぶ研修だった
広島県立教育センター主催「専門研修講座『学校経営【組織の活性化に向けた学校づくり】講座」「講師」（広島県立教育センター）	平成 25 年 10 月	「一人一人のやる気と能力を引き出すために」をテーマに講師を務めた。組織を活性化させるための具体的手立てについて、講演した。
明石市人権教育協議会・就学前教育部会主催「平成講演会 人権教育を基盤にした『命の教育』の推進」「講師」	平成 25 年 10 月	幼稚園でのお誕生会が命の教育であり、道徳性の芽生えに繋がると再確認した講演である。命にかかわる絵本の読み聞かせの継続の意義を論じた。
兵庫県伊和高等学校主催「『高校生心のサポートシステム実践・研究発表会」「講師」（会場：兵庫県伊和高等学校）	平成 25 年 10 月	「不登校支援の在り方を考えるー学級づくりをテーマとしてー」ついて講演し、不登校生徒への支援の実際を理解することができたと好評であった。
赤磐市教育委員会主催「赤磐市子育て講座立高陽中学校ブロック研修会」「講師」（会場：赤磐市立山陽小学校）	平成 25 年 10 月	「自己肯定感の育成をもとに学力向上を図る」において講師を務めた。ＰＴＡ等職員 70 名が対象であったが、認める子育て法が実感できた等、高い評価を得た。
兵庫県立こどもの館主催「家庭教育相談員パワー	平成 25 年 11	「構成的グループ・エンカウンターの理論と実際」

アップ講座『カウンセリング研修会』」「講師」（会場：兵庫県立こどもの館）	月	について講師を務めた。「温かい人間関係の中で、自己理解や信頼関係を進め、深めることができた」等、受講者自身がカウンセリングの効果を納得できた。
兵庫県三木市教育委員会主催「同和教育　伝承講座」「講師」（会場：三木市立教育センター）対象：三木市小・中学校教職員 70 名	平成 25 年 12 月	「人権教育をベースにしたいじめ・不登校の未然防止について」について講演した。いじめ・不登校の未然防止を道徳教育と関連付けながら説明した。
福崎町立福崎東中学校主催「生徒指導校内研修会」「講師」（福崎町立福崎東中学校）対象：教職員 50 名	平成 25 年 12 月	『生徒理解とアイチェックの活用についてⅡ』のテーマで講師を務めた。各担任へ個別に①１学期との比較　②２学期の分析結果　③今後の指導の方向性等、指導助言を行った。
兵庫県丹波市立神楽小学校主催「丹波市立神楽小学校校内研修会『支援を要する児童の支援について』」「講師」	平成 25 年 12 月	教職員を対象に『支援を要する児童の支援について』のテーマで、事例研究会の講師を務めた。「参加者が元気になる事例研究会だった」等の評価を得た。
兵庫県立上郡高等学校主催「文部科学省研究指定『社会人基礎力育成カリキュラム開発事業』に係るインターンシップ成果報告会・講評会及び研究協議（第 3 回運営指導委員会分科会）」「講師」	平成 24 年度～平成 26 年度	年度を追うごとに参加の生徒は、社会人として働く意味が理解できてきており、教職員からは「適切な指導助言により、昨年度より効果の上がったインターンシップができる」等の意見が出た。
科学研究費基盤研究（B）（平成 24 年度～平成 26 年度）「いのちの教育カリキュラムの開発研究」	平成 25 年度	研究分担者として、「『いのちも教育』予備調査から見えてきたもの―児童・生徒のいのちに対する意識の実態―」を調査分析した（代表：梶田叡一）
石川県教育委員会・石川県教育センター主催「平成 25 年度石川県教育センター担当者研修講座（講義・演習）「講師」３回（会場：県内 3 か所、対象：小・中・高・特別支援学校教職員 900 名］	平成 25 年度	『いじめ問題対策チーム対応力向上講座』：いじめの未然防止と初期対応」での講師を務めたが、受講生からは質問が活発に出、高い評価を得た。
NPO 日本教育カウンセラー協会主管・愛媛県教育カウンセラー協会主催「教育カウンセラー養成講座基礎コース：『公開講座：ひとりひとりを大切にする集団づくりー対話のある授業、不登校・いじめ・虐待などの諸問題に対応するためにー」「講師」（会場：松山市総合コミュニティセンター）	平成 25 年度	教育カウンセラー養成講座の講師を務めた。９０名の参加者からは、「体験を通して自己発見することが多く、自己理解が進んだ」「参加型・体験型の研修で、受講者が互いにリレーションを形成しながら、めあてに迫ることができた」等の意見が多く、高評価を得た。
兵庫県情緒障害教育研究会主催「兵庫県情緒障害教育研究大会　尼崎大会「講師」（会場：あましんアルカイックホール・尼崎市立成良中学校）	平成 25 年度	「不登校傾向のある子供の理解と支援」で、助言と講師を務め、「心を耕す道徳との関連した具体的な実践例を紹介してもらった」等の感想が多く出た。
日本教育新聞社主催「『教育セミナー関西 2013　－教師が変われば、子ども・学校・地域が変わる-』	平成 26 年度	分科会=特別支援・カウンセリング、支援するということを問う　総括シンポジウム「姫路の教育から

●分科会=特別支援・カウンセリング、支援するということを問う　●総括シンポジウム「姫路の教育から日本の教育を考える-学校間連携の在り方を探る-」「講師」（会場：姫路市市民会館）		日本の教育を考える-学校間連携の在り方を探る-」において講師を務めた。「特別支援教育において実践できそうな手立てを紹介してもらい大変参考になった」等の感想が多く、高評価を得た。
明石市教育委員会主催事業「平成２６年度　教科用図書明石地区協議会」「委員」	平成 26 年度～平成 31 年度	「委員」として、教科用図書の採択を進めた。適正かつ公正な採択の確保ができたと高評価を得た。
岡山県立東岡山工業高等学校主催「いじめ対策委員会」「学識経験者・委員」：対象：岡山県立東岡山工業高等学校教職員	平成 26 年度	「学識経験者・委員」として、生徒指導事例に対して助言・指導した。「道徳教育と関連した予防的な取り組みを理解した」等の感想が多くあった。
公益財団法人　私立大学通信教育協会　平成 26 年度運営委員会「運営委員」	平成 26 年 1 月	テーマ「授業・試験並びに成績」を中心にして、計 12 大学の企画・運営・進行・助言・報告書を作成した。特に住本は、専門領域から、クレームの対応事例への助言を行った。
兵庫県立上郡高等学校主催「文部科学省研究指定『社会人基礎力育成カリキュラム開発事業』に係る職員研修会」「講師」	平成 26 年 1 月	高校生活で適切な進路を選択できる社会人基礎力をつけるための、実現可能なカリキュラム開発を中心になって進めた。
兵庫教育大学大学院「学校教育研究科心の教育実践コース専門科目：キャリア教育実践プログラムの開発『開発したプログラムの発表・指導助言』」非常勤講師　［①現職院生対象授業、②夜間コース対象授業（サテライト）］担当	平成 26 年 1 月	キャリア教育実践プログラムの開発を実践した院生に対して、指導助言をした。キャリア教育を就職指導と狭くとらえがちな院生からは、「最新の研究成果を盛り込んだわかりやすい助言だった」と、大変好評であった。
鳥取県教育委員会主催「『子どもたちの社会性を育む事業』地区別研修会」に係る「講師」（会場：①鳥取市立桜ヶ丘中学校～②鳥取市立若葉台小学校～③鳥取市立津ノ井小学校～④鳥取市立米里小学校～白兎会館）	平成 26 年 2 月	各校を視察・授業観察後、それを踏まえ、講演会場（白兎会館）で、心理テストＱ－Ｕを活用した学級づくり・学校づくりについての講演をし、「児童生徒の実態を的確に把握し、具体的な手立ても明示された」と受講者から、高評価を得ることができた。
兵庫県加東市連合 PTA・加東市教育委員会主催「PTA　PTCA 活動支援事業実践発表大会：私たちの子供は私たちの手で！－家庭・地域・学校のコミュニケーションで見守り育む－」「講師」（会場：兵庫県加東市滝野文化会館　対象：教職員、保護者等 300 名）	平成 26 年 2 月	PTA、PTCA 活動の実践発表「私達の子供は私たちの手で！－家庭・地域・学校のコミュニケーションで見守り育む－」について助言をし、家庭・地域・学校、三者の連携の取り方のポイント、留意点について話し、受講者からは「三者の立場に立ち、共感をキーワードに助言をもらった」と好評であった。
兵庫県立上郡高等学校主催「文部科学省研究指定『社会人基礎力育成カリキュラム開発事業』に係る研究発表会及び学習成果発表会」「講師」	平成 26 年 2 月	生徒の研究発表会及び学習成果発表会の講師として助言、講演をした。生徒からは「研究を評価され、次のステップも明示され、参考になった」と、好評で、その内容は、報告書にまとめた。

兵庫県加東市立滝野南小学校主催「『学級集団アセスメント』事業に係る研修会：学級集団づくり QU テストの活用について」「講師」	平成 26 年 2 月	年間 2 回実施した心理テストの分析と解説をした。「次年度の学級づくりに生かせる内容の講演だった」と、受講した教職員から高い評価を得た。
尼崎市立教育総合センター主催「平成 25 年度 教育研究部会」「講師」	平成 26 年 2 月	教育総合センターのアドバイザーとして、研究発表者の教育相談事例発表への指導助言を担当した。
兵庫県稲美町教育委員会主催「稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会」「講師：副委員長」（会場：兵庫県稲美町いきがい創造センター）	平成 26 年 3 月	各校の校長、生徒指導担当者より 1 年間の取組の発表に対して、助言した。参加者からは「各事例に対して的確な助言と感想があった。
兵庫県立但馬やまびこの郷主催「不登校推進に係る研修員の研修成果発表会」に係る「指導助言講師」	平成 26 年 5 月	不登校推進に係る研修員の研修成果発表に対して、指導助言講師を務めた。
兵庫県加古川市立加古川北公民館主催「『山手寿大学（高齢者大学)』: カウンセリング技法を活用した人間関係づくり」「講師」（対象 200 名）	平成 26 年度	「高齢者大学」で講演。「カウンセリング技法を活用することで、人間関係が好転することを指導した。受講した高齢者からの評価が高かった。
岡山県立東岡山工業高等学校主催事業「『思春期サポート事業』」講師　年間 12 回	平成 26 年 5 月	「キャンパスカウンセラー」を務めた。不登校生の面談では 100%再登校へと支援することができた
兵庫県加東市立滝野中学校主催「『学級集団アセスメント』事業に係る研修会：学級集団づくり QU テストの活用について」「講師」	平成 26 年 6 月	5 月に実施した心理テストの分析と解説をした。受講者からは「明日からの学級づくりに生かせる」と、受講した教職員から高い評価を得ることができた。
ＴＶ朝日「ナニコレ珍百景『割れない？生タマゴ』」【珍百景 No. 1912】※心理学の立場から解説	平成 26 年 6 月	「人間にはある行動がどのような結果を生み出すかを予期・予見する予期機能があり、タマゴを強く握ると割れてしまうかもということを想像して無意識のうちに割れないようにブレーキをかけているため、タマゴが割れにくくなる」と論じた（ＴＶ朝日ＨＰより）
稲美町教育委員会主催「第１回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会：「小中学校における問題行動の状況」「講師（副委員長)」（会場：兵庫県稲美町役場コミュニティセンター）	平成 26 年度	問題行動の状況について中学校区ごとによる話し合いがあり、講師（副委員長）として助言した。各校の校長、生徒指導担当者から、今後の指導に生かせる等、高評価を得た。
ＪＣＩ龍野青年会議所主催講演会：「講師」「演題：子どもの心みつめていますか」（会場：兵庫県揖保郡太子町あすかホール　対象は学校関係者等、約 250 名）	平成 26 年 7 月	演題は、「子どもの心みつめていますか」で、対象は主に学校関係者であったが、講演後、多くの保護者が残られ、それぞれの相談に応じた。受講者からは専門家による講演会を継続の要望が出た。

兵庫教育大学大学院「学校教育研究科心の教育実践コース専門科目：キャリア教育実践プログラムの開発『エンカウンターによるキャリア教育』」非常勤講師　①[ストレート対象授業（1 限目）　②現職院生対象授業（2 限目）　夜間コース対象授業（7 限目）（サテライト）]担当	平成 26 年 7 月	キャリア教育実践プログラムの開発において、開発的カウンセリング技法を生かしたプログラム開発について研修を行った。「とてもわかりやすく、実践的に学べた」と、現職教諭の受講者からも高評価を得た。
兵庫県立上郡高等学校主催事業「心のサポート事業研究開発校『コミュニケーションの在り方実践研究』: i-check データからみるクラス経営」「講師」	平成 26 年 7 月	『コミュニケーションの在り方実践研究』の一環で、各クラスの i-check データを分析し、担任へ助言した。「実際の学級指導に生かせる」と高い評価を得た。
明石市教育研究所主催事業「明石市教育委員会スーパーバイザー派遣事業」「講師」（場所：明石市教育研究所、対象：明石市立中崎小学校教職員）	平成 26 年 7 月	スーパーバイザーとして、「子どもの人間関係を円滑にする取組の理論と実際」のテーマで講演。「双方向形式で楽しく学べた」と、受講者から高評価を得た。
兵庫県西宮市教育委員会主催「学級経営研修」「講師」（会場：兵庫県西宮市立総合教育センター）	平成 26 年 7 月	「カウンセリング技法を活用した学級づくり」研修会の講師を務めた。
倉敷市立福田中学校主催「研修会」「講師」（会場：ライフパーク倉敷）	平成 26 年 8 月	「『総合質問紙調査「アイチェック」を活用した学級づくり 』研修会の講師を務めた。
鳥取市小学校長会主催事業「鳥取市小学校長会第 1 回自主研修会」「講師」（場所：白兔会館、対象：鳥取市立小学校校長 45 名）	平成 26 年 8 月	「教員の授業力・学級経営力向上をめざす校長の役割」の研修会で講師を務めた。「とても実践的な内容で参考になった」と、受講者から高評価を得た。
伊丹市立総合教育センター主催事業「生徒指導研修：積極的な生徒指導の推進―いじめ、不登校等、児童生徒の問題行動の未然防止のために―」「講師」	平成 26 年 8 月	生徒指導研修：積極的な生徒指導の推進―いじめ、不登校等、児童生徒の問題行動の未然防止のために―」研修会の講師を務めた。「参加型・体験型の形式の研修だった。
岡山市教育研究研修センター主催「 岡山市教職員研修講座」「講師」（場所：岡山市教育研究研修センター）（対象：岡山市立小中高等学校　教職員 50 名）	平成 26 年 8 月	「学級集団アセスメント研修講座」の講師を務めた。「とても実践的な内容で、昨年度同様、大変参考になった」と、受講者から高い評価を得た。
「赤磐市 高陽中学校ブロック研修会」「講師」（場所；赤磐市立中央図書館・対象：高揚中学校区教職員 150 名）	平成 26 年 8 月	「自己肯定感の育成をもとに学力向上を図る－役割・期待・承認－2 年目研究の進め方・成果と課題」で講師を務めた。研究の振り返りを指導した。
日本生徒指導学会主催「日本生徒指導学会関西地区研究会第 7 回大会」「講師」（場所：京都教育大学）	平成 26 年 8 月	分科会『学級経営』」の講師を務めた。生徒指導の新たな在り方を、一般的に理解されない等の悩み等が率直に出され、助言を行った。

鳥取県教育委員会主催事業研究会「講師」（場所：倉吉体育文化会館、対象：県内高等学校教職員 40 名）	平成 26 年 8 月	「hyper-QU 活用研修会：hyper-QU を活用した学級づくり」の講師を務めた。「とても実践的な内容で、昨年度に引き続き参考になった」と、高い評価を得た。
兵庫県宝塚市光ガ丘中学校主催事業「校内研修会」「講師」	平成 26 年度	「校内研修会（学級づくり）：開発的カウンセリング技法を活用した学級づくり」の講師を務めた。
鳥取県岩美町立岩美南小学校主催事業「鳥取県教育委員会・岩美町立岩美南小学校：学校外部評価・指導講評・研修」「外部評価委員」「講師」（場所：岩美町立岩美南小学校　対象：教職員 50 名）	平成 26 年度	「カウンセリング技法を活用した学級づくり」の外部評価委員・講師を務めた。校長から「教職員を元気づける外部評価であり、実践的な内容の研修あり次年度も依頼したい」と、評価を得た。
尼崎市立武庫小学校主催事業「『こころの教育推進事業：体験、〈いのちの教育〉』「講師」（場所：尼崎市立武庫小学校、対象：小学５、６年児童 140 名と保護者）	平成 26 年 10 月	体験、〈いのちの教育〉の道徳授業で生命尊重項目を担当した。授業を受けた高学年児童は「命は一つだから大切にしたいと強く思った」、保護者は「親子や家族の絆について考える」等の感想を述べた。
赤磐市立高陽中学校主催「高陽中ブロック授業研究会：授業参観と指導助言」「講師」（場所；赤磐市立高揚中学校・対象：高揚中学校区教職員 100 名）	平成 26 年 11 月	「自己肯定感の育成をもとに学力向上を図るための効果的な取組について：授業参観と指導助言」を行った。
兵庫教育大学大学院「学校教育研究科心の教育実践コース専門科目：非常勤講師（兵庫教育大学）	平成 26 年 12 月	学校における『心の教育』と道徳指導の実践研究」の講師を務めた。
鳥取県教育委員会主催「hyper-QU 活用研修会」「講師」対象：鳥取県立高等学校学校長、生徒指導主事等 40 名：会場；鳥取県立倉吉総合産業高等学校	平成 27 年 1 月	「学級づくりにおいて生徒指導の果たす役割やその推進の実践的な内容で、第 1 回に引き続き、大変参考になった」と、受講者から高い評価を得た。
兵庫教育大学大学院「学校教育研究科心の教育実践コース専門科目：「キャリア教育実践プログラムの開発」非常勤講師※昼間クラス：夜間クラス）担当	平成 27 年 1 月	「キャリア教育実践プログラムの開発」の講師を務めた。「キャリア教育の専門家の貴重な助言をいただき、大変参考になった」と、受講者から評価を得た。
赤磐市立山陽小学校主催「赤磐市立山陽小学校校内研修会」「講師」：対象：高陽中学校区教職員	平成 27 年 1 月	「自己肯定感の育成をもとに学力向上を図る―役割・期待・承認―」で講師を務めた。
明石市教育委員会「スーパーバイザー派遣事業」・明石市立鳥羽小学校主催「明石市立鳥羽小学校校内研修会」講師：対象：明石市立鳥羽小学校教職員	平成 27 年 1 月	明石市教育委員会主催の研修会「講師」を務めた。学級経営と学力向上について、参加型・体験型研修のため実践的に学べたと受講者から評価を得た。
兵庫県稲美町教育委員会主催「稲美町生きる力を育むための小・中連携推進委員会：問題行動の状	平成 27 年 2 月	委員会の副委員長として講話を行った。各校の小中校長、生徒指導担当者より 1 年間の取組の事例発表

況、小中連携等」「講師」対象：稲美町教育委員会職員・町内小中校長、生徒指導担当者		に対して、助言をした。参加者からは「次年度からの指導に生かせる」等の感想を得た。
鳥取市教育委員会・鳥取市公立学校教頭会主催「管理職としての『いじめ未然防止・早期発見・早期対応』」「講師」	平成 27 年 2 月	「管理職としての『いじめ未然防止・早期発見・早期対応』」において学校づくりと生徒指導教員育成の視点で講師を務めた。
伊丹市立伊丹高等学校主催　「教員研修会：生徒が主体的に活動する学級経営について」「講師」対象：教職員 56 名	平成 27 年 3 月	受講者からは「高校生独特の事例についての紹介も多く、大変分かりやすく、とても実践的な内容であった」と、高評価を得た。
兵庫県立上郡高等学校主催事業「心のサポート事業研究開発校『コミュニケーションの在り方実践研究』：i-check データからみるクラス経営」「講師」	平成 27 年度	前回に引き続き、各クラスの i-check データを分析し、担任へ助言した。1 学期との比較が受講者に好評だった。
岡山県立東岡山工業高等学校主催事業『思春期サポート事業』」講師（スクールカウンセラー）年間 12 回	平成 27 年度	「キャンパスカウンセラー」を務めた。不登校生の面談では、昨年度に引き続き、100％再登校へと支援することができた。
東広島市いじめ問題調査委員会参加	平成 27 年 5 月	いじめ問題調査委員会設置条例に基づき、教育委員会から、「学識経験者」として委嘱され、会議等では、専門的知見から、助言等し実効を上げている。
兵庫県稲美町教育委員会主催「第 1 回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会：問題行動の状況」「講師（副委員長）」（会場：稲美町役場コミュニティセンターホール）	平成 27 年 6 月	平成 26 年度の小・中学校における問題行動の状況について、中学校区ごとに、話し合いがあり、講師（副委員長）として助言をした。
兵庫教育大学大学院「学校教育研究科心の教育実践コース専門科目：キャリア教育実践プログラムの開発『エンカウンターによるキャリア教育』」非常勤講師　①[ストレート対象授業（1 限目）、②現職院生対象授業（2 限目）、夜間コース対象授業（8 限目）（サテライト）]担当	平成 27 年度	キャリア教育実践プログラムの開発において、開発的カウンセリング技法（構成的グループエンカウンター）を生かしたプログラム開発について研修を進めた。「キャリア教育の要は、人間関係づくりであると確信できたし、たくさん実践のヒントを得た」と、受講者からも高評価であった。
岡山市教育委員会主催「適応指導教室　職員研修会」「講師」（会場：岡山市適応指導教室　対象：岡山市適応指導教室職員）	平成 27 年 7 月	不登校児童生徒の支援にとって、心的エネルギーをいかに高めるか、その手立てについて研修を進めた。研修後も市内から、たくさん問い合わせがあった。
赤磐市立高陽中学校主催「赤磐市立高陽中学校校内研修会：自己肯定感の育成をもとに学力向上を図る―役割・期待・承認―：i-check データからみ	平成 27 年度	「自己肯定感の育成をもとに学力向上を図るための効果的な取組について：授業参観と指導助言」で講師を務めた。受講者からは「エビデンスが明確で、

る研究推進効果」講師：対象：高陽中学校区教職員		実践がスムーズにできる」と意見が出た。
岡山県教育委員会主催「明るい学校づくり支援事業における活用力向上（指導者派遣）：心理検査の分析活用による学級集団の実態把握、課題の明確化、いじめ、暴力行為、不登校等の未然防止等による学校づくり指導助言」「指導者」：津山市立津山西中学校②笠岡市立笠岡東中学校③津山市立勝北中学校	平成 27 年 8 月	心理検査を活用し、暴力行為等、特に問題行動が多発している県下中学校を年間複数回訪問し、指導助言をする事業の指導者を担当。「具体的でわかりやすい研修内容であった」「教師自身が、一息つける研修内容であった」等の、研修後の声が多く、各校２学期以降も助言することになった。
滋賀県立学校いじめ問題調査委員会「不登校支援の在り方を考える ー「学級づくり」をテーマとしてー」対象：小中高等学校生徒指導・教育相談担当教員 500 名	平成 27 年 8 月	不登校児童支援の具体的手立てについて研修を進めた。「不登校を予防する学級づくりこそ大切だと実感した」「事例についても相談したい」と、研修後も問い合わせが多かった。
鳥取県教育委員会主催　「hyper-QU 活用研修会」「講師」（場所：倉吉体育文化会館、対象：県内高等学校教職員 70 名）	平成 27 年 8 月	「hyper-QU 活用研修会：hyper-QU を活用した学級づくり」の講師を務めた。「実践的な内容で、本年度はさらに深まった」と、高い評価を得た。
滋賀県立学校いじめ問題調査委員会「委員（学識経験者）」（会場：滋賀県庁）	平成 27 年 8 月	いじめ問題調査委員会条例に基づき、教育委員会から、「学識経験者」として委嘱された。
三木市教育センター専門研修講座「『カウンセリングで高める教師力』ーカウンセリング技法を活用した学級づくりー』「講師」（対象：小中教職員 30 名　会場：三木市教育センター）	平成 27 年 8 月	「教師力」を高めるため、カウンセリングの技法を研修してもらうことを目的とした研修の講師を務めた。「２学期から早速活用したい」「学級経営に即生かせる内容だった」と、評価も高かった。
兵庫県多可町立加美中学校主催「専門研修会：Q-U を活用した学級づくり」「講師」（対象：多可町教職員 50 名　会場：加美中学校体育館）	平成 27 年 9 月	生徒指導には教師の観察だけでは、不十分で、それに加え、心理検査が必要であるとの趣旨から、研修会が開催された。
明石市教育委員会「スーパーバイザー派遣事業」・明石市立貴崎小学校主催「校内研修会：学級経営をベースにした学力向上について」講師	平成 27 年 9 月	明石市立貴崎小学校教職員を対象に講師を務めた。「学級経営と学力向上について、実習形式で、実践的に学べた」と、受講者から高い評価を得た。
鳥取県教育委員会主催「認め合い、高め合う豊かな学級集団づくり」研修：カウンセリング技法を活用した学級づくり」「講師」（会場：琴浦町生涯学習センター　対象：小中教職員 50 名）	平成 27 年 9 月	学級づくりのポイントとして、①児童生徒理解の工夫　②カウンセリング技法の活用　以上２点を中心に、参加型・体験型での研修を進めた。心を育てる道徳教育を基本にすることが重要と強調した。
石川県教育委員会・石川県教育センター主催「初任者研修「生徒理解Ⅳ」：いじめ・非行等問題行動とその対応や未然防止」「講師」（会場：石川県教育センター　対象：中学校 52 名、高等学校 68 名）	平成 27 年 9 月	①学級経営をベースにした取組②学級づくりの中心には道徳教育や特別活動を活用した「心の教育」「命の教育」を据える③カウンセリング技法の活用、以上３点を中心に参加型体験型での研修を進めた。

明石市教育委員会２７年度「スーパーバイザー派遣事業」・明石市立王子校主催「明石市教育委員会・明石市立王子小学校校内研修会：認め合い、高め合う豊かな学級集団づくり」研修　①カウンセリング技法を活用した学級づくり　②ユニバーサルデザインの視点からの学級づくり」講師	平成 27 年 10 月	「認め合い、高め合う豊かな学級集団づくり」のテーマで研修を進めた。特に，「ユニバーサルデザインの視点からの学級づくり」では，質疑応答が活発であった。
鳥取県教育委員会・岩美町立岩美南小学校主催事業「平成２７年度　鳥取県教育委員会・岩美町立岩美南小学校：学校外部評価・指導講評」「講師」（場所：岩美町立岩美南小学校　対象：教職員 30 名）	平成 27 年 10 月	外部評価委員として，学校評価を実施した。改善点を具体的に話した上で，教職員研修も実施し，学級経営，学年・学校運営のポイントを示したので，次回も派遣依頼を受けた。
兵庫教育大学大学院「学校教育研究科心の教育実践コース専門科目：学校における『心の教育』の実践研究」非常勤講師（兵庫教育大学神戸サテライト）	平成 27 年 11 月	「『心の教育』の実践事例」について、特に不登校対策支援の手立てについて講義を進めた。「不登校支援の様々な実践方法を学べた」と、受講者からも高い評価であった。
滋賀県教育委員会主催「平成 27 年度　生徒指導上の課題解決に係る管理職等研修会：いじめ・不登校問題への対応－『いのちの教育』の実践より－」「講師」14:50～16:10　会場：栗東芸術文化会館さきら　大ホール　対象：滋賀県教育委員会管轄　管理職 300 名）	平成 27 年度	管理職を対象にした研修で、管理職の立場で，どう生徒の問題行動と向き合うかについて研修を進めた。「事例についても直接相談したい」と、研修後も問い合わせが多くあった。
岡山県教育委員会「明るい学校づくり支援事業における活用力向上「指導者」(H27.3.23 付委嘱)。	平成 27 年度～平成 29 年度	岡山県教育委員会より「道徳を視点に置いた学級集団の課題等を明確にして対応や指導等を検討し、望ましい学級集団育成」専門家の委嘱を受けた。
東広島市教育委員会　「東広島市いじめ問題調査委員会」「委員」(H27.3.24 付委嘱)。	平成 27 年度～現在に至る	日本教育カウンセラー協会事務局の推薦により「東広島市いじめ問題調査委員会」「委員（学識経験者)」として委嘱された。
滋賀県教育委員会「滋賀県立学校いじめ問題調査委員会」「委員（学識経験者)」(H27.3.24 付委嘱)	平成 28 年度～平成 31 年度	日本生徒指導学会の推薦により「滋賀県立学校いじめ問題調査委員会」「委員（学識経験者)」として委嘱された。
岡山県いじめ問題対策連絡協議会「会長」	平成 28 年度～平成 31 年度	岡山県教育委員会より「岡山県いじめ問題対策連絡協議会」「会長」として委嘱された。
「大学コンソーシアム岡山」運営委員会「運営委員」	平成 28 年度	「大学コンソーシアム岡山」運営委員会「運営委員」として委嘱された。

岡山県保育士養成協議会「理事」（平成２９年３月まで）	平成 28 年度～平成 31 年度	岡山県保育士養成協議会「理事」として委嘱された。
新見市子ども・子育て支援事業「新見市子ども・子育て支援会議」「委員長」	平成 28 年度～平成 31 年度	新見市より，新見市子ども・子育て支援事業「新見市子ども・子育て支援会議」「委員長」として委嘱された。
新見市教育委員会「教育委員」（平成３２年３月まで）	平成 28 年度	新見市教育委員会「教育委員」として委嘱された。
岡山県教育カウンセラー協会主催（NPO 日本教育カウンセラー協会主管・岡山県教育委員会後援･岡山市教育委員会後援・倉敷市教育委員会後援・岡山いのちの電話協会後援)、2016 年教育カウンセラー養成講座（岡山会場）「構成的グループ・エンカウンター」「講師」（会場：岡山国際交流センター）3 時間　対象：保育所･幼稚園･小･中･高等学校教職員･カウンセラー･福祉･保健･医療･教育関係者･学生等　80 名	平成 28 年度	対象が、保育所･幼稚園･小･中･高等学校教職員･カウンセラー･福祉･保健･医療･教育関係者･学生等で、計 100 名の受講者であった。受講者からは、「実践的な内容で、すぐに現場で、子ども支援、保護者支援に活用したい」「専門性はもちろん、自分自身の実践や生き方を見つめ直すことができ、自身の人間性を高めることができる講座内容であった」等の意見が多く、好評であった。
NPO 日本教育カウンセラー協会主管・愛媛県教育カウンセラー協会主催「教育カウンセラー養成講座基礎コース「対話あのある授業ー『いのちを育てる関わり方』指導者の必要なカウンセリング能力とはー」「講師」（会場：松山市総合コミュニティセンター）	平成 28 年度	教育カウンセラー養成講座の講師を務めた。幼稚園教諭、保育士、小中高特別支援学校教員等、９５名の参加者からは、「参加型・体験型研修で、深い学びができた」「双方向で、交流しながら、めあてに迫ることができた」等の意見が多く、高い評価を得た。
NPO 日本教育カウンセラー協会主管・富山県教育カウンセラー協会主催「教育カウンセラー養成講座（富山会場）「基礎講座：保護者対応の心理学ー信頼される教師であるためにー」「講師」（会場：サンシップ富山)・「グレードアップ講座：事例研究・スーパービジョンー事例研究の方法と進め方ー」「講師」（会場：サンシップ富山）	平成 28 年 2 月	対象が、保育所･幼稚園･小･中･高等学校教職員･カウンセラー･福祉･保健･医療･教育関係者･学生等で、各講座、50 名ずつ、計 100 名の受講者であった。受講者からは、「実践的な内容で、すぐ子ども支援、保護者支援に活用したい」「専門性、人間性を高めることができる講座内容であった」等の意見が多く、好評であった。
石川県教育委員会・石川県教育センター主催「平成 27 年度　カウンセラー教員養成研修（講義・演習）児童生徒の心の理解と問題行動の未然防止のためにーいじめ・不登校防止，『いのちの教育』の教育実践よりー」「講師」（会場：石川県教育センター　対象：全県　高等学校教員・特別支援学校教員 250 名）	平成 28 年 2 月	「児童生徒の心の理解と問題行動の未然防止」について、特に、いじめ・不登校対策の手立てについて講義を進めた。「いじめ、不登校対策の様々な実践方法を学べた」と、受講者からも高い評価であった。

鳥取県教育委員会・岩美町立岩美南小学校主催事業「平成２７年度　鳥取県教育委員会・岩美町立岩美南小学校：学校外部評価・指導講評」「講師」（場所：岩美町立岩美南小学校）	平成 28 年 3 月	「学校外部評価・指導講評」の「講師」を務めた。「次年度に活かせる、具体的な話だった」と、教育委員会、小学校管理職、教職員からも好評であった。
兵庫県教育委員会・兵庫県立上郡高等学校主催事業「平成２７年度　心のサポート事業研究開発校『コミュニケーションの在り方実践研究』：i-check データからみるクラス経営」「講師」	平成 28 年 4 月	心のサポート事業研究開発校で、「コミュニケーションの在り方実践研究－i-check データからみるクラス経営－」のテーマで、講演をした。「個への向き合い、集団への向き合いのバランスを意識しようと思った。有益であった」等の意見が多く、高い評価を得た。
兵庫県東播磨カウンセリング研究会主催　平成 28 年度研修会「『いのちの教育』をどう進めるか－悩み相談やアンケート結果から見えてきたもの－」「講師」	平成 28 年 5 月	「実践的な内容で、すぐに活用できるものばかりだった」などの感想が多く、好評だった。
赤磐市教育委員会　赤磐市立山陽東小学校ＰＴＡ・青少年育成協議会　主催　研修会「多様な子ども達に自信や意欲を持たせる関わり方－自己肯定感を高める関わりを持つために－」「講師」（会場：赤磐市立山陽東小学校）	平成 28 年 5 月	「大人が変われば子どもも変わる、を実感できる講演内容であった」などの感想が多く、研修終了後も問い合わせが多数あり、好評であった。
鳥取県教育委員会・鳥取県立智頭農林高等学校主催　職員研修会「開発的カウンセリング技法を活用した学級づくり－グループアプローチをクラスづくりに生かす際のポイント－」「講師」（会場：鳥取県立智頭農林高等学校）	平成 28 年度	「明日から早速、実践したい」「この技法を活用して学級経営に取り組みたい」等の意見が多くあり、受講の教職員から高い評価を得た。
岡山県教育委員会・岡山県立東岡山工業高等学校主催事業「平成２８年度　『思春期サポート事業』」講師（スクールカウンセラー）（年間 12 回）	平成 28 年 6 月	岡山県教育委員会・岡山県立東岡山工業高等学校主催事業「平成２８年度　『思春期サポート事業』」講師（スクールカウンセラー）を委嘱された。
明石市教育委員会・明石市教育研究所主催事業「平成２８年度　明石市教育委員会スーパーバイザー派遣事業：道徳教育から考える子どもの人間関係づくり」「講師」（場所：明石市教育研究所、対象：明石市立鳥羽小学校教職員）	平成 28 年 6 月	「大変実践的な内容で、明日からでも活用できるものばかりだった」などの感想が多く、高評価だった。
兵庫県教育委員会・兵庫県立相生産業高等学校主催事業「平成２８年度　心のサポート事業研究開発校アサーションで人間関係づくり－カウンセリング技法を活用したコミュニケーション力の育成－」「講師」	平成 28 年 7 月	心のサポート事業研究開発校で、「アサーションで人間関係づくり－カウンセリング技法を活用したコミュニケーション力の育成－」のテーマで、講演をした。「実践的な内容と、的確なアドバイスに感激した」等の意見が多く、好評だった。
神港学園神港高等学校主催「平成 28 年度　神港学	平成 28 年 7	「hyper-QU を活用した学級づくりの手法について

園神港高等学校　校内研修会： hyper-QU を活用した学級づくり」「講師」（対象：神港学園神港高等学校　教職員 50 名　会場：神港学園神港高等学校）	月	具体的に理解できた」などの感想が多く、教職員から高い評価だった。
兵庫教育大学大学院「学校教育研究科心の教育実践コース専門科目：キャリア教育実践プログラムの開発『エンカウンターによるキャリア教育』」「講師」	平成 28 年 7 月	「キャリア教育実践に活かせる技法を教えてもらいすぐ活用したい」「実践的内容でよかった」などの感想が多く、高評価だった。
兵庫県教育委員会・兵庫県立但馬やまびこの郷主催「平成 28 年度不登校に関する研修会：不登校の未然防止・課題対処型のＳＧＥ－構成的グループ・エンカウンターの理論と実際－」「講師」（会場：兵庫県立但馬やまびこの郷　対象：兵庫県下小中学校教職員 70 名）	平成 28 年 7 月	主に「不登校児童生徒の未然防止・課題解決型手立て」について講演をした。「不登校対策の様々な未然防止法などを学べた」「大変実践的に学べた」と、受講者からも高い評価であった。
鳥取県教育委員会主催　「平成 28 年度第１回 hyper-QU　活用研修会」「講師」（対象：鳥取県立高等学校、生徒指導主事等 40 名：会場；鳥取県倉吉体育文化会館）	平成 28 年 7 月	「hyper-QU についてはもちろん、これを活用した学級づくりの手立てについて具体的に理解することができた」などの感想が多く、教職員から高い評価だった。
兵庫県明石市教育委員会・明石市教育研究所主催「平成 28 年度　事務職員研修会：自他を大切にした自己表現－カウンセリング技法を活用したコミュニケーション力の育成－」「講師」（会場：明石市教育研究所）	平成 28 年 7 月	「カウンセリング技法を活用したコミュニケーション力の育成がいかに大切か、演習を通して具体的に理解できた」などの感想が多く、研修終了後も問い合わせがあり、好評であった。
新見公立大学　看護学部　教員研修「大学におけるアクティブ・ラーニングを取り入れた授業展開の試み」「講師」	平成 28 年 8 月	「わかりやすい内容なので、次回もお願いしたい」「アクティブ・ラーニング型授業についてよくわかった」と、受講者からも高い評価であった。
新見市教育委員会主催　「平成 28 年度　新見市全教職員研修会：幼小中の連携をふまえて進める『心の教育』の実際」「講師」（会場：新見市哲多総合センター　対象：保・幼・認定こども園・小・中学校教職員　250 名）	平成 28 年 8 月	「幼小中の連携をふまえて進める『心の教育』の大切さ、その実践の仕方が、よく理解できた」などの感想が多く、研修が終了して後も、多くの問い合わせがあり好評であった。
明石市教育委員会平成２８年度「スーパーバイザー派遣事業」・明石市立朝霧中学校主催「明石市教育委員会・明石市立朝霧中学校校内研修会：今、求められるコミュニケーションスキルーストレス・マネジメント教育の実際－」「講師」（対象：明石市教育委員会・明石市立朝霧中学校教職員　会場：明石市立朝霧中学校）	平成 28 年 8 月	「自他を大切にしたコミュニケーション力の育成がどれほど大切かよくわかった」「実習を通して具体的に理解できた」などの感想が多く、大変好評であった。

明石市魚住東地区人権教育研究協議会・魚住東地区青少年愛護協議会共催「平成 28 年度　夏季リーダー研修会：今、求められるコミュニケーションスキル －自分も相手も大切にした自己表現－」「講師」	平成 28 年 8 月	「自分も他者も大切にしたコミュニケーション力を育成することが、いかに大切かが、実習を通して具体的に理解できた」等の意見が多く寄せられた。
岡山県国公立幼稚園・こども園教育研究会　道徳教育部会　研修会「幼児期にこそ育てる子どもたちの『心の根っこ』－「心の教育」「いのちの教育」の実践を通して－」「講師」（対象：部会関係園長・保育教諭 90 名　会場：ライフパーク倉敷）	平成 28 年 8 月	「幼児期にこそ育てる子どもたちの『心の根っこ』－「心の教育」「いのちの教育」の実践を通して－」のテーマで講演をした。「次はぜひ、私の所属する園で講演を依頼したい」などの感想が多く、大変好評であった。
岡山県立東岡山工業高等学校主催「平成２８年度高校生対象学習会　部活動夏季学習会：バレーボール部・野球部員７０名対象　ストレス・マネジメント学習会：体験、ストレス・マネジメント教育の実際」「講師」（会場：岡山県立東岡山工業高等学校）	平成 28 年 8 月	高校生を対象に授業をした。「ぜひ日常に取り入れたい」「部活動に活かしたい」などの意見が多く、次年度も依頼を受けた。
兵庫県西宮市教育委員会主催「平成２８年度　学級経営研修：カウンセリング技法を活用した学級づくり： ―構成的グループ・エンカウンターの理論と実際―」「講師」（10:00～12:00　対象：西宮市教職員 80 名　会場：兵庫県西宮市立総合教育センター）	平成 28 年 8 月	ほとんどが初任者での研修であった。「ぜひ学級づくりに活かしたい」などの感想が多く、センター課長からは次年度も依頼を受けた
岡山県国公立幼稚園・こども園研究会備北支部研修会「幼児期にこそ求められる『心の教育』『いのちの教育』の実践－幼児期における『心の教育』『いのちの教育』の進め方－」（対象：岡山県備北地区　国公立幼稚園こども園長・保育教諭 70 名　会場：新見公立大学　学術交流センター）	平成 28 年度	「幼児期にこそ求められる『心の教育』『いのちの教育』の実践－幼児期における『心の教育』『いのちの教育』の進め方－」のテーマで講演を進めた。「次はぜひ、私の所属する幼稚園で講演をお願いしたい」などの感想が多く、大変好評であった。
明石市教育委員会平成２８年度「スーパーバイザー派遣事業」・明石市立花園幼稚園主催「明石市教育委員会・明石市立花園幼稚園園内研修会：個の育ちを支える援助を考える－幼児期のおける「心の教育」「いのちの教育」の進め方－」「講師」（対象：明石市教育委員会・明石市立花園幼稚園教職員　会場：明石市立花園幼稚園）	平成 28 年 9 月	「個の育ちを支える援助を考える－幼児期のおける「心の教育」「いのちの教育」の進め方－」のテーマで講演を進めた。子どもが死にどう向き合ったらいいか、等の事例についての質問もあり、大変深まった研修であった。
高大連携授業実践・岡山県立新見高等学校「体・いのちの教育」　１年生・2 年生 45 名対象（会	平成 28 年 9 月	「体験・いのちの教育」のテーマで講演を進めた。「実践的内容で、進路の具体的なイメージもできて

場：岡山県立新見高等学校）		よかった」などの感想が多く、大変好評であった。
石川県教育委員会・石川県教育センター主催「初任者研修「生徒理解Ⅳ」：いじめ・非行等問題行動とその対応や未然防止」「講師」（会場：石川県教育センター　対象：中学校６０名、高等学校７０名　合計１３０名）	平成 28 年 9 月	「いじめ・非行等問題行動とその対応や未然防止」のテーマで初任者に講演した。「教師としての心構えをしっかりと持てた」などの感想が大半を占め、質疑応答も多かった。
岡山県教育委員会・岡山県立東岡山工業高等学校主催いじめ対策会議「ＳＮＳ・プロフによるいじめの予防と対応」「講師」対象：教職員７０名	平成 28 年 9 月	事例についての内容が多く、とてもわかりやすかった」「生徒指導実践に役立てたい」等の意見が多く、好評であった。
鳥取県教育委員会・岩美町立岩美南小学校主催事業「平成２８年度　鳥取県教育委員会・岩美町立岩美南小学校：学校外部評価・指導講評」「講師」（場所：岩美町立岩美南小学校　対象：教職員 30 名）	平成 28 年 10 月	「教職員が元気になる指導講評であった」「PDCA サイクルに則った評価で、学校組織がチームとして次に生かせる内容であった」などの感想が多く、大変好評であった。
岡山県高等学校教育研究会教育相談部会・岡山県学校教育相談研究会高等学校部会主催「平成２８年度　岡山高教研教育相談部会秋季研修会：カウンセリング技法を生かしたクラスづくりー構成的グループ・エンカウンターの理論と実際ー」「講師」会場：岡山県立津山東高等学校　対象：教職員 70 名）	平成 28 年 10 月	「カウンセリング技法を生かしたクラスづくり」のテーマで講演を進めた。「実践的内容でよかった」「質疑応答においても、具体的手立てのアドバイスもあり、参加してよかった」などの感想が複数あり、参加者から高い評価を得た。
吉備中央町立津賀幼稚園主催　「すこやかセミナー：『生き抜く力』を育てる子育て十カ条」　対象：教職員２０名・保護者２０名）	平成 28 年 10 月	「子どもにいかに『生き抜く力』を育てるか」のテーマで保育者や、保護者に講演した。「教師として、こどもへの関わり方の留意点やヒントをたくさんもらった」などの感想が大半を占め、質疑応答も多かった。
兵庫教育大学大学院「学校教育研究科心の教育実践コース専門科目：「教育相談の理論と技能開発」（教育実践高度化専攻：心の教育実践コース専門科目）「非常勤講師」３限　13:10～14:40　社会棟 526 号室　対象：大学院生 20 名	平成 28 年 10 月	「教育相談や生徒指導、さらにはキャリア教育実践に活かせる技法を教えてもらいすぐ活用したい」「開発的カウンセリング技法の実践法が理解できた」などの感想が多く、高評価だった。
兵庫教育大学大学院「学校教育研究科心の教育実践コース専門科目：「教育相談の理論と技能開発」（教育実践高度化専攻：心の教育実践コース専門科目）「非常勤講師」現職院生対象授業（7 限目）夜間コース院生５名対象授業　18:30～20:00　神戸ハーバーランド・キャンパス（サテライト）］	平成 28 年 10 月	「心の教育の実践について具体的に学ぶことができた」「管理職としての心構えの参考になった」「カウンセリング技法の実践的な方法が理解できた」などの感想が多く、高い評価を得ることができた。

平成28年度にいみ子育てカレッジ「子育て支援者に対する専門研修」「幼児教育におけるいのちの教育の理論と実践Ⅰ」・「幼児教育におけるいのちの教育の理論と実践Ⅱ」・「幼児教育におけるいのちの教育の理論と実践Ⅲ」「講師」	平成28年度（10月・11月・12月）	「保育者・教育者としてどう子どもの心を育て、子どもの命に向き合うか、その方向性が見えた」「いのちに関わる絵本を紹介してもらったのがよかった」「次年度も楽しみにしたい」などの感想が多かった。
兵庫県教育委員会・兵庫県立相生産業高等学校主催事業「平成２８年度　心のサポート事業研究開発校『アサーションで人間関係づくりⅡ－カウンセリング技法を活用したコミュニケーション力の育成－：定時制」「講師」対象：県立高校教職員８０名	平成28年11月	「生徒指導・教育相談、進路指導に活かせる技法を教えてもらった。すぐ活用したい」「開発的カウンセリング技法の実践法（アサーショントレーニング技法）が理解できた」などの感想が多く、高評価だった。
石川県教育委員会　教職員課主催「平成28年度子どもの心を育てる教師のコミュニケーション力向上研修：子どもの心を育てる教師のコミュニケーション能力の育成－教師自身が自他を大切にした自己表現を！－」9:30～12:00　会場：石川県地場産業振興センター　対象：石川県内教職員300名	平成28年11月	「子どもの心を育てる教師のコミュニケーション能力の育成－教師自身が自他を大切にした自己表現を！－」のテーマで初任者に講演した。「教師としての初心に返ることができた」「教職にある者としての心構えを再確認できた」などの感想が大半を占め、質疑応答も多かった。
滋賀県立学校いじめ問題調査委員会「委員（学識経験者)」(会場：滋賀県庁)	平成28年11月	いじめ問題調査委員会条例に基づき、教育委員会から、「学識経験者」として委嘱された。
兵庫県教育委員会・兵庫県立上郡高等学校主催事業「平成２８年度　心のサポート事業研究開発校①『授業：アサーション・トレーニング、小中学生にアサーションを伝えるためのプログラム作り』の課題と成果，②『「i-check」を活用した学級づくり』「講師」13:00～17:00	平成28年11月	「①『授業：アサーション・トレーニング、小中学生にアサーションを伝えるためのプログラム作り』の課題と成果，②『「i-check」を活用した学級づくり』」のテーマで講演をした。「教育相談や生徒指導の教育実践に活かせる内容で、すぐに活用したい」「開発的カウンセリング技法の実践方法が理解できてよかった」などの感想が多く、高評価だった。
吉備中央町教育委員会主催・吉備中央町教育研修所幼稚園部　全体研修会「幼児期にこそ『心の教育』『いのちの教育』をベースにした実践を！」（対象：吉備中央町内、保育所、幼稚園、小学校等、教職員。会場：吉備中央町立津賀幼稚園）	平成28年12月	「幼児期にこそ『心の教育』『いのちの教育』をベースにした実践を！」のテーマで保育者や、保護者に講演した。「教師として、こどもへ関わる際のポイントをたくさん教えてもらった」などの感想が大半を占め、質疑応答も多く、高い評価を得た。
鳥取県教育委員会・鳥取県立日野高等学校主催「学級経営に活かすhyper-QU研修会」「講師」13:00～17:00	平成28年12月	「学級経営に活かすhyper-QU研修会」のテーマで講演をした。「教師自身が元気になる内容であった」「次年度もお願いしたい」などの感想が多かった。
兵庫県教育委員会・兵庫県立姫路別所高等学校主催事業　「学級経営に活かすhyper-QU研修会」「講師」13:00～17:00	平成29年1月	「学級経営に活かすhyper-QU研修会」の演題で教職員に講演した。「クラスづくりの手立てについて具体的に理解できた」等の感想が多く、質疑応答も活

		発であった。
岡山県教育委員会・岡山県立東岡山工業高等学校主催「いじめ対策会議：ＳＮＳ・プロフによるいじめの予防と対応」「講師」（会場：岡山県立東岡山工業高等学校　対象：高等学校教職員５０名）	平成 29 年 1 月	「いじめ対策会議：ＳＮＳ・プロフによるいじめの予防と対応」のテーマで当該高校教職員に講演した。「ＳＮＳ・プロフによるいじめ予防の大切さが実感できた」等の感想が多く、質疑応答も活発であった。
岡山市教育委員会・適応指導教室　ラポート牧山主催「適応指導教室　不登校生支援授業」「講師」（会場：岡山市適応指導教室　ラポート牧山　対象：適応指導教室　ラポート牧山　職員）13:00～15:00	平成 29 年 1 月	「不登校事例への具体的手立てが明確につかめた」「当該事例への介入法が具体的に理解できた」等の感想が多く、高評価であった。
鳥取県教育委員会・岩美町立岩美南小学校主催事業「平成２８年度　鳥取県教育委員会・岩美町立岩美南小学校：学校外部評価・指導講評」「講師」（場所：岩美町立岩美南小学校）	平成 29 年 2 月	「前回同様、教職員や保護者、ひいては子ども達が元気になる指導講評であった」「学校組織がチームとして次年度に生かせる内容であった」などの感想が多く、大変好評であった。
吉備中央町・にこにこふたば保育園主催「平成 28 年度　にこにこふたば保育園講演会『生き抜く力』を育てる子育て十ヵ条－子どもの悩みから見えてくるもの－」13:00～15:00	平成 29 年 2 月	「保育者としてどう子どもの『生き抜く力』を育て、子どもの命に向き合うかの方向性が見えた」「いのちに関わる絵本を紹介を紹介してもらったのがうれしかった」などの感想が多かった。
兵庫県稲美町教育委員会主催「平成２８年度第２回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会：本年度小中学校における問題行動の状況・振り返り」「講師（副委員長）」（会場：兵庫県稲美町役場コミュニティセンターホール）	平成 29 年 2 月	平成 28 年度の小・中学校における問題行動の状況について、中学校区ごとにグループディスカッションがあり、講師（副委員長）として助言をした。
岡山市教育委員会・適応指導教室　すまいる瀬戸主催「適応指導教室　不登校生支援授業」「講師」（会場：岡山市適応指導教室　すまいる瀬戸　対象：適応指導教室　すまいる瀬戸　職員）14:00～15:00	平成 29 年 3 月	「今回検討した不登校事例への具体的な手立てが明確につかめてよかった」「各事例への介入法が具体的に理解できた」等の感想が多く、高評価であった。
岡山県教育委員会主催「平成 28 年度　第２回　岡山県いじめ問題対策連絡協議会」「会長」（10:00～12:00　会場：岡山県庁分庁舎）	平成 29 年 3 月	岡山県教育委員会からの委嘱を受け、岡山県いじめ問題対策連絡協議会会長として、組織を企画運営した。
岡山県教育委員会・岡山県立岡山東商業高等学校主催「平成 29 年度　高大接続研修：i-check データからみるクラス経営」「講師」	平成 29 年 3 月	「クラスの実態が明確に把握でき、明日からどう取り組めばいいかのヒントももらえた」などの感想が多く、大変好評であった。

平成 28 年度　第 1 回「新見市総合教育会議」（教育委員出席・発表「新見公立大学・短大と連携した教育によるまちづくり」）	平成 29 年 3 月 16 日	住本は、新見市教育委員として出席し、新見公立大学健康保育学科長・教授の立場からも「新見公立大学・短大と連携した教育によるまちづくり」のテーマで提案した。
平成 29 年度教科用図書（小学校道徳）新見市・高梁市選定委員会「委員」	平成 29 年度	「委員」として、教科用図書の採択を進めた。適正かつ公正な採択の確保ができたと高い評価を得た。
兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフグループ主催「平成 29 年度小野市いじめ防止市民会議」「有識者・委員」	平成 29 年度～平成 31 年度	「平成 29 年度小野市いじめ防止市民会議」「有識者・委員」（平成 31 年度まで）として、小野市長より委嘱された。
兵庫県明石市教育委員会「平成 29 年度　教科用図書明石地区選定委員会」「会長」	平成 29 年度	「会長」として、教科用図書の採択を進めた。適正かつ公正な採択の確保ができたと高評価を得た。
学校法人美作学園美作高等学校（学校長　早瀬直紀氏）「平成 29 年度　進路ガイダンス・模擬授業」2 年生・3 年生 15 名参加「講師」	平成 29 年 4 月	「体験・いのちの教育」のテーマで模擬授業を進めた。「とてもわかりやすく、実践的内容で、進路の具体的なイメージもできてよかった」などの感想が多く、大変好評であった。
岡山市立岡山後楽館高校工大接続事業「模擬授業」（3 年生 45 名対象）	平成 29 年 4 月	「とてもわかりやすい内容で、自身の進路についての具体的なイメージもできてよかった」などの感想が多く、大変好評であった。
兵庫県加古川市平岡公民館主催事業「平成 29 年度平岡シニアカレッジ：仲間作りワークショップ」「講師」（加古川市平岡公民館　9:00～12:00、対象カレッジ生 80 名）	平成 29 年 5 月	「他者とのふれあいの素晴らしさが実感できた」「絆づくりの手法を体験を通して学べた」などの感想が多く、高評価だった。
岡山県教育委員会・岡山県立東岡山工業高等学校主催事業「平成 29 年度　『思春期サポート事業』」講師（スクールカウンセラー）（年間 12 回）	平成 29 年度	岡山県教育委員会・岡山県立東岡山工業高等学校主催事業「平成 29 年度　『思春期サポート事業』」講師（スクールカウンセラー）を委嘱された。
岡山県作陽高等学校（学校長：野村雅之氏）主催事業「平成 29 年度　高大接続研修　：i-check データからみるクラス経営の在り方」「講師」	平成 29 年 5 月	「自分のクラスの実態が明確に把握でき、担任として明日からの生徒指導にどう取り組めばいいかのヒントももらえた」などの感想が多く、大変好評であった。
兵庫県教育委員会・兵庫県立相生産業高等学校主催『高大接続事業』「平成 29 年度　心のサポート事業研究開発校『アサーションで人間関係づくりＩ－カウンセリング技法を活用したコミュニケー	平成 29 年 6 月	「教育相談や生徒指導、学級経営の教育実践に活かせる内容で、明日からでもすぐに活用したい」「開発的カウンセリング技法の実践方法が理解できてよかった」などの感想が多く、高評価だった。

ション力の育成ー』」「講師」		
兵庫県教育委員会・兵庫県立姫路別所高等学校主催「平成 29 年度　高大接続事業：hyper-QU を活用したクラス経営」「講師」	平成 29 年 7 月	「学級の実態が的確に把握でき、明日からの生徒指導にどう取り組めばいいかのヒントももらえた」などの感想が多く、大変好評であった。
神戸星城高等学校　「進路ガイダンス・模擬授業」「講師」高校 3 年生 7 名（男 1・女 6）=看護希望 1・地福希望 1・幼児教育希望 5	平成 29 年 7 月	「模擬授業がわかりやすい内容で、自分の進路についての具体的なイメージもでき、よかった」などの感想が多く、好評であった。
岡山県立備前緑陽高等学校（学校長：萩原康正氏）主催事業「平成 29 年度　高大接続研修　：i-check データからみるクラス経営の在り方」「講師」	平成 29 年 7 月	「担任として自分のクラスの実態が明確に把握でき、明日からの生徒指導にどう取り組めばいいかのヒントももらえた」などの感想が多く、大変好評であった。
兵庫教育大学大学院「学校教育研究科心の教育実践コース専門科目：キャリア教育実践プログラムの開発『エンカウンターによるキャリア教育』」非常勤講師　①[ストレート対象授業（1 限目）　9:00～10:30　B（ストレート学生 47 名）、共通講義棟 204、②現職院生対象授業（2 限目）　10:40～12:10 A（現職教員学生 22 名）共通講義棟 204、　③夜間コース対象授業（7 限目）20:10～21:40　夜間学生 1 名　神戸ハーバーランド・キャンパス（サテライト）講義室２]	平成 29 年 7 月	「心の教育（キャリア教育）の実践について具体的に学ぶことができた」「教職に就く前に興味深い実践法を学べてよかった」「管理職としての心構えの参考になった」「カウンセリング技法（エンカウンター）の実践的な方法が理解できた」「体験を通して学ぶことができた」などの感想が多く、高い評価を得ることができた。
兵庫県稲美町教育委員会主催「平成 29 年度第 1 回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会：昨年度小中学校における問題行動の状況・中学校区ごとによる話し合い」「講師（副委員長）」（会場：兵庫県稲美町役場コミュニティセンターホール）	平成 29 年 7 月	平成 29 年度の小・中学校における問題行動の状況について（前半）、中学校区ごとにグループディスカッションがあり、講師（副委員長）として助言をした。
滋賀県立学校いじめ問題調査委員会「委員（学識経験者）」（会場：滋賀県庁）	平成 29 年 7 月	県立学校におけるいじめ問題について、委員（学識経験者）として議論した。
鳥取県教育委員会・鳥取県立米子白鴎高等学校主催『高大接続事業』「クラス作りに生かす hyper-qu 研修会」「講師」10:00～12:00	平成 29 年 7 月	「クラス作りに生かす hyper-qu 研修会」の演題で教職員に講演した。「クラスづくりの手立てについて具体的に理解できた」等の感想が多く、質疑応答も活発であった。
岡山県教育委員会主催「平成 29 年度　第 1 回　岡山県いじめ問題対策連絡協議会」「会長」（13:30～16:00　会場：岡山県立図書館）	平成 29 年 7 月	岡山県いじめ問題対策連絡協議会会長として、いじめ問題への対策について協議し、県の方針をまとめた。
鳥取県教育委員会主催　「平成 29 年度第 1 回	平成 29 年 7	「クラス作りに生かす hyper-qu 研修会」の演題で

hyper-QU　活用研修会」「講師」（対象：鳥取県立高等学校、生徒指導主事等 40 名：会場；鳥取県倉吉体育文化会館）	月	鳥取県内教職員に講演した。「クラスづくりの手立てについて具体的に理解できた」「本校の研修講師をお願いしたい」等の感想が多く、質疑応答も活発であった。
平成 29 年度西日本公立保育士養成所長会議　担当校　企画・運営・会議進行・報告書作成	平成 29 年 8 月	「平成 29 年度西日本公立保育士養成所長会議」の担当校として（幼児教育学科長）、企画・運営・会議進行・報告書作成を担当した。
岡山県総社市教育委員会　小学校研究部会研修会「学級作りに生かすカウンセリング技法」「講師」対象：総社私立小学校校長会校長・教育相談担当者・生徒指導担当者 50 名　9:30～12:00	平成 29 年 8 月	「学級作りに生かすカウンセリング技法」の演題で総社市教育委員会　小学校研究部会教職員を対象に講演をした。「学級作りに生かすカウンセリング技法について具体的に理解できた」等の感想が多く、高評価であった。
明石市教育委員会平成２９年度「スーパーバイザー派遣事業」・明石市立松が丘幼稚園主催「明石市教育委員会・明石市立松が丘幼稚園園内研修会：カウンセリング・マインドを大切にした保護者との関わりについて」「講師」（対象：明石市教育委員会・明石市立花松が丘稚園教職員　会場：明石市立松が丘幼稚園）	平成 29 年 8 月	「カウンセリング・マインドを大切にした保護者との関わりについて」のテーマで明石市立松が丘稚園教職員を対象に講演をした。「効果的な保護者との連携の仕方について具体的に理解できた」等の感想が多く、高い評価を得た。
鳥取県教育委員会・岩美町立岩美南小学校主催事業「平成 29 年度　鳥取県教育委員会・岩美町立岩美南小学校：学校外部評価・指導講評」「講師」（場所：岩美町立岩美南小学校　対象：教職員 30 名）	平成 29 年 9 月	「毎回講評にしてもらうと、課題が明確に把握できる」「課題解決法まで指導してもらえるため次につながる評価である」「指導講評は学校組織がチームとして次に生かせる内容であった」などの感想が多く、大変好評であった。
兵庫県教育委員会・兵庫県立但馬やまびこの郷主催研修会「講義・演習：クラスの中での人間関係づくりー構成的グループエンカウンター（SGE）の演習を取り入れてー」「講師」丹波の森公苑 10:00～15:00　兵庫県下教職員 100 名	平成 29 年 9 月	「講義・演習：クラスの中での人間関係づくりー構成的グループエンカウンター（SGE）の演習を取り入れてー」のテーマで兵庫県教育委員会教職員を対象に講演をした。「実践的な内容を体験を通して学べた」等の感想が多く、高評価を得た。
岡山県立新見高等学校高大接続模擬授業・進路ガイダンス「講師」①進路ガイダンス・模擬授業 13:30～14:40　岡山県立新見高校生 1 年生 15 名 2 年生 15 名　計 30 名（幼児教育学科志望者）　②【内容】ガイダンス　学科の特色　入試に概略等生徒の希望による模擬授業実施	平成 29 年 9 月	「アクティブ・ラーニング型授業風景動画の視聴（住本担当授業）や模擬授業を受けて、幼児教育学科の特色がよくわかった」「大学の授業が、具体的にイメージできた」「針路のデザインが具体的に描けた」等の感想が多く、高い評価を得ることができた。
石川県教育委員会・石川県教育センター主催「平成 29 年度　初任者研修（講義）『いじめ・非行等問題行動とその対応や未然防止ーいじめ・不登校	平成 29 年 9 月	「いじめ・非行等問題行動とその対応や未然防止ーいじめ・不登校防止【いのちの教育】の教育実践よりー」のテーマで石川県教育委員会初任者に講演し

防止【いのちの教育】の教育実践よりー」「講師」（会場：石川県教員総合研修センター　対象：平成29年度　初任小・中・高・特別支援学校　教員300名　9:30～12:15）		た。「『教師』としての心構えをしっかりと持てた」「保護者との連携の仕方や生徒指導の具体的方法の理解が深まった」などの感想が大半を占め、質疑応答も多く高評価であった。
第14回新見千屋温泉いぶきの里経営諮問委員会（千屋温泉いぶきの里）「諮問委員」	平成29年10月	「新見千屋温泉いぶきの里経営諮問委員会（千屋温泉いぶきの里）」「諮問委員」として地方創生に関する協議を深めた。
新見市教育委員会・新見市小学校校長会主催「平成29年度　第2回　小学校校長会議　研修会：『新見市における保幼小中連携：保・幼・小連携に関する一考察－接続プログラムの開発を通してー』9:30～11:00　新見市阿新教育会館　対象；新見市小学校校長17名	平成29年10月	「新見市における保幼小中連携：保・幼・小連携に関する一考察－接続プログラムの開発を通してー」の演題で新見市小学校校長を対象に講演をした。「実践的な内容について体験を通して学べた」等の感想が多く、高い評価を得た。
岡山県教育委員会主催「平成29年度　第2回　岡山県いじめ問題対策連絡協議会」「会長」（9:00～12:00　会場：岡山県庁分庁舎）	平成29年10月	岡山県いじめ問題対策連絡協議会会長として、いじめ問題への対策について協議し、県の年間報告書にまとめた。
岡山県教育委員会生徒指導室長からの依頼を受けての助言「学校における危機対応・心のケア」（生徒の交通事故死　高校生3名）	平成29年10月	教職員、関係生徒（クラス、部活動等）、遺族等への心のケアの体制づくりを、中心になって企画し、実施した。
平成29年度にいみ子育てカレッジ「子どもの『いのち』を育む保育経営の実際⑴－保・幼・小連携の視点からー」・「子どもの『いのち』を育む保育経営の実際⑵－保・幼・小連携の視点からー」新見公立大学　学術交流センター　18:30～19:30「講師」	平成29年度（10月・11月）	「保育者や教育者として、どう子どもの心を育て、子ども達のいのちに向き合うかの方向性が見えた」「いのちに関わる絵本を紹介してもらったのがよかった」「次回も楽しみである」などの感想が多かった。
岡山県・岡山吉備高原学園高等学校主催　講演会「体験、いのちの教育」「講師」 会場：吉備高原学園高等学校 対象：生徒300名、保護者・教職員100名　計400名	平成29年10月	「体験・いのちの教育」のテーマで、生徒300名、保護者・教職員100名　計400名を対象に講演をした。「とてもわかりやすく、プラス思考で今後生活したい」「我が子の良さを見つめ直したい」「これからよりカウンセリング・マインドを持って子ども達に向き合いたい」などの感想が多く、大変好評であった。
岡山市教育委員会・適応指導教室　ラポート牧山主催「適応指導教室　不登校生支援授業」「講師」	平成29年11月	「事例提供した不登校事例への具体的な手立てが明確につかめてよかった」「スタッフとしての各事例への介入法が具体的に理解できた」等の感想が多く、高評価であった。
岡山市教育委員会・適応指導教室　ラポート牧山	平成29年12	「今回検討した事例への手立てが明確に理解できよ

主催「適応指導教室　不登校生支援授業」「講師」（会場：岡山市適応指導教室　ラポート牧山　対象：適応指導教室　ラポート牧山　職員）13:00～15:00	月	かった」「事例への介入方法が具体的に理解できた」「講師には専門家として定期的に指導してほしい」等の感想が多く、高評価であった。
岡山県立備前緑陽高等学校（学校長：萩原康正氏）主催事業「平成 29 年度　高大接続研修　：i-check データから分析するクラス経営の在り方」「講師」14:00～17:00	平成 29 年 12 月	「クラス担任として、自分のクラスの実態が明確に把握でき、明日からの生徒指導にどう取り組めばいいかについてのヒントももらえた」などの感想が多く、大変好評であった。
岡山県教育委員会・岡山県立東岡山工業高等学校主催「いじめ対策会議：SNS によるいじめの予防と対応」「講師」対象：高等学校教職員 50 名	平成 29 年 12 月	事例についての内容、その手立てについての話が多く、とてもわかりやすかった」「生徒指導や教育相談実践に役立てたい」等の意見が多く、好評であった。
新見市教育委員会「プログラミング教育　小・中学生実践発表会」「審査委員長」13:30～17:00　新見市役所南庁舎	平成 29 年 12 月	新見市教育委員会主催の「プログラミング教育　小・中学生実践発表会」の「審査委員長」として各発表にコメントをし、発表した生徒からは「意欲を持てるコメントを受け、一層頑張りたい」等の感想が多く、次年度以降も「審査委員長」の依頼を受けた。
石川県教育委員会・石川県教育センター主催「平成 30 年度　カウンセラー教員養成研修（講義・演習）絆づくりー教育カウンセリングの視点からー」「講師」（会場：石川県教員総合研修センター　対象：全県　教職員　9:30～16:00）	平成 30 年 1 月	「（講義・演習）絆づくりー教育カウンセリングの視点からー」について、特に、いじめ・不登校対策の手立てについて講義を進めた。「教育カウンセリングの理論や技法について、体験的に学べた」と、受講者からも高い評価であった。
岡山県立備前緑陽高等学校（学校長：萩原康正氏）主催事業「平成 30 年度　高大接続研修：i-check データから分析するクラス経営の在り方」「講師」14:00～17:00	平成 30 年 1 月	「担任としてクラスの実態が的確に把握でき、明日からの教育相談や生徒指導に生かせる」などの感想が多く、好評であった。研修後には複数の教員からの質問があった。
兵庫県教育委員会・兵庫県立千種高等学校主催『高大接続事業』・高校生心のサポートシステム事業「講師」場所：兵庫県立千種高等学校	平成 30 年 1 月	「開発的カウンセリング技法のアサーション・トレーニングについて理解を深めることができよかった」等の意見が多く、好評であった。
岡山市教育委員会・適応指導教室　すまいる瀬戸主催「適応指導教室　不登校生支援授業」「講師」対象：岡山市不登校児童・生徒・支援スタッフ	平成 30 年 1 月	「事例への介入方法が具体的に理解できた」「検討した事例への手立てが明確に理解できよかった」「今後も講師には定期的に指導してほしい」等の感想が多く、高評価であった。
岡山県教育委員会・岡山県立東岡山工業高等学校主催事業「平成 30 年度　『思春期サポート事	平成 30 年度	岡山県教育委員会・岡山県立東岡山工業高等学校主催事業「平成 30 年度　『思春期サポート事業』」講

業』」講師（スクールカウンセラー）（年間 12 回） 新見市教育委員会「学校における危機対応・心のケア」緊急支援チーム・学識経験者　新見市内小学生・保護者・教職員対象	 平成 30 年度	師（スクールカウンセラー）を委嘱された。 市内で起きた児童の交通事故死に対して、「心のケア」学識経験者として、助言。
第 29 回新見公立大学「鳴滝塾」『看護と保育と福祉の統合』　シンポジウム「シンポジスト」会場：新見市学術交流センター 兵庫県朝来市「保育士等キャリアアップ研修会」「講師」　会場：朝来市ジュピターホール（2018.5.12）	平成 30 年 5 月 平成 30 年 5 月	健康保育学科長として、本学が四大化し、1 学部 3 学科体制をとり、その一つの健康保育学科の特性について概略を説明した。 「【乳児保育の環境】保育所・幼稚園・認定こども園における子どもを座標軸にした環境構成－「心の教育」「いのちの教育」の実践を通して－」のテーマで研修講師を務めた。
岡山県作陽高等学校主催事業「平成 30 年度　高大接続研修：i-check データからみるクラス経営の在り方」「講師」 岡山県教育委員会・岡山県立瀬戸高等学校主催事業「平成 30 年度　高大接続研修：i-check データからみるクラス経営の在り方」「講師」 岡山県教育委員会・岡山県立邑久高等学校主催事業「平成 30 年度　高大接続研修：i-check データからみるクラス経営の在り方」「講師」 岡山県美作高等学校主催事業「平成 30 年度　高大接続研修：i-check データからみるクラス経営の在り方⑴」「講師」 岡山市教育委員会・倉敷市立倉敷委翔南高等学校主催事業「平成 30 年度　高大接続研修：i-check データからみるクラス経営の在り方」「講師」 岡山県教育委員会・岡山県立新見高等学校（南校地）主催事業「平成 30 年度　高大接続研修：i-check データからみるクラス経営の在り方」「講師」 岡山県美作高等学校主催事業「平成 30 年度　高大接続研修：i-check データからみるクラス経営の在り方⑵」「講師」	平成 30 年 6 月 平成 30 年 6 月 平成 30 年 6 月 平成 30 年 6 月 平成 30 年 6 月 平成 30 年 6 月 平成 30 年 6 月	「個別指導の参考になった」「担任としてクラスの実態が的確に把握でき、明日からの教育相談や生徒指導に生かせる」などの感想が多く、好評であった。 「担任として全体指導はもちろん、個別指導の参考になった」「今後の学級経営に役立つ」などの感想が多く、高評価を得た。 「生徒一人一人の背景がよく分かり個別指導の参考になった」「クラスの実態が正確に把握できた」などの感想が多く、好評であった。 「学級づくりの参考になった」「２学期も是非お願いしたい」等の感想が多く、研修後も複数の教員からの質問があった。 「講師のコメントは、担任として全体指導や個別指導の参考になった」「今後の学級経営に役立つ」などの感想が多く、高い評価を得た。 「個別指導の参考になった」「担任としてクラスの実態が把握でき、明日からの学級づくりに生かせる」などの感想が多く、好評であった。 「２回に分けてもらうとより詳細な助言がもらえうれしい」「２学期か３学期も、是非同じ講師にお願いしたい」等の感想が多く、研修後も複数の教員からの質問があった。

岡山県教育委員会・岡山県立岡山城東高等学校主催事業「平成30年度　高大接続研修：i-checkデータからみるクラス経営の在り方」「講師」	平成30年7月	県内有数の進学校であったが「学級づくりの参考になった」「講師の助言は、生徒指導の参考になった」等の感想が多く、研修後も多数の質問もあった。
岡山県教育委員会・岡山県立岡山東商業高等学校主催「平成30年度　高大接続研修：i-checkデータからみるクラス経営」「講師」	平成30年7月	「生徒一人一人への個別指導の参考になった」「担任としてクラスの実態が把握でき、すぐに学級づくりに生かせる」などの感想が多く好評であった。
兵庫教育大学大学院客員教員　授業講師「構成的グループ・エンカウンターの理論と実際」(会場：兵庫教育大学・神戸サテライト)	平成30年7月	「構成的グループ・エンカウンターの理論と実際」のテーマで講師を務めた。「学級づくりの人間関係づくりの参考になった」「実践的な内容でよかった」等の感想が多く、高い評価を得た。
鳥取県教育委員会主催　「平成30年度hyper-QU活用研修会（2018.7.30）会場：鳥取県県中部総合事務所	平成30年7月	「クラス作りに生かすhyper-qu研修会」のテーマで鳥取県内の教職員に講演した。「クラスづくりの手立てについて具体的に理解できた」等の感想が多く、質疑応答も活発であった。
兵庫県稲美町教育委員会主催「平成30年度第1回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会：昨年度小中学校における問題行動の状況・中学校区ごとによる話し合い」「講師（副委員長)」（会場：兵庫県稲美町役場コミュニティセンターホール)	平成30年7月	平成30年度の小・中学校における問題行動の状況について（前半)、中学校区ごとにグループで協議した。住本は、講師（副委員長）として助言をした。
岡山県・岡山商科大学附属高等学校主催事業「平成30年度　高大接続研修：i-checkデータからみるクラス経営の在り方⑴」「講師」	平成30年7月	「子ども一人一人への個別指導の参考になった（全体指導は勿論)」「担任としてクラスの実態が把握でき、すぐに学級づくりに生かせる」などの感想が多く大変好評であった。
鳥取県教育委員会　平成30年度　hyper-QU　活用研修会「講師」会場：倉吉体育文化会館　大研修室	平成30年7月	「学級づくりに生かすhyper-qu研修会」のテーマで鳥取県内の教職員（対象：全県悉皆研修：鳥取県立高等学校，管理職・生徒指導主事等40名）に講演した。「クラスづくりの手立てについて具体的に理解できた」等の感想が多く、質疑応答も活発であった。
岡山県立　健康の森学園　支援学校　平成30年度夏季研修会「不登校の理解と支援について」「講師」(2018.8.7)（会場：岡山県立　健康の森学園支援学校)	平成30年8月	「不登校の理解と支援について」のテーマで講師を務めた。「不登校の理解と支援方法についてわかりやすく理解できた」「エンカウンターについてもっと学びたいと思った」「実践的な内容でよかった」等の感想が多く、高評価であった。

岡山県いじめ問題対策連絡協議会「会長」	平成 30 年 8 月	岡山県教育委員会からの委嘱を受け、岡山県いじめ問題対策連絡協議会会長として、組織を企画運営した。
岡山県立東岡山工業高等学校主催「平成３０年度部活動夏季学習」ストレス・マネジメントー体験、ストレス・マネジメント教育の実際ー　対象：部活動生徒 50 名（2018.8.17　会場：岡山県立東岡山工業高等学校）	平成 30 年 8 月	「すぐに実践してみたい」「体験しながら学べたのでよかった」「試合で実践してみたい」などの感想が多く大変好評であった。
兵庫県加東市立滝野中学校「hyper-QU を活用した学級づくり-要支援群の生徒へのかかわりを中心にして-」「講師」	平成 30 年 8 月	「学級づくりの参考になった」「次回も是非お願いしたい」等の感想が多く、研修後も複数の教員からの質問があった。
岡山県教育委員会・岡山県立玉野高等学校主催「平成 30 年度　高大接続研修：i-check データからみるクラス経営」「講師」	平成 30 年 8 月	「生徒への個別指導の参考になった」「担任として学級の実態が把握でき、すぐに学級づくりに生かせる」などの感想が多く大変好評であった。
子育てカレッジ「平成 30 年度 専門研修「子どもの『いのち』を育む保育経営の実際ーストレス・マネジメント教育の実際を体験から学ぶー」「講師」18:30～19:30	平成 30 年 10 月	「保育者や教育者として、どう子どもの心を育て、子ども達のストレスと向き合うかの方向性が見えた」「次回も楽しみにしたい」などの感想が多かった。
岡山県教育委員会・岡山県立備前緑陽高等学校主催「平成 30 年度　人権・教育相談講演会：『いのちの教育』ー今、あらためて『命の大切さ』について考えるー」講師（対象：生徒・保護者・教職員 500 名　会場：岡山県立備前緑陽高等学校体育館）	平成 30 年 10 月	「『いのちの教育』ー今、あらためて『命の大切さ』について考えるー」のテーマで、生徒・保護者・教職員 500 名を対象に講演をした。「『プラス思考』で今後は生活したい」「我が子の長所や頑張りを見つめ直したい」などの感想が多く、大変好評であった。
平成 30 年度　第 1 回「新見市総合教育会議」（教育委員出席・発表「地域資源・人材を活かした新見らしい教育についてー『塩から子』という人づくりについてー」16:00～17:00　新見市役所南庁舎 1F　1C 会議室	平成 30 年 10 月 16 日	住本は、新見市教育委員として出席し、新見公立大学健康保育学科長・教授の立場からも「地域資源・人材を活かした新見らしい教育についてー『塩から子』という人づくりについてー』」のテーマで提案した。
平成 31 年度高梁・新見地区教科用図書（小学校：国語・書写・社会・地図・算数・理科・生活・音楽・図画工作・家庭・保健・英語・道徳）採択市教育委員会協議会「委員」・「役員：監事」	平成 30 年度	「委員」・「役員：監事」として、教科用図書の採択を進めた。適正かつ公正な採択の確保ができたと高評価を得た。
岡山県作陽高等学校主催事業「平成 30 年度　高大接続研修：i-check データからみるクラス経営の在り方」「講師」	平成 30 年 11 月	「講師からの実践的助言は、とても参考になりうれしい」「次年度も、是非同じ講師にお願いしたい」等の感想が多く、研修後も複数の教員からの質問が

		あった。
新見市教育委員会「プログラミング教育　小・中学生実践発表会」「審査委員・全体講評」13:30～17:00　新見市役所南庁舎	平成 30 年 11 月	昨年度に引き続き、新見市教育委員会主催の「プログラミング教育　小・中学生実践発表会」の「審査委員長」として各発表にコメントをし、発表した生徒からは「意欲を持てる助言をもらって、さらに頑張りたい」等の感想が多く、教育長から次年度以降も「審査委員長」の依頼を受けた。
赤磐市立ひかり幼稚園 PTA 講演会「心を育む子育て 10 ヶ条」10:00～11:30	平成 30 年 11 月	「保育者や教育者として、どう子どもの心を育て、子ども達の心やいのちと向き合うかについて、その方向性が見えた」「また次回も楽しみにしたい」などの感想が多く、好評であった。
平成 30 年度　新見市婦人連合協議会・新見市民運動推進協議会大会「『折れない心』のつくり方」－「いのちの教育」「心の教育」の視点からー」2018.1202※婦人会講演会　「講師」　会場：新見まなび広場　大ホール　対象：新見市会員他一般市民 500 名	平成 30 年 12 月	「『折れない心』のつくり方」－「いのちの教育」「心の教育」の視点からー」のテーマで講演をした。新見市長はじめ、多数の来賓をお迎えしての講演であったが、講演後は「大切なテーマで、しかもわかりやすい内容で聞いてよかった」「すぐ実践できる内容で参考になった」等の感想が多く好評であった。なお、講演の様子はケーブルＴＶで放映された。
石川県教員総合研修センター　平成 30 年度　初任者研修（中・高）（講義・演習）「いじめ・非行等の理解ーいじめ・不登校防止等,『いのちの教育』の教育実践よりー」2018.12.6 9:30～16:30　会場：石川県教員総合研修センター	平成 30 年 12 月	(講義・演習)「いじめ・非行等の理解ーいじめ・不登校防止等,『いのちの教育』の教育実践よりー」のテーマで石川県教育委員会初任者に研修を進めた。「『教師』として子どもに向き合う心構えをしっかりと持つことができた」「保護者との連携の仕方や生徒指導・教育相談の具体的な手法の理解を深めることができた」などの感想が多くを占め、質疑応答も多数あり、高い評価を得た。
岡山県立高松農業高等学校主催事業「平成 30 年度高大接続研修：i-check データからみるクラス経営の在り方」「講師」	平成 30 年 12 月	「講師からの助言は、とても参考になった」「次回も是非同じ講師にお願いしたい」等の感想が多く、研修後も教員からの質問が多かった。
鳥取県私立学校　「平成 30 年度 hyper-QU 活用研修会」講師	平成 30 年 12 月	「クラス作りに生かす hyper-qu 研修会」のテーマで鳥取県内の私立学校の教職員に講演をした。「学級づくりの手立てについて具体的に理解できた」等の感想が多く、質疑応答も活発であった。
兵庫県稲美町教育委員会主催「平成 30 年度第 2 回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会：昨年度小中学校における問題行動の状況・中学校区ごとによる話し合い」「講師（副委員長)」	平成 31 年 1 月	平成 30 年度の小・中学校における問題行動の状況について（年間)、中学校区ごとにグループで協議した。住本は、講師（副委員長）として助言をした（年度総括・助言)。

（会場：兵庫県稲美町役場コミュニティセンターホール） 石川県教育委員会・石川県教育センター主催「平成30年度　カウンセラー教員養成研修（講義・演習）絆づくりー教育カウンセリングの視点からー」「講師」（会場：石川県教員総合研修センター　対象：全県　教職員　9:30～16:00）	平成31年1月	（講義・演習）絆づくりー教育カウンセリングの視点からー」について、特に、いじめ・不登校対策の手立てについて講義を進めた。「教育カウンセラーとして、その理論や技法について、体験的に学べた」と、受講者からも高評価であった。
児童虐待対応専門アドバイザー事業による研修会「不登校児童・生徒への支援の在り方を考えるー子どもの悩みから見えてくるものー」「講師」平成31年3月4日（月）午後2時00分～午後4時00分　やぶ保健センター 岡山市教育委員会・適応指導教室　ラポート牧山主催「適応指導教室　不登校生支援授業」「講師」（会場：岡山市適応指導教室　ラポート牧山　対象：適応指導教室　ラポート牧山　職員）14:00～15:30	平成31年3月 平成31年3月	「不登校児童・生徒への支援の在り方を考えるー子どもの悩みから見えてくるものー」について、不登校事例が複数出され、事例検討を進めた。「具体的な手立てについての助言があり、とても参考になった」と、受講者からも高い評価であった。 「検討した事例への手立てが明確に理解できよかった」「事例への介入法が具体的に理解できた」「今後も講師には定期的に指導してほしい」等の感想が多く、高い評価であった。
兵庫県教育委員会　兵庫県立夢前高等学校主催特別授業「望ましい人間関係づくり」 ー「心の教育」「いのちの教育」の視点からー」「講師」（兵庫県教育委員会「特別非常勤講師」）10:50～12:40 岡山県教育委員会・岡山県立東岡山工業高等学校主催事業「平成31年度　『思春期サポート事業』」講師（スクールカウンセラー）（年間12回）	令和1年5月 平成31年度	兵庫県教育委員会「特別非常勤講師」として「望ましい人間関係づくりー「心の教育」「いのちの教育」の視点からー」のテーマで授業を担当した。 岡山県教育委員会・岡山県立東岡山工業高等学校主催事業「平成31年度　『思春期サポート事業』」講師（スクールカウンセラー）を委嘱された。
岡山県作陽高等学校主催事業「平成31年度　高大接続研修：i-checkデータからみるクラス経営の在り方」「講師」13:30～17:30	令和1年6月	「全体指導は勿論、子ども一人一人への個別指導の参考になった」「担任としてクラスの実態が把握でき、すぐに学級づくりに生かせる」などの感想が多く大変好評であった。
岡山県立備前緑陽高等学校主催事業「平成31年度高大接続研修：i-checkデータからみるクラス経営の在り方」「講師」14:00～17:30 岡山県立美作高等学校主催事業「平成31年度　高大接続研修：i-checkデータからみるクラス経営の在り方⑴」「講師」14:00～17:30	令和1年7月 令和1年7月	「担任として、学級の実態や生徒一人一人の状況が正確に把握でき、すぐに学級づくりに生かせる」などの感想が多く好評であった。 「クラス担任として学級の実態が的確に把握でき、すぐに学級づくりや生徒指導に生かせる」などの感想が多かった。

宝塚医療大学「非常勤講師」「教育相談」授業「構成的グループ・エンカウンターの理論と実際」2019.7.6（会場：宝塚医療大学）1限･2限　9:00～10:30　10:40～12:10　　50名	令和1年7月	宝塚医療大学の「教育相談」授業の「非常勤講師」を委嘱され、「構成的グループ・エンカウンターの理論と実際」のテーマで授業を担当した。学生による授業評価では、8割以上が「大変満足している」の評価であった。
兵庫県稲美町教育委員会主催「平成31年度第1回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会：昨年度小中学校における問題行動の状況・中学校区ごとによる話し合い」「講師（副委員長）」（会場：兵庫県稲美町役場コミュニティセンターホール）	令和1年7月	平成30年度の小・中学校における問題行動の状況について（前半）、中学校区ごとにグループで協議した。住本は、講師（副委員長）として助言をした。
岡山県立東岡山工業高等学校主催事業「平成31年度　高大接続研修：i-checkデータからみるクラス経営の在り方」「講師」14:00～17:30	令和1年7月	「クラス担任として学級の実態が的確に把握でき、すぐに学級づくりや教育相談に生かせる」などの感想が多かった。
岡山県立美作高等学校主催事業「平成31年度　高大接続研修：i-checkデータからみるクラス経営の在り方⑵」「講師」14:00～17:30	令和1年7月	「担任として学級の実態がしっかり把握でき、すぐに教育相談・生徒指導に生かせる」などの感想が多く、好評であった。
滋賀県立学校いじめ問題調査委員会（会場：滋賀県庁）	令和1年7月	県立学校におけるいじめ問題について、委員（学識経験者）として議論した。
兵庫県立上郡高等学校主催事業「平成31年度　高大接続研修：i-checkデータからみるクラス経営の在り方⑵」「講師」13:45～17:30　1/2年生	令和1年7月	「講師からの助言は、とても参考になった」「次回も是非講師をお願いしたい」等の感想が多く、研修後も教員からの質問が多かった。
岡山県立岡山東商業高等学校主催事業「平成31年度　高大接続研修：i-checkデータからみるクラス経営の在り方⑵」「講師」13:00～17:30	令和1年7月	「コメントにより担任として学級の実態がしっかり把握できた。すぐに教育相談や生徒指導に生かしたい」「具体的な手立てについての助言はいつもありがたいと実感している」などの感想が多く、大変好評であった。
鳥取県教育委員会・鳥取県立日野高等学校主催「学級経営に活かすhyper-QU研修会」「講師」13:00～17:00	令和1年7月	「講師の助言により、学級の実態が的確に把握できた。すぐに生徒指導、教育相談、学級経営に活用したい」などの感想が多く、好評であった。
岡山県教育委員会主催「平成31年度　第1回　岡山県いじめ問題対策連絡協議会」「会長」（14:00～16:30　会場：岡山県庁）	令和1年7月	岡山県教育委員会からの委嘱を受け、岡山県いじめ問題対策連絡協議会会長として、組織を企画運営した。
新見市教育委員会養護教諭部会主催夏季研修会「『折れない心』のつくり方ー「いのちの教育」	令和1年8月	新見市内の小・中学校の養護教諭が一堂に会した研修会。「『折れない心』のつくり方ー「いのちの教

「心の教育」の視点からー」「講師」2019.8.2 10:00～12:00　新見市正田ふれあいセンター		育」「心の教育」の視点からー」のテーマで研修を進めた。
岡山県立東岡山工業高等学校主催「令和元年度 部活動夏季学習」「講師」「ストレス・マネジメントー体験、ストレス・マネジメント教育の実際ー」（2019.8.16　10:00～12:00　岡山県立東岡山工業高等学校　運動部活部員 70 名）	令和１年８月	「体験しながら学べたのでわかりやすかった」「すぐに実践してみたい」「試合で緊張したときに今日学んだことを実践してみたい」などの感想が多く大変好評であった。
新見市教育委員会生徒指導部会主催夏季研修会「『いのちの教育』の視点からみた人権教育の推進についてーいじめ問題を中心にしてー」「講師」日時： 2019.8.20　10:00～11:40　　会場：阿新教育会館	令和１年８月	新見市内の小・中学校の生徒指導担当者が集まった研修で、「『いのちの教育』の視点からみた人権教育の推進についてーいじめ問題を中心にしてー」のテーマで研修会講師を務めた。
兵庫県東条中学校主催　「学級経営に活かす hyper-QU 研修会」「講師」13:30～16:00	令和１年８月	「講師からの助言は、大変参考になった」「次回も是非講師をお願いしたい」等の感想が多く、研修後も教員からの質問が多かった。
平成 31 年度　新見千屋温泉いぶきの里第 16 回経営諮問委員会「講師」「カウンセラー、転んで学んだ『子育て十か条』ー子どもの悩みから見えてくるものー」2019.8.29　16:00～19：00	令和１年８月	「カウンセラー、転んで学んだ『子育て十か条』ー子どもの悩みから見えてくるものー」のテーマで講師を務めた。
岡山市教育委員会・適応指導教室　ラポート牧山主催「適応指導教室　不登校生支援授業」「講師」（会場：岡山市適応指導教室　ラポート牧山　対象：適応指導教室　ラポート牧山　職員）13:00～16:00	令和１年９月	「事例への手立てが明確に理解できよかった」「事例への介入法が具体的に理解できた」「同じ講師で定期的に指導をお願いしたい」等の感想が多く、高い評価であった。
岡山県立新見高等学校　高大接続模擬授業・進路ガイダンス「講師」①進路ガイダンス・模擬授業 13:55～14:40　岡山県立新見高校生１年生 15 名 2 年生 25 名　計 40 名（健康保育学科志望者）②【内容】ガイダンス　学科の特色　入試の概略等 生徒の希望による模擬授業実施、アクティブ・ラーニング型授業風景動画の視聴	令和１年９月	【生徒の感想】「学科の特色がよくわかった」「大学の授業が、具体的にイメージできた」「進路についてのイメージがより明確になった」等、大学にとっても、地元高校への広報活動の場として大変よい機会であった。
岡山県教育委員会主催「令和元年度心理検査活用リーダー研修講座」（岡山県立学校人権教育サポート事業）『i-check』の活用について ー『i-check』の活用のポイントと 具体的な手立てについてー「講師」2019.9.27　13:45～15:45 会場：岡山県生涯学習センター	令和１年９月	岡山県下に i-check を活用する学校が増加しており、この度岡山県教育委員会主催による研修会がもたれ、講師を務めた。

岡山県教育委員会・岡山県立備前緑陽高等学校主催「いじめ対策会議：いじめの予防と対応」「講師」（会場：岡山県立備前緑陽高等学校　対象：高等学校教職員５０名）14:00～17:00	令和１年10月	いじめの事例について検討した。「的確な助言をもらって方向性が見えた」「これからも定期的に指導助言をお願いしたい」等の意見が出、好評であった。
岡山県作陽高等学校主催事業「平成31年度　高大接続研修：i-checkデータからみるクラス経営の在り方」「講師」10:30～13:30	令和１年10月	「講師からの助言が参考になった」「次回も是非講師をお願いしたい」等の感想が多く、研修後も教員からの質問が多かった。
平成31年度にいみ子育てカレッジ「子育て支援者に対する専門研修」「保育カウンセリング技法の実際」「講師」	令和１年10月	「保育者や教育者として、どう保護者とつながり子どもの心を育てていくか、その方向性が見えた」「次年度も楽しみにしたい」などの感想が多かった。
岡山県教育庁　福利課　公立学校共済組合　岡山支部主催「テーマ：職場の健康づくり研修会支援事業『学校園現場における健康増進の推進について』」「講師」15:00～16:30　会場：美作市民センター　対象：公立学校共済岡山支部内　養護教諭50名	令和１年10月	公立学校共済岡山支部内　養護教諭　50名を対象に、具体的事例を中心に指導助言をしながら進めた。「具体的でわかりやすかった」「実践的な内容でよかった」等の感想が多く、大変好評であった。
兵庫県明石市教育委員会スーパーバイザー事業「講師」明石市立松ケ丘幼稚園　「子どもの自己肯定感を育てる保育実践の在り方を探る－子どもや保護者の心に寄り添った教育実践のために－」2019.11.1　9:00～12:00保育参観　13:00～16:00講演･指導・助言（2020.1.17、2020.2.4、2020.3.9）	平成31年度	「子どもの自己肯定感を育てる保育実践の在り方を探る－子どもや保護者の心に寄り添った教育実践のために－」のテーマで講師を務めた。次年度11月の研究発表予定である。
新見市教育委員会「プログラミング教育　小・中学生実践発表会」「審査委員長」13:30～17:00　新見市役所南庁舎	令和１年11月	一昨年度、昨年度に引き続き、新見市教育委員会主催の「プログラミング教育　小・中学生実践発表会」の「審査委員長」として各発表にコメントをし、発表した生徒からは「意欲を持てる助言をもらって、一層努力を重ねたい」等の感想が大半を占めた。
神戸新聞取材（2019.11.15）「神戸市立東須磨小学校　教師によるいじめ・暴力事案へのコメント」	令和１年11月	2019年12月17日兵庫県全域判　掲載「リレーシリーズ：先生はいま」。
岡山県立岡山東商業高等学校主催事業「平成31年度　高大接続研修　：i-checkデータからみるクラス経営の在り方」「講師」15:55～17:30	令和１年11月	「講師からの助言が参考になった」「次年度も是非講師をお願いしたい」等の感想が多く、研修後も教員からの個別の質問が多かった。
滋賀県立学校いじめ問題調査委員会（会場：滋賀県庁）13:00～16:30	令和１年12月	県立学校におけるいじめ問題について、委員（学識経験者）として議論した。

岡山県立美作高等学校主催事業「平成 31 年度　高大接続研修：i-check データからみるクラス経営の在り方⑵」「講師」14:00～17:30 兵庫県教育委員会　兵庫県立夢前高等学校主催特別授業兵庫県立夢前高等学校主催講演会「講師」2019.12.16「『折れない心』を持って見つめる私の『将来の夢』－「心の教育」「いのちの教育」の視点からー」10:50～12:40	令和 1 年 12 月 令和 1 年 12 月	「講師からの助言が参考になった」「講師が認めてくれるので意欲的に取り組める」等の感想が多く、研修後も教員からの質問が重なった。 兵庫県教育委員会「特別非常勤講師」として「『折れない心』を持って見つめる私の『将来の夢』－「心の教育」「いのちの教育」の視点からー」のテーマで授業を担当した。
岡山県教育委員会・岡山県立東岡山工業高等学校主催事業「令和元年度　『思春期サポート事業』」講師（スクールカウンセラー）15:00～18:00 岡山県立東岡山工業高等学校 兵庫県明石市「スーパーバイザー」：明石市教育委員会・2019/2020 年度 明石市立松が丘幼稚園研究への助言・「スーパーバイザー」　11:00～16:30 明石市立松が丘幼稚園【「令和元年度・令和２年度 兵庫県明石市教育委員会指定　幼稚園教育研究実践　『幼児期における〔自尊感情〕育成の方途を探る』」】 兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフグループ主催「小野市いじめ防止市民会議」「有識者・委員」 石川県教育委員会・石川県教育センター主催「令和元年度　カウンセラー教員養成研修（講義・演習）児童生徒の心の理解と問題行動の未然防止のためにーいじめ・不登校防止，『いのちの教育』の教育実践よりー」「講師」（会場：石川県教育センター、対象：全県　高等学校教員・特別支援学校教員　9::30～16:30　石川県教育センター 兵庫県稲美町教育委員会主催「平成 30 年度第 2 回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会：昨年度小中学校における問題行動の状況・中学校区ごとによる話し合い」「講師（副委員長）」（会場：兵庫県稲美町役場コミュニティセンターホール） 岡山県教育委員会主催「令和 2 年度　第 2 回　岡山県いじめ問題対策連絡協議会」「会長」（14:30～	令和 2 年 1 月 令和 2 年度 令和 2 年度 令和 2 年 1 月 令和 2 年 1 月 令和 2 年 1 月 令和 2 年 2 月	スクールカウンセラーとして、スクールソーシャルワーカーとも連携しながら、不登校事例等を支援し、好転に導くことができた。また、教職員へのコンサルテーションの重要性が増してきたように感じる。 2 年間の研究で、研究テーマは『幼児期における〔自尊感情〕育成の方途を探る』であった。幼児教育実践に臨床の視点を持つ等の取組が効果を上げることが確認され、報告書にまとめ、発表会も盛会であった。 小野市のいじめ等防止に関連した有識者としての助言を重ねた。 （講義・演習）児童生徒の心の理解と問題行動の未然防止のためにーいじめ・不登校防止，『いのちの教育』の教育実践よりー」のテーマで講師を務めた。受講者からは、「理論と実践療法の学びを深めることができた」「明日からすぐに活用したい」等の意見が多く、高評価を得た。 平成 31 年度の小・中学校における問題行動の状況について（年間）、中学校区ごとにグループで協議した。住本は、講師（副委員長）として助言をした（年度総括・助言）。 令和元年度の岡山県いじめ問題への取組について総括をした。

16:30　会場：岡山県庁） 滋賀県立学校いじめ問題調査委員会「委員」（学識経験者：日本生徒指導学会 推薦）15:00～17:30 滋賀県庁	令和２年２月	教育学の立場から、いじめ問題についての意見を述べ、令和元年度の総括をした。
令和元年度 新見市子ども・子育て会議　「会長」14:00～16:00　新見市南庁舎	令和２年３月	令和元年度の新見市子ども・子育て会議の取組について総括をした。
令和２年度　高梁・新見地区教科用図書採択市教育委員会協議会委員（新見市教育委員会委員・監事）新見市南庁舎（中学校全教科）15:30～17:30	令和２年４月	当該委員として、高梁・新見地区教科用図書採択について協議した。
新見公立大学　非常勤講師　健康科学部　健康保育学科２年生　47 名『教育学総論』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）2 限～4 限・2 限～5 限・2 限	令和２年６月６日・６月 20 日・８月１日	非常勤講師として授業を担当した。アクティブ・ラーニング型の授業展開により、学生の理解度は高かった（評価高得点）。
新見公立大学　非常勤講師　健康科学部　健康保育学科１年生　57 名『保育者論』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）2 限～3 限・2 限～4 限・3 限～4 限集中講義授業担当	令和２年６月 27 日・７月 11 日	非常勤講師として授業を担当した。参加型・体験型、ＩＣＴ教育活用等の授業展開により、学生の理解度は高かった（評価高得点）。特に、グループワークを通して、目指す保育者像を探る体験が印象深かったようで、当該活動で、科目目標に迫ることができたと感じた。
「2020 年度 奈良学園 いじめ問題対応教員研修」「講師」※奈良文化高等学校(奈良県大和高田市東中 127)：7/27（月）13:30～15:00	令和２年７月 27 日	「いじめ防止」「初期対応」「早期発見」等のテーマについて講演をした。研修内容については、大学紀要にまとめた。
岡山県新見市立新見保育所「ロボホンと園児のふれあい活動」の平成 31 年度の活動の振り返り［管理職への聞き取り調査］ ※新見公立大学学長配分研究採択 300,000 円 【日時】2020/8/1　17:00～17:30（ロボホン・クラブ部員同席） 【場所】：新見市立新見保育所（新見市哲多町蚊家 4296－1・新見市教育委員会管轄） 【対象】：新見保育所園児 3･4･5 歳児 25 名	令和２年８月１日	ア）ロボホンの動き：挨拶・歌唱・ダンス。イ）園児の反応：挨拶⇒挨拶で返事 95%（満面の笑顔 60%・笑顔 40%）・歌唱⇒ロボホンと一緒に歌う（満面の笑顔）・ダンス⇒ハミングしながら一緒に踊る 25%・ロボホンの周りに笑顔で見守る 73%・その他 2%　ウ）保育者より：ロボホンの愛らしさ、人に近い動き（大きさ・表情・しぐさ・二足歩行・音楽が流れる点　等）に親近感を高め、ほとんど、園児がロボホンの側を離れていなかった。子どもの表情が皆朗らかでうれしそうだった。コミュニケーションが普段とれない園児が興味を示していた。新見公立大学年報にて報告。
兵庫県明石市「スーパーバイザー」：明石市教育委	令和２年８月	研究テーマは、『幼児期における〔自尊感情〕育成

員会・2019/2020 年度 明石市立松が丘幼稚園研究への助言・「スーパーバイザー」　10:00～17:00 明石市立松が丘幼稚園【「令和元年度・令和２年度兵庫県明石市教育委員会指定　幼稚園教育研究	4 日	の方途を探る』。参観後、教師の質問に対してケースカンファレンスで助言をした。参加者は特に、エビデンス・ベースド・エデュケーションの大切さを再確認することができた。
奈良学園大学　人間教育学部　オープンキャンパス模擬授業担当「体験『いのちの教育』の実際」高校生・保護者計 30 名参加	令和 2 年 8 月 8 日	オープンキャンパス模擬授業を担当した。模擬授業のタイトルは「体験『いのちの教育』の実際」で、高校生・保護者計 30 名が参加した。
兵庫県教育委員会・兵庫県立上郡高等学校主催「総合質問紙調査『アイチェック』を活用した学級づくり研修会」「講師」14:00～18:00 兵庫県立上郡高等学校	令和 2 年 8 月	「総合質問紙調査『アイチェック』を活用した学級づくり研修会」の研修テーマで講師を務めた。全担任と面談を進めた。
「2020 年度 奈良学園 いじめ問題対応教員研修」「講師」※奈良学園中学校・高等学校（奈良県大和郡山市山田町 430）：8/27（木）15:40～17:10	令和 2 年 8 月 27 日	「ネット上のいじめ」「いじめ防止」「初期対応」「早期発見」等のテーマについて講演をした。研修内容については、大学紀要に掲載した。
「2020 年度 奈良学園 いじめ問題対応教員研修」「講師」※奈良学園小学校、奈良学園幼稚園（奈良県奈良市中登美ヶ丘 3-15-1）：9/7（月）15:50～17:20	令和 2 年 9 月 7 日	「ネット上のいじめ」「いじめ防止」「初期対応」「早期発見」等のテーマについて講演をした。重大事態の案件事例についても説明した。研修内容については、大学紀要に掲載。
兵庫県稲美町教育委員会主催「令和 2 年度第 1 回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会：本年度小中学校における問題行動の状況」「講師（副委員長）」（会場：兵庫県稲美町役場コミュニティセンターホール）	令和 2 年 9 月	兵庫県稲美町における小中学生の問題行動の現況について事務局から報告があり、専門家の立場から助言をした。
「2020 年度 奈良学園 いじめ問題対応教員研修」「講師」※奈良学園登美ヶ丘中高（奈良県奈良市中登美ヶ丘 3-15-1）：9/10（木）16:00～17:30	令和 2 年 9 月 10 日	「いのちの教育」をベースにしたいじめ防止教育プログラムの実践等について講演をした。研修内容については、大学紀要にまとめて報告をした。
兵庫県明石市「スーパーバイザー」：明石市教育委員会・2019/2020 年度 明石市立松が丘幼稚園研究への助言・「スーパーバイザー」　9:00～16:30 明石市立松が丘幼稚園【「令和元年度・令和２年度兵庫県明石市教育委員会指定　幼稚園教育研究実践　『幼児期における〔自尊感情〕育成の方途を探る』」】	令和 2 年 9 月 15 日	研究テーマは、『幼児期における〔自尊感情〕育成の方途を探る』。参観後、教師の個別の質問に対してケースカンファレンスで助言を重ねた。回を重ねる度に、参加者の質問に深まりを感じる。特に、事例から学ぶ教師としての姿勢や事実からの子供の内面の動きの読み取りが深くなってきていた。
岡山県教育委員会・岡山県立津山高等学校主催「総合質問紙調査『アイチェック』を活用した学	令和 2 年 9 月	「総合質問紙調査『アイチェック』を活用した学級づくり研修会」の研修テーマで講師を務めた。全員

級づくり研修会」「講師」15:30～18:00 岡山県立津山高等学校		のホームルーム担任と面談をっし、手立て等について助言をした。
岡山県教育委員会主催「令和２年度心理検査活用リーダー研修講座（岡山県　県立学校人権教育サポート事業）『ｉ－ｃｈｅｃｋ』の活用について－『ｉ－ｃｈｅｃｋ』の活用のポイントと具体的な手立てについて－」「講師」13:45～17:00 岡山県総合教育センター対象：岡山県立学校生徒指導・教育相談担当者 20 名	令和２年９月	昨年度に引き続き、『ｉ－ｃｈｅｃｋ』の活用のポイントと具体的な手立てについて」講師を務めた。ほぼ全員の参加者より質問があり、実践例を紹介しながら応答した。
兵庫県明石市「スーパーバイザー」：明石市教育委員会・2019/2020 年度 明石市立松が丘幼稚園研究への助言・「スーパーバイザー」　13:30～16:30 明石市立松が丘幼稚園【「令和元年度・令和２年度 兵庫県明石市教育委員会指定　幼稚園教育研究実践　『幼児期における〔自尊感情〕育成の方途を探る』」】	令和２年 10 月６日・10 月 27 日	２年間の研究で、研究テーマは『幼児期における〔自尊感情〕育成の方途を探る』であった。教師自身が自尊感情を高めておくことの大切さ等が確認され、報告書にまとめ、発表会も盛会であった。
新見公立大学　非常勤講師　健康科学部　健康保育学科２年生　47 名『教育相談』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）・１限～3 限・１限～4 限・１限～4 限・１限～4 限集中講義 授業担当集中講義 授業担当	令和２年 10 月 31 日・12 月 12 日・令和３年１月 23 日・２月 13 日	非常勤講師として授業を担当した。参加型・体験型の双方向授業展開により、学生の理解度は高かった「事例についての話しが多かったので具体的に学ぶことができた」「カウンセリング・マインドを持った保育者を目指そうと強く思った」等の感想も多かった（評価高得点）。
新見市教育委員会・新見市教育研究部会 養護教諭部会研究打合会　15:30～17:30　新見公立大学	令和２年 12 月	総合質問紙を活用した教育実践のテーマで助言をした。
大阪府立狭山高等学校２年生 16 名への校内ガイダンス・模擬授業「〈教育学〉体験『いのちの教育』の実際」「講師」　教育学志望生徒 16 名にガイダンス・模擬授業実施。	令和２年 11 月５日	熱心に取り組み、２年生であったが、本学に大変興味を持ってもらった。（男子３・女子 13）グループワーク・発表形式の授業実施。13:00～15:10　大阪府立狭山高等学校。「命の大切さについて深く考えることができた」「大学の授業がイメージできて良かった」「命や人生について考える機会を持てて良かった」等の意見が多く好評であった。
兵庫県明石市「スーパーバイザー」：「令和元年度・令和２年度　兵庫県明石市教育委員会指定 幼稚園教育研究実践研究発表会　『幼児期における〔自尊感情〕育成の方途を探る』」全体講演「講師」11:00～16:30 明石市立松が丘幼稚園	令和２年 11 月 24 日	２年間の研究の集大成となる研究発表会であった。『幼児期における〔自尊感情〕育成の方途を探る』の演題で、全体講演の講師を務めた。研究会出席者の感想からも、高評価であった（コロナ禍により、参加者数を限定せざるを得なかったが、出席者は、

		「得るものが多かった」「事例を取り上げていただいたので、とても具体的で理解しやすかった」等の意見が多かった)。研究成果は研究紀要にまとめた。
兵庫県但馬地区県立高等学校 PTA 連合会 PTCA 研究大会「発達から見た高校生の心理とかかわり方ー高校生との親子関係について考えるー」「講師」13:00～14:30　豊岡赤穂当学校和魂百年館　対象：但馬地区県立高等学校 PTA 連合会会員 200 名	令和 2 年 11 月 28 日	兵庫県但馬地区県立高等学校 PTA 連合会 PTCA 研究大会の全体会講師を務めた。コロナ禍の影響で 500 名参加のところを 200 名に絞られていたが、参加者からは「子供の立場で考えることの大切さを再確認できた」「発達を踏まえて子供と向き合うことが大切だと実感した」等の感想が多くあった。
鳥取県教育委員会・鳥取県立日野高等学校主催 2020 年度教職員研修会「hyperQU を活用した学級経営の在り方」「講師」13:00～15:30	令和 2 年 12 月	昨年度に引き続き「hyperQU を活用した学級経営の在り方」のテーマで質問紙調査の分析依頼と手立てについての助言を求められた。
兵庫県教育委員会・兵庫県立夢前高等学校主催 特別授業（対象：高校 1 年生 74 人）「兵庫県立夢前高等学校主催講演会 2020.12.1510:50～12:40 兵庫県立夢前高等学校	令和 2 年 12 月 15 日	昨年度に引き続き『折れない心』を持って見つめる私の『将来の夢』－『心の教育』『いのちの教育』の視点からー」のテーマで高校生を対象に授業の講師を務めた。「はじめて命について真剣に考える場になった」等の意見が多く好評であった。
新見公立大学「非常勤講師」「教育相談（幼)」の科目を担当 第1限～第4限（9：20～16:30）新見公立大学	令和3年1月23日	新見公立大学非常勤講師として、「教育相談（幼)」の科目を担当する。健康保育学科2年57人が受講し、「実践的内容だった」と好評であった。
岡山県教育カウンセラー協会研修会「コロナ禍における『心のケア』について考える―『心の教育』『いのちの教育』の視点から―」「講師」	令和 3 年 2 月 7 日	岡山県教育カウンセラー協会研修会「コロナ禍における『心のケア』について考える―『心の教育』『いのちの教育』の視点から―」のテーマで、講師を務めた。オンラインでの講演であったが、本学の学生も 8 名参加し、受講者の方は熱心に参加された。
兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」「有識者・委員」小野市役所	令和2年度	「有識者・委員」として、年度のまとめをした（総括：2/9・3/10)。

岡山県新見市立新見保育所「ロボホンと園児のふれあい活動」の平成 31 年度の活動の振り返りと本年度の総括[管理職への聞き取り調査Ⅱ] ※新見公立大学学長配分研究採択 300,000 円 【日時】2021/2/12　15:30～16:00（ロボホン・クラブ部員同席） 【場所】: 新見市立新見保育所（新見市哲多町蚊家 4296－1・新見市教育委員会管轄） 【対象】: 新見保育所園児 3･4･5 歳児 25 名	令和 3 年 2 月 12 日	保育所長より、「保育者のかかわりでは反応しない園児が、ロボホンには反応していた」「人型ロボットペッパーに対しては、威圧感から、恐怖を感じた園児が複数名いたが、ロボホンに対しては、ほとんどの園児が親近感を高めていた。それは笑顔の多さから推測できた」「特別支援保育の可能性を強く感じた」等の聴取を総括とし、新見公立大学年報で報告した。
新見公立大学「非常勤講師」「教育相談（幼）」第 1 限～第 4 限新見公立大学	令和 3 年 2 月 13 日	新見公立大学非常勤講師として、「教育相談（幼）」（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生選択科目）の科目を担当する（集中講義）。健康保育学科 2 年 47 人が受講し、「保育現場で活用できる内容だった」と好評であった。
兵庫県稲美町教育委員会主催「令和 2 年度第 2 回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会：本年度小中学校における問題行動の状況」「講師（副委員長）」『講演：ネット上のいじめ対応と自殺予防教育プログラムについて』「講師」（会場：兵庫県稲美町役場コミュニティセンターホール）	令和 3 年 2 月 15 日	コロナ禍の状況から、「本年度小中学校における問題行動の状況」については、書面での報告がなされた。その後、『講演：ネット上のいじめ対応と自殺予防教育プログラムについて』の講師を務めた。参加の先生方からは、「ネット上のいじめ対応の具体的手立てがわかりやすかった」等の意見や「自殺への初動対応の実際が理解できてよかった」等の感想が多かった。
兵庫県明石市「スーパーバイザー」研究の振り返り「講師」15:00～16:30 明石市立松が丘幼稚園	令和 3 年 3 月 9 日	明石市教育委員会・2019/2020 年度 明石市立松が丘幼稚園研究への助言・「スーパーバイザー」【「令和元年度・令和２年度　兵庫県明石市教育委員会指定　幼稚園教育研究実践　『幼児期における〔自尊感情〕育成の方途を探る』」】関係者で反省会を実施し、2 年間の実践を振り返った。
岡山県いじめ問題対策連絡協議会「会長」	令和 3 年度	2021 年度の岡山県教育委員会取組の集約をした。
岡山県教育委員会　いじめ対策委員会「委員（学識経験者）」	令和 3 年度	2021 年度の取組の集約。各事例へのコンサルテーションを実施した。
兵庫県稲美町教育委員会主催事業「稲美町生きる力を育む小・中連携推進委員」『副委員長』	令和 3 年度	2021 年度 不登校、いじめ等問題行動への助言・研修会講師を務めた。

滋賀県立学校いじめ問題調査委員会「委員（学識経験者：日本生徒指導学会 推薦）	令和３年度	2021 年度 滋賀県立学校におけるいじめ重大事態の調査報告書（概要版は HP 掲載）を作成した。
兵庫県教育委員会　県立高等学校「特別非常勤講師」	令和３年度	兵庫県立高等学校での生徒対象にキャリア教育授業実践。年２回実施した。
兵庫県教育委員会・兵庫県立夢前高等学校主催[兵庫県教育委員会　県立高等学校「特別非常勤講師」10:50～12:40 兵庫県立夢前高等学校	令和３年４月13 日	兵庫県教育委員会・兵庫県立夢前高等学校主催[兵庫県教育委員会　県立高等学校「特別非常勤講師」として、特別授業（対象：高校１年生 85 人）「望ましい人間関係づくり」－『心の教育』『いのちの教育』の視点から－」を実施、「自分や身近な人の命について考えるいい機会であった」等の意見が多く、高評価であった。
新見公立大学「非常勤講師」『教育学総論』第１限～第４限、新見公立大学	令和３年４月24 日	『教育学総論』(幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する（集中講義)。健康科学部　健康保育学科２年 57 人が受講し、「保育現場で活用できる内容だった」と好評であった。
新見公立大学「非常勤講師」『保育者論』第１限～第３限、新見公立大学	令和３年５月１日	『教育学総論』(幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する（集中講義)。健康科学部　健康保育学科２年 57 人が受講し、「今回も保育現場で実践できる内容だった」と好評であった。
新見公立大学非常勤講師として、『保育者論』第１限～第５限、新見公立大学	令和3年5月8日	『保育者論』(幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する（集中講義)。健康科学部　健康保育学科１年 53 人が受講し、「保育現場で活用できる内容で、体験的に学ぶことができた」と好評であった。
新見公立大学非常勤講師として、『保育者論』第４限～第５限（オンライン)、新見公立大学	令和3年6月15日	『保育者論』(幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する（集中講義)。健康科学部　健康保育学科１年 53 人が受講し、「保育現場で活用できる内容で、参加型・体験型で学ぶことができた」と好評であった。

岡山県教育委員会主催研修会「講師」15:00～17:00 岡山県立東岡山工業高等学校（オンライン形式）	令和3年7月6日	岡山県教育委員会・岡山県立東岡山工業高校主催「総合質問紙調査『アイチェック』を活用した学級づくり研修会：特別支援教育事例検討会」で「講師」を務めた。「具体的手立てを理解でき、有益であった」と好評であった。
岡山県教育委員会主催研修会「講師」15:30～18:00 岡山県立津山高等学校	令和3年7月13日	岡山県教育委員会・岡山県立津山高等学校主催「総合質問紙調査『アイチェック』を活用した学級づくり研修会」で「講師」を務めた。「具体的な指導法まで助言していただき、有益であった」と好評であった。
兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」打ち合わせ会議 13:00～14:00　小野市役所	令和3年7月13日	兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」13:00～14:00。打ち合わせ会議出席。「有識者・委員」として、人権に関する課題について打ち合わせをした。
兵庫県稲美町教育委員会主催「令和３年度第１回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会（15:00～17:00 会場：兵庫県稲美町役場コミュニティセンターホール）	令和3年7月20日	兵庫県稲美町教育委員会主催「令和３年度第１回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会：本年度小中学校における問題行動の状況・振り返り」「講師（副委員長）」として、様々な児童生徒の問題行動に対して指導助言をした。「具体的手立てについて専門的な視点からの助言は有難かった」と好評であった。
兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」15:00～17:00。小野市役所	令和3年7月27	兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」に「有識者・委員」として出席し、主に人権課題に対して指導助言をした。
新見公立大学「非常勤講師」『教育学総論』第1限・『生徒指導論』第2限～第4限、新見公立大学	令和3年7月31日	『教育学総論』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する（集中講義）。健康科学部　健康保育学科1年57人が受講し、「全体総括によって、理論と実際のまとめができてよかった」と好評であった。その後、『生徒指導論』：健康科学部　看護学科3年8人：前期『生徒指導論』（2021年度 前期・養護教諭養成課程 履修生 必修科目前期：2.0単位　時間数：30時間　3年8人）の科目を担当する（集中講義）。健康科学部　看護学科3年8人が受講し、「理論と実践の区別ができ、わかりやすく理解できた」

		と好評であった。
新見公立大学「非常勤講師」『教育相談』第１限～第３限、新見公立大学	令和3年8月14日	『教育相談』：健康科学部　看護学科３年８人：前期『教育相談』(2021年度 前期・養護教諭養成課程 履修生 必修科目前期：2.0単位　時間数：30時間　３年８人）の科目を担当する（集中講義)。健康科学部　看護学科３年８人が受講し、「実践的でわかりやすかった」と好評であった。
兵庫県教育委員会主催研修会「講師」13:00～18：00上郡高等学校	令和3年8月30日	兵庫県教育委員会・兵庫県立上郡高等学校主催事業「i-checkデータからみるクラス経営」の研修テーマで「講師」を務めた。全クラス担任と面談をし、個別にデータ分析結果を伝え、担任ごとに指導助言をした。「エビデンスに基づいた助言だったので、とても説得力があった」等の意見が多く、高評価であった。
新見公立大学「非常勤講師」『生徒指導論』第１限～第４限、新見公立大学	令和3年8月31日	『生徒指導論』：健康科学部　看護学科３年８人：前期『生徒指導論』(2021年度 前期・養護教諭養成課程 履修生 必修科目前期：2.0単位　時間数：30時間　３年８人）の科目を担当する（集中講義)。健康科学部　看護学科３年８人が受講し、「実践的な内容の講義で、教育現場ですぐ活用できるものだった」と好評であった。
新見公立大学「非常勤講師」『生徒指導論』第１限～第４限、新見公立大学	令和3年9月1日	『生徒指導論』：健康科学部　看護学科３年８人：前期『生徒指導論』(2021年度 前期・養護教諭養成課程 履修生 必修科目前期：2.0単位　時間数：30時間　３年８人）の科目を担当する（集中講義)。健康科学部　看護学科３年８人が受講し、「理論を踏まえた実践的内容だった」と好評であった。
新見公立大学「非常勤講師」『教育相談』第１限～第４限、新見公立大学	令和3年9月7日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談』：健康科学部　看護学科３年８人：前期『教育相談』（2021年度 前期・養護教諭養成課程 履修生 必修科目前期：2.0単位　時間数：30時間　３年８人）の科目を担当する（集中講義)。健康科学部　看護学科３年８人が受講し、「グループワークも取り入れ、楽しく学ぶことができた」と高評価であった。

新見公立大学「非常勤講師」『教育相談』第１限～第４限、新見公立大学	令和3年9月8日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談』：健康科学部　看護学科３年８人：前期『教育相談』（2021年度 前期・養護教諭養成課程 履修生 必修科目前期：2.0単位　時間数：30時間　３年８人）の科目を担当する（集中講義)。健康科学部　看護学科３年８人が受講し、「実践的で理解しやすかった」と好評であった。
岡山県教育委員会主催「令和３年度心理検査活用リーダー研修講座（岡山県　県立学校人権教育サポート事業）13:45～17:00 岡山県総合教育センター対象：岡山県立学校生徒指導・教育相談担当者30名	令和3年9月16日	『ｉ－ｃｈｅｃｋ』の活用について－『ｉ－ｃｈｅｃｋ』の活用のポイントと具体的な手立てについて－」のテーマで「講師」を務めた。参加者からは「専門家から具体的な手立てを助言してもらい参加してよかった。すぐに実践したい」等の意見が多く、大変好評だった。
兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」打ち合わせ会議 13:00～14:00 小野市役所	令和3年9月21日	兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」。打ち合わせ会議出席。「有識者・委員」として、ハラスメントに関する課題について打ち合わせをした。
新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保)』第１限～第５限、新見公立大学	令和3年10月2日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保)』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する（集中講義)。健康保育学科２年57人が受講し、「保育現場で活用できる実践的な内容だった」と好評であった。
兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」「有識者・委員」15:00～17:00。小野市役所	令和3年10月5日	兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」に「有識者・委員」として出席し、主にハラスメント防止に関して指導助言をした。
新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保)』（オンライン・第５限)、新見公立大学	令和3年10月12日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保)』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する。健康保育学科２年57人が受講し、「教育現場で実践できる具体的な内容だった」と好評であった。（オンライン・第５限）

新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保)』(オンライン・第５限)、新見公立大学	令和3年10月17日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保)』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する。健康保育学科２年57人が受講し、「理論の説明でも具体例を挙げての解説もあり、理解しやすかった」と好評であった。(オンライン・第５限)、新見公立大学
新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保)』(オンライン・第５限)、新見公立大学	令和3年10月26日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保)』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する。健康保育学科２年57人が受講し、「保育現場で実践できるとても参考になる内容で、理解しやすかった」と好評であった。(オンライン・第５限)、新見公立大学
令和３年度　インターネット上の人権侵害の解消推進事業：大学との共同研究に係るシンポジウム（大阪府研究成果発表会)「指導者参加」(共同研究：大阪府人権局人権擁護課）大阪産業創造館 14:00～17:00	令和3年11月27日	令和３年度　インターネット上の人権侵害の解消推進事業：大学との共同研究に係るシンポジウム（大阪府研究成果発表会)：『インターネット上の人権侵害をどう防ぐか～教師をめざす学生として、意識改革から行動変容へ～』奈良学園大学　人間教育学部3回生：〇プロジェクトリーダー（住本ゼミ）伊藤美香・早川千世・横山菜摘　〇プロジェクトメンバー（住本ゼミ）岩永健汰・尾川涼夏・奥井秋穂・新里成哉・乗松貴大/「指導者」として助言指導。
滋賀県立学校いじめ問題調査委員会に「委員」(学識経験者：日本生徒指導学会 推薦）13:30～17:30 滋賀県庁	令和3年11月30日	滋賀県立学校いじめ問題調査委員会に「委員」(学識経験者：日本生徒指導学会 推薦）として出席。学識経験者として、知見を述べた。
岡山県新見市教育委員会主催「養護教諭中学校部会研修会」「講師」13:30～16:00 新見公立大学	令和3年12月7日	岡山県新見市教育委員会主催「養護教諭中学校部会研修会」の委員５名に「i-check を活用した保健指導」について指導助言をした。
新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保)』(第５限)、新見公立大学	令和3年12月7日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保)』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する。健康保育学科２年57人が受講し、「保育現場ですぐに実践できるとても参考になる内容であった」と好評であった。

鳥取県教育委員会主催研修会「講師」13:00～15:00　鳥取県立日野高等学校	令和3年12月21日	鳥取県教育委員会・鳥取県立日野高等学校主催の「2021年度教職員研修会「hyperQUを活用した学級経営の在り方」のテーマで「講師」を務めた。「専門的な助言をもらって参考になった」「実践を支持してもらい自信がついた」等の意見が多く高評価であった。
新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保)』(第5限)、新見公立大学	令和3年12月21日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保)』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する。健康保育学科2年57人が受講し、「教育現場で活用できる内容でよかった」と高評価であった。
兵庫県稲美町教育委員会主催「令和３年度第２回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会：本年度小中学校における問題行動の状況・振り返り」「講師（副委員長)」(15:00～17:00　会場：兵庫県稲美町役場コミュニティセンターホール)	令和4年1月18日	兵庫県稲美町教育委員会主催「令和３年度第２回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会：本年度小中学校における問題行動の状況・振り返り」で「講師（副委員長)」を務めた。「いじめ調査報告書から考えるいじめ防止教育プログラム開発の可能性」で講師も務め、「実践的内容だったので理解しやすかった」と好評であった。
兵庫県教育委員会・兵庫県立夢前高等学校主催[兵庫県教育委員会　県立高等学校「特別非常勤講師」10:50～12:40 兵庫県立夢前高等学校 13:25～15:15 兵庫県立夢前高等学校	令和4年1月19日	兵庫県教育委員会・兵庫県立夢前高等学校主催[兵庫県教育委員会　県立高等学校「特別非常勤講師」として、特別授業（対象：高校1年生85人）「将来の進路を見据えて」－『心の教育』『いのちの教育』の視点から－」を実施、「自分自身の自己理解が進んだ」「将来について考えるいい機会になった」等の意見が多く、高評価であった。
新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保)』(第1限～第5限)、新見公立大学	令和4年1月22日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保)』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する。健康保育学科2年57人が受講し、「保育現場ですぐに実践できるとても参考になる内容で、本年度の本科目の総括ができて良かった」と好評であった。
滋賀県立学校いじめ問題調査委員会に「委員」(学識経験者：日本生徒指導学会 推薦）13:30～17:30 滋賀県庁	令和4年1月31日	滋賀県立学校いじめ問題調査委員会調査業務を執行した。16:00～20:00（滋賀県立八幡工業高校）

滋賀県立学校いじめ問題調査委員会に「委員」（学識経験者：日本生徒指導学会 推薦）オンライン会議	令和4年2月22日	滋賀県立学校いじめ問題調査委員会オンライン会議に参加し協議。19:00～21:00
滋賀県立学校いじめ問題調査委員会に「委員」（学オンライン会議	令和４年３月12 日	滋賀県立学校いじめ問題調査委員会オンライン会議に参加し協議。19:00～21:00
兵庫県教育委員会・兵庫県立夢前高等学校主催[兵庫県教育委員会　県立高等学校「特別非常勤講師」10:50～12:40 兵庫県立夢前高等学校兵庫県教育委員会・兵庫県立夢前高等学校主催[兵庫県教育委員会	令和４年４月19	兵庫県教育委員会・兵庫県立夢前高等学校主催 特別授業（対象：高校１年生 74 名。立夢前高等学校主催講演会 ⑴「望ましい人間関係づくり」10:50～12:40 兵庫県立夢前高等学校　⑵「『折れない心』を持って見つめる私の『将来の夢』－『心の教育』『いのちの教育』の視点から－」で実施、「大切な自他の命について考えるいい機会であった」等の意見が多く、高評価であった。兵庫県立夢前高等学校
新見公立大学非常勤講師として、『教育学総論』（第１限～第３限）、新見公立大学	令和４年４月23 日	新見公立大学非常勤講師として、『教育学総論』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する。健康保育学科2 年 52 人が受講し、「保育現場ですぐに実践できる内容で、わかりやすい内容だった」と好評であった。
新見公立大学非常勤講師として、『教育学総論』（第１限～第４限）、新見公立大学	令和４年４月30 日	新見公立大学非常勤講師として、『教育学総論』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する。健康保育学科2 年 52 人が受講し、「実践的で、理論と実践で活かせる内容であった」と高評価を得た。
新見公立大学非常勤講師として、『保育者論』（第１限～第４限）、新見公立大学	令和４年５月14 日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（保）』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する。健康保育学科１年 54 人が受講し、「保育者として参考になる内容ばかりで、すぐに実践できる資料も頂き今後活用したい」と好評であった。
兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」「有識者・委員」15:00～17:00。小野市役所	令和４年５月31 日	兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」。打ち合わせ会議出席。「有識者・委員」として、グローバル社会の実現対策の課題について話し合った。

新見公立大学非常勤講師として、『保育者論』（第1限～第3限）、新見公立大学	令和4年6月11日	新見公立大学非常勤講師として、『保育者論』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する。健康保育学科 1年54人が受講し、「保育現場ですぐに実践できるとても参考になる内容で、本年度の本科目の前半の総括ができて良かった」と好評であった。
姫路市教育委員会　姫路市立総合教育センター：研修会-幼稚園選択研修「講師」	令和4年6月23日	姫路市教育委員会　姫路市立総合教育センター：研修会15:00～16:40「講師」幼稚園選択研修「カウンセリング・マインドを生かした保護者への対応について」場所：姫路市立総合教育センター　対象：姫路市立幼稚園・保育所・こども園の教職員70人「カウンセリング・マインドを生かした保護者への対応について」の演題で講演をした。「保護者連携のポイントについて具体的な方法がわかり、明日からの実践に活かしたい」等、好評であった。
兵庫県教育委員会・県立上郡高等学校主催研修会「講師」兵庫県立上郡高等学校	令和4年7月5日	兵庫県教育委員会・兵庫県立上郡高等学校主催「総合質問紙調査『アイチェック』を活用した学級づくり研修会」において、「講師」を務めた。「学級の実態に応じた明確な手立てを提示頂きとても参考になった」等の意見が多く、高評価を得た。14:00～18:00上郡高等学校
神戸市「今後の不登校支援のあり方に関する検討委員会」①7月12日・場所：神戸市総合教育センター	令和4年7月12日	当該年度第1回目の会議開催。「委員長」の立場で参加した。①7月12日・場所：神戸市総合教育センター　内容：委員委嘱・神戸市における不登校の現状・検討事項の確認 等
令和４年度 岡山県中学校養護教諭夏期研修会【研究・実践発表】保健室からつながる笑顔の輪～コミュニケーションスキル向上のための養護教諭の支援のあり方～	令和4年7月28日	令和４年度 岡山県中学校養護教諭夏期研修会 【研究・実践発表】保健室からつながる笑顔の輪 ～コミュニケーションスキル向上のための養護教諭の支援のあり方～ 備北ブロック（新見支部）【14:15～14:40】〇主 催 岡山県学校保健会養護教諭部会中学校部会 岡山県中学校教育研究会養護部会 〇共 催 岡山県教育委員会 〇主 管 岡山県中学校教育研究会備前ブロック養護部会 〇日時：2022．7．28（木） 〇研修形式：オンライン研修14:40～14:55「講師」として、指導講評を行った。
新見公立大学非常勤講師として、『教育学総論』	令和4年7月	新見公立大学非常勤講師として、『教育学総論』（幼

（第１限)、新見公立大学	30 日	稚園教諭養成課程履修生必修科目・保育士養成課程履修生必修科目）の科目を担当する。健康保育学科 2 年 52 人が受講し、「実践的内容でとても参考になった」等の意見が多く、好評であった。
新見公立大学非常勤講師として、『生徒指導論』（第２限～第４限)、新見公立大学	令和４年７月 30 日	新見公立大学非常勤講師として、『生徒指導論』（2022 年度 前期・養護教諭養成課程 履修生 必修科目 前期：2.0 単位 時間数：30 時間）の科目を担当する。健康科学部　看護学科 3 年生 10 名が受講し、「実践的な内容で参考になり、よかった」等の意見が多く、好評価であった。
新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（養)』（第１限～第４限)、新見公立大学	令和４年８月 22 日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（養)』（2022 年度 前期・養護教諭養成課程 履修生 必修科目前期：2.0 単位　時間数：30 時間）の科目を担当する。健康科学部　看護学科 3 年生 10 名が受講し、「すぐに活用できる実践的な内容でとても参考になった」等の意見が多く、好評価であった。
新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（養)』（第１限～第４限)、新見公立大学	令和４年８月 23 日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（養)』（2022 年度 前期・養護教諭養成課程 履修生 必修科目前期：2.0 単位　時間数：30 時間）の科目を担当する。健康科学部　看護学科 3 年生 10 名が受講し、「前日に続き、実践的な内容がとても参考になった」等の意見が多く、高評価を得た。
新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（養)』（第１限～第５限)、新見公立大学	令和４年８月 24 日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（養)』（2022 年度 前期・養護教諭養成課程 履修生 必修科目前期：2.0 単位　時間数：30 時間）の科目を担当する。健康科学部　看護学科３年生　８名が受講し、「全体的に理論と実践が整理されており、明確に理解できた。実践的な内容が学べてとても参考になった」等の意見が多く、好評価であった。
令和４年度 岡山県新見市養護研究部研修会「今こそ『折れない心』の育成を！－「いのちの教育」の視点から－」「講師」	令和４年８月 25 日	令和４年度 岡山県新見市養護研究部研修会「今こそ『折れない心』の育成を！－「いのちの教育」の視点から－」のテーマで講師を務めた。10:00～12:00・正田ふれあいセンター主催は、新見市教育委員会。参加者は、新見市内容語教諭等 25 名。「実践できるヒントを沢山頂いた」等の意見が多く、好評であった。

新見公立大学非常勤講師として、『生徒指導論』（第1限～第4限）、新見公立大学	令和4年8月30日	新見公立大学非常勤講師として、『生徒指導論』（2022年度 前期・養護教諭養成課程 履修生 必修科目前期：2.0単位　時間数：30時間）の科目を担当する。健康科学部　看護学科3年生　8名が受講し、「体験も取り入れ、実践的な内容が学べてとても参考になった」等の意見が多く、好評価であった。
新見公立大学非常勤講師として、『生徒指導論』（第1限～第4限）、新見公立大学	令和4年8月31日	新見公立大学非常勤講師として、『生徒指導論』（2022年度 前期・養護教諭養成課程 履修生 必修科目前期：2.0単位　時間数：30時間）の科目を担当する。健康科学部　看護学科3年生　8名が受講し、「前日に続いて、体験学習形式で、実践的な内容が学べてとても参考になった」等の意見が多く、好評価であった。
新見公立大学非常勤講師として、『生徒指導論』（第1限～第4限）、新見公立大学	令和4年9月7日	新見公立大学非常勤講師として、『生徒指導論』（2022年度 前期・養護教諭養成課程 履修生 必修科目前期：2.0単位　時間数：30時間）の科目を担当する。健康科学部　看護学科3年生　8名が受講し、「毎回取り入れて頂く、体験学習形式で、実践的な内容が学べて、とても参考にった」等の意見が多く、好評価であった。
新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（養）』（第1限～第2限）、新見公立大学	令和4年9月8日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談（養）』（2022年度 前期・養護教諭養成課程 履修生 必修科目前期：2.0単位　時間数：30時間）の科目を担当する。健康科学部　看護学科3年生　8名が受講し、「全体的に理論と実践が明確で、しっかりと理解することができた。実践的な内容がとても参考になった」等の意見が多く、高評価を得た。
岡山医療専門職大学非常勤講師として、『人間形成論』（第1限～第4限）、岡山医療専門職大学	令和4年9月10日	岡山医療専門職大学非常勤講師として、「人間形成論」（理学療法学科23人・作業療法学科10人・3年必修科目・後期集中：2.0単位・30時間1クラス33人）の科目を担当した。理学療法学科 23 人・作業療法学科 10 人・計 33 名の 3 年生が受講し、「全体的に理論と実践が明確で、しっかりと理解することができた。実践的な内容がとても参考になった」等の意見が多く、好評価であった。
神戸市「今後の不登校支援のあり方に関する検討	令和4年9月	当該年度第2回目の会議開催。「委員長」の立場で

委員会」②9 月 14 日・場所：神戸市総合教育センター	14 日	参加した。②9 月 14 日・場所：神戸市総合教育センター　内容：臨時の委員からのヒアリング・検討事項 「登校しやすい環境整備と不登校の早期支援」等
岡山医療専門職大学非常勤講師として、『人間形成論』（第 1 限～第 4 限）、岡山医療専門職大学	令和 4 年 9 月 17 日	岡山医療専門職大学非常勤講師として、「人間形成論」（理学療法学科 23 人・作業療法学科 10 人・3 年必修科目・後期集中：2.0 単位・30 時間 1 クラス 33 人）の科目を担当した。理学療法学科 23 人・作業療法学科 10 人・計 33 名の 3 年生が受講し、「実践的な内容で、現場で活かすことができるものばかりだった」等の意見が多く、好評価であった。
岡山県教育委員会主催「令和 4 年度心理検査活用リーダー研修講座「講師」	令和 4 年 9 月 20 日	岡山県教育委員会主催「令和 4 年度心理検査活用リーダー研修講座で「講師」を務めた。（岡山県　県立学校人権教育サポート事業）『i-check』の活用についてー『i-check』の活用のポイントと具体的な手立てについてー」「講師」13:00～15：30 オンライン　対象：岡山県立学校生徒指導・教育相談担当者 15 名。「学級の実態を正確に把握できる手法と実践の手立てを学ぶことができ有益な研修であった」等の意見が多く、好評価であった。
兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」「有識者・委員」15:00～17:00。小野市役所	令和 4 年 9 月 27 日	兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」。会議出席。「有識者・委員」として、グローバル社会の実現対策の課題【『兵庫県小野市国際交流センター主催「にほん語であそぼう！」外国人の子ども達との交流会 13:30～15:30　小野市エクラ』を踏まえて】について話し合った。
岡山医療専門職大学非常勤講師として、『人間形成論』（第 1 限～第 4 限）、岡山医療専門職大学	令和 4 年 10 月 1 日	岡山医療専門職大学非常勤講師として、「人間形成論」（理学療法学科 23 人・作業療法学科 10 人・3 年必修科目・後期集中：2.0 単位・30 時間 1 クラス 33 人）の科目を担当した。理学療法学科 23 人・作業療法学科 10 人・計 33 名の 3 年生が受講し、「わかりやすく、実践的な内容で、現場で活かすことができるものばかりだった」等の意見が多く、好評価であった。
神戸市「今後の不登校支援のあり方に関する検討委員会」③10 月 12 日・場所：神戸市立青少年育成センター	令和 4 年 10 月 12 日	当該年度第 3 回目の会議開催。「委員長」の立場で参加した。③10 月 12 日・場所：神戸市立青少年育成センター　内容：臨時の委員からのヒアリング・検討事項 「不登校児童生徒への支援の充実」等

岡山医療専門職大学非常勤講師として、『人間形成論』（第 1 限～第 3 限）、岡山医療専門職大学	令和 4 年 10 月 22 日	岡山医療専門職大学非常勤講師として、「人間形成論」（理学療法学科 23 人・作業療法学科 10 人・3 年必修科目・後期集中：2.0 単位・30 時間 1 クラス 33 人）の科目を担当した。理学療法学科 23 人・作業療法学科 10 人・計 33 名の 3 年生が受講し、「実践的な内容で、現場で活用できる学修ができよかった」等の意見が多く、好評価であった。
姫路市医師会看護専門学校非常勤講師として、『教育学』（第 1 限～第 3 限）、姫路市医師会看護専門学校	令和 4 年 10 月 25 日	姫路市医師会看護専門学校非常勤講師として、『教育学』（看護学科 2 年生 1 単位 30 時間、83 名）の科目を担当した。「実践的な内容で、現場で活用できる学修ができうれしい」等の意見が多く、好評価であった。
神戸市「今後の不登校支援のあり方に関する検討委員会」④11 月 2 日・場所：神戸市総合教育センター	令和 4 年 11 月 2 日	当該年度第 4 回目の会議開催。「委員長」の立場で参加した。④11 月 2 日・場所：神戸市総合教育センター　内容：臨時の委員からのヒアリング・検討事項 「不登校児童生徒への支援の充実」等
新見公立大学非常勤講師として、『教育相談』（第 1 限～第 4 限）、新見公立大学	令和 4 年 11 月 5 日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目 後期 2.0 単位・時間数 30 時間）の科目を担当する。健康科学部　健康保育学科 2 年生　52 名が受講し、「毎回取り入れて頂く、体験学習形式で、実践的な内容が学べて、とても参考になった」等の意見が多く、高評価を得た。
姫路市医師会看護専門学校非常勤講師として、『教育学』（第 1 限～第 4 限）、姫路市医師会看護専門学校	令和 4 年 11 月 8 日	姫路市医師会看護専門学校非常勤講師として、『教育学』（看護学科 2 年生 1 単位 30 時間、83 名）の科目を担当した。「大変実践的な内容で、医療現場等で活用できる学修ができ、良い学びであった」等の意見が多く、好評価であった。
新見公立大学非常勤講師として、『教育相談』（第 1 限～第 4 限）、新見公立大学	令和 4 年 11 月 19 日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目 後期 2.0 単位・時間数 30 時間）の科目を担当する。健康科学部　健康保育学科 2 年生　52 名が受講し、「毎回導入の体験学習形式で、実践的な内容を学ぶことができ、参考になった」等の意見が多く、高い評価を得た。
神戸市「今後の不登校支援のあり方に関する検討委員会」⑤11 月 30 日・場所：神戸市総合教育センター	令和 4 年 11 月 30 日	当該年度第 5 回目の会議開催。「委員長」の立場で参加した。⑤11 月 30 日・場所：神戸市総合教育センター　内容：臨時の委員からのヒアリング・検討事項 「不登校児童生徒への支援の充実」等

姫路市医師会看護専門学校非常勤講師として、『教育学』（第 1 限～第 4 限）、姫路市医師会看護専門学校	令和 4 年 12 月 6 日	姫路市医師会看護専門学校非常勤講師として、『教育学』（看護学科 2 年生　1 単位　30 時間、83 名）の科目を担当した。「本日は総括であったが、全体を振り返ってみても、大変実践的な内容で、医療現場等で活用できる学修ができよかった」等の意見が多く、好評価であった。
兵庫県教育委員会・兵庫県立夢前高等学校主催[兵庫県教育委員会　県立高等学校「特別非常勤講師」10:50～12:40 兵庫県立夢前高等学校兵庫県教育委員会・兵庫県立夢前高等学校主催[兵庫県教育委員会	令和 4 年 12 月 6 日	兵庫県教育委員会・兵庫県立夢前高等学校主催 特別授業（対象：高校 1 年生 74 名。立夢前高等学校主催講演会 ⑴「望ましい人間関係づくり」10:50～12:40 兵庫県立夢前高等学校　⑵「『折れない心』を持って見つめる私の『将来の夢』－『心の教育』『いのちの教育』の視点から－」で実施、「今までの人生を振り返る得がたい機会であった」「将来のことについて、真剣に考える時間であった」「自身の今までとこれからを考える真剣な時間だった」等の意見が多く、高評価であった。兵庫県立夢前高等学校
姫路市医師会看護専門学校 看護教員内部研修会「学生を守るハラスメント対応」「講師」	令和 4 年 12 月 21 日	「学生を守るハラスメント対応」のテーマで「講師」を務めた。「ハラスメント体制構築の重要性を再確認できた」「学生との関係の作り方の具体的な事例を学ぶことができた」「すぐに実践できそうな内容だったので、すぐに実践したい」「学生への向き合い方が明確に理解できた」等、大変好評であった。
兵庫県稲美町教育委員会主催「令和 4 年度第 2 回稲美町生きる力を育むための小・中連絡推進委員会：本年度小中学校における問題行動の状況」「講師（副委員長）」（会場：兵庫県稲美町役場コミュニティセンターホール）	令和 5 年 1 月 17 日	協議後、「講師」として、「教育相談で活用できる新たな手法について」のテーマで、「講師」を務めた。「本町の実態に合わせた講演内容で、わかりやすかった」「実践的内容で良かった」等の高い評価を得た。対象：小中生徒指導担当教員・小中学校長
新見公立大学非常勤講師として、『教育相談』（第1限～第 3 限）、新見公立大学	令和 5 年 1 月 21 日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目　後期 2.0 単位・時間数 30 時間）の科目を担当する。健康科学部　健康保育学科 2 年生　52 名が受講し、「体験を通して学ぶことができ、とても参考になった」等の意見が多く、高評価を得た。

神戸市「今後の不登校支援のあり方に関する検討委員会」「報告書」手交式	令和 5 年 1 月 25 日	当該年度第 5 回の会議で議論した内容を「報告書」にまとめ、住本（「委員長」）が神戸市教育長に手交した。
新見公立大学非常勤講師として、『教育相談』（第1限～第 4 限）、新見公立大学	令和 5 年 2 月 22 日	新見公立大学非常勤講師として、『教育相談』（幼稚園教諭養成課程履修生必修科目 後期 2.0 単位・時間数 30 時間）の科目を担当する。健康科学部　健康保育学科 2 年生　52 名が受講し、「全体総括であったが、毎回の体験学習形式で、実践的な内容を学ぶことができ、とても参考になった」等の意見が多く、高評価を得た。
兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」「有識者・委員」15:00～17:00。小野市役所	令和 5 年 2 月 28 日	兵庫県小野市市民安全部ヒューマンライフ・グループ主催「小野市いじめ防止市民会議」。打ち合わせ会議出席。「有識者・委員」として、グローバル社会の実現対策の課題について総括し、協議後、「不登校支援のあり方」について「講師」を務めた。

５　その他 特になし		
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格、免許 中学校教諭１級免許状（社会）	昭和53年3月	昭 52 中 1 普第 2995 号（大阪府教育委員会）
高校教諭２級免許状（社会）	昭和53年3月	昭 52 高 2 普第 3298 号（大阪府教育委員会）
小学校教諭 2 級免許状	昭和54年3月	昭 53 小 2 普第 2201 号（京都府教育委員会）
小学校教諭１級免許状	昭和55年3月	昭 54 小 1 普第 614 号（京都府教育委員会）
「社会教育主事」免許取得	昭和60年3月	神戸大学 H1.9.25 ：No.27
「学校心理士」資格取得	平成10年4月	No.98227（日本教育心理学会認定）
「上級教育カウンセラー」資格取得	平成11年4月	No.3023012（日本教育カウンセラー協会認定）
「学校カウンセラー」資格取得	平成12年4月	No.545 号（日本学校教育相談学会認定）
「心理検査士」資格取得	平成12年4月	No.353（日本教育評価研究会）
「認定カウンセラー」資格取得	平成16年4月	No.753（日本カウンセリング学会認定）
「認定スーパーバイザー」資格取得 〔現「カウンセリング心理士（スーパーバイザー)」〕	平成 19 年 4 月	SV-0065 号（日本カウンセリング学会）
「SGE（構成的グループ・エンカウンター）公認リーダー」資格取得	平成20年4月	第 3 期認定（NPO 法人日本教育カウンセラー協会認定）
「ガイダンスカウンセラー」資格取得	平成21年4月	No.11040021（一般社団法人スクールカウンセリング推進協議会認定）
「ガイダンスカウンセラー・スーパーバイザー」資格取得	令和 5 年 4 月	No.11040021（一般社団法人スクールカウンセリング推進協議会認定）
２　特許等 特になし		
３　実務の経験を有する者について特記事項 環太平洋大学における活動	平成 24 年度～平成 27 年度	環太平洋大学　次世代教育学部　学級経営学科　教授として、「ＦＤ実施推進委員」「教務委員会委員」「図書館運営委員会委員」「図書館長」「図書館運営委員長」「教務部長」「教務委員長」「学生相談室長」

		「学生相談委員会委員長」「生活支援センター長」「自己点検評価委員」「次世代教育学部　教育経営学科長」「大学認証評価『リエゾン・オフィサー』(平成 25 年度)」「入試委員会委員」「危機管理委員会委員」「大学推薦選考委員会」「大学個人評価委員会」「キャリアセンター・センター長補佐」「衛生委員会委員」「学術倫理委員会委員」等を務めた。 また、その間、兵庫教育大学非常勤講師として、「大学院学校教育研究科：教育実践高度化専攻：心の教育実践コース：『キャリア教育実践プログラムの開発』、「大学院学校教育研究科：共通基礎科目：『教育相談の理論と技能開発』、『学校における心の教育の実践研究』等の科目を担当した。
新見公立大学における活動	平成 28 年度～平成 31 年度	新見公立短期大学幼児教育学科・健康保育学科　教授として、「幼児教育学科長」「健康保育学科長（幼児教育学科長・兼務)」「評価・将来構想委員会委員」「人権委員会委員」「ＦＤ委員会委員」「ハラスメント委員会・調査委員」「学生等選抜委員会委員」「入試委員会委員」「入試課題検討委員会委員」「公立大学法人　新見公立大学　教育研究審議会委員」「公立大学法人　新見公立大学　個人情報保護委員会委員」等を務めている。また、その間、兵庫教育大学非常勤講師として、「大学院学校教育研究科：教育実践高度化専攻：心の教育実践コース：『キャリア教育実践プログラムの開発』、「大学院学校教育研究科：共通基礎科目：『教育相談の理論と技能開発』、『学校における心の教育の実践研究』等の科目を担当した。
奈良学園大学における活動	令和 2 年度～現在に至る	人間教育学部人間教育学部・学部運営委員会委員〈令和 3 年度からは「小学校専修長」・専修員 12 名〉として、「人を支える人づくり」「教員養成」等の業務の企画運営に取り組んだ。また、「評議会委員」「財務委員会委員」「人間教育学部研究倫理審査委員会」「教職・保育課程委員会」副委員長、「人間教育学部研究倫理審査委員会」として、学部学科に限らず、大学の企画・運営に尽力した。さらに、「中期計画策定委員会」委員として、その企画にもかかわった。担当科目としては、『教職入門Ａ（初等）『教職入門Ｂ（中等）『生徒指導・進路指導論Ｂ（中等）『人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）『教育実習事前事後指導（小）『教育実習Ⅰ（小）』『教育実習Ⅱ（小)』『教職実践演習（幼・小)』『生徒指導・進路指導論Ａ（初等)』『教育社会学Ａ（初等)』『教育社

		会学Ｂ（中等)』また、その間、新見公立大学非常勤講師として、『保育者論』(健康保育学科 1 年)『教育学総論』(健康保育学科 2 年)『教育相談（幼)』(健康保育学科 2 年)『教育相談（養)』(看護学科 3 年)『生徒指導論』(看護学科 3 年）等の科目を担当した。
４　その他 環太平洋大学「平成２５年度　教員免許状更新講習」(2013.8.21　10:00～11:30)「講師」	平成 25 年 8 月	「今、求められる小学校教育(2)―子どもの現状と課題を踏まえて―」講義をした。
環太平洋大学「平成２６年度　教員免許状更新講習」「講師」	平成 26 年 8 月	「今、求められる小学校教育(2)―①子どもの現状と課題　②教育相談の充実」の講義をした。
環太平洋大学「平成２７年度　教員免許状更新講習」「講師」	平成 27 年 8 月	子どもの現状と課題　と教育相談の充実について講義を行った。
日本カウンセリング学会第 48 回大会研修会「研修プログラム：グループアプローチの実際『グループアプローチをクラスづくりに生かす際のポイント』」「講師」(会場：環太平洋大学)	平成 27 年 8 月 28 日	教師の立場、またカウンセラー（主として、スクールカウンセラー）の立場で、グループアプローチをクラスづくりに生かす際のポイントについて実習をとおして研修を進めた。
岡山県教育委員会「『思春期サポート事業』」講師（スクールカウンセラー）(年間 12 回)	平成 27 年度～現在に至る	岡山県教育委員会「平成 27 年度　『思春期サポート事業』」講師（スクールカウンセラー）を委嘱された。
甲南大学教職教育センター「平成 28 年度教員免許状　更新講習」「講師」	平成 28 年 8 月	「教育の最新事情 道徳教育における『いのちの教育』をどう進めるかー「『命の大切さ』を実感させる教育プログラム」の展開・小学生・中学生・高校生の「いのち」に対する意識の実態調査結果をとおしてー」の講義をした。
岡山県警察本部　警務部　県民応接課　主催 岡山県警察学校授業「『心のケア』の理論と実際－学校カウンセリングの立場からー」「講師」 14:10-15:30　会場：岡山県警察学校	平成 28 年 11 月	岡山県警察本部の依頼で「『心のケア』の理論と実際－学校カウンセリングの立場からー」のテーマで講師を務めた。
奈良県私立高等学校第三者委員会「評価委員」	平成 30 年度～現在に至る	奈良県私立高等学校第三者委員会「評価委員」を委嘱された。
兵庫県教育委員会・県立高等学校「特別非常勤講師」	平成 31 年度～現在に至る	兵庫県教育委員会・県立高等学校「特別非常勤講師」を委嘱された。
岡山県教育委員会・岡山県総合教育センター主催 初任者研修（小・中・高・特　悉皆研修)「学級経営における指導技術向上（人間関係づくり）「カウンセリング技法を活用した学級づくりー	平成 31 年度	岡山県教育委員会・岡山県総合教育センター主催 初任者研修（小・中・高・特　悉皆研修）の講師を務めた。日時：2019.5.16　13:15～14:45（90 分）会場：岡山県総合教育センター

「心の教育」「いのちの教育」の視点からー」「講師」		
岡山県教育委員会・岡山県総合教育センター主催 中堅教諭等資質向上研修　共通研修Ⅰ「カウンセリング技法を活用した学級づくりー「心の教育」「いのちの教育」の視点からー」「講師」対象：県内中堅教員（小・中・高・特・幼・こども園・養護・栄教・学栄）450 名	平成 31 年度	岡山県教育委員会・岡山県総合教育センター主催 中堅教諭等資質向上研修　共通研修Ⅰの講師を務めた。日時：2019.5.28　14:00～15:30（90 分）会場：岡山県総合教育センター
神戸市「今後の不登校支援のあり方に関する検討委員会」「委員長」・神戸市における不登校の現状・検討・報告書作成	令和 4 年度	本検討委員会では、⑴「登校しやすい環境整備と不登校の早期支援」　⑵「不登校児童生徒への支援の充実」　⑶「保護者サポート及び民間施設等との連携推進」この３点を中心に検討を重ねた。特筆すべきは、不登校の経験者やその保護者、また、不登校に関する親の会の運営に携わる方々を臨時委員として、検討委員会でヒアリングを行ったこと。さらには、先進事例として、広島県及び横浜市の教育支援センター、岐阜市及び香川県三豊市の不登校特例校をそれぞれ訪問し、その取組を踏まえて議論を進めてきた。このように、何より不登校の経験者や保護者に基軸におき、不登校児童生徒に対する支援の目標である「社会的自立」の視点から好転に結びつけている実践事例を踏まえながら議論し、本報告としてまとめ、報告書は、手交式で住本が、神戸市教育長へ手交実施した。場所：神戸市教育委員会：令和 5 年 1 月 25 日。
令和４年度 岡山県中学校養護教諭夏期研修会【研究・実践発表】保健室からつながる笑顔の輪～コミュニケーションスキル向上のための養護教諭の支援のあり方～ 備北ブロック（新見支部）主 催 岡山県学校保健会養護教諭部会中学校部会 岡山県中学校教育研究会養護部会「講師」（指導講評）	令和 4 年度	「保健室からつながる笑顔の輪 ～コミュニケーションスキル向上のための養護教諭の支援のあり方～」のテーマで、備北ブロック（新見支部）で 5 年間の取り組みを成果発表した。開発的カウンセリング技法実践の有効性、総合質問紙調査（i-check:住本克彦、東京書籍）活用による実態把握・教育効果測定の有効性等が確認された。【研究・実践発表】保健室からつながる笑顔の輪 ～コミュニケーションスキル向上のための養護教諭の支援のあり方～ 備北ブロック（新見支部）〇主 催 岡山県学校保健会養護教諭部会中学校部会 岡山県中学校教育研究会養護部会 〇共催：岡山県教育委員会 〇主管：岡山県中学校教育研究会備前ブロック養護部会「講師」（指導講評）。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1. 子どもたちが輝くクラスづくりのための総合質問紙調査「i-check	共著	平成 24 年 7 月～現在に至る	東京書籍株式会社	学級の児童生徒の実態を正確に測り、学級経営の方途を探る実践的総合質問紙の説明書 監修者：梶田叡一

		※毎年度改訂版を発刊 ※令和３年度版からは、住本克彦が監修者・編著者		編著者：住本克彦 ※令和３年度版からは、住本克彦が監修者・編著者 小学校１・２年生判　pp. 1-8，小学校３・４年生判　小学校 pp. 1-12，小学校５・６年生判 pp. 1-12，中学校判　pp. 1-12，高等学校判 pp. 1-12）（1・2 年生判　　Ａ４判　全 47 問 全８頁）（小学校３・４年生判　　Ａ４判 全 73 問 全 12 頁）（小学校５・６年生判 Ａ４判　全 94 問 全 12 頁）（中学校判　　Ａ４判　全 94 問 全 12 頁）（高等学校判　　Ａ４判　全 110 問 全 12 頁） 【本人担当部分】本質問紙全体の企画、構成、編集　質問紙項目・解説書執筆を担当
2．次世代の教育原理【再掲】	共著	平成 25 年８月	大学教育出版	教員を目指す大学生を対象に、教育原理の理論と実践を解説したもの。 Ａ５判　全頁数　１５９， 編著者：中田正浩・松田智子 執筆者：中田正浩・松田智子　住本克彦　他４名） 【本人担当部分】（pp. 157-175 を単著） 「生徒指導と教育相談―教育相談を生かした生徒指導の展開―」の章を執筆した。児童生徒の問題行動の予防のため、教師が開発的カウンセリング技法に精通することを提案し、教育相談を生かした道徳教育と関連付けた生徒指導の在り方を実践例とともに紹介した。また、カウンセリングの精神は特別活動や道徳教育にも活用連携しながら、総合的に指導すると効果的なことも実際の事例を挙げながら述べた。

3．教育原理事始め 【再掲】	共著	平成 30 年 4 月	大学教育出版	教員を目指す大学生を対象に、教育原理の理論と実践を解説したもの。 Ａ５判 全頁数　２０１， 編著者：中田正浩　執筆者：中田正浩　住本克彦　他４名） 【本人担当部分】 (pp. 101-118 を単著)第 6 章「生徒指導と教育相談」を執筆。 生徒指導と教育相談の関係や学校組織の中での企画運営の仕方について詳述した。
4．新しい視点から見た教職入門 【再掲】	共著	平成 30 年 4 月（令和 3 年度第 2 版改訂・令和 5 年度第 3 版改訂）	大学教育出版	教職を目指す学生が教職課程で最初に学ぶ「教職入門」のテキスト。 Ａ５判　全頁数２８２， 編著：中田正浩 執筆者：中田正浩　住本克彦　他７名） 【本人担当部分】第 1 部理論編　第 5 章「『教育制度改革』の現況把握」(pp. 125-134 を単著）、「アクティブ・ラーニング」(pp. 135-136 を単著)。第 2 部実践編　第 6 章「教員採用試験」(pp. 267-280 を単著）を執筆。 『教育制度改革』の現況について詳述し、教員採用試験の実際や対策等についても詳述した。
5．エンカウンターでいじめ対応が変わる-教育相談と生徒指導のさらなる充実をめざして- 【再掲】	単著（編著）	平成 31 年 6 月	図書文化社	従来の不登校対策と異なったエンカウンターを用いたいじめ防止・早期対応等の具体的な手立てを示し、教育相談・生徒指導の理論や実際も示した著書 Ｂ5 判　　全頁数１９０， 監修　國分康孝・國分久子 編集　住本克彦 執筆者：住本克彦・國分康孝・國分久子・新井浩一・石原義行　他 26 名） 【本人担当部分】 単著部分(pp. 10-13，pp. 14-21，pp. 56-57，pp. 70-75，pp. 76-79，pp. 84-113)・共著部分（pp. 38-41・pp. 114-115）（共著者：住本克彦、仁八潔)・(pp. 42-47）（共著者：住本克彦、梅本剛雄)・(pp. 118-123）（共著者：住本克彦、植田律子・小藤信子・森本章代・山本眞由美） エンカウンターを生かしたいじめ問題への対

				応の仕方等、今まで実践報告がほとんどなかった領域において、幼児教育段階からの取組や精神科医の論述等を編集し、対処法の具体例を挙げながら論述した。 住本が編著者として、序章：教師としてのいじめへ取り組む心構え、第１章：いじめ対応の基本姿勢、第２章：いじめ対応に活かすエンカウンター、第３章：エンカウンターを活かしたいじめ対応の実際、第４章：さまざまな場におけるいじめ対応の取り組み、保育・教育現場の教師はもちろん、将来、保育者や教師をめざす学生にとっても、教育相談や生徒指導についての理論や実際についても学べる教育実践書である。
6. 『新しい視点からの教育社会学』【再掲】	単著（編著）	令和４年３月	大学教育出版	教員を目指す大学生を対象に、教育社会学のテキストとして企画・発刊された。 第1章: 教育社会学へのアプローチ　第2章: 教育社会学から見たカリキュラム　第3章: キャリア教育と教育機会　第4章: 現代社会における高等教育　第5章: 子どもの福祉と教育　第6章: 多様化する家族のあり方　第7章: いじめ問題への対応　第8章: 不登校問題への対応　第9章: 子どもとメディア利用　第10章: 教育社会学と特別支援教育　第11章: マイノリティとジェンダーをめぐる諸課題　第 12 章: 大学教育の今　第13章: これからの教育社会学　以上の13章立て。 Ａ５判　全頁数２５０ 編著者：住本克彦 執筆者：住本克彦、坂中尚哉、小泉令三 他２０名） 【本人担当部分】①(pp. 118-131 を単著)第７章「いじめ問題への対応」②(pp. 131-145 を単著)第８章「不登校問題への対応」③(pp. 243-252 を単著)第１３章「これからの教育社会学」の項目を執筆。いじめ問題、不登校問題の現状と課題、対処法、共生社会の実現に向けて、教育社会学に今後求められるものについて論述した。また、(pp. 167-179

				を共著)第 10 章「教育社会学と特別支援教育」第 2 節「インクルーシブ教育が目指すもの」を担当し、理論と実際について詳述した。
7. 『コンパス教育相談』【再掲】	単著（編著）	令和 4 年 3 月	建帛社	教員を目指す大学生を対象に、教育相談の理論と実践を解説したもの。 『コンパス教育相談』建帛社。令和 4 年 3 月。教育相談のテキストとして企画・発刊された。 第 1 章:教育相談の意義　第 2 章:カウンセリングの理論　第 3 章:子どもの発達と教育相談　第 4 章:教育相談におけるアセスメント　第 5 章:子どもの問題行動と教育相談－事例から考える－　第 6 章:開発的カウンセリング技法の活用　第 7 章:保護者支援と教育相談　第 8 章:校内システムと教育相談　第 9 章:医学と教育の連携　第 10 章:学校・園の危機対応－心の危機対応と安全教育－　第 11 章:教師のメンタルヘルス対策と教育相談　第 12 章:専門機関との連携と教育相談　以上の 12 章立て。Ａ５判　全頁数１４４ 巻頭言：桃山教育大学　梶田叡一　学長執筆 編著者：住本克彦 執筆者：住本克彦、新井　肇、小泉令三　他１１名） 【本人担当部分】①(pp. 1-7 を単著)第 1 章「教育相談の意義」②(pp. 33-40 を単著)第 4 章「教育相談におけるアセスメント」③(pp. 53-56 を単著)第 6 章「開発的カウンセリング技法の活用」第 1 節「構成的グループ・エンカウンターの活用」④(pp. 97-99 を単著) 第 10 章「学校・園の危機対応」第

				1節「学校・園における「心の危機」対応の基本」の項目を執筆。「いのちの教育」と教育相談の関係、求められる教育相談を活かした生徒指導の展開、教育相談におけるアセスメントの理論と実際、心の危機対応と安全教育等について論述した。
8. 『教職ライブラリ 教職入門－教育学のエッセンスから学ぶー』【再掲】	単著（編著）	令和5年3月	建帛社	教員を目指す大学生を対象に、教育相談の理論と実践を解説したもの。 『教職ライブラリ　教職入門－教育学のエッセンスから学ぶー』建帛社。令和5年3月。教職入門のテキストとして企画・発刊された。 第1章：教育への基本的視座　第2章：日本教育史　第3章：西洋教育史　第4章：教員の身分と服務　第5章：教員の資質向上と研修　第6章：教育改革の現状　第7章：教員としての仕事と生きがい　第8章：学級経営・ホームルーム経営の基本　第9章：生徒指導の実際　第10章：教育実習，教育実習事前・事後指導，教職実践演習　第11章：教員採用試験について　第12章：教員のメンタルヘルス　以上の12章立て。Ａ５判全頁数１３２ 巻頭言：兵庫教育大学　加治佐哲也　学長執筆 編著者：住本克彦 執筆者：住本克彦、門原眞佐子、野﨑洋司他１３名） 【本人担当部分】①(pp.1-９を単著)第 1 章「教育への基本的視座」②(pp.109-117 を単著)第 11 章「教員採用試験について」③(p.10 を単著)コラム「令和の日本型学校教育」④(p.30 を単著) コラム「不登校児童瀬戸への支援」⑤(p.82 を単著)コラム「開発的カウンセリング」⑥(p.118 を単著)コラム「子どもの自殺予防」を執筆。教育とは何か、教職を目指すことの意味、教育の現代的課題、教員採用試験の内容と、それに臨む心構えや対策、現代の教育時事に関する重要語等について、最新のデータを基に論述した。
（学術論文） 9.「『いのちも教育』予備調査から見えてきたもの―児童・生徒のいのちに対する意識の実態―」	共著	平成25年2月	いのちの教育実践交流会　第4回シンポジウム in 兵庫　記録集	科学研究費基盤研究（Ｂ）課題番号24330254（平成24年度～平成26年度）「いのちの教育カリキュラムの開発研究」研究分担者として、初年度は「『いのちも教育』予備調査から見えてきたもの―児童・生徒のい

				のちに対 する意識の実態―」と題して、「いのちの教育実践交流会　第４回シンポジウム in 兵庫」(2013.2.10）で、自尊感情を報告を育成することや未来志向性を持たせることの大切さ等がいのちの教育を進める際のポイントになることなどが示唆された。教え込みや叱責の道徳教育では、真の生命尊重は指導できないことも今後の課題である。生命尊重の小学校道徳資料の分析結果も紹介した。 （pp.13－30 を単著）（Ａ４判　全頁数７６，代表：梶田叡一　執筆者：近藤靖宏、古川治、梶田叡一、住本克彦、麻生川教、諏訪清二、大河内祥晴、渡邉満、松田智子、杉田郁代）
10.「自律神経活動から見たカウンセリングの有効性」－新設大学における学生相談システムの構築－ （査読有） ※特別研究費 300,000 円獲得	共著	平成 25 年 3 月	環太平洋大学研究紀要第７号	多様化する学生相談内容に有効なカウンセリング技法について、詳細に検討することで、相談活動システムの構築・整備に活かしたい。また、生理学的アプローチにより、科学的根拠を持って検証した。その結果、カウンセリング場面での終末の直面化において、Ｃ１．の心拍数の上昇が確認された。つまり、カウンセリング場面における直面化は、自律神経活動を活性化させ、精神的興奮状態に陥っていることが認められた。このことは、カウンセリング場面における直面化と自律神経系の高揚が連動していることが確認されたことを示しており、今後、Ｃ１．のカウンセリング場面における自律神経活動の経時的把握と検証が、カウンセリングの効果の検証資料となりうることが示唆された。本人(住本)は、本研究の企画、構成、カウンセリング実施・分析　論文執筆を担当した。(pp.161-164　Ａ４判)（共著者：住本克彦、安田従生）
11.「いじめ防止教育プログラム」の開発研Ｉ」―総合質問紙『i-check』を活用した「いじめ防止教育プログラム」― （査読有）	共著	平成 26 年 3 月	環太平洋大学研究紀要第８号	いじめ被害、加害の実態を把握する目的で実施した「いじめに関するアンケート」から、いじめ被害体験者は、小学校で約 54%いること。中学校で約 60%いること。高等学校で約 43%いることがわかった。小・中・高校でのいじめ被害の内容は、①「冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言う」　②「仲間外れ、集団による無視をする」などが上位を占め、いじめに関する相談

				については，「学級担任に相談」か、「誰にも相談していない」（相談しない理由上位２項目：どうせ解決しない。よりエスカレートするから。）が多い。また、「いじめをなくしたり，減らしたりするにはどうすればいいか。」の質問へは、アンケート実施やいじめ防止教育の実践等いじめの予防教育の期待が大きかった。 これらを踏まえ、「いじめ防止教育プログラム」として，①児童生徒の実態把握（標準化された質問紙実施と教職員の観察）②児童生徒の人間関係づくりを意識した道徳教育実践③さらに，これら①②を含めた教職員研修の教職員自身の道徳性の涵養の重要性が示唆された。本人(住本)は、本研究の企画、構成、アンケート調査・分析プログラム検証　論文執筆を担当した。(pp.100-113　Ａ４判)（共著者：住本克彦、安田従生、中本忠彦、仁八潔、粟生山貴子、山﨑一志、入江多喜夫、浅田栄里子、松﨑和則、柴田仁）
12.小学生・中学生・高校生の「いのち」に対する意識の実態―「いのちの教育」に関する質問紙調査結果をとおして―（科学研究費助成事業・基盤研究（B）課題番号24330254 研究課題名「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」(2012～2014)（査読有）	単著	平成 26 年 11 月	環太平洋大学研究紀要第 9 号	本研究は、科学研究費助成業･基盤研究（B）課題番号 24330254 研究課題名「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」(2012～2014)に基づき進めたものである。 小学生・中学生・高校生の「いのちに対する意識の実態を把握する目的で，質問紙を作成し予備調査，本調査を実施した。その結果より教育現場で実践可能で，効果的な「いのちの教育」カリキュラム開発の要諦を明示した。①自分自身に良いところがあると実感できる子は，いのちの大切さを実感できる。②周りの人に支えられていると実感できる子は，いのちの大切さを実感できる③得意なことがあると思える子は，いのちの大切さを実感できる。④努力すれば報われると認識している子は，いのちの大切さを実感できる。⑤新しいことに挑戦し，自分の可能性を広げたいと考えられる子は，いのちの大切さを実感できる。(pp.10-19　Ａ４判)
13. 中学校新入生の内的作業モデルと中学校入学後の学校適応感との関係 The Relationship	共著	平成 26 年 11 月	2015 年度　学校心理士会年報　第 7 号	本研究の目的は，中学校新入生の内的作業モデル（Internal Working Model：以下 IWM）を測定する尺度を再構成しその特徴をとらえることと，IWM と中学校新入生の学校適応

between the Internal Working Model and the Freshmen’sadjustment to the Junior High School ： A school psychological study （査読有）				感や学校生活への適応との関係を検討することであった。IWM は内的作業モデル尺度（詫摩･戸田，1998）に５項目が追加された 23 項目によって，また，学校適応感は学校生活適応感尺度（浅川・尾﨑・古川，2003）によって測定された。 研究協力者は，中学１年生 265 名（男子 143 名，女子 122 名）で，調査は４月と６月の２回にわたり実施された。主な結果と考察は以下の通りである。(1)分散分析の結果，「安定性」タイプでは学校生活適応感尺度のすべての下位領域でＬ群よりもＨ群の得点が高く，「安定性」の特性にみられるポジティブな認知や行動の選択は，友人関係や自らの進路に対する意識の高さにつながっていた。(2)家族との関係」得点は４月では男子群より女子群の方が高かったが，６月ではその差はなくなっており，アンカーポイントは家族から友人や教師へと移っていることが示唆された。以上の点から，IWM のタイプと学校適応感との関係が明らかとなり，IWM の面から中学生に対する支援をとらえることの重要性が示唆された。本人(住本)は、本研究の企画、構成、論文執筆を担当した。(pp. 13-19)南　雅則・住本克彦・古川雅文・三木澄代
14. 「『いのち』を実感的にとらえる道徳教育の在り方に関する一考察 （査読有）	単著	平成 28 年 3 月	環太平洋大学研究紀要第 10 号	自分とのかかわりで道徳的価値がとらえられることが大切である。そうでなければ、自分の命は大切にできても、他者の命は大切にできない。そのために、「『いのち』を実感的にとらえる道徳教育の在り方に考察した。
15.特別支援教育の視点に立った中学校区の連携の在り方に関する一考察―保育所・幼稚園・小学校・中学校を 10 年間連携させた教育実践モデルの提案― （査読有）	共著	平成 28 年 3 月	環太平洋大学研究紀要第 10 号	保・幼・小・中学校 10 年間の子どもたちの情報共有と個別支援の在り方を正しく理解し、一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援をすれば、子どもたちは様々な関わりを通して安心して園・学校生活を送り自己実現を図れるであろうとする仮説は立証された。特に、仮説具現化のための研究視点である①「つなげる」視点：特別支援教育の共通理解・情報共有・支援接続の強化・連携組織作り　②「かかわる」視点：園児・自動・生徒・教職員の体験交流事業の充実　以上二つの視点で、仮説を立証できた。(pp.107-116

				Ａ４判)　（共著者：住本克彦、田村仁志）
16. 大学におけるアクティブ・ラーニングを取り入れた授業展開への試み－『保育原理』の授業実践を通して進める「主体的・対話的で深い学び」－（査読有）	単著	平成 28 年 3 月	新見公立大学紀要第 37 巻	本研究では，アクティブ・ラーニングに関するエキスパート（「ＳＧＥ<Structured GroupEncounter>公認リーダー」）による「アクティブ・ラーニングを取り入れた授業」の準備・展開・事後指導の実践内容，特に学生の授業後の感想の分析から，その授業モデルを提案した。当該授業の受講者の感想を分析することで，①グループワークが苦手な学生への支援の在り方，②主体的能動的学習を充実させる学習環境の整備（一層のＩＣＴ活用の充実等），③教職員の研修参加による教育実践力向上，④学級経営と主体的能動的学習の推進との関連性の研究，⑤体制づくり等の課題が確認された。(pp. 7-13　Ａ４判)
17. 生徒指導・教育相談における“S-７step 法”活用の有効性の検討－（査読有）	単著	平成 29 年 12 月	新見公立大学紀要第 38 巻	本稿では，アクティブ・ラーニングに関するエキスパートが講師を務めた『大学における学習過程の質的改善への手立て探る－アクティブ・ラーニングの導入で主体的・対話的で深い学びの実現をめざして』－の参加者の研修後のアンケート調査（自由記述）結果の分析から，“S-７step 法”の活用の有効性を検討した。その結果、以下の点での効果・可能性が確認された。①参加者間の親和度を高めるのに有効であること　②参加者、それぞれの立場の壁を越えた活発な議論が可能であったこと　③講師（リーダー）と研修参加者が双方向で研修を進められたこと　④今後の方向性（実践・手立て）が明確化したこと　⑥個人の発言機会が増えたこと　⑦多面的な視点にふれることができたこと　⑧新しい教育プログラムを、体験を通して学べたこと　⑨日頃の自他の実践を振り返る良い機会となったこと　⑩本プログラムの活用可能性を実感したこと等、ほぼ全ての点で“S-７step 法”の事例検討会等への活用の可能性が確認された。 (pp. 65-70　Ａ４判)

18. 生徒指導・教育相談における実践課題に関する一考察－『保・幼・小連携』に焦点を合わせて－（査読有）	単著	平成 30 年 2 月	新見公立大学紀要 第 38 巻第 2 号	教育現場，特に生徒指導・教育相談の領域において，『保・幼・小連携』による「小 1 プロブレム」解消が喫緊の課題の一つに挙げられている。本稿では，この「小 1 プロブレム」解消について検討した。さらに，「小 1 プロブレム」の有無にかかわらず，児童の安心感を醸成するためにも有効で，文部科学省も「幼稚園・保育所・認定こども園の教育課程と小学校教育課程との関係を明確にし，それを踏まえた教育方法を実践する必要がある。」（「幼児期の教育と小学校教育の接続について」）とする，「保幼小連携プログラム」のポイントに焦点を当て検討した。特にこの点では筆者が講師として，当該テーマで研究・研修を進めた「Ａ市小学校校長会議」での実践内容を基に考察を加えた。その結果，10 項目の申し送り表の活用等の重要性が示唆された。（pp. 71-76　Ａ４判）
19. 『保育原理』『教育原理』で，「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」をどう教えるか－「第 3 期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」を基本視座にして－（査読有）	単著	平成 30 年 2 月	新見公立大学紀要 第 38 巻第 2 号	文部科学省は，「第 3 期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」（2017）において，2030 年以降の社会の変化を見据えた課題解決に向けた教育政策の基本的な方針を示している。言うまでもなく，保育・教育の施策の現況と課題について取り扱う大学教職課程科目は『保育原理』『教育原理』である。本稿では，「第 3 期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」を基本視座に，大学教職課程『保育原理』『教育原理』で，「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」（「第 3 期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」における中核目標）をどう教えるかについて概観した。
20. いじめ問題にどう立ち向かうか（岡山県教育委員会　教育時報　巻頭論文）	単著	平成 30 年 3 月	岡山県教育委員会 教育時報　巻頭論文 平成 30 年 4 月号	いじめ防止教育プログラム実践の際の留意点等、教育現場における具体的実践方法について（①いじめ問題に立ち向かう学級・学校づくりのポイント　②「いじめ防止教育プログラム」実践時の留意点　③開発的カウンセリング技法の活用による「いじめ防止教育プログラム」の実際）詳述した。岡山県全県小・中・高・特別支援学校等　学校園関係施設に配布された。（pp. 4-7　Ａ４判）

				（2018.3.発刊）
21.今，なぜ「学校カウンセリング」かⅠ-「教育相談」を活かした「生徒指導」の展開を-	単著	平成30年3月	平成29年度　研究紀要（新見公立短期大学）	問題行動が低年齢化、多様化、複雑化する中、開発的カウンセリング技法の実践による教育効果について強調し、その具体的実践方法についても詳述した。特に、構成的グループ・エンカウンターについては、住本は、公認リーダーの資格を有しており、國分エンカウンターのけ継承者として、その理念にまで触れている。Ａ４判全頁p.34編集・執筆担当。(2018.3.発刊)
22. 体験活動を通した「『生き抜く力』育成教育プログラム」開発に関する一考察－「にいみ塩から子育成事業」での実践をとおして－（査読有）	共著	平成30年12月	新見公立大学紀要第39巻	文部科学省（2017)は，「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」において，2030年以降の社会の変化を見据えた課題解決に向けた教育政策の基本的な方針を示している。そこでの目指すものとして「社会を生き抜く力の養成－多様で変化の激しい社会の中で個人の自立と協働を図るための主体的･能動的な力－」を育むこととしている。本稿では，新見市が主催する体験活動を中核に据え，たくましく生き抜く力を育成することを目的とする「にいみ塩から子育成事業」の成果と課題から，「急激に変化する社会を『生き抜く力』の育成」(「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」における中核目標）教育プログラム開発の方途を探った。（pp.71-78　Ａ４判）（共著者：住本克彦、城井田二郎、竹元　渉）
23. 「命の教育」の一環としての「いじめ防止教育プログラム」開発に関する一考察－文部科学省のいじめ防止対策事業を踏まえて－（査読有）	単著	平成30年12月	新見公立大学紀要第39巻	2013年，「いじめ防止対策推進法」が制定･施行された。これをもって，各学校において「学校いじめ防止基本方針」を制定することが義務付けられた。その後5年が経過したが，今なお，いじめ問題は教育現場において大きな課題の一つである。本稿においては，文部科学省のいじめ防止対策の現況を概観し，「命の教育」の一環としての「いじめ防止教育プログラム」開発こそ，いじめ防止対策の中核に据えることが重要であることの方途を示したい。(pp.79-84　Ａ４判)

24.今，なぜ「学校カウンセリング」かⅡ−「教育相談」を活かした「生徒指導」の一層の展開を−	単著	平成30年3月	平成30年度　研究紀要（新見公立大学）	第1章：生徒指導と教育相談の関係　　第2章：求められる予防的・開発的な教育活動　　第3章：開発的カウンセリング技法の活用　　第4章：今後の学校カウンセリング実践のために　の構成から成り、問題行動が低年齢化、多様化、複雑化する昨今、開発的カウンセリング技法（構成的グループ・エンカウンター）の実践による教育効果について強調し、その具体的実践方法や留意点についても詳述した。 Ａ４判全頁p.32編集・執筆担当。(2019.3.発刊)
25.『折れない心』の育成についての一考察－「いのちの教育」「心の教育」の視点から－ （査読有）	単著	令和2年3月	新見公立大学紀要 第40巻	住本は，公立学校教諭，県教育委員会指導主事，大学教員を歴任する中で，長く（42年間）生徒指導，教育相談にかかわってきた。その間に「いのちの教育」や「心の教育」に関する研究も重ねてきた。そんな中で，『折れない心』の育成には，いくつかの要素が大きく影響していると実感しており，　Ａ県内県立高等学校教育相談担当者部会，Ｂ市内公立学校養護教諭研究部会の協力を得て，次の10項目に集約することができた。①揺るぎない自信を持たせること。　②揺るぎない自信を持っている人をイメージさせること。　③勝ち負けにこだわり過ぎないようにさせること。　④プラス思考で物事をとらえることができるようにさせること。　⑤今の自分が好き（自尊感情）であると実感させること。　⑥感情のコントロールができるようにさせること。　⑦受け止めてくれる人を持つようにさせること。　⑧中立を保たせ，自己防衛ができるようにさせること。　⑨完璧を目指し過ぎないようにさせること。　⑩好きなこと（趣味）・没頭できるものを持たせること。(pp.79-84　Ａ４判)
26. 保育現場における人型ロボットの活用可能性に関する研究（査読有）	共著	令和2年3月	新見公立大学紀要 第40巻	保育現場での課題（保育士多忙化の解消）に対し，人型ロボット（ロボット型携帯電話）の活用による当該課題解消への可能性を探る

				ことを目的に，幼稚園・認定こども園の管理職への半構造化面接を実施〈10 園・園長：保育現場における人型ロボット（ロボット型携帯電話）の活用可能性について〉し，その内容を整理・検討したところ，保育現場における人型ロボット（ロボット型携帯電話）の活用可能性として，以下の 10 点が確認された。①挨拶指導（顔認証機能による登園・降園管理）　②緊急対応の連絡　③行事の説明（「七夕の由来」,「餅つきの由来」等）　④窒息防止の機能（午睡時等の心拍数の把握）⑤園児の写真撮影（カメラ搭載・動画録画）⑥「園便り」メール配信　⑦園児との遊び（ダンス・歌・クイズ・絵本の読み聞かせ）⑧健康指導：歯磨き指導・検温等　⑨コミュニケーションツールとしての話し相手　⑩保育に生かせるアプリによる機能の拡大期待（pp. 71-78　Ａ４判）（共著者：住本克彦、加藤由美、金山時恵、岡　京子）
27. 進路指導の理論と実際－『生徒指導』との関連を中心にして－	単著	令和２年３月	平成元年度研究紀要第３号（新見公立大学）	本論文では、法律から見た進路指導とは　②進路指導の変遷　③進路指導とキャリア教育（ア：キャリア教育とは　イ：キャリア教育の意義　ウ：キャリア教育の理論）④キャリア教育の実際（生徒指導との関連を中心に）　⑤在り方生き方を問う進路指導の展開を　の内容で、人としての在り方・生き方をベースとして子どもに向き合う生徒指導、進路指導の在り方について明示した。(pp. 3-8)（Ａ４判　全頁数２６）
28. 道徳教育の現況と課題に関する一考察－『特別の教科　道徳』で『考え、議論する道徳』をどう進めるか－」	単著	令和２年３月	平成元年度研究紀要第３号（新見公立大学）	本論文では、①『特別の教科　道徳』でめざすもの　②問題解決型の道徳授業　③『考え、議論する道徳授業』の進め方　の内容で、『特別の教科　道徳』で『考え、議論する道徳』をどう進めるかについて、開発的カウンセリング技法の活用を提唱した。(pp. 8-13)（Ａ４判　全頁数２６）
29. 共生社会の実現のためのインクルーシブ教育システム構築をめざして－新見市における取組を	共著	令和２年３月	平成元年度研究紀要第３号（新見公立大学）	本論文では、①『特別の教科　道徳』でめざすもの　②問題解決型の道徳授業　③『考え、議論する道徳授業』の進め方　の内容で、新見市における取組を中心に、共生社会

中心にしてー				の実現のためのインクルーシブ教育システム構築について検討した。住本克彦・城井田二郎・光島由忠（pp. 14-25）（Ａ４判　全頁数２６）
30.「いじめ防止・対応教職員研修プログラム」の開発に関する一考察ー学校法人奈良学園での実践を通してー	単著	令和２年12月	奈良学園大学紀要第13集	「いじめ防止・対応教職員研修プログラム」を実践し、研修会終了後、聞き取り調査を実施した（対象：高校３校190名・中学２校190名・小学校１校47名・幼稚園２園39名：計361名）。その結果、①「いのちの教育」からの教育実践　②開発的カウンセリング技法　③教師の観察力・感性向上と総合質問紙調査（アイチェックなど）等の活用　④チーム支援・関係機関との連携　⑤情報モラル教育・保護者との連携　⑥いじめ対応研修会や事例研修会等の定期的実施　等が要素である点がその有効性として確認された。（pp. 157-175　Ａ４判）
31.「幼児期における〔自尊感情〕育成の方途を探るー子どもや保護者の心に寄り添った保育・教育実践のためにー」	単著	令和３年３月	2019年度・2020年度明石市教育委員会指定・幼稚園研究実践研究報告書・奈良学園大学研究紀要別冊	２年間の研究の総括として、幼児期における「自尊感情」育成のポイントとして、①「臨床の視点」「脳科学の視点」を持つことの大切さ　②保護者との連携を図ることの大切さ　①　認めるタイミングを逃さないこと　④「チーム学校」組織対応の大切さ　⑤エビデンス・ベースド・エデュケーション実践の大切さ　⑥「個」と「集団」の成長を共に進めること　⑦保育者・教育者自身の資質を伸ばすこと　⑧「4歳の壁」を理解すること　⑨研究としての継続・広がりを考えること　⑩追跡調査を継続すること等が確認された。（pp. 56-61　Ａ４判）
32.「幼児教育に求められる人間関係に関する一考察ー保育における基本と領域『人間関係』との関連に注目してー」	共著	令和３年３月	令和２年度 研究紀要 第１巻（奈良学園大学）	保育における指導の中核にある『人間関係』領域において、子ども同士の人と関わる力、その他様々な人と関わる力形成の大きな要素として、教師と子どもの『人間関係』が大きく影響していることについて論述し、教師が、子ども達の『人間関係』を支え、広げ深める手立てとしても、家庭支援や子育て支援、さらには地域支援も視野に入れた取組が重要である事を示唆した。（pp. 3-6　Ａ４判）※科学研究費助成事業･基盤研究（C）課題番号18K03163研究課題名「人間関係力を育む

				保育者養成教育のあり方に関する実践的研究」研究代表者：加藤由美　研究分担者：住本克彦　他
33.「『ネット上のいじめ』対策についての一考察Ⅱ－『正しい情報メディアの使い方』をどう教えるか－」	単著	令和３年３月	令和２年度 研究紀要 第１巻（奈良学園大学）	「ネット上のいじめ」の定義、「ネット上のいじめ」の事例と対策（小・中・高等学校の各事例と対策）、「ネット上のいじめ」対応の一層の充実のための方策（情報モラル教育の推進等）等の構成で、「ネット上のいじめ」対策のポイントを明示した。(pp.7-16　Ａ４判)
34.「心理検査活用リーダー研修プログラムの開発の試みⅡ－県立学校教職員対象心理検査活用リーダー研修講座（『i-check』の活用」実施を踏まえて－」	単著	令和３年３月	令和２年度 研究紀要 第１巻（奈良学園大学）	2019 年度より継続の研究実践報告である。その構成は、①アイテェックのコンセプトについて　②カテゴリー構成とここの質問内容について　③結果帳票の種類とその見方について　④実際の分析例　個の４点である。実施後の質問紙調査（4 件法）の結果受講者全てが満足しており、自由記述では「学年団や生徒指導部会、教育相談部会等での検討する際の共通の資料になる」「生徒や保護者の話す際のエビデンスになる」等の当該検査の有効性等が報告された。(pp. 17-23　Ａ４判)
35. 心理検査活用リーダー研修プログラムの開発－Ａ県教育委員会主催研修講座「『i-check』の活用について」実施を踏まえて－	単著	令和３年 12 月	奈良学園大学紀要第 14 集	筆者が、Ａ県・県立学校人権教育サポート事業として、講師を務めた際（「心理検査活用リーダー研修プログラム」:【プログラム構成】①i-check のコンセプトについて　②カテゴリー構成と個々の質問について　③結果帳票の種類とその見方について　④実際の分析例　【主催】A 県教育委員会　【事業名】20XX 年度心理検査活用リーダー研修講座【テーマ】『i-check』の活用について－『i-check』の活用のポイントと具体的な手立てについて－）に、参加者への聞き取り調査後、以下の点が示唆された。⑴教師の観察だけではなく、心理検査の必要性を実感した（心理検査の活用が不可欠）。　⑵クラスの実態把握（学級経営）に有効　⑶学級の成員個々の実態が把握でき個人指導に活用できる。　⑷各「学校」「科」の実情に合った研修会（研修内容）実施を望む（専門家・講師の招聘）　⑸心理検査『i-check』の特徴・見方が理解できた（研修内容を具体的に提示、事例提示、双方向型、専門的視点からの

				手立ての提案等）　⑹生徒一人一人を多面的に理解することの大切さ　等。(pp. 221-233 Ａ４判)
36.「人権教育とパワーハラスメントー大学におけるハラスメント防止プログラムの提案ー」	単著	令和４年３月	令和３年度　研究紀要　第２巻（奈良学園大学）	①「パワーハラスメント」の定義　②「パワーハラスメント」の６類型　③企業に課せられる義務　④「人権」と「人権教育」（文部科学省）　⑤人権の擁護（法務省）　⑥いじめ問題（法務省）　⑦大学におけるハラスメント相談窓口設置事例　等の構成で、大学におけるハラスメント防止プログラムのポイントを明示した。（株）二鶴堂 2021(pp. 3-10 Ａ４判)
37.「『コロナいじめ防止教育プログラム』について」	単著	令和４年３月	令和３年度　研究紀要　第２巻（奈良学園大学）	①日本赤十字社「新型コロナウイルスの３つの顔を知ろう！～負のスパイラルを断ち切るために～」について　②中学生版教育プログラム「新型コロナウイルスと向き合うために」等の構成で、『コロナいじめ防止教育プログラム』のポイントを明示した。（株）二鶴堂 2021(pp. 11-15　Ａ４判)
38.「いじめ調査報告書から考えるいじめ防止教育プログラム開発の可能性」	単著	令和４年３月	令和３年度　研究紀要　第２巻（奈良学園大学）	①「調査報告書」作成における留意点　②「調査報告書」（講評概要版）の内容　※提言（再発防止に向けて）　等の構成で、いじめ防止教育プログラム開発の可能性について論述した。（株）二鶴堂 2021(pp. 16-31　Ａ４判)
39.「いじめ防止・対応等、教職員研修プログラム」の開発に関する研究Ｉ－『学校法人奈良学園』における『教育相談活動（生徒指導含む)』のネットワーク強化ー	共著	令和５年３月	奈良学園大学紀要第15集	本研究は、2022 年度 学校法人奈良学園採択の共同研究の経過報告である。本研究では、「いじめ対応研修会や事例研修会等の研修会」を奈良学園全体で複数回実施した（各学校園の生徒指導、教育相談等の担当者各１名参加)。毎回⑴生徒指導、教育相談に関する事例報告・検討　⑵最新の「教育相談」テキストを活用した研修と、そこでの参加者の研修の振り返りを基に、カウンセラー有資格者複数名が、半構造化面接を実施し、ＫＪ法によって、その内容を整理、分析し、「いじめ防止・対応等、教職員研修プログラム」開発に資するものである。本稿ではその第１回研修会実施結果から得られた知見を報告した。そこでは、⑴【事例報告・検討】成功事例に学ぶ事例検討会の有効性（危機管理体制の充実による効果）　⑵【テキスト研修】教育実践（生徒指導・教育相談）する際に、裏付けとなる理論等をベースとすることの有効性

				⑶開発的カウンセリング技法の研修の必要性⑷同一学園内で同様の分掌担当者が定期的に意見交流することの有効性　⑸研修会に専門家が入ることの有効性等が確認された。【執筆者】住本克彦・高橋千香子・中山 健・橋本宗隆・池田大輔・益田美保・三笘康之・山田百代　(pp. 119-200　Ａ４判)
（その他） 「辞典、事典、ハンドブック」				
（その他） 「調査研究報告書」 1. 子どもたちが輝くクラスづくりのためのアイチェック実践事例集Ⅰ （小・中学校判　）	共著	平成 25 年度	東京書籍株式会社	子どもたちの心の声に寄り添った教育実践を紹介したものである。 本人担当は「アイチェックを活用した学級づくりの提案」のテーマで、実践した小中学校の６事例の編集である。さらに「アイチェックを活用した学級づくり」の進め方について巻頭言として執筆した。(p.1)（Ａ４判　全頁数３６，執筆者：住本克彦、他６名）
2.（第２年次）文部科学省指定研究開発社会人基礎力育成プログラム開発Ⅱ―１・２年次「社会人基礎Ⅰ・Ⅱ」の取組―	共著	平成 25 年 3 月	友野印刷（株）：兵庫県教育委員会・兵庫県立上郡高等学校 環太平洋大学　住本克彦	『「生き方教育」をベースにしたインターンシップの推進－2 年間の研究開発（文部科学省指定研究開発「社会人基礎力育成プログラム開発：高校生に自立と共生の能力を兼ね備えた社会人の基礎を培うための教育課程開発に関する研究」）から見えてきたもの』を執筆したものである。本研究は、高校生に自立と共生の能力を兼ね備えた社会人の基礎を培うことを目標に、実践研究を進めてきた。1 年生で「アサーション・トレーニング」、2 年生で「インターンシップ」を中心にプログラム開発をした。効果測定としては、Q-U（河村)、「アイチェック」（梶田・住本）を活用し、1 年生：「自己理解・自己管理能力」、2 年生：「キャリアプランニング能力」、3 年生「課題対応能力」に焦点化し、心理教育や道徳教育を適切に配置し、包括的なプログラムを開発した。 本人担当部分は、研究のまとめと編集である。(pp77～79 を単著)（Ａ４判全頁数７９，編著：兵庫県教育委員会 兵庫県立上郡高等学校・環太平洋大学　住本克彦　　執筆者：住本克彦、兵庫県教育委員会・兵庫県立上郡高等学校）

3.平成 25 年度（第 3 年次）文部科学省指定研究開発社会人基礎力育成プログラム開発Ⅲ―１・２・３年次「社会人基礎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の取組―	共著	平成 26 年 3 月	友野印刷（株）：兵庫県教育委員会・兵庫県立上郡高等学校 環太平洋大学　住本克彦	『３年間の研究開発（文部科学省指定研究開発「社会人基礎力育成プログラム開発：高校生に自立と共生の能力を兼ね備えた社会人の基礎を培うための教育課程開発に関する研究」）から見えてきたもの』を執筆。本研究は、高校生に自立と共生の能力を兼ね備えた社会人の基礎を培うことを目標に、実践研究を進めてきた。1 年生で「アサーション・トレーニング」、2 年生で「インターンシップ」、3 年生で「すーく上高」を中心にプログラム開発をした。効果測定としては、Q-U（河村）、「アイチェック」（梶田・住本）、自尊感情尺度、規範意識調査等を活用し、1 年生：「自己理解・自己管理能力」、2 年生：「キャリアプランニング能力」、3 年生「課題対応能力」に焦点化し、「心理教育」や「道徳教育」等を適切に配置し、包括的なプログラムを開発し、その結果は報告書として文部科学省へも報告した。 本人担当部分は報告書の編集と本研究のまとめである。(pp114～115 を単著)（Ａ４判　全頁数１１５，編著者：兵庫県教育委員会 兵庫県立上郡高等学校・環太平洋大学　住本克彦　　執筆者：住本克彦、兵庫県教育委員会・兵庫県立上郡高等学校）
4.子どもたちが輝くクラスづくりのためのアイチェック実践事例集Ⅱ（小・中学校判　）	共著	平成 26 年 5 月	東京書籍株式会社	「『質問紙調査』『カウンセリング技法』を活用した学級経営を―アイチェックを活用した学級づくりの事例集である。 本人担当部分は子ども達の生きる力を高める―」のテーマで、実践した小・中学校の１０事例の編集である。そして「アイチェックを活用した学級づくり」の進め方について巻頭言として執筆した。(p.1)（Ａ４判　全頁数３８，執筆者：住本克彦、他６名）
5.「いのちの教育」カリキュラム開発への取組―小・中・高校生を対象にした「いのちの教育」に関する質問紙調査結果をとおして― 科学研究費助成事業･基盤研究（B）課題番号	単著	平成 27 年 1 月	科学研究費助成事業･基盤研究（B）課題番号 24330254 研究課題名「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書『いのちの教育カリキュラムモ	本研究は，小学生・中学生・高校生の「いのち」に対する意識の実態を把握する目的で、「いのちの教育」に関する質問紙を作成し、予備調査、本調査を実施した結果を踏まえた提言（「小学生・中学生・高校生の『いのち』に対する意識の実態―『いのちの教育』に関する質問紙調査結果をとおして―」住本,2014；The actual situation of the

24330254			デルの開発と実践』	consciousness for the life with an elementary and junior and senior high school students as a target, through questionnaire survey in relation to "Education of the life", 環太平洋大学研究紀要 No.9）と，先進校聞き取り調査から得られた効果的実践例を基に作成した『いのちの教育』のカリキュラム（2014，住本克彦，五百住満，三木澄代，瀧明知恵子，原実男，岡山心理学会第 62 回大会論文集）の両稿に加筆したものである。
6.「いのちの教育」カリキュラムモデル の開発的研究 ―小・中・高校生を対象にした「いのちの教育」に関する質問紙調査結果をとおして― 科学研究費助成事業･基盤研究（B）課題番号 24330254	共著	平成 27 年 2 月	平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金(基盤研究(B))課題番号 24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書 別冊	本研究は，科学研究費助成事業･基盤研究（B）課題番号 24330254 研究課題名「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」(研究代表者：梶田叡一)に基づき進めたものであり，本稿は，小学生・中学生・高校生の「いのち」に対する意識の実態を把握する目的で、「いのちの教育」に関する質問紙を作成し、予備調査、本調査を実施した結果を踏まえた提言（「小学生・中学生・高校生の『いのち』に対する意識の実態―『いのちの教育』に関する質問紙調査結果をとおして―」住本,2014 と，先進校聞き取り調査から得られた効果的実践例を基に作成した『いのちの教育』のカリキュラム（2014，住本，五百住，三木，瀧明，原，岡山心理学会第 62 回大会論文集），さらに道徳をはじめとする各教科における「いのちの教育カリキュラム開発への取組」（2015，梶田叡一 いのちの教育カリキュラムモデルの開発と実践）の原稿に加筆したものである。「ヒヤリハットマップづくり」や「いじめ防止」のためのロールプレイなど、いのちの教育：カリキュラムⅡ（自他のいのちを守る）<小学校低学年>～<高等学校>の具体的実践例を明示した。本人担当部分は第 1 部：「いのちの教育」カリキュラムモデルの開発的研究―小・中・高校生を対象にした「いのちの教育」に関する質問紙調査結果をとおして―住本克彦（pp.3-25），第 2 部：資料編「心に関するアンケート」調査結果　住本克彦（pp.27-40）。本人(住本)は、本別冊の企画、構成、編集　論文執筆（カリキュラム開発）を担当

				した。(pp.27-40)（Ａ４判　全 40 頁）
7. 公益財団法人　私立大学通信教育協会「平成 26 年度　大学通信教育職員研修会報告書」	共著	平成 26 年度	公益財団法人　私立大学通信教育協会 平成 26 年度運営委員会	平成 26 年度　大学通信教育職員研修会に参加し、報告書をまとめた。 本人担当は、本研修会役員として、研修会の企画、報告書の編集　執筆である。第２グループの「運営委員」として、テーマ「授業・試験並びに成績」を中心にして、日本大学、慶應義塾大学、東洋大学、帝京平成大学、東京未来大学、神戸親和大学はじめ、計 12 大学の企画・運営・進行・助言・報告書を作成した。特に住本は、専門領域から、クレームの対応事例への助言において、参加者から「大変参考になった」各委員からも高評価を得、レポート・試験、スクーリング、インターネット授業、成績票・試験答案等の運用管理方法などの領域で、報告書にまとめた。 （pp. 39-42）（Ａ４判　全頁数５８，共著者：住本克彦、梶　一夫、計１２名）
8. 高陽中ブロック授業研究『自己肯定感の育成をもとに学力向上を図る効果的取組』Ｉ―児童・生徒に「役割」「期待」「承認」を―	共著	平成 27 年 3 月	友野印刷（株）：赤磐市教育委員会環太平洋大学　住本克彦	赤磐市教育委員会との共同研究で、自己肯定感を高めれば、学力は向上する、という仮説を検証している。2 年目の報告書である。 　本人担当は、本報告書の編著者で、「『自己肯定感の育成をもとに学力向上を図る効果的取組』その教育効果の検証」、「『自己肯定感の育成をもとに学力向上を図る効果的取組』その成果と課題」を執筆。 　研究テーマは，『自己肯定感の育成をもとに学力向上を図る効果的取組―児童・生徒に「役割」「期待」「承認」を―』で，自己肯定感を基盤にして「学ぶ意欲」を高めていけば，児童・生徒に「確かな学力」が身に付くと考え，本研究主題を設定し，研究を進めていった。(pp11～12)（Ａ４判　全頁数１２，編著：岡山県赤磐市教育委員会・環太平洋大学　住本克彦　　執筆者：住本克彦、赤磐市教育委員会）
9. 「2016 年度新見公立大学学長配分研究費採択研究報告書」幼児教育における『いのちの教育』カリキュラムモデルの開発的研究－N 市における幼児教育の実態を踏まえて	共著	平成 29 年 3 月	二鶴堂：住本克彦	本研究では，「いのちの教育」実践園を調査した結果を参考にして，教育現場で実践可能で効果的な「いのちの教育」カリキュラム開発の要諦を提案した。研究１では、「いのちの教育」の領域が以下の 7 点あることが確認された。①動植物飼育・栽培活動の直接体験活動の実践（兎飼育・一人一鉢栽培　等)。

―				②防災教育（避難訓練・災害時の引き渡し訓練・保護者との連携　等）。③自己肯定感の育成（称揚・成功体験　等）。④被害に遭わない・いのちを守る指導（交通安全指導　等）。⑤人権教育の推進（思いやり・共感性の育成　等）。⑥絵本の活用（「いのち」にかかわる絵本の読み聞かせ　等）。⑦食育（感謝の気持ちの育成　等）。研究２では、先進校視察により、①小学校低学年：自然を活かした「いのちの教育」の実践活動　②小学校中学年：小高連携による梨栽培の実践活動　③小学校高学年：赤ちゃんとの交流等を通した「いのちの教育」の実践活動　等の実践の効果を確認できた。（Ａ４判　全頁数 23，編著：住本克彦　　執筆者：住本克彦・斎藤健司・加藤由美）
10.「総合質問紙調査『i-check』（アイチェック）　ハンドブックⅢ」	監修・編著	令和３年３月	東京書籍株式会社	「総合質問紙調査『i-check』（アイチェック）の改訂版（小・中・高等学校各版）を発刊した。それに伴い、ハンドブックも改訂し、巻頭言を執筆し、当該検査の学級経営への活かし方のポイント等を示した。（p.１　Ａ４判）
11.　「今後の不登校支援のあり方に関する検討委員会 意見のまとめ（報告書）」	編著	令和５年１月	神戸市教育委員会	「不登校児童生徒への支援の現状と課題を検証し、不登校児童生徒への支援の改善充実を図る観点から、今後の不登校対策の総合的かつ体系的な支援のあり方について検討するため、今後の 不登校支援のあり方に関する検討委員会を開催」（「今後の不登校支援のあり方に関する検討委員 会開催要綱」第 1 条（趣旨）令和４年７月７日付 神戸市教育長決定）することとなった。本検討委員会では、各委員がそれぞれの立場から、⑴「登校しやすい環境整備と不登校の早期支援」、⑵「不登校児童生徒への支援の充実」、⑶「保護者サポ ート及び民間施設等との連携推進」の３点を中心に検討を重ね、令和５年１月当該委員会「委員長」の立場で、報告書をまとめ〔「委員長総括」（p13）執筆（Ａ４判　全 21 頁）〕、当該報告書は、手交式にて、住本より神戸市教育長へ手交された（2023.1.25　神戸市教育委員会）本報告書において、特筆すべきは、不登校の 経験者やその保護者、また、不登校に関する親の会

				の運営に携わる方々を臨時委員として、検討委員会でヒアリングを行ったこと。さらには、先進事例として、広島県及び横浜市の教育支援セ ンター、岐阜市及び香川県三豊市の不登校特例校をそれぞれ訪問し、その取組を踏まえて議論を進めてきたことであり、このように当委員会では、何より不登校の経験者や保護者を基軸にし、不登校児童生徒に対する支援の目標である「社会的自立」の視点から好転に結びつけている実践事例を踏まえながら 議論し、その内容を、本報告（意見のまとめ）としてまとめたことが今後の不登校支援の大きな指針となった。
（その他）「口頭・ポスター発表」 1. 研究発表（発表番号22)「小･中･高等学校意識調査結果を踏まえた『いのちの教育』のカリキュラム開発への取組 科学研究費女性事業･基盤研究（B）課題番号24330254	共著	平成 26 年 12 月	岡山心理学会第６２回大会論文集	本研究は、科学研究費助成事業･基盤研究（B）課題番号 24330254 研究課題名「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」(研究代表者：梶田叡一)に基づき進めた。小学生・中学生・高校生の「いのちに対する意識の実態を把握する目的で、「いのちの教育」に関する質問紙を作成し、予備調査、本調査を実施（環太平洋大学研究紀要 No. 9「小学生・中学生・高校生の『いのち』に対する意識の実態―『いのちの教育』に関する質問紙調査結果をとおして―」住本，2014；The actual situation of the consciousness for the life with an elementary and junior and senior high school students as a target,through questionnaire survey in relation to“Education of the life”sumimoto,2014)。その結果と先進校聞き取り調査から得られた提言を基に作成した『いのちの教育』の道徳を中心とした各教科のカリキュラムを提案した。(p. 12) （共著者：住本克彦、五百住　満、三木澄代、瀧明知恵子、原　実男）
2. 研究発表（発表番号26)「小学校社会科教育におけるキャリア教育についての一考察Ⅰ」	共著	平成 26 年 12 月	岡山心理学会第６２回大会論文集	小学校社会科における主要目標である公民的資質の育成と、キャリア教育の重要な目標の、いずれにおいても、「社会」にいかに関わることができるかということが根底にある。すなわち、社会科の教育目標もキャリア教育の目標も「社会」をキーワードし、社会といかに関わり、その形成に参画していくか

				という社会形成能力の育成が共通の目標の一つと言える。このように考えると、社会科教育の役割は、キャリア教育にも重要な役割を果たして言える。本研究では、小学校社会科教育におけるキャリア教育の位置付けについて検討した。(p. 14) （共著者：八木達也、住本克彦）
3. 日本カウンセリング学会大会準備委員会企画シンポジウム（１）	共著	平成 27 年 8 月	日本カウンセリング学会第４８回大会論文集	「いじめ・自殺と向き合うカウンセリング」のテーマで、いじめ防止や自殺予防について、子どもたちとの心と向き合うカウンセリングや学校教育に何が求められているのかを探るため本シンポジウムを企画した。不登校支援のポイント、子どもの自尊感情を高めるヒント、教師が学級づくりで気をつけるべきポイント、道徳での自殺予防の指導ポイント、学校教育での自殺予防教育の実践例等が提案された。本人（住本）は、企画と司会、執筆を務めた（p. 27）（共著者：新井肇、住本克彦、相馬誠一、伊藤美奈子、秋光恵子、阪中順子）
4. 保育現場における人型ロボット『Pepper』の活用可能性に関する一考察	単著	平成 28 年 12 月	岡山心理学会第 64 回大会論文集	人型ロボットの性能や、保育・教育の特性との関連性を鑑み、その保育・教育現場での今後の活用可能性について検討した。(p. 11)
5. 幼児教育における『いのちの教育』の課題に関する研究－A 市における幼児教育の実態を踏まえて－	共著	平成 28 年 12 月	岡山心理学会第 64 回大会論文集	本研究では，「いのちの教育」実践園を調査した結果を参考にして，「いのちの教育」の課題として、①動植物飼育・栽培活動の直接体験活動の実践　②防災教育　③自己肯定感の育成（称揚・成功体験　等）。　④被害に遭わない・いのちを守る指導　⑤人権教育の推進　⑥絵本の活用　⑦食育　以上が確認できた。(p. 14) （共著者：西岡日向・光成汐里・住本克彦）
6. 幼稚園における遊具を通してはぐくむ『生きる力』に関する一考察－A 市における幼児教育の実態を踏まえて－	共著	平成 28 年 12 月	岡山心理学会第 64 回大会論文集	本研究では，園で使用される遊具の安全活用のための留意点について検討し、定期点検や遊具の安全使用の指導の重要性等を明確に示した。(p. 16)（共著者：大原早貴・大車苑花・住本克彦）
7. 幼児教育における特別支援教育に関する一考察－A 市における幼児教	共著	平成 28 年 12 月	岡山心理学会第 64 回大会論文集	本研究では，園における特別支援教育の重要性と具体的システムづくりの緊急性、保育者・教育者の特別支援教育に関する専門性を

育の実態を踏まえてー				いかに高めるかについて検討した。(p. 21)（共著者：角南周・住本克彦)
8. 幼児期における『命の教育』カリキュラムモデルの開発的研究ーA 市における幼児教育実践からー	単著	平成 29 年 9 月	日本カウンセリング学会第 50 回記念大会論文集	幼児期における『命の教育』カリキュラムモデルの開発的研究のテーマで、保育現場での発達に応じた「命に関わる絵本」を集約した。(p. 131)（跡見学園女子大学)
9. 保育現場における人型ロボット（ロボット型携帯電話）の活用可能性に関する研究	共著	平成 30 年 12 月	岡山心理学会第 66 回大会論文集	人型ロボット（ロボホン）の性能や、保育・教育の特性との関連性を鑑み、その保育・教育現場での今後の活用可能性について検討した。(pp. 12-13)（共著者：中川悠斗・上田実奈・住本克彦)
10. 生徒指導・教育相談における実践課題に関する一考察ー『保・幼・小連携』に焦点を合わせてー	単著	平成 30 年 12 月	岡山心理学会第 66 回大会論文集	教育相談を活かした生徒指導の展開をこそ目指すべきで、『保・幼・小連携』においてもその点を踏まえた実践こそ重要であることを明示した。(pp. 14-15)
「その他」 1.「エンカウンターで不登校対応が変わる(2)」	単著	平成 25 年 3 月	兵庫県教育委員会・兵庫県立但馬やまびこの郷『虹の架け橋』第 35 号	開発的カウンセリング技法である構成的グループ・エンカウンターを不登校対策支援に活用するポイントや留意点を、前号である第 34 号に続いて明示した。不登校予防にも役立つ教職員対象の実践的内容である。(pp. 2-3)（Ａ４判　全頁数１０）
2.「コミュニケーション能力を高めるために　―カウンセリング技法を活用して―」	単著	平成 25 年 11 月	兵庫県明石市教育研究所所報「あかしの教育」平成 25 年度判	今日的教育課題としての「コミュニケーション能力を高める手段」について、「自分も、相手も大切にした話し方であるアサーション・トレーニングの実際等の具体的にその方途を示した。(pp. 2-3)（Ａ４判　全頁数１０）
3. 保育所・幼稚園・小学校・中学校を 10 年間連携させた教育実践モデルの提案	単著	平成 28 年 8 月	全国保育士養成協議会第 55 回研究大会研究発表論文集	子どもを 10 年間のスパンでその心身の成長を見守る教育プログラムを提案した。そこでは、連携する場の設定、保護者との連携の重要性、教職員の多忙感を極力抑えること（現状の研修をいかに精選するか等)、専門家の研修会への招聘等が明示された。
4. いのちの教育『いのちの教育』のカリキュラム開発のポイントを探る	単著	平成 30 年 3 月	健学社　心とからだの健康　第 22 巻　第 3 号	今こそ、幼児期から命のかけがえのなさ、命のつながりなどに気づかせ、生きることの素晴らしさや生きる喜びを実感させることが大

				切だとして、『いのちの教育』のカリキュラム開発のポイントについて詳述した。（pp. 76-82）（2018.3.発刊）
5.いのちの教育『折れない心』の育成―「いのちの教育」「心の教育」の視点から―	単著	平成30年3月	健学社　心とからだの健康　第23巻　第3号	『折れない心』を育成するためのポイントについて、①揺るぎない自信を持たせる指導　②揺るぎない自信を持った人をイメージさせる指導　③勝ち負けにこだわらない指導　④プラ市施行で物事を捉える指導　⑤自尊感情を育てる指導　等10項目について、その具体的育成法を詳述した。（pp. 81-85）（2019.3.発刊）
6.健康ふしぎ発見ニュース（全学年用）「折れない心ってなに？」	単著	平成30年3月	健学社学校保健教育研究会（監修）健康ふしぎ発見三月号ニュース　第27巻第3号　通巻892号・壁新聞⑴	「折れない心」について、クイズ形式で、わかりやすくイラストで表示した。（Ｂ２判　解説8頁も単著）
7.健康ふしぎ発見ニュース（全学年用）「折れない心はどうすれば育つの？」	単著	平成30年3月	健学社学校保健教育研究会（監修）健康ふしぎ発見三月号ニュース　第27巻第3号　通巻892号・壁新聞⑵	「折れない心」の育成について、ソーシャルサポートの重要性等、わかりやすくイラストで表示した。（Ｂ２判　　解説8頁も単著）
8.健康ふしぎ発見ニュース（全学年用）「見方を変えれば短所も長所」	単著	平成30年3月	健学社学校保健教育研究会（監修）健康ふしぎ発見三月号ニュース　第27巻第3号　通巻893号・壁新聞⑶	「リフレーミング技法」（短所を長所に読み替え）について、わかりやすくイラストで表示した。（Ｂ２判　　解説8頁も単著）
9.プロとしての保育者、魅力的な保育者 【再掲】	単著	平成31年1月	教育情報出版	プロフェッショナルとしての保育者の資質として、「人間性」「指導力」「専門性」の重要性について具体的事例を挙げ、詳述した。新見公立大学健康保育学科の授業、「保育者論」等で使用し、実践的な内容で、理解しやすいと大変好評であった。（上中修　編著）【本人単著部分】第1部・第3章・第4項「プロとしての保育者、魅力的な保育者」（pp.44-48）（Ｂ５判　全頁数190）
10.私の提言（巻頭論文）「いじめ防止」は	単著	平成31年12月	健学社　心とからだの健康　第23巻　第	教師がいじめ問題と向き合う視点を以下の３点挙げた。①教師は、いじめは人として決し

「いのちの教育」の視点から向き合う			12 号	て許されない行為であるとの強い認識を持つ　②教師は、いじめ被害者を徹底して守り抜く姿勢を持つ　③教師は、「いのちの教育」の一環としての、いじめ問題への向き合う姿勢を持つ　各内容については、ポイントを明示した。(p. 9)（2019. 12. 発刊）
11 健康ふしぎ発見ニュース（全学年用）「悩んでいることがあれば、どうすればいいの？」	単著	平成 31 年 12 月	健学社学校保健教育研究会（監修）健康ふしぎ発見十二月号ニュース　第 27 巻第 12 号　通巻 918 号・壁新聞⑴	「相談する力」の育成をめざして、クイズ形式で、わかりやすくイラストで表示した。（Ｂ２判　解説 8 頁も単著）
12. 健康ふしぎ発見ニュース（全学年用）「心の声は聞こえにくい。だから勇気を持って言葉にしよう！」	単著	平成 31 年 12 月	健学社学校保健教育研究会（監修）健康ふしぎ発見十二月号ニュース　第 27 巻第 12 号　通巻 919 号・壁新聞⑵	「相談する力」の育成をめざして、クイズ形式で、わかりやすくイラストで表示した。回答編では、一人で抱え込まず、誰かに相談することを勧めている。（Ｂ２判　　解説 8 頁も単著）
13. 健康ふしぎ発見ニュース（全学年用）「こんなときどうしたらいい？本音を話す勇気を持とう！」	単著	平成 31 年 12 月	健学社学校保健教育研究会（監修）健康ふしぎ発見十二月号ニュース　第 27 巻第 12 号　通巻 920 号・壁新聞⑶	「相談する力」の育成をめざして、クイズ形式で、わかりやすくイラストで表示した。「信頼できる友だちの見つけ方」では、回答として「自分からあいさつをすること」「共通の話題を見つけること」「私メッセージを送ること」を明示した。（Ｂ２判　解説 8 頁も単著）
14. 子どもの保健と安全	共著	令和 2 年 2 月（令和 5 年度改訂）	教育情報出版	第 1 章・第 4 節：「地域における保健活動と子ども虐待防止」について執筆。虐待をいかに防止し、早期に適切な対応をしていくかについて、そのシステム構築の重要性について詳述した。また、第 9 章・第 7 節：「子どもと悪性腫瘍」についても執筆。保育者・教育者が、子どもの病気についての知識を持つことの重要性について強調。がん教育の推進についても提唱した。（高内正子編著） 【本人担当部分】第 1 章・第 4 節（pp. 34-40 を単著）・第 9 章・第 7 節（pp. 111-117 を単著）（Ｂ５判　全１９２頁）以下の改訂版では、最新のデータを掲載した。【本人単著部分】第 1 章・第 4 節（pp.18-19 を単著）・第 9 章・第 7 節（pp.92-93 を単著）（Ｂ５判 全２１５頁）2020.3 第 1 版発刊の改訂版（2023.3）

15.「総合質問紙調査『i-check』（アイチェック）令和２年度（改訂版）	監修・編著	令和２年３月	東京書籍株式会社	「総合質問紙調査『i-check』（アイチェック）の改訂版（小・中・高等学校各版Ａ４判）を発刊した。
16.『新型コロナウイルスの影響から考える心の健康』	単著	令和２年７月	健学社　心とからだの健康　７月号通巻第269号	コロナ禍における子供の「心のケア」の重要性を説き、具体的対処として、①子供のイライラは自然の反応であると捉えることの大切さ　②子供の睡眠・食事・遊びに注目することの大切さ　③日常的な運動量の確保の大切さ　④独りにさせないためのソーシャルサポートを実感させること　等についてわかりやすく詳述した。（pp. 17-23　Ａ４判）
17.『コロナ禍における児童虐待防止』	単著	令和２年10月	健学社　心とからだの健康　10月号通巻第272号	コロナ禍における児童虐待防止の課題とその手立てについて論述した。「2020 焦点 No. 10 子どもの心」（p. 9　Ａ４判）
18.『コロナ禍で考える〈心のケア〉〈児童虐待〉』	単著	令和２年11月	健学社　心とからだの健康　11月号通巻第273号	コロナ禍における「対面式授業」「オンライン授業」それぞれのメリット、デメリットを質問紙調査により明らかにした。その上で双方の利点を活かし、各課題を補い合う方途を明示した。また、潜在化する児童虐待への対応の具体例をその防止チェックシート（①子供の体や身なり　②保護者とのかかわり方　③友達とのかかわり方　④保護者の子供との接触の仕方　等の特徴）を示しながら防止法を探った。（pp. 23-31　Ａ４判）
19.『相手も自分も大切にする話し方ってなに？』【再掲】	単著	令和２年11月	健学社「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第921号	開発的カウンセリング技法のアサーション・トレーニングの具体例（思いやりを持ったコミュニケーションの取り方）をビジュアル教材として示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
20.『声のかけ方、注意の仕方で伝わり方が変わる！』【再掲】	単著	令和２年11月	健学社「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第	開発的カウセリング技法のアサーション・トレーニングの具体例（自他を大切にしたコミュニケーションの取り方）をビジュアル教材

			922 号	として示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
21.『自分に合ったストレス解消法を見つけよう』【再掲】	単著	令和２年 11 月	健学社「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 923 号	開発的カウンセリング技法のストレス・マネジメント教育の具体例（リラクゼーション法の実践）をビジュアル教材として示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
22.『自殺予防と命の教育の重要性』	単著	令和３年３月	健学社　心とからだの健康　３月号通巻第 273 号	自殺予防教育プログラム（①自尊感情を育む ②体験活動の充実　③情報社会の影の部分への対応　④命を守る知恵と態度の育成　⑤教師自身が命の意味を問いかける）と自殺発生時の対応マニュアル（事実確認の仕方や事実を児童生徒や教職員へ伝える際の留意点等）を明示した。（pp. 16-26　Ａ４判）
23.『自尊心を高めるってどういうこと？』【再掲】	単著	令和３年３月	健学社「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 933 号	自尊感情を実感することの大切さ、それを育てるポイントについて、ビジュアル教材として示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
24.『自尊心を育てよう！』【再掲】	単著	令和３年３月	健学社「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 934 号	自尊感情を育てるための実践例をビジュアル教材として示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
25.リレーミングをやってみよう！』【再掲】	単著	令和３年３月	健学社「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 935 号	短所を長所に読み替えるリフレーミング技法について、ビジュアル教材として示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
26.「総合質問紙調査『i-check』（アイチェック）令和２年度（改訂版）	監修・編著	令和３年３月	東京書籍株式会社	「総合質問紙調査『i-check』（アイチェック）の改訂版（小・中・高等学校各版Ａ４判）を発刊した。
27.「総合質問紙調査『History』（ヒストリ	監修・編著	令和３年３月	株式会社教育工学デザイン	「総合質問紙調査『History』（ヒストリー）令和３年度版（大学生版Ａ４判）株式会社教

ー)令和３年度版				育工学デザイン 2021.を発刊した。
28.健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 956 号『怒りの気持ちどうしたらいい？』［小学校用］（健学社）【再掲】	単著	令和４年１月	健学社「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 956 号	開発的カウンセリング技法のアンガーマネジメント法の具体例（怒りを感じた時の対処法について：別のものに視点を向ける・誰かに相談する等）をビジュアル教材（Ｑ＆Ａ方式）としてイラスト入りで示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
29.「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 957 号『ルールがある意味とアサーティブな話し方』［小学校用］（健学社）【再掲】	単著	令和４年１月	健学社「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 957 号	開発的カウンセリング技法のアサーション・トレーニングの具体例（ルールがある意味：廊下を走らない等についてについて「攻撃的な伝え方」・「受動的な伝え方」・「アサーティブな伝え方」それぞれどの伝え方が望ましいかを考えさせる例）をビジュアル教材としてイラスト入りで示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
30.「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 958 号『怒りのコントロール方法』［中高校用］（健学社）【再掲】	単著	令和４年１月	健学社「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 958 号	開発的カウンセリング技法のアンガーマネジメント法の具体例（怒りをコントロールする方法について：6 秒数えて深呼吸・その場を離れる・怒りを点数化する等）をビジュアル教材としてイラスト入りで示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
31.「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 959 号『ルールがある意味とアサーティブな話し方』［中高校用］（健学社）【再掲】	単著	令和４年１月	健学社「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材 通巻第 959 号	開発的カウンセリング技法のアサーション・トレーニングの具体例（ルールがある意味：食事中の黙食等について「攻撃的な伝え方」・「消極的な伝え方」・「アサーティブな伝え方」それぞれどの伝え方が望ましいかを考えさせる例）をビジュアル教材としてイラスト入りで示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
32.『人と関わり合う力を育てる』	単著	令和４年３月	健学社　心とからだの健康　３月号通巻第 289 号	コロナ禍によって、人との関わる力育成の重要性が一層注目されている。本稿では、小学校から高等学校までの各校での育成の仕方、その具体的実践例（自己主張訓練等）を挙げ、人と関わる中でのトラブルが発生した場合の「怒りの発散法（アンガーマネジメント）」や「ストレス解消法（ストレスマネジ

				メント教育)」についても詳述した。(pp. 25-30　Ａ４判)
33.「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材通巻第 968 号『心と体の健康観察をしよう！』」［小学生用］(健学社)【再掲】	単著	令和 4 年 8 月	健学社「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材　通巻第 968 号	「困ったことがあったとき、付箋に書き出して気持ちの整理をする」「一人で抱え込まないで誰かに相談してみよう（気の合う人探し等)」「やる気が起きないときは、深呼吸して『私がんばっているよ！』のメッセージを送る！」「プラス思考とスモールステップで乗り切ろう！」他、『心と体の健康観察をしよう！』のテーマで、小学生対象の保健教材を作成し、クイズ形式を取り入れ、ビジュアル教材としてイラスト入りで示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。(Ｂ２判)
34.「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材通巻第 969 号『日頃からできる心の健康観察法』」［小学生用］(健学社)【再掲】	単著	令和 4 年 8 月	健学社「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材　通巻第 969 号	「自分なりのストレス発散法を見つけよう！（音楽を聴く等)」「情報をコントロールしよう！」「食事をきちんと摂ろう」「自分が嫌になったとき、脱出可能だと自身を信じる（誰にでもあることだと脱出可能だと信じる等)」他、『日頃からできる心の健康観察法』のテーマで、小学生対象の保健教材を作成し、ビジュアル教材としてイラスト入りで示した。保健室（保健センター）等で、健康教育として活用されている。(Ｂ２判)
35.「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材通巻第 970 号『心と体の健康観察をしよう！』」［中高校生用］(健学社)【再掲】	単著	令和 4 年 8 月	健学社「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材　通巻第 970 号	「不安なときは、気晴らしスイッチを探してみよう！」「孤独感を感じたときは、『気の合う人探し』をしよう」「困ったことがあったとき、付箋に書き出して気持ちの整理をする」「一人で抱え込まないで誰かに相談してみよう」他、『心と体の健康観察をしよう！』のテーマで、中高校生対象の保健教材を作成し、クイズ形式を導入し、ビジュアル教材としてイラスト入りで示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。(Ｂ２判)
36.「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材通巻第 971 号『日頃からできる心の健康観察	単著	令和 4 年 8 月	健学社「健康不思議発見ニュース・ビジュアル教材　通巻第 971 号	「しんどいときは、自分にプラスメッセージを送ろう！」「自分なりのストレス発散法を見つけよう」「食事は朝昼晩 3 食をきちんと摂ろう」「自分自身にプラスのメッセージを

法』［中高校生用］（健学社）【再掲】				送ろう！」「人と繋がろう（話してみよう）！」他、『日頃からできる心の健康観察法』のテーマで、中高校生対象の保健教材を作成し、ビジュアル教材としてイラスト入りで示した。保健室（保健センター）等で、健康教育の一環として活用されている。（Ｂ２判）
37.『「非認知能力」を育成するために、養護教諭ができること」』	単著	令和５年２月	健学社　心とからだの健康　２月号通巻第300号	社会を育抜く力の礎にあるものとして「非認知能力」が注目されている。その育成について、教職員の声かけの事例などを具体的に詳述した。(pp.19-31　Ａ４判)
38.「現場の声とデータから見る i-check の教育的効果」	単著	令和５年３月	東京書籍「げんきの根っこ」第11号	『With コロナの時代を生きる子どもたち⑴』の特集で、「現場の声とデータから見る i-check の教育的効果」のタイトルで単著。2019年度（コロナ流行前)、2020年度（コロナ禍)、2021年度（やや規制緩和）の i-check および標準学力調査の全国値を経年比較しながら、今を生きる子どもたちの人間関係、学習状況、自己肯定感などの心の状況の現状について論述した。①コロナ禍前後で数値に大きな変化はなかった。②ソーシャルスキル・友だち/家族/先生の支えの肯定回答が増加。③対人ストレスの肯定回答が減少。等が数値で確認された。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年　3月　31日

氏名　　高岡　昌子

研究分野	研究内容のキーワード
教育心理学　発達心理学　保育心理学	心理　保育　教育　発達　記憶　教材　自然　動植物

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
（１）相愛大学において小学校教諭養成課程と保育者養成課程の教員としての実践（模擬保育・教育実践訓練・グループディスカッション、視覚教材の活用とフィードバック、小テストの実施など）	平成20年4月～平成26年3月	相愛大学で約8年間にわたり（「教育実習（幼稚園）」「教育実習の指導（幼稚園）」「保育原理」「保育内容C（人間関係）」「保育カウンセリング」「学校カウンセリング」「発達心理学」「インターンシップ実習A」「子ども学基礎演習」「保育総合演習」「卒業研究」など）指導した。実習準備段階から指導案そして模擬保育の指導、幼稚園採用試験にかかわる指導等行った。学生の模擬保育をビデオに撮ってフィードバックし、アクティブラーニングする中で、学生自身が省察し自ら気づくことができるように指導した。
（２）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部において保育者養成課程の教員としての実践（模擬保育・教育実践訓練・グループディスカッション、視覚教材の活用、小テストの実施、学内・学外での実践体験、独自のリフレクションシートの活用など）	平成26年4月～平成31年3月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部で約５年間にわたり「乳幼児心理学」「保育の心理Ⅰ」「保育原理」「保育内容演習（人間関係）」「子ども学ゼミ」などで、保育者養成課程の教員としての実践教育（模擬保育、学内・学外での実践体験、独自のリフレクションシートの活用等々）を行い、学生の意欲向上と望ましい保育者養成をめざして指導することで、ほぼ全員の就職が決まり、多くの卒業生を保育者として送りだしてきた。また実習担当として、「実習の手引き～保育所・幼稚園・施設～」を作成し、円滑な実習指導が実現するように工夫した。
（３）奈良学園大学において保育者養成課程の教員としての実践（模擬保育・学内・学外での実践体験、独自のリフレクションシート、グーグルフォームを用いた自作の練習問題の活用など）	平成31年4月～現在	奈良学園大学で主に「保育の心理学」「子どもと人間関係」「子どもと人間関係の指導法」「保育原理」「保育内容Ⅰ（人間関係）」「教職実践演習」「教育実習事前事後指導（幼）」「教育実習（幼）」「人間教育学ゼミナール」「保育実践演習」（令和2～3年度）」「子どもの理解と援助（令和2～3年度）」等を担当し、令和2～4年度には幼稚園専修長を務めた。グーグルフォームで自作した練習問題を活用して、学生の学習の効率化を図ったり、ZOOMと対面の両方を用いたハイブリット形式で授業を行ったりしている。
２　作成した教科書，教材		
「教育心理学―保育・学校現場をよりよくするために―」嵯峨野書院	平成28年4月	［本人単独担当部分］第7章 適応支援と心理アセスメント　１．適応のしくみ　２．心理アセスメント　３．不適応支援と心理療法（P.60～68）保育・学校現場をよりよくするために必要な教育心理学的内容をまとめた一冊である。
「子どもと保育者でつくる人間関係　―「わたし」から「わたしたち」へ―」保育出版社	平成29年4月	［本人単独担当部分］第11章1節「協力して「わたしたち」でやりとげようとする6歳児」（P.133～136）第12章3節　「小学校への円滑な接続とは？」（P.152～155）小1プロブレムについても言及し、その原因や連携の必要性について伝える内容となっている。
「コンパクト版_保育内容シリーズ『保育の心理学Ⅰ』」一藝社	平成30年3月	［本人単独担当部分］第15章　「地域社会における子ども支援」（P.121～P.128）1.「家庭・地域との連携」　2.「子育て支援」　3.「これからの子ども支援」現代社会における子育て支援の充実の必要性について伝える内容となっている。

「コンパクト版_保育内容シリーズ『保育の心理学Ⅱ』」一藝社	平成30年3月	［本人単独担当部分］第15章 「地域社会における子ども支援」（P.121～P.128）1. 「家庭・地域との連携」 2. 「子育て支援」 3. 「これからの子ども支援」現代社会における子育て支援の充実の必要性について伝える内容となっている。
「生活事例からはじめる―保育内容-人間関係」青踏社	平成30年3月	［本人単独担当部分］第８章 「遊びの中における学び」（P.65～P.72） 1. 「自発的な遊びに基づいた保育」 2. 「遊びと発達」 3. 「現代の子どもの遊びをめぐる問題」子どもにとっての遊びの重要性を指摘し、現代社会における子どもを取り巻く環境的な問題について述べている。
「保育の心理学」一藝社	平成30年3月	［本人単独担当部分］第６章「やさしさを育てる保育」（P.77～84）保育のなかで多様な人間関係を経験し、他者の思いに気づいて、思いやりをもてるように育まれていくことが必要である。
「子ども家庭支援の心理学」一藝社	令和2年3月	［本人単独担当部分］第14章「乳幼児期の学びの過程と特性」（P.113～120）乳幼児期の学びは主体的であるべきであることを指摘し、遊びの重要性について伝える内容となっている。
「子どもの理解と援助」一藝社	令和2年3月	［本人単独担当部分］ 第6章 「子育てを取り巻く社会的状況」（P.49～56）現代社会における保育ニーズの多様化について述べ、子育てを取り巻く社会的状況について多角的に捉える必要性について述べている。
３ 教育上の能力に関する大学等の評価		
（１）相愛大学における授業評価	平成20年4月～平成26年3月	授業評価結果は、毎年すべての授業評価を行った授業において常に学内平均以上であった。
（２）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部における授業評価	平成26年4月～平成31年3月	授業評価結果は、毎年すべての授業評価を行った授業において常に学内平均以上であった。平成28年度後期の授業評価においては、4点満点中、2Cクラスで3.81、2Dクラスで3.91と全体的に高く、レベル評価は、「知識・理解」、「技能・表現」、「思考・判断」、「関心・意欲・態度」のすべてにおいて目標値のレベル２以上の達成ができたとする学生は100％であった。
（３）奈良学園大学における授業評価	平成31年４月～令和3年3月	授業評価を行った授業の授業評価結果は、常に学内平均以上であった。
４ 実務の経験を有する者についての特記事項		
特記事項なし		特記事項なし
５ その他		
（１）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部公開講座	平成26年9月	地域の幼児と親を対象にして『英語で遊ぼう』と題して、公開講座を行った。
（２）幼稚園、小学校、特別支援学校（幼稚部・小学部）の教職員対象の奈良学園大学奈良文化女子短期大学部幼児教育講座	平成27年 9月	地域の幼稚園、小学校、特別支援学校（幼稚部・小学部）の教職員を対象にして、『保育者・教育者のネガティブな言動について考えよう！～子どもの各発達の時期によって～』という題目で公開講座を行った。
（３）地域の親子を招いて行うちびっこ広場	平成30年1月	地域の親子26組程を招いて行うちびっこ広場で『楽しく遊ぼう』という会を担当した。
（４）地域の親子を招いて行うちびっこ広場	平成30年11月	地域の親子25組程を招いて行うちびっこ広場で『楽しく遊ぼう』という会を担当した。
（５）京都府立木津高等学校で授業	令和3年11月	「保育者の仕事について～子どもたちの未来のために～」というテーマで授業を行った。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１ 資格，免許		

	平成4年3月 平成4年3月 平成16年1月	小学校教諭1種免許状（平三小一め第238号） 中学校教諭1種免許状（国語）（平三中一め第569号） 学校心理士（第72362号）
2　特許等		特記事項なし
3　実務の経験を有する者についての特記事項		特記事項なし
4　その他 （１）研究費 平成24年度～平成27年度　科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）挑戦的萌芽研究 （２）研究費 平成24年度相愛大学学内研究申請個人割研究費 （３）研究費 平成29年度奈良学園大学奈良文化女子短期大学部学内共同研究申請共同研究費 （４）研究費 平成30年度奈良学園大学奈良文化女子短期大学部学内共同研究申請共同研究費 （５）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部における学内業務 （６）奈良学園大学における学内業務 （７）奈良学園共同研究助成金	平成24年4月～平成28年3月 平成24年4月～平成24年3月 平成29年4月～平成30年3月 平成30年4月～平成31年3月 平成26年4月～平成31年3月 平成31年4月～現在 令和2年10月～現在 令和４年4月～3月	「子どもにおける３次元映像視聴に関する研究」（総額2,990,000円） 「子どもの発達を支える研究について」（230,000円） 「高等教育機関における女性のキャリア継続に必要な課題―保育者養成校としての短期大学の役割―」（600,000円）（高岡昌子・林悠子・高橋千香子・岩本健一） 「高等教育機関における保育者としてのキャリア継続に関わる課題―保育者養成校としての役割―」（200,000円）（高岡昌子・林悠子・高橋千香子・岩本健一） 入試広報委員(～平成28年度)，募集強化学内対策委員（オープンキャンパス委員）（～平成28年度），学生就職委員会(平成29年度～)カリキュラム委員，研究推進委員，紀要編集委員，IR委員，実習担当，クラスAGH担任 共通教育委員（～令和3年3月末）キャリアセンター委員（～令和3年3月末），クラス担任（～令和3年3月末），キャンパス移転ワーキング委員，実習担当，事業推進グループ３委員（令和3年4月～現在），入学試験委員（令和3年4月～現在） 人間教育学部人間教育学科幼稚園専修における専修長 「幼児教育における栽培活動を通して育む心の研究」（80,000円）（高岡昌子・石原由紀子・間井谷容代・谷川具子・岡村季光）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 1.教育心理学―保育・学校現場をよりよくするために―」嵯峨野書院	共著	平成28年4月	嵯峨野書院	【当該業績全体の概要】 保育・学校現場における子ども理解のために活用できる心理学的内容について述べている。 【本人の執筆部分の概要】 第7章 適応支援と心理アセスメント　問題行動が生じた場合における効果的な心理アセスメントや不適応支援について述べて、保育や教育における相談の在り方や関わり方について考えるための内容である。 著者：石上浩美、竹中美香、池田幸恭、芳田茂樹、水野正朗、高岡昌子、（他８名）

2.「コンパクト版_保育内容シリーズ『保育の心理学Ⅰ』」一藝社	共著	平成30年3月	一藝社	【当該業績全体の概要】 保育者になり子どもを理解するために必要な心理学の基礎的な内容について説明している。 【本人の執筆部分の概要】 第15章 地域社会における子ども支援　ここでは、家庭との連携の中で、相談の重要性を述べて、相談室や保育カウンセラーの必要性等についても指摘している。 著者：谷田貝公昭、石橋哲成、西方毅、福田真奈、宮崎隆穂、長谷川直子、谷真弓、片岡祥、稲葉健、高岡昌子（他７名）
3.「コンパクト版_保育内容シリーズ『保育の心理学Ⅱ』」一藝社	共著	平成30年3月	一藝社	【当該業績全体の概要】 保育者になって子どもを理解して対応するために必要な心理学的内容を応用的側面から説明している。 【本人の執筆部分の概要】 第8章 遊びの中における学び　子どもを理解するためには子どもたちの遊びを捉える必要がある。現代の子どもの遊びをめぐる問題と課題についても述べている。 著者：谷田貝公明、石橋哲成、西方毅、福田真奈、伊藤亮、小原倫子、川口めぐみ、高岡昌子、（他７名）
4.子どもの社会の未来を拓く―保育内容―「人間関係」	共著	平成30年3月	青踏社	【当該業績全体の概要】 子どもを理解するために、子どもを取り巻く人間関係を把握し、子どもの人間関係の持ち方の発達的変化について理解していくことが必要である。そして子どもがより良い人間関係力を培っていけるように関わる保育者の役割等も説明している。 【本人の執筆部分の概要】 第7章「やさしさを育てる保育」保育の中で他者を思いやる心を育てるための保育者の役割等について論じた。また子どもを理解するためには子どもを取り巻く環境を多角的に捉えていく必要がある。 著者：徳安敦、阪上節子、林幸範、鶴宏史、末次有加、二見素雅子、杉岡幸代、高岡昌子（他７名）
5.「新・保育原理－すばらしき保育の世界へ－」［第3版］	共著	平成28年4月	株式会社みらい	【当該業績全体の概要】 保育の役割と意義について述べ、保育の場や環境、原理、安全や健康、保育関係の法律や指針、保育の歴史そして現状と課題について多角的に述べている。 【本人の執筆部分の概要】 第３版：第９章　保育者に求められる子育て家庭支援 子どもの理解のためには子どもを取り巻く環境についての理解も重要である。教育相談事項となる子育て中の家庭における問題についても述べて、子どもの最善の利益のために子育て家庭を支援していくことの重要性を述べている。 著者：三宅茂夫編，小川圭子，熊丸真太郎，佐藤和順，角野幸代，高岡昌子，豊田和子，浜野兼一，（他４名）

6.「新・保育原理ーすばらしき保育の世界へー」［第4版］	共著	平成30年4月	株式会社みらい	【当該業績全体の概要】 保育の役割と意義について述べ、保育の場や環境、原理、安全や健康、保育関係の法律や指針、保育の歴史そして現状と課題について多角的に述べている。（保育所保育指針の改訂により大幅に改訂した。） 【本人の執筆部分の概要】 第４版：第９章　保育者に求められる子育て支援　子どもの理解のためには子どもを取り巻く環境についての理解も重要である。教育相談事項となる子育て中の家庭における問題についても述べて、子どもの最善の利益のために子育て家庭を支援していくことの重要性を述べている。 著者：三宅茂夫編，小川圭子，熊丸真太郎，佐藤和順，角野幸代，高岡昌子，豊田和子，浜野兼一，（他４名）
7.「子どもと保育者でつくる人間関係　―「わたし」から「わたしたち」へ―」	共著	平成29年4月	保育出版社	【当該業績全体の概要】 子ども理解のために子どもを取り巻く人間関係について理解することは不可欠であり、教育相談事項となることにつながる人間関係力を育む保育の重要性について述べている。 【本人の執筆部分の概要】 第11章1節「協力して「わたしたち」でやりとげようとする6歳児」6歳の子どもを理解するために、人間関係に関わる事例を入れて説明し、保育所や幼稚園で多様な人間関係を経験することの重要性について述べた。 第12章3節「小学校への円滑な接続とは？」年長児の人間関係の領域の問題を取り上げて述べ、子ども理解を深められるように幼児教育機関においてすべき課題について研究して述べた。 著者：横山真貴子、尾島重明、串崎幸代、
８.保育の心理学（保育士を育てる）	共著	令和2年3月	一藝社	【当該業績全体の概要】 保育において子どもを理解するために必要な心理学的基礎的内容について述べている。 【本人の執筆部分の概要】 第14章　乳幼児期の学びの過程と特性　子どもの自発的な遊びについて述べ、子どもを理解するために発達につながる自発的遊びについて理解することが必要であることを述べた。 著者：福田真奈、宮崎隆穂、長谷川直子、
（学術論文） 1. 実習指導の効果を高める教育方法の研究（その３）―幼稚園、保育所での実習における学生の自己評価と現場評価の比較検討から―	共著	平成24年3月	相愛大学研究論集 第28巻	【当該業績全体の概要】 幼稚園実習や保育所実習のための指導の効果を高める教育方法の研究を行った。特に幼稚園、保育所での実習における学生の自己評価と現場評価の比較検討から検討した。 【本人の果たした役割】 共同研究者として調査を行う授業を共同で担当して行った。 （P.167～P.180［共著者名］中西利恵、大森雅人、曲田映世、高岡昌子、山口美智
2. 研究報告 変化の時代における保育者養成教育のあり方ー特に学外実習のおける効果的な教育方法の検討ー	共著	平成25年3月	相愛大学研究論集 第29巻	【当該業績全体の概要】 変化の時代における保育者養成教育のあり方について研究した。特に学外実習のおける効果的な教育方法の検討を行った。 （p.73～p.79　［共著者名］中西利恵、曲田映世、藤本麻子、山口美智子、岩口摂子、木村久男、細川速見、山本和明、渡部美穂子、川中美津子、高岡昌子）

3. 携帯型ゲーム機のグラスレス３D映像視聴による影響　［査読付き］	単著	平成26年11月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学　紀要　第45巻	【当該業績全体の概要】 子ども達に身近な携帯型ゲーム機のグラスレス３D映像視聴による影響について研究した。（P.63～P.70（本研究はJSPS科研費24653187の助成を受けた研究である。）） 【本人の果たした役割】 主たる研究者として調査からデータ分析、執筆等を行った。 （共同研究により抽出不可：調査者による調査結果に基づき結果と考察を共同で執筆した。） 著者：高岡昌子、高橋千香子、林悠子、岩本健一
4. 幼少期におけるゲーム経験とゲーム体験による疲労感との関係 ［査読付き］	単著	平成27年11月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部　紀要 第46巻	【当該業績全体の概要】 幼少期におけるゲーム経験とゲーム体験による疲労感との関係について研究した。幼少期にゲーム体験をしているほうが、ゲームで疲れにくい傾向があった。（P.27～P.32（本研究はJSPS科研費 24653187の助成を受けた研究である。））
5. 各発達の時期における「先生」のネガティブな言動について	共著	平成28年11月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部研究紀要47号	【当該業績全体の概要】 保育者養成課程の学生を対象にして、保育所・幼稚園・小学校低学年・小学校高学年・中学校・高等学校の各時期の「先生」の不快な言動で特に記憶に残っている内容について調査研究を行い、結果を報告し論じた。保育者になる者は、子どもの発達を捉え、一人ひとりを十分に理解し、自身の言動が子どもに及ぼす影響について理解を深めておくことが大切であると述べた。 【本人の果たした役割】 主たる研究者として調査からデータ分析、執筆等を行った。 （共同研究により抽出不可：調査者による調査結果に基づき結果と考察を共同で執筆した。） 著者：高岡昌子、高橋千香子、林悠子、岩本健一
6. 保育者養成に求められる保育者の資質について（２）―就職先へのアンケート調査の前回調査との比較から―［査読付き］	共著	平成28年11月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部　紀要 第47巻	【当該業績全体の概要】 幼稚園や保育所等の学生の就職先へのアンケート調査の前回調査との比較から、保育者養成に求められる保育者の資質について検討した。特に人間関係の重要性についても検討した。 【本人の果たした役割】 共同研究者として議論に加わったり文章推敲したりした。 （P.71～P.80［共著者名］林悠子、高橋千香子、高岡昌子、岩本健一）
7. 保育者養成校の学生の性格特性および進路状況との関連について［査読付き］	共著	平成28年11月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部　紀要 第47巻	【当該業績全体の概要】 保育者養成校の学生の性格特性および進路状況との関連について研究した。 【本人の果たした役割】 共同研究者として議論に加わったり文章推敲したりした。（P.41～P.48［共著者名］高橋千香子、 高岡昌子、林悠子、岩本健一）
9. 新人保育者に必要な資質について―新人保育者に対する総合的な評価につながる具体的な資質―［査読付き］	共著	平成29年11月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部　紀要 第48巻	【当該業績全体の概要】 幼稚園や保育所等での新人保育者に対する評価に関する質問紙調査の前年度の結果との比較を通して、新人保育者に求められる資質について検討した。 【本人の果たした役割】 主たる研究者として調査からデータ分析、執筆等を行った。（P.51～P.60［共著者名］高岡昌子、岩本健一、高橋千香子、林悠子）
10. 施設実習における学生の不安を軽減する事前学習についての研究　［査読付き］	共著	平成29年11月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部　紀要 第48巻	保育者になるために必要な施設実習における学生の不安を軽減する事前学習についての研究を行った。 【本人の果たした役割】 共同研究者として議論したり文章推敲修正を行ったりした。（P.31～P.40［共著者名］岩本健一、 高岡昌子、 高橋千香子、林悠子）

11. 新人保育者に対する評価　～前年度との比較を通し て～［査読付き］	共著	平成30年11月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部　紀要 第49巻	【当該業績全体の概要】 幼稚園や保育所等に協力いただき行った質問紙調査の前年度の結果との比較を通して、新人保育者に対する評価について検討した。 【本人の果たした役割】 主たる研究者として調査からデータ分析、執筆等を行った。（P.49～P.59［共著者名］高岡昌子、飯田惠美子、岩本健一、小川純子、高橋千香子、林悠子）
12. 新人保育者に対する評価～前々年度と前年度との比較を通して～	共著	令和2年3月	奈良学園大学紀要　第12巻	【当該業績全体の概要】 幼稚園や保育所等にご協力いただき行った質問紙調査の前年度の結果との比較を通して、新人保育者に対する評価について検討した。特に「子ども学ゼミナール」という少人数で行う授業の成績と職場での評価に相関がみられたことについて論じている。 【本人の果たした役割】 主たる研究者として調査からデータ分析、執筆等を行った。（P.51～P.60［共著者名］高岡昌子、岩本健一、高橋千香子、林悠子）
13. 幼稚園実習を通して学生の自己成長を促すルーブリックの開発と活用 ー実習への意識向上とスキルアップに着目してー	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要　第15巻	【当該業績全体の概要】 幼稚園実習前・実習中・実習後の学生の学びの意識について調べ、意識の変容を捉えようとした。そして実習への意識向上とスキルアップを目指し、幼稚園実習を通して学生の自己成長を促すルーブリックの開発と活用を検討した。また、学生の質の向上としてアクティブラーニングを取り入れた授業の遂行の仕方を振り返り、授業の再構成を図った。 【本人の果たした役割】 共同研究者として調査実施や文章推敲修正等を行った。（P.155～P.164［共著者名］間井谷容代、石原由貴子、高岡昌子、岡村
（その他） （２）報告書本 教学報告 :	共著	平成31年3月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部	【当該業績全体の概要】 奈良学園大学奈良文化短期大学における幼児教育科の教育について一冊の本にまとめて報告した。 【本人の果たした役割】 共同研究者として分担執筆を行った。（磯辺ゆう、恒岡宗司、中田章子、高岡昌子、飯田惠美子、岩本健一、小川純子、高橋千香子、林悠子、吉田明史）

（注）

１ 最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。
２「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。
３「研究活動」については、下記の点に留意すること。
①著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。
②著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。
③　共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。
④　最近１０年間に著書･論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。
⑤　芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。

別記様式第４号（その２）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年3月31日

氏名　　中島　栄之介

研究分野	研究内容のキーワード
特別支援教育	教育課程、合理的配慮、病弱教育、重症心身障害教育、知的障害教育、肢体不自由教育、発達障害、ICT教育、知的障害におけるプログラミング教育

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 教育課程の特色ある編成 (1)特別支援学校（病弱・身体虚弱）での教育課程の編成	平成19年4月～22年3月	病弱教育における準ずる指導、合わせた指導、自立活動中心の指導の教育課程の編成を行うとともに、訪問教育等による肢体不自由、重度・重複障害の教育課程の編成もあわせて行い、学校全体の調整も行った。 （兵庫県立上野ヶ原特別支援学校での実践）
(2)特別支援学校（知的障害）での教育課程の編成	平成22年4月～平成31年3月	知的障害教育（普通科）における、合わせた指導、自立活動中心の課程、訪問教育の教育課程及び併せ有する肢体不自由、重度・重複障害の教育課程の編成。知的障害教育（高等部職業科）における教科中心の教育課程、専門学科の教育課程の編成。 （兵庫県立阪神昆陽特別支援学校、芦屋特別支援学校での実践）
２　作成した教科書，教材 (1)教育実習 ・教育実習の手引き（単著） 発行：兵庫県立芦屋特別支援学校	平成23年7月 平成30年	特別支援学校教育実習生の手引き。実習の日程と内容、障害、教育課程、授業研究、特別支援教育の歴史、特別支援教育と人権についてなど教育実習全般についてまとめ平成30年まで使用した。
・教育実習の心得（単著） 発行：兵庫県立阪神昆陽特別支援学校	平成24年5月～平成27年10月	特別支援教育実習生の手引き。実習の日程と内容、交流及び共同学習、専門学科（職業科）の教育課程の特色、授業研究について教育実習全般についてまとめ平成30年まで実習生対象に使用。
(2)介護等体験 ・介護等体験の手引き（単著） ・介護等体験講話資料（単著）	平成20年4月～25年4月	兵庫県立上野ヶ原特別支援学校、兵庫県立芦屋特別支援学校、兵庫県立阪神昆陽特別支援学校で作成し、平成30年まで実習生対象に使用中。
(3)医療関係者体験実習 ・特別支援教育とは（単著）	平成25年4月～平成31年3月	宝塚大学看護学部、神戸大学医学部、兵庫医科大学医学部の学生に対して、障害児と人権、特別支援学校の教育課程、合理的配慮と基礎的環境整備、ICFとICIDH、発達障害の臨床所見等、医師看護師になった際に必要な知識の指導冊子。

(5)特別支援教育総論（共著） 【再掲】	平成31年	入門者に対して特別支援教育の概要について、特別支援教育の理念、制度、歴史に加えて視覚、聴覚、知的、肢体不自由、病弱、発達障害、学習障害等について心理と生理、病理、教育課程と指導法等全般について記述した。また、特別支援教育について（理念と制度、歴史、自立活動と個別の教育支援計画及び個別の指導計画）、指導の実際（特別支援学校と特別支援学級等）、理解と指導（発達障害、学習障害、自閉症スペクトラム等）、課題と展望（センター的機能とコーディネーター、授業のユニバーサルデザイン化、ITCの活用、交流及び共同学習、インクルーシブ教育、障害の多様化と重度・重複化、医療的ケア、危機管理、地域や関連機関との連携、キャリア教育）など、現場に即した内容とした。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)奈良学園大学人間教育学部の学生アンケート	平成30年6月 平成31年6月 令和2年	「人間教育学」の講義で特別支援教育概論、知的障害特別支援学校の実際、知的障害特別支援学校の教育課程、知的障害特別支援学校の指導の実際を話した。満足度は4点満点で3.7であった。 「現代教育課題B(特別支援)」において、講義内容に関するアンケートを行った。受講者13人全員より回答があり、講義内容については概ね理解できるなど、高評価であった。 「現代教育課題B（特別支援）」において、講義内容に関するアンケートを行った。受講者54人中44人より回答があり、講義内容については概ね理解できるなど、高評価であった。 現代教育課題B(特別支援) 中島 栄之介 54 44 81.4の回収率で1項目以外は5点満点中4.5以上であった。残り1項目は講義が難しかったかという質問で3．9であった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)特別支援教育における情報教育（ICT）の構築	平成6年4月～現在に至る	兵庫県阪神地区学校で特別支援教育情報教育担当者を務める。平成17年～18年は兵庫県教育委員会情報教育専門推進員。令和元年度は兵庫県立芦屋特別支援学校と共同でマイクロソフト社の支援を得て特別支援学校におけるプログラミング教育の在り方について検討してきた。
(2)障害別の教育課程の編成	平成19年4月～平成31年3月	特別支援教育における準じた指導、合わせた指導、自立活動中心の指導、訪問教育など教育課程の編成を行ってきた（知的障害、肢体不自由、病弱、重度・重複）
(3)特別支援学校における教育実習生の指導	平成19年4月～平成31年3月	毎年実習生を受け入れた。実習の日程と内容、障害、教育課程、授業研究、特別支援教育の歴史など教育実習全般について指導。
(4)特別支援学校における介護等体験の指導	平成19年4月～平成31年3月	介護等体験の学生を毎年約30大学より250名程度受け入れた。特別支援教育の意味について実践的に指導を行った。
(5)新任特別支援病弱学級担当教員等研修講師（兵庫県教育委員会主催）	平成24年4月～28年3月	阪神昆陽特別支援学校（新設校で高等学校との交流及び共同学習、職業科という特色を持つ）の視察者を対象教育課程の特色、交流及び共同学習について講話を行った。海外、大学（大学生大学院生含む）関係、教育委員会関係など16団体に対応。他に特別支援学校関係、研修関係などを加えると述べ約150件に実施。

(6)医療関係者体験実習等講師	平成19年4月～平成31年3月	宝塚大学看護学部、神戸大学医学部、兵庫医科大学医学部の3大学延べ60人の学生に対して、障害児と人権、特別支援教育概論、発達障害の臨床所見等について指導
(7)兵庫県立芦屋特別支援学校主催、阪神間特別支援学校研修会講師	令和元年8月	兵庫県立芦屋特別支援学校職員を対象として、高等部での共同研究の様子を紹介しながら、特別支援学校におけるプログラミング教育の進め方について講演した。次年度より開始されるプログラミング教育の進め方について、参考になったと好評であった。
(8)奈良県次世代教員養成塾第2回講座　講師	令和元年11月～令和3年11月	奈良県下の小学校教員を目指す高校2年生約40人に授業を行った。道徳を中心に、伝えることの難しさをコミュニケーションについてグループで討議したり、障害のある子どもたちについて考えたりしながら行った。奈良県教育委員会のメールマガジンなどにも取り上げられるなど非常に好評であった。
(9)兵庫県言語聴覚士会小児委員会　学習会講師	令和元年12月	障害のある子どもたちの就学先について、兵庫県下の小児を対象としている言語聴覚士に対して講演した。卒業後の生活等も含めた講演を行い好評であった。
(10)兵庫県立こやの里特別支援学校校内研修会講師	令和元年12月	プログラミング教育の推進に関する取組について～芦屋特別支援学校職業班の取組～と題して、特別支援学校におけるプログラミング教育の進め方について講演した。他校での共同研究の事例など具体的な内容を入れたので非常に分かりやすかったと言う評価を受けた。
(11)兵庫県特別支援教育諸学校長会　研修会講師	令和2年1月	特別支援学校におけるICT教育−プログラミング教育を始める決意−と題して兵庫県下の特別支援学校の校長先生方に講演を行った。次年度以降小学部で始まるプログラミング教育について背景となる考え方、取り組みの進め方などを講演した。講演後も質問が続くなど高評価であった。
(12)兵庫県特別支援学校知的障害教育研究協議会　研修会講師	令和2年11月	兵庫県下の知的障害教育特別支援学校教員等約120人を対象として、合理的配慮と交流及び共同学習について、阪神昆陽特別支援学校の初期の実践を踏まえて、講演、指導助言を行った。同校には開設準備室より勤務したこともあり参加者より好評であった。
(13)兵庫県立西宮甲山高校研修会講師	令和3年8月	「特別支援教育とＩＣＴ」と題して、同校教員を対象として研修会をオンラインで実施した。特別支援教育の基礎、ICT機器の活用、デジタル教科書の使用体験などを実施し好評であった。
(14)兵庫県立西宮香風高校	令和3年10月	「ＩＣＴを使った合理的配慮等」と題して在籍している生徒に対してICT機器を使った合理的配慮の方法などを検討した。
(15)国立特別支援教育総合研究所　令和3年度第三期特別支援教育専門研修　病弱教育専修プログラム　講師（小・中学校における病気のある子供の健康管理）	令和4年3月	国立特別支援教育総合研究所の研修生に対して、小中学校における病気のある子供の健康管理について講義を行った。主として心臓疾患について病理・保健、指導の実際、指導計画の作成等についてディスカッションを交えながら講義を行った。現場に即した内容であると好評であった。
(16)令和4年度国立特別支援教育総合研究所第二期特別支援教育専門研修　病弱教育専修プログラム　講師（小・中学校における病気のある子供の健康管理）	令和4年11月	国立特別支援教育総合研究所の特別支援学校所属の研修生に対して、小中学校における病気のある子供の健康管理について講義を行った。主として心臓疾患について病理・保健、指導の実際、指導計画の作成等についてディスカッションを交えながら講義を行った。現場に即した内容であると好評であった。
5　その他		

(1)兵庫県立芦屋特別支援学校　学校評議員	令和元年6月～現在に至る	兵庫県立芦屋特別支援学校の学校評議員として、評議員会に出席し、意見を述べた。 令和2年度は書面による開催であった。
(2)兵庫県言語聴覚士会小児対策部　部員 （令和3年度までは小児委員会　委員）	平成29年度6月～現在に至る	兵庫県言語聴覚士会小児委員会委員として、県内小児領域担当の言語聴覚士の研修を計画、運営している 令和2年度は新型コロナウイルスの流行により令和3年4月に入ってから全体会の研修を実施し運営に携わった。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
(1)養護学校教諭1級普通免許状	昭和59年3月	免許状番号：昭５８養学１普第８０号（大阪府教育委員会）
(2)小学校教諭1級普通免許状	昭和59年3月	免許状番号：昭５８小１普第１４８０号（大阪府教育委員会）
(3)幼稚園教諭2級普通免許状	昭和59年3月	免許状番号：昭５８幼２普第４５３１号（大阪府教育委員会）
(4)修士（学校教育学）	平成8年3月	兵庫教育大学大学院 論題「重症心身障害児・者のコミュニケーション手段の獲得についての研究－シンプルテクノロジーとパーソナルコンピューターを用いて－」
(5)養護学校教諭専修免許状 (6)小学校教諭専修免許状 (7)言語聴覚士	平成8年3月 平成8年3月 平成16年3月	免許状番号：平８養学専第１号（兵庫県教育委員会） 免許状番号：平８小専第２１号（兵庫県教育委員会） 登録番号第５５４９号
2　特許等 ・特になし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		県立特別支援学校で病弱、知的障害、肢体不自由、重度重複障害の児童生徒の指導に当たる
(1)兵庫県立上野ヶ原特別支援学校教諭として	平成21年4月～22年3月	病弱教育学級（肢体不自由・知的障害との重複クラス）担任をする。教務部副部長として、すべての教育課程編成を担当した。教科学習グループ長、病棟訪問（重症心身障害グループ）を担当。
(2)兵庫県立芦屋特別支援学校教諭として	平成22年4月～23年12月	知的障害学級担任、情報図書部長、教務部長　教育課程委員長を務め、教育課程の点検を行った。特別支援教育における準じた指導、合わせた指導、自立活動中心の指導、訪問教育など教育課程の編成を実践。
(3)兵庫県立阪神昆陽特別支援学校教諭として	平成24年1月～26年3月	総務部長、教育課程編成の担当・入学選考を担当した。ただし平成24年1月新設校開講のため1～3月は開校準備室を兼務した。
(4)兵庫県立阪神昆陽高等学校教諭兼務として	平成29年4月～28年3月	多部制単位制高等学校の兵庫県立阪神昆陽高等学校教諭を兼務し、特別支援学校との連絡調整を行った。
(5)兵庫県立阪神昆陽特別支援学校主幹教諭として	平成26年4月～28年3月	総務部長、教育課程の編成、入学選考業務、高等学校との連絡調整、情報教育、人権教育、PTAの設立、初任者研修等行った。
(6)兵庫県立こやの里特別支援学校主幹教諭として	平成28年4月～29年3月	教務部長、教育課程の編成、入学選考業務、人権教育、情報教育、初任者研修、教育実習等を担当
(7)兵庫県立芦屋特別支援学校教頭として	平成29年4月～平成31年3月	県立特別支援学校管理職としての業務（高等部、総務部、生徒指導部他）兵庫県立特別支援学校教頭会役員を務める。
(8)地域公開講座講師	平成30年７月	教諭30人を対象に、特別支援教育におけるICTの活用「教育課程と発達段階とICTの関係を再考する」をテーマに講話。

(9) 兵庫県特別支援学校知的障害教育研究協議会　研修会講師	令和2年11月	前掲
(10)　国立特別支援教育総合研究所　特別支援教育専門研修　病弱教育専修プログラム　講師（小・中学校における病気のある子供の健康管理）	令和4年3月～現在に至る	前掲
４　その他 兵庫県言語聴覚士会小児対策部　部員 （令和3年度までは小児委員会　委員）	平成30年4月～現在に至る	兵庫県言語聴覚士会小児対策部が主催する年4回の主として小児領域の言語聴覚士を対象とした研修会の開催。主として学校と言語聴覚士の情報交換の連絡担当。 令和4年度、研修会は重症心身障害者とのコミュニケーションをテーマに実施

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 1　特別支援教育総論 :	共著	平成31年3月	ERP出版	入門者に対して特別支援教育の概要について、特別支援教育の理念、制度、歴史に加えて視覚、聴覚、知的、肢体不自由、病弱、発達障害、学習障害等について心理と生理、病理、教育課程と指導法等全般について記述した。また、特別支援教育について（理念と制度、歴史、自立活動と個別の教育支援計画及び個別の指導計画）、指導の実際（特別支援学校と特別支援学級等）、理解と指導（発達障害、学習障害、自閉症スペクトラム等）、課題と展望（センター的機能とコーディネーター、授業のユニバーサルデザイン化、ITCの活用、交流及び共同学習、インクルーシブ教育、障害の多様化と重度・重複化、医療的ケア、危機管理、地域や関連機関との連携、キャリア教育）など、現場に即した内容とした。 著者：中島栄之介、岡野由美子 執筆部分：知的障害部分以外全てを単著
（学術論文） 1．特別支援教育における人権教育 ー障害者差別を題材とするまでー	単著	平成30年9月	奈良学園大学ジャーナル「人間教育」第1巻第7号pp 211 - 219	兵庫県立Ａ特別支援学校での実践例を検討。特別支援学校では在籍生徒が差別を受けると同時に差別をする側にもなるという人権教育の特徴がある。生徒にとり障害者差別を認識することは過去に受けた差別と向き合うことであり、自身の障害と向き合うこと、さらに今後の差別、そして、自らの持つ差別性と向き合うことでもあると論じた。
2．特別支援教育の視点を生かした授業改善（1） 発達障害の視点から見たユニバーサルデザイン化による授業の改善	単著	平成30年9月	教育PRO pp.14-15	特別支援教育の視点を生かした授業改善について述べた。障害特性（とくに発達障害）について、介護等体験に実習に来た学生への説明をもとに支援の方向性の確認を行った。障害特性に配慮した授業を行うことや教室環境などに支援などの手立てを行うことはそのまま誰にとってもわかりやすいユニバーサルデザイン化の授業となり授業改善につながることに言及した。

3．特別支援教育におけるインクルーシブ教育システム構築について ーインクルーシブ教育システム構築と合理的配慮の実際ー	単著	平成30年10月	奈良学園大学研究紀要9集pp.111～118	特別支援教育において、インクルーシブ教育システムの構築や交流及び共同学習の推進、合理的配慮の提供は次期学習指導要領でも中心の課題である。兵庫県内に平成24年に同一敷地内に開校した高等部単独設置の特別支援学校と多部制単位制の高等学校は、設立準備段階より交流及び共同学習を念頭に置いて計画されており、次期学習指導要領の内容を先進的に取り組んできたといえる。今回、両校の開校当初に行われた発達障害の特性に着目した工夫を重ねることで授業改善や生徒理解につながってきた実践を検討し提案した。
4．特別支援教育の視点を生かした授業改善（２） 合理的配慮と基礎的環境整備の方向と授業の改善	単著	平成30年10月	教育PRO pp.14-15	特別支援学校における合理的配慮と基礎的環境整備の方向性と具体例について述べた。障害特性（時間、音声言語、ルール・場の空気）をもとにしての対応事例（授業で使うスライド、卒業式で使うスライド、教室環境の整備）より子どもたちは何に困りどのように配慮すればよいかを検討した。障害特性を踏まえることですべての子どもにとって学びやすい授業や環境となることに言及した。
5.特別支援学校における感染性胃腸炎の集団発生の要因とその拡大予防に関する検討	共著	平成30年10月	奈良学園大学研究紀要第9集　PP119 - 126	特別支援学校において感染性胃腸炎の集団発生から終息までの欠席・学級閉鎖の状況、対応策等の記録を分析し、感染ルート、感染拡大の原因、対応策等について検討した。感染経路の特定できない広がりもあり、学校医の助言を受け消毒等を行った。一般的対応だけでは著効なく、全クラスが時期をずらして学級閉鎖となるほど感染拡大、保護者への感染があった。拡大の背景として、感染力の強さに加え、施設設備、児童生徒数の増大による過密化、種々の集団の形成など特別支援学校特有の要因が示唆された。また、保護者への情報提供は感染拡大にも有効であったと考えられた。 共著者：中島 栄之介、　森一弘 担当部分：全文執筆
6．肢体不自由者教育における対象の変遷と教育的対応上の課題(1) ー脳性麻痺に着目してー	共著	平成31年1月	奈良学園大学ジャーナル「人間教育」第2巻第1号pp11-16	肢体不自由児への記載の変遷と肢体不自由の一因となる脳性麻痺について整理することを目的とした。近年の学習指導要領の改訂によって，脳性疾患に起因すると考えられる認知・行動上の特徴の考慮の必要性が協調されるに至った。今日の障害の重度重複化といった要因により，個々人の状態像や教育上のニーズの把握は簡単ではなくなっている。それが個のニーズに応じた指導計画作成の障壁となっている。 共著者：　松﨑泰・中島栄之介・荻布優子・川﨑聡大 担当部分：肢体不自由教育について学校現場の教育課程と指導の部分　、重度・重複障害の部分

7．肢体不自由者教育における対象の変遷と教育的対応上の課題(2)　－重度・重複障害に着目して－	共著	平成31年1月	奈良学園大学ジャーナル「人間教育」第2巻第1号PP.17-27	肢体不自由者教育における対象の変遷と教育的対応上の課題を「重度・重複障害」という言葉に着目して定義とその変遷、学習指導要領上の位置づけを中心に教育課程や指導法を検討した。いわゆる「重度・重複障害」を有する子どもたちの教育は、戦後すでに問題になっており制度改革や学習指導要領の改訂にごとに課題なった。また、新学習指導要領の開始以降では「発達障害」が「重度・重複障害」を考える上でポイントになる。 共著者：　中島栄之介・松﨑泰 担当部分：全文執筆
8．特別支援教育と不登校について －「学業」「居場所」に対する特別支援教育の視点からの検討－	単著	平成31年3月	奈良学園大学研究紀要第10集PP109 - 112	特別支援教育の視点から不登校について分析し、不登校の要因として考えられる発達障害、学習障害を視点に考察した。発達障害に関しては子どもたちの帰属する集団の少なさ、学習障害については学力の問題につながると考えられた。特別支援の視点を入れた、集団作り、学習への合理的配慮が必要とされた。
9．肢体不自由者及び重度・重複障害者教育における教育課程と指導 －発達段階とICT機器の活用に着目して－	単著	平成31年3月	奈良学園大学ジャーナル「人間教育」第2巻第2号 PP.61 - 65	肢体不自由者教育及び重度・重複障害者教育における教育課程と指導について発達段階とICT機器の活用に着目して学習指導要領、ICT機器の発展及び発達段階を中心に検討した。肢体不自由者教育での電動タイプライターや専用のコミュニケーション機器などに始まったICTの導入は、近年のタブレット端末や視線入力などのICT機器の発達により重度・重複障害を有する子どもたちにも積極的に活用されるようになってきた。そこで、ICT機器の導入について学習指導要領、子どもたちの発達の段階や障害の程度と教育課程と機器の活用について着目して考察した。その結果、ICT機器以外にもシンプルテクノロジーと言われる方法を取り入れるほかコミュニケーションや自尊感情などとの関連性を検討することが肢体不自由者及び重度・重複障害者教育における教育課程と指導についてポイントになると考えられた。
10．病弱教育における教育課程と指導 －対象疾患の変遷と病弱教育特別支援学校及び病弱教育特別支援学級に着目して－	単著	平成31年3月	奈良学園大学ジャーナル「人間教育」第2巻第2号 PP.67 - 74	病弱者教育における教育課程と指導について、対象疾患の変遷による病弱教育特別支援学校及び病弱虚弱特別支援学級における教育課程と指導の在り方の変化について検討した。病弱教育では医療の進歩等により①対象疾患が変化したことによる入院期間の多様化と②高等部卒業後も続くフォローアップという変化が現れた。このため、病弱教育特別支援学校に在籍する生徒の減少、病弱教育特別支援学級の増加、さらに病弱教育特別支援学校では複数障害種の受け入れなど学校の在り方にまで変化が見られた。しかし、このような変化は病弱教育を行う学校現場に教員の専門性の確保や教育課程の在り方をはじめとする新たな課題をもたらしていることが示唆された。共著者：中島栄之介、松田智子 担当部分：全文執筆

11．特別支援学校におけるプログラミング教育の在り方を考える－高等部職業パソコン班によるプログラミングによるモノづくり、販売会を目指しての実践より－	単著	令和2年12月	奈良学園大学紀要,13,27-35（2020-12-21）	2020（令和２）年度より特別支援学校小学部でもプログラミング教育が始まった。高等部の職業科でプログラミング教育を利用した販売会の取り組みを行った。その結果、ゲーム、BGM等の作成を行い、名刺などの製品を販売することができた。生徒には、集中して授業に取り組むことができた他、学習に対して意欲的に取り組むなどの変化や、メモなど文字による指示が有効であることがわかったことで生活面の変化もみられた。プログラミングを利用したモノづくりでは、複製による利点が見られた他、授業形態にも一斉授業ではなく個人で調べプログラミングに取り組み教師に必要なことを質問するという変化が見られた。また、職員には研修会も行った。今後は、カリキュラムマネジメントにより学校全体としてプログラム教育への取り組みを教育課程上に位置付けることが課題であると考えられる。
12．リハビリテーションにおける相互の認識理解と主体的な行動促進の重要性－特別支援教育における自立活動との比較から－ :	共著	令和2年12月	奈良学園大学紀要 ,13,49-56 （2020-12-21）	医療現場やリハビリテーションにおいて、患者教育が重要視されてきた。かつては専門家からの知識提供を主とした一方向の「指導型」であった教育の在り方が、今では対象者の十分な理解を図ったうえで、自己決定、自己管理の行動へとつながるよう促す「学習援助型」の教育へとパラダイムシフトしている。医療者と患者間でニーズや認識の違い、ギャップが存在している。一方、学校教育の現場では、さまざまな疾病や心身の障害などを抱える幼児児童生徒に対しての教育が、時代とともに工夫され変遷してきた。患者教育、学校教育のいずれにおいても、対象者との双方向のやり取りを十分行い目標ありきの指導法となって両者間でギャップを生じないよう、対象の主体的な行動を促進する工夫が重要であると考える。 共著者：中島栄之介、林真太郎 担当部分：Ⅳ．特別支援教育における自立活動について(PP.52-55)担当
（その他） 1.教員養成における肢体不自由教育の心理・生理・病理について-自立活動との関係に着目して-	単著	令和元年9月	奈良学園大学紀要第11集 PP.193-198	教員養成における肢体不自由教育の心理・生理・病理について自立活動との関係に着目して教員養成におけるあり方を考察した。肢体不自由教育における自立活動は体の動きの改善、合理的配慮による効果的な（学習）活動、交流や進路などへの参加が中心となる。そのため、医療機関などからの情報を自立活動等の教育課程の編成に生かす必要がある。近年、遺伝子検査の発展などによる診断技術の進歩等によって診断名や情報は多様化複雑化するなどの実態がある。しかし、検査を中心とした心理、体の動きの改善や予後を考えた教育課程の編成のために生理・病理の基本的な知識を生かすという基本的なことを生かすことがあらためて必要であると考えられた。

2.特別支援学校におけるプログラミング教育の開始に当たって－学習指導要領の位置づけと条件整備を中心に－ :	単著	令和2年3月	奈良学園大学紀要第12集 PP.151-157	来年度より、小学校でプログラミング教育が始まる。特別支援学校小学部でも同様である。そこで、小学校学習指導要領と特別支援学校学習指導要領におけるプログラミング教育及び情報機器の取扱いについて整理した。特別支援学校学習指導要領では、支援技術の観点よりコンピュータ等の情報機器の取扱いについて積極的に使用することが示されている。しかし、知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の教育課程においては、プログラミング教育を行う教科等の具体的な例示がないため積極的にプログラミング教育を行うカリキュラムマネジメントによらなければいけないことが示唆された。また、プログラミング成立のための情報機器や通信ネットワークなどの環境、情報機器の基本的操作の習得など課題は大きいと考えられた。

（注）

１ 最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。
２「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。
３「研究活動」については、下記の点に留意すること。
①著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。
②著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。
③　共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。
④　最近１０年間に著書･論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。
⑤　芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年　3月　31日

氏名　根岸　章

研究分野	研究内容のキーワード
数学、情報学、経済学	作用素論、量子ウォーク、グラフ理論、垂直軸風車、ジニ係数

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
（1）数学用ソフトウェアを用いた数学教育	平成19年9月～平成29年3月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専門科目「情報数学Ⅱ」において、KNOPPIX/MathのCDを配布し、フリーの数式処理ソフトウェアMaximaを用いた数学の学習活動を行った。これによって、関数のグラフをパラメータを使って動的に動かしたりが容易になり、関数の係数の意味を把握した理が容易になるなどの教育効果があった。 平成22年度からは、学内のパソコンがCDから起動できなくなり、Windows版のwxMaximaを利用するように変更した。 平成25年度からは新規科目「ゲーム数理」においても、3次元曲線のパラメータ表示などの視覚化に役立て、平成26年度からは、新課程科目「情報数学Ⅱ」でも、他変数関数の微積分の学習で活用するようになった。
（2）「基礎数学」の科目設置	平成23年4月～平成28年3月	奈良産業大学（現奈良学園大学）の全学共通の導入基礎科目「基礎数学Ⅰ」「基礎数学Ⅱ」を設置し、4月入学時に全学的に数学についてのプレースメントテストを行い「基礎数学Ⅰ」から履修、「基礎数学Ⅱ」から履修、「履修免除」にわけ、それぞれの科目を各学部で複数クラス開講して少人数教育にした。それによって、大部分の学生は数学力の向上が見られるなど教育効果があった。
（3）講義科目「情報数学I」と演習科目「情報数学演習I」の同時受講	平成24年4月～平成28年3月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の平成23年度のカリキュラム改革で、主要科目において講義科目と演習科目を併設して同時受講させるようにした。平成24年度から2年次配当科目として「情報数学Ⅰ」と「情報数学演習Ⅱ」を同時受講させ、両科目を連携させることによって数学的内容の理解とともに計算力をつけさせるように工夫した。
（4）講義科目「解析学基礎」における問題作成演習	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学基礎」において、中学・高等学校数学を範囲とした問題作成を行わせた。問題作成と同時に対象学年や難易度、解答と解説も行わせ、将来中学校や高等学校の数学教員になる際に必要とされる知識や考え方を学ばせた。
（5）「数学道場」における学び合いの実践	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部中等（数学・音楽）専攻数学専修の学生に対し、相互の学び合いを基本とする学習の場「数学道場」を開き、学生同士の学び合いを推進している。
（6）オンラインによる授業の実践	令和2年4月～令和5年3月	奈良学園大学人間教育学部の講義科目、ゼミナール等において、オンラインによるリアルタイムの講義を行うなどを実践した。
（7）復習のためのスライドショーの自動実行	令和4年4月～現在に至る	専門科目で作成したプレゼンテーションファイルを繰り返し自動実行できるように設定し、コモンズ7のモニターで表示することにより、いつでも復習できるような環境を整備した
2　作成した教科書，教材		

（１）「情報数学Ⅱ」	平成25年4月～ 平成29年9月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成23年度から改革されたカリキュラムの「情報数学Ⅱ」（専門科目、３年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。2変数関数の微積分を中心として、変数変換や近似計算も扱っている。Maximaの利用により、微積分の具体的な計算よりその意味を考えることに集中でき、また、2変数関数のグラフなどが視覚化されわかりやすくなるなどの教育効果があった。A4判全28頁。
（２）「ゲーム数理」	平成25年10月 ～ 平成29年3月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成23年度から改革されたカリキュラムの「ゲーム数理」（専門科目、３年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。平成23年度のカリキュラム改革で設置されたゲーム制作で現れる数学のうち、CGの変換の基礎となる数学事項に特化した内容を扱っている。授業中のプレゼンテーションではカラー化したものを用意し、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。全111シートである。
（３）「数学の世界」	平成27年4月～ 平成30年9月	奈良学園大学において平成26年度から設置された「数学の世界」（共通教育科目、1年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。幾何、代数、解析の3分野を中心に、「数の世界」、「量の世界」、「形の世界」、「計算の世界」、「変化の世界」と題して数学の諸分野の内容を紹介する。整数の集合など簡単な材料を用いることによって、高校までの数学ではでてこない比較的新しい数学の概念や考え方を、興味をもって学習できるように工夫した。全99シート。
（４）「日常に数学をー文理をつなぐ数学教室からー」	平成27年4月～ 平成30年9月	同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として担当の「数学入門」（専門科目、１年次配当、半期、２単位）で使用していた教科書。日常生活に近い場面での数学の活用例を中心に、関数、数列、行列の基礎知識と学びながら応用方法も学んでいく。 物体の動きと微分や、金利と数列、人数の変化と行列などを結び付け、学習者の興味を引き出しながら学んでいけるように工夫している。大田靖氏（岡山理科大学総合情報学部准教授）との共著でA５全169ページで学術図書出版より発行された（ISBN978-4-7806-0464-1）。根岸の担当分は第2部101ページである
（５）「情報数学演習Ⅱ」	平成27年9月～ 平成28年3月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成23年度から改革されたカリキュラムの「情報数学演習Ⅱ」（専門科目、３年次配当、半期、１単位）で配布したプリント。平成23年度のカリキュラム改革で設置された情報系で必要とされる数学内容のうち、グラフ理論を扱っている。演習中心に展開しつつ、グラフ理論の基礎用語の説明や、さまざまな定理の証明を実例を交えつつ行い、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。全84シートである。
（６）「解析学基礎」	平成30年4月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学基礎」で配布したプリント。集合論の基礎から微分のロピタルの定理までをほぼすべてに詳しい証明をつけて述べた。高校数学では単なる計算で終わりがちな微分を、実数の基礎から確認していくことを目的としている。A4で38ページである。
（７）「解析学A」	令和元年4月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学A」用に作成したパワーポイントファイル。実数の性質から始め、関数の極限と微分、リーマン積分から線積分までを扱う。高校数学の微積分に現れる定理、性質を詳しい照明を含めて学び、理解することを目的とする。全117シートである。

（８）「確率・統計基礎」	令和元年4月～令和4年3月	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「確率・統計基礎」用に作成したパワーポイントファイル。平均、分散等の統計量の意味とその性質、計算方法から確率の公理と2項分布、正規分布による確率計算までを扱う。統計ではグラフの読み取り、確率では種々の法則を公理から導くなど、概念の理解深めることを目的とする。全81シートである。
（９）「確率・統計応用」	令和2年4月～令和4年3月	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「確率・統計応用」用に作成したパワーポイントファイル。標本分布の確率的な意味から統計的推定、検定の概論といくつかの方法を具体例を中心に学ぶ。全112シートである。
(10) 「解析学I」	令和2年9月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学Ｉ」用に作成したプレゼンテーションファイル。リーマン積分の復習からその欠点を述べ、ルベーグ積分の必要性を学び、可測集合、可測関数を定義してルベーグ積分を導入し、その性質を学ぶ。全112シートである。
(11) 「数学入門 第４版」	令和2年4月	同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として担当の「数学入門」（専門科目、１年次配当、半期、２単位）で使用中の教科書。数の集合の拡張とそれぞれの関係から始め、初等的な方程式の解法や１変数関数の初歩的事項から、微積分、テーラー展開や数値積分までを扱っている。第２版では集合や命題と論理を付録として追加した。第３版では、数値積分を削り、複素数の扱いと数列を追加した。 自然数から有理数を導出する考え方と、指数が自然数のベキから小数のベキへの導出を対比させるなどして、いろいろな事項をなるべく関連させながら学習していくように工夫し、それによって、学生に１変数の解析を学習しやすくする教育効果があった。 A5全145ページで学術図書出版より発行された。 （ISBN978-4-7806-0788-8）
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
（１）学生の授業評価アンケートの結果	平成27年度前期	最高点4.00で、「数学の世界」の総合的満足度は2.85であり、全体平均の3.29よりだいぶ低い値となっていた。講義内容・方法についての項目の科目平均は2.31～3.92となり、全体平均と比べ低い項目も高い項目もあった。低かったのは、授業時間外の指導等で、高かったのは、授業中の私語対策などであった。その他の担当科目については受講生が10名未満だったため、アンケートの対象外だった。
	平成27年度後期	「生活の中の数学」の総合的満足度は3.33であり、全体平均の3.24より若干高い値となっていた。講義内容・方法についての項目の科目平均も3.33～3.56となり、どの項目も全体平均より高い値となっていた。その他の担当科目については受講生が10名未満だったため、アンケートの対象外だった。
	令和2年度前期	授業アンケートを行った3科目中、総合満足度が最もよかったのが「確率・統計応用」の4.23であり、この科目はすべての項目が4以上だった。逆に最も悪かったのは「解析学Ａ（テーラー展開）」の3.53であり、資料のわかりやすさ等の項目も3点台後半と若干低めであった。
	令和2年度後期	授業アンケートを行った2科目中、総合満足度が最もよかったのが「解析学基礎」の4.11であり、この科目はすべての項目が4以上だった。逆に最も悪かったのは「解析学Ｂ（複素関数）」の3.39であり、5項目で3点代前半、5項目で3点台後半とあまり良い評価が得られなかった。

	令和4年度前期	授業アンケートを行ったのは「解析学A」のみであった。学習時間以外のすべての項目で学部平均を下回る結果となっていた。とくに差が大きかったのは説明のわかりやすさの項目だった。
	令和4年度後期	授業アンケートを行った2科目中「解析学基礎」については、ほとんどの項目が学部平均と同等の数値となった。「解析学B」はアンケートの回収率が悪かったため、評価できない。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
（1）「こどもICT講座」	平成29年2月	三郷町文化振興財団と奈良学園大学が共催した三郷町の小学生を対象にしたカルチャーサロン「こどもICT講座」において、プログラミング言語「スクラッチ」を用いたプログラミングの教室の講師を務めた。 （参加者は三郷町の小学4年生から6年生16名）
（2）「子どもICT講座」	平成30年2月	三郷町文化振興財団と奈良学園大学が共催した三郷町の小学生を対象にしたカルチャーサロン「子どもICT講座」において、プログラミング言語「スクラッチ」を用いたプログラミングの教室の講師を務めた。 （参加者は三郷町の小学1年生から5年生14名）
（3）「たつたクラブ」	平成30年3月～現在に至る	三郷町において、3月より月１回行われている小中学生向けのプログラミング教室にサポーターとして参加している。8月から12月までは月2回のロボットプログラミング教室、および平成31年1月に行われた、競技会に主催者の一員として参加した。以降は、月1回のプログラミング教室を中心に活動し、令和2年2月には、第2回の競技会を開催した。
（4）「AIと囲碁」	平成30年6月	奈良県王寺町りーべる王寺において、王寺町と奈良学園大学の主催で行われた「第27回大学と地域をつなぐ公開講座『り～べるカレッジ』」において標記のテーマで講師を務めた。AIとその発展史を概観し、近年のキーワードとしてディープラーニングを取り上げた。合わせて、囲碁AIの開発史を概観し、モンテカルロ法とディープラーニングにより、急速に強さが増していったことを見た。その後、Excel上で簡単なニューラルネットワークモデルを作成し、ソルバー機能を用いて最適化を行うディープラーニングの実例を取り上げた。 （聴衆は地域の高齢者の方を中心に15名程度）
（5）「数式処理ソフトの使い方」]	平成30年10月	奈良県立高取国際等学校で行われた進路相談会の模擬講義において、標記のテーマで講師を務めた。導入としてAIの発達による各種の職業の将来性について、野村総合研究所の発表をもとに解説した。その後、高校1、2年の数学の内容を数式処理ソフトMaximaを使いながら概観し、数式処理ソフトを使った授業法について述べた。 （受講者は高取国際高校の2年生8名）
（6）2019年春期　奈良学園公開文化講座 「第31回　《小学生と学ぶロボットプログラミング》」	令和元年6月	志賀直哉旧居（奈良学園セミナーハウス）で行われている奈良学園公開文化講座の一環として行った講座。 2020年度の小学校の「プログラミング」必修化に向け、その経緯と在り方やプログラミングとは何かを概説し、ビジュアルプログラミング言語であるScratchの使い方や、ロボットプログラミングを説明し、参加者とともにロボットの作成、プログラミングを行った。 （受講者は地域の小学生やその保護者を中心に17名）
5　その他		
特記事項なし		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
高等学校教諭第一種免許（数学）	平成2年3月31日	平成高一め第四三六三号（京都府教育委員会）
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
（1）インターンシップ科目検討ワーキンググループ	平成23年8月～平成27年2月	インターンシップ実習の単位化にあたり、科目の内容、実施方法の検討を行った。その後、平成25
（2）情報学部評議員	平成24年4月～平成26年3月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部情報学科の評議員を務めた。
（3）情報学部長	平成27年4月～平成29年3月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部情報学科の学部長を務めた。
（4）情報センター長	平成29年4月～平成30年3月	奈良学園大学情報センター長を務めた。
（5）人間教育学部評議員	平成30年4月～令和3年3月	奈良学園大学人間教育学部の評議員を務めた。
（6）自己点検・評価委員会委員長	平成30年4月～令和4年3月	奈良学園大学自己点検・評価委員会の委員長を務めた。
（7）三郷町文化振興財団理事	平成30年6月～現在に至る	三郷町文化振興財団の理事を務めた。
（8）三郷町ICT学び推進協議会委員	平成30年7月～現在に至る	三郷町ICT学び推進協議会の委員を務めた。
（9）大学機関別認証評価　評価員候補者	令和2年4月～令和4年3月	公益財団法人日本高等教育評価機構の評価員候補者として登録された。
(10) 奈良学園大学学長補佐	令和3年2月～令和4年3月	奈良学園大学学長補佐に任命された。
(11) 財務委員長	令和3年2月～現在に至る	奈良学園大学財務委員会の委員長を務めた。
(12) 人間教育学部学科長	令和3年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の学科長を務めた。
4　その他		
特記事項なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1 日常に数学を－文理をつなぐ数学教室から－	共著	平成27年3月	学術図書出版社	（再掲のため略）
2 数学入門（第4版）	単著	令和2年4月	学術図書出版社	（再掲のため略）
3				
:				
（学術論文）				
1 有限グラフ上の量子ウォークについてⅠ：定義と条件	単著	平成25年2月	奈良産業大学情報学フォーラム紀要第8集 pp.99-108	有限グラフ上の量子ウォークについて、まず、グラフに無関係な一般のヒルベルト空間上のユニタリ写像を置き、その中で、グラフと結びつけるうえでのいくつかの仮定の下、グラフの頂点と関係する部分空間の次元を導出した。
2 有限グラフ上の量子ウォークについてII：例と性質	単著	平成25年12月	奈良産業大学紀要第30集 pp.57-63	有限グラフ上の量子ウォークについて、2部グラフでの解析において、半分の次数の行列を用いれば十分であることを示した。
3 有限グラフ上の量子ウォークについてIII：Propagator Setの次元	単著	平成29年9月	奈良学園大学紀要第7集 pp.91-96	有限グラフ上の量子ウォークについて、量子ウォークのPropagator Set の定義を与え、実パラメータの自由度を次元として Propagator Set の次元を与える定理を示した。また、瀬川、鈴木両氏の"Generator of an abstract quantum walk."における定義と根岸の定義の違いについて考察した。
:				
（その他）				
1 奈良産業大学（現奈良学園大学）インターンシップ第2期実施報告 :研究ノート	共著	平成27年9月	奈良学園大学紀要第3集 pp.209-227	平成24年度から奈良産業大学で実施された単位化された科目としてのインターンシップについて、その導入の経緯から実習後の教育効果までを記述した研究ノート。山本英司氏（現金沢星稜大学経済学部教授）との共著で、根岸は主にデータの解析とその分析結果の記述を担当した。

2 奈良産業大学「基礎数学」の報告と分析 :研究ノート	単著	平成28年9月	奈良学園大学紀要第5集 pp.197-211	奈良産業大学（現奈良学園大学）で平成23年度から平成27年度にかけて実施した数学の導入教育について、科目の到達目標の設定段階の状況報告から実施後の学生の成績に基づく分析までをまとめた。
3 解析学における高大連携の私論（その１） :論考	単著	平成27年11月	教育PRO第45巻25号p.16-17	数学の高大連携において、解析学に重点を置くことの意味を示し、いくつかの数学用語についての高校と大学での違いを述べた。
4 解析学における高大連携の私論（その２） :論考	単著	平成27年12月	教育PRO第45巻27号p.16-17	数学の高大連携において、微分と積分において、高校段階で注意すべき点をいくつか示し、それらが大学でどのような意味を持つかを述べた。
5 有限グラフ上の量子ウォークについて :口頭発表		平成25年9月	2013年夏の作用素論シンポジウム　於：広島大学東千田キャンパス	有限グラフ上での量子ウォークについて、ユニタリ性の見地からのより一般的な定義を与えた。また、この考えの応用例として、二部グラフにおける量子ウォークの固有関数についての定理を与えた。
6 トルク差を利用した垂直軸風車について :口頭発表		平成26年9月	2014年夏の作用素論シンポジウム　於：セミナー・カルチャーセン	垂直軸風車において、羽の両面の形状の違いによるトルク差を利用するアイデアを提唱し、その数値計算例を与えた
7 垂直軸風車の周速比の計算例 :口頭発表		平成27年9月	2015年夏の作用素論シンポジウム　於：福井県フェニックスプラザ	トルク差を利用した垂直軸風車について、周速比の計算例を与えた。
8 量子ウォークの時間発展の次元について :口頭発表		平成28年9月	2016年夏の作用素論シンポジウム　於：米子コンベンションセンター BiG SHiP	U(2n)に属するユニタリ行列の中で、辺数nの有限グラフ上の量子ウォークの時間発展となりうる行列の集合の幾何学的次元とその条件を与えた。
9 量子ウォークのPropagator Setの次元について :口頭発表		平成29年7月	2017年夏の作用素論シンポジウム 於：伊勢市観光文化会館	量子ウォークのPropagator Set の定義を与え、U(2n)に属するユニタリ行列の中で、辺数nの有限グラフ上の量子ウォークのPropagator Setの幾何学的次元に関する定理を示した。
10 羽根と質点の衝突から導出される方程式 :口頭発表		平成30年9月	2018年夏の作用素論シンポジウム 於：徳島市シビックセンター	空気分子が風車の羽根に与える角運動量とエネルギーの保存則から風車の羽根の形状の運動方程式を導出した
11 Introduction to Open Quantum Walks :口頭発表		令和元年9月	2019年夏の作用素論シンポジウム 於：和歌山ビッグ愛	2000年代初期からのUnitary Quantum Walksの様々な定義を紹介し、その後Open Quantum Walksの定義を述べUQWとの違いを述べた。
:				

（注）

１　最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。
２「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。
３「研究活動」については、下記の点に留意すること。
①著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。
②著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。
③　共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。
④　最近１０年間に著書･論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。
⑤　芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和５年３月３１日

氏名　長谷川栄子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
教育学	国語科教育法、図書館教育、教員養成

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 （１）学校図書館を活用した国語科教育	平成元年～ 現在に至る	主体的に本を手に取り、作品や自分、他者と対話しながら読む読書行為ができるよう国語科の授業実践を検討した。各教科・領域における読書指導などとの関連を考慮した年間指導計画の作成教材と関連する資料を学校図書館に置くのか検討して図書館改革に取り組んだ。 （奈良学園大学における講義、、奈良県子ども読書推進事フォーラム講師）
(2) 主体的・対話的な国語科学習に生徒を誘う発問研究	令和２年～現在に至る	教育実習事前事後指導（中・高）、国語科教育法Ⅰ・Ⅱにおいて、学生に思考を深める発問を考えさせ、模擬授業をさせる授業実践を行う。 発問づくりにおいては、①子どもたちを主体的な学習者として捉えること、②読書プロセスに応じ、単元全体で捉えること、③説明様式に応じることなどに留意して行った。 （奈良学園大学における授業実践、教育実習事前指導、国語科指導法Ⅰ・Ⅱ）
(3) 司書教諭免許取得科目に関わる授業実践	令和２年～現在に至る	司書教諭免許取得科目において、大学図書館と連携し、館内に展示コーナーを設け、学生の読書への興味を喚起した。（奈良学園大学における授業実践、読書と豊かな人間性）
2　作成した教科書・教材 (1)教育実習のための講話事例（単著） 芦屋市立潮見小学校発行	平成 29 年 4 月	芦屋市立潮見小学校の校長として教育実習生に分かりやすく話すための手引きを作成した。実習生の各担当教員が必ず指導しなければいけないことを講話というかたちでまとめ、実習を指導する教員に配布し使用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)奈良学園大学学生アンケート	令和元年 12 月	「子どもと言葉」の指導（ゲストティチャー）
(2)奈良学園大学学生授業アンケート	令和 2 年 7 月～ 現在に至る	担当科目において熱意のある授業としてポイント 4 以上の評価を受けた。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)教頭として指導助言等	平成 25 年 4 月～ 28 年 3 月	・朝日ヶ丘小学校の教頭として毎年実施する自主的全国研究会の企画運営を行い、学校目標に基づいた各教員の研究テーマについて助言 ・朝日ケ丘小学校教頭として、教育実習生の手引き

		を修正作成 ・浜風小学校教頭として兵庫県公立学校・教育委員会女性管理職研修会において発表 テーマ「実践的指導力のある教職員の育成」
(2)校長としての指導助言等	平成 29 年 4 月～ 令和 2 年 3 月	・兵庫県小学校長会研究大会で研究発表 テーマ「震災の教訓を生かし、防災体制を充実する学校づくり」 ・潮見小学校校長として教育実習生のための講話集を編集し教職員で共通確認を行った
(3)准教授としての指導助言	令和 2 年 4 月～ 令和 3 年 10 月	・芦屋市立潮見小学校若手教員への指導助言 ・奈良県立五條高等学校職業人講話講師 ・芦屋市教科等小学校国語部会研修会講師
(4)教授としての指導助言	令和 4 年 7 月～令和 5 年 3 月 令和 4 年 7 月 令和 5 年 2 月	・令和 4 年度奈良県読書水深事業企画運営委員会委員長 ・奈良県図書館担当者研修会講師 ・奈良県子ども読書推進フォーラム講師
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 ・小学校教諭 1 級普通免許状 ・幼稚園教諭 1 級普通免許状 ・小学校教諭専修免許状 ・幼稚園教諭専修免許状	 昭和 57 年 3 月 昭和 57 年 3 月 平成 15 年 3 月 平成 15 年 3 月	 （昭 56 小一普第 710 号）兵庫県教育委員会 （昭 56 幼一普第 606 号）兵庫県教育委員会 （平 14 小専第 59 号）兵庫県教育委員会 （平 14 幼専第 22 号）兵庫県教育委員会
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 ①教頭として	平成 23 年 4 月～ 28 年 3 月	・兵庫県芦屋市立朝日ケ丘小学校教頭として小学校国語科教育担当として研修会を実施 ・兵庫県芦屋市立浜風小学校・潮見小学校教頭として小学校教頭会理科教育担当として研修会を実施
②校長として	平成 29 年 4 月～ 令和元年 3 月	・芦屋市小学校校長会国語科教育、特別支援教育、学習評価担当校長として部会を開催し、研修会を実施、特に新学習指導要領の評価を巡り、研修会等何度も開催した。 ・芦屋市学力向上支援プラン研究校指定となり、新学習指要領の 3 つの柱について研究 ・芦屋市外国人に対するきめ細かな日本語指導研究校指定（～令和２年 3 月）外国籍の児童が多い学校なので、ユニバーサルの視点での国語科日本語の授業の試案を提案した ・芦屋市学力向上支援プラン研究校指定（～令和 2 年 3 月）

		・芦屋市小学校校長会国語科教育、家庭科教育、特別支援教育、学習評価担当（～令和２年３月） ・芦屋市学力向上支援プラン指定授業研究発表会 ・兵庫県日本語初期指導研究校指定 ・芦屋市学力向上支援プラン指定授業研究発表会
４　その他 管理職としての役職	平成 28 年４月 平成 29 年４月 平成 29 年８月 平成 30 年４月 平成 31 年４月	兵庫県芦屋市女性管理職等研修会会長 芦屋市特別支援教育教育支援委員会　副委員長 芦屋市特別支援教育教科用図書・一般図書採択　委員長 兵庫県阪神地区女性校長会副会長 兵庫県阪神地区女性学校運営研修会企画・運営 兵庫県阪神地区女性校長会会長 兵庫県阪神地区女性校長会幹事

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(著書) 1.読解力を育てる！小学校国語　定番教材の発問モデル説明文編 アクティブ・ラーニング型授業づくりのヒント	共	平成27年7月	明治図書	学習者の主体性を尊重し、多様性を考慮し、相互に協働する学習になるよう国語科単元において発問を構想し、提案した著書である。 A4版　124頁 井上一郎編著、執筆者：長谷川栄子、上月敏子、古川元視　他合計24名 本人担当部分：第2学年の説明的文章を活用して、箇条書きやQ&Aによる言語活動を行い、説明力を育成することをねらい、発問を提案した。書き言葉から話し言葉に転用させて、コミュニケーション能力や説明力の向上をねらった。pp44-pp45
2. 小学校国語「汎用的能力」を高める！アクティブ・ラーニングサポートワーク	共	平成27年12月	明治図書	言語認識力、言語操作力、自己表現力、言語生活力などの汎用的能力を身に付けるためのサポートワークを考案した著書である。 A4判　174頁 井上一郎編著、執筆者：長谷川栄子、上月敏子、尾崎靖二　他合計33名 担当部分：国語力を高めることによって、人間関係力も高めることをねらった。第1学年において物語の構造を捉えること、第3学年において説明的文章の語彙構造を捉えること、第4学年において調査事項を新聞記事に書くことを執筆した。子どもたちが、主体的に学習に取り組めるようワークシートを工夫した。 pp30-pp31
3.学校図書館を活用した国語科授業の創造 ―主体的・対話的な学びを目指して―	単	令和元年12月	ERP出版株式会社	国語科における、説明的文章に関わる思考語彙の指導について、詩の指導の在り方について、主体的対話的な国語科学習を成立させるための教師の発問について、新学習指導要領の求める資質能力を踏まえて、国語科教育を論じた。また、国語科教育に図書館教育を活用することの意義と、その方法を具体的に例示した。さらにコンピュータを活用した図書館教育を通して、児童の相互理

				解を深める具体的な例示をして指導を論じた。まとめとして、今後の図書館教育と国語科教育の在り方について提案した。 B5判　80頁
4. 国語科教育の基礎・基本 教え方・学び方ポイントシート 2「話すこと・聞くこと」「書くこと」編	共	令和3年1月	明治図書	国語科の基礎・基本を解説するとともに、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域における教材及びポイントシートを若手教員向けに構成した著書である。 A4版　117頁 井上一郎編著、執筆者：長谷川栄子、小木曽笑子、南理香他合計40名 担当部分：中学年の児童を対象に単元「不思議な出来事の物語―ファンタジーを書こう」を設定した。主人公が、不思議な世界に行って帰ってくるファンタジーを書くことを取り上げ、プロセスを3つの柱にしてまとめた。物語の組み立てに沿って内容を考えられるようにしたり、物語の冒頭部分を提示したりしてポイントシートを工夫した。pp92-pp93
(学術論文) 1. 学校図書館を活用した国語科授業の創造―ファンタジー作品を中心に―	共	令和元年5月	奈良学園大学「人間教育」第2巻第4号	主体的に本を手に取り、作品や自分、他者と対話しながら読む読書行為ができるよう国語科の授業実践を検討した。このような授業では、①必要な図書を再読する、②自分の体験と重ねながら、作品や作家、仲間と対話して読む、③音声言語による表現へ意欲を高める、というような児童の変容が見られた。各教科・領域における読書指導などとの関連を考慮した年間指導計画の作成教材と関連する資料をどの程度蔵書として学校図書館に置くのかが、課題となると論じた。 共著者：長谷川栄子、松田智子 本人担当部分：全文執筆　pp113-pp124
2. 工藤直子作品から広がる詩の指導―作品集を読むという読書行為を通して―	共	令和元年6月	奈良学園大学「人間教育」第2巻第5号	従来の指導方法からより多様な指導方法への視点を得て、主体的・対話的に他者や自分、詩と対話しながら学ぶことができるよう工藤直子の詩の作品集を丸ごと味わう読書行為を行った。子どもたちは、①作品世界に浸り、詩人について思いを馳せるようになる、②多様な音声表現や多様な作品集の創作を楽しむ、③自己を見つめる契機となるなどのこどもたちの姿が見て取れ、作品集を丸ごと味わう読書行為は、効果的な詩の指導方法であると考えられると提案した。 共著者：長谷川栄子、松田智子 本人担当部分：全文執筆　pp125-pp134
3. 主体的・対話的な国語科学習に誘う発問とは―説明的な文章を読むことに関して―	共	令和元年8月	奈良学園大学「人間教育」第2巻第7号	説明的な文章を読むことの学習過程において、内容主義に陥らないためには、一体どのような発問が考えられるだろうか。 そこで、学習過程に沿って主体的・対話的な学習になるよう発問モデルを試作した。発問づくりにおいては、①子どもたちを主体的な学習者として捉えること、②読書プロセスに応じた単元全体で捉えること、③説明様式に応じることなどに留意することが重要である。 共著者：長谷川栄子、松田智子 本人担当部分：全文執筆　pp155-164
4. 説明的文章に関わる思考語	共	令和元年9月	奈良学園大学「人間教	小・中学校国語科で取り扱われる「情報の扱い方に関する事項」

彙の指導			育」第2巻第8号	と思考語彙の指導、及び思考力を育成の関連を探った。 思考操作を授業に取り入れ、言葉と操作を一致させる思考語彙の指導が思考力育成の上で重要となる。「情報の扱い方に関する事項」の内容により一層焦点化させ、系統化を図られた。学習基本語彙から思考語彙を選択し、語彙と操作レベルを一体化させて思考力を育成することが重要である。 共著者：長谷川栄子、松田智子 本人担当部分：全文執筆　pp201-pp210
5. 公立図書館と連携した小学校における学校図書館教育	共	令和元年9月	奈良学園大学紀要第11集	学校図書館教育を充実させ、子どもたちの読書推進を図るには、公立図書館と連携した取組が効果的だ。そこで、学びの場を広げ、公立図書館と連携した読書推進活動や学習指導を構想し、学校図書館教育の充実を図ろうと試みた。①子どもたち同士が交流できる学びの場を設定すること、②公立図書館と連携した学習単元を構想すること、③司書教諭や学校司書の力を引き出し、読書推進の活性化を図ることが重要である。以上のことを提案した。 共著者：長谷川栄子、松田智子 本人担当部分：全文執筆　pp125-pp134
6. 小学校と大学が連携して教育実習生を育成しよう１	単	令和元年10月	教育プロ 第４９巻２３号	教員志望の学生が減少している中で、教員を志望する学生に対して小学校と大学が連携して人材を育成する視点が必要だ。現職の後輩を育てようとする意欲や自己研鑽意欲に支えられて行われる教育実習である。今後求められる教員の資質・能力は何かを考えて指導に当たることが肝要だ。教育実習の準備や大学教員の巡回指導における留意点を記述した。 pp14-pp15
7. 小学校と大学が連携して教育実習生を育成しよう２	単	令和元年11月	教育プロ 第４９巻２４号	教育実習生を指導するにあたっての留意点として、児童理解の方法について、また特別な配慮を要する子どもから何を学ぶかを論じた。また授業の方法として主体的対話的な学びを生かす指導方法とは何かを具体的に示した。さらにこれら学校現場の要望に合わせた大学の講義の在り方の改革への提言を行った。 pp14-pp15
8. コンピュータを活用し、児童の相互交流が生まれる学校図書館をめざして	単	令和元年11月	奈良学園大学「人間教育」第2巻第10号	学校図書館は、読書センター、学習センター、情報センターとしての役割がある。学習指導要領が新しくなり、外国語が加わった。メディア構成も新しくなる。図書資料として英語のCD、DVDなども加わることから、どのようにそれらを閲覧できるように環境を整備するのかが、課題となる。課題の解決の一つの方法として、コンピュータをはじめとするメディアを配置することが考えられる。それによって、子どもたちの相互交流で作り上げる検索システムを整備することができる。子どもたちが、主体的に読みたい本を閲覧できるようにコンピュータを活用したい。 pp243-pp252
(その他)				

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　５年　３月　３１日

氏名　松井　典夫

研究分野	研究内容のキーワード
学校安全・安全教育・教師教育・カリキュラム論	学校安全・子どもの安全・カリキュラムポリティクス

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会誌　第３巻１号 p62-66　松井）を用いた安全教育	平成 21 年度～現在に至る	安全教育で目指すべきところは、「安全で安心」であるＡのカテゴリーである。しかし、このカテゴリーに児童の状態がいれば、安全教育の役割が達成されたかと言えばそうではない。「安全・安心」の状態や児童の変容を客観的に測るマトリクスとして、「安全安心様相図」を考案した。
地震災害被災地の小学校における教育実践演習	平成 29 年～現在に至る	平成２９年４月に発生した熊本地震では、多くの学校も被災し、また避難所となった。避難所となった学校に訪問し、登校時の安全指導ボランティアや、授業補助の演習を行うことを目的として、奈良学園大学の教職志望の学生１０名を引率し、熊本県益城町立広安西小学校を訪れ、実践的演習を行った。また、毎年１月 17 日には阪神淡路大震災「1.17 の集い」に学生を引率して参加し、教員としての資質形成の目的とした学修を実践している。
２　作成した教科書，教材 授業プレゼンテーション及びワークシート	平成 26 年４月～現在に至る	その理論に伴った実際の児童の姿や授業の内容について、具体的に想起しながら学ぶことができるように、プレゼンテーションを作成して授業を行っている。また、その内容を復習しながら習熟していくことができるように、ワークシートに記入させ、１５回の講義後にワークシートを綴じ、テキストとして使用することができるようにしている。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 大阪教育大学附属池田小学校　学校教育診断	平成 17 年度～平成 25 年度	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年４回にわたって、児童対象と保護者対象に分けて、学校教育診断を実施している。およそ３０項目の質問事項に対して、マークシート式で回答し、その他の要望等を記述式で回答する。結果はホームページにおいて公開され、授業参観時に全保護者が閲覧できるように冊子化もされる。その結果において、児童、保護者ともに、毎年度高い評価を得た。
奈良学園大学における学生の授業評価	平成 27 年度～現在に至る	授業担当科目において、求められる教師の姿や学校の組織としての姿、組織力に関して具体的に学ぶことができたと、高評価を得た。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 岡山県備前市立三石小学校：ＰＴＡ人権教育小中合同研修会講師	平成 25 年６月	備前市立三石小学校において、午前の人権教育参観で第４学年において、「溺れかけた兄妹」という、作家の自伝的作品を題材にした安全教育（水難災害）の授業を行い、午後からＰＴＡ人権教育小中合同研修会で、「命を大切にする教育」と題し、安全教育と学校安全に関して、教員・保護者を対象に９０分の講演を行った。

守口市教育研究会　生活・総合部会：指導助言	平成 25 年 12 月	守口市教育研究会生活・総合部会において、「これからの学校安全と安全教育」と題し、６０分の講演を行った。ここでは、担当者の授業実践の内容を絡め、教科教育と安全教育の類似点と相違点について話し,児童にとって有効な安全教育の必要性について話した。
寝屋川市立第７中学校区「いのちの教育」研修会：講演	平成 26 年８月	寝屋川市の第７中学校校区である、第７中学校、南小学校、堀溝小学校の３校合同で開催された、「いのちの教育」研修会で、１２０分の講演を行った。「いのちの教育としての安全教育～“Smile School　“の提案～」と題し、大阪教育大学附属池田小学校において実践した研究授業「Smile School～『いじめと命』未来に向けて考えよう～」の実践内容と、授業実践時の児童の反応を中心として、いじめについて子供たちが向き合う方法について話した。
三郷町ひまわりセミナー：講師	平成 26 年 11 月	奈良県生駒郡三郷町における、一般向けのセミナーで９０分の講演を行った。当日は、三郷町の町長、教育長、地域の小学校校長、市民ボランティア団体、一般の町民等、様々な人が参加した。「子供たちの命を守る「安全・安心」～町と大人の役割～」と題し、事件や事故、災害の実例を挙げながら、どのようにして子供たちの命を守るのかという、地域の大人の役割について話した。
王寺町リーベルカレッジ：講演	平成 27 年８月	奈良学園大学社会連携センターと王寺町の共同による取り組み、王寺町リーベルカレッジにおいて、地域住民や子を持つ保護者を対象に、「子どもの安全を考える～大人と地域の役割～」と題した講演を行った。神戸市小１女児の連れ去り事件などを例に挙げ、地域の大人の目の大切さについて話した。
全国地域安全運動　泉大津・忠岡安全大会：講演	平成 27 年 10 月	忠岡町シビックセンターにおいて、泉大津・忠岡町の合同安全研修会で講演を行った。地域住民が２００名ほど集まり、「子どもの安全を考える　～大人と地域の役割～」として、2004 年の奈良小１女児殺害事件や、この年の夏に発生した奈良県香芝市の小６女児監禁事件を例に挙げ、「３つの死角」（場・地域住民・学校教育）について提案した
２０１５　なら講座：講演	平成 27 年 12 月	例年開催されているなら講座での講演。奈良県立医科大学で行われ、地域住民を対象に、「地域防犯の視点から」と題して講演を行った。地域の登下校見守り隊などのボランティア活動は高齢者頼みになっている実態を提示し、行政と地域が協同し、見守りなどの活動を活性化する必要性を提案した。
教職員自主研修事業　大学・専修学校等オープン講座　講演	平成 28 年７月	「事件・事故・災害の教訓から考えるこれからの学校安全と安全教育」と題し、９０分間の講演を行った。とくに連れ去り事件に焦点を置き、安全教育を実践する際の視点の置き方について話した。また、年代別防犯の方法について、幼・小学校低学年、小学校中学年、そして小学校高学年・中学生と、年代別にわけて提案した。
免許更新講習　講師	平成 28 年８月	保・幼稚園教諭を対象とする免許更新講習で、90 分の講義を担当した。「子どもの育ちを踏まえた保育内容の充実を考える」というテーマで行い、「表現領域（美術）」を担当した。図画工作科教室において、保育内容を充実させる授業内容をグループで考案し、ポスターセッションを行って実践例を共有する活動を行った。
熊本県益城町立広安西小学校　PTA 対象　講演	平成29 年4月	熊本地震が発生した平成28年4月14日（前震）の前日である4月13日の放課後に、甚大な被害を被った益城町の小学校ＰＴＡを対象に、「子どもの命を守る大人の役割」と題した講演を行った。
大阪市　資質向上研究会　講師	平成 29 年７月	「事件・災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」として、大阪市の教員、管理職で構成される資質向上研究会で３時間の講演を行った。 学校で発生した児童が被害に遭う事件を教訓に、学校安全の方法、管理職の役割について話し、またそれらを教材にした安全教育の授業題材や授業方法、教授法について話した。

教員免許更新講習　講師	平成 29 年 8 月	「子どもの育ちを踏まえた保育内容の充実を考える－幼児期における造形表現活動の意義と役割―」 　保育、幼稚園教諭の教員免許更新講習の講師として、40名を対象に講義を行った。アクティブ・ラーニングとして、グループで造形活動実践の計画、ポスター作成、ポスターセッションを行った。
生駒地区小中学校管理職・事務職員研修会　講師	平成 29 年 9 月	「学校での事故・災害など、緊急事態に対する対応と予防」について、生駒地区の小中学校の管理職と事務職員に講演した。これまでの学校での事故や災害を例に挙げ、発生いたとき、あるいは予防方法について、教師の役割、管理職の役割について話した
第 67 次兵庫県教育研究集会（ひょうご教育フェスティバル）　指導助言	平成 29 年 11 月	西宮市で開催された本研究会で、「生きる力を育む教育」分科会の指導助言に行った。当分科会では、主に震災に関連した発表が多くあり、震災関連教育については、今後、児童生徒の生きる力としての「レジリエンス」の重要性について話した。
北海道の子育て、教育を支援する会　講演	平成 30 年 7 月	北海道の子育て、教育を支援する会が主催する講演会、ワークショップにおいて、講師を務めた。午前の部は講座１として、「どうすれば子どもたちの命は守れるのか」と題し、９０分の講演を行った。そこでは、過去における事件、事故、災害を教訓として、学校安全、安全教育の生かす必要性と、その実践方法について講演した。午後は講座２として、実際に安全教育のプログラムをグループで考案し、ポスターセッションで交流した。
大阪市中堅教員研修　講師	平成 30 年 9 月	大阪市の中堅教員研修の講師として、３回（延べ６００人）を対象に学校安全、安全教育に関する講演を行った。「事件、事故、災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」について、実際の事件や災害の実例を紹介しながら、どうすれば防げたのか、学校ではどのような対応が必要だったか、という、中堅教員がこれから出会うであろう課題を想定して講演した。
カンボジア王国　王立プノンペン大学　招待講演	平成 30 年 9 月	カンボジアの日本人会による企画において招へいを受け、王立プノンペン大学において９０分の講演を行った。「日本における学校の安全と安全教育」と題し、およそ３０名のプノンペン大学生および教員に、日本の学校安全について話した。講演の中では質疑応答が活発に行われ、カンボジアと日本の文化、災害事情の相違などによる対策の方法の違いなどが確認され、双方において新たな知見が共有された。
奈良市「子ども安全の日の集い」講演	平成 30 年 11 月	2004 年 11 月に、奈良市内で発生した小１女児殺害事件に関して、奈良市が毎年開催している「子ども安全の日の集い」において、およそ３００人の教員、PTA、地域住民を対象に講演した。「子どもたちを守るために～危険個所を見える化するための一つの方策～」と出し、文部科学省の「登下校防犯プラン」に基づいて、集団下校の方法や見守り隊の役割について話した。
大阪市幼稚園主任者研修　講師	平成 30 年 12 月	大阪市の幼稚園主任者研修において、およそ４０名の幼稚園主任教諭を対象に、「子どもの安全のために必要なもの」と題して９０分の講演を行った。とくに、近年の略取誘拐事件の実態について、統計を例に挙げて話し、大人（教員）は事前にどのような対策をとればよいのかについて提案した。
奈良学園小学校　保護者対象講演会　講演	令和 1 年 6 月	奈良学園小学校の保護者を対象に、とくに入学後低学年段階における防犯意識の重要性と、家庭、学校における防犯教育の内容、方法について講演した。
奈良市教育委員会　少年指導員委嘱式　講演	令和 1 年 6 月	奈良市では、2004年11月に発生した小１女児連れ去り事件以後、教員、地域ボランティア、保護者を対象に毎年300人程度の「指導員」を委嘱し、児童生徒の安全対策を依頼している。その委嘱式において、300人を対象に学校安全について講演した。

大阪市教育委員会　中堅教員研修　講演	令和１年７月	大阪市の中堅教員研修の講師として、３回（延べ６００人）を対象に学校安全、安全教育に関する講演を行った。「事件、事故、災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」について、実際の事件や災害の実例を紹介しながら、どうすれば防げたのか、学校ではどのような対応が必要だったか、という、中堅教員がこれから出会うであろう課題を想定して講演した。
宝塚市教育委員会　現職教員研修会　講演	令和１年８月	宝塚市の現職教員研修会において、学校安全と安全教育について講演した。参加者が幼稚園教諭、小学校教諭、及び管理職と多岐に渡ったため、それぞれの発達段階に合わせた内容で講演した。
令和元年度教員免許更新講習（保育士・幼稚園教員対象）講師	令和１年８月	「子どもの育ちを踏まえた保育内容の充実を考える－幼児期における造形表現活動の意義と役割―」 保育、幼稚園教諭の教員免許更新講習の講師として、40名を対象に講義を行った。保育内容の5領域と「表現」領域の関連性について講義を行い、その後、アクティブ・ラーニングとして、グループで造形活動実践の計画、ポスター作成、ポスターセッションを行った。
吹田市教育委員会　校長会研修　講師	令和１年10月	吹田市の校長会の研修で講演を行った。校長ということもあり、学校安全における学校長としてのリーダーシップと役割について、熊本地震における実践例などを取り上げて講演した。
奈良市教育委員会　「子ども安全の日の集い」講演	令和１年11月	２００４年１１月に、奈良市内で発生した小１女児殺害事件に関して、奈良市が毎年開催している「子ども安全の日の集い」において、およそ３００人の教員、PTA、地域住民を対象に講演した。「子どもたちを守るために～危険個所を見える化するための一つの方策～」と出し、文部科学省の「登下校防犯プラン」に基づいて、集団下校の方法や見守り隊の役割について話した。
奈良市教育委員会　「ストップいじめ　なら子どもサミット」講師	令和２年２月	奈良市が取り組んでいる「ストップいじめ　なら子どもサミット」において、２１校の中学校の代表生徒が3回集まり、デスカッションを行う上でコーディネーターを務め、2月のサミットで最終公演を行った。
宝塚市教育委員会　現職教員研修会　講演	令和２年10月	宝塚市教育委員会主催の現職教員研修会で「子供たちの命を守るための防災教育」として講演した。幼稚園教員から高校教員まで幅広い参加者だったため、それぞれの校種に合わせて内容を構成した。
奈良市教育委員会　「子ども安全の日の集い」講演	令和２年11月	2004年11月に、奈良市内で発生した小１女児殺害事件に関して、奈良市が毎年開催している「子ども安全の日の集い」において講演した。コロナ禍のため、例年の300人の参加を 100 人に縮小して行われた。「子供の安心・安全を守る学校と地域のあり方」として、３者協働の安全対策について話した。
奈良学園小学校　防犯教室講師	令和３年６月	奈良学園小学校で、小学校１年、３年、５年生を対象に防犯教室を実施した。
大阪市教育委員会　中堅教員研修　講演	令和３年６月	大阪市の中堅教員研修の講師として、教職 10 年前後の教員を対象に学校安全、安全教育に関する講演を行った。コロナ禍でオンデマンドとなり、講演録画をおよそ300 人の教員が試聴した。「学校園における危機管理・安全管理」について、実際の事件や災害の実例を紹介しながら、どうすれば防げたのか、学校ではどのような対応が必要だったか、という、中堅教員がこれから出会う可能性のある課題を想定して講演した。
奈良市教育委員会　いじめ防止研修講座（エキスパート研修）講演	令和３年７月	奈良市教職員研修講座として、小中学校の教員 50 人を対象に「事件・事故・災害の教訓に学ぶ学校安全」として、いじめの事案と傾向、その対応について事例を紹介しながら講演した。
吹田市教育センター　課題別研修【安全教育】講演	令和３年９月	「事件の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」として、吹田市の小中学校教員を対象に講演した。コロナ禍により、事前録画をおよそ 200 人の教員が試聴した。

奈良県教育委員会　学校安全教室推進事業　講演	令和３年９月	「事件の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」として、奈良県の小中学校教員を対象に講演した。コロナ禍により、事前録画をおよそ 300 人の教員が試聴した。
奈良市教育委員会　「子ども安全の日の集い」講演	令和３年 11 月	2004 年 11 月に、奈良市内で発生した小１女児殺害事件に関して、奈良市が毎年開催している「子ども安全の日の集い」において講演した。コロナ禍のため、例年の 300 人の参加を 100 人に縮小して行われた。「過去の教訓をどう生かし、対策するのか」として、３者協働の安全対策について話した。
奈良市危機管理課令和３年度第１回「安全安心まちづくり懇話会」座長	令和３年 11 月	奈良市危機管理課「安全安心まちづくり懇話会」に出席し、座長を務めた。
石川県教育委員会　中能登教育事務所　学校安全ボランティア講習会　講演	令和３年 12 月	石川県中能登教育事務所の主催で、地域の小中学校教員、及び学校安全ボランティア（スクールガード）を対象に「子どもの安心・安全を守る学校と地域のあり方」として約 100 人を対象に講演した。
石川県教育委員会　奥能登教育事務所　学校安全ボランティア講習会　講演	令和３年 12 月	石川県奥能登教育事務所の主催で、地域の小中学校教員、及び学校安全ボランティア（スクールガード）を対象に「子どもの安心・安全を守る学校と地域のあり方」として約 100 人を対象に講演した。
生駒市小中学校教頭研修会　講演	令和４年１月	生駒市の小中学校教頭研修会において、「学校安全のリスクマネジメント～事件・災害の教訓から～」として講演した。
奈良市危機管理課令和３年度第２回「安全安心まちづくり懇話会」座長	令和４年２月	奈良市危機管理課「安全安心まちづくり懇話会」に出席し、座長を務めた。
石川県教育委員会　学校安全ボランティア養成講習会　講演	令和４年５月	「効果的な学校での防犯教育，防犯体制の確立について」と題して講演した。教員、スクールサポーター等 100 名が対象となった。
吹田市スクールリーダー研修　講演	令和４年６月	「事件・事故・災害を事例にした学校の危機管理について」と題して講演した。管理職等 30 人が対象となった。
大阪市教育委員会　中堅教員研修　講演	令和４年６月～	大阪市の中堅教員研修の講師として、教職 10 年前後の教員を対象に学校安全、安全教育に関する講演を行った。コロナ禍でオンデマンドとなり、講演録画をおよそ 300 人の教員が試聴した。
奈良県次世代教員養成塾　講師	令和４年 11 月	およそ 100 名の高校生を対象に「命の価値について考えよう」というタイトルで講義を行った。
奈良学園小学校　保護者対象　防犯教室講演会	令和４年 12 月	およそ 30 名の保護者を対象に、「命の教訓をその先の教育へ」というタイトルで講演した。
大阪私学生徒指導連盟　中学校部会　講演	令和５年１月	およそ 80 名の中学校教員を対象に、「過去の災禍を教訓にした学校危機マネジメント」と題して講演した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 小学校教諭一種免許状 平８小一第２３７８号	平成９年３月	大阪府教育委員会
２　特許等		

特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 大阪教育大学附属池田小学校教諭 ・図画工作科主任 ・第６学年主任 ・第４学年主任 ・第２学年主任 ・学校安全主任 ・学校安全主任	平成 17 年度～平成 21 年度 平成 21 年度 平成 22 年度 平成 23 年度 平成２２年度 平成２３年度	大阪教育大学附属池田小学校における、主たる校務分掌を記した。着任後すぐに、５年間図画工作科主任になり、教科論を記した。また、その後４年間学年主任の業務においては、新任指導も含め、円滑な学年経営に努め、成果を残してきた。学校安全主任は、当該校の要とも言える。その任に就き、学校安全の推進、保持、発信、また、安全教育の推進と、責務を果たしてきた。
４　その他 ［外部資金の獲得状況］ １．科学研究費補助金　奨励研究（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『児童の発達段階に応じた安全教育プログラムの開発に関する実証的研究』 （研究課題番号２２９０８００５） ２．日本教育弘済会教育論文　奨励賞受賞 『安全教育のレリバンスに関する研究』 ３．科学研究費補助金　奨励研究（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『安全教育のレリバンスに関する実証的研究』 （研究課題番号２６９０８０４０） ４．ＪＲ西日本あんしん社会財団研究助成（研究代表者） 「児童の発達段階を考慮した『有効な』安全教育プログラムの構築に関する実証的研究」	 平成 25 年４月～平成 26 年３月 平成 25 年３月 平成 26 年４月～平成 27 年３月 平成 27 年４月～平成 28 年３月	 安全教育における、発達段階についての研究はまだ未開発である。しかし、発達段階を考慮しなければ、真に効果的な安全教育はなされない。本研究では、公立小学校の協力校等で授業実践を行い、そのデータをもとに、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムを作成することを目的とする。 大阪教育弘済会の教育論文に応募したところ、個人部門で上部団体の主催する日本教育弘済会の教育賞に推薦され、奨励賞を受賞した。 １つの授業を低、中、高学年で実施し、安全教育と児童の発達段階の妥当性を検証した論文である。 これまでの安全教育の現状と課題として、小学校６か年というスパンにおける、児童の学齢の差異を考慮した安全教育プログラムの開発がされてこなかった。また、日常の山積する課題対応に追われる多くの公立学校において、年間で実施可能で、かつ有効な安全教育プログラムの開発がされてこなかった。そこで本研究課題では、安全教育内容の有効性の検証と開発、児童の学齢による安全教育内容の有効性の検証、年間で実施する安全教育プログラムの開発を目指した。 これまでの研究の中で、申請者が考案した「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会誌（第３巻第１号）P62-66　2010　松井）を用いて実践、検証した結果、学年に応じた有効な安全教育内容が明らかになってきた。そこで本研究課題においては、安全教育内容の有効性の検証と開発・複数小学校を対象にした児童の学齢による安全教育内容の有効性の検証・児童、教職員、学校に応じた安全教育プログラムの開発を行う。

５．科学研究費補助金　基盤研究Ｃ（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『小学生の学年に応じた安全教育プログラムの開発』 （研究課題番号１６ｋ０４７９１の研究代表者として、研究分担者１名体制で研究を率いた）	平成 28 年度～平成 30 年度	本研究は、小学校６ヵ年というスパンにおける小学生の学年を考慮し、低・中・高学年それぞれにおいて、その学年に妥当で有効な安全教育プログラムを開発することを目的とするものである。本研究課題では、これまでの事件や災害で失われた幼い命が残した教訓を生かした教材開発を行い、その妥当性と有効性を調査、検証し、全国の学校において実施可能な、有効で汎用性の高い安全教育プログラムを開発する。本研究は、安全で安心な社会の構築の一助となることはもとより、児童の命を守るための研究である。
６．科学研究費補助金　基盤研究Ｃ（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『「有効性」と「持続性」を持つ包括的な学校安全プログラムの開発』 （研究課題番号 19K02694 の研究代表者として、研究分担者１名体制で研究を率いている）	令和１年度～	これまでの学校安全に関する取組や研究は、事件や事故、災害が発生し、社会的な要求が高まった時期に進められてきた 。内容に関しても、社会的な関心や要求に呼応して取組まれてきており、包括的な学校安全に関して継続的に取組まれていないという課題がある。 要因として、これまでの学校安全に関する取組や研究が、学校や児童生徒の安全にとって「有効性」を持っていたのかという検証がされてこず 、成果の曖昧さから「持続性」を持って取組まれてこなかった。そこで本研究課題は、学校や児童生徒の安全において「有効性」を持ち、「持続性」を持って取り組まれる、「包括的な学校安全プログラム」を開発することを目的とする。
７．JR 西日本あんしん社会財団研究助成（研究代表者） 「事件・災害の未体験教員による語り継ぎのジレンマ研究」	令和２年度	本研究課題では、学校教育現場で関連のある事件を知らない、あるいは被災体験のない教員が、児童や学校内外において「語り継ぎ」の責務を背負った時、そこに生じる可能性のあるジレンマについて、モデルとなる教員へのインタビューと「環状島」をモデルに研究する。そして教員が、ジレンマを乗り越えて行う「語り継ぎ」は、その対象（児童や教員）に対してどのような有効性を持つのかを明らかにすることを目的とする。
８．奈良学園共同研究助成金（研究代表者） 「小学校における探究型防犯学習カリキュラムの開発」 （研究代表者として、共同研究者３名体制で研究を率いた）	令和３年度	本研究課題では「子供の視点（必要性）を出発点とした探究型防犯学習」のカリキュラムデザインについて開発、実践、検証することによって、子どもたちの安全・安心な日々（ウェルビーイング）に結びつく研究とすることを目的とした。本研究で開発しようとする探究型防犯学習では、図２における探究型学習のプロセスによって、児童がいかなる場所においても自ら判断することができる危険予知・回避力を身につけることができるカリキュラムモデルを作成し、実践、検証を行なった。
9. 奈良学園大学学部共同研究（研究代表者） 「教員志望学生の資質形成に資する Global Perspective の有効性に関する研究」 （研究代表者として共同研究者３名体制で研究を率いた）	令和４年度	本研究課題では、これからを生きる子供たち、そして子供の教育に携わる教師の視点（perspective)は、国籍や人種、文化、言語、習慣の枠にとらわれない（Global)ものでなければならない。これが、本研究で教育に関連したグローバル・パースペクティブの必要性と有効性を探究しようとすることを目的とした。そこで、Global Perspective 調査用紙を作成し、フィールドワークを中心として研究を推進した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				

1　「いのちの教育」	共著	平成 21 年 10 月	東洋館出版	平成１３年６月８日に発生した児童殺傷事件。それ以来、安全教育と道徳を中心として、児童の安全と安心のために取り組んできた８年間の教育・授業実践を２６例載せた。教育関係者がすぐにでも実践できるように、指導計画や板書例を掲載し、授業による児童の変容についても、具体的に記述した。 Ｂ５判　全１２４頁 編者：大阪教育大学附属池田小学校 共著者：藤田大輔・佐々木靖・浅田正志・井上伸一・岩井伸夫・岩井陽介・江原悦子・小原愛子・垣内幸太・鎌田菜絵・岸本卓也・坂下剛・佐藤学・田中毅・竹本和也・辻匡美・冨田有香・長野純子・中村晶子・西江なお子・西村恭美・能川正人・土師尚美・林美恵子・孕石泰孝・平田葵・升村誠志・松井典夫・松浦恵・松原梨沙・薬師寺美江・矢藤学・柳井友裕・山崎聡・龍神美和 本人担当部分： 「いのちをつなぐ機器ＡＥＤ」 （１１５頁－１１８頁）を単著 「命のバイスタンダー」 （１１９頁－１２２頁）を単著 子供たちの命を守り、安全で安心できる生活のために、学校は何ができ、また、何をすべきかという命題のもとに、学校安全に関わる著者陣が原稿を寄せてできた本。この安全・安心に関する問いかけに対しては、すでに多くの解説書や教材集、マニュアル本等が刊行されている。しかしそれらは、ともすれば上からの押し付けのような論が多い。そこで本書では、各著者が「私はこう考えている」「私はこんな体験をした」という、お話風の「語り（ナラティブ）」として編集された。
2　「学校安全　３６のナラティブ」	共著	平成 26 年 3 月	教育出版	Ｂ５版　全１５７頁 編者：長尾彰夫 共著者：小林忠三・浜條信彦・松井典夫・若狭孝太郎・神田英幸・前馬晋策・丸山涼子・植木美佳・砂田信夫・中井尚人・佃繁・松田智子・伊原正俊・藤田大輔・諏訪清二・村川雅弘・立田慶裕 本人担当部分： 「スリッパとＩＤカード」（pp14-15） 「安全な公園は危険な公園？」（pp18-19） 「わるい人とはどんな人？」（pp25－27） 「いかのおすしとおはしも」（pp48－49） 「休み時間に地震が起きたらどうしよう」（pp54－57） 「いろいろな不審者対応訓練」（pp62－65） 「火災現場に戻らない、は正解か」（pp74－77） 「命のバイスタンダーの授業から」（pp82－87） 「溺れかけた兄妹を教材にして」（pp108－111）

3 「教育フォーラム５６ アクティブ・ラーニングとは何か」	共著	平成 27 年 8 月	金子書房	本書は、アクティブ・ラーニングのために必要な、課題意識の喚起のさせ方、多様な発想・アプローチへの目の開かせ方、粘り強い課題取り組みへの支援、課題解決の結論の検討や再吟味の促しといった、さまざまな働きかけ、指導の実際を具体的に提示したものである。 Ａ５判　全１６９ページ 共著者（執筆順）：溝上慎一、加藤明、伊崎一夫、鎌田首治朗、前田洋一、岸周吾、芝池宗克、米川雅士、武谷嘉之、松井典夫、瀧明知恵子、井上信子、梶田叡一 本人担当部分：「児童にとって『有効な』安全教育プログラムに関する一考察」（pp. 105-114）
4 「どうすれば子どもたちのいのちは守れるのか －事件・災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」	単著	平成 29 年 2 月	ミネルヴァ書房	本書は，著者が、大阪教育大学附属池田小学校において、同僚とともに実践してきた不審者対応訓練や ID カード等による学校安全対策，様々な「いのちの教育」の授業の事例などを通じて，これまで当たり前とされてきた「安全」についての考え方や方法を根本的に見直し，これからの学校安全と安全教育のあり方をさぐることを目的とした書である。その中で、学校の安全を担う教師の役割、職責、使命感、資質能力について記述した。 Ａ５判　全２１６ページ
5 教育フォーラム ６０ 「深い学びのために　－アクティブ・ラーニングの目指すもの」	共著	平成 29 年 8 月	金子書房	アクティブ・ラーニングの中で提唱される「深い学び」については、一定の教授・学習活動のパターンに関わるものではない。本書では、どのようにすれば「深い学び」になり、実現できるのかを、具体的、かつ実践的な提案で記している。 Ａ５判　全１４５ページ 共著者（執筆順）：梶田叡一、古川治、鎌田首治朗、伊崎一夫、湯峯裕、大畑健美、菅井啓之、後藤紗貴、金山憲正、石森広美、善野八千子、瀧明知恵子、岡村季光、松井典夫 本人担当部分：「震災における教師の役割を考える」（pp. 125-134）を共著（岡村季光、松井典夫）

6「教師のための教育法規・教育行政入門」	共著	平成 30 年 3 月	ミネルヴァ書房	本書は教職入門、教職概論、教職行政論、教員採用試験対策のテキストを目的として著述された。初学者にむけて学校教育のしくみを法的に理解できるよう、事例などをまじえ具体的に解説している。また、巻末に「主な教育法規」を収録した。 Ａ５判　全２１０ページ 共著者：古川治、五百住満、八木眞由美、今西幸蔵、松井典夫、藤本裕人、藤田敏和、冨江英俊、中村豊、岡邑衛 本人担当部分： 「教育職員免許法」（pp14-15） 「校務分掌」（pp38-39）を単著 「校長と教諭の職務」（pp40-41） 「司書教諭の職務」（pp42-43） 「教員免許の更新制」（pp108-109） 「学校保健・安全と法規」（pp152-153） 「学校保健安全法」（pp154-155） 「安全点検と安全教育」（pp156-157） 「災害安全・防災教育」（pp158-159） 「養護教諭の職務」（pp160-161） 「学校事故と国家賠償法」（pp162-163） 「食育基本法」（pp164-165） 「学校給食法」（pp166-167）

7 「３年目教師　勝負の図工授業づくり」	編著	令和１年７月	明治図書		本書は図工科指導法のテキストを目的として、また、新任から３年目の教師をターゲットに、図工における有効な実践と、教師力向上を目的として著述された。改訂学習指導要領とも対応させ、カリキュラムマネジメント、ICT の活用、チームとしての学校等を関連させて授業実践ができるように構成した。 Ａ５判　全 127 ページ 編著者：松井典夫 共著者：松井典夫、森治健太 本人担当部分： 「はじめに」（p3） 「第１章とびら」（pp8-9） 「第１章-1 授業に役立つ学習指導要領の読み方」（pp10-11） 「第１章-2 材料との対話が授業を決める」（pp12-13） 「第１章-3 用具は『創造的な技能』への架け橋」（pp14-15） 「第１章-4　題材による柔軟で効果的な場の設定」（pp16-17） 「第１章-5　鑑賞活動と技能の融合」（pp18-19） 「第１章-8　「『安全』は信頼への架け橋」（pp24-25） 「第１章-10　活動過程を評価する」（pp28-29） 「第２章とびら」（pp30-31） 「第２章-1　学級開きでクラス旗づくり」（pp32-33） 「第２章-2　けがのない彫刻刀の授業で一致団結」（pp34-35） 「第２章-3　サイレント美術館でルールを守れるクラスに」（pp36-37） 「第２章-5　図工の時間のあいさつとルールで集中力」（pp40-41） 「第２章-6　個を高める指導で自尊感情の高いクラスに」（pp42-43） 「第２章-7　教室に遠足を再現しよう」（pp44-45） 「第２章-10　全校図工で１年生歓迎会を作ろう」（pp50-51） 「第２章-13　６年国語科　『やまなし』で場面を想像しよう」（pp56-57） 「第２章-14　４年算数科　立方体を考えて作ろう」（pp58-59） 「第２章-15　６年理科　月と太陽で宇宙を作ろう」（pp60-61） 「第２章-16　４年社会科　地形図模型を作って国土の理解」（pp62-63） 「第２章-17　６年外国語活動　世界の名産を調べて作ってギャラリートーク」（pp64-65） 「第２章-18　５年道徳科　資料に自己投影絵画」（pp66-67） 「第２章-19　地域の人材を生かしてチーム学校」（pp68-69） 「第２章-20　地域の伝統文化を図画工作で」（pp70-71） 「第２章-21　異学年交流で共同制作」（pp72-73） 「第２章-22　教師の専門性を生かしてチーム図工」（pp74-75）

8 2019年改訂　新学習指導要領　記入文例集」	共著	令和2年2月	文溪堂	「第2章-24　小中と美術館連携でアートカフェを開こう」（pp78-79） 「第2章-25　災害時のメンタルケアアートプロジェクトの実践」（pp80-81） 「第2章-26　校内の安全標識を作ろう」（pp82-83） 「第2章-27　看板で防犯対策」（pp84-85） 「第2章-28　立体安全マップを作ろう」（pp86-87） 「第2章-29 災害の教訓を絵本で伝えよう」（pp88-89） 「第2章-30 『安全かるた』で知識と意識を高めよう」（pp90-91） 「第2章-37 ブラックライトと蛍光塗料でルミナリエ」（pp104-105） 「第2章-38 アルミ板でミラーワールド」（pp106-107） 「第2章-39 技能を集結して食品サンプルづくり」（pp108-109） 「第2章-40 紙テープの変身」（pp110-111） 「第2章-41 砂でサンドアート」（pp112-113） 「第2章-42 名画が「わたしだけの名画」に」（pp114-115） 「第3章　とびら」（pp116-117） 「第3章-1 ワークシートは『夢への扉』」（pp118-119） 「第3章-3 即時評価と情報共有の画用紙」（pp122-123） 「第3章-4 身の回りのグッズの『第２利用』」（pp124-125） 「第3章-5 『想いの履歴』で児童把握
（学術論文） 1.「大阪教育大学附属池田小学校『安全科』のカリキュラムに関する一考察　－『安全安心様相図』を用いて-」 Human education and The dynamic of Art － Art experience and education at schools － （査読論文）	単著	平成26年3月	大阪教育大学大学院学校教育専攻　教育学コース　修士論文	大阪教育大学附属池田小学校においては、「安全科」を設置し、安全教育の研究と推進に努めてきた。しかしながら、その系統的な安全教育も十分ではない点がある。特に附小「安全科」においては、カリキュラムを作成する際に、１つの授業をどの学年に配当するかは、実証的な根拠が十分あってのことではなかったことが挙げられる。そこで本研究においては、児童の安全に対するレリバンスRelevance（知識・技能・行動・情緒面における妥当性）を検証し、そのことで児童の学年を考慮した系統的な安全教育カリキュラム編成に関して考察した。

監修：梶田叡一、編著：古川治、南山晃生、共著者：今宮信吾、盛田恭平、長野純子、松井典夫、栫井大輔、五十川昌宏、龍神美和、西江なお子、瀧本哲弘　全159頁
本人担当部分：
低学年　各教科の学習に関する所見図画工作、18頁－19頁
中学年　各教科の学習に関する所見図画工作、60頁－61頁
高学年　各教科の学習に関する所見図画工作、112頁－113頁

2.「人間教育と美術の力－美術体験と学校教育－ Human education and The dynamic of Art －Art experience and education at schools －」 （査読論文）	単著	平成 26 年 4 月	人間教育学会誌 「人間教育学研究」 創刊号ｐｐ８９－９５	図画工作・美術教育において、学習指導要領などに随所に現れる「自由」「創造的」「個性的」「喜び」という用語から教科としての特性と課題が見える。それらの用語は，図画工作・美術の他教科にはない特性を表すと同時に，捉えようによると教科としての「ゆるみ」に繋がりかねない。そこで本稿では、図画工作・美術教育の課題を歴史的背景から紐解くと同時に、図画工作・美術科が持つ教科としての特性を、鑑賞教育を中心とした特徴的な実践から論じた。
3.「小学校美術教育の方法と技術に関する実践研究Ⅰ　～ＩＣＴを活用した絵画教育の可能性～ Practical Research of Methods and Techniques of Elementary School Art Education -Possibility of Painting Education Using ICT-」	単著	平成 26 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第１集 ｐｐ１０９－１１５	戦後の美術教育史の中で、絵画教育が敬遠され、衰退してきた感は否めない。その理由として、絵画教育は、「上手」「下手」と2局的に、即時的に、そして結果的に評価されるため、授業者にとっても児童にとっても、それぞれの理由で積極的に取り組む関心・意欲・態度を逸してきたのだと考えられる。 そこで本稿では、新たな絵画教育の方法として、ＩＣＴ機器を活用した動画による鑑賞活動を取り入れた授業実践を紹介し、その授業の方法から、新たな絵画教育の方法や、美術教育の価値について論じた。
4.「小学校美術教育の方法と技術に関する実践研究Ⅱ　－小中連携教育の意義と課題－ Practical Research of Methods and Techniques of Elementary School Art Education ― Significance and Problems of elementary and junior high education cooperation ―」 （査読論文）	単著	平成 26 年 12 月	人間教育学会誌 「人間教育学研究」 第２号 ｐｐ１２１－１２９	小学校と中学校の義務教育期における教育の役割は、人間教育の観点での土台を築くものである。その重要性から、学校教育活動は小学校と中学校の連携を念頭に置き、共に理解し、共に手を携えた教育を実践する試みが多くなされている。 本稿においては、大阪教育大学附属池田地区合同研究会における具体的な取り組みから、小中連携の課題と意義について考察した。
5.「学校安全・安全教育」	単著	平成 27 年 1 月	平成２４年度～平成２６年度科学研究費補助金（基盤研究(B)課題番号24330254「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書「いのちの教育カリキュラムモデルの開発と実践」 ＰＰ７７－９５	本稿は、平成２４年度～平成２６年度科学研究費補助金「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」の研究成果報告書「いのちの教育－カリキュラムモデルの開発と実践－」の中の、第４章 学校安全・防災部会の報告、第１節学校安全（PP77-81）と第２節安全教育（PP82-95）の部分を単著したものである。主に大阪教育大学附属池田小学校における学校安全の取り組みや、「安全科」において取り組んだ安全教育の方法と実践内容について述べた。
6.「児童の発達段階を考慮した安全教育プログラムの開発に関する研究　－「児童の安全意識尺度（SASC）」の開発に関する基礎的研究－ A study on the development of safety education program in consideration of the developmental stage of the children -Basic research on the development of “Safety Awareness Scale of Children (SASC)”-」(査読論文)	単著	平成 27 年 12 月	人間教育学会 「人間教育学研究」 第３号 ｐｐ９７－１０６	本研究においては、より汎用性の高い安全教育プログラムの開発を念頭に、児童の発達段階を考慮した安全教育プログラムの開発に関する研究における、「児童の安全意識尺度（SASC）」の開発に関する基礎的研究を行うことを目的とした。調査結果を質問内容に着目した考察と、授業時の児童の様子に着目した考察を行った。その結果、本研究で取り上げた実践例である「知らない人にはついていってはいけません」という教えを題材とした安全教育内容は、低学年が最もその妥当性が高いと見なすことが可能となった。

7.「学校安全の課題と展望に関する一論考　～教訓と教材と教師について～」	単著	平成 28 年 2 月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」 pp。56-60	平成２７年７月に、奈良県香芝市で小学校６年の女児が誘拐された事件は世間を震撼させた。2004 年の奈良小１女児殺害事件や 2014 年に発生した神戸女児遺体遺棄事件、2015 年の和歌山小５殺害事件など、これらの連れ去り事件では、未来のある小学生の児童が命を失うという、最悪の結末を迎えている。防犯に関して、具体的な事件を想起しながら、教訓と教材と教師、という３つの視点で記述した。
8.「事件 ・事故・災害時における学校対応と児童の安全・安心に関する研究 A Study of school`s response to incidents ,accidents , disasters , and safety and security of children.」 （査読論文）	共著	平成 29 年 12 月	奈良学園大学人間教育学研究会 「人間教育研究」 第1号（創刊号） PP.55－71	これまで、児童生徒が被害に遭った事件・事故・災害において、その犯罪機会や動機、あるいは自己の発生原因や災害による被災状況については多く語られ、研究されてきた。本研究では、それら事件・事故・災害において、学校はどのように対応し、その対応は適切だったのかについて、過去の事例研究をもとに論考した。 著者／松井典夫・古田浩大・竹中遙一郎・中本将馬・池上紗耶・森高千晶・戸川理夏 本人(松井)は、本研究の企画、構成、授業実践、論文執筆を担当した。
9.「被災地小学校での絵画によるケアの実践 －熊本地震復興アートプロジェクトの児童と教師たち－ Practice of care by painting at elementary school in disaster area －Kumamoto earthquake reconstruction art project and children and teachers -」	単著	平成 30 年 3 月	奈良学園大学紀要 第８集 PP.87-95	本研究は、災害時における学校、教師、児童生徒に関連して２つの課題を見出した。一つは、災害時における「教師」を主体として見たとき、その多忙感を超えた使命感で避難所を運営する教師の姿は当たり前なのではないという認識の必要性である。もう1点は、防災教育のありかたとして、それは次に来たる災害への準備、対応のための教育という意義は認められるものの、その視点を災害後の心のケアに着目した教育に置き、その方法を構築していく必要性があるということである。 これら課題の着眼から、本研究では熊本地震において、学校再開直後に実践された復興アートプロジェクトに注目した。そして、「心の復興」を目的とする教育活動の有効性を、児童、教師、教材の３つの視点から検証した。
10.「教師教育の視座における国際理解教育の必要性への考察　－教職志望学生の開発途上国研修におけるテキストマイニングから－ A study on the necessity of international understanding education in the viewpoint of teacher education. -From text mining in developing country training for teacher aspiring students-」	単著	平成 30 年 9 月	奈良学園大学紀要 第９集 PP.137-146	近年我が国において、日系人を含む外国人の滞日が増加している。それに伴い、ニューカマーの児童生徒への教育や対応、社会的問題として、経済的危機（貧困)、学校不適応、母国への郷愁、それらが複合的に混在した結果によるいじめ等など、多くの問題が指摘されている。本研究では、それらニューカマーへの教育をはじめ、国際理解は教師にとって重要な資質能力であるにもかかわらず、教師教育の視座において、その認識や対応が進んでいないことを課題とした。ターゲットとした開発途上国研修は、教職志望学生の国際理解を進め、有効であることは明確となったが、グローバルパースペクティブや教員の資質能力向上に関しては、さらなる研究が必要であることが示唆された。

11.「災害時における教師の職業的役割　－「使命感」と「多忙感」に着目して－ Occupational role of teacher in case of disaster -Focusing on “sense of mission” and “busy feeling”-」 （査読論文）	共著	平成 30 年 9 月	日本教師学学会誌 「教師学研究」 第 21 巻　第 2 号 PP. 13－21	本研究では，災害時において，その教師の「職業的使命感」は統制の効かない状況における「多忙感」を凌駕するのではないかという仮説を立てた。そこで熊本地震において被災した学校に勤務する教員，非災害地域として，民間主催の研究会に参加した小学校教員，及び関西圏の小学校教員との比較アンケート調査と熊本群の小学校教師 6 名に非構造化インタビューを実施した。その結果，使命感に関しては，被災の有無にかかわらず高い使命感を有している反面，被災を経験した教員において，多忙感や内的統制感の高さが，自らの存在価値や意欲の高まりにつながっていない実態が明らかになった。 著者／松井典夫・岡村季光 　本人(松井)は、本研究の企画、構成、調査、論文執筆を担当した。 論文については、1．本研究の背景　4．まとめと考察を担当した。
12.「教職志望学生が危機管理意識の国際的な相違を認識することの有効性に関する考察 －『学校安全』における留学生と日本人学生の学びの比較から－」	単著	平成 31 年 3 月	奈良学園大学紀要 第１０集 pp. 113－122	本研究では、北海道地震における訪日外国人が直面した課題がこれからの時代において看過できない課題であり、また、昨今の学校教育における外国籍児童生徒の増加に伴い、これから教職を志す学生が「何を学ぶのか」という視点に立ったとき、諸外国の危機管理意識やその方法について学ぶことの必要性について考察した。「学校安全」の授業における中国人留学生と日本人学生の学びについて比較検討した。テキストマイニングによって分析を行った結果、危機管理において「命」というものに最大の重きを置き、「人の命も大切であり、できれば救いたい」という感覚においても中国人留学生と日本人学生は同様の質を示すことが示唆された。
13.「教員による「語り継ぎ」のジレンマに関する研究－事件・事故・災害の未体験教員と『環状島』をモデルとして－」	単著	令和 1 年 9 月	奈良学園大学紀要 第１１集 pp. 135－142	本研究では、被災体験のない、あるいは学校教育現場に関連した事件について、「事件を知らない」教員が「語り継ぎ」の責務を負った時、そのジレンマについて明らかにすることを目的としてきた。その中で、「語り継ぎ」のジレンマは、環状島（宮地,2007）のポイントとインタビューによって明らかになった。また、それぞれのモデルがそのジレンマを乗り越えるきっかけとして、立場の変化や他者からの評価が強く働いたことがわかった。
14.「教職志望学生の『学校安全』に関する体験的学修の有効性」	単著	令和 2 年 1 月	全国私立大学教職課程協会　「教師教育研究」 第３２号 pp. 63－74	本研究では、教員の資質能力としての学校安全の必要性の認識と実行力は、教員になる前の段階、教職志望学生の学修の中で育まれることが有効なのではないかという仮説を立てた。そのような中、2017 年、教職課程コアカリキュラムにおいて、「学校安全への対応」が必修項目とされた。これまでの課題の経緯を踏まえ、教職志望学生がいかに「学校安全」を学び、それが教職への資質能力へとどのように結びつけることができるのか、計画と実践、評価と検証が必要になってくる。 　本研究においては、教職志望学生が学校安全を学ぶひとつのモデルとして、体験的学修が、教員の資質能力としての学校安全への意識にどのように結びつくのか、実践と学生の反応から検証した。

15.「学校教育における事件・災害の伝承に関する一考察　－非体験教員による伝承の実態－」	単著	令和２年４月	大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター「学校危機とメンタルケア」第12巻 pp.1-13	本研究は、「非体験教員」による事件・災害の伝承に着目した。学校教育現場において、あるいは就学児童が命を失った災害や事件について、その当該校は教訓の伝承、あるいは再発防止の責務を否応なく背負ってきた経過がある。しかし、その事件や災害からの時間の経過は、「体験」教員の減少、あるいは不在により「非体験」教員へと伝承の責務は移行していく。その中では少なからず、「体験していないのに何が語れるのか」「体験者と同じ温度や強さで語れない」というジレンマの存在がある。 そこで本研究では、伝承の責務を担う事件・災害の「非体験」教員を対象にインタビューを実施し、環状島をモデルとして検証を試みた。そこでは、「非体験教員」が伝承する上で、「伝承のジレンマ」「非体験教員が感じる壁」「伝承していく上での温度差」の存在が示唆される結果が得られた。
16.「総合学習における地域教材の目的・課題の質的検討 A qualitative examination of the purpose and problem of teaching materials with a regional theme in integrated learning」	単著	令和２年７月	人間教育 第 3 巻第 7 号 pp.137-146	総合学習における学習課題として、地域教材は重要な意味を持つことは周知であろう。しかし、地域教材から「何を」学ぶのか、という総合学習の目的、あるいは成立要件の要素として、19 本のリポートから課題を見出した。本研究では、総合学習における地域教材に込められたふるさとへの愛着や誇りが、子供たちの資質・能力をどのように形成するのかという、地域教材のレリバンスを質的に検討することを目的とした。
17.「総合的な学習の時間における 『探究型防犯学習』のカリキュラム研究 Curriculum research of “inquiry-type crime prevention leaning” in the Integrated Studies」	単著	令和２年９月	人間教育 第 3 巻第 9 号 pp.185-192	本研究では、「子供の視点（必要性）を出発点とした探究型防犯学習」のカリキュラムデザインについて提案することを目的とする。探究的な学習が実現される要素として、「課題設定」の段階が重要であるということであった。体験的な学習や、情報収集し、分析したことを表現する総合学習は、これまでも多様な実践が試みられ、成果を上げてきた。しかし本研究からは、探究的な学習のカリキュラムが、改めて学習者から見出されることの重要性が示唆されたのである。
18.「カリキュラム・ポリティクスの視座における 『社会に開かれた教育課程』の論考 From the perspective of Curriculum Politics Discussion of ″Curriculum open to society″」	単著	令和２年10月	人間教育　第３巻第 10 号　pp.241-247	本研究は、カリキュラムをポリティカルな視座で解釈しつつ、「社会に開かれた教育課程」について論考した。子供たちが出会う学び（カリキュラム）とは、一人ひとりの子供が主体となって社会で、世界で生きていく資質・能力を身につけるものであり、その学びの内容、プロセスの総体がカリキュラムであるという視点を明確にすることを目的としてきた。カリキュラムとは、子供の生きる意味という視点で哲学的な生や死の意味をも含むものであり、社会的要請にこたえるためのものではないということを論じた。

19.「カリキュラム・マネジメントの今日的課題と成立要件の考察 ―M. Skilbeck の SBCD 理論を基点に― Consideration of today's issues and requirements for curriculum management － Based on SBCD theory by M. Skilbeck －」	単著	令和 3 年 2 月	人間教育　第 4 巻 第 2 号　pp.15-21	本研究は、M.スキルベックによる SBCD 理論を基点に、カリキュラム・マネジメントの今日的課題について言及し、その成立要件について考察することを目的とする。本研究ではその課題設定として、カリキュラム・マネジメントの主体は学校（教師）であることの認識はどれほどなされているのか、という課題意識が発端となっている。そこで本研究では、スキルベックの SBCD 理論、2017・2018 年改訂学習指導要領、その改訂の経過で発せられた論点整理をつぶさに比較、分析することによって、カリキュラム・マネジメントの成立要件について考察した。
20.PISA と総合的な学習の時間を起点としたカリキュラム観の論考 Study of the curriculum interpretation as starting from PISA and integrated leaning	単著	令和 3 年 12 月	奈良学園大学紀要 第 14 集 pp.149-156	第 1 回目の PISA が、2000 年の春、世界で 32 カ国、265000 人の 15 歳生徒が調査に参加した。日本では高校 1 年生の抽出された生徒、約 5100 人が参加した。この世界で初めての試みの結果、学力が「測られ」、思い込みで通用してきた各国の教育におけるアセスメントが覆されることになった。本研究では、カリキュラムは子供のための「地図」なのか、ナショナル・カリキュラムとしての「地図」なのか論考し、明確にしていくことを試みた。
21.学校安全・避難訓練と生徒指導 -避難訓練のマンネリズムと児童の意識変容に関する実証検証-	単著	令和 4 年 2 月	特別活動と積極的な生徒指導　-社会の形成者としての資質を涵養する特別活動- 平成 30 年～令和 3 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）報告書	学校の安全、とりわけ児童生徒の安全に関する取り組みついては、「その時何があったか」ということに大きく依拠していると松井（2017）は指摘している。あるいは時間の経過による意識の風化作用や、被災地、あるいは被害にあった地域、学校とその他との「温度差」に関する課題もある。そこで本研究では、小中学校における避難訓練に関連する実践について振り返り、「児童生徒の意識変容」について検証し、効果的な避難訓練カリキュラムについて考察することを目的とした。
22.　学校危機の定義、継続、変化に関する考察 ～石巻市立大川小学校津波事故と大阪教育大学附属池田小学校事件を事例に～	単著	令和 4 年 7 月	人間教育　第 5 巻 第 1 号　pp.1-11	本研究は、学校管理下における危機マネジメント（危機管理と呼ばれるものやその対応を含めた意味で）の研究の序章として、「学校危機」という概念について、附属池田小学校事件と大川小学校津波事故の 2 つの事例から考察し、「学校危機」の概念について定義することを目的とした。そこで大川小学校津波事故と附属池田小学校事件という二つの事例から、危機は継続すること、そして継続の過程でターニングポイントが訪れ、その選択的な対応が危機の継続性や強度に影響を及ぼすことがわかった。
23.「ポスト・コロナのカリキュラム論考　～学校行事の変更・縮小と不登校問題を起点に～」	単著	令和 5 年 3 月	奈良学園大学紀要 第 15 集 pp.165-173	本研究は、コロナ禍における学校休業以降において生じたカリキュラムにおける課題（脆弱性 fragile）を明らかにし、ポストコロナ（Post-Corona）のカリキュラムイノベーションの可能性について論考することを目的とした。その結果、コロナ禍において、教師は必然的にカリキュラム・デベロッパーとなり、とくに特別活動の領域で学校行事を変更・縮小するなどし、それは単なる変更・縮小ではなく、そこに児童生徒にとってより良い学習体験となるよう、工夫してカリキュラム・マネジメントを実践したことがわかった。

（教育誌等）				
1.「美術における『鑑賞教育』のあり方　～小学校図画工作に焦点を当てて～」	単著	平成 25 年 2 月	「教育PRO」　第45巻 第17号 通巻1716号、ERP、pp. 6-10	本稿では、小学校図画工作科における鑑賞教育のあり方について再考し、提案した。児童が新たな課題や素材に出会った時、そこから何を生み出そうとしているかという、「個の認識」の萌芽が見られる。それはまだ、イメージが具象化していない段階であり、自由闊達なものである。そして造形表現活動を始めた時、そのイメージは次第に具象化し、題材の具現化が始まる。この時、「個の認識」はいったん完結したように感じられるが、それは自己中心的なものであり、高次の自己認識とは言い難い。そこで鑑賞活動を取り入れることの有効性について述べた。
2.「これからの学校安全について考える　～第１回　事件の教訓から学校安全の実態を見る～」	単著	平成 27 年 8 月	「教育PRO」第45巻 第17号 通巻1786号、ERP、pp. 26-27	例えば、児童が何者かに連れ去られそうになったとき、大声を出した（いかの「お」すし）結果、その大声を最悪の方法で犯人が止めようとする場面を想像する。だが、「大声を出す」と教えたのは、現在の学校での安全教育の王道なのである。その教えを頑なに守ろうとした結果、不安全を招く可能性があることを認識しなければならない。ここでは、岡山県での安全教育実践を例に挙げ、安全標語に頼らない、「有効な」安全教育について述べた。
3. 「これからの学校安全について考える　～第２回　子どもの命を守る『有効な』安全教育とは～」	単著	平成 27 年 8 月	「教育PRO」第45巻 第18号 通巻1787号、ERP、pp. 26-27	警察庁のまとめによると、子供の連れ去り（略取・誘拐）事件のうち、発生時間帯として最も多かったのが、午後４時から午後6時の時間帯とされている。この時間帯は、言わば下校時間帯にあたる。奈良小１女児殺害事件以降、この時間帯は「魔の時間帯」とされ、子供たちの安全を守ろうと、地域住民による見守り隊など、児童の下校を見守る大人の姿が多く見られるようになった。地域住民が努力しても、なぜ犯罪は減らないのか。事件の教訓を視点に学校安全の実態について述べた。
4.「これからの学校安全について考える　～第３回　学校安全と教訓～」	単著	平成 27 年 9 月	「教育PRO」第45巻 第20号 通巻1789号、ERP、pp. 26-27	2001年6月に発生し、世間を震撼させた大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件では、「学校安全神話の崩壊」と言われた。しかし、学校がなぜ安全だと思い込まれていたのだろう。その思い込みが、８名の児童の大切な命を失う結果となったのである。今もなお、学校安全に対する思い込みはないだろうか。本稿では、「これまでの」学校安全に対する思い込みを検証し、考え直し、認識を改めていく必要性を述べてきた。最終回となる本稿では、学校安全を支える教訓について述べた。
5.「教育実習の課題と展望　第１回　教育実習の意義～その必要性と質～」	単著	平成 27 年 12 月	「教育PRO」第45巻 第28号　通巻1797号、ERP、pp. 14-15	教師たちは今、対応すべき問題や課題は多様化し増大している。大切なことは、「では、この流れゆく社会の中で求められる教師像に対応する資質・能力を、教員養成系大学や学校現場で、どのように育むのか」という現実的に必要な視点である。本稿ではその中でも特に、教員になる上で必修である教育実習について、そのあり方や価値、抱える課題について論考し、教育実習のこれからの展望を捉えていくことを目的として記述した。

6.「教育実習の課題と展望　第２回　教育実習の実態～実施する大学と受け入れる学校～」	単著	平成 28 年 1 月	「教育PRO」第46巻 第1号　通巻1798号、ERP、pp. 26-27	いわゆる母校実習については、“大学側の対応や評価の客観性の確保等の点で課題も指摘されることから、できるだけ避ける方向で、見直しを行うことが適当である”とあるように、公立学校にとっては、いつ何時、どのような、どこの学生を受け入れるのかという点において、不確定なのである。本稿では、受け入れる学校側の実態について記述した。
7.「教育実習の課題と展望　第３回　教育実習の役割～教職の道標～」	単著	平成 28 年 1 月	「教育PRO」第46巻 第2号　通巻1799号、ERP、pp. 24-25	教育実習の前、大学における３回生になるまでのカリキュラムの中で、介護等体験や学校支援ボランティアなど、教育という社会の一部に経験はあっても、そこにある「子どもたちに対する責任」の荷重はさほど大きくはない。しかし、教育実習は違う。おのずと「子どもたちに対する責任」の荷重は大きくなる。教育実習生は「学生」でありながら「先生」であるという、重層的立場（Student Teacher）を持つことになる。本稿では、教育実習生そのものに焦点をあて、教育実習現場での実際の学びと、その学びの有用性や効果について論考した。
8.「教育実習の課題と展望　第４回　これからの教育実習～質と夢の保証～」	単著	平成 28 年 2 月	「教育PRO」第46巻 第4号　通巻1801号、ERP、pp. 16-17	平成２７年１月に文部科学省から発信された「高大接続改革実行プラン」は、センター試験の廃止や記述式試験の導入などがセンセーショナルにクローズアップされた。高大接続改革とは、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の三者一体的改革であるという捉え方をするべきである。それは、高校での「学力の3要素」の育成と、それを受けた大学教育の質的変換、そして、高大の接続を担う大学入試制度が三位一体となった改革である。この構造を、教員養成に関わる一連の過程の中に求めるという視点で記述した。
9.　「これからの教員養成における質的転換」 第１回　教師の資質能力の変化と転換	単著	平成 28 年 8 月	「教育PRO」第46巻 第18号　通巻1815号、ERP、pp. 12-13	社会の進歩や変化のスピードは、体感できるほど早まっている感がある中で、教育の世界においてもその時流は確かに訪れてはいる。　しかしその一方で、教育そのものを担う教師の存在（意義）や資質能力、また、それらの礎となる教員養成の変化と進歩に大きな胎動は見られない。そこで本稿では、社会の変化や進歩に対応する教員養成の質的転換について、教師の資質能力、教育実習、教員採用をキーワードにして論考した。
10.「これからの教員養成における質的転換」 第２回　教員の「多忙感」と教職の実像	単著	平成 28 年 9 月	「教育PRO」第46巻 第20号　通巻1817号、ERP、pp. 14-15	次期指導要領案によると、小学校では英語教育の強化により、年間140時間の授業時数が増加する。また、プログラミング教育の導入など、その改定は、平成10年度改定のゆとり教育前への「回復」であると謳われている。このことから推測されるのは、教員の「多忙感」の増大である。第２回目となる本稿では、教員の「多忙感」に注目し、これからの教員養成について論考した。
11.「これからの教員養成における質的転換」 第３回　揺るぎない「教職の体幹」とは	単著	平成 28 年 9 月	「教育PRO」第46巻 第21号　通巻1818号、ERP、pp. 16-17	教員に求められる資質能力に関しては、これまでに幾度も答申等で整理されてきた。しかしながら、答申における「教員の資質能力」観から見て取れるのは、時代や社会の要請に応じて、その資質能力や教師像を変容させようとしながら、揺れ動いている様子である。第3回目となる本稿では、教員の資質能力について整理することによって、揺るぎない「教職の体幹」について論じた。

12.「これからの教員養成における質的転換」 第４回　「教職の体幹」を育成するカリキュラムデザイン	単著	平成 28 年 10 月	「教育PRO」第46巻 第22号　通巻1819号、ERP、pp. 16-17	大切なのは、その教師は何を持っているのか、それはどのようにして身につけたのかという点である。それは先天的なものや外見なのではなく、後天的に養成されるべきものである。本稿では、「子どもに好かれる資質」を後天的に養成するカリキュラムデザインについて論考した。
13.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第1回　震災をめぐる教師の「使命感」と「多忙感」への着目	単著	平成 29 年 6 月	「教育PRO」第47巻 第14号　通巻1839号、ERP、 pp. ２８－２９	災害時はまさしく、自己のコントロール（統制）が効かない特殊な状況下といえる。本研究では、災害時において、教師の「職業的使命感」は統制の効かない状況における「多忙感」を凌駕するのではないかという仮説を立てた。そして、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとし、災害時における教師の“ノブレス・オブリージュ”の実態を明らかにすることを目的とした。
14.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第２回　「災害支援者」としての教師の役割	単著	平成 29 年 7 月	「教育PRO」第47巻 第15号　通巻1840号、ERP、 pp. ６－７	「災害対策基本法」は、東日本大震災後、2回の改正を繰り返した。2013年6月の改正における「被災者保護対策の改善」で、「緊急避難場所」と「避難所」が明確に区別されることとなった。避難所となった学校において、教師たちは「役割分担が決められていない」状況の中、「災害時に救援する職業」として、目の前の災害に救援する役割を担うことになる。災害時の救援対策訓練を受けた「職業的災害救援者」ではなく、教師としての「使命感」で救援に従事する教師の実態について述べた。
15.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第３回　災害時における教師の職業的有能性	単著	平成 29 年 7 月	「教育PRO」第47巻 第16号　通巻1841号、ERP、 pp. １０－１１	本稿は、熊本地震で主体的に避難所を運営した一人の教師をモデルに、教師の災害時における職能について論考した。教師の使命感からくる災害時の職業的有能性を、明確な災害支援対策として位置づけ、分担し、だからこそ教師は災害支援者なのであるという認識を明確にしていくことは、今後における災害時の有効な避難所運営の模索においても、あるいは教師の、災害時における職業的役割の明確化においても、必要となる。
16.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第５回　避難訓練に対する被災地からのメッセージ	単著	平成 29 年 8 月	「教育PRO」第47巻 第18号　通巻1843号、ERP、 pp. １０－１１	熊本市内の南部に位置する熊本市立小学校で、管理職に取材を行った結果、被災地における子どもの様子や学校運営上の実情から、避難訓練の在り方に対する重要な示唆を得ることができた。避難訓練の在りようについて再考し、再確認することの必要性を示唆する、まさしく被災地からの大切なメッセージについて論述した。
17.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第６回　福島県の「今」が伝える、地域における学校の価値	単著	平成 29 年 9 月	「教育PRO」第47巻 第20号　通巻1845号、ERP、 pp. ８－９	2011年3月11日に発生した東日本大震災では、地震による津波災害という、2次的な災害によって大きな被害を被った。その中、地震動と津波による3次的災害が発生した。それが福島第一原子力発電所事故である。本稿では、原発事故から6年半経った福島県において、避難指示が解除されて再開した学校に着目し、学校が地域に果たす役割について記述した。
18.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第７回　子どもたちのいのちを守るのは「だれ」なのか	単著	平成 29 年 9 月	「教育PRO」第47巻 第21号　通巻1846号、ERP、 pp. １２－１３	災害に関して、その被災地域を世界に目を向けたとき、被災者数などその被害の大きさに関心が向けられるが、それらはどのように教訓とされ、発信されてきたのか。そこから見えてくるものの価値は大きい。本稿では、ベトナム社会主義共和国において、災害や事件などに対して、子どもを「保護」する親の姿勢を、日本の近年の実態と比較した。

19.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第９回　教訓を生かした避難所開設・運営に	単著	平成 29 年 10 月	「教育PRO」第47巻第23号　通巻1848号、ERP、 pp. ８－９	災害時における避難所を運営する主体に目を向けたとき、「避難所運営ガイドライン」には、教員、あるいは教職員が割当てられている役割は見当たらない。現実には、学校が避難所となる場合、そこを開錠して避難所を開設し、初動段階で被災者を受け入れ、運営を進めるのは教師であることが予想される。本稿では、避難所開設、運営時における教師の役割について述べた。
20.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第１０回　災害に関する教師へのインタビューから見えてきた課題	単著	平成 29 年 11 月	「教育PRO」第47巻第24号　通巻1849号、ERP、 pp. ８－９	本研究では各小中学校の管理職を対象としてインタビューを行ってきた。それらは非構造化インタビューであり、明確な問いに対して明確な回答を求めてきたのではなく、筆者らが震災のことを、そしてそこに関わる教師たちの内面的なものを知りたかったというのが率直なところである。本稿では、その後に実施した半構造化インタビューの結果を考察し、災害に関連して、教員にかかっている過重なストレスについて検討した。
（その他）（学会発表） 1.「安全教育カリキュラムのレリバンスに関する研究～大阪教育大学附属池田小学校『安全科』の実践から～」	単	平成 25 年 9 月	第６回アジア地域セーフコミュニティ会議	本研究においては、大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践例をもとに児童の安全に対するレリバンスを検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築の礎とすることを目的とした。「安全安心様相図」を用いた調査から、同授業を年代別で実施した結果、年代による相違が明らかとなった。
2.「児童の発達段階と安全教育内容の妥当性に関する実証的研究」	単	平成 27 年 10 月	日本安全教育学会第16回東京大会（於東京女子体育大学）	本研究の前段階として、「「安全安心様相図」を用いて児童の安全に対するレリバンスRelevance（知識・技能・行動・情緒面における妥当性）を検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築の礎とすることを目的とした研究を行ってきた。本研究においては、より汎用性の高い安全教育プログラムの開発を念頭に、「児童の安全意識尺度（SASC)」の開発に関する基礎的研究を行い、SASCの信頼性を高めながら、児童の発達段階を考慮した安全教育プログラムの開発に関する研究を行った。
3.災害時における教員の職業的役割 ―「使命感」と「多忙感」」に着目して―』	単	平成 29 年 3 月	日本教師学学会　第18回大会 （於　早稲田大学）	現代の学校教育に関連する諸課題に対する教育現場への期待や責任の増大に伴い、教員の「多忙化」が指摘されている。その一方で、地震災害時に教師は、「多忙感」の一要因である残業の多寡に関わらず、避難所運営に携わるなどの例がある。 そこで本研究では、教員の「使命感」と「多忙感」の相関性について、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとして、教員への意識調査をもとに検討した。

4. 事件の教訓から学ぶ教師と学校安全　－池田小学校事件からの発信を視点として－	単	平成 29 年 9 月	日本教師教育学会 第２７回奈良大会 （於、奈良教育大学）	児童が生命を脅かされ、あるいは失う事件、事故、事案は後を絶たない。そこで、過去の事件や災害の教訓は生かされているのかという問いが生じる。またそこに付随して、教訓とは何か、教訓を生かす方法とは何か、教訓を生かすのはだれかという問いについて議論を重ね、体系的に整理し、児童の命に結びつき生かされる教訓にしていくことが急がれる。そこで本稿では、今一度、池田小学校事件に立ち戻り、事件が残した教訓と、その後、附池小が発信した学校安全の取り組みを視点として、とくに教師が、それら教訓をどのように学校安全に生かしていくのかについて発表した。
5. 災害時における教員の職業的役割	単	平成 29 年 9 月	日本安全教育学会 第18回岡山大会（於、岡山大学津島キャンパス）	教員の「多忙化」が指摘される中、災害という統制できない状況のとき、その「多忙」の多寡にかかわらず、教員が避難所運営に主体的に、あるいはリーダーシップを発揮して携わるなどの例がある。 本研究では、教員の「使命感」と「多忙感」に着目し、その関連性について、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとして、教員への意識調査をもとに検討した
6. 被災地におけるアートプロジェクトが児童・教師に及ぼした影響について	単	平成 30 年 3 月	日本教師学学会 第１９回大会 （於、甲南大学平生記念セミナーハウス）	1995 年に発生した阪神・淡路大震災以降、被災者の心のケアの重要性が広く認識されるようになった。学校教育においては被災した児童生徒のためのストレス対処法や、災害後の心の傷を予防するためのストレスマネジメント教育の必要性が指摘されており、新たな防災教育が求められている。本研究は、熊本地震において被災し、避難所となった小学校において実践されたアートプロジェクトの報告から、防災教育の新たな方向性を見出そうとすることを目的とした。
7. 教職志望学生の「学校安全」に関する体験的学修の有効性	単	平成 30 年 9 月	日本安全教育学会 第１９回横浜大会 （於、國學院大學）	教員免許法が改正され、教職課程の授業の改善や、教職課程全体についてのデザインのさらなる検討が、各大学に求められるようになった。教職課程コアカリキュラムにおいては「学校安全」への対応が求められる。そこで本研究では、教職志望学生が「学校安全」を体験的に学修することによる教職への意識の変容、あるいは資質能力の形成における有効性について検討した。
8. 教職志望学生の「学校安全」に関する学修の有効性	単	平成 31 年 3 月	日本教師学学会 第２０回大会 （於、上智大学）	教職課程コアカリキュラムにおいて、「学校安全への対応」が必修項目とされた。これまでの課題の経緯を踏まえ、教職志望学生がいかに「学校安全」を学び、それが教職への資質能力へとどのように結びつけることができるのか、計画と実践、評価と検証が必要になってくる。本研究においては、教職志望学生が学校安全を学ぶひとつのモデルとして、体験的学修が教職への意識、資質能力にどのように結びつくのか、実践と学生の反応から検証した。

9.教員による「語り継ぎ」のジレンマと有効性	単	令和１年９月	日本安全教育学会第20回山形大会 （於、山形大学）	本研究では、被災体験のない、あるいは学校教育現場に関連した事件について、「事件を知らない」教員が「語り継ぎ」の責務を負った時、そのジレンマについて明らかにすることを目的とする。また、教員がそのジレンマを乗り越えて行う「語り継ぎ」は、その対象（児童や他の教員）にどのような有効性を持つのかを明らかにすることを目的とした。 そしてある教員は、聞き取りの中で「語り継ぎ」のジレンマを乗り越えたきっかけとして、他者からの「理解」と「評価」を挙げた。しかし、事件を対象としたインフォーマントの語りや環状島のポイントの様相は、熊本地震のモデルの様相とは違う結果が生じていることが示唆された。
10.事件・災害の未体験教員による「語り継ぎ」の研究	単	令和２年３月	日本教師学学会第21回大会 （於　関西医科大学）	阪神・淡路大震災から25年が経つ。その年月は、災害等の「未体験」教員が語り継いでいくことを意味する。本研究では、被災体験のない、あるいは学校教育現場に関連した事件について、「事件を知らない」教員が「語り継ぎ」の責務を負った時、そのジレンマについて明らかにすることを目的とした。本研究のモデルとなった教員は、そのインタビューの中で一様に、ジレンマを乗り越える「使命感」を表出した。
11.「登下校の見守り調査による安全対策の限界点について」	単	令和２年10月	日本安全教育学会第21回静岡大会（於常葉大学静岡草薙キャンパス、オンライン開催）	警察庁の統計による分析（平成25年）では、全被害件数に占める子供の被害件数の割合の高い罪種について「24年中は略取・誘拐が50.8%（95件）、強制わいせつが14.5%（1054件）、強姦が6.1%（76件）であった」と報告されている。その後、全体の犯罪件数における略取・誘拐事件の比率は上昇を続ける。これらのことから、子供が巻き込まれる事件の被害について、略取・誘拐事件、いわゆる連れ去りについて注視していく必要性を、統計が示唆しているといえる。そこで本研究では、2004年の連れ去り事件を経験した学校（以下、T小学校）、地域の取り組みをモデルに、「空白地帯」の存在と、見守りボランティアの役割、そして安全対策のあり方について研究することを目的とした。

［注］

1 最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。

2「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。

3「研究活動」については、下記の点に留意すること。

① 著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。

② 著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。

③ 共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。

④ 最近１０年間に著書･論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。

⑤ 芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和５年３月３１日

氏名　　森　一弘

研究分野	研究内容のキーワード
体育科教育の実践に関する実務 総合的な学習の指導法に関する実務	体育科指導法・自主的な学び・総合的な学習

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 ⑴　アクションリサーチを活用した授業の改善 ・単元における課題の持たせ方 ・子どもの聞き合う場づくり ・子どもと子どもの関係性 ・子どもと教師の関係性 ・子どもの理解度と授業の有効性	平成20年４月～ 令和３年３月	○授業をビデオで撮影し，子どもの実態をもとに授業改善の方策を探る。教師の授業における出場として，発問・切り返し・課題の再設定などに対して，子どもたちが実際にどのような姿をしめしたのか分析するとともに個と個の関係，個と教材との関係，個と集団との関係，個と教師の関係，集団と教師の関係など協働的な学びをもとに，授業の改善ができるのか研究している。
⑵　社会性を育む体育の授業づくり ・チームプレイが重要だという認識の持たせ方 ・チームが勝つための自分の役割に気付かす	平成20年４月～ 令和３年３月	○フラッグフットボールを教材にして，子どもたちの社会性を育む授業デザインを行う。「わかる・できる」を一体的に扱い，ゲームに勝つための，自分の役割を意識し，作戦を進めていくことを通して，相手への思いやり，ゲーム進行でのルールの順守，マナーの向上が見られるのかを調査している。
⑶　フラッグフットボールの教育的価値について授業実践からの検討	平成27年４月～ 令和３年３月	○フラッグフットボールの授業においてイーブンナンバーゲームを用いて授業展開しても、戦術的な学習課題へ焦点化でき、プレーにおいて子どもたちの役割の明確化とともに積極的なプレーへの参加を促す可能性があるのかを検証している。
２　作成した教科書、教材 ⑴　体育科指導についての教材 ・学習指導要領改訂のポイント ・指導領域の目標と内容 ・体育科の主体的・対話的で深い学び ・授業構成 ・評価 ・	平成27年４月～ 令和３年７月	○学習指導要領の内容を基に、小学校体育の指導におけるポイントを明らかにし、よい体育の授業を実施するための条件を具体的に示した。 生涯に渡り、健康の保持増進をめざし、体の動かし方を知り、実際に動き自分自身の体の特徴を把握し、今後どのようにすれば健康の保持増進ができるのか示唆した。
⑵　フラッグフットボール指導テキスト	平成24年４月～ 令和３年	学校体育で活用できるフラッグフットボール練習方法などを示した。 オフェンス時の作戦づくりをしていくために，2対1，4対3，5対3，（オフェンスチームの人数を多くする）でパスコース・ランコースを考えていくモデルとなる動きを示した。また，オフェンス時にも相手チームをブロックする動きを示し，フラッグフットボールのオフェンス時の作戦をスモールステップで学べるように工夫した。

3　教育上の能力に関する大学等の評価 勤務評定 ⑴　神戸大学附属住吉小学校長からの評価	平成 16 年度～ 平成 25 年度	副教頭として校務全般を取り仕切り，学校のかなめとして，各教員らの信頼も厚く，また，PTA との関係を密にして保護者からの信頼も厚いものがある。なくてはならない人材として高い評価を得ている。
⑵　芦屋市立山手小学校長からの評価	平成 26 年度	研究主任・６年学年主任として学校全体の教育課程の編成、授業実践、若手教員の指導などの業務に精通し学校運営の一翼を担っていたという評価を得ている。
⑶　奈良学園大学生からの授業評価	令和 3 年度	科目名「体育実技の指導法」 学生からの評価では、７項目（参加度・授業外学習・説明のわかりやすさ・内容の明確化・内容の分量・教員の反し方聞き方・提示資料）全てにおいて平均ポイントより上回った評価を得た。課題解決型の学習、体験的な学習、協働的な学習の方法をとった結果が出ているものと思われる。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 ⑴　教育実習に対する指導	平成 4 年 4 月～ 令和 3 年	これまで毎年教育実習生を受け入れて、担任や管理職の立場で行った講話内容 ・学校運営，児童理解，生徒指導と学習指導 ・単元の作り方と１時間の授業の作り方 ・学習評価の考え方の実際の評価の仕方 ・体育の授業の作り方 ・担任と養護教諭・カンセラーの連携 ・特別活動　等
⑵　教職に対する指導	平成 27 年～ 令和３年	教師の使命感・責任感・やり甲斐など教職の魅力について授業科目の中で指導するとともに、学生個人に対して、指導を行っている。このことが理想とする教師像を学生一人人に考えさせている。このことが、教員採用試験への対応につながっている。
⑶　全国大学体育連合主催 大学体育指導者全国研修会講師	平成 24 年 8 月	大学体育連合会の研修会にて大学教員へ「フラッグフットボール」の実技講習を行った。大学での体育授業に取り入れるための研修会として初心者への指導の具体を示した。この研修では、基本的な動きからゲーム（戦術）まで網羅的に体験することができました。研修を通して、フラッグフットボールの魅力を体感し、その特性を生かした授業について、実践的な知見を学ぶことができるプログラムを紹介した。
⑷　川西市市立久代小学校指導助言	平成 24 年度	校内授業研究会での指導助言
⑸　芦屋市教育文化センター講師	平成 27 年 5 月	若手教員が今やるべきこと「授業実践を通して」講演
⑹　芦屋市山手小学校研究会講師	平成 27 年 8 月	授業研究の進め方「学び合いのある活動について」講演
⑺　西日本私学連盟体育部会実技研修講師	平成 28 年 5 月	「フラッグフットボール授業の進め方」実技研修において、小学校高学年におけるゴール型ボールゲームの考え方及びフラッグフットボールの授業展開の仕方　講師
⑻　奈良県三宅町立三宅小学校運動能力向上のための指導講師	平成 28 年 5 月	小学生 1 年生から 6 年生を対象に、投動作の指導を実施しボール投げの技能向上を目指した指導を行った
⑼　奈良県三宅町立三宅小学校ボール運動授業	平成 28 年 8 月	フラッグフットボールを中心にボールゲームの

実技講習指導		授業構想について２日間に渡り実践指導を行った。
⑽　尼崎市立大島小学校講師	平成 28 年 8 月	学級づくりのポイントを示し、子供が主人公の学校づくりの必要性を指導した。
(11)芦屋市教育文化センター講師	平成 28 年 8 月	2 年次から 5 年次までの若手教員を対象に、学級づくり・授業づくりを指導した。
(12)芦屋市授業改善部会講師	平成 29 年～ 令和 3 年度	新学習指導要領による授業改善の具体を指導する。３つの柱にした授業の具体とその評価について講話等を行なった。
(13)芦屋市新任教員研修講師	平成 30 年 8 月～ 令和 4 年度	芦屋市新規採用者を対象に、授業のつくりかたを中心に、新任として必要な教師の脂質と能力を講話し、実際の授業計画、実践、授業後の事後指導を行った。
(14)芦屋市教員２～５年次研修　講師（	令和４年度	

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格、免許 教員免許	昭和 57 年 3 月 31 日 昭和 57 年 3 月 31 日	小学校教諭1級普通免許状 昭56小普第5892号　（埼玉県教育委員会） 中学校教諭 2 級普通免許状（社会） 昭 56 中普第 5629 号　　（埼玉県教育委員会）
２　特許等 特になし		
３　実務の経験を有する者について特記事項 ＜行政の委員＞ ⑴　奈良県三宅町健康づくり推進協議会座長 ⑵　奈良県三宅町教育委員会授業評価委員	平成 29 年 3 月 平成 29 年 2 月～令和 4 年 3 月	三宅町における健康増進計画・食育推進計画を審議し、計画書を作成した。 三宅町教育委員会の企画事業を第三者の立場で評価を行った。
４　その他		

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1 人間教育を支えるもの～自尊感情に焦点を当てる体育科の授業構想～	単著	平成 26 年 12 月	人間教育学研究 第 2 号「人間教育学」の可能性-理論の展開と実践- p89～p100	体育科の授業構想において次の３点がポイントとなることを明らかにした。①この多様性を授業に関わる全員が受け入れる。②仲間との関わりで生成される思考や技能を表現する。③仲間との関わりの中で差異を明らかにし認め合う。 このポイントを授業に位置付けることで、体育科の特性としての資質も高めることができる可能性がある。〇自由に操れる体・身体的エフィカシー、〇精神的・肉体的な粘り強さ、ストレス対処スキル、〇批判的思考、社会性、コミュニケーション、自律心などの資質を高めることができ、この資質が生涯スポーツへつながっていく大事な要素であることを示した。
2 共に学びを創り会う子どもをめざして ～言葉を生かし知識や技能を更新する～	単著	平成 27 年 2 月	芦屋市立山手小学校研究紀要 2014 掲載　p33～p39 掲載 p120～p126	授業研究基礎編 授業研究において最も大事にしたことは，各研究同人の主体的な取り組みである。研究同人である教師一人ひとりは，授業の質を高めることを目指し，授業研究に取り組んできた。授業の質について秋田は，『一人ひとりの子どもが授業中どれだけ「安心・安定（well-being）しているか」という居場所感と，学びの対象に対してどれだけ深くまたより長く「没頭・夢中(involvement)関わり考えることができるか」』という集中の２点を挙げている。この２点を踏まえ，子どもたちが教師との信頼関係，仲間に受け入れられているという受容感，よくわからない，迷ったり，困ったりしていることを自己開示できる安心感，自分の考えや言葉に共感しそれを豊かにすることから生まれる一体感を授業の中でみていくという主張を行った。 授業実践編 生き物の３つの特徴である、 ◇「外の世界とつながり」事例１ ◇「一つの個体としてつながり」事例２ ◇「長い時間の中で過去の生き物たちとつながり」事例３ をなぜ筆者は、この順で示し、特徴として挙げたのかということを考える時間である。 （批判的思考の活用）この特徴をこの順で示した理由は、目に見える身近なつながりから目には見えないつながりを挙げ、つながりがだんだんと長くなっていき、事例３のつながりは永遠につながっていくという時間的空間の深まりを意味している。このような筆者の工夫を共同的な学びで発見させ、読みの楽しさを実感させることを明らかにした。 共著者：中村整七、西尾節子、森一弘 （その他 32 名）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 フラッグフットボールにおける戦術アプローチによる簡易化されたゲームの有効性と課題	単著	平成 27 年９月	奈良学園大学紀要 掲載 p135～p141	フラッグフットボールは、アメリカンフットボールを簡易化したゲームである。簡易化された要素は、タックルの危険性を回避するために腰につけたフラッグをとることで、身体接触を禁止した。また、人数は５人対５人とした。用具であるボールは、小さく柔らかいものとしている。指導要領に示されている簡易化する要素を取り入れながら、授業を展開している。この中で、戦術アプローチの考えを持ち込み、アントナンバーのゲームであったり、パスに限定した動きをさせたりするが、これらの学習では、子どもたちの作戦をつくりだすという思考・判断させる活動が弱化させていることを指摘し、イーブンナンバーでのゲーム、ボールをゴールに運び込む手立てを提案した。
4 新聞を活用した総合的な学習の時間−アクティブ･ラ 4ーニングを意識した授業−	単著	平成 27 年 12 月	人間教育学研究 第 3 号「人間教育学」の視座−新しい「教育改革」への提言− p107～p114	新聞を活用し、子供たちが自らの興味関心にもとづき、課題を設定し、課題を解決するために情報を集め、課題解決のための方策を考え、まとめていく授業実践を提言した。この中で、新聞活用のポイントとして、「琴線に触れる言葉を探させる」「これからの自分の生き方について示唆している記事を探させる」という２点が重要であることを明らかにした。
5 経験による「教師の成長」について考察する	単著	平成 28 年 3 月	大阪教育大学実践学校教育講座　実践教育学論集 2015 −現代の教育問題を考える 20− p58～p61	「教える」という営みは、子どもたちの活動と結果として起こる事柄の詳細な関連を見いだし、反省していく熟慮的な「経験」だととらえることができないだろうか。ここでいう「経験」は、常に他者や自分自身の未来に開かれ、また新しいものを絶えず受け入れていこうとする。このような「経験」の繰り返しが、教師の成長を確かなものにし「教える」プロとして変容をもたらせてくれる。日々の授業の中で一人ひとりの子どもや個々の教材と向き合い熟慮する。また、日々、教師は自分の行動をふりかえり、反省的に教材内容の本質や子どもの思いに気づいていくことを、教員志望の学生に指導する必要性を提言した。
6 修士論文 小学校体育におけるフラッグフットボールゲームの授業実践研究−イーブンナンバーゲームの有効性−	単著	平成 29 年 1 月	大阪教育大学大学院教育研究科	本研究の目的は、フラッグフットボールゲームを公式ルールである 5 人対 5 人（クラスの人数によっては、4 人対 4 人）のイーブンナンバーゲームで実施しても戦術学習が成り立つことを明らかにすることであった。結果として、ゲームパフォーマンスが向上する。以上のことから、フラッグフットボールの授業においてイーブンナンバーゲームを用いて授業展開しても、戦術的な学習課題へ焦点化でき、プレーにおいて子どもたちの役割の明確化とともに積極的なプレーへの参加を促す可能性があることを明らかにした。
7 新しい視点から見た教職入門（第１版）	共著	平成 30 年 3 月	大学教育出版 第 4 章教員のメンタルヘルス p89～p105 第 5 章教育実習・教育実習事前事後指導 p251～p266	教育実習の意義及び実習に関わる組織の役割、実習のための具体を示した。また、有意義な実習になるための必要な条件について述べた。 共著者：中田正浩、住本克彦、森一弘、長井勘治、他 6 名（pp:251～265）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8 新しい視点から見た教職入門（第２版）	共著	令和２年４月	大学教育出版 第４章　教員のメンタルヘルス p89～p105 第５章　教育実習・教育実習事前事後指導・教職実践演習 p251～p265 ミニ教育用語事典「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」p256	教員のメンタルエルスに関する現状と課題を明らかにし、予防的取り組みについて述べた。教育実習の意義及び実習に関わる組織の役割、実習のための具体を示した。また、有意義な実習になるための必要な条件について述べた。 共著者：中田正浩、住本克彦、森一弘、長井勘治、その他６名
9 キャリア形成と成果～教員としてのキャリ形成について考えよう～	共著	令和２年９月	人を支える人になる～学士課程教育の質の保障　奈良学年大学「教職実践演習」の取組～掲載(株式会社 EPR2020 年 ９月	キャリアとは、狭義の『仕事上の道筋』という捉え方に加え、『自分の仕事や人生にどのような意味を見出し、そのように関わっていきたいのか』を考え自分自身の中に、仕事に対する充足感・充実感・納得感があふれ、仕事を通じて自分が生かされていると実感できる状態が「キャリアが順調である」という考えを示した。 そのためには、その時々のキャリア段階に応じた自分への期待に応え、与えられた役割を果たすことが必要であることを提言した。 共著者：森一弘　荻布優子、善野八千子、西江なお子、太田雄久 （pp:77～89）
10 学級経営、ホームルーム経営の基本		令和５年３月	『教職ライブラリ教職入門－教育学のエッセンスから学ぶ－』（編著者：住本克彦、建帛社、2023）	児童生徒の心の居場所づくりの実際や、学級・ホームルーム担任の実践すべき内容の基本について詳述した。単著部分：「第１節：児童生徒の心の居場所づくり」「学級・ホームルーム担任の役割」、担当部分：pp73-80、全頁数 144 頁、ISBN：978-4-7679-2133-4

教　育　研　究　業　績　書

令和５年 ３月 31 日
氏名　青山　雅哉

研究分野	研究内容のキーワード
芸術学，芸術一般，器楽（ピアノ）	ピアノ奏法, 音楽表現, 演奏解釈

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1)「音楽の基礎」におけるグレード表への取り組み	平成 25 年４月～ 平成 29 年３月	奈良文化女子短期大学での幼児教育へのピアノ音楽指導においてより効果的な指導法としてグレード表を考案していった。このことにより、学生の日常からの練習を促すこと、目標を明確にして達成度を高めていくことにもなり、効果的な取り組みとなった。 毎年更新してより良いものを学生に提示して学修を促すことにもなっている。
2) フェスティバルにおける合奏の取り組み	平成 25 年４月～ 平成 29 年３月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「合奏」の授業でそれまでの成果の発表として大学のイベントであるファスティバルへの出演をさせている。学生の授業の取り組みが単に各楽器の演奏スキルの学修に止まることなく舞台での準備、練習プラン、リハーサル等の方法がこの舞台での発表をすることにより得ることのできる様々な要素が学生の実際の就職先現場に生かすことのできる学びの機会となるよう指導を行ってきた。
3)「音楽の基礎」科目でのピアノ実技授業としてその練習の継続性と学修に向けての工夫	平成 25 年４月～ 平成 29 年３月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「音楽の基礎」科目での実践。授業での指導を基に実際の幼児への工夫した音楽的環境を作っていく力の向上を図り、クラス全員でグループを作りちびっ子広場（0 歳～5 歳の母子が近隣から集う本学の広場）で幼児への音楽あそびを設定し体験させていった。設定内容の練習を重ね、実際の音楽あそびの現場体験をとおし、ピアノ実技のスキル向上への必要性を認め、学生のピアノ練習への意欲を高める効果があった。
4)「音楽の基礎Ⅱ」科目でのピアノ実技授業としてその練習の継続性と学修に向けての工夫	平成 25 年４月～ 平成 29 年３月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「音楽の基礎Ⅱ」科目での実践。授業での指導を基に実際の幼児への工夫した音楽的環境を作っていく力の向上を図り、クラスの中でグループを作りつどいの広場（0 歳～5 歳の母子が近隣から集う本学の広場）で幼児への音楽あそびや学びを設定し実践させていった。設定内容の練習を重ね、実際の音楽あそびの現場体験をとおし、ピアノ実技のスキルや音楽表現力向上への必要性を認め、学生のその後の学修への意欲を高める効果があった。
5)「子ども学ゼミ」科目での子どもの歌への学修によるその効果と成果について	平成 25 年４月～ 平成 26 年２月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「子ども学ゼミ」科目での実践。このゼミでは、子どもたちの音楽環境を観察し、新たな子どもの歌の収集と分類を行い、知見を拡げ実際の現場で効果的な曲のレパートリーを備えていくことを目的とした。さらに、子どもための曲作りを試行し、詩のありかた、曲のありかたを検討する中で様々な発見があり、学生は子どもの歌に対する捉え方を新たにする良い機会ともなった。
6)「子ども学ゼミ」科目での楽器演奏と創作活動への学修によるその効果と成果について	平成 26 年４月～ 平成 27 年２月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「子ども学ゼミ」科目での実践。ゼミ学生の特技とする琴、吹奏楽器（サックス、ホルン、ユーフォニウム）とのコラボレーションを行う。作曲、演奏と共に音源を用いてＤＭ（デスクトップミュージック）の基本操作を学び音楽を作っていく方法を指導した。幼児教育現場においての音楽表現の一つとして指導し、そのスキルアップに学生は興味深く学修を行っていた。つどいの広場にて学習の成果として音楽発表を行い、好評を得ることができた。

7)「子ども学ゼミ」科目での子どもの歌への学修によるその効果と成果について	平成 27 年 4 月～ 平成 28 年 2 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「子ども学ゼミ」科目での実践。ゼミ学生の特技とする琴、吹奏楽器（サックス、ホルン、ユーフォニウム）とのコラボレーションを行う。作曲、演奏と共に音源を用いてＤＭ（デスクトップミュージック）の基本操作を学び音楽を作っていく方法を指導した。幼児教育現場においての音楽表現の一つとして指導し、そのスキルアップに学生は興味深く学修を行っていた。つどいの広場にて学習の成果として音楽発表を行い、好評を得ることができた。
8)器楽演習Ｉによるグレードの導入	平成 29 年 4 月～ 平成 29 年 9 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ｉ」における授業への取り組みに新たに学生の学修し身につけるべき曲集をグレード表として一覧できるようにして取り入れた。そのことで、学生は達成度の確認、計画的な練習、到達点までの目標設定が可能となり、学生の練習意欲向上に資することとなった。
9)器楽演習Ｉでの唱歌課題の導入	平成 29 年 4 月～ 平成 29 年 9 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ｉ」を指導。「器楽演習Ｉ」にこれまで学修範囲とされなかった小学校音楽の唱歌を導入した。原譜のままではレベル不足で弾くことは困難となるため、アレンジを行ってそのレベルにふさわしい課題となるよう工夫し、小学校 1 年から 6 年までの文科省指定の唱歌を学修できるよう準備を行い、指導をしている。
10)音楽表現Ｉにおける音楽基礎力向上への試み	平成 29 年 4 月～ 平成 29 年 9 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ｉ」の指導において、大学生のピアノ初心者としてのスタートとして適合した練習方法を「指の運動へのストレッチ」として譜面で示し、スムーズに練習成果への効果を生むことにつながってきている。筋肉が成長し指の柔軟な動きが困難な段階からのスタートによる最適な練習方法として示し学生自身で動きを観察し、客観性をもって練習していくことを求めている。
11)基礎ゼミによる音楽演奏への取り組み	平成 29 年 6 月～ 平成 29 年 9 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科音楽専修学生への「基礎ゼミＩ」においてモーツァルト作曲「きらきら星」の演奏と映像制作を計画し、きらきら星をピアノ連弾、サックス二重奏とピアノ伴奏、合唱としてそれぞれアレンジしてその録音を行って完成度を高めていった。学生自身で繰り返し演奏録音をチェックすることで効果的なスキルの向上への意欲とその成果を見ることができた。
２　作成した教科書，教材		
1)音楽ワークシート	平成 25 年 4 月～ 平成 28 年 3 月	奈良文化女子短期大学幼児教育学科への音楽の基礎Ｉ、Ⅱにおいて使用。ピアノ練習への目標や学修へのポイントを指導後に明記して練習への参考なるものとした。学生自身も自身で練習内容を振り返り記入していくことで、考えて練習をしていくきっかけとなった。
2)音楽の基礎テキストＩ	平成 25 年 4 月～ 平成 28 年 3 月	奈良文化女子短期大学幼児教育学科への音楽の基礎Ｉ、Ⅱにおいて使用。従来までの音楽ワークシートを改良したものであり、童謡を弾くための和音練習に重きを置き、メロディーへの和声付けを和音や和音記号としてアレンジし、現場に対応できる曲集を編成してテキストとした。
3)音楽の基礎テキストⅡ	平成 25 年 4 月～ 平成 28 年 2 月	奈良文化女子短期大学幼児教育学科への音楽の基礎Ｉ、Ⅱにおいて使用。音楽の基礎テキストＩの続編としてよりレベルアップした内容と曲集を編成。また、四季や行事等の項目毎に分けた曲集として学修やレパートリー獲得への利便性を図った。

4)ミュージック・ワークブック　奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行	平成 26 年 3 月	音楽初心者にとって音楽の基本となる必要な知識と基礎的テクニックをできるだけ早く身につけていくことが必要であり、その目的にかなう教材として検討を重ね形にしたものである。ピアノ演奏力向上に導くため、譜面の基礎となる音符の理解や指の運動練習を工夫した課題に解説や図面で示して提示している。これを学習することで、音楽への理解と基礎演奏への効果的な教材となっている。
5)ミュージック・ワークシート　奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行	平成 26 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部の「音楽の基礎」「音楽の基礎Ⅱ」科目の授業において使用。音楽初心者への演奏を身につける段階で、このワークでの課題学習を積み重ね知識を身につけていく教材としている。問題を答えていく形式で自習により身につけることが可能なものである。
6)グレード表による童謡、唱歌	平成 28 年 4 月～	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅰ」「音楽表現」において、学生のレベルにふさわしい編曲を行い教材として使用している。学生はグレード表に示されたその童謡や唱歌をピアノ課題として身につけレベルの向上をめざしている。
7)ピアノテクニックへの基礎	平成 29 年 4 月～	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅰ」「音楽表現」において、ピアノテクニックの基礎となる指の運動のためのストレッチとして、ピアノ練習の最初に行う指の感度を高めるためのテキストを作成し活用している。
8)ソルフェージュ～音楽のしくみの実践	平成 29 年 4 月～	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科音楽専修「ソルフェージュⅠ」へのテキストとなるもので、音楽の仕組みについて解説や課題問題集として作成し、学生の理解度と音への実践に対してより深く身につけていきそれぞれのレベル向上に資するものとなっている。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1)平成 24 年度から平成 27 年度にまでの授業アンケートについて	平成 25 年 4 月～ 平成 27 年 3 月	奈良文化女子短期大学において、授業アンケートが各授業において実施され、14 項目のアンケート内容により項目毎の平均値、並びに総合平均値が各授業担当者に示されている。また、学科の全授業を総合した各項目、総合平均値も示されている。 平成 27 年度の担当する科目（音楽の基礎Ⅰ、Ⅱ）の授業評価は学科全体平均値 3.47 を上回り 3.96 となっている（4 段階評価）。 また、これまで行ってきた 5 年間アンケートによる平均値も全体平均値を上回ることとなっている。担当する授業の指導には個別対応が主となり、個人個人の問題に熱心に取り組んでいることが数値となっているものと思われる。
2)奈良学園大学奈良文化女子短期大学図書館長（奈良学園大学図書館登美ヶ丘分館長兼務）への学長評価による就任	平成 26 年 4 月～ 平成 31 年 3 月	授業指導への取り組み、学生の音楽的スキル向上や学生アンケートからの評価、また ALO,自己点検評価委員長、規程委員長等での教育上の改善によるこれまでの活動が、学長の評価により図書館長に推され就任することになった。

3)ALO、自己点検・評価委員長としての本学自己点検・評価活動	平成 25 年 4 月～平成 28 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部における ALO として大学の教育活動の全面で点検と改善への提言を行ってきていた。教育活動での学習成果のあり方について、学外・学内での研修を行い教職職員間での理解と必要性を高めていった。その活動は自己点検・評価委員長としての活動と併行して平成 22 年度の本学認証評価も適格を獲得することができ、その後もそのままその任に就き自己点検による改善計画が機能していくよう取り組み、学習成果のエビデンスを目的とした全学的な取り組みを実現させ、それを具体化することに努力した。短期大学基準協会による第三者認証評価の評価員として、平成 24 年には宮崎学園短期大学、平成 27 年には頌栄短期大学の評価を担当している。平成 28 年には短期大学認証評価のために、自己点検評価の活動に努め、学習成果の検証として PROG の導入をするなど、より客観性のあるエビデンスをめざした自己点検評価表を作成することにより、奈良文化女子短期大学は平成 28 年度認証評価の適格を獲得することができた。
4)サタデー・オン・ステージへのプロデュース	平成 25 年 4 月～平成 28 年 3 月	奈良文化女子短期大学の地域貢献としての主に音楽の演奏会を毎年企画して年に９～１０回程度のイベントを開催してきた。当初から終了までの企画や実施におけるスタッフとして活動してきた。 平成 28 年度終了時には８３回目となる開催となった。それまで奈良県下、京都府下の高校の吹奏楽や合唱のクラブ、プロの音楽家、本学出身者、その他多岐にわたる出演者のステージを開催することで、奈良県下の高校生や地域への知名度向上へも貢献することにもなった。
４実務の経験を有する者についての特記事項 （ピアノ演奏活動）		
1)トゥティ・ピアノコンサート	平成 25 年 9 月 大阪八尾市文化会館　プリズムホール	吉松　隆：プレイアデス舞曲,シューマン：　幻想小曲集、でのソロ演奏　　日下義人、中春淳子氏との共演
2)奈良文化女子短期大学公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 25 年 10 月 奈良文化女子短期大学	ラヴェル：マメールロワ、ドボルザーク：スラブ舞曲、小川純子、上野稲子氏との共演
3)「初めてのクラシック」音楽会	平成 25 年 11 月 奈良市秋篠音楽堂	音楽に親しんで、クラシック初心者への公演。案内役と演奏。バッハ：ガボット、モーツァルト:トルコ行進曲、ベートーヴェン：エリーゼのために等
4)「初めてのクラシック」音楽会	平成 25 年 12 月 奈良市秋篠音楽堂	音楽に親しんで、クラシック初心者への公演。案内役と演奏。バッハ：ガボット、モーツァルト:トルコ行進曲、ベートーヴェン：ピアノソナタ等
5)三重県「障害者支援チャリティー音楽祭」	平成 26 年 1 月 三重県総合文化センター　中ホール	カプースチン：練習曲、前奏曲　ゲスト出演でのピアノ演奏
6)福井県　エスペランサコンサート	平成 26 年 5 月 美浜生涯学習センターなびあすホール	エスペランサ（フルート、ベースのグループ）との共演、

7)奈良学園大学奈良文化女子短期大学部公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 26 年 10 月 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部	ドビュッシー：小組曲　ピアノ連弾、アンサンブル・クラブ学生、小川純子氏との共演
8) 青山＆雑賀デュオコンサート	平成 27 年 4 月 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部	吉松　隆：プレイアデス舞曲集より、ショパン：ワルツ、の演奏、雑賀美佳氏とのイタリア歌曲、ミュージカルメドレーでの共演
9)東日本大震災復興支援チャリティコンサート in 西日本	平成 27 年 5 月 大阪南港 ATC 海辺の野外ステージ	「震災を風化させず支援を続けて行くことを関西から発信する」ことをテーマにボランティア演奏として音楽イベントに参加
10)奈良学園大学奈良文化女子短期大学部公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 27 年 10 月 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部	ブラームス：ハンガリー舞曲から　小川純子氏とのピアノ連弾による共演、
11)ピアノ・コンサート	平成 27 年 12 月 大阪守口市文化センター	カバレフスキー：ソナチネ、 モーツァルト：幻想曲　子どもの情景、ブラームス：ワルツ集
12)エンターテイナー・コンサート	平成 27 年 12 月 大阪守口市文化センター	ガーシュイン：ポギーとベスより、アイ・ゲット・リズムでのピアノソロと儀間太久実氏との共演
13)奈良学園大学奈良文化女子短期大学部公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 28 年 11 月 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部	ラヴェル：マ・メール・ロワ　ピアノ連弾、アンサンブル学生、小川純子氏との共演
14) 奈良文化女子短期大学同窓会 50 年記念コンサート	平成 28 年 11 月 奈良ホテル	ショパン：ワルツ集、ブラームス：ワルツ集、 吉松　隆：プレイアデス舞曲集
15)更紗コンサート	平成 28 年 12 月 ムラマツリサイタルホール	8 名によるピアノ・コンサートのゲスト出演 シャミナード：変奏曲、吉松　隆：プレイアデス舞曲より
16) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 29 年 10 月 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部	親子のための講座で様々な楽器の紹介、音の不思議についての話と小川純子氏との共演
17) 第 3 回奈良学園大学登美ヶ丘カレッジ公開講座「室内楽の調べ」	令和 3 年 8 月 22 日 奈良学園大学	ピアノ演奏とバイオリン、チェロ奏者との共演等 プーランク：間奏曲、ワイセンベルク：パリの四月等 島田稲子、滝恵美、北川しのぶ各氏との共演

(教育実践等) 1)音楽講師のための公開セミナー	平成 26 年 3 月	奈良 YMCA ピアノ教師・合唱教師への公開レッスン 子どもへのピアノ指導の方法や子どもの音への感性について講演。
2)音楽講師のための公開セミナー	平成 27 年 12 月	大阪守口市文化センターにおいて、音の性質、音から音楽へと成立していく行方、さらに音楽の表現についてピアノを通して講演した。
５　その他 1)　日本口笛音楽コンクール審査委員長	平成 17 年～現在に至る	日本において､これまで平成 17 年より約 2 年毎に開催され、当初からその審査委員長として全８回の審査をこれまで担当してきている。日本に留まらず世界中からの参加者があり口笛音楽界での主要なコンクールとなってこの優勝者からはプロとして活躍する者も生まれている。そして、主催する日本口笛音楽協会への音楽的アドバイザーも務めている。また、日本で活躍するプロ奏者の方々への音楽的表現についてのアドバイスも行っている。
2)中国口哨協会（政府公認）と日本口笛協会との交流会	平成 26 年 4 月	日本において、これまで開催してきた口笛コンクールへの総合的な行程や活動等の内容について中国の口笛演奏への主たる団体である中国口哨協会からの依頼により交流と講話を行っている。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 なし		
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 なし		
その他 第三者認証評価活動	平成 25 年 10 月 平成 27 年 10 月	一般財団法人短期大学基準協会による第三者認証評価での評価員として宮崎学園女子短期大学への評価を行った。 一般財団法人短期大学基準協会による第三者認証評価での評価員として頌栄短期大学への評価を行った。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1.ミュージック・ワークブック「Music Workbook」	共	平成 26 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行 （63 頁）	音楽初心者にとって音楽の基本となる必要な知識と基礎的テクニックをできるだけ早く身につけていくことが必要であり、その目的にかなう教材として検討を重ね形にしたものである。ピアノ演奏力向上に導くため、譜面の基礎となる音符の理解や指の運動練習を工夫した課題に解説や図面で示して提示している。これを学習することで、音楽への理解と基礎演奏へのスムーズなスタートとなる教材となっている。 著者：青山雅哉、小川純子、上野稲子 担当部分：pp.1～16,pp.32～34,pp.45～63
2. ミュージック・ワークブック「Music Sheet」	共	平成 26 年 4 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行 （47 頁）	音の高さについて、図で表し理解しやすく解説、そしてそのワークとなる問題集を担当。さらに筆頭著者として企画・総括のすべてを担当。 音楽初心者にとって音楽の基本となる必要な知識と基礎的テクニックをできるだけ早く身につけていくことが必要であり、自己学習での確認となる音楽理論への練習問題集。そして、自己学習でのピアノ練習へと導くための練習曲集となっている。 著者：青山雅哉、小川純子、上野稲子 担当部分：pp.1～16,pp、pp.32～47,pp
（学術論文） 1) 音楽教材「Music Workbook」におけるその制作の過程と実施経過の報	共	平成 26 年 11 月	紀要第 45 号 （奈良学園大学奈良文化女子短期大学部） （10 頁）	音楽教材「ミュージック・ワークブック」の制作するにあたり、音楽初心者への教材として適切な指導内容となるよう検討した。そうした検討過程とそれに対する意図についての報告をしている。さらにこの教材を利用し学修している学生達の状況やこれまでの効果について学生や指導教員へのアンケートも含めて状況の内容を検証し、その報告をしている。そして、この教材への使用法や指導法の工夫した利用について研究したものである。 担当部分：pp.1～3,pp.6,pp.8～9 著者：青山雅哉、小川純子、上野稲子
2) 学生の「つどいの広場」におけるその活動と実施調査の報告	共	平成 27 年 11 月	紀要第 46 号 （奈良学園大学奈良文化女子短期大学部） （11 頁）	幼児たちの活動の場において、学生達が音楽を用い、より良い環境の場を設定することのできる力をどのように展開し獲得しようとしたか。そうした、「環境の場の設定」の立案力の分析や、今後の授業に反映させていくことも大きな目的でもあったため、この活動の観察や学生のアンケート等による調査をとおして、音楽指導における「環境の場の設定」する力を養うため音楽授業内容の成果をどのように音楽表現へと展開し活用していくか、さらにそのための授業内容や指導方法への改善を検討した内容となっている。 担当部分：pp.1～2,pp.7～9 著者：青山雅哉、小川純子、上野稲子

3) ピアノ授業におけるその指導法と内容	共	平成 28 年 11 月	紀要第 47 号 (奈良学園大学奈良文化女子短期大学部) （11 頁）	学生達のピアノ練習の実状を観察し、身体的運動や楽譜理解、楽譜分析に対する反応を脳や筋肉、骨格などのメカニズムとして研究し、これまでのピアノ指導の様々な方法に照らし分析した。これらの様々な観点による効果を検証して、新たな身体の使い方や音楽理解、音楽表現方法の獲得について考察していく。さらに、そのための効果的な練習方法や指導方法を提示したものである。 担当部分：pp. 1～4, pp. 9～11 著者：青山雅哉、小川純子、島田稲子
4) 「つどいの広場」への参加による学生の教育的効果	共	平成 29 年 11 月	紀要第 48 号 (奈良学園大学奈良文化女子短期大学部) （11 頁）	奈良市地域子育て支援拠点事業としての「つどいの広場」は、主に０歳～就園までの親子が気軽に集える場として地域に広く周知されるようになり、親と子どもの成長を支えることと共に、本学が保育者養成校であるという性質上、子育て支援と学生教育の接続を図ることを目的として実施している。とりわけ、将来保育者を目指す学生が子どもたちと触れ合い実際を学ぶ場としての広場の役割は大きく、早期に広場体験を行うことが学生の実践的学びとなっていることが立証されてきた。本研究では、本学の教学改革計画の中での「⑦実践力向上のために、子育て支援活動と教育との接続を充実させる」に基づいて実施し、授業での参加に注目して参加の在り方の検討とともに、学生の意識の変容を探り、教育的効果を検証し報告するものである。 担当部分：pp. 1～4, pp. 9～10 著者：青山雅哉、小川純子、中田章子
5) ピアノ授業におけるその指導法と内容Ⅱ	共	令和 2 年 12 月	紀要第 13 集 （奈良学園大学） （10 頁）	学生達のピアノ練習の実状を観察し、身体的運動や楽譜理解、楽譜分析に対する反応を脳や筋肉、骨格などのメカニズムとして研究し、これまでのピアノ指導の様々な方法に照らし分析してきた。そのⅡとして、演奏における筋肉の収縮・弛緩や骨・関節の仕組みとリズムへの身体的反応を主として考察し、その観点から初心者への指導の方法を提示したものである。 担当部分：pp. 141～144、pp. 150 著者：青山雅哉、島田稲子

記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和５年３月 31 日

氏名　善野　八千子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
教育学	学校間接続、生活科、教育行政、子どもの人権、教員の力量形成

教育上の能力に関する事項

事　項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 ・リフレクションカードを活用した学習の定着及びグループディスカッションの実施	平成20年４月～現在に至る	奈良教育大学兼任講師として担当の「初等教科教育法（生活）」(3 回生)（教職科目、３年次配当、半期、必修２単位)、奈良学園大学　教授として担当の「人間教育開発力実践演習ⅠⅡ」(１～2 回生)（専門科目、１～2 年次配当、通年、選択１単位)、において、実践した。 学習定着を目的として、毎時限の最後にリフレクションカードによるフィードバックを実施。毎回、学生が記述したリフレクションカードに、コメント評価を記載。次回に返却し、導入時に前回の復習として活用。１枚のカードで当該科目のシラバス全体の振り返りとなり、学生自身が毎回の自己の学修成果と課題を明確にできた。 グループディスカッションについては、初回は、ペアワークとし、徐々に 5～6 人グループで行った。テーマに応じた協同的な学びの姿が見られ、話し合い後に発表することから、プレゼンテーション力が高まった。授業アンケート結果からも「自分と違う意見や考えによって理解が深まった」等の学生の満足度がきわめて高かった。 上記と同様に、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「教育行政学（初等）A」(2 回生)（教職科目、２年次前期配当、半期、選択必修２単位)、「生活科指導法」(2 回生)（教職科目、２年次後期配当、半期、必修２単位)、「生活の理解」１年次後期配当、半期、必修２単位)、「人間教育実践力開発演習Ⅲ」(Ⅲ回生)（専門科目、３年次配当、通年、選択１単位)、において実践した。
	平成22年４月～平成26年３月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教育学概論」(1 回生)（専門科目、1 年次配当、半期、必修２単位)、「教育制度論」（専門科目、1 年次配当、半期、必修２単位)、「教職実践演習」（専門科目、2 年次配当、半期、必修１単位）において、実践した。 毎時限の最後に、学習の定着のためにリフレクションカードによるフィードバックを実施した。毎回、学生が記述して提出したリフレクションカードに、コメント及び A 評価を記載。次回に返却し、導入時に前回の復習として活用した。承認や賞賛の体験が乏しい学生にとって意欲の高まりが顕著に見られた。1 枚のカードで当該科目のシラバス全体の振り返りとなることから、学生自身が自己の学習成果と課題を明確にすることができた。グループディスカッションについては、少人数から徐々に 5～6 人グループで行った。話し合い後に発表することから、プレゼンテーション力が高まった。授業アンケート結果から「授業満足度は、全クラス 97%以上であった。

・毎回の復習テストを活用した学習の定着の工夫	平成22年4月 ～現在に至る	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の専門科目、「教育制度論」（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、学習の定着を図るために、毎回の講義導入において復習ミニテストを実施した。 上記と同様に、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「教育行政学（初等）A」（2回生）（教職科目、2年次前期配当、半期、選択必修2単位）、「生活科指導法」（2回生）（教職科目、2年次後期配当、半期、必修2単位）、科目ごとの目標に対応した復習ミニテストを実践した。 履修者の相当数において、当該科目の履修の前後を比較すると、復習の習慣化と学習の定着度が向上した。
・予習レポートの活用と授業設計	平成23年4月 ～現在に至る	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の専門科目、「教育学概論」（1回生）（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、予習習慣の定着のために毎回の予習レポート「子ども情報カード」を実施した。学生は、シラバスに関連した子どもに関するニュース及び自己の考えを記述してくる。毎回の講義の冒頭で発表させることで、学生同士の関心意欲が喚起できる。また、教員は学生の実態を把握し、配慮した授業設計を行うことができる。履修者の相当数において、予習の習慣化と学習課題に対する関心意欲の向上が見られた。 上記と同様に、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「教育行政学（初等）A」（2回生）（教職科目、2年次前期配当、半期、選択必修2単位）、「生活科指導法」（2回生）（教職科目、２年次後期配当、半期、必修2単位）、「生活の理解」１年次後期配当、半期、必修2単位）において、科目ごとの目標に対応した予習課題を設定して実践した。
2　作成した教科書、教材		
・「学校評価を活かした学校改善の秘策」（再掲）	平成17年4月 ～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教育原理（平成20年3月まで）、教育学概論（平成20年4月から科目名変更）」（専門科目、1年次配当、半期、必修２単位）、において使用。 教員の資質向上のための学校改善の方策について、評価の運用及び実践事例の内容を示した。学生は、毎回の講義で10分間読解し、本時の目標に関わる章について、気づき及び疑問を発表し、教育の現状及びこれからの教育課題について意欲的な対話が可能になった。
・学校力・教師力を高める学校評価（再掲）	平成22年4月 ～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教育制度論」（専門科目、2年次配当、半期、必修２単位）において、使用した。教育制度における全容から、とりわけ学校評価の目的及び信頼構築の有様と実践事例の内容を教育制度の視点から示した。学生は、理解の困難な制度についても、公教育における制度のや現代的課題に関心を深めた。また、具体的な学校現場の事例を通して理解した。
・小学校教科用図書「あたらしいせいかつ」	平成23年4月 ～令和元年3月まで	平成23年度用、平成27年度用小学校生活科　教科用図書　採択された市町村立小学校及び私立小学校の第1学年・第2学年に於いて、使用されている。また、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科

		教授として担当の「生活科指導法」（教職科目、２年次配当、後期、必修２単位）において、使用した。学生は毎時間の模擬授業の際に活用し、学校現場での実践力強化として指導案作成のプロセスと低学年における児童理解が深まった。また、予習学修の定着と共に、指導法の課題が明確になった。
・キャリア教育読本「コドモタチへの想い」（再掲）	平成23年4月～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「キャリアデザイン演習」（専門科目、1年次配当、半期、選択１単位）において、使用した。就業力向上のために、仕事内容ややりがい等の具体的事例について示した。学生は、保育・教育の今を知り、教育現場の実際や課題を検討することが可能となった。
・幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発（再掲）	平成23年4月～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教職実践演習」（専門科目、２年次配当、半期、必修１単位）において、使用した。幼児期から児童期に関わる教員の資質向上のために特に就学前後の課題や生活科の具体的事例について示した。学生は、これからの保育・教育の課題を検討し実践力向上につなげた。
・子どもの育ちと学びをつなぐ―幼小連携のあり方と接続カリキュラムの作成―（再掲）	平成24年9月～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「キャリアデザイン演習Ⅱ」（専門科目、１年次配当、半期、選択１単位）において、使用した。保育者・教員の資質向上のための幼小接続カリキュラム開発及び実践例について示した。学生は、幼児期のカリキュラムと生活科に位置付いたカリキュラム作成のプロセスの理解が深まった。また、教育保育現場の実際を知り、就業力向上へもつなげた。
・子どもの育ちと学びをつなぐ―幼小連携のあり方と接続カリキュラムの作成―（再掲）	平成27年9月～現在まで	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活科指導法」（教職科目、２年次配当、後期、必修２単位）において、使用した。保育者・教員の資質向上のための幼小接続カリキュラム開発及び実践例について示した。学生は、幼児期のカリキュラムと生活科に位置付いたカリキュラム作成のプロセスの理解が深まった。また、予習学修の定着と共に、指導法の課題が明確になった。
・教科力　生活	平成28年9月～現在まで	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活の理解」（教職科目、１年次配当、後期、必修２単位）において、使用。保育者・教員の資質向上のための小学校生活の理論をもとに、歴史や評価の実践例についても提示。学生は、生活科の科目の特性に位置付いたカリキュラム作成と指導理論のプロセスの理解が深まった。また、予習学修の定着と共に、子ども理解の課題が明確になった。
・奈良学園大学「教職実践演習」＜教職組＞の取組～学士課程教育の質の保証～ 編集代表者・著者：善野八千子　著者：太田雄久、荻布優子、西江なお子、森一弘（令和２年７月 ERP）	令和２年９月～令和４年３月まで	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「教職実践演習」（教職科目、4年次配当、後期、必修２単位）において使用。教員の資質向上のための小学校教育現場の実践例等についても提示。学生は、教育公務員の特性に位置付いた指導案作成と指導理論のプロセスの理解が深まった。また、予習学修の定着と共に、子どもと保護者理解の課題が明確になった。

３　実務の経験を有する者についての特記事項		
北葛城郡広陵町幼稚園教員の資質向上にかかる講演の講師(於：北葛城郡広陵町総合福祉会館「さわやかホール」)	平成25年5月2日	北葛城郡幼稚園教育研究会会員を対象に「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造」について講演
敦賀っ子教育審議会にかかる「学び育み委員会」「子どもサポート委員会」合同開催　委員として講話(於：敦賀市立図書館　研修室)	平成25年5月15日	敦賀っ子教育審議会にかかる「子どもサポート委員会」委員を対象に「学びの基礎力」をもとに今後の方向性を提案
桜井市「第2回　子育てセミナー」講師(於：桜井市立中央公民館)	平成25年5月25日	桜井市就学前の幼児とその保護者対象に「第2回子育てセミナー」　において「遊びから学び～～幼児教育と小学校教育の接続」について講演
平成24年度　西日本私立小学校教員研修会　講師(於：追手門学院小学校)	平成25年5月25日	西日本私立小学校教員を対象として「学級経営分科会」において、「子どもと保護者と教師が育つ学級経営」について講演
兵庫県私立小学校連合会研修会講師 モラル教育の公開授業　指導講演(於：甲南小学校)	平成25年6月1日	兵庫県私立小学校学級経営部会教員を対象として「モラル・マナー・ルールを通して、公開授業指導講演
第20回授業実践フォーラム　教育課題講座の講師(於：岐阜県羽島市文化センター)	平成25年6月2日	初任者から経験者まで全国から参加の学級担任及び管理職等を対象に「学級づくりの諸課題～子どもと保護者と教師が育つ学級経営～」について講演
三田市教育委員会主催 三田市立保幼小・中・連携推進にかかる研修会　講師(於：有馬富士自然学習センター)	平成25年6月19日	三田市内の小・中校長または教頭、保育所長・私立幼稚園長又は教諭　50名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小・中・連携」について講演
第1回宝塚市立小・中・特別支援学校　校長研修会講師(於：宝塚市立教育総合センター)	平成25年6月22日	宝塚市立小・中・特別支援学校　校長等30人を対象に、「人材育成へのマネジメント～　学校改善へのリーダーシップ　～」について講演
天理市教育委員会主催　天理市内保・幼・小・中の連携推進にかかる研修会　講師(於：天理市教育総合センター)	平成25年6月29日	天理市内保・幼・小・中の校園所長２５名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保・幼・小連携」について講演
特例社団法人日本精神看護技術協会主催　教育方法研修会　講師（於：京都研修センター）	平成25年7月3日	看護実習指導者を目指している者(80名)を対象に、効果的な実習指導ができるよう、また、学生の特性を理解し、教育的配慮ができるように必要な知識・技術を修得させることを目的として「授業の形態」について講義
特例社団法人日本精神看護技術協会主催　教育方法研修会　講師（於：京都研修センター）	平成25年7月4日	看護実習指導者を目指している者(80名)を対象に、効果的な実習指導ができるよう、また、学生の特性を理解し、教育的配慮ができるように必要な知識・技術を修得させることを目的として「授業の方法」について講義
全国幼児教育研究協会 主催　中国地区岡山支部研修会　講師（於：岡山衛生会館　三木記念ホール）	平成25年7月7日	中国地区岡山県の幼稚園長・教諭・保育所長・保育士・大学関係者など300名を対象に「元気の出る幼稚園づくり～学校評価を活かして～」の講演
鳴門教育大学大学院　特別講義(於：鳴門教育大学)	平成25年7月13日	鳴門教育大学大学院授業科目「学習指導と学習評価」及び学部授業科目「教育評価論」における特別講義
平成24年度奈良市「30人学級」指導者研修会　講師　（於：奈良市庁舎　中央棟６階　正庁）	平成25年7月24日	奈良市立幼稚園・小学校教員を対象に『奈良市小･中学校学力･学習調査の結果から見えてくる「30人学級」での効果的指導法』について講演
福井県丹生郡学校教育研究会主催　丹生郡教育講演会　講師（於：越前陶芸村文化交流会館）	平成25年7月26日	福井県丹生郡内小中学校教職員150名を対象に「育ちと学びをつなぐ学校づくり　授業づくり」について講演した。

大阪府私立幼稚園連盟主催の免許更新講習会【必修】の講師（於：エル・おおさか（大阪府立労働センター））	平成25年8月6日	大阪府私立幼稚園免許状更新講習者を対象に免許更新講習【必修】を担当。
京都府教育委員会主催の平成25年度「保育技術専門講座Ⅰ」及び「新規採用者研修『幼稚園教諭２』講座」の講師（於：京都府教育センター）	平成25年8月8日	教諭（幼稚園及び特別支援学校の幼稚部　国立・私立を含む）90名を対象に「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続」について、講演及び演習。
奈良市教育委員会主催の平成25年度第1回「30人学級」指導者実践交流会の講師（於：奈良市教育センター）	平成25年8月12日	奈良市内幼稚園教諭及び小学校教員等を対象に指導助言及び講演。
安堵町教育委員会主催の夏季職員研修の講師（於：安堵町立中学校会議室）	平成25年8月13日	安堵町中学校小学校教職員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～よりよい連携・接続のあり方～」について講演。
丹波市教育委員会主催の丹波市小学校長会研修会の講師（於：丹波市山南住民センター）	平成25年8月27日	丹波市小学校校長25名を対象に「元気の出る学校づくり」について講演。
第2回高校と大学の連携フォーラム in 大阪のパネルディスカッション、コーディネータ　（於：内田洋行セミナールール）	平成25年8月31日	大阪府及び奈良県内高等学校関係者、教育関係者120名を対象に「日本の教師を育てる～教育三都物語～」について、パネルディスカッションにおいて、コーディネータ
愛知県教職員組合主催の第63次教育研究愛知研修会記念講演の講師。（於：愛知県産業労働センター（ウインクあいち））	平成25年10月19日	市町村教育長・愛知県小中学校長役員・PTA代表・教員代表等450名を対象に「子どもたちの健やかな成長をめざして～力と夢を育てる地域ぐるみの学校づくり～」をテーマに記念講演。
鳥取県中部委員会主催の平成25年度鳥取県中部地区幼稚園教員・保育士等の合同研修会の講師（於：倉吉未来中心センター）	平成25年10月30日	鳥取県中部地区幼稚園教員・保育士名を対象に、「元気の出る園づくり～園評価を活かして」をテーマに記念講演。
愛知県知多郡武豊町教育委員会主催の教育講演会の講師（於：武豊町立武豊中学校体育館）	平成25年11月22日	武豊町６小中学校教職員を対象に「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演
大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成25年11月29日	大阪市私立幼稚園連合会、幼稚園教諭を対象に「幼小連携」をテーマに講演
久米田看護専門学校主催の講師会の講師（於：社会医療法人　生長会　府中病院　セミナーホール）	平成25年11月30日	実習指導者、専任教員、非常勤講師他60名を対象として、「学生・教員・学校が輝く教育評価」をテーマに講演
尾張地区女性役職会主催の研修会の講師（於：名古屋国際会議場）	平成25年12月15日	尾張地区女性役職会研修会参加者450名を対象として、「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演
日本初等理科教育研究会堺大会発表校　堺市立浜寺石津小学校研修会の講師（於：堺市立浜寺石津小学校）	平成26年2月7日	日本初等理科教育研究会堺大会発表校　堺市立浜寺石津小学校教職員を対象に、第三者評価をふまえた総括会として、「未来を切り拓く子どもを育てる－日本初等理科教育研究会堺大会での成果と課題－」と題して講演
東海市立教員研修センターTEC21主催の東海市立教員研修の講師（於：東海市立文化センター）	平成26年2月7日	東海市立小中学校教員60名を対象として、「元気の出る学校づくり」をテーマに講演。
奈良文化女子短期大学第2回幼小接続フォーラムの総括講演（於：奈良文化女子短期大学）	平成26年3月2日	保幼小教職員・教育関係者等120名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに総括講演。
鳥取県東部地区幼稚園等の教員及び保育士の合同研修会 講師（於：鳥取県立福祉人材研修センター）	平成26年5月14日	保幼小教職員・教育関係者等200名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演。

大阪府立高等学校第７ブロックＰＴＡ連絡協議会の講師（於：大阪府立大塚高等学校）	平成26年6月14日	大阪府立高等学校第７ブロックＰＴＡ連絡協議会主催のＰＴＡ総会講演会において、保護者・校長・教頭・教員150名を対象に「高校生活をどう過ごさせるか」をテーマに講演
人間教育学会「学校間接続分科会」の講師（於：奈良学園大学）	平成26年8月4日	人間教育学会「学校間接続分科会」において、講演
三河教育研究会主催の総合的な学習部会夏季研修会の講師（於：愛知県岡崎市民会館　甲山会館）	平成26年8月5日	三河教育研究会主催の総合的な学習部会夏季研修会において、小中教員250名を対象に「力と夢を育てる学校づくり・授業づくり～総合的な学習を通して」をテーマに講演。
阿久比町小中学校主催の教職員夏季研修会の講師（於：阿久比町勤労福祉センター・エスペランス丸山））	平成26年8月6日	阿久比町小中学校主催の教職員夏季研修会「教育講演会」において、小中教職員200名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演。
日本私立小学校連合会主催の全国教員夏季研修会の講師（於：ホテルモントレ　ラ・スール）	平成26年8月21日	日本私立小学校連合会主催の全国教員夏季研修会において、小学校教員80名を対象に「元気の出る学級づくり～子どもと保護者と教師の育ち合いを通して」をテーマに講演。
豊中市教育委員会主催の幼保小連絡協議会夏期研修会の講師（於：アクア文化ホール）	平成26年8月28日	豊中市教育委員会主催の幼保小連絡協議会夏期研修会において、公私立小学校、幼稚園、公立・民間保育園、児童発達支援センター、認定こども園、所属長及び教職員180名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～よりよい幼保小連携・接続のあり方～」をテーマに講演。
和泉市立北池田小学校主催の夏季研修会の講師（於：和泉市立北池田小学校）	平成26年8月29日	和泉市立北池田小学校主催の夏季研修会において、教職員30名を対象に「元気な学校づくり～子どもと保護者と教師の育ち合いを通して～」をテーマに講演
寝屋川市教育委員会主催の研修会の講師（於：寝屋川市立北幼稚園）	平成26年9月17日	寝屋川市教育委員会主催の研修会において、小学校教員、公私立幼稚園教諭・保育士100名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～就学前後の接続を中心に～」をテーマに講演。
日本精神看護協会主催の看護実習指導者の資格取得の講師（於：日精看　京都研修センター）	平成26年10月21・22日	看護実習指導者の資格取得を目指すもの80名を対象に、教育方法研修会における講師
神戸市立幼稚園長会・私立幼稚園連盟主催の教育連絡会研修会の講師（於：神戸市総合教育センター）	平成26年11月10日	神戸市立幼稚園長会・私立幼稚園連盟主催の教育連絡会研修会において、公私立幼稚園教諭150名を対象に「元気の出る園づくり～子どもの育ちと学びをつなぐ～」をテーマに講演。
沖縄県庁主催の平成26年度宮古地区幼稚園教育課程研究協議会の講師（於：神戸市総合教育センター）	平成26年11月17日	沖縄県庁主催の平成26年度宮古地区幼稚園教育課程研究協議会において、公立、公私立幼稚園長、教諭・市村教育委員会指導主事、宮古島市教育研究所指導主事を対象に「元気の出る幼稚園づくり～学校評価を活かした保育改善を通して～」をテーマに講演。
大阪市私立幼稚園連盟主催の研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成26年12月3日	大阪市私立幼稚園連盟主催の研修会において、私立幼稚園教諭80名を対象に「元気の出る園づくり～どもの育ちと学びをつな～」をテーマに講演。
大東市主催の保幼小研修会の講師（於：大東市民会館）	平成27年1月27日	大東市主催の保幼小研修会において保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、園長、行政等300名対象として、「育ちと学びをつなぐ保幼小連携」をテーマに講演。

第58回大阪府私立幼稚園教育研究大会(免許更新講習）の講師（於：大阪国際会議場（グランキューブ大阪）	平成27年3月26日	大阪府私立幼稚園連盟主催の免許更新講習において、大阪府私立幼稚園・園長・教職員,近畿地区私立幼稚園教諭 100名を対象に「幼稚園の信頼構築と改善～学校評価と幼小接続・連携をもとに～」について、講義を担当。
大阪市私立幼稚園連合会研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成27年5月13日	大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会において、幼稚園教諭40名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
羽衣学園中学・高等学校の父母教育懇談会の講師（於：羽衣学園中学・高等学校）	平成27年5月16日	羽衣学園中学・高等学校の父母教育懇談会において、保護者及び教職員200名を対象に「親として、中・高時代をどう過ごさせるか」をテーマに講演。
近畿ブロック都市福祉事務所長連絡協議会主催の第9回通常総会における講師（於：大和高田市さざんかホール）	平成27年5月22日	近畿ブロック都市福祉事務所長連絡協議会主催の第9回通常総会において、福祉事務所長80名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ町づくり・人づくり～子ども・子育て新制度をふまえて」をテーマに講演。
神戸市総合教育センター主催の職務研修講座における講師（於：神戸市総合教育センター）	平成27年6月12日	神戸市総合教育センター主催の職務研修講座において、公立幼稚園主任30名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
日本私学教育研究所主催の平成27年度私立学校初任者研修小学校（西日本地区）の講師（於：大阪ガーデンパレス）	平成27年7月30日	日本私学教育研究所主催の平成27年度私立学校初任者研修小学校（西日本地区）において、小学校教員40名を対象に「子どもに力をつける教員の力量形成～教師力を学校力につなげる～」をテーマに講演。
古座川町保小中一貫教育研修会の講師（於：古座川町中央公民館）	平成27年8月2日	古座川町保小中一貫教育研修会において、保小中教職員・保護者60名を対象に「保幼接続・小中一貫」をテーマに講演。
姫路市教育委員会主催の園長研修の講師（於：姫路市立総合教育センター）	平成27年8月4日	姫路市教育委員会主催の園長研修において、幼稚園長30名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
宝塚市保幼小中特別支援学校合同研修会の講師（於：宝塚市立安倉小学校ランチルーム）	平成27年8月6日	宝塚市保幼小中特別支援学校合同研修会において、市立保育所長・園長・小中学校教職員・学校長60名を対象に、「子どもたちの育ちや学びをつなぐ保幼小連携の在り方]をテーマに講演。
教育セミナー関西2015の講師（於：京都ノートルダム女子大学）	平成27年8月8日	教育セミナー関西2015において、参加者20名を対象に「ワークショップー子どもたちの育ちや学びをつなぐ]をテーマに講演。
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年8月12日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園(所)50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム①」をテーマに講演
中丹地域保育所(園)・幼稚園・小学校連携推進研修会の講師（於：綾部市保健福祉センター）	平成27年8月17日	中丹地域保育所(園)・幼稚園・小学校連携推進研修会の講師
教員免許更新講習の講師（於：奈良学園大学幼小接続室）	平成27年8月19日	教員免許更新講習として、幼稚園教諭・小学校教諭30名を対象に「これからの生活科～子どもの育ちと学びの連続をふまえて～」をテーマに講師として全6時間の講習を担当。
岡山市教職員研修の講師（於：岡山ふれあいセンター）	平成27年8月24日	岡山市教職員研修こども園・保育園・幼稚園（年長担任もしくは連携担当者)、小学校（1年生担任もしくは生活科担当者）250名を対象に「子どもの「育ち」と「学び」をつなぐ保育，授業づくり～保幼小接続におけるこれからの言語活動～」をテーマに講演。

あま市小中学校教職員会研修会における講師（於：あま市美和文化会館）	平成27年8月25日	あま市小中学校教職員会研修会において、あま市小中学校教職員３５０名を対象に「力と夢を育てる学校づくり～学校間接続と学校評価を活かして」をテーマに講演。
第10回教師力向上研究会における講師（於：箕面自由学園小学校）	平成27年8月29日	第10回教師力向上研究会において、参加者30名を対象に「子どもの「育ち」と「学び」をつなぐ授業づくり」をテーマに講演。
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年9月8日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園(所)50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム②」をテーマに講演
鳥取県教育委員会事務局鳥取県教育センター主催の【研修名】【幼児教育④】の講師（於：鳥取県教育センター）	平成27年9月15日	鳥取県教育委員会事務局　鳥取県教育センター主催の【研修名】【幼児教育④】信頼される魅力ある園づくり～園評価を活かして～」において、 鳥取県内の幼稚園長・保育所（園）長・認定こども園長の21名を対象として、「信頼される魅力ある園づくりをめざしテーマに講義・演習を担当。受講者園長20名及び聴講(教育委員会幼児教育担当6名)
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年10月21日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園(所)50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム③」をテーマに講演
平成27年度和歌山県那賀地方PTA指導者研修会講演会の講師（於：岩出市民俗資料館	平成27年11月14日	平成27年度和歌山県那賀地方PTA指導者研修会において、保護者及び教員65名を対象として、「親として、中学時代をどう過ごさせるか～これからのコミュニケーションと学びの力～」をテーマに講演。
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年11月25日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園(所)50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム④」をテーマに講演
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年12月9日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園(所)50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム⑤」をテーマに講演
看護実習指導者を目指すものを対象とした「教育方法研修会」①の講師（於：京都研修センター）	平成27年12月16日	日本精神看護協会　京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者38名を対象に「授業の形態」をテーマとして、講義・演習
看護実習指導者を目指すものを対象とした「教育方法研修会」②の講師（於：京都研修センター）	平成27年12月18日	日本精神看護協会　京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者38名を対象に「授業の方法」をテーマとして、講義・演習
宝塚市子ども未来部主催の所内研修会の講師（於：宝塚市立安倉中保育所ホール）	平成28年1月13日	宝塚市子ども未来部主催の所内研修会において、所長・職員・保育教諭20名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小接続・連携」をテーマとして、講演。
大阪市私立幼稚園連合会研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成28年5月24日	大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会において、幼稚園教諭40名を対象に「子どもの育ちや学びをつなぐ ～幼児教育と小学校以降の教育の連携・接続～」をテーマとして、講演。

三宅町幼児園園外研修会（於：奈良学園大学幼小接続室）	平成28年6月1日	三宅町主催の研修会において、27名（町長・健康子ども部部長・職員５名、保護者18名、評議員１名、その他１名）を対象に「子どもの育ちや学びをつなぐ ～幼児教育と小学校以降の教育の連携・接続～」をテーマとして、講演。
愛知県一宮市西成東小学校PTA講演会（於：一宮市西成東小学校講堂）	平成28年6月12日	愛知県一宮市西成東小学校主催のPTA講演会において、管理職及び保護者50名を対象として、「親として、小学時代をどう過ごさせるか～これからのコミュニケーションと学びの力～」をテーマに講演。
ゆめナビ講義ライブ（於：インテックス大阪）	平成28年6月18日	ゆめナビライブにおいて、高校生80名を対象として、「保育士も教師も！～育ちと学びをつなぐ教育のスペシャリストになる～」をテーマに講義。全国の大学250講義の中で1万人参加の高校生アンケートにより「もう一度聴きたい講義」の第一位に選出された。
鳥取県中部教育局園経営研修（於：伯耆しあわせの郷）	平成28年6月28日	鳥取県中部教育局主催の【幼児教育④】園経営研修において、鳥取県内の幼稚園長・保育所（園）長・認定こども園長、園経営にかかわる副園（所）長、部長等の５０名を対象として、「園を活性化するための組織マネジメントのあり方 ～信頼される特色ある園づくりをめざして～ 」をテーマに講義・演習。
精神科認定看護資格取得研修会（於：京都研修センター）	平成28年7月22日	日本精神看護協会主催の精神科認定看護資格取得を目指すもの86名対象とした「組織内における活動、教育論Ⅰ」において、「教育に必要な理論・教育プログラムの展開に必要な教育技法」をテーマに講義。
西宮市幼保小第2回「つながり」研修（於：西宮市立子育て総合センター）	平成28年7月26日	西宮市立子育て総合センター主催の第2回「つながり」研修（幼保小）において、保育所保育士、幼稚園・小学校・特別支援学校教員等110名を対象に「生活科を窓口としたッスタートカリキュラムとアプローチカリキュラム」と題して講演。
岸和田市「平成28年度　管理職（校長）研修（於：波切りホール）	平成28年8月1日	岸和田市教育委員会主催の「平成28年度　管理職（校長）研修」において、市内幼小中学校校長40名を対象に「力と夢を育てる元気な学校づくり～学校評価を活かして～」をテーマに講演。
きのくに共育コミュニティ研修会（於：和歌山ビッグ愛）	平成28年8月3日	和歌山県教育庁主催のきのくに共育コミュニティ研修会において、参加者１１０名（学校関係者８０名、社会教育関係者（行政・公民館関係者・コーディネ ーター等３０名）を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ～学校・家庭・地域がつながる共育～」をテーマに講演。
福井県平28年度組織づくり研修講座（於：嶺南教育事務所）	平成28年9月7日	福井県教育庁主催の平成28年度組織づくり研修講座において、福井県嶺南地区小中学校・高等学校教職員20名を対象に、「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演。
三郷町立幼稚園　新規採用教員研修及び園内研修会（於：三郷町立南畑幼稚園）	平成28年10月14日	三郷町教育委員会主催の「幼稚園新規採用教員研修」及び園内研修において、町教委職員及び園長並びに職員を対象に講演。
大阪府立高等学校第3ブロックＰＴＡ協議会研修会（於：大阪府立市岡高等学校）	平成28年11月8日	大阪府立高等学校第3ブロックＰＴＡ協議会研修会において、保護者、校長、教員等55名を対象に「親子のコミュニケーション」をテーマに、講演。
柏原市「市教研研修会」（於：柏原市立玉手幼稚園）	平成28年11月11日	柏原市教育委員会主催の「柏原市教育研究会幼稚園部会」において、公立私立幼稚園及び小学校教職員50名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ～

		幼小接続カリキュラムのあり方～」について、講演。
日本精神看護協会「教育方法研修会」（於：京都研修センター）	平成 28 年 12 月 21 日	日本精神看護協会　京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者 36 名を対象に「授業の形態・方法」をテーマとして、講義・演習。
和歌山県社会教育関係職員等研修会（第２回）・訪問型家庭教育支援事業シンポジウム（於：紀南文化会館小ホール）	平成 29 年１月 16 日	和歌山県生涯教育局主催の「平成 28 年度和歌山県社会教育関係職員等研修会（第 2 回）・訪問型家庭教育支援事業シンポジウム」において、社会教育関係職員・家庭教育関係職員・福祉関係職員・学校関係教職員、子育て中の保護者、子育て支援活動をしている方、家庭教育支援チーム員等 100 名を対象としたパネルディスカッション「つながろう！家庭・学校・地域・行政・福祉切れ目のない支援のために」をテーマにコーディネータとして担当。
西宮市幼保小第３回「つながり」研修（於：西宮市立子育て総合センター）	平成 29 年１月 20 日	西宮市立子育て総合センター主催の第 3 回「つながり」研修（幼保小）において、保育所保育士、幼稚園・小学校・特別支援学校教員等 88 名を対象に『幼保小接続を考える「とまどいマトリクス」を通して』と題して講演及びワークショップを実施した。
鳥取県「幼保小連携推進研修会」（於：鳥取県福祉人材研修センター）	平成 29 年 2 月 27 日	鳥取県教育委員会主催の「幼保小連携推進研修会」において、幼保・認定子ども園棟等の管理職及び教諭、保育士、保育教諭、小学校、特別支援学校の管理職及び連携担当者、1 年生の担任、市町村教育委員会担当者などの 200 名を対象に幼保小の円滑な接続をめざして ～幼児教育と小学校をつなぐ～をテーマに講演・演習、指導講評を担当
岡山市保育協議会研修（於：岡山市役所 保健福祉局勤労者福祉センター）	平成 29 年 6 月 5 日	岡山市保育協議会主催の研修会において、保育園・こども園の園長・保育士 135 名を対象として、子どもの育ちと学びをつなぐ ～就学前までに育てたい力、つけたい力～ 」をテーマに講演。
大阪市私立幼稚園連合会講演（於：）	平成 29 年 6 月 20 日	大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会において、幼稚園教諭 50 名を対象に「子どもの育ちや学びをつなぐ ～幼児教育と小学校以降の教育の連携・接続～」をテーマとして、講演。合わせて、事務局を通じて、本学の案内と共に、学生の実習の際の受入等についてもお願いした。
奈良県就学前教育振興プログラム策定会議（於：京都大学）	平成 29 年 6 月 28 日	奈良県教委が京都大学に委嘱した事業「就学前教育プログラム策定」委員として出席し、2017 年度取り組みを検討した。とりわけ、保育・教育現場への評価規準や指標の示し方の提示など、新たな知見が情報交換された。
大和高田市まち・ひと・しごと創生会議（於：大和高田市役所）	平成 29 年 7 月 4 日	大和高田市主催の大和高田市まち・ひと・しごと創生会議において議長として、協議会を進行。議案の２「地方創生加速化交付金に係る事業の実施結果」及び議案の３「地方創生推進交付金に係る事業の実施状況」について検証。
平成 29 年度第 1 回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成 29 年 7 月 18 日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府ＨＰにて公開。
平成 29 年度第 2 回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成 29 年 7 月 19 日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府ＨＰにて公開。

西宮市教育委員会主催「つながり研修②」（於：西宮市職員会館）	平成29年7月24日	西宮市教育委員会主催の「つながり研修」において、幼稚園・保育所・小学校、特別支援教育の教職員100名を対象として、『育った力を学びの力につなぐⅠ「とまどいマトリクス」の活用を通して』①をテーマに講演。
大和高田市人権研究会　市人教　課題別研修会	平成29年7月29日	大和高田市人権教育研究会主催の平成２９年度大和高田市人権教育研究会　課題別研修会において、市人教会員（保幼こ小中高の教職員）120人を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ ～幼児期と小学校教育の連携・接続～ 」をテーマに講演。
平成29年度第3回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成29年7月31日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府ＨＰにて公開。
平成29年度保育士の専門性を高める連続研修会（於：TKP心斎橋駅前カンファレンスセンター）	平成29年8月1日	大阪府社会福祉協議会主催の平成29年度保育士の専門性を高める連続研修会において、府内の民間保育園･認定こども園に所属する施設長、リーダー、主任保育士に準ずる者200名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～就学前までに育てたい力～ 」をテーマに講演。今後の実習のお願いもした。
平成29年度和歌山県訪問型家庭教育支援事業第1回協議会（於：和歌山県庁）	平成29年8月2日	議長として、協議会を進行した。平成29年度の方向性として、以下の２点に特化して協議した。①事業の成果や効果を図るための成果指標の効果的な活用について　②円滑な支援に向けたシステムの構築について。①について、成果目標のもと、経年比較を行い事業評価報告で指標を示し、成果の客観性を図るよう指示した。
教員免許更新講習（於：奈良学園大学）	平成29年8月9日	奈良教育大学委嘱の教員免許更新講習を担当した。奈良学園大学「幼小接続室」を会場として、現職教員小学校及び幼稚園教諭38名に対して、生活科及び幼小接続カリキュラムについての理解を深め、認定評価した。
平成29年度第4回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成29年8月30日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府ＨＰにて公開。
平成29年度海南市公民館大会（於：海南市民会館）	平成29年9月3日	海南市教育委員会主催の「海南市公民館大会」において、海南市公民館館長教育関係200名を対象に「未来を拓く学びをつなぐ公民館～ 学校・家庭・地域がつながるためにできること～ 」をテーマに講演。和歌山県における本学の周知活動と共にお礼と次年度以降の実習等のお願いもした。
鳥取県倉吉市「幼保小連携推進研修会」（於：鳥取県立倉吉体育文化会館）	平成29年9月5日	倉吉市教育委員会主催の幼保合同研修会において、倉吉市内保育園・認定こども園の教職員、小学校教職員50名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児期と小学校の連携・接続～」をテーマに講演。鳥取県における本学の周知活動と共に、実習先の校長及び教員の参加もあり、お礼と次年度以降のお願いもした。
沖縄県宮古地区園長等運営管理協議会（於：宮古教育事務所）	平成29年9月11日	沖縄県宮古教育事務所主催の宮古地区園長等運営管理協議会において、宮古管内幼保教職員、小学校教職員・校長120名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児期と小学校の連携・接続～」をテーマに講演。沖縄県における本学の周知活動と共に、お礼と次年度以降の実習等のお願いもした。
奈良県就学前教育振興プログラム策定会議 実地訪問指導（於：田原本町立南幼稚園）	平成29年9月19日	H29奈良県就学前教育調査研究事業に係る、訪問調査へ委員として出席。奈良県教育委員会企画部及び教育委員会幼小担当指導主事、京都大学大学院

		生、田原本南幼稚園園長、教員に評価について指導助言及び今後の評価シート作成に当たってのインタビューを進めた。
奈良県就学前教育振興プログラム策定会議（於：奈良県立教育研究所）	平成29年9月29日	第2回奈良県就学前教育振興研究会へ委員として出席。訪問指導の報告と他の実践に対する分析を行った。
和歌山県訪問型家庭支援事業第2回協議会（於：和歌山県庁）	平成29年10月16日	議長として、協議会を進行した。平成29年度の方向性として、以下の２点に特化して協議した。①事業の成果や効果を図るための成果指標の効果的な活用について　②円滑な支援に向けたシステムの構築について。①について、成果目標のもと、経年比較を行い事業評価報告で指標から、成果の客観性を確認した。
宇陀市平成29年度宇陀市教育センター研修「幼小連携・接続講座」（於：宇陀市役所）	平成29年11月20日	宇陀市教育委員会主催の「平成29年度宇陀市教育センター研修」幼小連携・接続の講座において、幼稚園・保育所・こども園小学校の教職員40名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児期と小学校の連携・接続」をテーマに講演。本学の周知活動と共に、実習のお礼と次年度以降のお願いもした。
和歌山県訪問型家庭支援事業第3回協議会（於：和歌山県庁）	平成29年12月4日	議長として、協議会を進行した。平成２９年度各市町の取組成果とシンポジウムの方向性の２点について協議した。 ①事業の成果や効果を図るための成果指標の確認 ②シンポジウムの企画と進行の原案検討
日本精神看護協会主催「教育方法研修会」（於：京都研修所）	平成29年12月13日	日本精神看護協会京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者46名を対象に「授業の形態・方法」をテーマとして、講義・演習を担当した。
大阪府私立学校審議会（於：大阪府庁）	平成29年12月21日	「大阪府私立学校審議会」の委員による平成29年度12月定例会に出席。議事は、8号議案の申請概要を審議した。また、報告事項2点に基づいて意見交換された。
奈良市教職員研修講座（於：奈良市教育センター）	平成29年12月26日	奈良市教育センター主催の平成29年度教職員指導力向上研修講座において、受講者103名（小学校43各担当者、市立こども園12、幼稚園23保育園12、幼児教育アドバイザー等）を対象に「幼児教育と小学校教育の育ちと学び連続性」について、講演。また、教育実習及び学校園支援ボランティアのお礼と今後のご指導のお願いの場とした。
大阪府教育庁主催「第3回地域教育コーディネータ研修」（於：大阪府庁）	平成30年1月24日	大阪府教育庁主催の「第3回地域教育コーディネータ研修」において、「家庭教育支援員」「親学習リーダー」を含む地域教育コーディネータ・学校教職員・行政関係者200名を対象に「つながろう！家庭・学校・地域・行政・福祉～切れ目のない支援のために～」をテーマに講演した。また、教育実習及び学校園支援ボランティアのお礼と今後のご指導のお願いの場とした。
和歌山県訪問型家庭教育支援事業シンポジウム講演及び第4回協議会（於：紀南文化会館）	平成30年1月29日	和歌山県生涯教育局主催の「平成29年度和歌山県社会教育関係職員研究会・訪問型家庭教育支援事業シンポジウム」において、「家庭教育支援員」「親学習リーダー」を含む地域教育コーディネータ・学校教職員・行政関係者９０名を対象に「つながろう！家庭・福祉・教育!!ひろげよう！家庭教育支援!!切れ目のない支援に向けて～」をテーマに講演した。また、教育実習のお礼と今後のご指導のお願いの場とした。さらに、「第4回協議会」で座長とし

		て、議事進行と総括をした。
西宮市教育委員会主催「つながり研修②」（於：西宮市立芦之湯会館）	平成30年2月1日	西宮市教育委員会主催の「つながり研修②」において、・小学校27名、特別支援教育5名、幼稚園32名・保育所46名の教職員105名を対象として、『育った力を学びの力につなぐ「とまどいマトリクス」の活用を通して』Ⅱをテーマに講演及びワークショップを実施した。 実習校の教員の参加もあり、お礼と次年度のお願いもした。
奈良県教育委員会主催奈良県就学前教育センター「明日の保育をつくる人材育成フォーラム」（於：奈良県社会福祉総合センター大ホール）	平成30年2月19日	奈良県教育委員会主催の奈良県就学前教育センター「明日の保育をつくる人材育成フォーラム」において、公私立幼児教育関係教職員及び行政関係者120名を対象として、「奈良県就学前教育プログラムで育む子どもの姿」のパネルディスカッションにおけるコーディネーターを務めた。続いて「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児教育と小学校の連携・接続～」をテーマに講演した。 実習校の教員の参加もあり、お礼と次年度のお願いもした。
大阪府人権施策推進審議会（於：大阪府庁）	平成30年2月28日	第32回大阪府人権施策推進審議会に委員として出席。会長代理に任命された。審議内容は、以下の4点であった。 (1) 会長及び会長代理の選任について、（２）平成28（2016）年度人権施策の状況について、（３）性的マイノリティの人権問題についての理解増進に向けた取組について、（４）その他について審議した。
大阪府私立学校審議会（於：大阪府庁）	平成30年3月19日	「大阪府私立学校審議会」平成30年度3月定例会を開催し、委員として出席。議事は、21議案の申請概要を審議し、報告事項2点に基づいて意見交換がなされた。
阪急学園教職員研修会（於：阪急学園）	平成30年3月26日	阪急学園教職員研修会において、幼稚園教諭、保育園保育士計８０名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演を実施した。8園の法人は、理事長を中心に強固な研修体制を推進されており、学内の幼保コースへの就職情報としても提供したい。
和歌山県訪問型家庭支援事業第1回協議会（於：和歌山県民文化会館）	平成30年6月26日	訪問型家庭支援事業第1回協議会に会長として出席。昨年度の課題整理をふまえて今年度の方向性を協議。年度内計画を策定した。
大和高田市まち・ひと・しごと創生会議（於：大和高田市役所）	平成30年7月3日	大和高田市長依頼の「大和高田市まち・ひと・しごと創生会議」において、会長として選出され、進行した。大和高田市まち・ひと・しごと創生戦略における実施状況報告と地方創生関連交付金にかかる実施状況の報告と意見交換をした。
日本精神看護協会「教育方法研修会」（於：京都研修センター）	平成30年7月4日	日本精神看護協会主催の研修会において、精神科認定看護師資格取得を目指す看護師60名を対象に「組織内における活動　教育論１」をテーマに講義演習を実施した。
岡山市保育協議会研修（於：岡山市役所 保健福祉局勤労者福祉センター）	平成30年7月10日	岡山市保育協議会主催の「保幼小連携研修会」において、岡山市公私立認可保育園・認定こども園保育士130姪を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～就学前までに育てたい力、つけたい力～」をテーマに講演。

西宮市教育委員会主催「つながり研修」（於：青空幼稚園）	平成30年7月24日	西宮市教育委員会主催の「つながり」研修において、保育所保育士、幼稚園等・小学校・特別支援学校教員等100名を対象に『幼保小連携・接続のためになすべきこと、できること ～「とまどいマトリクス」の活用を通して～』をテーマに講演。
奈良市教頭講座②（於：奈良市教育センター）	平成30年7月25日	奈良市教育センター主催の「教頭研修講座②」において、小学校、中学校、高等学校の教頭68名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ校種間連携の在り方」をテーマに講演。
島本町夏季セミナー（於：島本町立第二小学校）	平成30年7月31日	大阪府島本町教育委員会主催の夏季セミナー健康教育分科会において、教職員50名を対象（２中学校、４小学校、２幼稚園、保）に保幼小連携推進協議会の活動報告とグループ討議の後に「保育所・幼稚園から小学校へ～よりよい接続のために～」について指導助言。
湯浅町PTA講演会（於：湯浅町立湯浅小学校）	平成30年9月28日	和歌山県湯浅町教育長及び学校長と共に、全学級を授業参観後、湯浅小学校において、教職員40名及び保護者85名を対象に「PTA子育て講演会」講師を担当。近隣の県立耐久高等学校からの入学者もある本学の紹介も含めて「2030年に生きる力を輝かせる～育ちと学びの連続をふまえて～」をテーマに講演。
王寺町子育て「どんぐり」in奈良学園大学（於：奈良学園大学）	平成30年11月24日	王寺町子育て「どんぐり」in奈良学園大学において、保護者30名を対象に「変わる子育て、変わらない子育て-2030年の社会と子どもの未来を見すえて」をテーマに講演。
「就学前教育振興プログラム」研修会（於：天理市立嘉幡保育所）	平成30年12月10日	奈良県教育振興課主催の「就学前教育振興プログラム」研修会において、県内市町村指導主事、教育研究所長期研究員、保育所長・保育士等16名を対象に「幼小接続期における育ちと学びの連続 『ハイスコープ就学前教育プログラム』の活用と言葉の力」をテーマに参観後の講演。
大阪府人権教育審議会（於：國民会館）	平成30年12月19日	第33回大阪府人権施策推進審議会に副会長として出席。(1) 大阪府人権推進計画の点検について、（２）行政文書における性別記載の点検・見直しについて審議した。
訪問型家庭支援事業シンポジウム（於：和歌山県勤労福祉会館プラザホール）	平成31年1月21日	和歌山県教育長主催の「訪問型家庭支援事業シンポジウム」において、家庭教育支援関係者・社会教育関係職員・学校関係職員・福祉関係職員・子育てサークル関係者・SSW/SSC/等の参加者160名を対象にコーディネーター及び講師として「つながろう家庭・福祉・教育！ひろげよう 家庭教育支援！！切れ目のない支援に向けて～地域で家庭をささえるために～」をテーマに講演。
訪問型家庭支援事業第3回協議会（於：和歌山県勤労福祉会館プラザホール）	平成31年1月21日	訪問型家庭支援事業第1回協議会に会長として出席。課題整理をふまえて実施項目及びシンポジウム評価を策定した。
西宮市教育委員会主催「つながり研修②」（於：西宮市職員会館）	平成31年1月28日	西宮市教育委員会主催の第２回「つながり」研修において、市内小学校教諭・幼稚園教諭等110名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ言葉の力を育むために ～2030年の社会と子どもの未来を見すえて～」をテーマに講演。
第34回 大阪府人権施策推進審議会（於：大阪府男女共同参画センター）	平成31年2月15日	大阪府府民文化部人権局長より通知のあった「第34回大阪府人権施策推進審議会」に副会長として出席。(1) ヘイトスピーチの解消及び性的マイノリ

		ティに対する差別の解消に向けた条例整備について（諮問）審議した。
第35回 大阪府人権施策推進審議会（於：大阪府男女共同参画センター）	平成31年3月22日	大阪府府民文化部人権局長より通知のあった「第35回大阪府人権施策推進審議会」に副会長として出席。(1)大阪府人権尊重の社会づくり条例における府民及び事業者の責務について（論点整理）(2)人種又は民族を理由とする不当な差別的言動の解消に向けた規定について（論点整理）(3)性的マイノリティに関する当事者及び有識者の主な意見について(4)その他報告事項。審議した。
第36回 大阪府人権施策推進審議会（於：大阪府男女共同参画センター）	平成31年4月26日	大阪府府民文化部人権局長より通知のあった「第36回大阪府人権施策推進審議会」に副会長として出席。(1)大阪府人権尊重の社会づくり条例における府民及び事業者の責務について（論点整理）(2)人種又は民族を理由とする不当な差別的言動の解消に向けた規定について（論点整理）(3)性的マイノリティに関する当事者及び有識者の主な意見について(4)その他報告事項を審議した。
第37回 大阪府人権施策推進審議会（於：プリムローズ大阪）	令和元年5月24日	大阪府府民文化部人権局長より通知のあった「第37回大阪府人権施策推進審議会」に副会長として出席。審議内容は、次の3点であった。　(1) ヘイトスピーチの解消に向けた規定について (2)答申のとりまとめについて(3)その他報告事項。
西宮市第１回　専門課題研修（於：西宮市総合教育センター）	令和元年5月28日	西宮市教育委員会主催の「西宮市第１回　専門課題研修」において、保育所・幼稚園・認定こども園・小学校・特別支援学校教職員 約60名を対象に、「幼小接続期における「主体的・対話的で深い学び」のために～「さんぽ」から「町探検」を事例に～」をテーマに講演した。
奈良県立西の京高校模擬授業（於：奈良県立西の京高等学校）	令和元年6月10日	「2030年のあなたが保育・教育に関わる仕事で輝くために～自ら意欲スイッチを押す魔法のしかけとは？～」をテーマに、高校2年生40名を対象に講義。あと10年で「消える職業」「なくなる仕事」（「雇用の未来」オックスフォード大学マイケル・A・オズボーン博士）の論文をもとに、これからの時代を生きるために「学ぶ意欲のしくみ」を知り、意欲スイッチを押す魔法のしかけについて考え、自らの意欲向上と共に、「保育や教育」のスペシャリストになるストーリーについて、論議させた。
奈良県王寺町立王寺幼稚園園内研修会（於：王寺町立王寺幼稚園）	令和元年6月18日	王寺町立王寺幼稚園園内研修会において、園長及び幼稚園教諭10名を対象に、午前の公開保育を通した指導助言及び「小学校を見通した幼児期の学びの在り方と『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』について」をテーマに講演した。
奈良市小中学校校長研修会（於：奈良市保健所・教育総合センター ）	令和元年6月24日	奈良市教育センター主催の奈良市教職員兼推移講座「校長のリーダーシップ研修」において、奈良市立学校校長62名を対象に「校種間連携の今後のあり方～子どもの育ちと学びの連続をふまえて～」をテーマに講演。
鳥取県東部教育局主催「子育て・家庭教育支援講座」（於：鳥取県東部庁舎）	令和元年7月1日	鳥取県東部教育局主催の「子育て・家庭支援講座（第２回）」において、小学校・幼保職員・社会教育関係者40名を対象に「教育と福祉の連携・協働体制構築に向けて ～切れ目のない支援を地域で家庭を支えるために～ 」をテーマに講演。
奈良県国公立幼稚園・子ども園研究協議会（於：平和地区公民館）	令和元年8月5日	奈良県国公立幼稚園・子ども園研究協議会主催の研修会において、園長121名を対象に「園長のリーダーシップの在り方 ～就学前後をつなぐマネジメントを通して～」をテーマに講演。

和歌山県湯浅町保幼小研修会（於：湯浅町役場）	令和元年８月21日	湯浅町教育委員会主催の保幼小研修会において、保育所長、小学校関係職員、教育委員会職員を対象に「湯浅町の未来を創る～こどもの育ちと学びをつなぐために～ 」をテーマに講演。
橋本市訪問型家庭支援員研修会（於：橋本市教育文化会館）	令和元年９月４日	和歌山県橋本市教育委員会主催の家庭教育支援員研修会において、ヘスティアチーム30名を対象に「就学時健診の際に保護者対象のグループワークの在り方について」をテーマに講演
令和元年度和歌山県訪問型家庭支援事業第１回協議会(於：和歌山県民文化会館)	令和元年９月30日	和歌山県生涯学習局主催の内閣府指定「訪問型家庭支援事業」第一回協議会に座長として出席した。和歌山県内４市町の取組の成果と課題をふまえ、県内の実施拡大と質向上に効果のある今年度シンポジウムの在り方について協議を深めた。
京都府立南陽高校模擬授業(於:京都府立南陽高校)	令和元年10月24日	「2030年のあなたが保育・教育に関わる仕事で輝くために～自ら意欲スイッチを押す魔法のしかけとは？～」をテーマに、高校２年生40名を対象に講義。あと10年で「消える職業」「なくなる仕事」（「雇用の未来」オックスフォード大学マイケル・A・オズボーン博士）の論文をもとに、これからの時代を生きるために「学ぶ意欲のしくみ」を知り、意欲スイッチを押す魔法のしかけについて考え、自らの意欲向上と共に、「保育や教育」のスペシャリストになるストーリーについて、論議させた。
令和元年度和歌山県訪問型家庭支援事業第２回協議会(於：和歌山県民文化会館)	令和元年11月25日	和歌山県生涯学習局主催の内閣府指定「訪問型家庭支援事業」第二回協議会に座長として出席した。和歌山県内４市町の取組の成果と課題をふまえ、成果指標の検討及び県内の実施拡大と質向上に効果のある今年度シンポジウムの在り方について、コンテンツや役割等もふまえ協議を深めた。
大和高田市第一回こども・子育て会議（於：大和高田市役所）	令和元年12月26日	大和高田市こども･子育て会議の会長として選出され、KPIに基づいて議論を進めた。
第３回和歌山県訪問型家庭支援事業シンポジウム及び協議会（於：紀南文化ホール）	令和２年１月27日	和歌山県障害教育局主催の訪問型家庭支援事業シンポジウムにおいて、参加者約70名（家庭教育支援関係者、園・学校教育関係職員、ＰＴＡ、福祉関係職員、社会教育関係職員、ＳＳＷ）を対象に コーディネーターを努めた。また、第３回協議会において、座長を務め進行し、今年度の総括をした。
横浜市　桐蔭学園幼稚部・キッズフォーレ保育所研修会	令和２年２月17日・18日	登園から視察の上、指導助言。できているところ、問題点を指摘。今後の研修改善に生かすためのハイスコープ評価及び園評価について資料提供した。
第２回大和高田市こども・子育て会議（於：大和高田市総合福祉会館（ゆうゆうセンター））	令和２年３月３日	第２回大和高田市子ども子育て会議の議長として、第二期子ども・子育て支援事業計画（素案）について、委員の意見を取りまとめた。
令和２年度訪問型家庭教育支援推進事業協議会（第１回）@和歌山県自治会館	令和２年６月29日	和歌山県生涯学習局主催の内閣府指定「訪問型家庭教育支援事業」第一回協議会に座長として出席した。和歌山県内４市町の取組の成果と課題をふまえ、県内の実施拡大と質向上に効果のある今年度シンポジウムの在り方について協議を深めた。
第38回大阪府人権施策審議会online	令和２年７月20日	大阪府府民文化部人権局長より通知のあった「第38回大阪府人権施策推進審議会」に会長として出席。審議内容は、大阪府HPに掲載。
神戸市子育て研修会（第２回）@ 新長田勤労市民センター別館ピフレホール	令和２年７月27日	神戸市子ども家庭局主催の「神戸市子育て研修会（第２回）　」において、神戸市立保育所・神戸市私立保育園（所）・認定こども園・小規模保育事業所･家庭的保育事業所に勤務する保育士及び保育教諭、教育委員会指導主事、保育行政担当者等200名を対象に幼稚園･保育所（３歳以上）･認定こども園の教育･保育課程の編成や実施に伴う指導上の諸課

		題、今後の幼児教育・保育の充実と保育者の資質向上に資する事を目的として、「子どもの育ちと学びをつなぐ～小学校教育以降との接続 ～」をテーマに講演。
令和２年度和歌山県教育課程・保育実践研究協議会@和歌山県自治会館大会議室	令和２年８月３日	文部科学省・和歌山県教育委員会主催の「教育課程・保育実践研究協議会」において、公･私立幼稚園の教員、公･私立保育所の保育士、公･私立認定こども園の保育教諭、認可外保育施設関係者、各市町村教育委員会指導主事、各市町村保育行政担当者等85名を対象に幼稚園･保育所（３歳以上）･認定こども園の教育･保育課程の編成や実施に伴う指導上の諸課題について、各園・所における日々の実践を交流し合い、今後の幼児教育・保育の充実と保育者の資質向上に資する事を目的として、「子どもの育ちと学びをつなぐ～ 幼小接続におけるカリキュラム・マネジメントを通して～」をテーマに講演。
和歌山県訪問型家庭教育支援推進事業令和２年度第２回協議会@和歌山県民文化会館	令和２年８月31日	「和歌山県訪問型家庭教育支援推進事業令和２年度第２回協議会」において、会長として司会進行を務めた。
第３回訪問型家庭教育支援推進協議会 和歌山県訪問型家庭教育支援推進事業シンポジウム@和歌山県民文化会館	令和２年８月31日	「和歌山県訪問型家庭教育支援推進事業令和２年度第３回協議会」において、会長として司会進行を務めた。 「シンポジウム」では、参加者200名（市町村関係職員・学校運営協議会委員・教職員・PTA関係者、幼・保・こども園職員、福祉関係者等）を対象にパネルディスカッションコーディネーター及び総括講演「切れ目のない支援を充実させるために」をテーマに総括講演した。その後TV和歌山の取材を受けインタビューに答えた。
第39回大阪府人権施策推進審議会（@マイドームおおさか）	令和２年11月９日	大阪府府民文化部人権局長より通知のあった「第39回大阪府人権施策推進審議会」に会長として出席。審議内容は、HPに掲載。
桐蔭学園研修会（第１回）online	令和２年12月７日	桐蔭学園主催の研修会において、小学校及び幼稚園管理職と教員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～チャレンジする子を育てるチャレンジする教職員をめざして～」をテーマに講演)。
桐蔭学園研修会（第２回）online	令和３年１月25日	桐蔭学園主催の研修会において、小学校及び幼稚園管理職と教員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～地域になくてはならない園づくりから考える「カリキュラム改善」～をテーマに講演。
第４回訪問型家庭教育支援推進協議会@和歌山県民文化会館	令和３年２月15日	「和歌山県訪問型家庭教育支援推進事業令和２年度第４回協議会」において、会長として司会進行を務めた。
桐蔭学園研修会（第３回）online	令和３年２月22日	桐蔭学園主催の研修会において、小学校及び幼稚園管理職と教員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～地域になくてはならない園づくりから考える「カリキュラム改善」②～」をテーマに講演。
第40回大阪府人権施策推進審議会（@マイドームおおさか）	令和３年３月24日	大阪府府民文化部人権局長より通知のあった「第40回大阪府人権施策推進審議会」に会長として出席。審議内容は、HPに掲載。
桐蔭学園研修会（第４回）online	令和３年３月25日	桐蔭学園主催の研修会において、小学校及び幼稚園管理職と教員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～ 対話的学びから考える「カリキュラム改善」～」をテーマに講演

桐蔭学園研修会（第５回）online	令和３年４月27日	桐蔭学園主催の研修会において、小学校及び幼稚園管理職と教員を対象に「「子どもの育ちと学びをつなぐ非認知能力の育成～自立心と規範意識～」をテーマに講演
滋賀県令和３年度国公立幼稚園・こども園長会研修会	令和３年５月31日	滋賀県国公立幼稚園こども園長会主催の研修会において、滋賀県公･私立幼稚園の教員、公･私立保育所の保育士、公･私立認定こども園の保育教諭、認可外保育施設関係者、各市町村教育委員会指導主事、各市町村保育行政担当者等100名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ園経営～ 保幼小連携接続を通して～」をテーマにZOOMによるオンライン講演。
第１回神戸市幼小接続研修会＠神戸市勤労会館 大ホール	令和３年６月14日	神戸市こども家庭局主催の「幼小接続研修会」において、150名（公立保育所７４名・民間園７４名）の主任保育士、行政関係者を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～小学校との接続～」をテーマに講演。
桐蔭学園研修会（第６回）online	令和３年６月22日	桐蔭学園主催の研修会において、小学校及び幼稚園管理職と教員を対象に「**子どもの育ちと学びをつなぐ**非認知能力の育成～自立心と規範意識②～」をテーマに講演
第１回訪問型家庭教育支援推進協議会＠和歌山県民文化会館	令和３年７月12日	「和歌山県訪問型家庭教育支援推進事業令和３年度第１回協議会」において、会長として司会進行を務めた。また、「家庭教育支援チームの活動の推進に係る文部科学大臣表彰推薦について」協議した。
桐蔭学園研修会（第７回）online	令和３年７月22日	桐蔭学園主催の研修会において、小学校及び幼稚園管理職と教員を対象に「**子どもの育ちと学びをつなぐ**非認知能力の育成～ 環境を生かし、「問いかける力」をもつために ～」をテーマに講演
桐蔭学園研修会（第８回）online	令和３年９月27日	桐蔭学園主催の研修会において、小学校及び幼稚園管理職と教員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐオンライン保育の工夫・効果と課題　～「健康な心と体」から考える～ 」をテーマに講演
大阪府立八尾高等学校	令和３年11月５日	大阪府立八尾高等学校主催のキャリア研修「総合的探究の時間」において、第２学年希望者40名を対象に「2030年のあなたが輝くために～自ら意欲スイッチを押す魔法のしかけとは？～」をテーマに講義担当。 その後、受講者と共にローカルラジオ出演。
下関市中核市研修「なめらかな接続」のための連携教育研修会＠下関市教育センター	令和３年11月８日	山口県下関市教育委員会主催の下関市中核市研修「なめらかな接続」のための連携教育研修会において、認定こども園・幼稚園・保育園長、小学校長認定こども園保育教諭、幼稚園教諭、保育園保育士、小学校教諭等、約100名を対象に、「育ちと学びをつなぐ～幼小接続期における『主体的・対話的な深い学び』に向けて～」をテーマに講演した。
桐蔭学園研修会（第９回）online	令和３年11月15日	桐蔭学園主催の研修会において、小学校及び幼稚園管理職と教員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ【幼稚園で実現したい子どもの姿】 研修会１周年目を振り返る」をテーマに講演
第２回神戸市幼小接続研修会＠神戸市勤労会館 大ホール	令和３年11月29日	神戸市主催の公私合同保育士研修（兵庫県の保育士等のキャリアアップ研修の対象）において、

		保育所長、保育教諭、保育士１３４名（公立保育所　６１名　民間園　７３名　）を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～小学校との接続～」をテーマに講演。
桐蔭学園研修会（第 10 回）online	令和３年 12 月 20 日	桐蔭学園主催の研修会において、小学校及び幼稚園管理職と教員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～2 学期の振り返り・総括～」をテーマに講演
桐蔭学園研修会（第 11 回）online	令和４年２月 21 日	桐蔭学園主催の研修会において、小学校及び幼稚園管理職と教員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～　オンライン保育・教育・ICT 活用の対話～」をテーマに講演
桐蔭学園研修会（第 12 回）online	令和３年３月 24 日	桐蔭学園主催の研修会において、小学校及び幼稚園管理職と教員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～2021 総括と 2022 スタートへの接続～」をテーマに講演
和歌山県訪問型家庭教育支援推進協議会＠和歌山県民文化会館	令和４年５月 9 日	「和歌山県訪問型家庭教育支援推進事業令和４年度第１回協議会」において、会長として議事司会進行を務めた。また、「県内の取組について」協議した。
日高川町専門講座研修会＠日高川町農村環境改善センター　大会議室	令和４年５月 23 日	和歌山県主催の専門講座において、家庭教育支援関係者、学校関係者、行政関係者、学校運営協議会委員、元教員、元保育士、保健師、民生児童委員を対象に、　「切れ目のない支援と訪問型家庭教育支援について　～学校教育と福祉行政の連携～　」をテーマとして講演とワークショップを実施。
神戸市公私合同保育士研修＠＠神戸市勤労会館　大ホール	令和４年６月 13 日	神戸市子ども家庭局主催の公私合同保育士研修の「幼児教育（⑤小学校との接続）」（兵庫県の保育士等のキャリアアップ研修の対象）において、神戸市立保育所・神戸市私立保育園（所）・認定こども園・小規模保事業所・家庭的保育事業所に勤務する保育士及び保育教諭等 150 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～小学校との接続、地域・保護者との連携～」をテーマに講演。
桐蔭学園研修会（第 13 回）online	令和４年７月 20 日	桐蔭学園主催の研修会において、幼稚園管理職と教員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～「言葉による伝え合い」スピーチ活動、今日のニュースを通して　～」をテーマに講演
日高川町教育研究会　教育講演会＠日高川町交流センター大ホール	令和４年８月 10 日	日高川町教育研究会主催の研修会に於いて、日高川町内小学校・中学校の教職員 151 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～学校間接続、家庭教育・福祉行政との連携～」をテーマに講演
令和４年度第２回和歌山県訪問型家庭教育支援推進協議会＠和歌山県自治会館	令和４年９月 7 日	「和歌山県訪問型家庭教育支援推進事業令和４年度第２回協議会」において、会長として議事司会進行を務めた。また、「教育現場への訪問型家庭支援の理解促進」、「切れ目の内支援の充実について」等の協議を進め指導助言した。
鳥取県令和４年度東部地区幼稚園教諭・保育教諭・保育士等合同研修会 online	令和４年９月 13 日	鳥取県教育委員会主催の「令和４年度東部地区幼稚園教諭・保育教諭・保育士等の合同研修会」において、幼稚園保育園・こども園の園長・副園長等 150 名を対象に「地域に開かれた園づくり　～元気の出る学校園評価～　」をテーマに講演。（オンライン研修に変更）

大和郡山市片桐幼稚園園内研修会＠片桐幼稚園ホール	令和４年９月21日	大和郡山市片桐幼稚園主催の園内研修会において、研究テーマ 「つながろう　楽しもう　心はずませて～３年間の生活を見通して～」にかかる実際保育を通しての研修及び研究協議並びに指導をした。
神戸市公私合同保育士研修＠兵庫県民会館　９階けんみんホール	令和４年10月17日	神戸市子ども家庭局主催のキャリアアップ研修会において、公立保育士６４名民間保育士　８８名計１５２名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ～小学校との接続、地域・保護者との連携～」をテーマに講演。
京都府家庭教育支援研修＠京都府総合教育センター	令和４年10月31日	京都府教育委員会主催の「京都府家庭教育支援研修」において、 家庭教育アドバイザー、まなび・生活アドバイザー 、家庭教育支援基盤構築事業実施市町における家庭教育支援員、家庭教育支援チーム構成員、地域コーディネータ、教育委員会担当者（社会教育・学校教育）等 、保健所、児童相談所、保健センター、子育て世代包括支援センター、児童館等保健・福祉行政担当者等、民生・児童委員、主任児童委員、社会福祉協議会、子育て支援団体等関係者等の50名を対象に「 こどもの育ちと学びをつなぐ～家庭教育・福祉行政との連携、学校間接続を通して～」をテーマに講演とワークショップの講師。
大阪府立八尾高等学校出張講座＠大阪府立八尾高等学校	令和４年11月４日	大阪府立八尾高等学校主催の出張講座「総合的な探究の時間」に係る講義において、文理選択を終えた生徒が、進学先の大学で学ぶ、学問の雰囲気を実際に体験することで、進学への意思を強くすることを目的として、高校2年生25名を対象として、「2030年のあなたが輝くために～自ら意欲スイッチを押す魔法のしかけとは？～」をテーマに講義を担当。
京都府家庭教育支援研修＠京都府総合教育センター北部研修所	令和４年11月７日	京都府教育委員会主催の「京都府家庭教育支援研修」において、 家庭教育アドバイザー、まなび・生活アドバイザー 、家庭教育支援基盤構築事業実施市町における家庭教育支援員、家庭教育支援チーム構成員、地域コーディネータ、教育委員会担当者（社会教育・学校教育）等 、保健所、児童相談所、保健センター、子育て世代包括支援センター、児童館等保健・福祉行政担当者等、民生・児童委員、主任児童委員、社会福祉協議会、子育て支援団体等関係者等の50名を対象に「 こどもの育ちと学びをつなぐ～家庭教育・福祉行政との連携、学校間接続を通して～」をテーマに講演とワークショップの講師。
日高川町立山野小学校教育講演会＠日高川町立山野小学校体育館	令和４年11月14日	日高川町立山野小学校教育講演会主催の令和４年度PTA講演会において、保護者及び教職員を対象に「育ちと学びをつなぐ家庭教育と学校教育の連携～子供に届く声かけとは？～ 」をテーマに講演。
令和４年度第３回和歌山県訪問型家庭教育支援推進協議会＠和歌山県民文化会館	令和４年12月19日	「和歌山県訪問型家庭教育支援推進事業令和４年度第３回協議会」において、会長として議事司会進行を務めた。また、「専門講座の在り方について」「令和４年度きのくにコミュニティスクール推進フォーラム」等の協議を進め、指導助言した。
桐蔭学園研修会（第14回）online	令和４年12月26日	桐蔭学園主催の研修会において、幼稚園管理職と教員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～ハイスコープ実施検証から～」をテーマに講演
大阪府保育部会北大阪ブロック会保育者研修＠大	令和５年１月	大阪府保育部会北大阪ブロック会主催の保育者

東市立文化ホール（サーティホール）	25 日	研修において、北大阪ブロック会会員（理事長・園長・保育士等）100 名を対象に「こどもの育ちと学びをつなぐ～幼保小の架け橋プログラムの重要性～」をテーマに講演。
和歌山県令和４年度きのくにコミュニティスクール推進フォーラム＠県民交流プラザ・和歌山ビッグ愛	令和５年２月24 日	和歌山県教育委員会主催の「コミュニティスクール推進フォーラム」において、小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援学校の教職員、行政職員、学校運営協議会委員、地域学校協働活動推進員、家庭教育支援関係者、公民館関係者、企業関係者、ＰＴＡ関係者、共育コミュニティ関係者等 を対象として、全体会及び「全小学校と家庭をつなぐ部」分科会に、和歌山県訪問型家庭支援推進事業協議会座長として出席。
令和４年度第４回和歌山県訪問型家庭教育支援推進協議会＠和歌山県民文化会館	令和５年３月６日	和歌山県教育庁生涯学習局主催の令和４年度第４回訪問型家庭教育支援推進協議会において、第２回子育て講座及びきのくにコミュニティスクール推進フォーラムにおける分科会「全小学校と家庭をつなぐ部」及び「令和４年度のふりかえり及び令和５年度の推進に向けて」をテーマに、訪問型家庭教育支援推進協議会座長として指導助言。
５　その他		
・大阪府私立学校審議会委員	平成22年７月～平成 29 年３月まで	大阪府内私立学校にかかる審議事項を検討した。
・大阪府子ども施策審議会委員	平成25年６月～平成28年３月まで	大阪府子ども施策にかかる審議事項を会長代理として検討した。
・大阪府教育行政評価審議委員	平成26年６月～平成28年３月まで	大阪府教育施策にかかる審議事項を委員として検討した。
・大和高田市ひとまちしごと創生会議委員長	平成27年６月～令和元年 ９月まで	大和高田市地方創世にかかる意見交換会において委員長として検討した。
・三郷町産官学連携常任委員	平成28年６月～令和 ４ 年 ３月まで	三郷町産官学連携会議において常任委員として検討した。
・三宅町評議員	平成28年６月～平成29年３月まで	三宅町評議員として検討した。
・和歌山県訪問型家庭教育支援事業推進事業協議会座長	平成28年６月～現在に至る	文部科学省指定事業「和歌山県訪問型家庭教育支援事業」の座長として務めた。
・奈良県就学前教育プログラム策定委員	平成28年６月～平成30年３月まで	奈良県就学前教育プログラム策定委員として、検討した。
・大和高田市子ども・子育て会議委員長	平成29年７月～令和元年９月	第１期大和高田市子ども・子育てにかかる意見交換会において委員長として検討した。
・大阪府人権施策推進審議会会長代理・会長	平成 29 年 10 月～令和 ４ 年１月まで	大阪府人権施策推進審議会会長代理として、検討した。 大阪府人権施策推進審議会会長として、検討した。
・大和高田市子ども・子育て会議委員長	令和元年 10 月～現在に至る	第２期大和高田市子ども・子育てにかかる意見交換会において委員長として検討した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事　項	年月日	概　　要
1　資格、免許 (1)　小学校教諭２級普通免許状 (2)　小学校教諭１級普通免許状 (3)　修士（学術）	 昭和50年３月 平成３年11月 平成16年３月	 大阪府教育委員会　昭４９小２普第１６０１号 大阪府教育委員会　平３小１普第５０７号 大阪教育大学大学院　第３５０６号 論文題目「学校教育自己診断」を活かした学校改善の研究
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1)　堺市立南八下小学校　教頭 (2) 堺市立美木多小学校　教頭 (3)大阪府教育センター　学校経営研究室主任指導主事、企画室主任指導主事	 平成９年４月～平成12年３月 平成12年４月～平成13年３月 平成13年４月～平成17年１月	 教頭として、校内研究推進及び学校の活性化並びに地域との連携に取り組んだ。教頭会研修委員として「学校のリスクマネジメント」にかかる研究を堺市教頭研修会において発表した。 教頭として、生活科・「総合的な学習の時間」にかかる堺市教育委員会指定事業を推進させた。 堺市立美木多中学校区の「公立・私立、保育園・幼稚園・小学校連絡協議会」において、保幼小の研究推進に取り組んだ。上記２点の取組を「地域と学校の特色を生かした実践とその評価」(2001文溪堂) P.18～P.30 で論じた。また、教員の実践例 P.39～P.46、P.63～P.70、P.79～P.86 について、監修指導した。（再掲） 主任指導主事として、４年間、全国教育研究所連盟、近畿地区教育研究所連盟、大阪府教育研究所連盟、近畿所長会の事務局長として、研究会の企画及び研究推進に努めた。また、大阪府内の新任校長研修会・新任教頭研修会、指導主事研修会等の企画運営及び講師の任にあたった。「大阪府教育センターフォーラム」の企画及び分科会の講師・コーディネータを担当した。大阪教育大学との連携において、スクールリーダーフォーラムの講師、シンポジスト等を担当した。 研究主担として、３年間、「大阪府学校教育自己診断」の調査研究を推進し、「学校改善への道筋」をまとめた。
4　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1．夢と力を育てる新しい学校づくり	共著	平成25年４月	教育出版	未来に向かう力をつけることのできる学校経営の在り方の提案として、新たな知見と実例をふまえ、未来志向型の学校づくりの提案。 A5版　全136頁

				共著者：善野八千子、前田洋一 本人担当部分：第1章忙しい木こりの物語(1-4頁)、第2章こんな学校が日本の教育を変える(5－14頁)、第7章「一石五鳥プラン」と「仕事のＡＢＣ」（84－106頁)、第8章幼稚園における学校評価(107－116頁)、第9章さらなる外部評価アンケートの改善（117－136頁)を単著。 教員の資質向上が子どもの学校文化を創る力になることを論考した。学校訪問記や評価を改善に生かした事例等のフィールドリサーチや分析から考察。学校づくりの発信転換の必要性を説き、学校教育関係者、学生等と共に熟考し、行動変容を可能にする知見を示した。
2. 教育フォーラム54 『各教科等の学習を支える言語活動』	共著	平成26年8月	金子書房	言葉の力を育てるため単元目標構造図や年間指導計画の活用などを考えながら、各教科特有の言語活動について、教師がどのような点に留意した指導を行えばよいのか、具体的な実践を踏まえて考察した。 A5版　全頁数140頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤　明、金澤孝夫、櫻本明美、金山憲正、中田正浩、川俣徹、松田智子、善野八千子、蔵あすか、オチャンテ村井ロサメルセデス 本人担当部分：第10章「幼小接続におけるこれからの言語活動」98～109頁を単著。 幼小接続期の対話と姿勢について、育ちと学びをつなぐ課題から論述した。
3. 教科力シリーズ 小学校生活	共著	平成28年2月	玉川大学出版	小学校の教科実践力の基礎を育む、自学自習テキストシリーズ。学習指導要領・平成20年改訂に対応。教員の力量形成において重要な、各教科の内容構成の理解を目的とする。具体的な場面を想定しながら、体験や活動を軸に、気付きを生み出す生活科の全体像を捉える。各単元の計画目標、実施方法、評価の観点なども解説する。 A5版　全頁数182頁 編者：寺本潔 共著者：寺本潔、綿貫健治、森山賢一、神永典郎、善野八千子、 本人担当部分：第11章「スタートカリキュラムの重要性と指導内容」114～124頁、第12章「交流を通した人間関係作りの指導内容」125～135頁、第14章「自己成長に気付かせる内容」146～156頁、おわりに「生活科創設の内容や最新の教育界の動向」176～182頁を単著。 ISBN　9784472405044
4. 教育フォーラム59 『対話的な学び-アクティブ・ラーニングの１つのキーポイント-』	共著	平成29年2月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をした。 A5版　全頁数176頁 編者：日本人間教育学会 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、伊崎一夫、金山憲正、菅井啓之、北俊夫、赤堀博之、善野八千子、牧田秀昭、五百住満、中村豊、石森広美、オチャンテ村井ロサメルセデス、井上信子 本人担当部分：「幼小接続期の対話的学びの力」91～101頁を単著。 幼児期から小学校接続の対話的学びの力として、一次的ことばと二次的ことばの接点に立つ教師の役割から考察した。

5. 教育フォーラム 60『深い学びのために-アクティブ・ラーニングの目指すもの-』	共著	平成 29 年 8 月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をした。 A5 版　全頁数 176 頁 編者：日本人間教育学会 共著者：梶田叡一、古川治、鎌田首治朗、伊崎一夫、湯峰裕、大畑健美、菅井啓之、金山憲正、石森広美、善野八千子、瀧明智恵子、岡村季光、松井典夫 本人担当部分：「幼小接続期の深い学びー地域と未来につなぐ生活科の事例からー」103～113 頁を単著。 幼児期から小学校接続の「深い学びの力」について論考し、生活科事例から考察した。
6. 教育フォーラム 61『各学習領域における基本的な見方・考え方ーアクティブ・ラーニングで鍛えられるもの-』	共著	平成 30 年 2 月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をした。 A5 版　全頁数 147 頁 編者：日本人間教育学会 共著者：梶田叡一、鎌田首治朗、湯峰裕、金山憲正、角屋重樹、中村哲、越智貢、大畑昌己、善野八千子、高木悠哉、杉浦健、渡邉規矩郎 本人担当部分：「小学校低学年における＜基本的な見方・考え方＞」91～101 頁を単著。 低学年における見方考え方について、生活科を基軸に授業改善に散り組むための考察をした。
7. 奈良学園大学「教職実践演習」＜教職組＞の取組～学士課程教育の質の保証～	共著	令和 2 年 7 月	ERP	教員免許制度の改正と大学再編について、教育職員免許法及び同法施行規則改正の施行に伴い、新たに履修内容の充実が求められ、本学の実践力育成の取組を論述した。 A5 版　全頁数 120 頁 編者：善野八千子 共著者：太田雄久、荻布優子、善野八千子、西江なお子、森一弘 本人担当部分：はじめに、第２章教員としての使命感・責任感～「話すこと、聴くこと、書くこと」で築く信頼構築を通して～、第４章　保護者対応～不安・不満・不信から安心・満足・信頼へ～、第６章　地域との連携～実は、地域を一番知らないのは、教師です～91～101 頁を単著。 ISBN-13: 978-4907104696
8. 教科力　生活（改訂第２版）	共著	令和 3 年 11 月	玉川大学出版	小学校生活科の内容構成を理解し実践力の基礎を育む教員志望者のためのテキスト。2017（平成 29）年改訂の学習指導要領に対応。教員の力量形成において重要な生活科の内容構成の理解を目的として、生活科のための実践力の自学自習テキスト。 A5 版　全頁数 188 頁 編者：寺本潔 共著者：寺本潔、綿貫健治、森山賢一、神永典郎、善野八千子、 本人担当部分：第 11 章「スタートカリキュラムの重要性と指導内容」114～124 頁、第 12 章「交流を通した人間関係作りの指導内容」125～135 頁、第 14 章「自己成長に気付かせる内容」146～156 頁、おわりに「生活科創設の内容や最新の教育界の動向」176～182 頁を単著。 ISBN　9784472406096
9. 教育フォーラム 69『基礎・基本に立ち返る』	共著	令和 4 年 2 月	金子書房	教育に求められるものは山積みで、基礎基本に焦点化して取り組まねば学校現場は疲弊するばかりである。不易の課題を検討、提示した。

				A5 版　全 194 ページ 編者：梶田叡一、日本人間教育学会 共著者：梶田叡一、鎌田首治朗、湯峯裕、二瓶弘行、金山憲正、菅井啓之、渡辺規矩郎、今西幸蔵、善野八千子、阿部秀高、古川治 　本人担当部分：幼児教育で大切にすべき基礎・基本～これからの幼小連携接続を見通して～」95～105 頁を単著。 　幼児教育で大切にすべき基礎・基本において、これからの幼小連携接続を見通して、幼児教育と生活科を基軸につなぐ保育・教育改善に取り組むための実践研究を提議した。 ISBN　9784760860197
10.「マイノリティとジェンダー」『新しい視点からの教育社会学人間形成論の視点から』	共著	令和 4 年 9 月	大学教育出版	『新しい視点からの教育社会学人間形成論の視点から』共著、令和 4 年 9 月 26 日、大学教育出版、全 234 ページ 編者：住本克彦 共著者：金山憲正、森一弘、善野八千子　他 本人担当部分：第 11 章 p179-198 を単著。 マイノリティとジェンダーをテーマにこれまでの社会における課題と歴史及びこれからの社会における人権を基本とした求められる変化と対応について、対話を通して考えを深め合い協働的に学び合えるように問いかけ考察した。
11.「幼児教育の充実がもたらす未来への展望」教育フォーラム 71『令和の時代の教育課題』	共著	令和 5 年 3 月	金子書房	明治 5 年の学制発布から 150 年余り。その間の教育を振り返り、今、そして未来の教育への提言を行う。人間教育を求め続けた最終号。 A5 版　全 218 ページ 編者：梶田叡一、日本人間教育学会 共著者：梶田叡一、古川治、鎌田首治朗、溝上慎一、湯峯裕、二瓶弘行、中間玲子、今西幸蔵、菅井啓之、杉浦健、善野八千子、阿部秀高、渡辺規矩郎、 　本人担当部分：幼児教育で大切にすべき基礎・基本～これからの幼小連携接続を見通して～」117～127 頁を単著。 　「幼児教育の充実がもたらす未来への展望」について、教育保育の「量的拡充から,質的向上」への転換、について、幼児教育の見直しとなった「ペリー就学前プログラム」の注目点、「ハイスコープ就学前教育プログラム」を手がかりとした実地検証、10 の姿を教育保育の質向上と幼保小連携接続につなぐ ICT の活用の実践を考察した。幼児教育の充実がもたらす未来は,施設類型や地域,家庭の環境を問わず,全ての子どもに対して格差なく質の高い学びを保障する環境の実現である。これは,「子どもに関わる大人が立場を越えて連携・協働する」という責務であり,子どもの育ちと学びをつなぐという共通の役割であり使命であることを論じた。 　ISBN　9784760860210
（学術論文） 1.「人間教育」の典型 ― 幼小連携・接続教育の価値 ― （査読付）	単著	平成 26 年 3 月	日本人間教育学会学会誌 Vol.1 p.67～p.78	教育の連携性と教育の一貫性をふまえ、幼小連携・接続,の価値について述べた。また、これまでの研究の知見から幼小接続期におけるカリキュラム開発の方法について提示した。さらに、幼児期の教育と小学校における,生活科との連続性について論述した生活科成長単元において,学習者の自己成長への気づきを促す過程を分析し,活動の活性化及び指導者の関わり方の必然性について,考察を行った。

2.人間教育に資する「これからの幼小接続教育」の展開(1) －自己成長への気づきを促す生活科の実現に向けて－（査読付）	単著	平成27年3月	日本人間教育学会学会誌Vol.2 p.93～p.105	「これからの幼小接続の基軸となる生活科教育」の工夫改善となる３つの要件を導出した。さらに,これら３つの要件。生活科成長単元において,学習者の自己成長への気づきを促す過程を分析し,活動の活性化及び指導者の関わり方の必然性について,考察を行った。これら３つの要件を充足する実践事例「生活科成長単元第2学年自分たんけん」の分析による検証を行い,その有効性について解明した。
3.人間教育に資する「幼小接続期カリキュラム」のあり方－「とまどいマトリクス」を活用した接続カリキュラムの改善－（査読付）	単著	平成28年3月	日本人間教育学会学会誌Vol.3 p.39～p.50	就学前後の子どものとまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」を作成できることを示唆した。また、それらを活かした「一日体験学習」の実践幼稚園の訪問調査結果から4段階の変容を分析した。 とまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」改善の手立てとして、活用できることを幼児教育の実践事例を分析し検証した。
4.人間教育に資する「幼小接続期カリキュラム」のあり方（２）－カリキュラム･マネジメントから考察する「とまどいマトリクス」の活用－（査読付）	単著	平成29年3月	日本人間教育学会学会誌Vol.4 p.43～p.56	就学前後の「子どもの育ちと学びをつなぐ」ためにスタートカリキュラムを作成するために必要なこと、またそのカリキュラム・マネジメントのあり方について示唆した。 ３つの実践小学校に関わった管理職の聴き取り調査結果から4段階の変容を分析した。 とまどいマトリクス活用によって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」改善の手立てとして、活用できることを小学校入門期の教育実践事例を分析し検証した。
5. 生き抜く力を育む人間教育-小学校における教科指導と現代的課題に着目して-	共著	平成30年12月	人間教育学研究第1号 p.39～p.54	生き抜く力を育む人間教育をめざして、「特別の教科道徳」における「夢や希望を育む」指導と「算数科」を軸にした「学力不振による不登校の未然防止」の指導を検討した。指導案例を提示することで、改善の方向性を示した。特別の教科道徳の中で、自己の生き方を考える時間の保障をすることや算数科指導の中に、生徒指導の３機能を生かした指導の改善などの視点を明確にした。 共著者：善野八千子・金山昴資・重安勝星・内藤翔一・早坂虹穂・松田彩加
6. 「生き抜く力を育む人間教育(2)- 幼小接続期から小学校における学習指導と現代的課題	共著	平成31年３月	人間教育学研究第 2号 p.25～p.46	未来を築く子供たちに生き抜く力を育む人間教育をめざして、「生活科」及び「特別活動」における「幼小接続期の給食指導」と「家庭と生活」を軸にした指導法ついて検討した。具体的に指導案例を提示することで、

に着目して」				改善の方向性を示した。また、それらの学校教育の取組について、社会に開かれた教育課程の一役を担う学校ＨＰについても検討した。 共著者：善野八千子・中菜摘・中西貴大・織谷百江・村田一輝
7. 「生き抜く力を育む人間教育(3)－ 小学校における学習指導と非認知能力に関する現代的課題に着目して」	共著	平成 31 年３月	人間教育学研究 第 2 号 p. 47～p. 63	現代的課題として挙げられる非認知能力「学習意欲、規範意識、自尊感情」の３点の課題解決をめざして、「算数科」を軸にした「学習意欲」、「特別の教科　道徳」における「いじめ問題」、「国語科」を軸とした「読書指導」について考察した。具体的に指導案例を比較・検討することで、改善の方向性を示した。 共著者：善野八千子・芳之内貴一・久保田巧・東川博規
8. 教育行政における幼小接続期への政策形成についての考察	単著	令和元年９月	奈良学園大学紀要 第 11 集 p. 99～p. 112	教育行政における幼児教育と小学校教育の接続期の政策動向について、1989 年の生活科の創設以降から今日に至る幼小接続に関するカリキュラム（以下、幼小接続カリキュラム）をめぐる教育政策の概要を時系列に沿って整理した。第１に「生きる力」における「学習の基盤」をめざす段階、第２に「小１プロブレム」の予防・解消をめざす段階、第３に安全で安心な学校生活をスタートさせる段階、第４に学びに向かう子どもを育てる段階に分類して検討した。
9. 生き抜く力を育む人間教育(4) −小学校における教科等横断的指導に着目して−	共著	令和２年３月	人間教育学研究 第 3 号 p. 43～p. 56	生き抜く力を育む人間教育における「資質・能力を育む」ため、小学校の学習を教科等横断的な視点で成立させる課題解決をめざした。特別の教科道徳と国語科、生活科、社会科、総合的な学習の時間の教科等横断的指導について考察した。具体的に既存の指導案例を検討して改善の方向性を示した。 共著者：善野八千子・関本和也・谷野萌・森本大貴
10. 教育行政における幼小接続期の子どもの人権に関する考察	単著	令和 3 年 12 月	奈良学園大学紀要 第 14 集 P205-220	子どもたちが加害者や被害者となる痛ましい事件が頻発し、子育て家庭や子どもたちを地域社会全体で見守り支えることの必要性から、教育行政に位置付く「訪問型家庭教育支援事業」に着目した。そして、先進的な取組の自治体の支援チームリーダーへのインタビュー調査結果から、子どもの人権にかかる幼小接続期の取組を考察した。その一つとして、家庭教育支援の継続した活動が子育て家庭の子どもの人権にかかる働きかけや家庭教育と学校教育をつなぐ大きな役割を担っていることを明らかにした。
11. 幼小接続期における子供の育ちと学びに関する考察～「幼児期の終わりまでに育ってほし	単著	令和 5 年 3 月	奈良学園大学紀要 第 15 集 P79-96	教育は、子供一人一人の生涯にわたる発達や学びの連続性を見通して行われるものであり、「幼児教育と小学校教育との接続の一層の強化」の必要性から、「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」に着目した。

い 10 の姿」をてがかりに～				そして、ネットワーク上のスプレッドシートに、「10 の姿」の観点別記入を共同編集できる園日誌の記録用のフォーマットを提案し、その取組を実践した教員へのインタビュー調査から考察した。その結果、1 点目に、「育てたい 10 の姿からみた活動記録（善野八千子 2021)」が契機となり保育活動の意識変容として有効であること、2 点目に、「幼小接続期の教育保育の質向上」として、幼児教育から学校教育への育ちの連続性を見通す情報共有となること、3 点目に幼保小連携接続のエビデンス資料の一つとなることを明らかにした。
（その他） 「研究報告書」 １.奈良県就学前教育研究調査事業最終報告書	共著	平成 29 年 3 月	京都大学地域連携教育研究推進ユニット	奈良県委嘱研究（奈良県就学前教育研究調査事業）A４版　全 175 頁研究代表　高見茂 本人担当部分：1.小学校との連携と親関与「就学前教育振興のために-小学校との連携推進及び家庭教育の支援を促進する取り組みに焦点を当てて-」2～21 頁を単著。
２.奈良県就学前教育研究調査事業最終報告書	共著	平成 29 年 12 月	京都大学地域連携教育研究推進ユニット	奈良県委嘱研究（奈良県就学前教育研究調査事業）A４版　全 159 頁研究代表　高見茂 本人担当部分：3.プログラム実践状況の分析「就学前教育振興のために-参観訪問園及び他１園の実施の現状を踏まえた分析と評価・総体について-」104～116 頁を単著。
「収録集」 １．平成 25 年度研究・研修収録第 44 号	単著	平成 26 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 25 年度研究・研修収録「専門教養研修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携「子供の育ちと学びをつなぐ」69～72 頁を単著。
２．平成 26 年度研究・研修収録第 45 号	単著	平成 27 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 26 年度研究・研修収録「専門教養研修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携(2)「子供の育ちと学びをつなぐこれからの言語活動」85～89 頁を単著。
３．平成 27 年度研究・研修収録第 46 号	単著	平成 28 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 27 年度研究・研修収録「専門教養研修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携「幼小接続カリキュラムの作成と改善＜とまどいマトリクス＞を活用して」78～80 頁を単著。
４．平成 28 年度研究・研修収録第 47 号	単著	平成 29 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 28 年度研究・研修収録「テーマ研修」として、執筆。 本人担当部分：子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期の対話的学びの力 35～38 頁を単著。
５・平成 29 年度研究・研修収録第 48 号	単著	平成 30 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 29 年度研究・研修収録「テーマ研修」として、執筆。

				本人担当部分：子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期の「深い学び」21～25 頁を単著。
「依頼原稿」 1. 生活科における「深い学び」を実現するための理論と授業づくりのポイント	単著	平成 30 年 1 月	学校教育 NO.1205 広島大学付属小学校　学校教育研究会	新学習指導要領の改訂（平成 29 年 3 月告示）の特徴である、「学びの質に着目した授業改善の取組の活性化を目指した構造の変更」から論じた。「深い学び」を実現するための生活科の課題と深い学びのための連続発展する４観点(1)幼児教育とつなぐ(2)次の活動につなぐ(3)家庭・地域とつなぐ(4)中学年の各教科へつなぐをふまえて、実践事例を元に論考した。 本人担当部分：14～21 頁を担当。
2. 未来を創る子どもに染み込む「価値」	単著	平成 30 年 8 月	阪急学園教育広報誌 8 月号	未来を創る子どもに染み込む「価値」について、1 点目は全国弁論大会の体験から、2 点目は、体験的学習の価値「親子でクッキング」の中で、「料理は科学」「料理は美学」「料理は五感力」「料理は段取り力」という講話の例から、3 点目は本学の学生育成の核について論じた。 本人担当部分：１頁（表紙）を担当。
3. 学びをつなぐ① 「育ちのバトン貯金箱」をスケルトンで創る	単著	平成 31 年 3 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 49 巻第 7 号	本人担当部分：「育ちのバトン貯金箱」をスケルトンで創る 35 頁を担当。
4. 学びをつなぐ② だれもが「ふるさと大使」になるために	単著	令和元年 5 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 49 巻第 11 号	本人担当部分：だれもが「ふるさと大使」になるために 35 頁を担当。
5. 学びをつなぐ③ 「人生 100 年時代の国際人を育てるために」	単著	令和元年 7 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 49 巻第 15 号	本人担当部分：「人生 100 年時代の国際人を育てるために」35 頁を担当。
6. 学びをつなぐ④ 「自立し生活を豊かにする資質・能力を育てる」	単著	令和元年 10 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 49 巻第 22 号	本人担当部分：「自立し生活を豊かにする資質・能力を育てる」35 頁を担当。
7. 学びをつなぐ⑤ 「ボールをつなぐラグビーと学びをつなぐ非認知能力」	単著	令和元年 12 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 49 巻第 27 号	本人担当部分：「ボールをつなぐラグビーと学びをつなぐ非認知能力」35 頁を担当。
8. 学びをつなぐ⑥ 「評価のカベをとる」～幼小接続期の非認知能力～	単著	令和 2 年 2 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 50 巻第 3 号	本人担当部分：「評価のカベをとる」～幼小接続期の非認知能力～21 頁を担当。
9. 学びをつなぐ⑦	単著	令和 2 年 5 月	日本教育綜合研究	本人担当部分：「ウィルスとの闘いと自制

「ウィルスとの闘いと自制心」			所 週刊教育 PRO	心」27 頁を担当。
10.学びをつなぐ⑧「アタッチメントと遊び」	単著	令和 2 年 7 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO	本人担当部分：「アタッチメントと遊び」17 頁を担当。
11.学びをつなぐ⑨「夏休み自由研究と情動知性（EQ)」	単著	令和 2 年 10 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO	本人担当部分：「夏休み自由研究と情動知性（EQ)」17 頁を担当。
12.学びをつなぐ⑩「ポストコロナ時代、次年度への準備」	単著	令和 3 年 2 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO	本人担当部分：「ポストコロナ時代、次年度への準備」26～27 頁を担当。
13. 学びをつなぐ⑪「保育・教育の充実と ICT 積極的活用　ポストコロナ時代だからこその実践」	単著	令和 3 年 6 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO	本人担当部分：「保育・教育の充実と ICT 積極的活用　ポストコロナ時代だからこその実践」26～27 頁を担当。
14. 学びをつなぐ⑫「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会第 2 回資料を読み解く」	単著	令和 3 年 10 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO	本人担当部分：「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会　第 2 回資料を読み解く」26～27 頁を担当。
15. 学びをつなぐ⑬「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」第 5 回資料を読み解く－「2021 年度 Cedep 公開シンポジウム人生の豊かなはじまりを支える幼児教育･保育～OECD 幼児教育･保育白書第 6 部より～」との連関－」	単著	令和 4 年 2 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO	本人担当部分：「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」第 5 回資料を読み解く－「2021 年度 Cedep 公開シンポジウム人生の豊かなはじまりを支える幼児教育･保育～OECD 幼児教育･保育白書第 6 部より～」との連関－」26～27 頁を担当。
16.「これからの幼児教育の特色と役割～「こどもの育ちと学びをつなぐ」共通の責務と使命～」	単著	令和 4 年 8 月	教育 PRO 第 52 巻第 10 号 ERP	特集「新しい幼児教育を考える」 本人担当部分：「これからの幼児教育の特色と役割～「こどもの育ちと学びをつなぐ」共通の責務と使命～」6～7 頁を担当。
「学会発表」				
1. 子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続カリキュラムの開発（Ⅳ）～「入学後の子どもの戸惑い」を見通した一日体験入学～	個人	平成 25 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 22 回大会（於: 神戸大学附属小学校・附属明石小学校）	継続研究の４年目において、「とまどいマトリクス」を活用した「幼小接続カリキュラム」の作成プロセス及びその一例として「一日体験入学」の活動案を提示した。とりわけ、「とまどいマトリクス」活用の有効性を実践検証した。
2.「子どもの育ちと学びをつなぐ―幼小中の接続－」	個人	平成 26 年 8 月	日本人間教育学会「学校間接続分科会」(於:奈良学園大学)	幼・小・中学校にかかる子ども観・評価観の違いを整理した。また、教育課程の理解を中心に接続を推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的に考察し、「汎用性」のある接続期のカリキュラムモデ

				ル作成の手順及びこれまでのカリキュラム改善の視点について、新たな知見を述べた。
3．子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続カリキュラムの開発（V）～「とまどいマトリクス」を活用した「一日体験入学」の改善	共同	平成 28 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 24 回大会（於:宮城学院女子大学）	継続研究の 5 年目において、「とまどいマトリクス」を活用した「幼小接続カリキュラム」を活用した合同研修事例を提示し「一日体験入学」の改善案を考察した。とりわけ、岐阜県山県市立小学校における「とまどいマトリクス」活用の有効性を実践検証した。
4．幼小接続期における育ちと学びの連続「ハイスコープ就学前教育プログラム」を手がかりに	共同	平成 30 年 12 月	日本人間教育学会第 4 回大会（於:桃山学院教育大学）	幼小接続期の非認知能力の向上のため「ハイスコープ就学前教育プログラム」を導入し発達レベルの評価基準や幼児の能力を高める指導戦略に生かした。また、教育視点の可視化と共に、幼児教育における基準や評価について教員の保育観の交流を進めた。評価スケール作成により、取組の成果と課題のエビデンスをもって卒園児の保護者及び小学校に伝える契機となった。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和５年 ３月 31 日

氏名　　安東　雅訓

研究分野	研究内容のキーワード
表現論的組合せ論	整数の分割，ヤング図形，母関数

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 (1) 学習支援システム上への演習問題の公開	平成 24 年４月～平成 30 年３月	稚内北星学園大学において，講義で扱った演習問題を学習支援システム上に上げている．在学生の他にも高校で教員をしている卒業生もたびたび確認しており，授業の参考や自学に活用している．
(2) 就職試験対策講座における，数的推理・判断推理分野の推理による解法の実践	平成 25 年６月～平成 29 年８月	数的推理・判断推理分野の問題は初等的な数学を用い時間をかけて丁寧に解けば答えの出せるものが殆どだが，その方法で正解率・回答速度を上げようとすれば慣れるより他なく，それなりの時間を要す．そこでこの分野は「数学」ではなく「推理」であるとしての，ベイズ確率等のテクニックにより選択肢を推理する方法を紹介している．実際に公務員試験等で使い，有効だったとの評価を得ている．
２　作成した教科書，教材 (1) 数学科目演習問題	平成 24 年４月～平成 30 年３月	稚内北星学園大学において，担当数学科目（数学基礎 I，II，線形代数学 I，II 演習，代数学 I，II，幾何学 II，集合論入門）で扱った演習問題を LMS（ラーニングマネジメントシステム）上にアップしたもの．教科書の演習問題としてはあまり見ない類の問題も多く載せている．
(2) 就職試験対策講座における演習問題	平成 25 年６月～平成 29 年８月	稚内北星学園大学における就職試験対策講座において，教材として使用したもの．定着のために扱う問題の種類を絞り類似の問題を多くそろえており，それらの問題を不得意とする学生には好評であった．
(3) 数理パズル集	平成 26 年 12 月	稚内北星学園大学まちなかメディアラボのプレオープンにおいて特集した数理パズル集．小学校低学年レベルの問題から高校生レベルまでを揃えている．
３　教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 稚内北星学園大学採用時の学部長の評価	平成 24 年２月	数学についての深い知識だけでなく，教育に対しての情熱と使命感を備えており，数学教育だけでなく教員養成にもその力を発揮すると期待する．
４　実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 北海道教育大学大学院生への指導	平成 26 年９月	北海道教育大学の大学院生２名に対し，大学数学と高校数学の関連，教員採用試験過去問の解説，中高生向けの数学トピック紹介等の指導を行った．
	平成 27 年 10 月	北海道教育大学の大学院生２名に対し，Latex のインストールと使用方法，教員採用試験過去問の解説，大学入試問題の指導方法等の指導を行った．
５　その他 特記事項無し		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1 2 3 :				
（学術論文） （査読有） 1 Combinatorics for graded Cartan matrices of the Iwahori-Hecke algebra of type A.	共著	2013	Annals of Combinatorics , 17(3)427-442.	熊本大学山田裕史教授，岡山大学鈴木武史准教授との共同研究である．オイラーの奇・相違分割等式の証明に用いられるグレイシャー対応の各ステップにウエイトを付け，そのウエイトを用いてA型岩堀-ヘッケ環の次数付きカルタン行列の行列式を記述している． 共著：山田裕史，鈴木武史，安東雅訓
2 A combinatorial proof of an identity for the divisor function.	単著	2013	Electronic Journal of Combinatorics, 20(2)12pp.	内村型q-恒等式と呼ばれる，約数関数と関連したq級数の等式について，組合せ論による翻訳と，写像を用いての全単射証明を与えている．
3 Products of parts in class regular partitions.	共著	2017	Hiroshima Mathematical Journal, 47(1) 15-18.	熊本大学山田裕史教授との共同研究である．r-類正則分割から定まる盤上に2種のウエイトを定義し，それらの積が階数を定める毎に一致することを示している．0階以降の積は岩堀-ヘッケ環の次数付きカルタン行列の行列式に一致する． 著者：山田裕史，安東雅訓
4 Inferior Regular Partitions and Glaisher Correspondence.	単著	2020	Hokkaido Mathmatical Journal, 49(3)391-398.	整数の分割に劣正則という制限を導入し，その母関数がグレイシャー対応における操作回数の母関数と一致することを示した．それにより，水川-山田のX-Yの定理を再証明し，またその自然な一般化も行っている．
5 The Baumkuchen Theorem. （査読なし）	共著	2022	Mathematical Assoc. of America Mathematics Magazine 88 5pp.	ピザの定理をバームクーヘンの定理という補題を準備した上で，初等的な知識のみで証明している． 共著：原口忠之

5 グレイシャー対応とヘッケ環の次数付きカルタン行列	共著	2011	京都大学数理解析研究所，1738，83-91.	整数の分割の各成分の個数について，p-進法での桁数を考えるという式と，その背景にあるA型次数付きカルタン行列の行列式を説明している．この結果は宇野-山田のカルタン行列に関する結果の次数付き版となっている．著者：山田裕史，鈴木武史，安東雅訓
6　次数付きカルタン行列に関する組合せ論	共著	2011	代数群と量子群の表現論研究集会報告集 12-20.	オイラーの奇・相違分割の等式の全単射証明法の１つにグレイシャー対応と呼ばれるものがある．このグレイシャー対応の各ステップにウエイトを付けたものを複数考え，これらの積が次数付きカルタン行列の行列式に一致することを示している． 著者：山田裕史，鈴木武史，安東雅訓
7　約数関数に関するq-方程式	単著	2013	北海道大学数学講究録，157，209-212.	約数関数に関係する内村型q-恒等式と呼ばれる式について，組合せ論的な意味づけと精密化を行っている．
8　内村型q-恒等式の組合せ論的理解と一般化	単著	2013	室蘭工業大学数理科学談話会報告集，Web掲載	内村型q-恒等式と呼ばれるq級数の等式について，式変形・超幾何関数の特殊化と色々な証明が知られているが，組合せ論の話として証明している．
9　制限分割の数え上げ	単著	2017	数学セミナー2月号	雑誌「数学セミナー」の整数の分割特集において，制限分割の数え上げについての記事を担当した
:				
（その他） 講演・学会発表 1 ヤング図形のフック長の積		2010年3月	日本数学会年会	
2 グレイシャー対応と次数付きカルタン行列		2010年9月	日本数学会秋季総合分科会	
3 グレイシャーウエイトと次数付きカルタン行列		2010年10月	RIMS 研究集会組合せ論的表現論とその応用	
4 次数付きカルタン行列における組合せ論		2011年6月	代数群と量子群の表現論研究集会	
5 相異分割のヤング図形と約数関数		2012年3月	日本数学会年会	
6 内村型q-恒等式の組合せ論的理解と一般化		2013年2月	室蘭工業大学数理科学談話会	
7 約数関数に関するq-方程式		2013年2月	数学総合若手研究集会	
8 内村型q-恒等式の組合せ論的理解と一般化		2013年6月	東海大学数学科談話会	
9 内村型q-恒等式とヤング図形		2013年10月	RIMS 研究集会組合せ論的表現論の展望	
10 4-正則分割について		2014年1月	岡山大学理学部数学科談話会CORE	
11 分割のフック長の積に関する公式		2014年3月	第 1 回岡山-広島代数学シンポジウム	

12 分割と相異分割の母関数における相似性の理解とその応用		2014 年 9 月	日本数学会秋季総合分科会	
13 約数関数と相異分割		2014 年 11 月	東京無限可積分セミナー	
14 奇数と台形数		2015 年 3 月	日本数学会年会	
15 奇数と台形数		2015 年 3 月	第 2 回岡山-広島代数学シンポジウム	
16 ヤング図形のフックの超対称性について		2015 年 11 月	室蘭工業大学数理科学談話会	
17 長方形型と階段型のヤング図形		2016 年 3 月	第 3 回岡山-広島代数学シンポジウム	
18 劣正則分割とグレイシャー対応		2016 年 8 月	稚内表現論小研究集会	
19 ヤング図形におけるフックの超対称性についての組合せ論的証明		2017 年 8 月	弘前表現論小研究集会	
20 整数の分割と母関数		2018 年 8 月	岡山大学オープンキャンパス	
21 カタラン数の表示についての 3 つの証明		2018 年 8 月	福井表現論小研究集会	
22 劣正則分割とグレイシャー対応		2018 年 9 月	日本数学会秋季総合分科会	
23 劣正則分割とグレイシャー対応		2018 年 9 月	岡山大学理学部数学科談話会 CORE	
24 周期性を持つ r-正則分割		2019 年 9 月	岡山大学理学部数学科談話会 CORE	
25 原田の予想についての対称群における証明		2019 年 10 月	奈良学園大数学セミナー	
26 ボードゲーム「カタン」がスマホ AR になって数学者の僕が考えたこと		2019 年 11 月	現代ビジネス記事	
27 数学者が「ピザ」のケンカしない分け方について本気で考えてみた	共著	2021 年 1 月	現代ビジネス記事	
28 【数学クイズ】「9×1+2」「9×12+3」「9×123+4」「9×1234+5」計算すると奇跡の数が…！		2021 年 6 月	現代ビジネス記事	
29 指数に周期性を持つ正則分割		2022 年 8 月	第 2 回奈良学園大学数学セミナー	
30 指数に周期性を持つ r-正則分割について		2023 年 3 月	再開 広島・岡山 代数学セミナー	

教　育　研　究　業　績　書

令和５年３月 31 日

氏名　　岡野　聡子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
幼児教育、地域福祉、キャリア教育	子どもと環境、キャリア教育、子育て支援、地域福祉

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　教育方法の実践例 (1)視聴覚教材の活用	平成 26 年４月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部にて、「子どもと環境」を担当している。学生は、子どもと接する経験が豊富であるとはいえず、また教科書の記述や講義だけでは、学生は子どもに対するイメージがわきにくいため、ビデオ教材を適宜使用している。映像を通して子どもの実像を実感し、理解を深めるように工夫している。また、ビデオ教材は学生が受身的に観て終わりということになりやすいので、ビデオ視聴前に課題を与え、問題意識を持ってビデオ教材を視聴させるようにしている。これらの過程により、学生の子どもに対するイメージが豊富になり、教育効果が上がっているといえる。
(2)体験学習を取り入れた授業	平成 26 年４月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部にて、「子どもと環境」や「保育表現力演習」(令和５年４月～) を担当している。ネイチャーゲームといった自然体験活動や小麦粉粘土づくり、STEAM 教育を取り入れた保育教材の作り方などを取り入れ、体験学習を中心に授業を実施している。学生アンケートでは、保育・教育実習にて活用したいという回答が多く、好評であった。
(3)LINE アプリを活用したキャリア支援の実施	平成 28 年６月～令和２年３月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の講師として、キャリア形成科目（キャリアデザインⅠ・Ⅱ、キャリアディベロップメントⅠ・Ⅱ、キャリアスキルアップⅠ・Ⅱ、インターンシップ）を担当した。奈良学園大学のキャリア教育は、1～3 年まで実施し、就職活動が本格化する 4 年次は、学生と教員の実質的支援がなくなる。そのため、これまでのキャリア教育で培った力が発揮されるよう、LINE アプリを用いてキャリア支援を実施した。任意登録としたが、2017 年 5 月現在で全学生 100 名中、52 名が参加をし、一般企業志望者である 38 名は全て加入している。なお、LINE アプリを通して、教員と情報交換をすることで、5 月 22 日時点における一般企業就職内定者は、64.1%という成果を上げることができた。
(4)授業に関するホームページの立ち上げ・運営	平成 30 年４月～令和３年 12 月	「子どもと環境」および「キャリアスキルアップⅠ」にて活用する授業補助教材を提示したホームページを立ち上げた。学生のレポートを添削し、その結果をホームページ上で公開しており、サイトを見た学生が他者の優れたレポートを閲覧することができるため、具体的にどのように文章構成をすればよいかがわかったとの声を学生から多くもらった。また、教育実習中の学生も授業内容を知ることができるため、授業についていけなかったらどうしようといった不安が軽減されたとの声もあった。
(5)キャリア形成科目におけるＰＢＬ（課題解決型授業）を取り入れた授業実践	平成 31 年４月～現在に至る	1～3 年生のキャリア形成科目において、ＰＢＬ課題解決型授業を取り組んだ。㈱マイナビが運営する MyFutureCampus の教材を取り入れ、「ＡＩをもちいて社会課題を解決する（グーグル合同会社)」や「千葉県長南町の廃校を活用した地域創生案を提案せよ(㈱マイナビ)」といったテーマを学生に与え、4 人 1 チームで実施した。ＰＢＬの教育効果について、キャリア教育ラボからの取材も受けた。https://career-ed-lab.mycampus.jp/interview/1578/
２　作成した教科書、教材 (1)「キャリアデザインサブノート～改訂版～」（教材）	平成 25 年４月	前年度に作成したキャリアデザインサブノートに、自己理解や業界研究、社会の理解の開設、就職活動の資料を新たに加えて作成した。前年度まで、各分室で行って

		きた授業内容は会議で共有されるものの、教育の効果や評価に対する議論が不足していた。そのため、学生の学びを可視化し、適切な評価をそれぞれの教員ができるようにサブノートの作成を行った。 （編集・著者）岡野聡子 （共著者）小野憲一、石渡嶺司、三木澄代、大野光二 （発行元）環太平洋大学 （出版社）ふくろう出版 （総頁数）90 ページ （担当頁）pp.2-9、pp.34-45、pp.51-86 （所属）環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科 （使用した科目名）キャリアデザイン
(2)「教職表現力演習ノート」（教材）	平成 27 年 4 月	前年度に実施した教職表現力演習の授業内容を精査し、教材を作成した。授業目的は、新聞記事や評論文を用いて、他者に物事をわかりやすく説明する力の育成を図り、アカデミックスキルの基礎を涵養することにある。作成した教材の構成は、①読んでまとめる、②言葉を学ぶ、③聴いてまとめるから成り立ち、それぞれの項目を段階的に学べるようにしている。 （編集・著者）西辻正副、山本美紀 （共著者）岡村季光、岡野聡子、高木悠哉、松井典夫 （発行元）奈良学園大学 （出版社）株式会社廣済堂 （総頁数）152 ページ （担当頁）pp.114-115 （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）教職表現力演習Ⅰ
(3)「キャリアデザインⅡ ～職業研究ワークブック～」（教材）	平成 27 年 9 月	キャリアデザインⅡでは、職業研究「働くこととは」をテーマとして、さまざまな業界から各分野において活躍している・してきた外部講師を招聘し、仕事に対する考え方や進め方を研究することを授業目的としている。本ワークブックでは、聞いたことをメモにまとめる要約力と、まとめた情報を簡潔に示す構造力を身に付けられるように構成した。 （作成者）岡野聡子 （発行元）奈良学園大学 （総頁数）30 ページ （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）キャリアデザインⅡ
(4)「キャリアディベロップメントⅡ ～職業研究 2 ワークブック～」（教材）	平成 27 年 9 月	キャリアディベロップメントⅡでは、①自己理解の深化、②職業への理解を深める、③インターンシップの 3 部構成としており、1 年次で学んだことを活かす内容となる。本ワークブックのねらいは、課業分析等を通して、仕事内容への理解を深めると同時に、多様な職種の情報を収集し、学生自身が具体的な職業像を獲得できることである。 （作成者）岡野聡子 （発行元）奈良学園大学 （総頁数）30 ページ （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）キャリアディベロップメントⅡ
(5)「2016 年度版 教職表現力演習ノート」（教材）	平成 28 年 4 月	前年度に活用した「教職表現力演習ノート」を精査し、改訂版として教材を作成した。授業目的は、新聞記事や評論文を用いて、他者に物事をわかりやすく説明する力の育成を図り、アカデミックスキルの基礎を涵養することにある。作成した教材の構成は、①読んでまとめる、②言葉を学ぶ、③聴いてまとめるから成り立ち、それぞれの項目を段階的に学べるようにしている。 （編集）西辻正副、岡村季光 （共著者）岡村季光、岡野聡子、桑原祐子、高木悠哉、山本美紀 （発行元）奈良学園大学 （出版社）株式会社廣済堂 （総頁数）109 ページ

		（担当頁）pp.52-53 （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）教職表現力演習Ⅰ
(6)「キャリアスキルアップⅠ ～就活準備ワークブック①」（教材）	平成29年4月	キャリアスキルアップⅠでは、3年生全員が履修をする科目である。1年後に控えた教員採用試験や一般企業就職活動、公務員採用試験の準備をするにあたり、①就職活動の流れ、②インターンシップの概要、③履歴書の書き方、④ＳＰＩ試験の概要、個人・集団面接、グループディスカッション、集団討議の概要をまとめたものである。学びの積み重ねが可視化できるようにしたワークブックである。 （作成者）岡野聡子 （総頁数）48ページ （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）キャリアスキルアップⅠ
(7)『子どもの生活理解と環境づくり[改訂版]～就学前教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』（教科書）（再掲）	平成31年3月	2017年に学習指導要領が改訂され、資質・能力の三つの柱と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）が明示された他、保幼小連携の強化が取り上げられた。本書では、学習指導要領改訂にともない、領域「環境」にて設置された新項目も含め、就学前教育と小学校教育の教育内容の接続に言及し、自然環境・物的環境・社会環境の３つの視点を用いて事例を取り上げながら解説を行った。 （単著・共著）共著 （判型）A5判 （総頁数）206ページ （出版社）ふくろう出版 （担当頁）pp.1-20、pp.81-83、pp.103-104、pp.106-108、pp.146-147 （担当部分）第1章第1節、第3章第2節1-2、1-3、第4章 第1節1、1-2、第5章第1節1-3 （編著者）岡野聡子 （分担執筆者）松田智子・大野鈴子・吉村啓子・筒井愛知・村田眞理子・藪田弘美・辻野孝・伊崎一夫・中道美鶴・岡田美紀・田中卓也・前川豊子・平野知見 （所属）奈良学園大学人間教育学部 （使用した科目名）子どもと環境、保育内容Ⅱ「環境」子どもと環境の指導法
(8)「自分の未来は自分が創る　キャリア形成ワークブック」	令和3年9月	PBL課題解決型授業の教材および採用試験のための準備学習をまとめたものである。 （単著・共著）共著 （判型）A4判 （総頁数）72ページ （出版社）ふくろう出版 （担当頁）pp.1-24、pp.54-72 （担当部分）第Ⅰ部課題発見力を高め、問題解決力を磨こう、第Ⅲ部資料集 （編著者）岡野聡子 （分担執筆者）上杉敏郎、柳本周介、栗山朝亜輝 （所属）奈良学園大学人間教育学部 （使用した科目名）キャリアディベロップメント、キャリアスキルアップⅠ・Ⅱ
３　教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 平成25年度授業評価アンケートの実施 科目名：生活の理解 大学名：環太平洋大学	平成25年7月	FD活動の一環として、「生活の理解」学生による授業評価アンケートを実施した。履修者数は209名、回答者数は172名（有効回答率：82.2%）であった。質問紙は15項目から成り立ち、①学生自身の取り組みについて、②担当教員や指導方法等について4点尺度で実施した。評価結果の平均評定は 3.419 であり、総合的満足度は3.445であった。また、教材研究の授業内容を多く取り入れたこともあり、「授業への参加意欲が促されるような工夫がされていましたか」について3.47の評価をもらうことができた。
(2) 平成26年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザインⅠ	平成26年4月 ～平成27年3月	平成26年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、

科目名：キャリアデザインⅡ 科目名：生活の理解 大学名：奈良学園大学		4点尺度で実施した。 ・キャリアデザインⅠ：3.37 ・キャリアデザインⅡ：3.43 ・生活の理解：3.65 いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(3)平成27年度授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境（前期） 科目名：生活の理解（後期） 科目名：キャリアデザインⅠ（前期） 科目名：キャリアデザインⅡ（後期） 科目名:キャリアディベロップメントⅠ(前期) 科目名:キャリアディベロップメントⅡ(後期) 大学名：奈良学園大学	平成27年4月～ 平成28年3月	平成27年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4点尺度で実施した。 ・子どもと環境：3.68 ・生活の理解：3.06 ・キャリアデザインⅠ：3.51 ・キャリアデザインⅡ：3.44 ・キャリアディベロップメントⅠ：3.4 ・キャリアディベロップメントⅡ：3.37 いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(4)平成28年度授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境（前期） 科目名：キャリアデザインⅠ（前期） 科目名：キャリアデザインⅡ（後期） 科目名:キャリアディベロップメントⅠ(前期) 科目名:キャリアディベロップメントⅡ(後期) 科目名：キャリアスキルアップⅠ（前期） 科目名：キャリアスキルアップⅡ（後期） 大学名：奈良学園大学	平成28年4月～ 平成29年3月	平成28年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4点尺度で実施した。 ・子どもと環境：3.45 ・キャリアデザインⅠ：3.55 ・キャリアデザインⅡ：3.59 ・キャリアディベロップメントⅠ：3.46 ・キャリアディベロップメントⅡ：3.09 ・キャリアスキルアップⅠ：3.55 ・キャリアスキルアップⅡ：2.95 いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(5)平成28年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザイン 大学名：奈良教育大学	平成28年10月～ 平成29年3月	平成28年度の学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りである。アンケートは、4点尺度であり、回収率は90.9%（履修者数：55人、解答者数：50人）である。 ・学習効果を上げるための工夫・準備：3.36 （全体平均：3.28） ・担当教員の話し方が明瞭かどうか：3.66 （全体平均：3.31） ・学生の理解や反応を見ながら授業していたか： 3.38（全体平均：3.29） ・授業の満足度：3.30（全体平均：3.32） ・新しい知識・考え方・教育実践力が得られたか： 3.44（全体平均：3.36） ・到達目標がどの程度、身に付いたか：3.20 （全体平均：3.27）
(6)平成29年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザイン 大学名：奈良教育大学	平成29年10月～ 平成30年3月	平成29年度の学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りである。アンケートは、4点尺度であり、回収率は88.9%（履修者数：54人、解答者数：48人）である。 ・学習効果を上げるための工夫・準備：3.35 （全体平均：3.33） ・担当教員は学生が主体的かつ意欲的に学べるような授業づくりを行っていたか：3.38 （全体平均：3.31） ・新しい知識・考え方が得られたか：3.48 （全体平均：3.49） ・教育実践力やそれにつながる力を得られたか： 3.23（全体平均：3.33） ・到達目標がどの程度、身に付いたか：2.96 （全体平均：3.21） ・授業の満足度：3.27（全体平均：3.38）

(7)平成29年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザインⅠ（前期） 科目名：キャリアデザインⅡ（後期） 科目名:キャリアディベロップメントⅠ(前期) 科目名:キャリアディベロップメントⅡ(後期) 科目名：キャリアスキルアップⅠ（前期） 科目名：キャリアスキルアップⅡ（後期） 大学名：奈良学園大学	平成29年4月～ 平成30年3月	平成29年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4点尺度で実施した。 ・キャリアデザインⅠ：3.05（全体：3.38） ・キャリアデザインⅡ：3.44（全体：3.41） ・キャリアディベロップメントⅠ：3.54（全体：3.38） ・キャリアディベロップメントⅡ：3.52（全体：3.41） ・キャリアスキルアップⅠ：3.35（全体：3.38） ・キャリアスキルアップⅡ：3.47（全体：3.41） いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(8)平成30年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザイン 大学名：奈良教育大学	平成30年10月～ 平成31年3月	平成30年度の学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りである。アンケートは、4点尺度であり、回収率は67.3%（履修者数：98人、解答者数：66人）である。 ・学習効果を上げるための準備・工夫：3.62 （全体平均：3.33） ・担当教員は学生が主体的かつ意欲的に学べるような授業づくりを行っていたか：3.67 （全体平均：3.32） ・新しい知識・考え方が得られたか：3.65 （全体平均：3.47） ・教育実践力やそれにつながる力を得られたか： 3.47（全体平均：3.33） ・到達目標がどの程度、身に付いたか：3.30 （全体平均：3.22） ・授業の満足度：3.68（全体平均：3.38）
(9)令和2年度授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境（前期） 大学名：奈良学園大学	令和 2 年 4 月～ 令和2年7月	令和 2 年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。5点尺度で実施し、本アンケート総数は36人である。 ・子どもと環境：4.75（全体平均：4.32）
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)岡山市子どもセンター・研究協力者	平成24年4月～ 平成26年3月	岡山市子どもセンターは、平成24年4月～平成26年3月まで、岡山市庭園都市推進課主催のＥＳＤプロジェクトから助成金（年間200万円）を獲得し、都市公園での遊び空間の創造をテーマとして、子どもの遊びの広場を展開した。筆者は、研究協力者として、公園を活用してできる遊びを提案したり、保護者アンケートを通して満足度を測定し、報告書にまとめる役割をになった。平成24年度は、5ヶ所でプロジェクトを実施し、平成25年度は、6ヶ所で行った。
(2)一般社団法人gid.jp日本性同一性障害と共に生きる人々の会・出張講義講師	平成26年8月	gid.jp関西交流会において、「就職に関する「ストレス」を考える～ストレスチェックを通して、自分のストレス耐性を知ろう～」をテーマとし、90 分間の講義を行った。講義では、ストレス耐性チェックを通して、自分が持つストレスを客観視し、ストレス解消法ではなくストレスと上手に付き合う方法の提案をした。また、性同一性障害の方が持つ就職活動･職場の人間関係での悩みについて事例を取り上げ、自己開示を含めたグループワークも実施した。実施場所は、大淀コミュニティセンター（大阪）で行い、受講生は18名であった。
(3)特定非営利活動法人男女共同参画ネット尼崎（尼崎市女性・勤労婦人センター）・出張講義講師	平成27年3月	2015 あまがさき女性フェスティバル記念講演会において、「カナダのコミュニティハウスに学ぶ　支えあいのまちづくり」をテーマとし、90分間の講演を行った。多文化共生の国カナダには、子どもから高齢者まで、さまざまな人々が利用するコミュニティハウスがある。そのコミュニティハウスの成り立ちとそこで実施されているサービスとプログラムについて紹介した。また、カナダのコミュニティハウスから学べることとして、コミュニティオーガニゼーションの概念を「人、もの、こと、ところ」、そして「時間の共有」という具体的内容に置き換えて述べた。社会保障の制度化が進む中で、福祉行政の専門分化が起こる過程についても解説した。実施場所は、尼崎市女性センター・トレピエで行い、受講者は40名であった。受講者満足度は100%であった。2014年

		度尼崎市立女性・勤労婦人センター事業報告書：p.26
(4)一般社団法人 gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会・出張講義講師	平成 27 年 6 月	gid.jp 関西交流会において、「自分自身について知る～自己概念の揺らぎを体験しよう～」をテーマとし、90 分間の講義を行った。講義では Twenty statements test=T.S.T/Who am I 法の心理検査も用いて、自己概念とは何かを解説した。また、「私の価値観を知ろう」をテーマとし、価値観の書かれた 15 枚のカードを、自分が大切にしたいと思う順番に並べてもらい、ペアワークを実施した。価値観カードのワークから、自己概念（自己が持つ自分のイメージ）がいかに揺らぎやすいか体験をしてもらった。実施場所はパシフィックマークス西梅田 14Ｆガクトホール（大阪）で行い、受講生は 20 名であった。
(5)2015 年度奈良学園大学公開講座「王寺町り～べるカレッジ」・出張講義講師	平成 27 年 7 月	奈良学園大学公開講座において、「子どもに求められる職業教育とは―キャリア教育の視点から―」をテーマとし、90 分間の講演を行った。講演では、キャリア教育が生まれた背景を解説し、キャリア教育が開発すべき社会生活を営む上で必要となる能力や態度について述べた。また、小学校から高等学校までのキャリア教育の取り組み事例を紹介し、能力開発を行う上で、最も重視すべき事項として、自己肯定感を育む必要性についても述べた。質疑応答の時間も 20 分程度取り、対話形式で講演を行い、大変好評であった。受講生は 18 名であった。
(6)平成 27 年度三郷町子ども人権学習支援事業・指導者	平成 28 年 1 月	三郷町子ども人権学習支援事業において、三郷北小学校「つながり学級」の小学生（32 名）と保護者（33 名）65 名を対象として、科学遊び・学びの広場プロジェクト「ピンホールカメラ作り～小さな穴から見える不思議な世界～」を実施した。ピンホールカメラ作りを通して、光の仕組みについて解説をした。低学年児童には解説は難しかったが、ピンホールカメラを覗くと、映し出される映像が逆転しているということに対し、不思議さと驚きを感じ、その仕組みがどのようになっているのか関心が高まった。実施後の保護者向けアンケートでは、満足度は 100％であり、次回も参加をしたいとの高評価を受けた。
(7)登美ヶ丘北中学校区地域教育協議会第３回スクールコーディネーター研修・出張講義講師	平成 28 年 9 月	「海外の地域コミュニティにおける活動～カナダ・バンクーバー市ネイバーフッドハウスの事例～～」をテーマとして、2015～2016 年度の科学技術研究費（若手研究Ｂ）の成果報告を兼ねて実施した。参加者は 7 名であり、現在、地域活性化事業を行っている者を対象として行った。カナダにおける移民支援組織の成り立ちやセツルメント運動における生活を包括的に支援する仕組み、ボランティアコーディネートの手法、コミュニティディベロップメントの概念についての解説を行った。多数の質問を受け、日本とカナダの文化的背景の差異はあるものの、地域における福祉活動の統合化には聴講者が共感し、高評価をいただいた。
(8)平成 28 年度三郷町立西部保育園第 3 回新任保育士研修会・出張講義講師	平成 28 年 12 月	三郷町立西部保育園にて新任保育士研修の講師として携わる。「環境を通した教育・保育のあり方を学ぶ～保育の「質」を考える～」をテーマとし、①保育の質、質の高い保育とは、②保育環境評価スケールの使用方法の解説および実践を実施した。昨今、教育経済学の視点から、幼児教育の経済学や学力の経済学という書籍が発刊され、就学前教育の充実が強力な公共投資となりうることに注目が集まっている。幼児教育がもたらす効果（自己統制力、向社会的行動、等）について、海外の調査研究の結果を事例として取り上げ、解説した。また、保育環境評価スケールを実践し、保育環境の見直しや保育活動の振り返りを行った。受講生は 3 名であった。
(9)平成 28 年度三郷町子ども人権学習支援事業・指導者	平成 29 年 1 月	三郷町子ども人権学習支援事業において、三郷北小学校「つながり学級」の小学生（28 名）と保護者（30 名）58 名を対象として、科学遊び・学びの広場プロジェクト「色が変わる、まほうの水で描く世界」を実施した。レモン水（酸性）、せっけん水（弱アルカリ性）、石灰水（アルカリ性）を用意し、紫キャベツで染めた紙（リトマス紙）に模様を描き、化学反応によって紙の色が変わ

		る様子を、酸性・アルカリ性の解説をした。学生主導で実施を行い、実施後の保護者向けアンケートでは、満足度は100%であり、次回も参加をしたいとの高評価を受けた。また、こうしたプロジェクトの実施により、学生の事業運営能力・スキルも格段に上がったと言える。
(10) 平成28年度三郷町立西部保育園第4回新任保育士研修会・出張講義講師	平成29年3月	三郷町立西部保育園にて新任保育士研修の講師として携わる。「保育環境評価スケールの活用を振り返って」をテーマとし、3、4、5歳児のクラス担任に保育環境評価スケールの結果を提示しながら、担任（保育経験10年以上）と副担任（保育経験1年）の結果を共有した。結果の共有では、保育経験10年以上の保育者は、自身の保育活動について個別具体的に思い出しながら、保育内容の質に関する発言が多くみられた。一方で、保育経験1年の新任保育者は、クラス全体を考えると概ね環境が整っていると回答し、全体的に高い評価をつけることがわかった。これらの結果を話し合うことで、10年以上の保育経験を有する保育者は、新任保育者の視点を学ぶことができ、今後の指導に役立てることができると述べていた。新任保育者は、10年以上の保育経験を有する保育者の発言を通して、保育の質について、より深く考えることができたと発言をした。園長からは、評価スケールを用いながら、具体的に保育者同士がコミュニケーションを図ることで、保育の質の向上につながると述べていた。受講生は6名であった。
(11) 第14回「産学連携のための経営者セミナー」・出張講義講師	平成29年3月	奈良県大学連合が主催する産学連携のための経営者セミナーにおいて、「学生の主体性を育むキャリア教育の在り方とは」をテーマとして講演を行った。大学生活で身に付けておきたい能力（学士力、社会人基礎力、ジェネリックスキル、21世紀型スキル）の解説をした後、本学のキャリア教育・キャリア支援を紹介した。また、2名の学生から、インターンシップ成果報告会の発表もしてもらい、場内からは、学生が堂々と発表する姿勢を大変評価していただいた。受講生は23名であった。
(12) 広陵町幼稚園保育園職員研修会・出張講義講師	平成29年3月	広陵町幼稚園・保育園職員研修会の講師として、「保育の質を考える～保育環境評価スケールの活用を通して～」をテーマとして講演を行った。保育の質の定義を考えると共に、保育環境評価スケールを用いて、客観的に自身の保育活動を振り返る必要性について述べた。聴講者の中で、保育環境評価スケールの活用をしたことがある者は1名（大学時代に実施した）であり、初めて活用した者ばかりであった。新任保育者よりも保育経験が10年を超える者は、他園見学や研修の機会を積んできていることもあり、他園と自園を比較して評価を付けることから、自己評価が厳しくなる傾向があると伝えると、納得できると聴講生からの感想があった。また、適宜、客観的な評価指標を用いて保育活動を点検する機会を設けることには意義があるとの感想をいただいた。受講生は、45名であった。
(13) 平成29年度北葛城郡内幼稚園教育研究会（総会）・出張講義講師	平成29年4月	北葛城郡幼稚園教育研究会の講師として、「保育の質を考える」をテーマとして講演を行った。保育の質を考えるために、幼児期における教育活動が、向社会行動や非認知能力の向上に影響を及ぼすという諸外国の研究結果を事例として取り上げた。 また、幼稚園内の保育・教育環境を評価するためのツールとして、保育環境評価スケールを紹介し、先生方に保育・教育環境のチェックおよび振り返りをしていただいた。聴講生からは、「幼児教育の重要性を改めて認識することができ、仕事へのやりがいを更に感じることができた」や「客観的指標を用いて自身の保育・教育を確認したことがなかったので、良い機会となった」と感想をいただいた。受講者は、90名であった。
(14) 平成29年度第1回北葛城郡幼稚園教育研究会・園内研究会講師	平成29年5月	第1回北葛城郡幼稚園教育研究会の園内研究会講師として、①幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について、②特別な支援を必要とする幼児の状態等に応じた計

		画的、組織的な指導の在り方をテーマとし、指導助言を行った。まず、各園の取り組みについて、実践報告をしていただいた。次に、講話者から、カリキュラム・マネジメントの概念について整理し、特別な支援を要する幼児の実態を把握するためのチェックリスト解説を行った。出席者は、12 名であった。(11 園の参加)
(15) 第 1 回吉野青年会議所事業合同会議・講師	平成 29 年 5 月	第 1 回吉野青年会議所事業合同会議の講師として、「学生を主体とした事業運営方法について～他者理解を深める技法とは～」をテーマとし、講義を行った。吉野青年会議所事業は、吉野広域に住む小学生を対象とした課外活動を実施し、青少年健全育成に取り組んでいる。大学生が主体となって事業を実施するため、事業目的を共有し、事業立案方法を提示した。また、参加者がコミュニケーションを円滑に行えるようにするために、他者理解を深める 2 つのワークショップを開催した。今回は、奈良学園大学の学生 17 名、奈良女子大学の学生 2 名、吉野青年会議所から 5 名が参加をした。
(16) 平成 29 年度三郷町立西部保育園第 1 回新任保育士研修会・出張講義講師	平成 29 年 5 月	三郷町立西部保育園第 1 回新任保育士研修会の講師として、「社会人に求められるコミュニケーションスキルとは」をテーマとして、講義を行った。研修では、第一印象の重要性、気持ちの良い挨拶の方法、身だしなみ、言葉遣いの 4 点を重点指導項目として、実施した。また、3 月まで学生であった新任保育士の方々に、学生と社会人の違いについて考えてもらい、社会人としての自覚を再認識していただいた。受講生からは、「姿勢等、指摘されるまで意識していなかった」や「保護者様の対応に役立てます」といった声をいただいた。受講生は、5 名であった。
(17) 平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 5 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9：00-11：30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13：00-16：30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。ＫＪ法を用い、①子どもの様子、②環境構成、③教師の援助の 3 つの観点から、各クラスの担当教員に本日の保育活動を振り返っていただいた。結果として、自然環境に関する項目の出現が見られなかったため、自然環境における環境構成の再点検と栽培活動に関わる子どもの様子を取り上げる必要性が明らかとなった。また、本園に関する重点項目として、①異年齢児交流、②遊び空間の改善・集中できる遊び作りの工夫、③遊び内容の充実、④教材の確認が取り上げられた。教員からは、「自然環境の項目がないことに対し、当たり前のことで、見過ごしていたと思う」や遊び空間の改善に関する意見があった。今回は、教員 9 名の参加であった。
(18) 平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 9 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9：00-11：30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13：00-16：30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(19) 平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 10 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9：00-11：30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13：00-16：30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一

		連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(20) 平成 29 年度第 2 回北葛城郡幼稚園教育研究会・園内研究会講師	平成 29 年 10 月	北葛城郡幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9：00-11：30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13：00-16：30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(21) 平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 11 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9：00-11：30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13：00-16：30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(22) 平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 11 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9：00-11：30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13：00-16：30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(23) 平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園長研修会講師	平成 30 年 1 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園にて、広陵町の幼稚園 5 ヶ園の園長先生を対象とし、幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの進め方について指導助言を行った。また、園内目標の立て方についてワークショップを実施した。園長 5 名、教員 5 名の参加であった。
(24) 平成 29 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 2 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの捉え方」をテーマとし、広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園で実施した 1 年間のカリキュラム・マネジメントの実践を交えながら、講義をした。講義後、西部保育園のＰＤＣＡサイクルの構築について、参加保育士と園長先生を交え、話し合った。保育士 8 名の参加であった。
(25) 平成 29 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 3 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育環境評価スケールの活用を振り返って」をテーマに指導助言を行った。12 月に実施した保育環境評価スケールの結果をもとに、3~5 歳のクラスの担任と副担任に示し、評価結果の差について、話し合った。評価スケールを用いながら、具体的に保育者同士がコミュニケーションを図ることで、保育の質の向上につながる。保育士 6 名の参加であった。
(26) 平成 30 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 5 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育士として求められるコミュニケーションスキルとは」をテーマに講演を行った。新任保育士を対象としており、社会人としてのマナーや保育園ならではのトラブル事例などをもとに相手に伝わるコミュニケーションの

		取り方について講義をした。計 10 名の参加であった。
(27) 平成 30 年度広陵町立真美ケ丘第一小学校附属幼稚園・園内研修会	平成 30 年 6 月	広陵町立真美ケ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、「保育指導助言および特別支援教育について」をテーマに、指導助言を行った。特別支援については、加配職員向けに具体的事例を取り上げながら、指導方法について助言を行った。教員 8 名の参加であった。
(28) 平成 30 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 7 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「チームビルディング研修」をテーマに講演を行った。全教職員 20 名を対象とし、ＮＡＳＡゲームを用いて、合意形成の手法を講義した。また、話し合いが有益であることを数値化して示したことにより、参加者の納得感を得られた。
(29) 平成 30 年度広陵町立真美ケ丘第一小学校附属幼稚園・園内研修会	平成 30 年 10 月	広陵町立真美ケ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、「保育指導助言および特別支援教育について」をテーマに、指導助言を行った。指導案の書き方について指導をした他、特別支援については、加配職員向けに具体的事例を取り上げながら、指導方法について助言を行った。教員 8 名の参加であった。
(30) 平成 30 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 12 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育のプロセスの質評価スケールの活用について」をテーマに指導助言を行った。0~5 歳のクラスの担任と副担任を対象とし、評価スケールを用いて、各保育士に自身の日々の保育活動を振り返ってもらった。保育士 15 名の参加であった。
(31) 平成 30 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 31 年 3 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育のプロセスの質評価スケールの結果を振り返って」をテーマに指導助言を行った。12 月に実施した保育環境評価スケールの結果をもとに、3~5 歳のクラスの担任と副担任に示し、評価結果の差について、話し合った。評価スケールを用いながら、具体的に保育者同士がコミュニケーションを図ることで、保育の質の向上につながる。保育士 15 名の参加であった。
(32) 令和元年度三郷町立西部保育園･保育士園内研修会講師	令和元年 5 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育記録の種類と書き方～記録を書くための視点とは～」をテーマに指導助言を行った。週案をもとにした記録やエピソード記録、個人票記録、子どものつぶやき、ヒヤリハット記録等の記録の種類と目的を提示した他、記録を書くための 5 つの視点について講義をした。実際に今日の午前中の保育活動におけるエピソード記録を保育士に書いてもらい、指導をした。保育士 7 名の参加であった。
(33) 令和元年度三郷町立西部保育園･保育士園内研修会講師	令和元年 11 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「ビデオカンファレンス①子どもの遊びの意味を考える」をテーマに指導助言を行った。午前中に子どもの遊ぶ様子や保育活動を撮影し、午後から映像をもとに、保育活動や環境構成の改善について考察した。保育士 7 名の参加であった。
(34) 令和元年度三郷町子ども人権学習支援事業・指導者	令和 2 年 2 月	三郷町子ども人権学習支援事業において、三郷北小学校「つながり学級」の小学生（28 名）と保護者（21 名）49 名を対象として、科学遊び・学びの広場プロジェクト「地球のふしぎを探ってみよう-地層編：たからさがし」を実施した。京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地質学鉱物学教室技術職員の高屋真樹先生を招聘し、鉱物標本等の解説をしていただいた。実施後の保護者向けアンケートでは、満足度は 100％であり、次回も参加をしたいとの高評価を受けた。また、プロジェクトの継続実施により、学生の事業運営能力・スキルも格段に上がったと言える。
(35) 令和 4 年度三郷町教育総務課放課後子ども教室・指導者	令和 4 年 4 月～令和 4 年 10 月	三郷町教育総務課の放課後子ども教室にて、量子科学技術研究開発機構の研究員や九州大学大学院の大学院生と共同で科学教室を実施した。中学生は、8 名の参加であった。中学生は、数理部門において全国大会に進むことができ、産経新聞でも取り組みの様子を取り上げられた。
(36) 地域福祉の方法論「プレイスベースド・アプ	令和 4 年 10 月	奈良地域デザイン研究所主催の令和 4 年地域デザイ

ローチ」とは		ナー養成講座の講師として、地域福祉の方法論の解説、カナダの地域福祉の事例の紹介を行った。参加者は 15 名であった。
(37)令和 4 年度三郷町子ども人権学習支援事業・指導者	令和4年11月	三郷町子ども人権学習支援事業にて、「親子のつながりを深める絵本の読み聞かせ―どきどき・わくわく絵本の世界」をテーマに、絵本の紹介や音読技術について解説をした。参加者は、親子で20名であった。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 (1)幼稚園教諭二種免許状取得	平成11年3月	免許状番号　平10幼二め　第804号（京都府教育委員会）
(2)プロジェクトワイルドエデュケーター資格取得	平成18年7月	財団法人公園緑地管理財団：資格番号なし
(3)保育：子育てアドバイザー（初級）	平成21年4月	特定非営利法人保育：子育てアドバイザー協会： 認定番号　第10001024号
(4)修士（都市政策）	平成23年3月	大阪市立大学大学院創造都市研究科都市政策専攻（都市政策修士 第730号）「修士論文題名：現代的セツルメント「ネイバーフッドハウス」の社会的意義～ゴードンネイバーフッドハウスの取り組みを　めぐって～」
(5)小学校教諭二種免許状取得	平成23年7月	免許状番号　平二三小二第六号（京都府教育委員会）
(6)生涯学習コーディネーター資格取得	平成23年10月	財団法人社会通信教育協会：第31110009号
(7)生涯学習1級インストラクター資格取得	平成23年10月	財団法人社会通信教育協会：第11110009号
(8)メンタルケアカウンセラー資格取得	平成25年7月	財団法人生涯学習開発財団/メンタルケア学術学会：資格第134014563号
(9)キャリアカウンセラー資格取得	平成25年9月	日本キャリア教育学会：認定登録第214号 有効期限：2027年9月13日（2020年9月更新）
(10)メンタルケア心理士資格取得	平成25年10月	財団法人生涯学習開発財団/メンタルケア学術学会：資格第134014563号
(11)准ケアストレスカウンセラー資格取得	平成25年11月	財団法人職業技能振興会：ＪＣ-080018
(12)ガイダンスカウンセラー資格取得	平成26年12月	スクールカウンセリング推進協議会 認定番号：第14030010号
(13)修士（学校教育学）	平成28年3月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科人間発達教育専攻（学校教育学修士 第8401号）「修士論文題目：多世代交流としての子育て支援に関する研究―カナダ・ネイバーフッドハウスの事例から―」
(14)プロジェクトワイルドシニアエデュケーター資格取得	令和2年1月	一般財団法人公園財団：資格番号なし
(15)カラーセラピスト資格取得	令和2年10月	一般社団法人日本色彩環境福祉協会：資格番号なし
(16)アンガーマネジメントファシリテーター	令和2年11月	一般社団法人日本アンガーマネジメント協会 JAMA管理番号：104345
(17)NAMA Certified Anger Management Specialist-Ⅰ	令和2年11月	National Anger Management Association：資格番号なし
(18)こども環境アドバイザー資格取得	令和3年4月	公益社団法人こども環境学会：No.210238
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1)特定非営利法人岡山市子どもセンター おかやまプレーパーク運営委員	平成24年3月～ 平成27年3月	特定非営利法人岡山市子どもセンター（岡山市北区久米348）の事業の一つである「おかやまプレーパーク」の運営委員に着任し、月に2度、岡山国際児童年記念公園こどもの森へ出向いて活動を行なっている。『自分の責任で自由に遊ぶ』ということをモットーとし、子どもがのびのびと思いっきり遊べるように敷地内の禁止事項（例えば、木登り禁止等）をなくし、やりたい遊びを実現できる遊び場の確保に力を注いでいる。年間事業計画の見直しや助成金の申請、行政と交渉をする際の助言役を務めている。
(2)特定非営利活動法人ウエルス　理事	平成24年5月～ 平成27年3月	特定非営利法人ウエルス（京都府亀岡市）の顧問に着任し、幼稚園や保育所における自然環境としての園庭の芝生緑地化推進活動の助言を行っている。園庭の芝生化により、子ども達の遊び方の変化や外遊びの増加、それに伴う健全な肉体形成等、芝生化によってどのような教育的効果があるか、共同研究を行った。（住所：法人事務所：〒621-0805　京都府亀岡市安町大池 11　日進ビル101）

(3)ギャラリー吾子・代表	平成25年10月～現在に至る	京都市東山区泉涌寺地区は、陶芸職人の町として知られているが、職人の高齢化が深刻な問題となっており、その地に根付いた文化が途絶えようとしている。そのため、地域振興の一環として、平成25年10月よりギャラリーの開催している。展示作品は、陶器に関わらず絵画なども展示している。地域のお祭りがある際には、無料で開放し、音楽会なども行っている。（京都市東山区泉涌寺東林町17-29）令和3年9月からは、京都市上京区仲之町の京町家に拠点を移し、文化資源の保全と活用のための活動をしている。
(4)広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会・ひと部門　部会長	平成27年7月～平成28年3月	本審議会は、まち・ひと・しごと創生法に基づく国の長期ビジョン及び総合戦略を勘案し、内閣府地方創生推進室が示す「地方人口ビジョン策定のための手引き」及び「地方版総合戦略策定の手引き」に基づき実施した。また、国の総合戦略が定める4つの政策分野（①地方における安定した雇用を創出する、②地方への新しい人の流れをつくる、③若い世代の結婚、出産、子育ての希望をかなえる、④時代に合った地域を創り、安心なくらしを守るとともに、地域と地域を連携する）に則り、まち部門、ひと部門、しごと部門の作業チームに分け、筆者はひと部門の部会長の任命を受け、総合戦略策定に向けた審議を実施した。
(5)広陵町幼保一体化推進会議　副会長	平成27年8月～平成28年7月	本会議では、「町立幼稚園・保育園における幼児教育・保育のあり方等について」を主題とし、5回にわたって審議を行った。審議事項は、①幼稚園・保育園におけるより良い教育・保育の提供、②現在策定中の幼保一体化総合計画に基づいた町立幼稚園・保育園の施設整備の促進、③就学前の子どもたちへの子育て支援の充実であり、それらを答申としてまとめ、報告した。
(6)広陵北幼保連携型認定こども園設計業務公募型プロポーザル選定委員会　委員	平成28年3月～平成28年6月	本プロポーザルは、広陵町における幼保の一体化を進めるため、広陵北幼稚園と広陵北保育園を統合し、広陵町で初めての幼保連携型認定こども園の設計業務の委託先を選定するものである。9社から応募があり、一次審査において5社を選定、2次審査において業務委託先を決定した。平成30年4月1日に開園予定であり、災害時の乳幼児を対象とした福祉避難所としての機能も有する施設となる。
(7)広陵町総合戦略等検証委員会　委員	平成28年7月～平成29年3月	平成27年7月～平成28年3月までに実施した広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会において策定した事業のうち、先行で実施している8事業に対して、その実施状況および事業の有効性に関する審議を行った。
(8)出会いウィーク2017実行委員会　委員	平成28年10月～平成29年3月	本事業は、奈良ＮＰＯセンターが主体となり、奈良県下にて活動を実施するＮＰＯおよびボランティア団体の広報活動の一環として実施したものである。奈良学園大学ボランティアサークルも参加をし、「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」のＰＲを行った。実施日は、平成29年2月18日（土）～19日（日）であり、当日の参加団体は36団体であった。2日間の参加者総数は、800名程度であった。
(9)広陵町総合戦略等検証委員会　委員	平成29年8月～令和3年3月	平成27年7月～平成28年3月までに実施した広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会において策定した事業の実施状況および事業の有効性に関する審議を行っている。（平成33年3月31日まで）
(10)広陵町教育委員会　教育委員	令和元年10月～現在に至る	広陵町教育委員会にて教育委員に任命された。定例教育委員会への参加の他、幼稚園から中学校まで学校教育の運営に関わる各種審議を行っている。
(11)西校区認定こども園整備基本計画事業手法等検討業務委託指名型プロポーザル審査委員会 委員	令和元年10月～令和2年3月	本プロポーザルは、広陵町における西校区認定こども園設置のための設計業務の委託先を選定するものである。業者は1社であり、選定作業を行った。
(12)日本地域福祉学会　第12期地方委員	令和2年7月～現在に至る	2020年度第2回（第152回）理事会にて、第12期地方委員に任命された。また、2020年度（12/19）近畿地域福祉学会の実行委員長（2020/8-12）を任命され、学会運営をした。

(13)広陵町公私連携法人指定審査委員会　副委員長	令和 2 年 7 月～令和 3 年 1 月	本プロポーザルは、広陵町における西校区認定こども園運営のため委託先を選定するものである。選定事業者1社であり、選定作業を行った。なお、任期は、西校区認定こども園整備運営に係る協定が締結された日の翌日までである。
(14)広陵町総合戦略等検証委員会　委員	令和 3 年 7 月～令和 4 年 3 月	平成 27 年 7 月～平成 28 年 3 月までに実施した広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会において策定した事業の実施状況および事業の有効性に関する審議を行っている。
4　その他 (1)環太平洋大学キャリアセンター運営委員会委員	平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月	環太平洋大学キャリアセンターは４つの分室（教職支援室・幼保施設分室・公務員就職支援室・企業等就職支援室）に分かれて進路支援をしている。月に 1 度キャリアセンター運営委員会を開催し、各分室との連携を図っている。また、環太平洋大学の場合、体育会に力を入れている学生も多く、4 年生の前期が終わるまで進路決定を引き延ばす学生の姿が見られ、そうした学生に対して、ゼミ担当教員も含めて支援を実施した。
(2)環太平洋大学幼児教育言語力育成研究会代表	平成 24 年 4 月～平成 27 年 3 月	2008 年に改訂された学習指導要領では、「言語活動の充実」が育成すべき重要項目の第一として取り上げられた。そのことを受け、現場における言語活動の充実を特に幼児を対象として調査することを目的として岡山市立大野幼稚園や岡山市立江西幼稚園の園長先生とともに研究会を立ち上げた。幼稚園の教育現場と大学組織が協同して、幼児期における言語活動の充実に関する調査を実施している。
(3)環太平洋大学ハラスメント委員会　委員	平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月	本学では、アカデミック・ハラスメントやジェンダー・ハラスメント、パワーハラスメント等を総合的に取り扱う部としてハラスメント委員を設置している。今年度は、ハラスメントのない教育研究環境づくりの一環として、オープンスペースを利用して学生相談を行うことや、学生が研究室内にいる場合は、ドアを開けておくなど、誤解やトラブルを未然に防ぐ対策をとった。
(4)奈良学園大学キャリアセンター運営委員会委員	平成 26 年 4 月～現在に至る	奈良産業大学から名称変更された奈良学園大学は、2 学部 2 学科（人間教育学部・保健医療学部）が新設された。それに伴い、大学組織も改変され、平成 26 年 4 月に就職支援課からキャリアセンターへと名称変更および業務内容の変更や統合がなされた。平成 30 年 4 月から、キャリアセンター内に教職支援室、企業・公務員支援室と分室をつくり、キャリア支援体制の強化を図った。平成 30 年 4 月から、キャリアセンター副センター長に任命（令和 3 年 3 月まで）された。
(5)奈良学園大学ボランティアサークル　顧問	平成 26 年 4 月～現在に至る	平成 27・28 年度に吉野青年会議所とボランティアサークルに所属する大学生と協働で吉野広域において「小学生を対象としたキャンプ事業」を実施した。平成 27 年度から現在に至るまで、三郷町内の小学生を対象とした「科学遊び・学びの広場プロジェクト」を実施している。年間 100～150 名が参加し、三郷町からも高く評価していただいた。（平成 27 年度には、奈良県庁主催の財団法人奈良県青少年会館からの寄付金を活用した「青少年の健全育成事業」に奈良学園大学ボランティアサークルで応募し、20 万円の採択を受けた。）その他、第 14 回大和川七夕まつり（平成 29 年度）において燈花会事業を実施し、参加した学生が大和郡山市ロータリークラブから感謝状を授与された。
(6)奈良学園大学サッカー部　顧問	平成 29 年 4 月～令和 3 年 3 月	奈良学園大学において、サッカー部の顧問となり、学生支援をしている。平成 29 年 4 月から現在に至る。
(7)奈良学園大学評議会　評議員	平成 30 年 4 月～令和 3 年 3 月	平成 30 年 4 月から、奈良学園大学評議会評議員に任命された。キャリアセンター報告を中心として、取り纏めをしている。
(8)奈良学園大学自己点検評価委員会　委員	令和 2 年 4 月～令和 3 年 3 月	令和 2 年 4 月から、奈良学園大学自己点検評価委員会委員に任命された。キャリアセンター運営関連資料の取りまとめを担当した。
(9)奈良学園大学共通教育委員会　委員	令和 3 年 4 月～現在に至る	令和 3 年 4 月から、奈良学園大学共通教育委員会委員に任命された。2 学部 3 学科の共通教育科目を、どの学生も履修できるようにするために整備を行っている。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1『保育者・小学校教師のための道しるべ』	共著	平成29年10月	学文社	本書は、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭をめざす短大生、大学生、専門学校生に向けて、就職する前に身に付けてほしい保育者・教師に求められる基礎知識、専門知識、技術をまとめたものである。 B5判　全140ページ 編著者：田中卓也・松村齋・小島千恵子・志濃原亜美・木本有香 共著者：黒田政広・秀真一郎・五十嵐淳子・中田尚美・岡野聡子・岩治まとか・雲津英子・谷原舞・橋爪けい子・光井恵子・今村民子・佐々木由美子 本人担当部分： 第8章「保育実習・幼稚園教育実習・小学校教育実習で実力を発揮しよう」(1) 保育実習とはどのような実習なのか（pp. 58-60)、(2) 幼稚園教育実習とはどのような実習なのか(pp. 60-62)、(6) 実習日誌、指導案とはどのようなものなのか(pp. 68-72)を単著。カフェタイム(コラム)②ちょっと知っておきたい保育室の飾り付け（p. 23）を単著。 本人担当部分の概要： 保育所実習と幼稚園実習について、観察実習、見学実習、部分実習、一日実習をまとめ、それぞれに修得すべき事柄を解説した。また、実習日誌や指導案では、実際に活用されている書類を事例として取り上げ、書き方のポイントを解説した。カフェタイムでは、保育室内の飾りの意味について取り上げた。
2『MINERUVAはじめて学ぶ保育12子育て支援』	共著	平成30年3月	ミネルヴァ書房	本書は、子ども・子育て支援新制度、保育教諭など最新の動向を盛り込みつつ、保育の基本を解説したものである。 B5判　全220ページ 監修：大方美香・名須川知子 編著者：伊藤篤（12巻担当） 共著者：岡野聡子・大方美香・大西晶子・寺村ゆかの・植木信一・山岡テイ・高畑芳美・吉岡洋子 本人担当部分： 第１章 子育て支援の必要性と制度(レッスン1 子育て支援が求められる社会背景①子育てをめぐる社会環境の変化、②少子化という社会現象、③子育てをめぐる諸課題（pp. 2-15)、レッスン 2 子育て支援に関する制度・施策の展開①わが国における子育て支援の制度・施策の歩み、②少子化の進行と子育て支援(pp. 16-29))、第4章 海外に学ぶ子育て支援（レッスン13 北米における子育て支援①多文化主義国家であるカナダ、②カナダにおける子育て家庭支援の展開、③カナダにおける子育ての現状、④子育て家庭支援の取り組みーファミリーリソースセンター、⑤子育て家庭支援の取り組みーネイバーフッドハウス、⑥子育て家庭支援の取り組みーノーバディズパーフェクトプログラム(pp. 156-171)）を単著。 本人担当部分の概要： 第１章では、子育て支援が求められる社会的

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				背景について、我が国における子育てをめぐる社会環境の変化や少子化についてデータを提示し、子育てをめぐる諸課題について解説した。また、我が国におけるこれまでの子育て支援に関する制度や施策の歩みを表にしてまとめ、その成果についても言及した。第４章では、カナダにおける子育て支援について、ファミリーリソースセンター、ネイバーフッドハウスの取り組みを紹介した。子育て家庭支援の取り組みでは、ノーバディズパーフェクトプログラムについて解説した。
３『子どもの生活理解と環境づくり（改訂版）～就学前教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』	共著	平成31年3月	ふくろう出版	2017 年に学習指導要領が改訂され、資質・能力の三つの柱と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10 の姿）が明示された他、保幼小連携の強化が取り上げられた。本書では、学習指導要領改訂にともない、領域「環境」にて設置された新項目も含め、就学前教育と小学校教育の教育内容の接続に言及し、自然環境・物的環境・社会環境の３つの視点を用いて事例を取り上げながら解説を行った。 A5 判　全 206 ページ 編著者：岡野聡子 共著者：松田智子・大野鈴子・吉村啓子・筒井愛知・村田眞理子・薮田弘美・辻野孝・伊崎一夫・中道美鶴・岡田美紀・田中卓也・前川豊子・平野知見 本人担当部分： 第１章「就学前教育から小学校教育へ」第１節「就学全教育と領域「環境」」（pp.1-20）、第３章「自然環境とのかかわり」第２節 1-2）栽培植物の選定条件とは、1-3）自然環境マップづくり（pp.81-83）、第４章「物的環境とのかかわり」第１節 1.ものの性質や仕組みを知る（pp.103-104）、1-2）ものの仕組みを理解する（pp.106-108）、第 5 章「社会環境とのかかわり」第１節 1-3）生活科における「行事」のとらえ方（pp.146-147） 本人担当部分の概要： 第１章では、就学全教育と領域「環境」の概要を述べ、2017 年度の学習指導要領改訂にて取り入れられた資質・能力の三つの柱と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10 の姿）、これから求められる幼児教育の在り方について解説した。また、保幼小連携の重要性から、領域「環境」と「生活科」の教育内容の接続について解説した。第３章では、自然環境のかかわりにて、園内にある栽培植物の選定条件を解説し、自然佳境マップづくりを紹介した。第４章では、物的環境とのかかわりにて、子どもがものの性質や仕組みを理解する過程について解説した。第５章では、社会環境とのかかわりにて、2017 年度の要領改訂において領域「環境」に示された行事の役割が、小学校教育「生活科」にどのように教育内容が接続されているか解説した。
４『基礎からまなべる保育内容（人間関係）ワークブック』	共著	令和2年2月	あいり出版	本書は、幼稚園教諭・保育士を目指す者を対象とし、保育内容（人間関係）の基礎を解説したものである。 A4 判　全 86 ページ 編著者：田中卓也・宮内洋・藤井伊津子・中澤幸子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				共著者:伊藤恵里子・秀真一郎・木本有香・小久保圭一郎・川村高弘・橋場早苗・佐藤寛子・岡野聡子・佐々木由美子・増田吹子・内田祥子・郷家史芸・香曽我部琢・五十嵐淳子・浅見優哉 本人担当部分： 第５章「人間関係を通して育む「道徳性・規範意識の芽生え」とは」（1.乳幼児期における「道徳性・規範意識の芽生え」、2.道徳性の芽生えとは、3.規範意識の芽生えとは）（pp.33-41） 本人担当部分の概要： 現在の日本社会における子どもの育ちに関する問題点や問題が生じた社会的背景について言及するとともに、2017 年に改訂された幼稚園教育要領・保育所保育指針の「道徳性・規範意識の芽生え」に関する項目のねらいと内容、内容の取扱いについて解説した。学生の理解が深まるように、道徳性や規範意識の芽生えについて、具体的事例を提示しながら解説した。また、学生がテキストに書き込めるワーク欄も作り、活用できるテキスト作りに勤めた。
５『保育者になる人のための実習ガイドブック A to Z ―実践できる！ 保育所・施設・幼稚園・認定こども園実習テキスト―』	共著	令和2年3月	萌文書林	保育所や施設、幼稚園、認定こども園での保育実習・教育実習について、実習の事前・事後で学ぶべき内容を 15 章に整理し、まとめている。コラムでは、実習の期間中だけでなく、現場の保育者になってからも役立つ内容としている。巻末付録には、実習の持ち物チェックリストと保育実習・教育実習で学び、現場で実際に働いている若手の保育者からのメッセージも収録した。 A4 判　全 178 ページ 監修：名須川知子 編著者：田中卓也・松村齋・小島千恵子・岡野聡子・中澤幸子 共著者：佐藤寛子・関容子・増田吹子・山本美紀・植田恵理子・赤塚めぐみ・日隈美代子・橋爪けい子・田中路・鈴木和正・中島眞吾・橋場早苗・島田直哉・山梨有子・安氏洋子・里見達也・加藤緑・八幡眞由美 本人担当部分： 第８章「幼稚園教育実習とは」（1.幼稚園教育実習の目的と心構え、2.幼稚園における園生活の流れと実習の実際、3.年齢別のクラスの特徴と実習のポイント）（pp.80-93） 本人担当部分の概要： 幼稚園教育実習の目的や実習に出向く際の心構えについて解説した。また、幼稚園の園生活の流れを例示し、実習のポイントについて述べた他、3～5 歳児の年齢別の実習のポイントを解説した。
６『基礎から学ぶ子育て支援の実際』	共著	令和2年6月	大学図書出版	本書は、子育て家庭の現状に合わせた支援方法や関係機関との連携体制の構築等、事例やワークを用いながら解説している。2019 年に改訂された保育士養成課程の教授内容に基づいて章立ての構成をしている。 B5 判　全 175 ページ 編著者：太田恵子・檜垣昌也 共著者：市東賢二・小川和代・城野敦子・田中卓也・桶田ゆかり・小原貴恵子・齋藤惠子・相樂真樹子・野田敦史・岡野聡子・大熊信成・志村浩二・山城久弥 本人担当部分：

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				第12講「特別な配慮を要する子どもと家庭への支援～発達障害児」(1.発達障害のある子どもと保護者の状況、2.発達障害の子どもと家庭への支援、3.特別な配慮を要する子どもや家庭への支援の実際、4.演習課題)(pp.122-139) 本人担当部分の概要： 代表的な発達障害である自閉症スペクトラム、注意欠如・多動症、限局性学習障害の3つの事例を取り上げ、子どもの様子や家庭支援のあり方について解説した。また、子どもと家庭支援の方法や制度、留意事項、保育現場における発達障害の子どもへの支援も事例を取り入れ解説した。
7『子どもとともに未来をデザインする保育者論・教育者論』	共著	令和2年10月	わかば社	本書は、保育士資格、幼稚園教諭免許状取得を目指す学生を対象とし、保育学・教育学の基礎を学ぶために、理論面・実践面から事例を通して解説した書籍である。 A4版　全155ページ 編著者：田中卓也・松村齋・小島千恵子 共著者：小川知晶・日隈美代子・中塚健一・加藤緑・小宮山道夫・鈴木和正・島田直哉・関容子・志濃原亜美・中澤幸子・北澤明子・安氏洋子・佐藤寛子・西田明史・垣添忠厚・大橋淳子・五十嵐淳子・坪井瞳・岡野聡子・加藤英夫・橋爪けい子・酒井範子・加藤裕希 本人担当部分： 第13章「保育者・教育者に必要な研修」(1.保育者としての専門性の向上とキャリア形成、2.研修の種類と内容、3.研修の成果を現場でいかしてみよう)(pp.124-133) 本人担当部分の概要： 長年に渡って保育者として働くために求められる専門性や、20～50 歳代までの保育者としてのキャリア形成について解説した。また、園内・園外研修の具体的事例、保育士のキャリアアップ制度、免許状更新講習を取り上げた。最後に、研修での学びをどのように現場で活かす方法について解説した。
8『自分の未来は自分が創る　キャリア形成ワークブック』	共著	令和3年9月	ふくろう出版	本書は、大学生のキャリア形成支援を目的として、ＰＢＬ(Problem-based Learning)の概要およびワークシート、チームビルディング、アサーションスキル、アンガーマネジメント、ストレスマネジメント、個人・集団面接対策、場面指導対策、集団討議対策、グループディスカッション対策、履歴書の書き方、エントリーシートの書き方等をまとめた書籍である。 A4版　全72ページ 編著者：岡野聡子 共著者：上杉敏郎・柳本周介・栗山朝亜輝 本人担当部分： 第Ⅰ部「課題発見力を高め、問題解決能力を磨こう」(pp.1-24)、第Ⅲ部「資料集」(pp.54-71) 本人担当部分の概要： ＰＢＬの概要を解説し、情報収集、課題分析、仮説構築、検証、アウトプットの方法をワークシート形式で掲載した。資料集では、電話のかけ方、メール・お礼状・送付状の書き方、採用試験で出る内容について解説した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９『基礎からまなべる保育内容（環境）ワークブック』	共著	令和3年10月	あいり出版	本書は、幼稚園教諭・保育士を目指す者を対象とし、保育内容（環境）の基礎を解説したものである。 A4 判　全 142 ページ 編著者：田中卓也・岡野聡子・藤井伊津子・橋爪けい子・木本有香・小久保圭一郎 共著者：木戸啓絵・柳生明子・香宗我部琢・小森谷一朗・郷家史芸・浅見優哉・福田篤子・加藤緑・栢清美・北澤明子・五十嵐淳子・伊藤能之・関容子・増田吹子・日隈美代子・塚越亜希子・佐々木由美子・中澤幸子・川村高弘 本人担当部分： 第 15 章「指導案の書き方・ポイント」（pp. 130-138）、第 9 章「生き物を飼育することの意義とは」（pp. 76-79） 本人担当部分の概要： 第 15 章は、指導案の書き方の事例を示しながら、書き方のポイントを解説した。第 9 章は、生き物を飼育することの意義について解説し、園の飼育活動に適した小動物を紹介した。
１０『保育・教育・社会福祉　研修ハンドブック』	共著	令和3年10月	大学図書出版	本書は、幼稚園教諭、保育士、小学校教諭、施設職員のための研修ハンドブックである。研修講師側、受講側のどちらもが活用できるように工夫した書籍である。 A4 判　全 120 ページ 編著者：田中卓也・松村齋・時田詠子・佐々木由美子 共著者：岡野聡子・小川千晶・志濃原亜美・鈴木和正・土屋昭雄・中島眞吾・中塚健一 本人担当部分： 第 2 章「保育所研修の実践例」（pp. 20-27） 本人担当部分の概要： 保育所にて実際に行われる研修を想定し、４つのテーマ（1. お散歩安全マップをつくってみよう、2. フォトカンファレンスに挑戦してみよう、3. 保護者との良好な人間関係をつくるために、4. 園内環境をチェックしてみよう）をあげ、それぞれの研修の意義や研修の流れとポイントを解説した。
１１『新しい視点からの教育社会学―人間形成論の視点から―』	共著	令和4年9月	大学教育出版	本書は、教職課程を学ぶ学生を対象にした教育社会学のテキストである。順に読み進めることで、教育社会学の理論と実践を学ぶことができ、現場の教師にあっては、最新の教育社会学の知見を学び、実践的な内容に触れることができるように構成している。 B5 版　全 234 ページ 編著者：住本克彦 共著者：岡本恵太・森一弘・小泉令三・定金浩一・山口裕毅・坂中尚哉・斎藤健司・立浪朋子・岡部康英・善野八千子・金山憲正・難波正義・オチャンテ・カルロス・正村政則・岡野聡子・西江なお子・崔回淑・濱津良輔・住本みゆき・正木友則・太田雄久・渋谷友和・松岡克典・原口忠之 本人担当部分： コラム③「今後のキャリア教育の行方」（p. 63） 本人担当部分の概要： AI が不得意な「物事を多角的・多面的に捉える力」を養い、さまざまな視点から課題を解決しようとする姿勢の重要性を述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１２『増進型地域福祉への展開―幸福を生み出す福祉をつくる』	共著	令和4年9月	同時代社	住民参加の福祉、福祉施設、社会福祉協議会・行政、協同組合、NPO などによる支え合いや助け合いを増進型地域福祉の視点から解説したものである。公助抑制のための福祉論ではなく、「共助」の意味と「公助」との関係を再構築し、「人が生きる幸せ」を地域で考える取り組みについて論じている。 編著者：小野達也・朝倉美江 共著者：森安美・原田徹・戎谷悦子・植田憲治・所正文・藤井恵里・渡辺晴子・石川久仁子・岡野聡子・柴田学 本人担当部分： 第 11 章 プレイスベースド・アプローチと増進型地域福祉(pp.211-230) 本人担当部分の概要： 公共政策分野で注目をされているプレイスベースド・アプローチが援用されているカナダの地域福祉団体を取り上げ、地域開発の方法論について述べた。また、そのカナダの事例を増進型地域福祉の視点で捉えなおし、日本の地域福祉への提言を行った。
（学術論文） １　幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価に向けて―「聞く力」を量的に捉える試み―	共著	平成26年3月	環太平洋大学研究紀要第８号（pp. 115-122）	調査対象者は、言葉の教育に特に力を入れているＡ園と言葉の教育以外に力を入れているＢ園の園児を対象とした。結果は、課題ごとに素点を出し、換算表に従って偏差値に変換した。言語性という項目を設け、2 要因分散分析を行った結果、Ａ園とＢ園には違いがなく、課題の主効果（F(3、42)=4.481、p<.01）のみ有意であった。本調査の取組から、園の取組の違いを結果に反映しにくいなど、測定の難しさが浮き彫りになった。また今後は、聞く力だけでなく、話す力、伝え合う力の測定について考える必要がある。 代表者：岡野聡子 共著者：吉村啓子、大野鈴子 本人担当部分：第1、2、3、5 章部分 第 1 章では、言語活動における教育効果の測定の評価の必要性と測定方法における先行研究を提示した。第 2 章では、調査対象園の概要をまとめ、第 3 章では、調査概要および研究手法、研究分析手法について提示した。第 5 章では、検査結果の提示および今後の課題として、聞く力だけでなく、話す力、伝え合う力の量的測定に対して言及した。
２　NIE を取り入れた教育実践研究―大学 2 年生を対象とした時事教養Ｉの授業実践を通して―	共著	平成26年3月	環太平洋大学研究紀要第８号(pp.　147-154)	学生の基礎学力の向上は、本学にとっても大きな課題であり、この課題解決の一つとして、新聞の利用による教育の導入を平成 25 年 4 月からはじめた。授業は学部単位で行い、420 名が履修をした。授業内容は、山陽新聞社による講義と現在注目されている新聞記事を題材（出生前診断やユニクロ世界同一賃金、アベノミクス等）を使用した講義を実施した。また、講義内に 3 回の試験を行い、講義後には学生アンケートを実施した。試験は、難易度が同程度の試験問題を使用しが。試験結果を分析すると、分散値にそれぞれ有意差は出ていないが、1 回目と 2 回目、2 回目と 3 回目、3 回目と 1 回目の平均点の間に有意差が見られ、点数が上昇していることから、基礎学力（ここでは言語力）と教養が身に付いたということが言えると思われる。また、学生アンケート

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				からは、これまで新聞を読まなかった学生も新聞に関心を持てるようになったことが明らかとなった。 代表者：渡邉規矩郎 共著者：仲田輝康、木戸和彦、三木澄代、 岡野聡子、正木友則 本人担当部分：第2章部分 第2章では、日本におけるNIEの導入の変遷にふれ、どのように大学教育において実践がされてきたか、先行研究を提示した。
3　都市公園における子どもの遊び場環境づくりの可能性―ＮＰＯと行政の協働による「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」を通して―	単著	平成26年10月	奈良学園大学研究紀要第1集(pp. 11-23)	本研究は、子どもの遊び場環境の変化にふれながら、おかやまプレーパークの積み上げてきた実践と今回のプロジェクトの事業評価・考察を行うことを目的としている。筆者は、2013年3月からNPO法人岡山市子どもセンターのプレーパーク運営委員となり、都市公園における子どもの遊び場環境作りに携わってきた。2012年4月からNPO法人岡山市子どもセンターは、岡山市庭園都市推進課と協働して「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」を実施する運びとなり、筆者は、プロジェクトに参加をし、2年間に渡って記録を取りまとめてきた。実践記録を用いて、「遊び場の設定と専門性の有無のマトリクス」を作成し、遊び場の設定と遊びの種類がどのような人員配置によって運営がされていたかを分析した。今回の分析結果として、緑の遊び場（ESD）プロジェクトの目的である「子どもが岡山市における中心市街地の公園の魅力を、遊びを通して発見し、原風景として子どもの記憶にとどめてもらいたいという願い」には来場者アンケートの回答も含め、十分応えられているものの、「公園内との緑とのかかわりを深めるための遊び場づくりを目的とした」では、合計53種類の遊びのうち8種類の設定であり、15%の実施率であったことが浮き彫りとなった。今後の改善点として取り上げるべき項目が明らかとなった。
4　キャリア教育とキャリア支援の相互展開による実践と課題について ―キャリア教育・キャリア支援における教職員連携の取り組みから― （査読有）	単著	平成26年12月	人間教育学研究第2号 (pp. 131-138)	大学におけるキャリア教育やキャリア支援は、1997年以降から本格的に推進されたインターンシップを皮切りとして、職業意識の形成を企図したキャリア関連科目の設置や学生のキャリア発達を促すプログラムの開発など、個々の大学の特色を活かして進められてきた。 キャリア教育は、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力の育成を目指して、教員主導のもとにカリキュラムの構成・授業の実施がされてきた。一方のキャリア支援は、従来の就職課で実施してきた就職活動に直結する学生支援を職員が担っている。昨今では、こうしたキャリア教育とキャリア支援を全学的・体系的に見直す動きがある。すなわち、教職員が職務分掌の枠を超えて連携するということである。本稿では、Ｋ大学を事例とし、キャリア教育とキャリア支援の連携について、その実態と課題を明らかにすることを目的としている。 まず、Ｋ大学が育成する人物像について述べた後、キャリア教育とキャリア支援の全体図を提示し、その実態を俯瞰した。次に、キャリア形成科目において、キャリア支援にあたっている職員のヒアリングで得た情報等をもとに、キャリア形成科目のカリキュラムの見直しおよび改善結果を提示した。そのことで、キャリア教育内

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				で把握できなかった個々の学生のニーズを把握することができ、キャリア支援につなぐ体制を整備することが可能となった。今後の課題は、就職活動準備は3年生の後期から本格的にはじまるのだが、学習意欲の低下が見られる1、2年生に対し、早期のポジティブ・アクションが3年生以降の進路を決める上で重要となると思われる。
5　子育て支援の多様化に関する一考察―子育て支援施策の揺らぎを越え、「チルドレン・ファースト」の舞台へ―	共著	平成27年3月	幼年児童教育研究第27号兵庫教育大学幼年教育コース（pp.115-126）	本研究は、子育て支援の変遷について国の施策を概観しつつ、その中で、子育て支援の対象者や実施運営主体が多様化していく様子を整理し、子育て支援の今後の課題について検討することを目的としている。「子育て支援」という言葉が行政の諸文書に登場してから25年目を迎えるが、その間、子育て支援の実施主体の多様化から、子育て支援が誰によって、どのように実施されているのかが見えにくい状況が生じているという課題があり、本稿において子育て支援の類型化を試みた。類型化では、横軸に支援の実施主体として公的主体、民間主体を取り上げ、縦軸に支援のニーズとして個別的ニーズ、社会的ニーズを取り上げて分類した。その分類に従って、子育て支援の具体的事例を取り上げ、今ある子育て支援の現場が持つ課題について論じた。子育て支援の変遷や事例の考察から、子育て支援は多様な実施主体の活動によって量的拡大をしてきたが、今後は子育て支援の質的保障の検討や点の支援を面の支援へとつなげ、子育て支援のネットワーク体制を確立することが求められると同時に、子どもの最善の利益を考えた「子どもの育ち」における議論の深まりの必要性が明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共著者：佐伯岳春、吉富裕子、馬場陽子 本人担当部分：第1、2、3-（1）、4章 第1章では、多様化した子育て支援を類型化し、その事例を提示することによって、今後の子育て支援の課題について考察する必要性について提示し、第2章では、日本における子育て支援の変遷を公文書や先行研究を用いて論じた。第3章（1）において、子育て支援の類型化を試みた。第4章では、子育て支援の量的拡大から質的保障への転換へといかにつなげるべきかを論じた。
6　カナダ・ネイバーフッドハウスにおける世代間交流の研究 ： フロッグホロウネイバーフッドハウスにおける世代間交流プロジェクトの事例から	単著	平成27年9月	奈良学園大学研究紀要第3集(pp.9-27)	本研究は、カナダのフロッグホロウネイバーフッドハウスで2011年4月から2014年3月までに取り組まれた世代間交流プロジェクトの実態を明らかにすることを目的としている。 ネイバーフッドハウスには、日常生活に必要なサービスやプログラムが多岐に渡って展開され、多世代が集う場が形成されている。本プロジェクトは、若者と高齢者の交流の質に目を向け、異世代間の相互理解を深めるプログラムを3年間に渡って実施したことに意義がある。研究方法は、まず、フロッグホロウネイバーフッドハウスが発行している世代間交流プロジェクトの報告書“Generation Citizenship Seniors + Youth Toolkit”とフロッグホロウネイバーフッドハウスのホームページに掲載されている世代間交流プロジェクトの概要を把握した後、ユースサービスコーディネーターA氏と運営責任者であるB

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				氏、参加者である高齢者のＣ氏、若者のＤ氏に対してインタビュー調査を実施した。プロジェクトの主要メンバーは、18 名の若者（30 歳以下）と 6 名の高齢者（50 歳以上）の計 24 名であった。2011 年～2012 年度は、主要メンバーを対象として、①コミュニケーションスキルの獲得、②エイジズムへの理解を深める、③アセットマップの作成、④メンターリーダーシップ研修を実施し、2013 年度に 9 つの世代間交流プロジェクトが実施された。主要メンバーをフォーカスグループとして 2 年間という時間をかけて育成していることは、他の世代間交流プログラムには見られないことである。また、補助金終了後も 9 つのプロジェクトのうち 6 つが現在も継続して実施されている。インタビュー結果からは、若者が高齢者との関わりの中で、他者理解を深め、高齢者の持つ生活体験の知に尊敬の念を抱く様子があり、高齢者は、若者と関わりにおいて目の前にいる若者だけとの関係性を構築しようとするのではなく、常に全体に対して配慮や気配りをする姿勢が見られた。
7　カナダ・ネイバーフッドハウス研究Ⅰ―利用者とボランティアスタッフの双方向的関係性に着目して―　（査読有）	単著	平成27年12月	日本人間教育学研究第 3 号（pp. 181-197）	本研究は、セツルメント運動を源流とするカナダ・ネイバーフッドハウスを研究対象とし、地域コミュニティにおける住民参画型の施設運営の在り方を考察することを目的としている。研究方法は、参与観察および聞き取り調査である。調査対象施設は、ゴードンネイバーフッドハウスであり、調査日時は、2010 年 3 月 1 日～3 月 15 日、2010 年 8 月 13 日～9 月 11 日、調査日時協力者は 23 名である。調査結果から、23 名中、サービス・プログラムを利用し、ボランティア経験を有する者は 11 名（47.80%）であり、そのうちカナダ出身以外の者は 10 名（90.9%）であった。利用者からボランティアスタッフへ、ボランティアスタッフから利用者へとなる様子を、事例を通して検討した結果、利用者からボランティアスタッフとして活動を行う過程には、彼らにとって明確な活動動機があったわけではなく、そこでの活動が日常生活の一部として行われていることであり、「手助け」として捉えられていた。そして、ボランティアスタッフから利用者になる過程には、自己のニーズ充足だけでなく、利用者とのかかわりを通して、ボランティアスタッフとしての役割意識から解放される様子があることが示された。ネイバーフッドハウスには、数字として出てこない「手助け」が数多く存在し、また、それが期待されているのであり、活動を支える大きな柱となっているといえる。
8　多世代交流としての子育て支援に関する研究―カナダ・ネイバーフッドハウスの事例から―（修士論文）	単著	平成28年3月	兵庫教育大学大学院	本研究は、カナダ・ネイバーフッドハウスを事例として、地域コミュニティを基盤とした日常生活を包括的に支援する体制や、多様な世代が集い合う場に着目し、子育て世代にとって、ネイバーフッドハウスがどのような意義と役割を果たしているかインタビュー調査から検討することを目的としている。調査結果からは、親世代における異世代との関わりは基本的にないと示されたが、親の視点から見た子ども世代における異世代との関わりにおける利点が取り上げられた。また、親世代の利用者が参画者として子育て支援の活動に携わる様子があり、支援を受けているという感覚ではなく、主体的に子育てに関

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				わるという姿勢が見られる。日本の子育て支援の現場においても、利用者自身が子育て支援の活動に参画できるような場や枠組みを作り、利用者―ボランティア―子育て支援員の皆が水平目線でつながり合えるパートナーとしての立ち位置を手に入れることが重要なのではないかと考えられた。
９　大学におけるキャリア教育の構造と展―本学におけるキャリア形成科目を事例として―（査読有）	単著	平成29年12月	人間教育研究誌創刊号（pp. 17-38）	本稿は、キャリア教育の変遷および大学におけるキャリア教育の構造を概観し、奈良学園大学人間教育学部におけるキャリア形成科目（共通教育科目群）の展開および培う能力について論じることを目的としている。本学の場合、学生の実態から、「基礎的・汎用的能力」の育成を重視し、キャリア形成科目の構造および培う能力指標の提示をした。また、今後の方向性として、専門科目群との連携におけるキャリア教育の授業展開の可能性について論じた。
１０　アサーションスキル獲得のための教材開発―学生が作成した事例を通して―（研究ノート）	単著	平成30年1月	人間教育ジャーナル第1巻（1）（pp. 25-44）	本教材は、平成29年度奈良学園大学人間教育学部4年次後期開講科目「教職実践演習」(必修・2単位）にて活用したものである。本教材を作成した理由は、2点ある。1点目は、新規学卒者の就職率は年々上昇しているが、大卒者の離職率は5年続けて30%を推移しており、若年者の離職理由の上位には「人間関係がよくなかった」が挙げられていることに着目したこと、2点目は、筆者自身が学生とのかかわりを通して、学生が、自分の気持ちを口頭にて表現することに抵抗を感じていると思うことがある点である。アサーションスキルの講義を2回に分けて実践したが、自分達が考えた事例を読んだ学生から、「私も、アルバイトにて、店長からシフトに入ってと何度も言われ、困った経験がある」等、各々の葛藤する場面に対し、共感する態度が見られた。葛藤場面に対し、どう対応するかを学生達が改めて問うたことにより、①自分の感情への気付きと表現方法、②他者の発言や行動の背景への気付きについて、考えるきっかけになったと思われる。
１１　幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの実践研究 1－Ａ公立幼稚園における園内研修を手掛かりとしてー（研究ノート）	単著	平成30年3月	奈良学園大学研究紀要第8集(pp. 127-141)	本稿は、筆者が平成29年4月から平成30年1月まで、「幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの適切な運営に向けて」をテーマとし、K町立Ａ幼稚園にて行った園内研修での取り組みの内容とその成果を提示することを目的としている。取り組み内容は、①園の教育目標の明確化、②指導計画書の検討・改善、③保育・教育実践の記録の検討・改善である。全10回の園内研修の実践から、幼児期におけるカリキュラム・マネジメントを実施する際、何から着手するか、どの項目から進めるかに戸惑いがあるという担任教諭からの意見が多数存在した。そのため、現時点において、カリキュラム・マネジメントに必要となる項目の抽出を試みた。項目数は、12 項目である。また、A園における PDCA サイクルの思考を確立することは、次年度以降の課題となったが、カリキュラム・マネジメントに取り組むことにより、現場教員の保育実践に対する意欲が高まったという意見があった。
１２　大学における教学支援体制の運営に関する一考察―キャリア教育とキャリア支援の連携に着	共著	平成30年7月	人間教育ジャーナル第1号（5）（pp. 123-141）	本稿は、大学における教学支援体制の運営について、特にキャリア教育とキャリア支援の教学支援の連携がどのように行われているかに着目し、3大学（学習院大学、文教大学、昭和女子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
目してー				大学）の視察を手掛かりとして考察することを目的としている。結果として、学習院大学では、教学部門と支援部門の連携体制の確立はされていなかったが、大学の教育理念や方針を取り入れたキャリアセンター事業計画があり、また、就職活動に関し、OB・OG による在学生支援体制が確立されていることが特徴であった。文教大学では、中期経営計画を立て、教学部門と経営部門がビジョンを共有し、計画→実行→評価→改善の PDCA サイクルの確立が行われていた。昭和女子大学ではキャリアデザイン委員会を設置し、全学横断型組織を確立し、教学部門と支援部門の有機的連携が確立されていた。 代表者：岡野聡子 共著者：岡村季光・ｵﾁｬﾝﾃ村井ﾛｻﾒﾙｾﾃﾞｽ 本人担当部分：第 1 章、第 2 章、第 3 章（3）、第 4 章 第 1 章では、教学支援体制の先行研究を取り上げ、第 2 章では 3 校の視察先の概要をまとめた。第 3 章（3）では、昭和女子大学の視察報告を行った。第 4 章では、3 校の視察から、大学運営の一環として育成したい学生像のマネジメントが行われており、組織として運営されていることが、教学支援が成功している要因であると言及した。
１３　育成したい「学生像」の明確化、能力指標構築の試みー奈良学園大学人間教育学部を事例としてー	共著	平成30年9月	人間教育ジャーナル第 1 号（7）（pp. 185-198）	本研究は、我が国における「これから求められる力」に関する能力概念の整理をした上で、奈良学園大学人間教育学部を事例として、「育成したい学生像」の能力指標を提示することを目的としている。新学習指導要領の完全実施や大学入学共通テストの導入などにより、2020 年に向けた教育改革が粛々と進行する中、大学教育にも大きな影響があると予想される。本稿では、第１に、社会から求められる能力概念の整理と学部特性を整理し、第２に AP、CP、DP から育成したい学生像の能力項目の抽出を行い、第３に能力指標を提示した。能力指標作成にあたっては、①測定される側の発達水準を考慮すること、②人間教育のあり方や目指す方向性を能力指標に反映させること、③能力の「芽生え」（ショプラー；2007）に注目するという観点を提示した。 代表者：岡野聡子 共著者：岡村季光・伊崎一夫 本人担当部分：第 1 章、第 4 章、第 5 章 第１章は、諸外国の教育改革における資質・能力目標をまとめたほか、人間教育学の価値について言及した。第４章は、奈良学園大学人間教育学部を事例とし、アドミッションポリシー、カキュラムポリシー、ディプロマポリシーの３つのポリシーから、育成したい学生像の能力指標案を作成した。第 5 章は、能力指標の運営について言及した。
１４　ゼミナール活動における地域をテーマとした学習モデルの作成－三郷町・龍田古道を事例としてー	単著	令和元年9月	奈良学園大学研究紀要第 11 集(pp. 1-15)	本研究は、筆者が 2016 年 10 月からはじめた地域をテーマとしたゼミナール活動を報告し、その教育実践の学習モデルの作成を目的としている。本稿では、2016～2017 年度のゼミナール活動を事例として取り上げ、学生の学びの成果に言及し、本実践から学生が身に付けられると期待する資質・能力（技術）を提示した。学生のアンケート調査および教育実践を整理した結果、身に付けると期待する資質・能力（技術）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				としてあげられたものは、地域理解、主体性の涵養、働きかけ力、課題発見力、傾聴力、情報収集力、情報編集力、情報発信力、研究手法の獲得であった。また、教員の教育力向上にも言及した。
１５　まちを映像保存化する意義と価値－三郷町・龍田古道を事例として－	共著	令和2年3月	人間教育研究第 3 号(pp. 33-47)	本研究は、映像保存のデジタル化の歩みをふまえ、三郷町にある龍田古道を事例とし、デジタルでまちを映像保存化することの意義と価値を問うことを目的としている。データ化の意義と価値は、データが劣化しないこと、一定の情報を多くの人に配付でき、広く流通できるという利点がある。今回、龍田古道のマップをもとにし、撮影から編集までの作業を学生が行った。取得したデジタルデータを VR 編集し、解説インタビューや祭りの風景などの静止画を挿入した。 代表者：富樫泰芽 共著者：田中咲希・藤田勝利・斎藤光明・桝井陽康・岡野聡子 本人担当部分：第 3 章 龍田古道の概要と事前調査および準備についてまとめた。
１６　PBL（Problem-Based Learning）の授業研究（１）―奈良学園大学におけるキャリア教育の授業実践を事例として―	共著	令和3年1月	人間教育ジャーナル第 4 巻（1）(pp. 1-14)	本研究は、本学におけるキャリア形成科目にて実施した「PBL（Problem-Based Learning）課題解決型」の授業実践を通して、受講学生が何を学び得たかを明らかにすることを目的としている。今回の授業にて、特に ４．結果と考察 (2) 改善点からは、学生がさまざまな葛藤場面を味わったことがうかがえる。チームで活動させることにより、主体的に行う者・そうでない者の間の葛藤（フリーライダー問題をどう取り扱うか)、時間確保の難しさ、課題の精度への疑問、役割意識の重要性といった事柄を認識させることができた。これらは、実社会で味わう葛 藤であるといえ、大学時代にこうした他者との関係性の葛藤経験を積んでおくことで、社会生活における人間関係の 葛藤を乗り越える力につながると考えられる。 代表者：岡野聡子 共著者：降幡仁美 本人担当部分：第 1 章、第 4 章 第 1 章では、PBL の実施概要についてまとめ、第 4 章は、学生の授業後のアンケート記述から分析を行った。
１７　絵本の読み聞かせボランティア活動の継続要因に関する研究－20 年以上の経験を有するボランティアへのインタビューを通して－	共著	令和4年1月	大阪信愛学院短期大学紀要第 57 号 (pp. 1-10)	本研究は「読み聞かせボランティア活動を継続する要因は何か」、「読み聞かせボランティア活動の 世代継承性における課題は何か」を明らかにするために、20 年以上読み聞かせボランティア活動を行っているＡ氏に対して、オンラインによる半構造化インタビューを実施した。読み聞かせボランティア活動力の継続要因として、①心の拠り所となった絵本、②楽しみにしてくれる子どもたちと絵本を味わう時間、③地域での社会貢献による自己肯定感、④フレキシブルな職場環境や応援してくれる家 族の存在、⑤一緒に楽しめるボランティアグループの雰囲気があることがわかった。世代継承性における課題としては、①活動仲間との交流の減少、②絵本を届ける立場であるボランティアとしての成長、③グループ内での経験値・知見統合の困難さ、④グループの継続や後継者育成における問題があることが明らかとなった。 代表者：谷原舞

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				共著者：田中卓也・中島眞吾・小久保圭一郎・岡野聡子 本人担当部分：5、6 5.にて論文の結論をまとめた。6.にて今後の課題を述べた。
（資料） 1　Neibourhood House Story in Canada - a case of Collingwood Neibourhood House in Vancouver -	単著	令和2年12月	奈良学園大学紀要第13集（pp.27-35）	本資料は、カナダ・バンクーバー市に位置するColingwood Neibourhood Houseにおいて、移民者がネイバーフッドハウスと出会い、自分自身の居場所を見つけながら地域社会とどのように関わり、生活を営んできたか、また、地域活動を通して、自己能力をどのように高め、発揮してきたかについて、インタビュー調査から明らかにした資料である。
（書評） 1　公益財団法人とよなか国際交流協会（編集）牧里毎治（監修）『外国人と共生する地域づくり：大阪・豊中の実践から見えてきたもの』	単著	令和2年3月	日本地域福祉学会「日本の地域福祉」第33巻（pp.53-55）	本書は、とよなか国際交流協会の実践活動を通して、地域に住む外国人の実態や外国人問題を社会化する過程における外国人の「公」をどのように地域に創出していくかについて言及されている。多文化共生と地域福祉がクロスオーバーする点を洗い出しながら、外国人が地域社会の構成員として共に生きていける地域づくり（多文化共生の地域社会づくり）について示唆を与える良著であると書評した。
2　『コミュニティの幸福論 助け合うことの社会学』	単著	令和4年3月	地域福祉研究 50巻（pp.134-135）	本書は、社会学を学ぶ大学生向けのテキストとして執筆されたものでもあり、数多くの文献や研究成果、事例が紹介されているだけでなく、用語も丁寧に解説されているため、初学者にとって大変親しみやすい内容となっている。また、著者のカナダでの経験がベースにあるため、海外の事例も豊富に提示され、日本のコミュニティ創りとの比較にも役立つと書評した。
（学会発表） 1　幼児期における「言語活動の充実」に関する研究Ⅱ～岡山型一貫教育の中における岡山市立大野幼稚園の取り組み～	－	平成26年5月	日本保育学会第67回（近畿ブロック）発表要旨集（p.542）（大阪総合保育大学）	岡山市における言語活動の充実を軸とした幼小中連携教育の実践を取り上げ、その中における岡山市公立幼稚園の言語活動の充実あるいは言葉の教育の保育実践の取り組みにおける考察を発表した。岡山市は、平成14年から岡山市地域協働学校施策を始め、その中で家庭・学校園・地域社会の三者協働による教育システムの構築や幼小連携および小中一貫教育を推進してきた。また、岡山型一貫教育と名付けた教育活動は、幼児期からの学びの連続性に着目し、幼小中連携教育の実践を行ってきたことが特徴であると言える。岡山市立大野幼稚園は、平成23～25年度まで、『園生活を楽しむための力の育成』を主題とし、実践研究に取り組んできた。指導上の工夫では、指導案に「話す・聞く・伝え合う」の項目を設け、教師が日々の教育・保育活動で意識できるよう配慮した。設定保育の工夫として、降園前の一日の振り返りにおいて、話し方の指導および聞き方の指導、特に話し手の内容を理解して聞いているかを確認しながら聞く力の育成を行っている。教師は、日々の教育・保育実践を行う中で、日々の活動が子どもの育ちにどのようにつながっていくかといった「見通しのもてる教育活動」は、教師の教育活動へのやる気や意欲を向上させる意義を含んでいる。「見通しのもてる教育活動」を実践するには、幼小中の教師が集うことのできる研究協議会等を整備することが重要である。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　プレーパークと行政の協働による「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」の実践報告～岡山市街地の公園を利用した子どもの遊び場づくり～	－	平成26年9月	こども環境学会合同セミナー研究発表・活動報告梗概集第 3 号（pp. 46-47）（名古屋工業大学）	本発表は、ＮＰＯ法人岡山市子どもセンターと岡山市庭園都市推進課が協働で実施した「緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2012、2013」の活動内容および事業評価について振り返り、都市公園を利用した子どもの遊び場環境づくりの実践報告を行った。2012 年度は 5 箇所の公園にて子どもの遊び場を設定し、2013 年度は 7 箇所に増設した。「子どもが遊ぶ」という視点から見た各公園が持つ課題を提示し、その課題をどのように解決したか本プロジェクトの実施写真を用いて解説した。本プロジェクトの参加者は、年間 2000 名に上っており、保護者アンケートからは、「今後も是非参加したい・参加したい」と 95.2%が回答している。
3　多世代間交流を可能とする場作り～カナダにおけるゴードンネイバーフッドハウスの事例を通して～	－	平成26年10月	日本世代間交流学会第 5 回全国大会要旨集（p. 72）（姫路商工会議所）	本発表は、自主企画シンポジウム 1-Aにおける「子育て支援をめぐる世代間交流―高齢者の参加を中心に―」の話題提供者として登壇した。カナダ・バンクーバー市ウエストエンド地区に位置するゴードンネイバーフッドハウスの取り組みを紹介し、多世代間交流を可能とする場作りについて考察した。ゴードンネイバーフッドハウスでは、子育て支援や高齢者支援、雇用支援等、約 30 種類のサービスやプログラムの大半を一時滞在者の留学生から現地の大学生、そしてウエストエンド地区に住むゴードンネイバーフッドハウスの利用者がボランティアスタッフとなって提供している。一つの施設内に多様なサービス提供の場を配し、ここを訪れる全ての人が「与え与えられる」といった互恵性を醸成する場の可能性について述べた。
4　奈良学園大学におけるキャリア教育の取り組み（Ⅰ）―大学１年生を対象とした「キャリアデザインⅠ」を通して―	－	平成26年11月	日本キャリア教育学会第 36 回研究大会・研究発表論文集（pp. 73-74）（琉球大学）	奈良学園大学は、奈良産業大学から名称変更をし、従来の学部学科を一新する形で人間教育学部と保健医療学部を設置した新設大学である。筆者は、人間教育学部に属し、キャリア形成科目を中心に担当をしている。本発表では、人間教育学部における 1 年次のキャリア教育の授業実践を報告することを目的とした。人間教育学部は「教育の三つのポリシー」を掲げると同時に、人間教育学部が目指す教育者像である「社会の中で一人の人間として生き抜く力となる豊かな「人間力」を基盤とする、柔軟な「教育力」と高度な「実践力」を備えた教育者」である。これらのポリシーに適う人材育成をするために、１年次では、①自己を知る、②社会を知る、③人生設計の 3 つのユニットに分けて実施した。履修者は 110 人いるため、学部教員に協力をしてもらい、10 グループに分けて活動を行った。グループ学習での学びの成果は、スピーチコンテストという形で確認をした。 1 年次の学びでは、各ユニットを通して、まず自己を振り返る活動と他者を知る活動であったと言える。また、5 月に進路希望調査を実施したところ、教師のみを志望している者が 53 名（51.5%）であり、なんとなく教職を志望した学生像が浮き彫りになる結果が見えた。
5　大学のキャリア教育における NIE 活用の展望～大学２年生を対象とした「時事教養Ⅰ・Ⅱ」の授業実践～	－	平成26年12月	日本 NIE 学会第 11 回仙台大会・発表要集録（p. 40）（東北福祉大学）	大学におけるキャリア教育は、1997 年以降から本格的に推進されたインターンシップを皮切りとして、職業意識の形成を企図したキャリア関連科目の設置や学生のキャリア発達を促すためのプログラムの開発など、個々の大学の特色を活かして進められてきた。環太平洋大学では、

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				1年次から「社会人基礎力の育成」をテーマとしてキャリア教育に取り組んでいる。「時事教養Ⅰ・Ⅱ」は、キャリア教育の充実を目的とし、授業において試験的にＮＩＥを導入することとした。本発表では、その実践内容と成果について報告することを目的としている。ＮＩＥにて取り扱うテーマ設定および内容を構築するに際し、職業観や勤労観にふれられる内容を盛り込んだ。実践の成果では、①新聞活用を通して社会情勢に関心を持て、読書量が増えたこと（学生アンケートから）、②基礎学力の向上（内容確認テストの有意差から）、③意見の質の向上（振り返りシートから）が見られた。 代表者：岡野聡子 共同者：仲田輝康 本人担当部分： 　授業実践および実践結果の考察を担当した。 備考：本発表内容は、平成26年12月24日の山陽新聞に掲載された。
６　大学のキャリア教育におけるＮＩＥ活用～事例紹介～	－	平成26年12月	第１回大学ＮＩＥ研究会（キャンパスプラザ京都6F第2講習室・京都文教大学サテライト教室）	本発表は、基礎学力向上の課題を解決すること、キャリア教育を充実させることを目的として設置された時事教養Ⅰ・Ⅱの科目をめぐって、ＮＩＥ活用の在り方や教材の作成方法について述べた。授業実践では、実際に授業で使用した「第８回若者の離職を考える」を取り上げ、教材作成方法や受講生の感想、実施後の教員側の感想について述べた。授業実践を振り返る中で、学生に教材を与え、無理やり読ませ、考えさせ、書かせ、対話することにこだわるよりも、ある程度一方的に知識として教える場面を増やし、考える力の土台作りをするというのも一つの選択肢であると提案した。
７　カナダ・フロッグホロウネイバーフッドハウスにおける世代間交流プロジェクトの取り組み～Generating Citizenship Seniors+Youthの実践から	－	平成27年10月	日本世代間交流学会第６回全国大会（p.51）（追手門大学大阪城スクエア）	現在では、国内外問わず、世代間交流プログラムの開発が多様な形で展開されている。本研究では、カナダのイーストバンクーバー地区に位置するフロッグホロウネイバーフッドハウスで実施された世代間交流プロジェクト（2011.4～2014.3）を対象として、その概要や取り組みを明らかにすることを目的としている。本世代間交流プロジェクトの目的は、①世代間のつながりを創ること、②世代間のつながりを創るためのスキルを向上させること、③コミュニティが抱えるニーズを確認するスキルを養うこと、④コミュニティに変化を与えるプログラムを開発することの 4 点である。ネイバーフッドハウスには、日常生活に必要なサービスやプログラムが多岐に渡って提供され、日々、さまざまな人、さまざまな世代が施設を訪問する。その中で、多様な世代がそこで出会い、雑談を交わし合う光景を見かけることができるのだが、今回、施設側が世代間交流プロジェクトを実施するにあたって、「交流の質」に着目した点は大変意義深いものであったと思われる。プロジェクト参加者からは、「私たちは何年間かお互いのことを知っていたけれども、互いの人生について知ることはなかった」との意見もあり、他者理解を深めることができた結果も得られた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８　大学のキャリア教育における NIE 活用の展望（2）～大学２年生を対象とした「キャリアディベロップメントⅠ」の授業実践～	－	平成27年12月	日本NIE学会第12回奈良大会（p.37）（奈良教育大学）	本発表は、平成25年度から実施しているキャリア教育における NIE 活用の授業実践を報告することを目的としている。受講生は奈良学園大学人間教育学部２年生（100名）を対象としている。本授業は、NIE 実践を通して、社会人としての幅広い教養を身に付け、伝達力、思考力を磨くことを目的として実施した。授業内容は、①メディアリテラシーへの理解、②課題発見（NIE 実践）、③私から発信する現代的課題の３つのユニットから成り立っている。受講前後のアンケート結果では、新聞を読むことによって、どのような能力が高まると思うかでは、受講後は、「課題発見力」が身に付くとの回答が上位に出現した。新聞を読むことを通して、論点を整理することの必要性を学生が感じたという結果を得ることができた。
９　保育内容「環境」の教授内容におけるシラバス分析の試み～SPSS Text Analytics for Surveys を活用して～	－	平成29年3月	日本教師学学会第18回大会（pp.54-55）（早稲田大学所沢キャンパス101号館）	保育士および幼稚園教諭を養成する大学教育機関を対象として、保育内容「環境」の教授内容の現状を、各大学のシラバスから分析・考察することを目的としている。授業概要やシラバスの内容の問題点や課題を探ることで、現代社会の諸課題に対応した保育者となる者が学ぶべき事項を研究することには意義があると考えられる。まず、7大学のシラバスを web 上から取得し、その傾向を分析した後、近畿圏内の47大学のシラバス分析を SPSS Text Analytics for Surveys を活用して試みた。授業計画の分析結果からは、自然環境に関する項目の頻度が 45％と最も多く、社会環境に関する項目の頻度が8％と最も少なく出現した。SPSS Text Analytics for Survey を活用したシラバス分析は、これまでの研究において見られず、初めての試みであった。本研究において、活用の有用性についても示すことができたと思われる。 代表者：岡野聡子 共同者：田中卓也 本人担当部分：シラバス収集および分析を行った。
１０　領域「環境」における授業内容の検討―大学における領域「環境」のシラバス分析を通して―	－	平成29年5月	日本保育学会第70回大会（川崎医療福祉大学）	本発表では、大学における領域「環境」の授業内容を検討することを目的としている。平成 30年度の幼稚園教育要領改訂に向けた文部科学省中央教育審議会幼児教育部会が取りまとめた「現行幼稚園教育要領等の成果と課題」を見ると、「(2) 幼児教育において育みたい資質・能力の整理と、小学校の各教科等との接続の在り方」の中で10項目（①健康な心と体、②自立心、③協同性、④道徳性・規範意識の芽生え、⑤社会生活との関わり、⑥思考力の芽生え、⑦自然との関わり・生命尊重、⑧数量・図形、文字等への関心・感覚、⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現）の指導内容が取り上げられている。その中で、領域「環境」と深く関連がある項目は、4項目（下線部⑤⑥⑦⑧）に及ぶ。この審議内容は、今後の教授内容の在り方を左右するものであると考えられ、領域「環境」の授業内容の一層の充実が求められていると言える。本学の場合、環境構成の視点から園内を見学するという授業では、学生の関心を高めることができ、大きな成果が見られた。改善点としては、栽培・飼育活動を継続的に行う工夫および社会生活との関わりに関する内容の充実が求められると言える。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１１　カナダにおける住民参加型地域福祉の推進のための方策とその工夫～”Everything Present in the Seed の資料分析から～	－	平成29年6月	日本地域福祉学会第 31 回大会 (p.168)（松山大学）	本発表は、地域福祉活動に従事するスタッフやボランティアスタッフを対象としたリーダーシップトレーニングの指南書として、カナダ・キャピラノ大学が 2013 年に発刊した（1）Everything Present in the Seed Community leadership Training と（2）Facilitator’s GUIDE を概観し、どのような要素や内容が取り上げられているか、考察することを目的としている。研究の手法は、資料分析である。まず、(1) の資料は、13 項目から成り立っており、121 頁である。1～4 章までが地域福祉活動の概要とその必要性、所属している組織がある者はその活動の紹介、インターネットの有効活用について書かれており、5～13 章までは、リーダーシップとは何か、コミュニケーションスキルの獲得、プロジェクトの立案方法やファシリテーション、企画書の書き方といった実践的な内容になっている。(2) の資料は、(1) の資料を活用する者のための副読本となっており、67 頁である。本資料の特徴は、①本資料の読み手・扱い手を「スタッフ」として想定しているだけでなく、英語があまり得意でない移民者が読むことができ、扱える内容になっている点である。リーダーシップトレーニングが幅広い対象者に拓かれ、実践されることは、ボランティア主導で地域福祉活動を実施する上で重要なことだと言える。また、本資料は、各章が 7～9 ページの構成となっており、解説部分が 2～3 ページ、残りが実践的な内容となっているため、必要な場面に応じて必要な部分を提示できる工夫がある。今後は、本資料の利用者の意見を集め、どのような利点・難点があるのか考察したい。
１２　多世代交流の子育て支援をめぐる取り組み～カナダ・ネイバーフッドハウスを事例として～	－	平成29年10月	日本世代間交流学会合 8 回大会（p.33）（熊本学園大学）	本研究は、セツルメント運動を源流とするカナダＢＣ州バンクーバー市のネイバーフッドハウスを事例として、多世代交流の子育て支援の在り方を考察すると共に、実現に向けた方策について検討することを目的としている。本研究では、Frog Hollow Neighourhood House、Kitslano Neighbourhood House、Gordon Neighbourhood House の 3 団体を調査した。多世代が集える工夫として、Frog Hollow Neighourhood House では、高齢者向けサービス（ヨガや太極拳等の健康増進）や中・高・大学生のボランティアリーダー研修を受講している者を子育て広場（Family Drop in Program）の手伝い・ワークショップ講師として参加をさせながら、子ども・親・若者・高齢者が集う場作りをしていた。Kitslano Neighbourhood House では、定期的に学齢期の子ども・親と高齢者が食事会を持つ場作りがなされていた。Gordon Neighbourhood House では、高齢者向けのランチ提供サービスにて、親子ランチ提供サービスを実施していたのだが、高齢者と子どもの食事のペースや食後に子ども達が走り回る等のことがあり、現在では多世代としての交流活動がなされていなかった。2 団体が多世代交流の子育て支援を現在も実施できている背景には、①それぞれの発達段階に応じた居場所があること、②スタッフの介入があることが示唆された。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１３　吉野青年会議所と大学生の協働による小学生を対象としたキャンプ事業の実践報告～地域福祉活動への示唆～	－	平成29年12月	近畿地域福祉学会平成29年度大会（こうべ市民福祉交流センター）	本発表は、一社）吉野青年会議所よしのびと創造委員会と奈良県下の大学生（ボランティアとして参加）が協働し、小学生を対象としたキャンプ事業の実践活動報告をすることを目的としている。一社）吉野青年会議所と大学生は、事業当日までに計 6 回の合同会議を行い、事業目的の共有化や企画案の話し合い・発表を行った。事業実施後の振り返りでは、①社会人と大学生が協働によって得られたメリットや課題、②小学生にとっての本体験活動の意義、③小学生、大学生、社会人の異世代交流がもたらす価値、④地域資源の発掘と活用方法等が取り上げられ、社会人と大学生による事業は、多面的価値を生み出せる可能性が具体的に示唆された。
１４　社会的経済における新たな資金の動き「カナダ・ネイバーフッドハウスの取り組み」	－	平成30年12月	第33回研究大会国際公共経済学会（兵庫大学）	カナダ・ネイバーフッドハウスを事例とし、ネイバーフッドハウスの組織運営体制やサービス・プログラムの概要を取り上げ、ボランティアが行うファンドレイジングの取り組みや資金調達の仕組みについて言及した。ネイバーフッドハウスには、人々の日常生活を支える 30 種類のサービス・プログラムが存在しており、住民から寄付された食器や衣類、家具等をリサイクルストアとして販売し、得られた資金をシングルマザーの支援のために使用されていることなど、施設内の資金作りの手法について紹介した。
１５　保育者養成校における子育て支援の取り組みと課題および展望	－	令和2年5月	日本保育学会第73回大会（奈良教育大学にて開催予定であったが、新型コロナウイルスの影響により学会は中止となった。発表は承認となった。）（演題ＩＤ：28）	本発表は、4 つの保育者養成校（清和大学短期大学部・西九州大学短期大学部・長野県立大学・奈良文化女子短期大学（現：奈良学園大学）の子育て支援の取り組みを紹介し、養成校における子育て支援の特徴や課題を検討することである。筆者は、奈良文化女子短期大学（現：奈良学園大学）の子育て支援について、①子育て広場「ちびっこ広場」、②親と子の相談室「ひまわり」、③奈良市つどいの広場「ぶんタン」、④公開講座「なら子育て大学」の取り組みを紹介した。保育者養成校が実施する子育て支援の良点は、学生にとって学内にいながら保育の現場経験を重ねることができることを取り上げた。
１６　カナダ・コミュニティディベロッパーの職務と役割－カナダ・Collingwood Neibourhood Houseの取り組みを事例として－	－	令和2年6月	日本地域福祉学会第 34 回大会（武庫川女子大学にて開催予定であったが、新型コロナウイルスの影響により学会は中止となった。発表は承認となった。）（p.182）	本研究は、カナダ・バンクーバー市に位置する Collingwood Neibourhood House（以下、CNH）の取り組みを事例とし、地域福祉を推進するコミュニティ・ディベロッパーの職務と役割を考察することを目的としている。CNH におけるコミュニティ・ディベロッパーの職務は、アート部門、フード部門、リーダーシップ開発部門の 3 つに分かれており、「アート」や「フード」といった誰もが参加できるテーマを掲げたプロジェクトを考案し、地域住民がコミュニティ活動に参画できる機会を提供している。リーダーシップ開発部門では、「アート」や「フード」部門で実施するプロジェクトへの参加を呼びかけ、役割をもって働く機会の提供（ボランティアの機会）と自分の学びを活かす場の提供（ファシリテーターの育成）を行っている。また、コミュニティ・ディベロッパーの役割とは、地域のニーズを解決すること（欠乏欲求を満たす）ではなく、コミュニティに住む個々人の能力を引き出し、彼らが活躍できる「場づくり」を行うこと（成長欲求を満たす）ことが特徴であると言える。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１７　小学校教育におけるデジタル教材の開発－まちを映像保存化する取り組みを通して	－	令和2年8月	教育の質的転換を目指すICT利用 ICT利用による教育改善研究発表会（東京理科大学にて開催予定であったが、新型コロナウイルスの影響により、発表はオンラインで行った）（pp.50-53）	本研究は、令和２年に「日本遺産」に指定された奈良県三郷町を通る日本最古の国道である龍田古道の映像データベース化の活動を通して、学生が映像機材の活用および情報の共有方法を学び、撮影や編集作業の過程から知識・技能の定着・活用、思考力・判断力・表現力の多角的向上を図ることを目的としている。対象学生は、小学校教員養成課程に所属しており、「まちたんけんマップ」や「安全マップ」といった教材の紙面制作経験を有する。本実践を通して、対象学生が、紙媒体によるレポートやマップ作成を超え、次世代映像技術を駆使した自己表現方法を獲得し、デジタル教材づくりの素地を身に付けることができたと考えられる。 代表者：岡野聡子 共同者：牟田口章人 本人担当部分：学生指導から得た知見を考察し、まとめた。
１８　カナダの地域福祉から学ぶ地域共生社会への示唆 ― カナダ・バンクーバーにおけるCollingwood Neighbourhood House の取り組みを事例として―	－	令和2年9月	日本カナダ学会第45回年次研究大会（対面・オンライン併用開催；会場は東京都八王子・大学セミナーハウス）（pp.7-8）	本報告の目的は、カナダの地域福祉から学ぶ地域共生社会への示唆として、バンクーバーに位置する Collingwood Neibourhood House の取り組みを事例とし、コミュニティサービスの提供方法の仕組みや施設運営の手法について発表することである。事例として取り上げるコリングウッド・ネイバーフッドハウスは、全世代を対象としたコミュニティサービスが展開されていることが特徴である。預かり保育、学童保育、子育て支援（家庭支援）、就労支援、シニアサービス等の他、特筆すべきは、ホームレス支援も同施設内で実施している。日本の場合、ホームレス支援を行う事業所に子ども・子育て支援を行うことはない。ネイバーフッドハウスの「対象者を限定しない」という理念が貫かれていることがわかる。他にも、セツルメントサービスや地域住民による地域活性化のための助成金事業、さまざまなイベントを通して、移民の社会統合や子ども・若者・高齢者の世代間交流を実現している。
１９　PBL(Problem-Based Learning)の教育効果に関する研究－協同作業認識尺度を用いた検討－	－	令和2年10月	日本キャリア教育学会第42回研究大会（筑波大学にて開催予定であったが、新型コロナウイルスの影響により発表はオンラインで行った）（pp.142-143）	本研究は、PBL（Problem-Based Learning）の教育効果について、協同作業認識尺度を用いて検討することを目的とする。PBLに関する先行研究では、三重大学高等教育創造開発センター（2007）では、PBLの実践マニュアルを作成し、授業効果測定（中川、2019）や多分野的なPBLの研究と実践に対する研究（杉山・松下、2018）等があり、PBL の教育効果について論じられている。本研究では、PBLをチームで取り組むことにより、協同作業認識に変化が生じるか否かを検証する。結果、協同作業認識尺度得点から、PBL実践にて仲間と共に作業することの有効性の認識が高まったと思われる。
２０　カナダにおける多世代交流を通した子育て家庭支援の取り組み－FrogHollow Neibourhood Houseを事例として(自主シンポジウム１「地域社会と子育て支援」)	－	令和2年11月	日本乳幼児教育学会第30回大会（オンライン開催）（pp.2-3）	本発表は、カナダ・バンクーバーに位置するFrogHollow Neighbourhood Houseを事例とし、多世代交流を通した子育て家庭支援の取り組みについて考察することを目的としている。なお、カナダでは、子育て支援のことを「ファミリーサポート」と呼んでおり、子育てをする家庭に対して、生活全般を支える取り組みが実施されているため、「子育て家庭支援」という言葉を使用している。多世代が集う場では、乳幼児や小・中・高校生が一つの場において活動を共にしている

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				ことから、年長者が年少者にとっての成長のロールモデルの役割を果たすと同時に、親が中高生の施設内で行っているボランティア活動の様子を日頃から見ているため、わが子の将来の成長に対し、具体的な願いを持つことができるという効果がある。また、施設側が企画した異文化交流会に、親自身が出し物を自分達で考え、用意し、取り組むことを通して、子育て家庭支援のサービスを受ける側から提供する側へとまわることもできる。ネイバーフッドハウスでは、親自身が自発的に地域社会と関わることのできる仕組みがあり、地域社会の一員という意識を育むことを可能にしていると考えられる。
２１　絵本の音読スキル向上のための視座の検討―『だいくとおにろく』『からすのパンやさん』を事例として（自主シンポジウム J-D-4「絵本作家が抱く子ども観と保育学生の絵本選び－絵本の読み聞かせに役立てるために－」）	－	令和3年5月	日本保育学会第74回大会（オンライン開催）（pp. 63-64）	本発表は、絵本を「音読」することに苦手意識を持つ大学１年生に対して行った学修内容の報告とその成果を考察することを目的としている。教職（保幼小）を目指す学生たちにおいて、絵本の「読み聞かせ」や「音読・朗読」することに対して苦手意識を持つものは少なくない。学生たちには、「句読点」「大事なところ」「会話文」などを注意点として指導するが、「音読」の基礎技術の理解や獲得にはバラつきが生じる。本発表は、『だいくとおにろく』を取り上げ、音読スキルの向上のための視座を検討した。 代表者：岡野聡子 共同者：伊崎一夫 本人担当部分：音読レベルの指標作りおよび学生指導の考察を担当した。
２２　読み聞かせボランティアが抱える困難さとその支援－質問紙による実態調査を通して	－	令和4年5月	日本保育学会第75回大会（オンライン開催）P-C-4	本研究は、乳幼児期からの子どもと本をつなぐ存在である読み聞かせボランティアの質の向上へ向けた支援を考案するため、読み聞かせボランティアが抱える困難さと支援の実態について、アンケート調査から明らかにすることを目的としている。結果は、困難さ・不安感の実態では、特に困難さを感じることは「選書に関する知識・技術」であった。さらに「選書に関する知識・技術」を分析すると、5つの困難さのカテゴリー（a. 選書の基準、b. 子どもに応じた選書、c. 読み聞かせに対する不安感、d. ボランティアとしての質向上、e. 保護者対応への不安感）が生成された。また、読み聞かせボランティアが抱える困難さを軽減するための支援では、絵本やその選書に関する基礎的知識を習得するための研修プログラムを作成し、機会を増やすことが求められているといえる。子どもの年齢に即した絵本や、今の子どもたちが興味をもっていそうな絵本についての知識を習得する場である。また、幅広い年齢層の子どもや、様々な興味関心を持つ子どもが参加しても、誰もが対応できるようになる実践的な技能を習得するための研修プログラムの構築が求められると考えられた。 代表者：谷原舞 共同者：野見山直子・岡野聡子・小久保圭一郎 中島眞吾・加藤緑・田中卓也 本人担当部分：質的コーディング分析を担当した。
２３　増進型地域福祉とプレイスベースド・アプローチ－増進型地域福祉の方法研究その１－	－	令和4年6月	日本地域福祉学会第36回大会（福岡大会・オンライン開催・西南学院大学）p. 212	本研究は、地域開発の手法の一つである「プレイスベースド・アプローチ」をもとに、どのようにして、包摂的なコミュニティをどのように創出するか、カナダ・Collingwood Neibourhood House の取り組みの事例を通して考え、増進型

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				地域福祉への展望を述べることを目的としている。日本の地域福祉拠点づくりへの示唆として、居場所の創出、最良の状態や理想をその場に集う者同士が語り合える場づくり、施設側が利用者に対して優良なサービス・プログラムを提供しようと考えるだけに留まらず、その利用者自身と対話を通して人生を分かち合い、その個人がもつ能力やスキルを理解しようとし、個人の能力やスキルを活かせる機会と場の提供を考えることで、利用者は支えられる側から支える側へと役割が転換していくことなどを述べた。（本研究は、JSPS 科研費 JP19K02214 の助成を受けたものである。） 代表者：岡野聡子 共同者：小野達也・朝倉美江・石川久仁子・渡辺晴子、柴田学 本人担当部分：データ収集、まとめの部分を担当した。
２４　増進型地域福祉とは何かー増進型地域福祉の理論研究 その１ー	ー	令和4年6月	日本地域福祉学会第 36 回大会（福岡大会・オンライン開催・西南学院大学）p. 150	本研究は、増進型地域福祉の基本的な考え方を明示することである。増進型地域福祉は、一人ひとりの幸せと地域の幸せをともに生み出すことを目指している。「福祉」には、がんらい幸福という意味合いがあるが、こうしたポジティブな側面はこれまで実現してこなかった。そこには、一番ケ瀬（1968）の指摘する幸福という目的概念と実際の政策や事業である実体概念の乖離がある。増進型地域福祉は、この目的概念と実体概念を架橋することで幸福としての福祉の実現を志向する実践研究である。（本研究は、JSPS 科研費 JP19K02214 の助成を受けたものである。） 代表者：小野達也 共同者：朝倉美江・渡辺晴子・石川久仁子・岡野聡子・柴田学 本人担当部分：本研究に対する質疑・理論的検討を行った。
２５　増進型地域福祉がつくる福祉文化ー増進型地域福祉の理論研究　その２ー	ー	令和4年6月	日本地域福祉学会第 36 回大会（福岡大会・オンライン開催・西南学院大学）p. 151	本研究は、増進型地域福祉の理論化にあたり、労働と環境の視点からその位置づけ・意義を明らかにすることを目的としている。現在、幸せなど福祉をめぐる高次の欲求がある一方で、格差・貧困が拡大し、その状況は福祉の二極化（広井：2016）と論じられている。この後者について、貧困の背景にある雇用破壊と社会保障制度の脆弱化、外国人労働者に焦点を当て検討する。そして、前者の幸せを目指し、それを実体化するための「協同の労働と生活」によって生み出される「協同の仕事・活動」と福祉文化との関係、さらに増進型地域福祉が福祉文化を生み出すことの意義について論考した。（本研究は、JSPS 科研費 JP19K02214 の助成を受けたものである。） 代表者：朝倉美江 共同者：小野達也・石川久仁子・渡辺晴子・柴田学・岡野聡子 本人担当部分：本研究に対する質疑・理論的検討を行った。
２６　増進型地域福祉と地域包括ケアシステムー増進型地域福祉の方法研究　その２ー	ー	令和4年6月	日本地域福祉学会第 36 回大会（福岡大会・オンライン開催・西南学院大学）p. 213	本研究は、増進型地域福祉の考え方に基づき、2014 年の介護保険制度改正によって創設された生活支援体制整備事業の実践事例を読み解き、地域住民および地域社会がケアの主体となり、自らの幸福を実現することができる地域包括ケアシステムのあり方について考察したものである。（本研究は、JSPS 科研費 JP19K02214 の助

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				成を受けたものである。） 代表者：渡辺晴子 共同者：小野達也・朝倉美江・石川久仁子・柴田学・岡野聡子 本人担当部分：本研究に対する質疑・理論的検討を行った。
２７　社会的連帯経済と増進型地域福祉との理論的な接合に関する一考察	－	令和4年6月	日本地域福祉学会第 36 回大会（福岡大会・オンライン開催・西南学院大学）p.165	本研究は、市場機構の弊害に対して、市民社会側から経済交換についての再考を求める形で台頭してきたオルタナティブな経済活動である「社会的連帯経済」に焦点をあて、増進型地域福祉との理論的な接合について検討することを目的としている。（本研究は、JSPS 科研費 JP19K02214 の助成を受けたものである。） 代表者：柴田学 共同者：小野達也・朝倉美江・渡辺晴子・石川久仁子・岡野聡子 本人担当部分：本研究に対する質疑・理論的検討を行った。
２８　増進型地域福祉と居住福祉から考える Well-Being	－	令和4年6月	日本地域福祉学会第 36 回大会（福岡大会・オンライン開催・西南学院大学）p.198	本研究は、早川和男が提唱した居住福祉という概念を通して、地域福祉における幸福とは何かを検討し、増進型地域福祉の構築に資することを目的としている。（本研究は、JSPS 科研費 JP19K02214 の助成を受けたものである。） 代表者：石川久仁子 共同者：小野達也・朝倉美江・岡野聡子・柴田学・渡辺晴子 本人担当部分：本研究に対する質疑・理論的検討を行った。
２９　絵本の読み聞かせボランティアの意義に関する研究－質問紙による実態調査を通して－	－	令和4年9月	令和４年度第 66 回日本読書学会大会、オンライン開催（pp.87-94）	本研究は、読み聞かせボランティアの活動を３年以上行っている経験者に対して、自身の活動の目的を尋ね、読み聞かせボランティアがもつ活動の意義を明らかにすることを目的としている。結果は、活動の意義の第一として、絵本の専門性に関すること（a.絵本の楽しさ、b.絵本との出会いによる新しい発見、c.子どもの成長）があり、第二に子育て支援の役割（d.絵本と子育て支援、e.支援の場所づくりと時間の提供、f.親子関係の構築、g.社会貢献）、第三にボランティア自身の成長（h.ボランティア自身の成長）が示された。読み聞かせボランティアをする者は、自身の活動が子育て支援を担っているという意識があることが明らかとなった。（本研究は、JSPS 科研費 JP22K02401 の助成を受けたものである。） 代表者：谷原舞 共同者：小久保圭一郎・小川千晶・小田桐早苗・田中卓也・野見山直子・中島眞吾・加藤緑・岡野聡子 本人担当部分：分析および発表全体の理論的検討を行った。
３０　乳幼児を対象とした絵本の読み聞かせボランティアを支援するための研修内容の検討	－	令和5年3月	日本教師学学会第 24 回大会（日本赤十字広島看護大学）（p.41-42）	本研究は、乳幼児を対象とした絵本の読み聞かせボランティア活動をする際に感じる困難さや不安感について調査を行い、その結果から研修内容の検討を行うことを目的としている。調査方法は、3 年以上の読み聞かせボランティア活動の経験をもつ者を対象とした質問紙調査である。読み聞かせボランティアがもつ困難さや不安感の調査結果からは、5 つのカテゴリーが生成され、そのカテゴリーをもとにして、基礎的知識研修と実践的技能研修とを位置づけ、研修内容を検討した。（本研究は、JSPS 科研費 JP22K02401 の助成を受けたものである。）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				代表者：岡野聡子 共同者：谷原舞・小久保圭一郎 　本人担当部分：分析および発表全体の理論的検討を行った。
「研究報告書、等」 1　緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2013～子どもの自由な遊び場を目指して～	共著	平成26年3月	岡山市庭園都市推進課「緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2013」	2013 年度は、5 つの公園から 7 つの公園に規模を拡大して「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」を実施した。また、前年度の活動に加え、大人が集える場作りの工夫も施した。たとえば、七輪カフェを設けたり、机やベンチを設けて、保護者の方や地域の高齢者の方など、多世代が集える場作りである。子どもを中心としたプロジェクトを通して、多様な立場の人々が出会える空間としての都市公園の利活用方法についても報告書の中で紹介をしている。なお、本報告書を用いて、こども環境学会第 3 回合同セミナー(2014.9)にて活動の発表を行い、奈良学園大学研究紀要（2014.10）では、事業の総合評価も行った。 A4 判　全 51 ページ 発行者：特定非営利法人岡山市子どもセンター 発行責任者：美咲美佐子 編著・執筆者：岡野聡子・道仙八代己 実行委員：美咲美佐子、藤本富多美、絹川利恵子、窪田昌子、道仙八代己、松田秀太郎、筒井愛知、岡野聡子 運営実施者：松田秀太郎（プレーリーダー）、特定非営利法人岡山市子どもセンター
2　伝達力・思考力を育む言葉の保育カリキュラムの開発～幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価にむけて～	単著	平成26年7月	公益財団法人福武教育文化振興財団（学校・地域における学力向上等の研究や実践活動への助成）平成 25 年度教育研究助成成果報告書	本研究は、平成 24 年度の本助成金を利用して得たアンケート調査結果をもとに、幼稚園と大学が連携を取って幼児期の教育現場における言葉の保育カリキュラムの作成の検討および開発をすることをねらいとしている。当初の計画では、言葉の保育カリキュラムの作成まで行う予定であったが、現場での多様な実践の一つ一つが幼児の教育効果を高めているのかについて量的に捉える必要があるため、今回の研究では、伝達力・思考力を育む上でも重要となる「聞く力」についての教育効果測定を試みた。結果として、園の取り組みの違いを結果に反映しにくいことなどから、測定の難しさが浮き彫りになったことを報告書としてまとめた。 A4 判　全 2 ページ 本人担当部分：pp. 8-9
3　2015 年度吉野青年会議所事業報告書「大学生と遊ぼう！学ぼう！吉野体験ツアー」	共著	平成28年1月	発行：奈良学園大学	吉野広域（3 町 5 村）の高齢化率は 35%に達している中で、次世代を担う子ども達が吉野に愛着を感じ、また大人になってからも吉野で働き、生活したいと思えるような環境作りをすることが喫緊の課題となっている。今回、吉野青年会議所と本学ボランティアサークルの学生 10 名が連携し、吉野広域の小学 3 年生～6 年生を対象としたキャンプイベント実施した。実施日は、平成 27 年 10 月 31 日～11 月 1 日である。小学生の参加者総数は、16 名であった。大学生企画では、①アイスブレイク、②吉野スタンプラリービンゴゲーム、③ものづくり、④自由創作の 4 つを立案・運営した。主に学生による企画立案から運営実施までの過程を報告書としてまとめている。 A4 判　全 84 ページ 報告書監修・編集：岡野聡子 事業実施者：一般社団法人吉野青年会議所、奈良学園大学ボランティアサークル 大学生企画指導：岡野聡子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4　2015 年度　ふしぎ☆いっぱい！小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成28年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、財団法人奈良県青少年会館からの寄付金を活用した「青少年の健全育成事業」の助成金（20 万円）を取得し、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。全 3 回の事業を行い、それらを報告書としてまとめた。 第 1 回：しゃぼん玉づくり名人になろう 実施日：平成 27 年 11 月 21 日（土） 参加者数：58 名（子ども 38 名） 第 2 回：くるくるアニメーションづくり 実施日：平成 27 年 12 月 19 日（土） 参加者数：27 名（子ども 12 名） 第 3 回：ピンホールカメラを作ろう 実施日：平成 28 年 1 月 23 日（土） 参加者数：65 名（子ども 33 名） A4 判　全 35 ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 運営指導：岡野聡子
5　2016 年度吉野青年会議所事業報告書「大学生と天川村でキャンプ！はじめましてから広がる吉野の“わ”」	共著	平成28年9月	発行：奈良学園大学	昨年度に引き続き、吉野青年会議所と共に奈良学園大学ボランティアサークルと協働で小学生を対象としたキャンプ事業を実施した。今年度は、奈良教育大学、畿央大学の学生と共に、大学生企画として①アイスブレイク、②フィールドビンゴゲーム、③天体観測、④ものづくりの企画立案・運営を行った。奈良学園大学ボランティアサークルの学生は 19 名が参加し、小学生の参加者総数は 23 名であった。実施日は、平成 28 年 8 月 20 日～21 日である。学生による企画立案から運営実施までの過程を報告書としてまとめている。今年度は、「大学生と社会人とのより良い協働関係を結ぶために」をテーマとして、事業実施後にアンケート調査を実施し、その内容も報告書に含めた。 A4 判　全 90 ページ 報告書監修・編集：岡野聡子 事業実施者：一般社団法人吉野青年会議所、 奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 大学生企画指導：岡野聡子
6　2016 年度　見えないものを見る力　小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成29年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、前年度の「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の活動実績から、本プロジェクトが学長指定プロジェクトに採択（26 万円）され、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。全 3 回の事業を行い、それらを報告書としてまとめた。 第 1 回：小さな宇宙 ～万華鏡の世界を探検しよう～ 実施日：平成 28 年 11 月 26 日（土） 参加者数：42 名（子ども 25 名） 第 2 回：空気砲を作ろう～目で見る空気の力～ 実施日：平成 28 年 12 月 17 日（土） 参加者数：62 名（子ども 38 名） 第 3 回：色が変わる、まほうの水で描く世界 実施日：平成 29 年 1 月 21 日（土） 参加者数：58 名（子ども 28 名） A4 判　全 35 ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 運営指導：岡野聡子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　2017 年度吉野青年会議所事業報告書「ドキドキワクワク川上村で大冒険！～大学生といっしょに自然を学び・あそびつくそう！～」	共著	平成29年11月	発行：奈良学園大学	吉野広域（3 町 5 村）の高齢化率は 35%に達している中で、次世代を担う子ども達が吉野に愛着を感じ、また大人になってからも吉野で働き、生活したいと思えるような環境作りをすることが喫緊の課題となっている。今回、吉野青年会議所と本学ボランティアサークルの学生 22 名、他大学生が連携し、吉野広域の小学 3 年生～6 年生を対象としたキャンプイベント実施した。実施日は、平成 27 年 10 月 14 日である。小学生の参加者総数は、30 名であった。大学生企画では、①アイスブレイク午前の部、②自然体験活動（魚つかみ、魚釣り）、③昼食づくり、④アイスブレイク午後の部、⑤ものづくりの 4 つを立案・運営した。主に学生による企画立案から運営実施までの過程を報告書としてまとめている。 A4 判　全 80 ページ 報告書監修・編集：岡野聡子 事業実施者：一般社団法人吉野青年会議所、 奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 大学生企画指導：岡野聡子
8　2017 年度　見えないものを見る力　小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成30年2月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、前年度の「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の活動実績から、本プロジェクトが学長指定プロジェクトに採択（8 万円）され、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。2017 年度は、１回の事業を行い、報告書としてまとめた。 第 1 回：声コプターをつくろう ～音のふしぎを目で見て体験してみよう～ 実施日：平成 30 年 1 月 20 日（土） 参加者数：49 名（子ども 28 名） A4 判　全 20 ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 運営指導：岡野聡子
9　三郷町の原風景	共著	平成30年2月	発行：奈良学園大学	平成 28 年度から「三郷町まちづくり講座」に参加をし、本学学生、行政職員、町民の方々と共に三郷町の地域資源について学びを深めた。①龍田古道プロジェクト事業、②信貴山における竹プロジェクト事業、③三郷町民へのインタビュー調査を実施し、その内容を報告書としてまとめた。 A4 判　全 102 ページ 報告書監修・編集：岡野聡子
１０　2018 年度　見えないものを見る力　小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成31年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、前年度の「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の活動実績から、本プロジェクトが学長指定プロジェクトに採択（20 万円）され、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。2018 年度は、3 回の事業を行い、報告書としてまとめた。 第 1 回：「ひかり」のひみつをさぐってみよう！ 実施日：平成 30 年 11 月 3 日（土） 参加者数：27 名（子ども 11 名） 第 2 回：「おと」のひみつをさぐってみよう！ 実施日：平成 30 年 12 月 15 日（土） 参加者数：21 名（子ども 14 名）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				第３回：「ひかり」と「おと」コレはホンモノ？ 実施日：平成 31 年２月２日（土） 参加者数：48 名（子ども 27 名） Ａ4 判　全 41 ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 運営指導：岡野聡子
１１　2019 年度　見えないものを見る力　小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	令和2年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、前年度の「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の活動実績から、本プロジェクトが学長指定プロジェクトに採択（30 万円）され、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。2019 年度は、3 回の事業を行い、報告書としてまとめた。 第１回：天気のふしぎを探ってみよう！ 実施日：令和元年 11 月９日（土） 参加者数：83 名（子ども 43 名） 第２回：夜空から宇宙を学んでみよう！ 実施日：令和元年 12 月７日（土） 参加者数：54 名（子ども 29 名） 第３回：地層の不思議を探ってみよう！ 実施日：令和２年２月８日（土） 参加者数：49 名（子ども 28 名） Ａ4 判　全 43 ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 運営指導：岡野聡子

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　５年　３月３１日

氏名　　岡野　由美子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
特別支援教育	発達障害の教育課程と指導法に関する研究 通級による指導の効果的な指導方法に関する研究 発達性読み書き障害に関する指導法についての研究

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 ・児童の行動の背景を理解し、支援につなげる工夫に関する実践	平成 19 年４月～27 年３月	特別支援教育コーディネーターとして、各学級の観察や情報共有、校内研修を通して、児童の行動理解を図り、教職員の特別支援教育についての理解を深め、資質の向上に努める工夫 （兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校での実践）
・児童の行動の背景を理解し、支援につなげる工夫	平成 19 年４月～27 年３月	特別支援教育コーディネーターとして、各学級の観察や情報共有、校内研修を通して、児童の行動理解を図り、教職員の特別支援教育についての理解を深め、資質の向上に努める工夫 （兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校での実践）
・小学校における特別支援学級新設にかかる理解啓発の工夫	平成 23 年４月～25 年３月	特別支援学級について、全校の児童が通常の学級と同様にその存在を知り、認め、ともに生きることを理解するための、啓発や理解についての工夫 （兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校での実践）
・読み書きにつまずきのある児童への配慮の工夫	平成 26 年４月～27 年３月	通常の学級に在籍する学習障害のある児童への配慮事項について、保護者との合理的配慮の提供にかかる合意形成の図り方、通常の学級の他の児童への理解啓発の授業実践の工夫 （兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校での実践）
・社会で出会う、発達障害のある人についての理解と適切な関わりのあり方についての実践方法	平成 31 年４月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科４年次生の学生に対し、発達障害のある人について、その基本的な障害特性の理解や合理的配慮の提供について、また適切なかかわり方について、事例を下に考え、理解を図るための工夫について指導を行った。擬似体験や話し合いを行い、障害についての理解を図り、卒業後の実践的な力となるような内容とし、より良いかかわり方や多様性を認める社会のあり方など、基本的な理解が出来るようになった。 （奈良学園大学人間教育学部での実践）
・知的障害をはじめとする障害のある児童生徒に対する指導法に関する授業実践	令和３年 10 月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の特別支援学校教員免許取得希望学生に対し、障害特性の理解とともに、その障害特性に応じた指導方法の工夫や支援のあり方について、授業を行った。模擬授業やグループ討議など、参加・体験型の授業展開により、学生の主体的、対話的な学びを深めることができた。さらに、毎時間授業のリフレクションなどから学生の疑問に対しコメントや更なる情報提供に努め、可能な限りフィードバックに努めた。（奈良学園大学人間教育学部での実践）
２　作成した教科書，教材 (1)特別支援教育概論（共著） 発行：ERP 出版 【再掲】	平成 31 年３月	小中学校の特別支援の各障害についての特徴の説明。障害の応じた教育課程編成とその指導法について記した。人間教育学ゼミナールⅠにおいて使用し、障害特性の理解の資料として使用した。
(2)特別支援学校教育実習の手引き（単著） 【再掲】	令和５年３月	特別支援学校で実施する教育実習に関し、実習中におけるマナー、心得、授業研究に向かう取り組みや教材研究、児童生徒理解についてなど、事前指導、事後指導において授業として使用するためのテキストを作成した。

３　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)奈良学園大学ゲスト講師　学生の授業評価アンケート	平成 31 年１月	奈良学園大学人間教育学部で特別支援の必要な児童生徒の教育課程と学校行事への参加の指導方法について特別講義をした。児童生徒の個別の対応の重要性を理解したという意見が多かった。4 点満点で４の評価だった。
(2)奈良学園大学人間教育学部　授業評価アンケート	令和２年 12 月	対面とオンライン併用の授業となったが、個別の疑問などを次の授業でフィードバックするなど、学生のニーズに応える授業展開を行い、「現代教育課題 A（不登校・いじめ)」において、講義内容に関するアンケートを実施した。受講者 64 名の総合的満足度 4.5(5 段階評価)で、学校における諸問題とその対応について、概ね理解ができたなど高評価を得た。
	令和５年	「発達障害教育総論」において、発達障害のある児童生徒の心理生理や教育課程と指導について講義を行った。概ねわかりやすく資料の提示も読みやすいという声があり、受講者 39 名中 33 名から回答があり、総合的満足度は 4.6（５段階評価）であった。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 校内適正就学指導研修会助言者 「一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援についての検討」	平成 19 年 4 月～平成 27 年 3 月 合計 23 回実施	兵庫県内の様々な学校において校内の各学級の担任から、気になる児童についての情報を集め、その状態から考えられる要因と指導・支援について、個別検討を行った。
(2)兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校研修講師 「自閉症スペクトラム障害」の障害の特性について」 対象：上月小学校教員等 14 名 場所：上月小学校	平成 25 年５月	自閉症スペクトラム障害のある児童の感覚の特異性について、事例をもとに研修を行った。大きな声や破裂音が苦手でありながら、当該児童が大声を出したり声を荒げている行動の要因を考えられる感覚の特異性について、教職員の理解を深め、適切な関わり方について、検討を行った。
(3)兵庫県加古川市　親の会　ひだまりの会 公開研修会　講師 「教室で、家でできるビジョントレーニング」 対象：加古川市広汎性発達障がい児親の会 会員、一般参加者　50 名 場所・加古川市総合福祉会館	平成 25 年１月	校内支援体制のあり方、校内における理解啓発と実際に学校で取り組んだビジョントレーニングとその効果についてと、放課後を利用した児童支援について資料を作成して講義を行った。
(4)兵庫県加古川市　親の会「ひだまりの会」 公開研修会　講師 「通常の学級における発達障害のある児童への支援の実際」 対象：加古川市広汎性発達障がい児親の会 会員、一般参加者　60 名 場所：加古川市総合福祉会館	平成 25 年１月	通常学級における発達に躓きのある児童の、読み書きの向上を図るために取り組んだ、アセスメントとビジョントレーニング、支援の方法などの事例を紹介し、読み書きにつまずく児童への支援のあり方について、資料を作成して講義を行った。
(5)兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校研修講師 「子どもの行動には理由があります」 対象：上月小学校教員等 14 名 場所：上月小学校	平成 26 年４月	知的特別支援学級が新設されるにあたり、知的障害の基礎的な理解と、自閉症を併せ有する児童の実態から、教職員の関わり方や全児童への理解や啓発の方法について、講義を行った。
(6)奈良県大和郡山市特別支援教育研修会講師 「特別な支援を要する児童生徒の理解と支援について」 対象：奈良県教諭 30 名 場所：大和郡山市役所	平成 26 年７月	通常の学級に在籍する発達障害のある児童生徒の基本的理解とその具体的な指導・支援の方法について 読み書きの躓きの要因について、事例をもとにした指導とその効果について資料を準備し講演した。
(7)兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校研修講師 「ディスレクシア（発達性読み書き障害）について―C 児の特性の理解と配慮事項について―」 対象：上月小学校教員等 14 名 場所：上月小学校	平成 26 年８月	通常学級に在籍し、LD（学習障害）の診断のある C 児について、その障害特性についてと、ルビふりや教科書の拡大コピーなど、授業における配慮事項について、全職員の共通理解を図った。

(8)佐用町特別支援教育コーディネーター研修会 「特別支援教育にかかる教員長期研修派遣報告」 対象：佐用町立小中学校管理職及び特別支援教育コーディネーター20 名 場所：佐用町立久崎小学校	平成 26 年８月	平成 25 年度、1 年間大阪教育大学特別支援教育特別専攻科において、取り組んだ研究、研修についての報告会。佐用町から、本事業に参加した教員はこれまでにはいなかったため、この事業の概要の説明と、学んだ授業の具体的なシラバスや、研究内容について報告を行った。
(9)沖縄県那覇市　一般社団法人ゆうありてぃ研修会　講師 「「見る」アセスメントから支援を考える」 対象：一般社団法人ゆうありてぃ職員、利用者、保護者等　60 名 場所：沖縄県総合福祉センター	平成 26 年８月	発達につまずきのある児童の「見る」力に焦点を絞り、そのアセスメントの意味と方法、解釈についてと、指導事例について、資料を作成し、講義を行った。
(10)播磨発達支援研究会　講師 「発達障害のある児童の「見る」アセスメントから支援を考える」 対象：播磨発達支援研究会会員　12 名 場所：相生市生きがい交流センター	平成 27 年６月	「見る」ことから「読む」ことへの一連の情報処理過程のメカニズムとそのつまずきについて、アセスメントの方法や解釈についてと、実際の指導例を提示し、資料を元に講義を行った。
(11)佐用町特別支援教育研修会講師 「特別な支援を要する児童生徒の指導」～自立活動のあり方～」 対象：兵庫県管理職及び教諭 20 名 場所：佐用町南光文化会館	平成 27 年７月	特別支援学級の教育課程の法的根拠と、教育課程の組み方、知的障害のある児童生徒の教育課程の構造についてと、自立活動の区分、項目の詳細の説明と具体的な指導内容の事例を挙げて、資料準備して助言を行った。
(12)天理市立井戸堂小学校校内研修会講師 「発達障害のある子どもの理解と支援～子どもの「見る」力のアセスメント～ 対象：天理市管理職及び教諭 12 名 場所：天理市立井戸堂小学校	平成 27 年８月	読み書きに躓きのある児童生徒の指導・支援について「読む」ために必要な視知覚、認知能力、情報処理過程の理解と、「見る」力のアセスメントの方法について、また、その具体的な支援についての理解について資料を用意して論じた。
(13)姫路市通級担当者研修会講師 「視知覚関連のアセスメントについて ～WAVES の結果の解釈～」 対象：兵庫県立特別支援学校教諭及び特別支援担当教諭 14 名 場所：姫路市総合教育センター	平成 28 年６月	「見る」力や「読み書き」につまずきのある児童生徒の実態を把握するためのアセスメント「WAVES」 の内容と、基本的な解釈についての講義を行った。また、その結果についての評価、解釈と事例検討も資料を準備し行った。
(14)臨時的任用教員研修会特別支援教育講師 「合理的配慮の提供とユニバーサルデザインによる授業について」 対象：兵庫県臨時講師 60 名 場所：兵庫県姫路総合庁舎	平成 27 年７月	通常の学級に在籍する学習や生活につまずきのある児童生徒の理解と、その指導・支援についてユニバーサルデザインの考え方に基づく学級づくり、学習指導の方法の工夫と、個別に配慮の必要な児童生徒の行動、学習面の困難さの理解を深めるために資料を準備して指導した。
(15)たつの市特別支援教育研修会講師 「特別な支援を要する児童生徒の自立活動のあり方」 対象：たつの市立小中学校特別支援学級担任 30 名 場所：たつの市教育委員会	平成 28 年８月	特別支援学級の教育課程の法的根拠と、教育課程の組み方、知的障害及び肢体不自由のある児童生徒の教育課程の構造について「合わせた指導」の具体的内容について「自立活動」の区分、項目の詳細の説明と具体的な指導内容の事例を挙げて、資料を準備し講演した。
(16)神河町全教職員研修会講師 「発達障害のある児童生徒の理解と学級づくり」 対象：神河町小中学校全教職員、教育委員、教育委員会担当者約８０名 場所：神河町立神河中学校	平成 28 年８月	通常の学級の担任に必要な特別支援児童生徒理解のあり方やアセスメントについて　児童生徒の問題行動の背景にある原因についての理解と、その上にたった指導・支援のあり方について資料を基に講話した。
(17)西播磨地区学校生活支援教員等研修会講師 「通級指導のあり方～教育課程と自立活動のあり方～」第１回 対象：西播磨地区小中学校生活支援教員及び特別支援学校教員 場所：兵庫県立西はりま特別支援学校	平成 28 年９月	通級による指導について、その目的、対象となる児童生徒、指導時間等の法的根拠に基づいた制度の理解、目標と評価について指導した。さらに対象となる児童生徒の実態把握の方法と、自立活動の具体的な内容について指導例を準備して講演した。
(18)揖龍地区特別支援コーディネーター研修会講師 「通級指導教室と通常学級の連携の意義とその方法について」 対象：特別支援教育コーディネーター４０名 場所：たつの市立小宅小学校	平成 29 年１月	特別支援に係る児童生徒の自立と社会参加のための連携の必要性について　通級指導の開始と終了、目標の設定と評価などの意味や意義について、学校内の理解啓発の方法について、資料を準備し講演した。

(19)教職経験者（２年次）研修全体研修講師 「保護者との連携」 対象：兵庫県特別支援学校教員２年次研修対象者 70 名 場所：兵庫県立特別支援教育センター	平成 29 年５月	障害のある子どもの保護者の心理的側面の理解と、よりよい協働のあり方について、事例検討を取り入れた資料を作成し、講義を行った。
(20)兵庫県立但馬農業高等学校講師 「授業のユニバーサルデザイン化とは」 対象：兵庫県立但馬農業高等学校教職員 40 名 会場：兵庫県立但馬農業高等学校	平成 29 年６月	発達障害のある生徒の基本的理解と、どの生徒にもわかりやすい授業という視点での授業改善の工夫について、ユニバーサルデザインの考え方の理解について資料を準備し講演した。
(21)通級指導担当教員研修講座講師 「教育課程と自立活動」 対象：兵庫県小中学校通級担当教員　73 名 会場：兵庫県福祉センター	平成 29 年６月	通級による指導の制度、目標、指導内容について学び、自立活動について、区分、項目ごとの具体的指導内容について、資料を作成し講義を行った。
(22)猪名川町スクールアシスタント研修講師 「特別な支援を要する児童・生徒の理解と支援 ～スクールアシスタントとしての支援 Vol.1～」 対象：猪名川町　スクールアシスタント 15 名 会場：猪名川町役場	平成 29 年８月	通常学級に在籍する発達障害のある児童生徒についての理解・支援のあり方についてと、学級担任との連携のあり方や大切さについて、資料を作成して講義を行った。
(23)猪名川町初任者研修講師 「特別な支援を要する児童・生徒の指導、支援」 対象：猪名川町小中学校初任者 11 名 会場：猪名川町役場	平成 29 年８月	LD 等の心理的疑似体験を通して、書けない、読めないなどの困難さのある児童生徒の心理状態を理解するとともに、児童生徒の行動からその原因を探る方法について、演習を行った。
(24)教職経験者（２年次）研修全体研修講師 「特別支援学校の学級経営と児童生徒理解」 対象：兵庫県特別支援学校教員２年次研修対象者 70 名 場所：兵庫県立特別支援教育センター	平成 29 年８月	特別支援学校の学級担任として、個別の指導、支援のあり方と学級集団の指導について、また、児童生徒の理解のあり方について、資料を作成し、講義を行った。
(25)兵庫県播磨西地区サポートネット会議研修会講師 「兵庫県の通級指導の現状と課題」 対象：播磨西地区サポートネット会議会員 60 名 会場：姫路総合庁舎	平成 29 年８月	通級による指導に関する現状と、通級による指導が児童生徒の自立と社会参加に対してどのような役割を担っているのか、ということを、学習指導要領や文部科学省の調査結果等を用いて資料を作成し、講義を行った。
(26)兵庫県播磨西地区学級経営（特別支援教育）研修会講師 「新学習指導要領と個別の指導計画」 対象：播磨西地区小中学校特別支援学級担任および通級指導教室担当者　約 170 名 会場：あいめっせホール	平成 29 年８月	特別支援学級の教育課程の編成のポイントや、自立活動の区分と項目の整理、特に知的障害のある児童生徒の教育課程の構造について、資料を作成し、講義を行った。
(27)姫路市通級担当者研修会講師 「視知覚関連のアセスメントについて～WAVEWS の結果の解釈」 対象：兵庫県立特別支援学校コーディネーター及び姫路市通級指導教室担当者 18 名	平成 29 年９月	「見る」力と「読み書き」に躓きのある児童生徒の実態を把握するためのアセスメント「WAVES」の内容と基本的な解釈についての講義を行った。 また、その結果についての評価、解釈と事例検討について、資料を作成し、講義を行った。
(28)佐用町コーディネーター研修会講師 「特別な支援を要する児童生徒の指導・支援について」 対象：佐用町特別支援教育ネットワーク会議会員 35 名 会場：佐用町教育委員会	平成 29 年９月	学習指導要領の改訂のポイントについてと、コーディネーターとしての校内支援のあり方、関係機関との連携のあり方等について、資料を作成し、講義を行った。
(29)篠山市・丹波市通級指導教員研修会講師 「通級による指導に期待されること～自立活動の具体的指導方法～」 対象：丹波市、篠山市通級指導教室担当者 教育委員会指導主事、特別支援学校教諭 25 名 場所：柏原住民センター	平成 29 年 12 月	通級による指導における、現場や高等学校における通級による指導の兵庫県における動向についてと、児童生徒の実態把握を元にした自立活動の選定や指導について、資料を作成し、講義を行った。
(30)特別支援教育士長崎支部会員研修会講師 「やってみよう事例検討　～アセスメントから指導計画へ～」 対象：特別支援教育士(S.E.N.S)長崎支部会員 70 名 会場：長崎大学	平成 29 年 12 月	学習や生活に困難を示す児童生徒のアセスメントから、指導計画を作り出すための、ケース検討をした。 WISC-Ⅳ、DTVP2 などのフォーマルアセスメントと、児童生徒や担任、保護者等からの聞き取り、観察を総合的にアセスメントし、通級指導教室、通常学級、保護者それぞれについて、指導目標を考える方法等について資料を準備し講演した。

(31)猪名川町スクールアシスタント研修講師 「特別な支援を要する児童・生徒の理解と支援 ～スクールアシスタントとしての支援～Vol.2」 対象：猪名川町　スクールアシスタント15名 会場：猪名川町役場	平成 29 年 12 月	LD 等の心理的疑似体験を通して、書けない、読めない困難さのある児童生徒の心理状態を理解するとともに、２学期を終えた時点での振り返りと３学期に向けての目標の設定について考えた。また、行動の理由を見るポイントについて、資料を作成し、講義を行った。
(32)兵庫県淡路教育事務所特別支援学級教育課程研修会講師 「特別支援学級の教育課程の編成や年間計画について」 対象：淡路地区小学校、中学校特別支援学級担任、特別支援教育コーディネーター50名 会場：淡路市役所	平成 30 年１月	特別支援学級の教育課程の構造についてと、自立活動の目標と内容、指導について、学習指導要領の海底のポイントについて、資料を作成して講義を行った。
(33)上郡町立山野里小学校校内研修講師 「特別な支援を要する児童の、特別の教科道徳の指導について」 対象：上郡町立山野里小学校教職員24名 会場：上郡町立山野里小学校	平成 30 年２月	特別支援学級在籍児童の、交流学級における特別の教科道徳について、特別支援学級担任の支援についてや、交流学級担任との連携のあり方などについて、資料を作成し、講義を行った。
(34)通級指導担当教員研修講座講師 「教育課程と自立活動」 対象：兵庫県小中学校通級担当教員　73名 会場：兵庫県福祉センター	平成 30 年６月	通級による指導の制度、目標、指導内容について学び、自立活動について、区分、項目ごとの具体的指導内容について、資料を作成し講義を行った。
(35)新任特別支援学級担当教員研修講座講師 「障害に応じた教育課程の編成と自立活動の指導」 対象：兵庫県小中学校特別支援学級担当教員 500名 会場：兵庫県福祉センター 神戸市勤労市民センター	平成 30 年６月	初めて特別支援学級の担当をする教員対象に、特別支援学級の教育課程の編成について、障害特性の理解と、実態把握、自立活動の指導について、資料を作成し、講義を行った。
(36)兵庫県立東播工業高等学校カウンセリングマインド研修講師 「障害特性の理解と支援のあり方について」 対象：県立東播工業高等学校教職員24名 会場：県立東播工場高等学校	平成 30 年６月	発達障害の基礎的な理解と疑似体験を通じて生徒の心理状態を理解するとともに、効果的な指導、支援のあり方について、資料を作成し講義を行った。
(37)兵庫県播磨西地区学級経営（特別支援教育）研修会講師 「新学習指導要領移行期のポイントと個別の指導計画」 対象：播磨西地区小中学校特別支援学級担任及び通級指導教室担当者170名 場所：姫路市民会館大ホール	平成 30 年７月	特別支援教育に関する、学習指導要領改訂のポイントと、自立活動における個別の指導計画の作成について、資料を作成し講演した。
(38)赤穂市立赤穂中学校校内研修講師 「特別支援生徒の進路についての合理的配慮とは」 対象：赤穂中学校教員及び管理職30名 場所：赤穂市立赤穂中学校	平成 30 年８月	中学校の通常学級に在籍する発達障害のある生徒についての理解・啓発を他の生徒に行う方法、進学に向けての合理的配慮の提供に関する考え方について、資料をもとに講演した。
(39)佐用町教育研究所研修会講師 「特別支援教育の具体的な進め方」 対象：佐用町教育研究所所員、小学校・中学校教職員　30名 場所：佐用町教育委員会	平成 30 年８月	学習指導要領の海底のポイントと、各教科等の指導における配慮事項などの工夫や、指導・支援の工夫について、疑似体験や、スリットの作成など、事例や実技などを取り入れながら理解を深めるように資料を作成して講義を行った。
(40)高等学校における通級による指導実践研究事業校内研修会講師 「発達障害のある子を理解するには」 対象：兵庫県立西脇北高等学校教員　40名 場所：兵庫県立西脇北高等学校	令和元年６月	高等学校における通級による指導が開始され、二年目となる。発達障害のある生徒の他にも、自傷行為、非行行為等様々な課題のある生徒指導面での対応とともに、発達障害を理解し、その指導について理解できるよう、疑似体験を取り入れるなどして講義を行った。
(41)相生市特別支援教育研修講座 「通常の学級における指導・支援～通級による指導との効果的な連携～」 対象：相生市学校園教職員 45名 場所：相生市文化会館　なぎさホール	令和元年７月	通常の学級に在籍する児童生徒の行動面のつまずきについて、応用行動分析の考え方をもとに、行動の原因やその結果についての観察の方法や行動変容につながる指導について、資料をもとに講義を行った。通級による指導についても、位置付けや通常学級との連携について理解を図った。

(42)姫路市立中学校特別支援教育コーディネーター研修会 「特別支援教育コーディネーターの役割」 対象：姫路市内中学校教員、特別支援学校教員 70名 場所：姫路市立書写養護学校	令和元年７月	特別支援教育コーディネーターは学内人事であり、担当者が固定されているわけでは無い。そのため、その業務の引き継ぎが十分でない、仕事が円滑に進められないなど様々な課題があり、それが校内の特別支援教育の推進において弊害となっているケースもある。どのように円滑に業務を進めていけるか、実習を入れ、講義を行った。
(43)明石市特別支援研修講座 「WISC-Ⅳ等発達検査について詳しく知ろう」 対象：あかし市教育研修所特別支援教育希望者　12名 場所：明石市立明石養護学校	令和元年８月	特別な支援を要する児童生徒が、その発達の凹凸やつまずきの要因を探るために医療機関等で実施される各種の検査結果の報告について、どのように読み取り支援に生かすかということについて、資料をもとに講義を行った。支援に生かす方法について理解を深めることができた。
(44)神崎郡小中学校特別支援教育研修会 「LD、ADHD の児童生徒に対する支援等について」 対象：神崎郡小中学校特別支援教育担当者等　４０名 場所：神河町大河内保健福祉センター	令和元年８月	発達障害のある児童生徒の指導、支援の具体的なあり方について、資料をもとに講義を行った。 障害特性の理解と、ユニバーサルデザインの授業の基本的な考え方等について理解啓発を図った。
(45)佐用町教育研修所特別支援教育研修講座 「特別な支援を要する子どもたちを「理解する」とは・・」 対象：佐用町小中学校教員　１７名 場所：佐用町役場	令和元年８月	特別な支援を要する児童生徒の発達検査等の所見をもとに、その困難さの理解と具体的な支援方法について、講義を行った。障害理解を考えるために疑似体験等を取り入れ、正しく理解することの大切さについて資料をもとに講義をした。
(46)太子町教職員研修 「すべての教職員のための特別支援教育をふまえた授業作り」 対象：太子町立幼小中学校教職員　240名 場所：太子町文化会館	令和元年８月	通常の学級に在籍する学習や生活に困難を示す児童生徒について、どのように観察し、つまずきの原因を探るかということや、通常学級の授業作りについて、事例をもとに実践的な内容として、資料をもとに講義を行った。
(47)高等学校における通級による指導実践研究事業校内研修会 「高等学校における通級指導について」 対象：兵庫県立宝塚西高等学校教職員、保護者　40名 場所：兵庫県立宝塚西高等学校	令和元年８月	高等学校における通級による指導が始まり、対象校でも二年目を迎えているが、その指導のあり方について校内で共通理解を深めるため、概要について講義を行った。 自立活動や個別の指導計画に基づいた指導のあり方について、資料を作成し、講義した。
(48)あかし教育センター「特別支援教育研修講座」 「WISC-Ⅳ等、発達検査の結果から具体的支援につなげるために」 対象：明石市小中学校教職員　５０名 場所：あかし教育研修センター	令和元年10月	発達検査の所見は、特別な支援を要する児童生徒の保護者から情報提供として受け取り、見ることが多くなった現在の学校現場であるが、それを読み解き、支援につなげることができなければ活用できたとは言い難い。本講義において、その基本的な解釈の仕方や、その支援方法について事例をもとに講義を行った。
(49)但馬地域特別支援連携協議会　指導助言 「早期からの教育相談・支援体制の充実に向けて」 対象：但馬地域特別支援連携協議会　委員26名 場所：兵庫県豊岡総合庁舎	令和元年11月	早期からの教育相談や支援体制について、各関係機関から委嘱された委員により、情報共有がなされた。就学前の段階で、どれくらい保護者に情報を発信し、より適切な支援を受けられる関係機関と連携をとるかという課題について大切さについて特別支援学校との連携などリソースの活用について等、助言を行った。
(50)特別支援教育士資格認定協会第１３回S.E.N.S養成セミナー指導実習 対象：特別支援教育士養成セミナー参加者　70名 場所：スペースアルファ神戸	令和元年12月	特別支援教育士資格取得のための、２泊３日の研修講座の担当講師として運営、講義等を行った。 グループ内でのアセスメント解釈や個別の指導計画作成に関し、適宜助言を行った。また、最終試験に向けての個々の課題についての助言等を行った。
(51)西播磨地区高等学校における通級による指導合同研究会 「発達段階に応じた通級の指導」 対象：兵庫県西播磨地区小中高等学校教職員、福祉関係担当者等　　７８名 場所：兵庫県立太子高等学校	令和２年１月	各学校種別ごとに、通級による指導が行われている。それぞれの発達段階を理解し、今在籍している学校の先にどんな教育が展開されるのか、将来の社会参加に向けてどんな力が必要となるのかなどについて、資料をもとに講義を行った。

(52)兵庫県高等学校生徒指導協議会阪神支部協議会「特別な支援が必要な生徒への対応について」 対象：阪神地区生徒指導担当教員　60 名 場所：兵庫県立宝塚西高等学校	令和２年２月	問題行動等、生徒指導上課題となる生徒の行動の原因となっていることがある発達障害について、どのように理解し、対応すればよいかといことについて、資料をもとに講義を行った。
(53)高等学校における通級による指導校内研修会「インクルーシブ教育と合理的配慮」 対象：兵庫県立西脇北高等学校教職員 40 名 場所：兵庫県立西脇北高等学校	令和元年２月	年度内の校内研修の２回目である。通級による指導の対象となる生徒の理解について、応用行動分析の考え方をもとに、事象に対して注意や叱責をするのではない関わり方について資料をもとに講義を行った。
(54)神崎郡中学校特別支援教育研修会「通級指導教室と通常学級の効果的な連携について」 対象：神崎郡中学校通級指導担当者等　20 名 場所：兵庫県福崎町立福崎西中学校	令和２年２月	中学校における通級による指導のあり方について、また、通常学級との連携についてその意義や具体的指導について、資料をもとに講義を行った。
(55)第４回特別支援教育西播磨地域連携研修会指導助言 対象：兵庫県西播磨地域通級指導担当教員、特別支援学校教員　30 名 場所：兵庫県立西はりま特別支援学校	令和２年２月	通級による指導の実践報告が小学校、中学校の担当教員からなされた。将来の自立に向けた視点を持つことの重要性、通級指導が通級指導だけで実施するのではなく、通常学級との連携が不可欠となることなどについて、助言を行った。
(56)兵庫県立上郡高等学校カウンセリングマインド職員研修会講師「発達障害のある生徒に対するカウンセリングマインド」 対象：兵庫県立上郡高等学校教員、50 名 場所：兵庫県立上郡高等学校	令和２年８月	発達障害の診断はないものの、中学時代から問題行動があったり、不登校や留年などの課題の多い生徒について、どう理解し、支援していけば良いか、資料に基づき講義を行った。
(57)兵庫県立西神戸高等特別支援学校校内研修講師「研修・研究とは」 対象：兵庫県立西神戸高等特別支援学校教員　53 名 場所：兵庫県立西神戸高等特別支援学校	令和２年７月	新設４年目を迎え、特別支援教育の校内の充実を図るため、研修体制を構築し、全職員で同じテーマに向けたそれぞれの研修の深め方、進め方について、講義を行った。
(58)高等学校における通級による指導実践研究事業指導助言 対象：兵庫県立西脇北高等学校教員　10 名 場所：兵庫県立西脇北高等学校	令和２年８月	高等学校における通級による指導の実施校における、通常の学級の授業の方法、支援の工夫などのあり方について、授業参観をした後に指導助言を行なった。
(59)兵庫県立特別支援教育センター研修講座　通級指導教室担当教員研修　講師 対象：兵庫県内通級指導担当教員　194 名 場所：神戸市教育会館、兵庫県民会館	令和２年 10 月	通級による指導を担当する、兵庫県内の全教員に対し、発達障害のある児童の障害特性の理解と、的確なアセスメントによる目標設定や自律活動の指導・支援の充実について、資料を用いて講義と演習を行った。
(60)但馬地域特別支援連携協議会　指導助言「幼児児童生徒の就労、進学等を見据えた支援の在り方について」 対象：但馬地域特別支援連携協議会　委員 26 名 場所：兵庫県豊岡総合庁舎	令和２年 11 月	特別支援学校の支援部、ハローワークからの現状の報告があった。就労についての難しさと先を見据えた支援の大切さ、福祉関係の支援について、幼小中学校との連携について、助言を行った。
(61)ひょうご専門家チーム派遣事業 対象：尼崎市立尼崎北小学校教員３名 場所：尼崎市立尼崎北小学校	令和２年 11 月	通級指導担当教員による、通級の指導の実際を参観し、対象児童の支援のあり方について、ケース検討を実施した。自立活動の内容や目標の設定、教師の関わり方について、評価するとともに、今後の目標について助言を行なった。

(62)ひょうご専門家チーム派遣事業 対象：神戸バイリンガルスクール教員８名 場所：神戸バイリンガルスクール	令和２年 12 月	バイリンガルスクールに通う、小学校１年生女児のケースについて、授業の様子の参観のあと、指導支援の方法や体制の整え方などについて助言を行なった。
(63)あかし教育研修センター講師派遣「特別支援教育研修会」講師 対象：明石市立大蔵中学校　教員 35 名 場所：明石市立大蔵中学校	令和３年２月	中学校における特別支援教育、ユニバーサルデザインの授業について、資料を元に講義を行った。
(64)特別支援学級カリキュラム検討委員会講師 対象：神崎郡市川町立市川中学校教員５名 市川町立甘地小学校教員１名 場所：神崎郡市川町立市川中学校	令和３年３月	特別支援学級の教育課程のあり方や、その設定方法、自律活動の授業の内容など、各学校の抱えている課題について、ケースを元に検討を行った。
(65)南あわじ市立広田中学校校内研修講師 対象：南あわじ市立広田中学校教員　１７名 場所：南あわじ市立広田中学校	令和３年７月	愛着障害の可能性のある生徒との関わり方や、発達障害との違い、支援について、資料をもとに講義を行った。
(66)赤穂市特別支援教育自主的研究推進事業夏季研修会講師 対象：赤穂市特別支援教育担当教員　30 名 場所：赤穂市民会館	令和３年８月	「ユニバーサルデザインの視点を活かした学級づくり、授業づくり」として、すべての児童にわかりやすい授業の工夫や、安心して過ごせる学級づくりについて資料をもとに講義を行った。
(67)神崎郡小中学校特別支援教育夏季研修会講師 対象：神崎郡小中学校教職員　170 名 場所：神崎郡市川町立市川中学校	令和３年８月	通常の学級担任や管理職など、特別支援教育の担当者ではない教員が、通級による指導とはどのようなもので実際にはどのような指導をする場所なのか、という基本的な内容から、実際の指導について、資料を作成し講義を行った。
(68)高等学校における通級による指導実践合同研究会講師 対象：神戸市立湊川高等学校通級担当教員、神戸市内小中学校教員他、約 60 名 場所：オンライン研修	令和３年８月	高等学校における通級による指導についてと、それぞれの発達段階に応じた効果的な指導・支援のあり方について、資料をもとに講義を行った。
(69)兵庫県淡路地区学級経営（特別支援教育）研究会講師 「児童生徒の障害の状態を踏まえた教育課程の編成について」 対象：淡路地区特別支援学級担当教員、特別支援教育担当教員　　111 名 場所：オンライン研修	令和３年８月	児童生徒の障害の状態を踏まえた教育課程の編成について、個別の教育課程の作成、個別の指導計画、教育支援計画の作成、読み取りなど、実際的な内容について資料を作成し、講義を行った。
(70)兵庫県播磨西地区学級経営（特別支援教育）研究会講師 対象：播磨西地区特別支援教育担当教員　520 名 場所：姫路市市民会館大ホール	令和３年９月	特別支援教育担当教員に対し、特別支援教育における今日的な課題について、主に「自立活動」のあり方や、実態把握についてなど、講義を行った。

(71)淡路地区学校経営（校長）研修会講師 対象：淡路地区小中学校校長、市組合教育委員　90名 場所：淡路文化会館	令和3年10月	特別支援教育の視点を活かした学校経営のあり方や、チーム学校としての特別支援教育への取り組み方についてなど、資料を作成し講義を行った。
(72)但馬地域特別支援連携協議会　指導助言 「子どもを中心に据えた学校と福祉の連携による支援の在り方について」 対象：但馬地域特別支援連携協議会委員　26名 場所：豊岡総合庁舎	令和3年11月	学校と福祉の連携は、「トライアングル・プロジェクト」として政策が掲げられるなど喫緊の課題である。その取り組みについて各機関からの実践発表を聞き、指導助言を行った。学校側からみた視点と関係機関からの視点の違いなど、多面的にとらえる必要性について助言した。
(73)姫路市特別支援教育コーディネーター研修講師 「通級による指導～一人ひとりの状況に応じた指導や配慮」」 対象：幼小中義高特別支援学校の特別支援教育コーディネーター　70名 場所：姫路市立総合教育センタークレアホール	令和3年11月	通級による指導について、自立活動を中心とした具体的な指導の実際を例を挙げ、講義を行った。
(74)明石市スーパーバイザー派遣事業　講師 「インクルーシブ教育時代における特別支援教育」 対象：明石市立鳥羽小学校教職員20名 場所：明石市立鳥羽小学校	令和4年1月	特別支援学級、通級による指導、通常の学級などさまざまな教育の場における特別な指導のあり方について、具体例を挙げながら資料をもとに講義を行った。
(75)兵庫県立特別支援教育センター　担当者研修 新任特別支援学級担当教員等研修　講師 「自立活動・障害に応じた教育課程の編成」 対象：兵庫県内新任特別支援学級担当教員　約500名　オンライン研修	令和4年4月	初めて特別支援学級の担任となる兵庫県内の教員を対象に、特別の教育課程の編成についてや自立活動の内容と選定方法等について、資料を作成し講義を行った。
(76)丹波教育事務所学級経営（特別支援教育）研修会講師 「特別支援学級の教育課程について」 対象：丹波地区特別支援学級担当教員　約50名 場所：丹波市山南住民センター	令和4年6月	児童生徒の実態に応じた特別支援学級の教育課程の編成について講義を行った。個別の指導計画の見直し、実態の把握について、資料を作成し、少人数でのグループ演習を入れながら具体的な内容について研修を実施した。
(77)奈良県教育委員会研修講座 「一人一人を大切にした教育、一人一人を大切にする教育」 対象：奈良県内の特別支援学級担任、通級による指導担当者等　約50名 場所：奈良県教育委員会特別支援教育推進室	令和4年6月	奈良県内の特別支援教育推進室主催の研修講座において、教育課程の編成や個別の実態把握について資料をもとに研修を実施した。
(78)淡路教育事務所（学級経営）研修会講師 「児童生徒の障害の状態に応じた指導内容や指導方法の工夫について」 対象：淡路地区特別支援教育担当教員　約60名 場所：淡路文化会館	令和4年7月	淡路地区の特別支援学級担当教員等を対象に、教育課程の編成や実態把握の方法について資料をもとに講義を行った。
(79)三田市立藍小学校校内研修講師 「それぞれに学びのある交流及び共同学習」 対象：三田市立藍小学校教員　約20名 場所：三田市立藍小学校	令和4年7月	特別支援学級に在籍する児童の、交流学級における学びとその評価のあり方について、資料を作成し、ケースを取り入れながら研修を行った。

(80)兵庫県高等学校における通級による指導実践研究事業　西播磨地区合同研修会　講師 「一人一人を大切にした通級による指導」 対象：兵庫県西播磨地区高校教員、小中学校教員約200名 場所：兵庫県立先端科学技術支援センター	令和４年８月	高等学校における通級による指導が実施され、軌道に乗りつつある現在、小中学校の通級と高等学校の通級、それぞれのあり方や接続に関し、成果や課題が明らかになりつつある。状況を踏まえ、今後の通級指導のあり方をどう捉えるか、について資料をもとに講義を行った。
(81)兵庫県立神戸特別支援学校カウンセリングマインド研修　講師 「カウンセリングマインドを踏まえた面接練習」 対象：兵庫県立神戸特別支援学校教員　約60名 場所：兵庫県立神戸特別支援学校	令和４年８月	特別支援学校教員が、日頃関わる児童生徒や保護者と、より良い関係を築きながら、児童生徒のためにそれぞれが役割を担って教育実践ができるよう、資料を作成し、事例研修を実施した。傾聴に重点を置き、教員がいかに話しを聞きながら相手の立場を理解できるか、という内容で、今後に活かせる内容であるとの声があった。
(82)あかし教育センタースーパーバイザー事業 兵庫県明石市立二見小学校校内研修　講師 「支援を要する児童に対する効果的な学習支援のあり方について」 対象：明石市立二見小学校教員　約20名 場所：明石市立二見小学校	令和４年８月	発達障害のある児童や、学習に躓いている児童に対し、効果的な学習支援のあり方とはどのような対応かについて、資料をもとに講義を行った。通常の学級の授業の工夫、支援の方法などについて具体的に話をした。
(83)兵庫県立教育研修所特別支援教育の視点を活かした生徒指導研修講座　講師 「「個」を大切にし認め合える学級「集団」づくり」 対象：兵庫県内小中学校教員　約70名 場所：兵庫県立教育研修所	令和４年８月	学級全体をアセスメントし、学習に躓いていたり、長時間集中が難しかったりする児童生徒を含むすべての学級の児童生徒にわかりやすい授業を提供するために、教員がどのような取り組みができるかについて、資料を作成し、講義を行った。
(84)兵庫県神崎郡市川町立こども園職員研修　講師 「特性のある子どもへの関わり方」 対象：市川町内こども園職員　約40名 場所：兵庫県神崎郡市川町立いちかわ東こども園	令和４年９月	発達障害のある幼児の障害特性の理解、気づきの視点について、また、小学校に上がる前にどのような力をつけておくと良いか、という点について、資料を作成し講義を行った。
(85)あかし教育センタースーパーバイザー派遣事業 特別支援教育研修講座　講師 「子どものアセスメントと支援について」 対象：明石市内小中学校教員　約30名 場所：あかし教育研修センター	令和４年９月	子どもの実態を把握するためのアセスメントについて、大まかに紹介し、使用について概略を理解してもらうよう、資料を作成し、講義を行った。実際の漢字の誤り分析をしていただき、そこから支援に繋げることができるか、グループ演習なども取り入れ、話をした。
(86)あかし教育センタースーパーバイザー派遣事業 授業のユニバーサルデザイン　講師 対象：明石市内小中学校教員　約30名 場所：あかし教育研修センター	令和４年11月	児童生徒の学習プリントなど、学習成果物の中から、誤りに気づき、それをどのように指導支援するかということについて、資料を作成し、講義を行った。
(87) あかし教育センタースーパーバイザー派遣事象 「学習障害についての指導や配慮」 対象：明石市立鳥羽小学校教員　約25名 場所：兵庫県明石市立鳥羽小学校	令和４年１１月	通常の学級における、学習障害のある児童に対する評価と指導支援に活かしていく方法について、具体的な事例を取り入れながら講義を行った。
(88)大和大学FD研修会　講師 「発達障害のある学生の理解と対応」 対象：大和大学教職員　約70名 場所：大和大学	令和５年２月	発達障害のある学生の理解とその対応のあり方について、大学職員を対象に講演を行なった。 合理的配慮の提供について、大学としてどのような仕組みが必要か、体制づくりの具体について資料をもとに講義を行った。
５　その他 (1)日本LD学会広報委員会　副委員長	平成31年５月～現在に至る	日本LD学会広報委員会副委員長として、学会広報誌の発行、ホームページのUD化、国際化についての検討など、計画し、推進している。

(2)但馬地域特別支援連携協議会　学識経験者	令和元年11月～現在に至る	LD、ADHD、高機能自閉症等を含めた特別な教育的支援を必要とする幼児児童生徒への総合的支援体制の整備を図るため、それぞれの期間の役割を明確にするとともに、地域支援のネットワークの構築を図るための協議に参加し総括助言を行なっている。
(3)あかし教育研修センター　スーパーバイザー	平成31年４月～現在に至る	明石市の市立学校園における教育課題解決及び校内研修推進に資するため、派遣申請に応じ、講師として派遣されている。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１　資格、免許 小学校教諭１種免許状 幼稚園教諭２種免許状 特別支援学校１種免許状（知・肢・病） 特別支援教育士スーパーバイザー 公認心理師 修士（学校教育学）	 平成５年３月 平成５年３月 平成26年３月 平成30年４月 令和３年２月 令和３年３月	 平４小一第１５３７号（大阪府教育委員会） 平４幼二第４７５１号（大阪府教育委員会） 平２５特支第１８３号（大阪府教育委員会） SV１８－０１０（一般財団法人　特別支援教育士資格認定協会） 第３５７０１号 兵庫教育大学大学院学校教育研究科（修第9389号）論題「フォントの読みやすさが読解に及ぼす影響に関する研究～UDフォントの学校現場における有効的活用について～」
２　特許等		なし
３　実務の経験を有する者について特記事項 (1) 兵庫県教育委員会　特別支援教育特別コーディネーターとしての業務	平成19年４月～27年３月	特別支援教育特別コーディネーターとして講演会の講師を毎年年間３回務めた。また保育園、中学校訪問、療育機関訪問など、各関係機関との連携を図ったり、PTA研修会の立案、実施なども行った。特別支援学級の新設にあたり、書類の作成、保護者との面談、保育所との協議、学級の備品等の購入申請等の業務を担当した。 年間３回、定期的に校内適正就学指導委員会を開催し、校内の特別な支援を要する児童についての共通理解と特別支援教育についての啓発を行った。また、事案によっては、随時開催し、当面の対処についてや関係機関との連絡調整、校内の体制の整備などを行った。
(2) 特別支援学級の担任としての業務	平成23年４月～平成26年３月	自閉症・情緒障害特別支援学級が新設にあたり、新１年生入学前から準備をし、担任となった。教育実習生を受け入れ、特別支援の基礎の講義を行った。就学前から保護者や該当児と面談をし、特別支援学級とはどんな学級なのかを全児童に理解・啓発するための全職員の共通理解を図るなど、担任として円滑に学級運営ができるよう、工夫した。 担任となってからは、在籍児童についての接し方や指導・支援についての職員研修を実施し、交流及び共同学習を積極的に行い、数年後の目標を見据えた学級運営を行った。また、教育実習生を受け入れ、特別支援の基礎的事項を指導した。
(3) 特別支援教育にかかる教員長期研修派遣事業における長期派遣研修参加	平成25年４月～26年３月	兵庫県教育委員会から大阪教育大学特別支援教育特別専攻科に派遣される。特別支援学校教諭１種免許状（知・肢・病）を取得した。特別支援教育概論、知的障害教育、肢体不自由教育、病弱教育、視覚障害教育、聴覚障害教育、言語障害教育をはじめ、読み書きに関する視覚機能についての研究、また、実地研修として、特別支援学校での教育実習、大阪府内の特別支援学校訪問、通級指導教室訪問、大阪医科大学LDセンター研究協力として読みに関するアセスメント、心理検査の実施などを行った。

(4) 兵庫県教育委員会事務局播磨西教育事務所 教育振興課主任指導主事特別支援教育担当としての業務	平成 27 年 4 月～ 29 年 3 月	◎特別支援教育担当 ・兵庫県県内各地の特別支援教育に関する指導研修講座の講師を務める ・西播磨教育事務所管内の特別支援教育に関する研修講座講師開催及び運営 ・特別支援学級編成及び教育課程編成に係る指導と事務 ・特別支援学級編成の実態調査及び聞き取り ・特別支援学級設置校、学校生活教員配置校訪問調査と指導 ・特別支援教育体制整備状況調査の実施と指導 ・播磨西地区（学級経営）研究会の実施と指導 ◎初任者研修担当 ・地区別初任者研修、一般研修の実施 ・初任者研修にかかる非常勤嘱託員の委嘱事務、派遣 ◎小中一貫教育（義務教育学校）担当 ・小中一貫教育地区別研修会の開催 ◎小学校外国語教育担当 ・英語教育地区別研修会の実施 ◎幼児教育担当（特別支援教育の幼児を含） ・幼児教育研修会の実施 ・幼児教育研究事業にかかる実践研究 ・幼児教育理解推進研修会の実施 ・幼稚園教諭初任者研修の実施
(5) 兵庫県立特別支援教育センター 主任指導主事としての業務	平成 29 年 4 月～ 平成 31 年 3 月	◎特別支援教育に関する研修に係る業務 ・特別支援学校２年次研修会講師 ・新任特別支援学級担当教員等研修講師 ・通級指導教室担当教員等研修講師 ・講師派遣研修講師 ◎特別支援教育に関する教育相談 ・ＬＤ，ＡＤＨＤ等発達につまずきのある幼児・児童・生徒の保護者、本人の教育相談 ◎特別支援教育に関する委託研究員 「通常学級の教員に対する、障害のある子どもの教育的支援についての理解・啓発」に関する研究 （独立行政法人国立特別支援教育研究所地域実践研究） ◎小中学校の先生のための特別支援教育ハンドブック作成
(6)ひょうご学習障害相談室専門相談員としての業務	平成 31 年 4 月～現在に至る	兵庫県の LD、ADHD 等に関する専門的な知識や技能を有する相談員が、本人、保護者、教育関係者に相談支援を行い、LD、ADHD 等に関する適切な情報を提供する。室長１名、専門相談員９名で構成されている。幼児児童生徒に関する相談業務を個別に行っている。ケースによって、継続的に相談にあたることがある。
(7)ひょうご専門家チーム派遣相談員としての業務	平成 31 年 4 月～現在に至る	医師・心理・教育関係者から構成する「ひょうご専門家チーム」の派遣相談員として、兵庫県の学校園委員会等からの要請に基づき、幼児児童生徒への支援や教員への教育相談等、学校園に対する支援を行う。 (1)幼児児童生徒への望ましい教育的対応についての専門的意見の提示 (2)学校園の支援体制についての指導助言 (3)ケース会議等における助言等 (4)その他必要に応じて関係機関が協議して支援を実施
(8)但馬地域特別支援教育連携協議会委員としての業務	令和元年 10 月～現在に至る	兵庫県但馬地域の特別支援教育連携協議会の学識経験者、委員長を務める。委員は、地域内の各市町教育委員会、学校関係者、福祉関係者、県民局関係者、関係機関担当者、事務局で構成され、テーマに基づいて協議が行われる。関係機関と学校との円滑な連携や情報の共有の貴重な機会であり、課題のある事柄について、適宜助言を行った。

(9)兵庫県スクールカウンセラーとしての業務	令和 2 年 4 月～現在に至る	兵庫県内の特別支援学校のスクールカウンセラーとして年８回の、特別支援学校に在籍する児童生徒または保護者に対するカウンセリングを行う。また、教員との情報共有、コンサルテーションを実施する。教職員対象のカウンセリングマインド研修を行う。
(10)奈良学園大学における活動	平成 31 年 4 月～現在に至る	人間教育学部学生相談室カウンセラー、学生支援センター運営委員、教職・保育課程委員会委員　として学部学科の代表として参画した。主に、学生支援センター運営委員・学生委員会委員・奈良学園大学同窓会ワーキング委員として、奈良学園大学同窓会の立ち上げ、学生相談の充実、学生相談連絡会の運営、合理的配慮の提供に関する体制整備等、委員として企画・運営に関わった。
４　その他		なし
(1)日本 LD 学会広報委員会　副委員長	平成 31 年 5 月～現在に至る	日本 LD 学会の広報委員会の委員会運営、年 4 回の広報誌の発行、各記事の執筆者の依頼等、会員及び一般向けの専門的情報発信等を進めている。
(2)奈良学園大学三郷キャンパスにおける学生相談室キャンパスカウンセラー	平成 31 年 4 月～令和 4 年 3 月	三郷キャンパスの人間教育学部の学生を対象とした学生相談室カウンセラーとして、定期的な相談のほか、事前予約なしの訪問時間を設定し、学生の支援に当たっている。登美ヶ丘キャンパスの学生相談担当の高橋千香子准教授と情報交換や共有をしながら対応した。
(3)バイオメディカル・ファジイ・システム学会第 34 回年次大会　大会組織委員	令和 2 年 10 月～令和 3 年 12 月	令和 3 年 12 月開催（奈良学園大学、オンラインのハイブリッド開催）の第 34 回年次大会の大会組織委員を務め、大会運営に従事した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） １　自前イラストでちょこっと SST	共著	平成25年6月	明治図書出版　第１５４号 「特別支援教育の実践情報 6-7 月号」	特別支援教育についての実践を掲載した著書 Ｂ5判　全73頁 共著者：太田篤志、高山恵子、安藤隆男、岡野由美子、 他３３名 担当部分：（ｐ４０～ｐ４１）視覚障害児支援を行いながら、SST に取り組んだ実践である。自閉症のある児童が、通常の学級における交流学習や休み時間を過ごす中でいろいろなトラブルや困難に出会う経験を積むことが多いが、様々な場面を想定したソーシャルスキルトレーニングを行った具体的な支援を述べた。

２　間違い探しイラストをつかって～たのしくおはなしコミュニケーション～	共著	平成27年7月	明治図書出版　第１６８号 「特別支援教育の実践情報 10-11月号」	特別支援教育についての具体的指導方法実践を掲載した著書 B5版　　全72頁 共著者：大塚　晃、樋口一宗、河村　久　、岡野由美子 　　他３１名 ・担当部分：（p４７）人とのかかわりについて、順序性のあるイラストを使って会話やコミュニケーションを高める実践について４枚のイラストを用いて、その順序を考える中で、自閉症スペクトラムのある児童が、物事の事象の前後を考えることや、並べ方について説明をするなどの会話と通して、コミュニケーションの向上を目指した実践について述べた。
３　小中学校の先生のための特別支援教育ハンドブック	共著	平成30年12月	兵庫県立特別支援教育センター	小中学校の先生のための、特別支援教育に関する基本的な内容をまとめた教師向きの著書である。特別支援教育に関する国の動向や法的な事項、特別支援学級担任のための、種別ごとの障害特性とその指導・支援、教科書選定、教育課程の組み方、通級による指導の制度、教育課程の編成と指導方法、自立活動のあり方、個別の教育支援計画、個別の指導計画の立て方などを指導主事としてまとめた。 A４判　全96頁 共著者：沖汐守彦、松本武、堀井美佐、藤原しをり、浅野　尚佳、岡野由美子 担当部分：P11～26,P45～50,P73～78,P83～88,P90～91について共著、抽出不可
４　特別支援教育総論	共著	平成31年3月	ERP出版株式会社 全70頁	小中学校の特別支援の各障害についての特徴の説明。障害の応じた教育課程編成とその指導法について論じた。 A6判　全　　頁 共著者：中島栄之介 担当部分：　　抽出不可
５　兵庫教育No.850	共著	令和3年12月	兵庫県教育委員会 全40頁	共生社会の実現に向けた特別支援教育の充実～「双方向」をキーワードとして～として、今後の特別支援教育の展開について、論述した。 A4版　　全40頁 共著者：島津明日香、猪子かおり、齋藤弓絵、田渕伸司　他８名 担当部分：p4～p7を単著
６　通常の学級におけるビジョントレーニングの実践	共著	令和4年4月	明治図書出版 「LD & ADHD & ASD」 No.29	学び方の違う子へのサポートに関する実践を掲載した著書 B５番全68頁 共著者：川端秀仁、奥村智人、簗田明教、他17名 担当部分：p28～31を単著 特集「見る力」を育む「ビジョントレーニング」―概論・アセスメント・指導の実際―　において、通常学級における実践をトレーニングの前後のデータをもとに、その効果と指導への活かし方について論述した。

（学術論文） 1. 発達障害の可能性のある児童への読み書きのつまずきに対する 多感覚活用の視点からの支援に関する一考察	単著	平成30年8月	人間教育第１巻第７号 （P199～210）	通常学級に在籍する発達障害の可能性のある児童の、読み書きのつまずきに対する支援方法について考察した。視覚入力を補助する手段として触覚教材は読みの困難さを軽減することができ、読みの速度を遅くする傾向があるが、読みやすさを感じさせる傾向もあり、注意を持続しながら読むことで読み誤りが減り、学習効率に影響を及ぼす可能性が示唆された。
2. 知的障害のある児童生徒の教育課程と指導法について ― 新学習指導要領の改訂に視点を当てて ―	単著	平成30年9月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル「人間教育」 第1巻第8号 （p249～260）	教育課程の編成について、特別支援教育を巡る学習指導要領の動向を、確認し、教育課程編成の基本的な理念、編成の手順について具体的に論じる。本稿は特別支援の知的障害についての教育課程について、具体的な指導方法における配慮事項にも言及する。その中でも、自立活動の支援と評価について、具体的な事例を挙げて、筆者が多くの学校を参観し、教育課程と指導法を表裏一体として指導をしてきた、新たな視点を加味し論じた。
3. 学習障害や注意欠陥多動性障害の可能性のある児童の読み支援への一考察～注意、集中力へのアプローチに視点をあてて～	単著	平成30年10月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル「人間教育」 第1巻第9号 （p281～287）	読みに躓きのある児童の中には、注意欠陥・多動性障害などの注意・集中に課題のある場合がある。触覚教材によって、読み教材に集中をしながら読むことで、内容の理解が進む可能性があることを実験により考察した。
4. 特別支援教育の視点から見た学習指導要領の改訂のポイント① ～インクルーシブ教育システム構築のために～	共著	平成30年10月	ERP 出版株式会社 ｐ14～p15	改訂が行われた小学校・中学校学習指導要領における、特別支援教育に関する内容について整理し、その上で今後取り組むべき課題と重要事項について論じた。
5. 特別支援教育の視点から見た小中学校学習指導要領の改訂のポイント② ～教育課程と自立活動～	共著	平成30年11月	ERP 出版株式会社 P14～15	新学習指導要領における、特別支援学級、通級による指導の中で、必要に応じて指導することとなっている「自立活動」について、具体的な改訂内容を指導・支援に生かすための効果的なな考え方や指導方法について論じた。
6. アセスメントに基づいた特別の教育課程設定についての一考察～特別支援学級における、個別の指導計画を生かす日々の教育活動～	単著	平成30年11月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル「人間教育」第１巻第１０号(p299～308)	新学習指導要領においては、特別支援学級の教育課程の編成について、その手順や指導すべき内容などが規定された。その実態把握、個別の指導計画、そして特別の教育課程を密接に関連させた事例を提示し、そのあり方について論じた。
7. 特別支援学級担任への研修体制に関する一考察 ～特別支援教育センター研修講座の充実について～	単著	平成30年12月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル「人間教育」第2巻第1号(p1～10)	特別支援学級の担任特別支援学級担当教員等研修講座の充実に向けた取り組みの現状と今後の課題について考察した。新任特別支援学級担当教員に対する研修内容を充実するために、教職員のニーズについてアンケートを実施し、講座の内容を充実に反映した実践例や研修のあり方についても論じた。
8. 知的障害のある児童生徒の教科等を合わせた指導に関する一考察―障害特性の強みを生かした指導の在り方―	単著	平成31年1月	奈良学園大学研究紀要第１０集	知的障害のある児童生徒に対する、効果的な教科等を合わせた指導のあり方について、具体的な指導内容や、効果的な指導のあり方とはどのようなものか、具体的指導事例を挙げ、論じた。

9. 障害特性に応じた指導方法の工夫～自閉スペクトラム症のある児童生徒の自立活動について～	共著	平成31年1月	奈良学園大学研究紀要第１０集	障害特性に応じた指導方法の工夫として、自閉スペクトラム症のある児童生徒への自立活動について、具体的指導事例を挙げ、特別支援学級および通級による指導における、実態把握や目標の設定、自立活動の指導内容の選定について論じた。共著者：松田智子
10. 通常の学級における日常活動としてのビジョントレーニング～「見る」力の高まりから、読み書き能力の向上へ～	共著	平成30年12月	日本LD学会第2回研究集会抄録p 3～4	通常学級におけるビジョントレーニングの取り組みの効果について、様々なアセスメントから検証した。学級集団としての取り組みが学級全体に及ぼす効果と、個の変容について、データから分析を行い、考察したことについて発表した。 共著者：奥村智人　増本利信
11. 特別支援教育におけるICT活用に関する一考察 ～障害のある児童生徒の支援ツールとしてのICT～	単著	平成31年6月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル「人間教育」第2巻第5号(p135～143)	特別支援教育におけるICT活用の有効性があることから、法改正や学習指導要領の改訂においてどのように転換が行われているか、また、効果的なICT活用について実践例をあげて論じた。
12. 通常の学級における、障害理解教育に関する授業実践～発達障害のある児童生徒理解を図る授業実践事例を通して～	単著	令和元年7月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル「人間教育」第2巻第6号（p145～153）	通常の学級において、発達障害のある児童生徒についての障害者理解教育の実践を行った事例を挙げ、その実践方法や成果、課題、発達障害についての障害理解教育の重要性について論じた。
13. 知的発達がグレーゾーンに位置し、自閉スペクトラム症も示唆される、入室渋り児童に対する、般性強化刺激を活用した支援の実践	共著	令和元年8月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル「人間教育」第2巻第7号（p165～173）	在籍教室への入室渋りを見せる4年生男児に、通級指導教室において教室復帰のための支援を行い、目標を設定し、トークンエコノミーシステムを実施し、行動改善が図れた事例について、検討を行った。 共著者：増本利信
14. 特別支援学級におけるキャリア教育に関する一考察～地域の特色を生かした日々の教育活動から～	単著	令和元年7月	奈良学園大学研究紀要第１１集	小学校の特別支援学級に在籍する知的障害のある児童のキャリア教育の実践について、実際の生活単元学習、自立活動の指導事例をもとにその推進方法について論じた。
15. 通級による指導担当教員の研修体制に関する一考察～特別支援教育センターの研修講座の実践から～	単著	令和2年3月	奈良学園大学研究紀要第１２集	通級による指導の担当教員のスキル向上を担う担当教員悉皆研修の実践について、受講者のアンケートをもとにそのニーズや課題について検討し、講座の内容に反映した研修のあり方について論じた。
16. 特別支援学校教育実習に関する学生のレディネスの把握に関する研究	単著	令和3年3月	奈良学園大学研究紀要第１５週	特別支援学校教育実習に関する事前指導及び事後指導において、指導すべき内容や大学と特別支援学校との連携について、投稿された文献をレビューした。
（その他）				

［教材作成］ 2　特別支援学校教育実習の手引き	単著	令和５年３月	奈良学園大学 A4判22頁	特別支援学校で実施する教育実習に関し、実習中におけるマナー、心得、授業研究に向かう取り組みや教材研究、児童生徒理解についてなど、事前指導、事後指導において授業として使用するためのテキスト。
「指導助言・講話資料」 1　通常学級における発達障害のある児童への支援の実態	単著	平成25年8月	加古川市広汎性発達障がい親の会 A4判9頁	通常学級における、発達に躓きのある児童の、読み書きの向上を図るために取り組んだ、アセスメントとビジョントレーニング、支援の方法について指導と評価を関連付けて論じた。
2 特別な支援を要する児童生徒の理解と支援について	単著	平成26年7月	大和郡山市教育委員会 A4判10頁	奈良県の教諭 30 名を対象に、通常の学級に在籍する発達障害のある児童生徒の基本的理解とその具体的な指導・支援の方法について読み書きの躓きの要因について、事例をもとにした指導とその効果について分析し方向性を提示した。
3　「見る」アセスメントから支援を考える	単著	平成26年8月	一般社団法人ゆうありてぃ A4判15頁	発達につまずきのある児童の「見る」力についてのアセスメントの意味と方法、解釈について具体例を示してまとめた。
4　発達障害のある児童の「見る」アセスメントから支援を考える。	単著	平成27年6月	播磨発達支援研究会 A4判12頁	「見る」ことから「読む」ことへの一連のメカニズムとそのつまずきについて、アセスメントの方法とその支援についてなど、具体的な例を示し、工夫してまとめた。
5 特別な支援を要する児童生徒の指導」～自立活動のあり方～」	単著	平成 27 年 7 月	兵庫県佐用町特別支援教育研修会 A4判8頁	兵庫県管理職及び教諭 20 名を対象に特別支援学級の教育課程の法的根拠と、教育課程の編成理念、知的障害及び肢体不自由のある児童生徒の教育課程の構造と指導方法について述べた。自立活動の区分、項目の詳細の説明と具体的な指導内容の事例を挙げて、資料準備して助言を行った。
6　発達障害のある子どもの理解と支援～子どもの「見る」力のアセスメント～	単著	平成27年8月	天理市教育委員会 A4判10頁	天理市立井戸堂小学校管理職及び教諭 12 名を対象に、「見る」力や「読み書き」につまずきのある学習障害の児童生徒の実態を把握するためのアセスメント「WAVES」の内容と、基本的な解釈の方法をまとめた。
7　視知覚関連のアセスメントについて～WAVES の結果の解釈～	単著	平成27年6月	姫路市教育委員会 A4判10頁	兵庫県立特別支援学校教諭及び特別支援担当教諭 14 名を対象に、読み書きに躓きのある児童生徒の指導・支援について「読む」ために必要な視知覚、認知能力、情報処理過程の理解と、「見る」力のアセスメントの方法について、また、その具体的な支援について、まとめた。
8 合理的配慮の提供とユニバーサルデザインによる授業について	単著	平成 27 年 7 月	兵庫県教育委員会 特別支援課 A4判10頁	兵庫県臨時的任用教員 60 名を対象に、通常の学級に在籍する学習や生活につまずきのある児童生徒の理解と、その指導・支援方法についてユニバーサルデザインの考え方に基づく学級づくり、学習指導の方法の工夫と、個別に配慮の必要な児童生徒の行動、学習面の困難さの理解を深めるために資料を準備して指導した。

9 特別な支援を要する児童生徒の自立活動のあり方	単著	平成28年8月	兵庫県たつの市教育委員会 A4判16頁	兵庫県たつの市立小中学校特別支援学級担任 30 名を対象に特別支援学級の教育課程の法的根拠と、教育課程の組み方、知的障害及び肢体不自由のある児童生徒の教育課程の構造と指導法について述べた。「合わせた指導」の具体的内容について「自立活動」の区分、項目の詳細の説明と具体的な指導内容の事例を挙げてまとめた。
10 発達障害のある児童生徒の理解と学級づくり	単著	平成28年8月	兵庫県神河町教育委員会 A4判23頁	神河町小中学校全教職員、教育委員、教育委員会担当者約８０名を対象に、通常の学級の担任に必要な特別支援児童生徒理解のあり方やアセスメントについて論じた。児童生徒の問題行動の背景にある原因についての理解と、その上にたった指導法・支援のあり方についてまとめた。
11 通級指導のあり方～教育課程と自立活動のあり方～	単著	平成 28 年 9 月	兵庫県西播磨地区教育事務所 A4判23頁	兵庫県西播磨地区小中学校生活支援教員及び特別支援学校教員を対象に、通級による指導について、その目的、対象となる児童生徒、指導時間等の法的根拠に基づいた制度の理解、目標と評価について指導した。さらに対象となる児童生徒の実態把握の方法と、自立活動の具体的な内容について指導例を準備して講演した。
12 通級指導教室と通常学級の連携の意義とその方法について	単著	平成29年1月	兵庫県揖龍地区教育委員会 A4判17頁	特別支援教育コーディネーター40 名を対象に 通級による指導について、その目的、対象となる児童生徒、指導時間等の法的根拠に基づいた制度の理解、目標と評価について指導した。さらに対象となる児童生徒の実態把握の方法と、自立活動の具体的な内容について指導例をあげてまとめた。
13 保護者との連携	単著	平成29年6月	兵庫県立特別支援教育センター パワーポイント 15 枚	特別支援学校教職経験２年目の教員 70 名を対象に、障害のある子どもの保護者の心理的側面の理解と、よりよい協働のあり方について、事例をあげ、保護者との連携が教育に及ぼす役割を論じた。
14 授業のユニバーサルデザイン化	単著	平成29年6月	兵庫県立但馬農業高等学校 A4判8頁	兵庫県立但馬農業高等学校の教員等約 40 名を対象に、発達障害のある生徒の基本的理解と、どの生徒にもわかりやすい授業という視点での授業改善の工夫について、ユニバーサルデザインの考え方について具体的に論じた。
15 教育課程と自立活動	単著	平成 29 年 6 月	兵庫県立特別支援教育センター A4 判 11 頁	通級による指導の制度、目標、指導内容について学び、自立活動について、区分、項目ごとの具体的指導内容について、資料を作成し講義を行った。
16 特別な支援を要する児童・生徒の理解と支援～スクールアシスタントとしての支援 Vol.1～	単著	平成 29 年８月	猪名川町教育委員会 A4 判 12 頁	猪名川町スクールアシスタント 15 名を対象に、通常学級に在籍する発達障害のある児童生徒についての理解・支援のあり方についてと、学級担任との連携のあり方や大切さについて、資料にまとめた。
17 特別な支援を要する児童・生徒の指導、支援	単著	平成 29 年８月	猪名川町教育委員会 A4 判 13 頁	猪名川町小中学校初任教員を対象に、LD 等の心理的疑似体験を通して、書けない、読めないなどの困難さのある児童生徒の心理状態を理解するとともに、児童生徒の行動からその原因を探る方法について、演習を行った。

18 特別支援学校の学級経営と児童生徒理解	単著	平成 29 年８月	兵庫県立特別支援教育センター A4 判 11 頁	特別支援学校教職経験２年目の教員 70 名を対象に、特別支援学校の学級担任として、個別の指導、支援のあり方と学級集団の指導について、また、児童生徒の理解のあり方について、資料を作成した。
19 兵庫県の通級指導の現状と課題	単著	平成 29 年８月	播磨西地区サポートネット会議 A4 判 15 頁	播磨西地区の特別支援学校、高等学校、小中学校の管理職、特別支援教育コーディネーター等サポートネット会議の会員を対象に通級による指導に関する現状と、通級による指導が児童生徒の自立と社会参加に対してどのような役割を担っているのか、ということを、学習指導要領や文部科学省の調査結果等を示した。
20 新学習指導要領と個別の指導計画	単著	平成 29 年８月	兵庫県教育委員会播磨西教育事務所 A4 判 15 頁	播磨西地区の特別支援学級担当教員、通級指導教室担当教員 170 名を対象に、特別支援学級の教育課程の編成のポイントや、自立活動の区分と項目の整理、特に知的障害のある児童生徒の教育課程の構造について、資料を作成した。
21 視知覚関連のアセスメントについて ～WAVEWS の結果の解釈	単著	平成 29 年９月	姫路市教育委員会 A4 判 24 頁	兵庫県立特別支援学校のコーディネーター、姫路市立の小中学校の通級担当者 18 名を対象に、「見る」力と「読み書き」に躓きのある児童生徒の実態を把握するためのアセスメント「WAVES」の内容と基本的な解釈についての講義を行った。また、その結果についての評価、解釈と事例検討について、資料を作成し、講義を行った。
22 特別な支援を要する児童生徒の指導・支援について	単著	平成 29 年９月	佐用町教育委員会 A4 判 17 頁	兵庫県佐用町の小中学校特別支援教育コーディネーター、教育委員会、福祉関係等各関係機関の 35 名を対象に、学習指導要領の改訂のポイントについてと、コーディネーターとしての校内支援のあり方、関係機関との連携のあり方等について、資料にまとめた。
23 通級による指導に期待されること～自立活動の具体的指導方法～	単著	平成 29 年 12 月	丹波市教育委員会・篠山市教育委員会 A4 判 21 頁	篠山市、丹波市の通級指導教室担当者、教育委員会指導主事、特別支援学校コーディネーター25 名を対象に、通級による指導における、現場や高等学校における通級による指導の兵庫県における動向についてと、児童生徒の実態把握を元にした自立活動の選定や指導について、資料を作成した。
24 やってみよう事例検討～アセスメントから指導計画へ～	単著	平成 29 年 12 月	特別支援教育士長崎支部会 A4 判 11 頁	特別支援教育士長崎支部会員 70 名を対象に、学習や生活に困難を示す児童生徒のアセスメントから、指導計画を作り出すための、ケース検討、 WISC-Ⅳ、DTVP2 などのフォーマルアセスメントと、児童生徒や担任、保護者等からの聞き取り、観察を総合的にアセスメントし、通級指導教室、通常学級、保護者それぞれについて、指導目標を考える方法等について資料を作成した。
25 特別な支援を要する児童・生徒の理解と支援～スクールアシスタントとしての支援～Vol.2	単著	平成 29 年 12 月	猪名川町教育委員会 A4 判 10 頁	猪名川町スクールアシスタント 15 名を対象に、LD 等の心理的疑似体験を通して、書けない、読めない困難さのある児童生徒の心理状態を理解するとともに、２学期を終えた時点での振り返りと３学期に向けての目標の設定について考えた。また、行動の理由を見るポイントについて、資料を作成した。

26 特別支援学級の教育課程の編成や年間計画について	単著	平成 30 年１月	兵庫県教育委員会事務局淡路教育事務所 A4 判 15 頁	淡路地区小中学校特別支援学級担任、特別支援教育コーディネーター50 名を対象に、特別支援学級の教育課程の構造についてと、自立活動の目標と内容、指導について、学習指導要領の海底のポイントについて、資料を作成した。
27 特別な支援を要する児童の、特別の教科　道徳の指導について	単著	平成 30 年２月	兵庫県赤穂郡上郡町立山野里小学校 A4 判 11 頁	上郡町立山野里小学校の教職員 24 名を対象に、特別支援学級在籍児童の、交流学級における「特別の教科　道徳」について、特別支援学級担任の支援についてや、交流学級担任との連携のあり方などについて、資料にまとめた。
28 教育課程と自立活動	単著	平成 30 年６月	兵庫県立特別支援教育センター A4 判 11 頁	兵庫県内の小中学校通級指導教室担当教員 73 名を対象に、通級による指導の制度、目標、指導内容について学び、自立活動について、区分、項目ごとの具体的指導内容について、資料を作成した。
29 障害に応じた教育課程の編成と自立活動の指導	単著	平成 30 年６月	兵庫県立特別支援教育センター A4 判 15 頁	兵庫県内の小中学校で、初めて特別支援学級の担当をする教員 500 名を対象に、特別支援学級の教育課程の編成について、障害特性の理解と、実態把握、自立活動の指導について、資料を作成し教育課程への理解を深めた。
30 障害特性の理解と支援のあり方について	単著	平成 30 年６月	兵庫県立東播工業高等学校 A4 判 15 頁	兵庫県立東播工業高等学校の教職員 24 名を対象に、発達障害の基礎的な理解と疑似体験を通じて生徒の心理状態を理解するとともに、効果的な指導、支援のあり方について、資料を作成し演習も交えた講義を行った。
31 学習指導要領移行期のポイントと個別の指導計画	単著	平成30年7月	兵庫県教育委員会播磨西教育事務所 パワーポイント 20 枚 A4 判 10 頁	兵庫県西播磨地区小中学校特別支援学級担任及び通級指導教室担当者 170 名を対象に特別支援教育に関する、学習指導要領改訂に沿った教育課程編成のポイントと、自立活動における個別の指導計画の作成について、資料を作成し実際の教育課程を比較分析し講演した。
32 進路についての合理的配慮	単著	平成30年8月	赤穂市立赤穂中学校 A4 判 10 頁	赤穂中学校教員及び管理職 30 名を対象に、中学校の通常学級に在籍する発達障害のある生徒についての理解・啓発を他の生徒に行う方法、進学に向けての合理的配慮の提供に関する適切な考え方についてまとめた。
33 特別支援教育の具体的な進め方	単著	平成 30 年８月	佐用町教育委員会 A4 判 16 頁	佐用町教育研究所所員、小学校・中学校教職員　30 名を対象に、学習指導要領の改訂のポイントと、各教科等の指導における配慮事項などの工夫や、指導・支援の工夫について、疑似体験や、スリットの作成など、事例や実技などを取り入れながら理解を深めるように資料を作成して講義を行った。
34 高等学校における発達障害のある子の理解	単著	令和元年６月	兵庫県立西脇北高等学校 A4 判 19 頁	兵庫県立西脇北高等学校教員約 40 名を対象に兵庫県教育委員会事業の一貫である「高等学校における通級による指導実践研究事業」の校内研修会で資料を基に、発達障害のある生徒の他、自傷行為、非行行為等様々な課題のある生徒指導面での対応とともに、発達障害を理解し、その指導について理解できるよう、疑似体験を取り入れるなどして講義を行った。

35 通常の学級における指導・支援について～通級による指導との効果的な連携～	単著	令和元年7月	相生市特別支援教育研修講座(相生市民会館) A4判24頁	相生市学校園教職員 45名を対象に、通常の学級に在籍する児童生徒の行動面のつまずきについて、応用行動分析の考え方をもとに行動の原因やその結果についての観察の方法、行動変容につながる指導について、資料をもとに講義を行った。通級による指導についても、位置付けや通常学級との連携について理解を図った。
36 特別支援教育コーディネーターの役割とは	単著	令和元年7月	姫路市立中学校特別支援教育コーディネーター研修会 A4判19頁	姫路市内中学校教員、特別支援学校教員70名に、資料を配布して特別支援教育コーディネーターの業務の引き継ぎが十分でない、仕事が円滑に進められないなど様々な課題について論じた。校内の特別支援教育の推進においては、その引き継ぎの不十分さが弊害となっているケースもある。どのように円滑に業務を進めていけば良いか、実習を入れ、講義を行った。
37 WISC-Ⅳ等発達検査について詳しく知ろう	単著	令和元年8月	明石市特別支援研修講座 A4判19頁	あかし市教育研修所特別支援教育受講者12名に、特別な支援を要する児童生徒が、その発達の凹凸やつまずきの要因を探るために医療機関等で実施される各種の検査結果の報告について、どのように読み取り支援に生かすかということについて、資料をもとに講義を行った。支援に生かす方法について理解を深めることができた。
38　LD、ADHDの児童生徒に対する支援等について	単著	令和元年8月	神崎郡小中学校特別支援教育研修会 A4判25頁	神崎郡小中学校特別支援教育担当者等40名を対象に、発達障害のある児童生徒の指導、支援の具体的なあり方について、資料をもとに講義を行った。 障害特性の理解と、ユニバーサルデザインの授業の基本的な考え方等について理解啓発を図った。
39 特別な支援を要する子どもたちを「理解する」とは	単著	令和元年8月	佐用町教育研修所特別支援教育研修講座 A4判20頁	佐用町小中学校教員17名に対し、特別な支援を要する児童生徒の発達検査等の所見をもとに、その困難さの理解と具体的な支援方法について、資料を作成し、講義を行った。障害理解を考えるために疑似体験等を取り入れ、正しく理解することの大切さについて資料をもとに講義をした。
40 すべての教職員のための特別支援教育をふまえた授業作り	単著	令和元年8月	太子町教職員研修 A4判19頁	太子町立幼小中学校教職員240名を対象に、通常の学級に在籍する学習や生活に困難を示す児童生徒について、どのように観察し、つまずきの原因を探るかということや、通常学級の授業作りについて、事例をもとに実践的な内容として、資料をもとに論じた。

41 高等学校における通級指導について	単著	令和元年8月	高等学校における通級による指導実践研究事業校内研修会（兵庫県立宝塚西高等学校） A4判19頁	兵庫県立宝塚西高等学校教職員、保護者40名に、2年目を迎えた高等学校における通級による指導の、その指導のあり方について校内で共通理解を深めるため、概要について講義を行った。自立活動や個別の指導計画に基づいた指導のあり方について、資料を作成し説明した。高等学校の特色により、課題は異なるものの、どこでも同様に発達障害のある生徒の存在や対応の重要性があることについて指摘した。
42 WISC-Ⅳ等、発達検査の結果から具体的支援につなげるために	単著	令和元年10月	あかし教育センター特別支援教育研修講座 A4判18頁	明石市小中学校教職員約50名を対象に、発達検査の理解についての講義を行った。検査の所見は、特別な支援を要する児童生徒の保護者から情報提供として受け取り、目にする機会が多くなった現在の学校現場であるが、それを読み解き、支援につなげることができなければ活用できたとは言い難い。その基本的な解釈の仕方や、その支援方法について事例をもとに説明した。
43 早期からの教育相談・支援体制の充実に向けて	単著	令和元年11月	但馬地域特別支援連携協議会　指導助言 A4判2頁	但馬地域特別支援連携協議会委員26名で、早期からの教育相談や支援体制について、各関係機関から委嘱された委員により、情報共有がなされた。就学前の段階で、どれくらい保護者に情報を発信し、より適切な支援を受けられる関係機関と連携をとるかという課題と、連携先として、特別支援学校などのリソースの活用について等、助言を行った。
44 発達段階に応じた通級の指導	単著	令和2年1月	西播磨地区高等学校における通級による指導合同研究会（兵庫県立太子高等学校） A4判19頁	兵庫県西播磨地区小中高等学校教職員、福祉関係担当者等78名に対し、発達段階に応じた通級指導のあり方について説明した。各学校種別ごとに、通級による指導が行われている。それぞれの発達段階を理解し、今在籍している学校の先にどんな教育が展開されるのか、将来の社会参加に向けてどんな力が必要となるのかなどについて、資料を作成して論じた。
45 特別な支援が必要な生徒への対応について	単著	令和2年2月	兵庫県高等学校生徒指導協議会阪神支部協議会（兵庫県立宝塚西高等学校） A4判19頁	阪神地区生徒指導担当教員60名を対象に、問題行動等、生徒指導上課題となる生徒の行動の原因となっていることがある発達障害について、どのように理解し、対応すればよいかといことについて、資料をもとに論じた。
46 インクルーシブ教育と合理的配慮	単著	令和元年2月	高等学校における通級による指導実践事業　校内研修会（兵庫県立西脇北高等学校） A4判13頁	兵庫県立西脇北高等学校教職員40名に、年度内の校内研修の2回目を実施した。通級による指導の対象となる生徒の理解について、応用行動分析の考え方をもとに、事象に対して注意や叱責をするのではない関わり方について資料をもとに講義を行った。

47 通級指導教室と通常学級の効果的な連携について	単著	令和２年２月	神崎郡中学校特別支援教育研修会 A4 判 15 頁	神崎郡中学校通級指導担当者等約 20 名を対象に、中学校における通級による指導のあり方について講義を行った。また、通常学級との連携についてその意義や具体的指導について、自立活動の考え方や将来の自立と社会参加でのつなぎ、高等学校における通級による指導の説明など、資料をもとに行った。
48 発達障害のある生徒に対するカウンセリングマインド	単著	令和２年８月	兵庫県立上郡高等学校カウンセリングマインド職員研修会講師 A４判 15 頁	兵庫県立上郡高等学校の教員約 50 名を対象に、発達障害の診断はないものの、中学時代から問題行動があったり、不登校や留年などの課題の多い生徒について、どう理解し、支援していけば良いか、資料に基づき講義を行った。
49 研修・研究とは	単著	令和２年７月	兵庫県立西神戸高等特別支援学校校内研修会 A４判７頁	兵庫県立西神戸高等特別支援学校の教員 53 名を対象に校内研修を行い、新設４年目を迎え、特別支援教育の校内の充実を図るため、研修体制を構築し、全職員で同じテーマに向けたそれぞれの研修の深め方、進め方について、講義を行った。
50　アセスメントと支援	単著	令和２年 10 月	兵庫県立特別支援教育センター研修会 A４判 18 頁	兵庫県立特別支援教育センター研修講座の通級指導教室担当教員研修を実施し、通級による指導を担当する、兵庫県内の全教員 194 名に対し、発達障害のある児童の障害特性の理解と、的確なアセスメントによる目標設定や自律活動の指導・支援の充実について、資料を用いて講義と演習を行った。
51 特別な支援が必要な生徒への対応について	単著	令和３年２月	明石市立大蔵中学校校内研修会 A４判 18 頁	あかし教育研修センター講師派遣事業として、明石市立大蔵中学校教員 35 名に講演を行った。中学校における特別支援教育、ユニバーサルデザインの授業について、資料を元に講義を行った。
52 愛着障害・発達障害特性と支援のアプローチの仕方	単著	令和３年７月	南あわじ市立広田中学校 A４判 16 頁	愛着障害の可能性のある生徒との関わり方や、発達障害との違い、支援について、資料をもとに講義を行った。

53 ユニバーサルデザインの視点を活かした学級づくり、授業づくり	単著	令和３年８月	赤穂市特別支援教育自主的研究推進事業夏季研修会 A４判 15 頁	「ユニバーサルデザインの視点を活かした学級づくり、授業づくり」として、すべての児童にわかりやすい授業の工夫や、安心して過ごせる学級づくりについて資料をもとに講義を行った。
54 通級の実践的な指導法について	単著	令和３年８月	神崎郡小中学校特別支援教育夏季研修会 A４判 16 頁	通常の学級担任や管理職など、特別支援教育の担当者ではない教員が、通級による指導とはどのようなもので実際にはどのような指導をする場所なのか、という基本的な内容から、実際の指導について、資料を作成し講義を行った。
55 これからの通級に必要なこと	単著	令和３年８月	高等学校における通級による指導実践合同研究会 A４判 16 頁	高等学校における通級による指導についてと、それぞれの発達段階に応じた効果的な指導・支援のあり方について、資料をもとに講義を行った。
56 児童生徒の障害の状態を踏まえた教育課程の編成について	単著	令和３年８月	兵庫県淡路地区学級経営（特別支援教育）研究会 A４判 16 頁	児童生徒の障害の状態を踏まえた教育課程の編成について、個別の教育課程の作成、個別の指導計画、教育支援計画の作成、読み取りなど、実際的な内容について資料を作成し、講義を行った。
57 児童生徒の障害の状態を踏まえた特別の教育課程の編成について	単著	令和３年 10 月	淡路地区学校経営（校長）研修会 A４判 16 頁	特別支援教育の視点を活かした学校経営のあり方や、チーム学校としての特別支援教育への取り組み方についてなど、資料を作成し講義を行った。
58 通級による指導～一人ひとりの状況に応じた指導や配慮	単著	令和３年 11 月	姫路市特別支援教育コーディネーター研修	通級による指導について、自立活動を中心とした具体的な指導の実際を例を挙げ、講義を行った。

59 インクルーシブ教育時代における特別支援教育	単著	令和４年１月	明石市スーパーバイザー派遣事業　明石市立鳥羽小学校校内研修 A4 判 17 頁	特別支援学級、通級による指導、通常の学級などさまざまな教育の場における特別な指導のあり方について、具体例を挙げながら資料をもとに講義を行った。
「学会発表等」 １「通常学級で取り組んだ児童の「見る力」へのアプローチ～日常活動として取り組んだビジョン・トレーニングとアセスメント～」	—	平成 23 年 10 月	日本 LD 学会第 20 回大会 跡見学園女子大学 ポスター発表 抄録p268-269	毎朝約５分間のビジョントレーニングを数ヶ月行った通常学級の児童の眼球運動の向上の有無を検証約２ヶ月間、ビジョントレーニングを行ったトレーニング実施群と、トレーニング非実施群について、眼球運動に関わるアセスメントをトレーニングの前後で行い、その効果について提案した。
２「通常学級で取り組んだ児童の「見る力」へのアプローチ２～日常活動として取り組んだビジョン・トレーニングとアセスメント～」	—	平成 24 年 10 月	日本 LD 学会第 21 回大会 （宮城教育大学） ポスター発表 抄録p432-433	前年度の児童の眼球運動の向上の有無を検証研究結果を基に、さらに細かいアセスメントを行い、ビジョントレーニングの効果について検証を行った。５年生と６年生において、実施群と非実施群において、約５ヶ月のビジョントレーニングを行い、その効果と仮説について新たな提案をした。
３「通常学級で取り組んだ児童の「見る力」へのアプローチ３～日常活動として取り組んだビジョン・トレーニングとアセスメント～」	—	平成 25 年 11 月	日本 LD 学会第 22 回大会（パシフィコ横浜） ポスター発表 抄録 p474-475	前年度から継続して約１年間、児童の眼球運動の向上の有無を検証トレーニングをした結果の分析と検証した。取り組みの結果、遠見視写検査について、有意差が認められ、トレーニングの有用性が見られたことを提案した。
4「読み書きにつまずきのある児童のアセスメントと指導～オプトメトリスト、通級、通常学級３者の立場から～	—	平成 28 年 11 月	日本 LD 学会第 25 回大会 （パシフィコ横浜） 自主シンポジウム JE１ WEB 論文集のため冊子資料なし	読み書きに躓きのある児童生徒のアセスメントと指導について、通常の学級の教員の立場から発表した。毎朝のビジョントレーニングの結果と、通常の学級でできる指導について、通級による指導との連携について、提言を行った。 シンポジスト： 岩永竜一郎、奥村智人、増本利信、岡野由美子
５　「特別支援教育における読解力向上の試み～読み書き困難から視覚障害、聴覚障害に至るまで～	—	平成 30 年 10 月	日本特殊教育学会 56 回大会自主シンポジウム （グランキューブ大阪） 冊子資料ｐ44	読み書きに躓きのある児童へのアセスメントと指導について、実践発表。発達段階を踏まえた、個々の児童への指導・支援のあり方についてまとめた。 シンポジスト：川崎聡大、加藤哲則、奥村智人、安藤明伸、深谷圭助、樋口一宗、荻布優子、松崎泰
６「通級指導教室のこれまでとこれから」 ～小学校、中学校、高等学校の LD 通級担当者による、現場からの提言～	—	平成 30 年 11 月	日本 LD 学会第 27 回大会自主シンポジウム （新潟コンベンションセンター） 冊子資料ｐ59－60	高等学校における通級による指導が、平成 30 年度から始まったことを踏まえ、通級による指導の担う役割と効果的な指導についての提言。ある程度軌道に乗った小中学校の通級による指導、モデル校として数年取り組んだ高等学校の通級指導教室担当者から、現場における実情や課題を提案し、総括する。 シンポジスト：上野一彦、増本利信、高橋範充、桂志保、岡野由美子
７「通級指導教室のこれまでとこれから第２弾」～小学校、中学校、高等学校の LD 通級担当者による、現場からの提言～	–	平成 31 年 11 月	日本 LD 学会第 28 回大会自主シンポジウム （パシフィコ横浜） 冊子資料 p67-68	通級による指導の制度が小学校から高等学校まで整った。これにより、発達段階を踏まえた通級による指導の重要性が増している。それぞれの通級指導教室担当者から、現在の課題や今後の在り方について提言をし、総括する。 シンポジスト：岩永竜一郎、増本利信、高橋範充、荒木弘行、岡野由美子

８「高等学校の個別の指導計画・教育支援計画について考える」	―	令和 2 年 10 月	日本LD学会第29回大会自主シンポジウム（WEB開催） 冊子資料p59-60	高等教育における個別の指導計画・支援計画の作成や活用の実際、中学校との連携、アメリカの高校でのＩＥＰの例を紹介し、今後の高校の個別の指導計画・教育支援計画の在り方について提案し、協議した。 シンポジスト：岩永竜一郎、南波聡、Todd Sanders、増本利信、岡野由美子

様式２

教　育　研　究　業　績　書

令和5年3月31日

氏名　岡 村　季 光

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
1.　キャリア教育の実践	平成16年４月～平成26年３月	奈良保育学院にて進路指導を継続的に行うため，常勤教員全員がオムニバスに担当する「課題研究」を開講した。授業では，学生の基礎能力向上のため履歴書作成（含．自己ＰＲ，志望動機），業者添削による小論文指導，漢字の学習を主に担当した。１回生後期～２回生前期に至る開講を行い，学生の進路への意識づけを喚起することができた。
2.　初歩の心理統計学を用いたデータ分析処理の実践	平成28年4月～現在に至る	奈良学園大学にて平成28年度より開講した「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」において，高校の数学Ⅰの知識を利用した初歩の心理統計学を用い，調査や実験を通して取得したデータを分析することで，心理学研究法を学んだ。その結果，心理学研究論文に記載されているデータの意味を理解し，卒業研究に必要な文献購読の初歩的スキルが向上した。
3.　調査及び統計解析に基づく卒業論文の指導	平成29年4月～現在に至る	奈良学園大学にて平成29年度より開講した「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」「卒業研究」において，文献による先行研究の概観，仮説に基づく調査や実験の実施，統計解析における実証的検討及び考察を通して卒業論文の執筆指導を行った。その結果，平成29年度は4名，平成30年度は3名，平成31（令和元）年度は1名，令和3年度は1名の学生が卒業論文を完成し，いずれの学生もデータに基づき現象の把握及び考察を行うアカデミックスキルの育成を行うことができた。
２　作成した教科書，教材		
1.　教育心理学テキスト共同執筆 『改訂版 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－』（再掲）	平成21年10月～平成28年９月	『改訂版 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－』を共同執筆した。帝塚山大学で担当する「教育心理学」（教職科目，２年次配当，半期，必修２単位）にて当該教科書を使用した。
2.　教育心理学テキスト共同執筆 『よくわかる！教職エクササイズ　教育心理学』（再掲）	平成30年４月	『よくわかる！教職エクササイズ　教育心理学』を共同執筆した。
3.　教育相談テキスト共同執筆 『コンパス 教育相談』（再掲）	令和４年３月	『コンパス 教育相談』を共同執筆した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1.　奈良学園大学における授業満足度アンケート結果	令和４年度	前期は講義内容・方法に関して全体平均3.67～3.99に比し当該教員の平均は3.33～4.13であった。 後期は講義内容・方法に関して全体平均3.67～4.29に比し当該教員の平均は3.61～4.40であった。
2.　帝塚山大学における授業満足度アンケート結果	令和４年度	「総合的に判断して，この授業はあなたにとって意義のあるものですか。」の質問に対し，“意義がある”52%，“ある程度意義がある”462%，“あまり意義がない”1%，“意義がない”0%という結果であった。

事項	年月日	概要
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1.　奈良保育学院における教育相談業務	平成13年４月～平成26年３月	奈良保育学院にて学業成績不振者本人及び保護者を呼び出し，学校心理学の見地に基づく学業指導を行った。また，学校不適応を訴える学生の相談業務を随時行い，同時に予防的教育相談業務として遅刻・欠席が目立つ学生等，いわゆる“気になる”学生の把握及び対応を常勤教職員同士で連携を図りながら行っている。
2.　奈良学園大学における学生支援センターのケース会議に参加	平成26年４月～平成31年３月	奈良学園大学で，高校からの環境の激変や発達障害等による学生問題行動事象に対して，医療機関と連携して，学生のカウンセリングを継続的定期的に担当した。また該当学生にかかわる教員全員に対し「学生指導上の配慮の手紙」を発行するなどして，カウンセリング効果を組織的に実効あるものにするよう指導的役割を果たした。また，関係者が集まり該当学生につき論議するケース会議を月に1回の割合で定期的に主催した。
５　その他		
1.　奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科における教育実績	平成12年４月～平成26年３月	奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科にて（平成12年４月～非常勤講師，平成13年４月～平成26年３月教育職員として），以下の科目を担当した。 「発達心理学（現．保育の心理学Ⅰ）」（平成12年４月～平成26年３月。平成23年10月～科目名変更） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「発達心理学（現．保育の心理学Ⅰ）」（専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）において人間の様々な諸側面の生涯発達に関する内容の授業を行い，それによって，学生に人間のライフサイクルや発達段階及び発達課題について理解させる教育効果があった。 「教育心理学」（平成12年10月～平成26年３月） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「教育心理学」（専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）において教育・保育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育・保育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「保育臨床心理学Ⅰ（現．保育の心理学Ⅱ）」（平成13年４月～平成26年３月。平成23年４月～科目名変更） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「保育臨床心理学Ⅰ（現．保育の心理学Ⅱ）」（専門科目，１年次配当，半期，必修１単位）において幼児の心的理解の方法に関する内容の授業を行い，それによって，学生に子どもの発達や知的能力，性格に関するアセスメント及び保育への貢献について理解させる教育効果があった。 「精神保健」（平成13年４月～平成23年９月） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「精神保健」（専門科目，２年次配当，半期，必修２単位）において子どものメンタルヘルスに関する授業を行い，それによって，学生に発達障がいについて理解させる教育効果があった。

事項	年月日	概要
奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科における教育実績（続き）		「保育臨床心理学Ⅱ（現．カウンセリング概論）」（平成13年10月～平成26年３月。平成24年10月～科目名変更予定） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「保育臨床心理学Ⅱ（現．カウンセリング概論）（専門科目，２年次配当，半期，必修１単位）においてカウンセリングの理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生にカウンセリング・マインドを育成する教育効果があった。
2. 帝塚山大学現代生活学部食物栄養学科・居住空間デザイン学科における教育実績	平成22年４月～現在に至る	「教育心理学」（平成22年４月～現在に至る） 帝塚山大学 現代生活学部食物栄養学科・居住空間デザイン学科の「教育心理学」（教職科目，２年次配当，半期，必修２単位）において教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「教育相談」（平成22年10月～現在に至る） 帝塚山大学 現代生活学部食物栄養学科・居住空間デザイン学科の「教育相談」（教職科目，３年次配当，半期，必修２単位）において教育相談に関する理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生に教育相談の意義とカウンセリング・マインドの必要性について理解させる教育効果があった。 「発達心理学」（令和４年４月～現在に至る） 帝塚山大学 現代生活学部食物栄養学科・居住空間デザイン学科の「発達心理学」（一般科目，２年次配当，半期，選択２単位）において人間の様々な諸側面の生涯発達に関する内容の授業を行い，それによって，学生に人間のライフサイクルや発達段階及び発達課題について理解させる教育効果があった。
3. 帝塚山大学教育学部こども教育学科における教育実績	令和２年10月～現在に至る	「教育相談」（令和２年10月～現在に至る） 帝塚山大学 現代生活学部こども学科（令和４年度から教育学部こども教育学科）（教職科目，４年次配当，半期，必修２単位）において教育相談に関する理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生に教育相談の意義とカウンセリング・マインドの必要性について理解させる教育効果があった。

事項	年月日	概要
4.　奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績	平成26年４月～現在に至る	「基礎ゼミナールⅠ」「基礎ゼミナールⅡ」（平成26年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「基礎ゼミナールⅠ」「基礎ゼミナールⅡ」（いずれも専門科目，１～２年次配当，通年，必修２単位）において，大学生として，高度な専門知識と確かな学士力を身につけるためのアカデミックスキルを身につけることを目指し，上述のスキルの基礎となる文献研究の方法やレポート作成法などを教授し，スキル育成の教育効果があった。 「教職表現力演習Ⅰ」（平成26年４月～平成29年３月まで） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教職表現力演習Ⅰ」（専門科目，１年次配当，通年，選択２単位）において，新聞記事や評論文等を参照する，あるいは講話を聴き文章を作成する授業を展開した。それによって，学生に言語活動の聴く・読む・話す・書く能力のうち特に「書く力」である「文章表現力」の基礎を身につける教育効果があった。 「教職表現力演習Ⅱ」（平成27年４月～平成29年３月まで） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教職表現力演習Ⅱ」（専門科目，２年次配当，通年，選択２単位）において，アカデミックな文章を読み，書くためのトレーニングを行った。具体的には，文章の論理性の理解，データの読み方，書籍輪読，内容発表およびディスカッションである。それらの取り組みによって，学生に言語活動の聴く・読む・話す・書く能力が養われ，特に「書く力」である「文章表現力」を身につける教育効果があった。 「発達・教育心理学Ａ（初等）」（平成27年４月～現在に至る。令和元年度までは「教育心理学Ａ（初等）」） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「発達・教育心理学Ａ（初等）」（専門科目，２年次配当，半期，選択２単位）において，就学前・初等教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に就学前・初等教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「発達・教育心理学Ｂ（中等）」（平成27年４月～現在に至る。令和元年度までは「教育心理学Ｂ（中等）」） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「発達・教育心理学Ｂ（中等）」（専門科目，２年次配当，半期，選択２単位）において，中等教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に中等教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（平成28年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（専門科目，３年次配当，通年，必修４単位）において，ライフステージにおいて特に重要視されている青年期を中心とした発達の理論を学習するとともに，青年期の諸側面について心理学の視点から理解を深めるた。また，卒業論文を視野に入れ，パソコン操作技能及び統計の基礎的知識習得にも取り組んだ。その結果，心理学研究論文に記載されているデータの意味を理解し，卒業研究に必要な文献購読の初歩的スキルが向上した。

事項	年月日	概要
奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績（続き）		「教育相談の理論と方法Ａ（初等）」（平成28年10月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育相談の理論と方法Ａ（初等）」（専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，初等教育現場における教育相談の活動並びにカウンセリングに関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に初等教育における教育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。 「教育相談の理論と方法Ｂ（中等）」（平成28年10月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育相談の理論と方法Ｂ（中等）」（専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，中等教育現場における教育相談の活動並びにカウンセリング及び心理教育に関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に中等教育における教育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。 「保育相談支援」（平成28年10月～平成31年３月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育相談支援」（専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，幼児教育現場における保育相談の活動並びにカウンセリングに関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に初等教育における保育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。 「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（平成29年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（専門科目，４年次配当，通年，必修４単位）において，卒業論文執筆に向けた先行研究の渉猟及び文献の読解に取り組んだ。その結果，卒業論文執筆に必要な序論構成を組み立てる力を養う教育効果があった。 「卒業研究」（平成29年10月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（専門科目，４年次配当，通年，選択４単位）において，仮説に基づく調査や実験の実施，統計解析における実証的検討及び考察を通して卒業論文の執筆指導を行った。その結果，平成29年度は4名，平成30年度は3名，平成31（令和元）年度は1名，令和３年度は1名の学生が卒業論文を完成し，いずれの学生もデータに基づき現象の把握及び考察を行うアカデミックスキルの育成を行うことができた。 「人間教育実践力開発演習Ｉ」（平成30年４月～平成31年３月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育実践力開発演習Ｉ」（専門科目，１年次配当，通年，選択２単位）において，教育・保育実践力を高めるために，地域園・学校へのボランティアに参加するための事前学習や行事参加を通して，幼児教育・保育における今日的課題について理解を深め，ボランティアに参加するまでの課題を各自が明確にすることができた。

事項	年月日	概要
奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績（続き）		「人間教育実践力開発演習Ⅱ」（平成30年４月～平成31年３月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育実践力開発演習Ⅱ」（専門科目，２年次配当，通年，選択１単位）において，教育・保育実践力を高めるために，地域園・学校へのボランティアに週１回継続的に参加することで，幼児教育・保育における今日的課題について理解を深め，教育・保育実習に向けた課題を各自が明確にすることができた。 「保育の心理学Ⅰ」（平成30年４月～平成30年９月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育の心理学Ⅰ」（専門科目，３年次配当，半期，保育士資格必修２単位）において人間の様々な諸側面の生涯発達に関する内容の授業を行い，それによって，学生に人間のライフサイクルや発達段階及び発達課題について理解させる教育効果があった。 「保育の心理学Ⅱ」（平成30年10月～平成31年３月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育の心理学Ⅱ」（専門科目，３年次配当，半期，保育士資格必修１単位）において幼児の心的理解の方法に関する内容の授業を行い，それによって，学生に子どもの発達や知的能力，性格に関するアセスメント及び保育への貢献について理解させる教育効果があった。 「保育相談」（令和元年10月～令和２年３月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育相談」（専門科目，４年次配当，後期，保育士資格必修１単位）において，現場における保育相談の活動並びに子育て支援に関する基礎的な知識及び実践を学んだ。それによって，学生に保育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。 「子ども家庭支援論」（令和３年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育相談」（専門科目，３年次配当，前期，保育士資格必修２単位）において，現場における子ども家庭支援に関する基礎的な知識及び実践を学んだ。それによって，学生に子ども家庭支援の理論と方法について理解させる教育効果があった。 「子どもの理解と援助」（令和４年９月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育相談」（専門科目，３年次配当，後期，保育士資格必修２単位）において，現場における子どもの理解と援助に関する基礎的な知識及び実践を学んだ。それによって，学生に子どもの能力における諸側面と援助について理解させる教育効果があった。
5.　平成26年度奈良学園大学公開講座の登壇	平成26年７月12日	平成26年度奈良学園大学公開講座に登壇し，講演を行った。 本講演の内容は，1)様々な学際領域から「居場所」をどのように捉えられているのか，2)実証的研究から見えてくる「居場所」とは何なのか，3)「居場所」づくりにはどのような視点が重要なのか，の３点であった。

事項	年月日	概要
6.　奈良女子大学文学部人間科学科における教育実績	平成27年10月～平成28年３月	「青年心理学特殊研究」（平成27年10月～平成28年３月） 奈良女子大学文学部の「青年心理学特殊研究」（専門科目，２年次配当，半期，選択２単位）において，生涯発達に関する理論を理解し，青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について授業を行い，それによって，学生に自らのライフを振り返り展望しながら論理的に思考する教育効果があった。
7.　大和高田市立看護専門学校看護学科における教育実績	平成28年４月～現在に至る	「人間の心・精神」（平成28年４月～現在に至る） 大和高田市立看護専門学校看護学科の「人間の心・精神」（１年次配当，半期，１単位）において，多岐にわたる心理学の領域，研究及び歴史についての基礎的知識を学んだ。本講義によって，心の働きやシステムについて理解を深め，心理学の歴史や研究における知識を得られる教育効果があった。
8.　三郷町立西部保育園の新任研修講師	平成28年10月３日	三郷町立西部保育園の新任研修講師として，「子ども理解を深める」という演題で講義を行った。具体的には，「神戸少年の街版 コモンセンス・ペアレンティング」を紹介し，大人が子どもにどのようにかかわるのが適切な方法か，ロールプレーも交えた実践的な演習課題に取り組んだ。本講義によって，子どもへの適切なかかわり方の方法論を獲得する教育効果がみられた。
9.　一般社団法人日本精神科看護協会品川研修センターにて教育理論研修会（講義内容：「教育心理－青年心理－」）の講師	平成28年11月15日	一般社団法人日本精神科看護協会品川研修センターにて教育理論研修会「教育心理－青年心理－」の講師を務めた。内容は，青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について理解を深めた。本講義によって，青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
10.　奈良県看護協会実習指導者講習会「教育心理」の講師	平成29年９月５日	奈良県看護協会にて実習指導者講習会「教育心理」の講師を務めた。内容は，青年期を中心とした生涯発達理論，認知発達過程，学習理論，学習意欲と動機づけ，カウンセリング概論及び演習であった。本講義によって，指導対象となる看護学生の年代である青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
11.　一般社団法人日本精神科看護協会京都研修センターにて教育理論研修会（講義内容：「教育心理－青年心理－」）の講師	平成29年９月25日	一般社団法人日本精神科看護協会京都研修センターにて教育理論研修会「教育心理－青年心理－」の講師を務めた。内容は，青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について理解を深めた。本講義によって，青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
12.　三郷町立西部保育園の新任研修講師	平成29年10月３日	三郷町立西部保育園の新任研修講師として，「子ども理解を深める」という演題で講義を行った。具体的には，「神戸少年の街版 コモンセンス・ペアレンティング」を紹介し，大人が子どもにどのようにかかわるのが適切な方法か，ロールプレーも交えた実践的な演習課題に取り組んだ。本講義によって，子どもへの適切なかかわり方の方法論を獲得する教育効果がみられた。
13.　教員免許更新講習（選択領域）講師	平成30年８月16日	奈良学園大学にて幼稚園教諭対象の教員免許更新講習において，「環境を踏まえた子どもの育ちと保育内容の充実」の小テーマとして，幼稚園の終わりまでに育ってほしい「10の姿」と児童期以降のつながりについて，発達心理学の観点から講義を行った。園児に現在どのような力が育ち，今後伸びていくのかを「10の姿」から考えるワークを行い，乳幼児期の学びが児童期以降の発達につながることを理解するという教育効果がみられた。

事項	年月日	概要
14. 奈良県看護協会実習指導者講習会「教育心理」の講師	平成30年９月３日	奈良県看護協会にて実習指導者講習会「教育心理」の講師を務めた。内容は，青年期を中心とした生涯発達理論，認知発達過程，学習理論，学習意欲と動機づけ，カウンセリング概論及び演習であった。本講義によって，指導対象となる看護学生の年代である青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
15. 三郷町立西部保育園の新任研修講師	平成30年10月４日	三郷町立西部保育園の新任研修講師として，「子ども理解を深める」という演題で講義を行った。具体的には，「神戸少年の街版 コモンセンス・ペアレンティング」を紹介し，大人が子どもにどのようにかかわるのが適切な方法か，ロールプレーも交えた実践的な演習課題に取り組んだ。本講義によって，子どもへの適切なかかわり方の方法論を獲得する教育効果がみられた。
16. 教員免許更新講習（選択領域）講師	令和元年８月16日	奈良学園大学にて幼稚園教諭対象の教員免許更新講習において，「環境を踏まえた子どもの育ちと保育内容の充実」の小テーマとして，幼稚園の終わりまでに育ってほしい「10の姿」と児童期以降のつながりについて，発達心理学の観点から講義を行った。園児に現在どのような力が育ち，今後伸びていくのかを「10の姿」から考えるワークを行い，乳幼児期の学びが児童期以降の発達につながることを理解するという教育効果がみられた。
17. 奈良県看護協会実習指導者講習会「教育心理」の講師	令和元年９月２日	奈良県看護協会にて実習指導者講習会「教育心理」の講師を務めた。内容は，青年期を中心とした生涯発達理論，認知発達過程，学習理論，学習意欲と動機づけ，カウンセリング概論及び演習であった。本講義によって，指導対象となる看護学生の年代である青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
18. 一般社団法人日本精神科看護協会京都研修センターにて教育理論研修会（講義内容：「教育心理－青年心理－」）の講師	令和元年９月30日	一般社団法人日本精神科看護協会京都研修センターにて教育理論研修会「教育心理－青年心理－」の講師を務めた。内容は，青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について理解を深めた。本講義によって，青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
19. 三郷町立西部保育園の新任研修講師	令和元年10月３日	三郷町立西部保育園の新任研修講師として，「特別支援における保護者対応について」という演題で講義を行った。具体的には，「（発達）障害の理解」「発達障害の対応」「保護者を「支える」ということ」という流れに沿って講義を行った。本講義によって，特別支援における子どもへの見方，適切なかかわり方の方法論を獲得する教育効果がみられた。
20. 奈良県看護協会実習指導者講習会「教育心理」の講師	令和２年８月24日	奈良県看護協会にて実習指導者講習会「教育心理」の講師を務めた。内容は，青年期を中心とした生涯発達理論，認知発達過程，学習理論，学習意欲と動機づけ，カウンセリング概論及び演習であった。本講義によって，指導対象となる看護学生の年代である青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。

事項	年月日	概要
21. 奈良県看護協会実習指導者講習会「教育心理」（一般領域）の講師	令和３年７月29日・７月30日・８月３日	奈良県看護協会にて実習指導者講習会「教育心理」の講師を務めた。内容は，青年期を中心とした生涯発達理論，認知発達過程，社会性の発達，学習理論，性格と適応，知能，学習意欲と動機づけ，教授学習理論，カウンセリング概論及び演習であった。本講義によって，指導対象となる看護学生の年代である青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
22. 大阪音楽大学音楽学部音楽学科・大阪音楽大学短期大学部音楽科における教育実績	令和３年９月～現在に至る	大阪音楽大学音楽学部音楽学科・大阪音楽大学短期大学部音楽科「青年心理学」の講師を務めた。内容は，青年期を中心とした生涯発達理論，身体発達とその認知，思考感情発達過程，対人関係，アイデンティティ形成，キャリア発達であった。本講義によって，中等教育教員免許取得を目指す学生に青年期の本質について理解させる教育効果があった。
23. 奈良県看護協会実習指導者講習会「教育心理」（特定領域）の講師	令和３年11月27日	奈良県看護協会にて実習指導者講習会「教育心理」（特定領域）の講師を務めた。内容は，教育心理（生涯発達理論，学習理論，学習意欲と動機づけ），教育原理（教育の意義と目的），教育方法（教育の基本的な方法や技術，評価方法）であった。本講義によって，指導対象となる看護学生の年代である青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
24. 奈良県看護協会実習指導者講習会「教育心理」（一般領域）の講師	令和４年８月２日～４日	奈良県看護協会にて実習指導者講習会「教育心理」の講師を務めた。内容は，青年期を中心とした生涯発達理論，認知発達過程，社会性の発達，学習理論，性格と適応，知能，学習意欲と動機づけ，教授学習理論，カウンセリング概論及び演習であった。本講義によって，指導対象となる看護学生の年代である青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
25. 奈良県看護協会実習指導者講習会「教育心理」（特定領域）の講師	令和４年10月１日	奈良県看護協会にて実習指導者講習会「教育心理」（特定領域）の講師を務めた。内容は，教育心理（生涯発達理論，学習理論，学習意欲と動機づけ），教育原理（教育の意義と目的），教育方法（教育の基本的な方法や技術，評価方法）であった。本講義によって，指導対象となる看護学生の年代である青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1. 修士（教育学）	平成13年３月	奈良教育大学　第817号 「修士論文題名：自己及び他者との関係における『居場所』の個人差」
2. 教員免許	平成13年３月	中学校教諭専修免許状（社会）取得（学校心理学付記）（平12中専修第20号，奈良県教育委員会）
3. 学校心理士	平成16年11月	第82689号 （令和元年12月更新，令和６年12月まで有効）
4. 公認心理師	令和４年９月	第56166号（令和４年９月14日登録）
2　特許等		（な　し）
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 教務全般の企画・運営	平成13年４月 ～平成26年３月	奈良保育学院にて教務係としてカリキュラム・時間割・年間行事の編成，成績管理，入試業務，奨学金業務，紀要編集委員その他関連する事務処理を主任の立場で活動した。
2. 学年担当（担任または副担任）	平成13年４月 ～現在に至る	奈良保育学院（平成13年４月～平成26年３月）及び奈良学園大学（平成26年４月～現在に至る）において学年担当（担任または副担任）を受け持ち，学生の日常における生活指導，学校心理学の見地に基づく成績不振者への学業指導及び学校不適応を訴える学生及びその保護者の相談等を受け持った。
3. 学生自治会顧問	平成14年４月 ～平成26年３月	奈良保育学院学生自治会の顧問として学生主催の新入生歓迎会，学院祭（体育祭・文化祭），送別会等の企画運営を監督した。
4. 進路指導	平成16年４月 ～平成26年３月	奈良保育学院の進路担当教員と連携して進路指導の科目（「課題研究」）を立ち上げ，１回生から２回生にかけて継続的に進路活動を行う体制を築いた。
5. 広報・募集活動	平成20年４月 ～平成26年３月	奈良保育学院の募集活動の一環として業者と連携してパンフレット・ポスター・ホームページ作成にかかわり，他教員と分担して近隣の高等学校へ訪問し広報活動を行った。
6. 広報委員会における活動	平成26年４月 ～平成27年３月	奈良学園大学にて広報委員会に所属し，委員として大学案内の内容，オープンキャンパスの内容企画，今後の広報活動及び戦略について検討を行った。
7. 教務委員会における活動	平成26年４月 ～平成30年３月，平成31年４月～令和２年３月	奈良学園大学にて教務委員会に所属し，委員としてＧＰＡ基準，試験要領の検討，追・再試験に関する取り扱い，入学前他大学等既修得単位の認定，保育士資格取得に関する整備，卒業論文にかかる諸規定の整備について体制を築いた。
8. 教職・保育課程委員会における活動	平成30年４月 ～平成31年３月	奈良学園大学にて教職・保育課程委員会に所属し，委員として介護等体験の指導，教育実習の訪問指導を行った。
9. 入学試験委員会における活動	令和２年４月 ～令和４年３月	奈良学園大学にて入学試験委員会に所属し，委員として入試要項の改訂並びに入試日の検討を行った。また，入学試験日当日には試験監督や面接官を務めた。
10. 共通教育委員会における活動	令和３年４月 ～令和４年３月	奈良学園大学にて共通教育委員会に所属し，（副）委員長としてキャンパス統合に伴う開講期の検討，共通教育科目履修登録者数及び不開講科□報告，次年度開講科□及び科□担当者の検討，特別聴講□開放科□の検討に加え，「数理・データサイエンス・AIに対応した科目」の検討を行った。
11. IR情報活用推進委員会における活動	令和３年４月 ～令和５年３月	奈良学園大学にてIR情報活用推進委員会に所属し，委員として学内のさまざまな学生情報の収集及び分析について検討を行った。

事項	年月日	概要
4　その他		
1. 関西心理学会事務局及び常任委員会活動	平成25年４月～現在に至る	関西心理学会事務局及び常任委員に任命され，平成29年３月まで学会事務局及び常任委員会の運営に携わった。また，平成27年４月より幹事に就任し，平成29年３月まで事務局の取りまとめを行った。また，平成29年４月より監事に就任し，会計監査に携わっている。
2. 奈良文化高等学校第三者評価委員会活動	令和２年４月～現在に至る	奈良文化高等学校にて第三者評価委員会委員に任命され，当該校の本科課程及び専攻科課程の学校経営計画，学校自己評価及び学校関係者評価報告書を受理した。上述の報告書に対し，それぞれの課程に高等学校相当として十分認められる旨評価を行うとともに，所見として評価の概要について意見を述べた。
3. 奈良県生駒郡三郷町子ども・子育て会議活動	令和３年１月28日～令和４年６月30日	奈良県生駒郡三郷町子ども・子育て会議にて議長に任命され，三郷町子どもの実態調査実施に向けて項目選定に携わった。
4. 日本学校心理士会奈良支部役員活動	令和３年６月19日～現在に至る	日本学校心理士会奈良支部役員に任命され，支部活動に携わっている。
5. 御所市いじめ防止対策委員会委員活動	令和４年４月～現在に至る	御所市いじめ防止対策委員会委員に任命され，御所市内の小中学校いじめに関する現況の報告を受けている。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1. 教育フォーラム第55号「実践的思考力・課題解決力を鍛える：PISA型学力をどう育てるか」	共著	平成27年２月	金子書房	実践的な諸課題に向けての解決をどう図っていくのか，そのために必要となる思考力や問題解決力をどのような形で鍛えていくか，実りある着実な学習活動の展開を具体的に提案している。 Ａ５判　全160頁 編　者：梶田叡一 共著者：伊﨑一夫・井上信子・大内善一・岡村季光・梶田叡一・加藤　明・金澤孝夫・鎌田首治朗・蔵あすか・萩原憲二・藤井幸一・藤田英治・宮岸　洋（50音順） 本人担当部分：「一人ひとりの「居場所」をどうつくるか」（pp. 111-121）の部分を単著。これまでの先行研究から居場所を「個人性－社会性」「主観性－客観性」の軸で捉えることが可能であることを示した。また，実証的研究の知見から「居場所がない」と感じる者に精神的な安定・安心を感じるような経験を提供すること，居場所感を毎日感じられる経験を積み重ねること，大人や仲間の支えにより成長・自立を図ることが重要であることを示唆した。
2. 教育フォーラム第60号「深い学びのために：アクティブ・ラーニングの目指すもの」	共著	平成29年８月	金子書房	学習指導要領にある「深い学び」は，いまだ焦点が拡散している印象がある。実践的な指導を提案しながら，基本ポイントを押さえ明確にしている。 Ａ５判　全148頁 編　者：梶田叡一 共著者：伊﨑一夫・石森広美・大畑健実・岡村季光・梶田叡一・鎌田首治朗・金山憲正・後藤紗貴・菅井啓之・善野八千子・瀧明知惠子・古川　治・松井典夫・湯峯　裕（50音順） 本人担当部分：「震災における教員の役割を考える」（pp. 125-134）の部分を執筆。本稿では避難所と学校の関係，避難所に携わる教員に焦点をあて，考察を行った。具体的には，震災時における避難所で教員は責任感や使命感をもって活動している一方，自らを省みず活動することによる教員自身の心身不調の問題を指摘した。また，熊本地震において被災した学校に勤務する教員と非災害地域の教員を比較した調査を実施した。その結果，熊本の教員が一連の熊本地震に対する長期のストレス状況にあり，エネルギーの枯渇に伴う意欲低下，自らの存在価値を見出せない教員が少なからずいることを指摘した。最後に，提言として，1)学校が平時より地域と連携することの重要性，2)避難所における教員のリーダーシップの発揮と自治組織への移譲，3)教員のメンタルヘルスへの支援を挙げた。
3. よくわかる！教職エクササイズ　教育心理学	共著	平成30年４月	ミネルヴァ書房	簡潔な解説で，教育心理学の基礎理論からその教育実践への応用まで学べる。授業で使いやすいよう，ディスカッション課題やワークなどの演習課題，資料図版を豊富に掲載。ノートページには書き込みの課題を提示しており，学生が自ら考え，つくりあげることができる。各講の最後は教員採用試験を掲載している。 Ｂ５判　全216頁 編　者：田爪宏二 共著者：今林俊一・梅本貴豊・岡村季光・下木戸隆司・滝口圭子・立元 真・原口 恵・増田優子・森田健宏（50音順） 本人担当部分：「第４講 心身の発達③青年期以降」（pp. 50-60.）部分を単著。青年期における身体発達，対人関係の発達，発達主題（アイデンティティの統合）についてそれぞれ説明を行った後，成人期以降の発達について紹介した。また，「青年期」の誕生についても，歴史的背景を中心に説明を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. コンパス 教育相談	共著	令和４年３月	建帛社	教育相談の総論的内容から，子どもの問題行動に着目した実践的内容，教育相談を担う教師・保育者が必要となる内容までを網羅し，解説。子どもが抱える問題やその背景を理解するための理論，最新の知見を学べる。 B5判　全144頁 編　者：住本克彦 共著者：赤松久美子・新井 肇・磯部美良・荆木まき子・岡村季光・加島ゆう子・片山則昭・加藤由美・門原眞佐子・上地玲子・小泉令三・阪中順子・坂中尚哉・定金浩一・清水里香・高橋彩・高橋千香子・高橋典久・立浪朋子・崔 回淑・葉山貴美子・原 志津・深津久美子・福森護・藤田由起・古川 治・松田文春・南 雅則・山口裕毅（50音順） 本人担当部分：「第１章 教育相談の意義 ３ 教育・保育に求められる臨床的な視点」（pp. 7-9）部分を単著。本項では，第１に心理臨床で求められる視点を取り上げ，教育・保育に求められる臨床的な視点との異同を比較した。第２に心理学における対象をとらえる視点について触れた。上述の検討を行うことで，教育・保育に求められる臨床的な視点において，子どもの様子をよく観察し，信頼関係を築くことの重要性を指摘した。また，これまでの経験・知識と教育・保育で見いだされた知見の両面を参照しながら子どもと関わることを指摘した。
（学術論文） 1. 「居場所」（安心できる人）とひとりで過ごす感情・評価の関係	単著	平成26年９月	奈良学園大学研究紀要第１号 pp. 191-197.	安心できる人の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果，“自分ひとり”の安心感を高く評定するものは，ひとりで過ごすことに肯定的な捉え方をしていることが示唆され，ひとりで過ごす感情・評価との関係が明らかになった。これはひとりで過ごすことに必ずしもネガティブな感情を抱いていないことを示唆するものであった。
2. 保育学生におけるコラージュ作品の形式分析及び作品印象に関する基礎的研究	共著	平成26年12月	奈良保育学院研究紀要第16号 pp. 103-110.	本研究の目的は，コラージュ作品の表現特徴を多方面にわたり分析し，さらに作品印象に関してテキストマイニングを用いて定量的に検討することであった。保育専門学校に所属していた１回生367名を対象に検討した結果，先行研究とほぼ合致する結果が得られ，コラージュ療法における表現特徴が，心理臨床のアセスメントに有益な指標をもたらすであろうことが示唆された。 共著者：岡村季光・吉野さやか 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
3. コラージュ作品と性格特性の関係：表現特徴とエゴグラムパターンの検討 （査読付）	共著	平成26年12月	人間教育学研究第２号 pp. 157-162.	本研究の目的は，性格特性とコラージュ作品の関連を検討することであり，387名の専門学校生にエゴグラム（TEGII）及びコラージュ作品制作を実施した。その結果，エゴグラムパターンにより切片数，余白，作品の満足度に違いがみられることが明らかになった。すなわち，1)切片数が多い者は心的エネルギーが高い性格特徴である可能性が，2)余白が多い者は心的エネルギーが低く，依存的で気分・感情の不安定さを伴う性格特徴である可能性が，3)満足度が低い者は自己否定の構えを持っている可能性が，それぞれ示唆された。 共著者：岡村季光・吉野さやか 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. 青年期後期における新旧の同性友人への安心感と学校適応感の関連	単著	平成27年９月	奈良学園大学研究紀要第３号 pp. 229-233.	本研究の目的は友人関係機能の「安定化機能」に着目し，一緒にいて「安心できる」という本人の主観的感情を手がかりにして友人を想起させ，新旧の同性友人の選択有無と現在の学校適応感との関連を検討することであった。新旧の同性友人の選択有無により群分けを行い，学校適応感との関連を検討した結果，新友人を選択した者が，旧友人のみを選択した者あるいはいずれも選択しなかった者に比して，現在の学校適応感は高かった。本研究結果は新旧友人関係が学校適応感に影響を及ぼす可能性を示唆するもので，今後の学校適応を考える上で意義のあるものと考えられた。
5. 「居場所」（安心できる人）を規定する要因―成人愛着スタイルによる検討― （査読付）	共著	平成27年12月	人間教育学研究第３号 pp. 175-180.	本研究は対人関係の表象として挙げられる愛着スタイルに着目し，安心できる人の程度の評定に与える影響を検討した結果，男子において安定型とアンビバレント型が，女子においてアンビバレント型と回避型が予測変数として有意であることが明らかとなった。本研究の結果は，居場所によって愛着スタイルが安心できる程度に及ぼす効果が異なることを示している。それ故，安心できる程度を適応の指標とした場合には，愛着スタイルが適応に及ぼす効果に対して，居場所が調整変数として機能したことが示唆された。 共著者：岡村季光・豊田弘司 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
6. 「居場所」（安心できる人）を規定する要因―ひとりで過ごす感情・評価及び成人愛着スタイルによる検討―	共著	平成28年11月	奈良教育大学紀要第65巻１号（人文・社会） pp. 27-34.	本研究は，対人関係の表象として挙げられるアタッチメントのパターンである愛着スタイルに着目し，「居場所」における安心できる程度の評定値，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果，安心できる人を規定する要因として，男女ともに“自分ひとり”は“孤独・不安”，“母親”は“見捨てられ不安”がそれぞれ予測変数として有意であった。また，“現学校以降の友人”は男子が“親密性の回避”，女子は“見捨てられ不安” がそれぞれ予測変数として有意であった。 共著者：岡村季光・豊田弘司 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
7. 保育者の子育てに関する一考察　―わが子の子育ての悩みに注目して―	共著	平成29年３月	奈良学園大学研究紀要第６号 pp. 115-124.	本研究では，第１に，現代の保育者がどのような子育ての悩みがあるのかを明らかにすること，第２に，保育者の子育てに関する悩みと，保育者としてのアイデンティティ形成，パーソナリティ，職務についての認識，職業観との要因との関連について検討した。その結果，各変数は年齢及び保育者歴による影響が考えられたため，両者の要因を統制した偏相関係数を子の有無別で算出し検討した。子のいない者は，子育ての経験のなさが自信のなさにつながっている可能性がある一方，保育者として誇りを持っている者は，他者から認められることが支えになっていることが考えられた。また，子のいる者は，子育て経験が自らの子育て経験が保育者としての誇り等とつながっていることが考えられる一方，保育者であることに迷いや戸惑いを感じている者は，アイデンティティの揺らぎを感じていることがうかがえた。 共著者：岡村季光・間井谷容代・谷本一榮 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8. 対人関係が「居場所」（安心できる人）に及ぼす影響　―友人関係及び家族関係による検討―	共著	平成29年３月	奈良教育大学次世代教員養成センター紀要第３号 pp.83-87.	家族並びに友人への親和欲求が，居場所（安心できる人）評定に及ぼす影響を検討した。その結果，1)男女ともに，“父親”，“母親”及び“きょうだい”と家族との親密性は中程度の正の相関であった。2)男子において，“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”と家族との親密性，“父親”“きょうだい”及び“現学校以前の友人”と友人との親密性はいずれも中程度の正の相関であった。一方，友人との親密性において，男子は“現学校以前の友人”と中程度の正の相関であったのに対し，女子は“現学校以降の友人”と中程度の正の相関であった。3)“父親”，“母親”及び“きょうだい”は男女ともに，家族との親密性が予測変数として有意であった。友人においては，“現学校以前の友人”において，男女ともに友人との親密性が予測変数として有意であった。一方，“現学校以降の友人”においては，女子のみ有意であった。 共著者：岡村季光・豊田弘司・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
9. 英語スピーキングに対する不安尺度作成－小学校英語の教科化に向けて－	共著	平成29年９月	奈良学園大学研究紀要第７号 pp.67-74.	大学生を対象とした英語スピーキング不安の尺度作成を行った。教職課程生の英語力でも特に必要とされているのがスピーキング力だと考えられるからである。Horwitzetal（1986）のFLCAS（the Foreign Language Classroom Anxiety Scale）からスピーキング不安に関係する項目を抜粋し，情動的反応などの日本人の特性を踏まえた項目を筆者らが付け加えた。結果として，現在のスピーキング不安では13項目が，将来の小学校教員としてのスピーキング不安では15項目が，信頼性と妥当性を得た尺度として残された。また，英語スピーキング不安尺度の妥当性を検討する段階において，英語学習者が英語スピーキング時の「情動的反応性」を克服し，英語スピーキングに対する「自信」をつける英語授業の必要性が示唆された。 共著者：熊田岐子・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
10. 学生の外的要因と内的要因に着目する「外国語の理解」「外国語指導法」に関する一考察	共著	平成30年３月	奈良学園大学研究紀要第８号 pp.115-124.	本研究は，小学校に「外国語活動」・「外国語」が導入されることを見据え，学生の外的要因（英語運用力・授業力）だけでなく，内的要因（自尊感情の低さ・他者理解の必要性・情動的反応性の克服）にも着目した研究である。本稿では，熊田・岡村（2017）において示唆された英語スピーキング不安と自尊感情の関連について検討を行った。結果として，対人不安傾向尺度の下位尺度である「情動的反応性」が現在の英語スピーキング不安に有意に影響を及ぼしていることが明らかになった。また，将来の英語スピーキング不安得点については「情動的反応性」に加え，「自尊感情」も有意に影響を及ぼしていることが明らかになった。さらに，「自尊感情」と将来の英語スピーキング不安には「情動的反応性」が媒介する間接効果も見出された。上述の事象を克服するために，近藤（2010）の「基本的自尊感情を育む共有体験」に着目すること，大学カリキュラムマネジメントにより他教科と連携することを提案した。 共著者：熊田岐子・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
11. 「居場所」（安心できる人）を規定する媒介要因の検討－”自分ひとり”ですごす居場所に注目して－	単著	平成30年３月	奈良学園大学研究紀要第８号 pp.115-124.	本研究の目的は，居場所（安心できる人）の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価を測定し，安心できる人を規定する要因に媒介要因が介在している可能性を検討することであった。大学生260名に調査を行った結果，自分ひとりの居場所を志向する要因は，ひとりで過ごすことによる充実感や満足感によって規定されており，さらに両者の関係にはひとりで過ごすことへの孤独感や不安感のなさが媒介していることが明らかになった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12. 大学における教学支援体制の運営に関する一考察―キャリア教育とキャリア支援の連携に着目して―	共著	平成30年７月	人間教育第1巻第5号 pp.123-141.	本稿では，大学における教学支援体制の運営について，特にキャリア教育とキャリア支援の教学支援の連携がどのように行われているかに着目し，3大学（学習院大学，文教大学，昭和女子大学）の視察を手掛かりとして考察することを目的としている。結果として，学習院大学では，教学部門と支援部門の連携体制の確立はされていなかったが，大学の教育理念や方針を取り入れたキャリアセンター事業計画があり，また，就職活動に関し，OB・OGによる在学生支援体制が確立されていることが特徴であった。文教大学では，中期経営計画を立て，教学部門と経営部門がビジョンを共有し，計画→実行→評価→改善のPDCAサイクルの確立が行われていた。昭和女子大学ではキャリアデザイン委員会を設置し，全学横断型組織を確立し，教学部門と支援部門の有機的連携が確立されていた。 共著者：岡野聡子・岡村季光・オチャンテ 村井ロサ メルセデス 本人担当部分：上述の内，文教大学に関する部分（pp.127-132）を担当
13. 育成したい「学生像」の明確化，能力指標構築の試み―奈良学園大学人間教育学部を事例として―	共著	平成30年９月	人間教育第1巻第7号 pp.185-198.	本稿では，我が国における「これから求められる力」に関する能力概念の整理をした上で，奈良学園大学人間教育学部を事例として，「育成したい学生像」の能力指標を提示することを目的としている。新学習指導要領の完全実施や大学入学共通テストの導入などにより，2020年に向けた教育改革が粛々と進行する中，大学教育にも大きな影響があると予想される。本稿では，第１に，社会から求められる能力概念の整理と学部特性を整理し，第２にAP，CP，DPから育成したい学生像の能力項目の抽出を行い，第３に能力指標を提示した。能力指標作成にあたっては，①測定される側の発達水準を考慮すること，②人間教育のあり方や目指す方向性を能力指標に反映させること，③能力の「芽生え」（ショプラー；2007）に注目するという観点を提示した。 共著者：岡野聡子・岡村季光・伊﨑一夫 本人担当部分：上述の内「奈良学園大学人間教育学部における「育成したい学生像」の能力指標の構築」に関する部分（pp.192-196）を担当
14. 災害時における教師の職業的役割―「使命感」と「多忙感」に着目して― （査読付）	共著	平成30年９月	教師学研究第21巻第2号 pp.13-21.	本研究では，災害時において，その教師の「職業的使命感」は統制の効かない状況における「多忙感」を凌駕するのではないかという仮説を立てた。そして，熊本地震において教員が果たした役割をモデルとし，非災害地域の教員の「使命感」「多忙感」との比較調査を行うことによって，災害時における教師の職業的使命感の実態を明らかにすることを目的とした。そこで本研究では，熊本地震において被災した学校に勤務する教員26名と，非災害地域として，関西圏の小学校教員47名の計73名との比較アンケート調査を実施した。その結果，使命感に関しては，被災の有無にかかわらず高い使命感を有している反面，被災を経験した教員において，多忙感や内的統制感の高さが，自らの存在価値や意欲の高まりにつながっていない実態が明らかになった。 共著者：松井典夫・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
15. ドリンク剤パッケージにおける色イメージに関する探索的研究―健康不安及び体調の差異による検討―	共著	平成31年３月	人間教育第2巻第2号 pp. 45-50.	本研究では，健康不安及び体調の差異によるドリンク剤パッケージの色イメージについて検討を行うことを目的であった。大学生及び登録販売者を対象に調査を行った結果，以下の点が明らかになった。すなわち，1)健康不安に関する調査では，大学生と登録販売者間に回答の差異は見いだせなかったが，直近1か月の体調に関する調査では，総じて大学生の方が登録販売者と比して体調不良を示す得点が高かった。2)ドリンク剤色イメージ評定において，目を引く色は青色，滋養強壮は金色，美容及び食物繊維は黄色において有意な差を見いだし，いずれも健康不安のない群がある群と比して選択率が高かった。3)直近1か月の体調を独立変数，各項目における色選択を従属変数とする判別分析を行った結果，大学生において，眠気覚ましは体調不安，体調の悩み，ストレス，疲れの変数が黒色の選択に，登録販売者において，美容は体調不安，体調の悩み，ストレス，疲れの変数が青色の選択に，それぞれ有意な影響を及ぼしていた。 共著者：岡村季光・多根井重晴・増田善昭 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当
16. 英会話授業における「自尊感情を高める共有体験」に関する調査－学生の内的要因に着目して－	共著	平成31年３月	奈良学園大学研究紀要第10号 pp. 55-61.	本稿では，熊田・岡村（2018）で着目した「基本的自尊感情を育む共有体験」（近藤，2010）を応用し，英語スピーキングの共有体験に関する調査を行った。「自尊感情を育む共有体験」として，英語スピーキングを場面と定め，他者とのコミュニケーションにおける英語スピーキング不安を検証した。具体的には，ペアワーク，グループワーク，クラス発表を場面として設定した。考案した項目を因子分析した結果，ペアワーク，グループワークにおいては「肯定承認」，「安心」，「忌避」，クラス発表においては「肯定承認」，「不得意」の構造を見いだした。さらに，英語スピーキング不安，対人不安傾向，自尊感情，自己受容，他者受容との関連を検討し，他者からのフィードバックが得られるグループワークが有効である可能性が示唆された。今後の展望として，他者からのフィードバックとして，信頼する人，すなわち教師がすべきフィードバックについて検討することが課題として残された。 共著者：熊田岐子・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
17. 居場所（安心できる人）の評定と自己－他者認識：協同作業認識との関連	単著	平成31年３月	奈良学園大学研究紀要第10号 pp. 55-61.	居場所（安心できる人）の評定とひとりで過ごす感情・評価，友人との関係の取り方及び協同作業認識との関連を検討した。「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって自分群，全体高群，全体低群の３群に分け，安心できる人の評定による群ごとに，ひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度，友人関係尺度と協同作業認識尺度の各尺度得点の相関係数を算出し検討を行った。その結果，１）安心できる人の評定が全体的に低い者は，協同作業への肯定的な認識が低く，他者と一緒にいることに苦痛を感じ回避する者は，協同作業の必要性を低く感じている傾向にあった。２）相関係数の同等性の検定において，友人関係尺度における“傷つけることの回避”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”及び“互恵懸念因子”に有意差がみられた。Ryan法による多重比較の結果，“協同効用因子”において全体高群と比して全体低群の方が“傷つけることの回避”との正の相関が強く，“互恵懸念因子”において全体高群と比して全体低群及び自分群の方が負の相関が強かった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
18. 特集「職業としての心理学」	共著	平成31年３月	追手門学院大学心理学論集第27号 pp.35-64.	「心理学総合科目－職業としての心理学」は，追手門学院大学卒業生による「職業人講話」を中心に展開される「心理学総合科目」であり，心理学部の特色ある教育の一つとして位置づけられてきた科目である。本稿では，12名の卒業生によって提供される12の「職業人講話」が展開された。 共著者：三川俊樹・天野宏美・東 摩耶・藤田裕一・萩原マリコ・橋本尚子・板橋裕子・木村泰子・好田史尚・森迫宏幸・長井裕司・西川晶・岡村季光 本人担当部分：上述の内「大学教員になるまでに出会った“人との縁”」の項目（pp.62-64）を担当
19. 居場所（安心できる人）の評定と貢献感の関連	単著	令和元年９月	奈良学園大学研究紀要第11号 pp.29-34.	本研究の目的は，居場所（安心できる人）の評定と自身の存在が他者のウェル・ビーイングに役に立っている（貢献している）感覚との関連を検討することであった。安心できる程度の評定に男女差がみられたことから，評定を男女別にZ得点に変換後，クラスター分析によって全体高群，全体低群，平均群の３群に分けた。安心できる人の評定による群ごとに，貢献感との関連を検討した結果，全体低群が他の群と比して貢献感得点が低かった。最後に，「貢献感」をめぐる言説について，Adler（1932）のそれとの異同について，議論を行った。
20. 青年期後期のSNSアカウント保有数と自己隠蔽傾向の関連	共著	令和２年３月	奈良学園大学研究紀要第12号 pp.23-28.	本研究は，各SNSにおけるアカウント保有数に着目し，自己隠蔽傾向との関連を検討することを目的とした。SNSにおけるアカウント保有数について，Twitterは約40％の者が複数アカウントを保有していることが明らかとなった。各SNSアカウント保有数と自己隠蔽傾向の関連を検討した結果，Twitterと自己隠蔽は有意傾向の正の相関，Facebookとは有意の正の相関が認められた。青年期のSNSの利用において，アカウントを複数所持する者ほど，アカウントを使い分けながら，本当の自分は見せないようにふるまっている可能性が示唆された。 共著者：岡村季光・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
21. Country and Gender Differences in the Color Association with Energy Drinks: A Survey in Taiwanese and Japanese Students（国及び性別エナジードリンクと色の連想の差異：台湾及び日本の大学生対象調査より）（査読付）	共著	令和２年11月	Foods, 9(11), 1670.（全11ページ）	本研究では，異なる文化である台湾及び日本の大学生におけるエナジードリンクと色の連想の差異について検討した。その結果，国を問わず黄色は滋養強壮及びビタミン，黒色は眠気覚まし，緑色は食物繊維，赤は鉄分補給とそれぞれ関連していた。一方，台湾のみ白と美容（コラーゲンなど）の関連がみられた。本研究結果から，エナジードリンクの機能に関する情報を伝えるには，消費者の環境や文化的背景を考慮した色の選択が重要であることが示唆された。 共著者：Shigeharu TANEI, Wen-Tseng CHU, Toshimitsu OKAMURA, Fu-Shih CHEN and Yukinori NAGAKURA 本人担当部分：データ収集・分析・結果部分を担当
22. 食品の色彩に対する許容度と嗜好性に関する探索的検討―青色の水餃子を事例に―	共著	令和３年３月	人間教育第4巻第3号 pp.23-32.	本研究は，食品の色彩に対する許容度や嗜好性の程度を探索的に検討した。具体的には，近年増加しつつある「青色に着色した食品」に着目した。実験では，試料として水餃子を採用し，試料の青色着色有無及び提供順序を操作することにより試料の許容度や嗜好性等の程度を試料摂取の前後で比較検討した。その結果，試料摂取前は青色着色の試料にネガティブな印象評定がなされたが，摂取後はネガティブな印象が緩和されたことが明らかになった。 共著者：大淵裕美・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23. 居場所（安心できる人）評定の地域間及び性別比較－日台大学生調査から－	共著	令和３年12月	奈良学園大学研究紀要第14号 pp. 35-41.	本研究では，居場所（安心できる人）の日台比較及び男女差を検討することが目的であった。日本大学生134名（男性61名，女性73名）及び台湾の大学生92名（男性37名，女性55名）を対象に検討した結果，“自分ひとり”，“父親”，“きょうだい”において国間の主効果が有意であり，いずれも日本に比して台湾の得点が高かった。また，“現学校以降の友人”において性の主効果が有意であり，男性に比して女性の得点が低かった。さらに，“自分ひとり”は交互作用も有意であったため，単純主効果検定を行った結果，女性において日本に比して台湾の得点が高かった。 共著者：岡村季光・林 伯修・朱 文增・鍾 慧于・陳 福士・新井一郎・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
24. 幼稚園実習を通して学生の自己成長を促すルーブリックの開発と活用―実習への意識向上とスキルアップに着目して―	共著	令和５年３月	奈良学園大学研究紀要第15号 pp. 155-164.	本研究では，「楽しい」だけの実習として終える学生の状況を打開するために，学生自身の現在の意識状況を知り，更なる学びに繋げるための自己評価としてルーブリック評価を考案し，実習前・実習中・実習後の学生の学びの意識について確認した。さらに，学生の質向上としてアクティブラーニングを取り入れた授業方法を振り返り，授業の再構成を図った。ルーブリックを活用し，学生が質の高い保育者像を一層意識して学びを深めていくことが，保育の質の向上と幼児教育に対する意識改革に繋げられることが期待された。 共著者：間井谷容代・石原由貴子・高岡昌子・岡村季光 本人担当部分：ルーブリック項目考案・データ集計部分を担当
25. 保育所・認定こども園等の研修体系の形成に関する研究	共著	令和５年３月	保育科学研究第12巻 pp. 120-174.	様々な自治体が公表している幼稚園教員等の育成指標，保育所保育指針等，西村ら（2015）などを参考に育成指標案を作成した。その案の妥当性を質問紙調査とヒアリング調査で検証した。その結果，園長・管理職の視点でも，０歳児，１・２歳児，３歳以上児担当の保育者の視点でも，主任保育士・主幹保育教諭の視点でも，経験年数が増えるにつれていずれの資質も段階が上がること，いずれの資質も段階を上げるのに研修が有効であることが明らかになり，案がある程度妥当であることが示された。自治体では育成指標の妥当性の検証は実施されていないことも示唆された。総合考察では，本研究で開発した育成指標の活用と育成指標に関する研究の今後について以下のように議論した。 共著者：千葉武夫・西村重稀・清水益治・森 俊之・碓氷ゆかり・成田朋子・吉岡眞知子・波田埜英治・水上彰子・青井夕貴・中島 一・岡村季光 本人担当部分：研究2内の分析結果に基づく考察部分（pp. 128-148）を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（その他） 「学会抄録」 1. 青年期女子における「居場所」（安心できる人）の評定－抑うつに耐える力との関連－	単著	平成26年11月	日本教育心理学会第56回総会発表論文集 p.486. （神戸国際会議場）	「居場所」（安心できる人）における危機的場面の安心できる程度の評定と抑うつに耐える力の関連を検討した。その結果，“自分ひとり”の評定を高くつけた者は“孤独に耐える力”が高く，“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”の評定を高くつけた者は“不安に向き合う力”が高かった。ひとりの時間を志向しつつ，友人に安心感を持つことで自身の問題を直視し不安に向き合うことが示唆された。
2. 中年期・老年期における「居場所」（安心できる人）の基礎的研究―ひとりで過ごす感情・評価の関係から―	単著	平成27年３月	日本発達心理学会第26回大会発表論文集 P5-045. （東京大学）	中年期・老年期における「居場所」（安心できる人）の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果，平常時において“自分ひとり”，“子ども”，“孫”といる場面において評定を高くつけた者は，“孤独・不安”において，得点が高かった。また，危機的状況においては“自分ひとり”でいる場面で評定を高くつけた者のみ“孤独・不安”得点が高かった。特に中年期以降においては，“自分ひとり”のみならず，“子ども”“孫”の存在が「居場所」に影響を及ぼす可能性が示唆された。
3. 「自分ひとりの居場所」の志向に関する検討　―「安心できる人」評定，ひとりで過ごす感情・評価及び協同作業認識尺度の関係から―	単著	平成27年８月	日本教育心理学会第57回総会発表論文集 p.683. （朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター））	居場所（安心できる人）の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び協同作業認識との関連を検討した。その結果，ひとり感情・評価尺度の“孤絶願望”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”に弱い負の相関関係がみられた。また，安心できる人の評定が全体的に低い者は他者との協同作業への肯定的な認識が低く，他者と一緒にいることに苦痛を感じ回避する者は協同作業の必要性を低く感じている傾向にあることを見いだした。
4. Relationship between Ibasho “Person who eases your mind” and sense of contribution in late adolescence （青年期後期における居場所（「安心できる人」）と貢献感の関係）	単著	平成28年７月	Poster presented at 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan （パシフィコ横浜）	大学生に「安心できる人」の評定をクラスター分析により検討した結果，安心できる評定の高低により４群に分類できることを見いだした。さらに，安心できる人の評定が低い群は所属している集団への貢献感が他の群と比べて有意に低かった。
5. The effects of power and grit on satisfaction and apathy in academic settings （影響力，grit及びアパシーが大学生活に与える影響）	共著	平成28年７月	Poster presented at 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan （パシフィコ横浜）	本研究は，影響力，grit及びアパシーが大学生活にどのような影響を与えているのかを検討した。将来展望を明確に持っているか否かで群分けを行い，重回帰分析を行った結果，将来展望を明確に持っている者において影響力，grit及びアパシーが大学生活に影響を与えていることが明らかとなった。 共同発表者：高木悠哉・赤間健一・岡村季光 本人担当部分：データ分析結果・考察部分を担当
6. 「居場所」（安心できる人）を規定する媒介要因の検討　―“自分ひとり”の居場所に注目して―	単著	平成28年10月	日本教育心理学会第58回総会発表論文集 p.451. （サンポートホール高松・かがわ国際会議場）	本研究は，安心できる人を規定する要因に媒介要因が介在している可能性を検討することを目的とした。自分ひとりの居場所を志向する要因は，ひとりで過ごすことによる充実感や満足感によって規定されており，さらに両者の関係にはひとりで過ごすことへの孤独感や不安感のなさが媒介していることを明らかにした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7. 居場所（安心できる人）の評定と貢献感の関連	単著	平成30年３月	日本発達心理学会第29回大会発表論文集 p.655. （東北大学川内北キャンパス）	大学生に「安心できる人」の評定をクラスター分析により検討した結果，安心できる評定の高低により３群に分類できることを見いだした。さらに，安心できる人の評定が低い群は所属している集団への貢献感が他の群と比べて有意に低かった。本研究における「安心できる人」分類において，特に家族に関するクラスター得点差は他と比して顕著であったことから，家族に対する安心できる感覚の差が貢献感の得点差に影響を及ぼしている可能性が考えられた。
8. 保育者の子育てに関する探索的研究	共著	平成30年５月	日本保育学会第第71回大会発表要旨集 p.659. （宮城学院女子大学）	本研究では，保育者の子育てについて自由記述により探索的に検討することを目的とした。子育てをしながら仕事をすることについて，「大変」「ポジティブ」「時間」「協力」の出現頻度が高く，保育者と子育ての両立が大変である一方，ポジティブに受けとめていることがうかがえた。また，他者の協力により，子育てと仕事の両立が維持されていることが推察された。子の担任やママ友に自身が保育者である旨を積極的に告知することはないという回答が多く，条件付で告知をする姿勢がうかがえた。 共同発表者：岡村季光・間井谷容代 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当
9. ドリンク剤における色イメージに関する探索的研究	共著	平成30年９月	日本心理学会第82回大会発表論文集 p.555. （仙台国際センター）	本研究では，健康不安及び体調の差異によるドリンク剤の色イメージについて検討を行うことを目的とした。その結果，ドリンク剤色イメージ評定において，目を引く色は青色，滋養強壮は金色，美容及び食物繊維は黄色において有意な差を見いだし，いずれも健康不安のない群がある群と比して選択率が高かった。また，体調と属性が色の選択に有意な影響を及ぼしていた。 共同発表者：岡村季光・多根井重晴・増田善昭 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当
10. 居場所と「個」及び「関係性」の観点にもとづくアイデンティティの関連	単著	平成31年３月	日本発達心理学会第30回大会発表論文集 p.305. （早稲田大学戸山キャンパス）	本研究では，居場所と「個」及び「関係性」の観点にもとづくアイデンティティとの関連を検討することを目的とした。その結果，全般的には「個」のアイデンティティよりも「関係性」のそれの方が居場所尺度との関連は強い傾向であった。また，男女間で相関係数の差の検定を行った結果，社会的居場所のうち，誰かから承認されている感覚が，「関係性」のアイデンティティ形成につながることが示唆されたが，その傾向は特に男子において顕著であった。
11. 青年期後期のSNSアカウント保有数と自己隠蔽傾向の関連	共著	令和元年９月	日本心理学会第83回総会発表論文集 p.241. （立命館大学大阪いばらきキャンパス（OIC））	本研究は，各SNSにおけるアカウント保有数に着目し，自己隠蔽傾向に着目し検討することを目的とした。その結果，複数のアカウントを所有している者が多かったTwitterと自己隠蔽傾向には弱い正の相関がみられ，アカウントを複数保有する者は，アカウントを使い分けることで本来の自分を隠蔽するように振る舞っていることがうかがえた。また，各SNSのアカウント保有率，複数アカウント保有率，重要度に統計的に有意な差異を見いだし，1)世代による影響，2)複数アカ保有諾否という仕様上の問題，3)インフラとしてのSNSニーズ有無，などがあることが推察された。 共同発表者：岡村季光・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12. 座席位置とエゴグラム及び情動知能の関係	共著	令和元年９月	日本教育心理学会第61回総会発表論文集 p.637. （日本大学文理学部３号館）	本研究では，同じ仮想場面における座席選択とエゴグラム及び情動知能の関係を検討することを目的とした，その結果，エゴグラムACにおいて，仮想場面で座席数が多い方を選択した者の座席数が少ない方を選択した者のそれよりも得点が高かった。リーダーシップに関する研究（Hare & Bales，1963）より，リーダーとフォロアーの関係が順応的自我状態に反映していると解釈された。なお，情動知能尺度（J-WLEIS）と座席選択との関連は見いだせなかった。 共同発表者：多根井重晴・岡村季光・豊田弘司・陳 福士・安西和紀 本人担当部分：データ収集・考察部分を担当
13. 居場所（安心できる人）と貢献感，特性的自己効力感及び生活満足感の関係	共著	令和２年３月	日本発達心理学会第31回大会発表論文集 p.291. （大阪国際会議場（グランキューブ大阪）で開催の予定だったが，参集しての開催は行われなかった）	本研究では，居場所（安心できる人）と貢献感，特性的自己効力感及び生活満足感の関係を検討することを目的とした。その結果，特に女子の方が各尺度間得点に中程度の正の相関があった。また，安心できる人評定群のうち，いずれも他者低群が全体高群，他者高群，全体低群と比して貢献感，特性的自己効力感及び生活満足感の得点が低かった。他者への安心感の低さが，貢献感，対人関係における満足感の低さにつながっていることが明らかとなった。 共同発表者：岡村季光・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
14. 社会不安及び生活満足感が居場所（安心できる人）の評定に及ぼす効果	単著	令和２年９月	日本教育心理学会第62回総会発表論文集 p.315. （アクトシティ浜松で開催の予定だったが，参集しての開催は行われなかった）	本研究では，自他への安心感の評定と社会不安（FNE）及び生活満足感の関連について検討することを目的とした。安心できる人評定，FNE及び生活満足感の関連を検討した結果，自分ひとりの評定及び全般的生活満足感とFNEは有意な負の相関であった。また，性，FNE短縮版及び生活満足感を予測変数，安心できる人評定を目的変数とする重回帰分析を安心できる人ごとに行った結果，安心できる人評定の対象が自分または他者により影響を及ぼす変数が異なることが明らかとなった。
15. 薬学生の学習習得度と自己評価式モラルシンキング尺度の関係	共著	令和２年９月	日本教育心理学会第62回総会発表論文集 p.167. （アクトシティ浜松で開催の予定だったが，参集しての開催は行われなかった）	薬学教育では，6年制課程を修了した者を対象とした新薬剤師国家試験制度の導入にともない，薬学部生には膨大な専門知識及び技能の習得が必須とされ，効率的な学習が求められるようになった。一方，池田ら（2018），文部科学省中央教育審議会（2011）の指摘を踏まえ，薬学生の学習習得度と自己評価式モラルシンキング尺度の関係を検討した。その結果，キャリア尺度得点と演習試験との間に正の相関を認めた。 共同発表者：多根井重晴・岡村季光・豊田弘司 本人担当部分：データ分析・考察部分を担当
16. 薬学生におけるキャリア基礎力支援のあり方に関する基礎的研究	共著	令和２年９月～11月	日本心理学会第84回総会発表論文集 p.200. （東洋大学白山キャンパスで開催の予定だったが，Webサイト内（https://www.jpa2020toyo.com/）で開催された）	本研究は，多根井ら（2020）続報として，キャリア基礎力をより詳細に検討するため，薬学部４年生を対象に，キャリア基礎力と正の関連が予想される批判的思考（クリティカルシンキング，CT），薬学に携わる者としての倫理観（モラルシンキング，MT），自他の情動理解（J-WLEIS）及び負の関連が予想されるセルフハンディキャッピング（SH）との関連を検討した。その結果，キャリア基礎力尺度とCT間，MT間は全て正の相関，J-WLEIS間は他者の情動評価や情動の利用・調節で正の相関，SH間は「やれない因子(can't）」で全て負の相関であった。キャリア基礎力育成には，自他理解や自己有用感に関わる支援を行う必要性が示唆された。 共同発表者：岡村季光・多根井重晴 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
17. 居場所（安心できる人）の評定とプライバシー意識の関連	共著	令和３年８月	日本教育心理学会第63回総会発表論文集 p.350. （オンライン）	本研究では居場所（安心できる人）とプライバシー意識の関連を検討した。各場面における「安心できる人」評定得点を用いて，クラスター分析（K-means法）により“平均群”，“他者低群”，“他者高群”に分類し，プライバシー意識尺度の各下位尺度得点について，2（性）×3（居場所分類各群）の分散分析を行った。その結果，自己意識／維持行動得点において男性のみ“他者高群”が“平均群”に比して得点が低かった。また，他者維持行動得点において，“他者高群”が“他者低群”に比して得点が高かった。 共同発表者：岡村季光・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
18. エゴグラムと学習動機及びメタ認知の関係	共著	令和３年８月	日本教育心理学会第63回総会発表論文集 p.355. （オンライン）	本報では，エゴグラムと学習動機及びメタ認知の関係について検討した。その結果，自己成長エゴグラム（SGE）の“A”とメタ認知ならびに学習方略の“意味理解方略”が正の弱い相関関係であった。また，SGEの“CP”と学習動機の“取り入れ的調整”，“外的調整”及びメタ認知が正の弱い相関関係であった。さらに，SGEの“AC”と学習動機の“外的調整”が正の弱い相関関係であった。エゴグラムは，自己変容が期待できる尺度であることからも，教育的な側面で考えると主に“CP”及び“A”を伸ばすことが，主体的学び育成の一環として有益である可能性が示唆された。 共同発表者：多根井重晴・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
19. 居場所（安心できる人）とプライバシー意識の関係：日台大学生調査から	共著	令和３年９月	日本心理学会第85回総会発表論文集 p.11. （Webサイト内（https://confit.atlas.jp/guide/event/jpa2021/top?lang=ja）で開催された）	本研究では，居場所（安心できる人）とプライバシー意識の関係を日台別に検討することが目的であった。日本大学生134名（男性61名，女性73名）及び台湾の大学生92名（男性37名，女性55名）を対象に検討した。第1に，各場面における「安心できる人」評定得点を用いて，国別にクラスター分析（K-means法）を行った結果，両国とも同様の傾向であった。具体的には，安心できる人の評定が全体的に平均的であった群を“平均群”，他者の評定が低かった群を“他者低群”，他者の評定が高かった群を“他者高群”と命名し居場所（安心できる人）評定による分類（以下，居場所分類）を行った。第2に，プライバシー意識尺度の各下位尺度得点について，2（国）×3（居場所分類各群）の分散分析を行った結果，自己のプライバシー意識／維持行動得点において日本に比して台湾の方が得点は高く，日本において“他者低群”が“他者高群”に比して得点が高かった。他者のプライバシー意識得点において“他者高群”が他群と比して得点が低かった。他者のプライバシー維持行動得点において台湾に比して日本の方が得点は高く，“他者高群”が他群と比して得点が高かった。 共同発表者：岡村季光・林 伯修・李 鵬遠・鍾 慧于・陳 福士・新井一郎・多根井 重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
20. 保育者におけるワーク・ライフ・バランスと保育者効力感の関係	共著	令和４年５月	日本保育学会第第75回大会発表論文集 pp. P-879-P-880. （聖徳大学で開催の予定だったが，オンラインで開催された）	本研究では，保育者におけるワーク・ライフ・バランスと保育者効力感の関係を検討した。奈良県内にある保育所に勤務する保育者123名（男性４，女性119）を対象に検討した結果，子のいない者においては，保育者として期待に応えることに仕事のやりがいを見いだし，地域の様々な住民との交流や参加に保育者としての効力感を持ちやすい傾向が伺えた。一方，子のいる者においては，保育所における社会的立場を意識しつつ，保育者の仲間を支援し，さらに保育者自身が人とかかわる基盤となり子ども同士の関係を育てることが，仕事のやりがいにつながっていることがみられた。また，仕事とプライベートの切り替えについては，子のいない者が出来ている一方，子のいる者はうまく切り替えが図れていない可能性が示唆された。 共同発表者：岡村季光・間井谷容代 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当
21. 衛生マスクにおける着用行動と色イメージの関連	共著	令和４年９月	日本心理学会第86回大会発表論文集 p. 3EV-013-PC. （日本大学文理学部）	本研究では，マスク着用行動と背景要因及び着用したマスクの色イメージの関連について検討することを目的とした。近畿圏に在住の大学生120名（男性76名，女性44名）を対象に調査を行った結果，女性において“公的自意識”と外出時マスク着用における“自分の姿を隠蔽”に弱い正の相関がみられた。また，着用したマスクの色イメージにおいて，“似合っている”において青，“魅力的”において金はそれぞれ男性の方が女性に比して有意に選択が多かった。さらに，外出時マスク着用行動とマスクの色イメージの関連において，“自分の姿を隠蔽”の回答と色イメージの選択の関係を検討した結果，“本音を隠せる”の色イメージにおいて，白は自分の姿を隠蔽できると回答した者が隠蔽できないと回答した者と比して有意に選択が多かった。黒は本音を隠すというイメージ，白は自身の姿自体を隠すというイメージとして弁別してとらえている可能性が示唆された。 共同発表者：岡村季光・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「学会発表」 1. 青年期女子における「居場所」（安心できる人）の評定―ひとりで過ごす感情・評価及び関係的自己の可変性との関係から―	－	平成25年11月	関西心理学会第125回大会発表論文集 p. 82. （和歌山大学）	「居場所」における安心できる程度の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び関係的自己の可変性との関係を検討した。その結果，友人への安心感評定が低いと自己が変化することに対して怖い，嫌だ，うまくできないという思いがやや高まる傾向を見いだした。また，自分への安心感評定が高いと自己が変化することに必要性を感じる等，変化に対して肯定的に捉えていた。
2. 「自分ひとりの居場所」を志向する要因の検討―「安心できる人」の評定とひとりで過ごす感情・評価及び満たされない自己との関係から―	－	平成26年11月	関西心理学会第126回大会発表論文集 p. 36. （大阪市立大学）	「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって３群に分け，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び満たされない自己との関係を検討した。その結果，“自分ひとり”に安心できる評定を高くつけた者の中にも，他者への評定を比較的低くつけている者は対人関係に苦痛を感じ，対人交渉の逃避をしていることが示唆された。また，自分だけ，または一部の者のみに安心感の評定を高くつけた者は自他共に安心感の評定が高い者と比して日常生活においての目標に喪失感や停滞感を感じていた。 共同発表者：岡村季光・高木悠哉 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
3. 心理学を学び，研究し，実践する－ライフステージとキャリアパス－ （シンポジウム話題提供）	－	平成27年11月	関西心理学会第127回大会発表論文集 p. 9. （関西学院大学）	本シンポジウムでは，心理学関連の大学教員として勤めている話題提供者が，これまでにどのようなキャリアパスを経てきたのか，また，自らのライフステージにおいて，どのような歩みがあったのかをそれぞれ発表した。その後，心理学のキャリアパスとライフステージとの兼ね合いについて率直な意見が交わされた。 話題提供者：大竹恵子・岡村季光・杉若弘子・土肥伊都子 指定討論：小椋たみ子・荘厳舜哉
4. 「居場所（安心できる人）の評定と他者認識―友人との関係の取り方と共同作業認識の関連から―	－	平成27年11月	関西心理学会第127回大会発表論文集 p. 42. （関西学院大学）	居場所（安心できる人）の評定，友人との関係の取り方及び協同作業認識との関連を検討した。「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって自分群，全体高群，全体低群の３群に分け，安心できる人の評定による群ごとに，友人関係尺度と協同作業認識尺度の各尺度得点の相関係数を算出した。相関係数の同等性の検定を行った結果，友人関係尺度における“傷つけることの回避”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”及び“互恵懸念因子”に有意差がみられた。Ryan法による多重比較の結果，“協同効用因子”において全体高群よりも全体低群の方が“傷つけることの回避”との正の相関が強く，“互恵懸念因子”において全体高群よりも全体低群及び自分群の方が負の相関が強かった。
5. 「自分ひとりの居場所」の志向に関する検討　―「安心できる人」評定，ひとりで過ごす感情・評価及び孤独感との関連―	－	平成28年11月	関西心理学会第128回大会発表論文集 p. 35. （京都大学）	本研究では，居場所（安心できる人）の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び他者とのつながりが感じられているか否かを測定するために孤独感を測定し，三者の関連を検討した。「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって全体高群，親群，恋人群，他者低群の４群に分け，さらに，ひとり感情・評価尺度の“孤独・不安”得点をもとに，得点の中央値を上回った群を高群，中央値以下を低群に分類した。孤独感尺度得点について，４（居場所）×２（ひとり感情・評価尺度“孤独・不安”得点高群・低群）の分散分析を行った結果，ひとり感情・評価尺度の“孤独・不安”得点低群において，“他者低群”が他の群に比して孤独感得点が高かった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6. 災害時における教員の職業的役割　―「使命感」と「多忙感」」に着目して―	―	平成29年３月	日本教師学学会第18回大会発表要旨集 pp.30-31. （早稲田大学所沢キャンパス）	現代の学校教育に関連する諸課題に対する教育現場への期待や責任の増大に伴い，教員の「多忙化」が指摘されている。その一方で，地震災害時に教師は，「多忙感」の一要因である残業の多寡に関わらず，避難所運営に携わるなどの例がある。そこで本研究では，教員の「使命感」と「多忙感」の相関性について，熊本地震において教員が果たした役割をモデルとして，教員への意識調査をもとに検討した。その結果，他群の教員は多忙感や内的統制感が高まることで自らの存在価値や意欲の高まりがみられるのに対し，熊本自身で被災した教員群にそれらがみられないことから，一連の熊本地震に対する対応の疲労感が高まっていることが背景因子として懸念された。 共著者：松井典夫・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
7. 居場所（安心できる人）の評定と社会不安及び生活満足感の関連	―	平成29年11月	関西心理学会第129回大会発表論文集 p.52. （京都橘大学）	本研究では，居場所（安心できる人）の評定，他者からの否定的な評価による不安及び生活満足感を測定し，三者の関連を検討することを目的とした。各場面における「安心できる人」評定得点を用いて，クラスター分析を行った結果，各評定の高低により４群に分類することができた。さらに，FNE短縮版得点（社会的不安得点）をもとに，平均値を上回った群を高群，平均値以下を低群に分類し，4（居場所）×2（社会的不安得点高・低）の分散分析を行った結果，社会的不安得点低群において“全体高群”及び“家族高群”が他群に比して全般的生活満足感得点が高かった。特に，家族への安心感と他者への否定的評価への不安のなさが全般的生活満足感の高さにつながったと言え，アタッチメントの影響が示唆された。
8. ありのままの自分を求めて：グローバル社会と「居場所」（日本心理学会第82回公募シンポジウムSS-082）	―	平成30年９月	日本心理学会第82回大会発表論文集 p.220. （仙台国際センター）	「居場所（Ibasho）」は日本固有の概念であるが，さまざまな心理学的概念と密接に関係していると考えられる。たとえば，アイデンティティ（Erikson, 1950）は「居場所」との関係性が示唆される。多様な人々が生活する複雑な現代社会において，ありのままの自分を表現でき，ありのままの自分でいられる「居場所」を我々はどのように見つけ出していけるのだろうか。また，アイデンティティと「居場所」はどのような関係にあるのだろうか。本シンポジウムでは，多文化環境のなかで生育・生活する人々を中心に，ありのままでいられる「居場所」をめぐって，（文化的）アイデンティティや「居場所」について議論を行った。 話題提供者：鈴木一代・岡村季光・植松晃子・石橋道子 指定討論：佐野秀樹
9. 新旧友人関係及び学校への認知が現在の居場所感に及ぼす影響―コミュニティ・アイデンティティ及びトポフィリアの視点から―	―	平成30年10月	関西心理学会第130回大会発表論文集 p.59. （甲南大学）	本研究の目的として，新旧友人関係及び学校への認知が現在の居場所感に及ぼす影響について検討を行った。特に，学校への認知はコミュニティ・アイデンティティ（CI）（野波・加藤，2009）及びトポフィリア（TP）（Tuan, 1974）に着目して検討を行った。その結果，高等学校までの友人が“親友”として認知されやすい傾向にあり，過去に所属していたCI及びTPを重視する傾向がみられた。特に現在の“承認的居場所”の感覚は，新旧友人及び過去・現在CIが規定因として認められ，過去とのつながりが居場所を感じる要因として重要であることが考えられた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10. 自己－他者関係及び特性的自己効力感が現在の居場所感に及ぼす影響―自分ひとり，新旧友人関係への安心感を手がかりに―	－	令和元年11月	関西心理学会第131回大会発表論文集 p.35. （大阪教育大学天王寺キャンパス）	本研究の目的は，自分ひとり，あるいは新旧友人と過ごす安心感及び特性的自己効力感が現在の居場所感に及ぼす影響について検討することであった。社会的居場所及び個人的居場所を目的変数，自分ひとり・新旧友人への各安心感評定，特性的自己効力感を予測変数とする重回帰分析を男女別に行った結果，男女とも特性的自己効力感が社会的居場所・個人的居場所，新友人の安心感が社会的居場所を予測することが認められた。
11. 大学生における居場所（安心できる人）の日台比較	－	令和３年３月	日本発達心理学会第32回大会発表論文集 p.99. （Webサイト内（http://www.jsdp.jp/jsdp2021/）で開催された）	本研究では，居場所（安心できる人）の日台比較及び男女差を検討することを目的とした。日本在住の大学生134名と台湾在住の大学生92名を対象に検討した結果，自分ひとり，父親，きょうだいにおける安心感はいずれも日本に比して台湾の得点が高かった。父親やきょうだいへの安心できる評定は，文化の違いが反映されたものであることがうかがえた。 共同発表者：岡村季光・林伯修・朱文增・陳福士・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
12. 「居場所」は多文化背景をもつ人々にとって有用な概念か？（会員企画 ラウンドテーブル 6AM1-D-RT05　話題提供）	－	令和４年３月	日本発達心理学会第33回大会発表論文集 （Webサイト内 https://www.jsdp.jp/jsdp2022/）で開催された）	本ラウンドテーブルでは，「居場所」という日本固有の概念が，日本人や日本だけではなく，多文化環境にある人々を初め，外国人やほかの国にとっても有用な概念になりうるかどうかについて議論した。 第２話題提供者からは，日本－台湾間による“安心できる人” の評定差異及びその背景について考察した。 その後，指定討論者よりバーチャル，またはイマジナリーの「心理的居場所」の存在と重要性について指摘があった。 企画：鈴木一代 話題提供者：石橋道子・岡村季光・鈴木一代 指定討論者:新田文輝
「その他」 1. 災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第４回　実証的研究からみえる教師の災害時における「使命感」と「多忙感」の関連	－	平成29年８月	教育PRO 第47巻第17号 通巻1842号 pp.8-9.	教員の「使命感」と「多忙感」の相関性について，熊本地震において教員が果たした役割をモデルとして，教員への意識調査をもとに検討した。その結果，他群の教員は多忙感や内的統制感が高まることで自らの存在価値や意欲の高まりがみられるのに対し，熊本自身で被災した教員群にそれらがみられないことから，一連の熊本地震への対応の長期のストレス状況にあることが推察された。一方，教員からの聞き取り調査では，教員は自らよりも児童生徒を優先して心のケアに努める利他行動が認められた。
2. 災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第８回　ベトナムにおける「保護」の根底にあるもの	－	平成29年10月	教育PRO 第47巻第22号 通巻1847号 pp.8-9.	ベトナムは様々な天災に見舞われているものの，災害の大きさに比して，被害が思いのほか小さい。そこには，災害等非常時における「保護」の主体が関連しているという示唆を得られた。本稿では，その「保護」意識の根底について考察した。その結果，ベトナムにおいては，近年の経済成長における都市化現象が核家族化を進展させたものの，家族を重要視するという観点も根強く残っている一方，知らない人への警戒心は非常に強いことが伺えた。上述の「警戒心の強さ」は「保護」意識の規定因である可能性が示唆された。
3. 災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第12回　取り戻す日常と薄れゆく震災の記憶～防災教育が持つ価値の提言～	－	平成29年12月	教育PRO 第47巻第27号 通巻1852号 pp.6-7.	本稿では，日常を取り戻そうとする「復興のベクトル」と，震災の記憶のうち「想起のベクトル」が減少していくという相反する状況の中で，防災教育が果たす役割について考察を行った。古くから「津波てんでんこ」などの教訓として後世に伝えられてきた事象を検討した結果，防災教育の根幹は，残された「教訓」の活性であることを見出した。 共著者：松井典夫・岡村季光 本人担当部分：先行研究収集・考察部分を担当

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和５年　３月　31日

氏名　岡本恵太

研究分野	研究内容のキーワード
国語科教育　教育社会学	コミュニケーション　思考力　談話分析　言語活動

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 (1)　「つけたい力を明らかにして思考力を育てる授業～見通しと振り返りを位置づけて」	平成26年4月～平成28年3月	三田市教育委員会の委嘱を受けた「三田市教育研究グループ」として、教師と学習者がともに、学習を通して「つけたい力」を明確にして思考力を高める授業の筋道を研究した。また、研究の成果を「三田市教育研究グループ研究集録」の国語部会の章（各年度4頁分，本人担当分平成27年度４p分）として発表するとともに、国語部会として独自に『実践事例集』（平成26年度は総頁数48p本人担当8p分・平成27年度は総頁数54p本人担当分10p・平成28年度は総頁数48p本人担当分8p）を編集、発行し、若い教員が日々の実践に取り組む際の手がかりとなるようにした。 研究における「言語活動」については、「学習者の願いや目的を言語を用いて具現化するプロセス」としてとらえている。ここにおける「願い」には達成したい活動の成果物とともに、学習者自身が「つけたい力」も含まれる。こうした「言語活動」を「学習者の願いや目的」に向けて導く資質・能力となる「論理的思考力」を育てるための言語活動の工夫改善に関する研究を継続した。
(2)「ともに学び合い高め合う子に～伝え合う場の設定～」	平成27年4月～平成30年３月	三田市立三輪小学校において、国語科における思考力や伝え合う力を育てるために全校で取り組んでいる実践研究である。学習者一人ひとりが主体的に課題を持って探求し、協同でその課題に挑戦しながら高め合っていく資質・能力を身につけた児童を育成することを主題に掲げている。各年度２月に公開研究発表会を実施するとともに、研究紀要を発行している。研究授業として、平成27年度は「世界で一番美しいぼくの村（東京書籍）・４年生」、平成28年度は「町の幸福論-コミュニティデザインを考える-（東京書籍）・６年生」、平成29年度は「木龍うるし（東京書籍）・４年生」を公開し、その成果については、研究紀要にまとめている。 「言語活動の充実」を中心とした実践研究においては、様々な言語活動に含まれる言語能力を抽出し、分類整理を行った。
(3) 令和３年度　インターネット上の人権侵害の解消推進事業 大学との共同研究（学生の研究活動プロジェクトの指導）	令和３年	善野八千子教授、住本克彦教授と共同し、インターネット上の人権侵害に係る学生の研究プロジェクトの指導にあたった。その成果は、11月27日のシンポジウム（研究成果発表会）において、「インターネット上の人権侵害をどう防ぐか～教師をめざす学生として、意識改革から行動変容へ～」として発表予定である。岡本は、善野八千子教授と共同で研究プロジェクトメンバーが受講する人間教育実践力開発演習Ⅲにおいて「SNSにおける人権侵害」を軸とする教育時事問題についての指導を継続するとともに、教育社会学の観点から、テキストマイニングを活用した分析手法についての助言を行った。
２　作成した教科書，教材		

(1) 『ひとり学びへの手引き』	平成29年4月	三田市教育委員会が市内の高学年児童に向けて発行している「ひとり学びへの手引き」の国語科に関する章のうち「パネル討論をしよう」「新聞記事を書こう」の項目を分担執筆した。 「ひとり学びへの手引き」は市内の児童が自分自身で問題を持ち、解決する力を育てることを目指した学習資料である。国語・社会・理科・算数・情報のそれぞれの分野ごとに、家庭学習の手法や児童が自ら調べ方・表現の仕方を解説している。 「パネル討論をしよう」では〈論点をどのように探すか〉〈どのような視点で議論を組み立てればいいか〉について児童が一人で学習が進められるよう記述した。 「新聞記事を書こう」では、まず新聞記事の特徴が「情報を客観的にとらえるための文章」であることを説明し、さらにその書き方について解説した（総頁数９２頁、本人担当分４頁）
（２）『新しい視点からの教育社会学』（大学教育出版）	令和4年9月	共著　編著者　住本克彦 第１章「教育社会学へのアプローチ」執筆を分担。教育社会学の導入として、学問としての特質とそのあゆみを学生がとらえることを目的としている。教育社会学の見方・考え方について、授業における会話構造の分析を事例として述べるとともに教育学との関連から明らかにした。さらに教育社会学の歴史について、エミール・デュルケーム、イヴァン・イリッチ、ピエール・ブルデュー、バジル・バーンスティンら主要な教育社会学者の業績について、日本国内の教育社会学の発展と関連付けて述べた。（総頁数252頁、本人担当分17頁）
３　教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 兵庫教育大学大学院「小学校英語活動プログラム（小学校英語活動指導者ユニット）」履修	平成26年3月	兵庫教育大学大学院において小学校英語活動の指導者育成を目的としたプログラムを履修した。プログラムの一環として現任校（当時：志手原小学校）における研究授業「オリジナルカレンダーを作ろう」を実施した。ここで目指したことは、「動きを通して〈考える〉英語活動」である。これは、英語活動で取り組まれるアクティビティの中に、選択・判断・吟味といった思考の要素を導入しようとするものである。「動きを通して〈考える〉英語活動」を具現化するために、即興演劇の手法を活用した「プレゼントゲーム」や、友だちに英語でインタビューする時の手順を絵（ピクトグラム）で目に見える形にしたワークシートを開発した。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 三田市教育研究グループ研究員（国語）	平成26年4月～ 平成30年3月	三田市教育委員会の委嘱を受けて、国語科における思考力の育成を軸に実践研究を行った。各年度の3月、各教科・領域の研究グループ交流会でその成果を発表するとともに、『活動報告』の冊子をまとめている。また、三田市の児童に自分自身の力で学ぶ力 育成することを目指して『一人学びへの手引き』（平成29年4月発行）の国語の項目の執筆も分担した。 グループ員で、実践を集積し、整理した結果、現在次のような手立ての有効性が立証された。第一に、学校行事や他教科と連携し、学習者にとって「必要性」「やりがい」が実感できる場の設定である。第二に、これまでの学習をもとに「目のつけどころ」や「方法」を取り出し、次に生かすようにすることである。第三に、思考の筋道を目に見える形にすることである。例えば思考ツールの活用や操作活動の導入が考えられる。第四に、自己評価や相互評価、あるいは地域に人や保護者など具体的な他者の評価を生かすことである。

(2) 『柿の実詩集』編集委員	平成27年度	『柿の実詩集』は、三田市教育委員会が毎年発行している児童詩集である。市内の各校から作品を募り、代表作をまとめて刊行している。（平成27年度は3に月発行）編集委員として原稿の集約・審査、および編集作業に従事した。
(3)三田市立三輪小学校校内研究講師	平成30年～令和３年	新しい学習指導要領にもとづく国語科授業のあり方や、研究の進め方について助言や講話を行うとともに、授業研究に参加し、対話力を高めるための授業づくりの具体的な手立てについて指導助言を行った。
(4)八尾市立北山本小学校校内研究会講師	令和2年～現在にいたる	全員参加の授業づくりの取り組みについて、具体的なワークシートづくりや言語活動の校正などの観点から助言を行っている。また、研究授業では、授業者の意図を新学習指導要領の方向性と関連づけるとともに、主体的対話的で深い学びの観点から異議付けを行っている。
(5)宝塚市立安倉北小学校校内研究会講師	令和２年～現在に至る	年１回実施されている理論研において、新学習指導要領に規定された資質・能力育成につながる具体的なワークシートや活動の工夫を提案している。また、令和３年11月には、タブレットを活用した研究授業を参観し、ICT機器を活用したこれからの授業づくりに関連して助言をした。
５　その他 特記事項なし		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
１　資格，免許 (1)小学校教諭１級普通免許 (2)中学校教諭１級普通免許（社会） (3)高等学校教諭２級普通免許（社会） (4)小学校教諭専修免許 (5)中学校教諭専修免許（社会）	 昭和61年3月 昭和61年3月 昭和61年3月 平成26年4月 平成26年4月	 昭60小１普第1028号（大阪府教育委員会） 昭60中１普第4361号（大阪府教育委員会） 昭60高２普第5063号（大阪府教育委員会） 平二六小専修第11号（兵庫県教育委員会） 平二六中専修第10号（兵庫県教育委員会）
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 公立小学校教員	昭和61年４月～平成30年３月	兵庫県三田市公立小学校
４　その他 特記事項なし		

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				

1『ケースから学ぶ　言葉による見方・考え方を育てる授業づくり』	単著	平成30年2月	株式会社 ERPブックレット	学習指導要領（平成29年告示）の鍵概念じめる 「言葉による見方・考え方」について基本的なとらえ方について小中９年間を見通して述べるとともに、その育成のための手立てを具体的な事例をもとに解説した単著。教師が、国語科の授業において、実際に出会うことが想定される場面を 「ケース」として設定し、その背景にある〈言葉による見方・考え方〉について解説するとともに具体的な手立てを示してい る。新学習指導要領の方向性をふまえ、「読むこと」「書くこと」「話すこと・聞くこと」のそれぞれの領域に共通して働く「言葉による見方・考え方」について〈効果〉〈正しさ〉〈整合性〉の三つの項目に整理した。 最終章では、「言葉による見方・考え方」を育成するための手立てが、「ゴールの明確化＞「方法・筋道の菓子化〉〈他者との伝え合いによる言語活動の吟味〉にあることを指摘した上で、「主体的・対話的で深い学び」を具体化することの重要性とその視座を総括的に提示している。A５判80頁
2『「見方・考え方」を鍛える小学校国語科の「思考スキル」』	共著	平成30年２月	東洋館出版社	平成29年に告示された学習指導要領の柱の一つである「思考力・判断力・表現力等」について「思考スキル」の観点から解説した共著。 具体的な実践事例をもとに、「思考スキル」の分類と、その育成の筋道について解説している。 編著者：伊崎一夫 共著者：岡本恵太　遠藤陽子　小玉直人　中島朱美　羽渕みな子　濱村憲二 細見博友　峯山　淳　山口　映 本人担当分：第Ⅱ章「思考スキル」の分類（pp23-42） 「思考スキル」について、比較・順序・理由・要約・定義・類別・課題解決・推論・評価の九つに分類し、それぞれについて、基本的な考え方と、育成に向けての筋道を解説した。 「問題解決のあらすじを書くためには」（pp. 80-83） 物語「はりねずみと金貨（東書3年）」について、あらすじを整理し、人物の気持ちの変化についてまとめるための実践を提案した。 「知識を本物にするには」（pp. 96-99） 説明文「夢のロボットを作る（東書4年）」について、思考ツールを活用して読み取る実践を提案した。 全192頁（本人執筆分28頁）
3『新しい視点からの教育社会学 - 人間形成論の視点から -』	共著	令和4年9月	大学教育出版	略（２作成した教科書，教材（2）参照）
（学術論文） 1「学校における児童の新たな行動様式はどのように成立するか―教師の意図から外れた場面の談話分析－」	単著	平成27年11月	日本教育社会学会編『教育社会学研究第97集』	「言葉による見方・考え方」の育成を促進する談話の構造を「新たな行動様式を生み出す『共演』の場」としてとらえた論考。 本研究では、小学校１年生の入学後一ヶ月後に実施された「ひらがな学習」における教室談話の分析を行っている。この「ひらがな学習」の授業において、児童は教師の書いた「ひらがな」の「まちがい」を指摘し、授業のねらいとははずれた部分にこだわっている事例に着目し、児童が新たな行動様式による学習行為を創出する過程とその価値について論じた。 20頁 教室談話を分析してみると、この教室では、教師にとって予想外の出来事をも包み込む談話構造が見られた。すなわち、教師の意図から外れているような場面において、教師と児童の間の「共演」といえる関係が成立していたのである。すなわち、児童たちが教師の「まちがい」を指摘しようとしたのは「先生の模倣」であり、教師もまたこうした「模倣」を促進する働きかけをしていた。こうした「共演」の中で、児童たちは一定の「ルール」を創り出していったのである。 これは、ヴィゴツキーが「遊び」についての研究で明らかにした、演じることによる「ルール」の成立と重なる事態である。国語教室に強制に依らない秩序を生み出すものは、教師と児童がその時々の状況を共に演じることだと言える。 「言葉による見方・考え方」の育成を促進する談話構造の形成は、小中9年間はもちろん高等学校においても必要であること、さらなる事例の収集と談話の分析を通して明らかにすべき課題について指摘した。

2「新学習指導要領における『言葉による見方・考え方』の三側面-小中９年間を見通す学習指導の方向性-」	共著	平成29年9月	『奈良学園大学紀要』第７集	平成29年に出された学習指導要領の鍵概念である「言葉による見方・考え方」の要素と構成およびその育成の筋道について述べた論文。 Ⅵ章構成(Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ章を分担執筆) 共著者：伊﨑一夫・岡本恵太 　本研究では「言葉による見方・考え方」を三つの側面に分類している。すなわち〈言葉と主体〉の関係に着目する「語用論的側面」、〈言葉と世界〉の関係に着目する「意味論的側面」、および〈言葉と言葉〉の関係に着目する「統辞論的側面」である。こうした三側面に基づいて新学習指導要領の指導事項を整理し、小中9年間を貫く系統性を明らかにした。 全13頁　本人執筆分14頁
3 「小学校国語科における「わざ言語」を活用した思考力の育成 ： 授業の談話分析からのアプローチ」	単著	平成31年 ３月	『奈良学園大学紀要』第10集	本研究は「わざ言語」を、子どもたちの具体的な言葉として表れた、思考力や「言葉によるものの見方・考え方」としてとらえる。「わざ言語」の思考力育成への寄与を探ることが本研究の目的である。事例として３年生の物語教材「ゆうすげ村の小さな旅館」の授業を取りあげ、談話分析を行った。その結果「見出し先行型」発言を「わざ言語」として取り出した。この発言の型は、感想の提示、問題の提示、問題の解決、教師への提案という機能を持つものであり、Task（課題活動）とAchievement（達成状態）の橋渡しをするものであった。実践に向けて、Task（課題活動）レベルにおける話型の導入、および橋渡し段階における先行学習の再構成への促し、そしてAchievement（達成状態）を子どもたち自身が整理・体系化することの必要性を示した。
４「教育社会学的な見方・考え方とは何か ―「置き勉」問題を手掛かりにー」	単著	令和２年２月	オンラインジャーナル「人間教育」第3巻第1号	本研究の目的は、教育社会学的なものの見方・考え方を明らかにすることにある。そのための手がかりとして「置き勉」問題を取り上げる。「置き勉」とは、教科書等の学習用具を教室に置いたままにしておくことであり、身体的な負担軽減のために容認する動きが広がりつつある。この問題について以下の二つの見方・考え方を適用する。第一が、教育事象における「あたりまえ」をとらえ直す「価値自由」であり、これにより従来の「置き勉」禁止が価値判断を暗黙の前提とすることが明らかになる。第二が「モデル化」を通して事象の仕組みを探求する「理念型」である。「置き勉」問題に「規範モデル」「解釈モデル」という二つのモデルを適用し、この問題の解決に向けては、規則の強化よりも児童・生徒による「規則についての解釈」を生かすことが有効だと示される。全７頁
５「児童-教師間の共演としてのIRE連鎖 ―対話的な学びの具現化に向けてー」	単著	令和２年３月	『奈良学園大学紀要』12集	教師の“Initiation（開始）”―児童生徒による“Replay（応答）”―教師の“Evaluation（評価）”の連鎖から成る会話構造であるIRE連鎖は，授業成立を支える「文法」ともいえるものである。本研究は，IRE連鎖に焦点をあてて，授業の談話記録を分析した。これは，IRE連鎖が，対話的な学びの促進要因となる条件を探るためである。分析の結果，IRE連鎖において，児童による積極的な参加が不可欠な要素であることが明らかになった。すなわち，第一に，教師とともに一定のリズムを生み出すこと。第二に教師に合わせて発言の形式を調整すること。第三に，教師とともに補い合いながら言葉を生み出していくことである。こうした三つの要素は，児童-教師間の「共演」と呼ぶことができるものである。対話的な学びを具現化するためには，教師と児童の「共演」を成立させていくことが必要である。 全10頁

６「観察力を育てる教育社会学の授業に向けて―学校外の事例から学校における事例へ―」	単著	令和２年５月	オンラインジャーナル「人間教育」第3巻第5号	本研究は、教員養成課程における教育社会学の授業において観察力を高めるための方策を考察するものである。観察力は児童・生徒に適切な指導を行うために欠かせないものである。観察力育成のための筋道として、学校外の事例を観察したのち、そこで得られた知見を学校内の事例にあてはめることを提案する。本研究では、学校外の事例としてエスカレーターの片側空けについて取り上げ、これが自然発生的なパターンであると同時に、改善のための介入が必要な事象であることを明らかにする。学校内における改善が必要な自然発生的パターンとしては、入学したての小学校１年生が学校「トイレの使い方」について学ぶ場面における「無力化実践」を取り上げる。これらの事例の検討を通して、教育社会学に臨床的な視点を取り入れることは、学生に実践力を育成するために有効である可能性を示すとともに、現職教員と連携した取り組みにも直結することを展望する。全７頁
７「デザイン的発想を生かした小学校国語科の授業改善」	単著	令和３年12月	『奈良学園大学紀要』14集	本研究の目的は，「デザインすること」に働く見方・考え方をデザイン的発想として取り出し，授業改善に生かすことである。本研究では，現代デザイン論を概観し，構成的・合理的思考という「作りながら考えること」の側面と日常的実践における「協調して考えること」の二つの側面を取り出す。小学校国語科における授業改善のためには，学校現場における「期待」を明確化し，プロトタイプの提案をすることが中心となる，さらに，教師をはじめとする関係者が協調して，教科書教材「事後的に」使いやすくすることが求められる。本研究ではプロトタイプの具体例として「言語活動系列表」と「授業のショートシナリオ」を提案し，授業改善におけるデザイン的発想の有効性を検討する。全10頁
（その他） 1 2 3 :				

（注）

１ 最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。
２「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。
３「研究活動」については、下記の点に留意すること。
①著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。
②著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。
③　共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。
④　最近１０年間に著書･論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。
⑤　芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5（2023）年3月31日

氏名　　鍵本　有理

研究分野	研究内容のキーワード
日本語学・古典文学・国語教育	文法史・万葉集の本文校訂・国語教材開発・わかりやすい表現

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
①文章表現指導	平成25(2013)年度～令和４(2022)年度	工業高等専門学校での国語表現指導、またその経験を2022年度から本学の教職表現力演習等に生かし、記入式プリント等を作成している。 その実践報告は、すでに『奈良工業高等専門学校研究紀要』や『高専教育』に発表済みである。
②「ノートが取れる・文章が書けるための表現指導－－書き取り・書き写しを活用して－－」	平成25(2013)年7月20日	教育現場において「文字を書く」という基本的な作業がおろそかになっている現状から、ディクテーションや書き写しの課題を通じて、学生の表現能力を養成する方法について実践した。その成果は、関西大学「教育支援センター年報」に発表済みである。
③「学生を主体とした図書委員会活性化の試み－恒常的活動を目指して－」	平成26(2014)年3月14日	「読書週間」展示その他、学生の図書委員会活動を活性化させることにより読書指導に役立てた。その上で、高専の図書館の位置づけについても全国図書館大会で発表、その後、前任者や後任者の実績も併せて高専フォーラムや『高専教育』に５年間の指導の成果を発表した。
④学生自身による学びの蓄積 ―ファイリングやノート作成のできる学生に―	平成29(2017)年3月1日	アクティブ・ラーニングほか、授業中に学生にプリント作業させることが増えている。そのプリントの蓄積方法や、手書きでノート作製させる方法を実践。そのメリットについて、岐阜工業高等専門学校「大学教育再生加速プログラム」公開報告会にて発表した。
⑤Teams・Forms等を導入した授業方法	令和2(2020)年度～令和3(2021)年度	遠隔授業において下記教材等を利用し、Teamsのリアクション機能を活用した双方向授業を実施。授業後には課題をFormsで提出させ、次回の授業で解答を紹介・コメントすることで授業外の学習を促進した。
⑥古典に親しむ遠隔授業教材 ―絵巻提示と文法解説の工夫―	令和3(2021)年3月4日	これまでの対面授業で作成した視聴覚教材を応用し、遠隔授業用に絵巻物を著作権に配慮しつつ利用した教材や、文法事項をアニメーション活用によりクイズ式にしたビデオ教材などを作成。令和2年度KOSENフォーラムにて発表した。
⑦「論理力を試そう！」テストの実施・分析――本校生の読解力を見る――	令和3(2021)年3月（電子版のため発行月のみ記載）	奈良高専の低学年を対象として、読解力テストを実施し、結果を分析した。読み誤りの原因としては「飛ばし読み」の可能性があることと、日頃から単語ではなく「文」を書かせ、ゆっくりでよいので正確に読み取る習慣付けが大切であることをまとめた。
２　作成した教科書，教材		
①国語表現に関する教材プリント	平成25(2013)年度～令和４(2022)年度	高等専門学校４年生を対象とした、国語表現に関する教材プリント。表現について考えさせるための問題と、技法や注意点をまとめた説明、新聞などの実例を組み合わせて構成。 令和４(2022)年度は、本学の教職表現力演習向けに新規作成、また特に敬語・悪文・道順説明などにはこれまでのものを応用して使用。

②『高専生のための　これだけ！　古典文法』 ③『大学生のための　これだけ！　古典文法』	平成25(2013)～令和3(2021)年度 令和４(2022)年度	通常の大学受験を必要としない高専学生を対象に、古典文学読解の上で最低限必要な古典文法事項をまとめた文法書(B６版、約50ページ)。完了「り」の接続についての最近の学説・「完了」と「過去」の違いなどをコラムとして入れ込むなど、研究成果も活かして作成。 また、本学学生向けに②を編集し直し、③を作成した。
④国語（古典）視聴覚教材 ⑤国語（現代文）視聴覚教材 ⑥「国語表現法」視聴覚教材 ⑦日本文化・文学に関する視聴覚教材 いずれもPowerPoint(対面授業)・Teams・Forms等（遠隔授業）活用	平成29(2017)年度より現在まで 平成30(2018)年度より現在まで 平成30(2018)年度より現在まで 平成31(2019)年度より現在まで	④⑤は高等学校国語教材の主なものについて、PowerPointを使用した教材である。 ④は古典作品のあらすじを絵巻物で紹介、文法事項についてはアニメーションを駆使しクイズ形式で学生との双方向授業となるよう工夫した。本学での夏期集中講座などでも、文法事項復習用として使用。 ⑤は、現代文についても、著者・作者の紹介や内容に関する視聴覚資料をPowerPointにより作成したもの。授業中の発問についても、PowerPointで提示し、その後アニメーションでヒントを与えるなどして、学生との双方向授業を工夫した。 ⑥は高専4年生対象の国語表現教材。最初は手紙用語など定番のものをPowerPointで作成していたが、「わかりやすい表現」など、文章作成の工夫についてもPowerPointのアニメーションで作成。また市販の音声教材なども積極的に利用している。 ⑦は、当初高専5年生（大学2年生に相当）の教養科目「日本文化学」で使用したもので、日本の古典や神話などの比較文化論について、工学系の学生にも興味を持ってもらえるようにした。その後、本学の講義でも、「竹取物語」の比較文学的側面を説明するために使用。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 ①奈良工業高等専門学校の授業アンケートにおける評価 ②本学の授業評価アンケートにおける評価	 平成25(2013)年度～令和3(2021)年度 令和４(2022)年度	 ４年次対象の「国語表現法」における授業アンケートにおいて、毎年高評価を得ていた。また、古典に関する指導についても、特にPowerPointの利用に関し、１クラス約40名の授業で、クラスにもよるが、自由記述で約10名が「おもしろかった」、約7名が「プロジェクタを使っているのもよかった」「ポイントがわかりやすい」「時代背景がわかる」、数名が「ノートがわかりやすい」と記述。 今年度、初めて担当した科目ばかりであったが、総合評価4.0/5.0と一定の評価は得られたようである。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 ①奈良県河合町中央公民館古典講座担当 ②奈良工業高等専門学校公開講座「日本文学講座」担当 ③奈良県香芝市中央公民館古典講座担当	 平成25(2013)年度～令和４(2022)年度 平成25(2013)年度～令和2(2020)年度 平成25(2013)年度～令和４(2022)年度	 河合町の町民大学「文化・芸術学部」の古典講座担当。『源氏物語』をはじめとし、日本の古典文学について、町民を対象として講義。 奈良工業高等専門学校の公開講座として、毎年夏期休業期間に地域住民を対象として実施。毎年70名前後の参加者があった。 国語科教員への依頼・日程調整・事務部との打ち合わせを行い、講演も年1回担当。 香芝市の古典講座「珠裳」の講師担当。『枕草子』『宇治拾遺物語』『徒然草』『源氏物語』など日本の古典文学について、市民を対象として購読形式にて講義。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
①修士（文学）　関西大学	平成4年3月31日	関西大学　文修第九六四号 論文題目「万葉集動詞のアスペクト」
②博士（文学）　関西大学	平成12年3月31日	関西大学　文博第一七号 論文題目「万葉集文法研究」
③中学校教諭１種免許（国語）	平成4年3月31日	（大阪府教育委員会平1中1第２７５０号）
④高等学校教諭１種免許（国語）	平成4年3月31日	（大阪府教育委員会平1高1第２９６９号）
⑤司書教諭免許	平成2年12月1日	（文部省第１５３６７６号）
⑥中学校教諭専修免許（国語）	平成4年3月31日	（大阪府教育委員会平３中専第５６号）
⑦高等学校教諭専修免許（国語）	平成4年3月31日	（大阪府教育委員会平３高専第２４８号）
⑧防災士	平成26年9月25日	近畿地区7高専連携による防災技能を有した技術者教育の構築プロジェクトの一環として受講し、資格試験に合格。（防災士登録０８１４１８号）
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
①奈良工業高等専門学校　教務主事補 （入試担当・教務担当）	平成25(2013)年度 ～平成28(2016)年度	最初の2年間は主に入試広報を担当し、中学や学習塾等主催の入試相談会業務を担当、また広報資料の作成・立案にもあたった。平行して、教務としての業務（時間割作成や授業に関する各種連絡等）を担当した。
②同　一般教科主任・運営委員・人事委員	平成29(2017)年度 ～平成30(2018)年度	主任として、科内運営他、月1回の科内会議の開催、採用・昇任人事を担当。また認証評価をはじめとした外部評価への対応、入試業務等にあたった。
③同　学生相談室長	平成29(2017)年度	保健室と連携し学生のメンタルケアやアンケート等を実施、特に夏季休業後から学生の相談が増加したため、各種研修での事例を参考に、学内の相談者リスト等を作成、後任者への引き継ぎに工夫をした。
④同　情報工学科1・2年学級担任	平成31(2019)年度 ～令和2(2020)年度	学生指導（生活・学習面）クラス運営や保護者懇談実施。様々な行事への引率等を行った。2020年度は遠隔授業期間の学生の精神面のサポート（ネットでの毎朝の連絡ほか）を行った。
⑤同　情報工学科1年学級担任	令和3(2021)年度	学生指導（生活・学習面）やクラス運営・保護者懇談実施。
4　その他		
奈良工業高等専門学校における学内FD 「担任勉強会」担当	平成25(2013)年度から平成29(2017)年3月まで毎年1・2回	高専の学級担任は、年度当初の注意事項や座席表・掃除当番表に始まり保護者への連絡文書、行事の案内文書、場合によっては学級通信当各種文書を自身で作成する必要がある。また、学生指導も経験の浅い教員にとっては戸惑うことも多い。 そこで担任業務へのサポートとして、初めて担任を受け持つ教員から、ある程度の経験を持つ教員まで、幅広いニーズに対応するよう、自身の経験から研修を行うだけでなく、担任同士の座談会や意見交換会なども企画・運営した。 また学生主事からの要望で、担任が作成する各種文書や業務を簡単にまとめた「担任資料」を作成、当初はCD－ROMと紙ファイル17部を学内に配付、その後も初めて担任を持つ教員に電子データを配付した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
(学術論文) １．「ノートが取れる・文章が書けるための表現指導ーー書き取り・書き写しを活用してーー」	単著	平成25(2013)年7月20日	関西大学『教職支援センター年報2012』pp13～18	教育現場において「文字を書く」という基本的な作業がおろそかになっている現状から、ディクテーションや書き写しの課題を通じて、学生の表現能力を養成する方法について述べた。
２．「論理力を試そう！」テストの実施・分析―本校生の読解力を見る―	単著	令和3(2021)年3月	「奈良工業高等専門学校研究紀要」第56号 pp81～88	新井紀子著「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」で、生徒の「基礎的読解力」が「危機的な状況」にある、と話題になった。また、国際学習到達度調査（PISA）読解力テストで日本の順位が低下している。そこで、勤務校学生の読解力について分析したところ、熟語などを「飛ばし読み」することが原因である可能性のあることがわかった。読解力養成のためには日頃から単語ではなく「文」を書かせ、ゆっくりとでよいので正確に意味を読ませる指導や工夫が大切であることをまとめた。
（その他） 1. 学生自身による学びの蓄積――ファイリングやノート作成のできる学生に――	単独	平成29(2017)年3月1日	岐阜工業高等専門学校「大学教育再生加速プログラム」公開報告会	ポスターセッション 学生によるポートフォリオの一環としてのファイリング指導やノート指導、アクティブラーニングのためのPowerPoint教材について紹介した。
2. 古典に親しむ遠隔授業教材―絵巻提示と文法解説の工夫―	単独	令和3(2021)年3月4日	令和2年度KOSENフォーラム オーガナイズセッション（OS-92） 高専ならではのICT活用～遠隔授業の実践発表～	これまでの対面授業で作成した視聴覚教材を応用した、遠隔授業教材の実践発表。絵巻物を著作権に配慮しつつ利用し、文法事項はアニメーションを利用してクイズ式にするなどしたビデオ教材紹介。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

2023年　3月　31日

氏名 川端咲子

研究分野	研究内容のキーワード
日本文学	近世文学　近世演劇　歌舞伎　浄瑠璃

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
1)くずし字解読のワークショップを取り入れた授業	平成23年4月～令和2年4月	佛教大学非常勤講師として、文献学入門（版本）の授業の中で、近世の版本を使ってくずし字解読を行うための作業を取り入れている。実際に近世に出版された本の写真を使い、くずし字解読に必要な特有の様々な約束などを身につけていく。これにより、当初は全く読めないと思われていた原典を少しずつ身近なものとして認識できるようになった。あわせて、近世の文学が作られた当時の人々や当時の文化を実感させることができた。
2)古典芸能のワークショップを取り入れた授業	平成26年10月～令和2年3月	同志社大学グローバルコミュニケーション学部非常勤講師として、日本の古典芸能に対してほとんど知識のない留学生相手の授業を担当。文化デジタルライブラリーなどのツールを利用し、映像資料を同時通訳的に現代語で解説しながら視聴するとともに、実演者によるワークショップを行った。結果として日本の古典芸能はもちろん、各々自国の古典文化に対する興味関心をも引き出した。
２　作成した教科書，教材		
なし		
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
2019年度（令和1年度）春学期佛教大学授業アンケート	令和1年7月	「この授業からあなたが得たものについて」の設問で、「シラバスに記載されている到達目標が達成できた」が4.0/5.0（全体平均3.96）、「自分にとって有益な考え方・発送が身についた」が4.16/5.0（全体平均4.02）、「意義のあるものであった」が4.06/5.0（全体平均が3.99）
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
神戸女子大学古典芸能研究センター特別講座「小栗判官」の物語	平成27年11月	社会人向けの「説経節―人は神仏に何を託そうとするのか―」という講座の1回。小栗判官を主人公とする説経節「をぐり」がどのような物語で、後生へどのように展開していくのかを解説した。
神戸女子大学古典芸能研究センター特別講座人が死ぬ時　来迎の姿―志水文庫蔵「来迎図」さまざま　付リ「涅槃図」解説―	平成28年3月	社会人向けの「あの世への想像力―日本人の死生観―」という講座の1回。神戸女子大学古典芸能研究センター所蔵の志水文庫には、佛教版画が多数含まれている。その整理の中で、得られた知見の中から、「来迎図」と「涅槃図」を取り上げ解説した。
神戸女子大学古典芸能研究センター特別講座源氏物語と近世の浄瑠璃	平成29年10月	社会人向けの「源氏物語と芸能」という講座の1回。平安時代に作られた物語である『源氏物語』が、中世を経て近世の芸能の中ではどのように受け入れられ、また変容したかについて解説した。
神戸女子大学古典芸能研究センター特別講座近世の牛若丸像	令和元年10月	社会人向けの「アイドル・義経の形成を探る」という講座の中の1回。近世の浄瑠璃や子供向けの絵本の中で、牛若丸が文字でどう書かれ、挿絵でどう描かれているかということを提示して、そこから見られる近世の牛若丸像について解説した。
奈良学園公開文化講座　第59回人形浄瑠璃に歴史と魅力	令和３年３月	近世に上方で誕生した人形浄瑠璃をとりあげ、さまざまな変遷を経て、現在の「人形浄瑠璃 文楽」となった経緯を解説。変遷の過程でおきた出来事、かかわった人々や多彩なエピソードをまじえながら、人形浄瑠璃の魅力について話をした。あわせて、奈良あるいは大和国と人形浄瑠璃の関わりについても話をした。
５　その他		

佛教大学における教育実績	平成12年度～令和3年度	平成23年度～令和2年度　近世文学特講（日本文学特講(近世)）・文献学入門（版本）・近世文学講読（日本文学講読（近世））・日本文学史
神戸女子大学における教育実績	平成15年度～令和2年度	平成25年度　芸能史Ⅰ・Ⅱ・古典芸能特講Ⅰ・Ⅱ・古典文学特講Ⅰ 平成26年度　日本語日本文学演習Ⅱ・芸能史Ⅰ・古典芸能特講Ⅰ・Ⅱ・詞と文学Ⅰ・日本語日本文学演習Ⅱ・文献資料学 平成27年度　芸能史Ⅰ・古典芸能特講Ⅱ・文献資料学 平成28年度～令和2年度　古典文学講読Ⅰ・Ⅱ・文献資料学
京都造形芸術大学における教育実績	平成25年度	平成25年　通信教育部和の伝統文化コースの卒業研究指導
同志社大学における教育実績	平成26年度～令和2年度	平成26年～令和2年　グローバルコミュニケーション学部で留学生対象の授業「日本の伝統文化演習」担当
神戸女学院大学における教育実績	平成30年度～令和1年度	平成30年度　日本芸能史1・2 令和1年度　日本芸能史1・2・日本古典文学講読
甲南女子大学における教育実績	平成29年度	芸能文化論
立命館大学における教育実績	平成30年度～令和3年度	日本演劇論
奈良学園大学における教育実績	令和3年度～令和4年度	国文学入門・国文学Ⅰ・国文学Ⅱ・国文学特講・教職表現力演習Ⅰ・教職表現力演習Ⅱ・基礎ゼミナール・語学・文学総合演習Ⅱ（国文学）・日本語教育指導法・教材研究

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
高等学校教諭一種免許（国語）	平成5年3月	
2　特許等		
なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
神戸女子大学古典芸能研究センター非常勤研究員	平成15年4月～令和3年3月	神戸女子大学古典芸能研究センター開設当時から非常勤研究員として業務に従事。
〔課題番号〕24520225〔研究課題名〕画像資料の相互利用による歌舞伎演出の研究（河合真澄）研究協力者	平成24年4月～平成27年3月	河合眞澄氏を代表とする科研。歌舞伎台帳(脚本)を中心とした、現存する江戸期の歌舞伎関連資料をもとに、江戸期の歌舞伎の上演形態や演出法などについての考察を行った。
4　その他		
なし		

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1食満南北著『大坂藝談』	共	平成28年3月	和泉書院 神戸女子大学古典芸能研究センター編	神戸女子大学古典芸能県有センターが入手した、食満南北の未公開原稿『大阪藝談』の翻刻と解説を載せた本。翻刻作業と索引作成に携わった。
2新作浄瑠璃『めをと山賊』―食満南北遺稿集―	共	令和2年3月	和泉書院 神戸女子大学古典芸能研究センター編	解題執筆 食満南北作の歌舞伎脚本「めをと山賊」の草稿本、食満南北脚色の浄瑠璃『恩讐の彼方に』（原作菊池寛）、食満南北の画賛の歌舞伎十八番図絵を収録した本で、上記三作品の翻刻と解題すべてを担当。
（学術論文）				
1古浄瑠璃〔紀三井寺〕（六段本）解題と翻刻	単	平成25年3月	神女大国文　24号 (p58-p72)	神戸女子大学古典芸能研究センター志水文庫所蔵の古浄瑠璃の紹介。『紀三井寺』は、京都で上演された浄瑠璃であるが、本作は本来の五段本を六段に変更して江戸で刊行されている。これは当時の浄瑠璃本刊行としては、時折見られる現象で、江戸版読み物として刊行されたと考えられている。挿絵の構図の変更などから、本作の場合も同様の位置づけが可能であることを考察した。

2資料紹介　浮世草子〔座敷歌舞伎〕	単	平成25年6月	神戸女子大学古典芸能研究センター紀要　7号 (p130-p135)	神戸女子大学古典芸能研究センター志水文庫所蔵の浮世草子の紹介。本作は浮世草子ではあるが、歌舞伎の口上の様相を示す資料としても扱われ、また赤穂義士物のひとつとも考えられる貴重な資料である。センターが所蔵するのは巻五のみの零本であるが、他機関に所蔵が見られないこともあり、本文の翻刻と挿絵をもって紹介をした。
3浄瑠璃『三世相』における工夫	単	平成26年6月	神女大国文　第25号 (p13-p22)	近松門左衛門作の浄瑠璃『三世相』を取り上げ、世話浄瑠璃誕生前夜の浄瑠璃として位置づけ、作中に見られる近松のいくつもの工夫を指摘した論考。当代の人を登場させることがまだなかった時期の浄瑠璃が、数年前に死去したばかりの遊女夕霧を登場させるためにおこなった工夫として、時代設定を敢えて曖昧にしたと考えられる事を本文の表記から指摘、また夕霧を幽霊として登場させることで当代の人を登場させるというハードルを越えようとした事を指摘した。後者については、様々な謡曲を、近世的な解釈をしつつ取り入れていることも合わせて指摘した。
4〈新収資料紹介〉『新板おどりくどき』	単	平成26年6月	神戸女子大学古典芸能研究センター紀要　8号	『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』3号で紹介した『新板きおんおとりくとき』の補足。ほぼ同じ資料ながら、掲載曲の順番が少し異なり、外題が異なる『新板おどりくどき』が、これまで所在不明であった古典文庫所収の本の底本であることを証明した。
5『二十五菩薩功徳集』について	単	平成27年6月	神戸女子大学古典芸能研究センター紀要　9号 (p106-p125)	神戸女子大学古典芸能研究センター志水文庫所蔵の仏教書の紹介。本書は、他には東京大学にのみ所蔵が確認できる資料である。著者不明であるが、内容から、浄土宗関係者による執筆と考えられることを指摘し、来迎に際して阿弥陀如来と共に現れる二十五菩薩に関する先行研究を踏まえつつ、十王経や和讃などの記述と比較して本書の特異性を確認し、その上で能の番外曲「御菩薩」との類似性を指摘した。
6享保三年の競演 ―絵入狂言本『けいせい山椒太夫』の検討― （査読有）	単	平成28年6月	『上方文藝研究』第13号 (p80-p93)	享保3年に起きた茨木屋幸斎闕所事件は大きな話題となり、大坂で浄瑠璃『山椒太夫葭原雀』・大坂と京都で歌舞伎『けいせい山椒太夫』が上演され、浮世草子『けいせい竈照君』の刊行も行われた。浮世草子刊行には、書肆八文字屋と江島屋の確執が絡むこともあり先行研究が複数存在する。本論文では、先行研究を整理した上で、大坂と京都で上演された『けいせい山椒太夫』は、正徳年間に上演された「さんせう太夫の狂言」を急遽改作した作品である可能性が高いことを指摘した。
7絵入狂言本『けいせい山椒太夫』の検討 　―嵐座・大和山座・都座―	単	平成28月年6月	『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』10号 (p66-p80)	上記の論文の続編。大坂で上演された『けいせい山椒太夫』と京都の二座（大和山座・都座）で上演された『けいせい山椒太夫』の相違点を確認し、それがどういった事情を背景として生じたかについて、特に出演役者の役柄の差に焦点を当てて考察した論考。また、絵入狂言本そのものの本文や挿絵に見られる齟齬が、どうした状況下に生じたと考えられるか、狂言本が現存しない大坂の『けいせい山椒太夫』はどのような内容であったと考えられるかについても考察を行った。
8「をぐり」の物語―十王由来譚	単	平成29年3月	『説経 ： 人は神仏に何を託そうとするのか』（和泉書院） (p142-p156)	説経節「をぐり」から、小栗判官の従者である「十人の殿原」の物語を取り上げて考察した論考。小栗判官に付き従ってきた十人の殿原は小栗と共に毒殺されて地獄の閻魔王の前に引き出される。我身を身替わりに小栗蘇生を訴えた十人の殿原の心意気に感じた閻魔王は、小栗を蘇生させ、十人の殿原を自分の周りに置く。これが十王の始まりであるという「十王由来譚」として語られる。説経「をぐり」の諸本に見られる「十人の殿原」の物語の異同を、『十王経』から始まる十王信仰の変遷と重ねて考察を行った。
9食満南北脚色、浄瑠璃「恩讐の彼方に」について	単	平成29年3月	神女大国文　28号 (p33-p43)	大正８年に菊池寛が発表した小説『恩讐の彼方に』は、菊池寛自身の手により戯曲化されて大正９年に帝国劇場で上演されている。この小説・戯曲を元にして、人形浄瑠璃のために脚色を行ったのが食満南北である。この浄瑠璃「恩讐の彼方に」が、どの様な状況下で浄瑠璃化されたか、浄瑠璃化に当たっては原作がどのように変更されたか、初演以降どのような変化が起きたかを考察した論考。歌舞伎や浄瑠璃のために多くの作品を脚色してきた食満南北の脚色のあり方が一部明らかになったといえる。

10豊竹山城少掾旧蔵段物集〔乱曲集〕（写真版）について―志水文庫蔵横山重氏旧蔵資料整理の一環	単	平成29年6月	『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』11号（p67-p82）	延宝から宝永にかけて京都で活躍した浄瑠璃太夫宇治加賀掾には、形式の異なる段物集が複数ある。それらは、加賀掾公認のものもあれば、書肆の一存で刊行したものもある。そうした段物集の刊行のあり方は、法整備がまだ整いきっていない時期の出版のあり方と絡み、様々な問題を内包すると考えられる。本稿では戦災により焼けてしまい現在は写真で一部分のみ知ることが可能な段物集〔乱曲集〕を取り上げ、書肆の検討、本文の検討、節付けの検討を通して、誰がどうした意図でこの段物集を作ったのかを考察した。
11近世芸能における道成寺の演出―宇治加賀掾古浄瑠璃『うしわか虎之巻』鐘入を中心に―	単	平成30年3月	神女大国文　29号（p39-p49）	『大日本法華経験記』（平安時代成立）以来、面々と語り伝えられてきた道成寺の鐘に纏わる伝説は、中世成立の能「道成寺」と『道成寺縁起絵巻』を経て、近世の浄瑠璃・歌舞伎に取り込まれて様々な「道成寺物」を生み出した。仮名草子『道成寺物語』の挿絵や歌舞伎の絵入狂言本の挿絵を元にして、近世芸能において鐘から蛇体が現れる際の演出は、どの様な形が一般的であったのかを考察し、挿絵のない古浄瑠璃『うしわか虎之巻』でも、本文の検討とあわせて同様の演出があったことを考察した。
12絵入狂言本『けいせい山崎通』について	単	令和元年5月	演劇研究会会報　第45号（p30-p41）	絵入狂言本『けいせい山崎通』は、古くから『徳川資料類従』掲載の翻刻は知られていながら、原本は所在不明であった。神戸女子大学古典芸能研究センターが入手した本は、その翻刻の底本らしいことが明らかになったため、翻刻には載らない挿絵を主に紹介を行った。またこの歌舞伎も『けいせい山椒太夫』と同じく、大坂と京都でほぼ同時期に上演されていることから、配役表と役者評判記の記述から、その相違点などを考察した。
13（資料紹介）京都大政所町資料『永傳録』の名代について	単	令和元年6月	『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』12号（p63-p73）	文化14年に京都で起きた「町代改義一件」（京都の上京下京町組が町代を訴えた訴訟）の後、大政所町町年寄が後世のために纏めた文書が『永傳録』である。様々な情報が記載された同文書の中に、「湯屋風呂屋茶屋嶌原芝居之事」という一条があり、「芝居之事」として挙げられている名代部分は、従来知られている『京都御役所向大概覚書』記載の名代一覧と聊かの異同があり、また『永傳録』の筆者による注記は他には見られない情報も含むことから、「芝居之事」の部分を紹介、若干の考察を行った。
14志水文庫所蔵 古浄瑠璃〔るり姫〕零葉	単	令和元年6月	『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』13号（p65-p73）	神戸女子大学古典芸能研究センター志水文庫所蔵の古浄瑠璃の零葉の紹介。この零葉については、早くに横山重氏が『古浄瑠璃正本集』で言及されているが、内容の検討は行われてこなかった。本稿は、零葉の本文の翻刻と挿絵の影印を紹介した上で、物語の背景となる伝説の紹介、本文と挿絵から分かる浄瑠璃の演出の推定を行い、以前に紹介した〔紀三井寺〕同様に、上方の浄瑠璃を江戸で読み物として刊行した可能性を指摘した。あわせて、慶應義塾大学図書館が所蔵する別の部分の零葉を紹介している。
15志水文庫の仏教資料	単	令和元年7月	『寺院文献資料学の新展開』第９巻近世佛教資料の諸相Ⅱ（臨川書店）編集山崎淳（p81-p107）	寺院所蔵文献資料調査を継続している研究会が主体となって刊行される『寺院文献資料学の新展開』全12巻の1冊。近世の仏教資料を調査研究するには、寺院所蔵の資料は餅論ではあるが、近代に流出して個人蔵となった資料への目配りも必要であることを、志水文庫（故信多純一大阪大学・神戸女子大学名誉教授旧蔵の資料）の例を示して主張した論考。あわせて、志水文庫所蔵の仏教関連資料の抄出紹介を行った。
16（資料紹介）食満南北画帖『その妻とともに』	単	令和2年6月	『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』14号（p5-p13）	食満南北再評価の一環。昭和31年に食満南北が妻や友人夫妻と和歌山へ旅をした折の画帖を影印で紹介し、解説を付した。
17〈資料紹介〉『絵本舞台桜』解題・翻刻・影印	単	令和2年6月	『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』14号（p71-p82）	『絵本舞台桜』は、浄瑠璃や歌舞伎の一場面を、能や狂言風に描いた絵本である。他に所蔵をみないため、翻刻と影印で紹介をした。解題では、本書の刊行時期は不明ながら、造本が非常に似通う同様の書があることから、近世の一時期に、能や狂言と浄瑠璃や歌舞伎のコラボレーション的な絵本が流行した可能性があることを指摘した。
18横山重自筆《書誌》カード（仮題）紹介（一）	単	令和3年6月	『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』15号（p5-p13）	昭和期の国文学者・書誌学者である横山重氏が蔵書の処分をするにあたって作成された書誌カードが、神戸女子大学古典芸能研究センターの志水文庫にある。資料的価値の高いこの書誌カードを翻刻紹介した。

19仏母鎮護　摩耶夫人の面影	単	令和3年7月	『伝説・物語の神戸を歩く』（神戸女子大学古典芸能研究センター編、神戸新聞総合出版センター刊）	本書は、生田、須磨、粟島など古典文学や古典芸能と関わりのある神戸の土地を取り上げ、その地に残る伝承や古典文学・古典芸能の紹介をする本である。その中で摩耶山の部を担当し、摩耶山が舞台となった文学・歌舞伎・浄瑠璃の紹介をした。
（その他）				
1「食満南北」図録 ：『食満南北著『大阪藝談』』刊行記念展示	単	平成29年7月	神戸女子大学古典芸能研究センター編	食満南北の未発表『大坂芸談』の刊行にあわせておこなった展示の図録。大正から昭和に書けて大阪の芸能界で作者として演出家として活躍し、川柳作家としても知られていた食満南北の再評価の一環。
2「志水文庫の大津絵と大原神社の絵馬「踊り子図」」図録		平成30年2月	神戸女子大学古典芸能研究センター編	志水文庫所蔵の資料の中から、大津絵を取り上げてその周辺資料と共に展示を行い、その図録を作成、HP上で公開した。
3「説経稀本展―森修文庫・志水文庫・阪口弘之氏蔵本―」図録		平成30年4月	神戸女子大学古典芸能研究センター編	神戸女子大学で近世文学の専門として教鞭をとられた森修・信多純一・阪口弘之先生が所蔵されていた（阪口先生に関しては所蔵されている）説経関連の正本（テキスト）を展示して、説経の世界の広がりを示した展示を行い、その図録を作成、HP上で公開した。
4「仏教版画の群像―如来・菩薩。羅漢―」図録		平成30年6月	神戸女子大学古典芸能研究センター編	志水文庫所蔵の仏教資料の諸相を示す展示の一環として、一面に多数の仏が描かれた作品を特に取り上げた展示を行い、その図録を作成、HP上で公開した。
5「古典芸能と番組・番付―宣伝・案内・見立―」図録	共	平成31年3月	神戸女子大学古典芸能研究センター編	能・狂言・歌舞伎・人形浄瑠璃の興行に際し、それを宣伝・案内するためには様々な形式の番組や番付が作られる。その様相を、古典芸能研究センター所蔵資料を使って示した展示を行い、その図録を作成、HP上で公開した。
6「みんなの偶像！牛若・。義経―芸能にみるその姿―」図録	共	令和1年9月	神戸女子大学古典芸能研究センター編	源義経生誕860年、没後830年を記念してセンター主催で行った特別講座「アイドル・義経の形成を探る」にあわせて、センター所蔵の牛若・義経関連の資料を使った展示を行い、その図録を作成、HP上で公開した。
7「床本　太夫が見る本―四世竹本相生太夫旧蔵資料を中心に―」図録	単	令和2年2月	神戸女子大学古典芸能研究センター編	平成30年に寄贈を受けた故四世竹本相生太夫所蔵資料のお披露目のために、文楽の太夫が舞台で浄瑠璃を語るときに使う「床本」にスポットライトを当てて行った展示の図録を作成、HP上で公開した。

（注）

１　最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。
２「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。
３「研究活動」については、下記の点に留意すること。
①著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。
②著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。
③　共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。
④　最近１０年間に著書･論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。
⑤　芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

2023年　3月　31日

氏　名　　澁谷　友和

研究分野	研究内容のキーワード
社会科教育　地理教育　防災教育	未来洞察型授業構成論　まちづくり学習　防災学習

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1. 平成23年度東大阪市教育委員会「オンリーワンスクール」推進事業	2011年10月	・社会科教育研究主任として「ようこそ縄東ツーリストへ！日本全国最高の旅行をプレゼンします！」の実践発表を行った。2泊3日の旅行計画を立てる実践で，地理的な見方・考え方が深まった。
2. 平成24年度中河内地区小学校教育課程研究協議会	2012月8月	・事項①の発表を行った。
3. 平成24年度東大阪市教育委員会「オンリーワンスクール」推進事業	2012年11月	・社会科教育研究主任として「ひょうたんやま 防災探検隊～大好きな自分の町のええとこ見つけた～」の実践発表を行った。地域の人と合同のフィールドワークを実施し，防災マップ作成した。その後，危険個所を市長に報告し，改善してもらうという地域全体の取り組みとなった。
4. 東大阪市人権教育エリア研究会公開授業	2014年11月	・「地震からいのちを守る知恵」というテーマで公開授業を行った。5年生担任としての実践で，いろんな場面を想定しての避難の仕方の学習を行った。
5. 東大阪市人権教育エリア研究会講演	2014年11月	・「児童が主体的に社会に関わろうとする人権学習～防災マップ作成を例に～」というテーマでエリア研究会全体講演を行った。
6. 平成26年度授業法研究会講演	2015年3月	・主に私立学校教員の研究会で，社会科で取り組んだ「都道府県名産弁当プレゼン」の実践をもとに講演を行った。都道府県の名産を盛り込んだ弁当開発だけではなく，なぜその名産が生まれたのかという背景を考えさせる授業実践を紹介した。
7. 東大阪市未来市民教育公開授業	2019年2月	・2019年度から東大阪市において小中一貫教育が開始され，その中で市の独自教科「未来市民教育－夢TRY科」が実施されている。その先行研究として「未来の社会と未来を生きる自分の姿を深く考える児童の育成」とテーマに，「わたしたちのくらしと税の役割」の授業実践を公開した。

2　作成した教科書，教材 1．瓢箪山をもっと楽しめるワクワクマガジン「ひょっこりひょうたん山」（pp.39-41.）に地域の人とともに手作り防災マップを作成。	2013年10月	・2012年度東大阪市教育委員会「オンリーワンスクール」推進事業で取り組んだ「ひょうたんやま 防災探検隊～大好きな自分の町のええとこ見つけた～」の実践で作成した防災マップをもとに，地域の人たちとともに保存版手作り防災マップを作成し，地域の防災対策の教材として活用してもらった。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1．大阪府教員評価育成システムでの評価	2007年より	・大阪府では教員評価育成システムが導入され，毎年業績評価される。SS・S・A・B・Cという評定がつけられるが，9年連続S評定，2016年度評価ではSSの評定をいただいた。転勤してからも3年連続でS評価をいただいた。
2．東大阪市長賞受賞	2013年1月	・2012年度東大阪市教育委員会「オンリーワンスクール」推進事業で取り組んだ「ひょうたんやま 防災探検隊～大好きな自分の町のええとこ見つけた～」の実践が東大阪市長賞をいただいた。地域の人と合同のフィールドワークを実施し，防災マップ作成した。それをふまえ危険個所を市長に報告し，改善してもらうという地域全体の取り組みとなったものだが，その時，実践学年を担当し，研究主任として尽力した。
3．奈良学園大学学生授業アンケート	2021年7月	・大学で実施される学生授業アンケートにおいて，担当している「社会科指導法」等の授業評価が，大学全体の平均授業評価より上回っており，高い評価を得た。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1．教育実習生担当	2010年9月 2012年9月 2015年9月 2016年6月 2016年9月	・大阪教育大学より男子学生1名担当 ・四天王寺大学より女子学生1名担当 ・佛教大学より男子学生1名担当 ・奈良教育大学より女子学生1名担当 ・同志社女子大学より女子学生1名担当
2．インターンシップ学生指導担当	2013年 年間 2014年 年間	・大阪教育大学大学院より男子学生1名担当 ・大阪教育大学大学院より男子学生1名担当
5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1．小学校教諭一種免許状	2000年3月	・平一一小一種第一三六号　奈良県教育委員会
2．中学校教諭一種免許状（社会）	2000年3月	・平一一中一種第二五七号　奈良県教育委員会
3．小学校教諭専修免許状	2016年3月	・平二七小専修第一〇号　奈良県教育委員会
4．中学校教諭専修免許状（社会）	2016年3月	・平二七中専修第五五号　奈良県教育委員会
5．修士（教育学）	2016年3月	・奈良教育大学　第一七二六号 論文題目「琉球・沖縄史を位置づけた小学校歴史学習カリキュラムの開発研究」
6．博士（学校教育学）	2021年3月	・兵庫教育大学　博乙第157号 論文題目「小学校社会科未来洞察型の授業開発研究」

2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1．平成26年度授業法研究会研修講師	2015年3月	・主に私立学校教員の研究会で，社会科で取り組んだ「都道府県名産弁当プレゼン」の実践をもとに講演を行った。都道府県の名産を盛り込んだ弁当開発だけではなく，なぜその名産が生まれたのかという背景を考えさせる授業実践を紹介した。
2．東大阪市花園北小学校研修講師	2021年年間	・東大阪市花園北小学校校内研究「未来を考える子ども」第3年次の研究授業に対する指導・助言を行った。
3．国際地理オリンピック委員	2021年年間	・日本地理学会の国際地理オリンピック委員として，大会に関する業務を行った。
4．東大阪市立花園北小学校研修講師	2022年年間	・東大阪市立花園北小学校校内研究「SDGsを位置づけた授業開発研究」の指導・助言を行った。
5．東大阪市立花園中学校ブロック研修講師	2022年5月	・「児童生徒が能動的につけたい力を身につけるための評価のあり方」をテーマに，その内容と方法の研修を行った。
6．兵庫県学校安全（防災）総合支援事業における気象災害モデル校授業研究会講師	2022年10～11月	・芦屋市立岩園小学校が指定を受けている気象災害に関する授業モデルの開発に関する研修を行った。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表会等の名称	概　　要
（著書） 1．近年の自然災害と学校防災Ⅱ－持続可能な社会をつくり防災・減災，復興教育－	共著	2021年3月	協同出版	学校教育の中で，教科の知識・技能の習得と防災・減災，復興への総合した取り組みが求められているが，本著は，直面する様々な防災・減災に関連した根本的な課題について整理しながら，どのような解決策，もしくは取り組みの観点があるのか検討したものである。その中で，自身の取り組みとして，「小学校における事前復興まちづくり学習の実践例－まちのコミュニティデザインを視点に－」の実践事例を紹介した。著：兵庫教育大学連合大学院・防災教育研究プロジェクトチーム。（担当pp.154-167.）
2．近年の自然災害と学校防災Ⅲ－これからの時代に求められる防災・減災－	共著	2022年3月	協同出版	前述のⅡ同様，直面する様々な防災・減災に関連した根本的な課題について整理しながら，どのような解決策，もしくは取り組みの観点があるのか検討したものである。その中で，自身の取り組みとして，地理分野における「共助の意識を高める防災学習プランの開発－災害に強いまちづくりに必要な取り組みを提案しよう―」の実践事例を紹介した。著：兵庫教育大学連合大学院・防災教育研究プロジェクトチーム。（担当pp.160‐171.）
3．新3観点の学習評価を	共著	2022年3月	明治図書出版	本著は，3観点の学習評価にもとづいた中学校の地

位置づけた中学校地理授業プラン				理分野の授業プランを提案したものである。その中で，自然環境と生活や産業・文化の関係性を探究する学習プランとして九州地方の学習事例，交通や通信と生活や産業の関係性を探究する学習プランとして中国・四国地方の学習事例を紹介した。編著者：吉水裕也。（担当pp.64-75）
4．新しい視点からの教育社会学－人間形成論の視点から－	共著	2022年9月	大学教育出版	本著は，教職課程にかかわる学修を進めている学生を対象とし，子どもが抱える問題や，その背景を理解するために理論や知識を学び，社会の動向をもとに教育のあるべき姿を探り，その様相を明らかにしようとするものである。編著者：住本克彦（担当p.198.）
（学術論文） 1．沖縄を教材とした社会科実践の研究（査読付）	共著	2012年3月	奈良教育大学教育実践開発センター研究紀要，第21号	沖縄の歴史・文化・現在を考え，知る学習を通じて，矛盾を見つめ，沖縄の問題を自分たちの問題と考えられるような授業実践のあり方を考えた。本稿は，こうした問題意識に基づいて開発・実践した社会科と総合的な学習時間を合わせた第 6 学年の単元「沖縄の歴史・文化・現在を知る中で，平和とは何かを考える」の経過と成果を述べるとともに，言語力を育成する視点から，考察を加えたものである。執筆者名：岩本廣美，澁谷友和，全10頁（pp.109－118.）本人執筆部分は，pp.109-118.
2．小学校社会科歴史学習における「琉球王国」の単元開発研究（査読付）	共著	2014年3月	奈良教育大学教育実践開発センター研究紀要，第23号	学校現場の歴史学習での沖縄の取り上げ方は，沖縄戦だけをクローズアップして授業が行われる傾向がある。そこで本研究では，本土と沖縄の関係をとらえ直すために「琉球王国」の単元開発・実践を行った。その結果，小学校社会科歴史学習の中で，児童が琉球王国から沖縄県に至る歴史の流れを連続的にとらえることができ，日本の歴史を多面的にとらえられることを明らかにした。執筆者名：岩本廣美，澁谷友和，全 8 頁（pp.41－48.）本人執筆部分は，pp.41-48.
3．琉球・沖縄史を位置づけた小学校社会科歴史学習（査読付）	単著	2016年12月	社会科教育研究，第129号，日本社会科教育学会	本研究では，琉球・沖縄という地域を例に小学校歴史学習全体の中で琉球・沖縄史の位置づけを考察し，琉球・沖縄史を取り上げる必要性を確認した上で，小学校歴史学習の計画を提言した。さらに，戦後の沖縄を学習する際に，ウルトラマンの脚本家である金城哲夫の思いを取り上げることにより，これまでの米軍基地問題を取り上げる実践とは一線を画する新しい実践例を示すことができた。全 13 頁（pp.1-13.）
4．時間のマルチ・スケールアプローチによる未来予測型小学校社会	単著	2018年12月	社会系教科教育学研究，第30号，社会系教科教育学会	本研究では，これまでの未来予測型授業の先行研究が，特定の時間スケールのみの予測にとどまっているという問題点を明らかにした上で，イギリスの

科授業の開発（査読付）				David Hicksの未来型スキルの理論に依拠し，時間のマルチ・スケールアプローチを組み込んだ改善策を提案した。提案した授業では，複数の未来を予測する授業が展開でき，より的確な予測に基づく判断力が形成できることを示すことができた。全10頁（pp.107-116.）
5．社会科におけるまちづくり学習の研究動向と展望	共著	2019年9月	兵庫教育大学研究紀要第55巻	代表者：吉水裕也（兵庫教育大学 理事・副学長）共著者：佐藤克士（武蔵野大学教育学部），澁谷友和（東大阪市立花園北小学校），曽川剛志（西宮市立夙川小学校）社会科におけるまちづくり学習の研究動向を整理し，その到達点と課題を明らかにしたものである。全10頁（pp.1-10，第2章澁谷担当）
6．小学校社会科未来洞察型授業に関する実践的研究－David Hicksの5つのfutures skillsを手がかりにして－（査読付）	単著	2020年3月	兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科教育実践学論集第21号	本研究では，従前の未来予測型授業の成果と課題を踏まえて授業開発，実践し，その効果を検証した。改善の視点として，David Hicksの提案する5つのfutures skillsを導入し，学習方法として時間のマルチ・スケールアプローチを採用して，2つの側面から授業設計を行った。その結果，授業前は根拠のあまりない理想の未来を描きがちであった児童が，授業後は，根拠を持って望ましい未来を検討するという考え方への変容を見ることができ，効果を明らかにすることができた。全9頁（pp.51-59.）
7．小学校社会科未来洞察型授業の開発－希望の未来像を描くシナリオ作成に着目して－（査読付）	単著	2020年12月	社会系教科教育学研究32号，社会系教科教育学会	本研究では，小学校社会科における未来洞察を，「過去や現在の社会事象から起こる確率の高い未来とその影響を予測した上で，それとは逆になる，現時点では起こる確率は低いかもしれないが，自分たちの希望の未来像に着目し，その未来を仮説的に描き，その実現に向けてのシナリオを創り出すこと」と定義し，この定義にもとづき，第4学年「わたしたちのくらしと水道水」の授業を開発し，検証を行ったものである。仮説的に未来を描かせるしなりを作成を活用した結果，未来にも「起こる未来」「望ましい未来」という複数の未来があるという考え方を獲得できることが示唆された。全10頁（pp.41-50.）
8．社会科における未来を創造する力を育む「未来探究学習プログラム」の開発－小学校第3学年小単元「店ではたらく人びとのしごと」を例に－	単著	2021年12月	奈良学園大学研究紀要第14号	本研究では、従前の小学校社会科で実践されてきた知識や概念を獲得する授業構成に加え、複数の未来を創造した上で、希望の未来を選択・決定し、その未来のシナリオを書くという未来を探究する学習プログラム示し、そのプログラムにもとづいた第3学年単元「店ではたらく人びとの仕事」の授業モデルを提案した。全12頁（pp.79-90.）
9．天理大学附属天理参考館と連携したプロジェクト学習の実践－奈良	共著	2023年3月	奈良学園大学研究紀要第15号	本研究では、小学校教員養成課程で学ぶ学生の学びの場として、博物館の活用が必要であるという立場に立ち、本学と同じ奈良県内にある天理大学附属天

学園大学社会科教育ゼミの取り組み事例－				理参考館との連携を事例に、博物館を活用した教育活動を展開する力を育成するための大学における実践の形態や内容について検討を加え，プロジェクト型の講義内容を提案した。全12頁（pp.67-78.）
（その他） （商用雑誌） 1．年表を比較することで見えてくる日本の多様な歴史	単著	2017年10月	教育科学 社会科教育 No.702　明治図書	「基礎がためはここが決めて！ 資料読み取りの指導ポイント」の頁を担当した。年表の時代区分を取り上げ，比較することで，日本の歴史の多様性に気が付く授業が展開できるという年表の積極的な活用方法を提案した。具体例として，年表の日本（日本通史）の歴史区分と，沖縄（琉球・沖縄史）の歴史区分を比較した「琉球の貝塚時代」の授業実践を紹介した。全2頁（pp.22-23.）
2．5つの未来型スキルの発達で，追究する力を身につける	単著	2018年8月	教育科学 社会科教育 No.712　明治図書	「授業最前線 追究の鬼を生む！新内容・重点事項教材＆授業設計プラン」の頁を担当した。未来型スキルを発達させることで，追究する力を育成できると提案した。具体的な授業プランとしては，時間のマルチ・スケールアプローチを組み込んだ「租税の役割」の授業を提案した。全4頁（pp.38-41.）
3．時期や時間の経過を視点に大まかな歴史を理解する授業	単著	2019年5月	教育科学　社会科教育 No.722　明治図書	「授業最前線 時間・空間認識を育てる探究的な授業デザイン」の頁を担当した。社会的な見方・考え方の一つとしてあげられている「時期や時間の経過」という視点を整理し，大まかな歴史の流れを理解する授業を提案した。全4頁（pp.42-45.）
（学会発表） 1．小学校社会科歴史学習における「琉球王国」の単元開発研究	単独	2013年10月	日本社会科教育学会 第63回全国研究大会 （山形県）	全国大会発表論文集第9号全2頁（pp.102-103.） 学術論文：小学校社会科歴史学習における「琉球王国」の単元開発研究の成果を発表した。
2．琉球・沖縄史を位置づけた小学校歴史学習カリキュラムの開発研究－「いくつもの日本」を意識した歴史学習へ－	単独	2014年11月	日本社会科教育学会 第64回全国研究大会 （静岡県）	全国大会発表論文集第10号全2頁（pp.96-97.） 学術論文：琉球・沖縄史を位置づけた小学校社会科歴史学習の前半部分の成果を発表した。
3．戦後の沖縄を考える社会科授業づくり－金城哲夫の生き方を手がかりにして－	単独	2016年11月	日本社会科教育学会 第66回全国研究大会 （青森県）	全国大会発表論文集第12号全2頁（pp.104-105.） 学術論文：琉球・沖縄史を位置づけた小学校社会科歴史学習の後半部分の成果を発表した。
4．未来予測力を育成する小学校社会科授業に関する研究－時間のマルチ・スケールアプローチの視点から－	単独	2018年2月	社会系教科教育学会 第29回研究発表大会 （京都府）	第29回研究発表大会発表要旨集録全1頁（p.30） 学術論文：時間のマルチ・スケールアプローチによる未来予測型小学校社会科授業の成果を発表した。

5．5つのfutures skillsを育成する小学校社会科未来予測型授業の開発	単独	2018年11月	日本社会科教育学会第68回全国研究大会（奈良県）	全国大会発表論文集第14号全2頁（pp.384-385） 学習指導要領が示す社会的な見方・考え方の枠組みの一つに，市民的資質として未来を見通す力，未来予測を加えることができると考え，その開発授業を提案した。
6．学校教育現場における教員養成の取り組み－小学校での教育実習や経験者研修を担当して－	単独	2019年2月	社会系教科教育学会 学会発足30周年記念研究発表大会（兵庫県）	第30回研究発表大会発表要旨集録全1頁（p.86） 教員養成という枠組みの中で，学校現場で行う教育実習に求められていることに視点を当てて，発表した。
7．「予測不可能な未来」にアプローチする小学校社会科の授業開発研究－希望の未来像を描くシナリオ作成に着目して－	共同	2020年2月	社会系教科教育学会第31回研究発表大会（岡山県）	第31回研究発表大会要旨集全1頁（p.95） 澁谷友和・杉山雄大 小学校社会科における未来洞察を定義し，その定義にもとづき開発した第4学年「わたしたちのくらしと水道水」の実践を発表した。
8．近年の自然災害と学校防災・危機管理Ⅱ－4「危機社会」における小学校社会科防災学習の授業開発	共同	2020年10月	日本教育大学協会研究集会（愛媛県：オンライン開催）	令和2年度日本教育大学協会研究集会発表資料集全4頁（pp.254-257.） 佐藤克士・澁谷友和・曽川剛志・行壽浩司・吉水裕也 本発表では，近年の地震や豪雨をはじめとする自然災害の脅威が激化・常態化し，被害や復興が大きな社会問題として深刻化している日本社会を「危機社会」と捉え，こうした社会に対応した資質・能力の育成をめざす社会科防災学習の授業モデルを提案した。
9．近年の自然災害と学校防災・危機管理Ⅱ－5 小学校における「事前復興まちづくり学習」に関する単元開発―地域のコミュニティデザインを考える授業を通して―	共同	2020年10月	日本教育大学協会研究集会（愛媛県：オンライン開催）	令和2年度日本教育大学協会研究集会発表資料集全4頁（pp.258-261.） 澁谷友和・佐藤克士・曽川剛志・行壽浩司・吉水裕也 本発表では，中長期的に地域防災の中心となる小学生を対象とし，地域住民も巻き込んだ事前復興まちづくり学習の単元を開発し，地域コミュニティをデザインすることを通して，地域コミュニティの形成者としての資質・能力の育成をめざす授業モデルを提案した。
10．近年の自然災害と学校防災・危機管理Ⅱ－6 中学校における主体的避難者育成を目指す授業プラン－中学校道徳教材「風の電話」を通して－	共同	2020年10月	日本教育大学協会研究集会（愛媛県：オンライン開催）	令和2年度日本教育大学協会研究集会発表資料集全4頁（pp.262-265.） 行壽浩司・佐藤克士・澁谷友和・曽川剛志・吉水裕也 本発表では，主体的な避難者育成を目指す防災教育理論に依拠しながら，生徒が主体的に命を守るために，自分の命の大切さと他者の命を慈しむ価値観形成を目指す授業プランを報告した。

11．近年の自然災害と学校防災・危機管理Ⅲ－4 主権者教育としての小学校社会科防災学習の授業開発	共同	2021年10月	日本教育大学協会研究集会 （福岡県：オンライン開催）	令和3年度日本教育大学協会研究集会発表資料集 全2頁（pp.128-129.） 佐藤克士・澁谷友和・曽川剛志・行壽浩司・吉水裕也 本発表では，主権者として求められる資質・能力を育成するために小学校社会科における自然災害や防災・減災に関する学習はどのような論理にもとづき，授業を構成すべきなのか，具体的な授業モデルの開発を通して検討した。
12．近年の自然災害と学校防災・危機管理Ⅲ－5 共助の意識を高める小学校社会科防災学習の授業開発	共同	2021年10月	日本教育大学協会研究集会 （福岡県：オンライン開催）	令和3年度日本教育大学協会研究集会発表資料集 全2頁（pp.130-131.） 澁谷友和・佐藤克士・曽川剛志・行壽浩司・吉水裕也 本研究では，災害時における地域の災害弱者の存在に着目し，その犠牲を減らすために，災害弱者の立場に立った対策の必要性に気づき，共助の視点から減災を考える学習単元の授業構成を提案した。
13．近年の自然災害と学校防災・危機管理Ⅲ－6 地域防災を考えるための小学校理科地図活用型防災学習の授業開発	共同	2021年10月	日本教育大学協会研究集会 （福岡県：オンライン開催）	令和3年度日本教育大学協会研究集会発表資料集 全2頁（pp.132-133.） 曽川剛志・佐藤克士・澁谷友和・行壽浩司・吉水裕也 本研究では，平成29年告示の小学校学習指導要領で新設された第4学年理科「雨水の行方と地面の様子」で，防災の「自校化」を図り，地域防災を考えるための小学校理科地図活用型防災学習の単元開発を提案した。
14．近年の自然災害と学校防災・危機管理Ⅲ－7 ハザードマップから自然の地形を読み取る中学校地理的分野の学習プラン	共同	2021年10月	日本教育大学協会研究集会 （福岡県：オンライン開催）	令和3年度日本教育大学協会研究集会発表資料集 全2頁（pp.134-135.） 行壽浩司・佐藤克士・澁谷友和・曽川剛志・吉水裕也 本研究では，中学校地理的分野における授業プランとしてハザードマップから自然の地形を読み取り，具体的な授業モデル開発を通して検討した。
15．小学校社会科における持続可能な地域のあり方を考える食文化の教材化－京都府宇治田原町の古老柿生産に着目して－	単独	2022年10月	日本社会科教育学会第72回全国研究大会 （長野県：オンライン開催）	第72回全国大会発表論文集全2頁 本研究は，京都府宇治田原町特産の干し柿である「古老柿」の食文化に着目し，生産に携わっている人々の生活の様子や，地域の人々の生活との関連を捉え，小学校第3学年の持続可能な地域のあり方を考える食文化の教材を開発・提案した。
16．未来の変化を動的に捉える小学校社会科の授業構想－インパクトダイナミクスの手法に	単独	2023年2月	社会系教科教育学会第34回研究発表大会 （愛媛県：オンライン開催）	第34回研究発表大会要旨集全1頁 科研費の研究成果を発表した。本研究は予測困難な時代における未来の捉え方として注目されている未来洞察のアプローチ方法，その中でもインパクトダ

着目して－				イナミクスの手法に着目し，児童の未来をデザインする力の育成をめざす未来洞察型の授業構成を提案した。

教　育　研　究　業　績　書

令和５年 ３月 31 日

氏名　高橋　千香子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
心理学	臨床心理学、精神分析学、教育心理学、社会福祉学（児童福祉）

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 １）各単元終了時に小テストの実施	平成 26 年４月～平成 31 年３月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部幼児教育学科における「保育の心理学」「保育の心理学Ⅱ」「教育心理学」において、主として子どもの心理発達に関する知識を定着させるため、各単元が終了する毎に小テストを実施している。
２）毎回の授業の振り返りを活用した授業実践	平成 26 年４月～令和５年３月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部幼児教育学科における「心理学」「保育の心理学」「保育の心理学Ⅱ」「保育相談支援」「教育心理学」、奈良学園大学人間教育学部における「保育相談支援（幼児教育相談支援）」「保育の心理学Ⅱ」「子ども家庭支援の心理学」「子育て支援」の授業において、ほぼ毎回の授業の最後に振り返りを記入させ、コメントを入れて次の授業時に返却している。内容が良かったものについては次の授業の開始時に紹介することで、前回の振り返りと学習内容への理解を深められるよう工夫している。
３）事例をもとにしたグループディスカッションおよび発表の実践	平成 26 年４月～令和５年３月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部幼児教育学科および奈良学園大学人間教育学部における「保育の心理学Ⅱ」「保育相談支援（幼児教育相談支援）」の授業において、「保育の心理学Ⅱ」では子どもの生活や対人関係の場面、「保育相談支援（幼児教育相談支援）」では保護者や親子関係への対応場面についての具体的な事例を多用している。１人で考える時間を設けた後、隣同士あるいは小グループに分かれてディスカッションさせ、発表させることで、思考力や対応力を養うことを目的としている。
４）ロールプレイの実践	平成 26 年４月～令和５年３月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部幼児教育学科および奈良学園大学人間教育学部の「保育相談支援（幼児教育相談支援）」の授業において、基本となるカウンセリングの基礎知識を学ぶため、カウンセリング演習の手法を用いたロールプレイを導入している。具体的には２人一組になり、話す役と聞く役に分かれて「聴く姿勢、聴かない姿勢」を相互に体験させ、「傾聴の基本」を学んだ後、それぞれの技術をロールプレイさせている。実施後、それぞれの役割を演じて具体的に振り返り、さらにディスカッションさせることで、メタ認知を賦活させ、理解を深めさせている。
２　作成した教科書，教材 １）コンパクト版保育者養成シリーズ　新版　保育の心理学Ⅱ	平成 30 年３月	保育士養成の必須科目である「保育の心理学Ⅱ」に対応したテキストであり、平成 29 年告示の要領および指針の改訂を反映した内容になっている。 監修者：谷田貝公昭、石橋哲成　編著者：福田真奈、西方毅　A5 版、145 頁 共著者：伊藤亮、小原倫子、川口めぐみ、小池はるか、佐々木真吾、高岡昌子、高橋千香子、谷真弓、西方毅、長谷川直子、菱田博之、福田真奈、山口昌澄 本人担当部分：第４章　子ども集団と保育者の援助（P33～40）子ども集団の特性、集団生活への発達援助、集団に入れない子どもの支援についてまとめている。特に集団生活において培われる協同性や道徳性、規範意識に対する保育者の望ましい援助のあり方について重点的に述べている。

2）シリーズ知のゆりかご　保育の心理学	平成 31 年 4 月	保育士養成課程「保育の心理学」、幼稚園教諭養成課程「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程」に対応したテキストである。 編著者：青木紀久代　B5 版、192 頁 共著者：青木紀久代、石井正子、大國ゆきの、片山伸子、加藤邦子、金子恵美子、金丸智美、高橋千香子、富田貴代子、中村涼、平沼晶子、細野美幸、三好力、矢野由佳子 本人担当部分：第 11 章　乳幼児の学びを支える保育（P172～185）　第 1 節では「養護と教育が一体的に展開する保育」について説明し、第 2 節において学びの芽生えを支える保育について事例を用いながら説明している。最後の第 3 節では保護者への支援について述べ、保護者との連携や協力の必要性について論じている。
3）シリーズ知のゆりかご　子ども家庭支援の心理学	令和元年 8 月	保育士養成課程の新しい必修科目「子ども家庭支援の心理学」に対応したテキストである。 編著者：青木紀久代　B5 版、192 頁 共著者：青木紀久代、石井正子、大國ゆきの、小嶋玲子、片山伸子、加藤邦子、金子恵美子、古志めぐみ、菅野幸恵、高橋千香子、武田（六角）洋子、細野美幸、三好力、矢野由佳子 本人担当部分：コラム②「保育所は貧困問題の最前線」（P113）　日本の子どもの貧困率の高さについて説明し、保育所が担う役割について述べている。
4）子ども家庭福祉専門職のための子育て支援入門	令和元年 5 月	保育士養成課程の新しい必修科目「子育て支援」「子ども家庭支援論」「子ども家庭福祉」に対応したテキストである。 編著者：才村純、芝野松次郎、新川泰弘、宮野安治　B5 版、176 頁 共著者：大倉得史、山本智也、関谷みのぶ、才村純、本田和隆、室谷雅美、宮野安治、新川泰弘、安田誠人、小山顕、渡邊慶一、山本由紀子、吉弘淳一、藤井裕子、寺田恭子、磯部美良、高橋千香子、川口めぐみ、久保木亮子、西井典子、芝野松次郎、塚本利幸、大谷由紀子、榎本祐子、飯島仁美、別所崇、山本展明、栗山直子 本人担当部分：第 17 章　個人面談、懇談会における子育て支援（P133～138）　保育士の行う個人面談の種類、基本事項、留意点について、事例を引用しつつ具体的に解説している。
5)保育士を育てる③子どもの理解と援助	令和 2 年 3 月	保育士養成課程の新しい必修科目「子どもの理解と援助」に対応したテキストである。 編著者：大沢裕、藤田久美　A5 版、148 頁 共著者：綾野鈴子、伊藤亮、大賀恵子、大沢裕、加納史章、熊谷賢、佐藤牧子、高岡昌子、高橋千香子、谷真弓、當銘美菜、根津知佳子、野末晃秀、藤田久美、古橋真紀子、村山久美、山本陽子 本人担当部分：第 11 章　子育て支援・家庭支援と子ども理解（P89～96）　近年の子育て家庭への支援の重要性の高まりと、子育て家庭支援にける子ども理解と援助のあり方について、事例を引用しつつ解説している。

６）シリーズ知のゆりかご　なぜ？から探る子ども理解と援助	令和４年１月	保育士養成課程の新しい必修科目「子ども理解と援助」と教職課程の「幼児理解の理論及び方法」に対応したテキストである。 編著者：青木紀久代　B5 版、175 頁 共著者：青木紀久代、大河内修、荻原はるみ、佐藤有香、嶋野珠生、高橋千香子、武田（六角）洋子、田村知栄子、細野美幸、松浦淳、三好力、矢野由佳子、山下直樹、横畑泰希 本人担当部分：第２章　共感的理解と子どもとの関わり（P29～39）子どもに対する共感的理解とはどのようなことなのか、複数の事例をもとに臨床心理学的な視点から解説し、保育者として望ましい関わりのあり方について述べている。
７）コンパス教育相談	令和４年３月	教職課程における「教育相談の理論及び方法」に対応したテキストであり、現代の教師・保育者にとって必要な内容となっている。 編著者：住本克彦　B5 版、131 頁 共著者：赤松久美子、新井肇、磯部美良、荊木まき子、岡村季光、加島ゆう子、片山則昭、加藤由美、門原眞佐子、上地玲子、小泉令三、阪中順子、坂中尚哉、定金浩一、清水里香、高橋彩、高橋千香子、高橋典久、立浪朋子、崔回淑、葉山貴美子、原志津、深津久美子、福森護、藤田由起、古川治、松田文春、南雅則、山口裕毅 本人担当部分：第３章　子どもの発達と教育相談　１乳幼児期の発達と教育相談（P21～25）乳幼児期の子どもの発達の概要を述べるとともに、その時期の教育相談の特性について解説している。
８）子どもと保護者に寄り添う「子ども家庭支援の心理学」	令和４年４月	保育士養成課程の必修科目「子ども家庭支援の心理学」に対応したテキストであり、生涯発達や家族・家庭への心理支援について具体的に学べる内容となっている。 監修：立花直樹、津田尚子　B5 版、167 頁 編者：要正子、小山顕、國田祥子 共著者：立花直樹、津田尚子、高橋千香子、小山顕、國田祥子、赤澤正人、河村陽子、丸目満弓、大川宏美、赤田太郎、勝野愛子、要正子、座間味愛理、藤野正和、佐藤睦子、森内さやか 本人担当部分：第２章「乳幼児期における発達」（P16～25）乳幼児期の発達について、愛着の重要性を軸に、主要な発達理論を事例とともに解説している。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 １）奈良文化女子短期大学に採用される際の学長評価	平成 25 年４月	学長より、18 年という長きにわたり児童心理相談の実践経験を積んでいることは、「保育の心理学」「保育相談支援」などの科目において、現場の求める保育者を育成するのにふさわしい人材であること、短期大学部の地域貢献事業の一つである子育て支援事業への貢献も期待できること、臨床心理士資格を有し、他大学の学生相談室カウンセラーの経験も有することから、短期大学部の学生支援においても貢献が期待できると評価された。
２）学生による授業評価の結果①	平成 26 年４月～平成 31 年３月	奈良文化女子短期大学部の学生による授業評価アンケートの結果、平成 30 年度の学生による授業評価（満点 4.0）は、「保育の心理学Ⅱ」3.79、「教育心理学」3.56 であった。自由記述には「保育の心理学Ⅱ」では「子どもの成長には心の状態が大きく関係していることを知った」、「教育心理学」では「自分を振り返り、人と関わる上で必要なことをたくさん学べた」などの記述があり、どちらも「とても分かりやすかった」「ためになる話が多かった」等の評価を得ることができた。

３）学生による授業評価の結果②	令和４年４月～令和５年３月	学生による授業評価アンケート（8 項目、満点 5.0）における総合的満足度を問う項目は、人間教育学部の専門科目の「幼児教育相談支援（保育相談支援）」、「子育て支援」、「子ども家庭支援の心理学」、保健医療学部リハビリテーション専門科目の「臨床心理」すべて 4.0 以上であり、高い評価を得ることができている。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 １）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部における幼児教育講座の講師	平成 25 年８月７日 平成 26 年８月７日	奈良文化女子短期大学部主催の幼稚園、保育所、こども園、小学校教諭、特別支援担当教諭らを対象とした幼児教育講座において、平成 25 年度は「気になる子」、平成 26 年度は「気になる子②－子どもの心と親子関係－」というテーマで講師を担当した。
２）関西女子短期大学教員免許状更新講習における講師	平成 26 年８月８日 平成 27 年８月 11 日 平成 28 年８月 10 日 平成 30 年８月 24 日 令和３年８月５日	関西女子短期大学主催の幼稚園教諭を対象とした教員免許状更新講習において、同短期大学保育学科の津田尚子准教授と協同し、「子どもを守り育てる家庭支援」と題した講座を担当している。その年に起こった児童虐待死事件にも触れつつ、現場の保育者が日々直面するであろう諸問題や、家庭支援のあり方について、講義やグループワークを実施し、考える視点を提供した。
３）葛城市保育士研修会における講師	平成 26 年 11 月 29 日	葛城市保育士会からの依頼により、同市内の公立・民間保育園に勤務する保育士対象に、「保護者理解と関係づくり」というテーマで研修を行った。
４）寝屋川市保育所・幼稚園職員研修会における講師	平成 27 年２月 27 日	寝屋川市保健福祉部からの依頼により、同市内の保育士、幼稚園教諭、児童福祉関係者等を対象に「保護者への伝え方、子どもへの関わり方」というテーマで研修を行った。

５）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部内のつどいの広場「ぶんタン」におけるミニ講座講師	平成 26 年 11 月 7 日 平成 27 年 9 月 30 日 平成 28 年 10 月 28 日 平成 29 年 11 月 6 日 平成 30 年 10 月 26 日	奈良文化女子短期大学部におけるつどいの広場「ぶんタン」において、「発達について」、「臨床心理士さんに聞いてみよう」「育児ストレスについて話そう」等のテーマでミニ講座を担当した。
６）奈良いのちの電話協会講座における講師	平成 27 年 10 月 31 日 平成 27 年 11 月 7 日	第 39 期電話相談員養成講座の中の「カウンセリング演習講座」において、4 回シリーズのうちの後半 2 回を担当した。
７）寝屋川市家庭教育講座における講師	平成 29 年 1 月 14 日	寝屋川市立点野小学校において保護者や教育関係者を対象として「思春期の心理について」というテーマで講演を行った。
８）登美ヶ丘公民館「子育て講座」における講師	平成 29 年 9 月 29 日 平成 30 年 10 月 5 日	登美ヶ丘公民館における子育て講座において、奈良文化女子短期大学部の中田章子講師と共同で、29 年度は「頑張りすぎない私らしい育児」、30 年度は「みんなどうしてる？子どもへの関わり方」というテーマで講座を担当した。
９）奈良県臨床心理士会第 77 回相互研修会におけるシンポジスト	平成 31 年 2 月 17 日	奈良県に在住もしくは勤務している臨床心理士を対象としている相互研修会において、「私の臨床を語る」をテーマに３名のシンポジストの内の１名として講話およびシンポジストを務めた。
10）令和 4 年度大阪私立学校保健会保健主事・養護教諭部会研修会の講師	令和 4 年 7 月 11 日	大阪私学学校の保健主事および養護教諭約 80 名を対象に、「青年期の発達障害について」というテーマで講演を行った。
11）天理教校学園における第三者委員会の委員	令和 4 年 6 月～令和 5 年 3 月	天理教校学園において発生した重大事態に対する第三者委員会の委員として、現地調査、関係者への聞き取り等を経て、報告書の作成に携わった。
５　その他 無		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１　資格，免許		

1）中学校教諭一種免許（社会） 2）高等学校教諭一種免許（社会） 3）小学校教諭二種免許 4）財団法人日本臨床心理士資格認定協会認定　臨床心理士 5）公認心理師	平成4年3月 平成4年3月 平成4年3月 平成9年4月 平成31年2月	平三　中一種　第2287号　　京都府教育委員会発行 平三　高一種　第2541号　　京都府教育委員会発行 平三　小二種　第10119号　　京都府教育委員会発行 登録番号　6651 登録番号　13797
2　特許等 無		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）大阪国際大学守口キャンパス学生相談室においてカウンセラーとして勤務	（平成12年4月）～平成26年3月	入職当初は学生相談室の体制、枠組みづくりに関与し、その後は相談を希望する学生に対するカウンセリング・心理検査等の実施、教職員へのコンサルテーションを行った。また、学内の担当教員と協力し、新入生へのメンタルヘルスチェックの実施、啓発活動、連絡会議への参加等を通じて、学内全体のメンタルヘルスの向上を視野に入れて活動した。
2）奈良県臨床心理士会子育て支援部会長	（平成24年6月）～平成26年5月（任期2年）	奈良県臨床心理士会内に設置されている7部会のひとつである子育て支援部会の長として、部会内の連絡および、月1回開催している子育て支援部会研修の企画・運営を行った。
3）寝屋川市立保育所民営化に係る事業者選定委員会に選定委員として参加	平成25年10月～平成26年2月	寝屋川市立ひなぎく保育所の民営化に係る事業者選定委員会に委員として参加した。
4）奈良文化幼稚園における発達の気になる子どもの行動観察および助言指導	平成26年6月～現在に至る	奈良文化幼稚園に年に3回（学期に1回）訪問し、各クラス担任からあらかじめ依頼された発達の気になる子どもの行動観察を行い、その後、子どもの見立てや今後の支援のあり方についてのカンファレンスを行っている。
5）奈良県臨床心理士会研修委員長	平成26年6月～平成28年5月（任期2年）	奈良県臨床心理士会の研修委員会の長として、年に3回実施される相互研修会の企画・運営を担当した。委員会の招集、連絡調整、講師との交渉、事前準備、当日の進行など、他の委員と協働して行った。
6）社会福祉法人宝山寺福祉事業団児童養護施設愛染寮にて心理相談員（パート）として勤務	平成29年4月～現在に至る	本学学生の施設実習や就職等でつながりのある児童養護施設愛染寮において、入所児童の心理的ケア（プレイセラピー）を担当する臨床心理士として、週1日3時間（のちに4.5時間に変更）勤務している。
7）近畿大学の大学院生へのスーパーヴィジョン	令和5年3月～現在に至る	近畿大学大学院総合文化研究科心理学専攻臨床心理学コースで学ぶ学生1名に対し、月に1回程度、スーパーヴィジョンを行っている。

４　その他 １）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部における子育て支援事業、奈良学園大学社会・国際連携センター事業「親と子の相談室ひまわり」の担当カウンセラー	平成 26 年 4 月～現在に至る	短期大学部の地域貢献事業のひとつとして一般の市民向けに開設された相談室であり、火曜日の午後に行ってきた。子どもへのカウンセリングや遊戯療法、発達検査、保護者へのカウンセリングなどを行っている。令和 2 年度からは奈良学園大学社会・国際連携センターの事業として、毎週水曜日の午後に実施している。
２）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部における人権教育推進・セクシャルハラスメント相談委員会の委員長	平成 27 年 4 月～平成 31 年 3 月	平成 25 年度より委員として活動し、平成 27 年 4 月からは委員長として、定期的に委員会を開催し、学生を対象とした人権アンケートの実施と分析、人権講演会の企画と開催、大人協研修への参加などを行った。
３）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部における学生相談の主担当	平成 26 年 4 月～平成 31 年 3 月	学科の学生相談員として、学生からのさまざまな相談に応じたり、心理的問題を抱える学生への対応について、他の教職員のサポートを行った。平成 27 年度から主担当となり、同年より本学に配置されている非常勤カウンセラーとも連携し、学内の学生相談体制の整備を目指した。
４）奈良学園大学登美ヶ丘キャンパスにおける学生相談室担当カウンセラー	平成 31 年 4 月～令和 4 年 3 月	登美ヶ丘キャンパスの保健医療学部の学生を対象とした学生相談室カウンセラーとして、毎週水曜日の午後、相談室に勤務している。三郷キャンパスの学生相談担当の岡野由美子准教授と情報交換や共有をしながら対応していた。令和 2 年度からは学生支援センターの構成委員となり、同キャンパスを担当してきたが、非常勤カウンセラー2 名の採用に伴い、教員兼務のカウンセラーは終了となった。
５）奈良学園大学入試委員会、学生支援センター運営委員会、ハラスメント防止委員会、衛生委員会、人間教育学部研究倫理審査委員会の各委員	平成 31 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学における校務分掌として、各委員会の委員としての役割を担っている。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				

１）学び、考え、実践力をつける家庭支援論	共著	平成 26 年 3 月（第 1 版） 平成 28 年 7 月（第 2 版） 平成 30 年 9 月（第 3 版） 令和 2 年 9 月 1 日（第 1 版）	保育出版社（P91、142～143） 令和 2 年度版より教育情報出版	保育士養成課程における必修科目である「家庭支援論」に対応し、基礎理論および具体的な実践事例を含み、読者自身が専門知識を習得した上で実践力をつけられる内容構成となっている。 編者：木村志保、津田尚子編著、B5 判、190 頁。 共著者：飯塚恭一郎、木村敦、太田顕子、大石美佳、長尾和美、佐伯知子、高橋美枝、菊地真理、吉田祐一郎、前嶋元、井土睦雄、原子純、松井圭三、森合真一、田中卓也、田中謙、平本譲、戸田竜也、高橋千香子、加藤博仁、津田尚子、池田幸代、阪木啓二、植木是、矢野裕子、矢幡眞由美、伊尻正一、隣谷正範、児玉龍治、緒倉珠巳、木村志保 本人担当部分：①第 8 章「どうやって子育て家庭を支援すればいいの？－子育て家庭支援の方法・やり方」の「現場の声」欄（P91）：章の導入部分であり、子育て家庭の多様化がすすむ中、不適切な養育が行われている家庭の支援では、子どもの命と安全を守るために園の役割が大変重要になっている現状について説明した。　②第 12 章「支援の実際を考えてみよう－子育て家庭支援の事例学習」の第 1 節「子育てに悩む親」①事例「孤独感から子育てへの不安が高まっている母」②「問題を考えるポイント」③「解説・留意点」④ステップアップ問題（P142～143）：事例学習の章であり、冒頭に事例を示した後、事例を考えるポイントをいくつか記し、学ぶ人が自ら考え記入できるスペースを設けている。その後に、事例の解説および留意点について述べ、最後にステップアップ問題を記載している。
２）コンパクト版保育者養成シリーズ　新版　保育の心理学Ⅱ	共著	平成 30 年 3 月	一藝社（P33～40）	保育士養成の必須科目である「保育の心理学Ⅱ」に対応したテキストであり、平成 29 年告示の要領および指針の改訂を反映した内容になっている。 監修者：谷田貝公昭、石橋哲成　編著者：福田真奈、西方毅　A5 版、145 頁 共著者：伊藤亮、小原倫子、川口めぐみ、小池はるか、佐々木真吾、高岡昌子、高橋千香子、谷真弓、西方毅、長谷川直子、菱田博之、福田真奈、山口昌澄 本人担当部分：第４章　子ども集団と保育者の援助（P33～40）子ども集団の特性、集団生活への発達援助、集団に入れない子どもの支援についてまとめている。特に集団生活において培われる協同性や道徳性、規範意識に対する保育者の望ましい援助のあり方について重点的に述べている。

３）シリーズ知のゆりかご保育の心理学	共著	平成 31 年 4 月	みらい（P172～185）	保育士養成課程「保育の心理学」、幼稚園教諭養成課程「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程」に対応したテキストである。 編著者：青木紀久代　B5 版、192 頁 共著者：青木紀久代、石井正子、大國ゆきの、片山伸子、加藤邦子、金子恵美子、金丸智美、高橋千香子、富田貴代子、中村涼、平沼晶子、細野美幸、三好力、矢野由佳子 本人担当部分：第 11 章　乳幼児の学びを支える保育（P172～185）　第 1 節で「養護と教育が一体的に展開する保育」について説明し、第 2 節で学びの芽生えを支える保育について事例を用いながら説明している。最後の第 3 節では保護者への支援について述べ、保護者との連携や協力の必要性について論じている。
４）シリーズ知のゆりかご子ども家庭支援の心理学	共著	令和元年 8 月	みらい（P113）	保育士養成課程の新しい必修科目「子ども家庭支援の心理学」に対応したテキストである。 編著者：青木紀久代　B5 版、192 頁 共著者：青木紀久代、石井正子、大國ゆきの、小嶋玲子、片山伸子、加藤邦子、金子恵美子、古志めぐみ、菅野幸恵、高橋千香子、武田（六角）洋子、細野美幸、三好力、矢野由佳子 本人担当部分：コラム②「保育所は貧困問題の最前線」（P113）　日本の子どもの貧困率の高さについて説明し、保育所が担う役割について述べている。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５）子ども家庭福祉専門職のための子育て支援入門	共著	令和元年５月	ミネルヴァ書房（P133～138）	保育士養成課程の新しい必修科目「子育て支援」「子ども家庭支援論」「子ども家庭福祉」に対応したテキストである。 編著者：才村純、芝野松次郎、新川泰弘、宮野安治　B5 版、176 頁 共著者：大倉得史、山本智也、関谷みのぶ、才村純、本田和隆、室谷雅美、宮野安治、新川泰弘、安田誠人、小山顕、渡邊慶一、山本由紀子、吉弘淳一、藤井裕子、寺田恭子、磯部美良、高橋千香子、川口めぐみ、久保木亮子、西井典子、芝野松次郎、塚本利幸、大谷由紀子、榎本祐子、飯島仁美、別所崇、山本展明、栗山直子 本人担当部分：第 17 章　個人面談、懇談会における子育て支援（P133～138） 保育士の行う個人面談の種類、基本事項、留意点について、事例を引用しつつ解説している。
６)保育士を育てる③子どもの理解と援助	共著	令和２年３月	一藝社（P89～96）	保育士養成課程の新しい必修科目「子どもの理解と援助」に対応したテキストである。 編著者：大沢裕、藤田久美　A5 版、148 頁 共著者：綾野鈴子、伊藤亮、大賀恵子、大沢裕、加納史章、熊谷賢、佐藤牧子、高岡昌子、高橋千香子、谷真弓、當銘美菜、根津知佳子、野末晃秀、藤田久美、古橋真紀子、村山久美、山本陽子 本人担当部分：第 11 章　子育て支援・家庭支援と子ども理解（P89～96）　近年の子育て家庭への支援の重要性の高まりと、子育て家庭支援にける子ども理解と援助のあり方について、事例を引用しつつ解説している。
７）シリーズ知のゆりかごなぜ？から探る子ども理解と援助	共著	令和４年１月	みらい（P29～39）	保育士養成課程の新しい必修科目「子ども理解と援助」と教職課程の「幼児理解の理論及び方法」に対応したテキストである。 編著者：青木紀久代　B5 版、175 頁 共著者：青木紀久代、大河内修、荻原はるみ、佐藤有香、嶋野珠生、高橋千香子、武田（六角）洋子、田村知栄子、細野美幸、松浦淳、三好力、矢野由佳子、山下直樹、横畑泰希 本人担当部分：第２章　共感的理解と子どもとの関わり（P29～39）子どもに対する共感的理解とはどのようなことなのか、複数の事例をもとに臨床心理学的な視点から解説し、保育者として望ましい関わりのあり方について述べている。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８）コンパス教育相談	共著	令和４年３月	建帛社（P21～25）	教職課程における「教育相談の理論及び方法」に対応したテキストであり、現代の教師・保育者にとって必要な内容となっている。 編著者：住本克彦　B5 版、131 頁 共著者：赤松久美子、新井肇、磯部美良、荊木まき子、岡村季光、加島ゆう子、片山則昭、加藤由美、門原眞佐子、上地玲子、小泉令三、阪中順子、坂中尚哉、定金浩一、清水里香、高橋彩、高橋千香子、高橋典久、立浪朋子、崔回淑、葉山貴美子、原志津、深津久美子、福森護、藤田由起、古川治、松田文春、南雅則、山口裕毅 本人担当部分：第３章　子どもの発達と教育相談　１乳幼児期の発達と教育相談（P21～25）乳幼児期の子どもの発達の概要を述べるとともに、その時期の教育相談の特性について解説している。
９）子どもと保護者に寄り添う「子ども家庭支援の心理学」	共著	令和４年４月	晃洋書房（P16～25）	保育士養成課程の必修科目「子ども家庭支援の心理学」に対応したテキストであり、生涯発達や家族・家庭への心理支援について具体的に学べる内容となっている。 監修：立花直樹、津田尚子　B5 版、167 頁 編者：要正子、小山顕、國田祥子 共著者：立花直樹、津田尚子、高橋千香子、小山顕、國田祥子、赤澤正人、河村陽子、丸目満弓、大川宏美、赤田太郎、勝野愛子、要正子、座間味愛理、藤野正和、佐藤睦子、森内さやか 本人担当部分：第２章「乳幼児期における発達」（P16～25）乳幼児期の発達について、愛着の重要性を軸に、主要な発達理論を事例とともに解説している。
（学術論文） 1）ことばの表出が遅れていた５才男児の遊戯療法過程	単著	平成 25 年 11 月	奈良文化女子短期大学研究紀要第 44 号（P45～56）	遊戯療法とは子どもを対象としたカウンセリング技法のひとつである。本論ではことばの遅れを主訴に相談室を訪れた５才児が、筆者との遊戯療法を通じて引きこもっていた心的状態から脱し、内的世界を豊かに表現して葛藤状況を乗り越えていった過程を３期に分けて報告し、その展開のありようについて考察を加えた。最後に遊戯療法についての筆者の若干の考えを述べた。
２）生活困窮家庭における不登校生徒への訪問による心理面接	単著	平成 26 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部研究紀要第 45 号（P71～82）	近年、日本の子どもの貧困問題が浮き彫りになり、その対策が急がれている。本論では、生活困窮家庭の不登校生徒に対して実施した約２年間の心理訪問面接について報告し、当該生徒の心理的背景と課題、訪問面接の経過について検討するとともに、訪問面接の有用性と留意点について考察した。そして最後に、生活困窮家庭の子どもへの心理的支援の意義について、若干の考察を加えた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３）保育者としての資質と保育実践能力に対する学生の意識について	共著	平成 27 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部研究紀要第 46 号（P91～99）	前研究より、保育現場ではまず保育者としての資質が重要視され、現場が必要とする実践能力として文章・言語現力が強く必要であることが分かった。そこで本研究では、本学学生にアンケート調査を行い、現場で必要とされる保育者としての専門的実践能力や資質についてどのように考え、自身がどれくらい身につけていると感じているのかを明らかにした。 本人担当部分は、学生へのアンケートの実施、および分析と考察を共同で行った。 共著者：林悠子、森本美佐、東村知子、高橋千香子
４）本学の子育て支援活動と学生教育との接続	共著	平成 27 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部研究紀要第 46 号（P121～128）	最近の学生の傾向として、コミュケーション能力の低さや親子世代の触れ合う経験の不足が挙げられる。このような学生たちを保育者として養成していくにあたり、いくつかの授業内において、本学で実施している子育て広場に早期に参加させる取り組みを始めている。その効果と課題を明らかにすることを目的として、学生へのアンケート調査およびレポート結果を考察し、分析を加えた。 本人担当部分は、子育て支援との連絡調整、学生へのアンケートの実施を担当し、アンケートの分析および考察について共同で行った。 共著者：森本美佐、小川純子、高橋千香子
５）各発達の時期における「先生」のネガティブな言動について	共著	平成 28 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部研究紀要第 47 号（P31～40）	保育者養成課程の学生を対象にして、保育所・幼稚園・小学校低学年・小学校高学年・中学校・高等学校の各時期の「先生」の不快な言動で特に記憶に残っている内容について調査研究を行い結果を報告し論じた。幼児期に受けた保育者の不快な言動を記憶している者は非常に少なく、むしろ良かった言動を覚えている場合が多いことが分かった。保育者になる者は、自身の言動が子どもに及ぼす影響を十分に理解することが大切であると結論づけた。 共著者：高岡昌子、高橋千香子、林悠子、岩本健一
６）保育者養成校の学生の性格特性および進路状況との関連について	共著	平成 28 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部研究紀要第 47 号（P41～48）	本学学生（卒業生を含む）160 名のＹＧ性格検査の判定結果をもとに、保育者養成校の学生の性格傾向および卒業時の進路状況（進路選択）との関連について調べた。その結果、学生の半数近くで「情緒の不安定さ」がみられ、保育者の資質とも関連の深い特性であると考えられた。進路状況との関連では、保育職選択と性格特性には関連は見出されなかったが非正規あるいは非就職を選択した学生は、「劣等感」「非協調性」が高い傾向にある学生の割合が高いことが分かった。 共著者：高橋千香子、高岡昌子、林悠子、岩本健一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
７）保育者養成に求められる保育者の資質について（２）―就職先へのアンケート調査の前回調査との比較から―	共著	平成 28 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部研究紀要第 47 号（P71～80）	平成 23 年度から 26 年度の本学学生の就職先に対して行ってきた勤務実態アンケート調査の自由記述のうち、園長らが保育者養成に望むこと、また就職した卒業生が評価されていることについての分析を行った。その結果、就職先の園長らは即戦力よりも社会人としての態度や覚悟、チームで働く上で必要な能力の養成を求めていることが明らかになった。保育士不足や早期離職が問題化する中、この点をふまえた保育者教育を行っていくことが急務であると結論づけた。 共著者：林悠子、高岡昌子、岩本健一、高橋千香子
８）ある不登校の少女の精神分析的遊戯療法過程	単著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部研究紀要第 48 号（P71～81）	不登校状態にあった小学生女児の精神分析的アプローチによる遊戯療法過程について報告し、考察した。女児の不登校の背景には両親が離婚するかもしれない不安が強くあったが、さらに遡り、幼少期から母親との情緒的葛藤を抱えていたことが遊戯療法を通じて明らかになった。精神分析的遊戯療法では言語によるやりとりも重要な役割を果たすが、その経過についても詳述した。
９）施設実習における学生の不安を軽減する事前学習についての研究	共著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部研究紀要第 48 号（P31～40）	施設実習に行く前後で学生の実習へのイメージが大きく変化することに着目し、その要因について調査した。変化につながるきっかけは子どもとのコミュニケーションにあることが分かり、学生が自ら子どもに働きかけられる力を事前指導においていかに習得させるかがポイントであることが明らかになった。また、学生が自ら実習前に不足していたと考えた要素を分析し、６つのカテゴリからなるチェック表を作成した。 共著者：岩本健一、高岡昌子、林悠子、高橋千香子
10）新人保育者に必要な資質について―新人保育者に対する総合的な評価につながる具体的な資質―	共著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部研究紀要第 48 号（P41～49）	本学の卒業生が就職先において新人保育者としてどのような評価を受けているのかを調べ、各評価項目と総合的な評価との関係について検討した。その結果、新人保育者は、高い技術や知識よりも、立場をわきまえた礼儀正しさ、業務に意欲的に取り組む前向きな姿勢が、総合評価の高さにつながっていることが明らかになった。これらと在学中の GPA とは相関はないことも明らかになった。 共著者：高岡昌子、高橋千香子、林悠子、岩本健一
11）地域子育て支援における心理相談室の役割―「親と子の相談室ひまわり」の報告から―	単著	平成 30 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部研究紀要第 49 号（P61～68）	本学において平成 21 年度から開設している「親と子の相談室ひまわり」の報告を通して、地域子育て支援における心理相談室の意義および役割について考察した。また筆者が５年間に担当した相談事例の統計報告をもとに、最近の親子の置かれている状況についても考察し、今後の相談室のあり方について検討した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12）新人保育者に対する評価～前年度との比較を通して～	共著	平成30年11月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部研究紀要第49号（P49～59）	昨年度に引き続いて、本学の卒業生が就職先において新人保育者としてどのような評価を受けているのかを調べ、各評価項目と総合的な評価との関係について検討した。就職先の学生に対する満足度は昨年度に比べて上昇していたが、将来性への評価はほぼ同じであった。また在学中のGPAと就職先の総合的評価得点との間にも相関は見られなかった。 共著者：高岡昌子、飯田恵美子、岩本健一、小川純子、高橋千香子、林悠子
13）新人保育者に対する評価～前々年度と前年度との比較を通して～	共著	令和2年3月	奈良学園大学紀要第12集（P51～60）	短期大学部の最後の卒業生（平成29年度卒）が就職先において新人保育者としてどのような評価を受けているのかを調べ、各評価項目と総合的な評価との関係について検討した。平成27年度から平成29年度の3か年では、保育現場における評価、満足度、将来性について明らかに上がっていた。一方、在学中のGPAと就職先の総合的評価得点との間には、今回も相関は見られなかったが、各教科の成績との関連をみると、「子ども学ゼミ」だけにおいて職場からの満足度との相関（r=0.6）が見られた。 共著者：高岡昌子、岩本健一、高橋千香子、林悠子
14）D.W.ウィニコットの情緒発達理論に関する一考察－保育における養護との関連に着目して－	単著	令和5年3月	奈良学園大学紀要第15集（P97～105）	保育所保育指針に示されている養護における保育者の関わりについての理解を深めるため、D.W.ウィニコットの情緒発達に関する主要論文を３編取り上げ、検討を試みた。ウィニコットは臨床実践を通じて子どもと母親の関係のありようについて深く論考しており、保育者による「応答的な関わり」とウィニコットの述べる「抱っこholding」との関連性、それにより育まれる自己感覚sense of self等について考察した。
15）「いじめ防止・対応等、教職員研修プログラム」の開発に関する研究Ⅰ－『学校法人奈良学園』における『教育相談活動（生徒指導含む）』のネットワーク強化－	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要第15集（P191～200）	本研究は2022年度 学校法人奈良学園採択の共同研究の経過報告である。本学園に置いて「いじめ対応研修会や事例研修会等の研修会」を複数回実施した。内容は生徒指導・教育相談に関する事例報告・検討および「教育相談」テキストを活用した研修であり、参加者の振り返りを基に内容を整理、分析し、「いじめ防止・対応等、教職員研修プログラム」開発に資するものである。本稿ではその第1回研修会実施結果から得られた知見を報告した。 共著者：住本克彦、高橋千香子、中山健、橋本宗隆、池田大輔、益田美保、三笘康之、山田百代
（その他）「学会等発表」				

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１）みどり精神分析研究会における事例発表	－	（平成16年5月）～現在に至る	みどり精神分析研究会（大阪市）	臨床心理技術の維持・向上のため、定期的に研究会に参加している。みどり精神分析研究会は、日本精神分析学会の認定グループのひとつであり、年10回開催されている。本研究会において、自験例の事例発表を、毎年1～2回行っている。
２）奈良県臨床心理士会子育て支援部会研修会における事例発表	－	平成23年7月2日	奈良県臨床心理士会子育て支援部会研修会（奈良市西部公民館）	子育て支援部会研修における事例検討会において、「「子どもを連れて死にたい」と訴える母親の支援」の事例を報告した。要保護児童ケースとして長年にわたってケースワーク的に関わっている事例であり、同じ福祉の現場で活動している臨床心理士より貴重なコメントを受けた。また、他機関とのネットワークの重要性や、その構築の方法についても議論された。
３）本学における子育て支援事業の5年間の取り組みと評価	－	平成27年9月	全国保育士養成協議会第54回研究大会(札幌市）ポスター発表（論文集P179）	地域における子育て支援の充実が求められるようになり、現在、保育所・幼稚園だけでなく様々な場において取り組みが行われている。本研究では、本学における過去5年間の子育て支援事業である「つどいの広場」「ちびっこ広場」の取り組みの経過と内容を振り返り、利用者アンケートの結果をもとに総括および今後の課題についてまとめた。 共同発表者：高橋千香子、森本美佐、林悠子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４）保育者としての資質と保育実践能力に対する学生の意識について	－	平成 27 年 9 月	全国保育士養成協議会第 54 回研究大会(札幌市）ポスター発表（論文集 P35）	前研究より、保育現場ではまず保育者としての資質が重要視され、現場が必要とする実践能力として文章・言語現力が強く必要であることが分かった。そこで本研究では、本学学生にアンケート調査を行い、現場で必要とされる保育者としての専門的実践能力や資質についてどのように考え、自身がどれくらい身につけていると感じているのかを明らかにした。 共同発表者：林悠子、東村知子、森本美佐、高橋千香子
５）保育者養成校の学生の性格特性および進路状況との関連について	－	平成 28 年 8 月	全国保育士養成協議会第 55 回研究大会(盛岡市）ポスター発表（論文集 P42）	本学学生（卒業生を含む）160 名のＹＧ性格検査の判定結果をもとに、保育者養成校の学生の性格傾向および卒業時の進路状況（進路選択）との関連について調べた。その結果、学生の半数近くで「情緒の不安定さ」がみられ、保育者の資質とも関連の深い特性であると考えられた。進路状況との関連では、保育職選択と性格特性には関連は見出されなかったが非正規あるいは非就職を選択した学生は、「劣等感」「非協調性」が高い傾向にある学生の割合が高いことが分かった。 共同発表者：高橋千香子、高岡昌子、林悠子、岩本健一
６）保育者養成に求められる保育者の資質について―就職先へのアンケート調査より―	－	平成 28 年 8 月	全国保育士養成協議会第 55 回研究大会(盛岡市）ポスター発表（論文集 P57）	平成 23 年度から 26 年度の本学学生の就職先に対して行ってきた勤務実態アンケート調査の自由記述のうち、園長らが保育者養成に望むこと、また就職した卒業生が評価されていることについての分析を行った。その結果、就職先の園長らは即戦力よりも社会人としての態度や覚悟、チームで働く上で必要な能力の養成を求めていることが明らかになった。保育士不足や早期離職が問題化する中、この点をふまえた保育者教育を行っていくことが急務であると結論づけた。 共同発表者：林悠子、高橋千香子、高岡昌子、岩本健一
７）幼稚園児の保護者に対する児童虐待についての意識調査	－	令和 2 年 3 月	日本保育者養成教育学会第 4 回研究大会（福山市）口頭発表（抄録集 P49）	ある幼稚園に通園する児童 147 名の保護者を対象に、①児童虐待問題への関心度②自身が虐待をしてしまうかもしれない可能性　③７つの行為について虐待と思うか否か　以上の３つについて質問紙法によるアンケート調査を実施した。その結果、③については、保護者の年代やこどもの数によって、虐待と捉える行為が変化する可能性があることが示唆された。 共同研究者：岩本健一、高岡昌子、林悠子、高橋千香子

８）多様化する子育て支援のあり方について －子育て支援の現状を探る－	－	令和４年５月	日本保育学会第 75 回大会（オンライン開催）ポスター発表	現在、地域子育て支援拠点事業の拡充とともに、支援の質の向上も課題となっている。本研究では子育て支援を「親が子育てに喜びを持ち、子どもと共に育ちあえる支援」と捉え、その現状を探ることを目的として、実施主体の異なる４か所の事業を概観した。そして今後は支援者の「親子関係を理解する力の深まり」が必要であり、そのための支援者プログラム開発につながる具体的な研究が必要であると結論づけた。 共同発表者：間井谷容代、高橋千香子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他）「報告書」 １）2013 子どもの育ちと学びをつなぐⅣ～奈良文化女子短期大学　幼小接続ＷＧ合同研究会の取り組みを通して～	共著	平成 26 年 3 月	奈良文化女子短期大学幼小接続ＷＧ編 （P43～48）	奈良文化女子短期大学にて平成 20 年度から開催されている「幼小接続 WG 合同研究会」における、平成 25 年度の講演資料や概要、参加者の感想等をまとめた冊子である。 本人担当部分：第１部第１章＜１月例会＞　講演テーマ「幼小接続に関わる保護者の不安～就学前後の相談から～」の内容をもとに、幼小接続期に保護者が抱く不安と、それらを安心に変えるための取り組みの例についてまとめた。 執筆者：秋田喜代美、前田洋一、善野八千子、恒岡宗司、石田秀朗、高橋千香子 A5 版　全 129 頁
２）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部　教学報告	共著	平成 30 年 12 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部幼児教育学科	奈良文化女子短期大学部の閉校にあたり、過去数年間において、特に教職員一丸となって行った教学上の特色のある取り組みや成果をまとめた記録である。 本人担当部分：7.3 本学における学生支援（P78～83）、8.8 心理学領域の科目における授業の工夫について-グループ活動を中心に(P121～122) 執筆者：青山雅哉、飯田惠美子、礒辺ゆう、岩本健一、小川純子、高岡昌子、高橋千香子、筒井道子、恒岡宗司、中田章子、林悠子、森本美佐、吉田明史 A4 版　全 188 頁

教　育　研　究　業　績　書

令和５年３月31日

氏名　辻井　直幸

研究分野	研究内容のキーワード
教育学	音楽科教育法、合奏、声楽、合唱、実習指導、作編曲

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１．教育方法の実践例 (1) 新指導要領の効果的な展開への取り組み	平成13年7月～16年 / 平成17年7月～平成24年	指導要領が改訂されるたびに教科書も新しくなり、教える事柄も変化する。そこで、効果的に学習活動が行えるよう愛知県海部地域独自の年間計画表を編成し直し、これを基に実際の指導案づくりをすることにより地域の音楽科共通理解を向上させた。
(2) 生徒が意欲的に歌うことができる「簡易伴奏」の開発	平成14年4月～平成24年3月	教科書指導書には、歌唱の「本伴奏」と「簡易伴奏」は掲載され、何れも歌声が完成してから効果が上がるものが多い。初期段階では、メロディをしっかりと提示し、更にビート感を前面に打ち出した方が生徒に興味を持たせる指導できる。歌詞を覚えるために毎回歌うことが必至であるが、飽きない伴奏は即興的に毎回変化が必要である。独自の簡易伴奏（作編曲）法を確立した。(蟹江町立蟹江中学校での実践)
(3) より深く理解させるための鑑賞指導の在り方。－表現と鑑賞の一体化を目指して―	平成17年7月～平成24年3月	作品を正しく理解するためには、その曲の背景にある文化の理解が必要である。さらに楽曲を聴くだけでなく、実際に演奏をすることにより、より深くその曲を理解する方法を研究した。鑑賞後の感想等を言語活動と結び付け、より深い鑑賞教育の在り方を追求した(蟹江町立蟹江中学校での実践)
(4) 質の高い合唱曲の発掘と新しい合唱曲集の開発―ChorusAlbum「AmaSong」編集―	平成22年1月	よりよい教材を発掘し、愛知県海部・津島地区の音楽教師で構成される「海部津島音楽教育連盟」代表として、授業で活用するための合唱曲集「AmaSong」を編集し、副教材にして授業の効率化を図った。(蟹江町立蟹江中学校での実践)
(5) 変声期を伴う時期の発声指導の在り方 －ベルカント唱とファルセットの効果的な練習方法－の開発	平成25年10月～27年3月	音楽の楽曲(歌唱曲)は、声楽的な発声で歌うことを前提である。複数人で教室単位の授業を行なう上で、合唱が一番有効な音楽形態である。声が溶け合う必要性があり、地声では困難である。この意味を生徒に理解させ、楽曲によって声の質を変化させ、曲に合った歌い方ができる発声練習方法を開発し教材を準備した。(蟹江町立蟹江中学校での実践)
(6) 合唱指揮法のための指揮棒を使用した生徒の理解しやすい独自の合唱指揮の開発	平成26年2月～27年2月	音楽的に完成された合唱を目指すには前に立つ指揮者の役割が大きい。合唱指揮は声楽の特質上、表現を重視するため横の動きが多く、指揮棒なしで演奏されることが多い。その反面テンポやリズムの縦の線が甘くなる。指導の段階では指揮棒を使用し明確に打点を示す必要がある。生徒に指揮指導の際も「はりぼて指揮者」ならない仕方を示した。(蟹江町立蟹江中学校での実践)

(7)和楽器に興味をもって意欲的にとりくめる 説明とテキストの作成	平成 28 年 ～ 現在に至る	生田流師範を招き「お琴教室」を開催した。そのための授業時間の設定や使用する箏の奏法を研究し、ゲストティーチャーの専門的な知識を生徒用に解説した。授業用テキストを考案し、新しい箏曲のアレンジに取り組んだ。(津島市立藤浪中学校での実践)
(8)言葉(歌詞)を生かした合唱指導の取り組み - 楽語の本当の意味を感じた合唱指導―	平成 28 年 ～ 現在に至る	合唱曲は歌詞の内容を音楽であらわしていると言える。優れた合唱曲は歌詞の意味と音楽が一致している。その歌詞を音楽的に大切にし、楽譜に書かれている記号の本当の意味を理解し、機械的な演奏に陥らない合唱指導の在り方を追求した。(津島市立藤浪中学校での実践)
(9)裏拍を感じた合唱指導の開発 -ハンドクラップを使った合唱指導-	平成 28 年 ～ 現在に至る	フレーズの歌い方は低学年の指導ではオンビート(表拍)を感じるだけでよいが、音楽レベルが上がるほど、裏拍が必要である。しかし「裏拍を意識して歌う」を理解するのは困難で、８分音符を基準にして「ハンドクラップ」を使って行う「リズム唱」を考案し活用した。(津島市立藤浪中学校での実践)
２　作成した教科書，教材 (1) 合唱曲集「AmaSong」を編集・監修・執筆し副教材とする。共著 海部津島音楽教育連盟発行 【再掲】	平成 22 年 改訂第１刷 平成 24 年 第２刷	中学校での歌唱指導は変声期の影響もあり、難しい問題が多い。特に中学生が好む音楽はテレビラジオの影響もあり、教科書離れが著しい。そのため質の高い合唱曲の発掘が必要である。そこで海部地区独自の合唱曲集(AmaSong)を発行し地区の全部の中学校で使用した。
(2) 合唱指揮のための生徒に分かりやすい指揮図の作成	平成 23 年 10 月	指揮の基本図形を示し、さらにそれらが実際の楽曲のどの部分で使用するのかを、楽譜上に分かりやすい図形(○、△、□)で表記させ、より実践的な指揮が行えるような、特別楽譜を準備した。 （蟹江町立蟹江中学校で使用）
(3) ベルカントとファルセットを練習するための模範 DVD の編集	平成 25 年 5 月	声楽的な正しい発声法は、中学生にとって、とても難しいものである。そこで、分かりやすい発声の仕方を馴染み深い楽曲から精選し、DVD を編集して生徒に掲示した。 （津島市立藤浪中学校で使用）
(4) 教育実習要項の作成(実習の手引き)	平成 25 年 8 月	津島市立藤浪中学校での教育実習生受け入れの「手引き」をまとめた。特に音楽の実習生に特化したものなので、他の中学校にも活用された。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 学生による自己評価委員会アンケート 奈良学園大学「器楽演習Ⅳ」の学生アンケート	令和元年 10 月	「器楽演習Ⅳ」本来はパーカッションのみの演習であるが、曲により他の楽器との調整が必要になる場合の具体的な配慮を指導した。そのため自由参加で履修学生以外の参加も認め合同での指導を行った。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 津島市立藤浪中学校縦割りブロ合唱祭の合唱指導(選曲や伴奏者確定のためのオーディションも含む)を行う。 (2)	平成 24 年 ～令和元年	特別活動と音楽科を合科的に進めるため、合唱コンクールを縦割り活動にして、上級生がリーダーとなって練習を担い、良い声の見本を下級生に示した。途中段階ではブロックごとに指導を行い、当日は絶対評価で審査した。良好な人間関係を構築した。

(2)愛知県海部津島地区教育研究集会音楽部会の助言者 （愛知県海部地方現職教育委員会主催）	平成 27 年 10 月	新学習指導要領「共通事項」の研究助言を行った。海部津島地区の音楽教師全員が集まる中で、この地域の音楽教師のスキルアップに貢献した。
(3) 愛知県海部津島地区教育研究集会音楽部会助言者(愛知県海部地方現職教育委員会主催)	平成 28 年 10 月	「響き合える子」のテーマの基、「ICT を活用した音楽授業の在り方」について助言を行った。次期学習指導要領で扱われる「主体的な学び」について、目標が大切と、指導・助言した。
(4)教育研究集会音楽教育部会の共同研究の助言者(愛知県海部地方現職教育委員会主催)	平成 29 年 10 月	継続テーマの「響き合える子」について助言を行った。サブテーマの「思いが伝わる音楽活動」については、特に合唱曲の選定と楽曲について「何を教えたいのか」というねらいをしっかりと持つことが大切であると指導・助言した。
(5)教育研究集会音楽教育部会の共同研究の各校別発表者(愛知県海部地方現職教育委員会主催)	平成 30 年 10 月	あま市立甚目寺東小学校で開催された、教育研究会でテーマ「響き合える子」－思いが伝わる音楽活動－についての共同研究において、津島市立藤浪中学校での実践「走る川」を DVD に録画し「歌詞の意味と音楽は一致する」ことを証明し発表した。
(6)教育研究集会音楽教育部会の共同研究の各校別発表者(愛知県海部地方現職教育委員会主催)	令和元年10月	愛西市立市江小学校で開催された、教育研究会でテーマ「響き合える子」－思いが伝わる音楽活動－についての共同研究において、津島市立藤浪中学校での実践「君に届け」で「歌詞を大切にすることが音楽的理解に大きく繋がり、より良い合唱になること」を DVD 録画により証明し発表をした。
5　その他		
(1)地域ジュニアバンドの指揮・指導を通して 地域青少年教育活動指導	平成 11 年 ～ 平成 23 年	社会福祉課協力の下「海部地区のジュニアバンド」を組織しこの地域に住む小中学生が休日に自由に吹奏楽活動に参加できる場を提供した。発表は三重県にある「志摩スペイン村」や、愛知県テーマパーク「ラグナシア」に参加。特に愛知万博『愛・地球博』会場では、来場者が全国に及び、吹奏楽の普及に寄与した。また東京ディズニーリゾートのオーディションに合格し、吹奏楽演奏を行った。
(2)マーチングの魅力の啓発のためトップ校で 編成する「メモリアルバンド」の教育活動	平成 21 年 ～令和元年	マーチング全国大会小編成の部で何度もグランプリを獲得した名古屋女子高等学校を中心に約 150 名でバンドを編成し「名古屋まつり」の吹奏楽連盟の行事等に積極的に参加した。特に愛知県吹奏楽連盟の主催する「動くコンサート」は、「名古屋ドーム」で行われ大規模である。また、名古屋駅地区振興会開催「ナゴヤ・エキトピアまつり」は平成 21 年から毎年参加し指揮・指導をした。延べ 10 万人観客にマーチングの魅力を広報することができた。
(3)指揮者としての教育活動	平成 22 年 ～令和元年	名古屋市の文化振興会企画、日本マーチングバンド協会東海支部と愛知県吹奏楽連盟が共催する「ナゴヤマーチング＆バトンウェーブ」では、2010 年より毎年、高校と合同バンドを組織し、その指揮・指導を行った。世界的なトランペッター「エリック・ミヤシロ」や「Blast」のドラマー石川直とトランペッターの米所大夢氏、「米米 CLUB」のサキソフォン奏者織田浩司氏、等の有名奏者と約 3000 人観客の前で共演。その後、市民吹奏楽団等や高校定期演奏会など、多くの団体から客演指揮の依頼がある。
(4)教職員の音楽教育活動の指導支援	平成 24 年 ～令和元年	教員で編成する「海部ディレクターズバンド」が毎年、海部津島現職教育委員会の主催する「教育講演会」等のアトラクション演奏を依頼された。

(5)ピアニストとしての地域貢献教育活動	平成 25 年～令和元年	地域ボランティア活動を、毎年ピアニストとして行っている。全てのジャンルの曲を瞬時にピアノ簡易伴奏に変換し初見演奏する独自の演奏法を身に着けている。その場の雰囲気やリクエストに応え楽しく演奏し老若男女問わず好評を博している。特に津島市の「六寿園」は、毎年訪問を続け、約 100 名の入園者に好評を得る。
(6) 吹奏楽・マーチング大会審査員としての教育活動	平成 25 年～令和元年	全日本吹奏楽連盟と朝日新聞社が共催する「全日本マーチングコンテスト」の三重県大会や愛媛県大会、また四国支部大会。また日本マーチング協会関西支部が主催する「マーチングバンド関西大会」など、全国大会への代表を決めるための審査員を務めた。
(7)吹奏楽・マーチングの指導者養成教育	平成 28 年～令和元年	愛知県吹奏楽連盟主催のマーチング MM 講習会やコンテ講習会、海部地区小中学校吹奏楽連盟主催のバンドクリニックなどで指導講師を数多く務めた。
(8) マーチング技能検定員としての指導者教育	平成 30 年 6 月 令和元年 8 月	2 年間、一般社団法人「日本マーチングバンド協会」の認定する 3 級・4 級の技能検定を愛西市佐織総合体育館で行い、150 名の試験官を担当した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事　　項	年 月 日	概　　要
1　資格、免許 ・中学校教諭一級普通免許（音楽） ・高等学校教諭二級普通免許（音楽） ・日本マーチングバンド協会　公認指導員 ・日本マーチングバンド協会技能検定講師資格 ・日本マーチングバンド協会技能検定員 ・日本マーチングバンド協会ライセンス検定員	昭和 57 年 3 月 昭和 57 年 3 月 平成 29 年 1 月 平成 29 年 1 月 平成 29 年 2 月 平成 31 年 2 月	昭五六中一普第4682号（愛知県教育委員会） 昭五六高二普第5417号（愛知県教育委員会） 公認証M第207号（一般社団法人日本マーチングバンド協会任命） 技能検定の講師資格　No.02155 MM講師 （一般社団法人「日本マーチングバンド協会」） 技能検定員資格　No.02155 MM技能 （一般社団法人「日本マーチングバンド協会」） 2020年指導ライセンスの検定員資格　No.02155 MM検定（一般社団法人「日本マーチングバンド協会」）
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1)音楽科主任	昭和 58 年～令和元年	37 年間、音楽科主任を務めた。教科の目標と指導計画を綿密に立て、平素の授業や各行事などでは音楽科の特色を生かした企画・立案をした。日常生活の音楽、給食準備の音楽、清掃活動時の音楽、下校放送などの楽曲の選定や運用を行い、学校全体に音楽を活用した。学習指導要領に求められる目標に向かって、生徒の実態をつかみ、より良い指導の方策を企て授業にあたった。評定だけでなく、過程の活動の評価を大切にした。その評価は、自己の指導の振り返りとし、何よりも、「楽しい授業」を念頭におき、高度な技能を習得させることよりも生涯にわたり音楽を愛好する心情を培うことを主眼に置いた。
(2) 学級担任	昭和 58 年～平成 11 年 / 平成 14 年～23 年まで	30 年間、学級担任を務めた。基本的生活習慣の定着、その上で学習を大切にさせ、集団を生かした学習活動の展開を図った。特に、クラスの協力や団結力を高め、リーダーづくりにも力を入れた。そのために、それぞれの役割を考え、理解させて、生徒の主体的な活動を推進していった。

(3) 教育実習生指導教官	昭和 60 年～令和元年	各大学から数十名に及ぶ教育実習生を受け入れた。そこでは実習の心構え、音楽授業の実際を指導した。生徒理解、目標とそれを達成するため指導案作成と評価を指導した。最終の研究授業では、目標の達成度を計り、授業研究協議会でまとめをした。
(4) 学年主任	平成 11 年～平成 13 年 / 平成 24 年～平成 30 年	10 年間、学年主任として、学年全体の方向性を決定した。問題行動の解決や保護者への協力要請などを率先して行なった。学年集会は定期的に行うものと、時々に応じて必要な内容でタイムリーに開催するものなど、メリハリをつけて生徒への学年目標の定着を図った。
(5) 音楽科における特別支援教育の推進	平成 24 年～令和元年	生徒の個別支援計画を立て授業を担当した。自閉傾向にある生徒には、「こだわり」のある部分は尊重しながらも、なるべく幅広く興味・関心が持てる授業になるよう工夫した。
(6) 部活動顧問の指導 ○蟹江町立蟹江中学校での吹奏楽部顧問

⑵ 次世代の音楽科指導－音楽教師に求められる資質・能力－	単	令和元年12月3日	ＥＲＰ出版	小学校から高等学校までの音楽科教育の目標・内容についての基本をおさえ、指導計画および指導案の作成・さらに評価を生かした授業づくりについて、実例を示して述べている。指導法では、発達段階に対応した指導・支援方法のポイントについて述べ、特に器楽演奏と合唱（日本の伝統的な歌唱法を含む）を中心として、共通教材にポイントを当てて述べている。最後に音楽科教育実習ならではの心得を掲載した。 Ｂ5版　pp１－pp83
⑶ simple is perfect による効率的なスクールバンド指導－管打楽器の SP 練習について－	単	令和5年3月7日	ＥＲＰ出版	昨今、働き方改革が叫ばれ、また新型の感染症の広がりも加担し、短い時間で効果の上がる音楽活動が求められている。しかし、器楽指導においては多種の楽器が存在し、一律に同じ指導ができないことが、この分野の難しい点であった。そこで、従来はその発音原理に基づく指導が主であったのに対し、本書では、楽器の構造上の音響的特徴を踏まえ、ポイント一つに絞りながら、短時間で効果の上がるトレーニング方法について述べていく。 Ｂ5版　pp１－pp89
⑵学術論文等) ⑴ 演奏の妨げとなる過緊張（あがり）の軽減について	共	平成31年3月	奈良学園大学紀要第10集（10頁）	優れた技能があるが、本番で実力を発揮できない生徒に配慮した指導法を論じた。過度の「あがり」のメカニズムを研究し、生徒アンケートを基に指導方法を示した。過去の失敗のイメージに向き合う、成功体験の積み重ね、あがっても演奏可能なメンタルの養成、集団演奏のメリットなどを提案した。実際に実践して、生徒の変化の過程と指導の効果を検証した。 本人担当部分：メカニズム研究と実践と検証部分を単著 pp99～pp108 共著者：辻井直幸、大西雅博、
⑵ 義務教育（中学校）における合唱指導の困難さとその打開策	共	平成31年3月	奈良学園大学「人間教育」第 2 巻第 2 号	歌唱指導について、音楽を巡る社会的背景と特に成長期の抱える問題点を明確にし、効果的な指導を論じた。特に日本人的発声から伝統的な西洋のベルカント唱法への移行指導、変声期の指導について具体的に論じた。発声指導とファルセット、楽曲に応じた歌い方、性別による指導などを中心に、実際の授業で楽曲を選定し、段階的に「良い声」を出せるように指導検証を行った。 本人担当部分：全本執筆、pp51～pp60 共著者：辻井直幸、大西雅博
⑶ 音楽科における合唱のための発声練習法－短期間で効果的な指導法に視点を当てて－	共	令和元年 9 月	奈良学園大学「人間教育」第 2 巻第 8 号	生徒は日常的に、音楽的な発声を行う機会がないから声楽的発声は難しい。本稿では、まず生徒が「流行歌」と言われる曲を好む理由を考え、さらに NHK 合唱コンクールの歴史に触れ、その曲の活用を論じる。合唱に向けての発声の短期間でも可能な効果的な指導方法（音階練習をする。美しく響く音を聴き取る。響きを記憶させて歌う。高い音の練習に入る。サイレンの練習。オクターブ上で歌う。）を提案する。これをセットで繰り返すと有効であることを実践的に論じた。 本人担当部分：全文執筆、pp183－pp192 共著者：大西雅博、辻井直幸

(4)　音楽教育で使用する「音」の理解－「楽典」の理解を効果的に支援する音楽指導法－	単	令和元年 9 月	奈良学園大学「人間教育」第 2 巻 8 号	楽譜は目に見えない音を、誰にでも見えるようにする試みである。器楽演奏にも合唱においても、楽譜の意味は大きく、最も音楽を形に表したものであるといえる。本稿では、楽譜に焦点を当て、その歴史的な成立の過程を記した。また生徒が、より興味を持って取り組む音楽指導の、特に楽典の指導方法を提案した。世界や日本の伝統的楽譜の歴史的な成り立ち、楽譜の見方（音の３要素、音の分類)、その他の日常音、「音」の表し方を、順を追って論じるたうえで、具体的な指導方法に導入して検証結果を述べた。 pp211～220
(5)　新しい時代に向かう鑑賞教育	共	令和元年 9 月	奈良学園大学紀要第 11 集	従来の鑑賞教育と言えば、鑑賞後に感想を書かせるだけのものが多かった。しかし、学習指導要領の変遷に沿って、その曲の背景となる地域や文化を研究させ、自分の言葉で根拠を持って説明できる鑑賞能力の育成を目指す必要性を論じた。新学習指導要領に求められる、言語教育やメディアと結びついた方向を示した。また、教科書に載っているという理由だけの鑑賞曲選曲にとどまらず、指導者の深い楽曲理解を伴う、新しい時代に合った作曲家の作品の選択視点を示し、鑑賞教育の在り方を具体的に例示して論じた。 本人担当部分：全文執筆　pp113－123 共著者：大西雅博、<u>辻井直幸</u>
(6)　教職の専門性と教育実習の意義	共	令和元年 9 月	奈良学園大学「人間教育」第 2 巻第 8 号	教職の専門性と教育実習の意義について、音楽科の立場から論じた。専門性を２つに分類し、批判的合理主義、職の特質の視点から、専門性を述べた。教育実習の意義は、教育現場の体験、教育理論と指導技術の獲得、自己の人間性の自覚にあるとした。教育実習生に求める資質は、学びへの意欲と謙虚さの両面、自分磨きの向上心であると示した。また、学校は社会の縮図と気づくことの大切さを記した。さらに音楽の教師独自に求められる資質能力と、そのために求められる指導法も論じた。 執筆担当部分：教育実習の意義、教育実習生に求める資質と指導法の部分を単著 pp193－pp200 著者：<u>辻井直幸</u>、松田智子
(7)　成長し続ける教師となるために ―「使命感」と「職務遂行力」と「自己統制力」に視点をあてて―	共	令和元年 10 月	奈良学園大学「人間教育」第 2 巻第 9 号	教師の成長とは何かを、「使命感」と「職務遂行力」と「自己統制力」に視点を当てて論じた。使命感は、師範学校の「教育学教科書」を参考に、「職務遂行力」については、まず教育実践力に焦点を当てて、教育課程編成、授業の展開における具体的配慮等について論じた。最後に、現在の「快楽原則」の価値環境において、自己統制力の必要性を述べ、教師として、自己の精神的内面をいかに自己統制するかが成長につながることを提案した。 執筆担当部分：教師の成長段階「守」「破」「離」の部分と自己統制力とまとめの部分単著 pp234―241 共著者：<u>辻井直幸</u>、松田智子
(8)「教育における守・破・離」－日本伝統音楽の修得を参考にして－ Ⅰ・Ⅱ	単	令和元年 11～12 月	教育プロ第 49 巻第 25 号 50 巻第 26 号	教師の成長を日本の伝統文化の習得を参考にして、「守・破・離」の学び方、時期になぞらえて、論じた。特に箏の習得の段階を詳細に説明して例示し、「守・破・離」の時期の意味するところを具体的に記した。この 3 段階はホップ・ステップ・ジャンプのような次々と階段状に上るものでなく螺旋状に向上するものであると記した。4 頁

(9)音楽教科における実践的合奏指導法－基本練習を核とした効率的な器楽指導のあり方－	共	令和２年３月	奈良学園大学紀要第12集	合奏や合唱指導を行なうとき、指導者は必ず指揮台に立つことになる。また、コンクールや発表会に出場するときは、「本番」という華やかな舞台の上で、指揮者として生徒と一体となって音楽を披露することになる。これは他教科の先生や運動部の顧問などとは決定的に違うことである。つまり音楽教師は教科の指導はもとより、さらに「本番」という、舞台上で指揮者として出演者（生徒）と同等に審査・評価され平素の指導を問われるという運命になる。そこで、今回は表現の領域にスポットを当て、我が国の音楽教育の中で、やや専門性が高く、指導が難しいとされる「器楽」の指導の仕方について、効果的な指導の在り方を追求し、また、それに伴う学校現場における「合奏指導」のあり方について、考察する。 共著者：大西雅博、辻井直幸
(10)簡易伴奏のための合理的なピアノ（鍵盤楽器）演奏方法－コードネームを基にした即興伴奏へのアプローチ－	単	令和元年12月	奈良学園大学人間教育学部人間教育ジャーナル(ONLINE ISSN:2433-779X)第２巻第11号	音楽を学ぶ者にとり、ピアノ演習は必修である。なぜなら、ピアノは鍵盤楽器という構造上、音楽を視覚的にも捉えやすく、また一人でメロディはもちろんのこと、和声やリズムまで演奏することができるからだ。さらに、音域が広く、殆どの楽器の音域をカバーしているからである。大変便利な楽器であるため、見方を変えるなら、「音楽研究装置」と言っても過言ではない。音楽史に残る大作曲家たちは、すべからくこの楽器の名手である。本稿では、この素晴らしい楽器を、音楽を学ぶ学生はもちろんのこと、一般の音楽愛好家のためにも、より身近に取り扱えるよう、コードネームを基にして単純で効果的な学習方法の開発を提案した。さらに、鍵盤楽器に苦手意識を感じている者にも、この楽器のメリットが活かせるように、誰にでも分かる単純な楽譜例を示しながら、この楽器の演奏上の仕組みを解き明かしつつ論じた。
(11)演奏に直結する生きた楽典の学習 －楽曲アナリーゼを促進させる楽典の学習方法－	単	令和２年２月	奈良学園大学人間教育学部Online Journal of Humanistic Education 3(2), 33-43, 2020-02	音は目に見えないため、音楽を学ぶ上で、それを視覚化することは、とても有効な手立てである。そのため、特に楽譜の存在は大きく、今の段階では最も音楽を形に表したものであると言える。また、楽譜は読むだけでなく、音楽を形成する上で、「楽典」という音楽の仕組みを表す理論の基になっている。そのため、楽典は音楽大学等の入試において、専門的な知識を量る出題科目の一つである。しかし、一般学生にとっては、音を記号や図、又は言葉に表すことは、普段の生活には無い特別なロジックを使うことになるため、その学習はかなり難しいものになる。しかも、単に知識の増加だけでは、実際の音楽の理解には繋がらない。その打開のため、本論では、生きた楽曲を分析し、そこから必要とする楽典の知識を身につける学習プロセスの工夫を紹介する。この取り組みを通して、本物の知識と技能を身につける方法を論じる。
(教育実践記録等) (1) 音楽実習ノート	単	平成24年5月	津島市立藤浪中学校音楽科	毎年教育実習生を指導し、その際使用した冊子をまとめた。教育実習生の心得、公務員として守るべき法律、学級担任としての仕事内容と校務分掌、教材研究と指導案作成の実際、生徒理解と授業の展開、研究授業への目標と評価等について具体的に記載して事前に学習することを指示した。 A4版10頁冊子
(2) ジュニアバンドと劇場の在り方	単	平成25年3月	「世界劇場会議 国際フォーラム2011」の報告・論文集	愛知県ジュニアバンド指導者の代表としてパネラーを務めた報告集である。「劇場の役割と進む道」－すべての人々に喜びを！－というテーマで劇場と演奏の在り方について論じた。Session-4 でパネラーとして討論に参加した様子と、日頃のジュニアバンドでの合奏指導と研究活動について報告した。p 245～p 262

(3) 教育実習要項作成（音楽科実習の手引き）	単	平成25年8月	津島市立藤浪中学校音楽科	津島市立藤浪中学校での教育実習生受け入れの「実習ノート」を再度見直してまとめたもの。特に音楽科の実習生に特化したものを作製し、市内の他の中学校でも活用された。 A4版10頁冊子
(4)基本を大切にした合唱指導	単	平成 26 年10月	海部地方現職教育研究会発行	藤浪中学校の実践（今咲き誇る花たち）をDVDを使い、基本的な技術指導を大切にしながらも、意欲が音の支えに繋がる合唱の在り方を追求し論じた。 A4版4頁冊子とDVD
(5)歌詞の意味と音楽の一致について	単	平成 30 年10月	海部地方現職教育研究会発行	継続研究[響き合える子－思いが伝わる音楽活動－]についての共同研究を藤浪中学校の実践（「走る川」）をDVDを使い、歌詞の意味と音楽は一致することを証明し発表した。 A4版4頁冊子とDVD
(6)歌詞を大切にした音楽理解の深化	単	令和元年10月	海部地方現職教育研究会発行	継続研究［響き合える子－思いが伝わる音楽活動－］についての共同研究を藤浪中学校の実践（「君に届け」）をDVDを使い、歌詞を大切にすることが音楽的理解に大きく繋がり、より良い合唱になることを実践発表した。 A4版4頁冊子とDVD
(その他・音楽作品等) (1)吹奏楽アレンジンジ20選	単	平成24年9月	WinDo（web 出版）	Music office Onishiよりペンネーム「斎宮八千代」としてロシアの大作曲家達の名曲を中心に吹奏楽用のアレンジ20曲（1曲3分）を出版する。(スコア300頁)
(2)「ソアレコンサート」用アンサンブル曲アレンジ12種	単	平成 25 年4月	MAESTRO（web 公開）	「翼をください」をテーマとして、多様なアンサンブル形態で演奏できるようアレンジし12曲（1曲3分の12ヶ月分）を「ソアレコンサート」のためにボランティア提供をした。(スコア24頁)
(3) Simple is Perfect ！による究極のバンド指導	単	平成 27 年9月	ジャパンライム株式会社	吹奏楽とマーチングのための指導用にDVD3枚組180分を出版しそれぞれに指導のための解説をした。新任顧問やバンド指導初心者でも即実践できるように、実写映像と解説を一体化している。
(4)実践ドラムメジャー	共	平成 28 年6月	愛知県吹奏楽連盟発行	ドラムメジャー（指揮杖のテクニック）のための指導DVD3枚組90分を作成し出版した。内容は、パレードコンテストに初めて参加するバンドやドラムメジャーの指導に苦慮する吹奏楽部の実態に合わせて、見ればすぐ使えるような実践的指導DVDとなっている。 本人担当部分：監修者として、制作のための全体の台本全てを執筆した。 共著者：佐藤祐季（実技指導）、東邦高校マーチングバンド部（演技）
(5)「ラプソディインブルー」G.ガーシュイン作曲、辻井直幸 編曲	単	平成 29 年6月	WinDo（web 発行）	兵庫県双星高校吹奏楽部の依頼により有名なオーケストラ曲「ラプソディインブルー」のマーチングバンドで演奏できるようにアレンジし指導を行った。ジャズとロック、ポップスのティストをふんだんに使った豪華なアレンジで好評を得た。(バンドスコア40頁)
(6)「バッハロックブルー」 J.S.バッハ作曲 辻井直幸 編曲	単	平成 30 年7月	WinDo（web発行）	愛知県春日井西高校吹奏楽部の依頼により有名なバッハの名曲を5曲織り交ぜ、マーチングバンドで演奏できるようにアレンジし指導を行った。バロック音楽の新たな可能性に聴くものを虜にする秀作。(バンドスコア40頁)

(7)「Canon」パッヘルベル作曲、辻井直幸 編曲	単	平成 30 年 7 月	WinDo（web 発行）	～和と洋が奏でる響き～「箏とピアノによるランチタイムコンサート」でパッヘルベル作曲の「カノン」(5 分) を 箏とピアノで演奏できるようにアレンジし演奏指導も行い、和楽器演奏の新しい可能性にチャレンジした。(スコア 5 頁)
(8)「春の海」宮城道夫作曲、辻井直幸 編曲	単	平成 30 年 9 月	WinDo（web 発行）	第 21 回ミッドランドスクエア音楽祭（名古屋駅前）が開催され宮城道夫作曲の「春の海」を箏とピアノで演奏できるようアレンジした。8 分の演奏指導も行い、全く違う「和と洋」の新しい音楽の融合を実現した。(スコア 5 頁)
(9)「ラストタンゴインブルーＡ．ピアソラ作曲 辻井直幸 編曲	単	平成 31 年 2 月	WinDo（web 発行）	愛知県東邦高校マーチングバンド部の依頼により有名なピアソラの名曲を４曲織り交ぜ、マーチングバンドで演奏できるようにアレンジし指導を行った。タンゴの強烈なリズムとアコーディオンの音色を意識した他に類を見ない、エキゾティックな仕上がりとなっている。(バンドスコア 40 頁)
(10)「ホワイトロード」 パットメセニー、他作曲 辻井直幸 編曲	単	令和元年 6 月	WinDo（web 発行）	愛知県の一般マーチングバンド「インペリアルサウンズ・ドラムアンドビューグルコー」からの依頼によりゲーム音楽とポップスの融合した新たなマーチングバンドの可能性を追求する作品。使用曲は「Altal」「残月」「シングルアゲイン」「ミヌアノ」の４曲となっている。(バンドスコア 50 頁)
(11)「童歌幻想」 辻井直幸 作曲	単	令和元年 7 月	WinDo（web 発行）	愛知県東邦高校マーチングバンド部の依頼により、日本の童歌を題材に完全オリジナルで作曲した。有名な童歌を彷彿とさせる独自の作風は、マーチングバンドで演奏することにより、和と洋の斬新なコラボレーションを実現した。(バンドスコア 50 頁)
(12)「To Be Vivid Stars」 八木澤教司 作曲 辻井直幸 編曲	単	令和 2 年 10 月	WinDo（web 発行）	静岡県浜松市立高校吹奏楽部の依頼により、八木澤教司作曲の吹奏楽曲をマーチングバンド用にアレンジし指導を行った。中間部分にテーマをポップス調にアレンジしコラージュしたが原曲の作者（八木澤氏）より好評価をいただいた。(バンドスコア 40 頁)
(13)「天空のフーガ」 J.S.バッハ作曲 辻井直幸 編曲	単	令和 3 年 1 月	WinDo（web 発行）	愛知県春日井西高校吹奏楽部の依頼により、前回に引き続き、バッハの名曲を６曲織り交ぜ、マーチングバンドで演奏できるようにアレンジし指導を行った。コロナ禍のため大会（令和２年度）は開催されなかったが、名古屋マーチングバトンウェーブで初演し好評を博す。(バンドスコア 40 頁)
(14)「悪魔のトッカータ」 J.S.バッハ作曲 辻井直幸 編曲	単	令和 3 年 5 月	WinDo（web 発行）	静岡県浜松市立高校吹奏楽部の依頼により、J.S.バッハ作曲の有名なバロック曲「トッカータとフーガニ短調」をメインにマーチングバンド用にアレンジし指導を行った。 10 月 31 日に行われた東海マーチングコンテストで初演し金賞を受賞した。(バンドスコア 50 頁)
(15)「スーパーフライ・ライブ」 越智志帆 作曲 辻井直幸 編曲	単	令和 3 年 6 月	WinDo（web 発行）	愛知県東邦高校マーチングバンド部の依頼により、「NHK 紅白歌合戦」でも歌われた「愛を込めて花束を」を中心数曲をメドレーにしてマーチングバンドでも演奏できるようにアレンジし指導を行った。人気歌手のライブコンサートが開催されている様子をマーチングで表した。(バンドスコア 50 頁)
(16)「ジキルとハイド」 フランク・ワイルドホーン 作曲 辻井直幸 編曲	単	令和 4 年 3 月	WinDo（web 発行）	愛知県春日井西高校吹奏楽部の依頼により、ミュージカル曲「ジキルとハイド」をマーチングバンドでも演奏できるようにアレンジし指導を行った。一般的に使用されている版とは違い、依頼されたバンドの特性を活かした表現ができるようにアレンジをした。 10 月 15 日長野県ビッグハットで行われた東海マーチングコンテストで銀賞を受賞した。(バンドスコア 40 頁)

(17)「漢の戦い」 大西洋平 作曲 辻井直幸 編曲	単	令和4年 5月	WinDo （web 発行）	愛知県の一般マーチングバンド「愛西ブローイング」からの依頼により、ゲーム音楽と和製ポップスを融合したアレンジで戦国武将「前田慶次」の半生をマーチングで描いてみた作品。 9月18日に行われたマーチングコンテスト愛知県大会で金賞を受賞した。(バンドスコア48頁)
(18)「ノートルダムの鐘」 A.メンケン 作曲 辻井直幸 編曲	単	令和4年 6月	WinDo （web 発行）	静岡県浜松市立高校吹奏楽部の依頼により、ディズニー映画作品で有名になった「ノートルダムの鐘」をマーチングバンド用にアレンジし指導を行った。吹奏楽の団体がマーチングショウにチャレンジするため、音楽的な部分（音色やニュアンス等）を大切にできるアレンジの工夫をした。(バンドスコア48頁)
(19)「美空ひばりショウ-愛燦燦-」 小椋佳 作曲 辻井直幸 編曲	単	令和4年 7月	WinDo （web 発行）	愛知県東邦高校マーチングバンド部の依頼により、「NHK紅白歌合戦」で話題になったAIによる「美空ひばり」の新曲「あれから」を冒頭に、ヒット曲「愛燦燦」等、数曲をメドレーにしてマーチングバンドでも演奏できるようにアレンジし指導を行った。9月18日に行われたマーチングコンテスト愛知県大会で金賞を受賞した。(バンドスコア48頁)

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年3月31日

氏名　西江なお子

研究分野	研究内容のキーワード
教育学	家庭科教育、食育、授業づくりの方法技術

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
(1)節電の効果とその意義を、実感を伴った理解へと導く「見える化」を図る実践	平成25年2月	家庭科と総合的な学習の実践である。東日本大震災後、節電という言葉を聞くが、継続するのは難しい。節電の意義を理解し実践する児童を育てることは重要である。そこで、課題を見出し、節電の方策を考え、自分にできることをする力を養う授業を行った。労力と電気の関係を実感するため、自転車発電機で実際に発電させる。また待機電力を測定し、その電力を年間に換算してどれほどの節電に繋がるのかをデータ化する。こうした実際に体を動かしたり数値化したりするなど様々な「見える化」のアプローチを経て、節電を実感させた。児童は校内の無駄な電気の消灯などに積極的になった。 (大阪教育大学附属池田小学校の実践)
(2)住環境の汚れに対し、意識下から意識化へと児童を変容させる指導法の実践	平成26年2月	家庭科の実践である。ドアノブや電気スイッチなど不特定多数の人が触れる場所や、一見きれいに見える壁や机まわりなどにも、拭いきれていない汚れが付着していることを光線の特殊なブラックライトを用いて照射し「見える化」する。そしてそれが人体に与える影響を考え、「きれいなはず」という意識を覆しどうすれば見えない汚れを取り除き、気持ちの良い環境づくりが実現するかを考えさせた。実際に自分の身近な物を雑巾等で拭い汚れを実感させることで、その後の清掃態度が激変すると同時に家庭でも同じような報告を保護者から受け、家庭での実践に繋がった。 (大阪教育大学附属池田小学校の実践)
(3)生活実践力向上を目指した小学校家庭科指導法の実践	(3)生活実践力向上を目指した小学校家庭科指導法の実践 平成26年5月～平成27年3月	小学校第５、６学年生を対象に、児童・教員の最も関心の低い分野である清掃学習において、本授業モデルによる実践を通して生活実践力がいかに高まるかを検証・考察した。その際、授業モデルの有効性を検証する目的で診断的評価・総括的評価を行い、児童の意識、態度の変容を調査した。また、家庭科の教科目標に対する評価も行った。教科の目標に対する評価においては４観点全てにおいて４段階評価の上位４、３が85%以上を占め、概ね達成している結果となった。授業のまとめとして授業対象学年以外の児童に清掃の必要性のプレゼンを5・6年生が行い、学校全体で清掃の取り組みが活発となり活動が定着し成果を得ることができた。 （池田市立石橋南小学校の実践）
(4)大学生の衣食住の知識・技能の向上を目指した講義の実践	平成28年4月現在に至る	大学生を対象に、衣食住の知識・技能のレディネステストを行い、実態を把握した。結果、個人差が大きく小学生からの家庭科の学びが定着していない学生が多く見られた。この実態を受け、毎時に知識・技能の小テストを行い、課題解決に向けての具体的な対策を考えさせた。学びの定着と実践の日常化を図るために、家庭科新聞の作成及び家庭での取り組みシートを継続的に書かせることで、学生自身に知識・技能の定着の成果を実感させることが出来、結果として成績が上昇する学生が増加し、ある一定の成果を得ることが出来た。 （奈良学園人間教育学部「衣食住の理解」での実践）

(5)大学における学生主体とした指導法の実践発表	平成30年10月～平成31年3月	家庭科を基盤とした教科横断的な「いのちの教育」を、動物愛護の視点を取り入れることによる有効性の実証に向けて実践した。児童の身近な存在としてペット（特に犬・猫）のいのちに注目し、「犬に名前を付ける日」の映画監督である山田あかね氏、動物保護に携わるNPO法人「犬猫みなしご救援隊」代表中谷百合氏を招き、児童、保護者、地域住民を対象とした「いのちの教育」を実施した。朝日新聞社及び大阪北摂地域のマスメディアの取材を受け、いのちの教育の取り組みを広く発信することが出来た。本実践研究により、いのちについて大人と子どもが語り合うと共に、児童のいのちにたいする意識が大きく変容し、教育効果があった。 （池田市立石橋南小学校の実践）
(7) 家庭科における「防災教育」の実践	平成30年4月～平成31年3月	家庭科を基盤とした教科横断的な「防災教育」の可能性を探り、その有効性の実証に向けて実践した。児童の防災意識と行動の不整合の検証を通して、防災意識の向上に加え具体的な防災の在り方についての知識・技能の習得の必要性を明らかにした。そこで、地域住民に対し、防災の取り組みや避難時等に抱く不安について聞き取り調査を実施し、小学生が地域の防災リーダーとして実践可能な事項について検討した。加えて、学習発表会においては、「釜石の奇蹟」を題材に演じ、震災時の様子を調べ、災害を自分事として捉え、下級生はじめ地域住民など多くの人に防災の必要性について発信した。これら一連の取り組みにより、実践前と比較した際、児童の防災意識はもとより、各家庭での防災の取り組みの質・量ともに向上し、本実践の有効性が示された。 （池田市立石橋南小学校の実践）
2　作成した教科書，教材		
(1)家庭科指導法における指導案作成の手引き （奈良学園大学　人間教育学部発行）	平成28年11月	家庭科指導法の受講生を対象に、家庭科指導案作成における重要点を明確に提示した。題材設定の理由や指導上の留意点の書き方などを、実際の指導案を示し具体性を重視した。学生からは、指導案の書き方が明確になり、重要点が示されているため書き漏れや書き損じを防ぐことができ好評であった。 Ａ4判　2頁
(2)衣食住の理解における技能向上のための手引き	平成29年6月	衣食住の理解の受講生を対象に、技能向上を目的としてその重要点を明確に提示した。ミシンの操作方法、安全な扱い方、児童への適切な指導法といった小学校教員として必要な技能を、基礎から応用までを詳細に記し、安心して児童に指導できるようにまとめた。児童 への指導ポイントが分かりやすいと好評であった。 Ａ4判　2頁
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
(1)奈良学園大学学長からの「家庭科教育法」「衣食住の理解」を担当する非常勤講師として採用時の評価	平成25年4月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、非常勤講師として採用時の評価は以下の通りである。 『該当教員は、大阪教育大学池田附属小学校に家庭科主任として4年間勤務し、毎年全国発表会を行い具体的な教材開発や指導方法などを熟知している。また、毎年多くの家庭科教師を志望する大学生を実習生として受け入れ、大学生に対しての指導の経験も豊かである。実践だけでなく研究紀要や、現職教員対象の「教員免許更新」の教科書を作成するなど、研究に対する意欲も高い。学会での活動も開始し、豊かな実践だけでなく、理論面でも大学教員としての資格を備えていると判断する。
(2)奈良学園大学「衣食住の理解」授業終了時における学生アンケートによる評価	平成27年8月	授業改善のために設定した5項目と自由記述による学生アンケートを行った。授業内容を実生活に活用できる項目の満足度は4点満点中3.8と高評価であり、多くの割合の学生が満足のいく授業となった。

(3)奈良学園大学「家庭科指導法」授業終了時における学生アンケートによる評価	平成29年3月	授業改善のために設定した5項目と自由記述による学生アンケートを行った。第１回目の講義においては家庭科に対する興味関心が低い傾向が事前調査で分かったが、学生が能動的に講義に参加し学びが深まるよう、アクティブラーニングを取り入れ、小学校現場で即活用できる力を身に付けさせた。講義の満足度は4点満点中3.8という高評価であり、学生に深い学びを保証することが出来た
(4) 奈良学園大学「衣食住の理解」授業終了時における学生アンケートによる評価	平成30年3月	全15回授業終了時におけるアンケートによる授業評価は、「授業時間の有効な使い方」は4点満点中3.83、「授業に対する熱意や意欲」は3.78、「説明のわかりやすさ」は3.7といずれも高評価であった。授業において、小学校家庭科教育の目標及び内容について実感を伴って理解できるよう、アクティブラーニングを取り入れ、リフレクションを図りながら学生の理解を確認し、適宜フィードバックして授業を進めることを心掛けた。その結果、学生の深い学びを保証し、満足度の高い授業とあり、先の評価を得ることが出来た。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
(1)大阪教育大学附属池田小学校における 学年主任としての学年教員指導と調整	平成21年4月～平	学年主任として、管理職や他学年との連絡調整を綿密に行い、児童の教育に尽力した。年間学習カリキュラムを作成し、学年の目標到達に向けて各教員と話し合いを密に行い、児童の教育にあたった。また、各学級の児童の実態把握に努め、個別対応を要する児童についての会議を定期的に行い、学年全体で情報を共有し児童の指導を行い、安定した学年経営が実現し、保護者からの高い評価も得た。
(2)大阪教育大学附属池田小学校における 家庭科主任として教育実習生の指導	平成21年4月～ 平成26年3月	平成21年から家庭科の主任を5年間担当し、毎年教育実習生を、年2回受け入れ、家庭科教員希望者を複数名実習指導した。実習指導の内容は、家庭科の学習指導要領に基づく教材内容の解釈、年間指導計画の立案、学習指導案の作成、効果的な実技指導の方法、安全な実習のための留意点、高学年児童の理解等におよんだ。さらに実際の授業をさせて、課題を指摘して、再挑戦させることで、実践力をつけさせ、学生からは課題が明確となる的確な指導であるとの評価を得た。
(3)近畿附属小学校連合会家庭科支部役員としての教育研究	平成21年4月～ 平成26年3月	役員として家庭科教育に関しての成果と課題を毎年分析し、他の附属校との意見交流を図る中で、PDCAサイクルを積極的に行い、研究会の成功に尽力した。
(4)大阪府家庭科教育研究会家庭科部会役員としての教育研究	平成21年4月～ 平成26年3月	平成21年から家庭科部会役員として、毎年実施される研究会の開催に向けて会長の指示のもと連絡調整を綿密に行い、教員の希望アンケートを集約し講師の選出など研究会の成功へと尽力した。
(5)大阪府家庭科研究会役員	平成21年4月～ 平成26年3月	役員として研究会開催に向けて関係機関と研究目的について検討し、会の成功に尽力した。また、日ごろの家庭科学習の取り組みを他市と情報交換する会を行い、池田市の家庭科教育の発展に尽力している。
(6)池田市家庭科教科書採択委員	平成26年度	池田市教育委員会からの委嘱により、平成27年度からの使用となる家庭科教科書採択委員として、教科書の採択を行った。各社の教科書の特徴を分析し、特に児童の実態を鑑みて採択することができた。

(7)池田市家庭科研究協議会指導助言者	平成28年度～29年度	池田市家庭科研究協議会指導助言者として、池田市の家庭科教育担当者に授業づくりのポイントや教材について助言した。特に27年10月に大阪府家庭科教育研究会において池田市から授業代表者を選出し授業提案した際は、消費者教育の授業の在り方について助言し、池田市の家庭科教育の発展に尽力した。研究会所属。教員並びに授業代表者所属長から、的確な指導により提案性のある授業が出来たとの評価を得た
(8) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「基礎ゼミナールⅠ」におけるアドバイザーとして学生支援	平成28年度	1回生のアドバイザーとして、年3回の面談および適宜個別指導を実施し、大学生活に順応できるよう支援し、学生の主体的な学びの実現に向けて尽力した。
(9) 「奈良学GT担当者」として、1期生教職志望学生の学生支援	平成28～29年度	1期生教職志望学生を対象とした「奈良学GT」担当者として、担当者間で連携を図りながら学習会の計画・運営、面談等を実施し、学生支援を行ってきた。各学生の実態把握と適切な指導を心掛けるとともに、各自治体の動向を分析し、個々に応じた教採対策計画の相談に応じるなど、全体と個別指導を適宜行ってきた。
(10)奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「基礎ゼミナールⅡ」におけるアドバイザーとして学生支援	平成29年度	平成29年度入学の中国人留学生指導担当として、日本と中国の食に関する比較から、地理的、文化的背景による食の相違点を見出し、分析・考察し、論文作成までの指導を行った。論文発表会において会場からは、食について多角的に研究を進めているとの評価を得ることが出来た。当該学生は、本研究を通して中国と日本の食に対する知見を深めることが出来たとともに、更なる研究を目指して今後中国での大学院進学を視野に入れており、研究への意欲喚起を図ることが出来た。
(11)奈良学園大学人間教育学部人間教育学科中国人留学生指導	平成29年度	平成29年度入学の中国人留学生指導担当として、日本と中国の食に関する比較から、地理的、文化的背景による食の相違点を見出し、分析・考察し、論文作成までの指導を行った。論文発表会において会場からは、食について多角的に研究を進めているとの評価を得ることが出来た。当該学生は、本研究を通して中国と日本の食に対する知見を深めることが出来たとともに、更なる研究を目指して今後中国での大学院進学を視野に入れており、研究への意欲喚起を図ることが出来た。
(12)「人間教育力開発演習Ⅲ」において教職志望学生を対象に指導	平成29年度～平成31年度	教職志望者を対象に教員に必要な資質・能力の育成を図ることを目的に、教育課題や教育指針等法規に基づいた取り組みの現状などを提示するとともに、学生個々が設定した課題の解決に向けて講義を進めた。学生からは、本講義受講により、教職志望の意思が確固たるものとなったことに加え、教員に必要な資質・能力を深く理解することができたとの評価を得ることが出来た。
(13) 兵庫教育文化研究所協力研究所員	平成29年度～現在に至る	兵庫教育文化研究所協力研究所員として、家庭科・技術家庭科部会における、家庭科教育の授業構築に関するアドバイザー業務に従事した。
(14)「奈良学GT主担当者」として、3期生教職志望学生の学生支援	平成29年度～現在に至る	3期生教職志望学生を対象とした「奈良学GT」主担当者として、キャリアセンターと連携を図りながら学習会の計画・運営、面談、業者との打ち合わせ等を実施し、学生支援を行ってきた。各学生の実態把握と適切な指導を心掛けるとともに、個々に応じた教採対策計画の相談に応じるなど、全体と個別指導を適宜行ってきた。このことから、学生の学修意欲向上を図ることができ、模試等において成果が表れており、学生自身が課題に向き合い、取り組む力を育てる教育効果を上げることが出来た。
(15) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「基礎ゼミナールⅡ」におけるアドバイザーとして学生支援	平成30年度	2回生のアドバイザーとして、年3回の面談および適宜個別指導を実施し、単位履修や学修計画、生活指導など、大学生活全般に関わる指導を行い、学生の主体的な学びの実現に向けて尽力した。

(16)三宅町フードフェスティバル実行委員	平成30年度～ 現在に至る	三宅町主催のフードフェスティバルの実行委員として、会の企画・運営について助言を行いアドバイザー業務に従事した。
(17)関西大学文学部における教育実績	平成30年度～ 現在に至る	関西大学文学部における家庭科教育法として、小学校における主体的・対話的で深い学びを実現するための家庭科指導の在り方について授業を行った。家庭科教育における指導計画の作成及び内容の取扱いについて、学習指導要領に則り学生の理解度を随時把握しながら進めることを心掛けた。また、毎時リフレクションシートに体得した学びと課題、疑問点等を記入させ、全学生が指導者としての知識・技能を身に付けられるようにし、自身の授業評価と改善を行った。その結果、学生からは、小学校家庭科教育の目的と教育方法が明確となったと高評価を得ることが出来た。
５　その他		
特記事項なし		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１　資格，免許		
１．免許・資格 (1)小学校教諭一種免許 (2)幼稚園教諭一種免許 (3)食育インストラクター2級 (4)応急手当普及員 (5)小学校教諭専修免許	平成7年3月 平成7年3月 平成22年9月 平成22年8月 平成28年3月	平６小一第794号（兵庫県教育委員会） 平６幼一第368号（兵庫県教育委員会） DP-0900856 第　F4056006 平28小専第16号（大阪府教育委員会）
２　特許等		
特記事項無し		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
(1)大阪府池田市教育委員会主催 ふくまる教志塾　講師 会場：池田市教育センター 対象：教員採用試験受験希望者	平成24年7月	池田市教育委員会主催の平成25年度教員採用試験突破を目指す大学生等を対象の講習講師を行った。採用試験に向けての学習法はじめ、家庭科など各教科授業づくりのポイント、保護者・児童への対応の仕方などを講義した。講習後のアンケートには、実際の小学校教員の生の声の影響は大きく、教職に対しての職務遂行能力の理解を促した。
(2)家庭科教育学会関西支部役員としての貢献	平成24年8月	日本家庭科教育学会第43回近畿地区会　大会を役員として成功させた。さらに西江本人も、実践・研究発表デザートのプレゼンを通して、望ましい消費者生活を提示した。
(3)大阪府豊能地区家庭科新任教員研修講師 会場：池田市立石橋南小学校 対象：平成24年度豊能地区新規採用教員	平成24年8月	平成24年度新規採用教員が対象の家庭科教育についての研修講師を行った。レジメを用い、家庭科の目的や、生涯学習での位置づけなどの学習指導要領の説明をした。また、45分の授業の組み立て方を例示し、師範授業も行った。発問・板書・ノート指導・教材選定などを例示した。研修後のアンケートでは、教師の目線はじめ、言葉かけ、授業の組み立て方など参考にする要素が多いと評価を得た。
(4)「食卓を囲むことから始まる食育」 ＰＴＡ主宰における保護者対象教育講演会講師 会場：池田市立石橋南小学校 対象：池田市立石橋南小学校保護者20人	平成26年10月	孤食が取りざたされている現状を踏まえ、各家庭で会話をしながら食事をすることの意義と、身近にできる台所菜園についての講演を全校保護者向けにレジメを用意し行った。そして、今求められている食育についての概要を伝え、食を通しての人間形成について話をした。講演会後のアンケートでは、家族と食卓を囲むことの重要さに気付いたと感想が出て、保護者の食への関心を高めることができ一定の成果を生むことができた。

(5)池田市家庭科研究会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員20名	平成28年5月	池田市家庭科教育研究会において、10月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、小学生対象の消費者教育をどのように進めていく必要があるのかを講師として指導助言を行った。具体的な指導だと好評だった
(6)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員20名	平成28年6月	池田市家庭科教育研究会において、10月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成及び発問や板書計画について具体的な指導を行った。消費者教育についての資料なども多種用意し、具体的な指導だと好評だった
(7)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員20名	平成28年7月	池田市家庭科教育研究会において、10月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成及び発問や板書計画について具体的な指導を行った
(8)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員20名	平成28年8月	池田市家庭科教育研究会において、10月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成の最終調整を行うと共に、7月に行われた授業のビデオ視聴による授業検討を行った。
(9)奈良学園大学オープンキャンパス模擬授業 会場：奈良学園大学 対象：オープンキャンパス参加高校生・保護者30名	平成28年8月	大学の講義を体験するオープンキャンパスにおいて、高校生・保護者を対象に節電を考える家庭科教育を行った。実感を伴った理解を図るため体験活動を取り入れた講義は、大学の講義に興味・関心を持つ一助となったとの感想が聞かれた。
(10)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：豊中市立東丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員20名	平成28年10月	大阪府家庭科研究会大会において、5月から行われてきた授業検討をもとに、小学校家庭科における消費者教育の授業実践を行った教員の指導助言を行った。
(11)食育講座 会場：三宅町立三宅小学校 対象：三宅町立三宅小学校保護者・教員25名 ・三宅町食育指導	平成28年12月	「小学生の体力向上に向けた食事のあり方」と題して、小学生に必要な栄養素を中心に、その適切な摂取方法や調理例を挙げ、保護者が家庭で行える食事のあり方について指導助言を行った。調理例や好き嫌いのある児童への対処の仕方など、無理なく行える食育として参会者に好評であった。
4　その他		
特記事項なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1. 「とごころ」第3号	共著	平成24年2月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5版　63頁 編者：大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：佐々木靖、岩井陽介、垣内幸太、坂下剛、小林秀訓、升村誠志、井上伸一、樋口万太郎、荒川真一、西江なお子、　他9名 本人担当部分：「家庭科における言語活動」の実践（p44～45）を単著 家庭科における体験的な活動を通して言語活動を充実させる授業法の研究をまとめた。 １．児童の実態把握。 ２．グループワークでの学習。 ３．異学年交流。 ４．振り返り活動。 以上、体験的な活動を学習に効果的に組み込むことを通して、言語活動の充実が図れていくことを教育実践として提案した。

2. 「とごころ」第4号	共著	平成24年10月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5判　全63頁 編者：大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：松井典夫、岩井陽介、佐々木靖、加藤いつき、西江なお子、平野憲、津田一司、西田まなみ、孕石泰孝、井上伸一　他７名 本人担当部分：『「家でもやってみたい」と思える授業づくりを目指して』（ｐ50～53）を単著 家庭科での学びがその場だけではなく、家庭での実践へとつながるための授業法の研究をまとめた。 １．学ぶ楽しさを感じる授業展開の工夫。 ２．児童の実態に適した教材選択の必要性。 ３．意識化するためのアプローチとしての「見える化」の提案。 ４．客観的思考での課題に迫る授業のアプローチ法。 ５．データ分析による事実把握。 ６．学びを家庭実践へと生かす方法。 以上、学びが児童の意識に根を強くおろし、家庭での実践へと継続していく研究実践として提案した。また、家庭科教育が児童の自立の過程における役割についても論じた。
3. 「教師も子どもも“楽しい”と思える授業づくり教職実践演習テキスト」	共著	平成25年3月	大阪教育大学	大阪教育大学における家庭科教育法の授業における教職実践演習に使用するテキストとして、執筆されたものである。 A5判　全52頁 編者：大本久美子 共著者：瀧野聡平、川口綾、昉那啓子、西江なお子 本人担当部分： １．「授業づくり・子どもとのかかわりのヒント」高学年児童との関わり方はじめ、家庭科授業の組み立て方の工夫や板書計画、教材研究方法、教室環境整備のポイントなど、教師を目指す学生の指針となるよう項目だてし、理論と実践をまとめた。 ２．「魅力的な家庭科の授業例」実際の教材を２つ提示して、学校で家庭科の授業で使いやすいようにポイントを述べた。 ①「かしこい消費者になろう　～家族の一員として、わたしにできること～」と題し、買い手と売り手の双方を経験しながら消費者としてのあるべき姿を学ぶ授業展開を述べた。 ②「快適な住まい方　～今の私にできること～」と題し、自分のまわりの 環境に興味・関心を持ち、そこから課題を見つけ、快適という概念を自分なりに模索しよりよい環境を作り出すにはどうすればよいか考え、実行するという住環境を考える住環境について学ぶ授業展開を論じた。（ｐ18～24、ｐ40～45）を単著
4. 「家庭科におけるアクティブ・ラーニングへの試み」	単著	平成27年12月	株式会社EPR教育プロ 第45巻　第27号　通巻1796号	最新の教育情報や斬新な実践等をまとめ、教育関係者並びに児童・生徒の保護者を対象に広く告知するために執筆されたものである。 本人担当部分：「家庭科におけるアクティブ・ラーニング」（ｐ18～19）を単著 ①清掃意識の実態把握。 ②見える化の体験による概念砕き。 ③言語活動による意識化と共有化。 ④メタ認知を行う。 ⑤学びを深化する。 以上、小学校家庭科教育において住まいの授業をアクティブ・ラーニングの方法で行うことにより、児童が自分の課題と向き合い、家族の一員としての自覚を持って生活し、主体的に生活する力が育成されると仮説を立て、研究実践として提案した。

5．3年目教師　勝負の学級づくり　ーマンネリの毎日を脱却する極め付きの指導技術56ー	共著	平成29年9月	明治図書　授業力＆学級づくり研究会	小学校3年目までの教員を対象に、学級経営や授業づくりの基礎・基本を明確に解説した。 A5判　全126頁 共著者：垣内幸太、樋口万太郎、日野英之、小林秀訓、西江なお子、他20名 本人担当部分： １．「給食準備・後片付け」と題し、低学年でも安全で早く準備ができるよそい方や、おかわりの仕方について明確な数値で児童に指導することの重要性を解説した。 ２．「給食指導の裏にある３つのねらい」では、安全・衛生面、社会性の構築、食文化への関心向上の3点の重要事項について解説した。 給食を単に昼食として捉えるのではなく、食育という指導の一つとしての位置づけについて述べ、教員の食への意識向上について論じた。（ｐ20～23）を単著
6.「とごころ」第9号	単著	平成30年2月	大阪教育大学附属池田小学校	「主体的・対話的で深い学びを」の実現に向けて、家庭科における授業デザインについて「生活実践力」育成に着目し授業法を述べた。次期学習指導要領解説家庭科編によると、家庭科教育の課題の一つは、家庭での実践に繋がっていないことであると挙げられている。そこで清掃学習における体験活動・交流活動・評価活動の往還により課題解決を図る生活実践力育成をめざした授業デザインを構築した。この学習を通して、実践前後における児童の取り組みと意識に変容が見られた。このことから、生活実践力育成における一つの取り組みとして体験・交流・評価活動の往還は有効であることが明らかとなった。
7.新指導要領準拠　小学校家庭科教育の基礎基本	単著	平成30年9月	株式会社ERP	平成31年度実施の新学習指導要領に準拠し、小学校家庭科教育の変遷並びに指導計画の作成及び内容の取扱い、また、授業づくりについて、小学校教員を目指す学生や家庭科を初めて指導する教員を対象に作成したブックレットである。授業づくりの項目においては、児童を取り巻く状況を具体のデータを提示、分析し、必要な支援の在り方や授業構成について詳細に述べている。加えて、授業実践も適宜掲載し、授業づくりの在り方を解説した。本著は、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「家庭科指導法」、関西大学文学部「家庭科教育法」において使用しているが、学生からは小学校家庭科の課題や児童の実態、及び指導案の書き方などが明確に分かると高評価を得ている。
8.指導要録記入文例集	共著	令和2年1月	株式会社文溪堂	学習指導要領改訂に伴い、通知表作成にも使用可能な学習指導要録の記入文例集として発行されたものである A4判　全160頁 編者：株式会社文溪堂 共著者：今宮信吾、盛田恭平、長野順子、西江なお子　他8名 本人担当部分：「児童の特徴・特技、学校内外に関する諸事項等（低学年）」（ｐ42～45）を単著、「児童の特徴・特技、学校内外に関する諸事項等（中学年）」（ｐ95～98）を単著、「家庭第5・6学年」（ｐ114～115）を単著、「児童の特徴・特技、学校内外に関する諸事項等（高学年）」（ｐ150～153）を単著 2017年、学習指導要領が改訂され、育成すべき資質・能力の3つの柱が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力」、「学びに向かう力、人間性等」とされ、それに伴い指導要録もこの資質・能力の達成状況を看取る観点として、「知識・技能」「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3巻点に整理された。これを受け、通知表にも活用できるよう「家庭」での記入例を具体的に示した。

9. 家庭科授業の理論と実践 持続可能な生活をつくる	共著	令和2年2月	あいり出版	学習指導要領改訂に伴い、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた家庭科の授業の理論と実践をまとめ、授業に活用できるよう発行されたものである A5判　全286頁 編者：株式会社あいり出版 共著者：大本久美子、野田文子、鈴木真由子、加賀恵子、森田晋太朗、西江なお子　他7名 本人担当部分：「家庭での実践につなげる授業の工夫 -数値化、視覚化して実感を伴わせる-」（ｐ160～166）を単著、「『特別の教科道徳』との教科横断的な『いのちの教育」～家庭科の可能性を探る～」（ｐ242～249）を単著、 　家庭科の課題の一つとして、家庭での実践に繋がらないという点が挙げられる。そこで、実感を伴った理解を促し実践へと結び付けるための手立てとして、電力を視覚化し節電行動につなげる教材を開発、授業提案を記した。また、特別の教科道徳との教科横断的な学習として動物のいのちに着目し、家庭科におけるいのちの教育の教材開発、授業提案を記した。
9. 家庭科授業の理論と実践 持続可能な生活をつくる	共著	令和2年2月	大学教育出版	住本克彦（編）『新しい視点からの教育社会学』,西江なお子「令和の日本型学校教育」,「教育社会学」のテキストとして企画・発刊された。西江はコラム執筆「令和の日本型学校教育」について「不易流行」の視点から将来教師を目指す学生を対象にわかりやすく解説した（単著）p.83.大学教育出版。令和4年3月発刊。Ａ５判,全頁数２５０
（学術論文）				
1. 快適な住まい方 ～今の私にできること～	単著	平成24年2月	大阪教育大学附属池田小学校 研究紀要 p101,102	まわりを取り巻く環境に興味・関心を抱き、課題点を見出し、改善するための方策を考え、自分に出来ることをみつけ実践する力を養うことをねらいとした授業実践と理論の記録である。授業では「快適」の定義を児童個々にイメージさせ定義づけし、めざす快適像を確立させる。そしてそれにむかうためにどのようなアプローチを踏めば実現可能となるのかを検証させ、実践へとつないだ。この学びを生かして冬場の教室内における空気の循環を効率よく行うよう窓の開け方を工夫したり、臭いや色彩といったものに着目したりしてより快適な環境づくりに励み、家庭でも実践したことを保護者から報告を受けた。住生活における「快適」の定義を理解し、その環境を創造するための研究である。
2. 私は我が家の節電大臣 ～今の私にできること～	単著	平成24年11月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要 p50～53	節電という言葉をメディア等で目にするものの、何をどれだけ行えばよいかが分からないままでは、継続した節電は難しい。しかし、節電は現在の日本の重要課題と言っても過言ではなく、その意義を知り意識して取り組むことが出来る児童を育てることが必要である。そこで、節電の今ある課題を 見出し、節電に繋がる様々な方策を考え、自分にできることを見つけ、実践する力を養うことをねらいとして授業を実践したまとめである。 労力と電気の関係を実感するため、自転車発電機で実際に発電させる。また待機電力を測定し、その電力を年間 に換算してどれほどの節電に繋がるのかをデータ化する。こうした実際に体を動かしたり数値化したりするなど様々な「見える化」のアプローチを経て、節電を実感させた。この学びから児童は校内の待機電力を省き、無駄な電気の消灯などに積極的に取り組むとともに、家庭でも実践を続け、一定の成果を得ることができた。

3. 私は我が家のコーディネーター　～「見える化」をめざした家庭科の授業～	単著	平成25年2月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要 p50～51	「汚れが見えていない＝清潔」という既成概念を覆し、清掃の在り方を見直し、清掃の意義を考え実践につないでいく授業の理論と実践のまとめである。ドアノブや電気スイッチなど不特定多数の人が触れる場所や、一見きれいに見える壁や机まわりなどにも、拭いきれていない汚れが付着していることを光線の特殊なブラックライトを用いて照射し「見える化」する。それが人体に与える影響を考え、「きれいなはず」という意識を覆し、見えない汚れを取り除き、気持ちの良い環境づくりが実現する方策を考えさえる授業記録である。実際に自分の身近な物を雑巾等で拭い汚れを実感させることで、その後の清掃態度が激変すると同時に家庭でも掃除機での掃除のみならず、拭き掃除も取り入れたという報告を保護者から受け、学びが家庭での実践に繋がり一定の成果を得ることができた。 住環境の汚れに対し、意識下から意識化へと児童を変容させる適切な指導法の研究を発信した。
4. ビブリオバトル～読んで聞いて話して～	単著	平成27年2月	池田市立石橋南小学校研究紀要　　p19～20	国語科でビブリオバトルというゲームの要素を持つ書評を行い、読む力・話す力・聞く力を身につけさせる指導法の在り方を研究した。初めは本の概要を説明する際、下書きをして読む練習を重ねていた児童も、回を重ねるうちに原稿を読むことなく与えられた時間内で、要点をつかみ聞き手に分かりやすく話すことができるようになった。また、聞く側も何を質問すればよいのか視点を絞りながらメモを取ることができるまでの力をつけることができた。この活動を通して聞く力と話す力、読む力を育てることができ、他の様々な場面でもその力を活用することができるようになり、成果を得ることができた。
5.　内面に働きかける小学校家庭科教育 ―意味ある体験活動を通して― 【査読付き】	単著	平成27年12月	人間教育学会 人間教育学研究第3号 p123～132	体験活動を積極的に取り入れることにより、児童が自分の課題と向き合い、家族の一員としての自覚を持って生活し、主体的に生活する力が育成されると仮説を立てて、家庭科教育の授業実践を行ったまとめである。 実践１：品質表示に注目する意義を体験活動を通して児童に意味づけし、家庭生活で実践することにより主体的な生活者の育成を目的として行った。 実践２：身近な活動であるにも関わらず、児童の興味・関心が低く積極的な取り組みが継続されにくい清掃活動の学習において、快適な環境とはどのようなものかを実感させ、家庭での実践へとつないでいくことを目的として行った。見える化の活動や、消費者と売り手の両者の視点を経験させ、実感を伴った理解へと導く活動など、いずれも体験活動を通して児童の概念砕きを行った結果、児童の学習意欲の喚起につながり、自ら調査・分析したり、新たな課題を見つけそれを解決する方法を模索したりするなど、まさに学びの過程である「感覚→思考→実践」を一連の学習の中で行い、学びを深化させていくことができる、適切な指導法の研究を発信した。
6. 他社との出会いによる自己変成	単著	平成28年3月	大阪教育大学　実践学校教育講座　実践教育学論集2015　―現代の教育問題を考える20― 特集：◇私を変容に導いた受的「経験」 p42～45	自分自身を変容へと導いた受苦的経験を高橋橋勝の理論に基づいてメタモルフォーゼする過程とその要因について分析した。本分析をもとに、教員の在り方について考察した。
7. 生活実践力の育成を目指した小学校家庭科モデル開発に関する研究　―実感を伴った理解へと導く体験活動を通して―	単著	平成28年12月	奈良学園大学研究紀要第4号 p133～139	小学校家庭科教育における課題の一つとして、学習した知識や技術などが実生活で十分に活かされていないことが挙げられる。そこで、学びを生活の中で継続して実行し、生活をよりよくしようとする態度や技能を「生活実践力」と定義づけ、授業での学びを生活実践力に結び付けていくモデル開発を行い、体験活動による動機づけの教育的な効果について論じた。
8.　「生活実践力の育成による人間教育　―家庭科授業モデルの構築―」 【査読付き】	単著	平成28年12月	人間教育学会 人間教育学研究第4号 p107～114	小学校家庭科において、生活実践力を図るうえで重要な要素である体験、交流、評価についてそれぞれ検証し、その意義をまとめると共に、それら三つの往還による生活実践力向上を図る授業モデルを開発し、その有効性を検証した。

9.　「生活実践力を高める小学校家庭科のプログラム開発―「体験・交流・評価」の往還を手がかりにして―」 （修士論文）	単著	平成29年2月	大阪教育大学大学院　実践教学校教育専攻 修士論文	「実践力を高める小学校家庭科教育のモデル開発～家庭での実習を組み込んだ『ふり返り活動』の実践を手掛かりにして～」という研究テーマに沿って、家庭科教育の課題の一つである「実践力」を育成するための手立てを実践研究したまとめである。清掃学習に振り返り活動と家庭での学習を移動計画に組み込むことにより、継続した実践が行われた結果を分析し、実践力を高める授業モデルを開発、提案する。 Ａ4判　142頁
10.　「家庭科における可視化を通した実践力育成に関する一考察	単著	平成29年9月	奈良学園大学研究紀要 第６号 ｐ83～89	小学校家庭科において、可視化を授業に取り入れることにより実践力向上を図ることができるという仮説を立て、実践研究を行い、その成果と課題をまとめた。サーモグラフィーで体内の熱分布を、ルームランナーで電気を可視化し、節電の意義と必然性を実感を伴って理解させ、節電について考えさせた。本実践を通して節電が児童の生活で日常化する成果が見られ、可視化の有効性を検証することが出来た。
11.　「家庭科における見えない汚れを可視化する掃除学習の有効性	単著	平成30年6月	奈良学園大学学術雑誌論文 1巻第4号 P113～121	家庭科の目標の一つは実践力を身に付けることであるが、掃除学習は定着に困難が見られる。そこで、定着を図ることを目的に、見えない汚れの可視化を図ることにより、日常の住まい方への関心を高め、住まい方に関する基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、快適な住まい方を考え工夫する能力を育成することができるという仮説を立て、授業モデルを作成し、その有効性を検証した。その結果、実践後一定期間経過後も緩やかな現象はあるものの、家庭において継続して掃除を実施する児童が確認できた。以上より、掃除学習に可視化を取り入れることは、児童の実践力向上に有効であることが明らかとなった。
12.　「動物介在・愛護を通して考える「いのちの教育」	単著	平成30年9月	奈良学園大学研究紀要 第9号 P127～136	家庭科におけるいのちの教育の研究及び実践事例を調査すると共に、学校現場や学校現場外における動物介在教育や動物愛護教育についての研究及び実践事例を概観することを目的とした。関連する文献を検索したところ20件が抽出され、内容を整理した。家庭科におけるいのちの教育は保育領域や食と関連付けているものが多いことが明らかとなった。また、動物介在教育は学校において実践する際には、十分な知見や教員間の共通理解と共に、専門家の助言を取り入れる必要があること、また動物愛護教育の実践事例及び研究は数少なく、行政が中心となって取り組んでいることが明らかとなった。
13.「家庭科を基盤とした教科横断的な防災教育の検討―家庭科における防災教育に関する文献研究を通して―」 【査読付き】	単著	平成32年3月	日本人間教育学会　人間教育学研究第6号	本研究は、小・中・高等学校の家庭科における防災教育の取り組みの実態を文献調査した。すると、小学校では「食分野」での防災食が見られた他は見当たらず、中学校では「食分野」に加え「住分野」が、高等学校では環境教育と関連付けた実践が見られた。以上から、家庭科における防災教育内容には偏りがあることが明らかとなった。しかし、防災・減災は衣食住に直結しており、家庭科教育を基盤として防災教育の目標である「日常生活の様々な場面で発生する災害の危険を理解し、安全な行動ができるようにするとともに、 他の人々の安全にも気配りできる児童の育成を目指す」ことが出来ると仮説を立て授業モデルを立案することが、今後の課題とした。

14.「家庭科を基盤とした教科横断的な防災教育の研究 児童の防災意識調査」	単著	平成32年4月	奈良学園大学研究紀要オンラインジャーナル人間教育　第2巻第2号 P83～92	防災への意識向上を図るには、教育が大きな使命を担っており、特に地域のコミュニティーとしての役割が強い小学校において防災教育を実施することは、地域内連携促進において有効であると仮説を立てた。その際、防災教育の目的を考慮すると、家族と家庭生活が学習の対象であり衣食住や消費、環境を学習内容とする家庭科に防災教育を取り入れる意義は大きいと考えた。そこで、児童を対象に防災に関する意識調査を行った結果、「正しく恐れて正しく備える」ことの必要性を児童に気付かせることが防災教育の課題の一つであり、そのためには地域住民との連携や教科横断的学習、防災科学技術のコンテンツの有効活用等を防災教育に位置づけ、児童の防災意識向上を図る必要があることが明らかとなった。
15.「小学校における教科横断的な「いのちの教育」－動物のいのちを軸に据えた教材の開発　－」【査読付き】	単著	令和2年3月	日本家庭科教育学会近畿地区50周年記念誌	総合的な学習の時間、家庭科の教科横断的な授業を開発し、「いのちの教育」が、1）児童のいのちに対する意識にどのよう影響を与えるか、2）自分自身を大切に思う意識や、誰かの役に立っているという意識を児童に育ませることができるか、の2点を検証した。授業では、児童の身近な動物のいのちについて学び、様々な体験活動を積み重ねることによっていのちを実感し、いのちを自分事として捉えさせた。その結果、家族とのいのちについての会話の増加、いのちが唯一無二であることの理解、自分を大切な存在だと思う意識の向上、いのちに関して自分にできることを考え実行する実践力の育成、の4点が成果として得られた。
（その他）				
「依頼原稿」				
１．小学生夏休みの家庭学習用教材編集	単著	平成22年4月～平成24年4月	(株)文溪堂	事前に児童の実態調査を行い、長期休暇に行うべき学習課題を明確化し、各教科ごとの重要項目を簡潔にまとめ、児童のつまづきやすい内容を吟味し、問題作成し教材作成会社文渓堂に提示した。小学校1年～6年までの全学年の学習用教材の企画と編集に関わった。執筆者は池田附属小学校の各教科の教師である。西江は教材全体の構成と、各教科等のバランスを調整校正を担当した。 A4判　p14～18
2. 大阪府豊能地区新規採用家庭科教員研修会 資料冊子	単著	平成24年8月	豊能地区教育委員会 大阪教育大学附属池田小学校家庭科教育部会	平成24年度新規採用教員が対象の家庭科教育についての研修講師を行った。その際、家庭科教育の目的や生涯学習での位置づけなどの学習指導要領の説明を行う際の小冊子を作成し、それをもとに講義を行った。また、45分の授業の組み立て方を例示し、師範授業も行い、発問・板書・ノート指導・教材選定の仕方などを例示した。 A4判　6頁
3.「第八回シンポジウム『アクティブラーニングを通して考える道徳をどうすすめるか』	単著	平成29年2月	株式会社EPR教育プロ 第 47 巻　第 4 号　通 巻 1829号	平成29年1月22日開催の「いのちの教育研究会第8回シンポジウム」におけるリポートを執筆した。アクティブラーニングを通して考える道徳をどうすすめるかをテーマに、基調提案・講演が行われ、それを受けて「子どもが命の大切さを実感するには」をテーマとして、グループ討議を行われたが、そこでの参会者の声やアンケート結果をもとに、いのちの教育についてまとめた。P8～9
「学会発表等」				
１．デザートのプレゼンを通して、望ましい消費者生活を考えた　授業実践		平成30年11月	朝日新聞社 （北摂13版）	家庭科を基盤とした教科横断的な「いのちの教育」の可能性を探り、その有効性の実証に向けの実践が、朝日新聞社に取材を受け発信された。本研究により、動物のいのちについて考えることにより、児童のいのちに対する意識が大きく変容することが明らかとなった。また、保護者、地域住民、児童が一堂に会し、いのちについて考え、語ることの意義も見出すことができ、その有効性を新聞により広く告知された。（池田市立石橋南小学校）

2.生活実践力の向上を図る小学校家庭科教育のプログラム		平成29年3月	日本教師学学会第18回大会 実践研究発表	小学校家庭科教育の課題として、学習内容が定着しておらず実生活で活かされていないことが挙げられる。そこで、実践力を体験活動・評価活動・交流活動の往還によって育成することが出来るという仮説を立て、実践モデルを開発し、その成果と課題を発表した。
3.小学校家庭科における生活実践力育成の授業モデル構想		平成29年8月	日本家庭科教育学会近畿地区会研究発表	小学校家庭科における課題の一つとして学習した知識や技術などが実生活で十分生かされていないことを文部科学省は指摘している。この現状を受け、児童の生活実践力の育成を図る授業モデルを構想し、研究実践を行い成果と課題を発表した。
4.多文化共生とSDGsを関連させた『食』を軸にした授業プログラムの開発		令和4年6月	日第42回関西支部発表	消費者教育では、「持続可能な社会の必要性に気付き、その実現に向けて多くの人々と協力して取り組むことができる力」の育成が求められている。このことから、消費者教育の枠組みにおいて多文化共生に関する内容を位置づけることは有効であると考ええ、多文化共生と SDGs を関連させた「食」を軸とした 授業プログラムを開発した。そしてその授業プログラムを実践し、小学生が持つ多様な価値観への受容や好奇心の変容を分析し、その結果を10月開催全国発表に向けて近畿地区で発表した。
5.『A家族・家庭生活』と『C消費生活・環境』を関連させた消費者教育の授業プログラムの開発		令和4年7月	日本家庭科教育学会第65回全国大会発表	日本家庭科教育学会近畿地区会におけるキャッシュレス時代の金融教育・消費者教育をテーマに小・中・高・大学生を対象としてキャッシュレス化の実態把握調査を行い,家庭科における金融教育の授業プログラムを開発した。そのうち、西江が所属する小学校グループでは、小学校学習指導要領『A家族・家庭生活』と『C消費生活・環境』を関連させた消費者教育の授業プログラムを開発し、提案を行った。
6.多文化共生とSDGsを関連させた『食』を軸にした授業プログラムの開発		令和4年10月	日本消費者教育学会第42回全国大会発表	消費者教育では、「持続可能な社会の必要性に気付き、その実現に向けて多くの人々と協力して取り組むことができる力」の育成が求められている。このことから、消費者教育の枠組みにおいて多文化共生に関する内容を位置づけることは有効であると考ええ、多文化共生と SDGs を関連させた「食」を軸とした 授業プログラムを開発した。そしてその授業プログラムを実践し、小学生が持つ多様な価値観への受容や好奇心の変容を分析し、その結果を発表した。
（取材）				
１．家庭科における「いのちの教育」の取り組みについて		平成30年11月	朝日新聞社 （北摂13版）	家庭科を基盤とした教科横断的な「いのちの教育」の可能性を探り、その有効性の実証に向けの実践が、朝日新聞社に取材を受け発信された。本研究により、動物のいのちについて考えることにより、児童のいのちに対する意識が大きく変容することが明らかとなった。また、保護者、地域住民、児童が一堂に会し、いのちについて考え、語ることの意義も見出すことができ、その有効性を新聞により広く告知された。（池田市立石橋南小学校）
２．家庭科における「いのちの教育」の取り組みについて		平成30年11月	ケーブルテレビ（大阪北摂版）	家庭科を基盤とした教科横断的な「いのちの教育」の可能性を探り、その有効性の実証に向けの実践が、ケーブルテレビ（大阪北摂版）に取材を受け発信された。会場には地域住民、保護者、児童計約200名が集まり、映画「犬に名前をつける日」を鑑賞、その後、NPO法人「犬猫みなしご救援隊」代表中谷百合氏、映画監督山田あかね氏の講演を聞き、いのちについて考えた。 授業後、本研究の趣旨並びに授業についての取材を受け、いのちの教育についての取り組み、児童の変容を語った。以上から、いのちの教育への関心の高さと必要性を実感するとともに、本研究の有効性を検証することが出来た。 （池田市立石橋南小学校）

3．保護者と歩む情報誌Partner		平成30年12月	ブンブンどりむ	家庭における「お手伝い」の意義と、児童の「お手伝い」への意識改革について取材を受けた。小学校における今までの実践事例をもとに、主体的・能動的な活動へと導く工夫として、汚れの視覚化やゲーム性の導入、フィードバックと称賛など、家庭で実践可能な取り組みを多く紹介した。加えて、小学校教員志望学生への、家庭科指導法における「家庭の仕事」の分野の授業法についても触れ、家庭と学校の連携の必要性も述べた。以上より、情報誌作成者からは、具体的で明確な事例であり、実践可能であると高評価を得ることが出来た。
4.「いのちの教育」の取り組みについて		令和元年8月15日	朝日新聞社 （北摂14版）	犬や猫の殺処分問題を取り上げ、いのちについて学ぶ教育について研究している。その一環として、募金活動を課外活動に位置付け、その様子について取材を受けた。募金活動の趣旨や児童の取り組み等について触れるとともに、いのちについて児童が真摯に向き合い学ぶ姿勢について述べ、「いのちの教育」の重要性を伝えた。 （池田市立石橋南小学校）

１　最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。
２「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。
３「研究活動」については、下記の点に留意すること。
①著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。
②著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。
③　共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。

教　育　研　究　業　績　書

令和５年 ３月　31 日

氏名　　林　悠子

研究分野	研究内容のキーワード
健康・スポーツ科学、スポーツ心理学、身体表現学	スポーツ心理、体育、運動イメージ、発育発達、表現

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 発達段階に応じた子ども向けダンスのグループ制作、保育者と園児役とに分かれて行う表現遊びの指導実践、サーキット遊びやボール遊びの創作と指導実践を行う。	平成25年～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部「健康・運動の理解」「子どもと表現（体育）」、奈良学園大学奈良文化女子短期大学部「体育の基礎Ⅰ・Ⅱ」「身体表現」において、乳幼児から小学生の発達段階を理解し、音楽リズムダンスの振り付けやリズム遊びの実践、「子どもに身につけさせたい基礎的な動き」を取り入れた遊びの創作を行った。
２　作成した教科書，教材 ダンスの振付用紙や運動あそび・音楽に合わせた身体表現遊びの指導案の作成とオペレッタのオリジナル台本の作成。	平成25年～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部「健康・運動の理解」「子どもと表現（体育）」、奈良学園大学奈良文化女子短期大学部「体育の基礎Ⅰ・Ⅱ」「身体表現」において、ダンスの振付用紙や音楽にあわせたリズム遊び・身体表現遊びの指導案を作成した。「子ども学ゼミ」では音楽科目担当者と共同でオペレッタの製作を行いこれまでに計10本のオリジナル台本を作成した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 奈良学園大学人間教育学部授業科目に対する学生評価 「運動健康の理解」（Ⅰ回生後期講義）	令和２年	奈良学園大学人間教育学部「運動・健康の理解」は後期において小学校専修２クラスと小学校免許取得者の１クラス計３クラスで講義を行っている。満足度は3.85、4.0．4.17ポイント、わかりやすさや聞きやすさも4.0ポイントから4.57ポイントといずれも高い評価であった（2020年度後期授業評価アンケートより）。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部主催講座講師 ①子育て支援事業「ちびっこ広場」 ②公開講座「親子で楽しむシリーズ」 (2)保育者向け講習 ①磯城郡保育士研修会講師 ②三郷町立西部保育園園内研修講師	(1) ①平成25年～平成30年 ②平成25年～平成29年 (2) ①平成29年6月 ②令和元年7月	(1) ①地域の子育て支援事業「ちびっこ広場」内において、保護者に向けて青年期の発達を見据えた、子どもとの音楽リズム遊びの実践を行った。 ②公開講座では、親子向けの保育表現や音楽表現「親子シリーズ」のうち、運動遊びやリズム遊びやダンスを行う身体表現の講師を担当した。 (2) ①宮森保育園にて、磯城郡保育士総会及び研修会の講師を務めた。 ②三郷町立西部保育園にて、現職保育者に対して運動あそびの指導を行った。
５　その他		特記事項なし

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
１　資格，免許		特記事項なし
２　特許等		特記事項なし
３　実務の経験を有する者についての特記事項 磯城郡保育士研修会講師，三郷町立西部保育園園内研修講師		磯城郡保育士研修会，三郷町立西部保育園園内研修講師の講師を務めた。
４　その他		特記事項なし

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（学術論文） 1.子育て支援広場に参加している乳幼児の運動状況について 〔査読有り〕	単著	平成25年11月	奈良文化女子短期大学紀要第44巻：91-99	本研究では、親子が集えるスペースに参加している未就園児親子を対象に、子どもの発育発達状況や日々の遊びなどの活動状況、また母親の運動歴や運動実施状況等についてアンケート調査を行った。その結果、子どもたちはおおむね活発に運動を行っており、遊びは室内遊びが多く、保護者（母親）の運動実施が少ないことなどが明らかとなった。
2.新人保育者の早期離職に関する実態調査 〔査読有り〕	共著	平成25年11月	奈良文化女子短期大学紀要第44巻：101-109	本研究では、保育者の早期離職問題に着目し、現場へのアンケート調査と早期離職者へのインタビュー調査を実施した。その結果、保育者は女性のライフサイクルの影響が強い職種であること、早期離職者の退職理由は、「進路変更」や「体調不良」が多いが、その根本的な原因は、職場での人間関係にあることが明らかになった。
3.保育者養成校に求められる学生の保育実践能力と資質について 〔査読有り〕	単著	平成26年11月	奈良文化女子短期大学紀要第45巻：123-130	本研究では、本学における保育者養成の在り方についての示唆を得ることを目的に、近畿一円の幼稚園、保育所（園）の管理職者または新人教育担当者に対してアンケート調査を実施した。「現場で求められている能力と新入職者の能力とのギャップ」に焦点を絞り、教育課程による差を探求したところ、保育者として求められる資質については教職課程に差がないものの、4年制大学と短期大学卒業生では保育実践能力において差があることが明らかになった。
4.保育者としての資質と保育実践能力に対する学生の意識について 〔査読有り〕	単著	平成27年11月	奈良文化女子短期大学紀要第46巻：121-128	本研究では、本学学生が保育者としての資質や能力についてどのように考え、どの程度それらの力を身につけていると考えているのかを明らかにした。保育者としての専門能力も資質も、それを重視するかという自身の考えについてはほとんどの項目で1回生の方が高く、いま自分がどれくらい実践できるか（身につけているか）という自己評価について、保育者としての実践的専門能力は1回生の方が高く、保育者の資質は2・3回生の方が高かった。
5.保育者養成に求められる保育者の資質について（2）－就職先へのアンケート調査の前回調査との比較から－ 〔査読有り〕	単著	平成28年11月	奈良文化女子短期大学紀要第47巻：71-80	本研究では、平成23年度から平成26年度の本学卒業生の就職先に対して行った勤務実態についてのアンケート調査のうち、自由記述から園長らが保育者養成校に望むこと、また就職した本学卒業生が評価されていることを分析した。前回調査と比較した結果、保育現場では即戦力として役立つ保育の実践力は当然ながら、保育者の資質や社会人としての態度や覚悟、特に「社会人基礎力」とされる、チームで働く上で重要視される様々な能力が求められていることが示唆された。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.各発達の時期における「先生」のネガティブな言動について〔査読有り〕	共著	平成 28 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 47 巻：31-40	本研究では、養成課程の学生が子どもの立場を理解し不適切でネガティブな言動をしないため、教師のネガティブな言動とは何かについて整理を行うため調査を行った。その結果、幼児期においては教員のネガティブな言動は少ないが、小学校高学年から中学生の時期においては、教員の言動でネガティブとして捉えられた言動が多くなっており、高校生になると減っていた。この変化は思春期と関係していると考えられ、教員の言動でネガティブと捉えられる言動は、それらを受け止める子どもの発達の時期によって量的にも質的にも異なっていた。
7.保育者養成校の学生の性格特性および進路状況との関連について〔査読有り〕	共著	平成 28 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 47 巻：41-48	本研究では、保育者養成短期大学生 160 名のＹＧ性格検査の判定結果をもとに、その性格特性の傾向について明らかにするとともに、卒業時の進路状況（進路選択）との関連について調べることを目的とした。学生の半数近くにみられた性格特性は「情緒の不安定さ」であった。進路状況との関連では、職種に関わらず非正規として就職あるいは就職をしない選択をした学生と、性格因子尺度の「劣等感」「非協調性」が高い傾向にある学生とのあいだに関連があることが示唆された。
8.女子大学生における運動能力の現状について-運動適正テストと運動不振尺度から－〔査読有り〕	単著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第 48 巻：87-96	本研究では、運動適正テストの実施と運動不振尺度の調査から、女子大学生の運動能力の実態について検討を行った。その結果、学生の半数以上で運動能力水準が低いこと、運動不振には技能的な側面とともに体力面での不振が関与することが示唆された。
9.施設実習における学生の不安を軽減する事前学習についての研究〔査読有り〕	共著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第 48 巻：31-40	本研究では、施設実習に参加した学生に対して行った実習事後指導における振り返りレポートを分析し、実習に参加する前の実習に対するイメージや不安感や疑問などを分類することで、実習に臨む学生にとっての必要な事前学習とは何かを明らかにした。また、実習において自身の不足していた点について分析を行ったことで、実習の取り組み点検チェック表を作成することができた。
10.新人保育者に必要な資質について－新人保育者に対する総合的な評価につながる具体的な資質－〔査読有り〕	共著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第 48 巻：41-49	本研究では、本学卒業生の勤務実態についてのアンケート調査から、どのような新人保育者が評価されるのかについて分析した。その結果、高い技術や知識よりもまずは新人という立場をわきまえながら礼儀正しく責任を持って一つ一つのことに意欲的に取り組む姿勢が必要であることが明らかになった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11.身体表現科目における表現遊びの指導実践内容と学生の気づき〔査読有り〕	単著	平成30年11月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第49巻：105-115	本研究では、身体表現遊びの指導実践の内容と有用性について分析した。その結果、指導内容は5歳児を対象とした遊びが半数を占め、運動遊び要素の強い遊び、既知の遊びを展開する傾向が伺われ、発達段階の広い理解と遊びのレパートリーを増やす努力が必要であると考えられた。
12.新人保育者に対する評価～前年度との比較を通して～〔査読有り〕	共著	平成30年11月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第49巻：49-59	本研究では、短期大学卒業生の勤務実態についてのアンケート調査から、どのような新人保育者が評価されるのかについて、前年度と比較分析した。その結果、満足度や将来性への期待が向上している傾向が伺われた。
13. 新人保育者に求められる資質，新人保育者としての評価，保育者養成校における課題，GPA・各教科の成績と職場での評価との関係	共著	令和2年3月	奈良学園大学紀要第12巻：51-60	本研究では、短期大学卒業生の就職先における評価についての研究の継続である。その結果、平成27年度からの３か年で全体的に保育現場での卒業生の評価は明らかに上がっていた。一方、卒業後における新人保育者としての総合的な評価得点・各項目における評価得点と在学中の累積GPAの値との相関はみられなかった。
14. 女子大学生における運動不振の現状について－運動不振尺度を用いて－	単著	令和2年3月	奈良学園大学紀要第12巻：103-108	本研究では、幼児教育学科に在籍する女子大学生の運動不振の実態について、大学生版運動不振尺度を用いて検討を行った。調査の結果、およそ3割の学生で身体操作力とボール操作力の何らかの運動不振があること、小中学校時よりも大学生である今現在において運動不振の状況が進んでいること、ボール操作力に比べて身体操作力の方が不振であることが明らかになった。
15. 新入生が考える保育者の資質について	単著	令和4年12月	奈良学園大学紀要第14集：129-137	本研究では、幼児教育専攻の新入生が保育者として必要な力や保育者適性についてどのように捉えているか分析した。その結果、入学間もない新入生では、保育者としてコミュニケーション能力や子どもを理解が重要であるとし、養育性や共感性といった適性が必要であると考えていたことが示された。
（その他） 1.　連載　遊びの世界27「大和地方のうた遊び」	単著	平成27年10月	子どもと発育発達.13-3：195-198	学会誌連載「遊びの世界」において、「大和地方のうた遊び」と題し、奈良県にちなんだ伝承遊びについて執筆した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学会発表）				
1.安静体験イメージによる精神生理学的変化について	－	平成25年6月	日本バイオフィードバック学会第41回大会発表（鎌倉女子大学） 大会予稿集P29.	くつろいだ姿勢を取った「安静体験」と、その体験の再現イメージを行った場合の精神生理学的変化について、①安静時の自分の筋感覚②自分の生理反応③自分の周りの様子、の3つのイメージを課題とし、脳波とイメージ想起に対する自己評価の高低との関連について比較検討を行った。その結果、自己評価の高い群は低い群に比べてイメージ時の大脳活動がより活発であったことが示された。
2.幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について（1）	－	平成25年8月	日本体育学会第64回大会発表（立命館大学） 大会予稿集P138.	本研究では、和歌山県私立W幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体格における発育発達の特徴について検討を行った。H11年・H16年・H21年の園児の、身長・体重・胸囲・座高の4つの身体測定データを分析対象とした。
3.幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について（2） －和歌山県私立W幼稚園における体力・運動能力測定データから－	－	平成25年8月	日本体育学会第64回大会発表（立命館大学） 大会予稿集P138.	本研究では、和歌山県私立W幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体力における発育発達の特徴について検討を行った。H11年・H16年・H21年の25m走、立ち幅跳び、ボール投げ、両足連続跳び越しの4つの運動能力測定データを分析対象とした。その結果、性差は年中児の跳び越しくぐりにのみみられ、「ボール投げ」や「立ち幅跳び」ではあまり年代の差が見られなかったのに対し、「25m走」「跳び越しくぐり」では年代による差が見られた。
4. 保育現場が保育士養成に望むこと	－	平成25年9月	全国保育士養成協議会第52回研究大会発表（高松） 大会予稿集p332-333.	本研究では、本学における保育者養成の在り方についての示唆を得ることを目的に、近畿一円の幼稚園、保育所（園）の管理職者または新人教育担当者に対し、保育現場で働く新入職者の現状と保育者養成に望むことについてアンケート調査を実施した。その結果、4年制大学化や保育士の国家資格化を望む声は少ないが、資質や基礎学力においては4年制大学卒が優れているという指摘もあり、養成校における保育者資質の向上が望まれることが明らかとなった。
5. 幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について（3） －和歌山県私立W幼稚園における体力・運動能力測定データから－	－	平成26年3月	日本発育発達学会第12回大会発表（大阪成蹊大学） 大会予稿集P83.	本研究では、和歌山県私立W幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体力における発育発達の特徴について検討を行った。3～5歳の園児のH11年・H16年・H21年の25m走、立ち幅跳び、ボール投げ、両足連続跳び越しの4つの運動能力測定データおよび身長・体重・胸囲の体格データを分析対象とした。その結果、「25m走」「跳び越しくぐり」では年代による差が見られ、ボール投げでは体格との正の相関がみられた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.Psychophysiological changes in the movement imagery -Preliminary study-身体動作イメージにおける精神生理学的変化について―予備的調査より―　〔審査有り〕	―	平成26年8月	7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress,Tokyo 大会予稿集P33.	本研究では内的な身体動作イメージと外的な身体動作イメージにおける脳波含有率の変化を分析した。その結果、α1波含有率は内的イメージ時には頭頂・中心領域での減少、外的イメージ時には後頭領域での減少がみられた。
7.Team Building Intervention for High School Volleyball Team 高校バレーボールチームに対するチームビルディングの介入効果について〔審査有り〕	―	平成26年8月	7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress,Tokyo 大会予稿集P32.	本研究では、高校バレーボールチームに対して、チャンピオンシップの最終出場資格を失った後にチームの結合を回復するため、その精神的な準備に対してスポーツ心理学がどのような働きを持ったかについて調査を行った。
8. 幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について（4） ―和歌山県私立W幼稚園における体力・運動能力測定データから―	―	平成26年8月	日本体育学会第65回大会発表（岩手大学）大会予稿集P129.	これまで和歌山県私立W幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体力における発育発達の特徴について検討を行ってきたが、本研究では運動能力測定データを分析対象とし、きょうだい構成の違いによる幼児の運動能力ならびに体格の発達特徴について検討を行った。　H11年・H16年・H21年の25m走、立ち幅跳び、ボール投げ、両足連続跳び越しの4つの運動能力測定データを分析対象とした。いずれの運動能力においても、ほぼすべての年代・年齢において第１子に比べて第２子以降の運動能力が高く、特に「跳び越しくぐり」において顕著であった。
9.幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について（5） ―和歌山県私立W幼稚園における体力・運動能力測定データから―	―	平成26年8月	日本体育学会第65回大会発表（岩手大学）大会予稿集P116.	これまで和歌山県私立W幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体力における発育発達の特徴について検討を行ってきたが、本研究ではH11年・H16年・H21年の身長・体重・胸囲の3つの身体測定データを分析対象とし、きょうだい構成の違いによる幼児の体格の発達的特徴について、運動能力との関連について分析した。
10. 現場が求める保育実践能力と卒業時に獲得している能力の教育課程別比較	―	平成26年9月	全国保育士養成協議会第53回研究大会発表（博多）大会予稿集P36.	本研究では、本学における保育者養成の在り方についての示唆を得ることを目的に、近畿一円の幼稚園、保育所（園）の管理職者または新人教育担当者に対してアンケート調査を実施した。「現場で求められている能力と新入職者の能力とのギャップ」に焦点を絞り、教育課程による差を探求したところ、保育者として求められる資質については教職課程に差がないものの、4年制大学と短期大学卒業生では保育実践能力において差があることが明らかになった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11.視点の異なる運動イメージに対する精神生理学的反応について	－	平成 27 年 7 月	日本バイオフィードバック学会第 43 回大会発表（筑波大学） 大会予稿集 P32.	本研究では、内的視点からなる体験イメージ（internal imagery）と外的視点からなる観察イメージ（external imagery）による単純な身体動作を課題とし、それらを想起した際の大脳活動の違いを比較することによって身体運動イメージの精神生理学的特徴を明らかにした。イメージ課題は 3 つの身体動作（脚を屈曲する･前屈する･腕を上げる）とし、体験イメージと観察イメージを行った。
12. 脳波からみた運動学習における運動イメージの効果について	－	平成 27 年 8 月	日本体育学会第 66 回大会発表（国士舘大学） 大会予稿集 P132.	本研究では、提示された他者の動きに対して、内的または外的視点から想起した自己像を意識しながら、動作の模倣を行うことを課題とし、脳波を用いて運動学習における運動イメージの効果を検討した。動作は、両手を置いた状態から手首を屈曲させて右手または左手を上げる単純動作であった。課題中は、頭皮上の 13 部位から脳波の記録を行った。反応時間、正答率および脳波に関して、経時変化の検討および内的視点－外的視点イメージ間の比較を行った。
13. 保育者としての資質と保育実践能力に対する学生の意識について	－	平成 27 年 9 月	全国保育士養成協議会第 54 回研究大会発表（札幌） 大会予稿集 P35.	本研究では、本学における保育者養成の在り方についての示唆を得ることを目的に、「保育者としての保育実践能力」と「保育者としての資質」についてどの程度重視し、どの程度自分の身についていると思うか、本学学生に対してアンケート調査を実施した。その結果、1 回生と 2 ・3 回生とでは重視する能力や自己評価について差が見られた。
14. 本学における子育て支援事業の 5 年間の取り組みと評価	－	平成 27 年 9 月	全国保育士養成協議会第 54 回研究大会発表（札幌） 大会予稿集 P179.	本学における子育て支援事業「ちびっこ広場」「つどいの広場」について、これまでの利用者アンケートや利用者数データなどから、5 年間の取り組み内容とその評価をまとめた。
15.Effects of motor imagery perspectives on motor learning based on EEG EEG をベースとした運動学習におけるイメージの視点の効果について 〔審査有り〕	－	平成 28 年 6 月	2016 NASPSPA Conference (Montreal) 北米スポーツ心理学会 大会プログラム P22.	本研究では、提示された他者の動きに対して、内的または外的視点から想起した自己像を意識しながら単純動作の模倣を行う運動学習課題における運動イメージの効果を検討した。その結果、他者の動作を模倣する際には、刺激と反応が一致する条件で反応が速かった。反応の速さと運動イメージの達成度・鮮明度・コントロール度とも対応関係が見られた。すなわち、運動学習において運動イメージの視点の違いが脳波に反映され、パフォーマンスとも関連することが示唆された。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16.女子大学生の運動イメージ想起能力について	－	平成28年8月	日本体育学会第67回大会発表（大阪体育大学） 大会予稿集.	本研究では、運動部に所属する健康な女子大学生56名を対象に、運動イメージ質問紙JMIQ-Rを用いて、イメージ想起の際の体験イメージ（すなわち内的視点イメージ）と観察イメージ（すなわち外的視点イメージ）のタイプを調査した。総合得点はバスケットボール部とソフトボール部で所属部間に差は見られなかったが、さらに、モーズレイ性格検査（MPI）による個人の性格特性やこれまでの運動経験等から、運動イメージ想起能力としてのイメージの視点について特徴を分析した。
17.女子大学生の運動イメージ想起能力について	－	平成28年8月	日本体育学会第67回大会発表（大阪体育大学） 大会予稿集.	本研究では、運動部に所属する健康な女子大学生56名を対象に、運動イメージ質問紙JMIQ-Rを用いて、イメージ想起の際の体験イメージ（すなわち内的視点イメージ）と観察イメージ（すなわち外的視点イメージ）のタイプを調査した。総合得点はバスケットボール部とソフトボール部で所属部間に差は見られなかったが、さらに、モーズレイ性格検査（MPI）による個人の性格特性やこれまでの運動経験等から、運動イメージ想起能力としてのイメージの視点について特徴を分析した。
18. 保育者養成に求められる保育者の資質について―就職先へのアンケート調査より―	－	平成28年8月	全国保育士養成協議会第55回研究大会発表（盛岡） 大会予稿集P57.	本研究では、平成23年度から平成26年度の本学卒業生の就職先に対して行った勤務実態についてのアンケート調査のうち、自由記述から園長らが保育者養成校に望むこと、また就職した本学卒業生が評価されていることを分析した。前回調査と比較した結果、保育現場では即戦力として役立つ保育の実践力は当然ながら、保育者の資質や社会人としての態度や覚悟、特に「社会人基礎力」とされる、チームで働く上で重要視される様々な能力が求められていることが示唆された。
19.運動イメージタイプと性格特性からみた女子大学生の運動イメージ想起能力について	－	平成28年11月	日本スポーツ心理学会第43回大会発表(北星学園大学）大会予稿集pp154-155.	本研究では，バスケットボール部とソフトボール部に所属する女子大学生を対象に、イメージ能力に関係するとされる性格特性との関わりや個人特性を分析することで，運動イメージ想起能力としてのイメージの視点についての特徴を明らかにした．それぞれの部においてポジションごとの比較をしたところ，ソフトボール部においては差がみられなかったが，バスケットボール部においてフォワードに比べてセンターの内的得点が高い傾向がみられるなど、所属部とポジションすなわち運動特性と役割におけるイメージ能力の違いが示唆された.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
20.The relationship between the ability of motor imagery and the clumsiness in exercise in university students. 大学生における運動不振と運動イメージ能力の関係について. 〔審査有り〕	―	平成29年7月	ISSP(International Society of Sport Psychology) 14th World Congress(Sevilla) 国際スポーツ心理学会14回大会（セビリア、スペイン)) （p.105)	本研究では、大学生の運動不振の実態について運動イメージの視点から精神生理学的に分析した。運動不振尺度質問紙により「身体操作力」と「ボール操作力」に関する運動不振の状態を判定し、運動イメージ質問紙JMIQ-R（Movement Imagery Questionnaire-Revised日本語版）により、イメージ想起の際に視覚的運動イメージ（外的視点イメージ）と筋感覚的運動イメージ（内的視点イメージ）のいずれが得意であるかというイメージタイプ分けを行った。参加者は、課題として一連のスポーツ場面と動作のイメージを行い、背景脳波と心的時間の測定から運動イメージの正確性を分析した結果、イメージ時の大脳活動の変化から、運動不振と運動イメージ能力との関連が示唆された。
21.IMPACT OF THE COVID-19 PANDEMIC ON ATHLETES BELONGING TO THE JAPAN PROFESSIONAL FOOTBALL LEAGUE. Ｊリーグ所属選手における新型コロナウイルス（COVID-19）パンデミックの影響について 〔審査有り〕	共	令和4年8月	ECSS Sevilla 2022（ヨーロッパスポーツ科学会議第27回大会、オンライン参加発表）	新型コロナウイルス（COVID-19）パンデミックによるスポーツ環境の劇的な変化はアスリートの心理に影響を与えたと思われる。これらの心理的変化を明らかにするため、日本プロサッカーリーグ（Ｊリーグ）に所属する29人の選手を対象にスポーツモチベーションスケールを用いてパンデミックの発生前後のシーズンの心理的パフォーマンススケール（SE）による自己効力感を測定した。その結果は、パンデミックが負の影響を及ぼした可能性があることを示したが、危機に対するアスリートの反応には個人差が見られた。したがって、この時期にアスリートに見られる心理的変化の背後にある個人的要因についてはさらに調べる必要があることが示された。
22.表現の指導法における模擬保育の実践を通した学生の気づきについて	―	令和5年3月	保育者養成学会第7回大会（3月5日オンライン開催）	本研究では、「子どもと表現の指導法（体育）」内の模擬保育の立案と実践を通して学生がどのような気づきを得るのかについて学生自身のふりかえりから分析した。指導案の立案については、多くの学生が苦労しなかった・考えやすかったとし、その理由として多く挙げられていたのが、直前の実習において部分実習を体験していたことやそれを修正しながら行えたことであった。教科書や参考書、インターネットなどを活用しつつ、実習時の自身の部分実習の内容や他の先生方や園児らの活動なども参考にし、経験的に子どもの実際の姿を描いて立案を行っていた。これらのことから、学生の学びにいかに実習経験が影響しているかが浮き彫りとなった。

教　育　研　究　業　績　書

令和５年 ３月 31 日

氏名　　原口　忠之

研　究　分　野	研究内容のキーワード
Algebraic Topology, Diffeology	Diffeological space, Homotopy theory, smooth CW complex

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　教育方法の実践例 1. 数学道場	平成30年4月～現在に至る	教員採用試験合格を目指し、数学検定準 1 級合格を目指し、週に 3 回実施している。その他にも学生のレベルに合わせた補修計画をたてている。
２　作成した教科書，教材 １．基礎数学の問題作成	平成 30 年 4 月～	学生の基礎学力の向上のため、数学の問題を作成し、授業のはじめにテストを実施している。
２．数学授業動画の作成	令和 3 年 4 月～	コロナ渦において、基礎学力の向上、大学で学ぶ数学の勉強のため､YouTube チャンネルを作成して、動画をあげている。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 「採用時における評価」 1.　大分工業高等専門学校一般科理系講師の採用にあたっての校長評価	平成 26 年 3 月	私立大学・高等学校での教育経験を生かして、高専における数学教育を期待され採用された。とくに面接時の模擬授業は、過去最高の内容と評価された。
2.　奈良学園大学人間教育学部講師の採用にあたっての学長評価	平成 30 年 3 月	私立大学・高専・高等学校での様々な数学教育の経験があり、また環太平洋大学所属時に通信教育課程の数学を管理運営した経験を期待され採用された。
「授業評価アンケート」 1. 環太平洋大学教務課による学生授業評価アンケート	平成 25 年 2 月	平成24年度の授業評価アンケートの平均が 4 段階中で 3.29 であった。
2. 大分工業高等専門学校教務主事室による学生授業評価アンケート（通年科目）	平成 27 年 2 月	大分高専において平成 26 年度は授業を 4 クラス担当し、5 段階で平均が 4.23 であった。また、情報工学科 1 年の基礎数学Ｉでは 4.44、電気電子工学科 2 年の線形代数では 4.21 であり、それぞれのクラスの全ての授業の中で、一番よい成績であった。 ※通年科目のみ担当
3. 大分工業高等専門学校教務主事室による学生授業評価アンケート（通年科目）	平成 28 年 2 月	大分高専において平成 27 年度は授業を 4 クラス担当し、5 段階で平均が 4.29 であった｡機会工学科 1 年の基礎数学Ｉでは 4.65、情報工学科 2 年の微分積分Ｉでは 4.02、都市環境工学科 3 年の微分積分 II では 3.98、電気電子工学科 3 年の微分方程式は 4.51 であった。 ※通年科目のみ担当

4. 大分工業高等専門学校教務主事室による学生授業評価アンケート（通年科目）	平成 29 年 2 月	大分高専において平成 28 年度は授業を 4 クラス担当し、5 段階で平均が 4.35 であった。情報工学科 1 年の基礎数学 I は 4.4、機会工学科 2 年の微分積分 I は 4.24、情報工学科 3 年の微分積分 II は 4.53、電気電子工学科 3 年の微分方程式は 4.23 であった。 ※通年科目のみ担当
4　実務の経験を有する者についての特記事項 2. 科研費獲得へ向けた講演の世話人	平成 25 年 9 月	環太平洋大学において、科研費獲得に向けた講演を文科省を通じて依頼し、当日に向けた準備、講演会での司会を担当した。
3. 岡山大学オープンキャンパス体験講義の特別講師	平成 28 年 8 月	岡山大学のオープンキャンパスの理学部数学科において，特別講師として，「オイラー標数の幾何学」というタイトルで体験授業を実施した。
4. 奈良学園大学オープンキャンパス　ミニ講義	平成 30 年 6 月	「代数方程式～3 次方程式の解の公式」というタイトルでミニ講義を実施した。
5. 奈良学園大学オープンキャンパス　ミニ講義	平成 30 年 8 月	「オイラー標数～正多面体の個数」というタイトルでミニ講義を実施した。
6. 奈良学園大学オープンキャンパス　ミニ講義	令和 1 年 6 月	「ピタゴラス数の性質」というタイトルでミニ講義を実施した。
7.奈良学園大学オープンキャンパス　ミニ講義	令和 4 年 5 月	「数学オリンピックの問題解いてみた」というタイトルでミニ講義を実施した。
5　その他 1.　該当なし		

職務上の実績に関		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 1. 高等学校教諭一種免許状（数学）取得	平成 19 年 3 月 23 日	岡山県教育委員会，平 18 高一第 965 号
2. 高等学校教諭専修免許状（数学）取得	平成 21 年 3 月 23 日	岡山県教育委員会，平 20 高専第 67 号
2　特許等 1. 該当なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 環太平洋大学大志会	平成25年4月～平成26年3月	環太平洋大学の教員を目指す学生に対して、教員採用試験用の数学の指導だけでなく、夜の勉強会の監督や、学生の相談に対応した。
2. 環太平洋大学学習支援室	平成25年4月～平成26年3月	環太平洋大学で主に低学年の基礎学力の定着を図る組織として学習支援室があり、E-Learning の管理運営だけでなく、新入生 300 人に対するオリエンテーションの企画、段取り等の運営に積極的に取り組んだ。また、就活生に対して、SPI の指導も実施した。
3. 環太平洋大学次世代教育学部クラス担任	平成25年4月～平成26年3月	学生 30 名のクラス担任を担当した。
4. 環太平洋大学 FD 委員	平成25年4月～平成26年3月	**環太平洋大学の教員の授業力向上や学生指導方法のワークショップの企画・運営を行った。**
5. 環太平洋大学紀要編集委員	平成25年4月～平成26年3月	**環太平洋大学研究紀要に掲載するにあたり研究内容が論文、研究ノート等に適切かどうかを判断し編集、とりまとめを行った。**

6. 大分高専図書館運営委員	平成26年4月～平成28年3月	明野通信の作成、学生の図書館の利用の管理を行った。
7. 大分高専弓道部	平成26年4月～平成28年3月	2年間担当し、管理運営をした。
8. 大分高専囲碁将棋部顧問	平成26年4月～平成30年3月	10年ほど趣味にしている将棋の経験を生かして、4年間担当した。、平成26年度は大分県高校選手権大会で団体戦・個人戦で準優勝する実績をあげ、個人戦は全国高校将棋選手権大会に出場した。また、平成27年度は全国高専大会でベスト4に入賞した。
9. 大分高専奨学資金等委員	平成27年4月～平成28年3月	学生の奨学金の申請を審議する。
10. 大分高専学生部委員会	平成27年4月～平成28年3月	学生の処分に関することを協議・決議する。
11. 大分高専オープンキャンパス副委員長	平成27年4月～平成28年3月	大分高専のオープンキャンパス副委員長として、段取りの精査や当日の司会進行等を務めた。
12. 大分高専広報委員会	平成27年4月～平成29年3月	大分高専のＨＰの掲示内容、広報活動について計画する。
13. 大分高専学生主事補	平成27年4月～平成29年3月	平成27年度は、学生の車両通学に関する指導が主な業務であり、本年度は特に学生の車両に関する管理を担当し、大分自動車学校における安全講習会の段取り、大分中央警察署と連携をとり安全講習の講演会を企画した。 平成28年度は、新入生オリエンテーション、高専祭等のイベントを運営し、学生会の予算案の作成を担当する等、学生会の運営管理を主な仕事とした。
14. 大分高専教務部委員	平成28年4月～平成30年3月	教員の授業カリキュラムの構成、年間行事を管理するだけでなく、中学校訪問を企画、実施する。また、Web シラバスを大分高専に導入する際に、学科を代表して取りまとめる業務を担当した。
15. 大分高専ソフトテニス部顧問	平成28年4月～平成30年3月	ソフトテニスの経験が10年ほどあったことを生かして、強化に努めた。とくに九州・沖縄地区高専大会では36年ぶりに個人戦優勝、全国高専大会では開学以来、初めてとなる団体戦・個人戦ともにベスト４の実績をあげた。また、高校総体でも新人戦で大分県ベスト８に入るなど九州大会の出場権を得た。
16. 大分高専機械工学科1年クラス担任	平成29年4月～平成30年3月	43名のクラスの担任を1年間務めた。学力が低いため11月からは、時間の都合がつく限り放課後に数学の補修を実施するなどして、基礎学力の向上に貢献した。
17. 人間教育学部人間教育学科数学専修コース 1 年②のクラス担任（17名）	平成30年4月～平成31年3月	学生の出席状況の確認・面談等を適宜行う。また、数学の学力の向上を図るため、補修等を実施している。
18. 人間教育学部人間教育学科企業公務員①のクラス担任（24名）	平成30年4月～平成31年3月	学生の出席状況の確認・面談等を適宜行いながら、クラス運営を実施している。

19. 人間教育学部人間教育学科広報委員	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学オープンキャンパスにおいて、学生のプレゼン指導等をはじめ広報委員会全体の運営に携わっている。
20. 奈良学園大学人間教育学研究会運営委員	平成30年4月～平成31年3月	「卒業生から聞こう、教わろう」、「学生シンポジウム」、「卒業研究発表」の運営会報・研究会誌の審査等をし、発行の準備をする。
21. 人間教育学部人間教育学科数学専修コース 1 年のクラス担任（20 名）	令和1年4月～令和2年3月	学生の出席状況の確認・面談等を適宜行いながら、クラス運営を実施している。
22. 人間教育学部人間教育学科数学専修コース 2 年のクラス担任（15 人）	令和1年4月～令和2年3月	学生の出席状況の確認・面談等を適宜行いながら、クラス運営を実施している。
23. 奈良学園大学人間教育学研究会運営委員	令和1年4月～令和2年3月	会報・研究会誌の審査等をし、発行の準備をする。
24. 人間教育学部人間教育学科数学専修コース 2 年のクラス担任（19 名）と 2 年のとりまとめ	令和2年4月～令和3年3月	コロナウイルスの影響でリモート授業の中で、クラス運営と学年の運営を実施している。
25. 人権教育研究推進委員	令和2年4月～令和3年3月	人権に関する委員会の一員である。
26. 人間教育学部人間教育学科数学専修コース 1 年のクラス担任（12 名）	令和3年4月～令和4年3月	学生の出席状況の確認・面談等を適宜行いながら、クラス運営を実施している。
27. NGU-NET 運営委員会	令和3年4月～令和4年3月	大学のネット環境について管理する。
28. 定数確保ワーキング	令和4年4月～令和5年3月	入学者の定員を確保できるように、企画運営している。
29. 登美ヶ丘キャンパス連携ワーキング	令和4年4月～令和5年3月	幼稚園、小学校、中学校、高校と
30. 数学専修長	令和5年5月～現在に至る	数学専修コースの長に就任した
31. 学生募集企画部委員	令和5年5月～現在に至る	学生募集のために、企画・運営を考える。
4 その他 1. 該当なし		

研究業績等に関する

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1 該当なし				
（学術論文）				

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1　A hommotopy theory of diffeological and numerical generated spaces（学位論文，査読なし）	単著	平成 25 年 3 月	岡山大学学術成果リポジトリ	位相空間の圏をTopで表すとき､圏Topは有限生成モデル構造をもつことが知られている。本論文では微分空間の圏をDiff で表すとき、圏 Diff は有限生成モデル構造を持つことを証明する。さらに数値的生成空間からなる圏Top の充満部分圏を NG で表すとき、圏 NG は有限生成モデル構造をもつことを証明し、圏 Top と圏 NG は Quillen 同値であることを証明し、圏 Diff から圏 Top、圏 NG への Quillen 随伴関手が存在することを証明し、これらの結果をまとめた。(54 項)
2　A model structure on the category of diffeological spaces（査読無）	共著	平成 25 年 11 月	arXiv:1311.5668	位相空間の圏 Top には有限生成モデル構造を持つことが知られている。この導入方法をもとに、微分空間の圏 Diff に有限生成モデル構造を導入することに成功した。関手 T : Diff→Top と D : Top →Diff が存在し、T は D の左随伴関手である。これらの関手を用いて、圏 Diff と圏 Top の性質を比較することができる。とくに、(T,D):Diff→Top は Quillen 同値を誘導することが証明できた。この結果により圏 Diff と圏 Top で展開されるホモトピー論は一致することが分かった。(30 項) （担当部分） 第 2 章「Diffeological spaces」～第 5 章「Model category of diffeological spaces」P.2～P.20 〔共著者〕 島川和久

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　Long Exact Sequences for De Rham Cohomology of Diffeological Spaces（査読付）	単著	平成 26 年 9 月	Kyushu Journal of Mathematics. Vol. 68(2014) No. 2, pp.333-345.	微分空間にコンパクトサポートが備わった微分形式を定義し、この微分形式を用いてコンパクトサポートが備わったド・ラム・コホモロジーを定義した。また、ド・ラム・コホモロジーの完全系列が存在する微分空間についての条件を言及し、具体的な例として、１の分割が存在するdiffeological subcartesian space を定義した。これにより、既存のド・ラム・コホモロジー理論の拡張に繋がるだけでなくホモトピー論とコホモロジー理論の融合に繋がる結果を得た。（13 項）
4　On model structure for coreflective subcategories of a model category（査読付）	単著	平成 27 年 1 月	Mathematical Journal of Okayama University, 57 (2015), pp.79-84.	有限生成モデル圏の部分圏に有限生成モデル構造を導入する手法を構成し、条件を制約することによりもとの圏のモデル構造とQuillen同値になることを証明した。この定理の具体的な例として、数値的生成空間からなる位相空間の圏Top の充満部分圏NG、コンパクト生成空間からなる圏 Top の充満部分圏 CG に対して圏 Top の有限生成モデル構造を圏 NG、圏 CG にそれぞれ導入し、さらに、圏 Top、圏 NG、圏 CG のモデル圏構造は Quillen 同値であることを証明した。(6 項)
5　オイラー標数を用いた初等幾何へのアプローチについて（査読無）	単著	平成 30 年 7 月	人間教育第 1 巻第 5 号, pp.157-161	初等幾何の代表的な問題として知られる``正多面体が 5 つしかない″という性質を、大学で学ぶ抽象的な概念の１つのオイラー標数を利用して、中学生が理解できるように指導方法をまとめた。この手法を用いることにより、中学生でも大学で学ぶような抽象的な数学的概念に触れることができ、数学への興味関心を深めることが期待できる。(5 項)
6　Homology and cohomology via enriched bifunctors（査読付）	共著	平成 30 年 8 月	Kyushu Journal of Mathematics. Vol. 72(2018) No. 2, pp.239-252	圏 Diff の圏 Top の間にある関手 T : Diff→Top と D:Top→Diff において T は D の左随伴関手である。TDX と X が同相になるような位相空間を数値的生成空間とよぶ。数値的生成空間からなる圏 Top の充満部分圏を NG とするとき、圏 NG は極限、余極限に関して閉じており、デカルト閉圏であることを証明した。さらに、スマッシュ積に関してモノイドであることを示した。とくに原口は圏 NG がデカルト閉圏となることを証明することを担当した。(14 項) （担当部分） 第２章「Nmerically generated spaces」～第 3 章「Exponentials in NG」P.2～P.6 〔共著者〕 島川和久、吉田耕平

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　微分空間 I（査読無）	単著	平成 30 年 10 月	人間教育第 1 巻第 8 号，pp.261-266	Zemmour の著書``Diffeology″を参考にして、diffeological space（微分空間）の解説を試みた論文である。微分空間の公理を導入し、例としてユークリッド空間の具体的な微分構造を紹介した。また、微分空間の間の射（滑らかな写像）を定めた。この性質を利用して、微分構造を写像によって引き戻すことで、集合に微分構造を導入する inductive 性を紹介した。この性質を利用することで，微分空間の部分集合に自然に微分構造を導入することができることも紹介している。(6 項)
8　微分空間 II（査読無）	単著	平成 30 年 10 月	人間教育第 1 巻第 8 号，pp.267-272	Zemmour の著書``Diffeology″を参考にして、diffeological space（微分空間）の基本的な性質について、微分空間 I の継続として解説を試みた論文である。本稿では、微分空間の微分構造を、写像を利用して，押し出すことによって、集合に微分構造を与えることを紹介した。この性質を利用して、微分空間の直和空間・直積空間・商空間を定義する。これらのことから、微分空間の圏は極限・余極限に関して閉じていることを紹介した。(6 項)
9　Homotopy structures of smooth CW complexes（査読無）	単著	平成 30 年 11 月	arXiv:1811.06175	微分空間の圏 Diff 上において、滑らかな CW 複体を構成し、その性質を調べた。Tame 性の概念を導入することでホモトピー拡張性質を滑らかな CW 複体上で利用することができる。この条件をりようすることで、胞体近似定理、ホモトピー同値に関する Whitehead の定理を証明することができた。また、2 つの滑らかな CW 複体の直積は CW 複体であり、位相空間の圏 Top 上の CW 複体よりも扱いやすい面もあることを発見した。(19 項)
10 On homotopy types of diffeological cell complexes	共著	令和 1 年 12 月	arXiv:1912.05359	微分空間の圏 Diff 上の滑らかな CW 複体の性質を調べた論文で、特に、これらの複体の間の連続写像は、微分空間の意味で滑らかな写像とホモトピックになることを証明している。また、これらの複体は 1 の分割をもつことも紹介している。連続写像と滑らかな写像の間の複雑さをホモトピーという概念で近似できることに成功した。
11 A model structure on the category of diffeological spaces, I	共著	令和 2 年 11 月	arXiv:2011.12842	微分空間の圏 Diff に Quillen モデル構造を導入した。
12 The Baumkuchen Theorem	共著	令和 4 年 12 月	Mathematics Magazine to appear	バームクーヘンの定理を初等幾何の性質のみを利用して証明を与えた。またこれを利用すると、既存のピザの定理を証明することができることも紹介している。

（その他） 「報告書」				

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1　微分空間の性質とその応用について 2　数値的生成空間の圏へのモデル構造の導入とその一般化について	単著 単著	平成 26 年 3 月 平成 26 年 3 月	第 10 回数学総合若手研究集会～多分野間の交流による発展・発見を目指して～北海道大学数学講究録，pp.181-184 日本数学会 2014 年度年会総合分科会トポロジー分科会アブストラクト	任意の微分空間 X は X のプロットを用いることで微分形式を定義することが可能であり、この微分形式を用いてド・ラム・コホモロジーを構成できることが可能であり、ホモトピー不変であることが知られている。この理論の発展とし 圏 D を圏 C の充満部分圏とする。圏 C が有限生成モデル構造をもち、圏 D から圏 C への包含関手 i:D→C がある条件を満たすときに圏 C のモデル構造を圏 D に導入することができる。その具体的な例として、次のことを紹介している。位相空間の圏 Top は有限生成モデル構造をもつ。数値的生成空間からなる圏 Top の充満部分圏を NG とする。このとき、包含関手 i:NG→Top によって圏 Top のモデル構造を圏 NG に導入することができる。また、これらのモデル構造は Quillen 同値であることも紹介している。(2 項)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　微分空間のホモトピー論とその周辺について	単著	平成 26 年 7 月	第 61 回トポロジーシンポジウム講演集 pp.37-46	微分空間における n 次元球体、n 次元球面の微分構造を境界上では微分係数が常に 0 になるような微分構造を入れなおすことで、滑らかな道の端点を無限回微分可能でつなぐことを可能にした。この条件を使うことで、位相空間で展開されるホモトピー論と同じような理論を構成できることに成功した。これらの概念を用いて、ファイブレーション、胞体複体、ホモトピー群を構成し、これらを利用することで圏 Diff に有限生成モデル構造を導入することに成功した。(10 項)
4　微分空間のモデル構造について	単著	平成 28 年 9 月	日本数学会 2016 年度秋季総合分科会	微分空間の圏 Diff 上にモデル構造を導入する手法の一つを紹介している。とくに、ファイブレーション、コファイブレーション、弱同値の定義に触れる。また位相空間の圏 Top との間には関手 T：Diff→Top、D：Top→Diff が存在し、随伴関係である。この性質を利用して圏 Diff の圏 Top のモデル構造が Quillen 同値であることを紹介する。(2 項)
5　滑らかな CW 複体のホモトピー構造	単著	平成 30 年 9 月	日本数学会 2018 年度秋季総合分科会トポロジー分科会アブストラクト pp.75-76	滑らかな CW 複体を構成する上で必要となる概念を紹介した。とくに微分空間の公理、微分空間の間の滑らかな写像を紹介した。また、可微分構造を用いてホモトピー論を展開する上で重要となる性質の tame 性を与えている。この性質を利用することで基本的なホモトピー拡張性質が成り立つことを紹介している。(2 項)
「学会発表等」				

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1　Long exact sequences for de Rham cohomology of diffeological spaces	単独発表	平成 25 年 3 月	日本数学会 2013 年度年会，京都大学吉田キャンパス	任意の微分空間に対して、微分形式が定義できド・ラム・コホモロジーが存在して、ホモトピー不変であることが Zemmour によって証明されている。本講演ではこのド・ラム・コホモロジーに対して、マイヤー・ビエトリス完全系列が存在する条件について言及する。とくに１の分割が存在する微分空間に関しては存在することが分かった。具体的な例の空間として１の分割が存在する diffeological subcartesian space を構成した。これにより、コホモロジー理論のさらなる応用が期待できる。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　de Rham cohomology of diffeological spaces	単独発表	平成 25 年 5 月	トポロジー金曜セミナー，九州大学伊都キャンパス伊都図書館 3F 中セミナー室 1	任意の微分空間には微分形式が定義可能であり、ド・ラム・コホモロジーを構成することが可能であり、ホモトピー不変であることが知られている。本講演ではこの理論の拡張として、コンパクト・サポートが備わった微分形式を定義し、この概念を用いてコンパクト・サポートが備わったド・ラム・コホモロジーを構成することに成功したことを紹介した。さらに、ホモトピー不変であることも証明し、コホモロジー理論の発展に貢献した。
3　微分空間におけるコンパクト性とド・ラム・コホモロジーについて	単独発表	平成 25 年 6 月	信州トポロジーセミナー，信州大学数理攻究室（理学部 A 棟 427）	１の分割が存在するような空間で可微分多様体よりも弱い条件で subcartesian space が知られている。本講演では微分空間における diffeological subcartesian space を紹介し、この空間を用いることで、多様体よりも多くの空間を de Rham cohomology の概念を用いて代数的な計算が可能であり、既存の理論の拡張に繋がることを紹介した。また D-Topology において、コンパクト性・局所コンパクト・パラコンパクト、ハウスドルフ性を構成し、コンパクト・サポートが備わった de Rham cohomology を構成できることを紹介した。
4　De Rham cohomology with compact support in respect to diffeological spaces	単独発表	平成 25 年 11 月	2013 年度ホモトピー論シンポジウム，岡山大学創立五十周年記念館 2 階大会議室・小会議室	微分空間から誘導される位相に対して、分離公理、コンパクト性を構成することに成功した。さらに、これらの概念を用いて、１の分割が存在する diffeological subcartesian space を定義した。この空間は多様体よりも条件が弱い空間である。また 1 の分割が存在するような微分空間に対してはド・ラム・コホモロジーにおいて、マイヤー・ビエトリス完全系列が存在することについて言及した。これらの結果から多様体より条件の弱い空間においても計算可能となり理論の拡張に成功した。
5　微分空間における微分形式とその周辺について	単独発表	平成 25 年 12 月	Diffeology in Karatsu，唐津市民交流プラザ	微分空間から誘導される位相は特殊であり、この位相を用いて、分離公理やコンパクト性を定義することに成功した。この性質を用いることで、任意の微分空間に対して、コンパクト・サポートが備わった微分形式を定義することに成功した。またこの概念を用いてハウスドルフをもつ微分空間に対して、コンパクト・サポートが備わったド・ラム・コホモロジーを構成することができた。さらにマイヤービエトリス完全系列の存在性について言及した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6　モデル構造を持つ圏の部分圏へのモデル構造の導入方法と，その例について	単独発表	平成 26 年 1 月	平成 25 年度日本数学会中国・四国支部例会，島根大学総合理工学部 1 号館 2 階 21 教室	有限生成モデル構造を持つ圏Dの部分圏Cに対して、包含関手 i : C→D とある関手 G : D→C が存在し i は G の左随伴関手であるとき、ある条件を満たすとき D の有限生成モデル構造を関手 G で写すことで部分圏 C に有限生成モデル構造を導入することができる。さらに、条件に制約を加えると圏 D と圏 C のモデル構造は Quillen 同値になることを紹介した。また、この具体的な例として数値的生成空間の圏 NG とコンパクト生成空間の圏 CG を紹介した。
7　微分空間の性質とその応用について	単独発表	平成 26 年 3 月	第 10 回数学総合若手研究集会～多分野間の交流による発展・発見を目指して～，北海道大学学術交流会館	任意の微分空間 X は X のプロットを用いることで微分形式を定義することが可能であり、この微分形式を用いてド・ラム・コホモロジーを構成できることが可能であり、ホモトピー不変であることが知られている。この理論の発展として、コンパクトサポートが備わった微分形式を構成し、これを用いてコンパクトサポートが備わったド・ラム・コホモロジーを構成することに成功した。これらの理論を整備するにあたり微分空間から誘導される位相空間の性質について調べた。
8　数値的生成空間の圏へのモデル構造の導入とその一般化について（研究発表）	単独発表	平成 26 年 3 月	日本数学会 2014 年度年会，学習院大学	圏 Diff と圏 Top の間には関手 T:Diff→Top と D : Top→Diff が存在して、T は D の左随伴関手になることが知られている。TDX と X が同相になる位相空間 X を数値的生成空間とよぶ。また数値的生成空間からなる圏 Top の充満部分圏を NG とするとき、圏 NG は CW 複体を含み、極限・余極限に関して閉じており、さらに有限生成モデル構造を導入可能であり、圏 Top のモデル構造と Quillen 同値であることを紹介した。さらに、これらの理論を圏論上で一般化可能であることを示した。
9　微分空間のホモトピー論とその周辺について	単独発表	平成 26 年 7 月	第 61 回トポロジーシンポジウム，東北大学片平キャンパスさくらホール	微分空間における n 次元球体、n 次元球面の微分構造を境界上では微分係数が常に 0 になるような微分構造を入れなおすことで、滑らかな道の端点を無限回微分可能でつなぐことを可能にした。この条件を使うことで、位相空間で展開されるホモトピー論と同じような理論を構成できることに成功した。これらの概念を用いて、ファイブレーション、胞体複体、ホモトピー群を構成し、これらを利用することで圏 Diff に有限生成モデル構造を導入することに成功した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10　微分空間のホモトピー論について	単独発表	平成 27 年 11 月	ホモトピー論シンポジウム姫路・西はりま地場産業センター（じばさんびる）6 階 601 会議室	微分空間の圏 Diff にモデル構造を導入する上で、新たな手法を発見した。とくに tame-写像の概念を導入し、この概念を用いて胞体複体、コファイブレーション、ファイブレーションを構成する。これらの 3 つの条件を使って、有限生成モデル構造とは異なるが似た性質をもつモデル構造を導入することに成功した。圏 Top は有限生成モデル構造をもつことが知られている。このとき、圏 Diff と圏 Top のモデル構造は Quillen 同値であることを証明した。
11　微分空間のモデル構造について	単独発表	平成 28 年 9 月	日本数学会 2016 年度秋季総合分科会，関西大学千里山キャンパス第 4 学舎 3 号館 4 階 3401	微分空間の圏において，ホモトピー論を展開するために，ファイブレーション，コファイブレーション，ホモトピーグンを導入し，これらが相互に関係する性質を調べた．この結果を利用して，微分空間の圏 Diff にモデル構造を導入する事に成功した。また、位相空間の圏 Top のモデル構造とを比較する方法を発見した。この手法を用いて、圏 Diff と圏 Top のモデル構造は Quillen 同値になることを示した。これらの結果から、位相空間と微分空間において、ホモトピー論を同様に展開する事が可能となった。
12　微分空間のモデル構造とその周辺について	単独発表	平成 28 年 10 月	第 135 回日本数学会九州支部例会，長崎大学工学部 1 号館 5 番教室（文教キャンパス）	微分空間の圏 Diff にホモトピー論を展開する上で必要となる胞体複体の性質について調べた。とくに微分空間におけるＣＷ複体は、微分空間、位相空間においてそれぞれで定義されるホモトピー群が同型になることを証明することに成功した。これは、可微分多様体でしられる「Whitney Aproximation property」の一般化と捉えることができる。そのため、微分構造をもつ空間においても連続的な扱いをすることが可能となる。
13　微分空間のホモトピー論に関すること	単独発表	平成 28 年 12 月	群作用と位相，城崎健康福祉センター	位相空間と微分空間のホモトピー論を比較するための方法を構成した。とくに、n 次単位区間 I^n からＣＷ複体への連続写像は、ある滑らかな写像とホモトピックになるという性質を証明した。この結果を利用する事で微分空間と位相空間で展開されるホモトピー論は一致することがわかる。また、微分空間の圏 Diff においてモデル構造を導入する手法に改良を加え議論をスムーズに構成する事に成功した。
14　微分空間の CW 複体の構成とその性質について	単独発表	平成 29 年 3 月	小研究集会「安定ホモトピー論とその周辺」，岡山大学理学部 2 号館 3 階「数学合同演習室」	微分空間における CW 複体の構成方法を紹介した。とくに、構成するにあたり、weak diffeology の概念を導入し、直積空間と相性が良いことを示した。これは、位相空間の CW 複体よりも扱いやすい性質をもっている。また、Whitney approximation property が成り立つことを紹介した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15 Whitney approximation property on smooth cell complexes of diffeological spaces	単独発表	平成 29 年 10 月	第 15 回北九州数理科学セミナー，北九州工業高等専門学校 1 号館 3 階大講義室	可微分多様体の間の任意の連続写像は、ある無限回微分可能写像とホモトピックの関係で近似できることが、Whitney の近似定理として知られる．可微分多様体を一般化した概念の微分空間にこの性質を導入する。その 1 つの例として、滑らかな CW 複体上では、Whitney の近似定理が成り立つことを証明し、この定理を CW 複体上に拡張することに成功した。
16　微分空間上における滑らかな CW 複体上のホモトピー構造について	単独発表	平成 30 年 9 月	日本数学会 2018 年度秋季総合分科会，岡山大学津島キャンパス	微分空間の対象のクラスとして、滑らかな CW 複体を構成する。そして、この CW 複体上で基本的なホモトピー論を展開する。その重要な性質として、ホモトピー拡張性質、胞体近似定理、ホワイトヘッドの定理等を紹介する。
17　Homotopy properties of smooth cubical cell complexes	単独発表	平成 30 年 11 月	京都大学代数トポロジーセミナー，京都大学理学部 6 号館 609	微分空間の圏上で、滑らかな CW 複体を定義する。そして、この滑らかな CW 複体上でホモトピー論を展開するために必要となる性質を紹介し、具体的な方法について紹介した。とくにホモトピー拡張性質の導入方法について触れ、N 連結や N 同値についての性質を紹介した。
18　A homotopy theory of diffeological spaces	単独発表	令和 1 年 9 月	ホモトピー沖縄 2019，てんぶす那覇	微分空間の圏上で、滑らかな CW 複体を紹介し、ホモトピー論で基本的な性質を説明するとともに、簡単な証明を与えた。とくに連続写像と滑らかなな写像の間にはホモトピックで近似できることを紹介した。
19 微分空間の圏のモデル構造について 1	単独発表	令和 4 年 9 月	Diffeology セミナー（信州大学）オンライン	微分空間のモデル構造の導入の紹介をした。はじめに、準備として基本的な性質を紹介した。
20 微分空間の圏のモデル構造について 2	単独発表	令和 4 年 9 月	Diffeology セミナー（信州大学）オンライン	微分空間のモデル構造の導入の紹介として、fibration,cofibration の紹介をし、これらの性質を調べた。
21 微分空間の圏のモデル構造について 3	単独発表	令和 4 年 9 月	Diffeology セミナー（信州大学）オンライン	微分空間のモデル構造の導入として、functorial factorization の紹介をした。

22 微分空間のホモトピー論について	単独発表	令和 4 年 12 月	高知ホモトピー論談話会	微分空間の圏と位相空間の圏のモデル構造について紹介した。また、これらの同値性のも触れた。
「国際学会等の講演」 1　A homotopy structure of diffeological spaces	単独発表	平成 31 年 3 月	Building-up Differential Homotopy Theory, D-413 IMI Auditorium West 1 Bld., Kyushu University	微分空間の圏上でホモトピー論を展開する際に必要と考えられる``tame″性という概念を導入し、この性質を利用したホモトピー論を紹介した。また、このtame 性と相性の良い対象として、滑らかなＣＷ複体を紹介し、ホモトピー構造を調べた。最後にこれらの性質を利用して、微分空間の圏上のモデル構造を導入する方法を紹介し、証明のアウトラインを解説した。
「世話人を務めた研究集 1　小研究集会「安定ホモトピー論とその周辺」	共同	平成 29 年 3 月	岡山大学理学部 2 号館 3 階「数学合同演習室」	本研究集会を世話人として、講演者を募集し当日の運営を行った。 「その他の世話人」 鳥居猛、奥山慎吾、吉田耕平

教　育　研　究　業　績　書

令和５年３月 31 日

氏名　　松岡　克典

研究分野	研究内容のキーワード
算数科教育指導法	算数科指導内容に関する研究 算数科指導方法に関する研究 算数科授業デザイン開発の研究

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
1. 近畿大学附属小学校での研修部長としての活動	平成 21 年４月 ～ 平成 26 年３月	近畿大学附属小学校には，「児童の算数の学力向上を達成させること」と「教員の資質を向上させること」が主たる使命での赴任であった。まず，教員研修の充実と共に研究・教員組織の改革を提起し，大改革を実施した。具体的な改革の内容は,「高学年への教科担任制の導入」「第２学年から第６学年までの算数科はチームティーチングでの指導体制の導入」「教員全員が自分の専門教科を定めその教科の研修を深める研究体制の導入」などである。特に，教え込み教育から脱却し，問題解決型の授業へと質の転換を図ってきた。結果，全国学力状況調査では，国語・算数のＡ・Ｂ問題とも全国平均を 10 ポイント以上上まわった。 教職経験 10 年未満の教員に対しては，別に「若手研修」と名付けて，「学級経営のあり方」「保護者との対応のあり方」「事故の対処の方法」「学級内で起きたトラブルへの対応法」など，具体的な事例を想定して考えさせるなどの研修を行った。
2. 算数科の教育内容の背景や関連内容に関する基礎・基本の理解を深めて，小学校算数科指導のための教材分析が的確に行えることをねらった実践	令和２年４月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科１年次生の学生約 80 名に対して，算数・数学教育の教材研究の基盤を育成することをねらった「数の理解」の講義において，実践を基に指導を行った。算数のよさを知り，数学的な思考力や判断力，表現力を養う授業づくりのための教材研究の手がかりが得られるように，具体的な活動を入れながら考察することが出来た。 （奈良学園大学「数の理解」の実践）
3. アクティブラーニングの形態を通して，問題解決型の授業の在り方を追求することをねらった実践	令和２年４月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科２年次生の学生約 90 名に対して，主体的な問題解決学習を行うための授業づくりと指導方法について，学生自身が問題意識を持って取り組む「算数科指導法」の授業を実践した。実践事例を紹介したり，授業風景を視聴したりして，現場の算数科の授業を感じ取らせるようにした。指導案を作成して模擬授業の実施とそれに対する評価を行い，改善案について学生間で討議できるようになった。 （奈良学園大学「算数科指導法」の実践）

２　作成した教科書，教材		
1．みんなと学ぶ　小学校　算数	平成 26 年 2 月 学校図書	新学習指導要領に基づいた文部科学省検定済教科書である。編集のポイントは以下の 12 点である。①「考える力」を育む，丁寧な単元展開　②学力を確かなものにする「力をつける問題」　③基礎・基本の重視　④一人一人の理解を助ける，「サポート」ページ　⑤学力向上への取り組み（全国学力学習状況調査結果の反映）　⑥「学び方」の重視と，自学自習への対応　⑦小・中学校連携への対応　⑧系統的な図の指導　⑨ノート指導の重視　⑩「倍の計算」シリーズ　⑪「算数探検隊」のページ　⑫授業で役立つ巻末付録 A4 判　1 年～6 年　代表：一松信，岡田禕雄 監修：赤井利行，池田敏和，黒澤俊二，他 5 名 共著者：青山尚司，石井英真，井上正人，植田敦三，植村哲郎，大石英助，大澤弘典，松岡克典，他 31 名
2．みんなと学ぶ　小学校　算数	平成 31 年 2 月 学校図書	新学習指導要領に即し，これからの社会の中で生きていくために，問題を見つけて解決するために，汎用的な力を身に付けるために役立てるように構成した。算数で育てたい３つの学びの力を紹介し，これらの学びが身に付くような構成になっている。「見方・考え方」を９つに分類し，キャラクターで表示し，楽しみながら身に付けるようにした。 A4 判　1 年～6 年代表：一松信，岡田禕雄 監修：赤井利行，池田敏和，黒澤俊二，他 3 名 共著者：青山尚司，石井英真，井上正人，植田敦三，植村哲郎，大石英助，大澤弘典，松岡克典，他 43 名
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1．近畿大学附属小学校長による評価	平成 26 年 3 月	近畿大学附属小学校研修部長として独自の附属小学校の授業観及び授業スタイルの見直し，基礎・基本の学力を育成するための指導をめざした教育改革を行った。また，習熟度別学習指導，チームティーチングによる指導，個に応じた指導のあり方などについての現職教育を行った。その結果，全国学力実態調査においても子どもの学力が著しく伸びたことから他の教育関係者や保護者からも高い評価を得るとともに，人事評価においても「A」評価を受けた。
2．奈良学園大学採用時の学長評価	令和元年 8 月	10 年間の公立小学校教員，9 年間の大阪教育大学附属天王寺小学校教員，12 年間の近畿大学附属小学校教員としての研究の経験と実績，さらには，大阪市小学校教育研究会算数部主任，7 年間にわたる大阪教育大学教育学部で非常勤講師として算数教育の指導に貢献した経験と実績に対して高い評価を受けた。また，教育に対する熱意と向上心に関しても高い評価と信頼を得た。
3. 奈良学園大学人間教育学部令和 2 年度前期学生による授業評価	令和 2 年 7 月	2 年次生に対する「算数科指導法」の講義について実施した学生の授業評価アンケートの結果，アクティブラーニングを活用して講義内容を振り返ることができる講義に対して，「受講意識は高かった」「受講マナーを守っていた」「授業時間外の学修を行っていた」「提示された資料はわかりやすかった」「話し方は聞き取りやすかった」「集中して取り組むことができた」「教員の熱意や意欲が感じられた」「授業時間を有効につかっていた」が 9 割を超え，充実感があった授業と判断できる評価を得ている。
4. 奈良学園大学人間教育学部令和 2 年度後期学生による授業評価	令和 3 年 3 月	1 年次生に対する「数の理解」の講義について実施した学生の授業評価アンケートの結果，実践を踏まえた講義に対して，「受講マナーを守っていた」「話し方はわかりやすかった」「集中して取り組むことができた」「教員の熱意や意欲が感じられた」「授業時間を有効につかっていた」が 9 割を超えており，充実感があった授業と判断できる評価を得ている。

5. 奈良学園大学における学生による授業評価アンケート結果	令和3年度 ～現在に至る	対面式とオンライン授業の併用の中においても事例から学ぶ学習形態や参加型・体験型学習形態，学生全員にコメントを書く双方向授業等を取り入れ，全担当科目で平均点以上の授業評価結果[5 点満点で，4.6 点以上の満足度得点。直近の 2022 年度前期・学生授業アンケート結果：「算数科指導法」58 人受講科目は，「4.4（「総合的に満足している」項目：5 段階評価）」]で学生の満足度も非常に高い。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 授業改善推進モデル校（高槻市立西大冠小学校）の講師	平成 21 年 7 月 ～ 平成 25 年 10 月	研究指定校の指導・助言役を担い，テーマに沿った研究について示唆を与えた。また，校内研究授業を参観し，討議会の指導助言を行った。また，事前の指導案検討会や校内研修会の講師を務めた。算数科における活用力について実践事例を通し講義した。5 年間にわたり，継続指導すると共にモデル校としての発表の一端を担った。
2. 茨木市立天王小学校研修会講師	平成 25 年 9 月 11 日，11 月 5 日	校内研究授業を参観し，討議会の指導助言を行った。さらに，校内研修会の講師を務めた。算数科における基礎・基本について実践事例を通し指導を行った。
3. 茨木市立山手台小学校研修会講師	平成 26 年 6 月 3 日，7 月 28 日，11 月 28 日，平成 27 年 6 月 23 日	校内研究授業を参観し，討議会の指導助言を行った。また，校内研修会の講師を務めた。さらに，算数科における基礎・基本について指導を行い，自らのビデオ授業を通して，授業のねらいや指導のポイントについての講義を行った。 子供達の個人差が大きくある中で，どの子も楽しく理解させていくにはどのような指導をすべきか論じた。
4. 西日本私学算数研修会講師	平成 26 年 6 月 27 日	西日本の私立小学校の教員を対象に，算数科における問題解決の授業について講義を行うと共に，指導のポイントや実践事例を通しての解説を行った。
5. 第 29 回　人間教育実践交流会フォーラム　in　奈良 分科会コーディネーター	平成 26 年 8 月 4 日	奈良学園大学人間教育学部開設記念をして開催された研究会の算数分科会でコーディネーターを務め，算数科の学習を支える言語活動について解説をすると共に，質疑応答を通して指導を行い，研究会の趣旨に貢献した。
6. 第 58 回　日私小連全国教員夏季研修会研究協議会コーディネーター	平成 26 年 8 月 20 日	全国の私学教員が参集する日本私立小学校連合会が開催する研修会において，算数部会のコーディネーターを務め，研究授業について協議を行うと共に，研究テーマに沿った論議を行った。
7. 第 13 回　教師力向上研究会　模擬授業	平成 28 年 8 月 18 日	明日から役立つ教師力をテーマにして，算数の授業づくりと子供理解について模擬授業をしながら，講話した。現役の国立･公立・私立教員及び大学教員や学生を対象に，分数の指導の在り方について説明した。
8. 高槻市教育研究会算数部研修会　講師	平成 29 年 2 月 1 日	算数部の提案する授業について指導し，研究授業を参観し，討議会の指導助言を行った。「わかる」「楽しむ」「学び合う」算数学習の創造をテーマに，考え，伝え，つながる算数学習について講演を行った。次期学習指導要領の内容について説明し，来年度の三島大会の研究の方向性について示唆した。
9. 高槻市立第 2 中学校区合同授業研究会　講師	平成 29 年 11 月 1 日	全員参加の中で子供達の学ぶ意欲を高める算数の授業づくりをテーマにして，①問題解決の個人差をどのようにすればよいか②どのようなグルーピングが良いのか③学ぶ意欲を高めるための授業形態を含め，授業づくりについて実践授業を基に論じた。
10. 高槻市教育研究会算数部研修会講師	平成 29 年 12 月 13 日	高槻市小学校教員を対象に「新学習指導要領導入をふまえた授業実践例の紹介」の講演を行い，新学習指導要領の背景とそれに対する授業の在り方について説明した。
11. 「算数教科書活用セミナー」第 1 回講師	平成 30 年 7 月 28 日	算数教科書の使い方について現職の教師の悩みを解決する研究会を発足し，教科書を活用した算数授業の模擬授業を行った。また，教科書をもとに算数科の本質を解き明かし，単元作り・授業づくりのポイントを示唆した。

12. 高槻市教育研究会算数部研修会講師	平成 30 年 11 月 14 日	高槻市小学校教員を対象に新学習指導要領の「C 変化と関係」領域の授業の在り方について実践を交えながら講演した。第 4 学年から第 6 学年の比例に関する内容を取り上げ，教科書での取り扱いと行間から読み取る指導法について論じた。
13. 高槻市教育研究会算数部研修会講師	令和元年 11 月 13 日	高槻市小学校教員を対象に新学習指導要領の「簡単な場合についての割合」の授業の在り方について実践を交えながら講演した。関連する事項としての割合についての指導方法や授業の在り方について論じた。
14. 高槻市教育研究会算数部研修会講師	令和元年 12 月 11 日	高槻市小学校教員を対象に「かけ算」の授業の在り方について実践を交えながら講演した。かけ算の指導方法や授業の在り方について論じた。
15. 八尾市キャリア教育研修会講師	令和 2 年 12 月 11 日	八尾市立北山本小学校にて，第 3 学年の模擬授業を行った。授業の進め方や授業構想の在り方，良い発問の仕方について論じた。
16. 高槻市立富田小学校研修会講師	令和3年9月10日	高槻市立富田小学校にて，第 3 学年研究授業を参観し，討議会の指導助言を行った。さらに，校内研修会の講師を務めた。算数科における主体的・対話的で深い学びについて実践事例を通し指導を行った。
17. 高槻市立冠小学校研修会講師	令和 3 年年 12 月 1 日	高槻市立冠小学校にて，第 4 学年「面積」研究授業を参観し，討議会の指導助言を行った。さらに，校内研修会の講師を務めた。「面積」について実践事例を通した指導や，学級集団づくりについて講演を行った。
18. 三島地区算数研究研修会講師	令和 4 年 2 月 9 日	新学習指導要領に加わった「データの活用」の指導の在り方について，実践例を基に論じた。さらに，三島地区が使用している教科書の扱い方や，指導法についての説明や解説を行った。
19. 第四中学校区研修会講師	令和 4 年 10 月 25 日	高槻市立富田小学校にて，文部科学省研究委託である人権教育推進事業として「自他の人権を守るための効果的な指導方法」についての講演を行った。一人一人が大切にされた教育活動は，豊かな心を育み，確かな学力向上につながることを，実践事例を通して単元設計やめあてを達成させるための手だての在り方を通して話した。
20. 三島地区算数研究研修会講師	令和 5 年 2 月 1 日	高槻市立五百住小学校にて，「わかる」「愉しむ」「学び合う」算数授業の創造のテーマで講演した。第 5 学年「割合」の研究授業の指導・助言を行い，「考え，伝え，つながる算数学習」についての説明や解説を行った。
21. 高槻市立富田小学校研修会講師	令和5年 2 月 6 日	高槻市立富田小学校にて，第 3 学年「□をつかった式」の研究授業を参観し，討議会の指導助言を行った。さらに，校内研修会の講師を務めた。昨年度からの継続である算数科における主体的・対話的で深い学びについて「学び合い」に焦点をあてて指導を行った。
5　その他 特記事項なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）小学校教諭 1 種免許 2）中学校教諭 1 種免許 3）高等学校教諭第 2 種免許 4）小学校教諭専修免許	昭和 63 年 3 月 昭和 63 年 3 月 昭和 63 年 3 月 平成 10 年 3 月	昭 62 小 1 第 1196 号　大阪府教育委員会 昭 62 中 1 第 4759 号　大阪府教育委員会 昭 62 高 2 第 5508 号　大阪府教育委員会 平 10 小専第 5 号　大阪府教育委員会
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		

1)　日本数学教育学会 全国大会最優秀研究賞受賞	平成 29 年 8 月	日本数学教育学会主催の全国算数・数学教育研究(岐阜)大会において，発表した実践研究論文の中から継続的な実践活動を伴い，所属校及び地域の算数・数学教育実践への貢献が認められた。 研究題目「学び合い活動における分数のわり算の指導－繁分数を活用した事例を通して－」
2) Apple Teacher	令和 2 年 1 月	Apple Teacher に認定された。
4　その他		
「研究助成」 1)科学研究費補助金　研究活動スタート支援 独立行政法人日本学術振興会 「理論依存型の算数科授業モデルの開発」 (研究課題番号　２０Ｋ２２２５６)	令和 2 年度～令和 5 年度	算数での問題解決では，論理的に考えることを重視しているが，帰納的に考える方法が主である。一方，数学では，証明問題の論証などは，演繹的に考える方法が主である。この指導方法の乖離が「中 1 ギャップ」を生じさせている要因にもなっているのではないだろうか。そこで，2 つの指導方法の橋渡しができないか考えることにした。本研究では，算数科に問題解決を基盤とした「理論依存型の授業」を取り入れ，演繹的に考える授業モデルを開発することを目的とする。 それにより，児童に論理的な見方や考え方が身に付き，数学での証明問題の論証に繋がる演繹的に考える力を身に付けさせることができる。従来見られなかった算数科授業モデルを開発し，指導方法の組み合わせ方や有効性を検討し，授業計画を構想し，研究授業の実践と授業記録に基づく事例分析の蓄積を通して，妥当性や適応性の高い授業モデルとして洗練させる。それにより，旧来から行われている算数の問題解決の指導方法を刷新する可能性が期待できる。
2) 2022 年度　博報堂教育財団 第 17 回　児童研究実践についての研究助成	令和 4 年 4 月～令和 6 年 3 月	「理論依存型の授業」を基盤として，演繹的だけでなく，帰納的，類推・統合的な手法などを用いるのが「理論構成型の授業」である。新たな授業モデルとして開発し実践することで，数学的に解き明かそうとする態度の育成にも繋がると考える。 また，ビジネス界では，マネジメント育成におけて「カッツ・モデル」(1974)が活用され，「コンセプチュアル・スキル」と問題解決・課題達成は，同じような背景・フレームワークをもっているとされている。コンセプチュアル・スキルとは，問題の本質を見極め，周囲が納得できる最適解を導き出す能力のことである。問題解決・課題達成のアプローチ法や手法の活用は，さまざまな場面に応用可能であり，それがコンセプチュアル・スキルの発揮につながっていく。そこで，ビジネス・スキルの問題解決のプロセスに有効な論理的思考のツールを算数の授業に活用し，その思考過程を分析し，考察する。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1．新しい算数研究（2014　3月号）	共著	平成26年3月	東洋館出版社	第38回新算数教育研究会セミナー集録「第5分科会：言語活動」　数学的に考える力を育てる授業改善をテーマに，算数教育の今日的課題について理解を深め，改善の在り方を探ることをめざした内容について集録している。　A4版　全224頁 編集：新算数教育研究会 共著者：古藤怜，佐藤満，長谷豊，伊藤説朗，松岡克典，他20名 本人担当分：「論理的思考力を育む分数のわり算の指導-逆数・繁分数を活用した事例を通して-」（p.208～p.213）　言語活動を充実することで，日常の事象を数理的にとらえ，見通しをもち筋道を立てて考え表現したり，表現したことから考えを進めたりすることができると考えた。そして，論理的思考力を伸ばすことをねらった指導法について考察することにした。 算数科における「論理的思考力」を「結果や解決方法の見通しをもち，演繹，帰納，類推による推論に基づいて，筋道を立てて考えていく力」と捉えた発表の内容と研究協議会の集録である。
2．資質や能力を育成する問題解決学習の在り方 ー学び合いに着目してー	共著	平成26年12月	ERP	資質や能力を育成するために，集団の相互作用に注目すると共に，「学び合い」に着目した問題解決の在り方について考察した。第5学年「図形の面積」の授業を通して，集団場面における「相互誘発」「相互葛藤」「相互補足」について分析した。学級集団で話し合う形態を主とし，自力解決で獲得した認識をもとに集団で他者と学び合うことで，多様な考えを統合して自分の考えを深めていくことができると考えた。 教育PRO　第44巻　第28号　p.26～p.29
3．読解力を養う	共著	令和3年3月	ERP	2021年度大学入学共通テストの出題傾向から，単なる数値を求める問題から読解力を求める問題へと変わってきていることを捉え，なぜ，数学に読解力が必要なのかを論じた。 算数・数学教育に読解力が求められる背景や，算数・数学教育における読解力の育成について述べ，読解力の必要性について読者に問いかけた。 教育PRO　第51巻　第4号　p. 10～11
4．新しい視点からの社会教育学	共著	令和4年9月	大学教育出版	新学習指導要領で必修化されたプログラミング教育について，小学校では「プログラミング的思考」を身に付けることを目的としていることを論じた。 「プログラミング的思考」とは，「論理的に考えていく力」だと述べ，中学校以降で学習するコーディングを覚えることではないことを強調した。 A5版　全234頁 編集者：住本克彦 共著者：難波正義，岡本恵太，オチャンテ・カルロス，森一弘，金山憲弘，松岡克典，他17名 本人担当分：「コラム⑫」（p.213）
（学術論文）				

1. 「21 世紀型能力」を育成する『学び合い』の在り方 （査読付き）	単著	平成 28 年 11 月	近畿大学研究論叢　第 28 巻第 1 号 p. 19～p. 36	「学び合い」を通して学ぶことで，資質･能力を身に付ける構造を検証したものである。集団思考の「相互誘発・相互葛藤・相互補足」に則って考察することで，「学び合い」によって練り上げられた思考力・判断力・表現力が，メタ認知を促し自己にフィードバックされ，どのように深化していくのかをひし形の求積方法を三角形に変形させる事例から検討した。
2. 学び合い活動における分数のわり算の指導－繁分数を活用した事例を通して－ （査読付き）	単著	平成 28 年 12 月	人間教育学研究第 4 号，p. 73～p. 85	分数の除法の計算の仕方をつくる過程を重視することにより，数学的な見方･考え方を高めるだけでなく，学び合い活動を通して，「再構成する力」を育むことができるか検証した。その結果，「再構成する力」は。自ら考えを持ち，表現し，伝え合い，振り返るといった一連の学びの過程を経て，自らの手で創り出したという実感を味わわせることが大切であることが分かった。
3. これからの算数教育の在り方－意味生成学習を用いて－ （査読付き）	単著	平成 30 年 3 月	人間教育学研究第 5 号，p. 65～p. 78	「意味生成学習」を取り入れることで，数学的な見方・考え方を育成することが出来るかを考察した。きまりについて考える場を授業の中に設定し，考えるための根拠となる既習事項や知識を活用して思考し，表現する理論依存型の授業を取り入れることにした。その結果，子供が既習事項を活用して思考し，自らの考えを導き出すことが出来たり，記述内容が既習事項を根拠にしたものになったりするなどの変容が見られた。
4. 21 世紀型能力を育む意味生成学習の在り方 （査読付き）	単著	平成 31 年 3 月	人間教育学研究第 6 号， p. 147～p. 161	算数教育における問題解決学習に「意味生成学習」を取り入れることで，どのような学び合いの過程を通して，「21 世紀型能力」を育成することが出来るかを考察したものである。授業において，学び合いに重点をおくことで，他者と協働して新しい考えを導き出す過程を探り，どのような新しい知識を構築していくのか，そのプロセスを検証することにした。その結果，学び合いを通して，子供が既習事項を活用して思考し，自らの考えを導き出すことが出来たり，記述内容が既習事項を根拠にしたものになったりするなどの変容が見られた。
5. プログラミング的思考を育む算数指導の在り方－作問学習支援システムを活用して－	単著	令和 2 年 12 月	奈良学園大学紀要　第 13 集 p. 71～p. 83	単文統合型作問支援環境「モンサクン」は，算数文章題を学ぶ子供たちを対象とした学習支援アプリであり，「問題を解くのではなく，問題を作る」学習を行う。このアプリでは，子供たちは，問題がどのような要素から構成されているのかを考える必要あり，問題を作る過程において，問題のもつ「構造」を意識しなければならない。この演習を繰り返すことで子供たちは「構造」で問題をとらえることができるようになり，「構造を理解する力」を養うことが可能となる。算数文章題の問題構造の理解を深めることで，プログラミング的思考の育成に繋がると考え，取り組んだ。
6. 算数教育における「理論依存型」授業の開発	単著	令和 3 年 6 月	日本数学教育学会第 9 回春期研究大会論文集 p. 315	算数における「理論依存型の授業」を提案し，これまでの算数の問題解決の学習に一石を投じる新たな授業モデルを開発することにした。旧来の算数における問題解決の指導方法を刷新し，他の学校や教員に「理論依存型の授業」を拡げることを目的とした。この「理論依存型の授業」を算数の授業に取り入れることで，数学的な見方・考え方を基に，帰納的や演繹的な手法などを用いて数学的に解き明かそうとする態度の育成も可能となった。

7. 算数科教育における見通しの有用性について	単著	令和３年12月	奈良学園大学紀要　第14集 p.157～p.168	算数科の問題解決学習において，「見通し」をもつことは，子どもたちが主体的に学習に取り組む上で重要である。小学校学習指導要領では，子どもが主体的に学ぶ態度を育み，学習意欲の向上に資する観点から「児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を，計画的に取り入れるように工夫すること」と示されている 。そこで，今一度「見通し」について整理し，先行研究から，「見通し」とはどういうものか，どのようなことを意識して授業を行う必要があるのか確認する。そして，「見通し」に重点をおいた授業デザインについて考察し，「対話的コミュニケーション」を通した授業の実践を通して，その結果を考察する。
8. 算数科における「理論構成型」の授業デザイン	単著	令和４年６月	日本数学教育学会第10回春期研究大会論文集 p.399	「理論構成型」の授業モデルを刷新し，帰納的・演繹的・類比的・統合的な探究も取り入れた「理論構成型の授業」を構築し，論理的に考える授業モデルを開発することを目的とした。それにより，児童に数学での論証に繋がる論理的に考える力を身に付けさせることができると考え，実践を基に発表した。
9. 演繹的思考を育む算数科授業モデルの開発	単著	令和４年６月	日本科学教育学会研究報告 2022年36巻７号 p.11-16	算数での問題解決では，帰納的に考える方法が主であり，数学では，証明問題の論証などは，演繹的に考える方法が主である。この指導方法の乖離の橋渡しができないか考えることにした。本研究では，算数科に問題解決を基盤とした「理論依存型の授業」を取り入れ，演繹的に考える授業モデルを開発することを目的とする。従来見られなかった算数科授業モデルを開発し，指導方法の組み合わせ方や有効性を検討し，授業計画を構想し，研究授業の実践と授業記録に基づく事例分析の蓄積を通して，妥当性や適応性の高い授業モデルとして洗練させる。
10.理論依存型の算数科授業モデルの開発（査読付き）	単著	令和５年６月（予定）	数学教育学会誌 2023/Vol.63 （12ページ分掲載予定）	算数での「理論依存型授業」を通して，数学の証明問題に繋がる学びの基盤となり，子供が既習事項を活用して演繹的に考え，自らの考えを導き出すことが出来たり，記述内容が既習事項を根拠にしたものになったりするなどの変容が見られた。本研究を通して，これからの社会の変化に対応する最適解や納得解を見つけ，事象についての数学的な見方・考え方で説明ができる姿も見られる可能性が期待できた。
「学会発表」				
1. 論理的思考力を育む分数のわり算の指導 －逆数･繁分数を活用した事例を通して－	単	平成25年8月４日	日本数学教育学会第95回総会全国算数・数学教育研究(山梨)大会	（分数）÷（分数）の計算方法を形式化する際には，式を変形させていく過程で，分母と分子をそれぞれどのようにすればよいかに目を向けさせ，（分数）÷（分数）の計算は，わる数を分母と分子を入れかえてかければよいことを，『逆数を用いた考え』と『繁分数を用いた考え』と結びつけ，ことばでまとめさせるようにした。そして，文字を使って一般化させ，一般化した式を使って，形式的に計算の処理ができるようにした。
2. 論理的思考力を育む分数のわり算の指導	単	平成25年12月27日	第３８回　新算研セミナー 第５分科会「言語活動」	言語活動を充実することで，日常の事象を数理的にとらえ，見通しをもち筋道を立てて考え表現したり，表現したことから考えを進めたりすることができると考えた。そして，論理的思考力を伸ばすことをねらった指導法について考察することにした。算数科における「論理的思考力」を「結果や解決方法の見通しをもち，演繹，帰納，類推による推論に基づいて，筋道を立てて考えていく力」と捉えた。

3. 資質・能力を育成する問題解決学習の在り方 －学び合いに着目して－	単	平成27年8月7日	日本数学教育学会第97回総会全国算数・数学教育研究(北海道)大会	問題解決学習での集団の相互作用に注目し，「学び合い」を自己との対話や他者理解を通じて，自他共に高まり合っていく活動と捉えた。「自分自身との学び合い」「他者との学び合い」「指導者の働きかけ」がどのように関与しているのか，子供同士が学び合いを通して考えた解決方法を共有することで知識や技能を獲得し，多様な考えを統合して自分の考えを深めていく過程について考察した。
4. 学び合い活動における分数のわり算の指導 －繁分数を活用した事例を通して－	単	平成28年8月6日	日本数学教育学会第98回総会全国算数・数学教育研究(岐阜)大会	分数の除法の計算の仕方をつくる過程を重視することにより，数学的な見方･考え方を高めるだけでなく，学び合い活動を通して，自らの手で形式化したという成就感をもたせるようにした授業の在り方について考察した。算数教育における学習過程に「意味生成学習」を取り入れることで，数学的な見方・考え方を育成することが出来るかを考察したものである。
5. 算数教育における意味生成学習の在り方	単	平成29年8月8日	日本数学教育学会第99回総会全国算数・数学教育研究(和歌山)大会	算数教育における学習過程に「意味生成学習」を取り入れることで，数学的な見方・考え方を育成することが出来るかを考察したものである。その結果，子供が既習事項を活用して思考し，自らの考えを導き出すことが出来たり，記述内容が既習事項を根拠にしたものになったりするなどの変容が見られた。「意味生成学習」は，数学的な見方・考え方を育成することに有効であることが明らかになった。
6. 算数教育における意味生成学習の在り方Ⅱ	単	平成30年8月3日	日本数学教育学会第100回総会全国算数・数学教育研究(東京)大会	昨年度の継続研究で事例を増やし，授業分析を行い，理論依存型の授業を取り入れることで，知識・技能面の定着だけでなくした。数学的な見方・考え方が育成されることをデータをもとに分析することにした。その結果，「意味生成学習」は，知識・技能面の確かな定着を図ることが可能であり，数学的な見方・考え方を育成することに有効であることが明らかになった。
7. プログラミング的思考を育む作問学習支援システムの活用の在り方	単	令和元年8月8日	日本数学教育学会第101回総会全国算数・数学教育研究(沖縄)大会	単文統合型作問支援環境「モンサクン」を活用し，「問題を解くのではなく，問題を作る」学習を行う．そのことで，「構造を理解する力」を養い，プログラミング的思考に繋げようと考え，取り組んだ。その結果。演習を繰り返すことで子供はキーワードではなく，構造で問題をとらえることができるようになり，論理的思考力の向上にも繋がった。
8. 数学に開花する指導の在り方 －尋常小學算術(緑表紙教科書) を活用して－	単	令和2年8月6日	日本数学教育学会第102回総会全国算数・数学教育研究(茨城)大会	数学では，抽象的なものを使って「なぜそうなるのか」を理解し，表すことが求められる。そこで，答えを導くまでの過程を重要視し，論理的な思考力や数学の神秘性に気付かせる授業展開を考えた。緑表紙教科書（編集責任者　塩野直道）の「数理思想」が目指す理念が新学習指導要領及び新学習指導要 領解説（算数編）にどのように繋がり，数学に結びつくのかを実践を通して考察することにした。
9. 算数教育における「理論依存型」授業の開発	単	令和3年6月6日	日本数学教育学会第9回春期研究大会（山梨）	算数における「理論依存型の授業」を提案し，これまでの算数の問題解決の学習に一石を投じる新たな授業モデルを開発することにした。旧来の算数における問題解決の指導方法を刷新し，他の学校や教員に「理論依存型の授業」を拡げることを目的とした。この「理論依存型の授業」を算数の授業に取り入れることで，数学的な見方・考え方を基に，帰納的や演繹的な手法などを用いて数学的に解き明かそうとする態度の育成も可能となった。

10. Development of "theory-dependent" classes in arithmetic education	単	令和3年7月17日	ICME14 第14回数学教育世界会議（中国・上海）	Focusing on the differences in teaching methods between arithmetic and mathematics, we have proposed a teaching model that incorporates deductive problem-solving activities into arithmetic classes. In this study, we propose "theory-dependent teaching" in arithmetic and develop a new teaching model that creates a stir in the conventional learning of problem solving in arithmetic.
11. 理論依存型の算数科授業モデルについて	単	令和3年8月22日	日本数学教育学会第103回総会全国算数・数学教育研究(埼玉)大会	算数と数学の指導法の相違という点に着目し，算数の授業に演繹的に問題解決を図る活動を取り入れるという授業モデルを提案することにした。きまりを教師が先に教えて，それを活用した思考活動に重点を置いた「理論依存型の授業」では，考察に必要な知識を教えるために，今まで気付かなかった新しい発見があり，そこから思考が発散的に拡がっていく授業展開が期待できた。
12. 理論依存型の算数科授業モデルの開発	単	令和3年10月30日	日本数学教育学会第54回秋期研究大会（広島大学）	算数での「理論依存型授業」を通して，数学の証明問題に繋がる学びの基盤となり，子供が既習事項を活用して演繹的に考え，自らの考えを導き出すことが出来たり，記述内容が既習事項を根拠にしたものになったりするなどの変容が見られた。本研究を通して，これからの社会の変化に対応する最適解や納得解を見つけ，事象についての数学的な見方・考え方で説明ができる姿も見られる可能性が期待できた。
13. 算数科における「理論構成型」の授業デザイン	単	令和4年6月5日	日本数学教育学会第10回春期研究大会（宇都宮）	算数科に問題解決を基盤とした「理論構成型の授業」を取り入れ，論理的に考える授業モデルを開発することを目的とした。それにより，児童に数学での論証に繋がる論理的に考える力を身に付けさせることができると考え，実践を基に発表した。
14.演繹的思考を育む算数科授業モデルの開発	単	令和4年6月12日	日本科学教育学会第7回研究会（中国支部）	算数科に「理論依存型の授業」を取り入れ，演繹的に考える授業モデルを開発することを目的とする。それにより，論理的な見方や考え方が身に付き，数学での証明問題の論証に繋がる演繹的に考える力を身に付けさせることができると考えた。それにより，旧来から行われている算数の問題解決の指導方法を刷新する可能性が期待できる。
15.理論構成型でつくる算数科の授業	単	令和4年8月5日	日本数学教育学会第104回総会全国算数・数学教育研究(島根)大会	算数科に問題解決を基盤とした理論構成型の授業を提案する。中学の数学への橋渡しとなる授業デザインを構築し，命題や証明問題の論証に繋がる算数科の授業とはどのようなものであるかを探る。
16.理論依存型の算数科授業モデルの開発Ⅱ	単	令和4年11月12日	日本数学教育学会第55回秋期研究大会（福岡教育大学）	きまり（公式・定義・定理）を教師が先に教えて,それを解明する活動に重点を置く「理論依存型の授業」では,ヘッドスタートができる場面を保証したことで、先行知識の有無に関係なく自らの考えを導き出し,論理的な思考・表現活動が行われるようになった。
17. Development of "Theory-Constructed Classes"	単	令和5年1月7日	IAFOR (Hawaii) IICE2023	In this study, we decided to focus on "argumentation. Therefore, we developed a "theory construction type" lesson model in elementary school arithmetic to help students acquire the ability to think logically, which leads to argumentation in mathematics. This led to transformations such as being able to think deductively and inductively by utilizing what they had already learned, and being able to derive their ideas and basing their writing on what they had already learned.

（その他）				
1　分科会発表「論理的思考力を育む算数科の指導」	単	平成26年8月4日	人間教育協議会 人間教育学会	第29回人間教育実践交流会フォーラム in 奈良において，算数分科会でコーディネーターを務めと共に，言語活動を充実することで，見通しをもち筋道を立てて考え表現したり，考えを進めたりすることができ，論理的思考力を育むことができるという仮説の基，分数のわり算の事例を通して論議した。

教　育　研　究　業　績　書

令和５年　　３月　　31 日

氏名　森瀬　智子

研究分野	研究内容のキーワード
芸術学・教育学	教科教育(音楽)、声楽、合唱、協同学習、初年次教育

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 (1)生徒個々人の発達段階を踏まえたキャリア教育の指導法の開発	平成 24 年 11 月	中３の学年主任として、従来のインターンシップのように近隣の施設の就労経験ではなく、キャリア教育の一環として、自己の興味関心に応じた研究所や企業先等に主体的に関わる仕組みを構築した。これにより、2 年後の探究活動に対し、研究所や企業協力を得て課題解決に取り組むことができた。 （神戸大学附属中学校の実践）
⑵ICT を活用した授業方法 学生の音楽科指導案作成時における ICT を活用した指導案の検討	平成 25～28 年度毎年	学生に対して音楽科指導案の作成等、模擬授業のために ICT を活用した事前・事後指導を行った。事前の指導案のチェックも双方向で見直し、指導案が充実し模擬授業に学生が自信をもって取り組み質が高まった。 （神戸大学発達科学部教育実習事前事後の実践）
(3)授業内容の公開 新学習指導要領に基づく協同学習を用いた邦楽『箏』演奏と鑑賞教材歌舞伎『勧進帳』の指導 神戸市教育委員会の依頼事業	平成 30 年 6 月～	優れた教育方法の実践として、授業の様子が神戸市教育情報ネットワークの学校イントラネットで配信された。内容は、神戸市立住吉中学校において、協同学習の手法の一つである、役割分担をすることで、技能の獲得と鑑賞の知覚に出現する変化の可視化に焦点をあてたものである。この授業が、音楽科教員に協同学習の手法に興味を持たせる一助となった。
２　作成した教科書、教材 (1)教育実習の手引き(音楽科用)　【再掲】 神戸大学付属住吉中学校音楽部発行	平成 25 年 6 月	従来から学校としての実習の手引きは存在したが、音楽科に特化した実習の手引きを新たに作成した。教育実習の意義と実習生として守るべき心得、音楽科指導案の作成事例、授業評価の方法、生徒理解の方法等について具体的に説明した冊子。
(2)「保育内容指導法(表現)」の教材作成 頌栄短期大学発行(単著) 『保育内容指導法(表現)』の授業で使用	平成 30 年 5 月	主体的に協働させ問題解決的に音楽表現の豊かさを育むために、課題を単元ごとに作成した。学生が前向きに取り組めるように、考えが深まる問いを工夫し、徐々に問いの難易度を上げる実践を提言した。学習形態として協同学習を取り入れ、単元ごとの課題を示すことで、音楽表現の豊かさが現れることが確認された。
(3)　協同学習の手法を用いた 「子どもの歌と音楽遊び」の教材作成 頌栄短期大学発行(単著) 『子どもの歌と音楽遊び』の授業で使用	平成 30 年 9 月	季節の歌・わらべ歌・器楽授業において、協同学習の手法を用いて子どもへのアプローチをグループで工夫する教材を作成した。幼稚園や小学校のわらべ歌を取り上げ、幼小連携を意識し、幼稚園と小学校の発達年齢に合わせた選曲の特徴に気づき、「実習で活用できた」と学生から好評を得た。

3　教育上の能力に関する大学等の評価 ⑴　教育実践演習(中学･高校音楽)における神戸大学発達科学部の教員からの授業評価	平成 28 年 1 月	模擬授業後の助言が分かりやすく、また協同学習を用いた授業について、「新規性のある音楽表現の授業であり、楽しく深い思考ができる授業である」「自信をもって模擬授業に挑める」と高い評価を受けた。
⑵　頌栄短期大学における教員評価 「音楽表現」の授業評価	平成 30 年 7 月	頌栄短期大学で音楽表現の授業を公開した。弾き歌いの技能の正確さと表現力がある点、また学生指導の的確さという点で高い評価を受けた。
⑶　頌栄短期大学における教員評価 「音楽Ⅰ・Ⅱ」(声楽・合唱) 授業	平成 30 年 7 月	「理論に基づいた呼吸法から始まる合唱の授業は、豊かな学生の声を引き出している」また「常に弾き歌いで教員が学生の声を導くため、学生がよく聴き、音楽表現ものびやかである」という評価を受けた。
(4)　頌栄短期大学における評価 学生授業アンケート 「子どものうたと音楽遊び」(後期)授業	平成 30 年 10 月	「子どものうたと音楽遊び」において実践的な授業で、保育実習でも大変役立ち、また教材プリントも勤務した時にも役立つと、高い評価を受けた。 平均値 3.9 に対して 4.6 の評価を得た。
(5) 頌栄短期大学における評価 学生授業アンケート 「音楽Ⅰ・Ⅱ」(声楽・合唱)の(通年)授業	平成 31 年 2 月	呼吸法から子どもの歌の子どもへ伝わる歌い方まで楽しく学べ、技能も身についたという感想も見られた。
(6)奈良学園大学　人間教育学部 学生授業アンケート 「音楽科指導法」(後期)授業	令和 4 年 1 月	授業で用いた協同学習の手法は学生が教員になった時にも是非使いたいと大変好評で、授業内容も分かり易かったという評価で、平均値よりかなり高い評価を受けた。
(7)奈良学園大学　人間教育学部 学生授業アンケート 「音楽の理解」(前期)授業	令和 4 年 7 月	教採の内容を意識した授業で、どこまでを理解しておけばよいのか、大変分かり易い上に、実践でも役に立つ実践的な授業でもあったと高評価であった。また、理解できていない学生に対して行った補講も大変好評であった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)　大学等の実習生指導	平成 3 年～平成 29 年	神戸市立中学校（毎年 1 名）と神戸大学附属中学校（毎年計 5 名）の音楽科の教育実習生の指導をした。事前打ち合わせで、授業の進度と回数、内容を提示、その際、評価の視点をもって指導案作成を伝え、近年ではメールを用いての指導案の指導も行った。実習開始後は、授業のふり返りと次の授業の助言を行った。学生の意思を尊重し、学生の状況を考慮し主体的に学ぶ指導を行った。
(2)　地域公開講座(頌栄短期大学乳幼児研究所) 第 16 回グローリーオープンカレッジ講師 場所：頌栄短期大学 参加人数：50 名限定で 50 名	令和元年 6 月	「声のひびきを楽しみましょう」の講師を務めた。対象は、保育者、小・中学校教員、一般(地域の)である。①幼・小・中の縦のつながりを考えた声と歌唱指導について、6 月に行われた二つの幼稚園部会の表現の研究授業(保育)の紹介と、小学校音楽の歌唱カリキュラムの現状等の説明。②指導者の声の充実のための呼吸法と発声法③コードを用いたアンサンブルの実践、とした。幼・小・中の全ての先生方からの参加があり、幼・小・中連携の一助を担った。

(3)　大学公開講座(頌栄短期大学) 創立 130 周年記念行事講師 場所：姫路キャスパホール 参加人数：130 名	令和元年 8 月	「歌の響きを楽しみましょう」講師を務めた。対象は、保育者、小・中・高学校教員、一般である。①目指す声に向けた発声法と呼吸法の実践と解説②歌のお姉さんの表現と声を紹介③高校生をモデルとして声の可能性について紹介④実践した発声法を使い参加者全員での「虹」の二部合唱である。これはサンテレビ「仕事人」で放映され、ネット配信もされた。好評で、次年度以降も他団体より、講師の依頼を受けている。
5　その他 (1) 神戸教員合唱団常任指揮者並びに指導者 団員約 30 名	平成 14 年～現在に至る	兵庫県の幼稚園から大学までの教員の音楽研修の場として発足した合唱団。指揮者並びに指導者として、毎年 2 回、震災遺児・孤児対象のチャリティーコンサートや児童養護施設訪問を行っている。研修では、弾き歌いや伴奏法への応用力の身に付け方、音楽教員の指導力向上と技術の修得のための方法を研究している。
(2)全日本音楽教育研究部会全国大会兵庫県大会 音楽部研究アドヴァイザー	平成 22 年 6 月～25 年 6 月	神戸市の幼・小・中・高音楽研究部研究内容の連携のためのアドヴァイザーを 3 年間務めた。違う校種の発達段階での音楽教育に対する考え方のすり合わせと、共通理解を図るための指導助言等を行った。
(3)少年少女合唱団(幼児・児童)の 7 団体を指揮・指導、　兵庫県合唱祭で発表 神戸文化ホール大ホール　観客：2100 名	平成 25 年 6 月	幼児～児童の合唱団 7 団体に対して体を使って声を出す方法と楽曲指導を行った。『崖の上のポニョ』など計 2 曲を総勢 200 名の合唱の指揮を行い、文化ホールで披露した。練習では、幼児の好きな律動で楽しく体を徐々に動かすことで、声が出るよう、情意面から声にアプローチしていった。合唱なのでお互いに聴き合いハーモニーも楽しめるように指導した。
(4)全日本音楽研究大会全国大会兵庫での研究演奏とレクチャー（西宮芸術文化センター） 対象：音楽科教員 1200 名、参加児童・生徒 500 名、保護者 300 名	平成 25 年 6 月	全日本音楽研究大会で県の代表として、コーラス部演奏を披露し、その際指揮を務めた。また、舞台上でどのような発声法をすることで、豊かな響きになるのかを、コーラス部生徒が実践講習を行い曲を披露した。
(5)名古屋市音楽研究部指導助言 (神戸大学附属中等教育学校)	平成 26 年 7 月	名古屋市の中学校音楽研究部会の歌唱表現の指導案について、指導助言と協同学習についての講習を行った。名古屋では、グループワークは行っているが、協同学習という概念はまだあまり音楽科では認知されていない為、協同学習の考え方から説明を行った。
(6)全日本合唱連盟主催『おかあさん大会』 兵庫県大会審査員(伊丹文化ホール) 対象：兵庫県おかあさんコーラス 60 団体 約 1800 名	平成 27 年 6 月	選考委員として、全国大会の出場団体を選出した。全団体にコメントを書き、今後の技能アップの示唆を与えた。また、選に漏れた団体に対して選考委員として、今後の一層の活躍を期待して、それぞれの審査員が、自分の名前を冠した賞を贈った。
(7)兵庫県合唱祭で実行委員長 場所：伊丹ホール 2 日間で延べ 8000 名が参加	平成 28 年 6 月	兵庫県の合唱祭で実行委員長を務めた。2 日間にわたる合唱祭の企画運営、指揮を執った。1 日目「おかあさん大会」では、全国大会に出場する 3 団体を選考した。2 日目は少年少女合唱団から小学校、中学校、高等学校、一般、シルバーまで、あらゆるカテゴリーの団体が参加し、各団の演奏と、合同合唱を披露した。

(8)神戸市小学校音楽研究部会研修会講師 （神戸市立本山第二小学校） 対象：神戸市小学校音楽教員 50 名	平成 28 年 8 月	コードを用いて楽しく歌い合わせることで音感を育む方法を紹介し実演した。大循環コードを用いて単旋律でカノンすることから始まり、次にコードを用いてハーモニーを感じさせ、最後に音価の使える幅を広げ作曲するというものである。音楽科専科でない教員も参加できるように、4 人それぞれが選んだ音で 4 小節歌い、各グループが異なる作曲でするしくみを用いた。
(9)教育実績に対する表彰	平成 29 年 3 月	神戸大学より、長年附属校への「音楽教育指導」の充実に貢献したとして、学長表彰を受ける。
(10)神戸市教員採用試験音楽実技試験 （ピアノ・歌）採点委員担当	平成 29 年度	神戸市教員採用試験音楽問題（幼稚園、小学校、中学校、高等学校）作成委員の依頼を受け、実技試験採点委員は平成 29 年度の他平成 15 年度～17 年度 にも務めた。
(11)小学校音楽部合唱部指導 （神戸市立なぎさ小学校） 対象：児童 65 名　音楽教員 3 名	平成 30 年 7 月～10 月	合唱指導と発声指導を行う。呼吸法では、身体の仕組みを理解させ、体に支えられた美しい声を出す方法を指導する。また発声では、小学生らしい明るい響きを実感するため、暗い声と明るい声を対比して聴かせ、息の流し方と声の出し方を理解させた。
(12)神戸市立小学校音楽会指導 （神戸市立宮本小学校） 対象：児童 314 名　宮本小学校教員 13 名	平成 30 年 10 月～令和元年	幼小中連携の表現指導の立場から、音楽会（1 年生～6 年生）の指導と教員に対して子どもから音楽表現を引き出すための指導を継続的に行う。2 年目では、中央区の音楽会でよく声も響かせ、高い評価を得た。
(13)神戸大学附属中等教育学校 合唱コンクール審査員 対象：生徒 660 名、市民等 400 名	平成 30 年 11 月 令和元年 11 月	中学 1 年生から高校 2 年生にあたる 5 学年の合唱コンクールの審査員として、審査を行った後、全クラスに対して演奏についての講評を全体の場で行い、今後の為に改善ポイント等を講習した。
(14)兵庫県下小学校・中学校・高等学校合唱指導 ・神戸大学附属中等教育学校高等部 ・神戸大学附属中等教育学校中等部 ・神戸市立鷹匠中学校 ・姫路市立広陵中学校 ・明石市立二見中学校 ・神戸市立なぎさ小学校	平成 31 年 4 月～現在に至る	左記の 6 団体に対して、合唱指導を行っている。呼吸法、発声指導、曲紹介、コンクール曲指導など、実践的に指導しレベルアップを図った。合唱コンクールでは全団体、予選⇒本選、本選⇒近畿大会、全国大会に進む等成果を得た。また、初の女声⇒混声での新しい試みでの挑戦等でも賞を得るなど、一定の効果が見られ、兵庫県の混声の底上げも図った。
(15)神戸大学附属中等教育学校における 新任音楽教員の研修担当 対象：新任音楽教員 1 名	平成 31 年 4 月～令和 2 年 3 月	神戸大学附属学校部の依頼により、音楽教員採用にアドヴァイザーとして関与。また、音楽新任教員研修担当として指導を行う。授業を参観しアドヴァイスを与え、次の授業の示唆を与えた。次の授業の指導案を添削し、新任教員の力量アップを図った。
(16)幼稚園における園児に対する表現（歌唱）指導 対象：幼稚園児 90 名	令和元年 6 月～令和 2 年 3 月	短期大学併設幼稚園の園歌や讃美歌の指導を園児に行った。音の高さを手で表現し、幼児と一緒に手を動かしながら音を表現することで、音の高さと出し方の違いを体感させる方法を用いた。また、子どもが親しみをもっているものになぞらえて指導することで、徐々に理解が深まった。高い音については、幼児自ら手を頭の上に挙げ頭声を意識する姿が見られた。

(17) 全日本合唱連盟主催『おかあさん大会』 兵庫県大会審査員(伊丹文化ホール) 対象：兵庫県おかあさんコーラス 60 団体 観客：約 1800 名	令和元年 6 月	全日本合唱連盟主催の全日本合唱コンクールおかあさん大会の選考委員として審査し、全国大会に出場する団体を選出した。その際、全団体にコメントを書き、今後の技能アップの示唆を与えた。また、惜しくも選に漏れた団体に対して選考委員として、今後の一層の活躍を期待して、それぞれの審査員が、自分の名前を冠した賞を贈った。令和 3 年度も審査委員としても投票で選ばれ選考委員として関わることが決まっている。
(18)徳島県教育委員会主催、ＮＨＫ学校音楽コンクール小学校の部・中学校の部・高等学校の部課題曲講習会　講師 (徳島県とくぎんプラザ) 対象：小・中・高等学校教員と 児童・生徒 300 名	令和元年 8 月 ～毎年継続で依頼を受けている。	ＮＨＫ学校音楽コンクール小・中・高等学校の部門の課題曲の講習を行う。部門別に課題曲の分析をレクチャーし、それぞれの部門ごとに実践指導を行った。呼吸法、発声法から曲に対するアプローチの仕方と、場面に合った声について助言した。好評につき継続依頼を受けている。
(19)神戸市教科・教科外研修講座 「音楽科研究部(合唱)講習会」講師 (神戸市総合教育センターホール) 対象：神戸市教員 150 名	令和元年 9 月	教科・教科外研修講座　音楽科研究部講習会において合唱についての指導講師を務める。①合唱の子どもに与える教育的効果と、生涯教育としての合唱について②効果的な呼吸法と発声法の実践③合唱曲の指導法④合唱の実践を指導した。
(20)神戸市立御影中学校合唱コンクール (学年合唱指導)講師 (神戸市立御影中学校) 対象：中学生 600 名	令和元年 9 月	地域貢献として近隣中学校で 2 回に渡って 1 年生～3 年生の学年合唱の指導をした。それぞれの学年の課題曲を 1 年～3 年 600 名余りに呼吸法・発声法・曲の理解について指導を行った。
(21)神戸市立押部谷中学校合唱コンクール (学年合唱指導)講師 対象：中学生 160 名	令和元年 10 月	中学 2 年生の学年合唱曲「時の旅人」の指導を行う。また、生徒を指導するだけでなく、学級担任としての合唱コンクールの関わり方と曲の内容、生徒への声掛けについても講演を行った。
(22)神戸大学附属中等教育学校研究会 音楽科授業指導助言　講師	令和 2 年 2 月	全国に向けて行われた音楽科研究授業の創作授業『オリジナル豆まきソングを創作しよう』の指導助言を務めた。また、研究協議会において、中学音楽科教員として理解しておくべき子どもの発達の中で音楽表現における分野について講演をおこなった。
(23)全日本合唱コンクール兵庫県大会 (中学校、高等学校の部)実行委員長 参加数：1000 人、観客：1200 人 場所：KOBELKO 大ホール	令和 3 年 8 月	兵庫県下から 40 校が出場したコンクールの実行委員長として、コロナ前とは違い感染対策を徹底してコンクールを実施した。幸い、全く問題はなく実施することができ、マスク越しであったが 2 年ぶりの歌声を子どもたちが響かせる手助けを行った。
(24) 全日本合唱連盟主催『おかあさん大会』 兵庫県大会審査員(伊丹文化ホール) 対象：兵庫県おかあさんコーラス 52 団体 観客：約 1700 名	令和 4 年 6 月	全日本合唱連盟主催の全日本合唱コンクールおかあさん大会の選考委員として審査し、全国大会に出場する団体を選出した。その際、全団体にコメントを書き、今後の技能アップの示唆を与えた。また、惜しくも選に漏れた団体に対して選考委員として、今後の一層の活躍を期待して、それぞれの審査員が、自分の名前を冠した賞を贈った。
(25)兵庫県但馬地区中学校教育研究会音楽部会 総会　研究会講師 場所：朝来市立和田山中学校 対象：音楽科教員 30 名	令和 4 年 6 月	但馬地区中学校教育研究会音楽部会において、研究会の講師を務めた。テーマは『子どもが表現したくなる主体的な学びを促す授業とは』とし、「中学校の普通授業における合唱（発声）指導の方法について」知りたいと希望があったため、カノンと大循環コードを使った創作からハーモニーづくりと合唱について発声から提

		案を行った。
(26)兵庫県芸術文化振興財団主催の合唱リモートレッスンの講師 対象：兵庫県福崎西中学校	令和４年７月と８月	次世代の芸術文化を担う人材を育成するために、簡単に指導を受けられない地域に指導者を派遣する目的で行われた兵庫県の活動に兵庫県から指導の要望があったため参画し、人材育成に力を注いだ。
(27)徳島県教育委員会主催、ＮＨＫ学校音楽コンクール小学校の部・中学校の部・高等学校の部課題曲講習会　講師 徳島県とくぎんプラザから ZOOM に変更 対象：小・中・高等学校教員と児童・生徒 200 名	令和４年８月	本年度の NHK 学校音楽コンクール課題曲講習を行った。当初の予定は現地のホールで小学校・中学校・高等学校の順で行う予定であったが、コロナ禍で他府県からの指導が難しくなったため、急遽遠隔で小学校・中学校・高等学校を１時間ずつ、選抜の６校に対して個別に行った。尚、その様子はどの学校からも見ることができた。遠隔でもポイントが分かったと好評を得た。
(28)全日本合唱コンクール兵庫県大会 (中学校、高等学校の部)副実行委員長 参加数：1000 人、観客：1000 人 場所：KOBELKO 大ホール	令和４年８月	兵庫県下から 39 校が出場したコンクールの副実行委員長として、昨年度コンクールを成功させた実績から副実行委員長として委員長を補佐した。全く問題はなく実施することができ、マスク越しであったが今年も歌声を子どもたちが響かせる手助けを行った。
(29)養父市立養父中学校で校外音楽会参加のための学年合唱指導 対象：中学生 80 名　教員５名 場所：養父中学校 (30)　但馬中学校教育研究会音楽部会主催 第 31 回但馬中学校音楽科教育研究会講師 場所：養父市立八鹿青渓中学校 参加：音楽科教員 30 名	令和４年 10 月 令和４年 10 月	和田山地区の中学校が集まり学年合唱を披露するため、そのための合唱指導を行った。曲目は 『夏の日の贈り物』と『春よ来い』であった。 急に子どもの声が出るようになったと音楽の先生他、みなさんに喜んでいただいた。 テーマは「イメージを伝え合い、協働する喜びを感じ取る」であった。『時の旅人』の学年合唱（75 名）の授業を参観した後、指導助言を行った。また発声等合唱についての悩みがいろいろだされたため、それについても助言を行い、大変先生方に喜んでいただいた。
(31)　摂津市教育研究会合唱講習会　講師 対象：摂津市音楽部教員、小学校教員 45 名参加 場所：摂津市立味舌小学校	令和５年１月	摂津市教育研究会より依頼があり、音楽専科が不在の摂津市の先生方に合唱指導の方法の講演、ワークショップを行った。歌唱導入の基礎から合唱指導の方法まで、実際に先生方に動きを伴った歌唱法をお伝えした。みなさん大変積極的に参加され、また積極的に質問もいただき盛り上がった講習会となった。今後も継続的に先生方と関わる方向になった。
(32)　神戸大学附属中等教育学校研究会 音楽科授業指導助言　講師 対象：音楽教員、学生　20 名 場所：神戸大学附属中等教育学校	令和５年２月	全国に向けて行われた音楽科研究授業の中学３年生創作と表現の授業の指導助言を務めた。また、研究協議会において、今回授業者が使った協同学習について音楽科参会者のみなさんに講演を行った。 今回は 20 名定員であったが、締め切り前に定員の上限となり、盛況であった。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事　　項	年月日	概　　要
１　資格、免許 ・中学校教諭１級普通免許状（音楽） ・高等学校教諭２級普通免許状（音楽） ・中学校教諭専修免許状（音楽） ・高等学校教諭専修免許状（音楽）	 昭和 63 年３月 昭和 63 年３月 平成 30 年２月 平成 30 年２月	 昭 62 中１普め第 1438（京都府教育委員会） 昭 62 高２普め第 1466 号（京都府教育委員会） 平 29 中専修第 157 号（兵庫県教育委員会） 平 29 高専修第 214 号（兵庫県教育委員会）

２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者について特記事項 (1)音楽科主任として 神戸大学発達科学部附属住吉校舎 神戸大学附属住吉中学校 神戸大学附属中学校(住吉校舎) 神戸大学附属中等教育学校	平成 18 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	音楽教員として、毎年全国に向けて音楽科の研究授業の発信を行った。50 名以上の参会者を対象に音楽科の研究会の活性化を図った。また、校内においても、歌声の溢れる学校になるよう、生徒が主体的に取り組める合唱練習のスタイルを構築した。
(2)コーラス部顧問・吹奏楽部顧問として (指揮者兼指導者) 神戸大学発達科学部附属住吉校舎 神戸大学附属住吉中学校 神戸大学附属中学校(住吉校舎) 神戸大学附属中等教育学校	平成 18 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	平成 18 年度から 3 年間吹奏楽部の顧問を務め、神戸市吹奏楽コンクール金賞受賞、県大会銀賞受賞。近隣の催し物にも招待され、地域貢献につながった。 平成 19 年から 10 年間コーラス部の顧問を務めた。 コーラス部の受賞歴（平成 20 年以降） ・ＮＨＫ全国学校音楽コンクール全国大会中学校部門優良賞・金賞・銀賞受賞（合唱指揮・指導）計 11 回 ・ＮＨＫ全国学校音楽コンクール近畿大会中学校部門銀賞受賞（合唱指揮・指導）計 6 回 ・全日本合唱コンクール　全国大会中学校・高校部門・銀賞・金賞・最優秀賞受賞(合唱指揮・指導)計 3 回 ・兵庫県ボーカルアンサンブルコンテスト青少年の部最優秀賞、兵庫県教育委員会賞・兵庫県知事賞 神戸市教育長賞・金賞受賞(アンサンブル指揮・指導)計４回 ・神戸ユース賞受賞(コーラス部)（合唱指揮・指導）計 5 回 ・ＭＢＳコンクール西日本大会最優秀賞全国大会選出（合唱指揮・指導） ・全日本合唱コンクール関西大会高校部門　金賞受賞（合唱指導）計 2 回 ・声楽アンサンブルコンテスト全国大会中学・高校部門優良賞受賞、中学校部門金賞受賞(合唱指揮・指導)計 2 回
(3)学年主任として 神戸大学附属中等教育学校 神戸市立住吉中学校	平成 23 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	附属学校では、2 期生の学年主任、5 期生の副主任(新しく高校から来られた先生を支えるため)、8 期生の主任を務めた。その後転勤した神戸市立中学校でもすぐに 1 年生の主任を務めた。チーム学校の一員として学年をまとめ運営を行った。また、月 1 回の学年保護者会では必ず現状と今後の展望を伝え、授業参観や子ども観察の時間を設定した。その他、毎週学年便りを出し続け、保護者と連携を図った。
(4)神戸市音楽研究部研究委員として	平成 29 年度	平成 31 年度の近畿音楽研究大会発表に向けて、音楽の共通教材の研究を行った。小学校からつながる主体的な表現を生み出し、深い学びにつながる歌唱教材の指導法の提案をした。時数やカリキュラムの関係もあり、季節関係なく指導されている歌唱教材の扱いにも言及し、それが子どもの曲に対する思いにどの様な影響を与えるのかということも含め提案を行った。
(5) 頌栄短期大学　教務部委員として	平成 30 年 4 月 ～令和 2 年 3 月	新しく学部の 3 ポリシーを考え、決定した。また評価の可視化を目指し、ルーブリック等を提案した。教務ワーキンググループに所属し、短大生が主体的な研究活動ができる初年次教育のシラバスを作成した。また入学前課題と初年次教育の充実に向けて新しいカリキュラムを考案した。

(6) 頌栄短期大学　入試広報室委員として	平成30年4月～令和 2 年 3 月	オープンキャンパスの計画を含めた入試業務全般を行うと同時に、入試問題の問作も行った。また、入試の形態も来年度に向けて情報を集め学校の特色を生かしたものを考えた。
(7) 頌栄短期大学入試課題検討委員会ワーキンググループメンバーとして	平成31年4月～令和 2 年 3 月	学長任命による学部長を含む 5 人のメンバーの中の一人として、新しい入試制度に向けて、オープンキャンパスの在り方、学生募集の方法、教育内容の充実について意見を述べた。
(8) 頌栄短期大学ＳＤ委員会副委員長として	平成31年4月～令和 2 年 3 月	昨年度は年に 2 回しか行われなかった教職協働のＳＤ会議を月 1 回行うように企画、実践した。毎月それぞれの部署ごとでテーマを決め報告することを通し、お互いの仕事内容を知ることができ、より意思の疎通が図れるようになった。
(9)奈良学園大学広報課課員として	令和 2 年 4 月～現在に至る	人間教育学部における大学案内パンフレットの作成が滞りなく行われるように機能的に配置するなどの工夫を行い仕上げまで関わった。また、オープンキャンパス等も協働できるような仕組みを提案するなど積極的に広報活動に取り組んだ。
４．その他（声楽家・指揮者としての活動） (1)兵庫教育大学演奏会ソプラノ独唱で出演 宝塚ベガホール 観客 350 人	平成26年1月	演奏会出演学内オーデションを経て、ソプラノ独唱で日本歌曲とイタリア歌曲を宝塚ベガホールで披露した。曲目①秘めごと(トスティー作曲)②4 月(トスティー作曲)③『沙羅より』北秋の(信時潔作曲・清水重道作詞)　3 曲とも愛を歌った曲。①は秘めたる愛、②は愛の季節と呼びかける明るい愛、③は北国の秋の険しい山道の野辺に咲く名もない白い小さい花を、好きな相手になぞらえて呼ぶ歌である。
(2)頌栄短期大学　チャペルコンサート ソプラノ独唱　　観客 230 人	平成 30 年 11 月・令和元年 11 月	音楽礼拝としてソプラノ独唱を行った。作曲者の違うアベマリア 4 曲①カッチーニ②マスカーニ③バッハ/グノー④シューベルト、1 曲ずつ歌詞の解説や曲の特徴について述べ歌った。
⑶関西合唱連盟主催レーディースコーラスフェスィバル指揮 西宮芸術文化会館　観客 2500 人	平成31年2月	指導している団の指揮者として出演、曲目：①女声合唱組曲「悲しみの意味」星野富弘作詩、なかにしあかね作曲　②「はなみずき」マシコタツロウ作詞、一青窈作曲を披露した。
⑷兵庫県合唱祭　一般女声コーラスグループ指揮 伊丹ホール　観客1800 人	令和元年 6 月	兵庫県合唱連盟主催の兵庫県合唱祭において、一般部門のコーラスグループの指揮者として出演、①さくら　御木白日作詞、大熊崇子作曲②さくらさくら　日本古謡を披露した。
(5)盲導犬チャリティーコンサート 女声コーラス指揮　　ピフレホール 観客 350 人	令和 2 年 1 月	チャリティーコンサートに出演し、女声合唱の指揮をし、優秀賞受賞。曲目①『いのちの歌』MIYABI 作詞、松村崇継作曲②『Ave Maria』G.Caccini 作曲、江上孝則編曲を披露した。
(6)関西レディースコーラス　女声合唱団指揮 池田市アゼリア大ホール　観客 300 人	令和 2 年 2 月	関西の女声合唱団が集う合唱祭で合唱団を指揮。 ①『You Raise Me Up』Brendan Joseph Graham 作詞、Rolf Lovland 作曲②『The Rose』Amanda McBroom 作詞作曲を披露した。
(7)盲導犬チャリティーコンサート 女声コーラス指揮　ピフレホール 観客 250 人	令和 3 年 1 月	チャリティーコンサートに出演し、女声合唱の指揮をする。今回はコロナ禍の為は賞は一切なしでの発表会となった。曲目①『SWEET MEMORIES』松本隆作詞、大村雅朗作曲、石若雅弥編曲②『天使のウィンク』尾崎亜美

		作詞・作曲、石若雅弥編曲を披露した。
(8) 盲導犬チャリティーコンサート 女声コーラス指揮　ピフレホール 観客 350 人	令和 5 年 1 月 21 日	チャリティーコンサートに出演し、女声合唱の指揮を行った。今年度はコロナ禍ということもあり、賞は設けていなかったので賞は送られなかったが、演奏後に「すごい！」という声が観客から漏れ聞こえてきたほど好評であった。曲目：君が君に歌う歌　作詞：Elvis Woodstock　作曲：大島ミチル
(9) 神戸教員合唱団チャリティー演奏会 合唱団指揮　ピフレホール 観客 300 人	令和 5 年 2 月 25 日	兵庫県の幼稚園から大学までの教員の音楽研修の場として発足した合唱団。指揮者並びに指導者として、毎年 2 回、震災遺児・孤児対象のチャリティーコンサートや児童養護施設訪問を行っている。今回は『にほんのうた』作曲：寺嶋陸也　作詩：野口有情、北原白秋他。『群青』作曲：小田美樹、編曲：信長貴富を演奏。震災孤児支援のレインボーハウスに寄付。
(10) 関西レディ―スコーラスフェスティバル 合唱団エメロード指揮 場所：アクリエ姫路（大ホール） 観客：2000 人	令和 5 年 2 月 26 日	関西の女声合唱団が集う合唱祭で合唱団を指揮。 曲目:『君が君に歌う歌』 作詞:Elvis Woodstock 作曲：大島ミチル作詞作曲を披露した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(著書) (1)令和3年度中学校の音楽教科書指導書	共著	平成3年4月	教育芸術社 1年 2・3年上 2・3年下 の合唱曲の指導案と解説合計 12 頁執筆担当	(全体概要)新しい指導要領を受けて、令和3年度の中学校の音楽の教科書の曲より、教員が指導しやすいように学習指導案やポイントを解説。 (担当部分概要)　全12頁 平成 29 年度告示の指導要領を受けての初の中学校の教科書の指導書である。新しい3観点に沿って解説をいれ、合唱曲4曲の指導案と解説を作成した。 曲目：1年『Let`s Search For Tomorrow』 『君をのせて』 2・3年上『メッセージ』 2・3年下『きみとともに』
(学術論文) (3)生涯に渡り多様な音楽に親しむことのできる音楽力の育成	単著	平成26年3月	神戸大学附属中等教育学校住吉校舎 2013 年度 研究紀要 pp.94-105.	ベートーヴェンの交響曲第9番の背景や仕組みを理解した上で、比較鑑賞から協同学習の手法を用いて合唱表現を工夫する試みの音楽科指導法を論じた。混声四部合唱に対する関心・意欲と協同学習に関する質問紙調査、合唱表現に対する質問紙調査、相互視聴による技能評価を行い分析した。視点は①観点別役割分担を用いた協同学習による聴く力と表現力の変容②協同学習を用いた比較視聴による知覚・感受の結び付きの深まりとした。結果、実験群において聴き方・歌い方について明らかな有意差が見られた。
(4)音楽科 『歌声で表現しよう』	単著	平成27年2月	神戸大学附属中等教育学校授業研究会 2014年度　研究紀要 pp.53-58.	小・中の連携を考え、中学1年生でカノンと大循環コードを用いてミニキーボードを使って創作をし、声で歌い合わせる単元を提案した。カノンは小学校で既に学習しているが、コードについては学習していない。自分の既習の知識と新しく得る知識を組み合わせる創作活動は、音楽科教育における小・中の連続性を意識することにつながること、またカノンと循環コードを扱うことで聴くことに注意が集まり、音価・音高の聴く力の高まりが見られることを論じた。

(5) 生涯に渡り多様な音楽にした親しむことのできる音感の育成 ―創作アンサンブルにおける読譜力の高まりについて―	単著	平成27年4月	神戸大学附属中等教育学校住吉校舎 2014年度 研究紀要 pp. 77-84.	単元「カノンと大循環コードを使って創作」において，グループでコードを用いた創作活動に協同学習の手法を取り入れることにより生徒の読譜力を効果的に高めることを明らかにした。分析結果より、本実践による①創作アンサンブルにおける読譜力については、事前事後のアンケートにより高まりがみられ、創作ワークシートから音符の理解が深まったことが明確になった。
(6) 協同学習を用いた中学生の読譜力の育成に関する研究 ―カノンの創作活動への応用を通して― （修士論文）	単著	平成28年3月	兵庫教育大学 A4版 全105頁	グループでキーボードを用いてコードを用いた創作活動に取り組むことにより、中学生の読譜力を効果的に高めることをねらいとした。読譜力の高まりを見るために，事前事後の読譜力調査の検定を通して分析した。幼児期の音楽経験の有無や歌遊び等の音楽経験が、その後児童生徒の音楽を愛好する情意面に影響するのか分析を行った結果、関連性が見えてきた。この調査結果を基盤にして、音楽科の指導方法に工夫を加えた。
(7) カリキュラム開発と評価研究の方法 ―汎用的能力論と新学習指導要領の方向性を踏まえて―	単著	平成29年2月	神戸大学附属中等教育学校平成 28 年度授業研究会紀要 pp. 39-43.	小学校との共同研究より、小学校から中等教育学校まで子どもたちに大切にしてほしい音楽教科に関わる汎用的能力論について述べた。また中等においては、基礎期（1・2年）、充実期（3・4年）とし、それぞれの区分で音楽の4領域で学ぶことを述べた。小学校から中学校までの音楽家の教育目標や内容について整理した。
(8) 生涯に渡り多様な音楽に親しむことができる音感の育成 ―コミュニケーションを通して― （音楽科）	単著	平成29年4月	神戸大学附属中等教育学校2017年度紀要 pp. 103-115.	協同学習の利点を活用して生徒の読譜力を高めることを試みた。単元「カノンと大循環コードを使って創作」の実践でグループでコードを用いた創作活動に取り組nだ。事前の聴き取り調査を基に、グループの力が均等になるようにした。協同学習においてはグループ分けが授業内容に大きく左右すると明らかになった。
(9)「保育内容(表現)」における音楽表現を用いたアクティブ・ラーニングの取り組み	単著	平成30年3月	頌栄短期大学論叢1号 pp. 65-75.	「表現」を真摯に実行する授業方法としてアクティブ・ラーニングを取り入れた授業の試案である。音楽表現の詳細な場面設定から幼児の表現過程での喜びや工夫を気付かせる方法を、意見を交流させながら思考し，判断し，意思決定する授業を行った。主体的に学ぶコミュニケーション活動を重視した教育により，実際の保育現場においても同僚性を活かし課題解決することができる。
(10)「保育内容(表現)」における協同学習を用いた音楽表現	単著	平成30年8月	頌栄短期大学論叢2号 pp. 1-13.	アクティブ・ラーニングを取り入れた授業を実施した。幼児が表現できるための環境設定を協同学習のしくみを考え，話し合い，判断し，意思決定する授業を行う。このような主体的に学ぶ力を育てるためにコミュニケーション活動を重視した方法をとった，お互いが表現しやすい雰囲気が生まれた。そのことがより深く幼児の音楽表現を理解することに繋がったことを論じた。
(11)「保育者論」における協同学習によるアクティブ・ラーニングの実践	単著	平成31年3月	頌栄短期大学論叢3号 pp. 22-31.	「保育者論」の授業で，協同学習の手法を用いた授業を展開しながら，保育者の資質と技能を明らかにした。保育者として身につけるべき力を理解し，現在の力を自身で分析する。また、目指す保育者像に近づくために学生自ら、課題解決法を考え，計画を立て，そのための行動計画を他者の前で発表することで，学生の「対人関係能力」「他者と協働する力」「主体的に課題を発見し，解決に導く力」を育むことを目指した。
(12) 音楽表現につながる読譜力育成に関する研究 ～協同学習を用いたカノンの創作活動への応用を通して～	単著	平成31年3月	頌栄短期大学紀要第43巻 pp. 59-72.	協同学習の利点を活用して，コードを用いた創作活動に取り組むことで中学生の読譜力を効果的に高めると論じた。読譜力の高まりを評価するため，事前事後の読譜力調査を検定を通して分析を試みた。調査内容は，音価・音高・コード・長短和音の4項目とした。いずれの項目も能力の伸長は見られ，特にコードにおいて事前と事後の調査で有意差がでた。音価の方が音高よりもより早く獲得できることも明らかになった。
(13) 保育者・教員養成校にお	単著	令和元年8月	頌栄短期大学論叢4号	1年生の基礎演習の1年間の取り組みについて述べた。2年後を見

ける初年次教育の取り組み～基礎演習におけるレポート課題とその実践と評価について～			pp. 1-13.	据えて学内のポリシーに沿って、短期大学卒業時をイメージして、入学前課題の取り組みから１年生前期までで学生につけたい力を考え、可視化した。学生92名に対して、アクティブ・ラーニングで協同学習の手法を用いたゼミ形式も、教員14名全員で担当し、きめ細かな指導方法で臨んだ。
(14) 初等科音楽と中等科音楽の学習内容の連携に関する考察 ―新学習指導要領における教材「カノン」の活用―	単著	令和2年1月	奈良学園大学 人間教育、３(1) pp. 17-26	幼稚園・小学校・中学校の３つの学習指導要領の総則から見える連続性について、新指導要領の方向性と汎用的能力について現行指導要領との比較から論じた。その上で、小学校中学校別の新学習指導要領音楽の教科目標の整理、３つの柱別の学年目標項目による学年別の整理、領域の観点別による小学校と中学校の内容の整理を通して、小学校と中学校における連携の必要性と学習内容の連続性について、題材「カノン」の指導内容から提案した。
(15)　音楽教育における合唱指導の変遷―発声指導に着目して―	単著	令和2年12月	奈良学園大学　紀要 第13集 11頁	唱歌の始まりである明治期と現在の学校音楽教育までを、学習指導要領における歌唱技能の発声と合唱の変遷を辿った上で、学校教育における現在の合唱活動について考察したものである。また一番合唱活動が盛んであった頃1955年に出版された品川三郎の『児童発声』を『日本声楽発声学会関西支部学会誌』(2015年度)に基づき発声法の根幹をなす歌唱（合唱）呼吸について妥当性を検討した。
(16) 小学校・中学校音楽科の歌唱(合唱)授業の一考察 ―歌唱技能に関する意識と実態―	単著	令和3年6月	全国大学音楽教育学会　関西地区学会誌 ≪第2号≫ 6頁	コロナ前後における歌唱指導の変化についてのアンケート調査より、小学校・中学校音楽教員がコロナ前まで子どもの発達段階を考えて、どのように歌唱に関する指導を行っていたのか、またコロナ禍での現行の指導がコロナ前に比べてどのように変化しているのかを明らかにした。また現在の中学生が小学校、中学校でどのような歌唱指導を受けてきているのかも明らかになった。これらから、まず腹式呼吸法の会得と指導ができることや発達段階に合わせた歌唱指導のための声掛けのバリエーションを多く持つことを含めた変声期における歌唱指導の重要性が明らかになった。
(17) 新学習指導要領における音楽科検定教科書の研究 ―「主体的・対話的で深い学び」に着目して―	単著	令和3年12月	奈良学園大学　紀要 第14集 10頁	2社の検定教科書では，生徒自身が身に付けることができる学力を確かめながら主体的に取り組むことができる工夫や，学びのねらいや学習内容を分かり易く俯瞰できるような構成になっていた。また生徒の興味を喚起し，関心を高める工夫や学びの手順，展開や工夫の視点を具体的に示し，協働的・対話的な活動を見据えて，分かり易く進んで学び合う活動ができるようになっており，どのように生徒が学ぶのかを主眼とした生徒自らが学習に取り組みやすい教科書の内容に発展していることが分かった。
(18)　中学校音楽鑑賞領域における体験型教材の研究 ―検定教科書掲載曲を用いて―	単著	令和5年3月	奈良学園大学　紀要 第15集 10頁	現行の鑑賞授業の手法に、アメリカでブース(2016)が提唱するティーチング・アーティスト(以下ＴＡ)が教育のために用いている体験型音楽鑑賞の考え方から久保田(2019)が示したエントリーポイントやアクティビティを活用、融合させた音楽科授業の提案を行った。体験型教材として扱う楽曲は、久保田(2019)『新しい音楽鑑賞～知識から体験へ～』第８章「室内楽」に掲載されているヴィヴァルディの『四季』から「春」の第一楽章とした。
その他（教材作成） （1）教育実習の手引き	単著	平成25年6月	神戸大学附属住吉中学校音楽科発行	従来から学校としての実習の手引きは存在したが、音楽科に特化した実習の手引きを、音楽家の主任として新たに作成した。教育実習の意義と、実習生として守るべき心得、音楽家指導案の作成事例と授業評価の方法について説明した。さらに学級担任として、生徒理解の方法等について具体的に説明した冊子。
（その他　依頼原稿） (1)「Ｗｅ　ｌｏｖｅ　ミュージッ	単著	平成25年8月	『教育音楽』９月号	全日本音楽研究大会全国大会(兵庫県大会)研究演奏についての附

ク！」神戸大学附属中等教育学校住吉校舎コーラス部&森瀬智子教諭　全日本音楽研究大会全国大会より			（音楽之友社） pp. 14-17.	属校における呼吸法から始まる声作りを含めた楽曲への取り組みの紹介と最大14声部に分かれる「会津磐梯山」の女声合唱の演奏について記述した。また、実際研究大会で会場の皆さんと一緒に声を出しながら行った呼吸法・発声法についても具体的に述べている。また、日々や年間の活動についても報告した。
(2) 特集　授業の始めの5分でできる発声練習ウォーミングアップ呼吸法　呼吸が良い声への鍵を握る	単著	平成26年5月	『教育音楽』6月号 （音楽之友社） pp. 32-33.	授業の最初に短時間でしかも継続できる呼吸法と発声指導の紹介した。呼吸は、実際写真によって、どの様な動きで、腹横筋や腹直筋、肋間筋などどこの筋肉をいかに使えばよいのか、またその効果的なトレーニング方法。そして理論を知って実践する大切さも述べた。見えない身体の中を映像の動画で可視化することで、一つひとつの動きに敏感になり、短時間でも成果が上がることを解説した。
(3) 特集　生徒の歌声を聴く力「聴く力をレベルアップするために」	単著	平成27年4月	『教育音楽』5月号 （音楽之友社） pp. 32-33.	特集　増やそう！歌唱指導で使える言葉　本当に使える言葉かけ「楽しい気分になる～夢の国の住人を使って～」において、歌唱指導の際にどのような言葉を使うと子どもの声が変化するのかをについて事例紹介と説明を行った。また、体の使い方を知ることで、自然な声で歌えることについても言及。どのような言葉、音色で声をかけると良いのか、またその継続の必要性についても音感を育てる視点に立って解説した。
(4) 特集　校内合唱コンクールに向けてパート練習をレベルアップ 「理想的なパート練習とは」	単著	平成27年8月	『教育音楽』9月号 （音楽之友社） pp. 29-36.	混声合唱練習において、主体的に学生・生徒・児童を対象とした協同学習を用いたパート練習の具体的手法を紹介した。ピアノを弾ける者がいない場合も言及。そしてその方法を解説。また、主体的に取り組むことで汎用的能力としてのどのような力がつくのか、そしてどのような表現力が向上するのかについて述べた。生徒をやる気にさせる教師の言葉かけ等、すぐ授業で使える方法を述べた。
(5) 特集　表現力アップ！ 合唱曲アナリーゼ大作戦 「指導に生かすアナリーゼ」	単著	平成27年12月	『教育音楽』1月号 （音楽之友社） pp. 36-38.	小・中学校の生徒に、そして先生方に人気曲である『時を越えて』柳野知子作詞・作曲の合唱曲分析方法を紹介。まず、曲の構造を知ること。曲の鍵は伴奏にあり、伴奏を見ると、和音なのか、分散和音なのか、どの音符が多いかで分析し、その音楽を歌に生かすことで表現力が豊かになる例を紹介。伴奏の弾き方も言及した。
(13) 特集「困った時の発声指導」について	単著	平成28年4月	『教育音楽』5月号 （音楽之友社） pp. 27	困った時の発声指導の解決策として、うたう声が小さい時のアプローチや指導について解説。また、子どもの声のために指導者が配慮すべきこと。幼児から児童生徒までを対象に教える側の理解について述べた。その知っておくべきことを使ってできる、授業ですぐに使える発声指導方法も紹介し、すぐできる指導を考えて述べた。
(6) 短時間で上達する 合唱指導	単著	平成28年9月	『教育音楽』10月号 （音楽之友社） pp. 29-30.	限られた短い時間で合唱のパート練習を紹介した。パートリーダーを育てること、パートリーダーが先生となって相談しながら自分たちの音楽を創っていくこと。音楽を楽しく表現する上で、子どもが主体的に表現できる方法や小中高等学校におけるクラスでの合唱指導の上で大切なパートリーダーの育成方法について述べた。
(7) 特集　卒業の歌を磨く「今からでも間に合う！ 卒業ソングの攻略法」	単著	平成29年1月	『教育音楽』2月号 （音楽之友社） pp. 40-43.	小学校や中学校で使える合唱曲『奇跡』若松歓作詞・作曲『前へ！』ruriko作詞・作曲の2曲の紹介と楽曲分析。指導ポイントを解説。また、ピアノで伴奏する際に気を付けるべきこと、やどのように伴奏にアプローチすればよいのかなど、伴奏から曲を読み解き、表現する方法を解説し、注意すべき点についても言及した。
(8) とっておき！私のお役立ちソフト	単著	平成29年8月	『教育音楽』9月号 （音楽之友社）	「レッツパー練4」CDを紹介。ポップスを編曲した合唱曲など、小学校・中学校で実際CDを用いて聞きながら練習をし、即歌う

			pp. 74	ことができるCDを紹介。子どもから大人までが幅広く使えるレパートリー曲が集められており、パートの音取りだけに活用するのではない、パート別CDの活用法の可能性についても解説している。小学校・中学校・高等学校の音楽会等でも活用できるものであることを述べている。
(学会発表等) (1)「第 9 に迫る」 授業・提案	—	平成 26 年 2 月	神戸大学附属中等教育学校教育研究協議会	生涯にわたり多様な音楽に親しむ人間力の育成を目指し、音楽史・鑑賞・合唱を組み合わせた単元「第 9 に迫る」を作った。第九の背景とベートーヴェンと時代について協同学習で学んだ後、第九の比較鑑賞を通して様々な曲の表現方法を理解した。最後に原語で第九の部分合唱を行った。比較鑑賞を通して生徒の表現力が高まることが分かった。
(2)「古から今へ、歌人になろう」 授業・提案	—	平成 27 年 2 月	神戸大学附属中等教育学校 神戸市研究部会創作領域研究協議会	5 音音階を使って箏を用いて小集団で作曲を行う。生徒が作った短歌に歌をつける活動として、①日本音階の中で沖縄音階・律音階・都音階・民謡音階のどれかを選択②曲の形態、長唄風、歌唱独唱風、アカペラ合唱風、ポップス風の中からそれぞれ選択して班の短歌に合った曲を箏を使って創作する活動の提案授業。箏の譜面を用いたため、楽譜に苦手意識のある生徒も取り組むことができた。
(3)「カノンと大循環コードを用いた創作Ⅰ」授業・提案	—	平成 27 年 2 月	神戸大学附属中等教育学校	中等教育学校 1 年生の生徒の読譜力を育成する研究授業と実践発表を行った。その中で協同学習を用いた創作アンサンブルにおける読譜力の高まりおよび情意面の変容を分析した。また、高校 3 年の生徒に対して音感力をつけるために継続的にこの単元に取り組ませたところ、音程感、リズム感の向上がともに見られた。
(4)「カノンと大循環コードを使って創作Ⅱ」授業・提案	—	平成 29 年 2 月	神戸大学附属中等教育学校	1 年生の創作単元研究 3 年目の発表である。大循環コードとカノンを用いるが、経過音を入れても良い、という課題の条件を増やした。このことによって、より多様な旋律を創作することが可能になり、前回よりも生徒の取り組みも活発になった。このような課題の条件の内容が生徒の音選びの力をつけることになることの提案を行った。
(5)「子どもの主体性を育む協同学習について」　提案	—	平成 29 年 10 月	神戸市立住吉中学校人権教育東灘ブロック研修会 神戸市教育委員会主催	幼・小・中・高の教員対象に実践報告とワークショップを行った。中学 1 年生に 7 か月様々な授業で協同学習の手法を用いたことによる生徒の変容と活動内容について報告した。結果、自己肯定感が高まり、活動的、協働的になったが、それはどのような仕組みを用いることで力がついてきたのか、パワーポイントで実際の映像を用いて説明を行った。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和 5 年 3 月 31 日

氏名　　山田　明広

研究分野	研究内容のキーワード
哲学、文学、文化人類学	漢文学、中国哲学、中国文学、文化人類学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 （１）画像・映像資料を活用した分かりやすい授業の実践	平成26年4月1日～平成30年3月31日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「現代アジアと日本 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月に担当した「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）において、本人が現地で撮影した写真および映像を用いて中国・台湾の宗教事象を中心とする諸文化を解説することにより、学生が授業内容について理解しやすくなっているとともに、興味を持つようになった。
（２）リアクションペーパー使用による授業改善の工夫	平成26年4月1日～平成 30 年 3 月 31 日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「現代アジアと日本 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月にかけて担当した「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）において、花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 30 年 3 月にかけて担当した「中国文学史Ⅰ」（講義科目、１年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および「中国文学史Ⅱ」（講義科目、１年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）において、適宜リアクションペーパーを使用して受講生から授業に対する感想・要望・質問を聞き、授業改善に生かした。また、寄せられた質問については、後の授業にて可能な限り回答するなど、学生との意思疎通を図った。

（３）効果的な漢文教育法の実践	平成26年4月1日～現在に至る	花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成26年4月～平成30年3月20日に担当した「漢文学Ⅰ」（講義科目、１年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および「漢文学Ⅱ」（講義科目、１年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、また、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科非常勤講師、同大学同学部同学科の特任講師、同大学同学部同学科の専任講師および同大学同学部同学科の准教授として平成28年4月～現在まで担当している「漢文学入門」（専門科目、２年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および「漢文学Ⅰ」（専門科目、２年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、漢文法および漢文句法を受講生に一通り網羅的に解説し演習問題を解かせて理解・定着させた上で漢文の文章読解を行わせることにより、受講生が比較的正確で安定的に漢文を読解することが可能となった。
（４）パワーポイントの効果的活用による分かりやすい授業の実践	平成26年11月27日・平成27年11月30日・平成28年4月～平成30年3月31日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）において、平成 28 年 9 月～平成 30 年 3 月に担当した「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）の全講義において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）の全講義において、パワーポイントで作成したスライドを全面的に活用することにより、学生にとって視覚的に見やすくまた理解しやすい授業を実践している。その結果、奈良県立医科大学の講義において実施したリアクションペーパーにおいては、見やすく分かりやすいといった類の意見が多数寄せられた。
（５）フィールドワークを取り入れた効果的な授業の実践	平成30年4月1日～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科専任講師および同大学同学部同学科准教授として平成 30 年４月～現在まで担当している「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（専門科目、３年次配当、通年、必修４単位）のうち、「中華圏の祭祀文化」に関する授業において、先に中華圏の廟と祭神、祭祀に関して講義を行い、その後、神戸および横浜の関帝廟の訪問や横浜中華街の関帝誕という祭りの見学を行うなど現地調査を行うなど実際に中華圏の廟や祭りの様子を目にすることで、学生の授業内容に対する理解度が大幅に高まった。
（６）問題解決能力を養わせるための授業の実践	令和元年4月1日～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科専任講師および同大学同学部同学科准教授として令和元年４月～現在まで担当している「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（専門科目、４年次配当、通年、必修４単位）において、前年度に基礎的な知識を講義し、その上で大まかなテーマを与えて受講生に順番に発表させ、そして、全体で討論させることにより、受講生に自ら問題を発見して考え、調査し、解決するという能力を養わせた。

２　作成した教科書，教材 （１）オリジナルプリント教材の作成	平成23年4月1日 ～現在に至る	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 23 年 4 月～令和 5 年 3 月まで担当した「中国思想文化論 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「中国思想文化論 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 24 年 4 月～平成 25 年 9 月に担当した「漢字・漢文論１」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）、平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「現代アジアと日本 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月に担当した「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）において、花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 30 年 3 月に担当した「中国文学史Ⅰ」（講義科目、１年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および「中国文学史Ⅱ」（講義科目、１年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）において、また、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科専任講師および同大学同学部同学科准教授として令和元年４月～現在まで担当している「漢文学Ⅱ」（専門科目、２年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において毎時間、事前に要点をまとめたオリジナルのプリントを作成し、そのプリントを使用して講義することで、学生の理解に資している。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 （１）関西大学文学部総合人文学科平成26年度春学期における学生による授業評価アンケート	平成 26 年 9 月	「中国思想文化論 1」および「現代アジアと日本 1」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、いずれの科目もほとんどの項目において評価平均が 4.0（満点 5.0）以上であった。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、「中国思想文化論 1」では評価平均が 4.1 に、「現代アジアと日本 2」では評価平均が 4.1 となり、いずれも全学の平均である 4.0 を超えることができた。
（２）関西大学文学部総合人文学科平成26年度秋学期における学生による授業評価アンケート	平成 27 年 3 月	「中国思想文化論 2」および「現代アジアと日本 2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目についての評価平均が「中国思想文化論 2」では 4.1 に、「現代アジアと日本 2」では 4.2 となり、いずれの科目においても全学の平均 4.0 を超えることができた。
（３）関西大学文学部総合人文学科平成27年度春学期における学生による授業評価アンケート	平成 27 年 9 月	「中国思想文化論 1」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、多くの項目においてその評価平均が全学平均および文学部平均を超えた。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、評価平均が 4.2 となり、全学平均 4.0 および文学部平均 4.1 を超えることができた。

（4）関西大学文学部総合人文学科平成27年度秋学期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「中国思想文化論 2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目においてその評価平均が全学平均および文学部平均を超えていた。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、評価平均が 4.2 となり、全学平均 4.0 および文学部平均 4.1 を超えることができた。
（5）近畿大学法学部平成27年度後期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「中国語総合 2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「この教員の授業を 10 点法で評価して下さい」という項目についての平均値が 8.6 となり、全科目平均の 8.3 を超えることができた。また、「とても分かりやすかった」や「説明が丁寧であった」といった類のコメントが多数寄せられるなど、高い評価が得られた。
（6）花園大学文学部日本文学科平成27年度後期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「漢文学Ⅱ」および「中国文学史Ⅱ」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、いずれの科目もほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。特に、「先生の授業に対する取り組みに熱意や情熱を感じられますか」という項目については、前者が 4.0（満点 5.0）、後者が 4.28 といずれも比較的高い評価が得られた。
（7）奈良県立医科大学医学部看護学科平成27年度における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「中国語」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「総合的に満足できる授業であった」という項目についての平均値が 4.57（満点 5.0）となり、全体平均 4.1 を大きく超えるなど、高い評価が得られた。
（8）奈良教育大学教育学部教育学科平成28年度前期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 9 月	「中国語」および「漢文学特論」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、両科目ともほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。また「わかりやすい授業であった」といった類のコメントが多数寄せられるなど、高い評価が得られた。
（9）奈良県立医科大学医学部看護学科平成28年度における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 9 月	「アジア文化論」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。特に、「授業を受けることでテーマについてより興味・関心を持てた」および「総合的に満足できる授業であった」という項目の平均値がともに 4.0 近くなるなど比較的高い評価が得られた。
(10) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科平成29年度における学生による授業評価アンケート	平成 29 年 9 月	「漢文学入門」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目において当該科目の平均値が全体の平均値を超えることができた。特に、「授業に対する熱意や意欲」および「有効な時間の使い方」の項目について、4 段階中 3.6 という高い評価が得られ、全体平均を大きく上回った。そして、その結果、総合評価でも 4 段階中 3.5 という全体平均を大きく上回る高評価が得られた。
(11) 関西学院大学社会学部平成29年度春学期における学生による授業評価アンケート	平成 29 年 9 月	「中国語Ⅰ」および「中国語Ⅲ」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目においてその評価平均が全学平均および学部平均を超えていた。特に、「あなたは、全体としてこの授業に満足していますか」という項目については、前者が 4.6、後者が 4.9（いずれも満点 5.0）といずれもかなり高い評価が得られた。

(12) 奈良教育大学教育学部教育学科平成30年度後期における学生による授業評価アンケート	平成30年3月	「漢文学特論」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。特に、「あなたはこの授業での学びにどの程度満足しましたか」という項目については、4段階中3.61という高い評価が得られ、全体平均を大きく上回った。
(13) 奈良学園大学令和2年度前期における学生による授業評価アンケート	令和2年9月	「漢文学入門」および「漢文学特論」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目において学生による評価の平均値が5段階中4.5を超えていた。特に、「この授業の先生の説明は分かりやすかった」および「この授業は総合的にみて満足のいくものだった」について学生による評価の平均値が5段階中4.5を超えていたなど、かなり高い評価が得られた。
(14) 関西大学文学部総合人文学科令和2年度秋学期における学生による授業評価アンケート	令和3年2月	「中国思想文化論2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、多くの項目において学生による評価の平均が全学平均を超えていた。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、評価平均が4.4となり、全学平均4.2を超えていたなど、かなり高い評価が得られた。
(15) 関西学院大学社会学部令和3年度春学期における学生による授業評価アンケート	令和3年9月	「中国語Ⅰ」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目においてその評価平均が全学平均および学部平均を超えていた。特に、「あなたはこの授業を通して、卒業までに求められる資質・能力を向上できたと思いますか」という項目については4.5、また「あなたは、全体としてこの授業に満足していますか」という項目については4.4（いずれも満点5.0）となるなどかなり高い評価が得られた。

４　実務の経験を有する者についての特記事項 〔社会人対象の講演〕 （１）台湾の道教の現状と道教儀礼について	平成27年9月11日	大阪日中友好協会の支援の下で設立された「くらしの智恵：道教に親しむ会」の第3回会合において、当会の要請により一般向けに行った講演。まず、中国道教の歴史について触れることで道教とはいかなる宗教か紹介した後、台湾では現在いかなる道教信仰が行われているか儀礼を中心に説明した。
（２）奈良学園大学公開講座「王寺町りーべるカレッジ」2019年度第3回における講演	令和元年6月29日	奈良学園大学が王寺町と提携して毎年行っている公開講座「王寺町りーべるカレッジ」の 2019 年度第 3 回において講師を務め、「台湾の疫病払いの祭り 」というテーマにて主として台湾南部で疫病を払うために行われる王醮という祭りについての講演を行った。まず、祭りが行われる廟について説明し、廟で行われ種々の活動について説明した後、王醮とはいかなる祭りであり、その中心となる王爺という神はどのような神で、どのような道教および民間信仰の儀礼や活動が行われるのか、写真や映像を用いて解説した。
（３）奈良学園公開文化講座第 47 回における講演	令和 3 年 7 月 31 日	学校法人奈良学園が所有している奈良学園セミナーハウス志賀直哉旧居において毎年開催されている奈良学園公開文化講座の第 47 回にて講師を務め、「中華圏の「お盆」の行事―台湾の現状とその起源を中心に」というテーマで講演を行った。まず、「お盆」に関連する用語の意味や使われ方について日本と中華圏とを比較し、その後、日本のお盆の現状について確認した上で、台湾を中心に中華圏のお盆に当たる鬼月の行事や儀式等の現状について解説した。その後、中華圏のお盆の起源として「中元」と「盂蘭盆」と「放焰口」といった三つの行事・儀式を取り上げ、これらがいかに変遷・習合することで現在の中華圏のお盆が形成されたかを解説した。
（４）天理参考館第 90 回企画展「館蔵資料から見る神仙思想と道教」の記念講演会での講演	令和 4 年 8 月 28 日	天理参考館で令和 4 年 7 月 13 日～9 月 5 日に行われた第 90 回企画展「館蔵資料から見る神仙思想と道教」の第２回目の記念講演会において講師を務め、「道教の不可思議な世界―仙人から疫病払いの儀式まで―」というテーマにて講演を行った。まず、道教に見られる不可思議な要素のうち神仙になるための煉丹術を取り上げ、その歴史的変遷と意義、具体的実践法について解説した。続いて、罪を滅し功徳を積むことで神仙になろうとする斎醮儀礼、中でもとりわけ現在の疫病払いの儀式について台湾の事例をもとに解説し、これらを通して道士が神仙になる方法について概観した。
（５）朝日カルチャーセンター中ノ島教室「怪異学入門 2022」における講演	令和 4 年 10 月 23 日	朝日カルチャーセンター中ノ島教室の 2022 年度の講座「怪異学入門 2022」（10 月～12 月）の第１回目の講座において講師を務め、「台湾の道教式死者供養の儀礼」というテーマにて講演を行った。まず、死者供養の儀礼の担い手である道士について説明し、続いて死者供養の儀礼と喪葬儀礼との関係性について説明し、その上で道教式死者供養の儀礼の構成や内容はいかなるものであるのか、現地調査により得た事例を用いて説明することで、台湾の道教式死者供養の儀礼の全体像を概観した。

〔展覧会の解説の翻訳〕 （１）「道教信仰文化特展」の解説の日本語訳	平成28年11月5日～平成29年2月19日	台南市文化局主催により台湾台南市鄭成功文物館にて「道法萬象―道教信仰文化特展」が行われ、そこで使用された李豊楙教授による中国語の解説文をすべて日本語に翻訳し、その結果、日本語による解説文として使用された。
〔海外研修〕 （１）「台湾研修」プログラムの提案企画	令和元年5月29日～現在に至る	奈良学園大学の学生向けの「台湾研修」を同大学学長に提案したところ、学長の支持を得、目下、学長支援の下、松井典夫教授と共同でプログラム案を企画している。本研修は、語学（中国語）習得に重きを置くのではなく、教師として必要な資質を身に着けるという点に重きを置いており、従来の海外研修とは内容が大きくことなるものにする予定である。すでに受け入れ先候補であり、同大学の提携校である屏東科技大学を訪問してこの点について伝えており、了承を得ておいる。現在、同大学の支援も得ながら、プログラムを企画している。
（２）令和元年度カンボジア短期研修プログラムにおける引率業務	令和2年2月11日～令和2年2月18日	奈良学園大学社会・国際連携センターが令和2年2月11日～18日に実施した学生向けの「カンボジア短期研修」において引率業務を行った。カンボジアメコン大学との交流のほか、日本語学校での学生による授業体験、スラム街での交流などといったプログラムを実施し、副次的立場からではあったものの、学生に対して指導を行った。
（３）令和２年度カンボジア短期研修プログラム（オンライン交流）における司会業務	令和3年2月18日	奈良学園大学とその提携校であるカンボジア・メコン大学との間で行われた学生向けのオンライン交流会（奈良学園大学社会・国際連携センター主催）において司会業務を務めた。また、事前準備のための研修に参加して学生の指導を行った。
（４）令和３、４年度奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流（オンライン）プログラムにおける企画・学生指導・司会進行業務	令和3年4月9日～現在に至る	奈良学園大学とその提携校である中国・蘇州科技大学との間で令和3年度より行われている学生向けのオンライン交流会（奈良学園大学社会・国際連携センター主催）において、企画、蘇州科技大学側の担当教員との間の連絡、交流会当日までの参加学生に対する指導、交流会当日の司会・進行業務、１週間後に実施する振り返り会における学生の指導、年度末発行の国際交流記録文集掲載用の報告文の作成および学生作成の報告文の添削指導等、本交流会に関する多くの業務を主導的立場にて行っている。

〔ＦＤ研修会における報告〕 （１）奈良学園大学人間教育学部ＦＤ研修会における報告	平成30年8月3日	奈良学園大学人間教育学部平成30年度第２回ＦＤ研修会において、完全講義型の授業とアクティブラーニング型の授業とでは学生の授業内容理解にどのような相違が見られるかについて、松井典夫氏および岡村季光氏と共同で報告を行った。岡村季光氏が両タイプの授業を実施し、各授業の最後に行った授業内容を問う小テストの結果を比較するという方法で調査し、その結果を報告した。調査の結果、完全講義型の授業とアクティブラーニング型の授業とでは学生の理解度に大差は見られないという結論に達するとともに、アクティブラーニングを効果的に行うには、ある程度の知識の習得が必要であると提言した。
〔留学生の指導〕 （１）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科特別聴講生の課題研究指導	平成29年6月 ～平成31年2月	平成29年度は蘇州科技大学から来た特別聴講生１名の「日本怪談文化について―『夢十夜』を中心に―」というテーマの課題研究の作成、および東方技術学院から来た特別聴講生１名の「京極夏彦作品から中日両国のミステリー小説の発展を窺い見る」というテーマの課題研究の作成を指導した。また、平成30年度には、蘇州科技大学から来た特別聴講生１名の「中日禅宗寺院の比較」というテーマの課題研究の作成を指導した。
５　その他 〔科目担当実績〕 （１）近畿大学における初級中国語に関する講義	平成21年4月1日 ～平成28年9月15日	近畿大学経済学部国際経済学科の非常勤講師として専門科目「基礎中国語Ⅰ,Ⅱ」（平成21年4月～平成）を、経営学部・法学部・理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として外国語科目「中国語総合1,2」（経営学部：平成22年4月～平成23年3月、法学部：平成24年4月～現在、理工学部：平成28年4月～現在）を担当し、大学1年次生に対して初級中国語を講義した。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。
（２）近畿大学における中級中国語に関する講義	平成22年4月1日 ～平成28年3月31日	近畿大学生物理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として平成22年4月～平成23年3月に「中国語応用Ⅰ,Ⅱ」を、理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として平成23年4月～平成24年3月に「中国語総合3,4」を、文芸学部基礎教育部門非常勤講師として平成23年4月～平成28年3月に「中国語総合C,D」を担当し、2年次以上の学生に対して中級中国語を講義した。生物理工学部には中国語会話に関する授業がないため、「中国語応用Ⅰ,Ⅱ」では聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするといった授業を行ったが、他の学部には別に「中国語コミュニケーション」という中国語会話に関する授業が存在するため、「中国語総合3,4」および「中国語総合C,D」では、読む・書くといった能力の向上に焦点を絞り、教科書と演習問題を中心とした授業を行った。

（３）近畿大学における中国語会話に関する講義	平成23年4月1日～平成28年9月15日	近畿大学経済学部国際経済学科の非常勤講師として外国語科目「中国語コミュニケーション1,2」を担当し、中国語会話に関する講義を行った。中国語の基本文法の確認を行ってから、その文法事項を会話の上でどのように用いるか講義するなど、種々の表現が可能となるような授業を行っている。また、教科書のみならずリスニング教材を用いるなど、「話す」だけでなく「聞く」という方面の能力も身に付くよう工夫した。
（４）関西大学における中国思想史に関する講義	平成23年4月1日～令和5年3月31日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成23年4月～令和5年3月まで「中国思想文化論1,2」を担当し、中国思想史に関する講義を行った。先秦から明代までの中国思想・宗教について儒教・仏教・道教の三教を基軸に通史的に講義しているが、思想・宗教のみならずその背景にある社会的文化的事象についても説明するなどして、受講生が理解しやすくなるよう工夫した。
（５）関西大学における漢字論・漢文講読に関する講義	平成24年4月1日～平成26年3月31日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として「漢字・漢文論1,2」を担当し、前半は漢文を構成する漢字の歴史や変遷について講義し、後半は漢文の作品の講読を行った。漢文作品の講読では、訓点付きの漢文の読解から始めて次第に訓点のない漢文の読解へと移行するなど、無理なく高度な漢文の読解ができるよう工夫した。
（６）奈良県立医科大学における初級中国語の講義	平成24年4月1日～平成28年3月31日	奈良県立医科大学医学部看護学科非常勤講師として「中国語」を担当し、大学1年次生に対して初級中国語を講義した。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。
（７）奈良教育大学における初級中国語の講義	平成24年4月1日～平成28年9月30日	奈良教育大学教育学部教育学科非常勤講師として「中国語」を担当し、大学1年次生に対して初級中国語を講義した。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。
（８）関西大学における現代の東アジアの宗教文化に関する講義	平成26年4月1日～平成30年3月20日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成26年4月～平成28年3月に「現代アジアと日本1,2」を、平成28年4月～平成30年3月に「アジアの伝統文化と現代Ⅰ,Ⅱ」を担当し、主として現代の東アジアの宗教文化に関する講義を行った。本人が現地調査を行って収集した画像・映像資料を用いたり講義のテーマに関わる映画を見せたりして、受講生の興味を喚起できるよう工夫した。授業において行うリアクションペーパーには、画像・映像資料が用いられていて分かりやすいとの反響が多数見られた。

（９）花園大学における漢文学に関する講義	平成26年4月1日～平成30年3月20日	花園大学文学部日本文学科非常勤講師として、平成26年4月～現在にかけて「漢文学Ⅰ,Ⅱ」を、平成26年9月～平成27年3月に「漢文学基礎」（後期のみ開講科目）を担当し、漢文読解に関する講義を行った。前者においては、漢文法・語法を網羅的に解説して後、訓点付きの漢文の作品の講読を行った。後者においては、訓点付きの漢文の作品の読解から開始し、次第に訓点のない漢文の作品の読解へと移っていくなど、読解中心の授業を行った。
（１０）花園大学における中国文学史に関する講義	平成26年4月1日～平成30年3月20日	花園大学文学部日本文学科非常勤講師として「中国文学史Ⅰ,Ⅱ」を担当し、中国文学史に関する講義を行った。先秦から明代までの中国文学の歴史について、毎回テーマを定めできる限り作品にも触れつつ通史的に概観した。毎回、ただテーマについて説明を行うだけではなく、その背後にある歴史的・社会的・文化的事象についても触れ、その作品や事象が起こった原因と結果についても考えていくよう工夫した。
（１１）奈良学園大学における漢文学に関する講義	平成28年4月1日～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科非常勤講師（平成28年4月～8月）、同大学同学部同学科特任講師（平成28年9月～平成30年3月）、同大学同学部同学科専任講師（平成30年度4月～令和2年3月）および同大学同学部同学科准教授（令和2年4月～現在）として、前期に「漢文学入門」、「漢文学Ⅱ」および「漢文学特論」を、後期に「漢文学Ⅰ」および「語学・文学総合演習Ⅲ（漢文学）」を担当している。前期の「漢文学入門」においては、訓点付きの漢文を独力で読むための基礎学力を養生することを目標として、漢文の基礎事項・文法を講義し、「漢文学Ⅱ」においては、「漢文学Ⅰ」から一歩進めて抽象的・思想的内容を含んだ文章でも主体的に読み進めることができることを目標に、難易度の高い散文作品をその背景なども説明しつつ読解し、また、「漢文学特論」においては、教員採用試験に向けて、分量が多く難解な文章を送り仮名なしで読解することに挑戦している。後期の「漢文学Ⅰ」においては、比較的平易な訓点付きの漢文の作品の講読し、「語学・文学総合演習Ⅲ（漢文学）」においては、「漢文学Ⅱ」よりもさらに進めて、返り点のない文章の読解を試みている。いずれの科目も教員免許取得のための科目であるため、いかに漢文を教えるべきかといった漢文教育という視点からの講義も行っている。
（１２）奈良県立医科大学におけるアジアの文化に関する講義	平成28年4月1日～平成28年9月20日	奈良県立医科大学医学部教養教育部門非常勤講師として「アジア文化論」（リレー講義、前期のみ開講）を担当し、本人は中華文化圏の諸文化について講義している。中華文化圏の地理と言語・飲食・年中行事・祭祀・喪葬のそれぞれをテーマとする５回に渡る授業を３クラスにおいて講義している。本人が現地調査を行って収集した画像・映像資料を用いるなど受講生が少しでも興味を持てるよう工夫した。

（１３）奈良教育大学における中国文学史に関する講義	平成28年4月1日～平成28年9月30日・平成30年10月1日～平成31年3月31日	奈良教育大学教育学部教育学科非常勤講師として「漢文学特講」（集中講義）を担当し、中国文学史に関する講義を行った。先秦から現代までの中国文学および芸能の歴史について、可能な限り作品にも触れつつ通史的に概観したが、特に中国の芸能の歴史については、画像・映像資料を用いるなどして、受講生にとって分かりやすく興味を持ちやすい授業となるよう工夫した。
（１４）奈良学園大学における教職者として必要な表現力に関する講義	平成28年9月20日～令和3年3月31日	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科非常勤講師（平成28年4月～8月）、同大学同学部同学科特任講師（平成28年9月～平成30年3月）、同大学同学部同学科専任講師（平成30年度4月～令和2年3月）および同大学同学部同学科准教授（令和2年4月～現在）として、「教職表現力演習Ⅰ」（平成28年9月～平成31年3月）および「教職表現力演習Ⅱ」（平成28年9月～令和3年3月）を担当した。「教職表現力演習Ⅰ」は主として1年生を対象とした、「教職表現力演習Ⅱ」は主として2年生を対象とした科目で、いずれも、教職者としてふさわしい「文章表現力」を身につけることに主眼をおく。テキストのみならず、毎回小テストを行うなど、現代日本語の知識と運用能力の向上を目指すべく工夫した授業を行った。
（１５）関西学院大学における初級中国語に関する講義	平成29年4月1日～現在に至る	関西学院大学社会学部の非常勤講師として外国語科目「中国語Ⅰ，Ⅱ」を担当し、主に中国語未習の大学1年生に対して初歩的な中国語を講義している。中国語を母語とする教員とペアで１つのクラス授業を担当し、1週間に各１コマずつ、合計２コマ授業を行っている。申請者は、主として、教科書各課における新出の文法・語法について説明するということを担当しており、日本人が中国語を学ぶ上では何が問題となるのかというポイントを捕らえた、日本人だからこそできる授業を展開している。
（１６）関西学院大学における中級中国語に関する講義	平成29年4月1日～現在に至る	関西学院大学社会学部の非常勤講師として外国語科目「中国語Ⅲ,Ⅳ」を担当し、すでに1年間中国語を学んだことのある２年次以上の学生に対して、中級中国語を講義している。中国語を母語とする教員とペアで１つのクラス授業を担当し、1週間に各１コマずつ、合計２コマ授業を行っている。申請者は、主として、教科書各課における新出の文法・語法について説明するということを担当しており、日本人が中国語を学ぶ上では何が問題となるのかというポイントを捕らえた、日本人だからこそできる授業を展開している。

（１７）奈良学園大学におけるゼミナール形式の演習科目	平成30年4月1日～現在に至る	平成30年度4月～令和2年3月までは奈良学園大学人間教育学部人間教育学科専任講師として、令和2年4月～現在までは奈良学園大学人間教育学部人間教育学科准教授として、「基礎ゼミナールⅠ」（平成30年4月～平成31年3月、令和2年4月～令和4年3月）、「基礎ゼミナールⅡ」（平成31年4月～令和2年3月）、「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（平成30年4月～現在）、「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（平成31年4月～現在）を担当している。「基礎ゼミナールⅠ」では、１年次生に対してアカデミックスキル習得を目指した内容の授業を行い、「基礎ゼミナールⅡ」では、翌年以降の「人間教育学ゼミナール」や卒業研究、卒業論文につながるようにすべく、より高度なアカデミックスキルの活用と向上を目指した内容の授業を行っている。「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」では、「国際理解に向けての中華文化研究」というテーマの下、３年次生に対して、前期は知識を得るべく中華圏の文化についての講義を行い、後期は学生個人が個別にテーマを設定して調べ、まとめて、発表するということを行っている。また、「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」では、学生個人が個別に設定したテーマについて引き続き調べさせ発表させるとともに、就職試験や面接に関する指導も行っている。
（１９）奈良学園大学における教職者に必要な資質・能力を培うための講義	令和3年4月1日～令和5年3月31日	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科准教授として、「人間教育実践力開発演習Ⅰ」（令和3年4月～令和5年3月）を担当した。幼稚園、小中学校、高校の教師とはどのようなもので、教師となるにはどのような資質・能力が必要か、現場経験者による講演や講義を通して学生に教えるとともに、現場経験者・現役教員との交流を通して、今日の学校・園の現場が抱える課題についての理解を深めた。また、各種グループ活動を通して、教師に必要なコミュニケーション力、企画力、行動力を養わせもした。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 （1）修士（文学） （2）博士（文学）	 平成14年3月31日 平成20年3月31日	 関西大学文修第1555号、論文題目「古道教斎戒儀礼考―塗炭斎を中心として―」 関西大学文博第110号、論文題目「道教斎儀の研究」
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 〔共同研究実績〕 （1）慶應義塾大学東アジア研究所における高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容－『東方地中海』をめぐる基層文化の比較研究」に参加	 平成23年4月～平成26年3月	 慶應義塾大学東アジア研究所において慶應義塾大学・野村伸一教授を研究代表者として進められた高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容－『東方地中海』をめぐる基層文化の比較研究」に研究協力者として参画し、主として中国および台湾の道教・民間信仰の調査・研究に従事するとともに、不定期的に開催された研究会に参加し、日本・中国・韓国の基層文化に関する研究報告を聞き、討論した。本研究課題に関わる研究業績として､共著１冊がある。
（2）関西大学東西学術研究所「東アジアにおける規範と学芸研究班」に参加	平成23年4月～平成25年3月	関西大学・二階堂善弘教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「東アジアにおける規範と学芸研究班」に非常勤研究員として参加し、主として中華文化圏と日本の喪葬儀礼の比較研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行った。本研究班参加に関わる研究業績として、論文１本がある。
（3）関西大学東西学術研究所「東アジア宗教儀礼研究班」に参加	平成25年4月～平成28年8月･平成29年4月～平成31年3月	関西大学・原田正俊教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「東アジア宗教儀礼研究班」に平成25年4月～平成28年8月にかけては非常勤研究員として、平成29年4月～は客員研究員として参加し、主として中華文化圏の道教の死者救済儀礼についての調査・研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行っている。本研究班参加に関わる研究業績として、論文１本がある。
（4）慶應義塾大学東アジア研究所における高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「慰霊供養と神格化から見る台湾人の歴史認識―民衆史学の構築をめざして」に参加	平成30年4月～令和2年3月	慶應義塾大学東アジア研究所において慶應義塾大学・三尾裕子教授を研究代表者として進められている高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「慰霊供養と神格化から見る台湾人の歴史認識―民衆史学の構築をめざして」に慶應義塾大学東アジア研究所研究員（非常勤）として参画し、主として台湾で祀られている日本人神に対する道教式の儀礼について、中華系の神に対する道教式の儀礼との相違という観点から調査・研究に従事した。
（5）関西大学東西学術研究所「東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班」に参加	平成31年4月～令和3年3月	関西大学・中谷伸生教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班」に客員研究員として参加し、主として中華圏の道教の死者救済儀礼についての調査・研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行った。

（6）立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所の研究に参加	平成31年4月～現在に至る	立命館大学衣笠総合研究機構白川静記念東洋文字文化研究所に同研究所副所長である大形徹教授の受け入れのもと客員研究員として参加し、主として台湾の道教儀礼で使用される文書等の道教儀礼文献に関する研究に従事している。
（7）奈良学園大学人間教育学部共同研究費助成による共同研究「教員志望学生の資質形成に資する Global Perspective の有効性に関する研究」に参加	令和4年12月～令和5年3月	奈良学園大学・松井典夫教授を代表とする、奈良学園大学人間教育学部共同研究費助成による共同研究「教員志望学生の資質形成に資する Global Perspective の有効性に関する研究」にアジア文化の研究者として参加し、大阪中華学校および神戸中華同文学校における異文化調査や授業見学などを企画・立案して実施するなどした。
〔競争的資金の獲得状況〕 （1）文部科学省科学研究費補助金　若手研究（B） 「台湾中部地域の烏頭道士の道教儀礼の調査・研究」 （課題番号 25870933）	平成23年度 ～平成25年度	研究代表者 助成金額：2,600,000 円
（2）文部科学省科学研究費補助金　研究成果公開促進費（学術図書） 「台湾道教における斎儀―その源流と展開―」 （課題番号 265009）	平成26年度	研究代表者 助成金額：1,100,000 円
（3）文部科学省科学研究費補助金　基盤研究（C） 「台湾北部地域の烏頭道士の道教儀礼の調査・研究」 （課題番号 17K02210）	平成29年度 ～令和元年度	研究代表者 助成金額：3,510,000 円
（4）高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト 「慰霊供養と神格化から見る台湾人の歴史認識―民衆史学の構築をめざして」	平成30年度 ～令和元年度	研究分担者 獲得金額：個人 700,000 円、全体 3,000,000 円 研究代表者：三尾裕子（慶應義塾大学文学部教授）
（5）文部科学省科学研究費補助金　基盤研究（C） 「台湾北部地域の烏頭道士の道教儀礼の比較的研究」 （課題番号 20K00065）	令和2年度 ～現在	研究代表者 助成金額：3,120,000 円
（6）奈良学園大学人間教育学部共同研究費助成 「教員志望学生の資質形成に資するGlobal Perspectiveの有効性に関する研究」	令和4年度	研究分担者 助成金額：全体 300,000 円 研究代表者：松井典夫（奈良学園大学人間教育学部教授）
4　その他 〔論文の引用実績〕 （1）「塗炭齋之後：道教民俗中首過儀式的扮犯表演」が「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」および「道教斎における自虐的行為の効能およびその衰退について――塗炭斎を中心として」を引用。	平成25年5月	李豊楙「塗炭齋之後：道教民俗中首過儀式的扮犯表演」（李豊楙、廖肇亨編『沉淪、懺悔與救度：中國文化的懺悔書寫論集』、中央研究院文哲所、2013年）、81頁の本文において、塗炭斎が次第に衰退した原因はすべてその自虐的行為に帰せられていると述べられており、同頁注16において、そのことを明確に述べた文献として、学術論文「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」および「道教斎における自虐的行為の効能およびその衰退について――塗炭斎を中心として」が引用されている。
（2）『臺南傳統道壇研究』が「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」および「道教斎儀の研究」を引用。	平成25年12月	洪瑩発、林長正『臺南傳統道壇研究』（臺南市政府文化局、2013年）、16頁の注10において、南朝劉宋の道士・陸修静が整備した斎儀礼が現在の台南地域の功徳儀礼にも影響を与えていることを述べた文献として、学術論文「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」および博士論文「道教斎儀の研究」が引用されている。また、19頁において、博士論文「道教斎儀の研究」、8頁掲載の表「台湾道教各教派の淵源および台湾における分布」が引用されている。

（3）「援法入道：南宋靈寶傳度科儀研究」が「臺灣道教合符童子科儀之形成的初步探討」を引用。	平成26年12月	張超然「援法入道：南宋靈寶傳度科儀研究」（謝世維主編『經典道教與地方宗教』、政大出版社、2014年）、132頁の注１において、台湾の道教儀礼に関する研究の中でも異なる時代の文献を比較することで儀礼の変遷をたどった研究の一つとして、学術論文「臺灣道教合符童子科儀之形成的初步探討」が引用されている。
（4）「産難の予防、禳除と抜度：台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として」が「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」および「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」を引用。	平成 27 年 3 月	謝聡輝著、山田明広訳「産難の予防、禳除と抜度：台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として」(野村伸一編著『東アジア海域文化の生成と展開―〈東方地中海〉としての理解―』、風響社、2015 年)、355 頁注 28 において、台湾道教の異常死者救済に関する参考文献として、学術論文「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」および「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」が引用されている。
（5）「水子供養と嬰霊慰霊―現代〈民間信仰〉の日台比較研究―」が「道教血湖儀礼の初歩的考察―台湾南部地区を例として―」および「台湾道教打城科儀についての初歩的考察」を引用。	令和2年3月	陳宣聿「水子供養と嬰霊慰霊―現代〈民間信仰〉の日台比較研究―」（東北大学大学院文学研究科人間科学専攻宗教学専攻分野博士論文、2020 年）、74 頁注 152 において、台湾の死者救済儀礼の一つである打城という儀礼の内容に関する参考文献として、学術論文「台湾道教打城科儀についての初歩的考察」が引用されている。また、138 頁注 312 において、台湾南部の霊宝派道士が難産死して血湖地獄に落ちた女性を救済するために行う転血車藏という儀礼の内容に関する参考文献として、学術論文「道教血湖儀礼の初歩的考察―台湾南部地区を例として―」が引用されている。
（8）『「水子供養」の日台比較研究――死者救済儀礼の創造と再構築』が「道教血湖儀礼の初歩的考察―台湾南部地区を例として―」、『台湾道教における斎儀―その源流と展開―』および「台湾道教打城科儀についての初歩的考察」を引用。	令和5年2月	陳宣聿『「水子供養」の日台比較研究――死者救済儀礼の創造と再構築』（晃洋書房、2023 年）、145 頁注 28 において、台湾の死者救済儀礼の一つである打城という儀礼の具体的内容を述べた研究として、学術論文「台湾道教打城科儀についての初歩的考察」が引用されている。また、211 頁注 55 において、クリストファー・シッペールの四部構成を用いて道教の死者救済儀礼の構成を分析した研究として著書『台湾道教における斎儀―その源流と展開―』が引用されている。さらに、249 頁注 52 において、台湾南部の霊宝派道士が血湖地獄中の難産死した女性を救済するために行う転血車藏という儀礼の具体的内容を述べた研究として、学術論文「道教血湖儀礼の初歩的考察―台湾南部地区を例として―」が引用されている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.日本古代中世の仏教と東アジア	共著	2014年 平成26年3月	関西大学出版部 全345頁	関西大学東西学術研究所の日本仏教研究班の研究成果報告論文集。東アジアにおける仏教史の総合的な様相を提示する書。 （A5 判・全 345 頁） 編者　原田正俊 共著者　原田正俊・西本昌弘・長谷洋一・山田明広・上川通夫・ほか 6 名 本人担当部分　第二部第四章「現代台湾の鬼月における無縁死者救済儀礼について―道教の普度法会と仏教の盂蘭盆会の比較―」(207 頁～240 頁) 台湾の鬼月において無縁仏救済のために行われる「普度法会」および「盂蘭盆会」という祭祀・儀礼について、まず、現地調査により得た事例を用いてその現状を紹介し、その上で、仏教儀礼および道教儀礼関連の漢文資料を読解することを通じて、「中元」、「盂蘭盆」、「施餓鬼」（放焔口）という関連する事項の原義を示し、さらに、これらの事項の歴史的変遷を追うことで、「普度法会」および「盂蘭盆会」の成立と展開を明らかにした。
2.台湾道教における斎儀―その源流と展開―	単著	2015年 平成27年2月	大河書房	漢文文献の読解と現地調査を有機的に組み合わせた研究方法を用いて、過去の道教儀礼と現在の台湾の道教儀礼の両方について分析することにより、道教の斎儀が現在に至るまでにいかに変容したのか、また反対に今なお古い斎儀の伝統がどれほど保存されているのか示そうとした書。三部七章より成る。本書を著すことにより、現在台湾で見られる道教儀礼の中には、歴史的意味での斎儀と現在的意味での斎儀の両方が並存しているということを明らかにした。 （A5 判・全 260 頁） 平成 26 年度科学研究費補助金研究成果公開促進費助成図書（交付額 1,100,000 円）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.東アジア海域文化の生成と展開―〈東方地中海〉としての理解―	共著	2015年 平成27年3月	風響社	慶應義塾大学東アジア研究所における高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容－『東方地中海』をめぐる基層文化の比較研究」(2011年度～2012年度）の研究報告論文集。 （A5判・全750頁） 編者　野村伸一 共著者　野村伸一・葉明生・謝聡輝・山田明広・鈴木正崇・ほか7名 本人担当部分　第二部第四章「福建泉州地域の寺廟・宗祠調査報告：王爺および観音信仰を中心に」(359頁～393頁）を藤野陽平と共著 2011年12月27日～2012年1月2日に福建泉州地域の寺廟や宗祠などを現地調査し見聞したものについて報告するとともに現地で見られた王爺信仰と観音信仰の特徴について考察したもの。福建泉州地域のいくつかの村落では観音信仰と王爺信仰が結合しているかと思われる祭祀が行われていること、および台湾では今なお行われている送王船の伝統が多くの廟において断絶してしまっていることを指摘した。本人は報告部分のおよそ7割（担当部分抽出不可能）および考察部分の全般（384頁～390頁）を担当した。 本人担当部分　第二部第五章第六節6「鹿港天后宮における普度法会次第」（435頁～445頁） 2013年8月21日（旧暦7月15日）に台湾彰化県の鹿港天后宮において施宣熹道長率いる保真壇により実施された道教の普度法会（無縁死者救済儀礼）の調査報告。本人が行った現地調査およびこれまでの先行研究に依拠しつつ主に法会の次第について解説した。また、本法会が一方で死者救済儀礼であるとともに、一方で生者救済儀礼でもあるということを示した。
4.怪異学講義　王権・信仰・いとなみ	共著	2021年 令和3年9月	勉誠出版	東アジア恠異学会による「怪異」について解説した入門書。王権・政治・祭祀・信仰・寺社・都市・村・生活・暮らしなど多様な視点から「怪異」とそれに対する人々のいとなみを読み解いたもの。 （四六判・全 445頁） 編者　東アジア恠異学会 共著者　大江篤・榎村寛之・佐々木聡・山田明広・化野燐・ほか15名 本人担当部分　第二部「道教と神降ろし」（245頁～269頁） 道教において神降ろしを伴う技法や儀礼を取り上げ、その実施法や効能について解説した文章。六朝初の茅山における神降ろしから現在の台湾の道教儀礼に至るまでに見られる神降ろしに関わる儀礼・技法を、神を降ろして憑依させるものと神を儀礼の場に招き迎えるものとに分けて通史的に概観し、これを通して、道教の修行者である道士は、決してシャーマンではなく、複雑で高度な技法を駆使して神と人とを媒介するものに過ぎないと結論付けている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5．台湾で日本人を祀る鬼（クイ）から神（シン）への現代人類学	共著	2022 年 令和 4 年 3 月	慶應義塾大学出版会	慶應義塾大学東アジア研究所における高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「慰霊供養と神格化から見る台湾人の歴史認識―民衆史学の構築をめざして」（2018 年度～2020 年度）の研究報告論文集。 （A５判・全 384 頁） 編者　三尾裕子 共著者　三尾裕子・藤野陽平・原英子・山田明広・五十嵐真子・ほか 4 名 本人担当部分　第 3 部第五章「第五章　廟神の出自により儀礼に差異は見られるか――台湾の日本神を祀る廟と中華神を祀る廟における儀礼・祭祀の比較」（171 頁～212 頁） 日本神を祀る廟での儀礼・祭祀と中華系の神を祀る廟での儀礼・祭祀を比較し、両者の間に差異が見られるかどうか検討した文章。道教儀礼と道教儀礼以外の儀礼・祭祀に分けて検討し、台湾の廟における儀礼や祭祀は、廟神が日本神であることにより、見かけ上、差異が見られることもあるが、基本的には台湾での従来の方式・習俗に則って行われ、根本から変わることはない、また、日本神を祀る廟での儀礼・祭祀における差異は、多くの場合、日本人によってあるいは台湾人が日本人を意識することによってもたらされたと結論づける。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1.道教血湖儀礼の初歩的考察―台湾南部地区を例として― （査読付）	単著	2014 年 平成26年3月	関西大学中国文学会紀要（関西大学中国文学会）第 35 号、113 頁～137 頁	道教において女性が難産死した場合に行われる「血湖」と呼ばれる特殊な死者救済儀礼について、まず、その淵源および歴史的変遷を道教儀礼関連の漢文文献を読解することによって検討し、その後、台湾で現地調査を行って収集した台湾南部地域の道教血湖儀礼に関する画像・映像資料および漢文体による文字資料を用いて、その儀礼構成や内容など具体的様相を明らかにするとともに、さらに、地域的差異、通常死の場合に行われる功徳儀礼との間の差異、歴史的位置づけなどを考察した論文。
2.台湾道教の異常死者救済儀礼	単著	2015 年 平成27年8月	アジア遊学（勉誠出版）第 187 号「怪異を媒介するもの」、249 頁～258 頁	台湾道教で、縊死、溺死、難産死などの異常と認められる死因により人が亡くなった場合に行われる「抽楹放索」、「転水藏」、「血湖」などといった特殊な儀礼について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した論文。最初に、通常死の場合に行われる死者救済儀礼はいかなるものか検討した後、異常死者救済儀礼のうち「抽楹放索」、「転水藏」を取り上げ、その実施法を具体的に描写することで、その意義や効能について考察した。
3.台湾鹿港地域の道教式功徳儀礼について （査読付）	単著	2016 年 平成28年3月	関西大学中国文学会紀要（関西大学中国文学会）第 37 号、297 頁～317 頁	本人が 2013 年 9 月 6 日に台湾彰化県鹿港鎮にて道教式功徳儀礼を調査したその報告論文。まず、調査した功徳儀礼の基本データおよび儀礼のプログラムを提示し、その後、提示したプログラムの順に従って功徳儀礼を構成する各科儀についてその実施方法や効果、意義、使用された文書などを叙述し、最後に、ここまでの考察および本人のこれまでの経験を踏まえて台湾中部地域の道教式功徳儀礼の特徴であると言えそうなことを提示した。
4.道教実践者としての李白―李白の詩を通しての考察―	単著	2016年 平成28年3月	奈良教育大学 国文 研究と教育（奈良教育大学国文学会）第 39 号、19 頁～31 頁	盛唐の詩の大家・李白が道教信者としていかなる道教的実践を行い、それは彼の漢詩の中ではどのように表現されているのか、李白の漢詩を分析することにより考察した論文。まず、李白の事績について述べ、それから、李白の漢詩の分析を通じて李白が授籙、煉丹服餌、存思といった道教的実践を行っていたことを提示し、最後に、これまでの考察を踏まえて、李白が天宝三年に長安の宮廷から放逐されたという挫折経験は、彼の道教信仰の上で、また詩作および人生の上で、大きなターニングポイントとなる出来事であったと結論付けた。
5.大学での漢文教育における問題点（１）―学生側の問題点：何が学生の漢文読解の妨げになっているか―	単著	2016年 平成28年5月	教育ＰＲＯ（株式会社ＥＲＰ）第 46 巻 10 号、14 頁～15 頁	大学の授業で学生が漢文学を学習するに当たって、何が学生の理解の妨げになっているか、本人のこれまでの大学における漢文教育経験を踏まえて述べた論文。考察の対象を訓点付きの漢文を読解する場合のみに絞り、その場合、書き下し文から現代語へと翻訳するのが学生にとって最も困難であるとし、その上で、その原因は①漢文の読みと字義に対する知識の不足、②漢文の文法に対する理解の不足、③日本語の古典文法に対する理解の不足の三点にあるとして、各点について詳細に論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6. 大学での漢文教育における問題点（２）―教員側の問題点：いかにして学生に漢文読解力を身に付けさせるべきか―	単著	2016年 平成28年5月	教育ＰＲＯ（株式会社ＥＲＰ）第46巻11号、14頁～15頁	学生が漢文学を学習するに当たって困難を覚える原因として①漢文の読みと字義に対する知識の不足、②漢文の文法に対する理解の不足、③日本語の古典文法に対する理解の不足の三要素が考えられるとした上で、教員はこれらの問題を解決して学生に漢文読解力を身に付けさせるために授業ではどのように取り組むべきか、また、学生に漢文に興味を持たせ継続的に学習させるにはどうすべきか、本人のこれまでの大学における漢文教育経験を踏まえて述べた論文。
7. 台湾道教打城科儀についての初歩的考察	単著	2017年 平成29年9月	奈良学園大学紀要（奈良学園大学）、第7集、97～109頁	台湾道教の死者救済儀礼を構成する儀式の一つで、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われる「打城」という儀式について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した論文。台湾道教の「打城科儀」の実施される条件や使用される糊紙製の地獄の城、科儀の内容、構成といった基礎的事項について考察を加え、さらに台南地域のものと高雄・屏東地域のものとを相互に比較することで地域的差異という点についても検討を加えた。
8. 台湾道教的救済异常死者的仪式――以台南地区的对缢死者及溺水死者等的仪式为主 （査読付き）	単著	2018年 平成30年6月	『道教学刊』(社会科学文献出版社）第２期、274～291頁	台湾道教の異常死者救済儀礼について、縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼を例として考察した論文。まず、何が異常死に当たるか定義づけした後、筆者が台南地域で調査した縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼の事例を用いて、それぞれの儀礼の実施方法や特徴などを確認し、その後、なぜこれらの儀礼は各死者が生じた現場で行わなければならないのかということについて、儀礼を行った道士たちに対する聞き取りや彼らが持っている漢文により書かれた科儀書および漢文体の筆記小説の読解などによって検討した。
9. 台湾北部淡水地区の烏頭道士の功徳儀礼 （査読付き）	単著	2021年 令和3年4月	東西学術研究所紀要（関西大学東西学術研究所)、第54輯、141～158頁	台湾新北市淡水鎮にて調査した道教式功徳儀礼（死者救済儀礼）を取り上げ、その構成および内容について、本人が台湾で現地調査を行い入手した文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した論文。同地区の烏頭道士が行う功徳儀礼のプログラム構成を示した上で各科儀の実施方法を適宜台湾南部地域のものと比較しつつ描写することを通して、淡水地区の烏頭道士による道教式功徳儀礼の特質と独自性について明らかにした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 〔国際会議等発表〕 1.道教血湖儀礼の現状について―台湾南部地域の血湖の功徳を例として―	―	2013年 平成25年5月	東アジア文化交渉学会第5回年次大会「描かれる新しい世界：東アジアの歴史・文化と未来」 （於香港城市大学）	道教において女性が難産死した場合に行われるとされる「血湖」と呼ばれる特殊な死者救済儀礼について、まず、その淵源について道教儀礼関連の漢文文献を用いて検討した後、本人が台湾で行ってきた現地調査の経験にもとづき、台湾南部地域の道教血湖儀礼を例として、その具体的様相、地域的差異、通常死の場合に行われる儀礼との間の差異などについて考察した研究発表。発表時間15分、討論時間10分。
2.道教血湖科儀的初步探討―以臺灣南部地區爲例―	―	2013年 平成25年7月	經典道教與地方宗教國際研討會 （於台湾・国立政治大学）	台湾道教において主として女性が難産死した場合に行われる血湖功徳について考察した中国語による研究発表。まず、道教儀礼関連の漢文文献を用いて難産死者が堕ちるとされる血湖地獄とはいかなるものか確認し、その後、現在の台湾で行われている「血湖功徳」について、本人が台湾南部地域で現地調査を行い得た漢文体のよる文字資料および画像・映像資料にもとづきつつその実施方法や一般の功徳儀礼との差異、使用される文書などについて検討した。発表時間 20分、討論時間30分
3.台灣道教的救濟異常死者的儀式――以台南地區的對縊死者及溺水死者的儀式為主	―	2016年 平成28年7月	中国人民大学-羅格斯大学首届国際道教文化前沿論壇 （於中国・湖南省陽光大酒店）	縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼を例に台湾道教の異常死者救済儀礼について考察した中国語による研究発表。まず、何が異常死に当たるか定義づけした後、筆者が台南地域で調査した縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼の事例を用いて、それぞれの儀礼の実施方法や特徴などを確認し、その後、なぜこれらの儀礼は各死者が生じた現場で行わなければならないのかということについて、儀礼を行った道士たちに対する聞き取りや彼らが持っている科儀書、筆記小説などによって検討した。発表時間20分、討論時間10分。
4.福建晉江地區的王爺信仰之初步探討	―	2017年 平成29年10月	2017臺灣王爺信仰文化國際學術研討會 （於台湾文化部文化資産局文化資産保存研究中心）	2011年12月27日～2012年1月2日に福建泉州地域の寺廟や宗祠などについて現地調査を行ったが、その際に調査したもののうち王爺廟および王爺信仰に関するものを抽出し考察を加えることで、当該地域の王爺信仰の特徴を描き出そうとした中国語による研究発表。福建泉州地域のいくつかの村落では観音信仰と王爺信仰が結合しているかと思われる祭祀が行われていること、および台湾では今なお行われている送王船の伝統が多くの廟において断絶してしまっていることを指摘した。発表時間20分、討論時間20分。
5.臺灣道教打城科儀之地方性差異――以臺南地區與高雄･屏東地區為例	―	2018年 平成30年10月	道教与地方文化国際学術研討会 （於中国・浙江大学）	台湾道教の死者救済儀礼を構成する儀式の一つで、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われる「打城」という儀式について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した中国語による研究発表。台湾道教の「打城科儀」の実施される条件や使用される糊紙製の地獄の城、科儀の内容、構成といった基礎的事項について考察を加え、さらに台南地域のものと高雄・屏東地域のものとを相互に比較することで地域的差異という点についても検討を加えた。発表時間20分、討論時間30分。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6. “Are There Any Differences in the Rites due to the Difference of the Spirits Origins of temples?: Comparison of the Rituals between Temples of Japanese Spirits and Temples of Chinese Spirits in Taiwan”	―	2019年 令和元年7月	The 2nd Annual Conference of the EASSSR (East Asian Society for the Scientific Study of Religion：東アジア宗教社会学会) （於北海道大学）	台湾の日本人神を祀る廟で行われる道教儀礼と中華系の神を祀る廟で行われる道教儀礼との間に見られる差異について、本人がこれまで行ってきたフィールドワークにもとづきつつ考察した英語による研究発表。日本人神を祀る廟で行われる道教儀礼の事例として2018年8月に屏東県枋寮東龍宮にて調査した普度法会の事例を取り上げ、これと一般的な普度法会を比較することで、道教儀礼は日本人神を祀る廟で行われようと、中華系の神を祀る廟で行われようと、いずれにおいても変わらないが、東龍宮は宮主が道士であるなど特殊であるため、いくらか相違が生じたという結論に達した。慶應義塾大学東アジア研究所における高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「慰霊供養と神格化から見る台湾人の歴史認識―民衆史学の構築をめざして」による研究成果の一部であり、本プロジェクトの中間報告と位置付け得るものである。発表時間20分、討論時間30分
7.臺灣南部道教打城科儀之初步探討―以臺南地區與高雄·屏東地區為例	―	2019年 令和元年9月	老子道文化学術研討会 （於中国・安徽省渦陽県）	台湾道教の死者救済儀礼を構成する儀式の一つで、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われる「打城」という儀式について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した中国語による研究発表。まず、「打城科儀」の実施される条件や使用される糊紙製の地獄の城といった基礎的事項について検討し、次に、台南地域と高雄・屏東地域それぞれの地域の打城科儀の内容および構成を分析し、最後に両者を相互に比較することで、打城科儀の地域的差異について考察した。発表時間20分、討論時間30分。
8. 臺灣鹿港地區靈寶道壇打血盆科儀之初步探討――以鹿港保真壇為例	―	2022年 令和4年6月	臺灣民俗學研討會：常與非常―疫情下的民俗研究 （於台湾・中山医学大学、オンライン参加）	台湾鹿港地域の道教式死者救済儀礼のうち、流血死者や難産死者が出た場合にのみ特別に行われる「打血盆」という儀式について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した中国語による研究発表。まず、「打血盆」を実施した鹿港保真壇について紹介した後、本人が調査した事例にもとづきつつ「打血盆」が実施される条件や状況等を確認し、続いて、台南地域と高雄・屏東地域のものと比較しながら鹿港地域の「打血盆」の構成について検討し、最後に鹿港地域の「打血盆」の特徴について考察した。発表時間20分、討論時間10分。
9. 台灣道教王醮的本質和特徵―透過針對王醮特有的科儀和文檢以及其地方性差異的分析之討論	―	2022年 令和4年11月	代遠天長：南鯤鯓代天府（1662～）360大圓周·代巡信仰國際論壇 （於台湾・南鯤鯓代天府、オンライン参加）	台湾の道教儀礼のうち、疫病払いを目的として行われる「王醮（禳災祈安醮）」について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した中国語による研究発表。台南地域の王醮と高雄・屏東地域の王醮の両者を取り上げ、まず各地域の王醮特有の科儀や文検を列挙するとともにその内容を分析し、その後両者を相互に比較することを通して、台湾道教の王醮の本質や特徴がいかなるものであるのか考察した。発表時間30分、討論時間10分。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〔国内学会発表〕 1.道教では縊死者をいかにして救済するのか―台湾南部地域を例として―	―	2014 年 平成 26 年 3 月	東アジア恠異学会第90回例会 （於園田学園女子大学）	台湾道教の異常死者救済儀礼のうち、人が縊死した場合に行われる特殊な儀礼について考察した研究発表。台南地域の縊死者救済儀礼である「抽楹放索」と高雄・屏東地域の縊死者救済儀礼である「絞台放索」を取り上げ、両者を相互に比較して両者の間に見られる相違について検討することで、「絞台放索」には死者を地獄から救済するという効能があるが、「抽楹放索」にはそのような効能はなくむしろ、縊死の原因である悪煞を祓うことに重点が置かれているという見解を示した。発表時間 60 分、討論時間 60 分。
2.伝統や文化に関する教育から国際理解へ―漢字・漢文教育を例として―	―	2017 年 平成29年2月	日本人間教育学会第2回大会 （於奈良学園大学）	教育によって、日本人の中華文化圏の人々に対する理解を増進させるべきことを主張した研究発表。まず、伝統や文化に関する教育と国際理解教育の現状および相互の関係性について振り返り、その上で、中華文化圏から非常に多くの観光客が日本へと来ているにも関わらず、日本人の中華文化圏の人々に対する理解が足りないため、彼らに対する対応に不適切な点があるといった問題点を指摘した。そして、旧字体や漢文といった伝統や文化に関する教育に力を入れることで、中華文化圏の人々に対する理解増大につながるのではないかと提言した。発表時間 20 分、討論時間 10 分。
3.台湾道教打城科儀についての初歩的考察	―	2017年 平成29年7月	関西大学東西学術研究所第８回研究例会 （於関西大学）	台湾道教の死者救済儀礼を構成する儀式の一つで、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われる「打城」という儀式について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した研究発表。台湾道教の「打城科儀」の実施される条件や使用される糊紙製の地獄の城、科儀の内容、構成といった基礎的事項について考察を加え、さらに台南地域のものと高雄・屏東地域のものとを相互に比較することで地域的差異という点についても検討を加えた。発表時間 20 分、討論時間 10 分。
4.伝統や文化に関する教育から中華圏に対する理解へ―国語科・社会科を中心に―	―	2017年 平成29年9月	第25回日本グローバル教育学会全国研究大会 （於国際医療福祉大学・小田原キャンパス）	学校教育の場で中華圏に対する理解を促進させる教育を行うべきことを主張した研究発表。まず、中華圏から非常に多くの観光客が日本へと来ているにも関わらず、日本人の中華文化圏に対する理解が足りないため、対応に不適切な点があるといった問題点を指摘し、その上で、伝統や文化に関する教育の一環として旧字体や台湾人・香港人アイデンティティーの問題について国語科や社会科の時間に教え、中華圏に対する正しい理解へとつなげるべきことを主張した。発表時間 20 分、討論 10 分。
5.道教の血湖地獄とその救済儀礼	―	2017 年 平成 29 年 12 月	東アジア恠異学会第114回定例研究会 （於園田学園女子大学）	道教の数ある地獄の中でも、主としてお産により亡くなった女性の亡魂が囚禁されると考えられている「血湖」とその救済儀礼について考察した研究発表。まず、道教の血湖地獄がいかなるものであるのか、仏教の血盆地獄と比較しつつ概観し、その後、主として現在の台湾で行われているものを例として、そこから救済するための儀礼はいかなるものであり、通常死の場合の儀礼とはいかなる違いが見られるのか、また地域によりいかなる違いが見られるのかといったことについて考察した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〔翻訳〕 1.産難の予防、禳除と抜度―台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として―	単訳	2015 年 平成 27 年 3 月	東アジア海域文化の生成と展開―〈東方地中海〉としての理解―（風響社）、299 頁～357 頁	原著者　謝聰輝 原題　「産難的預防、禳除與拔度：以南臺灣與泉州地區所見道教科法為主」 台湾師範大学教授・謝聰輝氏が著した中国語の論文を日本語に翻訳し、漢文文献や漢文体による儀礼書からの引用文については書き下し文に改めたもの。中国や台湾に伝わる女性の難産予防に関わる種々の儀礼やまじない、宗教医療について、主として文献を用いて詳細に分析するとともに、併せて、現今なお実施されている「血湖」と呼ばれる難産関連の道教儀礼について、台湾南部と泉州地区における現地調査を踏まえて仔細に論じている。
2.現代上海道教の宮觀および道士についての簡單な紹介	単訳	2015 年 平成 27 年 6 月	東方宗教（日本道教学会）第 125 号、127 頁～132 頁	原著者　姚树良 原題　「当代上海道教宫观、道士现状简介」 2014 年 11 月 8 日に開催された日本道教学会第 65 回大会において、上海市道教教会副会長・姚樹良氏により行われた中国語による講演の原稿を日本語に翻訳したもの。最初に文化大革命以降の中国道教の状況について紹介するとともに、中国道教の教派について説明し、その上で、上海の道教の現況について、宮観、儀礼、道士の養成方法、宮観と民衆とのかかわり、布教などといった側面から紹介されている。
〔研究報告〕 1.台湾道教の縊死者および溺死者救済儀礼に関する二、三の考察―台南地域を例として―	単著	2016 年 平成 28 年 9 月	奈良学園大学紀要（奈良学園大学）第 5 集、213 頁～219 頁	台湾道教の異常死者救済儀礼について、縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼を例として考察した研究報告。まず、何が異常死に当たるか定義づけした後、筆者が台南地域で調査した縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼の事例を用いて、それぞれの儀礼の実施方法や特徴などを確認し、その後、なぜこれらの儀礼は各死者が生じた現場で行わなければならないのかということについて、儀礼を行った道士たちに対する聞き取りや彼らが持っている科儀書、筆記小説などによって検討した。
2.伝統や文化に関する教育から中華圏に対する理解へ―国語科・社会科を中心に―	単著	2018 年 平成 30 年 3 月	奈良学園大学紀要（奈良学園大学）第 8 集、149 頁～154 頁	学校教育の場で中華圏に対する理解を促進させる教育を行うべきことを主張した研究報告。まず、中華圏から非常に多くの観光客が日本へと来ているにも関わらず、日本人の中華文化圏に対する理解が足りないため、対応に不適切な点があるといった問題点を指摘し、その上で、伝統や文化に関する教育の一環として旧字体や台湾人・香港人アイデンティティーの問題について国語科や社会科の時間に教え、中華圏に対する正しい理解へとつなげるべきことを主張した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〔書評〕 1.志賀市子著『〈神〉と〈鬼〉の間―中國東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』	単著	2013 年 平成 25 年 5 月	東方宗教（日本道教学会） 第 121 号、93 頁～99 頁	茨城キリスト教大学教授・志賀市子氏の著書『〈神〉と〈鬼〉の間―中國東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』（風響社、2012 年）に対する書評。中国東南部、特に広東省東部沿海の潮汕および海陸豊地域における無縁死者の埋葬と祭祀を主な研究対象とし、その諸相および歴史的変遷を明らかすることを目的として書した本書について、その内容を簡単に紹介した上で、その研究方法および内容について評し、さらに問題点を指摘した。
〔辞書〕 1.岩波世界人名事典	共著	2013 年 平成 25 年 12 月	岩波書店 全 3586 頁	全世界の国・地域について、神話・伝説上の人物から現存者までを網羅した総合的な人名辞典。 編者　岩波書店辞典編集部 共著者　山田明広・吾妻重二・二階堂善弘・酒井規史・三浦國雄他 550 名 本人担当部分　中国の道教および民間信仰の神・神仙に関する項目のうち以下の 11 項目。 安期生（145 頁）、王爺（484 頁）、玉皇大帝（734 頁）、元始天尊（924 頁）、黄初平（950 頁）、三官大帝（1117 頁）、三山国王（1118 頁）、三茅真君（1126 頁）、東華帝君（1839 頁）、保生大帝（2641 頁）、媽祖（2743 頁）
〔解説・総説・雑記等〕 1.屏東の林徳勝道長との出会いと交流―台湾道教のあり方を学ぶ―	共著	2014 年 平成 26 年 9 月	日本台湾学会ニューズレター（日本台湾学会）第 26 号、13 頁～14 頁	日本台湾学会のニューズレターにおける特集「記憶の中の台湾―思い出の場所、思い出の人―」に寄せた文章。本人が台湾留学中に知り合い、道教儀礼を調査させていただいたほか多くの資料を提供していただくなど非常にお世話になった台湾屏東県在住の道士・林徳勝道長との出会いとこれまでの交流、および林道長の道教儀礼や信仰に対する態度についてエッセー形式で紹介するという内容のもの。

教　育　研　究　業　績　書

令和4年　3月　31日

氏名　石原由貴子

研究分野	研究内容のキーワード
幼児教育	幼児教育・幼児理解・保育者論・教員養成

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 ・幼小連携でのスタートカリキュラムの作成	平成17年～現在に至る	幼児期から児童期の発達の特性を踏まえ、地域の小学校との連携を図りながら教育課程を見直し、改善を重ね実践してきた。（大和郡山市立郡山西・平和・北・片桐・昭和・矢田南幼稚園で実践）
・学校評価を生かした保育内容の改善と実践	平成元年～現在に至る	毎年、年度末に教育評価を評議員、教員、保護者と行い教育課程や保育内容が具体的かつ有効的であったか評価し、見直しと改善を重ねた。
・幼児理解に基づいた保育方法の探究	平成元年～現在に至る	一人ひとりの心もちに寄り添い、特性や発達に応じたきめ細やかな保育を展開してきた。また、主体的・対話的な保育を心がけ、充実した保育内容を考案した。
2　作成した教科書，教材		
・教育実習の手引（大和郡山私立幼稚園）	平成28年４月	幼稚園教育実習生の手引。実習の内容や日程、幼稚園教育の目標や幼稚園教育要領の基づいた保育内容の具体的な姿、幼児を理解する視点についてまとめ、令和３年まで使用した。
・実習の手引（奈良学園大学・共著）	令和４年	幼稚園教育実習、保育所保育実習、施設実習について、実習の日程と内容、教育実習の意義や目的、幼児教育全般についてまとめた。令和５年度より使用。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
・大和郡山市教育委員会からの評価	令和２年	園運営及び教育課程編成、保育内容の創造、若手教員の指導等について高い評価を得ることができた。
・奈良学園大学学生授業アンケート	令和３年	講義内容、話し方、要点の説明や明確化等については4.8ポイント程度で高評価を得ている。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		

・教育実習に対する指導	平成元年～令和４年３月３１日	多くの教育実習生を受け入れ、担任として、また、教頭・園長として指導や講話を行った。 ・幼児理解について ・学級経営について ・指導案作成について ・実際保育について ・配慮が必要な幼児について等
・教職に対する指導	令和４年度	教師の使命感や責任、やりがい、保育の面白さ等を担当する授業の中で実際の姿を映像等で見せながら指導してきた。
・令和３年度大和郡山市新規採用教員研修講師	令和4年 1月13日	令和3年度に採用された大和郡山市の小・中の教員に対して、就学前の教育や連携の大切さ等について講話を行った。
・令和４年度大和郡山市新規採用教員研修講師	令和4年 2月22日	令和4年度に大和郡山市の幼稚園・保育所、認定こども園の教員・保育士として採用される方々に、就学前教育について、多くの事例を交えながら、具体的に講話を行った。
・大和郡山市教頭・指導教諭研修会講師	令和3年 12月24日	大和郡山市の幼稚園教頭・指導教諭に対して、その職務についてや、若手教員の指導方法についての講話を行った。
・大和郡山市立矢田南幼稚園指導助言	令和4年度	園内研究会での指導助言
・大和郡山市立郡山西幼稚園指導助言	令和4年度	ポートフォリオ作成についての指導助言

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
・幼稚園教諭一種普通免許状	昭和59年3月24日	昭58幼一普第28号　（奈良県教育委員会）
・小学校教諭一種普通免許状	昭和59年3月24日	昭58小一普第221号　（奈良県教育委員会）
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
・奈良県放送教育研究協議会理事	令和2年4月1日～ 令和3年3月31日	幼稚園における放送教育についての指導を行うとともに会の運営に携わった。
・大和郡山市人権教育研究会副会長	令和3年4月1日～ 令和4年3月31日	大和郡山市の人権教育に関わって、指導・助言を行うとともに、会の運営に携わった。

・大和郡山市就学指導委員	令和2年4月1日～令和4年3月31日	大和郡山市の就学指導に携わり、観察・助言を行った。
・大和郡山市教育委員会学校教育指導委員	令和3年4月1日～令和4年3月31日	教育指導員として、大和郡山市内の教職員の指導や講話を行った。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） （学術論文） 大和郡山市教育委員会指定研究会紀要「コミュニケーションの力を育む」	共著	平成26年11月	大和郡山市立郡山西幼稚園　発行	平成25・26年度大和郡山市教育委員会の指定研究園となり、幼児一人一人が様々な経験を通して自信をもって生活し、「自分の思いを伝え、相手の思いを聴き、互いをわかり合おうとする」等のコミュニケーションの力を育むためにはどうすればよいかについて、実践・研究した。 共著者：加奥満紀子、安井典子、上田良美、石原由貴子、ほか7名
保育の質を高める一方法 一践記録から“私”の保育を振り返る一	共著	平成24年3月	奈良佐保短期大学研究紀要第19号	子どもは、日々の生活の中で小さな変化や出来事に目を留め、興味・関心をもって関わろうとする。それが遊びの原動力になる。しかし、時に保育者は子どもの興味・関心（心もち）に気付かないことがある。だからこそ、子どもが気付く小さな変化や出来事に共に関わることが、子どもと共に生活する保育者の大きな役割であり、ひいては保育者の資質につながる。こどもが“たまたま”出会ったことや“たまたま”見つけたもの、つまり偶然に見つけたこと（セレンディピティ）は、保育者の受け止め方や活かし方によって、子どもにとって必要な体験や経験になっていくと考える。そのような偶然の価値を見出し、子どもの育ちにつなげていけるよう保育者の資質を磨いていくことが大切である。 共著者：和田公子、石原由貴子、藤村朱美、木下育子、三輪和子、大内菜恵子
幼稚園実習を通して学生の自己成長を促すルーブリックの開発と活用 一実習への意識向上とスキルアップに着目して一	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要第15集	小さな子どもに「養護＋教育」を取り組む保育現場での実習に対して「楽しい」だけの実習として終える学生の状況に疑念を持つ。この現状を打開するために、学生の幼児教育に対する意識改革に務める必要性を強く感じる。そのために学生の現在の意識状況を知り、さらなる学びにつなげるための自己評価としてルーブリックを活用した。また、授業の遂行の仕方を振り返り、授業の再構成を図ることで学生の意識改革につながることを論じた。 共著者：間井谷容代、石原由貴子、高岡昌子、岡村季光

:				
（その他） 1幼児教育における栽培活動を通して育む心の研究	共著	令和４年度		学校法人奈良学園の学園内での共同研究として、奈良学園幼稚園4才児を対象に植物の栽培やビオトープの生き物の生態を顕微鏡で見たり、実際に確かめたりすることを通して、幼児の知的好奇心を高めるとともに、継続して取り組むことで豊かな心を育むまれることを研究した。共著者：高岡昌子、岡村季光、石原由貴子、谷川具子

教　育　研　究　業　績　書

令和５年３月３１日

氏名　太田　雄久

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
教育学	教育方法(理科)・教科教育（理科)・学級経営

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　教育方法の実践例 （１）小学校理科レポート作成による科学的な思考力・表現力の育成	平成25年4月～平成26年3月	小学校理科の学習指導要領改訂の改善の具体的事項で示されている「児童の科学的な見方や考え方が一層深まるように，観察・実験の結果を整理し考察し表現する学習活動」の充実として，子どもに各単元の終末でのレポート作成に取り組ませた。その結果，観察・実験の結果をグラフに整理したり，予想や仮説と関連づけて考察したりしたことを言語活動として表現する必要性を子どもに理解させることができるとともに，日々の授業での言語活動も充実することができ，相互に影響を与えつつ科学的な思考力や表現力を育成することができた。 （大阪教育大学附属天王寺小学校での実践）
（２）「Ａエネルギー・粒子」領域における見えないものを見えるようにする理科の教材開発	平成25年4月～平成26年3月	「Ａエネルギー・粒子」領域における見えないものをする可視化する教材開発を３年生理科の単元で行った。具体的には，「磁石の性質」の単元において，見えない磁石の力の働き方を可視化するために，棒磁石を同極同士長く連結したものと異極同士を長く連結したものを作った。それらにつく鉄でできた物のつき方の違いから，子どもは同極同士および異極同士近づけたときの磁石の力の働き方の違いをとらえることができた。また，「同極同士を近づけると退け合い，異極同士を近づけると引き合う」という現象について，子どもは見えない磁石の力の働き方に触れながら，自分なりの表現で説明することができるようになった。これらの姿は，３年生の「エネルギー」についての見方や考え方が育っていると評価できるものである。また，小学校３年生での「エネルギー」についての評価規準として，提案性のあるものとなった。 （大阪教育大学附属天王寺小学校での実践）

（４）子どもの感性を働かせ科学的な見方や考え方を育む理科の授業指導方法開発	平成25年4月～平成26年3月	理科の目標にある「科学的な見方や考え方」を育むために，３年生理科の授業で，子どもの感性を働かせるような授業開発を，年間を通じて行った。例えば，３年生はじめの「植物の体のつくり」の単元では，子どもの観察の視点（視線の向き，数，色，変化など）の意味付け，価値付けを指導者が行うことで，自然の事物・現象を見る際の視点を増やした。その結果，子どもの植物の観察の視点が増え，観察の質が向上した。また，以降の単元においても，初期事象の出会いや観察・実験の際に多様な気付きが生まれるようになり，子どもが主体的な問題解決を通して，科学的な見方や考え方を身に付けることができた。 （大阪教育大学附属天王寺小学校での実践）
２　作成した教科書，教材 特記事項なし		
３　教育上の能力に関する大学等の評価 （１）大阪教育大学非常勤講師としての学生による授業評価アンケート結果	平成25年9月	大阪教育大学非常勤講師としての学生アンケート評価は総合評価で３．９点（４点満点中）であり，学生の出席率の高さ，教員の例示の分かりやすさ，学生の内容の理解度の３つの項目で特に高い評価を得た。
（２）大阪教育大学附属天王寺小学校の副校長からの評価	平成26年2月	理科部では，科学教育プロジェクトの中心として大阪教育大学との連携を密にし，プロジェクト推進に寄与した。また，理科教育部の中心として新学習指導要領に基づいた研究を進めることにも貢献した。さらに，理科主任として，研究会議の場でも積極的に提案し，意欲的に新たな教材を開発し，研究推進に貢献した。学校および学年運営では，第３学年主任を務め，ミドルリーダーの役割を果たした。学年担任団をまとめ，児童への指導や保護者との連携を充実させ，学校を組織として機能させた。教育実習部では，教育実習主任を補佐し，教育基本実習，第２部４回生実習，１日教育実習，教育実習オリエンテーションなどの実習関連業務を滞りなく運営した。
（３）科研費獲得のための研究補助	平成26年3月	大阪教育大学附属天王寺小学校教諭として，平成25年度科研費（奨励研究）に応募した。（研究協力者は，大阪教育大学科学教育センター特任准教授　仲矢史雄氏である。）テーマは「現場教員による一貫指導と授業収録システムによる教育実習生指導方法の開発」である。科研費としては不採用であったが，大阪教育大学の学内選考会より，科研費獲得に向けて継続的に研究を進める価値があるテーマであるとの評価を受けた。科研費獲得の研究補助（平成２６年度）として１０万円の研究補助費を獲得した。

（４）奈良学園大学人間教育学部採用に当たっての学長からの評価	平成26年7月	大阪教育大学附属天王寺小学校で理科教育を８年間担当し教育方法技術も豊かである。また大阪府下の小学校教員への指導歴も多く，理科が苦手な教員へ実験等の指導にも優れている。また，附属小学校で多くの教育実習生の指導経験もあり，本大学の教育実習指導にも力を発揮できると期待する。さらに，非常勤講師として大阪教育大学で理科教育において学生指導を担当した経験もあり，すでに非常勤であるが大学教員としての授業の経験がある。附属では担任や学年主任の経験もあり，学生指導においてもその経験を発揮できると考える。奈良学園大学の今後を支える若手研究者として期待できる。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 （１）大阪教育大学の教育実習生指導担当	平成25年4月～平成26年3月 毎年9月 （昼間部）	毎年，大阪教育大学附属天王寺小学校に勤務した８年間，大阪教育大学教育学部の昼間部の学生を９月の１ヶ月間を指導した。教育実習部としては，当該年度の全ての実習生を指導した。大阪教育大学附属天王寺小学校は毎年度１００名程度の教育実習生を受け入れている。指導の内容は以下の通りである。 ・理科の授業づくりおよび指導案作成の指導（理科専科時） ・音楽科，図画工作科を除く，小学校全科および領域の授業づくりおよび指導案作成の指導，実習記録の仕方などの実習事務に関わる指導，学級経営などの学級担任としての心構えについての指導（学級担任時） ・教育実習生としての心構え，子どもとの関わり方，災害時などの教員の役割，守秘義務等学校教員としての規律などについての指導 （教育実習部担当時）
	平成25年4月～平成26年3月 毎年11月 （夜間部）	大阪教育大学附属天王寺小学校に勤務した８年間，毎年，大阪教育大学教育学部の夜間部の学生約 40名を11月に２週間指導した。教育実習部としては，当該年度の全ての実習生を指導した。指導の内容は以下の通りである。夜間部の学生はすでに小学校 2種や他校種等の免許を取得している学生が多いので，一定の教職に対する知識を備えている。そのため特に以下の点について指導した。 ・指導案作成における観点別評価の規準の設定と実際の評価の方法について（理科専科時） ・学級づくりにおいて，特別に支援を要する児童への関わり方や，そのために組織として対応する必要性について（学級担任時） ・保護者や地域と連携し，児童を育てるための，教師としての心得や，保護者の苦情などを学級や学校づくりに生かす方法について （教育実習部担当時）
（２）大阪府下の小学校教員の指導力向上のための研修の指導助言	平成24年8月	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業（地域貢献部門）の一環として，連続講座4回目を実施した。目的は，大阪府下の教員の指導力向上である。 「科学的な見方や考え方を深める授業づくり」をテーマに研究を行った。子どもの自然の事物・現象に対する見方や考え方を科学的なものに変容させるための授業づくりの考え方や授業実践例を紹介することで，理科の授業力向上を目的としている。「子どもが主体的な問題解決を行う理科の授業づくりには，児童分析と教材分析が必要不可欠であることを実感したこと」「単元および本時の授業後の子どもの姿を設定したうえで授業づくりを行うことの重要性」を

		論じた。結果，深い教材分析と的確な児童理解の重要性を受講生は理解することができた。 （対象者：大阪府下小学校教員約２０名）
（３）大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」実地講としての授業を担当	平成25年4月～平成26年3月 【3年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「高学年の理科指導」をテーマとして，授業づくり，児童分析，教材分析及び評価の観点とその手立てについての講義を行った。高学年児童の発達と学習傾向について説明した。さらに授業実践の紹介，模擬授業（単元はメダカ，豆電球）を行った。「知っているのにメダカが描けない」，「リード線付きソケットがなくなっただけで，豆電球に明かりをつけることができない」この事実に気付かせたりする事例を紹介した。学生からは，「従来のメダカの見方が変わった。」「教材として豆電球の教育的な価値が分かった。」といった声が聞かれた。これにより深く幅の広い教材分析や事前の予備実験の重要性を十分に理解した学生が多数であった。 （対象者：大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成26年4月～平成27年3月 【4年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとして，模擬授業や実践事例の紹介を通して，児童分析，教材分析，評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では，リード線付きソケットを使わずに豆電球に明かりを付けることから，「見えない部分も含めて一続きの回路になっている」ことを理解させること，実践事例の紹介では，子どもの目線を動かすような課題設定や支援によって子どもの学びは深まることを指導した。学生からは，「目線が変わるだけで，ものの見方が変わることがわかった。」「自分たちが活動することで，学びがこれほど違うのかと驚きました。」などといった感想を得た。これらから，児童理解と教材分析をもとにした授業づくりの重要性を理解した学生が多数であったと言える。 （対象者：大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成27年4月～平成28年3月 【5年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとして，模擬授業や実践事例の紹介を通して，児童分析，教材分析，評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では，何も見ずにメダカを描かせることから，「知っているつもりを自覚させることが主体的な問題解決につながる」ことを理解させた。実践事例の紹介では，ゴムの働きの学習における子どもの目線の変化を根拠に，児童分析と評価の方法について言及した。学生からは，「教師の教材研究や児童理解がどれほど重要かを再確認できた。」「子どもに新しい視点を，教師がいかに与えるかが大切だと思った。」などの感想を得た。これらから，児童分析，教材分析，評価についての理解を深めた学生が多数であったと言える。 （対象者：大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）

	平成28年4月～平成29年3月 【6年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとして，模擬授業や実践事例の紹介を通して，児童分析，教材分析，評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では，何も見ずにメダカを描かせることから，「知っているつもりを自覚させることが主体的な問題解決につながる」ことを理解させた。実践事例の紹介では，子どもに観察をさせる時の指導内容を紹介し，その後子どもがかいた観察記録を紹介した。また，数名の子どもの観察記録の変容から，観察時に必要な指導方法について言及した。学生からは，「子どもの記録の何を評価するかで，子どもの記録のかきぶりがこれほど変わるのかと驚いた。」「つい，何も指導をせずに観察記録をかきなさいと伝えてしまいがちになるが，教師の指導によって子どもの学びがこれほど深まるのかと感心した。」などの感想を得た。これらから，児童分析，教材分析，評価についての理解を深めた学生が多数であったと言える。 （対象者　大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成29年4月～平成30年3月 【7年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとして，模擬授業や実践事例の紹介を通して，児童分析，教材分析，評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では，何も見ずにメダカを描かせることから，「知っているつもりを自覚させることが主体的な問題解決につながる」ことを理解させた。実践事例の紹介では，子どもに観察をさせる時の指導内容を紹介し，その後子どもがかいた観察記録を紹介した。また，数名の子どもの観察記録の変容から，観察時に必要な指導方法について言及した。学生からは，「体験授業を通して自分の記録の書きぶりが変わったことから，子どもの記録のかきぶりも変わることに納得した。」「どの単元でも指導者の綿密な指導計画や準備があるからこそ，子どもの学びにつながることを理解した。」などの感想を得た。これらから，児童分析，教材分析，評価についての理解を深めた学生が多数であったと言える。 （対象者　大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）

（4）伊丹市立有岡小学校での指導講師	平成25年4月～平成26年3月 【2年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～体験活動を通した問題解決学習における言語活動の系統性を考える～」理科，生活科の教科研究および提案授業についての指導を行った。年間７回（提案授業の指導講評３回，年度初めの研究の方向性についての指導１回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，伊丹市教育委員会指定の研究発表会での指導講評１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。指導の内容としては，子どもの思考が働くきっかけである体験活動の充実の必要性，授業後の具体の子どもの姿（発言，ノート記録など）を具体化してからその姿に変容させるための手立てを考えることの２点である。指導の結果として，「子どもの思考を働かせるきっかけとなる体験活動の充実を意識した授業提案が大幅に増えたこと」「形式的な言語活動が授業場面で減少したこと」「単元や本時の授業の目標を具体化して授業案を立てられる教員が増えたこと」が挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成26年4月～平成27年3月 【3年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～自分の考えを持つための問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評３回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。今年度の指導の内容は，「子ども一人一人の生活経験や学習経験によって，子どもの自然の事物・現象を見る目は決まっていること」「その決まっている目線をずらすことで，子どもの問題意識は生まれること」「思考の多様な表現方法の意味付けや価値付けを指導者が的確に行うことで，子どもの学習に対する意欲はさらに高まり，子どもが主体的な問題解決に取り組むことができるようになること」の３点である。指導の結果として，「児童の実態を詳細に記録した学習指導案が多くなったこと」「授業時の子どもの姿やノート記録をもとにした討議を行うことが定着したこと」「子どもの意見や疑問をもとに授業を進める場面が研究授業において多く見られるようになったこと」が挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成27年4月～平成28年3月 【4年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評３回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。今年度の指導の内容は「子どもに伝え合い深め合わせるためには，『ホンネの問題意識』を持たせる必要があること」「子どもの意見や考えを授業のゴールに向かうように，指導者が意味付けたり価値付けたりする必要があること」の２点である。指導の結果として，「『ホンネの問題意識』を持たせるような事象の出会わせ方の工夫が多数見られたこと」「その工夫により子どもが自然と自らの伝え合うことができるようになったこと」が挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）

	平成28年4月～平成29年3月 【5年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評３回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，年度末の研究発表会での指導講評１回）の指導を行った。今年度の指導は,「子どもに伝え合い深め合わせるためには,『ホンネの問題意識』を持たせる必要があること」「子どもの意見や考えを授業のゴールに向かうように，指導者が意味付けたり価値付けたりする必要があること」「その意味付けや価値付けを板書などでどのように可視化するかということ」「伝え合い深め合えるツールの活用法」の４点である。指導の成果として，年度末の研究発表会で，板書やホワイトボードを思考の可視化のためのツールとして活用した生活科の授業,「ホンネの問題意識」を誘発する理科の授業，各グループの実験データを根拠に深め合う理科の授業を公開することができたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成29年4月～平成30年3月 【6年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評５回）の指導を行った。今年度の指導は,「子どもが主体的に伝え合い深め合えるような環境構成の仕方」「子どもの意見や考えを授業のゴールに向かうように，指導者が意味付けたり価値付けたりする必要があること」の２点である。指導の成果として，内容の系統性をふまえた「学習マップ」を作成できたことや，発達段階や学習内容に応じたグループ学習を実践できたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成30年4月～平成31年3月 【7年目】	自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間６回（提案授業の指導講評６回）の指導を行った。今年度の指導は,「子どもが主体的に問題解決や課題解決を行うことができる授業デザインのあり方」「子どもが自ら問題解決や課題解決に向かえる教師の形成的評価のあり方」の２点である。指導の成果としては，昨年度の成果として挙げられた学習マップを子どもの学びの自覚化を促進させるものに改編できたこと，子どもの気付きや考えをつなぐ教師の発言のあり方について教職員全員で学び合えたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成31年4月～令和２年３月 【8年目】	自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間７回（提案授業の指導講評６回，夏季研修会での講演１回）の指導を行った。今年度の指導は,「有岡小学校での過去の理科・生活科での研究成果を活かした授業デザイン」である。指導の成果としては，これまでの研究の成果と課題を分析することで，有岡小学校が目指す「主体的・対話的で深い学びによる授業改善」の視点を教職員全員で共通理解できたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）

	令和２年４月～令和３年３月 【9年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。コロナ禍ということもあり，本年度は研究授業の指導案の指導という形態となった。年間を通じて６本の指導案の指導を，主としてメールで行った。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	令和３年４月～令和４年３月 【9年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評３回，夏季研修会での講演１回，伊丹市教育委員会指定の研究発表会での指導助言）の指導を行った。今年度の指導内容は,「子どもが意欲的に学ぶ問題解決の在り方」である。指導の成果としては，これまでの研究の成果と課題を分析し，且つ OODA ループ的に問題解決の過程を捉えることで，有岡小学校が目指す「問題解決的な学習の在り方」を教職員全員で考えられたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
（５）大阪府下の小学校教員の自由研究指導力向上のための研修の指導助言	平成25年6月 【1年目】	大阪府教育センター主催の「自由研究指導力向上研修」で講話を行った。講話の内容は「自由研究の指導につながる理科の授業づくり」である。講話の目的は，日々の理科と自由研究を別物と考えるのではなく，日々の理科の授業を充実させることで，子どもが質の高い自由研究を行うことができるようにすることである。研修の結果として,「日々の授業で問題解決の道筋を子どもにたどらせることを繰り返すことが自由研究の質の向上につながることを参会者が実感したこと」が挙げられる。 （対象者：大阪府下小学校教員約３０名）
	平成26年6月 【2年目】	大阪府教育センター主催の「自由研究指導力向上研修」で講話を行った。講話の内容は「自由研究の指導につながる理科の授業づくり」である。講話の目的は，日々の理科の授業内容を充実させることで，子どもが質の高い自由研究を行うことを論じた。研修後「子どもの素朴な見方や考え方の分析の重要性」「日々の授業で問題解決の道筋を子どもにたどらせることを繰り返すことが自由研究の質の向上につながること」の２つを参会者が実感した。 （対象者：大阪府下小学校教員約３０名）
（６）大阪教育大学ＣＳＴ養成プログラム実地講師	平成25年8月 【1回目】	大阪教育大学科学教育センターが主催するＣＳＴ（コアサイエンスティーチャー）養成プログラムの学生プログラムである「理科教育法Ⅱ」で講義を行った。「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業」をテーマとし，中学年の授業づくり，児童分析，教材分析についての講義，授業実践の紹介，模擬授業を行った。結果，理科に関わる知識だけでなく，具体の子どもの姿をイメージできるようになったと好評であった。 （対象者:ＣＳＴ養成プログラム受講学生約１０名）

	平成26年3月 【2回目】	大阪教育大学科学教育センターが主催するＣＳＴ（コアサイエンスティーチャー）養成プログラムの学生プログラムである「理科教育法Ⅱ」で講義を行った。「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業」をテーマとし，高学年の授業づくり，児童分析，教材分析についての講義，授業実践の紹介，模擬授業を行った。結果，理科内容に対する深い理解のみならず，学習者の姿をイメージし教え込みではない理科の授業の魅力を感じることができたりした学生が大勢であった。 （対象者：ＣＳＴ養成プログラム受講学生約１０名）
（７）大阪教育大学教育学部「教職入門」実地講師	平成26年7月	大阪教育大学教育学部「教職入門」において，「理科を教える教師としての資質」をテーマとして，理科教師として学ぶこと，教育実習生を指導して感じたことを話した。さらに理科の目標内容とそのための授業づくりおよび実践事例についての講義を行った。特に，授業づくりおよび実践例では，小学校理科で取り扱う教材を学生一人一人に使用させ模擬授業を体験させた。その体験をもとに，実際の授業での子どもの様子を写真で紹介したり，ノート記録をもとに評価基準や評価方法を紹介したりした。指導の結果，「現場経験のある先生の授業は参考になる」「もっと実際の授業を受けて学びたい」「子どもの思考を姿やノート記録から教師が的確に見取り評価することがどれだけ重要かを実感した」などの声が多数挙がった。 （受講者：大阪教育大学１回生約６０名）
（８）教育課題研修指導者海外派遣プログラム 事前研修	平成26年8月	和泉市立国府小学校教諭として，独立行政法人教員研修センター主催の平成２６年度教育課題研修指導者海外派遣プログラム事前研修に参加した。研修派遣先は，フィンランドである。派遣団の研究テーマは「ＰＩＳＡ型学力の育成について」である。その中でも「科学的リテラシーを育成するための理科授業のデザイン」の研修を進める班に所属することとなった。本事前研修では，フィンランドの教育システムや現在の課題のみならず，日本の教育システムと比較しつつ視察するべき理科教育の項目をまとめた。さらに，研修報告書のまとめ方などの講義を受けた。
（９）教育課題研修指導者海外派遣プログラム 海外研修参加 （独立行政法人教員研修センター主催）	平成 26 年 10 月	平成２６年１０月１４～２５日の間，和泉市立国府小学校教諭として，「ＰＩＳＡ型学力の育成について」をテーマに，フィンランドでの海外研修に参加した。現地での主な研修先は，国家教育局，ユバスキュラ大学附属学校園，ヘルシンキ大学附属学校園および教員養成実習校など，計１２カ所の機関および学校園である。研修先では，主に理科の授業見学と授業担当教員へのインタビューを行った。本研修で明らかになったことは，日本の学習指導要領は世界でも誇れるすばらしい物であること，フィンランドでのＩＣＴ活用の授業のレベルが高いこと，ＩＣＴに頼りすぎて本来授業で大切にすべき教材分析や板書，支援が十分に行われていないことなどが明らかになった。

(10) 伊丹市立有岡小学校初任者研修講師	平成27年9月	伊丹市立有岡小学校において,「理科室の環境整備と授業づくりの基本」というテーマで，平成27年度に採用された初任者に対して，理科室の環境整備，安全面の指導，授業づくりについて指導した。特に，安全面の指導では，中村重太の「自作 hazards drawing による児童・生徒の加熱実験操作に関する安全意識調査」で使用された図を用いて，安全指導が必要な部分を指摘させた。また，授業づくりの基本では，リード線付きのソケットを使用せずに豆電球に明かりを付ける活動から，絶縁体の価値，リード線付きソケットの構造と豆電球の構造の関連性について講義した。結果,「指導者として見えていないものへの安全意識も持つことが大切であることがわかった」「指導者が教材について深く理解することが子どもを引きつける授業に繋がることがわかった」などの感想を得られた。 （対象者：伊丹市立有岡小学校新任教員４名）
(11)「保幼小接続期モデルカリキュラム（第２期）」検証のための幼稚園公開保育の指導講師	平成28年2月	伊丹市立こうのいけ幼稚園において行われた「保幼小接続期モデルカリキュラム（第２期）」アプローチカリキュラムに基づいた公開保育及び研究討議における指導講話を行った。指導の内容としては,「子どもの多様な気付きを誘発したり，思いや願いに向けて子どもがすぐに働きかけたりすることができる環境構成の重要性」「子どもの行動や発言他者とつなげる支援の重要性」の２点である。これらを公開保育で見られた具体的な事例を根拠として述べた。指導の結果として,「生活科の学びは保育園や幼稚園のそれと繋がっており，保育から学んでいかなければならないと実感した小学校教員が増えたこと」「小学校での学びを見据えた保育が必要であると考えた保育園や幼稚園の教員が多数見られた」ことが挙げられる。 （対象者：伊丹市内の小学校教員，公立および私立幼稚園教職員，保育所職員，こども園職員　約７０名）
(12) 八尾市立八尾小学校での指導講師	平成28年4月～平成29年3月【1年目】	「アクティブ・ラーニングの実現に向けて」というテーマをもとに指導を行った。年間５回（夏季研修での指導講話１回，研究授業の事前指導及び事後指導を３回，年度末の研究の成果と課題についての指導講話１回）の指導を，理科と算数科を中心に行った。指導の内容としては，子どもの思考が働くきっかけである課題設定の重要性，課題設定のための教師の教材分析と内容の系統性の分析の２点である。指導の結果として,「教材の特性や内容の系統性を踏まえた課題設定を授業のきっかけとして提示する授業が増加したこと」「展開部分での子どもへの形成的評価の必要性に気付く教員が出てきたこと」が挙げられる。 （対象者：八尾市立八尾小学校教員約４０名）
	平成29年4月～平成30年3月【2年目】	「アクティブ・ラーニングの実現に向けて」というテーマをもとに指導を行った。年間７回（年度初めの指導講話１回，各学年の研究授業の指導講話６回）の指導を，理科と算数科を中心に行った。指導の内容としては，子どもの思考をつなぎ拡げる指導者の役割，子どもの思考が表出するノートやワークシートの活用法の２点である。指導の結果として,「内容ではなく学び方を教える重要性」や「ノート記録の形成的評価やそれを考察部分で活用することの重要性」に気付く教員が出てきたことが挙げられる。 （対象者：八尾市立八尾小学校教員約４０名）

	平成30年4月～平成31年3月【3年目】	「子どもたちの考えをつなぎ・深める授業のあり方～自己の学びを見通し，振りかえることを大切にして～」というテーマをもとに指導を行った。年間６回（各学年の研究授業の指導講話６回）の指導を行った。指導の内容としては，子どもの主体的な学びを保証する授業デザインについて，子どもの思考をつなげる形成的評価のあり方の２つである。指導の結果として，本時レベルだけでなく単元レベルでの授業分析が授業等議会で多く発言されたこと，教師のつなぐ発言や子どもに繰り返し発言を求める教師の姿が授業内で多く見られたことが挙げられる。 （対象者：八尾市立八尾小学校教員約４０名）
(13) 第４９回全国小学校理科研究大会大阪大会分科会指導講師	平成 28 年 11 月	堺市立浜寺石津小学校で行われた，第４９回全国小学校理科研究大会大阪大会の代４学年分科会において，研究授業３本と実践報告２本の指導講評を行った。指導の内容としては，季節による動植物のくらしでは，季節ごとの気温や日照時間の変化と動植物のくらしを関連付ける指導の在り方について述べた。また，空気や温度変化など目に見えないものを扱う単元では，それらをイメージ図等で可視化しながら学習を進めていくことの重要性について述べた。参会者からは，グラフ化やサーモグラフィ画像など，可視化することの効果を感じられる実践発表や指導であったので，大変勉強になった。」「地域ごとによる夏の気温の上がり方の違いもあり，大阪府内と他の地域での学習のさせ方の違いを知ることができ，今後の指導の参考になった。」などという意見が多数挙がった。 （対象者　第４９回全国小学校理科研究大会大阪大会 第４学年分科会 参会者 約４０名）
(14) 公私立幼稚園・こども園・保育所（園）共同研究会講師	平成29年1月【1年目】	伊丹市立中央公民館で行われた第４回公私立幼稚園・こども園・保育所（園）共同研究会において，「次期学習指導要領に向けた就学前教育と小学校教育の滑らかな接続について」という演題で講演を行った。講演の内容として，伊丹市立有岡小学校で行われた生活科の授業をビデオで流し，対象授業を根拠として，子どもの学びの環境構成のあり方について講義をした。また，参会者にもグループ討議を行ってもらい，所属する校園の違いによる環境構成の考え方の違いから，保幼小の３校園の接続を念頭に置いた環境構成のあり方について考えてもらった。講演の成果として,「幼稚園や保育園の保育の実態を踏まえた生活科の授業づくりの重要性を実感した。」「小学校への接続や生活科と保育の系統性について改めて考えるいい機会となった。」という保育士や幼小教員の振り返りから，保幼小の接続期において，それぞれの校園での連携の重要性について気付いた保育士や教員が多数いたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市内の小学校教員，公立および私立幼稚園教職員，保育所職員，こども園職員　約７０名）

	平成30年2月 【2年目】	伊丹市立中央公民館で行われた第５回公私立幼稚園・こども園・保育所（園）共同研究会において，「就学前教育と小学校教育の滑らかな接続について～幼児期の終わりまでに育ってほしい姿～」という演題で講演を行った。講演の内容として，伊丹市立有岡小学校で行われた理科や生活科の授業実践から小学校教育での環境構成の有効性を論じると共に，保幼小の教育を滑らかに接続するために必要な条件や取り組みについて講義をした。また，参会者にもグループ討議を行ってもらい，所属する校園の違いによる環境構成の考え方の違いから，保幼小の３校園の接続を念頭に置いた環境構成のあり方について考えてもらった。「時間の無い中でも幼保の保育について学んで行かねばならないと感じた。」「幼稚園で行っている環境構成が小学校でも効果的であることを知って，さらに充実した実践を行っていこうと思うことができた。」という保育士や幼小教員の振り返りから，参会した保育士や教員によって学びのある会になったことが伺える。 （対象者：伊丹市内の小学校教員，公立および私立幼稚園教職員，保育所職員，こども園職員　約７０名）
(15) 伊丹市立有岡小学校研究発表会講演講師	平成29年2月	伊丹市教育委員会指定 平成28年度伊丹市立有岡小学校研究発表会において，「次期学習指導要領で求められる小学校理科・生活科の授業～有岡小学校の授業研究と「アクティブ・ラーニング」の視点から～」という演題で講演を行った。講演の内容として，平成28年12月の中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」の内容と登壇者の過去の授業実践を根拠に，次期学習指導要領で求められる小学校理科・生活科の授業像，およびその授業に必要な教師の指導の在り方について言及した。参会者のアンケートから「次期学習指導要領で求められる授業の具体が分かった。」「新学習指導要領が実施する前から授業の改善に取り組む必要性を十分に感じた。」といったアンケートの内容から，参会者の次期学習指導要領改訂に向けての学びが充実していたことが明らかとなった。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教職員，伊丹市内の学校教職員，伊丹市外の学校教職員，約２００名）
	令和4年1月	伊丹市教育委員会指定 令和 3 年度伊丹市立有岡小学校研究発表会において，「子どもが主体的に学び深め合う問題解決的な授業」という演題で講演を行った。講演の内容として，平成29年に告示された「小学校学習指導要領」やそれの各教科等の解説編の内容と令和3年度の有岡小学校の授業実践，登壇者の過去の授業実践などを根拠にしながら，これからの問題解決的な授業の在り方について言及した。（対象者：伊丹市立有岡小学校教職員，伊丹市内の学校教職員，伊丹市外の学校教職員，約２００名。伊丹市内外の教職員はオンラインでの参加。）

(16) 伊丹市立ありおか幼稚園園内研究会指導講師	平成29年3月	「育ちと学びをなめらかにつなげる幼小接続～自然科学の分野に視点をあてて，遊びの中で学びを深めていくための環境構成を探る～」という研究テーマのもとで指導を行った。指導の内容としては,「保育の学びと生活科・理科の学びの関連」「生活科・理科の環境構成から見る保育の環境構成の意義」の２点である。指導の結果として,「保育と小学校教育の関連に気付いた教員が出てきたこと」「教員が現在行っている保育実践の意味や価値に気付けたこと」が挙げられる。 （対象者：伊丹市立ありおか幼稚園教員６名）
（１７）八尾市立亀井小学校での指導講師	平成 30 年 11 月	八尾市立亀井小学校において，理科の研究指導を行った。研究授業の指導講評の他，子どもの「ホンネの問題意識を生み出す授業デザイン」をテーマとして講演を行った。 （対象者：八尾市立亀井小学校教職員約 40 名）
	平成31年4月～令和 5 年 3 月	八尾市立亀井小学校において，指導講師として授業研究の指導に携わった。研究テーマは「子どもの『かく力』『伝える力』の育成」である。年間６回（各学年の研究授業の指導講話６回）の指導を行った。指導の内容としては，子どもの対話の質を上げる手立てのあり方と，子どものノート記録の評価の在り方の２点である。指導の結果として，子どもの学びの記録の多様性を認めたり，対話の質を高める協働的な学びの在り方について学校全体で研究を行ったりすることができるようになった。 （対象者：八尾市立亀井小学校教員約４０名）
（１８）第 27 回大阪府小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会研究大会中河内大会の事前の研究指導講師	平成30年9月～令和 2 年 3 月	平成31年10月31日に八尾市立高安小学校で実施される第27回大阪府小学校生活科･総合的な学習教育研究協議大会中河内大会の総論，および授業研究の指導を行っている。平成30年度は「主体的・対話的で深い学びを目指す授業づくり」についての講演を 2 回，総論の内容指導を 2 回，研究授業の指導講評を１回行った。
（１９）八尾市立曙川小学校での指導講師	令和3年5月	八尾市立曙川小学校において,「新学習指導要領を踏まえた授業づくり」という内容で，同校教職員をｐ対象とした研修を行った。主体的な学び，教科横断的な学びの２つをキーワードにしながら，講師の過去の授業実践等の事例をもとに，今年度の授業づくりの在り方について言及した。 （対象者：八尾市立曙川小学校教職員約４０名）
（２０）堺市立金岡北中学校校区小中教職員夏季合同研修会の指導講師	令和3年7月	堺市立新金岡小学校において,「GIGA スクール構想，校内の ICT 教育の推進に向けて」というテーマの下で小中学校教職員向けの研修を行った。具体的には，小学校を中心としたプログラミング教育ポータル「スクラッチ」やそれを利用した授業実践例の紹介，また最先端技術を活用した指導の在り方について講義した。 （対象者：堺市立金岡北中学校区の小中教職員約８０名）
（２１）八尾市立高美小学校での指導講師	令和3年8月	八尾市立高美小学校において,「これから求められる小学校の授業実践」という内容で，同校教職員をｐ対象とした研修を行った。具体的には，子どもの問題場面の把握には個々に差があることや，算数科での具体的な問題場面を子どもの立場で捉えなおすことを通して，今年度の授業づくりの在り方を考えることができた。 （対象者：八尾市立高美小学校教職員約３０名）

（２２）伊丹市立荻野小学校での指導講師	令和４年１月	１年生の生活科の研究授業についての指導を行った。授業の実際を，「学習意欲に繋がる感覚」や「授業実践サイクル」，OODA ループなどと関連付けながら，子どもが具体的な活動や体験に没頭しながら気付きを深めていく授業の在り方について言及した。 （対象者：伊丹市立荻野小学校教職員約３０名）
（２３）大阪市小学校教育研究会 第３８回総合研究発表会２年次発表(理科)での指導講師	令和５年２月	大阪市小学校教育研究会 第３８回総合研究発表会２年次発表(理科)において，「地球」領域の研究授業の指導講評を行った。特に，「問題意識の醸成」の場面での指導の在り方やその場面を OODA ループで捉えていくことの重要性について言及した。 （対象者:大阪市小学校教育研究会 第３８回総合研究発表会２年次発表(理科)参加者約１００名）
５　その他 （１）大阪教育大学教育学部における非常勤講師としての教育実績 「初等理科授業研究」担当	平成25年4月 ～平成26年3月	大阪教育大学教育学部の非常勤講師として担当の「初等理科授業研究」(専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，理科の教材研究と授業づくりの講義および実習，学生による模擬授業の実施及び授業討議会での指導を行った。具体的には，授業で使用する教材を実際に作り，それを使った模擬授業をさせることで，教材の課題，板書や発問，支援などの課題を討議によって明らかにさせた。このような講義を通して，学生は教材分析の重要性や子どもに合った支援を行うことの重要性を理解することができた。
（２）畿央大学教育学部における非常勤講師としての教育実績	平成31年4月 ～令和３年３月	畿央大学現教育学部の非常勤講師として,「教育実習指導」(専門科目，３年次配当，通年，必修２単位）を担当した。主に，教育実習前の模擬授業の指導を担当した。教育実習を控えた学生に授業づくりの考え方や学習指導案の書き方，板書計画の立て方など教育実習に臨むにあたって必要な資質・能力の向上に寄与した。
	令和３年９月 ～令和４年３月	畿央大学現教育学部の非常勤講師として,「生活科概論」(専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）を担当した。主に，生活科の目標や内容，評価の在り方，具体的な活動や体験の意義等について,『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説生活編』をテキストに使いながら講義を行った。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 （１）小学校教諭１種免許状 （２）中学校教諭１種免許状家庭 （３）高等学校教諭１種免許状家庭 （４）小学校教諭専修免許状	 平成14年3月 平成14年3月 平成14年3月 平成29年3月	 平１３小１第２３６７号（大阪府教育委員会） 平１３中１第２４７４号（大阪府教育委員会） 平１３高１第２６３３号（大阪府教育委員会） 平２８小専第１３号（大阪府教育委員会）
２　特許等 特記事項なし		
３　実務の経験を有する者について特記事項 （１）大阪教育大学附属天王寺小学校　理科主任	平成25年4月 ～平成26年3月	大阪教育大学附属天王寺小学校の理科主任として，理科部の若手教員の育成に取り組んだ。具体的には，週１回の教科論に関わる文献の輪読会の開催，月１回の若手教員が行う授業見学とその事後指導を，年間を通じて行った。その結果，若手教員の文献を読む力がつくとともに，主任と部員が同じ方向性を持って日々の授業研究および実践を行うことができるようになった。学年の異なる理科担当者同士で学習指導要領を学び，目標や内容の系統性を確認し合った。さらには，本年度の研究発表会では，「いい提案授業であった。」「こんな理科の授業を見せてもらえ

		るなら来年もぜひ来たい。」といった高い評価を受けた。
（３）大阪教育大学附属天王寺小学校 第３学年主任	平成25年４月 ～平成26年３月	学年の主任として，学年全員に「規律」「素直」「努力」の３つのキーワードを示して，学年全体経営，授業改善および生活指導にも取り組んだ。定期的に学年教材研究日を設ける等，教師としての資質を高める指導を行った。その結果，学年全体の子どもは落ち着いて授業を受けられるようになるとともに，保護者からの学校および学年教員団への信頼も大きくなった。
４　その他 特記事項なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） １．天王寺教育ノート 第１４２号	共著	平成25年７月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成２４年２月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践分析集である。 Ｂ５判　全７６頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：萩原武士，大仲政憲，石川聡子，田中建司，山手隆文，森保，太田雄久，吉門妙子，髙井大輔，粟生義紀，松山雅子，手取義宏，柳本朋子，竹上由希子，三浦聡子，小島律子，佐藤賢司，入口豊，金光靖樹，山本岳大，他９名 本人担当部分 「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業３年『ものと重さ』」（p１８－ｐ２０）部分を単著 大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会での授業についての理科教科論と授業実践報告および分析，考察を行った。明らかになったことは，体験活動を充実させることで子どもが言語活動の必要性を感じることである。子どもの素朴概念と授業の目標をもとに体験活動も言語活動も「何を」「どのように」の２つの視点を明らかにして設定することが大切であると述べた。体験に支えられた言語活動の重要性を論じた。

２．天王寺教育ノート 第１４３号	共著	平成 25 年 12 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	思考力・表現力判断力の育成には，何を大切にし，どのように取り組むかを，各教科・領域の視点で述べた。 Ｂ５判　全６７頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：矢谷健一，山手隆文，太田雄久，吉門妙子，髙井大輔，竹上由希子，井上由香里，田村真由子，山本岳大，吉森久展，栫井大輔，浜田美和，武智康文，角田浩太郎，清水貴之，他７名 本人担当部分 「思考力・表現力・判断力の育成とその評価『観察での思考力・表現力の育成とその評価』」（ｐ８－ｐ９）の部分を単著 理科での思考力・表現力の育成について，観察という授業場面に焦点をあてて考察した。明らかになったことは，体験活動の充実と言語活動での指導者の目標に合わせた適切な意味付け，価値付けが思考力・表現力の育成につながるとことを論じた。
３.科学的な見方や考え方を育む理科授業	単著	平成 26 年 12 月	株式会社ＥＲＰ	小学校理科の目標である「科学的な見方や考え方を育む」ための理科授業づくりについて述べた。具体的な授業づくりの視点として，「児童理解」「教材分析」「単元目標の具体化」の３つをキーワードとして取り上げた。「児童理解」については，子どもの先行経験と内容の系統性をもとに，子どもが「知っていること」「知っているつもりになっていること」「全く知らないこと」の分析を行う「診断的評価」の重要性を述べた。「教材分析」は，教材がもつ単元目標に迫ることのできることのできる特質や価値を分析する目を養うことを述べた。さらに指導計画のなかに「形成的評価」をいかし，児童のつまずきを発見しそれを指導の改善に活かすことを主張した。「目標の具体化」については，「統合的な評価」を行うために目標達成に至った子どもの発言やノート記録を具体化することを述べた。３つのキーワードをもとにした小学校３年生「電気の通り道」，５年生「天気の変化」など６年生までの授業実践例を述べた。 Ａ５判　全５５頁
４.人間教育を視点にした教職入門	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版	人間教育に視点を当てて，教師を目指す学生に教育学の第一歩として，教育の目的や内容や学校組織について論じたものである。 Ｂ５判　２８０頁 編者：中田正浩 共著者：中田正浩，鎌田首治朗，松田智子，中田律子，金山憲正，瀧明知恵子，長居勘治， 本人担当部分（１０頁） 第６章第２節「小学校の学級経営」（p. １７２～p. １８０）の部分を単著 小学校は６歳から１２歳までと，担当する児童の成長及び発達の幅が広い。その発達に応じた特徴を把握し，段階に応じた学級指導について，１年から６年まで具体的に述べた。また，小学校学級担任の一日の仕事とその経営ポイントについて具体的に述べた。さらに，学校教育目標から学級教育目標を立てる手立

				てについて説明し，そのモデルとし６年生の例を示した。最後にPDCAサイクルで実践する学級経営の評価の重要性を論じた 本人担当部分（１０頁） 第７章第１節「小学校の生徒指導」（ｐ．２１２～ｐ．２２２）部分を単著 小学校という児童の発達年齢上，生徒指導は保護者及び地域の人々との連携なくしては，達成できない。また思春期の早期発達により，小学校高学年への対応は思春期初期の独特のプライドや自尊感情を傷つけないようにしつつも，毅然とした対応する必要性を述べた。小学校低学年・中学年・高学年の生徒指導のポイントを述べた。生徒指導の体罰・不登校・いじめなどが小学校でどのように解決するか方策を示唆した。また小１プロブレムや中１ギャップへ等への対応には接続する幼稚園・中学校との連携が，重要であることも述べた。
５.シリーズ新時代の学びを創る５ 理科　指導の理論と実践	共著	平成29年8月	あいり出版	新学習指導要領で求められる理科の指導や授業の在り方について，大学生や現役教員に向けて，理論と実践から論じたものである。 Ａ５判　２９８頁 編者：石川聡子 共著者：石川聡子，秋吉博之，畦浩二，平田豊城，太田雄久，仲矢史雄，川上雅之他１４名 本人担当部分（１０頁） 第９章「小学校の実践事例」第２節「３年生『ゴムの働き』」（ｐ．１６４～ｐ．１７２）の部分を単著 ３年生「ゴムの働き」の実践事例をもとに，新学習指導要領で求められる理科の授業づくりの在り方について言及した。具体的には，これまでの小学校理科教育で求められる不易の部分にあたる児童理解，教材研究などは，これまで通り大切にすべきであることを述べた。それと同時に，子どもが学ぶ内容以上に，学習に使うツールや環境構成など，子どもの学び方をどのように構造化するかという流行にあたる部分についても事例を通して述べた。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(学術論文) １. 多面的に観察させることで, 子どもの科学的な見方や考え方を育む	単著	平成 26 年 10 月	株式会社ＥＲＰ ｐ２４～ｐ２７	理科学習においては，子どものこれまでの先行経験によって，子どもの自然の事物・現象についての見方は一面的になる傾向が強い。そのためには単元導入前に「診断的評価」を行う必要がある。この子どもの見方は無意識的なものであるため，一面的な見方を変容するには，指導者の指導および支援が必要になる。また，その変容や指導の成果を確認するために，指導の全体計画に「形成的評価」を適宜設定しなければいけない。３年生の「植物の体のつくり」「昆虫の体のつくり」での子どもの観察記録の変容を例に挙げ，このような変容に至った指導者の指導や支援及び目標と評価について述べた。さらには，観察記録の変容を指導者が的確に価値付けたり意味付けたりすることで子どもにフィールドバックするなど,「指導と評価の一体化」を図ることにより，子どもの観察する視点を多面的・科学的なものに変容させることができることを述べた。さらに，評価を教師の指導改善に役立てる重要性についても論じた。
２. 理科教育と人間教育－自然の事物･現象についての視点を変えることを通して－	単著	平成 26 年 12 月	人間教育学研究第２号 （人間教育学会） ｐ８１～ｐ８８	人間教育とは，子ども一人ひとりが個性的で主体的な存在として成長していくことを援助する教育である。この教育のための授業づくりの視点として，子どもの内面世界に注目し，授業実践を行うことである。理科教育で求められることは①主体的な問題解決を重視することである。特に小学校では子どもの発達段階を考慮して身近な自然現象を対象とし子どもが自ら問題を発見し，見通しをもった観察・実験などを通して心を動かしながら問題解決の能力を育てることである。②言語力を重視することである。観察やレポートを作成する際に，視点を明確にして事象の差異や共通点を捉えて報告することは，人間としての基本的思考力育成となる。さらに比較や分類あるいは関連付けて思考すると言った「生きる力」の基本となる考え方を理科教育は育てる。③自然体験・科学体験の充実である。子どものこれらの体験不足が，人間としての成長に少なからず影響を与えている。体験を通し科学的知識の定着を図るだけでなく，学習

				を基に自己の日常生活を振り返り，生活に活用することができれば学習の意義は深まる。上記の視点で，理科という教科を学ぶ意義と人間教育について，具体的な単元をあげながら目標や内容，そして評価について実践事例をもとにして論じた。具体的には，６年生「水溶液の性質」で「粒子の結合の変化」をとらえさせるために，単元を通して自分の考えを図化して学習を進めさせた。考察の際に，図と比べさせ考察させることで，目には見えない「粒子の結合の変化」とらえることができるようにした。３年生「ゴムの働き」では，ゴムの伸びによって変化するゴムが持つエネルギーをとらえさせるため，決められた場所に車を止めるゲームを設定し，ゴムの伸びと車の進む距離の関係をドットシールでグラフ用紙に記録させた。完成した１次関数のグラフから「ゴムの伸びと車の進む距離にはきまりがある」ことに気付かせた。
３．子どもの目の付けどころをもとにした小学校理科の授業づくりに関する一考察	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学紀要 第３集 ｐ１６９～ｐ１７６	見る人が自然の事物・現象の何を見るかによって，その捉え方は変わる。また，同じ部分を異なる向きから見るかによっても，そのとらえ方は変わる。小学校理科の学習において，子どもの目の付け所を変えるような手立てを行うことは，自然の事物・現象を理解させたり見方を深めたりすることに非常に有効であると考えられる。このような想定の下で，小学３年生の「植物育ちとつくり」の実践事例をもとにして小学校理科の授業において子どもの目の付け所を変える手立てを行った。その手立てが子どもの自然の事物・現象の理解の深まりや見方の変容に効果的であったかを，子どものノート記録を根拠として論じた。授業実践を通して，指導者が観察の仕方を綿密に根気強く指導し続ける必要があると同時に，子どもの観察記録をもとに，その目の付け所を的確に意味付けたり価値付けたりする必要があることが明らかになった。また，このような指導を継続的に行うことで，子どもは自身の学び方のよさに気付くとともに，達成感を感じ，理科の学習に対しての自信を持つようになることが明らかになった。
４．小学校理科教材「メダカ」の価値とその学習で獲得させたい「生命」についての見方や概念	単著	平成 27 年 12 月	人間教育学研究第３号 （人間教育学会） ｐ１１５～ｐ１２１	前の指導要領の改訂によって，小学校理科の内容のうち，「動物の誕生」が選択から必修に変更された。その前の改訂時に選択になったのにもかかわらず，すぐに必修に戻されたことは，本内容には子どもに「生命」についての見方や考え方を養うための価値があると考えられる。このような考えのもとで，過去の教科書と現行の教科書の記述を分析することによって，「動物の誕生」の内容が持つ教育的な価値について論じた。教科書の分析から，子どもに獲得させたい「生命」についての見方や考え方は，メダカの雌雄によるひれの形の違いの持つ意味を理解し，受精卵の育ちを観察し，さらにはメダカを継続的に何世代にもわたって飼育するという体験を通して獲得される「生命の連続性」とであることが明らかとなった。また，「動物の誕生」の内容が持

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				つ価値は，雌雄のひれの形の違いや受精卵の育ちという内容そのものが「生命の連続性」を意味していることであることが明らかとなった。
５.子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果―小学校第５学年「電流の働き」の学習より―	単著	平成 29 年 3 月	平成 28 年度大阪教育大学大学院教育学研究科実践学校教育専攻 修士論文　全３３頁	これまでの日本の理科教育では，子どもが自然に働きかけたり自然から感じ取ったりすることは重要視されてきた。その根拠として，日置（2005）が論じている，我が国の理科教育のねらいは「子どもが素朴に自然を見つめて，自然に働きかけて，そこから得られた情報と自らの経験をもとにして，自分の考えをつくっていくこと」であること,「子ども独自の素朴な考え方をとりわけ重視しているので，理科の基盤には，子どもが自分で感じたことや考えたことが存在している」ことの２点を挙げることができる。また，平成 28 年 12 月の次期学習指導要領の改訂にむけての答申においても，育てたい子どもの姿として，子どもが豊かな感性を働かせながら新たな価値を創り出すことが明記されている。これらのことから，小学校理科で子どもの感性を育む授業を構想，実践することで，その効果を検証した。子どもの感性を育む授業を構想する前に，授業実践を行う子どものこれまでの自然体験と遊びの経験について，質問紙による調査を行った。その結果，授業実践を行う単元「電流の働き」の内容に関わる「乾電池を使ったおもちゃで遊んだことがある」「じ石を使ったおもちゃで遊んだことがある」の項目では,50%以上の子どもが「わりと経験がある」「かなり経験がある」ということが明らかとなった。一方で,「全く経験が無い」「あまり経験がない」子どもが，それぞれ 3.2%，9.7%いることも明らかとなった。質問紙調査の結果を受け，これまでの遊びの経験の差を埋めるために，導入部分で全員が電磁石で鉄を引きつけるという場を設定した。そして，その後の一連の問題解決において，森本（2013）による「対話的な授業を進めるための教師が取っている行動」により，指導者が子どもの表出させた感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うという授業を構想し，実践した。授業プロトコルの分析から，指導者が子どもの感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うことで，子どもは問題解決への見通しを持つことができるようになったり，実感を伴った理解へ至ることができるようになったりすることが明らかとなった。 この結果から，指導者が子どもの感性を意味付けたり価値付けたりすることで，子どもが「実感を伴った理解」に至るとともに，このような指導を繰り返し行うことで子どもの感性を育むことができるという知見が得られた。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
６．理科の見方・考え方を働かせる小学校理科の授業づくりの一考察	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要 第 7 集 ｐ１５～ｐ２２	平成 29 年 3 月に，新しい『小学校学習指導要領』が，同年 6 月に新しい『小学校学習指導要領解説理科編』が文部科学省より公示された。今回の改訂により，理科の目標が大きく変化した。これまで養う対象であった「見方や考え方」が，働かせる対象である「見方・考え方」となり，実際の授業実践に少なからず影響を与えるものと思われる。そこで，本稿では，現行の指導要領下で実践された授業を，新しい指導要領の考え方で分析し直し，新しい指導要領下での小学校理科の授業づくりについて分析を行った。その結果，これまでの実践の全てを変える必要はなく，子どもが「理科の見方・考え方」を働かせられるような教材や状況を，どのように作るかが重要であることが示唆された。
７.子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果の検証－小学校第５学年「電流の働き」の実践より－	共著	平成 30 年 7 月	理科教育学研究第 59 号 1 巻（日本理科教育学会）ｐ１～ｐ１０	研究の目的は，児童の感性を育てる小学校理科の授業を構想・実践し，その効果を検証することである。研究の方法として，これまでの児童の実態を把握し，授業実践を行った。質問紙調査から，児童の自然体験と遊びの経験が明らかとなった。特に，本研究の授業実践の対象である「電流の働き」の内容に関わる「乾電池を使ったおもちゃで遊んだことがある」「じ石を使ったおもちゃで遊んだことがある」の項目では，50%以上の児童が「わりと経験がある」「かなり経験がある」と回答した。その一方で，「全く経験が無い」「あまり経験がない」と回答した児童は，それぞれ 3.2%，9.7%であった。この児童の実態を踏まえて，児童の感性を育てる理科授業を構想した。その特徴として，次の２点が挙げられる。１つ目は，これまでの遊びの経験の差を埋めるために，導入部分で全員が電磁石で鉄を引きつけるという場を設定することである。2 つ目は，その後の問題解決の過程において，指導者が児童の感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うことである。実践した授業のプロトコルの分析から，指導者が児童の感性を意味付けたり価値付けたりする支援を繰り返し行うことで，児童は問題解決への見通しを持つことができたり，「実感を伴った理解」へ至ったりすることが明らかとなった。本授業実践を通して，指導者の児童の感性に対する意味付けや価値付けを繰り返し行うことで，児童の感性を育てることができるという知見が得られた。 ※平成 28 年度大阪教育大学大学院教育学研究科実践学校教育専攻修士論文を『理科教育学研究』への投稿用に一部を改編した。 共著者：太田雄久，粟生義紀，秋吉博之

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８.子どもの感性を育てる小学校理科授業の提案	共著	平成 31 年 2 月	理科の教育 2019 年 2 月号（東洋館出版社）	『理科教育学研究』第 59 号 1 巻に掲載された「子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果の検証－小学校第５学年「電流の働き」の実践より－」で取り上げた「対話的な授業を進めるための教師が取っている行動」（森本，2013）が子どもの感性を育てる効果があることを具体の実践事例を根拠に論じた。また，このような実践事例が新学習指導要領で求められている主体的・対話的で深い学びの授業提案であることも合わせて論じた。 共著者：太田雄久，粟生義紀，秋吉博之
９.理科の見方を働かせる小学校理科授業の提案－時間的な視点で捉える状況を作る－	単著	平成 31 年 3 月	奈良学園大学紀要 第 10 集 ｐ１～ｐ８	本論文の目的は,「時間的な視点で捉える」という「理科の見方」を子どもが働かせる状況を指導者が作り出す授業を構想，実践し，その授業で表出した子どものノート記録を分析することで，実践した授業において子どもが「時間的な視点で捉える」という「理科の見方」を働かせることができたかを検証することである。指導の手立てとして「4 コマ漫画の枠」を使った授業を実践し子どものノート記録を分析した結果,「4 コマ漫画の枠」を使うことで,「時間的な視点で捉える」という「理科の見方」を働かせる状況を作ることができることが明らかとなった。その一方で，自然の事物・現象についてより細かな時間枠で捉えるミクロ的な視点を働かせる必要性や効果的に「4 コマ漫画の枠」を使った学習ができる単元が他にもあるのかを検証する必要があることも示唆された。
１０.小学校教育で求められる授業実践についての一考察－生活科と幼稚園教育の比較から－	単著	令和 2 年 3 月	奈良学園大学紀要 第 12 集 ｐ１４５～ｐ１５０	本論文の目的は，小学校での生活科の授業実践を取り上げ，その実践と幼稚園の教育との共通点を示すことで，新学習指導要領で求められる小学校教育での学校段階等間の接続を踏まえた授業実践のポイントを考察することである。小学校生活科の授業実践 1 つと幼稚園での保育実践 1 つの比較から，①掲示物を活用して，子ども自身が学びを自覚化できるようにするとともに，子ども同士の学びの共有化を図ること，②掲示物は，子ども全員の目に入るところに効果的に配置すること，③教師は教えるのではなく，子ども自らが学びを創ったり進めたりすることができるように形成的評価を繰り返し行うことの 3 点が，小学校の教師と幼稚園の教師の共通の行為であることが明らかとなった。また，これらの行為は，新しい小学校学習指導要領で求められる授業実践におけるポイントになることも示唆された。

㈜学会発表㈜ 1. 子どもの目のつけどころを意識した理科の授業	―	平成25年6月	「ＮＥＷ　ＥＤＵＣＡＴＩＯＮ　ＥＸＰＯ」（大阪マーチャンダイズマート）	「小学校の理科教育に求められること」をテーマに開催された。個々の生活経験や学習経験によって，子どもの自然の事物・現象を見る目は決まっており，その目線をずらすことで，問題意識は生まれることについて授業実践をもとに述べた。実践例は，３年生「植物の体のつくり」である。発表では，チューリップの絵を描かせたときに，ほとんどの子どもは横向きに書くことを例に挙げ，観察する子どもの視線の向きを植物の上から，葉の裏側から，土の中へと変える手立てが，植物の体のつくりやその工夫についての実感を伴って理解につながることを述べた。 担当部分：具体的な指導事例の提示 共同発表者　村山哲哉
２.子どもの思考力を育成する理科の授業～子どもの目のつけ所を意識して～	―	平成25年8月	第３回村山理科教育セミナー（大阪市立苗代小学校）	大阪市，堺市，大阪教育大学附属小学校教員を中心にした理科教育の研究会である。発表内容は子どもの生活経験や学習経験の違いによって，子ども一人一人の自然の事物・現象への見方や感じ方が異なること，仮設設定や考察時にこの違いを指導者が適切に意味づけたり価値づけたりしながら対話的に授業を進めることで，科学的な思考力を育成するという考え方のもとで実践した具体例を述べた。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３. 理科教育と命の教育	－	平成 26 年 8 月	第 1 回人間教育学会 （奈良学園大学）	理科の「Ｂ生命」の内容を学習することを通して，小学校道徳の目標の解説にある「自他の生命の尊さ」を自覚できるきっかけを作ることを目的として実践した。実践した単元は，５年生「植物の発芽と成長」ある。明らかになったことは，理科の授業を通して「自然を愛する心情を育てる」こと，「実感を伴った理解を図る」ことができれば，「自他の生命の尊さ」を自覚できるきっかけを作ることができ，理科と道徳教育連携を図る授業の一案としての提案である。
４．理科教育と和文化	－	平成 26 年 11 月	第 11 回　和文化教育学会 （東京都武蔵村山市）	天気の言い伝えである観天望気を，５年生「天気の変化」の単元で詳しく学習することを通して，天気を決定づける要因について実感を伴って理解させることを目的として実践した内容を発表した。具体的な内容としては，単元の終末に，教科書で紹介されている観天望気を調べる活動を設定し，観天望気を成立させる要因を探る活動，さらには，オリジナル観天望気を作り，その信頼性を調べる活動を設定した。そして，その活動を設定することで，子どもの天気の変化についての見方や考え方を科学的なものにしようとした授業実践の一案として提案した。
５. 子どもの視点の分析をもとにした小学校理科の授業開発とその実践	－	平成 28 年 3 月	日本教師学学会第 17 回大会 （奈良学園大学）	小学校理科授業において，この視点を動かすことで，子どもは「ホンネの問題意識」を持つことができ，主体的に問題解決の活動に取り組むようになると考え，授業実践を行った。実践の分析から，子どもの視点を動かす手立てを行うことは，子どもが実感を伴って理解すること，科学的な見方や考え方に変容することにつながることが明らかとなった。
６. 子どもの感性を育む支援のあり方～子どもの自然体験や遊びの経験をふまえて～	－	平成 28 年 8 月	日本理科教育学会第 66 回全国大会 （信州大学）	子どもの自然体験や遊びの経験の違いにより，子どもの自然に対する感じ方や目の付け所に違いが出るという前提のもと，子ども一人一人の感じ方や目の付け所を効果的に価値付けたり意味付けたりして，子どもの感性を育もうとする授業を実践して，その効果を検証した。授業実践を通した検証から，ども一人一人の感じ方や目の付け所を効果的に価値付けたり意味付けたりすることで，子どもの感性が育むことにつながるという知見が得られた。 担当部分：研究代表者として発表を行う。 共同発表者　秋吉博之，粟生義紀 発表抄録：p. ２５６
７. 子どもの感性を活用した小学校理科授業の実践とその効果～小学校第５学年「電流の働き」の学習より～	－	平成 28 年 11 月	平成 28 年度日本理科教育学会近畿支部大会大阪大会 （大阪教育大学）	文部科学省（2011）は，感性に関する指導を行う際に「豊かな表現，より論理的で的確な表現を通して互いに交流する」ことに留意することを示している。そこで，対話的な学びの場で指導者が子どもの感性を指導に活用する授業を構想，実践し，その効果を検証した。授業実践による検証から，指導者が子どもの感性を活用することで，子どもは「実感を伴った理解」へ至ることが明らかとなった。 担当部分：研究代表者として発表を行う。 共同発表者　秋吉博之，粟生義紀 発表抄録：p. ３７

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８. 子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果～小学校第５学年「電流の働き」の学習より～	－	平成 29 年 8 月	日本理科教育学会第 67 回全国大会 （福岡教育大学）	これまでの日本の理科教育では，子どもが自然に働きかけたり自然から感じ取ったりすることは重要視されてきた。その根拠として，日置（2005）が論じている，我が国の理科教育のねらいは「子どもが素朴に自然を見つめて，自然に働きかけて，そこから得られた情報と自らの経験をもとにして，自分の考えをつくっていくこと」であること，「子ども独自の素朴な考え方をとりわけ重視しているので，理科の基盤には，子どもが自分で感じたことや考えたことが存在している」ことの２点を挙げることができる。また，平成 28 年 12 月の次期学習指導要領の改訂にむけての答申においても，育てたい子どもの姿として，子どもが豊かな感性を働かせながら新たな価値を創り出すことが明記されている。これらのことから，小学校理科で子どもの感性を育む授業を構想，実践することで，その効果を検証した。授業実践の検証から，森本（2013）による「対話的な授業を進めるための教師が取っている行動」により，指導者が子どもの表出させた感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うことで，子どもの感性を育てることができるという知見が得られた。 担当部分：研究代表者として発表を行う。 共同発表者　秋吉博之，栗生義紀 発表抄録：p. ３８５

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年3月31日

氏名　荻布　優子

研究分野	研究内容のキーワード
発達障害　障害児の心理学	発達性読み書き障害の背景要因・指導 読み書き能力と語彙や学力の関連

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 被支援者の立場にたつ演習形式の授業実践	平成31年4月～令和1年8月	宮城教育大学教育学部の非常勤講師として担当した小児保健において、保育士や幼稚園教諭を目指す学生に対して心理検査を受ける立場を経験させ保護者や幼児の立場について具体的に想像させるための演習形式の授業を
２　作成した教科書，教材 奈良学園大学「教職実践演習」＜教職組＞の取組～学士課程教育の質の保証～　分担執筆	令和2年9月	奈良学園大学における教育実践演習の取り組みをまとめたテキストのうち、特別支援教育に関する内容について分担執筆した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価	平成30年5月	東北大学教育ネットワークセンターコンサルテーション事業における学習障害児支援事業において、発達障害児へ知能検査（WISC-4）を実施する大学院生に対し、検査場面に同席し検査の実施方法の指導演習を行った。同時に検査場面での行動観察の視点についても指導した。具体的な指導に満足度が高かった。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 特記事項なし		
５　その他 仙台医健・スポーツ＆こども専門学校における教育実績	平成31年4月～令和1年8月	教育課程論を非常勤講師として担当。こども保育学科1年次を対象に、幼児教育の教育課程や子どものアセスメント、障害児の保育についての講義を行った
東北文化学園大学における教育実績	平成31年4月～令和1年8月	神経心理学を非常勤講師として担当（オムニバス）。医療福祉学部保健福祉学科3年次を対象に、発達障害に関わる神経心理学の概論について講義を行った。
宮城教育大学における教育実績	平成31年4月～令和1年8月	障害児保育を非常勤講師として担当（オムニバス）。教育学部初等教育教員養成課程幼児教育コース2年次を対象に、各種障害についての概説およびその保育について講義をした。 小児保健を非常勤講師として担当（オムニバス）。教育学部初等教育教員養成課程幼児教育コース2年次を対象に、各自治体で実施される乳幼児検診や精密検診で行われる心理検査についての講義を行った。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
１　資格，免許 博士（教育学）	令和2年3月	東北大学　教博第212号 題目：児童期における漢字書字正確性に関する神経心理学的検討―学力や視覚情報処理能力との関係性の観点から―
教員免許	平成24年3月 平成24年3月 平成24年3月	小学校教諭一種免許状（平二三小一第十四号） 幼稚園教諭一種免許状（平二三幼一第六号） 特別支援学校教諭一種免許状（平二三特支一第六号）
公認心理師 臨床発達心理士	平成31年2月 令和4年4月	第19263号 第04810号
２　特許等 特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 横浜市西部地域療育センターにおいて	平成26年4月～平成31年3月	心理士として幼児及び学齢児の心理評価およびフィードバックを年間200件程度行い、同時に保護者に対して心理教育に従事。幼稚園、保育園、小学校とのコンサルテーションを実施した。
	平成27年9月	ダウン症や脳性まひなどの病理型の知的障害を伴う児の保護者を対象に、障害種別の心理発達の特徴と心理評価について講義を行った。
	平成27年12月，平成28年3月，平成28年10月，平成29年6月，平成30年9月	発達障害児の保護者向けに、幼児期の発達段階および自閉スペクトラム症や注意欠如多動症の認知特性をテーマにした講義を行った。

	平成28年7月(2回),平成29年5月(2回).	知的障害児の保護者を対象に、知的発達と心理検査（心理査定方法）のについて講義を行った。
	平成28年6月	心理士を対象に、幼児期の認知発達・心理評価方法（田中ビネー知能検査及び新版K式発達検査2001）について講義を行った。
	平成27年11月	心理士を対象に、新版K式発達検査2001の歴史・検査の構成と実施方法、評価される能力・近年の研究動向についての講義を行った。
奈良県スクールカウンセラー	令和2年4月～現在に至る	奈良県スクールカウンセラーとして、公立小学校において児童や保護者のカウンセリング、コンサルテーション、研修講師等を行っている。
兵庫県スクールカウンセラー	令和2年4月～現在に至る	兵庫県スクールカウンセラーとして、県立特別支援学校において保護者のカウンセリングやコンサルテーション、研修講師を行っている。
丹有地区県立学校保健部長会研修講師	令和4年11月	兵庫県丹有地区の県立学校（高等学校及び特別支援学校）の保健部長を対象に「思春期の発達障害の理解」をテーマにした講義を行った。
４　その他		
第46回コミュニケーション障害学会学術講演会準備委員	平成31年2月～令和2年5月	令和2年5月30-31日に開催（Web）された第46回学術講演会の準備委員を務めた。
第8回宮古島神経科学カンファレンス・第10回NU-Brainシンポジウム合同学術集会実行委員	令和2年10月～12月	令和2年12月19日に開催（於沖縄・Webのハイブリット形式）された学術集会の実行委員を務めた。
第20回日本ストレスマネジメント学会準備委員	令和2年10月～令和3年9月	令和3年9月開催予定（於東北大学・Webのハイブリット形式）の第20回学会学術大会の準備委員を務めた。
バイオメディカル・ファジイ・システム学会第34回年次大会大会組織委員	令和2年10月～令和3年12月	令和3年11月開催予定（於奈良学園大学・Webのハイブリット形式）の第34回年次大会の大会組織委員を務めた。
バイオメディカル・ファジイ・システム学会評議員	令和3年4月～令和5年3月	バイオメディカル・ファジイ・システム学会の評議員を務め、合わせて学会活性化担当として学会運営に携わっている。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1. 奈良学園大学「教職実践演習」＜教職組＞の取組～学士課程教育の質の保証～	共	令和2年8月	ERP出版	本学の講義「教職実践演習」での取り組みをまとめた書籍にて、特別支援養育に関する章を執筆した。通常学期急に置ける特別支援教育の在り方や、その一手段としての授業のユニバーサルデザイン化について論じた。あわせて公認心理師の立場から、医療との連携や教師の立場から見た投薬の考え方についても述べた。 共著者名　善野八千子、太田雄久、荻布優子、西江なお子、森一弘 担当部分「第7章　特別支援教育～特別ではない、あたりまえの実践に～」 P55－64（全127頁）
2. これからの現場で役立つやさしい臨床心理検査事例集	共	令和5年2月	金子書房	公認心理師を対象とした心理検査活用を目的とした書籍のうち、思春期の問題行動をターゲットにして心理検査の活用や結果のフィードバックに関する仮想事例を執筆した。万引きなどの非行の背景にも発達障害特性が存在する可能性を示唆し、合わせて心理アセスメントをもとにした学校とのコンサルテーションの在り方や、チーム学校の在り方についても論じた。 編著　津川律子、黒田美穂 担当部分「第１部　事例で学ぶ臨床心理検査　3章　思春期の問題行動」 共同著者名：荻布優子、川崎聡大
（学術論文） 1.学齢期における遠見視写力の発達過程および語彙力・書字正確性への関与（査読あり）	共	平成26年4月	コミュニケーション障害学31(1)，p1-7	LD児が苦手とする「黒板を写す力＝遠見視写力」の定量的な評価方法を開発し、基礎的なデータを収集した。視写力は経年的に発達することが明らかとなった。また一般小学生では視写力の低下により、書字正確性と語彙力の低下が引き起こされる。知的障害児や肢体不自由児の学習場面においても、板書量の調整が必要であることが示唆された。 著者：北村満、川崎聡大、荻布優子
2. 基礎的学習スキルと学力の関連―学力に影響を及ぼす因子の検討：第一報―（査読あり）	共	平成29年3月	教育情報研究32(3)，p41-46	学習障害の支援を構築するため、既存の評価ツール読み書きの困難さの検出力を明らかにし、学力との関係を検討した。漢字の書字正確性の低下よりも、ひらがな音読流暢性の低下が学力低下のリスク因子となりうることが明らかとなった。 著者：荻布優子、川崎聡大

3. 発達障害の病理的背景―限局性学習症の診断評価の観点から―	共	平成30年9月	奈良学園大学紀要9,p23-29	教育界で定義されるLDの大部分をしめる限局性学習症（SLD）の医学的な診断基準の変遷と、その生理・病理的背景について概説した。いわゆる「LD」と総括されていた症候がDSM-5においてSLDとして概念が整理された。SLDの障害背景にある音韻情報処理・視覚情報処理・音韻の自動化能力と本邦で用いられているそれぞれの評価方法について論じた。 著者：荻布優子、川崎聡大
4. 自閉症スペクトラム障害における感覚過敏の生理・病理学的背景-聴覚情報処理に着目して-	共	平成30年9月	奈良学園大学紀要9,p59-63	DSM-5定義の改定とともに自閉スペクトラム症の診断基準に明記された感覚過敏について、特に最も頻度の高い聴覚過敏をとりあげてレビューした。またその機序を生理学・病理学的観点から検討をしたところ、症候の程度や予後は知的障害の程度の影響を受けることを示唆した。 著者：川崎聡大、荻布優子
5.特に漢字読み書きに困難さを示したボーダーラインの知的発達の児に対する漢字読み指導―漢字の音読力と語彙力の関係に注目して―	共	平成30年12月	東北大学大学院教育学研究科研究年報67(1),p135-143	知的発達がボーダーラインで読み書き困難を呈した児に対して漢字の読み指導を行った。認知神経心理学的アセスメントをもとに限局性学習症とも共通する障害機序を想定し、教育アセスメントにより語彙力に配慮した目標設定を行った。その結果、漢字の音読が可能となり、合わせて語彙力が向上した。対象児の知的発達水準と、障害機序に応じた指導目標の設定により、効率的に指導効果が得られたと推測される。 著者：荻布優子、川崎聡大
6. 肢体不自由児における対象の変遷と教育対応上の課題（１）―脳性麻痺に注目して―	共	平成31年1月	奈良学園大学ジャーナル「人間教育」2(1),p11-15	学習指導要領において肢体不自由児への記載の変遷と肢体不自由の一因となる脳性麻痺について整理した。脳性麻痺の原因として多く指摘される脳室周辺白質軟化症をはじめ，認知上の問題が指摘されて久しい。しかし個々人の状態像や教育上のニーズの把握は簡単ではなく、個のニーズに応じた教育のための障壁となっていることが示唆された。 著者：松崎泰、中島栄之介、荻布優子、川崎聡大
7. 発達初期の運動機能の障害が認知の発達に及ぼす影響	単	平成31年1月	奈良学園大学紀要10,p49-54	肢体不自由教育の対象になる障害及び疾病の歴史的変遷を概説した。現在は、脳性麻痺だけではなく筋ジストロフィーや医学の進歩により低出生体重児や医療的ケア児が増加し、状態象が多岐にわたる。肢体不自由児は、運動発達に伴って認知発達にも遅れが生じたり、乖離が生じることがある。また情緒面や親子関係、コミュニケーションの発達も特有の経過をたどる。これらの多角的な視点から、肢体不自由児の心理アセスメント及び支援は計画的に行われる必要があることを述べた。
8. 根拠に基づいたディスレクシアの実態理解 ： 言語障害臨床の到達点と課題	共	令和1年6月	東北大学大学院教育学研究科研究年報67(2),p63-75	ディスレクシアの実態と課題について①疫学②障害機序③評価方法について論じると共に，発達心理学的観点からディスレクシアの評価について再考し，診断評価の中核である神経心理学的検査の課題と言語障害臨床の領域で看過されてきた第一種ならびに第二種の過誤，支援や介入のための教育評価の現状と課題についても論じた。 著者：川崎聡大、松崎泰、荻布優子
9.児童期におけるRey-Osterrieth Complex Figure Testの発達経過とその尺度構成の検討．バイオメディカル・ファジィ・システム学会和文誌（査読あり）	共	令和1年5月	バイオメディカル・ファジィ・システム学会和文誌21(1)，69-77頁	神経心理学的検査の一つであり近年、発達障害への臨床応用が進むRay-Osterrieth Complex Figure Test（ROCFT）の妥当性検証と児童期の特徴や発達経過を明らかにした。主成分分析の結果、採用された項目でのROCFT得点の一次元構造が確認され、特に3分後再生と30分後再生で採用された項目は全く同一であった。改善を加えた上でのROCFT総得点は児童期の視覚情報処理過程の総合指標としての妥当性を有していると判断した。 著者：荻布優子、川崎聡大、奥村智人、中西誠
10. 児童期におけるRey-Osterrieth Complex Figure Test成績と書字正確性の関係に関する探索的研究	共	令和1年9月	奈良学園大学紀要11,p33-47	児童期におけるRey-Osterrieth Complex Figure Test（ROCFT）と書字正確性との関係を探索的に広く検討した。視覚情報処理過程と書字正確性の間には一定の関与が示唆された。ROCFT成績から書字正確性を十分に予測することは難しかったが、3年生および5年生ではROCFTの低下の有無が書字正確性の低下に関与することが明らかとなった。ただしROCFTの低下は書字低下の絶対条件ではなく、同様に書字正確性の低下した児童が必ずしもROCFTにも低下を認めるとも限らない。書字正確性の指標の信頼性および妥当性の検証が必要であり、そのうえでの発達心理学的観点から書字正確性と視覚情報処理過程の検討が必要であると考えらえた。 著者：荻布優子、川崎聡大

11.「児童を対象とした漢字読み書き正確性に関する新たな評価指標作成の試み」東北大学大学院教育学研究科研究年報 68(1) p205-217	共	令和1年9月	東北大学大学院教育学研究科研究年報 68(1),p205-217	児童の読み書き正確性に関する課題を新規作成すること，及び新規課題と学力との関係を検討することの2点を目的とした。学年配当を統制した30単語で構成された課題を読み書きそれぞれで作成し1 ～ 6年生1869名を対象に実施した。2 ～ 6年生137名については新規課題と学力（NRT 国語・算数）の関係を検討したところ、NRT 各課題を従属変数とした場合，低学年では読み課題・書き課題の双方が独立変数として有効であり，高学年では書き課題が独立変数として有効であった。学力に対する読み書き能力の影響は，学年進行に伴って変化する可能性が示唆された。 著者：荻布優子、川崎聡大、松崎泰、奥村智人
12. COVID-19 感染拡大化におけるASD傾向と精神的健康の関連―予防行動，感染危機意識の観点から―（査読あり）	共著	令和4年9月	ストレスマネジメント研究 18(2),p65-73	ASD者のCOVID-19に対する危機意識の高さと実際にとる予防行動の種類、頻度に焦点を当てて調査を行い、精神的ストレスとの関係を探索的に検討した。その結果、危機意識に差は認められなかったものの予防行動得点はASD傾向が高い群が低い群に比して低い値を示した。またCOVID-19感染拡大下であってもASD傾向が高い群は抑うつ症状を示しており、感染予防としての外出自粛の結果としてASD者が負担に感じやすい交流の機会が減ってもなお精神的ストレスが高いことも明らかになった。 共著：菅井美香、川崎聡大、荻布優子、川田拓
（その他） 〇報告書 1.遠見視写力が学習到達度に及ぼす影響　学齢期における縦断研究	共	平成25年12月	コミュニケーション障害学30(3)，204	視写行為はLDの評価の指標の一つである。新たに幾何図形を用いた集団式簡易視写検査を作成し、小学生243名に実施した。学齢期を通じた遠見視写の発達経過を明らかにした。遠見視写＝黒板を写す力と学力は密接に関係することが示唆された。 著者：北村満、川崎聡大、荻布優子
2.漢字単語音読指導経過と相応して語彙力に伸びを認めた発達性読み書き障害児1例	共	平成25年12月	コミュニケーション障害学30(3)，p188	認知神経心理学的アセスメントをもとに、LD児に対して漢字の読み指導を行った。その結果、漢字の音読が可能となり、合わせて語彙力の向上を認めた。 著者：荻布優子、川崎聡大、北村満
3.読み書きの正確性、流暢性、視覚性能力や音韻処理能力が学習到達度に及ぼす影響	共	平成25年12月	コミュニケーション障害学30(3)，p204	要素的な認知機能・語彙力・書字正確性・音読流暢性といった学習スキルが①その年度の学力②１年後の学力にどのように影響を与えているのかを定量的に検討した。その結果、読み流暢性がその年の学力を、書字正確性がその年と一年後の学力双方を説明した。また、学校現場での「見て、書いて、覚える」という学習スタイルに必要な認知能力が学力に反映されていた。つまり「見て、書いて、覚える」学習スタイルが苦手なLD児は学力低下を引き起こす可能性が示された。 著者：川崎聡大、奥村智人、荻布優子、北村満、若宮英司
4.児童のRey複雑図形テストの尺度構成の検討と書字との関連　主成分分析結果に基づいた新たな採点法の検討	共	平成26年12月	コミュニケーション障害学31(3)，p193	LD児の読み書きの苦手さの背景要因として、視覚情報処理過程の障害が想定されている。視覚情報処理能力を簡便に評価することが可能であり、広く臨床応用されているRey複雑図形テストの内容的妥当性と書字正確性との関係を検討した。また主成分分析を行い、Rey複雑図形テストのより簡便に実施可能な採点方法を提案した 著者：荻布優子、川崎聡大
5.社会的判断が求められるコミュニケーション場面において言語機能の果たす役割：心の理論課題を用いて	共	平成27年12月	コミュニケーション障害学32(3)，p253	自閉症児で通過が遅れるとされる心の理論課題（TOM）について、小学生を対象とした場合のTOM通過に対する言語機能が関与するモデルを作成し、共分散分析を行った。その結果モデルが成立し、非ASDにおいてもTOM通過に一定以上の言語能力が必要であることが明らかになった。また複数存在するTOM課題ごとによっても、関与する言語機能に違いがあることが明らかとなった。 著者：荻布優子、川崎聡大
6.全ての児童生徒にとって自己実現に役立ち主体的に楽しむ「読み書き」や「学習」とは　―学習困難への関りを再考する―	共	平成28年2月	特殊教育学研究53(5)，p451	キャリア教育の観点に立ち本人が実感できる「幸せ」を目標とした場合に個別支援がどのように寄与できるか、検討した。特性に応じた学習指導や合理的配慮は欠かすことはできない。また障害種を問わず小学生の読み能力と学力の向上は、子供たちの将来の選択肢を広げるための一つの重要な課題であることが改めて示唆された。 著者：川崎聡大、加藤哲則、荻布優子、奥村智人、中島栄之介，樋口一宗

7.全ての児童生徒にとって自己実現に役立ち主体的に楽しむ「読み書き」や「学習」とは② 「学習不振」を引き起こす様々な要因から	共	平成29年2月	特殊教育学研究54(5), p410	教育や療育の枠組みの中での学習障害の支援、合理的配慮の在り方を検討した。支援方針は、発達心理学の観点にたち未来への人生設計をもとにしてトップダウンで考えられる必要がある。また個別の支援方法の決定や困難さの掘り下げは集団を形成する個・個を取り巻く環境に対する評価が同じ重みづけのなかで行われることが望ましいと考えられる。 著者：川崎聡大、加藤哲則、荻布優子、奥村智人、中島栄之介、多田智絵、樋口一宗
8.全ての児童生徒にとって自己実現に役立ち主体的に楽しむ「読み書き」や「学習」とは③ ―読み書き困難と評価・学習意欲やストレスの関係―	共	平成30年2月	特殊教育学研究55（5），p330-331	学齢期だけではなく大人に至るまでの人生の様々なステージの中で、生活や学習を直接良い方向に変えることができる読み書き支援の方法とは何かを検討した。とくに学習レベルが高い高校生や大学生は、読み書き困難があってもそれを何らかの方略で自分で乗り越えてきていると考えられる。青年期においては、読み書きそれ自体の能力と、読み書きに関わる不安傾向・苦手意識を指標とした評価の可能性が示された。また汎用性のある対応のために心理学的な知見をさらに積み重ねることの重要性が示唆された。 著者：川崎聡大、加藤哲則、荻布優子、松崎泰、鈴木真人、高橋知音、樋口一宗
9.特別支援教育における読解力向上の試み-学習障害、視覚障害、聴覚障害といった垣根を越えて-	共	平成30年9月	日本特殊教育学会第56回大会プログラム集・発表論文集	専門家の指導が対象児童の「学習することの楽しさ」にどのように寄与しえたのかといった観点に立ち、障害の種別や障害の有無といった領域の垣根を越えて広く学びを深め、明日の臨床や教育に役立てることを目的として国語科教育やプログラミング教育の視点も含めて提案した。ボトムアップ（的な）指導を否定するわけではなく「指導のための指導」から脱却すべきであると考えている。 著者：川崎聡大、加藤哲則、荻布優子、松崎泰、奥村智人、安藤明伸、深谷圭介、岡野由美子、樋口一宗
10.学習言語を支援する-包括的な学習状況調査・発達の時間軸の観点に立った学業を楽しむための支援とは-	共	令和1年9月	日本特殊教育学会第57回大会プログラム集	今目の前にある対象の困難さはそれまでの経験や体験によって培われたものであり、一人として同じではない。また、ライフステージでの読みや書きの役割の違いは、過去の定説となった読み書き障害の障害機序と異なる知見を呈する可能性がある。発達の時間軸を踏まえ、また障害種別に関わらず、「読むこと」「書くこと」「聞くこと」「話すこと」を通じて学ぶことを楽しむための評価や支援のあり方について提案した。 著者：川崎聡大、加藤哲則、荻布優子、奥村智人、高橋知音、花熊曉
11.ひらがな読み困難が情緒面の問題としても顕在化した事例の指導経過	共	令和2年12月	コミュニケーション障害学会37(3), p208	ひらがな正確性から重篤に障害されていた不登校事例に対し、認知特性と情緒面（学習場面への強い拒否感・泣くといった形での抵抗）に配慮してひらがな読み指導を行った。対象児はひらがな音読正確性から著しく低下していたが、知的発達水準が高く保たれていたことから自身の苦手さを的確に把握し、回避的な行動に結びついていたと推測される。障害機序に配慮した段階的な指導により、文字自体への関心も増し、文字を余暇の中にも活用するなど文字に対する抵抗感が薄れた様子も認めるという効果を得られた。 著者：荻布優子、川崎聡大
○依頼原稿				
1.新しい特別支援教育-GIGAスクール構想実現でLD支援は進むのか-	単	令和3年11月	教育PRO51(13), p10-11	学習障害児に対してICT機器を活用することは学習を積み重ねる一手段として教育効果をもたらすが、機器購入や通信環境の整備といったハード面の課題と教師や同級生の戸惑いといったソフト面の課題から浸透しにくい現状があった。GIGAスクール構想により一人一台端末がスタンダードになりハード面の課題が解消されたことから、教師側が個別最適化された学びの一手段としてICTを積極的に活用する姿勢が望まれることを提言し
○学会発表				
1.ひらがな読み困難が情緒面の問題としても顕在化した事例の指導経過	共	令和2年5月	第46回コミュニケーション障害学会学術講演会（於 オンライン）	ひらがな正確性から重篤に障害されていた不登校事例に対し、認知特性と情緒面（学習場面への強い拒否感・泣くといった形での抵抗）に配慮してひらがな読み指導を行った経過を報告した。 共同発表者：荻布優子，川崎聡大

2.COVID-19 感染拡大下における ASD 傾向と精神的ストレスの関連―予防行動，危機意識の観点から―	共	令和3年9月	第19回日本ストレスマネジメント学会学術大会（於：オンライン）抄録集p44	ASD者のCOVID-19に対する危機意識の高さと実際にとる予防行動の種類、頻度に焦点を当てて調査を行い、精神的ストレスとの関係を探索的に検討した。その結果、危機意識に差は認められなかったものの予防行動得点はASD傾向が高い群が低い群に比して低い値を示した。またCOVID-19感染拡大下であってもASD傾向が高い群は抑うつ症状を示しており、感染予防としての外出自粛の結果としてASD者が負担に感じやすい交流の機会が減ってもなお精神的ストレスが高いことも明らかになった。 共同発表者：菅井美香、川崎聡大、荻布優子、川
3.多動・不注意傾向と時間不安の関係:時間の表示方法に着目して	共	令和4年3月	第 12 回 Society for Tokyo Young Psychologists（於：オンライン）抄録集p20	ADHD者の時間的切迫状況における焦りである時間不安について、その程度を定量的に明らかにすることを目的に、①多動・不注意傾向が高い人の日常的な時間不安の程度を多動・不注意傾向が低い人と比較する、② 課題遂行状況を想像したときの多動・不注意傾向と焦りの程度の関係について時間の表示方法に着目して検討した。その結果，多動・不注意高群が低群よりも時間不安測定尺度における不安得点,苛立ち得点が有意に高くなる、課題遂行状況を想像したときの焦りの程度も多動・不注意高群が有意に高くなることが明らかになった。また時間の表示方法については、多動・不注意高群においてのみ一部の時間区分で残り時間表示よりも経過時間表示の方が焦りの程度が大きくなることが明らかになった。 共同発表者：菅井美香、川崎聡大、荻布優子、川田拓
4.きれいな文字は“学力”に必要か？（ショートレクチャー）	単	令和4年3月	生涯発達支援研究会第1回大会，宮古島ICT交流センター）	美しい文字の書き手は能力が高いという人物評価を得られやすく学校教育においても正しく整った文字を書くことは重点的に指導されているが、実際の学力との関係は明らかとなっていない。我々の小学生の検討では、学力を従属変数とした場合に正しく整った文字が書けることの蓋然性は確認されず、この基準にこだわって指導することは発達障害をはじめとする認知機能に個人内差のある児童の学習到達度には好影響とはならない可能性があることが示唆された。
5. 児童期の漢字書字正確性と学力、学習意欲との関係性―標準漢字読み書き習得尺度（SAKLA）を用いた検討―	共	令和4年6月	第127回小児精神神経学会（於 白河文化交流館コミネス）	漢字読み書き正確性に関する新たな指標を開発し、学力との関連を他の言語ドメインや生活習慣等、関連要因を含め包括的に検討した。 著者：川崎聡大、荻布優子、奥村智人
6.小学生における正しく整った漢字書字と学力の関係に関する検討	共	令和4年6月	第127回小児精神神経学会（於 白河文化交流館コミネス）	漢字書字を正しく整った文字（一般採点基準）/判読可能である文字（判読可能基準）の2基準で採点し、学力および視覚情報処理能力との関係を検討した書字形態を整えるルールを学ぶ下学年では正しく整った文字を書くためには視知覚・視覚認知に負荷がかかり、上学年では文字の詳細なイメージを思い浮かべる必要性から視覚性WMには負荷がかかることが示唆された。 著者：荻布優子、川崎聡大、奥村智人

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　5 年 3 月　31 日

氏名　　オチャンテ・カルロス

研究分野	研究内容のキーワード
人文社会学，外国語教育	外国語教育，第二言語習得，バイリンガル教育，異文化教育

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
(1) ICT を生かした「英会話、英語Ⅰ、英語 II、時事英語」の実践	平成 23 年 4 月～29 年 3	主に TPR 指導法や ICT 教育（電子黒板、タブレット）を生かして英語への関心を高めた。留学生と日本人の共通科目のため混在クラスで、多国籍の特性を生かす活動を実践した。(環太平洋大学・英会話、英語Ⅰ 英語 II、時事英語)
(2) 問題・課題解決型授業の展開「Introduction to Digital Media (英語), 時事英語、異文化コミュニケーション論」	平成 23 年 4 月～29 年 3 月	英語をツール用いて与えられた課題（プロジェクト、議論）学生同士で取り組む授業の展開。学生同士で積極的に英語を使って、プレゼンテーション能力や議論（ディスカッション）能力を身に着く授業を目指した。
(3) 振り返りを伴った小テストの実施「英会話、英語Ⅰ、英語ⅠⅠ、」	平成 23 年 4 月～現在に至る	学習強化を目指すため、「ウォーミングアップ」活動として小テストを用いた。語学においての習得したボキャブラリーや文法の確認を行い、教科のこまめな評価、学生の成績はもとより、振り返りで意欲の向上につながった。
(4) e ラーニングを活かした授業の展開（時事英語、英会話、外国語の理解、外国語科の指導法）	平成 25 年 4 月～現在に至る	・「※Google for Education」を用いて授業内の教材の配布、課題の作成、出題や回収を行った。グーグルアプリケーションの連帯性を活用し学生と教材やデータを共有した。 ・「※Socrative」というアプリケーションを使い、授業でオンラインクイズやオンラインアンケートを取った。学生が自分のスマートフォンを使用し授業のまとめをオンラインで共有し参加型学習が実践され、よりインタラクティブな学習環境が可能になった。 （環太平洋大学・時事英語、異文化コミュニケーション論 ） ※Google for Education https://edu.google.com/intl/ja/?modal_active=none ※Socrative　https://www.socrative.com/
(6) 4 技能を活かした小学校英語強化クラス編成	平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月まで	奈良学園大学人間教育学部の小学校教職課程対象学生へ英語 4 技能を活かしたエクステンションクラス担当。次期学習指導要領で必要とされる主体的な学びや会話中心活動をもとに小学校英語科指導授業を展開。
(7) 小学校外国語指導の主体的・対話的授業づくり	令和元年 4 月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の小学校教職課程対象学生へ英語運用力としてクラスルームイングリッシュやフォニックスなどを扱い,「聞くこと・話すこと〈やり取り・発表〉・読むこと・書くこと」に関する知識を指導し，理論的，実践的なアウトプットができるように配慮した主体的・対話的な授業を展開。
(8) 小学校外国語活動の指導法における授業導入の工夫	令和元年 9 月～現在に至る	小学校英語科の役割と意義、学習指導要領で求められている内容・発音・リズム・クラスルームイングリッシュなどの英語力を向上させ、指導案作成，授業の導入部分で意欲付をするアイデアを身につける。
2　作成した教科書・教材 (1) Google Apps for Education での教材作成	平成 26 年 4 月～現在に至る	「Google for education」を用いて、インターネットでクラスマネジメント（課題配布・提出や評価など）を行った。授業のオンラインアンケートを行い授業のフィードバックを図った。 ・教材や宿題の文書作成に「Google Docs」用いた。 ・授業で扱った映像などのデータを「Google Classroom」で共有することによって復習や欠席者の学習に役立った。 ・授業内容のリフレクションペーパーなどのレポートやアンケート作成に「Google Forms」を用いた。 ・授業の内容を「Google Slides」で表示し、データを「Google Classroom」で共有した。 （環太平洋大学次世代教育学部国際教育学科「時事英語」、「異文化コミュニケーション論」、「国際教育基礎」、で使用）
3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 環太平洋大学学生授業評価ア	平成 28 年 7	「総合的に授業は満足でき、受講を後輩に進めたい」の項目では

ンケート「英会話Ⅰ．Ⅱ」	月	90%以上の肯定的な評価を得た。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1「伊賀の方言講座」第１回講	平成 24 年 10 月	「様々な人々が暮らす国際都市伊賀市」のテーマで講演した。ニューカマーの言語教育（英語と日本語）と異文化教育を話した。
2「多文化共生推進セミナー」研修会講師	平成 26 年 3 月	日本在住外国人の実態にふれ、英語及び日本語獲得の現状を含め、多文化共生においての課題をまとめて話した。(伊賀市主催)
3「岡山市立香和中学校人権教育研修」講演	平成 27 年 9 月 25 日	テーマは「日本人とは何かを問いかけ自己文化と海外の文化を見つめなおす」
7「マイノリティとキャリア」講演	平成 28 年 12 月 22 日	日本における在日外国人の進学問題や就職・進路選択の課題についての講演。 （京都外国語大学・ピカ☆イチ Project 採択団体主催）
4「そうなん？！世界のいろんな物語」言語活動講師	平成 29 年 8 月 27 日	小学生３０名を対象に日本語・英語でペルー民族に関連した物語の絵本の読み聞かせを行いました。
5「SIFA Multi-cultural Festival」講師	平成 30 年 6 月 24 日	小学生を対象に日本語・英語によるペルー民族紹介を担当。 主催：(公益財団法人吹田市国際交流協会（sifa)
6「地球村ぷらすペルー」講師	平成 30 年 7 月 8 日	国際理解の一環として吹田市国際交流協会にて、ペルーの文化と日系の歴史について講演を実施。 主催：(公益財団法人吹田市国際交流協会（sifa))
7　「日本で働く南米の人々の思い」講師	平成 30 年 7 月 26 日	日本における外国人労働者の実態と子どもの教育についての講演。奈良県第５７回県外教学習会。
8　「SIFA 子ども国際理解プログラム」	平成 30 年 12 月 23 日	小学校生を対象に外国語活動を使った国際理解活動の実施。公益財団法人吹田市国際交流協会（SIFA)。
9　「外国人児童生徒教育講座」講師	平成 30 年 12 月 25 日	外国にルーツのある子どもの教育と言語習得の実態についての講演。三重県伊賀市教育研究センター。
10　「外国人児童母語継承支援活動」講師	平成 31 年 1 月 26 日	外国にルーツのある児童の母語継承を支援する言語活動の講師。(公財）箕面市国際交流協会（MAFGA）
11 「外国にルーツある子どもの学習サポート活動」コーディネーター	令和 2 年～現在に至る	伊賀市人権生活環境部多文化共生課主催
５　その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年　月	概要
１　資格，免許 (1) 中学校教諭一種免許状 (2) 高等学校教諭一種免許状 (3) 中学校教諭一種免許状 (4) 高等学校教諭一種免許状	 平成 18 年 3 月 平成 18 年 3 月 平成 20 年 3 月 平成 20 年 3 月	 外国語（イスパニア語）京都府教育委員会（平 17 中一第 1275 号） 外国語（イスパニア語）京都府教育委員会（平 17 高一第 1987 号） 外国語（英語）三重県教育委員会（平 19 中一第 323 号） 外国語（英語）三重県教育委員会（平 19 高一第 583 号）
２　特許等		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
(1) 大学オープンキャンパスの英語公開授業	平成 25 年～27 年	環太平洋大学のオープンキャンパスにて、「英語コミュニケーション」についての公開授業を行った。
(2) 環太平洋大学開催の外国語活動イベント「イングリッシュ・キッズ」の講師	平成 26 年～29 年(年 2 回)	幼児・小学校生対象の英語を用いた体を動かすゲームや歌の講師。楽しく活動しつつ、英語に親しみ発音や単語や語順に慣れ親しむゲームを紹介した。
(3) 留学生による初等・中等学校支援事業への参加：支援モデル	平成 26 年～29 年 3 月	公立小中学校における言語支援活動（英語）を担当。環太平洋大学に留学中のアジア諸国の学生を地域（岡山県の岡山市、赤岩市、瀬

の構築（学術研究助成金事業、挑戦的萌芽研究）		戸内市）の公立学校で英語を使った言語支援の活動や国際理解支援の活動を行った。研究代表者：江原智子、共同研究者 井上聡、アンソニー・ウォルシュ、長野真澄、小嶋隆宏、オチャンテ・カルロス
(4) 環太平洋大学開催の英語村（イングリッシュ・キャンプ）イベントの指導	平成 26 年～29 年(年２回)	児童・生徒を対象に英語活動（ゲームやワークショップ）の講師を務めた。学生スタッフの研修企画及び英語活動の指導を担当。
(5) キャンパス内のイングリッシュ・ゾンの設営及び運営	平成 26 年４月～29 年３月	オール・イングリッシュで学生同士をスタッフが交流できる、英語を活かせる空間・場の設営、運営を担当。(環太平洋大学)
(6) 環太平洋大学 ICT 研修会	平成 28 年７月	学内における英語教育指導方法と Google apps for education を活用する研修を担当。(語学講師対象)
４　その他		
(1) 国際交流センター員	平成 23 年～4 月～29 年３月	学内の国際交流イベント企画、海外研修、留学学生の事前研修担当。TOEIC テスト監督。
(2) 英語スピーチコンテスト審査員	平成 24 年２月	大学で、高校生対象の英語スピーチコンテストを行い、その審査員を担当して、受賞者を決定し助言を行った。
(3) 教職課程委員会員	平成 24 年４月～26 年３月	英語免許取得学生の介護等体験や教育実習への事前説明担当、教育実習事前事後指導や実習学校訪問の企画を行う。
(4) 学術研究支援委員会における英語チェック修正	平成 25 年４月～29 年３月	大学紀要における論文の英語タイトル、概要の英語チェックを担当し、修正を指導した。
(5) FD 委員会員	平成 27 年４月～28 年３月	学内の FD では特に英語科指導授業を公開して研修を行った。
(6) 大学 HP の英語版の校正。	平成 27 年９月	大学の英語版ホームページのチェックと校正 （http://www.ipu-japan.ac.jp/global/spanish/index.html）
(7) 奈良学園大学社会・国際連携センター員	令和１年４月～現在に至る	「国際交流記録文集」の編集、海外大学と交流会の企画、文化交流参加学生の指導を担当。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	概　要
1 岡山県におけるニューカマーの子どもの教育実態－総社市の調査を元に－	単著	平成 24 年３月	環太平洋大学紀要 2013 年第７号 pp.205-211	岡山県のニューカマー数が著しい総社市を調査の対象にし、小学校と中学校に通う日系のブラジル人やペルー人の教育実態を調べた。調査では日本語の習得問題が存在し、日本語力が十分に身についていない子供が少なくないことが分かった。
2 外国語活動による小学生のコミュニケーションに対する動機づけの変化	共著	平成 24 年３月	環太平洋大学紀要第６号（pp183–190）	小学生を対象に異文化活動を通した外国語活動を実施した内容。コミュニケーションに対する動機づけを高める英語活動の内容と指導方法について論じた。 共著者：川崎由花、オチャンテ・カルロス 担当部分：実践的な異文化体験は小学校外国語活動においてどのような役割を果たすのかを量的調査を得て、分析し、執筆　pp185－188
3 外国人高校生を応援する仕組みづくりへの挑戦	共著	平成 25 年２月	ボランティア学研究 Vol.14 （12 頁	本論は外国にルーツをもつ若者が設立した NPO の活動実践 から後輩を応援することの意義を考察しながら、同じ境遇

4 英語課外クラスにおける活動事例報告 ― EFL 環境において英語学習への気づきを高める試み ―	共著	平成 26 年 3 月	環太平洋大学研究紀要 第 8 号（pp.203-210）	TOEIC の英語内容を分析し、効果的な対策指導法を論じた。英語多読教材や ICT を用いて効率化と向上を図った実践的な研究を提案。英語科の課外活動において効果があり、ICT 活用と英語科の内容と ICT 活用を関連付けて論じた。 共著者：オチャンテ・カルロス、小嶋隆宏、江原智子、 担当部分：英語指導内容に、ICT 教育を活かした事例を考察し、どのような学習内容が成果として出現したかを論じ執筆。pp208－210
7 ESL クラスにおける T.A.プログラム導入の必要性―環太平洋大学の調査を基に―	共著	平成 26 年 3 月	環太平洋大学紀要第 8 号（pp：193-200）	ESL（第二言語としての英語）科目で T.A.を活用し、会話中心の英語内容の効率化及び英語力向上との関連を調査。量的調査において T.A.の役割が授業内容の円滑な理解につながることが見られた。 共著者：オチャンテ・カルロス、アンソニー・ウォルシュ 担当部分：第二言語としての英語指導にティーチャー補助者（T.A.）が英語学習者にどのような支援が可能であり、学習者からの内容的アプローチについても論じ執筆。pp194－198
8 ESL クラスにおける E-ラーニングの取り組みに関する報告書 ― 環太平洋大学でウェブ 2.0 導入の取り組み―を基に ―	共著	平成 27 年 3 月	環太平洋大学研究紀要 第 9 号（pp.207-213）	ICT・メディアリテラシーの導入実践例を分析。「Google for Education」を活用しメディアリテラシーの向上と英語実践内容として文書作成や課題発表をデジタルな方法で行った。英語をツールとして情報リテラシー指導を行うとクロスカリキュラムな効果が見られた。 共著者：オチャンテ・カルロス、グジョン・ルック 担当部分：第二言語としての英語においてメディアリテラシーを扱った英語活動の実践例をあげ、どのような学習効果が得られるかについて執筆。pp207－209
9 言語学習におけるラーニング･スペースの重要性 ―日本と香港の事例を基に―	共著	平成 27 年 3 月	環太平洋大学紀要第 9 号（pp.135-140）	英語の 4 領域すべてにおける効果的な学修への ICT・メディアリテラシーの導入実践例を日本とアジアで比較分析した。「Google for Education」を活用した英語学習において主体的な学びが実践できるラーニング・スペースの重要性を考察した。 共著者：オチャンテ・カルロス、グジョン・ルック 担当部分：英語における主体的な学びにおけるラーニングスペースの役割について、具体例を挙げながら指導と効果について執筆。pp135－137
10 留学生による学校支援ボランティアの取り組み ― 小学校における国際交流と言語少数派児童に対する学習支援 ―	共著	平成 30 年 3 月	環太平洋大紀要第 12 号（301 - 306）	留学生に学校支援ボランティアへの参加を促し，留学生が地域社会と関わる機会の拡大を図っている。その主な活動内容は，小学校における国際交流活動と，言語少数派児童に対する学習支援であり，活動目的は，（1）留学生が自らの持つ知識や能力を活かして地域社会に貢献すること，（2）留学生自身の成長の機会とすること，の２点である。活動においては，大学が窓口となって，地域の教育委員会及び各学校と，留学生を繋ぐ役割を果たすとともに，留学生が円滑に活動できるように後方からの支援を行った。 共著者：長野 真澄、江原 智子、ウォルシュ アンソニー 担当部分：小学校における国際交流活動について考察を執筆。pp302-303

11 公立学校における英語活動と異文化交流の取り組み	共著	平成 30 年 6 月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル第 1 巻第 4 号（pp.105-112）	中学校の教科英語に大学の留学生が言語支援活動を行い、動機づけの変化を調べた研究。英語力が高いアジアの留学生は、自国の文化を生かした活動を取り入れることで、中学生に英語を通した異文化理解が実現させた。 共著者：オチャンテ・カルロス、アンソニー・ウォルシュ 担当部分： 言語支援の公立中学校の対象英語クラスに指導法と評価についてのアンケート調査を行い、その英語レベル情報の回収、分析と考察を執筆。
12 実践的な英語を扱うカリキュラムへの取り組み　－大学生のためのデジタル・メデイア入門－	共著	平成 28 年 3 月	環太平洋大学紀要第 10 集（pp.151-157）	メディアリテラシーとプロジェクト学習を扱った英語教育の成果をまとめた。メディアを発信する方法としてブログの作成やポッドキャスト作成などのプロジェクト型学習法を論じた。 共著者：オチャンテ・カルロス、グジョン・ルック 担当部分：情報リテラシーと英語教育を取り組んだクロスカリキュラム的で教科横断的な指導法の成果の質的調査によって考察し執筆。pp151－155
13 留学経験者クラスの運営に関する考察　－学生および教職員に対する調査結果－	共著	平成 29 年 3 月	環太平洋大学紀要第 11 号（pp.133-137）	海外への語学留学で獲得した英語能力を維持するための英語指導法をまとめた。英語の 4 技能を活かした英語活動を通して、小学校高学年の学習発達段階に応じた適切な指導法を考察した。 共著者：村上一三、オチャンテ・カルロス、グジョン・ルック、ウォルシュ・アンソニー 担当部分：留学帰国者の語学能力維持のための小学校英語指導実践例とクラスのレベル分けのマネジメントについて執筆。pp135－136
14「カトリック教会における多言語・多文化環境の実態－三重県伊賀市の事例－」	共著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要第 7 集 pp.167-177	日本のカトリック教会にニューカマーがやってきてからどのように変化したのかを論じる。ニューカマーの増加によって多民族化した教会ではミサなどの行事が多言語で行われるなど様々な対応と支援が行われている。本論文で対象にした伊賀市カトリック教会はこれまで多文化共生を課題に発展したケースであり、成功例でもある。 著者： オチャンテ 村井 ロサメルセデス

15 アンケートと授業見学を基にした小学校の英語教科化に向けた現状―大学での指導法の授業のために―	共著	平成 30 年 7 月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル第 1 巻第 5 号（pp.141-146）	小学校 3・4 年生の「外国語活動」、5・6 年生の「外国語」の移行期間の実態を踏まえ、次期学習指導要領までに、学校で準備する課題が何であるかを論じた。 共著者：オチャンテ・カルロス、熊田岐子 担当部分：小学校「外国語活動」の実態を調査実施。また公立中学校において英語に対する意識調査を実施。アンケートの回収、分析及び考察した。pp143-146
16 小学校英語教科における問題解決的な学習法	単著	平成 30 年 9 月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル第 1 巻第 7 号（pp.239-245）	大学英語学習で行った問題解決型の授業「Project Based Learning」を紹介し、小学校の英語指導法に応用を試みた。５・６年生が扱う英語の学習に問題解決と ICT 教育の活用により「主体的な学び」が実現できると仮定した授業指導案とその評価方法について提案した。

17 小学校英語教科におけるＩＣＴを活かした指導法	共著	平成 30 年 9 月	奈良学園大学紀要第９集（pp.193-199）	小学校英語科指導法の充実化を図るための方策を具体的に提案した。まず指導と評価の一体化を図る指導案の在り方ついて論じた。また新学習指導要領で育てる資質能力について論じた。さらに小学校の ICT の実情把握視察を行い、教員のメディアリテラシー能力によって英語指導における ICT 運用が異なることが分かった。 共著者：オチャンテ・カルロス、グジョン・ルック 担当部分：新学習指導要領で求められる資質能力について、公立小学校の外国語活動においての ICT 運用の実態と成果について執筆。 pp193－196
18 小学校英語教科指導法における絵本の読み聞かせの有効性	単著	平成 30 年 12 月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル第 2 巻第 1 号（pp.27-33）	小学校英語科における児童文学と絵本の読み聞かせの有効性を調べ、大学の英語エクステンションクラスで模擬授業の指導を行った。対象学生に質的な調査を行った結果、児童文学教材と教科書の連帯を用いた授業作りが有効的な英語活動につながることが分かった。リーディング指導及び指導案作成のプロセスは本稿で考察した。pp.27-33
19 小学校における外国語指導法の取り組みⅠ	単著	平成 31 年 2 月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル第 2 巻第 2 号（pp.75-82）	英語専科教員と外国語指導助手（ALT）の協力を得て著者とともに指導や授業作りなどの提案に関わった。本稿ではその取り組みを述べ、専科教員と外国語指導助手の役割を挙げ、将来的に英語指導にあたる学級担任の移行期間においての英語準備も述べる。本稿では、小学校英語授業の具体的な実際を分析し、その目標と指導と評価を一体として捉え、その振り返りである評価に視点を当てて、小学校での英語科指導法の充実化を図ることを目的とする。
20 英会話授業における「自尊感情を高める共有体験」に関する調査	共著	平成 31 年 3 月	奈良学園大学紀要第 10 集（pp.1-7）	本稿では、英語スピーキングと定め、他者とのコミュニケーションにおける英語スピーキング不安を検証した。考案した項目を因子分析した結果、ペアワーク、グループワークにおいては「肯定承認」、「安心」、「忌避クラス発表においては「肯定承認」，「不得意」の構造を見いだした。さらに，英語スピーキング不安，対人不安傾向，自尊感情，自己受容，他者受容との関連を検討し，他者からのフィードバックが得られるグループワークが有効である可能性が示唆された。 著者：熊田岐子，岡村季光，オチャンテ・カルロス
（その他）				
教員免許更新講座講師２コマ担当 英語指導法資料	単独	平成 24 年～29 年毎年実施	環太平洋大学 A4 判 10 頁	英語科指導法に異文化理解や ICT 教育の導入を扱ったテーマを中心に講座を実施した。毎年 40 人が受講した。

［注］

１ 最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。

２「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。

３「研究活動」については、下記の点に留意すること。

① 著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。

② 著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。

③ 共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。

④ 最近１０年間に著書･論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。

⑤ 芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。

教　育　研　究　業　績　書

令和　4　年　3　月　31　日

氏名　　葛城　元

研究分野	研究内容のキーワード
教科教育学(数学教育学)	高等学校数学科，教材開発，理数探究

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1．奈良学園大学人間教育学部の「確率・統計基礎」の授業での予習用動画教材の作成	2022年 令和4年4月～ 2022年 令和4年7月	この科目では確率・統計の基礎的な概念を習得することを目的としており，授業前の予習を担当者が作成した動画を利用して予習し，授業内は予習内容を深めるための発展的な内容を講義・演習形式で行った。予習用動画は記述統計の内容を中心に1本あたりの視聴時間が約10分のものを計26本作成した。
2　作成した教科書，教材 1．『中等数学科教育法序論』の第5章「STEAM教育における数学教育」（共立出版，pp.91-111）	2022年 令和4年3月	編著者：黒田恭史 「中等数学科教育法」のテキストとして，STEAM教育における数学教育のあり方について解説。第1節では数学教育の中で取り組まれてきた他領域との融合的教育研究について，第2節ではSTEAM教育の目的と内容について，第3節ではSTEAM教育における数学教育の取り組み実践例について述べた。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1．京都教育大学教育学部令和4年度前期における非常勤講師に伴う学生による授業評価アンケート	2022年 令和4年9月	「初等算数科教育」の科目において，「授業の満足度」の項目については，「満足」と「やや満足」と回答した学生は58名中53名（約91%）であった。
2．奈良学園大学人間教育学部令和4年度前期における学生による授業アンケート	2022年 令和4年9月	「数学の世界」の科目において，「この授業は，総合的にみて満足できるものでしたか」の項目については，「かなり満足」と「まあまあ満足」と回答した学生は36名中33名（約92%）であった。 「確率・統計基礎」の科目において，「この授業は，総合的にみて満足できるものでしたか」の項目については，「かなり満足」と「まあまあ満足」と回答した学生は24名中24名（100%）であった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1．京都府立嵯峨野高等学校での外部講師	2017年 平成29年6月	スーパーサイエンスハイスクール事業の取組として「数学活用」ラボの生徒（2年生）29名に特別講義「コンテナ船の折り紙数学」を講師として授業した。
2．京都府立洛北高等学校での外部講師	2017年 平成29年11月	スーパーサイエンスハイスクール事業の取組として，1・2年生（30名）を対象にサタデープロジェクトサイエンスチャレンジ（オリガミクス）で講師として授業した。
3．京都教育大学でのミニワークショップでの講演	2018年 平成30年1月	日本－韓国数学教育ミニワークショップ（京都教育大学）において，韓国の小中高等学校の教員，大学教育，教育省関係者（22名）を対象に「図形教育におけるオリガミクスの教育的効果」という題目で講演した。

４．大学から受け入れた教育実習生等に関する指導	2018年 平成30年8月 ～ 2022年 令和3年5月	京都教育大学教育学部および京都教育大学大学院連合教職実践研究科の教育実習生計9名の指導を担当した。
５．京都教育大学教育学部数学科「これからの算数・数学教育を考える会」での発表	2020年 令和元年8月	京都教育大学数学科主催の第5回これからの算数・数学教育を考える会で，「「わかる」を目指した高校2年生の三角関数の授業」という題目で高校数学の授業実践に関する発表を行った。
６．京都教育大学教育学部での非常勤講師	2021年 令和3年7月	京都教育大学教育学部の「中等数学科教育Ⅱ」の科目において，ゲストティーチャーとして計2コマ授業を行った。
７．京都教育大学教育学部数学科「これからの算数・数学教育を考える会」での発表	2022年 令和4年2月	京都教育大学数学科主催の第13回これからの算数・数学教育を考える会で，「1年間のハイブリッド型数学授業で見えた成果と課題」という題目で高校数学の授業実践に関する発表を行った。
８．京都府立山城高等学校での外部講師	2022年 令和4年10月 ～ 2022年 令和4年11月	第1学年文理総合科の生徒（41名）に特別講義「斜方投射を題材とした課題解決型授業」を講師として計2回（5コマ分）授業を行った。
９．奈良教育大学教育学部数学科「奈良セミナー」での発表	2023年 令和5年1月	奈良教育大学教育学部数学科主催の第157回奈良セミナーで，「生徒が数学を使って探究活動に取り組むための折り紙教材の開発」という題目で高等学校の理数授業に関する発表を行った。
10．一般社団法人数学教育学会での講師担当	2023年 令和5年2月	一般社団法人数学教育学会主催の第7回数学教育学会教員講習会で，「児童・生徒が算数・数学を使って探究に取り組むための折り紙を用いた授業づくり」を講師として講演を行った。
５　その他 **【賞罰】** １．2015年度教育システム情報学会学生研究発表会優秀発表賞　受賞	2016年 平成28年3月	研究業績「学会発表」の3が該当
２．平成28年度京都教育大学学生表彰研究活動賞受賞	2017年 平成29年2月	研究業績「学会発表」の3・4・5が該当
３．第7回知識共創フォーラムシーズセッション奨励賞　受賞	2017年 平成29年3月	研究業績「学術論文：査読無」の1が該当
４．平成29年度京都教育大学学生表彰研究活動賞受賞	2018年 平成30年3月	実務の経験を有する者についての特記事項の1・2，研究業績「学術論文：査読有」の1，「学術論文：査読無」の1，「学会発表」の6・7・8が該当
５．平成29年度数学教育学会馬場奨励賞　受賞	2018年 平成30年3月	研究業績「学術論文：査読有」の1が該当
６．公益財団法人パナソニック教育財団実践研究助成 一般助成　優秀賞受賞	2021年 令和3年3月	実務の経験を有する者についての特記事項（研究助成）の4と研究業績「その他」の1が該当
７．令和2年度数学教育学会馬場奨励賞　受賞	2021年 令和3年3月	研究業績「学術論文：査読有」の3が該当

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 教員免許状	 平成28年3月 平成28年3月 平成28年3月 平成30年3月 平成30年3月 平成30年3月	 小学校教諭一種免許状　取得 中学校教諭一種免許状（数学）　取得 高等学校教諭一種免許状（数学）　取得 小学校教諭専修免許状　取得 中学校教諭専修免許状（数学）　取得 高等学校教諭専修免許状（数学）　取得
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 **【研究助成】** 1．ORIGAMI科学で文化発信	 2017年 平成29年7月～ 2018年 平成30年3月	 担当：葛城元(代表者) 助成先：京都市，（公財）大学コンソーシアム京都 平成29年度「学まちコラボ事業」認定事業の文化枠に採択された(助成額は¥347,000)。
2．高大連携によるアクティブ・ラーニング教材の推進事業	2018年 平成30年6月～ 2019年 平成31年3月	担当：深尾武史(代表者)，田窪啓人，葛城元(分担者) 助成先：京都教育大学 平成30年度京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクトに採択された（採択額は¥492,000）。
3．京都発信！STEAM教育プロジェクト	2019年 令和元年6月～ 2020年 令和2年3月	担当：佐原大河(代表者)，葛城元(分担者)，他7名 助成先：京都教育大学 平成31年度京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクトに採択された（採択額は¥433,000）。
4．アクティブ・ラーニング教材の開発・実践と教具作成に関する事業	2019年 令和元年6月～ 2020年 令和2年3月	担当：深尾武史(代表者)，田窪啓人，葛城元(分担者) 助成先：京都教育大学 平成31年度京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクトに採択された（採択額は¥300,000）。
5．高等学校「理数探究基礎」を網羅するオリガミクスの新たなSTEAM教材の開発実践	2020年 令和2年4月～ 2021年 令和3年3月	担当：葛城元(代表者) 助成先：日本学術振興会 科学研究費補助金奨励研究（課題番号：20H00791）に採択された（助成額は¥410,000）。 科研費： https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-20H00791/
6．数学を基軸とした新教科「理数科」の教育内容開発と高校生による学習成果の動画発信	2020年 令和2年4月～ 2021年 令和3年3月	担当：葛城元(代表者)，他11名 助成先：公益財団法人パナソニック教育財団 公益財団法人パナソニック教育財団の実践研究助成（一般）に採択された（助成額は¥500,000）。
7．中学・高校数学科の視点から小学校算数科の捉え直し－数学の苦手克服を目指して－	2021年 令和2年6月～ 2021年 令和3年3月	担当：上田美智穂(代表者)，葛城元(分担者)，他6名 助成先：京都教育大学 令和2年度京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクトに採択された（採択額は¥244,000）。
8．数学における言語活動能力を養うアクティブ・ラーニング教材の展開	2021年 令和2年6月～ 2021年 令和3年3月	担当：田窪啓人(代表者)，葛城元(分担者)，深尾武史 助成先：京都教育大学 令和2年度京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクトに採択された（採択額は¥264,000）。
9．STEAM教育プロジェクト～京焼から広がる知の世界～	2021年 令和2年6月～ 2021年 令和3年3月	担当：辻秀人(代表者)，葛城元(分担者)，他6名 助成先：京都教育大学 令和2年度京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクトに採択された（採択額は¥204,000）。

10．高校新設科目「理数探究基礎」の充実を目指したオリガミクスによる教育内容の開発実践	2021年 令和3年4月～ 2022年 令和4年3月	担当：葛城元(代表者) 助成先：日本学術振興会 令和2年度科学研究費補助金（奨励研究）で，代表者として，「高校新設科目「理数探究基礎」の充実を目指したオリガミクスによる教育内容の開発実践」（課題番号：21H03967）が採択された（助成額は¥400,000）。 科研費： https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-21H03967/
11．高校生による折り紙の伝承文化と科学的手法を取り入れたＯＲＩＧＡＭＩ文化の創造	2021年 令和3年4月～ 2022年 令和4年3月	担当：葛城元(代表者) 助成先：公益財団法人中谷医工計測技術振興財団「令和3年度科学教育振興助成(個別助成)」で，代表者として「高校生による折り紙の伝承文化と科学的手法を取り入れたＯＲＩＧＡＭＩ文化の創造」が採択された（助成額は¥300,000）。
12.課題研究 におけるフェルミ推定プログラムとVRポスターセッションの開催	2021年 令和3年4月～ 2022年 令和4年3月	担当：深尾武史(代表者)，葛城元(分担者)，他4名 助成先：京都教育大学 令和3年度教育研究改革・改善プロジェクト（京都教育大学）で，共著者として，「課題研究におけるフェルミ推定プログラムとVRポスターセッションの開催」が採択された（助成額は¥335,000）。
13．数学と数学を用いた現実事象の解明を循環的に学ぶハイブリット型数学授業の開発と普及	2022年 令和4年4月～ 2023年 令和5年3月	担当：葛城元(代表者) 助成先：日本学術振興会 令和4年度科学研究費補助金（奨励研究）で，代表者として，「数学と数学を用いた現実事象の解明を循環的に学ぶハイブリット型数学授業の開発と普及」（課題番号：22H04097）が採択された（助成額は¥400,000）。 科研費： https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-22H04097/
4　その他 **【担当した委員会など】** １．NGU-NET運営委員会の委員	2022年 令和4年4月～ 2023年 令和5年3月	奈良学園大学のNGU-NET（情報セキュリティ）運営委員会の運営委員を人間教育学部の構成員として携わった。
２．数学教育学会学会誌の査読依頼担当	2022年 令和4年9月～ 現在	一般社団法人数学教育学会が発行する学術論文誌「数学教育学会誌」の投稿論文の査読を担当している。
３．2023年度数学教育学会春季年会の学会実行委員	2023年 令和5年3月	2023年度数学教育学会春季年会（3月16日～18日に対面・オンライン開催）において，実行委員として学会の運営に携わった。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
【著書】 １．中等数学科教育法序論【再掲】	共著(共著執筆)	2022年 令和4年3月	共立出版，pp.91-110	編著者：黒田恭史 本人担当：第5章 STEAM教育における数学教育 これまで数学教育で蓄積されてきた研究成果をもとに，STEAM教育における数学教育のあり方について検討した。第1節では数学教育の中で取り組まれてきた他領域との融合的教育研究について，第2節ではSTEAM教育の目的と内容について，第3節ではSTEAM教育における数学教育の取り組み実践例について述べた。

【学術論文：査読有】				
１．科学的思考方法の習得を目指したオリガミクスによる数学教材の開発 －ダイヤカット缶を題材として－	共著(筆頭)	2017年 平成29年3月	数学教育学会誌， Vol.57，No.3・4， pp.125-139，**査読有**	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 オリガミクスを数学教育に活用する利点は，学習者自らが様々な折り方を試行錯誤することができ，実験・検証が可能になることである。そこで，科学的思考方法の育成を目指したオリガミクスによる数学教材の開発を行った。
２．数学的探究の習得を目指したオリガミクスによる数学教材の開発 －船の荷物積載を題材として－	共著(筆頭)	2020年 令和2年3月	数学教育学会誌， Vol.60，No.3・4， pp.111-120，**査読有**	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 本研究では，数学的探究の習得を目指した高等学校の「理数科」および「数学科」の内容として，オリガミクスを取り上げ，船の荷物積載を題材とした数学教材を開発することと，本教材に関する数学的探究の習得の可能性を見出した。
３．数学的探究の習得を目指したオリガミクスによる高校生への教育実践 －船の荷物積載を題材として－	共著(筆頭)	2020年 令和2年9月	数学教育学会誌， Vol.61，No.1・2， pp.59-69，**査読有**	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 本研究の目的は，葛城・黒田（2019）が開発したオリガミクスによる数学教材を用いて高校生を対象に教育実践を行い，数学的探究モデルの探究活動を通しての教育的効果を検証することである。教育実践と認識調査の結果から，生徒自らが数学を活用したり，得られた結果を検証したりする探究活動の場面において，オリガミクスを用いることは有効であることが明らかになった。
４．新しい生活様式における数学的活動の事例研究 －VRポスターセッションの開催とその課題－	共著(筆頭)	2023年 令和5年2月	数学教育学会誌， Vol.63，No.3・4， pp.33-41，**査読有**	共著：葛城元，辻秀人，秋田薫，奥西邦弘，松田和真，深尾武史 本人担当：全般 高校生同士がオンライン形式で研究成果を交流し合う場として，Web会議システムの1つであるSpatial Chatを用いて，仮想空間上（VR, virtual reality）でのポスターセッションを開催した。実践とアンケートの結果から，生徒は数学的活動に関わる発表や質疑応答が気軽に落ち着いてできた点に良さを感じていたことが明らかになった。
【学術論文：査読無】				
１．数学教育における知識創造を目指した数学的探究モデルの設計と教育実践	共著(筆頭)	2017年 平成29年3月	知識共創，Vol.7，pp.Ⅳ3.1-12，アブストラクト査読有	共著：葛城元，黒田恭史，林慶治 本人担当：全般 本研究では，数学教育における知識創造を目指した数学的探究モデルの設計・数学教材の開発を行い，高等学校の第1学年（40名）を対象に教育実践を実施し，モデルと本教材の有効性について検証した。
２．多面体と黄金比	共著	2017年 平成29年3月	京都教育大学附属高等学校研究紀要，90号， pp.60-83，査読無	共著：林慶治，葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 黄金比φ＝1.618・・・は，世の中においてとても美しい数値として様々な分野で利用されている。その中でも今回は，菱形三十面体，正二十面体，正十二面体に着目し，身の回りにあるダイヤカット缶を折り紙数学で分析・考察した。
３．小学校算数科の図形領域における折り紙の教育実践 －伝承文化を取り入れた連続折りの活動を通して－	共著(筆頭)	2018年 平成30年3月	京都教育大学教育実践研究紀要，18号，pp.53-62，査読無	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 本研究では，第一に，小学校算数科の図形領域における連続折りを取り入れた折り紙の算数教材を開発した。第二に，小学生を対象に本教材を用いて教育実践を実施し，教材の有効性を明らかにした。

４．これからの理数探究に向けた折り紙数学の教材開発と教育実践 【修士論文】	単著	2018年 平成30年3月	京都教育大学院教育学研究科	単著：葛城元 本人担当：全般 指導教員：黒田恭史，柳本哲 本研究では，2022年度より高等学校学習指導要領の改訂に伴い新設される「理数科」において，探究の過程全体を遂行する力を育成するための折り紙数学の教材開発と高校生への教育実践を行った。高校生が数学的探究の過程に取り組む中で，数学の活用と結果検証を試行錯誤できる点を中心において有効性を明らかにしている。
５．高校1年生を対象とした斜方投射の数学授業の実践－課題解決とその過程の振り返りを通して－	共著(筆頭)	2019年 平成31年3月	京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要，1巻， pp.65-74，査読無	共著：葛城元，深尾武史，黒田恭史 本人担当：全般 本研究では，高校1年生を対象に教育実践を実施し，学習成果物による集計・分析を通して，数学的探究モデルに基づく課題解決とその過程・方法の振り返りに関する学習成果を明らかにした。
６.三角関数の原理の理解を目指した授業実践－定義，求値，グラフの指導方法を工夫して－	共著(筆頭)	2020年 令和2年3月	京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要，2巻， pp.21-30，査読無	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 本研究では，生徒が三角関数の原理を理解することをねらいとして，その学習内容の配列から指導方法を工夫し，高校2年生の理系標準クラス32名を対象に三角関数の定義，求値，グラフに関する授業実践を行い，結果から指導方法を検討した。
７．高校2年生を対象としたSTEAM教育に基づく課題研究の実践－日本の伝統工芸品を題材として－	共著(筆頭)	2020年 令和2年3月	京都教育大学附属高等学校研究紀要，93号， pp.59-67，査読無	共著：葛城元，佐原大河 本人担当：全般 本研究では，京都の伝統工芸品の一つである「京焼」を題材として，「物質」「社会」「生命」の三つの視点を軸に捉え直したSTEAM教育内容の開発と，高校2年生の理系クラス63名を対象とした課題研究を実践し，その実践経過からSTEAM教育に基づく課題研究の可能性を模索・検討した。
８．高校生自らが数学的探究活動を実現するための課題研究の実践	共著(筆頭)	2021年 令和3年3月	京都教育大学附属高等学校研究紀要，94号， pp.73-83，査読無	共著：葛城元，田窪啓人，深尾武史，黒田恭史，谷口和成 本人担当：全般 本研究の目的は，高等学校新設教科「理数科」の充実を目指して，生徒自らが数学的探究活動を実現するための課題研究を実践し，生徒らによるパワーポイントの録画録音機能を用いた学習成果の動画発信を行うことである。本稿では，課題研究における「準備段階」と「課題研究段階」の中間発表会までの実践結果について報告した。
９．高校探究学習科目「理数探究基礎」で扱うための斜方投射を題材とした課題解決型授業の実践	共著(筆頭)	2022年 令和4年3月	京都教育大学附属高等学校研究紀要，95号， pp.89-100，査読無	共著：葛城元，粥川絢子，野原大輝，深尾武史，谷口和成 本人担当：全般 本論文では，既存の斜方投射を題材とした教材を探究活動が経験できるように改良し，高校1年生143名に計5時間の課題解決型授業の実践を行った。その結果，生徒同士で協働しながら理科や数学の知識や考え方を活用した課題解決に取り組め振り返りにより改善点を意識できたこと，探究の再現性や客観性を意識させる点で可能性が示唆されたことなどが明らかになった。
10．1年生を対象とした探究の基礎を育む「総合的な探究の時間」の授業開発	共著	2022年 令和4年3月	京都教育大学附属高等学校研究紀要，95号， pp.101-112，査読無	共著：野原大輝，粥川絢子，葛城元，岡本幹，谷口和成 本人担当：全般 本研究の目的は，新教科「総合的な探究の時間」の授業内容が広く普及されることを目指して，教員と生徒が共に楽しむことができ，身近な現象や題材で簡易的な教材を使用した授業内容を開発することである。本稿では，開発した「総合的な探究の時間」の授業内容のうち2021年4月から12月までの実践結果を報告した。

11．高等学校における数学を用いた探究の基礎的な手法を習得するための授業設計と実践	共著(筆頭)	2023年 令和5年3月	奈良学園大学研究紀要，15号，pp.55-65，査読無	共著：葛城元，深尾武史，黒田恭史 本人担当：全般 本研究では、探究の深い知識や方法を定着させるための授業全体の設計に着目し，筆者らが考案した数学的探究モデルをもとに，1年間の授業設計と計41時間の授業実践を高校生39名に行った。さらに、これらの成果をもとに、探究の方法を習得するためのより効果的な授業のあり方についても検討した。
【学会発表】 １．SSH事業における「数学」の取り組みの実際とその検証　－「生徒研究発表会」と「意識調査」を事例として－	共著(筆頭)	2015年 平成27年6月	数学教育学会夏季研究会（関西エリア）発表論文集（大阪大谷大学），pp.9-12，査読無	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 本研究では，SSHで取り組む各教科の中でも，「数学」に焦点を絞って「数学」の取り組みの実際，および「数学」がもたらした成果を「生徒研究発表会」と「意識調査」を事例として，その分析結果から考察を行い，今後のSSHにおける数学の課題と展望を述べた。
２．高等学校文系クラスにおけるオリガミクスを用いたSSHの授業の可能性 －オイラー線とダイアカット缶を題材として－	共著	2015年 平成27年9月	数学教育学会秋季例会発表論文集（京都産業大学），pp.8-10，査読無	共著：黒田恭史，葛城元，林慶治 本人担当：2・3・4章 本研究では，高等学校第2学年の文系発展クラスを対象に，オリガミクスを取り入れた幾何に関する教育実践を行い，SSHの授業の可能性を分析・検証を行った。
３．SSHを対象とした学習者の発見過程に基づく数学教材の開発と実践	共著(筆頭)	2016年 平成28年3月	教育システム情報学会2015年度学生研究発表会(関西学院大学)，pp.67-68，査読無	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 本研究では，発見過程に基づいた数学教材を開発し，京都教育大学附属高等学校の第2学年（文系発展クラス）を対象に，幾何に関するオリガミクスを用いた実践授業を行い，本教材の有効性を検証した。
４．科学的思考方法の育成を目指したオリガミクスによる数学教材の開発と実践	共著(筆頭)	2016年 平成28年8月	教育システム情報学会第41回全国大会論文集（帝京大学），pp.275-276，査読無	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 本研究では，学習者の科学的思考方法の育成を目指したオリガミクスによる数学教材の開発を行い，SSH指定校を対象に教育実践を実施し，その有効性を検証した。
５．SSH授業におけるオリガミクスを用いた教材開発とその実践	共著(筆頭)	2016年 平成28年9月	第20回数学教育学会大学院生等発表会予稿集（関西大学），pp.4-9，査読無	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 本研究では，生徒自らが様々な折り方による試行錯誤可能なオリガミクスを取り上げ，教材開発および教育実践を行うことで，SSH授業での有効性を検討した。
６．コンテナ船の荷物積載を題材とした折り紙数学教材の開発	共著(筆頭)	2017年 平成29年9月	数学教育学会秋季例会予稿集(山形大学)，pp.46-48，査読無	共著：葛城元，黒田恭史，林慶治 本人担当：全般 本研究では，現実場面にある「コンテナ船の荷物積載」を題材に，探究の方法の基礎習得を目指した折り紙数学教材を開発した。
７．折り紙数学を用いた解析幾何の教育実践 －高校生を対象として－	共著(筆頭)	2017年 平成29年10月	日本・中国数学教育国際会議論文集（立命館大学），pp.77-80，査読無	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 本研究では，「コンテナ船の荷物積載」を題材に，折り紙数学を用いた解析幾何の教育実践を高校生（10名）に実施し，本教材の有効性を検証した。
８．伝承文化を取り入れた小学校算数科における折り紙の教育実践	共著(筆頭)	2017年 平成29年11月	日本教育実践学会第20回研究大会研究大会論文集(佛教大学)，pp.120-121，査読無	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 本研究では，小学生を対象に折り紙算数を用いた教育実践を行い，次期学習指導要領に位置付く小学校算数科での図形学習の有効性を検証した。

９．高等学校「理数探究」における折り紙数学の教育実践 －船のコンテナ積載を題材として－	共著(筆頭)	2018年 平成30年3月	数学教育学会春季年会予稿集（東京大学），pp.5-7，査読無	共著：葛城元，黒田恭史，西井潤，田窪啓人 本人担当：全般 本研究では，高等学校理系クラスを対象に折り紙数学教材を用いた教育実践を行い，学習成果について明らかにした。
10．高校1年生を対象とした斜方投射の数学授業の実践 －課題解決の方法を振り返って－	共著(筆頭)	2018年 平成30年9月	数学教育学会秋季例会予稿集(岡山大学)，pp.2-4，査読無	共著：葛城元，深尾武史，黒田恭史 本人担当：全般 本実践では「データの処理」「原点の設定」「2次関数の式の決定」の課題解決の方法について，生徒同士の振り返りによる考察を付加した。そして，高校1年生を対象に教育実践を実施し，学習成果物による集計・分析を通して，上記3点の認識の特徴を明らかにした。
11．高校1年生を対象とした「整数の性質」の学習における困難性 －定理・公式を創る活動に焦点を当てて－	共著(筆頭)	2019年 平成31年3月	数学教育学会春季年会予稿集(東京工業大学)，pp.66-68，査読無	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 本研究では，「整数の性質」において，生徒が既存の定理・公式を拡張・創造する学習における思考過程の特徴，および理解困難な事項の特定化とその要因を解明した。
12．高校生を対象とした生徒の問いを誘発するSTEAM教育の可能性 －京焼を題材として－	共著(筆頭)	2019年 令和元年11月	日本教育実践学会第22回研究大会研究大会論文集(鳥取看護大学)，pp.42-43，査読無	共著：葛城元，佐原大河，谷口和成 本人担当：1・2章 本研究では，京都の伝統文化の一つである「京焼」を題材として，高校2年生を対象に「物質」「社会」「生命」の三つの領域を軸に，生徒の問いを誘発するSTEAM教育の構築とその実践経過について報告し，その可能性を模索・検討した。
13．学校再開後の授業時数が制限された中での対面・非対面数学授業の在り方 －高等学校2年理系講座を対象として－	共著(筆頭)	2020年 令和2年9月	数学教育学会秋季例会予稿集(熊本大学)，pp.8-10，査読無	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 本研究の目的は，学校再開後の授業時数が制限された中で，動画教材による自宅学習と対面授業を組み合わせた対面・非対面数学授業がどのような学習効果をもたらすのかについて，高校2年生を対象に授業実践を行うことにより検証することである。
14．学校休校時・再開後も高校生が学びを続けるためのオンライン授業の実践	単著	2020年 令和2年9月	数学教育学会秋季例会予稿集(熊本大学)，pp.37-38，査読無	単著：葛城元 本オーガナイズドセッションでは，学校休校時・再開後も高校生が学びを続けるためのオンライン授業として，学校休校時におけるオンライン授業の導入から運用までの実践報告を行った。
15．高校生自らが数学的探究活動を促進するための課題研究の授業開発と実践	共著(筆頭)	2020年 令和2年11月	日本教育実践学会第23回研究大会研究大会論文集(徳島大学)，pp.37-38，査読無	共著：葛城元，田窪啓人，黒田恭史，谷口和成 本人担当：全般 2020年度から全面実施の高等学校新設教科「理数科」では，生徒自身が理数の知識や技能を活用し探究の過程全体を最後まで粘り強く遂行することがねらいにあり数学を題材とした課題研究の授業内容の開発と実践が必要である。本研究では，生徒自らが試行錯誤の中で数学の活用と結果の検証を実現するための数学の課題研究の授業開発を行い，その学習効果を授業実践により検証した。
16．探究の過程を通して生徒自ら新たな価値を見出すための課題研究の実践	共著	2020年 令和2年11月	日本教育実践学会第23回研究大会研究大会論文集(徳島大学)，pp.63-64，査読無	共著：野原大輝，谷口和成，葛城元 本人担当：第1章 新学習指導要領では１つの教科等に捉われず，教科横断的に多角的な視点から生徒自ら問いを見いだし，探究の過程を通して課題を解決する活動の充実がより一層強調される。評価の観点についても改められ，その１つに「学びに向かう力」とあり，学びに対する動機づけの向上を促す働きかけも重要になる。本研究では，生徒が主体的に探究の過程を通して課題を解決し，新たな価値を見出すための課題研究の教材，実践方法を動機づけの側面から検討を行った。

17. 昆虫の翅の折り畳みを応用したオリガミクスによる教材の開発実践 －高等学校のSTEAM教育の充実を目指して－	共著(筆頭)	2021年 令和3年3月	数学教育学会春季年会予稿集(慶応大学)，pp.8-10，査読無	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 日本の遊戯文化に代表される折り紙の原理・仕組みを科学的に分析する「オリガミクス」は，科学技術の融合により目覚ましい発展を遂げている。高等学校では，各教科の知識を実生活へ応用することによる問解解決力の育成を目指したSTEAM教育が推進されており，それを効果的なものとする教材開発と実践例の蓄積が急務である。本研究では，高等学校のSTEAM教育の充実を目指して，昆虫の翅の折り畳みを応用したオリガミクスによる教材を開発し，教育実践により有効性を検証した。
18. 3Dソフトウェアを用いた立体図形の指導の在り方	共著	2021年 令和3年3月	第25回数学教育学会大学院生等発表会予稿集(慶応大学)，pp.7-9，査読無	共著：青木駿介，葛城元，黒田恭史 本人担当：第3章 立方体の切断をはじめとした空間図形の学習は学習者にとって難しい内容の1つである。大学生を対象に視線移動計測実験を行った結果，平面上に表された空間図形の情報を正確に読み取ることに困難を示しており，従来の指導方法に加えて空間図形の特徴を捉えやすい教材を開発する必要性があると考えた。本稿では，実験結果をもとに，3Dソフトウェアを活用した数学及び化学の教科横断的な空間図形の3D教材を制作し，高校生を対象とした立方体の切断を題材とした3D教材を用いての教育実践の結果を分析した。
19. 高等学校における現実事象を取り扱った教材作成と実践 －物体の斜方投射と二次関数－	共著	2021年 令和3年3月	第25回数学教育学会大学院生等発表会予稿集(慶応大学)，pp.38-40，査読無	共著：伊藤祥貴，葛城元，黒田恭史 本人担当：第4章 現在の高等学校の関数教育では，生徒が関数を現実事象に活用するといった内容は少ない。関数が様々な現象を解明する上で有用な概念であることを生徒に指導することは重要であり，そのための教材開発が求められている。そこで，本稿では，物体の斜方投射と二次関数を用いる現実事象を取り上げ，数学的モデリングを取り入れた教材開発を行った。
20. ハイブリッド型数学授業がもたらす学習効果と学力格差 －高校生の学力層に着目した分析を通して－	共著(筆頭)	2021年 令和3年6月	数学教育学会夏季研究会（関西エリア）発表予稿集(大阪教育大学)，pp.9-12，査読無	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 本研究の目的は，高校2年生の理系講座38名を対象に，オンライン（自宅）学習と対面授業を組み合わせたハイブリッド型数学授業を実践し，その有効性を検証することである。本稿では，本授業がもたらす学習効果と学力格差について，学習者の学力層に着目し分析を行った。その結果，学力上位・中位層はオンライン（自宅）学習と対面授業による段階的な学習が，学習内容の理解を促進する点で有効であった。学力下位層はオンライン（自宅）学習の学習習慣の未定着や基礎的な事柄でのつまずきが対面授業での学習に影響を及ぼした。
21. オリガミクスを用いた数学授業では高校生にどのような思考と活動を促すのか	共著(筆頭)	2021年 令和3年9月	数学教育学会秋季例会予稿集(千葉大学)，pp.136-138，査読無	共著：葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 葛城・黒田は，折り紙自体の原理・仕組みを数理科学的に分析する「オリガミクス（造語：Origamics）」を用いた数学教材を3点開発し，2015年から2020年までの間に高校1～3年生の251名を対象にオリガミクスによる数学授業を行ってきた。本研究では，本実践が高校生にどのような思考と活動を促したのかを分析・考察し，オリガミクスを用いた数学授業のあり方について検討を行った。
22. 教科間の協働による「総合的な探究の時間」の教育内容の開発	共著	2021年 令和3年10月	日本教育大学協会研究集会発表概要集(福岡教育大学)，pp.154-155，査読無	共著：野原大輝，粥川絢子，葛城元，辻秀人，岡本幹，谷口和成 本人担当：全般 2022年度より高等学校で実施される「総合的な探究の時間」では，探究の見方・考え方を働かせながら教科横断的な学習を実施することが求められており，カリキュラムの作成と学校間での共有・普及が重要な役割を担う。そこで，本稿では，本校での探究活動の取り組みのノウハウを「総合的な探究の時間」に適用し，地域校に普及することのできるスタンダードな教育内容の提案を目的とした取り組みの成果を報告した。

23. 教科間の連携による探究の基礎を育む授業の実践	共著	2021年 令和3年11月	日本教育実践学会第24回研究大会研究大会論文集(兵庫教育大学), pp.66-67, 査読無	共著：野原大輝, 葛城元 本人担当：全般 本研究の目的は, 教科横断的に高等学校３年間を見通した探究活動のカリキュラムを検討し, １年生段階における探究活動の位置づけと授業内容を検討することである。今年度は, １年生の探究活動の位置付けを「身近な事象から探究の基礎を修得すること」として, 体験的に探究の基礎を育むための授業内容を検討, 実践を行った。
24. 高等学校新設教科「理数科」を充実させるための生徒の数学的試行錯誤と成果発信を実現する教育内容の開発	共著(筆頭)	2021年 令和3年11月	第47回全日本教育工学研究協議会講演論文集(大阪教育大学), pp.139-142, 査読無	共著：葛城元, 深尾武史, 黒田恭史 本人担当：全般 本研究では, 新教科「理数科」の「理数探究基礎（１単位）」の教育内容開発をもとに, 高校生が数学を含めた探究活動を実施すること, 学習成果をパワーポイントの録画音声機能を用いて動画制作し成果発信を行った。その結果, 高校生自らが積極的に問いを立て数学の活用と検証による数学的試行錯誤の活動や思考の過程を可視化・言語化できる点, そして, 「理数探究基礎」の教育内容として提案できる点で成果が得られた。
25. 生徒のExcelVBAの操作活動を取り入れた二次関数の指導について	共著	2022年 令和4年3月	関西地区教育システム情報学会2021年度学生研究発表会(関西学院大学), pp.101-103, 査読無	共著：松下旭, 葛城元, 黒田恭史 本人担当：全般 数学教育とプログラミング教育の連携として数学の関数の単元をExcelVBAを用いて学習することで関数の構造などの理解を深めることができるのではないかと考えた。そこで本稿ではExcelVBAを用いた教材開発を行い,作成した教材をもとに二次関数の頂点座標の軌跡に関する学習課題を用いて教育実践を行った。その際,生徒自身がマクロを動かすことで学習課題に対する根拠について考察している姿が見られた。
26. 高校数学におけるローンを題材とした関数教材の開発と実践	共著	2022年 令和4年3月	関西地区教育システム情報学会2021年度学生研究発表会(関西学院大学), pp.129-130, 査読無	共著：福島匡宏, 葛城元, 黒田恭史 本人担当：全般 現在, 各高校で行われている関数教育の指導法の中に 現実事象と関連させて学習を進めるものは少ない。しかし, 今後は関数教育でも現実事象を数学的に捉えて推論・考察を行 い課題解決を図る指導法が必要になってくる。 本研究では, 「ローン」を題材とした教材を作成し, その 有効性を授業実践を通して検証した。
27. 人口を題材とした関数教材の開発 －GeoGebraの探索方法によるデータから式を導出することを通して－	共著	2022年 令和4年9月	数学教育学会秋季例会発表予稿集(北海道大学), pp.113-115, 査読無	共著：高嘉良, 葛城元, 黒田恭史 本人担当：全般 表, グラフ, 式の活用をはじめとした関数の学習は学習者にとって現実事象への活用が難しい内容の1つである。人口変化の現状から将来を予測することについて, 現実事象のデータを適合に式に変換する関数教材を開発する必要性があると考えた。本稿では, 探索方法の試行錯誤と最小二乗法をもとに, ICTを活用した現実事象への応用の関数教材の開発を行った。
28. 高校生が数学的探究を遂行できるようになるための教材開発 －折り紙を用いたものづくりを通して－	共著(筆頭)	2023年 令和5年3月	日本STEM教育学会拡大研究会予稿集(オンライン開催), pp.11-14, 査読無	共著：葛城元, 黒田恭史 本人担当：全般 高等学校の数学教育では, 変化の激しい社会に対応していくために, 生徒が数学的探究を遂行できる力の育成が重要であると考えた。折り紙を用いたものづくりは, 数学の活用と実物検証による科学的手法を用いた思考法の習得と, 目的とする作品を精度高く創造・構築できるといった数学の果たす役割の理解が期待できる。本研究では, 折り紙を用いたものづくりを通して, 生徒が数学的探究を遂行できるようになるための教材開発を行った。

29．人口課題を題材とした関数の教育実践 －GeoGebraの探索方法を用いて－	共著	2023年 令和5年3月	第27回数学教育学会大学院生等発表会予稿集(中央大学)，pp.31-36，査読無	共著：高嘉良，葛城元，黒田恭史 本人担当：全般 本研究の目的は，高・葛城・黒田（2022）が開発しているGeoGebraの探索方法を用いた人口課題を題材する関数教材を改良し，高校1年生を対象に実践を行うことで，教材の有効性や課題を検証することである。人口予測の分析結果から，二次関数などによる人口予測の有用性が見られた。教育実践の結果から，本教材を使用することで従来の指導では扱えなかった現実事象へ関数の応用の学習ができたことや，座標上の点の近似式の学習を進められる可能性が示唆された。
【その他】				
１．数学を基軸とした新教科「理数科」の教育内容開発と高校生による学習成果の動画発信	単著	2021年 令和3年5月	公益財団法人パナソニック教育財団	2020年度（第46回）実践研究助成の一般助成を受けたため，その研究報告書を作成した。
２．船模型	単著	2022年 令和4年9月	教育科学「数学教育」，明治図書，No.779，東京，pp.66-67	商用雑誌「数学教育」の特集「生徒も教師も楽しくなる数学パズル・ゲームPremium」において「船模型」の内容を解説した。

別記様式第４号（その２）

教　育　研　究　業　績　書

令和　4 年 5 月 19 日

氏名　前田　綾子　　印

研究分野	研究内容のキーワード
幼児教育	保育者論、保育内容、保育と環境、保育と人間関係　★確認

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
1）絵本を活用した言葉力育成	平成21年4月～23年3月	語彙力を増やすために、言葉とイメージを関連付けてることに絵本を活用した。保育園から図書館分室にお散歩する時間を設定し、図書館に慣れ親しませるとともに、絵本を借りる習慣をつけた。さらに地域の読書ボランティアを活用して、読み聞かせの時間を設定し多様な本に触れる機会を増やした. （尼崎市立花南保育所での実践）
2）異年齢交流遊びで良好な人間関係育成	平成23年4月～26年3月	3 歳児以上のクラスの幼児において、毎週縦割り保育の時間を設定し、遊びの教え合いを通して、少子化が進む中で兄弟のような人間関係構築し、異年齢間での振る舞い方や感情（年少への思いやりや年長への信頼）を育てた。 （尼崎市立大島保育所での実践）
3）地域住民の要望を反映した保育所経営	平成23年4月～現在に至る	保育所の評価を自己評価だけでなく、保育所関係者の評価も実施して、その資料を公開し、夜間に会議を開催して、地域住民や保護者等と話し合い、要望を受け止め、次年度の保育計画に反映した。 （所長を務めた保育所で実施）
4）発達年齢を実感するために実習時間の設定	平成26年4月～現在に至る	大学で学んだ知識と保育所実習との齟齬に戸惑う実習生が多いことから、子どもの発達について全年齢クラスに入り、具体的な子どもの姿と大学の学習が結び付くような時間を、実習の中に取り入れた。この検証を基に次年度に、新たな保育所実習のしおり作成し、武庫南保育所で使用した。 （尼崎市立大庄・武庫南保育所の実践）
２　作成した教科書・教材		
1）保育実習の手引き　単著 尼崎市立大島保育所発行	平成23年6月	保育実習に臨むにあたって保育所とはどういうところなのか、生活の流れなどを事前に理解してもらうと共に安全に対する配慮事項や、心構え、挨拶などや持ち物、保育所におけるルールなどについて具体的に記した冊子を作成。 （尼崎市大島保育所で実習生指導に使用）
2）保育所実習のしおり　　単著 尼崎市立武庫南保育所発行	平成27年6月	実習生のタイプが変わってきたことから上記内容に加えて、毎日目標を持地、振り返りをし翌日に活かすこと、わからないことや何をしたら良いのか迷うときは自分から積極的に職員に聞くことなどより、実習生としての実習に臨む態度を具体的に示した。 （尼崎市立武庫南保育所の実習生指導に使用）

３　教育上の能力に関する大学等の評価 尼崎保育福祉専門学校の学生アンケート。	令和元年６月	尼崎保育福祉専門学校　80 名を対象に講義 実習前の学生にグループワークにより、不安の軽減、積極的に実習に臨む、授業で学んだ子どもの発達を意識することを伝えた。職員への感謝の気持ちの重要性も伝えた。講義の後半は安心し質問をするなど積極的に変容した。授業評価は４点満点で 3.8。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 1）尼崎市モデル保育所実践報告会発表	平成 27 年３月	尼崎市中央公民館 40 名参加 ★内容を簡単にテーマ等書く
2）保育内容研究会保育公開で発表	平成 28 年 11 月	尼崎市立大庄保育所 35 名参加
3）保育内容研究会実践発表会	平成 29 年２月	尼崎市中央公民館 50 名参加
4）保育内容研究会保育公開発表	平成 29 年 11 月	尼崎市立大庄保育所 35 名参加
5）尼崎市保育士専門研修講師 「尼崎の保育」の活用	平成 29 年 12 月	尼崎市青少年センターで保育士 25 人を対象に講演。保育指導課からの依頼により、保育士歴５年目から１５年目の公立保育所の保育士を対象に「尼崎市の保育」（冊子）の活用について研修をした。「尼崎の保育」には普段の保育に使える様々な資料が含まれており、その活用方法や、ミドルリーダーとしての自覚を持つことの大切さを伝える。
6）保育内容研究会実践発表会	平成 30 年２月	尼崎市中央公民館 50 名参加
7）尼崎市フォローアップ研修講師	平成 30 年 12 月	尼崎市青少年センターで保育士等 80 人対象に講演。保育指導課からの依頼により、公立保育所、法人保育園、小規模保育園の１、2 年目保育士を対象に「ふれあい遊び」の実技研修を担当する。ふれあい遊びの意義を保育所保育指針に基づき講義をし、１歳児から３歳児を対象としたふれあい遊びの実技講習をした。多くの遊びを知らなくても、１つの遊びをアレンジすることで１歳から５歳まで楽しめたりバリエーションが増えることを伝える。
8）尼崎市保育士専門研修講師 「リーダーシップ研修」	年　　月	保育指導課の依頼により、20 年目以上の保育士を対象に若い職員が増えていっている中で人材育成の手法として「コーチング」について講義をし、グループワークでリーダーとして苦労していることや今後どのように人材育成に取り組んで行きたいのかを話し合う。

5　その他 なし		
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 保母資格 保育士資格登録	昭和57年3月 平成16年2月	龍谷大学短期大学部学長　二葉憲香　第747号 兵庫県知事　井戸　敏三　兵庫県-011161
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 ・保育士としての特記事項 教育実習生の指導 各研究会等の発表	昭和59年4月 ～平成20年3月	・クラス担任として、発達に応じた集団づくりに取り組み、2歳児の事例を阪同教と兵同教で実践事例の報告をした。(平成2年7月) ・保育士3年目から毎年実習生を受け入れ、乳児や幼児における養護と教育の統合や、子どもの発達に応じた関わりについて指導をした。 ・個に応じた指導を大切にし、子どもの発達に関しての特記事項を共有するノートを作成し連携した。
・主任保育士としての特記事項	平成21年4月 ～23年3月	・尼崎市子育て支援推進委員会に所属し、今後の子育てセンターの機能や公立保育所のあり方などについて話し合う ・遊びの実践委員会として0歳児から5歳児の一人一人の遊びの発達を把握するために遊びのチェック表を作成（3歳児担当）
・所長としての特記事項	平成26年4月 -28年3月	・所長会の中の保育内容研究会、保育の質の向上推進部会、給食委員会を担当。 ・保育内容研究会担当として毎回の研究会の司会、進行、記録の確認をし、指定保育所が阪同教で発表した時（平成27年7月西宮市深津中学校）就学前部会で司会担当。 ・保育の質向上推進部会では2年間で保育所の自己評価と保護者アンケートを作成し、の実施の詳細を決定。各保育所で実施し、その結果の検討のシステムを決める。とともに防災マニュアルの作成をする。 ・給食委員会は所長の代表として2年間、調理師の代表、チーフ主任2名、管理栄養士をメンバーとして毎月の給食、おやつの反省と次々月の献立の検討をする。
	平成28年4月 -30年3月	・保育内容研究会担当 尼崎市研究指定保育所として「環境による知的好奇心を育む自然との関わり」に関して2年間職場研修を実施し、理論と実際の保育を結びつけ保育所職員が一体となって取り組む。職員をまとめ研究会冊子資料の執筆をする。また、改訂保育所保育指針の研修をし、保育内容研究会の子どもの姿の読み取りに3つの資質能力や、就学までに育てたい10の姿を取り入れ推進。
	平成29年4月 -31年3月	・オールあまっこ連絡協議会平成29年度大庄、平成30-31年度武庫地区代表として法人園地区代表所長とともに公立、法人園の年長児交流会を企画、実施する。
	平成30年4月 -31年3月	・保育内容研究会担当所長として、研究会の運営、司会、書記の確認等をする。
4　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(著書) なし				
(学術論文) 1 2 3				
(その他) 【研究紀要等】 1				
2 3 【学会発表等】 1知的好奇心を育む（1） NKYWのサイクルに注	単	令和元年5月	日本保育学会ポスター発表 (大妻女子大)	子どもが心動く環境に出会い「何んだろう」「何でだろう」という知的好奇心を抱いた時からその知的好奇心が満たされるまでの過程に着目し、何だろう（N）考えよう（K） やってみよう（Y）わかった（W）という4つ場面がサイクルとして回っていくことが知的好奇心の深まりや広がりに繋がることを論じた。 概要A4判2ページ ポスターB4サイズ8枚
2知的好奇心を育む（2）	単	令和2年5月	日本保育学会ポスター発表 (	子どもの好奇心を分類して好奇心の種類に応じた援助のあり方を論じた。 概要A4版2ページポスターパワーポイント8枚
3コロナ禍における保育実習のあり方に関する一考察	単	令和3年2月	日本乳幼児教育保育者養成学会ポスター発表	コロナ禍の中での実習指導の困難さや、実習の難しさについてや、実習指導のあり方や実習の実施についての提案を論じた。 パワーポイント10枚

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　5年　3月31日

氏名　間井谷容代

研究分野	研究内容のキーワード

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例	平成25年12月 平成25年12月	奈良100年会館で、表現活動発表を指導した。 奈良市サポートセンターのクリスマス会参加。学生の表現発表を指導した。
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価	平成28年12月	授業評価の学生アンケートの評価が高く。5段階の4.5であった。自己点検の評価では進路担当を行い、就職指導には力を注いだ。学生の願いが叶い高く評価され４の評価であった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項	平成29年12月～平成31年2月	子育て支援(香芝市子育て支援ほっと)にて、遊びにくる保護者と子ども対象に関わり、その中には療育を受けている障害のある子どももいた。その時には学生に配慮をするように指示を入れ保護者も子ども安心して参加できるような活動を準備するように努めた。
5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許	昭和62年3月18日 平成28年3月1日 令和3年3月31日	保育士証（奈良県002914） 幼稚園教諭1種免許状 (奈良県教育委員会平二七幼一種第二四号) 幼稚園教諭専修免許状 （大阪府教育委員会令二幼専第一八号）
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項	平成26年6月 平成27年5月，6月，10月 平成28年度（～平成29年度まで） 平成30年12月 平成31年1月，2月 令和1年10月 令和2年1月 令和2年3月5月 令和2年9月 令和4年10月	園内研修の講師を務めた（三郷町立南畑幼稚園）。 クラス運営の保育内容の進め方と障害加配担当者の関わりについて指導。また子どもの発達状況を記録と本児の姿を通して話し合った。 園内研修の講師を務めた（三郷町立南畑幼稚園）。 関西福祉科学大学保育士養成課程委員会の副委員長を務めた。 奈良社会福祉院　法人職員研修保育研修講師を務めた。 奈良社会福祉院　法人職員研修保育研修講師を務めた。 郡山東保育園を認定こども園への移行手続き、書類作成を行った。 奈良学園大学の開講科目「保育相談」の外部講師を務めた。 保育研修講師を務めた（学校法人楠公学園あけぼの・幼保学院）。 児童発達支援事業所「ぴょんちゃんclub」立ち上げ手続き、書類作成を行った。 園内研修講師を務める(三郷町立西部保育園)
4　その他		特になし。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の	概要
（著書） （学術論文） 1.近隣地域や関係機関における学生の活動 - 保育者養成における協働への手掛かり -	共著	平成26年12月	奈良保育学院研究紀要第16号	地域の子育て支援のサポートセンターでボランティア活動として劇を発表して、乳幼児や保護者の方と共に簡単な制作・触れ合い遊び等を取り組んだこと、また学園取り組みの「花いっぱい運動」に参加し、土作りから始め花を植え、花の世話を毎日していること、地域の人と花を通してかかわっていることなどをまとめた。 執筆：下清水広　間井谷容代　谷本一栄 pp.46－49Ⅲ
2.学生の保育計画力の育成に関する一考察－教育課程総論と幼稚園教育実習との関連を通して－	単著	平成26年12月	奈良保育学院研究紀要第16号	教育実習を進めていく流れとして、教育課程総論で幼稚園の歴史から計画していくことを学んだ。次にそれを実際に演習と合わせて、授業を展開してきたことをまとめた。また学生には実習にいき、どのようなことでつまずいたのか、どのようなことで注意を受けたのかを具体的にアンケートをとり、まとめた。 執筆：間井谷容代 pp.73-80
3. 保育者の子育てに関する一考察 - わが子の子育ての悩みに注目して -	共著	平成29年3月	奈良学園大学紀要第６号	現在保育者はどのような子育ての悩みがあるかを明らかにすることとして、保育者としてのアイデンティティ形成、パーソナリティ、職務について認識、職業観との関連について検討し、アンケート調査を行いまとめた。 執筆：岡村季光　間井谷容代　谷本一榮 pp.115-124
4.幼稚園実習を通して学生の自己成長を促すルーブリックの開発と活用	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要第15号	本研究では，幼稚園実習事前事後指導でルーブリック評価を活用し、学生の実習に向けての資質向上を図る。実習事前・実習中・実習事後の3回ルーブリック評価を行い、学生が実習に対して意識を持ち取り組むように進める。その中で、保育現場が今抱える問題(保育者不足)による実習指導に対して齟齬が生じてきている。この現状を打開するために学生の資質向上に努める。 執筆：間井谷容代　石原由貴子　高岡昌子　岡村季光　pp.155-164
（学会発表） 1.近隣地域や関係機関における本学院の活動－保育者養成における協働への手掛かり－	共著	平成25年9月	全国保育士養成協議会第52回研究大会(高知県)研究発表論文Ｐ550－551	近隣の幼稚園保育園を招待して、学生たちの表現活動発表をおこなっていること、あるいは、地元の自治会主催の行事や子育て支援として活動されているサポートセンターにボランティアで劇を演じたこと、表現以外として、学園全体が取り組んでいる花いっぱい運動を学生も共に行い、花を通じて地域の人と触れ合ったことなどをまとめた。 執筆：下清水広　間井谷容代　佐々木千晶　岩城正幸 Ⅱ活動内容・Ⅲ活動状況、活動からの考察
2. 地域子育て支援に取り組む実践者を対象にした教育プログラムへの参加動機	共著	平成29年1月	関西福祉科学大学総合福祉科学学会学術集会	子どもと家庭を支援する実践者と研究者の学び合いを質的に研究するとともに文献研究と実証的な量的調査研究を通して実習教育の理論的構造を明らかにすることをまとめた。実習教育では発達障害の子ども関わりについて問題としてあがり、地域子育て支援として福祉施設や専門機関等の連携の必要性についてもまとめた。 執筆：新川泰弘　宮野安治　間井谷容代　西元直美 林　龍平
3. 保育者の子育てに関する探索的研究	共著	平成30年5月	日本保育学会第71回大会(宮城県)	現代の保育者がどのような子育ての悩みがあるかを定量的変数との関連により検討した。また自由記述により探索的に検討を行いまとめた。その結果、子育ての負担感として「病気」に関することを始めとしたキーワードが抽出され、特に障害のある子どもの場合、子育ての負担感がさらに増大することが考えられた。 執筆：岡村季光　間井谷容代
4. 保育現場における他職種との協働について①保育士の視点	共著	平成30年5月	日本保育学会第71回大会(宮城県)	保育現場で気になる子どもがいるとすぐに発達障害の疑いをかけがちである。集団生活ができないと発達検査を勧めるケースが多々増加している。関連機関と連携を持ち保育士が保育上で何らかの特別な支援が必要だと思われる子どもへの支援方法等の役割について検討し、まとめた。 執筆：間井谷容代　宿谷仁美
5.保育領域にチーム体制を取り入れた支援について －保育者と実践を通して－	単著	令和4年3月	日本保育者養成教育学会第6回	保育領域にチーム体制を取り入れた支援方法について、某こども園で実践を行った経過を発表した。保育者と共に子どもの姿を追い、支援を続け、園内のチーム体制を含め何度も検討を行い、体制を整えてきた。結果子ども、親が安心できる職員集団へと変わってきたことを実証した。 執筆：間井谷容代

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の	概要
6.多様化する子育て支援のあり方について －子育て支援の現状を探る－	共著	令和4年5月	日本保育学会第75回大会	多様化する子育て支援の現代。取組み方法は様々である。それらを踏まえ再度原点を見つけるために、子育て支援の始まりを調べる。 それを知り得た後、各園、事業、センターで行われている支援内容を具体的に知る。今後、実際取り組まれている支援者である保育者、活用している保護者に調査を行う。 執筆：間井谷容代　　高橋千香子
7.保育者におけるワーク・ライフ・バランスと保育者効力感の関係	共著	令和4年5月	日本保育学会第75回大会	本研究では，子の有無別に各下位尺度間を年齢と保育者歴を統制変数としたピアソンの偏相関係数（r）で求めた。子のいない者は保育者として期待を求められる仕事をしつつ，自らの時間を確保でき，プライベートとの切り替えが図れているのに対し，子のいる者は多忙で仕事とプライベートの切り替えがうまく図れていない可能性が示唆された。図表で示した。 執筆：岡村季光　間井谷容代
（その他） 1.保育領域にチーム体制を取り入れた支援について	単著	令和3年1月	大阪教育大学大学院連合教職実践研究科高度教職開発専攻報告書	保育領域にチーム体制を取り入れた「気になる行動をする子どもや発達障害の子どもとその保護者への支援」の構築に関する報告である。まず保育教諭の「子ども支援」「保護者支援」に対するニーズに着目しニーズをアンケート調査より具体化した。結果、困り感・情報共有が十分でないことがわかった。取組みとしてチームとしての体制を整え、保育教諭の子ども支援、保護者支援が効果的で安定したものとなるように取組み実証した。

(注)
1　この書類は，学長（高等専門学校にあっては校長）及び専任教員について作成すること。
2　医科大学又は医学若しくは歯学に関する学部若しくは学部の学科の設置の認可を受けようとする場合，附属病院の長について　もこの書類を作成すること。
3　「研究業績等に関する事項」には，書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。
4　「氏名」は，本人が自署すること。
5　印影は，印鑑登録をしている印章により押印すること。ただし，やむを得ない事由があるときは，省略することができる。
　この場合において，「氏名」は，旅券にした署名と同じ文字及び書体で自署すること。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教育研究業績書

2023 年　5 月　18 日

氏名　　上野栄一　　印

研究分野	研究内容のキーワード
基礎看護学	看護理論、看護管理、コミュニケーション、ストレス、糖尿病

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 (1)シナリオ作成によるロールプレイの授業	平成 19 年 4 月～	科研で研究したコミュニケーション技法をもとにロールプレイ用のシナリオを作成し、授業に活かし学生からの高い評価を得ている。
(2)大学教育入門セミナーの開講	平成 23 年 4 月～	初年次教育（2 単位）をカリキュラムに取り込み、学生生活を有意義に過ごせるように、生活面、学習面、マナーなどの講義を取り入れ、高い評価を得た（現在、オムニバス方式で 15 コマの授業を行っている。本授業の中には、文部科学省の指定する薬害の特別講演もいれている）。
(3)双方向授業システムのクリッカーを用いた授業展開	平成 26 年 4 月～	双方向授業システム（3e　Analyzer）を用いた授業を、研究での検証を行った後、高い効果を得ることができ、リスクマネージメント論などの授業で展開し、学生の高い評価を得た（学生評価で優秀教員として選ばれた）。
(4)授業後のミニッツペーパーの分析による講義の構築	平成 26 年～	毎回の授業ミニッツペーパーによる授業の理解度を確認し、次の授業に活かし、学生のモチベーションを高めた。
2 作成した教科書，教材 (1)看護診断のためのアセスメントポケットガイド（共著）	平成 12 年 7 月	「9 つの人間の反応パターン」を表した用語の定義を、各パターンごとに説明し、理論的背景は、各パターンの下位概念までの範囲で、看護理論をはじめ関連のある心理学・社会学の理論などもふまえて説明している。患者の主観的情報の聴取が、分類しやすいように一連の関連した質問で構成した。根拠に基づいた意図的な質問を、的確に表現するようなガイドラインとなっている。臨床教育、看護学生に役立つ護診断のためのアセスメントポケっとガイドを作成した。学部教育では、看護診断、看護過程の導入に用い、新人看護師の教育にも使用した。

(2)看護研究コンパクトガイド（単著）	平成 14 年 3 月	看護研究のコンパクトガイドを作成し、卒業研究の副読本として活用した。また、本書は、看護師の看護研究指導にも用いられ、高い評価を得ている。本書は、看護診断カテゴリーに基づいて、看護婦が臨床の場で活用でき、効率的に患者情報を引き出せるように工夫した。
（3）楽しくなる看護研究	2012 年 12 月	看護研究のプロセスをもとに、研究計画書の記載方法、分析方法、結果、考察、結論の書き方までは系統に開設した学生、臨床看護師向けに解説した。
（４）看護診断の看護過程ガイド	2022 年 8 月 10 日	看護過程についてどードンの 11 の機能的健康パターンに基づく看護過程のプロセスについて事例を中心に解説した書であり、学生から看護師まで学ぶできる書である。 （編集）上野栄一、西田直子 （著者）上野栄一、道重文子、茅野友宣、西田直子、杉島優子、藤本ひとみ、松浦純平、内田宏美、本田裕美、上澤悦子、任和子、長光代、濱野陽子
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
(1)福井大学個人評価	平成 14 年 4 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日	3 年ごとの教員評価にて常に上位 0 の評価を受けている。
(2)福井大学学生評価優秀教員	平成 25 年度	福井大学学生授業評価において「リスクマネージメント論」の講義について優秀教員に選ばれた。
(3)福井大学学生評価優秀教員	平成 29 年度	福井大学学生授業評価において「リスクマネージメント論」の講義について優秀教員に選ばれた。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
(1)公開講座（福井大学）FD セミナー	平成 20 年 10 月	ＦＤセミナー委員長として、看護学科のＦＤセミナーを毎年開催してきた。
(2)平成 30 年超少子高齢化地域での先進的がん医療人養成（北信がんプロ）看護セミナー	平成 29 年 11 月 24 日	地域で暮らすがん患者への支援（村山正子）の企画
(3)平成 30 年超少子高齢化地域での先進的がん医療人養成（北信がんプロ）看護セミナー	平成 30 年 11 月 30 日	がんプロ公開講座「地域で暮らすがん患者への支援」（片山寛治）の企画

(4)令和元年度文部科学省「超少子高齢化地域での先進的がん医療人養成（北信がんプロ）」がんプロフェッショナル養成プラン（がんプロ） (5)令和 2 年度文部科学省「超少子高齢化地域での先進的がん医療人養成（北信がんプロ）」がんプロフェッショナル養成プラン（がんプロ）	令和 1 年 11 月 22 日 令和 2 年 10 月 30 日（決定）	がんプロ公開講座の実施 「患者のニーズに沿った寄り添う看護」（田端恭平）の企画 がんプロ公開講座の実施 「地域でのがん患者への支援」（日本がん看護学会理事長：小松浩子）の企画
5 その他 (1)文部科学省北陸がんプロフェッショナル養成プラン（がんプロ）講義 （動画）資料作成	平成 30 年 4 月	「がん患者と家族」、「がん患者へのミュニケーション」（北陸がんプロ教育課程の受講生に対するビデオ作成）

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格，免許 中学校教諭一級普通免許状	昭和 54 年 3 月 20 日	登録番号 563 号
高等学校教諭二級普通免許状（社会科）	昭和 54 年 3 月 20 日	登録番号第 571 号
文学士	昭和 54 年 3 月 30 日	登録番号文第 1320
測量士補（建設省国土地理院）	昭和 54 年 9 月 25 日	登録番号第 S54－805）
看護士免許	昭和 60 年 5 月 4 日	番号第 5989 号
救命救急士	平成 5 年 11 月 12 日	登録番号　第 05163 号
医学博士	平成 14 年 4 月 10 日	富山医科薬科大学医学博士　医乙第三二六号 [論文タイトル] Potential Role of Gab1 and Phospholipase C- γ in Osmotic Shok-Induced Glucose Uptake in 3T3-L1 Adipocytes
2 特許等 (1)特になし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 (1)福井大学医学誌　編集委員	平成 14 年 4 月 1 日～現在に至る	大学紀要の編集担当委員（平成 15 年 3 月 31 日）
4 その他		

(1)コミュニケーション技法が人間の感情に与える影響 ―主観的評価と客観的評価について―	平成 17 年 4 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日	富山第一銀行奨学財団からの奨学金を受け、コミュニケーション技法が人間の感情に与える影響について採択され、主観的評価と客観的評価についての研究を行った。
(2)福井市における糖尿病予備群と健診者への糖尿病教育支援の効果検証と学生への教育支援	平成 29 年 4 月 1 日 ～ 平成 30 年 3 月 31 日	福井大学と福井市が共同で糖尿病予防支援を行い、健診者や市民に糖尿病予防の啓蒙活動を行った。
［報道］社会貢献・国際交流活動情報		
1. 安心医療寸劇で紹介 福井看護の日大会に 600 人毎日新聞，日刊県民福井	平成 19 年 5 月	看護の日のイベントにおける看護の紹介
2. パネル討論など 12 日に看護大会 福井で県協会福井新聞	平成 19 年 5 月	看護の日のイベントにおいて、高校生を対象とした講演会の講師を務めた。
3. “元気で医こう”コミュニケーション日刊県民福井	平成 27 年 3 月	市民向けに、ストレスと健康についてその対処法について解説をした。
4. 平成 29 年度「地（知）の拠点整備事業：福井市における糖尿病予備群と健診者への糖尿病教育支援の効果検証と学生への教育支援」糖尿病予備軍への講演会と昼食会	平成 28 年 10 月	福井市保健センターと共同企画して、約 100 名の市民に対し食事会と講演会を実施し食事指導を栄養士も招いて実施した、また、対象者に生活習慣の判定結果をフィードバックした。
5. 独立行政法人大学改革支援・学位授与機構国立大学教育研究評価委員会専門委員	令和２年２月１日～令和３年３月３１日	令和２年２月１日　発布 独立行政法人大学改革支援・学位授与機構長：福田秀樹 評価事業部　評価企画課法人評価係

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1.対人関係（コミュニケ-ション）の技術：ナ-スのための糖尿病療養指導テキスト	共著	平成 13 年 3 月	南江堂、P.245-254	糖尿病患者への指導として、コミュニケーションの観点から解説をした。 効果的なコミュニケ-ションには受容、認知、自己開示、焦点化、明確化、要約化などがあり、非効果的なコミュニケ-ション技法には、安易な励まし、保証、審問、感情の軽視などが、あり看護者はこれらの技法を使い分けることが看護する上で重要である。この章では、糖尿病患者への効果的なコミュニケ-ション技術の方法について述べた。 担当部分：第 25 章「対人関係（コミュニケ-ション）の技術」執筆 共著者：小林 正、浦風 雅春、明満 喜子、笹岡 利安、春田 哲郎、吉田 百合子、佐藤 啓、大角 誠治、中村 典雄、

				山崎 勝也、藤川 真理子、平井 康子、上野 栄一、高間 静子
2.セルフケア理論にもとづく評価と援助：ナースのための糖尿病療養指導テキスト	共著	平成 13 年 3 月	南江堂、P.216-224	糖尿病患者への看護で重要なことは患者のセルフケア能力を高めることである。セルフケアを高めることの前提には、自己効力をあげることが必要となる。セルフケア理論には、オレムのセルフケア理論がある。この理論は、「セルフケア理論」、「セルフケア不足の理論」、「看護システム理論」がある。糖尿病患者への評価項目としては、生活習慣の評価、糖尿病に関する認知レベルの評価、身体症状の評価、精神・心理面の評価、ソーシャルサポートの評価、行動レベル評価、医療従事者からの説明の評価があげられる。この章では、セルフケアを認知レベルから行動レベルまでを視野に入れて患者のモチベーションのみならず自己効力をも視野に入れた評価、援助について詳細に説明した。 担当部分：第 18 章「セルフケア理論にもとづく評価と援助」執筆 [著者名]小林 正、浦風 雅春、明満 喜子、笹岡 利安、春田 哲郎、吉田 百合子、佐藤 啓、大角 誠治、中村 典雄、山崎 勝也、藤川 真理子、平井 康子、上野 栄一、高間 静子
3.看護研究ポケットガイド	単著	平成 14 年 3 月	医学書院	看護職及び学生、研究職を対象にしたコンパクトな看護研究のポケットガイドを作成した。看護研究の取り組み方を豊富な図表を用いて、研究題材の決定から統計処理の方法（パラメトリック検定、ノンパラメトリック検定、相関検定、ｔ検定、分散分析、カイ二乗検定、多重比較、因子分析、判別分析等）、図表の書き方、プレゼンテーションの方法について解説し、さらに論文を仕上げるまでのプロセスにそって看護研究のプロセスを平易に解説した。また、巻末には豊富な統計処理の実例を示し、さらには看護研究の理解を助けるようにスクリープロット図、チャート図、箱ひげ図等の特殊なグラ

				フを紹介し解説をした。 本人担当部分：編集と総括
4. 平成 19 年教科別看護師国家試験対策問題集	共著	平成 18 年 7 月	メディカ出版	最新国家試験問題をすべての領域から解答・解説とともに要点をまとめた。本書では、基礎看護学を担当した。さらに過去 6 年間の国家試験問題を徹底分析した予想問題について、新出題基準に対応した問題集を作成した。 担当部分：基礎看護学 ［著者名］上野 栄一，長谷川 智子，上原 佳子，上木礼子，佐々木 百恵
5. 教育と臨床のギャップ－知識, 技術, 態度の課題①	共著	平成 19 年 3 月	看護の科学社	学校教育と臨床でのギャップがなぜ、起こるかについて学校教育のカリキュラムと臨床での学びの観点から解説をするとともに、その課題を明確に解説した。 ［著者名］ 上野 栄一，松村 愛都
6. 教育と臨床のギャップ－知識, 技術, 態度の課題②	共著	平成 19 年 4 月	看護実践の科学 32(4), 92-96	学校教育と臨床でのギャップに対する対応について、知識・技術、態度の観点からその具体的な対応方法について解説した。 ［著者名］ 上野　栄一，松村 愛都
7. 平成 20 年教科別看護師国家試験対策問題集	共著	平成 20 年 8 月	メディカ出版	最新国家試験問題をすべての領域から解答・解説とともに要点をまとめた。本書では、基礎看護学を担当した。さらに過去 6 年間の国家試験問題を徹底分析した予想問題について、新出題基準に対応した問を作成した。 ［著者名］上原 佳子，上野 栄一，長谷川 智子，上木 礼子，佐々木 百恵 執筆、編集 基礎看護学

8.平成21年教科別看護師国家試験対策問題集	共著	平成20年12月	メディカ出版	最新国家試験問題をすべての領域から解答・解説とともに要点をまとめた。本書では、基礎看護学を担当した。さらに過去6年間の国家試験問題を徹底分析した予想問題について、新出題基準に対応した問題集を作成した。 [著者名]上原 佳子，上野 栄一，長谷川 智子，上木 礼子，佐々木 百恵 執筆、編集 基礎看護学
9.エビデンスに基づく精神科看護ケア関連図	共著	平成20年12月	中央法規	精神看護における代表的な症状について、解説した。特に臨床や実習で遭遇する疾患・症状について、その誘因・原因から病態生理学的変化、看護ケアまでを図式化した便利な関連図ガイドを作成し、看護過程の展開にも有用な書籍とした。観察のポイントや看護ケアの介入時期を詳細に記載し、臨地実習にも、役立つ内容とした。 [著者名]浅沼瞳，石川 幸代，石川 康博，一ノ山 隆司，伊藤 桂子，猪股 健一，上野 栄一，宇都宮 智，大迫 哲也，大迫 充江，北野 進，小西 奈美，下里 誠二，高岡 裕美，高橋 寛光，高間 さとみ，瀧口 宗宏，田中 留伊，土谷 朋子，福山 なおみ，藤森 里美，舟崎 紀代子，松本 賢哉，明神 一浩，村上 満，森 千鶴，山田 洋 （担当）自己実現
10.新2010年教科別看護師国家試験対策問題集	共著	平成28年7月	MCメディカ出版	最新国家試験問題をすべての領域から解答・解説とともに要点をまとめた。本書では、基礎看護学を担当した。さらに過去6年間の国家試験問題を徹底分析した予想問題について、新出題基準に対応した問題集を作成した。（共著者）上原 佳子，上野 栄一，長谷川 智子，佐々木 百恵，吉田 華奈恵（担当部分）基礎看護学分野
11. 看護管理用語集第3版	共著	平成28年7月	日本看護管理学会学術活動推進委員会	看護管理用語集について、看護管理で使われるキーワードを中心にまとめたもので、研究や実践に活用できるコンパクトな書籍とした。 （著者）共著 草刈淳子、石垣恭子、中村惠子、上野栄一、叶谷由佳、中村綾子、ほか

12. 臨床看護の場 Ⅲ　患者にとっての在宅	共著	令和１年２月		臨床看護学総論（第３版）　　宮脇美保子　編 出版社　メヂカルフレンド社
（学術論文） 1.看護婦の職務満足度への影響因子の追求	共著	平成６年９月	第３回日中看護学術会議論文集 Vol3, P.110-P.117	公立病院に勤務する看護婦91名、婦長29名を対象に、職務満足度調査用紙日本版 （尾崎）, STAI, Pines Burnout Scale, RosenbergのSelf-Esteem Scale、ZungのSelf-Rating Depression Scaleを用い、職務満足度と個人の特性、身体・精神的ストレス, 人間関係, 就労姿勢, 専門的自律度との関係、快眠度を調べた結果, これらのすべての独立変数と有意な高い相関を示した。また, 看護婦の職務満足度はこれらの諸因子によって影響を受けることがわかった。 担当部分：データ入力・解析 共著者：高間 静子, 上野 栄一, 尾崎フサ子
2.看護婦の職務満足度とストレスとの関係	共著	平成６年12月	富山医科薬科大学医学部看護学科紀要第１号 ： P. 11-P.17	T県に勤務する看護婦を対象に、職務満足度スケール、バーンアウトの尺度を用いて、看護婦の職務満足度と身体的・精神的ストレス, バーンアウト, 快眠度, ストレスフルな生活, 仕事中毒等との関係を調べると, ストレス, バーンアウトの高いものは満足度が低く, 快眠度の高いものは満足度が高かった。ストレスフルな生活をしている者, 仕事中毒の看護婦は「地位に対する満足度」が低かった。以上のことから、看護婦のストレスは職務満足度に有意に影響することがわかった。 担当部分：データ解析 共著者：高間 静子, 上野 栄一, 福田正治, 湯川 倫代, 塚原 節子, 山田 里江, 林 美紀

3.看護婦の職務満足度と対人関係との関係	共著	平成6年12月	富山医科薬科大学医学部看護学科紀要第1号 ： 19 -27	看護婦120名を対象に、看護婦の職務満足度と職場および過程における人間関係の善し悪し，対人関係能力との関係を調べた。その結果、職場や家庭での人間関係の円満な群はそうでない群よりも「地位」に対する満足度が高かった。また，対人関係能力の高い群は低い群に比べ満足度が有意に高い値を示し，人間関係の善し悪しおよび対人関係能力は職務満足度に影響することがわかった。さらに、給料に対する満足度は、対人関係能力、職場の人間関係、家族関係のいずれの群にも影響受けなかったことから、職務満足度には、人間関係が重要であることが示唆された。 担当部分：論文全般 共著者：上野 栄一，高間 静子，福田 正治，尾崎 フサ子，塚原 節子
4.看護婦の就労姿勢の職務満足度への影響	共著	平成7年12月	富山医科薬科大学医学部看護学科紀要2 ：15-22	看護婦の職務満足度と就業理由，企業帰属意識，勤労意欲，集団主義傾向等との関係をみると，生計を理由にしている群よりも生きがいを理由にしている看護婦の方が満足度が高かった。看護婦の企業帰属意識，勤労意欲，集団主義等と職務満足度とは高い相関関係を示した。 担当部分：データ解析、抄録作成 共著者：高間静子，田中いずみ，川西千恵美，上野栄一，塚原節子
5.看護婦のストレス対処行動と職務満足度との関係	共著	平成7年12月	富山医科薬科大学医学部看護学科紀要2 ：P.7- P. 13	看護婦の職務満足度とストレス対処行動との関係について調べた。効果的対処行動群は「給与」「看護管理」等に対する満足度が高く，婦長群ではみられなかったが看護婦群ではみられた。看護婦経験年数から対処行動との関係をみると経験年数5年以上の群では「給与」に対する満足度は対処行動のよい群のほうが有意に高い値を示した。 担当部分：論文全般 共著者：上野 栄一，福田 正治，高間 静子，得地 晃二，藤永 重美

6.看護婦の行動パターン別にみたバーンアウトと職務満足度との関係	共著	平成7年12月	富山医科薬科大学医学部看護学科紀要2：P. 23-P.30	看護婦の行動パターン別（タイプＡとタイプＢ）に，バーンアウトと職務満足度との関係を調べた。Pines バーンアウトの徴候ではタイプＡの看護婦群はタイプＢ群よりも高い満足度を示した。タイプＡ群では Staff Burnout と「医師-看護婦関係」「看護婦間の相互作用」等の人間関係に対する満足度との間に負の相関を示し，タイプＢ群では「自律度」「看護婦間の相互作用」等との間に正の相関を示した。さらに，Maslach Burnout Scale の下位概念の「自己成就」「地位」に対する満速度との間に，タイプＡでは正の，タイプＢ群では負の相関を示した。 担当部分：論文全般 共著者：上野 栄一，高間 静子，塚原 節子，福田 正治
7.看護婦の自己実現傾向，達成動機，独自性欲求等の職務満足度への影響	共著	平成7年12月	富山医科薬科大学医学部看護学科紀要2：31-37	看護婦の自己実現傾向，達成動機，独自性欲求等の職務満足度への影響について調べた。その結果，看護婦の自己実現傾向と「地位」や「看護婦間の相互関係」等に対する満足度とは有意な相関を示した。また，看護婦の独自性欲求と「給与」「看護管理」「自律度」「看護婦間の相互作用」に対する満足度とは有意な負の相関を示した。さらに達成動機を自己充実的達成動機と競争的達成動機とに分けて職務満足度との関係をみると，「地位」「看護婦間の相互作用」等に対する満足度と自己充実的達成動機との間には高い正の相関があり，競争的達成動機との間には負の相関があった。 担当部分：データ解析 共著者：高間 静子，塚原 節子，福田 正治，湯川 倫代，上野 栄一
8.看護婦の専門的自律に関する研究　その1-就労姿勢の専門的自律度への影響-	共著	平成8年5月	富山医科薬科大学医学会誌9(1)，55-60	富山県下の看護婦161名を対象に就労姿勢の専門的自律への影響について調べた結果，生きがいを理由にしている看護婦は，生計を理由にしている群よりも専門的自律度（ＰＮＱ）が高かった。また，モチベーターモラールについての勤労意欲の高い看護婦は専門的自律度が高かった。職階別にみると，企業帰属意識の下位概念の「組織の目標・規範・価値観」の高い婦長は専門的自律度が高かった。担当部分：データ解析共著者：高間 静子，川西 千恵美，塚原 節子，福田 正治，上野 栄一

9.看護婦の専門的自律に関する研究　その2−達成動機の専門的自律度への影響−	共著	平成8年5月	富山医科薬科大学医学会誌 9(1), 61-65	富山県に在住する看護婦を対象に、看護婦の達成動機が専門的自律度に影響しているかについて調査した。看護婦の専門的自律度（ＰＮＱ）の高い看護婦は自己充実的達成動機が高い。職階別にみると，患者の権利に関する専門的自律度（ＰＮＱ2）の高い婦長は自己充実的および競争的達成動機のいずれもが高かった。婚姻別にみると，自己充実的達成動機の高い未婚群はＰＮＱ2，3およびＰＮＱ合計が高い。また，自己充実的達成動機の高い既婚群はＰＮＱ2が高かった。 担当部分：調査票集計、データ解析 共著者：塚原節子，高間静子，川西千恵美，上野栄一
10.看護婦の勤労意欲に関する研究　−就労姿勢の勤労意欲への影響,	共著	平成8年6月	富山医科薬科大学看護学科紀要 3, 1-7	富山県に在住する看護婦を対象に、看護婦の勤労意欲への就業理由，企業帰属意識，達成動機，集団主義等の就業姿勢の影響について調べた。仕事を生きがいにしている者は生計を理由にしている者よりも勤労意欲が高く，また，企業帰属意識の下位概念の「目標・規範・価値観」と勤労意欲のモチベータ−モラ−ル以外のすべての項目に対する勤労意欲も高かった。しかし，モチベータモラ−ルの高い看護婦は自己充実的達成動機が高かった。さらに，集団主義傾向の強い看護婦はコミュニケ−ションに関する勤労意欲が高かった。 担当部分：調査票集計、データ解析 共著者：湯川 倫代，高間 静子，塚原節子，上野 栄一，福田 正治，田中 三千雄
11.看護婦の勤労意欲に関する研究 その2−ストレスの勤労意欲への影響−	共著	平成8年6月	富山医科薬科大学看護学科紀要 3, 9-13	富山県に在住する看護婦を対象に、ストレスの勤労意欲に与える影響について調べた。その結果、ストレスの少ない看護婦は慢性的ストレスのある看護婦よりもチ−ムワ−ク，メンタルハイジ−ン等についての勤労意欲が高かった。また，経験年数5年以上の看護婦において，効果的対処行動のできる群は非効果的対処行動群よりもハイジ−ンモラ−ルについての勤労意欲が高かった。 担当部分：調査票集計、データ解析 共著者：上野 栄一，塚原 節子，福田 正治，落合 宏，高間 静子

12.看護婦の勤労意欲に関する研究 その2-仕事中毒の勤労意欲への影響-	共著	平成8年6月	富山医科薬科大学看護学科紀要3, 15-19	仕事中毒傾向の高い婦長は低い婦長よりもチームワークに関する勤労意欲が高かった。また，経験年数5年以上の仕事中毒傾向の高い看護婦は，仕事中毒傾向の低い群に比べ，モチベーターモラール，チームワーク，会合評価等の勤労意欲が高かった。これらの結果は未婚者には見られなかったが，仕事中毒傾向の強い既婚者にも見られた。 担当部分：調査票集計、データ解析 共著者：塚原 節子，上野 栄一，福田 正治，落合 宏，高間 静子
13.看護婦の価値観の職務満足度への影響	共著	平成8年6月	富山医科薬科大学看護学科紀要3, 21-27	看護婦171名に価値観の職務満足度への影響を調べた結果，博愛的，道徳的，多彩的人生観の傾向の強い看護婦は，「看護業務」についての満足度が低かった。努力的人生観の傾向の強い看護婦は「自律度」についての満足度が高かった。以上のことから、看護婦の価値観が職務満足度に影響していることが示唆された。 担当部分：調査票集計、データ解析 共著者：高間 静子，塚原 節子，上野 栄一，福田 正治，田中 三千雄
14.セミクリーンルーム入室患者と多床室入室患者のうつ状態とストレスとの関係	共著	平成8年10月	臨床看護22(11月, 1681-1688	T附属病院における内科病棟の患者を対象にセミクリーンルーム入室患者と多床室入室患者の精神状態について，及びうつ状態とストレスとの関係について調べた。その結果、ストレス得点が高くなると、うつ状態が有意に増え、また、セミクリーンルームの患者は多床室患者に比べて多くのストレスをかかえていることが明らかとなった。また、援助として、代理行為や訪室等の重要性があげられた。 担当部分：データ解析、論文全般 共著者：上野 栄一，森本 久美子，島田 葉子，境 美代子
15.看護婦の充実感の勤労意欲への影響	共著	平成9年3月	富山医科薬科大学医学会誌10(1), 64-68	富山県内の国立病院に勤務する看護婦122名を対象に質問紙留置法で，勤労意欲測定尺度，充実感尺度を用いて看護婦の充実感の勤労意欲への影響を検討した。その結果，（1）看護婦群では充実感尺度の下位概念である第4因子（信頼-時間的展望因子）と勤労意欲の下位概念のモチベーターモラールと業績規範との間に正の有意な相関を示した。（2）第一因子（充実感気分因子）とハイジーンモラールでは正の有意な相関があった。（3）第2因子（自立、自信因子）とモチベーターモラールとの間には正の有意な相関があった。（4）第3因子（連帯因子）とハイジーンモラール因子との間には負の有意な相関

				があった。 以上のことから，充実感の高い看護婦は勤労意欲が高いことが判明した。 担当部分：調査票集計、データ解析 共著者：川西 千恵美，竹川 由希子，上野 栄一，高間 静子
16.看護婦の創造的構えの勤労意欲への影響	共著	平成 9 年 3 月	富山医科薬科大学医学会誌 10(1)，69-74	富山県内の公立病院に働く看護婦 122 名を対象に創造的構えと勤労意欲との関係について調べた。調査測定は創造的構えテストと勤労意欲測定のための尺度を用いた。その結果，婦長群において，創造的構えの下位概念の「持久力」と勤労意欲の下位概念の「ハイジ-ンモラ-ル」とのあいだには負の有意な相関があった。また，経験年数 3 年未満の看護婦群において，創造的構えの持久力と勤労意欲の「メンタルハイジ-ン」とのあいだには正の有意な相関があった。一方，婚姻別にみると，未婚群において，創造的構えの下位概念の「細心さ」と勤労意欲の下位概念の「チ-ムワ-ク」とのあいだには負の有意な相関があった。以上のことから，看護婦の創造的構えと勤労意欲は相関することが示唆された。担当部分：調査票集計、データ解析共著者：上野 栄一，安藤 素子，塚原 節子，高間 静子

17.看護婦の社会的スキルの勤労意欲への影響	共著	平成 9 年 3 月	富山医科薬科大学医学会誌 10(1), 59-63	富山県内の 6 つの国・公立病院に勤務する看護職を 132 名を対象に，和田らの社会的スキル尺度を用い，看護婦の社会的スキルの勤労意欲への影響を検討した。その結果，以下のことが明らかになった。社会的スキルの下位概念の関係維持は勤労意欲の下位概念の業績規範と正の相関を示した。また，社会的スキルの自己主張は勤労意欲の会合評価，コミュニケーション，メンタルハイジーン等と正の相関を示した。婦長群においては勤労意欲のチームワークと社会的スキルの自己主張とは負の相関を示した。また，自己主張は看護婦経験 3 年未満群において勤労意欲のモチベーターモラール，メンタルハイジーンと正の相関を示した。さらに未婚群では勤労意欲のモチベーターモラール，チームワーク，業績規範等と正の相関を示した。以上のことから，看護婦の社会的スキルは勤労意欲に影響し，職階，経験年数，婚姻の違いにより勤労意欲への影響が異なることが示唆された。 担当部分：調査票集計、データ解析 共著者：高間 静子，大久保 友香子，上野 栄一，川西 千恵美
18.病室環境におけるディストレス度測定尺度作成の開発	共著	平成 10 年 3 月	富山医科薬科大学医学会誌 11(1), 65-68	病室環境におけるディストレス度を測定するための尺度を作成した。作成するにあたって、患者への面接調査、文献等によりディストレスとなる項目をあげ、26 項目の原案を作った。これをもとに因子分析を行ったところ 3 因子 13 項目が抽出された。妥当性の検討には不安度、快眠度テストを用いた。いずれも、ディストレス尺度と有意な相関が認められ、妥当性は支持された。また、信頼性の検討には Chronbach の α 係数を用いた。その結果、0.8 以上の値を示し、この尺度の信頼性が証明された。以上のことからこの尺度は、妥当性、信頼性ともに支持されたものであった。 担当部分：論文全般、データ解析 共著者：上野 栄一、高間 静子

19.看護婦の専門的自律度のリーダーシップへの影響	共著	平成10年3月	富山医科薬科大学看護学会誌 1(1),23-27	富山県内の公立病院に勤務する婦長、副婦長108名を対象にリーダーシップ行動評定尺度,Pankratz Nursing Questionnaire(PNQ)の日本版を用い,PNQが看護婦のリーダーシップに及ぼす影響を検討した。 その結果, 副婦長のPNQ2,3とリーダーシップM機能との間に有意な相関を示した。婚姻別にみると,既婚群のPNQ3とM機能との間に,高い相関を示した。また,未婚群でもPNQ1とM行動との間にも高い相を示した。年齢別においても,41-50歳郡においてPNQ2とP機能との間に正の相関を示した。以上のことから,看護婦の専門的自律度はリーダーシップ行動に影響していることが示唆された。 担当部分：統計処理 共著者：塚原 節子, 上野 栄一, 高島佐知子, 高間 静子
20.看護婦の社会的スキルのリーダーシップ行動への影響	共著	平成10年3月	富山医科薬科大学看護学会誌 1(1),29-33	富山県内に就労する看護職の社会的スキルのリーダーシップ行動への影響について調べた。調査対象は無作為抽出により調査をし,有効回答の得られた婦長,副婦長108名とした。測定用具には三隅らのリーダーシップ行動評定尺度,社会的スキルの測定には和田の社会的スキル尺度を用いた。その結果,婦長の関係維持スキル度とリーダーシップのM機能とは高い正の相関を示した。年齢群においては35歳以下の群にのみ社会的スキルの関係開始のスキル度とリーダーシップのP機能とのあいだに正の相関を示した。以上のことから看護職の社会的スキルはリーダーシップの集団維持機能に影響を与えていることが示唆された。担当部分：統計処理 共著者：高間 静子, 塚原 節子, 上野 栄一
21.Involvement of Heat Shock Protein 90 in the Degradation of Mutant Insulin Receptors by the Proteasome	共著	平成10年5月	The Journal of Biological Chemistry Vol.273(18), 11183-11198.	タイプAのインスリン抵抗性症候群は、細胞表面のインスリンレセプターが減少することによって起こることが先の研究で明らかとなっているが、今回の研究ではHSP90の役割について調べた。デルタEx13-IRにAsp1179あるいはLeu1193を付加した結果、急激なデグラデーションの起こることがわかった。またAsp1179あるいはLeu1193の変異体のレセプターがHsp90と結合することを発見した。これらのことからHsp90がcytosol内の細胞内小網からのミュータント-インスリンレセプターに関与していることが明らかとなった。 担当部分：解析

				共著者：Takeshi Imamura, Tetsuro Haruta, Yasumitu Takata, Isao Usui,Minoru Iwata, Hajime Ishihara, Manabu Ishiki, Eiichi Ueno, Toshiyasu Sasaoka, Masashi Kobayashi
22.Relative involvement of Shc tyrosine 239/240 and tyrosine 317 on insulin induced mitogenic signaling in rat1 fibroblasts expressing insulin receptors	共著	平成10年11月	Biochemical and Biological Research Communications 252,139-144	Shc はGrb2の結合部位として、Tyr-239/240,Tyr-317でチロシンリン酸化されるが、本研究では、インスリンで誘導された細胞分裂におけるShc-239/240とTyr-317の関連するかかわりについて明らかにするために、Rat1のY317F（1F）shc, Y239/240F(2F)shc, Y239/240/317F(3F)-shcのベクターを作成し実験した。その結果、Rat1線維芽細胞において、Shc Tyr-317がMAP kinaseの活性化と細胞分裂に導かれるGrb2と結合するTyr-239/240よりも、インスリンで誘導されたチロシンリン酸化部位が多いことが明らかとなった。担当部分：解析共著者：Hajime Ishihara, Toshiyasu Sasaoka,Tsutomu Wada, Manabu Ishiki, Tetsuro Haruta, Isao Usui, Minoru Iwata, Atsuko Takano, Tatsuhito Uno, Eiichi Ueno, And Masashi Kobayashi
23.看護婦の自己開示度,孤独度の職務満足度へ影響	共著	平成11年3月	富山医科薬科大学看護学会誌第2号、117-126	富山県内に就労する看護婦146名を対象に，看護婦の職務満足度と自己開示度および孤独度との関係について調べた．測定用具は尾崎の職務満足度スケール，小口のオープナースケール，工藤らの孤独感尺度を用いた．その結果，婦長群の「なごませ」因子の得点は看護婦群よりも高かった．また，職務満足度の「給与」「地位」「看護管理」の因子においては，婦長群が看護婦群よりも有意に得点が高かった．自己開示度と職務満足度との関係を職階別にみると，看護婦群において，「なごませ」因子と「看護婦間の相互作用」との間に有意な正の相関があった．経験年数別では，3年未満の群で自己開示度合計と「地位」との間に有意な正の相関があった． 学歴別では，専修学校群において，「なごませ」因子と「地位」との間に有意な正の相関があった．婚姻別では，未婚群の自己開示度合計と「地位」との間に正の有意な相関があった．一方，婚姻別に看護婦の職務満足度と孤独度との関係をみると，既婚群

				の孤独度と「地位」との間に有意な負の相関があった．以上の結果から，看護婦の職務満足度は自己開示度，孤独度に影響することが示唆された． 担当部分：論文全般 共著者：上野栄一，生地洋子，塚原節子，高島佐知子，高間静子
24.看護職のタイプＡ行動のリーダーシップ行動への影響	共著	平成 11 年 3 月	富山医科薬科大学看護学会誌第 2 号、127-132	本研究ではタイプＡ行動の看護職のリーダーシップ（Ｐ機能，Ｍ機能）への影響について調べた．調査対象は富山県内に就労する看護婦 108 名とした．対象の属性は平均年齢 43.42 才，経験年数 22.44 年，婦長 32 名，副婦長 76 名，既婚 94 名，未婚 14 名，専修学校卒 100 名，短大卒 8 名であった．測定用具は，ＫＧ式日常生活質問紙とリーダーシップ行動評定尺度（自己評定質問紙）を用いた．その結果，タイプＡＢ行動とリーダーシップ類型とは有意に関係があった．タイプＡ総得点とＰ得点との間には 1%有意水準 r=0.375 の正の相関があった．さらに，タイプＡの下位概念の精力的活動・時間切迫感とＰ得点との間には 5%有意水準で r=0.375 の正の相関があった．看護婦全体のＰ，Ｍ得点とタイプＡとの関係について重回帰分析の結果，Ｐ機能には精力的活動，時間切迫感が影響因子となっていることが明らかとなった．また，婚姻別，学歴別に，タイプＡ行動がＰＭ機能に異なる影響を与えていることが示された． 担当部分：論文全般 共著者：上野 栄一，塚原 節子，高島佐知子，高間 静子

25.インスリンシグナル伝達における SHIP2 の役割	共著	平成 11 年 10 月	分子糖尿病学 VOL.10、169-173	SHIP2 は Shc と結合する蛋白として同定された。SHIP の構造は N 端に SH2 ドメインが，小央に酵素活性をもつドメインが，また C 端にはプロリン・リッチな領域が存在し，PTB 結合モチーフが 2 カ所存在した。本研究ではラット骨格筋細胞より SHIP の isozyme である SHIP 2 をクローニングし，その構造とインスリンシグナル伝達における機能を解析した。ラツト SHIP 2 のクローニングは、ラット骨格筋由来の CDNA ライブラリーを用いて degenerate PCR を行い，すでに発表となったヒト SHIP 2 と極めて相同性の高い CDNA 断片を得た。この CDNA 断片をもとに RACE を行い CDNA 全長を得た。得られた CDNA はヒト SHIP 2 と 92%の相同性が認められたことより 6L ラット SHIP 2 と確認された。SHIP 2 はその 5-phosphatase 活性により PIP3 を代謝する機能を有しており，P13 キナーゼを介するインスリンの代謝作用を負に制御することが示唆される。さらに，SHIP 2 は Grb2 と競合的に Shc に結合することにより，MAP キナーゼ活性化に至るインスリンの増殖作用をも負に調節することが示唆された。これらの結果からインスリンの標的細胞では SHIP 2 が，本研究で明らかとなったごとく，SHIP と同様に機能することが示唆された。 担当部分：実験、統計処理 共著者：石原 元、笹岡 利安、和田 努、堀 宏之、平井 洋生、春田 哲郎、薄井 勲、岩田 実、宇野 立人、高野 敦子、上野 栄一、小林 正
26. Retinoblastoma Protein Phosphorylation via PI 3-Kinase and mTOR Pathway Regulates Adipocyte Differentiation	共著	平成 12 年 8 月	Biochemical and Biophysical Research Communications, Vol. 275, No. 1, pp.115-120 (doi:10.1006/bbrc.平成 12 年.3201)	本研究では、3Ｔ3-Ｌ1 細胞におけるインスリンで誘導された脂肪細胞の分化（clonal expansion）について研究した。インスリンで誘導された clonal expansion、Ｒｂのリン酸化と脂肪細胞の分化は、PI 3-kinase inhibitors と rapamycin によってすべて抑制されたが、 MEK inhibitor では抑制されなかった。一方で、MEK inhibitor は，c-fos の誘導を減少させた。これらのことからインスリンは、PI 3-kinase を介すＲｂの高リン酸化を誘導して、mTOR に依存するパスウエイを誘導するものと考えられた。このことが、3T3-L1 細胞の clonal expansion と脂肪細胞の分化を促進させていると考えられた。 担当部分：解析 共著者：Isao Usui, Tetsuro Haruta,

				Minoru Iwata, Atsuko Takano, Tatsuhito Uno, Junko Kawahara, Eiichi Ueno, Toshiyasu Sasaoka, Masashi Kobayashi
27.最近の精神医療の動向について-過去13年間の文献探索から-	共著	平成12年11月	旭川医科大学フォーラム第1巻（創刊号），69-77.	過去13年間の文献を内容分析法により、語彙にまでタイトルを分析し、さらに名詞句を抽出し最近の精神医療の動向について内容分析を用いて分析した。その結果、「法」、「精神衛生法」、「精神保健法」の語句が上位に抽出された。これは、1987年に「精神衛生法」から精神保健法に改正されたことに関連していることが考えられる。また、「リエゾン精神医療」「地域医療」「報道機関」「阪神淡路大震災」といった社会情勢を示す語句もみられた。これらのことから、精神医療が社会福祉と連携をとりながら綿密な再検討がなされていることが明らかとなった。担当部分：研究企画、データ処理 共著者：山内学、上野 栄一
28.精神看護学実習におけるプロセスレコードの分析	共著	平成13年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科紀要(1349-3884)2巻P.34-39	看護系短期大学生の精神看護学実習を履修した学生のうち、患者との関わりの場面を記述したプロセスレコードが3場面以上記述されていた10名分の内容を、ヘイズとラーソンの治療的技法(25種類)と非治療的技法(19種類)を用いて比較分析した。実習期間は2週間で、精神科病棟において受け持ち患者を1名受け持ち、治療的関係の形成を第1の目的として、その関係性の上に対象への必要な援助を経験できるよう進められた。分析の結果、221件中、治療的技法の使用は204件(92.3%)、非治療的技法の使用は17件(7.7%)であった。関係の形成に効果的な技法を多く用いており、非効果的な技法の使用は少数であったということが明らかになった。上平 悦子(奈良県立医科大学 医学部看護学科)，上野 栄一

29.Pioglitazone Ameliorates Tumor Necrosis Factor-α-Induced Insuoin Receptor by a Mechanism Independent of Adipogenic Activity of Peroxisome Proliferator-Activated Receptor-γ	共著	平成 13 年 5 月	Diabetes 50: 1083-1092	.TNF-αは、肥満に関連するインスリン抵抗性の mediator の一つである。本研究では、TZDs のインスリン感受性の示唆を得るためにピオグリタゾンの効果について実験した。その結果、(1)pioglitazone は TNF-α処置の 3T3-L1 脂肪細胞内の 2DOG uptake を改善し、IR/IRS-1 のタンパク量を改善したり、PI3-kinase の活動を改善させた。さらには IRS-1 と p85 の結合を改善させた。(2)h PPAR-γ2 の過剰発現はタンパク量を改善させるだけではなく、IR/IRS-1 のチロシンリン酸化や TNF-αで処置した 3T3-L1 脂肪細胞の 2DOG uptake を改善させた。これらの結果から、インスリンで刺激された IR/IRS-1 のチロシンリン酸化を回復させる pioglitazone の能力は、IR/IRS-1 のタンパク量を調節する PPAR-γの adipogenic の活動には独立したものであるかもしれないことを示唆するものである。 担当部分：解析 共著者：Minoru Iwata, Tetsuro Haruta, Isao Usui, Yasumitsu Takata, Atsuko Takano, Tatsuhito Uno, Junko Kawahara, Eiichi Ueno, Toshiyasu Sasaoka, Osamu Ishibashi, and Malachi Kobayashi
30.Potential Role of Gab1 and Phospholipase C-γ in Osmotic Shok-Induced Glucose Uptake in 3T3-L1 Adipocytes.	共著	平成 13 年 7 月	Hormone and Metabolic Research	インスリンによるブドウ糖取り込みにおいては、インスリン受容体、インスリン受容体基質のチロシンリン酸化、続いて生じる PI3-kinase の活性化が重要であることが知られている。これまでの高浸透圧刺激による研究では、ブドウ糖取り込みが PI3-kinase を介さない経路によって引き起こされることが示唆されている。本研究では，高浸透圧刺激によるブドウ糖取り込みにおけるチロシンリン酸化タンパクの意義を検討した。結果、（1）高浸透圧刺激により 120-130kDa 付近のタンパクのチロシンリン酸化を認めた。（2）抗 Gab1 抗体の免疫沈降、PY blot では、高浸透圧刺激により Gab1 のチロシンリン酸化が増強した。（3）抗 PLC-γ抗体の免疫沈降、PY blot では、高浸透圧刺激により Gab1 のチロシンリン酸化が増強した。（4）抗 Gab1 抗体の免疫沈降、PY blot では、高浸透圧刺激により Gab1 のチロシンリン酸化が増強した。（5）抗 PLC-γ抗体の免疫沈降、PY blot では、高浸透圧刺激により PLC-γのチロシンリン酸化が増強し

				た。（6）抗 Gab1 抗体の免疫沈降では、高浸透圧刺激により PLC-γが結合した。（7）抗 PLC-γ抗体の免疫沈降では、高浸透圧刺激により Gab1 が結合した。（8）高浸透圧刺激による 2DOG uptake は Genistein、U73122、GF により抑制された。本研究により，Gab1，PLCγのチロシンリン酸化および PLCγの活性化が高浸透圧刺激による glucose uptake が関与している可能性が示唆された。 担当部分：実験全般、論文作成 共著者：Eiichi Ueno, Tetsuro Haruta, Tatsuhito Uno, Isao Usui, Minoru Iwata,Atsuko Takano, Junko Kawahara, Toshiyasu Sasaoka, Osamu Ishibashi and Masashi Kobaysshi
31. Growth Hormone Induces Cellular Insulin Resistance by Uncoupling Phosphatidylinositol 3-kinase and Its Downstream Signals in 3T3-L1 Adipocytes	共著	平成 13 年 10 月	DIABETES 50, 1891-1900	成長ホルモン（ＧＨ）は、生体内でインスリン抵抗性を引き起こすことが知られているが、分子レベルでの解明はほとんどなされていない。本研究では長時間ＧＨで処理した分化した 3Ｔ3-Ｌ1 細胞はインスリンで刺激した 2ＤＯＧ　の取り込みとＡｋｔの活性化を減じること、長時間のＧＨでの処置は 3Ｔ3－Ｌ1 細胞の 2－ＤＯＧ取り込には影響を与えないこと等の結果を得た。これらのことから、3Ｔ3－Ｌ1 細胞において、長時間ＧＨ処置によって引き起こされた細胞内のインスリン抵抗性はＰＩ3―kinase の活性化とその下流のシグナルとの間の非連結によって引き起こされることが示唆された。 担当部分：解析 共著者：Minoru Iwata, Tetsuro Haruta, Isao Usui, Yasumitsu Takata, Atsuko Takano, Tatsuhito Uno, Junko Kawahara, Eiichi Ueno, Toshiyasu Sasaoka, Osamu Ishibashi, and Malachi Kobayashi

32. Mechanism on Acceleration of Sorbitol Shock-Induced Glucose Uptake in 3T3-L1 Adipocytes （3T3-L1 脂肪細胞におけるソルビトール刺激による糖取込みの促進機序に関する研究）	単著	平成 14 年 3 月	富山医科薬科大学博士号授与機構	従来の研究では、細胞内への糖の取込みは PI3-キナーゼを介し Glut4 の細胞膜へのトランスロケーションにより引き起こすとされているが、Pessin らは PI3-キナーゼとは独立の経路で Glut4 トランスロケーションが起きることを示唆した。本研究では、高浸透圧刺激により PI3-キナーゼとは独立した経路で生じることを明らかにし、またそれに関与する蛋白質を同定することを目的とした。分化した 3T3-L1 脂肪細胞を用い，16 時間 serum free medium に附置し、Genistein（チロシンキナーゼ阻害剤）、U73122（PLCγ阻害剤）、GF109203X(conventional/novel PKC 阻害剤)、PP2（Src キナーゼ阻害剤）、Cytochalasin D（アクチンポリメライゼーション阻害剤）、Wortmannin (PI3-キナーゼ阻害剤)で前処置後、30 分間の高浸透圧刺激（0.3M Sorbitol）を加えた後、[3H]2 -deoxyglucose の取り込みへの影響を測定した。また、各種抗体を用いて免疫沈降法、PY ブロットによるウエスタンブロット法により、PI3-キナーゼとは独立した経路を中心に糖の取り込みに関与する蛋白質の同定を検討した。本実験の結果から Gab1 のチロシンリン酸化を刺激すると、①PLCγの Gab1 への結合活性②PLCγのチロシンリン酸化、そして③糖の取り込みが観察され、いずれもが PLC 阻害剤によって抑制されることを示した。以上のことから、高浸透圧刺激下においては、PI3-キナーゼとは独立した経路で細胞内への糖の取り込みが促進していた。また、高浸透圧刺激による糖の取り込みにおいては、Gab1 のチロシンリン酸化、続いて起こる Gab1 と PLCγの結合能の増大とその活性化が重要な役割を担っていることが示唆された。

33.結核・抗酸菌症教育はいかにすべきか、いかにあるべきか　看護師教育への提言	共著	平成15年1月	福井大学医学部研究雑誌(1348-8562)20巻 P.17-27	本研究は病院管理者である病院長と看護部長及び日常看護ケアに従事している看護師を対象に結核・抗酸菌感染症卒後教育の現状と学習ニーズを把握することを目的とした。結果、限られた人材と時間について回答者全員が現状では不十分と感じていた。病院長側は抗酸菌症に関する講義時間不足と抗酸菌症ケアに必要な機器や防護用具の購入予算の限界等を認識し、基礎的な研修会開催数増加を重要視していた。また看護部長・看護師側からは呼吸器感染症・抗酸菌症に経験のある講師の不足と研修機会の少なさを痛切に感じていた。看護部の講義内容は診断から検査、感染予防までの基本的な知識や技術を重視していた。また、日本結核病学会認定の抗酸菌症エキスパートナース資格者の活躍が期待される。今後は必要とする領域に勤務する看護職への集中的な講師人材派遣研修機会の増加及び抗酸菌症に強い医療職の養成が急務であり、抗酸菌症のエキスパート制度は、大変意義があると考える。上野 栄一, 石崎 武志
34.内容分析を用いた臨地実習における学習達成の自己評価と指導者評価の分析	共著	平成16年3月	Quality Nursing(1340-9875)10巻3号 P.257-265	学生の実習評価についてテキストマイングを用いたミックスメソッド法にて、自由記載の実習指導の評価について、自然言語処理にて単語頻度解析、クラスター解析を行い、学修効果を検証した。 須永 恭子、保田 明夫, 上野 栄一
35.精神科病棟に勤務する看護師の性格特性と精神的健康度との関係	共著	平成16年9月	富山医科薬科大学看護学会誌(5巻2号 P.19-28	精神科病棟に勤務する看護師の性格傾向と精神的健康度の関係を検討することを目的に,看護師19名(うち,女性16名)を対象に東大式エゴグラムとGHQ30(General Health Questionnaire 30)を用いたアンケートを実施した.GHQ30の各下位尺度得点を目的変数とした重回帰分析,内容分析の結果,以下のことが分かった.1)Adult(成人),Adapted Child(従順した子供.以下,AC)は,身体的症状に影響を与えていた.2)ACは不安と気分変調に影響を与えていた.3)Nurturing Parent(教育的親),ACは,希死念慮,うつ傾向に影響を与えていた.4)仕事上の負担には,対人関係に関する事項が多かった 。 共同研究者：小倉 克行, 上野 栄一

36.高血圧症患者の日常生活における自己管理度測定尺度の作成	共著	平成 17 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)28 巻 2 号 P.73-80	本研究では外来に通院する高血圧症患者の日常生活における自己管理度測定尺度を作成し,妥当性と信頼性について検討した.調査対象は大学病院の外来患者 105 名とした.結果、因子分析により 3 因子 27 項目の因子解が抽出された.各因子は項目内容により,「食事管理因子」「運動管理因子」「ストレス管理因子」と命名した.基準関連妥当性については,高血圧症患者の日常生活における自己管理尺度と概念が近似した 2 つの既存の尺度との間に有意な相関を確認した.内的整合性を示す信頼性係数αは 0.911 であった.これらのことから,本尺度は妥当性・信頼性の高い尺度であることが確認できた 坪田 恵子, 上野 栄一, 高間 静子
37.看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度の開発	単著	平成 17 年 6 月	日本看護科学会誌(0287-5330)25 巻 2 号 P.47-55	本研究では,看護師における患者とのコミュニケーションスキルを測定するための尺度を開発することを目的とした.54 の質問項目を作成後,看護職 368 名を対象に調査を行い,有効回答の得られた 355 名に対して分析を実施し,質問紙の信頼性,妥当性を検証した.その結果,最初の質問項目数は 54 項目であったが,内容妥当性,相関係数,共通性の値の検討により精選された質問紙原案 19 項目について因子分析を行った.その結果,第 1 因子「情報収集」,第 2 因子「話のスムーズさ」,第 3 因子「積極的傾聴」,第 4 因子「パーソナルスペース・視線交差」,第 5 因子「アサーション」の 5 つの因子が抽出された.信頼性の検討では,全体での Cronbach のα係数は 0.874 と内的整合性の高い値を示し,本尺度が信頼性の高いものであることが検証された.また,併存妥当性の検討では,本尺度と KiSS-18 との間には,高い有意な相関を示し,妥当性の高い尺度であることが証明された.以上の結果から,本尺度は高い信頼性と妥当性のあることが示された .
38.外来で化学療法を受けている患者の不安要因についての分析	共著	平成 17 年 12 月	日本看護学会論文集: 成人看護 II、36 号 P.51-53	外来で化学療法を受けている患者の不安要因を明らかにすることを目的に,当該患者 4 名(男性 2 名,女性 2 名.平均年齢 58.2 歳)を対象に半構成的面接を実施した.内容分析の結果,患者が抱えている不安として,【副作用に対する不安】【予後に対する不安】【治療施行中の不安】【不安はない】の 4 つのカテゴリーが抽出された. 林 寿美, 野尻 泉, 上野 栄一

39.終末期の患者の家族にCD音楽が及ぼした影響	共著	平成17年12月	日本看護学会論文集: 成人看護II(1347-8206)36号 P.303-305(平成17年.12)	終末期の患者の家族にCD(α波オルゴール)音楽が及ぼした影響を検討することを目的に,大腸癌の82歳女性患者の長女(62歳.保育士)を対象に,半構成的面接を実施した.長女は仕事を抱えているため患者に十分に付き添うことができなかったが,患者のそばで流れているCD音楽が「自分の代わりをしてくれている」という意識をもっており,CD音楽により癒しの効果も得ていた.また,看取り後のCD音楽は,【故人の回想】や【共に過ごした時の流れ】を感じるよすがともなっていることが分かった. 長 光代, 石若 弘美, 上井 陽子, 表寺直美, 飯田 真由美, 広田 牧子, 上野 栄一
40.統合失調症患者を支える家族の主観的負担感に関する研究　自由記載文の分析を試みて	共著	平成18年1月	日本看護学会論文集: 精神看護(1349-2985)36号 P.65-67	統合失調症患者を支える家族の主観的負担感を明らかにすることを目的に,「生活困難度尺度」「日本語版ZBI尺度」を用いたアンケート調査を実施し,自由記載欄の「日ごろ感じていること」への記述を内容分析した.その結果,家族は【世話への負担】【自責感】【精神的支えの欠如】【健康資源の欠如】【支援体制の未熟さ】【経済的な負担】を感じ,さらに将来への見通しから生じる【将来への不安】【退院に対する困難】【受け入れ先の欠如】,また,過去への【後悔】などを負担に感じていることが分かった.
41.内容分析技法を用いた基礎看護実習における学生の感想文の分析	共著	平成18年3月	日本看護学会誌(0917-513X)15巻2号 P.122-130	一ノ山 隆司, 上野 栄一, 永山 くに子 基礎看護実習終了後の学生の感想文に用いられている用語の特徴を明らかにすることを目的に、看護大学2年生52名の実習感想文の内容をクリッペンドルフの内容分析の手法を用いて分析した。その結果、感想文に多く用いられていた名詞は、「患者」「実習」「会話・話」などで、感想文に5回以上使用されていた名詞で類似しているものをカテゴリー化した結果、〈対人〉〈コミュニケーション〉〈情報収集〉〈自己評価・自己分析〉〈心理〉〈時間〉〈病態〉〈病院環境〉の8つのカテゴリーが抽出された。また、多く使用されていた動詞・形容動詞に連動する前後の文脈を読み取るコロケーション解析を行った結果、学生は初回の実習ではコミュニケーションや情報収集に困難さを感じていたが、病棟実習を行う中で自然な会話から必要とする情報を得ることができるようになっていることが分かった。 坪田 恵子、 上野 栄一, 塚原 節子

42 慢性統合失調症患者に対する認知療法的接近法　ストレスコーピングの向上にパンフレットを使用して	共著	平成 18 年 12 月	日本看護学会論文集：精神看護 (1349-2985)37 号 P.166-168	ストレスに対処することができず幻聴に悩まされている慢性統合失調症患者(50 代・男性)のストレスコーピングを高まるため、患者と話し合いながらパンフレットを作成し、日中は幻聴にすぐ対応できるようパンフレットを持ち歩くなどの指導を行った。当初は、幻聴への対処方法を考えることができず、16 時の振り返り時に看護師に頼ることが多かったが、次第に「今日はガムをかんだ」「散歩をしてみました」などの言葉が聞かれるようになり、それとともに幻聴の訴えも減っていった。介入前後の P-F スタディ(絵画-欲求不満テスト)の比較では、介入後に問題の解決思考が高まったことが確認できた。 明堂 文祐，四十田 里美，大塚 佳奈子，青山 正春，柳原 裕姫子，荒井 宏文，上野 栄一
43.下肢牽引患者の良肢位を保ちながら出来る足浴方法の考案　密封式足浴を試みて	共著	平成 18 年 12 月	日本看護学会論文集：看護総合 (1347-815X)37 号 P.194-196	整形外科病棟の下肢牽引患者が良肢位を保ちながら足浴ができる方法として、独自に考案した架台と筒状ビニールを用いた密封式足浴方法を考案し、大腿骨骨折患者 4 名(43～88 歳、平均年齢 73.5 歳)へ同法による足浴を実施し、足浴前後のバイタルサイン、フェイススケールなどの測定を行った。その結果、これまで足浴ができなかった患者も安楽に足浴が行えることが確認できた。 山地 慶子，永原 泰子，今野 友子，米澤 陽，吉森 祐美，松嶋 瞳，上野 栄一
44.データマイニングを用いた精神看護学実習記録からみた看護学生の学びの分析	共著	平成 19 年 1 月	日本看護学会論文集：看護教育 (1347-8265)37 号 P.90-92	精神看護学実習における学生の学びを明らかにすることを目的に、精神看護学実習を履修した 50 名の実習記録における「実習で学んだこと」についての自由記述を、データマイニングに基づき形態素解析し、解析後に分類された単語(名詞・動詞)をコロケーション解析し、Krippendorff の内容分析手法を参考に分析した。その結果、名詞の分析により、学習内容を示す【対人関係】【コミュニケーション・相互作用】【自己評価・自己分析】【時間】【情報収集】【環境】【病態関連】の 7 因子が抽出された。また、動詞の分析から、動詞と連動する先行・後続文脈が抽出され、実習目標に沿った学生の自己評価の視点を捉えることができた。 担当部分：テキストマイニング解析

				共著者：一ノ山 隆司，宮本 眞弓，上野 栄一
45.混合病棟における末期がん看護に関する看護師の葛藤	共著	平成19年2月	日本看護学会論文集：成人看護 II(1347-8206)37号 P.186-188	混合病棟における末期癌看護に関する看護師の葛藤を明らかにすることを目的に、混合病棟であるA病棟に勤務して1年以上の看護師16名(平均年齢34.2歳)を対象に半構成的面接を実施した。内容分析の結果、「患者への対応の難しさ」「時間が作れない」などのサブカテゴリーよりなる【患者との関わりと看取りへの思い】、「家族へのサポート」「家族への声かけの難しさ」などよりなる【家族との関わり】、「麻薬の使い方」などよりなる【医師との関わり】、の3つのカテゴリーが抽出された。
46.看護師のストレス要因とコーピングとの関連　日本版GHQ30とコーピング尺度を用いて	共著	平成19年3月	富山大学看護学会誌(1882-191X)6巻2号 P.37-46	早崎 智美，田中 美樹，安居 洋美，古金 祥子，船屋 彩子，上野 栄一 本研究では、看護師のストレスとコーピングとの関係について調べた。調査対象は、T市の総合病院に勤務する看護師104名とした。ストレスの測定には、一般健康調査質問紙General Health Questionnaire(GHQ)30項目を、コーピングの測定には尾関のコーピング尺度(1993)を使用した。その結果、勤続年数と一般的疾患傾向には負の相関が見られた。通勤時間の長さに比例して不安・うつが増長していた。睡眠時間の長さと身体的症状の間には負の相関があった。婚姻別にみると、未婚群は問題焦点型行動を多く取っていた。ストレス、対処行動の内容分析では、仕事に関するストレスが全体の87.4%を占めていた。ストレス対処行動としては、コミュニケーションや食事、趣味等が挙げられた。以上のことより、健康状態を良好に保つために、ストレスを効果的に発散できる場・方法を見つけだす必要性が考えられた。 共著者：加藤 麻衣，鈴木 敦子，坪田 恵子，上野 栄一

47.統合失調症患者を支える家族支援に関する研究　ソーシャルサポート・セルフケア機能からの視点	共著	平成 19 年 3 月	日本看護学会論文集：地域看護 (1347-8257)37 号 P.42-44	入院中の統合失調症患者を支える家族を対象に調査し、家族の負担要因と資源的条件である家族のソーシャルサポート・家族のセルフケア機能に注目した。地域の社会資源のひとつである病院における看護師の役割を再考するために、患者の行き場が課題である現状と地域精神保健看護の展望を見据え福祉との連携を視野に入れ、ストレス・コーピングモデルを家族支援システムとして位置づけた。主要なソーシャルサポートといえる家族会所属の有無において、家族会に所属していない家族の「病気への不安」は小さいことが示された。健康資源が低下している家族は不安を抱え込む傾向があり「病気への不安」への対処能力が低下していると推察された。ソーシャルサポート・セルフケアの視点からも家族が精神障害者を支えるためのストレス・コーピングモデルの構築が必要であると示唆された。 共著者：一ノ山 隆司，村上 満，宮本 眞弓，上野 栄一
48.外来患者が好感をもった看護師の言動に関する質的分析	共著	平成 19 年 3 月	日本看護学会論文集：地域看護 (1347-8257)37 号 P.252-254	患者が看護師のどのような言動に快く感じ、好感を持つか調査した。外来患者を対象としたアンケート調査を実施し患者が好感を持った看護師の言動を分類し、その質と傾向を明らかにした。外来通院中の患者(家族を含む)13 科(放射線科と精神科を除く)280 例を無作為に抽出し、有効回答 93.9%であった。看護師の「お大事に」「気配り」「励まし」「ほめる」の声がけに対し、多くの患者が好感を持った。看護師の「安心感」を与える言葉と笑顔に対し、患者は好感を持ち、看護師が「名前を覚えていてくれた」と感じると嬉しい気持ちになっていた。「思いやり、やさしい、親切」「謙虚な態度」に対し、理解的態度で、患者の話を傾聴する姿勢が患者に好感を与えた。忙しくても穏やかに対応し、手際良い看護技術を提供することが患者の好感につながった。 共著者：高橋 まゆ子，岩城 吉子，池田 京子，栃山 ひろ子，安原 陽子，渡辺 富美子，上野 栄一

49.精神科救急における入院時の隔離・拘束観察シート導入効果の検討	共著	平成19年12月	日本看護学会論文集: 精神看護(1349-2985)38号 P.21-23	A精神科病院に勤務する看護師10名を対象に、半構成的面接法を用いて「精神科救急における心理的負担」と「隔離・拘束観察シート導入の効果」の2点についてインタビュー調査を行い、語られた内容を質的帰納的に分析し、カテゴリー化を図った。結果、心理的負担については【不安・緊張】【暴力行為の遭遇】【対応技術の不足】【要望の未充足】というカテゴリーと16のサブカテゴリーが抽出された。隔離・拘束観察シート導入の効果は【記録】【観察】【報告】というカテゴリーと以下の10サブカテゴリーが抽出された。1)時間ごとの記入が可能。2)看護経過記録内容の焦点化。3)正確な記録に対する動機づけ。4)観察項目の明確化。5)事故防止。6)情報収集の容易さ。7)身体管理の向上。8)時間ごとの推移でわかりやすい。9)申し送りの円滑化。10)隔離・拘束の判断資料。 共著者：明神 一浩，一ノ山 隆司，上野 栄一，川野 雅資
50精神科看護師と一般科看護師とのストレス要因を探る　看護師ストレッサー尺度を用いて比較する	共著	平成19年12月	日本看護学会論文集: 精神看護(1349-2985)38号 P.170-172	A総合病院の精神科病棟看護師23名と一般病棟看護師97名を対象に、三木らにより信頼性が検証された『看護師ストレッサー尺度(8因子で構成)』による調査を行い、群間比較した。結果、一般病棟群に比べて精神科病棟群のストレスレベルは全体的に低かったが、第3因子(患者・家族との関係)の得点は有意に高かった。 日塔 恵理香，石政 直子，前田 憲，高松 聡，海原 真澄，柳原 裕姫子，荒井 宏文，上野 栄一
51.糖尿病療養指導士外来におけるセルフケア評価に関する研究(第5報)　段階的なセルフケア評価(GSEQ)導入による指導効果と関連要因	共著	平成20年2月	日本看護学会論文集: 成人看護II(1347-8206)38号 P.142-144	糖尿病初期入院患者のセルフケア能力向上のために開発された上野の「段階的セルフケア評価(GSEQ)」を糖尿病療養指導士(CDEJ)外来に導入し、有効であったことを前回報告した。今回、導入後1年6ヵ月までの指導効果についてGSEQスコアとHbA1c・BMI値を指標に検討し、あわせてHbA1c・BMI値の関連要因について検討した。その結果、指導効果は導入1年6ヵ月後まで維持されていることが確認された。HbA1cの関連要因として[間食の有無]と[家族協力の有無]が抽出された。BMIの関連要因は見出せなかった。 大西 みさ，上野 栄一

52.終末期がん患者の病院食の配膳停止に対する看護師の思い	共著	平成20年2月	日本看護学会論文集: 成人看護 II(1347-8206)38号 P.210-211	A総合病院の消化器外科病棟に勤務する看護師16名に質問紙調査を行い、「終末期がん患者に対して病院食の配膳停止を伝えるときの思い」を自由記述してもらい、記載内容を質的帰納的に分析した。その結果、以下の7カテゴリーが抽出された。1)経口摂取の諦め。2)死生観。3)生への希望。4)食ケアに関するアンビバレンスな感情。5)患者・家族の意思尊重。6)嗜好品への期待。7)葛藤であった。 共著者：村澤 嘉江子，卜部 麻美，村田 千紘，深美 まり子，飯田 真由美，武田 睦子，上野 栄一
53.終末期がん患者の男性家族員が捉えたギアチェンジ	共著	平成20年3月	富山大学看護学会誌(1882-191X)7巻2号 P.15-28	終末期がん患者の男性家族員が捉えるギアチェンジの様相とその関連要因を探るために、死別後1年以上経過した13名を対象とし、半構成的面接を行った。得られた逐語録をクリッペンドルフの内容分析手法で分析した結果、ギアチェンジの様相は、第1【理性を持ちながらギアチェンジできないもどかしさ】、第2【永遠の絆】と第3【リジリアンス】が、《生の希望》《時の流れ》に沿って3コアカテゴリーとして生成された。第1には、《がんとの共生》を中心に、《がんの脅威と危機》《ソーシャルサポート》《患者から放たれていたスピリチュアリティ》《パートナーシップ》《死への諦めと受容》《がん闘病の複雑さ》が、第2には、《相互作用》《尊厳》が、第3には、《行きつ戻りつする死別後の悲嘆》《立ち直り》が関連していた。死別悲嘆からの回復には、円滑な第1のギアチェンジが重要であり、その関連要因の中に、がん看護への多くの示唆が含まれていると考えられる。 共著者：長 光代，落合 宏，上野 栄一
54.パークベンチ体位における腋窩枕の検討	共著	平成20年7月	日本手術看護学会誌(1880-4780)4巻1号 P.73-76	パークベンチ体位では通常の側臥位に比べて腋窩にかかる体圧が高く、さらに頭部挙上によるずれ力が加わるため、腋窩枕の接触面に皮膚障害が生じやすいと考えられる。今回、3種類の腋窩枕を用いてパークベンチ体位における褥瘡予防効果を比較検討した。3種類の内訳は、1)褥瘡予防マット(ソフトナース)で作製した枕(35×16×7cm)、2)アクションパッド(ゲル枕;45×11×5cm)、3)エアー枕(輸液用生食1000mlの空バックに空気1200ccを注入したもの)で、健常人5名を対象に検討した結果、褥瘡予防効果が最も高いのは1)であると考えられた。

				共著者：橋場 まゆみ，澤田 浩美，西川 昇，井尻 那美，大前 明博，上野 栄一
55.入院中の統合失調症患者を支える家族の日頃の心理的負担に関する研究	共著	平成20年11月	共創福祉3巻2号 P.21-30	本研究の目的は、統合失調症の患者を支える家族の負担要因を明確にし、家族支援の枠組みに示唆を得ることである。精神科病院6施設に入院中の統合失調症患者20名の家族の負担要因を「日ごろ感じていること」の自由記載文から抽出した。家族の負担要因の抽出のためにKrippendorffの内容分析手法を用い、形態素解析・コロケーション解析した。名詞[96語]の内訳は「障害」、「場・場所」、「家族」、「世話」、「生活」、「人」、「病院」、「退院・入退院」、「看護師」、「心配」であった。その名詞[96語]についてコロケーション解析した結果、36事象の内容(文脈)が抽出され、7つのサブカテゴリー、3つのカテゴリー(3要因)が形成された。第1の要因は保健・医療・福祉に対する要求や従事者に対する期待と希望からなる要望と提言、第2の要因は社会復帰・社会参加あるいは退院を困難にさせている要因や今後の生活状況への不安と心配からなる負担と困難、第3の要因は入院を継続することでの安心感や家族会活動への意欲からなる安心と安堵であった。これらを【要望・提言】、【負担・困難】、【安心・安堵】と命名しカテゴリー化した。この方法によって、キーワード(単語:名詞)とカテゴリー(【要望・提言】、【負担・困難】、【安心・安堵】)の2つの次元で家族の心理的負担を捉えることができ、入院中の統合失調症患者を支える家族に対する看護の役割を見出すことができた。 一ノ山 隆司，村上 満，舟崎 起代子，上野 栄一

56.データマイニングによる看護専門学校の教育理念に関する分析	共著	平成20年12月	日本看護学会論文集：看護総合(1347-815X)39号 P.164-166	全国の看護専門学校の中から層化無作為抽出法で選定した154校のうち学校のホームページ上に教育理念が記されている121校を分析対象とし、これらの教育理念について形態素解析を行った。その結果、10640個の形態素が抽出され、記号""句読点"などの1097個を除く9443語の中から名詞4571語、動詞1382語が得られた。名詞のうち最も出現頻度が高かったのは「看護」(216語)であり、次いで「人間」(157)、「育成」(117)、「専門」(87)、「豊か」(78語)、「医療」(73語)、「実践」(68)、「生命」(65)、「技術」(63)、「知識」(60)の順であった(日本看護学会論文集：看護総合(1347-815X)39号 P.164-166 平成20年.12)。 動詞のうち最も出現頻度が高いのは「目指す・めざす」(49)であり、次いで「持つ・もつ」(46)、「養う」(38)、「基づく」(31)、「学ぶ」(22)、「行う」(19)、「育む」(17)、「応じる」(14)、「求める」(11月、「備える」(9)の順であった。教育理念を構成する概念を抽出するため、動詞で最も頻度の高い「目指す・めざす」についてコロケーション解析を行い、何を目指しているのかを検討した結果、以下の3カテゴリーが生成された。1)社会人としての人間形成。2)自己教育力の獲得。3)専門的知識・技術の向上。 （共著者）舟崎 起代子，一ノ山 隆司，明神 一浩，上野 栄一
57.精神看護学実習前後における学生の不安・イメージに関する変化要因	共著	平成21年2月	日本看護学会論文集：看護教育(1347-8265)39号 P.265-267	精神看護学実習における学生の不安要因と実習前後の患者のイメージの変化を明らかにすることを目的に、A看護専門学校の3年次生40名を対象に実習前後に自由記述によるアンケート調査を行った。内容分析の結果、看護学生の実習における不安要因として、【対象への接近困難性】【対象の威圧・圧迫性】【看護過程展開の難易性】の3つのカテゴリーが抽出された。また、実習前の看護学生の患者へのイメージとして、【共通性の欠如】【排除・区分性】【嫌悪感】の3カテゴリーが、実習後では【関係性の保持】【親密性】【固定観念の打破】の3カテゴリーがそれぞれ抽出された。 共同研究者：京谷 和哉，一ノ山 隆司，舟崎 起代子，明神 一浩，上野 栄一，川野 雅資

58.精神臨床看護検討レポート　関節拘縮がある統合失調症患者のケアに治療的契約を取り入れた事例	共著	平成21年3月	臨床看護(0386-7722)35巻3号 P.410-416	関節拘縮があり、依存傾向、意欲低下が顕著な統合失調症患者(60代・女性)に対し、治療的契約を結び、患者自身が設定した目標に沿って看護計画の修正と追加を行いながら援助したことで、セルフケア能力が向上し、「身の回りの動作」「移動動作」「食事」のそれぞれにおいて目標達成につながった事例について報告した。 一ノ山 隆司，明神 一浩，川野 雅資，舟崎 起代子，上野 栄一
59.精神臨床看護検討レポート「患者の安寧は看護師の言葉だけではない」ことの経験知自己の癒し体験をケアに生かすケアリング	共著	平成21年4月	臨床看護(0386-7722)35巻5号 P.811-815	長期化する入院生活により不安や悩みが増大し、強いストレス状態に陥り、腸腰筋膿瘍の再手術後3日目より夜間に創部のガーゼを剥がす行為と「死にたい」などの希死念慮が顕著に出現した患者(60代。男性)に対し、日々の看護業務に追われ十分な対応ができないことに申し訳ない気持ちにさいなまれていた看護師(著者)は、普段何気なく通り過ぎていた病院内のギャラリー(絵画の展示)に目を奪われ、ホッとした体験をしたことから、ギャラリーの絵画を一緒に見ることを患者に勧めた。絵画を見ている患者は、病室ではみられない穏やかな表情をしており、この日以降、患者から絵を見に行きたいといった希望があり、援助計画に取り入れて実施した。回を重ねるごとに、無口であった患者は仕事での経験談や、幼い頃から絵を描くことが好きでインテリアデザイナーとして働いている娘の話などを語るようになった。また、趣味である山登りについて活き活きとした表情で話した際、「退院したら山登りができたらいいですね」と問いかけると、「そうだね。山登りができるように歩く練習もしなくちゃな」と退院後の生活を見据えた言動があり、以後、患者自ら病棟内を散歩するようになった。それに伴い日中の臥床時間が次第に短くなり、夜間の創部のガーゼを剥がす行為や、「死にたい」などの希死念慮の訴えも少なくなった。 共著者：舟崎 起代子，一ノ山 隆司，川野 雅資，高野 悦子，上平 悦子，上野 栄一

60.幻聴のある患者に対する心理教育的アプローチの方法	共著	平成21年3月	富山大学看護学会誌(1882-191X)8巻2号 P.33-40	本研究は、幻聴のある患者に対して、心理教育的アプローチの介入が幻聴に苛む患者の自己対処能力の獲得によって、幻聴の軽減にどのように影響したかについて、その効果を検証する目的で研究を行った。研究対象者は2名の統合失調症患者を対象に、精神症状の陽性・陰性症状が高い患者2人を対象とした。評価方法は、心理教育プログラムは、幻聴の自己対処行動を獲得するために、原田のテキストを用い10回(約1回1時間程度)をプログラム実施前後で、陽性・陰性評価尺度で評価をした。最後のセッションでは、自己対処をより具体的にする為に、患者自身が自己対処できると思う方法を自分で選びSSTで訓練した。心理教育プログラムの結果、患者自身が症状悪化の兆候を知る機会になり、幻聴に対する自己対処行動のスキルが働き易くなった。 共同研究者：明神 一浩，一ノ山 隆司，上野 栄一，舟崎 起代子，川野 雅資
61.幻聴に苛む患者の自己対処行動を支えるための心理教育的アプローチ	共著	平成21年4月	共創福祉4巻1号 P.1-10	本研究の目的は、幻聴に苛む入院中の統合失調症患者2名(陽性症状片寄り、陰性症状片寄り)に対する心理教育的アプローチが幻聴の対処にどのように影響したかについて、その効果を検証することである。精神症状の評価には陽性・陰性評価尺度(PANSS)を使用し、介入前後の評点の対比では、精神症状の軽減になった。心理教育的アプローチによる10回のセッションを実施した結果、患者自身が症状悪化の兆候を知る機会になり、幻聴に対する自己対処行動のスキルが働き易くなった。この心理教育プログラムによって、幻聴の自己対処行動が可能であることが示唆された。 共同研究者：一ノ山 隆司，村上 満，舟崎 起代子，牧野 かおる，明神 一浩， 上野 栄一，川野 雅資

62.データマイニングによる精神科病院の理念・方針の特徴に関する分析	共著	平成21年4月	日本看護学会論文集: 看護管理 (1347-8184)39号 P.405-407	日本精神科病院協会に登録されている病院のうち、インターネット上に病院の理念・方針が公開されている938病院の中から、層化無作為抽出法を用いて各都道府県5病院、計235病院を選定し、ホームページに掲載されている「理念・方針」を分析した。形態素解析を行った結果、出現頻度の最も高い名詞は「医療」であり、次いで「患者」、「地域」、「提供」、「社会」、「病院」、「精神」、「心」、「尊重」、「信頼」、「貢献」の順であった。コロケーション解析を行った結果、理念・方針の構成要素として【病院内の充実】【職務満足】【地域連携】が抽出され、理念・方針の目指している内容として【地域医療と貢献】【サービスの向上】【信頼と安心・安全】【やりがいのある職場環境】というカテゴリーが生成された。 共同研究者：一ノ山 隆司, 舟崎 起代子, 上野 栄一, 川野 雅資
63.地域生活する精神障がい者を支える家族の思いの分析(Analysis of the Feelings of Family Members Who Support Mentally Handicapped Persons Living in Regional Communities)(英語)	共著	平成21年10月	共創福祉4巻2号 P.85-91 平成21年.10)	目的:家族の負担要因の明確化から、今後の家族支援への有効な手がかりに示唆を得ることである。Krippendorffの内容分析の手法を参考に、全記載文をデータ化した後、形態素解析、コロケーション解析を行った。内容分析の手順は、(1)自由記載文の電子テキスト化、(2)形態素解析の実行、分析単位は単語として品詞の出現頻度を算出、(3)出現頻度と研究者が注目した名詞をコロケーション解析した。解析後、類似性に基づいてカテゴリー化し、その因子をネーミングした。結果:形態素解析、コロケーション解析した結果、【本人の病気に関する不安】、【家族自身の体調の心配】、【本人の将来の生活に対する焦り】、【社会や周囲、身内からの理解不足に関する苛立ち】、【自分が責任を持ってケアする重圧】、【本人が家にいることによる束縛感】、【地域の施設が十分整備されないことへの不満感】の7つのカテゴリーを生成した。 結論:家族の思いは、本人の病気に関する不安、家族自身の体調の心配、本人の将来の生活に対する焦り、社会や周囲、身内からの理解不足に関する苛立ち、自分が責任を持ってケアする重圧、本人が家にいることによる束縛感、地域の施設が十分整備されないことへの不満感の7項目であった。家族が精神障がい者のケアの担い手ではあ

				っても、家族はケアの対象者である観点から福祉との融合施策に反映させていくための看護ケアに有効な知見が示唆された。 共著者：一ノ山 隆司，村上 満，舟崎 起代子，上野 栄一，川野 雅資
64.大学生の喫煙行動と喫煙に対する態度と知識への影響要因	共著	平成21年10月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌(1881-7319)19巻2号 P.110-114 平成21年.10)	大学生1406名を対象に、喫煙行動、喫煙に関する知識・態度について、集団調査法による無記名自記式質問紙調査を実施した。大学生の喫煙行動は性別・年齢・家族や友人の喫煙の影響、喫煙に関する知識は現在の喫煙行動・大学での専攻の影響、喫煙に対する否定的態度は現在の喫煙行動・大学での専攻・友人の喫煙の影響を受けていた。大学生への喫煙防止教育では、知識の提供や喫煙に対する否定的態度の育成については専攻別に内容や方法を検討し、友人の喫煙への対処の技術を組み込む必要があることが示唆された。 共同研究者：上原 佳子，長谷川 智子，上野 栄一，佐々木 百恵，吉田 華奈恵，上木 礼子，石崎 武志
65.精神臨床看護検討レポート(case 9)統合失調症患者の援助にフットケアを取り入れた介入効果とセルフケアレベルの変化について	共著	平成21年12月	臨床看護(0386-7722)35巻14号 P.2215-2224	統合失調症患者2名(70代女性)の援助にフットケアを取り入れ、その効果を、介入前後の「セルフケアチェック表」(6項目)によるセルフケア行動の評価の比較から検討した。フットケアは2週間に1回、5～10分程度、6ヵ月間実施した。その結果、事例1ではセルフケア行動評価の6項目のうち、「空気・水・食物」「活動と休息」「孤独とのつきあい」の3項目で、また、事例2では「活動と休息」「安全を保つ能力」の2項目で、それぞれ改善が認められた。 共同研究者：一ノ山 隆司，後藤 美沙江，舟崎 起代子，川野 雅資，村田 美津代，吉田 誠，明神 一浩，上野 栄一

66.地域で生活する精神障がい者を支える家族の思い	共著	平成 22 年 1 月	日本看護学会論文集: 精神看護 (1349-2985)40 号 P.143-145 平成 22 年.01)	地域で生活する精神障害者の家族 273 名にアンケートを行い、「日頃から気になっていること」について自由記載してもらい、その内容を質的帰納的に分析した。その結果、以下の 7 カテゴリーが抽出された。1)患者の病気に関する不安。2)家族自身の体調の心配。3)患者の将来の生活に対する焦り。4)社会や周囲・身内の理解不足に対する苛立ち。5)自分が責任を持ってケアする重圧。6)患者が家に居ることによる束縛感。7)地域の施設が十分整備されないことへの不満感。 共同研究者：一ノ山 隆司，村上 満，舟崎 起代子，上野 栄一，川野 雅資
67.重症心身障害児病棟実習が看護学生の障害児に対するイメージに及ぼす影響	共著	平成 22 年 2 月	日本看護学会論文集: 看護教育 (1347-8265)40 号 P.218-220 平成 22 年.02)	看護学生が小児看護学実習を通して抱く障害児に対するイメージの変化を明らかにするため、看護専門学校 3 学年 45 名を対象に、小児看護学実習前、重症心身障害児病棟実習終了直後、小児看護学実習後、全専門分野の実習終了後に調査を行った。舟越らが作成した 30 項目の形容詞対尺度の平均値を比較したところ、重症心身障害児病棟実習終了直後では 15 項目が最もポジティブであり、小児看護学実習後では 11 項目が最もポジティブであった。また、全専門分野の実習終了後には小児看護学実習前に比べて 30 項目全てがポジティブに変化していた。重症心身障害児病棟における 4～5 日の直接的な接触体験を伴う実習は、障害児に対するイメージをポジティブに変化させ、そのイメージの定着に有効であることが示唆された。 共同研究者：梅田 尚子，小笹 幸子，笠原 香理，上野 栄一

68.看護師学び直しプログラム病棟実習の学習効果　潜在看護師と就業看護師の比較	共著	平成 22 年 4 月	日本看護学会論文集：看護管理(1347-8184)40 号 P.93-95	本学では、文部科学省の『社会人学び直しニーズ対応教育推進プログラム』委託事業として、平成 19 年度から「看護師学び直しプログラム」を実施している。このプログラムは、潜在看護師と就業看護師の両者が共に学べることが特徴で、講義、演習、病棟実習を行っている。今回、病棟実習における両者の学習効果を比較検討した。調査方法は、平成 19 年度と 20 年度のプログラム受講生 70 名に対して実習終了後にアンケートを行い、実習で体験したこと、学んだこと、意見などについて自由記載で回答を求めた。そして、記載文を電子テキスト化し、形態解析を行い、「学んだ」「できた」内容のキーワードを抽出した。次にコロケーション解析により、「学んだ」「できた」の単語を含む文章を抽出し、カテゴリー化を図り、潜在看護師と就業看護師の学習内容を比較した。その結果、潜在看護師は就業看護師に比べて、【基本的看護技術】を中心に【与薬技術】【外科的処置】【看護管理】【電子カルテ】など多くのことを学び、自信を深めていることが明らかになった。 共同研究者：橘 幸子，清水 由加里，上野 栄一
69.支持的精神療法的なかかわりが患者-看護師関係の構築に有効であった事例意思表示ができない重症の悪性症候群を併発した患者の看護	共著	平成 22 年 6 月	臨床看護(0386-7722)36 巻 7 号 P.974-981	悪性症候群を発症して A 総合病院の精神科病棟に転院してきた統合失調症患者(30 代・男性)で、入院時に発熱と多量の発汗、持続した振戦、意識障害が認められた症例に対し、身体症状の急性期に声かけ、励まし、タッチングなど、五感へのはたらきかけを通して患者の自我機能にはたらきかけ、自己回復力が高まるような支援を継続した。その結果、身体症状が改善した直後から、患者は看護師に親しみを込めた会話(言語的・非言語的反応)を行うようになり、良好な患者-看護師関係へとつながった。 共同研究者：千 英樹，野原 茂，一ノ山 隆司，川野 雅資，上野 栄一

70.看護系大学における呼吸ケアカリキュラム　卒前・卒後の教育	共著	平成 22 年 6 月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌(1881-7319)20 巻 1 号 P.69-75	全国の看護系大学および関連大学病院看護部にアンケートを依頼した。結果は、大学と大学病院とでの教育内容・重点項目に相違があり、学生に求める実践能力と臨床で求める実践能力の違いも判明した。看護実践能力の向上のためには、学校サイドと臨床サイドがさらに連携し、卒前・卒後の一貫した教育を念頭に効果的な呼吸ケアの教育方法について工夫する必要があると考える。また、学生への標準的な呼吸ケア教育カリキュラムの構築が望まれる。 共同研究者：石崎 武志，吉田 華奈恵，佐々木 百恵，上木 礼子，上原 佳子，長谷川 智子，上野 栄一
71.精神臨床看護検討レポート(case13)幼児退行した統合失調症のケアにおいて、生活技能の維持と向上に段階的な目標を設定したかかわりの効果	共著	平成 22 年 7 月	臨床看護(0386-7722)36 巻 8 号 P.1088-1095	最終入院から 25 年が経過し、幼児退行した慢性期統合失調症患者(50 代女性)に対し、生活技能の維持・向上へ向けたアプローチとして生活行動表を導入し、患者が生活行動表に沿って各項目に自己記入し、目標の達成度を点数化する取り組みを 9 ヵ月間にわたって行った。患者とともに目標設定を行い、1 ヵ月ごとに合計点数を算出することが患者の動機づけとなり、介入後 7～9 ヵ月には盗癖や収集癖などの行動がなくなり、他の患者とのトラブルも減り、他患者との良好な関係が築けるようになったことでラジオ体操やグループ活動にも積極的に参加するようになった。 共同研究者：村田 美津代，一ノ山 隆司，舟崎 起代子，川野 雅資，後藤 美沙江，上野 栄一
72.精神臨床看護検討レポート(case14)水中毒患者の水分摂取方法の改善に対する援助　認知行動療法的なかかわりの取り組み	共著	平成 22 年 8 月	臨床看護(0386-7722)36 巻 9 号 P.1218-1224	水中毒が疑われるため総合病院の精神科病棟に入院した統合失調症疑いの患者(20 代・男性)に対し、段階的に行動療法的アプローチ、認知行動療法的アプローチを実施した事例について報告した。患者が記載した飲水チェックシートと日記を活用し、患者の多飲行動に対して認知的にはたらきかけ、患者自身が解決方法を見出すよう導き、具体的な対処方法を提示しながら支持的に見守る援助を行った結果、患者自身が振り返りを行い飲水の自己管理に対する課題を明確にすることができた。 共同研究者：信永 州洋，一ノ山 隆司，千 英樹，佐々木 祐一朗，川野 雅資，上野 栄一

73.著しい視力・聴力低下をともなった高齢のアルコール精神病患者への看護	共著	平成22年9月	臨床看護(0386-7722)36巻10号 P.1350-1355	著しい視力・聴力低下を伴った高齢のアルコール精神病患者(80代・男性)への看護について報告した。入院時、アルコール離脱せん妄による意識障害があり興奮状態で、対応そのものがきわめて困難であったため、行動制限が長期化することも推定して看護計画を立案した。しかし、看護ケアを実施するうちに、障害をもちながらもアルコールに助けを求めざるを得なかった患者の立場を看護師が理解し、何とか患者の回復に役立つ援助方法はないかと模索し関わった。その結果、安心感が得られるように2名以上の看護師で関わり、患者の残存機能の一つである触覚を活用し、患者の体にそっと触れてから処置を行い、車椅子移乗など移動の際には患者に物や場所を触れてもらって確認してもらう、などを行った結果、退院につなげることができた。 共同研究者：渡辺 富美子, 一ノ山 隆司, 川野 雅資, 上野 栄一
74.維持透析患者の体重管理意識向上に向けて　除水制限を試みて	共著	平成22年9月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)33巻4号 P.123-129	本研究は除水制限の効果について明らかにする事を目的とした。短期検討期間は32名,長期検討期間は22名を対象として,体重増加率(以下¥¥%DW)・心胸比・ドライウエイト・アルブミンの各項目データと,透析中のショックや足つり等の透析合併症出現回数の変化と,自己管理意識や自己効力感(以下GSES)を2年間にわたって追跡調査し検討を加えた。その結果,除水制限導入後では短期・長期検討期間の双方で¥¥%DWの減少や,アルブミンの上昇が認められた。また,透析合併症の血圧低下やショック等の予防にも効果があった。アンケート結果からは自己管理への意識の高まりを示し,GSESの上昇が明らかとなった。これらの結果からは導入後は延長や引き残したくないという意識が高まり,徐々に生活スタイルを変容させたものと推測される。一方で自己管理を徹底し¥¥%DWを下げる過程において,失敗と成功を繰り返しながら徐々に達成体験を積み重ねた事で,前向き志向となり自己効力感が上昇したと推測される。 共同研究者：岩城 敏之, 上野 栄一

75.精神臨床看護検討レポート(case16)修正型電気けいれん療法を自己決定した双極性障害の看護インフォームド・コンセントと精神的サポートの実践	共著	平成22年10月	臨床看護(0386-7722)36巻11号P.1484-1491	修正型電気けいれん療法(mECT)を選択(自己決定)した、誇大妄想、多弁、多動を伴う双極性障害患者(60代後半、女性)の看護における、インフォームド・コンセントと精神的サポートの実践について報告した。合併症や身体症状の出現により薬物療法が限界となった患者に対し看護師は、患者の意思決定を支え、支持的精神療法的かかわりを行い、精神症状の観察に努めるとともに、インフォームド・コンセント時には同席して、患者の不安感の解消を図った。その結果、mECTとの相乗効果により感情の自己コントロールが可能となり、簡易精神症状評価尺度の興奮、敵意・疑惑、不安・抑うつにおいて著明な改善がみられた。 共同研究者：千 英樹，一ノ山 隆司，上島 有香里，川野 雅資，上野 栄一
76.自力体動困難患者にできる手浴用具の改良・検討	共著	平成23年1月	日本看護学会論文集：看護総合(1347-815X)41号P.63-65	自力体動困難な患者でも手を湯に浸けて手浴できる用具を改良し、病棟看護師10名に改良前後で手浴を実施してもらいアンケート調査を行った。ワセリンの量を一定にしたこと、固定具をエラスコットからゴムベルトへ変更したこと、ビニールの幅や長さを小さくしたことで、密着性、固定性、水漏れ、ビニールの幅、ビニールの長さ、使用感についての設問で有意差がみられた。用具の使用感についての自由記載では、「入浴できない患者に早く使いたい」という回答もみられ、今後のケアの充実につながると考えられる。 共同研究者：古川 絵理，角田 愛，木下 成美，宮坂 純香，武田 睦子，上野 栄一
77.乳がんの術前化学療法後に全摘術を受けた患者の心理的援助	共著	平成23年1月	日本看護学会論文集：看護総合(1347-815X)41号P.387-390	術前化学療法を受けたが腫瘍の縮小率が少なく全摘術になった乳癌患者2名を対象に、術前、術後、現在に至る心理的状況を面接および看護記録から調査し、援助のあり方を検討した。入院時は、乳房喪失感よりも生命の危険性を考え、全摘術になることは十分覚悟できていたが、手術や麻酔に対する不安が強く、いくつもの要因が重なり不安がピークに達していた。患者個々の問題や不安を正しく評価し看護師の思い込みで援助してはならない。手術後から退院以降では、転移や再発に対する不安が大きいことを理解し、乳癌に罹患する前の自分を保持できるように再構築への援助が必要である。 共同研究者：小倉 弘子，石倉 誠子，上野 栄一

78.看護師のスピリチュアルケア測定尺度の開発	共著	平成 23 年 2 月	富山大学看護学会誌(1882-191X)10 巻 1 号 P.15-27	本研究では、看護師のスピリチュアルケア測定尺度の開発を目的とした。対象は、看護師 374 名。スピリチュアルおよび看護師のスピリチュアルケアについて、自由記載によるアンケート調査を実施し、帰納法的に概念を抽出、さらに文献に依拠した概念を抽出した後、質問紙原案を作成し因子分析した。その結果、第 1 因子は「霊的アプローチ」、第 2 因子「死生観」、第 3 因子「自然と他者との関係性」、第 4 因子「生きる意味」、第 5 因子「愛と受容」、第 6 因子「永遠のいのちへの希望」と命名された。合わせて 6 因子 60 項目で構成した尺度が開発された。本尺度の信頼性係数は全体で、0.9 以上を示した。また、本尺度と「スピリチュアリティ測定尺度」との相関は高かった。以上のことから、本尺度は高い信頼性と妥当性のあることが検証された。 共同研究者：江口 富子，落合 宏，塚原 節子，上野 栄一
79.介護老人保健施設における要介護高齢者の自己を生きる思い	共著	平成 23 年 3 月	畿央大学紀要(1349-5534)13 号 P.43-50	要介護高齢者(以下、高齢者)への面接調査の結果、高齢者の自己を生きる思いは 5 カテゴリーに分類された。高齢者は、自己の身体上に起こっている現実を【病気による身体的苦痛と不自由】と意識し、介護老人保健施設(以下、施設)を【自分の生活の場】であるという思いを抱いていた。また、【支えてくれる人と帰れる家】があることで自己を支え、高齢者は過去の自己の人生を【自身への誇りと回顧】していた。さらに、高齢者は人生の最終段階としての最大の課題である死を意識しながら、【生きがいと死】という思いを抱きながら自らの老いを生きていた。この結果から、高齢者がその人らしく老いを生きるために、看護職者は、施設で他者とともに生活する高齢者の自己実現に向けた援助、入所している高齢者相互間の関係を築くための援助を実践していく必要性が示唆された。 共同研究者：舩瀬 孝子，上平 悦子，明神 一浩，上野 栄一

80.データマイニングを用いた精神看護学実習における学習内容の分析	共著	平成 23 年 3 月	滋賀医科大学看護学ジャーナル (1348-7558)9 巻 1 号 P.67-72	精神看護学実習における学生の学びをデータマイニングを用いて明らかにすることを目的に、3～4 学年にかけて精神看護学実習を履修した看護大学生 60 名の実習記録を電子テキスト化し、形態素分析により名詞・動詞ごとの出現頻度を算出し、名詞を類似性に基づいてグループ化し、研究者が特徴的と考えた動詞と連動する文脈をコロケーション解析した。その結果、【対人専門職としての治療的関係を築く術】【精神障害者のノーマライゼーション】【看護過程の展開】【指導者も含めたグループ学習における相互作用】の 4 つのカテゴリーが抽出された。 共同研究者：田中 智美，瀧川 薫，上野 栄一
81.絵本の教材化と対人関係の教育に関する研究　言語的・非言語的刺激を用いた対人教育の効果	共著	平成 23 年 3 月	共創福祉 6 巻 1 号 P.27-36	目的:看護学生 92 名の読後感想文をデータマイニングの概念に基づいて解析し、絵本の教材化の観点から学生の学びの特徴を明らかにし、今後の学習支援のあり方に示唆を得ることである。方法:絵本「くまのこうちょうせんせい」の読後感想文をデータマイニングに基づき形態素解析し分類された単語(名詞・動詞)をコロケーション解析した。分析の手順は、(1)記載文の電子テキスト化、(2)形態素解析の実行、分析単位は単語(名詞・動詞)の出現頻度を算出、(3)名詞を類似性に基づいてグループ化、その因子をネーミング、(4)出現頻度を参考に研究者が特徴的(学生の学びを形成する単語)と捉えた動詞と連動する先行・後続文脈を調べるコロケーション解析である。結果:学生の読後感想文の名詞から【対人関係】、【コミュニケーション・相互作用】、【学習】、【環境】、【時間】の 5 因子を生成した。また、動詞においては学生の学びを構成している内容であり、対人関係を学ぶための準備性に必要な項目に相当していた。結論:名詞の分析によって【対人関係】、【コミュニケーション・相互作用】、【学習】、【環境】、【時間】の 5 因子が抽出され、学習内容を提示するための項目の形成を示した。また、動詞の分析によって学生の学びの視点を捉えることが可能となり、絵本のもつ言語的・非言語的刺激が学習への動機づけに関連していた。 共同研究者：一ノ山 隆司，村上 満，舟崎 起代子，上野 栄一，川野 雅資

82.看護学生に対する喫煙防止教育の効果 喫煙行動・喫煙に関する知識・喫煙に対する態度への介入	共著	平成23年6月	日本看護医療学会雑誌(1345-2606)13巻1号 P.3141	目的:看護学生を対象に、介入群に喫煙防止教育を実施し、対照群との喫煙行動、喫煙に対する態度、喫煙に関する知識の経時的変化の違いから、介入の効果を明らかにする。方法:看護学生1年次生291名を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施した。介入群(59名)と対照群(232名)に、第一次調査は平成19年4月、第二次調査は平成19年10月に実施した。教育的介入は介入群に、平成19年7月に実施した。介入は講義と演習を組み合わせて行った。結果:173名(介入群43名、対照群130名、有効回答率60%)を分析対象とした。喫煙率は、両群で有意な変化はなかった。喫煙に関する態度は、介入群で否定的に変化していたが、対照群では肯定的に変化していた。喫煙に関する知識は両群とも向上がみられ、特に介入群で有意に向上した。結論:介入による喫煙に関する知識の向上の効果を明らかにすることができた。そして介入により喫煙に対する態度を否定的な方向へ変化させる可能性があることについても示唆された。 共同研究者：長谷川 智子，上野 栄一，佐々木 百恵，吉田 華奈恵，礪波 利圭
83.COPD 患者の療養状況による自己管理情報ニ ー ズの違い Lung Information Needs Questionnaire(LINQ)を用いた実態調査	共著	平成23年10月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌(1881-7319)21巻2号 P.153-158	COPD患者の、療養状況による自己管理情報ニーズの違いを明らかにすることを目的に調査を行った。LINQを用いた情報ニーズ調査の結果、全体に自己管理、栄養、運動に関する情報ニーズが高く、76歳以上の患者は75歳以下に比べ自己管理、栄養、運動に関する情報の必要度が有意に高かった($p<0.05$)。特に高齢者へは栄養や運動などの生活に即したセルフマネジメントができるための支援が必要である。 共同研究者：上木 礼子，長谷川 晴美，長谷川 智子，上原 佳子，佐々木 百恵，吉田 華奈恵，良 貴子，門脇 麻衣子，上野 栄一，中村 康孝，石崎 武志

84.異なる水質への入浴による保温効果と気分の違い	共著	平成23年12月	日本看護医療学会雑誌(1345-2606)13巻2号 P.26-35	本研究は水道水・人工浴用剤水・温泉水への入浴による、保温効果と気分への影響の違いを明らかにし、看護の中での人工浴用剤の活用の基礎資料とすることを目的とした。対象者は、20歳代男性12名で慢性疾患及び心疾患や高血圧等の循環器疾患、皮膚疾患のない者とした。対象者は、実験の説明を受けた後で、3条件の異なる水質への入浴を行った。実験は、10分間の安静座位の後で、38℃に設定した湯に30分間入り、入浴終了後に再度、30分間の安静座位を行った。調査内容は、保温効果指標として深部体温(腋窩温)、末梢体温(右中指温)、気分の指標として、日本語版POMS、唾液中コルチゾールの測定を行なった。保温効果指標の深部体温では、[温泉水]への入浴では温熱作用が緩やかに伝わることが明らかになった。また、末梢体温では[浴用剤水]への入浴で末梢体温の保温状態が持続することが明らかになった。気分の指標は、日本語版POMSは3条件共に入浴前と比べ入浴後に『抑鬱-落ち込み』『怒り-敵意』『混乱』の気分が低下し、『活気』が高まった。しかし[温泉水]では『疲労』も入浴前と比べ入浴後に高まった。このことから[温泉水]の入浴は、精神的な活力を増すが、疲労感も増強させる可能性が示唆された。唾液中コルチゾールは、3条件共に、入浴前安静終了時と比べ、入浴終了時では減少したが、入浴後安静終了時は3条件ともに唾液中コルチゾールは増加し、中でも[水道水]への入浴で最も増加した。この結果から入浴開始後は気分が「快」であったが、入浴時間の長さがストレスになり唾液中コルチゾールが増加したと考える。本研究においては[浴用剤水]の入浴において、入浴中の末梢保温状態が入浴後も持続した。また3条件共に入浴によって気分が「快」になることが明らかになった。 共同研究者：礪波 利圭，長谷川 智子，上原 佳子，佐々木 百恵，吉田 華奈恵，上野 栄一

85.出産した子ども数の決定影響要因 50歳代の夫婦	共著	平成24年2月	日本看護学会論文集: 母性看護 (1347-8230)42号 P.96-99	50代の夫婦が出産した子どもの数とその決定要因を明らかにすることを目的にアンケート調査を行い、114組の夫婦より回答を得た。その結果、子ども数は2人(44.7%)と3人(43%)で大半を占めた。また、出産した子ども数の決定要因は、多く挙げられた順に、「住宅状況」「夫婦の年齢」「夫の協力」「母親の健康状態」などであった。 共同研究者：山内 弘子，高間 静子，上野 栄一
86.頭頸部外科領域における術後せん妄発症要因の検討 内容分析、セブン・クロス (7×7)法の分析より	共著	平成24年3月	富山大学看護学会誌(1882-191X)11巻1号 P.9-18	本研究の目的は、頭頸部外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症要因は何かを明らかにして、臨床での術後せん妄発症患者に対する看護実践への示唆を得ることである。対象は、A大学医学部附属病院頭頸部外科病棟に勤務する頭頸部外科勤務経験5年以上の看護師5名とした。術後せん妄発症要因について半構成的面接を実施、結果はK.Krippendorffの内容分析手法およびセブン・クロス法にて分析した。内容分析の結果から【性格特性】、【理解力不足】、【長期安静】、【高齢】、【不眠】、【男性】、【独居】の7つのカテゴリーが生成された。セブン・クロス法の結果から、優先順位が高い順に【不眠】、【性格特性】、【高齢】、【長時間手術】、【術中出血量】、【眠剤の影響】、【術前不安】の7つのカテゴリーが生成された。内容分析とセブン・クロス法の両方に含まれていたのは、【高齢】、【不眠】、【個人特性】の3つのカテゴリーであった。この結果から今後の術後せん妄看護についての示唆を得た。 共同研究者：松浦 純平，喜田 加奈子，上野 栄一
87.テキストマイニングによる看護師の考える術後せん妄発症予測について	共著	平成24年3月	日本看護学会論文集: 成人看護 I(1347-8192)42号 P.62-65	一般外科病棟に勤務する臨床看護経験が豊富な看護師が考える術後せん妄発症予測要因を明らかにすることを目的に、一般外科領域における臨床経験5年以上の当該看護師20名へ半構成的面接を行った。逐語録のテキストマイニングによる内容分析の結果、経験豊富な看護師は、術後せん妄発症予測につながる前駆症状として、「術後患者の体動増加」「不眠」「手術前と異なる患者の表情」「言語的・非言語的コミュニケーションを通して感じる患者の認識の変化」「幻覚や失見当識の出現の有無」「患者の不快感に関する訴

				え」などを重要な観察の視点として捉えていることが分かった。 共同研究者：松浦 純平，喜田 加奈子，福田 弘子， 上野 栄一，水野 正延
88.看護師の属性からみた倫理的問題と対処行動との関連	共著	平成 24 年 3 月	日本看護学会論文集：看護総合 (1347-815X)42 号 P.316-318	護師 126 人を対象に質問紙調査を行った。日々の看護業務の中で倫理的ジレンマを感じたことがあると回答したのは 89.7%であった。看護師の属性と倫理的問題 20 項目、対処行動 20 項目との関連はなかったが、重回帰分析の結果、倫理的ジレンマと個人背景のチームワークとやりがいに有意差がみられた。職場で倫理的な問題を検討する機会があるか否かについては、約 40%が「ない」と回答した。相談対象の上司、先輩、同僚については約 80～90%が「よく聞いてくれる」「まあまあ聞いてくれる」と回答し、医師については「少し聞いてくれる」が最も多く 40.5%、次いで「あまり聞いてくれない」が 29.4%であった。医療チーム全体のコミュニケーションの円滑化が重要である。 共同研究者：舟崎 起代子，田中 志穂，梁川 由美，大浦 千恵，立野 恵子，上野 栄一
89.精神科急性期における心的外傷体験に遭遇した看護職のストレス反応とその関連要因	共著	平成 24 年 3 月	滋賀医科大学看護学ジャーナル (1348-7558)10 巻 1 号 P.28-33	患者からの心的外傷体験に遭遇した精神科の急性期看護を担う看護職のストレス反応とコーピング特性、体験した看護師の属性との関連を検討した。対象は、公立・私立の精神科病院で急性期治療病棟および精神科救急病棟に勤務する看護職 171 名とした。ストレス反応の指標に出来事インパクト尺度(IES-R)を、コーピングの方法はコーピング特性簡易尺度(BSCP)を用いた。対象者の約 9 割には心的外傷体験があった。精神科勤務年数が長いほど、その機会が増大していた。患者の疾患と心的外傷体験の種類には関連が見られた。IES-R の結果では、13.7%の看護師がハイリスク群に該当した。心的外傷体験に影響を及ぼす要因としては、体験後の辞職希望の有無があった。ハイリスク群の看護職は「問題解決のための相談」「回避抑制」というコーピングを多く用いる傾向があった。 共同研究者：田中 智美，清水 純，上野 栄一，瀧川 薫

90.7 対 1 と 10 対 1 看護体制別でみた職務満足の違いの検討	共著	平成 24 年 4 年	日本看護学会論文集：看護管理 (1347-8184)42 号 P.424-427	500 床以上の病院 6 施設に勤務している看護師 1141 名を勤務体制別に 7 対 1 群(565 名)と 10 対 1 群(576 名)に分け、尾崎の『職務満足尺度』による得点を比較した。その結果、各群の総得点平均は 7 対 1 群が 153.2 点、10 対 1 群が 143.6 点であり、7 対 1 群のほうが有意に高かった。ローテーション研修の有無別で職務満足度を比較したところ、有り群が有意に高かった。年齢別、経験年数別、勤務年数別、職位別、最終学歴別による比較も行ったところ、全ての比較で有意差が認められた。 共同研究者：明神 一浩，上野 栄一，前川 哲弥
91.組織貢献意識尺度の信頼性・妥当性の検討	共著	平成 24 年 4 月	日本看護学会論文集：看護管理 (1347-8184)42 号 P.466-469	先行研究に基づき、組織貢献意識を構成する概念は「組織の目的達成」「専門職としての自律性の発揮」「組織変革への寄与」「責任意識を持った組織活動」であると考え、これら 4 概念を測定する質問紙原案(各概念 6 項目、計 24 項目)を作成した。その信頼性・妥当性について検討するため、350 床以上の総合病院 2 施設に勤務する看護師 471 名に試用した。回答の因子分析を行った結果、以下の 4 因子(計 14 項目)が抽出され、各項目の妥当性や尺度の信頼性に問題はないことが確認された。1)組織目標達成への積極性。2)組織の発展と自律性の発揮。3)組織変革への寄与。4)組織活動における責任意識。 共同研究者：近藤 やよい，藤本 ひとみ，上野 栄一，高間 静子
92.妄想のある統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーション技法	共著	平成 24 年 4 月	日本看護学会論文集：精神看護、42 号、P.137-140	妄想のある慢性期の統合失調症患者(30 代男性)と看護師(60 代男性)の対話場面を録音し、トランスクリプト表示した会話内容から妄想場面における看護師の対応とコミュニケーションの特徴を抽出した。妄想に関する 4 場面が抽出され、患者の妄想体験に看護師が対応していた各場面を分析した結果、「メタファー的な要素に相当する看護師の言葉」「表現の促しに相当する看護師の言葉」「焦点化に相当する看護師の言葉」の三つの技法の活用が明らかになった。看護師の言葉の特徴は、表現の促しや、感情の明確化であり、そこでは相槌を意図的に活用し、看護師は患者の視点に合わせて、妄想体験を否定しない態度に徹し、患者の感情

				表現を促していた。 共同研究者：一ノ山 隆司，舟崎 起代子，松浦 純平，上野 栄一，川野 雅資
93.精神臨床看護検討レポート (case18)(最終回) 病的体験の幻聴に対して患者の自己対処力を高めるアプローチ	共著	平成 24 年 12 月	臨床看護(0386-7722)36 巻 14 号 P.1900-1906	幻聴がある入院中の統合失調症患者 2 名(40 代前半男性、40 代後半男性)に対し、幻聴への対処力を高めるため心理教育的アプローチとしてビデオ学習、テキスト活用、社会生活技能訓練(SST)を段階的に実施し、その効果を陽性・陰性症状評価尺度(PANSS)を用いて検討した。その結果、幻聴に対する自己対処力が高まり、自己コントロールが可能となったことで、2 事例とも陽性症状に改善が認められた。 共同研究者：一ノ山 隆司，舟崎 起代子，村上 満，川野 雅資，上野 栄一
94.看護学生の禁煙支援力尺度の開発	共著	平成 24 年 12 月	福井大学医学部研究雑誌(1348-8562)13 巻 1-2 号 P.19-29	看護学生が禁煙支援を実施できる能力・態度・資質を測定し、禁煙支援者育成教育の客観的評価の指標として使用することが可能となる禁煙支援力尺度の開発と信頼性・妥当性を検討した。尺度を構成する因子として、「リーダーシップ力」「喫煙の有害性の説明能力」「コミュニケーション力」「企画立案力」「喫煙への態度」の 5 因子 18 項目が抽出された。禁煙支援力を構成する概念として研究者が考えていた尺度原案のうち、喫煙に関連した内容である、非喫煙維持行動、喫煙に関する意識、禁煙支援者としての役割への意識の計 40 項目のうち、項目分析で偏りが強かったことでその 6 割が削除された。項目分析で項目として残った内容は、喫煙に対する否定的態度の 3 項目と、禁煙支援の知識に関する 3 項目であった。保健指導力に関しては、予想していた 7 項目から最終的に「リーダーシップ力」「コミュニケーション力」「企画立案力」の 3 項目に絞られた。 共同研究者：上原 佳子，長谷川 智子，

				佐々木 百恵，北野 華奈恵，礪波 利圭，上野 栄一，石崎 武志
95.転倒・転落に対する看護師の意識変化　定期的なカンファレンスで看護計画の評価を行って	共著	平成 25 年 3 月	日本看護学会論文集：看護総合、43 号 P.263-266	カンファレンスで看護計画を評価することで、患者の転倒・転落防止に対する看護師の認識や行動は変化するかどうかを明らかにするため、病棟看護師 17 名を対象として調査を行った。週 1 回のカンファレンスで対象患者を 1 人決め、転倒・転落リスクや離床センサー「マッタ君」の必要性の検討に加え、看護計画の評価・修正を行った。カンファレンスを強化した後は、チームモニターとコミュニケーションの「認識」と「行動」が高まった。カンファレンスで看護計画の評価を行うことで、転倒・転落リスクのある患者の疾患や歩行状態、転倒・転落予防に対する患者自身の理解度などの情報を、それぞれの看護師が持ち寄り、情報を共有し、患者に対する共通認識を持つことができた。その上で、アイデアを出し合って患者に合わせた個別性のある転倒・転落予防対策を考え、その場でタイムリーに計画に反映させることで、どの看護師も統一した行動が取れるようになった。 共同研究者：三竹 香，竹島 裕恵，大谷 麻里子，中島 正喜，大森 貞，上野 栄一

96.ICU における PNS(Partnership Nursing System)の現状と課題	共著	平成 25 年 4 月	日本看護学会論文集: 看護管理 (1347-8184)43 号 P.195-198	新看護方式パートナーシップナーシングシステム(PNS)導入から 1 年が経過した ICU における現状と課題を明らかにするため、ICU 看護師 15 名を対象に、ケアに関する 6 項目、効率化に関する 7 項目、対人関係に関する 7 項目の質問紙調査を行った。また、自由記載をテキストマイニングソフトウェアを用いて分析した。「できる」「ややできる」と回答した割合は、患者ケアで平均 92%、効率化で 86%、対人関係で 86%であった。ペアで患者を受け持つことで協働関係が生まれていた。PNS はスタッフの精神的な負担の軽減、知識の共有、業務の効率化などに効果的であった。PNS の今後の課題は、信頼関係の確立や対等な関係を保つためのコミュニケーションスキルを養うことである。 共同研究者：片山 静，青池 智小都，北川 康代，桑原 勇治，蔵田 恭子，高山 裕喜枝，上野 栄一
97.糖尿病患者のセルフケア能力を測定するための尺度開発基本的概念枠組みの特徴について	共著	平成 25 年 4 月	日本看護学会論文集: 看護管理 (1347-8184)43 号 P.275-278	糖尿病患者のセルフケア能力を測定する尺度を開発するため、演繹的・帰納法的に抽出した 100 項目についてテキストマイニング手法を用いて、その特徴を明らかにした。セルフケア能力を測定する構成概念は、生活習慣(23 項目)、認知レベル(40 項目)、身体症状(13 項目)、精神-心理的側面(10 項目)、ソーシャルサポート(3 項目)、対処行動レベル(11 項目)の六つであった。単語レベルでの質問項目の特徴としては、「知る」「インスリン」「自分」「糖尿病」「足」「症状」「多い」「高血糖」「食品交換表」「低血糖」「薬」の使用頻度が高かった。糖尿病患者のセルフケア能力の評価は、認知レベルでの評価が特に重要であり、段階的に評価することが重要であることが示唆された。 共同研究者：上野 栄一，大西 みさ

98.片麻痺患者の日常生活における危険防止のためのコーピング行動の特徴　テキストマイニングによる分析	共著	平成 26 年 3 月	日本看護学会論文集: 看護総合 (1347-815X)44 号 P.138-141	A 県内のリハビリクリニックに通院する発症後 5 年以上経過した屋外歩行自立している片麻痺患者の日常生活における危険防止のためのコーピング行動の特徴について検討した。50 名の対象者に、敷居や段差のあるところ、平らな所、畳み上、階段の昇降時、ビニール素材の床、浴室内、雨の日道路の歩行時、信号機のある横断歩道の歩行時、履物の選択方法、人の多い場所、荷物を持っての歩行時に転倒しないためにとっているコーピング方法について尋ねる質問紙調査を実施した。有効回答数は 34 名(男性 23 名、女性 11 名)であった。テキストマイニング(TM)による分析の結果、危険防止のためのコーピング行動の特徴として歩行と手すりが抽出された。歩く、については「歩行時の工夫」「歩行時の心構え」「足元の確認」「歩き方」「麻痺側の意識」等のコーピング行動があった。手すり、については「階段昇降時の工夫」「家屋の改造」「生活場面」等のコーピング行動があった。 共同研究者：藤本 ひとみ, 高間 静子, 上野 栄一
99.EGFR 阻害薬治療を受ける大腸がん患者の QOL の経時的変化とその影響	共著	平成 26 年 4 月	日本看護学会論文集: 成人看護 II(1347-8206)44 号 P.113-116	大腸がん治療に用いられる EGFR 阻害薬は、副作用として皮膚障害が 80%以上の頻度で出現し、その出現と重症度は治療効果にほぼ比例するといわれている。今回、皮膚障害の出現が QOL に与える影響を明らかにするため、外来で EGFR 阻害薬治療を受けている大腸がん患者 21 例を対象に、皮膚疾患特異的 QOL 尺度(Skindex-16 日本語版)を用いた調査を行い、以下の結論を得た。1)皮膚障害の「ざ瘡」は QOL の感情領域に強い影響を及ぼす。2)皮膚障害の「爪囲炎」は QOL の症状領域に強い影響を及ぼす。 共同研究者：久保 博子, 木谷 智江, 中川 敦子, 藤田 弘子, 広田 法子, 金 祥恵, 冨永 知恵子, 上野 栄一

100.看護専門学校3年課程の看護教員集団の教師教育の実態 看護教員集団のグループインタヴュー分析より	共著	平成26年4月	日本看護学会論文集: 看護教育 (1347-8265)44号 P.260-263	A看護専門学校(都会に位置し規模が大きい)に所属経験のある看護教員6名と、B看護専門学校(郊外に位置し規模が小さい)に所属経験のある看護教員4名に対してそれぞれフォーカスグループインタビューを行い、「どのような教師教育をしているか」「どのような教師教育を受けているか」「教師教育に対する思い」の3点について聴取し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに準拠して分析を行い、カテゴリー化した。分析テーマは「看護教育に対して困難さを感じている看護教員と看護教員集団の特徴および教師教育の取り組みとその結果」とした。分析の結果、A校・B校とも以下の3カテゴリーが抽出された。1)発達段階にある教育。2)ケアリング的な教育。3)入職時の教員の姿の３つが抽出された。 共同研究者：梶谷 薫，北出 千春，石橋 千夏，松岡 小百合，上野 栄一
101看護専門学校の教師集団における教師教育の実態　テキストマイニングによるデータ分析から	共著	平成26年4月	日本看護学会論文集: 看護教育 (1347-8265)44号 P.264-267	A看護専門学校(都会に位置し規模が大きい)に所属経験のある看護教員6名と、B看護専門学校(郊外に位置し規模が小さい)に所属経験のある看護教員4名に対してそれぞれフォーカスグループインタビューを行い、「教師教育の現状とその思い」について聴取し、テキストマイニングソフトStudioを用いて単語の出現頻度を分析するとともに、単語間の共起関係について分析した。結果、A校・B校とも[学生][先生][言う][凄い]などの単語が頻出し、共起関係についてはA校で[学生][先生][自分]が多くの単語と共起関係にあり、B校では[人][凄い][学生]が多くの単語と共起関係にあった。詳細な分析の結果、両校ともに教師教育はプログラムされておらず、インフォーマルな同僚との関係によって教員が教師として成長していることがわかった。また、教師教育を阻む組織の特徴として、A校では派閥が存在する官僚主義的な組織の姿があり、B校では倫理的に問題となる管理者やハラスメントの存在があった。 共同研究者：北出千春，上野 栄一，梶谷 薫

102.背景別にみた看護学生の自己健康管理モニタリングの比較	共著	平成 26 年 6 月	富山大学看護学会誌(1882-191X)14 巻 1 号 P.81-90	本研究は、看護学生の自己健康管理モニタリング測定尺度を使用し、背景別に比較し教育的示唆を得ることを目的とした。対象は看護学生 1,056 名。「就学態度の自律性」、「対人関係の健全性」、「思考の健全性」、「食生活の健全性」、「対処行動能力」、「身体変調の注意力」、「予防行動力」の 7 つの下位概念からなる 30 項目の質問紙調査表を使用した。結果、「性別」、「年齢」、「学年」、「学校種別」、「家族との同居の有無」、「アルバイトの有無」、「平均睡眠時間」、「運動習慣」、「健康への気づかいの程度」に特徴的な有意差が認められた。自己健康管理できていない看護学生に対し、健康管理できるように、まず自分の状況・状態を捉えられているかを知ること、すなわちモニタリングできることが自己健康管理する上で必要であり、本研究は、対象の背景や生活状況と自己モニタリングとの関係を明らかにした。今後、自己健康管理指導時の教育的資料となる。 共同研究者：成瀬 早苗，上野 栄一
103.看護実践レポートからみる、私たちの看護の容″(かたち)″	共著	平成 26 年 9 月	看護実践の科学(0385-4280)39 巻 10 号 P.55-62	ナラティブを取り入れた看護実践レポートから Benner の看護実践領域分類およびテキストマイニングを用いて看護の「容(かたち)」を表出した。富山市民病院において平成 17 年から 2010 年の 5 年間に提出された実践レポート約 200 題のうち、患者への直接的な看護実践以外のテーマのもの(個人の思い、自己啓発、スタッフ育成、看護管理など)を除いた 187 題を分析対象とした。Benner が看護師へのインタビューを用いて抽出した臨床実践内容の 7 領域は、1)援助役割、2)教育とコーチングの機能、3)診断とモニタリングの機能、4)容態の急変を効果的に管理する、5)治療処置と与薬を実施し、モニターする、6)医療実践の質をモニターし、確保する、7)組織能力と役割遂行能力であった。提出されたレポートではどの領域の看護実践が看護師の心に留まる実践としてあげられているか分類した。一番多くあげられていたのは(1)援助役割 118 題、次いで(2)教育とコーチングの機能 46 題、(3)診断とモニタリングの機能 12 題などであった。 共同研究者：神保 浩子，上野 栄一，八塚 美樹

104.看護学生の段階別コミュニケーション能力評価尺度の開発	単著	平成 26 年 9 月	ヘルスカウンセリング学会年報 (1880-4543)20 巻 P.59-69	総合病院 5 施設の看護師 426 名にアンケートを行い、「看護学生に求めるコミュニケーション能力」(4 つの質問)について自由記述で回答を求め、その結果をもとに「看護学生に必要なコミュニケーション能力」178 項目を抽出し、看護学生用の質問紙原案を作成した。そして、この原案による調査を看護系大学 5 校の学生 372 名に実施し、得られた回答をもとに、信頼性・妥当性の検証と因子分析(主因子法・プロマックス法)を行った。結果、『看護学生の段階的コミュニケーション能力評価尺度』を構成する因子として以下の 9 因子が抽出され、本尺度の信頼性・妥当性は高いことが確認された。1)積極的傾聴。2)アサーション。3)音響学的配慮。4)係わり。5)人間尊重。6)観察。7)感情コントロール。8)フォーカシング。9)言語化。 （単独）上野 栄一
105.在宅片麻痺療養者の自律度測定尺度の開発	単著	平成 26 年 9 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)37 巻 4 号 P.23-30	【目的】本研究の目的は,在宅で生活する片麻痺療養者の自律度測定尺度を作成し,その信頼性と妥当性を検討することである。【方法】在宅片麻痺療養者の自律度尺度試作案は,質問 46 項目のリッカートスケールとした。対象者 145 名に面接法で実施した。【結果】主因子法プロマックス回転にて,因子分析を実施し,第 1 因子は「周囲に支えられた在宅生活」,第 2 因子は「在宅で前向きに生きる意欲」,第 3 因子は「在宅における安全な生活動作の工夫」の計 16 個の質問項目を採用した。信頼性は Cronbach の α 係数 0.783 であり,内的整合性が確認できた.【結論】本尺度は,在宅で日常生活を送る片麻痺療養者自身が短時間に自己評価できる尺度であり,療養者自身の判断材料となる。また,主介護者から自律を尊重されるきっかけとなり得る。 担当部分：統計解析と考察 共同研究者：横山 孝枝, 上野 栄一

106.胃瘻患者における在宅介護の成功要因の検討　二者の介護を行う男性介護者の語りから	共著	平成 26 年 12 月	富山大学看護学会誌(1882-191X)14 巻 2 号 P.159-171	本研究ではアルツハイマー型認知症の妻を介護しながら、パーキンソン病で胃瘻造設を行った実母を介護する男性介護者のケースに着目する。この二者の介護を行う男性介護者が胃瘻管理を含め介護を前向きに取り組んでいる要因は何かを検討し、その要因を抽出することを目的とした。本研究では面接調査方法を用い、半構造化インタビューによりデータ収集を行った。その後、「KH Coder」を使用し内容分析を行った。今回は共起ネットワーク分析と対応分析により質的データを可視化した。結果、(1)介護と死を自分も含めた人間の通る道としての受容。(2)被介護者への感謝の思いや経済的基盤の安定。(3)制度の利用に加え、医療従事者との関わりの多さ。(4)被介護者の状態が落ち着いていること。(5)自分の殻に閉じこもらず、自ら他者に働きかけていく介護者の特性。以上 5 要因が抽出できた。これらの結果から、医療者には介護者が孤立しない配慮が必要である。 本人担当部分：統計解析 共同研究者：杉島 優子，上野 栄一
107.年次看護学生の行動規範と職業的アイデンティティの関連	共著	平成 27 年 3 月	日本看護学会論文集: 看護教育(1347-8265)45 号 P.75-78	A 看護専門学校の 3 年生で、全ての臨地実習を終えた 84 名を対象に、西山らの『行動規範の自己評価表』(以下 A)と、藤井らの『医療系学生における職業的アイデンティティ尺度』(以下 B)を用いた調査を行い、両指標の相関性について検討した。結果、A の下位因子[実習態度の向上]と B の下位因子[医療職の選択と成長への自信][医療職として必要とされることへの自負][社会への貢献の志向]との間に有意な相関が認められた。また、A の下位因子「医療者としての人格形成」と B の下位因子[医療職観の確立]との間に有意な相関が認められた。 共同研究者：小坂 美映子，上野 栄一

108.看護師が体験する造血幹細胞移植を受ける患者・家族への困難な看護介入 自由記載内容の分析から	共著	平成 27 年 3 月	滋賀医科大学看護学ジャーナル (1348-7558)13 巻 1 号 P.23-26	本研究の目的は、移植を受ける患者・家族への困難な看護介入について看護師の体験の実際を明らかにし、看護のあり方について検討することである。調査票に、移植看護に携わるなかで患者・家族への看護で困難だった出来事について記入を求める自由記載欄を設け調査を行った。調査票は 251 部配布し、192 部の回収(回収率 76.5%)であった。そのうち、自由記載欄への回答のあった者は 37 名(回答率 14.7%)であった。自由記載文は約 4255 文字で、看護師 1 人につき約 115 文字であった。分析の結果、看護師が体験する移植を受ける患者・家族の困難な看護介入として、【移植と向き合い揺れ動く患者の精神的支援】、【医師との協働にジレンマを抱く】、【移植に対して後悔を残さないための意思決定支援】、【患者-家族関係の調整を図る援助】、【合併症と副作用に対する患者の理解とその対応】、【移植後の急変時における患者の希望の事前確認】、【ADL が低下した状況下での移植への介入】が明らかとなった。 共同研究者：田中 智美，瀧川 薫，上野 栄一，木藤 克之，藤野 みつ子
109.造血幹細胞移植を選択する患者への看護師の意思決定支援と影響要因　医師からの移植説明時における看護援助の実際	共著	平成 27 年 3 月	滋賀医科大学看護学ジャーナル (1348-7558)13 巻 1 号 P.27-30	本研究の目的は、移植を選択する患者への意思決定における看護師の支援の実態と、その影響要因を明らかにすることである。同意の得られた病院の看護師に対して質問紙調査を実施した。調査内容は、属性以外に移植の説明時における看護援助や心理・社会的支援に関する看護援助について調査を行った。調査票は 251 部配布し 192 部回収(回収率 76.5%)された。そのうち有効回答数は 189 名(75.3%)で、これらを分析対象とした。その結果、医師からの移植の説明時における看護援助では、【情報提供と医師との連携】【説明内容の理解と精神的支援】【権利と意思の尊重】の 3 つの因子が抽出された。また、移植を選択する患者に対する看護師の意思決定支援は、卒後教育における継続的な教育や学習経験が必要であることが示唆された。 共同研究者：田中 智美，瀧川 薫，上野 栄一，木藤 克之，藤野 みつ子

110.フットケア外来における糖尿病指導効果に関する研究,段階的なセルフケア評価質問紙(GSEQ)と間食に焦点をあてた解析から	共著	平成27年3月	日本糖尿病教育・看護学会誌(1342-8497)19巻1号 P.5-13	本研究の目的は,フットケア外来に段階的なセルフケア評価質問紙(GSEQ)を取り入れ,フットケアに加え間食を減らすための情報提供を行い,間食に焦点をあてた解析から血糖コントロールや足病変の経時的変化を検討することである.2型糖尿病でフットケア外来に通院し研究の同意を得た外来患者120名に,初回にGSEQで情報収集と低値のセルフケア項目についての情報提供を同時に行い,指導6ヵ月後,1年後,2年後に血糖コントロールと足の評価をt検定(paired,t-test),Wilooxon符号付順位検定で分析した.結果,GSEQで最も点数が低く問題のある項目は「間食」であった,間食3群(A:毎日間食する,B:時々する,C:全くしない)の比較でみると,C群がHbA1c,インスリン量,足病変(p<0.001)と振動覚閾値VPT(p<0.ODで.最も改善した.以上により,フットケア外来で血糖コントロールと足病変を改善するには,フットケアとCSEQを初回に行い,間食を減らすための情報提供を同時に行っていくのは有効であることが示唆された. 共同研究者：大西 みさ, 上野 栄一
111.PNSを取り入れたA病院におけるリーダー行動と、職位、経験年数、リーダー経験年数との関連	共著	平成27年4月	日本看護学会論文集: 看護管理(1347-8184)45号 P.11-14	勤務帯リーダー役割自己評価尺度を用いてアンケート調査を行い、パートナーシップナーシングシステム(PNS)におけるリーダーの実際の行動を調べた。対象はPNSを取り入れた福井大学医学部付属病院の勤務帯リーダー経験のある病棟看護師14名で、全員から回答が得られた。職位に就いている看護師は、「業務遂行に必要な内容をメンバーが学習できる機会をつくる」「援助方法に関するメンバーとの話し合いを推進する」の自己評価が高かった。看護師経験年数とリーダー経験年数との間に相関関係があったのは、「病棟全体を見守り、先を見通しながら業務を進める」「病棟状況の変化に柔軟に対応する」であった。以上より、リーダーとして行動している内容が明らかになった。 共同研究者：, 三竹 香, 大森 貞, 上野 栄一

112.PNS を取り入れた A 病院における理想のリーダー像、実際の行動、理想のリーダー像に近付くための課題	共著	平成 27 年 4 月	日本看護学会論文集：看護管理 (1347-8184)45 号 P.15-18	パートナーシップナーシングシステム(PNS)を取り入れた福井大学医学部付属病院の病棟看護師 18 名を対象として、リーダーの認識についてアンケート調査した。調査内容は属性、PNS における理想のリーダー像、実際の行動、理想のリーダー像に近づくための課題で、アンケート用紙に自由に記述させた。看護師経験 10 年目以上の看護師はタイムマネジメントできるリーダーを理想とし、実際の行動にもつながっていた。看護師経験 10 年目未満の看護師は業務の進捗に関しての役割を果たすリーダーを理想とし、実際に行動していた。リーダーの理想像に近づくには看護師経験に共通して努力と経験を課題とし、実戦から経験を重ねるという自分自身の努力が求められていると認識していた。 共同研究者：前田 弥生，三竹 香，大森 貞，上野 栄一
113.テキストマイニングによるアルコール依存症者の発言内容の分析	共著	平成 27 年 4 月	日本看護学会論文集：精神看護 (1349-2985)45 号 P.215-218	A 病院では 2 週間に 1 回、アルコール外来を開設し、認知行動療法を主とした診察に加え、仲間同士の自助グループを通して断酒生活を支援する外来アルコールミーティング(ミーティング)を行っており、今回、ミーティングに参加している患者がどのような思いを抱いているのかを明らかにすることを目的に、平成 23 年 4 月～25 年 12 月のミーティングに参加した患者、延べ 630 名の発言内容を、テキストマイニングにより分析した。単語分析の結果、「自分」という言葉の出現頻度が 3 番目に多く、「自己中心的な自分」「自分の責任」「自分の意志で」「自分を振り返る」「自分にとって」など自己を意識した発言が聞かれ、断酒への強い意志とともに、自信がない「自分」が存在し、断酒することは自分一人では困難であるため、そうした「自分」を支えるため、「仲間」「家族」「自助グループ」の存在があることが窺えた。 共同研究者：藤嶋 裕美，山本 育子，山口 達也，上野 栄一

114.看護学生の自己健康管理モニタリング測定尺度の開発と信頼性・妥当性の検証	共著	平成 27 年 6 月	日本看護医療学会雑誌(1345-2606)17 巻 1 号 P.33-42	【目的】本研究は、看護学生の自己健康管理モニタリング測定尺度を開発し、その信頼性・妥当性を検討する。【対象・方法】看護学生 1,056 名を対象として、121 項目 5 段階のリッカート法質問紙調査を行った。【結果】主因子法プロマックス回転にて因子分析を行った結果、7 因子 30 項目の因子解が抽出され、「就学態度の自律力」、「対人関係の健全力」、「思考の健全力」、「食生活の健全力」、「対処行動能力」、「身体変調の注意力」、「予防行動力」と命名した。全体の Cronbach α係数は.914、各因子は.705～.875 であり、G-P 分析・I-T 分析、基準関連妥当性も検討し、信頼性・妥当性は確認できた。【結論】本尺度は簡便に測定でき、繰り返し評価することで健康管理の指標として活用できる。今後は、看護以外の学生にも使用できる尺度を検討し、青年期における自己健康管理能力を向上させる一助としていく必要がある。 共同研究者：成瀬早苗、上野栄一
115.福井大学医学部附属病院で開発された PNS の効果　導入 1 年後の病棟看護師の認識	共著	平成 28 年 3 月	福井大学医学部研究雑誌(1348-8562)16 巻 1 号 P.37-46	福井大学医学部附属病院では,新看護方式 PNS を平成 21 年に消化器外科病棟で開発し 2011 年 4 月からは全病棟で実施している。今回,消化器外科病棟以外の病棟看護師 10 名に PNS について,自由に語ってもらい,「PNS」の効果を検証し,今後の発展性について検討した。分析はテキストマイニング自然言語処理した。思う,良い,PNS,人,1 人,いう,ペア,やる,聞くなどの単語が上位を占め,PNS の良さ,聞く態度,自分や人に関する関心度が高まっていた。これは PNS が自己に関心を向けさせ,人に関心を持たせ,更に自己成長を促すきっかけとなっていた。更に,ことばのネットワークでは,PNS,ペア,自分,人,良いの特徴が示され PNS のポジティブな効果が示されていた。PNS 導入 1 年目の効果として,常に相互作用が促進され,看護師のコンピテンシーがお互いに向上することが示唆された。 共同研究者：松村 愛都, 清水 由加里, 橘 幸子, 上野 栄一

116.看護学生の子ども理解の程度と小児看護学実習後の自己評価との関連	共著	平成 28 年 4 月	日本看護学会論文集: 看護教育、46 号 P.51-54	看護学生の子ども理解の程度と小児看護学実習における自己評価の関連を明らかにすることを目的に、小児看護学実習を終えた A 看護専門学校(3 年課程)3 年次生 94 名へ、西原らの「子ども理解の評価尺度」、A 看護学校の小児看護学実習評価表に準じた自己評価表(17 項目)を用いた質問紙調査を行った。その結果、「子ども理解の評価尺度」の 4 下位尺度のうち、【身体生理の特徴】は自己評価表 17 項目のうち 15 項目と相関が認められ、「患児の成長・発達に基づいた身体的側面が把握できた」自己評価と最も関連していた。その他、【知的・情緒・社会機能の発達】は自己評価の 11 項目と、【健康障害のある子どもの体験】は 10 項目、【自律性】は 7 項目の自己評価と、それぞれ相関が認められた。中林美寿々，上野 栄一
117.成人看護学演習でエンゼルケア・エンゼルメイクを取り入れた学習の構造と特徴　テキストマイニングの解析から	共著	平成 28 年 8 月	ホスピスケアと在宅ケア(1341-8688)24 巻 2 号 P.84-91	在宅での死が望まれながら、在宅死の割合は 2013 年(平成 25 年)12.9%と多いとは言えない。その理由として核家族の増加による社会構造の変化があげられる。家族の看取りや死後の対応に関わった学生は殆どいない。そこで終末期看護に人形を用いたエンゼルメイクを取り入れる教育機関が増えてきている。本研究は、成人看護学演習で 80 人の看護学生に行ったエンゼルケア・エンゼルメイクの学びの構造と特徴を明らかにする目的で授業感想からの学びをテキストマイニングで解析した。解析した文章は、総行数 935、平均行長(文字数)24.2、平均文長(文字数)1333、延べ単語数 8760、単語種別数 1366 であった。単語頻度解析では、エンゼルメイク(393)、家族(313)、思う(221)などであり、係り受け頻度解析では、「メイク-行う」(24)、「意向-沿う」(18)、「一緒-行う」(16)、「大切-感じる」(15)などが抽出された。ことばのネットワーク分析では、「エンゼルメイク」と「家族」の 2 つの KeyWords からネットワークが繰り広げられていた。「エンゼルメイク」は実際に行った事柄に関する言葉が繋がっていた。よって、エンゼルメイクを実際に実施することにより「エンゼルメイク」を「家族」と「行う」ことで「つながり」を感じ、「意向」に「沿う」、「(その)人らしさ」を慮ることに思考が広がり、「家族」が「死」を「受容」、「受け入れる」ことに繋が

				ることが示唆された。 共同研究者：原 元子，上野 栄一
118.高血圧症患者の日常生活行動における自己管理の実態調査	共著	平成 28 年 9 月	看護実践学会誌 (1882-2428)29 巻 1 号 P.8-18	本研究は高血圧症患者の日常生活行動における自己管理の実態を明らかにすることを目的とした。本態性高血圧症患者 174 名を対象に食事・運動・ストレス・服薬・飲酒・喫煙の 6 領域に関する自己管理について「高血圧症患者の日常生活行動自己管理尺度」を用いた質問紙調査を実施した。その結果、領域全体の平均得点で自己管理が出来ていると捉えられる基準の 3 点以上であったものは、領域毎にみると服薬管理のみであった。さらに、自己管理が困難な日常生活行動としては、食事管理では食塩制限・肥満予防に向けた行動、ストレス管理では入浴時の温度変化に配慮する行動、服薬管理では薬を飲み忘れない環境作りを行うこと等があった。性別においては、男性は女性よりも得点が低く、身体を擁護的に見ることや細かな配慮ができにくいことが示唆された。年齢別では 65 歳未満群の方が 65 歳以上群よりも管理得点が低く、ライフサイクル上の役割の大きさが影響していると考えられた。職業別においては、有職者が無職者よりも得点が低い実態がみられた。本研究結果は対象の特性に応じた自己管理への援助に活用できることが示唆された。 共同研究者：坪田 恵子，稲垣 美智子，上野 栄一
119.2 年課程昼間定時制の看護学生のレジリエンスに関する実態調査(第二報)	共著	平成 29 年 3 月	日本看護学会論文集: 看護教育 (1347-8265)47 号 P.31-34	准看護師として仕事を行いながら学業や子育てを両立させている 2 年課程昼間定時制の看護学生のレジリエンス(「ストレスフルな体験をどのように受け止めるか(落ち込む深さ)、どのように立ち直るか(跳ね上がる力と時間)の一連の回復する力」)の実態を明らかにすることを目的に、A 看護専門学校の 26・27 年度在学生(1～3 年生)を対象に「二次元レジリエンス要因尺度」を用いた質問紙調査を行い、253 名より有効回答を得た。その結果、当該看護学生のレジリエンスは、社会人経験年数、准看護師経験年数との関連性はなく、「2 年生」「30 代」で低い傾向がみられた。 共同研究者：石田 雪子，河西 惠子，荒川 由紀美，矢部 由香里，松田 由加里，島崎 真理子，中井 秀成，野城 亜弥子，島田 英子，平山 園子，上野 栄二

120.看護学生を対象とした助産外来見学実習の学び　学生のグループインタビューを通して	共著	平成 29 年 3 月	日本看護学会論文集：看護教育(1347-8265)47 号 P.107-110	母性看護学実習の助産外来見学実習における学生の学びを明らかにすることを目的に、母性看護学実習を終了した看護大学生(4 年生)15 名を対象にグループインタビューを行った。内容分析の結果、助産外来見学実習における学生の学びは、学生が見学した健診場面と学生の理解の 2 つの側面から構成されており、学生は妊婦健診、生活指導、妊婦や家族の心理・社会的側面を見学することで、助産外来の特徴や助産師の指導技術に対する理解を深めていることが窺えた。 共同研究者：森兼 眞理，岡山 真理，山名 香奈美，上平 悦子，上野 栄一
121.パートナーシップがケーススタディ指導にもたらす効果と課題	共著	平成 29 年 7 月	看護展望(0385-549X)42 巻 8 号 P.82-87	1 人の学生に対し 2 人の教員で指導するパートナーシップが、ケーススタディ指導にもたらす効果を明らかにすることを目的に、A 看護専門学校が導入したパートナーシップによるケーススタディ指導に関わった教員 9 名へ半構成的面接(1 名につき 2 回)を行うとともに、学生 29 名へ自由記述を含む質問紙調査を行った。教員への半構成的面接の逐語録をグラウンデッドセオリー法を用いて分析した結果、パートナーシップによるケーススタディ指導の取り組みとして、【得意な分野を引き受ける】【頼れるパートナーシップ】【いいとこ取りの論文作成】【立ち止まってみるケーススタディ指導】の 4 カテゴリーからなる《パートナーシップにより生成された効果》、【論文作成過程を深めたい】【自己研鑽の場としたい】【論文の仕上がりを懸念する】【協働することへの不安が生じる】の 4 カテゴリーからなる《論文完成度の向上を願う》、【2 人だからこそ出てきた困りごと】の《パートナー運営上の課題》の 3 コアカテゴリーが抽出された。また、学生への質問紙調査の自由記述を内容分析した結果、パートナーシップによる指導で学生が感じたこととして、「教員役割の有効活用」「連携による時間の有効利活用」のサブカテゴリーからなる【合理的な学習を支える環境】、「学生の思考過程を刺激」「作成過程の心理的支援」からなる【多様な視座による論文完成度の高まり】、「教員間の連携不足」の【パートナーシップの未熟性】の 3 カテゴリーが抽出された。

				共同研究者：坂中 善恵，小山 直美，上野 栄一
122.口腔ケアについての意見に関する実態調査	共著	平成 29 年 7 月	日本精神科看護学術集会誌 59 巻 2 号 P.341-344	対象は北陸 3 県の精神科病院に勤務する看護師で、口腔ケアについての意見に関する実態調査を実施し、132 名について精神科看護師が精神障がい者へ向けた口腔ケアについてどのようなことを考えているのかを明らかにするために、精神科病棟看護師の口腔ケアに対する意見について質問紙調査を行った。調査票は 132 部が回収され回収率は 79.1%であった。口腔ケアの有効性や必要性、看護師の間での業務のばらつきや、不十分な現状、方法がわからない、という迷いや悩みなどにまとめられた。 共同研究者：西田 実紗子，上野 栄一
123.論文表題におけるがん看護研究と対がん政策との関連テキストマイニングを用いた過去 46 年間の時代的変遷の分析	共著	平成 29 年 12 月	日本看護医療学会雑誌(1345-2606)19 巻 2 号 P.60-71	本研究の目的は、がん関連看護論文において、1972 年から 2017 年の研究動向を探ることである。医学中央雑誌(Web 版)の表題に使用された語句の傾向や対がん政策年代別の特徴等について、テキストマイニングの手法を用いて分析した。結果、12,030 件の論文が検索された。対がん政策以前は「術前後の看護」、第 1 次対がん 10 か年総合戦略は「看護ケア」、第 2 次対がん克服新 10 か年総合戦略は「QOL」、第 3 次対がん 10 か年総合戦略は「化学療法」、がん研究 10 か年戦略では「退院支援」が出現していた。研究内容は、6 カテゴリーに分類された。大学等所属研究者は「がんの包括的研究」、看護師は「患者との関わり」を主な研究テーマにしていた。【考察】がん看護の研究テーマは、対がん政策と関連し変遷しており、家族を含めた終末期がん患者への看護はがん看護研究の中でも重要な位置を占めてきている。臨床看護師と大学等研究者では、研究テーマの関心が異なっている。 共同研究者：李 慧瑛，下高原 理恵，深田 あきみ，新橋 澄子，緒方 重光，上野 栄一

124.1 泊 2 日で白内障手術を受けた患者の退院後の思い　テキストマイニングを用いての分析	共著	平成 30 年 3 月	日本看護学会論文集: 慢性期看護 (2188-6466)48 号 P279-P282	1 泊 2 日で白内障手術を受けた患者の退院後の思いをテキストマイニングを用いて明らかにすることを目的に、A 病院で当該手術を受けた患者 14 名(男性 8 名、女性 6 名、平均年齢 75.5 歳)へ半構成的面接を行った。インタビューの回答全体に対する単語頻度解析では、名詞では「メガネ」が頻出しており、退院後に 24 時間装着する必要がある保護メガネへの思いが強いことが窺え、装着指導は守られているものの、寝ている間に外れた経験を多くの者が有していた。メガネの装着に加え、点眼、洗面に患者は負担を感じており、看護師は医師と連携して個別性を取り入れた退院指導を行う必要があると考えられた。 入院期間が 20 年以上におよび、かつ 10 年以上の長期間を確率室で過ごしている自閉症スペクトラム(ASD)の 40 歳代男性患者の行動拡大に関する看護ケア内容をテキストマイニングの手法を用いて分析した。知能指数(IQ)62、医療保護入院となっていた。Z 病院 B 病棟所属の現在のプライマリーナースと、4 年前から継続的に対象患者の看護ケアを担っている看護師 5 名(男性 1 名、女性 4 名、平均年齢 47.8 歳)にインタビューガイドを用いた半構成的面接調査を実施した。対象者の発言内容の総抽出語数は 6461 であり、単語種別は 1416 であった。分析の結果、看護師は問題点に注目するのではなく、評価点に注目しポジティブフィードバックを行っていた。対象患者に伝わりやすいシールでフィードバックしたことが、ポジティブな行動の強化につながり、結果とした他害行動の減少と行動拡大につながったと考えられた。安全を守るため、リスクアセスメントの視点で、状況に応じた声かけを行っていた。 共同研究者：多田 徹，山本 亮成，中川 理絵，金森 政枝，上野 栄一

125.地域で暮らす精神障害者のスピリチュアリティ尺度の開発	共著	平成30年3月	聖マリア学院大学紀要(2185-0054)9巻 P.3-9	本研究の目的は、パイロットスタディとしての精神障害者用のスピリチュアリティ尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討することであった。 因子分析の結果、【生活の工夫と楽しみ】【つながり感と希望】【周囲との人間関係】【生きることの意味感】【理解者の存在】の5つの因子を抽出し,最終的に21項目となった。FACIT-Spと精神障害者用スピリチュアリティ尺度との相関係数はr=0.76 (p<.001)であり、Cronbachのα信頼性係数はα=0.95であった。このことから、精神障害者用スピリチュアリティ尺度の信頼性と妥当性が確認された。 共同研究者：安藤満代，川野 雅資，上野 栄一，八谷 美絵
126.日本の公衆衛生研究の歴史的概観	共著	平成30年3月	鹿児島大学医学部保健学科紀要(1346-2180)28巻1号 P.9-19	日本の公衆衛生に関する原著論文について，施策等時事的事項との関連を分析し，1970年から2017年までの研究動向を明らかにすることである。医学中央雑誌（Web版）に掲載されている原著論文のうち，“公衆衛生”をキーワードとして検索された論文を対象とし，表題に使用された語句の傾向，年代別の推移と特徴語について，テキストマイニングの手法を用いて分析した。結果、英文を除く298,898件の論文が検索された。公衆衛生関連の論文数は経年的に増えており，特に2000年前後を境として急増していた。表題に使用される頻出語上位は，「検討」「1例」であった。係り受け頻度解析で上位の「有用性－検討」は，診断や治療に関する研究であり，「現状－課題」では，保健，看護，リハビリテ―ションに関する研究が多く見られた。年代別の特徴語では，1970年代以前は「カドミニウム」「大気汚染」「公害」，1980年～1990年代は「二重盲検比較試験」「臨床評価」「予防接種」「集団検診」，2000年代は「患者」「家族」「QOL」「高齢者」，2010年代は「東日本大震災」と「1例」「課題」が出現していた。結論：研究動向は社会的背景や施策の影響を受けており，2000年頃の治療からQOLへと舵が切られた時期が，公衆衛生研究の転換期と考えられる。病院完結型医療から地域包括ケアへと移行する過程が，研究内容にも反映されている。 共同研究者：下高原 理恵，李 慧瑛，

				峰 和治，西本 大策，緒方 重光，上野 栄一
127.長期隔離処遇の自閉スペクトラム症患者の行動拡大に向けたアプローチ　テキストマイニングによる看護ケア内容の分析	共著	平成 30 年 4 月	日本看護学会論文集：精神看護 (1349-2985)48 号 P.63-66	入院期間が 20 年以上におよび、かつ 10 年以上の長期間を確率室で過ごしている自閉症スペクトラム(ASD)の 40 歳代男性患者の行動拡大に関する看護ケア内容をテキストマイニングの手法を用いて分析した。知能指数(IQ)62、医療保護入院となっていた。Z 病院 B 病棟所属の現在のプライマリーナースと、4 年前から継続的に対象患者の看護ケアを担っている看護師 5 名(男性 1 名、女性 4 名、平均年齢 47.8 歳)にインタビューガイドを用いた半構成的面接調査を実施した。対象者の発言内容の総抽出語数は 6461 であり、単語種別は 1416 であった。分析の結果、看護師は問題点に注目するのではなく、評価点に注目しポジティブフィードバックを行っていた。対象患者に伝わりやすいシールでフィードバックしたことが、ポジティブな行動の強化につながり、結果とした他害行動の減少と行動拡大につながったと考えられた。安全を守るため、リスクアセスメントの視点で、状況に応じた声かけを行っていた。 共同研究者：宮崎 宏一，山本 浩之，山口 達也，上野 栄一
128.A 看護専門学校における社会人基礎力育成の課題　基礎看護学実習 III 前後の社会人基礎力の変化より	共著	平成 30 年 7 月	看護実践の科学 (0385-4280)43 巻 8 号 P.60-65	新卒看護師に求められる社会人基礎力の実態、および看護学生の社会人基礎力の現状を把握することを目的に、B 病院の病棟勤務で入職 5 年目以上の看護師 115 名へ新卒看護師および学生に期待する社会人基礎力などについて、A 看護専門学校 2 年生 38 名へ調査時時点で身についていると感じる社会人基礎力および今後身につけたい社会人基礎力について、それぞれアンケート調査を行った。その結果、経済産業省が示した社会人基礎力を構成する 12 の能力要素のうち、看護師に高く求められているのは「主体性」「傾聴力」「規律性」で、新卒看護師、看護学生に共通して不足しているのは「創造力」であることが分かった。また、看護学生 10 名の基礎看護学実習 III 前後の社会人

				基礎力に対する自己評価を比較、検討した結果、実習後に12の能力要素中7つの能力要素で中央値が上昇し、「主体性」「計画力」「創造力」で有意差を認めた。 共同研究者：多喜 早苗，藤井 貴子，上野 栄一
129.精神科病棟看護師の精神障害者へ向けた口腔ケア行動意図尺度の開発	共著	平成30年9月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)41巻4号 P.665-674	【目的】本研究の目的は、精神科病棟看護師の精神障害者へ向けた口腔ケア行動意図尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することである。【方法】精神科病棟看護師の精神障害者へ向けた口腔ケア行動意図尺度施策案は、質問72項目のリッカートスケールとした。対象者363名に質問紙法で実施した。【結果】主因子法プロマックス回転にて因子分析を実施し、第1因子は【社会性獲得へむけた教育】、第2因子は【援助的関係に基づく口腔疾病予防】、第3因子は【継続的ケア遂行のための柔軟な対応】、第4因子は【相互の安全確保】と命名し、4因子、42項目が抽出された。信頼性はCronbachのα係数。967であり、内的整合性が確認できた。【結論】本尺度は、精神科病棟看護師が入院中の精神障害者に向けて口腔ケアを実施する際の行動意図を自己評価できる尺度であり、質向上のための基礎資料となる。 共同研究者：西田 実紗子，上野 栄一
130.短時間仮眠の実施が看護学生の眠気と睡眠への関心に与えた影響	共著	平成31年2月	日本看護学会論文集：看護教育(1347-8265)49号 P.11-14	3年課程のA看護専門学校の3年生38名と1年生40名のうち同意を得られた学生を対象に、昼食後15分の短時間仮眠を実施し、前後の睡眠調査・午後の眠気の調査を実施した。眠気の評価尺度はvisual analogue scale(VAS)を用いた。学生に研究の目的・方法・参加の自由等を説明し、予告期間に短時間仮眠を平日の各5日間実施した。短時間仮眠の参加状況は1日平均18.6人(参加率23.8%)であった。睡眠調査の回収率は32%で、有効回答率は14%であった。全体的には午後の眠気のVASは軽減した。各学年で5日間の実施をしたが、4日以上参加している学生の午後の眠気のVASは軽減しているが、参加が1から3日の参加学生のVASは軽減していなかった。日頃より睡眠負債がある場合、短時間仮眠では午後の眠気に繋がらない可能性があることが示唆された。学生に睡眠調査・短時間仮眠を体験してもらうことは、睡眠への

				教育的関わりに関心を向ける機会となった。 共同研究者：井上 くるみ，竹中 優子，上野 栄一
131.地域高齢者の楽しみと張り合い	共著	平成31年3月	看護実践学会誌(1882-2428)31巻2号 P.35-47	目的:地域高齢者の楽しみと張り合いの関連要因を検討し、一人暮らしと家族同居の相違を明らかにすること。方法:地域高齢者61名を対象に、自己記入式質問紙調査を実施した。55部を分析対象とし、量的データは統計的分析、質的データはテキストマイニング(TM)を用いて分析した。結果:回収は55部(回収率90.2%)で、すべてが有効回答であった。一人暮らし群は家族同居群と比較して楽しみと張り合いは、共に一人暮らし群が有意に低かった。影響要因を検討すると、楽しみでは、一人暮らし群は食事(内容)、家族同居群は、趣味の外出頻度、睡眠、筋骨格系疾患が抽出された。張り合いでは、一人暮らし群では抽出されず、家族同居群では睡眠、運動が抽出された。結論:一人暮らし群と家族同居群の楽しみと張り合いの比較から、一人暮らし群は楽しみと張り合いが低く、特に張り合いは低いだけでなく、張り合いがないことでネガティブな思いを持っていることが明らかになり、支援の必要性が示唆された。 共同研究者：成瀬 早苗，加藤 真由美，上野 栄一
132.穿刺困難患者に対するシャントカルテの効果	共著	平成31年3月	日本看護学会論文集: 慢性期看護(2188-6466)49号 P.319-322	A病院人工透析センターでは、穿刺時に独自のシャントスケールを用いてシャント評価を行っている。評価の技術にスタッフ間で大差はないが、触診や視診で読み取った情報は主観的で他者との共有は難しく、個々の穿刺技術や知識・経験の違いから穿刺トラブルにつながることがある。またシャント血管への穿刺は、血腫をつくったり、シャントの狭窄や閉塞につながる危険性があるため、スタッフは不安やストレスを抱えている。特に穿刺困難な患者ではスタッフの心理面への負担は大きいと考えられる。そこで、患者個々のシャントの特徴を示したカルテ(シャントカルテ)を作成して情報を共有することで、スタッフのシャントに対する知識や技術が向上し、穿刺トラブルの減少や穿刺に対する不安の軽減につながるのではないかと考え、実施した。シャントカルテには基本情報として「患者名」「生年月日」「透析導入日」

				「シャント作成日」を明記した。またシャント情報として、シャント肢をデジタルカメラで撮影した写真を掲載し、血管の走行に合わせて穿刺可能箇所を脱血側は赤色、返血側は青色で記し、有用であった。 共同研究者：藤田 拓也，十二 由光，室谷 恵，前野 典綱，上野 栄一
133. 結核・抗酸菌症教育はいかにすべきか、いかにあるべきか　看護師教育への提言	共著	令和元年5月	福井大学医学部研究雑誌（1348-8562)20巻 P. 17-27	本研究は病院管理者である病院長と看護部長及び日常看護ケアに従事している看護師を対象に結核・抗酸菌感染症卒後教育の現状と学習ニーズを把握することを目的とした。結果、限られた人材と時間について回答者全員が現状では不十分と感じていた。病院長側は抗酸菌症に関する講義時間不足と抗酸菌症ケアに必要な機器や防護用具の購入予算の限界等を認識し、基礎的な研修会開催数増加を重要視していた。また看護部長・看護師側からは呼吸器感染症・抗酸菌症に経験のある講師の不足と研修機会の少なさを痛切に感じていた。看護部の講義内容は診断から検査、感染予防までの基本的な知識や技術を重視していた。また、日本結核病学会認定の抗酸菌症エキスパートナース資格者の活躍が期待される。今後は必要とする領域に勤務する看護職への集中的な講師人材派遣研修機会の増加及び抗酸菌症に強い医療職の養成が急務であり、抗酸菌症のエキスパート制度は、大変意義があると考える。 共同研究者：上野 栄一，石崎 武志
134.在宅療養体制に対する課題の認識に関する地域間比較テキストマイニングとGISによる47都道府県の医療計画の分析	共著	令和1年5月	癌と化学療法、46巻 Suppl.Ⅰ P.110-112	医療計画は地域の現状を反映している。本研究はテキストマイニングによる医療計画の分析と地理情報システムによる地理的特徴の検討を目的とする。47都道府県の医療計画から全国、6地域区分、高齢化別4区分のテキストファイルを作成し単語を抽出した後、語の関連性を分析した。さらに重要課題である「看取り」の単語出現率で日本地図を色分けし特徴を検討した。全国の集計では214,716語抽出され、頻出上位は医療、在宅、支援、介護、訪問、診療、連携であった。共起ネットワークでは医療-在宅-介護-連携が体制-構築と連結していた。関東と近畿で人材-育成の連結があった。高齢化率の高い地域で「看取り」が頻出し、低い地域で人材-育成-確保の連結あった。「看取り」の出現頻度は西日本で

				高かった。医療計画では医療と介護の連携構築が重視され、西日本や高齢化率の高い地域では看取りが、低い地域では人材育成が重視されていると示唆された。 役割分担：解析、考察 共同研究者：板谷 智也，堀池 諒，平和也，上野 栄一
135. 排尿ケアチーム看護師が活動するうえで抱く困難感		令和 3 年 11 月	日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌 、25 巻 3 号 Page639-645	本研究では、排尿ケアチームの調整役を担う排尿ケアナースに着目し、チーム活動するうえで困難と感じていることの実態を明らかにすることを目的とした。病床数 300 床以上の病院 436 施設に勤務する排尿ケアチーム所属で、有効回答看護師 79 名の排尿ケアナースを対象とした。本研究結果では、対応分析において「病院」「フォロー」が特徴的な語であった。また、単語頻度解析で上位に挙がっていた「行う」は「カンファレンス」「時間」「ラウンド」と強い共起関係にあった。そのため、今後は患者の退院後のフォロー体制整備、カンファレンスやラウンドの時間確保のための体制整備が求められる。 役割分担：テキストマイニング解析 共同研究者：青木 未来，四谷 淳子，上野 栄一
文部省科学研究費およびその他の研究助成金				
1. 文部省科学研究費補助金基盤研究Ｃ	－	平成 13 年～平成 14 年		学校トイレの環境衛生と児童の健康な排泄に関するヘルスプロモーション 研究代表者：松浦 和代 研究助成金：2,700 千円 分担者：上野栄一
2. 富山第一銀行奨学財団「研究活動に対する助成」	－	平成 17 年	富山第一銀行奨学財団	研究期間：平成 17 年　代表者:上野栄一, コミュニケーション技法が人間の感情に与える影響―主観的評価と客観的評価について― 研究代表者：上野栄一
3. 文部省科学省研究費補助 金基盤研究Ｃ	－	平成 17 年～平成 19 年	文部科学省	看護学生・医学生の為の効果的禁煙教育指導プログラムの開発萌芽研究 科学研究費補助金：3,300 千円 研究代表者:上原佳子 分担者：上野栄一

4. 文部省科学省研究費補助 金基盤研究C	-	平成 18 年～平成 20 年	文部科学省	看護診断正確性に基づく看護診断能力測定尺度開発と看護診断能力育成プログラムの構築基盤研究(C)一般 科学研究費補助金：3,950 千円 研究代表者:長谷川智子 分担者：上野栄一
5. 文部省科学研究費補助 金基盤研究C	-	平成 19 年～平成 20 年	文部科学省	看護学生の段階別コミュニケーション能力評価尺度・教育プログラムの開発 日本学術振興会： 科学研究費補助金：1,300 千円 代表者:上野　栄一 研究代表者：上野栄一
6. 文部省科学研究費補助 金基盤研究C	-	平成 20 年～平成 22 年	文部科学省	看護学生の喫煙行動危険度予測尺度の開発と喫煙防止教育プログラムの構築基盤研究(C)（一般） 日本学術振興会：科学研究費補助金 研究代表者:上原　佳子 平成 21 年度 分担者：上野栄一 科学研究費補助金：4,290 千円
7. 文部省科学研究費補助 金基盤研究C	-	平成 20 年～平成 22 年	文部科学省	ＣＯＰＤ患者の情報ニーズに対応したセルフケア能力向上のための教育プログラムの構築基盤研究(C)（一般） 日本学術振興会科学研究費補助金 研究代表者:上木　礼子 平成 20 年度 分担者：上野栄一 科学研究費補助金：3,770 千円
8. 文部省科学研究費補助 金基盤研究C		平成 21 年～平成 23 年	文部科学省	看護診断過程の能力育成プログラムによる包括的教育介入の効果基盤研究(C)（一般） 日本学術振興会：科学研究費補助金 研究代表者:長谷川　智子 平成 21 年度 分担者：上野栄一 科学研究費補助金：4,550 千円
9. 文部省科学研究費補助 金基盤研究C		平成 21 年～平成 23 年		看護診断過程の能力育成プログラムによる包括的教育介入の効果基盤研究(C)（一般） 日本学術振興会：科学研究費補助金 研究代表者:長谷川　智子 平成 21 年度 分担者：上野栄一 科学研究費補助金：4,550 千円
10. 文部省科学研究費補助 金基盤研究C		平成 22 年～平成 24 年	文部科学省	話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系に与える影響基盤研究(C)（一般） 日本学術振興会：科学研究費助成事業 研究代表者：上野栄一
11. 北陸地区国立大学学術研究連携支援研究		平成 26 年 4 月～平成 30 年 3 月	北陸地区国立大学学術連携支援機構	がん患者と家族への支援に対する研究デザイン 共同発表者：天野 良平、八塚 美樹、正源寺 美穂、上野栄一

12. 文部省科学研究費補助金基盤研究Ｃ		平成 30 年～令和 1 年	文部科学省	研究題名：看護学生のコミュニケーションにおける共感性と共鳴性との関係 研究助成金：2,470 千円 研究代表者：上野栄一
13. 文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」		平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月	文部科学省	福井市在住の住民に対する糖尿病予防のためのランチセミナーにおける食生活習慣に関する意識調査 研究代表者：上野栄一
14. 文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」		平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月	文部科学省	「福井市における糖尿病予備群と健診者への糖尿病教育支援の効果検証と学生への教育支援」 研究代表者:上野栄一
（学会発表）				
1. 看護婦の勤労意欲とストレスとの関係	共著	平成 8 年 7 月	第 22 回日本看護研究学会，広島	看護婦の勤労意欲とストレスおよび対処行動との関係について調べた。その結果，看護婦全体において，時々のストレスのある群は慢性的ストレス群に比べて，勤労意欲の下位概念のチームワーク，メンタルハイジーンが高かった。経験年数 5 年以上の看護婦の時々のストレスのある群は慢性的ストレス群に比較して勤労意欲のモチベーターモラール，チームワークの得点が高かった。また，経験年数 5 年以上の看護婦において，効果的対処行動群は非効果的対処行動群に比べてハイジーンモラールが高かった。 担当部分：統計処理、抄録作成 共同発表者：上野栄一，高間静子，塚原節子，福田正治
2. 看護婦の就労姿勢の勤労意欲への影響	共著	平成 8 年 7 月	第 22 回日本看護研究学会，広島	看護婦の就労姿勢が看護婦の勤労意欲にどのように影響しているかについて調べた。その結果，勤労意欲と就労理由との関係では，生きがいを理由に働く群の勤労意欲のモチベーターの得点は生計や集団帰属を理由に働く群のそれらよりも有意に高かった。企業帰属意識と勤労意欲との関係では，帰属意識の構成要素「組織の目標・規範」についての看護婦群の得点と勤労意欲の大半の構成要素の得点と正の有意な相関を示した。また，看護婦群の勤労意欲の構成要素「モチベーターモラール」の得点と自己充実的達成動機との間に正の有意な相関を示した。さらに，看護婦の集団主義と勤労意欲との関係では，勤労意欲のコミュニケーションとの間で正の有意な相関を示した。 担当部分：統計処理

				共同発表者：塚原節子，上野栄一，高間静子，福田正治
3.　看護婦の自己開示度,孤独度の職務満足度への影響	共著	平成 9 年 7 月	第 23 回日本看護研究学会，久留米	看護婦の就労姿勢が看護婦の勤労意欲にどのように影響しているかについて調べた。その結果、(1)孤独度と自己開示度の下位概念および自己開示度合計との間には負の有意な相関があった。(2)職階別にみると,看護婦群において,自己開示度合計と「看護業務」との間には負の有意な相関があった。(3)経験年別に自己開示度と職務満足度との関係をみると,3 年未満の群と 5 年以上の群において,自己開示度合計と「看護婦間の相互作用」との間には正の有意な相関があった。(4)学歴別に自己開示度と職務満足度との関係についてみると,自己開示の「なごませ」因子と「看護婦間の相互作用」との間には正の相関があった。(5)婚姻別について，孤独度と職務満足度との関係についてみると,既婚群において,孤独度と「地位」,孤独度と「看護婦間の相互作用」との間にそれぞれ負の有意な相関があった。以上のことから、看護婦の自己開示度と孤独度は有意に職務満足度に影響を与えていることがわかった。 担当部分：統計処理、抄録作成 共同発表者：上野栄一，川西千恵美，高間静子
4.　看護婦の社会的スキルの勤労意欲への影響	共著	平成 9 年 7 月	第 23 回日本看護研究学会,久留米	富山県内の 6 つの国・公立病院に勤務する看護職を 132 名を対象に,和田らの社会的スキル尺度を用い，看護婦の社会的スキルの勤労意欲への影響を検討した。その結果，以下のことが明らかになった。社会的スキルの下位概念の関係維持は勤労意欲の下位概念の業績規範と正の相関を示した。また，社会的スキルの自己主張は勤労意欲の会合評価，コミュニケーション，メンタルハイジーン等と正の相関を示した。婦長群においては勤労意欲のチームワークと社会的スキルの自己主張とは負の相関を示した。自己主張は看護婦経験 3 年未満群においては、勤労意欲のモチベーターモラール，メンタルハイジーンと正の相関を示した。さらに未婚群では勤労意欲のモチベーターモラール，チームワーク，業績規範等と正の相関を示した。以上のことから，看護婦の社会的スキルは勤労意欲に影響し,職階，経験年数，婚姻の違いにより勤労意欲への影響が異なることが示唆された。

				担当部分：調査票集計、統計処理 共同発表者：高間静子, 上野栄一、川西千恵美
5.　看護婦の創造的構えの勤労意欲への影響	共著	平成 9 年 7 月	第 23 回日本看護研究学会, 久留米	富山県内の公立病院に働く看護婦を対象に創造的構えと勤労意欲との関について調べた。調査測定は創造的構えテストと勤労意欲測定のための尺度を用いた。その結果，婦長群において，創造的構えの下位概念の「持久力」と勤労意欲の下位概念の「ハイジーンモラールとのあいだには負の有意な相関があった。また，経験年数 3 年未満の看護婦群において，創造的構えの持久力と勤労意欲の「メンタルハイジーン」とのあいだには正の有意な相関があった。一方，婚姻別にみると，未婚群において，創造的構えの下位概念の「細心さ」と勤労意欲の下位概念の「チームワーク」とのあいだには負の有意な相関があった。以上のことから，看護婦の創構えと勤労意欲は相関することが示唆された。 担当部分：統計処理 共同発表者：塚原節子，上野栄一，高間静子
6.　看護婦の充実感の勤労意欲への影響	共著	平成 9 年 7 月	第 23 回日本看護研究学会, 久留米	富山県下に就労する看護婦 150 名を対象に、看護婦の就労姿勢が看護婦の勤労意欲にどのように影響しているかについて調べた。その結果、充実感の第 1 因子（充実感気分−退屈・空虚感因子）と勤労意欲の下位概念のハイジーンモラールとの間には有意な正の相関があった。充実感の第 4 因子（信頼・時間的展望−不信・時間的展望因子）とモチベーターモラール, 業績規範との間には有意な正の相関を示した。充実感の第 3 因子（連帯−孤立因子）とハイジーンとの間には相関があった。これらのことから、看護婦の充実感の高い人は勤労意欲が高いということが明らかとなった。 担当部分：統計処理 共同発表者：川西千恵美，上野栄一，高間静子
7.　看護職のタイプ A 行動のリーダーシップ行動への影響	共著	平成 9 年 12 月	第 17 回日本看護科学学会，神戸	本研究では富山県下に就労する看護婦を対象に、看護職のタイプＡ行動のリーダーシップ行動への影響について調べた. その結果, タイプＡ、タイプＢ行動とリーダーシップ類型とは有意に関係があった。タイプＡ総得点とＰ（目標達成）との間には正の有意な相関があった。さらに，タイプＡの下位概念

				の精力的活動・時間切迫感とＰとの間には正の有意な相関があった。看護婦全体のＰＭ得点とタイプＡの下位概念との関係について重回帰分析をした結果，Ｐ値には精力的活動，時間切迫感が有意な正の影響因子となっていることが明らかとなった．また,婚姻別,学歴別に,タイプＡ行動がＰＭ機能に異なる影響を与えていることが示された。以上のことからタイプＡ行動はリーダーシップ行動に有意に影響を与えていることが示唆された。 担当部分：統計処理、抄録作成 共同発表者：上野栄一，高間静子
8.　看護職の社会的スキルのリーダーシップ行動への影響	共著	平成 9 年 12 月	第 17 回日本看護科学学会、神戸	富山県内に就労する看護職の社会的スキルのリーダーシップ行動への影響について調べた。調査対象は無作為抽出により調査をし，有効回答の得られた富山県の 3 つの国公立病院に就労する婦長・副婦長 108 名とした。対象の内訳は婦長｜32 名，副婦長 76 名,既婚 94 名未婚 14 名,専修学校卒 100 名，短大卒 8 名であった。測定用具には三隅等のリーダーシップ行動評定尺度（自己評定質問紙）を用い,社会的スキルの測定には和田の社会的スキル尺度を用いた。その結果，婦長の社会的スキルの下位概念の関係維持のスキル度とリーダーシップの集団維持機能のM得点とは高い正の相関を示した。35 歳以下の若い群にのみ社会的スキルの下位概念の関係開始のスキル度とリーダーシップの目標達成機能のＰ得点とは正の相関を示した。以上のことから，特に看護の社会的スキルのうちの関係維持のスキルはリーダーシップの集団維持機能に影響を与えていることが示唆された。 担当部分：統計処理 共同発表者：高間静子，上野栄一，塚原節子
9.　Pervanadate による 3T3L1 細胞の glucose uptake に関する検討	共著	平成 10 年 5 月	第 41 回日本糖尿病学会，和歌山	Pervanadate および Osmotic shock によるブドウ糖の取り込みにおけるチロシンリン酸化タンパクの役割について検討した。その結果、(1) Pervanadate による 2DOG Glucose uptake は Wortmannin により部分的にしか抑制されなかった。(2) Pervanadate による 2DOG Glucose uptake は Wortmannin, Genistein の同時処置により、抑制された。これらのことから Osmotic shock 下では、IRS-1 から PI3-kinase を介しない別の経路が

				あることが示唆された。また、Gab1,PLCγがGlut4 translocationに関与していることが示唆された。 担当部分：実験全般、抄録作成 共同発表者：上野栄一，春田哲郎，薄井　勲，岩田　実，宇野立人，高野敦子，石橋　修，石原　元，和田　努，笹岡利安，小林正
10.　成長ホルモンのインスリン作用およびインスリン抵抗性の機序の検討	共著	平成10年5月	第41回日本糖尿病学会，和歌山	成長対レモン（GH）は短時間刺激ではインスリン様作用を有する反面、長時間処置では抗インスリシ作用を有するが，この機序はまた解明されていない．我々は3T3‐L1脂肪細胞を用いてGHの短時間・長時間作用を検討した．方法：（1）GH刺激（短時間、長時間）を加えた3T3‐L1脂肪細胞で2 deoxyglucose(2DOG) uptakeにより糖の取り込みを測定した．（2）GH，インスリンで刺激した細胞でWestern Blotを用いて各蛋白のリン酸化を検討した．これらの結果、（1）2DOG uptakeでの糖の取り込みは，GH刺激15分の短時間刺激ではBasalの約4倍，インスリンの約1/2のuptakeを認めた．GH長時間処置した細胞でのインスリンに対する糖の取り込みは非処置群よりも低下していた．（2）Western BlotではGH短時間刺激ではIRS-1のリン酸化は認めず，GH長時間処置したものではIRS‐1のリン酸化はやや増加していた．GH長時間処置した後にインスリンで刺激したものではIRS‐1およびインスリンレセプタ-のリン酸化は増強していた．これらのことから、3T3‐L1脂肪細胞ではGHによる糖の取り込みはIRS-1を介しない可能性が示唆された．また長時間処置による抗インスリン作用にはIRS‐1より下流のシグナル過程が抑制されている可能性が示唆された。 担当部分：解析 共同発表者：高野敦子，春田哲郎，薄井勲，岩田　実，宇野立人，上野栄一，笹岡利安，石原　元，石木　学，和田努，石橋　修，小林　正

11.　インスリン刺激による IRS-1 のセリン／スレオニン酸化の検討	共著	平成 10 年 5 月	第 41 回日本糖尿病学会，和歌山	インスリン抵抗性の成因の一つとして、IRS‐1 のセリンリン酸化の関与が示唆されている。本研究では、インスリンによる 1RS‐1 のセリンリン酸化の機序について、3T3-L1 脂肪細胞を用いて、（1）インスリン刺激よる 1RS‐1 のチロシンリン酸化および 1RS‐1 のリン酸化によると考えられる electrophoretic mobility shift(EMS) を検討した。また（2）EMS に対する wortmannin，LY294002 および pioglitazone の影響を検討した。その結果、（1）1RS‐1 のチロシンリン酸化はインスリン刺激後、5 分から 60 分までほぼ同程度であったが、時間依存性に増大する 1RS‐1 の EMS を認め、1RS‐1 のセリン/スレオニンリン酸化が生じていると考えられる。（2）インスリンによる 1RS-1 の EMS は wortmannin，LY294002 および pioglitazone 前処置によっても抑制される傾向を認めた。これらの結果から、インスリンシグナルは PI3-Kinase を介した IRS-1 のセリンリン酸化により負の制御を受けており、チアゾリン誘導体は 1RS-1 のセリンリン酸化のレベルで拮抗的に作用する可能性が示唆された。 担当部分：解析 共同発表者：宇野立人，春田哲郎，薄井　勲，岩田実，高野敦子，上野栄一，笹岡利安，石原　元，　石木　学，和田努，石橋　修，小林　正
12.　脂肪細胞への分化におけるインスリンシグナルの働き	－	平成 10 年 5 月	第 41 回日本糖尿病学会，和歌山	脂肪細胞の分化におけるインスリンの働きを調べる目的で clonal expansion 以下 CE）に注目し以下の実験を行った．（実験 1）Ploglitazone（以下 Pio）の存在，非存在下で 3T3‐L1 細胞に I，IBMX＋dexamethazone（以下 D），または 3 者を処置した．CE を BrdU 取り込みで，増殖系シグナルを c-fos の誘導で，脂肪細胞分化率を脂肪染色と中性脂肪量で評価した．（実験 2）Pl3‐kinase 阻害薬である wortmannin（以下 WM）または MEK 阻害薬である PD98059（以下 PD）を前処置後，3 者による分化処置を行った．これらにおける CE と脂肪細胞分化率を測定した．その結果、（1）I は CE を促進した．（2）I は D 存在時，著名に分化を促進させた．よって、CE を伴う脂肪細胞分化には I が重要であると考えられた．（3）pio は分化率を著しく上

				げたが，CE には有意な影響を与えず，CE 以外の機序により分化を促すことが示唆された．（4）c-fos はＩよりもＤで強く誘導された．（実験 2）WM は BfdU 取り込みと分化率を濃度依存的に抑制した．PD は BfdU 取り込みを軽度抑制したが，分化率を軽度促進した．以上のことから、CE を伴う脂肪細胞化には，PI3-kinase を介すシグナルが重要と考えられる。 担当部分：実験、解析 共同発表者：薄井　勲，春田哲郎，岩田　実，宇野立人，高野敦子，上野栄一，石木 学，和田　努，　石原　元，　石橋　修，笹岡利安，小林　正
13.　TNF-αのインスリン抵抗性に対する Pioglitazone の効果について	－	平成 10 年 5 月	第 41 回日本糖尿病学会，和歌山	TNF－αによるインスリン抵抗性の機序とそれに対する Pioglitazone の効果を解明するために脂肪細胞（3T3-L1 細胞）を用い検討した。方法は（1）短期効果として 3T3-L1 細胞を Pioglitazone5μM にて 6 時間前処置後、TNF－α25ng/l を 6 時間投与した。（2）長期効果として TNF－α3ng/ml にて 4 日間処置後、さらに 5μM の Pioglitazone を 16 時間追加投与した。次に（1）、（2）の後、IRS－1 の発現量及びインスリン刺激によるインスリン受容体（IR）の自己リン酸化、lRS－1 のチロシンリン酸化、糖取り込みについて検討した。その結果、TNF－αは短期間では lR の自己リン酸化、lRS－1 の発現量及びチロシンリン酸化、糖取り込みに影響を与えなかったが、長期間では lRS－1 の発現を対照に比較し 50%程度に低下させ、同程度に lRS－1 のチロシンリン酸化、糖取り込みを抑制した。また、Pioglitazone により lRS－1 の発現及びチロシンリン酸化、糖取り込みが対照レベルまで改善した。これらの結論から、脂肪細胞において TNF－αによるインスリン抵抗性は lRS－1 の発現を低下させることにより牛じ Pioglitazone は lRS－1 の発現を回復させることによりインスリン抵抗性を改善させると考えられる。 担当部分：実験、解析 共同発表者：岩田　実，春田哲郎，薄井　勲，宇野立人，高野敦子，上野栄一，石木　学，和田　努，　石原　元，石橋　修，笹岡利安，小林　正

14.　ＧＴＰγＳによるPI 3-kinase非依存性GLUT4 translocationにおけるチロシンリン酸化の意義	-	平成10年5月	第41回日本糖尿病学会，和歌山	GTPγSによるGLUT4 translocationは，PI3kinaseを介さない機序が考えられる．この経路におけるチロシンリン酸化蛋白の役割を検討した．3T3‐L1脂肪細胞を用いて，（1）GTPγSのMicroinjectionによるGLUT4 tranrans1caionに対する抗リン酸化チロシン抗体（PY20）の影響を検討した．（2）In situ electroporation法により導入したGTPγSによる，2-deoxy‐D‐glucose（2‐DOG）取り込み，白チロシンリン酸化ついてwortmannin（W），genistein（G），およびcalphostin C（C）の影響を検討した．その結果、（1）GTPγSによるGLUT4 translocationはPY20により65％抑制された．（2）GTPγSによる2-DOG取り込みは（W）および（C）により影響を受けず（G）により濃度依存性に抑制された．この蛋白の一部はpaxillinおよびp130CASであった。これらのことから、GTPγSはPI3-Kinaseの下流あるいは、独立した経路において、インスリン受容体、IRS以外のチロシンリン酸化蛋白を介して、Glut 4 translocationを惹起するものと考えられる。 担当部分：実験、解析 共同発表者：春田哲郎，岩田　実，薄井　勲，宇野立人，高野敦子，上野栄一，石木　学，　和田　努，石原　元，石橋　修，笹岡利安，小林　正
15.　L6細胞でのグリコーゲン合成に至るシグナル伝達におけるShcの役割	共著	平成10年5月	第41回日本糖尿病学会，和歌山	筋肉細胞でのグリコーゲン合成はインスリンの代謝作用として重要であるが、その細胞内シグナル伝達経路は不明である。今回グリコーゲン合成に至るシグナル伝達におけるShcの関与を検討した。Wild Type(WT)-Shcに加え、ShcのPTBドメインを含んだPTB‐Shcと、チロシンリン酸化部位をすべてP島に置換したY239／240／317F（3F）‐ShcのGST融合蛋白を作製し、L6細胞にトランスフェクションした。今回、インスリン作用との比較検討のため、1GF‐I刺激によるIRSのチロシンリン酸化、pKB/Akt活性、グリコーゲン合成にShcの過剰発現が及ぼす影響を測定した。［成績］IGF1によるPKB／Akt活性とグリコーゲン合成は、WT-または3F-Shcのどちらの過剰発現においても抑制された。これらの抑制効果は、PTB‐Shcのみの発現においても認められ、さらに、IGF-Iによ

				るIRSのチロシンリン酸化はWt－または3F－Shcの過乗U発現により低下を認めた。［結論］L6筋芽細胞では、IGF-Iのグリコーゲン合成作用にはShcは抑制的に作用した。その機序として、IGF-I受容体の基質レベルでのShcによるIRSチロシンリン酸化の競合的阻害による事が示唆された。 担当部分：解析 共同発表者：石木　学，笹岡利安，石原　元，和田　努，平井洋生，薄井　勲，岩田　実，高野敦　子，宇野立人，上野栄一，高田康光，春田哲郎，小林　正
16.　インスリンとIGF-1におけるSH2 Domain Containing Inositol 5-Phosphatase(SHIP)の役割	－	平成10年5月	第41回日本糖尿病学会，和歌山	SHIPは血球系の細胞で増殖作用への役割が報告されている。そこで、インスリンとIGF－Iの増殖作用発現におけるSHIP関与につき検討した。(方法)Wild Type(WT),SHIP,SHIPのSH2ドメインを欠いたdelta SH2－SHIP,SHIPのチロシンリン酸化部位をShcに加え、ShcのPTBドメインを含んだPTB－Shcと、チロシンリン酸化部位を欠いたdeltaSH2-SHIP,SHIPのチロシンリン酸化部位を置換したY917／1020F(2F)-SHIPをCOS7細胞とL6筋芽細砲に発現させた。インスリンとIGF-I刺激によるSHIPの細胞内蛋白への結合をウエスタンブロットにより検討し、SHIP発現がIGF-1の増殖作用に及ぼす影響を3H－チミジンの取り込み測定により検討した。その結果deltaSH2－SHIP発現でのShcとの結合は、WT-,または、2F-SHIPの過剰発現により低下したが、delta SH2－SHIPの発現においては変化を認めなかった。以上の結果から、L6筋芽細胞では、IGF－1の増殖作用発現にSHIPはNegativeに制御している事が示唆された。その機序としては、IGF－1によるShcリン酸化チロシンとGrb2のSH2ドメインとの結合をSHIPがそのSH2ドメインとを介して競合的に阻害することが示唆された。 担当部分：実験、解析 共同発表者：和田　努，笹岡利安，石原　元，石木　学，薄井　勲，岩田　実，宇野立人，高野敦子，上野栄一，高田康光，春田哲郎，小林　正

17.　Shc に結合するラット SH2 domain containing inositol 5-phosphatase subfamily(SHIP-2)のクローニング	-	平成 10 年 5 月	第 41 回日本糖尿病学会，和歌山	インスリンによる PIP35-phosphatase（5-ptase）の活性化が、抗 Shc 抗体による沈殿物に認められる。抗 SHIP 抗体での沈殿物中にはインスリンによる 5-ptase 活性は認めず、 SHIP2 の isozyme の存在が示唆されている。今回の実験では Shc に結合する 5-ptase のクローニングを行った。方法としては、各 5-ptase 間での高ホモロジー領域をもとに degenerate PCR を行い、得られた塩基配列をもとに RACE を行った。その結果、得られた cDNA(SHIP-2)は約 135ｋDa の 5-ptase をコードしており、SHIP 同様、N 末に SH2 ドメインが、Ｃ末にプロリン・リッチな領域が存在した．また，ＰＴＢドメインの結合モチーフ（NPXY）が 1 ケ所存在した．SHIP とのホモロジーは，ptase 部分で 60%，ＳH2 ドメインを含む N 末で 50%，Ｃ末で 30%であった．これらのことから，今回得られたクローンは，SHIP の subfamily と考えられ，インスリンシグナル伝達においても，SHIP 同様，Shc の増殖作用を負に制御する可能性が示唆され，また，さらにＰＫＢ/Akt を介し，インスリンの代謝作用に影響する可能性が示唆された． 担当部分：解析 共同発表者：石原　元，笹岡利安，平井洋生，石木　学，和田　努，薄井勲，岩田　実，高野敦子，宇野立人，上野栄一，高田康光，春田哲郎，小林正
18.　インスリンと IGF-1 における SH2 Domain Containing Inositol 5-Phosphatase(SHIP)の役割	共著	平成 10 年 5 月	第 41 回日本糖尿病学会，和歌山	SHIP は血球系の細胞で増殖作用への役割が報告されている。そこで、インスリンと IGF‐I の増殖作用発現における SHIP 関与につき検討した。(方法)Wild Type(WT)，SHIP，SHIP の SH2 ドメインを欠いた delta SH2‐SHIP，SHIP のチロシンリン酸化部位を Shc に加え、Shc の PTB ドメインを含んだ PTB‐Shc と、チロシンリン酸化部位を欠いた deltaSH2-SHIP,SHIP のチロシンリン酸化部位を置換した Y917／1020F(2F)-SHIP を COS7 細胞と L6 筋芽細砲に発現させた。インスリンと IGF-I 刺激による SHIP の細胞内蛋白への結合をウエスタンブロットにより検討し、SHIP 発現が IGF-1 の増殖作用に及ぼす影響を 3H‐チミジンの取り込み測定により検討した。その結果 deltaSH2‐SHIP 発現での Shc との結合は、WT-,または、2F-SHIP の過剰発現により低下したが、delta SH2‐SHIP の発現においては変

				化を認めなかった。以上の結果から、L6 筋芽細胞では、IGF－1 の増殖作用発現に SHIP は Negative に制御している事が示唆された。その機序としては、IGF－1 による Shc リン酸化チロシンと Grb2 の SH2 ドメインとの結合を SHIP がその SH2 ドメインとを介して競合的に阻害することが示唆された。 担当部分：解析 共同発表者：和田　努，笹岡利安，石原　元，石木　学，薄井　勲，岩田　実，宇野立人，高野敦子，上野栄一，高田康光，春田哲郎，小林　正
19.　Shc に結合するラット SH2 domain containing inositol 5-phosphatase subfamily(SHIP-2)のクローニング	共著	平成 10 年 5 月	第 41 回日本糖尿病学会，和歌山	インスリンによる PIP35-phosphatase（5-ptase）の活性化が、抗 Shc 抗体による沈殿物に認められる。抗 SHIP 抗体での沈殿物中にはインスリンによる 5-ptase 活性は認めず、 SHIP2 の isozyme の存在が示唆されている。今回の実験では Shc に結合する 5-ptase のクローニングを行った。方法としては、各 5-ptase 間での高ホモロジー領域をもとに degenerate PCR を行い、得られた塩基配列をもとに RACE を行った。その結果、得られた cDNA(SHIP-2)は約 135ｋDa の 5-ptase をコードしており、SHIP 同様、N 末に SH2 ドメインが、Ｃ末にプロリン・リッチな領域が存在した．また，ＰＴＢドメインの結合モチーフ（NPXY）が 1 ケ所存在した．SHIP とのホモロジーは，ptase 部分で 60%，ＳH2 ドメインを含む N 末で 50%，Ｃ末で 30%であった．これらのことから，今回得られたクローンは，SHIP の subfamily と考えられ，インスリンシグナル伝達においても，SHIP 同様，Shc の増殖作用を負に制御する可能性が示唆され，また，さらにＰＫＢ/Akt を介し，インスリンの代謝作用に影響する可能性が示唆された． 担当部分：解析共同発表者：石原　元，笹岡利安，平井洋生，石木　学，和田　努，薄井　勲，岩田　実，高野敦子，宇野立人，上野栄一，高田康光，春田哲郎，小林　正

20. Role of Tyrosine Phosphorylation Induced by GTPγS and Osmotic shock in 3T3L1 Adipocytes	共著	平成10年6月	58th Scientific Sessions (American Diabetes Association), Chicago,USA	GTPγSと高浸透圧によって誘導されるチロシンリン酸化される蛋白について検討した。免疫沈降、ウエスタンブロットによって、70-80kDa,120-130kDaの蛋白がリン酸化されることがわかった。また、各種阻害剤（Wortmannin,Calphostin C, Cytochalasin D）にてpaxillin, p130CAS,PYK2のチロシンリン酸化を検討した結果、これらのチロシンリン酸化はGTPγSやosmotic shockによって誘導された糖輸送には影響を与えていないことがわかった。したがって、GTPγSと高浸透圧によって誘導される未知の蛋白の存在が示唆された。 担当部分：実験全般、抄録作成 共同発表者：Eiichi Ueno, Minoru Iwata, Isao Usui, Atsuko Takano, Tetsuro Haruta
21. Mechanism of Insulin-induced Adipocyte Differentiation and Clonal Expansion in 3T3L1 Cells	共著	平成10年6月	58th Scientific Sessions (American Diabetes Association),Chicago,USA	本研究では、3T3-L1細胞におけるインスリンで誘導された脂肪の分化とクローナルエクスパンジョン（DNA合成）のメカニズムについて調べた。その結果、脂肪の分化とクローナルエクスパンジョンにはインスリンは不可欠であり、また、c-fosには関与していないことがわかった。さらに、Wortmannin, PD98059などの各種阻害剤を使った実験の結果、インスリンで誘導された脂肪の分化は、MAP kinaseやc-fosを介さず、PI3-kinaseを介することが示唆された。 担当部分：解析 共同発表者：Isao Usui, Tatsuhito Uno, Atsuko Takano, Eiichi Ueno, Tetsuro Haruta
22. Mechanism of Insulin-like Effect and Insulin Antagonistic Effect of Growth Hormone	共著	平成10年6月	58th Scientific Sessions (American Diabetes Association)Chicago,USA	成長ホルモンはインスリン抵抗性を起こすとが知られているが、本研究では成長ホルモンの短期刺激と長期刺激のインスリン抵抗性のメカニズムについて調べた。これらの結果、3T3‐L1脂肪細胞ではGHによる糖の取り込みはIRS-1を介しない可能性が示唆された．また長時間処置による抗インスリン作用にはIRS‐1より下流のシグナル過程が抑制されている可能性が示唆された。 担当部分：解析 共同発表者：Atsuko Takano, Minoru Iwata, Tatsuhito Uno, Eiichi Ueno, Masashi Kobayashi

23. Role of Tyrosine Phosphorylation Induced by GTPγS and Osmotic shock in 3T3L1 Adipocytes	共著	平成10年6月	58th Scientific Sessions (American Diabetes Association),Chicago,USA	GTPγSと高浸透圧によって誘導されるチロシンリン酸化される蛋白について検討した。免疫沈降、ウエスタンブロットによって、70-80kDa,120-130kDaの蛋白がリン酸化されることがわかった。また、各種阻害剤（Wortmannin, Calphostin C, Cytochalasin D）にてpaxillin, p130CAS, PYK2のチロシンリン酸化を検討した結果、これらのチロシンリン酸化はGTPγSやosmotic shockによって誘導された糖輸送には影響を与えていないことがわかった。したがって、GTPγSと高浸透圧によって誘導される未知の蛋白の存在が示唆された。 担当部分：実験全般、抄録作成 共同発表者：Eiichi Ueno, Minoru Iwata, Isao Usui, Atsuko Takano, Tetsuro Haruta
24. Mechanism of Insulin-induced Adipocyte Differentiation and Clonal Expansion in 3T3L1 Cells	共著	平成10年6月	58th Scientific Sessions (American Diabetes Association),Chicago,USA	本研究では、3T3-L1細胞におけるインスリンで誘導された脂肪の分化とクローナルエクスパンジョン（DNA合成）のメカニズムについて調べた。 その結果、脂肪の分化とクローナルエクスパンジョンにはインスリンは不可欠であり、また、c-fosには関与していないことがわかった。さらに、Wortmannin, PD98059などの各種阻害剤を使った実験の結果、インスリンで誘導された脂肪の分化は、MAP kinaseやc-fosを介さず、PI3-kinaseを介することが示唆された。 担当部分：解析 共同発表者：Isao Usui, Tatsuhito Uno, Atsuko Takano, Eiichi Ueno, Tetsuro Haruta
25. Pioglitazone Improves Insulin Resistance by Inhibiting TNFα-induced Decrease of IRS-1 Protein in 3T3L-1 Adipocytes	共著	平成10年6月	58th Scientific Sessions (American Diabetes Association),Chicago,USA	脂肪細胞（3T3-L1細胞）を用いTNF-αによるインスリン抵抗性の機序とそれに対するPioglitazoneの効果を解明するために検討した。その結果、TNF-αは短期間ではIRの自己リン酸化、IRS-1の発現量及びチロシンリン酸化と糖の取り込みに影響を与えなかった。また、長期間ではIRS-1の発現を対照に比較し50%程度に低下させ、同程度にIRS-1のチロシンリン酸化、糖取り込みを抑制した。これらの実験結果から、脂肪細胞においてTNF-αによるインスリン抵抗性はIRS-1の発現を低下させることにより生じ、また、PioglitazoneはIRS-1の発現を回復させることによりインスリン抵抗性を

				改善させると考えられた。 担当部分：実験、解析 共同発表者：Minoru Iwata, Isao Usui, Tatsuhito Uno, Eiichi Ueno,Tetsuro Haruta
26.　病室環境における入院患者のディストレス度測定尺度作成の試み	共著	平成 10 年 7 月	第 24 回看護研究学会，弘前	病室空間は入院患者の生活・心理に大きく影響し，　さまざまなディストレス（負のストレス）をもたらしている。この特殊な空間での生活に適応するための看護を行うには，その患者のディストレスの質と程度を知る必要があり、本研究では入院患者の病室環境におけるディストレス度を測定するための尺度の開発を試みた。第 1 段階として用語「ディストレス」の操作的定義を検討した。 セリエの定義に基づき，ディストレスを負のストレスとし，入院中の病室環境に対して，苦痛・不安・不眠・恐怖・不便・ 不快・苦悩・羞恥・屈辱・心配・悲嘆・負担・不適応等，苦悩となっているような事項を先行文献より収集した。第 2 段階として，患者 30 人に病室での生活でディストレスとなっている事項を記入してもらい，先行文献より得たディストレス項目とを参考に調査紙の原案を作成した。この原案をもとに無作為抽出によって調査に同意が得られた大部屋入院の内科系患者 97 名を母集団とし，調査した。 その結果、(1)因子分析（ 主因子法，　バリマツクス回転 ）の結果，固有値 1.0 以上を考慮しスクリプト法により 3 つの因子を抽出した。 (2) 因子負荷量 0.5 以上を項目の決定の基準にした。また、第 1 因子で 3 項目，第 2 因子で 5 項目，　第 3 因子で 5 項目の計 13 項目あげることができた。 累積寄与率は第 1 因子で 29.0，　第 2 因子で 35.4，第 3 因子で 40.8 であった。因子の命名は，第 1 因子を物理的不快因子，第 2 因子を危険・不安因子，　第 3 因子を人的不快因子とした。内部整合性の指標である Cronbach の α 係数を各因子ごとに算出した結果をみると，物理的不快因子で 0.837，危険・不安因子で 0.727，人的不快因子 0.701，質問紙全体で 0.862 と高い値を示した。 担当部分：論文全般 共同発表者：上野栄一、高島佐知子、高間静子

27.　病室環境における入院患者のディストレスと不安度との関係	共著	平成 10 年 7 月	第 24 回看護研究学会，弘前	患者にとって入院は多くのディストレス（否定的ストレス）が予測される。特に生活の場である病室環境はさまざまな質のディストレスを患者は経験する。本研究では病室環境におけるディトレス測定尺度を使って入院患者のディストレス度を測定し，患者の不安度との関係を調べた。調査対象：富山県内の公立の総合病院に入院し，無作為抽出によって調査に同意が得られ，有効回答のあった内科系疾患患者 97 名を母集団とした。対象 97 名全体から 3 つのディストレス因子と特性不安･状態不安との関係をみると，ディストレスの物理的因子と特性不安との間に r =0.239 の負の偏相関係数を，状態不安とは r =0.223 の正の偏相関係数を示した。性別にこれらの関係をみると，男性群においてのみディストレスの人的因子と特性不安との間で r =0.284 の有意な正の偏相関係数を示した。入院回数別に分けてディストレスと不安度との関係をみると，入院 1 回目の患者群においてのみ特性不安とディストレス度は有意水準 1%の危険率で r ＝0.521 の高い正の相関を示した。しかし，入院 3 回目の患者群では状態不安とディストレスの物理的因子との間で r ＝0.438 の高い正の相関を示した。年齢別ではこれらの関係はみられなかった。これらの結果は、ディストレスの物理的因子と特性不安との負の相関に対して状態不安との正の相関は，特性不安ては物理的ディストレスは高まらないが，状態不安か高いと高くなることをさし，状態不安の高さはディストレス度に相乗作用することを表している。男性群のディストレスの人的因子と特性不安との正の相関は，男性のストレス解消法が酒等の方法であるために，入院によりこの方法が不可能となることからくるのかもしれない。入院 1 回目の患者群において特性不安とディストレスの合計との高い相関は，病室環境への不適応からくるものと考える。以上のことを総括すると、患者の状態不安は物理的ディストレスに影響し，また，入院回数が多いほど影響し，特性不安は入院回数が少ない群においてディストレスに影響することが示唆された。 担当部分：データ処理の指導 共同発表者：横田恵子、大江美由紀、谷　優美子、上野栄一、高間静子

28.　看護婦の社会的スキルと専門的自律度との関係	共著	平成10年7月	第24回看護研究学会，弘前	間でｒ＝0．927の高い偏相関係数を示した。看護職経験年数別でみると経験20～30年未満群のPNQ1・2と関係維持とはそれぞれ有意水準5%の危険率でｒ＝0.297，ｒ＝0.295の偏相関係数を示した。全体的にみると，関係開始や自己主張はPNQとは相関を示さなかった。学歴別でみると，専門学校卒群のPNQ2は関係維持と弱い正の相関を示し，短期大学卒群のPNQ3は関係開始とr=0．858の負の相関を，自己主張とｒ＝0.812の正の相関を示した。婚姻別にみると既婚群のPNQ1，2，3と関係維持とはそれぞれ有意な正の相関を示した。これらの結果から、看護婦の専門的自律度には主として社会的スキルの下位概念の関係維持のスキルのみか関係し，その他の関係開始，自己主張等のスキルは関係していないことが示唆され，この関係は性，年齢，婚姻，学歴，経験年数により異なっていることが明かとなった。 担当部分：データ解析 共同発表者：堂下芳美、八田朱美、江守外志子、上野栄一、高間静子
29.　血糖コントロールに伴い一過性の透視化をきたした一例	共著	平成10年9月	第58回日本糖尿病学会中部地方大会	症例は56歳男性で平成4年より糖尿病を指摘され今回血糖コントロール目的に平成9年5月3日当科人院。入院時、ＦPG251mg／dl、HbAIc8．9%で網膜症を認めないためインシュリン治療を開始し6／6にはFPG101mg/ｄｌまで改善した。しかし同時期より眼鏡が合わないなどの症状が出現したため眼科受診。網膜症は認めず、屈折力が右眼にて-3．ODから-2．OD、左眼にて-3.ODから-2.5Dの遠視化を認めた。視力障害が出現したため患者がインシュリン治療に不信感を抱いたが6／27には屈折力は入院時の値まで回復し症状も改善した。血糖コントロールに伴い網膜症が増悪した場合、回復しないことが多い。しかし屈折異常は可逆性の変化であることを患者に十分鋭明し、安心させることの心理的アプローチが必要であると考える。 担当部分：解析 共同発表者：岩田 実、春田哲郎、簿井勲、宇野立人、高野敦子、上野栄-、笹岡利安、石木　学、和田　努、石原元、石橋　修、小林　正、星山真理、池田成子

30.　高齢糖尿病患者とその家族の治療や療養法に対する満足度とギャップ	共著	平成 10 年 11 月	第 14 回富山県糖尿病懇話会,富山	老年糖尿病患者と家族の療養生活上の負担度と QOL,ADL,ストレスによる抑うつ性との関連について、富山医科薬科大学第 1 内科糖尿病専門外来通院の患者・家族 105 組について、糖尿病総合負担度スケール、老研式活動能力指標、日本版ＳＤＳを使用し調査した結果、患者群では症状と食事療法負担度の相関がみられ、家族群では療養生活の支援を患者ほど負担とは思っていなかった。また、患者、家族の糖尿病総合負担度・QOL・ADL と抑うつ性との間には、相関を認めなかった。うつ傾向は患者の約 1 割に認められ、約 2 割はうつ傾向境界型であった。うつ状態群の患者は、食事療法、不安度、糖尿病総合負担度得点が有意に高いという結果を得た。以上の結果から、うつ傾向にある患者は食事療法に対する負担度が正常群より高く、このことが糖尿病のコントロールを困難にしていると考えられる。 担当部分：研究計画 共同発表者：木谷真由美，　鍋山昭子，日下智子，　猪谷久美，　砂田厚子，　野上悦子，　上野栄一
31.　インスリンシグナル伝達における SHIP-2 の役割	共著	平成 10 年 12 月	第 10 回分子糖尿病学シンポジウムプログラム，松山	SHIP2 は血球系のサイトカインのシグナルを負にする作用を持つ。本研究では、ラット骨格筋による SHIP の isozyme である SHIP2 をクローニングして、その構造とインスリンシグナル伝達機構について調べた。その結果、SHIP2 は SHIP と同様に、インスリンの増殖作用を負に調節することが示唆された。また、SHIP2 はインスリンの代謝作用をも負に制御することが示唆された。 担当部分：解析 共同発表者：石原　元，笹岡利安，和田　努，堀　宏之，平井洋生，春田哲郎，薄井　勲，岩田　実，宇野立人，高野敦子，上野栄一，小林　正

32.　Kleinefelter 症候群に合併した糖尿病の一症例	共著	平成 11 年 3 月	第 59 回日本糖尿病学会中部地方大会，名古屋	症例：46 歳、男性。家族歴：父親が糖尿病。現病歴：昭和 61 年より DM、depression、mental retardation にて他院で medication（グリベンクラミド 7.5mg）を受けていた。平成 4 年より paresthesia を自覚し、HbAlc11.5%とコントロール不良であり平成 8 年 12 月に柏崎中央病院に入院。入院時所見：恥毛薄く、女性化乳房、精巣の萎縮、両下肢の腱反射消失、振動覚低下を認めた。染色体検査で 47XXY、血中テストステロン低値、LH, FSH も高値で Klinefelter 症候群と診断した。蛋白尿 1.1g/day Ccr74.3ml／min、simple retinopathy(+)と triopathy を認めた。一般に欧米では、Klinefelter 症候群に伴う糖尿病は軽症例が多く本例のように triopathy を伴うものは珍しい。Klinefelter 症候群に伴う mentall retardation による糖尿病への理解不足が triopathy をきたした一因と考えられた。 担当部分：実験、解析 共同発表者：岩田 実，春田哲郎，薄井勲，宇野立人，高野敦子，上野栄一，笹岡利安，石原 元，和田 努，堀 宏之，石橋 修，大角誠治，小林正，星山真理
33.　糖尿病外来通院中断者の特性と中断理由について	共著	平成 11 年 3 月	第 12 回日本看護研究学会地方会京都	糖尿病中断者を対象に、その理由と患者の特性を把握し、今後の指導に役立てたいと考えた。当院第一内科で糖尿病の治療をしていたが、平成 9 年に入り 1 年以上通院していない人を中断者として、計 180 名にアンケート（無記名）を郵送し、56 名から回答を得た。その中で有効回答の得られた 47 名を対象とした。患者の特性を測定するために、健康認識度、健康帰属傾向、保健行動の優先性、支援、タイプ A 尺度を用いた。その結果、中断理由の中で多かったものは、「病院での待ち時間が長いから」「自覚症状がないから」「食事、運動療法のみならば自分でできるから」などであった。通院の継続条件としてあげられたものは、「自宅又は職場の近くに病院がある」「病院までの交通の便がよい」「時間予約制が確実で、待ち時間が短い」「医師の対応が丁寧で親切」などであった。患者の特性を見ると、入院回数と保健行動の優先性、入院回数と健康帰属傾向、入院回数と健康認識度との間に負の相関関係があった。また、中断者の

				保健行動の優先性は、支援と健康帰属観に大きく関与していた。以上のことを総括すると、患者の通院継続に対する二ーズには、地理的条件、時間的側面、病院のソフトの側面（医師の対応）が多かった。入院回数と保健行動の優先性、健康帰属傾向、健康認識度には有意な相関があった。保健行動の優先性は、支援と健康帰属傾向が影響していた。 担当部分：研究立案、データ解析共同発表者：北林正子，広上眞里子，上野栄一
34.　脂肪細胞の分化におけるインスリンシグナル、特にPI3 kinase及びRapamycin感受性の重要性	共　著	平成11年、4月	第42回日本糖尿病学会，横浜	インスリンによる脂肪細胞分化促進の機序について検討した．【方法】3T3-L1前駆脂肪細胞に，PI3 kinase阻害薬であるwortmannin（以下WM），LY294003（以下LY），MEK阻害薬であるPD98059（以下PD），mTOR経路の阻害薬であるrapamycin（以下rapa）を処置，または持続活性型PI3 kinase（以下p110 CAAX）をアデノウイルスベクターを用い発現後，脂肪細胞への分化を誘導．分化率，BrdUの取り込み，c-fosの誘導，Rbの燐酸化とcyclin Dの蛋白量について検討した．【結果】 脂肪細胞への分化率，分化誘導1日目のDNA合成，Rbの燐酸化，cyclin Dの蛋白量はWM，LYにより完全に，rapaにより部分的に抑制されたが，PDには影響を受けなかった．c-fosの誘導はPDにより抑制されたが，WM，LY，rapaには影響を受けなかった．p110 CAAXは分化率を抑制した．【考察】インスリンはcyclin　Dの蛋白量の上昇とRbの燐酸化による，分化初期の一過性のDNA合成の促進（clonal expansion）を一つの機序とし，脂肪細胞の分化促進に寄与する可能性を示した．この際，MEKからc-fosに到る経路でなく，PI3 kinaseとrapa感受性経路の一過性の活性化が重要であると考えられた． 担当部分：実験、解析 共同発表者：薄井勲、春田哲郎、岩田実、宇野立人、高野敦子、上野栄一、川原順子、笹岡利安、石原元、小林正

35.　老年病糖尿病患者・家族の負担度と抑うつ性との関連	共　著	平成 11 年 5 月	第 42 回日本糖尿病学会，横浜	老年糖尿病患者と家族の療養生活上の負担度と QOL,ADL,ストレスによる抑うつ性との関連について、糖尿病総合負担度スケール、老研式活動能力指標、日本版ＳＤＳを使用し、富山医科薬科大学第 1 内科糖尿病専門外来通院の患者・家族 105 組について調査した結果、（1）患者では症状と食事療法負担度が有意に高かった。（2）家族は療養生活の支援を患者ほど負担とは思っていない。（3）患者、家族の糖尿病総合負担度・QOL・ADL と抑うつ性との間には、相関を認めなかった。（4）患者の約 1 割にうつ傾向が認められ、約 2 割はうつ傾向境界型であった。（5）うつ状態群の患者は、食事療法、不安度、糖尿病総合負担度得点が有意に高かった。以上の結果から、うつ傾向にある患者は食事療法に対する負担度が正常群より高く、このことが糖尿病のコントロールを困難にしていると考えられる。看護介入としては、うつ状態を引き起こした背景をっさぐり、その改善をはかることが重要と考える。 担当部分：データ解析、考察 共同発表者：鍋山昭子，木谷真由美，猪谷久美，砂田厚子，杉政美雪，上野栄一，小林　正
36.　ラパマイシン感受性経路を介するインスリンシグナル伝達抑制機構	共　著	平成 11 年 5 月	第 42 回日本糖尿病学会，横浜	インスリン刺激により SDS-P.における IRS-1 の electrophoretic mobility shift（EMS）　及びその degradation が生じる。本研究では IRS-1 の EMS の機序とその機能的意義を検討した。また、3T3-L1 脂肪細胞を用いてインスリン、 PMA 、p110CAAX による IRS-1 の EMS および degradation を検討した。その結果、（1）インスリン，p110CAAX　および PMA による　IRS-1 の EMS　はラパマイシンにより抑制された。（2）ラパマイシンにより IRS-1 の EMS および degradation を抑制するとインスリン刺激後 4 時間における p85 と IRS-1 の結合および　Akt リン酸化は対象に比し上昇を認めた。これらの結果から、PI3-Kinase の下流に存在するラパマイシン感受性経路がインスリン刺激による IRS-1　のセリン／スレオニンリン酸化および degradation に関わっており、インスリン長時間刺激後に生ずるインスリン作用抑制機構の少なくとも一部を構成するものと考えられた。担当部分：解析共同発表者：宇野立人、春田哲郎、薄井　勲、

				岩田　実、高野敦子、上野栄一、川原順子、笹岡利安、石原　元、小林　正
37.　入院患者の日常生活における適応度測定尺度作成の試み	共　著	平成 11 年 7 月	第回日本看護研究学会	本研究では，入院患者の日常生活における適応の程度を測定するための尺度の開発を試みた．無作為抽出によって調査に同意が得られた富山県下の公立病院に入院する内科系患者 100 名に調査し，有効回答の得られた 97 名を対象とした．質問紙の原案は 50 項目からなる 4 段階のリッカートタイプとし，これを用いて調査し分析したところ，次の結果を得た．（1）因子分析（主医子法・バリマックス回転）の結果，固有値 1.00 以上を考慮しスクリプト法により 6 つの因子を抽出した．（2）顔子負荷量 0..5 以上を項目決定基準にした結果第 1 因子で 8 項目，第 2 塩子で 9 項臥　第 3 因子で 6 項乱目、第 4 因子で 5 項目，第 5 因子で 3 項目，第 6 因子で 4 項目の計 35 項目を確認した．累積寄与率は 6 因子で 50.8 であった．因子の命名は，第 1 因子を「病床因子」，第 2 因子を「病院食因子」，第 3 因子を「排泄環境因子」，第 4 因子を「同室者因子」，第 5 因子を「病室の物理的因子」，第 6 因子を「保清規制因子」とした．（3）質問紙の信頼性検討のため，内的整合性の指標である Cronbach の信頼性係数を算出したところ，病床因子で 0.879．病院食因子で 0.924，排泄環境因子で 0.872，同室者因子で 0.792，病室の物理的因子で 0.837，保清規制因子で 0.822 であり，質問紙全体でも 0.929 であった．（4）質問紙の妥当性検討のため，不安度や快眠度との相関をみた結果，質問舵と関学版の特性不安・状態不安とはそれぞれ有意水準 5%で r＝0.378，0.354 の正の相関を示した．以上の結果から 35 項目からなる質問紙は，高い信頼性・妥当性が支持された． 担当部分：データ処理、考察 共同発表者：高島佐知子、上野栄一、高間静子、谷優美子

38.　看護における対人関係の研究の動向	共　著	平成 12 年 6 月	第 11 回日本看護研究学会北海道地方学術集会、札幌	患者の入院生活への適応は，治療効果に影響する． 対人関係の歴史は、西暦紀元前 300 年以上も前にプラトン、アリストテレスらによって対人関係の問題が取り上げられ、これが対人関係の歴史の始まりと考えられている。本研究では、過去 15 年間における日本国内での対人関係に関する研究の動向についてその特徴を内容分析の手法を用いて明らかにした。研究方法は医学中央雑誌（CD-ROM 版）より過去 15 年間（1985 年～平成 11 年）の文献より、次の手順により分析した。その結果、過去 15 年間における対人関係に関する文献数は 1987 年 67 件、1990 年 85 件と他の年度と比べて多く、対人関係+看護の文献検索では、数は少ないものの 1990 年度以降増えてきている。次に、内容分析による単語の種類をみると、1987 年では、法（24）、精神医療改革（5）、新・精神保健法（4）と精神保健に関する研究が増加している。これらは 1988 年に精神保健法が制定されるということで、この法律に関する関心が高まったためにこの結果につながったと考えられる。また、平成 6 年の雲仙・普賢岳噴火災害、平成 11 年の災害ＰＴＳＤなど、災害に関する研究もされてきている。以上のことを総括すると、対人関係に関する研究は、1987 年より増加の傾向にある。また、看護に関する対人関係の研究も 1990 年以降増加の傾向にあり、患者との対人関係をテ-マとする研究が増えてきている。 担当部分：研究企画、統計処理、抄録作成 共同発表者：上野栄一、山内 学、望月吉勝、北村久美子

39.　最近の精神医療の動向について-過去13年間の文献探索から-	共　著	平成12年6月	第11回日本看護研究学会北海道地方学術集会、札幌	本研究では、過去13年間の精神医療の動向について、文献探索的研究を行い、最近の精神医療の特徴について考察した。文献は、医学中央雑誌CD-ROM版を用い、内容分析手法を用いて、タイトルを品詞に分解し、その名詞句の頻度から最近の精神医療の特徴を明らかにした。その結果、(1) 精神衛生法から精神保健法へと改正された1987年においては、「法」「精神衛生法」「精神保健法」という語が上位に現れ、その後の法改正と併せて、精神保健福祉行政、施策の変遷に伴う変化が見られた。(2) 「精神医療」「現状」という語句は、通年を通して見られた。(3) 国内において、「リエゾン精神医療」「地域医療」「報道機関」「阪神-淡路大震災」等の社会情勢を反映した用語も見られた。担当部分：研究立案、内容分析共同発表者：山内学、上野栄一、望月吉勝
40.　セミクリーンルーム入室患者のストレス要因と対処行動	共　著	平成12年6月	第31回日本看護学会、浜松	個室・カーテン隔離を強いられた患者にストレスをもたらす要因と程度、対処行動を明らかにし、さらにそれぞれの相違を検討し、必要な看護介入について明らかにした。調査対象：個室隔離を経験した患者(以下個室群とする)14名。カーテン隔離を経験した患者（以下カーテン群とする）7名。(両群に重複症例あり)。文献､患者からの情報､当科の特殊性から個室群に対して20項目を選びオリジナルのストレスチェックテスト(以下KSTとする)を、カーテン群に対して23項目を選びオリジナルのストレスチェックテスト(以下ＣＳＴとする)を作成し併用した。ＫＳＴ・ＣＳＴの項目としては基本的日常生活行動で分類し、『苦痛』と『気兼ね』の2つでストレスの程度を測定した。その結果、(1) 『苦痛』としてのストレスは、「食事」がもっとも強く、「排泄」「コミュニケーション」は少なかった。(2) 『気兼ね』としてのストレスは比較的少なかった。(3) カーテン隔離を経験した群はストレスに対して対処行動が取れていたが、個室群では対処行動は取れていなかったことがわかった。 担当部分：研究計画 共同発表者：我妻あゆみ、萩原 正子、上田 好恵、小山 智美、佐藤 華代、加藤 澄江、 上野 栄一

41.　看護学生の健康度と対人関係との関係	共　著	平成 12 年 7 月	日本看護研究学会、千葉	睡眠障害は、精神面において記憶力の低下やいらいら感が生じることなどから、対人関係にも悪影響を与えていると考えられる。本研究では、看護学生の健康度と対人関係との関係について調査した。、使用尺度として、健康度の指標として睡眠度、行動特性としてタイプ A 尺度、対人関係の測定にはシャイネス尺度、対人態度基本インベントリ-尺度、対処行動の尺度として積極的・効果的尺度を用いた。その結果、健康度は対人態度に影響を与え、また健康を害すると対人関係において、対人不安が高まる一方で、よりよい対人関係にしょうとする働きのあることがわかった。 担当部分：研究計画、統計解析 共同発表者：松田美千代、田中いずみ、長谷川ともみ、前畑夏子、安田智美、大野昌美、伊藤廣美、山内　学、松浦和代、上野栄一、望月吉勝
42.　個室・カ-テン隔離を強いられた患者のストレス要因と対処行動との関係	共　著	平成 12 年 7 月	日本看護研究学会，千葉	個室隔離を経験した 14 名の患者、カ-テン隔離を経験した患者に対し、ストレスをもたらす要因と程度、対処行動の比較の検討をおこなった。使用尺度として、心理的ストレス反応尺度（ＰＳＲＳ）とオリジナルのストレス尺度を開発したものを用いた。その結果、（1）苦痛としてのストレスは、食事がもっとも強く、排泄、コミュニケ-ションは少なかった。（2）気兼ねとしてのストレスは、比較的少なかった。（3）カ-テン隔離を経験した群はストレスに対して対処行動がとれていたが、個室群では対処行動はとれていなかった。 担当部分：調査票集計、データ解析 共同発表者：萩原正子、上野栄一
43.　看護学生の自我状態と対人関係との関係	共　著	平成 12 年 7 月	日本看護研究学会、千葉	本研究では、看護学生（62 名）の自我状態と対人関係との関係について調べた。その結果、（1）自我状態と対人不安、対人態度との間には有意な相関があった。（2）対人態度は自我状態に影響を与えていた。（3）自我（CP と A）とタイプ A との間には有意な相関があった。 担当部分：研究立案、データ解析 共同発表者：田中いずみ、松田美千代、長谷川ともみ、前畑夏子、安田智美、大野昌美、山内　学、上野栄一、松浦和代、望月吉勝、伊藤廣美

44.　WHO/QOL-26 調査票による看護学生の QOL の検討	共　著	平成 12 年 7 月	日本看護研究学会、千葉	将来の保健医療福祉の担い手となる看護学生の QOL を測定し、関連する要因を、看護学科 3 学年 66 名を対象に調査し探索した。使用尺度は、QOL-26 日本語版（田崎・中根、平成 9 年）、Self-Esteem Scale(RSES:Rosenberg,1965)、Breslow の健康習慣 7 項目を用いた。その結果、QOL-26 全体と領域別の得点の中央値をみると、全体では 3.35 であったが、包括的認識はやや小さく、社会的認識はやや大きい値であった。また、QOL-26 全体および領域別得点と RSES との間にはいずれも有意な相関関係がみられた。なかでも、心理的領域の相関係数は大きく、身体的領域と社会的関係がそれに次ぎ、環境と包括的認識は他に比して小さかった。 担当部分：研究立案、データ解析 共同発表者：望月吉勝、上野栄一、山内　学、松浦和代
45.　精神科に対する看護学生のイメージと対人不安・対人態度・自我状態との関係	共　著	平成 12 年 7 月	日本看護研究学会、千葉	本研究では、シャイネス尺度、基本的対人態度測定インベントリー、エゴグラム、タイプ A 尺度を用いて、対象である看護護学生 62 名の精神科に対するイメージと対人不安、対人態度、自我状態との関係について調べた。その結果、（1）看護学生の実習前の精神科に対するイメージはマイナスイメージが多いが、実習後にはオメージの変容が見られた。（2）対人態度とイメージには有意な相関があった。（3）自我状態はイメージに影響を与えていた。担当部分：抄録作成、プレゼンテーション共同発表者：上野栄一、山内　学、松浦和代、望月吉勝、伊藤廣美、田中いずみ、長谷川ともみ、前畑夏子

46.　精神科看護の歴史に関する研究の動向	共　著	平成 12 年 7 月	日本看護研究学会、千葉	日本看護研究学会、千葉 本研究では我が国における精神看護の歴史の研究の動向について調べた。研究内容の分析を、看護、看護教育、管理面の視点よりおこなった。その結果。（1）精神看護の歴史に関する研究は数少ない。 （2）精神科看護に関する文献が多く、教育に関する文献は少ない（3）内容の分析では、我が国では、職業看護婦の道を歩み出したのは明治以降であるが、精神医療の閉鎖性、後進性の中で精神科看護は停滞していた。また、精神疾患患者をとりまく環境の変化はその時代の社会背景、および精神医療の発達と密接につながり、精神科医療の中で果たす独自の役割機能も変化しきていることがわかった。 （4）本研究で行った内容分析による語彙レベルによって日本語の文章を分別、分析することは精神医療の動向を評価する際に大変有効であることが示唆された。 担当部分：研究立案、データ解析 共同発表者：山内　学、上野栄一
47.　Phorbol 12-myristate 13-acetate(PMA)によるインスリン抵抗性は mammalian target of rapamycin(mTOR)経路を介する	共　著	平成 13 年 4 月	第 44 回日本糖尿病学会年次学術集会、京都	PMA 刺激による IRS-1 の electrophoretic mobility shift(EMS)の機序およびその意義について検討し、また 3T3-LI 細胞を用いてインスリン、PMA 刺激による IRS-1 の EMS およびそれ以下のシグナルについて検討した。その結果、(1)インスリン刺激とは異なり PMA 刺激により生じた IRS-1 の EMS は、GF 109203X 前処置により抑制された。(2)PMA60 分刺激後インス リン 10 分刺激を加えると、IRS-1 のチロシンリン酸化、Akt のセリンリン酸化はコントロールに比べ減弱したが、rapamycin 前処置とアミノ酸欠損により改善した。以上の結果から、インスリン刺激と PMA 刺激により生じる IRS-1 のセリンスレオニンリン酸化は異なる経路を介しているが、mTOR 経路を介する点において共通していたこまたこの経路が、インスリン刺激後のインスリンシグナルの減弱に関与していることが示唆された。 担当部分：解析 共同発表者：宇野立人、春田哲郎、高野敦子、川原順子、上野栄一、薄井勲、岩田 実、笹岡利安、石原 元、小林 正

48. The professional duty of nurses in Japan: Analyzing malpractice cases in 1990’s.	共　著	平成 13 年 6 月	International council of nurses ICN 22nd Quadrennial congress , 10-15, june, 平成 13 年 (CNS), Copenhagen.	本研究の目的は、事例を通し看護婦の専門的義務を明らかにすることである。看護婦に関与する医療事故は、これまでに 10 件起こっている。与薬ミス 2 件、人工呼吸器に関係するもの 2 件、ベッドからの転落 2 件、抑制帯に関するもの 1 件、外科処置中の観察に関するもの 1 件、新生児の体位に関するもの 1 件、子どもの観察に関するもの 1 件であった。どの判決も看護婦の観察の注意義務を怠っていると指摘している。将来、患者ケアのレベルの向上と看護婦の法的責務の明確化が必要となることが示唆された。 担当部分：事例の分析 共同発表者：Sadako Yoshimura, Yoko Sato, Abe Noriko, Eiichi Ueno
49. 内容分析を用いた看護学生の考える現代医療の特徴	共　著	平成 13 年 7 月	第 27 回日本看護研究学会学術集会、金沢	20 世紀の医療は、インフォームドコンセント、臓器移植、遺伝子治療などの発展をみたように大変複雑化してきた。21 世紀はますます IT（情報技術）の進歩により医療・看護も大きな影響を受けると予想される。本研究では、精神看護学の課題レポート「現代医療」について内容分析法を用いて分析することにより、学生の考える現代医療の特徴を明らかにした。分析対象は看護大学第 3 学年生の記載した「現代医療」についてのレポート（平成 11 年度 9 月）60 人分を内容分析法を用いて解析した。一人のレポート枚数は 400 字詰め原稿用紙 4 枚程度であった。その結果、学生の考える現代医療の特徴について次のことが明らかとなった。（1）現代医療には心のケア、精神的なケアが必要であることが認識されていた。（2）患者、家族、人間等の対人関係に関する語彙が多く使用され、学習内容を端的に示す用語が用いられていた。（3）死という語は、救命救急と連動して使用されていることが多かった。（4）精神に関わる語彙は多様な表現に用いられていた。 担当部分：データ解析、抄録作成 共同発表者：上野栄一、 山内　学、松浦和代、望月良勝、萩原正子、小山智美、伊藤廣美、石崎佳奈子、須永恭子

50.　多床室での間仕切りカーテンの有用性	共　著	平成 13 年 7 月	第 27 回日本看護研究学会学術集会、金沢	病院での入院生活は、集団生活を余儀なくされ、患者は常にプライバシ-の問題にも多くのストレスをかかえることになる。本研究では、多床室で生活している患者の同室者を気にする生活場面と度合い、間仕切りカーテンで保持されるプライバシーの度合いを調査し、多床室における間仕切りカーテンの有用性を明らかにした。調査対象は内科病棟の 6 床室に 1 週間以上入院している患者 40 名を対象とした。その結果、同室者を気にする場面としては「排泄」「更衣」「清拭」が高かった。カーテン使用の有無では、「診察」で閉めるとした者が多いにもかかわらず、気にする度合いとしては低かった。さらに「診察」においては、患者が気にする前に医療者が配慮しているといった行為があることも明らかになった。以上のことより、気密性の少ない間仕切りカーテンには、患者間の人間関係というデリケートな感情を含んでいる事が明らかになった。また音や臭いといった限界もある事も考慮して看護をしていく必要性のあることが明らかとなった。 担当部分：データ解析、抄録作成指導 共同発表者：小山智美、黒田夕香、萩原正子、上野栄一
51.　精神看護学実習前後の精神科に対するイメージの変容	共　著	平成 13 年 10 月	北海道地域福祉学会研究大会、札幌	我が国は IT 等の国策により情報産業、グローバル化が進み、より機械化文明となってきた。その-方で心の病の増加がみられる。今後、精神看護領域における心のケアはますます重要となると考えられているが、精神科や障害者に対して持つマイナスのイメージは看護の質に影響すると考えられる。本研究では、学生の実習後の精神科に対するイメージの変容について調査した。調査対象：2 大学の看護大学学生 62 名（4 学年）。調査期間：平成 11 年 5 月～同年 8 月。イメージ調査にあたっては、自由記載方式とした．内容分析により、イメージの変容について形容詞、名詞を中心に抽出した。実習前調査では、 マイナスのイメージのみ回答した群：50 名、プラスのイメージのみ回答した者 1 名、マイナスとプラスのイメージを回答した群（混合型）：11 名であった。 どちらにも属さないイメージ：1S 名（複数回答）、全イメージ数は 321 個であった。マイナスのイメージとして

				は、暗い、暗い、不安、鉄格子などが、プラスのイメージとしては、なごやか、ゆったり、純粋、おおらか、楽しい等があげられていた。実習後の調査では、イメージの変化した学生は、100%であり、「マイナスイメージはなくなった」、あるいは「軽減した」と表現していた．また、マイナスイメージを持つ根拠としてマスコミの影響が大きかった 担当部分：データ解析、抄録作成 共同発表者：上野栄一、山内　学
52. 内容分析による「Notes on Nursing」の特徴	共　著	平成 14 年 8 月	第 28 回日本看護研究学会学術集会、横浜	フローレンス・ナイチンゲール(Florence Nightingale, 1820-1910:以下ナイチンゲールと略す)は、イギリスの看護婦であり看護専門職の創立者である。日本でもよく親しまれている「Notes on Nursing：看護覚え書き」は今なお看護の原典として教育に実践に生かされている。本研究では、Notes on Nursing を内容分析を用いてその特徴を明らかにした。その結果、彼女は nurse を「a good nurse」「a careful nurse」「careless nurse」「a true nurse」「professional nurse」「the kindest nurse」「the private nurse」「the clever nurse」「the experienced nurse」「a confidential nurse」等の使い分けをしていた。以上のことから、内容分析による「Notes on Nursing」の特徴として次のことが明かとなった。1) 全体では、冠詞、前置詞、助動詞、代名詞がよく用いられていた。2) 名詞では、医療に関わる人々、環境に関する単語が多く用いられていた。3) 動詞では、make, say,want, think、take, give が上位を占めた。4) nurse(nurses)には、専門職としての特徴や役割が描写されていた。以上のことを総播すると、ナイチンゲールの看護理論の基礎をなす環壊に関する単語が多く用いられていた。また内容分析により Notes on Nursing」の特徴をみることができた。 担当部分：データ解析、抄録作成 共同発表者：上野栄一、三田村保、伊藤幸子、 須永恭子

53. 寒冷地降雪期における女子高校生の冷えに関する実態調査	共　著	平成 14 年 8 月	第 28 回日本看護研究学会学術集会、横浜	北海道は暖房設備の充実、交通機関の発達により人々の冬季寒冷暴露は減少しているといえる.しかし戸外はマイナス気温であり、何らかの防寒対策は必要である.近年、降雪期であっても素足に短めのスカートで通学する女子高校生を見かけ、保温を考慮しているとは考えがたい.本研究では、高校生を対象に降雪期間の冷えに関する実態調査を行った。対象は協力が得られた旭川市及び近郊の制服のある公立高校 3 校の 2 年女子、319 名である.平成 14 年 2 月 12 日より同 19 日まで、無記名自已記載アンケート調査を実施した。その結果、回収は 279 名、有効回答数は 250 名であった(有効回答率 78.4%).冷えを自覚していた者(冷え有群とする)は 32.0%であり、ややそう思うを含めると 70.0%であった.冷えを感じる時期については、74.8%が冬期間をあげ、年間を通して感じている者は全体の 16.4%であった.冷え有り群は通学時の冷え(P<.005)と年間を通しての冷え(P<.0001)を有意に感じていた.冷えの部位は足先、指先、膝、足底の順に多く、冷え有り群に有意に多かった部位は足先(P<.001)、足底(P<.001)、指先(P<.001)、踵(P<.005)、尻(P<.005)であった.冷えによって生じると考えられる症状と冷えに対する意識、関連すると思われる日常の習慣について 4 段階評定による平均点を、冷え有り群と無し群との間で比較した.その結果、冷え有り群の平均 BMI は 20.3 であり、無し群(21.3)に比較し有意に差があった(p.038).以上のことから、寒冷地において、冷えやそれに伴う身体症状は高校生の世代から現れている.思春期の特性を考慮した冷え予防や生活習慣の指導を高校生世代から行う必要のあることが明らかとなった。 担当部分：データ解析、抄録作成 共同発表者：伊藤幸子、上野栄一

54. 内容分析による最近の糖尿病に関する看護の研究の動向	共　著	平成 15 年 4 月	糖尿病 46 巻臨増 P.S242	最近の糖尿病に関する看護の研究の動向をテキストマイングを用い分析した糖尿病研究に関する特徴を明らかにした。結果、全体では,リハビリテーションに関する研究が多く,また糖尿病の合併症や後遺を関するものも多く研究されていた.各年度別に研究の特徴を一ると,リハビリテーションに関する研究は 1990 年～平成 2000 で上位を占め、1996 年度からは,患者教育,糖尿病教育に関する看護研究が多くなされるようになっていた。 担当部分：研究計画，統計処理共同発表者：北林正子，上野栄一，広上真里子
55. 内容分析による精神科病棟の看護カルテに記載される用語の特徴	共　著	平成 15 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)26 巻 3 号 P.227	T 大学附属病院精神科病棟で使われている退院時看護要約(以下看護要約)に記載された 64 件を分析対象とした．精神科病棟で用いられる用語の特徴を明らかにした。その結果、 1.全体では読点、助動詞、助詞が上位をしめた.2.名詞では、入院、退院、症状、改善、療法が多かった.3.看護要約によく用いられる用語には、9 つの種類(ファクター)があり、特に症状に関する用語の中に精神科看護特有の用語が多くあった.4.目本語表記では、句読点、「うつ」と「欝」、「こと」と「事」などといった漢字・ひらがなの表記の違いがあった. 担当部分：研究計画、統計処理 共同発表者：辻口喜代隆，上野栄一

56. 内容分析の手法を用いた観光客がとらえる八尾町の印象とまちづくりの視点 観光客からの1,011通の手紙を分析して	共　著	平成15年6月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)26巻3号 P.444	人口約2万3千人の町に、「おわら風の盆」という祭り期間(前夜祭含め14日間)どなると、約30万人の観光客が全国から訪れる富山県八尾町において観光客による視点を取り入れるべく、「町に対する感想」や「まちづくりへの提言」等を手紙に綴ってもらい、それを内容分析法を用いて、八尾町の印象やまちづくりの視点を明らかにした。町内148ケ所において、「おわら風の盆」に訪れた観光客22,626人に、八尾町を訪れての感想、」や「まちづくりへの提言」等について自由に言髄してもらうための手紙を配布したところ、返信のあった1,011通分(回収率4.47%)について、内容分析法を用いて鱗斤した。その結果、(1)観光客がとらえる八尾町の印象は、抽出された茗詞、形容詞、動詞のどの語彙においても、肯定的な表現が上位を占めた。(2)観光客の多くは、八尾をｒおわらの町」よりも「風の盆の町」として表現し、認識していた。(3)「多い」畷念」に関わる語彙には、多様な表現が達動して使用されていた。(4)本研究で用いた内容分析法は、町の印象やまちづくりについて、観光客がとらえた視点を客観的かつ的確に把握していた。(5)今後この手法は、自由言磁等の分野での応用が期待できることが示唆された。 担当部分：解析、考察 共同発表者：村上満，上野栄一
57.　内容分析による「Notes on Nursing(看護覚え書)」の特徴 collocationによる解析から	共　著	平成15年6月	日本看護研究学会雑誌26巻3号 P.458	フローレンス・ナイチンゲール(以下,ナイチンゲール)の著書「Notes on Nursing」には,13の章がある直本研究では,これら13章につけれられたタイトルから,単語レベルでの解析を試み,キーワードの前後の単語の分析をした。また、キーワードを設定し,コロケーション解析をした結果,キーワードの前後には冠詞,定冠詞,前置詞が多く配列され、また,動詞,動名詞による単語の違いが,前後の単語の配列に影響を与えていた。 担当部分：研究総括、統計処理 共同発表者：上野栄一，須永恭子

58．福祉関連用語とエンパワーメント～「障害者」と「障がい者」のイメージの変化と内容分析～	共　著	平成 15 年 6 月	日本福祉心理学会第 1 回大会、東京.	本研究では、地域住民に対し、「障害者」と「障がい者」の用語から受けるイメージの特徴ならびに差異について調査を行い、その構造を明らかにした。対象は富山県八尾町に住む中高生以上の者、計 430 名に調査票を配布し、回答が得られた 425 名であった。その結果、「障害者」と「障がい者」に対するイメージの評定漢字群では、「重い」「現実的な」「複雑な」の 3 項目において、平均値が 4.0 以上であった。これに対し、ひらがな群では、「強い」「重い」「鋭い」「太った」「急激な」の 5 項目を除いた 25 項目すべてにおいて 4.0 以上で肯定的な方向であった。主成分分析では、5 因子が抽出され、第 1 因子は、『快感因子』と命名し、第 2 因子は、『包容感不快感因子』、第 3 因子は、『活力因子』、第 4 因子は、『親近感因子』、第 5 因子は『感情因子』と解釈できた。 共同発表者：村上　満、岩倉伸一、島滝しず子、小坂鐘治、新村吉通、上野栄一、安部　良
59．図形描画を利用した対人コミュニケーションの伝達効果	共　著	平成 16 年 3 月	第 17 回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会, 京都.	基礎看護教育におけるコミュニケーション技術の修得は大変重要である。本研究では、一方通行のゲーム(以下、課題 1)とする)と両面通行のゲーム(以下、「課題 2」とする)を通して、両者のコミュニケーションの違いを主観的、客観的に評価した。実施期及び対象者:平成 15 年度基礎看護実習(病棟実習)前。第 2 学年の調査の同意が得られた 50 名(68 名中)のデータを分析(4 名は図形の伝達者)した。結果、 両面通行のコミュニケーションは一方通行のコミュニケーションよりも、より精度の高い図形描写ができていた。また、一方通行のコミュニケーションでは、混乱、不安・緊張感などの感情が表出し、両面通行のコミュニケーションでは安心感があった。 担当部分：研究計画、研究総括 共同発表者：上野栄一，横田恵子

60．基礎看護実習における学生の感想文の分析－患者とのコミュニケーションを通してー.	共　著	平成 16 年 3 月	第 17 回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会, 京都.	本大学では 2 年次に基礎看護実習において初めて病棟実習が行われる。実習期間は平成 14 年 10 月から平成 15 年 2 月であり、病棟での実習は 7 回実施している。分析対象は、研究に対し同意の得られた本大学の看護学生(2 年生)52 名の感想文であり、全実習終了時に自由記載により記述してもらった。分析は、内容分析法を用いて解析した。その結果、感想文全体において、名詞の出現頻度を見ると、第 1 位:患者(149 回)、第 2 位=実習(116 回)、第 3 位:会話、話(81 回)と続いた。次に 5 回以上出現した 61 の名詞に関して、グループ化し、ネーミングを行った。その結果、コミュニケーション因子(コミュニケーション、相互交渉、会話等)、対人因子(患者、看護師、医師、家族、人、自分等)、病院環境因子(ナースステーシ当ン、病棟、入院、生活等)、病態因子(病気、病状、疾患、状態)、情報収集因子(情報、カルテ、目的、課題、見方、アセスメント、観察等)、心理的因子(緊張、不安、余裕、心、心理、気持ち、思いなど)、自己評価・自己分析因子(実感、把握、理解、大切、反省、不足、努力、経験、成長、勉強、知識など)、時間因子(最初、毎回、今回、時間など)の 8 つの因子が抽出できた。 担当部分：研究計画、統計処理共同発表者：横田恵子，上野栄一
61．セルフモニタリング法を使用した成人型アトピー性皮膚炎患者の掻破行動に関する内容分析	共　著	平成 16 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)27 巻 3 号 P.92	本研究では、セルフモニタリング法にて得られた自由由記載欄の文章を単語単位に解析し,客観的に解析することで、セルフモニタリング法の効果及び成人型 AD 患者の新たな特性を明らかにした。対象は平成 15 年 6 月から 9 月に S 病院皮膚科外来に通院した成人型 AD 患者に対し、文書にて本研究の目的を説明し同意を得,患者による 4 週間の掻破行動目記記載と面接を行ない、掻破行動日記を回収できた 7 名の自由記載欄に記載された文章を解析した。その結果、「手指」が掻破行動を行なう器官であるため,介入前半で「上肢」の掻く行為が自覚され,介入後半にその関心が「上肢」以外の部位へ向けられ,「上肢」に関する単語記載量が介入後半では減少したと考えられる。さらに「意識下」での掻破行動の状況から,掻破行動には身体面の健康状態だけでなく,日常生活も大きく関係していることが示唆された。掻破行動を意識し抑制してい

				ると考えられる単語が表出され,セルフモニタリング法により自分自身が掻破行動をコントロールすることにつながると示唆された。 担当部分：統計処理 共同発表者：長内志津子，八塚美樹，安田智美，吉井美穂，田澤賢次，上野栄一
62．外来に通院する高血圧症患者の日常生活における自己管理度の実態調査	共　著	平成16年6月	日本看護研究学会雑誌27巻3号 P.99	生活習慣病である高血圧症をもつ患者が増えてきている.そこで,本研究では外来に通院する高血圧症患者が目常生活においてどの程度自己管理できているのか.また、患者の背炭の違いによる自己管理の程度を調査した。対象者は大学病院に本態性高血圧症で通院の外来患者105名(年齢33～83歳)である。測定用具は「高血圧症患者の自己管理度測定尺度」を用いた。 その結果、全体の合計得点は65.8点であり,全体の得点で運動管理の得点が低かったのは,運動療法は効果があることをあまり知らないという知識の不足が影響している可能性が考えられた。また,肥満は血圧を上昇させせる二とが報告されており,本研究の対象者にはBMI が25%以上の者が44人(42%)いたことから,肥満改善・予防にむけた食事療法や運動療法を患者が行えるような支援が必要であり、また患者への支援に関して、男性・比較的若い年齢層・有職者に対し,特に充分に行う必要性のあることが示唆された。 担当部分：抄録 共同発表者：横田恵子，上野栄一，高間静子
63．データマイニングによる看護学生の考える看護観　自由記載文の分析から	共　著	平成16年6月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)27巻3号 P.132	看護教育の中で看護実践能力の修得は重要である。その基礎となるのが看護観である。看護観を高めることは,専門職としての基盤ともなる。本研究では学生がどのような看護観をもっているかについて,その特徴を明らかにすることを目的とした。1)調査対象:県内の看護大学生58名。2)調査内容:看護観について自由記載する。3)調査期間:平成15年7月～8月 4)分析方法:単語レベルで分析し,コロケーション解析を行った。倫理的配慮としては,氏名や固有名詞があれば除去すること,形態素解析を行い文章が特定できないようにした。 全体の解析結果総単語数は28,107個,2,253種類の単語があった。上位頻度の単語では,患者,看護,.人,思う,看護師,私患者さん,考え,思い,時間,でき

				る,必要,病気,健康等であった。 3.学語頻度上位5語以上の名詞を抽出し分類した。その結果,対人関係,症状,看護ケア,自己啓発,看護理論,時間の6つのカテゴリーに分かれた。 4、コロケーション解析では次の結果を得た。何を『重要』と捉えているか(20件):<人間><科学,技術,精神〉<杜会・健康・看護><信頼関係><自立><知識><環境〉<感性><観察力><コミュニケーション>等があった。何を『難しい』と捉えているか(12件):<信頼関係><看護〉<気持ちの理解〉等。何を『必要』としているのか(71件)=<技術や知識><経験><観察カ><経済,環境,政治の知識><的確な情報収集と客観的な半1」断><コミュニケ』ション><精神的ケア〉等があった。何を『大切』と捉えているか(70件):<コミュニケーション><出会い><信頼関係><専門性〉<自立〉等があった。 担当部分：研究総括、統計処理 共同発表者：上野栄一，横田恵子
64．ナイチンゲール書簡集にみるスピリチュアルケアの記述内容の分析	共　著	平成17年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会	ナイチンゲールの看護観がなぜ今も生きて働き行動につながっているのかについて考えた時、それはスピリチュアルな側面が大きく影響を及ぼしているのではないかと推測する。本研究では、スピリチュアルな側面を明らかにすることを目的とした。その結果、新訳・ナイチンゲール書簡集の中から分析した結果、下記の6つのサブカテゴリと4つのカテゴリーを抽出できた。【自己自身にむけられた思考】【神（Spirit）にむけられた感謝や賛美・喜び・祈り】からは、①『自己』、【教訓や教え】【他者へのとりなしや祈り】からは、②『他者(人・自然)』と命名でき、【神(Spirit)の存在】は『超越的存在』、【時間的過去、現在、未来】は『時間』とそれぞれカテゴリーを抽出した。以上のことを総括すると、ナイチンゲールは、書簡集の中で、聖書から116箇所を取り入れて看護を語っている。今後、看護の実践の場、教育にスピリチュアル的な考えや評価を十分活用することが人間を統合的に捉えるという看護に必要なことと考える。本人担当部分：質的解析共同発表者：江口富子、　長　光代、上野栄一
65．コミュニケーションスキルと自己開示度との関係	単著	平成17年5月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会	本研究では、看護師の自己開示度とコミュニケーションスキル尺度との関係について調査した。研究対象は、N総

				合病院に勤務する看護師163名にアンケート用紙を配布し、103名の回収（回収率63%）、データは独立変数として、年齢、経験年数、ホスピス緩和ケアの関心の有無など8項目設定し、分析対象とした。測定尺度は自己開示度尺度（小口孝司、1989）、看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度を用いた。結果、専門学校卒と、短大・大学卒のコミュニケーションスキル尺度の関係では、専門学校卒の方が、コミュニケーションスキル尺度の、「話のスムーズさ」「積極的傾聴」の得点は、短大・大学卒群よりも高い値を示した。所得免許数とコミュニケーションスキル尺度の関係：所得免許数とコミュニケーションスキル尺度には有意差はみられなかった。ストレス感とコミュニケーションスキル尺度の関係ストレス感とコミュニケーションスキル尺度には有意差はみられなかった。 担当部分：統計解析、総括 研究者：上野栄一
66.糖尿病専門看護師の役割　スタッフへの教育と実践評価について	共　著	平成17年4月	糖尿病 (0021437X)48巻 Suppl.2 P.S298	担当部分：調査票作成、解析 共同発表者：杉政美雪，北林正子，上野栄一
67.糖尿病と長谷川式簡易痴呆スケール得点との関係	共　著	平成17年4月	糖尿病 (0021437X)48巻 Suppl.2 P.S113	糖尿病患者のヘモグロビンA1Cと長谷川式痴呆スケールとの関係についてみた。結果、ヘモグロビンA1Cと長谷川式痴呆スケールとの間には有意な相関があった。 共同発表者：上野栄一，坪田恵子，山崎勝也，小林正
68.ヘイズとラーソンの治療的技法の因子構造と社会的スキルについて	共　著	平成17年6月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)28巻3号 P.143	本研究では、看護師を対象に治療的技法の25項目の因子構造と社会的スキルとの関係について明らかにした。看護師163名にアンケート用紙を配布し、103名の回収を得た。結果、ヘイズとラーソンの治療的技法の25項目は、7因子に分類できた。第1因子は、現実提示②焦点化③順序立て④比較の促し⑤探索⑥行動計画の促し⑦明確化⑧評価の促し⑨表現の促し⑩沈黙があり、「情報の整理」と命名した。第2因子は、①反復②反射③言語化④合意による確認⑤感情理解の試みがあり、「相互の確認」と命名した。第3因子は、①献自②一般的リード③開示があり、「他者の主導性」と命名した。第4因子は観察があり、「観察」と命名した。第5因子は、①受容②認知があ

				り、「受け入れの姿勢」と命名した。第6因子は疑念の表明があり、「疑念の表明」とした。第7因子は、要約化があり、「要約化」と命名した。社会的スキルに影響する要因について、7因子を独立変数として重回帰分析した結果、「相互の確認」と「疑念の表明」が社会的スキルに影響を与えていた。 担当部分：統計処理 共同発表者：加藤直美，長光代，横山真代，上野栄一
69.コミュニケーションのロールプレイ実施後の実習における効果　自由記載のアンケートを分析して	共　著	平成17年6月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)28巻3号 P.119	コミュニケーションのロールプレイ実施後の実習における効果-自由記載のアンケートを分析した。結果、コミュニケーションに関する能力の効果が認められた。 担当部分：統計処理，抄録作成 共同発表者：上野栄一，塚原節子，坪田恵子，吉井美穂
70.高血圧症患者の日常生活における自己管理度測定尺度の作成	共　著	平成17年6月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)28巻2号 P.73-80	本研究では高血圧症 患者の日常生活において管理の必要な側面を抽出し，各項 目に指標を設けて自己管理の実施の程度を把握するための 「自己管理度測定尺度」を作成することを目的とした。査対象　 大学附属病院に通院中の本態性高血圧症患者で医師が調 査可能と判断した者に調査を依頼し，同意の得られた105 名に行なった。その結果，因子分析により3因子27項目の因子解が抽出され た。各因子は「運動管理因子」「ストレス管理因子」「食事 管理因子」と命名した。 また，本尺度は内容妥当性，表面妥当性，因子的妥当性， 基準関連妥当性の検討，さらに信頼性の検討を行なっており，本尺度は妥当性・信頼性のある尺度であることが確認できた。 役割分担：統計解析 共同研究者：坪田恵子，上野栄一，高間静子
71.看護師・患者役のロールプレイによる学生の気づき	共　著	平成17年6月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)28巻3号 P.118	本研究ではロールプレイを通して学生が 気づいた事を明らかにすることを話的とした。科 2年生 60名を対象とし患者 とのコミュニケーションにおけるロールプレイを行った。結果、学生は看護締役を通して，コミュニケーションにおける困難性や重要性を 9つの観点から学びとっていた。そして，患者役を経験することで，これらの重要性を符認識したり，困難性は患者に戸惑いや不快感を与えていることに気づいている。しかしながら，看護締役では気まずく感じていた沈黙は患者役を通

				して必要とも感じ，看護締に適切に対応されることが患者に安心感をもたらすこと等，患者の撹 点に立つことで，看護師役では気づかなかった患者の気持ちを体験から感じとっている。 役割分担：質的解析 共同研究者：坪田恵子，吉井美穂，上野栄一，塚原節子 担当部分：統計解析
72.看護師の家族死別経験・ホスピスケアの関心とコミュニケーション技法との関係	共　著	平成 17 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)28 巻 3 号 P.99	本研究では看護師における家族の死別経験・ホスピスケアの関心とコミュニケーション技法との関係について調査した。調査対象は、N総合病院に勤務する看護師 163 名に研究の主旨を説明し、同意の得た 103 名の回収データ（回収率 63%）を分析対象とした。測定尺度は、KiSS-18（菊地章夫，1988）、自己開示度尺度（小口孝司，1989）、又ヘイズとラーソンの治療的技法を 5 段階評価として用いた。家族の死別経験有群では、治療的技法の「沈黙」「受容」「認知」「焦点化」「探索」「情報提供」「明確化」「合意による確認」の得点は、無群よりも高い値を示した。1.ホスピス・緩和ケアの関心有群では、治療的技法の「反射」「共同の提言」の得点は、無群よりも高い値を示した。治療的技法を従属変数としての得点は、重回帰分析した結果、看護師経験年数（β＝0.435, P＜0.05)となごませ因子（β＝0.342, P＜0.01)が、治療的技法に影響を与えていた。担当部分：統計解析、総括共同発表者：横山真代，長光代，加藤直美，上野栄一
73. 精神看護学実習における学生評価－自由記載の感想文の分析 －	共　著	平成 18 年 3 年	日本看護研究学会近畿・北陸地方会，大津	担当部分：テキストマイング解析 共同発表者：一ノ山 隆司，上野栄一
74. コミュニケーションと感情との関係	共　著	平成 18 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会，大津	コミュニケーションは感情の交流とも言われる。コミュニケーション能力は、看護実践の中で大変重要なスキルである。また看護過程を展開する上でも、情報の収集においてコミュニケーション能力がなければよい情報を得ることはできない。このコミュニケーション能力を評価する方法としては、コミュニケーションの測定尺度があり、質的に分析する方法として、ヘイズらの治療的技法と非治療的技法がある。本研究では、コミュニケーション技法が感情にどのような影響を与えるかについて明らかにすることを目的とした。対象は 2 つの看護大学生 240 名で有効回答のあった 152 名を分析対象と

				した。調査票の内容は治療的技法、非治療的技法の事例を作成し、会話場面を想定して各項目の[快―不快]度を5段階評価した。 担当部分：総括、研究計画 共同発表者：上野栄一、坪田恵子、上平悦子
75. 看護師のホスピスケアの関心度とコミュニケーションスキルとの関係	共　著	平成18年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会，大津	本研究では、看護師のホスピスケアの関心度とコミュニケーションスキルとの関係について調査した。調査対象は、N総合病院に勤務する看護師163名に配布、103名の回収（回収率63%）をしたデータを分析対象とした。測定尺度は、「看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度」（上野栄一，平成17年）を用い、統計処理ソフトはStatView5.0を使用した。結果、以下について有意差を認めた。1. ホスピスの関心有群では、「パーソナルスペース・視線交差」の得点は無群より高かく、「アサーション」では、得点は無群より低かった。2. 死別経験有群では、「話のスムーズさ」の得点は無群より高かった。3. 安楽の配慮有群では、「情報収集」「積極的傾聴」「パーソナルスペース・視線交差」「アサーション」の得点は無群より高かった。4. 患者とのコミュニケーションの困難さとコミュニケーションスキルとの関係：患者とのコミュニケーションの困難さ有群では、「アサーション」の得点は無群より高かった。5. 家族とのコミュニケーションの困難さとコミュニケーションスキルとの間に差はなかった。6.サポートの積極性の有群では、「情報収集」「アサーション」の得点は無群より高かった。7.患者・家族への説明の有群では、「アサーション」の得点は無群より高かった。8.患者・家族の思いの受容有群では、「情報収集」「積極的傾聴」「パーソナルスペース・視線交差」の得点は無群より高かった。 担当部分：研究計画、抄録作成指導 共同発表者：横山真代、加藤直美、長光代、小林春奈、村田亜悠美　四十竹美千代、三輪恵里、江口富子、一ノ山隆司、上平悦子、上野栄一

76.ナイチンゲール書簡集にみるスピリチュアルケアの記述内容の分析	共著	平成 18 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会，大津	担当部分：解析、考察 共同発表者：江口富子、長光代、上野栄一
77.看護師の「沈黙」に対する認識の分析	共著	平成 18 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会，大津	担当部分：計画、解析 共同発表者： 長光代、小林春奈、横山真代、加藤直美、上野栄一
78. コミュニケーションスキルと自己開示度との関係	共著	平成 18 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会，大津	担当部分：研究計画書、解析 共同発表者：加藤直美、横山真代、長光代、小林春奈、上野栄一
79.温泉と水道水による半身浴の生理的・心理的影響の検証 1) 気分とストレスホルモンへの影響	共　著	平成 18 年 8 月	生理心理学と精神生理学(0289-2405)24 巻 2 号 P.213	担当部分：解析と考察 共同発表者：佐々木 百恵，長谷川 智子，上原 佳子，上木 礼子，米澤 弘恵，上野 栄一
80.温泉と水道水による半身浴の生理的・心理的影響の検証 2) 循環能への影響	共　著	平成 18 年 8 月	生理心理学と精神生理学(0289-2405)24 巻 2 号 P.214	役割分担：結果考察 共同発表者：上原 佳子，長谷川 智子，上木 礼子，佐々木 百恵，米澤 弘恵，上野 栄一
81.温泉と水道水による半身浴の生理的・心理的影響の検証 3) 消化器能と免疫能への影響	共　著	平成 18 年 8 月	生理心理学と精神生理学(0289-2405)24 巻 2 号 P.215	役割分担：研究結果、考察 共同発表者：上木 礼子，長谷川 智子，上原 佳子，佐々木 百恵，米澤 弘恵，上野 栄一
82.新人ナースの職場適応能力を育てるその現状と対策 教育と臨床のギャップ知識、技術、態度の課題(1)	共　著	平成 19 年 3 月	看護実践の科学(0385-4280)32 巻 3 号 P.75-80(2007.3 月	担当部分：総括 共同発表者：上野 栄一，松村 愛都
83.手術室における医師・看護師が捉える倫理的問題の特徴	共　著	平成 19 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)30 巻 3 号 P.102	本研究では、手術室において医師と看護師がどのような状況を倫理的問 題として捉えているかを明らかにする。S 病院にて手術に携 わる医師 6 名と手術室に勤務する看護師 6 名を対象に調査 を行った。結果，医師はくプライパシーの確保>等の患者の人権 擁護，自己決定権の尊重に対し問題有と捉えていたが，看護師は同施設職員が患者になった場合、〈職員の優遇〉等一般患者との待遇が異なる場合が多い事を問題と捉えていた。 担当部分：考察

				共同発表者：佐々木 絹代，上野 栄一，長谷川 智子，上原 佳子，上木 礼子，佐々木 百恵，Edmont Katz
84.看護師の褥瘡予防行動予測評価尺度の開発　信頼性・妥当性の検討	共　著	平成 19 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)30 巻 3 号 P.104	褥瘡予防に必要と予測された看護師の行動を測定するため の予測評価尺度を開発する。:F 県内 2 ヶ所の総合病院に勤務する看護師 824 名を対象に 2006 年 8 月から 9 月にかけて調査した。結果、抽出した因子は第 1 因子「支援型学習・実践的知識因子 J. 第 2 因子「価値信念因子 J.第 3 因子「組織因子」、第 4 因 子「関心因子 j.第 5 因子「知識因子」とそれぞれ命名した。看護師の樗癒予防行動予測評価尺度は，妥当性.信頼性の 検討において高い値を示し樗癒予防を行おうとする看護 師の行動心理を明らかにする事で，個人，集団，組織単位 で得癒予防のために必要な対策，職場教育の立案が可能な 尺度であることが示唆された 担当部分：研究経過ｋ、統計解析 共同発表者：橘 幸子，上野 栄一，長谷川 智子，上原 佳子，上木 礼子，佐々木 百恵，Edmont Katz
85.看護師のライフストーリーからみたピカッと光る感性獲得過程	共　著	平成 19 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)30 巻 3 号 P.104	臨床の場では，“ピカッ”と光る感性を持つ看護師による. 素晴らしい看護に感心することがしばしばある.本研究は，“ピカッ”と光る看護師のライフストーリーの分析によ り，感性の獲得過程を明らかにし看護仰の感性育成のための示唆を得ることを目的とした。 研究対象者は総合病院に勤務する女性看護師 10 人で副看護師長に次ぐ立場にあり，看護モデルの役割を果たすことができ，かっピカッと光る感性を持つとユニット 責任者が 判断した看護師。結果、看護師の特徴を幼少期からみると 家庭や地域が子供を見 守る時代にのびのびと遊び¥基本的な挟を受け，両親祖、父母兄弟から影響を受け人格を形成してきたことが伺われた。生育過程で幼少期から家の手伝いをした者と，手伝いの経験は少ないが青年期に入り一人暮やアルバイト等 で、対人関係能力を築いた者の 2 群に分かれた 劣等感.受験の失敗，勤務の辛さから退職願望をもつ等の人生のあら ゆる困難な場面で.両親・教師・友人・先輩看護師らに助 けられていた。その困難な場面でも常に謙虚で前向きな考え方であった。 担当部分：研究計画、質的解析

				共同発表者：松村 愛都，上野 栄一，長谷川 智子，上原 佳子，上木 礼子，佐々木 百恵，Edmont Katz
86.データマイニングによる研究テーマからみた院内看護研究の特徴と傾向	共　著	平成 19 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)30 巻 3 号 P.107	今後の研究指導にとっても意義のあることと考え，院内看護研究テーマを内容分析することで．臨床実践病院としての A 病院における看護研究の特徴と傾向を調査した。対象資料過去 26 年間(1978~2004)院内研究発表された者護研究 599 題。研究領域では 、看護技術の揮発自己管理への援助が多く.キーワードでは患者の看護援助・支援・アブローチが主要なテーマとなっていた。研究デザインでは質的研究と量的研究が 8 割を占め，デイケアの研究タイプ加では 関子探索研究が圧倒的に多かった。病院の研究傾向は 「実態、・認識調変からスタートしそれについて検討する」といった認知領域の表現に移行するものと，「患者への指導・教育を効果的に実施するためのパンフレット・しおり・チェックリスト」を「試み・導入・施行」する具体的行動に移行する研究に分かれる傾向が見られた。 担当部分：解析 共同発表者：神保 浩子，重松 理恵，小林 幸子，上野 栄一
87.新人看護師の捉える看護技術の学校教育と臨床とのギャップ	共　著	平成 19 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)30 巻 3 号 P.111	本研究では.新人看護師の捉える委譲技術の学校教育と 床とのギャップについて明らかにすることを目的とした。対象は．総合病院に勤める新人看護師 35 名。結果、看護技術のギャップの多かったものには，呼吸ケアに関する項目が上位を占めていた。これらの看護技術項目は.見学のレベルでの実習が多く.臨床に出て初めてケアする時に大きなギャップを感じたものと考える。ギャップの少ない技術には，ベッドメーキングや食事介助などの項目があり実際に実習で多く経験できた項目と誰察する。自由記載の分析では多忙さが〈臨機応変の対応〉等に関連している要因として明らかとなった。 担当部分：解析 共同発表者：上野 栄一，松村 愛郎，橘 幸子

88.がん患者の男性家族員が捉えたギアチェンジの様相	共　著	平成 19 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)30 巻 3 号 P.118	本研究目的は，男性家族員の内的体 験から，ギアチェンジの様相と関連要因を明らかにするこ とである 。［研究方法〕(I)研究デ→?ごイン:クリッベンドルフの内容分析を参考にした質的帰納的研究、X 県内一般病棟でお治療を受けたがん患者の看病経験の有無に関わらず病状説明を受け 死別後 1 年以上経過した男性家族員 13 名(平均 55.5 歳) である。3 コアカテゴリー，ギアチェンジの様相の中でも.第 1 のギアチェンジは，くがんとの共生》を中心に 6 つの構成カテゴリーが複雑に相互作用し葛藤しながらギアチェンジせ ずに〈生への希望?を小さくしていったと推察するが.ギ アチェンジが円滑に行えるような支援と同時に.ギアチェ ンジしない入の受容も示唆された。 担当部分：研究計画、分析 共同発表者：長 光代，<u>上野 栄一</u>
89.手指衛生指導に向けての取り組みとその効果	共　著	平成 19 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)30 巻 3 号 P.126	本研究では看護締への感 染防止対策についての意識調査を行い，その係閣を改義す ることでヒビスコール S ジェルを効果的に使用できるよ う介入・検討することを目的とした。看護帥 24 名。 3. 調査 1)アンケートによる看護師の感染紡止対策への意識調査を学習会実施爺・実施後の 2 回行った。看護附の手指衛生に対する認識の低さが明らか となった c 特に易感染性宿主に対する交差感染の原因とし て医師・看護師ら医療従事者の手指が重要視されている。これらを学習会を通して看護郎に伝達し S ジェルの必要 性の教育・指導を行った結果，研究終了時 95%の看護隔が「効果的に使用できている」との有意な結来を得た。 担当部分：統計解析 共同発表者：辻 真梨亜，竹森 友香，渡辺 美貴，石田 喜美子，井村 敏子，森北 裕美子，<u>上野 栄一</u>
90.看護師の方言使用に関する意識調査	共　著	平成 19 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)30 巻 3 号 P.132	本研究では，実際に白々の看護業務の中で使用されて いる方言の種類や使用頻度.方言使用に関する認識を明ら かにする事を目的とした。［研究方法 i 1. A 病院の対象者 217 名にアンケート調査(一部自由記 述)を実施。 2.. 倫理的配蟻:調査目的について対象者に説明し 調査を途中で放棄できること，そのことにより不利益 を被る事がないこと等を説明し同意を得られた看護締のみアンケートを実施。 4. 有効回答の得られた看護部 209 名を分析対象とした。結果、方言使用については，(1)方

				言の使用を良いと考える回答では,「時と場合をわきまえて方言 で対応しでも良いと思う。」等があった。 (2)方言の使用が悪いと考える回答では 「ナース同士の会話での方設は言 葉がきたない。」等があった。 〔考察〕方言と標準諸にはそれぞれ長所と短所があるが,方言は長 い年月をかけてその地域の人々の生活の中から生まれてき たものであり,そのことばが使用されている地域の文化と 後接に関わっている。骸妙な身体状態を表現したり,親しみを感じさせたい場合などには.標準語より効果的な言葉だと考えられる。 担当部分:解析 共同発表者:平野 佐知子,南 隆子, 上野 栄一
91.看護技術の到達度に関する調査	共　著	平成 19 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)30 巻 3 号 P.132	阪療の高度化,複雑化が進み,かつ.個人情報保護法が施行され,看護締の役実 1)は多様化している。看護師には患者 の QOL を保障するため,患者の状況や必要に応じてケア を提供する責務がある。本研究の目的は,看護締の行う礎看護技術が適切であるかを評価することである。調査方法:費関紙調資法、対象 :T 病院看護締 132 名。結果から、全体的にみて.看護技術の判断.磯認の部分がやや弱いと いえる。看護師の看護技術を向上させるには,新人にはブリセプター,ブリセプターには中堅看護師の支援が必婆であり,また経験年数の長短を間わず,自分の技術を再確認し自己研鑽することが大切であると考える 担当部分:統計解析 共同発表者:小林 美穂子,小林 幸子, 上野 栄一
92.重症心身障害児の看護問題の特徴 看護診断に焦点をあてて	共　著	平成 19 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)30 巻 3 号 P.140	病棟におい ては療養生活の場であり日常生活の援助がほとんどで¥潜 在的問題を掘り下げて抽出している現状がある c 看護診断 ラベルを用いた表現では適切に使用されているかについて は明らかにされていない。本研究では看護診断についての 理解!支を明らかにすることを目的とした。対象肴設 1 談員 59 名で有効回答 55 名分を分析対象。本研究結巣から看護記録マニュアルでは看護診断の使用を 言われているが,看護診断の継続的な勉強がなされていない現状があり看護診断が適切に使用できないことや療養 生活の場となっている病棟にとって現在の肴護診断をと当て はめる難しさがある。既存の看護診断では当てはまらない ものが多

				いため.重症心身際害児については独自の看護診 断マニュアルを作成することが重要であると考える。 担当部分：解析 共同発表者：矢矧 仁，隨原 さとえ，谷橋 千鶴子，高原 眞佐江，上野 栄一
93.ロールプレイング演習における教育効果の検討	共　著	平成 19 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)30 巻 3 号 P.142	ロールプレイに参加した学生から「ロールプ レイを体験して学んだこと Ｊの記述を求めた。記載文の用 語の特徴と学生の学びを把揮することを目的に量的・質的 な分析を試みた。 学生の記載文を形態素解析し出現頻度の多い名詞を類似 性に基づきグループ化した結果，（対象理解)(共感的能力〕〔対応技法〕の 3 因子を抽出した。学生の学びが反映して いる動詞と連動する文献をコロケーション解析し先行・ 後続文脈に注目した結果.学生の学びの特設として今一こ こでの体験を学生自身の行動・思考・感情から捉えようと していることが分かった。例えば，今一ここでの関係を焦 点化する必要性や看護締役がどのような考えで行動したの か，その絞拠を学んで、いた。 担当部分：質的解析 共同発表者：一ノ山 隆司，村上 満，上野 栄一，川野 雅資
94.唾液バイオマーカーを用いた新たな子どものストレス評価	共　著	平成 19 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)30 巻 3 号 P.187	本研究では、唾液バイオマーカーによる簡易ストレス評価 手法を用いて.中学生を対象にストレス検査を実施し 消化酵素の一つである唾液アミラーゼに注 EI. その活性変化の実態を明らかにした。〔研究方法 1 1.調査対象:日県内の A 中学校の 18 名(男子 9 名，女 9 名)とし平成 18 年 12 月に実施した。結果、 [結果] 男子の唾液アミラーゼ活性は.27.9kU/ℓ± 12.4(mean 土 SD).女子は，40kU/ℓ± 21.43(mean ±SD)の範囲であっ た。アミラーゼ活性および主観的評価と性差との関連につ いては.ともに男子に比べて女子が有意に高かった。子どもの交感神経活性には性差があることが認められ，主 観的評価とも相関することが示唆されたが，今後はこのような唾液バイオマーカーによる新たなストレス評価手法の 活用が望まれる 担当部分：統計解析 共同発表者：村上 満，一ノ山 隆司，上野 栄一

95.乳がん患者の患者会における満足度と乳がん告知後の不安内容の変化	共　著	平成 19 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)30 巻 3 号 P.240	本研究では，乳がんと告知を受け てから患者の不安内容の変化を把握することで.適切な看護を提供するための示唆を得る目的でアンケート調査を行った。対象は，患者会に参加した 22 名に研究の趣旨を説明し研 究者が作成した半構成的質問用紙を院長の許可を得て配布 し同意を得られ返信された患者 10 名。患者会参加の 目的は，患者間で情報を提供・収集すること で共有でき，精神的な不安要素が解消できると考える。 知後の不安内容では，すべての時期において，死に対する 不安がある C これは，がん=死と言うイメージが以前より あると推察できる c また，情報においてもすべての時期に 見られ，継続的に’箔報提供が必要で、あり，本研究対象の患 者会は，情報交換，さらには不安等の気持ちを共有できる 良き場であったと考える。孤 担当部分：解析 共同発表者：加藤 直美，横山 真代，長 光代，小林 春奈，上野 栄一
96.看護専門学校生の基礎看護学実習前後における自己効力感と健康度の変化	共　著	平成 19 年 6 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)30 巻 3 号 P.253	本研究の目的は，基礎看護学実習前後における看護学生の 自己効力感と健康度の関係性，個人の属性が実習前後の健 康度および自己効力感に与える影響を明らかにすることで ある。｝象者・看護専門学校 2 年 402 名。実習前および実習後の得られた 337 名を分析対象とした。結果、本調査の対象となった学生の 7 割以上が精神的不健康と分かった。不安定な青年期におかれて いたことと，実習という課題による精神的ストレスが大きく影響していたと推察する。自己効力感は実習後に上昇が見られた。加えて，社会に役立つことが自 己効力感に正の影響要因として挙げられていたことは，社会に対する貢献ができたことを実習を通して実感できたことによるものと考える 担当部分：統計解析 共同発表者：清水 由加里，上野 栄一，長谷川 智子，上原 佳子，上木 礼子，佐々木 百恵，Edmont Katz
97.幻聴体験のある患者に対する自己対処能力の獲得をねらいとしたアプローチ	共　著	平成 19 年 11 月	日本看護科学学会学術集会講演集 27 回 P.495	担当部分：考察 共同発表者：一ノ山 隆司，上野 栄一

98.乳がん患者のサプリメントの認識に関連する要因	共　著	平成 20 年 1 月	日本がん看護学会誌(0914-6423)22 巻 Suppl. P.120	担当部分：データ解析 共同発表者：加藤 直美，横山 真代，長 光代，上野 栄一
99.日本の 47 都道府県における病院の経営理念の特徴	共　著	平成 20 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)31 巻 3 号 P.108	本研究では病院の経営理念の特徴を明らかにすることを目的とした。全国の病院を抽出するにあたっては全国の病院を層化無 作為抽出法により各都道府県 5 病院ずつ選定し（総合病 ， インター ネットで公開されている病院のホー ムペー ジ上の理念についてデータ集積， 遁子テキスト化して解析 した。 解析はクリッペンドルフの内容分析にて行った。結果、名詞レベルでの分析結呆， 病院としての理念には，［先進医 療］といった高度の医療を実施していることの PR があり次に ［尊厳］に基づいた ［患者中心の医療］を行い，［地域との述携］のなか［高い質のサービス］.［安全提供］といった経党努力していることを［組織の主張］として述べている。これらのカテゴリーからは病院組織の意気込みを感じさせる。 また現代医療に不可欠な要素が網羅されていると考える。動詞の分析では，［安全］［信頼］を中心とした［高度医療］を軸に［愛］ある［患者中心］の医療を実施し，さらに［職務満足］の高い組織であることを主張していた。 担当部分：解析、研究考察 共同発表者：上野 栄一，長谷川 智子，上木 礼子，Katz Edmont C.，吉田 華奈恵，一ノ山 隆司，明神 一浩
100.形態素解析で得られた 235 病院における看護理念の特徴	共　著	平成 20 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)31 巻 3 号 P.108	看護理念は病院理念と整合し職員に周知され．一貫性のある各看設単位の目標及び活動計画の具体化には必須である。本研究は， 病院組織における 看設理念の特徴を明らかにすることを目的とした。病院の抽出は層化無作為抽出法により各都道府県から 5 病 院（特定機能病院・一般病院）を選定した。235 病院のホームページに記載された看設組織の看設理念を電子テキスト 化した後形態素解析した。 名詞の分析から看設理念には看設の提供について，質の高 看設・ ニ ー ズに応じた看設が提言され，｛言頼･ 安全･ 安心をもって満足させることを管っている。このカテゴリーは看設の適切な提供のための思案が組み込まれた鍵概念であると考えられる。動詞の分析

				から安全・信頼を基調に質の 高い患者中心の看設の遂行が重視され，医療の中で時代の 変動・変化に対応できることを目指していると考えられ，看設師は社会に対し， 職業として看設を提供するという権 限を有すると共に， 自らを規制する責任を持つ存在である と捉えることができる。本研究結果では， 看設理念は看設 師にそのメッセージが届けられ，看設の適切な提供のため の仕組みになり組織管理の一端を担うと同時に対象者への宜誓の効果を持つものであることが示唆された。 担当部分：テキストマイニング解析、まとめ 共同研究者：一ノ山 隆司，上野 栄一，上野 佳子，佐々木 百恵，Katz Edmont C.，砺波 利圭
101.看護師の業務以外の役割別にみたストレッサー・ストレス反応の特徴	共　著	平成 20 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)31 巻 3 号 P.111	看護師の業務以外の役割別にみたストレッサー・ストレス反応の特徴をみた。医療技術の高度化・複雑イとに伴い， 日々の業務の中でもストレスを感じることは多くなっている。 また，看護業務以 外(委員会，研修，者護研究など)の仕事も;増えてきており，さらにストレスが増強していると考えられる c そこで 本研究では看護業務以外の役割の有無によるストレスの相 違を明らかにすることを百的とした。 ストレス対処方法を見出しており，重大なストレス反応、にならないようコントロールできていると考える。今後は， さらに潤閣のサポートや毅場でのサポートカを高め，スト レス反 IZ、として表れないような対策も考慈しなければならない。 担当部分：解析 共同発表者：中田 佑里子，下方 光枝，神保 浩子，上野 栄一
102.看護師の持続的血液浄化療法(CHDF)に対する不安に焦点を当てた支援の効果	共　著	平成 20 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)31 巻 3 号 P.145	担当部分：統計解析 共同発表者：七尾 美樹，坪田 知美，浦田 千賀子，小林 幸子，重松 理恵，上野 栄一
103.透析スタッフに教育ツールとしてパス・アルゴリズムを使用した結果	共　著	平成 20 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)31 巻 3 号 P.163	担当部分：統計解析 共同発表者：高柳 佳忠，松木 理浩，古村 和枝，竹林 陽子，上野 栄一

104.勤務配置交代者の院内研修の効果について考える　フィッシュボーンを使用して	共　著	平成 20 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)31 巻 3 号 P.164	担当部分：質的分析 共同発表者：矢矧 仁，森北 裕美子，上野 栄一
105.実習指導者がロールモデルを示す効果の検討	共　著	平成 20 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)31 巻 3 号 P.175	担当部分：質的分析 共同発表者：明神 一浩，一ノ山 隆司，上野 栄一，川野 雅資
106.内容分析を用いた院内急変時の看護師の対応分析	共　著	平成 20 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)31 巻 3 号 P.224	本研究では、院内急変持に第一発見者の看護 締がどのような対応をしているかを明らかにすることを 目的とした。対象は急変対応した 17 名の看護師への面接調査を実施した。院内で起きる急変時〈組織の体制〉の中で，〈時間〉と〈場所〉という限られた空間において.患者の〈状態の観察〉をしながら〈学習経験〉を活かした仕事の〈量〉を〈学習経験〉に基づき調節しながら行っていた。さらに，看護師は，様々な〈感情〉を持ちながら実践をこなしているという実態が明らかとなった。また、今後の院内 BLS 研修や，新人教育の 改善点について示唆された。 担当部分：テキストマイニング解析 共同発表者：井上 理恵，高山 裕喜枝，川上 三千穂，上野 栄一
107.終末期がん患者と非終末期がん患者に対する看護師の感情労働の比較	共　著	平成 20 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)31 巻 3 号 P.321	担当部分：統計解析、考察 共同発表者：吉田 華奈恵，上野 栄一，長谷川 智子，上原 佳子，上木 礼子，佐々木 百恵，砺波 利圭
108.百日咳流行に対する介入予防の成功事例	共　著	平成 20 年 10 月	CAMPUS HEALTH(13414313)45 巻 3 号 P.77	担当部分：統計分析、考察 共同発表者：玉川 美津恵，山本 恭弘，齋藤 由紀雄，石本 秀守，上野 栄一，梅澤 有美子，真弓 光文，李 鍾大，伊藤 春海，大林 貴代，山田 和弘，岩井 敬治，日下 幸則，室井 洋子，岩崎 博道，小淵 岳恒，寺澤 秀一，山口 明夫
109.大学生の喫煙行動および喫煙に対する態度への影響要因	共　著	平成 20 年 10 月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌(1881-7319)18 巻 Suppl. P.196s	担当部分：統計解析と考察 共同発表者：上原 佳子、石崎 武志，長谷川 智子，上野 栄一，上木 礼子，佐々木 百恵，吉田 華奈恵
110.COPD 患者の自己管理情報ニーズの変化　LINQ を用いた実態調査	共　著	平成 20 年 10 月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌(1881-7319)18 巻 Suppl. P.208s	担当部分：考察 共同発表者：上木 礼子，長谷川 晴美，長谷川 智子，上原 佳子，佐々木 百恵，吉田 華奈恵，良 貴子，門脇 麻衣子，上野 栄一，石崎 武志

111.内容分析による過去の医療事故に関する研究の特徴　看護研究に焦点を当てて	共　著	平成 20 年 11 月	医療の質・安全学会誌(1881-3658)3 巻 Suppl. P.191	担当部分：研究総括 共同発表者：上野 栄一，一ノ山 隆司，明神 一浩，上木 礼子，舟崎 紀代子，宮崎 由美子
112.医療職の医療安全に対する認識の違い　医療安全文化の視点から	共　著	平成 20 年 11 月	医療の質・安全学会誌(1881-3658)3 巻 Suppl. P.246	担当部分：データ解析 共同発表者：舟崎 起代子，一ノ山 隆司，上野 栄一，上木 礼子，明神 一浩，泉 朱子，境 美代子
113.精神看護における癒しとケアリング効果の有効性に関する研究	共　著	平成 20 年 11 月	日本看護科学学会学術集会講演集 28 回 P.437	担当部分：解析 共同発表者：明神 一浩，一ノ山 隆司，上野 栄一，川野 雅資
114.就労継続支援事業所の実習を終えた学生の地域連携精神看護の視点	共　著	平成 20 年 11 月	日本看護科学学会学術集会講演集 28 回 P.442	担当部分：結果と考察 共同発表者：一ノ山 隆司，明神 一浩，上野 栄一，川野 雅資
115.終末期がん患者と非終末期がん患者に対する看護師の認識、感情、感情労働の比較	共　著	平成 20 年 11 月	日本看護科学学会学術集会講演集 28 回 P.501	担当部分：結果と考察 共同発表者：吉田 華奈恵，上野 栄一，長谷川 智子，上原 佳子，上木 礼子，佐々木 百恵
116.臨床が求める看護学生のコミュニケーション能力	共　著	平成 21 年 4 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 16 回 P.57	担当部分：解析、研究総括 共同発表者：上野 栄一，一ノ山 隆司，明神 一浩
117.看護大学におけるコミュニケーション能力の特徴	共　著	平成 21 年 4 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 16 回 P.58	担当部分：解析 共同発表者：一ノ山 隆司，上野 栄一，明神 一浩
118.看護学生に求められる病院職員へのコミュニケーション能力の特徴	共　著	平成 21 年 4 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 16 回 P.59	担当部分：解析 共同発表者：明神 一浩，上野 栄一，一ノ山 隆司
119.障害者自立支援法下の福祉サービスに関する当事者の自由記述にみる内容分析	共　著	平成 21 年 4 月	日本病院・地域精神医学会総会抄録集 52 回 P.108	担当部分：質的解析 共同発表者：村上 満 子，一ノ山 隆司，舟崎 起代子，上野 栄一
120.抗がん剤取り扱いにおけるリスクマネジメント　化学療法に対する看護師の意識調査	共　著	平成 21 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)32 巻 3 号 P.194	抗がん剤の細胞毒性には「発がん性」「変異原生」「催奇形 性」が知られており， 微賊でも繰り返し接触することで被 爆へのリスクが高まると言われている。 本研究では抗がん 剤を取り扱う看護師の認識を明らかにすることを

				目的とし た。G 総合病院看護師 100 名。アンケートの回収率は 89 名 (89%)，有効回答率は 73 名(73%) であった。 2. 抗がん剤使用時の不安と感じる時：抗がん剤を調剤す るとき 65 名(89%)，ボトルにル ートをつける時 60 名(82%)，患者に投与する時 70 名 (96%)，点滴終了時ボトル，ルー ト を破棄する時 47 名(64%)，点滴がこぽれた時 64 名(88%) 等であった。3. 抗がん剤調剤時のガウン着用について：調剤時のガウ ン着用者は 3 1%，マスク装着者 64%，手袋装着者 8 1%，ゴー グル付マスク装着者 29%．すべて装着する人は 19%であった。4. 防護具の装着率：化学療法を扱う際の防設具の装着率 は ボトルにルートをつける時 ガウンをつける 10%，マスクを装着する 54%，手袋を装着する 73%等であった。 5. 看護師経験年数別にみた不安：看設師経験年数別では 調剤する時の不安は 1 年から 3 年と 21 年以上に有意差がみられた。抗がん剤を扱った年数では 1 年から 3 年と 21 年以 上に有意差がみられた(p<0.05)。 担当部分：統計解析 共同発表者：田中 理津子，吉本 有里，上野 栄一
121.病床稼働率の変動が看護師の疲労度やストレスに及ぼす影響	共　著	平成 21 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)32 巻 3 号 P.198	病 床稼働率の変化があった 8 月と 10 月にアンケ ート調査を行 い， 看護師のストレスの特徴と病床稼働率との関連を明ら かにすることを目的とした。対象 HCU の看設師 15 名。 2. ストレス度で有意差があったのは 10 月の〈イライラ感〉〈気分が晴れない〉〈集中できない〉の 3 項目が 8 月より高かく， 逆に 10 月の〈便秘や下痢をする〉は 8 月より低かった。 担当部分：統計解析 共同発表者：北島 弥生，神保 浩子，吉野 麻利，浦田 久美子，上野 栄一
122.看護学生の段階別コミュニケーション能力評価尺度からみた看護大学生のコミュニケーションの特徴	共　著	平成 21 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)32 巻 3 号 P.217	本研究では，看護学生の段階別コミュニケーション能力評 価尺度を用いて，看護学生のコミュニケーション能力の特 徴を明らかにし，また効果的な授業プログラムを開発につ いての㎛ 唆を得ることを目的とした。対象は 3 つ の看護大学生710 名の看護学生を対象とし，有効回答 351 名分を分析対象とした。看護学生のコミュニケーション能力の特徴としては，総得 点で 4 学年，1 学年，2 学年，3 学年の順で高かった。又，各下位概念の得点では，4 学年の次に 2 学年の順位で得点 が高かっ

				た。本尺度を利用した看護教育への応用として， 看護大学におけるコミュニケーションに関する教育の展開 は，1学年~4学年において段階別に教授することの必要性が示唆された。 担当部分：統計解析 共同発表者：上野 栄一，一ノ山 隆司，明神 一浩，上平 悦子
123.がん患者の家族へのインタビューから見えた遺族への援助	共　著	平成21年7月	日本看護研究学会雑誌、32巻3号 P.220	終末期の看設は早期から患者と家族を同様に援助すること と 思いを十分受け止め理解し，最後までその人らしさを した援助が重要である。 本研究では胆嚢癌を発症し 緊急入院した女性（以下A氏）と夫の思いを明らかにする ことを目的とし，事例の振り返りと遺族インタビューを試 みた：【研究方法】 1. 研究デザイン：事例研究 2. 研究対象：200X年4月 -200Y年5月まで5回入退院されたA氏とA氏。 事例の振り返りではセカンドオピニオンを勧めその後の受容がうまくいったこと，本人の意向を汲んで女性らしさを維持する援助に努めたこと， 亡くなる2日前にも関わらず本人が外泊を希望されたため，可能にしたことなどは本人らしさを腺重した看設であったと考える。 担当部分：質的分析 共同発表者：青山 紀子，重松 理恵，上野 栄一
124.事例検討によるBPD患者の支援のあり方に関する研究	共　著	平成21年7月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)32巻3号 P.245	近年増加傾向にある疾患の 一つに境界型人格障害(BPD) がある。本事例ではBPD患者の看設において家族の役割 を再構築した事で不安が軽減し退院に至った事例である。ロイ適応看護モデルを活用し不安が強いBPD患者の看護 を三期に分け援助した過程を報告する 【研究目的】 BPD息者の看護を振り返り患者支援のあり方に示唆を得る。 【研究方法】 1. 研究デザイン：事例研究 2. 研究期間 ：2008年6月から12月 3. 分析方法 ：本事例の検討から患者の言動と看護師の関 わりを分析し ． 経過を三期に分けロイ適応看設モデルを活用し患者の心理・精神的背景と行動化の意味を抽出する)。 4. 事例概要：A氏，30歳後半女性（三人兄弟の長女、a県外で就職し働いていたが職場の ストレ ス から抑うつ傾向を呈しBPDと診断される。帰郷して母親への強い依存から栂親との別居後自傷行為からa県内の B精神科病院に入院となった事例である。5. 倫理的配慮 ：本研究は研究者が所属する。

				1. 医療従事者への不｛言感 入院時は抑うつ傾向があったが，次第に入院になれ、BPD 特有の衝動性が出現した。治療の不満を医 療者へ向け看設師を指定するようになった。A 氏の気持ち を受容する関わりによって母に対しての気持ちを話すまで になった。 2. 偲親への不満と父への抗議 入院 2 ヶ月後母が面会に来てくれない不満の矛先が父に 向けられ親子関係は悪循環を招いていった。看護師は父親 に対して約束を守るように助言した所.A 氏は父親が自分 を見放さないといった感情を抱き安心感を得て状態は安定した。3. 新たな家族の関係づくり（第三期） 入院 3 ヵ月後，母への依存はなくなり経過の中で A 氏の心 のゆとりが見られるようになり， A 氏は依存という愛情の 確認行為をせずとも安心感が得られ退院した。 担当部分：事例解析 共同発表者：明神 一浩，一ノ山 隆司，上平 悦子，舟崎 起代子，上野 栄一
125.看護学生の倫理的態度育成に関する基礎的研究　学年毎の特徴と変化	共　著	平成 21 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)32 巻 3 号 P.296	看護学生の倫理的態度の学年による違いと，学年の進行に よる変化を明らかにし，倫理的態度育成の基礎資料とする。 【研究方法】 対象：A大学看護学科 1~4 年生（編入生を除く）229 名。得られた。性格傾向は，4 年生で「内向的」 が多く，2 年生で「外向的」が多かった。社会的スキルの 「関係維持」は 1・3 年生,「関係開始」は 2 年生,「自己主 張」は 2・3 年生で大学生女子の平均点よりも高かった。 学年別では,「自己主張」で 2 年生が有意に高かった（p< 0.05)。自尊感情尺度の全体の平均点は 29.3 点で，学年別で は 2 年生が最も高かった。倫理的態度の平均点は，3・4 年生はほとんどの項目で全体の平均点を上回っていた。性 格傾向の外向群は，社会的スキルのすべての下位項目と自 尊感情尺度で有意に高かった（p＜0.001)。倫理的態度は「身だしなみ」を除くすべての項目で，外向群が有意に高 かった（p＜0.01)。社会的スキルの「関係維持」は，倫理的 態度に強く影響していた（p＜0.001)。また社会的スキル には自尊感情と性格傾向，自尊感情には性格傾向と社会的スキルが影響していた（p＜0.05)。学年の進行による変化は，昨年度の結果と比較した。社会的スキルと自尊感情は 違いはなかった。倫理的態度の「身だしなみ」は，すべ

				て の学年で 0.02~0.07 点上昇したが，有意差はなかった。 担当部分：統計解析 共同発表者：月田 佳寿美，上野 栄一，酒井 明子，長谷川 美香，田邊 美智子
126.救急部における新人看護師のローテーション教育の効果	共　著	平成 21 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)32 巻 3 号 P.326	救急部ローテーション勤務（夜勤を含めた 5 日 間 ） での新人看護師の思いを明らかにし 教育 方法の効果を検証した。結果、「必要」「できる」「学ぶ」が上位を占めたのは，数多くの基礎看護 技術が習得 でき自信がつき，向 上 心のきっかけとなり自己の成長につながったためと推察する。ネガテイプ評価は， 新人看護師が体験しやすい 不適応反応のリア リティ ショックであると考える。結論：救急部ローテーション 教育は，効果的な知識· 技術の習得 ができ，ポジテイプ評価が高かった。 担当部分：解析 共同発表者：川崎 智美，高山 裕喜枝，井上 理恵，清水 由加里，早川 美津江，橘 幸子，上野 栄一
127.新人看護師の健康状態の変化	共　著	平成 21 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)32 巻 3 号 P.328	日本看護協会(2008 年）は， 新人看設師（新人）の 離職率の調査報告で看護師の配置が手厚い病院ほど離職率 が低い事を報告している。 又、新人が 1 年以内に辞める割合は平均 9.2%を示し， 原因としては. 技術力の未熟さ，医療事故への不安等がある。本研究では入職後， 新人の健康 状態どのように変化したかを明らかにする事を目的とした。結果、4 月から 12 月までの新人の健康状態は，一般的疾患傾向，身体的症状，睡眠障害， 社会的活動障害，希死念慮，B0 尺 度の脱人格化で，有意に変化があった。 担当部分：解析 共同発表者：清水 由加里，橘 幸子，早川 美津江，松村 愛都，上野 栄一
128.入院中の統合失調症患者を支える家族の主観的負担の構造	共　著	平成 21 年 7 月	日本看護研究学会雑誌、32 巻 3 号 P.338	本研究は，家族を援助者として捉えるのみではなく生活者である家族の主観的負担に注目し，入院中の患者を支える 家族の負担と支えにしていることを明らかにし， 心理的要 を含む主観的負担を捉え，負担要因から家族支援の基礎 賢料にすることを目的とした。結果、家族の主観的負担は，心理的・社会的・身体的な負担から 形成され，患者本人から受ける外的な重荷や困惑と家族自 身が抱く内的な後悔や偏見から疲弊感を抱き，資源不足から不全感を募らせている。家族の負担· 希望が

				時間経過に関係しており，過去から蓄積された負担に［自責と後悔か らの苛み］等 将来への見通しから生じる負担に［途方で つきない心配］等であると推察される。一方， 回復を信じ 見守る，自助に努めるといった［希望からの自信］を見出しており，家族の状況に呼応する家族支援が必要である。このことから，家族支援には時間性に伴う葛藤を把握し，この葛藤の緩和が負担軽減になると考える。 担当部分：解析と考察 共同発表者：一ノ山 隆司，村上 満，舟崎 起代子，明神 一浩，上野 栄一，川野 雅資
129.看護師のスピリチュアルケア能力測定尺度の開発と信頼性・妥当性の検討	共　著	平成 21 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)32 巻 3 号 P.356	本研究ではスピリチュアルケア能力評価尺度の開発．信頼 性と妥当性について検証することを目的とした。結果、因子分析はプロマッ クス法を実施． 尺度全体の a 係数は 0.95。妥当性では中村 (2004)のスピリチュアリティ測定尺度と本尺度との相関 r = 0.604 (p<0.001)であった。本尺度「看設師のスピリチュアルケア能力測定尺度」は．高い信頼性と妥当性を示した。本尺度は，今後の学校教育において．あるいは医療の臨床において有用なツ ールになると考える。 役割分担：研究計画、統計解析 共同発表者：江口 富子，上野 栄一
130.外来に通院する高血圧症患者の運動管理における関連要因	共　著	平成 21 年 8 月	Health Sciences(0911-7024)25 巻 3 号 P.219	役割分担：解析 共同発表者：坪田 恵子，上野 栄一
131.コミュニケーション技法が人間の感情に与える影響　主観的評価と客観的評価について	単著	平成 21 年 8 月	生理心理学と精神生理学(0289-2405)27 巻 2 号 P.183	（単独）上野 栄一
132.救急部における新人看護師のローテーション教育の効果ローテーション時期を比較して	共　著	平成 21 年 10 月	日本救急看護学会雑誌(1348-0928)11 巻 2 号 P.133	役割分担：共同発表者：高山 裕喜枝，井上 理恵，川崎 智美，川上 三千穂，清水 由加里，上野 栄一
133.看護師のインシデントレポート提出行動の影響要因としての組織風土・熟慮性・安全態度の分析	共　著	平成 21 年 11 月	日本看護科学学会学術集会講演集 29 回 P.223	役割分担：統計解析 共同発表者：畑中 美智子，上野 栄一，長谷川 智子，上原 佳子，佐々木 百恵，吉田 華奈恵，上木 礼子，砺波 利圭

134.怒りの場面と共感的相互作用が生じている場面での看護師の感情と交感神経活動との関係	共　著	平成21年11月	日本看護科学学会学術集会講演集29回 P.303	コミュニケーション技法は治療的技法と非治療的 技法に分類されるが、実際に感情や自律神経系との関係 は明らかにされていない。本研究では看護師を対象に怒りの場面と共感的相互作用が生じている場面での看護師 の感情と交感神経活動との関係についてみた。】怒りの場面では「びっくりした」「なぜ，怒られる の」といった驚きや不快感（「怒られるのは不快」「患者の 表情が怖い」）が顕著であった。VAS を用いた怒りの 1 回 目の場面での不快感の平均値は共感的相互作用の生じている場面が有意に減少した（p＜0. 00001）。客観的評 価では、1 回目の怒りの場面では LF／HF は上昇し 2 回目の怒りの場面では LF／HF は，交感神経活動は徐々に減少した。 役割分担：研究残飯 共同発表者：上野 栄一，一ノ山 隆司，舟崎 起代子
135.看護学生の喫煙行動および喫煙への態度と知識に関する喫煙防止教育の効果	共　著	平成21年11月	日本看護科学学会学術集会講演集29回 P.399	看護学生を対象にして，介入群に喫煙防止教育を 実施し，喫煙行動喫煙への態度喫煙に関する知識の 経時的変化について非介入群と比較分析し，教育的介入 の効果を明らかにした。結果、】非介入群に比べて介入群の看護学生の喫煙への態 度は否定的に変化し，喫煙に関する知識は有意に高まっ ていた。よって，教育的介入は知識を向上し，喫煙に対 する態度を否定的に変えることに効果があったと考えら れる。しかし，今回は介入後 3 ヶ月の短期的期間での調 査であることから，今後更なる調査を行い経過を追うこ とで，喫煙防止教育の長期的な介入効果について検討す ることが必要である。 役割分担：解析と考察 共同発表者：上原 佳子，長谷川 智子，上野 栄一，佐々木 百恵，吉田 華奈恵，礪波 利圭
136.異なる水質への入浴による身体の保湿効果と気分の違い水道水・人工浴用剤水・温泉水の比較	共　著	平成21年11月	日本看護科学学会学術集会講演集29回 P.424	本研究では，水道水・人工浴用剤水・温泉水への 入浴による身体の保湿効果と気分への影響の違いを明ら かにし，病院での入浴援助において人工浴用剤の活用の 基礎資料とする事を目的とした。結果、本研究において 3 条件共に入浴により 皮膚保湿効果が得られ，気分も「快」になる事が明らか になった。中でも［浴用剤水］と［温泉水］への入浴は， 入浴中の精神的な負担感は少なく，さらには［浴用剤水］ への入浴では『疲労感』も少ない事が明らかになった。 以上の事から，病院での

				入浴援助において人工浴用剤を 活用する事で，患者にとって身体的・精神的に負担の少 ない入浴に繋がる事が明らかになった。 役割分担：結果と考察 共同発表者：礪波 利圭，長谷川 智子，上野 栄一，上原 佳子，佐々木 百恵，吉田 華奈恵
137.心臓カテーテル検査・治療時患者が看護師に期待すること	共　著	平成 21 年 11 月	日本看護科学学会学術集会講演集 29 回 P.433	心臓カテーテル検査・治療を受けた患者に半構造 化面接による調査を行うことにより、患者が看護師に期 待することは何かを明確にした。本研究により患者は検査・治療の進行状況、結果 への不安から、耳で医師・看護師の話を聞くことにより、 状況の判断をしようと努めていることがわかった。この ため、患者の訴えや変化に注意しながら、術者である医 師の説明を補足し、優しく具体的な説明を行うよう努め ることが求められる。心臓カテーテル検査・治療の技術 は日々進歩し、血管造影室の看護師はその進歩について いく必要がある。また、患者は精神的配慮を看護師に求 めているのに対し、看護師は処置や治療の成果のみに気 をとられがちであり、看護師は患者の支えになれるよう 努力する必要がある。 役割分担：質的解析 共同発表者：東 治美，大野 文江，上野 栄一
138.精神障がい者を支える家族の負担要因		平成 21 年 11 月	日本看護科学学会学術集会講演集 29 回 P.501	2006 年に障害者自立支援法が施行され，退院促進の動向から地域生活する精神障がい者（以下，障がい者）を支える家族の負担が増すことは避けられない。本研究では自立支援医療への移行期のなかでの家族の生活実態を調 査し，困難・負担の要因から地域支援活動の基礎資料にする。調査対象：A 県の家族会（病院家族会 6 団体地域 家族会 14 団体）の会員で障がい者をもつ家族（主な世 話人）であり研究の同意が得られた 480 名（入院 197 人，在宅 283 人）。家族の負担と障がい者の行き場においては，「病気への不 安」と「日常生活の制約」に有意な関連があり，地域に 行き場があることが家族の「病気への不安」を軽減しており，また，「日常生活の制約」は，日常生活上の困難そのものに相当する因子であり，生活のしづらさを特徴づ けていることが推察された。家族にとって障がい者の地 域生活支援の場が負担と関係していることが示唆された。家族自らの行き場なども含めた社会資源の活用

				などを考慮していくことが必要である。 役割分担：解析・考察 共同発表者：一ノ山 隆司，舟崎 起代子，明神 一浩，上野 栄一，川野 雅資
139.強迫性障害のある患者の症状克服過程における心理的変化	共　著	平成 21 年 11 月	日本看護科学学会学術集会講演集 29 回 P.515	近年，摂食障害や人格障害と同様に増加傾向にあ る疾患の一つに強迫性障害がある。強迫性障害の一つに 不潔恐怖症（以下，強迫症）がある。強迫症などが原因で日常生活に支障をきたす患者も多く，それが原因となり，引きこもりを呈するケースがある。患者が回復過程において症状克服に繋がった 2 事例の心理的な変化に注 目し，強迫症患者の支援のあり方について検討した。結果、回復過程における患者の心理的変化を分析した結 果，患者の症状の克服過程において，【周囲からのサポー ト】，【とらわれからの脱却】，【保証された安心】の 3 カ テゴリが生成され，強迫行為が生じる要因を明確にでき たことであった。2 事例の患者が強迫行為『とらわれ』を認知することが回復に繋がった。 役割分担：解析 共同発表者：明神 一浩，一ノ山 隆司，上野 栄一，上平 悦子
140.糖尿病療養指導士外来における段階的なセルフケア評価(GSEQ)の疫学的有用性の検討	共　著	平成 22 年 4 月	糖尿病、53 巻 Suppl.1 P. S-265	役割分担：統計解析 共同発表者：大西 みさ，上野 栄一，岸 雅也，小川 浩平，大見 仁斉
141.看護師の職場適応度測定尺度の信頼性・妥当性	共　著	平成 22 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)33 巻 3 号 P.122	病院に勤務する看護師の職場における適応の度合いを測定 するための看護師の職場適応度測定尺度の開発をする。 :北陸 地区 3 県内の 500 床以上の 3 つの大学附属病院に勤務する 看護師 1405 名を対象とした。結果、看護師の職場適応について概念枠組みを行い「看 護師の職場適応度測定尺度」を作成した。抽出した因子は 第 1 因子「業務自律」，第 2 因子「上司との関係」，第 3 因 子「職場雰囲気」，第 4 因子「環境受容」と命名した。本尺度は表面妥当性，内容妥当性，因子的妥当性，弁別的妥 当性，基準関連妥当性等を行い，信頼性の高い構成概念妥 当性のある尺度であった。 役割分担：研究計画、統計解析 共同発表者：藤本 ひとみ，高間 静子，長谷川 智子，上原 佳子，佐々木 百恵，吉田 華奈恵，礪波 利圭，上野 栄一

142.精神臨床看護師が捉える急性期看護における患者の暴力行為の予見要因	共　著	平成 22 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)33 巻 3 号 P.146	本研究では臨床看護師が 患者の暴力行為をどのように予見するかを明らかにし，急性期看護への示唆を得る目的とした。対象：α 県内Ａ精神 科病院の経験年数 5 年以上の看護師（男性 6 名，女性 4 名）計 １０名とした。2.研究方法：半構成的面 接法により逐語記録を作成し，データ分析は質的帰納的に行った。結果、データ分 析の結果，患者の暴力行為 に対する看護師の予見を抽 出した。情報収集として【患者の行動パターンの把握】,【過去に起こった場面の想起】,【患者の話す内容の整合性】の 3 カテゴリーを生成した。臨床の看護 師がこれまで経験して来た 経験知の語りが大部分を占めていた 。 共同研究者：明神 一浩，一ノ山 隆司，村上 満，舟崎 起代子，上野 栄一，川野 雅資
143.学年別にみた看護学生のコミュニケーションスキルの特徴	共　著	平成 22 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)33 巻 3 号 P.154	本研究では， 護大学生の学年別にみたコミュニケーションの特徴を明らかにすることを目的とした。3 つ の看護大学生 720 名を対象は有効回答 356 名とした。調査内容は 1 学年 ～ 4 学年までの看護学生のコミュニケーション能力 ス キ ル を 上 野 の 看護師のコミュニケーションスキルを測定するための尺度を用いた 。結果、第 4 学 年 は ,『 情報収集』 『 積 極 的 傾 聴 』で他の学年よりも高 い ス キ ル得点を示した。合計得点の比較でも 4 学年は高い値を示した 。このことは ， コミュニケーショの基本スキルである積 極 的 傾 聴 と 情 報 収集については大きな学習成果と推察する 。 『 話 の ス ムーズさ』 『パーソナルスペース・ 視線交差』『 アサーション 』の各スキルにおいては ， 学年ごとにスキルが上昇しておら ず，今後の課題と考える 。 役割分担： 共同発表者：上野 栄一，一ノ山 隆司，明神 一浩，舟崎 起代子，村上 満
144.30 代女性看護師の心理的 well-being に影響を及ぼす要因役割達成感との関連から	共　著	平成 22 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)33 巻 3 号 P.159	本研究では，看護大学生の学年別にみたコミュニケーションの特徴を明らかにすることを目的とした。： A 総 合 病院３ ０代女性看護師７ ８ 名を対象とした。結婚の有無別心理的 ｗ ｅ ｌ ｌ － ｂ ｅ ｉ ｎ ｇで有意差が み られたのは律性」で ３ ０ 代 性の 発 達課 題 か

				ら考えると Josselson のいう「女性は親密な関係をもつことでアイデンティティがより確かになる」ことが考えられる。子供の有無別心理的 well-bein で有意差がみられた は「人格的成長」で武内によれば「子育て期の女性は子育てだけ人生を終わりたくないと思い,自分を生かすことと供という他者を生かすことの統合を試みようとしている」という。 役割達成感の「夫のために若さを維持しようと努力している」に有意差がみられたが,妻より母役割を重視することで優先順位が決まると推察する。
145.ICU における看護師の身体拘束アセスメントシート使用前後の効果について	共　著	平成 22 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)33 巻 3 号 P.175	役割分担：研究総括 共同発表者：上野 栄一，一ノ山 隆司，明神 一浩，舟崎 起代子，村上 満 本研究では、身体拘束アセスメントシート使用前後の効果について調べた。調査対象者F 県内の 3 つの総合病院で勤務している看護職者 135 名。看護部長に調査への協力を求め，了解が得られた後，質問紙を持参，各病棟の師長から配布してもらった。患者の状態を客観的にアセスメントすることができ，身体拘束の必要性を判断するための「身体拘束アセスメント シート」を作成し，スタッフ間の身体拘束開始基準の統一を図ることを目的とした。結果、すべての看護師が身体拘束を行った経験があり，身体拘束 開始の判断は看護師が行う傾向が強かった。身体拘束開始の判断では，アセスメントシート使用後は身体拘束開始について判断しやすくなった（p<0.01)。患者とのコミュニケーションでは，身体拘束を行うにあたり，アセスメントシート使用後には患者とのコミュニケーションを重視する 人が減少した。
146.看護職者の自律性および教育ニード・学習ニードの特徴	共　著	平成 22 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)33 巻 3 号 P.224	役割分担：統計解析 共同発表者：村井 純子，廣田 悟志，吉田 智美，上野 栄一 研究目的は、看護職者の自律性および教育ニード・学習ニードの特徴を明らかにする。回収は 1255 部（回収率 92.9 %)，欠損データを除いた 977 名対象とした。結果、学習ニードの診断は『中』で，学習ニード

				の高さが平均的であった。3．教育ニードの診断は『中』，病院に就業する看護専門職者として平均的な状態にあった。4．自律性が高い看護職者は，チームリーダー等の役割の経験があるという特性を備えていた。自立的判断能力において は助産師の得点が高かった。5．教育ニードが高い看護職者の特性は，スタッフ看護師，チームリーダー等の経験がないという特性を備えていた。
147.スピリチュアルケアの構成概念	共　著	平成22年7月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)33巻3号 P.263	共同発表者：林 宏美，長谷川 智子，上原 佳子，佐々木 百恵，吉田 華奈恵，礪波 利佳，上野 栄一 本研究では，スピリチュアルケアの構成概念について明らかにした。【研究方法】2006年3月。全国緩和ケア病院承認151施設に対し，20施設を乱数表にて選んだ。看護部長の同意を得た9施設に対しアンケート協力依頼し，回答をもって同意とみなした。郵送法にて実施。また，文献よりスピリチュアルに関する用語を抽出し，概念を生成した。結果、44名よりスピリチュアルに関する157の回答（自由記載）を得た 597のスピリチュアルに関する文章を抽出した。さらにこれらの文章を意味内容の類似性に基づいて，『自己理解』『人生観』『霊的痛み』『自然との関係性』『人間関係』『基本的看護観』『死生観』『信仰・信念』の8つの概念が抽出できた。
148.高齢男性介護者の介護に対する自己の構え	共　著	平成22年7月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)33巻3号 P.313	共同発表者：江口 富子，上野 栄一 今回在宅で妻を介護している高齢の 男性高齢者を対象に，その介護の状況を特に介護者自身の 心理面に焦点をあて明らかにすることを目的とした。対象者；対象者は，研究者のネットワークを活用し選定した。本研究の趣旨に同意され，現在在宅で妻を介護してい る70歳代の男性2名。面接内容より61センテンスを抽出し，その中から8つのサ ブカテゴリーと4つのカテゴリーが抽出された。「介護を 必要とする妻への思い」は介護は妻への感謝の気持ちとして生きがいとして行っており，また病気の妻に対する憐憫 の情であっ

				た。「高齢介護者の心理的負担」は介護による 疲れや不安としての負担であった。 役割分担：解析 共同発表者：上平 悦子、 松浦 純平，船瀬 孝子，明神 一浩，上野 栄一
149.就労継続支援事業所実習後の学生が捉えた地域支援活動の視点	共　著	平成 22 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)33 巻 3 号 P.319	本研究では，討議用紙の記載文を分析し，学生が捉えた地域支援活動に必要な知見を抽出する ことを目的とした。対象は、A 看護短期大学の学生で，研究の同意が得られた学生 38 名。結果、記載文を分析した結果，〔地域型社会資源の充実〕〔利用者 の意向の尊重〕〔多様な生活ニーズの把握〕〔地域の社会資源とニーズの融合〕〔継続可能なサービス供給の確保〕 〔社会資源の改善と開発の推進〕〔復権というリハビリテーション〕の 7 カテゴリーが生成された。自立支援法制定の理 念である「障がい者の自立した地域生活の実現」について， 当事者の尊重や福祉分野との協働の必要性が反映されてい た。また，精神障がい者支援に活かすための地域連携精神 看護の方法を模索していた。 役割分担： 共同発表者：一ノ山 隆司，舟崎 起代子，村上 満，上野 栄一，川野 雅資
150.外来に通院する高血圧症患者の食事管理における関連要因	共　著	平成 22 年 8 月	Health Sciences(0911-7024)26 巻 2 号 P.127	役割分担：解析と考察 共同発表者：坪田 恵子，上野 栄一
151.看護学生に必要とされるコミュニケーションスキルと評価	共　著	平成 22 年 9 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 17 回 P.51	共同発表者：上野 栄一，一ノ山 隆司，明神 一浩，舟崎 紀代子
152.看護師のコミュニケーションスキルをレベルアップするための方略	共　著	平成 22 年 9 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 17 回 P.60	共同発表者：明神 一浩，上野 栄一，松浦 純平，一ノ山 隆司
153.看護職者の自律性に影響を与える要因	共　著	平成 23 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)34 巻 3 号 P.172	看護職の自律性に対する説明変数の影響力の大きさを明ら かにする。調 査対象：調査対象者はF 県内の 3 つの総合病院で勤務する 正規採用の看護職者 977 名。結果、自律性の総得点において，チームリーダーの経験，臨床経 験

				年数，看護研究発表の経験，役職，教育委員の経験，臨 地実習指導者の経験，所属部署，看護の基礎教育機関の 8 つの変数が影響要因となっていた看護基礎教育が 4 年制 大学化へと移行する中で，臨床経験年数や所属部署に配慮 した看護管理，院内研修の必要性が示唆された。 役割分担：統計解析 共同発表者：林 宏美，上野 栄一
154. 一般外科領域における術後せん妄発症予測要因の検討 経験豊富な看護師へのインタビューより	共　著	平成 23 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)34 巻 3 号 P. 178	本研究の目的は一般外科病棟に勤務する経験豊富な看護 師が直観的に判断している術後せん妄の発症予測につながる患者の前駆症状を明らかにすることである。研究参加の同意が得られた看護師 20 名を対象とした。術後せん妄発症予測の前駆症状に関する発言内容を形態素 解析した結果，総単語数 33,593 個より 7,434 個、1,112 種類の名詞を抽出。その名詞からせん妄予測項目に該当する語句 に着目すると，78 の構成要素があり，類似性により分類し た結果，【表情】，【認識】，【患者の反応】，【置かれた環境】，【コミュニケーション】，【時間感覚】，【失見当識】，【行動】，【対象者】，【対象物】，【情意】，【直観】，【患者特性】，【不 安】，【睡眠】の 15 のカテゴリーが生成された。 共同発表者：松浦 純平，福田 弘子，上野 栄一
155. 高血圧症患者の日常生活自己管理尺度の作成	共　著	平成 23 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)34 巻 3 号 P. 203	本研究では高血圧症患者の日常生活自己管理 尺度の作成，及び妥当性と信頼性の検討を目的とした。対象は 4 施設の病院に通院する本態性高血圧症患者 186 名。高血圧症患者が日常生活を送る上で必要な自己管理項目 （食事・運動・ストレス管理）について，アンケート調査 を実施した。回収数は 183 名（回収率 98.4%）であり，有効回答数は 174 名であった。結果、高血圧症患者の日常生活自己管理尺度として，食事・運 動・ストレス管理因子が確認でき，妥当性及び信頼性のあ る尺度を作成できた。また，既知グループ技法により，自 己管理得点と血圧値との関係が確認できたことから，高血 圧症患者が血圧をコントロールするための生活を送る上 で，本研究で作成された自己管理尺度の項目を療養行動の 目標として示すことができると考える 役割分担：解析 共同発表者：坪田 恵子，稲垣 美智子，上野 栄一

156.内容分析による最近の診療報酬の特徴	共　著	平成 23 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)34 巻 3 号 P.227	本研究では，医療政策の中での診療報酬の内容につい て分析し，その特徴を明らかにすることを目的とした。平成 21 年 10 月～平成 22 年 9 月までの過去 1 年間の診療報酬 に関する記事について分析した。結果、診療報酬の記事の特徴として，薬価，入院医療に関するも のが，看護関係では指定訪問看護，看護体制，看護要員等 があげられた。これらのことからは，病院経営，質の高い 看護を提供するためにも診療報酬の情報を精緻に分析しいかに活用するかが重要な課題と考える 役割分担：研究総括、テキストマイニング解析 共同発表者：上野 栄一，一ノ山 隆司，明神 一浩，松浦 純平，上平 悦子
157.緩和ケアにおけるスピリチュアルの概念について	共　著	平成 23 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)34 巻 3 号 P.232	スピリチュアルとは何かを明らかにすることは，看護ケアの質の 向上につながる。本研究ではスピリチュアルとは何かについて明らかにすることを目的とした。対象は、全国緩和ケア病院承認 151 施設に対し，9 施設に対しアンケート協力依頼し，スピリチュアルとは何かについて回答を求め内容分析した。結果、抽出されたカテゴリーは「霊的アプロー チ」にはじまり「死生観」「自然と他者との関係性」「生きる意味」「愛と受容」「永遠のいのちへの希望」と続くスピ リチュアルの重要な概念であり，今後のケアへの活用が期待される。 共同発表者：江口 富子，上野 栄一
158.看護師のキャリア発達と組織コミットメントが職務満足に与える影響の検討	共　著	平成 23 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)34 巻 3 号 P.241	本研究では，看護師のキャリア発達と組織コミットメ ントが，職務満足にどのように影響しているのか，その関 連性を明らかにする。調査対象者は，北陸 3 県にある 500 床以上の病院に勤務する看護師 1400 人を対象に自記式質問紙調査を行い、重回帰分析（ステップワイズ法）を用いて， 従属変数は職務満足尺度合計に対して，22 の独立変数を用 いて分析をした。結果、看護師の職務満足に影響を与えるものとして，情動的コミットメント（愛着形成），キャリア自律性，キャリア関 心性が高かった。これは看護師の職務満足を形成する上 で，愛着を持って働ける職場であることが，看護師の自律 性を喚起していた。 担当部分：解析 共同発表者：明神 一浩，上野 栄一

159.新 ICU 病衣の作成	共　著	平成 23 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)34 巻 3 号 P.362	現状の ICU 病衣の特徴を把握するために，被服学の文献検索や他施 設の ICU 病衣に関する先行研究の調査，ICU スタッフに 聞き取り調査を行い病衣を試作し、その特徴をみた。 結果、対して運動性を妨げないよう配慮した。ワンフロアである ICU においても，他患者や面会者の目を気にすることなく動け，プライバシーの保護にもつながる。意識レベルの低下している患者の胸元を直す，回復の望めない患者でもその個人を 尊重し着飾ってあげたいと言う家族の意見，これまでの患 者のライフスタイルやイメージを尊重したいという気持ちが現れていた。 共同発表者：富永 弥生，土開 美和，本波 さやか，重松 理恵，上野 栄一
160.看護師の年齢・経験年数別にみた接遇・尊重・説明・指導における看護行為の評価	共　著	平成 23 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)34 巻 3 号 P.402	年齢や経験年数 別による接遇に対する意識の違いを明らかにすることを目的とした。対象 A 病院の同意を得られた病棟勤務の看護師 88 名（20 歳代～50 歳代の各年代 22 名）に質問紙調査を行った。結果次のカテゴリーが抽出できた。≪接遇カテゴリー≫ ・経験年数よりも年齢別で有意差がみられ，若い世代では 全体的に評価が低かった。 ≪尊重カテゴリー≫ ・経験年数 3 年未満，20 歳代での評価が低く，40－50 歳代 での評価が高かった。 ≪説明・指導カテゴリー≫ ・40 歳代の評価が高く，人としての価値観や知識が説明・指導能力を左右していた。 共同発表者：吉川 侑希，山田 智樹，高澤 みさき，小長井 麻衣，高柳 佳忠，上野 栄一
161.生活習慣改善の内容を調査して　効果的な保健指導のあり方を考える	共　著	平成 23 年 7 月	人間ドック、26 巻 2 号 P.396	共同発表者：谷口 素美，岸 宏栄，永田 隆恵，岡田 亜子，高吉 治子，松谷 優子，新田 一葉，上野 栄一
162.看護師の基本属性別におけるキャリア発達の特徴	共　著	平成 23 年 9 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 18 回 P.30	役割分担：研究計画、解析 共同発表者：明神 一浩，上野 栄一
163.看護理論にみるカウンセリング技法の特徴	共　著	平成 23 年 9 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 18 回 P.48	役割分担：研究総括 共同発表者：上野 栄一，松浦 純平，明神 一浩

164.看護学生の喫煙行動および喫煙に対する態度への影響要因	共　著	平成 23 年 10 月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌(1881-7319)21 巻 Suppl. P.211s	役割分担：結果と考察 共同発表者：上原 佳子，長谷川 智子，佐々木 百恵，吉田 華奈恵，礪波 利圭，淺川 久美子，田中 美由紀，上野 栄一，石崎 武志
165.効果的な手術時手洗い・手袋交換とSSI の関係　感染率低下を目指して	共　著	平成 23 年 10 月	日本手術看護学会誌(1880-4780)7 巻 2 号 P.185	役割分担：統計解析 共同発表者：杉田 朋美，石田 喜美子，長谷 由紀子，上野 栄一
166.看護学生の月経時のセルフケア測定尺度の作成	共　著	平成 23 年 10 月	北陸公衆衛生学会誌(0386-3530)38 巻学会特集 P.25	役割分担：統計解析 共同発表者：山内 弘子，上野 栄一，高間 静子
167.コミュニケーション技法が看護学生の感情に与える影響	共　著	平成 23 年 10 月	日本看護科学学会学術集会講演集 31 回 P.196	カウンセリングの分野では、受容、共感的理解などとても大切であるといわれているが、その評価に関する研究 は少ない。本研究では、治療的コミュニケーション技法 と非治療的コミュニケーション技法がどのように対象者 に影響を与えるかについて明らかにすることを目的とした。ヘイズとラーソン及びアイビーのコミュニケーションに 関する技法から、治療的技法と非治療的技法の項目について、治療的技法（沈黙、受容、献自、開示、一般的、順序立て等 25 項目、非治療的技法（保証、是認、拒否、否認、同意等 19 項目）を比較した。その結果、平均治 療的技法 2．88±0．28、平均非治療的技法 1．83±0．32 であり、(P〈0．001）の有意差を認めた。これらの結果からは、治療的技法は非治療的技法を用いた場合よりも、主観的に肯定的評価（快度）が高いこと が示された。これまで、共感的理解などのカウンセリン グ技法は、重要とは言われていたが、どのような感情を 相手に与えるかといった研究はほとんどない。本研究は 今後よりコミュニケーション技法を科学的に検証する上 での基礎資料になると考える。 役割分担：研究総括 共同発表者：上野 栄一，松浦 純平，上平 悦子
168.看護師の経験年数別にみたキャリア発達と職務満足の関係	共　著	平成 23 年 10 月	日本看護科学学会学術集会講演集 31 回 P.358	近年、少子高齢化社会に伴い国民の医療ニーズが多様化している中で、看護師は安定した医療サービスの提供が 求められている。本研究は看護師の経験年数の違いにより、キャリア発達と職務満足との関係が、どのように影 響を

				しているのか、その傾向を明らかにすることである。調査対象者は、北陸3県にある500床以上の病院に勤 務する看護師1400人を対象に自記式質問紙調査を行った。、キャリア発達と職務満足を比較した結果、当初の予測とは違い「3年未満」群が高いという特異な 値となった。これはキャリアラダー研修が、「3年未満」の看護師に評価された結果であると推察する。しかし、中堅看護師の満足度は先行研究と同様に低い傾向にあり、結婚や出産などのライフイベントにより、キャリアの中断が影響しているものと推察する。 役割分担：研究計画、統計解析
169.経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症予測要因の検討　データマイニングを用いたインタビューの分析	共　著	平成23年10月	日本看護科学学会学術集会講演集31回 P.393	共同発表者：明神 一浩，上野 栄一 本研究は、外科病棟での臨床経験豊富な看護師が考える術 後せん妄発症予測の視点となる前駆症状とは何かを数量化手法を用いて明らかにすることである。】経験豊富な看護師の術後せん妄発症予測につな がる前駆症状の観察視点として5点が明らかになった。 1. 患者の眼に代表される表情、2. 関わりの中でのコミュニケーション、3. 家族への面会要求等により安静保持が 守れない、4. 尿意、術後創部痛による不快感、5. ガーゼ・ルート・ドレーン類が気になる等の術後処置に伴う影響があった。 役割分担：分析と考察
170.臨床看護師が考える術後せん妄発症予防に関する看護実践について　KH Coderを利用した分析	共　著	平成24年3月	富山大学看護学会誌(1882-191X)11巻1号 P.38	共同発表者：松浦 純平，一ノ山 隆司，上野 栄一 本研究の目的は，外科病棟に勤務する臨床看護師（以下，看護師）が術後せん妄発症予防のために取 り組んでいる看護実践は何かを明らかにし，今後の術後せん妄発症予防に対する示唆を得ることである．本研究結果から，看護師は術前の段階より患者家族へ術後の環境および状況の変化について十分な説 明を実施し理解を促す様に努めることで急性混乱を予防する関わりについて意識し実践していること， 術後せん妄発症三要因の一因である誘発因子に含まれる術後睡眠障害に起因するサーカディアンリズム の変調からの早期改善を目指した看護実践に取り組んでいた．これら看護師の取り組みは，術後せん妄 発症要因のうち特に誘発因子に対する関わりを実践しておりエビデンスに基づいた看護実践であること が示唆された． 役割分担：結果と考察

				共同発表者：松浦 純平，上野 栄一，一ノ山 隆司，京谷 和哉，上平 悦子，梅林 かおり
171.3e-analyzer システムを用いた双方向授業の効果	共　著	平成 24 年 3 月	富山大学看護学会誌(1882-191X)11 巻 1 号 P.39	近年、教育の現場では、e－learning や CAI を用いた授業が増大しつつある。授業や研修会では、 講義は対象者と教員との相互作用の中で行われる、また、学生や研修生の学習意欲を知り、またどのくらい内容を理解したかを知ることは次の授業の展開を考えるうえで大変重要である。本研究では 3eAnalyzer を用いて α 大学が実施した研修会での教育効果を検証することを目 1 的に研究を行った。】アナライザーを用いた講義では授業の理解度やモチベーションが高まっていた。今後は、対象の設定を変えたり、授業の中でのアナライザーを使用した検証をさらに進めたいと考える。 役割分担：研究総括 共同発表者：上野 栄一，松浦 純平
172.医療政策の中での看護の動向	共　著	平成 24 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 24 回 P.29	役割分担：研究総括 共同発表者：上野 栄一，一ノ山 隆司，明神 一浩，松浦 純平，上平 悦子，八塚 美樹
173.頭頸部外科領域における術後せん妄発症予測要因の検討経験豊富な看護師へのインタビューより	共　著	平成 24 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 24 回 P.34	役割分担：考察 共同発表者：松浦 純平，上野 栄一，一ノ山 隆司，明神 一浩，福田 弘子
174.デイサービスにおける村田理論による援助的コミュニケーションの有効性	共　著	平成 24 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 24 回 P.43	役割分担：研究計画、分析 共同発表者：江口 富子，上野 栄一
175.過去 10 年間の職務満足の研究タイトルの分析による研究動向の検討	共　著	平成 24 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 24 回 P.48	役割分担：統計改正 共同発表者：明神 一浩，前川 哲弥，森下 憂一，松浦 純平，上平 悦子，上野 栄一

176.看護学生の捉えるケアリングと絵本の教材化に関する研究	共　著	平成24年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集24回 P.53	役割分担：分析 共同発表者：一ノ山 隆司，舟崎 起代子，村上 満，川野 雅資，上野 栄一
177.わが国における術後せん妄発症予測に関する研究の動向 過去27年間の文献検討より	共　著	平成24年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集24回 P.57	役割分担：分析 共同発表者：松浦 純平，上野 栄一，一ノ山 隆司，明神 一浩，福田 弘子
178.看護学生の授業における3eAnalyzerによる学習効果	共　著	平成24年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集25回 P.37	役割分担：研究総括 共同発表者：上野 栄一，松浦 純平，上平 悦子
179.テキストマイニングによる看護管理の研究の動向　過去10年間の文献より	共　著	平成24年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集25回 P.47	役割分担：研究総括 共同発表者：上野 栄一，松浦 純平，上平 悦子，安東 則子，八塚 美樹，神保 浩子
180.看護実践レポートからみる看護の容(かたち)	共　著	平成24年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集25回 P.54	役割分担：解析 共同発表者：神保 浩子，上野 栄一，八塚 美樹
181.過去10年間の医療機関における暴力に関する研究の動向	共　著	平成24年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集25回 P.55	役割分担：解析と考察 共同発表者：明神 一浩，上野 栄一，松浦 純平，上平 悦子
182.テキストマイニングを用いた術後せん妄に関する研究論文タイトルの分析	共　著	平成24年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集25回 P.57	役割分担：分析 共同発表者：松浦 純平，梅林 かおり，植木 健康，安東 則子，八塚 美樹，上野 栄一
183.フットケア外来における糖尿病指導効果に関する研究、GSEQと間食に焦点をあてた解析から	共　著	平成24年3月	糖尿病 (0021437X)55巻3号 P.231	役割分担：統計解析 共同発表者：大西 みさ，上野 栄一，服部 麗，蜂谷 真代，岸 雅也，小川 浩平

184.看護師の組織貢献意識に影響する要因の分析	共　著	平成 24 年 10 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)35 巻 3 号 P.111	看護師の組織貢献意識と基本属性（性別，年齢，経験年数，　職位，最終学歴），目標管理に対する受容度，組織コミットメント，職務満足度，自己実現，達成動機との関連性を 明らかにすることを目的とした。対象は北陸[D]県の[G]病院に勤務する看護師 550 名に自記式質問紙法による調査を実施した。結果、年齢と経 験年数については，長くなればなるほど所属する組織の目 標にも関心と理解を示し，仕事に対する自己評価能力を高 め，責任と自律性を高めることで組織貢献意識が高まると 考える。今後は，組織の目標達成と個人の自己実現欲求を 充足させることを可能とする目標管理を有効に活用し，個人の自己実現と組織の成果（組織への貢献）がつながるような人材育成が必要である。 役割分担：研究計画、統計解析 共同発表者：吉江 由加里，上野 栄一
185.看護師の職場適応度測定尺度の再検討	共　著	平成 24 年 10 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)35 巻 3 号 P.111	本研究では，看護師の職場適応度測定尺度を作成し，その信頼性・妥当性について検討した．看護師の職場適応を測定するための項目原案は，先行文献と看護師の経験等の概念枠組みに沿って作成した．対象者は，300 床以上の総合病院に勤務する看護師 700 名とした．因子分析の結果，　「業務自律」，「上司との関係」，「職場雰囲気」，「環境受容」の 4 因子 20 項目からなる尺度であった．本尺度は，内容妥当性，回答分布の偏り，弁別的妥当性，基準関連妥当性，信頼性が確認で き，高い信頼性と妥当性のある尺度であることが確認できた。 共同発表者：藤本 ひとみ，高間 静子，上野 栄一
186.看護師の安全行動尺度の開発	共　著	平成 24 年 10 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)35 巻 3 号 P.113	看護師一人一人が安全な看護業務を遂行するため身につけておくべき必要のある安全行動を可視化し，臨床で活用できる信頼性・妥当性の検証された安全行動尺度の開発を 本研究の目的とする。北陸[D] 県の病床数[3°°] 床以上の総合病院に勤務する看護師 600 名を対象とした。結果、第 1 因子〈科学的根拠〉，第 2 因子〈チームワーク〉，第 3 因子〈報告・連絡・相談〉，第 4 因子〈リスク認知〉，第 5 因子〈コミュニケーション〉，第 6 因子〈問題の発見〉，第 7 因子〈確認為〉，第 8 因子〈個人衛生〉と命名された。 役割分担：統計解析、考察

				共同発表者：共同発表者：永岩 里美，上野 栄一
187.臨床看護師が希望する術後せん妄アセスメントツールに関する分析	共　著	平成 24 年 10 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)35 巻 3 号 P.127 平成 24 年 10 月	術後せん妄アセスメントツール（以下，アセスメントツー ル）に関するニーズについて臨床経験年数別に明らかにした。対象は全国の国立大学医学部附属病院を乱数表を用いて無作為抽出した。協力の承諾が得られた 19 病 院の外科病棟勤務の看護師 725 人を対象とした。結果、有効回答数 337 部（有効回答率 46.5%）、経験年数別のアセスメントツールの必要性，使用希望，所要時間に関する 5 群間の多重比較では項目数の群間比較において経験年数 20 年以上群が他群の全てと比較して有意な差が生じていた。 共同発表者：松浦 純平，梅林 かおり，石澤 美保子，京谷 和哉，一ノ山 隆司，上野 栄一
188.テキストマイニングを用いた周手術期における皮膚トラブルに関する研究の動向と課題	共　著	平成 24 年 10 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)35 巻 3 号 P.141	本研究では、国内の周手術期における皮膚トラブルに関する研究の動向 と課題を明らかにした。方法：Web 版医学中央雑誌 Ver.5 を使用した。キーワードは「手術室」，「手術体位」，絞り込み検索は「看護」，「原著論文」とし、93 編を対象とした。結果、階層的クラスター分析結果より「発赤 予防のための物品の工夫」，「仰臥位時の皮膚調査」，「褥瘡発生予防」，「術中体位の工夫」，「術中体位固定についての 効果の検討」の³個のカテゴリーに分類された。共起ネッ トワーク分類結果から，術中の褥瘡発生予防を目的とした 物品の使用効果に関する研究に取り組んでいたことが明らかになった 担当部分：テキストマイニング解析、考察 共同発表者：西山 和成，松浦 純平，上野 栄一
189.緩和ケア病棟実習に参加した学生の学びを明らかにする実習後の学びレポートの分析から	共　著	平成 24 年 10 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)35 巻 3 号 P.153	本研究は緩和ケア病棟実習を体 験した学生の学びレポートから，学生の学びを明らかにすることを目的とした。研究対象：2010 年～2011 年に緩和ケア病棟実習を体験 した 36 名の学生の学びレポート。結果、名詞レベルでの分析の結果，学生は緩和ケア病棟を患者と家族の生活の場として捉え，看護は，苦痛と緩和を目的に行われていたと学んでいた。実習目標に掲げている Total Pain の理解と家族のおかれている状況を理解したと解釈できた。また

				学生は緩和ケアを支えるものとしてのボランティアの存在について学びを深めていた。 担当部分：テキストマイニング解析 共同発表者：安東 則子，四十竹 美千代，八塚 美樹，長 光代，上野 栄一
190.終末期にある心不全患者への関わり医師と看護師の認識の相違から	共　著	平成 24 年 10 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)35 巻 3 号 P.165	本研究では患者の治療に携わる医師，直接，看護介入を行う 看護師の心不全患者の終末期に対する認識を明らかにし今後 の終末期看護における課題を探索することを目的とする。 研究対象：A 病院循環器内科病棟医師 4 名　看護師 4 名とした。結果、医師は，【心不全の終末期における特異性】を認識し《積 極的な治療》《あきらめない治療》を行っている。末期的 心不全患者においても，一時的に状態の改善を認めるケースもあり，身体的苦痛の軽減を重視し，治療を中断しない という姿勢を保持していると考えられる。 看護師は【人間関係を重視した関わり】を重要だと考えて おり，死に向かう患者に対し，《コミュニケーション》を最も必要と考え，《精神的支え》になりたいという気持ちを持ち続けていた。 担当部分：質的解析 共同発表者：高田 奈奈，鎌 沙緒里，村井 純子，上野 栄一
191.短時間正社員制度を利用している看護師を受け入れる側の意識調査	共　著	平成 24 年 10 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)35 巻 3 号 P.175	日本看護協会の調査で，看護職の確保定着対策として「多 様な勤務形態の導入」が最も有効だという結果が出ている。多様な勤務形態の中には「短時間正社員制度」があり，A 病院では 2010 年 1 月より制度が導入され，2011 年 11 月までに²･人が利用している。そこで，制度についての理解・周囲の受け入れ態勢が整うことで，働き続けられる職場づくりに繋がるのではと考え，制度利用者を受け入れる側の意識調査を行った。結果、A 病院の病棟看 護師 108 人に質問紙によるアンケート調査を行った。結果、制度に対する意識として，結婚歴の有無で有意差を認め たのは「業務のリスクが大きい」。結婚歴と，出産経験の 有無の両方で有意差を認めたのは「制度は周りのスタッフ と利用する本人にとって仕事の負担が大きい」「ケアの提供時間」「以前に制度があったら利用してみたかった」であった。また、子供の有無で有意差が出たのは「制度は周りのスタッフ と利用する本人にとって仕事の負担が大きい」「今後この 制度を利用したい」「以

				前に制度があったら利用してみたかった」であった。 担当部分：統計解析 共同発表者：島崎 麻由美，西田 香菜，平井 千絵，山崎 洋子，田中 順子，上野 栄一
192.話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経に与える影響	共　著	平成 24 年 10 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)35 巻 3 号 P.186	パーソナルに関与する，効果 的な場の構成があるとされる。本研究では，話し手として の看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経 に与える影響についてＺ看護 大学生 12 名を対象に明らかにした。結果、受容的態度では，副交感神経系が有意となり，お互いが緊 張なくコミュニケーションがとれることが明らかとなった。このことにより話し手が受容的態度で相手に接することによりお互いの信頼関係が構築されていくことが示唆された 担当部分：総括 共同発表者：上野栄一，瀧川薫，田中智美，八塚 美樹，安東 則子，上平 悦子，松浦 純平，一ノ山 隆司
193.精神科初回入院患者の家族支援に関する動向と課題	共　著	平成 24 年 10 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)35 巻 3 号 P.247	本研究では，精神科初回入院 となった家族への支援の重要性から，退院後の地域生活を 継続するために必要な家族支援に関しての動向を明らかにし今後の示唆を得ることを目的とする。 医学中央雑誌 Web 版 Ver.4 を使用（2000 年～2010 年現在)。得られた 23 件の原著論文を対象とした。結果、【考察】 発行件数の年度，調査実施者の大半が臨床看護師であり，今後ますます臨床の場に還元されるべき分野であると推察 する。今回対象とした文献では，入院患者を対象とした研 究が多く，地域生活中の研究は取り組まれていなかった。このことから，今後，退院後および地域へ戻ってからの実 証的な家族支援の研究が行われることが望まれる。 担当部分：質的分析 共同発表者：植木 健康，松浦 純平，上野 栄一，川野 雅資
194.認知症患者へのちんどん音楽の効果	共　著	平成 24 年 10 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)35 巻 3 号 P.316	本研究ではちんどんによる認知症患者への効果について明らかにすることを目的とした。：Ｚ県 α 特養ホームにて認知症をもつ患者 14 名に実施した。演奏曲目は，青島マーチ， 青春のパラダイス，あの丘こえて，港町 13 番地，あこがれ のハワイ航路，お袋さん等をメドレー方式で演奏した。結果、本結果からは，表情や活動性が高まることが明らかとなった。これは中根らが音楽療法は生活 意欲を向上させると報告し

				ているように音楽や視覚効果が 影響すると考えられる。また回想法と同様に昔生活していた頃の音楽を聴くことにより，当時のことを思い出し，大脳血液流量を増加させ大脳を活性化さえ活動を活性化したことが推察された。 担当部分：統計処理 共同発表者：江口 富子，上野 栄一，安東 則子，八塚 美樹
195.経皮内視鏡的胃瘻造設術(PEG)後に生じた瘻孔周囲皮膚炎のケア効果の検証	共　著	平成 24 年 10 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)35 巻 3 号 P.334	本研究は、経皮内視鏡的胃瘻造設術（以後 PEG）後，瘻孔周囲皮膚 炎を生じた症例に対する看護ケアの効果を明らかにすることを目的とした。対象は、男性　病名：老人性嚥下性肺炎廃用症候群、認知症。今回，高齢期で誤嚥性肺炎となり，PEG 後に消化液により生じた瘻孔周囲皮膚炎への改善に身体活動性が増加する ケア介入を行った。蠕動運動の低下する要因には加齢・臥 床があり腹筋の低下という病態がる。進行の予防には活動性の増加を図る必要がある。本研究では主治医の治療と並行し身体活動性が増加するケアを取り入れた事で漏れ，瘻孔 周囲皮膚炎の改善に至る効果が得られたと考える。 担当部分：事例解析 共同発表者：長谷川 美智子，上野 栄一
196.過去 3 年間において世界で報告された暴力に関する文献のタイトルの特徴	共　著	平成 24 年 10 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)35 巻 3 号 P.344	本研究では過去 3 年間に及ぶ暴力に関する文 献の特徴を明らかにし，今後の暴力に対する研究への示唆 を得る目的で研究を行った。グーグルスカラー（WEB 版）で，過去 3 年間に発表された，2009 年～2011 年までの研究タイトル 18190 件を分析対象とした。コロケーション解析の結果からもわかるように，ケア においては，日本の暴力に対する研究と同様に海外でも“psychiatric care”，“mental health care”などのような，暴力の被害者に対してのケアが必要である。 担当部分：テキストマイニング解析 共同発表者：明神一浩，上野 栄一
197.国内の災害看護に関する研究の動向と課題	共　著	平成 24 年 10 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)35 巻 3 号 P.346	本研究では国内における災害看護に関する研究動向と課題を明らかにした。対象としたのは，医学中央雑誌 Web 版 Ver5 に収載されている 1983 年～2007 年までの国内で発表された，災 害看護に関する文献のタイトルであるキーワードは「災害」と「看護」で，絞り込み条 件としてそれぞれ看護分野，原著論文に限定し，全年で AND 検索した。師の継続教育の一環として災害看護研

				修が開始されている。本研究結果から抽出単語では「調査」,「課題」,「検討」,「訓練」といった語句が上位にあげられ，災害に対する看 護研究はまだ歴史は浅く，これからの調査に基づく対策が 早急の課題であることが示唆された。近年の日本国内の災 害から，災害看護の意識は高まっているが，具体的な対策 がこれから求められる。 担当部分：テキストマイニング解析 共同発表者：梅林 かおり，松浦 純平，石澤 美保子，東田 佳子，上野 栄一
198.話し手の治療的コミュニケーション技法と非治療的コミュニケーション技法が聞き手の感情に与える影響　POMS を用いた調査から	共　著	平成 24 年 10 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 19 回 P.33	担当部分：テキストマイニング解析 共同発表者：上野 栄一，松浦 純平
199.コミュニケーションにおける話し手と聞き手の発話量の比較	共　著	平成 24 年 10 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 19 回 P.51	担当部分：統計解析 松浦 純平，上野 栄一
200.EBN に基づいた会話分析とは何か	共　著	平成 24 年 10 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 19 回 P.52	担当部分：研究総括 共同発表者：上野 栄一，松浦 純平
201.話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系と感情に与える影響	共　著	平成 24 年 11 月	日本看護科学学会学術集会講演集 32 回 P.206	本研究は、看護系大学の学生を対象に、話し手としての 看護学生のコミュニケーションの治療的技法を用いた場合と非治療的技法を用いた場合の聞き手への自律神経系及び感情に与える影響について明らかにすることを目的 とする。話し手のコミュニケーション技法は、交換神経系、副交 換神経系に影響を与えていた。治療的技法を用いた場合 は、副交感神経系が優位になり、非治療的技法を用いた 場合は、交換神経系が優位となった。今後は、本研究結 果を教育に活かしたい。 担当部分：研究総括 共同発表者：上野 栄一，松浦 純平
202.造血幹細胞移植の意思決定支援における看護援助と影響要因	共　著	平成 24 年 11 月	日本看護科学学会学術集会講演集 32 回 P.238	造血幹細胞移植（以下、移植）における治療選択時の意 思決定支援に関する看護援助の実態と、その影響要因に ついて明らかにすることを目的とした意思決定における看護援助に関する項目のなかで平均値 の高い項目は、因子 2

				に含まれた項目であった。一方、 因子1や因子3に含まれる項目の平均値は低く、このことから移植選択の意思決定支援では因子2については高 い実施状況にあるが、その他の因子については十分な実 施状況とは言えないことが示唆された。移植看護に携わ る看護師は、移植看護経験年数を積むに従い患者への責 任が増し、患者や家族に対する臨床判断能力が培われ意 思決定支援の援助行動に反映されている。また、看護基 礎教育後の意思決定支援に関する継続的な教育の必要性 が示され、これらの学習経験が移植を受ける患者の意思 決定を支援する看護援助につながると考えられた。 担当部分：統計解析 共同発表者：田中 智美，瀧川 薫， 上野 栄一，藤野 みつ子
203.テキストマイニングによる術後せん妄アセスメントツールのニーズに関する自由記述の分析	共　著	平成24年11月	日本看護科学学会学術集会講演集32回 P.288	本研究の目的は、臨床看護師が考える術後せん妄アセスメントツール（以下、アセスメントツール）のニーズに関する自由記述 内容をテキストマイニングから明らかにする。対象：全国国立大学医学部附属病院42病院から無作為抽出し、調査協力が得られた19病院の外科病棟に勤務する看護師725人。分析結果から術後せん妄の「発症の早期発見」、「予防」し活用（発見・対応・判断）できるアセスメントツールに期待していることが明らかになった。特にコロケーション解析においては、リスク管理の観点から術後も 含めて術前から使用可能なアセスメントツールの必要 性が抽出できたと考える。このことから予防を重視し た視点に基づくアセスメントツールの開発を希望していることが示唆され、今後は術前段階の情報や行動を重視したツールの開発に取り組む必要性があると推察する。 担当部分：質的分析の考察 共同発表者：松浦 純平，一ノ山 隆司， 上野 栄一
204.認定看護師による看護学生に対するがん化学療法看護講義の感想の分析	共　著	平成25 年1月	日本がん看護学会誌(0914-6423)27巻 Suppl. P.208	担当部分：質的解析 共同発表者：久保 博子，繁田 里美， 上野 栄一

205.スピリチュアルケアに関する研究の動向	共　著	平成 25 年 1 月	日本がん看護学会誌(0914-6423)27 巻 Suppl. P.269	担当部分：統計解析 上野 栄一，長 光代，松浦 純平
206.臨床と教育との協働	共　著	平成 25 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 26 回 P.13-15	（単独）上野 栄一
207.看護師の自己実現に関連する要因の分析	共　著	平成 25 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 26 回 P.22	担当部分：統計解析 共同発表者：吉江 由加里，上野 栄一
208.看護学生の自己健康管理モニタリング行動における概念枠組み	共　著	平成 25 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 26 回 P.23	担当部分：統計解析 共同発表者：成瀬 早苗，上野 栄一
209.糖尿病患者の段階的セルフケア能力評価尺度の開発	共　著	平成 25 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 26 回 P.25	担当部分：研究総括 共同発表者：上野 栄一、 大西 みさ
210.「聞き書き」手法を用いて聞いた患者の思いを、テキストマイニングから考える	共　著	平成 25 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 26 回 P.26	担当部分：テキストマイニング解析 安東則子，八塚美樹，上野栄一
211.介護職員の考える「看取り」について　自分だったら何をしてほしいか	共　著	平成 25 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 26 回 P.29 平成 25 年 3 月	担当部分：質的解析 共同発表者：江口 富子，上野 栄一
212.看護師が抱く精神的負担感の状況および感情と対処方法	共　著	平成 25 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 26 回 P.33	共同発表者：北野 華奈恵，長谷川 智子，上原 佳子，佐々木 百恵，礪波 利圭，上野 栄一

213.重症心身障害児(者)の評価に関する文献の検討	共　著	平成 25 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 26 回 P.43	担当部分：質的解析 共同発表者：坂本 幸繁，上野 栄一
214.ICU 看護師が捉える PNS の特徴	共　著	平成 25 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 26 回 P.51	担当部分：質的解析 共同発表者：青池 智小都，片山 静，北川 康代，高山 裕喜枝，上野 栄一
215.看護師のコスト意識向上を目指した研修会の効果	共　著	平成 25 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 26 回 P.52	担当部分：解析 共同発表者：舟川 裕香，重松 理恵，上野 栄一
216.看護管理者昇任の意思が職務キャリアに与える影響	共　著	平成 25 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)36 巻 3 号 P.129	本研究の目的は，看護管理者昇任の意思の有無や，意思の 強さが，職務キャリアにどのように影響を及ぼしているか を明確にすることである。全国から無作為に抽出し，同意を得た 79 施設の看 護管理者 972 名を対象とした。結果、【考察】 看護管理者昇任の意思があった管理者は，職務キャリア得 点が高かった。この結果は，昇任の意思があった管理者は， 看護業務の遂行や，自己研鑽などに対し，自分の看護に自信を持っているや，常に向上心をもち，学ぶ姿勢があるな ど，自信を持って業務を遂行しているからではないかと考えられる。また自己決定した行為には，やりがいと責任が 伴う（手塚ら，2007）と言われている。意思を強く持って 昇任した看護管理者は職務キャリアが高く，高い成果に繋 がるのではないかと推察する。 担当部分：統計解析、考察 共同発表者：吹矢 三恵子，上野 栄一
217.冷え症の若年成人女性への日用生活でできる冷え対策指導の有用性の検討	共　著	平成 25 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)36 巻 3 号 P.146	冷え症の環境的要因には，生活のリズムの乱れや薄着，冷 房，食事の偏り，睡眠不足，ストレスやうつ等があげられ， 日常生活でできる冷え対策として，腹式呼吸，運動，食事， 冷えない入浴と服装，正しい睡眠，大きな筋肉を温める， ストレスをためないことの７項目が提唱されている。今 回，冷えを自覚している若年成人女性を対象に，３カ月間 日常生活でできる冷え対策指導を行った結果を報告する。冷え症は，非特異的な自覚症状であり，不

				定愁訴と捉えられることが多いが，近年，特に生活習慣の乱れや生活環境 の変化などにより冷え症の人が増加して社会問題化し，若 年女性層の冷え症の存在が注目されている。今回の結果から，「だるい」「むくみ」「疲れ」とった冷えによる全身的 な症状の改善を図ることができること，日常生活でできる冷え対策の実施によって精神的健康度が改善することがわ かり，日常生活でできる冷え対策の有用性が示唆された。 今後は，季節性を考慮し，介入期間等を考慮していく必要がある。 担当部分：解析 共同発表者：八塚 美樹，上野 栄一
218.代替医療の研究の特徴について　テキストマイニングによる分析から	共　著	平成 25 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)36 巻 3 号 P.147	代替医療は，近年急速に脚光をあびている医学分野であり， WHO は世界の健康管理業務の 65 から 80%を伝統的医療と分類している。本研究では，代替医療の研究にどのような 特徴があるかについて明らかにすることを目的とした。医学中央雑誌を用いて（2013 年 2 月現在)，過去 5 年間 1,305 件について分析した。解析ソフトは KHCoder を用いた。結果、代替医療には多くの研究がなされていた。医療における代 替医療では，マッサージ，アロマセラピー，リンパドレナー ジなど多彩な種類があった。また，効果，有効，取り組み，事例ななどの単語が上位にあがり，代替医療においては，ケア効果の検証がされてきているという特徴があった。 担当部分：研究総括 共同発表者：上野 栄一，八塚 美樹，須永 恭子
219.高血圧症患者の服薬管理行動に影響する要因	共　著	平成 25 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)36 巻 3 号 P.164	高血圧症患者にとって血圧をコントロールするためには日 常生活行動を自己管理していくことが必要となる。本研究 は高血圧症患者の日常生活行動の一部と考えられる服薬行 動の自己管理に影響する要因を明らかにすることを目的と した。対象は外来に通院する本態性高血圧症患者 166 名であり， 高血圧症患者の日常生活行動自己管理尺度の下位尺度であ る服薬管理尺度（7 項目）を用いた無記名自記式質問紙 調査を実施した。結果、飲酒習慣のある者は服薬管理得点が低かったことから，服 薬は食後であることが多く飲酒後にはアルコールの影響で 服薬の必要性の認識が低下し，服薬を忘れることが考えら れる。また，家庭血圧を測定する者の方が測定しない者よりも服薬管理

				得点が高いことから，自己の血圧値をモニタリングすることで服薬管理の意識が高まるのではないかと 考える。高血圧症患者の服薬管理指導においては，男性，65 歳未満の者，有職者，飲酒習慣のある者，家庭血圧測定 をしていない者に特に配慮して生活状況及び服薬管理状況 を確認することが必要と考える。 担当部分：統計解析、考察 共同発表者：坪田 恵子，稲垣 美智子，上野 栄一
220.看護学生の自己健康管理モニタリング測定尺度の開発	共　著	平成 25 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)36 巻 3 号 P.185	本研究は、看護学生の自己健康管理モニタリング測定尺度を開発し、その信頼性・妥当性を検討する。対象・方法は、看護学生 1,056 名を対象として、121 項目 5 段階のリッカート法質問紙調査を行った。結果、主因子法プロマックス回転にて因子分析を行った結果、7 因子 30 項目の因子解が抽出され、「就学態度の自律力」、「対人関係の健全力」、「思考の健全力」、「食生活の健全力」、「対処行動能力」、「身体変調の注意力」、「予防行動力」と命名した。全体の Cronbach α 係数は.914、各因子は.705～.875 であり、G-P 分析・I-T 分析、基準関連妥当性も検討し、信頼性・妥当性は確認できた。結論として、本尺度は簡便に測定でき、繰り返し評価することで健康管理の指標として活用できる。今後は、看護以外の学生にも使用できる尺度を検討し、青年期における自己健康管理能力を向上させる一助としていく必要がある。 担当部分：統計解析 共同発表者：成瀬 早苗，上野 栄一
221.テキストマイニングによる看護学生の臨地実習中でのヒヤリハットの分析	共　著	平成 25 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)36 巻 3 号 P.230	本研究の目的は、看護学生が，自己健康管理をモニタリングしているかをみるための自己健康管理モニタリング測定尺度の開発を目的 とした。対象は、看護専門学校の看護学生 1 ,056 名に自記式質問紙調査を実施した。【考察】結果より正規性が確認され，基準関連妥当性が検証された。また，信頼性係数、リテストの結果より，信頼性の高い尺度であることが確認できた。本尺度は，看護学生が自 己の健康管理をモニタリングしているかを測定する尺度として簡便に使用でき，これにより自己健康管理の状況を把握し，自己健康管理能力向上への一助となる。 共同発表者：藤本 ひとみ，高間 静子，上野 栄一

222.A 病院における看護師のバーンアウトの現状　バーンアウトしにくい職場環境を目指して	共　著	平成 25 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)36 巻 3 号 P.311	A病院の看護師のバーンアウトの現状とその要因を調査しバーンアウトしにくい環境を明らかにすることである。: A病院各病棟に勤務する 20 ～50 代の看護師を 177 名と対象とした。結果、A病院 では脱人格化の得点は低い傾向にあり，相談や報告ができず，ストレスの原因 となっていた。職場内のコミュニケーションを良好にすることがバーンアウトの回避に繋がると考えられる。また、向にはな く，全体的に差はみられなかった。このことより，新人看 護師へのフォローアップ体制が整っていることが考えられ る。職場環境とバーンアウトの相関からは，看護師と医師，看護師同士のコミュニケーションが良好であれば，バーンアウト得点が低いという事を示していた。 担当部分：統計解析、考察 共同発表者：伊藤　まり子，池田 満知子，山崎 浩子，高柳 佳忠，上野 栄一
223.在宅片麻痺患者の自律度測定尺度の開発	共　著	平成 25 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)36 巻 3 号、 P.328	本研究は，在宅片麻痺患者の自律度を測定する尺度を作成 することである。本研究の意義は，片麻痺患者自身が在宅 での生活方法を能動的に評価できる指標とすることである。調査は，福井県内 33 施設の在宅片麻痺患者 152 名に面接法 125 名，郵送法 27 名で実施した。結果、第 1 因子は「周囲に支えられた在宅生活」，第 2 因子は「安 全な日常生活動作の工夫」，第 3 因子は「心身状態の自己 管理」，第 4 因子は「同じ片麻痺患者との交流」，第 5 因子 は「運動能力の把握と対処行動」と命名した。統計解析の 結果，廃棄すべき項目はなく，正規分布の範囲内にあると判断できた。 担当部分：統計解析 共同発表者：横山 孝枝，上野 栄一
224.看護学生の自己健康管理モニタリングにおける精神的要因の特徴	共　著	平成 25 年 9 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 20 回 P.47	担当部分：解析と考察 共同発表者：成瀬 早苗，上野 栄一
225.看護学生のコミュニケーションの特徴　会話分析の視点から	共　著	平成 25 年 9 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 20 回 P.48	担当部分：研究総括 共同発表者：上野 栄一，成瀬 早苗

226.話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系に与える影響　治療的技法と非治療的技法を用いた快度とPOMSとの関係	共　著	平成25年9月	生理心理学と精神生理学(0289-2405)31巻2号 P.169	担当部分：研究総括 共同発表者：上野 栄一，安倍 博
227.終末期の患者の家族にCD音楽が及ぼした影響	共　著	平成25年10月	平成17年日本看護学会成人看護Ⅱ	終末期の患者の家族にCD(α 波オルゴール)音楽が及ぼした影響を検討することを目的に,大腸癌の82歳女性患者の長女(62歳.保育士)を対象に,半構成的面接を実施した.長女は仕事を抱えているため患者に十分に付き添うことができなかったが,患者のそばで流れているCD音楽が「自分の代わりをしてくれている」という意識をもっており,CD音楽により癒しの効果も得ていた.また,看取り後のCD音楽は,【故人の回想】や【共に過ごした時の流れ】を感じるよすがともなっていることが分かった 担当部分：質的分析 共同発表者：長光代、石若弘美、上井陽子、表寺直美、飯田真由美、　広田牧子、上野栄一
228.統合失調症患者を支える家族の主観的負担感に関する研究－自由記載文の分析から－	共　著	平成25年10月3	平成17年日本看護学会精神看護	担当部分：質的分析、一般化 共同発表者：一ノ山隆司、廣田朋子 上野栄一、永山くに子
229.ハンドマッサージが感情と脳波に与える影響	共　著	平成25年12月	日本統合医療学会誌6巻3号 P.158	担当部分：研究総括 共同発表者：上野 栄一，室谷 良子
230.F病院こころの医療センター外来における時間外電話相談の傾向　テキストマイニングによる分析	共　著	平成26年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集27回 P.21	担当部分：質的分析、考察 共同発表者：青山 幸子，上野 栄一，林 宏美，中村 恵子，大永 幸代，田中 薄治
231.外来ミーティングにおけるアルコール依存症患者の発言内容の分析	共　著	平成26年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集27回 P.22	担当部分：質的分析 共同発表者：藤嶋 裕美，山本 育子，山口 達也，上野 栄一

232.統合失調症と退院支援に関する研究の特徴	共　著	平成 26 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 27 回 P.23	担当部分：統計解析 共同発表者：山本 勝也，上野 栄一
233.高血圧症患者のストレス管理行動に関連する要因の分析	共　著	平成 26 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 27 回 P.30	担当部分：結果、考察 共同発表者：坪田 恵子，稲垣 美智子，上野 栄一
234.精神看護学実習における新人臨床指導者の指導の実態について　テキストマイニングにおける分析を通して	共　著	平成 26 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 27 回 P.39	担当部分：質的貝瀬 k 共同発表者：増田 安代，帰山 雅宏，上野 栄一
235.新聞記事に記載された看護教育の特徴	共　著	平成 26 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 27 回 P.41	担当部分：研究総括 共同発表者：上野 栄一，須永 恭子
236.継続的質改善を用いた腹膜透析スタッフ指導能力の向上	共　著	平成 26 年 5 月	日本透析医学会雑誌(1340-3451)47 巻 Suppl.1 P.820	担当部分：解析と考察 共同発表者：西村 佑佳，中川 詞織，中田 美智代，上野 栄一
237.災害に関する研究の動向　こころに焦点をあてて	共　著	平成 26 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)37 巻 3 号 P.118 平成 26 年.7 月	担当部分：質的解析 共同発表者：成瀬 早苗，上野 栄一
238.精神看護学における会話分析の手法	共　著	平成 26 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)37 巻 3 号 P.167	本交流集会では，会話場面の分析の一部を報告し，討議の材料として会話分析の示唆を得たることを目的とした。結果、質的分析方法としては，認知行動療法，ナラティブセラピー，スピリチュアリティ，ヒューマニスティックナーシング，など精神看護学の理論や技法に基づいて分析する方法が可能である。質的に分析する場合には，以下の 6 点 に注意を払う必要がある。会話分析研究の限界として，量的研究方法は，文脈の中での会話の意味を分析することを見落としがちで，質的研究方法は，反芻性，一般性に疑問が残る。この限界を乗り越えるには，量的研究

				方法と質的研究方法の両方を行うことが有用であることが示唆された。 共同発表者：川野 雅資，上野 栄一，安藤 満代，揚野 裕紀子，曽谷 貴子，伊藤 桂子，片山 典子，石川 純子，柳田 崇姉，松浦 純平
239.一般病棟看護師の退院支援における認識・行動と役割受容の関連性	共　著	平成 26 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)37 巻 3 号 P.191	一般病棟看護師の個人的背景（年齢・経験年数・臨床領 域・教育課程・退院支援研修受講の有無）と退院支援における認識・行動と役割受容との関連性を明らかにすることを目的として、北陸 3 県の施設基準として退院調整加算を取得している病 院 16 施設に勤務する一般病棟看護師 770 人に，個人的背景，退院支援の認識，退院支援の行動，看護師としての役割受 容について無記名の自記式質問紙調査を郵送法にて実施した。結果、退院支援の認識・行動と役割受容は年齢，経 験年数の高い看護師と，退院支援に関する研修を受講して いる看護師が有意に高かった。今後わが国では高齢化率や 障害をもつ生活者が増えていくことが推測されており，在 宅や施設へつなぐまでの関わりとして，一般病棟看護師は 退院支援の役割を肯定的に受け止め，看護ケアを提供していくことが重要な課題である。 担当部分：統計解析 共同発表者：吉田 一代，上野 栄一
240.看護師のメンタルヘルス不調による休職後の復職支援に関する研究	共　著	平成 26 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)37 巻 3 号 P.192	本研究の目的は、病院看護師のメンタルヘルス不調による休職後の復職支援に関して，看護管理者はその必要性をどのように認識して いるのか，組織の動向に示唆を得ることである。関東圏内の精神科病 院を除く，総合病院（200 床以上）からランダムに 350 施設 を選定し、有効回答は 129 部を分析とした。結果、復職に伴う支援には，訓練の導入やプログラムの活用，厚 労省の手引き用いて努力しているが，明らかな効果を示していない現状と支援を受ける側とする側にとって負担が大きくなることが推察される。また、メンタルヘルスはプライバシーの観点 から慎重に扱うことが求められ，支援体制にはその理解の 必要性が示唆された。 担当部分： 共同発表者：大津 聡美，遠藤 加奈子，一ノ山 隆司，上野 栄一

241.F 病院こころの医療センター外来における時間外電話相談の傾向　テキストマイニングによる分析	共　著	平成 26 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)37 巻 3 号 P.202	F 病院こころの医療センター（以下，F センター）は，精 神科病床 300 と精神科外来を有し，夜間，休日の電話相談を受け入れている。今回，F センター外来における電話 相談で，時間外に限局し，分析し考察した（平成 23 年 4 月から平成 24 年 3 月までの当外 来時間外で，看護師が受けた電話相談（患者が話した総数 4,258 件)。結果、当外来時間外電話相談では，「薬」は〈副作用〉〈受診日〉　〈不足〉〈処方希望〉〈夕食後〉〈朝食後〉と共起性があり，副作用による苦痛や飲み間違いなど服薬行動における悩み が推察された。「辛い」は〈我慢〉〈人間関係〉〈頓服〉〈診 察希望〉〈思考伝播〉と共起性があり，病的体験や付き合いにおける生き辛さを抱え，医療につながりながら生きて いる相談者の生活が推察された。また、相談者の生活上の障害に 焦点を当て，傾聴することが重要と考える。 担当部分：テキストマイニング解析 共同発表者：青山 幸子，上野 栄一，林 宏美，中村 恵子，大永 幸代，田中 薄治
242.看護職の専門職間協働における実践力測定尺度開発の試み	共　著	平成 26 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)37 巻 3 号 P.267	本研究の目的は、看護職の専門職間協働における実践力測定尺度の開発である。調査対象北陸 3 県の看護職 773 名（保健師 237 名，助産師 226 名，看護師 310 名)。結果、項目分析で抽出された 48 項目を，共通性と因子負 荷量を確認しながら因子分析した結果， 5 因子 31 項目を採用した。第 1 因子を「チーム内での役割に進んで取り組 む力」，第 2 因子「専門職との繋がりを太くする力」第 3 因子「チームメンバーとの良好な関係を築く力」第 4 因 子「専門職のチーム力を発揮させる力」第 5 因子「チームメンバーの協働を引き出す力」と命名した。 担当部分：統計解析 共同発表者：白崎 千恵美，上野 栄一
243.卒後 3 年目の看護師が受けた承認と非承認行為による感情の違いの検討	共　著	平成 26 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)37 巻 3 号 P.273	本研究は、卒後 3 年目の看護師（以下，卒 3）が受けた承認と非承認 行為での感情内容を明らかにし，今後の看護管理の在り方 に示唆を得ることである。対象は α 県内 A 総合病院に勤務する 卒 3 の看護師 12 名を対象にした。結果、言葉のネットワークの分析から分かったことは，看護師の 承認行為を振り返る過程において，新人時代にプリセプターとの関係が強く，プリセプターに承認を受けたこと が，3 年目ま

				で強く意識に焼きついていたことが，このような結果となったのではないかと推察する。また，非承認 行為では，自身→悪口→陰など，陰で悪口を言われた経験 も強く印象づいたのだと考える。 担当部分：質的解析 共同発表者：古川 智恵，武井 美佳，村上 愛，大亀 未貴，川崎 美樹，本多由美子，明神 一浩，上野 栄一
244.A 総合病院における男性看護師のチームワーク能力に対する調査研究	共　著	平成 26 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)37 巻 3 号 P.302	本研究の目的は、チームワーク能力尺度を用い，男性看護師が求められる チームワーク能力を解明することで今後の業務を円滑に行うための示唆を得るためである。結果、『リーダーシッ プ能力尺度』で有意差が出た項目としては公平対応因子の みであった。特に 2 項目がより低い値を示していた。この要因として男性看護師の経験によるものが大きいと予測さ れ，性別に関係なく男性看護師はリーダーシップ能力を発揮すべきであるという思いがある事が考えられる。しか し，期待値に届かなかったと解釈し，男性看護師はリ ーダーシップ能力を成長させ，経験を積んでいく事が必要であると考える。 担当部分：統計解析 共同発表者：加納 春洋，城戸 涼子，田中 裕美，高柳 佳忠，上野 栄一
245.テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析	共　著	平成 26 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)37 巻 3 号 P.311	本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からうつ病患者への援助の特徴を明らかにして今後 のうつ病患者へのカウンセリングに活用することである。対象者へのカウンセリングの会話内容を録音し 録音内容から逐語録を作成した。計量テキスト分析ソフト KH Coder にて記述統計，共起関係ネットワーク分類，階 層的クラスター分析を実施した。結果、【考察】 共起関係ネットワーク分類と階層的クラスター分析の結 果，「対象者の嗜好」は，対象者が好きなラーメンの話題 を自ら積極的に話していた。このことは対象者とカウンセ ラー間に堅固な信頼関係が構築されている証ではないかと 推察する。 担当部分：会話分析 共同発表者：松浦 純平，川野 雅資，上野 栄一
246.NANDA-I 看護診断における「急性混乱」の変遷およびその特徴について	共　著	平成 26 年 7 月	看護診断(1341-307 月 19 巻 2 号 P.112-113	担当部分：結果の考察 共同発表者：松浦 純平，上野 栄一

247.外来インスリン導入に段階的なセルフケア評価(GSEQ)を用いた有効性の検討	共　著	平成 26 年 8 月	日本糖尿病教育・看護学会誌(1342-8497)18 巻特別号 P.142	担当部分：統計解析 共同発表者：大西 みさ，上野 栄一
248.看護学生が自己評価の指標を決定する因子　統合実習後のインタビューの検討	共　著	平成 26 年 9 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 21 回 P.46	担当部分：解析 共同発表者：南野 まゆみ，上野 栄一
249.CPR(心肺蘇生)講習会において患者・家族の意見から見えてきたこと　過去 6 年間を振り返って	共　著	平成 26 年 9 月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌(1881-7319)24 巻 Suppl. P.139s	担当部分：データ解析 共同発表者：草野 玲奈，山上 美竹，舟川 裕香，重松 理恵，上野 栄一
250.慢性呼吸器疾患看護認定看護師への期待と役割の明確化	共　著	平成 26 年 9 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 21 回 P.46	担当部分：データ解析 共同発表者：東 絵理，高畑 奈津江，関口 浩至，上野 栄一，長谷川 智子，石崎 武志
251.小児造血細胞移植看護に関わる看護師の気持ち	共　著	平成 26 年 10 月	日本小児血液・がん学会雑誌(2187-011X)51 巻 4 号 P.409	担当部分：質的解析 共同発表者：広瀬 知美，黒川 歩美，尾崎 美津子，岩本 和栄，上野 栄一
252.外来化学療法に関する研究の動向　患者と家族に焦点をあてて	共　著	平成 27 年 1 月	日本がん看護学会誌(0914-6423)29 巻 Suppl. P.143	担当部分：研究総括 共同発表者：上野 栄一，長 光代
253.外来化学療法を受ける患者の栄養評価	共　著	平成 27 年 1 月	日本がん看護学会誌(0914-6423)29 巻 Suppl. P.156 平成 27 年.01)	担当部分：解析 共同発表者：久保 博子，上野 栄一
254.外来化学療法を受けている高齢者がん患者の家族の思い	共　著	平成 27 年 1 月	日本がん看護学会誌(0914-6423)29 巻 Suppl. P.203 平成 27 年.01)	共同発表者：長 光代，藤森 敦子，上野 栄一
255.外来がん化学療法を受ける乳がん患者のセクシュアリティへの影響(第 1 報)テキストマイニングによる会話の分析	共　著	平成 27 年 1 月	日本がん看護学会誌(0914-6423)29 巻 Suppl. P.241	担当部分：質的解析 共同担当部分：：木谷 智江，中野 妃佐恵，上野 栄一

256.看護政策に関わる研究の動向について	共　著	平成 27 年 2 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 28 回 P.21	担当部分：研究総括 共同発表者：上野 栄一，成瀬 早苗，増田 安代，松浦 純平，内田 真紀，山本 勝也
257.一人暮らし高齢者に関する研究の特徴　テキストマイニングによる分析	共　著	平成 27 年 2 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 28 回 P.24	担当部分：テキストマイニング解析 共同発表者：成瀬 早苗，上野 栄一，加藤 真由美
258.テキストマイニングによる「先制医療」の視点からみたせん妄発症予防の実際	共　著	平成 27 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)38 巻 3 号 P.160	担当部分：テキストマイニング解析 共同発表者：松浦 純平，足日 和美，中上 昌代，上野 栄一
259.統合失調症を有する人の地域生活におけるセルフマネジメント能力測定尺度の開発	共　著	平成 27 年 7 月	日本看護研究学会雑誌、38 巻 3 号 P.162 平成 27 年.7 月	担当部分：統計解析、考察 共同発表者：山本 勝也，上野 栄一
260.高齢者の捉える在宅生活の「楽しみ」と「はりあい」テキストマイニングの解析から	共　著	平成 27 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)38 巻 3 号 P.271	担当部分： 共同発表者：成瀬 早苗，上野 栄一，加藤 真由美，出村 佳子
261.各都道府県看護協会の取り組みを協会広報誌巻頭言の特徴から考察する	共　著	平成 27 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)38 巻 3 号 P.299	担当部分： 共同発表者：濱野 陽子，上野 栄一
262.テキストマイニングを用いた看護診断に関する研究の分析	共　著	平成 27 年 7 月	看護診断(1341-307 月 20 巻 2 号 P.118-119	担当部分： 共同発表者：松浦 純平，上野 栄一
263.高齢者の生きがいに関する研究の特徴　テキストマイニングの解析から	共　著	平成 27 年 9 月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集 22 回 P.57	担当部分： 共同発表者：成瀬 早苗，上野 栄一
264.軽度高血糖者への生活実態調査と糖尿病予防の取組み	共　著	平成 27 年 12 月	北陸公衆衛生学会誌(0386-3530)42 巻学会特集 P.40	担当部分： 共同発表者：間所 奈美恵，越後 美香，野村 未来，上野 栄一，出口 洋二，繁 担当部分： 田 里美

265.外来がん化学療法を受ける乳がん患者のセクシュアリティへの影響(第2報)テキストマイニングによる会話の分析	共　著	平成28年1月	日本がん看護学会誌(0914-6423)30巻 Suppl. P.233	担当部分： 共同発表者：木谷 智江，中野 妃佐恵，上野 栄一
266.高齢がん患者が通院治療を継続するにあたっての負担・不安と工夫	共　著	平成28年1月	日本がん看護学会誌(0914-6423)30巻 Suppl. P.274	担当部分：質的解析 共同発表者：磯見 智恵，繁田 里美，上野 栄一，笹川 良明，酒井 明子
267.世界におけるEBMに基づいたせん妄研究の現状と課題	共　著	平成28年2月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集29回 P.27	担当部分：結果と考察 共同発表者：松浦 純平，上野 栄一
268.精神看護学における記録内観導入への検討　テキストマイニングにおける分析を通して	共　著	平成28年2月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集29回 P.29	担当部分：質的解析 共同発表者：増田 安代，上野 栄一，明神 一浩
269.結核・抗酸菌感染症感染教育はいかにすべきか、いかにあるべきか　看護師教育	共　著	平成28年3月	結核(0022-9776)91巻3号 P.250	担当部分：研究総括 共同発表者：上野 栄一、石崎武志
270.精神科病棟看護師の精神障害者へ向けた口腔ケア行動意図尺度の開発	共　著	平成28年7月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)39巻3号 P.134	担当部分：統計解析 共同発表者：西田 実紗子，上野 栄一
271.パートナーシップがケーススタディ指導にもたらす効果と課題	共　著	平成28年7月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)39巻3号 P.151	担当部分：事例解析 共同発表者：坂中 善恵，小山 直美，上野 栄一
272.A病院における、新生児看護を行なう看護師の職務満足度とストレス要因	共　著	平成28年7月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)39巻3号 P.170	担当部分：事例解析 共同発表者：米谷 久恵，村上 愛，千葉 明日香，上野 栄一，明神 一浩
273.テキストマイニングを用いた救急隊からのファーストコールの診断別キーワード分析	共　著	平成28年9月	日本救急医学会雑誌(0915-924X)27巻9号 P.465	担当部分：テキストマイニング解析 共同発表者：関口 浩至，近藤 豊，上野 栄一，久木田 一朗

274.要支援高齢者の暮らしに関する研究の特徴　テキストマイニングの解析から	共　著	平成28年10月	ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集23回 P.39	担当部分：統計解析 共同発表者：成瀬 早苗，上野 栄一
275.リハビリテーション看護に役立つ手術室看護の要素	共　著	平成28年11月	日本リハビリテーション看護学会学術大会集録28回 P.83	担当部分：解析 共同発表者：南 まゆみ，小沼 ますみ，酒田 外希子，上野 栄一
276.世界における嗅覚障害看護の現状と展望　テキストマイニングによる定量的分析	共　著	平成28年11月	日本看護科学学会学術集会講演集36回 P.480	担当部分：結果と考察 共同発表者：松浦 純平，上野 栄一
277.精神看護学実習における実習指導者の看護学生への指導活動において自己効力感を高める要因	共　著	平成29年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集30回 P.28	担当部分：解析 共同発表者：藤木 栄司，上野 栄一
278.高齢慢性心不全患者の在宅療養における自己管理上の特徴　テキストマイニング手法により男女の言語分析を比較して	共　著	平成29年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集30回 P.32	担当部分：テキストマイニング解析 共同発表者：藤田 三恵，浅見 美千江，原 元子，武田 陽子，上野 栄一
279.NICU看護師のコンピテンシー尺度の開発	共　著	平成29年8月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)40巻3号 P.367	担当部分：統計解析 共同発表者：出口 文代，上野 栄一，上澤 悦子
280.『日本看護研究学会雑誌』に論文を掲載しよう！	共　著	平成29年9月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)40巻3号 P.299	担当部分：尺度開発の方法 共同発表者：法橋 尚宏，竹田 恵子，上野 栄一
281.A病院における新人看護師のリアリティ・ショックの構成因子	共　著	平成29年10月	日本リハビリテーション看護学会学術大会集録29回 P.94	担当部分：解析 共同発表者：前田 恵利，多喜 宏平，堀田 薫，岩井 美知代，藤川 揚子，上野 栄一
282.省察の概念分析分析の目的と用法	共　著	平成29年12月	日本看護科学学会学術集会講演集37回 P. [PA-40-6]	担当部分：解析と考察 共同発表者：加藤 真由美，泉 キヨ子，上野 栄一，鈴木 みずえ，正源寺 美穂

283.看護系大学生の初年次教育におけるアクティブラーニングの認識	共　著	平成 30 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)41 巻 3 号 P.540	担当部分：解析 共同発表者：境 美砂子，一ノ山 隆司，岩城 敏之，上野 栄一
284.テキストマイニングによる看護系大学の初年次教育の傾向分析	共　著	平成 30 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)41 巻 3 号 P.540	担当部分：結果と考察 共同発表者：一ノ山 隆司，上野 栄一，境 美砂子
285.看護系大学生の初年次教育におけるアクティブラーニングの認識	共　著	平成 30 年 8 月	日本看護研究学会第 44 回学術集会日本看護研究学会	担当部分：結果と考察 共同発表者：境　美砂子，一ノ山　隆司，　岩城　　敏之，　上野 栄一
286.テキストマイニングによる看護系大学の初年次教育の傾向分析	共　著	平成 30 年 8 月	日本看護研究学会第 44 回学術集会	担当部分：結果と考察 共同発表者：一ノ山　　隆司， 上野 栄一，　境　美砂子
287.臓器提供施設 A 病院における人生の最終段階に係る看護師としての意識調査	共　著	平成 30 年 10 月	第 54 回 日本移植学会総会	担当部分：解析 共同発表者：中田 美智代，一ノ山 拓也，八牧 佑美，上野 栄一
288.臓器提供施設 A 病院における人生の最終段階に係る看護師としての意識調査	共　著	平成 30 年 10 月	第 54 回 日本移植学会総会	担当部分：解析と考察 共同発表者：中田 美智代，一ノ山 拓也，八牧 佑美，上野 栄一
289.看護師の臨床判断における転倒につながる「ふらつき」の言語化	共　著	平成 30 年 12 月	日本看護科学学会学術集会講演集 38 回 P.［P2-8-45］	担当部分：解析と考察 共同発表者：加藤 真由美，泉 キヨ子，鈴木 みずえ，上野 栄一，正源寺 美穂
290.看護師の臨床判断における転倒につながる「ふらつき」の言語化	共　著	平成 30 年 12 月	第 38 回日本看護科学学会学術集会日本看護科学学会	担当部分：結果と考察 共同発表者：加藤　真由美，　泉　キヨ子，　鈴木　みずえ，　上野 栄一，　正源寺　美穂
291.臓器提供施設 A 病院における人生の最終段階に係る看護師としての意識調査	共　著	平成 31 年 3 月	移植(0578-7947)53 巻総会臨時 P.469	担当部分：分析と考察 共同発表者：中田 美智代，一ノ山 拓也，八牧 佑美，上野 栄一

292.看護研究をイノベーションするテキストマイニング	単　著	平成 31 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 32 回 P.25 平成 31 年.3 月	（単独）上野 栄一
293.テキストマイニングによる一次救命処置に関する看護の研究に関する動向と課題	共　著	平成 31 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 32 回 P.40	担当部分：結果と考察 共同発表者：松浦 純平，守本 とも子，上野 栄一
294.新人教育プログラムにおける研究の特徴について	共　著	平成 31 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 32 回 P.42	担当部分：解析 共同発表者：藤本 ひとみ，上野 栄一，清水 由加里
295.トラウマに関する研究の特徴　テキストマイニングの分析から	共　著	平成 31 年 3 月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 32 回 P.44	担当部分：テキストマイニング解析 共同発表者：上野 栄一，藤本 ひとみ，松浦 純平
296.看護研究をイノベーションするテキストマイニング	単　著	平成 31 年 3 月	日本看護研究学会第 32 回近畿・北陸地方会学術集会	（単独）上野　栄一
297.トラウマに関する研究の特徴　テキストマイニングの分析から	共　著	平成 31 年 3 月	日本看護研究学会第 32 回近畿・北陸地方会学術集会	担当部分：研究総括 共同発表者：上野 栄一，　藤本 ひとみ，　松浦 純平
298.新人教育プログラムにおける研究の特徴について	共　著	平成 31 年 3 月	日本看護研究学会第 32 回近畿・北陸地方会学術集会	担当部分：解析 共同発表者：藤本 ひとみ，上野 栄一，清水 由加里
299.テキストマイニングによる一次救命処置に関する看護の研究に関する動向と課題	共　著	平成 31 年 3 月	日本看護研究学会第 32 回近畿・北陸地方会学術集会	共同発表者：松浦 純平，　守本 とも子，　上野 栄一
300.精神看護学実習における TIC を意識したかかわりへの学びの過程の解明	共　著	令和 1 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)42 巻 3 号 P.569	学生たちの精神疾患対象者への TIC を意識し たかかわりの学びの過程を解明する。2018 年 10 月～2019 年 1 月に実施，て質 的統合法を用い、対象者を A 大 学看護学生 3 年生 91 名とした。

				結果、学生たちは，対象者との自然な関係構築，対象 者が安心できる環境形成，対象者を守る情報共有が， TIC を意識したかかわりの基盤となり，それに立脚し て要素④と要素⑤による専門的な介入が進むことに考 えが及んでいた。更に，要素⑥では，退院後の社会で 受ける偏見による生きづらさについても言及している。 これらは，91 名の学生が，実習中に TIC を意識したこと と，4 か月に及ぶ実習期間中に発表したグループの総 合的な観点からの集約なので，より深い学びの過程と なっていることが考えられる。 担当部分：テキストマイング解析 共同発表者：山元 恵子，川野 雅資， 上野 栄一
301.テキストマイニングによる看護系大学の初年次教育の傾向分析	共　著	令和 1 年 7 月	日本看護研究学会雑誌(0285-9262)42 巻 3 号 P.542	本研究目的は、看護系大学のホームページに公開しているシラバス内容か ら初年次教育に該当する授業概要についてテキストマイニ ング手法を用いて初年次教育の傾向を明らかにすることである。データ分析は，102 校，128 科目における授業概要に記載さ れた内容を質的データ化し，KH Coder Ver.2.00.f を用いて， テキストマイニング（形態素解析，単語頻度分析，共起 ネットワーク分析（ことばネットワーク）を実施した。単語頻度及び共起ネットワーク分析の結果を基に初年次教 育の傾向を勘案すると，学習の基本スタイルと学習のス キームの醸成であると考えられる。それは，名詞の「身」 からは能動的に学修に取り組むことを念頭に置いた授業に よって学習の基本スタイルを確立する意図があり，名詞の 「力」からは情報収集を行い根拠のある内容を調べる力， 論理的にまとめたレポートを作成する力，プレゼンテー ション能力を養い自己表現や情報を的確に伝える力の３つ を培う学習のスキームで構成している。このことは初年次 教育においては，専門的な能力を構築するために不可欠な 能力を示唆するものである。 本人担当部分：テキストマイニング解析 共同発表者：一ノ山 隆司，境 美砂子， 上野 栄一

302.精神看護学実習におけるTICを意識したかかわりへの学びの過程の解明	共　著	令和1年8月	日本看護研究学会第45回学術集会 日本看護研究学会	担当部分：質的解析 共同発表者：山元 恵子，川野 雅資，上野 栄一
303.過去・現在から未来へつなげる看護技術　可視化のイノベーション	単　著	令和1年8月	日本看護技術学会学術集会講演抄録集18回 P.38	（単独）上野 栄一
304.ハンドマッサージ施行中の脳波と感情の特徴について	共　著	令和1年8月	日本看護技術学会学術集会講演抄録集18回 P.58	本人担当部分：研究計画と統計解析 共同研究者：上野 栄一，四谷 淳子，出口 洋二，室谷 良子
305.1時間年休を獲得する取り組みを実施して	共　著	令和1年8月	日本看護技術学会学術集会講演抄録集18回 P.118	本人担当部分：統計解析 共同発表者：井上 美穂，砂原 奈緒，鶴谷 彩佳，上野 栄一
306.病棟ローテーションを導入した後の新人看護師の看護技術の習得状況の変化	共　著	令和1年8月	日本看護技術学会学術集会講演抄録集18回 P.120	担当部分：解析、結果記載 共同発表者：浜野 陽子，上野 栄一
307.テキストマイニングによる看護系大学の初年次教育の傾向分析	共　著	令和1年8月	第45回日本看護研究学会学術集会 日本看護研究学会	本研究の目的は看護系大学のホームページに公開しているシラバス内容か ら初年次教育に該当する授業概要についてテキストマイニ ング手法を用いて初年次教育の傾向を明らかにする。単語頻度及び共起ネットワーク分析の結果を基に初年次教 育の傾向を勘案すると，学習の基本スタイルと学習のス キームの醸成であると考えられる。それは，名詞の「身」 からは能動的に学修に取り組むことを念頭に置いた授業によって学習の基本スタイルを確立する意図があり，名詞の 「力」からは情報収集を行い根拠のある内容を調べる力， 論理的にまとめたレポートを作成する力，プレゼンテーション能力を養い自己表現や情報を的確に伝える力の３つ を培う学習のスキームで構成している。このことは初年次 教育においては，専門的な能力を構築するために不可欠な 能力を示唆するものである 担当部分：考察 共同発表者：一ノ山　隆司，境　美砂子，上野 栄一

308.推奨プロトコールを用いた定期的な評価と口腔ケアの効果	共　著	令和1年10月	日本リハビリテーション看護学会学術大会集録31回 P.106	本人担当部分：解析と考察 共同発表者：森 聖太郎，水上 灯，森 江 楓，滝下 杏奈，濱屋 宏衣，水野 里紗，河浦 恭子，上野 栄一
309.重症心身障がい児の統一した食事介助方法に向けた取り組み　A病院こども棟における摂食情報調査票作成	共　著	令和1年11月	日本リハビリテーション看護学会学術大会集録31回 P.108	本人担当部分：統計解析 共同発表者：多喜 宏平，河邊 麻衣子，田村 可南子，河原 孝子，上野 栄一
310.滅菌材料部における品質管理と滅菌バリデーションの現状	共　著	令和1年11月	医療の質・安全学会誌(1881-3658)14巻 Suppl. P.397	担当部分：解析と考察 共同研究者：石本 洋子，上野 栄一
311.経験の浅い看護師を対象にした転倒予防のための臨床判断力育成に係る省察の仮説モデル	共　著	令和1年11月	日本看護科学学会学術集会講演集39回 P. [PA-4-20]	担当部分：質的解析と考察 共同発表者：加藤 真由美，泉 キヨ子，鈴木 みずえ，上野 栄一，正源寺 美穂
312. 看護師の看護管理のコンピテンシーに関する研究の特徴　テキストマイニングによる分析から	共　著	令和2年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集33回.P.46	担当部分：自然言語処理 共同発表者：上野 栄一，松浦 純平，溝口 みちる，田場 真理，杉島 優子
313. テキストマイニングを用いたせん妄とPICSに関する研究動向の分析	共　著	令和2年9月	日本看護研究学会雑誌43巻3号,P.468	担当部分：テキストマイニング解析 共同発表者：松浦 純平，溝口 みちる，植木 奈美枝，守本 とも子，上野 栄一
314.看護におけるAI(人工知能)に関する研究の現状と展望テキストマイニングを用いた分析	共著	令和2年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 33回 Page47	担当部分：考察 共同研究者：松浦 純平，溝口 みちる，田場 真理，上野 栄一
315.新人看護師への転倒予防のための臨床判断と省察の支援に関する指導者の状況	共　著	令和2年9月	日本転倒予防学会誌 7巻2号，P. 0050	担当部分：質的解析と考察 共同発表者：加藤 真由美，泉 キヨ子，鈴木 みずえ，上野 栄一，正源寺 美穂，飯田 倫佳

316)テキストマイニングによる看護系大学生が考えるCPR実施を阻害する理由(第2報)　要因の具体的内容(会議録)	共著	令和2年12月	日本看護科学学会学術集会講演集40回 Page P12-0·	田場 真理，松浦 純平，溝口 みちる，守本 とも子，上野 栄一
317)看護学生のコミュニケーション能力と共感性との関係(会議録)	共著	令和3年9月	日本看護技術学会学術集会講演抄録集19回 Page63	上野 栄一，西村 高宏，北出 順子，藤本 ひとみ ·
318)高次脳機能障害のある患者への対応困難場面における看護師の思い(会議録)	共著	令和3年9月	日本脳神経看護研究学会会誌(1348-3072)44巻1号 Page20	横山 楓樹，花岡 璃子，渡邉 絵理子，河浦 恭子，上野 栄一 ·
319)回復期リハビリテーション病棟における看護師の多職種連携を強化する要因と今後の課題(会議録)	共著	令和3年11月	日本リハビリテーション看護学会学術大会集録33回 Page58	川村 麻友，田近 夏姫，中田 詠子，河浦 恭子，上野 栄一 ·
320.テキストマイニングを用いた看護系大学生が考えるCPR実施上の困難感(第一報)(会議録)	共著	令和2年12月	日本看護科学学会学術集会講演集 40回 Page P2-012(2020.12)	担当部分：解析と考察 共同研究者：松浦 純平，田場 真理，溝口 みちる，守本 とも子，上野 栄一
321.転倒予防に係る省察、臨床判断力、身体拘束についての意識(会議録)	共著	令和2年12月	日本看護科学学会学術集会講演集 40回 Page P2-077	担当部分：質的解析と考察 共同研究者：加藤 真由美，上野 栄一，鈴木みずえ，泉キヨ子，正源寺 美穂，飯田倫佳
328.自己導尿に関するYouTube動画の検討　患者作成動画と企業作成動画のテキストマイニング分析による比較(会議録)	共著	令和3年9月	日本排尿機能学会誌（1347-6513)32、巻1号 Page239	担当部分：テキストマイニング解析 共同研究者：佐藤 理乃，西井 久枝，若松 ひろ子，上野 栄一，中村 みどり，青木 芳隆，鈴木 基文
323.乳がん術後創部管理の患者指導の統一に向けたパンフレットの導入	共著	令和3年8月	日本看護学会論文集：急性期看護・慢性期看護 51回 Page52-55	担当部分：解析と考察 矢木 沙織，茶谷香織，竹森まなみ，上野 栄一 乳癌術後患者の創部管理の退院指導に、新たに作成したパンフレットを導

				入し、その効果を、当該患者 17 名へパンフレットを用いて指導を行った看護師 13 名へのアンケート調査から検討した。その結果、パンフレットの導入により、看護師は経験年数などに関係なく、創部の管理について統一した指導ができ、患者も退院後の創部の管理について理解できていた。一方、指導を受けた患者より、パンフレットに記載された以外の創部の異変や処置、ケア方法、バストバンドについて複数の質問があり、在宅でも安心して創部の管理を行えるよう、患者の年齢なども考慮した個別性のある指導が必要と考えられた。
324.定時制看護専門学校教員の組織コミットメントとその関連要因(原著論文)	共著	令和 3 年 8 月	日本看護学会論文集: 看護管理・看護教育 51 回 Page88-91	厚生労働省は『今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書概要』で、看護教員の資質の維持・向上に向けて「看護教員の継続教育」を掲げている。看護教員の継続教育を実現するためには、看護教員が就業を継続できることが必要であり、看護教員の就業継続意向を高めることが必要である。今回、組織コミットメントを就業継続意向の重要な関連要因と捉え、全国の定時制看護師専門学校に所属する看護教員を対象に、組織コミットメントとその関連要因について検討した。結果、組織コミットメントに関連する因子として「上司の支え」「成長の実感」「業務の負担」「情緒的消耗感」などが抽出された。 担当部分：解析と考察 共同研究者：矢木 沙織，茶谷香織，竹森まなみ，上野 栄一
325.自己導尿に関する YouTube 動画の検討　患者作成動画コメント欄のテキストマイニング分析(会議録)	共著	令和 3 年 9 月	日本排尿機能学会誌 1 号 Page239	担当部分：テキストマイニング解析 共同研究者：若松 ひろ子，西井 久枝，佐藤 理乃，上野 栄一，中村 みどり，青木 芳隆，鈴木 基文
326.保健医療福祉研究におけるテキストマイニングの活用 保健医療福祉研究におけるテキストマイニングの活用	共著	令和 3 年	日本在宅ケア学会誌 24 巻 2 号 Page22-30	（単独）上野栄一

327.看護過程におけるアセスメントに関する研究(会議録)	共著	令和3年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 34回 Page24	役割分担：研究総括 共同研究者：上野 栄一，松浦 純平，田場真理，溝口みちる，守本 とも子
328.A看護系大学生のCPR(心肺蘇生法)教育に関する意識調査	共著	令和3年3月	日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集 34回 Page22	担当部分：結果考察 共同研究者：松浦 純平，田場 真理，溝口 みちる，守本 とも子，上野 栄一
329)B病棟の退院遅延の要因分析 「看護師の退院調整に関する意識付けと円滑な退院調整に向けてー	共著	令和4年12月3日	第32回富山県看護研究学会 第4群－5	本研究では、B病棟の退院遅延の要因について明らかにし、今後の課題を明確にする。看護師の退院調整に対する意識や知識の向上、円滑な退院調整の実施を目指す。結果、退院調整についての意識改革、院内研修などを利用し看護師のさらなる知識の向上に努めることが必要である。他職種との連携は不可欠で、患者・家族が望む生活のためにどのような支援が必要か話し合いイメージを共有しながら退院後の療養先について具体的に意思決定を支援することが重要であることが明らかとなった。 共同研究者：町野麻美　水上明子　朝岡悠、上野栄一
330)深夜入り看護師が年休1時間取得するための病棟スタッフの意識と工夫	共著	令和4年12月3日	第32回富山県看護研究学会	病棟の主任以上の看護師がかえるプロジェクト取得のために行っている工夫や意識を明らかにすることである。 結果、リーダー業務を行う主任以上の看護師は、「かえるプロジェクトの必要性」と「心身の負担の軽減」を重視し、「リーダー業務における配慮」や「帰りやすい環境づくり」を主体的に行い、かえるプロジェクトに取り組んでいた。 共同研究者：志鷹彩華、竹谷真夕、平木美穂　藤田帆南、谷井遥希、増村沙和吉川佑希、上野栄一
331)A病院看護師のコロナ禍における手荒れの現状とハンドケアの実態調査	共著	令和4年2022年	第32回富山県看護研究学会 第3群－3	A 病院看護師のコロナ禍における手荒れの現状とハンドケアの実態を明らかにする。結果、A病院では、就寝前にハンドケアを実施している割合は 35.5%であり、他のタイミングとの大差は

				みられなかった。そのため、効果的なハンドケアのタイミングについても周知していく必要がある。 共同研究者：高口哲也、境春香、久野友子、志鷹もも、森友里花、尾島めぐみ、上野栄一
332)新型コロナウイルス感染症患者入院病床での卒後3年目看護師のストレスマネジメントについて	共著	令和4年 2022年	第32回富山県看護研究学会、第3群－1	研究目的は、卒後3年目のコロナ病床で勤務経験のある看護師のストレスマネジメントについて明らかにする。研究デザインは、質的記述的研究である。結果、コロナ病床で勤務経験のある卒後3年目の看護師は、異動前から【異動前から出来る準備】をし【自分の大切な人への感染リスクの軽減】を行うことでストレスマネジメントを行っていた。 共同研究者：菊地彩夏, 中橋里奈　館山亜夫　浅生来夢, 大江美由紀, 上野栄一
333)慢性腎不全患者が自己効力感をもって運動療法に取り組むための関わり方	共著	令和4年 2022年	第32回富山県看護研究学会、第2群－7	研究目的は、慢性腎不全患者が自己効力感をもって運動療法に取り組むための関わり方を明らかにすることである。結果、運動の効果を実感してもらうために、爽快感を感じられる程度の運動を提案する。 2.患者が運動療法に取り組むことをサポートし、評価していることを伝える。 3. 患者の生活背景を把握し、話し合いのなかで具体的な運動計画を一緒に考えることが重要である。 共同研究者：藤野日香荊、金井優那、竹田睦、上野栄一
334)B病棟の退院遅延の要因分析一看護師の退院調整に関する意識付けと円滑な退院調整に向けて－	共著	令和4年 2022年12月	第32回富山県看護研究学会	本研究の目的はB病棟の退院遅延の要因について明らかにし、今後の課題を明確にする。看護師の退院調整に対する意識や知識の向上、円滑な退院調整の実施を目指すことである。

				結果、B 病棟の退院遅延の要因は、【知識・経験の未熟さ】【他職種との連携の弱さ】【患者･家族の意思決定支援不足】であった。 2. 退院調整についての意識改革、院内研修などを利用し看護師のさらなる知識の向上に努めることが必要である。 3. 他職種との連携は不可欠であり、患者・家族が望む生活のためにどのような支援が必要か話し合いイメージを共有しながら退院後の療養先について具体的に意思決定を支援することが重要であることが示唆された。 共同研究者：町野麻美　水上明子、朝岡悠、上野栄一
335)深夜入り看護師が年休 1 時間取得するための病棟スタッフの意識と工夫	共著	令和 4 年 2022 年 12 月	第 32 回富山県看護研究学会 第 4 群－3	各病棟の主任以上の看護師がかえるプロジェクト取得のために行っている工夫や意識を明らかにすることである。結果、リーダー業務を行う主任以上の看護師は､｢かえるプロジェクトの必要性」と「心身の負担の軽減」を重視し、「リーダー業務における配慮」や「帰りやすい環境づくり」を主体的に行い、かえるプロジェクトに取り組んでいた。また、スタッフの一員として「ペア間での工夫」や「ペアへの配慮」を行い、かえるプロジェクトの活用には PNS の効果的な運用が必要であった。 共同研究者：志鷹彩華、竹谷真夕、平木美穂、藤田帆南、谷井遥希、増村沙和、吉川佑希、上野栄一
336)新型コロナウイルス感染症患者入院痛床での卒後 3 年目看護師のストレスマネジメントについて	共著	令和 4 年 2022 年 12 月	第 32 回富山県看護研究学会 第３群－1	本研究は､卒後 3 年目のコロナ病床で勤務経験のある看護師のストレスマネジメントについて明らかにすることである。結果、コロナ病床で勤務経験のある卒後 3 年目の看護師は、異動前から【異動前から出来る準備】をし【自分の大切な人への感染リスクの軽減】を行うことでストレスマネジメントを行っていた。異動後は【大切な人との会話で気持ちが楽になる】､【仕事以外の時間でのリフレ

				ッシュ】によってストレスマネジメントを行い、【強みを生かした業務への対応】に繋がっていた。 共同研究者：菊地彩夏、中橋里奈、館山亜夫、浅生来夢、大江美由紀、上野栄一
（その他） 1.　看護にコンピュ−タ−を生かそう	単著	平成 7 年 11 月	Quality Nursing 、1(11), p63, 文光堂	コンピュ−タ−と看護との接点について，看護教育，看護研究の視点からその利用方法およびコンピュ−タ−の必要性とその応用方法について述べた。 単独：上野栄一
2.　看護と現象学	単著	平成 7 年 6 月	Quality Nursing 2(6), p60, 文光堂	日常のケアのなかで，現象とは何かについて説明し，看護の場面においてどのように現象学を取り入れるのかについて，事例を通して説明し,その方法および有用性について簡潔に述べた。 単独：上野栄一
3.　Stat View:効果的なプレゼンテーションの必要性−多変量解析，学会発表用のプレゼンテーション用のグラフ作成を行う−	単著	平成 9 年 12 月	日経サイエンス、2(12), p6, 日本経済新聞社	Stat View 統計ソフトの医学領域における有用性と性能について、基本的統計処理からプレゼンテーション用のグラフ作成の必要性について説明した。 単独：上野栄一
4. Case Study With Stat View−医療の分野における Stat View の活用事例	単著	平成 10 年 2 月	医療とコンピュ−タ、9(2), 111-123	医療とコンピュ−タの接点から、看護と統計学との接点について述べ，医療の分野で扱うデ−タの特殊性について説明した。また、基本的統計処理、多変量解析の解説のみならずグラフの作成やプレゼンテ−ションまでを、医学や看護分野の具体的事例を通してビジュアルに解説した。 単独：上野栄一
5. 北海道看護協会上川南支部平成 13 年度年頭挨拶	単著	平成 13 年 2 月	北海道看護協会上川南支部機関紙「大雪」	北海道看護協会上川南支部における活動内容と抱負を、組織の強化、地域との連携との観点から述べ、平成 13 年度の活動内容について述べた。 （単独）上野栄一
6. 秋の夜の院内コンサート	単著	平成 14 年 2 月	Quality Nursing、文光堂	旭川市内で行われた藤原真理チェリストによる院内コンサートを患者の視点からルポした。当日は 150 人もの患者、家族が集い、1 時間程のコンサートが病院玄関ホールで開催された。患者、家族からは 1 曲ごとに大きな拍手が送られた。 （単独）上野栄一

7. 北海道看護協会上川南支部平成14年度年頭挨拶	共著	平成14年2月	北海道看護協会上川南支部機関紙「大雪」	北海道看護協会平成14年度の上川南支部における活動内容と抱負を、組織の強化、地域との連携との観点から述べ、平成14年度の活動内容について述べた。 発行・編集代表：上野栄一
8. 平成14年度医学部看護学科臨地看護学実習ガイドライン	共著	平成14年3月	旭川医科大学医学部看護学科、第一版	全国大学協議会での報告書を元に、大学教育における臨地看護学実習における到達目標を学年毎に決めて詳細な実習上での指導上の指針とした。 共著者：松浦和代、上野栄一、北村久美子、新開淑子、野村紀子

（注）
1　この書類は，学長（高等専門学校にあっては校長）及び専任教員について作成すること。
2　医科大学又は医学若しくは歯学に関する学部若しくは学部の学科の設置の認可を受けようとする場合，附属病院の長についてもこの書類を作成すること。
3　「研究業績等に関する事項」には，書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。
4　「氏名」の欄の「印」は，本人の署名をもって代えることができること。

教　育　研　究　業　績　書

令和 5年 3月 31日

氏名　　阪元　勇輝

研　究　分　野	研究内容のキーワード
環境学、プロセス工学	環境影響評価・環境政策、環境技術・環境材料、化学物質影響科学、反応工学・プロセスシステム、エネルギー学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年　月　日	概　　要
1　教育方法の実践例		
マルチメディア機器を利用した講義等	平成 17 年 4 月～現在に至る	奈良学園の高等教育において、学生に対して、より環境問題や関連する実験等の重要性の理解を深めるため、視覚効果（画像･映像）を利用して、学習効果を高めた。摘要科目としては、「生活と環境」、「環境科学」や「実験で学ぶ科学」、他において、DVD 映像や PC 上での食物連鎖のシミュレーション等。
2　作成した教科書，教材		
1) 環境関連講義用教科書	平成 17 年 4 月～現在に至る	奈良学園の高等教育および他大学において、環境関連の講義用教科書を作成した。環境関連の教科書は一般的に専門性が高いため、より平易な教科書を各関係テーマに応じて作成し、学習効果を高めた。摘要科目：環境科学、環境論、環境政策論、地域環境論、他
2) 環境関連講義用補助教材	平成 17 年 4 月～現在に至る	奈良学園の高等教育および他大学において、環境関連の補助教材を作成した。特に環境問題に関して、視覚効果（環境破壊の画像・ビデオ等）を利用し、より学習効果を高めるための補助教材を作成し、学習効果を高めた。摘要科目：環境科学、環境論、生活と環境、他
3　当該教員の教育上の能力に関する大学等の評価		
特記事項無し		
4　実務家教員についての特記事項		
1) 事業者、団体および地方行政職員・議員に対する環境関連のセミナーおよび講演	平成 11 年 4 月～現在に至る	多くの環境関連のセミナーおよび講演を行っている。詳細は、（公的招待講演会・セミナー発表等）を参照。
2) 関西大学客員研究員（先端科学技術推進機構）	平成 12 年 4 月～平成 16 年 3 月	客員研究員として左記大学において、学生の卒業研究および修士研究の研究指導・補助に従事し、卒業論文および修士論文の作成に寄与した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年　月　日	概　　要
1　資格，免許		
1) 工学修士	昭和 59 年 3 月 31 日　授与	固体系アンモニア化物を用いた蓄熱装置に関して、それらの反応特性および熱力学的物性に関して纏めた。
2) エネルギー管理士（経済産業省）	平成 6 年 5 月	エネルギーシステム全てにおいて管理が可能あることを認められている。
3) 環境カウンセラー：事業者・市民両部門（環境省）	平成 11 年 4 月	環境全般に関して、事業者および市民に対してカウンセリング可能あることを認められている。

4) 国際環境アドバイザー（経済産業省）	平成 11 年 10 月	国際的に環境に関するアドバイスが可能であることを認められている。
5) 新エネルギー有識者（NEDO:新エネルギー・産業技術総合開発機構）	平成 12 年 3 月	新エネルギーに関する知見を有していることを公式的に認められている。
6) 博士（工学）	平成 12 年 9 月 21 日　授与	ライフサイクルアナリシスによる省エネルギーおよび炭酸ガス削減技術の評価に関して論文として纏めた。
7) 環境マネジメントシステム・エコアクション 21（EA21）審査人（環境省）	平成 16 年 4 月	環境省の環境マネジメントシステム EA21 の審査することが環境省より公式的に認められている。
8) 環境社会検定（eco 検定）（東京商工会議所）	平成 19 年 12 月	様々な環境問題に関して幅広い知識を有していることを認定されている。
他、多数）危険物取扱者（甲種）、毒物劇物取扱責任者、他		左記のように多様な環境関連の資格を有している。
２　特許等		
磁気記録媒体に関する特許複数出願・所有	平成 2 年～	阪元　勇輝（筆頭）、他：現在存続期限終了
３　実務家教員についての特記事項		
1) 日立マクセル株式会社（現マクセル）　研究開発部	昭和 59 年 4 月～平成 9 年 3 月	主として、磁気メディアの研究開発に従事し、高密度磁気記録媒体としてデジタルオーディオおよびビデオテープの研究開発を行った。（主任研究員）
2) ・財団法人地球環境産業技術研究機構（RITE）：地球環境システム研究室　LCA 研究員、化学的 CO2 固定化プロジェクト研究員、生分解性プラスチックプロジェクト研究員等　兼務 ・通商産業省「地球環境産業技術開発」招聘プロジェクト研究員　兼務	平成 7 年 9 月～平成 11 年 12 月	通産省の環境プロジェクトに招聘研究員として参加し、主として、複数の国家プロジェクトの環境保全技術の研究開発およびその技術評価に従事し、ライフサイクルアセスメント（LCA）による評価手法の開発やそれらを用いた環境技術の評価を行った。
3) 関西大学　先端科学技術推進機構　客員研究員	平成 12 年 4 月～平成 16 年 3 月	客員研究員として自らの環境に関する研究を行うとともに卒業研究および修士研究に従事し、卒業論文および修士論文の作成に寄与した。
4) 奈良県庁　技術アドバイザー	平成 12 年 12 月～平成 24 年 3 月	奈良県商工労働部の技術アドバイザーとして奈良県内の企業に対して、新しい技術の導入の推進を目的にアドバイスを行った。
5) 大阪市役所　（財）大阪市産業創造館　環境プロジェクト　アドバイザー	平成 13 年 2 月～平成 16 年 3 月	大阪市において、環境保全を推進するとともに新しく環境ビジネスを創業するあるいは現在の環境ビジネスをさらに発展させる企業に対してのアドバイスや評価を行った。
6) NPO 法人奈良県環境カウンセラー協会　理事	平成 13 年 3 月～現在に至る	環境省環境カウンセラーの奈良県の協会を設立し、設立時より理事として現在まで運営に従事している。
7) 奈良県庁　環境アドバイザー	平成 13 年 3 月～現在に至る	奈良県環境政策課の環境アドバイザーとして奈良県内の企業に対して環境保全技術、省エネルギー技術および新エネルギー技術の指導を行っている。
8) （社）省エネルギーセンター　エネルギー使用合理化専門員	平成 15 年 10 月～現在に至る	様々な規模および業種の企業に対して、省エネルギーを推進するために評価および指導を行っている。
9) （社）産業環境管理協会（現（一社）サステナブル経営推進機構）エコリーフ環境ラベル制度　検証評価委員	平成 18 年 4 月～平成 24 年 4 月	国際規格にも準拠している日本のタイプ III 環境ラベル制度であり、当該制度において、事業者の環境ラベルを第三者の評価委員として認定を行っている。

10) 経済産業省（他 3 省合同：環境省、農林水産省および国土交通省）カーボンフットプリント試行制度評価パネル委員	平成 21 年 4 月～平成 24 年 3 月	4 省合同の国家プロジェクトである我が国の CO2 削減プロジェクトの検証制度の評価員として制度の枠組みおよび評価基準の策定に努めた。
11) 奈良県庁　節電協議会委員	平成 23 年 7 月～現在に至る	奈良県全体の節電を推進するために学識経験者として県の節電政策の策定や普及に努めている。
13) 奈良県庁　エネルギー利活用研究会委員	平成 23 年 12 月～現在に至る	奈良県のエネルギー利活用を目的とし、学識経験者として、特に再生可能エネルギー導入の推進策を研究し策定に努めている。
14) （社）産業環境管理協会（現（一社）サステナブル経営推進機構）環境ラベルプログラム制度　評価委員	平成 24 年 4 月～現在に至る	国家プロジェクト制度が終了し、制度が民間移行となるに伴い当該制度の評価委員として制度の策定および検証評価委員を務めている。
15) 奈良県庁　奈良県事業者向けエコ経営促進モデル事業　評価委員	平成 24 年 4 月～平成 27 年 3 月	奈良県の事業者を対象に、電力供給不足による事業継続リスクを回避するための先駆的な省エネ設備のモデル的な導入の応募者に対し、その導入事業の先駆性や効果の評価を行い、補助対象の可否の選考を行った。
16) 奈良県庁　エネルギービジョン推進協議会　委員	平成 25 年 8 月～現在に至る	奈良県のエネルギー政策に関しての方向性、計画策定およびその成果の評価を目的とし、学識経験者として、奈良県全体のエネルギー政策の推進に努めている。
17) 奈良県庁　エネルギービジョン策定委員会　委員	平成 26 年 4 月～現在に至る	奈良県のエネルギービジョンの策定を目的とし、学識経験者として、奈良県全体のエネルギービジョンの策定に努めている。
18) 環境省　再生可能エネルギー等導入地方公共団体支援基金　選考委員	平成 26 年 9 月～平成 29 年 3 月	環境省の左記事業において、奈良県内の地方行政（市町村）を対象とした災害に強い自立・分散型のエネルギーシステムの導入し環境先進地域（エコタウン）を構築する事業に対して、各市町村から提案された構築事業に関して、その事業の評価を行い、補助対象の可否の選考を行った。
19) 奈良県庁　環境審議会委員：環境総合計画策定委員	平成 27 年 4 月～現在に至る	奈良県の環境保全および保護を目的とし、環境学識経験者として、奈良県の環境基本計画の策定において特にエネルギー政策の策定に努めている。
20) 奈良県庁　奈良県再生可能エネルギー　アドバイザー	平成 28 年 4 月～現在に至る	奈良県の再生可能エネルギー導入推進を目的とし、奈良県下の地方行政、市民および事業者に対して、再生可能エネルギーに関する導入可能性、採算性および導入方法についてアドバイスを行っている。
21) 三郷町　三郷町まちづくり総合戦略策定有識者会議　委員	平成 27 年 10 月～平成 28 年 3 月	三郷町のまちづくり総合戦略策定にあたり、今後の 5 ヶ年の目標と具体的な施策に関して、有識者として、三郷町の環境・エネルギー政策の策定に努めた。
22) 経済産業省　「地域中核企業創出・支援事業」審査委員会　委員	平成28年4月～平成29年3月	経済産業省の左記事業において、近畿地方にて環境およびエネルギービジネスの中核となる企業から提案された事業に関して、その事業の評価を行い、補助対象の可否の選考を行った。
23) 奈良県庁　「きれいに暮らす奈良県スタイル」推進協議会　委員	平成28年12月～現在に至る	奈良ならではの美しい景観や持続可能な社会を構築することを目的として、学識経験者として、奈良県全体の環境に関する実践活動を誘発・促進するための計画策定の推進に努めている。

24) 関西広域連合会　環境・エネルギー分科会　委員	平成29年9月～現在に至る	当該連合会の環境・エネルギー分科会において、奈良県代表委員として関西広域および奈良県の環境政策およびエネルギー政策に関しての方向性や計画の策定に従事する予定。
１）競争的資金獲得状況		
1. 経済産業省所管　一般社団法人新エネルギー導入促進協議会　地産地消型再生可能エネルギー面的利用等推進事業 「奈良県立医科大学新キャンパスおよび付属病院周辺における再生可能エネルギー面的利用構想」	平成 27 年 9 月～平成 28 年 3 月	奈良県庁、富士通総研、関西電力との共同で、奈良県の都市計画の一環として、奈良県橿原市にある奈良県立医科大学の新キャンパスおよび付属病院周辺における再生可能エネルギーの面的利用構想を推進し、その事業性検討を行う。 獲得予算：5,111,231 円
2. 経済産業省所管　一般社団法人新エネルギー導入促進協議会　地産地消型再生可能エネルギー面的利用等推進事業 「県と市町村の連携によるエネルギー版「奈良モデル」構想事業」	平成 27 年 9 月～平成 28 年 3 月	奈良県庁、大阪ガスとの共同で、奈良県の都市計画の一環として、奈良県庁周辺の世界遺産地域における再生可能エネルギーの導入も含めたエネルギーインフラのあり方および県下市町村のエネルギーマネジメントとの連携を推進し、その事業性検討を行う。 獲得予算：9,978,300 円

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1. 奈良の節電スタイル：家庭部門：～楽に、楽しく、快適に、有意義な節電をしてみませんか～	編集・監修	平成 25 年 4 月	奈良県庁 : 地域振興部 : エネルギー政策課：省エネ環境係, 奈良県庁, pp.12	奈良県内の家庭を対象とし、奈良県節電協議会より発行・配布することを目的に、左記の様な家庭でできる様々な節電の取り組み方法および実例を奈良県節電協議会委員として、編集・監修し発行した。
2. 奈良の節電スタイル：事業部門・産業部門 : ～電力を効率的に消費するスタイルの普及へ～ （以上、著書）	編集・監修	平成 25 年 4 月	奈良県庁 : 地域振興部 : エネルギー政策課：省エネ環境係, 奈良県庁, pp8	奈良県内の事業者を対象とし、奈良県節電協議会より発行・配布することを目的に、左記の様な様々な事業所における効果的な節電の取り組み方法および実例を奈良県節電協議会委員として、編集・監修し発行した。
（学術論文）				
1. Utilization of Forest Thinning Residue as Biomass Resource （査読付）	単　著	平成 25 年 11 月	The Eleventh International Conference on Ecomaterials (ICEM11), pp.130-133	地方の森林山村において、隣地残材となっている森林間伐材の有効利用および廃棄物処理を目的とし、間伐材をバイオマス資源としてエッセンシャルオイルを抽出し、その抽出残渣をさらにバイオ燃料とするシステムを提案し、パイロットスケールにて実験を行い、そのフュージビリティスタディ（事業採算性）を行った。その結果、採算性は間伐材のコストに大きく依存することが明らかとなり、また間伐材のコストによっては、採算性が大きく見込める可能性があることが明らかとなった。

2. Performance of Thermal Energy Storage Unit Using Solid Ammoniated Salt (CaCl2-NH3 System) （査読付）(筆頭論文)	共　著 (第 1 著者)	平成 26 年 5 月	Natural Resources, Vol.5, pp.337-342	水素キャリアーであり、かつエネルギー貯蔵システムである CaCl2-NH3 System を用いたエネルギーシステムに関して、プロトタイプの蓄熱装置を試作し、また熱媒体を利用した際の反応特性に関しての研究を行った。その結果、熱媒体を利用すると反応特性が向上することが明らかとなり、また熱媒体の重量別の効果が明かとなった。 本人担当部分 : 蓄熱装置のプロトタイプの設計から実験までかつ全文記述を行った。 共著者：Y.Sakamoto and H.Yamamoto
3. Measurement of Thermophysical Property of Energy Storage System (CaCl2･NH3 System) （査読付）(筆頭論文)	共　著 (第 1 著者)	平成 26 年 8 月	Natural Resources, Vol.5, pp.687-697	水素キャリアーであり、かつエネルギー貯蔵システムである CaCl2-NH3 System を用いたエネルギーシステムに関して、このシステムの熱力学的物性値（熱伝導度、熱拡散係数および熱容量）を測定するために任意加熱法を用いた耐圧・耐腐食性測定装置を設計・開発し、その評価を行った。その結果、測定装置として実用化できることが明らかとなり、上記の熱力学的物性値を測定でき、測定（実用）温度範囲内において熱伝導度および熱拡散係数は、ほぼ一定であることが明らかとなった。 本人担当部分：耐圧・耐腐食性測定装置を設計・開発から測定までかつ全文記述を行った。 共著者：Y.Sakamoto and H.Yamamoto
4. Carbon Footprint of Essential Oil from Forest Thinning Residue （査読付）	単　著	平成 27 年 11 月	The Twelfth International Conference on Ecomaterials (ICEM12), D005, (5 pages)	バイオマス資源の有効利用システムとして、間伐材用から抽出された有用成分であるエッセンシャルオイル（アロマティック、防臭および防虫効果）のカーボンフットプリントを推算した。その結果、その環境負荷として CO2 排出量は、エッセンシャルオイル抽出プロセスが最も大きく、次いでオイルの輸送・販売プロセス、間伐材の収集・運搬プロセスの順に大きいことが明らかとなった。
5. Sustainable Urban Energy Planning of a Local City in Japan （査読付） （以上、研究論文）	単　著	平成 29 年 11 月	The Thirteenth International Conference on Ecomaterials (ICEM13), P-GP-01, (6 pages)	ある地方都市の医科大学の移転に伴い、その都市の再開発計画の一環として、再生可能エネルギーや未利用エネルギーを利用したまちづくりの可能性を検討した。その結果、新医科大学には、太陽光発電の導入および帯水層の地下水が利用できることが明らかとなり、また、高齢者向け住宅には、ソーラーヒーティングシステムおよび下水熱が利用できることが明らかとなり、これらのエネルギーは、地域にも供給でき、新しいまちづくりの基本設計を提案できた。

（国際学会）				
1. Utilization of Forest Thinning Residue as Biomass Resource	単	平成 25 年 11 月	Proceeding of Eleventh International Conference on Ecomaterials (ICEM11),Nov.11-13, Hanoi, Vietnam	日本の地方の森林山村において、隣地残材となっている森林間伐材の有効利用および廃棄物処理を目的とし、間伐材をバイオマス資源としてエッセンシャルオイルを抽出し、その抽出残渣をさらにバイオ燃料とするシステムを提案し、そのフュージビリティスタディを行った。その結果、採算性は間伐材のコストに依存し、また間伐材のコストによっては、採算性が見込める可能性があることが明らかとなった。
2. Carbon Footprint of Essential Oil from Forest Thinning Residue - Biomass Utilization System for Forest Thinning Residue –	単	平成 27 年 11 月	Proceeding of Twelfth International Conference on Ecomaterials (ICEM12),Nov.8-12, Tainan, Taiwan	バイオマス資源の有効利用システムとして、間伐材用から抽出された有用成分であるエッセンシャルオイル（アロマティック、防臭および防虫効果）のカーボンフットプリントを推算した。その結果、その環境負荷として CO2 排出量は、エッセンシャルオイル抽出プロセスが最も大きく、次いでオイルの輸送・販売プロセス、間伐材の収集・運搬プロセスの順に大きいことが明らかとなった。
5. Sustainable Urban Energy Planning of a Local City in Japan （以上、国際学会）	単	平成 29 年 11 月	Proceeding of Thirteenth International Conference on Ecomaterials (ICEM13),Nov.19-23, Bangkok, Thailand	ある地方都市の医科大学の移転に伴い、その都市の再開発計画の一環として、再生可能エネルギーや未利用エネルギーを利用したまちづくりの可能性を検討した。その結果、新医科大学には、太陽光発電の導入および帯水層の地下水が利用できることが明らかとなり、また、高齢者向け住宅には、ソーラーヒーティングシステムおよび下水熱が利用できることが明らかとなり、これらのエネルギーは、地域にも供給でき、新しいまちづくりの基本設計を提案できた。
（公的研究報告書）				
1. 奈良県立医科大学新キャンパスおよび付属病院周辺における再生可能エネルギー面的利用構想	共　著	平成28年2月	一般社団法人新エネルギー導入促進協議会 地産地消型再生可能エネルギー面的利用等推進事業　成果報告書, pp. 133, (2016)	奈良県庁、富士通総研、関西電力との共同で、奈良県の都市計画の一環として、奈良県橿原市にある奈良県立医科大学の新キャンパスおよび付属病院周辺における再生可能エネルギーの面的利用構想を検討した。その結果、太陽光発電、太陽熱利用、下水熱が利用できることが明らかとなった。
2. 県と市町村の連携によるエネルギー版「奈良モデル」構想事業	共　著	平成28年2月	一般社団法人新エネルギー導入促進協議会 地産地消型再生可能エネルギー面的利用等推進事業　成果報告書, pp.125, (2016)	奈良県庁、大阪ガスとの共同で、奈良県の都市計画の一環として、奈良県庁周辺の世界遺産地域における再生可能エネルギーの導入も含めたエネルギーインフラのあり方および県下市町村のエネルギーマネジメントとの連携の可能性を検討した。その結果、廃棄物焼却炉を新設する計画に伴い、廃棄物発電が可能であり、また発電した電力を売電することが可能であり、余った熱を近隣の農家に供給することも可能であることが明らかとなった。

3. 三郷町　まちづくり総合戦略 （以上、公的報告書）	共　著	平成28年3月	三郷町　まちづくり総合戦略策定委員会　報告書, pp. 50, (2016)	三郷町の産業振興（施設見学による新たな観光資源）や雇用創出（自治体PPS）としての観点から、再生可能エネルギーによる「エネルギーの地産地消」を目的とし検討を行った。その結果、町独自の再生可能エネルギーの導入についての検討を行うこととし、その導入可能性調査を計画することを提案し、現在その計画が進行中である。

（公的招待講演会・テレビ報道・新聞報道・セミナー発表等）				
1. 「電気料金値上げを前に」	単	平成 25 年 4 月	NHK 奈良放送局, ならナビ（18:30-19:00）,NHK 奈良放送局, 奈良市, (4 月 22 日)	関西電力管内において大幅な電気料金値上げが実施される予定である。その料金値上げ対策として、「電気料金値上げを前に」と題して、月額の電気料金の実際の値上げ巾やその対策としての節電方法を解説した。
2. エクセルギーとは何か？ - エネルギーのものさしと夏の節電 –	単	平成 25 年 6 月	「平成25年度 王子町り～べるカレッジ」第IIシリーズ「自分を取り巻く環境について学ぶ」第 1 回, 王寺町地域交流センター, 王寺町, （6 月 29 日）	近年、関西圏において特に夏期の電力不足が続いているため、エネルギーの価値として用いられているエクセルギーと言う指標を解説し、エネルギーの有効利用という観点から、効果的な節電方法の実例を挙げて解説した。
3. 「家庭でできる夏の節電」	単	平成 25 年 7 月	奈良県庁, 奈良くらし手帳, 奈良県民だより 7 月号,奈良県, (7 月 1 日発行)	関西電力管内において、電力不足および大幅な電気料金値上げが実施された。それらの対策として、「家庭でできる夏の節電」と題して、家庭の電化製品で電力消費量の大きい物を紹介し、それらの電化製品に対して、簡単で効果の大きい節電策を解説した。
4. 「奈良で育む 新しいエネルギーのかたち」	単	平成 25 年 7 月	奈良テレビ放送局, 奈良！そこが知りたい（21:00-21:30）, 奈良テレビ放送局, 奈良市, (7 月 20 日)	我が国のエネルギー政策として、原発停止以降、電力不足が大きな問題となっており、その対策としてのエネルギー政策について解説するとともに奈良県独自のエネルギー政策の策定とその実例を紹介した。
5. 公共施設のエネルギーマネジメント - 省エネルギー対策およびその事例 -	単	平成 26 年 2 月	橿原市役所主催, 平成 25 年度研修会, 橿原市役所　北館別館大会議室, 橿原市, （2 月 12 日）	公共施設のエネルギーマネジメントに関して、特に近年災害時等における公共施設の役割が増大しているため、電力に大きく依存しないような公共施設の省エネルギー化やマネジメントが急務とされており、その対策として、効果的な省エネルギーの方法および再生可能エネルギー導入の事例を解説した。
6. 「夏季の省エネルギー対策について」 - 事業所における節電対策 -	単	平成 27 年 7 月	奈良県中小企業団体中央会 , 春日ホテル, 奈良市, （7 月 29 日）	様々な事業所の省エネルギーに関して、直近の温室効果ガス排出量の増加にともない、我が国の政策として今後の温室効果ガス排出量削減の対策として、我が国の電源構成の目標が定められ、その目標に対して様々な事業所で特に夏季の省エネルギーとして節電を行うことが早急な課題とされ、その取り組みとして、効果的な節電の方法に関して解説した。

7. 「奈良市の事業系廃棄物について」	単	平成 28 年 3 月	奈良市役所主催, 平成 27 年度事業者 3R 講習会 , 奈良市役所　中央棟 6 階, 奈良市, （3 月 16 日）	奈良市の事業系一般廃棄物に関して、奈良市は大きな削減目標を設定し推進しているが、削減が困難な状況にある廃棄物もある。多くの事業者に対して、奈良市の削減推進政策を認識してもらうとともに削減困難な廃棄物に対する削減方法に関して、その対策として、奈良市の施策の推進策の内容および具体的な削減方法について解説した。
8. 市民のための省エネ･節電セミナー「電力自由化制度について」- その制度の概要 -	単	平成 28 年 6 月	市民節電所ネットワーク主催,奈良市ボランティアインフォメーションセンター会議室 1-1, 奈良市, （6 月 11 日）	太陽光発電等を導入し、市民発電所を営んでいる組織や個人の方に対して、本年 4 月からエネルギー自由化として電力自由化制度が始まり、その具体的な制度について解説した。特に新規電力ビジネスに参入した新電力会社の状況や契約時の注意事項等について、Q&A を交えて解説した。
9. 「夏の省エネ・節電対策」	単	平成 28 年 7 月	奈良県中小企業団体中央会 , 春日ホテル, 奈良市, （7 月 8 日）	本年 4 月からエネルギー自由化の第一弾として、電力自由化を迎え、事業所（企業）の夏季における省エネルギーに関して、特に今まで見落とされていたような節電方法について、その省エネルギーの方法や具体的な事例、また、新電力を含む電力会社の効果的な選択方法を解説した。
10. バイオマスの有効利用方法について	単	平成28年8月	奈良県 再生可能エネルギー　アドバイザー事業, 宇陀市,（8月30日）	奈良県中部の酪農地域の酪農家に対して、現在は主として廃棄されている家畜糞尿を有効利用するために、堆肥化処理、バイオマス燃料処理およびその燃料による発電の可能性について、各地の実例を解説するとともに、各処理の採算性について解説した。
11. 「電力・ガス自由化制度の概要」- エネルギーシステムの一体改革 –	単	平成29年2月	奈良県環境県民フィーラム, 奈良県文化会館　第 1 会議室, 奈良市, （2月23日）	本年4月よりエネルギー自由化として昨年の電力自由化に続きガス自由化制度が始まる、その具体的な制度について電力自由化制度との比較を解説した。特にガス自由化に新規に参入するガス会社の状況や契約（電力とガスのセット等の考え方）のメリット・デメリットや注意事項等について解説した。
12. 「まちづくりとSDGs」	単	令和元年5月	NPO法人　奈良環境カウンセラー協会主催, 公開講座, なら環境市民大学, 舟橋フロムワン, 奈良市, （5月26日）	我が国では地方創成と言う取り組みが推進されているが、地方都市・市町村レベルでは、まちづくりに対するその具体的な取り組みの状況が明確ではない。他方、国連では、現在SDGsが提唱され、我が国でもその独自の取り組みが推進されている。本公演では、環境問題やエネルギー問題の観点から、SDGsを概説し、また我が国のSDGsの政策を基に、まちづくりと言う観点から解説した。
13. 「中小企業向け省エネ対策」- 事業所における省エネ・節電 -	単	令和4年8月	奈良県庁主催, 令和4年度, 奈良県庁省エネセミナー, WEB開催	世界および我が国において、地球温暖化防止に向けた対策が急務となっている。また、我が国の化石燃料の調達や電力供給の問題が喫緊の課題であり、特に中小企業事業者に対する省エネや節電を推進するために、様々な具体的事例について解説した。

14. 「地球温暖化とCOOL CHOICE 」-「脱炭素につながる 新しい豊かな暮らしを創る国民運動」- （以上、公的招待講演会・テレビ報道・新聞報道・セミナー発表等）	単	令和5年2月	王子町主催，令和4年度，地球温暖化対策地方公共団体実行計画策定事業，王子町役場	我が国の地方行政において、地球温暖化防止実行計画の策定が義務化され、その策定が急務となっている。王寺町でもその計画を策定する必要があり、また、その地方行政に応じた計画を策定するために、王寺町に応じた地球温温暖化防止策やそれらの効果について解説した。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　5 年　 3 月　31 日

氏名　西薗　貞子

研究分野	研究内容のキーワード
看護教育	IBL（Inquiry Based Learning）/ 課題発見課題解決 / 看護アセスメント能力 / 教育プログラム/人材育成/トランジション

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		学生の主体的な学習参加を促し、問題発見問題解決の探究的学習方法であるＩＢＬを取り入れている。より具体的な事例の工夫やロールプレイとの連動などの設計で学習者がアクティブに意欲的に学習を進め、思考力強化に繋ぐ教育に工夫を重ねている。
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)　日本精神科看護技術協会　臨床指導者講習研修	2012.8	臨床指導者研修における教育講演
2)　日本移植再生医療看護研究学会第8回学術集会	2012.10	研究発表座長
3)　関西教育学会第 22 回学術集会	2012.11	一般演題座長
4)　京都府看護協会　京都市看護職能力向上研修	2012.10	看護教員を対象とした研修会講師
5)　京都コンソーシアム主催第 18 回FDフォーラム	2013.2	シンポジスト講演「学生間の協同的学習を促す授業方法」
6)　奈良県立医科大学　FD 研修会	2014.3	講演「IBL で看護アセスメント能力をはぐくむ」
7)　京都府後援保育士免許取得特例講座	2014.8	特例講座講師
8)　兵庫県立尼崎総合医療センター	2016.9	人材育成支援
9)　第 10 回日本医療教授システム学会総会「看護領域の臨床推論」	2018.3	シンポジスト「看護に必要な推論―論証能力と IBL 学習法の活用」
10)　週刊医学界新聞　対談掲載	2019.4	「心からアクティブになるアクティブ・ラーニング」をテーマに、溝上慎一氏と対談
11)　メディカ出版「ナーシングビジネス12 月号対談掲載	2020.12	「これからの次世代管理者育成に求められること」をテーマに、河野秀一氏、箕浦洋子氏と鼎談
12)　～ 溝上慎一 と大学教育について考える ～「教学マネジメント」実践事例セミナー第 4 回	2022.12	「教育目標の明確化、アセスメント開発から能力育成まで～看護師に求められる能力と評価指標開発、教育モデルの確立を目指して～」をテーマに発表、対談
5　その他		
学会・学術団体の活動への貢献		
日本移植・再生医療看護研究学会　第８回学術集会	2011～2013	（実行準備事務局）
日本移植・再生医療看護研究学会　評議員	2012～	
日本看護科学学会第 33 回学術集会　企画委員	2012～2014	（実行事務局）
日本看護科学学会第 32 回学術集会　実行委員	2013～2014	
日本移植・再生医療看護研究学会　第 10 回学術集会企画委員	2013～2014	
日本移植・再生医療看護研究学会　査読委員	2016～	
関西教育学会　理事	2021～	
日本移植・再生医療看護研究学会　評議	2022～	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）「魅力ある大学院教育」文部科学省採択教育プログラム「生活環境の課題発見・解決型女性研究者養成」教育プログラム」	2007 年	奈良女子大学国際交流センター共催「国際的 FD 視察・交流・研修」メンバーとして参加。スタンフォード大学・ワシントン大学・UCLA などを視察し、実践的なアメリカの FD 理論を考え、研修成果を冊子にまとめた。
2）ベルリン・ドイツ心臓病センターでの臓器移植医療に関する研修	2008 年	移植待機患者の状況やレシピエントおよびドナーコーディネートの実際、医療と社会保障制度、看護教育制度などの教育研修を受講。
3）米国における看護研修	2010 年	・メイヨクリニックにて臨床現任教育に関する視察研修 ・米国看護学部の教育ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑに関する視察研修
4　その他 補助金（過去 10 年以内を記載）		
1）　文部科学省基盤研究（基盤 B）（代表者）	2022.4 ～	「看護人材の円滑なトランジションを促す大学教育～新人教育の抜本的な改革と体系化」
2）　文部科学省基盤研究（基盤 C）（分担者）	2021.4 ～2024	「エンドオブライフケアに携わる看護師の 暗黙知に基づく臨死期の予測」
3）　文部科学省基盤研究（基盤 C）（分担者）	2018.4 ～2023	「看護実践能力の評価指標を基盤とした看護学実習カリキュラムの開発」
4）　文部科学省基盤研究（基盤 C）（分担者）	2018.4 ～2023	「学生の思考力強化を図る小児看護学実習の課題構造の明確化と教育方略の開発」
5）　文部科学省基盤研究（基盤 C）（分担者）	2017.4 ～2022	「看護リテラシー教育としての看護過程を活性化する IBL 教育プログラム開発」
6）　文部科学省基盤研究（基盤 B）（代表者）	2016.4 ～2019	「看護基盤能力の評価指標開発と IBL の進化によるプロフェッショナル教育モデルの確立」
7）　文部科学省基盤研究（基盤 C）（分担者）	2015.4 ～2018	「看護領域における臨床推論教育の概念整理と改善された教育プログラムの開発」
8）　文部科学省基盤研究（基盤 C）（代表者）	2013.4 ～2016	「IBL 方 式を用いた看護アセスメント能力向上教育プログラムの開発」。
9）　文部科学省基盤研究(挑戦的萌芽研究)(分担者)	2012.4 ～2015	「生体肝臓移植を受けたレシピエントの退院後の自己管理支援プログラムソフトの開発」
10）医学教育開発研究センター特別経費研究 （2,000 千円）（分担者）	2011.4 ～2014	「医科－歯科連携口腔衛生管理のための多職種連携教育者養成プログラムの開発」

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1.アクティブ・ラーニング IBL で進める成人看護学演習法	共著	2010.12	金芳堂	IBL(Inquiry-based Learning) を用いた講義演習におけるアクティブ・ラーニングの進め方を詳しく解説した。全 189 頁(担当:第 2. 第 3. 第 4 章), 赤澤千春, 西薗貞子
2. リンパ浮腫ケアのテクニック .	共著	2011.	金方堂	リンパドレナージや圧迫療法の手法を200点以上のイラストを用いてわかりやすく解説した。担当部分:5 章 スキンケア、6 章 日常生活の注意点)赤澤千春、西薗貞子、山本昌恵、福田里砂
（学術論文）				
1. 看護大学生の自己学習力獲得状況の検討	単著	2013.12	人間文化研究科年報	第 28 巻 107-120

2. 看護大学生における自己学習力構成因子の変化の検討	単著	2013.1	大阪医科大学看護研究雑誌	第 3 巻 90-99
3. Investigation of an actual daily lifestyle leading to continuous self-management after living-donor liver transplantation: More than 5 years living with living donor liver transplantation and emotions of recipients	共著	2013.6	The Japan Journal of Nursing Science	Vol.10(1)79-88 Akazawa C, Nishizono T, Yamamoto M, Teraguchi S
4. 肝移植レシピエントの退院後の生活を支えるサポートの実態－1 事例の分析を通して－	共著	2014.3	大阪医科大学看護研究雑誌	第 4 巻 50-59 谷水名美, 西薗貞子, 赤澤千春, 林 優子
5. 看護基礎教育における臨床判断力育成をめざした周手術期看護のシナリオ型シミュレーション演習の効果の検討	共著	2015.2	大阪医科大学看護研究雑誌	第 5 巻 76-86 山内栄子, 西薗貞子, 林優子
6. 小児看護学実習における看護実践と理論を結びつけるための指導方法の検討	共著	2016.7	日本看護学教育学会誌 Journal of Japan Academy of Nursing Education	26(1), 79-88 増尾美帆, 泊祐子, 竹村淳子, 西薗貞子, 岩間恵
7. Characteristics of Nursing Practical Fundamental Capabilities (Literacy and Competency) By Fundamental Education And Acquired Qualification of Nurses	単著	2018.3	INTED2018 proceedings paper	6576-6582
8. 超高齢社会の医療を担う看護師・看護学生の「看護実践力」に関する検討	共著	2018.4	関西看護医療大学紀要	10(1) 58-61 江川隆子, 赤澤千春, 西薗貞子, 他 5 名
9. IBL(Inquiry Based Learning)が高める思考・論証能力の多面的評価	共著	2018.4	奈良県立医科大学医学部看護学科紀要	Vol.14, 75-82 西薗貞子, 青山美智代
10. 看護アセスメント教育における Inquiry Based Learning の学習効果	共著	2018.4	奈良県立医科大学医学部看護学科紀要	Vol.14, 67-74 青山美智代, 西薗貞子
11. 看護過程展開はどう展開されているか(1) ―看護大学シラバス分析―	共著	2019.6	奈良県立医科大学医学部看護学科紀要	Vol.15, 青山美智代, 勝井伸子, 西薗貞子
12. 小児看護学実習において「実践と理論の統合」を必要とする学習課題の構造	共著	2020.8	日本看護科学会誌	40 巻 474-483 泊祐子, 大西文子, ,竹村淳子,西薗貞子, 川島美保
13. 看護過程の授業はどう展開されているか(2)：看護大学シラバス分析	共著	2021.7	梅花女子大学看護保健学部紀要	Vol.11 1-10 青山美智代, 勝井伸子, 西薗貞子
14. 看護の高等教育化への歩みとアクティブ・ラーニング展開の要請	共著	2021.7	奈良県立医科大学看護研究ジャーナル	第 17 巻 48-57 西薗貞子, 勝井伸子

15. 看護教育における知識の構築―IBL の基盤となる考え方	共著	2021.7	奈良県立医科大学看護研究ジャーナル	第 17 巻 38-47 勝井伸子, 西薗貞子
16. アメリカ看護由来の用語のわかりにくさの解明 ：看護師インタビュー調査	共著	2023.3	奈良県立医科大学看護研究ジャーナル	第 18 巻 61-69 勝井伸子、青山美智代、西薗貞子
17. 学生が主体的にデザインする実習 ： 統合実習の試み	共著	2022.10	奈良県立医科大学看護研究ジャーナル	18 巻 43-51 西薗貞子,勝井伸子,箕浦洋子,橋口智子
18. IBL アセスメント教育プログラムによる課題発見力開発	共著	2022.10	奈良県立医科大学看護研究ジャーナル	18 巻 70-77 西薗貞子,勝井伸子
19. 言語化と委嘱―看護部長-臨床看護師に求められる能力の構成要素-	共著	2023.3	奈良学園大学紀要	第 15 巻, 145-154 西薗貞子, 箕浦洋子, 勝井伸子
（学会発表）				
1. 看護基盤能力の評価指標開発に向けて～看護管理者が育成したい看護師像とは～	共著	2017.8	第 21 回日本看護管理学会学術集会（横浜）	交流集会(インフォメーションエクスチェンジ 西薗貞子,箕浦洋子,江川隆子,赤澤千春
2. 中堅看護師（ラダーⅢ）の PROG(社会人基礎力測定尺度）評価から 継続教育の課題を考える	共著	2018.8	第 22 回日本看護管理学会学術集会（神戸）	交流集会(インフォメーションエクスチェンジ 西薗貞子,箕浦洋子,江川隆子,赤澤千春
3. 大学における基盤教育と卒後継続教育の連携促進を目指した能力評価の共有 ～汎用性の高い「社会人基礎力評価」調査結果からの意見交換～	共著	2018.8	第 28 回日本看護学教育学会学術集会（横浜）	交流集会 西薗貞子, 江川隆子, 箕浦洋子, 赤澤千春, 日隈ふみ子, 青山美智代
4. Competency characteristics acquired by mid-level nurses	単著	2019.3	The ACEID2019 Conference, Tokyo	
5. 看護学実習後における社会人基礎力（看護実践能力）の特徴	共著	2019.7	第 51 回日本医学教育学会大会（京都）	口演発表 西薗貞子, 赤澤千春, 江川隆子
6. 看護学実習前後での看護実践能力テストのコンピテンシー数値が大きく変化した学生のインタビュー調査 ～対課題基礎力～	共著	2019.8	第 45 回日本看護研究学会学術集会（大阪）	ポスター発表 赤澤千春、江川隆子、西薗貞子、箕浦洋子
7. 看護学実習前後に変化する社会人基礎力（看護実践能力）の特徴	共著	2019.8	第 45 回日本看護研究学会学術集会（大阪）	ポスター発表 西薗貞子、江川隆子、赤澤千春、箕浦洋子
8. 主体的な学びの好循環を生み出す教育の仕掛け―基盤教育と卒後教育における IBL 教育プログラムでの展開―	共著	2019.8	第 45 回日本看護研究学会学術集会（大阪）	交流集会 西薗貞子、箕浦洋子、吉見絵美子
9. Characteristics of the abilities of nurses and general members of society in the evaluation of basic skills in society.	共著	2020.3	The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science	Teiko Nishizono, Takako Egawa 、Yoko Minoura

10. Capabilities required of nurses as viewed by nurse managers	共著	2020.3	The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science	Teiko Nishizono, Yoko Minoura
11. 看護学実習前後で看護実践能力のコンピテンシー数値が大きく変化した学生の経験の聞き取り調査 ～対人基礎力に着目して～	共著	2020.8	第 46 回日本看護研究学会学術集会（横浜）	赤澤千春，西薗貞子，青山美智代，江川隆子，箕浦洋子
12. 看護学実習によって獲得する対自己基礎力 ～ PROG テストの前後比較からコンピテンシーが変化した学生の経験分析～	共著	2020.8	第 46 回日本看護研究学会学術集会（横浜）	西薗貞子，江川隆子，赤澤千春，青山美智代，箕浦洋子
13. 小児看護学実習において教員が捉えた学習課題の構造	共著	2020.8	日本看護学教育学学会第 30 回学術集会	交流集会 泊祐子，岡田摩理，大西文子，西薗貞子，他
14. Fundamental Competencies for Professional Nurses：Qualitative Analysis of Interviews with Nursing Directors	単著	2020.11	ICERI2020 13th annual International Conference of Education, Research and Innovation	
15. 看護職固有のコンピテンシー（成果を生み出すための能力）テストの開発 評価テストの活用による組織マネジメント	共著	2021.8	看護管理学会 第 25 回日本看護管理学会学術集会	交流集会(インフォメーションエクスチェンジ 西薗貞子，箕浦洋子，松村直樹
16. IBL（Inquiry-Based Learning）教育プログラムの導入による課題発見力の育成 看護師の基礎力測定指標（PROG）による評価	共著	2021.8	看護管理学会 第 25 回日本看護管理学会学術集会	交流集会(インフォメーションエクスチェンジ 西薗貞子，箕浦洋子,三浦智恵
17. 看護師の生涯続く能力育成教育戦略 IBL（Inquiry-Based Learning）活用による経年別能力育成	共著	2022.8	看護管理学会 第 26 回日本看護管理学会学術集会	交流集会(インフォメーションエクスチェンジ 西薗貞子，箕浦洋子
18. 看護学実習で獲得する看護実践能力と教育設計の検討 ～実習前後の PROG の縦横断的調査による獲得能力の分析から～	共著	2022.8	第 48 回日本看護研究学会学術集会（愛媛）	西薗貞子，江川隆子，赤澤千春，箕浦洋子
19. アメリカ看護由来の用語の理解と使用をめぐる問題	共著	2022.12	第 42 回 日本看護科学学会学術集会 交流集会	西薗貞子，勝井伸子、青山美智代

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和 ５ 年 ３ 月 ３１ 日

氏名　服部　律子

研究分野	研究内容のキーワード
母性看護学・助産学	親準備性、青年期の健康支援、災害時の母子支援

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
(1) 産後の母子の看護過程学習におけるアクティブラーニングの導入	2013 年 4 月～ 2016 年 3 月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」（３年次配当、半期、必修科目、1 単位）において、産後の母子の看護過程の授業でアクティブラーニングを導入している。臨床場面で経験する状況に沿って事例を提示し、看護過程の段階ごとにグループワークと発表、解説等を相互に繰り返しながら展開している。このことにより、学生たちからは実践的思考と看護過程の展開の流れが理解できるようになったと評価が得られた。
(2)　周産期の看護過程学習におけるロールプレイ形式での演習の導入	2014 年 4 月～ 2015 年 7 月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」（３年次配当、半期、必修科目、1 単位）において、実践的な技術の習得を目的に、ロールプレイ形式での実践的な技術の演習を導入。 設定に基づいて教員が妊婦・褥婦を演じ、学生は看護師として臨床場面に即した観察を行う。このことにより、学生はコミュニケーション技術とフィジカルアセスメント技術を統合させ、看護行為としての観察技術が学習できるようになったと評価を得ている。
	2021 年 7 月 2022 年 7 月	奈良学園大学保健医療学部看護学科「母性看護援助論演習」（３年次配当、半期、必修科目、１単位）において、実践的な技術の習得と周産期の女性の心身の特性の理解を深めることを目的に、学生同士でロールプレイ形式での総合演習を導入。 学生は事前に示された褥婦の看護診断となる褥婦を演じる褥婦役と、看護師役にわかれ、看護師役はコミュニケーション技術とフィジカルアセスメント技術を統合させながら場面に即した観察を行う。役割を交代しながら演習することや相互フィードバックなどから、看護師としての態度も含めた褥婦の観察などの学びにつながっている。
(3)　クリッカーの活用	2014 年 4 月～ 2016 年 2 月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目、２単位）において、授業内でクリッカーを活用し、学生の意見をきいたり、授業への導入の小テストを行った。
(4)　母性看護技術演習における反転授業の導入	2015 年 4 月～ 2015 年 7 月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」（３年次配当、半期、必修科目、1 単位）において、母性看護技術部分を反転授業で実施した。事前にＶＴＲで事前学習した技術を、授業では“声掛け”やその時に観察すべきこと、留意点などと統合して「看護行為」として組み立てることができ、学生は、実習場面でも一連の行為としてスムーズに実施できるようになった。
(5)　観察に基づく理論の学習の試み	2014 年 9 月～ 2022 年 7 月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目、２単位）において、母性看護学の基本となる理論の理解を促すため、日常生活場面で母子の観察結果をグループで理論に基づいて分析しながら理論の理解と看護場面への理論の活用方法の理解を促す取り組みを行った。実際に自分が観察してきた具体的な場面と理論が結びつくことにより理解が深まっていた。

(6)　ジグソー法やペアワーク、グループワークの導入	2017 年 9 月～2023 年 1 月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目、２単位）ならびに「母性看護援助論」(2 年次、半期、必修科目、1 単位)の担当の各回の授業において、学生たちの能動的な学習を促し、学習内容の理解を深めたり、多様な考えに触れ多角的な理解を促すことを目的として、ジグソー法やシンク・ペア・シェア、ペアワークやグループワーク等アクティブラーニングの手法を取り入れた。
(7)　課題評価へのルーブリックの導入	2017 年 9 月～2023 年 3 月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目、２単位）の課題評価にルーブリックを導入した。作成したルーブリックを課題提示時から学生と共有することにより、学生自身が取り組むべき課題を具体的に理解すると共に、求められている水準も理解できたことで低い評価のレポートが減少した。 「母性看護学実習」（３年次配当、半期、必修科目、２単位）の評価にルーブリックを導入した。複数の教員で評価するため、ルーブリックでより評価基準を具体化することで教員間での評価の違いが少なくなり、調整が容易になった。
(8)配布シラバスの活用	2018 年 9 月～2022 年 ７月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目、２単位）で 15 回の授業計画、各授業の事前・事後課題、評価方法、レポート課題の詳細と採点基準（ルーブリック）、受講生へのメッセージなどを記載した配布用シラバスを導入した。学生たちからは全体像を示されたことで計画的に準備ができたなどの反応があり、主体的に取り組めるようになっていた。
２　作成した教科書，教材 (1)　母性看護技術のＶＴＲ	2015 年 4 月～2015 年 7 月	反転授業用に、授業内容に沿った技術のＶＴＲを作成した。要点はキャプチャーを入れるなど、授業と連動する内容とした。学生からは「眠くならない」「実習前の復習にも使え思い出しやすい」などの評価を得た。
(2)　看護系教員研修用動画	2022 年 3 月	看護系教員向けの研修動画「講義の学習指導案作成」「リアリティのある教材を活用する」「実技テストを設計する」「実技テストを評価する」「ルーブリックを作成する」「多様な学生に配慮する」(中井俊樹企画・監修）を作成し、医学書院 NEO<Nursing Education Online>で公開した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)　学生による授業評価	2013 年 7 月～2015 年 7 月	平成 25 年度に椙山女学園大学で実施された授業アンケートでは、看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性)」ABCD クラス､EFGH クラスにおいて､総合的にみて満足であった学生は､「その通りである」が 86.5～77.1%「どちらかと言えばそのとおりである」20.8～13.5%という結果であった。授業の理解のしやすさは「その通り」が 73.1～77.1%、「どちらかといえばその通り」が 22.9～26.9%となっていた。平成 27 年の授業評価でもほぼ同様の結果で、満足度の高い授業と評価された。
	2016 年 7 月～2018 年 7 月	椙山女学園大学「ピアサポート理論と実践」(非常勤）の授業アンケートの結果「総合的にみてこの科目は充実していた」で､「その通りである」63.2～54.5%「どちらかといえばその通りである」40.9～26.3%であった。
	2020 年 7 月	奈良学園大学保健医療学部看護学科「母性看護学概論」の授業評価アンケートで、各項目の平均点が５点満点中 4.41～4.79､「総合的にみて満足のいくものだった」で 4.58 であった。
	2021 年 7 月	奈良学園大学授業評価アンケートにおいて、保健医療学部看護学科「母性看護学概論」では各項目の平均が 5 点満点中 4.27～4.69､「総合的にみて満足のいくものだった」では 4.57 であった。「母性看護援助論演習」では各項目の平均が 4.18～4.59､「総合的にみて満足のいくものだった」では各クラス 4.26、4.35 と全体平均の 4.07 を上回る結果となっていた。

	2022 年 7 月	奈良学園大学授業評価アンケートにおいて、保健医療学部看護学科「母性看護学概論」では「総合的にみて満足のいくものだった」では 5 点満点中 3.95(全体平均 3.93)で概ね平均的に満足しているという結果であった。この年から授業時間外学習に関する項目が加えられた。全体では約 14%が「していない」と回答していたが、この科目では、授業時間外学習をしていない学生はなかった。
(2)　授業の教員の相互評価	2015 年 12 月	椙山女学園大学での教員の授業相互評価において授業デザインの明確さとグループワークのファシリテートで学生の主体的取り組みと学びが整理されていると評価された。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 特記すべき事項なし		
5　その他 (1)　修士論文指導	2018 年 4 月～2023 年 3 月	奈良学園大学大学院看護学研究科修士課程において、主指導教員として修士論文の指導を行った。 [修士論文] 「肯定的な出産体験を構成する要因の解明」(2020 年 3 月修了) 「妊産婦のエンパワメントに影響を及ぼす要因」(2023 年 3 月修了)

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 (1)　看護師免許	昭和 63 年 6 月 15 日	登録番号第 642045 号
(2)　助産師免許	平成元年 4 月 28 日	登録番号第 91302 号
2　特許等 該当なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)　思春期の健康教育講師等	2013 年 4 月～2023 年 1 月	ノートルダム女学院中学校 (2003 年から 20 年間)、奈良県葛城市立北新庄小学校などにおいて、男女のからだのしくみや妊娠・出産のしくみ、性行動と性感染症など、性と生殖に関する内容を中心に、思春期の健康教育の講師を務めている。
(2)思春期ピアカウンセラーの養成と活動	2013 年 7 月～2017 年 2 月	2010 年度より、栃木県における思春期ピアカウンセラー養成に携わっている。2013 年度からは椙山女学園大学において、主になって思春期ピアカウンセラー養成と活動支援を行った。
(3)病院での看護研究指導	2013 年 4 月～2020 年 8 月	愛知県厚生連海南病院（2000 年～2015 年まで）及び稲沢厚生病院(2000 年～2020 年)において、院内看護研修の一環として行われている看護研究の研修会（クリニカルラダー・レベル 2 並びに 3）の講師を務めクリニカルラダー看護研究指導を行うと共に、院内で実施されている看護研究の指導を行った。
(4)女性やセクシュアリティへの健康支援活動	平成 24 年 4 月～ 2023 年 3 月	2012 年度から 2017 年度まで週末に愛知県助産師会女性の健康なんでも相談、思春期電話相談の相談員としての活動を行った。2016 年 1 月からは SANE（性暴力被害者支援看護師）の認定を取得し、名古屋第二赤十字病院性暴力救援センターで被害者支援の臨床活動に携わっている。
4　その他 (1)県看護協会における理事・委員会活動	2013 年 4 月～2018 年 6 月	2012 年度から愛知県看護協会において教育委員、2014 年度からは教育委員長、2016 年 6 月から教育委員長・理事として、主に県内の看護職を対象とした教育計画の立案、研修会の企画・運営を行った。 理事としては県看護協会の運営に参画し、主に、クリニカルラダーに沿った卒後教育の整備に携わった。

(2) 奈良県看護学教育協議会（仮称）設立準備	2019 年 4 月～2021 年 3 月	2018 年 4 月から会長を務める奈良県看護師等学校教務主任協議会(大学、短期大学、専門学校の全ての学校種が加盟)において看護教育機関と行政機関や看護関連団体が連携して看護教育を行うための「奈良県看護学教育協議会（仮称)」の設立準備に携わった。
(3) 奈良県看護学教育協議会理事・委員会活動	2021 年 4 月～2023 年 3 月	奈良県看護学教育協議会理事・副会長として会の運営に携わると共に、研修委員会委員として看護学教育に携わる看護職のための研修会の企画と運営に携わると共に、看護教員を対象とした研究指導の講師を務めている。
(4) 奈良県臨地実習指導者講習会 講師	2021 年 8 月～2022 年 8 月	「教育評価」(1 単位,15 時間)の講師を務めた。
(5)病院での研修会　講師	2022 年 6 月	奈良県大和高田市立病院において、師長、副師長及び主任を対象とした、現任教育における職員の評価と評価に基づく支援に関する研修会で講師を務めた。
(6)性暴力被害者支援看護師養成講座 講師	2022 年 12 月	日本福祉大学社会福祉総合研修センター主催の「性暴力被害者支援看護師(SANE)養成プログラム 2023」において、「若者の生と性を考える」の講師を務めた。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 主体的な生き方を支えるピア・カウンセリング実践マニュアル改訂新版	共著	2015 年 4 月	小学館	「ピア活動の有効性」の章を担当し、先行研究と筆者らの研究結果を踏まえて、中高生とピアカウンセラー自身へのピア活動の有効性について解説した。 B5 版全 143 頁 本人担当部分：総頁数 143 頁中 19 頁を担当(4-1,4-2) 高村寿子編集,高村寿子,江角伸吾,堀内成子,前田ひとみ,渡辺純一,安達久美子,沼尾歩,小川正美,岩間薫,遠藤明希,高田昌代,川崎由紀子,井戸修一,堀井千華子,渡辺恵美子,船橋悠希,渡邉至,篠澤倪子,佐々木明子,池田悦子,服部律子
2.セクシュアリティがわかる本	共著	2015 年 7 月	一般社団法人日本家族計画協会	避妊法、性感染症、ネゴシエーション、トピックス(月経痛、マスターベーション、性的犯罪、レイプ、リベンジポルノ、カレシ・カノジョより友達？)を担当し、解説した。 B5 版全 57 頁 本人担当部分:総頁数 57 頁中 26 頁を担当(５章～７章) 高村寿子編著、安達久美子、服部律子
3.看護教育実践シリーズ３　授業方法の基礎	共著	2017 年 7 月	医学書院	看護学教育において、１回の授業をどう組み立てるかやアクティブラーニングを導入した授業の方法などについて解説した本である。第 11 章「授業時間外の学習を促す」を共著し、授業時間外の学習の重要性や課題の出し方などについて解説した。 A5 版全 184 頁 本人担当部分：総頁数 143 頁中 12 頁（11 章）を共著者と共に担当 中井俊樹・小林忠資編、中井俊樹、小林忠資、清水栄子、内藤佐知子、根岸千悠、根本淳子、服部律子、森千鶴

4.看護教育実践シリーズ ２授業設計と教育評価	共著	2018 年 3 月	医学書院	看護教育における授業設計から、評価、授業の改善方法までを解説した本である。全体に編者として関わり、10 章「評価基準を可視化する」を担当して執筆した。担当部分では、評価基準を可視化し学生と共有することの必要性やルーブリックなどの評価指標の作成について解説した。A5 版全 184 頁本人担当部分：編集・総ページ数 184 頁中 13 頁（10 章）中井俊樹・服部律子編、中井俊樹、服部律子、岡田聡志、加地真弥、小林忠資、嶋﨑和代、高植幸子、中島英博、肥田武
（学術論文） 1.小規模病院、有床診療所に勤務する助産師の学習ニーズ （査読付き論文	共著	2013 年 1 月	愛知母性衛生学会誌第 30 号	わが国の出産の約半数を担う小規模病院および有床診療所で勤務する助産師の学習ニーズの特徴を明らかにするため、愛知県内の分娩を取り扱っている小規模病院および有床診療所で勤務する助産師を対象に自己記入式質問紙調査を実施し、記述内容を質的に分析した。その結果、これらの施設で勤務する助産師の約７割が学習希望を有しており、助産実践の中で困ったり不安を感じた経験のある助産師のほうがその割合が有意に高かった。学習ニーズはステップアップへの欲求から生じており、スキルアップと知識のブラッシュアップのニーズがあることが明らかとなった。 論文掲載：pp72～77 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって行った。 共同執筆者：服部律子，石川真奈美，若山正代，鈴木明日香
2.分娩を取り扱う小規模病院、有床診療所に勤務する看護師の学習ニーズ （査読付き論文）	共著	2014 年 1 月	愛知母性衛生学会誌第 31 号	分娩を取り扱う小規模病院や有床診療所では助産師よりも看護師の勤務者数のほうが多く、看護師が周産期の様々なケアに携わっている現状を踏まえ、これらの施設に勤務する看護師を対象に自己記入式質問紙調査を実施し、記述内容を質的に分析した。その結果、調査対象者の約半数が学習希望を有しており、仕事の中で困難感や不安感を抱いた経験のある者のほうが希望する割合が多かった。これは、「仕事上不足している知識の補充」や、「知識や技術の発展」「自己実現への欲求」からくるものであることが明らかとなった。 論文掲載：pp52～60 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって行った。 共同執筆者：服部律子，中嶋文子,奥川ゆかり，水信真美子，石川真奈美，鈴木明日香，若山正代
3.青年期女子のライフデザインと親準備性	共著	2015 年 3 月	椙山女学園大学看護学研究 7 巻	女性を対象としたライフデザイン教育のあり方を検討するための基礎資料を得ることを目的に、Ａ大学１年生 510 人を対象に青年期女子のライフデザインや親準備性について明らかにした。結果、約６割の学生は将来の職業を決めて１年次から準備をしており、約８割の者が将来結婚を、約７割の者が出産を考えており、その予定平均年齢はそれぞれ、26.3 歳、27.7 歳であった。また離職のタイミングとしては第２子出産時が最多であった。 論文掲載：pp41～49 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって行った. 共同執筆者：服部律子，後藤宗理

4.高校生の対人関係への認識と性に関連する悩み（査読付き論文）	共著	2018年9月	日本性感染症学会誌 29巻1号	高校生の日常生活での対人関係への認識と性に関連する悩み、及び性交経験者と未経験者の認識の違いを明らかにし、思春期の母性保健の向上に効果的な保健指導・性教育のありかたを検討することを目的に分析を行った。無記名式自記式質問紙調査に回答された7,739名を分析対象とし、その結果、約7割が「友達の数は多い」「今幸せ」と認識し、9割が「今の家族の中で育って良かった」と認識していた。性交経験者は5.3%であり、未経験者に比べて「今幸せ」「今の家族の中で育って良かった」と回答した者が有意に多い一方で、「一人ぼっちと感じる」と回答した者も有意に多かった。思春期は自立し社会に巣立つ準備期であり、自己肯定感を高めつつ、他人との関係性・コミュニケーション能力を高める教育が必要であることが示唆された。 論文掲載：pp43-52 本人担当部分：研究計画立案、調査票作成、調査の実施、結果の考察を担当した。
5.Estimation of Pregnant Women Possibly Left Behind Tsunami Predicted Areas of Nagoya City A Simulation for Rescue Planning （査読付論文）	共著	2020年3月	Disaster Medicine and Public Health Preparedness	機械学習とGIS(Graphic information system)を用いて愛知県名古屋市における東南海地震発生時の津波浸水域の妊婦数を算出し、河川情報なども含めて避難可能な方向性から避難した妊婦の集中する地域を推定し、医療体制整備を提案した。 論文掲載：https://doi.org/10.1017/dmp.2019.164 本人担当部分：機械学習のための分析モデルの検討、考察、論文執筆 共同執筆者：服部律子,宮川祥子,服部兼敏
6.Prevalence and Associated factors of Suicidality in Japanese Adolescents: Results from A Population-based Questionnaire Survey.（査読付論文）	共著	2020年10月	BMC Pediatrics,	13歳から18歳の22,419人を対象に調査を実施し、自殺傾向に関連する要因を特定するために多項ロジスティック回帰分析を行った。自殺念慮を抱いたことがある者は男子21.6%、女子28.5%で、家族関係に関するストレスといじめが自殺傾向と強い関連が認められた。その他関連していた要因は性別、友人との関係についてのストレス、ジェンダーアイデンティティなどであった。相談に活用されるリソースで最も多かったものはインターネットであった。 DOI: https://doi.org/10.1186/s 12887-020-02362-9 本人担当部分：研究の計画、質問票の作成、データ収集、結果の考察 共同執筆者：NAGAMITSU S., MIMAKI M., KOYANAGI K., TOKITA N., KOBAYASHI J., HATTORI R., ISHII T., MATSUOKA M., YAMASHITA Y., YAMAGATA Z.

7. Estimation of Pregnant Women Possibly Left Behind in Tsunami Predicted Areas of Nagoya City: A Simulation for Rescue Planning, Disaster Medicine and Public Health Preparedness （査読付論文）	共著	2022 年 9 月	Disaster Medicine and Public Health Preparedness	名古屋市をモデルにして、東南海地震で津波到達予測時間までに、徒歩での避難を基本にして避難が不可能な地域に居住する妊婦の避難方法を検討するため、generai-purpose geographic information system を用い、道路中心線で算出された避難距離を用いて実際の避難時間に近づけるとともに、小学校区単位で分析を行った。その結果、今回のシミュレーションモデルで小学校区単位での避難リスクが判定できる事が明らかになった。しかし、建物の分布に差がある地域ではリスクが高く評価されることが示唆された。 DOI:https://doi.org/10.1017/dmp.2022.189 本人担当部分：研究の計画、分析のためのデータの選択、結果の考察 共同執筆者：S Miyagawa, R Hattori, K Hattori
（その他） -報告書- 1. より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究	共著	2016 年 3 月	公益社団法人日本助産師会 平成 27 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書	厚生労働省の補助金を得て産後ケアの実態について調査し、今後のあり方について提言した。 論文掲載：pp59～90 本人担当部分：「有床助産所ならびに病院・診療所で行っている産後ケアならびに産後ケア事業に係わる実地調査」を分担研究し、その結果を主になってまとめた。 共著者：島田真理恵,佐藤香,安達久美子,稲田千晴,服部律子,葛西圭子,相良有紀,市川香織,國分真佐代
2. 本学看護学部におけるクリッカー導入の評価	共著	2016 年 3 月	椙山女学園大学看護学研究 8 巻	アクティブラーニングの一貫として新たに導入したクリッカーの効果について、学生の質問紙調査とグループインタビューの結果から分析した。その結果クリッカーの使用による「ライブ感」が学生の授業への積極的参加を促している、他学生との類似点や相違点を見出したことが学習への動機づけとなっているという効果が明らかとなった。 論文掲載：pp47～55 本人担当部分：評価の計画、データ収集、分析、まとめの全般を主になって実施した。共著者：服部律子,和田貴子,佐原弘子,竹井留美,又吉忍,後藤宗理
3. 健やか親子 21(第 2 次)を推進するための思春期の母性保健の向上を目的とした効果的な保健指導のあり方についての調査研究	共著	2017 年 3 月	厚生労働省平成 28 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書	厚生労働省の補助金を得て、思春期の母性保健の向上を目的とした効果的な保健指導のあり方について提言し、研究結果に基づき保健指導媒体として「Adolescence わからないことがここにある」を作成した。 本人担当部分：研究計画、調査用紙の作成、４校におけるデータ収集、考察を共に担当し、「性の自己受容(多様性)・gender identity に対する保健指導」について文献レビューを行った(pp127-129 に掲載)。保健指導媒体では、「からだの性、こころの性～これって変？～(p18)を執筆した。 共著者：永光信一郎、安達久美子、石井隆大、内山有子、岡明、岡永真由美、葛西圭子、片岡弥恵子、川名敬、熊谷智子、小林順子、小柳憲司、齋藤伸治、鴇田夏子、永山美千子、二宮啓子、野々山未希子、服部律子、松岡美智子、松嵜くみ子、三牧正和、村上佳津美

4. チームビルディングを基盤とした全学合同新入生研修の試み	共著	2023 年 3 月	奈良学園大学紀要 第 15 集	2022 年度のキャンパス統合を機に初めて全学合同で実施した新入生研修の企画や運営のプロセスと実施後の評価について報告した。実施後の学生へのアンケートに自由記述で回答された内容をテキスト・マイニングにより分析した結果、他学科の学生と一緒にチームビルディングを基盤とした謎解きゲームに取り組んだことで、新入生は「楽しい」体験とともに４年間を頑張ろうという気持ちになっていることが生じていることが明らかとなり、チームビルディングを基盤とした新入生研修はその目的を達成し、効果があったことが明らかとなった。 本人担当部分：研修の企画、運営を統括して行い、アンケート結果の分析と紀要への報告の執筆を担当した。 共同執筆者：服部律子、松岡克典、阿波邦彦、安東雅訓、川端咲子、松浦尚子、荻布優子、嶋田理博、高橋寿奈、坪内善仁、辻井直幸
5. カリキュラム改正に伴う本学保健医療学部看護学科の新カリキュラム構築のプロセス	共著	2023 年 3 月	奈良学園大学紀要 第 15 集	カリキュラム改正に伴い、３ポリシーの見直しからはじめ、新しいカリキュラム構築に取り組んだプロセスをまとめ、報告した。 本人担当部分：カリキュラム構築のプロセスを主になって進め、紀要への執筆を担当した。 共同執筆者：服部律子、吉村雅世、西薗貞子、三浦康代、嶋田理博、小林由里、佐藤郁代、西出順子、溝口みちる
-講演-				
1. 母と子のメンタルヘルスのために助産師ができること、助産師がすべきこと		2016 年 5 月	第 2 回母と子のメンタルヘルスフォーラム（於名古屋市）	青年期の親準備性形成に関する研究成果と、前年度に取り組んだ「より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究」の結果から、そして現代の若者の特徴などから、親となる人々の特性を理解し、妊娠中から子育て期までを包括したケアのあり方にについて概観し発表した。
2. 母と子のメンタルヘルスのために助産師ができること、助産師がすべきこと		2016 年 10 月	第 57 回日本母性衛生学会総会・学術集会教育講演 （於東京）	平成 27 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究」成果を基に、産後の母親の特徴を解説するとともに、親準備性研究の成果に基づいて妊娠前から子育て期までの継続的で包括した支援の必要性について講演した。
3. 子育て支援と社会資源の活用		2016 年 11 月	平成 28 年度奈良県アウトリーチ型子育て支援モデル事業子育て支援者研修会	親準備性研究や産後ケアのあり方に関する研究での結果を踏まえ、子育て支援の対象の特性について解説し、子育て支援者に求められる姿勢などについて講演した。
4. 妊娠期からの包括支援に向けて～対象を理解する～		2018 年 2 月	平成 29 年度葛城地区保健衛生担当課長会保健師部会全体研修会	子ども虐待防止に向け、妊娠期からのリスクの早期発見や予防のための寄り添いや支援のあり方について講演した。
5. 子どもたちの生きる力を支える性教育		2019 年 10 月	京都府私立中学高等学校教育研究大会	厚生労働省平成 28 年度子ども･子育て支援推進調査研究事業の調査で明らかになった結果、近年の若者の特性などを踏まえ、エンパワーメントやライフスキル教育の視点から中高生への性教育のあり方について講演した。

―学会発表― 1.思春期ピアカウンセラー養成の現状と課題		2013 年 8 月	第 32 回日本思春期学会学術集会 （於和歌山市）	日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会認定プログラムを用いた過去 6 年間の思春期ピアカウンセラー養成数の推移や受講者の受講後の感想等から実態を分析した。その結果、若者気質の変化により友人に相談できなくなっていることなどから思春期ピアカウンセラーへのニーズは高まっているものの、同じ若者気質の変化により自らが思春期ピアカウンセラーになろうという若者は減少しているという課題が存在していることが明らかとなった。本人担当部分：研究全体に関わり、特にデータの分析とまとめを主になって行った。 共同発表者：服部律子，高村寿子，石田登喜子，渡辺純一
2. 助産所・病院・診療所で行われている産後ケアの実態		2016 年 10 月	第 75 回日本公衆衛生学会総会 （於大阪市）	わが国における産後ケアのあり方を検討するための基礎資料として、助産所、病院、診療所計 9 施設において、インタビュー調査を行った。結果、母親が育児技術を獲得し、自信をもって家庭生活へのスタートが切れるよう支援することが求められていた。また、産後ケア施設を提供するためには経済面、感染対策と癒しの空間の確保など施設面での課題があることが明らかとなった。 共同発表者：市川香織，服部律子，國分真佐代，稲田千晴，相良有紀，島田真理恵
3. Baseline survey with the purpose of developing adolescent peer activities related to reconstruction support in the wake of the Great East Japan Earthquake: For developing peer activities designed to support the ability to lead active lives in affected areas		2017 年 8 月	The 21st International Epidemiological Association （大宮市）	南相馬市における中学生へのピアサポートの実施に向けた中学生対象のベースライン調査の結果を報告した。将来の夢をもっていない群はもっている群に比べて自尊感情が低く、自分自身の心身への関心が低いことが明らかとなり、自尊感情を高める取り組みであるピアサポート活動の必要性が示唆された。 共同発表者：Hattori R, Takamura H, Nakamura
4. Prevalence and prediction of suicide ideation in Japanese adolescents: result from a population-based questionnaire survey		2017 年 1 月	American Academy of Child and Adolescent Psychiatry (Washington DC, USA)	全国の各地方に在住する中高生を対象に心身の健康状態について調査した結果から、希死念慮を抱く割合と自殺率を中心に精神健康状態に焦点をあてて報告した。 共同発表者:Nagamitsu S, Mimaki M, Koyanagi K, Tokita N, Kobayashi Y, Hattori R, Yamashita Y, Yamagata Z, Igarashi T
5.健やか親子 21（第 2 次）：思春期の保健課題の克服―中高生２万人のアンケート調査から		2017 年 8 月	日本思春期学会第 36 回学術集会	全国の各地方に在住する中高生を対象に健やか親子 21(第 2 次)に盛り込まれている思春期の保健課題を中心に調査した結果の概要を報告した。 共同発表者：永光信一郎、三牧正和、服部律子、小柳憲司、鴇田夏子、小林順子、五十嵐隆

6.産婦の肯定的な出産体験を構成する要素		2021年3月	日本助産学会第 35 回学術集会	肯定的な出産体験を構成する要素を明らかにすることを目的に、12名の褥婦を対象に半構造化面接を実施し、質的記述的に分析した結果、【基本的欲求が満たされたことによる満足感】【出産へのコントロール感を持てたことによる出産体験の受容】【自身の行動を肯定的に自己評価したことによる自尊感情の高まり】【元気な我が子が誕生したことによる喜び】の４つのカテゴリーが抽出された。 共同発表者：堀井有紗、美甘祥子、服部律子
−その他−				
1. 外来通院糖尿病患者の治療行動に影響を及ぼす要因	共著	2013年11月	へるす出版 月刊「臨床看護」	外来で通院治療を受けている、研究への協力に同意の得られた糖尿病患者19人に対して半構造化面接を実施し、保健行動理論に基づいて質的に分析した。結果、治療行動には病気の悪化への危機感や治療行動による効果の自覚、知識が影響していることが明らかとなった。また、糖尿病患者は治療行動の必要性の認識と同時に逃避欲求も抱いて逃避するための理由を探していることが明らかとなった。今後は、自己効力感にも着目し、今回明らかとなった要因との関連性を明らかにする必要がある。 論文掲載：pp1941～1947 本人担当部分：専門としている健康行動の観点から、研究の各プロセスと論文執筆について指導を行い、専門とする保健行動の観点から結果の分析、考察を共に行った。 共同執筆者：吉田和恵、服部律子、伏屋小夜子、牧田久仁子
2. 新・青年心理学ハンドブック	共著	2014年1月	福村出版	青年心理学に関する事項を広く解説したハンドブックである。この中で、トピック「青年期の親準備性」を担当した。 B5変形(27cm)版全714頁 本人担当部分：総頁数714頁中1頁(Topic32)を担当。 後藤宗理,二宮克美,高木秀明,大野久,白井利明,平石賢二,佐藤有耕,若松養亮編著,ほか114名著。Topic32 服部律子。
3. 周産期のメンタルヘルスの動向と助産師に求められるかかわり	単著	2017年4月	医学書院 「助産雑誌」	周産期のメンタルヘルスケアについて、施策の動向、筆者が取り組んできた今までの研究から明らかとなった親になる人々の特性、若者研究の成果などを踏まえて、対象の理解を中心に助産師に求められる関わりについて概説した。 論文掲載：pp262～267（特集　「周産期のメンタルヘルスのために助産師ができること、すべきこと」の中の１編）
4. 母性看護学の授業設計と演習・実習の進め方 ～母性看護学教育を取り巻く現状の把握～	単著	2019年1月	日総研 「臨床助産ケア」スキルの強化」 Vol.1, No.1	保健師助産師看護師学校養成所指定規則や国家試験出題基準について解説し、母性看護学の講義、演習、実習で求められている教育内容について解説した。 掲載：pp95～99
5. 母性看護学の授業設計と演習・実習の進め方 ～「母性看護学」の授業設計　何をどのように教えるか～	単著	2019年3月	日総研 「臨床助産ケア」スキルの強化」 Vol.1, No.2	母性看護学の講義科目の授業設計について、授業設計の意義や学習内容の配列など教育の基本を母性看護学の講義に当てはめて解説した。 掲載：pp60～64
6. 母性看護学の授業設計と演習・実習の進め方 ～「母性看護学」演習を計画する～	単著	2019年5月	日総研 「臨床助産ケア」スキルの強化」 Vol.1, No.3	母性看護学で扱う演習の計画について、ARCSモデルなどを学習理論を示しながらどのように設計するかを解説した。 掲載：pp89～92

7. 母性看護学の授業設計と演習・実習の進め方 ～「母性看護学」演習を評価する～	単著	2019 年 7 月	日総研 「臨床助産ケア」スキルの強化」 Vol.1, No.4	評価の構成要素や種類の基本を解説し、演習の評価表を例示しながら母性看護学の演習をどのように評価するかについて解説した。 掲載：pp71～75
8. 母性看護学の授業設計と演習・実習の進め方 ～「母性看護学」臨地実習の調整と具体的な進め方～	単著	2019 年 9 月	日総研 「臨床助産ケア」スキルの強化」 Vol.1, No.5	臨地実習を取り巻く現状を解説し、実習開講に向けた実習施設の開拓や協力体制づくり、複数の実習施設で実習を行う場合の留意点などについて説明した。 掲載：pp67～71
9. 母性看護学の授業設計と演習・実習の進め方 ～「母性看護学」教育の課題と展望～	単著	2019 年 11 月	日総研 「臨床助産ケア」スキルの強化」 Vol.1, No.6	少子社会で看護基礎教育で母性看護学領域で求められている教育内容を考え、実習の工夫やリプロダクティブヘルス領域の教育の強化の必要性などについて述べた。 掲載：pp83～87
10. 学生アスリートのスポーツ事故を防止する安全教育実践について -文部科学省科学研究費およびその他の研究助成-	共著	2020 年 12 月	奈良学園大学紀要 第 13 集	奈良学園大学硬式野球部を対象に実施した安全教育について、実施プログラムとその成果について報告した。 掲載：pp61～70 本人担当部分：安全教育の計画・実施と成果の評価計画、成果の分析
1 青年期女子の親準備性とキャリアデザイン、ライフデザインの関連性		2013 年 6 月	椙山女学園大学学園研究費助成(B)	妊娠に伴い身体的変化を来す女性を対象とした、妊孕性や家庭形性、妊娠・出産・子育てと仕事の両立なども含めた女性ならではのライフデザイン、キャリアデザインへの支援のあり方を検討するため、青年期女子に対する女子大学生 510 人を対象に、親準備性と現在描いているライフデザインについて実態について研究した。

［注］

1 最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。

2「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。

3「研究活動」については、下記の点に留意すること。

① 著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。

② 著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。

③ 共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。

④ 最近１０年間に著書･論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。

⑤ 芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　５年 ３月　３１日

氏名　小林　由里

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	基礎看護学、看護教育学、看護管理学、エンドオブライフケア

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 医療事故事例のシミュレーション体験を用いた授業方法	平成 15 年 12 月～平成 29 年 10 月	「医療安全」の講義において学生の自己モニタリングやリスクアセスメントを高め、事故防止行動がとれることを目的にシミュレーション教育を実施した。学生一人ずつ誤薬のシミュレーション体験とリフレクションを実施した。体験後レポートの記述から、学生はどのような状況で事故につながるのかや、自分の行動特性について理解できたという結果が得られた。また、実習においても事故防止の意識につながった。
多重課題を用いたリスクアセスメント力と判断力の育成演習	平成 28 年 1 月	統合分野「看護の統合と実践」の科目として、卒業前に多重課題を用いたリスクアセスメント力と判断力、対応力を育成することを目的に演習を実施した。病室に呼吸不全の患者、転倒リスクのある患者、嚥下困難のある患者などを設定し、学生は、グループでディスカッションして患者への援助計画を立案しておく。教員が患者役を演じ、ロールプレイを行い、患者の状況に対応しながら、リスクアセスメントや優先度の判断を行う体験学習とした。このメリットとして、学生は、臨場感のある患者の反応にどう対応しようかと思考し判断する機会となった。
看護管理の考え方を学ぶ事例を用いたグループ討議	平成 28 年 4 月～平成 29 年 6 月	統合分野「看護の統合と実践」の科目である、看護管理では、看護管理の定義やマネジメントプロセス、病院・看護部の組織体制などについて教授した。また、倫理的問題のある事例を用いて、自らがミドルマネージャーとしてどのように倫理的判断を行うかのディスカッションや、複数の様々な状況にある患者のケアが必要な事例に対し、チームでケアを実施する際のリーダーシップのあり方についてのディスカッションを取り入れた。
成人看護援助論Ⅱ、成人看護援助論演習の講義・演習	平成 30 年 4 月～令和 2 年 7 月	慢性疾患を持つ患者のセルフマネジメントを支援するための看護について、学生がイメージしながら学べるよう、事例を用いて、段階的に思考プロセスをたどっていけるような講義の組み立てを行った。セルフマネジメントの患者教育では、模擬患者（教員）に対してパンフレットを用いて学生が指導する課題とした。患者役の様々な反応に対して思考し、対応するという内容とした。学生は不足する知識や患者教育の技術など課題を明確にすることができた。医療事故防止のリスクアセスメント力を高めるためのシミュレーションを取り入れた。
看護管理学特論の講義	平成 31 年 9 月～現在に至る	大学院の看護管理学特論では、臨床で現在も勤務する学生であるため、生きた教材を活用するべく、各自の管理的疑問や問題を提起しあい、ディスカッションを行った。
想像力・創造力を高めるコミュニケーション論の講義・演習の工夫	令和 3 年 4 月～現在に至る	看護の初学者である１年次の学生に対し、コミュニケーションが、単なる言葉の伝達ではなく、目標や意図の共有であることや、看護職としてのコミュニケーションが理解できるよう工夫した。例えば様々なシチュエーションや臨床事例を用いて、学生が自ら考え、ディスカッションも組み入れて思考を深めていくようにした。
基礎看護技術Ⅰ・Ⅱ、ヘルスアセスメント、看護技術の基礎Ⅰ、看護学概論Ⅱの講義・演習	令和 3 年 4 月～現在に至る	基礎看護技術やアセスメントは、方法論を患者にあてはめるという思考にならないよう、授業外の学習を促進する取り組みを行った。事前課題は、手順を覚えるのではなく、その技術を必要とする根拠、実施の際の判断に必要な要素の視点で考えられるように工夫した。演習においても、自ら考え、学生同士でディスカッションしなが

		ら、事例患者に応じた援助の内容、方法、時期、留意点などの判断について深められるように促している。また，医療職としての倫理観を醸成するために、リアリティを持たせた事例を用いて体験を通して、深く考察できるよう工夫した。
看護管理学の講義	令和3年4月～現在に至る	４年次の学生が、卒業後に所属する組織の意義や機能、看護管理の定義やマネジメントプロセスなどをイメージすることができることを目指している。そして自らも組織の一員として看護をマネジメントしていく必要があることを理解できるよう教授する。現場で起こりうる様々な事例を用いたり、３年次までの実習を想起させて、マネジメントの視点による判断について思考を促す問いやディスカッションを取り入れている。
２　作成した教科書，教材		
３　教育上の能力に関する大学等の評価	令和元年8月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において奈良学園大学大学院看護学研究科講師、「看護管理学特論」M可、「特別研究」M合と判定
４　実務の経験を有する者についての特記事項 教育担当（5年間）として看護師の看護実践力向上のための現任教育の企画・運営	平成19年4月～平成24年3月	院内看護職（看護師、療養介助員、看護助手）の育成を図るため、経年別、役割別研修の企画・運営を担当した。毎年、新人看護師は毎月1回、2年目、3年目、4,5年目は2か月に1回程度、6年目以上は半年に1回程度、実習指導に関すること、褥瘡予防、摂食嚥下などの専門分野の研修などを実施した。経年別研修は、OJTを重視し、それぞれの経験年数での課題をOJTにより達成できるよう取り組み、集合研修ではその補填となるよう位置付けた。その結果、各部署で実践を通して、看護職員同士でお互いを育てあう意識ができた。新人看護職の研修テーマは主に看護技術や看護倫理に関すること、2年目はケーススタディ、3年目は組織におけるリーダーシップ・メンバーシップ、4年目以上は業務改善など組織における管理とし、業務改善につなげた。
教員に対する指導・教育、教員の教育実践力向上のための研修の企画・運営	平成25年～平成30年3月	看護専門学校の教育主事として看護学校管理を担当した。近畿内国立病院機構附属看護学校の1，2年目教員を対象とし、教育実践力向上を目的とした研修や、中堅看護教員を対象とし、学校運営・管理の視点の育成を目的とした研修を実施した。
国立病院機構近畿グループ主催実習指導者講習会講師、施設内実習指導者	平成26年6月～平成29年6月	国立病院機構近畿グループ主催実習指導者講習会にて「基礎看護学」や「実習評価」について担当し講義を行った。また、国立病院機構舞鶴医療センター附属看護学校、京都医療センター附属看護助産学校、敦賀医療センターでの実習指導者研修において、教育課程、実習指導の意義、実習評価、実習指導案の作成などについて講義を実施した。
５　その他 国立病院機構舞鶴医療センター附属看護学校における教育実績 国立病院機構京都医療センター附属京都看護助産学校　看護学科における教育実績	平成25年4月～平成28年3月 平成28年4月～平成30年3月	「看護学概論」「老年看護学概論」「医療安全」などの講義を担当した。また、「基礎看護学実習」「小児看護学実習」「成人看護学実習」「在宅看護論実習」の実習指導を行った。効果的な実習となるよう、実習施設への実習依頼や調整を行った。院外講師へは学生の講義評価結果をフィードバックし、講義依頼を行った。また、看護教員の指導、実習施設の実習指導者対象研修の講師などを行った。 「看護管理」「医療安全」の講義を担当した。また、「基礎看護学実習」「小児看護学実習」などの実習指導を行った。効果的な実習となるよう、実習施設への実習依頼や調整を行った。院外講師へは学生の講義評価結果をフィードバックし、講義依頼を行った。また、看護教員の指導や実習施設の実習指導者対象研修の講師などを行った。
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要

1　資格，免許	平成元年４月	看護婦免許
2　特許等 3　実務の経験を有する者についての特記事項 国立病院機構奈良医療センター教育担当看護師長	平成 21 年４月～平成 24 年３月	教育担当として看護職の現任教育の企画・実施を行った。また、医療安全管理係長とともに全職員対象の研修を実施した。人材確保対策事業として、看護職募集活動、復職支援研修や中途採用者研修の企画・運営を実施した。また実習受け入れ態勢整備等の役割を果たした。
4　その他		
科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（c） （研究分担者）	令和２年４月～令和４年３月	研究課題名「終末期患者の意思表示を支えるための高齢者市民を対象としたエンドオブライフケア教育」 市民を対象とした研修会の実施および、報告書冊子の作成に携わった。
実習部会	平成 31 年４月～令和４年３月	看護学科における実習に関する企画・運営、検討を行った。3 年次領域の臨地実習学生配置の作成、次年度実習ローテーション案の作成、実習要綱の修正・検討・作成、実習協議会の企画・運営・評価、統合看護実習の計画案作成、学生配置の検討など多岐にわたり、学生の実習で質の高い学びができるよう取り組んだ。令和２年は実習に向けた学生のコロナワクチン接種の対応も行い、コロナ過における臨地実習のあり方についても検討した。
教務部会	令和４年４月～現在に至る	看護学科における教務に関する検討・運営を行った。シラバス、授業担当教員の確認、時間割の確認・調整、教室や実習室の重複の確認など、学生の授業が円滑に進むよう、問題点を検討し、調整をおこなった。次年度の専門基礎科目の講師依頼と時間割調整、カリキュラム改正に伴う読み替え履修が必要な対象学生の確認、履修が問題なくできるよう調整した。R4 年度はオンラインによる入学前教育の企画・運営・評価を担当した。
カリキュラム検討ワーキング	令和２年 4 月～令和４年３月	令和４年度カリキュラム改正に向けて、本学看護学科のディプロマポリシー、カリキュラムポリシーを検討した。また、そのポリシーを達成するための科目、科目内容、カリキュラムツリー、科目間の関連、担当者等を検討するにあたり、検討案を提示し、意見を述べた。
学生生活ワーキング	平成 30 年４月～令和２年３月	新入生研修の準備・運営・評価を行った。また、学生の大学生活に関わる事項について情報共有および検討を行った。
国家試験対策ワーキング	平成 31 年４月～令和３年３月	国家試験合格に向けた模擬試験や夏季、秋季対策講座の準備、学生の学習状況把握のためのポートフォリオ作成の検討、学習支援のためのアドバイザー教員との連携方法などについて検討し、実施した。
卒業研究ワーキング	平成 31 年４月～R2 年３月	卒業研究に向けたガイダンスの計画と運営、卒業研究抄録集作成に向けた、執筆規程の修正、ポートフォリオ、評価表の検討を行った。
奈良学園大学自己点検自己評価委員会	令和３年４月～現在に至る	奈良学園大学白書の加筆・修正について、意見を取りまとめ、修正した。
教員評価制度検討ワーキング	令和３年４月～現在に至る	教員の教員分野に関する評価（ベストティーチャーなど）について検討し、実現に向けて具体案を計画した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　看護師国家試験 直前社会福祉学領域ファイナルチェック	共著	2021 年 03 月	金芳堂	社会福祉の仕組みを学び、対象者の生活を基盤とした QOL の質の向上に向けた社会福祉の知識を体系的に理解できるものである。3-2）障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための

2　エビデンスに基づく消化器看護ケア関連図	共著	2022 年 03 月	中央法規出版	法律（障害者総合支援法）を担当した。第Ⅱ部　疾患別／ D　肝臓・胆嚢の疾患胆石症を担当した。
（学術論文） 1．新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性とその特徴 （修士論文）	単著	平成 25 年 3 月	畿央大学	新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の特徴とその関連性を明らかにすることを目的とした。看護師 712 名に質問紙調査を実施した。質問紙は属性，批判的思考態度尺度(常盤ら,2010)，情報活用の実践力尺度(高比良ら,1999)で構成した。分析方法は記述統計，Spearman の相関係数，重回帰分析を用いた。結果，クリティカルシンキング能力は，協同的態度が高く，看護師との比較では，探求心が高く，論理的思考への自信が低かった。情報活用能力では，収集力，発信・伝達力が高く，看護師との比較では表現力が高かった。新人看護師および看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性は，双方とも有意な正の相関が認められ(r= .449,p< 0.1)，両能力は有意に関連していることがわかった。クリティカルシンキング能力を高めるには情報活用能力の判断力，創造力，処理力を育成する必要性が示唆された。 Ａ４判 全 64 頁
2．看護学生の砕石位体位前後の産婦人科診察台に対するイメージと羞恥心の変化 （査読付）	共著	平成 27 年 6 月	畿央大学紀要 p19～P30	看護学生が産婦人科診察台で砕石位を体験することで，体験前後の診察台のイメージや羞恥心の変化を検討することを目的とした。15 項目の産婦人科診察台イメージ尺度を作成した。羞恥心は樋口の状態羞恥心感情測定尺度で砕石位体験前後に調査した。参加者は 80 名。産婦人科イメージは，因子分析の結果「情動イメージ」「体感イメージ」「緊張的イメージ」「見た目イメージ」の 4 因子が抽出された。体験前は 13 項目がマイナスイメージであったが，体験後 5 項目がプラスに有意に変化した。体験後の羞恥心尺度の高値群は，診察台イメージの「高く」「嫌な」の項目でマイナスに有意に変化した。以上から産婦人科診察台に対してマイナスイメージが強い場合，羞恥心が強くなることが示唆された。 本人担当部分：データの分析，結果の考察を行った。 共著者：中居由美子,小笠原知枝,播金ヤスミ,小林由里,河合まゆみ,文鐘聲
3．基礎看護学実習評価項目の内容分析によるパフォーマンス評価のためのルーブリックの作成 （査読付）	共著	平成 30 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究第 5 巻 P43～P51	基礎看護学実習の評価に用いられた項目から，パフォーマンス評価のためのルーブリックを作成することを目的とした。10 校の基礎看護学実習評価表の評価項目を基礎データとし，Berelson の内容分析を参考にカテゴリ化した。445 記録単位数をコード化し，110 サブカテゴリ―，25 カテゴリ，6 コアカテゴリを抽出した。6 コアカテゴリは，看護過程展開力，クライエント理解力，自己学習力，チーム医療における看護師役割の認識力，倫理的態度に基づく実践力，コミュニケーション力と命名し，基礎看護学実習の実践力とした。これに基づき，縦軸に 25 カテゴリの評価規準, 100 サブカテゴリ―の評価基準から構成され，到達度

				で評価できる評価表を作成した。 本人担当部分：データの分析，結果の考察を行った。 共著者：播金ヤスミ，小笠原知枝,中居由美子,河合まゆみ,小林由里, 對中百合, 新井祐恵，太田容子，伊藤明子
4．新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の特徴とその関連性 （査読付）	共著	平成 31 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究第 6 巻 P3～P11	新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の特徴とその関連性を明らかにすることを目的とした。看護師 712 名に質問紙調査を実施した。質問紙は属性，批判的思考態度尺度(常盤ら，2010)，情報活用の実践力尺度(高比良ら，1999)で構成した。 分析方法は記述統計，Spearman の相関係数，重回帰分析を用いた。結果，クリティカルシンキング能力は，協同的態度が高く，看護師との比較では，探求心が高く，論理的思考への自信が低かった。情報活用能力では，収集力，発信・伝達力が高く，看護師との比較では表現力が高かった。新人看護師および看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性は，双方とも有意な正の相関が認められたが，新人看護師は看護師より関連性が低かった。（修士論文をもとに作成） 本人担当部分：質問紙の作成と調査及び統計解析，研究の総括を行った。 共著者：小林由里，小笠原知枝，河合まゆみ，中居由美子，播金ヤスミ
5．看護師の暗黙知による予後予測に関する文献検討（査読付）	共著	令和 5 年 3 月 掲載予定	医療福祉情報行動科学研究第 11 巻（2022）	【目的】看護師が暗黙知に基づきどのように死期を察知し，予後を予測しているかを明らかにする。 【方法】医中誌 Web 版，CiNii，PubMed，CINAHL を用い文献検索し，対象となる文献から，看護師の暗黙知による予後予測に関する記述を取り出し，内容の類似性に基づき抽象化しサブカテゴリ，カテゴリを生成した。 【結果】15 件の文献を分析した。経験年数 10 年以上の熟練看護師が暗黙知に基づく予後予測をしていた。一般病棟やホスピス，在宅において看取りを行う看護師は，客観的数値では測定できない微妙な状態変化や表情を直観的にとらえて，死期が近いことを察知し，予後を予測していた。 暗黙知による予後予測は，目つきや表情の変化，違和感のある臭気の消失，土気色のねっとりした皮膚，つじつまの合わない会話，今までにない異常な言動，一瞬の回復，死の恐怖，惜別に伴う感情，生へのこだわりの喪失，看護師自身に生じる何かが違うという感覚の 10 カテゴリが抽出された。 【結論】看護師は，患者の特異的な身体的情報や，死を自覚することに関連した心理的変化，今までにない言動や予想外の反応だけでなく，看護師自身に生じる「何かが違う」という感覚により死期を察知し，予後を予測していることが示唆された。 共著者：小林由里，小笠原知枝，西薗貞子，平松幸子，河合まゆみ，兒玉　拓

（その他）				
1．A Study of Young Women's　Images of the Gynecological Examination	―	平成 25 年 10 月	International Nursing Conference & World Academy of Nursing Science	若い女性が婦人科診察台に対して，どのようなイメージをしているのか判明することを目的とした。婦人科診察台のイメージの 15 項目のスケールを作成した。８０人の女子大学生に婦人科診察台で診察を受けるポーズをとってもらった。結果，診察ポーズ前の婦人科診察台のイメージは，「緊張する」67.0%，「恥ずかしい」58．0%，「親しみにくい」50%「こわい」43.3%，「嫌い」32.7%であった。診察ポーズ後の婦人科診察台のイメージは,「高い」61.7%，「嫌い」45.3%，「緊張」42.7%,「こわい」28.0%,「恥ずかしい」27.7%に変化した。 　診察ポーズ後 50 名の学生が婦人科診察台のイメージはマイナスイメージからプラスイメージに変化した。このことから若い女性は診察前は婦人科診察台に対してマイナスイメージをもっているが体験後プラスイメージに変化した。子宮がん検診率を上げるために，ヘルスケア・プロバイダーは，若い女性の婦人科診察台の否定的なイメージを減少させることが必要である。 本人担当部分：データの分析，結果の考察を行った。 共同発表者：Yumiko Nakai, Jong-Seong Moon, Yasumi Harikane, Yuri Kobayashi, Mayumi Kawai, Midori Takagi, Akiko Ito
2．新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性とその特徴	―	平成 26 年 8 月	日本看護学教育学会第 24 回学術集会	看護師 1,075 名を対象に自記式質問紙法による調査を行った。質問紙は高比良ら(1999)による情報活用の実践力尺度，常盤ら(2010)による批判的思考態度尺度を使用。分析対象者は新人看護師 158 名，看護師 583 名。新人看護師と看護師のクリティカルシンキング能力および情報活用能力の平均値の比較では，「協同的態度」と「探究心」で新人看護師が高く，「懐疑的態度」と「論理的思考への自信」は低かった。情報活用能力では<表現力>のみが有意に高かった。3) 新人看護師および看護師の「クリティカルシンキング能力」と<情報活用能力>の関連性は，双方とも有意な正の相関が認められた。本研究から，新人看護師の両能力は関連していることが示唆された。クリティカルシンキング能力では「懐疑的態度」や「論理的思考への自信」，情報活用能力では<判断力>や<処理力>などの能力を高める教育が必要であると考える。（修士論文の一部を発表） 本人担当部分：質問紙の作成と調査及び統計解析，研究の総括を行った。 共同発表者：小林由里，河合まゆみ，播金ヤスミ，中居由美子，伊藤明子，小笠原知枝

3．看護専門学校における高校新卒学生と社会人経験学生の学習意欲に関与する要因	―	平成 27 年 8 月	日本看護学教育学会 第 25 回学術集会	専門学校における高校新卒学生と社会人経験学生の学習意欲に関与する要因を明らかにすることを目的とした。看護専門学校 3 年課程（4 校）の 1～3 年生 445 名を対象に，自記式質問紙調査を実施。質問紙は永嶋らの学習意欲尺度，斎藤らの志望動機尺度，菅原らの自意識尺度と学習活動で困った場面・学校生活での人間関係・相談の気兼ねなど 6 項目とした。結果は，社会人が学習意欲全体で有意に高く，学習意欲に関与する要因とした高校卒は「志望動機」のみであったが，社会人は「志望動機」「自意識」「学校生活の相談」が関与していることが示唆された。さらに高校卒は看護職への憧れと自分に適性があると感じているほど演習・実習に期待が大きいことが推察された。 本人担当部分：データの分析，結果の考察を行った。 共同発表者：河合まゆみ，小笠原知枝，中居由美子，小林由里，播金ヤスミ
4．Prognosis Prediction at One Month Before Death Based on Nurses' Assumed Tacit Knowledge: Qualitative Inductive Research Based on Systematic Review	―	令和 4 年 4 月	The 25th East Asia Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference	【目的】看護師の経験に培われた暗黙知に基づく予後予測を可能にする要素を明らかにする。 研究デザインは，系統的レビューに基づく質的帰納的研究。文献検索は，2000 年～2020 年に発行された医中誌 Web 版，CiNii，PubMed，CINAHL 等の医療系データベースを使用した。キーワードは，tacit knowledge, tacit knowing, end-of-life, prediction and nurse とした。文献の質評価を行い選択基準に合致した文献を抽出し，レビューマトリックスを作成した。質的データはコード化し分類して分析した。選択基準に合致した 27 文献が分析対象となった。その結果，看護師の暗黙知に基づく死の約 1 か月前の予後予測の要素として，【目つき，表情の変化】【反応の低下】【死に対する恐怖】【家族等との惜別（せきべつ）】【今までにない異常な言動】【違和感のある臭気の消失】【生へのこだわりの喪失】【ただならぬ雰囲気を察知】【一瞬の回復】【発汗を伴う皮膚色の変化】などの 10 カテゴリが抽出された。 共同発表者：Yuri Kobayashi, Chie Ogasawara, Teiko Nishizono, Mayumi Kawai, Sachiko Hiramatsu, Yasumi Harikane.
5．看護師の暗黙知による予後予測に関する文献レビュー	―	令和 4 年 10 月	日本エンドオブライフケア学会 第 5 回学術集会	【目的】1）国内外の文献レビューにより，看護師の暗黙知による予後予測に関する研究の動向を把握し，2）看護師がどのような予感や直観に基づいて患者の予後を予測しているのかを明らかにする。 【方法】文献レビュー方法および対象文献の選定は，医中誌 Web 版，CiNii，PubMed，CINAHL 等を使用した。国内文献では，暗黙知，経験知，直観，察知，死の予測，予後予測，EOLC，終末期，国外文献では，tacit knowledge，tacit knowing，intuition，detection，prediction of death，prognosis prediction，end-of-life care，terminal で検索した。 【結果】分析対象文献は 17 件となった。

				暗黙知による予後予測に関する文献の動向は，8 件が看護師の暗黙知による死期の予測に関する文献，7 件は暗黙知による急変や異常の臨床判断に関する文献，2 件は経験により培われた実践知に関する文献であった。 【考察】看護師は過去の経験において培われた暗黙知の視点から予後を予測しており，特に患者の目つき・表情の変化，臭い，いつもと違う雰囲気などから予後を察知し予測していることが示唆された。 本人担当部分：文献検索，データ分析，研究の総括を行った。 共同発表者：小林由里，小笠原知枝
6．学生の主体性を引き出す有効な教育支援の検討ー学生がデザインする統合実習における教員の実践からー	―	令和 4 年 12 月	日本看護科学学会 第 42 回学術学会	【目的】対象学生 2 名への実践から，教員のどのような支援が学生の主体性を引き出しているかを検討しする。 今後の教育支援をより有効なものとする具体策を明らかにする。 【方法】「学生が主体的にデザインする実習（西薗）」を活用。この方法は，学生が自ら課題を設定し，看護の現象に対して探究心を持つことにより，研究的手法を用い，情報収集から計画立案，実践，考察を行うものである。 1)探究テーマと理由の明確化 2）実習施設とのスケジュール調整 3)実習日程の設定 【教育支援の実際】1)言語化へのサポート，2）主体的な学習行動継続のサポート 3)主体的に学ぶ環境づくり，4）カンファレンスで成長確認 共同発表者：松浦尚子，西薗貞子，小林由里
（その他）				
7．Stressors for Visiting Nurses Supporting End-of-Life Care for Older Patients with Dementia and Their Families	―	令和 5 年 3 月	The 26th East Asia Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference	目的：高齢認知症患者のエンドオブライフと家族を支援する訪問看護師のストレス要因を明らかにする。方法：5 年以上の訪問看護の経験をもつ看護師に，半構造化面接法を用いてデータ収集し，質的記述的研究の手法を用いて分析した。結果：研究参加者は 19 名で，訪問看護の経験年数の平均は 12.2 年であった。分析の結果，訪問看護師のストレスとして，12 のカテゴリと 28 のサブカテゴリが抽出された。12 カテゴリはストレスの特徴から，1.中核症状，行動心理症状，2.在宅療養継続困難，3．意思決定支援，4.在宅における看取り， 5.職場環境への課題の 5 つの視点に分類された。 共同発表者：平松幸子，小笠原知枝，兼澤あゆみ，小林由里，河合まゆみ

8. Grief Care Provided by Visiting Nurses to Bereaved Families of Patients with Dementia	―	令和 5 年 3 月	The 26th East Asia Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference	目的：認知症患者の遺族に対して訪問看護師が提供するグリーフケアを明らかにする。 方法：訪問看護師を対象にグリーフケアに関する質問紙調査。 結果：調査対象は，平均訪問看護師歴 9.2 年であった。認知症患者の配偶者や子どもへのグリーフケアは，家庭訪問や電話相談で行われた。訪問看護師が行ったグリーフケアは遺族に寄り添い傾聴，表現の促し，行ってきたことを肯定，ねぎらいの言葉，生前の家族との関係構築，故人の思いを察して言葉をかける(代弁)，新たな問題や心配事の確認と支援，同じ境遇の遺族の紹介，社会資源の活用，遺族の健康状態の把握，悲嘆過程の説明の 11 項目であった。 共同発表者：河合まゆみ，小笠原知枝，小林由里，平松幸子
（その他）				
令和３年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C） (研究代表者)		令和 3 年～ 令和 5 年	研究課題名「エンドオブライフケアに携わる看護師の暗黙知に基づく臨死期の予測」 令和 3 年度は，看護師の暗黙知に基づく予後予測項目の抽出を目的に，システマティックレビューおよび質的分析を行った。	
科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C） (研究分担者)		令和 2 年～ 令和 4 年	研究課題名「終末期患者の意思表示を支えるための高齢者市民を対象としたエンドオブライフケア教育」 市民を対象とした研修会の実施および，報告書冊子の作成に携わった。	
科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（B） (研究分担者)		令和 4 年～ 令和 7 年	研究課題名「看護人材の円滑なトランジションを促す大学教育～新人教育の抜本的な改革と体系化」	

別記様式第4号（その2）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年　3月　31日

氏名　佐藤　郁代

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	看護技術、看護教育学、在宅看護、産業看護

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 (1) グループダイナミクスを活用した技術習得の支援	2005年1月1日～ 2010年9月20日	岸和田市医師会看護専門学校において4名のグループを構成し、グループ全員がお互いの技術が確認できるように授業を構成した。全員が患者役を体験することによって、患者の思いを推察できるようにした。また、技術を分解し、1つ1つを修得したうえで一連の看護技術へとつなげた。このことによって、学生は技術の習得が容易となり、また、1つ1つの動作が丁寧なものとなった。
(2) レポート課題の添削	2010年10月1日 ～ 2011年8月31日	太成学院大学において、、カルペニートの看護診断において、診断名のつけ方や関連図の書き方の理解が及ばない学生に対して、放課後の支援を行った。これによって、学生は臨地実習へとつなげることができた。
(3) マルチメディア機器の利用	2012年4月1日～ 2013年3月31日	藍野大学短期大学において、授業前に看護技術方法をVTRおよび写真を撮影した。授業中にそれを使用して教授するとともに、授業後はいつでも視聴できるようなシステムを構築した。このことにより、ほぼ全員の学生が根拠も基づいた技術を習得することができた。
(4) 放課後演習時間の活用による教育効果の向上	2013年4月1日～ 2015年12月30日	近大姫路大学看護学において学年を2つにわけ、授業後の自主的な技術演習の時間を確保した。また、技術演習時は実習室に赴き、技術のポイントをモデルとなって提示した。これによって学生の意欲が向上した。
(5) 事例の作成	2016年1月1日～ 現在に至る	宝塚大学および奈良学園大学保健医療学部看護学科において実施した。事例の作成にあたっては、学生が親近感をもって取り組めるよう、絵や写真を多く用い、また、患者の心理を丁寧に記載した。これによって「患者さんのことがよくわかる」といった意見が多く聞かれ、関心を抱いて授業に取り組むことができていた。
2　作成した教科書，教材		
		なし
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
(1) 学生による授業評価（宝塚大学）	2017年3月1日	宝塚大学において、全教員を対象に授業科目ごとに学生による授業評価を行った。全体の80％が理解できると回答した。自由記載では、話し方が優しい、事例を話してくれるので理解しやすい、早く実習に行きたくなった、などであった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
(1)　好文学園女子高等学校	2013年1月30日	高等学校における進路選択の一環として、模擬授業「効果的な手洗いと感染予防」を行った。何気なく行っている手洗いにも根拠があることがわかり、楽しい授業であったとの感想があった。

5　その他		
(1)　国家試験対策委員会副委員長	2012年4月1日～ 2013年3月31日	学生が苦手とする分野を分析し、放課後を活用した講義を行った。少人数グループを作成し、学生間で質問を作成し解説するスタイルを築いた。各グループに担当の教員を配置し、綿密に学生の成績状況を把握できるように調整した。
(2)　学生生活委員会副委員長	2014年4月1日～ 2015年3月31日	学生の大学生活の支援をするとともに、朝の挨拶運動や環境整備、学園祭への協力を行った。また、休退学学生について、保護者や本人を交えた面談を行い、よりよい学生生活が送れるように支援した。
(3)　紀要編集委員会副委員長	2017年4月1日～ 2018年3月31日	紀要に投稿された論文を査読者へ依頼することや、内容を精読し、紀要論文として適しているかの確認を行った。
(4)　広報委員長	2021年4月1日～ 2022年3月31日	大学及び看護学の周知を図るため、高校を訪問し、模擬授業を行った。また、オープンキャンパスの企画運営に携わった。

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許	1988年6月2日 2009年3月31日 2011年3月31日 2022年3月31日	看護師免許取得（第674230号） 認定看護管理者教育課程ファーストレベル修了 看護学修士号取得 健康学博士号取得
2　特許等		なし
3　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)　日本サーモロジー学会第35回大会シンポジスト	2018年7月	看護におけるサーモグラフィの活用について、現在までの研究結果を踏まえて解説した。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 出題傾向がみえる健康支援と社会保障制度	共著	2020年10月	ピラールプレス	介護保険制度についてまとめ、過去問題を抽出し、解説を記載した。
出題傾向がみえる看護の統合と実践	共著	2018年6月	ピラールプレス	統合看護学問題にまとめ、新たに作問し、解説を記載した。
出題傾向がみえる必修問題	共著	2018年1月	ピラールプレス	基礎看護学問題についてまとめ、過去問題を抽出し、解説を記載した。

（学術論文） 1「緩和ケア病棟の看護師長の支持的スーパービジョン」（査読有）	共著	2012年4月	日本看護学会論文集看護管理．42．Pp345-348	緩和ケア病棟における看護師長の援助行為のなかで、看護師の悩み・苦しみに対する援助行為を質的に分析した結果、7つのスーパービジョン【看護師の悩み・苦しみに対する傾聴と肯定的受容】【看護師の能力の尊重】【看護師相互間の人間関係づくり】【看護介入の援助】【看護師のストレス軽減とその管理】【実践した緩和ケアに対する振り返り】【病院組織上の管理】が示唆された。特に、患者・家族との相互作用における看護師の悩み・苦しみに対する支持的スーパービジョンとして、【看護師の悩み・苦しみに対する傾聴と肯定的受容】と【看護師の能力の尊重】が示唆された。 多治見佳代子、中村真理子、佐藤郁代、都甲裕美、山本晃代、樫原理恵、小笠原知枝
2「看護学生及び看護師の看護師イメージに関する調査」（査読有）	単著	2015年4月	近大姫路大学看護学部紀要．7．Pp25-30	看護学生が思い描いている看護師イメージを把握し、新卒看護師の看護師イメージと比較することにより、いわゆるリアリティ・ショックを防ぐことができ、新卒看護師の離職予防の一端を担うと考えた。1年生は看護師イメージを「体力が必要な」「観察力を要す」「忙しい」「専門的」「白衣」「コミュニケーションが上手」「技術の鍛錬」「テキパキ」「やりがいのある」「責任感のある」「信頼できる」「やさしい」「清潔な」と捉え、4年生は看護師イメージを「忙しい」「体力が必要な」「観察力を要す」「専門的」と捉え。、新卒看護師は看護師イメージを「忙しい」「体力が必要な」「観察力を要す」「専門的」「やりがいのある」「白衣」と捉えていた。
3「准看護師要請に携わる看護教員の職務満足感、准看護師制度の捉え方及び個人属性から分析したバーンアウトの要因」（査読有）	共著	2016年6月	日本ヒューマンヘルスケア学会誌，1(1)，Pp11-19	准看護師養成に携わる看護教員の職務満足感や准看護師制度の捉え方の現状を分析し、またバーンアウトに関与する要因を、職務満足感と准看護師制度の捉え方及び個人属性から明らかにすることを目的とし、准看護師養成所64校の248名の看護教員の対し質問紙調査を行った。その結果、看護教員は准看護師制度について「見直しが必要」「准看護師と看護師の秒無内容が明確でない」と捉えていること、離職意思のある看護教員は離職意思のない看護教員と比較し、職務満足感が低くバーンアウト得点が高いこと、看護教員のバーンアウトに影響する要因として「職務満足感」「離職意思」「年齢」「准看護師と看護師の教育内容の違いが曖昧であると思う」が抽出されること、が明らかになった。 中村真理子、小笠原知枝、樫原理恵、吉岡さおり、多治見佳代子、佐藤郁代

4「Investigation of evaluation methods of bed-bath technics in Nursing Freshmen Education」（査読有）	共著	2016年5月	Journal of Modern Education Revie,6(5),Pp351-356	The purpose of this study is to reveal each item’s effect one another, and get a policy of the way of evaluations on educations in the future through the item analysis of bed-bath technics evaluation on the lecture of technics of bed-bath and clothing. We found that 1) Grooming, scored the highest in the mean value, showed a significant positive correlation between confirmation of the act, description and consent, secure the work area, how to use towels, favorite wipe pressure, communication. It suggested that the motivation and attitude that prepare grooming is involved in technics. 2) Favorite wipe pressure, scored low in the mean value, showed a significant positive correlation between how to wipe eyes. Moreover the item of how to wipe eye showed a significant positive correlation between confirmation of the act, description and consent, environmental adjustment. Therefore, to get technics of clear description and agreement is not only important itself. It also leads technical provision which students desire. We must teach students these technics in various technical exercises. Ikuyo Sato、Nanae Shintani、Shigeki Tatsukawa
5「看護におけるハンドマッサージの実践構成要素の抽出とその効果」（査読有）	単著	2017年3月	宝塚大学紀要. No.30. 187-198	看護師の実施する身体マッサージにおいて、根拠に基づいた看護を提供する能力として構成されている要素をつ輸出し、今後の教育内容の構成に反映することを目的とし、文献レビューを行った。研究対象は医学中央雑誌Web版（2016）を用い、看護に関連したハンドマッサージをキーワードに検索された中から、条件を満たした15件を分析対象とした。調査内容は、研究目的・研究対象者・介入方法・評価方法・結果及び効果とした。研究目的はリラクセーション効果および身体的・心理的反応の検証、研究対象者や健常者、終末期患者、高齢者、認知症患者、精神疾患患者、介入方法は手・指・手関節・前腕を「もむ・回す・包み込む」という手技を1回5～20分間実施、評価方法は心理的指標・心電図・脳波・疼痛スケール、感情・心理・リラックス度検査など、効果は副交感神経優位の生理的変化を示し、リラックス効果を示した。研究対象の多くが健常人であること、対象数が少ないこと、他の身体部位との比較検討、実施時間とその効果、手技・方法の多面性、評価方法の複雑化・心身への侵襲など、教育の内容構成には多くの課題が示唆された。

6「老人性皮膚掻痒症のシュガー・スクラブによるスキンケア効果の検証」（査読有）	共著	2019年3月	医療福祉情報行動科学研究,第6号,65-71.	皮脂量の低下によっておこる老人性皮膚掻痒症に対して、スキンケアに効果があるシュガー・スクラブを用いた清拭を5日間行い、その効果を検証した。その結果、シュガー・スクラブを用いた群では皮膚水分量・皮脂量ともに有意に増加することが確認された。シュガー・スクラブを用いた清拭は皮脂量を増加させ、皮膚のバリア機能を促進させることが示唆された。 高橋寿奈、斎藤英夫、山口求、吉村雅世、佐藤郁代、野口寿美子、井上昌子、守本とも子
7「重度心身障害児（者）の清潔援助としてスキンケアの提供によるストレスに関する研究」（査読有）	共著	2020年3月	医療福祉情報行動科学研究,第7号,73-80.	重度心身障害児は同一姿勢保持を余儀なくされることも多く、圧迫部位などの皮膚は湿疹や痒みなどとなり、ストレス誘因の一つともなる。本研究では、「カラダキレイ」を用いた清拭を行い、その効果を検証した。その結果、水分値・油分値ともに介入による上昇を確認した。皮膚が脆弱な重度心身障害児においては、皮膚トラブルの予防につながることが示唆された。唾液アミラーゼ値に介入前後の有意差を確認できなかったが、非常に高い値を示しており、高いストレス状態にあることが示唆された。 山口求、佐藤郁代、斎藤英夫、野口寿美子、松居典子、木野田利枝、門脇志保、村井久美子、谷口奈美、守本とも子
8 「ケアマネジメントに対する訪問看護師の現状と課題」（査読有）	共著	2021年3月	医療福祉情報行動科学研究,第8号,19-24.	医療系の専門資格をもつ介護支援専門員が少ないという現状の中、訪問看護師がその状況と今後をどのように考えているのか、その思いをまとめ、今後の課題解決への基礎資料とすることを目的に、訪問看護ステーションに勤務する管理者及び訪問看護経験が3年以上の常勤看護師54名に質問紙調査を行った。その結果、訪問看護師は業務の中でケアマネジメントを行い、それを自身の役割と考えていることがわかった。しかし、本来の技能が活用されないこと、無償からくる仕事のやりがいや満足度の低下、介護支援専門員との役割の曖昧さからくるストレス、療養者の安全への責任など、心理的な負担が大きいことが考えられた。 佐藤郁代、新谷奈苗、丸上輝剛
9 「サーモグラフィを活用したハンドマッサージによる癒し効果の検証」（査読有）	共著	2021年3月	s	今日の社会は、情報化、少子高齢化、核家族化、経済不況など、目まぐるしく変化する状況が長期化している。本研究では、健康成人19名にハンドマッサージを15分間行い、心身に及ぼす癒し効果を検証することを目的とした。生理的指標としてサーモグラフィ法による鼻部皮膚表面温度及び心拍変動を測定し、心理的指標としてVASを用いた心地よさ及びPOMS2日本語版短縮版を測定した。介入後、鼻部皮膚表面温度は直後に上昇し15分間持続した。心拍変動に有意差はなかった。心地よさは優位に上昇し、POMS2日本語版短縮版の下位尺度の「怒り-敵意」「混乱-当惑」「抑うつ-落ち込み」「疲労-無気力」「緊張-不安」は有意に低下した。 佐藤郁代、涌井忠昭、新谷奈苗

10 「大学生の首尾一貫感覚（SOC）と生活習慣および健康意識との関連」（査読有）	共著	2021年3月	医療福祉情報行動科学研究,第8号,19-24.	ストレスに対する捉え方の一つにストレス対処能力（SOC）がある。SOCが高い人ほどストレスを上手く対処できるとされ、これまでの経験や生活によって変わる。そこで本研究では、看護大学生のSOCと生活習慣及び健康意識の関連を明らかにすることを目的に、大学生66名に質問紙調査を行った。その結果、看護大学生のSOCの平均値は52.92±4.44であった。SOC「有意味感」を独立変数とした重回帰分析の結果、SF12「活力」、「近い距離や階段はできるだけ歩く」、CES-Dが抽出された（R2≒0.39）。 佐藤郁代、新谷奈苗、永岡裕康、齋藤英夫
9 「Z世代を対象としたセルフハンドマッサージによる肩こりおよびストレスの変化」（査読有）	共著	2021年7月	形態・機能,第20巻第1号,10-18.	肩こりの原因の一つにストレートネックがある。本研究では、Z世代を対象に、経穴刺激を組み合わせたセルフハンドマッサージを実施することにより肩こり感およびストレスの変化を明らかにすることを目的とした。その結果、肩こり間の緩和、左右僧帽筋上部筋硬度の低下および左右頚部健康上部皮膚音の低下を認め、肩こり感を緩和することが明らかになった。さらに、血圧値および脈拍値の低下、POMS下位尺度の「怒り-敵意」「疲労-無気力」「緊張-不安」および「活気-活力」の低下を認め、ストレス緩和の一助になることが確認された。 佐藤郁代、涌井忠昭、辻下聡馬、齋藤英夫、中村真理子
（学会発表） 1「Verification of the effect of hand massage on autonomic nervous system」	共著	2019年1月	EAFONS2019	ハンドマッサージが自律神経に与える効果について、健常成人20名を対象として検証した。ハンドマッサージによりSDNNが有意に低下し、Total Powerが増加することにより、ハンドマッサージがストレス対処能力を向上することが示唆された。自覚症状でも怒り、疲労などネガティブな気分が低下することにより、情緒を安定させ、不安を緩和し、リラクセーション効果をもたらす効果があることが示唆された。 Ikuyo Sato、Yukiko Minegishi、Nanae Shintani、Mariko Nakamura

2「Perceptions towards Diet and Exercise among Type 2 Diabetes Patients in Nara Prefecture」	共著	2020年1月	EAFONS2020	The purpose of this study was to explore the perceptions of residents in Nara Prefecture with Type 2 diabetes related to diet and exercise.Subjects included eleven male and ten females. The average age was 70.4 years old (SD = 7.6). The families, environment, local events, and the characteristics of workplaces in Nara Prefecture greatly affected the dietary and physical activities of the participants. Psychosocial themes related to diet included depression and lack of self-control. Haruna Tanaka, Ikuyo Sato, Sumiko Noguchi, Namie Ueki, Jillian Inouye, Tomoko Morimoto
3「緩和ケア病棟の看護師の悩み・苦しみに対する看護師長の援助行為」	共著	2011年9月	日赤医学. 63(1).	終末期のがん患者との関わりにおいて、看護師が体験する苦悩に対して支援することが緩和ケア病棟看護師長の役割について考えた。緩和ケア病棟で患者との対人援助の中で看護師長が看護師を支えるために看護師の支援の重要性は報告されているが、援助行動は追及されていない現状である。緩和ケア病棟看護師長6 名に半構造面接を用いた1 対1 での面接調査を行い、得られた記述的データを質的、帰納的に分析した。結果、看護師の悩み・苦しみに対する看護師長の援助行為の要素が抽出された。緩和ケア病棟における看護師長の援助行為は、看護師と患者との関わりの中で生ずる様々な悩み・苦しみに対する援助行為は【看護師の悩み・苦しみに対する傾聴と肯定的な受容】【看護師の能力の尊重】、【看護師相互間の人間関係づくり】【看護介入の援助】【看護師のストレス軽減とその管理】【実践した緩和ケアに対する振り返り】【病院組織上の管理】などの7 カテゴリーを含んでいた。 p.235 多治見佳代子、中村真理子、佐藤郁代、樫原理恵、小笠原知枝
4「基礎看護学実習の学生仲間集団のケアリング行動に関与する要因分析」	共著	2013年8月	日本看護教育学会学術集会	基礎看護学実習の実習グループ間における看護学生間のケアリング行動を明らかにし、ケアリング行動に関与する諸要因を明らかにするため、看護学生285名を対象とした質問紙調査を実施した。その結果、実習グループ間においては、心の支えとなる友だちを見出すなどのケアリング行動が高かった。ケアリング行動は共感性と有意な相関があるが、看護学生は共有経験のみが高い同情型の「共有型」が多く、自己と他者を分離し客観的に自己を見つめなおすことでケアリング行動が向上することが示唆された。共有経験と共有不全経験が共に高い「両高型」であること、患者・家族との関係性、臨地実習指導者の関わりなどがケアリング行動に関与する要因であることが示唆された。p.147 佐藤郁代、中村真理子、多治見佳代子、樫原理恵、小笠原知枝

5「ハンドマッサージによる皮膚表面温度の変化」	共著	2017年7月	第34回日本サーモロジー学会	ハンドマッサージがもたらすリラクセーション効果の持続を検討するため、健康成人5名を対象に15分間のハンドマッサージを実施した。実施前・直後・5分後・15分後にサーモカメラを用いて、鼻尖部の皮膚表面温度を測定した。ハンドマッサージにより、鼻尖部の皮膚表面温度が上昇し、15分後も持続して上昇していることがわかった。このことより、ハンドマッサージによるリラクセーション効果は最低15分間持続すると考えられる。今後、対象数を増やし、検証を続ける。P. 17 佐藤郁代、立川茂樹、中村真理子、新谷奈苗
6「訪問看護師の働く環境と思い―ケアマネジメント業務について―」	共著	2018年10月	産業保健人間工学会第23回大会	今後、訪問看護師が本来の訪問看護業務に加え、ケアマネジメントを行っていくべきか否かの思いをまとめ、今後の課題解決への基礎資料とすることを目的とし、奈良県内の73カ所の訪問看護ステーションに勤務する訪問看護師の経験が3年以上の看護師54名を対象として質問紙調査を行った。医療保険制度の種類や介護支援専門員の有無にかかわらず、訪問看護師はケアマネジメントを行っており、それを自身の役割であると考えていたが、オーバーワークとなっていることが考えられ、介護支援専門員との業務分担や連携の必要性が示唆された。 介護支援専門員との連携が困難な場面や訪問看護ケアマネジメント加算報酬の必要性は設置母体で有意に差があり、今後も検討を重ねる必要性が示唆された。p. 29-30 佐藤郁代、新谷奈苗、吉水清、丸上輝剛、日高佑都
7「ハンドマッサージによるリラクセーション効果の検証―高齢者を対象として―」	共著	2019年9月	日本サーモロジー学会第36回大会	ハンドマッサージによるリラクセーション効果について、地域在住高齢者7名を対象として検証した。ハンドマッサージにより主観的な心地よさを感じ、鼻尖部皮膚表面温度が上昇したことより、リラクセーション効果をもたらすことが示唆された。しかし、心拍変動周波数成分に変化がみられなかったことより、インパルスの減少によって神経伝導速度や脳内情報処理が遅延したことが一因であると考えられた。高齢者を対象とする場合は、マッサージ時間や大勢について検討することの示唆を得た。P. 18-19 佐藤郁代、涌井忠昭、新谷奈苗、永岡裕康

8「看護学生の生活の送り方と健康状態およびストレス状況の関連」	共著	2019年10月	日本産業看護学会第8回学術集会	看護大学3年生74名に対し、ストレスに対処する力を向上する要因のひとつには、規則正しい生活習慣があることを、先行研究を引用し説明した。その後、自分の心身の状況を知る目的で、一週間の健康観察カードの記録と、生活の送り方と心身の健康状態のアセスメントを依頼した。その記述結果から5名の研究者により、学生の「気づき」に着目し、内容分析を行った。その結果、スマートフォン使用時間の長さが睡眠時間を圧迫していることが認識できていないことが明らかになった。また朝食を摂取した日は、体調の良さや温かく感じるといった感覚を新鮮に感じていたことから、朝食摂取と体調との関連が認識できていないことが明らかになった。記録することと、自分の生活や心身の健康状態に着目したことで、心身の変化を認識することができたことが明らかになった。p. 121 新谷奈苗、佐藤郁代、永岡裕康、丸上輝剛
9「健康的な生活習慣によるストレス対処能力の向上への取り組み～大学生の生活習慣に焦点を当てて～」	共著	2019年10月	日本産業看護学会第8回学術集会	大学生のストレスならびにストレス対処能力と生活習慣および生活の質の関連を明らかにすることを目的とし、領域実習に臨む前の看護大学3年生74名を対象として調査を行った。ストレス値は「朝食」「外出と休養」「身体機能」と弱い負の相関がみられた。SOCは「手軽な運動」「歩く」と弱い正の相関が、「活力」と強い正の相関がみられた。SOC下位尺度の把握可能感は「心の健康」と弱い正の相関が、「活力」と弱い負の相関がみられた。有意味感は「活力」「社会生活機能」「手軽な運動」「歩く」と強い正の相関が、「全体的健康観」「日常役割機能（精神）」「ストレスためない」と弱い正の相関がみられた。SOCの高い群は低い群に比較し「活力」が有意に高かった。 p. 112 佐藤郁代、新谷奈苗
10「大学生のストレス対処能力と生活習慣ーストレス対処能力を向上させるための生活習慣教育ー」	共著	2019年10月	産業保健人間工学会第24回大会	日常生活体験が不足した看護学生に清拭を教授するにあたり、本校では夏の体験学習をはじめ、分習法を用いていた。その効果について実験研究を行った。その結果、「タオルの絞り方・巻き方」「湯の温度管理」「各部位の拭き方」など、分けて教授したほうがその後のテストの結果も有意に高いことがわかった。 p. 25-27 佐藤郁代、新谷奈苗、守本とも子
11「働き方改革状況の内部評価に	共著	2019年10月	産業保健人間工学会第24回大会	労働者の性格や行動特性が、働き方改革に対する評価にどのように関係するかを明確にするために、「働き方改革進展」「勤務制度充実」「福利厚生充実」「福利厚生使いやすさ」それぞれを目的変数とし、SOC、性格特性、対処行動特性を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、SOCと計画的対処が働き方改革進展の評価を促進することが明らかになった。計画的対処は勤務制度充実、福利厚生使いやすさの説明変数にも選択されており、潜在的特権意識は、勤務制度充実、福利厚生充実、福利厚生使いやすさの全てにおいて、抑制的に作用していた。これらのことから、働き方改革の進展状況を従業員に内部評価させる場合は、SOC、計画的対処、潜在的特権意識の高低により評価結果が異なるか否かを、分散分析等によって確認することが有効であると示唆された。p. 22-23 永岡裕康、新谷奈苗、新谷昌也、丸上輝剛、佐藤郁代

12「仕事と介護の両立のための職業生活へのサポート」	共著	2021年11月	日本産業看護学会第10回学術集会	働き方改革関連法案が策定されたが、我が国の会社組織の習慣からか、介護休業制度などの利用がしづらく介護離職となるケースがある。また、要介護者が亡くなった後のひきこもりや閉じこもりといった次の課題に繋がることも考えられ、介護をしながら仕事が継続できる労働環境構築が求められている。本研究では、地域を看る看護職者ができる支援の現状を明らかにすることを目的に、自宅で介護をしながら仕事を持つ60歳以下の介護者に、仕事との両立が難しいと感じた場面や困った場面と職場のサポートについて、インタビュー調査を行った。その結果、両立が難しいと感じたのは、特発的な事象の発生時が最も多く、次いで、時間的余裕のなさであった。調査対象者は、「周りに迷惑をかける」「自営業のためサポートがない」などの理由で職場のサポートを活用せず、今後も、職場のサポートよりも活用できるサービスを求めると回答した。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　5 年　 3 月　31 日

氏名　　井上　葉子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
看護学	公衆衛生看護、地域・在宅看護

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　教育方法の実践例		
在宅看護論実習 （非常勤講師）	平成25年4 月～平成 26 年 3 月	科目責任者である教授とともに実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告、次年度の実習依頼を担った。
地域看護学Ｖ　宝塚大学 （非常勤講師）	平成25年4 月～平成 26 年 3 月	科目責任者である教授とともに、地域診断演習時の指導、地区踏査の指導を担った。
地域看護学実習　宝塚大学 （非常勤講師）	平成25年4 月～平成 26 年 3 月	科目責任者である教授とともに実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を担った。
宝塚大学における授業実践	平成25年4月～平成26年3月	参加型・体験型の授業展開を中心とし、毎時間、具体的な事例を通して考えさせる学習形態を取り入れることで、学生の看護実践力を高め、理解力を深めることができるように工夫した。
在宅看護概論　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4 月～平成 27 年 3 月	在宅における看護は療養者の生活を健康面から支援する一役を担っている。また看護の対象が病気や障害をもった療養者だけでなく小児から高齢者まで幅広い年代やライフステージにある健康課題を抱えた方を対象とするようになっている。在宅看護概論では科目責任者として全てを担当し、学生に「在宅看護は責任が重い分喜びややりがいも大きい」ことを理解してもらえるよう事例を紹介するなどの工夫に努めた。
在宅看護論　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4月～平成27年3月	科目責任者として全てを担当し、在宅看護の目的である地域で暮らす人々が望む生活の質を維持し自立できるよう支援するために、社会資源を用いながら生活の場における看護を提供していくことを学生がより具体的に理解できるよう、映像教材や実際の事例等を用いた授業を行った。
在宅看護論演習　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4月～平成27年3月	科目責任者として担当し、地域で生活・療養している人々を援助していくためには看護職だけではなく、医療・保健・福祉の機関や職種が一体となって支援していく必要がある。特にこれからの看護に求められるケアマネジメントの視点を養うために、演習では「在宅療養者と共に暮らす家族の住まい」の具体案を提案できよう、福祉用具展示施設の見学、住まいの展示施設

		の見学、グループワークとポスターセッションを行い、学生同士の学びを深めるように工夫して授業を行った。
家族看護論　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年 4月～ 平成27年 3月	科目責任者として全てを担当した。家族は社会生活を営む上での基本的な集団単位であり、家族がライフサイクルのどの段階にあるかによって、その構成員の家族内外での役割や経済的・時間的生活が変化してくる。そのことを踏まえて援助対象となる家族の捉え方について家族セルフケア機能、家族システム理論、家族ストレス対処理論、家族生活力量モデル等を紹介しながら事例を通した看護の理解に努めた。
基礎看護学実習Ⅰ　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年 4月～ 平成27年 3月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。既習の看護技術が患者の個別性を尊重し展開できるよう、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。
基礎看護学実習Ⅱ　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年 4月～ 平成27年 3月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。既習の看護技術が患者の個別性を尊重し展開できるよう、事前に看護過程の復習、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。また看護過程については、苦手意識を克服できるよう個々の学習進度を理解した上で指導するように配慮した。
在宅看護論実習　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年 4月～ 平成27年 3月	科目責任者として実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告、次年度の実習依頼を行った。実習においては、小児から高齢者を対象とする在宅看護を行う中で、対象の年齢や疾患、障害による身体の変化、対象をとりまく環境、社会資源の活用、他職種との連携における看護職の役割について同時に考えられるように指導を行った。対象の心に寄り添う看護が行えるよう、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、対象と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患者の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。

公衆衛生看護学Ⅲ（産業保健）　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年 4月～ 平成28年 9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は1コマを担当し、職業性疾病の原因と予防・看護（アスベスト、振動障害、感音性難聴、VDT 症候群）について講義した。
公衆衛生看護学Ⅱ（学校保健）　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年 4月～ 平成28年 9月	科目責任者である非常勤講師と教授と講師とともに講義を担当した。井上は1コマを担当し、学校環境衛生について講義した。
公衆衛生看護学方法論Ⅰ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年 4月～ 平成28年 9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は3コマを担当し、母子保健施策と保健師の活動、乳幼児期の成長発達と保健指導、難病保健の動向について講義した。
公衆衛生看護学方法論Ⅱ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年 4月～ 平成28年 9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は2コマを担当し、家庭訪問における保健指導、新生児訪問についての講義と新生児訪問ロールプレイの演習を行った。
基礎看護学実習Ⅱ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年 9月～ 平成28年 12月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。既習の看護技術が患者の個別性を尊重し展開できるよう、事前に看護過程の復習、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。
小児看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年 9月～ 平成28年 12月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。実習においては、重症心身障害児を対象とする看護を行う中で、障害による身体の変化と成長発達の順序性、他者との愛着形成、遊びの意義と必要性について同時に考えられるように指導を行った。また、障害児をとりまく環境、他職種との連携における看護職の役割についても指導した。患児の心に寄り添う看護が行えるよう、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、患児と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患児の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。

老年看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年 9月～ 平成28年 12月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。実習においては、高齢者を対象とする看護を行う中で、加齢による身体の変化と家族関係と社会的な役割の変化、介護保険制度、福祉サービル利用について同時に考えられるように指導を行った。また、高齢者をとりまく環境、他職種との連携における看護職の役割についても指導した。また人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、高齢者と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患者の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
成人看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年 1月～ 平成29年 2月	単位認定者の講師とともに実習指導を行った。実習においては、成人の急性期、周手術期看護を行う中で、手術侵襲による身体の変化とや手術に対する不安、就労生活、家庭生活の中断による家族や生活状況の変化における看護の役割について同時に考えられるように指導を行った。また、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、患者と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患者の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
統合看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年 4月～ 平成29年 6月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。実習においては、急性期にある複数の患者に対して、援助の優先順位を考え、病棟のケア計画に則った援助計画を立案し、チームの一員として援助を行うよう留意して指導を行った。また、師長やチームリーダー、メンバーのシャドーイングを通して、リーダーシップ、メンバーシップと看護管理の実際を学ぶとともに専門外来の見学を通して他職種との連携の実際と医療チームにおける看護の役割を学ばせた。
卒業研究　奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年 4月～ 平成29年 10月	担当学生の論文作成の全てにおいて担当した。2 名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献学的研究であった。学生が興味をもったテーマについて先行研究を分析し考察を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて指導を強化した。

成人看護学援助論Ⅰ（急性期・周手術期） 奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年10月～平成30年3月	科目責任者である准教授とともに、看護過程演習の指導を担当した。
成人看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年4月～平成30年3月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告、来年度の実習調整を行った。実習においては、成人の急性期、周手術期看護を行う中で、手術侵襲による身体の変化とや手術に対する不安、就労生活、家庭生活の中断による家族や生活状況の変化における看護の役割について同時に考えられるように指導を行った。また、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、患者と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患者の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
公衆衛生看護学方法論Ⅰ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は4コマを担当し、母子保健施策と保健師の活動、乳幼児期の成長発達と保健指導、難病保健の動向について講義した。
公衆衛生看護学方法論Ⅱ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は2コマを担当し、家庭訪問における保健指導、新生児訪問についての講義と新生児訪問ロールプレイの演習を行った。
公衆衛生看護学実習Ⅰ（地域活動）　奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに保健所・市町村における実習を担当し、健康教育、家庭訪問、地区診断等の指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）　奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに学校（中学校・高等学校）における実習を担当し、実習指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学実習Ⅲ（産業保健）　奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに事業所における実習を担当し、実習指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年10月～平成31年3月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに講義を進めた。井上は2コマを担当し、成人保健の動向、成人期の保健活動・保健師動の内容について教授した。

卒業研究　奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年 4月～ 平成30年 11月	担当学生の論文作成指導の全てにおいて担当した。2名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献学的研究であった。学生が興味をもったテーマについて先行研究を分析し考察を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて指導を強化した。
基礎看護学実習Ⅱ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年 9月～ 平成30年 12月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。既習の看護技術が患者の個別性を尊重し展開できるよう、事前に看護過程の復習、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。
公衆衛生看護学方法論Ⅰ　奈良学園大学 （常勤講師）	平成31年 4 月～令和元年 9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は4コマを担当し、母子保健施策と保健師の活動、乳幼児期の成長発達と保健指導、難病保健の動向について講義した。
公衆衛生看護学方法論Ⅱ　奈良学園大学 （常勤講師）	平成31年 4月～ 令和元年 9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は2コマを担当し、家庭訪問における保健指導、新生児訪問についての講義と新生児訪問ロールプレイの演習を行った。
公衆衛生看護学診断演習　奈良学園大学 （常勤講師）	平成31年 4月～ 令和元年 9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに講義を担当した。井上は2コマを担当し、保健師が行う家庭訪問について講義した。
公衆衛生看護学実習Ⅰ（地域活動）　奈良学園大学 （常勤講師）	平成31年 4月～ 令和元年 9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに保健所・市町村における実習を担当し、健康教育、家庭訪問、地区診断等の指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）　奈良学園大学 （常勤講師）	平成31年 4月～ 令和元年 9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに学校（中学校・高等学校）における実習を担当し、実習指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学実習Ⅲ（産業保健）　奈良学園大学 （常勤講師）	平成31年 4月～ 令和元年 9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに事業所における実習を担当し、実習指導から評価までを行った。

基礎看護学実習Ⅰ　奈良学園大学 （常勤講師）	令和元年 9月～ 令和元年 12月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成を行った。実習においては、学生が看護師や患者とのコミュニケーションをスムーズに結ぶことができるように、また看護援助を根拠につなげることに留意しながら指導を行った。
公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）奈良学園大学 （常勤講師）	令和元年 10月～ 令和2年 3月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに講義を進めた。井上は2コマを担当し、成人保健の動向、成人期の保健活動・保健師動の内容について教授した。
卒業研究　奈良学園大学 （常勤講師）	平成31年 4月～ 令和元年 11月	担当学生の論文作成指導の全てにおいて担当した。2名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献学的研究であった。学生が興味をもったテーマについて先行研究を分析し考察を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて指導を強化した。
基礎看護学実習Ⅰ　奈良学園大学 （常勤講師）	令和元年 12月～ 令和2年 2月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成を行った。既習の看護技術が患者の個別性を尊重し展開できるよう、事前に看護過程の復習、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。
公衆衛生看護学方法論Ⅰ　奈良学園大学 （常勤講師）	令和2年 4月～ 令和2年 9月	科目責任者として講義のすべてを担当した。母子保健活動、難病保健活動、感染症保健活動、健康危機管理、地域診断について講義した。講義はすべてオンライン（Zoomとgoogle classroom）で行った。
公衆衛生看護学診断演習　奈良学園大学 （常勤講師）	令和2年 4月～ 令和2年 9月	科目責任者である教授と准教授、講師とともに実習グループごとの学生指導を担当した。
公衆衛生看護学実習Ⅰ（地域活動）　奈良学園大学 （常勤講師）	令和2年 4月～ 令和2年 9月	科目責任者である教授と准教授、講師とともに保健所・市町村における実習を担当し、健康教育、家庭訪問、地区診断等の指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）　奈良学園大学 （常勤講師）	令和2年 4月～ 令和2年 9月	科目責任者である教授と准教授、講師とともに学校（中学校・高等学校）における実習（オンライン実習）を担当し、健康観察についての講義、実習指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学実習Ⅲ（産業保健）　奈良学園大学 （常勤講師）	令和2年 4月～ 令和2年	科目責任者である教授、准教授、講師とともに事業所における実習を担当し、実習指導から評価までを行った。

	9月	
公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）奈良学園大学 （常勤講師）	令和 2 年 10 月～ 令和 3 年 3 月	科目責任者である教授と准教授、講師とともに講義を進めた。井上は 3 コマを担当し、健康危機管理、災害サイクルと保健活動、感染症集団発生時の保健活動の内容について教授した。講義はすべてオンライン（Zoom と google classroom）で行った。
卒業研究　奈良学園大学 （常勤講師）	令和 2 年 4 月～ 令和 2 年 11 月	担当学生の論文作成指導の全てにおいて担当した。3 名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献学的研究であった。学生が興味をもったテーマについて先行研究を分析し考察を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて指導を強化した。
在宅看護学特論Ⅳ（地域包括支援）　奈良学園大学大学院看護学研究科 （常勤講師　兼担教員）	令和 2 年 10 月～ 令和 5 年 3 月	科目責任者である教授とともに講義を進めた。井上は 2 コマを担当し、医療連携と地域包括支援システム、譫妄、認知症、脳卒中後遺症患者の地域包括ケア連携の内容について教授した。
公衆衛生看護学方法論Ⅰ　奈良学園大学 （常勤講師）	令和 3 年 4 月～ 令和 3 年 9 月	科目責任者として講義のすべてを担当した。母子保健活動、難病保健活動、感染症保健活動、健康危機管理、地域診断について講義した。講義はすべてオンライン（Zoom と google classroom）と対面（演習）で行った。家庭訪問演習では、協力を得られた育児中の母子とオンライン（ZOOM）でつなぎ、乳児の様子を観察し、母から育児に関する話を聞き、さらに学生から母に質問するなど実際の家庭訪問での状況を想起させるような情報収集とコミュニケーションの機会を設けるなど看護実践力の強化に努めた。
公衆衛生看護学Ⅱ（学校保健）　奈良学園大学 （常勤講師）	令和 3 年 4 月～ 令和 3 年 9 月	科目責任者として助教 1 人とオムニバスで担当した。井上は 8 コマを担当し、学校保健の定義と目的、学校経営、教職員の役割、学校環境衛生と学校安全計画、喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育、心の健康問題とその対応、養護教諭の活動の実際について担当した。学校経営の単元では元校長を養護教諭の活動の実際の単元では養護教諭をゲストスピーカーとして招き学校の教育現場での状況を想起させるような講話を聴講する機会を設けるなど看護実践力の強化に努めた。
公衆衛生看護学診断演習　奈良学園大学 （常勤講師）	令和 3 年 4 月～ 令和 3 年 9 月	科目責任者である教授と准教授、講師とともに実習グループごとの学生指導を担当した。また井上は、学校保健に関する 4 コマを担当し、学校における健康課題のアセスメントと保健指導の一環である「保健だより」作成について教授し、実習校の状況に合わせた保健だより案の作成まで指導した。

公衆衛生看護学実習Ⅰ（地域活動）　奈良学園大学 （常勤講師）	令和 3 年 4 月～ 令和 3 年 9 月	科目責任者である教授と准教授、講師とともに保健所・市町村における実習を担当し、健康教育、家庭訪問、地区診断等の指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）　奈良学園大学 （常勤講師）	令和 3 年 4 月～ 令和 3 年 9 月	科目責任者として実習要項の作成から実習校との調整、実習スケジュールの企画・調整、実習評価まで全てを担当した。実習指導は教授と准教授、講師とともに担当し、臨地、学内、オンラインという実習形態を組み合わせて、健康観察、学校環境測定、保健指導（保健だよりの作成）、健康診断等について実習校の養護教諭等と協力し学生の理解と技術修得に努めた。
公衆衛生看護学実習Ⅲ（産業保健）　奈良学園大学 （常勤講師）	令和 3 年 4 月～ 令和 3 年 9 月	科目責任者である教授、准教授、講師とともに事業所における実習を担当し、実習指導から評価までを行った。井上は金融機関における実習指導を担当し、事業場の特徴、労働者の健康問題と必要な支援について、生活と労働と健康を結び付けて学生が思考できるような関わりと助言を行った。
公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）奈良学園大学 （常勤講師）	令和 3 年 10 月～ 令和 4 年 3 月	科目責任者である教授と准教授、講師とともに講義を進めた。井上は 4 コマを担当し、健康危機管理、災害サイクルと保健活動、感染症集団発生時の保健活動、母子（親子）保健活動、難病保健活動の内容について教授した。
卒業研究　奈良学園大学 （常勤講師）	令和 3 年 4 月～ 令和 3 年 11 月	担当学生の論文作成指導の全てにおいて担当した。4 名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献学的研究であった。学生が興味をもったテーマについて先行研究を分析し考察を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて重点的に指導した。
公衆衛生看護学方法論Ⅰ　奈良学園大学 （常勤講師）	令和 4 年 4 月～ 令和 4 年 9 月	科目責任者として講義のすべてを担当した。母子保健活動、難病保健活動、感染症保健活動、健康危機管理、地域診断について講義した。家庭訪問演習では、協力を得られた育児中の母子とオンライン（ZOOM）でつなぎ、乳児の様子を観察し、母から育児に関する話を聞き、さらに学生から母に質問するなど実際の家庭訪問での状況を想起させるような情報収集とコミュニケーションの機会を設けるなど看護実践力の強化に努めた。
公衆衛生看護学診断演習　奈良学園大学 （常勤講師）	令和 4 年 4 月～ 令和 4 年 9 月	科目責任者である教授と准教授、講師の 3 名とともに公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）の実習グループすべての学生指導を担当した。また井上は、学校保健に関する 4 コマを担当し、学校における健康課題のア

		セスメントと保健指導の一環である「保健だより」作成について教授し、実習校の状況に合わせた保健だより案の作成を指導した。さらに実習校で行う保健教育「心肺蘇生法」の授業案作成から模擬授業までを実習校の養護教諭と協力のもと行った。
公衆衛生看護学Ⅱ（学校保健）　奈良学園大学 （常勤講師）	令和 4 年 4 月～ 令和 4 年 9 月	科目責任者として助教 1 人と共にオムニバスで担当した。井上は 8 コマを担当し、学校保健の定義と目的、学校経営、教職員の役割、学校環境衛生と学校安全計画、喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育、心の健康問題とその対応、養護教諭の活動の実際について担当した。学校経営の単元では元校長を養護教諭の活動の実際の単元では養護教諭をゲストスピーカーとして招き学校の教育現場での状況を想起させるような講話を聴講する機会を設けるなど看護実践力の強化に努めた。また保健指導の実際では、「心肺蘇生法」の授業案を作成し模擬授業の実践を行い保健指導の実践力強化の機会とした。
公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）　奈良学園大学 （常勤講師）	令和 4 年 4 月～ 令和 4 年 9 月	科目責任者として実習要項の作成から実習校との調整、実習スケジュールの企画・調整、実習指導ならびに実習評価まで全てを担当した。実習指導では臨地、学内という実習形態を組み合わせて、健康観察、学校環境測定、保健教育（心肺蘇生法）、保健指導（保健だよりの作成）、健康診断等について実習校の養護教諭等と協力し学生の理解と技術修得に努めた。
公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）奈良学園大学 （常勤講師）	令和 4 年 10 月～ 令和 5 年 3 月	科目責任者である教授と准教授、講師の 3 人と共にオムニバスで 15 回の講義を務めた。井上は 2 コマを担当し、母子（親子）保健活動、難病保健活動の内容について教授した。また授業では難病患者の在宅療養生活の様子を ALS 患者・家族の協力を得て撮影した動画教材を活用し、難病患者の対象理解と家族と生活の理解に努めた。
卒業研究　奈良学園大学 （常勤講師）	令和 4 年 4 月～ 令和 4 年 11 月	担当学生の研究テーマ選定ならびに論文作成指導、成績評価の全てにおいて担当した。2 名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献学的研究であった。学生が興味をもったテーマについて先行研究を分析し考察を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて重点的に指導した。
地域包括ケア論　奈良学園大学 （常勤講師）	令和 4 年 9 月～ 令和 5 年 3 月	科目責任者として 8 コマすべてを担当した。ケアマネジメントの基盤となる地域ケアシステムや活用される社会資源、保健医療福祉制度の現状や利用に伴う問題点、多職種連携やケアマネジメントの方法について

		教授した。特に「地域における看護活動の実際」の単元では奈良県天川村のコミュニティナースをゲストスピーカーとして招き、僻地における看護活動の実際とケアマネジメントの方法、地域の活性化と社会資源の活用の実際に関する講話を聴講する機会を設け看護マネジメント能力の強化に努めた。またケアマネジメント演習では独居高齢者と乳幼児のいる家族の事例を取り上げ「安全な住まいと住まい方」についての各自の提案とプレゼンテーションによりケアマネジメントを考える上での視点の深化を図った。
2　作成した教科書，教材		
在宅看護論実習の手引き	平成25年8月	宝塚大学看護学部の「在宅看護論実習」（３年次配当）において、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、思考過程、記録をする際の留意点、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
在宅看護論実習の手引	平成26年4月	白鳳女子短期大学看護学専攻「在宅看護論実習」（3年次配当）において、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、思考過程、記録をする際の留意点、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
成人看護実習Ⅰ（急性期・周手術期）実習記録用紙ガイドライン	平成29年4月	成人看護学Ⅰ（急性期・周手術期）において、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、思考過程、記録をする際の留意点などについてまとめた冊子を作成した。
成人看護学のデジタル教材：「一次救命（病室編）」、「一次救命（廊下編）」、「段階的離床」	平成29年11月	成人看護学の学内演習・臨地実習時のイメージがつくように、心肺蘇生法、AED の使用方法、緊急時の協力要請、手術後の段階的離床についてのデジタル教材を作成した。
健康保育学演習（家庭看護実習含む）ワークシート	令和 2 年3月 31 日	大阪教育大学で開講している健康保育学演習（家庭看護実習を含む）において、人間の健康の概念をふまえ子どもの成長発達と生活を理解し、家庭と集団保育の場で必要な知識と技術について具体的な学習内容についてまとめた冊子を共同で作成した。 著者名：関谷まり・井上葉子
健康教育のデジタル教材：「笑って健康に　ラフターヨガ」	令和 2 年12月	保健師の保健活動の一つである健康教育用のデジタル教材として、「ラフター（笑い）ヨガ」の楽しみ方、注意事項、始まりと終わり、セッション例をわかりやすく伝達できるよう工夫して作成した。

2021 年度公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）実習要項	令和 3 年 3 月	専門科目「公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）」（4 年次配当）で、科目責任者として実習目的、実習目標、具体的な学習内容と方法などについてまとめた冊子を作成した。
バーチャルリアリティ教材：校内巡視の実際	令和 3 年 6 月	全天球カメラ「RICOH THETA」（株式会社リコー）を用いて実習校内を撮影し、①校門・玄関・各教室、②手洗場・トイレ、③体育館・運動場・足洗場、④保健室の 4 種類を各 5 分程に編集し作成している。臨地実習で体験する学校環境衛生活動の一環である校内巡視の経験を補完するための教材として作成し、校内巡視のポイントと観察する視点と方法を学校現場に居るような感覚を持って繰り返し学習できるものとなっている。
デジタル教材：乳児家庭訪問と身体計測	令和 3 年 9 月	保健師が行う乳児家庭訪問の方法について、コミュニケーション、情報収集、身体計測、保健指導を具体的に理解でき、看護技術の習得ができるよう工夫した動画教材を作成した。
デジタル教材：「キラリ☆彡奈良の保健師」	令和 3 年 10 月	奈良県看護協会ならびに奈良県看護協会保健師職能委員会と本学との共同で、奈良県下で活躍する保健師の活動を紹介する PR 動画を制作した。保健師の仕事の魅力とやりがいについて、学生や一般の方にもわかりやすく伝えることができるよう、写真や音楽等を工夫して作成した。
デジタル教材：「保健師を目指すあなたへ」	令和 3 年 10 月	奈良県看護協会ならびに奈良県看護協会保健師職能委員会と本学との共同で、奈良県下で活躍中の現役保健師 2 名のインタビュー動画を制作した。保健師の仕事の魅力とやりがいについて、学生にわかりやすく伝えることができるるよう工夫して作成した。
2022 年度公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）実習要項	令和 4 年 3 月	専門科目「公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）」（4 年次配当）で、科目責任者として実習目的、実習目標、具体的な学習内容と方法などについてまとめた冊子を作成した。
2023 年度公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）実習要項	令和 5 年 3 月	専門科目「公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）」（4 年次配当）で、科目責任者として実習目的、実習目標、具体的な学習内容と方法などについてまとめた冊子を作成した。

動画教材:「在宅療養生活を送る難病患者と家族-ALS患者Nさんと家族の暮らし―」	令和4年11月	在宅で療養生活を送っているALS患者と家族へのインタビュー動画を制作した。①PCや文字盤を用いたコミュニケーション方法、②胃瘻の管理と経管栄養の方法、③リフトを用いたベッドから車いすへの移動の様子、④病に関する本人と家族の思いの4種類を制作した。学生が難病の対象と生活についてわかりやすく理解できるよう工夫して作成した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 白鳳女子短期大学FD委員会	平成26年4月～平成27年3月	講義最終回において大学が作成した授業アンケートを実施したところ、話の分かりやすさ、授業の内容のわかりやすさ、板書や資料のみやすさ等すべてにおいてわかりやすかったという結果であった。単独での講義実施だったため、自信につながった。
奈良学園大学FD・SD委員会	令和2年4月～令和3年3月	2020年度授業アンケートでは、話の聞き取りやすさ、説明の分かりやすさ、資料の分かりやすさ、学生の理解度を確認しながら授業を進める、授業時間の有効活用、授業の満足等において「そう思う」「ややそう思う」との回答であった。単独での講義実施だったため、自信につながった。
奈良学園大学FD・SD委員会	令和3年4月～令和4年3月	2021年度授業アンケートでは、話の聞き取りやすさ、説明の分かりやすさ、資料の分かりやすさ、学生の理解度を確認しながら授業を進める、授業時間の有効活用、授業の満足等において「そう思う」「ややそう思う」との回答であった。
奈良学園大学FD・SD委員会	令和4年4月～令和5年3月	2022年度授業アンケートでは、話の聞き取りやすさ、説明の分かりやすさ、資料の分かりやすさ、学生の理解度を確認しながら授業を進める、授業時間の有効活用、授業の満足等において「そう思う」「ややそう思う」との回答であった。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 奈良県看護協会　保健師職能委員会 平成28年度研修会	平成28年9月	奈良県看護協会　保健師職能委員会主催による平成28年度研修会「乳幼児の運動発達の観察のポイントと支援」開催において委員として、研修の企画、運営を担当した。
奈良県看護協会　保健師職能委員会 平成28年度交流会	平成28年9月	奈良県看護協会　保健師職能委員会主催による平成28年度交流会「思春期保健対策～若年妊婦へのアプローチを考える～」開催において委員として、研修の企画、運営を担当した。
奈良県看護協会　保健師職能委員会 平成29年度研修会	平成29年9月	奈良県看護協会　保健師職能委員会主催による平成29年度研修会「妊産婦のメンタルケアの重要性～チームでの育児支援～」開催において委員として、研修の企画、運営を担当した。

奈良県看護協会　保健師職能委員会 平成 29 年度交流会	平成30年 2 月	日本看護協会による平成 29 年度保健指導支援事業保健指導ミーティング開催にあたって、委員として、奈良県保健予防課、保健所、保健センターと協力し、企画、運営を担当した。
日本看護協会平成 29 年度保健指導支援事業　奈良県看護協会「保健指導ミーティング」事例検討会 ファシリテーター	平成30年 2 月	日本看護協会による平成 29 年度保健指導支援事業保健指導ミーティングにおいて、事例検討会のファシリテーター役として、保健指導ミーティング（事例検討会）参加者の新人保健師の意見が活発にでるように雰囲気作りやきっかけ作りに努め、とても勉強になったとの参加者の感想が聞かれた。
奈良県看護協会　保健師職能委員会 平成 30 年度研修会	平成30年 9 月	奈良県看護協会　保健師職能委員会主催による平成 30 年度研修会「各々の力を発揮できる子育てネットワークを考える～専門職それぞれの強み・弱みをふまえた支援の在り方～」開催において委員として、研修内容の企画、講師との調整、運営を担当した。 参加者からは、看護職それぞれの支援の方向性や取り組みが聞けてよかった等の感想が聞かれた。
奈良県看護協会　保健師職能委員会 平成 30 年度交流会	平成30年 11 月	日本看護協会による平成 30 年度保健指導支援事業保健指導ミーティング開催にあたって、委員として、奈良県保健予防課、保健所、保健センターと協力し、企画、運営を担当した。
奈良県看護協会　保健師職能委員会 令和元年度研修会	令和元年 9 月	奈良県看護協会　保健師職能委員会主催による令和元年度研修会「育てにくさを抱えた親子への包括的支援～ダウン症児の赤ちゃん体操を通して考える療育支援～」開催において委員として、研修内容の企画、講師との調整、運営を担当した。 参加者からは、親と子への支援の在り方や実際の取り組みが聞けてよかった等の感想が聞かれた。
生駒市立生駒北小中学校育友会 保護者交流会　講師	令和元年 6 月	小中学校の PTA 活動の一環として保護者を対象にした文化交流活動「ラフターヨガ教室」の講師役を担い、笑いと健康づくりの講話とラフターヨガの実践を行った。
奈良県健康推進課主催 令和元年度保健指導ミーティング　ファシリテータ	令和元年 11 月	令和元年 11 月奈良県が現任保健師の研修として開催した保健指導ミーティングにおいてファシリテータ役を務め、保健師のアセスメント力向上に向けた関りを行った。
奈良県看護協会　保健師職能委員会 令和元年度交流会	令和元年 12 月	奈良県看護協会　保健師職能委員会主催による令和元年度交流会「私の保健師ぢから～保健師の楽しさ再発見～」開催にあたって企画、講師依頼、運営を担当し、行政、産業等職域を越えたネットワークづくりを目指して活動した。

令和 2 年度奈良県看護学会　座長	令和 2 年 12 月	令和 2 年 12 月 8 日　奈良県橿原市で開催の令和 2 年度奈良県看護学会の演題発表第 1 群の座長役を担った。
介護予防講座「元気アップなら講座」講師	令和 3 年 11 月 9 日	奈良市二名地域包括支援センターが主催する介護予防講座「元気アップなら講座」において、地域の高齢者を対象にテーマ「笑いと健康」の講演を行った。参加者 42 名に笑いと健康づくりの講話とラフターヨガの実践を行った。
５　その他 奈良学園大学 平成 28 年度課程選択履修者選抜問題作成委員	平成 27 年 10 月～平成 28 年 3 月	保健医療学部看護学科看護師・保健師課程選択履修者選抜問題作成を担当し、作問、作問審議等の任を担った。
奈良学園大学 平成 28 年度課程選択履修者選考資料作成委員	平成 27 年 10 月～平成 28 年 3 月	保健医療学部看護学科看護師・保健師課程選択履修者選抜試験における採点、採点結果一覧表等の資料作成、選考会議に向けた原案作成等の任を担った。
奈良学園大学 平成 30 年度課程選択履修者選考資料作成委員	平成 29 年 11 月～平成 30 年 3 月	保健医療学部看護学科　看護師・保健師課程選択履修者選抜試験における採点、採点結果一覧表等の資料作成、選考会議に向けた原案作成等の任を担った。
奈良学園大学 2019 年度看護師・保健師課程選択者選抜試験実施委員	平成 30 年 12 月～平成 31 年 3 月	保健医療学部看護学科　2019 年度看護師・保健師課程選択者選抜試験の実施及び選考資料作成の任を担い、作問における採点、採点結果一覧表等の資料作成等を行った。
奈良学園大学 2020 年度看護師・保健師課程選択者選考委員	令和 1 年 12 月～令和 2 年 3 月	保健医療学部看護学科　2020 年度看護師・保健師課程選択者選考の任を担い、選考、作問、作問審議、採点、採点結果一覧表等の資料作成等を行った。
奈良学園大学 令和 3 年度看護師・保健師課程選択者選考委員	令和 2 年 11 月～令和 3 年 3 月	保健医療学部看護学科　2021 年度看護師・保健師課程選択者選考の任を担い、選考、作問、作問審議、採点、採点結果一覧表等の資料作成等を行った。
令和 3 年度奈良県看護功労者知事表彰	令和 3 年 4 月	保健師として「長年にわたる看護業務の遂行、看護関係者の育成指導等について功績顕著な者」として大学学長からの推薦を受け、医療業務等功労者知事表彰等審査委員会における審査の結果、受賞することができた。

奈良学園大学 令和４年度看護師・保健師課程選択者選考委員	令和３年 11 月～ 令和 4 年 3 月	保健医療学部看護学科　2022 年度看護師・保健師課程選択者選考の任を担い、選考、作問、作問審議、採点、採点結果一覧表等の資料作成等を行った。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 1）看護師免許	平成 4 年 5 月 13 日	
2）養護教諭一種免許	平成 6 年 3 月 31 日	
3）保健師免許	平成 6 年 5 月 19 日	
4）第一種衛生管理者免許	平成 6 年 8 月 10 日	
5）受胎調節実地指導員免許	平成 8 年 2 月 24 日	
6）Laughter Yoga Leader	平成 29 年 6 月 11 日	
7）日本心理学会　認定心理士	平成 30 年 4 月 21 日	
8）Laughter Yoga ambassador	令和元年 7 月 5 日	
２　特許等		
特記事項無し		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
奈良県立医科大学附属病院 常勤看護師	平成 4 年 4 月～ 平成 5 年 3 月	結核病棟に勤務。感染症看護を中心とする看護に従事した。旧結核予防法による入院患者に対し、確実な服薬管理の方法、食事・休養を中心とした生活習慣改善指導に携わった。また、継続看護の取り組みとして保健所保健師との連携を図ることに努めた。
斑鳩町役場保健センター 常勤保健師	平成 6 年 4 月～ 平成 7 年 6 月	奈良県内にある人口２万５千人程度の町の保健センター保健師として勤務。老人保健法に基づく機能訓練「リハビリ教室」では、企画・実施に携わり、病気をきっかけとして自宅に閉じこもりがちな高齢者が外出し、気分転換、他者との交流をはかることを目的とした活動を行った。また、「子宮がん検診」の主担当者として事業の企画・実施・評価といった一連の業務に従事するとともに、「胃がん検診」、「乳がん検診」、「肺がん・結核検診」についても主担当保健師と協力して実施を行った。また、母子保健法に基づく各種の

		健診、保健指導の業務に従事するとともに、特に妊婦を対象とした「母親教室」の主担当者として、妊娠・出産・育児の時期を安心して過ごせるよう、情報提供、啓発活動に取り組んだ。また必要に応じて担当地区の住民に対して家庭訪問を行い、個別対応での問題解決に努めた。さらに、住民が安全に安心して健やかに過ごせるような町づくりを目指し、食生活改善推進員養成講座の実施、観光課主催の町民マラソンへの救護員としての協力、社会福祉協議会と共催の「斑鳩町健康まつり」の企画・運営にも携わった。また、寝たきり状態で歯科受診できない住民に対して、「訪問歯科診療」事業の実施にも携わり、町歯科医師会と協働での訪問歯科診療を行った。
くさち耳鼻科 非常勤看護師	平成 8 年 2 月～平成 8 年 8 月	奈良県内にある耳鼻科の診療所の非常勤看護師として勤務。耳鼻科外来における診療の補助を中心とした看護活動を行った。
奈良県国民健康保険団体連合会生駒総合病院 健康管理センター 常勤保健師	平成 8 年 8 月～平成14年 3 月	人間ドックや各種健康診断の業務の担当者として従事した。また、患者指導として「糖尿病教室」、「高脂血症教室」、「高尿酸血症教室」の企画・運営・評価に携わった。特に糖尿病教室では、教室受講者を中心とした糖尿病患者会「虹の会」を立ち上げ、医師、薬剤師、管理栄養士と協力しながら療養者の生活の質の向上に努めた。そのほか、小児科外来での予防接種業務や育児相談、総合案内所における健康相談にも携わった。
三宅町立三宅小学校 非常勤講師	平成16年 5 月～平成 17 年 2 月	不登校・長期欠席児童が増加しつつある小学校において、教職員よりも身近な相談窓口となる「親と子の相談員」として、保護者および児童に対する相談業務に従事した。育児に悩む保護者の相談やコミュニケーションが困難な児童に対しては遊びを中心とした関わりを行い相談に応じた。
シリンクス株式会社 非常勤看護師	平成20年 4 月～平成 20 年 5 月	国際電気通信基礎技術研究所において行われていた看護師の業務に関する調査研究のデータ収集・分析作業に研究補助員として従事した。

奈良県　医療政策部　保健予防課　母子・保健対策係　石綿ばく露健康リスク調査担当 非常勤保健師	平成24年10月～平成25年6月	環境省からの委託で行っている奈良県内の住民に対する石綿ばく露健康リスク調査担当の非常勤保健師として従事し、問診から結果通知、データ管理などの一連の業務を担った。問診では生後から現在までの数十年におよぶ住環境、生活状況、石綿ばく露の状況を本人より聴き取る必要がある。そのため、年代ごとの写真やイラストを用いた媒体を作成し過去の状況を思い起こせるように工夫をし問診を行った。また石綿の製品、石綿ばく露の危険がある状況について写真やイラストを用いた媒体を作成し石綿ばく露健康リスク調査の意義や目的について住民の方に理解していただけるように努めた。
奈良県難病相談支援センター　難病専門相談員（非常勤保健師）	平成27年4月～平成28年3月	奈良県難病相談支援センターの難病相談専門員として、難病患者・家族等の療養生活上の相談業務に従事した。特に、難病患者の就労支援のための相談体制づくりとして、就労相談票の作成、相談内容のデータベースのフォーマット作成、ハローワークの難病患者就職サポーターとの定期的な打ち合わせを行った。また、難病専門医による医療相談の実施、難病患者患者会活動への支援、難病に関する講演会の企画や準備、難病相談支援センターの広報誌の作成にも関わった。さらに、全国難病センター研究会に出席し、奈良県難病相談センターの現状を伝えると共に、他府県の先進的な取り組みについて情報収集し、担当者同士のつながりを作ることに努めた。
奈良県看護協会　ナースセンター事業推進委員	平成28年4月～平成29年3月	奈良県看護協会ナースセンター推進委員として看護職の復職支援、看護学校ガイダンス、看護職の PR 活動に従事した。
奈良県看護協会　保健師職能委員会委員	平成28年4月～令和2年3月	奈良県看護協会保健師職能委員として研修会の企画、保健師職のネットワーク作りに活動している。
生駒市立生駒北小中学校育友会　副会長	平成29年4月～令和元年6月	生駒市内にある小中一貫校の小学部の PTA 役員として、教育活動の充実、学校、地域、保護者との連携に向けて活動した。
生駒市 PTA 協議会　理事	平成29年4月～令和元年6月	理事として生駒市内の教育について他の理事や役員とともに話し合い、よりよい教育を目指し活動した。

奈良県看護協会　奈良県看護学会委員会　副委員長	令和２年４月～令和３年３月	奈良県看護協会 常任委員会 教育研究委員会の下部組織である奈良県看護学会委員会の副委員長として学会の運営活動に携わった。
奈良県看護協会　奈良県看護学会委員会　委員長	令和３年４月～令和４年３月	奈良県看護協会 常任委員会 教育研究委員会の下部組織である奈良県看護学会委員会の委員長として学会の運営活動に携わった。
４　その他 令和３年度奈良県看護協会会長表彰	令和３年４月	保健師として「長年にわたる看護業務の遂行ならびに奈良県看護協会活動に貢献し、看護教育・学術研究に顕著な功績があった者」として大学学長からの推薦を受け、奈良県看護協会理事会での審査の結果、受賞に至った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　看護師国家試験直前社会福祉学領域ファイナルチェック	共著	令和３年３月 10 日	株式会社金芳堂	看護師国家試験科目の「社会福祉学」領域について、看護師国家試験出題基準に沿った内容構成で、看護師国家試験合格のための学力向上の支援が図れるものとなっている。 担当部分：社会保障制度の動向 p14-p16、民生委員・児童委員とは p30-p31 星野政明監修、守本とも子・富永尭史編著、執筆：井上昌子、井上葉子、小林由里、齋藤英夫、佐藤郁代、芝田ゆかり、高橋寿奈、田場真理、中馬成子、辻下守弘、富永尭史、西出順子、西本美和、野口寿美子、松居典子、松浦純平、三浦康代、美甘祥子、守本とも子、吉水清、吉村雅世
2　解いて､わかる!覚えて合格!看護の統合と実践/健康支援と社会保障制度問題集 2021 年 看護師国家試験対策 第 97 回～109 回看護師国家試験	共著	令和 2 年 12 月 24 日	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験科目の「看護の実践と統合」「健康支援と社会保障制度」について、看護師国家試験出題基準の中項目に基づく過去問題の要点の学びから知識を広げたり深めたりしながら、看護師国家試験合格のための学力向上の支援が図れるものとなっている。 執筆：三浦康代、芝田ゆかり、井上葉子、佐藤郁代、松村あゆみ、齋藤英夫 担当部分：災害と看護、公衆衛生におけ

				る感染症と対策、母子保健、難病保健、生活者の健康増進
3　出題基準平成 30 年版準拠 2021 年出題傾向がみえる健康支援と社会保障制度 中項目別にみた要点と解説付過去問題集　予想問題・第 97 回～第 109 回看護師国家試験問題収録	共著	令和 2 年 10 月 25 日	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験科目の「健康支援と社会保障制度」について、看護師国家試験出題基準の中項目に基づいた要点編と過去問題編の２部構成とし、過去問の要点の学びから知識を広げたり深めたりしながら、看護師国家試験合格のための学力向上の支援が図れるものとなっている。 担当部分：⑧公衆衛生における感染症 p76-91, p161-162、 ⑩母子保健 p90-92, p168-169、難病保健 p101-102, p175-176、 ⑪生活者の健康増進 p103-112, p177-182 監修：守本とも子、編著：三浦康代 執筆：三浦康代、芝田ゆかり、井上葉子、佐藤郁代、松村あゆみ、齋藤英夫
4　出題基準平成 30 年版準拠 2021 年出題傾向がみえる看護の統合と実践 中項目別にみた要点と解説付過去問題集　予想問題・第 98 回～第 109 回看護師国家試験問題収録	共著	令和 2 年 8 月 13 日	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験科目の「看護の統合と実践」について、看護師国家試験出題基準の中項目に基づいた過去問題と過去問の要点の学びから知識を広げたり深めたりしながら、看護師国家試験合格のための学力向上の支援が図れるものとなっている。 担当部分：②災害と看護 p35-41, p75-80、 監修：守本とも子、編著：三浦康代 執筆：三浦康代、井上葉子、佐藤郁代
5　健康保育学演習（課程看護実習含む）ワークシート	共著	令和 2 年 3 月	大阪青山大学 健康科学部	大阪教育大学で開講している健康保育学演習（家庭看護実習を含む）で使用するテキストを共同で作成した。人間の健康の概念をふまえ子どもの成長発達と生活を理解し、家庭と集団保育の場で必要な知識と技術について具体的な学習内容についてまとめた。 担当部分：子どもの歯の発達とケア

				p15-p18 関谷まり編著 著者：関谷まり・井上葉子
6　2018 年看護師国家試験対策要点がわかる出題傾向がみえる在宅看護論	共著	平成 29 年 12 月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験科目の「在宅看護論」について、看護師国家試験出題基準の中項目に基づいた要点編と過去問題編 の２部構成とし、過去問の要点の学びから知識を広げたり深めたりしながら、看護師国家試験合格のための学力向上の支援が図れるものとなっている。 担当部分：目標Ⅰ　在宅における安全と健康危機管理 p22-p24、目標Ⅱ4 在宅療養生活を支える看護（食事・栄養、排泄、清潔、移動）p35-p37、目標Ⅲ6 在宅療養において特徴的な疾病がある療養者への看護（小児、難病）p42, p45、7 在宅における医療管理を必要とする人と看護（膀胱留置カテーテル、褥瘡管理）p48, p51-p52 守本とも子監修、安藤邑惠編著、川口ちづる、井上葉子
（学術論文） １.生活経験からみた看護専門学校学生の看護技術力に関する研究	共著	平成 26 年３月	大阪教育大学家政学研究会「生活文化研究」第 51 巻，P33～41	著者名：井上葉子・碓田智子 担当の箇所については、共同研究につき抽出は不可能。 ３年課程の看護専門学校４校の１年生 147 名に生活経験に関する質問紙調査を実施し、生活経験の自己評価結果と１年で学習する４つの基礎看護技術の実技調査結果との対応関係を検討した。
２.在宅看護論における生活経験の重要性を再認識するための授業実践―ワークショップを用いた教育プログラムの検討―　（査読付き）	単著	平成 27 年２月	白鳳女子短期大学研究紀要 第９巻, ｐ47～54	短期大学看護学専攻学生２年生 122 名を対象に、生活経験を再認識するための講義とワークショップを組み合わせた授業実践を行い、学生の認識の変化と教育的効果について検討した。
３.避難生活体験とポスターセッションを取り入れた学内演習の実践と評価―生活環境を主体的に理	共著	平成 28 年１月	大阪教育大学家政学研究会「生活文化研究」第 53 巻，P57～67	著者名：関谷まり・井上葉子・碓田智子 担当の箇所については、共同研究につき抽出は不可能。 短期大学看護学専攻学生２年生 122 名を

解することを目指した在宅看護論の授業展開―				対象にした、在宅看護論の学内演習での避難生活環境の体験演習の学習効果と、体験演習の学習のまとめとしてポスターセッションを活用したことによる共同学習の効果と課題を検討した。
４.訪問看護ステーション実習での看護計画立案による学習効果について―実習目標の到達度の比較からの分析― （査読付き）	共著	平成 28 年４月	第 46 回日本看護学会論文集 看護教育 P23～26	著者名：西村和子・田村和子・井上葉子・松村あゆみ・北畠昭弥・北出千春３年課程の看護専門学校３年生 36 名を対象に、訪問看護ステーション実習において、看護計画立案の有無によって学習効果に違いがあるかどうかを質問紙調査の結果から比較検討した。
５.在宅看護論における難病患者の就労支援に関する 授業の学習効果【第 1 報】 ―授業振り返りシートの分析から― （査読付き）	共著	平成 30 年 2 月	第 48 回日本看護学会論文集 看護教育 P3～6	在宅看護論において実践したモデル授業「難病患者の職業生活を支援する看護」について、授業振り返りシートの記載内容を分析し難病患者の就労支援の内容を看護基礎教育に組み入れたことによる学習の効果を検討した。 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで全てにおいて関わった。 共著者：西村和子・井上葉子・松村あゆみ
６.在宅看護論における難病患者の就労支援に関する 授業の学習効果【第 2 報】―クローン病の事例を用いたワークシートの分析から― （査読付き）	共著	平成 30 年 2 月	第 48 回日本看護学会論文集 看護教育 P7～10	看護専門学校 2 年生の学生を対象に在宅看護論の授業で『職業生活を支援する看護』のモデル授業での難病患者のクローン病患者の事例ワークシートの分析から学生が難病患者の生活について就労を含めた視点で理解することについての学習効果について検討した。担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで全てにおいて関わった。 共著者：松村あゆみ・井上葉子・西村和子

７.臨地実習における看護学生のストレスと レジリエンスについての実態（査読付き）	共著	平成 30 年 2 月	第 48 回日本看護学会論文集 看護教育 P75～78	看護専門学校学生２年生を対象に時期の異なる 2 つの臨地実習前後で調査した、気分プロ フィール検査（POMS2）とストレス自己統制評定尺度（SSI）の 2 つの調査結果を基に、学生個別のストレス反応とレジリエンスの状態の変化を把握し、学生個々への適切な介入方法の必要性について検討した。研究の方法、分析、論文作成についての助言・指導を行った。 担当部分：分析、論文の作成、論文投稿指導に関わった。 共著者：山﨑陸世・平山亜矢子・井上葉子・丸田裕子・髙原 恵・ 後藤 恵・岡田和江・葦原佐衣・加納由紀子
８.在宅看護論における難病患者の就労支援に関する 授業の学習効果【第 3 報】―闘病記の感想文の分析から―	共著	平成 30 年 ３月	奈良学園大学紀要 第８集 P13～19	在宅看護論において実践したモデル授業「難病患者の職業生活を支援する看護」の課題としての、難病患者による就労についての闘病記を読んでの感想文の分析から教材として闘病記を用いたことによる学習の効果を検討した。 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで全てにおいて行った。 共著者：井上葉子・西村和子・松村あゆみ・奥西志穂・駒井由美子・大谷未来
９.ラフターヨガ（笑いヨガ)の実際と今後の可能性	共著	平成 30 年 12 月	日本保健医療行動科学会雑誌（33）№2 P46～48	ラフターヨガの実践結果から身体面と精神面への効果について検討した。 共著者：井上葉子・安藤和子
10.臨地実習における看護学生のレジリエンス育成に関する文献研究 （査読付き）	共著	平成 31 年 2 月	第 49 回日本看護学会論文集 看護教育 P75～78	臨地実習における学生のレジリエンス育成に関する文献検討を行い、個別支援のあり方について検討した。研究の方法、分析、論文作成についての助言・指導を行った。 担当部分：分析、論文の作成、論文投稿指導に関わった。 共著者：山﨑陸世・井上葉子・平山亜矢子・葦原佐衣・後藤 恵

11.2019 第 22 回東アジア看護学研究者フォーラムの報告（Ⅱ）－炎症性腸疾患患者の食生活に焦点をあてたライフスキルに関する文献検討－ A Report on 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference 2019 Part 2 －Study of literature on life skills that focus on eating habits of patients with inflammatory bowel disease－	共著	令和元年9月	奈良学園大学紀要第 11 集 P207～210	炎症性腸疾患患者の食生活に焦点をあてたライフスキルに関する研究の動向を明らかにし,支援方法のあり方について検討した。炎症性腸疾患患者の食生活に焦点をあてたライフスキルに関する研究の動向を明らかにし,支援方法のあり方について検討した。 共著者：井上 葉子 ， 芝田 ゆかり ， 吉水 清 ， 三浦 康代
12.2019 第 22 回東アジア看護学研究者フォーラムの報告（Ⅰ）～文献検討による女性の身長短縮に関連する因子および因子間の関連～ A Report on 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference 2019（Ⅰ）～Association among the factors in conjunction with Height Loss of females by the literature review～	共著	令和元年9月	奈良学園大学紀要第 11 集 P211～215	身長短縮を予防するための身長短縮に関連する因子とその因子間の関連について検討した。身長短縮を予防するための身長短縮に関連する因子とその因子間の関連について検討した。 共著者：三浦 康代 ， 芝田 ゆかり ， 吉水 清 ， 井上 葉子
13.療養者の生活への視点をもった技術習得のための看護技術教育の実践と評価―ベッドメーキング技術に着目して―	共著	令和２年３月	大阪教育大学家政学研究会「生活文化研究」第 57 巻，P1～10	著者：関谷まり・井上葉子・碓田智子 担当の箇所については、共同研究につき抽出は不可能。 A 大学看護学科１年生 91 名を対象にしたベッドメーキングの看護技術試験での評価に関してげ学生の自己評価と教員評価の比較から技術習得を左右する要因について検討した。
14.要介護者が暮らす住環境を理解することを目指した住居の見取り図作成	共著	令和２年３月	医療福祉情報行動科学研究 vol.7 P11～16	著者：井上葉子・西村和子・松村あゆみ 担当の箇所については、共同研究につき抽出は不可能。

による学習効果の検討 （査読付き）				短期大学看護学専攻学生２年生115名を対象にした、在宅看護論の学内演習での要介護者が暮らす住居の見取り図の作成と見取り図を用いたポスターセッションを活用したことによる学習効果と課題を検討した。
15.看護教員の難病患者の就労支援に対する意識調査に関する研究 （査読付き）	共著	令和３年３月	日本保健医療行動科学会雑誌 第35巻　第２号 P23-29	著者名：井上葉子・松村あゆみ・内田勇人 看護教員129名を対象にした質問紙調査から、難病患者の就労支援についての教育の実情を明らかにし、難病患者の就労支援を教育に取り入れる上での課題について検討した。
16.大学衛生委員会が作成した新型コロナウィルス感染拡大防止のための 「出席停止期間早見表」と「出勤不可期間早見表」 （査読付き）	共著	令和３年３月	保健師ジャーナル 2021年 4 月号　医学書院 P308～316	大学衛生委員会が作成した教職員と学生を対象とする新型コロナウィルス感染拡大防止のための「出席停止期間早見表」と「出勤不可期間早見表」の作成過程と運用状況についての活動報告を行った。 共著者：三浦康代・井上葉子・松村あゆみ・上栫佳代子・阿波邦彦・森村佳史・島本卓也
17.難病患者の就労に関する闘病記による学生の学び ―学生の感想文の分析から― （査読付き）	共著	令和３年３月	医療福祉情報行動科学研究 vol.8 P115～121	公衆衛生看護学方法論Ⅰにおいて実践したモデル授業「難病患者の職業生活を支援する看護」の課題として、難病患者の就労についての闘病記を読んだ学生の感想文の分析から教材として闘病記を用いたことによる学習の効果を検討した。 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで全てにおいて行った。 共著者：井上葉子・西村和子・内田勇人
（その他） （学会発表）				
1.看護学生による災害看護演習の評価に関する考察　―避難生活の看護活動を考える演習について―	－	平成27年8月	第17回日本災害看護学会（於　宮城県仙台市）	短期大学看護学専攻学生２年生122名を対象にした、在宅看護論における避難生活体験を題材とした演習の方法と学習効果についてを検討した。 共同発表者：関谷まり・井上葉子 抄録集　P.160

2.ポスターセッションを活用した在宅看護論演習の学習展開―「避難生活支援演習」の実践事例―	－	平成27年8月	第46回日本看護学会―看護教育― （於　奈良県）	短期大学看護学専攻学生２年生122名を対象にした、在宅看護論の学内演習での避難生活環境の体験演習の学習効果と、体験演習の学習のまとめとしてポスターセッションを活用したことの効果と課題を検討した。 共同発表者：井上葉子・関谷まり 抄録集　P.107
3.訪問看護ステーション実習での看護計画立案による学習効果について―実習目標の到達度の比較からの分析―	－	平成27年8月	第47回日本看護学会―看護教育― （於　奈良県）	３年課程の看護専門学校３年生 36 名を対象に、訪問看護ステーション実習において、看護計画立案の有無によって学習効果に違いがあるかどうかを質問紙調査の結果から比較検討した。 共同発表者：西村和子・松村あゆみ・田村和子・北畠昭弥・北出千春・井上葉子 抄録集　P.85
4. 看護基礎教育における難病患者の就労支援に関する教員の認識	－	平成28年10月	第75回日本公衆衛生学会総会 （於 大阪府）	看護専門学校教員129名を対象にした質問紙調査から、難病患者の就労支援についての認識を明らかにし、難病患者の就労支援を教育に取り入れる上での課題について検討した。 共同発表者：井上葉子・西村和子　松村あゆみ　内田勇人 抄録集　P.539
5.看護基礎教育における難病看護に関する教育の実態	－	平成28年12月	第37回奈良県公衆衛生学会 （於　奈良県）	看護専門学校教員129名を対象にした質問紙調査から、難病患者の就労支援についての教育の実情を明らかにし、難病患者の就労支援を教育に取り入れる上での課題について検討した。 共同発表者：井上葉子・西村和子・松村あゆみ・奥西志穂・早味妙・駒井由美子 抄録集　P.7
6. 在宅看護論における難病患者の就労支援に関する授業効果【第１報】―学生による授業振り返りシートの分析から―	－	平成29年8月	第48回日本看護学会―看護教育―学術集会 （於　香川県）	３年課程看護専門学校学生２年生 77 名を対象に「難病患者の就労支援」を題材として行った授業実践の教育効果と課題について、授業後の学生による「授業振り返りシート」の内容から分析と検討をした。 共同発表者：西村和子・井上葉子・松村あゆみ 抄録集　P.148

7. 在宅看護論における難病患者の就労支援に関する授業効果【第２報】―事例ワークシートからみた学習内容の分析―	－	平成 29 年 8 月	第 48 回日本看護学会―看護教育―学術集会（於　香川県）	３年課程看護専門学校学生２年生 77 名を対象に「難病患者の就労支援」を題材として行った授業実践の教育効果と課題について授業内で用いた教材「事例ワークシート」の内容から分析と検討をした。 共同発表者：松村あゆみ・井上葉子・西村和子 抄録集　P. 149
8. 臨地実習における看護学生のストレスとレジリエンスについての実態	－	平成 29 年 8 月	第 48 回日本看護学会―看護教育―学術集会（於　香川県）	３年課程看護専門学校学生２年生 42 名を対象に時期の異なる２つの臨地実習の実習前後で、学生のストレス反応とレジリエンスの状態を調査し、その結果からストレス反応とレジリエンスには個別性があり学生の特性を理解した支援の必要性を示した。 共同発表者：山﨑陸世・平山亜矢子・丸田裕子・井上葉子・高原恵・佐藤則子・定政美香 抄録集　P. 114
9. 要介護者が暮らす住環境を理解することを目指した在宅看護論の授業展開ー住居の提案とポスターセッションを取り入れた演習の実践と評価ー	－	平成 30 年 8 月	第 49 回日本看護学会―看護教育―学術集会（於　広島県）	看護短大２年生 122 名を対象に、在宅看護論演習において要介護者が暮らす住居の見取り図の作成を行い、授業の学習効果について授業後の学生の学びと感想の内容から分析を行った。学生が積極的な関心を持ち、能動的に学習する上で一定の効果があることが明らかとなった。 共同発表者：井上葉子・西村和子・松村あゆみ・奥西志穂・大谷未来・駒井由美子 抄録集　P. 86
10. 看護学生のレジリエンスに関する文献研究	－	平成 30 年 8 月	第 49 回日本看護学会―看護教育―学術集会（於　広島県）	看護基礎教育における臨地実習での学生のストレスへの対応を方法を検討するため、学生を対象としたレジリエンスの介入方法に関する研究の動向を検討した。 共同発表者：山﨑陸世・井上葉子・平山亜矢子・芦原佐衣・丸田裕子 抄録集　P. 205

11.在宅看護論実習における事例を用いたグループワークによる学生の学び―使える社会資源を調べるグループワークを実施して―	－	平成30年8月	第49回日本看護学会―看護教育―学術集会（於　広島県）	３年課程看護専門学校学生 42 名を対象に在宅看護論実習の最終日に、事例の社会資源を調べる学習を行い、その学習効果を検討した。 共同発表者：西村和子・北出千春・井上葉子 抄録集　P.206
12.Study of literature on life skills that focus on eating habits of patients with inflammatory bowel disease （炎症性腸疾患患者の食生活に焦点をあてたライフスキルに関する文献検討）	-	2019 年 2 月	the 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS). （in Singapore）	炎症性腸疾患患者の食生活に焦点をあてたライフスキルに関する研究の動向を明らかにし,支援方法のあり方について検討した。 共同研究者：Inouye Y,Shibata Y, Miura Y,Yoshimizu K Abstract No:ABS2427
13.Review of the literatures on factors related to height loss and relationship among the factors （文献検討による身長短縮に関連する因子および因子間の関連）	-	2019 年 2 月	the 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS). （in Singapore）	身長短縮を予防するための身長短縮に関連する因子とその因子間の関連について検討した。 共同研究者：Miura Y,Shibata Y, Yoshimizu K,Inouye Y Abstract No: ABS2253
14.テキストマイニングを用いた精神看護学実習における学生の学びの分析	－	平成31年3月	日本看護研究学会第 32 回近畿・北陸地方会学術集会（於　福井県）	３年課程看護専門学校学生 42 名を対象に精神看護学実習の最終日に提出したレポート「精神看護学実習を終えて」の内容分析を行い実習における学びの内容を検討した。 共同発表者：山﨑陸世・溝口みちる・井上葉子 抄録集　P.43
15.新型コロナウィルス感染症に関する新しい生活様式における子どもの保護者のたばこに関する意識と喫煙状況 ―男女別での比較＝	－	令和3年3月	日本看護研究学会第 34 回近畿・北陸地方会学術集会（於　奈良県）	関東圏と関西圏の子どもの保護者500名と対象にした調査を行い、新型コロナ感染症流行による新しい生活様式での喫煙状況とたばこに関する意識の状況から今後の喫煙対策の必要性について検討した。 共同発表者：井上葉子・関谷まり・松村あゆみ・守本とも子・三浦康代 抄録集　P.34

16.子育て世代を対象にしたラフターヨガ体験による心身の変化に関する研究	－	令和3年3月	日本看護研究学会第 34 回近畿・北陸地方会学術集会（於　奈良県）	子育て世代の 30 歳～40 歳代男女 6 名を対象に 50 分間のラフターヨガ体験による心身の変化について検討し、ラフターヨガの効果について検討した。 共同発表者：山﨑陸世・井上葉子・三浦康代 抄録集　P.30
17.看護基礎教育における精神看護学教育の研究の動向について―テキストマイニングを用いた論文タイトルの分析から―	－	令和3年3月	日本看護研究学会第 34 回近畿・北陸地方会学術集会（於　奈良県）	テキストマイニングを用いて「精神看護学」「臨地実習」「看護基礎教育を」キーワードにした論文タイトル 268 件の論文タイトルを分析し、看護基礎教育における精神看護学教育の研究の動向について検討した。 共同発表者：葦原佐衣・井上葉子・山﨑陸世 抄録集　P.24
18.　大学衛生委員会が作成した新型コロナウィルス感染拡大防止のための「出席停止期間早見表」と「出勤不可期間早見表」	－	令和3年3月	第61回日本社会医学会総会（於　大阪府）	大学衛生委員会が作成した教職員と学生を対象とする新型コロナウィルス感染拡大防止のための「出席停止期間早見表」と「出勤不可期間早見表」の作成過程と運用状況についての実践報告を行った。 共同発表者：三浦康代・井上葉子・松村あゆみ
19.Survey on parents' attitudes toward smoking in home life after the law's revision to prevent passive smoking in Japan （日本における受動喫煙防止のための法改正後の親の家庭生活での喫煙に関する意識調査）	－	2022 年年 1 月 8・9 日	The 6th International of Global Network of Public Health Nursing (in Osaka)	日本の健康増進法改正によって強化された受動喫煙防止について、子どもの親 500 人に対して喫煙に関する意識調査をインターネットによるアンケートで実施した。家庭生活における喫煙についての意識を喫煙者と非喫煙者、性別等から比較検討した。 共同発表者：Yohko Inoue・Mari Sekiya・Yusuke Yamamoto 抄録集　p.295
20.　学校保健実習におけるバーチャルリアリティ教材の開発及び導入の試み	－	令和 4 年 12 月	第11回日本公衆衛生看護学会学術集会（於　宮城県）	新型コロナウイルス感染症流行により、臨地実習が不可能となった学校保健実習において、バーチャルリアリティ教材を用いて実習の体験を代替する授業実践を試み、バーチャルリアリティ教材によって一定の学習効果があった事を報告した。 抄録集　p.146

（学会等への貢献 ） 1.日本サーモロジー学会学術集会　第33回大会実行委員				平成28年6月　奈良市で行われた第33回学術集会の実行委員を担った。
2.第33回日本保健医療行動科学学会学術集会実行委員				平成30年6月　沖縄県那覇市での第33回日本保健医療行動科学学会学術集会の実行委員として準備等の運営に携わった。
3.日本看護研究学会第 45 回学術集会　実行委員				令和元年8月　大阪市で開催された日本看護研究学会第 45 回学術集会の実行委員として開催準備等に携わった。
4.日本看護研究学会第 34 回近畿北陸地方会　実行委員				令和3年3月　奈良市で開催された日本看護研究学会第 34 回近畿北陸地方会の実行委員として開催準備等に携わった。
5.第27回日本看護診断学会学術大会　企画委員				令和3年7月　奈良市市で開催された第 27 回日本看護研究学会学術大会の企画委員として開催準備等に携わった。
令和 2 年度奈良県看護学会　座長				令和2年12月8日　奈良県橿原市で開催の令和2年度奈良県看護学会の演題発表第1群の座長役を担った。
令和 3 年度奈良県看護学会　学会委員長				令和3年12月16日　奈良県橿原市で開催の令和3年度奈良県看護学会の学会委員長として学会の企画から運営の全てにおいて関わり学会開催実現に貢献した。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年　3月　31日

氏名　　木下純子

研究分野	研究内容のキーワード
歴史社会学・医学史	育児方法の歴史、育児文化と医療、「食」の医療化

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例	2018年10月1日より より現在	母性看護援助論の講義において、具体的な事例(産婦のブログ等を作成)を用いて学生が状況をイメージできるように工夫している。
2　作成した教科書，教材	2020年5月20日	コロナ禍での母性看護学実習(学内)の教材として、分娩期のケア動画の企画撮影編集、紙上カルテの作成
3　教育上の能力に関する大学等の評価		なし
4　実務の経験を有する者についての特記事項	2014年10月 2016年5月～	出張専門助産師として、助産師学生に対して母子訪問等の地域実習指導に従事 助産学実習・母性看護学実習指導に従事
5　その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許 看護師免許 助産師免許	 1988年4月 1989年4月	
2　特許等		なし
3　実務の経験を有する者についての特記事項	2017年12月10日 2022年9月2日 2016年12月	財団法人性の健康医学財団認定　性の健康カウンセラー 日本女性医学学会　女性のヘルスケア研修会受講修了 日本周産期・新生児医学会　NCPR「専門」コース修了
4　その他	2013年10月17日	「健やか親子21」家族計画協会会長表彰受賞

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1 2 3 :				
（学術論文） 1<育児不安>と主体化される母親たち―授乳法のマニュアル化がもたらしたもの― :	単著	2021年9月	佛教大学社会学部論集 第73号	現代の育児不安の源流は、明治期以降の育児書に記述される「望ましい授乳法」によってもたらされた母親の自覚と混乱であることを、育児書の言説分析から論じた。
（その他） 1オンラインでの母性看護学実習における学習効果 :	共著	2021年3月	佛教大学保健医療技術学部論集　第15号	母性看護学の臨床実習がCovid-19で中止となり、オンラインでの代替実習を行なった。その学習効果について、履修学生のアンケートを基に分析を行った。結果、代替実習案での学習効果が認められたと結論づけた。

（注）

１ 最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。
２「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。
３「研究活動」については、下記の点に留意すること。
①著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。
②著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。
③　共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。
④　最近１０年間に著書･論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。
⑤　芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。

教　育　研　究　業　績　書

令和5年3月31日

氏名　高田勝子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学・医学	メンタルヘルス、ストレスマネジメント、 認知脳科学、グローバルヘルス

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
・精神看護学 1)精神看護援助論 2)精神看護援助論演習 3)精神看護学実習 4)統合看護学実習 5)卒業研究	2018年4月～ 現在	精神的に健康な人から精神障害をきたした人まで全ての人を対象とする学問であること。精神保健の維持、向上と、精神障害をきたしている人、社会復帰へ向けて支援をする看護を学ぶ。看護過程では事例を通して精神状態をアセスメントする技術を学び、ストレングスを活かした生活援助を立案していけるような取り組みをおこなっている。また、講義の中では、学生自身が自己のメンタルヘルスを保ちながら、ストレス対処をとれるような取り組みも心掛けている。病院実習と訪問看護実習を通して精神看護学を学ぶ取り組み。
・国際看護学　（他校の講義含む） 1）国際看護論	2019年4月～ 現在	世界で広域的に発生している健康問題の現状を学び、自分の考えを取り入れながら、国際看護学の取り扱う課題について考えていく取り組みをおこなっている。グル―バルヘルスの対象となる母子保健、開発途上国の課題、COVID-19を含めた感染症、栄養問題、難民問題、生殖医学や生命倫理、SDGsなども含め、幅広く学んでいく。グループディスカッションやプレゼンテーションを通して思考をまとめていけるような取り組み行っている。
・母性看護学　（他校の講義含む） 1）母性看護学Ⅰ概論 母性看護学Ⅱ各論 母性看護学Ⅲ（看護技術） 母性看護学Ⅳ（看護過程） 母性看護学援助論	2014年4月～	グループワークや討論を取り入れ、学生同士の意見交換が効果的となるような配慮を実施した。母性看護学概論では、生きることの意味を考え、命と向き合っていく専門職であることを考える機会を作る工夫をおこなっている。授業の最後には振り返りを行い、各自の目標達成、課題を明確にしていく取り組みをしている。
2）母性看護学演習 母性看護援助論演習	2014年4月～	講義で学んだ内容を技術演習を通して、行動実践できるようにした。さらに実習へとつなげていけるような工夫をしている。自主的に自己学習できるような教材を作成している。
・助産学 1）助産診断技術学	2015年4月～	少人数グループワークを授業の中に取り組み、他者と学習することで1つの実践を生み出せるプロセスを取り入れている。また、知識を活用・応用できるように具体的な事例を取り上げ、分析し、実践できるような設定の工夫をしている。
2）助産診断技術学演習	2015年4月～	シナリオを作成し、提示し、学生は課題を見つけ、実践することをおこなっている。また、学生が調べたことをプレゼンテーションし、自らの学習成果を他の学生と共有し、新たな学習課題を見つけ出すという展開を取り入れている。

2　作成した教科書，教材 1)分娩介助技術手順法	2015年2月	1)分娩直接介助と分娩間接介助の手順本を作成。
2)母性看護学実習指導要綱作成	2017年4月	2）効果的な実習が出来るように、従来の指導要綱の全体見直しと記録の変更を実施。
3）新生児沐浴と新生児フジィカルアセスメントのチェックリスト作成	2018年5月	3）演習、自己学習で活用でき、実践できるレベルになるように手順書を作成した。

3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
アドバンス助産師 CLoCMiPレベルⅢ認証	2016/12/1 2021年12月更新	
多言語プレゼンテーション国際コンテスト出場 国際シンポジウムのシンポジストとして招聘 第5回地連携発表会 大阪市医学会発表 理系大学院生英語プレゼンテーションコンテスト 第8回地域連携発表会　・　第9回地域連携発表会	2017年・2020年 2017年10月 2018年3月 2018年3月 2020年11月 2021年・2022年3月	入賞 早稲田大学大学院 2位入賞 医学会賞受賞 3位入賞 最優秀賞

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 看護師免許 介護支援専門員 助産師免許	 1998年 2003年 2010年	
3 実務の経験を有するものについての特記事項 1)プライマリヘルスケアプロジェクト 2)グローバルヘルスプロジェクト	1)2018年～現在 2)2020年4月～ 2022年5月現在	1)地域と連携を行い在留外国人のヘルスサポートを実施。リプロダクティブヘルスライツやグローバルヘルスケアの取り組みを実施している。英語による多国籍国際交流を取り入れた活動を継続。 2)新型コロナウイルス感染症の影響により緊急帰国した留学生のサポート支援
4　その他		
ベビーマッサージインストラクター資格 ヘッドスパ・エステインストラクター資格 リフレクソロジーインストラクター資格 新生児蘇生法インストラクター資格	2007年 2008年 2008年 2015年・2020年	

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
運動は脳を介して食意欲・行動にどう影響を与えるか	共著	2016年	日本未病システム学会雑誌 Vol.22 No3	担当部分：「運動が食欲に与える影響 食・動・脳関連」 共著者：高田勝子、吉川貴仁
未来のノーベル賞はここにある！イチオシ研究発掘メディア	共著	2018年	Academist Journal	担当部分：「食べる意欲や我慢は無意識に働く脳活動と関係するか」 共著者：高田勝子、吉川貴仁
母親の子ども認識と母子相互作用の脳神経メカニズムの解明	単著	2019年	私学共済 若手・女性研究者奨励	疲労の神経メカニズムの理解及び予防、回復に関する研究。母親が子どもの顔を見ることにより、精神的疲労感が軽減する可能性があることの研究。
（学術論文）				
助産師を志す看護専攻３年生の進学意識と教員の関わり	単著	2015年	白鳳短期大学研究紀要 第10号　P49-58	助産師を志す学生の進学動機からの進学意識の詳細とモチベーションの高さ、それに関わる教員の関わりについての質的研究。
死産ケア教育のとりくみ	共著	2016年	白鳳短期大学研究紀要第11号 P169-178	死産ケア教育は学生にとって誕生と死の両方の命をケアしていくことの大切さに気付き、看護対象へのより細やかな配慮と判断、柔な対応が求められることを新たに認識した 共著者：高田勝子、吉川貴仁
The brain science of exercise-eating linkage for improvements of modern human health.	共著	2017年	Journal of Physical Fitness and Sports Medicine. 2017;6(5):295-300.	単回運動や継続的運動習慣が、食意欲・食行動を制御する脳神経の仕組みにどのように働きかけるのかを解説した。 共著者：吉川貴仁、上田真也、石井聡、高田勝子
Neural activity induced by visual food stimuli presented out of awareness:a preliminary magnetoencephalography study	共著	2018年	Scientific Reports,Article number:3119	食刺激による神経活動に関連する無意識下の脳活動の役割を、脳磁図を使用して解明した。 共著者：高田勝子、吉川貴仁、石井聡、松尾貴司、中村千華
Relationship between Stress Response and Stress Tolerance Characteristics for Midwife Students	単著	2019年	奈良学園大学紀要第10集p63-73	唾液コルチゾールとハーディネスとの関係を調べ助産師学生のストレス反応とストレス耐性特性との関係について調査分析し考察した。
Neural effects of hand-grip-activity induced fatigue sensation on appetite:a magnetoencephalography study	共著	2019年	Scientific Reports,Article number:9:11044	急性の運動負荷による疲労感が食欲に与える影響に関して脳活動の役割を、脳磁図を使用して解明した。 共著者：松尾貴司、石井聡、高田勝子、中村千華、吉川貴仁
Neural effects of acute stress on appetite:a magnetoencephalography study	共著	2020年	PLoS ONE 15(1):e0228039.	将来の出来事を予期することによって生じる心理的ストレスが食欲に与える影響に関する脳活動の役割を、脳磁図を使用して解明した。 共著者：中村千華、松尾貴司、石井聡，　高田勝子、吉川貴仁
Effects of Viewing Children’s Faces on Mental Fatigue of Adult Females	単著	2022年	Osaka City Medical Journal 0030-6096　in Press	成人女性が子どもの顔を見ることで精神的疲労感が回復するかについて疲労の客観的指標とされる自律神経活動と共に検討した。

教　育　研　究　業　績　書

令和　5　年　　3　月　　31　日

氏名　高橋　寿奈

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	高齢看護学，看護教育，エイジズム， アドバンス・ケア・プランニング

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）講義と演習授業　白鳳短期大学　非常勤講師 「基礎看護概論」 「基礎看護方法論Ⅰ」 「基礎看護方法論Ⅱ」 「基礎看護方法論Ⅳ」 「基礎看護方法論Ⅴ」 ①ＰＰＰを使用したデジタル教材の作成 ②演習時に患者の想定がしやすいように、ボディイメージ資料作成使用 ③演習時の研究課題資料の作成使用	平成26年5月 ～ 平成29年3月	白鳳短期大学の非常勤講師として「基礎看護学概論」の授業の一部を担当した。主に看護の変遷として日本の看護や関係法規の歴史変遷、世界の看護の歴史についての授業とテスト作成をした。近代看護の基礎となる事柄や今後の看護の方向性などを写真や経験、ドラマを使って、親しみやすい内容にし、学生が習得しやすいように努めた。（1年次配当、1単位、学生150名） 「基礎看護方法論Ⅰ」の授業を担当した。活動と休息・感染予防・滅菌物品の無菌操作・食と排泄・移動と移乗・効率的な動きの講義を行い、人間が健康に向かうための看護援助の在り方のついて指導を行った。それぞれの授業で、実際に実技で学生に体験させることにより、よりイメージしやすいように、感染の仕方のモデルや重心変化の仕方の教具の作成を行い、学生に実施させ、わかりやすく習得できるように努めた。 「基礎看護学方法論Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ」（1年次配当各1単位）の演習授業全般について実施し、フィジカアセスメント・看護イグザミネーション技術・点滴・投薬・採血・排泄管理包帯法・ポジショニング・創傷管理・罨法の技術について、指導と実技テスト教官を行った。学生がイメージしやすいように研究課題を与え、その課題に沿って資料と実技を行った。学生からは「実践的でわかりやすい」や主体的に実習に臨む様子がみられた。
2）学内研究発表会指導	平成28年2月	白鳳短期大学の基礎実習Ⅱでの実習指導教員として担当学生の学内研究発表の指導を行った. 主に、日常生活援助での関わり方による対象高齢者の言動の変化についての気付きについて自信をもって発表できるように指導した。学生は「不安だったが内容が整理でき自信を持った発表できたとの評価を得た。
3）演習授業（学内）	平成29年4月 ～3月	「老年看護学」学内授業、演習授業のサポートを行っている。老年期の看護展開では、学生の個別指導も行い看護展開成果物の採点を行い、実習での看護展開時に実際に使用できるように補足説明をした。
4）実習指導（非常勤講師） 「基礎看護実習学Ⅰ」「基礎看護学実習Ⅱ」 「成人看護学1」「成人看護学Ⅱ」 「統合看護学」 「精神看護学」 「老年看護学」	平成26年5月 ～ 平成29年3月	白鳳短期大学非常勤講師としての実習指導を行った。 統合看護学実習では、要項説明と実習オリエンテーション、実習調整を行った。［基礎看護学」では、看護の仕事の実際や病院施設の概要について疑問点などを起こさないように指導した。また学生が達成感が持てるようにそれぞれの学生が苦手とするところの克服できるように配慮しながら行った。根拠をもって看護し、患者に寄り添い、生活者として視点も忘れず、看護の先にあるものについても意識して指導した。 「成人看護学」では急性期・慢性期での成人の療養上における問題について看護性について指導した。学生が、急性期の看護展開のスピードについていけるように、事前課題を確認し不足するところの指導を行った。周手術期の指導では、疾患の理解・術後侵襲・生活や社会人としての患者の役割・精神的な不安なども指導した。 「統合看護学実習」では、要項説明と事前の実習調整も行った。タイムスケジュールを学生が出来るようにあ、学生同士でのカンファレンスを多く持ち、チームで看護を行うことを重視いた指導をした。病院の組織の在り方や他職種連携の重要性や実際についてより多くの経験が出来るように調整配慮した。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
5）講義と演習授業　　奈良学園大学　専任教員 「老年看護学援助論」3年次　必修科目　1単位15時間 「老年看護援助論」2年次　必修科目　1単位15時間 「卒業研究Ⅱ」4年次　必修科目　1単位　15時間「基礎演習Ⅱ」1年次　必修科目　1単位　15時間 「演習実技指導」 ①ＰＰＰを使用したデジタル教材作成 ②高齢者の介助時の注意点資料作成 ③演習時の研究課題作成と添削 ④各授業開始時に前回授業の課題総括と説明・資料作成	平成30年4月 ～現在	平成30年から「老年看護学援助論」の基本的な高齢者への援助、活動・休息・食事・排泄などの技術全般、浮腫やについての講義と演習を担当した。演習時にはボディイメージと看護をつなぐ資料を作成し、与えた課題研究のもと授業を行った。その振り返りとして、学生自身でグループワークを行い、検討内容を板書説明し、それをさらに解説していく事で内容の理解と定着に努めた。臨地実習前には、学生を個別に基本的な技術指導を行った。 令和3年からは、科目責任者としてシラバスを見直し、授業計画を作成した。基礎看護学実習の直前に終了する科目でもあり、基礎看護学実習と老年看護援助論がつながるように意識した内容と後世にした。基本的な老年看護学における日常生活の基本活動や転倒リスク、排泄排尿障害やそれらの援助、権利擁護やリスクマネジメント、食事嚥下や口腔ケアの援助について行った。口腔ケアでは、実習時に活用できるように、必要物品や観察項目などを具体的に示せるような課題を作成し、知識の定着と狙った。外部講師との調整を行い歯科医師や衛生師による高齢者の口腔内の清潔についてや、地域包括看護・介護士による認知症サポーター養成講座の開講の支援を行った。おおむね目標達成でき、学生の授業評価の点数も平均以上であった。 「老年看護援助論演習」では、高齢者体験や片麻痺体験を学生自身でグループごとで行い、研究演習とした。また、学生自身に体験させることにより、高齢者イメージがしやすいようにし、看護に必要な内容を考えさせる機会とし、看護の視点の指導や理解、定着を図った。 令和2年からは、ほとんどの授業内容を担当し、看護展開を中心とし看護のアセスメントや計画の指導を中心の授業へ変化させた。看護展開は、学生が臨地実習で使用しているものを使用し実習時に戸惑いがないように配慮した。教員への質問もしやすいように　授業の攻勢を変更し、机間巡回の時間を増やし、学生同士での相談や考えの広がりが持てるようにペアワークとした。学生の進捗に合わせた説明をするようにし、理解の徹底と定着を図った。 「卒業研究Ⅱ」では、卒業延期性には個別にさらに時間を作り指導を行った。 「基礎演習Ⅱ」では、基本的な大学生活での学習方法や時間・単位制について指導した。グループワークで、基本的なレポートの書き方、グループワークについて指導し、レポートはその都度添削した。また図書の有効利用。インターネットを津科tt亜情報リテラシーの方法なども学生に理解の程度に合わせて具体的な指導を行い、学生が大学での学習方法について積極的に行えるように指導した。
６）老年看護学実習指導（奈良学園大学）専任教員 Ｒ１年度　領域実習・統合実習 実習要項 実習記録 Ｒ２～３年度 領域実習 実習要項 実習記録 学内実習用事例： ・大腿骨頸部骨折術後 ・大腿骨頸部骨折術後リハビリ期 ・腰椎圧迫骨折保存的療法 ・腰椎圧迫骨折保存的療法と認知症 ・腰椎症と頸部腫瘍の終末期 ・脳梗塞後片麻痺後のリハビリ期 ・脳梗塞後の高次機能障害 ・脳梗塞後誤嚥性肺炎（繰り返し発症する患者） ・脳梗塞後の廃用症候群 ・軽度認知症と脛腓骨骨折の保存的療法 ・変形性膝関節症術後 ・腰椎圧迫骨折後と膝関節症リハビリ期 統合実習	平成30年4月 ～現在	事前に、実習先の全施設と実習説明内容のために訪問調整し、学生の実習目的・目標・スケジュールなど詳しい説明を行った。実習開始からは、「老年看護学Ⅰ.Ⅱ」（3年次配当　4単位）で、学生が老年看護の基本的な考え方に基づいて看護展開の方法の実際を個別に指導し、実技指導と評価指導を行った。また、緊張緩和に努め実習で対象者の個別性に合う実習内容になるように一緒に考えアドバイスし、指導した。すべての実習に同行し、精神的配慮として個別の面談を交え学内では学習などの指導も行った。 令和2～3年では、コロナ渦で領域実習施設と病院での実習日程や内容の変更調整をすべて行った。学内実習内容でも臨地とできる限り似ている状況での実習が席るように、各担当学生1名に1事例作成し、看護展開や実技の実施ができるようにした。令和４年からは実習はできうる限り臨地に行けるように、コロナ幹線いて実習ができない時は他の病院と調整し、全学生が臨地実習で学べるようにした。学生からは、「臨地に行くことで学べる内容も多く急な変更になっても臨地実習できてよかった」との意見を直接聞くことができた。おおむね全学生が目標達成できた。 令和2～3年度の統合実習では、すべての内容がリモートへ変更になり、実習内容の変更をすべて行った。臨地実習の目標と齟齬が内容、動画やグループワークを効果的に使用した。学生間でのディスカッションやワークも偏らないように、適宜メンバーの変更を行い学びが最大限になるようにした。また、卒業後の仕事としての内容も意識し、様々なグルーでディスカッションすることによって、学習内容だけでなく対人能力や自己表現能力などもはぐぐまれ、能力の獲得と発揮ができるようにした。 令和4年度は、臨地実習に行けるように調整し、全員臨地実習で学ぶことができた。臨地実習では、今後臨地で就労することも見据え、チーム内で協力しながら具体的な生活課題に対する援助が実施できるよう

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
３）老年看護学援助論（平成30年：3年次配当１単位　令和1年：２年次配当1単位、3年次配当1単位） ①授業資料 ②演習授業資料 ③疾患理解のためのプリント作成 ④eラーニング授業と資料作成 平成30年担当 担当講義：高齢者の基本的生活援助（排泄・栄養・活動と休息・清潔）転倒転落・食事介助・嚥下困難・アクティビティケア・看護展開 演習授業：高齢者体験　片麻痺体験 　夏季休暇中の実習前演習　陰部洗浄　移送移動　点滴中の更衣　片麻痺の更衣　看護展開の実際（看護計画の実技） 令和1年担当 担当講義：排泄・転倒転落・廃用症候群・リスクマネジメント（災害看護・医療事故）看護展開 令和2～3年担当 講義授業：排泄・排尿障害・転倒転落・廃用症候群・発熱・浮腫・倦怠感・脱水・退院支援・権利擁護 令和4年度担当 担当講義：排泄・排尿障害・転倒転落・廃用症候群・嚥下食事・退院支援・権利擁護 4)「老難看護援助論演習」 令和1年担当 担当講義（演習）：退院支援グループワーク・セルフアセスメント・脳梗塞移動トイレ介助 令和2～3年度担当 「老年看護援助論演習」看護展開　1～12回ゴードンの機能的健康パターンを使った脳梗塞患者の看護展開、 令和4年度 看護展開　1～12回ゴードンの機能的健康パターンを使ったパーキンソン病患者の看護展開、関連図作成	平成30年４月～現在	「高齢者体験」ではグループワークで行う内容についての援助の方法の編成とないようについての目標や目的についてのプリントの作成を行った。また、杖歩行の援助方法の教授では、図式の資料と注意点を記入する用紙を作成し、実際に使いながら看護者・援助者・観察者と分け、肉体的だけだなく精神的な援助を含め考えるように指導した。 「転倒転落」では、事例をち使って転倒要因を考えるとともに、アセスメントスコアシートを実際につけアセスメントの視点と実際を行った。嚥下困難では、高齢者体験の感覚器系装具を付け、感覚器系の変化について体験させた。そのうえで事例を使って、栄養状態の評価をし食事摂取するという事とその困難について考えさせアセスメントさせた。アクティビティケアでは、写真等を使ってイメージしやすいようにした。また実際の学生間でも行った。 演習授業では、限りなく実践に近くできるように、グループごとでワーク形式で行った。 R2年度では、オンライン授業が中心であるが、学生が受け身にならないように、相互に意見交換やGWを使い授業参加できるように工夫した。eラーニングでは、すべ手を教授してしまわず、自分で考え調べたり、実習で考えて使えるような資料つくりを心かけた。 演習授業では、学生間でのディスカッションができるように、問題提起や発問などで実際の援助の方法に多角的に考えることができるように注意した。 　看護展開の授業では、コロナ渦でオンライン授業が中心であったが、学生同士相談し合いながらZOOMを使用してグループワークを行った。わからない学生には、個別に指導し理解を促した。学生からは接触的に参加する姿勢があり、自己学習をしている姿も多かった。 令和4年からは、退院支援などでは実習時に必要なプレゼンテーションのスキルも養うためにパワーポイント資料での提出とした。
２.作成した教材等		
1）老年看護学実習要項・評価表・記録用紙・学内実習用事例・学内実習用プログラム	平成30年4月～現在	学校奈良学園大学保健医療学部看護学科の専門科目「老年看護学Ⅰ.Ⅱ」（3年次配当　4単位）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習方法と内容、実習の進め方、実習の心得、健康管理の方法などについてまとめた冊子を作製した。老年看護学実習でないと経験できない看護援助の実技面でも、確手順書を作成し観察項目などの確実な習得を目指した。 R2～4年度は、コロナ渦の非常事態宣言にて臨地実習ができず、臨地と遜色ないように一人1事例事例を準備し、看護展開と実際の看護の内容について学内実習を行った。また臨地での受け入れが可能な施設では、感染予防とできるだけ多くの学生の受け入れをしてもらうために実習先変更や日程調整を行い、実習内容を組みなおし調整した。学生は到達目標へおおむね到達できた。評価表はパフォーマンス評価が適切にできるように、ルーブリック評価へ変更した。
２）統合看護学実習要項（老年領域）・記録用紙・学内実習プログラム	平成30年5月～現在	学校奈良学園大学保健医療学部看護学科の専門科目「統合実習」（4年次配当　1単位）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習方法とスケジュール内容、実習の進め方、実習の心得、健康管理の方法、領域実習で実習できなかった看護技術の実習の仕方についてまとめた冊子を作製した。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
令和1～２年 　老年看護援助論での授業教材として、パーキンソン病・排泄の機能障害（排尿・排便）についての自己学習プリントの作成 　浮腫のイグザミネーションの手順、脱水・浮腫・倦怠感・脱水のeラーニング後の確認テスト作成　テスト問題作成 　老年看護概論の社会保障制度eラーニング資料作成 令和3～4年 　ゴードンの機能的健康パターンの内容についてかみ砕き、内容がわかるように平癒な言葉に直した資料の作成 口腔ケア時の看護の課題作成　定期テスト問題作成	平成30年4月～現在	学生自身が学習内容を深められるように、解剖整理から、病態生理、症状検査、看護と発展的にできるように工夫をした。また、学習してきた内容は、授業の中で発表する時間をもちお互いの学習内容について振り返りを行った。また、提出後にはすべての学習内容についてチェックし、不足している部分についてはさらに復習として授業の中で補足説明を行い理解できるようにした。 eラーニングでは,テキストを使用し学習を深められるように発問の内容をおきながらポイントを学習できるようにした。暗記を必要とする科目に関しては繰り返す学習で使えるように、自分独自の資料が作成できるようにした。 実習で作成した資料をそのまま使えるように、実習時に必要な内容を盛り込んで資料とした。領域実習で使用しながらアセスメントする学生を多数確認できた。
４）老年看護学実習学内での事例作成 事例：高齢者特有の疾患患者11例 シュミレーターの設定 総合病院での実習計画スケジュールの作成	令和2年8月～現在	老難看護学実習1.Ⅱではコロナ感染予防のために学内実習に切り替わることも多く、事例を使用し、学生へ臨地実習に近づけるようにした。シュミレーターなども使用し、異常音の聴取や心電図の読み取りなどもできるようにした。また2グール共同での実習の場合の実習計画表を作成し、各グループで実習ができるように工夫し学びの低下を防ぐようにした。 学生からは、「実技指導もありよかった」という声や「少しでも臨地に行けて安心した」「患者さんと関われてよかった」という声が聞かれた。おおむね全学生は目標達成できた。
5)国家試験対策講座　老年領域資料 出題傾向問題作成と解説パワーポイント資料	令和4年1月	2022年度までの過去問題や参考書、学生の模擬試験結果から間違いやすい問題と出題傾向の強い問題を作成し配信下。そしてその解答と解説を行い、国家試験へ向けて知識の再確認と定着を行った。参加した学生からはおおむね好評であった。
３　教育上能力に関する大学の評価		
「老年看護学援助論演習」	令和2年3月～現在	学生評価では、積極的に参加できるような授業展開にしたため、参加度は4.33に上昇していた。しかし、on-lineということもありり、わかりやすさや満足といった内容評価は平均であった。おおむね学生は目標達成できていた。
４実務の経験を有する者についての特記事項		
１）奈良学園大学法人広報委員会 　　奈良学園大学保健医療学部入試広報	平成30年4月～平成31年3月 令和2年3月～現在	学外広報誌作成の参画と調整、広報誌の内容の修正　オープンキャンパス参画運営と教員への周知徹底、内容や物品の調整を行った。　リハビリテーション学科開設の伴う広報活動として、外部向けシンポジウム運営調整を行った。当日はオーブンキャンパスとの同時開催があり、教員と学生に対し企画説明・役割や時間調整等を行い運営した。また、学外広報としての高校への派遣授業の教員への意見聴取ととりまとめを行い教員派遣の調整をした。広報活動企画報告書の作成を行った。 入試面接のルーブリック案の作成を行った。
特記事項なし		
５　その他		
特記事項なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格，免許		
１）看護師免許	平成2年5月	登録番号第684127号
２）厚生労働省専任教員養成課程修了	平成27年3月	
３）次世代教育学　学士	平成27年3月	教育学部に在学し、看護教育学に特化した内容の教育学を学んだ。
４）看護師・保健師養成所専任教員	平成27年3月	大学・短大・専門学校などでの看護師・保健師の養成教育、病院での新人教育などに携わる教員を認定する資格を取得した。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
５）学術修士	平成17年3月	登録番号第　　号
６）心療回想士５級技術位	令和4年6月	内閣総理大臣認証法人第1050号特定非営利活動法人日本回想法学会認定心療回想法5級技術委心療回想士
２　特許等		
該当なし		
３実務の経験を有する者についての特記事項		
特になし		

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和５年３月31日

氏名　　田場　真理

研究分野	研究内容のキーワード
臨床看護学(透析看護) 看護教育（AL，GW）	血液透析　終末期　抑うつ　意思決定 アクティブラーニング　グループワーク　オンライン

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
２　作成した教科書，教材		
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
４　実務の経験を有する者についての特記事		
1）認定・日本重症心身障害看護師研修会 看護研究アシスタント講師	H29年7月 ～ H30年9月	近畿地区日本重症心身障害心身障害福祉協会の依頼により認定研修の看護研究アシスタント講師として研究指導を行った
2）西奈良中央病院研究指導講師	R2年4月 ～ 現在	依頼により、西奈良中央病院院内看護研究の指導を行っている。
５　その他		
1）「基礎看護技術Ⅱ・Ⅲ」教育実績	H25年4月 ～ H27年3月	関西学研医療福祉学院（看護専任教員）にて、基礎看護技術Ⅱ（栄養、排泄、活動・休息、創傷、BLS・ALS、エンゼルケア等）についての講義・演習を担当した。講義ではグループワーク、ロールプレイングを取り入れ、学生が主体的に学べる機会を作る一方で、定期的に小テストも行い、学生自ら基礎知識の確認ができるよう工夫した。演習では､DVDの視聴や教員自らデモンストレーションを行いながらも、日常生活援助技術に関しては、学生のこれまでの生活体験を活かしよりよい援助の方法を考え実施できるよう工夫した。
2）「小児看護学援助論」教育実績	H26年4月 ～ H27年3月	関西学研医療福祉学院（看護専任教員）にて、小児看護学援助論についての講義（全15コマ30時間）・演習（全7コマ14時間）を担当した。講義・演習では、グループワークやロールプレイングをとりいれた。その際、子どもの発達段階の理解とともに、子どもの最善の利益を守る事の重要性を伝えつつ、子どもと家族に必要な看護について学生自ら考えられるよう指導を行った。
3）「基礎・成人・老年・小児看護学実習」教育実績	H25年4月 ～ H27年3月	関西学研医療福祉学院看護専任教員として、基礎・成人・老年・小児実習指導を行った。実習前には事前学習を課し実習での学びの準備を整えた。臨地では指導者と協力しながら、学生がより多くの気付き（学び）ができるよう関わった。

	4）「統合看護学実習」教育実績	H25 年 4 月 H27 年 3 月	関西学研医療福祉学院（看護専任教員）にて、統合看護学実習指導を行った。実習前には事前学習を課し実習での学びの準備を整えた。統合実習では領域実習では体験できない管理実習や夜勤帯での実習も取り入れより深い学びが得られるようかかわった。
	5） 看護研究指導	H25 年 4 月 ～ H27 年 3 月	関西学研医療福祉学院（看護専任教員）にて、看護研究（ケーススタディ）指導にあたった。実習中の自身の看護をふりかえり
	6）「小児看護学概論・小児看護学援助論」教育実践	H28 年 4 月 ～ H29 年 3 月	奈良学園大学（助手）にて、講義・演習の補助的指導を行った。
	7）「小児看護学実習」教育実績	H28 年 4 月 ～ H29 年 3 月	奈良学園大学（助手）にて、小児看護学実習指導を行った。
	8）「基礎看護技術Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」教育実績	H29 年 4 月 ～ H30 年 3 月	奈良学園大学（助手）にて、主に看護技術演習の指導を行った。
	9）「基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ」教育実績	H29 年 4 月 H31 年 3 月	奈良学園大学にて基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ実習指導を行った。
	10）「ヘルスアセスメント」教育実績	H30 年 4 月 ～ H31 年 3 月	奈良学園大学にてヘルスアセスメント全15コマのうち呼吸循・環機のアセスメント 4 コマを担当した。
	11）「基礎演習Ⅰラーニングスキルズ」教育実績	H30 年 4 月 ～ R2 年 3 月	奈良学園大学にて、1 年次生配当の基礎演習Ⅰラーニングスキルズ、全 15 コマのうちのうち、11 コマを担当した。（4 回は統合実習のため交代）
	12）「成人看護学援助論Ⅱ」教育実績	H30 年 4 月 ～ R4 年 12 月	奈良学園大学にて、成人看護学援助論Ⅱ、全 15 コマのうち 12 コマを担当している。授業は、原則、オンラインによる動画等の配信を中心とした反転授業＋対面でのアクティブ・ラーニングとしている。
	13）「成人看護学援助論演習」教育実績	R2 年 4 月 ～ R5 年 3 月	奈良学園大学にて、R3 年度までは成人看護学援助論Ⅱ、全 30 コマのうち 16 コマを R4 年度は成人(慢性）としての 15 コマ全てを担当した。授業は、原則、オンラインによる動画等の配信を中心とした反転授業＋対面でのアクティブ・ラーニングとしている。
	14）「卒業研究」教育実績	H30 年 6 月 ～ R5 年 3 月	奈良学園大学にて卒業研究Ⅱの研究指導を行っている。
	15）「成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ」教育業績	H30 年 4 月 ～ R5 年 3 月	奈良学園大学にて、成人看護学実習（Ⅰ・Ⅱ）指導を行っている。
	16）「統合看護学実習（成人）」教育実績	H30 年 4 月 ～ R5 年 3 月	奈良学園大学にて、統合看護学実習指導を行っている。
	17）「基礎看護学実習Ⅱ」教育実績	H30 年 5 月 ～ H31 年 3 月	奈良学園大学にて、基礎看護学実習指導を行った。

	18）「成人看護学概論」教育実績	R3 年 4 月 ～ R4 年 7 月	奈良学園大学にて、成人看護学概論、全 15 コマのうち R3 年度は 2 コマ、R4 年度は 7 コマ担当した。
	19）「統合看護論」教育実績	R4 年 12 月	奈良学園大学にて、統合看護論 1 コマを担当した。
	20）「情報科学」教育実績	R3 年 4 月 ～ R4 年 12 月	田北看護専門学校にて、非常勤講師として情報科学（全 15 コマ）を担当している
	21）「看護研究」教育実績	R3 年 4 月 ～ R4 年 12 月	田北看護専門学校にて、非常勤講師として看護研究（全 15 コマのうち 8 コマ）を担当している
	職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
	事項	年月日	概　　要
	１　資格，免許 看護師免許（第 1396705 号） 修士（学術）	 H19 年 4 月 H29 年 3 月	 放送大学文化科学研究科生活健康プログラム 修士論文名：透析患者の抑うつにソーシャルサポートが与える影響と支援の在り方―医師、看護師、ピアサポートに関する考察―
	博士（応用情報科学）	R4 年 9 月	兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科 博士論文:ICT 活用によるメンタルヘルス不調予防のためのサポートに関する研究
	２　特許等		
	３　実務の経験を有する者についての特記事 1）　国家試験対策 WG メンバーとしての活動 2）　FD 委員としての活動 3）学生生活 WG メンバーとしての活動 4）全学キャリア委員としての活動	 H27 年 4 月 ～ H29 年 3 月 H28 年 4 月 ～ H30 年 3 月 H31 年 4 月 ～ R2 年 3 月 H30 年 4 月 ～H31 年 3 月 R2 年 4 月 ～R4 年 3 月 H29 年 4 月 ～ H31 年 3 月	 奈良学園大学保健医療学部国試対策 WG メンバーとして確認試験の問題作成、模試の試験監督などを行った 奈良学園大学保健医療学部 FD 委員として、定期的な研修の企画運営などを行った 学生生活部会メンバー（3 年次生担任）として保護者懇談会、卒業式、新入生宿泊研修などに関する活動を行った。 R2 年度はホームカミングデーをタスクフォースグループとして中心的になり実施した。 キャリア委員として、就職説明会、就職ガイダンス、卒業生に対するウェルカムデーなどの企画運営をおこなった。
	5）学内広報委員としての活動	H31 年 4 月 ～ R2 年 3 月	広報委員として、パンフレット作製、オープンキャンパスの企画運営を行った

	6）実習 WG メンバーとしての活動	R2 年 7 月 ～ R4 年 12 月	実習 WG のメンバーとして大学全体として実習に関する調整・管理を行った。
	7)全学学生支援運営委員会委員としての活動	R2 年 4 月 ～ R4 年 3 月	学生支援運営委員会メンバーとして全学学生支援に関する活動を行った。R3 年度は白書作成に携わった。
	8）FD カリキュラム委員としての活動	R4 年 4 月 ～ R4 年 12 月	FD カリキュラムのメンバーとして、看護学科 FD 研修会の企画運営、その他、カリキュラム評価検討などを行った
	9）全学 FDSD 委員としての活動	R4 年 4 月 ～ R4 年 12 月	全学 FDSD 委員として、主に授業評価や TP について検討した
	４　その他		

	研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　2018 年看護師国家試験対策　要点がわかる出題傾向がみえる小児看護学	共著	H29 年 11 月	ピラールプレス	看護師国家試験科目の「小児看護学」について、過去問を読み解くための要点をまとめた。 共著者：守本とも子（監修）、芝田ゆかり、田場真理、瀬山由美子（編著） 本人担当部分：目標Ⅰ「子どもと家族を取り巻く環境」「子どもの成長・発達」「小児各期における健康増進のための子どもと家族への看護」の部分の執筆を担当した。
2　2018 年看護師国家試験対策　要点がわかる出題傾向がみえる成人看護学（下）	共著	H29 年 11 月	ピラールプレス	看護師国家試験科目の「成人看護学」について、過去問を読み解くための要点をまとめた。 共著者：守本とも子（監修）、松浦純平（編著）、大山末美、梶村郁子、田場真理（著） 本人担当部分：「内部環境調節機能障害のある患者の看護」「排尿機能障害のある患者の看護」の部分の執筆を担当した。
3　看護師国家試験 直前社会福祉学領域ファイナルチェック	共著	R3 年 3 月	金芳堂	看護師国家試験の出題範囲・出題傾向を基準とし、社会福祉学に関連する法律的な解決や理論、あるいは看護実践との関わりについてまとめた。 共著者：守本とも子、富永堯史（編著）、星野政明（監修）、田場真理（著） 本人担当部分：第 6 章 所得保障（公的年金・社会手当・雇用保険・労働者災害補償保険）

4　エビデンスに基づく消化器看護ケア関連図	共著	R4 年 2 月	中央法規	看護学生用、病態・看護関連図に関する参考書である。 共著者：吉治仁志、西田直子（監修）、松浦純平（編集） 本人担当部分:肝硬の部分の執筆を担当した。
（学術論文）				
1　認知症高齢者を介護する娘介護者の体験ー介護生活の中で体験する困難と、介護生活の支えとなるものー	共著	H28 年 9 月	奈良学園大学紀要 5：67-79, 2016.	認知症高齢者である親の介護経験を有する娘介護者を対象に、介護の中で体験する困難と介護生活の支えとなっているものについて半構成的面接を行った。その結果、娘介護者が体験する困難として《親の現状を受け止める難しさ》など７つのカテゴリーが、介護生活を続ける中で支えになるものとして《変わってゆく親を共有できる存在》など４つのカテゴリーが見いだされた。 共著者：上山智恵子、田場真理、守本とも子 本人担当部分:半構成的面接によるデータ収集および、コーディング、カテゴリー化を行った。
2　外来透析患者の服薬コンプライアンス不良に至る因子の検討（査読付） 〃	単著	H29 年 3 月	日本医療福祉情報行動学研究 4:25-30, 2017.	外来透析患者の服薬コンプライアンス不良に至る因子について、薬物に関する知識や理解度のほか、視力障害や指先の動きなど身体的側面の影響、ストレスなど心理・精神的側面の影響、そして薬物管理に関する家族のサポート状況など社会的側面の影響など軽 11 項目について検討した。その結果、服薬コンプライアンス不良に至る因子としては、患者の服薬に対する意識の低さが最も影響することが明らかとなった。
3　透析患者の抑うつにソーシャルサポートが与える影響と支援の在り方―医師、看護師、ピアサポートに関する考察―（修士論文）	単著	H29 年 3 月	放送大学修士論文	透析患者の抑うつに対する効果的な援助について示唆を得るため、ソーシャルサポートとしての医師・看護師・（患者仲間）ピアの援助について検討した。その結果、透析患者の抑うつを軽減させるために効果がある援助とは、身体症状を改善させるための看護師からの保健情報の提供であることが明らかとなった。

4　看護師のサポートが透析患者の抑うつに与える影響（査読付）	共著	H30 年 8 月	日本腎不全学会誌 20（2）,74-84,2018.	看護師のサポートが透析患者の抑うつに与える影響について明らかにし、透析患者の抑うつに効果的な看護師のサポートについて検討した。結果は、透析患者が抑うつになる最大の原因は身体症状の悪さであり、それを自己管理により軽減させるための看護師の保健情報提供的サポートが、身体症状を改善させることで精神面である抑うつを軽減する効果があることが示唆された。 共著者：田場真理、井出訓 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成、投稿を行った
5　Support for Decision-making Regarding Continuing or Suspending Terminal-Stage Dialysis.（査読付）	共著	H31 年 3 月	Japan Information and Behavior Science for Health and Welfare, 6,13-19, 2019.	透析患者の終末期透析の意思決定支援について示唆を得るため終末期透析に対する透析患者の思いを質的量的に分析した。量的データからは、透析患者の多くは自らの死について考えたり、医療者や家族と話合いをしていないことが明らかとなった。また質的データからは、透析患者には生への希望がある一方で家族への遠慮により延命への諦めがあることが明らかとなった。しかしながら、尊厳死への願いは共通しており、最期まで自分がどのように生きたいかを医療者・家族としっかり話合いの場を持てるよう調整することが重要であることが示唆された。 共著者：田場真理、守本とも子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成、投稿を行った
6　認知症高齢者と家族の生活支援への検討 ―認知症高齢者の気になる行動の分析より―（査読付）	共著	H31 年 3 月	医療福祉情報行動科学研究,6,55-63, 2019.	認知症高齢者家族の支援を検討するため、認知症高齢者の気になる行動を中心に、認知症高齢者と家族の抱える問題をインタビューより明らかにし、KJ 法により分類した。その結果、認知症高齢者と家族の抱える問題は「もの忘れ」「怒りっぽい」「排泄の問題」など 8 つの問題に分類された。これらの問題はいずれも生活問題としてそれなりに重要ではあるが、なかでも「弄弁」は家族が抱える最も困難な事象であることが明らかとなった。また、これらの問題はいずれも認知症という疾患に起因するものであることから、介護者の精神的負担を軽減するためには、認知症という疾患の理解を促すことが重要であることが示唆された。 共著者：守本とも子、田場真理、川口ちづる、新谷奈苗、永岡裕康 本人担当部分：実施・分析・一部論文作成を行った

7　透析患者の抑うつにピアサポートが与える影響（査読付）	共著	令和２年３月	医療福祉情報行動科学研究 vol.7 pp44-53, 2020.	透析患者の抑うつにピアサポートが与える影響について明らかにし、効果的なピアサポートの活用のための示唆を得ることを目的とした。2変量解析・多変量解析の結果、透析患者の抑うつにピアサポートが影響を与えることは示されなかった。理由は透析患者が抑うつとなる最大の要因が患者自身の自覚する身体症状であるためであることが示され分析から示され、透析患者の抑うつに対してピアサポートを効果的に活用しようとするならば，まずは患者の身体症状を改善することが医療者の役割として重要であることが示唆された。 共著者：田場真理、守本とも子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成、投稿を行った
8　“Support of doctor” influence on hemodialysis patients’ depression: Cooperation with doctors from a nursing perspective. （透析患者の抑うつに医師のサポートが与える影響－看護の立場から医師との連携を考える－）（査読付）	共著	令和２年３月	Japan Information and Behavior Science for Health and Welfare: vol.7 pp17-24, 2020.	透析患者の抑うつ改善のための効果的な医師との連携の在り方を看護の立場から検討するため、医師のサポートについて調査・分析した.結果，透析患者の抑うつに直接的に影響を与えているものは患者自身の自覚する身体症状であり、医師のサポートは間接的に影響を与えるものであることが明らかとなった。このことからは医師の治療による身体症状の改善が行われれば，抑うつ状態も軽快へと向かう可能性があることが示唆された。看護師は身体症状に対する治療効果を高めるために医師と連携することが、抑うつ改善のための効果的な医師との連携であろうことが示唆された。 共著者：田場真理、守本とも子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成、投稿を行った
9　透析患者の抑うつに対する看護の実態（査読付）	共著	令和２年３月	医療福祉情報行動科学研究 vol.7 pp55-62, 2020.	透析患者の抑うつに対する看護の実態として，抑うつ症状等の観察の頻度および情報提供の状況を明らかにし，課題について検討することを目的とした.その結果，対象者は経験豊富な看護師が多く含まれる集団であったといえるが，抑うつ症状の観察を常日頃行っている看護師は３割程度、情報提供を行っている看護師は１割にも満たないことが明らかとなった．また分析の結果、看護師経験年数，透析看護経験年数が長い人であっても，抑うつ症状等の観察ができているわけではないことも明らかとなった. 共著者：田場真理、石垣恭子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成・投稿を行った

10　A Discussion of Social Support for Dementia Elderly People and Family Carers（認知症高齢者と家族介護者におけるソーシャルサポートの考察）（査読付）	共著	令和３年３月	Japan Information and Behavior Science for Health and Welfare: vol.8 pp,67-75, 2021.	認知症高齢者と家族介護者の生活とソーシャルサポートの実態について明らかにし、在宅での介護継続、QOL 向上に必要な支援について検討した。その結果、医療・福祉が提供するソーシャルサポートの中で、在宅介護に関する相談や支援など手段的サポートや、介護についての情報提供といった情報的サポートに課題があることが明らかとなった。 共著者：守本とも子、田場真理、新谷奈苗、辻下守弘 本人担当部分：実施・分析・一部論文作成を行った
11　An Analysis of Related Factors of Subjective Health and Life Satisfaction among Caregivers of Dementia Elderly People（認知症高齢者の介護者における主観的健康感、生活満足度の関連要因の分析）（査読付）	共著	令和３年３月	Japan Information and Behavior Science for Health and Welfare: vol.8 pp, 77-83.2021.	認知症高齢者の介護者の QOL と主観的健康感、生活満足度との関連を明らかにし、必要な支援について検討した。その結果、主観的健康感と生活満足度の間に高い相関が認められ、介護者の主観的健康感を高めることが生活満足度を高めることになることが示唆された。また、生活満足度は家計とも高い相関が認められ、福祉サービスの利用増加に伴い、介護者の経済的な負担も考慮しケースに応じた適切な社会資源の活用を生かした支援策を講じる必要が考えられた。 共著者：守本とも子、田場真理、新谷奈苗、辻下守弘 本人担当部分：実施・分析・一部論文作成を行った
12　オンライン上グループワークにおける学習成果に繋がる学生の態度と認知の関係（査読付）	共著	令和３年６月	Computer ＆ Education vol.50 72-77.2021	看護系大学生のオンライン上 GW の実態として，学生の態度や認知，　学習成果の状況を明らかにした。結果，オンライン上 GW において，学生の学習理解の高まりには自信の高まりとの関係があり，自信 の高まりには GW の良さ，そして GW への貢献の双方の認知の高まりを伴うことが明らかとなった。他方で，　やりがいやスキルといった態度の高まりや，事前学習，自室で授業参加，心理的安全性も，間接的に学習成果 と関係することが明らかとなった。 共著者：田場真理、石垣恭子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成・投稿を行った

13　舌癌サバイバーのレジリエンスを構成する要素	共著	令和５年３月	奈良学園大学紀要 15: 135-144,2023.	舌癌サバイバーのレジリエンスを構成する要素について，I have，I am，I can の３側面から明らかにすることを目的とし，心身の安定した舌癌サバイバーに半構造化面接を実施，逐語録を作成し，レジリエンスを構成する要素に該当する部分をＩ have，　Ｉ am，Ｉ can の３側面に分類し内容分析によりカテゴリ化した．結果として，舌癌サバイバーのレジリエンスを構成する要素として，Ｉ have では，【辛い時，困った時に支援を得られる環境がある】こと，【心理的に支えてくれる人がいる】ことが，I am では，【楽観的に生きる】力，【自分も周囲の人も大切にする】力があることが，そしてＩ can では，【生活の再構築に向け模索・実践する】力，【心と体の健康を作る】力が見出された． 共著者：田場真理，柳生貴裕，溝口みちる，桐田忠昭，守本とも子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成・投稿を行った
国際学会発表				
1　Analysis and problem of research on dialysis nursing at disaster time in the world（世界における災害時における透析看護に関する研究の分析と課題）	共著	令和２年２月	The 6th International Research Conference of World Academy of Nursing Science（6th WANS）	文献検討により世界における災害時における透析看護に関する研究の分析と課題を明らかにすることを目的とした。テキストマイニングによる分析の結果、災害時の透析患者の健康を優先的に考え、素早い対応ができるプログラムの開発と医療職種チームが連携することが重要であること、病院の医療職チームが実際に行動（アクション）を起こすこと、透析患者の健康を優先的に考えることが重要であることが示された。今後の課題は、地域により地震やハリケーンなど多様な災害があるため、今後も多種多様な研究の増加が望まれる。 共同発表者：松浦純平、田場真理、小林由里、溝口みちる、守本とも子 本人担当部分：研究実施、・分析を行った

2	A systematic review of research on postoperative delirium onset prevention from the viewpoint of circadian rhythm in the world（世界におけるサーカディアンリズムの観点からみた術後せん妄発症予防に関する研究のシステマティックレビュー）	共著	令和２年２月	The 6th International Research Conference of World Academy of Nursing Science（6th WANS）	文献検討により、世界における先行研究からサーカディアンリズムとせん妄発症の関連性からせん妄発症予防について分析することを目的とした。4編の論文を精読し，サーカディアンリズムとせん妄発症の関連性についてテキストマイニングにより分析した結果、4編の論文中3編の論文から明らかになったことは，メラトニン産生がサーカディアンリズムを調節し、術後せん妄発症を予防する可能性が示された。今後は無作為ランダム試験による研究が進むことが期待される。 共同発表者：松浦純平、小林由里、田場真理、溝口みちる、守本とも子 本人担当部分：研究実施、・分析を行った
3	Analysis of nursing research on CPR in gender: a 10-year study in the world（世界におけるジェンダーの視点からのCPR実施時に関する看護研究の分析）	共著	令和２年２月	The 6th International Research Conference of World Academy of Nursing Science（6th WANS）	文献検討により、世界におけるCPR実施時の性に関する研究の分析と課題をテキストマイニングにより明らかにすることを目的とした。階層的クラスターの結果から学生のCPR教育の中で性差に囚われずに確実なCPRの実施、振り返り、実施後のデブリーフィングが重要であることが明らかになった。男子女子学生という枠組みに入れ込まずにCPR教育時における確実なCPRの手技とデブリーフィングが必要であることが示唆された。地域、国別の独自の文化的、宗教的背景があるため、性差によるCPR実施時の影響について取り組んだ研究は少数であった。性差に囚われずに確実な手技の習得につながる教育の必要性については共通していた。 共同発表者：松浦純平、溝口みちる、小林由里、田場真理、守本とも子 本人担当部分：研究実施、・分析を行った

4 Factors Related to the Perception of Nursing Students for Group Work in Online Classes(オンライン上グループワークにおける看護学生の認知に影響を及ぼす要因)(国際学会発表)	共著	令和2年11月	11th Biennial Conference of the Asia-Pacific Association for Medical Informatics (APAMI2020)	オンライン上で実施するグループワークにおける看護学生の認知に影響を及ぼす要因について明らかにし、効果的なオンライン上グループワークを行うための示唆を得ることを目的とした。分析の結果、オンライン上グループワークにおいて看護学生がグループワークの良さを認知するためには、学生自身がグループワークにやりがいを感じていること、グループ内の心理的安全性が確保されていること、自室など集中できる場所で授業に参加できること、ストレスマネジメントスキルがあることが影響を及ぼす要因であることが示された。一方、グループワークへの貢献を認知するためには、心理的安全性が確保されていない状況において学生がスキルを発揮すること、自室など集中できる場所で授業に参加できることが影響を及ぼす要因であることが示された。これらを考慮した授業設計が重要となることが示唆された。 発表者：田場真理、石垣恭子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成・発表を行った
(国内学会発表)				
1. 透析室における患者満足度調査―患者の声から現状の問題点と課題について考える―		H24年2月	奈良県医師会透析部会(奈良県医師会透析部会誌 18:1,92.)	外来透析患者に対し、既存の透析患者用満足度尺度を用いて看護師に対する満足度を測定した。その結果、態度に関する満足度は高かったが、患者自身が疼痛を伴う穿刺技術に関する満足度は低いものであることが明らかとなった。共同発表者：田場真理、米澤麻理、森村美保 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成・発表を行った
2. 透析患者の抑うつに対する看護の実態	共著	H31年3月	日本看護研究学会第32回近畿・北陸地方会学術集会(於　福井)	透析室で勤務する看護師が、日常的に患者の抑うつ症状についてどの程度観察を行っているか、その実態について明らかにした。結果は、経験豊富な看護師でさえも、ほとんど観察できていないことが明らかとなった。 発表者：田場真理、石垣恭子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成・発表を行った

3. 看護師の看護管理のコンピテンシーに関する研究の特徴ーテキストマイニングによる分析からー	共著	令和2年3月	日本看護研究学会 第33回近畿・北陸地方会学術集会抄録集	看護師の看護管理のコンピテンシーに関する研究の特徴を明らかにすることを目的にKHCoderにて先行研究の文章解析を行った。その結果、看護師の看護管理のコンピテンシーに関する研究は人材育成、能力評価、支援・指導体制、キャリア開発、隣地実践能力などの特徴があった。今後、病院や地域での看護師の臨床実践能力が求められていることが示唆された。 共同発表者：上野栄一、松浦純平、溝口みちる、田場真理、杉島優子 本人担当分：文献収集、分析を行った
4. 看護におけるAI（人工知能）に関する研究の現状と展望ーテキストマイニングを用いた分析ー	共著	令和2年3月	日本看護研究学会 第33回近畿・北陸地方会学術集会抄録集	看護におけるAIに関する研究の現状と展望を明らかにする目的で対象文献をKHCoderを用いて分析した。結果、看護分野におけるAI活用の現状は、介護支援ロボットスーツHALや手術支援ロボットda Vinciなどロボットに関する研究とその効果について研究が多いことが明らかとなった。今後は患者の心に寄り添い、AIが導き出した以上の看護実践に取り組み効果を検証していく必要性が考えられた。 共同発表者：松浦純平、溝口みちる、田場真理、上野栄一 本人担当分：文献収集、分析を行った。
5. テキストマイニングを用いた看護系大学生が考えるCPR実施上の困難感（第1報）	共著	令和2年12月	第40回日本看護科学学会学術集会	看護系大学生が考える一次救命処置実施上の困難感を明らかにし教育に示唆を得ることを目的とした。CPRで大事なことは、確実な手技のもと胸骨圧迫の継続である。結果より実施阻害要因の1つとして不安が明らかになった。不安の内容は確実な胸骨圧迫の実施ができるかと周囲の目がある中でCPRの2つの不安が明らかになった。CPR教育では論理を理解した上で反復行動にて達成経験を得ること、他者からの承認を与えること、様々な状況を想定して想像的体験にて自己効力感を高め、自分もできるという自信を持たせることを意識した教育が必要と考えられた。 共同発表者：松浦純平、田場真理、溝口みちる、守本とも子、上野栄一 本人担当部分：研究実施、・分析を行った

6. テキストマイニングによる看護系大学生が考えるCPR実施を阻害する理由（第2報）－要因の具体的内容－	共著	令和2年12月	第40回日本看護科学学会学術集会	看護系大学生が考えるCPR実施を阻害要因の具体的内容を明らかにし、教育への示唆を得ることを目的とした。CPR実施を阻害する要因としては、人工呼吸実施への抵抗が強いことが明らかになった。CPRでは無理して人工呼吸を実施するよりも確実な胸骨圧迫の継続が重要である。正しく優先順位を理解した上での確実なCPRは救命率上昇につながる。女性へのAED電極パッド貼付に対してプライバシーや羞恥心を感じることも阻害要因として明らかになった。対策としては、衣服の完全脱衣ではなく衣服の下からのパッド貼付などを普段から想定した教育・演習の必要性が示唆された。 共同発表者：田場真理、松浦純平、溝口みちる、守本とも子、上野栄一 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成・発表を行った
7. オンライン上グループワーク型授業における看護学生の態度に影響を及ぼす要因	共著	令和3年3月	日本看護研究学会 第34回近畿・北陸地方会学術集会抄録集	オンライン上グループワーク型授業における看護学生の態度に影響を及ぼす要因について明らかにすることを目的とした。グループワークにおける態度として、スキルには、①心理的安全性（β＝0.46）、②事前学習（β＝0.25）が（R2＝0.30）、やりがいには、①心理的安全性（β＝0.41）、②事前学習（β＝0.26）が影響を及ぼしていることが示された（R2＝0.25）。今回仮定した因子の中でリーダーシップに有意に影響を及ぼすものはなかった。 共同発表者：田場真理、松浦純平、溝口みちる 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成・発表を行った
8. 看護過程におけるアセスメントに関する研究	共著	令和3年3月	日本看護研究学会 第34回近畿・北陸地方会学術集会抄録集	看護過程におけるアセスメント能力に関する研究の特徴をテキストマイニングによる解析で明らかにした。共起分析の結果、看護とアセスメントと能力、今後と課題等がグループを形成した。対応分析の結果、[学生と実習と指導]、[支援と活動]、などの特徴が示された。アセスメントのコロケーション解析では、【アセスメント能力】【アセスメントシートの活用】【アセスメント能力の概念】【アセスメントの方法】【症状別アセスメント】【焦点を当てたアセスメント】【EBMに基づいたアセスメント】の7カテゴリーが生成された。 共同発表者：上野栄一、松浦純平、田場真理、溝口みちる、守本とも子 本人担当部分：文献収集、分析を行った

9. A 看護系大学生の CPR（心肺蘇生法）教育に関する意識調査	共著	令和 3 年 3 月	日本看護研究学会 第 34 回近畿・北陸地方会学術集会抄録集	看護系大学生の CPR 教育に関する意識の実態を Tukye 法による多重比較により明らかにした。BLS 実施の自信について学年比較した結果、1 年と 3 年、1 年と 4 年の 2 群間について有意差(p<.005)がみられた。BLS 実施時の困難感は「胸骨圧迫」、「人工呼吸」、「呼吸の確認」の順番であった。死戦期呼吸の認知度は 42 名（82.3%）が知っていると回答した。認知度について、学年間で群間比較した結果、有意差はみられなかった。学年間で群間比較した結果、有意差はみられなかった。BLS 講義・演習を受講済であるため学生はやればできるという自信につながっているのではないかと推察する。今後は講義・演習での要指導強化内容は、確実な胸骨圧迫の手技の理解と技術修得、死戦期呼吸の見極め、プライバシーへの配慮を考える教育が必要であることが示唆された。 共同発表者：松浦純平、田場真理、溝口みちる、守本とも子、上野栄一 本人担当部分：研究実施、・分析を行った
10. テキストマイニングによる ICU における術後せん妄に関する研究の現状と展望	共著	令和 3 年 3 月	日本看護研究学会 第 34 回近畿・北陸地方会学術集会抄録集	本研究では、ICU における術後せん妄に関する研究の現状と展望をテキストマイニングにより明らかにすることを目的とした。形態素解析の結果、総抽出語数は 1,268 語、354 種類であった。頻出上位品詞は、せん妄（45）、術後（42）、患者（20）、ICU（15）、検討（15）、術前（13）、訪問（11）、要因（10）などであった。共起ネットワーク分類の結果、術後せん妄発症予防的介入の効果、看護ケアの実際、対象患者側の視点、アセスメントシート作成の 4 つのクラスターに分類された。相関関係ではアセスメントシートと作成（0.5）、術前と訪問（0.45）、患者と手術（0.42）間に相関関係がみられた。階層的クラスター解析の結果、5 つのクラスターに分類された。ICU における術後せん妄に関する研究の傾向としては、術前 ICU 訪問（11 編）を中心とした発症の予防的視点からの研究（15 編）、せん妄発症要因探索に関する研究（12 編）、アセスメントシート作成・効果検証（6 編）、実態調査（4 編）、患者の思いを実際に語ってもらい聞き取るなどの患者側の視点からの研究（2 編）の 5 つの側面からの研究に取り組まれていることが明らかになった。 共同発表者：溝口みちる、松浦純平、田場真理、 本人担当部分：研究実施、・分析を行った

11. 舌癌患者のレジリエンスの構成要素	共著	令和 3 年 7 月	日本看護診断学会 第 27 回学術大会抄録集	舌亜全摘を受けた患者のレジリエンスの構成要素については明らかにすることを目的に、半構造化面接を実施、逐語録を作成し、その中からレジリエンスに該当する部分を抽出し、質的記述的に分析した。結果、舌亜全摘を受けた患者のレジリエンスの構成要素として≪舌癌も舌癌になった自分も受け入れる≫≪家族・医療者からの支援を得る≫≪治療後の障害・後遺症改善へ向け模索・実践する≫の 3 つのカテゴリーが抽出された。 共同発表者：田場真理、松浦純平、溝口みちる、守本とも子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成・発表を行った
（その他雑誌）				
1　終末期透析についての意識と実態調査報告書	共著	H28 年 3 月	NPO 法人奈良県腎友会発行雑誌ばんび春号. 3-12, 2016	外来透析患者とその家族を対象に、終末期透析についての意識と実態を調査した。その結果、意思決定能力のあるうちに、自身の終末期医療について書面で提示 しておきたいと考える患者が約半数、そうしてもらいたいと考える家族は半数いることがわかった。しかしながら、医療者とそういった話し合いの場は、ほとんどもたれていない現状が明らかとなった。 共著者：田場真理、守本とも子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成、投稿を行った
（講演）				
1　奈良県腎友会女性部会での講演		H28 年 7 月		腎臓病患者会である NPO 法人奈良県腎友会より依頼があり、終末期の維持透析と事前指示書に関する講演を行った。（於 桃谷楼）

2　奈良県腎友会北和地域健腎会での講演 3　奈良県腎友会北和地域健腎会での講演		H30 年 2 月 H31 年 2 月		NPO法人奈良県腎友会(北和地域腎友会)より依頼があり、「豊かな人生の総仕上げのためにー自らの人生の先に思いを馳せて語り合おうー」のテーマで新年のつどいの講演を行った。（於 生駒市南コミュニティセンターせせらぎ） NPO法人奈良県腎友会(北和地域腎友会)より依頼があり、「寝たきりにならないための日常生活で気をつけること」のテーマで新年のつどいの講演を行った。（於 生駒市福祉センター）
（学会等への貢献） 1　日本サーモロジー学会学術集会第 33 回大会 2　奈良県腎不全看護研究会世話人 3　日本看護研究学会学術集会第 45 回大会		H28 年 6 月 H30 年 4 月 ～ 現在 R 元年 8 月		奈良市（奈良学園大学）で開催された第 33 回日本サーモロジー学会学術集会の実行委員を担った。 日本腎不全看護学会の下部組織である奈良県看護研究会の世話人として、研究会の管理運営（年 2 回の研究会）を行っている。 大阪国際会議場（グランキューブ）で開催された第 45 回日本看護研究学会学術集会の実行委員を担った
4　第 34 回近畿北陸地方会学術集会		R3 年 3 月		奈良市（奈良学園大学）で開催の第 34 回日本看護研究学会近畿北陸地方会学術集会の実行委員（会計）を担った。新型コロナウィルス感染症の影響によりオンサイト開催は中止となり、抄録集の発行のみとなった。
5　第 27 回看護診断学会学術大会		R3 年 7 月		奈良市（奈良学園大学）で開催の第 27 回日本看護診断学会学術大会の実行委員（会計）を担った。新型コロナウィルス感染症の影響によりオンデマンド開催となった。
:				

［注］

1 最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。

2「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。

3「研究活動」については、下記の点に留意すること。

① 著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。

② 著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。

③ 共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。

④ 最近１０年間に著書･論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。

⑤ 芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。

別記様式第４号（その２）

教　育　研　究　業　績　書

2023　年　3 月　31　日

氏名 西出　順子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学、心理学	自己心理学、共感、 患者ー看護師関係、相互作用

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
１）通信制教育でのレポート添削における工夫	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神援助論」（専門分野Ⅱ、必修2単位）「精神看護学演習」（専門分野Ⅱ、必修１単位）において、通信制システムを通して、複数の課題項目に従ったレポートが送られてくる。学生の理解力に応じたコメントの工夫として、理論の簡略的な解説やレポートの書き方や考え方の筋道、具体例等、学生のレポートにワードの校閲機能を用い、学生の記述の文脈の中でコメントを返すように心がけた。学生からの感想として、「躓いているところ等のポイントでコメントをもらい、わかりやすかった」等の評価を得た。
２）課題・レポートの活用	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野、１年次配当、半期、必修１単位）「精神看護特性論」（専門分野、２年次配当、半期、必修１単位）「精神援助論」（専門分野、３年次配当、半期、必修２単位）において、次回の講義内容の予習として、他の科目で習得した内容が講義内容と関連する場合、レポートにまとめたうえで受講する形をとっている。例えば、講義内容が「向精神病薬の副作用に対する援助」であれば、解剖学・生理学等で既習した錐体外路や副交感神経の作用について、有害反応の根拠となる基本をレポートにまとめ、授業に挑むようにしている。「精神看護学概論」や「精神看護特性論」は、「精神援助論」につながる基本をおさえているので、既習した内容が「精神援助論」の授業内容に関連する場合、既習の知識をレポートとしてまとめた上での受講としている。定期試験において、レポートと関連させた内容のところは正答率がやや高い結果となっている。学生の意欲の差はあるが、既習得の授業内容とリンクさせ学生にまとめさせることによって、授業に向かう動機付け及び順序立てた理解につながると考えられる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学 保健科学部 看護学科において、1年次配当「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、予習としてポイント個所をまとめ授業前に発表する形をとっている2年次配当「精神看護援助論」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）においては、授業後にポイントを文脈を作ってノートにまとめ、授業期間中間と最終日に提出し、コメントをつけて返却する。これらにより、単位修得試験以外において、最低限、授業内容について考える機会を設けている。また、看護の対象を理解するツールとして用いるエリクソンの発達論に関しては、自己の発達と関連させてキーワードの考察を深めるためにレポートを課している。

事項	年月日	概　　要
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所　CNSコースの精神看護学演習Ⅰ・Ⅱ（専門科目、半期、各2単位）において、授業内容に応じたテーマで日頃の看護実践場面をまとめたものを持参してもらい、授業素材とし、実践に応じた助言を行っている。
３）演習・実習の効果的な活用	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤短期大学神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程　専任講師の講師「精神看護学実習」（専門分野Ⅱ、必修１単位）において、帰納的学習法をとっている。2日間の見学実習の後、3日間のスクーリング授業を行う。見学した内容をスクーリングで援助の根拠づけを行い、さらに内容を深化させていく帰納的学習法を実施している。スクーリングでは講義やグループワーク、個別指導等の方法をとる。グループワークでは見学したことについて、対象理解や援助方法、治療的環境という観点で話し合い理解を深めていく。また、学んだことを統括するために、看護過程をイメージできる事例（発症から入院～退院後の経過を追った事例）を選択し、精神状態のアセスメントをしながら患者の内的体験のイメージを膨らませ、精神看護の基本的な姿勢を患者の自我を支えるという視点でおさえる。また、2日間の病院実習ではなかなか機会が得られない退院支援については、DVDや新聞の切抜きなどを活用し、そのつど学生に問いかけながら理解を求める。授業終了後のアンケートでは、レポート学習から見学したことまで、すべてがつながる内容だったと評価を得ている。
	平成21年4月～平成27年3月	兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科　非常勤講師「ヘルスカウンセリング」（2年生　45人クラス）において、行動の変容をはかるということとカウンセリングの関係性についての概説。心理学の視点から人の心について理解したうで、傾聴の基本姿勢、関係性から生じる厄介な問題（転移・逆転移）、医療現場でのコミュニケーションの流れについて説明する。授業開始前に臨地実習で実際の患者とのコミュニケーション場面のプロセスレコードを課題とし提出、その中からいくつかの場面を抜粋し、患者の話す言葉の意味や対応を考える。グループワークで事例検討を行い、対象理解とコミュニケーション方法について考え、ロールプレイを行う。授業後の感想で、学生の実際の実習場面でのプロセスレコードを教材として用いるため、学生の関心が高まったという内容が多く聞かれた。
	平成23年4月～平成27年3月	神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科の専門科目 「こころと歯科衛生ケアプロセス」（2年生　約90名それぞれABクラスに分けて行った）において、演習形式で行った。人を理解するための理論と、様々な対象者と関係を築くための基本的な知識を学習し、医療現場に適したコミュニケーションを実践できる能力を身につける。対象者の心を様々な角度から理解する意味について解説。演習として、話をきく基本姿勢について学生同士、意識をしてロールプレイをする。好ましい態度と好ましくない態度。歯科衛生士と患者の関係性の中で生じる厄介な問題について事例を用いて解説。人を理解するための心理学の理論や障害のある患者の概説。演習で歯周疾患患者（成人）と高齢者の患者の2事例で、対象理解とコミュニケーション方法についてグループワークをし、考える場を設けた。

事項	年月日	概　　要
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神援助論」（専門分野、３年次配当、半期、必修２単位）において、IBL(inquiry-based learning)方式のアクティブラーニングとロールプレイングを導入している。IBLは、①目的に沿った事例を作成　（統合失調症、うつ病性障害等）②事例から数行の情報が入ったパートを３から４作成。パートごとに＜事実＞＜仮説＞＜必要な情報＞＜調べる項目＞に分けて進行していく。＜調べる項目＞では学生が次回の授業までに分担して調べる。③②に続くグループワークでは、①で作成した事例を学生に提示し、病院実習で用いる記録用紙に情報を記入、治療薬について調べ、精神のアセスメント、セルフケア項目順に沿ってのアセスメント、全体図、看護計画を作成していく。④③で作成した看護計画をロールプレイングで実施する。また、ロールプレイングでは他に「かかわりを拒絶する患者」や「幻覚のある患者」等、病院実習でよく遭遇する場面を設定し行っている。IBL方式の少しずつの情報提供は、病院実習での情報のとり方を想定し、少しずつイメージを膨らませ、患者に問いかけられるようにと言う意図も含み行っている。学生からは、この方式に馴染めない者もいるが、情報から、考えを進めていく筋道がわかるとの評価ももらっている。ロールプレイングでは、患者像のイメージを掴むのが難しく、双方向のコミュニケーション効果までは望めないが、「このような場面に遭遇した時はどうすればいいのか」と意識することにはなっていると思われる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において3年次配当、「精神看護援助論演習」（専門科目、3年次配当、前期、必修1単位）ペーパーペイシェントを用い、情報の収集の仕方、収集した情報の記録の仕方、アセスメント方法と看護援助の導き方について、小ステップでの個人ワークとグループでの意見交換の後教員の解説を行う。授業ごとに個人ワークは提出し、教員のコメント付きで返却することを看護過程終了までの5回行う。次に、別事例（ペーパーペイシェント）をグループで展開する。グループワークの内容は、情報の収集・アセスメント、援助の方向性までグループで検討しながら看護の展開をはかる。自分で思考したうえでグループで検討しあうことは、思考過程を広げ深めていくことができると考える。また、グループで立案した看護計画は学生同士で患者・看護師役を交代で行い実践し、その実践課程をプロセスレコードに記入し振り返りを行っている。模擬ではあるが実習で実施する看護実践課程を一通り体験している。

事項	年月日	概　　要
４）視聴覚教育技術その他教材の利用	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野、１年次配当、半期、必修１単位）「精神看護特性論」（専門分野、２年次配当、半期、必修１単位）「精神援助論」（専門分野、３年次配当、半期、必修２単位）において、精神障がい者の生きづらさや苦悩について、理解をはかるためにドキュメンタリーのDVDを活用している。「精神看護学概論」では、映画「精神」から統合失調症の女性のヒストリーを語る場面を視聴、後に解説をすることで、成育歴や生活環境が患者の精神状態や心理にいかに影響を及ぼすのかについて理解を図る。「精神看護特性論」では、自閉症の患者のDVDを用い、障害の特性や苦悩の理解を図る。「精神看護特性論」と「精神援助論」では、COMHBO地域精神保健福祉機構の作成するDVDを用い、SSTや訪問看護、心理教育など地域で暮らす障がい者の様々な治療やサポートについて患者の心理の描写とともに理解を図る。後の感想・評価からは、いずれも精神障がい者に対して、共感的にイメージ化が図れている一助となっていることがわかる。

事項	年月日	概　　要
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて「精神看護援助論」（専門科目、2年次配当、後期、必修1単位）で、抗精神病薬の有害反応や、閉鎖病棟のイメージ化を図るためにドキュメンタリーの映像を活用している。また、妄想や幻覚などの病的体験のイメージを広げ共感的理解の促進を図ることを目的に、当事者グループが作成した「妄想幻聴かるた」を活用している。 精神看護の理解が進んだ後に、奈良県の地域活動支援センターに通所する当事者にゲストスピーカーを依頼し、ご自身の体験と看護師の支援に関する体験をお話しいただいている。以上により、様々な生きづらさや背景を持つ対象と看護に必要な基本知識の理解を促進する。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所　精神看護学特論Ⅳ・精神看護学演習Ⅱ（専門科目、1年次配当、後期、各2単位）でSSTの実践について、流れやポイントを理解するためにDVDを活用している。
５）双方向授業の実践	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤短期大学神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程　専任講師の講師「精神看護学実習」（専門分野Ⅱ、必修１単位）では、2日間の見学実習の後、3日間のスクーリング授業を実施する。スクーリングでは講義やグループワーク、個別指導等の方法をとる。グループワークでは見学したことについて、対象理解や援助方法、治療的環境という観点で話し合い、話し合ったことを発表する形ですすめている。グループワークに適度に入り、質問や助言を行うことや、その後の発表では各グループの発表直後に質問や助言をしている。その後のレポートから、その場その時のやりとりは、学生に理解の深まりや広がりにつながっていることが読み取れる。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」「精神看護特性論」「精神援助論」において、講義形式をとる場合、適宜発問をし、周囲の学生と２分ほど話し合い、意見を発言してもらう。これらを1回の授業で4回～5回設けることで、学生の注意を喚起し、居眠りが減る傾向にある。
		神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「健康支援実習Ⅲ（精神）」（専門分野、３年次配当、半期、必修２単位）では、8日間の病院実習と半日の学内実習を行っている。病院での実習と学内実習では、学生に付き添い、対象者の背景から読み取る理解やコミュニケーションを通しての理解、精神状態や心理状態の把握、コミュニケーションの取り方や実施した援助についてなど、その場その時に応じた質問や助言を行っている。実習学生から返ってくる内容や感想、提出物の内容の充実さから効果が認められる。

事項	年月日	概　　要
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において担当の1年次配当「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、ゼミ形式にて、常時問いかけと発言を繰り返し行っており、学生が自分の考えを発言する機会を多く持つようにしている。2年次配当「精神看護学概論」（専門科目、２年次配当、半期、必修２単位）においては、授業の終わりにミニノートと質問を記述し、次回の授業の際に授業のおさらいの意図も含め、質問に答えている。オムニバスにて、次週担当しない場合は、GoogleClassroomにコメントを掲載し、学生に返している。2年次配当「精神看護援助論」（専門科目、2年次配当、半期、1単位）および3年次配当「精神看護援助論演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修1単位）においては、講義形式の際は発問を取り入れ、演習の際には、巡回し、質問ができる環境を整えている。

事項	年月日	概　　要
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所　精神看護学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・精神看護学演習Ⅰ・Ⅱ（専門科目、1年次配当、半期、各2単位）では、理論や知識の説明後、臨床経験を有する学生の現場での体験を話してもらいながら関連付けて授業を進めている。
6）ディスカッションの導入	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤短期大学神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程　専任講師の講師「精神看護学実習」では、3日間のスクーリングは主にグループワークのディスカッションですすめられていく。学生の年齢層が20代後半から60歳代まで幅広く、人生経験も豊かなため、ディスカッションも活発である。ただし、個性も豊かで、他者の発言を聞き入れられなかったり、内容に偏りが見られることもあり、適宜介入が必要である。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護特性論」「精神援助論」において、隔離・拘束について“人権を守る”ということはどういうことなのかについてディスカッションをしている。ディスカッションをすることで精神障がい者の人権を守る意義について意識化を図る。また、精神状態やセルフケアのアセスメントをする際、まずグループで事例を用いて討議することからはじめ、個人作業に移行させている。グループによっては、討議までにはなかなか至れず、発言する者にグループが引っ張られる傾向も見られるが、学生同士が質問し教え合う場にはなっている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において1年次配当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、少人数の中でさらにグループに分け、テーマに応じてディスカッションする時間を複数設けている。その時の約束事として、相手の意見を積極的に聞く・否定しない・話の腰を折らないなどを設け、自分の考えを発言し、他者に受け入れてもらえる体験を強化している。2年次配当「精神看護学援助論」（専門科目、2年次配当、後期、必修1単位）においては、幻聴妄想かるたをグループで行った後、患者の気持ちの推測や、似たような体験、どう関わると安心できるかについて討議し、理解を深める機会としている。3年次配当「精神看護援助論演習」（専門科目、3年次配当、前期、必修2単位）においてはペーパーペイシェントの演習を通して、根拠を相手に伝えながら、グループで一つのものをまとめていくことを狙いとしている。自分の意見も主張しつつ、他者の考えも受け入れる態度を学習する機会としている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所　精神看護学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・精神看護学演習Ⅰ・Ⅱ（専門科目、1年次配当、半期、各2単位）では、社会で自立し仕事をしている者同士のディスカッションを通して、さらに建設的な学びになるように時には、教員はファシリテーターの役割を担いながら、ディスカッションを促進する。

事項	年月日	概　　要
７）プレゼンテーションの導入	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護特性論」において、他の授業で既に授業を受けた発達課題についてグループでまとめ、発達段階ごとにプレゼンテーションを行う。また評価は、各グループの成員同士が互いのグループワークの参加度について５段階で評価し、平常点として加算することにしている。ほとんどの学生が４～５の評価をしており、グループワークの参加に対する意欲が高いと考える。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「健康支援実習Ⅲ（精神）」において、実習の最終日に各実習病棟ごと（1クール：１０～１８名、１病棟３～６人、実習病棟は２～４病棟）に各病棟の紹介と実習で看護展開をした2事例を取り上げ、援助の流れと学び・感想を模造紙にまとめて発表している。プレゼンテーションを通して、他病棟での実習内容を共有することで学びの巾を広げている。実習最終日でもあり、様々な思いを抱く中、プレゼンテーションに対する内容の質疑・応答、感想などの発言も比較的活発であり、主体的な参加が認められる。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「課題別総合実習」（専門分野、４年次配当、半期、必修４単位）において、実習を終えた後、実習病院で全実習病棟の看護部長・師長・指導者・かかわりのあった看護師に向けて、パワーポイントを用い、実習の成果を発表し、評価を受ける。自己の成果について実習病院で発表し評価を得ることは、学生にとって緊張度も高いが、また達成感も大きく、その後の自信につながっていくと考えられる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において1年次配当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、グループで話し合った内容を模造紙やパワーポイントを活用して、プレゼンテーションを行っている。学生は、初めて体験するものも多いが、グループで要点をまとめ、分担しながら行っている。3年次配当「精神看護援助論演習」（専門科目、3年次配当、前期、必修1単位）においては、グループワークの成果である看護過程の経過と援助の方向性について、決められたパワーポーンとの枚数内と制限時間内で発表をしている。制限のある中で、メンバーが協力し合い、おのおののマンパワーを生かしつつ成果を発表する場は、学生にとって達成感を得、自信を得る機会となっている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所　精神看護学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（専門科目、半期、各2単位）において、授業内容について、あらかじめ各自で調べプレゼンテーションを行うことで、主体的な授業参加、学習となっている。

事項	年月日	概　　要
８）小テストの活用	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」「精神看護特性論」「精神援助論」において、軸となる理論については、小テストを実施し、理解の定着を図っている。小テストの項目としては自我防衛機制、エリクソンの発達論、精神の症状、薬の有害反応、ペブロウとトラベルビーの関係性の進度等がある。これらの知識を臨地実習において活用していることから、繰り返しの学習効果によるものと考えられる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において2年次配当「精神看護援助論」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）においては、精神看護学の重要な内容の授業が続く、内容は多岐にわたり、その都度の予習復習が求められるが、この時期、他科目も同じように進行しているため、学生は学ぶことが多く、能力を超えるものも多い。小テストをこまめにすることで、要所要所でいやおうでも、振り返り学習機会を持つことで、ポイントは抑えられると考える。
２　作成した教科書，教材		
１）各授業、レジュメを作成し配布する。	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤短期大学神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野Ⅱ、必修１単位）「精神看護学実習」のスクーリングにおいて、講義の要点の理解と、復習に活用するために、授業のアウトライン及びポイントを1回ごとに作成し、そのプリントを毎回の授業で配布している。内容は、複数のテキストから一部抜粋しまとめたものや、また対象を理解するための理論については、精神分析関連（フロイト・コフート等）の本の一部をまとめたもの、傾聴や共感の意味などについては、教員の様々な経験を統合し、文章化したものを使用。実習スクーリングでは、社会福祉に関する文献や新聞の切り抜き等を活用し、実際の場面に近い形の内容になるように心がけた。授業後には、ポイントがわかりやすいなどの感想を得ている。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」「精神看護特性論」「精神援助論」において、講義の要点の理解と、復習に活用するために、授業のアウトライン及びポイントを1回ごとに作成し、そのプリントを毎回の授業で配布している。「精神看護特性論」「精神援助論」では、精神状態のアセスメントについては他の授業で馴染みがなくイメージしにくいことを受け、DVDで視聴した事例について、学生が考えた後に、教員が精神状態をアセスメントしたプリントを配布し、比較し考えるようにしている。

事項	年月日	概　　要
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において1年次配当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、レポートの書き方、要約の仕方のところで、朝日新聞の天声人語を学生が興味を持ちやすいと思われるテーマを8つほど選び教材を作成した。その中からさらに、学生が選び、グループで内容の精読や要約を行っている。2年次配当「精神看護学概論」（専門科目、2年次配当、前期、必修2単位）、2年次配当「精神看護援助論」（専門科目、2年次配当、後期、必修1単位）においては、毎回講義内容のポイントをまとめたうえで関連するアニメポイントを用い視覚的に工夫したレジュメを配布している。

事項	年月日	概　　要
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
１）神戸常盤大学学生による授業評価		神戸常盤大学において平成２７年度に実施された学生による授業評価によると、「精神看護学概論」では、授業内容 4.2，授業方法 4.3，学習成果 4.2，　総合評価 4.5 「精神看護特性論」では、授業内容 3.4，授業方法 3.4，学習成果 3.5，　総合評価 3.3 「精神援助論」では、授業内容 3.6，授業方法 3.5，学習成果 3.8，　総合評価 3.7であり、2年・3年次の授業においては満足度が高いとは言えない。
２）奈良学園大学保健医療学部看護学科における学生による授業評価		2022年度「精神看護援助論」では、授業方法に関する内容の＜先生の説明はわかりやすいですか＞3.54、＜毎時間の授業汚要点は明確ですか＞3.77 2022年度「精神看護援助論演習」では、授業方法に関する内容について1組＜先生の説明はわかりやすいですか＞3.43、＜毎時間の授業汚要点は明確ですか＞3.21、2組＜先生の説明はわかりやすいですか＞4.07、＜毎時間の授業汚要点は明確ですか＞3.93、基本同じ内容と方法の授業をしているにもかかわらず、この点数差について考察するが、一つ思い浮かぶのは印象の問題が考えられる。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）なし		
５　その他		
１）　神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程における教育実績	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の専任教員（講師）として、以下のような科目を担当した。
	平成19年4月～平成27年3月	「精神看護学概論」（平成19年4月～平成27年3月）　神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野Ⅱ、必修１単位）において、精神の健康の基本的概念と精神看護の目的、精神の機能、パーソナリティの発達と阻害要因、精神障害の概説、援助の方法論、ストレスと対処行動、精神医療と看護の歴史的動向や精神看護の役割と課題についての概要の内容の授業を行った。対象理解のために精神力動的視点で心理を推察することや精神状態をアセスメントしていく方法と、精神援助として傾聴・共感がどうして重要になってくるのか等、ドキュメント映画「精神」のDVDを視聴し、関連付けながら解説することで、精神看護の概要を理解させる効果があった。

事項	年月日	概　　要
	平成19年4月～平成27年3月	「精神援助論」（平成19年4月～平成27年3月）神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神援助論」（専門分野Ⅱ、必修１単位）では、様々な精神障害の学習に加えて、精神障害を有する人の精神機能上の問題やセルフケアに及ぼす影響について理解し、患者の苦悩を理解したうえで、基本的な援助のありかたを理解することを目的とした。テキスト学習でおさえるべきポイントを“学習の要点”として提示、テキスト学習をしたうえでレポート課題に取り組む。レポートの設題は、統合失調症・感情障害（鬱）、施設症の患者の理解（疾患・治療・心理）と看護援助に関する内容を設定した。添削のポイントとして、テキストを丸写しにするのではなく、基本をおさえたうえで、障害の理解や解釈、看護上の問題、障害からひきおこる患者の心理状態等を推察したうえでの援助等、学生自身の考察等を含むことを求めた。添削と再提出を複数回繰り返すことによって、個人に合わせた進度で理解が図れた。
	平成19年4月～平成27年3月	「精神看護学演習」（平成19年4月～平成27年3月）　神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神看護学演習」（専門分野Ⅱ、必修１単位）では、対象を総合的に理解し、効果的な看護実践ができることをねらいとし、レポート添削による指導をおこなった。＜統合失調症急性期＞＜感情障害（鬱）＞＜アルコール依存症＞の事例から設題を提示し、テキストや文献を活用し、対象理解をすすめ、状況に合わせた根拠のある援助を考えさせた。添削と再提出を複数回くりかえし、学生に応じた理解をはかった。
	平成19年4月～平成27年3月	「精神看護学実習」（平成19年4月～平成27年3月）　神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神看護学実習」（専門分野Ⅱ、必修１単位）では、2日間の見学実習の後、3日間のスクーリング授業を行った。見学した内容を、スクーリングで援助の根拠づけを行い理解させていく帰納的学習法を実施した。講義やグループワーク、個別指導等の方法をとった。主にグループワークで見学したことについて、対象理解や援助方法、治療的環境という観点で話し合った。これらを通して、精神の病からひきおこる様々な生きづらさを抱える患者の理解と援助、精神科病棟の特殊性等、精神看護についての理解を深化させた。
２）神戸常盤大学保健科学部看護学科における教育実績		神戸常盤大学保健科学部看護学科の専任教員（講師）として、以下のような科目を担当している。
	平成27年4月～平成30年3月	「精神看護学概論」（平成27年4月～平成30年3月）　神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野、１年次配当、半期、必修１単位）において、精神の機能と精神の健康・不健康に関する基本概念、および様々な成長・発達段階にある人の精神・心理状態を理解するための基礎的な理論の概要、精神看護実践に活用する理論の基礎的知識の内容の授業を行い、精神看護を支える基本的な知識の修得をはかっている。

事項	年月日	概　　要
	平成27年4月～平成30年3月	「精神看護特性論」（平成27年4月～平成30年3月）　　神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護特性論」（専門分野、２年次配当、半期、必修１単位）においては、ライフサイクルにおける危機と心と精神の問題、精神障害を有する人の精神機能上の問題や苦悩、セルフケアに及ぼす影響、各種療法と看護援助に関する基礎的な知識、精神保健福祉施策の変遷や精神障がい者に向けられる偏見の問題等を理解する内容となっており、グループワークや演習等を行い、医療・福祉・看護における現状の理解と課題を意識化させている。
	平成27年4月～平成30年3月	「精神援助論」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神援助論」（専門分野、３年次配当、半期、必修２単位）においては、精神ならびに身体の病をもつ人を総合的に理解し、適切な看護援助を組み立てる基礎的能力を培うことを狙いとした内容となっている。講義・グループワーク・IBL(inquiry-based learning)方式のアクティブラーニングとロールプレイング等の演習を通して、代表的な精神の病と生活への影響、精神の病をもつ人に対する看護展開の基礎、精神の病をもつ人と家族への看護援助の基礎、適切な社会資源の活用を理解させている。また、リエゾン精神看護の役割及び機能や精神看護における倫理についての理解も図っている。
	平成27年4月～平成30年3月	「健康支援実習Ⅲ（精神）」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「健康支援実習Ⅲ（精神）」（専門分野、３年次配当、半期、必修２単位）では、一学生につき8日間の精神科病院での実習と半日の学内実習を行っている。精神の病をもつ人を生物学的・心理的・社会的側面から総合的に理解するとともに、良好な治療的関係を構築し、セルフケアニードとストレングス視点に基づく看護実践能力の基礎を培うことを目的とした実習内容になっている。その場その時に応じた指導内容によって、精神看護の統合を図る効果がある。計14週/年の精神科病院（急性期・回復期・慢性期）において学生指導を行う。
	平成27年4月～平成30年3月	「課題別総合実習」（平成27年4月～平成30年3月）　　神戸常盤大学の講師として担当の「課題別総合実習」（専門分野、４年次配当、半期、必修４単位）では、自己の課題を明らかにし、課題を達成するために精神科病院での実習を希望する学生が対象となる。学生自身が実習計画を立て実習を行うことで、総合的な実践能力を高め、自己の将来の看護展開能力へとつなげる実習となっている。13日間の病院実習と2日間の学内実習から成り、病院実習最終日に成果を発表することでさらなる学習効果を得ている。
	平成27年4月～平成30年3月	「看護研究」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「看護研究」（専門分野、４年次配当、通年、必修２単位）では、研究方法の基礎力と研究的態度を身につけることを目標としている。精神看護学に関連する研究課題を選択した学生を対象に、一緒に研究過程をたどることを通して論文をまとめ上げ、目標を達成している。

事項	年月日	概　　要
	平成27年4月～平成30年3月	「看護活動基礎実習」（平成27年4月～平成30年3月）　　神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「看護活動基礎実習」（専門分野、1年次配当、半期、必修1単位）では、看護専門職の実際の活動場面の見学実習を通して、看護の対象と機能・役割について学ぶ内容となっている。実習形態の学習に不慣れな学生のフォローと、実習場面でのポイントをその場その時におさえながら実習を進めることで成果を得ている。
３）神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科における教育実績	平成23年4月～平成26年9月	神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科の兼担講師として、以下の科目を担当した。
	平成23年4月～平成26年9月	「こころと歯科衛生ケアプロセス」（平成23年4月～平成26年9月） 神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科の兼担講師として担当の「こころと歯科衛生ケアプロセス」（専門分野、2年次配当、半期、必修1単位）においては、人を理解するための理論と、様々な対象者と関係を築くための基本的な知識を学習し、医療現場に適したコミュニケーションを実践できる能力を身につける内容となっている。演習形式の授業を通して、心のメカニズムを理解し、歯科衛生ケアプロセスの場面に応じた対応能力を身につけ、それを基礎に対象者、あるいはその支援者への対応ができる基本が習得できた。
４）兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科における教育実績	平成18年4月～平成30年3月	兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として以下の科目を担当している。

事項	年月日	概　　要
	平成21年4月～平成28年3月	「ヘルスカウンセリング」 兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として担当の「ヘルスカウンセリング」（2年次、14時間）においては、臨地実習前に行動変容とカウンセリング技術の関係性、心の理論、相互作用に関する理論、医療現場でのコミュニケーション技術についての内容の授業を行い、実習後に学生が実習でとってきたプロセスレコードを素材に、演習を行う。これらのことを通して、人の心の成り立ちと関係性についての理論的な観点をおさえた上で、実習で体験したケースから、関わり方の基本と応用を習得した。
	平成28年4月～平成30年3月	「健康心理学」 兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として担当の「健康心理学」（2年次、4時間）においては、オムニバスで演習部分を担当した。臨地実習後に学生が実習中にとってきたプロセスレコードを素材に、対象者の思いに寄り添ったコミュニケーションの理解を図った。
５）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の専任教員（助教）として、以下のような科目を担当している。令和2年4月に講師となり、以下科目を担当する
	平成30年4月～令和元年前期	「基礎演習Ｉ」（ラーニングスキルズ） 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「基礎演習Ｉ」（共通教育科目、1年次前期配当、必修1単位）においては、1年生が大学の学習に慣れ、4年間の大学生活を有意義に送るための基礎を習得することを目的としている。講義ノートのとり方、文献資料の検索、学術的な文章の読み方、グループワークの進め方などについてゼミ形式の演習を通じて学習する。慣れたグループの中で、自分の意見を発言し他者に受け入れられる体験を通して、自己発信する基礎的な力を培っている。
	令和２年６月～現在に至る	「精神看護学概論」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」（専門科目、2年次前期配当、必修1単位）においては、他教員と分担・協力して授業を展開している。主に人間の精神の機能や脳の仕組み、発達段階における漸次的心理葛藤など、看護の対象理解を促進する基本的や自身のメンタルヘルスの向上をはかる部分を担当する。令和5年度よりカリキュラム変更にて（専門科目、2年生前期配当、必修2単位）になり、オムニバス形式で、主に人間の心の働きとパーソナリティ、心の発達論、精神看護の基盤となる理論と実践に関する内容について担当する。

事項	年月日	概　　要
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学援助論」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「精神看護学援助論」（専門科目、3年次前期配当、必修2単位）においては、他教員と分担・協力して授業を展開している。様々な精神疾患や精神障がい者を理解し、精神看護学の基礎的知識と看護を学ぶことを目標としている。例えば、治療的な患者ー看護師関係を成立させる方法、精神障がい者の観察の方法と治療について、精神科医療現場における身体合併症の看護について、精神症状や問題行動とその援助について、精神科リハビリテーション及び地域におけるサポートシステムの現状・課題について修得する。 　令和2年度より（2年次後期配当、必修1単位）講義形式に変更。精神障害の理解から様々な治療方法、精神保健福祉法、精神疾患と苦渋の症状と看護のポイントについて修得する。
	令和2年4月～現在に至る	「精神看護援助論演習」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「精神看護援助論演習」（専門科目、3年次前期配当、必修１単位）においては、ペーパーペイシェントを用い、情報の収集の仕方、収集した情報の記録の仕方、アセスメント方法と看護援助の導き方について、小ステップでの個人ワークとグループでの意見交換の後教員の解説を行う。授業ごとに個人ワークは提出し、教員のコメント付きで返却することを看護過程終了までの5回行う。次に、別事例（ペーパーペイシェント）をグループで展開する。グループワークの内容は、情報の収集・アセスメント、援助の方向性までグループで検討しながら看護の展開をはかる。また、グループで立案した看護計画は学生同士で患者・看護師役を交代で行い実践し、その実践課程をプロセスレコードに記入し振り返りを行っている。模擬ではあるが実習で実施する看護実践課程を一通り体験している。

事項	年月日	概　　要
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学実習」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「精神看護学実習」（専門科目、3年次後期配当、必修2単位）においては、精神の健康上の問題を有する人とその家族について、身体的・精神的・社会的側面から総合的に理解するとともに、治療的な関係を築き、精神看護における看護実践能力の基礎を培うことを目的に精神科病院にて実習を行う。実習時間中は実習場にて、その場その時に応じて助言を行う。令和2年度は病院実習がかなわなくなったことを期に、訪問看護ステーションでの実習を行ったところ生活者としての対象をどのように支えていくかということの意識を強めることができた。令和3年度から病院実習と訪問看護ステーション両方の場で実習をすすめていく。
	平成30年4月～現在に至る	「統合看護学実習」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「統合看護学実習」（専門科目、4年次後期配当、必修2単位）においては、看護過程の展開はもとより多重課題や看護マネジメント、多職種連携、地域連携などを視野に入れた実習を行っている。令和３年度から、学生自身の課題と探求したい内容に応じて個別の計画を立て、主体的な実習の中で看護観を深め、探求する意義を学ぶ。
	平成30年4月～現在に至る	「卒業研究Ⅱ」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「卒業研究Ⅱ」（専門科目、4年次前後期配当、必修1単位）においては、学生の興味関心のあるテーマを文献検討し、論文を作成する。少人数グループ（2～4名）でゼミ形式で進めている。
	令和３年～現在に至る	「統合看護論」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「統合看護論」（専門科目、4年次後期配当、必修２単位）において、精神看護学分野において担当する。精神看護の全体像をおさえたうえで家族・地域も含めた複雑事例の看護の展開について、小テストの事例からアセスメントと支援の方向性について解説し、精神看護学についてさらに実際に根差した気づきと理解の深化を促進する。
６）奈良学園大学大学院看護研究科における教育実績	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の専任教員として、以下のような科目を担当している。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅰ（歴史・法制度）」 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にノーラマイゼーションの概念と実際について担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。

事項	年月日	概　　要
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅱ（精神・身体状態の評価）」奈良学園大学大学院看護学研究科講師として主に心理機能評価・身体機能評価を担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅲ（精神科治療技法）」　奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主に治療技法（精神療法）について担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅳ（精神看護理論、援助技法）」　奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にSSTについて担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学演習Ⅰ（精神科治療技法）」　奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にカウンセリングの基本技法について担当し、各々の実践による経験による検討や模擬演習をしならすすめる。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学演習Ⅱ（精神看護理論、援助技術）奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にSSTについて担当し、計画立案と模擬演習を行う。
	平成30年4月～令和4年度	「特別研究」（専門科目、1・2年通年、8単位）奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として、学生の研究テーマから研究計画、倫理申請、データ収集、結果、論文の作成まで助言を行った。

事項	年月日	概　　要
	平成30年4月～現在に至る	「課題研究」（専門科目、2年通年、４単位） 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として、学生の研究テーマ、研究計画、倫理申請、データ収集、結果、論文の作成まで助言を行った。データ収集においては、直接ケア実習、上級ケア実習の実践内容から抽出するため、実習の進行の最中においてもテーマに焦点を当てた助言を行う。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）看護師免許証	昭和60年5月9日	第532000号
2）修士（人間文化学）	平成15年3月	甲子園大学大学院人間文化学研究科人間文化学専攻　修了　人間文化学　修人第9号　論文題目「看護師の共感性に関する認識と特徴」
3）臨床心理士資格認定	平成16年3月20日	第11561号
4）公認心理師登録	平成31年2月5日	第14522号
2　特許等		
1）なし		
3実務の経験を有する者についての特記事項		
1）医療法人朗源会おおくまリハビリテーション病院（常勤3年間、非常勤5年間）	平成16年4月～平成25年3月	脳梗塞・脳出血発症後、ギランバレー症候群等の回復期で後遺症（四肢麻痺や失語等）から抑うつ状態、否認、強い悲嘆反応等の心理的問題を持つ患者と家族に対し、ベッドサイドやデイルームで対話やコラージュを用いた心理療法を行い、障害を受容していく過程に寄り添った。JR福知山線で電車事故に巻き込まれリハビリを要する患者の心的外傷に対して心理療法を行った。他には多系統萎縮症（難病指定）で極度の起立性低血圧や全身の筋力低下が著しく進行し悲嘆にくれる患者に対し、対話で心理療法を行い生きる意味を模索した。外科病棟で医師・看護師から依頼のある癌末期で抑うつ状態の患者に対して心理療法を行った。医療スタッフ（看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・医療ソーシャルワーカー・医師）に対し、心理的問題を持つ患者の精神・心理状態についての情報提供や関わり方のコンサルテーションを行った。職場に馴染めない新人スタッフや職場・家庭内で問題を抱えるスタッフに対しカウンセリングを行った。
4　その他		

事項	年月日	概　　要
１）科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究C（課題番号：24593282） 研究代表者　武ユカリ 研究題目「在宅看護における対応困難事例、暴言、暴力の現状と対策に関する研究」	平成24年度～平成27年度	在宅看護の臨床現場に特化した暴言、暴力に関する調査はまだ少なく、現状も明らかになっていない。本研究では在宅看護における暴言、暴力の発生状況、対応の現状と、それらの発生する背景や要因や対応困難事例について、明らかにした。困難事例、暴言・暴力についての訪問看護師への個別面接調査や訪問看護ステーションに対する郵送質問紙調査、グループ対話による困難事例の困難に関する検討を行った。在宅看護におけるリスクマネジメントや、療養者と家族に対する支援の在り方について検討した。

事項	年月日	概　　要
２）常盤大学テーマ別研究助成金 研究代表者　西出順子 研究題目「在宅で生活する精神障がい者と家族のストレングスに焦点を当てた支援方法の検討― 訪問看護師のストレングスへの着目点とケアの成果 ―」	平成28年5月～平成29年2月	訪問看護師が在宅で生活する精神障がい者と家族（以下、対象者とする）に対して行っているストレングス に着目した支援方法とその成果を明らかにした。対象者を訪問する看護師に半構造化面接を行い、得られた結果から意識化されず実施されているストレングスに着目した支援内容をカテゴリ化にて明らかにし、成果について検討した。
３）奈良学園大学共同研究助成金 研究代表者　西出順子 研究題目「CVID-19 状況下でのグループワークにおける学生の体験」	令和4年5月～令和5年3月	令和3年度に実習を終えた4年生に臨地実習とグループワーク演習についての体験についてインタビュー調査を行った。データはM-GTPにて解析中である。
４）FD委員会　委員	平成19年4月～平成27年3月 平成28年4月～平成30年4月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程在籍中と神戸常盤大学保健科学部看護学科において、FD委員として活動を行っている。大学教職員の能力開発を目標とし、平成19年度から全教員に向けて年２回の研修を行っている。平成28年度は １．教育改革を進めようとする当大学の教職員の理解を進めるために最近の教育改革の動向を文科省の大学改革官から聞く機会を企画する。 ２．主体的かつ深く志向する学生を育成するための教育技能を学ぶためにディープアクティブラーニングのワークショップを開催する。 ３．学科内のFD活動を計画的に進める ４．公開授業を促進し、教員相互の教育技法を向上させるを目標に進めている。学科内FDでは、全体のディープアクティブラーニングのワークショップの前に、学科内で活発にアクティブラーニングを行っている教員に依頼し、模擬授業を実施、そのあとグループワークを行い、アクティブラーニングの効果的な方法について検討を行った。
５）国家試験対策委員会　委員	平成19年4月～平成26年3月 平成28年4月～平成30年3月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程在籍中と神戸常盤大学保健科学部看護学科において国家試験対策委員をしている。看護師国家試験対策として、学科教員の講座や業者の模擬試験や講座を組み入れたプログラム作り、模擬試験成績の振るわない学生へのフォロー、学生主体の学習会のサポート等を行っている。平成27年度生の看護師国家試験の合格率は95.1％であった。
６）第三者評価委員会　委員	平成24年4月～平成26年3月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の自己点検・評価報告書の作成に携わった。
７）入試委員会　委員	平成26年4月～27年3月	兵庫県、京都府、滋賀県、関東地域等で入試広報を行った。また、受験生の書類審査、合否判定の資料作成等を行った。神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制過程において、学習から遠ざかっていた学生が入学後すぐにテキスト学習にとりくめることを目的に入学前教育を行った。内容はテキストの活用の仕方、レポートの書き方、また、模擬のレポート設題を設け、テキストを活用しレポートをまとめていく過程について解説を行った。参加は任意であったが、地方からも参加があり、参加率は70％と学生の意欲の高さがうかがわれた。

事項	年月日	概　　要
８）入学試験の出題　看護学　委員	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学　保健科学部　看護学科　編入試験の精神看護学に関する問題を作成した。
９）一般社団法人　日本精神分析的自己心理学協会の運営する精神分析的心理療法家養成のための訓練研究所による通年の研修を受講「現代自己心理学Ⅰ」「現代自己心理学Ⅱ」「フロイトの著作」	平成24年4月～26年3月	自己心理学はコフートが生み出した理論であり、自己愛に問題を抱え（自己観の問題を抱え）生活の中での生きづらさを体験する患者への精神分析的アプローチの一つ。「現代自己心理学Ⅰ・Ⅱ」では、自己心理学・間主観性理論・関係性理論の考え方と臨床の中で活用する方法を学んだ。クライエントとセラピストとの治療的な関係性の中で、その場その時に生じている事象を捉え、目指す方向性を定める指針となる理論について学ぶとともに各自の臨床事例を持ち寄り、グループスーパービジョンを受けた。この理論は患者―看護師関係においても、関係性の鍵概念・アセスメントと治療的なアプローチにおいて十分に活用できる理論である。 「フロイトの著作」では、神経症水準（不安障害・恐怖症等）の患者の捉え方、治療的な関りについて古典を理解し、自己心理学と比較しながら差異を理解する内容となっていた。フロイトは一者心理学であり、自己心理学は二者心理学といわれるが、その差異を理解することができた。
１０）イギリス研修旅行（トラウマ・インフォームドケア研修）に参加	平成28年9月18日～9月25日	医療法人寿栄会有馬高原病院主催の研修旅行に参加。イギリスを訪問し、認知症の方が利用する施設・病院の視察を行い、またスウォンジー大学で研修を受けた。認知症を患った方が利用する施設や病院を見学し、トラウマ・インフォームド・ケアの観点から日本との差異を認識し、よりよいケアのありかたについて考える機会を得た。患者―看護師関係は平等であり、患者の意思と尊厳が最大限に守られる理念のもと物理的・人的環境が作られていた。スウォンジー大学では当事者（てんかん）から治療による有害反応から生活障害を引き起こした体験や、治療の弊害を訴え発言する場を確保する活動について話を聴いた。また、研究者からはメンタルヘルスシステムが細分化されすぎ、ケアの評価が患者個人の思いや願いが重視されず、数値のみに頼る弊害を明らかにしたうえで見直すための研究や、患者目線からみたケアの評価の検討等の研究について聞く機会を得た。
１１）第2回　臨床精神看護学研究会　準備事務局員	平成29年1月～5月	平成29年5月20日　有馬高原病院で開催予定。発表会の運営と準備に関する役割を担う。

事項	年月日	概　　要
１２）FD委員会　委員	平成30年4月～平成31年3月、令和4年4月～令和5年3月	奈良学園大学において『教育力をあげるようなFD活動』をテーマに2回/年の研修会を企画運営に携わった。8月日頃の指導の中での困難さや課題を出し合い次回FDプログラム作成につなげるためのワーク、3月コーチングについて 令和4年度は、教育に関する現状の課題や取り組みの工夫について、グループワークを中心としたＦＤ研修会を３回開催した。第１回テーマ　「PROGテストの結果の説明を受け、教育の工夫についてのグループワークで話し合い、結果を共有する」、第２回テーマ「学生の授業態度によく見られる２ケース　＜集中力が続かない学生＞＜事前学習が不十分なまま実習に行き、自己評価が高く、自分のことを振り返られない学生＞について工夫や対処方法を検討する」、第３回テーマ「後期の授業を振り返り、次年度への改善策を発見する」その他、1年次生対象に地域住民との交流「健康フェスティバル」を企画運営した。
１３）人権教育研究推進委員会	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学において、奈良県大学人権教育研究協議会の企画する研修会に参加するとともに、1回/年の研修会を企画運営する。30年度は「ハラスメントを防止するために」の企画運営に携わった。
１４）実習ワーキング	平成31年4月～令和2年3月	奈良学園大学において、3年次各領域の臨地実習枠の作成、4年次統合実習の実習枠の作成、実習場の開拓、実習方法の見直し、実習要綱の見直し、コロナ渦においての臨地実習方法などについて検討した。また、実習における学生の進捗状況やケア方法なども検討し共有しあった。
１５）カリキュラムワーキング	令和2年4月～令和5年3月	奈良学園大学において、新カリキュラムに向けて、アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディブロマポリシーを新たに定め、カリキュラムの立案に携わった。
１６）教務ワーキング（令和4年度教務部会に変更）	令和2年4月～現在	奈良学園大学において、時間割や単位修得に関する判定方法と各種日程・期間、履修の手引き、入学前試験、新入生ガイダンスや新年度ガイダンスに関する内容検討と実施に携わった。その他、学習・授業に関する問題など適宜検討した。
１７）学生生活部会	令和4年4月～令和5年3月	学生の状況の共有、他、学生からの提案窓口の設置と事項の共有、支援などを検討した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				

事項			年月日	概　　要
1.会話でわかる看護師のコミュニケーション技術	共著	平成30年9月	中央法規	第6章 様々な分析からわかる看護師のコミュニケーション技術の中の「共感の視点を分析してわかるコミュニケーション技術」のテーマで自己心理学を用い共感に着目し会話を分析した。（p.98～107）
2.改訂版 エビデンスに基づく精神科看護ケア関連図関連図	共著	令和2年1月（改訂版発行日）	中央法規	ワンポイントラーニング　身体合併症を担当する。生活習慣病、生活習慣病から生命にかかわる疾患へ、衛生面からの問題、ロコモティブ症候群など、精神障がい者と関連の深い合併症について解説した。（p.149）
（学術論文）				
１.精神科病院におけるトラウマインフォームドケアの有用性について　資料（査読なし）	単著	平成28年3月	甲子園大学 発達・臨床心理センター紀要10.11号合併号 p.30～33	トラウマインフォームドケアは、アメリカの精神科医療におけるコア戦略の中でも核となる概念の一つであり、トラウマインフォームドケアを導入することで入院中の再トラウマ体験を防止し、速やかに回復を図ることが狙いとされ、精神科病院においてこの考え方が浸透している。日本では、2015年に川野がアドバイザーとして所属する特定医療法人寿栄会有馬高原病院で病院をあげてトラウマインフォームドケアの理解を深め、臨床の中で実践を試みている。トラウマインフォームドケアについて、以下二点考察を行った。一つは自己心理学を用い個別的なケアの有用性について、もう一つは組織における管理的な側面からの取り組みの必要性について考察を行った。
２．看護のケアリング機能―共感の意味についての一考察―　研究報告（査読付）	単著	平成29年12月	日本サイコセラピー学会雑誌第18巻第1号 p.87～95	急性骨髄性白血病(AML)で化学療法を受けた50歳男性の看護援助の経過について報告し、看護師の患者に対する共感的理解と看護師のニードに焦点を当てて考察を行う。生活のほとんどが受け身的にならざるを得ない患者にとって、過酷な入院生活で生じる感情こそが自己の存在を確認するものとなる。しかし、時には患者から発せられる感情は、看護師のニードに反することもある。看護師は共感を通して患者の気持ちに寄り添いながらも、時としてアンビバレントな感情を抱え、関係性の中でその瞬間に浮かび上がってくる言語・非言語の表現を返し、それを受けて患者は反応し看護師に投げかける。この絶え間ないやりとりがケアリングであり、危うくなる患者の自己存在感を支えることとなる。
３．訪問看護師にとっての対応困難事例の困難要素について：テキストマイニングソフトを用いた個別面接調査の分析より原著（査読付）	共著	平成29年12月	日本在宅医学会雑誌第19巻第1号 p.11～18	困難事例について多職種連携チームでの対応を促進するため,訪問看護師の困難要素を明確にすることを目的とした.訪問看護師12名に対する半構造面接法による個別面接調査,横断研究で,テキストマイニングソフトを用い解析し,困難要素の分類を行った.【体制・マネジメント】【職務】【疾患・障害】【現状認識】【治療・ケアに対する反応】【利用者・家族の不服】【人間関係】【療養環境】の8カテゴリの困難要素を特定し,「利用者・家族の感情」「訪問看護師の職務意識」「地域体制の整備と訪問看護ステーションのチームマネジメント」ついて考察した.　分担部分：構想・デザイン・データの取得・分析・解釈に関与 共著者：武ユカリ、小坂素子、西出順子、安斎三枝子、金川治美

事項			年月日	概　　要
４．20歳代女性のカウンセリング場面の分析～自己心理学の観点から治療的かかわりについて焦点を当てて（査読付）	単著	平成30年3月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌第5巻　p.25～32	カウンセリングの一場面を取り上げ、会話分析を行った。セラピストは６０代の男性。患者は２０歳代の女性であり、職場でのハラスメントをきっかけにパニックになり、認知行動療法をベースに定期的にカウンセリングを受けていた。定期的に行われている面接場面を患者の同意を得て録音・録画し、そのうちの１セッションの逐語録を作成した。本稿では、セラピストが患者のいつもと違う様子を察知し、手法を切り替えた１セッションを取り上げ、治療的関りについて自己心理学の主要概念である「自己対象ニード」「自己対象体験」「共感」「相互的調制」に焦点を当て分析を行った。セラピストとの安定した自己対象体験は、患者の傷ついた自己対象（男性像）を修復し、成果に通じる可能性を大きく持つと考える。
５．相互作用を振り返るための概念枠組み－ポスト自己心理学の臨床活用（査読付）	単著	令和2年3月	第３回　臨床精神看護学研究会（奈良）　p48～52	患者看護師関係のプロセスを振り返るツールとして、自己心理学派のリヒテンバーグの動機付けシステム理論をとり上げる。リヒテンバーグの言う動機付けとは、シンプルには「何がその人を動かすのか、その人は何を求め、何を避けるのか」を指しており、これを関係性の中で湧く「欲求」と捉え、以下7つの欲求・動機付けシステムを挙げている。①生理的要請に対する心理的調節②個人への愛着③集団への親和性④養育⑤探求と好みや能力の主張⑥身体感覚的快と性的興奮⑦引きこもりや敵意を用いた嫌悪的反応、これらの欲求には感情が伴い、その先には意図や目的がある。これら7つのシステムが相対的に「今ここで」あるいは「その時そこで」重要あるいは優勢かということは刻一刻と変化する事柄といえる。この動きを相互作用として丁寧に捉えることが、その場その時の関係性をアセスメントすることにつながると考える。今回は、事例を用いて理論の概要を紹介する。
６．精神障害を有する患者の理解を促進する授業方法の工夫―『幻聴妄想かるた』を教材にした学生の体験と学び－(査読なし)	単著	令和2年12月	奈良学園大学紀要第13集　p.177～188	〔目的〕『幻聴妄想かるた』を取り入れた演習が、学生にどのように体験されているかを把握し、学習への影響や体験の中で生じている現象について考察し、さらに効果的な授業方法を検討する。〔研究方法〕『幻聴妄想かるた』を用いた演習後、任意によるアンケート調査を行った。〔結果〕『かるた』を行っている時の感想は【学生の感情体験】【現象・対象理解】【作品の印象】に、精神障がい者に対する理解では【精神障がい者に対する理解】【グループメンバーの視点の差異】【関わりの姿勢】に、幻覚妄想を有する精神障がい者に対する援助では＜聞く＞＜寄り添う＞＜受けとめる＞＜共感する＞＜否定も肯定もせず、幻聴を深めることは言わない＞＜幻覚・妄想の対応へのとまどい＞〔考察〕『幻聴妄想かるた』を用いた演習は、自由な雰囲気の中で楽しみながらも、幻聴妄想体験の不思議さや、わからなさが探究の動機付けに適切だったこと、そして、学生同士安心で楽しめる場を作り、そこでの討議がイメージの拡充や理解の促進に効果的だったことが示唆された。課題として、共感的な支援につなげるために、学生自身が当事者に近しい体験ができるような工夫が必要であることが明らかになった。

事項			年月日	概　　要
（その他）				
[実践報告]				
１.患者を支えるための概念枠組み一自己心理学の臨床活用	単著	平成29年11月	第2回 臨床精神看護学研究会誌 2017年　 p.2～5	筆者は看護師の経験を持ちながら大学・大学院で心理学を学習する機会を得た。多くの理論を学び、臨床心理士としてリハビリテーション病院に入職し、患者と自己の理解、関係性の把握に活用してきたが、精神分析系の理論を治療的な関りに用いようとすると、病院臨床では使うことが難しい現状に行き当たった。その理由として、治療の枠組みが厳密であること、患者自身が自己を分析し、把握していくためのモチベーションを必要とすること等が考えられた。模索する中で、患者の言動と筆者の心理がちょうどマッチした自己心理学に出会った。本稿では筆者の臨床での経験を通して、これら理論の活用の概要を紹介する
[学会発表]				
１.訪問看護の困難事例についての哲学的グループ対話を用いた検討	－	平成26年7月	第22回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会（兵庫県神戸市）	2012年2月～2013年8月哲学的対話手法（Neo-Socratic Dialog:以下NSD）を用いて、異なる背景の参加者（訪問看護師、その他の医療介護職、一般人、倫理等専門家、メディア関係者等）による対話から困難事例の「困難」とは何かについて検討し、結果を報告した。第1回討論から「療養者の意思を尊重しながら、医療ニーズに応えるため、訪問看護師の判断をもとに、関係者（医師、療養者、介護者等）との高度な連携が求められること」、第2回討論から「療養者の生活の多様な価値観のなかで、看護職が重視する価値の実現のため専門的援助を行うこと」、第3回討論から「療養者の生活上の問題に直面しても、ときに訪問看護師1人では援助手段を見出し難いこと」が導かれた。本人担当部分：NSDに参加、結果分析を行った。共同発表者：會澤久仁子、武ユカリ、金川治美、西出順子、小坂素子、安齋三枝子
２．訪問看護師の対応困難事例における困難要素の検討－全国質問紙郵送調査の結果より	－	平成28年7月	第18回日本在宅医学学会（東京）	8カテゴリ28分類に整理した個別面接調査の分析結果と文献検討、グループ対話で得らえた結果を含め、岩間の分類を参考に質問項目を作成した。回答数588（回収率29.4%）、うち505（有効回答25.3%）を分析対象とした。65項目について最終的に全40項目、4因子を抽出し、以下の通り命名した。ⅰ「家族・利用者の抑制のバランスが保てていない態度」、ⅱ「訪問看護師の能力レベルと組織の協力体制」、ⅲ「利用者・家族の疾患と状態に起因する生活能力の低下」、ⅳ「家族が円滑にケアすることを阻む状況」全体のクロンバックα係数は0.96であり、各因子のクロンバックα係数は0.89～0.92で内的整合性は高い結果が得られた。　本人担当部分：質問紙の作成（訪問看護師への個別面接調査と語りの内容からカテゴリーの作成とネーミング、文献やグループ対話で得られた結果から質問項目を考えた）、結果分析（因子分析過程においてのデータの絞り込みとネーミング）、発表内容の検討を行った. 共同発表者：武ユカリ、金川治美、小坂素子、西出順子

事項			年月日	概　　要
３．訪問看護師が感じる困難要素の検討―インタビューによる質的分析と質問紙による量的分析の統合―	－	平成28年8月	第2回 日本混合研究法学会(東京)	訪問看護師は療養者と家族を対象に個別性の高い多様な援助ニーズに対応しなければならず、対応困難事例に遭遇することが多い。文献研究ではこれまで対応困難事例に関する訪問看護領域の研究は少なく、何が困難の要素となっているかについて検討されていなかった。また哲学的対話手法（ＮＳＤ）による調査では、訪問看護の対応困難事例には非常に複雑な困難要素があるが、それらにはいくつかの抽象的な枠組みがあることが示唆された。そこで本研究では対応策の検討につなげるため、訪問看護師の感じる困難要素の構造を明らかにすることとした。研究方法は、質的研究の結果から訪問看護における困難要素を抽出し、その結果得られた知見をもとに、仮説検証のための量的研究につなげ統合した探索的順次的デザインを用いた。混合研究法を用いることで、より実態に沿った調査を行い、困難要素の構造を明らかにした。　本人担当部分：発表内容に関連する研究への関与と発表内容の構成と内容検討。 共同発表者：武ユカリ、小坂素子、西出順子、會澤久仁子、金川治美
４．在宅で生活する精神障がい者の支援方法の検討～訪問看護師のストレングスに着目したケアの一考察～	－	平成30年7月	第49回日本看護学会ー在宅看護ー学術集会（佐賀）	【目的】訪問看護師が精神障害を有する療養者に対して、独自の方法で行っているストレングスに着目した支援方法を明らかにする【方法】[研究対象]A県下の訪問看護ステーション6施設、各施設管理者に推薦された看護師10名[研究期間]平成28年9月～平成29年2月[研究デザイン]質的記述的研究[分析方法]質的統合法（KJ法）【結果】元ラベル74枚から①困りごとは強みに通じるゲート②身体をいたわる③好きなことは現実感覚強化の糸口④自信は新たな希望のエネルギー源⑤望みや願いを第1に守るの５要素を抽出した。【結論】訪問看護師は日々の関りの中で自ずとストレングスに着目しながら支援をしている。時に、利用者の願いや望みが過剰に作用し体調を崩すことにもなるが、あきらめずに将来に希望を持ち共存していく手立てを一緒に探ることが、地域での生活を支えていく上で重要であることがわかった。 本人担当部分：研究計画、文献検討、インタビューガイドの作成とインタビュー、結果分析、考察、発表 発表者：西出順子、木村聡子、鵜飼知鶴、畑吉節未
５．トラウマに関する看護研究の特徴ーテキストマイニングによる解析ー	－	令和4年7月	第28回日本看護診断学会学術大会 Web開催	【目的】トラウマに関する文献検討から、トラウマの研究の特徴を明らかにし、今後のケアの方向性について検討すること【方法】医学中央雑誌ウェブ版（2022年4月10日現在）（1998年12月～2022年1月）を用いた。検索はトラウマ、看護、原著論文、本文有とした。結果、72件抽出され本研究対象とした。 テキストマイニングにより、タイトルと抄録内容について共起分析、コロケーション解析対応分析をして、トラウマ研究の特徴をみた。【結果・考察】多岐にわたる研究（対人ストレス、災害、疾患や出産体験など）がなされ、トラウマの研究の特徴として、「トラウマへの支援」、「様々な外傷に関連するストレス」「ケア行動の効果」「障害の治療」「退院困難な患者の家族への支援」があった。トラウマのケアに対する有効性の研究はほとんどされておらず、今後の検証が期待され、また、看護診断の指標にＴＩＣの新しい概念をとり入れることも必要と考える。 本人担当部分：結果分析、考察 発表者：上野栄一、西出順子、山﨑陸世、高田勝子

事項			年月日	概　　要
６．高校生のマインドフルネスが心身の健康状態に及ぼす効果の関係性	－	令和5年1月15日	第66回日本心身医学会近畿地方会Web開催	【目的】高校生のストレス軽減法として、マインドフルネス呼吸法に着目し、健康状態に及ぼす効果を検討する。【方法】高校生16名に起床後に5分間の呼吸を2週間実施し、呼吸開始前と14日目で健康状態と主観的ストレス度を測定した。また、毎日の呼吸前後に現在の気分を数字で評価し、ノンパラメトリック検定を行った。【結果】2週間後の主観的ストレス19項目中7項目に優位差があり、また、呼吸前後で気分の変化指数が上昇した。本人担当部分：実施準備、データ打ち込み、結果考察 発表者：高田勝子、上野栄一西出順子
７．COVID-19感染症拡大の状況下での精神看護学実習における看護学生の学び	－	令和5年3月4日	第27回日本看護研究学会東海地方会	【目的】COVID-19感染症の拡大により、2020年度より精神看護学実習において、様々な実習形態への変更を余儀なくされた。Withコロナ時代における臨地実習の教育につなげるため、看護学生へのインタビューによる調査を行い、今後の教育の示唆を得ること。【方法】研究　対象者14名の学生にインタビューを行った。分析はKrippendorffの内容分析法に準じ、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出し、さらに抽象度を上げコアカテゴリーを生成した。【結果】「病院実習」では、実際に『患者－看護師関係のコミュニケーション』を通して《患者視点へシフト》することで『精神患者の生きづらさを認識』し、【精神看護実習ならではの体験】をしていた。また、受け持ち患者の【看護展開】を通して《意図的な看護ケア》について『自己の未熟さに気づき』ながらも『患者からもらったことば』に感動していた。さらに目標とする『将来の看護師像』ができ【将来への展望】につながった。「訪問看護実習」では、学生は『利用者精神障害の心情を感じ取る』ことで《訪問看護を活用する意義》を深め、【病院から訪問看護へのつながりの実感】があったが【精神科病院イメージ化の困難】を感じていた。「学内実習」では、《事例での看護展開のジレンマと限界》を感じながらも『アセスメントの共有』や『ディスカッションに対する満足感』などの《グループワークの強み》を認識し、様々な【グループワークの長短】があった。また《臨地での体験不足による自信のなさ》から精神看護の【イメージと現実のギャップ】を感じていた。【考察】病院実習とは異なる実習でも、違った視点の学びがあると提示することで学習効果が期待されると考える。本人担当部分：インタビュー、カテゴリー生成、結果分析、考察 発表者：山﨑陸世、西出順子、高田勝子、上野栄一

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和５年３月 31 日

氏名　　井上　昌子

研究分野	研究内容のキーワード
在宅看護学	小児　在宅　重症心身障害児　レスパイト

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1）老年看護学援助論授業補助を行った。	平成 30 年４月～７月	奈良学園大学保健医療学部の助手として、老年看護学援助論の授業・演習のサポートや出欠確認を行った。演習では学生のロールプレイ、看護過程の評価を行った。
2）統合看護学臨地実習指導を担当した。	平成 30 年５月	奈良学園大学保健医療学部の助手として、実習施設との調整、実習前オリエンテーションを行い、実習では学生自身の目標が達成できるようチーム医療の一員として看護師が果たす役割や、複数の受け持ちの中での優先順位を考え行動することを指導した。単位認定者の教授とともに実習後の評価を行った。
3）基礎・老年・成人・在宅看護実習において臨地実習指導を担当した。	平成 30 年９月～令和元年１月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、 実習に必要な日常生活援助技術の練習を行い、学生が実習に取り組めるようにした。実習では、情報収集、アセスメント、看護過程の展開を通して患者に何が必要な看護かを考えるよう指導した。また学生に自分の看護を振り返り、学びを深められるよう支援できた。単位認定者の教授とともに、実習後の評価を行った。
4）基礎看護実習Ⅱ臨地実習指導を担当した。	令和元年２月	実習施設において、情報収集、コミュニケーション、アセスメントを通して必要な看護や患者の思いを考えられるように指導した。
5）統合看護学実習臨地実習指導を担当した。	令和元年５月	奈良学園大学保健医療学部の助手として、実習施設との調整、実習前オリエンテーションを行い、実習では学生自身の目標が達成できるようチーム医療の一員として看護師が果たす役割や、複数の受け持ちの中での優先順位を考え行動することを指導した。単位認定者の教授とともに実習後の評価を行った。
6）老年看護学援助論、疾病治療論Ⅵ授業補助を行った。	令和元年４月～９月	奈良学園大学保健医療学部の助手として、老年看護学援助論の授業・演習の準備やサポート、出欠確認を行った。演習では、学生のロールプレイ・看護過程についての評価を行った。
7）老年領域実習Ⅰ・Ⅱにおいて臨地実習指導を行った。	令和元年９月～令和２年１月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、 実習に必要な日常生活援助技術の練習を行い、学生が実習に取り組めるようにした。実習では、情報収集、アセスメント、看護過程の展開を通して患者に何が必要な看護かを考えるよう指導した。また学生に自分の看護を振り返り、学びを深められるよう支援できた。単位認定者の教授とともに、実習後の評価を行った。
8）基礎看護学実習Ⅱにおいて臨地実習指導を行った。	令和２年２月	実習施設において、学生が情報収集やコミュニケーション、アセスメントを通して必要な看護や患者の思いを考えられるよう取り組んだ。

9）老年看護学援助論演習において授業を担当した。	令和２年４月～ 令和２年８月	奈良学園大学保健医療学部の助教として、3年次生を対象とした授業の一部を担当し、清潔、皮膚、陰部洗浄、歩行介助の講義を行った。授業の後に確認テストをWeb上で行い、解説を配布することで学生に分かりや易く説明した。試験問題を作成し、領域教員と評価を行った。
10）基礎演習Ⅰ（ラーニングスキルズ）を担当した。	令和２年４月～ 令和２年７月	1年次生を対象とした授業の一部を担当し、大学での学習方法、レポートの書き方、プレゼンテーション方法、査読について指導を行った。学生にはテーマを与えてプレゼンテーションとレポートを提出させ、それぞれのレポートを査読させ、評価をフィードバックした。
11）卒業研究Ⅱを担当した。	令和２年４月～ 令和３年２月	4年次生学生2名に対して、テーマ決定、文献検討から分析において指導をした。
12）老年領域統合実習において実習指導を行った。	令和２年６月	新型コロナウイルスの感染拡大のため実習施設との遠遠実習の調整、実習の到達目標、記録用紙、事例作成を領域教員と共同で作成した。他職種連携の中での看護師の役割、看護管理、複数患者受け持ちや病状急変について、映像資料を活用し、指導を行った。実習室で、援助方法や声掛けを実践し、振り返ることで自己の課題を見付けられるよう指導した。領域教員と評価を行った。
13）老年領域実習Ⅰ・Ⅱにおいて臨地実習指導を行った。	令和２年８月～ 令和３年１月	施設との実習期間の調整、遠隔での実習環境調整、講義依頼、物品管理を行い、実習開始後は学生の健康管理を行い、できるだけ臨地実習が出来るように努めた。学生には、看護過程の展開を通して看護計画立案・実施を指導した。領域教員と評価を行った。
14）在宅看護学援助論演習において講義を行った。	令和３年４月～ 令和３年７月	講義の一部を担当し、看護計画立案について講義を行った。学生が事例の患者の看護課題を理解できるように務めた。授業の出欠確認、Zoomのチャット機能を用いた学生の質問への対応を行った。
15）在宅看護学概論にて授業補助を行う。	令和３年４月～ 令和３年７月	授業の出欠確認､Zoomのチャット機能を用いた学生の質問への対応を行った。
16）統合看護実習において臨地実習指導を行った。	令和３年７月	施設との実習打ち合わせを行い学生がスムーズに実習できるように調整した。学生に対しては、卒業研究と繋げられる自己のテーマを持ち、実習できるように指導した。
17）卒業研究Ⅱを担当した。	令和３年４月～ 令和４年３月	4年次生の学生2名に対して、統合実習での学びと卒業研究テーマを関連して学習できるように努めた。テーマに沿って、文献検討、分析、論文作成について指導した。
18）在宅看護援助論にて講義を行った。	令和３年９月～ 令和３年12月	回復期及び慢性期の療養者への看護についての講義を行った。学生が糖尿病についての学びを深められるよう映像教材を用いて工夫した。糖尿病の怖さについて改めて理解できたと講評を得られた。エンゼルケアについて演習を通して、学生に死後の処置、家族への言葉がけ、思いを傾聴する大切を学べるよう指導した。
19）在宅領域実習の臨地指導を行った。	令和３年９月～ 令和４年３月	施設との事前打ち合わせを行い、大学の到達目標を提示し、学生が目標を達成できるように指導した。実習中は記録を読み、療養者に必要なケアを導き出せるように関わった。領域教員と評価を行った。
20）統合看護論（在宅）にて講義を行った。	令和３年12月	事例を通して、療養者に必要な看護計画、利用できる福祉制度について講義を行った。

21）領域別国家試験対策講座（在宅）にて講義をおこなった。	令和４年１月 13 日	介護保険制度と医療保険制度による訪問看護、訪問看護ステーションの設置基準などについて講義を行い、国家試験前に自己の弱点などに気付き学習できるように指導した。
22）在宅看護学援助論演習にて講義を行った。	令和４年４月～７月	助教として講義の一部を担当し、看護計画立案について患者を理解し課題を見つけられるように指導した。授業の出欠確認、Zoom の録画、チャット機能を用いた学生の質問への対応を行った。
23）統合看護実習において臨地実習指導を行う。	令和４年４月～現在に至る	助教として実習先の新規開拓、調整を行い、学生が自分のテーマを探求できる実習になるよう環境を整えた。
24）卒業研究Ⅱを担当した。	令和４年４月～令和４年 11 月	４年次生の学生２名に対して、統合実習での学びと卒業研究テーマを関連して学習できるように努めた。テーマに沿って、文献検討、分析、論文作成について指導した。
25）在宅領域実習の臨地指導を行った。	令和４年９月～令和４年 11 月	施設との事前打ち合わせを行い、大学の到達目標を提示し、学生が目標を達成できるように指導した。実習中は学生の実習意欲を引き出せるよう関わり、在宅療養者の生活を理解し、必要なケアを者導き出せるように指導した。
２　作成した教科書，教材 なし		
３　教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
４　実務の経験を有する者についての特記 なし		
５　その他 なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 1）看護師免許 2）修士（看護学）	 平成 27 年４月 令和2年3月修了	 奈良学園大学大学院看護学研究科在宅看護学分野
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記 なし		
４　その他 1）教務 WG、卒業研究 WG 委員 2）学生生活 WG 3）国家試験対策 WG、FD 研修 WG 4）図書館運営委員、教員会	 令和元年４月～令和２年３月 令和２年４月～令和３年３月 令和３年４月～令和４年３月 令和４年４月～令和４年３月	 書記を担当し議事録作成した。 書記を担当し議事録作成した。保護者懇談会の司会・受付・誘導、希望学生の保護者との三者懇談を行った。 書記を担当し議事録作成した。模試試験監督、講座の見守りを行い、学生の学習環境を整えた。 大学教員の研究分野を広く地域や学生に伝えるための展示について協議した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要

（著書） 1.2019 年出題傾向がみえる必修問題	共著	平成 30 年 12 月	株式会社ピラールプレス Ｂ5 判　全 189 項	2019 年の看護師国家試験対策問題集として、近年出題された問題と要点がまとめられている。 共著者：守本とも子（監修）、松浦純平（編著）、井上昌子、斎藤英夫、溝口みちる、明神一浩（著） 本人担当箇所は、要点編「健康に影響する要因」「人間のライフサイクル各期の特徴と生活」「主な看護活動の場と看護の機能」「人体の構造と機能」「疾患と徴候」「診療に伴う看護技術」の一部を担当した。
2.2020 年解いて、わかる！覚えて合格！必修問題問題集	共著	令和元年 11 月	株式会社ピラールプレス Ｂ5 判　全 172 項	2020 年の看護師国家試験対策として必必修問題の過去問と要点の解説している。過去問の解説を一部担当した。 共著者：守本とも子（監修）、松浦純平(編著) 本人担当箇所：P14-15、P24、P32-33
3.2020 年解いて、わかる！覚えて合格！小児看護学/看護の統合と実践　問題集	共著	令和 2 年 3 月	株式会社ピラールプレス B5 判　全 98 頁	2021 年の看護師国家試験対策として小児領域の過去問と解説している。 共著者：守本とも子（監修), 山口 求（編）、井上昌子 本人担当箇所：p13-33、p35-40、p42-52、P56-66.
4. 2021 年解いて、わかる!覚えて合格！小児看護学問題集	共著	令和 2 年 5 月	株式会社ピラールプレス B5 判　全 80 頁	2021 年の看護師国家試験対策として小児領域の過去問と解説している。 本人担当箇所は、過去問編全般の解説を担当した。 共著者：守本とも子（監修）井上昌子（編著） 本人担当箇所：p6-80.
5. 2021 年出題傾向がみえる小児看護学(中項目にみた要点と 176 問過去問題集)	共著	令和 2 年 7 月	株式会社ピラールプレス B5 判　全 148 頁	出題基準平成 30 年版に基づき中項目に見た要点編と解説付き過去問題集で、国家試験に頻出される重要な内容について分かりやすく解説した。 共著者：守本とも子（編著者）、山口求（著）、井上昌子 本人担当箇所：p112-148
6. 看護師国家試験　直前前　社会福祉学領域ファイナルチェック	共著	令和 3 年 3 月	金芳堂 A5 判・170 頁	2021 年の看護師国家試験対策として社会福祉についてまとめられている。 本人は、第 5 章「介護保険制度」2.介護保険制度の仕組みを執筆担当した。 監修：星野政明、編著：守本智子、富永堯史、執筆：井上昌子他 20 名 本人担当箇所：p52-57
（学術論文） 1.原著「老人性皮膚掻痒症」のシュガー・スクラブよるスキンケアの効果の検証（査読付）	共著	平成 31 年 3 月	医療福祉情報行動科学研究、 Vol.6,March,2019	シュガー・スクラブを用いたスキンケアの効果をケア群と統制群に分けて検証した。 共著者：高橋寿奈、斎藤英夫、山口求、吉村雅世、佐藤郁代、野口寿美子、井上昌子、守本とも子 本人担当部分：研究準備、研究遂行、

				データ入力を行った。
2.高齢者の「老人性皮膚掻痒症」のシュガー・スクラブによるスキンケア効果の検証	共著	平成31年3月	アビザル・ジャパン委託研究報告書、 全10頁	老人保健施設において、シュガースクラブを塗布し、マッサージをおこなった。皮膚水分量・脂分量とも有意に上昇し、保湿効果によるバリア機能となること
				明らかとなった。 共著者：山口求、守本とも子、吉村雅世、佐藤郁代、斎藤英夫、高橋寿奈、井上昌子、野口寿美子 本人担当部分：研究準備、研究遂行、データ入力を行った。
3.原著「レスパイトケアを利用する母親の重症心身障害児（者）のきょうだいに対する思いの変化」 （査読付）	共著	令和3年10月21日	日本看護科学会誌 41巻p614-p622	共著者：井上昌子、守本とも子、中馬成子 本人担当箇所：研究計画の立案と実施，論文を執筆した。
（学会発表） 1.「レスパイトケアを継続利用する在宅重症心身障害児（者）の母親の心理プロセス」	共著	令和2年9月28～11月8日	第46回日本看護研究学会学術集会 講演集p261.	レスパイトケア利用を継続することで，母親の休息時間の確保だけでなく，緊急時や将来の生活 の場として「安心して子どもを預けられる場所」が出来ていた。同じ苦痛や罪悪感に悩んできたピアサポートによる共感的な支援や、ソーシャルサポートの中でも情緒的サポーが罪悪感」や事績の念を抱いていた母親にとって有効かつ重要であることが明らかとなった。 共著者：井上昌子、中馬成子、守本とも子
2.「レスパイトケアを利用する母親の在宅重症心身障害児（者）のきょうだいに対する思い」	共著	令和2年12月12～13日	第40回日本看護科学学会学術集会 （東京・Web） 一般講演集p155	母親は，レスパイトケアを利用することでずっと我慢を強いているきょうだいへの申し訳なさや罪悪感から解放され、愛情が満たされる喜びを感じていたことが明らかとなった。レスパイトケアは、きょうだいの負の感情を発散することができ、母子間の情緒的欲求が満たされることで、安定した親子関係の構築につながることが示唆された。 共著者：井上昌子、中馬成子、守本とも子
3.「重症心身障害児（者）母親のレスパイトケア利用時の困難さと感情」	共著	令和3年3月20日	日本看護研究学会 第34回近畿北陸地方会学術集会 （奈良・Web） 抄録集P34	母親はレスパイトケア利用時に、子を預ける罪悪感や、移動の負担感、サービスや看護師に対する様々な困難さを経験していることが明らかとなった。母親の葛藤や気掛かりに対する心理的支援を行い、子を安心して預けられるように長期的な関わりが必要であった。 共著者：井上昌子、中馬成子、守本とも子
（その他） 1.第39回日本看護研究学学術集会実行委員（大阪）		令和元年8月20～21日		学術集会において、学会運営に携わった。
2.日本看護研究学会第34		令和3年3月		学術集会において、学会運営・抄録編集

近畿・北陸地方会学術集会実行委員（奈良） 3. 第 27 回日本看護診断学学術大会企画運営委員会（奈良）		20 日 令和 3 年 7 月 17～31 日		に携わった。 学術集会において、学会運営に携わった。

［注］

1 最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。

2 「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。

3 「研究活動」については、下記の点に留意すること。

① 著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。

② 著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。

③ 共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。

④ 最近１０年間に著書･論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。

⑤ 芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。

（様式３）　　（用紙　日本工業規格　A4縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年　3月　31　日

氏名　　松村　あゆみ

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	老年看護学　在宅看護論　訪問看護　健康増進　難病支援

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例	平成11年4月～平成31年3月	ハートランドしぎさん看護専門学校において平成11年～平成30年までの19年間において、専任教員として看護基礎教育を実践してきた。主な看護学の専門領域は老年看護学、在宅看護学であり、講義や演習及び実習指導をおこなってきた。また実習指導者、教務副主任として教育課程や臨地実習計画の立案や各看護学の実習指導を実した。約760名の看護師養成に関わった
	平成31年4月～令和2年3月	兵庫大学看護学部において老年看護学の領域責任者として、老年看護学科目責任の任を担い老年看護学の講義や実習指導を行った。さらに、地域貢献として地域の高齢者の健康教室の主催代表をつとめ、大学と地域の交流を図った。大学運営に関しては実習委員会、看護研究委員会に所属し、円滑な実習調整、配置表の作成、実習指導者協議会の計画、立案を行った。看護研究委員会では学部生の看護研究に関する倫理的な事案の調整、看護研究抄録集の作成を行った。
	令和2年4月～令和4年6月現在	奈良学園大学保健医療学部では、公衆衛生看護領域において、公衆衛生看護学の講義と実習指導を行った。さらに保健師課程選択者の国家試験対策にも力をいれ取り組んだ。大学運営に関しては広報委員会、教務委員会、国家試験・キャリア委員会、FD・カリキュラム委員会に所属し活動を行った。広報委員会ではオープンキャンパスの企画・運営と高校訪問を実施し大学入学者の獲得のための活動を実施した。教務委員会では、新カリキュラムでの時間割の調整や履修手引きや課程選択実施要領の検討を行った。国家試験対策・キャリア委員会では保健師、助産師、看護師の国家試験の合格率100％を目指し、国家試験対策の企画と実施、模擬試験の実施等を行った。令和3年度の看護師国家試験の合格率は100％であった。
2　作成した教科書，教材	平成27年4月～平成29年3月	基礎看護学実習における事例教材の作成を行った。（クモ膜下出血・肺炎・腰椎圧迫骨折） ハートランドしぎさん・ハートランドしぎさん看護専門学校の合同指導者会にて学習するための精神看護学実習（統合失調症）の教材事例を作成した。
	令和2年4月	出題傾向がみえる健康支援と社会保障制度　出題基準平成30年版準拠中項目にみた要点と解説付 2021年，PILAR PRESSピラールプレス
	令和４年2月	エビデンスに基づく消化器看護ケア関連図，2022，中央法規出版
3　教育上の能力に関する大学等の評価		なし
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）看護教員講習会	平成25年9月～11月	厚生労働省認定の看護教員養成講習会（奈良県）において看護教員講習生に対して老年看護学の講義、実習指導を担当し実施した。老年看護学の講義に関しては「高齢者の食生活を支える看護」についての講義計画や教授方法の指導を実施した。また臨地実習指導に関しては、健康障害をもつ高齢者の看護過程の展開に関しての指導を行った。
2）環太平洋大学　看護教員養成コース	平成27年10月	環太平洋大学主催の看護教員養成コースにおいて看護教員講習生に老年看護学の実習指導を担当し実施した。認知症をもつ高齢者の看護過程展開に関しての指導を実施し、老年看護学実習の指導計画立案に関しての指導を行った。

3) 日本看護研究学会　学会企画委員	令和2年4月～令和3年3月	学会企画委員として学会の企画、運営に携わった
4) 日本看護診断学会　第26回学会企画委員	令和3年3月～令和4年3月	学会企画委員として学会の企画、運営に携わった
5) 兵庫大学　非常勤講師	令和2年4月～令和4年	老年看護学を担当した
6) 阪奈中央看護専門学校　非常勤講師	令和4年～令和5年	家族看護学を担当
7) 四条畷看護専門学校　非常勤講師	令和3年3月～令和4年3月	家族看護学・災害看護を担当
8) 日本看研究学会　第50回学会企画委員	令和５年～	学会企画委員として学会の企画、運営に携わっている

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許 看護師免許 保健師免許 第一種衛生管理者免許	 昭和63年 8月 平成11年 5月 平成10年 6月	 登録番号：644196 登録番号：62585 登録番号：29000085891
2　特許等		なし

事項	年月日	概要
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1) ホームヘルパー養成講習会（2級） 2) 元気アップ奈良講座(奈良市)	 平成19年5月～平成23年5月 令和3年～令和4年	 ホームヘルパー養成講習会の受講生対して、ホームヘルパサービス概論の講義を担当した。講義の内容としてホームヘルプサービスの社会的役割や制度、変遷について講義を実施した。また生活の質を高める在宅ケアや継続支援についてのグループワークや認知症利用者の介護事例を通じ対応の基本について講義を行った。この講義受講後、受地域包括支援センター(奈良市) 主催の介護予防教室にて地域で生活する高齢者へ介護予防に関する講義を実施した。
4　その他 看護功労者知事表彰	 令和5年4月	 奈良県での看護実績や教育実績の貢献に関して知事からの表彰をうけた

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 1 在宅看護実習まとめの方法に関する検討 －ラベルワーク技法の絵による表現の学習効果－ (査読付)	共著	平成21年8月	第40回日本看護学会看護教育発表 (開催場所：岡山県) 第40回日本看護学会論文集　看護教育	在宅看護論実習の訪問看護ステーションにおいて学びの内容をラベルワークの技法を用いて「絵」を用いて表現し、学生に実施したアンケート調査から学習効果を考察した。その結果、ラベルワークで自分たちが創ったオリジナリティにあふれた「絵」により達成感や充実感を得ており、イメージ化しやすことの示唆を得た。また、学生自身が楽しく参加できグループ間の結束もうまれ、思考が整理される効果が得られた。 担当部分：ラベルワーク終了後の学生アンケートの集計やアンケート自由記載内容の分析の集計とカテゴリー化の分類を実施した。カテゴリー化については意味内容の妥当性を研究者間で協議を行った。(p263～265) 共著者：西村和子，早味妙，松村あゆみ

2 在宅看護論におけるエンゼルメイク演習の効果 （査読付）	共著	平成22年8月	第41回日本看護学会看護教育発表 （開催場所：長崎県） 第41回日本看護学会論文集　看護教育	在宅看護論は看護の統合と実践に位置し、教育内容の充実が求められており演習の強化とともに訪問看護実習や終末期看護の実施も望まれているなか、終末期看護の実践在宅看護の現場では困難な状況にある。そのため、終末期看護の技術としてのエンゼルメイク演習を実施しその学習内容を質問紙調査で把握しその効果を明らかにした。その結果、この演習は学生に今後に役立ち、死後も生きた人間とする人格の尊重やスピリチュアルケアとして捉える機会になった。また、遺された家族へのグリーフケアに繋がる重要性に気づけ、その人らしさの表現するケアであることの理解が深まった。 担当部分：エンゼルメイク演習を学生に実施し、実施後アンケートの集計と内容分析を行った。アンケートの自由記載のカテゴリー化の研究者間の協議や考察部分を担当した。（P162- 165） 共著者：西村和子，松村あゆみ，早味妙，田村和子，松吉晶子
3.訪問看護実習で居宅で学生が困難と感じた内容 ー実習後のアンケートからー （査読付）	共著	平成23年8月	第４２回日本看護学会看護教育発表 （開催場所）：愛媛県	訪問看護ステーションの実習では一人の患者を受け持つ病院実習とは違い複数患者と接する。また、訪問する時間や回数が制限されるため、患者と学生の関係性は脆弱であり、また技術レベルからも看護過程を用いて看護を実践する目標は困難な状況にある。この研究では在宅関論実習において訪問看護ステーションでの実習において看護計画立案の有無の違いによって実習効果に差があるか質問紙調査から比較検討を行った。その結果、訪問看護ステーションでの実習において看護計画を立案した方が実習目標を到達するために有効であると示唆を得た。 担当部分：在宅看護論実習の終了後に看護計画立案に関するアンケートの分析を担当した。（P23-26） 共著者：西村和子，田村和子，井上葉子，松村あゆみ，北島昭弥，北出千春
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
4. 訪問看護実習の居宅で困難と感じる内容の分析 ー指導者と学生のアンケート調査結果を比較してー （査読付）	共著	平成26年9月	第45回日本看護学会看護教育発表 （開催場所：新潟県）第45回日本看護学会論文集看護教育	訪問看護実習の特徴は訪問看護師と学生で居宅に出向きケアを見学、あるいは指導者と共にケアに参加しながら在宅看護の特徴を学ぶ。そのため教員が居宅で学生の支援は難しい現状にある。また、現場での学生の行動は把握しにくい傾向にある。そこで、この研究では居宅において学生の困難な内容、指導者が感じる学生に対して困難な内容を比較分析することで、実習調整の方法や学習内容を明確する目的とした。その結果、半数以上の指導者や学生は実習で困難と感じず実習を行っていることが明確になった。また学生は指導者へのコミュケーションや看護技術についての困難が、指導者は学生の看護技術の未熟さや訪問時のマナー等に困難を感じていることが分かった。 担当部分：訪問看護が終了した学生へのアンケートの実施と訪問看護ステーションの指導者へのアンケートの実施した。またデータ収集と分析、考察を実施した。（P102-105） 共著者：西村和子，田村和子，松村あゆみ，大西貴子

5在宅看護実習の訪問看護ステーションでの看護計画立案による学習効果について （査読付）	共著	平成27年8月	第46回日本看護学会看護教育発表 （開催場所）：奈良県 第46回　日本看護学会論文集　看護教育	訪問看護ステーションの実習では一人の患者を受け持つ病院実習とは違い複数患者と接する。また、訪問する時間や回数が制限されるため、患者と学生の関係性は脆弱であり、また技術レベルからも看護過程を用いて看護を実践する目標は困難な状況にある。この研究では在宅関論実習において訪問看護ステーションでの実習において看護計画立案の有無の違いによって実習効果に差があるか質問紙調査から比較検討を行った。その結果、訪問看護ステーションでの実習において看護計画を立案した方が実習目標を到達するために有効であると示唆を得た。 担当部分：在宅看護論実習の終了後に看護計画立案に関するアンケートの分析を担当した。（P23-26） 共著者：西村和子，田村和子，井上菜子，松村あゆみ，北島昭弥，北出千春
6 看護学生のヘルスリテラシーと生活習慣に関する研究 （修士論文）	単著	平成28年3月	大阪教育大学大学院教育学研究科	本研究は将来人々の健康増進や健康管理の仕事につく看護学生のヘルスリテラシーについて分析し、生活習慣との関連について検討を行い、看護学生のヘルスリテラシー向上のための教育的支援の基礎資料を得ることを目的とした。 分析のための測定用具は須賀が開発した「日本語版HLS-14」を用いて測定した。また、生活習慣は徳永らが作成した「健康度」12項目、「生活習慣行動」9項目、「運動条件」4項目、「食生活状況」11項目、「休養状況」4項目、「睡眠状況」5項質問項目を用いて測定した。 その結果、伝達的HL低群の割合は、「健康度」「食生活状況」「休養状況」「睡眠状況」の非良好群で有意に高かった。批判的HL低群の割合は「健康度」「生活習慣行動」「食生活状況」の非良好群で有意に高かった。この結果からヘルスリテラシーを向上させることで、生活習慣の良好群が増えることにつながると示唆を得た。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7 在宅看護論おける難病患者の就労支援に関する学習効果第１報 ー学生による授業振り返りシートの分析からー　（査読付）	共著	平成29年8月	第４８回日本看護学会看護教育発表 （開催場所）：香川県 第48回日本看護学会論文集　看護教育	在宅看護論の授業で「職業生活を支援する看護」のモデル授業を実践し、その授業構成の教育効果について検討した。その結果、働くことの意味、就労生活が生活の質を高める事につながる理解は社会人経験の有無に関係なく良く理解できていた。 また、難病と就労を結びつけて考えさせるこの授業は、完治しない継続な治療が必要な患者であっても環境調整や支援によって就労が可能になる事を意識づけた。さらに 家族や職場の人などにも目を向け、対象を広げた看護を学ぶ機会になった。 担当部分：難病患者の就労支援のモデル授業を在宅看護論の中で実施し、実施後アンケートの分析と考察部分を担当した。（P3-6） 共著者：西村和子，井上菜子，松村あゆみ

8 在宅看護論おける難病患者の就労支援に関する学習効果第２報 ークローン病の事例を用いたワークシートの分析からー （査読付）	共著	平成29年8月	第４８回日本看護学会看護教育発表 （開催場所）：香川県 第48回日本看護学会論文集　看護教育	在宅看護論の授業で「職業生活を支援する看護」のモデル授業を実践し、難病患者の事例ワークシートから学生の学びを分析し難病患者の就労支援の内容を看護教育に組み入れることによる学習効果を検討した。その結果、事例ワークシートの活用が難病患者の生活視点につながり、学生は難病患者の身体面の不都合が精神面や社会面に影響しているこのイメージができた。またその人にとってどんな条件が整えば就労できるのかのICFの概念の理解や就労のための生活環境や社会環境の調整の必要性の理解でき、学習効果の示唆を得た。 担当部分：難病患者の就労支援のモデル授業で使用したクローン病患者の事例で学生が学んだことの内容分析と考察、まとめを担当した。（P7-10） 共著者：松村あゆみ，井上葉子，西村和子
9.　在宅看護論における難病患者の就労支援に関する授業の授業効果 ー闘病記の感想文の分析ー	共著	平成30年3月	奈良学園大学紀要第8集	3年課程の看護専門学校2校2年生80名を対象に在宅看護論において「職業生活を支援する看護」の授業を行い、授業後に「難病患者の就労に関する闘病記」を読んでの感想を課題として提示した。テキストマイニングにて感想文の内容を確認したところ、難病に苦しんでいる人の役に立ちたいという看護師の目標を見つける機会となり、一定の教育効果がみられた。（P13 - 19） 担当部分：難病患者の就労の闘病記をテキストマイングで内容分析を考察を行った。 共著者：井上葉子，西村和子，松村あゆみ，奥西志毬，駒井由美子，大谷未来
10. 要介護者が暮らす住環境を理解することを目指した住居見取り図作成による学習効果の検討	共著	令和2年3月	医療福祉情報行動科学研究	在宅看護論演習におけて療養者の生活という視点を育み、居宅における環境調整の意味と意義を理解することについて要介護者が暮らす住居の見取り図作成とポスターセッションの学習効果を考察した。その結果見取り図を用いたポスター瀬kセッションでは、双方の意見交換により学習内容を深化させることにつながり、他者に明確に内容を伝えるスキルを考える機会になった。（P11 - 16 ） 共著者：井上葉子，松村あゆみ，西村和子
11. 看護教員の難病患者の就労支援に対する意識に関する研究	共著	令和3年3月	日本保健医療行動科学会雑誌35（2）	看護教員の難病患者の就労支援に関する意識調査と教育内容や教育上の課題を明らかにすることを目的とした。看護職勤務期間、相談支援経験の程度、難病看護の教授経験の有無に関して2群に分けMann-WhitneyU検定を用いて比較した。その結果、治療の状況を踏まえ就労・休職・復職にむけての情報提供、仕事内容や職場条件を踏まえた体調管理、病気や障害によって仕事ができない時の相談先に関する情報提供の項目の平均値が有意に高かった。（P23－29） 共著者：井上葉子，松村あゆみ，内田勇人
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12. 大学衛生委員会が作成した新型コロナウイルス感染症拡大防止のための「出席停止期間早見表」と「出勤不可期間早見表」	共著	令和3年4月	保健師ジャーナル 77（4）	奈良学園大学における衛生委員会で新型コロナ感染症拡大防止のための具体的実践方法のマニュアルを作成し、出席、出勤停止早見表を作成活用することで、感染拡大を防止することができた。（P308－316） 共著者：三浦康代，井上葉子，松村あゆみ，上栫佳代子，阿波邦彦，森村佳史，島本卓也
（その他） （学会発表）				

1. 効果的な老年看護技術「清潔・身だしなみを保持する」演習技術の検討	共著	平成17 年8月	奈良県看護教員研究会で発表：奈良県	老年看護学実習における「清潔・身だしなみを保持する」ための技術の実施に関しての実態調査では眼、耳、鼻の清潔ケアや手浴、肘浴の実施率が低い結果となった。そこで「清潔・身だしなみ」を保持する」講義と演習計画の作成に取り組み、演習に使用する教材選択や演習方法の検討を行った。演習の教材として看護教員が模擬患者として演習に参加することで、学生に高齢者への対象理解が図れ、効果的な看護技術演習に繋がることの示唆を得た。 共著者：山下陽子，今川文子，松村あゆみ
2. 効果的な老年看護技術「清潔・身だしなみを保持する」演習の実施・評価	共著	平成18年8月	奈良県看護教員研究会で発表：奈良県	老年看護学技術演習における「清潔・身だしなみを保持する」技術の演習計画を立案し、実施を行った。演習の事例として85歳女性、脳梗塞発症後14日とし、演習前後の指導内容と学生の学習内容を抽出した。演習後は授業評価スケールを用いて下位尺度（時間配分ちお内容の難易度・目的の伝達と指導・教材の活用・学生間の交流・学生の態度）毎にデータの分析を行った。その結果、下位尺度の学生間の交流、学生の態度の項目が高い結果となった。このことから効　　果的な演習には事例に提示に終わらず、教材を工夫し学生間に交流を深めることや学生が質問しやすい環境を調整していくことは効果的である。 共著者：山下陽子，松村あゆみ，早味　妙，西崎久子
3. 老年看護学概論におけるインタビューを取り入れた授業案の作成	共著	平成19年8月	奈良県看護教員研究会で発表：奈良県	高齢者との語らいの効果として、高齢者観に肯定的な効果をもたらすという研究データもあり、老年看看護学概論の授業に関して高齢者へのインタビューを取り入れた授業案を作成した。インタビュー内容は「一日の過ごし方」「生活習慣」「現在の楽しみ」「昔の仕事」「戦争体験」であり、学生はインタビューを通じて高齢者と触れ合うことで高齢者の理解につながることが明らかになった。 共著者：松村あゆみ，山下　陽子，西崎　久子，早味　妙，駒　妙
4. 看護学生のヘルスリテラシーと生活習慣に関する研究（査読付）	単著	平成28年10月	第７５回日本公衆衛生学会発表 （開催場所）：大阪府	本研究は将来人々の健康増進や健康管理の仕事につく看護学生のヘルスリテラシーについて分析し、生活習慣との関連について検討を行い、看護学生のヘルスリテラシー向上のための教育的支援の基礎資料を得ることを目的とした。 分析のための測定用具は須賀が開発した「日本語版HLS-14」を用いて測定した。また、生活習慣は徳永らが作成した「健康度」12項目、「生活習慣行動」9項目、「運動条件」4項目、「食生活状況」11項目、「休養状況」4項目、「睡眠状況」5項質問項目を用いて測定した。 その結果、伝達的HL低群の割合は、「健康度」「食生活状況」「休養状況」「睡眠状況」の非良好群で有意に高かった。批判的HL低群の割合は「健康度」「生活習慣行動」「食生活状況」の非良好群で有意に高かった。この結果からヘルスリテラシーを向上させることで、生活習慣の良好群が増えることにつながると示唆を得た。　抄録P314

（学会発表）				
6. 看護基礎教育における難病看護に関する教育の実態―就労支援に焦点をあてて―（査読付）	共著	平成28年12月	第３７回奈良県公衆衛生学会発表 （開催場所）：奈良県	上記の結果から、難病患者が必要としている社会資源に関する情報を十分に提供するには患者にとって身近な医療従事者である看護師が、その情報を持つことが必要であり、教育の場で教員が学生にそれをどう教授していくのかの課題が明確になった。　抄録P7 共著者：井上葉子，西村和子，松村あゆみ，奥西志保，早味　妙，駒井由美子

7. 看護専門学校における難病患者の就労支援に関する授業の学習効果ー難病患者の就労支援体験談からの学生の学びの分析ー	共著	平成29年11月	平成29年度NTT数理データシステム学生奨励賞	難病患者の就労支援の内容を授業に組む入れることの必要性についての看護専門学校教員の認識は9割以上であったが、難病患者の具体的な就労支援や制度については約半数近くの教員が理解しておらず、授業で教授しているか看護専門学校教員はほとんどいなかった。そこで難病患者の就労支援に関する学習効果について検討し、難病患者が就労する上での環境整備が看護師の役割であることを気付けるような教材が今後必要になるとの示唆を得た。 担当部分：難病患者の就労支援におけるモデル授業で学生が記述した内容分析を担当した。 共著者：井上葉子，西村和子，松村あゆみ，奥西志穂，駒井由美子，大谷未来
8. テキストマイングを用いたヘルスリテラシーに関する研究動向の分析	共著	令和2年11月	日本看護研究学会第34回近畿北陸地方会学術集会	ヘルスリリテラシーの研究動向について、文献検索を行いてテテキストマイニングを用いて分析を行った。その結果、ヘルスリテラシーと健康関連を検討することに相関関係があり、その検討を重ねることでヘルスリテラシーを向上できる介入方法が明らかになることの示唆を得た。共著者：松村あゆみ，松浦純平
9. 在宅看護学実習における患者・家族の思いを取り入れた看護介入－学生に対する指導内容と今後の課題ー	単著	令和3年7月	第27回日本看護診断学会学術大会	在宅看護学実習における患者・家族の思いを取り入れた看護介入について、看護基礎教育での指導内容を抽出し、考察した結果、訪問看護師と連携をとり、対象の具体的な情報提供が重要となり、看護診断を活用しながら療養者、家族の状況をアセスメントし意思決定できるような看護介入が重要であるとの示唆を得た。単著者：松村あゆみ
10. 看護学生のヘルスリテラシーに対する健康教育の効果	共著	令和3年7月	第27回日本看護診断学会学術大会	保健医療の立場で健康教育に携わる看護学生に対してヘルスリテラシーについての健康教育を実施しその効果を研究目的とした。その結果、健康教育前と健康教育後では健康情報を批判的に分析し、自己に取りいれる批判的ヘルスリテラシーが有意に高くなったことから健康教育の効果が示された。共著者：松村あゆみ，松浦純平
11. 看護過程の観点から考えるせん妄への介入研究の特徴	共著	令和3年7月	第27回日本看護診断学会学術大会	看護過程の観点からせん妄発症介入研究の特徴を明らかにすることを研究目的とし、以下の内容の示唆を得た。せん妄発症介入研究に関する看護過程の特徴では、成人期における術後せん妄発症による予防介入やCOVID-19 とせん妄を同時に発症した患者への看護、認知症看護の視点での介入研究が多かった。共著者：松浦純平，溝口みちる，田場真理，松村あゆみ，上野栄一
12. 大学衛生委員会が作成した新型コロナウイルス感染症拡大防止のための「出席停止期間早見表」と「出勤不可期間早見表」	共著	令和3年11月	社会医学研究	奈良学園大学における衛生委員会で新型コロナ感染症拡大防止のための具体的実践方法のマニュアルを作成し、出席、出勤停止早見表を作成活用することで、感染拡大を防止することができた。 共著者：三浦康代，井上葉子，松村あゆみ，

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年3月31日

氏名　山本　真樹子

研究分野	研究内容のキーワード
	女性の思い　妊娠・出産体験　助産ケア

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
・小レポートの活用	2018年、2019年、2020年4月	関西大学人間健康学部・人間健康研究科の非常勤講師として担当の「医学一般Ⅰ」（専門・選択科目、1年次配当、半期）において、授業1回目に学生自身がその時点で考える「健康とは」を小レポートとして課した。小レポートから学生たちの授業に期待しまた求めている内容およびプレコンセプションケアを意識した内容とすることで、学生が自身や周囲の健康について考え、生活変容に繋がるように内容を工夫した。学生の毎回の授業後の感想や意見と授業評価アンケートより、自身や周囲の健康や生活に意識がいくようになっていた。
・視聴覚教育教材の作成と利用	2021年6月	奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「母性看護援助論演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修1単位）において、授乳の場面でのケアや褥婦とのやり取りを教員が演じる視覚教材を作成し、母性看護学の主要な理論がどのように看護職がケアとして行っているか、また褥婦の言動から心理・社会面の情報収集の方法考える演習を行った。学生には、ケアが理論をもとに行われていることやコミュニケーションの中での情報収集の学びになっていた。
2　作成した教科書，教材		
・母性看護学演習画像	2021年6月	奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「母性看護援助論演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修1単位）において、授乳場面でのケアや褥婦と看護者のやり取りを教員が演じた動画を作成し、看護過程の授業で活用した。Classroomで共有し活用できるようにした。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
・学生による授業評価アンケート結果における評価	2020年7月	関西大学人間健康学部・人間健康研究科の非常勤講師として担当の「医学一般Ⅰ」（専門・選択科目、1年次配当、半期）に対して2020年度に実施された学生による授業評価において、約7割の学生が「友人や後輩に推薦したい授業内容」、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものだった」と回答していた。（回答数293/330人：88.7%）
	2022年1月	「母性看護援助論」での学生評価は、授業への積極的な参加度3.95、説明のわかりやすさ3.80、要点の明確さ3.89、授業内容の分量の適切さ3.57、聞き取りやすさ4.05、資料のわかりやすさ3.82と、概ね、学生は授業に積極的に参加しており、授業は要点が明確で説明や資料もわかりやすく、聞き取りやすい。授業の分量は多いからどちらとも言えないという状況であった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		
・助産学共用試験問題作成	2021年4月～6月	全国助産師協議会から会員校に対する依頼で、助産師教育における実習生の質保証のための助産学共用試験問題を作成し、登録を行った。
	2022年6月～12月	全国助産師協議会の「令和4年度助産師国家試験プール問題公募の啓発・応募促進事業」で、協力員となり、一つのグループでリーダーとなり、3回のzoomによるオンラインミーテイング、メール会議等を行い、厚生労働省に試験問題を登録した。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
	1998年3月	看護師免許（第1018456号）、助産師免許（第106495号）、保健師免許（第88011号）取得

	2016年8月 （更新2020年8月）	新生児蘇生法「専門」コース修了（認定期間：2020年8月23日～2023年8月22日）
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 ・済生会茨木病院　看護学生実習指導 ・済生会茨木病院　助産学生実習指導 ・済生会茨木病院　看護研究	2016年～2018年 2016年9月～2018年12月 2017年～2019年9月	正看護師臨床指導（受け持ち褥婦と新生児のケア）（20016年4月～2018年3月） 助産学生の分娩介助の指導 EPDSを使用する時期の検討についての研究、GDM妊婦への助産ケアについての検討についての研究（2017年～2019年9月）
4　その他		

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1				
（学術論文） 1.妊娠糖尿病と診断された女性の体験についての一考察～出産後の振り返りから～	共著	2023年	医療福祉情報行動科学研究Vol.10,pp47-54(2023.3.24)	GDMと診断された女性の体験について知り、助産師の支援方法を検討することを目的に研究を行った。女性の語りから、「GDMと診断された後の思い」、「糖尿病という言葉への反応」など7つのカテゴリーが抽出された。GDMを診断される妊娠週数から、身体面の治療やケアと同様に、母親役割取得過程への影響を考えた関わりが必要であると示唆されていた。
2.女性の出産体験と助産師のありよう	単著	2016年2月	武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科臨床教育学専攻学位論文	女性の出産に焦点を当て、出産経過での身体変化に対する女性の身体感覚と、女性とその出産の場を共有する人との関係性と、出産の方向性を示す一つの因子である時間という３つの視点から、出産を女性がどのように体験しているか、また、助産師が女性の出産をどのように捉えて関わっているのかを知り、出産の意味と出産の場における助産師のありようを検討することを目的におこなった。
（その他） 1院内研究発表会（報告）GDMと診断された女性の思いへの一考察～出産後の振り返りから～ .	共同	2019年9月	大阪府済生会茨木病院研究発表会	GDMと診断された女性の思いを聞き、A病院におけるGDMと診断された女性への具体的な支援方法について検討することを目的に、5名のGDMと診断された女性に出産後に振り返りというかたちで半構造化面接を行った。次年度に別のグループに引き継ぎ、介入研究につなげた。

（注）

１　最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。
２「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。
３「研究活動」については、下記の点に留意すること。
①著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。
②著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。
③　共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。
④　最近１０年間に著書･論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。
⑤　芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　５年　　３月 31 日

氏名　　松居　典子

研究分野	研究内容のキーワード
母親の育児不安，育児困難，多胎育児	育児不安，育児困難，多胎，育児支援

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
1「母性看護学方法論」（藍野大学短期大学部）	H28～H31	妊娠期，分娩期，産褥期，新生児期の演習を指導する産褥期の経過とアセスメント、看護について講義する
2「研究Ⅱ」（藍野大学短期大学部）	H28～H31	卒業研究を指導する
3「ゼミナール」（藍野大学短期大学部）	H28～H31	8～9 名でのグループ研究を指導する
4「母性看護学実習」（藍野大学短期大学部）	H27～H31	臨地実習を指導する
5「母性看護援助論」（奈良学園大学）	R2～	分娩期，産褥期の経過と看護について講義する
6「母性看護援助論演習」（奈良学園大学）	H31～	妊娠期，分娩期，産褥期，新生児期の演習を指導する
7「母性看護学実習」（奈良学園大学）	R1～	臨地実習で実際の対象に応じた看護について指導する
8「ウィメンズヘルス学」（奈良学園大学）	R2～	女性のライフサークル各期の健康課題と健康支援について講義する
9「助産診断技術学Ⅲ」（奈良学園大学）	R2～	産褥期の助産診断、助産ケアについて講義やグループワークによる指導を行う
10「助産診断技術学演習Ⅰ」（奈良学園大学）	H31～	分娩期のケアを演習指導する
11「助産診断技術学演習Ⅱ」（奈良学園大学）	H31～	妊娠期，産褥期，新生児期のケアを演習指導する
12「助産診断技術学実習」（奈良学園大学）	R1～	臨地実習で実際の対象に応じた助産ケアを指導する
13「ラーニングスキルズ」（奈良学園大学）	R2	１年生に文献資料の検索や論文作成などゼミ形式で指導する
14「卒業研究Ⅱ」（奈良学園大学）	H31～	卒業研究を指導する
２　作成した教科書，教材		
３　教育上の能力に関する大学等の評価	H29～	学生による授業評価アンケートにおいて評価を得る
４　実務の経験を有する者についての特記事項 1　藍野大学　短期大学部　助手	H27,8～ H31,3	
５　その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
１　資格，免許		
1　看護師免許	H10,4	
2　助産師免許	H11,4	
3　受胎調節実地指導員	H11,4	
4　藍野大学　看護学研究科　看護学修士	H31,3	
２　特許等		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
４　その他 1　滋賀県大津市新生児訪問	H27～31	新生児訪問を実施　計測，指導，相談など

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 看護師国家試験直前社会福祉学領域ファイナルチェック	共著	令和 3 年 3 月	株式会社金芳堂	社会福祉学領域の看護師国家試験対策 A5 版　全 170 頁 編者：守本とも子、富永尭史 「児童家庭福祉　次世代育成支援・少子対策」P.125～P.128 を単著 健やか親子 21，少子化対策について
（学術論文） 1 定頸までの双子の育児験から生まれた母親の技	単著	H31,3	藍野大学看護学研究科看護学専攻修士論文	双子を育児中の母親８名へのインタビュを行い、定頸までの育児体験から生まれた、双子育児ならではの育児方法や、観察方法、児への関わり方などの育児の工夫を検討し、母親の創意工夫から生まれた双子育児の方法を育児支援に役立てる
2 重症心身障害児（者）の清潔援助としてスキンケアの提供によるストレスに関する研究	共著	R2,2	日本医療福祉情報行動科学会誌「医療福祉情報行動科学研究」 第 7 巻 2020 年 3 月 P.73～P.81	入院中の重症心身障害児（者）をケア群とコントロール群に分けケア群にはカラダキレイとシュクレを用いて清潔ケアを行いストレスへの効果を検証した。 （共著者：山口求，松居典子他 10 名）
3 重症心身障害児（者）の清潔援助としてスキンケアの提供によるストレスに関する研究	共著	R2,3	アビサル・ジャパン KK 受託研究報告書 令和 2 年 3 月 P.1～P.9	入院中の重症心身障害児（者）をケア群とコントロール群に分けケア群にはカラダキレイとシュクレを用いて清潔ケアを行いストレスへの効果を検証した。 （共著者：山口求，松居典子他 10 名）
4 ＮＩＣＵ退院後の母親求める入院中の育児支援	共著	R2,3 投稿中	日本小児保健協会	ＮＩＣＵに入院経験のある、第１子育児中の母親８名へのインタビューを行い、入院中に求めていた育児指導や育児支援を検討し、NICU での母親への指導・援助を考案した。 （共著者：寺本久美子，松居典子,今村美幸）
（その他） 1 2 3				

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　５年　５月　１日

氏名　　松浦　尚子

研究分野	研究内容のキーワード
基礎看護学	基礎看護技術演習，評価

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
（1）国家試験対策におけるｅポートフォリオの導入	平成27年4月～現在	国家試験対策のため，ｅポートフォリオを活用し，学生の目標を明確にし，モチベーションを低下させず国試に向かわせ合格に導いた。
（2）基礎技術演習へのルーブリックの導入	平成29年4月～令和2年3月	白鳳短期大学看護学専攻「基礎看護学方法論Ⅳ（診療の補助技術）」（2年次配当，半期，必修科目，2単位）において，基礎看護技術演習でルーブリック評価を導入し，学生のパフォーマンスを含む主体的学修，演習後の課題レポートの基準の明確化を行った。
（3）人体の構造と機能の授業において書画カメラの活用	平成30年4月～令和元年8月	白鳳短期大学看護学専攻「人体の構造と機能Ⅰ，Ⅱ」（1年次配当，半期，必修科目，各2単位）において，栄養の消化と吸収を担当し，書画カメラを活用しながら，消化器の構造と機能の理解を深める取り組みを行った。
（4）社会福祉学の授業でのグループワークの導入	平成30年4月～令和元年8月	白鳳短期大学看護学専攻「社会福祉学」（1年次配当，半期，必修科目，2単位）において，前半は講義を行い，後半は問題提起，グループワーク，発表，解説を繰り返し展開した。このことで学生からは，社会福祉がどのように生活と結びついているのかを理解することができたと評価が得られた。
（5）基礎技術演習での感染対策を行いながらの実施による学びの確保	令和2年5月～令和3年3月	奈良学園大学「看護技術演習Ⅰ」（1年次配当，半期，必修科目，2単位）において，演習は学年を4分割し，感染対策を講じながらすべての演習単元を実施し，「より良い」を深めることができた。
（6）国家試験対策の領域別の講義	令和3年1月 令和4年1月	奈良学園大学の国家試験の領域別の対策講習において，基礎看護学領域の過去10年間の国家試験問題から出題基準別に出題傾向を分析し講義を行った。
２　作成した教科書，教材 特記事項なし		
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
（1）学生による授業評価アンケート	令和元年前期	白鳳短期大学看護学専攻での令和元年度の学生による授業評価は，専攻の平均4.0を上回り平均4.19～4.7となっている。
４　実務の経験を有する者についての特		
（1）奈良県立高田高等学校の学生に模擬授業	平成30年9月28日	看護師の仕事について
（2）奈良県立五條高等学校の学生に講義	平成31年3月4日	高齢者看護について
（3）大阪市立扇町総合高等学校の学生に模擬授業	令和元年6月24日	バイタルサインについて

(4) 大阪府立懐風館高等学校の学生に模擬授業	令和元年7月17日	看護師の仕事について
(5) 奈良県立高田高等学校でフィジカルサポート	令和元年7月19日	CPR と AED について
(6) 梅花高等学校の学生に模擬授業	令和元年12月12日	看護師の仕事と看護師になるための高校生活の過ごし方について
(7) 高田商業高校の学生に模擬授業	令和3年11月26日	自分の身体を知ろう！
(8) 東大阪市立日新高等学校で3年次進路探求講座の講師	令和4年5月12日	看護師に必要な知識
5　その他		
(1) 白鳳短期大学総合人間学科看護学専攻における教育実績	平成27年4月～平成28年3月	白鳳短期大学において成人看護学Ⅳ（慢性期・終末期）を3名の教員と，成人看護学Ⅴ（看護過程）を4名の教員で講義を担当。成人看護学実習Ⅰ（急性期･周手術期），成人看護学実習Ⅱ（慢性期）の実習を担当し実数指導を行った。
(2) 白鳳短期大学総合人間学科看護学専攻における教育実績	平成27年4月～平成28年3月 平成30年4月～平成31年3月	白鳳短期大学において学生の人間力を高めるため，2年次生に人間学研究Ⅲ・Ⅳ（前・後期）の授業を3名の教員と担当した。
(3) 白鳳短期大学総合人間学科看護学専攻における教育実績	平成27年4月～令和2年3月	白鳳短期大学において卒業研究Ⅱの担当を行った。
(4) 白鳳短期大学総合人間学科看護学専攻における教育実績	平成28年4月～平成31年3月	白鳳短期大学において学生の人間力を高めるため，1年次生に人間学研究Ⅰ・Ⅱ（前・後期）の授業を3名の教員と担当した。
(5) 白鳳短期大学総合人間学科看護学専攻における教育実績	平成28年4月～令和2年3月	白鳳短期大学において看護学概論を4名の教員で担当，基礎看護学方法論Ⅳ（診療の補助技術）の講義を担当。基礎看護学実習Ⅰ，基礎看護学実習Ⅱを担当し実習指導をおこなった。
(6) 白鳳短期大学総合人間学科看護学専攻における教育実績	平成29年4月～平成29年9月	白鳳短期大学において保健学総論の授業を担当した。
(7) 白鳳短期大学総合人間学科看護学専攻における教育実績	平成30年4月～令和元年9月	白鳳短期大学において社会福祉学の授業を担当した。
(8) 白鳳短期大学総合人間学科看護学専攻における教育実績	平成30年4月～令和元年9月	白鳳短期大学において生体機能学Ⅰ，生体機能学Ⅱの消化器の授業を担当した。
(9) 白鳳短期大学総合人間学科看護学専攻における教育実績	平成30年10月～令和2年3月	白鳳短期大学において統合実習で1グループを担当し実習指導を行った。
(10) 白鳳短期大学総合人間学科看護学専攻における教育実績	平成31年4月～令和2年3月	白鳳短期大学において国試対策のサブリーダーを担当し，学生を合格へと導いた。
(11) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	令和2年4月～現在	奈良学園大学で，看護基礎技術演習Ⅰを4名の教員，看護基礎技術演習Ⅱを4名の教員で講義を担当している。基礎看護学実習Ⅰ，基礎看護学実習Ⅱを担当し実習指導を行っている。

（12））奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	令和２年４月～現在	奈良学園大学で卒業研究Ⅱの担当している。
（13）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	令和２年４月～現在	奈良学園大学で公衆衛生看護学Ⅱ（学校保健）を２名で担当している。
（14）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	令和３年４月～現在	奈良学園大学でヘルスアセスメントの授業を4名で担当している。
奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	令和３年４月～現在	奈良学園大学で統合実習の担当し実習指導を行っている。
（10）白鳳短期大学総合人間学科看護学専		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１　資格，免許		
（1）看護師免許	昭和63年５月18日	登録番号　第630355号
（2）養護教諭Ⅰ種免許状	平成７年３月31日	登録番号　平６養１第2013号
（3）保健師免許	平成７年５月12日	登録番号　第77561号
（4）看護師養成所専任教員資格	平成27年３月	
２　特許等 特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特		
（1）教務部	平成27年４月～令和２年３月	白鳳短期大学教務部で教務副リーダーとして時間割の調整・変更作業，定期試験の準備，非常勤講師との連絡調整等を行い，授業が円滑に進むよう調整を行った。
（2）学年のリーダー・サブリーダー	平成28年４月～令和２年３月	白鳳短期大学で学年のリーダー，サブリーダーを行い，学年での国試対策の企画運営，人間力を高めるための企画，運営等を行った。
（3）領域でのリーダー	平成30年４月～令和２年３月	白鳳短期大学で領域のリーダーとして，基礎看護学領域の授業，実習の調整，実習病院への書類の作成，実習グループの構成等を行った。更に実習後の実習発表会の企画・運営を行った。
（4）学生生活	令和２年４月～現在	奈良学園大学で大学生活がスムーズに進められるよう，観察を行い，メールでの相談，対面での相談を行っている。
（5）入試広報	令和３年４月～令和４年３月	奈良学園大学で入試広報委員として，オープンキャンパスの企画・運営，学校見学の対応，学校パンフレットの構成等を行っている。
４　その他 特記事項なし		
研究業績等に関する事項		

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（学術論文） 1 看護技術演習における学生評価の検討 2 基礎看護技術演習における学生の主体的学修の評価に関する検討 （その他） 学会発表 学生の主体性を引き出す有効な教育支援の検討	 共著 共著 共著	 平成 31 年 1 月 令和 3 年 3 月 令和 4 年 12 月	 星槎大学大学院教育学研究科　教育学専攻　修士論文 医療福祉情報行動科学研究　2021.Vol8 P99-114 第 42 回日本看護科学学会	 基礎看護学技術演習の評価として，パフォーマンス評価と演習レポートのルーブリック評価を導入しその有用性を検証した。（共著者：松浦尚子、佐藤智彦） 基礎看護技術演習でルーブリック評価を導入し，学生のパフォーマンスを含む主体的学修，演習後の課題レポートの基準の明確化を行った。（共著者：松浦尚子，佐藤智彦） 統合実習での実践を振り返り，教員のどのような支援が学生の主体性を引き出しているかを明らかにしていった。（共著者：松浦尚子，西薗貞子，小林由里）

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年3月31日

氏名　溝口みちる

研究分野	研究内容のキーワード
看護学，情報学	オストメイト、スマートストーマ

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
（１）基礎看護学の講義・演習の工夫と技術試験の試み（社会医療法人　機内会　岡波看護専門学校　1年生）	平成24年4月～平成29年1月	「生活を支援する技術Ⅱ」（環境、休息、活動）、「生活を支援する技術Ⅳ」（食事・排泄）を担当した。パワーポイントや板書だけではなく、DVDも活用し授業した。授業したことがすぐに演習できるよう、白衣を着用し、すべての授業は実習室で行った。また、事前学習をもとに、活発な意見を発言できるよう、グループワークを行った。入学後すぐの学生は、自分で書籍を調べるということが難しいため、授業時間内で図書室も利用した。そうすることで、よりグループ内の協調性が増し、演習でも自ら考えて行動できるようになった。また、授業終了後には、学生にアクションシートを記載してもらい、授業の目標と授業の成果を照らし合わせ自己の授業評価を行った。「導尿処置」の基礎看護学技術試験について、これまでチェックリストによる基礎看護学技術試験を行っていたが、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの能力も含めた学習の到達度を評価していくことが重要である。教員と学習者である学生にとって、学習の到達状況を把握するための指標となるばかりではなく、次の学習の方向性を示し、自己学習力を培う指針となるため、ルーブリック評価表を作成した。評価規準を「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技術・表現」「知識・理解」に分け、三段階の評価基準を設定した。ルーブリック評価を活用し技術試験を行った結果、世具体的な評価ができた半面、全教員での統一がいま一つであり、改善していく必要があった。
（２）能動的な授業を考えたジグソー学習の導入（社会医療法人　機内会　岡波看護専門学校　2年生）	平成24年4月～平成29年1月	座学やグループワークのみにとどまらず、学生がいかに効果的・能動的に授業を行うことができるのかを考え、「診療行為を支援する技術Ⅰ」の注射の授業で実施した。「注射」は学生にとって一番興味を示す反面、医療事故にも繋がるものと考えたためである。学生は、「皮下注射」「皮内注射」「筋肉注射」「静脈内注射」のどれか一つを担当し、他のメンバーに自分が教授したことを伝える。まず、事前課題を提示し、授業当日に役割別の専門家チーム皮下、皮内、筋肉、静脈内それぞれの注射）に参加し、他者に教えることができるまで学び合う。その後は、学生は他のグループで教員役となり実施する。教員はそれぞれの専門家チームのアドバイザー的存在として指導する。ジグソー学習前には、教員による授業と実践を行い、根拠、留意点、ポイントを伝えている。授業評価には、30項目の授業アンケートを作成し、「責任感を感じた」「自分から進んで理解しないとこの授業は難しかった」「友達に伝えようという気持ちを持った」など、の声が多数寄せられた。
（３）統合看護学実習を意識した統合看護技術の実施（社会医療法人　機内会　岡波看護専門学校3年生）	平成24年4月～平成29年1月	ケーススタディ、シナリオを用いた演習を行った。6名の受け持ち患者を想定し、グループで患者の優先順位を考えた行動計画の立案をさせた。その後、モデル人形を活用し、実際に上京設定したうえで、観察項目や看護技術などの演習を行った。隣接する病院看護師および1年生の学生の協力のもと、統合看護技術試験を行った。時間内に優先順位を考え、ナースコールの対応やリーダー、メンバーの役割等を確認した。また、この授業の中には、統合看護知識確認として、統合看護技術、医療安全の確認試験を行った。学生は実際にはできなかった場面が多く、看護師国家試験の受験終了後から卒業するまでの間、技術練習を自主的に行うようになった。
（４）実習調整者　（社会医療法人　機内会　岡波看護専門学校）	平成28年4月～平成29年1月	実習調整者の役割である年間計画をもとに、臨地実習（基礎看護学実習、領域別実習、統合実習）における、実習施設および各担当教員との調整、実習調整会議にて司会進行等を行った。
（５）基礎演習Ⅰラーニングスキルズ（奈良学園大学　保健医療学部看護学科　1年生）	令和2年4月～令和2年8月	1年次生が大学の学習に慣れ、4年間の大学生活を有意義におくるための基礎を習得することを目的とし、大学での学習を進めるうえで必要となる基礎的な知識や技能、学ぶ姿勢を身につけることを目標としている。目標達成するためには、大学での学び方を身につける、文献や資料を調べることができる、分析的かつ批判的に文章を読み、意見を聞くことができる、論理的かつ多方面に思考することができるとしている。課題や積極的な授業参加ができるよう、ゼミ形式で行った。

事項	年月日	概　　要
（６）成人看護学援助論Ⅰ　急性期・周手術期（奈良学園大学　保健医療学部看護学科　2年生）	令和3年4月～現在	急激な健康破綻が対象者および家族に及ぼす様々な影響を理解し、適切な看護援助ができるように学習する。急性期、リハビリ期、回復期にある患者と家族への具体的看護方法を学ぶとともに問題解決能力を養うための学習を行う。目標は、クリティカル・周術期にある対象の生体反応や治療・回復過程の特徴を踏まえた看護を理解し、治療による身体機能、自己イメージの変化、苦痛の緩和などに対して、支援する看護を理解する。また、倫理的側面を考慮した看護を理解する。私は、消化・吸収障害をもつ患者の看護を担当する。全身麻酔による影響や手術による侵襲を考え、消化器疾患患者さんの術後合併症を予防するための看護や回復に向けての看護を考えられるように教授する。具体的には、事例を取り上げグループワークを通して学ぶ。特に、人工肛門造設術を受ける患者さんは、排泄経路の変更による不安が強い。十分な説明や個別性を考え、また、術後回復よりストーマ管理を行うためにも、術前から必要な看護を考えられるようにする。
（７）成人看護学援助論Ⅱ　慢性期・回復期・終末期　（奈良学園大学　保健医療学部看護学科　2年生）	令和2年9月～現在	生涯疾患とともに生活することを余儀なくされている対象者とその家族の看護、および終末期にある患者と家族の看護について学習する。慢性期疾患患者の看護においては、終生自己管理を必要としなければならない患者の心理状況を理解するとともに、具体的な看護方法について学ぶ。目標は、慢性的な経過をたどる主な疾患の特徴と、症状や治療が生活に与える影響と慢性的な健康障害をもつ対象とその家族が病気と付き合いながらセルフマネジメントできるための看護を理解する。私は膠原病を持つ患者の看護、消化・吸収障害をもつ患者の看護を担当する。ペーパーペイシェントで看護過程を展開するために、まず、罹患した患者さんの経験や思いを理解する必要がある。そのために、患者会等の患者さんの動画を事前課題として掲示した。それを踏まえ、患者さんおよびその家族に対する看護を考え、退院後の生活に必要な指導についてグループワーク行い、学びを深める。
（８）成人看護援助論演習　（奈良学園大学　保健医療学部看護学科　3年生）	令和3年4月～現在	成人期の急性期・慢性期・終末期にある対象を看護するために臨床場面で必要となる看護過程や看護技術について、演習を通して学ぶことが目標である。具体的な目標は、１．適切な一次救命救急の手技が習得できる、２．ICUにおける術後看護の視点が理解でき、適切な看護の視点での観察が分かる、３．周手術期における患者の看護過程の展開が分かる、４．簡易血糖測定の意義を理解でき、その技術の習得と患者への指導を考察できる、５．輸液ポンプ・シリンジポンプの操作方法や管理が理解できる、６．COPDを持つ大腿骨頸部骨折術患者の看護過程の展開が分かる、である。私が担当する「COPDを持つ大腿骨頸部骨折術患者の看護過程の展開が分かる」は、COPDの基礎疾患を持ちながら大腿骨頸部骨折に対して手術を行い、退院後の生活を見すえた看護を考えられるような事例とした。複雑な事例ではあるが、実際に臨地実習では経験する事例ではあると考え、患者さんやその家族の状況や気持ちを考え、看護過程を展開できるようする。
（９）成人看護学実習における学外実習の実践（奈良学園大学　保健医療学部看護学科　3年生）	平成30年9月～現在	成人看護学の担当となり、成人看護学実習Ⅰ（急性期）および成人看護学実習Ⅱ（慢性期）の臨地実習指導を担当している。成人看護学実習Ⅰ（急性期）では、学生は周手術期も含めた、手術を受けられる患者さんを受け持ち、術前・術中・術後の看護展開を行う。全身麻酔と術式による侵襲が身体へどう影響をおよぼすのかを考え、術後の観察や状況に合わせた看護ケア、退院に向けて必要なこと等を指導した。また、成人看護学実習Ⅱ（慢性期）の実習では、障害受容の過程、行動変容、自己効力感などをキーワードに、特に患者さんの入院前の生活に目を向け、看護介入を行うことができるようにする。
（１０）統合看護学実習（成人看護学）における学外実習の実践　（奈良学園大学　保健医療学部看護学科　4年生）	平成30年５月～現在	成人領域の統合看護学実習の目的は、専門分野の実習をふまえ、多様な看護の場において業務に即しながら、保健医療チームの一員として多職種と連携し、チーム医療を実践するための看護実践能力を高めることである。保健医療福祉チームにおける協働と連携、メンバーシップやリーダーシップの在り方を考えたり、看護をマネジメントできる能力を身につけるように指導した。また、看護の実際と適正な評価、実施した看護から自身の看護観を明確にできるようにした。
（１１）卒業研究Ⅱ	令和2年9月～現在	学生が研究テーマを決め、深く研究を進めて論文を作成することが目標である。学生2名を担当し、学生が興味のある分野でテーマを決定し、文献検討を行っている。卒業研究Ⅰをもう一度振り返りながら論文と抄録の作成までの指導を行っている。

事項	年月日	概　　要
2　作成した教科書，教材 （1）学生の目標達成に向けたポートフォリオの作成	平成25年4月～ 平成29年1月	学生が自らテーマや目標を決め、学び続ける学習法を取り入れることを考え、ポートフォリオを作成した。入学時にポートフォリオの説明を行い、ビジョンとゴールを記載させた。中間の面接時に、ゴールに向かうためにはどうしていくのかを指導した。また、2～3月には、各学年による発表の機会を設け、学生全員がプレゼンをした。学生自身がどのように成長してきたのかがわかり、また、学生は自信をもって成長できたと主張できるようになった。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		特記事項なし
4　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）三重県立名張桔梗ヶ丘高等学校　出前講座	平成24年9月～ 平成28年12月	「看護学探求」の授業があり、看護に興味・関心を持っている学生に対し、授業を行った。「形態機能学に関連した基礎看護技術」を担当し、授業の後、実際に血圧測定やビニール手袋の装着・脱着の方法、体位変換等を行った。学生からは、「看護師を目指そうと決めた」「もっと勉強しないといけないと思った」などの声があった。
5　その他		特記事項なし

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
（1）准看護師免許	平成10年3月	第17056号
（2）看護師免許	平成12年3月	第1075353号
（3）厚生労働省認定看護専任教員養成講習会終了	平成24年1月	厚生労働省認定三重県専任教員養成講習会
（4）修士（看護学）	令和2年3月	奈良学園大学大学院 修士課程　看護学専攻
2　特許等		特記事項なし
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
（1）日本看護技術学会第18回学術集会　企画委員	平成30年4月～ 令和元年3月	「過去・現在から未来へ発信する看護イノベーション」をテーマに、令和元年9月7日、8日の学術集会の開催に向けて、役割を遂行した。
（2）日本看護研究学会第45回学術集会　実行委員	令和元年8月	「研究成果をためる　つかう　ひろげる　―社会に評価される看護力―」をテーマに、令和元年8月20日、21日の学術集会の役割を遂行した。
（3）日本看護研究学会第34回近畿・北陸地方会学術集会　事務局（庶務）および企画実行委員	令和2年2月～ 令和3年3月	「看護の原点回帰　情緒的価値観へのパラダイムシフト」をテーマに奈良学園大学登美ヶ丘キャンパスで実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響にて、プログラムと演題を収録した抄録集をもって、発表・大会参加のかたちとなった。

事項	年月日	概　　要
（４）第27回日本看護診断学会学術集会大会　企画委員	令和2年4月～令和3年7月	「看護過程のプロセスとしての看護診断」をテーマに、これまでの看護診断を振り返り、現状から未来へどのように看護診断を発展させればよいかについて考える機会とする。
（５）第27回日本看護診断学会学術集会大会　特別企画交流集会Ⅲ	令和2年4月～令和3年7月	「看護診断に基づく口腔ケアに関する現状と今後の展望」のテーマで、看護基礎教育における学生、臨床における看護師の口腔ケアアセスメント力、口腔ケア実践能力の現状と課題について発表し、口腔ケアの今後の展望について、看護基礎教育の立場と臨床の立場から意見交換を行った。
（６）日本オストミー協会　奈良県支部 若いオストメイトオンライン交流会（オストメイト協会・奈良県支部）講師	令和4年3月	オストメイトの参加者に向けて、自身の研究したオストメイトの余暇活動に関する内容を伝えた。
４　その他		
（１）入試対策委員（社会医療法人　畿内会　岡波看護専門学校）	平成27年4月～平成29年1月	入学試験に関する筆記試験監督および面接試験監督を行った。判定会議に向けて、入試状況をまとめた。
（２）広報活動（社会医療法人　畿内会　岡波看護専門学校）	平成25年4月～平成29年1月	三重県および奈良県内の高等学校を訪問し、学生募集の案内を行った。また、学校ホームページのニュース更新や広報業者との打ち合わせに参加するなど、広報活動を行った。
（３）学校における防災・災害に関する見直しを検討	平成25年4月～平成29年1月	「災害発生時に適切な判断・行動がとれる教員の養成－防災マニュアルの再構築－」として、アクションカードを作成した。実際に、防災訓練に活用し、「責任者（指示命令）」「第一発見者（初期消火）」「応援者（避難・誘導）」を行った。結果、焦らずスムーズに学生を誘導でき、自らの役割も担うことができた。また、隣接する病院内での業務改善発表会で発表した。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

2023年　3月　31日

氏名　　森本　早紀

研究分野	研究内容のキーワード
医療人類学　臨床看護学	医療　実践知　感覚　臨床看護

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1.事例を用いた学習。ロールプレイの活用を採り入れた授業設定【成人看護学講座】	2019年1月から2020年3月まで	梅花女子大学　専門科目　急性期看護援助論　3学年(通年・必修)3単位80名 成人看護学実習1(急性期)を担当し、手術療法によって生じる生体機能の変化と生活の変化を理解し、問題解決に向けたアプローチ方法を学ぶことを目的とした。実習と関連付けられた本科目では、事例展開を通して根拠をもった看護過程の展開について学習を進めた。学生は作成した看護問題と解決策のシナリオをもとに、根拠に基づく理解をさらに深められるよう、学生の主体的な行動を引き出す目的でアドバイザーとしての配慮を行った。
2.ロールプレイを採り入れた看護技術演習【基礎看護学講座】	2022年4月から2023年3月まで	奈良学園大学　専門科目　基礎看護学技術演習Ⅱ　2学年(前期・必修)2単位88名と1学年看護技術の基礎Ⅰ(後期・必修)2単位88名を担当した。基礎的な看護技術を身体の構造や科学的根拠に基づいて理解し、個別具体的な患者に即したアプローチ方法を学び実践できることを目的とした。学生が座学での学びと事前学習をもとに主体的な行動と思考を獲得することを目的にアドバイザーとして関わった。
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1.新人看護師に教育指導(大阪大学医学部附属病院)	2016年4月から2018年3月まで	新人看護師の教育支援担当として、学習支援計画を立て、個別の状況に応じた支援を行った。
2.記録委員(大阪大学医学部附属病院)	2018年4月から2019年3月まで	電子カルテシステムを活用した看護の質の向上を目的に所属部署の現任教育に取り組み、実践現場における教育支援を行った。
3.　学会・学術団体の活動への貢献		
第10回　日本移植・再生医療看護学会学術集会運営委員	2014年11月	学会進行や闊達な議論のためのサポートを行った。
日本WHO協会　関西グローバルヘルスの集い運営委員	2020年4月から	関西グローバルヘルスの集いが主催するセミナーの運営を担い、機関紙『目で見るWHO』の編集を担当する。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許	2013年3月27日 2013年4月8日	第1666099号　看護師 第215339号　保健師
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項	2017年8月28日	大阪大学医学部附属病院　ACLSコース受講
4　その他		

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) (学術論文) (学会発表) 1「ワールドカフェ形式による双方向のオンラインイベント開催の試み」	共著	2021年1月	日本国際保健医療学会　第39回西日本地方学会	オンラインセミナー開催の事例報告により、効果的な意見交換について検討を図り、闊達な議論展開となるセミナープログラムについて多くの学びを深めた。

教　育　研　究　業　績　書

令和5年　5月　1日

氏名　飯塚照史　印

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学	リハビリテーション科学・福祉工学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）個別面談による学生の状況把握と対応	平成19年4月	青丹学園作業療法学科専任教員として1年次担任を務め，学生生活や今後について不安を抱えている学生に対し個別面談を行った．自省を促し，勉学における2年時への円滑な移行を促進するために面接を実施し，学生の状況や指導，苦手な面などを把握し，指導に役立てた．その結果，学生個々の勉学への取り組みや，進路変更も含めて円滑な対応が行えた．
2）模擬医療面接による評価技術習得	平成19年4月	青丹学園作業療法学科専任教員として担当の「作業療法評価学」（専門科目，1年次配当，半期，必修2単位）において，事前に作成した模擬患者に対する面接演習を実施した．この際，挨拶などのいわゆる接遇面にも十分に説明したうえで，患者のニードをうかがう技術について実践的に行った．その結果，学生の面接に対する理解度が向上した．
3）症例供覧を通じた作業療法の理解	平成19年4月	青丹学園作業療法学科専任教員として担当の「身体障害作業療法学」（専門科目，2年次配当，半期，必修1単位）において，講師担当症例の経過を供覧し，その実践的対応を教示した．学生の臨床実践に対する理解が向上した．
4）義肢装具学における症例を通した実践的演習	平成19年4月	青丹学園作業療法学科専任教員として担当の「義肢装具学」（専門科目，2年次配当，半期，必修2単位）において，能動義手ユーザーを招き，問題点評価を通して，学生による自助具作成を実施した．評価技術の習得，自助具作成における考慮などを目的とし，学生の臨床実践に対する理解度が向上した．
5）義肢装具学におけるメーカーによるデモ供覧	平成19年4月	青丹学園作業療法学科専任教員として担当の「義肢装具学」（専門科目，2年次配当，半期，必修2単位）において，オットーボック社からの講師を招き，メーカーによるデモを実践してもらい学生に体験させた．今後の臨床実践における選択肢となる事，能動義手と筋電義手の長所，短所の理解を目的とした．学生の理解度が向上した．

事項	年月日	概　　要
6）入学から卒業までの定期個人面談による学生の状況把握および助言	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の講師として平成22年度入学生および平成27年度入学生の担任を務めた．当該学生の入学から卒業まで，留年者も含めて総勢約80人に対し，毎年前後期併せて4回の定期面談に加え，成績低迷学生やその他問題のある学生に対して不定期面談を実施した．心理的問題を主とする学生については，学内に設置された学生相談室と連携し，対応を行った．問題ある場合には迅速な対応を行うい，学生の意識変容を促せた．その結果，退学者の減少に貢献できた．
7）リハビリテーション関連職種に対する総合的スプリント作製実習による装具療法の理解	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「義肢装具学実習」（3年次配当，1単位）および，理学療法学専攻の専門科目「義肢装具学実習」（3年次配当，1単位）において，スプリント作製を通じた装具治療の基本を教示した．具体的には，作業療法学専攻については8種類，理学療法学専攻については3種類の作製を通じて，原因組織別の拘縮矯正に対する評価技術やスプリント調整を行った．その結果，学生の理解度が向上した．
8）レポート課題の評価基準統一による学生へのフィードバック	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学実習」（3年次配当，1単位）において，提出される課題レポートの評価基準をS，A1，A2，B1，B2などと8段階として統一し，それぞれの採点基準を設けた．これを学生にフィードバックすることで，実習に向けての自身の課題の明確化につながり，学生の動機が向上した．
9）コミュニケーション講座による実習への動機付け	平成25年4月 ～ 平成27年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の講師として平成25年度3年次学生（40名），平成26年度3年次学生（30名），平成27年度3年次学生（35名）に対し，実習で必要とされるコミュニケーションについて，その学術的意義から理論，実践，倫理などを教示した．さらに，昨今の学外実習による学生の諸問題，特に精神的不調についても学問的知識を教示し，予防的意義を含めた．一連の取り組みについては，各回でアンケートを取った．その結果．学外実習に対して漠然とした不安が，「指導者との関係」などといった具体的な不安へとつながり，これを学生が認識することで予防的効果を見込めることが分かった．また，倫理的事項に対する全体討論を通じて，いわゆる接遇的コミュニケーションのみならず，医療倫理としてのコミュニケーションを理解することにつながった．一連の取り組みについては，大学教育に関する学会での発表を3回，1篇の論文を通じて周知に努めた．さらに，コミュニケーション教育について先駆的役割を果たされている桜美林大学リベラルアーツ群の教授や，リハビリテーション関連職種における養成教育での位置づけを強調される理学療法士などを招き，学内全体の取り組みとして周知に努めた．これの功績が認められ，平成28年度からの新カリキュラムにて授業化された．移行期間は，「身体障害作業療法学実習」およびホームルームなどで対応している．

事項	年月日	概　　要
10）学生個々の状況に応じた定期面談および指導	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として，チューターを努め，理学療法学・作業療法学専攻学生の定期面談および個々の状況に応じた指導を行った．
11）穴埋め式レジュメの使用による理解を促す講	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科における人体構造学Ⅲの講義において，解剖学的構造や名称の暗記に際し，穴埋め式のレジュメを使用することで理解と定着を図った．
12）症例提示を通じた実践的講義	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での担当講義において，適時症例提示を通じて，理論や治療法に関する実践的講義を展開し，理解を促した．
13）オンライン・オンデマンド方式を用いた講義	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での担当講義について，COVID-19感染予防の観点から，Googleクラスルーム，Googleフォームを駆使したオンデマンド，オンライン方式の講義を展開した．講義内容は後日確認することも出来るようにし，復習用の教材としても提供した．各回での確認テスト提出を義務付けることで，学習内容の定着も図った．

事項	年月日	概　　要
２　作成した教科書，教材 1）義肢装具学（スプリント作製）における記録用紙作成	平成19年4月	青丹学園作業療法学科専任教員として担当の「義肢装具学」（専門科目，2年次配当，半期，必修2単位），および星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「義肢装具学実習」（3年次配当，1単位）および，理学療法学専攻の専門科目「義肢装具学実習」（3年次配当，1単位）において，教科書だけでなく，実践に役立つスプリント作製を念頭に置いた．後期のみで8種類程度の作製を実施した．また，作製記録を毎回提出させ，再現性の高い記載を指示した．また，作製時における評価の重要性についても別時間を設け十分に説明し，これも記載させることで学生の理解度が向上した．
2）国家試験対策資料	平成19年4月	青丹学園作業療法学科専任教員，および星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻講師として，国家試験対策用の資料作成を行っている．当該対策本は模試関連業者からも多く発刊されているが，細項目の分類が学生の理解と異なる部分があるように感じている．例えば，装具関連の問題では，装具の理解ではなく，神経損傷の理解が必要であったり，などである．そのため，それまでの学生指導の要点を踏まえて，関連付けて覚えられるように講義を展開したうえで，これに関連する問題をまとめた資料を作成，配布するようにしている．
3）小テストによる講義理解度の把握	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学Ⅰ」（2年次配当，1単位）において，小テストを作成し各回の講義終了後に実施し，講義理解度の把握に努めた．同時に講義に対する感想も求め，次回講義でこれに応えるという形式で展開した．これにより，学生の理解度は飛躍的に向上し，身体機能障害領域を志望する学生が増加した．
4）症例報告レポート作成を目的とした情報提供用資料	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学実習」（3年次配当，1単位）において課題として提示する症例報告レポート用の症例情報提供資料を作成した．当該資料には，個人情報を保護したうえでの現病歴や既往歴，あるいは面接時の逐語録などを示した．これを基にしたレポート作成により学生は実践への理解度が向上した．
5）講義用補助教材	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門基礎科目「臨床運動学」（3年次配当，1単位）において，テキストに沿ったアウトラインについて資料を作成，配布している．さらに資料内には，関連事項として講師が経験した症例などを紹介する項目を設けて学生に興味を引き出すように工夫している．

事項	年月日	概　　要
6）体表解剖学における触診資料	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「臨床体表解剖学」（1年次配当，1単位）において，筋骨格の触診について再現性の高い資料を作成した．さらに，毎回触診した筋骨格に関する運動学的知識などを先取りで教示し，小テストを行った．これにより学生の解剖学への理解度が向上し，興味関心の高まりがある．さらに，ロードマップとして今後修得すべき知識を見せることで，勉学全般に対する動機づけにつながっている．
7）作業で語る事例報告 A4判　全164項 編者：斎藤佑樹 共著者：友利幸之助，上江洲聖，澤田辰徳	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学実習」（3年次配当，1単位）において，教科書として使用した．当該教科書では作業療法学の文脈上にある作業について網羅的に示され，さらに実践として豊富な事例報告が収められている．学生が率直に疑問に思う点について簡潔明瞭に述べられているため教科書として採用した．さらに，講義内では教科書を用いた症例検討の重要性を説き，学外実習において参考にするよう指導した．
8）確認テスト	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での担当講義について，各回毎に学習内容に応じた確認テストを作成した．質問項目も付記することで適宜学生からの反応も確認することが出来るようにしている．
9）穴埋め式レジュメの作成	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での担当講義について，学習内容における重点項目を穴埋めとするレジュメを作成し，当該部分での強調と筆記による定着を促した．また，試験範囲の明確化にもつながるようにした．

事項	年月日	概　　要
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1）星城大学再任評価	平成26年12月14日	学長，学部長による面接評価を受けた．入試広報委員会副部長としての活動による学内貢献，学生教育への尽力，研究領域としての科研費取得などが認められ，平成27年度かの再任が決定した．
2）星城大学学生による授業評価アンケート結果	平成28年12月	星城大学において毎年実施している学生による授業評価アンケートによると，3年次学生に対する「義肢装具学」，および2年次学生に対する「身体障害作業療法学Ⅰ」，いずれについても，95%以上の学生から満足との高い評価をもらっている．
3）奈良学園大学学生による授業評価アンケート結果	令和3年7月	奈良学園大学において実施される授業評価アンケートについて，3年次学生対象の「義肢装具学」「作業療法特論」，2年次学生対象の「人体構造実習」「身体障害作業療法学Ⅱ」「作業療法評価学演習Ⅰ（身体）」，1年次学生対象の「人体構造学Ⅲ」において，いずれも5点満点中4.3程度の満足度を得た．
4）学部長による定期面談	令和2年6月22日 令和3年3月2日	奈良学園大学保健医療学部において，学部長との定期面談を実施した．専攻運営，大学運営，とりわけ広報活動に関して一定の評価を受けた．
４　実務の経験を有する者についての特記事項 1）一般社団法人日本ハンドセラピィ学会主催認定ハンドセラピスト養成カリキュラム「入門セミナー」，研修会講師	平成20年4月 ～ 現在に至る	認定ハンドセラピスト養成カリキュラムの一環として毎年開催される入門セミナーにて，肘関節・前腕の機能解剖につき継続して講師を務めている．毎年，おおむね100名程度の参加者がいる．
2）奈良県作業療法士会主催現職者講習会「後輩育成・協業」，講師	平成22年4月 ～ 平成24年3月	現職者講習会として，有資格者を対象に後輩育成，協業について実践を通じた教示を行った．各年ともにおおむね50名程度の参加者がいた．
3）一般社団法人日本ハンドセラピィ学会主催認定ハンドセラピスト養成カリキュラム応用実践研修会「ハンドスプリントベーシックセミナー」，研修会講師	平成22年4月 ～ 現在に至る	認定ハンドセラピスト養成カリキュラムの一環として毎年開催される応用実践セミナーにて，座学としてスプリントの力学，実践として作製実習につき継続して講師を務めている．毎年，おおむね100名程度の参加者がいる．

事項	年月日	概　　要
4）一般社団法人日本ハンドセラピィ学会主催 認定ハンドセラピスト養成講習会「機能解剖・触診セミナー」，研修会講師	平成23年4月 ～ 現在に至る	認定ハンドセラピスト養成カリキュラムの一環として毎年開催される基礎セミナーにて，手，手指の機能解剖と触診実習の講師として継続して講師を務めている．毎年，おおむね100名程度の参加者がいる．
5）愛知県作業療法士会主催 現職者講習会「職業倫理」，研修会講師	平成24年4月 ～ 現在に至る	現職者講習会として，有資格者を対象に職業倫理について討論を通じた教示を継続して行っている．各年ともにおおむね100名程度の参加者がいる．
6）星城大学元気創造研究センター助成研究 公開講座「リハビリテーション専門職養成課程におけるコミュニケーション教育」，報告「作業療法学生に対するコミュニケーション教育」	平成26年9月27日	本講座は星城大学元気創造センター助成研究として実施した学生のコミュニケーション教育についての研究成果を周知するために開催し，報告した．併せて講義も企画し，学生への教示も行った．
7）星城大学FDセミナー 「科研費取得のポイント」，研修会講師	平成29年9月14日	これまで2度連続での科研費取得実績を評価され，学内FDセミナーでの講師を務めた．自身の経験を基に，成書で示される記載方法や研究の展開について教示した．
8)奈良県作業療法士会主催 学術部セミナー「手のリハビリテーション」講師	令和3年10月	手外科疾患について，概要，評価，治療について臨床上有用な情報を教示した．
9）奈良県作業療法士会主催 現職者研修会「急性期の作業療法」講師	令和3年11月	急性期の作業療法に関してリスクマネジメントを中心に教示した．

事項	年月日	概　　要
５　その他 1）学部科目担当実績 星城大学リハビリテーション学部	平成22年4月 ～ 平成30年3月	星城大学リハビリテーション学部にて，「身体障害作業療法学」「身体障害作業療法学実習」「臨床運動学」「運動学演習」「臨床体表解剖学」「義肢装具学」「義肢装具学実習」「作業療法学特論」の科目担当として講義を行った．
2）修士課程科目担当実績 星城大学大学院リハビリテーション健康支援学研究科健康支援学専攻	平成25年4月 ～ 平成30年3月	星城大学大学院リハビリテーション健康支援学研究科健康支援学専攻にて，「病態運動学」「リハビリテーション健康支援学」の科目担当として講義を行った．
3）修士論文指導実績 星城大学大学院リハビリテーション健康支援学研究科健康支援学専攻	平成27年4月 ～ 平成30年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の学生1名（テーマ：橈骨遠位端骨折後の患者満足度とリハビリテーション期間の認識に影響する因子についての研究）に対して，研究指導補助教員として修士論文作成における研究計画策定から，データ分析，論文作成，発表資料作成に至るまでの一連を指導した．
4）学部科目担当実績 奈良学園大学保健医療学部	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部にて，「基礎ゼミⅡ」「人体構造学Ⅲ（神経・運動神）」「義肢装具学（総論）」「義肢装具学」「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」「作業療法評価学演習Ⅰ（身体）」「作業療法評価学特論Ⅰ（身体障害）」の科目担当として講義を行っている．

事項	年月日	概　　要
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
作業療法士	平成10年3月	第20618号
修士（保健学）	平成12年3月	広島大学　第16792号 修士論文題目：指把持力の圧変化から見た書字動作解析；健常人とパーキンソン病患者との比較
博士（保健学）	平成19年4月	広島大学　第4258号 博士論文題目：ZoneII屈筋腱断裂修復後の後療法の特徴に関する一考察 ： 3週間固定法とKleinert変法の経時的関節可動域の比較
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）土谷総合病院リハビリテーション科 作業療法士	平成12年4月 ～ 平成14年3月	主に整形外科病棟に入院する患者および外来患者のリハビリテーション業務に従事した．外傷，先天性疾患に対して，筋力，関節可動域の改善，日常生活動作能力の向上を意図した作業療法を実施し，社会復帰へと導けるよう尽力した．併せて，在宅でリハビリテーションを行う訪問リハビリテーションも行い，施設から在宅へとシームレスな対応が出来るように他職種との連携も心がけた．
2）名古屋掖済会病院リハビリテーション科 作業療法士	平成17年4月 ～ 平成22年3月	整形外科の一専門分野である手外科領域のみを担当する作業療法士として，救急対応から医師と綿密な連携を取りながら，術前，術中，術後対応を行った．重度外傷にあっては，リハビリテーションが遅延することによって起こる障害が多いため，医師の手術の意図を踏まえた早期リハビリテーションを心がけた．
3）臨床実習における指導	平成17年4月 ～ 平成22年3月	名古屋掖済会病院にて常勤で在職中に大阪リハビリテーション専門学校延べ5人，星城大学リハビリテーション学部作業療法学科学生延べ2人に対し臨床評価実習，臨床治療実習を実施した．手の外科領域という特殊性があるものの，作業療法において共通である実践技術について指導した．また，作業療法だけでなく他職種の業務についても把握するために，手術見学や外来診察，病棟回診などにも同行してもらった．作業療法を実施する前に他職種が多くかかわっていること，作業療法士として評価，実践するべき事項があることを理解してもらうよう努めた．

事項	年月日	概　　要
4）有資格者に対する実践研修指導	平成19年4月 ～ 平成22年3月	名古屋掖済会病院にて在職中に，手外科リハビリテーションに対する実地研修の受け入れを行っており，三河地域より2名，豊田地域より2名，名古屋地域より3名の有資格者に対し，実技研修を指導した．具体的には症例の病態に対する評価，治療方針の立て方などを実践に即して指導，討論を通じて洗練化を図った．
5）一般社団法人日本海員掖済会名古屋掖済会病院主催地域貢献事業エキサイ健康教室「手と足と口の健康チェック」，研修会講師	平成29年7月18日	通年シリーズで行われる地域住民への啓発としての健康教室で講師を務めた．当該日においては，握力などの測定も行い，自身の健康に対する意識を高めてもらった．参加者および院内からの評価も高く，今後も継続して行うこととなっている．
6）科学研究費取得（若手B） 「適切なリハビリテーション期間の決定に関わる因子の探索的研究」	平成25年4月 ～ 平成28年3月	橈骨遠位端骨折患者を対象とし，患者満足度と関節可動域や筋力などの機能的因子の関連から，適切なリハビリテーション期間を決定づける因子について探索検討した．他施設共同研究として160名について検討したところ，機能的因子が患者満足度に関連するのは術後8週までであること，終了に係る印紙として患者とセラピストの間で一致するアウトカムは患者立脚型評価であること，術後4週をベースラインとすると患者立脚型評価において33点以上の改善が必要であることが提案された．
7）科学研究費取得（基盤C） 「健常人と腱移行術症例に対する前頭前野負荷と運動学習遅延に関する実証的研究」	平成28年4月 ～ 平成31年3月	予め練習をした群（事前練習群）と練習をしない群（非練習群）を設定し，指示された一定のつまみ力を維持する課題を与え，さらにそれぞれにN-back課題（数個前の数字を想起し答える課題）を負荷し，大脳前頭前野における脳血流量を近赤外線分光法にて計測し，被殻した．結果，事前練習群においては脳血流量の増大を認めず，筋電図における振幅は漸減していた．一方，非練習群においては事前練習群とは逆の傾向が認められた．以上から，運動学習における習熟過程を前頭前野脳血流量と筋電図がアウトカムとなる可能性が提案された．さらに外傷による機能再建術としての腱移行術後のリハビリテーションへの応用を提案した．
8）日本ハンドセラピィ学会理事としての活動	平成27年4月 ～ 現在に至る	会員数約700人の日本ハンドセラピィ学会において理事を務め2期目となる．2期目からは認定資格審査委員会事務局長の役を任ぜられ，認定ハンドセラピストの申請，更新，研修会運営に係る全体調整および報告のとりまとめ，など学会の根幹に関わる部分を担当している．

事項	年月日	概　　要
9）第29回日本ハンドセラピィ学会運営局長，学術局長としての活動	平成28年4月 ～ 平成29年4月	日本ハンドセラピィ学会の年次学術集会が名古屋で開催されるにあたり，名古屋大学手外科教室とともに，中日病院に所属する学会長とともに，実務的な作業を行った．当初は，学術局長として任命されたものの，運営局の業務遅延により中途から運営局長を兼任した．開催当日にあっては，過去最高の約800人の参加者を迎え大成功であり，これに貢献した．
10）第5回中部日本ハンドセラピィ研究会代表世話人としての活動	平成30年1月27日	手外科専門医による一般社団法人日本手外科学会の下部組織となる中部手外科研究会においては，毎年研究会を開催している．この中部手外科研究会の医師の支持を受けて発足した中部日本ハンドセラピィ研究会においては，世話人会を組織し，中部手外科研究会と併催する形で4回の研究会を行ってきた．第5回にあっては，名古屋で行われることとなり，中部日本ハンドセラピィ研究会世話人会で指名され，中部手外科研究会で承認され，代表世話人となった．共催にあたり藤田保健衛生大学医学部整形外科の鈴木教授と折衝を重ね，新規的な研究会を企画し，開催した．
11）第35回日本ハンドセラピィ学会大会長として	令和3年4月 ～ 現在に至る	2023年4月開催予定の学会について大会長を拝命し，日本手外科学会側との交渉も通じて，企画を計画した．継続して活動中である．
12）科学研究費取得（基盤C）	令和4年4月 ～ 現在に至る	脆弱性骨折の初発となる橈骨遠位端骨折は高率で大腿骨頚部骨折といった二次骨折を発生するため，効率性のあるリスク評価が求められる．しかし，上肢骨折が転倒を主因とする二次骨折へとつながる一連のメカニズムは未解明である．これに対し，左右上肢活動量の対称性と動的立位バランスの相関性を明らかにし，予備的検討にて骨折側の運動制御パターンの変化を捉えた．すなわち，上肢骨折による中枢機能の変化が下肢機能へと波及しているとの仮説が成り立つ．方法としては，一次運動野から脊髄前角での複数の運動核への投射パターンを捉える筋シナジー解析を適用し，上下肢の運動制御の変化と姿勢反射および平衡反応との関連性を検討する．本研究は二次骨折のリスク評価への応用が期待される．
13）日本作業療法士協会主催「研究法」講師	令和4年6月11日 令和4年6月12日 令和4年12月10日 令和4年12月11日	有資格者に対して研究計画立案から倫理的配慮を教示し，各自立案した研究計画に対してアドバイスを行った．
14）日本ハンドセラピィ学会主催「研究法」講師	令和4年6月25日	ハンドセラピィを専門分野とする者に対し，各種研究実践を紹介したのち，当該分野に資する研究計画についてアドバイスを行った．
15）日本ハンドセラピィ学会主催「触診セミ	令和4年8月28日	学会主催にて実施している実技セミナーとしての触診技術について，座学及び実技について教示した．
16）奈良県作業療法士会　現職者講習会「急性期の作	令和4年10月2日	現職者に対して急性期の作業療法について教示し，地域連携も踏まえた対応の重要性を説いた．

事項	年月日	概　　要
４　その他 1）入試広報委員会としての活動	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学内における入試広報活動の要として，入学者増加対策やオープンキャンパスの企画，運営など入試広報活動全般にわたる対応を行っている．平成25年からの2年間は副委員長を務め，リハビリテーション学部における当該業務を一手に引き受けてきた．オープンキャンパスの運営については一部ルーティン化し効率化を図るとともに，教員帯同による高校訪問なども定着させた．
2）キャリア委員会としての活動	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学内における就職活動において要となるキャリア委員会にて一貫して対応してきた．リハビリテーション学部においては2年次からのキャリア教育を実施し，早期内定あるいは公的機関受験対応を軸として取り組んでいる．
3）広報委員会としての活動	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部における広報委員として，高校訪問，進学ガイダンス，オープンキャンパス対応として，企画・講師派遣等を行った．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1. 作業で語る事例報告作業療法のレジメの書き方・考え方	共著	平成26年3月	株式会社　医学書院	作業療法における「作業」に着目し，その評価法と解釈について記したものである．本書はこれに基づき多数の事例が報告されている． A4判　全164項 編者：斎藤佑樹 共著者：友利幸之助，上江洲聖，澤田辰徳，飯塚照史，他38名． 本人担当部分：第5章　生活に焦点を当てた事例報告の書き方　「生活の変化に向けて必要な作業を確認し目標設定を行った手外科事例」を単著． 伸筋腱断裂および手関節可動域制限を来した症例に対し，主観的な面接を中心として，機能的側面の評価とともに包括的に目標設定を行った．また，妻の逝去に伴う対象者の役割の変化を踏まえて，現実的かつ具体的な目標から，対象者とともに手…
2. リハビリテーション義肢装具学	共著	平成29年3月	メジカルビュー	リハビリテーション分野において重要な装具学の知識を教示した．本書の特養としては，豊富な事例を用いて具体的に示している点である． A4判　全453項 編者：清水順一，青木主税 共著者：飯塚照史，他25名． 本人担当部分：Ⅱ装具　1章　上肢装具「肘装具」「手関節装具」，手部装具各論2「末梢神経障害」を単著． 肘，手関節について実践上で用いた独自性の高い装具を例示し，慣習的な装具との違い，利点，欠点，適用を述べたうえで，こ
３．ハンドセラピィマニュアル（日本作業療法士協会編）	共著	令和2年2月	日本作業療法協会	日本作業療法士協会におけるマニュアルシリーズにて，評価に関して分担執筆した．当該マニュアルは日本における標準的なハンドセラピィ技術，知識の根拠となるものであり，その有用性は高い． A4判　全78項 著者：岡野昭夫，飯塚照史，稲垣慶之，内屋純，大山峰生，谷口しのぶ，茶木正樹，野中信宏，古田　裕之，武藤光弘 本人担当部分：「評価」について単著． ハンドセラピィ領域で多用される評価について，図表を用いて概説した．
4. 作業療法理論の教科書	共著	令和2年9月	メジカルビュー社	作業療法分野において適用される理論について，生体力学的モデルの分担執筆を担当した．学生への教示用として実践レベルを通して分かりやすく解説している． A4判　全255項 編者：小川真寛，藤本一博，京極真 著者：飯塚照史，他18名． 本人担当部分：「生体力学的モデル」を単著． 作業療法実践において機能評価を基にした治療におけるモデルを概説した．

5. 動画で学ぼう PT・OTのためのハンドセラピィ [Web付録付]	編集・共著	令和4年3月	医学書院	手のリハビリテーション（ハンドセラピィ）に関して初学者向けの教科書として，動画を加えて基礎から応用までを網羅し，コラムを加えて分かりやすく解説した. A4判　全160項 編者：斎藤和夫，飯塚照史，下田信明 本人担当：「ROM検査」「筋力評価」「感覚評価」「目標設定」「関節可動域の改善」「協調性の改善」の6章（全42項相当）を執筆した．加えて，編者として全体構成や動
（学術論文） 1. 客観的臨床能力試験場面のビデオフィードバックによる臨床実習前教育の取り組み. （査読付）	共著	平成26年4月	作業療法，33巻2号，p181-190	学内で実習前に実施する客観的臨床能力試験に際し，ビデオフィードバックを用いた学習の効果について述べた．学生は，当該ビデオを用いた学習形態をとっており，有効であったと述べた者が8割を超えており，実習前の学習手段として有用である可能性を述べた. 本人担当部分：データ収集，解析，論文推
2. 作業療法学生の臨床実習に対する意識の変容についての研究 （査読付）	共著	平成26年10月	星城大学紀要，14号，p43-56	作業療法専攻学生に対して，臨床実習前にストレスマネジメントを主眼とするコミュニケーション講座を開講し，その効果を学生アンケートからKJ法を用いて検討した．その結果，学生の不安は，当初漠然としたものであるが，後半には指導者や対象者との関係性構築に焦点化されており，その対策が必要であることを述べた
3. 滑車訓練における手関節主動筋の筋電位と握力の関係について （査読付）	共著	平成26年12月	日本ハンドセラピィ学会誌，7巻，p23-28	ハンドセラピィ領域で筋力増強目的に多用される滑車訓練について，実験的に検証した．手関節固定筋とともに，把持力を同期，解析した結果，10kg程度の負荷をかけてもその握力は最大握力の7割程度にとどまること，加えて手関節固定筋については最大握力発揮時の5割未満にとどまる事を報告した．以上から，握力増強には適さず，固定時における廃用性の筋力低下に対しての効果にとどまることを示した．さらに筋力増強効果としては，他の訓練法が有用である可能性を指摘したうえで，提案した. 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲
4. 手指PIP関節周辺骨折におけるDIP・PIP関節可動域の推移 （査読付）	共著	平成27年5月	日本ハンドセラピィ学会誌，8巻，p16-21	手指PIP関節脱臼骨折のリハビリテーションにおける可動域推移につき検討し報告した．開始当初にDIP関節のみの運動を実施している群については，これと同期するようにPIP関節の可動性が改善するのに対し，当該運動を実施していない群については，その相関性が低くなっていた．解剖学的，運動学的構造から，非損傷関節であるDIP関節の運動が最終成績の向上に有用であることを述べた.
5. The optimal rehabilitation period for patients with distal radius fractures according to the MCID in DASH scores; a preliminary study （DASH MCIDを基準とした橈骨遠位端骨折に対する至適リハビリテーション期間に関する予備的検討） （査読付）	共著	平成28年4月	Journal of hand surgery-Asia-Pacific, vol.21(2), p1-6	手外科領域のおける患者立脚型評価としてのDASHについて，臨床的に意味のある差が17点であるとされており，これを用いて橈骨遠位端骨折の早期運動療法開始群と非早期運動療法開始群の効果を検討した．その結果，ベースラインからの得点変化が17点であっても，機能的な差が生じていないことが明らかとなった．そのため，手関節可動域や筋力の改善を指標としたリハビリテーションのアウトカムについては有用性が見出させない可能性があることを指摘した．また，検討結果から，現状のリハビリテーションの効果は長くとも受傷してから8週間程度であり，現状の12週間程度のリハビリテーションについては疑問が生じていることを述べた. 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆
6. Correlation of the Hand 20 with the	共著	平成28年4月	Asian Journal of Occupational Therapy,	著者も加わり名古屋大学手外科教室を主体として作成した，本邦における患者立脚型

International Classification of Functioning, Disability, and Health and comparison of the results with those of the Disability of the Arm, Shoulder and Hand (Hand 20とDASHのICFによる関連性について) (査読付)			vol.11, p27-33	評価のHand20と世界的標準とされるDASHについて，その差異をICF概念へのリンクにて検討した．その結果，Hand20は手に限局する主観的困難感を聴取するのに対し，DASHは社会的不利について主軸を置いているものと捉えられた．以上とともに，2つの患者立脚型評価の得点を解釈するうえでは，対象者の測定範囲に配慮することが肝要であることを強調した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆 共著者：Terufumi Iitsuka, Tomoko Ohura, Takashi Fujita
7. 作業療法学学生に対する臨床実習前コミュニケーション講座の試み (査読付)	共著	平成28年12月	日本作業療法教育研究，16巻1号，p23-29	作業療法学専攻3年次学生35名を対象として，臨床実習（以下，実習）に向けた対人コミュニケーション能力向上と心理的支援を目的とした講座を4回実施した．講座実施中の学生の実習に対する不安は，講座開始当初は指導者や対象者との「関係作り」であった．しかし，実習直前には「知識・技術不足」に対する不安が高まる傾向にあった．しかし，講座における指導者などとの対人関係を意図したロールプレイングやストレスマネジメントとしてのリラクゼーション方法の教示は，実習前不安の自己評価得点を軽減していた．一方，実習後のアンケートでは，コミュニケーション困難として対象者の疾患特性や沈黙，消極的態度といった状況に直面し，対人反応への戸惑いを感じていた．今後は作業療法実践におけるコミュニケーション特性を具体的に検討した上で，実習で想定される困難場面に
8. 橈骨遠位端骨折手術例におけるセラピィ終了時期に影響を及ぼす要因について (査読付)	共著	平成29年5月	日本ハンドセラピィ学会誌，9巻3号，p131－135	先行研究にて当研究グループではハンドセラピィパスを作成し，その有用性を述べてきた．しかし，パスに適用されない患者についての検討がなされていないため，実施した．その結果，骨折系と掌屈可動域，握力がその要因として挙げられ，これらに対する対策が良好な成績を安定して獲得するためのポイントであることを指摘した．また，握力増強に有用な訓練としてタオル絞りを提案した． 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲
9. 臨床実習後作業療法学生におけるハンドセラピィに対する認識 （査読付）	共著	平成29年10月	日本ハンドセラピィ学会誌，10巻1号，p43－48	養成校作業療法学生の臨床実習後におけるハンドセラピィに対する認識を検討するために，作業療法特論（ハンドセラピィ）を選択した学生を対象として，提出レポートを用いた検討を行った．テキストマイニング手法により抽出された10コードを用いて主成分分析を行ったところ4つの成分に縮約された．また，主題分析による質的検討を踏まえると，学生はハンドセラピィを作業療法の一分野として認知はしているものの，その対象範囲は生活や作業と対極し，かつ作業療法士とは一線を画するものであるとの認識であることが示唆された．この要因として作業療法の定義と実践との乖離に対するジレンマの存在が推察され，卒前あるいは卒後教育にあってはハンドセラピィの定義と専門性，意義につき各分野との関連を念頭においた教示の必要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画策定，データ収
10. 脳血管疾患患者における回復期リハビリテーション病棟退院後の日常生活活動能力の変化および関連因子に関するアンケート調査 （査読付）	共著	平成30年6月	作業療法，38巻1号，p37-44	回復期リハビリテーション病棟退院後の脳血管疾患患者のADL能力は低下するとされ，退院前が最も高い能力を有するとされる．一方で慢性期脳血管疾患患者のADL能力と生活範囲，IADL能力やQOLは関連性があるとされるが，回復期病棟退院前を基準とした経時的変化との関連性の言及はない．本研究は脳血管疾患患者の退院前を基準とし在宅時とのFIM得点の比較，維持・改善と悪化に関わる因子探索を行った結果，移動項目に有意な低下を認め，FIM得点の維持・改善に

11. 運動学習段階を捉える新規的指標の開発に関する基礎的研究―事前練習の有無および健常若年者と高齢者の比較（査読付）	共著	平成30年10月	日本ハンドセラピィ学会誌，11巻2号，p58－67	関わる因子に生活範囲が関連していた．回復期の退院支援では，在宅時の活動範囲拡大を意図した指導でADL能力の維持・改善に寄与する可能性があった． 運動学習の過程における「認知段階」と「連合・自動段階」への対応は異なる．前者では新規的運動を認知するために言語的情報や生体信号をフィードバックするなどで強化，促進するのに対し，後者は反復する練習あるいは環境設定の異なる場面での運動が奏功する．したがって，ハンドセラピィにおける実践，とりわけ新規的運動獲得が主となる筋・腱移行術等を想定すると，当該段階を区別する必要性は高く，かつ客観的であることが望ましい．以上を基に本研究では，同時注意要求課題を与えた際の筋出力と筋電図振幅，ならびに前頭前野の活動領域から「認知段階」と「連合・自動段階」を区別する新規的指標を見出し，かつそれが若年者と高齢者に普遍的であるか否かを検証することを目的とした．結果，同時注意要求課題を与えた際の前頭前野活動領域は拡大し，かつ事前練習を行った者にあっては，運動習熟値（筋出力を筋電振幅で除した値）が増加する傾向にあった．本結果で認められた現象は，「認知段階」と「連合・自動段階」を区別できる客観的指標として応用できる可能性が示唆された．しかし，本研究における実験課題等については，再現性や客観性を担保す
12. 外傷手の予後予測（総説）	単著	令和1年10月	日本ハンドセラピィ学会誌12巻1号，2019	外傷手の予後予測について，戦略・戦術・アウトカムを基に，ハンドセラピィの対象疾患として頻度が高いと思われる代表的疾患に対しcritical pointとこれに関わるエビデンスについて述べた．手外科医との綿密な討論とチームワークで，外科的対応を含めた「戦略」および個々の局面での具体的な「戦術」を基に，ハンドセラピィでの「戦術」を立てる．並行してハンドセラピィ上の具体的な目標設定に沿って，これに反応するアウトカムについてICFを意識して認識することが重要である．加えて，最終成績を予想するための各時点のcritical pointによる中途結果の判断は，
13. 本学保健医療学部リハビリテーション学科志望経緯に関する調査（研究ノート）	共著	令和2年12月	奈良学園大学紀要第13集，149-155，2020	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の広報活動に資する基礎資料とするため，2020年度新入生の志望経緯および本学に対する印象等についてアンケート調査を行った．結果，理学療法・作業療法いずれの専攻についても，多くの学生は当初の志望を中途変更することはなかった．一方で，中途で変更する学生においては，自身の経験や自身の適性についての内省，さらに作業療法学専攻については，特徴的な技術に魅力を感じたことが契機となっていた．入学前の本学選択においては設備，環境面を魅力と感じており，入学後は教員や教育の質について肯定的な意見が多かった．以上から，低年齢における分かりやすい理学療法・作業療法に関する周知，あるいは本学の特徴的な講義等の教育方法に関する広報が有用であることを提案した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集・解析，論文執筆 共著者：飯塚照史、辻下守弘、池田耕二、

14. 橈骨遠位端骨折に対するハンドセラピィと最近のトピック（総説）	単著	令和2年12月	日本ハンドセラピィ学会 誌，14巻1号，2021	橈骨遠位端骨折は高頻度で発生する外傷であるがゆえに多くの研究が存在し，その予防から予後に至るまで多様な知見が存在する．ハンドセラピィにおける臨床実践レベルにあっては対象者の機能的因子の改善に最も焦点があたるが，俯瞰すれば効果的であるとされる技術は未だ明確ではない．したがって，その効果は未だ懐疑的であり不要論さえ存在するのが実状である．これに対し，現時点での研究のトレンドを踏まえると費用対効果に優れる早期ハンドセラピィ開始および早期終了が鍵であり，これに資するアウトカムの開発が本骨折に対するハンドセラピィ技術の継承・発展におい
15. 橈骨遠位端骨折に対する掌側ロッキングプレート固定術後のリハビリテーションにおけるHand20と患者満足度の関連性 （査読付）	共著	令和3年8月	日本ハンドセラピィ学会誌，13巻4号，2021	橈骨遠位端骨折は，術後3か月程度の急峻な回復ののち，１年程度にわたる緩徐な回復を示すため，Minimally Clinical Important Difference（臨床的に意味のある差）の算出方法を参照し，患者満足度を改善させるHand20得点の改善量について検討した．術後4週をベースラインとすると，手全体の機能に対する患者満足度を改善するHand20得点の改善量のカットオフ値は26
16. 移乗介助動作における医療従事者の筋活動 ―腰痛予防に向けた分析―	共著	令和3年11月	作業療法ジャーナル 55巻12号，2021年	セラピストの移乗動作中の腰部筋の筋電図から腰痛を発生させないための動作上の工夫について考察した．体幹全体をなるべく屈伸させず，膝関節を用いた動作介助が有用であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文推敲，一部執筆 共著者：谷口敦也，窪優太，飯塚照史
17. 2021年度リハビリテーション学科新入生における志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要第13集，149-155，2020	学部設置3年目を迎えたリハビリテーション学科においては，定員充足率増加に伴い新入生の進学経緯も多様になっているものと考えられる．そこで，3期生においてアンケート調査を実施し，2期生との比較を通じてその傾向について比較検討した．結果，当初における職業選択は変更されることなく，近しい人物への相談を伴ったオープンキャンパスへの参加，加えて本学近隣環境等への好感を以て進学を決定している経緯があり，2期生との大きな変化はなかった．一方で，プレゼンスの高まり，教員対応への肯定的意見と捉えられる側面もあり，本学魅力の一端として認識する必要性が示唆された．以上の結果は，今後の広報戦略に資するものであると考えられた． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集・解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，辻下守弘、池田耕二、
18. Factorial validity and internal consistency of a practitioners' checklist for therapists in rehabilitation （リハビリテーションにおける療法士のための実践者用チェックリストの因子的妥当性と内的整合性）（査読付）	共著	令和3年12月	JBI Evid Implement 2021; 19:387-393.	病院・訪問で働く療法士を対象にリハビリテーション実践におけるチェックリストの因子的妥当性と内的整合性を検証した．分析対象は385人で，4因子20項目のモデル適合度はRMSEA0.083，GFI0.843,AGFI0.799で、因子間の相関は0.67-0.95，各因子からの因子負荷量は20項目すべてで0.41以上だった． Cronbach's α係数は0.896，0.890，0.935，0.925だった． 本人担当部分：研究計画策定，論文推敲，一部執筆 共著者：Ohura t, Tsuyama T, Furusawa M,
（その他） ＜国際学会＞ 1.A pilot study of influences of the thumb abduction limitations on the control of the rice-ball precision grip （母指外転制限による茶碗把持への影響に関する予備的検討）	-	平成26年6月	16th international congress of the world federation of occupational herapists（第16回世界作業療法士連盟大会：横浜）	模擬的に母指関節角度を制限し，茶碗保持への影響を筋電図および関節角度をパラメータとして比較検討した．直径11センチの茶碗保持においてMP関節可動域，母指球筋の筋積分値増加が認められた．実践にあっていずれかの関節に制限が認められた場合，当該関節および筋に対する配慮が必要であることがわかった． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：辻村雅美，飯塚照史，宮本定

				治
2. Occupational therapy approaches for bi-lateral metacarpal hands; A case report which have returned to work through proposing a treatment plan by patient’s desires （両側メタカルパルハンドに対する作業療法；患者の要望に合わせた治療方針提案により復職に至った一例）	－	平成26年6月	16th international congress of the world federation of occupational herapists（第16回世界作業療法士連盟大会：横浜）	両側の手指切断および母指の一部挫滅によるメタカルパルハンドの患者に対し，いくつかの治療方針を医師とともに提案しながら，本人の希望に沿った治療を行なった．結果的に足趾移植術を選択され，5年後の追跡調査においてもボタン操作や書字なども実施しており，有用であった． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿作成 共同発表者：飯塚照史，宮本定治，高見昌史
3. The effect of mixed tasks on pretraining for grasping tasks with a fixed gripping power: A preliminary study （つまみ力一定把持課題の事前練習に対する混合課題の影響：予備的検討）	－	平成29年11月	5th congress of the Asia Pacific Federation for Societies for Hand Therapy （第5回アジア太平洋ハンドセラピィ学会：フィリピン）	本研究では健常人を対象に，事前練習の有無が混合課題によって阻害されるか否かによってその客観的区別の可能性について予備的に検討した．結果，前頭前野における活動領域が大きいほど，一定のつまみ力に対する筋電図振幅が漸減していた．つまり，前頭前野の負荷をかけても末梢で学習が起きている状況であれば，運動学習が進行しているものと捉えられ，客観的指標の一つして提案した．
「招待講演」 1. 手外科領域の作業療法	－	平成26年3月	滋賀県作業療法士会主催　学術部研修会 （滋賀県栗東市）	滋賀県作業療法士会主催の研修会にて，他分野（脳卒中，精神疾患等）とともに，手外科領域における作業療法の展開について教示した．共通点として国際生活機能分類（ICF）を用いた障害像の捉え方，異なる点として医学的知識の重要性について説い
2. 橈骨遠位端骨折に対する作業療法	－	平成26年10月	滋賀県作業療法士会主催　学術部研修会 （滋賀県栗東市）	滋賀県作業療法士会主催による研修会において，対応する機会の多い疾患として橈骨遠位端骨折について教示した．エックス線読影ならびに初期評価から抽出される問題点に対する運動プログラムの立案について
3. 臨床・教育・研究から捉えるハンドセラピィ	－	平成28年2月	九州ハンドセラピィ研究会第7回学術集会教育講演（福岡市）	九州ハンドセラピィ学会における特別講演として，臨床，卒前卒後教育，研究の3領域にまたがる共通の問題点を明らかにしたうえで，今後の方向性について論じた．養成課程におけるハンドセラピィに関する教育
4. Hand therapy for distal radius fractures Current trends	－	平成30年11月	Asia pacific wrist conference 2019 （narita, Japan）	アジア太平洋地域の手関節外科に関わる医師とセラピストが一同に会する国際学会において，本邦におけるハンドセラピィの実践状況とともに自身の研究内容について講演を行った．とりわけ，橈骨遠位端骨折に
5. Therapy for hand trauma: The importance of cooperation between surgeons and therapists	－	平成31年3月	18th shanghai international plastic and aesthetic surgery conference (Shanghai, china)	中国上海で行われた形成外科国際学会のセラピストセッションにおいて医師向けの招待講演を行った．本邦における外傷手の術後対応と初期治療後のリハビリテーションや機能再建に向けた対応について具体的に
6. 外傷手の予後予測	－	平成31年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（北海道札幌市）	ハンドセラピィにおいて比較的頻度の高い外傷として，屈筋腱損傷，伸筋腱損傷，骨折（主に橈骨遠位端骨折），末梢神経障害，手指再接着術後，手指切断に焦点を当て，その予後に影響する因子あるいは臨床
7. 外傷手に対するハンドセラピィと効果判定について	－	令和元年5月	京都ハンドセラピィ研究会（京都）	外傷手のハンドセラピィにおけるアウトカムに着目し，その得点を解釈することの重要性について述べた．併せて，現在進行中の研究における中途報告も兼ねて行い，ハンドセラピィ効果を判定するための新規アウトカム開発の重要性について説いた．
8. 関節外骨折に対する手術例のセラピィ	－	令和元年9月	第12回手関節外科ワークショップ（奈良）	橈骨遠位端部における関節外骨折はAO分類のA2およびA3に該当し，60歳以降で高頻度となることからosteoporosisの影響が示唆される．したがって，骨折の連鎖を予防し健康寿命の延伸に資するためには，日常生活において十分に使える手での早期社会復帰が望ましい．これに対する特異的なハンドセラピィ手技は存在しないものの，前述の背景を踏まえると，如何に早く回復させ，それをどのようなアウトカムで判断するのかが最大の関心事であると捉えられる．以上を基に，本シンポジウムではハンドセラピィパスの紹介，外科的対応も含めた早期回復への工夫，新規的アウトカムの提案の3点を通じ，関節外骨折に対するセラ

9. Preliminary study on the usability of a tri- axial accelerometer: Evaluation of how postoperative distal radius fracture patients use their hands in ADL (3次元加速度計の有用性に関する予備的検討：橈骨遠位端骨折後の患者の日常生活における評価)	-	令和元年3月	APFSSH/APFSHT2020 (Melbourne, Australia) アジア太平洋手外科学会/ハンドセラピィ学会（メルボルン，オーストラリア）	橈骨遠位端骨折に対するハンドセラピィでは，日常生活で不自由なく使用できる手の獲得を目標とする．これに対し，Lang CEらはウェアラブル加速度計での計測方法を開発し脳卒中患者に適用して上肢使用量の把握に有用であったことを報告している．本研究ではこの方法論を橈骨遠位端骨折患者に適用し，経時的推移および機能的結果との関連性について検討した．結果，受傷側手の使用時間は手関節角度，握力に，また，両手の使用時間と患者立脚型評価の間に正の相関関係が認められた．さらに，Total magnitude ratio（左右のvector magnitudeの比）が健常人の閾値以下の場合，機能的回復が劣る傾向にあった．以上から，ウェアラブル加速度計は橈骨遠位端骨折後の日常生活における上肢活動量の計測に有用である可能性がある．しかし，い
10. 橈骨遠位端骨折に対する作業療法と最近のトピック	-	令和2年9月	第53回日本作業療法学会（新潟）	橈骨遠位端骨折に関する現時点での研究のトレンドを踏まえ，費用対効果に優れる早期ハンドセラピィ開始および早期終了について根拠を説明した．さらに，これに資するアウトカムの開発が本骨折に対するハンドセラピィ技術の継承・発展において喫緊の課題と捉えられる点について論じた．
11. 複合組織損傷に対するハンドセラピィ	-	令和3年1月	第8回中部日本ハンドセラピィ研究会（名古	複合組織損傷を伴う外傷手について，機能面としてどのような手を目指すのか（戦
12. 拘縮に対する徒手療法		令和4年2月	第9回中部日本ハンドセラピィ研究会（名古屋）	ハンドセラピィ中に発生する拘縮に対して予防を主とした徒手療法について，拘縮発生のメカニズムと自身の研究を踏まえて概説した．具体的方法論についてもデータと
13. PT・OTのためのハンドセラピィ		###########	医学書院セミナー	書籍出版に併せて当該内容を基とした実践での応用について説明した．
14. 外傷手の予後予測		###########	金沢ハンドセラピィ研究会	初療時所見から外科的対応を予測し，機能低下を未然に防ぐ対応について説明した．
15. 専門作業療法士の実践　養成校教員の立場から		###########	第56回日本作業療法士学会学術集会（京都）	養成教育に際して，作業療法士の専門性を高めるために学生の傾向を踏まえ，教示すべき内容や最新のトピックと作業療法との関連性から，その内容についての考えを説
16. 私の考える　Translational Hand therapy		###########	なにわハンドセラピィ研究会	ハンドセラピィ領域の学術的知識の整理とともに，近接あるいは遠隔領域にある内容とコラボレーションすることで，新規的提案が出来ることについて説いた．とりわけ，骨折後の転倒リスクについて継続中の研究内容を一部紹介し，将来的展望につい
17. 作業療法にできることってなんだろう		###########	奈良県作業療法士会	作業療法学分野における可能性や臨床実践にあたるうえでの心構え，概念等について説明した．作業療法の定義にとらわれず，今後の展望を踏まえた対応が必要であるこ
18. スプリント療法の紹介		###########	人ヘルスケア株式会社主	スプリント療法の概念を紹介し，痙縮治療に資する内容を文献的考察を踏まえて説明した．参加者は個人開業医が多く，地域貢
「シンポジウム」 1. DASH　MCIDを指標とした橈骨遠位端骨折術後リハビリテーションの至適期間の構築	-	平成26年2月	中部日本手外科研究会（下関）	橈骨遠位端骨折術後のリハビリテーションについて臨床的に意味のある差（MCID）を指標とした場合，開始時期は可及的早期が望ましく，リハビリテーション至適期間は8週であることが示唆された．また，手関節尺屈可動域と握力が終了時期を見極めるた
「成果報告書」 1.学生のコミュニケーション技能向上に向けたプログラム開発と評価に関する研究	共著	平成28年3月	星城大学元気創造研究セ ンター助成研究	平成25年度から27年度までの助成研究についてその進捗および成果を報告した．年度ごとに対象となる学生が異なるにも関わらず，臨床実習前の学生の不安傾向が普遍的であることと，これに沿ったコミュニケーションプログラムが有効である可能性を指摘した．
2.「若手研究B」適切なリハビリテーション期間の決定に関わる因子の探索的研究	単著	平成28年6月	科学研究費助成事業研究成果報告書	橈骨遠位端骨折に対するリハビリテーションはおおむね3か月で終了するが，その正当性は不明である．患者自己記入式の評価得点を指標としてデータを検討すると，術後3日程度から開始するリハビリテーションは

3.運動学習段階を捉える新規的指標の開発に関する基礎的研究 － 健常若年者と高齢者の比較 －	共著	平成29年2月	一般社団法人日本ハンド セラピィ学会 研究助成事業2016年度 学研究課題研究成果報告書	支持されるが，その効果は8週間程度までであった．さらに，リハビリテーションの終了は医療者と患者の合意によって成り立っているため，双方のリハビリテーション継続に対する認識を加味した検討を行った．その結果，関節可動域や筋力などの客観的指標との関連は見当たらなかった．日常生活における手の使用を以て改善する部分が大半を占めている現状から，リハビリテー本研究では若年者および高齢者を対象に運動学習に相違があるか否かについて検討する事を目的とした．実験はrest（20秒）－task（30秒）を繰り返すブロックデザインとし，taskは3種類とした（A：n-back課題，B：最大つまみ力の3割を保持する課題，C：task Aとtask Bの混合課題）．データは近赤外線分光法（NIRS）による前頭前野の脳血流量（Oxy-Hb），および筋電図（第1背側骨間筋：FDI，橈側手根伸筋：ECR）とした．対象は，若年者4名（平均年齢21歳，女性），高齢者2名（67歳，80歳，女性）とし，ランダムに事前に一定のつまみ力発揮を十分に練習する群（事前練習群：若年者2名，高齢者1名）と，確認のみで練習をしない群（非事前練習群）に分けた．結果，task A，Bにおける脳血流量の差異はいずれの群にても認められなかった．一方で，task Cにおいては，脳血流量の差異はほとんど見られないにもかかわらず，事前練習群では特にECRの活動電位が漸減していた．未解析ではあるが，同様の傾向は高齢者にても認められた．今後，さらに解析を実施することで傾向を明らかにすることが出来るものと考えられる．本結果が共通となれば手外科領域における腱移行術な
4.「基盤C」健常人と腱移行術症例に対する前頭前野負荷と運動学習遅延に関する実証的研究	共著	令和元年6月	科学研究費助成事業研究成果報告書	リハビリテーション分野での応用を視野に，運動学習の過程における「認知段階」および「連合・自動段階」の客観的区別を可能とする方法および指標の提案を研究目的とした．予備的検討結果に基づき，特定の課題について事前に十分練習をした者は，当該課題を遂行中に前頭葉活動を賦活するための課題を同時に与えても，効率性良く筋出力を発揮するものと仮定し検証した．事前に練習しない者と比較した結果，一部は仮説を支持する傾向が認められた．一方で，健常被験者において生来持ち合わせている運動経験の影響も考えられるため，患者群への応用は限定的であるものと考えられた．そのため，よりBalisticな運動としての指タッピング動作を課題としたところ，当該動作における筋収縮の効率性
「学会発表」 ＜国内学会＞ 1. 手指・母指損傷後の患者を対象とした自己機能・能力障害評価表の開発	－	平成26年4月	第26回日本ハンドセラピィ学会（沖縄）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第１期である本研究では，母指・手指で特異的に支障をきたすと考えられるADL項目を抽出し，因子分析にて24項目に絞った． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：原田康江，佐藤彰博，野中信宏，飯塚照史，桂理，安部幸一郎
2. 逆説性歩行を用いた課題志向型訓練に取り組み，歩行開始遅延・歩行中のすくみ足に変化が見られた一例	－	平成26年10月	第8回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス（京都）	姿勢反射障害・筋強剛の症状によりすくみ足・動作緩慢が出現し，トイレ動作時または移動時に困難を感じている初期パーキンソン病患者に対し，先行研究で示されている外的手掛かりに加え，これに方向転換課題を組み込むことで，より生活動作内容に近い状況を設定した．その結果，自覚・他覚ともに歩行速度・動作緩慢は改善し、トイレまでの歩行動作質向上が得られた． 本人担当部分：研究計画策定，原稿推敲 共同発表者：金坂有紀，児島範明，宮本定治，飯塚照史，梅本安則

3. 手外科疾患における疾患特異的QOL評価表の開発-肘部管症候群-	-	平成27年4月	第27回日本ハンドセラピィ学会（東京）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第１期である本研究では，肘部管症候群で特異的に支障をきたすと考えられるADL項目を抽出し，因子分析にて20項目に絞った． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：野中信宏，佐藤彰博，原田康江，飯塚照史，桂理，阿部幸一郎
4. 手外科疾患における疾患特異的QOL評価表の開発-橈骨遠位端骨折	-	平成27年4月	第27回日本ハンドセラピィ学会（東京）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第１期である本研究では，橈骨遠位端骨折で特異的に支障をきたすと考えられるADL項目を抽出し，因子分析にて26項目に絞った． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：桂理，佐藤彰博，野中信宏，原田康江，飯塚照史
5. 手指・母指損傷後の患者を対象とした自己機能・能力障害評価表の再現性と妥当性	-	平成27年4月	第27回日本ハンドセラピィ学会（東京）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第2期である本研究では，母指・手指損傷に関して第１期で試作した評価表の再現性と妥当性を検証した． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：原田康江，佐藤彰博，野中信宏，飯塚照史，桂理，阿部幸一郎
6. コミュニケーション講座受講学生の実習直前の不安要因と実習成績との関連に関する探索的検討	-	平成27年10月	第20回日本作業療法教育研究学術集会（奈良）	養成教育過程における臨床実習前に学生に対して職業倫理の涵養も踏まえたコミュニケーション講座を実施した．学生の実習前の不安は多種多様であり，さらにこれと実習における評価得点には関連性はなかった．しかし，実習に対する不安傾向の特徴から，今後の講座展開に資する示唆を得た．
7. 橈骨遠位端骨折手術例におけるセラピィ終了時期に影響を与える要因．	-	平成28年4月	第28回日本ハンドセラピィ学会（広島）	本人担当部分：研究計画策定，データ分先行研究にて当研究グループではハンドセラピィパスを作成し，その有用性を述べてきた．しかし，パスに適用されない患者についての検討がなされていないため，実施した．その結果，骨折系と掌屈可動域，握力がその要因として挙げられ，これらに対する対策が良好な成績を安定して獲得するためのポイントであることを指摘した．また，握力増強に有用な訓練としてタオル絞りを提案した．
8. 手指屈筋腱断裂の術後成績不良因子とセラピィのアウトカム評価について	-	平成28年7月	第16回東海北陸作業療法学会（金沢）	後方視的検討により手指屈筋腱断裂の成績を検討した．ROC解析の結果，術後６週時点におけるカットオフ値が見出され，臨床的な指標となる可能性が示唆された．
9. 橈骨遠位端骨折に対する掌側ロッキングプレート固定術後のリハビリテーションにおけるHand20のMinimal Clinically Important	-	平成29年4月	第29回日本ハンドセラピィ学会（名古屋）	橈骨遠位端骨折後のハンドセラピィにおいて多用されるHand20の臨床的に意味のある差（MCID）を検討した．結果，術後４周をベースラインとした時に，12週時点で33点以上の変化がある場合に，患者も満足するという結果であった．
10. 運動学習段階を捉える新規的指標の開発に関する基礎的研究；健常若年者と高齢者の比較	-	平成30年4月	第30回日本ハンドセラピィ学会（東京）	本研究では，同時注意要求課題を与えた際の筋出力と筋電図振幅，ならびに前頭前野の活動領域から運動学習段階を区別する新規的指標が若年者と高齢者に普遍的であるか否かを検証することを目的とした．結果，同時注意要求課題を与えた際の前頭前野活動領域は拡大し，かつ事前練習を行った者にあっては，運動習熟値（筋出力を筋電振幅で除した値）が増加する傾向にあり，若年者と高齢者で共通であった．しか

11. 患者および医療者側のハンドセラピィ継続要否を基とした橈骨遠位端骨折後のリハビリテーション至適期間策定に関する探索的研究	-	平成31年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（札幌）	本研究では，「患者，セラピスト双方におけるハンドセラピィ効果の認識を通じて治療継続の要否を判断している」と仮説を立て，これに影響する因子の特定を目的とした．結果，ハンドセラピィ継続の要否におけるセラピストと患者間の齟齬は，術後8週以降で顕著であり，影響因子として，セラピスト側では機能的因子，患者側ではHand20が一貫して挙げられており，双方でハンドセラピィ効果を判断する指標は異なるものと推測された．一方で，共通因子と
12. 手外科疾患における疾患特異的QOL評価表の開発-橈骨遠位端骨折質問票試案の再現性・妥当性の検証-	共著	平成31年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（札幌）	橈骨遠位端骨折に対するハンドセラピィ効果を判定するための患者立脚型評価表について述べた，本発表ではその再現性と妥当性を検証し，他の評価表と比較しても遜色ないことを確認した．
13. 橈骨遠位端骨折術後の抑うつは満足感に関連するか　―多施設間研究―	共著	平成31年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（札幌）	抑うつとは，気分の落ち込みや興味・喜びの喪失などうつ症状が出現している状態のことであり，橈骨遠位端骨折の術後成績と関連があるとされている．抑うつが橈骨遠位端骨折の術後成績に影響するのであれば，患者の満足感にも影響する可能性があると考えられる．検討の結果，術後の抑うつと，手の機能の一部に関連があったが，患者が手の機能に満足する時期やリハビリテーション終了を希望する時期との関連はなかった．よって，橈骨遠位端骨折術後の
14. 患者および医療者側のハンドセラピィ継続要否を基とした橈骨遠位端骨折後のリハビリテーション至適期間策定に関する探索的研究	共著	平成31年年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（札幌）	橈骨遠位端骨折後に最大限の機能的回復を得るには1年以上の期間を要する（Swart E, 2012）ため，短期的かつ費用対効果に優れるハンドセラピィ至適期間の策定が望まれ，Cochrane review (Handoll H, 2015) においても強調されている．一方で，口頭指導が定型的なハンドセラピィよりも機能的回復に優れることが報告されており（Souer JS, 2011），その効果を機能的因子のみで説明するには限界がある．本研究では，「患者，セラピスト双方におけるハンドセラピィ効果の認識を通じて治療継続の要否を判断している」と仮説を立て，これに影響する因子の特定を目的とした．その結果，ハンドセラピィ継続の要否におけるセラピストと患者間の齟齬は，術後8週以降で顕著であり，影響因子として，セラピスト側では機能的因子，患者側ではHand20が一貫して挙げられており，双方でハンドセラピィ効果を判断する指標は異なるものと推測された．一方で，共通因子としてのHand20があることから，これを主要評価項
15. 橈骨遠位端骨折患者の上肢活動の経時的回復における損傷側別特徴	共著	令和4年4月	第34回日本ハンドセラピィ学会学術集会（北九州）	左右上肢の活動量から受傷側と非受傷側の回復特徴につき報告した．利き手の回復が速やかとなる一方で，非利き手の回復が遅延していた．また，相関する機能的指標とも相関が異なっており，損傷側別の特徴を踏まえたハンドセラピィにつき提案した．

（注）
1　最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。

教　育　研　究　業　績　書

令和5年　5月　1日

氏名　飯塚照史　印

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学	リハビリテーション科学・福祉工学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）個別面談による学生の状況把握と対応	平成19年4月	青丹学園作業療法学科専任教員として1年次担任を務め，学生生活や今後について不安を抱えている学生に対し個別面談を行った．自省を促し，勉学における2年時への円滑な移行を促進するために面接を実施し，学生の状況や指導，苦手な面などを把握し，指導に役立てた．その結果，学生個々の勉学への取り組みや，進路変更も含めて円滑な対応が行えた．
2）模擬医療面接による評価技術習得	平成19年4月	青丹学園作業療法学科専任教員として担当の「作業療法評価学」（専門科目，1年次配当，半期，必修2単位）において，事前に作成した模擬患者に対する面接演習を実施した．この際，挨拶などのいわゆる接遇面にも十分に説明したうえで，患者のニードをうかがう技術について実践的に行った．その結果，学生の面接に対する理解度が向上した．
3）症例供覧を通じた作業療法の理解	平成19年4月	青丹学園作業療法学科専任教員として担当の「身体障害作業療法学」（専門科目，2年次配当，半期，必修1単位）において，講師担当症例の経過を供覧し，その実践的対応を教示した．学生の臨床実践に対する理解が向上した．
4）義肢装具学における症例を通した実践的演習	平成19年4月	青丹学園作業療法学科専任教員として担当の「義肢装具学」（専門科目，2年次配当，半期，必修2単位）において，能動義手ユーザーを招き，問題点評価を通して，学生による自助具作成を実施した．評価技術の習得，自助具作成における考慮などを目的とし，学生の臨床実践に対する理解度が向上した．
5）義肢装具学におけるメーカーによるデモ供覧	平成19年4月	青丹学園作業療法学科専任教員として担当の「義肢装具学」（専門科目，2年次配当，半期，必修2単位）において，オットーボック社からの講師を招き，メーカーによるデモを実践してもらい学生に体験させた．今後の臨床実践における選択肢となる事，能動義手と筋電義手の長所，短所の理解を目的とした．学生の理解度が向上した．

事項	年月日	概　　要
6）入学から卒業までの定期個人面談による学生の状況把握および助言	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の講師として平成22年度入学生および平成27年度入学生の担任を務めた．当該学生の入学から卒業まで，留年者も含めて総勢約80人に対し，毎年前後期併せて4回の定期面談に加え，成績低迷学生やその他問題のある学生に対して不定期面談を実施した．心理的問題を主とする学生については，学内に設置された学生相談室と連携し，対応を行った．問題ある場合には迅速な対応を行うい，学生の意識変容を促せた．その結果，退学者の減少に貢献できた．
7）リハビリテーション関連職種に対する総合的スプリント作製実習による装具療法の理解	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「義肢装具学実習」（3年次配当，1単位）および，理学療法学専攻の専門科目「義肢装具学実習」（3年次配当，1単位）において，スプリント作製を通じた装具治療の基本を教示した．具体的には，作業療法学専攻については8種類，理学療法学専攻については3種類の作製を通じて，原因組織別の拘縮矯正に対する評価技術やスプリント調整を行った．その結果，学生の理解度が向上した．
8）レポート課題の評価基準統一による学生へのフィードバック	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学実習」（3年次配当，1単位）において，提出される課題レポートの評価基準をS，A1，A2，B1，B2などと8段階として統一し，それぞれの採点基準を設けた．これを学生にフィードバックすることで，実習に向けての自身の課題の明確化につながり，学生の動機が向上した．
9）コミュニケーション講座による実習への動機付け	平成25年4月 ～ 平成27年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の講師として平成25年度3年次学生（40名），平成26年度3年次学生（30名），平成27年度3年次学生（35名）に対し，実習で必要とされるコミュニケーションについて，その学術的意義から理論，実践，倫理などを教示した．さらに，昨今の学外実習による学生の諸問題，特に精神的不調についても学問的知識を教示し，予防的意義を含めた．一連の取り組みについては，各回でアンケートを取った．その結果．学外実習に対して漠然とした不安が，「指導者との関係」などといった具体的な不安へとつながり，これを学生が認識することで予防的効果を見込めることが分かった．また，倫理的事項に対する全体討論を通じて，いわゆる接遇的コミュニケーションのみならず，医療倫理としてのコミュニケーションを理解することにつながった．一連の取り組みについては，大学教育に関する学会での発表を3回，1篇の論文を通じて周知に努めた．さらに，コミュニケーション教育について先駆的役割を果たされている桜美林大学リベラルアーツ群の教授や，リハビリテーション関連職種における養成教育での位置づけを強調される理学療法士などを招き，学内全体の取り組みとして周知に努めた．これの功績が認められ，平成28年度からの新カリキュラムにて授業化された．移行期間は，「身体障害作業療法学実習」およびホームルームなどで対応している．

事項	年月日	概　　要
10）学生個々の状況に応じた定期面談および指導	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として，チューターを努め，理学療法学・作業療法学専攻学生の定期面談および個々の状況に応じた指導を行った．
11）穴埋め式レジュメの使用による理解を促す講	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科における人体構造学Ⅲの講義において，解剖学的構造や名称の暗記に際し，穴埋め式のレジュメを使用することで理解と定着を図った．
12）症例提示を通じた実践的講義	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での担当講義において，適時症例提示を通じて，理論や治療法に関する実践的講義を展開し，理解を促した．
13）オンライン・オンデマンド方式を用いた講義	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での担当講義について，COVID-19感染予防の観点から，Googleクラスルーム，Googleフォームを駆使したオンデマンド，オンライン方式の講義を展開した．講義内容は後日確認することも出来るようにし，復習用の教材としても提供した．各回での確認テスト提出を義務付けることで，学習内容の定着も図った．

事項	年月日	概　　要
２　作成した教科書，教材 1）義肢装具学（スプリント作製）における記録用紙作成	平成19年4月	青丹学園作業療法学科専任教員として担当の「義肢装具学」（専門科目，2年次配当，半期，必修2単位），および星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「義肢装具学実習」（3年次配当，1単位）および，理学療法学専攻の専門科目「義肢装具学実習」（3年次配当，1単位）において，教科書だけでなく，実践に役立つスプリント作製を念頭に置いた．後期のみで8種類程度の作製を実施した．また，作製記録を毎回提出させ，再現性の高い記載を指示した．また，作製時における評価の重要性についても別時間を設け十分に説明し，これも記載させることで学生の理解度が向上した．
2）国家試験対策資料	平成19年4月	青丹学園作業療法学科専任教員，および星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻講師として，国家試験対策用の資料作成を行っている．当該対策本は模試関連業者からも多く発刊されているが，細項目の分類が学生の理解と異なる部分があるように感じている．例えば，装具関連の問題では，装具の理解ではなく，神経損傷の理解が必要であったり，などである．そのため，それまでの学生指導の要点を踏まえて，関連付けて覚えられるように講義を展開したうえで，これに関連する問題をまとめた資料を作成，配布するようにしている．
3）小テストによる講義理解度の把握	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学Ⅰ」（2年次配当，1単位）において，小テストを作成し各回の講義終了後に実施し，講義理解度の把握に努めた．同時に講義に対する感想も求め，次回講義でこれに応えるという形式で展開した．これにより，学生の理解度は飛躍的に向上し，身体機能障害領域を志望する学生が増加した．
4）症例報告レポート作成を目的とした情報提供用資料	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学実習」（3年次配当，1単位）において課題として提示する症例報告レポート用の症例情報提供資料を作成した．当該資料には，個人情報を保護したうえでの現病歴や既往歴，あるいは面接時の逐語録などを示した．これを基にしたレポート作成により学生は実践への理解度が向上した．
5）講義用補助教材	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門基礎科目「臨床運動学」（3年次配当，1単位）において，テキストに沿ったアウトラインについて資料を作成，配布している．さらに資料内には，関連事項として講師が経験した症例などを紹介する項目を設けて学生に興味を引き出すように工夫している．

事項	年月日	概　　要
6）体表解剖学における触診資料	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「臨床体表解剖学」（1年次配当，1単位）において，筋骨格の触診について再現性の高い資料を作成した．さらに，毎回触診した筋骨格に関する運動学的知識などを先取りで教示し，小テストを行った．これにより学生の解剖学への理解度が向上し，興味関心の高まりがある．さらに，ロードマップとして今後修得すべき知識を見せることで，勉学全般に対する動機づけにつながっている．
7）作業で語る事例報告 A4判　全164項 編者：斎藤佑樹 共著者：友利幸之助，上江洲聖，澤田辰徳	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学実習」（3年次配当，1単位）において，教科書として使用した．当該教科書では作業療法学の文脈上にある作業について網羅的に示され，さらに実践として豊富な事例報告が収められている．学生が率直に疑問に思う点について簡潔明瞭に述べられているため教科書として採用した．さらに，講義内では教科書を用いた症例検討の重要性を説き，学外実習において参考にするよう指導した．
8）確認テスト	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での担当講義について，各回毎に学習内容に応じた確認テストを作成した．質問項目も付記することで適宜学生からの反応も確認することが出来るようにしている．
9）穴埋め式レジュメの作成	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での担当講義について，学習内容における重点項目を穴埋めとするレジュメを作成し，当該部分での強調と筆記による定着を促した．また，試験範囲の明確化にもつながるようにした．

事項	年月日	概　　要
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1）星城大学再任評価	平成26年12月14日	学長，学部長による面接評価を受けた．入試広報委員会副部長としての活動による学内貢献，学生教育への尽力，研究領域としての科研費取得などが認められ，平成27年度かの再任が決定した．
2）星城大学学生による授業評価アンケート結果	平成28年12月	星城大学において毎年実施している学生による授業評価アンケートによると，3年次学生に対する「義肢装具学」，および2年次学生に対する「身体障害作業療法学Ⅰ」，いずれについても，95%以上の学生から満足との高い評価をもらっている．
3）奈良学園大学学生による授業評価アンケート結果	令和3年7月	奈良学園大学において実施される授業評価アンケートについて，3年次学生対象の「義肢装具学」「作業療法特論」，2年次学生対象の「人体構造実習」「身体障害作業療法学Ⅱ」「作業療法評価学演習Ⅰ（身体）」，1年次学生対象の「人体構造学Ⅲ」において，いずれも5点満点中4.3程度の満足度を得た．
4）学部長による定期面談	令和2年6月22日 令和3年3月2日	奈良学園大学保健医療学部において，学部長との定期面談を実施した．専攻運営，大学運営，とりわけ広報活動に関して一定の評価を受けた．
４　実務の経験を有する者についての特記事項 1）一般社団法人日本ハンドセラピィ学会主催認定ハンドセラピスト養成カリキュラム「入門セミナー」，研修会講師	平成20年4月 ～ 現在に至る	認定ハンドセラピスト養成カリキュラムの一環として毎年開催される入門セミナーにて，肘関節・前腕の機能解剖につき継続して講師を務めている．毎年，おおむね100名程度の参加者がいる．
2）奈良県作業療法士会主催現職者講習会「後輩育成・協業」，講師	平成22年4月 ～ 平成24年3月	現職者講習会として，有資格者を対象に後輩育成，協業について実践を通じた教示を行った．各年ともにおおむね50名程度の参加者がいた．
3）一般社団法人日本ハンドセラピィ学会主催認定ハンドセラピスト養成カリキュラム応用実践研修会「ハンドスプリントベーシックセミナー」，研修会講師	平成22年4月 ～ 現在に至る	認定ハンドセラピスト養成カリキュラムの一環として毎年開催される応用実践セミナーにて，座学としてスプリントの力学，実践として作製実習につき継続して講師を務めている．毎年，おおむね100名程度の参加者がいる．

事項	年月日	概　　要
4）一般社団法人日本ハンドセラピィ学会主催 認定ハンドセラピスト養成講習会「機能解剖・触診セミナー」，研修会講師	平成23年4月 ～ 現在に至る	認定ハンドセラピスト養成カリキュラムの一環として毎年開催される基礎セミナーにて，手，手指の機能解剖と触診実習の講師として継続して講師を務めている．毎年，おおむね100名程度の参加者がいる．
5）愛知県作業療法士会主催 現職者講習会「職業倫理」，研修会講師	平成24年4月 ～ 現在に至る	現職者講習会として，有資格者を対象に職業倫理について討論を通じた教示を継続して行っている．各年ともにおおむね100名程度の参加者がいる．
6）星城大学元気創造研究センター助成研究 公開講座「リハビリテーション専門職養成課程におけるコミュニケーション教育」，報告「作業療法学生に対するコミュニケーション教育」	平成26年9月27日	本講座は星城大学元気創造センター助成研究として実施した学生のコミュニケーション教育についての研究成果を周知するために開催し，報告した．併せて講義も企画し，学生への教示も行った．
7）星城大学FDセミナー 「科研費取得のポイント」，研修会講師	平成29年9月14日	これまで2度連続での科研費取得実績を評価され，学内FDセミナーでの講師を務めた．自身の経験を基に，成書で示される記載方法や研究の展開について教示した．
8)奈良県作業療法士会主催 学術部セミナー「手のリハビリテーション」講師	令和3年10月	手外科疾患について，概要，評価，治療について臨床上有用な情報を教示した．
9）奈良県作業療法士会主催 現職者研修会「急性期の作業療法」講師	令和3年11月	急性期の作業療法に関してリスクマネジメントを中心に教示した．

事項	年月日	概　　要
５　その他 1）学部科目担当実績 星城大学リハビリテーション学部	平成22年4月 ～ 平成30年3月	星城大学リハビリテーション学部にて，「身体障害作業療法学」「身体障害作業療法学実習」「臨床運動学」「運動学演習」「臨床体表解剖学」「義肢装具学」「義肢装具学実習」「作業療法学特論」の科目担当として講義を行った．
2）修士課程科目担当実績 星城大学大学院リハビリテーション健康支援学研究科健康支援学専攻	平成25年4月 ～ 平成30年3月	星城大学大学院リハビリテーション健康支援学研究科健康支援学専攻にて，「病態運動学」「リハビリテーション健康支援学」の科目担当として講義を行った．
3）修士論文指導実績 星城大学大学院リハビリテーション健康支援学研究科健康支援学専攻	平成27年4月 ～ 平成30年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の学生1名（テーマ：橈骨遠位端骨折後の患者満足度とリハビリテーション期間の認識に影響する因子についての研究）に対して，研究指導補助教員として修士論文作成における研究計画策定から，データ分析，論文作成，発表資料作成に至るまでの一連を指導した．
4）学部科目担当実績 奈良学園大学保健医療学部	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部にて，「基礎ゼミⅡ」「人体構造学Ⅲ（神経・運動神）」「義肢装具学（総論）」「義肢装具学」「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」「作業療法評価学演習Ⅰ（身体）」「作業療法評価学特論Ⅰ（身体障害）」の科目担当として講義を行っている．

事項	年月日	概　　要
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
作業療法士	平成10年3月	第20618号
修士（保健学）	平成12年3月	広島大学　第16792号 修士論文題目：指把持力の圧変化から見た書字動作解析；健常人とパーキンソン病患者との比較
博士（保健学）	平成19年4月	広島大学　第4258号 博士論文題目：ZoneII屈筋腱断裂修復後の後療法の特徴に関する一考察 ： 3週間固定法とKleinert変法の経時的関節可動域の比較
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）土谷総合病院リハビリテーション科 作業療法士	平成12年4月 ～ 平成14年3月	主に整形外科病棟に入院する患者および外来患者のリハビリテーション業務に従事した．外傷，先天性疾患に対して，筋力，関節可動域の改善，日常生活動作能力の向上を意図した作業療法を実施し，社会復帰へと導けるよう尽力した．併せて，在宅でリハビリテーションを行う訪問リハビリテーションも行い，施設から在宅へとシームレスな対応が出来るように他職種との連携も心がけた．
2）名古屋掖済会病院リハビリテーション科 作業療法士	平成17年4月 ～ 平成22年3月	整形外科の一専門分野である手外科領域のみを担当する作業療法士として，救急対応から医師と綿密な連携を取りながら，術前，術中，術後対応を行った．重度外傷にあっては，リハビリテーションが遅延することによって起こる障害が多いため，医師の手術の意図を踏まえた早期リハビリテーションを心がけた．
3）臨床実習における指導	平成17年4月 ～ 平成22年3月	名古屋掖済会病院にて常勤で在職中に大阪リハビリテーション専門学校延べ5人，星城大学リハビリテーション学部作業療法学科学生延べ2人に対し臨床評価実習，臨床治療実習を実施した．手の外科領域という特殊性があるものの，作業療法において共通である実践技術について指導した．また，作業療法だけでなく他職種の業務についても把握するために，手術見学や外来診察，病棟回診などにも同行してもらった．作業療法を実施する前に他職種が多くかかわっていること，作業療法士として評価，実践するべき事項があることを理解してもらうよう努めた．

事項	年月日	概　　要
4）有資格者に対する実践研修指導	平成19年4月 ～ 平成22年3月	名古屋掖済会病院にて在職中に，手外科リハビリテーションに対する実地研修の受け入れを行っており，三河地域より2名，豊田地域より2名，名古屋地域より3名の有資格者に対し，実技研修を指導した．具体的には症例の病態に対する評価，治療方針の立て方などを実践に即して指導，討論を通じて洗練化を図った．
5）一般社団法人日本海員掖済会名古屋掖済会病院主催地域貢献事業エキサイ健康教室「手と足と口の健康チェック」，研修会講師	平成29年7月18日	通年シリーズで行われる地域住民への啓発としての健康教室で講師を務めた．当該日においては，握力などの測定も行い，自身の健康に対する意識を高めてもらった．参加者および院内からの評価も高く，今後も継続して行うこととなっている．
6）科学研究費取得（若手B） 「適切なリハビリテーション期間の決定に関わる因子の探索的研究」	平成25年4月 ～ 平成28年3月	橈骨遠位端骨折患者を対象とし，患者満足度と関節可動域や筋力などの機能的因子の関連から，適切なリハビリテーション期間を決定づける因子について探索検討した．他施設共同研究として160名について検討したところ，機能的因子が患者満足度に関連するのは術後8週までであること，終了に係る印紙として患者とセラピストの間で一致するアウトカムは患者立脚型評価であること，術後4週をベースラインとすると患者立脚型評価において33点以上の改善が必要であることが提案された．
7）科学研究費取得（基盤C） 「健常人と腱移行術症例に対する前頭前野負荷と運動学習遅延に関する実証的研究」	平成28年4月 ～ 平成31年3月	予め練習をした群（事前練習群）と練習をしない群（非練習群）を設定し，指示された一定のつまみ力を維持する課題を与え，さらにそれぞれにN-back課題（数個前の数字を想起し答える課題）を負荷し，大脳前頭前野における脳血流量を近赤外線分光法にて計測し，被殻した．結果，事前練習群においては脳血流量の増大を認めず，筋電図における振幅は漸減していた．一方，非練習群においては事前練習群とは逆の傾向が認められた．以上から，運動学習における習熟過程を前頭前野脳血流量と筋電図がアウトカムとなる可能性が提案された．さらに外傷による機能再建術としての腱移行術後のリハビリテーションへの応用を提案した．
8）日本ハンドセラピィ学会理事としての活動	平成27年4月 ～ 現在に至る	会員数約700人の日本ハンドセラピィ学会において理事を務め2期目となる．2期目からは認定資格審査委員会事務局長の役を任ぜられ，認定ハンドセラピストの申請，更新，研修会運営に係る全体調整および報告のとりまとめ，など学会の根幹に関わる部分を担当している．

事項	年月日	概　　要
9）第29回日本ハンドセラピィ学会運営局長，学術局長としての活動	平成28年4月 ～ 平成29年4月	日本ハンドセラピィ学会の年次学術集会が名古屋で開催されるにあたり，名古屋大学手外科教室とともに，中日病院に所属する学会長とともに，実務的な作業を行った．当初は，学術局長として任命されたものの，運営局の業務遅延により中途から運営局長を兼任した．開催当日にあっては，過去最高の約800人の参加者を迎え大成功であり，これに貢献した．
10）第5回中部日本ハンドセラピィ研究会代表世話人としての活動	平成30年1月27日	手外科専門医による一般社団法人日本手外科学会の下部組織となる中部手外科研究会においては，毎年研究会を開催している．この中部手外科研究会の医師の支持を受けて発足した中部日本ハンドセラピィ研究会においては，世話人会を組織し，中部手外科研究会と併催する形で4回の研究会を行ってきた．第5回にあっては，名古屋で行われることとなり，中部日本ハンドセラピィ研究会世話人会で指名され，中部手外科研究会で承認され，代表世話人となった．共催にあたり藤田保健衛生大学医学部整形外科の鈴木教授と折衝を重ね，新規的な研究会を企画し，開催した．
11）第35回日本ハンドセラピィ学会大会長として	令和3年4月 ～ 現在に至る	2023年4月開催予定の学会について大会長を拝命し，日本手外科学会側との交渉も通じて，企画を計画した．継続して活動中である．
12）科学研究費取得（基盤C）	令和4年4月 ～ 現在に至る	脆弱性骨折の初発となる橈骨遠位端骨折は高率で大腿骨頚部骨折といった二次骨折を発生するため，効率性のあるリスク評価が求められる．しかし，上肢骨折が転倒を主因とする二次骨折へとつながる一連のメカニズムは未解明である．これに対し，左右上肢活動量の対称性と動的立位バランスの相関性を明らかにし，予備的検討にて骨折側の運動制御パターンの変化を捉えた．すなわち，上肢骨折による中枢機能の変化が下肢機能へと波及しているとの仮説が成り立つ．方法としては，一次運動野から脊髄前角での複数の運動核への投射パターンを捉える筋シナジー解析を適用し，上下肢の運動制御の変化と姿勢反射および平衡反応との関連性を検討する．本研究は二次骨折のリスク評価への応用が期待される．
13）日本作業療法士協会主催「研究法」講師	令和4年6月11日 令和4年6月12日 令和4年12月10日 令和4年12月11日	有資格者に対して研究計画立案から倫理的配慮を教示し，各自立案した研究計画に対してアドバイスを行った．
14）日本ハンドセラピィ学会主催「研究法」講師	令和4年6月25日	ハンドセラピィを専門分野とする者に対し，各種研究実践を紹介したのち，当該分野に資する研究計画についてアドバイスを行った．
15）日本ハンドセラピィ学会主催「触診セミ	令和4年8月28日	学会主催にて実施している実技セミナーとしての触診技術について，座学及び実技について教示した．
16）奈良県作業療法士会　現職者講習会「急性期の作	令和4年10月2日	現職者に対して急性期の作業療法について教示し，地域連携も踏まえた対応の重要性を説いた．

事項	年月日	概　　要
４　その他 1）入試広報委員会としての活動	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学内における入試広報活動の要として，入学者増加対策やオープンキャンパスの企画，運営など入試広報活動全般にわたる対応を行っている．平成25年からの2年間は副委員長を務め，リハビリテーション学部における当該業務を一手に引き受けてきた．オープンキャンパスの運営については一部ルーティン化し効率化を図るとともに，教員帯同による高校訪問なども定着させた．
2）キャリア委員会としての活動	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学内における就職活動において要となるキャリア委員会にて一貫して対応してきた．リハビリテーション学部においては2年次からのキャリア教育を実施し，早期内定あるいは公的機関受験対応を軸として取り組んでいる．
3）広報委員会としての活動	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部における広報委員として，高校訪問，進学ガイダンス，オープンキャンパス対応として，企画・講師派遣等を行った．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1. 作業で語る事例報告作業療法のレジメの書き方・考え方	共著	平成26年3月	株式会社　医学書院	作業療法における「作業」に着目し，その評価法と解釈について記したものである．本書はこれに基づき多数の事例が報告されている． A4判　全164項 編者：斎藤佑樹 共著者：友利幸之助，上江洲聖，澤田辰徳，飯塚照史，他38名． 本人担当部分：第5章　生活に焦点を当てた事例報告の書き方　「生活の変化に向けて必要な作業を確認し目標設定を行った手外科事例」を単著． 伸筋腱断裂および手関節可動域制限を来した症例に対し，主観的な面接を中心として，機能的側面の評価とともに包括的に目標設定を行った．また，妻の逝去に伴う対象者の役割の変化を踏まえて，現実的かつ具体的な目標から，対象者とともに手…
2. リハビリテーション義肢装具学	共著	平成29年3月	メジカルビュー	リハビリテーション分野において重要な装具学の知識を教示した．本書の特養としては，豊富な事例を用いて具体的に示している点である． A4判　全453項 編者：清水順一，青木主税 共著者：飯塚照史，他25名． 本人担当部分：Ⅱ装具　1章　上肢装具「肘装具」「手関節装具」，手部装具各論2「末梢神経障害」を単著． 肘，手関節について実践上で用いた独自性の高い装具を例示し，慣習的な装具との違い，利点，欠点，適用を述べたうえで，こ
３．ハンドセラピィマニュアル（日本作業療法士協会編）	共著	令和2年2月	日本作業療法協会	日本作業療法士協会におけるマニュアルシリーズにて，評価に関して分担執筆した．当該マニュアルは日本における標準的なハンドセラピィ技術，知識の根拠となるものであり，その有用性は高い． A4判　全78項 著者：岡野昭夫，飯塚照史，稲垣慶之，内屋純，大山峰生，谷口しのぶ，茶木正樹，野中信宏，古田　裕之，武藤光弘 本人担当部分：「評価」について単著． ハンドセラピィ領域で多用される評価について，図表を用いて概説した．
4. 作業療法理論の教科書	共著	令和2年9月	メジカルビュー社	作業療法分野において適用される理論について，生体力学的モデルの分担執筆を担当した．学生への教示用として実践レベルを通して分かりやすく解説している． A4判　全255項 編者：小川真寛，藤本一博，京極真 著者：飯塚照史，他18名． 本人担当部分：「生体力学的モデル」を単著． 作業療法実践において機能評価を基にした治療におけるモデルを概説した．

5. 動画で学ぼう PT・OTのためのハンドセラピィ [Web付録付]	編集・共著	令和4年3月	医学書院	手のリハビリテーション（ハンドセラピィ）に関して初学者向けの教科書として，動画を加えて基礎から応用までを網羅し，コラムを加えて分かりやすく解説した. A4判　全160項 編者：斎藤和夫，飯塚照史，下田信明 本人担当：「ROM検査」「筋力評価」「感覚評価」「目標設定」「関節可動域の改善」「協調性の改善」の6章（全42項相当）を執筆した．加えて，編者として全体構成や動
（学術論文） 1. 客観的臨床能力試験場面のビデオフィードバックによる臨床実習前教育の取り組み. （査読付）	共著	平成26年4月	作業療法，33巻2号，p181-190	学内で実習前に実施する客観的臨床能力試験に際し，ビデオフィードバックを用いた学習の効果について述べた．学生は，当該ビデオを用いた学習形態をとっており，有効であったと述べた者が8割を超えており，実習前の学習手段として有用である可能性を述べた. 本人担当部分：データ収集，解析，論文推
2. 作業療法学生の臨床実習に対する意識の変容についての研究 （査読付）	共著	平成26年10月	星城大学紀要，14号，p43-56	作業療法専攻学生に対して，臨床実習前にストレスマネジメントを主眼とするコミュニケーション講座を開講し，その効果を学生アンケートからKJ法を用いて検討した．その結果，学生の不安は，当初漠然としたものであるが，後半には指導者や対象者との関係性構築に焦点化されており，その対策が必要であることを述べた
3. 滑車訓練における手関節主動筋の筋電位と握力の関係について （査読付）	共著	平成26年12月	日本ハンドセラピィ学会誌，7巻，p23-28	ハンドセラピィ領域で筋力増強目的に多用される滑車訓練について，実験的に検証した．手関節固定筋とともに，把持力を同期，解析した結果，10kg程度の負荷をかけてもその握力は最大握力の7割程度にとどまること，加えて手関節固定筋については最大握力発揮時の5割未満にとどまる事を報告した．以上から，握力増強には適さず，固定時における廃用性の筋力低下に対しての効果にとどまることを示した．さらに筋力増強効果としては，他の訓練法が有用である可能性を指摘したうえで，提案した. 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲
4. 手指PIP関節周辺骨折におけるDIP・PIP関節可動域の推移 （査読付）	共著	平成27年5月	日本ハンドセラピィ学会誌，8巻，p16-21	手指PIP関節脱臼骨折のリハビリテーションにおける可動域推移につき検討し報告した．開始当初にDIP関節のみの運動を実施している群については，これと同期するようにPIP関節の可動性が改善するのに対し，当該運動を実施していない群については，その相関性が低くなっていた．解剖学的，運動学的構造から，非損傷関節であるDIP関節の運動が最終成績の向上に有用であることを述べた.
5. The optimal rehabilitation period for patients with distal radius fractures according to the MCID in DASH scores; a preliminary study （DASH MCIDを基準とした橈骨遠位端骨折に対する至適リハビリテーション期間に関する予備的検討） （査読付）	共著	平成28年4月	Journal of hand surgery-Asia-Pacific, vol.21(2), p1-6	手外科領域のおける患者立脚型評価としてのDASHについて，臨床的に意味のある差が17点であるとされており，これを用いて橈骨遠位端骨折の早期運動療法開始群と非早期運動療法開始群の効果を検討した．その結果，ベースラインからの得点変化が17点であっても，機能的な差が生じていないことが明らかとなった．そのため，手関節可動域や筋力の改善を指標としたリハビリテーションのアウトカムについては有用性が見出させない可能性があることを指摘した．また，検討結果から，現状のリハビリテーションの効果は長くとも受傷してから8週間程度であり，現状の12週間程度のリハビリテーションについては疑問が生じていることを述べた. 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆
6. Correlation of the Hand 20 with the	共著	平成28年4月	Asian Journal of Occupational Therapy,	著者も加わり名古屋大学手外科教室を主体として作成した，本邦における患者立脚型

International Classification of Functioning, Disability, and Health and comparison of the results with those of the Disability of the Arm, Shoulder and Hand (Hand 20とDASHのICFによる関連性について) (査読付)			vol.11, p27-33	評価のHand20と世界的標準とされるDASHについて，その差異をICF概念へのリンクにて検討した．その結果，Hand20は手に限局する主観的困難感を聴取するのに対し，DASHは社会的不利について主軸を置いているものと捉えられた．以上とともに，2つの患者立脚型評価の得点を解釈するうえでは，対象者の測定範囲に配慮することが肝要であることを強調した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆 共著者：Terufumi Iitsuka, Tomoko Ohura, Takashi Fujita
7. 作業療法学学生に対する臨床実習前コミュニケーション講座の試み (査読付)	共著	平成28年12月	日本作業療法教育研究，16巻1号，p23-29	作業療法学専攻3年次学生35名を対象として，臨床実習（以下，実習）に向けた対人コミュニケーション能力向上と心理的支援を目的とした講座を4回実施した．講座実施中の学生の実習に対する不安は，講座開始当初は指導者や対象者との「関係作り」であった．しかし，実習直前には「知識・技術不足」に対する不安が高まる傾向にあった．しかし，講座における指導者などとの対人関係を意図したロールプレイングやストレスマネジメントとしてのリラクゼーション方法の教示は，実習前不安の自己評価得点を軽減していた．一方，実習後のアンケートでは，コミュニケーション困難として対象者の疾患特性や沈黙，消極的態度といった状況に直面し，対人反応への戸惑いを感じていた．今後は作業療法実践におけるコミュニケーション特性を具体的に検討した上で，実習で想定される困難場面に
8. 橈骨遠位端骨折手術例におけるセラピィ終了時期に影響を及ぼす要因について (査読付)	共著	平成29年5月	日本ハンドセラピィ学会誌，9巻3号，p131－135	先行研究にて当研究グループではハンドセラピィパスを作成し，その有用性を述べてきた．しかし，パスに適用されない患者についての検討がなされていないため，実施した．その結果，骨折系と掌屈可動域，握力がその要因として挙げられ，これらに対する対策が良好な成績を安定して獲得するためのポイントであることを指摘した．また，握力増強に有用な訓練としてタオル絞りを提案した． 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲
9. 臨床実習後作業療法学生におけるハンドセラピィに対する認識 （査読付）	共著	平成29年10月	日本ハンドセラピィ学会誌，10巻1号，p43－48	養成校作業療法学生の臨床実習後におけるハンドセラピィに対する認識を検討するために，作業療法特論（ハンドセラピィ）を選択した学生を対象として，提出レポートを用いた検討を行った．テキストマイニング手法により抽出された10コードを用いて主成分分析を行ったところ4つの成分に縮約された．また，主題分析による質的検討を踏まえると，学生はハンドセラピィを作業療法の一分野として認知はしているものの，その対象範囲は生活や作業と対極し，かつ作業療法士とは一線を画するものであるとの認識であることが示唆された．この要因として作業療法の定義と実践との乖離に対するジレンマの存在が推察され，卒前あるいは卒後教育にあってはハンドセラピィの定義と専門性，意義につき各分野との関連を念頭においた教示の必要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画策定，データ収
10. 脳血管疾患患者における回復期リハビリテーション病棟退院後の日常生活活動能力の変化および関連因子に関するアンケート調査 （査読付）	共著	平成30年6月	作業療法，38巻1号，p37-44	回復期リハビリテーション病棟退院後の脳血管疾患患者のADL能力は低下するとされ，退院前が最も高い能力を有するとされる．一方で慢性期脳血管疾患患者のADL能力と生活範囲，IADL能力やQOLは関連性があるとされるが，回復期病棟退院前を基準とした経時的変化との関連性の言及はない．本研究は脳血管疾患患者の退院前を基準とし在宅時とのFIM得点の比較，維持・改善と悪化に関わる因子探索を行った結果，移動項目に有意な低下を認め，FIM得点の維持・改善に

11. 運動学習段階を捉える新規的指標の開発に関する基礎的研究―事前練習の有無および健常若年者と高齢者の比較（査読付）	共著	平成30年10月	日本ハンドセラピィ学会誌，11巻2号，p58－67	関わる因子に生活範囲が関連していた．回復期の退院支援では，在宅時の活動範囲拡大を意図した指導でADL能力の維持・改善に寄与する可能性があった． 運動学習の過程における「認知段階」と「連合・自動段階」への対応は異なる．前者では新規的運動を認知するために言語的情報や生体信号をフィードバックするなどで強化，促進するのに対し，後者は反復する練習あるいは環境設定の異なる場面での運動が奏功する．したがって，ハンドセラピィにおける実践，とりわけ新規的運動獲得が主となる筋・腱移行術等を想定すると，当該段階を区別する必要性は高く，かつ客観的であることが望ましい．以上を基に本研究では，同時注意要求課題を与えた際の筋出力と筋電図振幅，ならびに前頭前野の活動領域から「認知段階」と「連合・自動段階」を区別する新規的指標を見出し，かつそれが若年者と高齢者に普遍的であるか否かを検証することを目的とした．結果，同時注意要求課題を与えた際の前頭前野活動領域は拡大し，かつ事前練習を行った者にあっては，運動習熟値（筋出力を筋電振幅で除した値）が増加する傾向にあった．本結果で認められた現象は，「認知段階」と「連合・自動段階」を区別できる客観的指標として応用できる可能性が示唆された．しかし，本研究における実験課題等については，再現性や客観性を担保す
12. 外傷手の予後予測（総説）	単著	令和1年10月	日本ハンドセラピィ学会誌12巻1号，2019	外傷手の予後予測について，戦略・戦術・アウトカムを基に，ハンドセラピィの対象疾患として頻度が高いと思われる代表的疾患に対しcritical pointとこれに関わるエビデンスについて述べた．手外科医との綿密な討論とチームワークで，外科的対応を含めた「戦略」および個々の局面での具体的な「戦術」を基に，ハンドセラピィでの「戦術」を立てる．並行してハンドセラピィ上の具体的な目標設定に沿って，これに反応するアウトカムについてICFを意識して認識することが重要である．加えて，最終成績を予想するための各時点のcritical pointによる中途結果の判断は，
13. 本学保健医療学部リハビリテーション学科志望経緯に関する調査（研究ノート）	共著	令和2年12月	奈良学園大学紀要第13集，149-155，2020	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の広報活動に資する基礎資料とするため，2020年度新入生の志望経緯および本学に対する印象等についてアンケート調査を行った．結果，理学療法・作業療法いずれの専攻についても，多くの学生は当初の志望を中途変更することはなかった．一方で，中途で変更する学生においては，自身の経験や自身の適性についての内省，さらに作業療法学専攻については，特徴的な技術に魅力を感じたことが契機となっていた．入学前の本学選択においては設備，環境面を魅力と感じており，入学後は教員や教育の質について肯定的な意見が多かった．以上から，低年齢における分かりやすい理学療法・作業療法に関する周知，あるいは本学の特徴的な講義等の教育方法に関する広報が有用であることを提案した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集・解析，論文執筆 共著者：飯塚照史、辻下守弘、池田耕二、

14. 橈骨遠位端骨折に対するハンドセラピィと最近のトピック（総説）	単著	令和2年12月	日本ハンドセラピィ学会 誌，14巻1号，2021	橈骨遠位端骨折は高頻度で発生する外傷であるがゆえに多くの研究が存在し，その予防から予後に至るまで多様な知見が存在する．ハンドセラピィにおける臨床実践レベルにあっては対象者の機能的因子の改善に最も焦点があたるが，俯瞰すれば効果的であるとされる技術は未だ明確ではない．したがって，その効果は未だ懐疑的であり不要論さえ存在するのが実状である．これに対し，現時点での研究のトレンドを踏まえると費用対効果に優れる早期ハンドセラピィ開始および早期終了が鍵であり，これに資するアウトカムの開発が本骨折に対するハンドセラピィ技術の継承・発展におい
15. 橈骨遠位端骨折に対する掌側ロッキングプレート固定術後のリハビリテーションにおけるHand20と患者満足度の関連性 （査読付）	共著	令和3年8月	日本ハンドセラピィ学会誌，13巻4号，2021	橈骨遠位端骨折は，術後3か月程度の急峻な回復ののち，１年程度にわたる緩徐な回復を示すため，Minimally Clinical Important Difference（臨床的に意味のある差）の算出方法を参照し，患者満足度を改善させるHand20得点の改善量について検討した．術後4週をベースラインとすると，手全体の機能に対する患者満足度を改善するHand20得点の改善量のカットオフ値は26
16. 移乗介助動作における医療従事者の筋活動 ―腰痛予防に向けた分析―	共著	令和3年11月	作業療法ジャーナル 55巻12号，2021年	セラピストの移乗動作中の腰部筋の筋電図から腰痛を発生させないための動作上の工夫について考察した．体幹全体をなるべく屈伸させず，膝関節を用いた動作介助が有用であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文推敲，一部執筆 共著者：谷口敦也，窪優太，飯塚照史
17. 2021年度リハビリテーション学科新入生における志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要第13集，149-155，2020	学部設置3年目を迎えたリハビリテーション学科においては，定員充足率増加に伴い新入生の進学経緯も多様になっているものと考えられる．そこで，3期生においてアンケート調査を実施し，2期生との比較を通じてその傾向について比較検討した．結果，当初における職業選択は変更されることなく，近しい人物への相談を伴ったオープンキャンパスへの参加，加えて本学近隣環境等への好感を以て進学を決定している経緯があり，2期生との大きな変化はなかった．一方で，プレゼンスの高まり，教員対応への肯定的意見と捉えられる側面もあり，本学魅力の一端として認識する必要性が示唆された．以上の結果は，今後の広報戦略に資するものであると考えられた． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集・解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，辻下守弘、池田耕二、
18. Factorial validity and internal consistency of a practitioners' checklist for therapists in rehabilitation （リハビリテーションにおける療法士のための実践者用チェックリストの因子的妥当性と内的整合性）（査読付）	共著	令和3年12月	JBI Evid Implement 2021; 19:387-393.	病院・訪問で働く療法士を対象にリハビリテーション実践におけるチェックリストの因子的妥当性と内的整合性を検証した．分析対象は385人で，4因子20項目のモデル適合度はRMSEA0.083，GFI0.843,AGFI0.799で、因子間の相関は0.67-0.95，各因子からの因子負荷量は20項目すべてで0.41以上だった． Cronbach's α係数は0.896，0.890，0.935，0.925だった． 本人担当部分：研究計画策定，論文推敲，一部執筆 共著者：Ohura t, Tsuyama T, Furusawa M,
（その他） ＜国際学会＞ 1.A pilot study of influences of the thumb abduction limitations on the control of the rice-ball precision grip （母指外転制限による茶碗把持への影響に関する予備的検討）	-	平成26年6月	16th international congress of the world federation of occupational herapists（第16回世界作業療法士連盟大会：横浜）	模擬的に母指関節角度を制限し，茶碗保持への影響を筋電図および関節角度をパラメータとして比較検討した．直径11センチの茶碗保持においてMP関節可動域，母指球筋の筋積分値増加が認められた．実践にあっていずれかの関節に制限が認められた場合，当該関節および筋に対する配慮が必要であることがわかった． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：辻村雅美，飯塚照史，宮本定

				治
2. Occupational therapy approaches for bi-lateral metacarpal hands; A case report which have returned to work through proposing a treatment plan by patient’s desires （両側メタカルパルハンドに対する作業療法；患者の要望に合わせた治療方針提案により復職に至った一例）	－	平成26年6月	16th international congress of the world federation of occupational herapists（第16回世界作業療法士連盟大会：横浜）	両側の手指切断および母指の一部挫滅によるメタカルパルハンドの患者に対し，いくつかの治療方針を医師とともに提案しながら，本人の希望に沿った治療を行なった．結果的に足趾移植術を選択され，5年後の追跡調査においてもボタン操作や書字なども実施しており，有用であった． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿作成 共同発表者：飯塚照史，宮本定治，高見昌史
3. The effect of mixed tasks on pretraining for grasping tasks with a fixed gripping power: A preliminary study （つまみ力一定把持課題の事前練習に対する混合課題の影響：予備的検討）	－	平成29年11月	5th congress of the Asia Pacific Federation for Societies for Hand Therapy （第5回アジア太平洋ハンドセラピィ学会：フィリピン）	本研究では健常人を対象に，事前練習の有無が混合課題によって阻害されるか否かによってその客観的区別の可能性について予備的に検討した．結果，前頭前野における活動領域が大きいほど，一定のつまみ力に対する筋電図振幅が漸減していた．つまり，前頭前野の負荷をかけても末梢で学習が起きている状況であれば，運動学習が進行しているものと捉えられ，客観的指標の一つして提案した．
「招待講演」 1. 手外科領域の作業療法	－	平成26年3月	滋賀県作業療法士会主催　学術部研修会 （滋賀県栗東市）	滋賀県作業療法士会主催の研修会にて，他分野（脳卒中，精神疾患等）とともに，手外科領域における作業療法の展開について教示した．共通点として国際生活機能分類（ICF）を用いた障害像の捉え方，異なる点として医学的知識の重要性について説い
2. 橈骨遠位端骨折に対する作業療法	－	平成26年10月	滋賀県作業療法士会主催　学術部研修会 （滋賀県栗東市）	滋賀県作業療法士会主催による研修会において，対応する機会の多い疾患として橈骨遠位端骨折について教示した．エックス線読影ならびに初期評価から抽出される問題点に対する運動プログラムの立案について
3. 臨床・教育・研究から捉えるハンドセラピィ	－	平成28年2月	九州ハンドセラピィ研究会第7回学術集会教育講演（福岡市）	九州ハンドセラピィ学会における特別講演として，臨床，卒前卒後教育，研究の3領域にまたがる共通の問題点を明らかにしたうえで，今後の方向性について論じた．養成課程におけるハンドセラピィに関する教育
4. Hand therapy for distal radius fractures Current trends	－	平成30年11月	Asia pacific wrist conference 2019 （narita, Japan）	アジア太平洋地域の手関節外科に関わる医師とセラピストが一同に会する国際学会において，本邦におけるハンドセラピィの実践状況とともに自身の研究内容について講演を行った．とりわけ，橈骨遠位端骨折に
5. Therapy for hand trauma: The importance of cooperation between surgeons and therapists	－	平成31年3月	18th shanghai international plastic and aesthetic surgery conference (Shanghai, china)	中国上海で行われた形成外科国際学会のセラピストセッションにおいて医師向けの招待講演を行った．本邦における外傷手の術後対応と初期治療後のリハビリテーションや機能再建に向けた対応について具体的に
6. 外傷手の予後予測	－	平成31年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（北海道札幌市）	ハンドセラピィにおいて比較的頻度の高い外傷として，屈筋腱損傷，伸筋腱損傷，骨折（主に橈骨遠位端骨折），末梢神経障害，手指再接着術後，手指切断に焦点を当て，その予後に影響する因子あるいは臨床
7. 外傷手に対するハンドセラピィと効果判定について	－	令和元年5月	京都ハンドセラピィ研究会（京都）	外傷手のハンドセラピィにおけるアウトカムに着目し，その得点を解釈することの重要性について述べた．併せて，現在進行中の研究における中途報告も兼ねて行い，ハンドセラピィ効果を判定するための新規アウトカム開発の重要性について説いた．
8. 関節外骨折に対する手術例のセラピィ	－	令和元年9月	第12回手関節外科ワークショップ（奈良）	橈骨遠位端部における関節外骨折はAO分類のA2およびA3に該当し，60歳以降で高頻度となることからosteoporosisの影響が示唆される．したがって，骨折の連鎖を予防し健康寿命の延伸に資するためには，日常生活において十分に使える手での早期社会復帰が望ましい．これに対する特異的なハンドセラピィ手技は存在しないものの，前述の背景を踏まえると，如何に早く回復させ，それをどのようなアウトカムで判断するのかが最大の関心事であると捉えられる．以上を基に，本シンポジウムではハンドセラピィパスの紹介，外科的対応も含めた早期回復への工夫，新規的アウトカムの提案の3点を通じ，関節外骨折に対するセラ

9. Preliminary study on the usability of a tri- axial accelerometer: Evaluation of how postoperative distal radius fracture patients use their hands in ADL (3次元加速度計の有用性に関する予備的検討：橈骨遠位端骨折後の患者の日常生活における評価)	-	令和元年3月	APFSSH/APFSHT2020 (Melbourne, Australia) アジア太平洋手外科学会/ハンドセラピィ学会（メルボルン，オーストラリア）	橈骨遠位端骨折に対するハンドセラピィでは，日常生活で不自由なく使用できる手の獲得を目標とする．これに対し，Lang CEらはウェアラブル加速度計での計測方法を開発し脳卒中患者に適用して上肢使用量の把握に有用であったことを報告している．本研究ではこの方法論を橈骨遠位端骨折患者に適用し，経時的推移および機能的結果との関連性について検討した．結果，受傷側手の使用時間は手関節角度，握力に，また，両手の使用時間と患者立脚型評価の間に正の相関関係が認められた．さらに，Total magnitude ratio（左右のvector magnitudeの比）が健常人の閾値以下の場合，機能的回復が劣る傾向にあった．以上から，ウェアラブル加速度計は橈骨遠位端骨折後の日常生活における上肢活動量の計測に有用である可能性がある．しかし，い
10. 橈骨遠位端骨折に対する作業療法と最近のトピック	-	令和2年9月	第53回日本作業療法学会（新潟）	橈骨遠位端骨折に関する現時点での研究のトレンドを踏まえ，費用対効果に優れる早期ハンドセラピィ開始および早期終了について根拠を説明した．さらに，これに資するアウトカムの開発が本骨折に対するハンドセラピィ技術の継承・発展において喫緊の課題と捉えられる点について論じた．
11. 複合組織損傷に対するハンドセラピィ	-	令和3年1月	第8回中部日本ハンドセラピィ研究会（名古	複合組織損傷を伴う外傷手について，機能面としてどのような手を目指すのか（戦
12. 拘縮に対する徒手療法		令和4年2月	第9回中部日本ハンドセラピィ研究会（名古屋）	ハンドセラピィ中に発生する拘縮に対して予防を主とした徒手療法について，拘縮発生のメカニズムと自身の研究を踏まえて概説した．具体的方法論についてもデータと
13. PT・OTのためのハンドセラピィ		###########	医学書院セミナー	書籍出版に併せて当該内容を基とした実践での応用について説明した．
14. 外傷手の予後予測		###########	金沢ハンドセラピィ研究会	初療時所見から外科的対応を予測し，機能低下を未然に防ぐ対応について説明した．
15. 専門作業療法士の実践　養成校教員の立場から		###########	第56回日本作業療法士学会学術集会（京都）	養成教育に際して，作業療法士の専門性を高めるために学生の傾向を踏まえ，教示すべき内容や最新のトピックと作業療法との関連性から，その内容についての考えを説
16. 私の考える　Translational Hand therapy		###########	なにわハンドセラピィ研究会	ハンドセラピィ領域の学術的知識の整理とともに，近接あるいは遠隔領域にある内容とコラボレーションすることで，新規的提案が出来ることについて説いた．とりわけ，骨折後の転倒リスクについて継続中の研究内容を一部紹介し，将来的展望につい
17. 作業療法にできることってなんだろう		###########	奈良県作業療法士会	作業療法学分野における可能性や臨床実践にあたるうえでの心構え，概念等について説明した．作業療法の定義にとらわれず，今後の展望を踏まえた対応が必要であるこ
18. スプリント療法の紹介		###########	人ヘルスケア株式会社主	スプリント療法の概念を紹介し，痙縮治療に資する内容を文献的考察を踏まえて説明した．参加者は個人開業医が多く，地域貢
「シンポジウム」 1. DASH　MCIDを指標とした橈骨遠位端骨折術後リハビリテーションの至適期間の構築	-	平成26年2月	中部日本手外科研究会（下関）	橈骨遠位端骨折術後のリハビリテーションについて臨床的に意味のある差（MCID）を指標とした場合，開始時期は可及的早期が望ましく，リハビリテーション至適期間は8週であることが示唆された．また，手関節尺屈可動域と握力が終了時期を見極めるた
「成果報告書」 1.学生のコミュニケーション技能向上に向けたプログラム開発と評価に関する研究	共著	平成28年3月	星城大学元気創造研究セ ンター助成研究	平成25年度から27年度までの助成研究についてその進捗および成果を報告した．年度ごとに対象となる学生が異なるにも関わらず，臨床実習前の学生の不安傾向が普遍的であることと，これに沿ったコミュニケーションプログラムが有効である可能性を指摘した．
2.「若手研究B」適切なリハビリテーション期間の決定に関わる因子の探索的研究	単著	平成28年6月	科学研究費助成事業研究成果報告書	橈骨遠位端骨折に対するリハビリテーションはおおむね3か月で終了するが，その正当性は不明である．患者自己記入式の評価得点を指標としてデータを検討すると，術後3日程度から開始するリハビリテーションは

3.運動学習段階を捉える新規的指標の開発に関する基礎的研究 － 健常若年者と高齢者の比較 －	共著	平成29年2月	一般社団法人日本ハンド セラピィ学会 研究助成事業2016年度 学研究課題研究成果報告書	支持されるが，その効果は8週間程度までであった．さらに，リハビリテーションの終了は医療者と患者の合意によって成り立っているため，双方のリハビリテーション継続に対する認識を加味した検討を行った．その結果，関節可動域や筋力などの客観的指標との関連は見当たらなかった．日常生活における手の使用を以て改善する部分が大半を占めている現状から，リハビリテー本研究では若年者および高齢者を対象に運動学習に相違があるか否かについて検討する事を目的とした．実験はrest（20秒）－task（30秒）を繰り返すブロックデザインとし，taskは3種類とした（A：n-back課題，B：最大つまみ力の3割を保持する課題，C：task Aとtask Bの混合課題）．データは近赤外線分光法（NIRS）による前頭前野の脳血流量（Oxy-Hb），および筋電図（第1背側骨間筋：FDI，橈側手根伸筋：ECR）とした．対象は，若年者4名（平均年齢21歳，女性），高齢者2名（67歳，80歳，女性）とし，ランダムに事前に一定のつまみ力発揮を十分に練習する群（事前練習群：若年者2名，高齢者1名）と，確認のみで練習をしない群（非事前練習群）に分けた．結果，task A，Bにおける脳血流量の差異はいずれの群にても認められなかった．一方で，task Cにおいては，脳血流量の差異はほとんど見られないにもかかわらず，事前練習群では特にECRの活動電位が漸減していた．未解析ではあるが，同様の傾向は高齢者にても認められた．今後，さらに解析を実施することで傾向を明らかにすることが出来るものと考えられる．本結果が共通となれば手外科領域における腱移行術な
4.「基盤C」健常人と腱移行術症例に対する前頭前野負荷と運動学習遅延に関する実証的研究	共著	令和元年6月	科学研究費助成事業研究成果報告書	リハビリテーション分野での応用を視野に，運動学習の過程における「認知段階」および「連合・自動段階」の客観的区別を可能とする方法および指標の提案を研究目的とした．予備的検討結果に基づき，特定の課題について事前に十分練習をした者は，当該課題を遂行中に前頭葉活動を賦活するための課題を同時に与えても，効率性良く筋出力を発揮するものと仮定し検証した．事前に練習しない者と比較した結果，一部は仮説を支持する傾向が認められた．一方で，健常被験者において生来持ち合わせている運動経験の影響も考えられるため，患者群への応用は限定的であるものと考えられた．そのため，よりBalisticな運動としての指タッピング動作を課題としたところ，当該動作における筋収縮の効率性
「学会発表」 ＜国内学会＞ 1. 手指・母指損傷後の患者を対象とした自己機能・能力障害評価表の開発	－	平成26年4月	第26回日本ハンドセラピィ学会（沖縄）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第１期である本研究では，母指・手指で特異的に支障をきたすと考えられるADL項目を抽出し，因子分析にて24項目に絞った． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：原田康江，佐藤彰博，野中信宏，飯塚照史，桂理，安部幸一郎
2. 逆説性歩行を用いた課題志向型訓練に取り組み，歩行開始遅延・歩行中のすくみ足に変化が見られた一例	－	平成26年10月	第8回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス（京都）	姿勢反射障害・筋強剛の症状によりすくみ足・動作緩慢が出現し，トイレ動作時または移動時に困難を感じている初期パーキンソン病患者に対し，先行研究で示されている外的手掛かりに加え，これに方向転換課題を組み込むことで，より生活動作内容に近い状況を設定した．その結果，自覚・他覚ともに歩行速度・動作緩慢は改善し、トイレまでの歩行動作質向上が得られた． 本人担当部分：研究計画策定，原稿推敲 共同発表者：金坂有紀，児島範明，宮本定治，飯塚照史，梅本安則

3. 手外科疾患における疾患特異的QOL評価表の開発-肘部管症候群-	-	平成27年4月	第27回日本ハンドセラピィ学会（東京）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第１期である本研究では，肘部管症候群で特異的に支障をきたすと考えられるADL項目を抽出し，因子分析にて20項目に絞った． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：野中信宏，佐藤彰博，原田康江，飯塚照史，桂理，阿部幸一郎
4. 手外科疾患における疾患特異的QOL評価表の開発-橈骨遠位端骨折	-	平成27年4月	第27回日本ハンドセラピィ学会（東京）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第１期である本研究では，橈骨遠位端骨折で特異的に支障をきたすと考えられるADL項目を抽出し，因子分析にて26項目に絞った． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：桂理，佐藤彰博，野中信宏，原田康江，飯塚照史
5. 手指・母指損傷後の患者を対象とした自己機能・能力障害評価表の再現性と妥当性	-	平成27年4月	第27回日本ハンドセラピィ学会（東京）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第2期である本研究では，母指・手指損傷に関して第１期で試作した評価表の再現性と妥当性を検証した． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：原田康江，佐藤彰博，野中信宏，飯塚照史，桂理，阿部幸一郎
6. コミュニケーション講座受講学生の実習直前の不安要因と実習成績との関連に関する探索的検討	-	平成27年10月	第20回日本作業療法教育研究学術集会（奈良）	養成教育過程における臨床実習前に学生に対して職業倫理の涵養も踏まえたコミュニケーション講座を実施した．学生の実習前の不安は多種多様であり，さらにこれと実習における評価得点には関連性はなかった．しかし，実習に対する不安傾向の特徴から，今後の講座展開に資する示唆を得た．
7. 橈骨遠位端骨折手術例におけるセラピィ終了時期に影響を与える要因．	-	平成28年4月	第28回日本ハンドセラピィ学会（広島）	本人担当部分：研究計画策定，データ分先行研究にて当研究グループではハンドセラピィパスを作成し，その有用性を述べてきた．しかし，パスに適用されない患者についての検討がなされていないため，実施した．その結果，骨折系と掌屈可動域，握力がその要因として挙げられ，これらに対する対策が良好な成績を安定して獲得するためのポイントであることを指摘した．また，握力増強に有用な訓練としてタオル絞りを提案した．
8. 手指屈筋腱断裂の術後成績不良因子とセラピィのアウトカム評価について	-	平成28年7月	第16回東海北陸作業療法学会（金沢）	後方視的検討により手指屈筋腱断裂の成績を検討した．ROC解析の結果，術後６週時点におけるカットオフ値が見出され，臨床的な指標となる可能性が示唆された．
9. 橈骨遠位端骨折に対する掌側ロッキングプレート固定術後のリハビリテーションにおけるHand20のMinimal Clinically Important	-	平成29年4月	第29回日本ハンドセラピィ学会（名古屋）	橈骨遠位端骨折後のハンドセラピィにおいて多用されるHand20の臨床的に意味のある差（MCID）を検討した．結果，術後４周をベースラインとした時に，12週時点で33点以上の変化がある場合に，患者も満足するという結果であった．
10. 運動学習段階を捉える新規的指標の開発に関する基礎的研究；健常若年者と高齢者の比較	-	平成30年4月	第30回日本ハンドセラピィ学会（東京）	本研究では，同時注意要求課題を与えた際の筋出力と筋電図振幅，ならびに前頭前野の活動領域から運動学習段階を区別する新規的指標が若年者と高齢者に普遍的であるか否かを検証することを目的とした．結果，同時注意要求課題を与えた際の前頭前野活動領域は拡大し，かつ事前練習を行った者にあっては，運動習熟値（筋出力を筋電振幅で除した値）が増加する傾向にあり，若年者と高齢者で共通であった．しか

11. 患者および医療者側のハンドセラピィ継続要否を基とした橈骨遠位端骨折後のリハビリテーション至適期間策定に関する探索的研究	-	平成31年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（札幌）	本研究では，「患者，セラピスト双方におけるハンドセラピィ効果の認識を通じて治療継続の要否を判断している」と仮説を立て，これに影響する因子の特定を目的とした．結果，ハンドセラピィ継続の要否におけるセラピストと患者間の齟齬は，術後8週以降で顕著であり，影響因子として，セラピスト側では機能的因子，患者側ではHand20が一貫して挙げられており，双方でハンドセラピィ効果を判断する指標は異なるものと推測された．一方で，共通因子と
12. 手外科疾患における疾患特異的QOL評価表の開発-橈骨遠位端骨折質問票試案の再現性・妥当性の検証-	共著	平成31年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（札幌）	橈骨遠位端骨折に対するハンドセラピィ効果を判定するための患者立脚型評価表について述べた，本発表ではその再現性と妥当性を検証し，他の評価表と比較しても遜色ないことを確認した．
13. 橈骨遠位端骨折術後の抑うつは満足感に関連するか　―多施設間研究―	共著	平成31年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（札幌）	抑うつとは，気分の落ち込みや興味・喜びの喪失などうつ症状が出現している状態のことであり，橈骨遠位端骨折の術後成績と関連があるとされている．抑うつが橈骨遠位端骨折の術後成績に影響するのであれば，患者の満足感にも影響する可能性があると考えられる．検討の結果，術後の抑うつと，手の機能の一部に関連があったが，患者が手の機能に満足する時期やリハビリテーション終了を希望する時期との関連はなかった．よって，橈骨遠位端骨折術後の
14. 患者および医療者側のハンドセラピィ継続要否を基とした橈骨遠位端骨折後のリハビリテーション至適期間策定に関する探索的研究	共著	平成31年年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（札幌）	橈骨遠位端骨折後に最大限の機能的回復を得るには1年以上の期間を要する（Swart E, 2012）ため，短期的かつ費用対効果に優れるハンドセラピィ至適期間の策定が望まれ，Cochrane review (Handoll H, 2015) においても強調されている．一方で，口頭指導が定型的なハンドセラピィよりも機能的回復に優れることが報告されており（Souer JS, 2011），その効果を機能的因子のみで説明するには限界がある．本研究では，「患者，セラピスト双方におけるハンドセラピィ効果の認識を通じて治療継続の要否を判断している」と仮説を立て，これに影響する因子の特定を目的とした．その結果，ハンドセラピィ継続の要否におけるセラピストと患者間の齟齬は，術後8週以降で顕著であり，影響因子として，セラピスト側では機能的因子，患者側ではHand20が一貫して挙げられており，双方でハンドセラピィ効果を判断する指標は異なるものと推測された．一方で，共通因子としてのHand20があることから，これを主要評価項
15. 橈骨遠位端骨折患者の上肢活動の経時的回復における損傷側別特徴	共著	令和4年4月	第34回日本ハンドセラピィ学会学術集会（北九州）	左右上肢の活動量から受傷側と非受傷側の回復特徴につき報告した．利き手の回復が速やかとなる一方で，非利き手の回復が遅延していた．また，相関する機能的指標とも相関が異なっており，損傷側別の特徴を踏まえたハンドセラピィにつき提案した．

（注）
1　最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　5 年　3 月 31日

氏名　池田　耕二

研究分野	研究内容のキーワード
リハビリテーション科学，理学療法学，教育工学	理学療法学・理学療法教育，教育工学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1）図示化教材と臨床現場を体験できるスライド教材を用いたシュミレーション教育の実践	平成18年4月 ～ 平成25年9月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当授業科目：理学療法治療学Ⅱ 授業は，暗記型の授業ではなくできるだけ理学療法とはどういったものか考えることができるような授業にした．そのために授業資料は図によって見やすくレイアウトしたものを用いたり，臨床現場のスライド等をみせつつ，学生自身に実際現場に立てばどういった態度や評価，実践を行うかを問いながら，シュミレーショを交え学生とともに検討するスタイルにした．また，ときには勉強の仕方や資料の調べ方など，実践現場で臨床を行いながらどのように勉強していくのか等を，経験を交えて教示した．その結果，学生は理学療法実践するにあたって自分に何が足らないかを再認識し，自ら勉強しなければならないという姿勢を学ぶことができたと考える．
2）ペイパーペイシェントとインターネット活用による認知スキルトレーニングの実践	平成23年4月 ～ 平成26年3月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 担当授業科目：理学療法技術実習2，総合技術特別実習3 授業は，理学療法の認知スキル，つまり技術の一つとしての理学療法臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題を抽出し，それを基に仮説生成しながら理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．その結果，問題を解決していこうとする姿勢や具体的な解決方法を学ぶことができた．
3）個々の学生の習熟度に合わせた学外実習指導	平成24年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目：理学療法体験実習，評価実習，総合臨床実習 学外施設で行われる各臨床実習を，個々のレベルに合わせて円滑に行えるようにするため，実習前には各学生と個人面談を行い，知識の習熟度，コミュニケーション能力，その他，不安なことを確認し，それを学外施設の指導者と共有しながら実習を行った．必要に応じて実習前に実技練習を行ったり，また何度も学外施設に出かけたり，学生との面談を繰り返したりした．　これにより学生のレベルに合わせた実習が可能となり，個々の学生が成長できた．

事項	年月日	概　　要
4）チーム別体験学習による教育実践	平成26年4月 ～ 平成28年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当授業科目：日常生活活動学演習 授業では，代表的な疾患を整理しながら，日常生活活動の評価法を教授し実践させた．また，障がい別に日常生活活動や生活関連動作の評価や動作指導，介助方法等についても，疑似体験させ理解を深めさせた．チーム別にレポートをまとめさせることでチームアプローチの重要性を体験させ，実際の現場で口頭指導ができるような体験も取り入れた．これにより日常生活活動における評価や指導力がついた．また，学年によっては理解を深めるために，班長には別に1コマ時間を作り，実践を教授し，それを伝えさせる練習も加えた．これにより学生の学習も進んだ．
5）高齢患者の動画教材を用いた教育実践	平成26年4月 ～ 平成30年9月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当授業科目：老年学 大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当科目：老年期疾病論，老年期障害理学療法 授業では，学生があまり触れることない高齢者の身体的特徴をはじめ，疾患，環境についての講義を行った．その際には実際の患者の動画やデータを基に臨場感をもたせ，本学問と理学療法との関わりについて講義した．これからの高齢者には，地域における転倒，認知症，腰痛，生活習慣病に対する予防理学療法が大切になってくることも教授し，理解を深めた．これにより高齢者理学療法の実態を理解し，興味をもって老年学を学習できるようになった．
6）ペイパーペイシェントとインタ-ネットを活用したチームアプローチ実践	平成26年9月 ～ 平成29年3月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 担当授業科目：チームリハビリテーション特論 授業は，理学療法におけるチームアプローチによる臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題抽出し，それを基に仮説を生成しながらチームアプローチによって理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．これによりチームアプローチによる臨床推論と理学療法プログラムの立案能力が養われた．
7）終末期・がん患者リハビリテーションにおけるスライド教材の作成と教育実践	平成28年9月 ～ 現在に至る	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 担当授業科目：基礎医学特論Ⅰ 授業では，一般病院，地域におけるがんリハビリテーションについて教授し．生活の質を高めるための実際の工夫も加え，興味をひくように展開した．その際は，触れる機会の少ない終末期がん患者のリハビリテーションの風景のスライド教材を作成し，「生」や「死」，支援，ケアについて考えてもらうようにした．これによりがんリハビリテーションに対する知見を深めることができた．

事項	年月日	概　　要
8）予習，体験，復習シートを用いた訪問リハビリテーションにおける教育実践	平成28年9月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当授業科目：地域リハビリテーション 本授業では，実際の現場の写真や動画を多用し，症例検討式にして実際の訪問リハが疑似体験できるように進めた．また，その際には，予習シート，体験シート，復習シートを作成し，現場に臨む姿勢，学ぶ姿勢，復習する姿勢を養うように工夫した．さらには，在宅における看取りまでの終末期理学療法をみてもらい，これからの訪問リハの有り方をともに考えることにした． また，地域リハビリテーションは，疾患だけでなく，地域特性や社会情勢からも大きく影響をうけたり，個々の価値観が大きく反映するため，書物を多く読んで考えることが大切となる．そこで,少し時間をかけて書物多く読んでもらい,レポート量も増やして熟考して貰う練習も行った．これにより,地域リハビリテーションの奥深さとかんがえることの大切さを学ばせた．
9）運動学I（総論）ワークブックを用いた教育実践	令和元年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　運動学I（総論） 本授業では，運動学の総論を講義した．しかし，その範囲は非常に広く，どれも重要事項であるため，学生がどこから手をつけて良いかわかりづらくなっている．そのため，学生の学習意欲が下がる危険性も大きい．そこで，学習の方向性を示したり，運動学の理解を促すワークブックを作成し，それを用いて講義を行なった．これにより，自己学習を促し，学習意欲の低下を防ぐことができた．
10）オンデマンド・ライブ配信を行った学内・見学実習	令和2年8月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　早期体験実習（理学療法） 本実習は，外部の医療施設におもむき見学を通して学習を深めるものである．しかし，コロナ感染のため学内実習に切り替えた．できるだけ従来の実習に近づけるため，動画教材を作成し，病院からもライブ配信を実施した．さらには予習，復習のためのホームページも作成し，学習を変化にすすめた．これにより従来の見学実習と同程度の学習内容が得られたものと考える．ただし，実際に現場に行けなかったことは大きな不安材料になったことは否めない．

事項	年月日	概　　要
11）オンデマンド・ライブ配信を行った学内・地域理学療法実習	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　地域理学療法実習 本実習は，外部の介護保健施設，地域におもむき見学等を通して学習を深めるものである．しかし，コロナ感染のため学内実習に切り替えた．できるだけ従来の実習に近づけるため，動画教材を作成し，病院からもライブ配信を実施した．さらには予習，復習のためのホームページも作成し，学習を変化にすすめた．これにより従来の地域理学療法実習と同程度の学習内容が得られたものと考える．ただし，実際に現場に行けなかったことは大きな不安材料になったことは否めない．
12）予習・復習ワークシートを用いた徒手筋力検査学実習の教育実践	令和2年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　運動器評価学I（総論） 本講義は，コロナ禍においてオンライン・対面のハイブリッドで実践されたため，実技時間が限られていた．そこで，できるだけ効率よく学習をすすめるために予習用ワークシートを作成し，これにより自己学習を促した．限られた実技練習の時間には，予習シートから理解度が低い考えられるところを抽出し，そこを重点的に説明できるようにした．これにより対面と同じ程度，学習効果を維持できたと考える．
13）課題ワークシートを活用した日常生活動作学演習の実践	令和2年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　日常生活活動学演習 本演習は，コロナ禍においてオンライン・対面のハイブリッドで実践されたため演習時間が限られていた．そこで，できるだけ効率よく学習をすすめるために日常生活動作学演習の課題ワークシートを作成し，それをもとに考えるグループ学習を実践した．これにより演習は教える垂直型教育だけでなく，学生同士による平行型教育も可能となり，考える学習が実践できたと考える．これにより対面と同じ程度の学習効果が得られたとも考える．
14）高齢者のQOLを向上させるための外出プランの作成課題を通した地域理学療法学習	令和2年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　地域理学療法学演習 本演習は，地域理学療法学を習得後，あらためて個々の対象者に対する地域理学療法学を演習を通して学ぶものである．本演習では，障害を有する高齢者を設定し，QOLを向上させる外出計画を個々に立案させた．立案計画は，同じ設定であっても多様な内容になることや，それぞれ意味合いが違うことを明らかにした．これらの実践により，地域理学療法学の多様性を学習できたと考える．

事項	年月日	概　　要
２　作成した教科書，教材 1）図式化教材の作成	平成18年4月 ～ 平成25年9月	大阪医療福祉専門学校 担当授業科目：理学療法治療学Ⅱ 整形疾患に対する理学療法において，図で見る教材を作成し，視覚にうったえる教材を作成し，それに基づいて教育を行った．これにより教科書に苦手意識をもつ学生も興味をもって臨むようになり学習効果が向上した．
2）理学療法士のための物理療法臨床判断ガイドブック	平成19年9月 ～ 平成23年12月	病院現場における臨床実習指導 物理療法における浮腫に関する個所を担当し，ディシジョンツリーによって，わかりやすく治療を判断できるようにした（出版）．
3）認知症後期高齢者に対する理学療法の実践知の構造化による教材作成	平成20年4月 ～ 平成23年12月	病院現場における臨床実習指導 学生にとって対応が難しいとされる認知症患者の理学療法を指導する際に，認知症後期高齢者に対する理学療法から実践知を構造化し，図示化したものを活用し，臨床実習指導を行った．これにより学生は，認知症後期高齢患者の理学療法における方向性や概要が把握しやすくなり，学習効果が進んだ．
4）臨床における動作分析についてのプレゼンテーション資料（教材）の作成	平成22年6月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 特別講義：動作分析 病院における患者の状態を観察し，１）病態を探る，２）その能力から何ができるかを考える，３)動作の意味を考える，といったように動作分析の重要性や活用方法をわかりやすくするプレゼンテーション資料を作成した．これにより動作分析学習における導入が容易となり学習効果が向上した．
5）臨床における高齢者の理学療法(運動療法) 実践に向けたプレゼンテーション資料（教材）の作成	平成23年7月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 特別講義：臨床推論 高齢者の問題構造の把握や理学療法（運動療法）の設定方法を学ぶことを目的に，プレゼンテーション資料を作成した．これにより多角的な視点が必要となる高齢者理学療法の一端を体験することができるようになり学習効果が向上した．
6）高齢者理学療法における動画教材の作成	平成26年4月 ～ 平成31年3月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当授業科目：老年学 大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当科目：老年期疾病論，老年期障害理学療法 授業では，高齢者の現場の実際の動画やデータを基に臨場感をもたせながら，本学問と理学療法との関わり動画教材を作成し講義した．これにより高齢者の理学療法が実感できるようになり，学生は興味をもって学習できるようになった．

事項	年月日	概　　要
7）終末期理学療法の実践	平成27年4月 ～ 平成30年3月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目　老年期障害理学療法学 終末期理学療法実践に関する教育方法を，熟達度に合わせて分かりやすく紹介した（出版） 書籍名　終末期理学療法の実践　B5判　全208頁 編集者：日高正巳，桑山浩明 著者：池田耕二　本人担当部分：第2章　「終末期理学療法をどのように教えるか，そして学ぶか」pp7-13を単著
8）地域リハビリテーション学習における予習，体験，復習シートの作成	平成28年9月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当授業科目：地域リハビリテーション 本授業では，実際の現場の写真や動画を多用し，症例検討式にして実際の訪問リハが疑似体験できるように進めた．また，その際には，予習シート，体験シート，復習シートを作成し，現場に臨む姿勢，学ぶ姿勢，復習する姿勢を養うように工夫した．さらには，在宅における看取りまでの終末期理学療法をみてもらい，これからの訪問リハの有り方をともに考えることにした． また，地域リハビリテーションは，疾患だけでなく，地域特性や社会情勢からも大きく影響をうけたり，個々の価値観が大きく反映するため，書物を多く読んで考えることが大切となる．そこで,少し時間をかけて書物多く読んでもらい,レポート量も増やして熟考して貰う練習も行った．これにより,地域リハビリテーションの奥深さとかんがえることの大切さを学ばせた．
9）局所と全身からアプローチする運動器の運動療法	平成29年8月	運動器の運動療法の理解を深めるために，運動療法における歴史をまとめて紹介した（出版）． 書籍名　局所と全身からアプローチする運動器の運動療法　B5判　全342頁　編集者：小柳磨毅，中江徳彦，井上悟 著者：池田耕二　本人担当部位：第Ⅰ部　総論，1.運動器の運動療法とは，運動療法の歴史 pp14-17を単著．
10）訪問リハビリテーション アドバイスブック	平成30年3月	在宅での終末期にリハビリテーションにかかわるセラピストに求められる視点や，対象者と家族，周辺の人々とのかかわり方，セラピストの在り方について提言した
11）運動学ワークブック	令和元年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当科目　運動学I（総論） 運動学（総論）における学習意欲の低下を防ぎ，自己学習を促すために，ワークブックを作成し，それを授業に活用した．
12）徒手筋力検査学習のための予習・復習シートの作成	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当科目　運動器評価学I（総論） コロナ禍における遠隔・対面のハイブリッド講義において，徒手筋力検査の学習を効率よく行うために予習復習シートを作成し活用した．

事項	年月日	概　　要
13）日常生活活動学演習のための課題シートの作成	令和2年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当科目　日常生活活動学演習 コロナ禍における遠隔・対面のハイブリッド講義において，徒手筋力検査の学習を効率よく行うために予習復習シートを作成し活用した．
14）理学療法臨床実習とケーススタディ	令和2年12月	コロナ禍で初めて行われた本学の学内実習の内容を紹介した（出版）． 書籍名　理学療法臨床実習とケーススタディ　B5判　285頁編集者：鶴見隆正，辻下守弘 著者：池田耕二　本人担当部分：With コロナ社会での
15）PT・OTのための運動学テキスト ： 基礎・実習・臨床	令和3年2月	運動学の理解を深めるために，補訂版を作成するにあたり編集・校正に加わり，運動学総論・等を紹介した（出版）． 書籍名　PT・OTのための運動学テキスト ： 基礎・実習・臨床　B5判　全570頁　編集者：小柳磨毅，山下協子，大西秀明，境隆弘 著者：池田耕二本人担当部分：主に運動学の定義，生体力学のページの大幅な修正・校正を行った．
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1）　臨床実習施設における臨床実習生のアンケート調査	平成20年4月 ～ 平成23年3月	臨床実習施設において臨床実習生にアンケート調査を行い毎回臨床実習指導の評価を行った．その結果，評価としては「実習生に適した指導をしてもらえた」，「努力を継続することの必要性を学べた」，「親切丁寧に指導してもらえた」等があげられた．
2）大阪行岡医療大学における授業評価アンケート調査	平成26年4月 ～ 平成30年9月	大学授業評価の結果は，担当科目「日常生活活動」「日常生活活動演習」「老年期疾病論」「老年期障害理学療法」「地域リハビリテーション」「理学療法概論」において，「十分理解できた」，「理解できた」，「授業に情熱を感じた」等の評価を受けた．また，卒業研究ゼミにおいては，一番の人気ゼミとなっている．
３）奈良学園大学における授業評価アンケート調査	令和2年度 ～ 現在に至る	授業評価については，アンケートが実施された「運動学Ⅰ」，「運動器評価学」，「日常生活動作学演習」において5段階中4.0以上の満足度が得られていた．

事項	年月日	概　　要
４　実務の経験を有する者についての特記事項 1）　臨床実習指導	平成5年6月 ～ 平成23年3月	武部整形外科リハビリテーション，小川病院，道仁病院の各施設にて，臨床における理学療法業務において，実習指導者として理学療法の理論・技術の教授，実技の援助を実習生に対して行った．合計9校から，計83名の実習生を指導した．臨床現場で症例を数例担当し，理学療法実践を学ぶだけでなく，それ以外にもどのような準備や実践，チームワークが必要かも学んでもらった．また医療や社会のどのようなルールに基づいて理学療法が行われているのかも教示し学習してもらった．また，実践の中でどのように課題に取り組み，研究を行っていくのかも少し触れてもらうことにした．その結果，学生は理学療法評価や実践だけではなく，現場の諸仕事を学習し理学療法士のあり方を学習するにいたった．
	平成22年4月 ～ 平成23年3月	道仁病院にて臨床教育を有効に行うために構造構成主義を臨床教育に導入した構造構成的協同臨床教育法を開発し実践した．　昨今の理学療法臨床実習では指導者，学生ともに問題を有していることから，臨床実習の運営や指導が上手くいかないこともある．そこで考え方を根本から見直し，信念対立を解消することができる構造構成主義を基盤に新たな教育法を開発し実践した．そのことによって効果的に理学療法やその他のことを教示・学習しやすくなり臨床実習効果が向上した．
2）各施設（池田病院総合リハビリテーションセンター，大阪北警察病院，サンシティ―木津，大阪行岡医療大学など）の中堅理学療法士に対する教育，指導活動	平成25年4月 ～ 現在に至る	学生や新人理学療法士教育については，近年充実してきたが，中堅理学療法士が成長できる機会は，技術講習会や大学院を除いてほとんどない．そのため，業務管理や後輩指導，その他の技量アップや情報発信できる力を養うことを目的に，大学業務以外に個別に業務や学術指導を行ってきた．現在も中堅理学療法士の指導は継続実施であり，希望者があれば社会貢献目的で今後もそうした活動を継続する．
3)介護付有料老人ホームにおけるリハビリテーション業務のシニアアドバイザー	令和元年9月 ～ 現在に至る	介護付有料老人ホームのリハビリテーション室の立ち上げと業務等の指導・相談．老人ホームにおける理学療法の開発を担う．具体的には，リハビリテーション・ケアセンターうららかを開設し，実践の振り返りを通して，介護付き有料老人ホームのリハビリテーション・モデルを開発し提案している．

事項	年月日	概　　要
4）臨床実習指導者講習会　講師と世話人	令和2年度 ～ 現在に至る	2020年における理学療法養成校指定規則の改変による指導者の育成を行っている． 厚生省，日本理学療法士協会，奈良県理学療法士協会，奈良県理学療法養成校協議会による共同主催．
5）講演，シンポジウム ・公開講座である健康教室の企画・開催と講師	平成5年3月 ～ 平成10年3月	診療所（武部整形外科リハビリテーション）が市民に対して開いている健康教室の企画・準備・開催とその講師を行った．テーマは，腰痛，膝の痛み，肩の痛み，骨折などである．詳細については 医学書院，公衆衛生学の活動レポートとして出版された．論文名「健康教室」10年間の総括－公開講座を継続させる工夫－として（査読付）公衆衛生 61(7) 495－499，1997．
・痛みに対する低出力レーザー療法	平成7年11月	第3回物理療法研究会（神戸大会）講師 肩関節周囲炎患者に対する低出力レーザーは除痛効果があるものの，症例ごとには使用方法の再検討が示唆された．今後の課題としては照射条件や他の物理療法とのコンビネーション効果，使用時期などがあげられることを講演した．
・車椅子スポーツチャンバラの紹介	平成9年1月	第4回身体障害者スポーツ指導員養成講習会　講師 スポーツチャンバラを，患者や障がい者にリハビリの一環として，または楽しんもらうために車いすスポーツチャンバラとして開発し，実用していることを講演した．
・臨床実習における指導方法について	平成18年2月	大阪医療福祉専門学校実習指導者会議　講師 臨床実習指導には，知識や技術だけでなく感情面についての指導や配慮も必要であることを示唆し，具体的な手法と実践報告を講演した．
・臨床実習における指導方法の実際 ―臨床実習指導者からの提言―	平成19年7月	大阪府理学療法士会 臨床実習指導者研修会 講師 臨床実習生を知識・技術，感情面等からみると様々な学生がいることが理解できる．それに合わせて指導することが臨床実習指導を有効にできることを講演した．
・Bridge the gap － 臨床実習指導者の提言－	平成20年3月	行岡リハビリテーション専門学校 臨床実習指導者会議教育講演　講師 臨床実習では，指導者と学生の間に大きな隔たり，すなわちギャップがある．これを意識して指導することが有効な臨床実習につながっていくことを講演した．

事項	年月日	概　　要
・地域医療（小規模型民間病院）における終末期理学療法の実践　－事例研究の紹介－	平成21年2月	神戸大学就進会理学療法分科会 （神戸大学医学部保健学科同窓会）講師 地域医療における終末期がん患者，血液透析患者，遷延性意識障害患者等に対する終末期理学療法実践の内容を講演した.
・理学療法臨床実習をどのように実践していくか？	平成27年3月	三加茂田中病院（徳島）教育講師　講師 臨床実習指導について，知識や技術供与だけでなく，大切なことは学生が自然と伸びる場づくりであることを講演した.
・認知症を正しく知ろう	平成27年8月	大阪行岡医療大学健康教室　講師 地域住民の方に対して健康教室を開催し，認知症の疫学や予防方法，介護方法等について講演した.
・高齢者のリハビリテーション	平成27年12月	大阪行岡医療大学市民公開講座　講師 高齢者に多い疾患や障害の紹介とともに，それに対する予防方法や生活管理，制度，リハビリテーション等について講演した.
・理学療法士を育む	平成28年3月	宝持会　池田病院（大阪）教育講演　講師 池田病院の管理者研修の一環として，人材育成に関する方法論を理学療法士教育を通して講演した.
・人間科学リハビリテーションにおけるエビデンスを考える	平成29年1月	第13回人間科学リハビリテーション研究会　講師 人間科学においては，客観的実証主義に代表される数値化だけでエビデンスは作れないこと示唆し，現象学，構造構成学，接面等の考え方を利用すれば，新たな視点からエビデンスが作れる可能性が高まることを講演した.
・リハビリテーションと生活管理－寝たきりにならないために－	平成30年3月	宝持会総合健康づくりセンターハリーえいわ　市民健康講座　講師 寝たきりにならないためには，リハビリテーションが終了したあとも大切であることを伝え，生活管理として生活習慣の見直す，あるいは自己管理していくことが重要であることを講演した.
・リハビリテーションの視点から見た温泉旅行の可能性	令和元年11月	ユニバーサルツーリズム　阿智村シンポジウム2019 長野阿智村において開催されたユニバーサルツーリズムのシンポジウムにおいて，リハビリテーションにおける温泉旅行の可能性を講演した.

事項	年月日	概　　要
・現場の理学療法士育成論：経験学習を通して	令和3年11月	医療情勢の変化や働き方改革・等を背景に研修会や勉強会を重視した学習だけでは，現場の理学療法士（PT）教育・育成は限界にきている．そこで現場で行う経験学習に注目し，PTの経験学習プロセスの解明をもとに，現場教育・人材育成における支援方法を教示した．
・終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められ	令和4年2月	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
学習し続ける組織の構築にむけて	令和4年2月	大阪府理学療法士会の理学療法士の中間管理職，管理職を対象に学習する組織の構築について講演した．講演内容は，現場経験に基づく組織づくりの内容に加え科学研究費による研究成果である理学療法士の経験学習プロセスの解明から導かれた経験学習支援方法を紹介した．
・緩和ケア領域における理学療法の紹介−理学療法士の可能性と広がる役割−	令和4年12月	緩和ケア領域における理学療法を紹介し，理学療法士の可能性と広がる役割について講演した．
・終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められる視点と対応	令和5年3月	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
5　その他 ・理学療法士養成校における教育実績 （専任教員）	平成24年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学 医療学部理学療法学科 担当授業科目：理学療法体験実習，評価実習，総合臨床実習 専任教員 学外施設で行われる各臨床実習を，個々のレベルに合わせて円滑に行えるようにするため，実習前には各学生と個人面談を行い，知識の習熟度，コミュニケーション能力，その他，不安なことを確認し，それを学外施設の指導者と共有しながら実習を行った．必要に応じて実習前に実技練習を行ったり，また何度も学外施設に出かけたり，学生との面談を繰り返したりした．　これにより学生のレベルに合わせた実習が可能となり，個々の学生が成

事項	年月日	概　　要
	平成26年4月 ～ 平成28年9月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目：日常生活活動学演習　専任教員 授業では，代表的な疾患を整理しながら，日常生活活動の評価法を教授し実践させた．また，障がい別に日常生活活動や生活関連動作の評価や動作指導，介助方法等についても，疑似体験させ理解を深めさせた．チーム別にレポートをまとめさせることでチームアプローチの重要性を体験させ，実際の現場で口頭指導ができるような体験も取り入れた．これにより日常生活活動における評価や指導力がついた． また，学年によっては理解を深めるために，班長には別に1コマ時間を作り，実践を教授し，それを伝えさせる練
	平成26年4月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当授業科目：老年期疾病論（老年期障害学）専任教員 授業では，老年期を代表する疾患や高齢者問題等を教授した．また現在の医療保険制度や介護保険制度などの社会制度についても教授し，高齢者リハビリテーションには医療，看護，保険，社会福祉等の多様な知識が必要であることや，多職種のチームアプローチが必要であることを伝えた． これにより老年期疾病やそれに対する理学療法の理解が深まった．また，これから理学療法士が多く扱うであろう慢性疾患，とくに生活習慣病等についての対応も教授し，その役割の大きさを理解させた．
	平成26年9月 ～ 平成27年3月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目：日常生活活動学　専任教員 授業では，国際障害分類，国際生活機能分類をはじめ，生活活動評価であるバーサルインデックスや機能的自立度評価表（ＦＩＭ）等を教授した．また，代表的な疾患を整理しながら，日常生活活動の評価と実践内容の概要を教授した．
	平成26年9月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当授業科目：老年期障害理学療法　専任教員 授業では，老年期の障害の評価に基づいて，老人の生活自立に向けた系統的な健康管理や地域参加を促進するために，医学的管理下において，機能訓練などの理学療法技術が展開できるように演習した．これにより，老年期障害理学療法における考え方や捉え方が養われた．また，今後重要となってくる様々な内部障害や慢性疾患を想定し，運動や活動が体にどのような影響を及ぼすかも考えさせ，その奥深さを実感してもらった．また，がんをはじめ終末期の理学療法についても教授し，これから必要となる看取りまでの理学療法の可能性を示し，今後の課題を実感してもらった．

事項	年月日	概　　要
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当授業科目：卒業研究 専任教員 テーマは，平成28年度「終末期がん患者の在宅療養を支援するための理学療法の課題」，平成29年度「消化器系がんによる低栄養と運動療法」，「脊椎転移患者に対する理学療法」であった． これから大きな役割を担うと思われる難病や終末期を対象とした患者の理学療法を学習し，今後に備えることにした．
	平成28年9月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当授業科目：地域リハビリテーション 専任教員 授業では，実際の現場の写真や動画を多用し，症例検討式にして実際の訪問リハが疑似体験できるように進めた．また，その際には，予習シート，体験シート，復習シートを作成し，現場に臨む姿勢，学ぶ姿勢，復習する姿勢を養うように工夫した．さらには，在宅における看取りまでの終末期理学療法をみてもらい，これからの訪問リハの有り方をともに考えることにした． また，地域リハビリテーションは，疾患だけでなく，地域特性や社会情勢からも大きく影響をうけたり，個々の価値観が大きく反映するため，書物を多く読んで考えることが大切となる．そこで,少し時間をかけて書物多く読んでもらい,レポート量も増やして熟考して貰う練習も行った．これにより,地域リハビリテーションの奥深さとかんがえることの大切さを学ばせた．
	平成28年9月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当授業科目：理学療法評価学 専任教員 授業では，理学療法評価学に関する知識を総論的に教授し，ICFに基づく理学療法プログラムの立案や臨床推論の方法を教授した．
	平成29年4月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目：理学療法概論　（専任教員） 授業では，高齢者の理学療法の概論を担当し，高齢者の理学療法の役割や可能性，その展望について紹介した．

事項	年月日	概　　要
	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：早期体験実習（理学療法）（専任教員） 授業では，十分なオリエンテーションのうえ，一般病院等の医療施設を３つ学生に体験してもらった．帰校後は，さらに学習を深化させてもらうためにディスカッションを行い学習内容の発表を行なった．これにより医療施設における理学療法，その他の専門職種の役割が理解できた．
	令和元年10月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：基礎ゼミII（専任教員） 授業では，自己学習の進め方を学習するために，課題設定，文献検索の方法や読み方，プレゼンテーション方法を教授し，学習成果の発表を行なった．これにより学生は，大学内，学外実習，またはプロになってからの自己学習方法の一部が身についた．
	令和元年10月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：運動学I（総論）（専任教員） 授業では，運動学の総論を内容をすべて網羅できるように講義を行なった．なお，その際には運動学ワークブックを作成し，大切なところや自己学習の方向性がわかるようにし，学習を深めた．
	令和2年4月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：日常生活動作学（専任教員） 本講義では，日常生活動作の基本や疾患別の動作分析，日常生活評価を講義した．また，様々な評価方法や評価尺度を紹介した．
	令和2年4月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：地域理学療法学（専任教員） 本講義では，地域理学療法における施設系，訪問系の理学療法を講義した．また終末期理学療法についても講義した．

事項	年月日	概　　要
	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：地域理学療法実習（専任教員） 本実習は，外部の介護保健施設，地域におもむき見学等を通して学習を深めるものである．しかし，本年は，コロナ感染のため学内実習に切り替えた．できるだけ従来の実習に近づけるため，動画教材を作成し，病院からもライブ配信を実施した．さらには予習，復習のためのホームページも作成し，学習を変化にすすめた．これにより従来の地域理学療法実習と同程度の学習内容が得られたものと考える．ただし，実際に現場に行けなかったことは大きな不安材料になったことは否めない．
	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：運動器評価学I（総論）（専任教員） 本講義は，コロナ禍においてオンライン・対面のハイブリッドで実践されたため，実技時間が限られていた．そこで，できるだけ効率よく学習をすすめるために予習用ワークシートを作成し，これにより自己学習を促した．限られた実技練習の時間には，予習シートから理解度が低い考えられるところを抽出し，そこを重点的に説明できるようにした．これにより対面と同じ程度，学習効果を維持できたと考える．
	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：日常生活動作学演習（専任教員） 本演習は，コロナ禍においてオンライン・対面のハイブリッドで実践されたため演習時間が限られていた．そこで，できるだけ効率よく学習をすすめるために日常生活動作学演習の課題ワークシートを作成し，それをもとに考えるグループ学習を実践した．これにより演習は教える垂直型教育だけでなく，学生同士による平行型教育も可能となり，考える学習が実践できたと考える．これにより対面と同じ程度の学習効果が得られたとも考える．
	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：地域理学療法学演習（専任教員） 本演習は，地域理学療法学を習得後，あらためて個々の対象者に対する地域理学療法学を演習を通して学ぶものである．本演習では，障害を有する高齢者を設定し，QOLを向上させる外出計画を個々に立案させた．立案計画は，同じ設定であっても多様な内容になることや，それぞれ意味合いが違うことを明らかにした．これらの実践により，地域理学療法学の多様性を学習できたと考える

事項	年月日	概　　要
	令和3年4月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：老年期障害理学療法学（専任教員） 本授業では，高齢者の身体，心理的，社会的特徴とともに，高齢者の理学療法における評価や実践方法を，そのエビデンスとともに教授した．
・理学療法士養成校における教育実績 （非常勤講師）	平成12年4月 ～ 平成13年9月	大阪府立看護大学　医療技術短期大学部理学療法学科 担当授業科目：臨床実習　非常勤講師 臨床現場で理学療法を行うにあたり，単に理学療法評価や実践を学ばせるだけでなく，それ以外にもどのような準備や実践が必要なのか，医療や社会においてどのようなルールに基づいて理学療法が行われているのか等も教示し，学習できるようにした．その結果，学生は理学療法評価や実践だけではなく，現場の諸仕事を学習し理学療法士のあり方を学習するにいたった．
	平成18年4月 ～ 平成25年9月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当授業科目：理学療法治療学Ⅱ　整形外科疾患（関節リウマチ，足部・足関節）　非常勤講師 授業は，暗記型の授業ではなくできるだけ理学療法とはどういったものか考えることができるような授業にした．そのために授業資料は図によって見やすくレイアウトしたものを用いたり，臨床現場のスライド等をみせつつ，学生自身に実際現場に立てばどういった態度や評価，実践を行うかを問いながら，シュミレーショを交え学生とともに検討するスタイルにした．また，ときには勉強の仕方や資料の調べ方など，実践現場で臨床を行いながらどのように勉強していくのか等を，経験を交えて教示した． その結果，学生は理学療法実践するにあたって自分に何が足らないかを再認識し，自ら勉強しなければならないという姿勢を学ぶことができたと考える．
	平成23年4月 ～ 平成24年9月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部理学療法学科 担当授業科目：理学療法技術実習2　非常勤講師 授業は，理学療法の認知スキル，つまり技術の一つとしての理学療法臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題を抽出し，それを基に仮説生成しながら理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．その結果，問題を解決していこうとする姿勢や具体的な解決方法を学ぶことができた．

事項	年月日	概　　要
	平成25年9月 ～ 平成26年3月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部理学療法学科 担当授業科目：総合技術特別実習3　非常勤講師 授業は，認知スキルの一つとして理学療法における臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題抽出し，国際生活機能分類に即しながら，それを基に仮説生成し理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．その結果，国際生活機能分類に即しながら，問題を解決していこうとする姿勢が身に付き，具体的な解決方法を自ら発見し，学ぶことができた．
	平成26年4月 ～ 平成31年3月	大阪医療福祉専門学校 理学療法学科 担当授業科目：老年学，非常勤講師 授業は，高齢者の身体的特徴をはじめ，疾患，環境についての講義を行った．また，その際には実際の患者の動画やデータを基に，本学問と理学療法との関わりについても講義した． また，これからの高齢者においては，地域における転倒，認知症，腰痛，生活習慣病に対する予防理学療法が大切になってくることを教授し，理解を深めた．これにより高齢者理学療法の実態を理解し，興味をもって老年学を学習できるようになった．
	平成26年9月 ～ 平成29年3月	大阪電気通信大学医療福祉工学部 理学療法学科 担当授業科目：チームリハビリテーション特論　非常勤講師 授業は，理学療法におけるチームアプローチによる臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題抽出し，それを基に仮説を生成しながらチームアプローチによって理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．これによりチームアプローチによる臨床推論と理学療法プログラムの立案能力が養われた．
	平成28年9月 ～ 令和4年3月	大阪電気通信大学 医療福祉工学部理学療法学科 担当授業科目：基礎医学特論Ⅰ　非常勤講師 授業では，一般病院，地域におけるがんリハビリテーションについて教授し．生活の質を高めるための実際の工夫も加え，興味をひくように展開した．これによりがんリハビリテーションに対する知見を深めることができた．
	令和元年12月	大阪行岡医療大学　特論 担当授業科目：理学療法特論　非常勤講師 授業では，がんリハビリテーション・ケアと終末期理学療法の実践を教授し，これらの実践力がこれからの地域リハビリテーションには必要になることを学習した．

事項	年月日	概　　要
	令和4年６月	大阪保健医療学　保健医療学部　理学療法学学科 担当授業科目　老年期理学療法治療学 授業では，緩和ケアの理学療法の実践を教授した。
・臨床実習生の自己開示レポートから意識変化を分析し，提言をおこなった.	平成21年10月	理学療法ジャーナル 43(10) 942-943 題目「コミュニケーション能力の向上に課題にした自己分析レポートからみえてきたもの」として実習生の自己開示レポートを分析し，実習指導における指導方法について考察した.

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許		
理学療法士免許	平成 5年6月	（登録番号21836号）
ケアマネージャー	平成13年3月	（登録番号27995318号）
福祉住環境コーディーネーター　2級	平成15年6月	（証書番号10－2－04540）
修士（学術）	平成20年3月	放送大学大学院 文化科学研究科 教育開発プログラム（学位番号第1903号） 題目「理学療法臨床実習による臨床実習生の意識構造の変化」
専門理学療法士（教育・管理理学療法）取得	平成22年4月	日本理学療法士協会が制度化した専門理学療法士制度の専門理学療法士（教育・管理）を取得　登録番号（７－90）
博士（工学）	平成24年3月	大阪電気通信大学大学院 医療福祉工学研究科医療福祉工学専攻（学位番号博医甲第0028号） 題目「理学療法臨床実習における実習生の意識変化の解析に関する研究」
TOGU“FT-Physio”,”FT-coach Level1”	平成25年8月	TOGU社製のツールを活用したトレーニングやコンディショニングを実践するインストラクター（Instructor Number 002）
大阪府がんリハビリテーション研修　終了	平成28年2月	がんリハビリテーション料の算定可能
臨床実習指導者講習会　修了	平成31年3月	臨床実習指導者の資格，および指導者を育成できる資格を獲得した．（第2018-2-046号）
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 1）武部整形外科リハビリテーション （有床診療所） 職種　理学療法士	平成5年3月 ～ 平成8年3月	理学療法士として，主に脊椎圧迫骨折，大腿骨頸部骨折術後，人工膝関節置換術，前十字靭帯再建術，アキレス腱縫合術，下肢の切断等，整形外科疾患の理学療法に従事する．担当患者のカンファレンスや退院指導，訪問指導の役割も担う．また，診療所主催の公開講座である健康教室の企画を担当し，準備やテーマごとに講師の役割も担う．2か月に1回開催を実施．学術活動にも積極的に参加する．

事項	年月日	概　　要
2）武部整形外科リハビリテーション （有床診療所） 職種　主任　理学療法士	平成8年4月 ～ 平成13年3月	理学療法士として，上述した整形外科疾患診療に関わる傍ら，公開講座である健康教室の企画，運営にも関わった．また主任として，訪問リハビリテーションの開設し，大腿骨頸部骨折や脊椎圧迫骨折後の患者，脳卒中の患者にに対する在宅理学療法を行う．また，リハビリテーション室の管理業務として，職員である理学療法士の募集から育成，また理学療法アシスタントの育成を担う．治療実績の管理，勉強会，学術活動への積極的な参加，学生に対する臨床実習指導に従事する．
3）小川病院　リハビリテーション科 職種　主任　理学療法士	平成10年4月 ～ 平成13年3月	リハビリテーション科開設のため，主任としてリハビリテーション機器の見積もり，搬入等の準備・施設基準Ⅱの取得とシステムの構築，そして開設に従事した．その後，リハビリテーション科の主任として管理業務を行う．具体的には治療実績の管理，理学療法士の募集，後輩理学療法士の育成，勉強会の開催，学術活動に推進，学生に対する臨床実習指導を担う． 理学療法士としては，医療，介護のケアミックス病棟であったことから，整形外科疾患を中心に，長期寝たきり患者，虚弱高齢者等の理学療法に，この時から緩和ケア，終末期理学療法に関わる．また夜間にはスポーツ専門リハビリテーションを開設し，主に学生のスポーツ障害後のリハビリテーションに従事する．
4）道仁病院　リハビリテーション科 職種　統括責任者　理学療法士	平成13年4月 ～ 平成23年12月	統括責任者として，リハビリテーション科開設のための機器の見積もり，搬入等の準備・施設基準Ⅱの取得とシステムの構築，そして開設に従事した．その後，統括責任者として管理業務を行う．具体的には治療実績の管理，理学療法士の募集，後輩理学療法士の育成，勉強会の開催，学術活動に推進，学生に対する臨床実習指導を担う． 理学療法士としては，医療，介護のケアミックス病棟であったことから，整形外科疾患を中心に，長期寝たきり患者，がん患者，内部障害，虚弱高齢者等の理学療法に従事する．また，緩和ケアや終末期の患者に対する理学療法も行う．このとき末期がんの理学療法に対する症例報告の論文を発表し，理学療法ジャーナル奨励賞を受賞する．

事項	年月日	概　　要
5）池田病院　総合リハビリテーションセンター 職種　主任　理学療法士（現場最高責任者）	平成23年12月 ～ 平成25年3月	総合リハビリテーションセンターの現場最高責任者として，一般病棟，回復期リハビリテーション病棟，療養型病棟，訪問リハビリテーション，デイケア，デイサービス等のリハビリテーションセンターの運営に携わる．診療報酬の改定や患者へのサービス充実にあわせてシステムの再構築も行った．また，学術委員，医療安全委員，接遇委員等も担った．さらに理学療法士，作業療法士，言語療法士等の人事にも携わった．理学療法士としては，主に急性期から維持期の脳血管，運動器，呼吸器，循環器，内部障害（がん，糖尿病による切断等）の理学療法に関わった．また積極的に終末期医療や高齢者医療にもたずさわり理学療法士の役割等を模索・実践してきた．また地域住民の方々に対して理学療法の啓蒙や健康維持を目的に，相談や公開講座も行った． 現場では複数の部下（理学療法士）に勉強会や講習を行い育成にも力を注いできた．
6）池田病院　総合リハビリテーションセンター 職種　リハビリテーションコーディネーター（教育・研究活動と実務の指導）	平成25年4月 ～ 令和元年9月	大学勤務の傍ら，総合リハビリテーションセンター施設，訪問リハビリテーション，訪問看護ステーション，デイケア，デイサービス（医療，介護）において，リハビリテーションコーディネーターとして研究，相談業務を行ってきた． その際は，実際に現場にでて臨床実践するだけでなく，中堅，新人理学療法士の管理教育や学術活動等をも支援してきた．また，医療，保健，介護の分野における横断的な相談も担い，リハビリテーションが円滑に行える環境作りや支援を必要に応じて行っている． 現在，総合リハビリテーション施設では，緩和ケア系のがんリハビリテーションの評価やプログラム開発，腎臓リハビリテーションの構築，これから重要度が増してくると在宅リハビリテーションの評価やプログラム開発，健康予防教室等を行っており，地域リハビリテーション発展に寄与するだけでなく，後進教育という役割も担っている．
7）サンシティ木津　リハビリテーション・ケアセンターうららか 職種　シニアアドバイザー （教育・研究・実務相談業務）	令和元年9月 ～ 現在に至る	大学勤務の傍ら，介護付有料老人ホームサンシティ木津リハビリテーション・ケアセンターうららかの立ち上げと，教育・研究・実務相談業務を行なってきた． 現在，要介護度が高い高齢入居者に対するリハビリテーションの評価・実践プログラムの開発を検討しており，後進教育を担っている．
8）児童発達支援　放課後デイサービス いちごハウス 職種：教育研究アドバイザー	令和3年10月 ～ 現在に至る	大学勤務の傍ら，児童支援　放課後デイサービスいちごハウスにおける教育・研究のアドバイスを行っている． 現在，現場の問題点を抽出し，よりよい課題解決や人材育成，サービスの立案を担う研究や教育に関するアドバイスを行っている．

事項	年月日	概　　要
9）科学研究費等の研究助成		
・科学研究費助成事業（基盤研究C）	平成28年4月 ～ 平成31年3月	題目「線維筋痛症患者に対する運動療法の効果の検証：脳内ネットワークの変化を指標として」 研究代表　藤田信子　分担者　池田耕二 研究経費　平成28年度2.0千円，平成29年度4.5千円，平成30年度5.5千円
・科学研究費助成事業（基盤研究C）	平成29年4月 ～ 令和2年3月	題目「理学療法士の発達を促す経験学習支援方法の開発」 研究代表　池田耕二 研究経費　平成29年度288千円，平成30年度354千円，令
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和元年6月 ～ 令和2年3月	題目「リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性活用システムの構築−臨床実習教育の質的向上を目指して−」研究代表　池田耕二
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和2年6月 ～ 令和3年3月	題目「フラの動作に関する研究:フラを活用した効果的な介護予防プログラムを作成するために―」 研究代表者　笹野弘美　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和2年度160千円
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和2年6月 ～ 令和3年3月	題目「山間過疎地域における高齢者の体力特性－フレイル質問票を用いた検討―」 研究代表者　滝本幸治　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和2年度　220千円
・科学研究費助成事業（基盤研究C）	令和3年4月 ～ 現在に至る	「理学療法士の発達や経験学習を促す【場】の特性の解明」 研究代表　池田耕二 研究経費　令和3年度700千円　令和4年度1800千円
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和3年6月 ～ 現在に至る	題目「COVID-19パンデミックが高齢者の健康および日常生活に及ぼす影響に関する研究　―コロナ禍における遠隔指導を加味した検討―」 研究代表者　滝本幸治　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和3年度　340千円
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和3年6月 ～ 現在に至る	「地域の特性を活かした高齢者の健康増進に関する研究」 研究代表者　笹野弘美　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和3年度　340千円

事項	年月日	概　　要
４　その他 1）メディア取材 ・スポーツチャンバラと車椅子を活用して車椅子スポーツチャンバラとして体系化を行い，院内でのリハビリに活用した	平成5年3月 ～ 平成10年3月	車椅子スポーツチャンバラをリハビリに活用した（ラジオや新聞の取材あり）
2）学会座長 ・大阪府理学療法士会 北河内ブロック新人症例発表会　座長	平成22年1月	大阪府理学療法士会が新人教育を目的として平成22年より開始した北河内ブロック新人症例発表会において座長を行った.
・第22回大阪府理学療法学術大会　　座長	平成22年7月	第22回大阪府理学療法学術大会において座長を行った.
・大阪府理学療法士会 北河内ブロック新人症例発表会　座長	平成23年1月	大阪府理学療法士会が新人教育を目的として平成22年より開始した北河内ブロック新人症例発表会において座長を行った.
・第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究会）座長	平成30年11月	第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究会）の座長を行った.
・保健医療学会第10回学術集会座長	令和元年12月	保健医療学会第10回学術集会の座長を行なった.
・第11回日本理学療法教育学会　座長	令和4年11月	第11回日本理学療法教育学会の座長を行なった.
・保健医療学部第12回学術集会　特別講演　座長	令和4年12月	保健医療学部第12回学術集会の特別講演の座長を行なった.
・第5回日本理学療法管理研究会学術大会　座長	令和4年12月	第5回日本理学療法管理研究会学術大会の座長を行なった.
3）学会査読 ・第46回日本理学療法学術大会　査読	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第47回日本理学療法学術大会　査読	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第48回日本理学療法学術大会　査読	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第25回大阪府理学療法学術大会　査読	平成25年7月	第25回大阪府理学療法学術大会の査読を行った.
・第49回日本理学療法学術大会　査読	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第26回大阪府理学療法学術大会　査読	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会の査読を行った.
・第50回日本理学療法学術大会　査読	平成27年5月	第50回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.

事項	年月日	概　　要
・第51回日本理学療法学術大会　査読	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第52回日本理学療法学術大会　査読	平成29年5月	第51回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・保健医療学学会第8回学術集会　査読	平成29年11月	保健医療学学会第8回学術集会の査読を行った.
・第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究会）査読	平成30年9月	第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究大会）の学会報告の査読を行った.
・保健医療学学会第9回学術集会　査読	平成30年12月	保健医療学学会第9回学術集会の査読を行った.
・保健医療学学会第10回学術集会　査読	令和元年12月	保健医療学会第10回学術集会の査読を行なった.
・第55回日本理学療法学術大会：日本地域・支援工学・教育合同理学療法学会学術大会2020（合同開催：理学療法管理部門研究会）査読	令和2年11月	日本地域・支援工学・教育合同理学療法学会学術大会2020（合同開催：理学療法管理部門研究会）の学会報告の査読を行った
・第56回日本理学療法学術大会：日本地域・支援工学・教育合同理学療法学会学術大会2020（合同開催：理学療法管理部門研究会）査読	令和3年12月	日本地域・支援工学・教育合同理学療法学会学術大会2021（合同開催：理学療法管理部門研究会）の学会報告の査読を行った.
・第11回日本理学療法教育学会　査読	令和4年11月	日本理学療法教育学会の査読を行なった.
・第5回日本理学療法管理研究会学術大会　査読	令和4年12月	日本理学療法管理研究会学術大会の査読を行なった.
・第62回近畿理学療法学術大会　査読	令和5年2月	第62回近畿理学療法学術大会の査読を行なった.
4）論文査読		
・保健医療学雑誌　論文査読	平成30年6月	保健医療学学会「保健医療学雑誌」の論文査読を行った.
・医療情報福祉行動学雑誌　論文査読	令和2年3月	医療情報福祉行動学雑誌の論文査読を行った.
・医療情報福祉行動学雑誌　論文査読	令和3年2月	医療情報福祉行動学雑誌の論文査読を行った.
・保健医療学雑誌　論文査読	令和3年1月	保健医療学学会「保健医療学雑誌」の論文査読を行った.
・医療情報福祉行動学雑誌　論文査読	令和4年2月	医療情報福祉行動学雑誌の論文査読を行った.
・総合理学療法　論文査読	令和4年11月	総合理学療法の論文査読を行った.
・理学療法教育学　論文査読	令和5年3月	理学療法教育学の論文査読を行った.
5）委員会活動		
・公益社団法人大阪府理学療法士会 臨床実習倫理規定策定特別委員会　委員	平成27年5月 ～ 平成28年3月	公益社団法人大阪府理学療法士会　臨床実習倫理規定策定特別委員会にて，理学療法臨床実習における倫理規定の策定を行った.
・保健医療学学会　第8回学術集会　大会準備委員長	平成29年4月 ～ 平成30年3月	保健医療学学会　第8回学術集会開催に向けて準備を行った.

事項	年月日	概　　要
・日本理学療法教育学会　選挙管理委員	令和3年8月 ～ 現在に至る	日本理学療法教育学会の選挙管理委員を担った.
・日本理学療法教育学会　コアカリキュラム委員	令和3年11月 ～ 現在に至る	日本理学療法教育学会コアカリキュラム委員を担った.
・日本理学療法士協会　指定規則等検討部会部会員（学校養成施設検討作業部会）	令和4年7月 ～ 現在に至る	日本理学療法士協会　指定規則等検討部会部会員と学校養成施設検討作業部会を担う
6）学会理事活動		
・保健医療学学会　理事	平成29年4月 ～ 現在に至る	保健医療学会の理事に就任し運営に携わった.
7）招待講演　シンポジスト		
・第3回物理療法研究会（神戸）シンポジスト	平成7年11月	肩関節周囲炎患者に対して低出力レーザーの臨床効果に
・第4回身体障害者スポーツ指導員養成講習会（大阪）講師	平成9年1月	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案し方法やルール等を紹介した.
・大阪医療福祉専門学校　実習指導者会議　（大阪）講師	平成18年2月	問題を有する実習生に対して，実際行っている具体的な指導方法について講演した.
・大阪府理学療法士会臨床実習指導者研修会（大阪）	平成19年7月	臨床実習に対する指導方法の中でも，特に情意面における指導方法について講演を行った.
・神戸大学就進会理学療法分科会（神戸大学医学部保健学科同窓会，神戸）講師	平成20年2月	地域医療における一般病院にて行われている終末期医療を紹介し，それに対する事例研究を報告した．またこれから事例研究がどうあるかべきかについても合わせて報告した.
・行岡リハビリテーション専門学校　臨床実習指導者会議　教育講演（大阪）	平成20年3月	臨床実習における実習生の内面をパターン分類し，それらに対する指導方法について講演を行った.
・公益社団法人　大阪府理学療法士会（大阪）　新人教育プログラム研修　講師	平成29年12月 ～ 平成30年12月	新人教育プログラム研修における「理学療法研究方法論」の講義を行った.
・公益社団法人　大阪府理学療法士会（大阪）　新人教育プログラム研修　講師	平成31年1月	新人教育プログラム研修における「クリニカルリーズニング」の講義を行った.
・第30回大阪府理学療法学術大会（大阪）教育シンポジウムのシンポジスト	平成30年7月	これからの理学療法臨床実習の在り方を講演した.

事項	年月日	概　　要
・現場の理学療法士育成論：経験学習を通して	令和3年11月	医療情勢の変化や働き方改革・等を背景に研修会や勉強会を重視した学習だけでは，現場の理学療法士（PT）教育・育成は限界にきている．そこで現場で行う経験学習に注目し，PTの経験学習プロセスの解明をもとに，現場教育・人材育成における支援方法を教示した．
・終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められ	令和4年2月	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
・学習し続ける組織の構築にむけて	令和4年2月	大阪府理学療法士会の理学療法士の中間管理職，管理職を対象に学習する組織の構築について講演した．講演内容は，現場経験に基づく組織づくりの内容に加え科学研究費による研究成果である理学療法士の経験学習プロセスの解明から導かれた経験学習支援方法を紹介した．
・緩和ケア領域における理学療法の紹介−理学療法士の可能性と広がる役割−	令和4年12月	緩和ケア領域における理学療法を紹介し，理学療法士の可能性と広がる役割について講演した．
・終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められる視点と対応	令和5年3月	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
8）公益社団法人日本理学療法士協会 臨床実習指導者		
・第2回　臨床実習指導者講習会（大阪）　修了	平成31年3月	臨床実習指導者の資格，および指導者を育成できる資格を獲得した．
・第120回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和2年2月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した．
・第128回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和2年2月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した．
・第368回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年6月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した．
・第378回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年6月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した．

事項	年月日	概　　要
・第399回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年8月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第437回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年9月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第515回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年11月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第664回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和4年3月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第706回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和4年3月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
8）大学内業務の経験	平成25年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学開学から臨床実習教育を担う臨床実習委員，教務一般を担う教務委員，国家試験対策を担う国家試験委員等に任命された.
	平成31年4月 ～ 令和4年3月	奈良学園大学開学から臨床実習部会部長，入試委員を任命された.
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　広報委員を任命された.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　大学評議委員を任命された.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　専攻主任，地域・高齢者領域領域長，予算委員，国家試験委員，大学院開設委員を担う.
	令和4年4月 ～ 現在に至る 現在に至る	理学療法専攻専攻長，大学広報委員長を任命された
9）大阪行岡医療大学における市民公開講座企画と運営	平成28年4月 ～ 平成29年3月	大阪行岡医療大学で行われる市民公開講座の企画運営を行った.

事項	年月日	概　　要
10）日本理学療法士協会 専門理学療法士（教育・管理）取得	平成22年4月 ～ 現在に至る	日本理学療法士協会が制度化した専門理学療法士制度の専門理学療法士(教育・管理)を取得した.
11）理学療法士の内面の発達を理学療法士発達論とし，それもとに理学療法教育を行う必要性を指摘した.	平成25年5月	理学療法ジャーナル　47（5）423 題目「理学慮法士発達論に基づいた教育方法の開発に向けて」に，理学療法士の内面の発達を理学療法士発達論とし，それもとに理学療法教育を行う必要性を指摘した.

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1.理学療法士のための物理療法臨床判断ガイドブック	共著	平成19年9月	文光堂	本書は，物理療法の対象となる疾患に対して，臨床的判断が行いやすいようにデシジョンツリーを作成してまとめ上げ，それぞれの手技や方法について系統立てて述べたものである. Ｂ5判　全566頁 編者：木村貞治 共著者：玉木彰，池田耕二 本人担当部分：第Ⅱ章，疾患・症状別　臨床判断に基づく物理療法のすすめかた 19　c 浮腫に対する物理療法の臨床判断を考える　pp323－344を単著. 浮腫の病態から，それらに対する理学療法を臨床的判断が行いやすいようにデシジョンツリーを作成してまとめ上げ，それぞれの手技や方法について系統立てて述べた.
2.持続可能な社会をどう構想するか. （構造構成主義研究　第４巻）	共著	平成22年4月	北大路書房	本書は，「持続可能な社会をどう構想するか」についての有識者の鼎談と構造構成主義の論文集をまとめたものである. Ａ5判　全255頁 編者：西條剛央，京極真，池田清彦 著者：池田耕二 本人担当部分：「構造構成的協同臨床教育法の構築に向けて-理学療法臨床実習を通して-」pp100-126を単著. 構造構成主義を基盤に，お互いの関心をすり合わせながら，お互いに教え合うことを可能にする教育方法，すなわち構造構成的協同臨床教育方法を開発し，これを理学療法臨床実習に活用し学習効果を上げたことを述べた.
3.よい教育とは何か. （構造構成主義研究　第５巻）	共著	平成23年4月	北大路書房	本書は，「よい教育とは何か」についての有識者の鼎談と構造構成主義研究の論文集をまとめたものである. Ａ5判　全328頁 編者：西條剛央，京極真，池田清彦 著者：池田耕二 本人担当部分：「理学療法臨床実習を通じた構造構成的協同臨床教育法の方法論的拡張」pp218-239を単著. 筆者が開発した構造構成的協同臨床教育方法を方法論的に拡張し，臨床現場基礎力の少ない学生に対して
4.思想が開く未来へのロードマップ. （構造構成主義研究　第6巻）	共著	平成26年4月	北大路書房	本書は，「思想がひらく未来へのロードマップ」についての鼎談と構造構成主義研究の論文集をまとめたものである. Ａ5判　全261頁 編者：西條剛央，京極真，池田清彦 著者：池田耕二 本人担当部分：「終末期理学療法教育における構造構成的協同臨床教育法の可能性」pp135-153を単著. 理学療法士にとってスムーズに教育が進みにくい終末期理学療法教育に対して，構造構成的協同臨床教育方法を活用し，その効果と可能性を述べた.

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5.終末期理学療法の実践	共著	平成27年5月	文光堂	本書は，終末患者に対する理学療法の実践方法を，総論，具体的な介入方法，諸問題，チームケアの展開の４つ点からまとめたものである. Ｂ5判　全208頁 編集者：日高正巳，桑山浩明 著者：池田耕二 本人担当部分：第2章　「終末期理学療法をどのように教えるか，そして学ぶか」pp7-13を単著. 　終末期理学療法における理学療法士教育の問題点を，理学療法士の発達段階ごとにあげ，それにあわせた学習や教育方法を紹介した.
6.局所と全身からアプローチする運動器の運動療法	共著	平成29年8月	羊土社	本書は，運動器疾患に関する運動療法を，主に，総論，身体の部位別の運動療法，姿勢と運動連鎖でまとめた入門書である．関節リウマチ，悪性腫瘍に対する運動療法についても少し触れている. Ｂ5判　全342頁 編集者：小柳磨毅，中江徳彦，井上悟 著者：池田耕二 本人担当部位：第Ｉ部　総論，1.運動器の運動療法とは，運動療法の歴史 pp14-17を単著. 　運動器に対する運動療法の歴史を，古代，近代，近現代，近年に分類し，その発展過程を説明した.
7.訪問リハビリテーション アドバイスブック	共著	平成30年3月	メジカルビュー社	本書は，訪問リハビリテーションにかかわるセラピストに対する様々なアドバイスをまとめた入門書である. B5判　全324頁 監修：青山朋樹，高橋紀代 編集者：辰巳昌嵩 著者：池田耕二 本人担当部分：コラム⑨終末期/ターミナル患者と，その家族に対する訪問スタッフ（セラピスト）のありかた，pp254-257を単著. 在宅における終末期/ターミナル患者と，その家族に対する訪問スタッフ（セラピスト）のありかたを提言した.
8.理学療法臨床実習とケーススタディ	共著	令和2年12月	医学書院	本書では，コロナ禍における奈良学園大学の早期体験，地域理学療法実習の学内実習の実践内容を紹介した. B5判　285頁 編集者：鶴見隆正，辻下守弘 著者：池田耕二 本人担当部分：With コロナ社会での学内実習の方法 pp50-59を単著 コロナ社会における学内実習の枠組みや具体的な実践内容について紹介した.

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
9.PT・OTのための運動学テキスト ： 基礎・実習・臨床	共著	令和3年2月	金原出版	本書は，運動学を基礎，実習，臨床の観点からまとめたものである． B5判　全570頁 編集者：小柳磨毅，山下協子，大西秀明，境隆弘 著者：池田耕二 本人担当部分：主に運動学の定義，生体力学のページの大幅な修正・校正を行った．
（学術論文） 1 自動温度補償機能付きp02センサーの開発（査読付）	共著	平成5年12月	神戸大学医療技術短期大学部紀要　9　113－117	深在性組織に直接刺入できない対象組織の温度変化に対応可能な極細の針状センサーを開発した．これにより温熱や寒冷などの理学療法施行中の組織血行動態の変化を定量・経時的に計測が可能となり治療効果の判定に寄与することを報告した． 本人担当部分：実験担当，データ収集，一部加筆） （共著者：講武芳英，荒川佳子，池田耕二，嶋田智明，石川斉，北潔）
2 変形性膝関節症における疼痛および筋力とＡＤＬ能力との関係（査読付）	共著	平成6年5月	理学療法学　21(5)　347－350	変形性膝関節症患者の疼痛，変形・筋力・肥満度の観点から日常生活動作能力低下との関係を調べた．その結果，日常生活動作の低下には疼痛と筋力低下に影響されていることが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，一部加筆 （共著者：生島秀樹，日高正巳，池田耕二）
3 直線偏光近赤外線照射が筋肉の血行動態に与える影響について（査読付）	共著	平成6年12月	神戸大学医学部保健学科紀要 10 43-47	ラットを対象に頸部神経節近傍への近赤外線照射を行ったところ，筋内の酸素分圧の上昇にある程度の影響を与えることが判明したことを報告した． 本人担当部分：実験担当，データ収集，分析，考察，一部加筆 （共著者：講武芳英，嶋田智明，石川斉，池田耕二，北潔）
4 痛みに対する低出力レーザー療法	共著	平成7年11月	物理療法研究会会誌　3 38－41	肩関節周囲炎患者に対して低出力レーザーの臨床効果を判定した．低出力レーザーは除痛効果があるものの，症例ごとには使用方法の再検討が示唆された．また今後の課題としては照射条件や他の物理療法とのコンビネーション効果，使用時期などがあげられた． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，武政誠一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5 変形性膝関節症における膝周囲筋力と日常生活動作能力との関連性（査読付）	共著	平成7年12月	神戸大学医学部保健学科紀要 11 9－15	変形性膝関節症患者に対して大腿四頭筋やハムストリングスの筋力を測定し，それらを体重で除した値等と疼痛，歩行，日常生活動作の障害程度の関係性を調査した．その結果，日常生活動作能力を筋力で評価するときは大腿四頭筋を体重で除した値が有効であるということが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，武政誠一，生島秀樹）
6 在宅脳卒中後片麻痺者の自立度と介護者の負担との関係（査読付）	共著	平成8年11月	公衆衛生 60（11） 814－817	在宅高齢障害者を対象に実施した実態調査結果より，介護者の負担について分析した．被介護者の日常生活と家族の介護力とが，介護者の負担や健康に影響を与えていることを示唆した．介護者の精神的負担を今後の研究課題としてあげた． 本人担当部分：分析，考察，一部加筆 （共著者：日高正巳，池田耕二，武政誠一，嶋田智明）
7 両側セメントレス大腿骨人工骨頭置換術に対する理学療法の経験（査読付）	共著	平成8年12月	神戸大学医学部保健学科紀要 12 157-161	両側セメントレス大腿骨人工骨頭置換術を行った2症例に対して荷重訓練を行う上での問題点を述べた．本2症例は片側例と違って健側での支持が期待できないためリハビリテーションを行うためには症例に応じた工夫が必要であることを報告した． 本人担当部分：理学療法実践，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，岩本雅浩，武部恭一，武政誠一，日高正巳）
8 骨粗鬆症患者におけるライフスタイルと骨密度との関連に関する一考察（査読付）	共著	平成8年12月	神戸大学医学部保健学科紀要 12 39-44	骨粗鬆症患者を対象にライフスタイルと骨密度との関連を検討した結果，朝食，喫煙，散歩，体操，牛乳では健康的な生活習慣を有するものが高い骨密度を示した．今後の課題としては若い世代の生活習慣と骨密度の関係や，現在の生活習慣と骨密度の減少速度の関係があげられた． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，一部加筆 （共著者：日高正巳，池田耕二， 武部恭一，武政誠一，長尾徹， 嶋田智明）
9 「健康教室」10年間の総括－公開講座を継続させる工夫－（査読付）	共著	平成9年7月	公衆衛生 61（7） 495－499	地域住民の健康に寄与する目的にて「健康教室」を10年実施してきた．それらから長期継続するための工夫や，今後の展望について検討した．健康教室の有効性は示唆されたが，今後は情報源としても健康教室を役立たせ地域リハビリテーションの１システムとして確立していきたいことを報告した． 本人担当部分：健康教室の企画，開催．分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，武部恭一，武政誠一，岩本雅浩）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10 末期癌患者の緩和ケアにおける理学療法士の役割に関する一考察－未告知であった2症例の経験から－（査読付）	共著	平成16年10月	理学療法ジャーナル 38 (7) 597－602	末期癌患者2症例の緩和ケアにおいて理学療法士がどのような役割を担えるのかについて考察した．理学療法士には，疼痛緩和や身体機能低下から生じる不安や苦痛などに対する心理的サポートという役割があるように考えられた． 本人担当部分：理学療法実践，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木彰，中塚奈々，村田磨優，宮崎昌之）
11 高齢血液透析患者における身体能力推移の経時的記録利用の試み－単一症例による15か月の理学療法経験－（査読付）	共著	平成19年7月	理学療法ジャーナル 41 (10) 865－869	高齢血液透析患者1症例から，身体能力評価表を作成しそれを用いて15か月間の身体能力推移を経時的に記録した．これらからは個人にあった課題抽出や理学療法の介入効果をあげるためには長期介入と観察，経時的記録など様々な角度から評価する必要性が示唆された． 本人担当部分：評価表の作成，理学療法実践，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木彰，中塚奈々，山本秀美，宮崎昌之）
12 理学療法臨床実習による臨床実習生の意識構造の変化（修士論文）	単著	平成20年3月	放送大学	本研究の目的は，臨床実習期間における実習生の意識変容過程の分析から効果的な指導方法や援助方法を検討することにある．対象者は臨床実習生13名（男8名，女5名，平均年齢23.6±3.8歳）であり，分析対象は実習日誌の感想文であった．分析方法は，感想文の内容に対して知識・感情・意欲の３つ視点から「コード化/カテゴリー化」を行い数量化を行った．そして各期間における各カテゴリー数の変化と，臨床実習生の意識構造の分析を行った．その結果から，実習生には，理学療法実践だけではなく医療人として視野を広げるための指導や援助，緊張や焦りを少なくし心理的負担を少なくするためのケア，または具体的な行動目標の立案や課題の設定や自己モニタリング能力を養う指導や援助が必要と考えられた．また，臨床実習生の意識構造は，「感情」，「知識」，「専門・統合」，「意欲」，「冷静」，「躍動」，「混合」優位の７タイプに分類することができ，それぞれのタイプに合わせた指導や援助が必要になることが示唆された． Ａ4判　全41頁
13 マニュアルセラピーと科学性：マニュアルセラピーのエビデンスを考える～構造構成主義からみた見解～（査読付）	共著	平成21年3月	徒手的理学療法 8（2）49-52	本論文では，マニュアルセラピーの理論的基盤に構造構成主義をおき広義の科学性を担保した．その結果，客観的なものから主観的なものまでをマニュアルセラピーのエビデンスとすることを理論的に可能にした． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：瓜谷大輔，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14 認知症後期高齢患者に対する理学療法実践知の構造化：構造構成的質的研究法をメタ研究法としたメモリーワークとＭ－ＧＴＡのトライアンギュレーションによる事例研究（査読付）	共著	平成21年9月	心身健康科学　5(2)　102－109	認知症後期高齢患者に対する理学療法の実践知を質的研究によって構造化した．その結果，実践知モデルを活用することで理学療法実践においてどの部分に力点をあてるのかわかりやすくなり，また柔軟な理学療法ストラテジーの選択が可能になることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木　彰，山本秀美，中田加奈子，西條剛央）
15 構造構成的協同教育法の構築に向けて-理学療法臨床実習を通して-（査読付）	単著	平成22年4月	構造構成主義研究 4　100－126	本研究では,多くの諸問題を抱えている理学療法臨床実習教育において，それらを解消しつつ教育効果を高める方法として構造構成的協同臨床教育法を構築した．それはお互いの理解を促したり，広義の科学性を担保することができるとされている構造構成主義をメタ理論に導入した教育法であり，指導者と実習生が共に成長できる教育法である．その特徴としては従来の知識や技術だけでなく，暗黙知や主観的なもので構成される知識や技術についても教育しやすくなっている．
16 遷延性意識障害を有する脳血管障害高齢患者1症例の理学療法実践からみた他動的関節可動域運動の即時効果に関する一考察（査読付）	共著	平成22年4月	理学療法科学　25(2) 305－308	本研究は，遷延性意識障害を有する脳血管高齢患者を対象に，関節可動域運動が可動域維持以外にどのような効果を有しているかを検討したものである．その結果，関節可動域運動は，上肢の動きを即時的に促す効果があることが明らかとなった． 本人担当部分：理学療法実践，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木彰，山本秀美 ，中田加奈子）
17 3年目の理学療法士は終末期理学療法実践をどのように体験しているか？－「無力感や意欲低下」の生成過程について－（査読付）	共著	平成22年8月	理学療法科学 25(4) 523-528	本研究は，終末期理学療法を実践している3年目の理学療法士を対象に，「無力感や意欲低下」の生成過程を検討したものである．本研究の結果からは，3年目の理学療法士は，実践における葛藤や実践している環境の中から，無力感や意欲低下が生成されていくことが明らかとなった． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
18 理学療法臨床実習における実習生の意識構造の変化－質的内容分析と数量化Ⅲ類による探索的構造分析― （査読付）	共著	平成22年12月	理学療法科学　25（6）881-888	本研究は，臨床実習生の実習日誌を対象に知識・感情・意欲の視点から分析を行い，臨床実習生の意識変化には，「感情」，「知識」，「専門・統合」，「意欲」，「冷静」，「躍動」，「混合」優位の７タイプがあり，それぞれのタイプに合わせた指導や援助が必要になることを示唆した. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木彰,吉田正樹）
19 理学療法臨床実習を通じた構造構成的協同臨床教育法の方法論的拡張 －臨床現場基礎力の欠如問題を通して－(査読付)	単著	平成23年4月	構造構成主義研 5　218－239	本研究は，以前，筆者が開発した構造構成的協同臨床教育法を方法論的に拡張し，理学療法における臨床現場基礎力の欠如の構造を構成し，教育的介入方法を検討したものである．臨床実習基礎力の欠如は，様々な構造からなっており，その構造を一つひとつ解消，または対応することで臨床実習指導がスムーズになることを示唆した.
20 理学療法臨床実習における実習生の内面因子の経時的変化(査読付)	共著	平成23年12月	教育工学会会誌 35 33-36	本研究では,医療や介護施設で患者の障害構造を評価する実習,いわゆる評価実習を行った実習生10名と患者に理学療法治療プログラムを総合実践する実習,いわゆる総合実習を行った実習生17名から実習理想因子,実習負荷軽減因子,不安軽減因子の内面3因子を抽出し,それらと睡眠,自宅勉強時間,自己目標達成度の経時的変化を調査した.その結果,実習期間を通して,内面3因子では評価,総合実習ともに実習理想因子は維持され実習負荷軽減因子と不安軽減因子は増加する傾向にあること,睡眠と自宅勉強時間では評価実習は自宅勉強時間が多く総合実習は睡眠時間が多い傾向にあること,自己目標達成度では評価,総合実習ともに増加する傾向にあることが明らかとなった.本研究は，理学療法臨床実習生の内面因子を明らかにし，それら因子の経時的変化を明らかにしたものである. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，吉田正樹）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
21　理学療法臨床実習における実習生の意識変化の解析に関する研究 （博士論文）	単著	平成24年3月	大阪電気通信大学	本研究は，実習生の知識，感情，意欲の3因子に着目し，質的内容分析を用いて探索的に実習生の日誌を解析した．その結果，実習期間を通して，実習生は意識の中で理学療法実践を多く学びながら緊張や焦りを多く感じ，思考的な意欲を心がける傾向にあることを明らかにした．続いて，同じ3因子に着目し，質的（言語）データの因子分析とされる数量化Ⅲ類を用いて，実習生の日誌を探索的に解析し，実習生を「感情優位」，「知識優位」，「専門・統合優位」，「意欲優位」，「冷静優位」，「躍動優位」，「混合」の7タイプに分類できることを明らかにした．さらに従来は着目されなかった肯定的，否定的，高喚起，低喚起感情の４つの感情変化に着目し，実習生の日誌を解析した．その結果，実習生にはいくつかの感情変化パターンがあることを明らかにした．ここまでの解析方法は作業負担が大きく実用性にも欠けることから，簡便な調査方法が必要と考え調査票を作成し調査を行った．その結果，実習生には実習理想因子，実習負荷軽減因子，不安軽減因子の3つの内面因子があること，それら3因子と睡眠，自宅勉強時間，自己目標達成度の経時的変化からは，精神的ストレスは実習期間を通して軽減していくこと，精神的ストレスと自己目標達成度の間には因果関係があること，評価実習と総合実習では実習生の睡眠と自宅勉強時間の関係が逆転することを明らかにした． Ａ4判　全131頁
22　終末期理学療法教育における構造構成的協同臨床教育法の可能性（査読付）	単著	平成26年3月	構造構成主義研究 6　135-153	本研究は，筆者が開発した構造構成的協同臨床教育法を終末期理学療法教育に応用した実践研究であり，それによる学習効果を明らかにした．終末期理学療法には，従来の理学療法にはない最後に死を迎えるという問題を抱えていえる．そのため，無力感につながる可能性が大きい．こうした特殊な問題を抱える終末期理学療法教育において学習効果を示せた意義は大きいことを提示した．
23　理学療法臨床実習の認識構造からみた終末期理学療法の課題（査読付）	共著	平成26年6月	理学療法科学　29(3) 411-415	本研究では，理学療法臨床実習生の終末期理学療法に対する認識構造を視点に，終末期理学療法の教育的，実践的課題を提起した．理学療法臨床実習生の終末期理学療法に対する認識構造モデルは，主に理学療法士の内面の原動力と環境や状況 からくる行動の原動力から構成されていた．よって，本モデルからは終末期理学療法の環境や状況の見直しのための啓蒙や教育，医療，社会のシステム作り，死の語りを取り入れた教育課程の導入等が提起された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二, 山本秀美, 中田加奈子, 黒田未貴, 廣瀬将士）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
24　術後感染による両側TKA再置換術後１症例の理学療法からみた臨床的課題（査読付）	共著	平成27年3月	理学療法ジャーナル 49(3) 267-271	本研究では，術後感染症による両側2期的TKA再置換術1症例の理学療法を行い，従来のTKAとは違う経過や問題点を経験したので，それをもとに具体的な臨床的課題を抽出した．その結果，1）疼痛に対する物理療法の適切な選択，2）適切な関節運動を誘導する関節可動域運動とその妥当性，3）関節や筋の状態を評価しながら負荷量を設定する筋力増強運動とその妥当性，4）転倒リスクの回避と日常生活活動の維持，5）体力維持（廃用症候群予防），6）炎症の再燃を意識した運動量の設定，7）退院後の炎症の把握，8）運動量の増加に伴う転倒リスク，9）長期入院による心理的負担という臨床的課題が挙げられたことを提示した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：宮﨑紗也佳，池田耕二，廣瀬将士，町井義
25　特発性器質化肺炎患者に対して積極的呼吸理学療法を実施した一症例（査読付）	共著	平成27年3月	理学療法科学 30(1) 135-139	本研究では，特発性器質化肺炎（COP）に対する呼吸理学療法の有効性を1症例の症例研究法にて検討した．初期（1週）と最終（7週）の肺機能検査，心肺運動負荷試験，長崎大学呼吸器疾患日常生活活動評価表（NRADL）の評価結果を比較したところ，症例の運動耐容能，NRADLが改善し，病型分類に基づく呼吸理学療法の有効性を示唆した．Idiopathic Interstitial Pneumonias（以下，IIPs）の病型分類に基づく呼吸理学療法はCOP患者に対して有効であることを提示した． 引用文献（11） 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二，宮崎紗也佳，小田瑛梨，堀江淳，池田秀一）
26　回復期リハビリテーション病棟における終末期がん患者の在宅復帰を円滑にする条件 －悪性リンパ腫1症例の理学療法経験を通して－（査読付）	共著	平成27年7月	理学療法科学 30(3) 479-482	本研究では，回復期リハビリテーション病棟における終末期がん患者の在宅復帰を円滑にするための条件を明らかにした．その条件とは，1）患者，家族の在宅復帰への意志が明確であったこと，2）関わるスタッフが終末期という視点に転換できたこと，3）関わるスタッフが情報を共有できたこと，4）かかりつけ医との相性の良さや急変時の受け入れ体制が明確であったことであり，これら4つの条件を満たすことで終末期がん患者の在宅復帰は円滑になることを示唆した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：黒田未貴，池田耕二，中田加奈子，井谷由香理，中川真優，朴聖章）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
27　直腸がんによるストーマ造設と化膿性関節炎による大腿骨骨頭切除を施行したがんサバイバー１人の二つの体験（査読付）	共著	平成28年3月	理学療法科学31（1） 175-180	本研究では，がんサバイバー1人の二つの体験から理学療法ケア（心理的ケア，配慮，工夫など）構築のための有効な視点を提示した．対象は，直腸がんによるストーマの造設と化膿性関節炎による大腿骨骨頭の切除を同時に体験した40歳代の男性1人である．方法は構造構成的質的研究法をメタ研究法においた事例―コード・マトリックス法とした．結果，本男性の体験は，【排泄機能の変更体験】と【下肢支持機能の停止体験】という二つの体験事例と，【生活レベルの変化の感じ方】，【機能変更，停止による感情表出】，【機能変更，停止に対する受け止め方】，【患部に対する認識】，【患部に対する接触行動】，【機能変更，停止による新たな学習】の六つのコード（カテゴリー）から構成された．二つの事例比較からは，生活レベルの変化の感じ方や機能変更，停止による感情表出，受け止め方，新たな学習の内容に違いが認められ，患部に対する認識や接触行動の内容には共通したものが認められた．直腸がんによるストーマ造設後と化膿性関節炎による大腿骨骨頭切除後のがんサバイバーに対する理学療法ケア構築のための有効な視点が提示できた． 本人担当部分：理学療法実践，データ収取，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，黒田未貴，河野茉梨絵）
28　理学療法時の意欲を向上させる声かけの言い回しに関する予備的研究（査読付）	共著	平成29年2月	理学療法科学 32(1) 35-38	本研究では，フレーミング効果を用いた言葉かけの言い回しが，リハビリテーション対象患者の意欲にどのような影響を与えるかを調査した．対象は，調査に協力を得られた入院患者37名（男性17名，女性20名，年齢69.9 ± 12.6歳）とした．紙面によるアンケートにて，トイレ，歩行，疼痛の3つの場面を想定し，各場面で肯定的および否定的な声かけの2つの言い回しを設定し，意欲の向上がみられるかを調査し比較した．結果，3つの場面全てにおいて，肯定的な声かけの言い回しで患者の意欲の向上が認められ，否定的な声かけの言い回しでは意欲の向上は認められなかった．理学療法時の肯定的な声かけの言い回しは，患者の意欲を向上させることが示唆された．結果は，肯定的なフレーミングによる言い回しが有効であったことを示唆した 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）
29　回復期リハビリテーション病棟における高齢患者に対する退院支援能力の向上に向けた事例研究 ―高齢患者本人，家族，ケアマネージャーに対するインタビュー調査より―（査読付）	共著	平成29年3月	大阪行岡医療大学紀要 4 19-24	本研究では，近年，リハビリテーション対象者として多い骨折や認知症を抱える70～90歳代の女性を対象に，退院支援後の生活を調査し，回復期リハビリテーション病棟における退院支援能力を向上させる知見を抽出した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，尾藤彩花，黒田未貴，阪本みさき，木村恵理，松井美夕貴，久貝亮太，池田秀一，清水貴恵）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
30　慢性疼痛患者の生活管理-訪問リハビリテーションによる実践-	単著	平成29年5月	ペインクリニック 38 (5) 623-639	本稿では，近年着目されている慢性痛患者を生活習慣病の一つと位置づけ，運動，睡眠，食事，排泄，ストレス，社会との関わり，生活史の視点から生活管理の必要性を示唆した．なお，訪問リハビリテーションによる生活管理の実践で有効であった事例を提示した．
31　肺サルコイドーシスを有した脛骨高原骨折術後1症例に対する全身持久力トレーニングの効果（査読付）	共著	平成29年6月	理学療法科学32 (3) 449-453	本研究では，肺サルコイドーシスを有する脛骨高原骨折術後1症例の全身持久力を，CPX（心肺運動負荷試験）を用いて検査し，問題点を明らかにするとともに運動処方を有効に行い，生活を向上させることができたことを示唆した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二，高橋昇嗣，池田秀一）
32 在宅終末期がんサバイバーのリハビリテーションにおける多職種連携の有効性（査読付）	共著	平成29年８月	地域リハビリテーション 12(8)701-708	がんサバイバーは，がん罹患者（生存者）だけでなく家族（遺族）などを含む概念であり，周囲と共に人生を構築しようとする意味がある．そのため，がんサバイバーの訪問リハでは，本人に加え，周囲を取り込みながら実践していく必要がある．今回，在宅終末期がんサバイバー2事例のかかわりからは，地域における多職種連携の有効性を示唆することができたので報告する．事例1は，80歳代前立腺がんの男性である．多職種連携からは，情報共有アプリを利用したことで，座椅子に対する本人の想いや仏壇前でおむつを交換することへの妻の嫌悪感が理解できた．事例2は，60歳代右下顎歯肉がんの男性である．後日，本人の不安や葛藤の原因が間近に迫る次女の結婚式にあることが多職種連携でわかった．これらからは，従来の方法に加え，情報共有アプリなどを積極的に活用した多職種連携が地域でも有効に機能すれば，本人や家族の想いに応える実践が可能になると考えられた． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：金谷親好,竹ノ内裕一,岩元香菜子,濵﨑恵,池田耕二,久松憲明）
33　当院における家族支援の取り組み一事例からみたリハビリテーション科の支援の検討(査読付)	共著	平成29年10月	日本慢性期医療協会誌 25(113) 68-71	本稿では，脳卒中後遺症患者に対する緩和ケア（緩和的理学療法実践）の経過と合わせて，家族に対する支援について検討を加えた．リハビリテーション専門職が積極的に緩和ケアに取り組むことで家族の心理的負担は軽減し，緩和ケアに満足できる可能性が高まると考えられる． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：山口朋彦，池田耕二，山口美帆子，堀寿美代，沢田学）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
34 訪問リハビリテーションにおける在宅緩和ケアとしての理学療法の可能性 ―がん患者と非がん患者の事例を通して―（査読付）	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究53-9	本稿では，訪問リハビリテーションにおける在宅緩和ケアとしての理学療法の実践から有効な実践知を抽出し，その可能性を提示した． 事例1の大腸がんを有する80歳代女性の実践からは，理学療法士の介入は限られているが，多職種連携により運動療法と環境調整が継続できれば，疼痛緩和の時間を多くし，生活全体を変化させることができることを示唆した． 事例２の多系統萎縮症を有する60歳代女性の実践からは，疼痛等により他者との関わりが減少していても，多職種連携によって小さな効果を積み重ねていくことができれば，最後まで希望のある充実した時間を提供できることを示唆した． 今回の訪問リハビリテーションにおける多職種連携による在宅緩和ケアの２実践は，がん患者と非がん患者に対する在宅緩和ケアとしての理学療法の可能性を広げたと考えられた． 本人担当部分：理学療法実践，データ収集，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，古家真優，中岡絵
35 【ペインリハビリテーションの新潮流・新戦略】慢性疼痛患者に対する地域・在宅リハビリテーション：理学療法士による生活管理の実践	共著	平成30年4月	ペインクリニック 39特別号：246－252	本稿では，近年着目されている慢性痛患者を生活習慣病の一つと位置づけ，運動，睡眠，食事，排泄，ストレス，社会との関わり，生活史の視点から生活管理の必要性を示唆し，訪問リハビリテーションによる生活管理の実践事例も紹介した． 本人担当部分：理学療法実践，分析，考察，論文執筆 (共著者：池田耕二，山本秀美，中岡絵美，古家真優，大島知子,竹内章)
36【ペインリハビリテーション：新視点からの理学療法】慢性疼痛患者に対する地域・在宅リハビリテーション：理学療法士による生活管理の実践	共著	平成30年8月	ペインクリニック39(8) 1038-1044	本稿では，近年着目されている慢性痛患者を生活習慣病の一つと位置づけ，運動，睡眠，食事，排泄，ストレス，社会との関わり，生活史の視点から生活管理の必要性を示唆し，訪問リハビリテーションによる生活管理の実践事例も紹介した． 本人担当部分：理学療法実践，分析，考察，論文執筆 (共著者：池田耕二，山本秀美，中岡絵美，古家真優，大島知子,竹内章)
37 腎臓リハビリテーションにおける高齢血液透析患者に 対する理学療法士の役割に関する一考察（査読付）	共著	平成30年8月	理学療法科学33(4)725-729	本稿では，高齢血液透析患者2症例の腎臓リハビリテーションから，運動療法による身体機能の改善，行動変容に対する支援，身体活動量の管理，生活の再構築に向けたソーシャルワーク的実践という理学療法士の4つの役割を示唆した 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二，古家真優，高橋昇嗣,池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
38 理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けて ―経験学習研究における理論的枠組みと課題―（査読付）	共著	平成31年3月	大阪行岡医療大学紀要（6），23-33，2019	本稿では，理学療法士の経験学習プロセスの解明と支援方法の開発に向け，これまで多くの専門職の経験学習プロセスを明らかにしてきた松尾による経験学習研究の理論的枠組みを要約し紹介した． そして，それによって解明された看護師と保健師の経験学習プロセスを紹介し，理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けての研究的枠組みを整理し，課題を考察した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）
39 ジャンプ着地後の姿勢安定化能力の信頼性と性差の検討（査読付）	共著	平成31年3月	大阪行岡医療大学紀要（6），5-9，2019	本稿では，前方ジャンプ着地後のDynamic stability index（DSI）の信頼性と，性差，体格との関連等を検討し，DPSIの信頼性は良好であり，性差の影響も把握できることを示唆した．また，女性はジャンプ着地後の姿勢安定化能力が低いことを示した． 本人担当部分：分析の一部，考察 （共著者：粕渕賢志，神里巌，久保峰鳴，幸田仁志，藤田浩之，福本貴彦，池田耕二）
40 理学療法想定場面におけるフレーミング効果を意識した声かけの言い回しの違いによる視覚的文字教示が患者の意欲に与える影響について ―肯定的と否定的な言い回しによる比較―（査読付）	共著	令和元年6月	理学療法科34(4)353-357	本稿では,理学療法時の肯定的，否定的な声かけの言い回しの違いによる視覚的文字教示が，患者の意欲にどのような影響を与えるかを検証し，いくつかの場面で肯定的な言い回しの方が患者の意欲を向上させることを明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）
41 理学療法を積極的に取り組んでいる障がいを有した働き盛りの患者の理学療法への取り組みに対する意欲を探求する－解釈学的現象学的分析による事例研究―（査読付）	共著	令和元年10月	保健医療学部雑誌 10(2) 79-91	本研究の目的は，障がいを有した働き盛りの患者の理学療法への取り組みに対する意欲を向上させるための知見を得ることである．対象は，理学療法に積極的かつ意欲的に取り組んでいる40 歳代の男性入院患者である．方法は解釈学的現象学的分析とし，手順としては，本患者に半構造化面接を行い，理学療法を積極的かつ意欲的に取り組める理由について聞きとり，理学療法への取り組みに対する意欲を分析した．結果は，本患者の理学療法への取り組みに対する意欲を9 つのテーマから解釈することができた．テーマは，半年限定，家族や妻の存在，男のプライド，苦痛を意欲に変化させる力，関係性から構成される意欲等が示された．我々は，これらに着目した理学療法実践時の声かけや配慮，工夫が理学療法への取り組みに対する意欲の向上に大切になると結論づけた． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
42 高齢線維筋痛症2症例の3週間入院運動プログラムの効果について ―痛みと身体・注意機能，包括的QOLおよび背外側前頭前野の血流動態への影響―（査読付）	共著	令和元年12月	理学療法科34(6)893-846	本研究の目的は，高齢線維筋痛症（FM）患者の入院運動プログラムが痛みと身体・注意機能，包括的quality of living（QOL），背外側前頭前野（DLPFC）の機能に与える影響を検討することであった．対象は，高齢FM女性2名とし，方法は3週間入院運動プログラムを行い，介入前後に痛み，身体・注意機能，包括的QOL，DLPFCの血流量と反応時間の評価を行った．結果は，両者とも痛みの認知・情動的側面，身体機能，包括的QOLに改善がみられたが，注意機能とDLPFCの機能については症例で異なる結果となった．高齢者FM患者に対する入院運動プログラムの介入は，痛みの認知・情動的側面や身体機能，包括的QOLの改善に有効であることを示唆した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：藤田信子，池田耕二，高井範子，金子基史，松野悟之，三木健司，仙波恵美子）
43 卒前教育における終末期理学療法講義の役割を再考する（査読付）	共著	令和2年2月	理学療法科35(1)133-138	本研究の目的は，終末期理学療法（終末期PT）の講義を理学療法学科の学生がどのように受け止めているかを明らかにし，本講義の役割を再考することである．対象は理学療法学科の学生62名とし，方法は質的研究法である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach：M-GTA）を用いて終末期PTの講義後（90分）の感想文のテクストデータからカテゴリー化によってモデル構築を行い分析した．結果，モデルは，死と向き合う機会，死と向き合うことで促された学び，終末期PTに対する実践意欲の向上の3つカテゴリーからなり，これらは階層性を成していた．モデルは終末期PT講義における学生の段階的な受け止め方（習熟度）と実践意欲を高める過程を示した．これを活用すれば学生の習熟度に合わせた実践意欲を高める講義が可能になると考えられた． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：山口朋彦，池田耕二，桝本展孝）
44 デイケアにおいて閉じこもり傾向にあった高齢利用者に対する行動変容理論の実践（査読付）	共著	令和2年3月	地域リハビリテーション15(1) 54-59	高齢者の閉じこもりは，要支援・要介護，死亡リスクを高めるため，その予防や対策が重要視されている．高齢者の閉じこもり対策の一つに行動変容理論の実践がある．しかし，デイケア（通所リハ）における行動変容理論の具体的な実践方法や工夫などの知見は少ない．そこで今回，3つの実践事例に対する物語分析から有効な実践知を抽出した．その結果，3実践事例からは，個々に応じた靴の変更や横断歩道の横断開始のタイミングの指導，または痛みに対する自己管理の指導，時期に応じたケアマネジャーとの連携，デイケアにおける屋外歩行練習による成功体験の蓄積等の効果が重なることで，買い物行動の獲得に繋がる可能性があるという実践知が得られた． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大山大将，池田 耕二，黒岡禎治，廣瀬将士，吉富慈洋，高本晴加，勝久江，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
45 在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求する ―グループインタビューによる事例研究― （査読付）	共著	令和2年3月	大阪行岡医療大学紀要 7 11-17	本研究では，在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求し，在宅終末期リハビリテーションを有効に実践するためには患者や家族との関係性づくりや変化に気づく等の能力が必要であることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共著者：池田耕二，根釜夢乃，岩永愛理奈，谷口茉恵，西本正樹）
46 地域リハビリテーションとしての温泉旅行の可能性を探る -事例研究-（査読付）	共著	令和2年3月	医療福祉情報行動科学研究 7 37 - 43	本研究の目的は，地域リハビリテーションのソフトインフラとして温泉旅行を整備するため，温泉旅行および温泉旅行の各活動場面が要介護高齢者に与える影響を明らかにすることである．方法は，日帰り温泉旅行に参加した要介護高齢者2名を対象に，半構造化インタビューを行った．インタビューでは温泉旅行にある各活動場面の楽しみの程度と対象者や家族等の変化を調査した．結果は，A氏は入浴を含めた温泉旅行の全活動場面を楽しんでいた．また，脳卒中後10年間行くことはなかった温泉旅行に再び行こうとしており，温泉旅行の参加に対する自信を回復していた．B氏は温泉旅行の入浴以外の準備，移動を楽しんでおり，温泉旅行で新たな人間関係を構築していた．本研究では，温泉旅行にある各活動場面や温泉旅行は個々の要介護高齢者に様々な影響を及ぼすことが示唆された．その影響としては，自信の回復や人間関係の再構築を促進させることが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）
47 Quantitative Evaluation of Functional Instability Due to Anterior Cruciate Ligament Deficiency（前十字靭帯断裂による機能的不安定性の定量的評価）（査読付）	共著	令和2年7月	Orthopaedic journal of sports medicine 8(7) 2325967120933885 - 2325967120933885	本研究では，TBTテストが主観的な膝の不安定感を反映した体重負荷条件下でACLDによる機能的不安定感を定量的に評価できる安全かつ信頼性の高い方法であることを示した．本テストは，ACL再建前後の客観的な測定値を追加することで，治療成果やスポーツ復帰の指標となる． 本人担当部分：データ解析・統計 （共著者：松尾高行，小柳磨毅，沖本遼，森内俊貴，池田耕二，中江徳彦，中川滋人，史野根生）
48 単身世帯の認知症高齢者1症例の地域生活の再建を可能にした訪問リハビリテーションの実践 （査読付）	共著	令和2年8月	訪問リハビリテーション 10(3) 153-159	本論文では，認知症高齢者に対して，生活リズムの改善，生活意欲と活動性の向上に着目し，訪問リハが本人の希望に即しながら多角的に介入すれば，地域生活の再建に有効であることを示唆した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：金谷親好，金丸真由美，池田耕二，久松憲明）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
49 理学療法士の経験学習プロセスの解明と支援方法の開発に向けた探索的研究 （査読付）	共著	令和2年10月	理学療法学 48(1) 19-28	本論文では，熟達理学療法士（以下，PT）の経験学習プロセスにある成長を促す経験と学習内容を明らかにした．熟達PT はキャリアの初期に「障がいを有した患者の社会参加に向けた実践経験」から〈人とのかかわりや社会・生活に対する実感〉を，初期～中期に「予期できぬ否定的な経験」から〈医療の厳しさ〉等や「重度患者を基本的理学療法で改善した経験」から〈基本的理学療法技術の有効性〉等を，中期～後期に「実習生や新人に対するサポート経験」から〈自己内省による知識・技術の整理〉等や「多職種連携による介入経験」から〈コミュニケーション〉等を学習していることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，　城野靖朋，松田淳子）
50 理学療法臨床実習・現場教育を支援する教育的工夫と配慮	共著	令和2年12月	奈良学園大学紀要 13 1-8	本論文では，2019年に理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則の一部を改正する省令がだされ，理学療法臨床実習は大きく変わろうとしていること，昨今の社会情勢を背景に理学療法士の現場教育も変わろうとしていることを踏まえ，学生や新人理学療法士の自律性を育成し，それを支える教育的工夫や配慮を，1)教育目標の共有，2)現場のストレスに対する認識，3)チームという場づくり，4)感情労働，5)経験資本という視点から，筆者らの経験をもとに提案した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋）
51 本学保健医療学部リハビリテーション学科志望経緯に関する調査	共著	令和2年12月	奈良学園大学紀要 13 149-155	本研究では，本学保健医療学部リハビリテーション学科の広報活動に資する基礎資料とするため，2020年度新入生の志望経緯および本学に対する印象等についてアンケート調査を行った．その結果，理学療法・作業療法いずれの専攻についても，多くの学生は当初の志望を中途変更することはなかった．一方で，中途で変更する学生においては，自身の経験や自身の適性についての内省，さらに作業療法学専攻については，特徴的な技術に魅力を感じたことが契機となっていた．入学前の本学選択においては設備，環境面を魅力と感じており，入学後は教員や教育の質について肯定的な意見が多かった．以上から，低年齢時における分かりやすい理学療法・作業療法に関する周知，あるいは本学の特徴的な講義等の教育方法に関する広報が有用であると考えられた． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：飯塚照史，辻下守弘，池田耕二，城野靖朋，中島大貴）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
52　日帰り温泉旅行における要介護高齢者自身の生活機能に対する認識の変化：解釈学的現象学的分析（査読付）	共著	令和3年3月	医療福祉情報行動科学研究 8 55-65	本論文では，日帰り温泉旅行に参加した個々の要介護高齢者自身の生活機能に対する認識の変化を，解釈学的現象学的分析を用いて分析した．その結果，13サブテーマと【楽しさに繋がる行動を促進する】，【喪失されていた思いの再獲得】，【豊かな感情を喚起する環境に対する認識】，【スタッフの関り方や置かれた立場によって生じる感情】，【自身の在り方に対する認識の変化】という5テーマが抽出できた．要介護高齢者は温泉旅行を経験したことにより，多様な生活機能に対する認識の変化を生じていたことを述べた． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）
53　終末期肺腺がん高齢者1症例のQOLの向上が図れた訪問リハビリテーションの実践（査読付）	共著	令和3年8月	訪問リハビリテーション 11(3) 160-165	本論文では，終末期にある利用者との間に，信頼関係の構築ができれば，たとえ余命1ヶ月であったとしても新たに希望が芽生え，訪問リハが終末期がん高齢者に対するQOL向上の実現の可能性を高めることや，訪問リハの多面的な視点と専門的な知識・技術に基づいた介入，多職種連携による多角的介入が有効に機能すれば，終末期がん高齢者のQOLも向上させることができることを示唆した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：金谷親好，金丸真由美，池田耕二，田中千恵）
54 Perceptions, beliefs, and needs of Japanese people with knee osteoarthritis during conservative care: A qualitative study(保存療法中の変形性膝関節症の日本人における認識，信念，ニーズ：質的研究）（査読付）	共著	令和3年9月	BMC Musculoskeletal Disorders3;22(1):754. doi: 10.1186/s12891-021-04641-7.	本研究では，日本人の膝OA患者がどのように症状や障害を経験・認識し，保存的ケアの際にどのように向き合っているのかを質的研究によって明らかにした．参加者は膝OA患者（男性2名，女性7名，平均年齢74.3±5.5歳）であった．対面式の半構造化インタビューによって個人的な経験を聞き取った．分析はグラウンデッド・セオリー・アプローチに基づいて行った．結果，データから「負の経験」と「困難への対処」の2つのコアカテゴリーが抽出された．日本人の膝OA患者は，エビデンスに基づいた情報や，同じ境遇の人とつながって問題を解決することを望んでいることがわかった．よって，患者の不安を解消するためには，医療従事者が丁寧なヒアリングを行い，患者の過去の経験に関する情報を得て，膝OAに関する患者の経験を理解する必要がある．膝OA患者が経験する症状や困難は，膝OAに対する患者の認識や信念を統合したエビデンスに基づく情報によって管理されるべきである． 本人担当部分：計画，データ収集，分析，考察，執筆 （共著者：Daisuke Uritani, Akane Ikeda, Toru Shironoki, Kentaro Matsubata, Yuto Mutsura, Tadashi Fujii, Koji Ikeda）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
55 2021年度リハビリテーション学科新入生における志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要 13 1-6	本論文では，学部設置3 年目を迎えた奈良学園大学リハビリテーション学科においては，定員充足率増加に伴い新入生の進学経緯も多様になっているものと考えられれる．そこで，3 期生においてアンケート調査を実施し，2 期生との比較を通じてその傾向について比較検討した．結果，当初における職業選択は変更されることなく，近しい人物への相談を伴ったオープンキャンパスへの参加，加えて本学近隣環境等への好感を以て進学を決定している経緯があり，2 期生との大きな変化はなかった．一方で，プレゼンスの高まり，教員対応への肯定的意見と捉えられる側面もあり，本学魅力の一端として認識する必要性が示唆された． 本人担当部分：考察，一部加筆 （共著者：飯塚照史，辻下守弘，池田耕二，城野靖朋·，大貴）
56　介護付き有料老人ホームにおけるリハビリテーションに関する一考察一事例研究．リハビリテーション·ケアセンターつららかにおける実践の振り返り一	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要 13 7-17	本論文では，介護付き有料老人ホームにおける2年間のリハビリテーション実践の振り返りを通して，その効果や役割，あり方，可能性を考察した．その結果，筆者らが取り組んでいる介護付き有料老人ホームのリハビリは，リハビリスタッフと入居者，家族とのコミュニケーションや関係性を基軸に，喜びや安心感という感情表出，全身調整機能や生活リズムの再構築，集団リハビリというコミュニティ，環境変化からくる多様な効果や役割が総じて，入居者や家族の生活の質（QOL）向上の可能性を高めていると考えられた．これらを考慮したリハビリテーションが実施できれば多様な障害像を有する入居者のQOL向上が図れると期待することができる．これらについてはさらに検証を加える必要があり，今後の課題であることを提言した． 本人担当部分：実践，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，古家真優，梅津奈央，大塚佳世）
57　地域リハビリテーションにおけるソフトインフラとしての温泉旅行についての再考：地域高齢者・障がい者のQOLの向上を図る仕組み作り	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要 13 53-58	本論文では，温泉旅行を地域リハビリテーションの一環として理論的に整備し，その可能性について考察した．温泉旅行の効果に関する先行研究の多くは温泉浴の疾病に対するものであり，生活の質への効果やその因果関係を明示するものは少ない．しかし，高齢者に人気のある温泉旅行を，生活の質を向上させるためのソフトインフラとして，新たな視点から理論的に再構築する意義は大きい．日帰り温泉旅行における2つの実態調査からは，要介護高齢者には多様な楽しみ方があることや，多様な思い・感情・変化があることが示唆されている．これらを温泉旅行へ理論的に組み込むことができれば，地域リハビリテーションの新たなソフトインフラになる可能性があると考えられる．本稿では，これらの知見を通じて，温泉旅行をソフトインフラとして理論的に再構築し，多様な工夫や企画等を提案し，その可能性や課題を提示した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
58 線維筋痛症患者の語りから見出された疼痛の背景･疼痛抑制要因および今後の治療に望まれること	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要 13 91-101	本研究では，FM患者12名を対象とした3週間入院運動プログラムの介入前後に行った半構造化面接から，痛みの背景にある精神的ストレス要因，および，FM患者の痛みの状況や疼痛抑制要因に関する語りを取り上げ，今後のFM治療に望まれることを示唆する．結果，疼痛抑制要因として痛みがあっても身体を動かすことが逆に痛みを軽減させること．セルフマッサージや入浴・シャワーなどで身体を温めること，運動を含めた規則正しい生活習慣等が重要になることが示唆された．また辛さに共感してくれる他者の存在が痛みの軽減につながることが語られた．今後，FM治療に望まれることとして，FM治療の専門家の育成やFM患者に対する「初期対応」の重要性，FM患者が語る疼痛抑制要因から見出された疼痛管理やFM患者に対する入院運動プログラムの可能性，さらに，FM患者への言葉がけの工夫や患者に寄り添う医療スタッフの育成，および，FM患者に対するチーム医療の必要性などが患者の語りから見出された． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：高井範子，池田耕二，藤田信子，三木健司，高橋紀代，仙波恵美子）
59 3週間入院運動プログラムによる線維筋痛症患者の心身の変化 -心理面談により明らかになった理学療法士の対応の重要性- （査読付）	共著	令和4年2月	理学療法科学 37(1) 45-58	〔目的〕新たに考案した3週間入院運動プログラムによる介入前後の線維筋痛症（FM）患者の心身の変化を調査し，理学療法士（PT）の適切な対応を明らかにすることである．〔対象と方法〕FM女性患者12名を対象とし，医療や心理学などの専門家による共同チームが考案した3週間入院運動プログラムによる介入を行い，その前後において質問票（日本語版線維筋痛症質問票（JFIQ），日本版ベック抑うつ質問票（BDI-Ⅱ），The 8-item Short-Form Health Survey （SF-8））による評価と心理面談による聴き取りを行った．〔結果〕本プログラムによりFM患者のJFIQでは11名，BDI-Ⅱでは10名，SF-8では9名（身体面），8名（精神面）が改善を示した．患者の語りからは，患者の痛みや辛さに寄り添う姿勢など，PTの対応が患者にとり重要であることが示唆された．〔結語〕本プログラムはFM患者の心身に変化を及ぼす効果があり，その遂行において患者の痛みや辛さに寄り添うPTの姿勢が重要である． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：高井範子，藤田信子，池田耕二，金子基史，丸山伸廣，中原理，三木健司，髙橋紀代，仙波恵美子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
60 放課後等デイサービスにおける理学療法士の役割および課題 （査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9 39-46 2022年	近年，放課後等デイサービスの事業所は年々増加しており，そこに関わる理学療法士は国，放課後等デイサービスおよび理学療法士協会から期待されている．しかし，現状は放課後等デイサービスに関わる理学療法士は極めて少ない．また放課後等デイサービスにおける理学療法士の役割や課題に関する先行研究や実践報告はほとんど見受けられない．このような現状では理学療法士はどのように放課後等デイサービスに関われるべきか分かりにくい状況である．理学療法士が放課後等デイサービスで働くことに関心を有しても，行動に移しづらい要因となっている．そこで，本論文では，放課後等デイサービスにおける理学療法士の役割や課題について，数少ない先行研究や実践報告，そして，筆者のこれまでの経験を通して提示することを目的とした．その結果，放課後等デイサービスにおける理学療法士の役割は，個別療育と集団療育の大きく二つあることが分かった．個別療育では理学療法士が主に個別に合わせたリハビリテーションを行う．集団療育では主には理学療法士以外のサービス提供職員が担当することが多いが，集団療育の場にも積極的に理学療法士が関与することで支援スタッフの児童やリハビリテーション専門職への理解が進む可能性がある．次に，放課後等デイサービスに理学療法士が関わる際の今後の課題としては日常生活動作が比較的自立した児童～医療的ケアが必要な重症児にも対応できるように理学療法士としての専門性を幅広く高める必要性，リハビリテーション専門職が早期から放課後等デイサービスと情報共有する必要性，地域に住む人たちが障害児・者についての理解を広げてもらえるように理学療法士が啓発活動を行うことなどが課題として挙げられた． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：辻下聡馬，池田耕二，辻下千賀）
61 コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題―学内実習の概要と学生アンケート調査による考察― （査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9 31-38 2022年2月	【目的】指定規則の改正により，訪問リハビリテーションまたは通所リハビリテーションに関する実習（以下，地域実習）を行うことになった．しかし，新型コロナウイルスの感染拡大により現場での実習実施が困難となったため，令和2年度・3年度においては学内実習を行うこととなった．本研究は学内実習の構成について触れ，履修学生のアンケート調査より学内実習の課題と可能性について検討した．【方法】リハビリテーション学科（理学／作業療法専攻）の地域実習は，2年次後期配当科目（2単位）であり，2週間にわたり実施した．学内実習は，①予習，②学内実習，③復習で構成した．①予習は臨床実習専用ホームページ（HP）にて，実習開始1か月前に予習用教材を掲載した．②学内実習では，可能な限り学外実習と遜色のない学習機会が学生に提供されるよう配慮し，日々の学習テーマに沿ってグループ討議を積極的に行い，訪問・通所事業所とライブ中継等を取り入れた．③復習は，学内実習を振り返ることができるよう復習用資料をHPに掲載した．また，令和2年度・3年度の履修学生に対し，実習終了後に学内実習に関するアンケート調査を実施した．【結果】回答率は，令和2年度95.7%，令和3年度94.7%であった．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				アンケート調査の結果，両年度ともに類似した回答傾向であり，地域実習で扱ったテーマについては77.5 - 97.2%が理解できたと回答した．訪問・通所事業所のライブ中継については，94.4 - 100%で高い評価結果であった．一方，3年次以降の臨床実習に関する質問では，36.4 - 85.9%の学生が「不安」という回答であった．自由記載では，「地域リハビリテーションに関する関心や意識が向上した」という感想がある一方，「現場に行きたかった」「実技の時間が欲しい」などの意見もみられた． 本人担当部分：実践，考察 （共著者：滝本幸治,吉川義之,笹野弘美,坪内善仁,前田吉樹，中島大貴,辻下聡馬,大浦智子,山形力生,池田耕二）
62 コロナ禍における理学・作業療法士養成課程の早期体験実習 ―学内実習後の学生アンケート調査による検証―（査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9 55-63 2022年	令和2年および3年度，新型コロナウイルスの感染拡大をうけ早期体験実習を学内実習として実施した．学生アンケートの結果から，学内実習の意義や課題を明確にした．アンケートの結果，両年度とも実習内容については多くの学生が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答した反面，「2年次以降の学外実習に向けた不安」を訴える学生が多かった．自由記述では「教員が近くにいる分質問などがしやすかった」，「疑問をすぐに先生に質問することができた」という意見のほか，「自分が知らなかった分野にも興味が持てた」という意見もみられた．学内実習で医療施設での学びを完全に再現することは困難だが，早期体験実習の本来の目的を達成する上で，学内実習は必ずしも不利な点ばかりではない． 本人担当部分：実践，考察 （共著者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩﨑智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二）
63 熟達理学療法士の経験学習プロセスにおける成長を促す経験（査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9 97-103 2022年	【目的】熟達理学療法士から経験学習プロセスにある成長を促す経験を明らかにし，経験学習支援を理論的・実践的に示唆することである．【方法】対象は，熟達理学療法士43名とした．方法はアンケート調査とし，印象に残った経験（時期，内容）を聞き取った．分析にはオープンコーディング法を採用し，成長を促す経験カテゴリーを作成し，コード数の多い上位の成長を促す経験カテゴリーを抽出した．【結果】1）担当患者の理学療法・関係性に苦悩した経験，2）理学療法における成功体験，3）先輩・指導者の治療技術に差を感じた経験などの成長を促す経験カテゴリーが抽出された．【考察】成長を促す経験からは，キャリアを通して理学療法士管理者・指導者は，理学療法士に対して担当患者の理学療法や，担当患者との関係性からくる苦悩に対してケアを行うこと，できるだけ成功体験の蓄積を支援すること，先輩と治療技術の差を実感させる機会を多くすること，そして重度な患者を診る機会や学会発表や参加する機会を多くすることが経験学習支援につながると考えられた． 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
64 Work beliefs and experiential learning among proficient physical therapists in Japan: Developing a method to support belief formation （査読付）	共著	令和4年4月	Journal of Physical Therapy Science 34(4) 262-268	[Purpose] This study aimed to elucidate the content of work beliefs related to proficiency among physical therapists in Japan. [Participants and Methods] Participants included 50 therapists who met the definition of proficiency to participate in a questionnaire survey conducted between October 2017 and March 2019. Participants were asked to freely describe their daily work beliefs, including their thoughts, values, and ideals. This content was coded and categorized using open coding; a hierarchical cluster analysis (Ward’s method) was conducted of the proficient therapists with the individuals and belief categories as the variables. All belief categories were classified into three groups. [Results] Three work beliefs were identified as follows: 1) practices that emphasize building relationships in the field, 2) broad practices with physical therapist pride (responsibility and enthusiasm), and 3) practices with awareness of treatment outcomes and social benefits. [Conclusion] A better understanding of the three aforementioned work beliefs would facilitate good support for and development of physical therapists. We recommend continuing to elucidate the three work beliefs identified among proficient therapists and verify their educational effects. 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：Koji Ikeda, Atsushi Tasaka, Kenji Kasubuchi, Yasutomo Jono, Junko Matuda）
65 養成校からみた訪問への臨床実習の実際	共著	令和4年6月	訪問リハビリテーション 12(2) 112-123	訪問リハの役割を，①再自立支援型，②疾病・介護予防型，③緩和ケア型に区別し，各役割ごとに学習すべき事柄や重要ポイントを述べ，訪問リハの臨床実習の配置時期と３つの役割ごとに，臨床実習における組み立て方や指導，教育方法について紹介した． 本人担当部分：論文執筆 （共著者：池田耕二，吉川義之）
66 放課後等デイサービスにおける保護者およびスタッフ視点の児童の課題・目標に関する探索的研究 （査読付）	共著	令和4年12月	理学療法科学 37(6) 571-578	〔目的〕児童に対する保護者およびスタッフの目標や課題を明らかにし，理学療法の課題を提示することである．〔対象と方法〕対象は保護者10名とスタッフ5名とし，10名の各児童の目標・課題を質問紙による自由記述式にて調査した．分析方法はオープン・コーディング法とし，短期・長期的な目標や課題を整理したうえで保護者とスタッフのものを比較した．〔結果〕短期的な目標・課題では，保護者は家庭内の生活のことを，スタッフは学校内の生活のことを気にする意見が多く，認識の相違が認められ，長期的な目標・課題では，保護者もスタッフも就労に関するものが多く，将来の方向性は類似していた．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				〔結語〕今後の理学療法の課題は，保護者およびスタッフに対して定期的に理学療法評価の結果を伝え，協働してリハビリテーションを進めていくことが重要である． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：辻下聡馬，池田耕二，辻下千賀）
67 数量化III類分析による線維筋痛症女性患者の症状改善傾向の類型化 -3週間入院運動プログラムにおける症状変化を通して-（査読付）	共著	令和4年12月	理学療法科学 37(6) 593-599	〔目的〕3週間入院運動プログラム（有酸素運動，筋力増強運動など）における線維筋痛症（FM）女性患者の症状改善傾向を類型化すること．〔対象と方法〕対象はFM女性患者11名，方法はプログラムの開始前，中，後で，①SF-8（身体的健康度（PCS），精神的健康度（MCS）は前後のみ），②体調，③疲労度，④熟睡度，⑤疼痛，⑥楽しさ，⑦歩数，⑧睡眠時間，⑨睡眠効率，⑩姿勢（座位・立位の割合）を測定し，各項目の改善傾向から数量化Ⅲ類分析を用いて症状改善傾向を4つに分類した．〔結果〕症状改善傾向は，1）睡眠時間，熟睡度，疲労度，2）姿勢とPCS，3）歩数，MCS，睡眠効率，4）疼痛，楽しさ，体調の4つのグループに分類できた．〔結語〕本研究はFM女性患者の運動療法の効果の現れ方を4つに類型化した． 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，藤田信子，松野悟之，高井範子，金子基史，三木健司，仙波恵美子）
68 施設の種類に対応した臨床参加型実習モデルの提案 一施設の特徴を活かした経験の積ませ方一	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要 15 1-14	本稿では，臨床実習が行われる医療施設と介護施設，訪問リハビリテーションに大別しながら，各施設の理学療法の特徴や役割を整理し，臨床実習の内容や方向性を確認した．次に，学生に対する経験の積ませ方を考慮しながら，各施設における臨床参加型臨床実習モデルを構築し，併せて臨床実習におけるキーポイントを提示した． 本人担当部分：論文執筆 （共著者：池田耕二，滝本幸治，城野靖朋，吉川義之，野田 優希，野中紘士，辻下守弘）
69 理学療法士を育む【場】づくりの着想に関する一考察	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要 15 15-20	本稿では，現在の理学療法士の現場教育や人材育成の課題と限界を提示し，新たな枠組みの必要性を指摘する。筆者らが着想する新たな枠組みとは，理学療法士の発達や成長を後押しする“理学療法士を育む【場】づくり”である。これは理学療法士の経験学習が促進されやすい【場】（雰囲気や組織風土からなる空間）をつくりあげるというものである。しかし，現在，理学療法士の経験学習を促す【場】の特性や，それを成立させるための条件は明らかになっていない。これらを解明することができれば，理学療法士を育む【場】づくりが可能となり，現場教育や人材育成に貢献できると考える。本枠組みの実現可能性は十分あり，これからの現場教育，人材育成の課題の一つとなる。 本人担当部分：論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋，吉川義之，野田優希）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
70 高齢心不全患者のQOL に対する多職種連携による介入の有用性: スコーピングレビュー	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要 15 37-43	心不全患者に対する治療目的の一つは生活の質(Quality of life：QOL)の改善であり，日本循環器学会のガイドラインは高齢心不全患者に対する多職種連携による介入を推奨している．しかし，高齢心不全患者のQOLに関する研究の多くは在宅や地域の患者を対象としており，入院中の患者を対象にはしていない．今後，日本では高齢心不全患者の増加が予測されており，入院中の高齢心不全患者に対する多職種連携による介入のQOL改善効果を検討する意義は大きい．そこで，本研究では入院中の高齢心不全患者に対する多職種連携による介入が退院後のQOL改善に寄与しているかという関心のもと，スコーピングレビューを行った．対象文献の収集はPubMedと医中誌web版とした．結果，11件が全文精読の対象となり，そのうち，分析対象となった文献は1件であった．本採用文献は入院中の高齢心不全患者に対する多職種連携による介入のQOL改善効果を示したが，除外された中で対象国が日本である文献の全てはQOL評価が実施されておらず，日本における入院中の高齢心不全患者に対する多職種連携による介入のQOL改善効果の研究が不十分であることを示唆した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：梅津俊介，喜多一馬，森田隆剛，池田耕二）
71 熟達理学療法士における成長を促した経験学習サイクルを探求する:教訓と応用 （査読付）	共著	令和5年4月	日本理学療法管理学 1 15-22	【目的】熟達理学療法士の成長を促した経験から獲得した教訓と応用の内容を探求すること． 【方法】対象は熟達理学療法士 43 名とした．方法はアンケート調査とし，調査項目は1基本属性，2成長を促した経験，3獲得した教訓内容，4次に向けた応用内容とした．分析方法はオープンコーディング法とし，成長を促した経験と教訓，応用内容をカテゴリーとして抽出した． 【結果】1基本属性:男 31 名，女 12 名，年齢 36.8 ± 4.5 歳，臨床経験年数 14.0 ± 4.4 年であった．次に2成長を促した経験と3教訓，4応用カテゴリーは順に，a)担当患者の理学療法・関係性に苦悩した経験，教訓は理学療法士としての態度，応用は丁寧な患者対応など，b)理学療法における成 功体験，教訓は個々の症例に対する気づき，応用は介入方法の変化など，c)先輩・指導者の治療技術 に差を感じた経験，教訓は評価の重要性，理学療法士の能力の必要性，応用は自己研鑽などであった．【結論】熟達理学療法士は多様な経験から多様な教訓を得て，次の経験に向けて応用していた． 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（その他） **「総説」** 1 ”Physical Therapy”1994年版まとめ	共著	平成7年8月	理学療法ジャーナル　29 (8)　865－869	アメリカ理学療法士協会の機関紙である”Physical Therapy，1994年”に掲載された92編の論文を要約し，それらから運動療法，物理療法，運動学，検査，測定，義肢・装具，教育・管理・調査に分類し主だったものをいくつか紹介した．1年間を通して各研究において研究デザインが検討されており，研究自体の信頼性を高める努力がなされている．また日常的な技術についての信頼性や妥当性の再確認もされていた．その他，患者教育に関するもの，物理療法に関する研究が多くなされていた． 本人担当部分：和訳，考察，論文執筆 （共著者：武政誠一，嶋田智明，日高正巳，池田耕二）
「提言」 1 コミュニケーション能力の向上を課題にした自己分析レポートから見えてきたもの	単著	平成21年10月	理学療法ジャーナル 43(10) 942 -943	本論文では，実習生自らが提出した自己分析レポートを分析し，実習生の内面の変容過程を明らかにし，そこから一実習指導を提起した．コミュニケーションにおいては方法の模索に始まり，新たな模索へという子過程が示された．実習での新たな発見からは視野が広がる過程が示された．これらの過程に即した指導が必要になることを提起した．
2 終末期における理学療法の位置づけを再考する	共著	平成23年3月	理学療法ジャーナル 45(3) 240	本稿では，現場で実感しにくい生活の質を目標に理学療法を漠然と行うのではなく，理学療法の哲学的基盤を根底から見直し，終末期理学療法の位置づけを筆者の経験をもとに再考した．そして，終末期理学療法は生活の質の再構築と納得を目指すものと提起した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，中田加奈子）
3 認知症患者1症例の理学療法経験から学んだ「工夫」や「視点」	共著	平成23年4月	理学療法ジャーナル 45 (4)　332	本稿では，認知症患者の理学療法経験を通して，学んだ工夫や視点を述べた．具体的には，認知症患者の介入によって，症例を理解しようと焦らず，何かを感じ取ろうとすること，患者の細かな変化を日々の中で捉えること，理学療法評価やツールとして家族機能を活用することで切る動作を通して治療を組み立てることなどを提示した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
4 理学療法士発達論に基づいた教育方法の開発に向けて	単著	平成25年5月	理学療法ジャーナル 47 (5) 423	本稿では，徒弟制度に基づく教育だけでは個々の人材が有する新たな可能性を摘んでしまう危険性があることを指摘し，その可能性を積まない教育支援方法の必要性を説いた．そこで，理学療法士の内面の発達を理学療法士発達論とし，それにもとづく理学療法教育を行う必要性を提起した．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5 これからの地域社会に求められる理学療法士像を考える	共著	平成27年11月	理学療法ジャーナル 49（11）：1058	本稿では，地域包括ケア等がはじまった地域社会から現場で本当に求められる理学療法士像を考察した．現場では，様々な対応や知識が求めらえる．そして，それらを包括して解決に向かわせる力が必要となる．これを包括的理学療法として位置づけ，現場で必要な能力とした． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二）
6 コロナ禍で変わる臨床実習：奈良学園大学リハビリテーション学科	共著	令和3年4月	作業療法ジャーナル 55(4) 373 - 374	本稿では，2020年，コロナ禍で学内で行われた早期体験実習と地域理学療法実習について紹介した．具体的には，企画，内容，ＩＴの活用，問題意識，実践など，学生と教員が共同で実践した内容を提示し，これからの課題と合わせて提示した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：中島大貴，坪内善仁，池田耕二，山形力生，大浦智子，辻下守弘）
7 私のターニングポイント：自分と理学療法士としての成長の重なり	単著	令和4年5月	PTジャーナル 56(5)578	本稿では，理学療法士である筆者の理学療法士としての成長と自信の成長を重なり合わせ、時間をかけて理学療法士は成長することを示唆した。
「研究報告書」				
1 理学療法士の発達を促す経験学習支援方法の開発	単著	令和3年4月	科学研究費助成事業　（基盤研究C）研究成果報告書	本稿では，「理学療法士の発達を促す経験学習支援方法の開発」の研究成果を報告した． A4判5頁
2 リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性活用システムの構築−臨床実習教育の質的向上を目指して−	単著	令和3年5月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成成果報告書	リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性活用システムの構築の経緯，可能性について報告した． A4判4頁
「学会発表」 **＜国際学会＞**				
1 INTRODUCTION OF "WHEELCHAIR SPORTS CHANBARA"- A NEW PROGRAM IN REHABILITATION - (車いすチャンバラの紹介；新しいリハビリテーションプログラム)	―	平成9年8月	The 8th World Congress of The International Rehabilitation Medicine Association, KYOTO, JAPAN（京都）	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルールを考案し紹介した． 本人担当部分：車いすスポーツチャンバラの開発，実践，考察） （共同発表者：K.TAKEBE, K.IKEDA, T.KANEKO, S.TAKEMASA, T.NAGAO）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2 INFLUENCE ON THE VOLUNTARY CONTRACTION OF PELVIC FLOOR MUSCLES WITH BODY WEIGHT SUPPORT （体重支持による骨盤底筋群の随意収縮の影響）	－	平成20年8月	10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy, CHIBA, JAPAN（千葉）	部分的荷重によって骨盤底筋群の収縮がどのように影響されるかについて調査検討を行い報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：Asuka Iso, Miwako Ishii, Mayumi Tayanaka, Kosaku Ota, Koji Ikeda）
3 CHANGE OF CONSCIOUSNESS IN STUDENTS IN PHYSICAL THERAPY CLINICAL PRACTICE- EXPLORATORY STRUCTURE ANALYSIS BY QUALITATIVE CONTENT ANALYSIS AND QUANTIFICATION III - （理学療法臨床実習における実習生の意識構造の変化－質的内容分析と数量化Ⅲ類による探索的構造分析―）	－	平成21年7月	Improving University Teaching（IUT）34th International Conference, Simon Fraser University, Burnaby Campus, Vancouver, Canada（バンクーバー）	本研究の目的は，理学療法臨床実習期間における臨床実習生の意識変容過程を明らかにすることにある．その結果，理学療法臨床実習生は理学療法実践を多く学びながら，緊張や焦りを多く感じて思考的に意欲を心がける傾向にあることが明らかとなった．また意識構造は,知識・感情の軸と冷静な実習・躍動的な実習の軸で構成されていることがわかり,さらにその変容過程は「感情」，「知識」，「専門・統合」，「意欲」，「冷静」，「躍動」，「混合」優位の７つのタイプに分類できることが明らかとなった． 本人担当部分：データ取集，分析，考察，執筆 （共同発表者：Koji IKEDA, Akira TAMAKI, Masaki YOSIDA）
4 Study on the Effects of Skin Stretching without Joint Movement on range of motion in Rats （ラットにおける関節可動域運動が無い状態での皮膚のストレッチ効果に関する研究）	－	平成28年10月	The Asian Confederation for Physical Therapy 2016, Kuala Lumpur（クアラルンプール）	本研究では，基礎研究としてラットにおいて関節運動を生じさせない状態での皮膚のストレッチが関節拘縮の予防に効果的かを検討した．その結果，皮膚のストレッチは関節拘縮の予防になる可能性を示唆した． 本人担当部分：考察 （共同発表者：Atsushi Tasaka, Takeya Ono, Hideki Ishikura, Kazuki Aihara, Yuta Sato, Koji Ikeda, Sadaaki Oki）
<国内学会>				
1 当院における大腿骨頚部骨折術後患者の生活状況について	－	平成5年11月	第33回近畿理学療法士学会（和歌山）	当院において手術し，リハビリテーションが施行された大腿骨頚部骨折患者の生活状況を調査し報告した． 本人担当部分：調査，分析，執筆 （共同発表者：平山敦子，宮本真美，池田耕二，太田光子，武部恭一，武政誠一）
2 変形性膝関節症における体重支持指数と日常生活動作について	－	平成6年5月	第29回日本理学療法士学会（青森）	変形性膝関節症における体重支持指数と日常生活動作についての関連性について検討した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆（共同発表者：池田耕二，宮本真美，平山敦子，太田光子，武部恭一，武政誠一，生島秀樹，石川司）
3 生体加温の際の組織酸素分圧測定用センサーの試作と特徴	－	平成7年6月	第30回日本理学療法士学会（東京）	深在性組織に直接刺入できない対象組織の温度変化に対応可能な極細の針状センサーを試作，開発しその特徴について報告した． 本人担当部分：実験担当，データ収集，分析 （共同発表者：講武芳英，嶋田智明，池田耕二，北潔）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
4 振り子打腱装置の開発とその精度の検討	－	平成7年6月	第30回日本理学療法士学会（東京）	振り子打鍵装置を開発し，それらの定量的評価における精度について報告した． 本人担当部分：データ収集 （共同発表者：篠原英紀，吉田正樹，武富由雄，瀬藤乃理子，富田義之，鈴木喜子，池田耕二，坂本達也，徳原尚人，中山伸治）
5 両側ｾﾒﾝﾄﾚｽ大腿骨人工骨頭置換術に対する荷重訓練について	－	平成7年11月	第35回近畿理学療法士学会（京都）	両側セメントレス大腿骨人工骨頭置換術を行った2症例に対して荷重訓練を行う上で問題点を述べた．本2症例は片側例と違って健側での支持が期待できないためリハビリテーションを行うためには症例に応じた工夫が必要であることを報告した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 (共同発表者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，武政誠一)
6 骨粗鬆症患者におけるﾗｲﾌｽﾀｲﾙ･生活活動能力と骨密度との関連に関する一考察	－	平成8年5月	第31回日本理学療法士学会（愛知）	骨粗鬆症患者を対象にライフスタイルと骨密度との関連を検討した結果，朝食，喫煙，散歩，体操，牛乳では健康的な生活習慣を有するものが高い骨密度を示すことを報告した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，武部恭一，武政誠一，長尾徹，嶋田智明）
7 車椅子スポーツチャンバラの紹介－リハビリテーションの一環として－	－	平成9年5月	第32回日本理学療法士学会（埼玉）	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルール等，考案したものをビデオにて紹介した． 本人担当部分：開発，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，岩本雅浩，武部恭一，金子翼，武政誠一，長尾徹）
8 大学サッカー選手における外傷・障害調査	－	平成10年11月	第38回近畿理学療法士学会（和歌山）	大学のサッカーチームを対象に選手の外傷・障害の調査をポジション別に行い，その調査結果を報告した． 本人担当部分：考察 （共同発表者：岩本雅浩，池田耕二）
9 バレエ動作による足部障害 PartⅠ－繰り返し動作との関連性－	－	平成13年2月	第12回大阪府理学療法士学会（大阪）	バレエ動作の特徴である足部障害を，繰り返し動作の回数という視点から調査分析を行い，その関連性を報告した． 本人担当部分：調査，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，菊池奈美，磯あすか，式田利晴，玉木彰,林義孝）
10 バレエ動作による足部障害 PartⅡ　－３症例を通して－	－	平成13年2月	第12回大阪府理学療法士学会（大阪）	バレエ動作の特徴である足部障害を有する３症例の理学療法経験から，その効果について検討を行い報告した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：菊池奈美，池田耕二，磯あすか，式田利晴，玉木彰,林義孝）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11　随意的胸式・腹式呼吸が呼吸運動及び換気反応に及ぼす影響(第2報)：肢位の違いによる検討	－	平成13年5月	第36回日本理学療法学術大会（広島）	随意的胸式・腹式呼吸が呼吸運動及び換気反応に及ぼす影響を肢位の違いから検討を行い報告した. 本人担当部分：データ収集 （共同発表者：土井暁子，玉木彰，小室透，山下堅，太田善行，長谷川聡，池田耕二，辻田純三，堀清記）
12 有酸素能力の差が運動時のLocomotor Respiratory Coupling発生に及ぼす影響(運動・神経生理)	－	平成14年5月	第37回日本理学療法学術大会（静岡）	有酸素能力の差が運動時のLocomotor Respiratory Coupling発生に及ぼす影響を検討し，報告した. 本人担当部分：データ収集 （共同発表者：玉木彰，長谷川聡，小室透，白須章子，池田耕二，土井暁子，辻田純三，堀清記）
13 他動的関節可動域が終末期寝たきり脳血管障害者に及ぼす影響	－	平成19年11月	第47回近畿理学療法学術大会（京都）	他動的関節可動域が終末期寝たきり脳血管障害者に及ぼす影響を，シングルケースデザイン法によって検討したことを報告した. 本人担当部分：理学療法実践，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，玉木彰，山本秀美，中田加奈子）
14 認知症後期高齢患者の理学療法実践における「実践知」の構造化にむけた事例研究	－	平成20年11月	第48回近畿理学療法学術大会（大阪）	認知症後期高齢患者の理学療法実践における「実践知」を明らかにし活用できるようにするために，その構造化を，質的研究を用いて行った. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，玉木彰，山本秀美，中田加奈子）
15 身体機能低下を伴った認知症高齢者の理学療法経験	－	平成20年11月	第48回近畿理学療法学術大会（大阪）	身体機能低下を伴った認知症高齢者の２症例の理学療法経験から，理学療法士の関わり方について考察し報告した. 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美，玉木　彰）
16　3年目の理学療法士は終末期理学療法実践をどのように体験しているか？－SCQRMをメタ研究法とした修正版M－GTAによるモデル構築－	－	平成21年11月	第49回近畿理学療法学術大会（兵庫）	本研究は，終末期理学療法を実践している3年目の理学療法士を対象に，「無力感や意欲低下」の生成過程を検討したものである．本研究の結果からは，3年目の理学療法士は，実践における葛藤や実践している環境の中から，無力感や意欲低下が生成されていくことが明らかとなった. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
17　脳出血後高齢血液透析患者1症例の10m介助歩行における往路と復路の能力差に着目した縦断研究	－	平成21年11月	第49回近畿理学療法学術大会（兵庫）	本研究では，脳出血後高齢血液透析患者1症例の10m介助歩行における往路と復路の能力差に着目し，縦断的に研究した．その結果，往路・復路の能力差は不安定性を示した．それらを今後さらに分析するとともに，それらを安定させることが課題であると考えられた． 本人担当部分：データ取集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，玉木彰，山本秀美，中田加奈子）
18 アルツハイマー型認知症を伴う大腿骨人工骨頭置換術後患者に対する理学療法経験 －関わりの中における工夫や視点－	－	平成22年7月	第22回大阪府理学療法学術大会（大阪）	アルツハイマー型認知症を伴う大腿骨人工骨頭置換術後患者1症例の理学療法経験から，関わりの中における工夫や視点について考察した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
19 脳出血後高齢血液透析患者１症例の10m介助歩行における往路と復路の能力差に着目した縦断研究・第２報	－	平成22年11月	第50回近畿理学療法学術大会（和歌山）	本研究では，脳出血後高齢血液透析患者1症例の10m介助歩行における往路と復路の能力差に着目し，それらの縦断研究を行い，能力差の不安定性と重錘負荷との関係を明らかにした． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，山本秀美，中田加奈子,玉木彰）
20 終末期寝たきり高齢患者に対する理学療法評価思考ツールの開発に向けた事例研究	－	平成22年11月	第50回近畿理学療法学術大会（和歌山）	終末期寝たきり患者１症例の理学療法経験から，評価思考ツールの開発にむけた事例研究を行った．その結果，終末期寝たきり患者は全身状態と食事，コミュニケーションの関係から評価・思考できることが明らかとなった． 本人担当部分：理学療法実践，開発，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
21 理想の理学療法士モデルを視点にした理学療法臨床実習生の質的変化の検討 －評価実習と総合実習の比較－	－	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会（宮崎）	本研究では，理学療法臨床実習生が抱く理想の理学療法士モデルを視点に，質的変化の分析を行い，理学療法評価実習と総合実習における違いを明らかにした． 本人担当部分：データ収取集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，吉田正樹,山本秀美,中田加奈子）
22 感情変化に基づいた感性工学的臨床実習指導法の開発にむけて	－	平成23年9月	第13回日本感性工学会（東京）	本研究では，実習日誌から感情表現を抽出し，実習期間中における感情変化と成績との関係を明らかにした．それを基に指導方法を提起した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二,吉田正樹）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23トイレ動作が自立できていない高齢患者の在宅復帰を促す要因（構造）の検討	－	平成23年11月	第51回近畿理学療法学術大会（滋賀）	本研究では，トイレ動作が自立できていない高齢患者を対象に，在宅復帰を促す構造を明らかにした． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：岡村太嗣，池田耕二，梅木速水）
24 強い拒否がみられた認知症高齢患者2症例の理学療法経験から	－	平成23年11月	第52回近畿理学療法学術大会（滋賀）	本研究では，強い拒否がみられた認知症高齢患者における症例検討を行い，理学療法の有り方を提起した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
25 終末期リハビリテーションにおける理学療法評価思考ツールの開発に向けた暗黙知モデルの有用性について―理学療法士へのアンケート調査から―	－	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会（兵庫）	本研究では，以前，筆者らが構造化した「終末期理学療法評価思考ツール」に対するアンケートを実施し，その有用性について検討を行った． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
26 Critical illness polyneuropathyを来した1例に対して訪問リハビリテーション介入により復職可能となった経験	－	平成24年7月	第24回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，Critical illness polyneuropathy 1症例に対する訪問リハビリテーションの有用性を検討した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：廣瀬将士，池田耕二，大原佳孝，竹内
27 退院後の転倒予防に向けた体力測定表の開発に向けて-運動器疾患を通して-	－	平成24年11月	第53回近畿理学療法学術大会（奈良）	本研究では，入院中の運動器疾患患者を対象に評価を行い，退院後の転倒予防に向けた体力測定表の開発経過を報告した． 本人担当部分：開発，データ収集，分析，執筆 （共同発表者：髙本晴輝，山本秀美，中田加奈子，中
28 理学療法臨床実習生の終末期理学療法に対する認識構造からみた終末期理学療法の課題	－	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会（愛知）	本研究では，理学療法臨床実習生の認識構造を構成し，それをもとに終末期理学療法実践と教育における課題を抽出した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，山本秀美，中田加奈子，黒田未貴，廣瀬将士）
29 回復期病棟における脳血管障害患者のFIMの経時的変化	－	平成25年7月	第24回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，回復期病棟における脳血管障害患者のＦＩＭの経時的変化を，退院先（在宅，非在宅）別に明らかにし分析した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：廣瀬将士，池田耕二，河野茉梨絵，大原佳孝，水野瑛梨，粉川友太，朴聖章，阪本みさき）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
30 運動耐容能トレーニングが奏効した特発性間質性肺炎患者の一例　心肺運動負荷試験による運動処方	－	平成25年7月	第24回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，特発性間質性肺炎患者に対して心肺運動負荷試験行い，それをもとに運動処方を行った．その結果，運動療法における有用性が明らかとなった． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，北川紗也佳，水野瑛梨，宇野陽子，堀江淳，池田秀一）
31 回復期病棟における終末期患者の在宅復帰をスムーズにするための条件とは?	－	平成25年6月	第18回日本緩和医療学会学術大会（横浜）	本研究では，回復期病棟に入院し，在宅復帰が円滑に進んだ終末期がん患者1症例を対象に，そこから在宅復帰をスムーズにするための条件を抽出した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：黒田未貴，池田耕二，中田加奈子，中川真優，朴聖章，井谷友香理，北林直人，川岸美佐子，村中恵子，小川 敦子，池田 秀一）
32 理学療法士教育における演劇ワークショップを用いた対人技能向上の取り組み	－	平成25年8月	第5回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会（岐阜）	本研究では，理学療法養成大学における学生に演劇ワークショップを取り入れ，好評であったこと，そして学生に質的な変化がみられたことを報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：山本貴啓，原田信子，池田耕二，田坂厚志，横井輝夫）
33 高齢入院患者の転倒予防に向けた取り組み－運動器疾患に着目して－	－	平成25年11月	第53回近畿理学療法学術大会（京都）	本研究では，入院高齢患者に対して様々な評価を行い，運動器疾患によってそれからがどのように違ってくるかを検討した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：中川真優，山本秀美，中田加奈子，朴聖章，杉本貴美子，池田耕二）
34 患者の行動様式を視点に多職種チームアプローチによって転倒予防対策に取り組んだ2症例	－	平成25年11月	第53回近畿理学療法学術大会（京都）	本研究では，2症例の行動様式に着目し，チームアプローチによって転倒予防に取り組んだ経験を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，黒田未貴，井谷友香理，中川真優，朴聖章，北林直人，川岸美佐子，小川敦子，福井孝子，池田秀一）
35 臨床実習にある新人・中堅臨床実習指導者の不安増幅プロセスとは？	－	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（神奈川）	本研究では，質的研究を用いて，新人・中堅理学療法臨床実習指導者の不安増幅プロセスを構成した．それを視点に不安解消対策を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：湯地英充，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
36 回復期リハビリテーション病棟における「家族が述べる在宅復帰のための条件」と在宅復帰に関する実態調査　―在宅復帰のための条件がトイレ動作の自立の場合―	―	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（神奈川）	本研究では，回復期病棟入院時に家族が述べる在宅復帰のための条件，特にそれをトイレ動作の自立とした家族と患者の在宅復帰に着目し，その実態を調査した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：勢登香織，池田耕二，岡村太嗣）
37 腰椎圧迫骨折を呈した1症例に対する課題指向型アプローチ～家屋調査から見えてきた課題を中心に～	―	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，腰椎圧迫骨折を呈した1症例に対して，早期に家屋調査を行い，課題遂行型アプローチを実践し，良好な結果を得た経験を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：高橋昇嗣，池田耕二，黒田未貴，中川真優）
38 整形外科疾患患者における内部障害有病率に関する実態調査	―	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，整形外科疾患患者における内部障害の実態を調査した．その結果，内部障害の有病率は75％であることが分かった．これらからは，整形疾患患者といえども内部障害に着目した理学療法が必要であり，包括的な理学療法が必要であることが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，吉富滋洋，徳永美由貴，池田耕二，池田秀一）
39 慢性期病院における終末期理学療法の1症例～脳幹出血後遺症の患者と家族を支えた16ヵ月間～	―	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，脳幹出血後遺症の患者と家族を支えた16ヵ月間の理学療法経験を報告し，支える医療における理学療法士の役割を提言した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：山口朋彦，木村美帆子，堀寿美代，黒田敦士，池田耕二，沢田学）
40 不整脈・慢性糸球体腎炎を有する大腿骨転子部骨折術後患者の運動療法～心電図モニタと医師との連携によるリスク管理～	―	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，不整脈・慢性糸球体腎炎を有する大腿骨転子部骨折術後患者の運動療法の経験を報告し，心電図モニタの活用や医師との連携の必要性を再提起した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：黒岡禎治，池田耕二，大原佳孝） 共同研究につき本人担当部分抽出不可能
41　構造構成的協同臨床教育法の視点導入に基づく新たな協働の有り方に関する研究－ケーススタディへの応用－	―	平成26年8月	第42回日本職業リハビリテーション学会（岩手）	本研究では，筆者が開発した構造構成的協同臨床教育法の視点を職業リハビリテーションのケーススタディーに応用し，新たな協働の在り方を提言した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：前原和明，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
42 終末期理学療法実践に対する評価法（考え方）の理論的構築と提案―実践の有効性をどのように評価するか？－	－	平成26年10月	第8回全国大学理学療法教育学会(兵庫)	本研究では，終末期理学療法実践に対する評価法（考え方）を，構造構成主義を活用することで理論的に構築し，理学療法教育に提案した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，貞末仁美）
43 肺サルコイドーシスを有する右脛骨高原骨折術後一症例の理学療法　－臨床現場における包括的理学療法の必要性－	－	平成26年11月	第54回近畿理学療法学術大会（大阪）	本研究では，肺サルコイドーシスを有する右脛骨高原骨折術後一症例の理学療法経験を報告し，包括的理学療法の必要性を示唆した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：高橋昇嗣，大原佳孝，池田耕二，宮崎紗也佳，猪子純一，池田秀一）
44 右重度片麻痺患者一症例の退院後カンファレンスから得られたこと	－	平成27年1月	第1回日本地域理学療法学会（大阪）	本研究では，右重度片麻痺患者の退院時支援から，支援が奏功する3つの要因と，退院後にしか明らかにならなかった2つの課題を明らかにした． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中川真優，大原佳孝，池田耕二，北林直人，上田紀子，清水貴恵，川岸美佐子，池田秀一）
45 病院リハと訪問リハの連携によって終末期がん患者の在宅復帰を可能にした実践報告	－	平成27年1月	第1回日本地域理学療法学会（大阪）	本研究では，病院と訪問リハの連携によって終末期がん患者の在宅復帰を可能にした実践を報告した．病院,訪問リハスタッフの連携により在宅支援を進める意義は大きいと思われた． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，大原佳孝，池田耕二，原田美江，中瀬美穂，池田秀一）
46 看取り近くまでの理学療法を実践した終末期がん患者１症例における入院と訪問の担当理学療法士の連携について	－	平成27年6月	第20回日本緩和医療学会（横浜）	本研究では，看取りに向けた終末期がん患者の在宅復帰に対して，病棟担当理学療法士と訪問理学療法士の連携について考察した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，山本秀美，黒田未貴，早田敏）
47 終末期がん患者の理学療法実践の方向性を示す理学療法教育モデルの構築とその可能性－2症例の経験から－	－	平成27年6月	第20回日本緩和医療学会（横浜）	本研究では，理解されにくい終末期がん患者の理学療法を，その有り方や目標がイメージしやすいモデルに構築しなおし，教育モデルとしの可能性を考察した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：黒田未貴，池田耕二，河野茉梨絵，赤田美和子，早田敏）
48 肺サルコイドーシスを有する両側人工膝関節置換術後一症例患者の運動耐容能および日常生活活動の経時的変化（第2報）	－	平成27年11月	第55回近畿理学療法士学会（神戸）	本研究では，肺サルコイドーシスを有する両側人工膝関節置換術1症例の運動耐容能をCPXにて測定し，運動耐容能と日常生活活動の経時的変化からその関係性について考察した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：髙橋昇嗣，池田耕二，大原佳孝，猪子純一，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
49 当訪問リハビリテーション事業所・訪問看護ステーション利用者における基礎的調査―理学療法における支援課題抽出に向けて　―	―	平成27年12月	第2回日本地域理学療法学会（千葉）	本研究では，地域の特色が反映される訪問リハ事業所と訪問看護ステーションにおける利用者の基本的な特性を調査し，そこから支援課題を抽出した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，池田耕二，濱田絵美，古家真優，中瀬美穂，池田秀一）
50　透析患者に対する包括的腎臓リハビリテーションの役割―2症例の経験から　―	―	平成28年3月	日本腎臓リハビリテーション学会学術大会（岡山）	本研究では，透析患者に対するリハビリテーションの代表的な二つの役割を，事例研究を通して紹介した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，高橋昇嗣，朴聖章，吉冨滋洋）
51　早期歩行獲得を目指した脊髄髄内上衣下腫摘出術後一症例に対する理学療法経験―感覚性運動失調に対するアプローチ―	―	平成28年5月	日本理学療法学術大会（札幌）	本研究では，胸髄髄内上衣下腫術後一症例に対して感覚性運動失調に着目した運動療法を行い，短期間に歩行が獲得できたのでその詳細を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共著者：宮﨑紗也佳，池田耕二，井上良太，田中秀和，北村哲郎，竹島靖浩，堀川博誠）
52 看取りまでの緩和ケアの開発を目的にした終末期がん患者の睡眠状態の把握	―	平成28年6月	第21回日本緩和医療学会（京都）	本研究では，終末期がん患者に対する看取りに向けた緩和ケアを開発する目的にて，終末期がん患者の睡眠状態を調査した．その結果，睡眠パターン等が崩れていく状態が明らかとなり緩和ケアとしては良質な睡眠の確保が重要になっていくことが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴，赤田美和子，早田敏）
53 がん患者に対するリハビリ・ケアの質的向上を目指したアセスメントシートの開発とその有効性	―	平成28年6月	第21回日本緩和医療学会（京都）	本研究では，がん患者のリハビリやケアの質を向上させるために，アセスメントシートを作成し，それを用いることで必要な配慮や工夫を抽出していこうとした．これによりがん患者個々に配慮したリハビリの展開が可能となった． 本人担当部分：アセスメント作成，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：黒田未貴，池田耕二，河野茉梨絵，赤田美和子，早田敏）
54 在宅終末期がんサバイバーのリハビリテーションにおける多職種連携の有効性	―	平成28年7月	第18回日本在宅医学会大会（東京）	本研究では，スマートフォン等を活用することで地域における広域の多職種連携を可能にし，在宅ガンサバイバーに対する有効な実践を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：金谷親好，濵﨑恵，竹ノ内裕一，　池田耕二，久松憲明）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
55 血液透析患者のフットケアにおける理学療法士の役割と可能性	―	平成29年2月	第7回腎臓リハビリテーション学会学術大会（茨城）	本研究では，これから需要が高まる透析患者のフットケア業務の構築とそれに関わる理学療法士の可能性を，実務面から検討し報告した． 本人担当部分：業務の構築，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，高橋昇嗣，吉冨滋洋，朴聖章，白川優子，　池田秀一）
56 理学療法想定場面におけるフレーミング効果を意識した声掛けが意欲に与える影響について	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	本研究では，理学療法における様々な場面において，フレーミングを意識した声がけが意欲の向上とどのような関係にあるかをRCTによって調査した．その結果，主に肯定的なフレーミングが意欲の向上に寄与していることが分かった． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）
57 訪問リハビリテーション利用者の暮らしを守る生活見守りシートの開発と実践の紹介	―	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，我々が開発した訪問利用者の暮らしを守るための生活見守りシートと，それを用いた実践を紹介した．虚弱高齢者や終末期利用者に倒しても生活見守りシートは問題点や方向性が示唆できるようになってあり，実践だけでなく教育にも有効活用できる可能性が示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，中岡絵美，山本秀美，古家
58 終末期患者の緩和ケアにおける訪問リハビリテーションの可能性	―	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，終末期のがん患者，非がん患者に対する訪問リハビリテーションの実践事例から，その可能性を報告した．在宅において理学療法士が看取りまで実践する意義や可能性を示唆することができた． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，池田耕二，中岡絵美，古家真優，大島知子，中瀬美穂，池田秀一）
59 訪問リハビリテーション利用者における外出頻度，地域活動への参加，時間の感覚，憂鬱に関する実態調査	―	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，ICFにおける活動や参加を促すことを目的に，訪問リハビリテーション利用者の活動，参加の実態を調査した．その結果，利用者の活動，参加が低下しているという実態があらためて示唆された．地域特性を考えながらこれらに対処していく必要性が示唆された． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，大島知子，池田秀一）
60 重症急性膵炎後に廃用症候群を呈した1症例に対する訪問リハビリテーションの長期介入効果に関する一考察	―	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，発症後，衰弱がひどく予後が不良な症例に対して，訪問リハビリテーションによる長期介入を行った．その結果，日常生活が自立し，活動範囲は広がり，自己管理能力が育まれたことを報告した．これにより，今後予想される在宅の虚弱高齢者に対する訪問リハビリテーションの可能性を広げることができた． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：大島知子，池田耕二，山本秀美，古家

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
61 訪問リハビリテーションにより認知症高齢者の地域生活の再建ができた事例報告	－	平成29年6月	第19回日本在宅医学会大会（名古屋）	本研究では，地域における認知高齢者の生活を，多職種，多部門連携と近隣住民との協力によって再建した事例を報告した．これにより認知症高齢者の地域生活再建の可能性を示唆することができた． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：金谷親好，池田耕二，久松憲明）
62 不眠のある終末期がん患者1症例に対する緩和ケアにおける理学療法の可能性 －睡眠計と理学療法ケアシートの活用－	－	平成29年6月	第22回日本緩和医療学会学術大会（横浜）	本研究では，終末期がん患者に対して，我々が開発してきた理学療法ケアシートと睡眠計を活用した理学療法の実践を通して，緩和ケアにおける理学療法の有効性や可能性を示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴，赤田美和子，早田敏）
63 外出を契機に活動意欲を取り戻し自宅復帰可能となった虚弱高齢者1症例の理学療法経験	－	平成29年7月	第29回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，意欲低下を示したがんサバイバーの高齢者が，外出を契機に活動意欲を取り戻し自宅復帰が可能になった事例を報告した．ここでは，あらためて機能障害だけでなく，活動，参加に目を向けた実践や多職種連携の有効性や必要性を示唆した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：門内鈴香，池田耕二，中岡伶弥，　黒田未貴）
64 線維筋痛症2症例に対する3週間入院運動療法プログラムの試み ～運動療法介入による脳血流の変化とQOLの改善について～	－	平成29年9月	第22回ペインリハビリテーション（神戸）	本研究では，線維筋痛症患者の3週間入院プログラムの効果を，脳血流の変化と生活の質（ＱＯＬ）の改善から示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：藤田信子，池田耕二，高井範子，松野悟之，小泉優喜，平岡駿典，高橋紀代，三木健司，仙波恵美子）
65 線維筋痛症２症例に対する3週間入院運動療法プログラムの試み　－心理的側面からの検討	－	平成29年9月	第22回ペインリハビリテーション（神戸）	本研究では，線維筋痛症患者の3週間入院プログラムの効果を，心理的変化と生活の質（ＱＯＬ）の改善から示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：高井範子，藤田信子，池田耕二，丸山伸廣，栗田樹，中原理，髙橋紀代，三木健司，仙波恵美子）
66 当院における入院高齢患者の「装い」に関するアンケート調査 －「装い」を支援する作業療法介入に向けて-	－	平成29年9月	第37回近畿作業療法学会（奈良）	本研究では，入院高齢患者の「装い」に対する関心度をアンケート調査した．多くの高齢者は「装い」，すなわち，おしゃれに対する関心が低くなっていた．作業療法では装いを支援していく必要があることを報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：松井美夕貴，池田耕二，木村恵理，阪本みさき，尾藤彩花，宮内克明，水本紀子，黒田未貴，老田弘子，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
67 繊維筋痛症患者に対する３週間入院プログラムの試み	－	平成29年10月	日本繊維筋痛症学会第9回学術集会（大阪）	本研究では，線維筋痛症患者に対する3週間入院プログラム（運動療法）の効果を示唆した． 本人担当部分：データ収集 （共同発表者：高橋紀代，小泉優喜，谷山ゆりえ，丸山信廣，中原理，池田耕二，高井範子，藤田信子，三木健司，仙波恵美子）
68　圧迫刺激が足関節背屈可動域および足関節底屈筋の筋出力に及ぼす影響について	－	平成29年12月	保健医療学学会第8回学術集会（大阪）	本研究では，圧迫刺激が足関節背屈可動域および足関節底屈筋の筋出力に及ぼす影響について調査した．結果，圧迫による足関節背屈可動域への影響は認められなかったが，筋出力においては介入後の腓腹筋に有意な低下が認められた．これは圧迫による腓腹筋の筋出力低下作用を示唆した． 本人担当部分：分析，執筆 （共同発表者：城野靖朋，岡村和典，池田耕二，粕渕賢志，神里巌，金井秀作）
69 理学療法を積極的に取り組んでいる腕神経叢引き抜き損傷を有する男性患者の意欲を探求する ―解釈学的現象学分析―	－	平成29年12月	保健医療学学会第8回学術集会（大阪）	本研究では，理学療法を積極的に取り組んでいる腕神経叢引き抜き損傷を有する男性の意欲を探求し，理学療法実施患者の意欲向上における知見を得た．本男性からは，【半年限定で意欲が維持できるという認識】【焦り，病状，苦痛を，身体を回復させるための意欲に変化させる力】【家族の存在によって強気な自分を維持できる】【妻の努力に依存しない自分，妻からエネルギーをもらう自分という二つの自分】【父親，主人，男としてのプライド】【努力を維持するために，自分をモニタリングし，追い込む力】【職場復帰への意欲と，復帰後への不安から生じる葛藤】【医療スタッフからの情報により，ゆらぐ思い】【セラピスト，病棟，友人との関係性から構成される意欲や思い】の9つのテーマが得られた． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）
70　当院における血液透析患者の足病変・足部変形のケアに向けた実態調査	－	平成30年3月	第8回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究では，透析患者における足病変・足部変形の実態調査を行った．その結果，①足病変は有26肢，無6肢，内訳は胼胝形成が58%，乾燥が12%，潰瘍形成が15%等（重複）であった．②足部変形は有26肢，無6肢，内訳は浮き足43%，外反母趾25%，内反小趾13%等（重複）であった．③ROM制限は有24肢，無8肢，横アーチは正常9肢，低下23肢であった．③潰瘍形成は，有4肢，無28肢であったことを報告し，足病変，足部変形のケアの必要性を報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，朴聖章，髙橋昇嗣，吉冨慈洋，前田純依，島津生江，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
71　高齢血液透析患者におけるFIMと自覚的困難感との関係性～緩和的な理学療法に向けた取り組み～	－	平成30年3月	第8回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究では，高齢血液透析患者の自覚的困難感を軽減する緩和的な理学療法の取り組みに向け，FIMと自覚的的困難感の関係性を検討した．その結果，高齢HD患者の困難感を軽減するためには，個々に合わせた継続的な運動や環境・介助調整等が大切になることを報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：朴聖章，池田耕二，大原佳孝，高橋昇嗣，吉冨滋洋，前田純依，島津生江，池田秀一）
72　末期腎不全(ESKD)を併存した恥骨骨折症例に対する理学療法経験	－	平成30年3月	第8回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究では，末期腎不全（ESKD）を併存した恥骨骨折症例に対する理学療法の経験を報告した． 具体的には，本経験からは医師と連携し，理学療法士が運動中の呼吸循環応答等を評価し慎重に運動負荷を調整すれば，ESKD症例に対しても有効な理学療法が可能となり，ADL向上が図れることを示唆した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：前田純依，池田耕二，大原佳孝，髙橋昇嗣，吉冨慈洋，前田純依，池田秀一）
73 当院がんリハビリテーション実施患者の実態調査	－	平成30年6月	第23回日本緩和医療学学会（神戸）	本研究では，筆頭演者所属病院におけるがんリハビリテーションの実態を調査し，年齢80歳代，PSは重度，家族の関わり有は9割，独居は4割，症状は倦怠感，痛み，食欲低下が多く，ADL介助は清拭，移動，排泄が多く，退院先は自宅，死亡退院が4割を占めていたことを報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴，中本直子，松井美夕貴，中川卓，赤田美和子，早田敏）
74　パーキンソン病独居高齢者に対する自助力を高める視点からの訪問リハビリテーションの実践	－	平成30年6月	第12回訪問リハビリテーション学会（北九州）	本研究では，転倒を繰り返し在宅生活が困難になりつつあったパーキンソン独居高齢者に対し，生活を見守る視点から訪問リハビリテーション（以下，訪問リハ）を実践し，良好な結果を得たので報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，竹内章，大島知子，池田秀一）
75　これからの魅力ある臨床実習，臨床教育に向けて	－	平成30年7月	第30回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本シンポジウムでは，現在の学生や新人の現状を鑑み，大切になると考える3つの視点，①現場教育における「場」づくりという視点．②経験資本という視点．③感情労働という視点を紹介し，今後の臨床実習，新人教育，人材育成についての課題をなげかけた．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
76　閉じこもり傾向にあった高齢者に対して生活の再構築を可能にした理学療法実践～脱臼不安感，運動と食への関心に着目して～	－	平成30年7月	第30回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，入院前より閉じこもり傾向にあった高齢者に対して，身体機能だけでなく，脱臼不安感や運動と食への関心，他者との交流に着目した理学療法を実践したことで，それらに対する認識が変化し，生活の再構築が可能となった事例を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，竹内章，大島知子，池田秀一）
77　線維筋痛症高齢女性2症例に対する3週間入院運動プログラムの試み：前頭前野の血流動態の変化と疼痛，抑うつ，QOLの改善について	－	平成30年9月	第23回日本ペインリハビリテーション学会（福岡）	本研究では，線維筋痛高齢女性に対して3週間入院運動プログラムを行い，疼痛，抑うつ，QOLの改善とNear Infrared spectroscopy (NIRS)による前頭前野(PFC)の血流動態の変化について報告した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：藤田信子，池田耕二，高井範子，松野悟之，金子基史，三木健司，行岡正雄，仙波恵美子）
78　線維筋痛症高齢女性２症例に対する３週間 入院運動プログラムの試み －患者の心身の変化と理学療法士の関わり方に	－	平成30年9月	第23回日本ペインリハビリテーション学会（福岡）	本研究では，線維筋痛症（FM）患者である高齢女性２症例について，３週間入院運動プログラムの介入を行い，その効果と理学療法士（PT）の関わり方を含めた心身の変化の検討を行った． 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：高井範子，藤田信子，池田耕二，金子基史，三木健司，行岡正雄，仙波恵美子）
79　転倒を契機に横紋筋融解症を呈した超高齢患者一症例に対する理学療法経験 ―摂食嚥下機能と栄養状態に着目して―	－	平成30年10月	第5回日本予防理学療法学会（福岡）	本研究では，横紋筋融解症に褥瘡，摂食嚥下機能障害を合併していた症例に対して，栄養状態と摂食嚥下機能に着目した理学療法を行い，経口摂取を可能にし栄養状態や基本的動作等を改善した症例を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中本直子，池田耕二，古家真優，大原佳孝）
80　卒前教育における終末期理学療法講義の役割を再考する	－	平成30年11月	第7回日本理学療法教育学会（神戸）	本研究では，卒前教育として実施している終末期理学療法の講義が，学生に死と向き合う機会を提供し，終末期PTに対する学習・実践意欲を高める機会になっていることを報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：山口朋彦，池田耕二，柳本展孝）
81　理学療法士の経験学習プロセスの解明にむけた探索的研究 －成長を促す経験と教訓―	－	平成30年11月	第7回日本理学療法教育学会（神戸）	本研究では，熟達理学療法士の経験学習プロセスにある成長を促す経験と教訓を明らかにした．これらを理学療法士の現場教育に活用できれば有効な人材育成が可能になることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
82　在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求する	―	平成30年12月	第9回保健医療学学会 2018年12月	本研究では，在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求し，在宅終末期リハビリテーションを有効に実践するためには患者や家族との関係性づくりや変化に気づく等の能力が必要であることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：根釜夢乃，岩永愛里奈，谷口茉恵，西本正樹，池田耕二）
83 当訪問リハビリテーション事業所における利用者のクラスター分析による類型化とその特徴	―	平成30年12月	第5回日本地域理学療法学会（横浜）	本研究では，活動，栄養，排泄，睡眠の4つの視点からなる評価ツールを活用し，クラスター分析によって訪問リハ利用者の類型化を試みることである．その結果，訪問リハ利用者は，Ⅰ群：活動と睡眠に主な課題・介入箇所があり，特に運動機能が低い介護度4の高齢者，Ⅱ群：睡眠に主な課題・介入箇所がある介護度3の高齢者，Ⅲ群：栄養〈食事〉以外の7項目にわずかな課題・介入箇所がある介護度3の高齢者，Ⅳ群：睡眠〈量〉と排泄〈排便〉に主な課題・介入箇所がある介護度3の高齢者の4群に類型化できたことを報告した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，大島知子，山本秀美，中岡絵美，中川真優，竹内章，尾藤彩花，池田秀一）
84 質的研究で変形性膝関節症患者の痛みの心理社会的側 面を生成する要因と過程をひも解く：探索的事例研究	―	令和元年10月	第7回日本運動器理学療法学会学術大会（岡山）	本研究では膝OA患者の一人の語り（主観的体験）から，痛みの心理社会的側面の要因と生成・対処過程をモデル構築し，探索した．その結果，＜膝の症状に対する過剰な執着＞をコアカテゴリーとするモデルが構築でき，痛みの心理社会的側面の一つである症状への執着は適切な対処によって軽減可能なことを示唆した．本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：瓜谷大輔，池田茜，城之木徹，松端賢太郎，六浦優斗，池田耕二）
85 熟達理学療法士の経験学習能力を支える 仕事に対する信念とは？	―	令和元年11月	第54回日本理学療法学術大会・第8回日本理学療法教育学会・第2回理学療法士学会・管理部門研究会（名古屋）	本研究では，理学療法士の経験学習能力に大きく影響を与える仕事に対する信念を，熟達理学療法士から解明した．その結果，熟達PTの信念は人間関係の構築，PTのプライドや責任感，熱意と幅広い実践，治療成果による社会還元等から形成されていたことを報告した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
86 変形性膝関節症に患者・理学療法士はそれぞれどのように向き合っているのか:質的研究	－	令和2年9月	第32回大阪理学療法学術大会（大阪）	本研究では，膝OA患者とPTにおいて，膝OAに対する向き合い方に共通認識がある一方で，運動実施の判断基準や情報の信憑性の判断等に認識の差異が認められた．現場で膝OA患者の能動的参加を促すためには，これらの差異を意識した実践が必要になると考えられた． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆
87 熟達理学療法士の経験学習プロセスにある成長を促す経験とは？	－	令和2年11月	第55回日本理学療法学術大会 第９回日本理学療法教育学会学術大会 第３回日本理学療法士学会・管理部門研究会 （埼玉WEB）	本研究では，多くの専門職において経験学習プロセスにある成長を促す経験から経験学習支援方法が示唆されているなか，理学療法士の成長を促す経験を明らかにし，それをもとに経験学習支援方法を提案した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）
88 本人の希望であった書字動作の獲得が契機となり生活の質の向上が図られた末期肺腺がん利用者の訪問リハの実践	－	令和3年5月	第18回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（高知）	本報告では，本人の希望であった書字動作の獲得が契機となり生活の質（QOL）の向上が図れた末期肺線がん利用者の訪問リハビリテーション実践を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：金谷親好，金丸真由美，池田耕二，
89 放課後等デイサービスにおける保護者視点の児童の課題および 目標に関する探索的研究	－	令和3年10月	日本発達障害学会 第56回研究大会（鹿児島WEB開催）	本報告では，放課後等デイサービスにおける保護者視点の児童の課題および 目標に関する探索的研究を行い，保護者は児童の家庭における具体的な生活動作に課題・目標を設定しており，将来的には児童の個性に合わせた就労支援について悩んでいることを明らかにした． 本人担当部分：データ分析，考察，執筆 （共同発表者：辻下聡馬,辻下千賀，池田耕二）
90 生活空間の広い通所リハビリテーション利用者の身体機能と生活様式の実態について - 転倒有無別による比較 -	－	令和3年12月	日本地域理学療法学会・日本支援工学理学療法学会 日本理学療法教育学会・日本理学療法管理研究会 合同学術大会2021（熊本WEB開催）	本研究では，生活空間の広い通所リハビリテーション利用者の身体機能と生活様式の実態について報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：上田翔平，田坂厚志，辻郁，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
91　熟達理学療法士の成長を促 ― 教訓と応用　―	―	令和3年12月	日本地域理学療法学会・日本支援工学理学療法学会 日本理学療法教育学会・日本理学療法管理研究会 合同学術大会2021（熊本WEB開催）	本研究では，熟達PTの経験学習プロセスにある成長を促す経験から，獲得していた教訓，その後の応用の内容を明らかにした．様々な応用パターンを理解し，成長を促す経験を提供することができれば効率の良い人材育成が可能になると考えられる． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆（共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）
92　放課後等デイサービスにおけるスタッフ視点の児童の目標・課題に関する探索的研究	―	令和3年12月	第11回保健医療学学会学術集会（大阪）	本報告では，放課後等デイサービスにおけるスタッフ視点の児童の課題および目標に関する探索的研究を行い，スタッフは，身体機能に課題・目標を設定しており，将来的には児童の就労について悩んでいることを明らかにした． 本人担当部分：データ分析，考察，執筆 （共同発表者：辻下聡馬,辻下千賀，池田耕二）
93　地域の特性を考慮した村民の健康増進への取り組みの検討	―	令和4年７月	日本予防理学療法学会 第7回サテライト集会（霧島）	本研究では，高齢化率40.2％（平成31年1月）である岡山県西北端に位置する真庭郡新庄村においてAging in Placeを実現および継続するために，地域の環境や特性・資源を調査し，村民の健康増進および介護予防の方法を検討した．新庄村は高齢になっても農業に従事している者が多く，ロコトレ参加者の平均年齢が80歳を超えており，元気な高齢者が多いと考えられる．しかし入所施設および小規模多機能型居宅介護以外の短期入所施設が無いため，何らかの障害を有すると村内での生活が困難となる．また農業従事者は仕事と生活の線引きが難しく1日の殆どが仕事という生活であるため，中高年者の健康への意識は低いと考えられる．以上より，村民の健康増進，介護予防およびAging in Placeの実現と継続には，自身の健康へ目を向ける機会を増やすとともに，農業による身体への負荷を軽減する動作指導等，高齢者のみならず中高年者へのアプローチが重要と考える． 本人担当部分：考察 （共同発表者：笹野弘美，平野孝行，池田耕二，滝本幸治，辻下聡馬，笹野英樹）
94 慣性センサーの加速度と角速度を用いて算出した角度の妥当性検証 ―単軸運動の角速度とセンサー位置の影響―	―	令和4年７月	第31回奈良県理学療法士学会（奈良）	関節角度は運動分析において重要な評価項目である．慣性センサーは重力加速度が鉛直方向に加わる特性を利用する方法と,角速度を利用する方法で角度を算出できる.本研究ではこれらの方法で算出した角度の妥当性,単軸運動の角速度と慣性センサーの設置位置が及ぼす影響を検証した.その結果，慣性センサーから算出できる角度は低速運動では加速度,高速運動では角速度を利用することで妥当性の高い結果が得られることが示された. 本人担当部分：考察 （共同発表者：城野靖朋，野田優希，前田吉樹，飯塚照史，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
95　コロナ禍における生活変化はフレイルに影響するか？ ―後期高齢者を対象とした質問紙による検討―	―	令和4年11月	第9回日本予防理学療法学会学術大会（東京）	本研究では，高齢化が進む山間地域の後期高齢者を対象に，コロナ禍における生活変化がフレイルに影響しているか質問紙にて調査したので報告する．その結果，コロナ禍における生活の変化が，フレイル判定や後期高齢者の質問票の結果と関連していることが分かった．質問紙且つ小サンプルの調査結果ではあるが，山間地域に在住の後期高齢者では，コロナ禍での生活変化が虚弱な状態への移行に関連する可能性が示唆された． 本人担当部分：考察 （共同発表者：滝本幸治，池田耕二，笹野弘美，辻下聡馬，椿根純子，小杏宜子）
96 軟式野球部のコンディショニングに対する意識向上を目的としたアクションリサーチ	―	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（奈良）	アクションリサーチを用いたスポーツ現場の障害予防を実践した報告は見当たらない．そこで，本手法を用いて，コンディショニングに対する意識の向上を目的とした．対象は対象は奈良学園登美ヶ丘中学校・高等学校の軟式野球部の部員21名および監督とした．チームのコンディショニングに対する意識についてアンケート調査し，その結果を受けてウォーミングアップの提供および指導を行った．介入による意識や行動の変化を捉えるためにアクションリサーチの手法を用いて分析した．コンディショニングに対する生徒の意識は，介入により一旦低下したが，介入方法を修正することで再び向上した．介入に際しては，メニューの目的をしっかり伝えること，チームの練習時間によってメニュー変更可能であるものにすること，さらに習得度に合わせ段階的に提供することでコンディショニングに対する取り組みを促すことができることが示唆された． 本人担当部分：研究計画，考察 （共同発表者：野田優希，寄能彩未，寺岡舞，橋本晃樹，池田耕二）
97 コロナ禍における在宅・地域高齢者の「思い」を探索する：３事例による探索的研究	―	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（奈良）	本研究では，コロナ禍における在宅・地域高齢者の「思い」を構造化した．その結果，在宅・地域高齢者の「思い」の構造からは，「コロナ感染からくる怖さや不安」を中心に【コロナ禍での 様々な変化】，「コロナ禍における制動」，「ワクチン接種がもたらす自由や期待」の 3 つがバランスを保ちつつ， 高齢者の行動を形成していることが示唆された.また，怖さや不安は「コロナ禍に対する感染対策への揺れる思い」と「コロナ禍がもたらす若者への揺れる思い・考え」と三角関係を形成し変容していること，そして【コロ ナ禍における死生観の再考】を促し，死の覚悟と喜びをもたらしていることも示唆された． 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：松井翔大，前田颯太，松本嵐，土肥あかね，松本洋平，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
98 理学療法士を育む【場】の形成に向けて：新たな枠組みと今後の課題	―	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（奈良）	近年の現場は若手の理学療法士(以下，PT)の急増，ハラスメント意識の高まり，働き方改革、社会 的ニーズの多様化により大きく変わりつつある.現場には教えられないものも多くあり，個々の PT は自己学習・研鑽，経験学習により実践知や能力を獲得していかなければならない.本演題では現在の現場教育の限界を踏まえつつ，筆者らの経験と文献から必要と考えられる新たな枠組み，【場】づくりを示唆し，その実現に向けた今後の方向性と課題を提案した．【場】の形成はあくまでも間接的支援であり，直接的支援である教育方法の開発や実践は継続されなければならないと考える. 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋，吉川義之，野田優希）
99 理学療法士の苦悩経験(失敗，ミスなどを含む)における探求的研究	–	令和4年12月	第5回日本理学療法管理研究会学術大会（WEB）	本研究では，熟達理学療法士（以下，PT） の苦悩経験を探索した．その結果，PTは，患者に対して「理学療法の未熟さや目標設定ミス，患者 の転倒や死」に苦悩し，周囲や自身，学生・後輩に対して「周囲との関係性，自分の力量不足，自分の不甲斐ない態度，指導 不足や学生のドロップアウト」に苦悩していた. 特に中堅PT（4-10年目)の時期に苦悩する傾向にあり，PT管理者はPTの患者 や周囲・自身等に向かう苦悩に適切な支援を行う必要があると考えられた. 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋，吉川義之，野田優希）
100 リハビリテーション専門職の働きがいに与える 要因	–	令和4年12月	第5回日本理学療法管理研究会学術大会（WEB）	本研究では，当法人のリ ハビリ専門職の働きがいに影響を与える要因を明らかにした．その結果，当法人のリハビリ専門職の働きがいに影響を与える要 因は，配置，ビジョン共有，能力向上であった．当法人のリハビリは4部門あるが，配置は面談にて希望を確認し納得のうえで実施している．ビジョン共有はビジョン・ミッションの刷新を行ない職員で作成したビジョンを各部門で共有し，能力向上はプリセプター制度の採用，各部門での研修会や 症例検討会の実施，今年度からはキャリアラダー等を採用している．今回，これらが大きく影響したものと思われ，評価や処遇がなかった理由は当法人の人事考課制度が作成段階にあるためと推察できた. 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：池田祐介，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
101 感情労働や共感疲労からくる理学療法士のスト レスを探求する:解釈学的現象学的分析	–	令和4年12月	第5回日本理学療法管理研究会学術大会（WEB）	本研究では，現場の理学療法士（以下，PT）の心理的ストレスを解釈学的現象学的分析により探究し，支援方法を提案した．その結果， PTの心理的ストレスの経験には、対患者，対医療スタッフ，PT自身に由来のものがあった.それぞれへの支援としては、対患者では「患者への疼痛や吐露，理不尽さ，クレーム，ハラスメン トへの対応方法に関する教育やトレーニング，患者の突然の死や病状進行，出口の見えない状況，PTとして委ねられる意思決 定に対峙したときのケア，患者との関係を決定する職場の環境 の整備」、対医療スタッフでは「上司や他職種の決定や振る舞いに対する研修や仕組み作り，上司や他職種との考えや理解の 相違を埋めるための研修，管理職として働くうえでの研修やケア」，PT自身では「PTとして無力感が生じたときのケア」が提案できた. 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）
102 後縦靭帯骨化症術後の運動障害に対して対側下肢を用いて運動感覚を想起させる介入が功を奏した一症例	–	令和4年12月	第62回近畿理学療法学術大会（和歌山）	本研究では，OPLL術後に運動障害を合併した症例に対し、初期介入時に反対側下肢を用いた運動感覚に着目した介入を実施し功を奏したので報告した．椎間板ヘルニアの罹患期間も合わせると2年間以上下肢に神経障害があったと推察できるため、OPLL術後の左下肢介入だけでは運動感覚の想起 や再教育が難しかったものと考えられる．脳血管障害でも非麻 痺側への介入でクロスエデュケーションとして利用されてきたが、本症例においても初期介入時に有効な介入方法となること が示唆された. 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：森田隆剛，喜多一馬，梅津俊介，池田耕二）
「招待講演，シンポジスト」				
1 痛みに対する低出力レーザー療法	–	平成7年11月	第3回物理療法研究会　神戸大会（神戸）	肩関節周囲炎患者に対して低出力レーザーの臨床効果を判定した．低出力レーザーは除痛効果があるものの，症例ごとには使用方法の再検討が示唆された．また今後の課題としては照射条件や他の物理療法とのコンビネーション効果，使用時期などがあげられた. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，武政誠一）
2 車椅子スポーツチャンバラの紹介	–	平成9年1月	第4回身体障害者スポーツ指導員養成講習会（大阪）	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルール等，考案したものを紹介した. 本人担当部分：車いすスポーツチャンバラの開発，執筆 （共同発表者：池田耕二，岩本雅浩，武部恭一，金子翼，武政誠一，長尾徹）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3 臨床実習における指導方法について	―	平成18年2月	大阪医療福祉専門学校　実習指導者会議　（大阪）	問題を有する実習生に対して，実際行っている具体的な指導方法について講演した．
4 臨床実習における指導方法の実際　―臨床実習指導者からの提言―	―	平成19年7月	大阪府理学療法士会 臨床実習指導者研修会（大阪）	臨床実習に対する指導方法の中でも，特に情意面における指導方法について講演を行った．
5 地域医療（小規模型民間病院）における終末期理学療法の実践― 事例研究の紹介	―	平成20年2月	神戸大学就進会理学療法分科会（神戸大学医学部保健学科同窓会，神戸）	地域医療における一般病院にて行われている終末期医療を紹介し，それに対する事例研究を報告した．またこれから事例研究がどうあるかべきかについても合わせて報告した．
6 Bridge the gap，－”１”臨床実習指導者の提言－	―	平成20年3月	行岡リハビリテーション専門学校　臨床実習指導者会議　教育講演（大阪）	臨床実習における実習生の内面をパターン分類し，それらに対する指導方法について講演を行った．
7　理学療法研究方法論	―	平成29年12月	公益社団法人大阪府理学療法士会　新人教育プログラム研修会（大阪）	理学療法における研究法やエビデンスに基づく理学療法実践についての講演を行った．
8 これからの魅力ある臨床実習，臨床教育に向けて	―	平成30年7月	第30回大阪府理学療法学術大会　教育シンポジウム（大阪）	これからの理学療法臨床実習の在り方を講演した．
9 理学研究方法論（EBPTを含む）	―	平成30年12月	公益社団法人大阪府理学療法士会　新人教育プログラム研修会（大阪）	理学療法における研究法やエビデンスに基づく理学療法実践についての講演を行った．
10 クリニカルリーズニング	―	平成31年1月	公益社団法人大阪府理学療法士会　新人教育プログラム研修会（三島ブロック）（大阪）	理学療法におけるクリニカルリーズニングをわかりやすく解説する講演を行った．
11 リハビリテーションの視点から見た温泉旅行の可能性	―	令和元年11月	ユニバーサルツーリズム阿智村シンポジウム2019	長野阿智村において開催されたユニバーサルツーリズムのシンポジウムにおいて，リハビリテーションにおける温泉旅行の可能性を講演した． （共同発表者：池田耕二，喜多一馬）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12　現場の理学療法士育成論：経験学習を通して	－	令和3年11月	大阪北区理学療法士会　研修会（大阪）	医療情勢の変化や働き方改革・等を背景に研修会や勉強会を重視した学習だけでは，現場の理学療法士（PT）教育・育成は限界にきている．そこで現場で行う経験学習に注目し，PTの経験学習プロセスの解明をもとに，現場教育・人材育成における支援方法を教示した．
13　終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められる視点と対応	－	令和4年2月	リハテック・リンクス　地域理学療法（オンライン）	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
14　学習し続ける組織の構築にむけて	－	令和4年2月	大阪府理学療法士会・医療・介護保険部　ミドルマネジメント講習会（大阪）	大阪府理学療法士会の理学療法士の中間管理職，管理職を対象に学習する組織の構築について講演した．講演内容は，現場経験に基づく組織づくりの内容に加え科学研究費による研究成果である理学療法士の経験学習プロセスの解明から導かれた経験学習支援方法を紹介した．
15　緩和ケア領域における理学療法の紹介−理学療法士の可能性と広がる役割−	－	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（ランチョンセミナー）	緩和ケア領域における理学療法を紹介し，理学療法士の可能性と広がる役割について講演した．
16　終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められる視点と対応	－	令和5年3月	リハテック・リンクス　地域理学療法（オンライン）	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
＜研究大会＞ 1 当院における車椅子スポーツチャンバラの試み	－	平成6年11月	第4回車椅子ｽﾎﾟｰﾂ研究集会(名古屋)	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルール等，考案したものを紹介した． 本人担当部位：車いすスポーツチャンバラの開発，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，平山敦子，朝倉光子，武部恭一，金子 翼，武政誠一）
2 車椅子ｽﾎﾟｰﾂﾁｬﾝﾊﾞﾗにおける心拍数変動について	－	平成7年11月	第5回車椅子ｽﾎﾟｰﾂ研究集会（大阪）	考案した車椅子スポーツチャンバラが，それに参加した患者に対して身体にどのような影響をあたえるかを，心拍変動より検討した． 本人担当部位：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，金子翼，長尾 徹，小室 透，居村茂幸）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3 健康教室"10年間の総括-公開講座を継続させる工夫-	－	平成8年8月	第18回全国地域リハビリテーション研究会（神戸）	地域住民の健康に寄与する目的にて「健康教室」を10年実施してきた．それらから長期継続するための工夫や，今後の展望について検討した．健康教室の有効性は示唆されたが，今後は情報源としても健康教室を役立たせ地域リハビリテーションの１システムとして確立していきたいことを報告した． 本人担当部分：健康教室の企画・運営，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，岩本雅浩，武部恭一，武政誠一）
4 車椅子スポーツチャンバラにおける心身反応について	－	平成9年9月	第 7回車椅子ｽﾎﾟｰﾂ研究集会（東京）	考案した車椅子スポーツチャンバラが，それに参加した患者に対して心理面や血圧にどのような影響をあたえるかを検討した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：磯あすか，池田耕二，杉山安幾子，平田憲市，武部恭一，金子翼，武政誠一，長尾徹）
5　訪問リハビリを利用している主介護者の介護負担感と要介護者のＦＩＭとの関連性について	－	平成23年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会くまもと2011（熊本）	本研究では，介護者の負担かんと要介護者のＦＩＭとの関連性を明らかにし，訪問リハビリにおける理学療法の方向性を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：岡村太嗣，池田耕二，岩森渉）
6　回復期リハビリ病棟における家族が述べる「在宅復帰のための条件」と在宅復帰について	－	平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究では,回復期病棟入院時に家族が述べる在宅復帰のための条件と在宅復帰の関連性を検討した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：岡村太嗣，池田耕二，深田大介）
7　嚥下造影検査に嚥下障害の実態調査		平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究では，嚥下造影検査と嚥下障害の関係を調査し，その実態を明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：上田紀子，池田耕二，黒田未貴，廣瀬将士，清水貴恵，福井孝子，池田秀一）
8 在宅復帰に向けた家屋調査の実態とその傾向	－	平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究では，在宅復帰に向けた家屋調査の実態を調査し，玄関，トイレ，入浴に環境調整が多いことを明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：北林直人，池田耕二，井谷友香里，坂本みさき，尾藤彩花，上田紀子，黒田未貴，廣瀬将士，清水貴恵，福井孝子，池田秀一）
9 がんの緩和リハに対する意識調査－看護とリハスタッフの比較－	－	平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究は，アンケートによって，がんの緩和リハに対する意識が看護師とリハビリスタッフでは違うことを明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴，廣瀬将士，赤田美和子，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10 転倒予防専用カンファレンスによる転倒予防の取り組み―転倒カンファ導入の効果検討	―	平成26年2月	回復期リハビリテーション協会　第23回研究大会（愛知）	本研究では，転倒予防専用のカンファレンスが病棟の転倒予防に有用であることを示唆した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，黒田未貴，井谷友香理，中川真優，朴聖章，川岸美佐子，小川敦子，福井孝子，池田秀一）
11 デイケアにおけるサービス向上に向けた実施調査	―	平成26年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2014（長崎）	本研究では，デイケアにおいて実態調査を行い，約8割の利用者がリハビリに満足していたことや，約6割に転倒不安があり，4割が外出を控えていたことを明らかにした． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：大庭由香莉，池田耕二，上田紀子，中田加奈子，大村昌和，小田瑛梨，勝久江，池田秀一）
12 重度右片麻痺患者一症例の退院後カンファレンスからみえてきたもの	―	平成26年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2014（長崎）	本研究では，重度右片麻痺患者一症例の退院後カンファレンスから，オムツ交換の早期指導や転落時の対応指導，指導用パンフレットの有効性を明らかにした． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中川真優，池田耕二，黒田未貴，北林直人，上田紀子，福井孝子，川岸美佐子，池田秀一）
13 家屋調査と環境調整に関する追跡調査―インタビュー調査による質的検討―	―	平成26年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2014（長崎）	本研究では，退院後のインタビュー調査から，患者や家族の環境調整に対する理解不足，環境調整の追加の必要性や不安の存在を明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：尾藤彩花，池田耕二，上田紀子，北林直人，阪本みさき，井谷友香理，久貝亮太，黒田未貴，廣瀬将士，清水貴恵，池田秀一）
14 慢性心不全患者1症例に対する生活管理という訪問リハビリの役割 - 入退院を繰り返さないために -	―	平成27年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会（神戸）	本研究では，慢性心不全患者の訪問リハビリを，生活管理の視点から見直し，その役割について考察した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：濵田絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，須々木星衣子，中瀬美穂，池田秀一）
15 高齢者の退院に向けた身体活動量把握の取り組み	―	平成27年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会（神戸）	本研究では，回復期リハビリテーション病棟における高齢者に対して，退院にむけた活動量の調査を行った． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：杉本貴美子，池田耕二，古家真優，吉冨滋洋，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
16 訪問リハビリテーション利用者の生活習慣とリズムに関する実態調査- 虚弱高齢者の暮らしを支える活・栄・排・睡の4つの視点 -	―	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2016（茨城）	本研究では，訪問リハビリテーション対象患者の生活習慣とリズムを，主に活動，栄養，排泄，睡眠の4つの視点から調査した．その結果，訪問リハ利用者の活動低下，睡眠不足等の実態が明らかとなり，この4つの視点からの実践が今後は大切になることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，山本秀美，中岡絵美，古家真優，大島知子，池田秀一）
17 転倒により入退院を繰り返した一症例に対する病棟と訪問理学療法士における協同の振り返り－シームレスな療養支援の構築に向けて	―	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2016（茨城）	本研究では，病棟と訪問の理学療法士が共同で同じ症例を振り返ることで，シームレスな支援の構築に重要な実践知を抽出した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家
18 高次脳機能障害患者1例に対する道のりシートを用いた退院支援について ―退院までの道程を共有する道のりシートの作成と活用―	―	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2016（茨城）	本研究では，リハビリテーションや退院支援が困難である高次脳機能障害患者に対して，退院の方向性や段階を示す道のりシートなるものを作成し，実践した．これにより患者の心理は安定し，リハビリテーションは可能となり，職員の連携も良好となり，有効な退院支援が可能となったことを報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：尾藤彩花，池田耕二，木村恵理，阪本みさき，松井美夕貴，猪子純一，黒田未貴，大原佳孝，米沢仁美，清水貴恵，上地康子，池田秀一）
19 回復期リハビリテーション病棟における高齢患者の活動量について ― 測定部位（手首と腰部），FIM，うつ，転倒予防自己効力感に着目して ―	―	平成29年2月	第29回復期リハビリテーション病棟協会研究大会（広島）	本研究では，回復期リハビリテーション患者の活動量を手と腰に装着し，それぞれの活動量を測定することで病棟の活動実態を明らかにした．手に装着した活動量では病棟生活の実態がより反映した．またFIM，うつ，転倒自己効力感との関係性についても報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：杉本貴美子，池田耕二，吉冨滋洋，中岡伶弥，古家真優，池田秀一）
20 質問項目から見た患者タイプ別のフレーミング効果を意識した肯定的・否定的な声かけの有効性に関する探索的研究	―	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究では，ユニーク質問により患者をタイプ別に分類し，肯定的な声かけと否定的な声かけでフレーミング効果を検証してみた．その結果，肯定的な声かけでフレーミング効果がみられたが，タイプ別に明らかになることはなかった． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
21 重複障害を有する独居高齢者の退院支援から見えてきたもの	－	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究では，重複障害を有する独居高齢者の退院支援を振り返り，退院支援能力を向上させる知見を抽出した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：阪本みさき，池田耕二，尾藤彩花，木村恵理，松井美夕貴，黒田未貴，老田弘子，池田秀一）
22 デイケアにおいて閉じこもり傾向にあった高齢利用者に対する行動変容理論を用いた実践―3事例の物語分析から得た知見―	－	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究では，デイケアにおいて閉じこもり傾向にあった高齢利用者に対する行動変容理論を用いた実践を，物語分析によって分析し，閉じこもりを予防できる知見を抽出した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：大山大将，池田耕二，黒岡禎治，廣瀬将士，吉冨滋洋，高本晴加，勝久江，池田秀一）
23 糖尿病による右下腿切断後，多職種連携による訪問リハビリテーションを実施し生活の再構築を図った 認知症患者1症例の実践報告	－	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究は，糖尿病による右下腿切断後の認知症高齢患者を，多職種連携と訪問リハビリテーションによって生活の再構築を実現させた実践報告である． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：竹内章，池田耕二，山本秀美，中岡絵美，大島知子，池田秀一）
24 当院回復期リハビリテーション病棟におけるサルコペニア症例の特徴からみた今後の取り組み	－	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究は，回復期リハビリテーション病棟におけサルコペニア症例を対象に，退院時にサルコペニアが改善した群と改善しなかった群を比較し，その特徴を明らかにし，今後の取り組みの方向性を示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：中岡伶弥，池田耕二，杉本貴美子，尾藤彩花，大庭由香莉，加藤靖乃，門内鈴香，松井美夕貴，岡村大，田渕真由美，大原佳孝，老田弘子，池田秀一）
25　奈良学園大学におけるコロナ禍の学内実習の紹介① ：臨床実習専用ホームページの開設と運用方法の紹介	－	令和3年10月	全国リハビリテーション学校協会　第34回教育研究大会・教員研修会（福岡WEB開催）	本研究では，本学の臨床実習専用ホームページの紹介と，コロナ禍における学内実習の活用例(予習，経験，復習のサイクルに応用）を紹介した．併せて学生のアンケート結果を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，滝本幸治，飯塚照史，城野靖朋，野田優希，福原啓太，中田修，辻下聡馬，岩﨑智子，辻下守弘）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
26　奈良学園大学リハビリにおけるコロナ禍の学内実習の紹介② ：早期体験実習の概要と学生アンケート調査	－	令和3年10月	全国リハビリテーション学校協会　第34回教育研究大会・教員研修会（福岡WEB開催）	本研究では，新型コロナウィルス感染拡大を受け，早期体験実習を学内実習としたが，その概要と学生に対して実施したアンケート結果を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩﨑智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二）
27　奈良学園大学におけるコロナ禍の学内実習の紹介③ ：地域理学療法・作業療法実習の概要と学生アンケート調査－	－	令和3年10月	全国リハビリテーション学校協会　第34回教育研究大会・教員研修会（福岡WEB開	本研究では，，新型コロナウィルス感染拡大を受け，地域実習を学内実習としたが，その概要と学に対して実施したアンケート結果を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：滝本幸治，吉川義之，笹野弘美，坪内善仁，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生，池田耕二）
<医療集談会> 1 車椅子ｽﾎﾟｰﾂﾁｬﾝﾊﾞﾗの試み	－	平成6年3月	第14回兵庫県リハビリテーション医療集談会（兵庫）	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルール等，考案したものを紹介した． 本人担当部分：スポーツチャンバラの開発，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，宮本真美，平山敦子，太田光子，栗岡真弓，武部恭一，金子 翼，武政誠一）
2 当院における訪問ﾘﾊの現状と問題点	－	平成10年2月	第17回兵庫県リハビリテーション医療集談会（兵庫）	当院における訪問リハビリテーションの立ち上げ，その活動の現状と問題点を整理し報告を行った． 本人担当部分：訪問リハの開設，分析，考察，執筆 （共同発表者：平田憲市，池田耕二，杉山安幾子，磯あすか，松本知子，武部恭一，武政誠一，長尾徹）
3 竹を素材とした自助具の紹介	－	平成10年2月	第17回兵庫県リハビリテーション医療集談会（兵庫）	関節リウマチ患者に対して竹を素材とした自助具を作成し，その活用方法とともに紹介を行った． 本人担当部分：考察 （共同発表者：長尾徹，金子翼，武政誠一，池田耕二，武部恭一）
<その他> 『リハビリテーション・ケアセンターうららか』の軌跡 ～ 実践報告：開設から現在までの振	－	平成10年2月	全国有料老人ホーム協会第25回西日本事例研修発表会（WEB）	『リハビリテーション・ケアセンターうららか』の軌跡を実践報告として振り返った（開設から現在までの振り返り）． 本人担当部分：実践，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，古家真優，梅津奈史，石田大貴，池田耕二）

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　5 年　3 月 31日

氏名　池田　耕二

研究分野	研究内容のキーワード
リハビリテーション科学，理学療法学，教育工学	理学療法学・理学療法教育，教育工学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1）図示化教材と臨床現場を体験できるスライド教材を用いたシュミレーション教育の実践	平成18年4月 ～ 平成25年9月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当授業科目：理学療法治療学Ⅱ 授業は，暗記型の授業ではなくできるだけ理学療法とはどういったものか考えることができるような授業にした．そのために授業資料は図によって見やすくレイアウトしたものを用いたり，臨床現場のスライド等をみせつつ，学生自身に実際現場に立てばどういった態度や評価，実践を行うかを問いながら，シュミレーショを交え学生とともに検討するスタイルにした．また，ときには勉強の仕方や資料の調べ方など，実践現場で臨床を行いながらどのように勉強していくのか等を，経験を交えて教示した．その結果，学生は理学療法実践するにあたって自分に何が足らないかを再認識し，自ら勉強しなければならないという姿勢を学ぶことができたと考える．
2）ペイパーペイシェントとインターネット活用による認知スキルトレーニングの実践	平成23年4月 ～ 平成26年3月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 担当授業科目：理学療法技術実習2，総合技術特別実習3 授業は，理学療法の認知スキル，つまり技術の一つとしての理学療法臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題を抽出し，それを基に仮説生成しながら理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．その結果，問題を解決していこうとする姿勢や具体的な解決方法を学ぶことができた．
3）個々の学生の習熟度に合わせた学外実習指導	平成24年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目：理学療法体験実習，評価実習，総合臨床実習 学外施設で行われる各臨床実習を，個々のレベルに合わせて円滑に行えるようにするため，実習前には各学生と個人面談を行い，知識の習熟度，コミュニケーション能力，その他，不安なことを確認し，それを学外施設の指導者と共有しながら実習を行った．必要に応じて実習前に実技練習を行ったり，また何度も学外施設に出かけたり，学生との面談を繰り返したりした．　これにより学生のレベルに合わせた実習が可能となり，個々の学生が成長できた．

事項	年月日	概　　要
4）チーム別体験学習による教育実践	平成26年4月 ～ 平成28年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当授業科目：日常生活活動学演習 授業では，代表的な疾患を整理しながら，日常生活活動の評価法を教授し実践させた．また，障がい別に日常生活活動や生活関連動作の評価や動作指導，介助方法等についても，疑似体験させ理解を深めさせた．チーム別にレポートをまとめさせることでチームアプローチの重要性を体験させ，実際の現場で口頭指導ができるような体験も取り入れた．これにより日常生活活動における評価や指導力がついた．また，学年によっては理解を深めるために，班長には別に1コマ時間を作り，実践を教授し，それを伝えさせる練習も加えた．これにより学生の学習も進んだ．
5）高齢患者の動画教材を用いた教育実践	平成26年4月 ～ 平成30年9月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当授業科目：老年学 大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当科目：老年期疾病論，老年期障害理学療法 授業では，学生があまり触れることない高齢者の身体的特徴をはじめ，疾患，環境についての講義を行った．その際には実際の患者の動画やデータを基に臨場感をもたせ，本学問と理学療法との関わりについて講義した．これからの高齢者には，地域における転倒，認知症，腰痛，生活習慣病に対する予防理学療法が大切になってくることも教授し，理解を深めた．これにより高齢者理学療法の実態を理解し，興味をもって老年学を学習できるようになった．
6）ペイパーペイシェントとインタ-ネットを活用したチームアプローチ実践	平成26年9月 ～ 平成29年3月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 担当授業科目：チームリハビリテーション特論 授業は，理学療法におけるチームアプローチによる臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題抽出し，それを基に仮説を生成しながらチームアプローチによって理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．これによりチームアプローチによる臨床推論と理学療法プログラムの立案能力が養われた．
7）終末期・がん患者リハビリテーションにおけるスライド教材の作成と教育実践	平成28年9月 ～ 現在に至る	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 担当授業科目：基礎医学特論Ⅰ 授業では，一般病院，地域におけるがんリハビリテーションについて教授し．生活の質を高めるための実際の工夫も加え，興味をひくように展開した．その際は，触れる機会の少ない終末期がん患者のリハビリテーションの風景のスライド教材を作成し，「生」や「死」，支援，ケアについて考えてもらうようにした．これによりがんリハビリテーションに対する知見を深めることができた．

事項	年月日	概　　要
8）予習，体験，復習シートを用いた訪問リハビリテーションにおける教育実践	平成28年9月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当授業科目：地域リハビリテーション 本授業では，実際の現場の写真や動画を多用し，症例検討式にして実際の訪問リハが疑似体験できるように進めた．また，その際には，予習シート，体験シート，復習シートを作成し，現場に臨む姿勢，学ぶ姿勢，復習する姿勢を養うように工夫した．さらには，在宅における看取りまでの終末期理学療法をみてもらい，これからの訪問リハの有り方をともに考えることにした． また，地域リハビリテーションは，疾患だけでなく，地域特性や社会情勢からも大きく影響をうけたり，個々の価値観が大きく反映するため，書物を多く読んで考えることが大切となる．そこで,少し時間をかけて書物多く読んでもらい,レポート量も増やして熟考して貰う練習も行った．これにより,地域リハビリテーションの奥深さとかんがえることの大切さを学ばせた．
9）運動学I（総論）ワークブックを用いた教育実践	令和元年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　運動学I（総論） 本授業では，運動学の総論を講義した．しかし，その範囲は非常に広く，どれも重要事項であるため，学生がどこから手をつけて良いかわかりづらくなっている．そのため，学生の学習意欲が下がる危険性も大きい．そこで，学習の方向性を示したり，運動学の理解を促すワークブックを作成し，それを用いて講義を行なった．これにより，自己学習を促し，学習意欲の低下を防ぐことができた．
10）オンデマンド・ライブ配信を行った学内・見学実習	令和2年8月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　早期体験実習（理学療法） 本実習は，外部の医療施設におもむき見学を通して学習を深めるものである．しかし，コロナ感染のため学内実習に切り替えた．できるだけ従来の実習に近づけるため，動画教材を作成し，病院からもライブ配信を実施した．さらには予習，復習のためのホームページも作成し，学習を変化にすすめた．これにより従来の見学実習と同程度の学習内容が得られたものと考える．ただし，実際に現場に行けなかったことは大きな不安材料になったことは否めない．

事項	年月日	概　　要
11）オンデマンド・ライブ配信を行った学内・地域理学療法実習	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　地域理学療法実習 本実習は，外部の介護保健施設，地域におもむき見学等を通して学習を深めるものである．しかし，コロナ感染のため学内実習に切り替えた．できるだけ従来の実習に近づけるため，動画教材を作成し，病院からもライブ配信を実施した．さらには予習，復習のためのホームページも作成し，学習を変化にすすめた．これにより従来の地域理学療法実習と同程度の学習内容が得られたものと考える．ただし，実際に現場に行けなかったことは大きな不安材料になったことは否めない．
12）予習・復習ワークシートを用いた徒手筋力検査学実習の教育実践	令和2年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　運動器評価学I（総論） 本講義は，コロナ禍においてオンライン・対面のハイブリッドで実践されたため，実技時間が限られていた．そこで，できるだけ効率よく学習をすすめるために予習用ワークシートを作成し，これにより自己学習を促した．限られた実技練習の時間には，予習シートから理解度が低い考えられるところを抽出し，そこを重点的に説明できるようにした．これにより対面と同じ程度，学習効果を維持できたと考える．
13）課題ワークシートを活用した日常生活動作学演習の実践	令和2年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　日常生活活動学演習 本演習は，コロナ禍においてオンライン・対面のハイブリッドで実践されたため演習時間が限られていた．そこで，できるだけ効率よく学習をすすめるために日常生活動作学演習の課題ワークシートを作成し，それをもとに考えるグループ学習を実践した．これにより演習は教える垂直型教育だけでなく，学生同士による平行型教育も可能となり，考える学習が実践できたと考える．これにより対面と同じ程度の学習効果が得られたとも考える．
14）高齢者のQOLを向上させるための外出プランの作成課題を通した地域理学療法学習	令和2年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　地域理学療法学演習 本演習は，地域理学療法学を習得後，あらためて個々の対象者に対する地域理学療法学を演習を通して学ぶものである．本演習では，障害を有する高齢者を設定し，QOLを向上させる外出計画を個々に立案させた．立案計画は，同じ設定であっても多様な内容になることや，それぞれ意味合いが違うことを明らかにした．これらの実践により，地域理学療法学の多様性を学習できたと考える．

事項	年月日	概　　要
２　作成した教科書，教材 1）図式化教材の作成	平成18年4月 ～ 平成25年9月	大阪医療福祉専門学校 担当授業科目：理学療法治療学Ⅱ 整形疾患に対する理学療法において，図で見る教材を作成し，視覚にうったえる教材を作成し，それに基づいて教育を行った．これにより教科書に苦手意識をもつ学生も興味をもって臨むようになり学習効果が向上した．
2）理学療法士のための物理療法臨床判断ガイドブック	平成19年9月 ～ 平成23年12月	病院現場における臨床実習指導 物理療法における浮腫に関する個所を担当し，ディシジョンツリーによって，わかりやすく治療を判断できるようにした（出版）．
3）認知症後期高齢者に対する理学療法の実践知の構造化による教材作成	平成20年4月 ～ 平成23年12月	病院現場における臨床実習指導 学生にとって対応が難しいとされる認知症患者の理学療法を指導する際に，認知症後期高齢者に対する理学療法から実践知を構造化し，図示化したものを活用し，臨床実習指導を行った．これにより学生は，認知症後期高齢患者の理学療法における方向性や概要が把握しやすくなり，学習効果が進んだ．
4）臨床における動作分析についてのプレゼンテーション資料（教材）の作成	平成22年6月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 特別講義：動作分析 病院における患者の状態を観察し，１）病態を探る，２）その能力から何ができるかを考える，３)動作の意味を考える，といったように動作分析の重要性や活用方法をわかりやすくするプレゼンテーション資料を作成した．これにより動作分析学習における導入が容易となり学習効果が向上した．
5）臨床における高齢者の理学療法(運動療法) 実践に向けたプレゼンテーション資料（教材）の作成	平成23年7月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 特別講義：臨床推論 高齢者の問題構造の把握や理学療法（運動療法）の設定方法を学ぶことを目的に，プレゼンテーション資料を作成した．これにより多角的な視点が必要となる高齢者理学療法の一端を体験することができるようになり学習効果が向上した．
6）高齢者理学療法における動画教材の作成	平成26年4月 ～ 平成31年3月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当授業科目：老年学 大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当科目：老年期疾病論，老年期障害理学療法 授業では，高齢者の現場の実際の動画やデータを基に臨場感をもたせながら，本学問と理学療法との関わり動画教材を作成し講義した．これにより高齢者の理学療法が実感できるようになり，学生は興味をもって学習できるようになった．

事項	年月日	概　　要
7）終末期理学療法の実践	平成27年4月 ～ 平成30年3月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目　老年期障害理学療法学 終末期理学療法実践に関する教育方法を，熟達度に合わせて分かりやすく紹介した（出版） 書籍名　終末期理学療法の実践　B5判　全208頁 編集者：日高正巳，桑山浩明 著者：池田耕二　本人担当部分：第2章　「終末期理学療法をどのように教えるか，そして学ぶか」pp7-13を単著
8）地域リハビリテーション学習における予習，体験，復習シートの作成	平成28年9月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当授業科目：地域リハビリテーション 本授業では，実際の現場の写真や動画を多用し，症例検討式にして実際の訪問リハが疑似体験できるように進めた．また，その際には，予習シート，体験シート，復習シートを作成し，現場に臨む姿勢，学ぶ姿勢，復習する姿勢を養うように工夫した．さらには，在宅における看取りまでの終末期理学療法をみてもらい，これからの訪問リハの有り方をともに考えることにした． また，地域リハビリテーションは，疾患だけでなく，地域特性や社会情勢からも大きく影響をうけたり，個々の価値観が大きく反映するため，書物を多く読んで考えることが大切となる．そこで,少し時間をかけて書物多く読んでもらい,レポート量も増やして熟考して貰う練習も行った．これにより,地域リハビリテーションの奥深さとかんがえることの大切さを学ばせた．
9）局所と全身からアプローチする運動器の運動療法	平成29年8月	運動器の運動療法の理解を深めるために，運動療法における歴史をまとめて紹介した（出版）． 書籍名　局所と全身からアプローチする運動器の運動療法　B5判　全342頁　編集者：小柳磨毅，中江徳彦，井上悟 著者：池田耕二　本人担当部位：第Ⅰ部　総論，1.運動器の運動療法とは，運動療法の歴史 pp14-17を単著．
10）訪問リハビリテーション アドバイスブック	平成30年3月	在宅での終末期にリハビリテーションにかかわるセラピストに求められる視点や，対象者と家族，周辺の人々とのかかわり方，セラピストの在り方について提言した
11）運動学ワークブック	令和元年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当科目　運動学I（総論） 運動学（総論）における学習意欲の低下を防ぎ，自己学習を促すために，ワークブックを作成し，それを授業に活用した．
12）徒手筋力検査学習のための予習・復習シートの作成	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当科目　運動器評価学I（総論） コロナ禍における遠隔・対面のハイブリッド講義において，徒手筋力検査の学習を効率よく行うために予習復習シートを作成し活用した．

事項	年月日	概　　要
13）日常生活活動学演習のための課題シートの作成	令和2年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当科目　日常生活活動学演習 コロナ禍における遠隔・対面のハイブリッド講義において，徒手筋力検査の学習を効率よく行うために予習復習シートを作成し活用した．
14）理学療法臨床実習とケーススタディ	令和2年12月	コロナ禍で初めて行われた本学の学内実習の内容を紹介した（出版）． 書籍名　理学療法臨床実習とケーススタディ　B5判　285頁編集者：鶴見隆正，辻下守弘 著者：池田耕二　本人担当部分：With コロナ社会での
15）PT・OTのための運動学テキスト ： 基礎・実習・臨床	令和3年2月	運動学の理解を深めるために，補訂版を作成するにあたり編集・校正に加わり，運動学総論・等を紹介した（出版）． 書籍名　PT・OTのための運動学テキスト ： 基礎・実習・臨床　B5判　全570頁　編集者：小柳磨毅，山下協子，大西秀明，境隆弘 著者：池田耕二本人担当部分：主に運動学の定義，生体力学のページの大幅な修正・校正を行った．
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1）　臨床実習施設における臨床実習生のアンケート調査	平成20年4月 ～ 平成23年3月	臨床実習施設において臨床実習生にアンケート調査を行い毎回臨床実習指導の評価を行った．その結果，評価としては「実習生に適した指導をしてもらえた」，「努力を継続することの必要性を学べた」，「親切丁寧に指導してもらえた」等があげられた．
2）大阪行岡医療大学における授業評価アンケート調査	平成26年4月 ～ 平成30年9月	大学授業評価の結果は，担当科目「日常生活活動」「日常生活活動演習」「老年期疾病論」「老年期障害理学療法」「地域リハビリテーション」「理学療法概論」において，「十分理解できた」，「理解できた」，「授業に情熱を感じた」等の評価を受けた．また，卒業研究ゼミにおいては，一番の人気ゼミとなっている．
３）奈良学園大学における授業評価アンケート調査	令和2年度 ～ 現在に至る	授業評価については，アンケートが実施された「運動学Ⅰ」，「運動器評価学」，「日常生活動作学演習」において5段階中4.0以上の満足度が得られていた．

事項	年月日	概　　要
４　実務の経験を有する者についての特記事項 1）　臨床実習指導	平成5年6月 ～ 平成23年3月	武部整形外科リハビリテーション，小川病院，道仁病院の各施設にて，臨床における理学療法業務において，実習指導者として理学療法の理論・技術の教授，実技の援助を実習生に対して行った．合計9校から，計83名の実習生を指導した．臨床現場で症例を数例担当し，理学療法実践を学ぶだけでなく，それ以外にもどのような準備や実践，チームワークが必要かも学んでもらった．また医療や社会のどのようなルールに基づいて理学療法が行われているのかも教示し学習してもらった．また，実践の中でどのように課題に取り組み，研究を行っていくのかも少し触れてもらうことにした．その結果，学生は理学療法評価や実践だけではなく，現場の諸仕事を学習し理学療法士のあり方を学習するにいたった．
	平成22年4月 ～ 平成23年3月	道仁病院にて臨床教育を有効に行うために構造構成主義を臨床教育に導入した構造構成的協同臨床教育法を開発し実践した．　昨今の理学療法臨床実習では指導者，学生ともに問題を有していることから，臨床実習の運営や指導が上手くいかないこともある．そこで考え方を根本から見直し，信念対立を解消することができる構造構成主義を基盤に新たな教育法を開発し実践した．そのことによって効果的に理学療法やその他のことを教示・学習しやすくなり臨床実習効果が向上した．
2）各施設（池田病院総合リハビリテーションセンター，大阪北警察病院，サンシティ―木津，大阪行岡医療大学など）の中堅理学療法士に対する教育，指導活動	平成25年4月 ～ 現在に至る	学生や新人理学療法士教育については，近年充実してきたが，中堅理学療法士が成長できる機会は，技術講習会や大学院を除いてほとんどない．そのため，業務管理や後輩指導，その他の技量アップや情報発信できる力を養うことを目的に，大学業務以外に個別に業務や学術指導を行ってきた．現在も中堅理学療法士の指導は継続実施であり，希望者があれば社会貢献目的で今後もそうした活動を継続する．
3)介護付有料老人ホームにおけるリハビリテーション業務のシニアアドバイザー	令和元年9月 ～ 現在に至る	介護付有料老人ホームのリハビリテーション室の立ち上げと業務等の指導・相談．老人ホームにおける理学療法の開発を担う．具体的には，リハビリテーション・ケアセンターうららかを開設し，実践の振り返りを通して，介護付き有料老人ホームのリハビリテーション・モデルを開発し提案している．

事項	年月日	概　　要
4）臨床実習指導者講習会　講師と世話人	令和2年度 ～ 現在に至る	2020年における理学療法養成校指定規則の改変による指導者の育成を行っている． 厚生省，日本理学療法士協会，奈良県理学療法士協会，奈良県理学療法養成校協議会による共同主催．
5）講演，シンポジウム ・公開講座である健康教室の企画・開催と講師	平成5年3月 ～ 平成10年3月	診療所（武部整形外科リハビリテーション）が市民に対して開いている健康教室の企画・準備・開催とその講師を行った．テーマは，腰痛，膝の痛み，肩の痛み，骨折などである．詳細については 医学書院，公衆衛生学の活動レポートとして出版された．論文名「健康教室」10年間の総括－公開講座を継続させる工夫－として（査読付）公衆衛生 61(7) 495－499，1997．
・痛みに対する低出力レーザー療法	平成7年11月	第3回物理療法研究会（神戸大会）講師 肩関節周囲炎患者に対する低出力レーザーは除痛効果があるものの，症例ごとには使用方法の再検討が示唆された．今後の課題としては照射条件や他の物理療法とのコンビネーション効果，使用時期などがあげられることを講演した．
・車椅子スポーツチャンバラの紹介	平成9年1月	第4回身体障害者スポーツ指導員養成講習会　講師 スポーツチャンバラを，患者や障がい者にリハビリの一環として，または楽しんもらうために車いすスポーツチャンバラとして開発し，実用していることを講演した．
・臨床実習における指導方法について	平成18年2月	大阪医療福祉専門学校実習指導者会議　講師 臨床実習指導には，知識や技術だけでなく感情面についての指導や配慮も必要であることを示唆し，具体的な手法と実践報告を講演した．
・臨床実習における指導方法の実際 ―臨床実習指導者からの提言―	平成19年7月	大阪府理学療法士会 臨床実習指導者研修会 講師 臨床実習生を知識・技術，感情面等からみると様々な学生がいることが理解できる．それに合わせて指導することが臨床実習指導を有効にできることを講演した．
・Bridge the gap － 臨床実習指導者の提言－	平成20年3月	行岡リハビリテーション専門学校 臨床実習指導者会議教育講演　講師 臨床実習では，指導者と学生の間に大きな隔たり，すなわちギャップがある．これを意識して指導することが有効な臨床実習につながっていくことを講演した．

事項	年月日	概　　要
・地域医療（小規模型民間病院）における終末期理学療法の実践　－事例研究の紹介－	平成21年2月	神戸大学就進会理学療法分科会 （神戸大学医学部保健学科同窓会）講師 地域医療における終末期がん患者，血液透析患者，遷延性意識障害患者等に対する終末期理学療法実践の内容を講演した.
・理学療法臨床実習をどのように実践していくか？	平成27年3月	三加茂田中病院（徳島）教育講師　講師 臨床実習指導について，知識や技術供与だけでなく，大切なことは学生が自然と伸びる場づくりであることを講演した.
・認知症を正しく知ろう	平成27年8月	大阪行岡医療大学健康教室　講師 地域住民の方に対して健康教室を開催し，認知症の疫学や予防方法，介護方法等について講演した.
・高齢者のリハビリテーション	平成27年12月	大阪行岡医療大学市民公開講座　講師 高齢者に多い疾患や障害の紹介とともに，それに対する予防方法や生活管理，制度，リハビリテーション等について講演した.
・理学療法士を育む	平成28年3月	宝持会　池田病院（大阪）教育講演　講師 池田病院の管理者研修の一環として，人材育成に関する方法論を理学療法士教育を通して講演した.
・人間科学リハビリテーションにおけるエビデンスを考える	平成29年1月	第13回人間科学リハビリテーション研究会　講師 人間科学においては，客観的実証主義に代表される数値化だけでエビデンスは作れないこと示唆し，現象学，構造構成学，接面等の考え方を利用すれば，新たな視点からエビデンスが作れる可能性が高まることを講演した.
・リハビリテーションと生活管理－寝たきりにならないために－	平成30年3月	宝持会総合健康づくりセンターハリーえいわ　市民健康講座　講師 寝たきりにならないためには，リハビリテーションが終了したあとも大切であることを伝え，生活管理として生活習慣の見直す，あるいは自己管理していくことが重要であることを講演した.
・リハビリテーションの視点から見た温泉旅行の可能性	令和元年11月	ユニバーサルツーリズム　阿智村シンポジウム2019 長野阿智村において開催されたユニバーサルツーリズムのシンポジウムにおいて，リハビリテーションにおける温泉旅行の可能性を講演した.

事項	年月日	概　　要
・現場の理学療法士育成論：経験学習を通して	令和3年11月	医療情勢の変化や働き方改革・等を背景に研修会や勉強会を重視した学習だけでは，現場の理学療法士（PT）教育・育成は限界にきている．そこで現場で行う経験学習に注目し，PTの経験学習プロセスの解明をもとに，現場教育・人材育成における支援方法を教示した．
・終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められ	令和4年2月	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
学習し続ける組織の構築にむけて	令和4年2月	大阪府理学療法士会の理学療法士の中間管理職，管理職を対象に学習する組織の構築について講演した．講演内容は，現場経験に基づく組織づくりの内容に加え科学研究費による研究成果である理学療法士の経験学習プロセスの解明から導かれた経験学習支援方法を紹介した．
・緩和ケア領域における理学療法の紹介−理学療法士の可能性と広がる役割−	令和4年12月	緩和ケア領域における理学療法を紹介し，理学療法士の可能性と広がる役割について講演した．
・終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められる視点と対応	令和5年3月	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
5　その他 ・理学療法士養成校における教育実績 （専任教員）	平成24年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学 医療学部理学療法学科 担当授業科目：理学療法体験実習，評価実習，総合臨床実習 専任教員 学外施設で行われる各臨床実習を，個々のレベルに合わせて円滑に行えるようにするため，実習前には各学生と個人面談を行い，知識の習熟度，コミュニケーション能力，その他，不安なことを確認し，それを学外施設の指導者と共有しながら実習を行った．必要に応じて実習前に実技練習を行ったり，また何度も学外施設に出かけたり，学生との面談を繰り返したりした．　これにより学生のレベルに合わせた実習が可能となり，個々の学生が成

事項	年月日	概　　要
	平成26年4月 ～ 平成28年9月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目：日常生活活動学演習　専任教員 授業では，代表的な疾患を整理しながら，日常生活活動の評価法を教授し実践させた．また，障がい別に日常生活活動や生活関連動作の評価や動作指導，介助方法等についても，疑似体験させ理解を深めさせた．チーム別にレポートをまとめさせることでチームアプローチの重要性を体験させ，実際の現場で口頭指導ができるような体験も取り入れた．これにより日常生活活動における評価や指導力がついた． また，学年によっては理解を深めるために，班長には別に1コマ時間を作り，実践を教授し，それを伝えさせる練
	平成26年4月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当授業科目：老年期疾病論（老年期障害学）専任教員 授業では，老年期を代表する疾患や高齢者問題等を教授した．また現在の医療保険制度や介護保険制度などの社会制度についても教授し，高齢者リハビリテーションには医療，看護，保険，社会福祉等の多様な知識が必要であることや，多職種のチームアプローチが必要であることを伝えた． これにより老年期疾病やそれに対する理学療法の理解が深まった．また，これから理学療法士が多く扱うであろう慢性疾患，とくに生活習慣病等についての対応も教授し，その役割の大きさを理解させた．
	平成26年9月 ～ 平成27年3月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目：日常生活活動学　専任教員 授業では，国際障害分類，国際生活機能分類をはじめ，生活活動評価であるバーサルインデックスや機能的自立度評価表（ＦＩＭ）等を教授した．また，代表的な疾患を整理しながら，日常生活活動の評価と実践内容の概要を教授した．
	平成26年9月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当授業科目：老年期障害理学療法　専任教員 授業では，老年期の障害の評価に基づいて，老人の生活自立に向けた系統的な健康管理や地域参加を促進するために，医学的管理下において，機能訓練などの理学療法技術が展開できるように演習した．これにより，老年期障害理学療法における考え方や捉え方が養われた．また，今後重要となってくる様々な内部障害や慢性疾患を想定し，運動や活動が体にどのような影響を及ぼすかも考えさせ，その奥深さを実感してもらった．また，がんをはじめ終末期の理学療法についても教授し，これから必要となる看取りまでの理学療法の可能性を示し，今後の課題を実感してもらった．

事項	年月日	概　　要
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当授業科目：卒業研究 専任教員 テーマは，平成28年度「終末期がん患者の在宅療養を支援するための理学療法の課題」，平成29年度「消化器系がんによる低栄養と運動療法」，「脊椎転移患者に対する理学療法」であった． これから大きな役割を担うと思われる難病や終末期を対象とした患者の理学療法を学習し，今後に備えることにした．
	平成28年9月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当授業科目：地域リハビリテーション 専任教員 授業では，実際の現場の写真や動画を多用し，症例検討式にして実際の訪問リハが疑似体験できるように進めた．また，その際には，予習シート，体験シート，復習シートを作成し，現場に臨む姿勢，学ぶ姿勢，復習する姿勢を養うように工夫した．さらには，在宅における看取りまでの終末期理学療法をみてもらい，これからの訪問リハの有り方をともに考えることにした． また，地域リハビリテーションは，疾患だけでなく，地域特性や社会情勢からも大きく影響をうけたり，個々の価値観が大きく反映するため，書物を多く読んで考えることが大切となる．そこで,少し時間をかけて書物多く読んでもらい,レポート量も増やして熟考して貰う練習も行った．これにより,地域リハビリテーションの奥深さとかんがえることの大切さを学ばせた．
	平成28年9月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当授業科目：理学療法評価学 専任教員 授業では，理学療法評価学に関する知識を総論的に教授し，ICFに基づく理学療法プログラムの立案や臨床推論の方法を教授した．
	平成29年4月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目：理学療法概論　（専任教員） 授業では，高齢者の理学療法の概論を担当し，高齢者の理学療法の役割や可能性，その展望について紹介した．

事項	年月日	概　　要
	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：早期体験実習（理学療法）（専任教員） 授業では，十分なオリエンテーションのうえ，一般病院等の医療施設を３つ学生に体験してもらった．帰校後は，さらに学習を深化させてもらうためにディスカッションを行い学習内容の発表を行なった．これにより医療施設における理学療法，その他の専門職種の役割が理解できた．
	令和元年10月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：基礎ゼミII（専任教員） 授業では，自己学習の進め方を学習するために，課題設定，文献検索の方法や読み方，プレゼンテーション方法を教授し，学習成果の発表を行なった．これにより学生は，大学内，学外実習，またはプロになってからの自己学習方法の一部が身についた．
	令和元年10月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：運動学I（総論）（専任教員） 授業では，運動学の総論を内容をすべて網羅できるように講義を行なった．なお，その際には運動学ワークブックを作成し，大切なところや自己学習の方向性がわかるようにし，学習を深めた．
	令和2年4月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：日常生活動作学（専任教員） 本講義では，日常生活動作の基本や疾患別の動作分析，日常生活評価を講義した．また，様々な評価方法や評価尺度を紹介した．
	令和2年4月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：地域理学療法学（専任教員） 本講義では，地域理学療法における施設系，訪問系の理学療法を講義した．また終末期理学療法についても講義した．

事項	年月日	概　　要
	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：地域理学療法実習（専任教員） 本実習は，外部の介護保健施設，地域におもむき見学等を通して学習を深めるものである．しかし，本年は，コロナ感染のため学内実習に切り替えた．できるだけ従来の実習に近づけるため，動画教材を作成し，病院からもライブ配信を実施した．さらには予習，復習のためのホームページも作成し，学習を変化にすすめた．これにより従来の地域理学療法実習と同程度の学習内容が得られたものと考える．ただし，実際に現場に行けなかったことは大きな不安材料になったことは否めない．
	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：運動器評価学I（総論）（専任教員） 本講義は，コロナ禍においてオンライン・対面のハイブリッドで実践されたため，実技時間が限られていた．そこで，できるだけ効率よく学習をすすめるために予習用ワークシートを作成し，これにより自己学習を促した．限られた実技練習の時間には，予習シートから理解度が低い考えられるところを抽出し，そこを重点的に説明できるようにした．これにより対面と同じ程度，学習効果を維持できたと考える．
	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：日常生活動作学演習（専任教員） 本演習は，コロナ禍においてオンライン・対面のハイブリッドで実践されたため演習時間が限られていた．そこで，できるだけ効率よく学習をすすめるために日常生活動作学演習の課題ワークシートを作成し，それをもとに考えるグループ学習を実践した．これにより演習は教える垂直型教育だけでなく，学生同士による平行型教育も可能となり，考える学習が実践できたと考える．これにより対面と同じ程度の学習効果が得られたとも考える．
	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：地域理学療法学演習（専任教員） 本演習は，地域理学療法学を習得後，あらためて個々の対象者に対する地域理学療法学を演習を通して学ぶものである．本演習では，障害を有する高齢者を設定し，QOLを向上させる外出計画を個々に立案させた．立案計画は，同じ設定であっても多様な内容になることや，それぞれ意味合いが違うことを明らかにした．これらの実践により，地域理学療法学の多様性を学習できたと考える

事項	年月日	概　　要
	令和3年4月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：老年期障害理学療法学（専任教員） 本授業では，高齢者の身体，心理的，社会的特徴とともに，高齢者の理学療法における評価や実践方法を，そのエビデンスとともに教授した．
・理学療法士養成校における教育実績 （非常勤講師）	平成12年4月 ～ 平成13年9月	大阪府立看護大学　医療技術短期大学部理学療法学科 担当授業科目：臨床実習　非常勤講師 臨床現場で理学療法を行うにあたり，単に理学療法評価や実践を学ばせるだけでなく，それ以外にもどのような準備や実践が必要なのか，医療や社会においてどのようなルールに基づいて理学療法が行われているのか等も教示し，学習できるようにした．その結果，学生は理学療法評価や実践だけではなく，現場の諸仕事を学習し理学療法士のあり方を学習するにいたった．
	平成18年4月 ～ 平成25年9月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当授業科目：理学療法治療学Ⅱ　整形外科疾患（関節リウマチ，足部・足関節）　非常勤講師 授業は，暗記型の授業ではなくできるだけ理学療法とはどういったものか考えることができるような授業にした．そのために授業資料は図によって見やすくレイアウトしたものを用いたり，臨床現場のスライド等をみせつつ，学生自身に実際現場に立てばどういった態度や評価，実践を行うかを問いながら，シュミレーショを交え学生とともに検討するスタイルにした．また，ときには勉強の仕方や資料の調べ方など，実践現場で臨床を行いながらどのように勉強していくのか等を，経験を交えて教示した． その結果，学生は理学療法実践するにあたって自分に何が足らないかを再認識し，自ら勉強しなければならないという姿勢を学ぶことができたと考える．
	平成23年4月 ～ 平成24年9月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部理学療法学科 担当授業科目：理学療法技術実習2　非常勤講師 授業は，理学療法の認知スキル，つまり技術の一つとしての理学療法臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題を抽出し，それを基に仮説生成しながら理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．その結果，問題を解決していこうとする姿勢や具体的な解決方法を学ぶことができた．

事項	年月日	概　　要
	平成25年9月 ～ 平成26年3月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部理学療法学科 担当授業科目：総合技術特別実習3　非常勤講師 授業は，認知スキルの一つとして理学療法における臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題抽出し，国際生活機能分類に即しながら，それを基に仮説生成し理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．その結果，国際生活機能分類に即しながら，問題を解決していこうとする姿勢が身に付き，具体的な解決方法を自ら発見し，学ぶことができた．
	平成26年4月 ～ 平成31年3月	大阪医療福祉専門学校 理学療法学科 担当授業科目：老年学，非常勤講師 授業は，高齢者の身体的特徴をはじめ，疾患，環境についての講義を行った．また，その際には実際の患者の動画やデータを基に，本学問と理学療法との関わりについても講義した． また，これからの高齢者においては，地域における転倒，認知症，腰痛，生活習慣病に対する予防理学療法が大切になってくることを教授し，理解を深めた．これにより高齢者理学療法の実態を理解し，興味をもって老年学を学習できるようになった．
	平成26年9月 ～ 平成29年3月	大阪電気通信大学医療福祉工学部 理学療法学科 担当授業科目：チームリハビリテーション特論　非常勤講師 授業は，理学療法におけるチームアプローチによる臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題抽出し，それを基に仮説を生成しながらチームアプローチによって理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．これによりチームアプローチによる臨床推論と理学療法プログラムの立案能力が養われた．
	平成28年9月 ～ 令和4年3月	大阪電気通信大学 医療福祉工学部理学療法学科 担当授業科目：基礎医学特論Ⅰ　非常勤講師 授業では，一般病院，地域におけるがんリハビリテーションについて教授し．生活の質を高めるための実際の工夫も加え，興味をひくように展開した．これによりがんリハビリテーションに対する知見を深めることができた．
	令和元年12月	大阪行岡医療大学　特論 担当授業科目：理学療法特論　非常勤講師 授業では，がんリハビリテーション・ケアと終末期理学療法の実践を教授し，これらの実践力がこれからの地域リハビリテーションには必要になることを学習した．

事項	年月日	概　　要
	令和4年６月	大阪保健医療学　保健医療学部　理学療法学学科 担当授業科目　老年期理学療法治療学 授業では，緩和ケアの理学療法の実践を教授した。
・臨床実習生の自己開示レポートから意識変化を分析し，提言をおこなった.	平成21年10月	理学療法ジャーナル 43(10) 942-943 題目「コミュニケーション能力の向上に課題にした自己分析レポートからみえてきたもの」として実習生の自己開示レポートを分析し，実習指導における指導方法について考察した.

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許		
理学療法士免許	平成 5年6月	（登録番号21836号）
ケアマネージャー	平成13年3月	（登録番号27995318号）
福祉住環境コーディーネーター　2級	平成15年6月	（証書番号10－2－04540）
修士（学術）	平成20年3月	放送大学大学院 文化科学研究科 教育開発プログラム（学位番号第1903号） 題目「理学療法臨床実習による臨床実習生の意識構造の変化」
専門理学療法士（教育・管理理学療法）取得	平成22年4月	日本理学療法士協会が制度化した専門理学療法士制度の専門理学療法士（教育・管理）を取得　登録番号（７－90）
博士（工学）	平成24年3月	大阪電気通信大学大学院 医療福祉工学研究科医療福祉工学専攻（学位番号博医甲第0028号） 題目「理学療法臨床実習における実習生の意識変化の解析に関する研究」
TOGU“FT-Physio”,”FT-coach Level1”	平成25年8月	TOGU社製のツールを活用したトレーニングやコンディショニングを実践するインストラクター（Instructor Number 002）
大阪府がんリハビリテーション研修　終了	平成28年2月	がんリハビリテーション料の算定可能
臨床実習指導者講習会　修了	平成31年3月	臨床実習指導者の資格，および指導者を育成できる資格を獲得した．（第2018-2-046号）
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 1）武部整形外科リハビリテーション （有床診療所） 職種　理学療法士	平成5年3月 ～ 平成8年3月	理学療法士として，主に脊椎圧迫骨折，大腿骨頸部骨折術後，人工膝関節置換術，前十字靭帯再建術，アキレス腱縫合術，下肢の切断等，整形外科疾患の理学療法に従事する．担当患者のカンファレンスや退院指導，訪問指導の役割も担う．また，診療所主催の公開講座である健康教室の企画を担当し，準備やテーマごとに講師の役割も担う．2か月に1回開催を実施．学術活動にも積極的に参加する．

事項	年月日	概　　要
2）武部整形外科リハビリテーション （有床診療所） 職種　主任　理学療法士	平成8年4月 ～ 平成13年3月	理学療法士として，上述した整形外科疾患診療に関わる傍ら，公開講座である健康教室の企画，運営にも関わった．また主任として，訪問リハビリテーションの開設し，大腿骨頸部骨折や脊椎圧迫骨折後の患者，脳卒中の患者にに対する在宅理学療法を行う．また，リハビリテーション室の管理業務として，職員である理学療法士の募集から育成，また理学療法アシスタントの育成を担う．治療実績の管理，勉強会，学術活動への積極的な参加，学生に対する臨床実習指導に従事する．
3）小川病院　リハビリテーション科 職種　主任　理学療法士	平成10年4月 ～ 平成13年3月	リハビリテーション科開設のため，主任としてリハビリテーション機器の見積もり，搬入等の準備・施設基準Ⅱの取得とシステムの構築，そして開設に従事した．その後，リハビリテーション科の主任として管理業務を行う．具体的には治療実績の管理，理学療法士の募集，後輩理学療法士の育成，勉強会の開催，学術活動に推進，学生に対する臨床実習指導を担う． 理学療法士としては，医療，介護のケアミックス病棟であったことから，整形外科疾患を中心に，長期寝たきり患者，虚弱高齢者等の理学療法に，この時から緩和ケア，終末期理学療法に関わる．また夜間にはスポーツ専門リハビリテーションを開設し，主に学生のスポーツ障害後のリハビリテーションに従事する．
4）道仁病院　リハビリテーション科 職種　統括責任者　理学療法士	平成13年4月 ～ 平成23年12月	統括責任者として，リハビリテーション科開設のための機器の見積もり，搬入等の準備・施設基準Ⅱの取得とシステムの構築，そして開設に従事した．その後，統括責任者として管理業務を行う．具体的には治療実績の管理，理学療法士の募集，後輩理学療法士の育成，勉強会の開催，学術活動に推進，学生に対する臨床実習指導を担う． 理学療法士としては，医療，介護のケアミックス病棟であったことから，整形外科疾患を中心に，長期寝たきり患者，がん患者，内部障害，虚弱高齢者等の理学療法に従事する．また，緩和ケアや終末期の患者に対する理学療法も行う．このとき末期がんの理学療法に対する症例報告の論文を発表し，理学療法ジャーナル奨励賞を受賞する．

事項	年月日	概　　要
5）池田病院　総合リハビリテーションセンター 職種　主任　理学療法士（現場最高責任者）	平成23年12月 ～ 平成25年3月	総合リハビリテーションセンターの現場最高責任者として，一般病棟，回復期リハビリテーション病棟，療養型病棟，訪問リハビリテーション，デイケア，デイサービス等のリハビリテーションセンターの運営に携わる．診療報酬の改定や患者へのサービス充実にあわせてシステムの再構築も行った．また，学術委員，医療安全委員，接遇委員等も担った．さらに理学療法士，作業療法士，言語療法士等の人事にも携わった．理学療法士としては，主に急性期から維持期の脳血管，運動器，呼吸器，循環器，内部障害（がん，糖尿病による切断等）の理学療法に関わった．また積極的に終末期医療や高齢者医療にもたずさわり理学療法士の役割等を模索・実践してきた．また地域住民の方々に対して理学療法の啓蒙や健康維持を目的に，相談や公開講座も行った． 現場では複数の部下（理学療法士）に勉強会や講習を行い育成にも力を注いできた．
6）池田病院　総合リハビリテーションセンター 職種　リハビリテーションコーディネーター（教育・研究活動と実務の指導）	平成25年4月 ～ 令和元年9月	大学勤務の傍ら，総合リハビリテーションセンター施設，訪問リハビリテーション，訪問看護ステーション，デイケア，デイサービス（医療，介護）において，リハビリテーションコーディネーターとして研究，相談業務を行ってきた． その際は，実際に現場にでて臨床実践するだけでなく，中堅，新人理学療法士の管理教育や学術活動等をも支援してきた．また，医療，保健，介護の分野における横断的な相談も担い，リハビリテーションが円滑に行える環境作りや支援を必要に応じて行っている． 現在，総合リハビリテーション施設では，緩和ケア系のがんリハビリテーションの評価やプログラム開発，腎臓リハビリテーションの構築，これから重要度が増してくると在宅リハビリテーションの評価やプログラム開発，健康予防教室等を行っており，地域リハビリテーション発展に寄与するだけでなく，後進教育という役割も担っている．
7）サンシティ木津　リハビリテーション・ケアセンターうららか 職種　シニアアドバイザー （教育・研究・実務相談業務）	令和元年9月 ～ 現在に至る	大学勤務の傍ら，介護付有料老人ホームサンシティ木津リハビリテーション・ケアセンターうららかの立ち上げと，教育・研究・実務相談業務を行なってきた． 現在，要介護度が高い高齢入居者に対するリハビリテーションの評価・実践プログラムの開発を検討しており，後進教育を担っている．
8）児童発達支援　放課後デイサービス いちごハウス 職種：教育研究アドバイザー	令和3年10月 ～ 現在に至る	大学勤務の傍ら，児童支援　放課後デイサービスいちごハウスにおける教育・研究のアドバイスを行っている． 現在，現場の問題点を抽出し，よりよい課題解決や人材育成，サービスの立案を担う研究や教育に関するアドバイスを行っている．

事項	年月日	概　　要
9）科学研究費等の研究助成		
・科学研究費助成事業（基盤研究C）	平成28年4月 ～ 平成31年3月	題目「線維筋痛症患者に対する運動療法の効果の検証：脳内ネットワークの変化を指標として」 研究代表　藤田信子　分担者　池田耕二 研究経費　平成28年度2.0千円，平成29年度4.5千円，平成30年度5.5千円
・科学研究費助成事業（基盤研究C）	平成29年4月 ～ 令和2年3月	題目「理学療法士の発達を促す経験学習支援方法の開発」 研究代表　池田耕二 研究経費　平成29年度288千円，平成30年度354千円，令
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和元年6月 ～ 令和2年3月	題目「リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性活用システムの構築−臨床実習教育の質的向上を目指して−」研究代表　池田耕二
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和2年6月 ～ 令和3年3月	題目「フラの動作に関する研究:フラを活用した効果的な介護予防プログラムを作成するために―」 研究代表者　笹野弘美　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和2年度160千円
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和2年6月 ～ 令和3年3月	題目「山間過疎地域における高齢者の体力特性－フレイル質問票を用いた検討―」 研究代表者　滝本幸治　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和2年度　220千円
・科学研究費助成事業（基盤研究C）	令和3年4月 ～ 現在に至る	「理学療法士の発達や経験学習を促す【場】の特性の解明」 研究代表　池田耕二 研究経費　令和3年度700千円　令和4年度1800千円
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和3年6月 ～ 現在に至る	題目「COVID-19パンデミックが高齢者の健康および日常生活に及ぼす影響に関する研究　―コロナ禍における遠隔指導を加味した検討―」 研究代表者　滝本幸治　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和3年度　340千円
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和3年6月 ～ 現在に至る	「地域の特性を活かした高齢者の健康増進に関する研究」 研究代表者　笹野弘美　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和3年度　340千円

事項	年月日	概　　要
４　その他 1）メディア取材 ・スポーツチャンバラと車椅子を活用して車椅子スポーツチャンバラとして体系化を行い，院内でのリハビリに活用した	平成5年3月 ～ 平成10年3月	車椅子スポーツチャンバラをリハビリに活用した（ラジオや新聞の取材あり）
2）学会座長 ・大阪府理学療法士会 北河内ブロック新人症例発表会　座長	平成22年1月	大阪府理学療法士会が新人教育を目的として平成22年より開始した北河内ブロック新人症例発表会において座長を行った.
・第22回大阪府理学療法学術大会　　座長	平成22年7月	第22回大阪府理学療法学術大会において座長を行った.
・大阪府理学療法士会 北河内ブロック新人症例発表会　座長	平成23年1月	大阪府理学療法士会が新人教育を目的として平成22年より開始した北河内ブロック新人症例発表会において座長を行った.
・第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究会）座長	平成30年11月	第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究会）の座長を行った.
・保健医療学会第10回学術集会座長	令和元年12月	保健医療学会第10回学術集会の座長を行なった.
・第11回日本理学療法教育学会　座長	令和4年11月	第11回日本理学療法教育学会の座長を行なった.
・保健医療学部第12回学術集会　特別講演　座長	令和4年12月	保健医療学部第12回学術集会の特別講演の座長を行なった.
・第5回日本理学療法管理研究会学術大会　座長	令和4年12月	第5回日本理学療法管理研究会学術大会の座長を行なった.
3）学会査読 ・第46回日本理学療法学術大会　査読	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第47回日本理学療法学術大会　査読	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第48回日本理学療法学術大会　査読	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第25回大阪府理学療法学術大会　査読	平成25年7月	第25回大阪府理学療法学術大会の査読を行った.
・第49回日本理学療法学術大会　査読	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第26回大阪府理学療法学術大会　査読	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会の査読を行った.
・第50回日本理学療法学術大会　査読	平成27年5月	第50回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.

事項	年月日	概　　要
・第51回日本理学療法学術大会　査読	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第52回日本理学療法学術大会　査読	平成29年5月	第51回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・保健医療学学会第8回学術集会　査読	平成29年11月	保健医療学学会第8回学術集会の査読を行った.
・第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究会）査読	平成30年9月	第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究大会）の学会報告の査読を行った.
・保健医療学学会第9回学術集会　査読	平成30年12月	保健医療学学会第9回学術集会の査読を行った.
・保健医療学学会第10回学術集会　査読	令和元年12月	保健医療学会第10回学術集会の査読を行なった.
・第55回日本理学療法学術大会：日本地域・支援工学・教育合同理学療法学会学術大会2020（合同開催：理学療法管理部門研究会）査読	令和2年11月	日本地域・支援工学・教育合同理学療法学会学術大会2020（合同開催：理学療法管理部門研究会）の学会報告の査読を行った
・第56回日本理学療法学術大会：日本地域・支援工学・教育合同理学療法学会学術大会2020（合同開催：理学療法管理部門研究会）査読	令和3年12月	日本地域・支援工学・教育合同理学療法学会学術大会2021（合同開催：理学療法管理部門研究会）の学会報告の査読を行った.
・第11回日本理学療法教育学会　査読	令和4年11月	日本理学療法教育学会の査読を行なった.
・第5回日本理学療法管理研究会学術大会　査読	令和4年12月	日本理学療法管理研究会学術大会の査読を行なった.
・第62回近畿理学療法学術大会　査読	令和5年2月	第62回近畿理学療法学術大会の査読を行なった.
4）論文査読		
・保健医療学雑誌　論文査読	平成30年6月	保健医療学学会「保健医療学雑誌」の論文査読を行った.
・医療情報福祉行動学雑誌　論文査読	令和2年3月	医療情報福祉行動学雑誌の論文査読を行った.
・医療情報福祉行動学雑誌　論文査読	令和3年2月	医療情報福祉行動学雑誌の論文査読を行った.
・保健医療学雑誌　論文査読	令和3年1月	保健医療学学会「保健医療学雑誌」の論文査読を行った.
・医療情報福祉行動学雑誌　論文査読	令和4年2月	医療情報福祉行動学雑誌の論文査読を行った.
・総合理学療法　論文査読	令和4年11月	総合理学療法の論文査読を行った.
・理学療法教育学　論文査読	令和5年3月	理学療法教育学の論文査読を行った.
5）委員会活動		
・公益社団法人大阪府理学療法士会 臨床実習倫理規定策定特別委員会　委員	平成27年5月 ～ 平成28年3月	公益社団法人大阪府理学療法士会　臨床実習倫理規定策定特別委員会にて，理学療法臨床実習における倫理規定の策定を行った.
・保健医療学学会　第8回学術集会　大会準備委員長	平成29年4月 ～ 平成30年3月	保健医療学学会　第8回学術集会開催に向けて準備を行った.

事項	年月日	概　　要
・日本理学療法教育学会　選挙管理委員	令和3年8月 ～ 現在に至る	日本理学療法教育学会の選挙管理委員を担った.
・日本理学療法教育学会　コアカリキュラム委員	令和3年11月 ～ 現在に至る	日本理学療法教育学会コアカリキュラム委員を担った.
・日本理学療法士協会　指定規則等検討部会部会員（学校養成施設検討作業部会）	令和4年7月 ～ 現在に至る	日本理学療法士協会　指定規則等検討部会部会員と学校養成施設検討作業部会を担う
6）学会理事活動		
・保健医療学学会　理事	平成29年4月 ～ 現在に至る	保健医療学会の理事に就任し運営に携わった.
7）招待講演　シンポジスト		
・第3回物理療法研究会（神戸）シンポジスト	平成7年11月	肩関節周囲炎患者に対して低出力レーザーの臨床効果に
・第4回身体障害者スポーツ指導員養成講習会（大阪）講師	平成9年1月	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案し方法やルール等を紹介した.
・大阪医療福祉専門学校　実習指導者会議　（大阪）講師	平成18年2月	問題を有する実習生に対して，実際行っている具体的な指導方法について講演した.
・大阪府理学療法士会臨床実習指導者研修会（大阪）	平成19年7月	臨床実習に対する指導方法の中でも，特に情意面における指導方法について講演を行った.
・神戸大学就進会理学療法分科会（神戸大学医学部保健学科同窓会，神戸）講師	平成20年2月	地域医療における一般病院にて行われている終末期医療を紹介し，それに対する事例研究を報告した．またこれから事例研究がどうあるかべきかについても合わせて報告した.
・行岡リハビリテーション専門学校　臨床実習指導者会議　教育講演（大阪）	平成20年3月	臨床実習における実習生の内面をパターン分類し，それらに対する指導方法について講演を行った.
・公益社団法人　大阪府理学療法士会（大阪）　新人教育プログラム研修　講師	平成29年12月 ～ 平成30年12月	新人教育プログラム研修における「理学療法研究方法論」の講義を行った.
・公益社団法人　大阪府理学療法士会（大阪）　新人教育プログラム研修　講師	平成31年1月	新人教育プログラム研修における「クリニカルリーズニング」の講義を行った.
・第30回大阪府理学療法学術大会（大阪）教育シンポジウムのシンポジスト	平成30年7月	これからの理学療法臨床実習の在り方を講演した.

事項	年月日	概　　要
・現場の理学療法士育成論：経験学習を通して	令和3年11月	医療情勢の変化や働き方改革・等を背景に研修会や勉強会を重視した学習だけでは，現場の理学療法士（PT）教育・育成は限界にきている．そこで現場で行う経験学習に注目し，PTの経験学習プロセスの解明をもとに，現場教育・人材育成における支援方法を教示した．
・終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められ	令和4年2月	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
・学習し続ける組織の構築にむけて	令和4年2月	大阪府理学療法士会の理学療法士の中間管理職，管理職を対象に学習する組織の構築について講演した．講演内容は，現場経験に基づく組織づくりの内容に加え科学研究費による研究成果である理学療法士の経験学習プロセスの解明から導かれた経験学習支援方法を紹介した．
・緩和ケア領域における理学療法の紹介−理学療法士の可能性と広がる役割−	令和4年12月	緩和ケア領域における理学療法を紹介し，理学療法士の可能性と広がる役割について講演した．
・終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められる視点と対応	令和5年3月	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
8）公益社団法人日本理学療法士協会 臨床実習指導者		
・第2回　臨床実習指導者講習会（大阪）　修了	平成31年3月	臨床実習指導者の資格，および指導者を育成できる資格を獲得した．
・第120回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和2年2月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した．
・第128回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和2年2月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した．
・第368回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年6月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した．
・第378回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年6月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した．

事項	年月日	概　　要
・第399回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年8月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第437回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年9月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第515回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年11月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第664回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和4年3月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第706回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和4年3月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
8）大学内業務の経験	平成25年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学開学から臨床実習教育を担う臨床実習委員，教務一般を担う教務委員，国家試験対策を担う国家試験委員等に任命された.
	平成31年4月 ～ 令和4年3月	奈良学園大学開学から臨床実習部会部長，入試委員を任命された.
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　広報委員を任命された.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　大学評議委員を任命された.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　専攻主任，地域・高齢者領域領域長，予算委員，国家試験委員，大学院開設委員を担う.
	令和4年4月 ～ 現在に至る 現在に至る	理学療法専攻専攻長，大学広報委員長を任命された
9）大阪行岡医療大学における市民公開講座企画と運営	平成28年4月 ～ 平成29年3月	大阪行岡医療大学で行われる市民公開講座の企画運営を行った.

事項	年月日	概　　要
10）日本理学療法士協会 専門理学療法士（教育・管理）取得	平成22年4月 ～ 現在に至る	日本理学療法士協会が制度化した専門理学療法士制度の専門理学療法士(教育・管理)を取得した.
11）理学療法士の内面の発達を理学療法士発達論とし，それもとに理学療法教育を行う必要性を指摘した.	平成25年5月	理学療法ジャーナル　47（5）423 題目「理学慮法士発達論に基づいた教育方法の開発に向けて」に，理学療法士の内面の発達を理学療法士発達論とし，それもとに理学療法教育を行う必要性を指摘した.

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1.理学療法士のための物理療法臨床判断ガイドブック	共著	平成19年9月	文光堂	本書は，物理療法の対象となる疾患に対して，臨床的判断が行いやすいようにデシジョンツリーを作成してまとめ上げ，それぞれの手技や方法について系統立てて述べたものである. Ｂ5判　全566頁 編者：木村貞治 共著者：玉木彰，池田耕二 本人担当部分：第Ⅱ章，疾患・症状別　臨床判断に基づく物理療法のすすめかた 19　c 浮腫に対する物理療法の臨床判断を考える　pp323－344を単著. 浮腫の病態から，それらに対する理学療法を臨床的判断が行いやすいようにデシジョンツリーを作成してまとめ上げ，それぞれの手技や方法について系統立てて述べた.
2.持続可能な社会をどう構想するか. （構造構成主義研究　第４巻）	共著	平成22年4月	北大路書房	本書は，「持続可能な社会をどう構想するか」についての有識者の鼎談と構造構成主義の論文集をまとめたものである. Ａ5判　全255頁 編者：西條剛央，京極真，池田清彦 著者：池田耕二 本人担当部分：「構造構成的協同臨床教育法の構築に向けて-理学療法臨床実習を通して-」pp100-126を単著. 構造構成主義を基盤に，お互いの関心をすり合わせながら，お互いに教え合うことを可能にする教育方法，すなわち構造構成的協同臨床教育方法を開発し，これを理学療法臨床実習に活用し学習効果を上げたことを述べた.
3.よい教育とは何か. （構造構成主義研究　第５巻）	共著	平成23年4月	北大路書房	本書は，「よい教育とは何か」についての有識者の鼎談と構造構成主義研究の論文集をまとめたものである. Ａ5判　全328頁 編者：西條剛央，京極真，池田清彦 著者：池田耕二 本人担当部分：「理学療法臨床実習を通じた構造構成的協同臨床教育法の方法論的拡張」pp218-239を単著. 筆者が開発した構造構成的協同臨床教育方法を方法論的に拡張し，臨床現場基礎力の少ない学生に対して
4.思想が開く未来へのロードマップ. （構造構成主義研究　第6巻）	共著	平成26年4月	北大路書房	本書は，「思想がひらく未来へのロードマップ」についての鼎談と構造構成主義研究の論文集をまとめたものである. Ａ5判　全261頁 編者：西條剛央，京極真，池田清彦 著者：池田耕二 本人担当部分：「終末期理学療法教育における構造構成的協同臨床教育法の可能性」pp135-153を単著. 理学療法士にとってスムーズに教育が進みにくい終末期理学療法教育に対して，構造構成的協同臨床教育方法を活用し，その効果と可能性を述べた.

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5.終末期理学療法の実践	共著	平成27年5月	文光堂	本書は，終末患者に対する理学療法の実践方法を，総論，具体的な介入方法，諸問題，チームケアの展開の４つ点からまとめたものである. Ｂ5判　全208頁 編集者：日高正巳，桑山浩明 著者：池田耕二 本人担当部分：第2章　「終末期理学療法をどのように教えるか，そして学ぶか」pp7-13を単著. 　終末期理学療法における理学療法士教育の問題点を，理学療法士の発達段階ごとにあげ，それにあわせた学習や教育方法を紹介した.
6.局所と全身からアプローチする運動器の運動療法	共著	平成29年8月	羊土社	本書は，運動器疾患に関する運動療法を，主に，総論，身体の部位別の運動療法，姿勢と運動連鎖でまとめた入門書である．関節リウマチ，悪性腫瘍に対する運動療法についても少し触れている. Ｂ5判　全342頁 編集者：小柳磨毅，中江徳彦，井上悟 著者：池田耕二 本人担当部位：第Ｉ部　総論，1.運動器の運動療法とは，運動療法の歴史 pp14-17を単著. 　運動器に対する運動療法の歴史を，古代，近代，近現代，近年に分類し，その発展過程を説明した.
7.訪問リハビリテーション アドバイスブック	共著	平成30年3月	メジカルビュー社	本書は，訪問リハビリテーションにかかわるセラピストに対する様々なアドバイスをまとめた入門書である. B5判　全324頁 監修：青山朋樹，高橋紀代 編集者：辰巳昌嵩 著者：池田耕二 本人担当部分：コラム⑨終末期/ターミナル患者と，その家族に対する訪問スタッフ（セラピスト）のありかた，pp254-257を単著. 在宅における終末期/ターミナル患者と，その家族に対する訪問スタッフ（セラピスト）のありかたを提言した.
8.理学療法臨床実習とケーススタディ	共著	令和2年12月	医学書院	本書では，コロナ禍における奈良学園大学の早期体験，地域理学療法実習の学内実習の実践内容を紹介した. B5判　285頁 編集者：鶴見隆正，辻下守弘 著者：池田耕二 本人担当部分：With コロナ社会での学内実習の方法 pp50-59を単著 コロナ社会における学内実習の枠組みや具体的な実践内容について紹介した.

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
9.PT・OTのための運動学テキスト ： 基礎・実習・臨床	共著	令和3年2月	金原出版	本書は，運動学を基礎，実習，臨床の観点からまとめたものである． B5判　全570頁 編集者：小柳磨毅，山下協子，大西秀明，境隆弘 著者：池田耕二 本人担当部分：主に運動学の定義，生体力学のページの大幅な修正・校正を行った．
（学術論文） 1 自動温度補償機能付きp02センサーの開発（査読付）	共著	平成5年12月	神戸大学医療技術短期大学部紀要　9　113－117	深在性組織に直接刺入できない対象組織の温度変化に対応可能な極細の針状センサーを開発した．これにより温熱や寒冷などの理学療法施行中の組織血行動態の変化を定量・経時的に計測が可能となり治療効果の判定に寄与することを報告した． 本人担当部分：実験担当，データ収集，一部加筆） （共著者：講武芳英，荒川佳子，池田耕二，嶋田智明，石川斉，北潔）
2 変形性膝関節症における疼痛および筋力とＡＤＬ能力との関係（査読付）	共著	平成6年5月	理学療法学　21(5)　347－350	変形性膝関節症患者の疼痛，変形・筋力・肥満度の観点から日常生活動作能力低下との関係を調べた．その結果，日常生活動作の低下には疼痛と筋力低下に影響されていることが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，一部加筆 （共著者：生島秀樹，日高正巳，池田耕二）
3 直線偏光近赤外線照射が筋肉の血行動態に与える影響について（査読付）	共著	平成6年12月	神戸大学医学部保健学科紀要 10 43-47	ラットを対象に頸部神経節近傍への近赤外線照射を行ったところ，筋内の酸素分圧の上昇にある程度の影響を与えることが判明したことを報告した． 本人担当部分：実験担当，データ収集，分析，考察，一部加筆 （共著者：講武芳英，嶋田智明，石川斉，池田耕二，北潔）
4 痛みに対する低出力レーザー療法	共著	平成7年11月	物理療法研究会会誌　3 38－41	肩関節周囲炎患者に対して低出力レーザーの臨床効果を判定した．低出力レーザーは除痛効果があるものの，症例ごとには使用方法の再検討が示唆された．また今後の課題としては照射条件や他の物理療法とのコンビネーション効果，使用時期などがあげられた． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，武政誠一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5 変形性膝関節症における膝周囲筋力と日常生活動作能力との関連性（査読付）	共著	平成7年12月	神戸大学医学部保健学科紀要 11 9－15	変形性膝関節症患者に対して大腿四頭筋やハムストリングスの筋力を測定し，それらを体重で除した値等と疼痛，歩行，日常生活動作の障害程度の関係性を調査した．その結果，日常生活動作能力を筋力で評価するときは大腿四頭筋を体重で除した値が有効であるということが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，武政誠一，生島秀樹）
6 在宅脳卒中後片麻痺者の自立度と介護者の負担との関係（査読付）	共著	平成8年11月	公衆衛生 60（11） 814－817	在宅高齢障害者を対象に実施した実態調査結果より，介護者の負担について分析した．被介護者の日常生活と家族の介護力とが，介護者の負担や健康に影響を与えていることを示唆した．介護者の精神的負担を今後の研究課題としてあげた． 本人担当部分：分析，考察，一部加筆 （共著者：日高正巳，池田耕二，武政誠一，嶋田智明）
7 両側セメントレス大腿骨人工骨頭置換術に対する理学療法の経験（査読付）	共著	平成8年12月	神戸大学医学部保健学科紀要 12 157-161	両側セメントレス大腿骨人工骨頭置換術を行った2症例に対して荷重訓練を行う上での問題点を述べた．本2症例は片側例と違って健側での支持が期待できないためリハビリテーションを行うためには症例に応じた工夫が必要であることを報告した． 本人担当部分：理学療法実践，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，岩本雅浩，武部恭一，武政誠一，日高正巳）
8 骨粗鬆症患者におけるライフスタイルと骨密度との関連に関する一考察（査読付）	共著	平成8年12月	神戸大学医学部保健学科紀要 12 39-44	骨粗鬆症患者を対象にライフスタイルと骨密度との関連を検討した結果，朝食，喫煙，散歩，体操，牛乳では健康的な生活習慣を有するものが高い骨密度を示した．今後の課題としては若い世代の生活習慣と骨密度の関係や，現在の生活習慣と骨密度の減少速度の関係があげられた． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，一部加筆 （共著者：日高正巳，池田耕二， 武部恭一，武政誠一，長尾徹， 嶋田智明）
9 「健康教室」10年間の総括－公開講座を継続させる工夫－（査読付）	共著	平成9年7月	公衆衛生 61（7） 495－499	地域住民の健康に寄与する目的にて「健康教室」を10年実施してきた．それらから長期継続するための工夫や，今後の展望について検討した．健康教室の有効性は示唆されたが，今後は情報源としても健康教室を役立たせ地域リハビリテーションの１システムとして確立していきたいことを報告した． 本人担当部分：健康教室の企画，開催．分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，武部恭一，武政誠一，岩本雅浩）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10 末期癌患者の緩和ケアにおける理学療法士の役割に関する一考察－未告知であった2症例の経験から－（査読付）	共著	平成16年10月	理学療法ジャーナル 38 (7) 597－602	末期癌患者2症例の緩和ケアにおいて理学療法士がどのような役割を担えるのかについて考察した．理学療法士には，疼痛緩和や身体機能低下から生じる不安や苦痛などに対する心理的サポートという役割があるように考えられた． 本人担当部分：理学療法実践，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木彰，中塚奈々，村田磨優，宮崎昌之）
11 高齢血液透析患者における身体能力推移の経時的記録利用の試み－単一症例による15か月の理学療法経験－（査読付）	共著	平成19年7月	理学療法ジャーナル 41 (10) 865－869	高齢血液透析患者1症例から，身体能力評価表を作成しそれを用いて15か月間の身体能力推移を経時的に記録した．これらからは個人にあった課題抽出や理学療法の介入効果をあげるためには長期介入と観察，経時的記録など様々な角度から評価する必要性が示唆された． 本人担当部分：評価表の作成，理学療法実践，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木彰，中塚奈々，山本秀美，宮崎昌之）
12 理学療法臨床実習による臨床実習生の意識構造の変化（修士論文）	単著	平成20年3月	放送大学	本研究の目的は，臨床実習期間における実習生の意識変容過程の分析から効果的な指導方法や援助方法を検討することにある．対象者は臨床実習生13名（男8名，女5名，平均年齢23.6±3.8歳）であり，分析対象は実習日誌の感想文であった．分析方法は，感想文の内容に対して知識・感情・意欲の３つ視点から「コード化/カテゴリー化」を行い数量化を行った．そして各期間における各カテゴリー数の変化と，臨床実習生の意識構造の分析を行った．その結果から，実習生には，理学療法実践だけではなく医療人として視野を広げるための指導や援助，緊張や焦りを少なくし心理的負担を少なくするためのケア，または具体的な行動目標の立案や課題の設定や自己モニタリング能力を養う指導や援助が必要と考えられた．また，臨床実習生の意識構造は，「感情」，「知識」，「専門・統合」，「意欲」，「冷静」，「躍動」，「混合」優位の７タイプに分類することができ，それぞれのタイプに合わせた指導や援助が必要になることが示唆された． Ａ4判　全41頁
13 マニュアルセラピーと科学性：マニュアルセラピーのエビデンスを考える～構造構成主義からみた見解～（査読付）	共著	平成21年3月	徒手的理学療法 8（2）49-52	本論文では，マニュアルセラピーの理論的基盤に構造構成主義をおき広義の科学性を担保した．その結果，客観的なものから主観的なものまでをマニュアルセラピーのエビデンスとすることを理論的に可能にした． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：瓜谷大輔，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14 認知症後期高齢患者に対する理学療法実践知の構造化：構造構成的質的研究法をメタ研究法としたメモリーワークとＭ－ＧＴＡのトライアンギュレーションによる事例研究（査読付）	共著	平成21年9月	心身健康科学　5(2)　102－109	認知症後期高齢患者に対する理学療法の実践知を質的研究によって構造化した．その結果，実践知モデルを活用することで理学療法実践においてどの部分に力点をあてるのかわかりやすくなり，また柔軟な理学療法ストラテジーの選択が可能になることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木　彰，山本秀美，中田加奈子，西條剛央）
15 構造構成的協同教育法の構築に向けて-理学療法臨床実習を通して-（査読付）	単著	平成22年4月	構造構成主義研究 4　100－126	本研究では,多くの諸問題を抱えている理学療法臨床実習教育において，それらを解消しつつ教育効果を高める方法として構造構成的協同臨床教育法を構築した．それはお互いの理解を促したり，広義の科学性を担保することができるとされている構造構成主義をメタ理論に導入した教育法であり，指導者と実習生が共に成長できる教育法である．その特徴としては従来の知識や技術だけでなく，暗黙知や主観的なもので構成される知識や技術についても教育しやすくなっている．
16 遷延性意識障害を有する脳血管障害高齢患者1症例の理学療法実践からみた他動的関節可動域運動の即時効果に関する一考察（査読付）	共著	平成22年4月	理学療法科学　25(2) 305－308	本研究は，遷延性意識障害を有する脳血管高齢患者を対象に，関節可動域運動が可動域維持以外にどのような効果を有しているかを検討したものである．その結果，関節可動域運動は，上肢の動きを即時的に促す効果があることが明らかとなった． 本人担当部分：理学療法実践，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木彰，山本秀美 ，中田加奈子）
17 3年目の理学療法士は終末期理学療法実践をどのように体験しているか？－「無力感や意欲低下」の生成過程について－（査読付）	共著	平成22年8月	理学療法科学 25(4) 523-528	本研究は，終末期理学療法を実践している3年目の理学療法士を対象に，「無力感や意欲低下」の生成過程を検討したものである．本研究の結果からは，3年目の理学療法士は，実践における葛藤や実践している環境の中から，無力感や意欲低下が生成されていくことが明らかとなった． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
18 理学療法臨床実習における実習生の意識構造の変化－質的内容分析と数量化Ⅲ類による探索的構造分析― （査読付）	共著	平成22年12月	理学療法科学　25（6）881-888	本研究は，臨床実習生の実習日誌を対象に知識・感情・意欲の視点から分析を行い，臨床実習生の意識変化には，「感情」，「知識」，「専門・統合」，「意欲」，「冷静」，「躍動」，「混合」優位の７タイプがあり，それぞれのタイプに合わせた指導や援助が必要になることを示唆した. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木彰,吉田正樹）
19 理学療法臨床実習を通じた構造構成的協同臨床教育法の方法論的拡張 －臨床現場基礎力の欠如問題を通して－(査読付)	単著	平成23年4月	構造構成主義研 5　218－239	本研究は，以前，筆者が開発した構造構成的協同臨床教育法を方法論的に拡張し，理学療法における臨床現場基礎力の欠如の構造を構成し，教育的介入方法を検討したものである．臨床実習基礎力の欠如は，様々な構造からなっており，その構造を一つひとつ解消，または対応することで臨床実習指導がスムーズになることを示唆した.
20 理学療法臨床実習における実習生の内面因子の経時的変化(査読付)	共著	平成23年12月	教育工学会会誌 35 33-36	本研究では,医療や介護施設で患者の障害構造を評価する実習,いわゆる評価実習を行った実習生10名と患者に理学療法治療プログラムを総合実践する実習,いわゆる総合実習を行った実習生17名から実習理想因子,実習負荷軽減因子,不安軽減因子の内面3因子を抽出し,それらと睡眠,自宅勉強時間,自己目標達成度の経時的変化を調査した.その結果,実習期間を通して,内面3因子では評価,総合実習ともに実習理想因子は維持され実習負荷軽減因子と不安軽減因子は増加する傾向にあること,睡眠と自宅勉強時間では評価実習は自宅勉強時間が多く総合実習は睡眠時間が多い傾向にあること,自己目標達成度では評価,総合実習ともに増加する傾向にあることが明らかとなった.本研究は，理学療法臨床実習生の内面因子を明らかにし，それら因子の経時的変化を明らかにしたものである. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，吉田正樹）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
21　理学療法臨床実習における実習生の意識変化の解析に関する研究 （博士論文）	単著	平成24年3月	大阪電気通信大学	本研究は，実習生の知識，感情，意欲の3因子に着目し，質的内容分析を用いて探索的に実習生の日誌を解析した．その結果，実習期間を通して，実習生は意識の中で理学療法実践を多く学びながら緊張や焦りを多く感じ，思考的な意欲を心がける傾向にあることを明らかにした．続いて，同じ3因子に着目し，質的（言語）データの因子分析とされる数量化Ⅲ類を用いて，実習生の日誌を探索的に解析し，実習生を「感情優位」，「知識優位」，「専門・統合優位」，「意欲優位」，「冷静優位」，「躍動優位」，「混合」の7タイプに分類できることを明らかにした．さらに従来は着目されなかった肯定的，否定的，高喚起，低喚起感情の４つの感情変化に着目し，実習生の日誌を解析した．その結果，実習生にはいくつかの感情変化パターンがあることを明らかにした．ここまでの解析方法は作業負担が大きく実用性にも欠けることから，簡便な調査方法が必要と考え調査票を作成し調査を行った．その結果，実習生には実習理想因子，実習負荷軽減因子，不安軽減因子の3つの内面因子があること，それら3因子と睡眠，自宅勉強時間，自己目標達成度の経時的変化からは，精神的ストレスは実習期間を通して軽減していくこと，精神的ストレスと自己目標達成度の間には因果関係があること，評価実習と総合実習では実習生の睡眠と自宅勉強時間の関係が逆転することを明らかにした． Ａ4判　全131頁
22　終末期理学療法教育における構造構成的協同臨床教育法の可能性（査読付）	単著	平成26年3月	構造構成主義研究 6　135-153	本研究は，筆者が開発した構造構成的協同臨床教育法を終末期理学療法教育に応用した実践研究であり，それによる学習効果を明らかにした．終末期理学療法には，従来の理学療法にはない最後に死を迎えるという問題を抱えていえる．そのため，無力感につながる可能性が大きい．こうした特殊な問題を抱える終末期理学療法教育において学習効果を示せた意義は大きいことを提示した．
23　理学療法臨床実習の認識構造からみた終末期理学療法の課題（査読付）	共著	平成26年6月	理学療法科学　29(3) 411-415	本研究では，理学療法臨床実習生の終末期理学療法に対する認識構造を視点に，終末期理学療法の教育的，実践的課題を提起した．理学療法臨床実習生の終末期理学療法に対する認識構造モデルは，主に理学療法士の内面の原動力と環境や状況 からくる行動の原動力から構成されていた．よって，本モデルからは終末期理学療法の環境や状況の見直しのための啓蒙や教育，医療，社会のシステム作り，死の語りを取り入れた教育課程の導入等が提起された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二, 山本秀美, 中田加奈子, 黒田未貴, 廣瀬将士）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
24　術後感染による両側TKA再置換術後１症例の理学療法からみた臨床的課題（査読付）	共著	平成27年3月	理学療法ジャーナル 49(3) 267-271	本研究では，術後感染症による両側2期的TKA再置換術1症例の理学療法を行い，従来のTKAとは違う経過や問題点を経験したので，それをもとに具体的な臨床的課題を抽出した．その結果，1）疼痛に対する物理療法の適切な選択，2）適切な関節運動を誘導する関節可動域運動とその妥当性，3）関節や筋の状態を評価しながら負荷量を設定する筋力増強運動とその妥当性，4）転倒リスクの回避と日常生活活動の維持，5）体力維持（廃用症候群予防），6）炎症の再燃を意識した運動量の設定，7）退院後の炎症の把握，8）運動量の増加に伴う転倒リスク，9）長期入院による心理的負担という臨床的課題が挙げられたことを提示した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：宮﨑紗也佳，池田耕二，廣瀬将士，町井義
25　特発性器質化肺炎患者に対して積極的呼吸理学療法を実施した一症例（査読付）	共著	平成27年3月	理学療法科学 30(1) 135-139	本研究では，特発性器質化肺炎（COP）に対する呼吸理学療法の有効性を1症例の症例研究法にて検討した．初期（1週）と最終（7週）の肺機能検査，心肺運動負荷試験，長崎大学呼吸器疾患日常生活活動評価表（NRADL）の評価結果を比較したところ，症例の運動耐容能，NRADLが改善し，病型分類に基づく呼吸理学療法の有効性を示唆した．Idiopathic Interstitial Pneumonias（以下，IIPs）の病型分類に基づく呼吸理学療法はCOP患者に対して有効であることを提示した． 引用文献（11） 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二，宮崎紗也佳，小田瑛梨，堀江淳，池田秀一）
26　回復期リハビリテーション病棟における終末期がん患者の在宅復帰を円滑にする条件 －悪性リンパ腫1症例の理学療法経験を通して－（査読付）	共著	平成27年7月	理学療法科学 30(3) 479-482	本研究では，回復期リハビリテーション病棟における終末期がん患者の在宅復帰を円滑にするための条件を明らかにした．その条件とは，1）患者，家族の在宅復帰への意志が明確であったこと，2）関わるスタッフが終末期という視点に転換できたこと，3）関わるスタッフが情報を共有できたこと，4）かかりつけ医との相性の良さや急変時の受け入れ体制が明確であったことであり，これら4つの条件を満たすことで終末期がん患者の在宅復帰は円滑になることを示唆した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：黒田未貴，池田耕二，中田加奈子，井谷由香理，中川真優，朴聖章）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
27　直腸がんによるストーマ造設と化膿性関節炎による大腿骨骨頭切除を施行したがんサバイバー１人の二つの体験（査読付）	共著	平成28年3月	理学療法科学31（1） 175-180	本研究では，がんサバイバー1人の二つの体験から理学療法ケア（心理的ケア，配慮，工夫など）構築のための有効な視点を提示した．対象は，直腸がんによるストーマの造設と化膿性関節炎による大腿骨骨頭の切除を同時に体験した40歳代の男性1人である．方法は構造構成的質的研究法をメタ研究法においた事例―コード・マトリックス法とした．結果，本男性の体験は，【排泄機能の変更体験】と【下肢支持機能の停止体験】という二つの体験事例と，【生活レベルの変化の感じ方】，【機能変更，停止による感情表出】，【機能変更，停止に対する受け止め方】，【患部に対する認識】，【患部に対する接触行動】，【機能変更，停止による新たな学習】の六つのコード（カテゴリー）から構成された．二つの事例比較からは，生活レベルの変化の感じ方や機能変更，停止による感情表出，受け止め方，新たな学習の内容に違いが認められ，患部に対する認識や接触行動の内容には共通したものが認められた．直腸がんによるストーマ造設後と化膿性関節炎による大腿骨骨頭切除後のがんサバイバーに対する理学療法ケア構築のための有効な視点が提示できた． 本人担当部分：理学療法実践，データ収取，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，黒田未貴，河野茉梨絵）
28　理学療法時の意欲を向上させる声かけの言い回しに関する予備的研究（査読付）	共著	平成29年2月	理学療法科学 32(1) 35-38	本研究では，フレーミング効果を用いた言葉かけの言い回しが，リハビリテーション対象患者の意欲にどのような影響を与えるかを調査した．対象は，調査に協力を得られた入院患者37名（男性17名，女性20名，年齢69.9 ± 12.6歳）とした．紙面によるアンケートにて，トイレ，歩行，疼痛の3つの場面を想定し，各場面で肯定的および否定的な声かけの2つの言い回しを設定し，意欲の向上がみられるかを調査し比較した．結果，3つの場面全てにおいて，肯定的な声かけの言い回しで患者の意欲の向上が認められ，否定的な声かけの言い回しでは意欲の向上は認められなかった．理学療法時の肯定的な声かけの言い回しは，患者の意欲を向上させることが示唆された．結果は，肯定的なフレーミングによる言い回しが有効であったことを示唆した 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）
29　回復期リハビリテーション病棟における高齢患者に対する退院支援能力の向上に向けた事例研究 ―高齢患者本人，家族，ケアマネージャーに対するインタビュー調査より―（査読付）	共著	平成29年3月	大阪行岡医療大学紀要 4 19-24	本研究では，近年，リハビリテーション対象者として多い骨折や認知症を抱える70～90歳代の女性を対象に，退院支援後の生活を調査し，回復期リハビリテーション病棟における退院支援能力を向上させる知見を抽出した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，尾藤彩花，黒田未貴，阪本みさき，木村恵理，松井美夕貴，久貝亮太，池田秀一，清水貴恵）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
30　慢性疼痛患者の生活管理-訪問リハビリテーションによる実践-	単著	平成29年5月	ペインクリニック 38 (5) 623-639	本稿では，近年着目されている慢性痛患者を生活習慣病の一つと位置づけ，運動，睡眠，食事，排泄，ストレス，社会との関わり，生活史の視点から生活管理の必要性を示唆した．なお，訪問リハビリテーションによる生活管理の実践で有効であった事例を提示した．
31　肺サルコイドーシスを有した脛骨高原骨折術後1症例に対する全身持久力トレーニングの効果（査読付）	共著	平成29年6月	理学療法科学32 (3) 449-453	本研究では，肺サルコイドーシスを有する脛骨高原骨折術後1症例の全身持久力を，CPX（心肺運動負荷試験）を用いて検査し，問題点を明らかにするとともに運動処方を有効に行い，生活を向上させることができたことを示唆した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二，高橋昇嗣，池田秀一）
32 在宅終末期がんサバイバーのリハビリテーションにおける多職種連携の有効性（査読付）	共著	平成29年８月	地域リハビリテーション 12(8)701-708	がんサバイバーは，がん罹患者（生存者）だけでなく家族（遺族）などを含む概念であり，周囲と共に人生を構築しようとする意味がある．そのため，がんサバイバーの訪問リハでは，本人に加え，周囲を取り込みながら実践していく必要がある．今回，在宅終末期がんサバイバー2事例のかかわりからは，地域における多職種連携の有効性を示唆することができたので報告する．事例1は，80歳代前立腺がんの男性である．多職種連携からは，情報共有アプリを利用したことで，座椅子に対する本人の想いや仏壇前でおむつを交換することへの妻の嫌悪感が理解できた．事例2は，60歳代右下顎歯肉がんの男性である．後日，本人の不安や葛藤の原因が間近に迫る次女の結婚式にあることが多職種連携でわかった．これらからは，従来の方法に加え，情報共有アプリなどを積極的に活用した多職種連携が地域でも有効に機能すれば，本人や家族の想いに応える実践が可能になると考えられた． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：金谷親好,竹ノ内裕一,岩元香菜子,濵﨑恵,池田耕二,久松憲明）
33　当院における家族支援の取り組み一事例からみたリハビリテーション科の支援の検討(査読付)	共著	平成29年10月	日本慢性期医療協会誌 25(113) 68-71	本稿では，脳卒中後遺症患者に対する緩和ケア（緩和的理学療法実践）の経過と合わせて，家族に対する支援について検討を加えた．リハビリテーション専門職が積極的に緩和ケアに取り組むことで家族の心理的負担は軽減し，緩和ケアに満足できる可能性が高まると考えられる． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：山口朋彦，池田耕二，山口美帆子，堀寿美代，沢田学）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
34 訪問リハビリテーションにおける在宅緩和ケアとしての理学療法の可能性 ―がん患者と非がん患者の事例を通して―（査読付）	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究53-9	本稿では，訪問リハビリテーションにおける在宅緩和ケアとしての理学療法の実践から有効な実践知を抽出し，その可能性を提示した． 事例1の大腸がんを有する80歳代女性の実践からは，理学療法士の介入は限られているが，多職種連携により運動療法と環境調整が継続できれば，疼痛緩和の時間を多くし，生活全体を変化させることができることを示唆した． 事例２の多系統萎縮症を有する60歳代女性の実践からは，疼痛等により他者との関わりが減少していても，多職種連携によって小さな効果を積み重ねていくことができれば，最後まで希望のある充実した時間を提供できることを示唆した． 今回の訪問リハビリテーションにおける多職種連携による在宅緩和ケアの２実践は，がん患者と非がん患者に対する在宅緩和ケアとしての理学療法の可能性を広げたと考えられた． 本人担当部分：理学療法実践，データ収集，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，古家真優，中岡絵
35 【ペインリハビリテーションの新潮流・新戦略】慢性疼痛患者に対する地域・在宅リハビリテーション：理学療法士による生活管理の実践	共著	平成30年4月	ペインクリニック 39特別号：246－252	本稿では，近年着目されている慢性痛患者を生活習慣病の一つと位置づけ，運動，睡眠，食事，排泄，ストレス，社会との関わり，生活史の視点から生活管理の必要性を示唆し，訪問リハビリテーションによる生活管理の実践事例も紹介した． 本人担当部分：理学療法実践，分析，考察，論文執筆 (共著者：池田耕二，山本秀美，中岡絵美，古家真優，大島知子,竹内章)
36【ペインリハビリテーション：新視点からの理学療法】慢性疼痛患者に対する地域・在宅リハビリテーション：理学療法士による生活管理の実践	共著	平成30年8月	ペインクリニック39(8) 1038-1044	本稿では，近年着目されている慢性痛患者を生活習慣病の一つと位置づけ，運動，睡眠，食事，排泄，ストレス，社会との関わり，生活史の視点から生活管理の必要性を示唆し，訪問リハビリテーションによる生活管理の実践事例も紹介した． 本人担当部分：理学療法実践，分析，考察，論文執筆 (共著者：池田耕二，山本秀美，中岡絵美，古家真優，大島知子,竹内章)
37 腎臓リハビリテーションにおける高齢血液透析患者に 対する理学療法士の役割に関する一考察（査読付）	共著	平成30年8月	理学療法科学33(4)725-729	本稿では，高齢血液透析患者2症例の腎臓リハビリテーションから，運動療法による身体機能の改善，行動変容に対する支援，身体活動量の管理，生活の再構築に向けたソーシャルワーク的実践という理学療法士の4つの役割を示唆した 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二，古家真優，高橋昇嗣,池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
38 理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けて ―経験学習研究における理論的枠組みと課題―（査読付）	共著	平成31年3月	大阪行岡医療大学紀要（6），23-33，2019	本稿では，理学療法士の経験学習プロセスの解明と支援方法の開発に向け，これまで多くの専門職の経験学習プロセスを明らかにしてきた松尾による経験学習研究の理論的枠組みを要約し紹介した． そして，それによって解明された看護師と保健師の経験学習プロセスを紹介し，理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けての研究的枠組みを整理し，課題を考察した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）
39 ジャンプ着地後の姿勢安定化能力の信頼性と性差の検討（査読付）	共著	平成31年3月	大阪行岡医療大学紀要（6），5-9，2019	本稿では，前方ジャンプ着地後のDynamic stability index（DSI）の信頼性と，性差，体格との関連等を検討し，DPSIの信頼性は良好であり，性差の影響も把握できることを示唆した．また，女性はジャンプ着地後の姿勢安定化能力が低いことを示した． 本人担当部分：分析の一部，考察 （共著者：粕渕賢志，神里巌，久保峰鳴，幸田仁志，藤田浩之，福本貴彦，池田耕二）
40 理学療法想定場面におけるフレーミング効果を意識した声かけの言い回しの違いによる視覚的文字教示が患者の意欲に与える影響について ―肯定的と否定的な言い回しによる比較―（査読付）	共著	令和元年6月	理学療法科34(4)353-357	本稿では,理学療法時の肯定的，否定的な声かけの言い回しの違いによる視覚的文字教示が，患者の意欲にどのような影響を与えるかを検証し，いくつかの場面で肯定的な言い回しの方が患者の意欲を向上させることを明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）
41 理学療法を積極的に取り組んでいる障がいを有した働き盛りの患者の理学療法への取り組みに対する意欲を探求する－解釈学的現象学的分析による事例研究―（査読付）	共著	令和元年10月	保健医療学部雑誌 10(2) 79-91	本研究の目的は，障がいを有した働き盛りの患者の理学療法への取り組みに対する意欲を向上させるための知見を得ることである．対象は，理学療法に積極的かつ意欲的に取り組んでいる40 歳代の男性入院患者である．方法は解釈学的現象学的分析とし，手順としては，本患者に半構造化面接を行い，理学療法を積極的かつ意欲的に取り組める理由について聞きとり，理学療法への取り組みに対する意欲を分析した．結果は，本患者の理学療法への取り組みに対する意欲を9 つのテーマから解釈することができた．テーマは，半年限定，家族や妻の存在，男のプライド，苦痛を意欲に変化させる力，関係性から構成される意欲等が示された．我々は，これらに着目した理学療法実践時の声かけや配慮，工夫が理学療法への取り組みに対する意欲の向上に大切になると結論づけた． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
42 高齢線維筋痛症2症例の3週間入院運動プログラムの効果について ―痛みと身体・注意機能，包括的QOLおよび背外側前頭前野の血流動態への影響―（査読付）	共著	令和元年12月	理学療法科34(6)893-846	本研究の目的は，高齢線維筋痛症（FM）患者の入院運動プログラムが痛みと身体・注意機能，包括的quality of living（QOL），背外側前頭前野（DLPFC）の機能に与える影響を検討することであった．対象は，高齢FM女性2名とし，方法は3週間入院運動プログラムを行い，介入前後に痛み，身体・注意機能，包括的QOL，DLPFCの血流量と反応時間の評価を行った．結果は，両者とも痛みの認知・情動的側面，身体機能，包括的QOLに改善がみられたが，注意機能とDLPFCの機能については症例で異なる結果となった．高齢者FM患者に対する入院運動プログラムの介入は，痛みの認知・情動的側面や身体機能，包括的QOLの改善に有効であることを示唆した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：藤田信子，池田耕二，高井範子，金子基史，松野悟之，三木健司，仙波恵美子）
43 卒前教育における終末期理学療法講義の役割を再考する（査読付）	共著	令和2年2月	理学療法科35(1)133-138	本研究の目的は，終末期理学療法（終末期PT）の講義を理学療法学科の学生がどのように受け止めているかを明らかにし，本講義の役割を再考することである．対象は理学療法学科の学生62名とし，方法は質的研究法である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach：M-GTA）を用いて終末期PTの講義後（90分）の感想文のテクストデータからカテゴリー化によってモデル構築を行い分析した．結果，モデルは，死と向き合う機会，死と向き合うことで促された学び，終末期PTに対する実践意欲の向上の3つカテゴリーからなり，これらは階層性を成していた．モデルは終末期PT講義における学生の段階的な受け止め方（習熟度）と実践意欲を高める過程を示した．これを活用すれば学生の習熟度に合わせた実践意欲を高める講義が可能になると考えられた． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：山口朋彦，池田耕二，桝本展孝）
44 デイケアにおいて閉じこもり傾向にあった高齢利用者に対する行動変容理論の実践（査読付）	共著	令和2年3月	地域リハビリテーション15(1) 54-59	高齢者の閉じこもりは，要支援・要介護，死亡リスクを高めるため，その予防や対策が重要視されている．高齢者の閉じこもり対策の一つに行動変容理論の実践がある．しかし，デイケア（通所リハ）における行動変容理論の具体的な実践方法や工夫などの知見は少ない．そこで今回，3つの実践事例に対する物語分析から有効な実践知を抽出した．その結果，3実践事例からは，個々に応じた靴の変更や横断歩道の横断開始のタイミングの指導，または痛みに対する自己管理の指導，時期に応じたケアマネジャーとの連携，デイケアにおける屋外歩行練習による成功体験の蓄積等の効果が重なることで，買い物行動の獲得に繋がる可能性があるという実践知が得られた． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大山大将，池田 耕二，黒岡禎治，廣瀬将士，吉富慈洋，高本晴加，勝久江，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
45 在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求する ―グループインタビューによる事例研究― （査読付）	共著	令和2年3月	大阪行岡医療大学紀要 7 11-17	本研究では，在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求し，在宅終末期リハビリテーションを有効に実践するためには患者や家族との関係性づくりや変化に気づく等の能力が必要であることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共著者：池田耕二，根釜夢乃，岩永愛理奈，谷口茉恵，西本正樹）
46 地域リハビリテーションとしての温泉旅行の可能性を探る -事例研究-（査読付）	共著	令和2年3月	医療福祉情報行動科学研究 7 37 - 43	本研究の目的は，地域リハビリテーションのソフトインフラとして温泉旅行を整備するため，温泉旅行および温泉旅行の各活動場面が要介護高齢者に与える影響を明らかにすることである．方法は，日帰り温泉旅行に参加した要介護高齢者2名を対象に，半構造化インタビューを行った．インタビューでは温泉旅行にある各活動場面の楽しみの程度と対象者や家族等の変化を調査した．結果は，A氏は入浴を含めた温泉旅行の全活動場面を楽しんでいた．また，脳卒中後10年間行くことはなかった温泉旅行に再び行こうとしており，温泉旅行の参加に対する自信を回復していた．B氏は温泉旅行の入浴以外の準備，移動を楽しんでおり，温泉旅行で新たな人間関係を構築していた．本研究では，温泉旅行にある各活動場面や温泉旅行は個々の要介護高齢者に様々な影響を及ぼすことが示唆された．その影響としては，自信の回復や人間関係の再構築を促進させることが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）
47 Quantitative Evaluation of Functional Instability Due to Anterior Cruciate Ligament Deficiency（前十字靭帯断裂による機能的不安定性の定量的評価）（査読付）	共著	令和2年7月	Orthopaedic journal of sports medicine 8(7) 2325967120933885 - 2325967120933885	本研究では，TBTテストが主観的な膝の不安定感を反映した体重負荷条件下でACLDによる機能的不安定感を定量的に評価できる安全かつ信頼性の高い方法であることを示した．本テストは，ACL再建前後の客観的な測定値を追加することで，治療成果やスポーツ復帰の指標となる． 本人担当部分：データ解析・統計 （共著者：松尾高行，小柳磨毅，沖本遼，森内俊貴，池田耕二，中江徳彦，中川滋人，史野根生）
48 単身世帯の認知症高齢者1症例の地域生活の再建を可能にした訪問リハビリテーションの実践 （査読付）	共著	令和2年8月	訪問リハビリテーション 10(3) 153-159	本論文では，認知症高齢者に対して，生活リズムの改善，生活意欲と活動性の向上に着目し，訪問リハが本人の希望に即しながら多角的に介入すれば，地域生活の再建に有効であることを示唆した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：金谷親好，金丸真由美，池田耕二，久松憲明）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
49 理学療法士の経験学習プロセスの解明と支援方法の開発に向けた探索的研究 （査読付）	共著	令和2年10月	理学療法学 48(1) 19-28	本論文では，熟達理学療法士（以下，PT）の経験学習プロセスにある成長を促す経験と学習内容を明らかにした．熟達PT はキャリアの初期に「障がいを有した患者の社会参加に向けた実践経験」から〈人とのかかわりや社会・生活に対する実感〉を，初期～中期に「予期できぬ否定的な経験」から〈医療の厳しさ〉等や「重度患者を基本的理学療法で改善した経験」から〈基本的理学療法技術の有効性〉等を，中期～後期に「実習生や新人に対するサポート経験」から〈自己内省による知識・技術の整理〉等や「多職種連携による介入経験」から〈コミュニケーション〉等を学習していることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，　城野靖朋，松田淳子）
50 理学療法臨床実習・現場教育を支援する教育的工夫と配慮	共著	令和2年12月	奈良学園大学紀要 13 1-8	本論文では，2019年に理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則の一部を改正する省令がだされ，理学療法臨床実習は大きく変わろうとしていること，昨今の社会情勢を背景に理学療法士の現場教育も変わろうとしていることを踏まえ，学生や新人理学療法士の自律性を育成し，それを支える教育的工夫や配慮を，1)教育目標の共有，2)現場のストレスに対する認識，3)チームという場づくり，4)感情労働，5)経験資本という視点から，筆者らの経験をもとに提案した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋）
51 本学保健医療学部リハビリテーション学科志望経緯に関する調査	共著	令和2年12月	奈良学園大学紀要 13 149-155	本研究では，本学保健医療学部リハビリテーション学科の広報活動に資する基礎資料とするため，2020年度新入生の志望経緯および本学に対する印象等についてアンケート調査を行った．その結果，理学療法・作業療法いずれの専攻についても，多くの学生は当初の志望を中途変更することはなかった．一方で，中途で変更する学生においては，自身の経験や自身の適性についての内省，さらに作業療法学専攻については，特徴的な技術に魅力を感じたことが契機となっていた．入学前の本学選択においては設備，環境面を魅力と感じており，入学後は教員や教育の質について肯定的な意見が多かった．以上から，低年齢時における分かりやすい理学療法・作業療法に関する周知，あるいは本学の特徴的な講義等の教育方法に関する広報が有用であると考えられた． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：飯塚照史，辻下守弘，池田耕二，城野靖朋，中島大貴）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
52　日帰り温泉旅行における要介護高齢者自身の生活機能に対する認識の変化：解釈学的現象学的分析（査読付）	共著	令和3年3月	医療福祉情報行動科学研究 8 55-65	本論文では，日帰り温泉旅行に参加した個々の要介護高齢者自身の生活機能に対する認識の変化を，解釈学的現象学的分析を用いて分析した．その結果，13サブテーマと【楽しさに繋がる行動を促進する】，【喪失されていた思いの再獲得】，【豊かな感情を喚起する環境に対する認識】，【スタッフの関り方や置かれた立場によって生じる感情】，【自身の在り方に対する認識の変化】という5テーマが抽出できた．要介護高齢者は温泉旅行を経験したことにより，多様な生活機能に対する認識の変化を生じていたことを述べた． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）
53　終末期肺腺がん高齢者1症例のQOLの向上が図れた訪問リハビリテーションの実践（査読付）	共著	令和3年8月	訪問リハビリテーション 11(3) 160-165	本論文では，終末期にある利用者との間に，信頼関係の構築ができれば，たとえ余命1ヶ月であったとしても新たに希望が芽生え，訪問リハが終末期がん高齢者に対するQOL向上の実現の可能性を高めることや，訪問リハの多面的な視点と専門的な知識・技術に基づいた介入，多職種連携による多角的介入が有効に機能すれば，終末期がん高齢者のQOLも向上させることができることを示唆した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：金谷親好，金丸真由美，池田耕二，田中千恵）
54 Perceptions, beliefs, and needs of Japanese people with knee osteoarthritis during conservative care: A qualitative study(保存療法中の変形性膝関節症の日本人における認識，信念，ニーズ：質的研究）（査読付）	共著	令和3年9月	BMC Musculoskeletal Disorders3;22(1):754. doi: 10.1186/s12891-021-04641-7.	本研究では，日本人の膝OA患者がどのように症状や障害を経験・認識し，保存的ケアの際にどのように向き合っているのかを質的研究によって明らかにした．参加者は膝OA患者（男性2名，女性7名，平均年齢74.3±5.5歳）であった．対面式の半構造化インタビューによって個人的な経験を聞き取った．分析はグラウンデッド・セオリー・アプローチに基づいて行った．結果，データから「負の経験」と「困難への対処」の2つのコアカテゴリーが抽出された．日本人の膝OA患者は，エビデンスに基づいた情報や，同じ境遇の人とつながって問題を解決することを望んでいることがわかった．よって，患者の不安を解消するためには，医療従事者が丁寧なヒアリングを行い，患者の過去の経験に関する情報を得て，膝OAに関する患者の経験を理解する必要がある．膝OA患者が経験する症状や困難は，膝OAに対する患者の認識や信念を統合したエビデンスに基づく情報によって管理されるべきである． 本人担当部分：計画，データ収集，分析，考察，執筆 （共著者：Daisuke Uritani, Akane Ikeda, Toru Shironoki, Kentaro Matsubata, Yuto Mutsura, Tadashi Fujii, Koji Ikeda）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
55 2021年度リハビリテーション学科新入生における志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要 13 1-6	本論文では，学部設置3 年目を迎えた奈良学園大学リハビリテーション学科においては，定員充足率増加に伴い新入生の進学経緯も多様になっているものと考えられれる．そこで，3 期生においてアンケート調査を実施し，2 期生との比較を通じてその傾向について比較検討した．結果，当初における職業選択は変更されることなく，近しい人物への相談を伴ったオープンキャンパスへの参加，加えて本学近隣環境等への好感を以て進学を決定している経緯があり，2 期生との大きな変化はなかった．一方で，プレゼンスの高まり，教員対応への肯定的意見と捉えられる側面もあり，本学魅力の一端として認識する必要性が示唆された． 本人担当部分：考察，一部加筆 （共著者：飯塚照史，辻下守弘，池田耕二，城野靖朋·，大貴）
56　介護付き有料老人ホームにおけるリハビリテーションに関する一考察一事例研究．リハビリテーション·ケアセンターつららかにおける実践の振り返り一	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要 13 7-17	本論文では，介護付き有料老人ホームにおける2年間のリハビリテーション実践の振り返りを通して，その効果や役割，あり方，可能性を考察した．その結果，筆者らが取り組んでいる介護付き有料老人ホームのリハビリは，リハビリスタッフと入居者，家族とのコミュニケーションや関係性を基軸に，喜びや安心感という感情表出，全身調整機能や生活リズムの再構築，集団リハビリというコミュニティ，環境変化からくる多様な効果や役割が総じて，入居者や家族の生活の質（QOL）向上の可能性を高めていると考えられた．これらを考慮したリハビリテーションが実施できれば多様な障害像を有する入居者のQOL向上が図れると期待することができる．これらについてはさらに検証を加える必要があり，今後の課題であることを提言した． 本人担当部分：実践，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，古家真優，梅津奈央，大塚佳世）
57　地域リハビリテーションにおけるソフトインフラとしての温泉旅行についての再考：地域高齢者・障がい者のQOLの向上を図る仕組み作り	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要 13 53-58	本論文では，温泉旅行を地域リハビリテーションの一環として理論的に整備し，その可能性について考察した．温泉旅行の効果に関する先行研究の多くは温泉浴の疾病に対するものであり，生活の質への効果やその因果関係を明示するものは少ない．しかし，高齢者に人気のある温泉旅行を，生活の質を向上させるためのソフトインフラとして，新たな視点から理論的に再構築する意義は大きい．日帰り温泉旅行における2つの実態調査からは，要介護高齢者には多様な楽しみ方があることや，多様な思い・感情・変化があることが示唆されている．これらを温泉旅行へ理論的に組み込むことができれば，地域リハビリテーションの新たなソフトインフラになる可能性があると考えられる．本稿では，これらの知見を通じて，温泉旅行をソフトインフラとして理論的に再構築し，多様な工夫や企画等を提案し，その可能性や課題を提示した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
58 線維筋痛症患者の語りから見出された疼痛の背景･疼痛抑制要因および今後の治療に望まれること	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要 13 91-101	本研究では，FM患者12名を対象とした3週間入院運動プログラムの介入前後に行った半構造化面接から，痛みの背景にある精神的ストレス要因，および，FM患者の痛みの状況や疼痛抑制要因に関する語りを取り上げ，今後のFM治療に望まれることを示唆する．結果，疼痛抑制要因として痛みがあっても身体を動かすことが逆に痛みを軽減させること．セルフマッサージや入浴・シャワーなどで身体を温めること，運動を含めた規則正しい生活習慣等が重要になることが示唆された．また辛さに共感してくれる他者の存在が痛みの軽減につながることが語られた．今後，FM治療に望まれることとして，FM治療の専門家の育成やFM患者に対する「初期対応」の重要性，FM患者が語る疼痛抑制要因から見出された疼痛管理やFM患者に対する入院運動プログラムの可能性，さらに，FM患者への言葉がけの工夫や患者に寄り添う医療スタッフの育成，および，FM患者に対するチーム医療の必要性などが患者の語りから見出された． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：高井範子，池田耕二，藤田信子，三木健司，高橋紀代，仙波恵美子）
59 3週間入院運動プログラムによる線維筋痛症患者の心身の変化 -心理面談により明らかになった理学療法士の対応の重要性- （査読付）	共著	令和4年2月	理学療法科学 37(1) 45-58	〔目的〕新たに考案した3週間入院運動プログラムによる介入前後の線維筋痛症（FM）患者の心身の変化を調査し，理学療法士（PT）の適切な対応を明らかにすることである．〔対象と方法〕FM女性患者12名を対象とし，医療や心理学などの専門家による共同チームが考案した3週間入院運動プログラムによる介入を行い，その前後において質問票（日本語版線維筋痛症質問票（JFIQ），日本版ベック抑うつ質問票（BDI-Ⅱ），The 8-item Short-Form Health Survey （SF-8））による評価と心理面談による聴き取りを行った．〔結果〕本プログラムによりFM患者のJFIQでは11名，BDI-Ⅱでは10名，SF-8では9名（身体面），8名（精神面）が改善を示した．患者の語りからは，患者の痛みや辛さに寄り添う姿勢など，PTの対応が患者にとり重要であることが示唆された．〔結語〕本プログラムはFM患者の心身に変化を及ぼす効果があり，その遂行において患者の痛みや辛さに寄り添うPTの姿勢が重要である． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：高井範子，藤田信子，池田耕二，金子基史，丸山伸廣，中原理，三木健司，髙橋紀代，仙波恵美子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
60 放課後等デイサービスにおける理学療法士の役割および課題 （査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9 39-46 2022年	近年，放課後等デイサービスの事業所は年々増加しており，そこに関わる理学療法士は国，放課後等デイサービスおよび理学療法士協会から期待されている．しかし，現状は放課後等デイサービスに関わる理学療法士は極めて少ない．また放課後等デイサービスにおける理学療法士の役割や課題に関する先行研究や実践報告はほとんど見受けられない．このような現状では理学療法士はどのように放課後等デイサービスに関われるべきか分かりにくい状況である．理学療法士が放課後等デイサービスで働くことに関心を有しても，行動に移しづらい要因となっている．そこで，本論文では，放課後等デイサービスにおける理学療法士の役割や課題について，数少ない先行研究や実践報告，そして，筆者のこれまでの経験を通して提示することを目的とした．その結果，放課後等デイサービスにおける理学療法士の役割は，個別療育と集団療育の大きく二つあることが分かった．個別療育では理学療法士が主に個別に合わせたリハビリテーションを行う．集団療育では主には理学療法士以外のサービス提供職員が担当することが多いが，集団療育の場にも積極的に理学療法士が関与することで支援スタッフの児童やリハビリテーション専門職への理解が進む可能性がある．次に，放課後等デイサービスに理学療法士が関わる際の今後の課題としては日常生活動作が比較的自立した児童～医療的ケアが必要な重症児にも対応できるように理学療法士としての専門性を幅広く高める必要性，リハビリテーション専門職が早期から放課後等デイサービスと情報共有する必要性，地域に住む人たちが障害児・者についての理解を広げてもらえるように理学療法士が啓発活動を行うことなどが課題として挙げられた． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：辻下聡馬，池田耕二，辻下千賀）
61 コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題―学内実習の概要と学生アンケート調査による考察― （査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9 31-38 2022年2月	【目的】指定規則の改正により，訪問リハビリテーションまたは通所リハビリテーションに関する実習（以下，地域実習）を行うことになった．しかし，新型コロナウイルスの感染拡大により現場での実習実施が困難となったため，令和2年度・3年度においては学内実習を行うこととなった．本研究は学内実習の構成について触れ，履修学生のアンケート調査より学内実習の課題と可能性について検討した．【方法】リハビリテーション学科（理学／作業療法専攻）の地域実習は，2年次後期配当科目（2単位）であり，2週間にわたり実施した．学内実習は，①予習，②学内実習，③復習で構成した．①予習は臨床実習専用ホームページ（HP）にて，実習開始1か月前に予習用教材を掲載した．②学内実習では，可能な限り学外実習と遜色のない学習機会が学生に提供されるよう配慮し，日々の学習テーマに沿ってグループ討議を積極的に行い，訪問・通所事業所とライブ中継等を取り入れた．③復習は，学内実習を振り返ることができるよう復習用資料をHPに掲載した．また，令和2年度・3年度の履修学生に対し，実習終了後に学内実習に関するアンケート調査を実施した．【結果】回答率は，令和2年度95.7%，令和3年度94.7%であった．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				アンケート調査の結果，両年度ともに類似した回答傾向であり，地域実習で扱ったテーマについては77.5 - 97.2%が理解できたと回答した．訪問・通所事業所のライブ中継については，94.4 - 100%で高い評価結果であった．一方，3年次以降の臨床実習に関する質問では，36.4 - 85.9%の学生が「不安」という回答であった．自由記載では，「地域リハビリテーションに関する関心や意識が向上した」という感想がある一方，「現場に行きたかった」「実技の時間が欲しい」などの意見もみられた． 本人担当部分：実践，考察 （共著者：滝本幸治,吉川義之,笹野弘美,坪内善仁,前田吉樹，中島大貴,辻下聡馬,大浦智子,山形力生,池田耕二）
62 コロナ禍における理学・作業療法士養成課程の早期体験実習 ―学内実習後の学生アンケート調査による検証―（査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9 55-63 2022年	令和2年および3年度，新型コロナウイルスの感染拡大をうけ早期体験実習を学内実習として実施した．学生アンケートの結果から，学内実習の意義や課題を明確にした．アンケートの結果，両年度とも実習内容については多くの学生が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答した反面，「2年次以降の学外実習に向けた不安」を訴える学生が多かった．自由記述では「教員が近くにいる分質問などがしやすかった」，「疑問をすぐに先生に質問することができた」という意見のほか，「自分が知らなかった分野にも興味が持てた」という意見もみられた．学内実習で医療施設での学びを完全に再現することは困難だが，早期体験実習の本来の目的を達成する上で，学内実習は必ずしも不利な点ばかりではない． 本人担当部分：実践，考察 （共著者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩﨑智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二）
63 熟達理学療法士の経験学習プロセスにおける成長を促す経験（査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9 97-103 2022年	【目的】熟達理学療法士から経験学習プロセスにある成長を促す経験を明らかにし，経験学習支援を理論的・実践的に示唆することである．【方法】対象は，熟達理学療法士43名とした．方法はアンケート調査とし，印象に残った経験（時期，内容）を聞き取った．分析にはオープンコーディング法を採用し，成長を促す経験カテゴリーを作成し，コード数の多い上位の成長を促す経験カテゴリーを抽出した．【結果】1）担当患者の理学療法・関係性に苦悩した経験，2）理学療法における成功体験，3）先輩・指導者の治療技術に差を感じた経験などの成長を促す経験カテゴリーが抽出された．【考察】成長を促す経験からは，キャリアを通して理学療法士管理者・指導者は，理学療法士に対して担当患者の理学療法や，担当患者との関係性からくる苦悩に対してケアを行うこと，できるだけ成功体験の蓄積を支援すること，先輩と治療技術の差を実感させる機会を多くすること，そして重度な患者を診る機会や学会発表や参加する機会を多くすることが経験学習支援につながると考えられた． 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
64 Work beliefs and experiential learning among proficient physical therapists in Japan: Developing a method to support belief formation （査読付）	共著	令和4年4月	Journal of Physical Therapy Science 34(4) 262-268	[Purpose] This study aimed to elucidate the content of work beliefs related to proficiency among physical therapists in Japan. [Participants and Methods] Participants included 50 therapists who met the definition of proficiency to participate in a questionnaire survey conducted between October 2017 and March 2019. Participants were asked to freely describe their daily work beliefs, including their thoughts, values, and ideals. This content was coded and categorized using open coding; a hierarchical cluster analysis (Ward’s method) was conducted of the proficient therapists with the individuals and belief categories as the variables. All belief categories were classified into three groups. [Results] Three work beliefs were identified as follows: 1) practices that emphasize building relationships in the field, 2) broad practices with physical therapist pride (responsibility and enthusiasm), and 3) practices with awareness of treatment outcomes and social benefits. [Conclusion] A better understanding of the three aforementioned work beliefs would facilitate good support for and development of physical therapists. We recommend continuing to elucidate the three work beliefs identified among proficient therapists and verify their educational effects. 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：Koji Ikeda, Atsushi Tasaka, Kenji Kasubuchi, Yasutomo Jono, Junko Matuda）
65 養成校からみた訪問への臨床実習の実際	共著	令和4年6月	訪問リハビリテーション 12(2) 112-123	訪問リハの役割を，①再自立支援型，②疾病・介護予防型，③緩和ケア型に区別し，各役割ごとに学習すべき事柄や重要ポイントを述べ，訪問リハの臨床実習の配置時期と３つの役割ごとに，臨床実習における組み立て方や指導，教育方法について紹介した． 本人担当部分：論文執筆 （共著者：池田耕二，吉川義之）
66 放課後等デイサービスにおける保護者およびスタッフ視点の児童の課題・目標に関する探索的研究 （査読付）	共著	令和4年12月	理学療法科学 37(6) 571-578	〔目的〕児童に対する保護者およびスタッフの目標や課題を明らかにし，理学療法の課題を提示することである．〔対象と方法〕対象は保護者10名とスタッフ5名とし，10名の各児童の目標・課題を質問紙による自由記述式にて調査した．分析方法はオープン・コーディング法とし，短期・長期的な目標や課題を整理したうえで保護者とスタッフのものを比較した．〔結果〕短期的な目標・課題では，保護者は家庭内の生活のことを，スタッフは学校内の生活のことを気にする意見が多く，認識の相違が認められ，長期的な目標・課題では，保護者もスタッフも就労に関するものが多く，将来の方向性は類似していた．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				〔結語〕今後の理学療法の課題は，保護者およびスタッフに対して定期的に理学療法評価の結果を伝え，協働してリハビリテーションを進めていくことが重要である． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：辻下聡馬，池田耕二，辻下千賀）
67 数量化III類分析による線維筋痛症女性患者の症状改善傾向の類型化 -3週間入院運動プログラムにおける症状変化を通して-（査読付）	共著	令和4年12月	理学療法科学 37(6) 593-599	〔目的〕3週間入院運動プログラム（有酸素運動，筋力増強運動など）における線維筋痛症（FM）女性患者の症状改善傾向を類型化すること．〔対象と方法〕対象はFM女性患者11名，方法はプログラムの開始前，中，後で，①SF-8（身体的健康度（PCS），精神的健康度（MCS）は前後のみ），②体調，③疲労度，④熟睡度，⑤疼痛，⑥楽しさ，⑦歩数，⑧睡眠時間，⑨睡眠効率，⑩姿勢（座位・立位の割合）を測定し，各項目の改善傾向から数量化Ⅲ類分析を用いて症状改善傾向を4つに分類した．〔結果〕症状改善傾向は，1）睡眠時間，熟睡度，疲労度，2）姿勢とPCS，3）歩数，MCS，睡眠効率，4）疼痛，楽しさ，体調の4つのグループに分類できた．〔結語〕本研究はFM女性患者の運動療法の効果の現れ方を4つに類型化した． 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，藤田信子，松野悟之，高井範子，金子基史，三木健司，仙波恵美子）
68 施設の種類に対応した臨床参加型実習モデルの提案 一施設の特徴を活かした経験の積ませ方一	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要 15 1-14	本稿では，臨床実習が行われる医療施設と介護施設，訪問リハビリテーションに大別しながら，各施設の理学療法の特徴や役割を整理し，臨床実習の内容や方向性を確認した．次に，学生に対する経験の積ませ方を考慮しながら，各施設における臨床参加型臨床実習モデルを構築し，併せて臨床実習におけるキーポイントを提示した． 本人担当部分：論文執筆 （共著者：池田耕二，滝本幸治，城野靖朋，吉川義之，野田 優希，野中紘士，辻下守弘）
69 理学療法士を育む【場】づくりの着想に関する一考察	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要 15 15-20	本稿では，現在の理学療法士の現場教育や人材育成の課題と限界を提示し，新たな枠組みの必要性を指摘する。筆者らが着想する新たな枠組みとは，理学療法士の発達や成長を後押しする“理学療法士を育む【場】づくり”である。これは理学療法士の経験学習が促進されやすい【場】（雰囲気や組織風土からなる空間）をつくりあげるというものである。しかし，現在，理学療法士の経験学習を促す【場】の特性や，それを成立させるための条件は明らかになっていない。これらを解明することができれば，理学療法士を育む【場】づくりが可能となり，現場教育や人材育成に貢献できると考える。本枠組みの実現可能性は十分あり，これからの現場教育，人材育成の課題の一つとなる。 本人担当部分：論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋，吉川義之，野田優希）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
70 高齢心不全患者のQOL に対する多職種連携による介入の有用性: スコーピングレビュー	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要 15 37-43	心不全患者に対する治療目的の一つは生活の質(Quality of life：QOL)の改善であり，日本循環器学会のガイドラインは高齢心不全患者に対する多職種連携による介入を推奨している．しかし，高齢心不全患者のQOLに関する研究の多くは在宅や地域の患者を対象としており，入院中の患者を対象にはしていない．今後，日本では高齢心不全患者の増加が予測されており，入院中の高齢心不全患者に対する多職種連携による介入のQOL改善効果を検討する意義は大きい．そこで，本研究では入院中の高齢心不全患者に対する多職種連携による介入が退院後のQOL改善に寄与しているかという関心のもと，スコーピングレビューを行った．対象文献の収集はPubMedと医中誌web版とした．結果，11件が全文精読の対象となり，そのうち，分析対象となった文献は1件であった．本採用文献は入院中の高齢心不全患者に対する多職種連携による介入のQOL改善効果を示したが，除外された中で対象国が日本である文献の全てはQOL評価が実施されておらず，日本における入院中の高齢心不全患者に対する多職種連携による介入のQOL改善効果の研究が不十分であることを示唆した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：梅津俊介，喜多一馬，森田隆剛，池田耕二）
71 熟達理学療法士における成長を促した経験学習サイクルを探求する:教訓と応用 （査読付）	共著	令和5年4月	日本理学療法管理学 1 15-22	【目的】熟達理学療法士の成長を促した経験から獲得した教訓と応用の内容を探求すること． 【方法】対象は熟達理学療法士 43 名とした．方法はアンケート調査とし，調査項目は1基本属性，2成長を促した経験，3獲得した教訓内容，4次に向けた応用内容とした．分析方法はオープンコーディング法とし，成長を促した経験と教訓，応用内容をカテゴリーとして抽出した． 【結果】1基本属性:男 31 名，女 12 名，年齢 36.8 ± 4.5 歳，臨床経験年数 14.0 ± 4.4 年であった．次に2成長を促した経験と3教訓，4応用カテゴリーは順に，a)担当患者の理学療法・関係性に苦悩した経験，教訓は理学療法士としての態度，応用は丁寧な患者対応など，b)理学療法における成 功体験，教訓は個々の症例に対する気づき，応用は介入方法の変化など，c)先輩・指導者の治療技術 に差を感じた経験，教訓は評価の重要性，理学療法士の能力の必要性，応用は自己研鑽などであった．【結論】熟達理学療法士は多様な経験から多様な教訓を得て，次の経験に向けて応用していた． 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（その他） **「総説」** 1 ”Physical Therapy”1994年版まとめ	共著	平成7年8月	理学療法ジャーナル　29 (8)　865－869	アメリカ理学療法士協会の機関紙である”Physical Therapy，1994年”に掲載された92編の論文を要約し，それらから運動療法，物理療法，運動学，検査，測定，義肢・装具，教育・管理・調査に分類し主だったものをいくつか紹介した．1年間を通して各研究において研究デザインが検討されており，研究自体の信頼性を高める努力がなされている．また日常的な技術についての信頼性や妥当性の再確認もされていた．その他，患者教育に関するもの，物理療法に関する研究が多くなされていた． 本人担当部分：和訳，考察，論文執筆 （共著者：武政誠一，嶋田智明，日高正巳，池田耕二）
「提言」 1 コミュニケーション能力の向上を課題にした自己分析レポートから見えてきたもの	単著	平成21年10月	理学療法ジャーナル 43(10) 942 -943	本論文では，実習生自らが提出した自己分析レポートを分析し，実習生の内面の変容過程を明らかにし，そこから一実習指導を提起した．コミュニケーションにおいては方法の模索に始まり，新たな模索へという子過程が示された．実習での新たな発見からは視野が広がる過程が示された．これらの過程に即した指導が必要になることを提起した．
2 終末期における理学療法の位置づけを再考する	共著	平成23年3月	理学療法ジャーナル 45(3) 240	本稿では，現場で実感しにくい生活の質を目標に理学療法を漠然と行うのではなく，理学療法の哲学的基盤を根底から見直し，終末期理学療法の位置づけを筆者の経験をもとに再考した．そして，終末期理学療法は生活の質の再構築と納得を目指すものと提起した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，中田加奈子）
3 認知症患者1症例の理学療法経験から学んだ「工夫」や「視点」	共著	平成23年4月	理学療法ジャーナル 45 (4)　332	本稿では，認知症患者の理学療法経験を通して，学んだ工夫や視点を述べた．具体的には，認知症患者の介入によって，症例を理解しようと焦らず，何かを感じ取ろうとすること，患者の細かな変化を日々の中で捉えること，理学療法評価やツールとして家族機能を活用することで切る動作を通して治療を組み立てることなどを提示した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
4 理学療法士発達論に基づいた教育方法の開発に向けて	単著	平成25年5月	理学療法ジャーナル 47 (5) 423	本稿では，徒弟制度に基づく教育だけでは個々の人材が有する新たな可能性を摘んでしまう危険性があることを指摘し，その可能性を積まない教育支援方法の必要性を説いた．そこで，理学療法士の内面の発達を理学療法士発達論とし，それにもとづく理学療法教育を行う必要性を提起した．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5 これからの地域社会に求められる理学療法士像を考える	共著	平成27年11月	理学療法ジャーナル 49（11）：1058	本稿では，地域包括ケア等がはじまった地域社会から現場で本当に求められる理学療法士像を考察した．現場では，様々な対応や知識が求めらえる．そして，それらを包括して解決に向かわせる力が必要となる．これを包括的理学療法として位置づけ，現場で必要な能力とした． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二）
6 コロナ禍で変わる臨床実習：奈良学園大学リハビリテーション学科	共著	令和3年4月	作業療法ジャーナル 55(4) 373 - 374	本稿では，2020年，コロナ禍で学内で行われた早期体験実習と地域理学療法実習について紹介した．具体的には，企画，内容，ＩＴの活用，問題意識，実践など，学生と教員が共同で実践した内容を提示し，これからの課題と合わせて提示した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：中島大貴，坪内善仁，池田耕二，山形力生，大浦智子，辻下守弘）
7 私のターニングポイント：自分と理学療法士としての成長の重なり	単著	令和4年5月	PTジャーナル 56(5)578	本稿では，理学療法士である筆者の理学療法士としての成長と自信の成長を重なり合わせ、時間をかけて理学療法士は成長することを示唆した。
「研究報告書」				
1 理学療法士の発達を促す経験学習支援方法の開発	単著	令和3年4月	科学研究費助成事業　（基盤研究C）研究成果報告書	本稿では，「理学療法士の発達を促す経験学習支援方法の開発」の研究成果を報告した． A4判5頁
2 リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性活用システムの構築−臨床実習教育の質的向上を目指して−	単著	令和3年5月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成成果報告書	リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性活用システムの構築の経緯，可能性について報告した． A4判4頁
「学会発表」 **＜国際学会＞**				
1 INTRODUCTION OF "WHEELCHAIR SPORTS CHANBARA"- A NEW PROGRAM IN REHABILITATION - (車いすチャンバラの紹介；新しいリハビリテーションプログラム)	―	平成9年8月	The 8th World Congress of The International Rehabilitation Medicine Association, KYOTO, JAPAN（京都）	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルールを考案し紹介した． 本人担当部分：車いすスポーツチャンバラの開発，実践，考察） （共同発表者：K.TAKEBE, K.IKEDA, T.KANEKO, S.TAKEMASA, T.NAGAO）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2 INFLUENCE ON THE VOLUNTARY CONTRACTION OF PELVIC FLOOR MUSCLES WITH BODY WEIGHT SUPPORT （体重支持による骨盤底筋群の随意収縮の影響）	－	平成20年8月	10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy, CHIBA, JAPAN（千葉）	部分的荷重によって骨盤底筋群の収縮がどのように影響されるかについて調査検討を行い報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：Asuka Iso, Miwako Ishii, Mayumi Tayanaka, Kosaku Ota, Koji Ikeda）
3 CHANGE OF CONSCIOUSNESS IN STUDENTS IN PHYSICAL THERAPY CLINICAL PRACTICE- EXPLORATORY STRUCTURE ANALYSIS BY QUALITATIVE CONTENT ANALYSIS AND QUANTIFICATION III - （理学療法臨床実習における実習生の意識構造の変化－質的内容分析と数量化Ⅲ類による探索的構造分析―）	－	平成21年7月	Improving University Teaching（IUT）34th International Conference, Simon Fraser University, Burnaby Campus, Vancouver, Canada（バンクーバー）	本研究の目的は，理学療法臨床実習期間における臨床実習生の意識変容過程を明らかにすることにある．その結果，理学療法臨床実習生は理学療法実践を多く学びながら，緊張や焦りを多く感じて思考的に意欲を心がける傾向にあることが明らかとなった．また意識構造は,知識・感情の軸と冷静な実習・躍動的な実習の軸で構成されていることがわかり,さらにその変容過程は「感情」，「知識」，「専門・統合」，「意欲」，「冷静」，「躍動」，「混合」優位の７つのタイプに分類できることが明らかとなった． 本人担当部分：データ取集，分析，考察，執筆 （共同発表者：Koji IKEDA, Akira TAMAKI, Masaki YOSIDA）
4 Study on the Effects of Skin Stretching without Joint Movement on range of motion in Rats （ラットにおける関節可動域運動が無い状態での皮膚のストレッチ効果に関する研究）	－	平成28年10月	The Asian Confederation for Physical Therapy 2016, Kuala Lumpur（クアラルンプール）	本研究では，基礎研究としてラットにおいて関節運動を生じさせない状態での皮膚のストレッチが関節拘縮の予防に効果的かを検討した．その結果，皮膚のストレッチは関節拘縮の予防になる可能性を示唆した． 本人担当部分：考察 （共同発表者：Atsushi Tasaka, Takeya Ono, Hideki Ishikura, Kazuki Aihara, Yuta Sato, Koji Ikeda, Sadaaki Oki）
<国内学会>				
1 当院における大腿骨頚部骨折術後患者の生活状況について	－	平成5年11月	第33回近畿理学療法士学会（和歌山）	当院において手術し，リハビリテーションが施行された大腿骨頚部骨折患者の生活状況を調査し報告した． 本人担当部分：調査，分析，執筆 （共同発表者：平山敦子，宮本真美，池田耕二，太田光子，武部恭一，武政誠一）
2 変形性膝関節症における体重支持指数と日常生活動作について	－	平成6年5月	第29回日本理学療法士学会（青森）	変形性膝関節症における体重支持指数と日常生活動作についての関連性について検討した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆（共同発表者：池田耕二，宮本真美，平山敦子，太田光子，武部恭一，武政誠一，生島秀樹，石川司）
3 生体加温の際の組織酸素分圧測定用センサーの試作と特徴	－	平成7年6月	第30回日本理学療法士学会（東京）	深在性組織に直接刺入できない対象組織の温度変化に対応可能な極細の針状センサーを試作，開発しその特徴について報告した． 本人担当部分：実験担当，データ収集，分析 （共同発表者：講武芳英，嶋田智明，池田耕二，北潔）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
4 振り子打腱装置の開発とその精度の検討	－	平成7年6月	第30回日本理学療法士学会（東京）	振り子打鍵装置を開発し，それらの定量的評価における精度について報告した． 本人担当部分：データ収集 （共同発表者：篠原英紀，吉田正樹，武富由雄，瀬藤乃理子，富田義之，鈴木喜子，池田耕二，坂本達也，徳原尚人，中山伸治）
5 両側ｾﾒﾝﾄﾚｽ大腿骨人工骨頭置換術に対する荷重訓練について	－	平成7年11月	第35回近畿理学療法士学会（京都）	両側セメントレス大腿骨人工骨頭置換術を行った2症例に対して荷重訓練を行う上で問題点を述べた．本2症例は片側例と違って健側での支持が期待できないためリハビリテーションを行うためには症例に応じた工夫が必要であることを報告した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 (共同発表者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，武政誠一)
6 骨粗鬆症患者におけるﾗｲﾌｽﾀｲﾙ･生活活動能力と骨密度との関連に関する一考察	－	平成8年5月	第31回日本理学療法士学会（愛知）	骨粗鬆症患者を対象にライフスタイルと骨密度との関連を検討した結果，朝食，喫煙，散歩，体操，牛乳では健康的な生活習慣を有するものが高い骨密度を示すことを報告した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，武部恭一，武政誠一，長尾徹，嶋田智明）
7 車椅子スポーツチャンバラの紹介－リハビリテーションの一環として－	－	平成9年5月	第32回日本理学療法士学会（埼玉）	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルール等，考案したものをビデオにて紹介した． 本人担当部分：開発，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，岩本雅浩，武部恭一，金子翼，武政誠一，長尾徹）
8 大学サッカー選手における外傷・障害調査	－	平成10年11月	第38回近畿理学療法士学会（和歌山）	大学のサッカーチームを対象に選手の外傷・障害の調査をポジション別に行い，その調査結果を報告した． 本人担当部分：考察 （共同発表者：岩本雅浩，池田耕二）
9 バレエ動作による足部障害 PartⅠ－繰り返し動作との関連性－	－	平成13年2月	第12回大阪府理学療法士学会（大阪）	バレエ動作の特徴である足部障害を，繰り返し動作の回数という視点から調査分析を行い，その関連性を報告した． 本人担当部分：調査，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，菊池奈美，磯あすか，式田利晴，玉木彰,林義孝）
10 バレエ動作による足部障害 PartⅡ　－３症例を通して－	－	平成13年2月	第12回大阪府理学療法士学会（大阪）	バレエ動作の特徴である足部障害を有する３症例の理学療法経験から，その効果について検討を行い報告した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：菊池奈美，池田耕二，磯あすか，式田利晴，玉木彰,林義孝）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11　随意的胸式・腹式呼吸が呼吸運動及び換気反応に及ぼす影響(第2報)：肢位の違いによる検討	－	平成13年5月	第36回日本理学療法学術大会（広島）	随意的胸式・腹式呼吸が呼吸運動及び換気反応に及ぼす影響を肢位の違いから検討を行い報告した. 本人担当部分：データ収集 （共同発表者：土井暁子，玉木彰，小室透，山下堅，太田善行，長谷川聡，池田耕二，辻田純三，堀清記）
12 有酸素能力の差が運動時のLocomotor Respiratory Coupling発生に及ぼす影響(運動・神経生理)	－	平成14年5月	第37回日本理学療法学術大会（静岡）	有酸素能力の差が運動時のLocomotor Respiratory Coupling発生に及ぼす影響を検討し，報告した. 本人担当部分：データ収集 （共同発表者：玉木彰，長谷川聡，小室透，白須章子，池田耕二，土井暁子，辻田純三，堀清記）
13 他動的関節可動域が終末期寝たきり脳血管障害者に及ぼす影響	－	平成19年11月	第47回近畿理学療法学術大会（京都）	他動的関節可動域が終末期寝たきり脳血管障害者に及ぼす影響を，シングルケースデザイン法によって検討したことを報告した. 本人担当部分：理学療法実践，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，玉木彰，山本秀美，中田加奈子）
14 認知症後期高齢患者の理学療法実践における「実践知」の構造化にむけた事例研究	－	平成20年11月	第48回近畿理学療法学術大会（大阪）	認知症後期高齢患者の理学療法実践における「実践知」を明らかにし活用できるようにするために，その構造化を，質的研究を用いて行った. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，玉木彰，山本秀美，中田加奈子）
15 身体機能低下を伴った認知症高齢者の理学療法経験	－	平成20年11月	第48回近畿理学療法学術大会（大阪）	身体機能低下を伴った認知症高齢者の２症例の理学療法経験から，理学療法士の関わり方について考察し報告した. 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美，玉木　彰）
16　3年目の理学療法士は終末期理学療法実践をどのように体験しているか？－SCQRMをメタ研究法とした修正版M－GTAによるモデル構築－	－	平成21年11月	第49回近畿理学療法学術大会（兵庫）	本研究は，終末期理学療法を実践している3年目の理学療法士を対象に，「無力感や意欲低下」の生成過程を検討したものである．本研究の結果からは，3年目の理学療法士は，実践における葛藤や実践している環境の中から，無力感や意欲低下が生成されていくことが明らかとなった. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
17　脳出血後高齢血液透析患者1症例の10m介助歩行における往路と復路の能力差に着目した縦断研究	－	平成21年11月	第49回近畿理学療法学術大会（兵庫）	本研究では，脳出血後高齢血液透析患者1症例の10m介助歩行における往路と復路の能力差に着目し，縦断的に研究した．その結果，往路・復路の能力差は不安定性を示した．それらを今後さらに分析するとともに，それらを安定させることが課題であると考えられた． 本人担当部分：データ取集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，玉木彰，山本秀美，中田加奈子）
18 アルツハイマー型認知症を伴う大腿骨人工骨頭置換術後患者に対する理学療法経験 －関わりの中における工夫や視点－	－	平成22年7月	第22回大阪府理学療法学術大会（大阪）	アルツハイマー型認知症を伴う大腿骨人工骨頭置換術後患者1症例の理学療法経験から，関わりの中における工夫や視点について考察した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
19 脳出血後高齢血液透析患者１症例の10m介助歩行における往路と復路の能力差に着目した縦断研究・第２報	－	平成22年11月	第50回近畿理学療法学術大会（和歌山）	本研究では，脳出血後高齢血液透析患者1症例の10m介助歩行における往路と復路の能力差に着目し，それらの縦断研究を行い，能力差の不安定性と重錘負荷との関係を明らかにした． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，山本秀美，中田加奈子,玉木彰）
20 終末期寝たきり高齢患者に対する理学療法評価思考ツールの開発に向けた事例研究	－	平成22年11月	第50回近畿理学療法学術大会（和歌山）	終末期寝たきり患者１症例の理学療法経験から，評価思考ツールの開発にむけた事例研究を行った．その結果，終末期寝たきり患者は全身状態と食事，コミュニケーションの関係から評価・思考できることが明らかとなった． 本人担当部分：理学療法実践，開発，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
21 理想の理学療法士モデルを視点にした理学療法臨床実習生の質的変化の検討 －評価実習と総合実習の比較－	－	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会（宮崎）	本研究では，理学療法臨床実習生が抱く理想の理学療法士モデルを視点に，質的変化の分析を行い，理学療法評価実習と総合実習における違いを明らかにした． 本人担当部分：データ収取集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，吉田正樹,山本秀美,中田加奈子）
22 感情変化に基づいた感性工学的臨床実習指導法の開発にむけて	－	平成23年9月	第13回日本感性工学会（東京）	本研究では，実習日誌から感情表現を抽出し，実習期間中における感情変化と成績との関係を明らかにした．それを基に指導方法を提起した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二,吉田正樹）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23トイレ動作が自立できていない高齢患者の在宅復帰を促す要因（構造）の検討	－	平成23年11月	第51回近畿理学療法学術大会（滋賀）	本研究では，トイレ動作が自立できていない高齢患者を対象に，在宅復帰を促す構造を明らかにした． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：岡村太嗣，池田耕二，梅木速水）
24 強い拒否がみられた認知症高齢患者2症例の理学療法経験から	－	平成23年11月	第52回近畿理学療法学術大会（滋賀）	本研究では，強い拒否がみられた認知症高齢患者における症例検討を行い，理学療法の有り方を提起した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
25 終末期リハビリテーションにおける理学療法評価思考ツールの開発に向けた暗黙知モデルの有用性について―理学療法士へのアンケート調査から―	－	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会（兵庫）	本研究では，以前，筆者らが構造化した「終末期理学療法評価思考ツール」に対するアンケートを実施し，その有用性について検討を行った． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
26 Critical illness polyneuropathyを来した1例に対して訪問リハビリテーション介入により復職可能となった経験	－	平成24年7月	第24回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，Critical illness polyneuropathy 1症例に対する訪問リハビリテーションの有用性を検討した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：廣瀬将士，池田耕二，大原佳孝，竹内
27 退院後の転倒予防に向けた体力測定表の開発に向けて-運動器疾患を通して-	－	平成24年11月	第53回近畿理学療法学術大会（奈良）	本研究では，入院中の運動器疾患患者を対象に評価を行い，退院後の転倒予防に向けた体力測定表の開発経過を報告した． 本人担当部分：開発，データ収集，分析，執筆 （共同発表者：髙本晴輝，山本秀美，中田加奈子，中
28 理学療法臨床実習生の終末期理学療法に対する認識構造からみた終末期理学療法の課題	－	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会（愛知）	本研究では，理学療法臨床実習生の認識構造を構成し，それをもとに終末期理学療法実践と教育における課題を抽出した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，山本秀美，中田加奈子，黒田未貴，廣瀬将士）
29 回復期病棟における脳血管障害患者のFIMの経時的変化	－	平成25年7月	第24回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，回復期病棟における脳血管障害患者のＦＩＭの経時的変化を，退院先（在宅，非在宅）別に明らかにし分析した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：廣瀬将士，池田耕二，河野茉梨絵，大原佳孝，水野瑛梨，粉川友太，朴聖章，阪本みさき）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
30 運動耐容能トレーニングが奏効した特発性間質性肺炎患者の一例　心肺運動負荷試験による運動処方	－	平成25年7月	第24回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，特発性間質性肺炎患者に対して心肺運動負荷試験行い，それをもとに運動処方を行った．その結果，運動療法における有用性が明らかとなった． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，北川紗也佳，水野瑛梨，宇野陽子，堀江淳，池田秀一）
31 回復期病棟における終末期患者の在宅復帰をスムーズにするための条件とは?	－	平成25年6月	第18回日本緩和医療学会学術大会（横浜）	本研究では，回復期病棟に入院し，在宅復帰が円滑に進んだ終末期がん患者1症例を対象に，そこから在宅復帰をスムーズにするための条件を抽出した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：黒田未貴，池田耕二，中田加奈子，中川真優，朴聖章，井谷友香理，北林直人，川岸美佐子，村中恵子，小川 敦子，池田 秀一）
32 理学療法士教育における演劇ワークショップを用いた対人技能向上の取り組み	－	平成25年8月	第5回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会（岐阜）	本研究では，理学療法養成大学における学生に演劇ワークショップを取り入れ，好評であったこと，そして学生に質的な変化がみられたことを報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：山本貴啓，原田信子，池田耕二，田坂厚志，横井輝夫）
33 高齢入院患者の転倒予防に向けた取り組み－運動器疾患に着目して－	－	平成25年11月	第53回近畿理学療法学術大会（京都）	本研究では，入院高齢患者に対して様々な評価を行い，運動器疾患によってそれからがどのように違ってくるかを検討した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：中川真優，山本秀美，中田加奈子，朴聖章，杉本貴美子，池田耕二）
34 患者の行動様式を視点に多職種チームアプローチによって転倒予防対策に取り組んだ2症例	－	平成25年11月	第53回近畿理学療法学術大会（京都）	本研究では，2症例の行動様式に着目し，チームアプローチによって転倒予防に取り組んだ経験を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，黒田未貴，井谷友香理，中川真優，朴聖章，北林直人，川岸美佐子，小川敦子，福井孝子，池田秀一）
35 臨床実習にある新人・中堅臨床実習指導者の不安増幅プロセスとは？	－	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（神奈川）	本研究では，質的研究を用いて，新人・中堅理学療法臨床実習指導者の不安増幅プロセスを構成した．それを視点に不安解消対策を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：湯地英充，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
36 回復期リハビリテーション病棟における「家族が述べる在宅復帰のための条件」と在宅復帰に関する実態調査　―在宅復帰のための条件がトイレ動作の自立の場合―	―	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（神奈川）	本研究では，回復期病棟入院時に家族が述べる在宅復帰のための条件，特にそれをトイレ動作の自立とした家族と患者の在宅復帰に着目し，その実態を調査した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：勢登香織，池田耕二，岡村太嗣）
37 腰椎圧迫骨折を呈した1症例に対する課題指向型アプローチ～家屋調査から見えてきた課題を中心に～	―	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，腰椎圧迫骨折を呈した1症例に対して，早期に家屋調査を行い，課題遂行型アプローチを実践し，良好な結果を得た経験を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：高橋昇嗣，池田耕二，黒田未貴，中川真優）
38 整形外科疾患患者における内部障害有病率に関する実態調査	―	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，整形外科疾患患者における内部障害の実態を調査した．その結果，内部障害の有病率は75％であることが分かった．これらからは，整形疾患患者といえども内部障害に着目した理学療法が必要であり，包括的な理学療法が必要であることが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，吉富滋洋，徳永美由貴，池田耕二，池田秀一）
39 慢性期病院における終末期理学療法の1症例～脳幹出血後遺症の患者と家族を支えた16ヵ月間～	―	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，脳幹出血後遺症の患者と家族を支えた16ヵ月間の理学療法経験を報告し，支える医療における理学療法士の役割を提言した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：山口朋彦，木村美帆子，堀寿美代，黒田敦士，池田耕二，沢田学）
40 不整脈・慢性糸球体腎炎を有する大腿骨転子部骨折術後患者の運動療法～心電図モニタと医師との連携によるリスク管理～	―	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，不整脈・慢性糸球体腎炎を有する大腿骨転子部骨折術後患者の運動療法の経験を報告し，心電図モニタの活用や医師との連携の必要性を再提起した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：黒岡禎治，池田耕二，大原佳孝） 共同研究につき本人担当部分抽出不可能
41　構造構成的協同臨床教育法の視点導入に基づく新たな協働の有り方に関する研究－ケーススタディへの応用－	―	平成26年8月	第42回日本職業リハビリテーション学会（岩手）	本研究では，筆者が開発した構造構成的協同臨床教育法の視点を職業リハビリテーションのケーススタディーに応用し，新たな協働の在り方を提言した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：前原和明，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
42 終末期理学療法実践に対する評価法（考え方）の理論的構築と提案―実践の有効性をどのように評価するか？－	－	平成26年10月	第8回全国大学理学療法教育学会(兵庫)	本研究では，終末期理学療法実践に対する評価法（考え方）を，構造構成主義を活用することで理論的に構築し，理学療法教育に提案した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，貞末仁美）
43 肺サルコイドーシスを有する右脛骨高原骨折術後一症例の理学療法　－臨床現場における包括的理学療法の必要性－	－	平成26年11月	第54回近畿理学療法学術大会（大阪）	本研究では，肺サルコイドーシスを有する右脛骨高原骨折術後一症例の理学療法経験を報告し，包括的理学療法の必要性を示唆した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：高橋昇嗣，大原佳孝，池田耕二，宮崎紗也佳，猪子純一，池田秀一）
44 右重度片麻痺患者一症例の退院後カンファレンスから得られたこと	－	平成27年1月	第1回日本地域理学療法学会（大阪）	本研究では，右重度片麻痺患者の退院時支援から，支援が奏功する3つの要因と，退院後にしか明らかにならなかった2つの課題を明らかにした． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中川真優，大原佳孝，池田耕二，北林直人，上田紀子，清水貴恵，川岸美佐子，池田秀一）
45 病院リハと訪問リハの連携によって終末期がん患者の在宅復帰を可能にした実践報告	－	平成27年1月	第1回日本地域理学療法学会（大阪）	本研究では，病院と訪問リハの連携によって終末期がん患者の在宅復帰を可能にした実践を報告した．病院,訪問リハスタッフの連携により在宅支援を進める意義は大きいと思われた． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，大原佳孝，池田耕二，原田美江，中瀬美穂，池田秀一）
46 看取り近くまでの理学療法を実践した終末期がん患者１症例における入院と訪問の担当理学療法士の連携について	－	平成27年6月	第20回日本緩和医療学会（横浜）	本研究では，看取りに向けた終末期がん患者の在宅復帰に対して，病棟担当理学療法士と訪問理学療法士の連携について考察した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，山本秀美，黒田未貴，早田敏）
47 終末期がん患者の理学療法実践の方向性を示す理学療法教育モデルの構築とその可能性－2症例の経験から－	－	平成27年6月	第20回日本緩和医療学会（横浜）	本研究では，理解されにくい終末期がん患者の理学療法を，その有り方や目標がイメージしやすいモデルに構築しなおし，教育モデルとしの可能性を考察した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：黒田未貴，池田耕二，河野茉梨絵，赤田美和子，早田敏）
48 肺サルコイドーシスを有する両側人工膝関節置換術後一症例患者の運動耐容能および日常生活活動の経時的変化（第2報）	－	平成27年11月	第55回近畿理学療法士学会（神戸）	本研究では，肺サルコイドーシスを有する両側人工膝関節置換術1症例の運動耐容能をCPXにて測定し，運動耐容能と日常生活活動の経時的変化からその関係性について考察した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：髙橋昇嗣，池田耕二，大原佳孝，猪子純一，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
49 当訪問リハビリテーション事業所・訪問看護ステーション利用者における基礎的調査―理学療法における支援課題抽出に向けて　―	―	平成27年12月	第2回日本地域理学療法学会（千葉）	本研究では，地域の特色が反映される訪問リハ事業所と訪問看護ステーションにおける利用者の基本的な特性を調査し，そこから支援課題を抽出した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，池田耕二，濱田絵美，古家真優，中瀬美穂，池田秀一）
50　透析患者に対する包括的腎臓リハビリテーションの役割―2症例の経験から　―	―	平成28年3月	日本腎臓リハビリテーション学会学術大会（岡山）	本研究では，透析患者に対するリハビリテーションの代表的な二つの役割を，事例研究を通して紹介した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，高橋昇嗣，朴聖章，吉冨滋洋）
51　早期歩行獲得を目指した脊髄髄内上衣下腫摘出術後一症例に対する理学療法経験―感覚性運動失調に対するアプローチ―	―	平成28年5月	日本理学療法学術大会（札幌）	本研究では，胸髄髄内上衣下腫術後一症例に対して感覚性運動失調に着目した運動療法を行い，短期間に歩行が獲得できたのでその詳細を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共著者：宮﨑紗也佳，池田耕二，井上良太，田中秀和，北村哲郎，竹島靖浩，堀川博誠）
52 看取りまでの緩和ケアの開発を目的にした終末期がん患者の睡眠状態の把握	―	平成28年6月	第21回日本緩和医療学会（京都）	本研究では，終末期がん患者に対する看取りに向けた緩和ケアを開発する目的にて，終末期がん患者の睡眠状態を調査した．その結果，睡眠パターン等が崩れていく状態が明らかとなり緩和ケアとしては良質な睡眠の確保が重要になっていくことが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴，赤田美和子，早田敏）
53 がん患者に対するリハビリ・ケアの質的向上を目指したアセスメントシートの開発とその有効性	―	平成28年6月	第21回日本緩和医療学会（京都）	本研究では，がん患者のリハビリやケアの質を向上させるために，アセスメントシートを作成し，それを用いることで必要な配慮や工夫を抽出していこうとした．これによりがん患者個々に配慮したリハビリの展開が可能となった． 本人担当部分：アセスメント作成，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：黒田未貴，池田耕二，河野茉梨絵，赤田美和子，早田敏）
54 在宅終末期がんサバイバーのリハビリテーションにおける多職種連携の有効性	―	平成28年7月	第18回日本在宅医学会大会（東京）	本研究では，スマートフォン等を活用することで地域における広域の多職種連携を可能にし，在宅ガンサバイバーに対する有効な実践を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：金谷親好，濵﨑恵，竹ノ内裕一，　池田耕二，久松憲明）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
55 血液透析患者のフットケアにおける理学療法士の役割と可能性	―	平成29年2月	第7回腎臓リハビリテーション学会学術大会（茨城）	本研究では，これから需要が高まる透析患者のフットケア業務の構築とそれに関わる理学療法士の可能性を，実務面から検討し報告した． 本人担当部分：業務の構築，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，高橋昇嗣，吉冨滋洋，朴聖章，白川優子，　池田秀一）
56 理学療法想定場面におけるフレーミング効果を意識した声掛けが意欲に与える影響について	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	本研究では，理学療法における様々な場面において，フレーミングを意識した声がけが意欲の向上とどのような関係にあるかをRCTによって調査した．その結果，主に肯定的なフレーミングが意欲の向上に寄与していることが分かった． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）
57 訪問リハビリテーション利用者の暮らしを守る生活見守りシートの開発と実践の紹介	―	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，我々が開発した訪問利用者の暮らしを守るための生活見守りシートと，それを用いた実践を紹介した．虚弱高齢者や終末期利用者に倒しても生活見守りシートは問題点や方向性が示唆できるようになってあり，実践だけでなく教育にも有効活用できる可能性が示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，中岡絵美，山本秀美，古家
58 終末期患者の緩和ケアにおける訪問リハビリテーションの可能性	―	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，終末期のがん患者，非がん患者に対する訪問リハビリテーションの実践事例から，その可能性を報告した．在宅において理学療法士が看取りまで実践する意義や可能性を示唆することができた． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，池田耕二，中岡絵美，古家真優，大島知子，中瀬美穂，池田秀一）
59 訪問リハビリテーション利用者における外出頻度，地域活動への参加，時間の感覚，憂鬱に関する実態調査	―	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，ICFにおける活動や参加を促すことを目的に，訪問リハビリテーション利用者の活動，参加の実態を調査した．その結果，利用者の活動，参加が低下しているという実態があらためて示唆された．地域特性を考えながらこれらに対処していく必要性が示唆された． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，大島知子，池田秀一）
60 重症急性膵炎後に廃用症候群を呈した1症例に対する訪問リハビリテーションの長期介入効果に関する一考察	―	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，発症後，衰弱がひどく予後が不良な症例に対して，訪問リハビリテーションによる長期介入を行った．その結果，日常生活が自立し，活動範囲は広がり，自己管理能力が育まれたことを報告した．これにより，今後予想される在宅の虚弱高齢者に対する訪問リハビリテーションの可能性を広げることができた． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：大島知子，池田耕二，山本秀美，古家

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
61 訪問リハビリテーションにより認知症高齢者の地域生活の再建ができた事例報告	－	平成29年6月	第19回日本在宅医学会大会（名古屋）	本研究では，地域における認知高齢者の生活を，多職種，多部門連携と近隣住民との協力によって再建した事例を報告した．これにより認知症高齢者の地域生活再建の可能性を示唆することができた． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：金谷親好，池田耕二，久松憲明）
62 不眠のある終末期がん患者1症例に対する緩和ケアにおける理学療法の可能性 －睡眠計と理学療法ケアシートの活用－	－	平成29年6月	第22回日本緩和医療学会学術大会（横浜）	本研究では，終末期がん患者に対して，我々が開発してきた理学療法ケアシートと睡眠計を活用した理学療法の実践を通して，緩和ケアにおける理学療法の有効性や可能性を示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴，赤田美和子，早田敏）
63 外出を契機に活動意欲を取り戻し自宅復帰可能となった虚弱高齢者1症例の理学療法経験	－	平成29年7月	第29回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，意欲低下を示したがんサバイバーの高齢者が，外出を契機に活動意欲を取り戻し自宅復帰が可能になった事例を報告した．ここでは，あらためて機能障害だけでなく，活動，参加に目を向けた実践や多職種連携の有効性や必要性を示唆した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：門内鈴香，池田耕二，中岡伶弥，　黒田未貴）
64 線維筋痛症2症例に対する3週間入院運動療法プログラムの試み ～運動療法介入による脳血流の変化とQOLの改善について～	－	平成29年9月	第22回ペインリハビリテーション（神戸）	本研究では，線維筋痛症患者の3週間入院プログラムの効果を，脳血流の変化と生活の質（ＱＯＬ）の改善から示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：藤田信子，池田耕二，高井範子，松野悟之，小泉優喜，平岡駿典，高橋紀代，三木健司，仙波恵美子）
65 線維筋痛症２症例に対する3週間入院運動療法プログラムの試み　－心理的側面からの検討	－	平成29年9月	第22回ペインリハビリテーション（神戸）	本研究では，線維筋痛症患者の3週間入院プログラムの効果を，心理的変化と生活の質（ＱＯＬ）の改善から示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：高井範子，藤田信子，池田耕二，丸山伸廣，栗田樹，中原理，髙橋紀代，三木健司，仙波恵美子）
66 当院における入院高齢患者の「装い」に関するアンケート調査 －「装い」を支援する作業療法介入に向けて-	－	平成29年9月	第37回近畿作業療法学会（奈良）	本研究では，入院高齢患者の「装い」に対する関心度をアンケート調査した．多くの高齢者は「装い」，すなわち，おしゃれに対する関心が低くなっていた．作業療法では装いを支援していく必要があることを報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：松井美夕貴，池田耕二，木村恵理，阪本みさき，尾藤彩花，宮内克明，水本紀子，黒田未貴，老田弘子，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
67 繊維筋痛症患者に対する３週間入院プログラムの試み	－	平成29年10月	日本繊維筋痛症学会第9回学術集会（大阪）	本研究では，線維筋痛症患者に対する3週間入院プログラム（運動療法）の効果を示唆した． 本人担当部分：データ収集 （共同発表者：高橋紀代，小泉優喜，谷山ゆりえ，丸山信廣，中原理，池田耕二，高井範子，藤田信子，三木健司，仙波恵美子）
68　圧迫刺激が足関節背屈可動域および足関節底屈筋の筋出力に及ぼす影響について	－	平成29年12月	保健医療学学会第8回学術集会（大阪）	本研究では，圧迫刺激が足関節背屈可動域および足関節底屈筋の筋出力に及ぼす影響について調査した．結果，圧迫による足関節背屈可動域への影響は認められなかったが，筋出力においては介入後の腓腹筋に有意な低下が認められた．これは圧迫による腓腹筋の筋出力低下作用を示唆した． 本人担当部分：分析，執筆 （共同発表者：城野靖朋，岡村和典，池田耕二，粕渕賢志，神里巌，金井秀作）
69 理学療法を積極的に取り組んでいる腕神経叢引き抜き損傷を有する男性患者の意欲を探求する ―解釈学的現象学分析―	－	平成29年12月	保健医療学学会第8回学術集会（大阪）	本研究では，理学療法を積極的に取り組んでいる腕神経叢引き抜き損傷を有する男性の意欲を探求し，理学療法実施患者の意欲向上における知見を得た．本男性からは，【半年限定で意欲が維持できるという認識】【焦り，病状，苦痛を，身体を回復させるための意欲に変化させる力】【家族の存在によって強気な自分を維持できる】【妻の努力に依存しない自分，妻からエネルギーをもらう自分という二つの自分】【父親，主人，男としてのプライド】【努力を維持するために，自分をモニタリングし，追い込む力】【職場復帰への意欲と，復帰後への不安から生じる葛藤】【医療スタッフからの情報により，ゆらぐ思い】【セラピスト，病棟，友人との関係性から構成される意欲や思い】の9つのテーマが得られた． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）
70　当院における血液透析患者の足病変・足部変形のケアに向けた実態調査	－	平成30年3月	第8回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究では，透析患者における足病変・足部変形の実態調査を行った．その結果，①足病変は有26肢，無6肢，内訳は胼胝形成が58%，乾燥が12%，潰瘍形成が15%等（重複）であった．②足部変形は有26肢，無6肢，内訳は浮き足43%，外反母趾25%，内反小趾13%等（重複）であった．③ROM制限は有24肢，無8肢，横アーチは正常9肢，低下23肢であった．③潰瘍形成は，有4肢，無28肢であったことを報告し，足病変，足部変形のケアの必要性を報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，朴聖章，髙橋昇嗣，吉冨慈洋，前田純依，島津生江，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
71　高齢血液透析患者におけるFIMと自覚的困難感との関係性～緩和的な理学療法に向けた取り組み～	－	平成30年3月	第8回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究では，高齢血液透析患者の自覚的困難感を軽減する緩和的な理学療法の取り組みに向け，FIMと自覚的的困難感の関係性を検討した．その結果，高齢HD患者の困難感を軽減するためには，個々に合わせた継続的な運動や環境・介助調整等が大切になることを報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：朴聖章，池田耕二，大原佳孝，高橋昇嗣，吉冨滋洋，前田純依，島津生江，池田秀一）
72　末期腎不全(ESKD)を併存した恥骨骨折症例に対する理学療法経験	－	平成30年3月	第8回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究では，末期腎不全（ESKD）を併存した恥骨骨折症例に対する理学療法の経験を報告した． 具体的には，本経験からは医師と連携し，理学療法士が運動中の呼吸循環応答等を評価し慎重に運動負荷を調整すれば，ESKD症例に対しても有効な理学療法が可能となり，ADL向上が図れることを示唆した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：前田純依，池田耕二，大原佳孝，髙橋昇嗣，吉冨慈洋，前田純依，池田秀一）
73 当院がんリハビリテーション実施患者の実態調査	－	平成30年6月	第23回日本緩和医療学学会（神戸）	本研究では，筆頭演者所属病院におけるがんリハビリテーションの実態を調査し，年齢80歳代，PSは重度，家族の関わり有は9割，独居は4割，症状は倦怠感，痛み，食欲低下が多く，ADL介助は清拭，移動，排泄が多く，退院先は自宅，死亡退院が4割を占めていたことを報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴，中本直子，松井美夕貴，中川卓，赤田美和子，早田敏）
74　パーキンソン病独居高齢者に対する自助力を高める視点からの訪問リハビリテーションの実践	－	平成30年6月	第12回訪問リハビリテーション学会（北九州）	本研究では，転倒を繰り返し在宅生活が困難になりつつあったパーキンソン独居高齢者に対し，生活を見守る視点から訪問リハビリテーション（以下，訪問リハ）を実践し，良好な結果を得たので報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，竹内章，大島知子，池田秀一）
75　これからの魅力ある臨床実習，臨床教育に向けて	－	平成30年7月	第30回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本シンポジウムでは，現在の学生や新人の現状を鑑み，大切になると考える3つの視点，①現場教育における「場」づくりという視点．②経験資本という視点．③感情労働という視点を紹介し，今後の臨床実習，新人教育，人材育成についての課題をなげかけた．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
76　閉じこもり傾向にあった高齢者に対して生活の再構築を可能にした理学療法実践～脱臼不安感，運動と食への関心に着目して～	－	平成30年7月	第30回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，入院前より閉じこもり傾向にあった高齢者に対して，身体機能だけでなく，脱臼不安感や運動と食への関心，他者との交流に着目した理学療法を実践したことで，それらに対する認識が変化し，生活の再構築が可能となった事例を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，竹内章，大島知子，池田秀一）
77　線維筋痛症高齢女性2症例に対する3週間入院運動プログラムの試み：前頭前野の血流動態の変化と疼痛，抑うつ，QOLの改善について	－	平成30年9月	第23回日本ペインリハビリテーション学会（福岡）	本研究では，線維筋痛高齢女性に対して3週間入院運動プログラムを行い，疼痛，抑うつ，QOLの改善とNear Infrared spectroscopy (NIRS)による前頭前野(PFC)の血流動態の変化について報告した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：藤田信子，池田耕二，高井範子，松野悟之，金子基史，三木健司，行岡正雄，仙波恵美子）
78　線維筋痛症高齢女性２症例に対する３週間 入院運動プログラムの試み －患者の心身の変化と理学療法士の関わり方に	－	平成30年9月	第23回日本ペインリハビリテーション学会（福岡）	本研究では，線維筋痛症（FM）患者である高齢女性２症例について，３週間入院運動プログラムの介入を行い，その効果と理学療法士（PT）の関わり方を含めた心身の変化の検討を行った． 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：高井範子，藤田信子，池田耕二，金子基史，三木健司，行岡正雄，仙波恵美子）
79　転倒を契機に横紋筋融解症を呈した超高齢患者一症例に対する理学療法経験 ―摂食嚥下機能と栄養状態に着目して―	－	平成30年10月	第5回日本予防理学療法学会（福岡）	本研究では，横紋筋融解症に褥瘡，摂食嚥下機能障害を合併していた症例に対して，栄養状態と摂食嚥下機能に着目した理学療法を行い，経口摂取を可能にし栄養状態や基本的動作等を改善した症例を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中本直子，池田耕二，古家真優，大原佳孝）
80　卒前教育における終末期理学療法講義の役割を再考する	－	平成30年11月	第7回日本理学療法教育学会（神戸）	本研究では，卒前教育として実施している終末期理学療法の講義が，学生に死と向き合う機会を提供し，終末期PTに対する学習・実践意欲を高める機会になっていることを報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：山口朋彦，池田耕二，柳本展孝）
81　理学療法士の経験学習プロセスの解明にむけた探索的研究 －成長を促す経験と教訓―	－	平成30年11月	第7回日本理学療法教育学会（神戸）	本研究では，熟達理学療法士の経験学習プロセスにある成長を促す経験と教訓を明らかにした．これらを理学療法士の現場教育に活用できれば有効な人材育成が可能になることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
82　在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求する	―	平成30年12月	第9回保健医療学学会 2018年12月	本研究では，在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求し，在宅終末期リハビリテーションを有効に実践するためには患者や家族との関係性づくりや変化に気づく等の能力が必要であることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：根釜夢乃，岩永愛里奈，谷口茉恵，西本正樹，池田耕二）
83 当訪問リハビリテーション事業所における利用者のクラスター分析による類型化とその特徴	―	平成30年12月	第5回日本地域理学療法学会（横浜）	本研究では，活動，栄養，排泄，睡眠の4つの視点からなる評価ツールを活用し，クラスター分析によって訪問リハ利用者の類型化を試みることである．その結果，訪問リハ利用者は，Ⅰ群：活動と睡眠に主な課題・介入箇所があり，特に運動機能が低い介護度4の高齢者，Ⅱ群：睡眠に主な課題・介入箇所がある介護度3の高齢者，Ⅲ群：栄養〈食事〉以外の7項目にわずかな課題・介入箇所がある介護度3の高齢者，Ⅳ群：睡眠〈量〉と排泄〈排便〉に主な課題・介入箇所がある介護度3の高齢者の4群に類型化できたことを報告した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，大島知子，山本秀美，中岡絵美，中川真優，竹内章，尾藤彩花，池田秀一）
84 質的研究で変形性膝関節症患者の痛みの心理社会的側 面を生成する要因と過程をひも解く：探索的事例研究	―	令和元年10月	第7回日本運動器理学療法学会学術大会（岡山）	本研究では膝OA患者の一人の語り（主観的体験）から，痛みの心理社会的側面の要因と生成・対処過程をモデル構築し，探索した．その結果，＜膝の症状に対する過剰な執着＞をコアカテゴリーとするモデルが構築でき，痛みの心理社会的側面の一つである症状への執着は適切な対処によって軽減可能なことを示唆した．本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：瓜谷大輔，池田茜，城之木徹，松端賢太郎，六浦優斗，池田耕二）
85 熟達理学療法士の経験学習能力を支える 仕事に対する信念とは？	―	令和元年11月	第54回日本理学療法学術大会・第8回日本理学療法教育学会・第2回理学療法士学会・管理部門研究会（名古屋）	本研究では，理学療法士の経験学習能力に大きく影響を与える仕事に対する信念を，熟達理学療法士から解明した．その結果，熟達PTの信念は人間関係の構築，PTのプライドや責任感，熱意と幅広い実践，治療成果による社会還元等から形成されていたことを報告した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
86 変形性膝関節症に患者・理学療法士はそれぞれどのように向き合っているのか:質的研究	－	令和2年9月	第32回大阪理学療法学術大会（大阪）	本研究では，膝OA患者とPTにおいて，膝OAに対する向き合い方に共通認識がある一方で，運動実施の判断基準や情報の信憑性の判断等に認識の差異が認められた．現場で膝OA患者の能動的参加を促すためには，これらの差異を意識した実践が必要になると考えられた． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆
87 熟達理学療法士の経験学習プロセスにある成長を促す経験とは？	－	令和2年11月	第55回日本理学療法学術大会 第９回日本理学療法教育学会学術大会 第３回日本理学療法士学会・管理部門研究会 （埼玉WEB）	本研究では，多くの専門職において経験学習プロセスにある成長を促す経験から経験学習支援方法が示唆されているなか，理学療法士の成長を促す経験を明らかにし，それをもとに経験学習支援方法を提案した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）
88 本人の希望であった書字動作の獲得が契機となり生活の質の向上が図られた末期肺腺がん利用者の訪問リハの実践	－	令和3年5月	第18回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（高知）	本報告では，本人の希望であった書字動作の獲得が契機となり生活の質（QOL）の向上が図れた末期肺線がん利用者の訪問リハビリテーション実践を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：金谷親好，金丸真由美，池田耕二，
89 放課後等デイサービスにおける保護者視点の児童の課題および 目標に関する探索的研究	－	令和3年10月	日本発達障害学会 第56回研究大会（鹿児島WEB開催）	本報告では，放課後等デイサービスにおける保護者視点の児童の課題および 目標に関する探索的研究を行い，保護者は児童の家庭における具体的な生活動作に課題・目標を設定しており，将来的には児童の個性に合わせた就労支援について悩んでいることを明らかにした． 本人担当部分：データ分析，考察，執筆 （共同発表者：辻下聡馬,辻下千賀，池田耕二）
90 生活空間の広い通所リハビリテーション利用者の身体機能と生活様式の実態について - 転倒有無別による比較 -	－	令和3年12月	日本地域理学療法学会・日本支援工学理学療法学会 日本理学療法教育学会・日本理学療法管理研究会 合同学術大会2021（熊本WEB開催）	本研究では，生活空間の広い通所リハビリテーション利用者の身体機能と生活様式の実態について報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：上田翔平，田坂厚志，辻郁，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
91　熟達理学療法士の成長を促 ― 教訓と応用　―	―	令和3年12月	日本地域理学療法学会・日本支援工学理学療法学会 日本理学療法教育学会・日本理学療法管理研究会 合同学術大会2021（熊本WEB開催）	本研究では，熟達PTの経験学習プロセスにある成長を促す経験から，獲得していた教訓，その後の応用の内容を明らかにした．様々な応用パターンを理解し，成長を促す経験を提供することができれば効率の良い人材育成が可能になると考えられる． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆（共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）
92　放課後等デイサービスにおけるスタッフ視点の児童の目標・課題に関する探索的研究	―	令和3年12月	第11回保健医療学学会学術集会（大阪）	本報告では，放課後等デイサービスにおけるスタッフ視点の児童の課題および目標に関する探索的研究を行い，スタッフは，身体機能に課題・目標を設定しており，将来的には児童の就労について悩んでいることを明らかにした． 本人担当部分：データ分析，考察，執筆 （共同発表者：辻下聡馬,辻下千賀，池田耕二）
93　地域の特性を考慮した村民の健康増進への取り組みの検討	―	令和4年７月	日本予防理学療法学会 第7回サテライト集会（霧島）	本研究では，高齢化率40.2％（平成31年1月）である岡山県西北端に位置する真庭郡新庄村においてAging in Placeを実現および継続するために，地域の環境や特性・資源を調査し，村民の健康増進および介護予防の方法を検討した．新庄村は高齢になっても農業に従事している者が多く，ロコトレ参加者の平均年齢が80歳を超えており，元気な高齢者が多いと考えられる．しかし入所施設および小規模多機能型居宅介護以外の短期入所施設が無いため，何らかの障害を有すると村内での生活が困難となる．また農業従事者は仕事と生活の線引きが難しく1日の殆どが仕事という生活であるため，中高年者の健康への意識は低いと考えられる．以上より，村民の健康増進，介護予防およびAging in Placeの実現と継続には，自身の健康へ目を向ける機会を増やすとともに，農業による身体への負荷を軽減する動作指導等，高齢者のみならず中高年者へのアプローチが重要と考える． 本人担当部分：考察 （共同発表者：笹野弘美，平野孝行，池田耕二，滝本幸治，辻下聡馬，笹野英樹）
94 慣性センサーの加速度と角速度を用いて算出した角度の妥当性検証 ―単軸運動の角速度とセンサー位置の影響―	―	令和4年７月	第31回奈良県理学療法士学会（奈良）	関節角度は運動分析において重要な評価項目である．慣性センサーは重力加速度が鉛直方向に加わる特性を利用する方法と,角速度を利用する方法で角度を算出できる.本研究ではこれらの方法で算出した角度の妥当性,単軸運動の角速度と慣性センサーの設置位置が及ぼす影響を検証した.その結果，慣性センサーから算出できる角度は低速運動では加速度,高速運動では角速度を利用することで妥当性の高い結果が得られることが示された. 本人担当部分：考察 （共同発表者：城野靖朋，野田優希，前田吉樹，飯塚照史，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
95　コロナ禍における生活変化はフレイルに影響するか？ ―後期高齢者を対象とした質問紙による検討―	―	令和4年11月	第9回日本予防理学療法学会学術大会（東京）	本研究では，高齢化が進む山間地域の後期高齢者を対象に，コロナ禍における生活変化がフレイルに影響しているか質問紙にて調査したので報告する．その結果，コロナ禍における生活の変化が，フレイル判定や後期高齢者の質問票の結果と関連していることが分かった．質問紙且つ小サンプルの調査結果ではあるが，山間地域に在住の後期高齢者では，コロナ禍での生活変化が虚弱な状態への移行に関連する可能性が示唆された． 本人担当部分：考察 （共同発表者：滝本幸治，池田耕二，笹野弘美，辻下聡馬，椿根純子，小杏宜子）
96 軟式野球部のコンディショニングに対する意識向上を目的としたアクションリサーチ	―	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（奈良）	アクションリサーチを用いたスポーツ現場の障害予防を実践した報告は見当たらない．そこで，本手法を用いて，コンディショニングに対する意識の向上を目的とした．対象は対象は奈良学園登美ヶ丘中学校・高等学校の軟式野球部の部員21名および監督とした．チームのコンディショニングに対する意識についてアンケート調査し，その結果を受けてウォーミングアップの提供および指導を行った．介入による意識や行動の変化を捉えるためにアクションリサーチの手法を用いて分析した．コンディショニングに対する生徒の意識は，介入により一旦低下したが，介入方法を修正することで再び向上した．介入に際しては，メニューの目的をしっかり伝えること，チームの練習時間によってメニュー変更可能であるものにすること，さらに習得度に合わせ段階的に提供することでコンディショニングに対する取り組みを促すことができることが示唆された． 本人担当部分：研究計画，考察 （共同発表者：野田優希，寄能彩未，寺岡舞，橋本晃樹，池田耕二）
97 コロナ禍における在宅・地域高齢者の「思い」を探索する：３事例による探索的研究	―	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（奈良）	本研究では，コロナ禍における在宅・地域高齢者の「思い」を構造化した．その結果，在宅・地域高齢者の「思い」の構造からは，「コロナ感染からくる怖さや不安」を中心に【コロナ禍での 様々な変化】，「コロナ禍における制動」，「ワクチン接種がもたらす自由や期待」の 3 つがバランスを保ちつつ， 高齢者の行動を形成していることが示唆された.また，怖さや不安は「コロナ禍に対する感染対策への揺れる思い」と「コロナ禍がもたらす若者への揺れる思い・考え」と三角関係を形成し変容していること，そして【コロ ナ禍における死生観の再考】を促し，死の覚悟と喜びをもたらしていることも示唆された． 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：松井翔大，前田颯太，松本嵐，土肥あかね，松本洋平，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
98 理学療法士を育む【場】の形成に向けて：新たな枠組みと今後の課題	―	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（奈良）	近年の現場は若手の理学療法士(以下，PT)の急増，ハラスメント意識の高まり，働き方改革、社会 的ニーズの多様化により大きく変わりつつある.現場には教えられないものも多くあり，個々の PT は自己学習・研鑽，経験学習により実践知や能力を獲得していかなければならない.本演題では現在の現場教育の限界を踏まえつつ，筆者らの経験と文献から必要と考えられる新たな枠組み，【場】づくりを示唆し，その実現に向けた今後の方向性と課題を提案した．【場】の形成はあくまでも間接的支援であり，直接的支援である教育方法の開発や実践は継続されなければならないと考える. 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋，吉川義之，野田優希）
99 理学療法士の苦悩経験(失敗，ミスなどを含む)における探求的研究	–	令和4年12月	第5回日本理学療法管理研究会学術大会（WEB）	本研究では，熟達理学療法士（以下，PT） の苦悩経験を探索した．その結果，PTは，患者に対して「理学療法の未熟さや目標設定ミス，患者 の転倒や死」に苦悩し，周囲や自身，学生・後輩に対して「周囲との関係性，自分の力量不足，自分の不甲斐ない態度，指導 不足や学生のドロップアウト」に苦悩していた. 特に中堅PT（4-10年目)の時期に苦悩する傾向にあり，PT管理者はPTの患者 や周囲・自身等に向かう苦悩に適切な支援を行う必要があると考えられた. 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋，吉川義之，野田優希）
100 リハビリテーション専門職の働きがいに与える 要因	–	令和4年12月	第5回日本理学療法管理研究会学術大会（WEB）	本研究では，当法人のリ ハビリ専門職の働きがいに影響を与える要因を明らかにした．その結果，当法人のリハビリ専門職の働きがいに影響を与える要 因は，配置，ビジョン共有，能力向上であった．当法人のリハビリは4部門あるが，配置は面談にて希望を確認し納得のうえで実施している．ビジョン共有はビジョン・ミッションの刷新を行ない職員で作成したビジョンを各部門で共有し，能力向上はプリセプター制度の採用，各部門での研修会や 症例検討会の実施，今年度からはキャリアラダー等を採用している．今回，これらが大きく影響したものと思われ，評価や処遇がなかった理由は当法人の人事考課制度が作成段階にあるためと推察できた. 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：池田祐介，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
101 感情労働や共感疲労からくる理学療法士のスト レスを探求する:解釈学的現象学的分析	–	令和4年12月	第5回日本理学療法管理研究会学術大会（WEB）	本研究では，現場の理学療法士（以下，PT）の心理的ストレスを解釈学的現象学的分析により探究し，支援方法を提案した．その結果， PTの心理的ストレスの経験には、対患者，対医療スタッフ，PT自身に由来のものがあった.それぞれへの支援としては、対患者では「患者への疼痛や吐露，理不尽さ，クレーム，ハラスメン トへの対応方法に関する教育やトレーニング，患者の突然の死や病状進行，出口の見えない状況，PTとして委ねられる意思決 定に対峙したときのケア，患者との関係を決定する職場の環境 の整備」、対医療スタッフでは「上司や他職種の決定や振る舞いに対する研修や仕組み作り，上司や他職種との考えや理解の 相違を埋めるための研修，管理職として働くうえでの研修やケア」，PT自身では「PTとして無力感が生じたときのケア」が提案できた. 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）
102 後縦靭帯骨化症術後の運動障害に対して対側下肢を用いて運動感覚を想起させる介入が功を奏した一症例	–	令和4年12月	第62回近畿理学療法学術大会（和歌山）	本研究では，OPLL術後に運動障害を合併した症例に対し、初期介入時に反対側下肢を用いた運動感覚に着目した介入を実施し功を奏したので報告した．椎間板ヘルニアの罹患期間も合わせると2年間以上下肢に神経障害があったと推察できるため、OPLL術後の左下肢介入だけでは運動感覚の想起 や再教育が難しかったものと考えられる．脳血管障害でも非麻 痺側への介入でクロスエデュケーションとして利用されてきたが、本症例においても初期介入時に有効な介入方法となること が示唆された. 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：森田隆剛，喜多一馬，梅津俊介，池田耕二）
「招待講演，シンポジスト」				
1 痛みに対する低出力レーザー療法	–	平成7年11月	第3回物理療法研究会　神戸大会（神戸）	肩関節周囲炎患者に対して低出力レーザーの臨床効果を判定した．低出力レーザーは除痛効果があるものの，症例ごとには使用方法の再検討が示唆された．また今後の課題としては照射条件や他の物理療法とのコンビネーション効果，使用時期などがあげられた. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，武政誠一）
2 車椅子スポーツチャンバラの紹介	–	平成9年1月	第4回身体障害者スポーツ指導員養成講習会（大阪）	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルール等，考案したものを紹介した. 本人担当部分：車いすスポーツチャンバラの開発，執筆 （共同発表者：池田耕二，岩本雅浩，武部恭一，金子翼，武政誠一，長尾徹）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3 臨床実習における指導方法について	―	平成18年2月	大阪医療福祉専門学校　実習指導者会議　（大阪）	問題を有する実習生に対して，実際行っている具体的な指導方法について講演した．
4 臨床実習における指導方法の実際　―臨床実習指導者からの提言―	―	平成19年7月	大阪府理学療法士会 臨床実習指導者研修会（大阪）	臨床実習に対する指導方法の中でも，特に情意面における指導方法について講演を行った．
5 地域医療（小規模型民間病院）における終末期理学療法の実践― 事例研究の紹介	―	平成20年2月	神戸大学就進会理学療法分科会（神戸大学医学部保健学科同窓会，神戸）	地域医療における一般病院にて行われている終末期医療を紹介し，それに対する事例研究を報告した．またこれから事例研究がどうあるかべきかについても合わせて報告した．
6 Bridge the gap，－”１”臨床実習指導者の提言－	―	平成20年3月	行岡リハビリテーション専門学校　臨床実習指導者会議　教育講演（大阪）	臨床実習における実習生の内面をパターン分類し，それらに対する指導方法について講演を行った．
7　理学療法研究方法論	―	平成29年12月	公益社団法人大阪府理学療法士会　新人教育プログラム研修会（大阪）	理学療法における研究法やエビデンスに基づく理学療法実践についての講演を行った．
8 これからの魅力ある臨床実習，臨床教育に向けて	―	平成30年7月	第30回大阪府理学療法学術大会　教育シンポジウム（大阪）	これからの理学療法臨床実習の在り方を講演した．
9 理学研究方法論（EBPTを含む）	―	平成30年12月	公益社団法人大阪府理学療法士会　新人教育プログラム研修会（大阪）	理学療法における研究法やエビデンスに基づく理学療法実践についての講演を行った．
10 クリニカルリーズニング	―	平成31年1月	公益社団法人大阪府理学療法士会　新人教育プログラム研修会（三島ブロック）（大阪）	理学療法におけるクリニカルリーズニングをわかりやすく解説する講演を行った．
11 リハビリテーションの視点から見た温泉旅行の可能性	―	令和元年11月	ユニバーサルツーリズム阿智村シンポジウム2019	長野阿智村において開催されたユニバーサルツーリズムのシンポジウムにおいて，リハビリテーションにおける温泉旅行の可能性を講演した． （共同発表者：池田耕二，喜多一馬）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12　現場の理学療法士育成論：経験学習を通して	－	令和3年11月	大阪北区理学療法士会　研修会（大阪）	医療情勢の変化や働き方改革・等を背景に研修会や勉強会を重視した学習だけでは，現場の理学療法士（PT）教育・育成は限界にきている．そこで現場で行う経験学習に注目し，PTの経験学習プロセスの解明をもとに，現場教育・人材育成における支援方法を教示した．
13　終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められる視点と対応	－	令和4年2月	リハテック・リンクス　地域理学療法（オンライン）	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
14　学習し続ける組織の構築にむけて	－	令和4年2月	大阪府理学療法士会・医療・介護保険部　ミドルマネジメント講習会（大阪）	大阪府理学療法士会の理学療法士の中間管理職，管理職を対象に学習する組織の構築について講演した．講演内容は，現場経験に基づく組織づくりの内容に加え科学研究費による研究成果である理学療法士の経験学習プロセスの解明から導かれた経験学習支援方法を紹介した．
15　緩和ケア領域における理学療法の紹介−理学療法士の可能性と広がる役割−	－	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（ランチョンセミナー）	緩和ケア領域における理学療法を紹介し，理学療法士の可能性と広がる役割について講演した．
16　終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められる視点と対応	－	令和5年3月	リハテック・リンクス　地域理学療法（オンライン）	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
＜研究大会＞ 1 当院における車椅子スポーツチャンバラの試み	－	平成6年11月	第4回車椅子ｽﾎﾟｰﾂ研究集会(名古屋)	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルール等，考案したものを紹介した． 本人担当部位：車いすスポーツチャンバラの開発，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，平山敦子，朝倉光子，武部恭一，金子 翼，武政誠一）
2 車椅子ｽﾎﾟｰﾂﾁｬﾝﾊﾞﾗにおける心拍数変動について	－	平成7年11月	第5回車椅子ｽﾎﾟｰﾂ研究集会（大阪）	考案した車椅子スポーツチャンバラが，それに参加した患者に対して身体にどのような影響をあたえるかを，心拍変動より検討した． 本人担当部位：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，金子翼，長尾 徹，小室 透，居村茂幸）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3 健康教室"10年間の総括-公開講座を継続させる工夫-	－	平成8年8月	第18回全国地域リハビリテーション研究会（神戸）	地域住民の健康に寄与する目的にて「健康教室」を10年実施してきた．それらから長期継続するための工夫や，今後の展望について検討した．健康教室の有効性は示唆されたが，今後は情報源としても健康教室を役立たせ地域リハビリテーションの１システムとして確立していきたいことを報告した． 本人担当部分：健康教室の企画・運営，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，岩本雅浩，武部恭一，武政誠一）
4 車椅子スポーツチャンバラにおける心身反応について	－	平成9年9月	第 7回車椅子ｽﾎﾟｰﾂ研究集会（東京）	考案した車椅子スポーツチャンバラが，それに参加した患者に対して心理面や血圧にどのような影響をあたえるかを検討した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：磯あすか，池田耕二，杉山安幾子，平田憲市，武部恭一，金子翼，武政誠一，長尾徹）
5　訪問リハビリを利用している主介護者の介護負担感と要介護者のＦＩＭとの関連性について	－	平成23年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会くまもと2011（熊本）	本研究では，介護者の負担かんと要介護者のＦＩＭとの関連性を明らかにし，訪問リハビリにおける理学療法の方向性を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：岡村太嗣，池田耕二，岩森渉）
6　回復期リハビリ病棟における家族が述べる「在宅復帰のための条件」と在宅復帰について	－	平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究では,回復期病棟入院時に家族が述べる在宅復帰のための条件と在宅復帰の関連性を検討した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：岡村太嗣，池田耕二，深田大介）
7　嚥下造影検査に嚥下障害の実態調査		平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究では，嚥下造影検査と嚥下障害の関係を調査し，その実態を明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：上田紀子，池田耕二，黒田未貴，廣瀬将士，清水貴恵，福井孝子，池田秀一）
8 在宅復帰に向けた家屋調査の実態とその傾向	－	平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究では，在宅復帰に向けた家屋調査の実態を調査し，玄関，トイレ，入浴に環境調整が多いことを明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：北林直人，池田耕二，井谷友香里，坂本みさき，尾藤彩花，上田紀子，黒田未貴，廣瀬将士，清水貴恵，福井孝子，池田秀一）
9 がんの緩和リハに対する意識調査－看護とリハスタッフの比較－	－	平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究は，アンケートによって，がんの緩和リハに対する意識が看護師とリハビリスタッフでは違うことを明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴，廣瀬将士，赤田美和子，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10 転倒予防専用カンファレンスによる転倒予防の取り組み―転倒カンファ導入の効果検討	―	平成26年2月	回復期リハビリテーション協会　第23回研究大会（愛知）	本研究では，転倒予防専用のカンファレンスが病棟の転倒予防に有用であることを示唆した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，黒田未貴，井谷友香理，中川真優，朴聖章，川岸美佐子，小川敦子，福井孝子，池田秀一）
11 デイケアにおけるサービス向上に向けた実施調査	―	平成26年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2014（長崎）	本研究では，デイケアにおいて実態調査を行い，約8割の利用者がリハビリに満足していたことや，約6割に転倒不安があり，4割が外出を控えていたことを明らかにした． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：大庭由香莉，池田耕二，上田紀子，中田加奈子，大村昌和，小田瑛梨，勝久江，池田秀一）
12 重度右片麻痺患者一症例の退院後カンファレンスからみえてきたもの	―	平成26年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2014（長崎）	本研究では，重度右片麻痺患者一症例の退院後カンファレンスから，オムツ交換の早期指導や転落時の対応指導，指導用パンフレットの有効性を明らかにした． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中川真優，池田耕二，黒田未貴，北林直人，上田紀子，福井孝子，川岸美佐子，池田秀一）
13 家屋調査と環境調整に関する追跡調査―インタビュー調査による質的検討―	―	平成26年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2014（長崎）	本研究では，退院後のインタビュー調査から，患者や家族の環境調整に対する理解不足，環境調整の追加の必要性や不安の存在を明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：尾藤彩花，池田耕二，上田紀子，北林直人，阪本みさき，井谷友香理，久貝亮太，黒田未貴，廣瀬将士，清水貴恵，池田秀一）
14 慢性心不全患者1症例に対する生活管理という訪問リハビリの役割 - 入退院を繰り返さないために -	―	平成27年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会（神戸）	本研究では，慢性心不全患者の訪問リハビリを，生活管理の視点から見直し，その役割について考察した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：濵田絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，須々木星衣子，中瀬美穂，池田秀一）
15 高齢者の退院に向けた身体活動量把握の取り組み	―	平成27年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会（神戸）	本研究では，回復期リハビリテーション病棟における高齢者に対して，退院にむけた活動量の調査を行った． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：杉本貴美子，池田耕二，古家真優，吉冨滋洋，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
16 訪問リハビリテーション利用者の生活習慣とリズムに関する実態調査- 虚弱高齢者の暮らしを支える活・栄・排・睡の4つの視点 -	―	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2016（茨城）	本研究では，訪問リハビリテーション対象患者の生活習慣とリズムを，主に活動，栄養，排泄，睡眠の4つの視点から調査した．その結果，訪問リハ利用者の活動低下，睡眠不足等の実態が明らかとなり，この4つの視点からの実践が今後は大切になることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，山本秀美，中岡絵美，古家真優，大島知子，池田秀一）
17 転倒により入退院を繰り返した一症例に対する病棟と訪問理学療法士における協同の振り返り－シームレスな療養支援の構築に向けて	―	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2016（茨城）	本研究では，病棟と訪問の理学療法士が共同で同じ症例を振り返ることで，シームレスな支援の構築に重要な実践知を抽出した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家
18 高次脳機能障害患者1例に対する道のりシートを用いた退院支援について ―退院までの道程を共有する道のりシートの作成と活用―	―	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2016（茨城）	本研究では，リハビリテーションや退院支援が困難である高次脳機能障害患者に対して，退院の方向性や段階を示す道のりシートなるものを作成し，実践した．これにより患者の心理は安定し，リハビリテーションは可能となり，職員の連携も良好となり，有効な退院支援が可能となったことを報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：尾藤彩花，池田耕二，木村恵理，阪本みさき，松井美夕貴，猪子純一，黒田未貴，大原佳孝，米沢仁美，清水貴恵，上地康子，池田秀一）
19 回復期リハビリテーション病棟における高齢患者の活動量について ― 測定部位（手首と腰部），FIM，うつ，転倒予防自己効力感に着目して ―	―	平成29年2月	第29回復期リハビリテーション病棟協会研究大会（広島）	本研究では，回復期リハビリテーション患者の活動量を手と腰に装着し，それぞれの活動量を測定することで病棟の活動実態を明らかにした．手に装着した活動量では病棟生活の実態がより反映した．またFIM，うつ，転倒自己効力感との関係性についても報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：杉本貴美子，池田耕二，吉冨滋洋，中岡伶弥，古家真優，池田秀一）
20 質問項目から見た患者タイプ別のフレーミング効果を意識した肯定的・否定的な声かけの有効性に関する探索的研究	―	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究では，ユニーク質問により患者をタイプ別に分類し，肯定的な声かけと否定的な声かけでフレーミング効果を検証してみた．その結果，肯定的な声かけでフレーミング効果がみられたが，タイプ別に明らかになることはなかった． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
21 重複障害を有する独居高齢者の退院支援から見えてきたもの	－	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究では，重複障害を有する独居高齢者の退院支援を振り返り，退院支援能力を向上させる知見を抽出した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：阪本みさき，池田耕二，尾藤彩花，木村恵理，松井美夕貴，黒田未貴，老田弘子，池田秀一）
22 デイケアにおいて閉じこもり傾向にあった高齢利用者に対する行動変容理論を用いた実践―3事例の物語分析から得た知見―	－	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究では，デイケアにおいて閉じこもり傾向にあった高齢利用者に対する行動変容理論を用いた実践を，物語分析によって分析し，閉じこもりを予防できる知見を抽出した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：大山大将，池田耕二，黒岡禎治，廣瀬将士，吉冨滋洋，高本晴加，勝久江，池田秀一）
23 糖尿病による右下腿切断後，多職種連携による訪問リハビリテーションを実施し生活の再構築を図った 認知症患者1症例の実践報告	－	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究は，糖尿病による右下腿切断後の認知症高齢患者を，多職種連携と訪問リハビリテーションによって生活の再構築を実現させた実践報告である． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：竹内章，池田耕二，山本秀美，中岡絵美，大島知子，池田秀一）
24 当院回復期リハビリテーション病棟におけるサルコペニア症例の特徴からみた今後の取り組み	－	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究は，回復期リハビリテーション病棟におけサルコペニア症例を対象に，退院時にサルコペニアが改善した群と改善しなかった群を比較し，その特徴を明らかにし，今後の取り組みの方向性を示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：中岡伶弥，池田耕二，杉本貴美子，尾藤彩花，大庭由香莉，加藤靖乃，門内鈴香，松井美夕貴，岡村大，田渕真由美，大原佳孝，老田弘子，池田秀一）
25　奈良学園大学におけるコロナ禍の学内実習の紹介① ：臨床実習専用ホームページの開設と運用方法の紹介	－	令和3年10月	全国リハビリテーション学校協会　第34回教育研究大会・教員研修会（福岡WEB開催）	本研究では，本学の臨床実習専用ホームページの紹介と，コロナ禍における学内実習の活用例(予習，経験，復習のサイクルに応用）を紹介した．併せて学生のアンケート結果を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，滝本幸治，飯塚照史，城野靖朋，野田優希，福原啓太，中田修，辻下聡馬，岩﨑智子，辻下守弘）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
26　奈良学園大学リハビリにおけるコロナ禍の学内実習の紹介② ：早期体験実習の概要と学生アンケート調査	－	令和3年10月	全国リハビリテーション学校協会　第34回教育研究大会・教員研修会（福岡WEB開催）	本研究では，新型コロナウィルス感染拡大を受け，早期体験実習を学内実習としたが，その概要と学生に対して実施したアンケート結果を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩﨑智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二）
27　奈良学園大学におけるコロナ禍の学内実習の紹介③ ：地域理学療法・作業療法実習の概要と学生アンケート調査－	－	令和3年10月	全国リハビリテーション学校協会　第34回教育研究大会・教員研修会（福岡WEB開	本研究では，，新型コロナウィルス感染拡大を受け，地域実習を学内実習としたが，その概要と学に対して実施したアンケート結果を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：滝本幸治，吉川義之，笹野弘美，坪内善仁，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生，池田耕二）
<医療集談会> 1 車椅子ｽﾎﾟｰﾂﾁｬﾝﾊﾞﾗの試み	－	平成6年3月	第14回兵庫県リハビリテーション医療集談会（兵庫）	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルール等，考案したものを紹介した． 本人担当部分：スポーツチャンバラの開発，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，宮本真美，平山敦子，太田光子，栗岡真弓，武部恭一，金子 翼，武政誠一）
2 当院における訪問ﾘﾊの現状と問題点	－	平成10年2月	第17回兵庫県リハビリテーション医療集談会（兵庫）	当院における訪問リハビリテーションの立ち上げ，その活動の現状と問題点を整理し報告を行った． 本人担当部分：訪問リハの開設，分析，考察，執筆 （共同発表者：平田憲市，池田耕二，杉山安幾子，磯あすか，松本知子，武部恭一，武政誠一，長尾徹）
3 竹を素材とした自助具の紹介	－	平成10年2月	第17回兵庫県リハビリテーション医療集談会（兵庫）	関節リウマチ患者に対して竹を素材とした自助具を作成し，その活用方法とともに紹介を行った． 本人担当部分：考察 （共同発表者：長尾徹，金子翼，武政誠一，池田耕二，武部恭一）
<その他> 『リハビリテーション・ケアセンターうららか』の軌跡 ～ 実践報告：開設から現在までの振	－	平成10年2月	全国有料老人ホーム協会第25回西日本事例研修発表会（WEB）	『リハビリテーション・ケアセンターうららか』の軌跡を実践報告として振り返った（開設から現在までの振り返り）． 本人担当部分：実践，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，古家真優，梅津奈史，石田大貴，池田耕二）

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年3月31日

氏名　　伊藤　健一　　印

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学	呼吸・心臓リハビリテーション，糖尿病理学療法

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）講義の工夫	平成17年4月 ～ 平成28年9月	大阪府立看護大学医療技術短期大学部理学療法学科 大阪府立看護大学総合リハビリテーション学部 理学療法学専攻 大阪府立大学総合リハビリテーション学類 理学療法学専攻 内部障害理学療法学I・II・III 物理療法学I・II 講義では可能な限りイラストやビデオを多用し，分かりやすいように工夫した．また，様々な資料等で出てくる単語の統一にも気を配り，学生が混乱しないように努めた．さらに，教科書的な内容の教授の後に，実際の症例に重ね合わせることで机上での勉強と臨床でのギャップを少なくするように努めた．また，国家試験対策も盛り込んだ．
	平成26年10月 ～ 平成28年9月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類 理学療法学専攻 内部障害理学療法学I・II・III 物理療法学I・II 講義には active learning を促通する目的で反転授業を取り入れている．具体的には自主制作した e-learning 教材で自宅学習させ，講義時間は演習やディスカッションに活用した．
2）実験・実習の工夫	平成17年4月 ～ 平成28年9月	大阪府立看護大学医療技術短期大学部理学療法学科 大阪府立看護大学総合リハビリテーション学部 理学療法学専攻 大阪府立大学総合リハビリテーション学類 理学療法学専攻 内部障害理学療法学I 基礎技術の習得には可能な限り時間を掛け，その後，臨床で起こりうる難渋例を想定した実習を行った． 呼吸リハビリテーションにおける聴診の実習ではシュミレータを活用した．
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）大阪府立大学　平成25年度教員業績評価 2）大阪府立大学　平成26年度教員業績評価	 平成26年12月 平成27年12月	 総合評価Ａ（S～Cの４段階評価） 総合評価Ｓ（S～Cの４段階評価）
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）講演，研究会について	平成25年 9月	平成25年度第3回ホッと＆ハートの会 「呼吸体操」講師
	平成25年 9月	平成25年度佐賀県理学療法士会研修会 「心臓リハビリテーション：入門のためのミニマムエッセンス」講師
	平成25年 9月	平成26年度第2回ホッと＆ハートの会 「運動の新しい視点：自分の運動量を見直そう」講師
	平成26年10月	はびきの市民大学「正しい運動で健康増進」講師
	平成27年10月	平成25年度第4回ホッと＆ハートの会 「骨密度と転倒予防運動について」講師

事項	年月日	概　　要
2)高大連携　講義について	平成25年 1月	大阪府立急性期・総合医療センターふれあい病院探検隊「理学療法における評価」講師
	平成25年 7月	大阪府立今宮高等学校「リハビリテーションとは」講師
	平成26年 7月	大阪府立八尾高等学校「リハビリテーションとは」講師
	平成26年 9月	大阪府立寝屋川高等学校「リハビリテーションとは」講師

事項	年月日	概　　要
	平成27年 7月	大阪府立泉陽高等学校「リハビリテーションとは」講師
	平成28年 1月	大阪府立急性期・総合医療センターふれあい病院探検隊「理学療法を体験しよう」講師
	平成30年6月	大阪府立河南高等学校「人を支える「リハビリテーション」を知る：変わるニーズと進歩する技術　講師
	平成30年12月	奈良県立生駒高等学校「理学療法とは」講師
	平成31年1月	奈良県立高取国際高等学校「リハビリテーション学への招待」講師
5　その他 1）大学院博士前期・後期課程指導実績 （大阪府立大学）	平成23年4月～	○博士前期課程：1名 呼息時低周波電気刺激の効果に関する研究：健常成人によるランダム化比較対照試験
	平成25年4月～	○博士前期課程：1名 エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響
	平成26年4月～	○博士前期課程：2名 透析低血圧患者における透析施行中の低負荷レジスタンストレーニングは血圧および運動機能の改善に寄与するか スタチン投与中の運動が骨格筋ミトコンドリアへ及ぼす影響 ○博士後期課程：2名 Predictors of improvements in exercise capacityduring cardiac rehabilitation in the recovery phase after coronary artery bypass graft surgery versus acute myocardial infarction Changes in exercise tolerance and quality of life are unrelated in lung cancer survivors who undergo video-assisted thoracic surgery
	平成27年4月～	○博士前期課程：1名 食道がん切除再建術後患者の理学療法における認知行動療法の併用が退院後の身体活動量と健康関連QOLに与える影響
2）大学院博士前期・後期課程学位審査会実績 （大阪府立大学）	平成24年2月	○主査：1名 呼息時低周波電気刺激の効果に関する研究：健常成人によるランダム化比較対照試験（博士前期課程） ○副査：3名 リズミカルな足関節運動が対側ヒラメ筋H反射興奮性に及ぼす影響（博士前期課程） Dependency of preparatory inhibition of

事項	年月日	概　　要
		corticospinal excitability on the sequence of the to-be-signaled motor response （博士後期課程）
		Transcranial magnetic stimulation over the cerebellum induces long latency motor response during visually guided manual tracking task （博士後期課程）
	平成25年2月	○副査：2名 外乱予測が筋反応および反応前期の皮質脊髄路興奮性に与える影響（博士前期課程）
		離散運動と周期運動の運動制御の違いについて （博士前期課程）
	平成26年2月	○主査：1名 エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響 （博士前期課程）
		○副査：2名 Monaural auditory stimulus affects selection of the hand to reach（博士前期課程）
		Motor evoked potential of the hand muscles elicited by posterior-anterior current is suppressed during eye movement without vision （博士前期課程）
	平成27年2月	○主査：1名 透析低血圧患者における透析施行中の低負荷レジスタンストレーニングは血圧および運動機能の改善に寄与するか（博士前期課程）

事項	年月日	概　　要
	平成30年2月	○副査：3名 Switching or cancelling leg movement suppresses anticipatory postural adjustment before gait initiation（博士前期課程） 腕運動に随伴する眼球運動の発生源に関する研究（博士前期課程） The effect of tonic contraction of one hand muscle on motor area of tonically contracting another hand muscle（博士後期課程） ○学外審査員：2名 Predictors of improvements in exercise capacity during cardiac rehabilitation in the recovery phase after coronary artery bypass graft surgery versus acute myocardial infarction（博士後期課程） Changes in exercise tolerance and quality of life are unrelated in lung cancer survivors who undergo video-assisted thoracic surgery（博士後期課程）

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1)臨床実習指導者講習会	平成31年 3月3日	第2018-2-031号：厚生労働省
2　特許等 なし		

事項	年月日	概　　要
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1)国家公務員共済組合連合会枚方公済病院理学療法士	平成28年 10月1日 ～ 平成30年 3月31日	臨床業務，教育業務，研究業務 リハビリテーション科主任（室長） 組織再編と新人教育システムの構築 呼吸器リハビリテーション外来の開設 看護師長および看護師教育 療法士教育プログラムの作成と運営
4　その他 1)国・地方公共団体における審議会・委員会等の参画	平成26年10月 ～ 平成28年9月	文部科学省大学教育再生加速プログラム（I・II複合型）大阪府立大学プロジェクト委員
2)大学委員会の活動	平成30年4月	奈良学園大学共通教育委員会委員（現在に至る） 奈良学園大学大学院入試小委員会委員（平成31年３月まで） 奈良学園大学保健医療学部研究倫理審査委員会委員（平成31年３月まで）
	平成30年7月	奈良学園大学入試広報委員会委員（平成31年３月ま
	平成30年12月	奈良学園大学ハラスメント調査委員会委員長（令和元年６月まで）
	平成31年４月	奈良学園大学教務委員会委員（現在に至る） 奈良学園大学自己点検・評価委員会委員（令和3年3月まで） 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科教務ワーキング委員（現在に至る）
	令和3年４月	奈良学園大学共通教育委員会委員（現在に至る）
	令和4年４月	奈良学園大学教務委員長（現在に至る）

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年3月31日

氏名　　伊藤　健一　　印

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学	呼吸・心臓リハビリテーション，糖尿病理学療法

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）講義の工夫	平成17年4月 ～ 平成28年9月	大阪府立看護大学医療技術短期大学部理学療法学科 大阪府立看護大学総合リハビリテーション学部 理学療法学専攻 大阪府立大学総合リハビリテーション学類 理学療法学専攻 内部障害理学療法学I・II・III 物理療法学I・II 講義では可能な限りイラストやビデオを多用し，分かりやすいように工夫した．また，様々な資料等で出てくる単語の統一にも気を配り，学生が混乱しないように努めた．さらに，教科書的な内容の教授の後に，実際の症例に重ね合わせることで机上での勉強と臨床でのギャップを少なくするように努めた．また，国家試験対策も盛り込んだ．
	平成26年10月 ～ 平成28年9月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類 理学療法学専攻 内部障害理学療法学I・II・III 物理療法学I・II 講義には active learning を促通する目的で反転授業を取り入れている．具体的には自主制作した e-learning 教材で自宅学習させ，講義時間は演習やディスカッションに活用した．
2）実験・実習の工夫	平成17年4月 ～ 平成28年9月	大阪府立看護大学医療技術短期大学部理学療法学科 大阪府立看護大学総合リハビリテーション学部 理学療法学専攻 大阪府立大学総合リハビリテーション学類 理学療法学専攻 内部障害理学療法学I 基礎技術の習得には可能な限り時間を掛け，その後，臨床で起こりうる難渋例を想定した実習を行った． 呼吸リハビリテーションにおける聴診の実習ではシュミレータを活用した．
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）大阪府立大学　平成25年度教員業績評価 2）大阪府立大学　平成26年度教員業績評価	 平成26年12月 平成27年12月	 総合評価Ａ（S～Cの４段階評価） 総合評価Ｓ（S～Cの４段階評価）
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）講演，研究会について	平成25年 9月	平成25年度第3回ホッと＆ハートの会 「呼吸体操」講師
	平成25年 9月	平成25年度佐賀県理学療法士会研修会 「心臓リハビリテーション：入門のためのミニマムエッセンス」講師
	平成25年 9月	平成26年度第2回ホッと＆ハートの会 「運動の新しい視点：自分の運動量を見直そう」講師
	平成26年10月	はびきの市民大学「正しい運動で健康増進」講師
	平成27年10月	平成25年度第4回ホッと＆ハートの会 「骨密度と転倒予防運動について」講師

事項	年月日	概　　要
2)高大連携　講義について	平成25年 1月	大阪府立急性期・総合医療センターふれあい病院探検隊「理学療法における評価」講師
	平成25年 7月	大阪府立今宮高等学校「リハビリテーションとは」講師
	平成26年 7月	大阪府立八尾高等学校「リハビリテーションとは」講師
	平成26年 9月	大阪府立寝屋川高等学校「リハビリテーションとは」講師

事項	年月日	概　　要
	平成27年 7月	大阪府立泉陽高等学校「リハビリテーションとは」講師
	平成28年 1月	大阪府立急性期・総合医療センターふれあい病院探検隊「理学療法を体験しよう」講師
	平成30年6月	大阪府立河南高等学校「人を支える「リハビリテーション」を知る：変わるニーズと進歩する技術　講師
	平成30年12月	奈良県立生駒高等学校「理学療法とは」講師
	平成31年1月	奈良県立高取国際高等学校「リハビリテーション学への招待」講師
5　その他 1）大学院博士前期・後期課程指導実績 （大阪府立大学）	平成23年4月～	○博士前期課程：1名 呼息時低周波電気刺激の効果に関する研究：健常成人によるランダム化比較対照試験
	平成25年4月～	○博士前期課程：1名 エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響
	平成26年4月～	○博士前期課程：2名 透析低血圧患者における透析施行中の低負荷レジスタンストレーニングは血圧および運動機能の改善に寄与するか スタチン投与中の運動が骨格筋ミトコンドリアへ及ぼす影響 ○博士後期課程：2名 Predictors of improvements in exercise capacityduring cardiac rehabilitation in the recovery phase after coronary artery bypass graft surgery versus acute myocardial infarction Changes in exercise tolerance and quality of life are unrelated in lung cancer survivors who undergo video-assisted thoracic surgery
	平成27年4月～	○博士前期課程：1名 食道がん切除再建術後患者の理学療法における認知行動療法の併用が退院後の身体活動量と健康関連QOLに与える影響
2）大学院博士前期・後期課程学位審査会実績 （大阪府立大学）	平成24年2月	○主査：1名 呼息時低周波電気刺激の効果に関する研究：健常成人によるランダム化比較対照試験（博士前期課程） ○副査：3名 リズミカルな足関節運動が対側ヒラメ筋H反射興奮性に及ぼす影響（博士前期課程） Dependency of preparatory inhibition of

事項	年月日	概　　要
		corticospinal excitability on the sequence of the to-be-signaled motor response （博士後期課程）
		Transcranial magnetic stimulation over the cerebellum induces long latency motor response during visually guided manual tracking task （博士後期課程）
	平成25年2月	○副査：2名 外乱予測が筋反応および反応前期の皮質脊髄路興奮性に与える影響（博士前期課程）
		離散運動と周期運動の運動制御の違いについて （博士前期課程）
	平成26年2月	○主査：1名 エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響 （博士前期課程）
		○副査：2名 Monaural auditory stimulus affects selection of the hand to reach（博士前期課程）
		Motor evoked potential of the hand muscles elicited by posterior-anterior current is suppressed during eye movement without vision （博士前期課程）
	平成27年2月	○主査：1名 透析低血圧患者における透析施行中の低負荷レジスタンストレーニングは血圧および運動機能の改善に寄与するか（博士前期課程）

事項	年月日	概　　要
	平成30年2月	○副査：3名 Switching or cancelling leg movement suppresses anticipatory postural adjustment before gait initiation（博士前期課程） 腕運動に随伴する眼球運動の発生源に関する研究（博士前期課程） The effect of tonic contraction of one hand muscle on motor area of tonically contracting another hand muscle（博士後期課程） ○学外審査員：2名 Predictors of improvements in exercise capacity during cardiac rehabilitation in the recovery phase after coronary artery bypass graft surgery versus acute myocardial infarction（博士後期課程） Changes in exercise tolerance and quality of life are unrelated in lung cancer survivors who undergo video-assisted thoracic surgery（博士後期課程）

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1)臨床実習指導者講習会	平成31年 3月3日	第2018-2-031号：厚生労働省
2　特許等 なし		

事項	年月日	概　　要
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1)国家公務員共済組合連合会枚方公済病院理学療法士	平成28年 10月1日 ～ 平成30年 3月31日	臨床業務，教育業務，研究業務 リハビリテーション科主任（室長） 組織再編と新人教育システムの構築 呼吸器リハビリテーション外来の開設 看護師長および看護師教育 療法士教育プログラムの作成と運営
4　その他 1)国・地方公共団体における審議会・委員会等の参画	平成26年10月 ～ 平成28年9月	文部科学省大学教育再生加速プログラム（I・II複合型）大阪府立大学プロジェクト委員
2)大学委員会の活動	平成30年4月	奈良学園大学共通教育委員会委員（現在に至る） 奈良学園大学大学院入試小委員会委員（平成31年３月まで） 奈良学園大学保健医療学部研究倫理審査委員会委員（平成31年３月まで）
	平成30年7月	奈良学園大学入試広報委員会委員（平成31年３月ま
	平成30年12月	奈良学園大学ハラスメント調査委員会委員長（令和元年６月まで）
	平成31年４月	奈良学園大学教務委員会委員（現在に至る） 奈良学園大学自己点検・評価委員会委員（令和3年3月まで） 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科教務ワーキング委員（現在に至る）
	令和3年４月	奈良学園大学共通教育委員会委員（現在に至る）
	令和4年４月	奈良学園大学教務委員長（現在に至る）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　PT卒後ハンドブック　１年目に習得したい基本スキル	共著	平成26年1月	三輪書店	本書は新人理学療法士に対してon the job trainingとoff the job trainingを職場の教育体制として整備するだけではなく，成人としての学習方法を身につけてもらうこと，そしてそうした自己研鑽が自らのエンプロイアビリティ学習に向けた動機付けを目的にしたテキストである. B5判 全190頁 編者：斉藤秀之，島村耕介，森本榮 共著者：斉藤秀之，森本榮，青山誠，大塚功，小泉幸毅，松原徹，豊田平介，島村耕介，後藤伸介，対馬栄輝，高橋哲也，伊藤直人，奥山夕子，村永信吾，伊能幸雄，中村崇，兼子昌幸，小林久文，川村博文，辻下守弘，西上智彦，川勝邦浩，大矢暢久，鶴見隆正，伊藤健一，他1名 本人担当部分：「症例報告から何を学ぶべきか！」（P175 - P181）を共著 分担執筆者：川村博文，辻下守弘，西上智彦，川勝邦浩，大矢暢久，鶴見正隆，伊藤健一 １年目のPTとして習得したい基本スキルとして「症例報告から何を学ぶべきか！」について，症例報告書の作成方法，症例報告の発表方法について具体例を提示した中で重要ポイントをまとめ，解説した.

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 The Usefulness of the Incremental Load Repeated Standup Test in the Assessment of the Exercise Capacity of Patients with Chronic Obstructive Pulmonary Disease （査読付） （慢性閉塞性肺疾患患者の運動能力評価における漸増反復起立動作テストの有用性）	共著	平成25年5月	Journal of Physical Therapy Science , 25 : P391-P395	椅座位からの漸増反復起立動作テスト(IRST)がCOPD患者の運動耐容能評価として活用できるかを検討した．男性COPD患者18例を対象に6分間歩行距離(6MWD)，漸増シャトルウォーキングテスト(ISWT)，心肺運動負荷テスト(CEST)，IRSTを測定した．Peak VO2の比較として，6MWTの予測値とISWTの予測値では，ISWTの方が有意に高値で，6MWTの予測値とIRSTではIRSTの方が有意に高値であったが，IRSTとISWT ，IRST，CESTには有意差を認めなかった．また，CEST-Peak VO2=0.12×起立回数＋8.26，CEST-Peak VO2=0.02×6MWD＋3.48，CEST-Peak VO2=0.02×ISWT＋6.48との有意な回帰式が得られた．IRSTは，客観的な運動耐容能の把握，運動処方，効果検証が可能になり，COPD患者の運動耐容能の評価法として活用できる可能性が示唆された． （分担執筆者：Horie,J.，Ito,K.，Hayashi,S.，Fujii,H.,Ishihara,H.,Horikawa,E.） （担当部分：資料収集と考察）
2 Carbon Dioxide Water Bathing Enhances Myogenin but Not MyoD Protein Expression after Skeletal Muscle Injury （査読付） （炭酸泉浴は骨格筋損傷後のMyoDタンパク質を増加させないがMyogeninを増加させる）	共著	平成25年5月	Journal of Physical Therapy Science , 25 : P709-P711	これまでに我々は，人工炭酸泉浴が筋損傷の治癒回復を促進する可能性を見いだした．本研究はその治癒促進のメカニズムを探ることを目的に行った．筋損傷後に人工炭酸泉浴を行うと損傷筋の筋芽細胞増殖に関わるMyoDタンパクの発現に変化は見られないが，筋管形成に関わるmyogeninタンパクの発現が増加した．以上より，筋損傷後の人工炭酸泉浴は筋管形成を促進する可能性が示唆された． （分担執筆者:Nonaka,K.,Akiyama,J.,Tatsuta,N.,Une,S.,Ito,K.,Ogaya,S.,Kataoka,M.,Iwata,A.,Okuda,K.） （担当部分：資料収集）
3 Changes in antioxidant enzymes and lipid peroxidation in extensor digitorum longus muscles of streptozotocin-diabetic rats may contribute to muscle atrophy （査読付） （ストレプトゾトシン糖尿病ラット長指伸筋の抗酸化酵素と過酸化脂質の変化は筋萎縮と関連する）	共著	平成26年12月	Acta Physiologica Hungarica, 101：P421-P428	糖尿病時の筋萎縮が酸化ストレスと関連があるかについて検証した．速筋線維優位である長指伸筋は萎縮し，抗酸化酵素(カタラーゼ，グルタチオンペルオキシダーゼ，スーパーオキサイドジスムターゼ)活性の上TBARSの増加が確認された．一方，赤筋線維優位であるヒラメ筋の萎縮は軽度で，カタラーゼ活性は上昇したが，それ以外の抗酸化酵素活性とTBARSに変化は認められなかった．以上より，糖尿病に伴う酸化ストレスが速筋線維の萎縮を惹起する可能性を示した． （分担執筆者:Nonaka,K.，Une,S.，Tatsuta,N.，Ito,K.，Akiyama,J.） （担当部分：資料収集）
4 Electrical stimulated ventilation feedback improve ventilation pattern in patients with COPD （筆頭著者） （査読付） （電気刺激による換気フィードバックはCOPD患者の換気パターンを改善する）	共著	平成27年2月	Journal of Physical Therapy Science, 27 : P325-P330	研究の目的は,COPD患者に対する呼息時電気刺激（PESE）を用いた換気フィードバックの有効性を明らかにすることである．24名のCOPD患者を，プラセボ群とPESEを行う群に割り付けた．これら対象者には5分間のエルゴメータ運動を2回行ってもらい，ベースライン（BL）と各介入による換気指標を中心としたデータの測定を行った．BLに対しプラセボ群では，安静時・運動時とも明らかな変化は認められなかったが， PESE群では安静時・運動時とも有意な換気効率の改善を認めた．この結果によりCOPD患者の換気効率改善にPESEが有効であることが明らかとなった． （分担執筆者:Ito,K.，Nozoe,T.，Okuda,M.，

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				Nonaka, K.,Yamahara,J., Horie,J., Hayama,Y., Kawamura,H.)

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5　虚弱高齢者を対象とした腹筋トレーニングを含む通所リハビリテーションの効果 （査読付）	共著	平成27年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究，5：P31-P36	本研究の目的は，虚弱高齢者に対する腹筋トレーニングを含んだ6ヵ月間の通所リハの効果を検証することである．対象者は通所リハ利用中の虚弱高齢者20名（80.5 ± 6.6歳）とした．対照群は既存のプログラムとし，介入群は既存プログラムに1日20回の腹筋トレーニングを含んだ．結果，片脚立脚時間と5 m最速歩行速度は介入群が有意に向上した．腹筋トレーニングを含んだ通所リハは虚弱高齢者のヘルスプロモーションとして有効である可能性が示唆された． （分担執筆者:阿波邦彦，北村智哉，堀江淳，伊藤健一） （担当部分：考察と論文作成指導）
6　Evaluation of a Physical Activity Promotion Program Using the "Exercise Guide 2006" Aimed at Preventing Life style-related Disease among Working People （査読付） （勤労者の生活習慣病予防を目的としたエクササイズガイド2006を用いた身体活動促進プログラムの評価）	共著	平成28年5月	Japanease Journal of Occupational Medicine and Traumatology, 64: 162-172	健康づくりのための運動指針2006に基づく身体活動促進プログラム(EPAR)の効果を一般的な運動指針(GEG)とともに明らかにした．対象は製造業に従事する勤労者で,これら対象者をEPAR群とGEG群,コントロール群に割り付け,それぞれの介入を行った．評価項目は生化学検査値，身体組成，膝進展筋力，運動に対する自己効力感，行動変容ステージである.結果より健康づくりのための運動指針2006に基づく身体活動促進プログラムは運動への自己効力感を増大させ，生活習慣病予防に寄与する可能性が示唆された． （分担執筆者：Asada,F.,Nomura,T.,Kubota,M.,Ohashi,M.,Ito,K.） （担当部分：研究の企画およびデザインと論文指導）
7　Surface electromyogra-phy activity of the rectus abdominis, internal oblique,and external oblique muscles during forced expiration inhealthy adults （筆頭著者） （査読付） （健常成人の努力性呼気時における腹直筋，内腹斜筋，外腹斜筋の表面筋電図の活動）	共著	平成28年6月	Journal of Electromyo-graphy and Kinesiology, 28: 76-81	呼吸リハビリテーションの基礎研究として呼気筋の筋活動パターンを筋電図を用いて呼気抵抗別に検討した．10%PEmax，20%PEmax,30%PEmaxの抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋,外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち,最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし,その活動量は30%PEmaxの負荷であっても20%MVC以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは30%PEmax程度の負荷が推奨されるが,生理学的な視点でみた場合,その負荷は弱すぎることが示唆された． （分担執筆者：Ito,K.，Nonaka,K.，Ogaya,S.，Oogi,A.，Matsunaka,C.，Horie,J.） （担当部分：研究の企画およびデザインと論文作成）
8　Electrical stimulation ventilatory feedback facilitates maintenance of a prolonged expiration pattern during exercise: A proof of concept study in healthy adults （査読付） （電気刺激呼吸フィードバックは運動中の呼気延長の維持を容易にする：健常成人における概念実証試験）	共著	平成28年7月	Physiotherapy Theory and Practice, 32:P483-P488	本研究の目的は，運動中の呼息を促通させるために電気刺激を用いたフィードバック（ESVF）を行い，その効果と安全性を明らかにすることである．健常成人23名をESVF群と対照群に割り付けた．対象者は呼吸練習において，呼気延長の呼吸パターンを練習し，その呼吸法を運動中も維持するように指導された．運動中と運動後の呼気/吸気時間比において対照群と比較してESVF群が有意に高値を示した．また，ESVFによる副作用が認められなかったことからESVFは運動中の呼吸法を習得させるツールになり得ることが明らかとなった． （分担執筆者:Yamahara,J.,Ito,K.,Nonaka,K.） （担当部分：実験の計画立案と考察，論文作成指導）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9 慢性呼吸器疾患におけるPhysical Activity Scale for the Elderlyを用いた身体活動量評価の有用性に関する検証 （査読付）	共著	平成29年3月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌，26：P495-P501	本研究の目的は，慢性呼吸器患者におけるPhysical Activity Scale for the Elderly(PASE)を用いた身体活動量評価の有用性を検証することである．対象である50名のCOPD患者はPASEの回答の後，活動量計を２週間装着した．PASE調査は初回回答から１週間後に再度行った．結果はPASEスコアと活動量計カロリーには相関が認められ，さらに初回PASEスコアと2回目PASEスコアにも高い相関が認められた．これらのことから慢性呼吸器患者に対してPASEが利用できることが明らかとなった． （分担執筆者:青田絵里，伊藤健一，奥田みゆき，濃添建男，堀江淳，石原英樹）
10　エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響 （査読付）	共著	平成29年4月	理学療法科学，32：P183-P188	本研究の目的は臥床時の呼吸機能に対するエアマットレスの悪影響の有無を明らかにすることである.対象は健常者群 19 名と胸郭コンプライアンス低下群 10名に対して，エアマットレスと標準マットレスの 2 つの条件下で臥位にて測定された呼吸機能を比較した．測定項目は一回換気量，分時換気量，死腔換気率，呼吸数，呼気時間，　吸気時間，全呼吸時間，呼気平均流量，吸気平均流量，吸気における腹部の隆起が開始するタイミングの 10 項目とした．結果は両群ともにすべての測定項目でエアマットレス上臥位と標準マットレス上臥位の間に有意な差は認められなかった．以上よりエアマットレス導入は呼吸機能へ悪影響を与えないことが明らかになった． （分担執筆者:井上貴裕，野中紘士，伊藤健一） （担当部分：実験の計画立案と考察，論文作成指
11　Comparison of the pain-relieving effects of transcutaneous electrical nerve stimulation applied at the same dermatome levels as the site of pain in the wrist joint （査読付） （手関節疼痛部位と同皮膚節レベルに実施する経皮的電気神経刺激の鎮痛効果の比較）	共著	平成29年11月	Journal of Physical Therapy Science，29：P1996-P1999	本研究の目的は手関節疼痛部位と同皮膚節レベルに実施する経皮的電気神経刺激（TENS）の鎮痛効果を比較検討することである．対象は成人女性で，熱刺激を手関節に与えて疼痛を出現させてコントロールを設定し，次に同熱刺激を与えつつ対側の同皮膚節レベルである手関節（CW）へのTENS実施，手関節背側の疼痛部位と同皮膚節レベルの頸部（N）へのTENS実施，CWとNの同時両部位（CWN）へのTENS実施である計3方法での介入を行い，痛みの程度及び脳血流測定を行った．3つの介入の痛みの程度は，コントロールに比べ有意に減少したが，3方法間における痛みの程度の比較では，いずれの組合せにおいても有意な差は認められなかった．効果的なTENSには皮膚節を有効に活用することも重要であるものと考えられた． （分担執筆者：Kawamura,H.,Nishigami,T., Yamamoto,A.,Tsujishita,M.,Ito,K., Ohya,N., Takagi,M.） （担当部分：資料収集と考察）
12　Changes in exercise tolerance and quality of life are unrelated in lung cancer survivors who undergo video-assisted thoracic surgery （査読付） （胸腔鏡下手術を受けた肺がん患者では運動耐容能の変化とQOLは関係がない	共著	平成30年3月	Journal of Physical Therapy Science，30:P467-P473	本研究の目的は，胸腔鏡下手術（VATS）を受けた患者の運動耐容能の変化とQOLとの関係を明らかにすることである．VATS後3ヶ月間，肺癌患者36名を追跡調査し，QOLと身体機能を評価した．QOLの身体的および社会的側面は，術後有意に減少したが，第12週までに回復した．対照的に，身体機能は術後4週までに回復していた．QOLの変化率と身体機能に関する変化率との間には有意な相関は認められなかった．身体機能の回復とQOLの回復は相関しないことが明らかとなった． （分担執筆者：Anami,K., Horie,J.,

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				Hirayama,Y., Yamashita,N., Ito,K.) (担当部分：研究デザインと解析，考察)

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
13 Predictors of improvements in exercise capacity during cardiac rehabilitation in the recovery phase after coronary artery bypass graft surgery versus acute myocardial infarction （査読付） （回復期心臓リハビリテーションにおける運動耐容能改善予測因子の検討-冠状動脈バイパス術後患者と急性心筋梗塞患者の比較-）	共著	平成30年4月	Heart and Vessels, 33: P358-P366	心臓リハビリテーション(心リハ)における，冠状動脈バイパス術後(CABG)患者と急性心筋梗塞(AMI)患者の運動耐容能改善予測因子を検討した．CABG後患者(61例)では，等尺性膝伸展筋力の変化率(β=0.39,p<0.01)，ヘモグロビン値の変化値(β=0.23,p<0.05)，心リハ開始時の脳性ナトリウム利尿ペプチド値(β=-0.37, p<0.01)が運動耐容能改善予測因子であった．一方，AMI患者(91例)では心リハ開始時の運動耐容能(%予測値)(β=-0.43, p<0.01)が唯一の運動耐容能改善予測因子であった． （分担執筆者：Suzuki,Y.，Ito,K.，Yamamoto,K.，Fukui,N.，Yanagi,H.，Kitagaki,K.，Konishi,H.，Arakawa,T.，Nakanishi,M.，Goto,Y.） （担当部分：研究デザインと解析，考察）
14 Potential of muscles to accelerate the body during late-stance T forward progression in individuals with knee osteoarthritis （査読付） （変形性膝関節症患者における立脚後期の前進中に体幹を加速するための筋の潜在性）	共著	平成30年8月	Human Movement Science, 61:P109-116	本研究では，加速度の減少が上腕三頭筋による前方進行の筋電位の低下と関連しているかどうかを明らかにするために，前方への身体重心加速度および筋電位に対する個々の筋の寄与を分析した．対象は膝OA患者12人と健常者12人である．誘導加速度分析を使用して，各筋肉が70～100%の立脚期の間に前方への身体重心加速にどのように寄与したかを分析した．次に，前方への身体重心加速度の筋電位を算出した．膝OA患者は健常者と比較してヒラメ筋，腓腹筋，および腸腰筋で有意に低い前方への身体重心加速度を示した．これらの所見は，前進に対するヒラメ筋の寄与を改善することが後期立脚期の間に膝OA患者の歩行速度を高めるのに有効であることが明らかとなった． （分担執筆者：Ogaya,S.,Kubota,R.,Chujo,Y.,Hirooka,E.,Ito,K.,Kim,K.,Hase,K.） （担当部分：研究デザインと考察）
15 Endurance exercise increases the protein levels of PGC-1α and respiratory chain complexes in mouse skeletal muscle during atorvastatin administration （査読付） （アトルバスタチン投与中の持久力運動はマウス骨格筋のPGC-1αと呼吸鎖複合体タンパク質を増加させる）	共著	平成31年2月	The Journal of Physiological Sciences, 69: P327-333	アトルバスタチン（AS）の投与中に，マウスの持久力運動が骨格筋のミトコンドリア順応および筋肉損傷を誘発するか否かを調査した．雄のマウスを３つの群のうちの１つに割り当てた：対照（Con），スタチン（Sta），またはスタチンおよび運動(Sta＋Ex)．そしてASを投与し，トレッドミル上で8週間運動を行った．大腿四頭筋におけるミトコンドリア関連タンパク質PGC-1α，および呼吸鎖複合体（COX）I-V，および筋肉損傷マーカーである血清クレアチンキナーゼのレベルを計測した．PGC-1αおよびCOX I-VはStaおよびConの群と比較して，Sta＋Exの群で増大した．血清クレアチンキナーゼレベルは同様であった．これらのことからマウスにおける持久力運動はAS投与中に，筋肉損傷を引き起こさずに骨格筋におけるミトコンドリア順応を誘導することが明らかとなった． （分担執筆者：Nonaka, K.,Ozaki, Y.,Ito,K.,Sakita,M.,Une,S.,Akiyama,J.） （担当部分：研究デザインと考察）
16 地域在住高齢者におけるテレビコマーシャルメッセージの時間を活用した身体活動促進プログラムの予備的研究 （査読付）	共著	令和3年4月	健康支援，23：早期公開	本研究の目的は，CM 中の歩行または足踏みを促す身体活動プログラムの実行可能性と身体活動量への影響を明らかにすることである.CM 開始時点から歩行または足踏みを開始し，CM 終了まで継続するよう指示した.また,CM 中の歩行または足踏みは，7日間，各日1日を通して実施する

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				よう指示した．加速度計の装着時間は通常週が平均 776.6 ± 80.0 分/日，介入週が平均751.6 ± 116.0分/日であり，介入週で有意に短かった。通常週の歩数は平均6,483 ± 3,019歩/日，介入週の歩数は平均7,304 ± 3,196 歩 /日であり，介入週で有意に増加した．また，通常週の歩行時間は平均67.6 ± 35.8分/日，介入週の歩行時間は平均77.6 ± 36.9分/日であり，歩行時間は介入週で有意に増加した．本研究により，CM 中の歩行または足踏みを促す身体活動プログラムは，高齢者の歩数と歩行時間を有意に増加させ，厚生労働省の提案する「プラス 10」を満たすための実行可能な方法となり得ることが示された． （分担執筆者：中島大貴，伊藤健一，坪内喜仁，藤井啓介,田畑泉） （担当部分：研究デザインと考察）
「総説」 1　内部障害に対する運動療法における臨床推論と臨床判断	共著	平成25年2月	理学療法，30巻：P176-P180	「内部障害に対する運動療法における臨床推論と臨床判断」について解説した．具体的には臨床推論と臨床判断の意義・要点，臨床推論と臨床判断を的確に行うための基本的知識の整理と留意点について図を用いて解説した． （分担執筆者：伊藤健一） （担当部分：企画と論文作成）
2　他科で役立つこんな時のリハ処方 4.呼吸器内科・呼吸器外科-呼吸リハを中心に	共著	平成25年12月	Journal of Clinical Rehabilitation，22巻：P1211-P1217	呼吸リハビリテーションを処方するにあたり必須となる以下の点についてまとめた．１）リハの適応者と評価，対応，２）注意点，３）主治医のリハ依頼の目的や期待，４）リハ依頼の多い疾患の概略，５）症例とその効果 （分担執筆者：石田健司，野村卓生，伊藤健一） （担当部分：情報収集とデータ提供）
3　他職種で作成したハイフローシステムマニュアル	共著	平成30年６月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌，27巻：P146-P152	呼吸不全の新しい治療法であるハイフロー療法で用いるハイフローシステムの設定や取り扱い方について，医師や看護師，理学療法士，薬剤師，臨床工学技士がそれぞれの視点からわかりやすくまとめた． （分担執筆者：奥田みゆき，田中順哉，福田康二，木戸悠人，清水学，上田耕平，辻是道，加治木幸，有満道子，前田里美，伊藤健一，大木敦司，高橋留佳，野原隆司） （担当部分：リハビリテーション部分の企画と校正）
4　おしえてQ&A 呼吸ケア・リハビリテーションの未来はどうなる？	共著	令和4年4月	みんなの呼吸器 Respica，20巻2号：P96	読者からの問い「呼吸ケア・リハビリテーションの未来はどうなる？」に対し，昨今のリハビリテーションにおけるAIやICT・ロボット技術の導入を例として取り上げ，医療従事者側のそのような動向の認識と準備が必要であることを解説した． （分担執筆者：伊藤健一） （担当部分：執筆）
「学会発表」 〈国際学会〉				

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 Effects of phasic electrical stimulation during expiration in elderly patients with chronic obstructive pulmonary disease: A randomised control trial （高齢COPD患者における呼息時電気刺激の効果：ランダム化試験）	－	平成25年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2013 (Barcelona)	24名の高齢COPD患者を対照群と呼息時低周波電気刺激群に割り付け，安静時および運動時の換気機能について，呼息時低周波電気刺激の効果を検証した．結果より呼息時低周波電気刺激は換気機能を有意に改善することが明らかとなった． （共同発表者：Ito,K.,Nozoe,T.,Okuda,M.,Nonaka,K.,Horie,J.,Kawamura,H.） （担当部分：研究企画，資料の収集，データ解析，学会発表）
2 CORRELATING FACTORS OF EXERCISE CAPACITY IMPROVEMENT AFTER CARDIAC REHABILITATION IN POST-CORONARY ARTERY BYPASS GRAFT SURGERY PATIENTS （冠動脈バイパス術後患者における心臓リハビリテーション後の運動能力改善の関連因子）	－	平成27年5月	World Confederation for Physical Theraty Congress 2015 (Singapore)	心臓リハビリテーション(心リハ)に参加した冠動脈バイパス術(CABG)後患者の運動耐容能改善関連因子を検討した．対象は，CABG後に3か月間の心リハプログラムに参加した61例とした．対象には心リハ前後で，運動負荷試験，膝伸展筋力測定，体組成測定，血液データ測定が行われた．多変量解析の結果，膝伸展筋力の変化率(β＝0.51，P＜0.05)と換気効率(VE/VCO2 slope)の変化率(β＝-0.67，P＜0.01)が運動耐容能改善の独立した関連因子であることが明らかとなった． （共同発表者：Suzuki,Y.,Hieda,M.,Fujiwara,R.,Yamamoto,K.,Fukui,N.,Konishi,H.Arakawa,T.,Kumasaka,R.,Nakanishi,M.,Fukui,S.,Nakao,K.,Ohara,T.,Noguchi,T.,Yanase,M.,Ito,K.,Goto,Y.） （担当部分：計画と考察，研究指導）
3 Electromyography Activity of the Rectus Abdominis, Internal Oblique, and External Oblique Muscles During Forced Expiration in Healthy Adults （健常成人における努力性呼気時の腹直筋，内腹斜筋と外腹斜筋の筋電活動）	－	平成27年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2015 (Amsterdam)	呼気筋の筋活動パターンを筋電図を用いて呼気抵抗別に検討した．10%PEmax，20%PEmax,30%PEmaxの抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋,外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち,最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし,その活動量は30%PEmaxの負荷であっても20%MVC以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは30%PEmax程度の負荷が推奨されるが,生理学的な視点でみた場合,その負荷は弱すぎることが示唆された． （共同発表者：Ito,K.,Nonaka,K.,Ogaya,S.,Horie,J.） （担当部分：データの解析，考察，学会発表）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 Validity and Intra-class Reliability of Spirometry Using a Mask Instead of a Mouthpiece （マウスピースの代わりにマスクを用いたスパイロメータの信頼性と妥当性）	－	平成28年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2016 (London)	本研究の目的はマスクを用いたスパイロメトリの妥当性と再現性を明らかにすることである．筒型マウスピースの代わりにマスクを用いて肺機能を測定した結果，妥当性と再現性が確認できた．このことから，スパイロメトリの際に筒型マウスピースの代わりにマスクを用いることが可能であると考えられた．但し，データの取り扱いに関しては一次回帰式で補正する必要がある．また，今回の結果は安静時計測の結果であり，背景に記した運動時評価における妥当性と再現性の検討は今後の課題である． （共同発表者：Ito,K., Nonaka,K., Takeda,S., Nishikawa, T.,Anami,K., Horie,J., Tsujishita,M., Kawamura,H.） （担当部分：データの解析，考察，学会発表）
5 Assessment of the mechanism underlying the improvement in ventilation efficiency induced by phasic electrical stimulation during expiration in patients with chronic obstructive pulmonary disease. （慢性閉塞性肺疾患患者に対する呼息時電気刺激がもたらす換気効率の改善機序）	－	平成29年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2017 (Milan)	本研究の目的はCOPD患者に対する呼息時電気刺激（PESE）が換気効率を改善する機序を明らかにすることである．対象は35名の外来COPD患者で電気刺激を行わない，電極を設置しただけの群（sham control）と呼息筋である腹直筋に対して電気刺激を行う群（R-PESE），呼息に関係の無い腕橈骨筋に対し電気刺激を行う群（B-PESE）の３群に無作為に割り付けた．各群とも安静時の換気機能指標の計測の後，各群の介入下に軽い運動を行い換気機能指標を計測した．本研究の結果よりPESEの効果は呼息筋に対する機能的電気刺激としての効果ではなく，呼息を促すbiofeedbackの効果であることが明らかとなった． （共同発表者：Ito,K., Nonaka,K., Nozoe,T., Shiranita,S.,Horie,J.,Shimizu,G.,Ogi,A., Okuda,M.,Watanabe,N.） （担当部分：データの解析，考察，学会発表）
6 Analysis of changes in clinical characteristics of patients with COPD or interstitial pneumonia during a 6-minute walk test （COPDと間質性肺炎の6分間歩行中の臨床的特性）	－	令和２年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2020 (Wien)	本研究の目的は，COPD患者と間質性肺炎の患者の臨床的特性をあきらかにすることである． COPD患者では，6分間歩行前後のICの有意な減少が認められた（$p < 0.05$）． 間質性肺炎患者では，歩行の開始から終了まで呼吸数ががCOPD患者よりも有意に高い値を示した（$p < 0.05$）．経時的変化の特徴は，ほとんどすべての値が開始から3分まで有意な変動を示したが，その後定常状態に達したということでした．結果よりCOPDでのみに6分間の歩行テスト中に，動的過膨張が認めらた．浅速呼吸は間質性肺炎でのみに認められた．また，歩行開始後3分以内に各特性が現れることが観察された． （共同発表者：Ogi,A.,Enoki,T., Matsumoto,T.,Ito,K.,Shimizu,G., Okuda,M.,Tanaka,N., Fukuda,K.,Nohara,R.）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
〈国内学会〉				
1　高齢COPD患者に対する呼息時低周波電気刺激の効果	－	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会 （名古屋）	24名の高齢COPD患者に対して呼息時低周波電気刺激（PESE）を用い，その効果を，安静時および運動時の換気機能や酸素摂取量に着目し検討した．本研究の結果よりPESEが安静時および運動時の換気効率を改善することが明らかとなった．また，その際にはPESEが仕事量増大の指標になり得るVO2／Wの増大を誘発しないことが証明された． （共同発表者：伊藤健一，野中紘士，濃添建男，奥田みゆき，川村博文） （担当部分：研究企画と資料の収集，データ解析，学会発表）
2　胸腔鏡下肺葉切除術（VATS）後1ヵ月時におけるATポイントでのMETsの差異で術前の身体機能に違いはあるか？	－	平成26年9月	第33回日本臨床運動療法学会学術集会（大阪）	本研究の目的は，胸腔鏡下肺葉切除術（以下，VATS）後1ヵ月時におけるATポイントでのMETsの差異で術前の身体機能に違いがあるか検証することである．対象はVATSが施行された23名，年齢70.5±7.3歳であった．3.1METs以上群（12名）と3METs以下群（11名）に分け術前身体機能を比較した結果，3METs以下群は有意に体重比膝伸展筋力が低値を認めたが，それ以外には有意差を認めなかった．結果より術後に安全かつ効率的な運動ができるためには下肢筋力が重要であることが明らかとなった． （共同発表者：阿波邦彦，平山善康，堀江淳，太田垣あゆみ，松井萌恵，田中宇大，山下直己，伊藤健一） （担当部分：計画と考察，研究指導）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3　室内有酸素運動における映像の効果	－	平成26年9月	第33回日本臨床運動療法学会学術集会（大阪）	トレッドミルを用いた屋内有酸素運動中の「映像視聴」が及ぼす身体への影響について検討した．24名の健常女子大学生を映像視聴「あり」群と「なし」群の２群に割り付けトレドミル歩行を行い,疲労指標や呼吸代謝指標,換気能力指標を測定した．身体的疲労感と精神的疲労感はともに2群間で有意な差は認められなかった．一方でVO2,METS,EEについては,いずれも「あり」群が「なし」群に比べ有意に高い値を示した．本研究結果から,運動中の映像視聴は映像「なし」での運動と変わらぬ疲労感で効率の良い運動が可能となることが示唆された． （共同発表者：小西隆幸，杉山友香，谷口結子，藤井愛美，野中紘士，伊藤健一） （担当部分：計画と考察，研究指導）
4　エアマットレスが臥床時の「換気」を制限するか：健常者による基礎的研究	－	平成26年10月	第24回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（奈良）	健常者を対象に，エアマットレスが臥床中の呼吸機能に与える影響を明らかにした．対象者にはエアマットレスと標準マットレス上にて臥位を取らせ，一回換気量，呼吸数などの呼吸機能を測定し比較した．エアマットレス上臥位と標準マットレス上臥位の間で呼吸機能に有意差は認められなかった．胸郭のコンプライアンスの良い者についてはエアマットレスを使用しても，呼吸機能に変化を及ぼさないことが明らかになった． （共同発表者：井上貴裕，伊藤健一，野中紘士） （担当部分：計画とその解析，考察，研究指導）
5　胸腔鏡下肺葉切除術後患者における身体能力および健康関連QOLの縦断的変化の検証	－	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会（東京）	本研究は，VATS前後から術後1ヵ月にかけての身体能力および健康関連QOLの変化を前向きに検討した．対象は30名で年齢72.3±7.2歳であった．反復測定分散分析の結果，呼吸機能は低下したままだが，運動耐容能は術後1ヵ月で術前の値まで回復することが示唆された．しかしながら，健康関連QOLは1ヵ月では完全に回復しないことが明らかとなった．そのため退院前指導をはじめとした健康関連QOLを考慮した指導等の必要性が示唆された． （共同発表者：阿波邦彦，平山善康，山下直己，堀江淳，太田垣あゆみ，松井萌恵，出見世真人，佃陽一 ，伊藤健一） （担当部分：計画とその解析，考察，研究指導）
6　強制呼気筋の強度別筋活動パターンの解明：無作為割付，シングルブラインドによる検討	－	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会（東京）	呼吸リハビリテーションにおける呼吸筋トレーニングを効率良く実施するために,強度別筋活動パターンを筋電図を用いて検討した．10%PEmax,20%PEmax,30%PEmaxの抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋,外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち,最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし,その活動量は30%PEmaxの負荷であっても20%MVC以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは30%PEmax程度の負荷が推奨されるが,生理学的な視点でみた場合,その負荷は弱すぎることが示唆された． （共同発表者：大木敦司，松中千明，野中紘士，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察，研究指導）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7　心不全を伴う透析関連低血圧患者の特徴（第1報）	－	平成27年7月	第21回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（福岡）	本研究の目的は透析関連低血圧患者の特徴を明らかにすることである．対象は当院外来透析患者のうち，研究の同意が得られた高齢心不全患者14名とし，透析中に収縮期血圧が20mmHg以上低下し，100mmHg未満となる血圧低下群7名と対照群7名の2群に分け，身体機能などを比較検討した．対照群と比較し，血圧低下群では蛋白異化率が有意に低値であったことから，透析関連低血圧患者の特徴として，蛋白摂取量が低い傾向であり栄養障害のあることが示唆された． （共同発表者：山下真由子，寺崎珠，中瀬理恵，杉本篤子，木下千春，神田豊子，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察，研究指導）
8　冠動脈疾患患者の心臓リハビリテーション後の体重増加は全て悪か？：筋力・体組成からの検討	－	平成27年7月	第21回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（福岡）	心臓リハビリテーション(心リハ)に参加した冠動脈疾患(CAD)患者の体重増加について検討した．心リハ後に体重が増加した50例のうち膝伸展筋力改善10%以上の18例を筋力増加群，10%未満の32例を増加不良群とした．両群ともに膝伸展筋力と骨格筋量 は心リハ後に有意に増加したが，各増加率は筋力増加群が不良群より有意に大きかった．さらに，筋力増加群では体脂肪量は不変で，運動耐容能が有意に改善したが，不良群では体脂肪量が有意に増加し，運動耐容能に有意な増加は見られなかった．下肢筋力増加を伴う体重増加は「良い体重増加」であることが明らかとなった． （共同発表者：鈴木裕二，山本壱弥，福井教之，柳英利，北垣和史，小西治美，稗田道成，藤原玲子，荒川鉄雄，熊坂礼音，福井重文，大原貴裕，簗瀬正伸，中尾一泰，中西道郎，伊藤健一，後藤葉一） （担当部分：計画と考察，研究指導）
9　透析低血圧患者における透析施行中の低負荷レジスタンストレーニングの効果	－	平成28年3月	第6回日本腎臓リハビリテーション学会（岡山）	透析低血圧患者の血圧や運動機能が３か月間低負荷レジスタンストレーニング（RT）により改善するかを検討した。血圧については，変化は認められなかった．歩行速度については，介入前後で対照群で有意な低下が認められたが，RT群では維持された．また，身体活動量については，介入前後で対照群では有意な変化は認められなかったが，RT群では有意な増加が認められた．運動に対する行動変容ステージについても，RT群では介入前後で有意に増加し，運動に対するアドヒアランスの有意な改善が認められた．結果より今回のRTが運動機能の維持や身体活動量，運動に対するアドヒアランスの改善において有用であることが明らかとなった． （共同発表者：山下真由子，木下千春，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10　肺がん患者の健康関連QOLと身体能力の術後回復過程	－	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会 （札幌）	本研究は，胸腔鏡下胚葉切除術を受ける肺がん患者に対し，術前から術後3ヵ月にかけて健康関連QOLおよび身体能力の変化を前向きに検証した．結果，肺がん患者の身体能力は術後1カ月足らずで回復することが確認できたが，健康関連QOL（SF-36 PCS）は術前の状況まで回復するのに3ヵ月以上を要することが明らかとなった．つまり，身体能力を維持・向上させるだけでは健康関連QOL対策としては不十分であることが示唆された． （共同発表者：阿波邦彦，平山善康，山下直己，堀江淳，太田垣あゆみ，松井萌恵，出見世真人，佃陽一，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察）
11　食道がん切除再建術後患者の生存期間に影響を及ぼす因子の検討―手術後におけるQOL，身体機能改善への後追試的研究―	－	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会 （札幌）	食道がん切除再建術後患者の生存期間に関与する因子を対象の36名を生存群・死亡群に分け比較検討した．結果，術後1年でのAlbが死亡群で低値，術前のがん進行度が重症な者ほど生存期間が短かった．死亡群で生存期間が術後1年程の者も多く．術後におけるパラメータからは生存期間予測は困難であった．がん進行度が重症であれば，術後の生存期間が短い可能性があり，周術期から生存期間も考慮した理学療法を実施する必要性がある． （共同発表者：髙畑晴行，脇田正徳，伊藤健一，金光浩，長谷公隆） （担当部分：研究計画とデータの解析，考察）
12　減量に成功した肥満を有する冠動脈疾患患者の運動耐容能変化が筋力・体組成に及ぼす影響	－	平成28年7月	第22回日本心臓リハビリテーション学会学術集会 （東京）	心臓リハビリテーション参加後に減量したBMI25以上の肥満を有する冠動脈疾患患者50例を，運動耐容能(PVO2) 増加率が5%以上の33例(PVO2改善群)と，5%未満の17例(非改善群)に分け，体組成，筋力変化を比較した．PVO2改善群では，PVO2改善(改善率 +17%，p＜0.01)に伴い，下肢筋肉量(15.4→15.8kg，p＜0.01)と膝伸展筋力(41.4→44.4kg，p＜0.01)が有意に改善したのに対し，PVO2非改善群(PVO2改善率 -4%，NS)では下肢筋肉量，膝伸展筋力とも有意な増加を示さなかった． （共同発表者：鈴木裕二，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，伊藤健一，小西治美，稗田道成，藤原玲子，渡慶次竜生，伊達歩，熊坂礼音，荒川鉄雄，中西道郎，大原貴裕，高潮征爾，中尾一泰，福井重文，簗瀬正伸，後藤葉一） （担当部分：データの解析，考察）
13　食道がん患者における術前の運動習慣と 術後呼吸機能・健康関連QOLとの関連	－	平成28年10月	第26回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 （横浜）	本研究の目的は食道がん患者における運動習慣が身体機能，QOLに与える影響を検討することである．食道がん切除術を受ける15名の患者に対し，手術前と退院時の行動変容ステージ，膝伸展筋力，6分間歩行距離，咳嗽時最大呼気流量（PCF），最大呼気流量（PEF），健康関連QOLを測定した．結果を運動実行群と非実行群の2群に分けて検討した．運動習慣と術後のQOLに関連性は認められなかったが，運動習慣のある者は術前PCF・PEF，術後PEFが有意に高かった．このことから，運動習慣は食道がん術後経過に良い影響を及ぼす可能性が示唆された． （共同発表者：髙畑晴行，濱田真一，金光浩，伊藤健一，長谷公隆） （担当部分：データの解析，考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14　マスクを用いたスパイロメトリの妥当性と信頼性	－	平成28年10月	第26回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（横浜）	本研究の目的はマスクを用いたスパイロメトリの妥当性と再現性を級内相関やブランド・アルトマンプロットにより明らかにすることである．筒型マウスピースの代わりにマスクを用いて肺機能を測定した結果，妥当性と再現性が確認できた．このことから，スパイロメトリの際に筒型マウスピースの代わりにマスクを用いることが可能であると考えられた．但し，データの取り扱いに関しては一次回帰式で補正する必要がある．また，今回の結果は安静時計測の結果であり，背景に記した運動時評価における妥当性と再現性の検討は今後の課題である． （共同発表者：伊藤健一，野中紘士，武田匠平，西川剛史，奥田みゆき） （担当部分：データの解析，考察，発表）
15　筋骨格シミュレーション解析を用いた変形性膝関節症患者の歩行時膝伸展パターン分類	－	平成28年12月	第3回日本運動器理学療法学会学術集会（金沢）	本研究の目的は変形性膝関節症患者が歩行中にどの筋を使って膝を伸展させるのかを調べ，代償動作のパターンを分類することである．計測された歩行の運動学・運動力学データを元に多関節運動モデルを用いたシミュレーション解析を行った結果，１．大殿筋の活動増加，２．ヒラメ筋の活動増加，3．前脛骨筋の活動減少，の3つの膝伸展代償パターンに分類できることがわかった．また，大殿筋で膝伸展を代償するパターンは他2群よりも歩行速度が高いことがわかった．この結果より，大殿筋による大腿骨の後方回旋で膝を伸展させる作用が，変形膝関節症患者の歩行速度を維持するのに重要であることが明らかとなった． 本発表で学術大会賞を受賞している． （共同発表者：小栢進也，久保田良，中條雄太，金光浩，伊藤健一，長谷公隆） （担当部分：研究デザイン，考察）
16　運動メニューの順序変更が心臓リハビリテーションの円滑な進行に有効であった高度心機能低下DCMの一例	－	平成29年2月	日本心臓リハビリテーション学会第2回近畿地方会（大阪）	今回，高度心機能低下若年DCM症例の心臓リハビリテーション（心リハ）を経験した．症例は25歳女性，23歳時にDCMと診断され，今回心不全増悪にて入院となった．心リハ開始時の左室駆出率は25%，BNP980pg/mlであった．心リハ実施中に血圧低下，眩暈がしばしば出現し，心リハ進行が困難であった．そこで，運動メニューの順序として有酸素運動の実施前に低強度レジスタンストレーニングを先行させたところ，低血圧症状は軽減し，心リハ3ヶ月終了時にはPeakVO2が＋37.7%，等尺性膝伸展筋力が＋17.9%と良好に増加した． （共同発表者：鈴木裕二，伊藤健一，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，小西治美，渡慶次竜生，伊達歩，熊坂礼音，荒川鉄雄，三浦弘之，長谷川拓也，中尾一泰，福井重文，築瀬正伸，中西道郎，後藤葉一） （担当部分：データの解析，考察，発表）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
17　食道がん切除再建術患者における術前身体活動量が術後の身体機能と健康関連QOLに与える影響	－	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	本研究の目的は食道がん患者における手術前の身体活動量が，術後の身体機能,健康関連QOLに与える影響を検討することである．術前の活動量が1日3METs･時間以上の活動している群の方が，以下の群よりも手術前では等尺性膝伸展筋力，6分間歩行距離，身体的QOLサマリースコアが有意に高く，術後では等尺性膝伸展筋力のみ有意に高い結果となった．食道がん切除再建術は高侵襲を伴う手術であるため，身体機能のなかでも心肺機能と関連する運動耐容能の低下がQOLの低下に影響する可能性がある．今後は，術前，周術期，退院後において運動耐容能を高めるための理学療法介入の有効性について検討する必要がある． （共同発表者：髙畑晴行，濱田真一，清水遼子，脇田正徳，金光浩，伊藤健一） （担当部分：研究の計画立案と考察，指導）
18　CABG後患者の心臓リハビリでの運動耐容能改善規定因子はAMIと異なるか―重回帰分析による検討―	－	平成29年7月	第23回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（岐阜）	心臓リハビリテーション（心リハ）に参加した，冠状動脈バイパス術後（CABG）症例61例と急性心筋梗塞（AMI）症例91例の運動耐容能改善規定因子について検討した．CABG症例の運動耐容能改善規定因子は，心リハ開始前後の膝伸展筋力の変化率，血中ヘモグロビンの変化値，心リハ開始時の血中脳性ナトリウム利尿ペプチド（BNP）値であった．AMI症例の運動耐容能改善規定因子は，心リハ開始時の運動耐容能の%予測値であった． （共同発表者：鈴木裕二，伊藤健一，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，小西治美，渡慶次竜生，伊達歩，熊坂礼音，荒川鉄雄，三浦弘之，長谷川拓也，中尾一泰，福井重文，簗瀬正伸，中西道郎，後藤葉一） （担当部分：考察と指導）
19　体重200kgを超える肥満肺胞低換気症候群の症例を如何に運動療法に繋げるか	－	平成29年9月	第36回日本臨床運動療法学会（大阪）	体重が200kgを超える肥満肺胞低換気症候群患者に対し，理学療法の位置づけを考察しながら減量できた症例の経過について報告した．症例は30歳男性，体重は239kgでBMIは78であった．入院当初より低酸素血症と肺高血圧症，重度右心不全が認められた．動作レベルは寝返り，起き上がりが何とかできる程度であった．減量目的の介入が不可欠であったが，立ち上がりができなかったことからセザムベッドによる立ち上がり介助を行い，立位・歩行練習へと繋げていった．歩行距離も順調に延長することができ，170kgまで減量ができたため，自宅退院となった．一般的な肥満患者の理学療法プログラムでは減量目的の有酸素運動が主となるが，今回のような症例では基本動作から歩行までの手段を工夫し，担保する事が重要である． （共同研究者：大木敦司，伊藤健一，清水学，原智恵，林祐司，春名克純，奥田みゆき） （担当部分：治療介入と考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
20　体重200kgを超える肥満肺胞低換気症候群の１例：理学療法の位置づけ	－	平成29年10月	第66回共済医学会学術集会（京都）	体重が200kgを超える肥満肺胞低換気症候群患者に対し，理学療法の位置づけを考察しながら減量できた症例の経過について報告した．症例は30歳男性，体重は239kgでBMIは78であった．入院当初より低酸素血症と肺高血圧症，重度右心不全が認められた．動作レベルは寝返り，起き上がりが何とかできる程度であった．減量目的の介入が不可欠であったが，立ち上がりができなかったことからセザムベッドによる立ち上がり介助を行い，立位・歩行練習へと繋げていった．歩行距離も順調に延長することができ，170kgまで減量ができたため，自宅退院となった．一般的な肥満患者の理学療法プログラムでは減量目的の有酸素運動が主となるが，今回のような症例では基本動作から歩行までの手段を工夫し，担保する事が重要である． （共同研究者：大木敦司，伊藤健一，清水学，原智恵，林祐司，春名克純，奥田みゆき） （担当部分：治療介入と考察）
21　当院における「できるADL」と「しているADL」の検討	－	平成29年10月	第66回共済医学会学術集会（京都）	研究の目的は枚方公済病院における「屋内移動」と「トイレ」に関する「できる」「している」の乖離度合いを調査し，早期退院につなげる方策を検討することである．過去にリハビリテーションの依頼のあった310名の患者カルテから「屋内移動」と「トイレ」に関する「できる」・「している」について調査した．「できる」・「している」の乖離は7病棟中3病棟で存在していた．この3病棟は認知症患者を多く抱える病棟で，患者の転倒を避けるが故の乖離であることが推測できた．このことから認知症患者の病棟内移動手段の決定には病棟看護師と理学療法士の密なコミュニケーションと共通の基準を設ける必要性が示唆された． （共同発表者：木村拓磨，大木敦司，池島浩司，井上悟，吉本拓登，能勢亜友子， 伊藤健一，奥田みゆき） （担当部分：考察と発表指導）
22　COPD患者の換気効率を改善する呼息時電気刺激はどこを刺激すべきか	－	平成29年11月	第27回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究の目的はCOPD患者に対する呼息時電気刺激(PESE)の刺激部位を特定することである．対象者は35名のCOPD患者である．対象者は電極を設置しただけの群と呼息筋である腹部筋に対して刺激を行う群，呼吸運動に関係の無い前腕部に対し刺激を行う群の3群に割り付けられた．対象者にはエルゴメータ運動を課し，種々の換気指標を計測した．結果よりPESEの効果は呼息筋に対する機能的電気刺激としての効果ではなく，呼息を促すbiofeedbackの効果であることが示唆された． よって刺激部位は腹部でなく，露出しやすい前腕部でも良いことが明らかとなった． （共同発表者：伊藤健一，野中紘士，白仁田秀一，堀江淳，清水学，大木敦司，奥田みゆき） （担当部分：研究デザインと介入，考察，発表）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23　臥位での運動療法が生きることを支援した終末期間質性肺炎の一例	－	平成29年11月	第27回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（仙台）	Platypnea-Orthodeoxia症候群（POS）を有する肝肺症候群の理学療法について報告した．症例は50代男性で診断名は間質性肺炎急性増悪，既往歴として肝硬変を有していた．呼吸苦により他院で上記診断．入院時血ガスは酸素4LでPCO2 33.6torr，PO2 55.2torrであり胸部CTでは両側下背野に網状影.を認めた．オキシマイザー+酸素6Lで臥位ではSpO2は97%を維持できたが，起坐位ではSpO2が70%台となるPOSを認めた．理学療法はPOSを許容した上で屋内短距離移動の獲得を目的に臥位での筋力トレーニングを行った．連続歩行は20mまでとし,退院後は訪問サービスで管理することで53病日オキシマイザー+酸素6LのHOTを使用し自宅退院となった. （共同発表者：大木敦司，伊藤健一，清水学，林祐司，木戸悠人，川田富美子，奥田みゆき） （担当部分：治療介入と考察）
24 肺がん術後に乳糜胸を合併した，認知機能障害がある高齢者に対する多職種での関わりが有効であった一例	－	平成29年11月	第27回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（仙台）	症例は80歳台女性で，肺炎加療中に左肺腫瘍が見つかり左上葉切除を施行した．術後に乳糜胸を認めた．乳糜胸の治療は安静による保存療法が一般的であるが，本症例は認知症を合併していたため，更なる機能低下を懸念し他職種間で綿密な情報交換を行いながら積極的なチームアプローチを行った．結果，スムーズに退院に繋げることができた. （中村佳菜子，松島裕美,糸賀詩織,能勢亜友子,田中順也,奥田みゆき,渡邊明,伊藤健一,上田 耕平,辻是道） （担当部分：理学療法の介入と考察）
25　心不全入院時における身体的フレイル指標の推移	－	平成30年2月	日本心臓リハビリテーション学会第3回近畿地方会（神戸）	フレイルの基礎研究として心不全入院時の身体機能の実態を調査した．急性心不全あるいは慢性心不全急性増悪で入院してきた患者で，入院前に屋内歩行が可能でshort physical performance batteryを測定した患者212名が対象である．これら対象者を低機能群，中間機能群，高機能群の3群に分け，それぞれの群毎に退院時に機能改善の認められた割合を調査した．低機能群のうち機能回復を示した割合は60.3%，中間機能群では57.1%，高機能群では0%であった．入院時に身体的フレイルが認められた者のうち，低機能群・中間機能群においてはリハビリテーションの介入で50%以上の者に身体機能の改善が認められた．また，高機能群においては入院時の機能が維持できていたことが明らかとなり，フレイルに対するリハビリテーションの介入効果が明らかとなった. （共同発表者：池田力，岩津弘太郎，芦川博信，松村幸一，坂本真実，伊藤健一，中野南帆子，阪田智子，原谷こずえ，高林健介，藤田亮子，北口勝司，野原隆司） （担当部分：考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
26 心臓サルコイドーシス患者における心臓リハビリテーションの有効性	－	平成30年7月	第24回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（横浜）	心臓リハビリ3ヶ月プログラムとCPXを実施している21名の心臓サルコイドーシス患者に対する心臓リハビリテーション（心リハ）の有効性と安全性について検討した．検討した項目は最高酸素摂取量と等尺性膝伸展筋力，血液データである．結果より心臓サルコイドーシス患者では心リハ導入により運動耐容能は改善するが，開始時BNPの高値例では運動耐容能の改善は乏しいことが明らかとなった．また，有害事象も認められなかったことより心臓サルコイドーシス患者の心リハの有効性と安全性が示唆された． （共同研究者：鈴木裕二，伊藤健一，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，島田幸洋，小西治美，荒川鉄雄，中尾一泰，長谷川拓也，福井重文，三浦弘之，中西道郎） （担当部分：考察）
27　COPD患者に対する呼息時電気刺激が動的肺過膨張に及ぼす影響：パイロットスタディ	－	平成30年11月	第28回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（幕張）	研究の目的はPESEの動的肺過膨張への影響を明らかにすることである．外来COPD患者６名に対して６分間歩行を呼息時電気刺激を行う「介入あり」と「介入なし」の２条件下に実施した．その際に最大吸気量(IC)と分時換気量(VE)，呼吸数(RR)，酸素飽和度(SpO2)，自覚的運動強度(Borg scale)を計測した．IC，VE，RR，SpO2，Borg scaleのいずれの評価項目においても有意な差は認められなかった．効果量についてはBorg scaleで効果量「大」であった．呼息時電気刺激は動的肺過膨張を抑制することはできなかったが，息切れの軽減に有用である可能性が示唆された． （共同研究者：伊藤健一，大木敦司，清水学，奥田みゆき） （担当部分：デザイン，考察，発表）
28　安定期呼吸器疾患の身体活動量及び生活空間の広がりと運動機能の関連	－	平成30年11月	第28回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（幕張）	外来リハビリテーションを実施している安定期呼吸器疾患患者70名を対象に，身体活動量及び生活空間の広がり（IPAC）と運動機能（膝伸展筋力，SPPB，6MD）の関連について調査検討した．結果より安定期呼吸器疾患患者の外出頻度にはバランス等のパフォーマンス能力が関与し，身体活動量には運動耐容能が関与することが明らかとなった． （共同研究者：大木敦司，清水学，伊藤健一，松本美希子，高橋留佳，池田力，奥田みゆき） （担当部分：考察）
29　在宅酸素療法（HOT）使用者における酸素ボンベと液体酸素デバイス間の患者特性	－	令和元年11月	第29回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（名古屋）	研究の目的はHOT適応者において，酸素ボンベと液体酸素各々の使用者の特性を明らかにすることである．51名のHOT適応患者において年齢，肺機能，酸素流量，上下肢筋力，６分間歩行距離，身体活動量，ADL能力，認知機能について評価した．結果，液体酸素使用群において上下肢筋力，身体活動量，認知機能において有意に勝っていた．これらの結果は酸素デバイスを選択する際に役立つものと考えられた． （共同研究者：清水学，大木敦司，池田力，伊藤健一，森山久美子，高橋留佳，上田耕平，木戸悠人，福田康二，奥田みゆき） （担当部分：考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
30　高齢安定期呼吸器疾患の身体活動量を規定する因子	－	令和元年11月	第29回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（名古屋）	研究の目的は高齢安定期呼吸器疾患の身体活動量を規定する因子を明らかにすることである．外来呼吸リハを実施している92名の患者に対し，SPPB，NRADL，HADS，MMSE，LSAを評価し，LSAを目的変数として重回帰分析を行った．結果，SPPBとNRADLが身体活動量を示すLSAを規定する因子として抽出された．高齢安定期呼吸器疾患の身体活動量を向上させるには息切れのコントロールを含めたADL能力とパオーマンス能力の向上が重要であることが示唆された． （共同研究者：大木敦司，清水学，伊藤健一，森山久美子，高橋留佳，池田力，奥田みゆき） （担当部分：考察）
31　地域在住呼吸器患者におけるCOVID-19流行期の状況調査ー身体活動性と各指標の関連ー	－	令和3年3月	第30回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（京都）	研究の目的はCOVID-19流行期の地域在住呼吸器患者の身体活動性と関連する要因を分析することである．感染予防対策の記載は手洗いやうがいが5割以上であり，運動習慣の記載はストレッチやスクワットが3割り程度であった.Life-Space Assessmentと性別,BMI,要介護度に有意な相関を認めた.COVID-19流行期において,呼吸器患者の身体活動性は低値であり,Life-Space Assessmentが低値な者は女性,低BMI，要介護度が高いという特徴が明らかとなった. （共同研究者：大木敦司，清水学，上田耕平，伊藤健一，池田力，奥田みゆき） （担当部分：考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
〈研修会〉 1　心臓リハビリテーション：入門のためのミニマムエッセンス	－	平成25年9月	平成25年度　佐賀県理学療法士会研修会（佐賀）	新人理学療法士に向け，近年急速にニーズが高まってきた心臓リハビリテーションを実施するにあたり，最低限押さえておかなければならない基礎知識，リスク管理，評価，運動療法プログラムについて,そのエッセンスについて提示した. （伊藤健一） （担当部分：研究企画と資料の収集，データ解析，発表）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　PT卒後ハンドブック　１年目に習得したい基本スキル	共著	平成26年1月	三輪書店	本書は新人理学療法士に対してon the job trainingとoff the job trainingを職場の教育体制として整備するだけではなく，成人としての学習方法を身につけてもらうこと，そしてそうした自己研鑽が自らのエンプロイアビリティ学習に向けた動機付けを目的にしたテキストである. B5判 全190頁 編者：斉藤秀之，島村耕介，森本榮 共著者：斉藤秀之，森本榮，青山誠，大塚功，小泉幸毅，松原徹，豊田平介，島村耕介，後藤伸介，対馬栄輝，高橋哲也，伊藤直人，奥山夕子，村永信吾，伊能幸雄，中村崇，兼子昌幸，小林久文，川村博文，辻下守弘，西上智彦，川勝邦浩，大矢暢久，鶴見隆正，伊藤健一，他1名 本人担当部分：「症例報告から何を学ぶべきか！」（P175 - P181）を共著 分担執筆者：川村博文，辻下守弘，西上智彦，川勝邦浩，大矢暢久，鶴見正隆，伊藤健一 １年目のPTとして習得したい基本スキルとして「症例報告から何を学ぶべきか！」について，症例報告書の作成方法，症例報告の発表方法について具体例を提示した中で重要ポイントをまとめ，解説した.

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 The Usefulness of the Incremental Load Repeated Standup Test in the Assessment of the Exercise Capacity of Patients with Chronic Obstructive Pulmonary Disease （査読付） （慢性閉塞性肺疾患患者の運動能力評価における漸増反復起立動作テストの有用性）	共著	平成25年5月	Journal of Physical Therapy Science , 25 : P391-P395	椅座位からの漸増反復起立動作テスト(IRST)がCOPD患者の運動耐容能評価として活用できるかを検討した．男性COPD患者18例を対象に6分間歩行距離(6MWD)，漸増シャトルウォーキングテスト(ISWT)，心肺運動負荷テスト(CEST)，IRSTを測定した．Peak VO2の比較として，6MWTの予測値とISWTの予測値では，ISWTの方が有意に高値で，6MWTの予測値とIRSTではIRSTの方が有意に高値であったが，IRSTとISWT ，IRST，CESTには有意差を認めなかった．また，CEST-Peak VO2=0.12×起立回数＋8.26，CEST-Peak VO2=0.02×6MWD＋3.48，CEST-Peak VO2=0.02×ISWT＋6.48との有意な回帰式が得られた．IRSTは，客観的な運動耐容能の把握，運動処方，効果検証が可能になり，COPD患者の運動耐容能の評価法として活用できる可能性が示唆された． （分担執筆者：Horie,J.，Ito,K.，Hayashi,S.，Fujii,H.,Ishihara,H.,Horikawa,E.） （担当部分：資料収集と考察）
2 Carbon Dioxide Water Bathing Enhances Myogenin but Not MyoD Protein Expression after Skeletal Muscle Injury （査読付） （炭酸泉浴は骨格筋損傷後のMyoDタンパク質を増加させないがMyogeninを増加させる）	共著	平成25年5月	Journal of Physical Therapy Science , 25 : P709-P711	これまでに我々は，人工炭酸泉浴が筋損傷の治癒回復を促進する可能性を見いだした．本研究はその治癒促進のメカニズムを探ることを目的に行った．筋損傷後に人工炭酸泉浴を行うと損傷筋の筋芽細胞増殖に関わるMyoDタンパクの発現に変化は見られないが，筋管形成に関わるmyogeninタンパクの発現が増加した．以上より，筋損傷後の人工炭酸泉浴は筋管形成を促進する可能性が示唆された． （分担執筆者:Nonaka,K.,Akiyama,J.,Tatsuta,N.,Une,S.,Ito,K.,Ogaya,S.,Kataoka,M.,Iwata,A.,Okuda,K.） （担当部分：資料収集）
3 Changes in antioxidant enzymes and lipid peroxidation in extensor digitorum longus muscles of streptozotocin-diabetic rats may contribute to muscle atrophy （査読付） （ストレプトゾトシン糖尿病ラット長指伸筋の抗酸化酵素と過酸化脂質の変化は筋萎縮と関連する）	共著	平成26年12月	Acta Physiologica Hungarica, 101：P421-P428	糖尿病時の筋萎縮が酸化ストレスと関連があるかについて検証した．速筋線維優位である長指伸筋は萎縮し，抗酸化酵素(カタラーゼ，グルタチオンペルオキシダーゼ，スーパーオキサイドジスムターゼ)活性の上TBARSの増加が確認された．一方，赤筋線維優位であるヒラメ筋の萎縮は軽度で，カタラーゼ活性は上昇したが，それ以外の抗酸化酵素活性とTBARSに変化は認められなかった．以上より，糖尿病に伴う酸化ストレスが速筋線維の萎縮を惹起する可能性を示した． （分担執筆者:Nonaka,K.，Une,S.，Tatsuta,N.，Ito,K.，Akiyama,J.） （担当部分：資料収集）
4 Electrical stimulated ventilation feedback improve ventilation pattern in patients with COPD （筆頭著者） （査読付） （電気刺激による換気フィードバックはCOPD患者の換気パターンを改善する）	共著	平成27年2月	Journal of Physical Therapy Science, 27 : P325-P330	研究の目的は,COPD患者に対する呼息時電気刺激（PESE）を用いた換気フィードバックの有効性を明らかにすることである．24名のCOPD患者を，プラセボ群とPESEを行う群に割り付けた．これら対象者には5分間のエルゴメータ運動を2回行ってもらい，ベースライン（BL）と各介入による換気指標を中心としたデータの測定を行った．BLに対しプラセボ群では，安静時・運動時とも明らかな変化は認められなかったが， PESE群では安静時・運動時とも有意な換気効率の改善を認めた．この結果によりCOPD患者の換気効率改善にPESEが有効であることが明らかとなった． （分担執筆者:Ito,K.，Nozoe,T.，Okuda,M.，

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				Nonaka, K.,Yamahara,J., Horie,J., Hayama,Y., Kawamura,H.)

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5　虚弱高齢者を対象とした腹筋トレーニングを含む通所リハビリテーションの効果 （査読付）	共著	平成27年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究，5：P31-P36	本研究の目的は，虚弱高齢者に対する腹筋トレーニングを含んだ6ヵ月間の通所リハの効果を検証することである．対象者は通所リハ利用中の虚弱高齢者20名（80.5 ± 6.6歳）とした．対照群は既存のプログラムとし，介入群は既存プログラムに1日20回の腹筋トレーニングを含んだ．結果，片脚立脚時間と5 m最速歩行速度は介入群が有意に向上した．腹筋トレーニングを含んだ通所リハは虚弱高齢者のヘルスプロモーションとして有効である可能性が示唆された． （分担執筆者:阿波邦彦，北村智哉，堀江淳，伊藤健一） （担当部分：考察と論文作成指導）
6　Evaluation of a Physical Activity Promotion Program Using the "Exercise Guide 2006" Aimed at Preventing Life style-related Disease among Working People （査読付） （勤労者の生活習慣病予防を目的としたエクササイズガイド2006を用いた身体活動促進プログラムの評価）	共著	平成28年5月	Japanease Journal of Occupational Medicine and Traumatology, 64: 162-172	健康づくりのための運動指針2006に基づく身体活動促進プログラム(EPAR)の効果を一般的な運動指針(GEG)とともに明らかにした．対象は製造業に従事する勤労者で,これら対象者をEPAR群とGEG群,コントロール群に割り付け,それぞれの介入を行った．評価項目は生化学検査値，身体組成，膝進展筋力，運動に対する自己効力感，行動変容ステージである.結果より健康づくりのための運動指針2006に基づく身体活動促進プログラムは運動への自己効力感を増大させ，生活習慣病予防に寄与する可能性が示唆された． （分担執筆者：Asada,F.,Nomura,T.,Kubota,M.,Ohashi,M.,Ito,K.） （担当部分：研究の企画およびデザインと論文指導）
7　Surface electromyogra-phy activity of the rectus abdominis, internal oblique,and external oblique muscles during forced expiration inhealthy adults （筆頭著者） （査読付） （健常成人の努力性呼気時における腹直筋，内腹斜筋，外腹斜筋の表面筋電図の活動）	共著	平成28年6月	Journal of Electromyo-graphy and Kinesiology, 28: 76-81	呼吸リハビリテーションの基礎研究として呼気筋の筋活動パターンを筋電図を用いて呼気抵抗別に検討した．10%PEmax，20%PEmax,30%PEmaxの抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋,外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち,最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし,その活動量は30%PEmaxの負荷であっても20%MVC以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは30%PEmax程度の負荷が推奨されるが,生理学的な視点でみた場合,その負荷は弱すぎることが示唆された． （分担執筆者：Ito,K.，Nonaka,K.，Ogaya,S.，Oogi,A.，Matsunaka,C.，Horie,J.） （担当部分：研究の企画およびデザインと論文作成）
8　Electrical stimulation ventilatory feedback facilitates maintenance of a prolonged expiration pattern during exercise: A proof of concept study in healthy adults （査読付） （電気刺激呼吸フィードバックは運動中の呼気延長の維持を容易にする：健常成人における概念実証試験）	共著	平成28年7月	Physiotherapy Theory and Practice, 32:P483-P488	本研究の目的は，運動中の呼息を促通させるために電気刺激を用いたフィードバック（ESVF）を行い，その効果と安全性を明らかにすることである．健常成人23名をESVF群と対照群に割り付けた．対象者は呼吸練習において，呼気延長の呼吸パターンを練習し，その呼吸法を運動中も維持するように指導された．運動中と運動後の呼気/吸気時間比において対照群と比較してESVF群が有意に高値を示した．また，ESVFによる副作用が認められなかったことからESVFは運動中の呼吸法を習得させるツールになり得ることが明らかとなった． （分担執筆者:Yamahara,J.,Ito,K.,Nonaka,K.） （担当部分：実験の計画立案と考察，論文作成指導）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9 慢性呼吸器疾患におけるPhysical Activity Scale for the Elderlyを用いた身体活動量評価の有用性に関する検証 （査読付）	共著	平成29年3月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌，26：P495-P501	本研究の目的は，慢性呼吸器患者におけるPhysical Activity Scale for the Elderly(PASE)を用いた身体活動量評価の有用性を検証することである．対象である50名のCOPD患者はPASEの回答の後，活動量計を２週間装着した．PASE調査は初回回答から１週間後に再度行った．結果はPASEスコアと活動量計カロリーには相関が認められ，さらに初回PASEスコアと2回目PASEスコアにも高い相関が認められた．これらのことから慢性呼吸器患者に対してPASEが利用できることが明らかとなった． （分担執筆者:青田絵里，伊藤健一，奥田みゆき，濃添建男，堀江淳，石原英樹）
10　エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響 （査読付）	共著	平成29年4月	理学療法科学，32：P183-P188	本研究の目的は臥床時の呼吸機能に対するエアマットレスの悪影響の有無を明らかにすることである.対象は健常者群 19 名と胸郭コンプライアンス低下群 10名に対して，エアマットレスと標準マットレスの 2 つの条件下で臥位にて測定された呼吸機能を比較した．測定項目は一回換気量，分時換気量，死腔換気率，呼吸数，呼気時間，　吸気時間，全呼吸時間，呼気平均流量，吸気平均流量，吸気における腹部の隆起が開始するタイミングの 10 項目とした．結果は両群ともにすべての測定項目でエアマットレス上臥位と標準マットレス上臥位の間に有意な差は認められなかった．以上よりエアマットレス導入は呼吸機能へ悪影響を与えないことが明らかになった． （分担執筆者:井上貴裕，野中紘士，伊藤健一） （担当部分：実験の計画立案と考察，論文作成指
11　Comparison of the pain-relieving effects of transcutaneous electrical nerve stimulation applied at the same dermatome levels as the site of pain in the wrist joint （査読付） （手関節疼痛部位と同皮膚節レベルに実施する経皮的電気神経刺激の鎮痛効果の比較）	共著	平成29年11月	Journal of Physical Therapy Science，29：P1996-P1999	本研究の目的は手関節疼痛部位と同皮膚節レベルに実施する経皮的電気神経刺激（TENS）の鎮痛効果を比較検討することである．対象は成人女性で，熱刺激を手関節に与えて疼痛を出現させてコントロールを設定し，次に同熱刺激を与えつつ対側の同皮膚節レベルである手関節（CW）へのTENS実施，手関節背側の疼痛部位と同皮膚節レベルの頸部（N）へのTENS実施，CWとNの同時両部位（CWN）へのTENS実施である計3方法での介入を行い，痛みの程度及び脳血流測定を行った．3つの介入の痛みの程度は，コントロールに比べ有意に減少したが，3方法間における痛みの程度の比較では，いずれの組合せにおいても有意な差は認められなかった．効果的なTENSには皮膚節を有効に活用することも重要であるものと考えられた． （分担執筆者：Kawamura,H.,Nishigami,T., Yamamoto,A.,Tsujishita,M.,Ito,K., Ohya,N., Takagi,M.） （担当部分：資料収集と考察）
12　Changes in exercise tolerance and quality of life are unrelated in lung cancer survivors who undergo video-assisted thoracic surgery （査読付） （胸腔鏡下手術を受けた肺がん患者では運動耐容能の変化とQOLは関係がない	共著	平成30年3月	Journal of Physical Therapy Science，30:P467-P473	本研究の目的は，胸腔鏡下手術（VATS）を受けた患者の運動耐容能の変化とQOLとの関係を明らかにすることである．VATS後3ヶ月間，肺癌患者36名を追跡調査し，QOLと身体機能を評価した．QOLの身体的および社会的側面は，術後有意に減少したが，第12週までに回復した．対照的に，身体機能は術後4週までに回復していた．QOLの変化率と身体機能に関する変化率との間には有意な相関は認められなかった．身体機能の回復とQOLの回復は相関しないことが明らかとなった． （分担執筆者：Anami,K., Horie,J.,

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				Hirayama,Y., Yamashita,N., Ito,K.) (担当部分：研究デザインと解析，考察)

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
13 Predictors of improvements in exercise capacity during cardiac rehabilitation in the recovery phase after coronary artery bypass graft surgery versus acute myocardial infarction （査読付） （回復期心臓リハビリテーションにおける運動耐容能改善予測因子の検討-冠状動脈バイパス術後患者と急性心筋梗塞患者の比較-）	共著	平成30年4月	Heart and Vessels, 33: P358-P366	心臓リハビリテーション(心リハ)における，冠状動脈バイパス術後(CABG)患者と急性心筋梗塞(AMI)患者の運動耐容能改善予測因子を検討した．CABG後患者(61例)では，等尺性膝伸展筋力の変化率(β=0.39,p<0.01)，ヘモグロビン値の変化値(β=0.23,p<0.05)，心リハ開始時の脳性ナトリウム利尿ペプチド値(β=-0.37, p<0.01)が運動耐容能改善予測因子であった．一方，AMI患者(91例)では心リハ開始時の運動耐容能(%予測値)(β=-0.43, p<0.01)が唯一の運動耐容能改善予測因子であった． （分担執筆者：Suzuki,Y.，Ito,K.，Yamamoto,K.，Fukui,N.，Yanagi,H.，Kitagaki,K.，Konishi,H.，Arakawa,T.，Nakanishi,M.，Goto,Y.） （担当部分：研究デザインと解析，考察）
14 Potential of muscles to accelerate the body during late-stance T forward progression in individuals with knee osteoarthritis （査読付） （変形性膝関節症患者における立脚後期の前進中に体幹を加速するための筋の潜在性）	共著	平成30年8月	Human Movement Science, 61:P109-116	本研究では，加速度の減少が上腕三頭筋による前方進行の筋電位の低下と関連しているかどうかを明らかにするために，前方への身体重心加速度および筋電位に対する個々の筋の寄与を分析した．対象は膝OA患者12人と健常者12人である．誘導加速度分析を使用して，各筋肉が70～100%の立脚期の間に前方への身体重心加速にどのように寄与したかを分析した．次に，前方への身体重心加速度の筋電位を算出した．膝OA患者は健常者と比較してヒラメ筋，腓腹筋，および腸腰筋で有意に低い前方への身体重心加速度を示した．これらの所見は，前進に対するヒラメ筋の寄与を改善することが後期立脚期の間に膝OA患者の歩行速度を高めるのに有効であることが明らかとなった． （分担執筆者：Ogaya,S.,Kubota,R.,Chujo,Y.,Hirooka,E.,Ito,K.,Kim,K.,Hase,K.） （担当部分：研究デザインと考察）
15 Endurance exercise increases the protein levels of PGC-1α and respiratory chain complexes in mouse skeletal muscle during atorvastatin administration （査読付） （アトルバスタチン投与中の持久力運動はマウス骨格筋のPGC-1αと呼吸鎖複合体タンパク質を増加させる）	共著	平成31年2月	The Journal of Physiological Sciences, 69: P327-333	アトルバスタチン（AS）の投与中に，マウスの持久力運動が骨格筋のミトコンドリア順応および筋肉損傷を誘発するか否かを調査した．雄のマウスを３つの群のうちの１つに割り当てた：対照（Con），スタチン（Sta），またはスタチンおよび運動(Sta＋Ex)．そしてASを投与し，トレッドミル上で8週間運動を行った．大腿四頭筋におけるミトコンドリア関連タンパク質PGC-1α，および呼吸鎖複合体（COX）I-V，および筋肉損傷マーカーである血清クレアチンキナーゼのレベルを計測した．PGC-1αおよびCOX I-VはStaおよびConの群と比較して，Sta＋Exの群で増大した．血清クレアチンキナーゼレベルは同様であった．これらのことからマウスにおける持久力運動はAS投与中に，筋肉損傷を引き起こさずに骨格筋におけるミトコンドリア順応を誘導することが明らかとなった． （分担執筆者：Nonaka, K.,Ozaki, Y.,Ito,K.,Sakita,M.,Une,S.,Akiyama,J.） （担当部分：研究デザインと考察）
16 地域在住高齢者におけるテレビコマーシャルメッセージの時間を活用した身体活動促進プログラムの予備的研究 （査読付）	共著	令和3年4月	健康支援，23：早期公開	本研究の目的は，CM 中の歩行または足踏みを促す身体活動プログラムの実行可能性と身体活動量への影響を明らかにすることである.CM 開始時点から歩行または足踏みを開始し，CM 終了まで継続するよう指示した.また,CM 中の歩行または足踏みは，7日間，各日1日を通して実施する

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				よう指示した．加速度計の装着時間は通常週が平均 776.6 ± 80.0 分/日，介入週が平均751.6 ± 116.0分/日であり，介入週で有意に短かった。通常週の歩数は平均6,483 ± 3,019歩/日，介入週の歩数は平均7,304 ± 3,196 歩 /日であり，介入週で有意に増加した．また，通常週の歩行時間は平均67.6 ± 35.8分/日，介入週の歩行時間は平均77.6 ± 36.9分/日であり，歩行時間は介入週で有意に増加した．本研究により，CM 中の歩行または足踏みを促す身体活動プログラムは，高齢者の歩数と歩行時間を有意に増加させ，厚生労働省の提案する「プラス 10」を満たすための実行可能な方法となり得ることが示された． （分担執筆者：中島大貴，伊藤健一，坪内喜仁，藤井啓介,田畑泉） （担当部分：研究デザインと考察）
「総説」 1　内部障害に対する運動療法における臨床推論と臨床判断	共著	平成25年2月	理学療法，30巻：P176-P180	「内部障害に対する運動療法における臨床推論と臨床判断」について解説した．具体的には臨床推論と臨床判断の意義・要点，臨床推論と臨床判断を的確に行うための基本的知識の整理と留意点について図を用いて解説した． （分担執筆者：伊藤健一） （担当部分：企画と論文作成）
2　他科で役立つこんな時のリハ処方 4.呼吸器内科・呼吸器外科-呼吸リハを中心に	共著	平成25年12月	Journal of Clinical Rehabilitation，22巻：P1211-P1217	呼吸リハビリテーションを処方するにあたり必須となる以下の点についてまとめた．１）リハの適応者と評価，対応，２）注意点，３）主治医のリハ依頼の目的や期待，４）リハ依頼の多い疾患の概略，５）症例とその効果 （分担執筆者：石田健司，野村卓生，伊藤健一） （担当部分：情報収集とデータ提供）
3　他職種で作成したハイフローシステムマニュアル	共著	平成30年６月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌，27巻：P146-P152	呼吸不全の新しい治療法であるハイフロー療法で用いるハイフローシステムの設定や取り扱い方について，医師や看護師，理学療法士，薬剤師，臨床工学技士がそれぞれの視点からわかりやすくまとめた． （分担執筆者：奥田みゆき，田中順哉，福田康二，木戸悠人，清水学，上田耕平，辻是道，加治木幸，有満道子，前田里美，伊藤健一，大木敦司，高橋留佳，野原隆司） （担当部分：リハビリテーション部分の企画と校正）
4　おしえてQ&A 呼吸ケア・リハビリテーションの未来はどうなる？	共著	令和4年4月	みんなの呼吸器 Respica，20巻2号：P96	読者からの問い「呼吸ケア・リハビリテーションの未来はどうなる？」に対し，昨今のリハビリテーションにおけるAIやICT・ロボット技術の導入を例として取り上げ，医療従事者側のそのような動向の認識と準備が必要であることを解説した． （分担執筆者：伊藤健一） （担当部分：執筆）
「学会発表」 〈国際学会〉				

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 Effects of phasic electrical stimulation during expiration in elderly patients with chronic obstructive pulmonary disease: A randomised control trial （高齢COPD患者における呼息時電気刺激の効果：ランダム化試験）	－	平成25年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2013 (Barcelona)	24名の高齢COPD患者を対照群と呼息時低周波電気刺激群に割り付け，安静時および運動時の換気機能について，呼息時低周波電気刺激の効果を検証した．結果より呼息時低周波電気刺激は換気機能を有意に改善することが明らかとなった． （共同発表者：Ito,K.,Nozoe,T.,Okuda,M.,Nonaka,K.,Horie,J.,Kawamura,H.） （担当部分：研究企画，資料の収集，データ解析，学会発表）
2 CORRELATING FACTORS OF EXERCISE CAPACITY IMPROVEMENT AFTER CARDIAC REHABILITATION IN POST-CORONARY ARTERY BYPASS GRAFT SURGERY PATIENTS （冠動脈バイパス術後患者における心臓リハビリテーション後の運動能力改善の関連因子）	－	平成27年5月	World Confederation for Physical Theraty Congress 2015 (Singapore)	心臓リハビリテーション(心リハ)に参加した冠動脈バイパス術(CABG)後患者の運動耐容能改善関連因子を検討した．対象は，CABG後に3か月間の心リハプログラムに参加した61例とした．対象には心リハ前後で，運動負荷試験，膝伸展筋力測定，体組成測定，血液データ測定が行われた．多変量解析の結果，膝伸展筋力の変化率(β＝0.51，P＜0.05)と換気効率(VE/VCO2 slope)の変化率(β＝-0.67，P＜0.01)が運動耐容能改善の独立した関連因子であることが明らかとなった． （共同発表者：Suzuki,Y.,Hieda,M.,Fujiwara,R.,Yamamoto,K.,Fukui,N.,Konishi,H.Arakawa,T.,Kumasaka,R.,Nakanishi,M.,Fukui,S.,Nakao,K.,Ohara,T.,Noguchi,T.,Yanase,M.,Ito,K.,Goto,Y.） （担当部分：計画と考察，研究指導）
3 Electromyography Activity of the Rectus Abdominis, Internal Oblique, and External Oblique Muscles During Forced Expiration in Healthy Adults （健常成人における努力性呼気時の腹直筋，内腹斜筋と外腹斜筋の筋電活動）	－	平成27年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2015 (Amsterdam)	呼気筋の筋活動パターンを筋電図を用いて呼気抵抗別に検討した．10%PEmax，20%PEmax,30%PEmaxの抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋,外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち,最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし,その活動量は30%PEmaxの負荷であっても20%MVC以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは30%PEmax程度の負荷が推奨されるが,生理学的な視点でみた場合,その負荷は弱すぎることが示唆された． （共同発表者：Ito,K.,Nonaka,K.,Ogaya,S.,Horie,J.） （担当部分：データの解析，考察，学会発表）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 Validity and Intra-class Reliability of Spirometry Using a Mask Instead of a Mouthpiece （マウスピースの代わりにマスクを用いたスパイロメータの信頼性と妥当性）	－	平成28年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2016 (London)	本研究の目的はマスクを用いたスパイロメトリの妥当性と再現性を明らかにすることである．筒型マウスピースの代わりにマスクを用いて肺機能を測定した結果，妥当性と再現性が確認できた．このことから，スパイロメトリの際に筒型マウスピースの代わりにマスクを用いることが可能であると考えられた．但し，データの取り扱いに関しては一次回帰式で補正する必要がある．また，今回の結果は安静時計測の結果であり，背景に記した運動時評価における妥当性と再現性の検討は今後の課題である． （共同発表者：Ito,K., Nonaka,K., Takeda,S., Nishikawa, T.,Anami,K., Horie,J., Tsujishita,M., Kawamura,H.） （担当部分：データの解析，考察，学会発表）
5 Assessment of the mechanism underlying the improvement in ventilation efficiency induced by phasic electrical stimulation during expiration in patients with chronic obstructive pulmonary disease. （慢性閉塞性肺疾患患者に対する呼息時電気刺激がもたらす換気効率の改善機序）	－	平成29年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2017 (Milan)	本研究の目的はCOPD患者に対する呼息時電気刺激（PESE）が換気効率を改善する機序を明らかにすることである．対象は35名の外来COPD患者で電気刺激を行わない，電極を設置しただけの群（sham control）と呼息筋である腹直筋に対して電気刺激を行う群（R-PESE），呼息に関係の無い腕橈骨筋に対し電気刺激を行う群（B-PESE）の３群に無作為に割り付けた．各群とも安静時の換気機能指標の計測の後，各群の介入下に軽い運動を行い換気機能指標を計測した．本研究の結果よりPESEの効果は呼息筋に対する機能的電気刺激としての効果ではなく，呼息を促すbiofeedbackの効果であることが明らかとなった． （共同発表者：Ito,K., Nonaka,K., Nozoe,T., Shiranita,S.,Horie,J.,Shimizu,G.,Ogi,A., Okuda,M.,Watanabe,N.） （担当部分：データの解析，考察，学会発表）
6 Analysis of changes in clinical characteristics of patients with COPD or interstitial pneumonia during a 6-minute walk test （COPDと間質性肺炎の6分間歩行中の臨床的特性）	－	令和２年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2020 (Wien)	本研究の目的は，COPD患者と間質性肺炎の患者の臨床的特性をあきらかにすることである． COPD患者では，6分間歩行前後のICの有意な減少が認められた（$p < 0.05$）． 間質性肺炎患者では，歩行の開始から終了まで呼吸数ががCOPD患者よりも有意に高い値を示した（$p < 0.05$）．経時的変化の特徴は，ほとんどすべての値が開始から3分まで有意な変動を示したが，その後定常状態に達したということでした．結果よりCOPDでのみに6分間の歩行テスト中に，動的過膨張が認めらた．浅速呼吸は間質性肺炎でのみに認められた．また，歩行開始後3分以内に各特性が現れることが観察された． （共同発表者：Ogi,A.,Enoki,T., Matsumoto,T.,Ito,K.,Shimizu,G., Okuda,M.,Tanaka,N., Fukuda,K.,Nohara,R.）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
〈国内学会〉				
1　高齢COPD患者に対する呼息時低周波電気刺激の効果	－	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会 （名古屋）	24名の高齢COPD患者に対して呼息時低周波電気刺激（PESE）を用い，その効果を，安静時および運動時の換気機能や酸素摂取量に着目し検討した．本研究の結果よりPESEが安静時および運動時の換気効率を改善することが明らかとなった．また，その際にはPESEが仕事量増大の指標になり得るVO2／Wの増大を誘発しないことが証明された． （共同発表者：伊藤健一，野中紘士，濃添建男，奥田みゆき，川村博文） （担当部分：研究企画と資料の収集，データ解析，学会発表）
2　胸腔鏡下肺葉切除術（VATS）後1ヵ月時におけるATポイントでのMETsの差異で術前の身体機能に違いはあるか？	－	平成26年9月	第33回日本臨床運動療法学会学術集会（大阪）	本研究の目的は，胸腔鏡下肺葉切除術（以下，VATS）後1ヵ月時におけるATポイントでのMETsの差異で術前の身体機能に違いがあるか検証することである．対象はVATSが施行された23名，年齢70.5±7.3歳であった．3.1METs以上群（12名）と3METs以下群（11名）に分け術前身体機能を比較した結果，3METs以下群は有意に体重比膝伸展筋力が低値を認めたが，それ以外には有意差を認めなかった．結果より術後に安全かつ効率的な運動ができるためには下肢筋力が重要であることが明らかとなった． （共同発表者：阿波邦彦，平山善康，堀江淳，太田垣あゆみ，松井萌恵，田中宇大，山下直己，伊藤健一） （担当部分：計画と考察，研究指導）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3　室内有酸素運動における映像の効果	－	平成26年9月	第33回日本臨床運動療法学会学術集会（大阪）	トレッドミルを用いた屋内有酸素運動中の「映像視聴」が及ぼす身体への影響について検討した．24名の健常女子大学生を映像視聴「あり」群と「なし」群の２群に割り付けトレドミル歩行を行い,疲労指標や呼吸代謝指標,換気能力指標を測定した．身体的疲労感と精神的疲労感はともに2群間で有意な差は認められなかった．一方でVO2,METS,EEについては,いずれも「あり」群が「なし」群に比べ有意に高い値を示した．本研究結果から,運動中の映像視聴は映像「なし」での運動と変わらぬ疲労感で効率の良い運動が可能となることが示唆された． （共同発表者：小西隆幸，杉山友香，谷口結子，藤井愛美，野中紘士，伊藤健一） （担当部分：計画と考察，研究指導）
4　エアマットレスが臥床時の「換気」を制限するか：健常者による基礎的研究	－	平成26年10月	第24回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（奈良）	健常者を対象に，エアマットレスが臥床中の呼吸機能に与える影響を明らかにした．対象者にはエアマットレスと標準マットレス上にて臥位を取らせ，一回換気量，呼吸数などの呼吸機能を測定し比較した．エアマットレス上臥位と標準マットレス上臥位の間で呼吸機能に有意差は認められなかった．胸郭のコンプライアンスの良い者についてはエアマットレスを使用しても，呼吸機能に変化を及ぼさないことが明らかになった． （共同発表者：井上貴裕，伊藤健一，野中紘士） （担当部分：計画とその解析，考察，研究指導）
5　胸腔鏡下肺葉切除術後患者における身体能力および健康関連QOLの縦断的変化の検証	－	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会（東京）	本研究は，VATS前後から術後1ヵ月にかけての身体能力および健康関連QOLの変化を前向きに検討した．対象は30名で年齢72.3±7.2歳であった．反復測定分散分析の結果，呼吸機能は低下したままだが，運動耐容能は術後1ヵ月で術前の値まで回復することが示唆された．しかしながら，健康関連QOLは1ヵ月では完全に回復しないことが明らかとなった．そのため退院前指導をはじめとした健康関連QOLを考慮した指導等の必要性が示唆された． （共同発表者：阿波邦彦，平山善康，山下直己，堀江淳，太田垣あゆみ，松井萌恵，出見世真人，佃陽一 ，伊藤健一） （担当部分：計画とその解析，考察，研究指導）
6　強制呼気筋の強度別筋活動パターンの解明：無作為割付，シングルブラインドによる検討	－	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会（東京）	呼吸リハビリテーションにおける呼吸筋トレーニングを効率良く実施するために,強度別筋活動パターンを筋電図を用いて検討した．10%PEmax,20%PEmax,30%PEmaxの抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋,外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち,最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし,その活動量は30%PEmaxの負荷であっても20%MVC以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは30%PEmax程度の負荷が推奨されるが,生理学的な視点でみた場合,その負荷は弱すぎることが示唆された． （共同発表者：大木敦司，松中千明，野中紘士，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察，研究指導）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7　心不全を伴う透析関連低血圧患者の特徴（第1報）	－	平成27年7月	第21回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（福岡）	本研究の目的は透析関連低血圧患者の特徴を明らかにすることである．対象は当院外来透析患者のうち，研究の同意が得られた高齢心不全患者14名とし，透析中に収縮期血圧が20mmHg以上低下し，100mmHg未満となる血圧低下群7名と対照群7名の2群に分け，身体機能などを比較検討した．対照群と比較し，血圧低下群では蛋白異化率が有意に低値であったことから，透析関連低血圧患者の特徴として，蛋白摂取量が低い傾向であり栄養障害のあることが示唆された． （共同発表者：山下真由子，寺崎珠，中瀬理恵，杉本篤子，木下千春，神田豊子，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察，研究指導）
8　冠動脈疾患患者の心臓リハビリテーション後の体重増加は全て悪か？：筋力・体組成からの検討	－	平成27年7月	第21回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（福岡）	心臓リハビリテーション(心リハ)に参加した冠動脈疾患(CAD)患者の体重増加について検討した．心リハ後に体重が増加した50例のうち膝伸展筋力改善10%以上の18例を筋力増加群，10%未満の32例を増加不良群とした．両群ともに膝伸展筋力と骨格筋量 は心リハ後に有意に増加したが，各増加率は筋力増加群が不良群より有意に大きかった．さらに，筋力増加群では体脂肪量は不変で，運動耐容能が有意に改善したが，不良群では体脂肪量が有意に増加し，運動耐容能に有意な増加は見られなかった．下肢筋力増加を伴う体重増加は「良い体重増加」であることが明らかとなった． （共同発表者：鈴木裕二，山本壱弥，福井教之，柳英利，北垣和史，小西治美，稗田道成，藤原玲子，荒川鉄雄，熊坂礼音，福井重文，大原貴裕，簗瀬正伸，中尾一泰，中西道郎，伊藤健一，後藤葉一） （担当部分：計画と考察，研究指導）
9　透析低血圧患者における透析施行中の低負荷レジスタンストレーニングの効果	－	平成28年3月	第6回日本腎臓リハビリテーション学会（岡山）	透析低血圧患者の血圧や運動機能が３か月間低負荷レジスタンストレーニング（RT）により改善するかを検討した。血圧については，変化は認められなかった．歩行速度については，介入前後で対照群で有意な低下が認められたが，RT群では維持された．また，身体活動量については，介入前後で対照群では有意な変化は認められなかったが，RT群では有意な増加が認められた．運動に対する行動変容ステージについても，RT群では介入前後で有意に増加し，運動に対するアドヒアランスの有意な改善が認められた．結果より今回のRTが運動機能の維持や身体活動量，運動に対するアドヒアランスの改善において有用であることが明らかとなった． （共同発表者：山下真由子，木下千春，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10　肺がん患者の健康関連QOLと身体能力の術後回復過程	－	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会 （札幌）	本研究は，胸腔鏡下胚葉切除術を受ける肺がん患者に対し，術前から術後3ヵ月にかけて健康関連QOLおよび身体能力の変化を前向きに検証した．結果，肺がん患者の身体能力は術後1カ月足らずで回復することが確認できたが，健康関連QOL（SF-36 PCS）は術前の状況まで回復するのに3ヵ月以上を要することが明らかとなった．つまり，身体能力を維持・向上させるだけでは健康関連QOL対策としては不十分であることが示唆された． （共同発表者：阿波邦彦，平山善康，山下直己，堀江淳，太田垣あゆみ，松井萌恵，出見世真人，佃陽一，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察）
11　食道がん切除再建術後患者の生存期間に影響を及ぼす因子の検討―手術後におけるQOL，身体機能改善への後追試的研究―	－	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会 （札幌）	食道がん切除再建術後患者の生存期間に関与する因子を対象の36名を生存群・死亡群に分け比較検討した．結果，術後1年でのAlbが死亡群で低値，術前のがん進行度が重症な者ほど生存期間が短かった．死亡群で生存期間が術後1年程の者も多く．術後におけるパラメータからは生存期間予測は困難であった．がん進行度が重症であれば，術後の生存期間が短い可能性があり，周術期から生存期間も考慮した理学療法を実施する必要性がある． （共同発表者：髙畑晴行，脇田正徳，伊藤健一，金光浩，長谷公隆） （担当部分：研究計画とデータの解析，考察）
12　減量に成功した肥満を有する冠動脈疾患患者の運動耐容能変化が筋力・体組成に及ぼす影響	－	平成28年7月	第22回日本心臓リハビリテーション学会学術集会 （東京）	心臓リハビリテーション参加後に減量したBMI25以上の肥満を有する冠動脈疾患患者50例を，運動耐容能(PVO2) 増加率が5%以上の33例(PVO2改善群)と，5%未満の17例(非改善群)に分け，体組成，筋力変化を比較した．PVO2改善群では，PVO2改善(改善率 +17%，p＜0.01)に伴い，下肢筋肉量(15.4→15.8kg，p＜0.01)と膝伸展筋力(41.4→44.4kg，p＜0.01)が有意に改善したのに対し，PVO2非改善群(PVO2改善率 -4%，NS)では下肢筋肉量，膝伸展筋力とも有意な増加を示さなかった． （共同発表者：鈴木裕二，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，伊藤健一，小西治美，稗田道成，藤原玲子，渡慶次竜生，伊達歩，熊坂礼音，荒川鉄雄，中西道郎，大原貴裕，高潮征爾，中尾一泰，福井重文，簗瀬正伸，後藤葉一） （担当部分：データの解析，考察）
13　食道がん患者における術前の運動習慣と 術後呼吸機能・健康関連QOLとの関連	－	平成28年10月	第26回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 （横浜）	本研究の目的は食道がん患者における運動習慣が身体機能，QOLに与える影響を検討することである．食道がん切除術を受ける15名の患者に対し，手術前と退院時の行動変容ステージ，膝伸展筋力，6分間歩行距離，咳嗽時最大呼気流量（PCF），最大呼気流量（PEF），健康関連QOLを測定した．結果を運動実行群と非実行群の2群に分けて検討した．運動習慣と術後のQOLに関連性は認められなかったが，運動習慣のある者は術前PCF・PEF，術後PEFが有意に高かった．このことから，運動習慣は食道がん術後経過に良い影響を及ぼす可能性が示唆された． （共同発表者：髙畑晴行，濱田真一，金光浩，伊藤健一，長谷公隆） （担当部分：データの解析，考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14　マスクを用いたスパイロメトリの妥当性と信頼性	－	平成28年10月	第26回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（横浜）	本研究の目的はマスクを用いたスパイロメトリの妥当性と再現性を級内相関やブランド・アルトマンプロットにより明らかにすることである．筒型マウスピースの代わりにマスクを用いて肺機能を測定した結果，妥当性と再現性が確認できた．このことから，スパイロメトリの際に筒型マウスピースの代わりにマスクを用いることが可能であると考えられた．但し，データの取り扱いに関しては一次回帰式で補正する必要がある．また，今回の結果は安静時計測の結果であり，背景に記した運動時評価における妥当性と再現性の検討は今後の課題である． （共同発表者：伊藤健一，野中紘士，武田匠平，西川剛史，奥田みゆき） （担当部分：データの解析，考察，発表）
15　筋骨格シミュレーション解析を用いた変形性膝関節症患者の歩行時膝伸展パターン分類	－	平成28年12月	第3回日本運動器理学療法学会学術集会（金沢）	本研究の目的は変形性膝関節症患者が歩行中にどの筋を使って膝を伸展させるのかを調べ，代償動作のパターンを分類することである．計測された歩行の運動学・運動力学データを元に多関節運動モデルを用いたシミュレーション解析を行った結果，１．大殿筋の活動増加，２．ヒラメ筋の活動増加，3．前脛骨筋の活動減少，の3つの膝伸展代償パターンに分類できることがわかった．また，大殿筋で膝伸展を代償するパターンは他2群よりも歩行速度が高いことがわかった．この結果より，大殿筋による大腿骨の後方回旋で膝を伸展させる作用が，変形膝関節症患者の歩行速度を維持するのに重要であることが明らかとなった． 本発表で学術大会賞を受賞している． （共同発表者：小栢進也，久保田良，中條雄太，金光浩，伊藤健一，長谷公隆） （担当部分：研究デザイン，考察）
16　運動メニューの順序変更が心臓リハビリテーションの円滑な進行に有効であった高度心機能低下DCMの一例	－	平成29年2月	日本心臓リハビリテーション学会第2回近畿地方会（大阪）	今回，高度心機能低下若年DCM症例の心臓リハビリテーション（心リハ）を経験した．症例は25歳女性，23歳時にDCMと診断され，今回心不全増悪にて入院となった．心リハ開始時の左室駆出率は25%，BNP980pg/mlであった．心リハ実施中に血圧低下，眩暈がしばしば出現し，心リハ進行が困難であった．そこで，運動メニューの順序として有酸素運動の実施前に低強度レジスタンストレーニングを先行させたところ，低血圧症状は軽減し，心リハ3ヶ月終了時にはPeakVO2が＋37.7%，等尺性膝伸展筋力が＋17.9%と良好に増加した． （共同発表者：鈴木裕二，伊藤健一，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，小西治美，渡慶次竜生，伊達歩，熊坂礼音，荒川鉄雄，三浦弘之，長谷川拓也，中尾一泰，福井重文，築瀬正伸，中西道郎，後藤葉一） （担当部分：データの解析，考察，発表）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
17　食道がん切除再建術患者における術前身体活動量が術後の身体機能と健康関連QOLに与える影響	－	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	本研究の目的は食道がん患者における手術前の身体活動量が，術後の身体機能,健康関連QOLに与える影響を検討することである．術前の活動量が1日3METs･時間以上の活動している群の方が，以下の群よりも手術前では等尺性膝伸展筋力，6分間歩行距離，身体的QOLサマリースコアが有意に高く，術後では等尺性膝伸展筋力のみ有意に高い結果となった．食道がん切除再建術は高侵襲を伴う手術であるため，身体機能のなかでも心肺機能と関連する運動耐容能の低下がQOLの低下に影響する可能性がある．今後は，術前，周術期，退院後において運動耐容能を高めるための理学療法介入の有効性について検討する必要がある． （共同発表者：髙畑晴行，濱田真一，清水遼子，脇田正徳，金光浩，伊藤健一） （担当部分：研究の計画立案と考察，指導）
18　CABG後患者の心臓リハビリでの運動耐容能改善規定因子はAMIと異なるか―重回帰分析による検討―	－	平成29年7月	第23回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（岐阜）	心臓リハビリテーション（心リハ）に参加した，冠状動脈バイパス術後（CABG）症例61例と急性心筋梗塞（AMI）症例91例の運動耐容能改善規定因子について検討した．CABG症例の運動耐容能改善規定因子は，心リハ開始前後の膝伸展筋力の変化率，血中ヘモグロビンの変化値，心リハ開始時の血中脳性ナトリウム利尿ペプチド（BNP）値であった．AMI症例の運動耐容能改善規定因子は，心リハ開始時の運動耐容能の%予測値であった． （共同発表者：鈴木裕二，伊藤健一，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，小西治美，渡慶次竜生，伊達歩，熊坂礼音，荒川鉄雄，三浦弘之，長谷川拓也，中尾一泰，福井重文，簗瀬正伸，中西道郎，後藤葉一） （担当部分：考察と指導）
19　体重200kgを超える肥満肺胞低換気症候群の症例を如何に運動療法に繋げるか	－	平成29年9月	第36回日本臨床運動療法学会（大阪）	体重が200kgを超える肥満肺胞低換気症候群患者に対し，理学療法の位置づけを考察しながら減量できた症例の経過について報告した．症例は30歳男性，体重は239kgでBMIは78であった．入院当初より低酸素血症と肺高血圧症，重度右心不全が認められた．動作レベルは寝返り，起き上がりが何とかできる程度であった．減量目的の介入が不可欠であったが，立ち上がりができなかったことからセザムベッドによる立ち上がり介助を行い，立位・歩行練習へと繋げていった．歩行距離も順調に延長することができ，170kgまで減量ができたため，自宅退院となった．一般的な肥満患者の理学療法プログラムでは減量目的の有酸素運動が主となるが，今回のような症例では基本動作から歩行までの手段を工夫し，担保する事が重要である． （共同研究者：大木敦司，伊藤健一，清水学，原智恵，林祐司，春名克純，奥田みゆき） （担当部分：治療介入と考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
20　体重200kgを超える肥満肺胞低換気症候群の１例：理学療法の位置づけ	－	平成29年10月	第66回共済医学会学術集会（京都）	体重が200kgを超える肥満肺胞低換気症候群患者に対し，理学療法の位置づけを考察しながら減量できた症例の経過について報告した．症例は30歳男性，体重は239kgでBMIは78であった．入院当初より低酸素血症と肺高血圧症，重度右心不全が認められた．動作レベルは寝返り，起き上がりが何とかできる程度であった．減量目的の介入が不可欠であったが，立ち上がりができなかったことからセザムベッドによる立ち上がり介助を行い，立位・歩行練習へと繋げていった．歩行距離も順調に延長することができ，170kgまで減量ができたため，自宅退院となった．一般的な肥満患者の理学療法プログラムでは減量目的の有酸素運動が主となるが，今回のような症例では基本動作から歩行までの手段を工夫し，担保する事が重要である． （共同研究者：大木敦司，伊藤健一，清水学，原智恵，林祐司，春名克純，奥田みゆき） （担当部分：治療介入と考察）
21　当院における「できるADL」と「しているADL」の検討	－	平成29年10月	第66回共済医学会学術集会（京都）	研究の目的は枚方公済病院における「屋内移動」と「トイレ」に関する「できる」「している」の乖離度合いを調査し，早期退院につなげる方策を検討することである．過去にリハビリテーションの依頼のあった310名の患者カルテから「屋内移動」と「トイレ」に関する「できる」・「している」について調査した．「できる」・「している」の乖離は7病棟中3病棟で存在していた．この3病棟は認知症患者を多く抱える病棟で，患者の転倒を避けるが故の乖離であることが推測できた．このことから認知症患者の病棟内移動手段の決定には病棟看護師と理学療法士の密なコミュニケーションと共通の基準を設ける必要性が示唆された． （共同発表者：木村拓磨，大木敦司，池島浩司，井上悟，吉本拓登，能勢亜友子， 伊藤健一，奥田みゆき） （担当部分：考察と発表指導）
22　COPD患者の換気効率を改善する呼息時電気刺激はどこを刺激すべきか	－	平成29年11月	第27回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究の目的はCOPD患者に対する呼息時電気刺激(PESE)の刺激部位を特定することである．対象者は35名のCOPD患者である．対象者は電極を設置しただけの群と呼息筋である腹部筋に対して刺激を行う群，呼吸運動に関係の無い前腕部に対し刺激を行う群の3群に割り付けられた．対象者にはエルゴメータ運動を課し，種々の換気指標を計測した．結果よりPESEの効果は呼息筋に対する機能的電気刺激としての効果ではなく，呼息を促すbiofeedbackの効果であることが示唆された． よって刺激部位は腹部でなく，露出しやすい前腕部でも良いことが明らかとなった． （共同発表者：伊藤健一，野中紘士，白仁田秀一，堀江淳，清水学，大木敦司，奥田みゆき） （担当部分：研究デザインと介入，考察，発表）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23　臥位での運動療法が生きることを支援した終末期間質性肺炎の一例	－	平成29年11月	第27回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（仙台）	Platypnea-Orthodeoxia症候群（POS）を有する肝肺症候群の理学療法について報告した．症例は50代男性で診断名は間質性肺炎急性増悪，既往歴として肝硬変を有していた．呼吸苦により他院で上記診断．入院時血ガスは酸素4LでPCO2 33.6torr，PO2 55.2torrであり胸部CTでは両側下背野に網状影.を認めた．オキシマイザー+酸素6Lで臥位ではSpO2は97%を維持できたが，起坐位ではSpO2が70%台となるPOSを認めた．理学療法はPOSを許容した上で屋内短距離移動の獲得を目的に臥位での筋力トレーニングを行った．連続歩行は20mまでとし,退院後は訪問サービスで管理することで53病日オキシマイザー+酸素6LのHOTを使用し自宅退院となった. （共同発表者：大木敦司，伊藤健一，清水学，林祐司，木戸悠人，川田富美子，奥田みゆき） （担当部分：治療介入と考察）
24 肺がん術後に乳糜胸を合併した，認知機能障害がある高齢者に対する多職種での関わりが有効であった一例	－	平成29年11月	第27回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（仙台）	症例は80歳台女性で，肺炎加療中に左肺腫瘍が見つかり左上葉切除を施行した．術後に乳糜胸を認めた．乳糜胸の治療は安静による保存療法が一般的であるが，本症例は認知症を合併していたため，更なる機能低下を懸念し他職種間で綿密な情報交換を行いながら積極的なチームアプローチを行った．結果，スムーズに退院に繋げることができた. （中村佳菜子，松島裕美,糸賀詩織,能勢亜友子,田中順也,奥田みゆき,渡邊明,伊藤健一,上田 耕平,辻是道） （担当部分：理学療法の介入と考察）
25　心不全入院時における身体的フレイル指標の推移	－	平成30年2月	日本心臓リハビリテーション学会第3回近畿地方会（神戸）	フレイルの基礎研究として心不全入院時の身体機能の実態を調査した．急性心不全あるいは慢性心不全急性増悪で入院してきた患者で，入院前に屋内歩行が可能でshort physical performance batteryを測定した患者212名が対象である．これら対象者を低機能群，中間機能群，高機能群の3群に分け，それぞれの群毎に退院時に機能改善の認められた割合を調査した．低機能群のうち機能回復を示した割合は60.3%，中間機能群では57.1%，高機能群では0%であった．入院時に身体的フレイルが認められた者のうち，低機能群・中間機能群においてはリハビリテーションの介入で50%以上の者に身体機能の改善が認められた．また，高機能群においては入院時の機能が維持できていたことが明らかとなり，フレイルに対するリハビリテーションの介入効果が明らかとなった. （共同発表者：池田力，岩津弘太郎，芦川博信，松村幸一，坂本真実，伊藤健一，中野南帆子，阪田智子，原谷こずえ，高林健介，藤田亮子，北口勝司，野原隆司） （担当部分：考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
26 心臓サルコイドーシス患者における心臓リハビリテーションの有効性	－	平成30年7月	第24回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（横浜）	心臓リハビリ3ヶ月プログラムとCPXを実施している21名の心臓サルコイドーシス患者に対する心臓リハビリテーション（心リハ）の有効性と安全性について検討した．検討した項目は最高酸素摂取量と等尺性膝伸展筋力，血液データである．結果より心臓サルコイドーシス患者では心リハ導入により運動耐容能は改善するが，開始時BNPの高値例では運動耐容能の改善は乏しいことが明らかとなった．また，有害事象も認められなかったことより心臓サルコイドーシス患者の心リハの有効性と安全性が示唆された． （共同研究者：鈴木裕二，伊藤健一，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，島田幸洋，小西治美，荒川鉄雄，中尾一泰，長谷川拓也，福井重文，三浦弘之，中西道郎） （担当部分：考察）
27　COPD患者に対する呼息時電気刺激が動的肺過膨張に及ぼす影響：パイロットスタディ	－	平成30年11月	第28回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（幕張）	研究の目的はPESEの動的肺過膨張への影響を明らかにすることである．外来COPD患者６名に対して６分間歩行を呼息時電気刺激を行う「介入あり」と「介入なし」の２条件下に実施した．その際に最大吸気量(IC)と分時換気量(VE)，呼吸数(RR)，酸素飽和度(SpO2)，自覚的運動強度(Borg scale)を計測した．IC，VE，RR，SpO2，Borg scaleのいずれの評価項目においても有意な差は認められなかった．効果量についてはBorg scaleで効果量「大」であった．呼息時電気刺激は動的肺過膨張を抑制することはできなかったが，息切れの軽減に有用である可能性が示唆された． （共同研究者：伊藤健一，大木敦司，清水学，奥田みゆき） （担当部分：デザイン，考察，発表）
28　安定期呼吸器疾患の身体活動量及び生活空間の広がりと運動機能の関連	－	平成30年11月	第28回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（幕張）	外来リハビリテーションを実施している安定期呼吸器疾患患者70名を対象に，身体活動量及び生活空間の広がり（IPAC）と運動機能（膝伸展筋力，SPPB，6MD）の関連について調査検討した．結果より安定期呼吸器疾患患者の外出頻度にはバランス等のパフォーマンス能力が関与し，身体活動量には運動耐容能が関与することが明らかとなった． （共同研究者：大木敦司，清水学，伊藤健一，松本美希子，高橋留佳，池田力，奥田みゆき） （担当部分：考察）
29　在宅酸素療法（HOT）使用者における酸素ボンベと液体酸素デバイス間の患者特性	－	令和元年11月	第29回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（名古屋）	研究の目的はHOT適応者において，酸素ボンベと液体酸素各々の使用者の特性を明らかにすることである．51名のHOT適応患者において年齢，肺機能，酸素流量，上下肢筋力，６分間歩行距離，身体活動量，ADL能力，認知機能について評価した．結果，液体酸素使用群において上下肢筋力，身体活動量，認知機能において有意に勝っていた．これらの結果は酸素デバイスを選択する際に役立つものと考えられた． （共同研究者：清水学，大木敦司，池田力，伊藤健一，森山久美子，高橋留佳，上田耕平，木戸悠人，福田康二，奥田みゆき） （担当部分：考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
30　高齢安定期呼吸器疾患の身体活動量を規定する因子	－	令和元年11月	第29回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（名古屋）	研究の目的は高齢安定期呼吸器疾患の身体活動量を規定する因子を明らかにすることである．外来呼吸リハを実施している92名の患者に対し，SPPB，NRADL，HADS，MMSE，LSAを評価し，LSAを目的変数として重回帰分析を行った．結果，SPPBとNRADLが身体活動量を示すLSAを規定する因子として抽出された．高齢安定期呼吸器疾患の身体活動量を向上させるには息切れのコントロールを含めたADL能力とパオーマンス能力の向上が重要であることが示唆された． （共同研究者：大木敦司，清水学，伊藤健一，森山久美子，高橋留佳，池田力，奥田みゆき） （担当部分：考察）
31　地域在住呼吸器患者におけるCOVID-19流行期の状況調査ー身体活動性と各指標の関連ー	－	令和3年3月	第30回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（京都）	研究の目的はCOVID-19流行期の地域在住呼吸器患者の身体活動性と関連する要因を分析することである．感染予防対策の記載は手洗いやうがいが5割以上であり，運動習慣の記載はストレッチやスクワットが3割り程度であった.Life-Space Assessmentと性別,BMI,要介護度に有意な相関を認めた.COVID-19流行期において,呼吸器患者の身体活動性は低値であり,Life-Space Assessmentが低値な者は女性,低BMI，要介護度が高いという特徴が明らかとなった. （共同研究者：大木敦司，清水学，上田耕平，伊藤健一，池田力，奥田みゆき） （担当部分：考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
〈研修会〉 1　心臓リハビリテーション：入門のためのミニマムエッセンス	－	平成25年9月	平成25年度　佐賀県理学療法士会研修会（佐賀）	新人理学療法士に向け，近年急速にニーズが高まってきた心臓リハビリテーションを実施するにあたり，最低限押さえておかなければならない基礎知識，リスク管理，評価，運動療法プログラムについて,そのエッセンスについて提示した. （伊藤健一） （担当部分：研究企画と資料の収集，データ解析，発表）

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　5年　3月　31日

氏名　　大浦　智子

研究分野	研究内容のキーワード
公衆衛生学，疫学，作業療法学	健康情報学，作業療法学，ヘルスコミュニケーション

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）双方向授業の実践と演習・実習の効果的な活用	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の専任教員として担当の「基礎ゼミⅡ」（1年次）において，文献検索やMicrosoft Office Word，Excel，PowerPointの操作における課題教材の提示と演習により，スキルの修得を図った．適時，発表とフィードバックの機会を提供し，双方向授業を実践した．
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「基礎作業学」（2年次）において，基礎作業学の理解を深めるための演習を行い知識の定着につなげた．適時，発表とフィードバックの機会を提供するとともに，ICTを活用した予習や復習，課題実施状況をふまえた授業を展開し，双方向授業を実践した．
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「地域作業療法学Ⅰ」（2年次）において，地域作業療法学の理解を深めるための課題教材に加え，発表とフィードバックの機会を提供するとともに，ICTを活用した予習や復習，課題実施状況をふまえた授業を展開し，双方向授業を実践した．
	令和2年4月 ～ 令和3年3月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「疫学」（看護学科2年次）において，疫学の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげるとともに，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた（オンデマンド動画）．適時，ICTを活用したフィードバックを行い，課題実施状況をふまえた授業を展開し，双方向授業を実践した．
	令和2年4月 ～ 令和3年3月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の保健師国家試験対策（看護学科4年次）において，保健師国家試験に向けて疫学の理解を深めるための事前学習課題の活用と，演習形式のフィードバックと講義に応じたスライドにより，知識の定着につなげた．
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「老年期障害作業療法学Ⅰ（総論）」（3年次）において，老年期障害作業療法学の全体的理解を深めるための課題教材の活用に加え，適時，発表とフィードバックの機会を提供するとともに，ICTを活用した予習や復習，課題実施状況をふまえた授業を展開し，双方向授業を実践した．

事項	年月日	概　　要
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「老年期障害作業療法学Ⅱ（各論）」（3年次）において，老年期障害作業療法学各論の理解を深めるための課題教材の活用に加え，適時，発表とフィードバックの機会を提供するとともに，ICTを活用した予習や復習，課題実施状況をふまえた授業を展開し，双方向授業を実践した.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「作業療法研究法」（3年次）において，作業療法研究法の理解を深めるための課題教材の活用に加え，適時，発表とフィードバックの機会を提供するとともに，ICTを活用した予習や復習，課題実施状況をふまえた授業を展開し，双方向授業を実践した.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「作業療法学特論Ⅳ」（3年次）において，作業療法学特論Ⅳとして老年期障害の作業療法の理解を深めるための課題教材の活用に加え，適時，発表とフィードバックの機会を提供するとともに，ICTを活用した予習や復習，課題実施状況をふまえた授業を展開し，双方向授業を実践した.
2）演習・実習の効果的な活用とパワーポイントの効果的活用	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「基礎作業学」（2年次，専門科目）は，作業療法の基礎となる作業活動，理論，作業分析を理解するための科目である．補充資料に加えて体験型の演習および分析を伴う実習を取り入れ，アクティブラーニングを促進した.これにより，個々の学生の学習到達度を高めることができた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「地域作業療法学」（3年次，専門科目）は，地域生活者である対象者の理解と地域における作業療法実践の理解を深める科目である．講義に加えて適宜外部講師を招聘し，演習や事例検討を加え，地域リハビリテーションや地域作業療法，在宅サービスを理解するためのアクティブラーニングを促進した。これにより，個々の学生の学習到達度を高めることができた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「地域作業療法学演習」（3年次，専門科目）は，地域生活者の疾病・障害の予防や地域集団に対する予防教育に関する理解を深める科目である．健康行動理論や予防の考え方に関する講義のほか，介護者支援代表や行政で働く作業療法士を適宜招聘するとともに，行政と連携した地域住民対象の介護予防事業等を通して，地域リハビリテーションや地域作業療法，在宅サービスの理解を高めることができた.

事項	年月日	概　　要
3) 課題・レポートの調整と演習・実習の効果的な活用	平成22年4月 ～ 平成27年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「身体障害作業療法学実習」（3年次，専門科目）は，身体障害領域の作業療法実践の実際を理解するための科目である．主にリスク管理に関する講義および観察・面接の演習とフィードバックを担当し，疾患に応じた評価・治療計画を立案し，症例レポート作成に至るアクティブラーニングを促進した.これにより，個々の学生の学習到達度を高めることができた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学研究法演習」（3年次，専門科目）は，講義および文献抄読等を通して，学生自ら卒業研究計画を立案する科目である.具体的な研究計画事例の提示とともに，実際の研究計画を立てる課題とフィードバックにより，研究計画手順の習得を図った．これにより，個々の学生が研究倫理を理解し，研究計画書を作成することができた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学研究法特論」（4年次，専門科目）は，学生自身が卒業研究の実施と論文を執筆する過程を習得するための科目である．学士能力として研究の実施・論文執筆・プレゼンテーション能力を修得できるよう支援した．これにより，個々の学生が研究を手順に沿って実施、分析、考察することで研究の手順に対するの理解を高めることができた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅰ」（2年次，専門科目）は，病院や施設において1週間を通じて臨床実習指導者である作業療法士のもとで作業療法の役割の理解を深め，作業療法の実際を見学する科目である．臨床実習中および実習セミナーにおける指導により，臨床実習指導者のもとでの病院や施設および作業療法の役割について理解を深められるよう支援した.これにより，学生の実習における学習到達度を高めることができた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅱ」（3年次，専門科目）において，病院や施設において3週間を通じて臨床実習指導者である作業療法士のもとで対象者の評価，目標設定，記録報告等を習得する科目である．臨床実習中および実習セミナーにおける指導により，疾患や障害，作業療法評価，作業療法の目標設定について理解を深められるよう支援した.これにより，学生の実習における学習到達度を高めることができた.

事項	年月日	概　　要
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅲ-1」（4年次，専門科目）は，病院や施設において8週間を通じて臨床実習指導者である作業療法士のもとで対象者の評価，治療の立案，治療実施，記録報告等を習得する科目である．臨床実習中および実習セミナーにおける指導により，疾患や障害，作業療法評価，作業療法の目標設定，治療計画の立案および実施について理解を深められるよう支援した.これにより，学生の実習における学習到達度を高めることができた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅲ-2」（4年次，専門科目）は，病院や施設において8週間を通じて臨床実習指導者である作業療法士のもとで対象者の評価，治療の立案，治療実施，記録報告等を習得する科目である．臨床実習中および実習セミナーにおける指導により，疾患や障害，作業療法評価，作業療法の目標設定，治療計画の立案および実施について理解を深められるよう支援した.これにより，学生の実習における学習到達度を高めることができた.
	平成23年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学研究法」（3年次，専門科目）は，作業療法領域における研究の位置づけや手順を習得する科目である．講義にあわせた演習によって，研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）の理解を深めアクティブラーニングを促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	平成25年4月 ～ 平成28年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「情報処理演習Ⅱ」（1年次，教養科目）は，パワーポイントによるプレゼンテーション・スキルを習得するため科目である．課題の提示およびプレゼンテーション実践の場とした.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	平成26年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学特論Ⅳ」において，作業療法の歴史，作業療法の理論・モデルを理解・活用を深めるために，反転授業を取り入れるとともに，臨床実習担当事例の症例報告を活用した集団討議を通してアクティブラーニングを促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学セミナー 」（4年次，専門科目）は，作業療法士国家試験にむけた科目である．このうち，作業療法理論・研究法・管理・地域領域の知識の確認と理解を高めるための課題の提供と演習機会を設けた．これにより，学生の学習到達度を高めることができた.

事項	年月日	概　　要
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「情報処理演習」（1年次，教養科目）は，Microsoft Office Word，Excel，PowerPointの操作とプレゼンテーションの修得を図る科目である．課題の段階的提示と発表機会を設けアクティブラーニングを促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「地域リハビリテーション演習」（2年次，専門科目）は，地域リハビリテーションおよび集団を対象としたプログラムの立案を理解するための科目である．介護保険・総合支援事業関連施設におけるフィールドワークによって，実際場面での経験を通じた理解を高めることが出来た.
	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「基礎ゼミⅡ」（1年次，共通教育科目）は，大学での学び方を理解し，レポート作成・グループワークの実施・基本的なプレゼンテーションを身につける科目である．文献検索やレポートの作成，プレゼンテーションの実施によって，理解を高めることが出来た.
4）パワーポイントの効果的活用	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の　ほぼ全科目において，講義の進行をわかりやすくるるためのパワーポイントを作成した.特に，教科書を用いる場合においては教科書に沿って要点を示す，教科書以外の説明を加える場合には十分な時間をとって学生自身が記入しながら学習することが出来るように配慮して作成した．これにより，進行中の講義で示している箇所が明確となり，学生が配布資料に記載することも増え，理解を促進できた.
	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の科目において，講義の進行をわかりやすくるるためのパワーポイントを作成した.特に，教科書を用いる場合においては教科書に沿って要点を示す，教科書以外の説明を加える場合には十分な時間をとって学生自身が記入しながら学習することが出来るように配慮して作成した．これにより，進行中の講義で示している箇所が明確となり，学生が配布資料に記載することも増え，理解を促進できた.
5）実例提示の活用	平成28年4月 ～ 平成29年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の　「作業療法学概論」（1年次，専門科目）は，作業療法の理解を図る導入の位置づけの科目である．なかでも，作業療法士が働く分野とその役割について解説し，例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.

事項	年月日	概　　要
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「基礎作業学」（2年次）において，基礎作業学の理解を深めるため知識に関する教授に加えて実例を例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「地域作業療法学Ⅰ」（2年次）において，地域作業療法学の理解を深めるため知識に関する教授に加えて実例を例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「老年期障害作業療法学Ⅰ（総論）」（3年次）において，老年期障害作業療法学の全体的理解を深めるため知識に関する教授に加えて実例を例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「老年期障害作業療法学Ⅱ（各論）」（3年次）において，老年期障害作業療法学各論の理解を深めるため知識に関する教授に加えて実例を例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「作業療法研究法」（3年次）において，作業療法研究法の理解を深めるため知識に関する教授に加えて実例を例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「作業療法学特論Ⅳ」（3年次）において，作業療法学特論Ⅳとして老年期障害の作業療法の理解を深めるため知識に関する教授に加えて実例を例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
6）（院）パワーポイントの効果的活用	平成24年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員および京都大学大学院医学研究科の非常勤講師として担当の　ほぼ全科目において，講義の進行をわかりやすくるるためのパワーポイントを作成した.学生自身が記入しながら学習することが出来るように配慮して作成した．これにより，進行中の講義でのディスカッション機会を設けながら学生が配布資料に記載することも増え，理解を促進できた.

事項	年月日	概　　要
7)　(院) 演習・実習の効果的な活用と遠隔講義への対応	平成24年4月 ～ 平成26年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「生活行動科学特論Ⅱ」は，健康行動理論および作業療法理論の理解によって健康支援学をより深く探求する科目である．学びを深化させるための討議や発表機会により，学生の学習到達度を高めることができた．
	平成26年4月 ～ 平成27年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「生活環境学特論Ⅱ」は，社会の健康を支援する視点，制度的・文化的環境を含む健康支援の理解を深めるための科目である．課題準備を進めたが，開講無だった．
	平成26年4月 ～ 平成27年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「生活環境学演習」は，ヘルスコミュニケーションおよび論文の批判的吟味への理解を深めるための科目である．課題準備を進めたが，開講無だった．
	平成26年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「健康支援学研究法」（必修）は，大学院生としての研究手順を理解するための科目である．主に研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）について担当した．適宜演習を加えながら進めることで，学生の学習到達度を高めることができた．
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「生活行動支援学特論」（必修）は，社会の健康を支援する視点，ヘルスコミュニケーションを通じた健康支援の理解を深める科目である．学びを深化させるための議論の機会を設けることで，学生の学習到達度を高めることができた．
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「日常生活環境学特論」は，社会の健康を支援する視点，制度的・文化的環境を含む健康支援の理解を深める科目である．学びを深化させるために議論の機会を設けることで，学生の学習到達度を高めることができた．
8)（院）　課題・レポートの調整・活用と演習・実習の効果的な活用	平成28年4月 ～ 平成31年3月	京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻の非常勤講師として担当の「クリティカルケア看護学特論Ⅰ」（修士課程）（平成28・29年度）および「生活習慣病看護学特論」（博士後期課程）（平成30年度）は，疫学研究のデザインの理解を深めるための講義と研究仮説の立て方に関する演習科目である．演習を通じて，研究計画の立案への理解を促進し，学生の学習到達度を高めることができた．

事項	年月日	概　　要
２　作成した教科書，教材		
1）講義用補助教材	平成29年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「地域リハビリテーション演習」（2年次，専門科目）において使用した．補助教材を用いて修得を図った．
2）講義用教材とスライド	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「基礎作業学」（2年次，専門科目）において使用した．教科書に記載されていない内容を補充するためのも所教材を用いて，作業療法の基礎となる作業活動，理論，作業分析への理解を深めた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「地域作業療法学」（3年次，専門科目）において使用した．地域リハビリテーションや地域作業療法，在宅サービスへの理解を深めた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「地域作業療法学演習」（3年次，専門科目）において使用した．地域リハビリテーションや地域作業療法，在宅サービスを理解するために，スライドに加えてその元となった書籍等を提示し，理解を深めた.また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成23年4月 ～ 平成29年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学研究法」（3年次，専門科目）において使用した．研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成25年4月 ～ 平成28年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「情報処理演習Ⅱ」（1年次，教養科目）において使用した．パワーポイントによるプレゼンテーション・スキルを習得するための課題の設定により修得を図った.また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「情報処理演習」（1年次，教養科目）において使用した．Microsoft Office Word，Excel，PowerPointの操作における課題教材の提示と演習により，スキルの修得を図った．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．

事項	年月日	概　　要
	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の専任教員として担当の「基礎ゼミⅡ」（1年次）において使用した．文献検索やMicrosoft Office Word, Excel, PowerPointの操作における課題教材の提示と演習により，スキルの修得を図った．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「基礎作業学」（2年次）において使用した.基礎作業学の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「地域作業療法学Ⅰ」（2年次）において使用した.地域作業療法学の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	令和2年4月 ～ 令和3年3月	奈良学園大学保健医療学部の教授として担当の「疫学」（看護学科2年次）において使用した.疫学の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた（オンデマンド動画）．
	令和2年4月 ～ 令和3年3月	奈良学園大学保健医療学部の教授として担当の保健師国家試験対策（看護学科4年次）において使用した．保健師国家試験に向けて疫学の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「老年期障害作業療法学Ⅰ（総論）」（3年次）において使用した.老年期障害作業療法学の全体的理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「老年期障害作業療法学Ⅱ（各論）」（3年次）において使用した.老年期障害作業療法学各論の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげる．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．

事項	年月日	概　　要
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「作業療法研究法」（3年次）において使用した.作業療法研究法の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「作業療法学特論Ⅳ」（3年次）において使用した.作業療法学特論Ⅳとして老年期障害の作業療法の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげる．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	龍谷大学社会学部の非常勤講師として担当の「地域保健学」において使用した.地域保健学の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた（オンデマンド動画）.
3）実習指導用マニュアル	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅰ」（2年次，専門科目）において使用した．臨床実習指導者のもとで病院や施設の特性と作業療法の役割について理解を深められるよう用い，実習を円滑に進めた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅱ」（3年次，専門科目）において使用した．臨床実習指導者のもとで対象者の評価，記録報告等を習得できるよう用い，実習を円滑に進めた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅲ-1」（4年次，専門科目）において使用した．臨床実習指導者のもとで対象者の評価，治療の立案，治療実施，記録報告等を習得できるよう用い，実習を円滑に進めた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅲ-2」（4年次，専門科目）において使用した．臨床実習指導者のもとで対象者の評価，治療の立案，治療実施，記録報告等を習得できるよう用い，実習を円滑に進めた.
	平成25年4月 ～ 平成26年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学特論Ⅰ」（3年次，専門科目）において使用した．事前・事後学習のための教材および評価表を用いて知識・技術の修得につなげた.
	平成31年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部の教授として担当の「早期体験実習（作業療法）」（1年次，専門科目）において使用した．病院や施設の特性と理学療法・作業療法の役割について理解を深められるよう用い，実習を円滑に進めた.

事項	年月日	概　　要
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部の教授として担当の「地域実習（作業療法）」（2年次，専門科目）において使用した．病院や施設の特性と理学療法・作業療法の役割について理解を深められるよう用い，実習を円滑に進めた．
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「検査測定実習（作業療法）」（3年次，専門科目）において使用した．作業療法評価，検査・測定の意義について理解を深め実践できるよう，実習を円滑に進めた．
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「作業療法評価実習（作業療法）」（3年次，専門科目）において使用した．作業療法の評価の実際について理解を深め実践できるよう作成した．
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「総合臨床実習Ⅰ（作業療法）」（4年次，専門科目）において，作業療法の評価から治療までの一連の流れと医療人としての心構えについて理解し実践できるよう作成した．
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「総合臨床実習Ⅱ（作業療法）」（4年次，専門科目）において，作業療法の評価から治療までの一連の流れと医療人としての心構えについて理解し実践できるよう作成した．
4）スライド	平成22年4月 ～ 平成26年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学特論Ⅲ」（4年次，専門科目）において使用した．作業療法の歴史，作業療法の理論・モデルの理解・活用を深めた．
5）課題教材	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学セミナー 」（4年次，専門科目）において使用した．作業療法士国家試験範囲のうち，作業療法理論・研究法・管理・地域領域の課題教材を用いた演習により知識の定着につなげた．
	令和2年4月 ～ 令和3年3月	奈良学園大学保健医療学部の教授として担当の保健師国家試験対策（看護学科4年次）において使用した．保健師国家試験に向けて疫学の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
6）講義用教材（『作業療法研究法』（医歯薬出版株式会社）の発刊前校正刷）と講義用補助教材	平成29年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学研究法」において（3年次，専門科目）において使用した．研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）の理解を深めるための補助教材をあわせて使用し，修得につなげた．

事項	年月日	概　　要
7）（院）講義用教材とスライド	平成23年4月 ～ 平成26年3月	星城大学大学院健康支援学研究科の専任教員として担当の「生活行動科学特論Ⅱ」において使用した．健康行動理論および作業療法理論の理解によって健康支援学をより深く探求するために，教材を活用した．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成26年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「健康支援学研究法」（必修）において使用した．研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）の理解を深めるために，教材を活用した.また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「生活行動支援学特論」（必修）において使用した．社会の健康を支援する視点，ヘルスコミュニケーションを通じた健康支援の理解を深めるために教材を活用した.また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「日常生活環境学特論」において使用した．社会の健康を支援する視点，制度的・文化的環境をふまえた健康支援の理解を深めるために，教材を活用した.また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成28年4月 ～ 平成30年3月	京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻の非常勤講師として担当の「クリティカルケア看護学特論Ⅰ」（修士課程）において使用した．独自教材に基づき，課題の設定を行い，演習によって効果的な学修機会となるよう配慮した.また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成30年4月 ～ 平成31年3月	京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻の非常勤講師として担当の「生活習慣病看護学特論」（博士後期課程）において使用した．独自教材に基づき，課題の設定を行い，演習によって効果的な学修機会となるよう配慮した.また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1）授業評価（平成25年度，星城大学）	平成25年4月 ～ 平成26年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.36 授業アンケート科目②：情報処理演習Ⅱ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.17 授業アンケート科目③：作業療法学特論Ⅲ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.50
2）授業評価（平成26年度，星城大学）	平成26年4月 ～ 平成27年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.56 授業アンケート科目②：情報処理演習Ⅱ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.26

事項	年月日	概　　要
3）授業評価（平成27年度，星城大学）	平成27年4月 ～ 平成28年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.25 授業アンケート科目②：情報処理演習Ⅱ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.00
4）授業評価（平成28年度，星城大学）	平成28年4月 ～ 平成29年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.46 授業アンケート科目②：地域作業療法学演習 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.46
5）授業評価（平成29年度，星城大学）	平成29年4月 ～ 平成30年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.54 授業アンケート科目②：地域作業療法学演習 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.52
6）授業評価（平成30年度，星城大学）	平成30年4月 ～ 平成31年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.87 授業アンケート科目②：地域作業療法学演習 総合満足度の平均スコアは4点満点中4.00
7）授業評価（令和3年度，奈良学園大学）	令和3年4月 ～ 令和4年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは5点満点中4.47 授業アンケート科目②：基礎作業学 総合満足度の平均スコアは5点満点中4.47 授業アンケート科目③：老年期作業療法学Ⅰ（総論） 総合満足度の平均スコアは5点満点中4.67 授業アンケート科目④：作業療法研究法 総合満足度の平均スコアは5点満点中4.5 授業アンケート科目⑤：老年期作業療法学Ⅱ（各論） ７項目すべてにおいて全体結果を上回っていた 授業アンケート科目⑥：作業療法学特論（老年期障害） ７項目すべてにおいて全体結果を上回っていた
8）授業評価（令和3年度，奈良学園大学）	令和4年4月 ～ 令和5年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは5点満点中4.06 授業アンケート科目②：基礎作業学 総合満足度の平均スコアは5点満点中3.78（9名） 授業アンケート科目③：老年期作業療法学Ⅰ（総論） 総合満足度の平均スコアは5点満点中4.14 授業アンケート科目④：作業療法研究法 総合満足度の平均スコアは5点満点中3.5（8名） 授業アンケート科目⑤：老年期作業療法学Ⅱ（各論） 総合満足度の平均スコアは5点満点中4.17 授業アンケート科目⑥：作業療法学特論Ⅳ（老年期障害） 総合満足度の平均スコアは5点満点中3.56（9名）

事項	年月日	概　　要
4　実務の経験を有する者についての特記事項 （実習指導） 1）金井病院通所リハビリテーションでの 3年次評価実習	平成12年11月 ～ 平成12年12月	滋賀医療技術専門学校3年次科目「臨床実習Ⅱ」として1名の学生に対して4週間，通所リハビリテーションにおける作業療法の役割を理解し，作業療法評価および目標の設定を行うことが出来るよう指導した.
	平成13年11月 ～ 平成13年12月	滋賀医療技術専門学校3年次科目「臨床実習Ⅱ」として1名の学生に対して4週間，通所リハビリテーションにおける作業療法の役割を理解し，作業療法評価および目標の設定を行うことが出来るよう指導した.
2）金井病院通所リハビリテーションでの 4年次治療実習	平成13年6月 ～ 平成13年8月	滋賀医療技術専門学校4年次科目「臨床実習Ⅲ」として1名の学生に対して8週間，通所リハビリテーションにおける作業療法の役割を理解し，作業療法評価および目標の設定，治療計画の立案と実施，再評価を行うことが出来るよう指導した.
3）金井病院通所リハビリテーションでの2年次地域 実習	平成13年11月 ～ 平成14年1月	大阪リハビリテーション専門学校2年次科目「作業療法実習Ⅲ」として各日3名の学生に対し，地域における作業療法士の役割，通所リハビリテーションの役割，他職種との連携等の理解を深めるための実習指導を行った.
（講師・講演） 1）京都大学大学院医学研究科社会健康医学系 専攻健康情報学分野同門会	平成26年8月	「Shared Decision Making:　臨床実践者に求められるスキルとは？」講師として，対象者中心の考え方とエビデンスに基づく実践，その架け橋となる共有決定について講義した.
2）日本訪問リハビリテーション協会 認定技術研修会	平成26年8月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した.
3）八千代病院総合リハビリセンター　研修会	平成27年2月	「臨床実践者に求められるスキルとは？」講師として，対象者中心の考え方とエビデンスに基づく実践，リハビリテーション場面における実情について講義した.
4）日本訪問リハビリテーション協会学術大会 in 大阪シンポジウム	平成27年5月	シンポジウム1「訪問リハビリテーションにおける教育のこれから～生命，生活，人生を共に歩む訪問療法士を育てる為には～」シンポジストとして，求められる訪問リハビリテーションのあり方，認定訪問療法士制度と教育について講演した.
5）日本訪問リハビリテーション協会認定技術研修会	平成27年10月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した.

事項	年月日	概　　要
6) 平成27年度厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究事業) 〈指定課題〉『社会的責任に応える医療の基盤となる診療ガイドラインの課題と可能性の研究』公開シンポジウム 「 Shared decision making〈SDM〉の今・これから：診療ガイドラインの新たな可能性を考える」	平成28年2月	様々な医療の場におけるSDMの試み 「地域医療の立場から」シンポジストとして，地域におけるリハビリテーション場面における情報共有の実態報告と，望まれる共有決定のあり方について講演した.
7) 第3回臨床作業療法学会（東京） 「教育と臨床のコラボ企画」	平成28年3月	「学校の特色紹介　学校と臨床現場をつなごう企画」において，星城大学における学内教育と臨床実践にむけた取り組みを紹介した.
8) 第31回愛知訪問リハネットワーク 「訪問リハビリテーションの効果：主観的指標と客観的指標」	平成28年11月	「訪問リハビリテーションの効果：主観的指標と客観的指標」講師として，訪問リハビリテーションに従事する療法士を対象にリハビリテーションにおけるアウトカム，訪問リハビリテーションにおける効果測定の重要性について講義した．また，その後の症例報告会において全報告症例へのコメントの要望があり，フィードバックした.
9) 第10回 健康寿命延伸と介護予防を考える会 ～70代、80代を元気に乗り越える為に～（公益財団法人杉浦記念財団）	平成30年5月	「高齢者ケアとリハビリテーション ―その人らしい生活を支える作業療法―」について講演し，研究会参加者との活発な意見交換を行った.
10) 日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定基礎研修会	平成30年5月	「リスク管理」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスク管理の考え方，および訪問リハビリテーションにおけるリスク管理について講義した.
11) 日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	平成30年6月	「訪問リハビリテーションにおけるリスクマネジメント」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスクマネジメントについて講義・演習を行った.
12) 日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定基礎研修会	平成30年8月	「リスク管理」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスク管理の考え方，および訪問リハビリテーションにおけるリスク管理について講義した.
13) 日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	平成30年10月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した.
14) 日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	平成30年11月	「訪問リハビリテーションにおけるリスクマネジメント」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスクマネジメントについて講義・演習を行った.
15) 日本訪問リハビリテーション協会学術大会 in にいがた【教育講座1】	令和元年6月	【教育講座1】「症例報告の書き方と留意点」講師として，症例報告が果たす役割，書き方と留意点について講演した.

事項	年月日	概　　要
16）日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	令和元年7月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した．
17）日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定基礎研修会	令和元年7月	「リスク管理」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスク管理の考え方，および訪問リハビリテーションにおけるリスク管理について講義した．
18）日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	令和元年10月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した．
19）奈良学園大学公開講座第2回登美ヶ丘カレッジ	令和元年12月	「日常生活の工夫～健康情報の読み方から健康生活のススメ～」講師として，一般市民に向けた講演を行った．
20）第54回日本作業療法学会専門作業療法士セミナー⑧訪問作業療法「未来の実践につなげる調査・研究」	令和2年9月	「専門作業療法士セミナー⑧訪問作業療法」講師として，「未来の実践につなげる調査・研究」について講演を行った（動画）．
21）第18回日本訪問リハビリテーション協会学術大会in高知 学術部セミナー「臨床疑問からはじめる調査・研究」	令和3年5月	学術部セミナー講師として，「臨床疑問からはじめる調査・研究」について講演を行った．
22）日本訪問リハビリテーション協会企画研修「訪問リハビリテーション研究入門～研究結果を臨床に活かす」	令和3年10月	学術部セミナー講師として，「訪問リハビリテーション研究入門～研究結果を臨床に活かす」について講義を行い，グループワーク等のファシリテータおよび運営を担った．
23）日本訪問リハビリテーション協会企画研修「訪問リハビリテーション研究入門～研究結果を臨床に活かす」	令和5年2月	学術部セミナー講師として，「訪問リハビリテーション研究入門～研究結果を臨床に活かす」について講義を行い，グループワーク等のファシリテータおよび運営を担った．
（座長） 1）第4回日本訪問リハビリテーション協会学術大会in熊本	平成26年6月	「人材育成・教育」の座長として，訪問リハビリテーションにおける人材育成およびリスク管理等を扱うセッションを進行しコメントした．
2）第50回日本作業療法学会	平成28年9月	「理論・基礎6」の座長として，作業療法および関連領域における文献研究，動物研究，人を対象とした質的研究，量的研究等を扱うセッションを進行しコメントした．
3）日本訪問リハビリテーション協会学術大会 in　北九州 シンポジウム	平成30年6月	シンポジウム3「訪問リハビリテーションにおける人材教育について」の座長として，訪問リハビリテーションに携わる人材の育成に取り組むシンポジストの講演と質疑を進行した．

事項	年月日	概　　要
4）第52回日本作業療法学会	平成30年9月	「ON-7 地域7」の座長として，地域作業療法を扱うセッションを進行しコメントした.
5）第78回日本公衆衛生学会	令和元年10月	「第23分科会P-2301」（保健医療介護サービス研究）の座長として，保健医療介護サービス研究を扱うセッションを進行しコメントした.
6）訪問リハビリテーション協会学術大会 in 長崎	令和4年5月	学術セミナーの座長として，セッションを進行しコメントした.
（調査・研究協力・その他） 1）東海市健康増進計画等の評価及び策定支援委託事業（星城大学契約/実務担当）	平成25年5月 ～ 平成26年3月	東海市委託事業において，各年代の健康に関するアンケートの集計および分析と報告書の作成を行った.
2）旭化成ファーマ株式会社業務委託（個人契約）	平成25年8月 ～ 平成26年7月	脳卒中患者を対象としたセルフケア自立度測定尺度の信頼性検証のために，研究計画への助言などを含む研究調整を行った.
3）東海市介護予防サロン運営展開方法調査（星城大学契約/分担）	平成26年5月 ～ 平成27年3月	東海市委託事業において、介護予防サロン運営に関する調査および分析と報告書の作成を行った.
4）「健康チャレンジ」京大共同研究プロジェクト研究関連（株式会社電通）	平成30年9月 ～ 平成30年12月	健康に関するシステマティックレビュー等を通して研究に協力した.
５　その他 （卒業研究指導実績） 1）星城大学リハビリテーション学部における卒業研究指導	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部専任教員として，各々の学生1人につき1テーマの卒業研究指導を行った. 平成22年度：1名 平成23年度：5名 平成24年度：2名 平成25年度：5名 平成26年度：3名 平成27年度：6名 平成28年度：3名 平成29年度：4名 平成30年度：4名
2）奈良学園大学保健医療学部における卒業研究指導	令和4年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学専任教員として，卒業研究指導を行った. 令和4年度：1名

事項	年月日	概　　要
（卒業研究論文公表） 1）星城大学リハビリテーション学部における卒業研究指導論文の論文公表	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部専任教員として，一部の学生の卒業研究は論文として掲載に至った（指導学生[筆答]と論文・雑誌は以下の通り）． ・山崎竜弥，他．（短報）臨床実習後の作業療法学生が目標・理想とする作業療法士査読付）．愛知作業療法22:55-58，2014. ・船渡絵梨香，他．訪問リハビリテーション利用者の主介護者における主観的介護負担感とその関連要因の検討（査読付）．愛知作業療法22:3-8，2014. ・山内春香，他．作業療法士による訪問リハビリテーションの目標とプログラム：訪問リハビリテーション実施計画書の記載内容（査読付）．作業療法ジャーナル 51：261-265，2017 ・榊原唯，他．中年世代の各ライフステージにおける趣味と思い出の傾向（査読付）．臨床作業療法 5：14-19，2018. ・水野里咲，他．病院と訪問における作業療法士の役割と必要なスキル-学生の視点による質的研究（査読付）．作業療法ジャーナル　53(9)：1014-1018，2019. ・林映見，他．（学生論文）「作業に焦点を当てた実践」の現状と障壁（査読付）．日本臨床作業療法研究　6(1)：38-5，2019.
（修士論文作成支援及び指導実績） 1）星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻における健康支援学特別研究への 教育支援	平成25年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻生活健康支援学領域（修士課程）　講師（平成30年度准教授）として，竹田徳則教授が指導教員として指導する学生の教育支援（研究計画への助言，研究の相談等）を行った．
2）京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻専門職学位課程大学院生への研究支援（1名）	平成26年10月 ～ 平成27年3月	京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻専門職学位課程における課題研究において，研究協力者として研究データの分析への助言および論文執筆にむけた支援を行った．
3）京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻専門職学位課程大学院生への研究支援（1名）	平成27年9月 ～ 平成28年3月	京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻専門職学位課程における課題研究において，研究協力者として研究データの分析への助言および論文執筆にむけた支援を行った．
4）星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻生活健康支援学領域（修士課程）における健康支援学特別研究における研究指導補助（1名）	平成28年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻生活健康支援学領域（修士課程）　講師（平成30年度准教授）として，竹田徳則教授が指導教員として指導する学生の研究指導補助教員の立場から「認知症カフェにおける作業療法士の役割と課題ーインタビュー調査と生活行為向上マネジメントの実践を通してー」の研究計画の立案・実施・分析について支援した．

事項	年月日	概　　要
5) 星城大学大学院生健康支援学研究科健康支援学専攻生活健康支援学領域（修士課程）への研究支援（1名）	平成31年4月 ～ 令和2年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻生活健康支援学領域（修士課程）　における竹田徳則教授が指導教員として指導する学生の研究について，前年度に引き続いて指導を継続した．

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1) 作業療法士	平成9年4月	作業療法士名簿登録番号　第18679号
2) 福祉用具プランナー	平成15年8月	第15-1209号
3) 京都大学　社会健康医学修士（専門職）	平成19年3月	社医修（専）　第63号 「脳卒中のリハビリテーション研究に用いられている評価指標の分類と動向：1996年から2005年の文献調査」
4) AMPS認定評価者	平成22年9月	Rater Number: 014924
5) AAD（現・A3）認定評価者	平成22年12月	—
6) 日本公衆衛生学会認定専門家	平成23年4月	第681号 （平成28年4月・令和3年4月　更新）
7) 日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士	平成26年2月	第5号（平成31年2月　更新）
8) RIASコーダー (The Roter Methods of Interaction Process Analysis System)	平成27年8月	第145号
9) 京都大学　博士（社会健康医学）	平成29年1月	社医博　第76号 「Studies of setting care goals and understanding subjective needs in aged care facilities: care providers’ and residents’ view（高齢者施設におけるケア目標の設定とニーズ把握の研究：ケア提供者と入所者本人の視点」
10) 日本作業療法士協会認定作業療法士	平成31年2月	第2279号
11) 日本作業療法士協会専門作業療法士（訪問）	令和2年2月	第006号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 医療法人社団淀さんせん会金井病院	平成24年4月 ～ 平成29年3月	非常勤作業療法士として作業療法士の指導，およびリハビリテーション科の管理・運営に関する検討（作業療法部門および関連部門従事者の面談含む）や調査に関する助言を行った．
2) 東海市産学官連携協議会「健康関連事業への参画」ワーキンググループ	平成25年5月 ～ 平成27年3月	健康関連事業計画ワーキングメンバーとして，倒壊しの健康推進にむけた検討会に定期的に参加した．
3) （株）旭化成ファーマ	平成25年8月 ～ 平成26年7月	研究調整員として研究計画立案・データ収集への助言，および研究調整業務を行った．（業務委託）
4) 東海市健康増進計画等策定ワーキング部会	平成26年2月	健康推進策定委員として策定会議に参加した．
5) 株式会社電通	平成30年9月 ～ 平成30年12月	「健康チャレンジ」京大共同研究プロジェクト研究関連にて，健康に関するシステマティックレビュー等の研究協力を担った．

事項	年月日	概　　要
6）奈良市登美ヶ丘地区地域包括支援センター	平成31年4月 ～ 現在に至る	専門家（作業療法士）として自立支援ケア会議に出席し，助言を行っている．
4　その他 （職能団体における実績） 1）日本訪問リハビリテーション協会　教育研修部認定審査委員	平成25年4月 ～ 令和2年3月	日本訪問リハビリテーション協会における認定訪問療法士の認定審査を担当した．
2）日本訪問リハビリテーション協会　教育研修部認定審査委員会　委員長	平成28年4月 ～ 令和2年3月	日本訪問リハビリテーション協会における認定訪問療法士の認定審査を担当し，審査委員長として統括した．
3）日本訪問リハビリテーション協会　理事	平成29年6月 ～ 現在に至る	日本訪問リハビリテーション協会における認定訪問療法士の認定審査および認定研修の担当理事として教育研修の構築と運用を行った（令和2年4月より学術部）．
3）作業療法と生活リスクコミュニケーション学会　理事	令和4年11月 ～ 現在に至る	作業療法と生活リスクコミュニケーション学会学術担当理事として教育研修の構築と運用を行った．
（受賞歴） 1）第53回近畿産業衛生学会若手奨励賞＜研究＞	平成25年11月	第53回近畿産業衛生学会における研究分野の若手奨励賞の受賞 「高齢者施設の常勤介護職員における離職とその関連要因の検討」
2）第6回日本訪問リハビリテーション協会学術大会奨励賞	平成28年6月	第6回日本訪問リハビリテーション協会学術大会における奨励賞の受賞 「訪問リハビリテーション・チェックリストの開発：具体的な目標設定と明確な課題解決のプロセス」
3）第18回日本訪問リハビリテーション協会学術大会 優秀賞（調査研究部門）	令和 3年 5月	第18回日本訪問リハビリテーション協会学術大会における優秀賞（調査研究部門）の受賞 「病院・訪問で働くリハビリテーション専門職の勤務継続意向に関する基礎的検討」
（研修） 1）第10回厚生労働省主催在宅訪問リハビリテーション講習会修了	平成14年2月	厚生労働省が日本リハビリテーション医学会に委託し日本理学療法士協会及び日本作業療法士協会の協賛を得て開催した講習会で所定の課程を修了（第799号）
2）福祉用具プランナー講習会修了	平成15年8月	京都市介護実習・普及センター主催の福祉用具プランナー研修において財）テクノエイド協会が定めた課程を修了（第15-1209号）
3）第31回理学療法士・作業療法士養成施設等教員講習修了	平成16年12月	厚生労働省と財団法人医療研修推進財団が共催し社団法人リハビリテーション医学会，日本理学療法士協会，日本作業療法士協会及び全国理学療法士作業療法士学校養成施設連絡協議会の協賛を得て開催された研修課程を修了（第3408号）
4）第2回大学院生のための教育実践講座 -大学でどう教えるか-修了	平成18年8月	京都大学高等教育研究開発推進センターが主催した左記講座の所定の課程を修了（第54号）

事項	年月日	概　　要
5) 第35回Assessment of Motor and Process Skills (AMPS)講習修了	平成22年2月	AMPS講習会事務局主催の講習会を修了し，規定のデータを米国AMPS Project Internationalに提出し認定（Rater Number: 014924）
6) 第5回Assessment of Awareness Disability (AAD)講習修了	平成22年7月	日本AAD講習会事務局主催の講習会を修了し，規定のデータを提出し認定
7) 第11回RIASコーディング研修修了（The Roter Methods of Interaction Process Analysis System）	平成27年8月	RIAS研究会日本部会主催の第11回RIASワークショップにおける研修を修了し，規定のデータを提出し認定（第145号）
8) 倫理審査委員会・治験審査委員会委員養成研修修了	平成29年12月	国立研究開発法人日本医療研究開発機構　医療技術実用化総合促進事業「平成29年度臨床研究・治験従事者等に対する研修」
9) 2021年度公認心理師現任者講習会修了	令和3年12月	公認心理師法（平成27年法律第68号）附則第2条第2項第1号の規定に基づく文部科学大臣及び厚生労働大臣指定講習会の課程を修了（修了番号21C20401）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 PT・OT・STのためのエビデンスの基礎知識と診療ガイドライン活用法	共著	平成29年5月	医歯薬出版株式会社	理学療法士・作業療法士・言語聴覚士が診療ガイドラインを活用するうえで必要な知識と活用方法について，具体的に示した. B5判　全180頁 監修：中山健夫 編集：日髙正巳・藤本修平 共著者：荒木浩二郎，有明陽佑，稲富宏之，大浦智子，大寺祥佑，尾川達也，紙谷司，小久保徹，小向佳奈子，今法子，酒井克也，佐々木祥，杉田翔，竹林崇，田中宏明，坪内優太，中村学，芳賀大輔，日髙正巳，福岡達之，福谷直人，藤本修平，廣江貴則，吉川義之 本人担当部分：「質的研究を解釈するうえで必要な知識」pp.55-60を単著. 質的研究の基本的な構成および考え方を概説し，リハビリテーション専門職が臨床場面で質的研究成果を活用するにあたり留意すべき点を解説した.
2 これから始める！シェアードデシジョンメイキング：新しい医療のコミュニケーション	共著	平成29年9月	日本医事新報社	医療におけるコミュニケーションや意思決定としてのシェアードデシジョンメイキングについて，国内における先駆者による解説と実践について示した. A5判　全172頁 編著：中山健夫 共著者：中山健夫，藤本修平，湯川慶子，中山和弘，大坂和可子，堀江重郎，森田明夫，大浦智子，今法子，浦尾充子，山口育子，射場典子 本人担当部分：「（コラム）臨床におけるSDM:リハビリテーション」pp.129-130を単著. 　地域医療のなかでも訪問リハビリテーションにおける患者と提供者間の情報共有とその実態について紹介し，今後のコミュニケーションのあり方について示した.
3 作業療法研究法	共著	平成29年10月	医歯薬出版株式会社	作業療法士が押さえておくべき研究倫理，研究の種類，研究のすすめ方，報告や発表について，作業療法士養成教育に活用するために構成・編集した. B5判　全164頁 編著：竹田徳則，大浦智子，藤本修平 第3部監修：廣江貴則 共著者：竹田徳則，大浦智子，木村大介，藤本修平 本人担当部分：「量的研究」pp.34-41を単著 　量的研究における各種の研究デザインと特性について解説した.特に，観察研究と介入研究における各研究デザインの特徴と臨床場面における考え方を示した. 本人担当部分：「質的研究」pp.50-54を単著 　質的研究における手順と方法，妥当性の担保などについて解説した. 本人担当部分：「混合法（mixed methods approach）」pp.55-56を単著 　混合型の研究の種類や方法について，例を挙げながら解説した.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分：「尺度開発」」pp.68-70を単著 　作業療法場面を想定した例あげながら，効果を測定するための尺度の兼ね備えておくべき信頼性と妥当性について解説した. 本人担当部分：「文献研究」pp.71-72を単著 　主にシステマティックレビューとメタアナリシスについて，解説した. 本人担当部分：「データベース研究」pp.73-74を単著 　データベースの構築と研究への活用について，利点と留意点を中心に解説した. 本人担当部分：「根拠に基づく医療（Evidence-Based Medicine; EBM）」pp.140 　根拠に基づく医療と根拠に基づく実践について，その考え方について解説した. 本人担当部分：「エビデンスの質と階層」」pp.141-143を単著 　研究を実施する際だけでなく，既存研究を読み解釈する際に参考となるエビデンスレベルについて解説した. 本人担当部分：「診療ガイドラインの作成と活用」pp.144-146を単著 　診療ガイドラインについて、作成の手順と活用方法について解説した. 本人担当部分：「研究対象者の選定」pp.23-26を共著 　研究対象者の選択方法について，バイアスを防ぐ方法をふまえて解説した.（共著者とともに内容を調整し，最終原稿を主として作成した.） 共著者：大浦智子，木村大介 本人担当部分：「アウトカム」pp.27-28を共著 　アウトカムの考え方について，尺度の種類に関する説明のほか，メイン・アウトカムの設定や対象者主体のアウトカムについて示した.（共著者とともに内容を調整し，最終原稿を主として作成した.） 共著者：大浦智子，木村大介 本人担当部分：「用語の説明」pp.1-7を共著 　作業療法士もしくは学生が研究法を効果的に学ぶために，本書内における主要な用語を説明した.（説明する用語の抽出および執筆担当者の振り分け，担当用語の執筆，全用語の内容の確認を行った.） 共著者：竹田徳則，大浦智子，木村大介 本人担当部分：「巻末課題」pp.148を共著 　作業療法士もしくは学生が研究法を効果的に学ぶために，巻末課題を示した.（学部学生を想定し，到達すべきであろう学習目標を設定して，共著者とともに課題を作成した.） 共著者：竹田徳則，大浦智子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4 訪問リハビリテーションアドバイスブック	共著	平成30年3月	メジカルビュー社	訪問リハビリテーションについて理解するために，多職種の立場から訪問リハビリテーション従事者が抑えておくべき事項を示した. 監修：青山朋樹，高橋紀代 編集：辰巳昌嵩 共著者：辰巳昌嵩，阿毛裕理，片桐辰徳，藤本修平，光武誠吾，高橋紀代，八木街子，宇野雄祐，杉田翔，三好早苗，山﨑真一，奥村圭子，川場康智，東田全央，今枝敬典，倉田昌幸，木村圭佑，羽田真博，岩田研二，青山朋樹，藤田美和子，嶋本尚恵，小口妃小江，杉浦徹，三木貴弘，朝倉健太郎，尾畑翔太，中川征士，大場やよい，上野多加子，森下元賀，小泉裕一，園山真弓，池田耕二，大浦智子，鳴尾彰人，樺元大輝，南條拓也，田代雄斗 本人担当部分：「筋力維持・増強」pp.260-265を単著 筋力維持・増強に関する基本的知識に加え，在宅訪問リハビリテーションにおける着眼点と留意点を解説した. 本人担当部分：「関節可動域の維持と改善」pp.266-269を単著 関節可動域に関する基本的知識に加え，在宅訪問リハビリテーションにおける着眼点と留意点を解説した. 本人担当部分：「転倒および転倒時対応」pp.270-275を単著 在宅生活を送る対象者の生活機能の低下を脅かす転倒について，環境整備を含めて転倒予防対策について解説した.
5 PT-OT-STのための臨床に活かすエビデンスと意思決定の考えかた	共著	令和2年10月	医学書院	リハビリテーション専門職向けにEvidence-based medicineの考え方から研究論文の読み方,患者とのコミュニケーション，意思決定過程について示した. 編著：藤本修平，竹林崇 共著者：藤本修平，竹林崇，小向佳奈子，杉田翔，大浦智子，福田芽森，穴田周吾，中口拓真，佐々木祥，村井歩志，他. 本人担当部分：「質的研究」pp.53-58を単著 質的研究論文報告のためのチェックリストを用いながら，臨床実践に役立てるための論文情報の読み方について解説した.
（学術論文） 1 （調査報告）「憩いのサロン」参加者の健康情報源と情報の授受：サロンは情報の授受の場になっているか？（査読付）	共著	平成25年9月	保健師ジャーナル69: 712-719, 2013.	A町の介護予防事業であるサロンは，一般参加者にとって主要な健康関連情報の授受の場になっており，健康情報の伝達と情報的サポートの増加により介護予防への寄与が期待できることが示唆された. 本人担当部分：共著者らの助言を得て研究計画の立案と実施，論文を執筆した. 共著者：大浦智子，竹田徳則，近藤克則，木村大介，今井あい子
2 介護支援専門員と訪問介護員における訪問リハビリテーション効果への期待：量的・質的検討（査読付）	共著	平成25年10月	作業療法32: 440-450, 2013.	介護支援専門員（care manager: CM）とヘルパーを対象に実施した「訪問リハリハビリテーション（訪問リハ）に期待している効果」に関する質問紙調査の結果，身体機能の回復，動きやすさやセルフケアの改善に偏っていた. 本人担当部分：共著者らと協力施設を調整し，研究計画の立案と実施，論文を執筆した. 共著者：大浦智子，津山努，中西康祐

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 Care goal setting and associated factors: semi-structured interviews with multidisciplinary care providers in facilities for elderly people（介護目標の設定と関連要因：高齢者施設の多職種ケア提供者への半構造化面接）（査読付）	共著	平成26年3月	International Journal of GERONTOLOGY 8(1): 12-17, 2014.	要介護高齢者入所施設の職員が考える高齢者のケア目標とその関連要因を明らかにするために，7施設30人の職員を対象に半構造化面接を実施し，その内容を質的に分析した結果，4カテゴリが抽出された. 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した. 共著者：Ohura T, Takada A, Nakayama T
4 訪問リハビリテーション利用者の主介護者における主観的介護負担感とその関連要因の検討（査読付）	共著	平成26年3月	愛知作業療法22:3-8, 2014.	在宅要介護者の主介護者が感じる主観的介護負担感とその関連要因を明らかにすることを目的に，訪問リハビリテーション利用者の主介護者（66名）を対象に質問紙調査を実施した結果，階段昇降要介助の場合は自立に比べて，主観的介護時間が多い場合は少ない場合に比べて，オッズ比が高かった. 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり指導した（責任著者）. 共著者：船渡絵梨香，津山努，今井あい子，大浦智子
5 （短報）臨床実習後の作業療法学生が目標・理想とする作業療法士（査読付）	共著	平成26年3月	愛知作業療法22:55-58, 2014.	A大学作業療法学専攻4年生を対象に，目標・理想の作業療法士に関する自由記述式質問紙による調査を行い質的分析を行った．目標・理想とする作業療法士として，【技能】の＜コミュニケーションスキル＞と【総合的判断力】の＜論理＞に着眼していることが明らかとなった. 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり助言した. 共著者：山崎竜弥，大浦智子
6 （実践報告）客観的臨床能力試験（OSCE）場面のビデオ・フィードバックによる臨床実習前教育の取り組み（査読付）	共著	平成26年4月	作業療法33(2)：181-190, 2014.	学生が取り組むOSCEの症例課題実施場面を撮影し，終了後のビデオ・フィードバックと学習のふり返り機会を提供した．臨床実習後の質問紙調査（37名）では，OSCEの復習をした者が8割以上で，その内容はビデオ・フィードバックを参考にしていた. 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した. 共著者：大浦智子，竹田徳則，藤田高史，古澤麻衣，木村大介，冨山直輝，林浩之，飯塚照史，坂井一也，今井あい子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7 学生における客観的臨床能力試験（OSCE）前後の学習と臨床実習後の自己評価：量的・質的分析による検討 （査読付）	共著	平成26年7月	作業療法教育研究14(1): 16-22, 2014	評価主体の臨床実習（実習）開始約1カ月前に，検査・測定，症例課題からなる客観的臨床能力試験（OSCE）を実施し，実習後に質問紙調査を実施した．対象学生33名中32名がOSCEの事前準備をしたと自己評価していたが，実習前には知識や評価のみならず，相手に合わせる応用技術を視野に入れた準備が必要だと学生は感じていた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，竹田徳則，藤田高史
8 訪問リハビリテーション利用者のサービス利用のきっかけと生活目標 （査読付）	共著	平成26年12月	作業療法33(6): 517-525, 2014	訪問リハビリテーション利用者の訪問リハ利用のきっかけと日々の生活目標を知るために，質問紙調査によって34 名の訪問リハ利用者の自由記述回答を質的に分析した．利用のきっかけは7 個の二次テーマ，生活目標は 8 個の二次テーマが抽出された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，津山努
9 Assessment of the validity and internal consistency of a performance evaluation tool based on the modified Barthel Index Japanese nversion for elderly people living at home（在宅高齢者におけるBarthel Index改変日本語版に基づく遂行評価ツールの妥当性と内的整合性） （査読付）	共著	平成26年12月	J Phys Ther Sci 26(12): 1971-1974, 2014	在宅要介護高齢者128名を対象に，Modified Barthel Indexに基づくセルフケア遂行評価日本語版の因子的妥当性と内的整合性を検証した．確認的因子分析の結果，モデル適合度は許容範囲内と判断された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Higashi T, Ishizaki T, Nakayama T
10 Testing validity and reliability of a newly developed instrument to assess the subjective needs of institutionalized elderly（入所高齢者の主観的ニーズを評価するために新たに開発したツールの妥当性と信頼性の検証） （査読付）	共著	平成27年1月	Clinical Gerontologist 38(1): 88-102, 2015	入所高齢者のニーズを評価するための質問紙（4領域25項目）を開発し，妥当性と信頼性を検証した．再検査法による信頼性は，ニーズの領域・項目によって高低が認められた．確認的因子分析の結果，モデル適合度は許容範囲内と判断された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Ishizaki T, Higashi T, Nakayama T

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11 初期認知症および軽度認知機能障害（MCI）における軽微な認知機能の変化を捉え得る神経心理学検査の検討 （査読付）	共著	平成27年3月	日本認知症予防学会誌 48(1): 22-24, 2015	動作性 IQ や日常生活場面での記憶障害が，MCI や初期認知症の変化を把握できるかを確認することを目的に，神経内科受診者のうち 1 年後の再評価が実施できた 9 名のMini-Mental State Examination（MMSE），コース立方体組み合わせテスト，リバーミード行動記憶検査（RBMT）の初期評価と 2 回目評価結果を比較した．結果，RBMT が軽微な認知機能の変化を検出可能であった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施を行い，論文執筆に際して助言した． 共著者：木村大介，廣瀬秀一，大浦智子，中西康裕，大槻輝子
12 学生が地域で運営する健康サロンにおける学習と気づき （査読付）	共著	平成27年6月	作業療法 34: 325-334, 2015.	学生が地域高齢者を対象に健康サロンを運営することによって得られた学生自身の気づきを明らかにするために，運営開始11か月後に質問紙調査を行った．学びの場としての肯定的意見に対し，実務面での反省が挙げられていた． 本人担当部分：研究計画を立案し，共著者とともに実施，論文執筆にあたり助言をした． 共著者：古澤麻衣，竹田徳則，大浦智子
13 Differences between home-visit rehabilitation users and providers in their understanding of the content and subjective effects of rehabilitation practices（リハビリテーション内容の理解と主観的効果に関する訪問リハビリテーション利用者と提供者間の違い） （査読付）	共著	平成27年6月	J Phys Ther Sci 27: 1705-1708, 2015.	訪問リハビリテーション利用者と提供者34組を対象に，主観的効果と実施プログラムの認識の相違を明らかにした．利用者は，提供者が考えているよりも症状や床上動作の改善に向けたプログラムを実施していると認識していた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Tsuyama T, Nakayama T
14 健康サロンに参加する高齢女性における認知機能低下の有無と健康情報ニーズとの関連 （査読付）	共著	平成27年7月	作業療法ジャーナル 49(8), 861-867	介護予防における一次予防事業として行われているサロン参加女性を対象に，軽度認知機能低下の有無と健康情報ニーズとの関連を明らかにするための調査（自記式認知機能検査，健康情報ニーズ等）と体力測定を実施した．軽度認知機能低下の有無による健康情報ニーズの違いは認められなかった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，竹田徳則，木村大介，冨山直輝，古澤麻衣，天野圭二

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15 地域開催型ラジオ体操が高齢者の身体・心理社会面にもたらす効果 （査読付）	共著	平成27年8月	作業療法 34(4), 393-402, 2015.	高齢者の身体・心理社会面にもたらす地域開催型ラジオ体操の効果を明らかにするために，3か月間の介入を行った．ラジオ体操群では下肢筋力やバランスに有意な向上を認め，体調の主観的変化を認知していた． 本人担当部分：研究結果の解釈，統計解析および論文の執筆にあたり助言した． 共著者：今井あい子，加藤芳司，竹田徳則，大浦智子，北林由紀子，山本和恵，真田樹義
16 Differences in understanding and subjective effects of home-visit rehabilitation between user families and rehabilitation providers（利用者家族と提供者間における訪問リハビリテーション内容の理解と主観的効果の違い） （査読付）	共著	平成27年12月	J. Phys. Ther. Sci. 27: 3837-3841, 2015	訪問リハビリテーション利用者家族と提供者50組を対象に，主観的効果と実施プログラムの認識の相違を明らかにした．利用者家族は，提供者が考えているよりも症状や床上動作の改善に向けたプログラムやマッサージを実施していると認識しており，痛みや症状の改善を自覚していた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Tsuyama T, Nakayama T
17 Gaps between the subjective needs of older facility residents and how care workers understand them: a pairwise cross-sectional study （入所高齢者の主観的ニーズと介護職員が把握している程度との隔たり：ペアワイズ横断研究） （査読付）	共著	平成28年1月	BMC Res Notes 9:52, 2016. DOI:10.1186/s13104-016-1851-7	介護老人保健施設に入所する高齢者のニーズと介護職員によるニーズの把握の程度を明らかにするために，高齢者と介護職員115組にインタビューと質問紙を用いた調査を行った．基本的日常生活と情緒的なニーズに比べ，手段的日常生活と生活環境に関するニーズのほうが，職員による把握割合が低い傾向にあった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Ishizaki T, Higashi T, Nakayama T
18 Evaluation of facilitative factors for preventing cognitive decline: A 3-year cohort study of community intervention （認知機能低下予防促進因子の評価：3年間の地域介入コホート研究） （査読付）	共著	平成28年2月	PSYCHOGERIATRICS 17(1):9-16, 2017. DOI: 10.1111/psyg.12182	武豊プロジェクトの参加高齢者100名を3年間追跡し，認知機能を保つ要因を明らかにした．レジャー活動や社会的つながりの強化が，認知機能の維持に正の効果を及ぼしていることが明らかとなった． 本人担当部分：研究結果に対する解釈および論文執筆に際して助言をした． 共著者：Kimura D, Takeda T, Ohura T, Imai A

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19 Correlation of the Hand 20 with the International Classification of Functioning, Disability, and Health and comparison of the results with those of the Disability of the Arm, Shoulder and Hand（国際生活機能分類とHand20との関係とDASHスケールとの比較）（査読付）	共著	平成28年3月	Asian J Occup Ther 11: 27-33, 2016	本邦の手外科領域で多用されている患者立脚型評価Hand20の各項目について，ICF項目との関連からDASHとの比較を試みた結果，Hand20は心身機能から5項目，活動と参加から23項目，個人因子から2項目がICF項目と関連づけられた．また，Hand20は，DASHより手に特化した身体部位特異的尺度であると捉えられた． 本人担当部分：研究計画の立案に対する助言，研究の実施をともに行い，論文執筆に際して助言をした． 共著者：Iitsuka T, Ohura T, Fujita T.
20 Studies of setting care goals and understanding subjective needs in aged care facilities: care providers' and residents' view（高齢者施設におけるケア目標の設定とニーズ把握の研究：ケア提供者と入所者本人の視点）（博士論文）	単著	平成29年1月	京都大学	1）施設職員による入所高齢者へのケア目標の設定とケア目標に関連する要因，2）入所高齢者の生活上の主観的ニーズの評価法，3）入所高齢者の生活上の主観的ニーズと介護職員の把握状況，を明らかにした． A4判　全38頁（既出の学術論文9・16・23で構成）
21 作業療法士による訪問リハビリテーションの目標とプログラム：訪問リハビリテーション実施計画書の記載内容（査読付）	共著	平成29年3月	作業療法ジャーナル 51: 261-265, 2017	作業療法士による訪問リハビリテーションの目標とプログラムの実態を明らかにするために，初回実施計画書の記載内容を計量的に分析し，社会参加を見据えた活動・参加の目標のもと，活動・参加と心身機能・身体構造のプログラムが多く行われていることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり指導した（責任著者）． 共著者：山内春香，佐竹美保，津山努，大浦智子
22 認知症高齢者のQOL向上に向けたADL 支援プロトコル構築のための在宅の基礎的調査（査読付）	共著	平成29年7月	日本認知症ケア学会誌 16: 461-469, 2017	認知症高齢者の主観的生活の質（QOL）の維持向上に向けた日常生活動作（ADL)支援プロトコルの構築を目指し、在宅認知症高齢者の総合的なADLの実態，主観的QOLと総合的なADL等の因子との関連を調査した.総合的ADLの障害が主観的QOLと関連があり，手段的ADLが基本的ADLに比べて自立度が低い傾向にあることが示された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり助言した． 共著者：中西康祐，大浦智子，池谷政直
23 Validity and reliability of a performance evaluation tool based on the modified Barthel Index for stroke patients (Barthel Index改変版としての遂行評価尺度の脳卒中患者における妥当性と信頼性)（査読付）	共著	平成29年8月	BMC Medical Research Methodology (2017) 17:131 DOI 10.1186/s12874-017-0409-2	脳卒中患者におけるModified BI（MBI）に基づく日本語版（performance evaluation tool of MBI: PET-MBI）の妥当性と信頼性検証を行った．PET-MBIは，BIとの基準関連妥当性と評価者間信頼性・評価者内信頼性が高いと判断した． 本人担当部分：共著者とともに研究計画を立案・実施し，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Hase K, Nakajima Y, Nakayama T

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
24 臨床実習後作業療法学生におけるハンドセラピィに対する認識 （査読付）	共著	平成29年10月	日本ハンドセラピィ学会誌 10: 43-48, 2017	養成校作業療法学生の臨床実習後におけるハンドセラピィに対する認識を検討するために，学生の提出レポートをテキストマイニング手法により分析した．主題分析を用いた質的検討を踏まえると，学生はハンドセラピィを作業療法の一分野として認知はしているものの，生活や作業とは対極しており，作業療法士とは一線を画すとの認識であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり助言した． 共著者：飯塚照史，大浦智子
25 テキストマイニング手法を用いた訪問リハビリテーションプログラムの分析 （査読付）	共著	平成29年11月	地域リハビリテーション 12: 968-975, 2017	訪問リハビリテーションの初回プログラム内容と，3ヶ月以内の目標達成終了者の特徴を明らかにするために，テキストマイニング手法を用いて分析し，脳血管疾患と骨関節疾患のプログラムの割合を計量した．初回のプログラムは心身機能に焦点をあてた機能訓練が多かった． 本人担当部分：研究計画を立案し，共著者とともに実施，論文執筆にあたり助言をした． 共著者：古澤麻衣，大浦智子 ，藤井啓介，津山努
26 中年世代の各ライフステージにおける趣味と思い出の傾向 （査読付）	共著	平成30年5月	日本臨床作業療法研究 5: 14-19, 2018	中年世代のライフステージの趣味と，その時の思い出の傾向を明らかにするために，自由回答式質問紙調査を実施した．趣味の思い出は人との思い出が最も多く，作業療法場面で趣味を活用する際には，活動としての趣味だけでなく，その趣味に含まれる意味や思い出を理解する必要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画共著者とともに立案し，論文執筆にあたり助言をした（責任著者）． 共著者：榊原唯，水野里咲，村松真侑子，阿部優奈，大浦　智子
27 Occupation-based differences in shared perceptions of older resident needs within multidisciplinary care teams: a cross-sectional study of care workers, nurses, and therapists linked to older residents（入所高齢者の視点共有に関する多職種ケアチーム内における職種間の違い：入所高齢者とリンクされた介護・看護・リハビリテーション職を対象とした横断研究） （査読付）	共著	平成30年6月	J. Phys. Ther. Sci. 30: 866-873, 2018	介護老人保健施設で働く介護・看護・リハビリテーション職による入所高齢者のニーズ把握の程度とその共有実態を明らかにするために，高齢者と介護・看護・リハビリテーション職88組への調査結果を分析した．職員らは手段的日常生活と生活環境に関するニーズを過小評価する傾向があり、職種によってニーズの把握領域が異なっていた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Higashi T, Ishizaki T, Nakayama T

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28 関節リウマチ患者と医学生の合同グループワークで得られた患者と医学生の声　今後の医学教育に必要なこと（査読付）	共著	平成31年5月	日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌　10(1)：31-35，2019	関節リウマチ患者と医学生の合同グループワークの取り組みを紹介し，合同グループワーク後の感想と，双方が考えている医学教育に必要なことを問うた．双方とも，グループワークの取り組みを肯定的にとらえていたのに加え，医学生は患者さんの生活を知ることの重要性を感じていた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，小嶋雅代，荘子万能，西明博，橋本里穂，石橋茉実，山中寿，中山健夫
29 病院と訪問における作業療法士の役割と必要なスキル-学生の視点による質的研究（査読付）	共著	令和元年8月	作業療法ジャーナル 53(9)：1014-1018，2019	作業療法専攻で学ぶ大学生の視点で，作業療法士に対して病院と訪問における作業療法士の役割と必要なスキルをインタビューし，分析した．【目標の共有】と【医療・介護保険の知識】は，訪問リハに関する語りのみで抽出され，訪問リハで意識されていることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画共著者とともに立案し，論文執筆にあたり助言をした（責任著者）． 共著者：水野里咲，榊原唯，阿部優奈，村松真侑子，大浦智子
30 （学生論文）「作業に焦点を当てた実践」の現状と障壁（査読付）	共著	令和元年8月	日本臨床作業療法研究 6(1)：38-5，2019	作業療法士に対する質問紙調査にて，OTを提供するうえで【目標共有】，【ニーズ】，【アプローチ】等に配慮し，「意味のある作業」に焦点を当てることがOTを行う上で有用だと考えていることがわかった．作業に焦点を当てた実践を知っていると回答したOTRは限られていたが，知らないと回答したOTRの約9割が知りたいとの回答を得た． 本人担当部分：研究計画共著者とともに立案し，論文執筆にあたり助言をした（責任著者）． 共著者：林映見，林原千夏，野呂奈々穂，加藤正崇，石黒佳世，大浦智子
31 介護老人保健施設に入所する高齢者の生活満足の関連要因：ケア提供者の職種とニーズ把握を加味した検討（査読付）	共著	令和2年3月	医療福祉情報行動科学研究7：63-72，2020	介護老人保健施設の入所高齢者の生活満足に入所高齢者を対象に，4領域25項目のニーズ項目と生活満足等で構成する質問紙を用いた面接調査を行った．さらに，高齢者1人につき介護職員・看護職員・リハビリテーション職員（リハビリ職員）をマッチさせ，高齢者と同様のニーズ項目とケア提供への満足度等で構成する質問紙調査を実施した．高齢者の生活満足を従属変数，高齢者の特性（性，年齢，認知機能など），職員の特性（カンファレンスの参加，ケア提供），職員による高齢者のニーズ把握数を説明変数し，有意水準を0.10未満として変数増加法を用いたロジスティック回帰分析にてオッズ比を算出した．入所高齢者は，性や年齢にかかわらず約8割が生活に満足していた．高齢者の生活満足をアウトカムとしたロジスティック回帰分析の結果，オッズ比は，介護職員がケア提供に満足している場合がしていない場合に比べて9.46（95%信頼区間[confidence interval：CI]1.04-86.02）だった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，中山健夫

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
32 特別論文：特別永住者や外国系日本人における日本の高齢者介護サービスへのアクセスの現状と課題：公衆衛生モニタリング・レポート委員会報告（査読付）	共著	令和2年7月	日本公衆衛生雑誌 67(7)：435-441，2020	日本の在留外国人ならびに外国系日本人高齢者（以下，外国系高齢者）の介護について概観するために，医学中央雑誌Web（Ver.5）による検索を行った結果，205件の論文が抽出され，第一次・第二次抽出手続きを経て，本テーマに該当すると判断された論文は2件のみであった．この2件は主に現在の75歳以上に多いとされる特別永住者である在日韓国・朝鮮人，および中国帰国者と配偶者を対象とした報告であった．今後の介護リスクを有する外国系高齢者の介護を考えるうえで，特別永住者はもとより，他国からの永住者の増加を見据え，文化的背景や言語の多様化を考慮した課題を明らかにし，対応を検討する必要がある． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，鷲尾昌一，石崎達郎，大坪徹也，安西将也，甲斐一郎，植木章三，矢庭さゆり，藤原佳典，奥村二郎
33 Psychological Conflicts in Bystander Cardiopulmonary Resuscitation for Out-of-Hospital Cardiac Arrest（査読付）（院外心停止におけるバイスタンダーの心肺蘇生における心理的葛藤）	共著	令和2年9月	International Journal of First Aid Education 3(2) 10 - 21，2020	心停止現場に居合わせた市民（バイスタンダー）による心肺蘇生（CPR）の実施に影響する要因を明らかにするために，ミクストメソッドの第１段として、心停止現場に遭遇した方を対象に半構造化面接を通じた質的研究を実施した．14名を対象に16件の院外心停止事例が得られ，バイスタンダーCPRに関連する5つのカテゴリ“助けたいという思い”，“CPR実施を促進する要素”，”CPR実施を障害する要素”，“知識と経験”，“心停止現場の状況と環境”と，19の概念が生成された．バイスタンダーは心停止現場に遭遇した際に命を助けたいと感じるが，CPRを実施するかしないかという葛藤を繰り返し経験するプロセスが示唆された． 本人担当部分：筆頭筆者とともに質的分析を担った． 共著者：Shimamoto T，Nishiyama C，Ohura T，Kawamura T，Iwami T
34 総説：日本国内の生活者を対象とした健康増進・疾病予防に関わる介入の実態―医中誌webを用いたシステマティックレビュー―（査読付）	共著	令和2年10月	日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌11(2) 43-60，2020	健康意識・態度と健康に関する行動変容(健康増進・疾病予防に関わる行動の変容)に係る地域における一般生活者に対する介入の実態把握と，その方略や手段など工夫(以下，工夫)の抽出を目的に，産学連携体制にて国内文献のレビューを行った．文献検索には医学中央雑誌を用い，41編の論文を採択した．研究デザインは一群前後比較の研究が多く(15編)，アウトカムは意識・態度変容のみが8編，健康に関する行動変容(健康増進・疾病予防に関わる行動の変容)を扱った研究が33編だった．また介入対象者を健康関心層に設定した研究が相対的に多かった(28編)．分析から，意識・態度と健康に関する行動変容(健康増進・疾病予防に関わる行動の変容)に係る工夫を77個抽出し，8のカテゴリに整理した．今後は無関心層や低関心層を対象とした研究の強化，5W1Hを起点とした実効性の高い介入施策のデザインと検証，有用なノウハウやアセットを持つ民間セクターとの積極的な連携が期待される． 本人担当部分：文献検索および文献レビューを行った． 共著者：佐藤克彦，戒田信賢，大浦智子，太田はるか，中山寛子，森岡美帆，甲斐千晴，小柳仁，中山健夫
35 Surveying Therapists on Seating Approaches for Patients with Muscular Dystrophy in Japan（査読付）（日本における筋ジストロフィー患者のシーティングアプローチに関する療法士への調査）（査読付）	共著	令和3年5月	Healthcare　9(6)：631，2021. DOI:10.3390/healthcare9060631	筋ジストロフィー患者の車いすシーティングに関わる療法士を対象に、シーティングの実施状況について質問紙調査を実施した． 本人担当部分：共著者とともに研究計画の立案・実施した 共著者：Fujita H，Tsukada A，Ohura T

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
36 Factorial validity and internal consistency of a practitioners' checklist for therapists in rehabilitation（査読付）（リハビリテーションにおける療法士のための実践者用チェックリストの因子的妥当性と内的整合性）（査読付）	共著	令和3年11月	JBI Evidence Implementation 19:387-393, 2021.	病院・訪問で働く療法士を対象にリハビリテーション実践におけるチェックリストの因子的妥当性と内的整合性を検証した．分析対象は385人で，4因子20項目のモデル適合度はRMSEA0.083, GFI0.843,AGFI0.799で、因子間の相関は0.67-0.95，各因子からの因子負荷量は20項目すべてで0.41以上だった． Cronbach's α係数は0.896, 0.890, 0.935, 0.925だった． 本人担当部分：研究計画の立案・実施を主で行った． 共著者：Ohura T, Tsuyama T, Furusawa M, Iitsuka T
37 コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題―学内実習の概要と学生アンケート調査による考察―（査読付）	共著	令和4年3月	医療福祉情報行動科学研究　Vol.9 ： 31-38,2022.	訪問リハビリテーションまたは通所リハビリテーションに関する実習（以下、地域実習）において新型コロナウイルスの感染拡大により，令和2年度・3年度の学内での地域実習は2年次後期配当科目で2週間実施した．実習は①予習，②学内実習，③復習で構成され，履修学生に対する実習終了後アンケート調査は両年度ともに約95％の回答率で類似した回答傾向，地域実習で扱ったテーマについては約90%の学生が理解できたと回答，訪問・通所事業所のライブ中継は100%に近い割合で高い評価であった一方，3年次以降の臨床実習に対して最大約40%の学生が「不安」と回答した． 本人担当部分：共著者とともに実習および研究を実施した． 共著者：滝本幸治，池田耕二，吉川義之，坪内善仁，笹野弘美，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生
38 介護職員の専門職意識と離職予防:先行研究からの考察	単著	2022年6月	地域ケアリング 24(6) 64-66 2022.	介護職員の離職に関わるよういんについて明らかにするために，本邦にて発行された文献をレビューし，概観した． 単著
39 Evaluation of Clinical Practice Guidelines for Rare Diseases in Japan（日本における希少疾患の診療ガイドラインの評価）（査読付）	共著	2022年10月	JMA Journal 5(4): 460-470, 2022.	希少患者を対象とした診療ガイドラインをレビューし，ガイドラインの実態を明らかにした． 本人担当分：共著者と共にレビューおよび研究を実施した． 共著者：Uchida T, Takahashi Y, Yamashita H, Nakaoku Y, Ohura T, Okura T, Masuzawa Y, Hosaka M, Kobayashi H, Sengoku T, Nakayama T
40 高齢者の市中肺炎（院外肺炎）の危険因子とインフルエンザワクチン・肺炎球菌ワクチン接種：公衆衛生モニタリング・レポート委員会報告（査読付）	共著	印刷中	日本公衆衛生雑誌（印刷中）.	高齢者の市中肺炎の危険因子とインフルエンザワクチン・肺炎球菌ワクチン接種について，検討した． 本人担当部分：共著者と共に実施した． 共著者：鷲尾昌一，石崎達郎，植木章三，藤原佳典，大浦智子，安西将也，甲斐一郎，奥村二郎，大坪徹也，矢庭さゆり，島本太香子，渡辺修一郎
41 高次脳機能障害者への実車評価の実施状況と受け入れに関する意向 -指定自動車教習所の代表者と指導員への質問紙調査-（査読付）	共著	印刷中	作業療法ジャーナル（印刷中）	高次脳機能障害者の自動車運転について，実車評価の実態と恵瓊れに関する意向について明らかにした． 本人担当部分：主として質的分析を担当し，考察した． 共著者：今井あい子，石川稜馬，飯塚照史，大浦智子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「ガイドライン」 1 JSPU Guidelines for the Prevention and Management of Pressure Ulcers (3rd Ed.) (褥瘡予防・管理ガイドライン（第3版）)	共著	平成26年3月	Jpn J PU 16(1): 12-90, 2014.	科学的根拠に基づく褥瘡予防・管理ガイドラインの改訂版を作成した. 本人担当部分：委員会による作成のため抽出不可能　（ガイドラインについての説明と位置づけについて概説し，褥瘡予防・管理ガイドライン第3版作成にあたり，各分野の推奨度の根拠となる文献の研究デザインおよびエビデンスレベルを判断し，ガイドラインにおける推奨度決定を支援した.） 共著者：The Japanese Society of Pressure Ulcers Guideline Revision Committee (Tsuboi R, Tanaka M, Kadono T, Nagai Y, Furuta K,Noda Y, Sekine Y, Kaitani T, Kataoka H, Nakagawa H, Iwamoto T, Kurita M, Kinoshita M, Kurashige Y, Nakagami G, Kakizaki S, Hidaka M, Hirose H, Sugimoto M, Miyajima M, Noguchi M, Okuwa M, Ishizawa M, Kinoshita Y, Sobue M, Murooka Y, Matsui Y, Ohura T, Konya C, Ichioka S, Sugama J, Tanaka H, Adachi K, Nakayama T, Miyachi Y)
「総説・解説等」 1 （提言）患者中心のアプローチ（Patient-centered approach）と根拠に基づく実践（Evidence-based Practice）：より良い作業療法実践にむけて	単著	平成27年2月	OTジャーナル 49: 90-91, 2015	作業療法領域における「患者中心のアプローチ（Patient-centered approach: PCA）」，「根拠に基づく実践（Evidence-based Practice: EBP）」，「意思決定の共有（Shared-decision making: SDM）」と「説明と同意Informed Consent（IC）」を紹介した.
2 EQUATOR Networkから得られる，質の高い研究報告のための国際ルール④ PRISMA: システマティック・レビュー報告のためのツール	共著	平成27年5月	Jpn Pharmacol Ther（薬理と治療）43 suppl. 1: s44-s50, 2015.	メタアナリシスとシステマティックレビューの報告のガイダンスであるPRISMA（Preferred Reporting Items for Systematic reviews and Meta-Analyses）の概要を紹介し，今後の展望をまとめた. 本人担当部分：共著者の助言を得て，論文を執筆した. 共著者：大浦智子，中山健夫
3 （特集）訪問リハビリテーション・チェックリストの開発：具体的な目標設定と明確な課題解決のプロセス	共著	平成28年3月	訪問リハビリテーション協会機関紙43: 29-34.2016	明確な目標設定に基づく効果的な訪問リハビリテーション（訪問リハ）の提供を可能とするためのアセスメントシートとチェックリストを開発した．チェックリストは4領域20項目で構成された. 本人担当部分：共著者の助言を得て研究計画を立案・実施し，論文を執筆した. 共著者：大浦智子，津山努，古澤麻衣
4 養成校における訪問リハビリテーションの教育の現状と課題	単著	平成29年1月	地域リハビリテーション 12: 34-39, 2017	養成校における訪問リハビリテーションの教育の現状と課題について，報告した．養成教育における地域関連科目と単位数，全体のなかでの訪問リハビリテーションについて説明できる時間的制約について概説する一方，近年の実習における訪問リハビリテーション見学場面の増加などについて示した.
「報告書等」 1 市民の健康に関する意識調査報告書	共著	平成26年2月	平成25年度東海市健康増進計画等の評価及び策定支援委託事業（星城大学）	東海市健康増進計画等の評価及び策定にむけた調査を集計し報告した. A4判　全158頁 本人担当部分：データ集計・結果の解釈および報告書を主となって作成し，とりまとめた. 共著者：江西一成，竹田徳則，大浦智子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2 地域居住高齢者の健康増進・介護予防プログラムとしてのシリアスゲームの活用	共著	平成26年3月	平成25年度元気創造研究センター年報（星城大学）	地域における介護予防のための健康サロンに参加する高齢者の健康情報ニーズの収集方法などについて調査し，シリアスゲームを活用した健康教育活動について検討した. A4判　全44頁 代表：大浦智子 本人担当部分：「地域居住高齢者の健康増進・介護予防プログラムとしてのシリアスゲームの活用」pp31-33を共著（筆頭）. 公民館サロン参加高齢者の健康関連ニーズ及び入手源について調査し，報告した. 共著者：大浦智子，竹田徳則，天野圭二，冨山直輝，木村大介
3 介護予防のための心理社会面に着目した包括的地域介入に関する研究	共著	平成26年3月	平成25年度元気創造研究センター年報（星城大学）	心理社会面と健康に着目し「憩いのサロン」を活用した介護予防のための地域介入によってもたらされる効果と課題について長期追跡によって検証した（2年目）. A4判　全44頁 代表：竹田徳則 本人担当部分：「介護予防のための心理社会面に着目した包括的地域介入に関する研究」pp.34-36を共著 　介護予防の一次予防事業「憩いのサロン」拠点数の増加に伴う延べ参加者の増加，一時予防事業として展開される中での二次予防事業該当者のカバー，サロン参加と回数が多いほど要介護認定発生が有意に低いことを報告した．（研究の実施および論文執筆にあたり助言した.） 共著者：竹田徳則，木村大介，大浦智子，今井あい子
4 介護予防サロン運営展開方法調査報告書	共著	平成27年1月	平成26年度東海市委託事業(星城大学)	東海市のサロン運営ボランティアへのヒアリングと質問紙調査の実施・集計と，これに基づく提案を報告した. A4判　全21頁 本人担当部分：共著者とともに質問紙を作成し，調査の実施・集計と報告書の作成を主に担った. 共著者：安倍基幸，竹田徳則，江西一成，大浦智子
5 地域居住高齢者の健康増進・介護予防プログラムとしてのシリアスゲームの活用	共著	平成27年3月	平成26年度元気創造研究センター年報（星城大学）	地域における介護予防のための健康サロンに参加する高齢者の健康情報ニーズの収集方法などについて調査し，シリアスゲームを活用した健康教育活動について検討した（2年目）. A4版　全33頁 代表：大浦智子 本人担当部分：「地域居住高齢者の健康増進・介護予防プログラムとしてのシリアスゲームの活用」pp23-26を共著（筆頭）. 公民館サロン参加高齢者に対する健康増進・介護予防プログラムとして実施した健康川柳の募集，健康川柳を活用したカルタの作成とカルタの活用について報告した. 共著者：大浦智子，竹田徳則，天野圭二，冨山直輝，木村大介

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6 公衆衛生モニタリング・レポート委員会平成26年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	平成27年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある12グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全59頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた3つの個別課題pp.14-18を共著 （このうち，高齢者グループ個別課題②「高齢者の地域におけるリハビリテーションについて」pp.15-17担当執筆） 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，須知雅史，多田敏子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）
7 小規模私立大学で運用可能な調査システムを活用した、大学生の精神健康実態調査	共著	平成28年3月	平成27年度元気創造研究センター年報（星城大学）	A4判　全33頁 学年および学部別の精神健康の特徴，および進級に伴う精神健康の推移を明らかにするために，学生の精神健康について実態を調査した. 代表：羽山 順子 本人担当部分：「小規模私立大学で運用可能な調査システムを活用した、大学生の精神健康実態調査」pp25-29を共著. 学生の精神的健康とアルバイトとの関連，半年後の精神健康を予測する要因について報告した. 共著者：羽山 順子，安部 基幸，赤岡 美津子，大浦智子
8 認知症高齢者主観的QOL向上をめざすADLプログラム開発に向けた在宅生活の実態調査	共著	平成28年8月	公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団2015年度「在宅医療研究への助成」一般公募研究（前期）完了報告書	認知症高齢者の日常生活活動プログラム構築のために，在宅で暮らす認知症高齢者の日常生活活動，主観的QOLなどを調査した．日常生活活動の障害が，認知症高齢者の主観的QOLを低下させる要因であることが示唆された.（研究の実施，および報告書作成にあたり助言した.） A4判　全13頁（PDF公開） 代表：中西康祐 本人担当部分：代表者とともに研究計画を立案し，分析・報告にあたり助言をした. 共著者：中西康祐，大浦智子，増田秀一
9 公衆衛生モニタリング・レポート委員会平成27年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	平成28年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある11グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全64頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた3つの個別課題pp.13-17を共著 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，須知雅史，多田敏子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10 公衆衛生モニタリング・レポート委員会 平成28年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	平成29年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある11グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全72頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた3つの個別課題pp.18-23を共著 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，須知雅史，多田敏子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）
11 公衆衛生モニタリング・レポート委員会 平成29/30年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	平成30年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある11グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全83頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた2つの個別課題pp.16-20を共著 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，島本太香子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）
12 回復期リハビリテーション病棟における退院前指導に関する実態：レセプトデータによる医科情報を用いたリハビリテーション研究の可能性	共著	平成31年3月	平成30年度元気創造研究センター年報（星城大学）	A4判　全83頁 回復期リハビリテーションを担う「回復期リハビリテーション病棟」における「入院時訪問指導加算」算定の実態を明らかにすることを目的に，日本医療データセンター（JMDC）のレセプトデータを用いて分析した. 代表：大浦智子 本人担当部分：「H003-2 リハビリテーション総合計画評価料 」算定件数は増加傾向にあること，「入院時訪問指導加算」の算定割合は新規に回復期リハビリテーション病棟に入院した数に対して限定的で，月単位における増減があるものの、やや増加していることを明らかにし，pp.14-16を共著. 共著者：大浦智子，飯塚照史
13 公衆衛生モニタリング・レポート委員会 2018/2019年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	令和元年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある11グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全83頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた1つの個別課題pp.13-20を共著 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，島本太香子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14 公衆衛生モニタリング・レポート委員会 2020/2021年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	令和3年12月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある12グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全80頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた2つの個別課題のうち1つの課題pp.13-15を共著（高齢者の市中肺炎の危険因子とインフルエンザワクチンの効果．執筆担当者：鷲尾昌一，石崎達郎，大浦智子，渡辺修一郎） 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （渡辺修一郎（リーダー），安西将也，石崎達郎，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，島本太香子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一）
「国際学会」 1 Differences between users and providers in regard to awareness and understanding the content and subjective effects of home-visit rehabilitation (訪問リハビリテーションの内容と主観的効果に関する利用者と提供者の認識と理解の違い)	―	平成26年6月	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo (Yokohama)	利用者と提供者間における訪問リハ内容・主観的効果に対する認識の相違を明らかにするための質問紙調査を行った．利用者が提供者よりも実施したと認識する内容は，筋力や体力・麻痺・床上動作・身のまわり動作・屋内移動・呼吸の改善の6項目，利用者の主観的効果(維持・向上)は転倒の危険・家族関係が最も高かった. 本人担当部分：研究の計画立案・実施と結果を集計し，報告した. 共同発表者：Ohura T, Tsuyama T, Nakayama T
2 Evaluation of the Facilitative Factors for the Prevention of Cognitive Decline in a Preventive Intervention for Dementia (認知症予防介入における認知機能低下促進因子の評価)	―	平成26年6月	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo (Yokohama)	一次予防事業であるサロン参加者の認知機能低下をエンドポイントとした4年間の追跡調査と分析を行った．サロン参加者では，Social networkやLeisure activityの高い状態が長期的には，認知機能低下に保護的である可能性が考えられた. 本人担当部分：研究の計画立案・実施および報告に向けた助言をした．. 共同発表者：Kimura D, Takeda T, Ohura T, Imai A
3 Motor and psychosocial tendencies in elderly women receiving primary preventive services (一次予防事業に参加する高齢女性の運動と心理社会特性)	―	平成26年6月	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo (Yokohama)	一次予防事業参加女性における運動器関連低下の割合と健康に関連する心理社会面を，横断的に検討した．予防事業参加女性の運動器該当群は約2割で，非該当群より生活機能，外出頻度の低下，うつ得点が高いことが示唆された. 本人担当部分：研究の計画立案・実施および報告に向けた助言をした．. 共同発表者：Imai A, Takeda T, Kimura D, Ohura T
「国内学会」 1 訪問リハビリテーション利用者・家族の生活目標：自由記述回答の質的分析	―	平成25年6月	第2回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（松本）	5箇所の訪問リハ事業所の利用者155名とその家族を対象に生活目標に関する質問紙調査を実施した．生活目標は，利用者では8個の二次カテゴリに，家族では17個の二次カテゴリに集約された．利用者と家族の生活目標は，歩行や外出等の移動が共通し，利用者では[自分らしい生活]，家族では[その人らしい活動]が挙げられていた. 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した. 共同発表者：大浦智子，津山努

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2 作業療法学専攻学生における“憩いのサロン事業”参加前後の学習と気づき	－	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪）	一次予防事業としての閉じこもり・認知症予防のための「憩いのサロン」に参加している学生を対象に，サロン参加前後のコミュニケーションや作業療法関連知識に対する質問紙調査を実施した．サロン参加によって「コミュニケーションの反省」や「改善したい態度」が意識化され，これらの課題について臨床実習前に学生が気づくには学内教育では限界があることがわかった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，竹田徳則，木村大介，今井あい子
3 脳卒中患者を対象とした作業療法介入ランダム化比較試験における評価尺度の計量的研究	－	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪）	2006-2010年に公表された脳卒中患者に対するOT介入RCTで使用された評価尺度を計量した．2006-2010年の5年間に公表された脳卒中患者対象のOT介入RCTは9論文(入院5，地域4)で，「活動・参加」で使用された評価尺度は基本動作やセルフケアに関するものが主であり，IADLやQOL，主観的な満足感を評価尺度として採用している研究は一部に限られていた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施を支援し、報告にむけて助言した． 共同発表者：田中理乃，大浦智子，中山健夫
4 ポピュレーションアプローチによる介護予防に向けた憩いのサロン事業-参加促進要因-	－	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪）	介護予防に向けたサロン参加促進の手がかりを得るために，お元気チェックにおいてサロン参加のきっかけを質問項目のひとつとして調査した．サロン参加へのきっかけは，ボランティアと参加者で「人」と「町広報誌」，参加者では「回覧板」や「老人会」を介した情報的サポートが多い反面，「家族の勧め」は少なかった． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：竹田徳則，近藤克則，大浦智子，木村大介，今井あい子
5 地域在住高齢者における自己記入式認知機能検査日本語版(Test Your Memory -J)の基準関連妥当性の検討	－	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪）	地域在住高齢者を対象にTest Your Memory-J（TYM-J)の基準関連妥当性を，MMSE・HDS-R・CDRを併用して検討した．地域在住高齢者の認知機能評価としてのTYM-Jの妥当性と検査適正が確認できた． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：木村大介，竹田徳則，大浦智子，今井あい子
6 入所高齢者の主観的ニーズを把握するための質問紙の作成：内的整合性と再現性	－	平成25年10月	第72回日本公衆衛生学会（津）	施設入所の要介護高齢者における生活に関する主観的ニーズ把握のための質問紙の内的整合性と再現性を検証した．質問紙は，高齢者の主観的ニーズに関する4領域・合計25項目で構成され，質問紙の4領域の内的整合性は高く，領域や項目による信頼性の高低があった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，東尚弘，石崎達郎，中山健夫

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7 高齢者施設の常勤介護職員における離職とその関連要因の検討	－	平成25年11月	第53回近畿産業衛生学会（京都）	常勤介護職員の離職と職業ストレス，バーンアウト，抑うつ等との関係を明らかにするために，調査後1年以内の離職の有無をアウトカムとした共分散構造分析を行った．常勤介護職員において，バーンアウト（BO）の情緒的消耗感には職業ストレス・BO脱人格化やBO個人的達成感・抑うつが関与しており，BO情緒的消耗感が限定的ではあるが離職の直接要因となっていた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，石崎達郎，中山健夫
8 臨床実習後の作業療法学生が目標・理想とする作業療法士	－	平成25年11月	第13回東海北陸作業療法学会（富山）	最終学年での臨床実習（8週間の総合実習2回）を終えた学生がm目指す作業療法士をを明らかにするために，記述式質問紙調査で得た内容を質的に分析した．臨床実習を終えた学生は，目標・理想とする作業療法士の要素として【技能】や【総合的判断力】に着目していた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施を支援し、報告にむけて助言した． 共同発表者：山崎竜弥，大浦智子
9 訪問リハビリテーションの効果判定に使用されている評価指標：国内外の作業療法効果に関する文献レビュー	－	平成26年6月	第4回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（熊本）	高齢者への訪問リハビリテーションにおける作業療法介入研究の使用評価指標を明らかにした．包含基準を満たす国内外5論文の使用評価指標は対象者8種（セルフケアや転倒発生等），介護者2種（負担感等）だった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，古澤麻衣，中山健夫
10 女性高齢者の認知機能を規定する生活機能の探索的分析	－	平成26年9月	第4回日本認知症予防学会（平成26年9月，東京）	サロンに参加する女性64名を対象に，手段的自立（以下，IADL）などを含む高次生活機能の状態が認知機能に及ぼす影響を明らかにした．見当識と視空間はIADL，語流暢性は知的能動性，遅延再生は社会的役割の状態から説明可能であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案し，実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：木村大介，古澤麻衣，大浦智子，竹田徳則，冨山直輝，天野圭二
11 健康サロン参加高齢者の健康関連情報ニーズとIT使用状況	－	平成26年11月	第73回日本公衆衛生学会（宇都宮）	健康サロン参加高齢者の健康関連情報ニーズとIT使用状況を明らかにするための質問紙調査を実施した．健康サロン参加高齢者の健康関連情報ニーズとして，認知症，物忘れ，筋力低下，骨粗鬆症の関心が高かった．携帯電話およびインターネットの使用状況が決して高いとはいえなかった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，竹田徳則

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12 認知症高齢者の回復期病棟退院前後における家族介護者の負担感の特徴	－	平成27年5月	第16回認知症ケア学会（札幌）	回復期リハビリテーション病棟から自宅退院した認知症を伴う高齢者の介護者における負担感の変化と関連要因を検討した．介護者は高齢者が入院中でも何らかの介護負担を感じ，退院後に高い傾向にあった．介護者の多くは認知症の症状を理解し，サポートの受領もあったが，負担が高い群の半数はBPSDによる負担感があり，その高齢者は退院後もBPSDが出現し，ADL自立は総じて低かった． 本人担当部分：研究結果の解釈および報告にむけて助言した． 共同発表者：藤田彩花，竹田徳則，大浦智子，神田太一
13 訪問リハビリテーション・チェックリストの開発：具体的な目標設定と明確な課題解決のプロセス	－	平成27年5月	第6回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（大阪）	明確な目標設定に基づく効果的な訪問リハビリテーション（訪問リハ）の提供を可能とするためのアセスメントシートとチェックリストを開発した．チェックリストは4領域20項目で構成された． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，古澤麻衣
14 院外心停止に居あわせた市民の　心肺蘇生における心理・行動プロセスとその関連要因	－	平成27年6月	第18回　日本臨床救急医学会総会・学術集会（富山）	院外心停止に居あわせた市民の心肺蘇生における心理・行動プロセスとその関連要因を明らかにするために，インタビューを用いた質的研究を行った．助けたいという動機の存在のもと，心配停止現場に伴う負担と心肺蘇生を実施する根拠の葛藤が生じていることが明らかとなった． 本人担当部分：データの分析を共に担い，研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：島本大也，西山知佳，大浦智子，石見拓
15 訪問リハビリテーション実施計画書における目標とプログラムの施設間の違い	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	訪問リハ実施計画書（計画書）の目標とプログラムを構成するICF領域数を施設間で比較した．3施設に対象者特性の大きな違いはなかったが，目標の領域数はPTによる計画書で施設間の違いが認められた．プログラムの領域数は全体・PT・OTいずれの場合においても施設間の違いが認められた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，山内春香，佐竹美保
16 訪問リハビリテーション実施計画書の目標とプログラム	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	作業療法士が作成した訪問リハ実施計画書（計画書）の目標とプログラムを構成するICF領域数を計量した．目標の組み合わせは＜活動のみ＞と＜活動とその他＞をあわせて約半数を超えていたことに対し，プログラムの上位は＜心身と活動＞，＜心身と活動とその他＞，＜心身と活動と環境＞のように「心身」を含む複数領域で構成される組み合わせに広がっていた． 本人担当部分：研究計画を立案・実施し，データの分析および報告にむけて支援した． 共同発表者：山内春香，佐竹美保，津山努，大浦智子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17 介護予防「憩いのサロン」事業参加者における二次予防リスク者の特徴	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	一時予防事業であるサロン参加者における二次予防対策リスク者とその割合を確認し，サロンを活用した一時予防事業プログラムにつながる基礎資料を得るために，お元気チェックで得た自記式質問紙の回答を分析した．運動器と口腔機能，認知機能，うつの各リスク者，なかでも平均年齢の高い一般参加者で二次予防事業該当者が多く含まれていた． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：竹田徳則，木村大介，大浦智子，今井あい子
18 介護予防・認知症予防事業に参加している地域在住高齢者の認知機能の影響要因に関する共分散構造分析を用いた分析	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	認知機能に対する予防要因を明らかにし，予防要因が認知機能に与える影響のプロセスを明らかにした．認知機能に対する予防要因である潜在変数は，「生活上の役割」「社会的技能」「知的IADL」「身体機能」に集約された．認知機能予防事業には，「社会参加」を通じて認知機能を高める関節効果と４つの潜在因子が認知機能に直接影響する直接効果の両者の介入効果が包含されていた． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：木村大介，竹田徳則，大浦智子，今井あい子
19 前向きな障害受容は脳卒中後遺症者の主観的幸福感に関連するか？	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	脳卒中後遺症を有する者の主観的幸福感を高める支援に向けて，前向きな障害受容と主観的幸福感の関連を検討した．ロジスティック回帰分析の結果，主観的幸福感には，機能低下や活動制限など以上に，親しい人との交流満足感が関与しており，脳卒中後遺症を有する者の対人交流の状態やその満足感に着目する重要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案・実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：今井あい子，平野友祐，大浦智子
20 認知症高齢者の介護者に対する情報的サポート内容の検討	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	介護者を対象にOTから入院中に受けたサポート内容と自宅で介護をすることで入院中にあれば良かったと思うサポート内容を調査し，OTが今後提供すべきサポート内容を検討した．退院1ヵ月後の介護において入院中にあれば良かったサポートは「認知症症状の対応」と「コミュニケーション方法」，「できることを増やす方法」など高齢者の症状理解と対応方法に関する内容が多かったが，これらは入院中の提供が少ない傾向であった． 本人担当部分：結果の解釈に関する助言，および報告にむけて支援した． 共同発表者：藤田彩花，竹田徳則，大浦智子，神田太一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
21 3ヶ月以内に訪問リハビリテーションの目標達成 終了に至る要因の探索	－	平成27年11月	第74回日本公衆衛生学会（長崎）	訪問リハビリテーションの初回目標/プログラムの内容と目標達成による3か月以内の終了との関連を明らかにするために，リハビリテーション実施計画書の後方視的研究を行った．セルフケアのうち，入浴を視野に入れた目標のもと，計画的に評価を行うことが，限られた期間内に目標を達成し終了に至る要因となる可能性がある． 本人担当部分：研究計画を立案・実施し，データの分析および報告にむけて助言した． 共同発表者：古澤麻衣，大浦智子，藤井啓介
22 訪問リハビリテーション内容と効果に対する利用者家族と提供者の捉え方の相違	－	平成27年11月	第74回日本公衆衛生学会（長崎）	訪問リハビリテーション利用者家族と提供者50組を対象に，主観的効果と実施プログラムの認識の相違を明らかにした．利用者家族は，提供者が考えているよりも症状や床上動作の改善に向けたプログラムやマッサージを実施していると認識しており，痛みや症状の改善を自覚していた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，中山健夫
23 訪問と回復期におけるリハビリテーション実践状況の違いー複数施設を対象とした質問紙調査ー	－	平成28年3月	第3回臨床作業療法学会学術大会（東京）	訪問リハと回復期リハにおける実践状況の相違を明らかにした．訪問群が回復期群に比べて，環境に関する評価や専門的立場からの助言，対象者や家族の意向を反映し理解のもとに決定したプランを立案・実施していた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，古澤麻衣
24 作業療法のクリニカルリーズニングと患者満足度との関連	－	平成28年3月	第3回臨床作業療法学会学術大会（東京）	作業療法士（OTR)のクリニカルリーズニング（CR)と作業療法内容，クライアント（CL)の満足度の関連を明らかにするために，19組の質問紙回答を分析した．約半数のOTRの経験年数が1～2 年目だったが，CRの合計は 7.3 と多くの活用が認められた．CLの満足度はどの項目においても作業療法に対して高い評価だったことに対し，OTR が予測したCLの満足度や作業療法の提供満足度は約5点と低かった． 本人担当部分：研究計画立案をともに行い，データの分析および報告にむけて助言した． 共同発表者：古澤麻衣，大浦智子，藤井啓介
25 脳卒中患者を対象としたModified Barthel Indexの信頼性	－	平成28年6月	第53回日本リハビリテーション医学会(大阪)	日本語版performance evaluation tool of Modified Barthel Indexの信頼性を，ビデオ法を用いて検証した．合計点数の評価者間・評価者内信頼性はAlmost perfect，全項目がAlmost perfect- Substantialであったことから，信頼性があると判断した． 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，長谷公隆，中島美恵，中山健夫

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
26 臨床経験を有する者における訪問リハビリテーション配属期間と実践状況との関連	－	平成28年6月	第8回日本訪問リハビリテーション協会（東京）	臨床経験が6年目以上の者における訪問リハビリテーション（訪問リハ）配属期間と実践状況との関連を明らかにした．訪問長群は訪問短群に比べてICFの活動・参加に関する評価を行い，プランの実施に対象者や家族の意向を反映していると自己評価していた．訪問長群では，対象者だけでなく家族の意向の調整を含めた総合的視点に配慮した実践に取り組んでいた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，古澤麻衣
27 臨床経験とリハビリテーション実践との関連	－	平成28年9月	第50回日本作業療法学会（札幌）	臨床経験年数と実践状況との関連を明らかにするために，6箇所の回復期リハ病棟から得られた223名の質問紙の回答（新人群144名，経験群79名）を分析した．経験群は，全20項目において新人群に比べて実践状況が高かったことから，これらの項目の実践状況は経験年数との関連が示唆された． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，古澤麻衣
28 認知症高齢者のQOL向上に寄与するADL介入プロトコル構築のための予備的調査	－	平成28年9月	第50回日本作業療法学会（札幌）	施設の認知症高齢者のQOL向上に寄与するADL介入プロトコルを構築するため，予備的介入調査を実施しその効果を検証した．ADL介入をとおして，QOLは主観的評価と代理評価のいずれも向上した．介入毎の意欲向上の記録や介入後の肯定的な感想から，QOLが向上した一因がうかがえた． 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告にむけて助言した． 共同発表者：中西康祐，大浦智子，矢田智恵美，浅井健一
29 医学生は、患者視点をどのように学ぶことができるのか～リウマチ患者へのインタビューを通じて～	－	平成28年9月	第8回ヘルスコミュニケーション学会（東京）	「リウマチ友の会」会員に行った質問紙調査の自由記述式の質問に対する回答結果を，医学生4名（5年生3名、6年生1名）でKJ法により分析した．患者が希望するのは『不安・不満の解消』であり，患者の持つ不安・不満は『生活上の問題』，『心理的な問題』，『社会的な問題』に大別できた。これらの不安・不満の解消を阻害する要因として『患者視点に欠ける医療体制および診療内容』が抽出された．これら2つの阻害要因について，具体的どのようなことを改善すべきなのかをインタビュー調査で明らかにした． 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告にむけて支援した． 共同発表者：荘子万能，　西明博，橋本里穂，石橋茉実，小嶋雅代，大浦智子，山中寿，中山 健夫
30 回復期リハビリテーション病棟と訪問リハビリテーション実践の制約	－	平成28年10月	第75回日本公衆衛生学会（大阪）	リハビリテーション（リハ）専門職における臨床実践上での制約を明らかにした．17箇所から得られた385名の質問紙の回答（回復期222名，訪問163名）から，回復期ではプランの提案や立案・実施に制約を感じる一方で，訪問では生活目標の共有や課題の原因特定と対象者・家族への伝達・理解に制約を感じていることがわかった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，古澤麻衣

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
31 リウマチ寛解基準へのPGA導入過渡期の患者の類型化	－	平成29年8月	第49回日本医学教育学会大会（札幌）	医療に対する患者の多様性を把握するために，関節リウマチ患者を対象とした4回のフォーカスグループインタビューを用いて，段階的コーディングで語りの潜在的意味を可視化するSCAT手法により分析した.分析の結果，完治を追求する「理想志向型」、医師に提案を行う「提案型」、医師の言う通りに従う「開き直り型」、嘘をつく「医師あやつり型」の4類型に分けられ，タイプ毎の医師患者関係を明らかにした. 本人担当部分：共著者と共に研究を実施した. 共同発表者：中村里香，肥田武，小嶋雅代，末松三奈，大浦智子，安井浩樹，高橋徳幸，阿部恵子，岡崎研太郎，植村和正
32 関節リウマチ患者と医学生の面接によって得られた「患者の声」	－	平成29年9月	第9回ヘルスコミュニケーション学会（京都）	「（病気の）つらさ」に焦点をあて,9名（女性）の患者を対象に医学生3名（5回生）が同席のもとで非医師がフォーカスグループインタビューを行った結果，4つの大カテゴリ（【ライフイベント】【近親者による理解の有無】【周囲からの親切に対する思い】【リウマチに対する受入れの困難さ】）が抽出された．患者個人の体験としてのライフイベントや病気に対する周囲の理解に関する内容が「（病気の）つらさ」として抽出され，これらへの支援の必要性が示唆された. 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告した. 共同発表者：大浦智子，小嶋雅代，山中寿，荘子万能，　西明博，橋本里穂，石橋茉実，中山 健夫
33 関節リウマチ患者と医学生の合同グループワークの経験から：患者さんの感じたこと・医学生の学んだこと	－	平成29年9月	第9回ヘルスコミュニケーション学会（京都）	関節リウマチ（RA）患者と医学生の合同グループワークグループワーク（GW）を通して両者が感じたことと、今後の医学教育に必要と考えることを明らかにするために，質問紙調査によって面接の感想と医学教育に必要と考えることについて回答を得た．患者理解を試みる医学生に対し，患者から「伝えたい・教えたい」という思いが表出された一方，医学生は患者の生活像を理解する必要性を実感する機会となった. 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告した. 共同発表者：大浦智子，小嶋雅代，山中寿，荘子万能，　西明博，橋本里穂，石橋茉実，中山 健夫
34 救命処置実施への自信につながる心肺蘇生講習会の内容	－	平成30年6月	第21回　日本臨床救急医学会総会・学術集会（名古屋）	救命処置の自信に繋がる心肺蘇生講習会の内容を明らかにするために，心肺蘇生講習会に参加した18歳以上の市民を対象に質問紙調査を行い，自由記述に記載された講習会の良かった点に関して内容分析を行った．自由記述を分析した結果，自信に繋がった講習会の内容は「救命処置の体験」に関わるものが多くを占めた．救命処置を体験することで自信獲得に繋がること，質疑への対応や手技へのフィードバック，リアリティのある状況設定に応じた練習も重要であることが示唆された. 本人担当部分：データの分析を共に担い，研究の実施および報告にむけて助言した. 共同発表者：島本大也，西山知佳，大浦智子，石見拓

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
35 訪問リハビリテーション実践チェックリストの因子的妥当性と内的整合性	－	平成30年6月	第12回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（北九州）	訪問リハに配属されている理学療法士，作業療法士，言語聴覚士163名を分析対象とし，訪問リハ実践チェックリストに基づいて過去1ヶ月間の実践状況（0-10の11段階）を問う無記名自記式質問紙調査結果を分析した．質問紙は基本情報のほか，長期・短期目標からなる＜目標設定：Q1-5＞，優先度の高い活動を妨げている作業工程と行為をICFで整理する＜課題の分析：Q6-10＞，解決方法（プラン）の選択肢と根拠を整理する＜プランの提案：Q11-15＞，プランの頻度と期間を決定づける＜プランの立案と実施：Q16-20＞の4領域20項目で，確証的因子分析（CFA）によるモデル適合はRMSEA=0.079，GFI=0.80，AGFI=0.74だった．クロンバックα係数は4領域すべてで0.90以上だった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，古澤麻衣，津山努
36　回復期リハビリテーション病棟における実践チェックリストの因子的妥当性と内的整合性	－	平成30年9月	第52回日本作業療法学会（名古屋）	回復期リハに配属されている理学療法士，作業療法士，言語聴覚士222名を分析対象とし，実践チェックリストに基づいて過去1ヶ月間の実践状況（0-10の11段階）を問う無記名自記式質問紙調査結果を分析した．質問紙は基本情報のほか，長期・短期目標からなる＜目標設定：Q1-5＞，優先度の高い活動を妨げている作業工程と行為をICFで整理する＜課題の分析：Q6-10＞，解決方法（プラン）の選択肢と根拠を整理する＜プランの提案：Q11-15＞，プランの頻度と期間を決定づける＜プランの立案と実施：Q16-20＞の4領域20項目で，確証的因子分析（CFA）によるモデル適合はRMSEA=0.087，GFI=0.80，AGFI=0.75だった．クロンバックα係数は0.89～0.91だった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，古澤麻衣，津山努
37　回復期リハビリテーション病棟における入院時指導加算に関する実態	－	令和元年10月	第78回日本公衆衛生学会（高知）	日本医療データセンター（JMDC）のレセプトデータから，所定の期間に「1度でも回復期リハビリテーション病棟入院料を算定したことのある患者」を抽出し，新規に回復期リハビリテーション病棟に入院した数を概算した．次に，新規入院患者に占める「入院時訪問指導加算」算定件数の割合を算出した．2014年度以降，H003-2算定件数は増加傾向にあり，新規に回復期リハビリテーション病棟に入院した数に対する「入院時訪問指導加算」の算定割合は限定的であるもののH003-2と同様に増加傾向がみられた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した．
38 筋ジストロフィー患者に対する理学療法・作業療法の実態把握にむけた系統的レビュー	－	令和2年2月	第30回日本疫学会学術総会（京都）	医療従事者（理学療法士，作業療法士）を対象とした筋ジストロフィー患者の姿勢保持支援に関する調査を視野に入れ，患者を取り巻く課題と調査研究の実態を把握することを目的に，医療従事者が報告した「筋ジストロフィー」及び「理学療法」あるいは「作業療法」をキーワードとした学術報告について，系統的にレビューした．使用した文献データベースは医中誌webを用い，「筋ジストロフィー」及び「理学療法」あるいは「作業療法」をキーワードとし，2014年8月－2019年7月の5年間を対象とした．対象の学術報告は延べ266件であり，報告形態は事例研究86件，調査研究が16件，観察研究が30件，介入研究3件，解説が35件であった．そのうち，姿勢に関する報告件数は事例研究5件のみであった． 本人担当部分：研究計画立案をともに行い，データの分析および報告にむけて助言した． 共同発表者：藤田ひとみ,塚田敦史,大浦智子,木村清人,辻村尚子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
39 病院で働くリハビリテーション専門職の仕事不満足に関する要因	―	令和2年9月	第54回日本作業療法学会（新潟）	病院で働くリハ専門職の仕事への不満足感に関連する要因を明らかにすることを目的に，リハ専門職を対象に,自記式質問紙調査を実施した．分析対象は回復期・一般等の病院勤務者とし，基本情報(性・経験年数・職種等),仕事満足度,人間関係満足度を分析に用い,オッズ比を算出した(説明変数:性・経験年数・職種・人間関係満足度).分析対象は170人(経験年数[中央値]3年)で,このうち77人(45.3%)が女性だった.仕事に不満足の36人のうち16人(44.4%),満足している134人のうち8人(6.0%)が人間関係に不満足だった.ロジスティック回帰分析の結果,性・経験年数・職種は要因として抽出されず,人間関係のみが抽出された． オッズ比は人間関係満足が不満に比べて 0.079（95% 信頼区間0.030-0.210),判別的中率は83.5%だった. 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した. 共同発表者：大浦智子,福原啓太,佐藤英人,加藤美樹,藤堂恵美子
40 高齢者介護に従事する介護福祉士が自覚する仕事パフォーマンスの関連項目の探索	―	令和2年10月	第79回日本公衆衛生学会総会（京都）	高齢者介護に従事する介護福祉士が自覚する仕事パフォーマンスとの関連項目を明らかにすることを目的に，高齢者介護施設・事業所を有する2法人の介護福祉士(男性53名,女性182名)を対象に，質問紙調査を行った.仕事パフォーマンス（過去4週間の仕事に対する自己評価）の平均値(82.4±15.8%)から，83%を基準に高・低パフォーマンスに設定し，高パフォーマンス者の特徴（女性,年齢が高い,日常生活のストレスなし，仕事の相談相手が同職種の同僚,健康のために規則正しい食事・バランスのとれた食事・十分な睡眠・ストレスをためない，仕事の異動希望なし）を明らかにした. 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した（単著）.
41 病院・訪問で働くリハビリテーション専門職の勤務継続意向に関する基礎的検討	―	令和3年5月	第18回日本訪問リハビリテーション協会in高知2021（高知）	病院・訪問で働くリハ専門職の勤務継続意向に関連する要因を明らかにするために，リハ専門職を対象に，自記式質問紙調査を実施した．分析対象は回復期・一般等の病院勤務者（以下，病院）と訪問リハ事業所・訪問看護ステーション勤務者（以下，訪問）とし，基本情報（年齢・性別・職種・経験年数等），仕事の満足度，職場の勤務継続の意向を分析に用いた．分析対象は193人で，病院170人（経験年数[中央値]3年）のうち77人（45.3%），訪問23人（同12年）のうち15人（65.2%）が女性だった．継続意向は127人（経験年数[中央値]4年，女性64人[50.4%]），異動希望が63人（同2年，同26人[41.3%]）だった．仕事に満足している154人のうち113人（73.4%），不満の36人のうち14人（38.9%）が継続意向だった． 欠損値のある3名を除外した190名の勤務継続意向をアウトカムとしたロジスティック回帰分析の結果，継続意向のオッズ比は仕事満足が不満に比べて4.33（95%信頼区間2.03-9.26），病院が訪問に比べて0.11（同0.01-0.84）であり，判別的中率は71.1%だった. 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した. 共同発表者：大浦智子,福原啓太,佐藤英人,藤堂恵美子,加藤美樹

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
42 奈良学園大学におけるコロナ禍の学内実習の紹介3―地域理学療法・作業療法実習の概要と学生アンケート調査―	－	令和3年10月	全国リハビリテーション学校協会第34回教育研究大会・教員研修会（福岡）web開催 https://orbit-cs.net/34rehatki/	奈良学園大学(理学療法学専攻・作業療法学専攻)における2年次後期配当科目(2単位)である「地域理学療法実習」「地域作業療法実習」(以下，地域実習)がコロナ禍において学内実習となった．学外実習と遜色がないよう多彩な実習プログラムとなるよう配慮し，①事前学習，②学内実習，③事後学習で構成した．事後に行ったアンケートの結果，学内実習は概ね肯定的な意見であったが，今後の実習に対して不安があることが分かった．次期実習に向けた学生の不安要素に対する支援が必要である． 本人担当部分：研究を計画立案・実施した． 共同発表者：滝本幸治,吉川義之,笹野弘美,坪内善仁,前田吉樹,中島大貴,辻下聡馬,大浦智子,山形力生,池田耕二
43 根拠に基づく実践と効果指標の設定.	－	令和4年8月	LIFE2022（web）	筋ジストロフィー患者の車椅子シーティングの質向上に向けて，根拠に基づく実践と効果指標の設定について報告した． 本人担当部分：主となってとりまとめた． 共同発表者：大浦智子，藤田ひとみ，塚田敦史
44 筋ジストロフィー患者へのシーティングに関する全国調査.	－	令和4年8月	LIFE2022（web）	筋ジストロフィー患者の車椅子シーティングの質向上に向けて実施した全国調査結果を報告した． 本人担当部分：研究の実施・考察助言を行った． 共同発表者：藤田ひとみ，塚田敦史,大浦智子
45 リハビリテーション専門職者におけるTime Pressure-Kiken Yochi Training（TP-KYT)の構成概念妥当性の検討.	－	令和4年9月	第56回日本作業療法学会（京都）	リハビリテーション専門職者におけるTime Pressure-Kiken Yochi Training（TP-KYT)の構成概念妥当性について検討し，概念モデルの因子的妥当性を検証した． 本人担当部分：分析の助言を行った． 共同発表者：木下亮平，大浦智子，有久勝彦，松下航，宮口英樹
46 コロナ禍における高齢者介護従事者の仕事への不安と心配.	－	令和4年10月	第81回日本公衆衛生学会総会（山梨）	介護従事者のコロナ禍における仕事への不安・心配と，家庭生活との関係について報告した． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した（単著）．
「シンポジウム」 1「訪問リハビリテーションにおける教育のこれから～生命，生活，人生を共に歩む訪問療法士を育てる為には～」	―	平成27年5月	日本訪問リハビリテーション協会学術大会 in 大阪 シンポジウム（大阪）	シンポジウム1のシンポジストとして，求められる訪問リハビリテーションのあり方，認定訪問療法士制度と教育について講演した．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2 様々な医療の場におけるSDMの試み「地域医療の立場から」	－	平成28年2月	平成27年度厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)〈指定課題〉『社会的責任に応える医療の基盤となる診療ガイドラインの課題と可能性の研究』公開シンポジウム「Shared decision making〈SDM〉の今・これから：診療ガイドラインの新たな可能性を考える」	シンポジストとして，地域におけるリハビリテーション場面における情報共有の実態報告と，望まれる共有決定のあり方について講演した.
「インタビューセッション」				
1 インタビューセッション	－	令和3年5月	第18回日本訪問リハビリテーション協会in高知2021（高知）	調査・研究部門優秀演者として，実践報告部門優秀演者とともに登壇し，発表演題の背景や研究に係る事項について意見交換などをセッションに形式にて行った.
「メディア」				
1 サロン参加で健康に良い情報が増えた人が8割	－	平成25年10月	日本福祉大学健康社会研究センタープレスリリース	「憩いのサロン」参加者の健康情報源と情報の授受：サロンは情報の授受の場になっているか？保健師ジャーナル 69(9)；712-719. 2013.を紹介した.
2 シリーズ講話 「健康で長生きの秘けつ」	－	平成27年9月	メディアスFM	第6回「健康にまつわるコミュニケーション」を担当し，医療や健康に関するコミュニケーションの特性や留意事項を解説した. （星城大学大学院教員によるシリーズ講話）
3 わたしの健康～ＨＡＰＰＹライフ☆～ 「健康デー」特別番組	－	平成31年1月	メディアスFM	医療・健康情報の聞き方・伝え方. （星城大学大学院教員によるシリーズ講話）

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　5年　3月　31日

氏名　　大浦　智子

研究分野	研究内容のキーワード
公衆衛生学，疫学，作業療法学	健康情報学，作業療法学，ヘルスコミュニケーション

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）双方向授業の実践と演習・実習の効果的な活用	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の専任教員として担当の「基礎ゼミⅡ」（1年次）において，文献検索やMicrosoft Office Word，Excel，PowerPointの操作における課題教材の提示と演習により，スキルの修得を図った．適時，発表とフィードバックの機会を提供し，双方向授業を実践した．
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「基礎作業学」（2年次）において，基礎作業学の理解を深めるための演習を行い知識の定着につなげた．適時，発表とフィードバックの機会を提供するとともに，ICTを活用した予習や復習，課題実施状況をふまえた授業を展開し，双方向授業を実践した．
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「地域作業療法学Ⅰ」（2年次）において，地域作業療法学の理解を深めるための課題教材に加え，発表とフィードバックの機会を提供するとともに，ICTを活用した予習や復習，課題実施状況をふまえた授業を展開し，双方向授業を実践した．
	令和2年4月 ～ 令和3年3月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「疫学」（看護学科2年次）において，疫学の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげるとともに，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた（オンデマンド動画）．適時，ICTを活用したフィードバックを行い，課題実施状況をふまえた授業を展開し，双方向授業を実践した．
	令和2年4月 ～ 令和3年3月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の保健師国家試験対策（看護学科4年次）において，保健師国家試験に向けて疫学の理解を深めるための事前学習課題の活用と，演習形式のフィードバックと講義に応じたスライドにより，知識の定着につなげた．
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「老年期障害作業療法学Ⅰ（総論）」（3年次）において，老年期障害作業療法学の全体的理解を深めるための課題教材の活用に加え，適時，発表とフィードバックの機会を提供するとともに，ICTを活用した予習や復習，課題実施状況をふまえた授業を展開し，双方向授業を実践した．

事項	年月日	概　　要
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「老年期障害作業療法学Ⅱ（各論）」（3年次）において，老年期障害作業療法学各論の理解を深めるための課題教材の活用に加え，適時，発表とフィードバックの機会を提供するとともに，ICTを活用した予習や復習，課題実施状況をふまえた授業を展開し，双方向授業を実践した.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「作業療法研究法」（3年次）において，作業療法研究法の理解を深めるための課題教材の活用に加え，適時，発表とフィードバックの機会を提供するとともに，ICTを活用した予習や復習，課題実施状況をふまえた授業を展開し，双方向授業を実践した.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「作業療法学特論Ⅳ」（3年次）において，作業療法学特論Ⅳとして老年期障害の作業療法の理解を深めるための課題教材の活用に加え，適時，発表とフィードバックの機会を提供するとともに，ICTを活用した予習や復習，課題実施状況をふまえた授業を展開し，双方向授業を実践した.
2）演習・実習の効果的な活用とパワーポイントの効果的活用	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「基礎作業学」（2年次，専門科目）は，作業療法の基礎となる作業活動，理論，作業分析を理解するための科目である．補充資料に加えて体験型の演習および分析を伴う実習を取り入れ，アクティブラーニングを促進した.これにより，個々の学生の学習到達度を高めることができた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「地域作業療法学」（3年次，専門科目）は，地域生活者である対象者の理解と地域における作業療法実践の理解を深める科目である．講義に加えて適宜外部講師を招聘し，演習や事例検討を加え，地域リハビリテーションや地域作業療法，在宅サービスを理解するためのアクティブラーニングを促進した。これにより，個々の学生の学習到達度を高めることができた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「地域作業療法学演習」（3年次，専門科目）は，地域生活者の疾病・障害の予防や地域集団に対する予防教育に関する理解を深める科目である．健康行動理論や予防の考え方に関する講義のほか，介護者支援代表や行政で働く作業療法士を適宜招聘するとともに，行政と連携した地域住民対象の介護予防事業等を通して，地域リハビリテーションや地域作業療法，在宅サービスの理解を高めることができた.

事項	年月日	概　　要
3) 課題・レポートの調整と演習・実習の効果的な活用	平成22年4月 ～ 平成27年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「身体障害作業療法学実習」（3年次，専門科目）は，身体障害領域の作業療法実践の実際を理解するための科目である．主にリスク管理に関する講義および観察・面接の演習とフィードバックを担当し，疾患に応じた評価・治療計画を立案し，症例レポート作成に至るアクティブラーニングを促進した.これにより，個々の学生の学習到達度を高めることができた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学研究法演習」（3年次，専門科目）は，講義および文献抄読等を通して，学生自ら卒業研究計画を立案する科目である.具体的な研究計画事例の提示とともに，実際の研究計画を立てる課題とフィードバックにより，研究計画手順の習得を図った．これにより，個々の学生が研究倫理を理解し，研究計画書を作成することができた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学研究法特論」（4年次，専門科目）は，学生自身が卒業研究の実施と論文を執筆する過程を習得するための科目である．学士能力として研究の実施・論文執筆・プレゼンテーション能力を修得できるよう支援した．これにより，個々の学生が研究を手順に沿って実施、分析、考察することで研究の手順に対するの理解を高めることができた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅰ」（2年次，専門科目）は，病院や施設において1週間を通じて臨床実習指導者である作業療法士のもとで作業療法の役割の理解を深め，作業療法の実際を見学する科目である．臨床実習中および実習セミナーにおける指導により，臨床実習指導者のもとでの病院や施設および作業療法の役割について理解を深められるよう支援した.これにより，学生の実習における学習到達度を高めることができた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅱ」（3年次，専門科目）において，病院や施設において3週間を通じて臨床実習指導者である作業療法士のもとで対象者の評価，目標設定，記録報告等を習得する科目である．臨床実習中および実習セミナーにおける指導により，疾患や障害，作業療法評価，作業療法の目標設定について理解を深められるよう支援した.これにより，学生の実習における学習到達度を高めることができた.

事項	年月日	概　　要
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅲ-1」（4年次，専門科目）は，病院や施設において8週間を通じて臨床実習指導者である作業療法士のもとで対象者の評価，治療の立案，治療実施，記録報告等を習得する科目である．臨床実習中および実習セミナーにおける指導により，疾患や障害，作業療法評価，作業療法の目標設定，治療計画の立案および実施について理解を深められるよう支援した.これにより，学生の実習における学習到達度を高めることができた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅲ-2」（4年次，専門科目）は，病院や施設において8週間を通じて臨床実習指導者である作業療法士のもとで対象者の評価，治療の立案，治療実施，記録報告等を習得する科目である．臨床実習中および実習セミナーにおける指導により，疾患や障害，作業療法評価，作業療法の目標設定，治療計画の立案および実施について理解を深められるよう支援した.これにより，学生の実習における学習到達度を高めることができた.
	平成23年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学研究法」（3年次，専門科目）は，作業療法領域における研究の位置づけや手順を習得する科目である．講義にあわせた演習によって，研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）の理解を深めアクティブラーニングを促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	平成25年4月 ～ 平成28年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「情報処理演習Ⅱ」（1年次，教養科目）は，パワーポイントによるプレゼンテーション・スキルを習得するため科目である．課題の提示およびプレゼンテーション実践の場とした.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	平成26年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学特論Ⅳ」において，作業療法の歴史，作業療法の理論・モデルを理解・活用を深めるために，反転授業を取り入れるとともに，臨床実習担当事例の症例報告を活用した集団討議を通してアクティブラーニングを促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学セミナー 」（4年次，専門科目）は，作業療法士国家試験にむけた科目である．このうち，作業療法理論・研究法・管理・地域領域の知識の確認と理解を高めるための課題の提供と演習機会を設けた．これにより，学生の学習到達度を高めることができた.

事項	年月日	概　　要
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「情報処理演習」（1年次，教養科目）は，Microsoft Office Word，Excel，PowerPointの操作とプレゼンテーションの修得を図る科目である．課題の段階的提示と発表機会を設けアクティブラーニングを促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「地域リハビリテーション演習」（2年次，専門科目）は，地域リハビリテーションおよび集団を対象としたプログラムの立案を理解するための科目である．介護保険・総合支援事業関連施設におけるフィールドワークによって，実際場面での経験を通じた理解を高めることが出来た.
	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「基礎ゼミⅡ」（1年次，共通教育科目）は，大学での学び方を理解し，レポート作成・グループワークの実施・基本的なプレゼンテーションを身につける科目である．文献検索やレポートの作成，プレゼンテーションの実施によって，理解を高めることが出来た.
4）パワーポイントの効果的活用	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の　ほぼ全科目において，講義の進行をわかりやすくるるためのパワーポイントを作成した.特に，教科書を用いる場合においては教科書に沿って要点を示す，教科書以外の説明を加える場合には十分な時間をとって学生自身が記入しながら学習することが出来るように配慮して作成した．これにより，進行中の講義で示している箇所が明確となり，学生が配布資料に記載することも増え，理解を促進できた.
	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の科目において，講義の進行をわかりやすくるるためのパワーポイントを作成した.特に，教科書を用いる場合においては教科書に沿って要点を示す，教科書以外の説明を加える場合には十分な時間をとって学生自身が記入しながら学習することが出来るように配慮して作成した．これにより，進行中の講義で示している箇所が明確となり，学生が配布資料に記載することも増え，理解を促進できた.
5）実例提示の活用	平成28年4月 ～ 平成29年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の　「作業療法学概論」（1年次，専門科目）は，作業療法の理解を図る導入の位置づけの科目である．なかでも，作業療法士が働く分野とその役割について解説し，例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.

事項	年月日	概　　要
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「基礎作業学」（2年次）において，基礎作業学の理解を深めるため知識に関する教授に加えて実例を例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「地域作業療法学Ⅰ」（2年次）において，地域作業療法学の理解を深めるため知識に関する教授に加えて実例を例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「老年期障害作業療法学Ⅰ（総論）」（3年次）において，老年期障害作業療法学の全体的理解を深めるため知識に関する教授に加えて実例を例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「老年期障害作業療法学Ⅱ（各論）」（3年次）において，老年期障害作業療法学各論の理解を深めるため知識に関する教授に加えて実例を例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「作業療法研究法」（3年次）において，作業療法研究法の理解を深めるため知識に関する教授に加えて実例を例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「作業療法学特論Ⅳ」（3年次）において，作業療法学特論Ⅳとして老年期障害の作業療法の理解を深めるため知識に関する教授に加えて実例を例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
6）（院）パワーポイントの効果的活用	平成24年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員および京都大学大学院医学研究科の非常勤講師として担当の　ほぼ全科目において，講義の進行をわかりやすくるるためのパワーポイントを作成した.学生自身が記入しながら学習することが出来るように配慮して作成した．これにより，進行中の講義でのディスカッション機会を設けながら学生が配布資料に記載することも増え，理解を促進できた.

事項	年月日	概　　要
7)　(院) 演習・実習の効果的な活用と遠隔講義への対応	平成24年4月 ～ 平成26年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「生活行動科学特論Ⅱ」は，健康行動理論および作業療法理論の理解によって健康支援学をより深く探求する科目である．学びを深化させるための討議や発表機会により，学生の学習到達度を高めることができた．
	平成26年4月 ～ 平成27年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「生活環境学特論Ⅱ」は，社会の健康を支援する視点，制度的・文化的環境を含む健康支援の理解を深めるための科目である．課題準備を進めたが，開講無だった．
	平成26年4月 ～ 平成27年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「生活環境学演習」は，ヘルスコミュニケーションおよび論文の批判的吟味への理解を深めるための科目である．課題準備を進めたが，開講無だった．
	平成26年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「健康支援学研究法」（必修）は，大学院生としての研究手順を理解するための科目である．主に研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）について担当した．適宜演習を加えながら進めることで，学生の学習到達度を高めることができた．
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「生活行動支援学特論」（必修）は，社会の健康を支援する視点，ヘルスコミュニケーションを通じた健康支援の理解を深める科目である．学びを深化させるための議論の機会を設けることで，学生の学習到達度を高めることができた．
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「日常生活環境学特論」は，社会の健康を支援する視点，制度的・文化的環境を含む健康支援の理解を深める科目である．学びを深化させるために議論の機会を設けることで，学生の学習到達度を高めることができた．
8)（院）　課題・レポートの調整・活用と演習・実習の効果的な活用	平成28年4月 ～ 平成31年3月	京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻の非常勤講師として担当の「クリティカルケア看護学特論Ⅰ」（修士課程）（平成28・29年度）および「生活習慣病看護学特論」（博士後期課程）（平成30年度）は，疫学研究のデザインの理解を深めるための講義と研究仮説の立て方に関する演習科目である．演習を通じて，研究計画の立案への理解を促進し，学生の学習到達度を高めることができた．

事項	年月日	概　　要
２　作成した教科書，教材		
1）講義用補助教材	平成29年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「地域リハビリテーション演習」（2年次，専門科目）において使用した．補助教材を用いて修得を図った．
2）講義用教材とスライド	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「基礎作業学」（2年次，専門科目）において使用した．教科書に記載されていない内容を補充するためのも所教材を用いて，作業療法の基礎となる作業活動，理論，作業分析への理解を深めた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「地域作業療法学」（3年次，専門科目）において使用した．地域リハビリテーションや地域作業療法，在宅サービスへの理解を深めた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「地域作業療法学演習」（3年次，専門科目）において使用した．地域リハビリテーションや地域作業療法，在宅サービスを理解するために，スライドに加えてその元となった書籍等を提示し，理解を深めた.また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成23年4月 ～ 平成29年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学研究法」（3年次，専門科目）において使用した．研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成25年4月 ～ 平成28年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「情報処理演習Ⅱ」（1年次，教養科目）において使用した．パワーポイントによるプレゼンテーション・スキルを習得するための課題の設定により修得を図った.また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「情報処理演習」（1年次，教養科目）において使用した．Microsoft Office Word，Excel，PowerPointの操作における課題教材の提示と演習により，スキルの修得を図った．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．

事項	年月日	概　　要
	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の専任教員として担当の「基礎ゼミⅡ」（1年次）において使用した．文献検索やMicrosoft Office Word, Excel, PowerPointの操作における課題教材の提示と演習により，スキルの修得を図った．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「基礎作業学」（2年次）において使用した.基礎作業学の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「地域作業療法学Ⅰ」（2年次）において使用した.地域作業療法学の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	令和2年4月 ～ 令和3年3月	奈良学園大学保健医療学部の教授として担当の「疫学」（看護学科2年次）において使用した.疫学の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた（オンデマンド動画）．
	令和2年4月 ～ 令和3年3月	奈良学園大学保健医療学部の教授として担当の保健師国家試験対策（看護学科4年次）において使用した．保健師国家試験に向けて疫学の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「老年期障害作業療法学Ⅰ（総論）」（3年次）において使用した.老年期障害作業療法学の全体的理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「老年期障害作業療法学Ⅱ（各論）」（3年次）において使用した.老年期障害作業療法学各論の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげる．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．

事項	年月日	概　　要
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「作業療法研究法」（3年次）において使用した.作業療法研究法の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「作業療法学特論Ⅳ」（3年次）において使用した.作業療法学特論Ⅳとして老年期障害の作業療法の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげる．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	龍谷大学社会学部の非常勤講師として担当の「地域保健学」において使用した.地域保健学の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた（オンデマンド動画）.
3）実習指導用マニュアル	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅰ」（2年次，専門科目）において使用した．臨床実習指導者のもとで病院や施設の特性と作業療法の役割について理解を深められるよう用い，実習を円滑に進めた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅱ」（3年次，専門科目）において使用した．臨床実習指導者のもとで対象者の評価，記録報告等を習得できるよう用い，実習を円滑に進めた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅲ-1」（4年次，専門科目）において使用した．臨床実習指導者のもとで対象者の評価，治療の立案，治療実施，記録報告等を習得できるよう用い，実習を円滑に進めた.
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「臨床実習Ⅲ-2」（4年次，専門科目）において使用した．臨床実習指導者のもとで対象者の評価，治療の立案，治療実施，記録報告等を習得できるよう用い，実習を円滑に進めた.
	平成25年4月 ～ 平成26年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学特論Ⅰ」（3年次，専門科目）において使用した．事前・事後学習のための教材および評価表を用いて知識・技術の修得につなげた.
	平成31年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部の教授として担当の「早期体験実習（作業療法）」（1年次，専門科目）において使用した．病院や施設の特性と理学療法・作業療法の役割について理解を深められるよう用い，実習を円滑に進めた.

事項	年月日	概　　要
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部の教授として担当の「地域実習（作業療法）」（2年次，専門科目）において使用した．病院や施設の特性と理学療法・作業療法の役割について理解を深められるよう用い，実習を円滑に進めた．
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「検査測定実習（作業療法）」（3年次，専門科目）において使用した．作業療法評価，検査・測定の意義について理解を深め実践できるよう，実習を円滑に進めた．
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「作業療法評価実習（作業療法）」（3年次，専門科目）において使用した．作業療法の評価の実際について理解を深め実践できるよう作成した．
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「総合臨床実習Ⅰ（作業療法）」（4年次，専門科目）において，作業療法の評価から治療までの一連の流れと医療人としての心構えについて理解し実践できるよう作成した．
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として担当の「総合臨床実習Ⅱ（作業療法）」（4年次，専門科目）において，作業療法の評価から治療までの一連の流れと医療人としての心構えについて理解し実践できるよう作成した．
4）スライド	平成22年4月 ～ 平成26年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学特論Ⅲ」（4年次，専門科目）において使用した．作業療法の歴史，作業療法の理論・モデルの理解・活用を深めた．
5）課題教材	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学セミナー 」（4年次，専門科目）において使用した．作業療法士国家試験範囲のうち，作業療法理論・研究法・管理・地域領域の課題教材を用いた演習により知識の定着につなげた．
	令和2年4月 ～ 令和3年3月	奈良学園大学保健医療学部の教授として担当の保健師国家試験対策（看護学科4年次）において使用した．保健師国家試験に向けて疫学の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
6）講義用教材（『作業療法研究法』（医歯薬出版株式会社）の発刊前校正刷）と講義用補助教材	平成29年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の専任教員として担当の「作業療法学研究法」において（3年次，専門科目）において使用した．研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）の理解を深めるための補助教材をあわせて使用し，修得につなげた．

事項	年月日	概　　要
7）（院）講義用教材とスライド	平成23年4月 ～ 平成26年3月	星城大学大学院健康支援学研究科の専任教員として担当の「生活行動科学特論Ⅱ」において使用した．健康行動理論および作業療法理論の理解によって健康支援学をより深く探求するために，教材を活用した．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成26年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「健康支援学研究法」（必修）において使用した．研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）の理解を深めるために，教材を活用した.また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「生活行動支援学特論」（必修）において使用した．社会の健康を支援する視点，ヘルスコミュニケーションを通じた健康支援の理解を深めるために教材を活用した.また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の専任教員として担当の「日常生活環境学特論」において使用した．社会の健康を支援する視点，制度的・文化的環境をふまえた健康支援の理解を深めるために，教材を活用した.また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成28年4月 ～ 平成30年3月	京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻の非常勤講師として担当の「クリティカルケア看護学特論Ⅰ」（修士課程）において使用した．独自教材に基づき，課題の設定を行い，演習によって効果的な学修機会となるよう配慮した.また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成30年4月 ～ 平成31年3月	京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻の非常勤講師として担当の「生活習慣病看護学特論」（博士後期課程）において使用した．独自教材に基づき，課題の設定を行い，演習によって効果的な学修機会となるよう配慮した.また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1）授業評価（平成25年度，星城大学）	平成25年4月 ～ 平成26年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.36 授業アンケート科目②：情報処理演習Ⅱ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.17 授業アンケート科目③：作業療法学特論Ⅲ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.50
2）授業評価（平成26年度，星城大学）	平成26年4月 ～ 平成27年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.56 授業アンケート科目②：情報処理演習Ⅱ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.26

事項	年月日	概　　要
3）授業評価（平成27年度，星城大学）	平成27年4月 ～ 平成28年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.25 授業アンケート科目②：情報処理演習Ⅱ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.00
4）授業評価（平成28年度，星城大学）	平成28年4月 ～ 平成29年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.46 授業アンケート科目②：地域作業療法学演習 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.46
5）授業評価（平成29年度，星城大学）	平成29年4月 ～ 平成30年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.54 授業アンケート科目②：地域作業療法学演習 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.52
6）授業評価（平成30年度，星城大学）	平成30年4月 ～ 平成31年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.87 授業アンケート科目②：地域作業療法学演習 総合満足度の平均スコアは4点満点中4.00
7）授業評価（令和3年度，奈良学園大学）	令和3年4月 ～ 令和4年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは5点満点中4.47 授業アンケート科目②：基礎作業学 総合満足度の平均スコアは5点満点中4.47 授業アンケート科目③：老年期作業療法学Ⅰ（総論） 総合満足度の平均スコアは5点満点中4.67 授業アンケート科目④：作業療法研究法 総合満足度の平均スコアは5点満点中4.5 授業アンケート科目⑤：老年期作業療法学Ⅱ（各論） ７項目すべてにおいて全体結果を上回っていた 授業アンケート科目⑥：作業療法学特論（老年期障害） ７項目すべてにおいて全体結果を上回っていた
8）授業評価（令和3年度，奈良学園大学）	令和4年4月 ～ 令和5年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは5点満点中4.06 授業アンケート科目②：基礎作業学 総合満足度の平均スコアは5点満点中3.78（9名） 授業アンケート科目③：老年期作業療法学Ⅰ（総論） 総合満足度の平均スコアは5点満点中4.14 授業アンケート科目④：作業療法研究法 総合満足度の平均スコアは5点満点中3.5（8名） 授業アンケート科目⑤：老年期作業療法学Ⅱ（各論） 総合満足度の平均スコアは5点満点中4.17 授業アンケート科目⑥：作業療法学特論Ⅳ（老年期障害） 総合満足度の平均スコアは5点満点中3.56（9名）

事項	年月日	概　　要
4　実務の経験を有する者についての特記事項 （実習指導） 1）金井病院通所リハビリテーションでの 3年次評価実習	平成12年11月 ～ 平成12年12月	滋賀医療技術専門学校3年次科目「臨床実習Ⅱ」として1名の学生に対して4週間，通所リハビリテーションにおける作業療法の役割を理解し，作業療法評価および目標の設定を行うことが出来るよう指導した.
	平成13年11月 ～ 平成13年12月	滋賀医療技術専門学校3年次科目「臨床実習Ⅱ」として1名の学生に対して4週間，通所リハビリテーションにおける作業療法の役割を理解し，作業療法評価および目標の設定を行うことが出来るよう指導した.
2）金井病院通所リハビリテーションでの 4年次治療実習	平成13年6月 ～ 平成13年8月	滋賀医療技術専門学校4年次科目「臨床実習Ⅲ」として1名の学生に対して8週間，通所リハビリテーションにおける作業療法の役割を理解し，作業療法評価および目標の設定，治療計画の立案と実施，再評価を行うことが出来るよう指導した.
3）金井病院通所リハビリテーションでの2年次地域 実習	平成13年11月 ～ 平成14年1月	大阪リハビリテーション専門学校2年次科目「作業療法実習Ⅲ」として各日3名の学生に対し，地域における作業療法士の役割，通所リハビリテーションの役割，他職種との連携等の理解を深めるための実習指導を行った.
（講師・講演） 1）京都大学大学院医学研究科社会健康医学系 専攻健康情報学分野同門会	平成26年8月	「Shared Decision Making:　臨床実践者に求められるスキルとは？」講師として，対象者中心の考え方とエビデンスに基づく実践，その架け橋となる共有決定について講義した.
2）日本訪問リハビリテーション協会 認定技術研修会	平成26年8月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した.
3）八千代病院総合リハビリセンター　研修会	平成27年2月	「臨床実践者に求められるスキルとは？」講師として，対象者中心の考え方とエビデンスに基づく実践，リハビリテーション場面における実情について講義した.
4）日本訪問リハビリテーション協会学術大会 in 大阪シンポジウム	平成27年5月	シンポジウム1「訪問リハビリテーションにおける教育のこれから～生命，生活，人生を共に歩む訪問療法士を育てる為には～」シンポジストとして，求められる訪問リハビリテーションのあり方，認定訪問療法士制度と教育について講演した.
5）日本訪問リハビリテーション協会認定技術研修会	平成27年10月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した.

事項	年月日	概　　要
6) 平成27年度厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究事業) 〈指定課題〉『社会的責任に応える医療の基盤となる診療ガイドラインの課題と可能性の研究』公開シンポジウム 「 Shared decision making〈SDM〉の今・これから：診療ガイドラインの新たな可能性を考える」	平成28年2月	様々な医療の場におけるSDMの試み 「地域医療の立場から」シンポジストとして，地域におけるリハビリテーション場面における情報共有の実態報告と，望まれる共有決定のあり方について講演した.
7) 第3回臨床作業療法学会（東京） 「教育と臨床のコラボ企画」	平成28年3月	「学校の特色紹介　学校と臨床現場をつなごう企画」において，星城大学における学内教育と臨床実践にむけた取り組みを紹介した.
8) 第31回愛知訪問リハネットワーク 「訪問リハビリテーションの効果：主観的指標と客観的指標」	平成28年11月	「訪問リハビリテーションの効果：主観的指標と客観的指標」講師として，訪問リハビリテーションに従事する療法士を対象にリハビリテーションにおけるアウトカム，訪問リハビリテーションにおける効果測定の重要性について講義した．また，その後の症例報告会において全報告症例へのコメントの要望があり，フィードバックした.
9) 第10回 健康寿命延伸と介護予防を考える会 ～70代、80代を元気に乗り越える為に～（公益財団法人杉浦記念財団）	平成30年5月	「高齢者ケアとリハビリテーション ―その人らしい生活を支える作業療法―」について講演し，研究会参加者との活発な意見交換を行った.
10) 日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定基礎研修会	平成30年5月	「リスク管理」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスク管理の考え方，および訪問リハビリテーションにおけるリスク管理について講義した.
11) 日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	平成30年6月	「訪問リハビリテーションにおけるリスクマネジメント」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスクマネジメントについて講義・演習を行った.
12) 日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定基礎研修会	平成30年8月	「リスク管理」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスク管理の考え方，および訪問リハビリテーションにおけるリスク管理について講義した.
13) 日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	平成30年10月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した.
14) 日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	平成30年11月	「訪問リハビリテーションにおけるリスクマネジメント」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスクマネジメントについて講義・演習を行った.
15) 日本訪問リハビリテーション協会学術大会 in にいがた【教育講座1】	令和元年6月	【教育講座1】「症例報告の書き方と留意点」講師として，症例報告が果たす役割，書き方と留意点について講演した.

事項	年月日	概　　要
16）日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	令和元年7月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した．
17）日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定基礎研修会	令和元年7月	「リスク管理」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスク管理の考え方，および訪問リハビリテーションにおけるリスク管理について講義した．
18）日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	令和元年10月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した．
19）奈良学園大学公開講座第2回登美ヶ丘カレッジ	令和元年12月	「日常生活の工夫～健康情報の読み方から健康生活のススメ～」講師として，一般市民に向けた講演を行った．
20）第54回日本作業療法学会専門作業療法士セミナー⑧訪問作業療法「未来の実践につなげる調査・研究」	令和2年9月	「専門作業療法士セミナー⑧訪問作業療法」講師として，「未来の実践につなげる調査・研究」について講演を行った（動画）．
21）第18回日本訪問リハビリテーション協会学術大会in高知 学術部セミナー「臨床疑問からはじめる調査・研究」	令和3年5月	学術部セミナー講師として，「臨床疑問からはじめる調査・研究」について講演を行った．
22）日本訪問リハビリテーション協会企画研修「訪問リハビリテーション研究入門～研究結果を臨床に活かす」	令和3年10月	学術部セミナー講師として，「訪問リハビリテーション研究入門～研究結果を臨床に活かす」について講義を行い，グループワーク等のファシリテータおよび運営を担った．
23）日本訪問リハビリテーション協会企画研修「訪問リハビリテーション研究入門～研究結果を臨床に活かす」	令和5年2月	学術部セミナー講師として，「訪問リハビリテーション研究入門～研究結果を臨床に活かす」について講義を行い，グループワーク等のファシリテータおよび運営を担った．
（座長） 1）第4回日本訪問リハビリテーション協会学術大会in熊本	平成26年6月	「人材育成・教育」の座長として，訪問リハビリテーションにおける人材育成およびリスク管理等を扱うセッションを進行しコメントした．
2）第50回日本作業療法学会	平成28年9月	「理論・基礎6」の座長として，作業療法および関連領域における文献研究，動物研究，人を対象とした質的研究，量的研究等を扱うセッションを進行しコメントした．
3）日本訪問リハビリテーション協会学術大会 in　北九州 シンポジウム	平成30年6月	シンポジウム3「訪問リハビリテーションにおける人材教育について」の座長として，訪問リハビリテーションに携わる人材の育成に取り組むシンポジストの講演と質疑を進行した．

事項	年月日	概　　要
4）第52回日本作業療法学会	平成30年9月	「ON-7 地域7」の座長として，地域作業療法を扱うセッションを進行しコメントした.
5）第78回日本公衆衛生学会	令和元年10月	「第23分科会P-2301」（保健医療介護サービス研究）の座長として，保健医療介護サービス研究を扱うセッションを進行しコメントした.
6）訪問リハビリテーション協会学術大会 in 長崎	令和4年5月	学術セミナーの座長として，セッションを進行しコメントした.
（調査・研究協力・その他） 1）東海市健康増進計画等の評価及び策定支援委託事業（星城大学契約/実務担当）	平成25年5月 ～ 平成26年3月	東海市委託事業において，各年代の健康に関するアンケートの集計および分析と報告書の作成を行った.
2）旭化成ファーマ株式会社業務委託（個人契約）	平成25年8月 ～ 平成26年7月	脳卒中患者を対象としたセルフケア自立度測定尺度の信頼性検証のために，研究計画への助言などを含む研究調整を行った.
3）東海市介護予防サロン運営展開方法調査（星城大学契約/分担）	平成26年5月 ～ 平成27年3月	東海市委託事業において、介護予防サロン運営に関する調査および分析と報告書の作成を行った.
4）「健康チャレンジ」京大共同研究プロジェクト研究関連（株式会社電通）	平成30年9月 ～ 平成30年12月	健康に関するシステマティックレビュー等を通して研究に協力した.
５　その他 （卒業研究指導実績） 1）星城大学リハビリテーション学部における卒業研究指導	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部専任教員として，各々の学生1人につき1テーマの卒業研究指導を行った. 平成22年度：1名 平成23年度：5名 平成24年度：2名 平成25年度：5名 平成26年度：3名 平成27年度：6名 平成28年度：3名 平成29年度：4名 平成30年度：4名
2）奈良学園大学保健医療学部における卒業研究指導	令和4年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学専任教員として，卒業研究指導を行った. 令和4年度：1名

事項	年月日	概　　要
（卒業研究論文公表） 1）星城大学リハビリテーション学部における卒業研究指導論文の論文公表	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部専任教員として，一部の学生の卒業研究は論文として掲載に至った（指導学生[筆答]と論文・雑誌は以下の通り）． ・山崎竜弥，他．（短報）臨床実習後の作業療法学生が目標・理想とする作業療法士査読付）．愛知作業療法22:55-58，2014. ・船渡絵梨香，他．訪問リハビリテーション利用者の主介護者における主観的介護負担感とその関連要因の検討（査読付）．愛知作業療法22:3-8，2014. ・山内春香，他．作業療法士による訪問リハビリテーションの目標とプログラム：訪問リハビリテーション実施計画書の記載内容（査読付）．作業療法ジャーナル 51：261-265，2017 ・榊原唯，他．中年世代の各ライフステージにおける趣味と思い出の傾向（査読付）．臨床作業療法 5：14-19，2018. ・水野里咲，他．病院と訪問における作業療法士の役割と必要なスキル-学生の視点による質的研究（査読付）．作業療法ジャーナル　53(9)：1014-1018，2019. ・林映見，他．（学生論文）「作業に焦点を当てた実践」の現状と障壁（査読付）．日本臨床作業療法研究　6(1)：38-5，2019.
（修士論文作成支援及び指導実績） 1）星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻における健康支援学特別研究への 教育支援	平成25年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻生活健康支援学領域（修士課程）　講師（平成30年度准教授）として，竹田徳則教授が指導教員として指導する学生の教育支援（研究計画への助言，研究の相談等）を行った．
2）京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻専門職学位課程大学院生への研究支援（1名）	平成26年10月 ～ 平成27年3月	京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻専門職学位課程における課題研究において，研究協力者として研究データの分析への助言および論文執筆にむけた支援を行った．
3）京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻専門職学位課程大学院生への研究支援（1名）	平成27年9月 ～ 平成28年3月	京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻専門職学位課程における課題研究において，研究協力者として研究データの分析への助言および論文執筆にむけた支援を行った．
4）星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻生活健康支援学領域（修士課程）における健康支援学特別研究における研究指導補助（1名）	平成28年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻生活健康支援学領域（修士課程）　講師（平成30年度准教授）として，竹田徳則教授が指導教員として指導する学生の研究指導補助教員の立場から「認知症カフェにおける作業療法士の役割と課題ーインタビュー調査と生活行為向上マネジメントの実践を通してー」の研究計画の立案・実施・分析について支援した．

事項	年月日	概　　要
5) 星城大学大学院生健康支援学研究科健康支援学専攻生活健康支援学領域（修士課程）への研究支援（1名）	平成31年4月 ～ 令和2年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻生活健康支援学領域（修士課程）　における竹田徳則教授が指導教員として指導する学生の研究について，前年度に引き続いて指導を継続した．

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1) 作業療法士	平成9年4月	作業療法士名簿登録番号　第18679号
2) 福祉用具プランナー	平成15年8月	第15-1209号
3) 京都大学　社会健康医学修士（専門職）	平成19年3月	社医修（専）　第63号 「脳卒中のリハビリテーション研究に用いられている評価指標の分類と動向：1996年から2005年の文献調査」
4) AMPS認定評価者	平成22年9月	Rater Number: 014924
5) AAD（現・A3）認定評価者	平成22年12月	—
6) 日本公衆衛生学会認定専門家	平成23年4月	第681号 （平成28年4月・令和3年4月　更新）
7) 日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士	平成26年2月	第5号（平成31年2月　更新）
8) RIASコーダー (The Roter Methods of Interaction Process Analysis System)	平成27年8月	第145号
9) 京都大学　博士（社会健康医学）	平成29年1月	社医博　第76号 「Studies of setting care goals and understanding subjective needs in aged care facilities: care providers’ and residents’ view（高齢者施設におけるケア目標の設定とニーズ把握の研究：ケア提供者と入所者本人の視点」
10) 日本作業療法士協会認定作業療法士	平成31年2月	第2279号
11) 日本作業療法士協会専門作業療法士（訪問）	令和2年2月	第006号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 医療法人社団淀さんせん会金井病院	平成24年4月 ～ 平成29年3月	非常勤作業療法士として作業療法士の指導，およびリハビリテーション科の管理・運営に関する検討（作業療法部門および関連部門従事者の面談含む）や調査に関する助言を行った．
2) 東海市産学官連携協議会「健康関連事業への参画」ワーキンググループ	平成25年5月 ～ 平成27年3月	健康関連事業計画ワーキングメンバーとして，倒壊しの健康推進にむけた検討会に定期的に参加した．
3) （株）旭化成ファーマ	平成25年8月 ～ 平成26年7月	研究調整員として研究計画立案・データ収集への助言，および研究調整業務を行った．（業務委託）
4) 東海市健康増進計画等策定ワーキング部会	平成26年2月	健康推進策定委員として策定会議に参加した．
5) 株式会社電通	平成30年9月 ～ 平成30年12月	「健康チャレンジ」京大共同研究プロジェクト研究関連にて，健康に関するシステマティックレビュー等の研究協力を担った．

事項	年月日	概　　要
6）奈良市登美ヶ丘地区地域包括支援センター	平成31年4月 ～ 現在に至る	専門家（作業療法士）として自立支援ケア会議に出席し，助言を行っている．
4　その他 （職能団体における実績） 1）日本訪問リハビリテーション協会　教育研修部認定審査委員	平成25年4月 ～ 令和2年3月	日本訪問リハビリテーション協会における認定訪問療法士の認定審査を担当した．
2）日本訪問リハビリテーション協会　教育研修部認定審査委員会　委員長	平成28年4月 ～ 令和2年3月	日本訪問リハビリテーション協会における認定訪問療法士の認定審査を担当し，審査委員長として統括した．
3）日本訪問リハビリテーション協会　理事	平成29年6月 ～ 現在に至る	日本訪問リハビリテーション協会における認定訪問療法士の認定審査および認定研修の担当理事として教育研修の構築と運用を行った（令和2年4月より学術部）．
3）作業療法と生活リスクコミュニケーション学会　理事	令和4年11月 ～ 現在に至る	作業療法と生活リスクコミュニケーション学会学術担当理事として教育研修の構築と運用を行った．
（受賞歴） 1）第53回近畿産業衛生学会若手奨励賞＜研究＞	平成25年11月	第53回近畿産業衛生学会における研究分野の若手奨励賞の受賞 「高齢者施設の常勤介護職員における離職とその関連要因の検討」
2）第6回日本訪問リハビリテーション協会学術大会奨励賞	平成28年6月	第6回日本訪問リハビリテーション協会学術大会における奨励賞の受賞 「訪問リハビリテーション・チェックリストの開発：具体的な目標設定と明確な課題解決のプロセス」
3）第18回日本訪問リハビリテーション協会学術大会 優秀賞（調査研究部門）	令和 3年 5月	第18回日本訪問リハビリテーション協会学術大会における優秀賞（調査研究部門）の受賞 「病院・訪問で働くリハビリテーション専門職の勤務継続意向に関する基礎的検討」
（研修） 1）第10回厚生労働省主催在宅訪問リハビリテーション講習会修了	平成14年2月	厚生労働省が日本リハビリテーション医学会に委託し日本理学療法士協会及び日本作業療法士協会の協賛を得て開催した講習会で所定の課程を修了（第799号）
2）福祉用具プランナー講習会修了	平成15年8月	京都市介護実習・普及センター主催の福祉用具プランナー研修において財）テクノエイド協会が定めた課程を修了（第15-1209号）
3）第31回理学療法士・作業療法士養成施設等教員講習修了	平成16年12月	厚生労働省と財団法人医療研修推進財団が共催し社団法人リハビリテーション医学会，日本理学療法士協会，日本作業療法士協会及び全国理学療法士作業療法士学校養成施設連絡協議会の協賛を得て開催された研修課程を修了（第3408号）
4）第2回大学院生のための教育実践講座 -大学でどう教えるか-修了	平成18年8月	京都大学高等教育研究開発推進センターが主催した左記講座の所定の課程を修了（第54号）

事項	年月日	概　　要
5) 第35回Assessment of Motor and Process Skills (AMPS)講習修了	平成22年2月	AMPS講習会事務局主催の講習会を修了し，規定のデータを米国AMPS Project Internationalに提出し認定（Rater Number: 014924）
6) 第5回Assessment of Awareness Disability (AAD)講習修了	平成22年7月	日本AAD講習会事務局主催の講習会を修了し，規定のデータを提出し認定
7) 第11回RIASコーディング研修修了（The Roter Methods of Interaction Process Analysis System）	平成27年8月	RIAS研究会日本部会主催の第11回RIASワークショップにおける研修を修了し，規定のデータを提出し認定（第145号）
8) 倫理審査委員会・治験審査委員会委員養成研修修了	平成29年12月	国立研究開発法人日本医療研究開発機構　医療技術実用化総合促進事業「平成29年度臨床研究・治験従事者等に対する研修」
9) 2021年度公認心理師現任者講習会修了	令和3年12月	公認心理師法（平成27年法律第68号）附則第2条第2項第1号の規定に基づく文部科学大臣及び厚生労働大臣指定講習会の課程を修了（修了番号21C20401）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 PT・OT・STのためのエビデンスの基礎知識と診療ガイドライン活用法	共著	平成29年5月	医歯薬出版株式会社	理学療法士・作業療法士・言語聴覚士が診療ガイドラインを活用するうえで必要な知識と活用方法について，具体的に示した. B5判　全180頁 監修：中山健夫 編集：日髙正巳・藤本修平 共著者：荒木浩二郎，有明陽佑，稲富宏之，大浦智子，大寺祥佑，尾川達也，紙谷司，小久保徹，小向佳奈子，今法子，酒井克也，佐々木祥，杉田翔，竹林崇，田中宏明，坪内優太，中村学，芳賀大輔，日髙正巳，福岡達之，福谷直人，藤本修平，廣江貴則，吉川義之 本人担当部分：「質的研究を解釈するうえで必要な知識」pp.55-60を単著. 質的研究の基本的な構成および考え方を概説し，リハビリテーション専門職が臨床場面で質的研究成果を活用するにあたり留意すべき点を解説した.
2 これから始める！シェアードデシジョンメイキング：新しい医療のコミュニケーション	共著	平成29年9月	日本医事新報社	医療におけるコミュニケーションや意思決定としてのシェアードデシジョンメイキングについて，国内における先駆者による解説と実践について示した. A5判　全172頁 編著：中山健夫 共著者：中山健夫，藤本修平，湯川慶子，中山和弘，大坂和可子，堀江重郎，森田明夫，大浦智子，今法子，浦尾充子，山口育子，射場典子 本人担当部分：「（コラム）臨床におけるSDM:リハビリテーション」pp.129-130を単著. 　地域医療のなかでも訪問リハビリテーションにおける患者と提供者間の情報共有とその実態について紹介し，今後のコミュニケーションのあり方について示した.
3 作業療法研究法	共著	平成29年10月	医歯薬出版株式会社	作業療法士が押さえておくべき研究倫理，研究の種類，研究のすすめ方，報告や発表について，作業療法士養成教育に活用するために構成・編集した. B5判　全164頁 編著：竹田徳則，大浦智子，藤本修平 第3部監修：廣江貴則 共著者：竹田徳則，大浦智子，木村大介，藤本修平 本人担当部分：「量的研究」pp.34-41を単著 　量的研究における各種の研究デザインと特性について解説した.特に，観察研究と介入研究における各研究デザインの特徴と臨床場面における考え方を示した. 本人担当部分：「質的研究」pp.50-54を単著 　質的研究における手順と方法，妥当性の担保などについて解説した. 本人担当部分：「混合法（mixed methods approach）」pp.55-56を単著 　混合型の研究の種類や方法について，例を挙げながら解説した.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分：「尺度開発」」pp.68-70を単著 　作業療法場面を想定した例あげながら，効果を測定するための尺度の兼ね備えておくべき信頼性と妥当性について解説した. 本人担当部分：「文献研究」pp.71-72を単著 　主にシステマティックレビューとメタアナリシスについて，解説した. 本人担当部分：「データベース研究」pp.73-74を単著 　データベースの構築と研究への活用について，利点と留意点を中心に解説した. 本人担当部分：「根拠に基づく医療（Evidence-Based Medicine; EBM）」pp.140 　根拠に基づく医療と根拠に基づく実践について，その考え方について解説した. 本人担当部分：「エビデンスの質と階層」」pp.141-143を単著 　研究を実施する際だけでなく，既存研究を読み解釈する際に参考となるエビデンスレベルについて解説した. 本人担当部分：「診療ガイドラインの作成と活用」pp.144-146を単著 　診療ガイドラインについて、作成の手順と活用方法について解説した. 本人担当部分：「研究対象者の選定」pp.23-26を共著 　研究対象者の選択方法について，バイアスを防ぐ方法をふまえて解説した.（共著者とともに内容を調整し，最終原稿を主として作成した.） 共著者：大浦智子，木村大介 本人担当部分：「アウトカム」pp.27-28を共著 　アウトカムの考え方について，尺度の種類に関する説明のほか，メイン・アウトカムの設定や対象者主体のアウトカムについて示した.（共著者とともに内容を調整し，最終原稿を主として作成した.） 共著者：大浦智子，木村大介 本人担当部分：「用語の説明」pp.1-7を共著 　作業療法士もしくは学生が研究法を効果的に学ぶために，本書内における主要な用語を説明した.（説明する用語の抽出および執筆担当者の振り分け，担当用語の執筆，全用語の内容の確認を行った.） 共著者：竹田徳則，大浦智子，木村大介 本人担当部分：「巻末課題」pp.148を共著 　作業療法士もしくは学生が研究法を効果的に学ぶために，巻末課題を示した.（学部学生を想定し，到達すべきであろう学習目標を設定して，共著者とともに課題を作成した.） 共著者：竹田徳則，大浦智子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4 訪問リハビリテーションアドバイスブック	共著	平成30年3月	メジカルビュー社	訪問リハビリテーションについて理解するために，多職種の立場から訪問リハビリテーション従事者が抑えておくべき事項を示した. 監修：青山朋樹，高橋紀代 編集：辰巳昌嵩 共著者：辰巳昌嵩，阿毛裕理，片桐辰徳，藤本修平，光武誠吾，高橋紀代，八木街子，宇野雄祐，杉田翔，三好早苗，山﨑真一，奥村圭子，川場康智，東田全央，今枝敬典，倉田昌幸，木村圭佑，羽田真博，岩田研二，青山朋樹，藤田美和子，嶋本尚恵，小口妃小江，杉浦徹，三木貴弘，朝倉健太郎，尾畑翔太，中川征士，大場やよい，上野多加子，森下元賀，小泉裕一，園山真弓，池田耕二，大浦智子，鳴尾彰人，樺元大輝，南條拓也，田代雄斗 本人担当部分：「筋力維持・増強」pp.260-265を単著 筋力維持・増強に関する基本的知識に加え，在宅訪問リハビリテーションにおける着眼点と留意点を解説した. 本人担当部分：「関節可動域の維持と改善」pp.266-269を単著 関節可動域に関する基本的知識に加え，在宅訪問リハビリテーションにおける着眼点と留意点を解説した. 本人担当部分：「転倒および転倒時対応」pp.270-275を単著 在宅生活を送る対象者の生活機能の低下を脅かす転倒について，環境整備を含めて転倒予防対策について解説した.
5 PT-OT-STのための臨床に活かすエビデンスと意思決定の考えかた	共著	令和2年10月	医学書院	リハビリテーション専門職向けにEvidence-based medicineの考え方から研究論文の読み方,患者とのコミュニケーション，意思決定過程について示した. 編著：藤本修平，竹林崇 共著者：藤本修平，竹林崇，小向佳奈子，杉田翔，大浦智子，福田芽森，穴田周吾，中口拓真，佐々木祥，村井歩志，他. 本人担当部分：「質的研究」pp.53-58を単著 質的研究論文報告のためのチェックリストを用いながら，臨床実践に役立てるための論文情報の読み方について解説した.
（学術論文） 1 （調査報告）「憩いのサロン」参加者の健康情報源と情報の授受：サロンは情報の授受の場になっているか？（査読付）	共著	平成25年9月	保健師ジャーナル69: 712-719, 2013.	A町の介護予防事業であるサロンは，一般参加者にとって主要な健康関連情報の授受の場になっており，健康情報の伝達と情報的サポートの増加により介護予防への寄与が期待できることが示唆された. 本人担当部分：共著者らの助言を得て研究計画の立案と実施，論文を執筆した. 共著者：大浦智子，竹田徳則，近藤克則，木村大介，今井あい子
2 介護支援専門員と訪問介護員における訪問リハビリテーション効果への期待：量的・質的検討（査読付）	共著	平成25年10月	作業療法32: 440-450, 2013.	介護支援専門員（care manager: CM）とヘルパーを対象に実施した「訪問リハリハビリテーション（訪問リハ）に期待している効果」に関する質問紙調査の結果，身体機能の回復，動きやすさやセルフケアの改善に偏っていた. 本人担当部分：共著者らと協力施設を調整し，研究計画の立案と実施，論文を執筆した. 共著者：大浦智子，津山努，中西康祐

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 Care goal setting and associated factors: semi-structured interviews with multidisciplinary care providers in facilities for elderly people（介護目標の設定と関連要因：高齢者施設の多職種ケア提供者への半構造化面接）（査読付）	共著	平成26年3月	International Journal of GERONTOLOGY 8(1): 12-17, 2014.	要介護高齢者入所施設の職員が考える高齢者のケア目標とその関連要因を明らかにするために，7施設30人の職員を対象に半構造化面接を実施し，その内容を質的に分析した結果，4カテゴリが抽出された. 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した. 共著者：Ohura T, Takada A, Nakayama T
4 訪問リハビリテーション利用者の主介護者における主観的介護負担感とその関連要因の検討（査読付）	共著	平成26年3月	愛知作業療法22:3-8, 2014.	在宅要介護者の主介護者が感じる主観的介護負担感とその関連要因を明らかにすることを目的に，訪問リハビリテーション利用者の主介護者（66名）を対象に質問紙調査を実施した結果，階段昇降要介助の場合は自立に比べて，主観的介護時間が多い場合は少ない場合に比べて，オッズ比が高かった. 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり指導した（責任著者）. 共著者：船渡絵梨香，津山努，今井あい子，大浦智子
5 （短報）臨床実習後の作業療法学生が目標・理想とする作業療法士（査読付）	共著	平成26年3月	愛知作業療法22:55-58, 2014.	A大学作業療法学専攻4年生を対象に，目標・理想の作業療法士に関する自由記述式質問紙による調査を行い質的分析を行った．目標・理想とする作業療法士として，【技能】の＜コミュニケーションスキル＞と【総合的判断力】の＜論理＞に着眼していることが明らかとなった. 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり助言した. 共著者：山崎竜弥，大浦智子
6 （実践報告）客観的臨床能力試験（OSCE）場面のビデオ・フィードバックによる臨床実習前教育の取り組み（査読付）	共著	平成26年4月	作業療法33(2)：181-190, 2014.	学生が取り組むOSCEの症例課題実施場面を撮影し，終了後のビデオ・フィードバックと学習のふり返り機会を提供した．臨床実習後の質問紙調査（37名）では，OSCEの復習をした者が8割以上で，その内容はビデオ・フィードバックを参考にしていた. 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した. 共著者：大浦智子，竹田徳則，藤田高史，古澤麻衣，木村大介，冨山直輝，林浩之，飯塚照史，坂井一也，今井あい子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7 学生における客観的臨床能力試験（OSCE）前後の学習と臨床実習後の自己評価：量的・質的分析による検討 （査読付）	共著	平成26年7月	作業療法教育研究14(1): 16-22, 2014	評価主体の臨床実習（実習）開始約1カ月前に，検査・測定，症例課題からなる客観的臨床能力試験（OSCE）を実施し，実習後に質問紙調査を実施した．対象学生33名中32名がOSCEの事前準備をしたと自己評価していたが，実習前には知識や評価のみならず，相手に合わせる応用技術を視野に入れた準備が必要だと学生は感じていた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，竹田徳則，藤田高史
8 訪問リハビリテーション利用者のサービス利用のきっかけと生活目標 （査読付）	共著	平成26年12月	作業療法33(6): 517-525, 2014	訪問リハビリテーション利用者の訪問リハ利用のきっかけと日々の生活目標を知るために，質問紙調査によって34 名の訪問リハ利用者の自由記述回答を質的に分析した．利用のきっかけは7 個の二次テーマ，生活目標は 8 個の二次テーマが抽出された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，津山努
9 Assessment of the validity and internal consistency of a performance evaluation tool based on the modified Barthel Index Japanese nversion for elderly people living at home（在宅高齢者におけるBarthel Index改変日本語版に基づく遂行評価ツールの妥当性と内的整合性） （査読付）	共著	平成26年12月	J Phys Ther Sci 26(12): 1971-1974, 2014	在宅要介護高齢者128名を対象に，Modified Barthel Indexに基づくセルフケア遂行評価日本語版の因子的妥当性と内的整合性を検証した．確認的因子分析の結果，モデル適合度は許容範囲内と判断された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Higashi T, Ishizaki T, Nakayama T
10 Testing validity and reliability of a newly developed instrument to assess the subjective needs of institutionalized elderly（入所高齢者の主観的ニーズを評価するために新たに開発したツールの妥当性と信頼性の検証） （査読付）	共著	平成27年1月	Clinical Gerontologist 38(1): 88-102, 2015	入所高齢者のニーズを評価するための質問紙（4領域25項目）を開発し，妥当性と信頼性を検証した．再検査法による信頼性は，ニーズの領域・項目によって高低が認められた．確認的因子分析の結果，モデル適合度は許容範囲内と判断された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Ishizaki T, Higashi T, Nakayama T

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11 初期認知症および軽度認知機能障害（MCI）における軽微な認知機能の変化を捉え得る神経心理学検査の検討 （査読付）	共著	平成27年3月	日本認知症予防学会誌 48(1): 22-24, 2015	動作性 IQ や日常生活場面での記憶障害が，MCI や初期認知症の変化を把握できるかを確認することを目的に，神経内科受診者のうち 1 年後の再評価が実施できた 9 名のMini-Mental State Examination（MMSE），コース立方体組み合わせテスト，リバーミード行動記憶検査（RBMT）の初期評価と 2 回目評価結果を比較した．結果，RBMT が軽微な認知機能の変化を検出可能であった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施を行い，論文執筆に際して助言した． 共著者：木村大介，廣瀬秀一，大浦智子，中西康裕，大槻輝子
12 学生が地域で運営する健康サロンにおける学習と気づき （査読付）	共著	平成27年6月	作業療法 34: 325-334, 2015.	学生が地域高齢者を対象に健康サロンを運営することによって得られた学生自身の気づきを明らかにするために，運営開始11か月後に質問紙調査を行った．学びの場としての肯定的意見に対し，実務面での反省が挙げられていた． 本人担当部分：研究計画を立案し，共著者とともに実施，論文執筆にあたり助言をした． 共著者：古澤麻衣，竹田徳則，大浦智子
13 Differences between home-visit rehabilitation users and providers in their understanding of the content and subjective effects of rehabilitation practices（リハビリテーション内容の理解と主観的効果に関する訪問リハビリテーション利用者と提供者間の違い） （査読付）	共著	平成27年6月	J Phys Ther Sci 27: 1705-1708, 2015.	訪問リハビリテーション利用者と提供者34組を対象に，主観的効果と実施プログラムの認識の相違を明らかにした．利用者は，提供者が考えているよりも症状や床上動作の改善に向けたプログラムを実施していると認識していた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Tsuyama T, Nakayama T
14 健康サロンに参加する高齢女性における認知機能低下の有無と健康情報ニーズとの関連 （査読付）	共著	平成27年7月	作業療法ジャーナル 49(8), 861-867	介護予防における一次予防事業として行われているサロン参加女性を対象に，軽度認知機能低下の有無と健康情報ニーズとの関連を明らかにするための調査（自記式認知機能検査，健康情報ニーズ等）と体力測定を実施した．軽度認知機能低下の有無による健康情報ニーズの違いは認められなかった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，竹田徳則，木村大介，冨山直輝，古澤麻衣，天野圭二

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15 地域開催型ラジオ体操が高齢者の身体・心理社会面にもたらす効果 （査読付）	共著	平成27年8月	作業療法 34(4), 393-402, 2015.	高齢者の身体・心理社会面にもたらす地域開催型ラジオ体操の効果を明らかにするために，3か月間の介入を行った．ラジオ体操群では下肢筋力やバランスに有意な向上を認め，体調の主観的変化を認知していた． 本人担当部分：研究結果の解釈，統計解析および論文の執筆にあたり助言した． 共著者：今井あい子，加藤芳司，竹田徳則，大浦智子，北林由紀子，山本和恵，真田樹義
16 Differences in understanding and subjective effects of home-visit rehabilitation between user families and rehabilitation providers（利用者家族と提供者間における訪問リハビリテーション内容の理解と主観的効果の違い） （査読付）	共著	平成27年12月	J. Phys. Ther. Sci. 27: 3837-3841, 2015	訪問リハビリテーション利用者家族と提供者50組を対象に，主観的効果と実施プログラムの認識の相違を明らかにした．利用者家族は，提供者が考えているよりも症状や床上動作の改善に向けたプログラムやマッサージを実施していると認識しており，痛みや症状の改善を自覚していた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Tsuyama T, Nakayama T
17 Gaps between the subjective needs of older facility residents and how care workers understand them: a pairwise cross-sectional study （入所高齢者の主観的ニーズと介護職員が把握している程度との隔たり：ペアワイズ横断研究） （査読付）	共著	平成28年1月	BMC Res Notes 9:52, 2016. DOI:10.1186/s13104-016-1851-7	介護老人保健施設に入所する高齢者のニーズと介護職員によるニーズの把握の程度を明らかにするために，高齢者と介護職員115組にインタビューと質問紙を用いた調査を行った．基本的日常生活と情緒的なニーズに比べ，手段的日常生活と生活環境に関するニーズのほうが，職員による把握割合が低い傾向にあった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Ishizaki T, Higashi T, Nakayama T
18 Evaluation of facilitative factors for preventing cognitive decline: A 3-year cohort study of community intervention （認知機能低下予防促進因子の評価：3年間の地域介入コホート研究） （査読付）	共著	平成28年2月	PSYCHOGERIATRICS 17(1):9-16, 2017. DOI: 10.1111/psyg.12182	武豊プロジェクトの参加高齢者100名を3年間追跡し，認知機能を保つ要因を明らかにした．レジャー活動や社会的つながりの強化が，認知機能の維持に正の効果を及ぼしていることが明らかとなった． 本人担当部分：研究結果に対する解釈および論文執筆に際して助言をした． 共著者：Kimura D, Takeda T, Ohura T, Imai A

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19 Correlation of the Hand 20 with the International Classification of Functioning, Disability, and Health and comparison of the results with those of the Disability of the Arm, Shoulder and Hand（国際生活機能分類とHand20との関係とDASHスケールとの比較）（査読付）	共著	平成28年3月	Asian J Occup Ther 11: 27-33, 2016	本邦の手外科領域で多用されている患者立脚型評価Hand20の各項目について，ICF項目との関連からDASHとの比較を試みた結果，Hand20は心身機能から5項目，活動と参加から23項目，個人因子から2項目がICF項目と関連づけられた．また，Hand20は，DASHより手に特化した身体部位特異的尺度であると捉えられた． 本人担当部分：研究計画の立案に対する助言，研究の実施をともに行い，論文執筆に際して助言をした． 共著者：Iitsuka T, Ohura T, Fujita T.
20 Studies of setting care goals and understanding subjective needs in aged care facilities: care providers' and residents' view（高齢者施設におけるケア目標の設定とニーズ把握の研究：ケア提供者と入所者本人の視点）（博士論文）	単著	平成29年1月	京都大学	1）施設職員による入所高齢者へのケア目標の設定とケア目標に関連する要因，2）入所高齢者の生活上の主観的ニーズの評価法，3）入所高齢者の生活上の主観的ニーズと介護職員の把握状況，を明らかにした． A4判　全38頁（既出の学術論文9・16・23で構成）
21 作業療法士による訪問リハビリテーションの目標とプログラム：訪問リハビリテーション実施計画書の記載内容（査読付）	共著	平成29年3月	作業療法ジャーナル 51: 261-265, 2017	作業療法士による訪問リハビリテーションの目標とプログラムの実態を明らかにするために，初回実施計画書の記載内容を計量的に分析し，社会参加を見据えた活動・参加の目標のもと，活動・参加と心身機能・身体構造のプログラムが多く行われていることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり指導した（責任著者）． 共著者：山内春香，佐竹美保，津山努，大浦智子
22 認知症高齢者のQOL向上に向けたADL 支援プロトコル構築のための在宅の基礎的調査（査読付）	共著	平成29年7月	日本認知症ケア学会誌 16: 461-469, 2017	認知症高齢者の主観的生活の質（QOL）の維持向上に向けた日常生活動作（ADL)支援プロトコルの構築を目指し、在宅認知症高齢者の総合的なADLの実態，主観的QOLと総合的なADL等の因子との関連を調査した.総合的ADLの障害が主観的QOLと関連があり，手段的ADLが基本的ADLに比べて自立度が低い傾向にあることが示された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり助言した． 共著者：中西康祐，大浦智子，池谷政直
23 Validity and reliability of a performance evaluation tool based on the modified Barthel Index for stroke patients (Barthel Index改変版としての遂行評価尺度の脳卒中患者における妥当性と信頼性)（査読付）	共著	平成29年8月	BMC Medical Research Methodology (2017) 17:131 DOI 10.1186/s12874-017-0409-2	脳卒中患者におけるModified BI（MBI）に基づく日本語版（performance evaluation tool of MBI: PET-MBI）の妥当性と信頼性検証を行った．PET-MBIは，BIとの基準関連妥当性と評価者間信頼性・評価者内信頼性が高いと判断した． 本人担当部分：共著者とともに研究計画を立案・実施し，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Hase K, Nakajima Y, Nakayama T

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
24 臨床実習後作業療法学生におけるハンドセラピィに対する認識 （査読付）	共著	平成29年10月	日本ハンドセラピィ学会誌 10: 43-48, 2017	養成校作業療法学生の臨床実習後におけるハンドセラピィに対する認識を検討するために，学生の提出レポートをテキストマイニング手法により分析した．主題分析を用いた質的検討を踏まえると，学生はハンドセラピィを作業療法の一分野として認知はしているものの，生活や作業とは対極しており，作業療法士とは一線を画すとの認識であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり助言した． 共著者：飯塚照史，大浦智子
25 テキストマイニング手法を用いた訪問リハビリテーションプログラムの分析 （査読付）	共著	平成29年11月	地域リハビリテーション 12: 968-975, 2017	訪問リハビリテーションの初回プログラム内容と，3ヶ月以内の目標達成終了者の特徴を明らかにするために，テキストマイニング手法を用いて分析し，脳血管疾患と骨関節疾患のプログラムの割合を計量した．初回のプログラムは心身機能に焦点をあてた機能訓練が多かった． 本人担当部分：研究計画を立案し，共著者とともに実施，論文執筆にあたり助言をした． 共著者：古澤麻衣，大浦智子 ，藤井啓介，津山努
26 中年世代の各ライフステージにおける趣味と思い出の傾向 （査読付）	共著	平成30年5月	日本臨床作業療法研究 5: 14-19, 2018	中年世代のライフステージの趣味と，その時の思い出の傾向を明らかにするために，自由回答式質問紙調査を実施した．趣味の思い出は人との思い出が最も多く，作業療法場面で趣味を活用する際には，活動としての趣味だけでなく，その趣味に含まれる意味や思い出を理解する必要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画共著者とともに立案し，論文執筆にあたり助言をした（責任著者）． 共著者：榊原唯，水野里咲，村松真侑子，阿部優奈，大浦　智子
27 Occupation-based differences in shared perceptions of older resident needs within multidisciplinary care teams: a cross-sectional study of care workers, nurses, and therapists linked to older residents（入所高齢者の視点共有に関する多職種ケアチーム内における職種間の違い：入所高齢者とリンクされた介護・看護・リハビリテーション職を対象とした横断研究） （査読付）	共著	平成30年6月	J. Phys. Ther. Sci. 30: 866-873, 2018	介護老人保健施設で働く介護・看護・リハビリテーション職による入所高齢者のニーズ把握の程度とその共有実態を明らかにするために，高齢者と介護・看護・リハビリテーション職88組への調査結果を分析した．職員らは手段的日常生活と生活環境に関するニーズを過小評価する傾向があり、職種によってニーズの把握領域が異なっていた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Higashi T, Ishizaki T, Nakayama T

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28 関節リウマチ患者と医学生の合同グループワークで得られた患者と医学生の声　今後の医学教育に必要なこと（査読付）	共著	平成31年5月	日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌　10(1)：31-35，2019	関節リウマチ患者と医学生の合同グループワークの取り組みを紹介し，合同グループワーク後の感想と，双方が考えている医学教育に必要なことを問うた．双方とも，グループワークの取り組みを肯定的にとらえていたのに加え，医学生は患者さんの生活を知ることの重要性を感じていた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，小嶋雅代，荘子万能，西明博，橋本里穂，石橋茉実，山中寿，中山健夫
29 病院と訪問における作業療法士の役割と必要なスキル-学生の視点による質的研究（査読付）	共著	令和元年8月	作業療法ジャーナル 53(9)：1014-1018，2019	作業療法専攻で学ぶ大学生の視点で，作業療法士に対して病院と訪問における作業療法士の役割と必要なスキルをインタビューし，分析した．【目標の共有】と【医療・介護保険の知識】は，訪問リハに関する語りのみで抽出され，訪問リハで意識されていることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画共著者とともに立案し，論文執筆にあたり助言をした（責任著者）． 共著者：水野里咲，榊原唯，阿部優奈，村松真侑子，大浦智子
30 （学生論文）「作業に焦点を当てた実践」の現状と障壁（査読付）	共著	令和元年8月	日本臨床作業療法研究 6(1)：38-5，2019	作業療法士に対する質問紙調査にて，OTを提供するうえで【目標共有】，【ニーズ】，【アプローチ】等に配慮し，「意味のある作業」に焦点を当てることがOTを行う上で有用だと考えていることがわかった．作業に焦点を当てた実践を知っていると回答したOTRは限られていたが，知らないと回答したOTRの約9割が知りたいとの回答を得た． 本人担当部分：研究計画共著者とともに立案し，論文執筆にあたり助言をした（責任著者）． 共著者：林映見，林原千夏，野呂奈々穂，加藤正崇，石黒佳世，大浦智子
31 介護老人保健施設に入所する高齢者の生活満足の関連要因：ケア提供者の職種とニーズ把握を加味した検討（査読付）	共著	令和2年3月	医療福祉情報行動科学研究7：63-72，2020	介護老人保健施設の入所高齢者の生活満足に入所高齢者を対象に，4領域25項目のニーズ項目と生活満足等で構成する質問紙を用いた面接調査を行った．さらに，高齢者1人につき介護職員・看護職員・リハビリテーション職員（リハビリ職員）をマッチさせ，高齢者と同様のニーズ項目とケア提供への満足度等で構成する質問紙調査を実施した．高齢者の生活満足を従属変数，高齢者の特性（性，年齢，認知機能など），職員の特性（カンファレンスの参加，ケア提供），職員による高齢者のニーズ把握数を説明変数し，有意水準を0.10未満として変数増加法を用いたロジスティック回帰分析にてオッズ比を算出した．入所高齢者は，性や年齢にかかわらず約8割が生活に満足していた．高齢者の生活満足をアウトカムとしたロジスティック回帰分析の結果，オッズ比は，介護職員がケア提供に満足している場合がしていない場合に比べて9.46（95%信頼区間[confidence interval：CI]1.04-86.02）だった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，中山健夫

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
32 特別論文：特別永住者や外国系日本人における日本の高齢者介護サービスへのアクセスの現状と課題：公衆衛生モニタリング・レポート委員会報告（査読付）	共著	令和2年7月	日本公衆衛生雑誌 67(7)：435-441，2020	日本の在留外国人ならびに外国系日本人高齢者（以下，外国系高齢者）の介護について概観するために，医学中央雑誌Web（Ver.5）による検索を行った結果，205件の論文が抽出され，第一次・第二次抽出手続きを経て，本テーマに該当すると判断された論文は2件のみであった．この2件は主に現在の75歳以上に多いとされる特別永住者である在日韓国・朝鮮人，および中国帰国者と配偶者を対象とした報告であった．今後の介護リスクを有する外国系高齢者の介護を考えるうえで，特別永住者はもとより，他国からの永住者の増加を見据え，文化的背景や言語の多様化を考慮した課題を明らかにし，対応を検討する必要がある． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，鷲尾昌一，石崎達郎，大坪徹也，安西将也，甲斐一郎，植木章三，矢庭さゆり，藤原佳典，奥村二郎
33 Psychological Conflicts in Bystander Cardiopulmonary Resuscitation for Out-of-Hospital Cardiac Arrest（査読付）（院外心停止におけるバイスタンダーの心肺蘇生における心理的葛藤）	共著	令和2年9月	International Journal of First Aid Education 3(2) 10 - 21，2020	心停止現場に居合わせた市民（バイスタンダー）による心肺蘇生（CPR）の実施に影響する要因を明らかにするために，ミクストメソッドの第１段として、心停止現場に遭遇した方を対象に半構造化面接を通じた質的研究を実施した．14名を対象に16件の院外心停止事例が得られ，バイスタンダーCPRに関連する5つのカテゴリ“助けたいという思い”，“CPR実施を促進する要素”，”CPR実施を障害する要素”，“知識と経験”，“心停止現場の状況と環境”と，19の概念が生成された．バイスタンダーは心停止現場に遭遇した際に命を助けたいと感じるが，CPRを実施するかしないかという葛藤を繰り返し経験するプロセスが示唆された． 本人担当部分：筆頭筆者とともに質的分析を担った． 共著者：Shimamoto T，Nishiyama C，Ohura T，Kawamura T，Iwami T
34 総説：日本国内の生活者を対象とした健康増進・疾病予防に関わる介入の実態―医中誌webを用いたシステマティックレビュー―（査読付）	共著	令和2年10月	日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌11(2) 43-60，2020	健康意識・態度と健康に関する行動変容(健康増進・疾病予防に関わる行動の変容)に係る地域における一般生活者に対する介入の実態把握と，その方略や手段など工夫(以下，工夫)の抽出を目的に，産学連携体制にて国内文献のレビューを行った．文献検索には医学中央雑誌を用い，41編の論文を採択した．研究デザインは一群前後比較の研究が多く(15編)，アウトカムは意識・態度変容のみが8編，健康に関する行動変容(健康増進・疾病予防に関わる行動の変容)を扱った研究が33編だった．また介入対象者を健康関心層に設定した研究が相対的に多かった(28編)．分析から，意識・態度と健康に関する行動変容(健康増進・疾病予防に関わる行動の変容)に係る工夫を77個抽出し，8のカテゴリに整理した．今後は無関心層や低関心層を対象とした研究の強化，5W1Hを起点とした実効性の高い介入施策のデザインと検証，有用なノウハウやアセットを持つ民間セクターとの積極的な連携が期待される． 本人担当部分：文献検索および文献レビューを行った． 共著者：佐藤克彦，戒田信賢，大浦智子，太田はるか，中山寛子，森岡美帆，甲斐千晴，小柳仁，中山健夫
35 Surveying Therapists on Seating Approaches for Patients with Muscular Dystrophy in Japan（査読付）（日本における筋ジストロフィー患者のシーティングアプローチに関する療法士への調査）（査読付）	共著	令和3年5月	Healthcare　9(6)：631，2021. DOI:10.3390/healthcare9060631	筋ジストロフィー患者の車いすシーティングに関わる療法士を対象に、シーティングの実施状況について質問紙調査を実施した． 本人担当部分：共著者とともに研究計画の立案・実施した 共著者：Fujita H，Tsukada A，Ohura T

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
36 Factorial validity and internal consistency of a practitioners' checklist for therapists in rehabilitation（査読付）（リハビリテーションにおける療法士のための実践者用チェックリストの因子的妥当性と内的整合性）（査読付）	共著	令和3年11月	JBI Evidence Implementation 19:387-393, 2021.	病院・訪問で働く療法士を対象にリハビリテーション実践におけるチェックリストの因子的妥当性と内的整合性を検証した．分析対象は385人で，4因子20項目のモデル適合度はRMSEA0.083, GFI0.843,AGFI0.799で、因子間の相関は0.67-0.95，各因子からの因子負荷量は20項目すべてで0.41以上だった． Cronbach's α係数は0.896, 0.890, 0.935, 0.925だった． 本人担当部分：研究計画の立案・実施を主で行った． 共著者：Ohura T, Tsuyama T, Furusawa M, Iitsuka T
37 コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題―学内実習の概要と学生アンケート調査による考察―（査読付）	共著	令和4年3月	医療福祉情報行動科学研究　Vol.9 ： 31-38,2022.	訪問リハビリテーションまたは通所リハビリテーションに関する実習（以下、地域実習）において新型コロナウイルスの感染拡大により，令和2年度・3年度の学内での地域実習は2年次後期配当科目で2週間実施した．実習は①予習，②学内実習，③復習で構成され，履修学生に対する実習終了後アンケート調査は両年度ともに約95％の回答率で類似した回答傾向，地域実習で扱ったテーマについては約90%の学生が理解できたと回答，訪問・通所事業所のライブ中継は100%に近い割合で高い評価であった一方，3年次以降の臨床実習に対して最大約40%の学生が「不安」と回答した． 本人担当部分：共著者とともに実習および研究を実施した． 共著者：滝本幸治，池田耕二，吉川義之，坪内善仁，笹野弘美，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生
38 介護職員の専門職意識と離職予防:先行研究からの考察	単著	2022年6月	地域ケアリング 24(6) 64-66 2022.	介護職員の離職に関わるよういんについて明らかにするために，本邦にて発行された文献をレビューし，概観した． 単著
39 Evaluation of Clinical Practice Guidelines for Rare Diseases in Japan（日本における希少疾患の診療ガイドラインの評価）（査読付）	共著	2022年10月	JMA Journal 5(4): 460-470, 2022.	希少患者を対象とした診療ガイドラインをレビューし，ガイドラインの実態を明らかにした． 本人担当分：共著者と共にレビューおよび研究を実施した． 共著者：Uchida T, Takahashi Y, Yamashita H, Nakaoku Y, Ohura T, Okura T, Masuzawa Y, Hosaka M, Kobayashi H, Sengoku T, Nakayama T
40 高齢者の市中肺炎（院外肺炎）の危険因子とインフルエンザワクチン・肺炎球菌ワクチン接種：公衆衛生モニタリング・レポート委員会報告（査読付）	共著	印刷中	日本公衆衛生雑誌（印刷中）.	高齢者の市中肺炎の危険因子とインフルエンザワクチン・肺炎球菌ワクチン接種について，検討した． 本人担当部分：共著者と共に実施した． 共著者：鷲尾昌一，石崎達郎，植木章三，藤原佳典，大浦智子，安西将也，甲斐一郎，奥村二郎，大坪徹也，矢庭さゆり，島本太香子，渡辺修一郎
41 高次脳機能障害者への実車評価の実施状況と受け入れに関する意向 -指定自動車教習所の代表者と指導員への質問紙調査-（査読付）	共著	印刷中	作業療法ジャーナル（印刷中）	高次脳機能障害者の自動車運転について，実車評価の実態と恵瓊れに関する意向について明らかにした． 本人担当部分：主として質的分析を担当し，考察した． 共著者：今井あい子，石川稜馬，飯塚照史，大浦智子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「ガイドライン」 1 JSPU Guidelines for the Prevention and Management of Pressure Ulcers (3rd Ed.) (褥瘡予防・管理ガイドライン（第3版）)	共著	平成26年3月	Jpn J PU 16(1): 12-90, 2014.	科学的根拠に基づく褥瘡予防・管理ガイドラインの改訂版を作成した. 本人担当部分：委員会による作成のため抽出不可能　（ガイドラインについての説明と位置づけについて概説し，褥瘡予防・管理ガイドライン第3版作成にあたり，各分野の推奨度の根拠となる文献の研究デザインおよびエビデンスレベルを判断し，ガイドラインにおける推奨度決定を支援した.） 共著者：The Japanese Society of Pressure Ulcers Guideline Revision Committee (Tsuboi R, Tanaka M, Kadono T, Nagai Y, Furuta K,Noda Y, Sekine Y, Kaitani T, Kataoka H, Nakagawa H, Iwamoto T, Kurita M, Kinoshita M, Kurashige Y, Nakagami G, Kakizaki S, Hidaka M, Hirose H, Sugimoto M, Miyajima M, Noguchi M, Okuwa M, Ishizawa M, Kinoshita Y, Sobue M, Murooka Y, Matsui Y, Ohura T, Konya C, Ichioka S, Sugama J, Tanaka H, Adachi K, Nakayama T, Miyachi Y)
「総説・解説等」 1 （提言）患者中心のアプローチ（Patient-centered approach）と根拠に基づく実践（Evidence-based Practice）：より良い作業療法実践にむけて	単著	平成27年2月	OTジャーナル 49: 90-91, 2015	作業療法領域における「患者中心のアプローチ（Patient-centered approach: PCA）」，「根拠に基づく実践（Evidence-based Practice: EBP）」，「意思決定の共有（Shared-decision making: SDM）」と「説明と同意Informed Consent（IC）」を紹介した.
2 EQUATOR Networkから得られる，質の高い研究報告のための国際ルール④ PRISMA: システマティック・レビュー報告のためのツール	共著	平成27年5月	Jpn Pharmacol Ther（薬理と治療）43 suppl. 1: s44-s50, 2015.	メタアナリシスとシステマティックレビューの報告のガイダンスであるPRISMA（Preferred Reporting Items for Systematic reviews and Meta-Analyses）の概要を紹介し，今後の展望をまとめた. 本人担当部分：共著者の助言を得て，論文を執筆した. 共著者：大浦智子，中山健夫
3 （特集）訪問リハビリテーション・チェックリストの開発：具体的な目標設定と明確な課題解決のプロセス	共著	平成28年3月	訪問リハビリテーション協会機関紙43: 29-34.2016	明確な目標設定に基づく効果的な訪問リハビリテーション（訪問リハ）の提供を可能とするためのアセスメントシートとチェックリストを開発した．チェックリストは4領域20項目で構成された. 本人担当部分：共著者の助言を得て研究計画を立案・実施し，論文を執筆した. 共著者：大浦智子，津山努，古澤麻衣
4 養成校における訪問リハビリテーションの教育の現状と課題	単著	平成29年1月	地域リハビリテーション 12: 34-39, 2017	養成校における訪問リハビリテーションの教育の現状と課題について，報告した．養成教育における地域関連科目と単位数，全体のなかでの訪問リハビリテーションについて説明できる時間的制約について概説する一方，近年の実習における訪問リハビリテーション見学場面の増加などについて示した.
「報告書等」 1 市民の健康に関する意識調査報告書	共著	平成26年2月	平成25年度東海市健康増進計画等の評価及び策定支援委託事業（星城大学）	東海市健康増進計画等の評価及び策定にむけた調査を集計し報告した. A4判　全158頁 本人担当部分：データ集計・結果の解釈および報告書を主となって作成し，とりまとめた. 共著者：江西一成，竹田徳則，大浦智子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2 地域居住高齢者の健康増進・介護予防プログラムとしてのシリアスゲームの活用	共著	平成26年3月	平成25年度元気創造研究センター年報（星城大学）	地域における介護予防のための健康サロンに参加する高齢者の健康情報ニーズの収集方法などについて調査し，シリアスゲームを活用した健康教育活動について検討した. A4判　全44頁 代表：大浦智子 本人担当部分：「地域居住高齢者の健康増進・介護予防プログラムとしてのシリアスゲームの活用」pp31-33を共著（筆頭）. 公民館サロン参加高齢者の健康関連ニーズ及び入手源について調査し，報告した. 共著者：大浦智子，竹田徳則，天野圭二，冨山直輝，木村大介
3 介護予防のための心理社会面に着目した包括的地域介入に関する研究	共著	平成26年3月	平成25年度元気創造研究センター年報（星城大学）	心理社会面と健康に着目し「憩いのサロン」を活用した介護予防のための地域介入によってもたらされる効果と課題について長期追跡によって検証した（2年目）. A4判　全44頁 代表：竹田徳則 本人担当部分：「介護予防のための心理社会面に着目した包括的地域介入に関する研究」pp.34-36を共著 　介護予防の一次予防事業「憩いのサロン」拠点数の増加に伴う延べ参加者の増加，一時予防事業として展開される中での二次予防事業該当者のカバー，サロン参加と回数が多いほど要介護認定発生が有意に低いことを報告した．（研究の実施および論文執筆にあたり助言した.） 共著者：竹田徳則，木村大介，大浦智子，今井あい子
4 介護予防サロン運営展開方法調査報告書	共著	平成27年1月	平成26年度東海市委託事業(星城大学)	東海市のサロン運営ボランティアへのヒアリングと質問紙調査の実施・集計と，これに基づく提案を報告した. A4判　全21頁 本人担当部分：共著者とともに質問紙を作成し，調査の実施・集計と報告書の作成を主に担った. 共著者：安倍基幸，竹田徳則，江西一成，大浦智子
5 地域居住高齢者の健康増進・介護予防プログラムとしてのシリアスゲームの活用	共著	平成27年3月	平成26年度元気創造研究センター年報（星城大学）	地域における介護予防のための健康サロンに参加する高齢者の健康情報ニーズの収集方法などについて調査し，シリアスゲームを活用した健康教育活動について検討した（2年目）. A4版　全33頁 代表：大浦智子 本人担当部分：「地域居住高齢者の健康増進・介護予防プログラムとしてのシリアスゲームの活用」pp23-26を共著（筆頭）. 公民館サロン参加高齢者に対する健康増進・介護予防プログラムとして実施した健康川柳の募集，健康川柳を活用したカルタの作成とカルタの活用について報告した. 共著者：大浦智子，竹田徳則，天野圭二，冨山直輝，木村大介

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6 公衆衛生モニタリング・レポート委員会平成26年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	平成27年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある12グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全59頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた3つの個別課題pp.14-18を共著 （このうち，高齢者グループ個別課題②「高齢者の地域におけるリハビリテーションについて」pp.15-17担当執筆） 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，須知雅史，多田敏子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）
7 小規模私立大学で運用可能な調査システムを活用した、大学生の精神健康実態調査	共著	平成28年3月	平成27年度元気創造研究センター年報（星城大学）	A4判　全33頁 学年および学部別の精神健康の特徴，および進級に伴う精神健康の推移を明らかにするために，学生の精神健康について実態を調査した. 代表：羽山 順子 本人担当部分：「小規模私立大学で運用可能な調査システムを活用した、大学生の精神健康実態調査」pp25-29を共著. 学生の精神的健康とアルバイトとの関連，半年後の精神健康を予測する要因について報告した. 共著者：羽山 順子，安部 基幸，赤岡 美津子，大浦智子
8 認知症高齢者主観的QOL向上をめざすADLプログラム開発に向けた在宅生活の実態調査	共著	平成28年8月	公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団2015年度「在宅医療研究への助成」一般公募研究（前期）完了報告書	認知症高齢者の日常生活活動プログラム構築のために，在宅で暮らす認知症高齢者の日常生活活動，主観的QOLなどを調査した．日常生活活動の障害が，認知症高齢者の主観的QOLを低下させる要因であることが示唆された.（研究の実施，および報告書作成にあたり助言した.） A4判　全13頁（PDF公開） 代表：中西康祐 本人担当部分：代表者とともに研究計画を立案し，分析・報告にあたり助言をした. 共著者：中西康祐，大浦智子，増田秀一
9 公衆衛生モニタリング・レポート委員会平成27年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	平成28年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある11グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全64頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた3つの個別課題pp.13-17を共著 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，須知雅史，多田敏子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10 公衆衛生モニタリング・レポート委員会 平成28年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	平成29年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある11グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全72頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた3つの個別課題pp.18-23を共著 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，須知雅史，多田敏子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）
11 公衆衛生モニタリング・レポート委員会 平成29/30年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	平成30年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある11グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全83頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた2つの個別課題pp.16-20を共著 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，島本太香子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）
12 回復期リハビリテーション病棟における退院前指導に関する実態：レセプトデータによる医科情報を用いたリハビリテーション研究の可能性	共著	平成31年3月	平成30年度元気創造研究センター年報（星城大学）	A4判　全83頁 回復期リハビリテーションを担う「回復期リハビリテーション病棟」における「入院時訪問指導加算」算定の実態を明らかにすることを目的に，日本医療データセンター（JMDC）のレセプトデータを用いて分析した. 代表：大浦智子 本人担当部分：「H003-2 リハビリテーション総合計画評価料 」算定件数は増加傾向にあること，「入院時訪問指導加算」の算定割合は新規に回復期リハビリテーション病棟に入院した数に対して限定的で，月単位における増減があるものの、やや増加していることを明らかにし，pp.14-16を共著. 共著者：大浦智子，飯塚照史
13 公衆衛生モニタリング・レポート委員会 2018/2019年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	令和元年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある11グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全83頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた1つの個別課題pp.13-20を共著 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，島本太香子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14 公衆衛生モニタリング・レポート委員会 2020/2021年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	令和3年12月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある12グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全80頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた2つの個別課題のうち1つの課題pp.13-15を共著（高齢者の市中肺炎の危険因子とインフルエンザワクチンの効果．執筆担当者：鷲尾昌一，石崎達郎，大浦智子，渡辺修一郎） 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （渡辺修一郎（リーダー），安西将也，石崎達郎，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，島本太香子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一）
「国際学会」 1 Differences between users and providers in regard to awareness and understanding the content and subjective effects of home-visit rehabilitation (訪問リハビリテーションの内容と主観的効果に関する利用者と提供者の認識と理解の違い)	―	平成26年6月	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo (Yokohama)	利用者と提供者間における訪問リハ内容・主観的効果に対する認識の相違を明らかにするための質問紙調査を行った．利用者が提供者よりも実施したと認識する内容は，筋力や体力・麻痺・床上動作・身のまわり動作・屋内移動・呼吸の改善の6項目，利用者の主観的効果(維持・向上)は転倒の危険・家族関係が最も高かった. 本人担当部分：研究の計画立案・実施と結果を集計し，報告した. 共同発表者：Ohura T, Tsuyama T, Nakayama T
2 Evaluation of the Facilitative Factors for the Prevention of Cognitive Decline in a Preventive Intervention for Dementia (認知症予防介入における認知機能低下促進因子の評価)	―	平成26年6月	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo (Yokohama)	一次予防事業であるサロン参加者の認知機能低下をエンドポイントとした4年間の追跡調査と分析を行った．サロン参加者では，Social networkやLeisure activityの高い状態が長期的には，認知機能低下に保護的である可能性が考えられた. 本人担当部分：研究の計画立案・実施および報告に向けた助言をした．. 共同発表者：Kimura D, Takeda T, Ohura T, Imai A
3 Motor and psychosocial tendencies in elderly women receiving primary preventive services (一次予防事業に参加する高齢女性の運動と心理社会特性)	―	平成26年6月	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo (Yokohama)	一次予防事業参加女性における運動器関連低下の割合と健康に関連する心理社会面を，横断的に検討した．予防事業参加女性の運動器該当群は約2割で，非該当群より生活機能，外出頻度の低下，うつ得点が高いことが示唆された. 本人担当部分：研究の計画立案・実施および報告に向けた助言をした．. 共同発表者：Imai A, Takeda T, Kimura D, Ohura T
「国内学会」 1 訪問リハビリテーション利用者・家族の生活目標：自由記述回答の質的分析	―	平成25年6月	第2回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（松本）	5箇所の訪問リハ事業所の利用者155名とその家族を対象に生活目標に関する質問紙調査を実施した．生活目標は，利用者では8個の二次カテゴリに，家族では17個の二次カテゴリに集約された．利用者と家族の生活目標は，歩行や外出等の移動が共通し，利用者では[自分らしい生活]，家族では[その人らしい活動]が挙げられていた. 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した. 共同発表者：大浦智子，津山努

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2 作業療法学専攻学生における“憩いのサロン事業”参加前後の学習と気づき	－	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪）	一次予防事業としての閉じこもり・認知症予防のための「憩いのサロン」に参加している学生を対象に，サロン参加前後のコミュニケーションや作業療法関連知識に対する質問紙調査を実施した．サロン参加によって「コミュニケーションの反省」や「改善したい態度」が意識化され，これらの課題について臨床実習前に学生が気づくには学内教育では限界があることがわかった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，竹田徳則，木村大介，今井あい子
3 脳卒中患者を対象とした作業療法介入ランダム化比較試験における評価尺度の計量的研究	－	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪）	2006-2010年に公表された脳卒中患者に対するOT介入RCTで使用された評価尺度を計量した．2006-2010年の5年間に公表された脳卒中患者対象のOT介入RCTは9論文(入院5，地域4)で，「活動・参加」で使用された評価尺度は基本動作やセルフケアに関するものが主であり，IADLやQOL，主観的な満足感を評価尺度として採用している研究は一部に限られていた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施を支援し、報告にむけて助言した． 共同発表者：田中理乃，大浦智子，中山健夫
4 ポピュレーションアプローチによる介護予防に向けた憩いのサロン事業-参加促進要因-	－	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪）	介護予防に向けたサロン参加促進の手がかりを得るために，お元気チェックにおいてサロン参加のきっかけを質問項目のひとつとして調査した．サロン参加へのきっかけは，ボランティアと参加者で「人」と「町広報誌」，参加者では「回覧板」や「老人会」を介した情報的サポートが多い反面，「家族の勧め」は少なかった． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：竹田徳則，近藤克則，大浦智子，木村大介，今井あい子
5 地域在住高齢者における自己記入式認知機能検査日本語版(Test Your Memory -J)の基準関連妥当性の検討	－	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪）	地域在住高齢者を対象にTest Your Memory-J（TYM-J)の基準関連妥当性を，MMSE・HDS-R・CDRを併用して検討した．地域在住高齢者の認知機能評価としてのTYM-Jの妥当性と検査適正が確認できた． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：木村大介，竹田徳則，大浦智子，今井あい子
6 入所高齢者の主観的ニーズを把握するための質問紙の作成：内的整合性と再現性	－	平成25年10月	第72回日本公衆衛生学会（津）	施設入所の要介護高齢者における生活に関する主観的ニーズ把握のための質問紙の内的整合性と再現性を検証した．質問紙は，高齢者の主観的ニーズに関する4領域・合計25項目で構成され，質問紙の4領域の内的整合性は高く，領域や項目による信頼性の高低があった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，東尚弘，石崎達郎，中山健夫

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7 高齢者施設の常勤介護職員における離職とその関連要因の検討	－	平成25年11月	第53回近畿産業衛生学会（京都）	常勤介護職員の離職と職業ストレス，バーンアウト，抑うつ等との関係を明らかにするために，調査後1年以内の離職の有無をアウトカムとした共分散構造分析を行った．常勤介護職員において，バーンアウト（BO）の情緒的消耗感には職業ストレス・BO脱人格化やBO個人的達成感・抑うつが関与しており，BO情緒的消耗感が限定的ではあるが離職の直接要因となっていた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，石崎達郎，中山健夫
8 臨床実習後の作業療法学生が目標・理想とする作業療法士	－	平成25年11月	第13回東海北陸作業療法学会（富山）	最終学年での臨床実習（8週間の総合実習2回）を終えた学生がm目指す作業療法士をを明らかにするために，記述式質問紙調査で得た内容を質的に分析した．臨床実習を終えた学生は，目標・理想とする作業療法士の要素として【技能】や【総合的判断力】に着目していた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施を支援し、報告にむけて助言した． 共同発表者：山崎竜弥，大浦智子
9 訪問リハビリテーションの効果判定に使用されている評価指標：国内外の作業療法効果に関する文献レビュー	－	平成26年6月	第4回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（熊本）	高齢者への訪問リハビリテーションにおける作業療法介入研究の使用評価指標を明らかにした．包含基準を満たす国内外5論文の使用評価指標は対象者8種（セルフケアや転倒発生等），介護者2種（負担感等）だった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，古澤麻衣，中山健夫
10 女性高齢者の認知機能を規定する生活機能の探索的分析	－	平成26年9月	第4回日本認知症予防学会（平成26年9月，東京）	サロンに参加する女性64名を対象に，手段的自立（以下，IADL）などを含む高次生活機能の状態が認知機能に及ぼす影響を明らかにした．見当識と視空間はIADL，語流暢性は知的能動性，遅延再生は社会的役割の状態から説明可能であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案し，実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：木村大介，古澤麻衣，大浦智子，竹田徳則，冨山直輝，天野圭二
11 健康サロン参加高齢者の健康関連情報ニーズとIT使用状況	－	平成26年11月	第73回日本公衆衛生学会（宇都宮）	健康サロン参加高齢者の健康関連情報ニーズとIT使用状況を明らかにするための質問紙調査を実施した．健康サロン参加高齢者の健康関連情報ニーズとして，認知症，物忘れ，筋力低下，骨粗鬆症の関心が高かった．携帯電話およびインターネットの使用状況が決して高いとはいえなかった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，竹田徳則

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12 認知症高齢者の回復期病棟退院前後における家族介護者の負担感の特徴	－	平成27年5月	第16回認知症ケア学会（札幌）	回復期リハビリテーション病棟から自宅退院した認知症を伴う高齢者の介護者における負担感の変化と関連要因を検討した．介護者は高齢者が入院中でも何らかの介護負担を感じ，退院後に高い傾向にあった．介護者の多くは認知症の症状を理解し，サポートの受領もあったが，負担が高い群の半数はBPSDによる負担感があり，その高齢者は退院後もBPSDが出現し，ADL自立は総じて低かった． 本人担当部分：研究結果の解釈および報告にむけて助言した． 共同発表者：藤田彩花，竹田徳則，大浦智子，神田太一
13 訪問リハビリテーション・チェックリストの開発：具体的な目標設定と明確な課題解決のプロセス	－	平成27年5月	第6回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（大阪）	明確な目標設定に基づく効果的な訪問リハビリテーション（訪問リハ）の提供を可能とするためのアセスメントシートとチェックリストを開発した．チェックリストは4領域20項目で構成された． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，古澤麻衣
14 院外心停止に居あわせた市民の　心肺蘇生における心理・行動プロセスとその関連要因	－	平成27年6月	第18回　日本臨床救急医学会総会・学術集会（富山）	院外心停止に居あわせた市民の心肺蘇生における心理・行動プロセスとその関連要因を明らかにするために，インタビューを用いた質的研究を行った．助けたいという動機の存在のもと，心配停止現場に伴う負担と心肺蘇生を実施する根拠の葛藤が生じていることが明らかとなった． 本人担当部分：データの分析を共に担い，研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：島本大也，西山知佳，大浦智子，石見拓
15 訪問リハビリテーション実施計画書における目標とプログラムの施設間の違い	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	訪問リハ実施計画書（計画書）の目標とプログラムを構成するICF領域数を施設間で比較した．3施設に対象者特性の大きな違いはなかったが，目標の領域数はPTによる計画書で施設間の違いが認められた．プログラムの領域数は全体・PT・OTいずれの場合においても施設間の違いが認められた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，山内春香，佐竹美保
16 訪問リハビリテーション実施計画書の目標とプログラム	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	作業療法士が作成した訪問リハ実施計画書（計画書）の目標とプログラムを構成するICF領域数を計量した．目標の組み合わせは＜活動のみ＞と＜活動とその他＞をあわせて約半数を超えていたことに対し，プログラムの上位は＜心身と活動＞，＜心身と活動とその他＞，＜心身と活動と環境＞のように「心身」を含む複数領域で構成される組み合わせに広がっていた． 本人担当部分：研究計画を立案・実施し，データの分析および報告にむけて支援した． 共同発表者：山内春香，佐竹美保，津山努，大浦智子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17 介護予防「憩いのサロン」事業参加者における二次予防リスク者の特徴	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	一時予防事業であるサロン参加者における二次予防対策リスク者とその割合を確認し，サロンを活用した一時予防事業プログラムにつながる基礎資料を得るために，お元気チェックで得た自記式質問紙の回答を分析した．運動器と口腔機能，認知機能，うつの各リスク者，なかでも平均年齢の高い一般参加者で二次予防事業該当者が多く含まれていた． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：竹田徳則，木村大介，大浦智子，今井あい子
18 介護予防・認知症予防事業に参加している地域在住高齢者の認知機能の影響要因に関する共分散構造分析を用いた分析	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	認知機能に対する予防要因を明らかにし，予防要因が認知機能に与える影響のプロセスを明らかにした．認知機能に対する予防要因である潜在変数は，「生活上の役割」「社会的技能」「知的IADL」「身体機能」に集約された．認知機能予防事業には，「社会参加」を通じて認知機能を高める関節効果と４つの潜在因子が認知機能に直接影響する直接効果の両者の介入効果が包含されていた． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：木村大介，竹田徳則，大浦智子，今井あい子
19 前向きな障害受容は脳卒中後遺症者の主観的幸福感に関連するか？	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	脳卒中後遺症を有する者の主観的幸福感を高める支援に向けて，前向きな障害受容と主観的幸福感の関連を検討した．ロジスティック回帰分析の結果，主観的幸福感には，機能低下や活動制限など以上に，親しい人との交流満足感が関与しており，脳卒中後遺症を有する者の対人交流の状態やその満足感に着目する重要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案・実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：今井あい子，平野友祐，大浦智子
20 認知症高齢者の介護者に対する情報的サポート内容の検討	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	介護者を対象にOTから入院中に受けたサポート内容と自宅で介護をすることで入院中にあれば良かったと思うサポート内容を調査し，OTが今後提供すべきサポート内容を検討した．退院1ヵ月後の介護において入院中にあれば良かったサポートは「認知症症状の対応」と「コミュニケーション方法」，「できることを増やす方法」など高齢者の症状理解と対応方法に関する内容が多かったが，これらは入院中の提供が少ない傾向であった． 本人担当部分：結果の解釈に関する助言，および報告にむけて支援した． 共同発表者：藤田彩花，竹田徳則，大浦智子，神田太一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
21 3ヶ月以内に訪問リハビリテーションの目標達成 終了に至る要因の探索	－	平成27年11月	第74回日本公衆衛生学会（長崎）	訪問リハビリテーションの初回目標/プログラムの内容と目標達成による3か月以内の終了との関連を明らかにするために，リハビリテーション実施計画書の後方視的研究を行った．セルフケアのうち，入浴を視野に入れた目標のもと，計画的に評価を行うことが，限られた期間内に目標を達成し終了に至る要因となる可能性がある． 本人担当部分：研究計画を立案・実施し，データの分析および報告にむけて助言した． 共同発表者：古澤麻衣，大浦智子，藤井啓介
22 訪問リハビリテーション内容と効果に対する利用者家族と提供者の捉え方の相違	－	平成27年11月	第74回日本公衆衛生学会（長崎）	訪問リハビリテーション利用者家族と提供者50組を対象に，主観的効果と実施プログラムの認識の相違を明らかにした．利用者家族は，提供者が考えているよりも症状や床上動作の改善に向けたプログラムやマッサージを実施していると認識しており，痛みや症状の改善を自覚していた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，中山健夫
23 訪問と回復期におけるリハビリテーション実践状況の違いー複数施設を対象とした質問紙調査ー	－	平成28年3月	第3回臨床作業療法学会学術大会（東京）	訪問リハと回復期リハにおける実践状況の相違を明らかにした．訪問群が回復期群に比べて，環境に関する評価や専門的立場からの助言，対象者や家族の意向を反映し理解のもとに決定したプランを立案・実施していた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，古澤麻衣
24 作業療法のクリニカルリーズニングと患者満足度との関連	－	平成28年3月	第3回臨床作業療法学会学術大会（東京）	作業療法士（OTR)のクリニカルリーズニング（CR)と作業療法内容，クライアント（CL)の満足度の関連を明らかにするために，19組の質問紙回答を分析した．約半数のOTRの経験年数が1～2 年目だったが，CRの合計は 7.3 と多くの活用が認められた．CLの満足度はどの項目においても作業療法に対して高い評価だったことに対し，OTR が予測したCLの満足度や作業療法の提供満足度は約5点と低かった． 本人担当部分：研究計画立案をともに行い，データの分析および報告にむけて助言した． 共同発表者：古澤麻衣，大浦智子，藤井啓介
25 脳卒中患者を対象としたModified Barthel Indexの信頼性	－	平成28年6月	第53回日本リハビリテーション医学会(大阪)	日本語版performance evaluation tool of Modified Barthel Indexの信頼性を，ビデオ法を用いて検証した．合計点数の評価者間・評価者内信頼性はAlmost perfect，全項目がAlmost perfect- Substantialであったことから，信頼性があると判断した． 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，長谷公隆，中島美恵，中山健夫

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
26 臨床経験を有する者における訪問リハビリテーション配属期間と実践状況との関連	－	平成28年6月	第8回日本訪問リハビリテーション協会（東京）	臨床経験が6年目以上の者における訪問リハビリテーション（訪問リハ）配属期間と実践状況との関連を明らかにした．訪問長群は訪問短群に比べてICFの活動・参加に関する評価を行い，プランの実施に対象者や家族の意向を反映していると自己評価していた．訪問長群では，対象者だけでなく家族の意向の調整を含めた総合的視点に配慮した実践に取り組んでいた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，古澤麻衣
27 臨床経験とリハビリテーション実践との関連	－	平成28年9月	第50回日本作業療法学会（札幌）	臨床経験年数と実践状況との関連を明らかにするために，6箇所の回復期リハ病棟から得られた223名の質問紙の回答（新人群144名，経験群79名）を分析した．経験群は，全20項目において新人群に比べて実践状況が高かったことから，これらの項目の実践状況は経験年数との関連が示唆された． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，古澤麻衣
28 認知症高齢者のQOL向上に寄与するADL介入プロトコル構築のための予備的調査	－	平成28年9月	第50回日本作業療法学会（札幌）	施設の認知症高齢者のQOL向上に寄与するADL介入プロトコルを構築するため，予備的介入調査を実施しその効果を検証した．ADL介入をとおして，QOLは主観的評価と代理評価のいずれも向上した．介入毎の意欲向上の記録や介入後の肯定的な感想から，QOLが向上した一因がうかがえた． 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告にむけて助言した． 共同発表者：中西康祐，大浦智子，矢田智恵美，浅井健一
29 医学生は、患者視点をどのように学ぶことができるのか～リウマチ患者へのインタビューを通じて～	－	平成28年9月	第8回ヘルスコミュニケーション学会（東京）	「リウマチ友の会」会員に行った質問紙調査の自由記述式の質問に対する回答結果を，医学生4名（5年生3名、6年生1名）でKJ法により分析した．患者が希望するのは『不安・不満の解消』であり，患者の持つ不安・不満は『生活上の問題』，『心理的な問題』，『社会的な問題』に大別できた。これらの不安・不満の解消を阻害する要因として『患者視点に欠ける医療体制および診療内容』が抽出された．これら2つの阻害要因について，具体的どのようなことを改善すべきなのかをインタビュー調査で明らかにした． 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告にむけて支援した． 共同発表者：荘子万能，　西明博，橋本里穂，石橋茉実，小嶋雅代，大浦智子，山中寿，中山 健夫
30 回復期リハビリテーション病棟と訪問リハビリテーション実践の制約	－	平成28年10月	第75回日本公衆衛生学会（大阪）	リハビリテーション（リハ）専門職における臨床実践上での制約を明らかにした．17箇所から得られた385名の質問紙の回答（回復期222名，訪問163名）から，回復期ではプランの提案や立案・実施に制約を感じる一方で，訪問では生活目標の共有や課題の原因特定と対象者・家族への伝達・理解に制約を感じていることがわかった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，古澤麻衣

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
31 リウマチ寛解基準へのPGA導入過渡期の患者の類型化	－	平成29年8月	第49回日本医学教育学会大会（札幌）	医療に対する患者の多様性を把握するために，関節リウマチ患者を対象とした4回のフォーカスグループインタビューを用いて，段階的コーディングで語りの潜在的意味を可視化するSCAT手法により分析した.分析の結果，完治を追求する「理想志向型」、医師に提案を行う「提案型」、医師の言う通りに従う「開き直り型」、嘘をつく「医師あやつり型」の4類型に分けられ，タイプ毎の医師患者関係を明らかにした. 本人担当部分：共著者と共に研究を実施した. 共同発表者：中村里香，肥田武，小嶋雅代，末松三奈，大浦智子，安井浩樹，高橋徳幸，阿部恵子，岡崎研太郎，植村和正
32 関節リウマチ患者と医学生の面接によって得られた「患者の声」	－	平成29年9月	第9回ヘルスコミュニケーション学会（京都）	「（病気の）つらさ」に焦点をあて,9名（女性）の患者を対象に医学生3名（5回生）が同席のもとで非医師がフォーカスグループインタビューを行った結果，4つの大カテゴリ（【ライフイベント】【近親者による理解の有無】【周囲からの親切に対する思い】【リウマチに対する受入れの困難さ】）が抽出された．患者個人の体験としてのライフイベントや病気に対する周囲の理解に関する内容が「（病気の）つらさ」として抽出され，これらへの支援の必要性が示唆された. 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告した. 共同発表者：大浦智子，小嶋雅代，山中寿，荘子万能，　西明博，橋本里穂，石橋茉実，中山 健夫
33 関節リウマチ患者と医学生の合同グループワークの経験から：患者さんの感じたこと・医学生の学んだこと	－	平成29年9月	第9回ヘルスコミュニケーション学会（京都）	関節リウマチ（RA）患者と医学生の合同グループワークグループワーク（GW）を通して両者が感じたことと、今後の医学教育に必要と考えることを明らかにするために，質問紙調査によって面接の感想と医学教育に必要と考えることについて回答を得た．患者理解を試みる医学生に対し，患者から「伝えたい・教えたい」という思いが表出された一方，医学生は患者の生活像を理解する必要性を実感する機会となった. 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告した. 共同発表者：大浦智子，小嶋雅代，山中寿，荘子万能，　西明博，橋本里穂，石橋茉実，中山 健夫
34 救命処置実施への自信につながる心肺蘇生講習会の内容	－	平成30年6月	第21回　日本臨床救急医学会総会・学術集会（名古屋）	救命処置の自信に繋がる心肺蘇生講習会の内容を明らかにするために，心肺蘇生講習会に参加した18歳以上の市民を対象に質問紙調査を行い，自由記述に記載された講習会の良かった点に関して内容分析を行った．自由記述を分析した結果，自信に繋がった講習会の内容は「救命処置の体験」に関わるものが多くを占めた．救命処置を体験することで自信獲得に繋がること，質疑への対応や手技へのフィードバック，リアリティのある状況設定に応じた練習も重要であることが示唆された. 本人担当部分：データの分析を共に担い，研究の実施および報告にむけて助言した. 共同発表者：島本大也，西山知佳，大浦智子，石見拓

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
35 訪問リハビリテーション実践チェックリストの因子的妥当性と内的整合性	－	平成30年6月	第12回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（北九州）	訪問リハに配属されている理学療法士，作業療法士，言語聴覚士163名を分析対象とし，訪問リハ実践チェックリストに基づいて過去1ヶ月間の実践状況（0-10の11段階）を問う無記名自記式質問紙調査結果を分析した．質問紙は基本情報のほか，長期・短期目標からなる＜目標設定：Q1-5＞，優先度の高い活動を妨げている作業工程と行為をICFで整理する＜課題の分析：Q6-10＞，解決方法（プラン）の選択肢と根拠を整理する＜プランの提案：Q11-15＞，プランの頻度と期間を決定づける＜プランの立案と実施：Q16-20＞の4領域20項目で，確証的因子分析（CFA）によるモデル適合はRMSEA=0.079，GFI=0.80，AGFI=0.74だった．クロンバックα係数は4領域すべてで0.90以上だった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，古澤麻衣，津山努
36　回復期リハビリテーション病棟における実践チェックリストの因子的妥当性と内的整合性	－	平成30年9月	第52回日本作業療法学会（名古屋）	回復期リハに配属されている理学療法士，作業療法士，言語聴覚士222名を分析対象とし，実践チェックリストに基づいて過去1ヶ月間の実践状況（0-10の11段階）を問う無記名自記式質問紙調査結果を分析した．質問紙は基本情報のほか，長期・短期目標からなる＜目標設定：Q1-5＞，優先度の高い活動を妨げている作業工程と行為をICFで整理する＜課題の分析：Q6-10＞，解決方法（プラン）の選択肢と根拠を整理する＜プランの提案：Q11-15＞，プランの頻度と期間を決定づける＜プランの立案と実施：Q16-20＞の4領域20項目で，確証的因子分析（CFA）によるモデル適合はRMSEA=0.087，GFI=0.80，AGFI=0.75だった．クロンバックα係数は0.89～0.91だった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，古澤麻衣，津山努
37　回復期リハビリテーション病棟における入院時指導加算に関する実態	－	令和元年10月	第78回日本公衆衛生学会（高知）	日本医療データセンター（JMDC）のレセプトデータから，所定の期間に「1度でも回復期リハビリテーション病棟入院料を算定したことのある患者」を抽出し，新規に回復期リハビリテーション病棟に入院した数を概算した．次に，新規入院患者に占める「入院時訪問指導加算」算定件数の割合を算出した．2014年度以降，H003-2算定件数は増加傾向にあり，新規に回復期リハビリテーション病棟に入院した数に対する「入院時訪問指導加算」の算定割合は限定的であるもののH003-2と同様に増加傾向がみられた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した．
38 筋ジストロフィー患者に対する理学療法・作業療法の実態把握にむけた系統的レビュー	－	令和2年2月	第30回日本疫学会学術総会（京都）	医療従事者（理学療法士，作業療法士）を対象とした筋ジストロフィー患者の姿勢保持支援に関する調査を視野に入れ，患者を取り巻く課題と調査研究の実態を把握することを目的に，医療従事者が報告した「筋ジストロフィー」及び「理学療法」あるいは「作業療法」をキーワードとした学術報告について，系統的にレビューした．使用した文献データベースは医中誌webを用い，「筋ジストロフィー」及び「理学療法」あるいは「作業療法」をキーワードとし，2014年8月－2019年7月の5年間を対象とした．対象の学術報告は延べ266件であり，報告形態は事例研究86件，調査研究が16件，観察研究が30件，介入研究3件，解説が35件であった．そのうち，姿勢に関する報告件数は事例研究5件のみであった． 本人担当部分：研究計画立案をともに行い，データの分析および報告にむけて助言した． 共同発表者：藤田ひとみ,塚田敦史,大浦智子,木村清人,辻村尚子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
39 病院で働くリハビリテーション専門職の仕事不満足に関する要因	―	令和2年9月	第54回日本作業療法学会（新潟）	病院で働くリハ専門職の仕事への不満足感に関連する要因を明らかにすることを目的に，リハ専門職を対象に,自記式質問紙調査を実施した．分析対象は回復期・一般等の病院勤務者とし，基本情報(性・経験年数・職種等),仕事満足度,人間関係満足度を分析に用い,オッズ比を算出した(説明変数:性・経験年数・職種・人間関係満足度).分析対象は170人(経験年数[中央値]3年)で,このうち77人(45.3%)が女性だった.仕事に不満足の36人のうち16人(44.4%),満足している134人のうち8人(6.0%)が人間関係に不満足だった.ロジスティック回帰分析の結果,性・経験年数・職種は要因として抽出されず,人間関係のみが抽出された． オッズ比は人間関係満足が不満に比べて 0.079（95% 信頼区間0.030-0.210),判別的中率は83.5%だった. 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した. 共同発表者：大浦智子,福原啓太,佐藤英人,加藤美樹,藤堂恵美子
40 高齢者介護に従事する介護福祉士が自覚する仕事パフォーマンスの関連項目の探索	―	令和2年10月	第79回日本公衆衛生学会総会（京都）	高齢者介護に従事する介護福祉士が自覚する仕事パフォーマンスとの関連項目を明らかにすることを目的に，高齢者介護施設・事業所を有する2法人の介護福祉士(男性53名,女性182名)を対象に，質問紙調査を行った.仕事パフォーマンス（過去4週間の仕事に対する自己評価）の平均値(82.4±15.8%)から，83%を基準に高・低パフォーマンスに設定し，高パフォーマンス者の特徴（女性,年齢が高い,日常生活のストレスなし，仕事の相談相手が同職種の同僚,健康のために規則正しい食事・バランスのとれた食事・十分な睡眠・ストレスをためない，仕事の異動希望なし）を明らかにした. 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した（単著）.
41 病院・訪問で働くリハビリテーション専門職の勤務継続意向に関する基礎的検討	―	令和3年5月	第18回日本訪問リハビリテーション協会in高知2021（高知）	病院・訪問で働くリハ専門職の勤務継続意向に関連する要因を明らかにするために，リハ専門職を対象に，自記式質問紙調査を実施した．分析対象は回復期・一般等の病院勤務者（以下，病院）と訪問リハ事業所・訪問看護ステーション勤務者（以下，訪問）とし，基本情報（年齢・性別・職種・経験年数等），仕事の満足度，職場の勤務継続の意向を分析に用いた．分析対象は193人で，病院170人（経験年数[中央値]3年）のうち77人（45.3%），訪問23人（同12年）のうち15人（65.2%）が女性だった．継続意向は127人（経験年数[中央値]4年，女性64人[50.4%]），異動希望が63人（同2年，同26人[41.3%]）だった．仕事に満足している154人のうち113人（73.4%），不満の36人のうち14人（38.9%）が継続意向だった． 欠損値のある3名を除外した190名の勤務継続意向をアウトカムとしたロジスティック回帰分析の結果，継続意向のオッズ比は仕事満足が不満に比べて4.33（95%信頼区間2.03-9.26），病院が訪問に比べて0.11（同0.01-0.84）であり，判別的中率は71.1%だった. 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した. 共同発表者：大浦智子,福原啓太,佐藤英人,藤堂恵美子,加藤美樹

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
42 奈良学園大学におけるコロナ禍の学内実習の紹介3―地域理学療法・作業療法実習の概要と学生アンケート調査―	－	令和3年10月	全国リハビリテーション学校協会第34回教育研究大会・教員研修会（福岡）web開催 https://orbit-cs.net/34rehatki/	奈良学園大学(理学療法学専攻・作業療法学専攻)における2年次後期配当科目(2単位)である「地域理学療法実習」「地域作業療法実習」(以下，地域実習)がコロナ禍において学内実習となった．学外実習と遜色がないよう多彩な実習プログラムとなるよう配慮し，①事前学習，②学内実習，③事後学習で構成した．事後に行ったアンケートの結果，学内実習は概ね肯定的な意見であったが，今後の実習に対して不安があることが分かった．次期実習に向けた学生の不安要素に対する支援が必要である． 本人担当部分：研究を計画立案・実施した． 共同発表者：滝本幸治,吉川義之,笹野弘美,坪内善仁,前田吉樹,中島大貴,辻下聡馬,大浦智子,山形力生,池田耕二
43 根拠に基づく実践と効果指標の設定.	－	令和4年8月	LIFE2022（web）	筋ジストロフィー患者の車椅子シーティングの質向上に向けて，根拠に基づく実践と効果指標の設定について報告した． 本人担当部分：主となってとりまとめた． 共同発表者：大浦智子，藤田ひとみ，塚田敦史
44 筋ジストロフィー患者へのシーティングに関する全国調査.	－	令和4年8月	LIFE2022（web）	筋ジストロフィー患者の車椅子シーティングの質向上に向けて実施した全国調査結果を報告した． 本人担当部分：研究の実施・考察助言を行った． 共同発表者：藤田ひとみ，塚田敦史,大浦智子
45 リハビリテーション専門職者におけるTime Pressure-Kiken Yochi Training（TP-KYT)の構成概念妥当性の検討.	－	令和4年9月	第56回日本作業療法学会（京都）	リハビリテーション専門職者におけるTime Pressure-Kiken Yochi Training（TP-KYT)の構成概念妥当性について検討し，概念モデルの因子的妥当性を検証した． 本人担当部分：分析の助言を行った． 共同発表者：木下亮平，大浦智子，有久勝彦，松下航，宮口英樹
46 コロナ禍における高齢者介護従事者の仕事への不安と心配.	－	令和4年10月	第81回日本公衆衛生学会総会（山梨）	介護従事者のコロナ禍における仕事への不安・心配と，家庭生活との関係について報告した． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した（単著）．
「シンポジウム」 1「訪問リハビリテーションにおける教育のこれから～生命，生活，人生を共に歩む訪問療法士を育てる為には～」	―	平成27年5月	日本訪問リハビリテーション協会学術大会 in 大阪 シンポジウム（大阪）	シンポジウム1のシンポジストとして，求められる訪問リハビリテーションのあり方，認定訪問療法士制度と教育について講演した．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2 様々な医療の場におけるSDMの試み「地域医療の立場から」	－	平成28年2月	平成27年度厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)〈指定課題〉『社会的責任に応える医療の基盤となる診療ガイドラインの課題と可能性の研究』公開シンポジウム「Shared decision making〈SDM〉の今・これから：診療ガイドラインの新たな可能性を考える」	シンポジストとして，地域におけるリハビリテーション場面における情報共有の実態報告と，望まれる共有決定のあり方について講演した.
「インタビューセッション」				
1 インタビューセッション	－	令和3年5月	第18回日本訪問リハビリテーション協会in高知2021（高知）	調査・研究部門優秀演者として，実践報告部門優秀演者とともに登壇し，発表演題の背景や研究に係る事項について意見交換などをセッションに形式にて行った.
「メディア」				
1 サロン参加で健康に良い情報が増えた人が8割	－	平成25年10月	日本福祉大学健康社会研究センタープレスリリース	「憩いのサロン」参加者の健康情報源と情報の授受：サロンは情報の授受の場になっているか？保健師ジャーナル 69(9)；712-719. 2013.を紹介した.
2 シリーズ講話 「健康で長生きの秘けつ」	－	平成27年9月	メディアスFM	第6回「健康にまつわるコミュニケーション」を担当し，医療や健康に関するコミュニケーションの特性や留意事項を解説した. （星城大学大学院教員によるシリーズ講話）
3 わたしの健康～ＨＡＰＰＹライフ☆～ 「健康デー」特別番組	－	平成31年1月	メディアスFM	医療・健康情報の聞き方・伝え方. （星城大学大学院教員によるシリーズ講話）

別記様式第４号（その１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　員　個　人　調　書

履　歴　書

フ　リ　ガ　ナ	シバタ　マサヒコ	性別	男	生年月日（年齢）	昭和34年　1月　24日　（満62歳）
氏　　名	柴田　政彦				
国　　籍	日本国	現住所	〒665-0062 兵庫県宝塚市仁川高台1-1-7		
月額基本給	千円				

学　歴

年　月	事　項
昭和53年4月	大阪大学医学部医学科入学
昭和60年3月	大阪大学医学部医学科卒業　医学士
昭和60年5月	医師免許（第291103号）
平成10年5月	大阪大学大学院医学系研究科　博士（医学 第14051号）
	「博士論文名：The effect of electroconvulsive treatment on thermal hyperalgesia and mechanical allodynia in a rat model of peripheral neuropathy. Anesth Analg 86:584-7,1998」
平成29年4月	臨床心理士免許（第33329号）
平成31年4月	公認心理師（第22882号）

職　歴

年　月	事　項
昭和60年7月	大阪大学医学部附属病院麻酔科　医員（昭和61年6月まで）
昭和61年7月	大阪警察病院麻酔科　医員（平成元年6月まで）
平成元年7月	佐賀医科大学麻酔科学教室　助手（平成2年6月まで）
平成2年7月	市立西宮中央病院麻酔科　副医長（平成5年3月まで）
平成5年4月	市立西宮中央病院麻酔科　医長（平成5年6月まで）
平成5年7月	大阪大学大学院医学系研究科麻酔集中治療医学教室　助手（平成16年12月まで）
平成17年1月	千里A&Hペインクリニック　勤務医（平成17年6月まで）
平成17年4月	大阪大学大学院医学系研究科麻酔集中治療医学教室　臨床助教授（兼任） （平成19年3月まで）
平成17年7月	市立芦屋病院麻酔科　部長（平成19年3月まで）
平成19年4月	大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座　教授（平成30年3月まで） 担当科目：『麻酔学』『臨床医学特論』『薬物治療学Ⅲ』
平成25年4月	大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター 副センター長（平成30年3月まで）
平成30年4月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科教授（現在に至る） 担当科目：『生化学』『疾病治療論』『人体機能学』『内部障害学』『ペインコントロール論』『疼痛学概論』『疼痛リハビリテーション学』『疫学』

学　会　及　び　社　会　に　お　け　る　活　動　等

現在所属している学会	日本麻酔科学会、日本疼痛学会、日本運動器疼痛学会、日本ペインクリニック学会、日本慢性疼痛学会、国際疼痛学会、日本心療内科学会、日本リハビリテーション医学会、日本賠償科学会

年　月	事　項
	「学会活動」
昭和60年4月	日本麻酔科学会　入会　（現在に至る）
平成元年4月	日本ペインクリニック学会　入会　（現在に至る）
平成2年4月	日本疼痛学会　入会　（現在に至る）
平成2年4月	日本慢性疼痛学会　入会　（現在に至る）
平成2年4月	国際疼痛学会　入会　（現在に至る）
平成10年4月	日本運動器疼痛学会　入会　（現在に至る）
平成22年4月	日本賠償科学会　入会（現在に至る）

平成25年4月	日本リハビリテーション医学会　入会　（現在に至る）
平成29年4月	日本心療内科学会　入会　（現在に至る）
	「認定医および学会での役職」
昭和63年3月	麻酔科標榜医
平成4年4月	麻酔科指導医
平成6年6月	日本ペインクリニック学会認定医
平成15年7月	日本ペインクリニック学会　評議員（現在に至る）
平成24年4月	日本疼痛学会理事　（現在に至る）
平成27年11月	日本運動器疼痛学会　監事　（現在に至る）
	「研究活動」
平成22年度～平成23年度	厚生労働省科学研究費補助金・難治性疾患克服研究事業・脊髄障害性疼痛症候群の実態の把握と病態の解明に関する研究 研究代表者 牛田享宏（愛知医科大学）研究分担者　戸山芳昭　菊池臣一　谷俊一 田口敏彦　山下敏彦　高安正和　竹下克志　中村雅也　内田研造　井上和秀　野口光一 上野雅文　中村裕之　　柴田政彦 平成22年度　19,500千円　平成23年度　13,000千円
平成23年度～平成24年度	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）「脳機能画像を用いた運動時痛の解明と治療法の開発」 研究代表者　研究分担者　松田陽一　井上隆弥　坂上学　植松弘進 研究経費：平成22年度　2,860千円　平成23年度　910千円、　平成24年度　910千円
平成23年度～平成24年度	厚生労働省科学研究費補助金・慢性の痛み対策研究事業・難治性疼痛の実態の解明と対応策の開発に関する研究 研究代表者　牛田享宏（愛知医科大学）研究分担者　山下敏彦 平田 仁　片山容一 井関雅子　内田研造 神谷光広　細井昌子 柿木隆介　河野達郎 佐藤純　中塚映政　橋本亮太 中村裕之　田倉智之　安田哲行　鈴木重行　小林章雄　大森豪 柴田政彦 平成23年度 40,300千円、平成24年度　41,103千円
平成23年度～平成25年度	日本損害保険協会2011年度交通事故医療特定課題研究助成「新しい運動療法の開発： 脳機能画像を応用し、外傷後の『痛みの慢性化』に対して有効な運動療法を開発する」 研究代表者 5,000千円
平成23年度～平成25年度	厚生労働科学研究費補助金・慢性の痛み対策研究事業「痛み」に関する教育と情報提供システムの構築に関する研究 研究代表者　研究分担者　井関雅子　横山正尚　山下敏彦　竹林庸雄　池本竜則　小山なつ　中塚映政 細井昌子　宮岡等　宮地英雄　亀田秀人　今村佳樹　大島秀規　平田幸一　沖田実　住谷昌彦　和佐勝史 長櫓巧　竹下克志　中村雅也　牛田享宏　井上玄　岩田幸一　矢谷博文　和嶋浩一　川真田樹人　鈴木勉 三木健司　北原雅樹　堀越勝　史賢林 研究経費：平成23年度5,200千円、　平成24年度5,200千円、平成25年度5,200千円
平成25年度～平成26年度	厚生労働省科学研究費補助金・慢性の痛み対策研究事業・慢性の痛みの診療の基盤となる情報の集約とより高度な診療の為の医療システム構築に関する研究 研究代表者　牛田享宏（愛知医科大学）研究分担者　山下敏彦　矢吹省司 井関雅子　北原雅樹　中村雅也　竹下克志　松平浩　中村裕之　松原貴子　福井聖 田倉智之　西江宏行　横山正尚　細井昌子　西尾宏文　浅井雅代　柴田政彦 平成25年度　39,000千円、平成26年度　44,200千円
平成26年度	厚生労働省科学研究委託事業・慢性の痛み解明研究事業「慢性痛に対する認知行動療法の普及と効果解明に関する研究」 研究代表者　研究分担者　堀越勝　北原雅樹　井関雅子　住谷昌彦　山本則子　高井ゆかり　今村佳樹 井上玄　宮岡等　佐々木淳　小山なつ　木村慎二　沖田実　松原貴子　西上智彦　鈴木勉　祖父江友孝 池本竜則　大江悠樹　高岸百合子　岩佐和典　福森崇貴　蟹江絢子 平成26年度　6,287千円
平成27年度～平成28年度	国立研究開発法人日本医療研究開発機構AMED慢性の痛み解明研究事業　「慢性痛に対する認知行動療法の普及と効果解明に関する研究」 研究代表者 研究分担者　堀越　勝　北原雅樹　住谷昌彦　山本則子　高井ゆかり　木村慎二　松原貴子 西上智彦　鈴木勉　祖父江友孝　池本竜則　大江悠樹　高岸百合子　岩佐和典　福森崇貴　蟹江絢子 岡本禎晃　松平　浩　西江宏行　高橋紀代　新明一星　細越寛樹　深井英佑
平成26年度～平成28年度	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）「CRPS患者の運動障害における脳機能異常」 研究代表者　研究分担者　渡邉嘉之　寒重之　西上智彦　植松弘進　宮内哲 平成26年度　2,340千円、平成27年度　1,170千円、平成28年度　1,560千円

平成27年度	日本損害保険協会2015年度交通事故医療一般研究助成金「安静時fMRIを用いた外傷後遷延痛患者の痛み及び機能回復に関する予測手法の開発 研究代表者 5,000千円
平成27年度～ 平成29年度	厚生労働科学研究費補助金・慢性の痛み政策研究事業　「慢性の痛み診療・教育の基盤となるシステム構築に関する研究」 研究代表者　牛田享宏（愛知医科大学）研究分担者　山下敏彦　矢吹省司　木村慎二 山口重樹　加藤実　井関雅子　北原雅樹　住谷昌彦　松平浩　川口善治　中村裕之　松原貴子 笠井裕一　福井聖　田倉智之 西田圭一郎　尾形直則　田口敏彦　河野崇　西尾芳文　細井昌子 門司晃　柴田政彦 平成27年度　44,200千円、平成28年度　50,000千円、　平成29年度　50,000千円
平成27年度～ 平成28年度	国立研究開発法人日本医療研究開発機構AMED・慢性の痛み解明研究事業・診断・治療法の開発を目指した痛み慢性化脳機構に関するトランスレーショナル研究 研究代表者　加藤総夫（東京慈恵会医科大学）研究分担者　南雅文　岡野ジェイムス洋尚 柴田政彦 平成27年度 9,917千円、　平成28年度 9,965千円
平成27年度～ 平成29年度	厚生労働科学研究費補助金・新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業・「子宮頸がんワクチンの有効性と安全性の評価に関する疫学調査」 研究代表者　祖父江友孝（大阪大学）研究分担者　垣添忠生　福島若葉 原めぐみ　榎本隆之　上田豊　宇川義一　平田幸一　岡明　宮本信也　喜多村祐里　柴田政彦 平成27年度　44,980千円、　平成28年度　35,000千円、　平成29年度　26,000千円
平成27年度～ 平成28年度	国立研究開発法人日本医療研究開発機構AMED・「統合医療」に係る医療の質向上・科学的根拠収集研究・線維筋痛症に対する統合医療的介入の評価手法に関する研究 研究代表者　伊藤嘉記（大阪大学）　研究分担者　新谷歩　寒重之　仙波恵美子 渡邉嘉之　牛田享宏　井上真輔　伊藤和憲　林紀行　柴田政彦 平成27年度　4,940千円、平成28年度　4,940千円
平成27年度～ 平成29年度	国立研究開発法人日本医療研究開発機構AMED・慢性の痛み解明研究事業・神経画像検査法を用いた中枢性脳卒中後疼痛の客観的指標の探索と革新的非侵襲脳刺激療法の開発 研究代表者　平田仁（名古屋大学）研究分担者　寳珠山稔　岩月克之 岩崎倫政　三上容司　寒重之　三木健司　住谷昌彦　森岡周　大野欽司　柴田政彦 平成27年度　7,410千円、平成28年度　6,890千円　平成29年度　6,669千円
平成28年度～ 平成29年度	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）「線維筋痛症患者に対する運動療法の効果の検証：脳内ネットワークの変化を指標として」 研究代表者　藤田信子（大阪行岡医療大学）　研究分担者　仙波恵美子 行岡正雄　寒重之　柴田政彦　高井範子　堀竜次　高橋紀代 平成27年度　3,120千円、平成28年度　780千円、平成29年度　910千円
平成29年度	厚生労働省慢性疼痛診療体制構築モデル事業補助金　怒りや恨み、不公平感などの情動に伴う慢性疼痛の実態に関する研究 研究代表者　研究分担者　安達友紀　橋本淳 平成29年度　7,992千円
平成29年度	日本損害保険協会2017年度交通事故医療一般研究助成金「外傷後遷延痛に伴う生活障害の維持・増悪要因としての重要他者の破局化：重要他者の破局化の評価法と外傷後遷延痛の維持・増悪モデルの検証」 研究代表者　平成29年度　2,650千円
令和元年度から 令和２年度	国立研究開発法人日本医療研究開発機構AMED・慢性の痛み解明研究事業・「怒りや恨み、不公平感などの情動に伴う慢性疼痛の実態に関する研究」 研究代表者　令和元年度7,150千円　令和２年度6,435千円
	「社会活動」
平成27年4月 ～現在	芦屋市保健センター運営審議会委員長

賞　　罰	
年　月	事　　項
年　　月	なし

現　在　の　職　務　の　状　況			
勤　務　先	職名	学部等又は所属部局の名称	勤務状況
奈良学園大学	教授	保健医療学部リハビリテーション学科	リハビリテーション学・看護学の教育・研究に従事
大阪大学	招へい教授	大学院医学系研究科	臨床医学特論、環境健康リスク論（修士公衆衛生学コース）、総合内科、薬物治療学（薬学部）　講義
神戸大学	非常勤講師	外科系講座・麻酔科学分野	麻酔科学　講義
滋賀医科大学	非常勤講師	大学院医学系研究科	麻酔・緩和医療学　講義
市立芦屋病院	医師	麻酔科	1日/週　ペインクリニックと緩和ケアチームにおける診療と教育に従事
開　設　後　の　職　務　の　状　況			
勤　務　先	職名	学部等又は所属部局の名称	勤務状況

上記のとおり相違ありません。

2021年　8月　15日

氏名　柴 田　政 彦　印

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

2021年8月15日

氏名　　印

研究分野	研究内容のキーワード
行動科学　認知脳科学 リハビリテーション医学	痛み　脳機能画像　集学的診療 行動科学　生物心理社会モデル

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1）プリント、スライド、ディスカッション、レポートの活用	平成21年4月 ～ 平成30年3月	大阪大学医学部付属病院新研修医プログラム、大阪大学医学部の新研修医を対象に血管穿刺の方法と注意点について講義した　新研修医は医師として血管穿刺の基本的な方法とそのリスクについて学んだ。
	平成24年4月 ～ 平成30年3月	大阪大学医学部医学科　「麻酔学」、局所麻酔、伝達麻酔、医学生は局所麻酔と伝達麻酔について学び、臨床医としての基礎的な情報を得た。
	平成24年4月 ～ 現在に至る	大阪大学医学部医学科「臨床医学特論」、痛みについて医師として学ぶべき痛みの基礎知識の整理と、慢性痛の概念、評価方法、治療法について講義した。学生は痛みの基礎知識を学び、慢性痛治療の基本的な情報を得ることができた。
	平成24年4月 ～ 現在に至る	大阪大学薬学部「薬物治療学Ⅲ」、薬学部の学生に対し、痛みの基礎知識と種々の鎮痛薬について講義をおこなった。薬学生は薬剤師としての痛みに関する基本的な知識を身につけた。
	平成29年4月 ～ 現在に至る	滋賀医科大学医学部医学科「麻酔・緩和医療学」、慢性疼痛に対する学際的治療、認知行動療法、慢性痛に対する集学的診療について講義した。学生は慢性痛の集学的診療について基本的な知識を入手した。
2）臨地実習における体験型学習	平成5年4月 ～ 平成26年3月	主に医学部5年次を対象に、痛みを対象とした医療の臨床研修を指導した。学生は特殊な痛み医療の現場を学び、医師としての基本的な診療技術を身につけることができた。
	平成24年4月 ～ 現在に至る	甲南女子大学　人間科学部 一人当たり5時間程度のペインクリニック研修、学生はペインクリニックの現場を見学することで、診療、とりわけ難治性の疼痛患者に対するコミュニケーションの基本や注意点を知ることができた。

事項	年月日	概　　要
２　作成した教科書，教材 1）痛みの教育コンテンツ提供システム	平成23年4月 ～ 現在に至る	厚生労働科学研究「痛みに関する教育と情報提供システムの構築に関する研究」及び　AMED研究「慢性痛に対する認知行動療法の普及と効果解明に関する研究」の取り組みで、「痛みの教育コンテンツ」というPowerPointスライドを作成した。コンテンツは医学教育用・リハビリテーション医学・歯学・薬学・看護教育用があり、内容は痛みに関する基礎医学、概論、評価法、臨床的内容、社会的問題など多岐にわたり、初学者に学んでもらえるよう可能な限り平易な内容にし、学生講義、実習、院内の勉強会、研究会などに活用できるシステムを構築した。ダウンロード件数は１万件を超える。完全無償化とすることで、各大学の授業・現職者向けのセミナー等において幅広く活用されている。
2）痛みの集学的診療：痛みのコアカリキュラム（再掲）	平成28年10月 真興交易 全347頁	「痛みの教育コンテンツ」を書籍として発行。平成29年度厚労省慢性疼痛診療体制構築モデル事業における医師・理学作業療法士・心理士向けの各セミナーにおいて、講師の話す内容・要点・表現などを統一する上で役立っている。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1）大阪大学における授業評価アンケート	平成24年4月 ～ 現在に至る	「臨床医学特論」での講義に関しては、学生からのアンケートには「心理・社会モデルに基づく痛みの見方がわかってよかった」といった意見もあり、高評価であった
４　実務の経験を有する者についての特記事項 「研究会・NPO法人」 1）疼痛勉強会代表世話人	平成2年4月 ～ 平成30年3月	関西地区の痛み専門医の研修を目的として年二回の研修会を運営
2）CRPS研究会世話人	平成20年4月 ～ 平成30年3月	厚生労働省研究班終了後、全国のCRPS研究者による研究会を企画・運営
3）関西痛みの診療研究会代表世話人	平成23年4月 ～ 現在に至る	関西地区の痛み専門医療者の研修を目的として年一回の研修会を運営
4）ＮＰＯ痛み医学研究情報センター講師	平成24年4月 ～ 平成30年3月	医療者向けの研修会における研修内容の会議に出席、研修会の運営及び講師
「講演」 1）医療の立場から"身体"について	平成18年10月	シンポジウム　「JR福知山線列車事故を考える」この事故の捉え方と”こころ”と”身体”の後遺症について　於：三田市まちづくり協同センター
2）　慢性痛の評価と治療	平成23年4月	第28回　日本医学会総会　於：東京国際フォーラム

事項	年月日	概　　要
3)「後遺障害診断書において痛みを扱うか?」	平成25年10月	第15回自賠責講演会　於：神戸
4)「慢性痛の成り立ちと対策」	平成27年3月	第15回痛みの研究会　講演　於：九州大学医学部百年講堂
5)「ファブリー病に伴う神経障害性痛について」	平成27年4月	一般社団法人 全国ファブリ―病患者と家族の会基調講演　於：大阪大学医学部附属病院
6) 難知性疼痛の治療戦略、オピオイドの長期使用について	平成27年4月	J-PAT PA2　於：東京コンベンションホール
7) 慢性疼痛の基礎知識、慢性疼痛の評価と治療方針、疾患別各論	平成27年6月	J-PAT FULL　於：ルポール麹町
8) 難知性疼痛の治療戦略	平成27年7月	J-PAT PA2　於：メルパルク大阪
9)「一歩踏み込んだ痛みの治療」	平成27年7月	芦屋市医師会講演会 於：芦屋市医師会館
10)　難知性疼痛の治療戦略	平成27年8月	J-PAT PA2　於：TKPガーデンシティ大阪梅田
11)「運動器疼痛を対象とした脳機能画像研究と治療応用」	平成27年9月	第3回運動器疼痛を考える会　於：東京
12)「痛みの慢性化と集学的アプローチの意義―脳機能画像研究から見えてくるもの」	平成27年10月	第５回　脊椎の痛みを学ぶ会in九州 於：福岡サンパレス
13)「複合性局所疼痛症候群　-補償上の問題点」	平成27年12月	日本損害保険協会「名古屋医療セミナー」
14) 難知性疼痛の治療戦略、オピオイドの長期使用について	平成28年4月	J-PAT PA2　於：ホテルグランヴェア大阪
15) 慢性疼痛の基礎知識、慢性疼痛の評価と治療方針、疾患別各論	平成28年6月	J-PAT FULL　於：ホテルアゴーラリージェンシー堺
16)　慢性疼痛の基礎知識、慢性疼痛の評価と治療方針、疾患別各論	平成28年8月	J-PAT FULL　於：東京コンベンションホール
17)「慢性痛に対する集学的アプローチについて」	平成28年8月	OSAKA疼痛治療セミナー講演会 於：シェラトン都ホテル大阪

事項	年月日	概　　要
18) 慢性疼痛の評価と治療方針、 疾患別各論	平成28年10月	J-PAT FULL　於：JPタワーホール&カンファレンス
19)「複合性局所疼痛症候群　-補償上の問題点」	平成28年11月	日本損害保険協会「さいたま医療セミナー」
20)「痛みの責任は誰にあるのか？」	平成28年11月	日本麻酔医事法制研究会講演ファブリー病に伴う神経障害性痛についてファブリー病に伴う神経障害性痛について
21)「何故　今？　慢性痛対策が重要なのか？」	平成29年1月	文部科学省課題解決型事業「慢性疼痛患者の生きる力を支える人材育成」キックオフ･セミナー　名古屋市立大学桜山キャンパスさくら講堂
22)「慢性疼痛に対する治療の現状と将来の展望」	平成29年1月	第56回日本定位・機能神経外科学会シンポジウム 於：グランフロント大阪コングレコンベンションセンター
23)　「飛翔」	平成29年6月	第39回日本疼痛学会　会長講演 於：神戸国際会議場
24)「複合性局所疼痛症候群　-補償上の問題点」	平成29年7月	日本損害保険協会「東京医療セミナー」
25)「ICD-11への改訂に向けての慢性痛」	平成29年7月	第51回日本ペインクリニック学会リフレッシャーコース　　於：長良川国際会議場
26)「大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでの集学的診療について」	平成29年10月	日本線維筋痛症学会第9回学術集会シンポジウム 於：千里ライフサイエンスセンター
27)「Alteration of resting state networks in patients with fibromyalgia, CRPS and other functional somatic pain syndrome」 （線維筋痛症、CRPS、機能性疼痛症候群患者における安静時脳内ネットワーク活動の変化）	平成29年10月	The 7th Asian Pain Symposium Preliminary Scientific Program, Taiwan （アジア疼痛シンポジウム：プレ大会，台湾）
28)「慢性痛医療のバランス」	平成29年11月	イーライリリー社Painアドバイザリー会議

事項	年月日	概　　要
5　その他 1）博士学位論文指導実績　（25名）	平成17年4月 ～ 現在に至る	神経障害性疼痛に対するリチウムの効果・神経障害性疼痛におけるNOの役割・神経障害性疼痛に伴う情動の変化・神経障害性疼痛に対する牛車腎気丸の効果・神経障害性疼痛におけるSerotonin2C receptor mRNA の役割・CRPS患者における中枢機能の障害・機械的刺激による痛みの認知機構（2名）・運動時痛の認知機構・慢性痛患者における不公平感・腕神経叢引き抜き損傷後痛の治療成績など11名に対してそれぞれ2－4年間指導した。
2）学位論文査読（副査 1名）	平成28年3月	研究テーマ：下肢の難治性神経障害性疼痛に対するHコイルによる反復経頭蓋磁気刺激の除痛効果

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）医師免許	昭和60年5月27日	第291103号
2）博士（医学）	平成10年5月29日	大阪大学大学院医学系研究科　第14051号
3）麻酔科学会 指導医	平成4年4月	第24125号
4）日本ペインクリニック学会認定医	平成6年6月	第19940054号
5）臨床心理士免許	平成29年4月	第33329号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）臨床歴及び実務歴	昭和60年7月 ～ 昭和61年6月	大阪大学医学部附属病院麻酔科において 診察に従事
	昭和61年7月 ～ 平成元年6月	大阪警察病院麻酔科において診察に従事
	平成元年7月 ～ 平成2年6月	佐賀医科大学麻酔科教室において助手として 診察に従事
	平成2年7月 ～ 平成5年6月	西宮市立中央病院麻酔科にて副医長・医長として 診察に従事
	平成5年7月 ～ 現在に至る	大阪大学医学部附属病院麻酔科にて 診察に従事
	平成17年1月 ～ 平成17年6月	千里A&Hペインクリニックにて診療に従事
	平成17年4月 ～ 平成19年3月	大阪大学大学院医学系研究科臨床助教授を兼任 疼痛医療センターのカンファレンスに出席、若手医師の教育および麻酔学教室の研究に従事した。
	平成17年7月 ～ 平成19年3月	市立芦屋病院麻酔科部長として診療に従事

事項	年月日	概　　要
	平成19年4月 ～ 現在に至る	大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座寄附講座教授就任
	平成25年4月 ～ 現在に至る	疼痛医療センター副センター長就任
2）麻酔科指導医	平成5年4月 ～ 現在に至る	麻酔科指導医として約100名の研修医を指導
4　その他 1）芦屋市保健センター運営審議会委員長	平成27年4月 ～ 現在に至る	審議会に出席し、芦屋市保健センター審議会の進行役を務めるとともに、指導・助言をおこなう。
2）治験における医学専門家	平成29年8月 ～ 現在に至る	治験の遂行を適切に実施するための医学的観点からの助言（日本臓器製薬株式会社）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1）長引く・頑固な・つらい痛み 薬物療法2011	共著	平成23年5月	㈱CBR	臨床医が治療に難渋する「長引く・頑固な・つらい手・足・腰・筋・関節などの痛み」に対する薬物療法の今日の治療指針について解説。最新の知見に基づいて病理、病態生理から治療のメカニズムまでを概観し、とりわけ薬物療法に関する科学的裏付けを詳細に示した。薬物は非オピオイド系から向精神薬、筋弛緩薬、抗リウマチ薬、さらには漢方薬までを網羅しており、各症候に対するベストプラクティス、薬物相互作用、Drug informationなども紹介。非専門医でも薬物治療のマネジメントができるよう解説した。 B5判・168頁 編者：米延策雄，菊池臣一，柴田政彦 共著者：柴田政彦，田口敏彦，関口美穂，紺野慎一，竹下克志，西本憲弘，史賢林，橋本淳，安田由華，大井一高ほか15名 本人担当部分： 「第2章 痛みを有する患者に対する薬の使い方」P12-35を共著 鎮痛薬投与に関する患者の痛みの評価、薬物の選択基準、その効果について解説。 共著者：柴田政彦，田口敏彦，関口美穂，紺野慎一
2）癌性疼痛 ＦＯＲ ＰＲＯＦＥＳＳＩＯＮＡＬ ＡＮＥＳＴＨＥＳＴＯＬＯＧＩＳＴ，Ｖ	共著	平成25年7月	克誠堂出版	癌の痛みを理解する知識を全て網羅。癌性疼痛の発症機序、使用する薬物、オピオイドの使用法と副作用、鎮痛補助薬、在宅医療などの各項目を解説。ＷＨＯ方式の癌性疼痛治療法や、オピオイドの副作用とその対処、オピオイドが効きにくい痛みとその治療法にも触れる。さらには鎮痛補助薬や各種代替療法、在宅医療における癌性疼痛への対処法などについても解説した。 A4判・321頁 編者：花岡一雄 共著者：柴田政彦，松田陽一，眞下節，花岡一雄，細川豊史，佐伯茂，有田英子，村川和重，小川節郎，下山直人ほか39名 本人担当部分： 「神経ブロック療法」 P203-209を共著 癌の痛みに対する各種神経ブロックの方法について，そのエビデンスと手技について解説。 共著者：柴田政彦，松田陽一，眞下節
3）運動器慢性痛診療の手引き	共著	平成25年11月	南江堂	局所の組織由来ではない運動器の慢性痛、なかでも神経経路や記憶、精神面などに影響を受ける慢性痛における診療マニュアル。、痛みを修飾するメカニズムの解明とその対策について解説。さらに整形外科医が使ってこなかった中枢系に作用する薬剤の使い方などについて、日本整形外科学会運動器疼痛対策委員会の成果をまとめた。 A4判・180頁 編者：田口敏彦，山下敏彦，牛田享宏 共著者：柴田政彦，中村雅也，関口美穂，紺野慎一，米和徳，中尾慎一，福井大輔，川上守，大鳥精司，ほか15名 本人担当部分： 「複合性局所疼痛症候群」 P168-173を単著 複合性局所疼痛症候群の疾患概念と評価、治療方針について解説。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4) ペインクリニシャンのための新キーワード135	共著	平成26年5月	真興交易(株)医書出版部	ペインクリニック診療の現場でよく用いられる135項目のキーワードを、基礎的用語・病態および疼痛性疾患・痛みの評価法・神経ブロック・治療法(神経ブロック以外)・その他の6章分別、体系的に分かりやすく解説した。『痛みの概念が変わった 新キーワード100+α』(2008年刊)を基に、スピリチュアルペイン・無痛分娩など新たな項目を加え、最新のガイドライン・治験等を踏まえ概説した。 A4判・368頁 編者：小川節郎 共著者：柴田政彦，山田芳嗣，小川節郎，細川豊史，森本昌宏，井関雅子，三木健司，牛田享宏，川股知之，児玉謙次ほか84名 本人担当部分： 第二章 病態「CRPS」 P73-74を共著 CRPSの病院、疫学、判定指標やその注意点について解説。 共著者：住谷昌彦，柴田政彦，山田芳嗣
5) 増刊 レジデントノート あらゆる科で役立つ！ 麻酔科で学びたい技術	共著	平成25年6月	羊土社	麻酔科レジデントが、現代の麻酔の概念を理解できるように、また基本手技を習得できるように各種技術を解説。周術期管理の基本を押さえ、知っておくべき病気・病態の知識の整理ができるような構成となっている。 A4判・261頁 編者：萩平哲 共著者：柴田政彦，上山博史，森本康裕，増井健一，内田整，原真理子，柴田晶カール，車武丸，浅井隆，鈴木昭広，讃岐美智義，ほか20名 本人担当部分： 「硬膜外麻酔」 P107-112を単著 麻酔時の体位・主義・薬剤管理などから、硬膜外麻酔修得に要する技術について解説。
6) まれな疾患の麻酔 A to Z	共著	平成27年5月	文光堂	麻酔科医のために、およそ400の“まれな疾患”を取り上げて解説した。まれな疾患に遭遇した際、辞書を引くように検索でき、診療に直結する最新情報をすばやくアクセスできる構成とした。各項目の冒頭には麻酔中に「してしてよいこと」と「してはいけないこと（do or do not）」を【注意事項】として掲載、リスクマネジメント教育にも有用な構成となっている。 B5変型判・714頁 編者：高崎眞弓，河本昌志，木内恵子，白神豪太郎，萩平哲 共著者：柴田政彦，神崎理英子，瀬戸口秀一，外須美夫，重松研二，山浦健，小倉信，井手岳，又吉宏昭，ほか360名 本人担当部分： 「ハンセン病」 P479を単著 ハンセン病患者の病態生理・臨床症状と、術中麻酔時の留意事項について解説

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7）痛みScience&Practice臨床に役立つ神経障害性痛の理解	共著	平成27年5月	文光堂	近年、神経障害性痛は多くの研究者や専門医による様々な観点からの病態や治療法が探求されている。本書では痛み診療に従事する医師が最良の治療を行えるよう配慮。「痛みの機序に関する基礎は，末梢から中枢まで連続性や統一性のある解説」「神経障害性痛の正しい理解のため，その要素を一部有している疾患やその周辺疾患も含めて解説」「各疾患については，疫学，病態，治療法などを詳細に解説」これらに重点を置きつつ、実践的で分かりやすい構成で解説した。 A4判・285頁 編者：井関雅子 共著者：柴田政彦，佐々木美佳，河野達郎，大橋宣子，渡部達範，南雅文，津田誠，内田仁司，植田弘師，伊藤誠二，ほか102名 本人担当部分： 「線維筋痛症」 P238-241を単著 線維筋痛症の疫学・病態・症状と、その薬物治療について解説。
8）麻酔科学レビュー2016	共著	平成28年2月	総合医学社	研修医や若手麻酔科医に必要な麻酔科１４領域の知識を総括し、さらに２０１３～２０１４年に発表された文献の中で重要なもの１２０件を１頁１文献で紹介、開設を加えた。 AB判・300頁 編者：澄川耕二，岩崎寛 共著者：柴田政彦，川前金幸，小出康弘，神山有史，坂口嘉郎，貝沼関志，西川俊昭，原哲也，山蔭道明，浅井隆，ほか40名 本人担当部分： 「38. ペインクリニック」 P221－225を単著 ペインクリニックにおける神経ブロックやインターベンション、薬物治療に関するエビデンスについて最新のレビューを交え解説。
9）痛みの集学的診療：痛みのコアカリキュラム	共著	平成28年10月	日本疼痛学会、痛みの教育コアカリキュラム編集委員会 真興交易（株）医書出版部	慢性痛の診療を行うにあたり、医師や看護師だけでなく、多職種が集まる“集学的な診療チーム”により「生物心理社会モデル」として合理的に考えようとする取り組みが本邦でも始まっている。本書はそれらに携わる医療従事者への“教育”に必要な教科書として作成された。生物心理社会社会モデルの説明を中心に、慢性痛の分類をIASP（世界疼痛学会）の新しい分類に準拠して行い、特に重要と思われる言葉をキーワードとしてまとめた。 編者：西江宏之，北原雅樹，柴田政彦，福井聖，矢吹省司，山下敏彦 共著者：西江宏之，北原雅樹，柴田政彦，福井聖，矢吹省司，山下敏彦，小山なつ，仙波恵美子，高橋直人，笠原諭，井関雅子ほか25人 A4判・347頁 本人担当部分： 「一次性慢性痛」 P256－263を単著 １次性慢性痛の代表例として、線維筋痛症・過敏性腸症候群・慢性骨盤内疼痛について解説。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10）慢性疼痛疾患 診断と治療のABC	共著	平成28年6月	最新医学社	慢性疼痛疾患は大きく「侵害受容性疼痛」と「神経障害性疼痛」に分けられ，前者は末梢組織の障害が正常の知覚神経経路を伝達することで感じる痛み出るのに対し、後者は知覚神経伝達経路が障害されることにより生じる痛みである。痛みの原因が何であるかを診断することはその後の治療計画を立てる上でも非常に重要となる。本書では痛みの診断・評価法，薬物療法・理学療法・手術療法をはじめ、各部位からみた慢性痛の診断と治療を網羅した。さらに、また慢性疼痛に対する海外と本邦との診療体制の差とそれらの実情・課題についてもまとめた。 A4判・237頁 編者：田口敏彦 共著者：柴田政彦，井上雅之，細井昌子，二階堂琢也，松平浩，松原貴子，寒竹司，今村佳樹，福井聖，伊東勝也，ほか17名 本人担当部分： 「我が国における慢性疼痛に対する診療体制の実情と課題」」 P232－237を単著 本邦の慢性痛に対する診療の実情や問題点、集学的アプローチの可能性と課題・対策について解説。
11）慢性疼痛診療ハンドブック	共著	平成28年12月	中外医学社	「痛み」は診療における中核的な症状であり患者のQOLを著しく低下させる。なかでも特に慢性疼痛について様々な見地から解説を行う。痛みに関する科学的情報を発信するNPO法人「いたみ医学研究情報センター」の医療者教育用資料を再編集し、医師、理学・作業療法士、看護師、社会福祉士など、慢性疼痛のケアに悩むすべての方にとって役立つ内容を示した。 A5判・300頁 編者：池本竜則 共著者：柴田政彦，足立友紀，池本竜則，牛田享弘，石川理恵，井関雅子，北原雅樹，住谷昌彦，坂田尚子，西江宏行，内山徹ほか13名 本人担当部分： 「治療に難渋する慢性疼痛患者とは」 P14－26を共著 治療に難渋する慢性痛患者の特徴について、身体的要因・精神心理的要因・環境要因などの観点から解説、さらに代表的な難治性疼痛症例との関係性についても解説している。 共著者：柴田政彦，足立友紀
12)「痛みをやわらげる心の科学」最前線		令和4年6月	週間朝日 5779号 2022.6.3号　p26-27	
13）あなたVS慢性痛		令和4年7月	PRESDENT 第60巻第13号 2022.7.15号 p98-99	

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1) The Animal Model of Spinal Cord Injury as an Experimental Pain Model. （痛みの実験モデルとしての脊髄損傷動物モデル） （査読付）	共著	平成23年3月	Journal of Biomedicine and Biotechnology2011:1-11.	痛みは脊髄損傷患者にとって重要な問題の１つである。運動・自律神経障害とともに感覚障害も脊髄損傷研究を複雑にしている。さらに様々な要因の痛みもこれに関連する。これまで多くの脊髄損傷動物モデルがその病理学的な一般メカニズムの解明に役立ってきた。しかしながら、その結果は誤解して解釈されやすいものである。よってヒトの脊髄損傷の兆候を完全に理解することは重要である。本レビューでは、動物の脊髄損傷モデルについて概説し、そのそれらの有効利用例について紹介する。 本人担当部分：論文の執筆ととりまとめをおこなった。 共著者: Nakae A, Nakai K, Yano K, Hosokawa K, Shibata M, Mashimo T.
2) Brain imaging of mechanically induced muscle versus cutaneous pain. （脳機能画像における痛覚認知機構の解析 ： 筋由来の痛みと皮膚由来の痛みの比較検討） （査読付）	共著	平成23年5月	Neuroscience Research70(1):78-84	筋のみへの機械的刺激に反応する脳活動を機能的磁気共鳴画像法で評価し、皮膚と筋由来の痛みに反応する脳活動部位の比較を行った。皮膚への局所麻酔の有無により、「皮膚と筋への侵害圧刺激」条件、「筋のみへの侵害圧刺激」条件を比較した。皮膚由来の痛みによって第二次体性感覚野が活動しやすいことが示された一方で、筋への侵害圧刺激に特異的な脳領域はなく、代わりに特有の活動パターンがあることが明らかになった。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: Uematsu H, Shibata M, Miyauchi S, Mashimo T.
3) Differential efficacy of electric motor cortex stimulation and lesioning of the dorsal root entry zone for continuous vs paroxysmal pain after brachial plexus avulsion （腕神経叢引き抜き損傷後の持続的な痛みと発作的な痛みに対する大脳運動野電気刺激療法・脊髄後根侵入部微小凝固術の異なる効果） （査読付）	共著	平成23年5月	Neurosurgery, vol. 68, issue 5 (2011) pp. 1252-1257	腕神経叢引き抜き損傷後の異なる二つの痛み（持続的痛み・発作的痛み）に対し、大脳運動野電気刺激療法（EMCS）および脊髄後根侵入部微小凝固術（GREZotomy）が与える影響を検証した。15名の対象に対して治療介入を行った結果、DREZotomyの方が両方の痛みをより効果的に改善できることが示唆された。 本人担当部分： 患者の担当と調査結果を麻酔科医の立場から評価し、研究統括をおこなった。 共著者: Ali M, Saitoh Y, Oshino S, Hosomi K, Kishima H, Morris S, Shibata M, Yoshimine T

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4) Human brain activity associated with painful mechanical stimulation to muscle and bone （筋・骨組織に対する侵害圧刺激に関連するヒトの脳活動） （査読付）	共著	平成23年8月	Journal of Anesthesia, vol. 25, issue 4 (2011) pp. 523-530	筋組織と骨に対する侵害圧刺激を受けている際のヒトの脳活動を、機能的核磁気共鳴画像（fMRI）を用いて検証した。結果、基底核のいくつかの領域は骨よりも筋に対する刺激の際に強く活動がみられた。今回の結果は、筋の痛みの脳処理過程に被殻・尾状核が関与する可能性を示唆している。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: Maeda L, Ono M, Koyama T, Oshiro Y, Sumitani M, Mashimo T, Shibata M
5) 催眠による認知的評価と痛みの変化に関する研究 （査読付）	共著	平成23年10月	催眠学研究 53(1), 14-22.	催眠が痛みの耐性と認知的評価に影響を及ぼすかを検証した。被験者14名に痛み刺激として電気刺激を提示し、覚醒条件と催眠条件において痛みの耐性を比較した。結果、催眠条件では覚醒条件に比べて痛みに対する「妨害性」が減少し(Z=-2.94、p<.01)、「コントロール可能性」が増加する(t(13)=-2.71、p<.05)ことが示された。また、条件による「妨害性」の変化と「コントロール可能性」の変化の間に強い負の相関が見られた(r=-.56、p<.05)。催眠による痛みの軽減は痛み刺激の解釈の仕方の変化によって説明されうることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: 安達友紀, 宮田敬一, 中江文, 柴田政彦
6) 脳機能画像における痛覚認知機構の解析：筋由来の痛みと皮膚由来の痛みの比較検討 （査読付）	共著	平成24年5月	Journal of musculoskeletal pain research：日本運動器疼痛学会誌vol.3 (1) 52-62	筋のみへの機械的刺激に反応する脳活動を機能的磁気共鳴画像法で評価し、皮膚と筋由来の痛みに反応する脳活動部位の比較を行った。皮膚への局所麻酔の有無により、「皮膚と筋への侵害圧刺激」条件、「筋のみへの侵害圧刺激」条件を比較した。筋への侵害圧刺激に特異的な脳領域はなかったが、特有の活動パターンがあることが明らかになった。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆研究総括をおこなった。 共著者: 植松 弘進, 柴田 政彦, 大城 宜哲

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7) A Case of Hypogonadotropic Hypogonadism Caused by Opioid Treatment for Nonmalignant Chronic Pain. （非悪性慢性疼痛治療のためオピオイド療法によって低ゴナドトロピン性性機能低下をきたした症例） （査読付）	共著	平成24年12月	Case reports in medicine 2012:1-5.	本症例は、交通事故によって生じた慢性的な痛みの治療に対して経皮的フェンタニル治療を施行されたが、その後全般性の疲労と勃起障害を呈した。内分泌系の検査では低性腺刺激性性機能低下が示唆され、またMRI検査でも異常所見は認められなかった。このケースは、オピオイド治療における内分泌機能障害の可能性を考慮する必要性を示唆している。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆研究総括をおこなった。 共著者: Tabuchi Y, Yasuda T, Kaneto H, Kitamura T, Kozawa J, Otsuki M, Imagawa A, Nakae A, Matsuda Y, Uematsu H, Mashimo T, Shibata M, Shimomura I.
8) 痛みの評価尺度・日本語版 Short-Form McGill Pain Questionnaire 2 (SF-MPQ-2)の作成とその信頼性と妥当性の検討 （査読付）	共著	平成25年1月	Pain Research 28(1), 43-53.	Short-Form McGill Pain Questionnaire 2 （SFMPQ-2）の日本語版を作成した。87名の患者を対象にSFMPQ-2を回答させ、その妥当性評価のために探索的因子分析をおこなった。また信頼性の評価のためにCronbachのα係数と級内相関係数を算出した。結果、内的整合性・検査間信頼性ともに高く、その他機能的評価との相関も高かった。これらの結果は将来の臨床研究でこSFMPQ-2を使用する上での基礎となる。 本人担当部分：データの取得と、結果について麻酔科医の立場から評価をおこなった。 共著者: 圓尾知之, 中江文,前田倫,高橋香代子, Morris Shayn, 横江勝, 松崎大河, 柴田政彦, 齋藤洋一.
9) Painful Diabetic Neuropathy in Japanese Diabetic Patients Is Common but Underrecognized. （糖尿病性神経障害に伴う痛みは一般的だが過小評価されている） （査読付）	共著	平成25年10月	Pain Research and Treatment;2013:1-3.	痛みを伴う糖尿病性神経障害（PDN）の日本における疫学およびQOL・心理面への影響を調査した。298名の糖尿病患者を対象とした。結果、22.1%にPDNがみられ、QOLと精神状態に負の影響をもつことがわかった。その一方で、医師は症状のある者の36.4%しかPDNに気付いていなかった。本研究の結果は、日常の診療で医師がPDNに気付き、その進行を防ぐことの重要性を示している。 本人担当部分：結果に対して麻酔科医の立場から評価をおこない、研究総括をおこなった。 共著者: Tsuji M, Yasuda T, Kaneto H, Matsuoka T, Hirose T, Kawamori R, Iseki M, Shimomura I, Shibata M.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10) Validation of the Japanese Version of the Pain Self-Efficacy Questionnaire in Japanese Patients with Chronic Pain. （慢性痛患者に対する日本語版Pain Self Efficacy Questionnarie <PSEQ>の妥当性の検証） （査読付）	共著	平成26年8月	Pain Med;15(8):1405-1417	PSEQ日本語版の開発と、その心理物理学的特性の評価をおこなった。横断研究デザインで、複数の病院およびクリニックの患者に対しPSEQとその他痛みの心理学的評価指標を取得し、それらの関係性を検証した。結果、PSEQは充分な信頼性と妥当性を示した。階層的重回帰分析によって、PSEQで取得された自己効力感は本研究で取得された指標の変量で充分な説明が可能であることが示された。また、PSEQは社会的な活動と最も強く関連していた。 本人担当部分：患者担当とデータ測定、麻酔科医の立場から結果の評価をおこなった。 共著者: Adachi T, Nakae A, Maruo T, Shi K, Shibata M, Maeda L, Saitoh Y, Sasaki J.
11) Age-related and sex-related changes in perfusion index in response to noxious electrical stimulation in healthy subjects. （侵害電気刺激に対する灌流指標の変化に対する年齢および性別の影響） （査読付）	共著	平成26年12月	Journal of Pain Research2014;7:91.	痛みの客観的指標の開発にむけ、痛み刺激の灌流指標の変化に年齢・性別がもたらす影響を検証した。70名のボランティアに対して侵害電気刺激を与え、痛みの強度が耐性閾値に達するまで与えた。刺激前後の灌流指標と脈拍数の差を年齢・性別で比較した。結果、灌流指標は高齢の女性で刺激前後の変化が小さかった。灌流指標は高齢女性以外では痛みの客観的指標として使用できる可能性が示唆された。 本人担当部分：論文の執筆ととりまとめをおこなった。 共著者: Nakae T, Nishimura T, Shibata M, Mashimo T, Fujino Y.
12) Pain-Related Brain Activity Evoked by Active and Dynamic Arm Movement: Delayed-Onset Muscle Soreness as a Promising Model for Studying Movement-Related Pain in Humans. （動的運動によって誘発される痛みの脳活動：ヒトの遅発性筋痛モデルを用いて） （査読付）	共著	平成27年8月	Pain Medicine;16(8):1528-1539.	遅発性筋痛が「運動によって誘発される痛み」の適切なモデルとなるかを検証するため、遅発性筋痛の発生する状況下で動的な運動をおこなわせた際の脳活動を明らかにする。12名の健常成人に対して、肘のレジスタンストレーニングをおこなわせて遅発性筋痛を誘発する。運動後2日目（遅発性筋痛あり）条件と30日目（遅発性筋痛なし）条件とで機能的核磁気共鳴画像にて脳活動を比較した。結果、筋痛あり条件で対側の一次運動野、頭頂弁蓋部、両側の補足運動野により強い活動がみられた。また、Pain Matrixと呼ばれる痛み知覚時の代表的な脳領域に関しては、両条件間に差を認めなかった。この結果は、遅発性筋痛モデルがヒトの運動誘発痛研究において有効な実験モデルであることを示唆している。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆および研究総括をおこなった。 共著者: Matsuda Y, Kan S, Uematsu H, Shibata M, Fujino Y.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13) 痛みの自己効力感とその他の認知・感情的要因が慢性痛患者の健康関連Quality of Lifeと生活障害度に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成27年12月	慢性疼痛 1(34), 1.	本研究では認知・感情的要因が健康関連QOLや生活障害度といったアウトカムへ及ぼす影響を検討した。大学附属病院集学的診療外来に受診した初診患者60名に対し、健康関連QOL、生活障害度、痛みの自己効力感、破局的思考、不安・抑うつ、直近24時間の痛みの平均的な強さを測定する6つの尺度への回答を求めた。結果から、痛みの自己効力感は健康関連QOLと正の相関を、生活障害度と負の相関を示すこと、および痛みの自己効力感が健康関連QOLに対して正の影響性を有することが明らかになった。これらのことから、慢性痛の診療において適応的な認知・感情的要因を高めていくことの重要性が示唆された。 本人担当部分：研究の計画、データの取得、論文のとりまとめと研究総括をおこなった。 共著者: 安達友紀, 山田恵子, 西上智彦, 佐々木淳, 柴田政彦
14) Go-sha-jinki-Gan (GJG) ameliorates allodynia in chronic constriction injury model mice via suppression of TNF-α expression in the spinal cord. （牛車腎気丸がマウスの慢性絞扼性アロディニアモデルの症状を、脊髄のTNF-α発現を抑制して改善させる） （査読付）	共著	平成28年1月	Molecular Pain 12:1-16	牛車腎気丸は日本の伝統的なハーブ療法で、異常痛や麻痺の改善に用いられてきたが、その作用メカニズムは不明である。本研究では、慢性絞扼性アロディニアモデルマウスを用いて牛車腎気丸のもつ鎮痛効果の分子メカニズムを明らかにする。結果、牛車腎気丸によってマウスの痛覚過敏は初期の段階から有意に低下した。さらに、牛車腎気丸は脊髄中のIba1とTNF－αの発現を抑制していることがわかった。牛車腎気丸は、神経炎症によって誘発される痛みの治癒に有効であることが示唆された。 本人担当部分：結果について麻酔科医の立場から評価をおこない、論文のとりまとめをおこなった。 共著者: Nakanishi M, Nakae A, Kishida Y, Baba K, Sakashita N, Shibata M, Yoshikawa H, Hagihara K.
15) 第三者行為をきっかけとした神経障害性疼痛の治療反応性 （査読付）	共著	平成28年2月	ペインクリニック 372(2), 221-228.	他害的な外傷をきっかけとする慢性疼痛には複雑な心理が関与し、臨床において治療抵抗性であることを経験する。第三者行為をきっかけとする神経障害性疼痛10症例と、第三者行為がきっかけでない神経障害性疼痛11症例を対象に、治療反応性を、複数の評価尺度を用いて多面的に比較検討した。初診時、および3ヵ月後の再診時に実施した自記式質問紙の集計と、診療録の内容を後ろ向きに収集し、統計解析を行った。その結果、初診時の尺度スコア平均は2群間で有意な差を認めなかった。治療反応性については、第三者行為をきっかけとする神経障害性疼痛は、簡易痛みの質問票、不安抑うつ尺度、痛み破局化スケールの拡大視、EuroQoLのスコア改善が乏しかった。 本人担当部分: 研究の計画、データの取得、論文のとりまとめと研究総括をおこなった。 共著者: 山田恵子, 今野弘規, 磯博康, 柴田政彦

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16) resting-state fMRIによる上肢CRPS患者における感覚・運動ネットワークの検討 (査読付)	共著	平成28年5月	日本運動器疼痛学会誌 vol.8(2)203-208	本研究では、複合性局所疼痛症候群(CRPS)患者における運動機能障害の中枢機序の解明を目的として、上肢CRPS患者の感覚・運動ネットワークをresting-state fMRIにより検討した。健康成人と比べ、CRPS患者では感覚・運動関連部位間の機能的結合に変化が生じていた。本研究の結果は、感覚・運動ネットワークの機能異常がCRPS患者における運動機能障害の発生に関与している可能性を示唆するものである。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: 寒重之，大迫正一，植松弘進，渡邉嘉之，田中壽，柴田政彦
17) Independent Risk Factors for Positive and Negative Symptoms in Patients with Diabetic Polyneuropathy. （糖尿病性多発神経障害の陽性および陰性症状に対する独立危険因子） （査読付）	共著	平成28年6月	Journal of Pain and Palliative Care Pharmacotherapy;30(3):178-183.	糖尿病性神経障害（DPN）患者の麻痺・知覚障害の危険因子を分析した。298名の糖尿病患者を対象として、ロジスティック回帰モデルを用いて独立因子を決定した。さらに統計モデルを痛みグループ、知覚障害グループの二群に対して適用した。DPNの有無には抑うつ症状、アキレス腱反射の異常、インシュリン治療の有無などが関連していた。また痛み群と知覚障害群の差には女性であること、アキレス腱反射の異常、インシュリン治療の有無が関連していた。 本人担当部分：結果の解析と論文のとりまとめをおこなった。 共著者: Inoue R, Sumitani M, Yasuda T, Tsuji M, Nakamura M, Shimomura I, Shibata M, Yamada Y.
18) 言語的妥当性を担保した日本語版Injustice Experience Questionnaire: IEQの作成 （査読付）	共著	平成28年8月	ペインクリニック vol.37(8)1053-1057	他害的な外傷をきっかけとする慢性痛患者は、自分に落ち度がないのに不当に慢性痛を被っているという不条理・不公平感に囚われているため、医療者が治療に難渋することを経験する。慢性痛患者が抱えるこのような不条理・不公平な扱いを受けているという感情を欧米では「perceived injustice」と表現しており、Injustice Experience Questionnaireという尺度で計量心理学的に定量化している。われわれは、尺度の他言語翻訳を行う際の推奨ガイドラインに則って日本語版Injustice Experience Questionnaireを作成した。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆研究総括をおこなった。 共著者: 山田 恵子，安達 友紀，西上 智彦，磯博康，柴田 政彦

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19) ペインクリニック外来患者を対象とした薬剤師外来の現状 （査読付）	共著	平成28年8月	医療薬学 vol.42(8)558-561	ペインクリニック外来患者を対象とした薬剤師外来の現状について検討した。1年間に薬剤師外来で対応した92例、実施回数347回を対象とした。現在、1日あたり約8～10例程度の患者の面談を行っている。新規患者の初回面談時に、お薬手帳を用いて服用薬剤数を調査し、平均使用薬剤品目数は7.3±4.4種類であった。薬剤師の介入内容は、鎮痛薬の効果・副作用の確認、その他の併用薬の副作用の確認、薬剤の減量(他科のものも含む)、排便や睡眠状況など副作用や生活習慣に関するアドバイス、精神的苦痛への対応など多岐にわたった。 本人担当部分：結果を麻酔科医の立場から評価し、研究総括をおこなった。 共著者: 中川左理, 岡本禎晃, 柴田政彦
20) Socioeconomic value of intervention for chronic pain. （慢性痛介入の社会経済学的価値について） （査読付）	共著	平成28年8月	Journal of Anesthesia vol.30 Issue4 2016;30(4):553-561.	本研究の目的は、痛みに対する医療の費用対効果を評価することである。91名の患者を薬物治療、薬物＋ブロック治療、その他教育・リハビリテーション治療の3カテゴリに分類し、EQ-5D得点からQALY 質調整生存年を算出した。結果、見積もられた年間治療コストとQALYに基づく費用対効果の計算から、痛みに対する医療には充分な社会経済学的価値があることが示された。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆をおこなった。 共著者: Takura T, Shibata M, Inoue S, Matsuda Y, Uematsu H, Yamada K, Ushida T.
21) Arthropathy-related pain in a patient with congenital impairment of pain sensation due to hereditary sensory and autonomic neuropathy type II with a rare mutation in the WNK1/HSN2 gene: a case report. （WNK1/HSN2遺伝子の変異を伴う hereditary sensory and autonomic neuropathy type II による先天性感覚障害をもつ患者の関節痛：ケースレポート） （査読付）	共著	平成28年10月	BMC Neurology16(1):201	Hereditary sensory and autonomic neuropathy (HSAN) type IIにより先天的な感覚障害を呈した症例を経験した。本症例は手袋・靴下型の感覚脱失を呈していたが、月経や内蔵の痛みは感じることができていたが、骨隨炎による中足骨切除を施行された。腓骨神経は生研上無髄・有髄神経共に著しい損失がみられていた。さらに多数の関節で激しい痛みを訴えていたが、アセトアミノフェンによって痛みが軽減されQOLの改善に至った。本件は日本で2件目のHSAN typeⅡ症例の報告であり、アセトアミノフェンが先天性の痛覚障害を有する患者の痛みのコントロールに有効であった。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: Yamada K, Yuan J, Mano T, Takashima H, Shibata M.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22) Injustice Experience Questionnaire, Japanese Version: Cross-Cultural Factor-Structure Comparison and Demographics Associated with Perceived Injustice. （Injustice Experience Questionnaire：IEQ日本語版の作成：「不公平感」に関連する異文化間の因子構造の比較と人口統計） （査読付）	共著	平成28年10月	Plos One;11(8)e0160567	IEQは受傷に関連する不公平感を評価するバッテリーである。本研究ではIEQの日本語版作成のため、その因子構造と妥当性、信頼性、さらにはIEQスコアを予測する要因について検証した。71名の患者を対象にとしてIEQと痛みの強さ・心理的要因の評価、基本的情報の調査をおこなった。因子分析の結果、日本語版は原典と異なり3因子（Severity / irreparability, Blame / unfairness, Perceived lack of empathy ）構造においてデータへの適合が高く、信頼性も高かった。また、「1年以上の痛みの持続」と「受傷の原因が多者にある場合」の2つが、IEQスコアへの寄与率が高かった。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析および研究総括をおこなった。 共著者: Yamada K, Adachi T, Mibu A, Nishigami T, Motoyama Y, Uematsu H, Matsuda Y, Sato H, Hayashi K, Cui R, Takao Y, Shibata M, Iso H.
23) The Effect of Guidance regarding Home Exercise and ADL on Adolescent Females Suffering from Adverse Effects after HPV Vaccination in Japanese Multidisciplinary Pain Centers. （子宮頸がんワクチン（HPV）接種後の副反応を呈した思春期女性に対する運動とADL指導の効果；学際的痛みセンターでの取り組み） （査読付）	共著	平成28年10月	Pain Research and Management;2016:1-6.	HPV接種後の副反応を呈した若年女性は稀ながらも230名を超えている。本研究の目的は、副反応を呈した若年女性に対する認知行動療法的介入の効果を調査することである。副反応を呈した145名に対し、部分的に認知行動療法アプローチに基づいて運動と日常生活の指導をおこない、それらを後方視的に調査した。指標は痛みの強さのNRSとHADS、PCSを用いた。結果、治療プログラムを実施した80名のうち、10名は著しい改善、43名は若干の改善を示した。認知行動療法的アプローチは、HPV接種後副反応の症状減弱に有効であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文のとりまとめをおこなった。 共著者: Ushida T, Shibata M, Kitahara M, Yabuki S, Sumitani M, Murakami T, Iseki M, Hosoi M, Shiokawa H, Tetsunaga T, Nishie H, Fukui S, Kawasaki M, Inoue S, Nishihara M, Aono S, Ikemoto T, Kawai T, Arai Y-C.
24) Resting state fMRI を用いた各脳部位の相互作用の解析 （査読付）	共著	平成28年10月	バイオメディカル・ファジィ・システム学会年次大会講演論文集vol.29 161-164	Resting state fMRI(rs-fMRI)画像を用いて、各脳部相互作用を解析する新しい方法を提案した。約5分間のecho planer imaging(EPI)連続測定を行い、脳機能画像を取得した。3名を対象として脳機能画像を取得し、三つの推定パラメータを基に各脳部位の関連を示す樹形図を形成し、関係性の判別が可能となった。また、階層的クラスタリングの解析で、脳部位番号26(被殻左側)と71(中央帯状回右側)の関係性が近いことを示した。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆および研究総括をおこなった。 共著者: 丸居 航, Alam Saadia Binte, 寒 重之, 柴田 政彦, Koh Min-Sung, 小橋 昌司

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
25) 慢性疼痛に対する漢方エキス剤の効果を、国際的な尺度を用いて多面的に評価し得た症例 （査読付）	共著	平成28年10月	痛みと漢方 26, 33-39	本症例は交通事故により頸椎捻挫との診断で受傷3年を経過しても痛みが改善せず、当院を受診した。降雨前に痛みが強くなる訴えを水毒と解釈し、五苓散(TJ-17)7.5g/日を投与したところ著効した。特に症状が著しく軽減した初診から3ヵ月間において、痛みの強さ7/10→5/10、Pain Disability Scale 21/60→7/60など著しい改善がみられた。国際的に妥当性・信頼性の担保された尺度を用い、医療用漢方エキス剤の効果を客観的に評価できる可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: 山田恵子, 蔭山充, 柴田政彦.
26) 慢性痛患者への入院集学的リハの取り組み （査読付）	共著	平成28年10月	Journal of Musculoskeletal Pain Research 8巻3号 Page S125	大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでは、院内で実施困難な慢性痛に対する集学的入院治療を近隣の医療機関と連携協力して実施可能とした。就業や日常生活に支障をきたしている慢性痛患者を治療対象とし、運動療法、認知行動療法、集学的リハビリテーションの三要素を含んだ入院プログラムを作成した。結果、痛みの評価が改善し、就労した症例を経験した。また、EQ-5Dを用いて、このプログラムの費用対効果も検討した。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆研究総括をおこなった。 共著者： 高橋紀代, 安達友紀, 丸山 伸廣, 西上智彦, 柴田 政彦
27) Fear-avoidance beliefs are independently associated with the prevalence of chronic pain in Japanese workers. （恐怖回避思考は日本における労働者の慢性痛の有無と独立して関連している） （査読付）	共著	平成29年4月	Journal of Anesthesia;31(2):255-262.	恐怖回避思考と慢性痛の関係は、アジア圏では明らかにされていない。本研究の目的は、日本のホワイトカラー層における恐怖回避思考と慢性痛の関係を明らかにすることである。433名の労働者にアンケート調査を実施し、TSK、仕事関連心理因子、うつ傾向等を調査した。結果、調整済みオッズ比でも慢性痛患者は高いTSKスコアを有することがわかった。本研究の結果は、日本のホワイトカラー層においてTSKスコアと慢性痛の有無に密接な関連があることを示唆している。 本人担当部分：データ測定、結果の評価を麻酔科医の立場からおこなった。 共著者: Wakaizumi K, Yamada K, Oka H, Kosugi S, Morisaki H, Matsudaira K, Ushida T, Shibata M, Kitahara M, Yabuki S, Sumitani M, Murakami T, Iseki M, Hosoi M, Shiokawa H, Tetsunaga T, Nishie H, Fukui S, Kawasaki M, Inoue S, Nishihara M, Aono S, Ikemoto T, Kawai T, Arai Y-C.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28) 非がん性慢性疼痛のチーム医療 5.大阪大学医学部附属病院の痛み診療 (査読付)	共著	平成29年8月	ペインクリニックVol.38 No.8　P1063-1068	大阪大学疼痛医療センターで実施している集学的診療外来、外来・入院リハビリテーション、認知行動療法を紹介する。集学的診療外来やリハビリテーション、認知行動療法について、実施内容を示し、疼痛医療センターの取り組みを支えている研究や教育プログラムについて述べた。疼痛医療センターでは、諸外国で行われている集学的な慢性痛治療が、本邦でも広まることを期待しており、普及に向けた活動に取り組んでいる。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆および研究総括をおこなった。 共著者: 榎本聖香，安達友紀，井上大輔，細越寛樹，西上智彦，高橋紀代，柴田政彦
29) 中枢機能障害性疼痛患者における脳部位間の機能的結合と背景因子との関連：安静時fMRIによる検討 (査読付)	共著	平成29年10月	PAIN RESEARCH vol.32(1)52-59	中枢機能障害性疼痛(FSS)患者を対象に、resting-state functional MRI(rs-fMRI)を用いて脳部位間の機能的結合と背景因子との関連について検討した。痛みの強さと左扁桃体-左島皮質の機能的結合の間に有意な正の相関、痛みの期間と左右前帯状回吻側部・左島皮質前部の機能的結合の間で有意な負の相関がみられた。またHADSの不安スコアは右扁桃体内の機能的結合と有意な負の相関、PCSスコアは右扁桃体-右海馬傍回・前帯状回吻側部-右視床の機能的結合と有意な正の相関を認めた。FSS患者に対するrs-fMRIによる機能的結合の評価は、慢性疼痛の病態解明に有用であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆および研究総括をおこなった。 共著者:寒重之，大迫正一，植松弘進，渡邉嘉之，田中壽，柴田政彦
30) 就労環境における慢性痛の実態調査～仕事に影響する慢性痛のリスク因子の検討：QWLICスタディ (査読付)	共著	平成29年12月	産業衛生学会誌 vol.59 (5) 125-134	就労環境における慢性痛の実態，及び慢性痛が仕事に影響する重症例でのリスク因子を明らかにすることを目的とした。計3社18施設の被雇用者を対象に，「からだの痛みに関する調査研究アンケート」を施行した。対象者の生活習慣や心理社会的因子と慢性痛有症との関連について，性年齢調整ロジスティック回帰分析を用いて分析した。結果、仕事に影響する慢性痛を有することは，肥満，喫煙習慣，不眠症，ワーカホリック度の高さ，上司・同僚からの支援の乏しさ，仕事の満足度の低さ，仕事の要求度の高さ，仕事のコントロール度の低さ，心理的ストレスの高さ，抑うつ状態と有意に関連があった。就労環境における慢性痛とそのリスク因子の実態が一部明らかとなった。 本人担当部分：データ測定、論文のとりまとめをおこなった。 共著者： 山田恵子，若泉謙太，深井恭佑，磯博康，祖父江友孝，柴田政彦，松平浩

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
31) Classification and characterisation of brain network changes in chronic back pain: A multicenter study.	共著	平成30年	Wellcome Open Res 3:19	共著者：Mano H, Kotecha G, Leibnitz K, Matsubara T, Nakae A, Shenker N, Shibata M, Voon V, Yoshida W, Lee M, Yanagida T, Kawato M, Rosa MJ, Seymour B
32)The relationships between pain catastrophizing subcomponents and multiple pain-related outcomes in Japanese outpatients with chronic pain: a cross-sectional study.	共著	平成30年5月	Pain Pract.	共著者：Adachi T, Nakae A, Maruo T, Shi K, Maeda L, Saitoh Y, Shibata M, Sasaki J
33)Reliability and validity of the Athens Insomnia Scale in chronic pain patients.	共著	平成30年	J Pain Res 11:793-801	共著者：Enomoto K, Adachi T, Yamada K, Inoue D, Nakanishi M, Nishigami T, Shibata M
34)Verbal Instruction Can Induce Extinction of Fear of Movement-Related Pain.	共著	平成30年	j.jpain.19:1063-1073	共著者：Maeda Y, Kan S, Fujino Y, Shibata M
35)Evaluating the psychometric properties of two-item and four-item short forms of the Japanese Pain Self-Efficacy Questionnaire: a cross-sectional study.	共著	平成30年		共著者：Adachi T, Enomoto K, Yamada K, Inoue D, Nakanishi M, Takahashi N, Nishigami T, Shibata M
36)Frequency of mental disorders among chronic pain patients with or without fibromyalgia in Japan.	共著	平成30年	Neuropsychopharmacol Rep 38:167-174	共著者：Miki K, Nakae A, Shi K, Yasuda Y, Yamamori H, Fujimoto M, Ikeda M, Shibata M, Yukioka M, Hashimoto R

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
37)Validation of the Japanese version of the life satisfaction checklist (LiSat-11) in patients with low back pain: A cross-sectional study.	共著	平成30年	J Orthop Sci 23:895-901	共著者：Mibu A, Nishigami T, Tanaka K, Manfuku M, Yono S, Kajiwara S, Tanabe A, Shibata M
38)慢性疼痛領域における治療の費用対効果と社会経済的な負担	共著	平成30年	日本運動器疼痛学会誌 10(1): 88-96	田倉智之1)，柴田政彦2)，牛田享宏3) 1)東京大学大学院医学系研究科 医療経済政策学，2)奈良学園大学 保健医療学部，3)愛知医科大学 学際的痛みセンター
39)慢性疼痛に対する認知行動療法とリハビリテーションの併用効果 ： いきいきリハビリノートの治療実績を含めて	共著	平成30年	日本運動器疼痛学会誌 10(2): 205-216	大鶴直史1,2)，木村慎二2)，細井昌子3)，松原貴子4)，柴田政彦5)，水野泰行6)，西原真理7)，村上孝徳8)，大西秀明1) 1)新潟医療福祉大学 運動機能医科学研究所，2)新潟大学医歯学総合病院 リハビリテーション科，3)九州大学病院 心療内科，4)神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 理学療法学科，5)大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，6)関西医科大学 心療内科学講座，7)愛知医科大学医学部 学際的痛みセンター，8)札幌医科大学 リハビリテーション医学講座
40)Factors influencing outcomes among patients with whiplash-associated disorder: A population-based study in Japan.	共著	令和元年	PLoS One 14:e0216857	共著者：Hayashi K, Miki K, Ikemoto T, Ushida T, Shibata M
41)Japanese cross-cultural validation study of the Pain Stage of Change Questionnaire.	共著	令和元年	Pain Rep 4:e711	共著者：Adachi T, Sunohara M, Enomoto K, Sasaki K, Sakaue G, Fujita Y, Mizuno Y, Okamoto Y, Miki K, Yukioka M, Nitta K, Iwashita N, Kitagawa H, Shibata M, Sasaki J, Jensen MP, Fukui S

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
42)Association of sleep sufficiency and duration with chronic pain prevalence: A population-based cross-sectional study.	共著	令和元年	J Psychosom Res 120:74-80	共著者：Yamada K, Kubota Y, Shimizu Y, Shibata M, Morotomi N
43)Towards prognostic functional brain biomarkers for cervical myelopathy: A resting-state fMRI study.	共著	令和元年	Sci Rep 9:10456	共著者：Takenaka S, Kan S, Seymour B, Makino T, Sakai Y, Kushioka J, Tanaka H, Watanabe Y, Shibata M, Yoshikawa H, Kaito T
44)Smoking is associated with greater pain intensity and pain-related occupational disability in Japanese workers.	共著	令和元年	J Anesth 33:523-530	共著者：Yamada K, Wakaizumi K, Kubota Y, Matsudaira K, Shibata M
45)Evaluating the psychometric properties of two-item and four-item short forms of the Japanese Pain Self-Efficacy Questionnaire: a cross-sectional study.	共著	令和元年	J Anesth 33:58-66	共著者：Adachi T, Enomoto K, Yamada K, Inoue D, Nakanishi M, Takahashi N, Nishigami T, Shibata M
46)The Relationships Between Pain-Catastrophizing Subcomponents and Multiple Pain-Related Outcomes in Japanese Outpatients with Chronic Pain: A Cross-Sectional Study.	共著	令和元年	Pain Pract 19:27-36	共著：Adachi T, Nakae A, Maruo T, Shi K, Maeda L, Saitoh Y, Shibata M, Sasaki J
47)Pilot study of a basic individualized cognitive behavioral therapy program for chronic pain in Japan.	共著	令和2年	Biopsychosoc Med 14:6	共著者：Hosogoshi H, Iwasa K, Fukumori T, Takagishi Y, Takebayashi Y, Adachi T, Oe Y, Tairako Y, Takao Y, Nishie H, Kanie A, Kitahara M, Enomoto K, Ishii H, Shinmei I, Horikoshi M, Shibata M

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
48)Associations between the injustice experience questionnaire and treatment term in patients with acute Whiplash-associated disorder in Japan	共著	令和2年	PLoS One 15:e0231077	共著者：Hayashi K, Miki K, Ikemoto T, Ushida T, Shibata M
49)Resting-state Amplitude of Low-frequency Fluctuation is a Potentially Useful Prognostic Functional Biomarker in Cervical Myelopathy.	共著	令和2年	Clin Orthop Relat Res 478:1667-1680 共著者：Takenaka S, Kan S, Seymour B, Makino T, Sakai Y, Kushioka J, Tanaka H, Watanabe Y, Shibata M, Yoshikawa H, Kaito T	
50)皮膚科における帯状疱疹関連痛の治療の現状 51)	共著	令和3年12月	慢性疼痛(1340-2331)41巻1号 Page91-95(2022.12)	山岡 慶子(労働者健康安全機構関西労災病院 薬剤部), 岡本 禎晃, 柴田 政彦, 前田 倫, 石井 直子, 中川 左理
（その他） 「総説」 1) Evaluation of patients with chronic pain （慢性痛患者の評価）	共著	平成20年11月	Masui.57(11):1337-1342.	慢性痛患者の痛み行動は多くの要因によって変化する。それらの要因を評価することは痛みのマネジメント上重要なことである。多くの有効なアプローチやこれらの示唆すること、患者の評価と治療の選定など慢性痛患者のマネジメントに欠くことができない事項について解説した。 本人担当部分：原稿の執筆をおこなった。 共著者: Shibata M, Inoue T, Sumitani M, Matsumura Y, Mashimo T.
2) 複合性局所疼痛症候群の診断と治療	共著	平成23年4月	日本医事新報4539：72-78	複合性局所疼痛症候群の診断、治療に関する歴史的変遷を解説、近年用いられている判定指標や治療手段について実例を交えながら解説した。 本人担当部分：原稿の執筆および全体の構成に携わった。 共著者： 植松弘進, 柴田政彦

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3）慢性痛の問題点と今後の取り組み	共著	平成26年12月	理学療法学vol.41(8) 699-705	疫学、認知行動療法、条件付け、運動療法、脳機能画像研究、バイオフィードバックという幅広いテーマから、リハビリテーションにおける慢性痛の位置づけを詳細に解説した。 本人担当部分：原稿の執筆および全体の構成に携わった。 共同著者：柴田政彦，山田恵子，前田吉樹，安達友紀，西上智彦，寒重之
4）医学生教育の観点から：医学生への痛みの教育	単著	平成28年8月	ペインクリニックvol.37 No.8 P991-998	痛みは患者が訴える最も頻度の高い症状であり、医療者が患者の訴える痛みに対して適切に対応できるためには、医療者教育の早期に適切な教育を受けることが重要である。国際的にもこの問題が指摘されており、改善への取り組みが始まっている。わが国でも医学部において痛みの教育は系統的に実施されていないが、今後の取り組みによって改善していくことが望ましい。
5）Functional Pain Disorder 3. 複合性局所疼痛症候群	単著	平成28年8月	最新医学71巻8号　P116-119	四肢の外傷後に痛みが遷延し,浮腫,皮膚温の変化,発汗や発毛の異常,関節可動域制限や拘縮を伴う場合,複合性局所疼痛症候群と呼ばれる.古くから一部の患者に発症するこの病態の機序は謎に包まれていたが,近年,脳機能の変化を伴うことが明らかになってきており,末梢の炎症とともに本症候群の原因や治療と関連する重要な現象として注目されている.
6）疼痛および鎮痛の神経メカニズム	共著	平成28年8月	The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine第53巻　8号　P591-595	痛覚の伝達経路には末梢から中枢へ向かう上行路だけでなく，下行性に痛みを抑制あるいは増強させる下行路もある．本稿では上行路（皮膚，脊髄，体性感覚野および扁桃体）と下行路（state dependent control）に分けて概説し，さらに，それぞれの経路に働きかけるリハビリテーションの臨床応用について言及する． 本人担当部分：原稿の執筆および全体の構成に携わった。 共著者： 西上智彦，柴田 政彦
7）オピオイド治療と内分泌機能異常	共著	平成28年11月	Locomotive Pain Frontier vol.5 No.2　P44-46	オピオイドの長期使用により性腺機能異常をはじめとする内分泌機能障害を併発することがある。疲労感、気分障害、体重減少など、オピオイドの適応となる慢性痛の随伴症状との鑑別が困難なため注意が必要である。特に強オピオイドを長期間若い男性に投与する場合には、投与前に内分泌機能を確認するなど、細心の注意が求められる。内分泌機能の評価の際には、内分泌専門医にコンサルトすることが望ましい。 本人担当部分：原稿執筆をおこなった。 共著者： 柴田政彦，田渕優希子，安田哲行

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8) “Katakori”：a Pain Syndrome Specific to the Japanese（日本に特異的な症状″肩こり″）	共著	平成28年12月	Current Pain and Headache Reports 20(12)64-65	日本特有の痛みの訴えである「肩こり」について、その疫学と機序、評価と治療について概説した。 本人担当部分：原稿執筆をおこなった 共著者：Masaki Kitahara, Masahiko Shibata
9) さまざまな慢性痛患者の安静時fMRI研究	共著	平成28年12月	Pain Research; vol.31 No.4 P189-196	fMRIは核磁気共鳴現象を利用して脳活動を画像化する非侵襲脳活動計測法の一つで、痛みの研究に応用されてきた。様々な慢性痛患者の脳活動を健常人と比較することによってその脳内機序を探る方法として、近年安静時fMRIが注目されている。線維筋痛症、慢性腰痛、片頭痛、その他の疾患を対象とした安静時fMRIの論文を取り上げ、主な知見をまとめた。 本人担当部分：原稿執筆、資料の提供、全体の構成の総括をおこなった 共著者： 柴田政彦，寒重之，大迫正一，三木健司，柳澤琢史，助永憲比古，恒遠剛示，新田一仁，岩下成人，福井聖，黒崎弘倫，中野直樹，若泉謙太，上嶋江利，本山泰士，高雄由美子，溝渕知司
10) 痛みは脳をどう変えるか？-Neuroimaging からみえてきたもの	共著	平成29年3月	週刊　医学のあゆみ　別刷 vol.260 No.2 P155-160	従来の痛みの研究には大きく分けて2つの方法があった。動物を対象とした痛覚の研究と、ヒトの痛みの訴えや感情・行動を対象とした痛みの研究である。これら2つの研究の橋渡しを期待できるのが脳機能画像研究である。患者が″痛み″を医療者に伝え、医療者が患者の痛みを察知して何らかの役割を果たそうとする。ありふれた状況であるが、この状況には、無数のメカニズム、因子が寄与している。因果関係はともかく、これらの複雑な仕組みの一端が脳に刻まれていることが推察され、その情報をもとに治療に応用しようという試みがはじまっている。 本人担当部分：全体の構成の総括をおこなった 共著者： 寒重之，柴田政彦
11)運動器慢性疼痛に対する認知行動療法理論に基づいた運動促進法	共著	平成30年	The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine 55(3): 206-214	木村慎二*1，細井昌子*2，松原貴子*3，柴田政彦*4，水野泰行*5，西原真理*6，村上孝徳*7，大鶴直史*8 *1新潟大学医歯学総合病院リハビリテーション科，*2九州大学心療内科，*3日本福祉大学健康科学部リハビリテーション学科，*4大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座，*5関西医科大学心療内科学講座，*6愛知医科大学医学部学際的痛みセンター，*7札幌医科大学リハビリテーション医学講座，*8新潟医療福祉大学医療技術学部理学療法学科
12)慢性疼痛のリハビリテーション(第1回)　慢性疼痛の病態と機序	単著	令和3年4月	Journal of Clinical Rehabilitation(0918-5259)31巻4号 Page347-351(2022.04)	

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13)医学的に原因が見当たらない痛みで受診した患者の治療方針について　痛みの原因を探るのではなく、痛みを主訴に受診したのはなぜかを考える(Q&A)	単著	令和４年	日本医事新報(0385-9215)5129号 Page53(2022.08)	
「特集」 1) 慢性痛の心理アセスメント 私の診療現場から 「施す医療」からの転換私の診療に影響を与えた慢性痛の3症例	単著	平成26年12月	ペインクリニック35巻2号 Page235-240	自分自身の診療経験から、患者に対して『施す医療』から『支える医療』へ転換したいきさつについて解説した。
2) 座談会 本邦における集学的痛みセンターの必要性について	共著	平成27年3月	Practice of pain management 6巻1号 Page4-11	認知行動療法など、心理的側面から意見交換をおこなった。 北原雅樹，柴田政彦，牛田享宏
3) 一歩進んだ痛みの治療	共著	平成27年7月	臨床雑誌『整形外科』 66巻7号 Page671-675	整形外科疾患に伴う、痛みの薬物療法について解説した。 柴田政彦，松田陽一，植松弘進，安達友紀，西上智彦
4) 我が国の痛みの集学(学際)的アプローチはどうあるべきか？当院における慢性痛に対する集学的診療	共著	平成27年10月	Anet 19巻2号 Page6-10	大阪大学医学部附属病院における集学的診療の内容を各医療者毎の役割を明確にしながら解説した。 柴田政彦，安達友紀，西上智彦
5) 痛みのClinical Neuroscience(9)座談会 本邦における慢性痛対策 ： 見えてきた課題	共著	平成28年3月	最新医学 71巻3号 Page426-439	本邦における慢性痛の診療体制の構築について現状と今後の取り組みについて意見交換した。 田口敏彦，柴田政彦，北原雅樹
6) コラム・ペインコンソーシアムの設立の経緯と取り組み	単著	平成28年6月	Journal of Musculoskeletal Pain Research　Vol.8 No.1 P5-6	痛み関連学会の情報共有の目的で、痛み関連の7学会が参加できるペインコンソーシアムという組織を設立し、運営してきた。
7)【慢性腰痛の診断と治療update】(Part1)基礎　神経障害性疼痛その機序と慢性腰痛との関連	共著	平成28年10月	Bone Joint Nerve 6巻4号 Page679-685	神経障害性疼痛と、慢性腰痛の関連について解説した 牧野 孝洋，三木 健司，柴田 政彦
8) 特集 慢性腰痛の診断と治療update 座談会	共著	平成28年11月	Bone Joint Nerve 6巻4号 Page811-824	整形外科領域の神経障害性疼痛についてその機序と慢性腰痛との関連を解説した 慢性腰痛の治療の一つとして、生物・社会・心理モデルに基づいたリハビリテーションや、心理的アプローチについて解説した。 紺野愼一，中村雅也，牛田享宏，柴田政彦

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9）特集「ＣＲＰＳの最新事情」によせて	単著	平成29年4月	ペインクリニックvol.38 no.4 P437-438	CRPSに関連する最新の知見について解説した。
10）痛みの責任は誰にある?	共著	平成29年4月	日本臨床麻酔学会誌 37(7): 838-843	
11）【神経障害】 高齢者の脊椎由来の慢性疼痛へのアプローチと薬物療法	共著	平成31年	Pharma Medica 37(1): 27-30	
12）慢性疼痛の最新治療~集学的診療~	共著	平成31年	難病と在宅ケア 25(5): 34-38	
13）痛みの病態・機序	単著	令和2年4月	日本医師会雑誌 (0021-4493)149巻1号 Page21-24	
14)「頭痛の診療ガイドライン2021」準拠　ジェネラリストのための頭痛診療マスター】(第2章)頭痛患者のQOLを改善するためのノウハウ慢性頭痛に対する集学的診療	単著	令和3年10月	jmed mook82号 Page116-119(2022.10)	
麻酔・ペインクリニック　慢性痛の集学的診療の実施・運営のポイントは?　集学的診療には多職種の診療を支えるマネージャーが重要である		令和3年10月	日本医事新報(0385-9215)5137号 Page54(2022.10)	高橋 紀代(千里山病院 集学的痛みセンター)，柴田 政彦
医学的に原因が見当たらない痛みで受診した患者の治療方針について　痛みの原因を探るのではなく、痛みを主訴に受診したのはなぜかを考える	単著	令和3年8月	日本医事新報(0385-9215)5129号 Page53(2022.08)	Q&A
「新聞」				
1）今日のストレス明日の病気：上肢の痛み	単著	平成23年6月	夕刊フジ	ストレスと痛みについて解説
2）名医はこの人ブラックジャックを探せ	単著	平成23年6月	夕刊フジ	原因が特定できない痛みへの対策について
3）慢性の痛み目指す総合治療	単著	平成23年10月	読売新聞	慢性痛に対する集学的診療の重要性を解説

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4）痛みよもやま話連載	単著	平成24年8月～ 平成25年4月	・京都新聞 ・下野新聞 ・福島新聞 ・信濃毎日新聞 ・日本海新聞 ・山陽新聞 ・北國新聞 ・宮崎日日新聞 ・神戸新聞 ・愛媛新聞 ・岐阜新聞 ・千葉日報	①痛みの不思議 ②痛みと錯覚 ③トウガラシなどの刺激物 ④痛がり遺伝子 ⑤プラセボ効果 ⑥プラセボ効果 ⑦やはり問診が大事 ⑧痛みと医療（前編） ⑨痛みと医療（後編） ⑩国で異なる鎮痛薬の処方 ⑪三叉神経痛 ⑫幻肢痛 ⑬養成ギブス ⑭腰痛 ⑮進歩する研究 ⑯慢性痛と深く関連 ⑰リハビリで元気に ⑱幻肢痛に大きな効果 ⑲かかとの痛みとれず ⑳手術後に長く続く痛み
「報道」 1)ガッテン！	－	平成30年5月	NHK教育テレビ 2018年5月9日（水）午後7時30分放送	痛みを“脳”で克服！“慢性痛”治療革命
「国際学会発表」 1）Fear Conditioning and Extinction Associating Voluntary Movement with Painful Stimulus: Experimental Verification of Fear Avoidance Model Using Skin Potential Response （運動と痛みの恐怖条件づけ：恐怖回避モデルの実験的検証）	－	平成26年10月	15th World Congress of International Assicuation for the Study of Pain, Buenos Aires. 2014.10.6-11	運動と痛みの恐怖が結びつくという現象の証明から、その消去、さらには教示が与える影響までを検証した。 ポスター発表 共同発表者：Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Yoshitetsu Oshiro, Satoru Miyauchi, Aya Nakae, Ben Seymour, Hideki Kashioka, Masahiko Shibata 担当部分: 研究計画、研究総括
2）Psychologigal characteristics related to the acquisition and extention of pain-related fear (痛みに関連する恐怖の獲得と消去に影響する心理的特性の検証)	－	平成28年9月	16ｔｈ World congress on pain, Yokohama, 2016.9.26-30	運動への恐怖条件づけの獲得、消去における個人差に着目し、各個人の心理特性との関連性を探索的に検討した。消去期におけるSPR振幅値と各心理指標との相関がみられた。本研究の結果は、疼痛の慢性化に性格傾向等の心理要因が関与する可能性を示唆している。 ポスター発表 共同発表者：Takatoshi Masaki, Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Masahiko Shibata 担当部分: 研究計画、データ測定
3）Socioeconimic Value of Intervention for chronic Pain (慢性痛治療の社会経済的価値の検証)	－	平成28年9月	16ｔｈ World congress on pain, Yokohama, 2016.9.26-30	本邦における集学的痛み診療の社会経済的価値を試算した。集学的診療をうけた患者91名における各疼痛バッテリーの改善値を、QUALY解析によって価値化した。結果、１QUALyあたり平均45.879＄の価値があることがわかった。 ポスター発表 共同発表者：Masahiko Shibata, Keiko Yamada, Youichi Matsuda, Hironobu Uematsu, Shinsuke Inoue, Takahiro Ushida, Tomoyuki Takura 担当部分: 抄録執筆、研究計画、データ測定、解析

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4) Effects of exercise therapy for outpatients with chronic pain （慢性疼痛患者に対するリハビリテーション入院プログラム）	－	平成28年9月	16th World congress on pain, Yokohama, 2016.9.26-30	大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでは、院内で実施困難な慢性痛に対する集学的入院治療を近隣の医療機関と連携協力して実施可能とした。就業や日常生活に支障をきたしている慢性痛患者を治療対象とし、運動療法、認知行動療法、集学的リハビリテーションの三要素を含んだ入院プログラムを作成した。結果、痛みの評価が改善し、就労した症例を経験した。また、EQ-5Dを用いて、このプログラムの費用対効果も検討した。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、研究総括をおこなった。 ポスター発表 共同発表者： N. Takahashi, M. Shibata, T. Adachi, Y. Maeda, K. Yamada, T. Nishigami
5) Disabilities on work and fear avoidance beliefs in Japanese workers with chronic pain. （慢性痛患者の恐怖回避思考と就労困難との関係）	－	平成28年12月	International Congress of Behavioral Medicine 2016, Melbourne, Australia. 2016 Dec 7-10.	就労環境における慢性痛の実態，及び慢性痛が仕事に影響する重症例でのリスク因子を明らかにすることを目的とした。計3社18施設の被雇用者を対象に，「からだの痛みに関する調査研究アンケート」を施行した。対象者の生活習慣や心理社会的因子と慢性痛有症との関連について，性年齢調整ロジスティック回帰分析を用いて分析した。結果、仕事に影響する慢性痛を有することは，肥満，喫煙習慣，不眠症，ワーカホリック度の高さ，上司・同僚からの支援の乏しさ，仕事の満足度の低さ，仕事の要求度の高さ，仕事のコントロール度の低さ，心理的ストレスの高さ，抑うつ状態と有意に関連があった。就労環境における慢性痛とそのリスク因子の実態が一部明らかとなった。 ポスター発表 本人担当部分：データ測定、抄録のとりまとめをおこなった。 共同発表者：Kenta Wakaizumi, Keiko Yamada, Masahiko Shibata, Shizuko Kosugi, Hiroshi Morisaki, and Ko Matsudaira
6) An Epidemiological Study on the Association Between Job Satisfaction and Reduced Performance/ sickness Absence among Workers with Chronic Pain （慢性痛患者の職務満足度と機能低下・病欠の疫学調査）	－	平成28年12月	International Congress of Behavioral Medicine 2016, Melbourne, Australia. 2016 Dec 7-10.	就労環境における慢性痛の実態，及び慢性痛が仕事に影響する重症例でのリスク因子を明らかにすることを目的とした。計3社18施設の被雇用者を対象に，「からだの痛みに関する調査研究アンケート」を施行した。対象者の生活習慣や心理社会的因子と慢性痛有症との関連について，性年齢調整ロジスティック回帰分析を用いて分析した。結果、仕事に影響する慢性痛を有することは，肥満，喫煙習慣，不眠症，ワーカホリック度の高さ，上司・同僚からの支援の乏しさ，仕事の満足度の低さ，仕事の要求度の高さ，仕事のコントロール度の低さ，心理的ストレスの高さ，抑うつ状態と有意に関連があった。就労環境における慢性痛とそのリスク因子の実態が一部明らかとなった。 本人担当部分：データ測定，研究総括をおこなった。 ポスター発表 共同発表者： Keiko Yamada, Kenta Wakaizumi, Ko Matsudaira, Masahiko Shibata, and Hiroyasu Iso

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「国内学会発表」 1) 慢性疼痛患者に対するリハビリテーション入院プログラムの効果	－	平成28年6月	第53回日本リハビリテーション医学会学術集会	大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでは、院内で実施困難な慢性痛に対する集学的入院治療を近隣の医療機関と連携協力して実施可能とした。就業や日常生活に支障をきたしている慢性痛患者を治療対象とし、運動療法、認知行動療法、集学的リハビリテーションの三要素を含んだ入院プログラムを作成した。結果、痛みの評価が改善し、就労した症例を経験した。また、EQ-5Dを用いて、このプログラムの費用対効果も検討した。 本人担当部分： 研究計画、データ測定、結果の解析、研究総括をおこなった。 口述発表 共同発表者：高橋紀代，柴田政彦
2) 慢性痛患者への入院集学的リハの取り組み	－	平成28年11月	第9回日本運動器疼痛学会、東京、2016.11.26～27	慢性痛患者に対して短期入院による集学的リハを実施したので報告する。集学的リハとして医師（講義：1h／w），臨床心理士（講義：2h／w），理学療法士（講義：1h／w），理学・作業療法士（運動療法：6日／w）がそれぞれ介入。また，上記以外の時間で自主トレの時間を午前・午後に各1時間ずつ定。アウトカムを日常生活における移動能力・ADL・情動面の改善とし，主な評価尺度として3分間歩行，5m歩行，PDAS，HADS，PCS，PSEQを入院時と退院時で比較した。結果、運動面と情動面の改善が見られた。 本人担当部分： 研究計画、データ測定、結果の解析、研究総括をおこなった。 ポスター発表 共同発表者：丸山伸廣，高橋紀代，柴田政彦
3) 慢性疼痛患者に対する外来運動療法完遂者とドロップアウトした者との比較	－	平成28年11月月	第9回日本運動器疼痛学会、東京、2016.11.26～27	大阪大学附属病院疹痛医療センター（痛みセンター）と連携した3ヵ月間の外来運動療法には、プログラム途中で来院しなくなった患者も認められる。今回ドロップアウトした患者に対して後方視的に調査を行い，運動療法完遂者と比較した結果を報告する。当院外来を受診した29名のうち、計12回のプログラム参加したものを完遂群それ以前に中断したものをドロップアウト群（DO群）とした。結果、29名中20名が完遂し，9名が脱落していた。 DO群と完遂群の比較では介入前の痛みNRS，EQ－5D，PSEQに有意差を認めた。慢性痛に対する運動療法を試行する際ドロップアウトの危険性の予測に多面的評価の結果が有用となる可能性が示唆された。 本人担当部分： 研究計画、データ測定、結果の解析、研究総括をおこなった。 ポスター発表 共同発表者： 鳴尾彰人，西上智彦，高橋紀代，
4)飛翔 － 日本疼痛学会の新しい門出を迎えて		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	会長講演

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5)青少年における「疼痛又は運動障害を中心とする多様な症状」の受療状況に関する全国疫学調査		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	福島若葉1，原めぐみ2，柴田政彦3，喜多村祐里4，祖父江友孝4 1大阪市立大学大学院医学研究科 公衆衛生学，2佐賀大学医学部 社会医学講座 予防医学分野，3大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，4大阪大学大学院医学系研究科 社会医学講座 環境医学
6)慢性痛患者に対する集学的入院治療の長期効果と費用対効果		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	高橋紀代1,2,3，安達友紀4,5,6，柴田政彦3,4 1篤友会リハビリテーションクリニック，2医療法人篤友会 千里山病院，3大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，4大阪大学医学部附属病院 疼痛医療センター，5滋賀医科大学医学部附属病院 ペインクリニック科，6日本学術振興会
7)頸椎症性脊髄症における安静時fMRIを用いた自発脳活動および機能的結合の変化の検討		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	串岡純一1，海渡貴司1，武中章太1，牧野孝洋1，坂井勇介1，田中壽2，渡邉嘉之2，寒重之3，柴田政彦3 1大阪大学大学院医学系研究科 器官制御外科学(整形外科)，2大阪大学大学院医学系研究科 放射線統合医学講座 放射線医学教室，3大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座
8)安静時fMRIを用いた変形性膝関節症の痛みに関わる脳機能異常の予備的研究		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	大迫正一1，寒重之2，植松弘進1，松田陽一1,4，二井数馬4，田中壽3，渡邉嘉之3，冨田哲也4，柴田政彦2，藤野裕士1 1大阪大学大学院医学系研究科 生体統御医学講座麻酔・集中治療医学教室，2大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，3大阪大学大学院医学系研究科 放射線統合医学講座 放射線医学教室，4大阪大学大学院医学系研究科 器官制御外科学
9)慢性痛患者における短縮版アテネ不眠尺度（AIS-5）の信頼性・妥当性の検討		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	榎本聖香1，安達友紀2,3,4，山田恵子2,5，井上大輔2,6，中西美保2,7，西上智彦2,8，柴田政彦1,2 1大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，2大阪大学医学部附属病院 疼痛医療センター，3滋賀医科大学医学部附属病院 学際的痛み治療センター，4日本学術振興会，5大阪大学大学院医学系研究科 社会医学講座 公衆衛生学，6大阪リハビリテーション専門学校 作業療法学科，7大阪大学大学院医学系研究科 漢方医学寄附講座，8甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科
10)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでの集学的痛み治療の現況と課題		平成29年11月	第10回日本運動器疼痛学会、福島、2017.11.18～19	柴田政彦1,3)，井上大輔1,2)，西上智彦1,3,4)，安達友紀1,6)，榎本聖香1,3,6)，高橋紀代1,3,7) 1)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，2)大阪リハビリテーション専門学校作業療法学科，3)大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座，4)甲南女子大学看護リハビリテーション学部理学療法学科，5)大阪大学大学院医学系研究科社会医学講座公衆衛生学，6)滋賀医科大学附属病院学際的痛み治療センター，7)篤友会千里山病院

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11)頸髄症における術前・術前後の脳機能的結合の変化 ：安静時fMRIによる検討		平成29年11月	第10回日本運動器疼痛学会、福島、2017.11.18～19	串岡純一1)，海渡貴司1)，武中章太1)，牧野孝洋1)，坂井勇介1)，田中壽2)，渡邉嘉之2)，寒重之3)，吉川秀樹1)，柴田政彦3) 1)大阪大学整形外科，2)大阪大学放射線統合医学講座，3)大阪大学疼痛医学寄附講座
12)入院集学的リハビリテーションの適応と入院期間の検討		平成29年11月	第10回日本運動器疼痛学会、福島、2017.11.18～19	高橋紀代1,2,3)，柴田政彦2,4) 1)千里山病院，2)大阪大学医学部付属病院疼痛医療センター，3)篤友会リハビリテーションクリニック，4)大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座
13)ICD-11への改訂に向けての慢性痛分類について		平成29年7月	日本ペインクリニック学会第51回大会、岐阜、2017.7.20～22	柴田政彦1，山田恵子2，北原雅樹3，井関雅子4，福井聖5，牛田享宏6 1大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座，2大阪大学大学院医学系研究科社会医学講座公衆衛生学，3東京慈恵医科大学麻酔科，4順天堂大学医学部 麻酔科学・ペインクリニック講座，5滋賀医科大学医学部附属病院ペインクリニック科，6愛知医科大学 学際的痛みセンター
14)慢性側腹部痛に集学的診療と漢方薬治療（柴芍六君子湯）が有効であった1例		平成29年7月	日本ペインクリニック学会第51回大会、岐阜、2017.7.20～22	中西美保1，山田恵子3，柴田政彦4 1大阪大学大学院医学系研究科漢方医学寄附講座，2大阪大学医学部附属病院 疼痛医療センター，3大阪大学大学院 医学系研究科 社会医学講座 公衆衛生学，4大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座
15)頚髄症患者における安静時自発脳活動のALFFおよびReHoによる検討		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	寒重之1)，串岡純一2)，武中章太2)，牧野孝洋2)，坂井勇介2)，海渡貴司2)，田中壽3)，渡邉嘉之4)，柴田政彦5) 1)大阪大学大学院医学系研究科生体統御医学講座，2)大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学講座，3)大阪大学大学院医学系研究科放射線統合医学講座，4)大阪大学大学院医学系研究科次世代画像診断学共同研究講座，5)奈良学園大学保健医療学部看護学科
16)慢性の痛みに関する教育プログラムの構築 - 課題解決型高度医療人材養成プログラム ： 慢性の痛みに関する領域		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	鈴木秀典1)，坂井孝司1)，柴田政彦2)，牛田享宏3)，福井聖4)，池田亮5)，田口敏彦6) 1)山口大学大学院医学系研究科整形外科学，2)奈良学園大学保健医療学部，3)愛知医科大学医学部学際的痛みセンター，4)滋賀医科大学医学部附属病院 ペインクリニック科，5)東京慈恵会医科大学整形外科学，6)山口労災病院
17)入院前の集学的診療が入院集学的リハビリテーションに与えた効果~入院中に関わる治療者が適応判断に加わる意義について~		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	丸山伸廣1)，中原理1)，高橋紀代1)，榎本聖香1)，柴田政彦2) 1)千里山病院，2)奈良学園大学保健医療学部
18)医療制度・診療報酬の国際比較		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	三木健司1,2,3)，柴田政彦4) 1)大阪行岡医療大学医療学部，2)早石病院疼痛医療センター，3)認定NPOいたみ医学研究情報センター，4)奈良学園大学保健医療学部

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19)慢性痛に対する入院集学的リハビリテーションの費用対効果の検討		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	高橋紀代1)，中原理1)，榎本聖香2)，田倉智之3)，柴田政彦2,4) 1)千里山病院，2)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，3)東京大学大学院医学系研究科医療経済政策学講座，4)奈良学園大学保健医療学部
20)厚生労働省慢性疼痛診療体制構築モデル事業（近畿地区）報告		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	柴田政彦1,4)，福井聖2)，水野泰行3)，榎本聖香1,2)，西上智彦1)，高橋紀代1) 1)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，2)滋賀医科大学医学部附属病院学際的痛みセンター，3)関西医科大学心療内科学講座，4)奈良学園大学保健医療学部
21)慢性痛発症の契機に他者の落ち度を感じているか否かが，痛み信念に及ぼす影響		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	榎本聖香1)，安達友紀1)，西上智彦1)，高橋紀代1)，柴田政彦1,2) 1)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，2)奈良学園大学保健医療学部
22)認知行動療法で過剰行動と回避行動を順に扱い改善がみられた一次性慢性痛の一症例		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	細越寛樹1,2)，榎本聖香2)，安達友紀2)，高橋紀代2)，西上智彦2)，柴田政彦2) 1)関西大学社会学部社会学科心理学専攻，2)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター
23)痛みの多面性が訪問リハビリテーション利用者の生活に及ぼす影響		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	鳴尾彰人1)，赤尾祥吾1)，西上智彦2)，高橋紀代1)，柴田政彦3) 1)篤友会リハビリテーションクリニック，2)甲南女子大学看護リハビリテーション学部，3)奈良学園大学保健医療学部
24)入院集学的リハビリテーションによる介入が，疼痛生活障害尺度（PDAS）の下位因子に与える影響について		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	中原理1)，高橋紀代1,2)，榎本聖香2)，柴田政彦2,3) 1)千里山病院，2)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，3)奈良学園大学保健医療学部
25)いたみどめ調整入院によるフェンタニルクエン酸塩貼付剤の一時的な使用が効果的であった腰椎変形性側弯症の一例		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	西山菜々子1,2)，田村宏1)，清水憲政3)，石井良平2)，岡本禎晃2)，金井菜穂子2)，柴田政彦2,4) 1)市立芦屋病院リハビリテーション科，2)市立芦屋病院サポーティブケアチーム，3)市立芦屋病院整形外科，4)奈良学園大学保健医療学部
26)線維筋痛症・広範囲慢性疼痛の集学的診療の取り組み精神科診断について		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	三木健司1,2,4)，史賢林3)，柴田政彦5)，行岡正雄4)，橋本亮太6) 1)大阪行岡医療大学医療学部，2)早石病院整形外科・疼痛医療センター，3)てんじん整形外科リウマチ科，4)行岡病院リウマチ科，5)奈良学園大学保健医療学部，6)国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
27)中枢性脳卒中後疼痛の機能結合の変化			第48回日本臨床神経生理学会学術大会、東京、2018.11.9～	細見晃一1,2，清水豪士1-3，森信彦4，眞野智生1,2，渡邉嘉之5，柴田政彦6，寒重之7，Khoo Hui Ming2，谷直樹2，押野悟2，貴島晴彦2，齋藤洋一1,2 1大阪大学大学院医学系研究科脳神経機能再生学，2大阪大学大学院医学系研究科脳神経外科学，3大手前病院脳神経外科，4和歌山県立医科大学附属病院紀北分院リハビリテーション科，5大阪大学大学院医学系研究科次世代画像診断学，6奈良学園大学保健医療学部，7大阪大学大学院医学系研究科麻酔科学
28)安静時fMRIを用いた脳機能的結合解析による頚髄症の新規予後予測法の開発		平成30年4月	第47回日本脊椎脊髄病学会学術集会、神戸、2018.4.12～14	海渡貴司1，寒重之2，武中章太1，牧野孝洋1，坂井勇介1，串岡純一1，田中壽3，渡邉嘉之3，柴田政彦2，吉川秀樹1 1大阪大学整形外科，2大阪大学医学部疼痛医学講座，3大阪大学医学部放射線統合医学講座
29)痛みの行動科学		平成30年6月	第40回日本疼痛学会、長崎、2018.6.15～16	
30)中枢性脳卒中後疼痛の神経画像研究と非侵襲脳刺激療法		平成30年6月	第40回日本疼痛学会、長崎、2018.6.15～16	細見晃一1,2，清水豪士1,2,3，眞野智生1,2，森信彦4，渡邉嘉之5，柴田政彦6，貴島晴彦2，齋藤洋一1,2 1大阪大学大学院医学系研究科 脳神経機能再生学，2大阪大学大学院医学系研究科 脳神経外科学，3大手前病院 脳神経外科，4和歌山県立医科大学附属病院紀北分院 リハビリテーション科，5大阪大学大学院医学系研究科 放射線医学，6大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学
31)中枢機能障害性疼痛患者を特徴づける脳部位間機能的結合の機械学習による検討		平成30年6月	第40回日本疼痛学会、長崎、2018.6.15～16	寒重之1，大迫正一2，植松弘進2，田中壽3，渡邉嘉之4，柴田政彦1 1大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，2大阪大学大学院医学系研究科 麻酔・集中治療医学教室，3大阪大学大学院医学系研究科 放射線部，4大阪大学大学院医学系研究科 放射線統合医学講座
32)過活動の慢性痛患者への認知行動療法　入院治療における多職種連携の一事例		平成31年8月	第19回日本認知療法・認知行動療法学会、東京、2019.8.31～9.1	榎本 聖香(大阪大学 大学院人間科学研究科)，安達 友紀，佐々木 樹，津田 清香，中原 理，高橋紀代，佐々木 淳，柴田 政彦
33)安静時functional MRIを用いた頚髄症患者の脳局所活動評価における可塑性，予後予測		平成31年4月	第48回日本脊椎脊髄病学会学術集会、横浜、2019.4.18～20	武中章太1，海渡貴司1，寒重之2，牧野孝洋1，坂井勇介1，串岡純一1，田中壽3，渡邉嘉之3，柴田政彦4，吉川秀樹1 1阪大大学院整形，2阪大大学院麻酔集中医療医学，3阪大大学院放射線医学，4奈良学園大保健医療学部看護学科
34)中枢性脳卒中後疼痛のアウトカム評価		平成31年7月	第41回日本疼痛学会、名古屋、2019.7.12～13	細見晃一1,2，森信彦1,2，眞野智生1,2，柴田政彦3，貴島晴彦2，齋藤洋一1,2 1大阪大学大学院医学系研究科 脳神経機能再生学，2大阪大学大学院医学系研究科 脳神経外科学，3奈良学園大学
35)中枢性脳卒中後疼痛における中枢神経感作		平成31年7月	第41回日本疼痛学会、名古屋、2019.7.12～13	細見晃一1，森信彦1，渡邉嘉之2，柴田政彦3，貴島晴彦4，齋藤洋一1 1大阪大学大学院医学系研究科 脳神経機能再生学・脳神経外科学，2大阪大学大学院医学系研究科 次世代画像診断学，3奈良学園大学 保健医療学部，4大阪大学大学院医学系研究科 脳神経外科学

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
36)中強度負荷を目的とした自転車エルゴメーターによる有酸素運動のプロトコル作成の検討		平成31年11月	第12回日本運動器疼痛学会、東京、2019.11.30～12.1	丸山伸廣1)，浦澤純一1)，中原理1)，高橋紀代1)，柴田政彦2) 1)千里山病院，2)奈良学園大学保健医療学部
37)当院の集学的痛みセンター外来における中断者の特徴について		平成31年11月	第12回日本運動器疼痛学会、東京、2019.11.30～12.1	中原理1)，高橋紀代1)，柴田政彦2) 1)千里山病院，2)奈良学園大学保健医療学部
38)訪問リハビリテーション利用者の転倒と疼痛の心理的側面との関連		平成31年11月	第12回日本運動器疼痛学会、東京、2019.11.30～12.1	赤尾祥吾1)，鳴尾彰人1)，西上智彦2)，高橋紀代1)，柴田政彦3) 1)篤友会リハビリテーションクリニック，2)甲南女子大学看護リハビリテーション学部，3)奈良学園大学保健医療学部
39)慢性痛を有する訪問リハビリテーション利用者の疼痛や生活機能の縦断的変化		平成31年11月	第12回日本運動器疼痛学会、東京、2019.11.30～12.1	鳴尾彰人1)，赤尾祥吾1)，西上智彦2)，高橋紀代1)，柴田政彦3) 1)篤友会リハビリテーションクリニック，2)甲南女子大学看護リハビリテーション学部，3)奈良学園大学保健医療学部
40)脳機能画像解析による手術6か月後の満足度の予測 －圧迫性脊髄症患者での検証		平成31年7月	日本ペインクリニック学会第53回大会、熊本、2019.7.18～20	柴田政彦1)，寒重之2) 1)奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科，2)大阪大学大学院医学系研究科 生体統御医学講座 麻酔集中治療医学教室
41)帯状疱疹後神経痛患者における脳の可塑的変化に対する安静時機能的MRIによる検討		平成31年7月	日本ペインクリニック学会第53回大会、熊本、2019.7.18～20	恒遠剛示1,2)，寒重之3)，柴田政彦4) 1)牧整形外科病院 麻酔科・ペインクリニック科，2)兵庫医科大学病院 ペインクリニック部，3)大阪大学大学院医学系研究科 生体統御医学講座，4)奈良学園大学保健医療学部
癌性疼痛を有する進行膵癌患者に対する腹腔神経叢ブロックの影響に関する予備的後方視調査	共著	令和3年7月	Palliative Care Research(1880-5302)17巻Suppl. Page S.245(2022.07)	大前 隆仁(芦屋市立芦屋病院 緩和ケア内科)，柴田 政彦，岡本 禎晃，松田 良信，山下 由紀子，河野 真揮枝，武田 亜衣，加治佐 直子，橋野 陽子，江頭 佐都美，橋本 百世
医療者による教育的な関りによってADL・疼痛の著明な改善をもたらした一症例(会議録)	共著	令和3年10月	Journal of Musculoskeletal Pain Research(2186-2796)14巻4号 Page S45(2022.10)	浦澤 純一(千里山病院)，中原 理，前田 吉樹，高橋 紀代，柴田 政彦
慢性疼痛を含む身体症状証に対する認知行動療法と身体的治療とのコンビネーションについて		令和3年12月	第21回日本認知行動療法・認知行動療法学会シンポジウム	企画・座長　柴田政彦・富永敏行 シンポジスト　富永敏行・清水栄司・岩佐和典・上野博司

別記様式第４号（その１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　員　個　人　調　書

履　歴　書

フ　リ　ガ　ナ	シバタ　マサヒコ	性別	男	生年月日（年齢）	昭和34年　1月　24日　（満62歳）
氏　　名	柴田　政彦				
国　　籍	日本国	現住所	〒665-0062 兵庫県宝塚市仁川高台1-1-7		
月額基本給	千円				

学　歴

年　月	事　項
昭和53年4月	大阪大学医学部医学科入学
昭和60年3月	大阪大学医学部医学科卒業　医学士
昭和60年5月	医師免許（第291103号）
平成10年5月	大阪大学大学院医学系研究科　博士（医学 第14051号）
	「博士論文名：The effect of electroconvulsive treatment on thermal hyperalgesia and mechanical allodynia in a rat model of peripheral neuropathy. Anesth Analg 86:584-7,1998」
平成29年4月	臨床心理士免許（第33329号）
平成31年4月	公認心理師（第22882号）

職　歴

年　月	事　項
昭和60年7月	大阪大学医学部附属病院麻酔科　医員（昭和61年6月まで）
昭和61年7月	大阪警察病院麻酔科　医員（平成元年6月まで）
平成元年7月	佐賀医科大学麻酔科学教室　助手（平成2年6月まで）
平成2年7月	市立西宮中央病院麻酔科　副医長（平成5年3月まで）
平成5年4月	市立西宮中央病院麻酔科　医長（平成5年6月まで）
平成5年7月	大阪大学大学院医学系研究科麻酔集中治療医学教室　助手（平成16年12月まで）
平成17年1月	千里A&Hペインクリニック　勤務医（平成17年6月まで）
平成17年4月	大阪大学大学院医学系研究科麻酔集中治療医学教室　臨床助教授（兼任） （平成19年3月まで）
平成17年7月	市立芦屋病院麻酔科　部長（平成19年3月まで）
平成19年4月	大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座　教授（平成30年3月まで） 担当科目：『麻酔学』『臨床医学特論』『薬物治療学Ⅲ』
平成25年4月	大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター 副センター長（平成30年3月まで）
平成30年4月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科教授（現在に至る） 担当科目：『生化学』『疾病治療論』『人体機能学』『内部障害学』『ペインコントロール論』『疼痛学概論』『疼痛リハビリテーション学』『疫学』

学　会　及　び　社　会　に　お　け　る　活　動　等

現在所属している学会	日本麻酔科学会、日本疼痛学会、日本運動器疼痛学会、日本ペインクリニック学会、日本慢性疼痛学会、国際疼痛学会、日本心療内科学会、日本リハビリテーション医学会、日本賠償科学会

年　月	事　項
	「学会活動」
昭和60年4月	日本麻酔科学会　入会　（現在に至る）
平成元年4月	日本ペインクリニック学会　入会　（現在に至る）
平成2年4月	日本疼痛学会　入会　（現在に至る）
平成2年4月	日本慢性疼痛学会　入会　（現在に至る）
平成2年4月	国際疼痛学会　入会　（現在に至る）
平成10年4月	日本運動器疼痛学会　入会　（現在に至る）
平成22年4月	日本賠償科学会　入会（現在に至る）

平成25年4月	日本リハビリテーション医学会　入会　（現在に至る）
平成29年4月	日本心療内科学会　入会　（現在に至る）
	「認定医および学会での役職」
昭和63年3月	麻酔科標榜医
平成4年4月	麻酔科指導医
平成6年6月	日本ペインクリニック学会認定医
平成15年7月	日本ペインクリニック学会　評議員（現在に至る）
平成24年4月	日本疼痛学会理事　（現在に至る）
平成27年11月	日本運動器疼痛学会　監事　（現在に至る）
	「研究活動」
平成22年度～平成23年度	厚生労働省科学研究費補助金・難治性疾患克服研究事業・脊髄障害性疼痛症候群の実態の把握と病態の解明に関する研究 研究代表者 牛田享宏（愛知医科大学）研究分担者　戸山芳昭　菊池臣一　谷俊一 田口敏彦　山下敏彦　高安正和　竹下克志　中村雅也　内田研造　井上和秀　野口光一 上野雅文　中村裕之　　柴田政彦 平成22年度　19,500千円　平成23年度　13,000千円
平成23年度～平成24年度	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）「脳機能画像を用いた運動時痛の解明と治療法の開発」 研究代表者　研究分担者　松田陽一　井上隆弥　坂上学　植松弘進 研究経費：平成22年度　2,860千円　平成23年度　910千円、　平成24年度　910千円
平成23年度～平成24年度	厚生労働省科学研究費補助金・慢性の痛み対策研究事業・難治性疼痛の実態の解明と対応策の開発に関する研究 研究代表者　牛田享宏（愛知医科大学）研究分担者　山下敏彦 平田 仁　片山容一 井関雅子　内田研造 神谷光広　細井昌子 柿木隆介　河野達郎 佐藤純　中塚映政　橋本亮太 中村裕之　田倉智之　安田哲行　鈴木重行　小林章雄　大森豪 柴田政彦 平成23年度 40,300千円、平成24年度　41,103千円
平成23年度～平成25年度	日本損害保険協会2011年度交通事故医療特定課題研究助成「新しい運動療法の開発： 脳機能画像を応用し、外傷後の『痛みの慢性化』に対して有効な運動療法を開発する」 研究代表者 5,000千円
平成23年度～平成25年度	厚生労働科学研究費補助金・慢性の痛み対策研究事業「痛み」に関する教育と情報提供システムの構築に関する研究 研究代表者　研究分担者　井関雅子　横山正尚　山下敏彦　竹林庸雄　池本竜則　小山なつ　中塚映政 細井昌子　宮岡等　宮地英雄　亀田秀人　今村佳樹　大島秀規　平田幸一　沖田実　住谷昌彦　和佐勝史 長櫓巧　竹下克志　中村雅也　牛田享宏　井上玄　岩田幸一　矢谷博文　和嶋浩一　川真田樹人　鈴木勉 三木健司　北原雅樹　堀越勝　史賢林 研究経費：平成23年度5,200千円、　平成24年度5,200千円、平成25年度5,200千円
平成25年度～平成26年度	厚生労働省科学研究費補助金・慢性の痛み対策研究事業・慢性の痛みの診療の基盤となる情報の集約とより高度な診療の為の医療システム構築に関する研究 研究代表者　牛田享宏（愛知医科大学）研究分担者　山下敏彦　矢吹省司 井関雅子　北原雅樹　中村雅也　竹下克志　松平浩　中村裕之　松原貴子　福井聖 田倉智之　西江宏行　横山正尚　細井昌子　西尾宏文　浅井雅代　柴田政彦 平成25年度　39,000千円、平成26年度　44,200千円
平成26年度	厚生労働省科学研究委託事業・慢性の痛み解明研究事業「慢性痛に対する認知行動療法の普及と効果解明に関する研究」 研究代表者　研究分担者　堀越勝　北原雅樹　井関雅子　住谷昌彦　山本則子　高井ゆかり　今村佳樹 井上玄　宮岡等　佐々木淳　小山なつ　木村慎二　沖田実　松原貴子　西上智彦　鈴木勉　祖父江友孝 池本竜則　大江悠樹　高岸百合子　岩佐和典　福森崇貴　蟹江絢子 平成26年度　6,287千円
平成27年度～平成28年度	国立研究開発法人日本医療研究開発機構AMED慢性の痛み解明研究事業　「慢性痛に対する認知行動療法の普及と効果解明に関する研究」 研究代表者 研究分担者　堀越　勝　北原雅樹　住谷昌彦　山本則子　高井ゆかり　木村慎二　松原貴子 西上智彦　鈴木勉　祖父江友孝　池本竜則　大江悠樹　高岸百合子　岩佐和典　福森崇貴　蟹江絢子 岡本禎晃　松平　浩　西江宏行　高橋紀代　新明一星　細越寛樹　深井英佑
平成26年度～平成28年度	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）「CRPS患者の運動障害における脳機能異常」 研究代表者　研究分担者　渡邉嘉之　寒重之　西上智彦　植松弘進　宮内哲 平成26年度　2,340千円、平成27年度　1,170千円、平成28年度　1,560千円

平成27年度	日本損害保険協会2015年度交通事故医療一般研究助成金「安静時fMRIを用いた外傷後遷延痛患者の痛み及び機能回復に関する予測手法の開発 研究代表者 5,000千円
平成27年度～ 平成29年度	厚生労働科学研究費補助金・慢性の痛み政策研究事業　「慢性の痛み診療・教育の基盤となるシステム構築に関する研究」 研究代表者　牛田享宏（愛知医科大学）研究分担者　山下敏彦　矢吹省司　木村慎二 山口重樹　加藤実　井関雅子　北原雅樹　住谷昌彦　松平浩　川口善治　中村裕之　松原貴子 笠井裕一　福井聖　田倉智之 西田圭一郎　尾形直則　田口敏彦　河野崇　西尾芳文　細井昌子 門司晃　柴田政彦 平成27年度　44,200千円、平成28年度　50,000千円、　平成29年度　50,000千円
平成27年度～ 平成28年度	国立研究開発法人日本医療研究開発機構AMED・慢性の痛み解明研究事業・診断・治療法の開発を目指した痛み慢性化脳機構に関するトランスレーショナル研究 研究代表者　加藤総夫（東京慈恵会医科大学）研究分担者　南雅文　岡野ジェイムス洋尚 柴田政彦 平成27年度 9,917千円、　平成28年度 9,965千円
平成27年度～ 平成29年度	厚生労働科学研究費補助金・新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業・「子宮頸がんワクチンの有効性と安全性の評価に関する疫学調査」 研究代表者　祖父江友孝（大阪大学）研究分担者　垣添忠生　福島若葉 原めぐみ　榎本隆之　上田豊　宇川義一　平田幸一　岡明　宮本信也　喜多村祐里　柴田政彦 平成27年度　44,980千円、　平成28年度　35,000千円、　平成29年度　26,000千円
平成27年度～ 平成28年度	国立研究開発法人日本医療研究開発機構AMED・「統合医療」に係る医療の質向上・科学的根拠収集研究・線維筋痛症に対する統合医療的介入の評価手法に関する研究 研究代表者　伊藤嘉記（大阪大学）　研究分担者　新谷歩　寒重之　仙波恵美子 渡邉嘉之　牛田享宏　井上真輔　伊藤和憲　林紀行　柴田政彦 平成27年度　4,940千円、平成28年度　4,940千円
平成27年度～ 平成29年度	国立研究開発法人日本医療研究開発機構AMED・慢性の痛み解明研究事業・神経画像検査法を用いた中枢性脳卒中後疼痛の客観的指標の探索と革新的非侵襲脳刺激療法の開発 研究代表者　平田仁（名古屋大学）研究分担者　寳珠山稔　岩月克之 岩崎倫政　三上容司　寒重之　三木健司　住谷昌彦　森岡周　大野欽司　柴田政彦 平成27年度　7,410千円、平成28年度　6,890千円　平成29年度　6,669千円
平成28年度～ 平成29年度	文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）「線維筋痛症患者に対する運動療法の効果の検証：脳内ネットワークの変化を指標として」 研究代表者　藤田信子（大阪行岡医療大学）　研究分担者　仙波恵美子 行岡正雄　寒重之　柴田政彦　高井範子　堀竜次　高橋紀代 平成27年度　3,120千円、平成28年度　780千円、平成29年度　910千円
平成29年度	厚生労働省慢性疼痛診療体制構築モデル事業補助金　怒りや恨み、不公平感などの情動に伴う慢性疼痛の実態に関する研究 研究代表者　研究分担者　安達友紀　橋本淳 平成29年度　7,992千円
平成29年度	日本損害保険協会2017年度交通事故医療一般研究助成金「外傷後遷延痛に伴う生活障害の維持・増悪要因としての重要他者の破局化：重要他者の破局化の評価法と外傷後遷延痛の維持・増悪モデルの検証」 研究代表者　平成29年度　2,650千円
令和元年度から 令和２年度	国立研究開発法人日本医療研究開発機構AMED・慢性の痛み解明研究事業・「怒りや恨み、不公平感などの情動に伴う慢性疼痛の実態に関する研究」 研究代表者　令和元年度7,150千円　令和２年度6,435千円
	「社会活動」
平成27年4月 ～現在	芦屋市保健センター運営審議会委員長

賞　　罰	
年　月	事　　項
年　　月	なし

現　在　の　職　務　の　状　況			
勤　務　先	職名	学部等又は所属部局の名称	勤務状況
奈良学園大学	教授	保健医療学部リハビリテーション学科	リハビリテーション学・看護学の教育・研究に従事
大阪大学	招へい教授	大学院医学系研究科	臨床医学特論、環境健康リスク論（修士公衆衛生学コース）、総合内科、薬物治療学（薬学部）　講義
神戸大学	非常勤講師	外科系講座・麻酔科学分野	麻酔科学　講義
滋賀医科大学	非常勤講師	大学院医学系研究科	麻酔・緩和医療学　講義
市立芦屋病院	医師	麻酔科	1日/週　ペインクリニックと緩和ケアチームにおける診療と教育に従事
開　設　後　の　職　務　の　状　況			
勤　務　先	職名	学部等又は所属部局の名称	勤務状況

上記のとおり相違ありません。

2021年　8月　15日

氏名　柴 田　政 彦　印

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

2021年8月15日

氏名　　印

研究分野	研究内容のキーワード
行動科学　認知脳科学 リハビリテーション医学	痛み　脳機能画像　集学的診療 行動科学　生物心理社会モデル

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1）プリント、スライド、ディスカッション、レポートの活用	平成21年4月 ～ 平成30年3月	大阪大学医学部付属病院新研修医プログラム、大阪大学医学部の新研修医を対象に血管穿刺の方法と注意点について講義した　新研修医は医師として血管穿刺の基本的な方法とそのリスクについて学んだ。
	平成24年4月 ～ 平成30年3月	大阪大学医学部医学科　「麻酔学」、局所麻酔、伝達麻酔、医学生は局所麻酔と伝達麻酔について学び、臨床医としての基礎的な情報を得た。
	平成24年4月 ～ 現在に至る	大阪大学医学部医学科「臨床医学特論」、痛みについて医師として学ぶべき痛みの基礎知識の整理と、慢性痛の概念、評価方法、治療法について講義した。学生は痛みの基礎知識を学び、慢性痛治療の基本的な情報を得ることができた。
	平成24年4月 ～ 現在に至る	大阪大学薬学部「薬物治療学Ⅲ」、薬学部の学生に対し、痛みの基礎知識と種々の鎮痛薬について講義をおこなった。薬学生は薬剤師としての痛みに関する基本的な知識を身につけた。
	平成29年4月 ～ 現在に至る	滋賀医科大学医学部医学科「麻酔・緩和医療学」、慢性疼痛に対する学際的治療、認知行動療法、慢性痛に対する集学的診療について講義した。学生は慢性痛の集学的診療について基本的な知識を入手した。
2）臨地実習における体験型学習	平成5年4月 ～ 平成26年3月	主に医学部5年次を対象に、痛みを対象とした医療の臨床研修を指導した。学生は特殊な痛み医療の現場を学び、医師としての基本的な診療技術を身につけることができた。
	平成24年4月 ～ 現在に至る	甲南女子大学　人間科学部 一人当たり5時間程度のペインクリニック研修、学生はペインクリニックの現場を見学することで、診療、とりわけ難治性の疼痛患者に対するコミュニケーションの基本や注意点を知ることができた。

事項	年月日	概　　要
２　作成した教科書，教材 1）痛みの教育コンテンツ提供システム	平成23年4月 ～ 現在に至る	厚生労働科学研究「痛みに関する教育と情報提供システムの構築に関する研究」及び　AMED研究「慢性痛に対する認知行動療法の普及と効果解明に関する研究」の取り組みで、「痛みの教育コンテンツ」というPowerPointスライドを作成した。コンテンツは医学教育用・リハビリテーション医学・歯学・薬学・看護教育用があり、内容は痛みに関する基礎医学、概論、評価法、臨床的内容、社会的問題など多岐にわたり、初学者に学んでもらえるよう可能な限り平易な内容にし、学生講義、実習、院内の勉強会、研究会などに活用できるシステムを構築した。ダウンロード件数は１万件を超える。完全無償化とすることで、各大学の授業・現職者向けのセミナー等において幅広く活用されている。
2）痛みの集学的診療：痛みのコアカリキュラム（再掲）	平成28年10月 真興交易 全347頁	「痛みの教育コンテンツ」を書籍として発行。平成29年度厚労省慢性疼痛診療体制構築モデル事業における医師・理学作業療法士・心理士向けの各セミナーにおいて、講師の話す内容・要点・表現などを統一する上で役立っている。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1）大阪大学における授業評価アンケート	平成24年4月 ～ 現在に至る	「臨床医学特論」での講義に関しては、学生からのアンケートには「心理・社会モデルに基づく痛みの見方がわかってよかった」といった意見もあり、高評価であった
４　実務の経験を有する者についての特記事項 「研究会・NPO法人」 1）疼痛勉強会代表世話人	平成2年4月 ～ 平成30年3月	関西地区の痛み専門医の研修を目的として年二回の研修会を運営
2）CRPS研究会世話人	平成20年4月 ～ 平成30年3月	厚生労働省研究班終了後、全国のCRPS研究者による研究会を企画・運営
3）関西痛みの診療研究会代表世話人	平成23年4月 ～ 現在に至る	関西地区の痛み専門医療者の研修を目的として年一回の研修会を運営
4）ＮＰＯ痛み医学研究情報センター講師	平成24年4月 ～ 平成30年3月	医療者向けの研修会における研修内容の会議に出席、研修会の運営及び講師
「講演」 1）医療の立場から"身体"について	平成18年10月	シンポジウム　「JR福知山線列車事故を考える」この事故の捉え方と”こころ”と”身体”の後遺症について　於：三田市まちづくり協同センター
2）　慢性痛の評価と治療	平成23年4月	第28回　日本医学会総会　於：東京国際フォーラム

事項	年月日	概　　要
3)「後遺障害診断書において痛みを扱うか?」	平成25年10月	第15回自賠責講演会　於：神戸
4)「慢性痛の成り立ちと対策」	平成27年3月	第15回痛みの研究会　講演　於：九州大学医学部百年講堂
5)「ファブリー病に伴う神経障害性痛について」	平成27年4月	一般社団法人 全国ファブリ―病患者と家族の会基調講演　於：大阪大学医学部附属病院
6) 難知性疼痛の治療戦略、オピオイドの長期使用について	平成27年4月	J-PAT PA2　於：東京コンベンションホール
7) 慢性疼痛の基礎知識、慢性疼痛の評価と治療方針、疾患別各論	平成27年6月	J-PAT FULL　於：ルポール麹町
8) 難知性疼痛の治療戦略	平成27年7月	J-PAT PA2　於：メルパルク大阪
9)「一歩踏み込んだ痛みの治療」	平成27年7月	芦屋市医師会講演会 於：芦屋市医師会館
10)　難知性疼痛の治療戦略	平成27年8月	J-PAT PA2　於：TKPガーデンシティ大阪梅田
11)「運動器疼痛を対象とした脳機能画像研究と治療応用」	平成27年9月	第3回運動器疼痛を考える会　於：東京
12)「痛みの慢性化と集学的アプローチの意義―脳機能画像研究から見えてくるもの」	平成27年10月	第５回　脊椎の痛みを学ぶ会in九州 於：福岡サンパレス
13)「複合性局所疼痛症候群　-補償上の問題点」	平成27年12月	日本損害保険協会「名古屋医療セミナー」
14) 難知性疼痛の治療戦略、オピオイドの長期使用について	平成28年4月	J-PAT PA2　於：ホテルグランヴェア大阪
15) 慢性疼痛の基礎知識、慢性疼痛の評価と治療方針、疾患別各論	平成28年6月	J-PAT FULL　於：ホテルアゴーラリージェンシー堺
16)　慢性疼痛の基礎知識、慢性疼痛の評価と治療方針、疾患別各論	平成28年8月	J-PAT FULL　於：東京コンベンションホール
17)「慢性痛に対する集学的アプローチについて」	平成28年8月	OSAKA疼痛治療セミナー講演会 於：シェラトン都ホテル大阪

事項	年月日	概　　要
18) 慢性疼痛の評価と治療方針、 疾患別各論	平成28年10月	J-PAT FULL　於：JPタワーホール&カンファレンス
19)「複合性局所疼痛症候群　-補償上の問題点」	平成28年11月	日本損害保険協会「さいたま医療セミナー」
20)「痛みの責任は誰にあるのか？」	平成28年11月	日本麻酔医事法制研究会講演ファブリー病に伴う神経障害性痛についてファブリー病に伴う神経障害性痛について
21)「何故　今？　慢性痛対策が重要なのか？」	平成29年1月	文部科学省課題解決型事業「慢性疼痛患者の生きる力を支える人材育成」キックオフ･セミナー　名古屋市立大学桜山キャンパスさくら講堂
22)「慢性疼痛に対する治療の現状と将来の展望」	平成29年1月	第56回日本定位・機能神経外科学会シンポジウム 於：グランフロント大阪コングレコンベンションセンター
23)　「飛翔」	平成29年6月	第39回日本疼痛学会　会長講演 於：神戸国際会議場
24)「複合性局所疼痛症候群　-補償上の問題点」	平成29年7月	日本損害保険協会「東京医療セミナー」
25)「ICD-11への改訂に向けての慢性痛」	平成29年7月	第51回日本ペインクリニック学会リフレッシャーコース　　於：長良川国際会議場
26)「大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでの集学的診療について」	平成29年10月	日本線維筋痛症学会第9回学術集会シンポジウム 於：千里ライフサイエンスセンター
27)「Alteration of resting state networks in patients with fibromyalgia, CRPS and other functional somatic pain syndrome」 （線維筋痛症、CRPS、機能性疼痛症候群患者における安静時脳内ネットワーク活動の変化）	平成29年10月	The 7th Asian Pain Symposium Preliminary Scientific Program, Taiwan （アジア疼痛シンポジウム：プレ大会，台湾）
28)「慢性痛医療のバランス」	平成29年11月	イーライリリー社Painアドバイザリー会議

事項	年月日	概　　要
5　その他 1）博士学位論文指導実績　（25名）	平成17年4月 ～ 現在に至る	神経障害性疼痛に対するリチウムの効果・神経障害性疼痛におけるNOの役割・神経障害性疼痛に伴う情動の変化・神経障害性疼痛に対する牛車腎気丸の効果・神経障害性疼痛におけるSerotonin2C receptor mRNA の役割・CRPS患者における中枢機能の障害・機械的刺激による痛みの認知機構（2名）・運動時痛の認知機構・慢性痛患者における不公平感・腕神経叢引き抜き損傷後痛の治療成績など11名に対してそれぞれ2－4年間指導した。
2）学位論文査読（副査 1名）	平成28年3月	研究テーマ：下肢の難治性神経障害性疼痛に対するHコイルによる反復経頭蓋磁気刺激の除痛効果

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）医師免許	昭和60年5月27日	第291103号
2）博士（医学）	平成10年5月29日	大阪大学大学院医学系研究科　第14051号
3）麻酔科学会 指導医	平成4年4月	第24125号
4）日本ペインクリニック学会認定医	平成6年6月	第19940054号
5）臨床心理士免許	平成29年4月	第33329号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）臨床歴及び実務歴	昭和60年7月 ～ 昭和61年6月	大阪大学医学部附属病院麻酔科において 診察に従事
	昭和61年7月 ～ 平成元年6月	大阪警察病院麻酔科において診察に従事
	平成元年7月 ～ 平成2年6月	佐賀医科大学麻酔科教室において助手として 診察に従事
	平成2年7月 ～ 平成5年6月	西宮市立中央病院麻酔科にて副医長・医長として 診察に従事
	平成5年7月 ～ 現在に至る	大阪大学医学部附属病院麻酔科にて 診察に従事
	平成17年1月 ～ 平成17年6月	千里A&Hペインクリニックにて診療に従事
	平成17年4月 ～ 平成19年3月	大阪大学大学院医学系研究科臨床助教授を兼任 疼痛医療センターのカンファレンスに出席、若手医師の教育および麻酔学教室の研究に従事した。
	平成17年7月 ～ 平成19年3月	市立芦屋病院麻酔科部長として診療に従事

事項	年月日	概　　要
	平成19年4月 ～ 現在に至る	大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座寄附講座教授就任
	平成25年4月 ～ 現在に至る	疼痛医療センター副センター長就任
2）麻酔科指導医	平成5年4月 ～ 現在に至る	麻酔科指導医として約100名の研修医を指導
4　その他 1）芦屋市保健センター運営審議会委員長	平成27年4月 ～ 現在に至る	審議会に出席し、芦屋市保健センター審議会の進行役を務めるとともに、指導・助言をおこなう。
2）治験における医学専門家	平成29年8月 ～ 現在に至る	治験の遂行を適切に実施するための医学的観点からの助言（日本臓器製薬株式会社）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1）長引く・頑固な・つらい痛み 薬物療法2011	共著	平成23年5月	㈱CBR	臨床医が治療に難渋する「長引く・頑固な・つらい手・足・腰・筋・関節などの痛み」に対する薬物療法の今日の治療指針について解説。最新の知見に基づいて病理、病態生理から治療のメカニズムまでを概観し、とりわけ薬物療法に関する科学的裏付けを詳細に示した。薬物は非オピオイド系から向精神薬、筋弛緩薬、抗リウマチ薬、さらには漢方薬までを網羅しており、各症候に対するベストプラクティス、薬物相互作用、Drug informationなども紹介。非専門医でも薬物治療のマネジメントができるよう解説した。 B5判・168頁 編者：米延策雄，菊池臣一，柴田政彦 共著者：柴田政彦，田口敏彦，関口美穂，紺野慎一，竹下克志，西本憲弘，史賢林，橋本淳，安田由華，大井一高ほか15名 本人担当部分： 「第2章 痛みを有する患者に対する薬の使い方」P12-35を共著 鎮痛薬投与に関する患者の痛みの評価、薬物の選択基準、その効果について解説。 共著者：柴田政彦，田口敏彦，関口美穂，紺野慎一
2）癌性疼痛 ＦＯＲ ＰＲＯＦＥＳＳＩＯＮＡＬ ＡＮＥＳＴＨＥＳＴＯＬＯＧＩＳＴ，Ｖ	共著	平成25年7月	克誠堂出版	癌の痛みを理解する知識を全て網羅。癌性疼痛の発症機序、使用する薬物、オピオイドの使用法と副作用、鎮痛補助薬、在宅医療などの各項目を解説。ＷＨＯ方式の癌性疼痛治療法や、オピオイドの副作用とその対処、オピオイドが効きにくい痛みとその治療法にも触れる。さらには鎮痛補助薬や各種代替療法、在宅医療における癌性疼痛への対処法などについても解説した。 A4判・321頁 編者：花岡一雄 共著者：柴田政彦，松田陽一，眞下節，花岡一雄，細川豊史，佐伯茂，有田英子，村川和重，小川節郎，下山直人ほか39名 本人担当部分： 「神経ブロック療法」 P203-209を共著 癌の痛みに対する各種神経ブロックの方法について，そのエビデンスと手技について解説。 共著者：柴田政彦，松田陽一，眞下節
3）運動器慢性痛診療の手引き	共著	平成25年11月	南江堂	局所の組織由来ではない運動器の慢性痛、なかでも神経経路や記憶、精神面などに影響を受ける慢性痛における診療マニュアル。、痛みを修飾するメカニズムの解明とその対策について解説。さらに整形外科医が使ってこなかった中枢系に作用する薬剤の使い方などについて、日本整形外科学会運動器疼痛対策委員会の成果をまとめた。 A4判・180頁 編者：田口敏彦，山下敏彦，牛田享宏 共著者：柴田政彦，中村雅也，関口美穂，紺野慎一，米和徳，中尾慎一，福井大輔，川上守，大鳥精司，ほか15名 本人担当部分： 「複合性局所疼痛症候群」 P168-173を単著 複合性局所疼痛症候群の疾患概念と評価、治療方針について解説。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4) ペインクリニシャンのための新キーワード135	共著	平成26年5月	真興交易(株)医書出版部	ペインクリニック診療の現場でよく用いられる135項目のキーワードを、基礎的用語・病態および疼痛性疾患・痛みの評価法・神経ブロック・治療法(神経ブロック以外)・その他の6章分別、体系的に分かりやすく解説した。『痛みの概念が変わった 新キーワード100+α』(2008年刊)を基に、スピリチュアルペイン・無痛分娩など新たな項目を加え、最新のガイドライン・治験等を踏まえ概説した。 A4判・368頁 編者：小川節郎 共著者：柴田政彦，山田芳嗣，小川節郎，細川豊史，森本昌宏，井関雅子，三木健司，牛田享宏，川股知之，児玉謙次ほか84名 本人担当部分： 第二章 病態「CRPS」 P73-74を共著 CRPSの病院、疫学、判定指標やその注意点について解説。 共著者：住谷昌彦，柴田政彦，山田芳嗣
5) 増刊 レジデントノート あらゆる科で役立つ！ 麻酔科で学びたい技術	共著	平成25年6月	羊土社	麻酔科レジデントが、現代の麻酔の概念を理解できるように、また基本手技を習得できるように各種技術を解説。周術期管理の基本を押さえ、知っておくべき病気・病態の知識の整理ができるような構成となっている。 A4判・261頁 編者：萩平哲 共著者：柴田政彦，上山博史，森本康裕，増井健一，内田整，原真理子，柴田晶カール，車武丸，浅井隆，鈴木昭広，讃岐美智義，ほか20名 本人担当部分： 「硬膜外麻酔」 P107-112を単著 麻酔時の体位・主義・薬剤管理などから、硬膜外麻酔修得に要する技術について解説。
6) まれな疾患の麻酔 A to Z	共著	平成27年5月	文光堂	麻酔科医のために、およそ400の“まれな疾患”を取り上げて解説した。まれな疾患に遭遇した際、辞書を引くように検索でき、診療に直結する最新情報をすばやくアクセスできる構成とした。各項目の冒頭には麻酔中に「してしてよいこと」と「してはいけないこと（do or do not）」を【注意事項】として掲載、リスクマネジメント教育にも有用な構成となっている。 B5変型判・714頁 編者：高崎眞弓，河本昌志，木内恵子，白神豪太郎，萩平哲 共著者：柴田政彦，神崎理英子，瀬戸口秀一，外須美夫，重松研二，山浦健，小倉信，井手岳，又吉宏昭，ほか360名 本人担当部分： 「ハンセン病」 P479を単著 ハンセン病患者の病態生理・臨床症状と、術中麻酔時の留意事項について解説

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7）痛みScience&Practice臨床に役立つ神経障害性痛の理解	共著	平成27年5月	文光堂	近年、神経障害性痛は多くの研究者や専門医による様々な観点からの病態や治療法が探求されている。本書では痛み診療に従事する医師が最良の治療を行えるよう配慮。「痛みの機序に関する基礎は，末梢から中枢まで連続性や統一性のある解説」「神経障害性痛の正しい理解のため，その要素を一部有している疾患やその周辺疾患も含めて解説」「各疾患については，疫学，病態，治療法などを詳細に解説」これらに重点を置きつつ、実践的で分かりやすい構成で解説した。 A4判・285頁 編者：井関雅子 共著者：柴田政彦，佐々木美佳，河野達郎，大橋宣子，渡部達範，南雅文，津田誠，内田仁司，植田弘師，伊藤誠二，ほか102名 本人担当部分： 「線維筋痛症」 P238-241を単著 線維筋痛症の疫学・病態・症状と、その薬物治療について解説。
8）麻酔科学レビュー2016	共著	平成28年2月	総合医学社	研修医や若手麻酔科医に必要な麻酔科１４領域の知識を総括し、さらに２０１３～２０１４年に発表された文献の中で重要なもの１２０件を１頁１文献で紹介、開設を加えた。 AB判・300頁 編者：澄川耕二，岩崎寛 共著者：柴田政彦，川前金幸，小出康弘，神山有史，坂口嘉郎，貝沼関志，西川俊昭，原哲也，山蔭道明，浅井隆，ほか40名 本人担当部分： 「38. ペインクリニック」 P221－225を単著 ペインクリニックにおける神経ブロックやインターベンション、薬物治療に関するエビデンスについて最新のレビューを交え解説。
9）痛みの集学的診療：痛みのコアカリキュラム	共著	平成28年10月	日本疼痛学会、痛みの教育コアカリキュラム編集委員会 真興交易（株）医書出版部	慢性痛の診療を行うにあたり、医師や看護師だけでなく、多職種が集まる“集学的な診療チーム”により「生物心理社会モデル」として合理的に考えようとする取り組みが本邦でも始まっている。本書はそれらに携わる医療従事者への“教育”に必要な教科書として作成された。生物心理社会社会モデルの説明を中心に、慢性痛の分類をIASP（世界疼痛学会）の新しい分類に準拠して行い、特に重要と思われる言葉をキーワードとしてまとめた。 編者：西江宏之，北原雅樹，柴田政彦，福井聖，矢吹省司，山下敏彦 共著者：西江宏之，北原雅樹，柴田政彦，福井聖，矢吹省司，山下敏彦，小山なつ，仙波恵美子，高橋直人，笠原諭，井関雅子ほか25人 A4判・347頁 本人担当部分： 「一次性慢性痛」 P256－263を単著 １次性慢性痛の代表例として、線維筋痛症・過敏性腸症候群・慢性骨盤内疼痛について解説。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10）慢性疼痛疾患 診断と治療のABC	共著	平成28年6月	最新医学社	慢性疼痛疾患は大きく「侵害受容性疼痛」と「神経障害性疼痛」に分けられ，前者は末梢組織の障害が正常の知覚神経経路を伝達することで感じる痛み出るのに対し、後者は知覚神経伝達経路が障害されることにより生じる痛みである。痛みの原因が何であるかを診断することはその後の治療計画を立てる上でも非常に重要となる。本書では痛みの診断・評価法，薬物療法・理学療法・手術療法をはじめ、各部位からみた慢性痛の診断と治療を網羅した。さらに、また慢性疼痛に対する海外と本邦との診療体制の差とそれらの実情・課題についてもまとめた。 A4判・237頁 編者：田口敏彦 共著者：柴田政彦，井上雅之，細井昌子，二階堂琢也，松平浩，松原貴子，寒竹司，今村佳樹，福井聖，伊東勝也，ほか17名 本人担当部分： 「我が国における慢性疼痛に対する診療体制の実情と課題」」 P232－237を単著 本邦の慢性痛に対する診療の実情や問題点、集学的アプローチの可能性と課題・対策について解説。
11）慢性疼痛診療ハンドブック	共著	平成28年12月	中外医学社	「痛み」は診療における中核的な症状であり患者のQOLを著しく低下させる。なかでも特に慢性疼痛について様々な見地から解説を行う。痛みに関する科学的情報を発信するNPO法人「いたみ医学研究情報センター」の医療者教育用資料を再編集し、医師、理学・作業療法士、看護師、社会福祉士など、慢性疼痛のケアに悩むすべての方にとって役立つ内容を示した。 A5判・300頁 編者：池本竜則 共著者：柴田政彦，足立友紀，池本竜則，牛田享弘，石川理恵，井関雅子，北原雅樹，住谷昌彦，坂田尚子，西江宏行，内山徹ほか13名 本人担当部分： 「治療に難渋する慢性疼痛患者とは」 P14－26を共著 治療に難渋する慢性痛患者の特徴について、身体的要因・精神心理的要因・環境要因などの観点から解説、さらに代表的な難治性疼痛症例との関係性についても解説している。 共著者：柴田政彦，足立友紀
12)「痛みをやわらげる心の科学」最前線		令和4年6月	週間朝日 5779号 2022.6.3号　p26-27	
13）あなたVS慢性痛		令和4年7月	PRESDENT 第60巻第13号 2022.7.15号 p98-99	

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1) The Animal Model of Spinal Cord Injury as an Experimental Pain Model. （痛みの実験モデルとしての脊髄損傷動物モデル） （査読付）	共著	平成23年3月	Journal of Biomedicine and Biotechnology2011:1-11.	痛みは脊髄損傷患者にとって重要な問題の１つである。運動・自律神経障害とともに感覚障害も脊髄損傷研究を複雑にしている。さらに様々な要因の痛みもこれに関連する。これまで多くの脊髄損傷動物モデルがその病理学的な一般メカニズムの解明に役立ってきた。しかしながら、その結果は誤解して解釈されやすいものである。よってヒトの脊髄損傷の兆候を完全に理解することは重要である。本レビューでは、動物の脊髄損傷モデルについて概説し、そのそれらの有効利用例について紹介する。 本人担当部分：論文の執筆ととりまとめをおこなった。 共著者: Nakae A, Nakai K, Yano K, Hosokawa K, Shibata M, Mashimo T.
2) Brain imaging of mechanically induced muscle versus cutaneous pain. （脳機能画像における痛覚認知機構の解析 ： 筋由来の痛みと皮膚由来の痛みの比較検討） （査読付）	共著	平成23年5月	Neuroscience Research70(1):78-84	筋のみへの機械的刺激に反応する脳活動を機能的磁気共鳴画像法で評価し、皮膚と筋由来の痛みに反応する脳活動部位の比較を行った。皮膚への局所麻酔の有無により、「皮膚と筋への侵害圧刺激」条件、「筋のみへの侵害圧刺激」条件を比較した。皮膚由来の痛みによって第二次体性感覚野が活動しやすいことが示された一方で、筋への侵害圧刺激に特異的な脳領域はなく、代わりに特有の活動パターンがあることが明らかになった。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: Uematsu H, Shibata M, Miyauchi S, Mashimo T.
3) Differential efficacy of electric motor cortex stimulation and lesioning of the dorsal root entry zone for continuous vs paroxysmal pain after brachial plexus avulsion （腕神経叢引き抜き損傷後の持続的な痛みと発作的な痛みに対する大脳運動野電気刺激療法・脊髄後根侵入部微小凝固術の異なる効果） （査読付）	共著	平成23年5月	Neurosurgery, vol. 68, issue 5 (2011) pp. 1252-1257	腕神経叢引き抜き損傷後の異なる二つの痛み（持続的痛み・発作的痛み）に対し、大脳運動野電気刺激療法（EMCS）および脊髄後根侵入部微小凝固術（GREZotomy）が与える影響を検証した。15名の対象に対して治療介入を行った結果、DREZotomyの方が両方の痛みをより効果的に改善できることが示唆された。 本人担当部分： 患者の担当と調査結果を麻酔科医の立場から評価し、研究統括をおこなった。 共著者: Ali M, Saitoh Y, Oshino S, Hosomi K, Kishima H, Morris S, Shibata M, Yoshimine T

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4) Human brain activity associated with painful mechanical stimulation to muscle and bone （筋・骨組織に対する侵害圧刺激に関連するヒトの脳活動） （査読付）	共著	平成23年8月	Journal of Anesthesia, vol. 25, issue 4 (2011) pp. 523-530	筋組織と骨に対する侵害圧刺激を受けている際のヒトの脳活動を、機能的核磁気共鳴画像（fMRI）を用いて検証した。結果、基底核のいくつかの領域は骨よりも筋に対する刺激の際に強く活動がみられた。今回の結果は、筋の痛みの脳処理過程に被殻・尾状核が関与する可能性を示唆している。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: Maeda L, Ono M, Koyama T, Oshiro Y, Sumitani M, Mashimo T, Shibata M
5) 催眠による認知的評価と痛みの変化に関する研究 （査読付）	共著	平成23年10月	催眠学研究 53(1), 14-22.	催眠が痛みの耐性と認知的評価に影響を及ぼすかを検証した。被験者14名に痛み刺激として電気刺激を提示し、覚醒条件と催眠条件において痛みの耐性を比較した。結果、催眠条件では覚醒条件に比べて痛みに対する「妨害性」が減少し(Z=-2.94、p<.01)、「コントロール可能性」が増加する(t(13)=-2.71、p<.05)ことが示された。また、条件による「妨害性」の変化と「コントロール可能性」の変化の間に強い負の相関が見られた(r=-.56、p<.05)。催眠による痛みの軽減は痛み刺激の解釈の仕方の変化によって説明されうることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: 安達友紀, 宮田敬一, 中江文, 柴田政彦
6) 脳機能画像における痛覚認知機構の解析：筋由来の痛みと皮膚由来の痛みの比較検討 （査読付）	共著	平成24年5月	Journal of musculoskeletal pain research：日本運動器疼痛学会誌vol.3 (1) 52-62	筋のみへの機械的刺激に反応する脳活動を機能的磁気共鳴画像法で評価し、皮膚と筋由来の痛みに反応する脳活動部位の比較を行った。皮膚への局所麻酔の有無により、「皮膚と筋への侵害圧刺激」条件、「筋のみへの侵害圧刺激」条件を比較した。筋への侵害圧刺激に特異的な脳領域はなかったが、特有の活動パターンがあることが明らかになった。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆研究総括をおこなった。 共著者: 植松 弘進, 柴田 政彦, 大城 宜哲

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7) A Case of Hypogonadotropic Hypogonadism Caused by Opioid Treatment for Nonmalignant Chronic Pain. （非悪性慢性疼痛治療のためオピオイド療法によって低ゴナドトロピン性性機能低下をきたした症例） （査読付）	共著	平成24年12月	Case reports in medicine 2012:1-5.	本症例は、交通事故によって生じた慢性的な痛みの治療に対して経皮的フェンタニル治療を施行されたが、その後全般性の疲労と勃起障害を呈した。内分泌系の検査では低性腺刺激性性機能低下が示唆され、またMRI検査でも異常所見は認められなかった。このケースは、オピオイド治療における内分泌機能障害の可能性を考慮する必要性を示唆している。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆研究総括をおこなった。 共著者: Tabuchi Y, Yasuda T, Kaneto H, Kitamura T, Kozawa J, Otsuki M, Imagawa A, Nakae A, Matsuda Y, Uematsu H, Mashimo T, Shibata M, Shimomura I.
8) 痛みの評価尺度・日本語版 Short-Form McGill Pain Questionnaire 2 (SF-MPQ-2)の作成とその信頼性と妥当性の検討 （査読付）	共著	平成25年1月	Pain Research 28(1), 43-53.	Short-Form McGill Pain Questionnaire 2 （SFMPQ-2）の日本語版を作成した。87名の患者を対象にSFMPQ-2を回答させ、その妥当性評価のために探索的因子分析をおこなった。また信頼性の評価のためにCronbachのα係数と級内相関係数を算出した。結果、内的整合性・検査間信頼性ともに高く、その他機能的評価との相関も高かった。これらの結果は将来の臨床研究でこSFMPQ-2を使用する上での基礎となる。 本人担当部分：データの取得と、結果について麻酔科医の立場から評価をおこなった。 共著者: 圓尾知之, 中江文,前田倫,高橋香代子, Morris Shayn, 横江勝, 松崎大河, 柴田政彦, 齋藤洋一.
9) Painful Diabetic Neuropathy in Japanese Diabetic Patients Is Common but Underrecognized. （糖尿病性神経障害に伴う痛みは一般的だが過小評価されている） （査読付）	共著	平成25年10月	Pain Research and Treatment;2013:1-3.	痛みを伴う糖尿病性神経障害（PDN）の日本における疫学およびQOL・心理面への影響を調査した。298名の糖尿病患者を対象とした。結果、22.1%にPDNがみられ、QOLと精神状態に負の影響をもつことがわかった。その一方で、医師は症状のある者の36.4%しかPDNに気付いていなかった。本研究の結果は、日常の診療で医師がPDNに気付き、その進行を防ぐことの重要性を示している。 本人担当部分：結果に対して麻酔科医の立場から評価をおこない、研究総括をおこなった。 共著者: Tsuji M, Yasuda T, Kaneto H, Matsuoka T, Hirose T, Kawamori R, Iseki M, Shimomura I, Shibata M.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10) Validation of the Japanese Version of the Pain Self-Efficacy Questionnaire in Japanese Patients with Chronic Pain. （慢性痛患者に対する日本語版Pain Self Efficacy Questionnarie <PSEQ>の妥当性の検証） （査読付）	共著	平成26年8月	Pain Med;15(8):1405-1417	PSEQ日本語版の開発と、その心理物理学的特性の評価をおこなった。横断研究デザインで、複数の病院およびクリニックの患者に対しPSEQとその他痛みの心理学的評価指標を取得し、それらの関係性を検証した。結果、PSEQは充分な信頼性と妥当性を示した。階層的重回帰分析によって、PSEQで取得された自己効力感は本研究で取得された指標の変量で充分な説明が可能であることが示された。また、PSEQは社会的な活動と最も強く関連していた。 本人担当部分：患者担当とデータ測定、麻酔科医の立場から結果の評価をおこなった。 共著者: Adachi T, Nakae A, Maruo T, Shi K, Shibata M, Maeda L, Saitoh Y, Sasaki J.
11) Age-related and sex-related changes in perfusion index in response to noxious electrical stimulation in healthy subjects. （侵害電気刺激に対する灌流指標の変化に対する年齢および性別の影響） （査読付）	共著	平成26年12月	Journal of Pain Research2014;7:91.	痛みの客観的指標の開発にむけ、痛み刺激の灌流指標の変化に年齢・性別がもたらす影響を検証した。70名のボランティアに対して侵害電気刺激を与え、痛みの強度が耐性閾値に達するまで与えた。刺激前後の灌流指標と脈拍数の差を年齢・性別で比較した。結果、灌流指標は高齢の女性で刺激前後の変化が小さかった。灌流指標は高齢女性以外では痛みの客観的指標として使用できる可能性が示唆された。 本人担当部分：論文の執筆ととりまとめをおこなった。 共著者: Nakae T, Nishimura T, Shibata M, Mashimo T, Fujino Y.
12) Pain-Related Brain Activity Evoked by Active and Dynamic Arm Movement: Delayed-Onset Muscle Soreness as a Promising Model for Studying Movement-Related Pain in Humans. （動的運動によって誘発される痛みの脳活動：ヒトの遅発性筋痛モデルを用いて） （査読付）	共著	平成27年8月	Pain Medicine;16(8):1528-1539.	遅発性筋痛が「運動によって誘発される痛み」の適切なモデルとなるかを検証するため、遅発性筋痛の発生する状況下で動的な運動をおこなわせた際の脳活動を明らかにする。12名の健常成人に対して、肘のレジスタンストレーニングをおこなわせて遅発性筋痛を誘発する。運動後2日目（遅発性筋痛あり）条件と30日目（遅発性筋痛なし）条件とで機能的核磁気共鳴画像にて脳活動を比較した。結果、筋痛あり条件で対側の一次運動野、頭頂弁蓋部、両側の補足運動野により強い活動がみられた。また、Pain Matrixと呼ばれる痛み知覚時の代表的な脳領域に関しては、両条件間に差を認めなかった。この結果は、遅発性筋痛モデルがヒトの運動誘発痛研究において有効な実験モデルであることを示唆している。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆および研究総括をおこなった。 共著者: Matsuda Y, Kan S, Uematsu H, Shibata M, Fujino Y.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13) 痛みの自己効力感とその他の認知・感情的要因が慢性痛患者の健康関連Quality of Lifeと生活障害度に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成27年12月	慢性疼痛 1(34), 1.	本研究では認知・感情的要因が健康関連QOLや生活障害度といったアウトカムへ及ぼす影響を検討した。大学附属病院集学的診療外来に受診した初診患者60名に対し、健康関連QOL、生活障害度、痛みの自己効力感、破局的思考、不安・抑うつ、直近24時間の痛みの平均的な強さを測定する6つの尺度への回答を求めた。結果から、痛みの自己効力感は健康関連QOLと正の相関を、生活障害度と負の相関を示すこと、および痛みの自己効力感が健康関連QOLに対して正の影響性を有することが明らかになった。これらのことから、慢性痛の診療において適応的な認知・感情的要因を高めていくことの重要性が示唆された。 本人担当部分：研究の計画、データの取得、論文のとりまとめと研究総括をおこなった。 共著者: 安達友紀, 山田恵子, 西上智彦, 佐々木淳, 柴田政彦
14) Go-sha-jinki-Gan (GJG) ameliorates allodynia in chronic constriction injury model mice via suppression of TNF-α expression in the spinal cord. （牛車腎気丸がマウスの慢性絞扼性アロディニアモデルの症状を、脊髄のTNF-α発現を抑制して改善させる） （査読付）	共著	平成28年1月	Molecular Pain 12:1-16	牛車腎気丸は日本の伝統的なハーブ療法で、異常痛や麻痺の改善に用いられてきたが、その作用メカニズムは不明である。本研究では、慢性絞扼性アロディニアモデルマウスを用いて牛車腎気丸のもつ鎮痛効果の分子メカニズムを明らかにする。結果、牛車腎気丸によってマウスの痛覚過敏は初期の段階から有意に低下した。さらに、牛車腎気丸は脊髄中のIba1とTNF－αの発現を抑制していることがわかった。牛車腎気丸は、神経炎症によって誘発される痛みの治癒に有効であることが示唆された。 本人担当部分：結果について麻酔科医の立場から評価をおこない、論文のとりまとめをおこなった。 共著者: Nakanishi M, Nakae A, Kishida Y, Baba K, Sakashita N, Shibata M, Yoshikawa H, Hagihara K.
15) 第三者行為をきっかけとした神経障害性疼痛の治療反応性 （査読付）	共著	平成28年2月	ペインクリニック 372(2), 221-228.	他害的な外傷をきっかけとする慢性疼痛には複雑な心理が関与し、臨床において治療抵抗性であることを経験する。第三者行為をきっかけとする神経障害性疼痛10症例と、第三者行為がきっかけでない神経障害性疼痛11症例を対象に、治療反応性を、複数の評価尺度を用いて多面的に比較検討した。初診時、および3ヵ月後の再診時に実施した自記式質問紙の集計と、診療録の内容を後ろ向きに収集し、統計解析を行った。その結果、初診時の尺度スコア平均は2群間で有意な差を認めなかった。治療反応性については、第三者行為をきっかけとする神経障害性疼痛は、簡易痛みの質問票、不安抑うつ尺度、痛み破局化スケールの拡大視、EuroQoLのスコア改善が乏しかった。 本人担当部分: 研究の計画、データの取得、論文のとりまとめと研究総括をおこなった。 共著者: 山田恵子, 今野弘規, 磯博康, 柴田政彦

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16) resting-state fMRIによる上肢CRPS患者における感覚・運動ネットワークの検討 (査読付)	共著	平成28年5月	日本運動器疼痛学会誌 vol.8(2)203-208	本研究では、複合性局所疼痛症候群(CRPS)患者における運動機能障害の中枢機序の解明を目的として、上肢CRPS患者の感覚・運動ネットワークをresting-state fMRIにより検討した。健康成人と比べ、CRPS患者では感覚・運動関連部位間の機能的結合に変化が生じていた。本研究の結果は、感覚・運動ネットワークの機能異常がCRPS患者における運動機能障害の発生に関与している可能性を示唆するものである。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: 寒重之，大迫正一，植松弘進，渡邉嘉之，田中壽，柴田政彦
17) Independent Risk Factors for Positive and Negative Symptoms in Patients with Diabetic Polyneuropathy. （糖尿病性多発神経障害の陽性および陰性症状に対する独立危険因子） （査読付）	共著	平成28年6月	Journal of Pain and Palliative Care Pharmacotherapy;30(3):178-183.	糖尿病性神経障害（DPN）患者の麻痺・知覚障害の危険因子を分析した。298名の糖尿病患者を対象として、ロジスティック回帰モデルを用いて独立因子を決定した。さらに統計モデルを痛みグループ、知覚障害グループの二群に対して適用した。DPNの有無には抑うつ症状、アキレス腱反射の異常、インシュリン治療の有無などが関連していた。また痛み群と知覚障害群の差には女性であること、アキレス腱反射の異常、インシュリン治療の有無が関連していた。 本人担当部分：結果の解析と論文のとりまとめをおこなった。 共著者: Inoue R, Sumitani M, Yasuda T, Tsuji M, Nakamura M, Shimomura I, Shibata M, Yamada Y.
18) 言語的妥当性を担保した日本語版Injustice Experience Questionnaire: IEQの作成 （査読付）	共著	平成28年8月	ペインクリニック vol.37(8)1053-1057	他害的な外傷をきっかけとする慢性痛患者は、自分に落ち度がないのに不当に慢性痛を被っているという不条理・不公平感に囚われているため、医療者が治療に難渋することを経験する。慢性痛患者が抱えるこのような不条理・不公平な扱いを受けているという感情を欧米では「perceived injustice」と表現しており、Injustice Experience Questionnaireという尺度で計量心理学的に定量化している。われわれは、尺度の他言語翻訳を行う際の推奨ガイドラインに則って日本語版Injustice Experience Questionnaireを作成した。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆研究総括をおこなった。 共著者: 山田 恵子，安達 友紀，西上 智彦，磯博康，柴田 政彦

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19) ペインクリニック外来患者を対象とした薬剤師外来の現状 （査読付）	共著	平成28年8月	医療薬学 vol.42(8)558-561	ペインクリニック外来患者を対象とした薬剤師外来の現状について検討した。1年間に薬剤師外来で対応した92例、実施回数347回を対象とした。現在、1日あたり約8～10例程度の患者の面談を行っている。新規患者の初回面談時に、お薬手帳を用いて服用薬剤数を調査し、平均使用薬剤品目数は7.3±4.4種類であった。薬剤師の介入内容は、鎮痛薬の効果・副作用の確認、その他の併用薬の副作用の確認、薬剤の減量(他科のものも含む)、排便や睡眠状況など副作用や生活習慣に関するアドバイス、精神的苦痛への対応など多岐にわたった。 本人担当部分：結果を麻酔科医の立場から評価し、研究総括をおこなった。 共著者: 中川左理, 岡本禎晃, 柴田政彦
20) Socioeconomic value of intervention for chronic pain. （慢性痛介入の社会経済学的価値について） （査読付）	共著	平成28年8月	Journal of Anesthesia vol.30 Issue4 2016;30(4):553-561.	本研究の目的は、痛みに対する医療の費用対効果を評価することである。91名の患者を薬物治療、薬物＋ブロック治療、その他教育・リハビリテーション治療の3カテゴリに分類し、EQ-5D得点からQALY 質調整生存年を算出した。結果、見積もられた年間治療コストとQALYに基づく費用対効果の計算から、痛みに対する医療には充分な社会経済学的価値があることが示された。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆をおこなった。 共著者: Takura T, Shibata M, Inoue S, Matsuda Y, Uematsu H, Yamada K, Ushida T.
21) Arthropathy-related pain in a patient with congenital impairment of pain sensation due to hereditary sensory and autonomic neuropathy type II with a rare mutation in the WNK1/HSN2 gene: a case report. （WNK1/HSN2遺伝子の変異を伴う hereditary sensory and autonomic neuropathy type II による先天性感覚障害をもつ患者の関節痛：ケースレポート） （査読付）	共著	平成28年10月	BMC Neurology16(1):201	Hereditary sensory and autonomic neuropathy (HSAN) type IIにより先天的な感覚障害を呈した症例を経験した。本症例は手袋・靴下型の感覚脱失を呈していたが、月経や内蔵の痛みは感じることができていたが、骨隨炎による中足骨切除を施行された。腓骨神経は生研上無髄・有髄神経共に著しい損失がみられていた。さらに多数の関節で激しい痛みを訴えていたが、アセトアミノフェンによって痛みが軽減されQOLの改善に至った。本件は日本で2件目のHSAN typeⅡ症例の報告であり、アセトアミノフェンが先天性の痛覚障害を有する患者の痛みのコントロールに有効であった。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: Yamada K, Yuan J, Mano T, Takashima H, Shibata M.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22) Injustice Experience Questionnaire, Japanese Version: Cross-Cultural Factor-Structure Comparison and Demographics Associated with Perceived Injustice. （Injustice Experience Questionnaire：IEQ日本語版の作成：「不公平感」に関連する異文化間の因子構造の比較と人口統計） （査読付）	共著	平成28年10月	Plos One;11(8)e0160567	IEQは受傷に関連する不公平感を評価するバッテリーである。本研究ではIEQの日本語版作成のため、その因子構造と妥当性、信頼性、さらにはIEQスコアを予測する要因について検証した。71名の患者を対象にとしてIEQと痛みの強さ・心理的要因の評価、基本的情報の調査をおこなった。因子分析の結果、日本語版は原典と異なり3因子（Severity / irreparability, Blame / unfairness, Perceived lack of empathy ）構造においてデータへの適合が高く、信頼性も高かった。また、「1年以上の痛みの持続」と「受傷の原因が多者にある場合」の2つが、IEQスコアへの寄与率が高かった。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析および研究総括をおこなった。 共著者: Yamada K, Adachi T, Mibu A, Nishigami T, Motoyama Y, Uematsu H, Matsuda Y, Sato H, Hayashi K, Cui R, Takao Y, Shibata M, Iso H.
23) The Effect of Guidance regarding Home Exercise and ADL on Adolescent Females Suffering from Adverse Effects after HPV Vaccination in Japanese Multidisciplinary Pain Centers. （子宮頸がんワクチン（HPV）接種後の副反応を呈した思春期女性に対する運動とADL指導の効果；学際的痛みセンターでの取り組み） （査読付）	共著	平成28年10月	Pain Research and Management;2016:1-6.	HPV接種後の副反応を呈した若年女性は稀ながらも230名を超えている。本研究の目的は、副反応を呈した若年女性に対する認知行動療法的介入の効果を調査することである。副反応を呈した145名に対し、部分的に認知行動療法アプローチに基づいて運動と日常生活の指導をおこない、それらを後方視的に調査した。指標は痛みの強さのNRSとHADS、PCSを用いた。結果、治療プログラムを実施した80名のうち、10名は著しい改善、43名は若干の改善を示した。認知行動療法的アプローチは、HPV接種後副反応の症状減弱に有効であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文のとりまとめをおこなった。 共著者: Ushida T, Shibata M, Kitahara M, Yabuki S, Sumitani M, Murakami T, Iseki M, Hosoi M, Shiokawa H, Tetsunaga T, Nishie H, Fukui S, Kawasaki M, Inoue S, Nishihara M, Aono S, Ikemoto T, Kawai T, Arai Y-C.
24) Resting state fMRI を用いた各脳部位の相互作用の解析 （査読付）	共著	平成28年10月	バイオメディカル・ファジィ・システム学会年次大会講演論文集vol.29 161-164	Resting state fMRI(rs-fMRI)画像を用いて、各脳部相互作用を解析する新しい方法を提案した。約5分間のecho planer imaging(EPI)連続測定を行い、脳機能画像を取得した。3名を対象として脳機能画像を取得し、三つの推定パラメータを基に各脳部位の関連を示す樹形図を形成し、関係性の判別が可能となった。また、階層的クラスタリングの解析で、脳部位番号26(被殻左側)と71(中央帯状回右側)の関係性が近いことを示した。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆および研究総括をおこなった。 共著者: 丸居 航, Alam Saadia Binte, 寒 重之, 柴田 政彦, Koh Min-Sung, 小橋 昌司

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
25) 慢性疼痛に対する漢方エキス剤の効果を、国際的な尺度を用いて多面的に評価し得た症例 （査読付）	共著	平成28年10月	痛みと漢方 26, 33-39	本症例は交通事故により頸椎捻挫との診断で受傷3年を経過しても痛みが改善せず、当院を受診した。降雨前に痛みが強くなる訴えを水毒と解釈し、五苓散(TJ-17)7.5g/日を投与したところ著効した。特に症状が著しく軽減した初診から3ヵ月間において、痛みの強さ7/10→5/10、Pain Disability Scale 21/60→7/60など著しい改善がみられた。国際的に妥当性・信頼性の担保された尺度を用い、医療用漢方エキス剤の効果を客観的に評価できる可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: 山田恵子, 蔭山充, 柴田政彦.
26) 慢性痛患者への入院集学的リハの取り組み （査読付）	共著	平成28年10月	Journal of Musculoskeletal Pain Research 8巻3号 Page S125	大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでは、院内で実施困難な慢性痛に対する集学的入院治療を近隣の医療機関と連携協力して実施可能とした。就業や日常生活に支障をきたしている慢性痛患者を治療対象とし、運動療法、認知行動療法、集学的リハビリテーションの三要素を含んだ入院プログラムを作成した。結果、痛みの評価が改善し、就労した症例を経験した。また、EQ-5Dを用いて、このプログラムの費用対効果も検討した。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆研究総括をおこなった。 共著者： 高橋紀代, 安達友紀, 丸山 伸廣, 西上智彦, 柴田 政彦
27) Fear-avoidance beliefs are independently associated with the prevalence of chronic pain in Japanese workers. （恐怖回避思考は日本における労働者の慢性痛の有無と独立して関連している） （査読付）	共著	平成29年4月	Journal of Anesthesia;31(2):255-262.	恐怖回避思考と慢性痛の関係は、アジア圏では明らかにされていない。本研究の目的は、日本のホワイトカラー層における恐怖回避思考と慢性痛の関係を明らかにすることである。433名の労働者にアンケート調査を実施し、TSK、仕事関連心理因子、うつ傾向等を調査した。結果、調整済みオッズ比でも慢性痛患者は高いTSKスコアを有することがわかった。本研究の結果は、日本のホワイトカラー層においてTSKスコアと慢性痛の有無に密接な関連があることを示唆している。 本人担当部分：データ測定、結果の評価を麻酔科医の立場からおこなった。 共著者: Wakaizumi K, Yamada K, Oka H, Kosugi S, Morisaki H, Matsudaira K, Ushida T, Shibata M, Kitahara M, Yabuki S, Sumitani M, Murakami T, Iseki M, Hosoi M, Shiokawa H, Tetsunaga T, Nishie H, Fukui S, Kawasaki M, Inoue S, Nishihara M, Aono S, Ikemoto T, Kawai T, Arai Y-C.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28) 非がん性慢性疼痛のチーム医療 5.大阪大学医学部附属病院の痛み診療 (査読付)	共著	平成29年8月	ペインクリニックVol.38 No.8　P1063-1068	大阪大学疼痛医療センターで実施している集学的診療外来、外来・入院リハビリテーション、認知行動療法を紹介する。集学的診療外来やリハビリテーション、認知行動療法について、実施内容を示し、疼痛医療センターの取り組みを支えている研究や教育プログラムについて述べた。疼痛医療センターでは、諸外国で行われている集学的な慢性痛治療が、本邦でも広まることを期待しており、普及に向けた活動に取り組んでいる。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆および研究総括をおこなった。 共著者: 榎本聖香，安達友紀，井上大輔，細越寛樹，西上智彦，高橋紀代，柴田政彦
29) 中枢機能障害性疼痛患者における脳部位間の機能的結合と背景因子との関連：安静時fMRIによる検討 (査読付)	共著	平成29年10月	PAIN RESEARCH vol.32(1)52-59	中枢機能障害性疼痛(FSS)患者を対象に、resting-state functional MRI(rs-fMRI)を用いて脳部位間の機能的結合と背景因子との関連について検討した。痛みの強さと左扁桃体-左島皮質の機能的結合の間に有意な正の相関、痛みの期間と左右前帯状回吻側部・左島皮質前部の機能的結合の間で有意な負の相関がみられた。またHADSの不安スコアは右扁桃体内の機能的結合と有意な負の相関、PCSスコアは右扁桃体-右海馬傍回・前帯状回吻側部-右視床の機能的結合と有意な正の相関を認めた。FSS患者に対するrs-fMRIによる機能的結合の評価は、慢性疼痛の病態解明に有用であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆および研究総括をおこなった。 共著者:寒重之，大迫正一，植松弘進，渡邉嘉之，田中壽，柴田政彦
30) 就労環境における慢性痛の実態調査～仕事に影響する慢性痛のリスク因子の検討：QWLICスタディ (査読付)	共著	平成29年12月	産業衛生学会誌 vol.59 (5) 125-134	就労環境における慢性痛の実態，及び慢性痛が仕事に影響する重症例でのリスク因子を明らかにすることを目的とした。計3社18施設の被雇用者を対象に，「からだの痛みに関する調査研究アンケート」を施行した。対象者の生活習慣や心理社会的因子と慢性痛有症との関連について，性年齢調整ロジスティック回帰分析を用いて分析した。結果、仕事に影響する慢性痛を有することは，肥満，喫煙習慣，不眠症，ワーカホリック度の高さ，上司・同僚からの支援の乏しさ，仕事の満足度の低さ，仕事の要求度の高さ，仕事のコントロール度の低さ，心理的ストレスの高さ，抑うつ状態と有意に関連があった。就労環境における慢性痛とそのリスク因子の実態が一部明らかとなった。 本人担当部分：データ測定、論文のとりまとめをおこなった。 共著者： 山田恵子，若泉謙太，深井恭佑，磯博康，祖父江友孝，柴田政彦，松平浩

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
31) Classification and characterisation of brain network changes in chronic back pain: A multicenter study.	共著	平成30年	Wellcome Open Res 3:19	共著者：Mano H, Kotecha G, Leibnitz K, Matsubara T, Nakae A, Shenker N, Shibata M, Voon V, Yoshida W, Lee M, Yanagida T, Kawato M, Rosa MJ, Seymour B
32)The relationships between pain catastrophizing subcomponents and multiple pain-related outcomes in Japanese outpatients with chronic pain: a cross-sectional study.	共著	平成30年5月	Pain Pract.	共著者：Adachi T, Nakae A, Maruo T, Shi K, Maeda L, Saitoh Y, Shibata M, Sasaki J
33)Reliability and validity of the Athens Insomnia Scale in chronic pain patients.	共著	平成30年	J Pain Res 11:793-801	共著者：Enomoto K, Adachi T, Yamada K, Inoue D, Nakanishi M, Nishigami T, Shibata M
34)Verbal Instruction Can Induce Extinction of Fear of Movement-Related Pain.	共著	平成30年	j.jpain.19:1063-1073	共著者：Maeda Y, Kan S, Fujino Y, Shibata M
35)Evaluating the psychometric properties of two-item and four-item short forms of the Japanese Pain Self-Efficacy Questionnaire: a cross-sectional study.	共著	平成30年		共著者：Adachi T, Enomoto K, Yamada K, Inoue D, Nakanishi M, Takahashi N, Nishigami T, Shibata M
36)Frequency of mental disorders among chronic pain patients with or without fibromyalgia in Japan.	共著	平成30年	Neuropsychopharmacol Rep 38:167-174	共著者：Miki K, Nakae A, Shi K, Yasuda Y, Yamamori H, Fujimoto M, Ikeda M, Shibata M, Yukioka M, Hashimoto R

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
37)Validation of the Japanese version of the life satisfaction checklist (LiSat-11) in patients with low back pain: A cross-sectional study.	共著	平成30年	J Orthop Sci 23:895-901	共著者：Mibu A, Nishigami T, Tanaka K, Manfuku M, Yono S, Kajiwara S, Tanabe A, Shibata M
38)慢性疼痛領域における治療の費用対効果と社会経済的な負担	共著	平成30年	日本運動器疼痛学会誌 10(1): 88-96	田倉智之1)，柴田政彦2)，牛田享宏3) 1)東京大学大学院医学系研究科 医療経済政策学，2)奈良学園大学 保健医療学部，3)愛知医科大学 学際的痛みセンター
39)慢性疼痛に対する認知行動療法とリハビリテーションの併用効果 ： いきいきリハビリノートの治療実績を含めて	共著	平成30年	日本運動器疼痛学会誌 10(2): 205-216	大鶴直史1,2)，木村慎二2)，細井昌子3)，松原貴子4)，柴田政彦5)，水野泰行6)，西原真理7)，村上孝徳8)，大西秀明1) 1)新潟医療福祉大学 運動機能医科学研究所，2)新潟大学医歯学総合病院 リハビリテーション科，3)九州大学病院 心療内科，4)神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 理学療法学科，5)大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，6)関西医科大学 心療内科学講座，7)愛知医科大学医学部 学際的痛みセンター，8)札幌医科大学 リハビリテーション医学講座
40)Factors influencing outcomes among patients with whiplash-associated disorder: A population-based study in Japan.	共著	令和元年	PLoS One 14:e0216857	共著者：Hayashi K, Miki K, Ikemoto T, Ushida T, Shibata M
41)Japanese cross-cultural validation study of the Pain Stage of Change Questionnaire.	共著	令和元年	Pain Rep 4:e711	共著者：Adachi T, Sunohara M, Enomoto K, Sasaki K, Sakaue G, Fujita Y, Mizuno Y, Okamoto Y, Miki K, Yukioka M, Nitta K, Iwashita N, Kitagawa H, Shibata M, Sasaki J, Jensen MP, Fukui S

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
42)Association of sleep sufficiency and duration with chronic pain prevalence: A population-based cross-sectional study.	共著	令和元年	J Psychosom Res 120:74-80	共著者：Yamada K, Kubota Y, Shimizu Y, Shibata M, Morotomi N
43)Towards prognostic functional brain biomarkers for cervical myelopathy: A resting-state fMRI study.	共著	令和元年	Sci Rep 9:10456	共著者：Takenaka S, Kan S, Seymour B, Makino T, Sakai Y, Kushioka J, Tanaka H, Watanabe Y, Shibata M, Yoshikawa H, Kaito T
44)Smoking is associated with greater pain intensity and pain-related occupational disability in Japanese workers.	共著	令和元年	J Anesth 33:523-530	共著者：Yamada K, Wakaizumi K, Kubota Y, Matsudaira K, Shibata M
45)Evaluating the psychometric properties of two-item and four-item short forms of the Japanese Pain Self-Efficacy Questionnaire: a cross-sectional study.	共著	令和元年	J Anesth 33:58-66	共著者：Adachi T, Enomoto K, Yamada K, Inoue D, Nakanishi M, Takahashi N, Nishigami T, Shibata M
46)The Relationships Between Pain-Catastrophizing Subcomponents and Multiple Pain-Related Outcomes in Japanese Outpatients with Chronic Pain: A Cross-Sectional Study.	共著	令和元年	Pain Pract 19:27-36	共著：Adachi T, Nakae A, Maruo T, Shi K, Maeda L, Saitoh Y, Shibata M, Sasaki J
47)Pilot study of a basic individualized cognitive behavioral therapy program for chronic pain in Japan.	共著	令和2年	Biopsychosoc Med 14:6	共著者：Hosogoshi H, Iwasa K, Fukumori T, Takagishi Y, Takebayashi Y, Adachi T, Oe Y, Tairako Y, Takao Y, Nishie H, Kanie A, Kitahara M, Enomoto K, Ishii H, Shinmei I, Horikoshi M, Shibata M

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
48)Associations between the injustice experience questionnaire and treatment term in patients with acute Whiplash-associated disorder in Japan	共著	令和2年	PLoS One 15:e0231077	共著者：Hayashi K, Miki K, Ikemoto T, Ushida T, Shibata M
49)Resting-state Amplitude of Low-frequency Fluctuation is a Potentially Useful Prognostic Functional Biomarker in Cervical Myelopathy.	共著	令和2年	Clin Orthop Relat Res 478:1667-1680 共著者：Takenaka S, Kan S, Seymour B, Makino T, Sakai Y, Kushioka J, Tanaka H, Watanabe Y, Shibata M, Yoshikawa H, Kaito T	
50)皮膚科における帯状疱疹関連痛の治療の現状 51)	共著	令和3年12月	慢性疼痛(1340-2331)41巻1号 Page91-95(2022.12)	山岡 慶子(労働者健康安全機構関西労災病院 薬剤部), 岡本 禎晃, 柴田 政彦, 前田 倫, 石井 直子, 中川 左理
（その他） 「総説」 1) Evaluation of patients with chronic pain （慢性痛患者の評価）	共著	平成20年11月	Masui.57(11):1337-1342.	慢性痛患者の痛み行動は多くの要因によって変化する。それらの要因を評価することは痛みのマネジメント上重要なことである。多くの有効なアプローチやこれらの示唆すること、患者の評価と治療の選定など慢性痛患者のマネジメントに欠くことができない事項について解説した。 本人担当部分：原稿の執筆をおこなった。 共著者: Shibata M, Inoue T, Sumitani M, Matsumura Y, Mashimo T.
2) 複合性局所疼痛症候群の診断と治療	共著	平成23年4月	日本医事新報4539：72-78	複合性局所疼痛症候群の診断、治療に関する歴史的変遷を解説、近年用いられている判定指標や治療手段について実例を交えながら解説した。 本人担当部分：原稿の執筆および全体の構成に携わった。 共著者： 植松弘進, 柴田政彦

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3）慢性痛の問題点と今後の取り組み	共著	平成26年12月	理学療法学vol.41(8) 699-705	疫学、認知行動療法、条件付け、運動療法、脳機能画像研究、バイオフィードバックという幅広いテーマから、リハビリテーションにおける慢性痛の位置づけを詳細に解説した。 本人担当部分：原稿の執筆および全体の構成に携わった。 共同著者：柴田政彦，山田恵子，前田吉樹，安達友紀，西上智彦，寒重之
4）医学生教育の観点から：医学生への痛みの教育	単著	平成28年8月	ペインクリニックvol.37 No.8 P991-998	痛みは患者が訴える最も頻度の高い症状であり、医療者が患者の訴える痛みに対して適切に対応できるためには、医療者教育の早期に適切な教育を受けることが重要である。国際的にもこの問題が指摘されており、改善への取り組みが始まっている。わが国でも医学部において痛みの教育は系統的に実施されていないが、今後の取り組みによって改善していくことが望ましい。
5）Functional Pain Disorder 3. 複合性局所疼痛症候群	単著	平成28年8月	最新医学71巻8号　P116-119	四肢の外傷後に痛みが遷延し,浮腫,皮膚温の変化,発汗や発毛の異常,関節可動域制限や拘縮を伴う場合,複合性局所疼痛症候群と呼ばれる.古くから一部の患者に発症するこの病態の機序は謎に包まれていたが,近年,脳機能の変化を伴うことが明らかになってきており,末梢の炎症とともに本症候群の原因や治療と関連する重要な現象として注目されている.
6）疼痛および鎮痛の神経メカニズム	共著	平成28年8月	The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine第53巻　8号　P591-595	痛覚の伝達経路には末梢から中枢へ向かう上行路だけでなく，下行性に痛みを抑制あるいは増強させる下行路もある．本稿では上行路（皮膚，脊髄，体性感覚野および扁桃体）と下行路（state dependent control）に分けて概説し，さらに，それぞれの経路に働きかけるリハビリテーションの臨床応用について言及する． 本人担当部分：原稿の執筆および全体の構成に携わった。 共著者： 西上智彦，柴田 政彦
7）オピオイド治療と内分泌機能異常	共著	平成28年11月	Locomotive Pain Frontier vol.5 No.2　P44-46	オピオイドの長期使用により性腺機能異常をはじめとする内分泌機能障害を併発することがある。疲労感、気分障害、体重減少など、オピオイドの適応となる慢性痛の随伴症状との鑑別が困難なため注意が必要である。特に強オピオイドを長期間若い男性に投与する場合には、投与前に内分泌機能を確認するなど、細心の注意が求められる。内分泌機能の評価の際には、内分泌専門医にコンサルトすることが望ましい。 本人担当部分：原稿執筆をおこなった。 共著者： 柴田政彦，田渕優希子，安田哲行

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8) “Katakori”：a Pain Syndrome Specific to the Japanese（日本に特異的な症状″肩こり″）	共著	平成28年12月	Current Pain and Headache Reports 20(12)64-65	日本特有の痛みの訴えである「肩こり」について、その疫学と機序、評価と治療について概説した。 本人担当部分：原稿執筆をおこなった 共著者：Masaki Kitahara, Masahiko Shibata
9) さまざまな慢性痛患者の安静時fMRI研究	共著	平成28年12月	Pain Research; vol.31 No.4 P189-196	fMRIは核磁気共鳴現象を利用して脳活動を画像化する非侵襲脳活動計測法の一つで、痛みの研究に応用されてきた。様々な慢性痛患者の脳活動を健常人と比較することによってその脳内機序を探る方法として、近年安静時fMRIが注目されている。線維筋痛症、慢性腰痛、片頭痛、その他の疾患を対象とした安静時fMRIの論文を取り上げ、主な知見をまとめた。 本人担当部分：原稿執筆、資料の提供、全体の構成の総括をおこなった 共著者： 柴田政彦，寒重之，大迫正一，三木健司，柳澤琢史，助永憲比古，恒遠剛示，新田一仁，岩下成人，福井聖，黒崎弘倫，中野直樹，若泉謙太，上嶋江利，本山泰士，高雄由美子，溝渕知司
10) 痛みは脳をどう変えるか？-Neuroimaging からみえてきたもの	共著	平成29年3月	週刊　医学のあゆみ　別刷 vol.260 No.2 P155-160	従来の痛みの研究には大きく分けて2つの方法があった。動物を対象とした痛覚の研究と、ヒトの痛みの訴えや感情・行動を対象とした痛みの研究である。これら2つの研究の橋渡しを期待できるのが脳機能画像研究である。患者が″痛み″を医療者に伝え、医療者が患者の痛みを察知して何らかの役割を果たそうとする。ありふれた状況であるが、この状況には、無数のメカニズム、因子が寄与している。因果関係はともかく、これらの複雑な仕組みの一端が脳に刻まれていることが推察され、その情報をもとに治療に応用しようという試みがはじまっている。 本人担当部分：全体の構成の総括をおこなった 共著者： 寒重之，柴田政彦
11)運動器慢性疼痛に対する認知行動療法理論に基づいた運動促進法	共著	平成30年	The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine 55(3): 206-214	木村慎二*1，細井昌子*2，松原貴子*3，柴田政彦*4，水野泰行*5，西原真理*6，村上孝徳*7，大鶴直史*8 *1新潟大学医歯学総合病院リハビリテーション科，*2九州大学心療内科，*3日本福祉大学健康科学部リハビリテーション学科，*4大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座，*5関西医科大学心療内科学講座，*6愛知医科大学医学部学際的痛みセンター，*7札幌医科大学リハビリテーション医学講座，*8新潟医療福祉大学医療技術学部理学療法学科
12)慢性疼痛のリハビリテーション(第1回)　慢性疼痛の病態と機序	単著	令和3年4月	Journal of Clinical Rehabilitation(0918-5259)31巻4号 Page347-351(2022.04)	

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13)医学的に原因が見当たらない痛みで受診した患者の治療方針について　痛みの原因を探るのではなく、痛みを主訴に受診したのはなぜかを考える(Q&A)	単著	令和４年	日本医事新報(0385-9215)5129号 Page53(2022.08)	
「特集」 1) 慢性痛の心理アセスメント 私の診療現場から 「施す医療」からの転換私の診療に影響を与えた慢性痛の3症例	単著	平成26年12月	ペインクリニック35巻2号 Page235-240	自分自身の診療経験から、患者に対して『施す医療』から『支える医療』へ転換したいきさつについて解説した。
2) 座談会 本邦における集学的痛みセンターの必要性について	共著	平成27年3月	Practice of pain management 6巻1号 Page4-11	認知行動療法など、心理的側面から意見交換をおこなった。 北原雅樹，柴田政彦，牛田享宏
3) 一歩進んだ痛みの治療	共著	平成27年7月	臨床雑誌『整形外科』 66巻7号 Page671-675	整形外科疾患に伴う、痛みの薬物療法について解説した。 柴田政彦，松田陽一，植松弘進，安達友紀，西上智彦
4) 我が国の痛みの集学(学際)的アプローチはどうあるべきか？当院における慢性痛に対する集学的診療	共著	平成27年10月	Anet 19巻2号 Page6-10	大阪大学医学部附属病院における集学的診療の内容を各医療者毎の役割を明確にしながら解説した。 柴田政彦，安達友紀，西上智彦
5) 痛みのClinical Neuroscience(9)座談会 本邦における慢性痛対策 ： 見えてきた課題	共著	平成28年3月	最新医学 71巻3号 Page426-439	本邦における慢性痛の診療体制の構築について現状と今後の取り組みについて意見交換した。 田口敏彦，柴田政彦，北原雅樹
6) コラム・ペインコンソーシアムの設立の経緯と取り組み	単著	平成28年6月	Journal of Musculoskeletal Pain Research　Vol.8 No.1 P5-6	痛み関連学会の情報共有の目的で、痛み関連の7学会が参加できるペインコンソーシアムという組織を設立し、運営してきた。
7)【慢性腰痛の診断と治療update】(Part1)基礎　神経障害性疼痛その機序と慢性腰痛との関連	共著	平成28年10月	Bone Joint Nerve 6巻4号 Page679-685	神経障害性疼痛と、慢性腰痛の関連について解説した 牧野 孝洋，三木 健司，柴田 政彦
8) 特集 慢性腰痛の診断と治療update 座談会	共著	平成28年11月	Bone Joint Nerve 6巻4号 Page811-824	整形外科領域の神経障害性疼痛についてその機序と慢性腰痛との関連を解説した 慢性腰痛の治療の一つとして、生物・社会・心理モデルに基づいたリハビリテーションや、心理的アプローチについて解説した。 紺野愼一，中村雅也，牛田享宏，柴田政彦

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9）特集「ＣＲＰＳの最新事情」によせて	単著	平成29年4月	ペインクリニックvol.38 no.4 P437-438	CRPSに関連する最新の知見について解説した。
10）痛みの責任は誰にある?	共著	平成29年4月	日本臨床麻酔学会誌 37(7): 838-843	
11）【神経障害】 高齢者の脊椎由来の慢性疼痛へのアプローチと薬物療法	共著	平成31年	Pharma Medica 37(1): 27-30	
12）慢性疼痛の最新治療~集学的診療~	共著	平成31年	難病と在宅ケア 25(5): 34-38	
13）痛みの病態・機序	単著	令和2年4月	日本医師会雑誌 (0021-4493)149巻1号 Page21-24	
14)「頭痛の診療ガイドライン2021」準拠　ジェネラリストのための頭痛診療マスター】(第2章)頭痛患者のQOLを改善するためのノウハウ慢性頭痛に対する集学的診療	単著	令和3年10月	jmed mook82号 Page116-119(2022.10)	
麻酔・ペインクリニック　慢性痛の集学的診療の実施・運営のポイントは?　集学的診療には多職種の診療を支えるマネージャーが重要である		令和3年10月	日本医事新報(0385-9215)5137号 Page54(2022.10)	高橋 紀代(千里山病院 集学的痛みセンター)，柴田 政彦
医学的に原因が見当たらない痛みで受診した患者の治療方針について　痛みの原因を探るのではなく、痛みを主訴に受診したのはなぜかを考える	単著	令和3年8月	日本医事新報(0385-9215)5129号 Page53(2022.08)	Q&A
「新聞」				
1）今日のストレス明日の病気：上肢の痛み	単著	平成23年6月	夕刊フジ	ストレスと痛みについて解説
2）名医はこの人ブラックジャックを探せ	単著	平成23年6月	夕刊フジ	原因が特定できない痛みへの対策について
3）慢性の痛み目指す総合治療	単著	平成23年10月	読売新聞	慢性痛に対する集学的診療の重要性を解説

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4）痛みよもやま話連載	単著	平成24年8月～ 平成25年4月	・京都新聞 ・下野新聞 ・福島新聞 ・信濃毎日新聞 ・日本海新聞 ・山陽新聞 ・北國新聞 ・宮崎日日新聞 ・神戸新聞 ・愛媛新聞 ・岐阜新聞 ・千葉日報	①痛みの不思議 ②痛みと錯覚 ③トウガラシなどの刺激物 ④痛がり遺伝子 ⑤プラセボ効果 ⑥プラセボ効果 ⑦やはり問診が大事 ⑧痛みと医療（前編） ⑨痛みと医療（後編） ⑩国で異なる鎮痛薬の処方 ⑪三叉神経痛 ⑫幻肢痛 ⑬養成ギブス ⑭腰痛 ⑮進歩する研究 ⑯慢性痛と深く関連 ⑰リハビリで元気に ⑱幻肢痛に大きな効果 ⑲かかとの痛みとれず ⑳手術後に長く続く痛み
「報道」 1)ガッテン！	－	平成30年5月	NHK教育テレビ 2018年5月9日（水）午後7時30分放送	痛みを“脳”で克服！“慢性痛”治療革命
「国際学会発表」 1）Fear Conditioning and Extinction Associating Voluntary Movement with Painful Stimulus: Experimental Verification of Fear Avoidance Model Using Skin Potential Response （運動と痛みの恐怖条件づけ：恐怖回避モデルの実験的検証）	－	平成26年10月	15th World Congress of International Assicuation for the Study of Pain, Buenos Aires. 2014.10.6-11	運動と痛みの恐怖が結びつくという現象の証明から、その消去、さらには教示が与える影響までを検証した。 ポスター発表 共同発表者：Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Yoshitetsu Oshiro, Satoru Miyauchi, Aya Nakae, Ben Seymour, Hideki Kashioka, Masahiko Shibata 担当部分: 研究計画、研究総括
2）Psychologigal characteristics related to the acquisition and extention of pain-related fear (痛みに関連する恐怖の獲得と消去に影響する心理的特性の検証)	－	平成28年9月	16ｔｈ World congress on pain, Yokohama, 2016.9.26-30	運動への恐怖条件づけの獲得、消去における個人差に着目し、各個人の心理特性との関連性を探索的に検討した。消去期におけるSPR振幅値と各心理指標との相関がみられた。本研究の結果は、疼痛の慢性化に性格傾向等の心理要因が関与する可能性を示唆している。 ポスター発表 共同発表者：Takatoshi Masaki, Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Masahiko Shibata 担当部分: 研究計画、データ測定
3）Socioeconimic Value of Intervention for chronic Pain (慢性痛治療の社会経済的価値の検証)	－	平成28年9月	16ｔｈ World congress on pain, Yokohama, 2016.9.26-30	本邦における集学的痛み診療の社会経済的価値を試算した。集学的診療をうけた患者91名における各疼痛バッテリーの改善値を、QUALY解析によって価値化した。結果、１QUALyあたり平均45.879＄の価値があることがわかった。 ポスター発表 共同発表者：Masahiko Shibata, Keiko Yamada, Youichi Matsuda, Hironobu Uematsu, Shinsuke Inoue, Takahiro Ushida, Tomoyuki Takura 担当部分: 抄録執筆、研究計画、データ測定、解析

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4) Effects of exercise therapy for outpatients with chronic pain （慢性疼痛患者に対するリハビリテーション入院プログラム）	－	平成28年9月	16th World congress on pain, Yokohama, 2016.9.26-30	大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでは、院内で実施困難な慢性痛に対する集学的入院治療を近隣の医療機関と連携協力して実施可能とした。就業や日常生活に支障をきたしている慢性痛患者を治療対象とし、運動療法、認知行動療法、集学的リハビリテーションの三要素を含んだ入院プログラムを作成した。結果、痛みの評価が改善し、就労した症例を経験した。また、EQ-5Dを用いて、このプログラムの費用対効果も検討した。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、研究総括をおこなった。 ポスター発表 共同発表者： N. Takahashi, M. Shibata, T. Adachi, Y. Maeda, K. Yamada, T. Nishigami
5) Disabilities on work and fear avoidance beliefs in Japanese workers with chronic pain. （慢性痛患者の恐怖回避思考と就労困難との関係）	－	平成28年12月	International Congress of Behavioral Medicine 2016, Melbourne, Australia. 2016 Dec 7-10.	就労環境における慢性痛の実態，及び慢性痛が仕事に影響する重症例でのリスク因子を明らかにすることを目的とした。計3社18施設の被雇用者を対象に，「からだの痛みに関する調査研究アンケート」を施行した。対象者の生活習慣や心理社会的因子と慢性痛有症との関連について，性年齢調整ロジスティック回帰分析を用いて分析した。結果、仕事に影響する慢性痛を有することは，肥満，喫煙習慣，不眠症，ワーカホリック度の高さ，上司・同僚からの支援の乏しさ，仕事の満足度の低さ，仕事の要求度の高さ，仕事のコントロール度の低さ，心理的ストレスの高さ，抑うつ状態と有意に関連があった。就労環境における慢性痛とそのリスク因子の実態が一部明らかとなった。 ポスター発表 本人担当部分：データ測定、抄録のとりまとめをおこなった。 共同発表者：Kenta Wakaizumi, Keiko Yamada, Masahiko Shibata, Shizuko Kosugi, Hiroshi Morisaki, and Ko Matsudaira
6) An Epidemiological Study on the Association Between Job Satisfaction and Reduced Performance/ sickness Absence among Workers with Chronic Pain （慢性痛患者の職務満足度と機能低下・病欠の疫学調査）	－	平成28年12月	International Congress of Behavioral Medicine 2016, Melbourne, Australia. 2016 Dec 7-10.	就労環境における慢性痛の実態，及び慢性痛が仕事に影響する重症例でのリスク因子を明らかにすることを目的とした。計3社18施設の被雇用者を対象に，「からだの痛みに関する調査研究アンケート」を施行した。対象者の生活習慣や心理社会的因子と慢性痛有症との関連について，性年齢調整ロジスティック回帰分析を用いて分析した。結果、仕事に影響する慢性痛を有することは，肥満，喫煙習慣，不眠症，ワーカホリック度の高さ，上司・同僚からの支援の乏しさ，仕事の満足度の低さ，仕事の要求度の高さ，仕事のコントロール度の低さ，心理的ストレスの高さ，抑うつ状態と有意に関連があった。就労環境における慢性痛とそのリスク因子の実態が一部明らかとなった。 本人担当部分：データ測定，研究総括をおこなった。 ポスター発表 共同発表者： Keiko Yamada, Kenta Wakaizumi, Ko Matsudaira, Masahiko Shibata, and Hiroyasu Iso

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「国内学会発表」 1) 慢性疼痛患者に対するリハビリテーション入院プログラムの効果	－	平成28年6月	第53回日本リハビリテーション医学会学術集会	大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでは、院内で実施困難な慢性痛に対する集学的入院治療を近隣の医療機関と連携協力して実施可能とした。就業や日常生活に支障をきたしている慢性痛患者を治療対象とし、運動療法、認知行動療法、集学的リハビリテーションの三要素を含んだ入院プログラムを作成した。結果、痛みの評価が改善し、就労した症例を経験した。また、EQ-5Dを用いて、このプログラムの費用対効果も検討した。 本人担当部分： 研究計画、データ測定、結果の解析、研究総括をおこなった。 口述発表 共同発表者：高橋紀代，柴田政彦
2) 慢性痛患者への入院集学的リハの取り組み	－	平成28年11月	第9回日本運動器疼痛学会、東京、2016.11.26～27	慢性痛患者に対して短期入院による集学的リハを実施したので報告する。集学的リハとして医師（講義：1h／w），臨床心理士（講義：2h／w），理学療法士（講義：1h／w），理学・作業療法士（運動療法：6日／w）がそれぞれ介入。また，上記以外の時間で自主トレの時間を午前・午後に各1時間ずつ定。アウトカムを日常生活における移動能力・ADL・情動面の改善とし，主な評価尺度として3分間歩行，5m歩行，PDAS，HADS，PCS，PSEQを入院時と退院時で比較した。結果、運動面と情動面の改善が見られた。 本人担当部分： 研究計画、データ測定、結果の解析、研究総括をおこなった。 ポスター発表 共同発表者：丸山伸廣，高橋紀代，柴田政彦
3) 慢性疼痛患者に対する外来運動療法完遂者とドロップアウトした者との比較	－	平成28年11月月	第9回日本運動器疼痛学会、東京、2016.11.26～27	大阪大学附属病院疹痛医療センター（痛みセンター）と連携した3ヵ月間の外来運動療法には、プログラム途中で来院しなくなった患者も認められる。今回ドロップアウトした患者に対して後方視的に調査を行い，運動療法完遂者と比較した結果を報告する。当院外来を受診した29名のうち、計12回のプログラム参加したものを完遂群それ以前に中断したものをドロップアウト群（DO群）とした。結果、29名中20名が完遂し，9名が脱落していた。 DO群と完遂群の比較では介入前の痛みNRS，EQ－5D，PSEQに有意差を認めた。慢性痛に対する運動療法を試行する際ドロップアウトの危険性の予測に多面的評価の結果が有用となる可能性が示唆された。 本人担当部分： 研究計画、データ測定、結果の解析、研究総括をおこなった。 ポスター発表 共同発表者： 鳴尾彰人，西上智彦，高橋紀代，
4)飛翔 － 日本疼痛学会の新しい門出を迎えて		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	会長講演

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5)青少年における「疼痛又は運動障害を中心とする多様な症状」の受療状況に関する全国疫学調査		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	福島若葉1，原めぐみ2，柴田政彦3，喜多村祐里4，祖父江友孝4 1大阪市立大学大学院医学研究科 公衆衛生学，2佐賀大学医学部 社会医学講座 予防医学分野，3大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，4大阪大学大学院医学系研究科 社会医学講座 環境医学
6)慢性痛患者に対する集学的入院治療の長期効果と費用対効果		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	高橋紀代1,2,3，安達友紀4,5,6，柴田政彦3,4 1篤友会リハビリテーションクリニック，2医療法人篤友会 千里山病院，3大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，4大阪大学医学部附属病院 疼痛医療センター，5滋賀医科大学医学部附属病院 ペインクリニック科，6日本学術振興会
7)頸椎症性脊髄症における安静時fMRIを用いた自発脳活動および機能的結合の変化の検討		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	串岡純一1，海渡貴司1，武中章太1，牧野孝洋1，坂井勇介1，田中壽2，渡邉嘉之2，寒重之3，柴田政彦3 1大阪大学大学院医学系研究科 器官制御外科学(整形外科)，2大阪大学大学院医学系研究科 放射線統合医学講座 放射線医学教室，3大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座
8)安静時fMRIを用いた変形性膝関節症の痛みに関わる脳機能異常の予備的研究		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	大迫正一1，寒重之2，植松弘進1，松田陽一1,4，二井数馬4，田中壽3，渡邉嘉之3，冨田哲也4，柴田政彦2，藤野裕士1 1大阪大学大学院医学系研究科 生体統御医学講座麻酔・集中治療医学教室，2大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，3大阪大学大学院医学系研究科 放射線統合医学講座 放射線医学教室，4大阪大学大学院医学系研究科 器官制御外科学
9)慢性痛患者における短縮版アテネ不眠尺度（AIS-5）の信頼性・妥当性の検討		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	榎本聖香1，安達友紀2,3,4，山田恵子2,5，井上大輔2,6，中西美保2,7，西上智彦2,8，柴田政彦1,2 1大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，2大阪大学医学部附属病院 疼痛医療センター，3滋賀医科大学医学部附属病院 学際的痛み治療センター，4日本学術振興会，5大阪大学大学院医学系研究科 社会医学講座 公衆衛生学，6大阪リハビリテーション専門学校 作業療法学科，7大阪大学大学院医学系研究科 漢方医学寄附講座，8甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科
10)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでの集学的痛み治療の現況と課題		平成29年11月	第10回日本運動器疼痛学会、福島、2017.11.18～19	柴田政彦1,3)，井上大輔1,2)，西上智彦1,3,4)，安達友紀1,6)，榎本聖香1,3,6)，高橋紀代1,3,7) 1)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，2)大阪リハビリテーション専門学校作業療法学科，3)大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座，4)甲南女子大学看護リハビリテーション学部理学療法学科，5)大阪大学大学院医学系研究科社会医学講座公衆衛生学，6)滋賀医科大学附属病院学際的痛み治療センター，7)篤友会千里山病院

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11)頸髄症における術前・術前後の脳機能的結合の変化 ：安静時fMRIによる検討		平成29年11月	第10回日本運動器疼痛学会、福島、2017.11.18～19	串岡純一1)，海渡貴司1)，武中章太1)，牧野孝洋1)，坂井勇介1)，田中壽2)，渡邉嘉之2)，寒重之3)，吉川秀樹1)，柴田政彦3) 1)大阪大学整形外科，2)大阪大学放射線統合医学講座，3)大阪大学疼痛医学寄附講座
12)入院集学的リハビリテーションの適応と入院期間の検討		平成29年11月	第10回日本運動器疼痛学会、福島、2017.11.18～19	高橋紀代1,2,3)，柴田政彦2,4) 1)千里山病院，2)大阪大学医学部付属病院疼痛医療センター，3)篤友会リハビリテーションクリニック，4)大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座
13)ICD-11への改訂に向けての慢性痛分類について		平成29年7月	日本ペインクリニック学会第51回大会、岐阜、2017.7.20～22	柴田政彦1，山田恵子2，北原雅樹3，井関雅子4，福井聖5，牛田享宏6 1大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座，2大阪大学大学院医学系研究科社会医学講座公衆衛生学，3東京慈恵医科大学麻酔科，4順天堂大学医学部 麻酔科学・ペインクリニック講座，5滋賀医科大学医学部附属病院ペインクリニック科，6愛知医科大学 学際的痛みセンター
14)慢性側腹部痛に集学的診療と漢方薬治療（柴芍六君子湯）が有効であった1例		平成29年7月	日本ペインクリニック学会第51回大会、岐阜、2017.7.20～22	中西美保1，山田恵子3，柴田政彦4 1大阪大学大学院医学系研究科漢方医学寄附講座，2大阪大学医学部附属病院 疼痛医療センター，3大阪大学大学院 医学系研究科 社会医学講座 公衆衛生学，4大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座
15)頚髄症患者における安静時自発脳活動のALFFおよびReHoによる検討		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	寒重之1)，串岡純一2)，武中章太2)，牧野孝洋2)，坂井勇介2)，海渡貴司2)，田中壽3)，渡邉嘉之4)，柴田政彦5) 1)大阪大学大学院医学系研究科生体統御医学講座，2)大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学講座，3)大阪大学大学院医学系研究科放射線統合医学講座，4)大阪大学大学院医学系研究科次世代画像診断学共同研究講座，5)奈良学園大学保健医療学部看護学科
16)慢性の痛みに関する教育プログラムの構築 - 課題解決型高度医療人材養成プログラム ： 慢性の痛みに関する領域		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	鈴木秀典1)，坂井孝司1)，柴田政彦2)，牛田享宏3)，福井聖4)，池田亮5)，田口敏彦6) 1)山口大学大学院医学系研究科整形外科学，2)奈良学園大学保健医療学部，3)愛知医科大学医学部学際的痛みセンター，4)滋賀医科大学医学部附属病院 ペインクリニック科，5)東京慈恵会医科大学整形外科学，6)山口労災病院
17)入院前の集学的診療が入院集学的リハビリテーションに与えた効果~入院中に関わる治療者が適応判断に加わる意義について~		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	丸山伸廣1)，中原理1)，高橋紀代1)，榎本聖香1)，柴田政彦2) 1)千里山病院，2)奈良学園大学保健医療学部
18)医療制度・診療報酬の国際比較		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	三木健司1,2,3)，柴田政彦4) 1)大阪行岡医療大学医療学部，2)早石病院疼痛医療センター，3)認定NPOいたみ医学研究情報センター，4)奈良学園大学保健医療学部

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19)慢性痛に対する入院集学的リハビリテーションの費用対効果の検討		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	高橋紀代1)，中原理1)，榎本聖香2)，田倉智之3)，柴田政彦2,4) 1)千里山病院，2)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，3)東京大学大学院医学系研究科医療経済政策学講座，4)奈良学園大学保健医療学部
20)厚生労働省慢性疼痛診療体制構築モデル事業（近畿地区）報告		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	柴田政彦1,4)，福井聖2)，水野泰行3)，榎本聖香1,2)，西上智彦1)，高橋紀代1) 1)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，2)滋賀医科大学医学部附属病院学際的痛みセンター，3)関西医科大学心療内科学講座，4)奈良学園大学保健医療学部
21)慢性痛発症の契機に他者の落ち度を感じているか否かが，痛み信念に及ぼす影響		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	榎本聖香1)，安達友紀1)，西上智彦1)，高橋紀代1)，柴田政彦1,2) 1)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，2)奈良学園大学保健医療学部
22)認知行動療法で過剰行動と回避行動を順に扱い改善がみられた一次性慢性痛の一症例		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	細越寛樹1,2)，榎本聖香2)，安達友紀2)，高橋紀代2)，西上智彦2)，柴田政彦2) 1)関西大学社会学部社会学科心理学専攻，2)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター
23)痛みの多面性が訪問リハビリテーション利用者の生活に及ぼす影響		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	鳴尾彰人1)，赤尾祥吾1)，西上智彦2)，高橋紀代1)，柴田政彦3) 1)篤友会リハビリテーションクリニック，2)甲南女子大学看護リハビリテーション学部，3)奈良学園大学保健医療学部
24)入院集学的リハビリテーションによる介入が，疼痛生活障害尺度（PDAS）の下位因子に与える影響について		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	中原理1)，高橋紀代1,2)，榎本聖香2)，柴田政彦2,3) 1)千里山病院，2)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，3)奈良学園大学保健医療学部
25)いたみどめ調整入院によるフェンタニルクエン酸塩貼付剤の一時的な使用が効果的であった腰椎変形性側弯症の一例		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	西山菜々子1,2)，田村宏1)，清水憲政3)，石井良平2)，岡本禎晃2)，金井菜穂子2)，柴田政彦2,4) 1)市立芦屋病院リハビリテーション科，2)市立芦屋病院サポーティブケアチーム，3)市立芦屋病院整形外科，4)奈良学園大学保健医療学部
26)線維筋痛症・広範囲慢性疼痛の集学的診療の取り組み精神科診断について		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	三木健司1,2,4)，史賢林3)，柴田政彦5)，行岡正雄4)，橋本亮太6) 1)大阪行岡医療大学医療学部，2)早石病院整形外科・疼痛医療センター，3)てんじん整形外科リウマチ科，4)行岡病院リウマチ科，5)奈良学園大学保健医療学部，6)国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
27)中枢性脳卒中後疼痛の機能結合の変化			第48回日本臨床神経生理学会学術大会、東京、2018.11.9～	細見晃一1,2，清水豪士1-3，森信彦4，眞野智生1,2，渡邉嘉之5，柴田政彦6，寒重之7，Khoo Hui Ming2，谷直樹2，押野悟2，貴島晴彦2，齋藤洋一1,2 1大阪大学大学院医学系研究科脳神経機能再生学，2大阪大学大学院医学系研究科脳神経外科学，3大手前病院脳神経外科，4和歌山県立医科大学附属病院紀北分院リハビリテーション科，5大阪大学大学院医学系研究科次世代画像診断学，6奈良学園大学保健医療学部，7大阪大学大学院医学系研究科麻酔科学
28)安静時fMRIを用いた脳機能的結合解析による頚髄症の新規予後予測法の開発		平成30年4月	第47回日本脊椎脊髄病学会学術集会、神戸、2018.4.12～14	海渡貴司1，寒重之2，武中章太1，牧野孝洋1，坂井勇介1，串岡純一1，田中壽3，渡邉嘉之3，柴田政彦2，吉川秀樹1 1大阪大学整形外科，2大阪大学医学部疼痛医学講座，3大阪大学医学部放射線統合医学講座
29)痛みの行動科学		平成30年6月	第40回日本疼痛学会、長崎、2018.6.15～16	
30)中枢性脳卒中後疼痛の神経画像研究と非侵襲脳刺激療法		平成30年6月	第40回日本疼痛学会、長崎、2018.6.15～16	細見晃一1,2，清水豪士1,2,3，眞野智生1,2，森信彦4，渡邉嘉之5，柴田政彦6，貴島晴彦2，齋藤洋一1,2 1大阪大学大学院医学系研究科 脳神経機能再生学，2大阪大学大学院医学系研究科 脳神経外科学，3大手前病院 脳神経外科，4和歌山県立医科大学附属病院紀北分院 リハビリテーション科，5大阪大学大学院医学系研究科 放射線医学，6大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学
31)中枢機能障害性疼痛患者を特徴づける脳部位間機能的結合の機械学習による検討		平成30年6月	第40回日本疼痛学会、長崎、2018.6.15～16	寒重之1，大迫正一2，植松弘進2，田中壽3，渡邉嘉之4，柴田政彦1 1大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，2大阪大学大学院医学系研究科 麻酔・集中治療医学教室，3大阪大学大学院医学系研究科 放射線部，4大阪大学大学院医学系研究科 放射線統合医学講座
32)過活動の慢性痛患者への認知行動療法　入院治療における多職種連携の一事例		平成31年8月	第19回日本認知療法・認知行動療法学会、東京、2019.8.31～9.1	榎本 聖香(大阪大学 大学院人間科学研究科)，安達 友紀，佐々木 樹，津田 清香，中原 理，高橋紀代，佐々木 淳，柴田 政彦
33)安静時functional MRIを用いた頚髄症患者の脳局所活動評価における可塑性，予後予測		平成31年4月	第48回日本脊椎脊髄病学会学術集会、横浜、2019.4.18～20	武中章太1，海渡貴司1，寒重之2，牧野孝洋1，坂井勇介1，串岡純一1，田中壽3，渡邉嘉之3，柴田政彦4，吉川秀樹1 1阪大大学院整形，2阪大大学院麻酔集中医療医学，3阪大大学院放射線医学，4奈良学園大保健医療学部看護学科
34)中枢性脳卒中後疼痛のアウトカム評価		平成31年7月	第41回日本疼痛学会、名古屋、2019.7.12～13	細見晃一1,2，森信彦1,2，眞野智生1,2，柴田政彦3，貴島晴彦2，齋藤洋一1,2 1大阪大学大学院医学系研究科 脳神経機能再生学，2大阪大学大学院医学系研究科 脳神経外科学，3奈良学園大学
35)中枢性脳卒中後疼痛における中枢神経感作		平成31年7月	第41回日本疼痛学会、名古屋、2019.7.12～13	細見晃一1，森信彦1，渡邉嘉之2，柴田政彦3，貴島晴彦4，齋藤洋一1 1大阪大学大学院医学系研究科 脳神経機能再生学・脳神経外科学，2大阪大学大学院医学系研究科 次世代画像診断学，3奈良学園大学 保健医療学部，4大阪大学大学院医学系研究科 脳神経外科学

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
36)中強度負荷を目的とした自転車エルゴメーターによる有酸素運動のプロトコル作成の検討		平成31年11月	第12回日本運動器疼痛学会、東京、2019.11.30～12.1	丸山伸廣1)，浦澤純一1)，中原理1)，高橋紀代1)，柴田政彦2) 1)千里山病院，2)奈良学園大学保健医療学部
37)当院の集学的痛みセンター外来における中断者の特徴について		平成31年11月	第12回日本運動器疼痛学会、東京、2019.11.30～12.1	中原理1)，高橋紀代1)，柴田政彦2) 1)千里山病院，2)奈良学園大学保健医療学部
38)訪問リハビリテーション利用者の転倒と疼痛の心理的側面との関連		平成31年11月	第12回日本運動器疼痛学会、東京、2019.11.30～12.1	赤尾祥吾1)，鳴尾彰人1)，西上智彦2)，高橋紀代1)，柴田政彦3) 1)篤友会リハビリテーションクリニック，2)甲南女子大学看護リハビリテーション学部，3)奈良学園大学保健医療学部
39)慢性痛を有する訪問リハビリテーション利用者の疼痛や生活機能の縦断的変化		平成31年11月	第12回日本運動器疼痛学会、東京、2019.11.30～12.1	鳴尾彰人1)，赤尾祥吾1)，西上智彦2)，高橋紀代1)，柴田政彦3) 1)篤友会リハビリテーションクリニック，2)甲南女子大学看護リハビリテーション学部，3)奈良学園大学保健医療学部
40)脳機能画像解析による手術6か月後の満足度の予測 －圧迫性脊髄症患者での検証		平成31年7月	日本ペインクリニック学会第53回大会、熊本、2019.7.18～20	柴田政彦1)，寒重之2) 1)奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科，2)大阪大学大学院医学系研究科 生体統御医学講座 麻酔集中治療医学教室
41)帯状疱疹後神経痛患者における脳の可塑的変化に対する安静時機能的MRIによる検討		平成31年7月	日本ペインクリニック学会第53回大会、熊本、2019.7.18～20	恒遠剛示1,2)，寒重之3)，柴田政彦4) 1)牧整形外科病院 麻酔科・ペインクリニック科，2)兵庫医科大学病院 ペインクリニック部，3)大阪大学大学院医学系研究科 生体統御医学講座，4)奈良学園大学保健医療学部
癌性疼痛を有する進行膵癌患者に対する腹腔神経叢ブロックの影響に関する予備的後方視調査	共著	令和3年7月	Palliative Care Research(1880-5302)17巻Suppl. Page S.245(2022.07)	大前 隆仁(芦屋市立芦屋病院 緩和ケア内科)，柴田 政彦，岡本 禎晃，松田 良信，山下 由紀子，河野 真揮枝，武田 亜衣，加治佐 直子，橋野 陽子，江頭 佐都美，橋本 百世
医療者による教育的な関りによってADL・疼痛の著明な改善をもたらした一症例(会議録)	共著	令和3年10月	Journal of Musculoskeletal Pain Research(2186-2796)14巻4号 Page S45(2022.10)	浦澤 純一(千里山病院)，中原 理，前田 吉樹，高橋 紀代，柴田 政彦
慢性疼痛を含む身体症状証に対する認知行動療法と身体的治療とのコンビネーションについて		令和3年12月	第21回日本認知行動療法・認知行動療法学会シンポジウム	企画・座長　柴田政彦・富永敏行 シンポジスト　富永敏行・清水栄司・岩佐和典・上野博司

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　5年　5月　11日

氏名　　辻下守弘

研究分野	研究内容のキーワード
外科系臨床医学	理学療法学、リハビリテーション学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1）奈良学園大学社会連携センター・センター長としての活動	平成28年4月 ～平成30年3月	奈良学園大学社会連携センター長として、大学と地域社会との連携をスムーズにするためのコーディネーターとしての役割を果たした。具体的には、大学が立地する市町村との連携事業である公開講座の企画運営、大学シーズと地域ニーズとのマッチング、産官学連携による共同研究の推進と実施などに関して実施責任者としての活動を行った。
2）奈良学園大学評議員としての活動	平成30年4月 ～現在に至る	奈良学園大学評議員として、大学に関する重要事項の審議に加わることで大学運営に関与した。
3）奈良学園大学保健医療学部研究倫理委員会・委員長としての活動	平成30年4月 ～現在に至る	保健医療学部研究倫理審査委員会は、教員の臨床研究および疫学研究に関して、被験者に対する人間の尊厳、人権の尊重その他の倫理的観点及び科学的観点を調査審議することを目的に設置されている。本委員会の委員長として、委員会の招集および審議の調整および議事録作成と学長への報告書作成など中心的な役割を果たした。これまで審査した申請件数は平成30年度で11件、令和元年度で34件、令和2年度で20件、令和3年度で22件であり、研究倫理審査委員長として審査した件数は合計87件である。
4）奈良学園大学大学院看護学研究科委員会・委員としての活動	平成30年4月 ～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究科設置に伴い、研究科の運営会議としての看護学研究科委員会の委員となって、毎月1回開催される定例の委員会に出席し、以下の事項について委員として審議を行った。①研究科の課程及び学生の教育に関する事項、②研究の指導及び論文の審査に関する事項、③単位認定、課程修了認定並びに学位授与に関する事項、④学生の厚生補導及びその身分に関する事項
5）奈良学園大学大学院看護学研究科研究倫理審査委員会・委員としての活動	平成30年4月 ～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究科設置に伴い、修士課程の1学年生に対する研究倫理審査委員会の委員として、毎年11月頃に開催される大学院研究倫理審査委員会で申請された研究計画書と申請者への質疑応答による審査を行った。これまで平成30年度に6件、令和元年度に3件、令和2年度に2件、令和3年度に5件の審査を担当した。
6）学位論文指導および修士論文審査の実績	平成30年4月 ～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究科修士課程の在宅看護学分野指導教授として、研究指導と修士論文の審査に関与した。 これまで主指導教員として2名の学生に対して研究倫理審査申請書類の作成からはじまり、調査計画およびデータ処理と修士論文作成に関する指導を継続し、令和4年度末終了予定である。主指導教員としてかかわっている学生の研究課題は、「重度身体障害者が進路を決定する要因～重度身体障害者の意識調査から～」と「病院から在宅移行支援する効果的な連携のあり方」である。 また、副指導教員としては1名の学生にかかわり、その研究課題は「在宅にて脳血管障がい者である妻を支える男性介護者が感じる介護負担感について―要因とその支援策の検討―」であり、令和元

事項	年月日	概　　要
		年度末で修士課程を修了し、修士（看護学）の学位が授与されている。 また、修士論文審査では、令和元年度に副査2件、令和2年度に副査1件、令和3年度に主査1件を担当した。 これまで副査として修士論文審査を担当した研究課題は、以下のとおりである。 令和元年度は、「オストメイトの余暇活動に関する促進要因と阻害要因の検討」と「在宅にて脳血管障がい者である妻を支える男性介護者が感じる介護負担感について―要因とその支援策の検討―」である。令和2年度は、「精神科病院入院患者にトラウマ・インフォームドケアに基づく看護面接を実施した看護師の内面に生じること」である。 これまで主査として修士論文審査を担当した研究課題は、以下のとおりである。 令和3年度は、「在宅看護を実施する際の訪問看護師が抱える不安」である。
7）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科・学科長としての活動	令和元年4月 ～現在に至る	令和元年4月にリハビリテーション学科が奈良学園大学保健医療学部に開設され、開設に際して学科長に就任した。学科長は、リハビリテーション学科の運営と人事、および教学などの管理責任者であり、学科に所属する教員の代表としてリーダーシップを発揮している。また。大学の執行部として、企画運営会議や大学評議会にも所属し、大学運営にも関与している。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）専門理学療法士資格更新 （日本理学療法士協会）	平成29年4月1日	公益社団法人日本理学療法士協会から神経（2017S-02-000033）と運動器（2017S-03-000043）の2分野に対する専門理学療法士資格を更新認定を取得
2）公益社団法人日本理学療法士協会認定試験委員会委員としての活動	平成30年6月 ～令和4年6月	公益社団法人日本理学療法士協会において、新人教育プログラム修了者を対象に、自らの専門性を高め、高い専門的臨床技能の維持、社会、職能面における理学療法の専門性（技術・スキル）を高めていくことを目的とした生涯学習制度の一つとして認定理学療法士がある。この認定試験の作問と実施、そして認定基準などを審議する委員会の委員として活動した。
（研究活動） 1）科学研究費補助金研究成果報告書 （基盤研究C）	平成24年度 ～平成26年度	研究科題名：「性差と加齢を考慮した労働者の睡眠の質改善のためのセルフケア・プログラムの開発」 研究代表者：廣川空美 共同研究者：藤井保人、谷口敏代、辻下守弘 研究成果の概要：本研究の目的は、労働者の睡眠の質における性差と加齢の影響を明確にし、性別と加齢に応じた睡眠の質改善のプログラムを開発することである。研究対象者は中規模事業場で働く35歳以上の男女であった。研究期間中の健康診断時期に調査を実施した。1年目の調査結果では、男性の睡眠の質には運動習慣、女性の睡眠の質には教育歴や喫煙状況が関連していた。2年目には、23項目の睡眠チェックリストを作成した。3年目には、睡眠の質改善のためのセルフケア・プログラムの効果評価を行った結果、介入群において3項目に改善が認められた。今後は産業保健スタッフが睡眠改善指導にどのように活用するかを検討する必要がある。

事項	年月日	概　　要
2）科学研究費補助金（基盤研究C）	平成26年度 ～平成28年度	研究課題名「乳がん患者の就労を支えるJob recovery pathの開発」、配分額4,550千円、研究代表者：新谷奈苗、研究分担者：岩永誠、佐藤禮子、河野啓子、守本とも子、辻下守弘 研究成果の概要：乳がん患者の標準治療プロセスを、確定診断、手術、化学療法、放射線療法、ホルモン療法と定義し、これをベースに「全体プロセス」「確定診断時」「確定診断後」「手術後」「化学療法中」「化学療法後」「放射線療法中」「ホルモン療法前」「仕事を休みたい時」「つらい時」というタイミングごとに課題を明確化した。その課題に対し、医療者、企業、社会がそれぞれ何を行うべきかという対応策を検討、提示し、Job recovery pathとしてまとめた。 なお対応策のなかには現時点で実現できていない内容も含まれており、そういった課題の解決を広く社会に対して働きかけ続けていくことも、重要であると考えられる。
3）科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）	令和2年度 ～平成28年度	研究課題名「介護老人保健施設での介護職員指導に関する研究－行動分析学の枠組みによる介助指導－」、配分額2,860千円、研究代表者：小林和彦、共同研究者：辻下守弘 研究成果の概要：行動分析学の枠組みを用いたe-learningによる自己学習式移乗介助指導プログラムを高齢者介護施設介護職員を対象に施行し、事前、事後、およびフォローアップ評価を行うことで、その介入効果を検証した（介入群15名、統制群15名）。評価内容は、介助技術評価指標として「模擬患者への“身体接触率”」を用いた。 その結果、介入群の事後評価時における身体接触率の減少傾向、およびフォローアップ評価時における増加傾向が認められた。また、指導コンテンツの満足度に関する事後アンケートの結果、否定的な意見もあったものの、概ね良好な回答が得られた。
4）科学研究費補助金（基盤研究C）	令和4年度 ～令和6年度	研究課題名「転倒恐怖感を持つ高齢者を対象とした仮想現実技術を導入した曝露療法の開発とその評価」、配分額4,160千円、研究代表者：辻下守弘、共同研究者：登尾啓史、大西克彦、小枝正直 研究成果の概要：高齢者の転倒は、要介護状態を促すだけでなく、転倒を恐れて日々の生活活動が低下し、閉じこもりやうつ傾向を招き、再転倒や虚弱化のリスクを高める。そこで、本研究の目的は、仮想現実（VR）技術を用いて高齢者の転倒恐怖感を軽減させるVR曝露療法を開発することである。本研究では、転倒経験のある高齢者を対象として、転倒恐怖を感じる生活場面のVRデータを構築し、それをVRゴーグルで高齢者に視聴してもらうことで、高齢者に転倒恐怖感が惹起させることを精神生理学的測定により確認する。さらに、その転倒恐怖VRを用いて、惹起された恐怖感を心拍変動バイオフィードバックにて緩和させるといっ
4　その他 12）京都市立芸術大学大学院美術研究科美術専攻博士（後期）課程の博士論文審査委員	平成27年12月 ～平成28年12月	京都市立美術大学大学院美術研究科美術専攻博士（後期）課程において、美術作品をリハビリテーション医療に活かす研究を博士論文の課題としている学生に対して、リハビリテーション医療に携わる研究者として博士論文の審査を行っている。平成28年2月には第1回の博士論文報告会があり、発表論文への試問を実施し、博士論文審査委員会において論文への評価と今後の課題について報告を行った。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1 日常生活活動学・生活環境学	共著	平成24年9月	医学書院	本書は、「日常生活活動学」と「生活環境学」の二部構成である。「日常生活活動学」は、総論でADLの歴史、概念、評価などの基本事項を解説し、各論で疾患別の評価方法とADL指導を具体的に提示し、「生活環境学」では、概念や法的諸制度、住宅改修や生活支援機器について解説した。（377頁） （編者：鶴見隆正、隆島研吾　分担執筆者：秋若山佐一、林　克郎、辻下守弘、他25名） 担当部分：第1章第4節「ADLの運動学的分析」運動学の基本事項を整理した上で、日常生活動作を運動学的に分析するための基礎を詳細に解説した。また、起き上がりや立ち上がりなどの動作に対する運動学的分析を具体例も上げながら論述した。 (pp.36～51、単著)
2 脳卒中理学療法の理論と技術	共著	平成25年6月	メジカルビュー社	本書は、臨床の場で用いられる実践的な理学療法と、その基礎となる解剖学・生理学の知識をはじめ、病態生理の知識、理学療法評価の技術、運動処方および生活指導のための理論的背景と技術を解説した。（512頁） （編者：原　寛美、吉尾雅春　分担執筆者：渡辺雅彦、中村　元、辻下守弘、他22名） 担当部分：第Ⅴ章「理論と理学療法」の中の「バイオフィードバック療法」を担当した。 バイオフィードバック理論の基礎となる学習理論を解説した上で、バイオフィードバックが使う各種モダリティーや国内の代表的な機器について紹介した。また、脳卒中片麻痺患者に対するバイオフィードバックとニューロフィードバックについても論述した。 (pp.445～456、単著)
3 生活支援の基礎理論Ⅰ	共著	平成27年4月	光生館	本書は、地域での生活を支援する介護福祉士として必要な基礎知識を，保健，心理，栄養，居住環境，家族支援などの関連分野から体系的に学習できるように解説している。（196頁） （編者：上之園佳子、谷口敏代、鈴木聖子、　分担執筆者：本名靖、太田貞司、土室修、辻下守弘、他16名） 担当部分：第５章「介護福祉の基礎となる心理学」の中の「学習」を担当した。 学習の定義と介護福祉領域で必要となる重要事項を解説した上で、認知心理学的な考え方と行動分析学的な考え方に分けて各理論を具体例を入れながら解説した。 (pp.98～102、単著)
4 痛みのケア	共著	平成29年3月	ピラールプレス	本書は、看護現場で求められる痛みのケアについて、哲学・倫理学的理解と痛みの理論からはじまり、痛みの治療と看護ケアについて解説した上で、看護実践事例について検討されている。（編者：守本とも子 分担執筆者：池辺寧、沖本克子、梶村郁子、辻下守弘、他15名） 担当部分：第Ⅱ部「痛みの理論」第5章「痛みの行動科学的理解」を担当した。看護現場における痛みの生理医学的アプローチの問題点を指摘した上で、慢性的ないたみを行動科学的にアプローチすることの重要性について解説している。また、痛みの社会的強化により出現する痛み行動に対する理解と看護現場での具体的なケアの方法論について提案している。（pp.34～41、単著）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
5 看護師国家試験 直前 社会福祉学領域 ファイナルチェック	共著	令和3年3月	金芳堂	本書は、看護職をめざす読者が社会福祉について学ぶためのテキストである。また同時に、すでに看護職として活躍されている方々にも現代における社会福祉についての理解を深め、看護実践における社会資源の活用に向けて、重要な示唆を与えるものとなっている。（編者：守本とも子、富永堯史、分担執筆者：井上昌子、井上葉子、小林由里、齋藤英夫、佐藤郁代、芝田ゆかり、高橋寿奈、田場真理、中馬成子、辻下守弘、他21名） 担当部分：第12章「ソーシャルワークの理解」を担当した。ソーシャルワークが発展した歴史を概説した上で、ソーシャルワークの基礎理論と概念モデルについて解説した。また、看護職に必要なソーシャルワークの実践過程の知識とチーム医療における位置づけについても記述した。（pp.162～175、単著）
6 ＶＲ／ＡＲ技術における感覚の提示、拡張技術と最新応用事例	共著	令和3年6月	技術情報協会	本書は、5G時代の到来で医療や教育、スポーツ、モノづくり現場まで様々な分野など市場が拡大しているAR（拡張現実）やVR（人工現実）などの先端技術に関する最新の理論と応用事例、および科学的根拠となる研究の現状を各方面の専門家により紹介している。（編者：技術情報協会 分担執筆者：繁桝博昭、半田知也、鳴海拓志、辻下守弘、他63名） 担当部分：第９章「医療分野への活用事例」第6節「バーチャル・リハビリテーションの最新動向とバイオフィードバック技術」を担当した。本節では，コロナ禍の社会において注目されるようになった遠隔リハビリテーションと最先端技術であるバーチャル・リハビリテーション（VR)の最新動向を紹介するとともに，このVR技術とバイオフィードバック技術との融合についても、自身が行った研究結果などを含めて解説した。（pp.482～493、単著）
（学術論文） 1 Relationship between life satisfaction and sympathovagal balance in healthy elderly males at home at night （夜間在宅における健常老年者の生活満足度と交感神経バランスとの関連性） （査読付）	共著	平成24年10月	Health Vol.4 No.11 pp.1068-1072	本研究の目的は、老年者における夜間在宅での生活満足度が交感神経バランスと関連するかを検討することであった。健常老年者39名を対象として、アクティブトレーサーにより72時間の心拍変動と身体活動量を計測した。測定の結果、生活満足度と交感神経バランスとの間には-0.47の有意な相関関係を認めた。(5頁) (分担執筆者：吉野公三、守本とも子、板垣孝弘、池谷茂隆、永田昌美、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果部分を担当した。
2 Effects of a hardness discrimination task in failed back surgery syndrome with severe low back pain and disturbed body image: case study （身体像の認知課題作業が背部の術後症候群による重度な腰痛症に対する影響：事例研究） （査読付）	共著	平成24年10月	Journal of Novel Physiotherapies 2012 Open Access	本研究では背部の術後に重度な腰痛を発症した20歳の女性に対して認知課題による疼痛緩和のアプローチを行った。初期の疼痛はNRSで10と最大の痛みを訴えていた。また、身体像の認知に障害を持っていた。介入として1日20分、週6日の認知課題のトレーニングを4週間にわたり行ったところ、痛みがNRSで5と半分に緩和され、歩行や日常生活動作能力も改善していた。(6頁) (分担執筆者：西上智彦、奥埜裕之、中野英樹、大村裕、清水ミッシェルアイズマン、辻下守弘、壬生彰、牛田孝博) 担当部分：症例の理学的評価と訓練および論文の結果部分を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3　運動器疾患を有する高齢者の生活機能に対する理学療法の取り組み　通所リハビリテーション利用者の心理・社会的側面に着目して	共著	平成26年4月	理学療法第31巻第4号 pp.376～382	1.運動器疾患を有する高齢者の生活機能の改善には、高齢者の身体活動の開始と継続に関する要因を理解する必要があり、心理・社会的要因が大きく関連している。2.どのような治療を選択するにしても、高齢者個々の心理・社会的要因を認識し、オーダーメイドの治療を実施することが必要である。3.高齢者の心理・社会的要因を認識するための第一歩は、対象者とのコミュニケーションである。単なるコミュニケーション技法を用いるのではなく、対象者を支えている信念や認識に触れる関わり方がオーダーメイドの治療を実施できた。(7頁) (分担執筆者：大門恭平、米田大人、辻下守弘、川村博文) 担当部分：高齢者の運動機能に関する要因の分析と論文の一部執筆を担当した。
4　Central neural mechanisms of interindividual difference in discomfort during sensorimotor incongruence in healthy volunteers: an experimental study （健康対象者における感覚運動不一致による不快感が個人差に関する中枢神経メカニズムについて：実験的研究） （査読付）	共著	平成26年10月	Rheumatology 2014 Open Access	本研究の目的は、感覚運動認知の不一致に関する個人差に関して、その中枢神経メカニズムを明らかにすることである。対象は、18名の健常若年女性であり、感覚運動認知の不一致課題を独自に作成し、その認知課題中における脳波を分析し、脳内メカニズムをLORETA法によって解析した。その結果、不一致の個人差は前部帯状回および後部帯状回の活動状況の違いと一致していることがわかった。　(8頁) (分担執筆者：分担執筆者：西上智彦、中野英樹、大住道弘、辻下守弘、壬生彰、牛田孝博) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果部分を担当した。
5　バイオフィードバックの発展に向けての提言　日本バイオフィードバック学会企画委員会からのアンケート結果報告	共著	平成26年10月	バイオフィードバック研究 第41巻第2号 pp.95～102	2012年の第40回学術総合においてアンケート調査を実施した。学術総会に参加した25人の学会員から回答を得た。その結果、1.医学・工学・心理学の研究面の連携に関して学会の存在意義を認める回答が多かった。2.学会に望むことについては、次世代を担う若い研究者・学生が積極的に参加できる環境づくりを指摘する意見が目立った。3.会員以外には、バイオフィードバックについて正しく分かりやすく理解してもらう情報提供の必要性を訴える意見が多かった。以上の結果に基づいて今後学会の方向性に関する提案を行った。(8頁) (分担執筆者：中尾睦宏、大須賀美恵子、廣田昭久、佐久間春夫、志和資朗、竹林直紀、辻下守弘) 担当部分：アンケート調査の作成からデータ整理と統計分析および考察の一部の執筆を担当した。
6　高齢者に対する視覚誘導性到達課題を用いた音楽運動療法の開発とその効果に関する研究 （査読付）	共著	平成27年3月	医療福祉情報行動科学研究 第3号 pp.27～32	本研究では、視覚誘導性到達運動課題を用いた音楽運動療法を開発することとこれが高齢者のバランス能力に及ぼす影響を明らかにすることであった。対象は70歳以上の健常高齢者16名であり、実施群8名と対照群8名の2群に割り付けた。評価は機能的バランス尺度（BBS)、TUG、FRTおよび静的重心動揺計と動的姿勢制御検査とした。5回の練習後、BBS、FRTそして動的姿勢制御検査の有意な改善を認めた。(6頁) (分担執筆者：辻下守弘、川村博文、永田昌美、前田吉樹) 担当部分：研究全般を実施し論文全体の執筆を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7　Kinectセンサーを使った仮想環境が高齢者の運動機能に及ぼす影響について （査読付）	共著	平成27年4月	バイオフィードバック研究 第42巻第1号 pp.57～62	Microsoft社により開発されたKinectセンサーを使った風船割りゲーム「キネリハシステム」を使って高齢者にゲームを定期的に行ってもらい、仮想環境が高齢者の運動機能にどのように影響を及ぼすかを検討した。デイケアに週2回以上通う高齢者23名に対しキネリハシステムを週2回以上4週間実施した。この前後に(1)10m歩行(2)TUG(3)5StepTestを測定し4週間完遂した者について結果を比較した。その結果、継続してゲームを行い施行期間の最後まで継続してやり遂げ(1)～(3)を測定できた者は7名だった。ゲーム後の結果が(2)と(3)において有意に向上していた($p<0.05$)。(6頁) (分担執筆者：小貫睦巳、有田元英、井上悦治、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。
8　介助者による介助の経時的変化に基づいた介助評価方法の検討－認知症を有する高齢障害7 者への介護職員による移乗介助場面の行動論的分析－ （査読付）	共著	平成27年12月	理学療法科学第30巻第6号 pp.933-937	車椅子からベッドへの移乗課題を用い、介助を基準に被介助者の遂行レベルを査定する評価法の妥当性を行動論の視点から検討した。対象は施設介護職員および入所中の認知症を有する高齢障害者とした。介助者の4段階の介助系列をもとに6段階の遂行レベルを設定し、各単位行動が遂行されたときの介助を遂行機会ごとに図示し、介助の経時的変化を被介助者の遂行レベルの推移の視点から分析した。その結果、被介助者による遂行過程は単位行動ごとに異なった遂行レベルを推移しており，従来ADL評価法とは視点の異なる情報が得られた。 (分担執筆者：小林和彦、辻下守弘) 担当部分：症例の評価と介入指導および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。
9　生体センシング技術を使った仮想現実によるゲームが高齢者の運動機能に及ぼす影響について （査読付）	共著	平成27年12月	理学療法科学第30巻第6号 pp.811-815	生体センシング技術を使ったゲームを高齢者に行わせ仮想現実を利用したゲームが高齢者の運動機能にどう影響を及ぼすかを予備的調査した。高齢者23名に対しゲームシステムを週2回以上4週間実施した。4週間実施前後の①10m歩行②TUG③5StepTestの3つのパフォーマンステストの結果及びゲームの測定機能を利用したゲームに対する平均反応速度とゲームの成功率について比較した。その結果、②と③及び平均反応速度・成功率に於いて施行後が施行前に比べ有意に向上していた。またゲーム完遂者に運動習慣があるものが有意に多かった。 (分担執筆者：小貫睦巳、有田元英、井上悦治、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果の一部の執筆を担当した。
10　中年女性に出現する肩こりと腰痛の重複症状の実態とその関連要因に関する研究 （査読付）	共著	平成28年3月	甲南女子大学研究紀要（看護学・リハビリテーション学編）第10号 pp.1-10	本研究では、パソコン操作を主体とした作業に従事する中年女性従業員335名を対象として、肩こりと腰痛の重複症状が出現する実態を明らかにするとともに、その身体的、心理的、社会的な要因との関連性について検討した。症状なし群、肩こり単独群、腰痛単独群、そして両者重複群という4群間において各要因を比較したところ、分散分析により有意な主効果を認めたのは、年齢、運動態度、食行動、K6、そしてクッパーマン指数であった。多重ロジスティック回帰分析の結果、肩こりと腰痛の両者重複と関連する要因は、低いBMI、高いK6スコア、そして高いクッパーマン指数であった。 (分担執筆者：辻下 守弘、永田 昌美、芝 寿実子、前田 吉樹、川村 博文、小貫 睦巳) 担当部分：データ収集から統計処理および論文執筆を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11　心身のストレスおよび作業量からみた体圧移動で座面が変化するERチェアの評価　健常成人女性および高齢者を対象としたプレテストの結果から （査読付）	共著	平成28年3月	甲南女子大学研究紀要（看護学・リハビリテーション学編）第10号 pp.19-28	本研究は、高齢者用に開発したERチェアと通常の椅子を比較し、対象者の心身のストレスにどのような影響をもたらすかを検証することとした。被験者は、参加条件を満たした健常成人女性6名と高齢者8名の計14名である。研究デザインはクロスオーバー・デザインとし、被験者にはERチェアと通常の椅子の2種類の椅子に座った際に５つの課題を課した。分析の結果、主観的疲労感の全身倦怠感において、被験者全体の操作実施前後の平均値はERチェアが減少したが、通常の椅子は増加し、平均値の差の比較で統計的に有意な差が認められた(p=.04)。また、唾液アミラーゼ量において、高齢者の操作実施前後の平均値はERチェアがやや減少し、通常の椅子が増加して統計的に有意な差が認められたが(p=.04)、交互作用が認められた。 (分担執筆者：丸尾 智実、兼田 美代、臼井 キミカ、辻下 守弘、速水 裕子) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果の執筆を担当した。
12　骨盤臓器脱術後の便失禁症状に骨盤底筋の筋電図バイオフィードバック療法が奏効した症例 （査読付）	共著	平成28年4月	バイオフィードバック研究 第43巻第1号 pp.19-26	今回、骨盤底筋の選択的筋収縮が困難であった便失禁を有する症例に対して、骨盤底筋の筋放電を確認しながら筋収縮を確認し、筋収縮を調整する筋電図バイオフィードバック療法が症状の改善に有効であったので報告した。症例は、膀胱瘤により骨盤臓器脱術を受けた70歳の女性である。骨盤臓器脱の症状は手術により改善したが、運動時にガス程度の便失禁が4～5回以上認められた。評価および介入は、Thought Technology社製のMyotrac3を用い、骨盤底筋と腹筋を分離して筋収縮させることを目的として実施した。10セッション実施の結果、持続的収縮においては8セッションから骨盤底筋のみを収縮させることが可能となった。運動時の失禁頻度は6セッション時から減少した。 (分担執筆者：松谷 綾子、青田 絵里、西上 智彦、辻下 守弘、服部 耕治、木村 俊夫) 担当部分：症例の評価と治療および論文の症例報告と考察の一部の執筆を担当した。
13　行動分析学の枠組みを用いたコンピューターシミュレーション教材による介護老人保健施設介護職員への介助指導 － 高齢障害者に対するベッドから車椅子への移乗介助指導効果の検討 － （査読付）	共著	平成28年8月	行動療法研究第42巻第2号 pp.201-213	本研究においては、行動分析学の視点から理論および介助の方法論を解説したパソコン上で作動する教材を開発し、介護職員3名に自己学習とセルフチェックを行ってもらい、介護老人保健施設入所者に対するベッドから車椅子への移乗介助技能への効果を、単一事例実験計画法を用いて検証した。その結果、3名とも適切な介助の頻度が増加(平均46.2%)し、彼らが日頃介助している入所者も、より少ない介助で移乗が行えるようになった。また、移乗介助指導の効果が同じ入所者の脱衣介助に反映されることも確認された。さらに、指導プログラムの内容や意義に関しても比較的良好な受け入れや評価が得られた。以上から、従来の指導方法によるデメリットを補完する役割を果たすことができ、本教材が介護職員指導における効果的な方法論として位置づけられる可能性が示唆された。 (分担執筆者：小林和彦、辻下守弘) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14　疼痛に対する物理療法・運動療法	共著	平成28年8月	The Japan Journal of Rehabilitation Medicine 第53巻第8号 pp.604-609	本論文では、疼痛に対する治療としての物理療法、運動療法について、有効性に関わる理論的な裏付けから臨床のエビデンスを交えて検討した。その結果、急性痛と慢性痛とでは、対応が異なり、急性痛には過度な不活動を避け、原因となる組織損傷の治療を下級的早期に進めることと、可能な限り疼痛を抑制し長期化を阻止することが重要であることが分かった。また、慢性痛では、感覚面に着目する以外に、情動面や認知面などの多面的、複合的な側面での特性の認識理解が不可欠であり、ADLやQOL向上を目的として、TENSなどの物理療法、運動療法、学際的集学的治療を導入することが重要であることがわかった。 (分担執筆者：川村博文、西上智彦、伊藤健一、大矢暢久、辻下守弘) 担当部分：文献収集と整理および論文の慢性疼痛に関する部分の執筆を担当した。
15　インタラクティブ・メトロノーム法の紹介とリハビリテーションへの応用可能性	単著	平成28年9月	奈良学園大学紀要第5集 pp.1-9	本論文では、運動・認知機能のリハビリテーションに欠けていた脳内時計と時間情報処理能力を高めるというコンセプトを導入した新しいトレーニング方法であるインタラクティブ・メトロノーム法（Interactive Metronome®：以下IMと略す）について、その歴史、原理と方法、トレーニングの手順、そして科学的根拠を概説した上で、リハビリテーションへの応用可能性について解説した。IMの利点は、リズム音に手と足の動きを同調させてタイミングをとるといった非常にシンプルなトレーニングであり、2歳程度の幼児から高齢者まで適用範囲が広く、生体への侵襲も全くないため、従来のリハビリテーションへ併用して使用可能なことである ただし、現在の問題点は、科学的根拠を裏付けるIMの臨床研究が国際的にも不足していることやIMシステムが日本における医療機器の薬事承認を得てないことであった。
16 バーチャルリアリティ（VR）技術を用いた高齢者のリハビリテーションに関する文献的研究	単著	平成29年9月	奈良学園大学紀要第7集 pp.75-81	コンピュータサイエンスの発展によってバーチャルリアリティ（VirtualReality：VR）技術が身近になった。一方で、わが国は急速なスピードで超高齢社会が進行し、要介護状態の高齢者が急増する中で、高齢者のリハビリテ-ションが注目されている。そこで、本論文では、VRの定義と特徴を解説した上で、主にWiiとKinectセンサーを用いた高齢者リハビリテーションへの応用に関する国内外の現状と課題を文献的に考察した。その結果、WiiとKinectセンサーを用いたトレーニングが高齢者の心身機能に及ぼす影響を明らかにした良質の無作為化比較対照試験（RCT）は少ないものの、高齢者の機能的なバランス能力を改善させる効果のあることが多くの論文で示唆されていた。VRを用いた高齢者のリハビリテーションには課題もあるが、より没入感の強いヘッドマウントディスプレイが普及することで、今後は高齢者リハビリテーションへの応用可能性が拡大すると考えられた。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
17 タイ王国の周産期看護ーチェンマイ大学看護学部の視察を通してー	共著	平成29年9月	奈良学園大学紀要第7集 pp.179-185	タイ北部にあるチェンマイ大学を視察し、タイにおける周産期看護の現状についての現状把握を行った。タイでは、仕事を持つ母親たちの多くが授乳のための環境が整っていないために母乳で育児を行うことは困難であり、母乳育児率の低下が問題視されていた。こういった社会的背景から、母乳育児の重要性についての啓発活動と環境を改善するための王室によるプロジェクトが発足し、企業の事業所内の授乳コーナー設置や無料での母乳輸送サービスの提供などが現在では行われていた。日本においても母乳育児の利点については知られてはいるが、タイ王国のようなサービスの整備までには至っていない状況なため、タイ王国の周産期看護の現状を把握することは、日本の周産期看護の質改善のための示唆を得ることにつながると考えられた。 （分担執筆者:田中和奈、守本とも子、辻下守弘） 担当部分：現地での調査および論文のインタビュー解析に関する部分の執筆を担当した。
18 リハビリテーション医療におけるバイオフィードバック―脳卒中片麻痺に対する応用可能性について	単著	平成29年9月	バイオフィードバック研究 第44巻第2号 pp.70-75	本研究の目的は、各種の生体情報を音や光などの人間にわかりやすい情報へ変換し、その情報に基づいて自己の状態を調整するバイオフィードバック（以下BF）に対するリハビリテーション医療（以下リハ医療）への応用可能性を検討することであった。リハ医療の特徴は、一般的な医療が手術や投薬など医療者に依存した受動的治療であるのに対して、残存機能の回復や健常機能への代償など患者自身による能動的治療が主体となることであり、患者の学習過程への介入が重要なアプローチとなる。本論文では、その効果的な介入方法としてのBFに関して、その治療メカニズムについて学習理論を用いた解説を行った。また、脳卒中片麻痺に対す表面筋電図BFについて、コンパクトなBF機器であるMyoTracの操作方法と治療手続きとその効果および臨床応用上の課題について論説した。最後に、EEG（脳波計）やHEG（近赤外線方式脳血流計）を用いたニューロフィードバックトレーニングが脳卒中だけでなく他の神経系障害および運動器障害へのリハビリテーションに応用されていく可能性を検証し、多様なモダリティを使ったBFがリハ医療に応用されていく必要性について論説した。
19 Comparison of the pain-relieving effects of transcutaneous electrical nerve stimulation applied at the same dermatome levels as the site of pain in the wrist joint （手関節部の疼痛に対する頸部と対側手関節および両者の同一皮膚分節知覚帯への経皮的膚電気刺激が疼痛軽減に及ぼす影響の比較） （査読付）	共著	平成29年11月	Journal of Physical Therapy Science Vol.29 No.11 pp.1996-1999	本研究の目的は、手関節部の疼痛に対する対側同一皮膚分節知覚帯への経皮的電気刺激(Transcutaneous Electrical Nerve Stimulation:以下TENS)が疼痛緩和にどのような影響を及ぼすかを検討することであった。対象は15名の健康な成人女性（21.9±0.3歳[21-22歳]）であった。実験手続きは、まず30秒間の安静後に左手関節背側部へ47℃で60秒間の温熱刺激にて疼痛を生じさせ、その後に頸部（N）と対側手関節部（CW）および両者（CWN）へのTENS（周波数:15Hz・波長:200μs）を実施した。その結果、TENSを行わない対照群を含んだ4条件の分散分析では視覚的アナログ尺度（VAS）の違いに有意な主効果を認めたが、N条件、CW条件、CWN条件間には有意差を認めなかった。本研究の結果、疼痛部位と同一の皮膚分節知覚帯へのTENSには有意な効果があるものの、TENS部位間での有意差は認められなかった。 （分担執筆者：川村博文、西上智彦、山本綾子、辻下守弘、伊藤健一、大矢暢久、高木峰子） 担当部分：被験者への疼痛評価とTENSの実施および統計処理と論文の結果に関する部分の執筆を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
20 訪問リハビリテーションにおける在宅緩和ケアとしての理学療法の可能性―がん患者と非がん患者の事例を通して― （査読付）	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究 vol.5 pp.3-9	本論文では、訪問リハビリテーションにおける在宅緩和ケアとしての理学療法の2実践を通して、有効な実践知を抽出し、その可能性について提示した。事例1の大腸がんを有する80歳代女性の実践からは、理学療法士の介入は限られているが、多職種間連携により運動療法と環境調整を継続することで、疼痛緩和の時間を多くし、生活全体を変化させることが可能であることを理解した。また、事例2の多系統萎縮症を有する60歳代女性の実践からは、疼痛などにより他者とのかかわりが減少したとしても、多職種間連携によって小さな効果を積み重ねていくことができれば、最後まで希望のある充実した時間を提供できることが明らかとなった。本研究では訪問リハビリテーションにおける多職種間連携による在宅緩和ケアの2実践を通して、がん患者と非がん患者に対する在宅緩和ケアとしての理学療法に対する可能性を広げたものと考えられた。 (分担執筆者：池田耕二、山本秀美、古家真優、中岡絵美、大島知子、竹内　章、辻下守弘、池田秀一) 担当部分：非がん患者である多系統萎縮症の事例に関する記述と多職種間連携に関する考察の執筆を担当した。
21 リハビリテーション医療におけるバイオフィードバックの応用	単著	平成30年4月	バイオフィードバック研究 第45巻第1号 pp.41-44	リハビリテーション医療におけるバイオフィードバックの応用として、主に表面筋電図バイオフィードバック（SEMGBF）と心拍変動バイオフィードバック（HRVBF）に関する臨床経験について解説した。SEMGBFについては、脳神経筋疾患における促通目的と弛緩目的での治療に使われることが多いため、その適用について目的別の説明を行った。実際の適用症例として、促通目的では交通外傷後の膝蓋大腿関節機能不全と便失禁の原因となる骨盤底筋機能不全に対する治療とその効果について紹介し、抑制目的では無意識な筋肉の過緊張状態（ディスポネーシス）を認める腰痛に対する治療とその効果について紹介した。また、HRVBFについては、心拍コヒーレンス法を用いた膠原病性間質性肺炎による呼吸不全患者の治療経験について紹介した。最後に、リハビリテーション医療におけるバイオフィードバック応用の利点と欠点について考察した上で、今後の応用可能性について論述した。
22 バーチャルリハビリテーションにおける次世代バイオフィードバックの可能性	単著	平成30年10月	バイオフィードバック研究 第45巻第2号 pp.73-78	リハビリテーションとは，脳卒中や交通事故により四肢に障害を抱えた患者をトレーニングし，家庭や職場へ復帰できるように支援することであるが，そのトレーニングは辛く苦しいものであることが大きな課題であった. 　バーチャル・リハビリテーションとは，一般的にVRと呼ばれているバーチャルリアリティ（仮想現実）技術とロボット技術を統合した次世代リハビリテーションの総称であるが，国際的には研究開発の歴史が長いものの日本ではまだ普及が遅れているのが現状である. 　バーチャル・リハビリテーションの利点は，病室やリハビリテーション室という限られた空間の中で，自由なVR場面を設定できることである. 　本稿では，バイオフィードバックが応用されたバーチャル・リハビリテーションについて紹介し，その応用可能性について報告した.

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23 失禁とバイオフィードバック	単著	令和2年4月	バイオフィードバック研究 第47巻第1号 pp.19-22	失禁（Incontinence）とは，排尿や排便が自分の意志でコントロール（禁制：Continence）できずに排出される状態のことをいう.本稿では，主に筋電図を用いた骨盤底筋に対するバイオフィードバックの方法とその効果について報告した。まず、失禁と骨盤底筋機能障害との関係について解剖生理学的に明らかにした上で、失禁に関して骨盤底筋機能が重要であることとそのケアについて解説した。また、骨盤底筋機能を効果的に高めるアプローチとして筋電図バイオフィードバック療法(EMGBF）について、その基本的原理と具体的なトレーニングの方法を解説するとともに、これまで行われた臨床研究を整理し、科学的なエビデンスについて言及した。最後に、日本においてEMGBFが欧米や中国に比較すると未だ標準的な治療として位置づけられてい現状および今後の課題と展望についても論述した。
24 作業療法を深める（42）VR（仮想現実）VR 技術を用いたリハビリテーションの現状と展望	単著	令和2年6月	作業療法ジャーナル 第54巻第6号 pp.562-569	最近ではコンピュータサイエンスの進歩により，VR（人口現実）技術が身近となり，意欲を高める多様なリハの可能性が高まり，欧米ではバーチャル・リハビリテーションと名づけられ，広く応用されつつある．また，脳卒中片麻痺の運動障害等に対してVRを導入した治療では，主に上肢機能と日常生活活動への効果に関する報告が多く，その効果は今のところ限定的ではあるが，作業療法への応用可能性は高いと考えられる． 本稿では，VR技術を用いたリハに関して，まずVRとは何かを定義したうえで，VRの鍵となる「臨場感」と「没入感」について解説し，リハにおけるVRの応用事例の紹介とリハビリテーション医療におけるVRの今後について展望した．
25 The Efficacy of Virtual Reality Exposure Therapy for Fear of Falling (FOF) in the Elderly ＜英文＞ 高齢者における転倒恐怖症に対するバーチャルリアリティ曝露療法の効果 （査読付）	共著	令和2年7月	Conference paper In International Conference on Human-Computer Interaction Springer, Cham. pp.178-187	転倒恐怖症は、過去1年間に転倒した人の平均50%に発生するため、高齢者によく見られる症状である。本研究の目的は、バーチャルリアリティ曝露療法を用いて、高齢者の転倒者における転倒恐怖症（FOF）を軽減する試みについて報告した。本研究では、以下の2つの実験を実施した。まず、バーチャルリアリティ技術を用いた曝露療法システムを開発し、被験者にそれを装着して視聴させ、被験者の心拍数や皮膚温などのバイタルデータを収集し、バーチャルリアリティを用いた曝露療法の有効性を検証した。本研究では、以前に転倒したことのある高齢者を対象として予備実験を行い、バーチャルリアリティ曝露療法による転倒恐怖症の軽減効果を確認した。 (分担執筆者：辻下守弘、登尾啓史、升谷保博、小枝正直、大西克彦) 担当部分：バーチャルリアリティ曝露療法の開発から臨床試験およびデータ解析と論文作成の全体を担当した。
26　本学保健医療学部リハビリテーション学科志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要第13集 pp.151-157	本学リハビリテーション学科の広報活動に資する基礎資料とするため、2020年度新入生の志望経緯および本学に対する印象等についてアンケート調査を行った。その結果、理学療法・作業療法いずれの専攻についても、多くの学生は当初の志望を中途変更することはなかった。作業療法学専攻については、特徴的な技術に魅力を感じたことが契機となっていた。入学前の本学選択においては設備、環境面を魅力と感じており、入学後は教員や教育の質について肯定的な意見が多かった。 (分担執筆者：飯塚 照史，辻下 守弘，池田 耕二，城野 靖朋，中島 大貴) 担当部分：アンケート調査の実施と調査結果のデータ整理と統計処理を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
27 特集：コロナ禍におけるバイオフィードバック.リハビリテーション領域における現状	単著	令和3年4月	バイオフィードバック研究 第48巻第1号 pp.17-23	COVID-19の世界的な感染拡大は，リハビリテーション領域においても重大な問題となった.そもそもリハビリテーション領域の理学療法や作業療法は，徒手的治療あるいは日常生活動作指導において，セラピストと患者との濃厚接触が基本となる治療的介入であり，それを否定する接触感染対策は受け入れがたいのが現状である．コロナ禍におけるリハビリテーションの課題は，濃厚接触業務，3密回避困難，そして社会活動制限の3点である．これらの課題に対するBFの応用として，筋電図BFと心拍変動BFを紹介した．今後は，国内においても接触感染対策としての遠隔リハビリテーションが大きく注目され，BFの応用可能性はますます高くなると考えられることについて論述した.
28 創傷被覆材における近赤外線透過率の検証 （査読付）	共著	令和3年4月	医療福祉情報行動科学会雑誌 第8巻 pp.11-18	本研究では、創傷被覆材であるフィルムドレッシング（FD）材，ハイドロコロイドドレッシング（HC）材，ハイドロファイバー（PF）材，ポリウレタンフォーム（HP）材のドレッシング材を準備し，滲出液を含まない状態（乾燥している状態）と滲出液を含んだと仮定した状態（生理食塩水を吸収させた状態）の近赤外線透過率を確認した。 その結果、FD材については約95％の透過率があったため，FD材のみであれば十分な近赤外線が創部へ到達すると考えられる。しかし，HC材，PF材，HP材は13～96％と透過率に差があったため，使用ドレッシング材の透過率を計算した上での照射強度の設定が必要であることが示唆された。また，HC材については，水分を吸収することで透過率が減少し，PF材については水分を吸収することで透過率が増加していた。 (分担執筆者：吉川義之、城野靖朋、滝本幸治、植村弥希子、辻下守弘) 担当部分：近赤外線透過率の計測とデータ解析を担当した。
29 A Discussion of Social Support for Dementia Elderly People and Family Carers ＜英文＞ 認知症高齢者と家族介護者におけるソーシャルサポートの考察 （査読付）	共著	令和3年4月	医療福祉情報行動科学会雑誌 第8巻 pp.67-75	本研究では認知症高齢者と家族介護者が在宅での介護の継続を可能とし、QOLの高い生活が送ることができることを目的として、生活実態とソーシャルサポートに視点をあてた支援方法について検討した。対象者は兵庫県・奈良県・三重県・愛知県在住の認知症高齢者の主たる介護者であり、アンケート調査の有効回答は、138人(配布数200部、回収率69％)であった。また、面接調査30人であった。 本研究では約4割の介護者が認知症高齢者の緊急時への対応に不安を持っていることから、地域における医療的環境の改善が必要であると考えられた。また、ソーシャルサポートを大別して「情緒的サポート」「手段的サポート」「情報的サポート」に分類して考察した結果、情緒的サポートでは、家族が重要な意味を持っていて、福祉や医療従事者はほとんど関与していなかった。認知症という疾患を抱えた認知症高齢者と家族介護者の情緒的なサポートとしては、相談したり、往診したりしてくれる医師と緊急時に入院させてくれる病院の存在が不可欠であることが示唆された。 (分担執筆者：守本とも子、田場真理、新谷奈苗、辻下守弘) 担当部分：アンケート調査の実施とデータ集計および解析と論文の結果および英文作成を担当した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
30　An Analysis of Related Factors of Subjective Health and Life Satisfaction among Caregivers of Dementia Elderly People　＜英文＞ 認知症高齢者の介護者における主観的健康感、生活満足度の関連要因の分析 （査読付）	共著	令和3年4月	医療福祉情報行動科学会雑誌 第8巻 pp.77-83	本研究では認知症高齢者の介護者が在宅での介護の継続を可能とし、QOLの高い生活が送ることができることを目的として、認知症高齢者の介護者における主観的健康感、生活満足度に関連する要因に視点をあてた支援方法について検討した。対象者は兵庫県・奈良県・三重県・愛知県在住の認知症高齢者の主たる介護者であり、アンケート調査の有効回答は、138人(配布数200部、回収率69%)であった。また、面接調査30人であった。 調査の結果、主観的健康感と生活満足度に高い相関が認められた。その結果は主観的健康感を高めることが生活満足度を高める要因であることを示唆するものであった。また、生活満足度は、認知高齢者と介護者の生活の質に大きく関与する要因である。認知症高齢者と介護者は、今後ますます高齢化が進み、健康障害をきたしやすいことが考えられる。認知症高齢者と介護者の生活の質を維持、向上させるためには双方の健康管理が重要であることが示唆された。 (分担執筆者：守本とも子、田場真理、新谷奈苗、辻下守弘) 担当部分：アンケート調査の実施とデータ集計および解析と論文の結果および英文作成を担当した。
31　2021年度リハビリテーション学科新入生における志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要第14集 pp.1-6	学部設置3年目を迎えたリハビリテーション学科においては、定員充足率増加に伴い新入生の進学経緯も多様になっているものと考えられる。そこで、3期生においてアンケート調査を実施し、2期生との比較を通じてその傾向について比較検討した。結果、当初における職業選択は変更されることなく、近しい人物への相談を伴ったオープンキャンパスへの参加、加えて本学近隣環境等への好感を以て進学を決定している経緯があり、2期生との大きな変化はなかった。一方、プレゼンスの高まり、教員対応への肯定的意見と捉えられる側面もあり、本学魅力の一端として認識する必要性が示唆された。以上の結果は、今後の広報戦略に資するものであると考えられた。 (分担執筆者：飯塚 照史，辻下 守弘，池田 耕二，城野 靖朋，中島 大貴) 担当部分：アンケート調査の実施と調査結果のデータ整理と統計処理を担当した。
（その他） 1　膝蓋大腿関節機能不全に対する筋電図バイオフィードバック療法の一経験 （口頭発表）	共著	平成25年4月	第41回日本バイオフィードバック学会学術集会 （神奈川） バイオフィードバック研究第40巻第1号2013年 p.88	交通事故により膝蓋腱損傷を受傷し，再建術後に膝蓋大腿骨腎機能不全となった症例に対して筋電図バイオフィードバック療法（以下BF と略す）を実施し、歩行障害の改善に著効を認めたので、その実施方法と経過について報告した。退院時には、不安定性や疹痛もなく、階段昇降やスクワット動作も問題なくスムーズに可能となっていた。 (共同研究者：辻下守弘、西上智彦、笹田朋香、山本昇吾、孫 康基、梶原沙央里、田辺暁人) 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。
2　高齢者に対するキネクトセンサーを用いたインタラクティブ・リハビリテーションの効果 （口頭発表）	共著	平成26年4月	第42回日本バイオフィードバック学会学術集会 （東京） バイオフィードバック研究第41巻第1号2014年 p.50	本研究の目的は、高齢者を 対象としてキネリハを用いた運動トレーニングを実施し、全身の機能的身体運動能力やバランス能力に及ぼす 影響および認知脳機能に対する効果について検討することであった。対象は、認知症や中枢神経系疾患のないことが確認された健常高齢者3名であった。キネリハの所要時間は休息も入れて約15分とし，週3回の頻度で2週間継続した。キネリハの結果3名ともにFRTはリーチ距離が改善

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				し、TUGは所要時間が短縮していた。ファイブ・コグテストは手先の運動スピードと注意分割機能が3名とも向上していた。 (共同研究者：辻下守弘、川村博文、西上智彦、松谷綾子、井上悦治) 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。
3　認知症患者に対するインタラクティブ・メトロノームの症例報告 （口頭発表）	共著	平成27年3月	第1回認知症の早期発見、予防・治療研究会（東京） 抄録集 p.14	本研究では、認知機能の改善を目的としたIMトレーニングが、高齢者の認知症に対しても同様の効果が期待できると考え応用を試みたので報告する。対象は、IMトレーニングを3ヶ月間継続できた認知症高齢者2名とし、認知症の評価には、改訂長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）とIMの専用ソフトに内蔵されているミリ秒単位でタイミング誤差を測定する評価ツールを使用した。IMは、1セッション約20分とし、提示される1分間54のテンポに対して正確にタイミングを合わせて両手、左右片手といった3種類のリズム運動を週3回、3ヶ月間実施した。被験者2名は、IMに対する意欲が3か月間維持され、トレーニング開始時に比較して、タイミング誤差が大幅に短縮し、それに伴ってHDS-Rの改善も認められた。IMは、認知症の認知機能の改善にも効果が期待できる。
4　タイミング誤差のフィードバックトレーニングが時間認知に及ぼす影響 （口頭発表）	共著	平成27年4月	第43回日本バイオフィードバック学会学術集会（つくば） バイオフィードバック研究第42巻第1号2015年 p.85-86	本研究では、注意欠陥多動性障害（ADHD）と認知症といった代表的な認知機能障害に対してタイミング誤差のフィードバックトレーニングを継続的に実施する機会を得た。対象は、ADHDの中学生1名とアルッハイマー型認知症の高齢者1名であった。トレーニングには、インタラクティブ・メトロノー ム法（IM）を用いた。IMは、1セッション約30分とし、提示されるテンポに対して正確にタイミングを合わせてリズム運動を行う課題を8週間で合計56セッション実施した。その結果、ADHDではセッション中期以降でタイミング誤差が小さくなり、認知症ではセッション中期で急激にタイミング誤差が小さくなっていた。 (共同研究者：辻下守弘、西上智彦、松谷綾子、青田絵里) 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。
5　インタラクティブ・メトロノーム(IM)がアルツハイマー型認知症の認知機能に及ぼす効果について （口頭発表）	共著	令和2年4月	第47回日本バイオフィードバック学会学術集会（名古屋） バイオフィードバック研究第47巻第1号2020年 p.29	インタラクティブ・メトロノーム（IM）は、基準となるリズム音に対して身体運動のタイミングを合わせる簡単なトレーニングであり、基準音と運動のタイミング誤差を聴覚的・視覚的にリアルタイムでフィードバックさせることが特徴である。本研究では、軽度から中等度のアルツハイマー型認知症高齢者6名を対象として、IMをトレーニングに取り入れその効果について検討した。対象者全員がIMのスコアとトレーニングを理解し実施することが可能であった。その結果、スコアと認知症評価とは関連性があり、IMによってスコアが改善傾向にあることが分かった。 (共同研究者：辻下聡馬、辻下守弘) 担当部分：IMトレーニングと効果検証および論文の執筆までを担当した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
6　若齢女性における冷え症の手浴効果における自律神経評価 （口頭発表）	共著	令和3年12月	第51回日本臨床神経生理学会学術大会（仙台市） 臨床神経生理学第49巻第5号p. 443	指尖容積脈波を用いて、冷え症の女子大学生の手浴後の自律神経の変化を調べることを目的とした。安静時では冷え症は、非冷え症群と比べて脈波振幅の相対値は有意に低値を示した。1回目手浴後冷え症は非冷え症群と比べて脈波振幅の相対値は有意に高値を示し、2回目手浴後では冷え症は非冷え症群と比べて脈波振幅の相対値は有意に高値を示した。以上の結果から冷え症では、温浴刺激によって脈波振幅が低値となり血管収縮、拡張が繰り返し起こり、冷え症は温浴刺激を繰り返すと自律神経が変調することがわかった。 (共同研究者：関谷まり、辻下守弘、嶋田理博、山本祐輔、水野由子) 担当部分：指尖容積脈波の測定とデータ解析を担当した。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　5年　5月　11日

氏名　　辻下守弘

研究分野	研究内容のキーワード
外科系臨床医学	理学療法学、リハビリテーション学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1）奈良学園大学社会連携センター・センター長としての活動	平成28年4月 ～平成30年3月	奈良学園大学社会連携センター長として、大学と地域社会との連携をスムーズにするためのコーディネーターとしての役割を果たした。具体的には、大学が立地する市町村との連携事業である公開講座の企画運営、大学シーズと地域ニーズとのマッチング、産官学連携による共同研究の推進と実施などに関して実施責任者としての活動を行った。
2）奈良学園大学評議員としての活動	平成30年4月 ～現在に至る	奈良学園大学評議員として、大学に関する重要事項の審議に加わることで大学運営に関与した。
3）奈良学園大学保健医療学部研究倫理委員会・委員長としての活動	平成30年4月 ～現在に至る	保健医療学部研究倫理審査委員会は、教員の臨床研究および疫学研究に関して、被験者に対する人間の尊厳、人権の尊重その他の倫理的観点及び科学的観点を調査審議することを目的に設置されている。本委員会の委員長として、委員会の招集および審議の調整および議事録作成と学長への報告書作成など中心的な役割を果たした。これまで審査した申請件数は平成30年度で11件、令和元年度で34件、令和2年度で20件、令和3年度で22件であり、研究倫理審査委員長として審査した件数は合計87件である。
4）奈良学園大学大学院看護学研究科委員会・委員としての活動	平成30年4月 ～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究科設置に伴い、研究科の運営会議としての看護学研究科委員会の委員となって、毎月1回開催される定例の委員会に出席し、以下の事項について委員として審議を行った。①研究科の課程及び学生の教育に関する事項、②研究の指導及び論文の審査に関する事項、③単位認定、課程修了認定並びに学位授与に関する事項、④学生の厚生補導及びその身分に関する事項
5）奈良学園大学大学院看護学研究科研究倫理審査委員会・委員としての活動	平成30年4月 ～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究科設置に伴い、修士課程の1学年生に対する研究倫理審査委員会の委員として、毎年11月頃に開催される大学院研究倫理審査委員会で申請された研究計画書と申請者への質疑応答による審査を行った。これまで平成30年度に6件、令和元年度に3件、令和2年度に2件、令和3年度に5件の審査を担当した。
6）学位論文指導および修士論文審査の実績	平成30年4月 ～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究科修士課程の在宅看護学分野指導教授として、研究指導と修士論文の審査に関与した。 これまで主指導教員として2名の学生に対して研究倫理審査申請書類の作成からはじまり、調査計画およびデータ処理と修士論文作成に関する指導を継続し、令和4年度末終了予定である。主指導教員としてかかわっている学生の研究課題は、「重度身体障害者が進路を決定する要因～重度身体障害者の意識調査から～」と「病院から在宅移行支援する効果的な連携のあり方」である。 また、副指導教員としては1名の学生にかかわり、その研究課題は「在宅にて脳血管障がい者である妻を支える男性介護者が感じる介護負担感について―要因とその支援策の検討―」であり、令和元

事項	年月日	概　　要
		年度末で修士課程を修了し、修士（看護学）の学位が授与されている。 また、修士論文審査では、令和元年度に副査2件、令和2年度に副査1件、令和3年度に主査1件を担当した。 これまで副査として修士論文審査を担当した研究課題は、以下のとおりである。 令和元年度は、「オストメイトの余暇活動に関する促進要因と阻害要因の検討」と「在宅にて脳血管障がい者である妻を支える男性介護者が感じる介護負担感について―要因とその支援策の検討―」である。令和2年度は、「精神科病院入院患者にトラウマ・インフォームドケアに基づく看護面接を実施した看護師の内面に生じること」である。 これまで主査として修士論文審査を担当した研究課題は、以下のとおりである。 令和3年度は、「在宅看護を実施する際の訪問看護師が抱える不安」である。
7）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科・学科長としての活動	令和元年4月 ～現在に至る	令和元年4月にリハビリテーション学科が奈良学園大学保健医療学部に開設され、開設に際して学科長に就任した。学科長は、リハビリテーション学科の運営と人事、および教学などの管理責任者であり、学科に所属する教員の代表としてリーダーシップを発揮している。また。大学の執行部として、企画運営会議や大学評議会にも所属し、大学運営にも関与している。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）専門理学療法士資格更新 （日本理学療法士協会）	平成29年4月1日	公益社団法人日本理学療法士協会から神経（2017S-02-000033）と運動器（2017S-03-000043）の2分野に対する専門理学療法士資格を更新認定を取得
2）公益社団法人日本理学療法士協会認定試験委員会委員としての活動	平成30年6月 ～令和4年6月	公益社団法人日本理学療法士協会において、新人教育プログラム修了者を対象に、自らの専門性を高め、高い専門的臨床技能の維持、社会、職能面における理学療法の専門性（技術・スキル）を高めていくことを目的とした生涯学習制度の一つとして認定理学療法士がある。この認定試験の作問と実施、そして認定基準などを審議する委員会の委員として活動した。
（研究活動） 1）科学研究費補助金研究成果報告書 （基盤研究C）	平成24年度 ～平成26年度	研究科題名：「性差と加齢を考慮した労働者の睡眠の質改善のためのセルフケア・プログラムの開発」 研究代表者：廣川空美 共同研究者：藤井保人、谷口敏代、辻下守弘 研究成果の概要：本研究の目的は、労働者の睡眠の質における性差と加齢の影響を明確にし、性別と加齢に応じた睡眠の質改善のプログラムを開発することである。研究対象者は中規模事業場で働く35歳以上の男女であった。研究期間中の健康診断時期に調査を実施した。1年目の調査結果では、男性の睡眠の質には運動習慣、女性の睡眠の質には教育歴や喫煙状況が関連していた。2年目には、23項目の睡眠チェックリストを作成した。3年目には、睡眠の質改善のためのセルフケア・プログラムの効果評価を行った結果、介入群において3項目に改善が認められた。今後は産業保健スタッフが睡眠改善指導にどのように活用するかを検討する必要がある。

事項	年月日	概　　要
2）科学研究費補助金（基盤研究C）	平成26年度 ～平成28年度	研究課題名「乳がん患者の就労を支えるJob recovery pathの開発」、配分額4,550千円、研究代表者：新谷奈苗、研究分担者：岩永誠、佐藤禮子、河野啓子、守本とも子、辻下守弘 研究成果の概要：乳がん患者の標準治療プロセスを、確定診断、手術、化学療法、放射線療法、ホルモン療法と定義し、これをベースに「全体プロセス」「確定診断時」「確定診断後」「手術後」「化学療法中」「化学療法後」「放射線療法中」「ホルモン療法前」「仕事を休みたい時」「つらい時」というタイミングごとに課題を明確化した。その課題に対し、医療者、企業、社会がそれぞれ何を行うべきかという対応策を検討、提示し、Job recovery pathとしてまとめた。 なお対応策のなかには現時点で実現できていない内容も含まれており、そういった課題の解決を広く社会に対して働きかけ続けていくことも、重要であると考えられる。
3）科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）	令和2年度 ～平成28年度	研究課題名「介護老人保健施設での介護職員指導に関する研究－行動分析学の枠組みによる介助指導－」、配分額2,860千円、研究代表者：小林和彦、共同研究者：辻下守弘 研究成果の概要：行動分析学の枠組みを用いたe-learningによる自己学習式移乗介助指導プログラムを高齢者介護施設介護職員を対象に施行し、事前、事後、およびフォローアップ評価を行うことで、その介入効果を検証した（介入群15名、統制群15名）。評価内容は、介助技術評価指標として「模擬患者への“身体接触率”」を用いた。 その結果、介入群の事後評価時における身体接触率の減少傾向、およびフォローアップ評価時における増加傾向が認められた。また、指導コンテンツの満足度に関する事後アンケートの結果、否定的な意見もあったものの、概ね良好な回答が得られた。
4）科学研究費補助金（基盤研究C）	令和4年度 ～令和6年度	研究課題名「転倒恐怖感を持つ高齢者を対象とした仮想現実技術を導入した曝露療法の開発とその評価」、配分額4,160千円、研究代表者：辻下守弘、共同研究者：登尾啓史、大西克彦、小枝正直 研究成果の概要：高齢者の転倒は、要介護状態を促すだけでなく、転倒を恐れて日々の生活活動が低下し、閉じこもりやうつ傾向を招き、再転倒や虚弱化のリスクを高める。そこで、本研究の目的は、仮想現実（VR）技術を用いて高齢者の転倒恐怖感を軽減させるVR曝露療法を開発することである。本研究では、転倒経験のある高齢者を対象として、転倒恐怖を感じる生活場面のVRデータを構築し、それをVRゴーグルで高齢者に視聴してもらうことで、高齢者に転倒恐怖感が惹起させることを精神生理学的測定により確認する。さらに、その転倒恐怖VRを用いて、惹起された恐怖感を心拍変動バイオフィードバックにて緩和させるといっ
4　その他 12）京都市立芸術大学大学院美術研究科美術専攻博士（後期）課程の博士論文審査委員	平成27年12月 ～平成28年12月	京都市立美術大学大学院美術研究科美術専攻博士（後期）課程において、美術作品をリハビリテーション医療に活かす研究を博士論文の課題としている学生に対して、リハビリテーション医療に携わる研究者として博士論文の審査を行っている。平成28年2月には第1回の博士論文報告会があり、発表論文への試問を実施し、博士論文審査委員会において論文への評価と今後の課題について報告を行った。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1 日常生活活動学・生活環境学	共著	平成24年9月	医学書院	本書は、「日常生活活動学」と「生活環境学」の二部構成である。「日常生活活動学」は、総論でADLの歴史、概念、評価などの基本事項を解説し、各論で疾患別の評価方法とADL指導を具体的に提示し、「生活環境学」では、概念や法的諸制度、住宅改修や生活支援機器について解説した。（377頁） （編者：鶴見隆正、隆島研吾　分担執筆者：秋若山佐一、林　克郎、辻下守弘、他25名） 担当部分：第1章第4節「ADLの運動学的分析」運動学の基本事項を整理した上で、日常生活動作を運動学的に分析するための基礎を詳細に解説した。また、起き上がりや立ち上がりなどの動作に対する運動学的分析を具体例も上げながら論述した。 (pp.36～51、単著)
2 脳卒中理学療法の理論と技術	共著	平成25年6月	メジカルビュー社	本書は、臨床の場で用いられる実践的な理学療法と、その基礎となる解剖学・生理学の知識をはじめ、病態生理の知識、理学療法評価の技術、運動処方および生活指導のための理論的背景と技術を解説した。（512頁） （編者：原　寛美、吉尾雅春　分担執筆者：渡辺雅彦、中村　元、辻下守弘、他22名） 担当部分：第Ⅴ章「理論と理学療法」の中の「バイオフィードバック療法」を担当した。 バイオフィードバック理論の基礎となる学習理論を解説した上で、バイオフィードバックが使う各種モダリティーや国内の代表的な機器について紹介した。また、脳卒中片麻痺患者に対するバイオフィードバックとニューロフィードバックについても論述した。 (pp.445～456、単著)
3 生活支援の基礎理論Ⅰ	共著	平成27年4月	光生館	本書は、地域での生活を支援する介護福祉士として必要な基礎知識を，保健，心理，栄養，居住環境，家族支援などの関連分野から体系的に学習できるように解説している。（196頁） （編者：上之園佳子、谷口敏代、鈴木聖子、　分担執筆者：本名靖、太田貞司、土室修、辻下守弘、他16名） 担当部分：第５章「介護福祉の基礎となる心理学」の中の「学習」を担当した。 学習の定義と介護福祉領域で必要となる重要事項を解説した上で、認知心理学的な考え方と行動分析学的な考え方に分けて各理論を具体例を入れながら解説した。 (pp.98～102、単著)
4 痛みのケア	共著	平成29年3月	ピラールプレス	本書は、看護現場で求められる痛みのケアについて、哲学・倫理学的理解と痛みの理論からはじまり、痛みの治療と看護ケアについて解説した上で、看護実践事例について検討されている。（編者：守本とも子 分担執筆者：池辺寧、沖本克子、梶村郁子、辻下守弘、他15名） 担当部分：第Ⅱ部「痛みの理論」第5章「痛みの行動科学的理解」を担当した。看護現場における痛みの生理医学的アプローチの問題点を指摘した上で、慢性的ないたみを行動科学的にアプローチすることの重要性について解説している。また、痛みの社会的強化により出現する痛み行動に対する理解と看護現場での具体的なケアの方法論について提案している。（pp.34～41、単著）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
5 看護師国家試験 直前 社会福祉学領域 ファイナルチェック	共著	令和3年3月	金芳堂	本書は、看護職をめざす読者が社会福祉について学ぶためのテキストである。また同時に、すでに看護職として活躍されている方々にも現代における社会福祉についての理解を深め、看護実践における社会資源の活用に向けて、重要な示唆を与えるものとなっている。（編者：守本とも子、富永堯史、分担執筆者：井上昌子、井上葉子、小林由里、齋藤英夫、佐藤郁代、芝田ゆかり、高橋寿奈、田場真理、中馬成子、辻下守弘、他21名） 担当部分：第12章「ソーシャルワークの理解」を担当した。ソーシャルワークが発展した歴史を概説した上で、ソーシャルワークの基礎理論と概念モデルについて解説した。また、看護職に必要なソーシャルワークの実践過程の知識とチーム医療における位置づけについても記述した。（pp.162～175、単著）
6 ＶＲ／ＡＲ技術における感覚の提示、拡張技術と最新応用事例	共著	令和3年6月	技術情報協会	本書は、5G時代の到来で医療や教育、スポーツ、モノづくり現場まで様々な分野など市場が拡大しているAR（拡張現実）やVR（人工現実）などの先端技術に関する最新の理論と応用事例、および科学的根拠となる研究の現状を各方面の専門家により紹介している。（編者：技術情報協会 分担執筆者：繁桝博昭、半田知也、鳴海拓志、辻下守弘、他63名） 担当部分：第９章「医療分野への活用事例」第6節「バーチャル・リハビリテーションの最新動向とバイオフィードバック技術」を担当した。本節では，コロナ禍の社会において注目されるようになった遠隔リハビリテーションと最先端技術であるバーチャル・リハビリテーション（VR)の最新動向を紹介するとともに，このVR技術とバイオフィードバック技術との融合についても、自身が行った研究結果などを含めて解説した。（pp.482～493、単著）
（学術論文） 1 Relationship between life satisfaction and sympathovagal balance in healthy elderly males at home at night （夜間在宅における健常老年者の生活満足度と交感神経バランスとの関連性） （査読付）	共著	平成24年10月	Health Vol.4 No.11 pp.1068-1072	本研究の目的は、老年者における夜間在宅での生活満足度が交感神経バランスと関連するかを検討することであった。健常老年者39名を対象として、アクティブトレーサーにより72時間の心拍変動と身体活動量を計測した。測定の結果、生活満足度と交感神経バランスとの間には-0.47の有意な相関関係を認めた。(5頁) (分担執筆者：吉野公三、守本とも子、板垣孝弘、池谷茂隆、永田昌美、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果部分を担当した。
2 Effects of a hardness discrimination task in failed back surgery syndrome with severe low back pain and disturbed body image: case study （身体像の認知課題作業が背部の術後症候群による重度な腰痛症に対する影響：事例研究） （査読付）	共著	平成24年10月	Journal of Novel Physiotherapies 2012 Open Access	本研究では背部の術後に重度な腰痛を発症した20歳の女性に対して認知課題による疼痛緩和のアプローチを行った。初期の疼痛はNRSで10と最大の痛みを訴えていた。また、身体像の認知に障害を持っていた。介入として1日20分、週6日の認知課題のトレーニングを4週間にわたり行ったところ、痛みがNRSで5と半分に緩和され、歩行や日常生活動作能力も改善していた。(6頁) (分担執筆者：西上智彦、奥埜裕之、中野英樹、大村裕、清水ミッシェルアイズマン、辻下守弘、壬生彰、牛田孝博) 担当部分：症例の理学的評価と訓練および論文の結果部分を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3　運動器疾患を有する高齢者の生活機能に対する理学療法の取り組み　通所リハビリテーション利用者の心理・社会的側面に着目して	共著	平成26年4月	理学療法第31巻第4号 pp.376～382	1.運動器疾患を有する高齢者の生活機能の改善には、高齢者の身体活動の開始と継続に関する要因を理解する必要があり、心理・社会的要因が大きく関連している。2.どのような治療を選択するにしても、高齢者個々の心理・社会的要因を認識し、オーダーメイドの治療を実施することが必要である。3.高齢者の心理・社会的要因を認識するための第一歩は、対象者とのコミュニケーションである。単なるコミュニケーション技法を用いるのではなく、対象者を支えている信念や認識に触れる関わり方がオーダーメイドの治療を実施できた。(7頁) (分担執筆者：大門恭平、米田大人、辻下守弘、川村博文) 担当部分：高齢者の運動機能に関する要因の分析と論文の一部執筆を担当した。
4　Central neural mechanisms of interindividual difference in discomfort during sensorimotor incongruence in healthy volunteers: an experimental study （健康対象者における感覚運動不一致による不快感が個人差に関する中枢神経メカニズムについて：実験的研究） （査読付）	共著	平成26年10月	Rheumatology 2014 Open Access	本研究の目的は、感覚運動認知の不一致に関する個人差に関して、その中枢神経メカニズムを明らかにすることである。対象は、18名の健常若年女性であり、感覚運動認知の不一致課題を独自に作成し、その認知課題中における脳波を分析し、脳内メカニズムをLORETA法によって解析した。その結果、不一致の個人差は前部帯状回および後部帯状回の活動状況の違いと一致していることがわかった。　(8頁) (分担執筆者：分担執筆者：西上智彦、中野英樹、大住道弘、辻下守弘、壬生彰、牛田孝博) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果部分を担当した。
5　バイオフィードバックの発展に向けての提言　日本バイオフィードバック学会企画委員会からのアンケート結果報告	共著	平成26年10月	バイオフィードバック研究 第41巻第2号 pp.95～102	2012年の第40回学術総合においてアンケート調査を実施した。学術総会に参加した25人の学会員から回答を得た。その結果、1.医学・工学・心理学の研究面の連携に関して学会の存在意義を認める回答が多かった。2.学会に望むことについては、次世代を担う若い研究者・学生が積極的に参加できる環境づくりを指摘する意見が目立った。3.会員以外には、バイオフィードバックについて正しく分かりやすく理解してもらう情報提供の必要性を訴える意見が多かった。以上の結果に基づいて今後学会の方向性に関する提案を行った。(8頁) (分担執筆者：中尾睦宏、大須賀美恵子、廣田昭久、佐久間春夫、志和資朗、竹林直紀、辻下守弘) 担当部分：アンケート調査の作成からデータ整理と統計分析および考察の一部の執筆を担当した。
6　高齢者に対する視覚誘導性到達課題を用いた音楽運動療法の開発とその効果に関する研究 （査読付）	共著	平成27年3月	医療福祉情報行動科学研究 第3号 pp.27～32	本研究では、視覚誘導性到達運動課題を用いた音楽運動療法を開発することとこれが高齢者のバランス能力に及ぼす影響を明らかにすることであった。対象は70歳以上の健常高齢者16名であり、実施群8名と対照群8名の2群に割り付けた。評価は機能的バランス尺度（BBS)、TUG、FRTおよび静的重心動揺計と動的姿勢制御検査とした。5回の練習後、BBS、FRTそして動的姿勢制御検査の有意な改善を認めた。(6頁) (分担執筆者：辻下守弘、川村博文、永田昌美、前田吉樹) 担当部分：研究全般を実施し論文全体の執筆を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7　Kinectセンサーを使った仮想環境が高齢者の運動機能に及ぼす影響について （査読付）	共著	平成27年4月	バイオフィードバック研究 第42巻第1号 pp.57～62	Microsoft社により開発されたKinectセンサーを使った風船割りゲーム「キネリハシステム」を使って高齢者にゲームを定期的に行ってもらい、仮想環境が高齢者の運動機能にどのように影響を及ぼすかを検討した。デイケアに週2回以上通う高齢者23名に対しキネリハシステムを週2回以上4週間実施した。この前後に(1)10m歩行(2)TUG(3)5StepTestを測定し4週間完遂した者について結果を比較した。その結果、継続してゲームを行い施行期間の最後まで継続してやり遂げ(1)～(3)を測定できた者は7名だった。ゲーム後の結果が(2)と(3)において有意に向上していた($p<0.05$)。(6頁) (分担執筆者：小貫睦巳、有田元英、井上悦治、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。
8　介助者による介助の経時的変化に基づいた介助評価方法の検討－認知症を有する高齢障害7 者への介護職員による移乗介助場面の行動論的分析－ （査読付）	共著	平成27年12月	理学療法科学第30巻第6号 pp.933-937	車椅子からベッドへの移乗課題を用い、介助を基準に被介助者の遂行レベルを査定する評価法の妥当性を行動論の視点から検討した。対象は施設介護職員および入所中の認知症を有する高齢障害者とした。介助者の4段階の介助系列をもとに6段階の遂行レベルを設定し、各単位行動が遂行されたときの介助を遂行機会ごとに図示し、介助の経時的変化を被介助者の遂行レベルの推移の視点から分析した。その結果、被介助者による遂行過程は単位行動ごとに異なった遂行レベルを推移しており，従来ADL評価法とは視点の異なる情報が得られた。 (分担執筆者：小林和彦、辻下守弘) 担当部分：症例の評価と介入指導および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。
9　生体センシング技術を使った仮想現実によるゲームが高齢者の運動機能に及ぼす影響について （査読付）	共著	平成27年12月	理学療法科学第30巻第6号 pp.811-815	生体センシング技術を使ったゲームを高齢者に行わせ仮想現実を利用したゲームが高齢者の運動機能にどう影響を及ぼすかを予備的調査した。高齢者23名に対しゲームシステムを週2回以上4週間実施した。4週間実施前後の①10m歩行②TUG③5StepTestの3つのパフォーマンステストの結果及びゲームの測定機能を利用したゲームに対する平均反応速度とゲームの成功率について比較した。その結果、②と③及び平均反応速度・成功率に於いて施行後が施行前に比べ有意に向上していた。またゲーム完遂者に運動習慣があるものが有意に多かった。 (分担執筆者：小貫睦巳、有田元英、井上悦治、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果の一部の執筆を担当した。
10　中年女性に出現する肩こりと腰痛の重複症状の実態とその関連要因に関する研究 （査読付）	共著	平成28年3月	甲南女子大学研究紀要（看護学・リハビリテーション学編）第10号 pp.1-10	本研究では、パソコン操作を主体とした作業に従事する中年女性従業員335名を対象として、肩こりと腰痛の重複症状が出現する実態を明らかにするとともに、その身体的、心理的、社会的な要因との関連性について検討した。症状なし群、肩こり単独群、腰痛単独群、そして両者重複群という4群間において各要因を比較したところ、分散分析により有意な主効果を認めたのは、年齢、運動態度、食行動、K6、そしてクッパーマン指数であった。多重ロジスティック回帰分析の結果、肩こりと腰痛の両者重複と関連する要因は、低いBMI、高いK6スコア、そして高いクッパーマン指数であった。 (分担執筆者：辻下 守弘、永田 昌美、芝 寿実子、前田 吉樹、川村 博文、小貫 睦巳) 担当部分：データ収集から統計処理および論文執筆を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11　心身のストレスおよび作業量からみた体圧移動で座面が変化するERチェアの評価　健常成人女性および高齢者を対象としたプレテストの結果から （査読付）	共著	平成28年3月	甲南女子大学研究紀要（看護学・リハビリテーション学編）第10号 pp.19-28	本研究は、高齢者用に開発したERチェアと通常の椅子を比較し、対象者の心身のストレスにどのような影響をもたらすかを検証することとした。被験者は、参加条件を満たした健常成人女性6名と高齢者8名の計14名である。研究デザインはクロスオーバー・デザインとし、被験者にはERチェアと通常の椅子の2種類の椅子に座った際に５つの課題を課した。分析の結果、主観的疲労感の全身倦怠感において、被験者全体の操作実施前後の平均値はERチェアが減少したが、通常の椅子は増加し、平均値の差の比較で統計的に有意な差が認められた(p=.04)。また、唾液アミラーゼ量において、高齢者の操作実施前後の平均値はERチェアがやや減少し、通常の椅子が増加して統計的に有意な差が認められたが(p=.04)、交互作用が認められた。 (分担執筆者：丸尾 智実、兼田 美代、臼井 キミカ、辻下 守弘、速水 裕子) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果の執筆を担当した。
12　骨盤臓器脱術後の便失禁症状に骨盤底筋の筋電図バイオフィードバック療法が奏効した症例 （査読付）	共著	平成28年4月	バイオフィードバック研究 第43巻第1号 pp.19-26	今回、骨盤底筋の選択的筋収縮が困難であった便失禁を有する症例に対して、骨盤底筋の筋放電を確認しながら筋収縮を確認し、筋収縮を調整する筋電図バイオフィードバック療法が症状の改善に有効であったので報告した。症例は、膀胱瘤により骨盤臓器脱術を受けた70歳の女性である。骨盤臓器脱の症状は手術により改善したが、運動時にガス程度の便失禁が4～5回以上認められた。評価および介入は、Thought Technology社製のMyotrac3を用い、骨盤底筋と腹筋を分離して筋収縮させることを目的として実施した。10セッション実施の結果、持続的収縮においては8セッションから骨盤底筋のみを収縮させることが可能となった。運動時の失禁頻度は6セッション時から減少した。 (分担執筆者：松谷 綾子、青田 絵里、西上 智彦、辻下 守弘、服部 耕治、木村 俊夫) 担当部分：症例の評価と治療および論文の症例報告と考察の一部の執筆を担当した。
13　行動分析学の枠組みを用いたコンピューターシミュレーション教材による介護老人保健施設介護職員への介助指導 － 高齢障害者に対するベッドから車椅子への移乗介助指導効果の検討 － （査読付）	共著	平成28年8月	行動療法研究第42巻第2号 pp.201-213	本研究においては、行動分析学の視点から理論および介助の方法論を解説したパソコン上で作動する教材を開発し、介護職員3名に自己学習とセルフチェックを行ってもらい、介護老人保健施設入所者に対するベッドから車椅子への移乗介助技能への効果を、単一事例実験計画法を用いて検証した。その結果、3名とも適切な介助の頻度が増加(平均46.2%)し、彼らが日頃介助している入所者も、より少ない介助で移乗が行えるようになった。また、移乗介助指導の効果が同じ入所者の脱衣介助に反映されることも確認された。さらに、指導プログラムの内容や意義に関しても比較的良好な受け入れや評価が得られた。以上から、従来の指導方法によるデメリットを補完する役割を果たすことができ、本教材が介護職員指導における効果的な方法論として位置づけられる可能性が示唆された。 (分担執筆者：小林和彦、辻下守弘) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14　疼痛に対する物理療法・運動療法	共著	平成28年8月	The Japan Journal of Rehabilitation Medicine 第53巻第8号 pp.604-609	本論文では、疼痛に対する治療としての物理療法、運動療法について、有効性に関わる理論的な裏付けから臨床のエビデンスを交えて検討した。その結果、急性痛と慢性痛とでは、対応が異なり、急性痛には過度な不活動を避け、原因となる組織損傷の治療を下級的早期に進めることと、可能な限り疼痛を抑制し長期化を阻止することが重要であることが分かった。また、慢性痛では、感覚面に着目する以外に、情動面や認知面などの多面的、複合的な側面での特性の認識理解が不可欠であり、ADLやQOL向上を目的として、TENSなどの物理療法、運動療法、学際的集学的治療を導入することが重要であることがわかった。 (分担執筆者：川村博文、西上智彦、伊藤健一、大矢暢久、辻下守弘) 担当部分：文献収集と整理および論文の慢性疼痛に関する部分の執筆を担当した。
15　インタラクティブ・メトロノーム法の紹介とリハビリテーションへの応用可能性	単著	平成28年9月	奈良学園大学紀要第5集 pp.1-9	本論文では、運動・認知機能のリハビリテーションに欠けていた脳内時計と時間情報処理能力を高めるというコンセプトを導入した新しいトレーニング方法であるインタラクティブ・メトロノーム法（Interactive Metronome®：以下IMと略す）について、その歴史、原理と方法、トレーニングの手順、そして科学的根拠を概説した上で、リハビリテーションへの応用可能性について解説した。IMの利点は、リズム音に手と足の動きを同調させてタイミングをとるといった非常にシンプルなトレーニングであり、2歳程度の幼児から高齢者まで適用範囲が広く、生体への侵襲も全くないため、従来のリハビリテーションへ併用して使用可能なことである ただし、現在の問題点は、科学的根拠を裏付けるIMの臨床研究が国際的にも不足していることやIMシステムが日本における医療機器の薬事承認を得てないことであった。
16 バーチャルリアリティ（VR）技術を用いた高齢者のリハビリテーションに関する文献的研究	単著	平成29年9月	奈良学園大学紀要第7集 pp.75-81	コンピュータサイエンスの発展によってバーチャルリアリティ（VirtualReality：VR）技術が身近になった。一方で、わが国は急速なスピードで超高齢社会が進行し、要介護状態の高齢者が急増する中で、高齢者のリハビリテ-ションが注目されている。そこで、本論文では、VRの定義と特徴を解説した上で、主にWiiとKinectセンサーを用いた高齢者リハビリテーションへの応用に関する国内外の現状と課題を文献的に考察した。その結果、WiiとKinectセンサーを用いたトレーニングが高齢者の心身機能に及ぼす影響を明らかにした良質の無作為化比較対照試験（RCT）は少ないものの、高齢者の機能的なバランス能力を改善させる効果のあることが多くの論文で示唆されていた。VRを用いた高齢者のリハビリテーションには課題もあるが、より没入感の強いヘッドマウントディスプレイが普及することで、今後は高齢者リハビリテーションへの応用可能性が拡大すると考えられた。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
17 タイ王国の周産期看護ーチェンマイ大学看護学部の視察を通してー	共著	平成29年9月	奈良学園大学紀要第7集 pp.179-185	タイ北部にあるチェンマイ大学を視察し、タイにおける周産期看護の現状についての現状把握を行った。タイでは、仕事を持つ母親たちの多くが授乳のための環境が整っていないために母乳で育児を行うことは困難であり、母乳育児率の低下が問題視されていた。こういった社会的背景から、母乳育児の重要性についての啓発活動と環境を改善するための王室によるプロジェクトが発足し、企業の事業所内の授乳コーナー設置や無料での母乳輸送サービスの提供などが現在では行われていた。日本においても母乳育児の利点については知られてはいるが、タイ王国のようなサービスの整備までには至っていない状況なため、タイ王国の周産期看護の現状を把握することは、日本の周産期看護の質改善のための示唆を得ることにつながると考えられた。 （分担執筆者:田中和奈、守本とも子、辻下守弘） 担当部分：現地での調査および論文のインタビュー解析に関する部分の執筆を担当した。
18 リハビリテーション医療におけるバイオフィードバック―脳卒中片麻痺に対する応用可能性について	単著	平成29年9月	バイオフィードバック研究 第44巻第2号 pp.70-75	本研究の目的は、各種の生体情報を音や光などの人間にわかりやすい情報へ変換し、その情報に基づいて自己の状態を調整するバイオフィードバック（以下BF）に対するリハビリテーション医療（以下リハ医療）への応用可能性を検討することであった。リハ医療の特徴は、一般的な医療が手術や投薬など医療者に依存した受動的治療であるのに対して、残存機能の回復や健常機能への代償など患者自身による能動的治療が主体となることであり、患者の学習過程への介入が重要なアプローチとなる。本論文では、その効果的な介入方法としてのBFに関して、その治療メカニズムについて学習理論を用いた解説を行った。また、脳卒中片麻痺に対す表面筋電図BFについて、コンパクトなBF機器であるMyoTracの操作方法と治療手続きとその効果および臨床応用上の課題について論説した。最後に、EEG（脳波計）やHEG（近赤外線方式脳血流計）を用いたニューロフィードバックトレーニングが脳卒中だけでなく他の神経系障害および運動器障害へのリハビリテーションに応用されていく可能性を検証し、多様なモダリティを使ったBFがリハ医療に応用されていく必要性について論説した。
19 Comparison of the pain-relieving effects of transcutaneous electrical nerve stimulation applied at the same dermatome levels as the site of pain in the wrist joint （手関節部の疼痛に対する頸部と対側手関節および両者の同一皮膚分節知覚帯への経皮的膚電気刺激が疼痛軽減に及ぼす影響の比較） （査読付）	共著	平成29年11月	Journal of Physical Therapy Science Vol.29 No.11 pp.1996-1999	本研究の目的は、手関節部の疼痛に対する対側同一皮膚分節知覚帯への経皮的電気刺激(Transcutaneous Electrical Nerve Stimulation:以下TENS)が疼痛緩和にどのような影響を及ぼすかを検討することであった。対象は15名の健康な成人女性（21.9±0.3歳[21-22歳]）であった。実験手続きは、まず30秒間の安静後に左手関節背側部へ47℃で60秒間の温熱刺激にて疼痛を生じさせ、その後に頸部（N）と対側手関節部（CW）および両者（CWN）へのTENS（周波数:15Hz・波長:200μs）を実施した。その結果、TENSを行わない対照群を含んだ4条件の分散分析では視覚的アナログ尺度（VAS）の違いに有意な主効果を認めたが、N条件、CW条件、CWN条件間には有意差を認めなかった。本研究の結果、疼痛部位と同一の皮膚分節知覚帯へのTENSには有意な効果があるものの、TENS部位間での有意差は認められなかった。 （分担執筆者：川村博文、西上智彦、山本綾子、辻下守弘、伊藤健一、大矢暢久、高木峰子） 担当部分：被験者への疼痛評価とTENSの実施および統計処理と論文の結果に関する部分の執筆を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
20 訪問リハビリテーションにおける在宅緩和ケアとしての理学療法の可能性―がん患者と非がん患者の事例を通して― （査読付）	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究 vol.5 pp.3-9	本論文では、訪問リハビリテーションにおける在宅緩和ケアとしての理学療法の2実践を通して、有効な実践知を抽出し、その可能性について提示した。事例1の大腸がんを有する80歳代女性の実践からは、理学療法士の介入は限られているが、多職種間連携により運動療法と環境調整を継続することで、疼痛緩和の時間を多くし、生活全体を変化させることが可能であることを理解した。また、事例2の多系統萎縮症を有する60歳代女性の実践からは、疼痛などにより他者とのかかわりが減少したとしても、多職種間連携によって小さな効果を積み重ねていくことができれば、最後まで希望のある充実した時間を提供できることが明らかとなった。本研究では訪問リハビリテーションにおける多職種間連携による在宅緩和ケアの2実践を通して、がん患者と非がん患者に対する在宅緩和ケアとしての理学療法に対する可能性を広げたものと考えられた。 (分担執筆者：池田耕二、山本秀美、古家真優、中岡絵美、大島知子、竹内　章、辻下守弘、池田秀一) 担当部分：非がん患者である多系統萎縮症の事例に関する記述と多職種間連携に関する考察の執筆を担当した。
21 リハビリテーション医療におけるバイオフィードバックの応用	単著	平成30年4月	バイオフィードバック研究 第45巻第1号 pp.41-44	リハビリテーション医療におけるバイオフィードバックの応用として、主に表面筋電図バイオフィードバック（SEMGBF）と心拍変動バイオフィードバック（HRVBF）に関する臨床経験について解説した。SEMGBFについては、脳神経筋疾患における促通目的と弛緩目的での治療に使われることが多いため、その適用について目的別の説明を行った。実際の適用症例として、促通目的では交通外傷後の膝蓋大腿関節機能不全と便失禁の原因となる骨盤底筋機能不全に対する治療とその効果について紹介し、抑制目的では無意識な筋肉の過緊張状態（ディスポネーシス）を認める腰痛に対する治療とその効果について紹介した。また、HRVBFについては、心拍コヒーレンス法を用いた膠原病性間質性肺炎による呼吸不全患者の治療経験について紹介した。最後に、リハビリテーション医療におけるバイオフィードバック応用の利点と欠点について考察した上で、今後の応用可能性について論述した。
22 バーチャルリハビリテーションにおける次世代バイオフィードバックの可能性	単著	平成30年10月	バイオフィードバック研究 第45巻第2号 pp.73-78	リハビリテーションとは，脳卒中や交通事故により四肢に障害を抱えた患者をトレーニングし，家庭や職場へ復帰できるように支援することであるが，そのトレーニングは辛く苦しいものであることが大きな課題であった. 　バーチャル・リハビリテーションとは，一般的にVRと呼ばれているバーチャルリアリティ（仮想現実）技術とロボット技術を統合した次世代リハビリテーションの総称であるが，国際的には研究開発の歴史が長いものの日本ではまだ普及が遅れているのが現状である. 　バーチャル・リハビリテーションの利点は，病室やリハビリテーション室という限られた空間の中で，自由なVR場面を設定できることである. 　本稿では，バイオフィードバックが応用されたバーチャル・リハビリテーションについて紹介し，その応用可能性について報告した.

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23 失禁とバイオフィードバック	単著	令和2年4月	バイオフィードバック研究 第47巻第1号 pp.19-22	失禁（Incontinence）とは，排尿や排便が自分の意志でコントロール（禁制：Continence）できずに排出される状態のことをいう.本稿では，主に筋電図を用いた骨盤底筋に対するバイオフィードバックの方法とその効果について報告した。まず、失禁と骨盤底筋機能障害との関係について解剖生理学的に明らかにした上で、失禁に関して骨盤底筋機能が重要であることとそのケアについて解説した。また、骨盤底筋機能を効果的に高めるアプローチとして筋電図バイオフィードバック療法(EMGBF）について、その基本的原理と具体的なトレーニングの方法を解説するとともに、これまで行われた臨床研究を整理し、科学的なエビデンスについて言及した。最後に、日本においてEMGBFが欧米や中国に比較すると未だ標準的な治療として位置づけられてい現状および今後の課題と展望についても論述した。
24 作業療法を深める（42）VR（仮想現実）VR 技術を用いたリハビリテーションの現状と展望	単著	令和2年6月	作業療法ジャーナル 第54巻第6号 pp.562-569	最近ではコンピュータサイエンスの進歩により，VR（人口現実）技術が身近となり，意欲を高める多様なリハの可能性が高まり，欧米ではバーチャル・リハビリテーションと名づけられ，広く応用されつつある．また，脳卒中片麻痺の運動障害等に対してVRを導入した治療では，主に上肢機能と日常生活活動への効果に関する報告が多く，その効果は今のところ限定的ではあるが，作業療法への応用可能性は高いと考えられる． 本稿では，VR技術を用いたリハに関して，まずVRとは何かを定義したうえで，VRの鍵となる「臨場感」と「没入感」について解説し，リハにおけるVRの応用事例の紹介とリハビリテーション医療におけるVRの今後について展望した．
25 The Efficacy of Virtual Reality Exposure Therapy for Fear of Falling (FOF) in the Elderly ＜英文＞ 高齢者における転倒恐怖症に対するバーチャルリアリティ曝露療法の効果 （査読付）	共著	令和2年7月	Conference paper In International Conference on Human-Computer Interaction Springer, Cham. pp.178-187	転倒恐怖症は、過去1年間に転倒した人の平均50%に発生するため、高齢者によく見られる症状である。本研究の目的は、バーチャルリアリティ曝露療法を用いて、高齢者の転倒者における転倒恐怖症（FOF）を軽減する試みについて報告した。本研究では、以下の2つの実験を実施した。まず、バーチャルリアリティ技術を用いた曝露療法システムを開発し、被験者にそれを装着して視聴させ、被験者の心拍数や皮膚温などのバイタルデータを収集し、バーチャルリアリティを用いた曝露療法の有効性を検証した。本研究では、以前に転倒したことのある高齢者を対象として予備実験を行い、バーチャルリアリティ曝露療法による転倒恐怖症の軽減効果を確認した。 (分担執筆者：辻下守弘、登尾啓史、升谷保博、小枝正直、大西克彦) 担当部分：バーチャルリアリティ曝露療法の開発から臨床試験およびデータ解析と論文作成の全体を担当した。
26　本学保健医療学部リハビリテーション学科志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要第13集 pp.151-157	本学リハビリテーション学科の広報活動に資する基礎資料とするため、2020年度新入生の志望経緯および本学に対する印象等についてアンケート調査を行った。その結果、理学療法・作業療法いずれの専攻についても、多くの学生は当初の志望を中途変更することはなかった。作業療法学専攻については、特徴的な技術に魅力を感じたことが契機となっていた。入学前の本学選択においては設備、環境面を魅力と感じており、入学後は教員や教育の質について肯定的な意見が多かった。 (分担執筆者：飯塚 照史，辻下 守弘，池田 耕二，城野 靖朋，中島 大貴) 担当部分：アンケート調査の実施と調査結果のデータ整理と統計処理を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
27 特集：コロナ禍におけるバイオフィードバック.リハビリテーション領域における現状	単著	令和3年4月	バイオフィードバック研究 第48巻第1号 pp.17-23	COVID-19の世界的な感染拡大は，リハビリテーション領域においても重大な問題となった.そもそもリハビリテーション領域の理学療法や作業療法は，徒手的治療あるいは日常生活動作指導において，セラピストと患者との濃厚接触が基本となる治療的介入であり，それを否定する接触感染対策は受け入れがたいのが現状である．コロナ禍におけるリハビリテーションの課題は，濃厚接触業務，3密回避困難，そして社会活動制限の3点である．これらの課題に対するBFの応用として，筋電図BFと心拍変動BFを紹介した．今後は，国内においても接触感染対策としての遠隔リハビリテーションが大きく注目され，BFの応用可能性はますます高くなると考えられることについて論述した.
28 創傷被覆材における近赤外線透過率の検証 （査読付）	共著	令和3年4月	医療福祉情報行動科学会雑誌 第8巻 pp.11-18	本研究では、創傷被覆材であるフィルムドレッシング（FD）材，ハイドロコロイドドレッシング（HC）材，ハイドロファイバー（PF）材，ポリウレタンフォーム（HP）材のドレッシング材を準備し，滲出液を含まない状態（乾燥している状態）と滲出液を含んだと仮定した状態（生理食塩水を吸収させた状態）の近赤外線透過率を確認した。 その結果、FD材については約95％の透過率があったため，FD材のみであれば十分な近赤外線が創部へ到達すると考えられる。しかし，HC材，PF材，HP材は13～96％と透過率に差があったため，使用ドレッシング材の透過率を計算した上での照射強度の設定が必要であることが示唆された。また，HC材については，水分を吸収することで透過率が減少し，PF材については水分を吸収することで透過率が増加していた。 (分担執筆者：吉川義之、城野靖朋、滝本幸治、植村弥希子、辻下守弘) 担当部分：近赤外線透過率の計測とデータ解析を担当した。
29 A Discussion of Social Support for Dementia Elderly People and Family Carers ＜英文＞ 認知症高齢者と家族介護者におけるソーシャルサポートの考察 （査読付）	共著	令和3年4月	医療福祉情報行動科学会雑誌 第8巻 pp.67-75	本研究では認知症高齢者と家族介護者が在宅での介護の継続を可能とし、QOLの高い生活が送ることができることを目的として、生活実態とソーシャルサポートに視点をあてた支援方法について検討した。対象者は兵庫県・奈良県・三重県・愛知県在住の認知症高齢者の主たる介護者であり、アンケート調査の有効回答は、138人(配布数200部、回収率69％)であった。また、面接調査30人であった。 本研究では約4割の介護者が認知症高齢者の緊急時への対応に不安を持っていることから、地域における医療的環境の改善が必要であると考えられた。また、ソーシャルサポートを大別して「情緒的サポート」「手段的サポート」「情報的サポート」に分類して考察した結果、情緒的サポートでは、家族が重要な意味を持っていて、福祉や医療従事者はほとんど関与していなかった。認知症という疾患を抱えた認知症高齢者と家族介護者の情緒的なサポートとしては、相談したり、往診したりしてくれる医師と緊急時に入院させてくれる病院の存在が不可欠であることが示唆された。 (分担執筆者：守本とも子、田場真理、新谷奈苗、辻下守弘) 担当部分：アンケート調査の実施とデータ集計および解析と論文の結果および英文作成を担当した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
30　An Analysis of Related Factors of Subjective Health and Life Satisfaction among Caregivers of Dementia Elderly People　＜英文＞ 認知症高齢者の介護者における主観的健康感、生活満足度の関連要因の分析 （査読付）	共著	令和3年4月	医療福祉情報行動科学会雑誌 第8巻 pp.77-83	本研究では認知症高齢者の介護者が在宅での介護の継続を可能とし、QOLの高い生活が送ることができることを目的として、認知症高齢者の介護者における主観的健康感、生活満足度に関連する要因に視点をあてた支援方法について検討した。対象者は兵庫県・奈良県・三重県・愛知県在住の認知症高齢者の主たる介護者であり、アンケート調査の有効回答は、138人(配布数200部、回収率69%)であった。また、面接調査30人であった。 調査の結果、主観的健康感と生活満足度に高い相関が認められた。その結果は主観的健康感を高めることが生活満足度を高める要因であることを示唆するものであった。また、生活満足度は、認知高齢者と介護者の生活の質に大きく関与する要因である。認知症高齢者と介護者は、今後ますます高齢化が進み、健康障害をきたしやすいことが考えられる。認知症高齢者と介護者の生活の質を維持、向上させるためには双方の健康管理が重要であることが示唆された。 (分担執筆者：守本とも子、田場真理、新谷奈苗、辻下守弘) 担当部分：アンケート調査の実施とデータ集計および解析と論文の結果および英文作成を担当した。
31　2021年度リハビリテーション学科新入生における志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要第14集 pp.1-6	学部設置3年目を迎えたリハビリテーション学科においては、定員充足率増加に伴い新入生の進学経緯も多様になっているものと考えられる。そこで、3期生においてアンケート調査を実施し、2期生との比較を通じてその傾向について比較検討した。結果、当初における職業選択は変更されることなく、近しい人物への相談を伴ったオープンキャンパスへの参加、加えて本学近隣環境等への好感を以て進学を決定している経緯があり、2期生との大きな変化はなかった。一方、プレゼンスの高まり、教員対応への肯定的意見と捉えられる側面もあり、本学魅力の一端として認識する必要性が示唆された。以上の結果は、今後の広報戦略に資するものであると考えられた。 (分担執筆者：飯塚 照史，辻下 守弘，池田 耕二，城野 靖朋，中島 大貴) 担当部分：アンケート調査の実施と調査結果のデータ整理と統計処理を担当した。
（その他） 1　膝蓋大腿関節機能不全に対する筋電図バイオフィードバック療法の一経験 （口頭発表）	共著	平成25年4月	第41回日本バイオフィードバック学会学術集会 （神奈川） バイオフィードバック研究第40巻第1号2013年 p.88	交通事故により膝蓋腱損傷を受傷し，再建術後に膝蓋大腿骨腎機能不全となった症例に対して筋電図バイオフィードバック療法（以下BF と略す）を実施し、歩行障害の改善に著効を認めたので、その実施方法と経過について報告した。退院時には、不安定性や疹痛もなく、階段昇降やスクワット動作も問題なくスムーズに可能となっていた。 (共同研究者：辻下守弘、西上智彦、笹田朋香、山本昇吾、孫 康基、梶原沙央里、田辺暁人) 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。
2　高齢者に対するキネクトセンサーを用いたインタラクティブ・リハビリテーションの効果 （口頭発表）	共著	平成26年4月	第42回日本バイオフィードバック学会学術集会 （東京） バイオフィードバック研究第41巻第1号2014年 p.50	本研究の目的は、高齢者を 対象としてキネリハを用いた運動トレーニングを実施し、全身の機能的身体運動能力やバランス能力に及ぼす 影響および認知脳機能に対する効果について検討することであった。対象は、認知症や中枢神経系疾患のないことが確認された健常高齢者3名であった。キネリハの所要時間は休息も入れて約15分とし，週3回の頻度で2週間継続した。キネリハの結果3名ともにFRTはリーチ距離が改善

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				し、TUGは所要時間が短縮していた。ファイブ・コグテストは手先の運動スピードと注意分割機能が3名とも向上していた。 (共同研究者：辻下守弘、川村博文、西上智彦、松谷綾子、井上悦治) 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。
3　認知症患者に対するインタラクティブ・メトロノームの症例報告 （口頭発表）	共著	平成27年3月	第1回認知症の早期発見、予防・治療研究会（東京） 抄録集 p.14	本研究では、認知機能の改善を目的としたIMトレーニングが、高齢者の認知症に対しても同様の効果が期待できると考え応用を試みたので報告する。対象は、IMトレーニングを3ヶ月間継続できた認知症高齢者2名とし、認知症の評価には、改訂長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）とIMの専用ソフトに内蔵されているミリ秒単位でタイミング誤差を測定する評価ツールを使用した。IMは、1セッション約20分とし、提示される1分間54のテンポに対して正確にタイミングを合わせて両手、左右片手といった3種類のリズム運動を週3回、3ヶ月間実施した。被験者2名は、IMに対する意欲が3か月間維持され、トレーニング開始時に比較して、タイミング誤差が大幅に短縮し、それに伴ってHDS-Rの改善も認められた。IMは、認知症の認知機能の改善にも効果が期待できる。
4　タイミング誤差のフィードバックトレーニングが時間認知に及ぼす影響 （口頭発表）	共著	平成27年4月	第43回日本バイオフィードバック学会学術集会（つくば） バイオフィードバック研究第42巻第1号2015年 p.85-86	本研究では、注意欠陥多動性障害（ADHD）と認知症といった代表的な認知機能障害に対してタイミング誤差のフィードバックトレーニングを継続的に実施する機会を得た。対象は、ADHDの中学生1名とアルッハイマー型認知症の高齢者1名であった。トレーニングには、インタラクティブ・メトロノー ム法（IM）を用いた。IMは、1セッション約30分とし、提示されるテンポに対して正確にタイミングを合わせてリズム運動を行う課題を8週間で合計56セッション実施した。その結果、ADHDではセッション中期以降でタイミング誤差が小さくなり、認知症ではセッション中期で急激にタイミング誤差が小さくなっていた。 (共同研究者：辻下守弘、西上智彦、松谷綾子、青田絵里) 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。
5　インタラクティブ・メトロノーム(IM)がアルツハイマー型認知症の認知機能に及ぼす効果について （口頭発表）	共著	令和2年4月	第47回日本バイオフィードバック学会学術集会（名古屋） バイオフィードバック研究第47巻第1号2020年 p.29	インタラクティブ・メトロノーム（IM）は、基準となるリズム音に対して身体運動のタイミングを合わせる簡単なトレーニングであり、基準音と運動のタイミング誤差を聴覚的・視覚的にリアルタイムでフィードバックさせることが特徴である。本研究では、軽度から中等度のアルツハイマー型認知症高齢者6名を対象として、IMをトレーニングに取り入れその効果について検討した。対象者全員がIMのスコアとトレーニングを理解し実施することが可能であった。その結果、スコアと認知症評価とは関連性があり、IMによってスコアが改善傾向にあることが分かった。 (共同研究者：辻下聡馬、辻下守弘) 担当部分：IMトレーニングと効果検証および論文の執筆までを担当した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
6　若齢女性における冷え症の手浴効果における自律神経評価 （口頭発表）	共著	令和3年12月	第51回日本臨床神経生理学会学術大会（仙台市） 臨床神経生理学第49巻第5号p. 443	指尖容積脈波を用いて、冷え症の女子大学生の手浴後の自律神経の変化を調べることを目的とした。安静時では冷え症は、非冷え症群と比べて脈波振幅の相対値は有意に低値を示した。1回目手浴後冷え症は非冷え症群と比べて脈波振幅の相対値は有意に高値を示し、2回目手浴後では冷え症は非冷え症群と比べて脈波振幅の相対値は有意に高値を示した。以上の結果から冷え症では、温浴刺激によって脈波振幅が低値となり血管収縮、拡張が繰り返し起こり、冷え症は温浴刺激を繰り返すと自律神経が変調することがわかった。 (共同研究者：関谷まり、辻下守弘、嶋田理博、山本祐輔、水野由子) 担当部分：指尖容積脈波の測定とデータ解析を担当した。

別記様式第４号（その２）

教　育　研　究　業　績　書

令和 5 年 3 月 31 日

氏名　　西川　隆

研究分野	研究内容のキーワード
内科系臨床医学，神経科学	精神神経科学，神経科学一般，神経心理学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）作業療法学専攻における精神医学の授業に参加型演習を導入	平成 23 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部作業療法学専攻学生 2 年次授業科目「精神障害論」（後に「精神医学Ⅱ」）において，毎回，前週に検討課題を与えてグループによる事前学習を行わせ，授業ではプレゼンテーション・討論・総括を行い，翌週までに総括のレポートを提出させるという今日のいわゆるアクティブ・ラーニングを実践し，課題検討能力の向上をはかった。
2）作業療法学専攻における高次脳機能障害学の授業に参加型演習を導入	平成 23 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部作業療法学専攻学生 3 年次授業科目「認知心理障害論Ⅱ」（後に「高次脳機能障害学Ⅱ」）において，毎回，前週に検討課題を与えてグループによる事前学習を行わせ，授業ではプレゼンテーション・討論・総括を行うという今日のいわゆるアクティブ・ラーニングを実践し，課題検討能力の向上をはかった。
3）大学院生に対する職域横断的学術活動の支援	平成 23 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科大学院生に対し，各自の研究テーマに応じて，作業療法士・言語聴覚士・理学療法士などの職域を超えた医学分野の学会（老年精神医学会，高次脳機能障害学会，統合失調症学会等）への加入を促し，学会報告・論文発表を指導して，職域横断的な学術活動の能力向上をはかった。 現在，医療専門職として就業している社会人大学院生が多いという事情を考慮し，週 1 回，大阪市中心部にあるサテライト教室で夜間に研究指導を行った。
2　作成した教科書，教材 精神医学マイテキスト	平成 23 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部における「精神医学」（後に「精神医学Ⅰ」）の講義に用い，理学療法学専攻および作業療法学専攻の学生に，精神医学の諸理念と歴史，症候学，精神疾患の各論的知識を習得するために活用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成 18 年 7 月	公立大学法人大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科臨床支援領域修士課程（職名：教授，講義科目：高次脳機能障害学特論　M可，研究指導：臨床支援特別演習　M○合，特別研究　M○合）の資格ありと判定
大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成 20 年 8 月	公立大学法人大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科博士後期課程（職名：教授，講義科目：高次脳機能障害学特別講義　D可，研究指導：臨床支援特別演習Ⅱ　D○合，臨床支援特別演習Ⅲ　D○合，特別研究Ⅱ　D○合，特別研究Ⅲ　D○合）の資格ありと判定
4　実務の経験を有する者についての特記事		

5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 1）医師免許 2）博士（医学） 3）日本精神神経学会精神科専門医 4）老年精神医学会専門医	 昭和 54 年 5 月 平成 13 年 11 月 平成 18 年 4 月 平成 16 年 6 月	 医師免許（第 244771 号） 大阪大学 16585 会員番号 04466 第 001676 号
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事		
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1 意識と睡 （脳とこころのプライマリケア 5）	共著	平成 24 年 6 月	シナジー	脳とこころに関する病態を体系的に解説した全書のうち，意識と睡眠に関する分野における最近の研究知見を基礎から臨床まで詳述した書 B5 版　全 840 頁 監修：日野原重明，宮岡等 巻編者：千葉茂 本人担当部分「特殊な意識障害　解離性障害」の項（264-271） 解離性障害は防衛機制として意識の一部を自己から分離あるいは変容させることにより生じる病態である。てんかんや昏睡との鑑別を中心にその症状と病態を解説した。
2 脳血管障害と神経心理学　第 2 版	共著	平成 25 年 9 月	医学書院	脳血管障害による局在病変と各神経心理学的症候の関連を脳解剖生理学的病態理論を踏まえて総合的に解説した書 B5 版　全 550 頁 編者：平山恵造，田川皓一 本人担当部分「情動障害」の項（67-76） 脳血管障害によって現れる各種の気分・感情の障害につい知見を総説し，そ神経基盤と病態機序について解説した。
3 認知症ハンドブック	共著	平成 25 年 11 月	医学書院	認知症診療に必要な知識を全項目にわたって詳しく解説した書 A5 版　全 907 頁 編者：中島健二，天野直二，下濱俊，冨本秀和，三村將 本人担当部分「認知症の診断―問診」の項（109-115） 認知症の問診手順と技法，留意事項について解説した。

4 症例で学ぶ高次脳機能障害-病巣部位からのアプローチ-	共著	平成26年9月	中外医学社	高次脳機能障害に関する種々の実例をもとに，各症候の病巣部位と病態を解説した書 B5版 全274頁 編者：鈴木匡子 本人担当部分「脳梁前部」の項（236-245） 脳梁前部症候群を呈した症例を提示しその病態と診断上の留意点および脳梁の機能解剖学的知識を解説した。
5 注意と意欲の神経機構	共著	平成26年10月	新興医学出版社	従来の認知科学では捉え難かった人間の注意と意欲の神経基盤とメカニズムについて種々の病態を通じて検討した書 A5版 全280頁 編者：日本高次脳機能障害学会教育・研修委員会 本人担当部分「消去現象の病態と注意機構」の項(97－118) 消去現象とは一側刺激では感知可能な刺激が両側刺激ではその一方を感知し得ないという現象である。その病態に関する研究の知見を総括し解説した。
6 精神・心理機能評価ハンドブック	共著	平成27年6月	中山書店	精神疾患や神経疾患でみられる精神・心理的障害および症状の評価尺度と検査法を解説した書 B5版 全528頁 編者：山内俊雄，鹿島晴雄 本人担当部分「重度認知症における認知機能検査」 重度認知症の認知機能を評価しうる検査として著者らが新たに開発した評価尺度を解説した。
7 情動とトラウマ	共著	平成29年4月	朝倉書店	心的トラウマが与える精神発達への影響と精神障害発生の病態機制および治療戦略を生物学的・心理学的・社会学的側面から多面的に解説した書 A5版 全230頁 編者：三村將　奥山眞紀子 本人担当部分「ストレス関連障害に対する他の精神療法」の項（216-223） ストレス関連性精神障害の精神療法のうち認知行動療法を除く他の精神療法について効果のエビデンスにもとづく推奨度を国際外傷性ストレス研究学会のガイドラインに沿って解説し，理論的背景を解説した。
8 女性のメンタルヘルス	共著	平成29年11月	南山堂	平成 26 年の女性活躍推進法の制定を受け，働く女性のメンタルヘルスの向上と不調の予防および治療について総合的に解説した書 B5版 全274頁 編者：丸山総一郎 本人担当部分「女性のメンタル不調の診察」の項（71-78） 女性がメンタルヘルスの不調を呈した際の診察手順とその際に考慮すべき女性特有の生活史背景と心理的要因について解説した。

9　高次脳機能障害ビジュアル大事典	共著	令和２年９月	メディカ出版	看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士を対象に、豊富なイラストと症例提示を添えて各種の高次脳機能障害の症候の概念と効果的な対応法を開設した事典 B5 版 全 286 頁 監修：大沢愛子 本人担当部分「聴覚失認」の項（168-170）聴覚失認の概念と病態の特徴、効果的なケアのアプローチについて解説した。
（学術論文） 1 重度認知症者のための認知機能検査 －‘Severe Cognitive Impairment Rating Scale’日本語版の臨床的有用性の検討 － （査読付）	共著	平成 25 年 10 月	老年精神医学雑誌 24(10):1037-1046	重度認知症患者にとって既存の認知機能検査は難易度が高く，残存する認知機能を詳細に把握することが困難である．海外では，重度認知症患者の認知機能検査として，Severe Cognitive Impairment Rating Scale（SCIRS)が開発されている．本研究では，SCIRS の日本語版を作成し，臨床的有用性を検討した．その結果，既存の検査では床効果を示した患者に対しても，SCIRS を用いてより詳細に認知機能を判別できた．以上より，日本語版 SCIRS は重度認知症者の残存する認知機能を詳細に幅広く測定可能な検査であると考えられた． 本人担当部分：研究計画，調査，データ分析，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：田中寛之，植松正保，永田優馬，福原啓太，内藤泰男，大西久男，西川隆
2 認知症患者における認知機能，ADL，BPSD の関連性　重度認知症患者に着目して （査読付）	共著	平成 26 年３月	老年精神医学雑誌 25(3):316-323	94 人の認知症入院患者を対象に，認知機能，日常生活活動（ADL），周辺症状（BPSD）の関連性を検討した。その結果，ADL が高ければ認知機能障害が軽度で，移動能力が高いほど BPSD が増悪することが明らかになった。また，重度認知症患者では，認知機能検査，ADL 検査においていくつかの検査項目で床効果を示した。そのため，重度認知症患者向けの各検査が必要であると考えられた。 本人担当部分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：田中寛之，植松正保，小城遼太，永田優馬，福原啓太，内藤泰男，大西久男，西川隆

3 利き手・非利き手での到達把持動作での予測的な戦略の検討	共著	平成26年3月	四條畷学園大学リハビリテーション学部紀要 平成26年度	高齢者の巧緻動作能力の低下における特徴を検討するために，到達運動時に見られる Pre-shaping において最大切線速度出現時点と母指・示指間最大距離出現時点を指標として若年者と比較を行った。その結果，高齢者では Pre-shaping が若年者に比べてより早期に出現することが示された。 本人担当部分：研究計画，結果の考察に関わった。 共著者：田丸佳希，内藤泰男，西川隆，松下太，杉原勝美，西田斉二，川上永子，北山淳，銀山章代，上田任克
4 ライフヒストリーカルテの作成　生活史を多職種で共有する意義（査読付）	共著	平成26年7月	老年精神医学雑誌 25(7)801-808	医療・介護療養型病床および介護老人保健施設に入院・入所している患者のケアに資することを目的に対象者の生活史を多職種が短時間で把握できる共有ツールの作成を試みた。ケアスタッフへの意識調査により，記載すべき情報として，出身地，家族関係，　家族や友だち，遊び，仕事，結婚，人柄，印象に残っている姿，生活習慣，誇りなどが挙げられた。 本人担当部分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：田中寛之，山本祐子，小城遼太，永田優馬，日垣一男，西川隆，植松正保
5 非失語性失書を合併したタイピング障害の一例　― 失書との関連 ― （査読付）	共著	平成27年6月	高次脳機能研究 35(2)233-241	非失語性の失書を伴うタイピング障害例の病態を検討した。失書は運動覚性失書であり，タイピングの障害は打鍵位置の空間的誤りによるものであった。左中心前回，角回に病巣を有し，音韻選択や配列に関わる左中前頭回後部には及んでいなかった。タイピングは書字と神経基盤の一部を共有していることが示唆された。 本人担当部分：症例の診断，神経学的所見，画像所見，検査結果の分析と考察，論文執筆に関わった。 共著者：坂井麻里子，柏木敏宏，江口香織，西川 隆
6 Development of the Cognitive Test for Severe Dementia （重度認知症のための認知機能テストの開発） （査読付）	共著	平成27年6月	Dement Geriatr Cogn Disord 40(1-2): 94-106	中等度から重度の認知症患者に対して既存の認知機能検査は床効果を示し，特に重度認知症者に対しては残存する認知機能を測定することができない。著者らは認知機能7領域13項目からなる重度認知症患者向けの認知機能テスト(the Cognitive Test for Severe Dementia; CTSD) を開発し，信頼性と妥当性を検討した。CTSD は床効果を示さず，信頼性・妥当性も確認された。CTSD は他の認知機能検査と比較して重度認知症患者の残存する認知機能を鋭敏に測定することができる。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Uematsu M, Takebayashi T, Hanada K, Inokawa M, Fukuhara K, Ogawa Y, Haga D, Kakegawa Y, Nishikawa T

7 右前頭葉内側面損傷により漢字の純粋失書を呈した一例 (査読付)	共著	平成27年6月	神経心理学 31(3)204-212	右前頭葉内側面損傷により漢字の純粋失書を呈した 1 症例について失書の発現機序を検討した．漢字の誤り方の特徴として，無反応に次いで形態性の誤りが多かった．漢字の書字の成否は画数ではなく，構成要素数の多さと関係し，錯書の場合は構成要素が他の漢字の構成要素に置換されることが多く，そのほとんどが実在する構成要素を組み合わせていた．他の言語機能に問題がなかったことから，本例の漢字の失書は，音韻の配列や意味から文字形態を想起する過程は終盤近くまで保たれているが，最終段階における構成要素の選択と配置の誤りによって生じているものと考えられた． 本人担当部分：症例の診断，神経学的所見，画像所見，検査結果の分析と考察，論文執筆に関わった。 共著者：坂井麻里子，鈴木則夫，柏木敏宏，西川隆
8 Decline of gustatory sensitivity with the progression of Alzheimer’s disease (アルツハイマー病の進行とともに低下する味覚感度) (査読付)	共著	平成28年3月	International Psychogeriatrics 28(3)511-517	アルツハイマー病患者 32 名の甘味・塩味・酸味・苦味に関する味覚閾値をテーストディスクを用いて測定するとともに，味覚弁別，味覚同定能力を評価した。健常対照群と比較した。患者の味覚閾値は初期から低下し認知症の重症度とともに進行した。酸味・苦味は弁別はできるが同定は困難であったが，甘味だけは同定能力が保たれていたことから，アルツハイマー病患者にみられる甘味への強い嗜好性の基盤に基礎的な味覚障害が関与している可能性が示唆された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Sakai M, Ikeda M, Kazui H, Shigenobu K, Nishikawa T
9 重度認知症に対する従来の QOL 尺度の限界 (査読付)	共著	平成28年4月	老年精神医学雑誌 27(4): 429-437	を対象に開発された QOL 尺度が用いられてきたが，近年，その QOL 概念の枠組みは異なると示唆されている。36 人の重度認知症者を対象に，自己評点式尺度と代理評点式尺度をそれぞれ2種類従来のQOL尺度を用いて，重度認知症者に対する適応性を検討した。適応性の検定の結果，4 尺度の内の 1 尺度内における 2 項目が適合基準を満たしただけであった。重度認知症者に対する従来の QOL 尺度の適応性には限界があると考えられた． 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：永田優馬，田中寛之，石丸大貴，植松正保，福原啓太，小川泰弘，内藤泰男，西川隆

10 右前頭葉の発話・書字への関与― 一過性の発話開始困難と持続的な漢字の純粋失書を呈した症例からの考察	共著	平成28年6月	高次脳機能研究 36(2)236-243	前補足運動野を含む右前頭葉内側面損傷により一過性の発話開始困難と持続性の漢字の失書を呈た症例を報告した。右前頭葉内側面損傷による失書は過去に報告されていない。本例の書字の成否は，漢字の画数や使用頻度に依存せず，構成要素（偏や旁など漢字を構成する要素的単位）の数が増すほど書字が困難であり，その誤りの特徴は構成要素の置換であった。右前頭葉内側面は漢字書字を実現する過程の終盤の段階で，構成要素の選択・配列に関与している可能性が示唆される。 本人担当部分：結果の考察，論文執筆を担当した 共著者：坂井麻里子，鈴木則夫，西川隆
11 線画に比べ実物や写真でより顕著な障害を認めた視覚失認の一例 （査読付）	共著	平成28年6月	高次脳機能研究 36(2)304-311	特異な視覚失認と大脳性色覚障害，失語症，前向性健忘を呈する症例を報告した。左側の舌状回・紡錘状回を含む後頭葉から側頭葉内側下部に病変を有し，一般的に視覚対象の認知は実物や写真より線画のほうが難しいと考えられているのに反して，症例では線画に比べ実物や写真の認知が不良であった。症例の視覚認知機能をさらに検討した結果，輪郭情報にもとづく対象の認知は比較的保たれていたが，陰影や奥行きの情報を統合し，立体感のある対象として認知することが困難であると考えられた。 本人担当部分：結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：竹田奈央子，渋谷静英，塚本能三，西川隆，柏木敏宏
12 脳血管障害によりフレゴリの錯覚と身体パラフレニアを合併した2症例 （査読付）	共著	平成28年6月	高次脳機能研究 36(2)312-319	脳血管障害による右半球病変に伴って身体パラフレニアとフレゴリの錯覚を合併した 2 症例を報告した。Feinberg らは，身体パラフレニアを，カプグラ症候群と同型の病態構造を有していると指摘しているが，身体パラフレニアとカプグラ症候群の合併の報告はみられない。一方，身体パラフレニアにフレゴリの錯覚の合併をうかがわせる記述は少数見出された。身体パラフレニアと人物誤認症候は右半球とりわけ前頭葉病変に共通した責任病巣があるものと考えられており，これまで注目されてこなかったが，フレゴリの錯覚と身体パラフレニアはより高率に合併している可能性がある。 本人担当分：画像所見，結果の考察，文献的検討，論文執筆を担当した。 共著者：掛川泰朗，磯野理，西川隆

13 家族からのビデオレターによる simulated Presence Therapy が言語的混乱行動を軽減させた認知症高齢者の一症例 (査読付)	共著	平成29年4月	作業療法 36(2): 223-229	家族からの語りをオーディオ・ビデオテープに録音・録画・再生する擬似的再現療法とはことで感情を刺激し,快適さをもたらす療法を認知症高齢者の一症例に実施した結果，介入前と比較して介入後に言語的混乱行動の回数に有意な軽減を認めたが，音楽刺激では効果がみられなかった。家族からのビデオレターによる擬似的再現は症例の欲求不満を軽減する作用があると考えられた。 本人担当分：結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：田中寛之，永田優馬，石丸大貴，小城遼太，西川隆
14 Impaired Interpretation of Others' Behavior is Associated with Difficulties in Recognizing Pragmatic Language in Patients with Schizophrenia (統合失調症において他者の行動の理解障害は語用論的言語理解障害と関連している) (査読付)	共著	平成 29 年 10 月	Journal of Psycholinguistic Research 46(5): 1309-1318	統合失調症患者 34 人と健常者 34 人に対して，心の理論課題，比喩皮肉文課題，社会常識テストを実施した，全ての課題において，患者群は健常群よりも有意に障害されていた。また患者群内において比喩理解能力と正常行動理解能力，皮肉理解能力と異常行動理解能力の間に有意な相関がみられた。統合失調症患者の社会的認知機能障害はこれら 2 つの語用論的要因を含んでいることが示唆された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Fukuhara K, Ogawa Y, Tanaka H, Nagata Y, Nishida S, Haga D, Nishikawa T
15 Earlier and greater hand pre-shaping in the elderly: a study based on kinetic analysis of reaching movements to grasp objects (高齢者にみられる早期のより大きな手 pre-shaping:物体把握到達運の運動学的分析に基づく研究) (査読付)	共著	平成 29 年 11 月	Psychogeriatrics 17(6): 382-388	物体把握の準備動作として到達運動期間にみられる手の形態変化を Pre-shaping という。高齢者の巧緻動作の評価とともに，高齢者群と若年対象者群の Pre-shaping を運動解析装置を用いて比較したところ,Pre-shaping の最大切線速度出現時点と母指・示指間最大距離出現時点高齢者の方が若年者に比べてより早期に出現することが示された。この結果は高齢者においては巧緻動作能力の低下を代償する方策として Pre-shaping を変化させていることを示唆している。 本人担当部分：研究計画，結果の考察，論文執筆に関わった。 共著者：Tamaru Y, Naito Y, Nishikawa T

16 Gustatory dysfunction as an early symptom of semantic dementia (意味性認知症の初期症状としての味覚障害) (査読付)	共著	平成 29 年 11 月	Dement Geriatr Cogn Dis Extra 7(3): 395-405	意味性認知症(SD)患者 18 名とアルツハイマー病(AD)患者 18 名，健常対照者に対して，味覚閾値および味覚弁別・味覚同定の能力を測定し比較した。SD と AD ではともに早期より健常者に比べて味覚閾値が低下しており，その傾向は SD でより目立った。この研究は SD の味覚閾値を測定した初めての研究である。SD では AD と比較してより甘味への嗜好性の強いことが知られているが，その背景には基本的な味覚機能低下が関与していると考えられる。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Sakai M, Ikeda M, Kazui H, Shigenobu K,Komori K, Ikeda M, Nishikawa T
17 Development of the Japanese version of the Quality of Life in late-stage Dementia Scale (Quality of Life in late-stage Dementia Scale 日本版の作成) (査読付)	共著	平成 30 年 3 月	Psychogeriatrics 18(2): 106-112	重度認知症者の QOL 尺度は海外でも少数しか開発されておらず，日本ではまだ臨床に導入されていない。本研究は海外で開発され広く使用されている Quality of Life in late-stage Dementia Scale(QUALID)を原著者の許可を得て翻訳して日本版(QUALID-J)を作成し，その信頼性と妥当性を検討したものである。70 人の重度認知症者に評価を施行し，十分な信頼性・妥当性を有する検査であることが確認された。今後重度認知症患者の治療や介護の効果判定に役立つことが期待される。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Nagata Y, Tanaka H, Ishimaru D, Uematsu M, Naito Y, Nishikawa T
18 Clinical Utility of the Cognitive Test for Severe Dementia: Factor Analysis, Minimal Detectable Change, and Longitudinal Changes (Cognitive Test for Severe Dementia の臨床的有用性:因子分析，最小検出可能変化値，長期変化) (査読付)	共著	平成 30 年 6 月	Dement Geriatr Cogn Dis Extra 8(2): 214-225	著者らが開発した重度認知症患者向けの認知機能テスト CTSD (the Cognitive Test for Severe Dementia) の臨床的有用性を COSMIN checklist によって検討した。232 人の認知症患者における認知機能の変化を追跡し，そのデータにもとづいて 1)因子分析による構成妥当性，2)標準誤差と最小検出可能変化値による信頼性と解釈可能性，3)長期変化による反応性，を検討した。結果は CTSD が信頼しうる評価指標であることを示した。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Nishikawa T

19 Physical Activity in Severe Dementia is Associated with Agitation Rather than Cognitive Function （重度認知症の身体活動は認知機能でなく焦燥と関連している） （査読付）	共著	令和１年９月	Am J Alzheimers Dis Other Demen doi: 10.1177/1533317519871397.	重度認知症者における身体活動と認知機能・日常生活活動(ADL)・心理行動症状(BPSD)の関連を検討した。認知症患者 63 名の 1 日身体活動量をアクティウォッチで定量的に計測し，認知機能・日常生活活動・心理行動症状の各評価尺度の結果との関連を分析した。重度認知症者の身体活動は認知機能ではなく BPSD の焦燥と相関していた。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Nishikawa T
20 Insight Into Illness and Defense Styles in Schizophrenia （統合失調症における病識と防衛様式） （査読付）	共著	令和１年９月	J Nerv Ment Dis 207(10):815-819	統合失調症者における病識と防衛機制，認知機能の関連を検討した.38 名の統合失調症患者に SAI-J（病識尺度），DSQ(防衛様式)，BACS-J（神経認知機能），BPRS（精神症状)を施行した結果，認知機能と精神症状を統制した重回帰分析によって，病識は未熟な防衛機制に関連していることが示された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Ogawa Y, Fukuhara K, Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Nishikawa T
21 Clinical factors associated with Activities of Daily Living and their decline in patients with severe and profound dementia （重度および最重度認知症患者の日常生活活動とその低下に関連する臨床要因） （査読付）	共著	令和２年３月	Psychogeriatrics 20(3):327-336	認知症患者の ADL に影響を及ぼす因子を検討した。131 人の患者に Personal Self-Maintenance Scale（PSMS）（ADL 尺度）と CTSD(認知機能尺度)，NPI-NH と CSDD(PPSD 尺度)，MNA-FS（栄養状態)，CCI（合併疾患）等による評価の 6 か月間の変化を測定し，重回帰分析を行った結果，最重度の段階の認知症においても ADL 機能の低下を最もよく予測する因子は認知機能であることが示された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Nishikawa T
22 認知症における engagement 評価尺度；日本語版 Menorah Park Engagement Scale の臨床的有用性の検討 （査読付）	共著	令和２年３月	老年精神医学雑誌 31(3):304-310	engagement とは活動に取り組む主体の態度のことであり，認知症者のリハビリテーションにおいては重要な要因と考えられるが，本邦ではいまだこれに関する評価尺度は導入されていない。海外で使用されている Menorah Park Engagement Scale を原著者の許可を得て日本語に翻訳し，その信頼性と妥当性を検討した。日本語版 Menorah Park Engagement Scale は認知症者の engagement を評価する上で有用性な尺である。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：石丸大貴，田中寛之，永田優馬，西川隆

23 Effect of Alzheimer's disease severity on upper limb function (上肢機能に対するアルツハイマー病重症度の影響) (査読付)	共著	令和２年８月	Psychogeriatrics. 20(5):802-804	著者らは物体把握の準備動作であるPre-shapingの最大切線速度出現時点と母指・示指間最大距離出現時点が加齢とともにより早く出現するようになることを既に報告した。今回の研究では，重症度の異なるアルツハイマー型認知症者（AD）の左右上肢による物体到達・把握動作を運動解析し，ADの初期の段階で利き手の到達運動が解体されるが非利き手には見られず，また把握動作には変化がみられないことを明らかにした。この知見はAD患者の動作障害を検討するうえで有用である。 本人担当部分：結果の考察，論文執筆に関わった。 共著者：Tamaru Y, Tanaka H, Ueda M, Sumino Y, Imaoka M, Matsugi A, Nishikawa T, Ishii R, Naito Y
24 Incidence and lesions causative of delusional misidentification syndrome after stroke. (脳卒中後の妄想性誤認症候群の発生頻度と原因病巣) (査読付)	共著	令和２年９月	Brain and Behavior 10(11): e01829.	脳卒中で入院した874人の患者における妄想性誤認症候群(DMS)の発生頻度と合併症，共通病巣を調査した。10例のDMSが見出されたが全てFregoli症候群であり，Capgras症候群を含め他のDMSはみられなかった。病変は全例が右半球病変を有し，全例左半側空間無視(USN)を呈していた。DMSを呈しないUSNの24例を対照群とするvoxel-based lesion-symptom mappingを用いた病巣解析の結果，鈎状束を含む病変がFregoli症候群に特異的に関連していることが示された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Kakegawa Y, Isono O, Hanada K, Nishikawa T
25 青年期脳性麻痺児・者のための自己回答式QOL尺度-Cerebral Palsy Quality of Life Questionnaire for Adolescents（CPQOL-Teen）日本語版の作成と有用性の検討-.	共著	令和３年１月	脳と発達 53(1):10-14	青年期脳性麻痺児・者の主観的QOL評価尺度CPQOL-Teenを著者の許可を得て和訳した日本語版を脳性麻痺児・者57名（CP群）と定型発達児・者58名（TD群）に実施し，評価尺度としての有用性を検討した.日本語版CPQOL-Teen自己回答版は,十分な検査-再検査信頼性と内的整合性,J-KIDSCREEN-27を外的基準とした妥当性を示した.CPQOL-Teenの5領域のうち『機能についての満足度』は，CPの特性を反映する可能性が示された. 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：加藤雅子，荒井洋，小松光友，ラトン桃子，立山清美，西川隆

26 Impact of disturbed rest-activity rhythms on activities of daily living in moderate and severe dementia patients. （中等度から重度認知症者の日常生活活動に与える休息・活動リズムの影響） （査読付）	共著	令和３年４月	Alzheimer Disease and Associated Disorders 35(2):135-140	中等度から重度認知症者 64 名の睡眠・覚醒リズムをアクティグラフィで測定・解析するとともに，認知機能，ADL，心理行動異常を評価して，相互の関連を検討した。 昼間の睡眠・覚醒リズムの不安定性と休息ピークのタイミングの不適切さが低い ADL に有意な影響を与える因子であることが示された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Ogawa Y, Fukuhara K, Takabatake S, Nishikawa T
27 左頭頂葉病変により把握反射，本能性把握反応を伴わず「つかんだものが放せない」症状を呈した１例（査読付）	共著	令和３年６月	高次脳機能研究 41(2):219-226	左中心後回後上部の転移性脳腫瘍に伴い，右手でつかんだものを放せなくなる症状を呈した症例を報告した。症状は，持つ対象やつかむときの手の形，使用する指のいかんに関わらず生じた。また，放すという行為にしか生じなかった。右手には運動拙劣と道具を正しく持てない症状があったが，麻痺はなく， 複雑な指の動きも可能だった。把握反射や本能性把握反応もみられなかった。つかんだものを放せない症状が把握反射や本能性把握反応から独立して，また頭頂葉損傷により起こりうることが示唆された。 本人担当部分：画像診断，結果の考察，論文執筆に関わった。 共著者：坂井麻里子，平山和美，後藤泰伸，西川隆
28 Pitch accent disorder observed in a Japanese patient due to traumatic head injury（頭部外傷の日本人患者にみられた高低アクセントの障害）	共著	令和３年９月	Aphasiology doi.10.1080/02687038.2021.1978382	頭部外傷により軽度ウェルニッケ失語に高低アクセント障害を選択的に発症した日本人の症例について，高低アクセント障害のメカニズムを検討した。アクセントの誤りのパターンを分析した結果、誤りであっても母語の大阪弁のパターンから逸脱していなかった。この結果は、高低アクセントの生成過程が音素の生成過程とは独立している可能性を示唆し、アクセント障害は発声の過程でランダムに生じたのではなく、母語のアクセントのレパートリーから当該の単語にパターンを割り当てる際に問題が生じたと思われる。つまり、この患者のアクセント障害は、音声生成の運動制御にではなく、より高次の言語処理、すなわち語彙的なアクセントの符号化の問題であったと考えられる。 本人担当部分：画像診断，統計解析，結果の考察，論文執筆に関わった。 共著者：Sakai M, Ihori N, Nishikawa T

29 Insight into illness and psychological defense attitudes in people with chronic schizophrenia using Markova's Insight Scale. （Markova 病識尺度によ る統合失調症患者の病識 と防衛的態度）（査読付）	共著	令和3年12月	J Nerv Ment Dis 209(12):879-883	病識は多次元的現象であり多くの評価法がある。Markova の Insight Scale (IS) に着目し、統合失調症患者 38 名を対象に、洞察力、心理的防衛スタイル、神経認知との関係を検討した。その結果、洞察力は未熟な防衛スタイルと有意に相関し、臨床変数を統制しても IS は未熟な防衛スタイルによって有意に予測された。これらは、IS で評価された洞察力の高さが未熟な防衛機制を反映している可能性が高いことを示唆している。また洞察力スコアが高いほど発症年齢が早かった。洞察力スコアは、統合失調症の未熟な心理的防御態度を反映し、そのような患者が臨床家の意見に従うことを望むようになると考えられる。 本人担当部分：研究全体を統括，指導するとともに，研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Ogawa Y, Fukuhara K, Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Urakawa M, Nishikawa T
30 Factors influencing the quality of life in patients with severe dementia（重度認知症患者の QOL に影響する要因）（査読付）	共著	令和4年1月	Psychogeriatrics 22(1): 49-54	重度認知症患者の QOL に影響する要因を検討するために，患者 105 名を対象に，QoL(QUALID-J),認知機能(CTSD), BPSD(NPI-NH), ADL(PSMS), 疼痛(PAINAD)および 居住環境(SCUEQS) QOL(QUALID-J)を各評価尺度によって評価し重回帰分析を行った。QUALID-J の総得点は NPI-NH と PAINAD の得点に有意に影響されることが明らかとなった。 QUALID-J の因子 1（快適さの表現）と因子 2（不快さの表現）は、それぞれ PSMS と PAINAD、NPI-NH と PAINAD の得点に有意に影響されることが示された。この結果は、認知症の行動・心理症状や痛みが、重度認知症患者の QoL に影響を与える重要な要因であることを示している。 本人担当部分：研究全体を統括，指導するとともに，研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Nagata Y, Nishikawa T, Tanaka H, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Shigenobu K, Ikeda M
31 Clinical utility of an assessment scale for engagement in activities for patients with moderate-to-severe dementia: additional analysis.	共著	令和4年4月	Psychogeriatrics 22(4): 433-444	我々が開発した中等度から重度の認知症患者の engagement 評価ツールである「活動への関与のための評価尺度（ASEA)」の信頼性のに関して、精神科急性期病院における中等度から重度の認知症患者 195 名を対象に、「健康測定機器選定のための合意に基づく基準（COSMIN）チェックリスト」を用いた追加解析を行った。重度の認知症に特化した数少ない評価方法の中で、ASEA は治療活動への関与状態を数値化し評価するのに有用な尺度であることが示された。共著者：Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Ogawa Y, Fukuhara K, Takabatake S, Nishikawa T.

32 語の意味記憶が解体された左側頭葉前部脳膿瘍の 1 例.	共著	令和 4 年 6 月	神経心理学 38(2): 144-154	左側頭葉前部の脳膿瘍の患者にみられた軽度の言語性意味記憶障害に対し，障害の質的検討を行った．本例の理解障害の特徴は，語の派生的意味の理解障害と語の範疇的使用の障害であった．また，語の理解が困難な場合，語の一部の意味や，その語を含む慣用表現の音韻的脈絡を手掛かりとして意味を探索する代償的方略もみられた．Patterson ら（2007）の Distributed-plus-hub 仮説を援用すれば，これらの所見は，損傷が及ばない脳領域の trans-modal pathway により各様式の表象間の局部的連結に基づく具体的な意味記憶は喚起されるが，semantic hub である側頭葉前部の損傷によって，より広範な表象の統合を要する抽象的な語の意味記憶が解体されたものと解釈できる． 共著者：坂井麻里子，鈴木則夫，西川隆
33 The Lower the Physical Function, the Higher the Quality of Life in Japanese Adolescents with Cerebral Palsy.	共著	令和 5 年 3 月	Physical & Occupational Therapy in Pediatrics, DOI: 10.1080/01942638.2023.2186197, March 17, 2023	脳性麻痺の青年 51 名を対象に，日本語版 KIDSCREEN-27 を用いた面接により主観的 QOL を評価し，定型発達青年 60 名と比較した。また、主観的 QOL と年齢、性別、機能レベル（粗大運動、操作、コミュニケーション）、知能、日常生活活動（ADL）レベル、教育支援の種類との相関を検討した。QOL の総得点および J-KIDSCREEN-27 の各領域は定型発達の青年と差がなく、性別、操作・コミュニケーション機能、知能は主観的 QOL と関係がなかった。総運動機能と ADL レベルは、学校環境に対する満足度と負の相関があった。重回帰分析の結果、年齢が高いほど心理的幸福度が低く、粗大運動機能が低いほど学校環境に対する満足度が高く、特別支援学校または特別支援学級に通っているほど身体的幸福度が高い。通常のクラスに通う軽症の青年に十分なサポートを提供することが重要であることを指摘した。 共著者：Kato M, Arai A, Komatsu K, Tateyama K, Nishikawa T

（その他） 「総説」 1 神経心理学からみた高齢者の認知機能低下	共著	平成24年4月	老年精神医学雑誌 23(4)： 441-454	高齢者において減衰する認知機能低下に関して神経心理学的機能の各領域についてこれまでの内外の研究知見をレビューし解説を加えた。近年のこの分野の研究は社会学的認知機能に及んでおり，加齢の影響を受ける程度には多様な差があることを指摘した。 本人担当部分：資料収集，執筆 共著者：小川泰弘，西川隆
2 現象学に対する神経心理学的見地からの若干のコメント	単著	平成25年3月	神経心理学 29(1)：44-53	現象学は近代の科学的客観主義が動態的な現実を抽象的に捉えていることを批判し，主体的体験を根拠として現実をとらえようとする思想であった。このような視点は，ともすれば客観主義的な人間観を抱きがちな今日の脳科学や神経心理学に対しても重要な批判的観点であることを指摘した。
3 外来で早期に認知症を疑うコツ	単著	平成27年3月	治療 97(3)： 313-316	一般的な診療において外来患者が認知症であることを治療者が疑うのはどのような所見を見出したときであるか，いくつかの経験上の要点を解説した。
4 脳梁と精神疾患	単著	平成27年3月	神経内科 82(3):297-304	脳梁離断症状は自己の単一性や同一性の障害を招くことがら，離断学説が提起されて以来，統合失調症や心因性の解離症状のモデルとされてきた。脳梁の解剖生理学的知識と症候学および精神疾患と関連する研究史の流れを解説し，今後の展望を述べた。
5 DSM-5からみた複合性注意の領域	共著	平成28年12月	神経内科 85(2):182-187	アメリカ精神医学会の精神疾患診断マニュアルDSM-IVからDSM-5への改訂に伴い，認知症の診断基準に含まれる認知機能が5領域から6領域に増えるとともに，領域間をまたいだ再編成が行われた。新たに設けられた「複合性注意」の概念を改訂の背景とともに開設した。 本人担当分：執筆 共著者：永田優馬，田中寛之，石丸大貴，西川隆
6 統合失調症患者における語用論的言語（比喩・皮肉）の理解能力について （査読付）	共著	平成28年12月	Journal of Rehabilitation and Health Sciences 1415-25	語用論の定義や統合失調症患者の言語使用に関する学術的背景，統合失調症患者の比喩・皮肉理解における障害についての知見を総説し，言語的観点からの統合失調症者に対する支援方法と今後の展望について指摘した。 本人担当分：執筆 共著者：福原啓太，田中寛之，小川泰弘，永田優馬，田中宏明，大西久男，西川隆

7 認知症における食行動異常と嗅覚・味覚の生理学的機能	共著	平成29年9月	神経心理学 33(3):167-176	認知症の食行動異常と嗅覚・味覚の生理学的機能との関連について近年の知見を概説した。アルツハイマー病（AD）とレビー小体型認知症（DLB）ではしばしば嗅覚障害を早期より認めるが，味覚については研究が少ない。著者らはADと意味性認知症（SD）に関して甘味・塩味・酸味・苦味の検知・認知閾値が初期から上昇することを見出し、食嗜好の変化の背景に基礎的な味覚機能の変化が関わることを指摘した。 本人担当分：執筆 共著者：坂井麻里子，西川隆
8 グローバリゼーションの負債－貧困・高齢の都市生活者に見える風景－	単著	平成30年2月	臨床精神医学 47(2):169-175	グローバリゼーションやボーダーレスが進行する社会的影響について，都市の貧困・単身の高齢者の視点から最近の社会変化がどのように見えるかを救護施設での医療経験を踏まえ，素描した。
9 重度認知症者のための認知機能検査 ：Cognitive Test for Severe Dementia, Severe Cognitive Impairment Rating Scale	共著	平成30年11月	老年精神医学雑誌 29(11):1175-1181	重度認知症者の認知機能の変化を検出するためには残存する限られた機能を検出し，それをさらに段階づけることができるだけの感度を備えていることが必要である。現在日本で使用しうる検査のうち，著者らが開発したCTSDと同じく著者らが翻訳導入したSCIRSの2つの認知機能検査について，それぞれの内容と特徴を解説した。 本人担当分：執筆 共著者：田中寛之，永田優馬，石丸大貴，西川隆

別記様式第４号（その２）

教　育　研　究　業　績　書

令和 5 年 3 月 31 日

氏名　　西川　隆

研究分野	研究内容のキーワード
内科系臨床医学，神経科学	精神神経科学，神経科学一般，神経心理学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）作業療法学専攻における精神医学の授業に参加型演習を導入	平成 23 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部作業療法学専攻学生 2 年次授業科目「精神障害論」（後に「精神医学Ⅱ」）において，毎回，前週に検討課題を与えてグループによる事前学習を行わせ，授業ではプレゼンテーション・討論・総括を行い，翌週までに総括のレポートを提出させるという今日のいわゆるアクティブ・ラーニングを実践し，課題検討能力の向上をはかった。
2）作業療法学専攻における高次脳機能障害学の授業に参加型演習を導入	平成 23 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部作業療法学専攻学生 3 年次授業科目「認知心理障害論Ⅱ」（後に「高次脳機能障害学Ⅱ」）において，毎回，前週に検討課題を与えてグループによる事前学習を行わせ，授業ではプレゼンテーション・討論・総括を行うという今日のいわゆるアクティブ・ラーニングを実践し，課題検討能力の向上をはかった。
3）大学院生に対する職域横断的学術活動の支援	平成 23 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科大学院生に対し，各自の研究テーマに応じて，作業療法士・言語聴覚士・理学療法士などの職域を超えた医学分野の学会（老年精神医学会，高次脳機能障害学会，統合失調症学会等）への加入を促し，学会報告・論文発表を指導して，職域横断的な学術活動の能力向上をはかった。 現在，医療専門職として就業している社会人大学院生が多いという事情を考慮し，週 1 回，大阪市中心部にあるサテライト教室で夜間に研究指導を行った。
2　作成した教科書，教材 精神医学マイテキスト	平成 23 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部における「精神医学」（後に「精神医学Ⅰ」）の講義に用い，理学療法学専攻および作業療法学専攻の学生に，精神医学の諸理念と歴史，症候学，精神疾患の各論的知識を習得するために活用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成 18 年 7 月	公立大学法人大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科臨床支援領域修士課程（職名：教授，講義科目：高次脳機能障害学特論　M可，研究指導：臨床支援特別演習　M○合，特別研究　M○合）の資格ありと判定
大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成 20 年 8 月	公立大学法人大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科博士後期課程（職名：教授，講義科目：高次脳機能障害学特別講義　D可，研究指導：臨床支援特別演習Ⅱ　D○合，臨床支援特別演習Ⅲ　D○合，特別研究Ⅱ　D○合，特別研究Ⅲ　D○合）の資格ありと判定
4　実務の経験を有する者についての特記事		

5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 1）医師免許 2）博士（医学） 3）日本精神神経学会精神科専門医 4）老年精神医学会専門医	 昭和 54 年 5 月 平成 13 年 11 月 平成 18 年 4 月 平成 16 年 6 月	 医師免許（第 244771 号） 大阪大学 16585 会員番号 04466 第 001676 号
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事		
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1 意識と睡 （脳とこころのプライマリケア 5）	共著	平成 24 年 6 月	シナジー	脳とこころに関する病態を体系的に解説した全書のうち，意識と睡眠に関する分野における最近の研究知見を基礎から臨床まで詳述した書 B5 版　全 840 頁 監修：日野原重明，宮岡等 巻編者：千葉茂 本人担当部分「特殊な意識障害　解離性障害」の項（264-271） 解離性障害は防衛機制として意識の一部を自己から分離あるいは変容させることにより生じる病態である。てんかんや昏睡との鑑別を中心にその症状と病態を解説した。
2 脳血管障害と神経心理学　第 2 版	共著	平成 25 年 9 月	医学書院	脳血管障害による局在病変と各神経心理学的症候の関連を脳解剖生理学的病態理論を踏まえて総合的に解説した書 B5 版　全 550 頁 編者：平山恵造，田川皓一 本人担当部分「情動障害」の項（67-76） 脳血管障害によって現れる各種の気分・感情の障害につい知見を総説し，そ神経基盤と病態機序について解説した。
3 認知症ハンドブック	共著	平成 25 年 11 月	医学書院	認知症診療に必要な知識を全項目にわたって詳しく解説した書 A5 版　全 907 頁 編者：中島健二，天野直二，下濱俊，冨本秀和，三村將 本人担当部分「認知症の診断―問診」の項（109-115） 認知症の問診手順と技法，留意事項について解説した。

4 症例で学ぶ高次脳機能障害-病巣部位からのアプローチ-	共著	平成26年9月	中外医学社	高次脳機能障害に関する種々の実例をもとに，各症候の病巣部位と病態を解説した書 B5版 全274頁 編者：鈴木匡子 本人担当部分「脳梁前部」の項（236-245） 脳梁前部症候群を呈した症例を提示しその病態と診断上の留意点および脳梁の機能解剖学的知識を解説した。
5 注意と意欲の神経機構	共著	平成26年10月	新興医学出版社	従来の認知科学では捉え難かった人間の注意と意欲の神経基盤とメカニズムについて種々の病態を通じて検討した書 A5版 全280頁 編者：日本高次脳機能障害学会教育・研修委員会 本人担当部分「消去現象の病態と注意機構」の項(97－118) 消去現象とは一側刺激では感知可能な刺激が両側刺激ではその一方を感知し得ないという現象である。その病態に関する研究の知見を総括し解説した。
6 精神・心理機能評価ハンドブック	共著	平成27年6月	中山書店	精神疾患や神経疾患でみられる精神・心理的障害および症状の評価尺度と検査法を解説した書 B5版 全528頁 編者：山内俊雄，鹿島晴雄 本人担当部分「重度認知症における認知機能検査」 重度認知症の認知機能を評価しうる検査として著者らが新たに開発した評価尺度を解説した。
7 情動とトラウマ	共著	平成29年4月	朝倉書店	心的トラウマが与える精神発達への影響と精神障害発生の病態機制および治療戦略を生物学的・心理学的・社会学的側面から多面的に解説した書 A5版 全230頁 編者：三村將　奥山眞紀子 本人担当部分「ストレス関連障害に対する他の精神療法」の項（216-223） ストレス関連性精神障害の精神療法のうち認知行動療法を除く他の精神療法について効果のエビデンスにもとづく推奨度を国際外傷性ストレス研究学会のガイドラインに沿って解説し，理論的背景を解説した。
8 女性のメンタルヘルス	共著	平成29年11月	南山堂	平成 26 年の女性活躍推進法の制定を受け，働く女性のメンタルヘルスの向上と不調の予防および治療について総合的に解説した書 B5版 全274頁 編者：丸山総一郎 本人担当部分「女性のメンタル不調の診察」の項（71-78） 女性がメンタルヘルスの不調を呈した際の診察手順とその際に考慮すべき女性特有の生活史背景と心理的要因について解説した。

9　高次脳機能障害ビジュアル大事典	共著	令和２年９月	メディカ出版	看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士を対象に、豊富なイラストと症例提示を添えて各種の高次脳機能障害の症候の概念と効果的な対応法を開設した事典 B5 版 全 286 頁 監修：大沢愛子 本人担当部分「聴覚失認」の項（168-170）聴覚失認の概念と病態の特徴、効果的なケアのアプローチについて解説した。
（学術論文） 1 重度認知症者のための認知機能検査 －‘Severe Cognitive Impairment Rating Scale’日本語版の臨床的有用性の検討 － （査読付）	共著	平成 25 年 10 月	老年精神医学雑誌 24(10):1037-1046	重度認知症患者にとって既存の認知機能検査は難易度が高く，残存する認知機能を詳細に把握することが困難である．海外では，重度認知症患者の認知機能検査として，Severe Cognitive Impairment Rating Scale（SCIRS)が開発されている．本研究では，SCIRS の日本語版を作成し，臨床的有用性を検討した．その結果，既存の検査では床効果を示した患者に対しても，SCIRS を用いてより詳細に認知機能を判別できた．以上より，日本語版 SCIRS は重度認知症者の残存する認知機能を詳細に幅広く測定可能な検査であると考えられた． 本人担当部分：研究計画，調査，データ分析，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：田中寛之，植松正保，永田優馬，福原啓太，内藤泰男，大西久男，西川隆
2 認知症患者における認知機能，ADL，BPSD の関連性　重度認知症患者に着目して （査読付）	共著	平成 26 年３月	老年精神医学雑誌 25(3):316-323	94 人の認知症入院患者を対象に，認知機能，日常生活活動（ADL），周辺症状（BPSD）の関連性を検討した。その結果，ADL が高ければ認知機能障害が軽度で，移動能力が高いほど BPSD が増悪することが明らかになった。また，重度認知症患者では，認知機能検査，ADL 検査においていくつかの検査項目で床効果を示した。そのため，重度認知症患者向けの各検査が必要であると考えられた。 本人担当部分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：田中寛之，植松正保，小城遼太，永田優馬，福原啓太，内藤泰男，大西久男，西川隆

3 利き手・非利き手での到達把持動作での予測的な戦略の検討	共著	平成26年3月	四條畷学園大学リハビリテーション学部紀要 平成26年度	高齢者の巧緻動作能力の低下における特徴を検討するために，到達運動時に見られる Pre-shaping において最大切線速度出現時点と母指・示指間最大距離出現時点を指標として若年者と比較を行った。その結果，高齢者では Pre-shaping が若年者に比べてより早期に出現することが示された。 本人担当部分：研究計画，結果の考察に関わった。 共著者：田丸佳希，内藤泰男，西川隆，松下太，杉原勝美，西田斉二，川上永子，北山淳，銀山章代，上田任克
4 ライフヒストリーカルテの作成　生活史を多職種で共有する意義（査読付）	共著	平成26年7月	老年精神医学雑誌 25(7)801-808	医療・介護療養型病床および介護老人保健施設に入院・入所している患者のケアに資することを目的に対象者の生活史を多職種が短時間で把握できる共有ツールの作成を試みた。ケアスタッフへの意識調査により，記載すべき情報として，出身地，家族関係，　家族や友だち，遊び，仕事，結婚，人柄，印象に残っている姿，生活習慣，誇りなどが挙げられた。 本人担当部分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：田中寛之，山本祐子，小城遼太，永田優馬，日垣一男，西川隆，植松正保
5 非失語性失書を合併したタイピング障害の一例　― 失書との関連 ― （査読付）	共著	平成27年6月	高次脳機能研究 35(2)233-241	非失語性の失書を伴うタイピング障害例の病態を検討した。失書は運動覚性失書であり，タイピングの障害は打鍵位置の空間的誤りによるものであった。左中心前回，角回に病巣を有し，音韻選択や配列に関わる左中前頭回後部には及んでいなかった。タイピングは書字と神経基盤の一部を共有していることが示唆された。 本人担当部分：症例の診断，神経学的所見，画像所見，検査結果の分析と考察，論文執筆に関わった。 共著者：坂井麻里子，柏木敏宏，江口香織，西川 隆
6 Development of the Cognitive Test for Severe Dementia （重度認知症のための認知機能テストの開発） （査読付）	共著	平成27年6月	Dement Geriatr Cogn Disord 40(1-2): 94-106	中等度から重度の認知症患者に対して既存の認知機能検査は床効果を示し，特に重度認知症者に対しては残存する認知機能を測定することができない。著者らは認知機能7領域13項目からなる重度認知症患者向けの認知機能テスト(the Cognitive Test for Severe Dementia; CTSD) を開発し，信頼性と妥当性を検討した。CTSD は床効果を示さず，信頼性・妥当性も確認された。CTSD は他の認知機能検査と比較して重度認知症患者の残存する認知機能を鋭敏に測定することができる。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Uematsu M, Takebayashi T, Hanada K, Inokawa M, Fukuhara K, Ogawa Y, Haga D, Kakegawa Y, Nishikawa T

7 右前頭葉内側面損傷により漢字の純粋失書を呈した一例 (査読付)	共著	平成27年6月	神経心理学 31(3)204-212	右前頭葉内側面損傷により漢字の純粋失書を呈した 1 症例について失書の発現機序を検討した．漢字の誤り方の特徴として，無反応に次いで形態性の誤りが多かった．漢字の書字の成否は画数ではなく，構成要素数の多さと関係し，錯書の場合は構成要素が他の漢字の構成要素に置換されることが多く，そのほとんどが実在する構成要素を組み合わせていた．他の言語機能に問題がなかったことから，本例の漢字の失書は，音韻の配列や意味から文字形態を想起する過程は終盤近くまで保たれているが，最終段階における構成要素の選択と配置の誤りによって生じているものと考えられた． 本人担当部分：症例の診断，神経学的所見，画像所見，検査結果の分析と考察，論文執筆に関わった。 共著者：坂井麻里子，鈴木則夫，柏木敏宏，西川隆
8 Decline of gustatory sensitivity with the progression of Alzheimer’s disease (アルツハイマー病の進行とともに低下する味覚感度) (査読付)	共著	平成28年3月	International Psychogeriatrics 28(3)511-517	アルツハイマー病患者 32 名の甘味・塩味・酸味・苦味に関する味覚閾値をテーストディスクを用いて測定するとともに，味覚弁別，味覚同定能力を評価した。健常対照群と比較した。患者の味覚閾値は初期から低下し認知症の重症度とともに進行した。酸味・苦味は弁別はできるが同定は困難であったが，甘味だけは同定能力が保たれていたことから，アルツハイマー病患者にみられる甘味への強い嗜好性の基盤に基礎的な味覚障害が関与している可能性が示唆された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Sakai M, Ikeda M, Kazui H, Shigenobu K, Nishikawa T
9 重度認知症に対する従来の QOL 尺度の限界 (査読付)	共著	平成28年4月	老年精神医学雑誌 27(4): 429-437	を対象に開発された QOL 尺度が用いられてきたが，近年，その QOL 概念の枠組みは異なると示唆されている。36 人の重度認知症者を対象に，自己評点式尺度と代理評点式尺度をそれぞれ2種類従来のQOL尺度を用いて，重度認知症者に対する適応性を検討した。適応性の検定の結果，4 尺度の内の 1 尺度内における 2 項目が適合基準を満たしただけであった。重度認知症者に対する従来の QOL 尺度の適応性には限界があると考えられた． 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：永田優馬，田中寛之，石丸大貴，植松正保，福原啓太，小川泰弘，内藤泰男，西川隆

10 右前頭葉の発話・書字への関与― 一過性の発話開始困難と持続的な漢字の純粋失書を呈した症例からの考察	共著	平成28年6月	高次脳機能研究 36(2)236-243	前補足運動野を含む右前頭葉内側面損傷により一過性の発話開始困難と持続性の漢字の失書を呈た症例を報告した。右前頭葉内側面損傷による失書は過去に報告されていない。本例の書字の成否は，漢字の画数や使用頻度に依存せず，構成要素（偏や旁など漢字を構成する要素的単位）の数が増すほど書字が困難であり，その誤りの特徴は構成要素の置換であった。右前頭葉内側面は漢字書字を実現する過程の終盤の段階で，構成要素の選択・配列に関与している可能性が示唆される。 本人担当部分：結果の考察，論文執筆を担当した 共著者：坂井麻里子，鈴木則夫，西川隆
11 線画に比べ実物や写真でより顕著な障害を認めた視覚失認の一例 （査読付）	共著	平成28年6月	高次脳機能研究 36(2)304-311	特異な視覚失認と大脳性色覚障害，失語症，前向性健忘を呈する症例を報告した。左側の舌状回・紡錘状回を含む後頭葉から側頭葉内側下部に病変を有し，一般的に視覚対象の認知は実物や写真より線画のほうが難しいと考えられているのに反して，症例では線画に比べ実物や写真の認知が不良であった。症例の視覚認知機能をさらに検討した結果，輪郭情報にもとづく対象の認知は比較的保たれていたが，陰影や奥行きの情報を統合し，立体感のある対象として認知することが困難であると考えられた。 本人担当部分：結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：竹田奈央子，渋谷静英，塚本能三，西川隆，柏木敏宏
12 脳血管障害によりフレゴリの錯覚と身体パラフレニアを合併した2症例 （査読付）	共著	平成28年6月	高次脳機能研究 36(2)312-319	脳血管障害による右半球病変に伴って身体パラフレニアとフレゴリの錯覚を合併した 2 症例を報告した。Feinberg らは，身体パラフレニアを，カプグラ症候群と同型の病態構造を有していると指摘しているが，身体パラフレニアとカプグラ症候群の合併の報告はみられない。一方，身体パラフレニアにフレゴリの錯覚の合併をうかがわせる記述は少数見出された。身体パラフレニアと人物誤認症候は右半球とりわけ前頭葉病変に共通した責任病巣があるものと考えられており，これまで注目されてこなかったが，フレゴリの錯覚と身体パラフレニアはより高率に合併している可能性がある。 本人担当分：画像所見，結果の考察，文献的検討，論文執筆を担当した。 共著者：掛川泰朗，磯野理，西川隆

13 家族からのビデオレターによる simulated Presence Therapy が言語的混乱行動を軽減させた認知症高齢者の一症例 (査読付)	共著	平成29年4月	作業療法 36(2): 223-229	家族からの語りをオーディオ・ビデオテープに録音・録画・再生する擬似的再現療法とはことで感情を刺激し,快適さをもたらす療法を認知症高齢者の一症例に実施した結果，介入前と比較して介入後に言語的混乱行動の回数に有意な軽減を認めたが，音楽刺激では効果がみられなかった。家族からのビデオレターによる擬似的再現は症例の欲求不満を軽減する作用があると考えられた。 本人担当分：結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：田中寛之，永田優馬，石丸大貴，小城遼太，西川隆
14 Impaired Interpretation of Others' Behavior is Associated with Difficulties in Recognizing Pragmatic Language in Patients with Schizophrenia (統合失調症において他者の行動の理解障害は語用論的言語理解障害と関連している) (査読付)	共著	平成 29 年 10 月	Journal of Psycholinguistic Research 46(5): 1309-1318	統合失調症患者 34 人と健常者 34 人に対して，心の理論課題，比喩皮肉文課題，社会常識テストを実施した，全ての課題において，患者群は健常群よりも有意に障害されていた。また患者群内において比喩理解能力と正常行動理解能力，皮肉理解能力と異常行動理解能力の間に有意な相関がみられた。統合失調症患者の社会的認知機能障害はこれら 2 つの語用論的要因を含んでいることが示唆された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Fukuhara K, Ogawa Y, Tanaka H, Nagata Y, Nishida S, Haga D, Nishikawa T
15 Earlier and greater hand pre-shaping in the elderly: a study based on kinetic analysis of reaching movements to grasp objects (高齢者にみられる早期のより大きな手 pre-shaping:物体把握到達運の運動学的分析に基づく研究) (査読付)	共著	平成 29 年 11 月	Psychogeriatrics 17(6): 382-388	物体把握の準備動作として到達運動期間にみられる手の形態変化を Pre-shaping という。高齢者の巧緻動作の評価とともに，高齢者群と若年対象者群の Pre-shaping を運動解析装置を用いて比較したところ,Pre-shaping の最大切線速度出現時点と母指・示指間最大距離出現時点高齢者の方が若年者に比べてより早期に出現することが示された。この結果は高齢者においては巧緻動作能力の低下を代償する方策として Pre-shaping を変化させていることを示唆している。 本人担当部分：研究計画，結果の考察，論文執筆に関わった。 共著者：Tamaru Y, Naito Y, Nishikawa T

16 Gustatory dysfunction as an early symptom of semantic dementia (意味性認知症の初期症状としての味覚障害) (査読付)	共著	平成 29 年 11 月	Dement Geriatr Cogn Dis Extra 7(3): 395-405	意味性認知症(SD)患者 18 名とアルツハイマー病(AD)患者 18 名，健常対照者に対して，味覚閾値および味覚弁別・味覚同定の能力を測定し比較した。SD と AD ではともに早期より健常者に比べて味覚閾値が低下しており，その傾向は SD でより目立った。この研究は SD の味覚閾値を測定した初めての研究である。SD では AD と比較してより甘味への嗜好性の強いことが知られているが，その背景には基本的な味覚機能低下が関与していると考えられる。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Sakai M, Ikeda M, Kazui H, Shigenobu K,Komori K, Ikeda M, Nishikawa T
17 Development of the Japanese version of the Quality of Life in late-stage Dementia Scale (Quality of Life in late-stage Dementia Scale 日本版の作成) (査読付)	共著	平成 30 年 3 月	Psychogeriatrics 18(2): 106-112	重度認知症者の QOL 尺度は海外でも少数しか開発されておらず，日本ではまだ臨床に導入されていない。本研究は海外で開発され広く使用されている Quality of Life in late-stage Dementia Scale(QUALID)を原著者の許可を得て翻訳して日本版(QUALID-J)を作成し，その信頼性と妥当性を検討したものである。70 人の重度認知症者に評価を施行し，十分な信頼性・妥当性を有する検査であることが確認された。今後重度認知症患者の治療や介護の効果判定に役立つことが期待される。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Nagata Y, Tanaka H, Ishimaru D, Uematsu M, Naito Y, Nishikawa T
18 Clinical Utility of the Cognitive Test for Severe Dementia: Factor Analysis, Minimal Detectable Change, and Longitudinal Changes (Cognitive Test for Severe Dementia の臨床的有用性:因子分析，最小検出可能変化値，長期変化) (査読付)	共著	平成 30 年 6 月	Dement Geriatr Cogn Dis Extra 8(2): 214-225	著者らが開発した重度認知症患者向けの認知機能テスト CTSD (the Cognitive Test for Severe Dementia) の臨床的有用性を COSMIN checklist によって検討した。232 人の認知症患者における認知機能の変化を追跡し，そのデータにもとづいて 1)因子分析による構成妥当性，2)標準誤差と最小検出可能変化値による信頼性と解釈可能性，3)長期変化による反応性，を検討した。結果は CTSD が信頼しうる評価指標であることを示した。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Nishikawa T

19 Physical Activity in Severe Dementia is Associated with Agitation Rather than Cognitive Function （重度認知症の身体活動は認知機能でなく焦燥と関連している） （査読付）	共著	令和１年９月	Am J Alzheimers Dis Other Demen doi: 10.1177/1533317519871397.	重度認知症者における身体活動と認知機能・日常生活活動(ADL)・心理行動症状(BPSD)の関連を検討した。認知症患者 63 名の 1 日身体活動量をアクティウォッチで定量的に計測し，認知機能・日常生活活動・心理行動症状の各評価尺度の結果との関連を分析した。重度認知症者の身体活動は認知機能ではなく BPSD の焦燥と相関していた。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Nishikawa T
20 Insight Into Illness and Defense Styles in Schizophrenia （統合失調症における病識と防衛様式） （査読付）	共著	令和１年９月	J Nerv Ment Dis 207(10):815-819	統合失調症者における病識と防衛機制，認知機能の関連を検討した.38 名の統合失調症患者に SAI-J（病識尺度），DSQ(防衛様式)，BACS-J（神経認知機能），BPRS（精神症状)を施行した結果，認知機能と精神症状を統制した重回帰分析によって，病識は未熟な防衛機制に関連していることが示された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Ogawa Y, Fukuhara K, Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Nishikawa T
21 Clinical factors associated with Activities of Daily Living and their decline in patients with severe and profound dementia （重度および最重度認知症患者の日常生活活動とその低下に関連する臨床要因） （査読付）	共著	令和２年３月	Psychogeriatrics 20(3):327-336	認知症患者の ADL に影響を及ぼす因子を検討した。131 人の患者に Personal Self-Maintenance Scale（PSMS）（ADL 尺度）と CTSD(認知機能尺度)，NPI-NH と CSDD(PPSD 尺度)，MNA-FS（栄養状態)，CCI（合併疾患）等による評価の 6 か月間の変化を測定し，重回帰分析を行った結果，最重度の段階の認知症においても ADL 機能の低下を最もよく予測する因子は認知機能であることが示された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Nishikawa T
22 認知症における engagement 評価尺度；日本語版 Menorah Park Engagement Scale の臨床的有用性の検討 （査読付）	共著	令和２年３月	老年精神医学雑誌 31(3):304-310	engagement とは活動に取り組む主体の態度のことであり，認知症者のリハビリテーションにおいては重要な要因と考えられるが，本邦ではいまだこれに関する評価尺度は導入されていない。海外で使用されている Menorah Park Engagement Scale を原著者の許可を得て日本語に翻訳し，その信頼性と妥当性を検討した。日本語版 Menorah Park Engagement Scale は認知症者の engagement を評価する上で有用性な尺である。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：石丸大貴，田中寛之，永田優馬，西川隆

23 Effect of Alzheimer's disease severity on upper limb function (上肢機能に対するアルツハイマー病重症度の影響) (査読付)	共著	令和２年８月	Psychogeriatrics. 20(5):802-804	著者らは物体把握の準備動作であるPre-shapingの最大切線速度出現時点と母指・示指間最大距離出現時点が加齢とともにより早く出現するようになることを既に報告した。今回の研究では，重症度の異なるアルツハイマー型認知症者（AD）の左右上肢による物体到達・把握動作を運動解析し，ADの初期の段階で利き手の到達運動が解体されるが非利き手には見られず，また把握動作には変化がみられないことを明らかにした。この知見はAD患者の動作障害を検討するうえで有用である。 本人担当部分：結果の考察，論文執筆に関わった。 共著者：Tamaru Y, Tanaka H, Ueda M, Sumino Y, Imaoka M, Matsugi A, Nishikawa T, Ishii R, Naito Y
24 Incidence and lesions causative of delusional misidentification syndrome after stroke. (脳卒中後の妄想性誤認症候群の発生頻度と原因病巣) (査読付)	共著	令和２年９月	Brain and Behavior 10(11): e01829.	脳卒中で入院した874人の患者における妄想性誤認症候群(DMS)の発生頻度と合併症，共通病巣を調査した。10例のDMSが見出されたが全てFregoli症候群であり，Capgras症候群を含め他のDMSはみられなかった。病変は全例が右半球病変を有し，全例左半側空間無視(USN)を呈していた。DMSを呈しないUSNの24例を対照群とするvoxel-based lesion-symptom mappingを用いた病巣解析の結果，鈎状束を含む病変がFregoli症候群に特異的に関連していることが示された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Kakegawa Y, Isono O, Hanada K, Nishikawa T
25 青年期脳性麻痺児・者のための自己回答式QOL尺度-Cerebral Palsy Quality of Life Questionnaire for Adolescents（CPQOL-Teen）日本語版の作成と有用性の検討-.	共著	令和３年１月	脳と発達 53(1):10-14	青年期脳性麻痺児・者の主観的QOL評価尺度CPQOL-Teenを著者の許可を得て和訳した日本語版を脳性麻痺児・者57名（CP群）と定型発達児・者58名（TD群）に実施し，評価尺度としての有用性を検討した.日本語版CPQOL-Teen自己回答版は,十分な検査-再検査信頼性と内的整合性,J-KIDSCREEN-27を外的基準とした妥当性を示した.CPQOL-Teenの5領域のうち『機能についての満足度』は，CPの特性を反映する可能性が示された. 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：加藤雅子，荒井洋，小松光友，ラトン桃子，立山清美，西川隆

26 Impact of disturbed rest-activity rhythms on activities of daily living in moderate and severe dementia patients. （中等度から重度認知症者の日常生活活動に与える休息・活動リズムの影響） （査読付）	共著	令和３年４月	Alzheimer Disease and Associated Disorders 35(2):135-140	中等度から重度認知症者 64 名の睡眠・覚醒リズムをアクティグラフィで測定・解析するとともに，認知機能，ADL，心理行動異常を評価して，相互の関連を検討した。 昼間の睡眠・覚醒リズムの不安定性と休息ピークのタイミングの不適切さが低い ADL に有意な影響を与える因子であることが示された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Ogawa Y, Fukuhara K, Takabatake S, Nishikawa T
27 左頭頂葉病変により把握反射，本能性把握反応を伴わず「つかんだものが放せない」症状を呈した１例（査読付）	共著	令和３年６月	高次脳機能研究 41(2):219-226	左中心後回後上部の転移性脳腫瘍に伴い，右手でつかんだものを放せなくなる症状を呈した症例を報告した。症状は，持つ対象やつかむときの手の形，使用する指のいかんに関わらず生じた。また，放すという行為にしか生じなかった。右手には運動拙劣と道具を正しく持てない症状があったが，麻痺はなく， 複雑な指の動きも可能だった。把握反射や本能性把握反応もみられなかった。つかんだものを放せない症状が把握反射や本能性把握反応から独立して，また頭頂葉損傷により起こりうることが示唆された。 本人担当部分：画像診断，結果の考察，論文執筆に関わった。 共著者：坂井麻里子，平山和美，後藤泰伸，西川隆
28 Pitch accent disorder observed in a Japanese patient due to traumatic head injury（頭部外傷の日本人患者にみられた高低アクセントの障害）	共著	令和３年９月	Aphasiology doi.10.1080/02687038.2021.1978382	頭部外傷により軽度ウェルニッケ失語に高低アクセント障害を選択的に発症した日本人の症例について，高低アクセント障害のメカニズムを検討した。アクセントの誤りのパターンを分析した結果、誤りであっても母語の大阪弁のパターンから逸脱していなかった。この結果は、高低アクセントの生成過程が音素の生成過程とは独立している可能性を示唆し、アクセント障害は発声の過程でランダムに生じたのではなく、母語のアクセントのレパートリーから当該の単語にパターンを割り当てる際に問題が生じたと思われる。つまり、この患者のアクセント障害は、音声生成の運動制御にではなく、より高次の言語処理、すなわち語彙的なアクセントの符号化の問題であったと考えられる。 本人担当部分：画像診断，統計解析，結果の考察，論文執筆に関わった。 共著者：Sakai M, Ihori N, Nishikawa T

29 Insight into illness and psychological defense attitudes in people with chronic schizophrenia using Markova's Insight Scale. （Markova 病識尺度によ る統合失調症患者の病識 と防衛的態度）（査読付）	共著	令和3年12月	J Nerv Ment Dis 209(12):879-883	病識は多次元的現象であり多くの評価法がある。Markova の Insight Scale (IS) に着目し、統合失調症患者 38 名を対象に、洞察力、心理的防衛スタイル、神経認知との関係を検討した。その結果、洞察力は未熟な防衛スタイルと有意に相関し、臨床変数を統制しても IS は未熟な防衛スタイルによって有意に予測された。これらは、IS で評価された洞察力の高さが未熟な防衛機制を反映している可能性が高いことを示唆している。また洞察力スコアが高いほど発症年齢が早かった。洞察力スコアは、統合失調症の未熟な心理的防御態度を反映し、そのような患者が臨床家の意見に従うことを望むようになると考えられる。 本人担当部分：研究全体を統括，指導するとともに，研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Ogawa Y, Fukuhara K, Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Urakawa M, Nishikawa T
30 Factors influencing the quality of life in patients with severe dementia（重度認知症患者の QOL に影響する要因）（査読付）	共著	令和4年1月	Psychogeriatrics 22(1): 49-54	重度認知症患者の QOL に影響する要因を検討するために，患者 105 名を対象に，QoL(QUALID-J),認知機能(CTSD), BPSD(NPI-NH), ADL(PSMS), 疼痛(PAINAD)および 居住環境(SCUEQS) QOL(QUALID-J)を各評価尺度によって評価し重回帰分析を行った。QUALID-J の総得点は NPI-NH と PAINAD の得点に有意に影響されることが明らかとなった。 QUALID-J の因子 1（快適さの表現）と因子 2（不快さの表現）は、それぞれ PSMS と PAINAD、NPI-NH と PAINAD の得点に有意に影響されることが示された。この結果は、認知症の行動・心理症状や痛みが、重度認知症患者の QoL に影響を与える重要な要因であることを示している。 本人担当部分：研究全体を統括，指導するとともに，研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Nagata Y, Nishikawa T, Tanaka H, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Shigenobu K, Ikeda M
31 Clinical utility of an assessment scale for engagement in activities for patients with moderate-to-severe dementia: additional analysis.	共著	令和4年4月	Psychogeriatrics 22(4): 433-444	我々が開発した中等度から重度の認知症患者の engagement 評価ツールである「活動への関与のための評価尺度（ASEA)」の信頼性のに関して、精神科急性期病院における中等度から重度の認知症患者 195 名を対象に、「健康測定機器選定のための合意に基づく基準（COSMIN）チェックリスト」を用いた追加解析を行った。重度の認知症に特化した数少ない評価方法の中で、ASEA は治療活動への関与状態を数値化し評価するのに有用な尺度であることが示された。共著者：Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Ogawa Y, Fukuhara K, Takabatake S, Nishikawa T.

32 語の意味記憶が解体された左側頭葉前部脳膿瘍の 1 例.	共著	令和 4 年 6 月	神経心理学 38(2): 144-154	左側頭葉前部の脳膿瘍の患者にみられた軽度の言語性意味記憶障害に対し，障害の質的検討を行った．本例の理解障害の特徴は，語の派生的意味の理解障害と語の範疇的使用の障害であった．また，語の理解が困難な場合，語の一部の意味や，その語を含む慣用表現の音韻的脈絡を手掛かりとして意味を探索する代償的方略もみられた．Patterson ら（2007）の Distributed-plus-hub 仮説を援用すれば，これらの所見は，損傷が及ばない脳領域の trans-modal pathway により各様式の表象間の局部的連結に基づく具体的な意味記憶は喚起されるが，semantic hub である側頭葉前部の損傷によって，より広範な表象の統合を要する抽象的な語の意味記憶が解体されたものと解釈できる． 共著者：坂井麻里子，鈴木則夫，西川隆
33 The Lower the Physical Function, the Higher the Quality of Life in Japanese Adolescents with Cerebral Palsy.	共著	令和 5 年 3 月	Physical & Occupational Therapy in Pediatrics, DOI: 10.1080/01942638.2023.2186197, March 17, 2023	脳性麻痺の青年 51 名を対象に，日本語版 KIDSCREEN-27 を用いた面接により主観的 QOL を評価し，定型発達青年 60 名と比較した。また、主観的 QOL と年齢、性別、機能レベル（粗大運動、操作、コミュニケーション）、知能、日常生活活動（ADL）レベル、教育支援の種類との相関を検討した。QOL の総得点および J-KIDSCREEN-27 の各領域は定型発達の青年と差がなく、性別、操作・コミュニケーション機能、知能は主観的 QOL と関係がなかった。総運動機能と ADL レベルは、学校環境に対する満足度と負の相関があった。重回帰分析の結果、年齢が高いほど心理的幸福度が低く、粗大運動機能が低いほど学校環境に対する満足度が高く、特別支援学校または特別支援学級に通っているほど身体的幸福度が高い。通常のクラスに通う軽症の青年に十分なサポートを提供することが重要であることを指摘した。 共著者：Kato M, Arai A, Komatsu K, Tateyama K, Nishikawa T

（その他） 「総説」 1 神経心理学からみた高齢者の認知機能低下	共著	平成24年4月	老年精神医学雑誌 23(4)： 441-454	高齢者において減衰する認知機能低下に関して神経心理学的機能の各領域についてこれまでの内外の研究知見をレビューし解説を加えた。近年のこの分野の研究は社会学的認知機能に及んでおり，加齢の影響を受ける程度には多様な差があることを指摘した。 本人担当部分：資料収集，執筆 共著者：小川泰弘，西川隆
2 現象学に対する神経心理学的見地からの若干のコメント	単著	平成25年3月	神経心理学 29(1)：44-53	現象学は近代の科学的客観主義が動態的な現実を抽象的に捉えていることを批判し，主体的体験を根拠として現実をとらえようとする思想であった。このような視点は，ともすれば客観主義的な人間観を抱きがちな今日の脳科学や神経心理学に対しても重要な批判的観点であることを指摘した。
3 外来で早期に認知症を疑うコツ	単著	平成27年3月	治療 97(3)： 313-316	一般的な診療において外来患者が認知症であることを治療者が疑うのはどのような所見を見出したときであるか，いくつかの経験上の要点を解説した。
4 脳梁と精神疾患	単著	平成27年3月	神経内科 82(3):297-304	脳梁離断症状は自己の単一性や同一性の障害を招くことがら，離断学説が提起されて以来，統合失調症や心因性の解離症状のモデルとされてきた。脳梁の解剖生理学的知識と症候学および精神疾患と関連する研究史の流れを解説し，今後の展望を述べた。
5 DSM-5からみた複合性注意の領域	共著	平成28年12月	神経内科 85(2):182-187	アメリカ精神医学会の精神疾患診断マニュアルDSM-IVからDSM-5への改訂に伴い，認知症の診断基準に含まれる認知機能が5領域から6領域に増えるとともに，領域間をまたいだ再編成が行われた。新たに設けられた「複合性注意」の概念を改訂の背景とともに開設した。 本人担当分：執筆 共著者：永田優馬，田中寛之，石丸大貴，西川隆
6 統合失調症患者における語用論的言語（比喩・皮肉）の理解能力について （査読付）	共著	平成28年12月	Journal of Rehabilitation and Health Sciences 1415-25	語用論の定義や統合失調症患者の言語使用に関する学術的背景，統合失調症患者の比喩・皮肉理解における障害についての知見を総説し，言語的観点からの統合失調症者に対する支援方法と今後の展望について指摘した。 本人担当分：執筆 共著者：福原啓太，田中寛之，小川泰弘，永田優馬，田中宏明，大西久男，西川隆

7 認知症における食行動異常と嗅覚・味覚の生理学的機能	共著	平成29年9月	神経心理学 33(3):167-176	認知症の食行動異常と嗅覚・味覚の生理学的機能との関連について近年の知見を概説した。アルツハイマー病（AD）とレビー小体型認知症（DLB）ではしばしば嗅覚障害を早期より認めるが，味覚については研究が少ない。著者らはADと意味性認知症（SD）に関して甘味・塩味・酸味・苦味の検知・認知閾値が初期から上昇することを見出し、食嗜好の変化の背景に基礎的な味覚機能の変化が関わることを指摘した。 本人担当分：執筆 共著者：坂井麻里子，西川隆
8 グローバリゼーションの負債－貧困・高齢の都市生活者に見える風景－	単著	平成30年2月	臨床精神医学 47(2):169-175	グローバリゼーションやボーダーレスが進行する社会的影響について，都市の貧困・単身の高齢者の視点から最近の社会変化がどのように見えるかを救護施設での医療経験を踏まえ，素描した。
9 重度認知症者のための認知機能検査 ：Cognitive Test for Severe Dementia, Severe Cognitive Impairment Rating Scale	共著	平成30年11月	老年精神医学雑誌 29(11):1175-1181	重度認知症者の認知機能の変化を検出するためには残存する限られた機能を検出し，それをさらに段階づけることができるだけの感度を備えていることが必要である。現在日本で使用しうる検査のうち，著者らが開発したCTSDと同じく著者らが翻訳導入したSCIRSの2つの認知機能検査について，それぞれの内容と特徴を解説した。 本人担当分：執筆 共著者：田中寛之，永田優馬，石丸大貴，西川隆

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年　3月　31日

氏名　橋本　雅至

	研究内容のキーワード
健康・スポーツ科学 人間医工学	スポーツ科学、運動療法、動作分析、バイオメカニクス、病態運動学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
7）実技を取り入れた実践的な講義・実習	平成25年4月 ～ 令和2年3月	大阪河﨑リハビリテーション大学リハビリテーション学部　「運動器系理学療法学」「運動器系理学療法学実習」「スポーツ・リハビリテーション」において実践的な実技を中心とした講義とプレゼンテーション資料の作成、実技の復習や練習が可能な講義資料を作成した。
8）実技を取り入れた実践的な講義・実習	令和1年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部「スポーツ障害理学療法学」「筋骨格障害理学療法学Ⅰ、Ⅱ」「理学療法計画論」において理論内容の講義に加えて、実技を積極的に取り入れ、理論に裏付けされた実技の実践を多く取り入れた。臨床実習前の治療場面を想定した知識や情報整理をおこなった。
２　作成した教科書，教材		
6）ビデオ教材の作成	平成25年4月	大阪河﨑リハビリテーション大学 リハビリテーション学部理学療法学専攻 「臨床運動学演習」の動画を自主作成 症例の基本動作ビデオ、高齢者の歩行動作(約250名)の動画集（約60分）
11）実践PTノート運動器傷害の理学療法（第2版）（三輪書店）	平成25年4月	大阪河﨑リハビリテーション大学 リハビリテーション学部理学療法学専攻 「運動器系理学療法学実習」のテキスト作成 A5版205ページ、（共同）担当部分:全員による作成のため全ページを担当し、特定の担当箇所を定めていない。
12）運動器障害理学療法学テキスト（改訂第3版）（南江堂）	令和3年8月	奈良学園大学保健医療学部 リハビリテーション学科理学療法学専攻 「筋骨格障害理学療法学Ⅰ、Ⅱ」のテキスト作成 B5版369ページ、（共同）担当部分:207～216ページ、21筋・軟部組織性障害①概論。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）大学設置・学校法人審査会の教員組織審査	平成30年10月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻　教授

事項	年月日	概　　要
		「基礎ゼミⅡ」「スポーツ医学」「運動学Ⅱ」「筋骨格障害理学療法学Ⅰ」「筋骨格障害理学療法学Ⅱ」「スポーツ障害理学療法学」「早期体験実習」「地域理学療法実習」「理学療法評価実習」「総合臨床実習Ⅰ」「総合臨床実習Ⅱ」「理学療法卒業研究」可と判定。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
39）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成25年5月	（公社）大阪府理学療法士会　豊能ブロック主催第1回新人教育プログラム講習会
40）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成25年9月	（公社）奈良県理学療法士会主催　第21回公開講座「アンチエイジングの秘訣　それは『脚から』」
41）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成25年12月	和歌山県高等学校体育クラブキャプテン研修会「身体の土台、足から考えてみる」
42）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年5月	大阪河﨑リハビリテーション大学同窓会（河泉会）スキルアップスキンシップ講座「下肢関節疾患（膝関節）の評価と治療」
43）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年6月	（公社）大阪府理学療法士会　大阪南ブロック　研修会「下肢運動連鎖を考慮した観察的動作分析とアプローチ（導入編）」
44）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年9月	（公社）大阪府理学療法士会大阪南ブロック技術講習会「下肢運動連鎖を考慮した観察的動作分析とアプローチ（実技編）」
45）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年10月	大阪臨床整形外科医会療法士会研修会「膝関節障害に対する理学療法～動作解析と評価から治療～」
46）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年12月	あしべん主催特別講習会「立位・歩行のための体幹機能と動作のとらえ方」
47）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成27年5月	第14回　日本良導絡自律神経学会　近畿ブロック　講習会「病態運動学から見たスポーツ傷害のとらえ方とアプローチ」
48）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成27年12月	あしべん主催特別講習会「身体運動連鎖の基盤となる体幹機能をどう捉えるか？」
49）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成28年10月	（公社）大阪府理学療法士会　堺ブロック　研修会「歩行を診る」

事項	年月日	概　　要
50）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成28年12月	あしべん主催特別講習会「力学的観点から歩行を診る～動作分析の際、考慮すべきポイント～」
51）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成29年12月	あしべん主催特別講習会「運動連鎖の観点から歩行を診るポイント」
52）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成31年1月	第58回近畿理学療法学術大会　教育講演「下肢の荷重関節を力学的に考える～まずは足元から～」
53）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和1年8月	第45回日本整形外科スポーツ医学会学術集会 特別企画４　コアトレーニングの神髄 講演「コアトレーニングを効果的に進めるために、体幹（筋）機能を適切に捉える評価について」
54）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和1年8月	大阪府理学療法士会生涯学習センター主催 2019年医工連携&運動器疾患（足関節）研修会 「運動連鎖について足部・足関節の機能から考える」
55）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和2年9月	大阪府理学療法士会生涯学習センター主催 第2回生涯学習研修集会（Web開催） 研修４：膝・足・足関節の機能障害に挑む 「身体動作の基礎、足部・足関節機能の捉え方」
56）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和2年11月	大阪市北区理学療法士会　第1回生涯学習研修会 「足部・足関節の機能からみた理学療法」
57）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和2年12月	あしべん主催　特別講演　「身体重心を考慮して、体幹機能と足部・足関節機能を考える」
58）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和4年9月	日本理学療法士会主催　理学療法講習会 「スポーツフィールドにおける理学療法の実践　～導入から実例紹介～」
59）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和4年12月	奈良県障がい者スポーツ協会主催 令和4年度奈良県初級障害者スポーツ指導員養成講習会講習会 「各障がいのスポーツ指導上の留意点と工夫」
５　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 1）理学療法士関連	昭和63年4月 平成16年12月	理学療法士免許（第15840号）取得：厚生労働省 第31回理学療法士・作業療法士養成施設等教員講習会修了：厚生労働省（第3370号）

事項	年月日	概　　要
	平成22年4月	専門理学療法士（運動器3-115）認定：日本理学療法士協会
2）大学教育関連学位	平成9年9月 平成12年3月 平成17年3月	学士(社会学)取得：佛教大学第42456号 修士（体育学）取得：大阪体育大学大学院　第73号 「運動選手･非運動者における足部･足関節の機能評価」 博士（スポーツ科学）取得： 大阪体育大学大学院　第3号 「足部の機能と下肢の運動連鎖に関する研究」
２　特許等 特になし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 1）理学療法士としての臨床実務歴	平成7年4月 ～ 現在に至る 平成18年4月 ～ 現在に至る	金井整形外科医院非常勤にて外来部門を担当。週1回の診療にて外来症例の理学療法を行っている。対象症例に対して自宅リハや自主運動の立案、診療時のチェックを頻回に行った。十数年に渡り診療を継続している症例も少なくない。 宝持会池田病院リハビリテーションセンター非常勤にて、外来部門の夜間診療を担当。週1回の診療にて外来症例の理学療法を行っている。特にスポーツ選手のリハビリテーションを多く担当している。また若い理学療法士の教育的立場から臨床指導を行っている。
3）学校保健・地域スポーツ活動への参画	令和1年9月 令和3年12月 ～ 現在に至る	奈良学園大学にて第1回ボッチャ大会を開催 大学生、特別支援学校生、地域住民を対象にパラスポーツ（ボッチャ）の体験会と大会を開催 ：総勢150名の参加 　教員と大学生により大会運営を行い、特別支援学校の生徒や地域の小学生から高齢者まで参加してもらい、パラスポーツであるボッチャの体験会と、チーム編成して試合(大会)を行った。当日の内容は奈良テレビの夕方の地方ニュースでも報道された。 京都府立田辺高等学校硬式野球部（毎月1回） スポーツ傷害予防の指導、スポーツ医事相談とトレーニング、コンディショニング指導の実践 　硬式野球部の監督から要請があり、学校長からの高校として正式な依頼により、野球部部員の健康チェックやスポーツ障害予防や、トレーニング・コンディショニング指導を担当する。
４　その他 1）学外研究機関などとの共同研究 (株)ワコール人間科学研究所	平成17年4月 ～ 現在に至る	運動機能に着目したアンダーウェア、スポーツウェアの開発と三次元動作解析装置を用いた効果の検証 　ワコールのスポーツウエア部門の製品を対象に機能的ウエアの開発段階での効果検証や、発売前の機能効果の検証や身体への影響を客観化する。手段は主に三次元動作解析装置や筋電測定、加速度センサーなどを用いて短時間で多くの客観的データの収集を行い、結果の検証を行う。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 9. 実践PTノート 運動器傷害の理学療法 （第2版）	共著	平成25年4月	（株）三輪書店	運動器傷害の概論と運動療法に関して実際に実践している実技内容を部位ごとに紹介した。さらに自己学習のため、その手技の動画をDVDに収録し講義外での実技練習に役立てるように工夫した。第1版から内容の見直しと追加を行い、より実践的な内容に再編した （Ａ４判　全210頁） 編著者：小柳磨毅 共著者：上野隆司、吉本陽二、橋本雅至、 淵岡聡、中江徳彦、佐藤睦美、境隆弘 共著者全員での執筆のため、本人担当部分を明記不可
10. 教科書にはない敏腕 PTのテクニック -臨床実践変形性膝関 節症の理学療法-	共著	平成28年5月	(株)文光堂	変形性膝関節症に対する理学療法評価と治療アプローチに関して臨床上の工夫を多く紹介した。クリティカルパス通りに進まない場合のアプローチ、歩行（歩容）の改善など，臨床で遭遇する症例への対応、さらには、対象者を取り巻く心血管疾患を中心とした内科的問題を併発する場合の運動療法の進め方、荷重関節疾患との関連がある肥満に関する考慮のポイント、日常生活を含めた患者教育の実践と工夫について図表を用いて詳細に解説した。 （Ｂ５判　全196頁） 編著者：橋本雅至 ①本人担当部分： 膝OAの外科的治療を理解し術後に活かす（ｐ．47～ｐ．59）を共著。 人工膝関節置換術を中心にその手術方法を解説し、皮膚切開から術後の理学療法の工夫や考慮のポイントを解説した。特に術後関節可動性に影響を与えやすい術創部のアプローチを具体的に紹介した。 共著者：橋本雅至、木下和昭 ②本人担当部分： 膝OA患者の術前・術後の歩容改善をねらう（ｐ．120～ｐ．134）を単著。 手術前の状態から手術後の歩容の改善を、その時期に分けて解説した。特に術後の残存する体幹機能の不具合に着目して具体的なアプローチについて紹介している。 著者：橋本雅至
11. 教科書にはない敏腕 PTのテクニック -臨床実践足部・足関 節の理学療法-	共著	平成29年5月	(株)文光堂	足部・足関節に頻発する運動器傷害を中心に評価やアプローチについて臨床で行っている実践的な内容をまとめた。運動器疾患以外にも内科的障害に起因する足部の障害についてもあわせて解説した。 （Ｂ５判　全194頁） 編著者：橋本雅至 ①本人担当部分： 足部・足関節機能と身体運動との関係をとらえる（ｐ．25～ｐ．38）を共著。 足部・足関節の力学的機能について解説し、身体運動時の基礎としての役割に対して必要な機能を解説した。また機能不全の場合のアプローチについて紹介を行った。 共著者：橋本雅至、木下和昭

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				②本人担当部分： 扁平足障害−足部・足関節の機能的特徴をふまえ介入する（ｐ．70～ｐ．84）を共著。 　臨床で経験する扁平足障害が足部にとどまらず、身体運動に影響を及ぼす関係性について解説し、その評価方法やアプローチについて紹介した。 共著者：中尾英俊、橋本雅至 ③本人担当部分： 有痛性外反母趾−足部・足関節の機能的特徴をふまえ介入する（ｐ．85～ｐ．98）を共著。 　外反母趾変形でも有痛性の場合を重要視して、足部にとどまらず、身体運動に影響を及ぼす関係性について解説し、その評価方法やアプローチについて紹介した。特に靴の工夫やインソールなどについて具体的に解説した。 共著者：生島直樹、橋本雅至 ④本人担当部分： 後脛骨筋腱、腓骨筋腱の要害−足部・足関節の機能的特徴をふまえ介入する（ｐ．99～ｐ．113）を共著。 　足アーチ機能を担保する筋群に加わる力学的ストレスを具体的に紹介し、その頻回な負荷が引き起こす筋腱の障害を解説した。足部機能だけではなく、身体の重心保持の機能を含めて具体的に解説した。 共著者：瓜生玲子、橋本雅至
12. アスリートケア 理学療法士によるスポーツ選手への健康支援	共著	平成29年10月	(株)三輪書店	一般社団法人アスリートケアに所属する理学療法士が20年以上活動してきたスポーツ現場の健康支援事業を解説し、それぞれの課題克服や工夫など広く共有するため事業の各方面(スポーツ現場、領域など)を細かく解説した。 （A５判　全359頁） 越智隆弘監修、アスリートケア編集 本人担当部分： 第3章3高校部活動の支援　サッカー部.　（ｐ．224～ｐ．237）を共著。 　高校サッカー部の健康支援について解説した。特に成長期の体幹機能に着目をして，その評価(測定)方法の開発、トレーニング指導の効果の検証を客観的に行い、学会発表や論文になった内容などを含めて解説した。 共著者：井上直人、橋本雅至、高本晴輝、田頭悟志、木下和昭
13. 統合と解釈がよくわかる 実践！理学療法評価学	共著	平成30年3月	(株)医歯薬出版	理学療法評価で得られた医学的情報，検査測定結果，動作観察の内容をどのように統合・解釈し、臨床推論をどのように組み立てていけばよいかを解説した。臨床実習で指導者が学生に指導するように、情報収集の項目と意味、画像解読のポイント，患者の動作をみるポイント、検査結果の解釈、治療場面での工夫とリスクなどについて紹介した。 （Ｂ５判　全305頁） 西守隆 編著，上杉雅之監修 本人担当部分： 第4章4アキレス腱断裂(手術適応例).　（ｐ．196～ｐ．205）を共著。 　アキレス腱断裂術後の理学療法を臨床上の工夫を踏まえて解説した。アキレス腱断裂の術後を中心に術後

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				療法を補装具使用など積極的な回復を目標に行う方法における評価ポイントを紹介した。また機能改善に難治するような事項に対する対処方法などを具体的問題点把握から解説し、実践的な評価方法を紹介した。 共著者：橋本雅至、木下和昭
14. 教科書にはない敏腕PTのテクニック -臨床実践　肩関節の理学療法-	共著	平成30年5月	(株)文光堂	肩関節機能障害に対する理学療法士の臨床技術を解説した。病態を理解するための機能解剖と運動学，理学療法士が押さえておくべき手術のポイント，運動療法につなげるための機能評価を紹介した。さらに軟部組織の痛み，関節可動域制限，筋機能低下，関節不安定症を取り上げ，臨床で実際に行われている機能的特徴を踏まえた理学療法手技を解説した。 （Ｂ５判　全208頁） 編著者：橋本雅至，村西壽祥 本人担当部分： 肩の機能解剖を理解する。 (p. 2～p. 15)を担当 肩関節周囲の評価の基本になる体表面から見る触察方法を具体的に紹介した。また機能障害や疾患からくる痛みの部位を解剖学的に正確に捉える重要性を解説した。触察方法は図表を多く掲載し、評価手技につねがるように考慮した。 共著者：中尾英俊、橋本雅至
15. 教科書にはない敏腕PTのテクニック -臨床実践 体幹の理学療法-	共著	令和1年8月	(株)文光堂	体幹の機能障害や疾患に対する理学療法士の技術とコツを解説下。触診による機能解剖や疾患の特徴から見た運動連鎖の観点からの運動機能障害，機能評価を紹介し、動作分析からみた腰痛発生のメカニズムや外科的治療とその術後理学療法を解説した。また、成長期スポーツ選手の腰痛や非特異的腰痛の特徴、運動連鎖・隣接関節を理解したうえでの介入方法、産業医学の立場から見た腰痛対策について紹介した。 （Ｂ５判　全192頁） 編著者：橋本雅至 ①本人担当部分： 疾患の特徴から腰部の運動機能障害を理解する。 (p. 17～p. 27)を担当 高齢者に多く見られる器質的疾患について紹介し、その特徴を運動面や機能的異な観点から見る評価や観察のポイントを解説した。それらの観点からつながる理学療法の実践法を紹介した。 共著者：生島直樹、橋本雅至 ②本人担当部分： コアスタビリティを評価し結果を介入に活かす。 (p. 28～p. 38)を担当 体幹の安定性に関わる体幹機能の評価から、体幹の安定性改善を目的にした理学療法の立案を紹介する。コアスタビリティの具体的な実践方法に対する、その効果検証のため、評価の重要性について解説した。 共著者：田頭悟志、橋本雅至 ③本人担当部分： 運動連鎖の観点から体幹と下肢の機能の関連を評価する。 (p. 39～p. 57)を担当 体幹の筋機能を中心に動的、静的に評価する方法を紹介し、我々の行う体幹筋機能評価方法の実践と得られた結果から荷重位の姿勢保持や動作における体幹機

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				れた結果から荷重位の姿勢保持や動作における体幹機能の関わりの考察を解説した。 著者：木下和昭、橋本雅至 ④本人担当部分： 非特異性腰痛の特徴を踏まえて介入する。 (p. 113～p. 129)を担当 非特異性腰痛の機能面での病態を評価し、体幹の筋機能の特性を考慮したアプローチについて解説した。特に体幹と股関節との連携、下肢荷重位での動作(歩行)時の力学的ストレスを考察し．理学療法を立案する実践を紹介した。 著者：森藤武、橋本雅至
16. 運動器スポーツ外傷・障害の保存療法　下肢	共著	令和2年11月	(株)南江堂	スポーツ外傷・障害の保存療法についての最新の知識を紹介し、その具体的方法と進歩を解説した。下肢に認められる、多岐にわたる疾患ごとに運動療法の適切な選択や指導方法について細かく解説した。また、物理・装具療法の併用のポイント、最近のトピックスであるPRPや体外衝撃波治療のポイントから最新の実績まで網羅した。 （Ｂ５判　全316頁） 編集：熊井司、石橋恭之 本人担当部分： 各種保存療法の基礎知識　運動療法。 (p. 18～p. 33)を担当 スポーツ選手に対する運動療法にて行われる実際の手技を解説した。術後や急性期の基本的な運動療法から、スポーツ復帰期の競技動作の基本となるトレーニングについて紹介した。またスポーツ障害に対しては身体機能を考慮した運動療法、トレーニングが必要であり、実際に例示して解説した。 著者：橋本雅至
17. 教科書にはない敏腕PTのテクニック -臨床実践スポーツ傷害膝の理学療法-	共著	令和2年12月	(株)文光堂	スポーツによる膝の外傷・障害に対する理学療法士の技術とコツについて解説した。触診による機能解剖や機能評価，疾患の特徴や病態，外科的治療について紹介し、外科的治療前後での介入や障害発生のメカニズム，運動連鎖を応用したアプローチについて解説した。また，競技レベルへの復帰を導く手法，再発予防のための取り組みについて紹介した。 （Ｂ５判　全214頁） 編著者：橋本雅至 ①本人担当部分： 膝関節の筋機能と下肢機能を評価する。 (p. 16～p. 27)を共著 筋力や筋持久力にとどまらず、筋機能と身体動作との関連を考慮して、その機能を評価、測定に関する実践方法を紹介した。筋機能測定機器を用いた方法(トルク値やトルクカーブなど)や、スポーツ現場でも可能な、パフォーマンステスト(スクワットやレッグランジなど)を工夫して筋機能の評価方法を紹介した。 共著者：井上直人、橋本雅至 ②本人担当部分： 膝関節のオーバーユース障害の要因を評価し改善に導く　(p. 124～p. 140)を共著

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				く。(p. 124～p. 140)を共著 　オーバーユース障害に至るメカニカルストレスに関する評価方法を下肢荷重位でのアライメント評価と局所の関節機能評価と組み合わせ、その考察から運動療法やトレーニング方法を具体的に立案し、テーピングなどのアイテムも加えて、対応する実践的な方法を解説した。 共著者：野田優希、橋本雅至
18. 運動器障害理学療法学テキスト（改訂第3版）	共著	令和3年8月	(株)南江堂	障害と疾患の基本的理解と，根拠に基づく介入法とその実践に必要な整形外科学などの基礎学問を解説した教科書の改訂版．今改訂では本文をフルカラーとし，運動療法・検査などを分かりやすいイラストで多数掲載．視覚的な理解にも優れた紙面となった．さらに運動器障害理学療法学分野，またその理解の基礎となる整形外科学分野の過去10年分の国家試験問題へのリンクも収載した充実の改訂版． （Ｂ５判　全316頁） 編集：高柳清美、中川法一、木藤伸宏、森山英樹 本人担当部分： 21. 筋・軟部組織性障害①　概論。(p. 207～p. 216)を共著 　軟部組織に起こる機能障害を例示して、軟部組織(結合組織)の特徴を踏まえて解説した。筋、筋腱移行部、腱、靭帯や関節包などに由来する機能障害に対する運動療法を問題点を見る評価とあわせて紹介し、理学療法を学ぶ基本内容が網羅できるように解説した。 共著者：橋本雅至、野田優希
（学術論文） [原著論文] 59. クラウス・ウェーバーテスト変法と体幹深部筋エクササイズにおける腹横筋の筋活動量について （査読付）	共著	平成25年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol. 22 :P. 25-P. 27	体幹筋機能を向上させる目的に行われるトレーニング動作について実際の筋活動量の観点からその効果について検討した。筋活動の測定には、ワイヤー電極を用い、深部の筋活動を導出した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：杉本拓也、能登洋平、林慈晃、池内誠、仲哲治、土井龍雄、柳田育久、田邉　智、 大槻伸吾、橋本雅至、大久保衛
60. デジタルカメラによる胸腰椎可動域測定法の一検討(第一報) （査読付）	共著	平成25年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol. 22 :P. 29-P. 31	デジタルカメラにて撮影した静止画を用いて条件間の角度の変化から脊柱の可動性を予測した。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：福本貴典、田頭悟志、板矢悠佑、高嶋厚史、橋本雅至

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
61. 第5中足骨疲労骨折の既往を有する大学サッカー選手におけるターン動作時の足部圧力解析 （査読付）	共著	平成25年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.22 :P.39-P.41	サッカー選手の好発する足部第5中足骨骨折の発生要因として切り返し動作の繰り返しが考えられる。実際にターン動作にて足部の同様な力学的なストレスが加わるかを客観化し、発生要因を検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、武村政徳、辻田純三、橋本雅至、大久保衛
62. 大学サッカー選手における足部スポーツ障害に対するインソールの有用性 （査読付）	共著	平成25年7月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.33（3） :P.292-P.297	縦断的に調査を継続している大学サッカー選手に認められる足部スポーツ障害に対して、市販のインソールの使用がスポーツ障害発生にどのように影響を及ぼすかを検討した。結果、インソールの使用の有用性が示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、岸本恵一、橋本雅至、大久保衛
63. 荷物の持ち上げ動作時の下肢および体幹の運動力学的解析 （査読付）	共著	平成25年10月	理学療法科学 Vol.28（5） :P.619-P.622	日常生活から職業動作によく見られる荷物の持ち上げ動作について動作分析を行った。三次元動作解析装置を用いて体幹、下肢の力学的負荷を客観化した。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：三谷保弘、橋本雅至、北川智美、松木明好
64. 高校男子サッカー選手における体幹筋機能と股関節可動域が運動時腰痛に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成26年1月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 :P.59-P.66	高校生のサッカー選手を対象に体幹筋の持久性と協調性を見た機能評価と股関節の可動性と柔軟性が、スポーツ動作時の腰痛発生に及ぼす影響を考察し、その関連性を示唆した。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：吉川晋矢、橋本雅至、井上直人、古川博章、木下和昭、大槻伸吾
65. 高校男子サッカー選手における入学年度別の体幹筋機能と運動時腰痛発生の経時的変化 （査読付）	共著	平成26年3月	四條畷学園大学リハビリテーション学部紀要 9号 :P7-P14	縦断的に調査している高校生サッカー選手が各年代の体幹機能評価の結果に特徴があることが分かり、その後トレーニング介入した結果、運動時の腰痛が一時期改善するが、その後僅かに増加する傾向があることが分かった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：石東友輝、橋本雅至、井上直人、木下和昭、古川博章、大槻伸吾
66. 大学アメリカンフットボール選手におけ	共著	平成26年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22（2）	大学生の体幹機能を瞬発力の観点と筋持久力の観点から測定し、その関連性を検討した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
るSide Bridge test と体幹筋力との関係 （査読付）			:P.297-P.301	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、新宮信之、廣瀬ちえ、橋本雅至、田頭悟志、木下和昭
67. 第5中足骨疲労骨折の既往を有するサッカー選手の切り返し動作の動作解析 （査読付）	共著	平成26年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (2) :P.331-P.335	第5中足骨の骨折経験のあるサッカー選手の方向転換(切り返し)動作をハイスピードカメラにて撮影し、その足部の関節運動を健常者と比較検討した。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、岸本恵一、橋本雅至、大久保衛、熊井司、田中康仁
68. 大学サッカー選手における足関節捻挫の競技復帰に影響を及ぼす要因の検討 （査読付）	共著	平成26年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.23 :P.19-P.21	縦断的に調査している大学サッカー選手の足関節捻挫についてスポーツ復帰に影響を及ぼす身体的特徴(筋力、柔軟性など)を検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大久保衛、大槻伸吾、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、田中康仁
69. ハンドヘルドダイナモメーターを用いた体幹機能評価方法の再現性と関連性 （査読付）	共著	平成26年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.23 :P.27-P.29	体幹筋の筋力測定にハンドヘルドダイナモメータを用いた測定に関してその再現性について級内相関係数を用いて検討を行った。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、米田勇貴、中雄太、北西秀行、大八木博貴、橋本雅至、柴沼均
70. 本学学生の国家試験前後における不安の変化 （査読付）	共著	平成26年6月	リハビリテーション教育研究 19号 P.216-P.217	最終学年の学生を対象に国家試験前後の不安状態を客観化し、その変化について検討を行った。資格を取得する教育課程において最終目標となる国家試験は多くの学生において不安をもたらす要因となることが考えられた。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：小杢武陛、岡健司、髙橋泰子、橋本雅至、酒井桂太
71. 荷重による足部アーチの変化が足部スポーツ障害の発生に与える影響　大学サッカーチームの8年間の前向き研究 （査読付）	共著	平成26年7月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.34 (3) :P.307-P.311	荷重負荷による足部アーチ高の沈降率を測定し、後に足部に発生するスポーツ障害との関係性について検討を行った。アーチ高の変化が大きい選手はスポーツ障害発生に何ら影響を与える可能性が示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、橋本雅至、大槻伸吾、

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				大久保衛、熊井司、田中康仁
72. 大学男子サッカーチームにおける10年間の傷害発生状況 （査読付）	共著	平成26年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (3) :P.463-P.472	縦断的に関わっている大学サッカー選手のスポーツ障害発生の動向について10年間の調査結果をまとめ、検討した。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、 岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衛、 熊井司、田中康仁
73. 股関節可動域、下肢筋タイトネスの経時的変化が運動時腰痛に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成26年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (3) :P.481-P.487	高校生サッカー選手を対象に股関節の可動性と下肢筋の硬さが、運動時腰痛との関連と関連すると考えられ、トレーニング介入によるその改善がその後の運動時腰痛にどう変化をもたらせるかを調査し検討を加えた。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：福本貴典、橋本雅至、田頭悟志、 板矢悠祐、井上直人、木下和昭、大槻伸吾
74. 変形性膝関節症における体幹機能と身体機能の関連性 （査読付）	共著	平成26年12月	運動器リハビリテーション Vol.25 (4) :P.350-P.355	変形性膝関節症患者において、体幹機能評価を実施し、身体機能との関連性を検討した。その結果、体幹機能評価である体幹荷重支持機能は、膝関節伸展筋力と静的バランス、動的バランスにおいて有意な相関が認められた。このことから変形性膝関節症患者は体幹機能にも着目することが重要であることが明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、米田勇貴、
75. 端座位での片側支持における姿勢保持とTrunk Righting Testとの関係 （査読付）	共著	平成27年4月	理学療法科学 Vol.30 (2) :P.329-P.332	体幹機能評価であるTrunk Righting Testの姿勢を重心動揺の観点から検討した。その結果、Trunk Righting Testの劣位側は優位側に比して、外周面積が大きく、単位面積軌跡長が有意に劣っていた。このことからTrunk Righting Test中枢神経におけるコントロールも重要であることが明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、米田勇貴、中雄太、北西秀行、大八木博貴、星野祐一、柴沼均
76. 大学男子サッカーチームにおける上半身傷害の発生状況 ： 10年間の傷害調査結果 （査読付）	共著	平成27年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.23 (2) :P.242-P.251	大学男子サッカーチームにおける，2003年から2012年までの10年間の上半身(上肢，体幹，頭頚部)に発生した傷害を調査した．　1年生時の発生率，ゴールキーパーの発生率が有意に高く，1部リーグに参加した年度と人工芝グラウンドに変更した年度の上肢傷害発生率の有意な増加が認められた. 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衛、熊井司、田中康仁
77. 大学サッカー選手における足趾屈曲筋力が足部スポーツ障害の発生に与える影響 (査読付)	共著	平成27年5月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.35 (2) :P.133-P.138	多種多様なフットワーク動作が必要なサッカー選手において足趾の屈曲力(把持力)がスポーツ障害発生にいかに関与するかを検討した。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：藤高紘平、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衛、熊井司、田中康仁
78. 足部横アーチ変化の測定方法の検討 (査読付)	共著	平成27年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.24 :P.19-P.22	外見の形状では測定が困難である足部横アーチの客観的な測定方法について考案し、その方法の有用性について検討した。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、 岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衛、 熊井 司、田中康仁
79. Trunk Righting Test と体幹機能の関係性 (査読付)	共著	平成27年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.24 :P.31-P.34	体幹機能評価として考案したTrunk Righting Testと体幹筋の持久性と協調性を見るブリッジテストとの関連性から、体幹筋の評価方法について検討した。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、北西秀行、 井上直人、植田篤史
80. A novel objective evaluation method for trunk function (体幹筋機能評価方法の検討) (査読付)	共著	平成27年6月	J. Phys. Ther. Sci. Vol.27 :P.1633-P.1636	立ち直り動作を客観化したTrunk Righting Testを考案し、その再現性を報告した。その結果、検者内・検者間共に良好な再現性を有していることが示唆された。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Kazuaki Kinoshita, Masashi Hashimoto, Kazunari Ishida, Yuki Yoneda, Yuta Naka, HidekuKi Kitanishi, Hirotaka Oyagi, Yuichi Hoshino, Nao Shibanuma
81. 人工膝関節全置換術後患者の身体機能と術前および術後の体幹機能の関連性 (査読付)	共著	平成27年6月	理学療法科学 Vol.30 (3) :P.389-P.394	人工膝関節全置換術の術前後の体幹機能と術後の身体機能の関連性を検討した。その結果、術前の体幹機能が良好な方が術後のTUGが良好であることが示唆された。このことから術後の早期回復には術前の体幹機能の向上が重要であることが考えられた。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、中雄太、北西秀行、大八木博貴

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
82. 座位体幹荷重支持機能テストと体幹筋機能 （査読付）	共著	平成28年1月	理学療法科学 Vol.31（1） :P.49-P.52	座位での体幹荷重支持機能テストと既存する体幹機能テストの関係を検討した。その結果、体幹荷重支持機能テストと既存する体幹機能テストとの間には有意な相関が認められなかった。そのため、両者は異なった観点で評価をしていることが明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、北西秀行、米田勇貴、中雄太、大八木博貴、井上直人、植田篤史、田頭悟志、福本貴典、高嶋厚史、板矢悠佑、新谷健、星野祐一
83. 腰椎変性疾患に対する体幹伸展持久力トレーニングの効果−日本整形外科学会腰椎疾患問診票（JOABPEQ）を用いた評価− （査読付）	共著	平成28年4月	理学療法科学 Vol.31（2） :P.275-P.279	腰椎変性疾患患者27名とし,体幹伸展持久力トレーニングを実施する15名（T群）と，通院のみの12名（C群）との間で,体幹伸展持久力,VAS,JOABPEQの経時変化を比較した．結果,T群の体幹伸筋持久力は3ヵ月目に，JOABPEQは腰椎機能障害のみ2ヵ月目に有意に高値を，VASは2，3ヵ月目に有意に低値を示し,体幹伸筋持久力トレーニングは，疼痛およびADLの改善に効果的であることが示唆される． 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：中尾英俊、稲葉孝洋、森藤武、内原由佳子、渡邊萌、金子元春、木下和昭、橋本雅至、大槻伸吾
84. 体幹の荷重支持機能の左右差がジャンプ動作に与える影響 （査読付）	共著	平成28年6月	JOSKAS Vol.41（3） :P.1068-P.1074	Trunk Righting Testにて得られた体幹荷重機能の左右差が各種のジャンプ動作に与える影響について調査した。結果、体幹の安定性が大きく求められるジャンプ動作では体幹機能の左右差が関与しやすいことが示唆された。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、井上直人、北西秀行、中雄太、大八木博貴、植田篤史、星野祐一、石田一成、柴沼均、中尾英俊、大槻伸吾
85. 成長期スポーツ障害の腰椎分離症と非特異的腰痛のX線による腰椎アライメントと可動性について （査読付）	共著	平成29年3月	大阪河﨑リハビリテーション大学紀要 11巻 :P.135-P.139	成長期スポーツ障害の腰痛症に多い、腰椎分離症と非特異的腰痛の腰椎のアライメントと可動域について検証した。検証はX線を用い、腰椎椎間角を計測した。分離症では下位腰椎の前弯角が大きいことが示唆された。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：中尾英俊、橋本雅至、森藤武、岡健司
86. 高校男子サッカー選手における体幹荷重支持機能とブリッジ姿勢保持の特徴～利き脚側と非利き脚側での比較～ （査読付）	共著	平成29年5月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.37（2） :P38-P41	高校サッカー選手の体幹荷重支持機能についてどのような特徴を有するのか検討した。その結果、利き側の体幹荷重支持機能の方が有意に強いことが示唆された。このことから体幹の荷重支持機能は優位な荷重側のみが強くなるわけではなく、その反復される動作に影響を受ける可能性が明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、中尾英俊、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
87. 大学サッカー選手の人工芝グラウンドにおけるスポーツ傷害の経時的変化　人工芝グラウンドに対するゴムチップ補充の影響	共著	平成29年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.25 :P53-P55	サッカー競技中に発生する外傷や障害を引き起こす要因は，選手が使用しているグラウンドサーフェイスも一要因になると報告されている。今回，長期経過した人工芝グラウンドに特殊珪砂やゴムチップを補充したことによる，スポーツ傷害発生への影響を検討した．結果、人工芝グラウンドでは年数が経過するとともに下肢捻挫発生率が増加し，ゴムチップの補充後では下肢肉離れの発生率が有意に減少した． 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衛、熊井 司、田中康仁
88. Relationship between trunk function evaluated using the trunk righting test and physical function in patients with knee osteoarthritis (体幹筋機能テストと変形性膝関節症患者の身体特性との関連性) (査読付)	共著	平成29年6月	J. Phys. Ther. Sci. Vol.29 :P.996-P.1000	変形性膝関節症（OA）患者の運動機能評価において体幹の立ち直り運動のテスト（TRT）を用いて体幹筋機能の評価を行っている。その臨床上の有効性について検討した。結果、同側のTRTと関連する因子は、最大等尺性膝伸筋力テストおよび同側のステップテストであった。術側と、非術側TRTはTUGとかなり関連していた。下肢の運動器疾患であるが、体幹機能評価の重要性が示唆された。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Kazuaki Kinoshita, Kazunari Ishida, Masashi Hashimoto, YuKi Yoneda, Yuta NaKa, hideyuki Kitanishi, Hiroki Oyagi, Yuichi Hoshino, Masahiro Kurosaka, Nao Shibanuma
89. Side-to-side differences in range of motion, muscle strength, and medial elbow laxity in young baseball players with medial elbow injuries (内側型肘関節障害を有した成長期野球選手の関節可動域、筋力、関節弛緩性のの左右差について) (査読付)	共著	平成29年7月	J Phys Fitness Sports Med Vol.6 (4) :P.233-P.239	成長期の野球選手の肘関節の障害は投球動作に大きく影響し、また投球動作から力学的影響を受ける。今回、成長期の野球選手の関節機能の評価から検討を加えた。結果、肩外内旋、肘屈伸、前腕回内外､股関節内旋の可動域は非投球側に比べ減少していた。また僧帽筋および棘上筋の筋力、肘関節の内側不安定性は左右差を示していた。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Takeshi Morifuji, Hidetoshi Nakao, Takahiro Inaba, Kenji Kasubuchi, Masashi Hashimoto, Motoharu Kaneko
90. 野球経験年数での肩関節回旋可動域の変化 (査読付)	共著	平成29年7月	JOSKAS Vol.42 ：P.493-P.498	小中学生の野球経験年数別での肩関節可動域の変化について検討した。結果は野球経験年数の増加に伴い、両側共に肩関節90°外転位での外旋角度と全可動域に有意な低下傾向が認められた。以上より、小中学生の野球選手の肩関節90°外転位での外旋角度と全可動域は野球経験の増加に伴い減少していくことが考えられ、今後の投球障害治療の一助となる可能性が示された。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、中川泰彰、向井章悟、佐治隆彦、

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				薮本浩光、井上直人、伊藤春盛、橋本雅至、大槻伸吾
91. 投球障害肘を有する小学生野球選手の肩関節可動域の特徴（査読付）	共著	平成29年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.25 (3) ：P.454-P.457	投球動作において，肩関節可動域の制限は，投球障害肘の発症と関連が報告されている．そのため，本研究の目的は投球障害肘を有する小学生野球選手の肩関節可動域の特徴を明らかにすることとした.結果，障害群は健常群に比して，投球側，非投球側の肩関節外転位での外旋可動域が，有意に小さかった．また，投球側の肩全回旋可動域およびGlenohumeral Internal Rotation Deficitは，2群間で統計学的に有意差はなかったが，障害群のほうが小さい傾向であった. 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：植田篤史、橋本雅至、木下和昭、小島喜義、衛門良幸、井上直人、大槻伸吾
92. Cognitive impairment associated with locomotive syndrome in community dwelling elderly women in Japan（日本人の健常高齢者女性の運動機能評価と認知機能について）（査読付）	共著	平成29年10月	Clinical Interventions in Aging 2017 12 :P.1-P.7	日本人の健常高齢者を対象に運動機能評価と身体組成、認知機能との関連を検討した。ロコモティブシンドロームのように運動機能の低下により引き起こされるが、これは認知機能の変化や体組成の変化との関連が示唆された。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Misa Nakamura, Fumie Tazaki, Kazuki Nomura, Taeko Takano, Masashi Hashimoto, Hiroshi Hashizume, Ichiro Kamei
93.体幹筋・股関節周囲筋の機能評価を目的とした難度別のcore stability testの保持時間について　（査読付）	共著	平成30年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌,27: p.27-p.29	難度別core stability test（CST）の姿勢保持時間を評価指標として測定を行い，設定した難度別CSTが有用であるかを検討することを目的とした．結果，SB・FBの保持時間はB～D の難度毎に有意差が認められ，A～Bの難度では有意差が 認められなかった．つまり，難度別CST においてB～Dは有用であり，Aは姿勢や被験者の選定に 配慮が必要であると考えられた. 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：高嶋厚史，田頭悟志，板矢悠佑，福本貴典，大槻伸吾，木下和昭，新谷健，橋本雅至
94.片脚立位と端座位での片側支持姿勢の腰部周囲筋の筋活動の関係　（査読付）	共著	平成30年12月	理学療法科学 33(6) p.929-p.934	片脚立位と体幹荷重支持との腰部周囲筋の筋活動の関係をワイヤー筋電にて検討した。その結果、両側の内腹斜筋と腹横筋，遊脚側の多裂筋と外腹斜筋に正の相関が認められた。このことより、片脚立位と体幹の荷重支持の腰部周囲筋の一部は，貢献度が同じ傾向であったことが明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭，橋本雅至，中尾英俊，澳昂佑，板谷悠佑，福本貴典，高嶋厚史，大槻伸吾
95.腰痛を有する高校野球選手における体幹・股関節筋力と腰椎アライメントとの関係性（査読付）	共著	平成31年1月	日本臨床スポーツ医学会誌 27巻1号 p.27-p.33	腰痛を有する野球選手を腰痛群，腰痛のない 選手を腰痛なし群とし，体幹・股関節筋力と腰椎前弯角を比較検討した．結果，筋力の比較では両群に有意差を認めなかったが，腰椎前弯角は体幹伸展位においてのみ群間の差が有意であった．筋力と腰椎前弯角との間に

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				群間の差が有意であった．筋力と腰椎前弯角との間には，腰痛群において股関節屈筋筋力と腰椎前弯角との間に有意な正の相関を認めた．腰痛を有する高校野球選手では，股関節筋力と腰椎アライメントが関係していることが示唆された． 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：中尾英俊，橋本雅至，濱田太朗，木下和昭，森藤武，大槻伸吾
96.A Vertical Load Applied Towards the Trunk Unilaterally Increases the Bilateral Abdominal Muscle Activities　(査読付)	共著	平成31年3月	J. Phys. Ther. Sci. Vol.30(3)	端坐位と体幹荷重支持中の腰部周囲筋の筋活動についてワイヤー電極を用いて検討した。その結果、両側の内腹斜筋、多裂筋、腹横筋、腹直筋、非移動側の外腹斜筋に有意な筋活動の増大が認められた。このことから体幹の荷重支持には、両側の腰背筋の筋活動が重要であることが明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Kazuaki Kinoshita, Kazunari Ishida, Masashi Hashimoto, Hidetoshi Nakao, Nao Shibanuma, Masahiro Kurosaka, Shingo Otsuki
97.肩肘障害を発症する小学野球選手の肩関節可動域の特徴 一年間の縦断的検討　(査読付)	共著	平成31年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 27巻2号 p.273-p.278	肩肘障害を発症した軟式野球選手の一年前の肩関節可動域の変化について検討した。その結果、肩関節外転位での外旋角度において肩肘障害を発症する前には、有意な可動域差は認められないが、発症後は肩肘障害者において有意な低下が認められた。このことから、肩肘の障害発生には、肩関節の可動域が重要な要因とはならず、傷害発生後に肩関節の可動域が低下していることが明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下 和昭，中川 泰彰，向井 章悟，伊藤 盛春，井上 直人，橋本 雅至，大槻 伸吾
98.体操競技に必要な倒立と身体因子との関係　(査読付)	共著	令和1年6月	JOSKAS　44巻3号 Page882-888	直線的な倒立姿勢に必要な身体機能因子について検討した。その結果、直線的な倒立姿勢には背筋筋力、肩-肩甲帯の柔軟性が重要な因子であることが明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭，橋本雅至，横田尚子，澳昂佑，来田宣幸，西澤勇一郎，星野祐一
99.人工膝関節全置換術後早期のTimed up and go testの改善に関係する因子　(査読付)	共著	令和1年10月	理学療法科学　34巻5号 p.553-p.557	人工膝関節全置換術（TKA）後の早期のTimed up and go test（TUG）の回復に影響を及ぼす因子を検討した。結果、TKA後4週のTUGの回復率には，5STSと術側のTRTが影響を及ぼす因子であった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭，橋本雅至，大八木博貴，石田一成，柴沼均，来田宣幸

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
100.健常者の足背高測定による足部アーチ評価とアーチ高に影響を及ぼす因子　(査読付)	共著	令和1年11月	バイオメカニズム学会誌 43巻4号 p.256-p.262	18歳以上の689名（男性370名，　女性319名）の足背高および足長計測からアーチ高率を算出し，さらに自記式アンケートを行った．アンケートから身長，体重，BMI，足の既往歴の有無，歩行困難の有無，スポーツ活動の有無を確認した．足背高とアーチ高率から高値（H群），標準（S群），低値（L群）の3群に分類し比較した結果 足背高が高い群では体重とBMIの増加が影響していることが示唆された． 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：中尾英俊，今岡真和，岡健司，肥田光正，森藤武，橋本雅至，松本和幸，北研二
101.SVM-RFEを用いた足部アーチ高比の低下を有する人の関連要因分析　(査読付)	共著	令和1年12月	生体医工学　57巻6号 Page190-196	足部アーチの低下に基本属性が関連する要因の解析を目的とする．　基本属性を説明変数とした非線形回帰分析手法のSVM-RFEによる関連要因を判別する分析を行った．　対象は1178名(男性485名,女性693名)とし，低アーチ群は207名，　非低アーチ群は971名となり，「年齢」，　「身長」，　「体重」，　「BMI」，　「足長」の5項目を説明変数とした．その結果，　SVM-RFEによる説明変数の識別評価では，　「年齢」，　「足長」，　「体重」の3項目が足部低アーチの関連要因として明らかとなった．　本研究では説明変数が限定的かつ少数であったが，　足部低アーチの関連要因として，　SVM-RFEの分析手法は有効であった． 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：中尾 英俊，今岡 真和，岡 健司，森藤 武，橋本 雅至，松本 和幸，北 研二
102.小学生軟式野球選手における投球障害肘発症時の体幹筋機能の変化　(査読付)	共著	令和2年3月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 40巻1号 p.26-p.29	小学生軟式野球選手が投球障害肘を発症したときのSide Bridge testの変化を調査した．結果，新たに投球障害肘を発症した選手は，投球側のみSide Bridge testの向上が認められなかった．成長に伴い体幹筋機能の向上が認められない場合，小学生軟式野球選手の投球障害肘発生に影響を与えている可能性が示唆された． 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、横田尚子、橋本雅至、木下和昭
103.一都道府県のジュニア体操競技選手権大会における疼痛発生調査　(査読付)	共著	令和2年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 28巻2号 p.298-p.306	一都道府県における小中学生の体操競技選手権大会に出場する選手を対象とした疼痛発生の調査を行い，次に上肢傷害の起因となり得る倒立での疼痛調査の特徴について検討することである。結果，男女とも小学生では足関節に多くの疼痛が発生しており，中学生ではそれに加え，男子で上肢や膝関節，女子では腰部での疼痛発生件数も多く見られた．また一年以内に倒立時の疼痛を有した選手は男子 22.1%，女子37.2% であり，手関節に多く，有痛の女子は身長が高く，体重が

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				重かった. 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、横田尚子、橋本雅至、来田宣幸、西澤勇一郎、星野祐一
104.Acute effects of static passive stretching without voluntary contraction of skeletal muscles on arterial stiffness in elderly lacking exercise habits （査読付） (運動習慣のない高齢者における動脈硬化に対する骨格筋の随意収縮が関与しない静的受動的ストレッチの急性効果)	共著	令和2年6月	J Phys Fitness Sports Med, 9 (5)	運動習慣の少ない高齢者を対象に筋収縮を伴わない持続伸張トレーニング(ストレッチング)を他動的に行うことで、the cardio-ankle vascular index (CAVI)が減少し、動脈硬化における血管系の硬さの改善が認められた。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Takeshi Morifuji, Hidetoshi Nakao, Masashi Hashimoto, Masakazu Imaoka and Hidemi Fujino
105.Correlation of Medial Longitudinal Arch Morphology with Body Characteristics and Locomotive Function in Community-Dwelling Older Women: A Cross-Sectional Study（査読付） （地域女性高齢者の足部痛と足部アーチ形状の変形が身体的特徴と運動機能に及ぼす影響)	共著	令和3年3月	Journal of orthopedic and surgery. 29(2)	地域高齢者の女性を対象に足部の痛みと足部アーチ形状の変形が身体的特徴と運動機能に及ぼす影響を調査した。方法は65～90歳の145人の地域在住の女性とし、足部アーチ高の比率（足背高/切長足長）を測定した. 参加者を高アーチ型グループ（HAG）、低アーチ型グループ（LAG）、または通常アーチ型グループ（NAG）とし、身体特徴（年齢、身長、体重、肥満度指数（BMI）、骨格筋量を比較した。結果、足部の痛みを有する場合において3グループ間で内在筋力、および2ステップ値に有意差を示し、高アーチグループが低下を示した。足部アーチが高く、足部の痛みを有する場合、足部内在筋の衰弱と関連しており、高齢者の女性の運動機能の低下に影響を与える可能性がある。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Hidetoshi Nakao, Masakazu Imaoka, Mitsumasa Hida, Ryota Imai, Fumie Tazaki, Takeshi Morifuji, Masashi Hashimoto, Misa Nakamura.
106.Stepwise increase of upper limb muscle activity induced by progressive 4 positions of a handstand training (査読付) (倒立姿勢獲得のための段階的な4つのトレーニング姿勢による上肢筋活動の増加について)	共著	令和3年8月	Isokinetics and Exercise Science (in press) （Web公開済）	倒立姿勢は体操競技において最も重要な技である。成長期のジュニア選手においては、協調性のある筋機能により安定した倒立姿勢保持が好まれるため、倒立姿勢における上肢の筋活動をEMGにて測定した。倒立姿勢獲得の段階的な4つのトレーニング姿勢における筋活動を測定し、4つの倒立獲得のトレーニングでは、徐々に筋活動が高くなり、ゆるやかなおよびバランスがとれた運動負荷量の増加を示していた。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Kazuaki Kinoshita, Yuichi Hoshino, Naoko Yokota, Masashi Hashimoto, Yuichiro Nishizawa, Noriyuki Kida

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
107.The effects of vertical trunk supportability improvement on one-leg rebound jump efficiency	共著	令和4年5月	PLoS One.　2022 May 19;17(5): e0267460.doi: 10.1371/journal.pone.0267460.	本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Kinoshita Kazuaki, Kazunari Ishida, Masashi Hashimoto, Hidetoshi Nakao, Yuichiro Nishizawa, Nao Shibanuma, Masahiro Kurosaka, Shingo Otsuki
108.小学軟式野球選手における超音波検査かつX線やCT、MRI所見で認められた肘障害の因子 一年前の検診結果から	共著	令和4年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 30巻2号 Page468-474	本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下 和昭，中川 泰彰，向井 章悟，井上 直人，横田 尚子，橋本 雅至
109.Factors affecting chronic low back pain among high school baseball players in Japan: A pilot study	共著	令和5年1月	PLoS One.　2023 Jan 26;18(1): e0280453.doi: 10.1371/journal.pone.0280453.	本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Hidetoshi Nakao, Ryota Imai, Taro Hamada, Masakazu Imaoka, Mitsumasa Hida, Takeshi Morifuji, Masashi Hashimoto
その他 「総説・報告書」				
14.　運動器疾患の理学療法における臨床力	単著	平成25年4月	理学療法京都 42号 ：41-46	運動器疾患の理学療法を効果的に進めるにあたり、身体の機能を如何に捉えることができるが重要である。その際、動作の観察・分析が適切に行い、機能障害を具体的にする評価が治療の成果を左右する。著者の工夫している動作の捉え方を紹介しながら、ポイントを解説した。
15.　観察的動作分析における介入効果から身体運動を捉える方法～足部・足関節の機能に着目して運動器疾患における歩行動作を考察する～	単著	平成26年6月	大阪河﨑リハビリテーション大学紀要 8巻1号 :P.158-P.165	身体運動の土台である足部足関節の機能を中心に運動連鎖の観点から身体全体に及ぶ姿勢制御や運動調整について解説した。特にインソール療法と運動療法の併用や荷重位トレーニングにおける考え方、観察的動作観察のポイントなどを紹介しながら説明を加えた。
16.　足部・足関節のスポーツ障害-overuse障害の克服-　理学療法によるoveruse障害への対応	共著	平成26年7月	臨床スポーツ医学 31巻7号 ：P.674-P.684	overuse障害の要因を関節弛緩性など関節の特性と運動連鎖における力学的ストレスの観点から解説する。具体的には運動療法の紹介とインソールなどの装具療法を併用した理学療法を解説した。 本人担当部分：論文執筆 共著者：橋本雅至、伊佐地弘基

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17.　動作解析を用いた機能的ウエア開発-ワコールとの共同開発	単著	平成29年11月	理学療法ジャーナル 51巻11号 ：P.959-P.962	特集「多分野に広がる理学療法」の1つを担当執筆。身体運動解釈、動作分析の観点から機能的ウエアを開発する業務について紹介した。過去10年の実施の開発例を示し、理学療法の観点がどのように活用できるかを解説した。
(その他) [学会発表] (国際学会) 4. Characteristics of human body movement when lifting loads: investigation into difference in load weight. （重量物の持ち上げ動作におけるの重さに違いが身体動作に与える特徴）	―	平成25年9月	WCPT-AWP & ACPT Congress 2013 (Taichung, Taiwan)	荷物の持ち上げ動作における運動特性について、荷物の重さを変えた時に体幹、下肢の運動負荷がどのように変化するかを検討した。 本人担当部分：研究計画、データ分析、研究指導 共同発表者：Yasuhiro Mitani, Masashi Hashimoto, Tomomi Kitagawa
5. Electromyography analysis in stratified core stability testing （体幹筋機能の評価テストの筋電図学的検討）	―	平成28年10月	ACPT Congress 2016 (Kuala Lumpur, Malaysia)	体幹機能評価としてブリッジ姿勢を用いた機能評価を行っている。今回、その評価姿勢における体幹の筋活動の特性を客観化し、今後の評価方法としての有用性を検討することとした。 本人担当部分：研究計画、データ分析、研究指導 共同発表者： Satoshi Tagashira, Masashi Hashimoto
6. Body Factors of Low Arch of Foot for Middle and Senior Age （中高年者の足部アーチ低下に関連する身体的因子について）	―	令和1年5月	WCPT congress 2019 （Geneva, Switzerland）	加齢に伴う足部変形の進行度はさまざまであり関連因子の検討が必要である。対象は40歳以上の124名（男性43名）とし，調査方法は足の測定としてアーチ高を測定した。加えて、自記式のアンケート調査を行った。結果，BMIのみが独立関連因子であった。40歳代以降では、BMIが高いことは足部アーチ高の低下に関連する因子であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：Hidetoshi Nakao, Masakazu Imaoka, Kenji Oka, Mitsumasa Hida, Takeshi Morifuji, Masashi Hashimoto, Kazuyuki Matsumoto, Kenji Kita
7. Factor Affecting Low-Arch and High-Arch of Foot （足部アーチ高に影響する因子について）	―	令和1年6月	International society of Physical and Rehabilitation Medicine world congress.　(Kobe.	対象は1100人（男性471人）の右1100足、平均年齢50.2±22.3（18～97歳）となった。方法は右足背高率（足背高mm/足長mm×100）を算出した。加えて自記式アンケートを実施した。アンケートには、身長、体

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
			Japan)	重、BMIなどを調査した。3群の比率は、Normalが940足（86.2%）、Lowが64足（5.9%）、Highが86足（7.9%）となった。統計解析の結果、年齢、BMIに有意差を認めた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：Hidetoshi Nakao, Masakazu Imaoka, Kenji Oka, Mitsumasa Hida, Takeshi Morifuji, Masashi Hashimoto,Kazuyuki Matsumoto, Kenji Kita
(国内学会) 69. 変形性膝関節症における体幹機能と身体機能の関連性	－	平成25年7月	第25回 日本運動器科学会 （神戸）	変形性膝関節症患者の体幹機能と下肢機能を中心とした身体動作との関連性を検討した。結果、下肢機能を必要とする身体動作には体幹機能の状況が少なからず関与することが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中雄太， 米田勇貴，北西秀行，大八木博貴，柴沼均
70. Trunk Righting Test（TRT）結果と片側殿部支持による座位姿勢保持との関連について重心(COP)動揺計測からの一考察	－	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	片側殿部支持の端座位（立ち直り動作）にて同側上部体幹を上方に押す力を測定するTRTを実施しており，今回，TRT時の姿勢を重心（COP）動揺から考察し，姿勢制御との関連を検討した．外周面積と単位面積軌跡長において優位側と劣位側との間で有意差が認められた． 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，米田勇貴， 中雄太，北西秀行，大八木博貴，星野祐一， 柴沼均
71. 体幹筋機構評価の姿勢保持における骨盤・股関節周囲筋に関する筋電図学的分析.	－	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	Side Bridge test（SB）、Front Bridge test（FB）とBack Bridge test（BB）を筋電図学的分析により、体幹筋機能評価としての有用性について検討した。測定筋は内腹斜筋、外腹斜筋、多裂筋、大殿筋、中臀筋、大腿筋膜張筋、大腿直筋、内側ハムストリングとした。 %iEMG、MdPFともに有意な変化が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：田頭悟志，橋本雅至，高嶋厚史， 板矢悠佑，福本貴典，大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
72. 大学アメリカンフットボール選手におけるSide bridge testと体幹筋力の関係～第2報～	－	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	体幹筋機能検査として行っているSide bridge test（SB）と体幹筋力の伸展／屈曲比（E／F比）との関連について対象者数を増やしさらに検討を加えた。結果、SBと伸展筋力との間、 SBとE／F比との間に有意な相関が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人，中川泰彰，向井章悟，新宮信之，伊藤盛春，廣瀬ちえ，橋本雅至
73. 超音波画像を用いた大腿骨前捻角の測定方法	－	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	大腿骨には前捻角があり股回旋ROMとの関係がある。前捻角を測定するRyder法は大転子の触診による測定であり，検者による誤差が生じる可能性が考えられる．今回，超音波画像を用いた前捻角の測定方法を試行し，その信頼性について検討した．結果、検者内ICC検者間ICCともに有意な相関が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：新谷健，橋本雅至，井上直人，中川泰彰
74. 足部スポーツ障害を受傷した大学サッカー選手の足部アーチの特徴	－	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	足部スポーツ障害を受傷した大学サッカー選手の足部アーチの特徴を検討した。座位アーチ高率と立位アーチ高率を測定し，座位アーチ高率から立位アーチ高率を引いてアーチ高率変化量（アーチ変化量）を算出した．受傷群を立位アーチ高率が高い群（高アーチ群）と 低い群（低アーチ群）の2群に分けアーチ変化量の比較を行った．結果、受傷群の立位アーチ高率は非受傷群よりも有意に低く，受傷群のアーチ変化量は非受傷群よりも有意に大きかった．低アーチ群のアーチ変化量は高アーチ群よりも有意に小さかった． 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，大槻伸吾，岸本恵一，橋本雅至，大久保衛，熊井司，田中康仁
75. 人工股関節全置換術後の体幹機能と膝関節伸展筋力、歩行能力獲得の関係	－	平成26年2月	第44回 日本人工関節学会 （宜野湾）	股関節疾患による人工関節置換術後患者の体幹機能と下肢機能、身体動作との関連性について検討した。結果、下肢機能は体幹機能と関連性があり、身体運動にも影響を及ぼすことが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：中雄太，木下和昭，橋本雅至，北西秀行，大八木博貴
76. 人工膝関節全置換術後患者の身体機能と術前及び術後の体幹機能の関連性	－	平成26年5月	第49回 日本理学療法学術大会 （横浜）	変形性膝関節症患者（以下，膝OA）の膝関節の炎症や変形などを主症状とする運動連鎖機能不全の一病態に至ったものであると報告されており、術後は膝関節のみでなく，病変の悪化につながる体幹および下肢の運

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				動連鎖を考慮することが重要である。我々はその機能を客観化することを目的にTrunk Righting Test（以下，TRT）を考案し，術後の体幹機能と身体機能との関連性についても検討した。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中雄太，北西秀行，大八木博貴
77. 大学サッカー選手における足趾把持筋力が足部スポーツ障害の発生に与える影響	－	平成26年9月	第40回 日本整形外科スポーツ医学会学術集会 （東京）	多種多様なフットワーク動作が必要なサッカー選手において足趾の屈曲力(把持力)がスポーツ障害発生にいかに関与するかを検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，岸本恵一，橋本雅至，大槻伸吾，大久保衛，熊井司，田中康仁
78. 高校生サッカー選手における体幹筋機能と障害発生の関係	－	平成26年11月	第25回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	体幹筋機能検査として行っているSide bridge test（SB）と体幹筋力の伸展／屈曲比（E／F比）との関連について報告した．その後，対象者数を増やしさらに検討を加えた。SBと伸展筋力との間、SBとE／F比との間に有意な相関が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志，橋本雅至，新谷健，福本貴典，板矢悠祐，高嶋厚史，木下和昭，大槻伸吾
79. Trunk Righting Testと体幹機能の関係性　第2報	－	平成26年11月	第25回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	個人内のTrunk Righting Test(以下、 TRT)の左右データの優劣かSide-Bridge test(以下、 SB)の姿勢保 持時間の優劣を反映していることを報告した。その後、対象者数を 増やしさらに検討を加えた。結果、TRTとFB・SBとの間に相関関係は認められなかった。またFB・SBともにTRTの優位側が有意に姿勢保持の時間が長かった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至,米田勇貴，中雄太，北西秀行，大八木博貴，井上直人，植田篤史，田頭悟志，福本貴典，高嶋厚史，板矢悠祐，新谷健，星野佑一
80. Back Bridge 動作における体幹・股関節周囲筋に関する筋電図学的分析	－	平成26年11月	第25回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	体幹筋や股関節伸筋に着目し、Back Bridge(BB)を筋電図学的に分析し、評価としての有用性を検討した。結果、体幹伸筋、股関節伸筋の%IEMG、 MdPFに有意な変化か認められ、BB姿勢保持が体幹伸筋、股関節伸筋の持久性評 価の方法としての有用性か示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				共同発表者：高嶋厚史，田頭悟志，板矢悠祐，福本貴典，橋本雅至，大槻伸吾
81. 人工膝関節全置換術前後における椅子立ち上がりテストの有用性	―	平成27年6月	第50回 日本理学療法学術大会 （横浜）	スクリーニングである30秒椅子立ち上がりテスト（以下，CS-30）や5回椅子立ち上がりテスト（以下，SS-5）が、変形性膝関節症の患者（以下，膝OA）やその後，手術に至った患者に対する有用性について検討した。結果、SS-5は今回測定した他の動作テストとの関係性が確認でき，先行研究と同様に膝OAに対して使用が可能であることが示唆された。SS-5の方が短時間にて可能であり，負担が少なく，有用性の高いテストであると考えられた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、中雄太、米田勇貴、北西秀行、大八木博貴
82. 体幹の荷重支持機能の左右差がジャンプ動作に与える影響	―	平成27年6月	第7回 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （札幌）	Trunk Righting Testにて得られた体幹荷重機能の左右差が各種のジャンプ動作に与える影響について調査した。結果、体幹の安定性が大きく求められるジャンプ動作では体幹機能の左右差が関与しやすいことが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、井上直人、北西秀行、中雄太、大八木博貴、植田篤史、星野佑一、石田一成
83. 高校男子サッカー選手の座位体幹荷重支持機能と利き脚、非利き脚との関連	―	平成27年9月	第41回 日本整形外科スポーツ医学会学術集会 （京都）	Trunk Righting Testにて得られた体幹荷重機能とブリッジ姿勢保持により得られた体幹筋機能の左右差と効き脚と非効き脚の関係性について調査した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中尾英俊，大槻伸吾
84. 人工股関節全置換術前における体幹機能評価の重要性	―	平成27年10月	第42回 日本股関節学会学術集会 （大阪）	人工股関節全置換術（以下、THA）の術前の身体機能が術後の回復に影響を与えることが報告されている。THA前の体幹機能と身体機能の客観的な関連性を示した報告は少なく、我々はTHA前後の体幹機能に着目し、術前から体幹機能評価（Trunk Righting Test 以下、TRT）を行っている。今回、THA前の症例を対象に、術前の体幹機能と身体機能との関係性を検討した。結果、術側TRTと術側膝関節伸展筋力、術側下肢荷重量との間にそれぞれ有意な正の相関が認められた。術側TRTと歩行時NRSとの間に有意な負の相関が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				研究指導 共同発表者：中雄太、木下和昭、橋本雅至、 柴沼均、林申也、橋本慎吾
85. 座位での体幹荷重支持機能テストの力学的考察	－	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	体幹荷重支持機能テスト（TRT）を考案し、片側の体幹の荷重支持機能が同側の連続ジャンプ動作に影響を与えることを報告した。今回、TRTを力学的に検討し、荷重動作との関係も検討した。TRTの肩で押す力と腎部で押す力は強い相関があった。またTRTの測定値は床反力値と強い相関があった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、中尾英俊、 井上直人、田頭悟志、新谷健、大槻伸吾
86. 高校男子サッカー選手における競技パフォーマンスと体幹筋機能との関係	－	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	高校男子サッカー部に対して、体幹筋機能とサッカーに必要な競技パフォーマンスとの関係について検討した。FBはT－testと12分間走、 SBはT－testと12分間走、 BBはT－testと12分間走に有意な相関が認められた。FB・SB・BBのような姿勢を一定時間保持する体幹筋機能は、T－testや12分間走と関係することが考えられた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：新谷健、橋本雅至、田頭悟志、 木下和昭、清野大輔
87. Bridge姿勢を用いた体幹筋機能評価における腹筋と背筋の不均衡についての検討	－	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	体幹筋機能評価としてBack Bridge test（BB）とFront Bridge test（FB）の測定値から、 BB（背筋）とFB（腹筋）の不均衡が動作テストに与える影響を検討した。結果、BB／FB高値群（BB優位）のBB＋FBは3回片足跳び、20m走、50m走、T test、12分間走との間に有意な相関が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：高嶋厚史、橋本雅至、田頭悟志、 新谷健、福本貴典、板矢悠佑、幸田康宏、 木下和昭、大槻伸吾
88. 体幹筋機能の左右差がランニング動作へ及ぼす影響	－	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	サッカー選手に対して傷害予防やパフォーマンスの向上を目的に介入し、体幹筋機能の左右差とランニング動作との関連を調査した。体幹筋機能評価はFront Bridge test（FB）、Side Bridge test（SB）を実施し、ランニング動作は50m走、 Ttest、12分間走とした。体幹筋機能評価より左右差あり群と左右差なし群に群分けを行い、ランニング動作との相関を調査した。結果、体幹の安定性が必要なランニング動作では体幹機能がランニングの動作に影響を及ぼすことが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：田頭悟志、橋本雅至、新谷健、 板矢悠佑、福本貴典、高嶋厚史、幸田康宏、

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				木下和昭、大槻伸吾
89. 成長期スポーツ障害の腰椎分離症と非特異的腰痛のX線による腰椎分節可動域の違い	－	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	成長期スポーツ選手の腰椎分離症と非特異的腰痛における腰椎の各椎体間の可動性について検証した。X線またはMRIにてL5片側の腰椎分離症（分離群）と診断された10名と、非器質的腰痛症（腰痛群）と診断された12名の臥位腰椎側面像のX線動態撮影により、L1－Sの各椎体間の最大伸展時の前弯角および最大屈曲時の後弯角を測定し、さらに最大伸展時と最大屈曲時の腰椎分節角を計測し、その差から各椎体間の分節可動域を算出した。結果、最大伸展時の前弯角は、分離群が腰痛群に比して高値を示し、腰椎の分節可動域は、分離群が腰痛群に比して高値を示した。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：中尾英俊、稲葉考洋、森藤武、 金子元春、木下和昭、橋本雅至、大槻伸吾
90. 小学生軟式野球選手におけるSide Bridge testの有用性	－	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	小学生軟式野球選手に野球検診を実施しており、今回、小学生軟式野球選手にSBを実施し、傷害との関連を調査し、さらにSBの負荷量設定を検討した。結果、今回の条件下の調査においては、SBと投球による傷害との関連は認められなかった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、 佐治隆彦、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、 廣瀬ちえ、橋本雅至、大場友裕、木下和昭、 高嶋厚史、石東友輝、吉川晋矢
91. 器質的な投球障害肘を有する小学野球選手の肩関節・体幹可動域の特徴	－	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	器質的な投球障害肘を有する小学生野球選手 における肩関節・体幹可動域の特徴を検討した。対象は、投球障害肘と診断された小学生野球選手（以下、障害群）と健常な小学生野球選手（以下、健常群）とした。投球側の肩関節2nd外旋は障害群が健常群に比して有意な可動域減少が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：植田篤史、橋本雅至、木下和昭、 小島喜義、衛門良幸、大槻伸吾
92. 下肢筋タイトネスがボールキック動作時の骨盤前傾角度に及ぼす影響の検討	－	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	下肢筋タイトネスがボールキック動作時の骨盤運動や肢位に及ぼす影響を検討した。 三次元動作解析システムにて、利き脚のインステップキックを解析した。踵腎間距離（HBD）と骨盤前傾角度の最大値に有意な相関は認められなかった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：福本貴典、橋本雅至、田頭悟志、 新谷健、板矢悠佑、高嶋厚史、幸田康宏、 木下和昭、大槻伸吾
93. 小学生軟式野球選手におけるSide Bridge testと投球障害	―	平成28年5月	第51回 日本理学療法学術大会 （札幌）	軟式野球連盟に加入している小学生に対して投球障害を早期発見することを目的に野球検診を実施している。投球動作においては，上肢機能だけでなく下肢，体幹機能の重要性が報告されている。今回，体幹筋機能の検査方法を取り入れ、小学生にSide Bridgetestを実施し投球障害との関連を調査した。結果、Side Bridge testの保持時間は投球側､非投球側ともに肘障害群と障害なし群の間に有意差は認められなかった。点数の差は肘障害群が障害なし群に比べ、有意に大きい結果であった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、 佐治隆彦、藪本浩光、伊藤盛春、廣瀬ちえ、 橋本雅至、木下和昭、高本晴輝
94. 高校男子サッカー選手におけるシンスプリント既往者の疾走動作の特徴について	―	平成28年5月	第51回 日本理学療法学術大会 （札幌）	シンスプリント（Medial Tibial Stress Syndrome 以下，MTSS）の発生要因は下腿内側筋群の伸張性低下や足部の過回内による伸張ストレスによるとの報告が多い。我々は高校男子サッカー選手に対するフィジカルチェックにて明らかな特徴が認められなかった。そこで今回、MTSS 群と MTSS 既往の無い群（以下，control 群）の動作時アライメントを比較しMTSS 群の動作的特徴を検討した。 結果、静的アライメントと ROM には有意差が認められなかったが、動的アライメントでは 足関節の回内角度と足部外転モーメントに有意差が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：幸田康宏、田頭悟志、新谷健、 福本貴典、板矢悠佑、高嶋厚史、林孝明、 春日勇磨、木下和昭、橋本雅至
95. 野球経験年数での肩関節回旋可動域の変化	―	平成28年7月	第8回 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （福岡）	小中学生の野球経験年数別での肩関節可動域の変化について検討した。結果は野球経験年数の増加に伴い、両側共に肩関節90°外転位での外旋角度と全可動域に有意な低下傾向が認められた。以上より、小中学生の野球選手の肩関節90°外転位での外旋角度と全可動域は野球経験の増加に伴い減少していくことが考えられ、今後の投球障害治療の一助となる可能性が示された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：木下和昭，中川泰彰，向井章悟，佐治隆彦，藪本浩光，井上直人，橋本雅至，大槻 伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
96. 成長期野球選手の腰椎分離症における股関節屈筋群と伸筋群の筋力の検討	－	平成28年9月	第42回 日本整形外科スポーツ医学会 （札幌）	腰椎と股関節の運動時における連動について着目し、腰椎分離症による腰痛と、股関節周囲筋の筋機能との関連性について検討した。結果、分離症を有する選手の投球軸足股関節の屈曲筋力、伸展筋力ともに低く、ステップ脚の股関節屈曲筋力が有意に低かった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：中尾英俊，稲葉考洋，木下和昭，濱田太朗，森藤武，橋本雅至，大槻伸吾
97. ボールキック動作における体幹運動の解析	－	平成28年9月	第42回 日本整形外科スポーツ医学会 （札幌）	サッカー選手の特有なボールのキック動作では、骨盤から下肢の分析が多く、体幹の詳細な分析は少ない。今回はキック動作中の体幹運動に着目し検討した。結果、インステップキックは体幹伸展位、蹴側へ側屈させて力を貯め、インパクトに向けて骨盤と胸郭が相反する動きを伴いながら、急激に体幹を屈曲し、軸側方向へ側屈させていくことが示唆された。また水平面上では骨盤と胸郭が相反する回旋を伴いながら体軸を調整し、脊柱を一定方向へ回旋させている可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中尾英俊，福本貴典，大槻伸吾
98. 童期野球選手における肩肘関節障害者の肩関節可動域の特徴～健常群と障害群との比較～	－	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	学童期野球選手における野球経験年数別での肩、肘関節に障害を有する者の肩関節可動域の特徴について検討した。野球開始1年目から4年目の障害群では、投球側の2nd外旋と2nd全可動域が健常群に比して有意に可動域が低下していた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：木下和昭、中川泰彰、向井章悟、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、井上直人、廣瀬ちえ、橋本雅至、大槻伸吾
99. 中学生と高校生野球選手における投球障害の危険因子の違い	－	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	投球障害（Throwing Injury、以下TI）の危険因子を年代別で調査しTIの要因となる成長に伴う身体的特徴の違いについて検討した。TIと関連性の高かった項目は小中学生では投球側elbow push testとlnitial abduction test、高校生では投球側EPTと肩関節2nd外旋可動域、股関節内旋可動域左右差であった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				研究指導 共同発表者：衛門良幸、橋本雅至、小島喜義、植田篤史、大木毅
100. 小学生軟式野球選手におけるSide Bridge testと投球障害肘との関係 ～第2報～	－	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	小学生野球選手に対して野球肘検診を実施しており、小学生野球選手の体幹筋機能検査として我々が用いているSide Bridge test（SB）の負荷設定の変更が必要であることを報告した。今回、SBの負荷を変更し投球障害との関連を調査した。SBの差は肘傷害群が低い傾向であったことから、SBの結果に左右差が認められることが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、廣瀬ちえ、橋本雅至、木下和昭
101. 座位での体幹荷重支持機能評価における筋活動	－	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	動作の体幹機能評価として、端座位での立ち直り姿勢から鉛直方向への負荷を課した方法（体幹荷重支持機能評価）を用いている。今回は本法の筋活動を検討した。体幹荷重支持機能評価において、腹直筋、内腹斜筋、外腹斜筋、多裂筋、腹横筋が有意に高かった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、中尾 英俊、板矢悠佑、福本貴典、高嶋厚史、田頭悟志、田邊智、大槻伸吾
102. 高校野球選手の腰痛症の体幹・股関節筋力と腰椎アライメントとの関係性	－	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	野球選手の腰痛発生頻度は高く、今回、ハンドヘルドダイナモメーター（HDD）にて野球選手の体幹と股関節の筋力を測定し、腰痛者と腰痛の既往がない者で比較した。腰痛群の筋力は股関節屈筋群が低下傾向を示し、同様に腰椎 アライメントは前湾角が小さいことが認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：中尾英俊、木下和昭、橋本雅至、大槻伸吾
103. 階層別Core stability testにおける身体重心動揺についての検討	－	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	幅広い筋機能レベルの評価が可能となるように階層別Core stability test（CST）を難易度別に考案し、身体重心動揺の観点から、評価方法の難易度の設定に関する妥当性を検討した。単位軌跡長、加速度は有意に増加し、難度が高くなることにより姿勢保持における不安定性が増加することが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：高嶋 厚史、橋本雅至、田頭悟志、新谷健、福本貴典、板矢悠佑、幸田康宏、木下和昭、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
104. 男子高校野球選手におけるSide Bridge Testと走タイムの関係性	―	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	男子高校硬式野球部員に対して、体幹筋機能検査としてSide Bridge Test（以下、 SB）を実施しており、テストの目標値を提示するために走タイムとの関連性を検討した。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：板矢悠佑、橋本雅至、田頭悟志、木下和昭、新谷健、福本貴典、高嶋厚史、幸田康宏、大槻伸吾
105. 片側の体幹の荷重支持機能の向上が動作に与える効果	―	平成29年5月	第52回 日本理学療法学術大会 （千葉）	歩行や走行，ジャンプ動作では体幹に対して鉛直方向に荷重負荷が加わりながら，片脚で支持するような場面が求められ，その時の体幹機能の評価方法として座位での片側の体幹荷重支持機能（Trunk Righting Test，TRT）に着目している。今回、TRT の向上がどのような動作能力の向上に効果を与えるのか検討することとした。結果、pre 期と post 期の間では TRT と膝関節伸展の最大等尺性筋力，ジャンプ効率に有意な増加が認められ，side hop test には有意な低下が認められた。post 期と retraining 期の間では TRT，ジャンプ効率に有意な低下が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本 雅至，中尾 英俊田頭悟志，大槻 伸吾
106. 小学生野球選手における肩肘関節障害発生者の肩関節可動域の特徴1年間の縦断的検討	―	平成29年6月	第９回 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （札幌）	1年間に肩肘関節の障害が発生した小学生野球選手の肩関節可動域の特徴について検討した。対象は2015年度から2016年度の1年間に肩肘関節に障害を有さなかった小学生野球選手（健常群）140名と肩肘関節に障害を有した小学生野球選手（障害群）38名とした。結果、障害群は2015年度に比して2016年度の投球側の2nd外旋が有意に低下していた（p＜0.05）。小学生野球選手において新規に発生した肩肘障害者は投球側の2nd外旋が低下していた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：木下和昭，中川泰彰，向井章悟，佐治隆彦，薮本浩光，井上直人,伊藤盛春，橋本雅至，大槻伸吾
107. 高等学校におけるスポーツ活動支援事業の利用状況とその意義	―	平成29年9月	第43回 日本整形外科スポーツ医学会 （宮崎）	本学では付属の高等学校に対し、スポーツ活動支援事業を実施している。本研究の目的は、その事業の利用者状況とその意義について考察する。結果、開始当初は受診率が低値であったが、継続的に活動を行うことにより増加する傾向であった。また医療機関を受診した者は、重度なスポーツ傷害と診断された利用者も存在し、医療機関への受診の重要性が示唆された。これらの結果は、学校保健内において理学療法士が顧問や保護者と良好な関係を保ちながら、継続的なスポーツ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				活動支援事業を実施する重要性を示唆する。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、澳昂佑、北川智美、長野聖、森永敏博、星野祐一、廣島和夫
108. 倒立姿勢保持における肘関節と肩甲骨周囲の筋活動～上肢の肢位の違いによる変化～	－	平成29年11月	第28回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	小学生女子の器械体操選手の肘関節障害に着目して、競技特性である上肢での荷重肢位における筋活動から、力学的考察を行った。特に肘関節障害の小学生に多い、肩関節回旋位に観点を置き肩甲骨から肩関節肘関節の制御する筋活動に代償運動を示す運動を示唆する筋活動が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、横田尚子、澳昂佑、来田宜幸、星野祐一
109. 姿勢保持の難度別に分けたCore stability test の筋活動につい ての検討	－	平成29年11月	第28回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	Core stability test を用いて体幹筋機能を測定するにあたり、対象者の身体特性を反映して用いる姿勢保持に難度別の条件を検討している。実際に考案した方法ごとに筋活動を測定し、難度ごとに筋活動から見た運動負荷の違いを検討した。結果、いくつかの条件間で有意差が認められ、難度別に分けることがより具体的になった。。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：高嶋 厚史、橋本雅至、田頭悟志、福本貴典、板矢悠佑、木下和昭、大槻伸吾
110. 小学生軟式野球選手における関節可動域の経年変化と投球障害肘との関係	－	平成29年11月	第28回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	小学生の野球選手に対して継続して関わり、メディカルチェックを行っている。対象の小学生の肘関節障害が、スポーツ活動を継続し、時間経過を伴ってどのように発生するかを検討している。今回は左右の関節可動域に着目して股関節の回旋可動域の減少と肘障害発生との関連性を示唆した。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、橋本雅至、木下和昭
111.器械体操に必要な倒立姿勢と身体因子との関連性	－	平成30年6月	第10回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （福岡）	直線的な倒立と身体因子の関係について検討した.倒立の評価は,静止画撮影にて倒立時の肩関節屈曲角度(以下,肩屈曲)と胸骨の傾斜角度を求めた.身体因子の測定項目は肩甲上腕関節と肩甲胸郭,体幹の柔軟性,複合的な肩関節の柔軟性,肩-肩甲骨の荷重位での安定性,体幹筋機能,バランス能力とした.結果,直線的な倒立は,各関節の柔軟性よりも,胸郭を含めた肩関節の可

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				動性と肩-体幹の安定性が影響していた. 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，横田尚子，澳昂佑，来田宣幸，西澤勇一朗，星野祐一
112.腰痛症の高校野球選手に対する股関節筋力トレーニングが腰椎前弯角に及ぼす影響	ー	平成30年6月	第10回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会（福岡）	高校野球選手に股関節屈曲筋力トレーニングを実施させ、腰椎前弯角と腰痛の変化を検討した。対象は腰痛群12名と、腰痛がない選手16名をコントロール群とした。トレーニング期間は4週間とした。介入前後に腰椎前弯角と体幹・股関節筋力を計測した。なお腰痛群のみVASを評価した。結果、股関節屈曲筋力トレーニングは、腰椎アライメントの変化と自覚的な痛みの改善に影響を与えた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：中尾英俊，木下和昭，橋本雅至，大槻伸吾
113.小学生軟式野球選手における投球障害肘発症時の体幹筋機能の変化	ー	平成30年9月	第44回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（徳島）	投球障害発生の原因として体幹筋機能の低下はその一要因としての報告があり、小学生軟式野球選手を対象に体幹筋機能検査としてSide Bridge testの変化を調査した．過去1年以内に投球側の肘関節に障害の経験がない小学5年生54名を対象とし，Side Bridge testの1年の変化を調査した．結果，新たに投球障害肘を発症した選手は，投球側のみSide Bridge testの向上が認められなかった．成長に伴い体幹筋機能の向上が認められない場合，小学生軟式野球選手の投球障害肘発生に影響を与えている可能性が示唆された. 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：井上直人，中川泰彰，向井章悟，横田尚子，橋本雅至，木下和昭
114.ジュニア体操競技における倒立時の疼痛調査	ー	平成30年9月	第44回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（徳島）	H県ジュニア体操競技選手権大会に出場した選手に対して倒立時の疼痛発生頻度や部位について検討した。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，横田尚子，澳昂佑，来田宣幸，西澤勇一郎，星野祐一
115.地域在住高齢者における体幹筋機能とロコモティブシンドロームとの関係について144.	ー	平成30年9月	第44回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（徳島）	健康教室に通う地域高齢者を対象に、体幹筋機能検査を行い、体幹機能と身体活動量との関係を調査した。結果、体幹機能の良好な高齢者と機構低鏡と止められる高齢者では、日常生活での身体活動量に客観的な差が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：高嶋厚史，大槻伸吾，橋本雅至，田頭悟志，新谷健
116.地域在住高齢者の園芸活動の実態 ～園芸習慣のアンケー	ー	平成30年9月	第8回日本認知症予防学会学術集会（東京）	地域の高齢者において園芸を行う理由は男女で異なるが，他者と関わり，つながるツールとして園芸が介在

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
トからわかったこと～				していることが示唆された。また、前期高齢者と後期高齢者では園芸をする環境条件は違っており，年を重ねてからも，その時の身体機能に沿った方法で継続することが可能な趣味活動であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：髙野珠栄子，田崎史江，橋本雅至，野村和樹，山口隆司，中村美砂
117.健康教室へ参加されている高齢者に対する体幹機能評価法が血圧・心拍数に及ぼす影響について	―	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	高齢者の体幹機能をブリッジ姿勢にて評価し、その評価方法が血圧と心拍数に及ぼす影響について検討した。ブリッジ姿勢を用いた体幹機能評価法は、血圧と心拍数の観点からアメリカスポーツ医学会が定める基準の範囲内での変化であったため安全に実施可能であることが示唆された. 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：田頭悟志，橋本雅至，高嶋厚史，福本貴典，新谷健，大槻伸吾
118.小学生軟式野球選手の肘障害に影響を与える因子　1年前の検診結果から	―	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	本研究は1年前の野球検診（以下、検診）の結果から肘障害に影響を与えている因子について検討した。対象は2015年から2017年に行われた検診に、2年連続で参加した小学生軟式野球選手474名とした。学童期軟式野球選手では、筋力やパフォーマンスが高く、野球開始年齢が遅い選手ほど、肘障害の原因となる関節への力学的負荷が大きくなる可能性が示唆された. 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，中川泰彰，向井章悟，伊藤盛春，井上直人，横田尚子，橋本雅至
119.Side-bridge姿勢における股関節の肢位の違いが腰部周囲筋の筋活動に及ぼす影響	―	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	Side－bridge姿勢における股関節の肢位の違いが腰部周囲筋の筋活動に及ぼす影響を検討した。Side－bridge姿勢における挙上側の股関節肢位の変化は、体幹の姿勢制御に必要なローカル筋群の筋活動に加えて、股関節より遠位の下肢姿勢保持による負荷量の増大に対応した腰部周囲グローバル筋の筋活動が増大すると考えられた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：齋藤優季，木下和昭，橋本雅至，来田宣幸，大槻伸吾
120.高校男子サッカー選手におけるBridge姿勢の保持時間と筋厚との関係性	―	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	Bridge姿勢の保持時間と筋厚との関係性及びトレーニング効果について検討した。Side Bridge（SB）とFront Bridge（FB）においてトレーニング群は非運動群よりSB・FBの保持時間と筋厚は優っていたが、SB・FBの保持時間と筋厚との相関はなく、Bridge姿勢の保持には筋持久力や共同運動などが影響すると推察された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				共同発表者：新谷健，橋本雅至，木下和昭，田頭悟志，福本貴典，高嶋厚史，大槻伸吾
121.中高齢者の足部アーチ低下の身体要因について	―	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	40歳代以降の足部アーチ高に着目し、低アーチの要因について検討を行った。対象は124名（男性43名）調査方法は足の測定としてアーチ高と自記式のアンケート調査を行った。BMIのオッズ比0.84と独立関連因子となった 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：中尾英俊，木下和昭，森藤武，濱田太朗，橋本雅至，大槻伸吾
122.段階づけた倒立姿勢における肩関節と肩甲骨周囲筋の筋活動の変化	―	平成30年12月	第6回日本運動器理学療法学術大会（福岡）	上肢傷害からのスポーツ復帰やジュニア世代の体操選手での倒立練習は、上肢への荷重負荷を段階づける方法が重要である。そこで本研究は段階づけた倒立の練習方法における筋活動について検討した。肩関節角度90°位と比較すると、135°位は肩甲骨周囲筋の筋活動の増大が起こり、倒立まで上体を挙げることにより、さらに肩甲上腕関節周囲筋の筋活動の増大が起こることが明らかとなった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，横田尚子，澳昂佑
123.運動講座に参加している高齢者における体幹筋機能と下肢機能及び移動能力との関係について	―	平成30年12月	第6回日本運動器理学療法学術大会（福岡）	体幹筋機能の向上と下肢機能や移動能力の向上には、関係性があると考えられる。本研究では一定の運動習慣のある高齢者に対して、体幹筋機能と下肢機能や移動能力との関係性について検討した。運動習慣のある高齢者においてブリッジ姿勢で難度の高い姿勢を保持できることが、下肢機能や移動能力の結果と関係していることが示され、一定以上の体幹筋機能を有することが下肢機能や移動能力の向上に必要であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：高嶋厚史，橋本雅至，田頭悟志，新谷健，福本貴典，木下和昭，大槻伸吾
124.倒立時の上肢障害予防に着目した練習方法の筋活動の検討(Muscle Activity Analysis of Exercise Methods Focusing on The Prevention of Upper Limb Disorders During a Handstand)	―	令和1年6月	第11回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会（札幌）	This study was to examine the muscle activity during handstands in a graded manner. The muscle activities were evaluated with the upper limb in flexion of 90°, 135°, and 180° positions and during handstand using the forearm (elbowstand). The scapular muscles showed increased muscle activity with increasing shoulder flexion angle in all postures. The shoulder muscles exhibited increased muscle activity from the 90° position to the 180° position. The elbowstand showed significantly increased muscle activity in the upper and middle trapezius muscles compared to that in the 135° position. 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下 和昭，横田 尚子，橋本 雅至，澳昂佑，来田 宣幸，西澤 勇一郎，星野 祐一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
125.コアトレーニングを効果的に進めるために、体幹(筋)機能を適切に捉える評価について	－	令和1年8月	第45回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（大阪）	体幹筋機能の評価として考案したブリッジテストについて解説した。従来使用されるクラウスウェーバーテスト大阪市大変法との関係について検討し、実際に行ってきた成長期のスポーツ選手の測定とデータ蓄積から、その評価方法としての有用性を検討した研究を紹介した。また、コアトレーニングの継続による、体幹筋機能評価の成績の推移と腰痛発生との関係について検討した研究などから、トレーニングとその客観的な評価の重要性について提案した。
126.ジュニア体操競技選手における段階づけた倒立練習方法の有用性	－	令和1年11月	第30回日本臨床スポーツ医学会学術集会（横浜）	ジュニア体操競技選手に対して、段階づけた倒立練習方法の導入による上肢の疾痛発生件数と身体機能の変化について検討した。段階づけた倒立練習方法の亭入は、肘痛を予防する一手段となることが考えられた。一方、その予防においては、体幹の筋機能や柔軟性、肩ー肩甲骨の荷重位での安定性など多角的な変化が重重要であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下 和昭，横田 尚子，橋本 雅至，来田 宣幸，西澤 勇一郎，星野 祐一
127.上肢支持を除外したSide Bridgeの筋活動について	－	令和1年11月	第30回日本臨床スポーツ医学会学術集会（横浜）	上肢支持を除外したSBの筋活動を調査し、トレーニングとして有用であるかを検討した。内腹斜筋、中殿筋、大腿筋膜張筋、腓骨筋は下肢挙上をすることにより筋活動は有意に上昇した。僧帽筋、前鋸筋は台を使用すると筋活動は有意に低下した。台を使用し上肢支持を除外することにより、体幹、下肢への筋活動を減少させることなく上肢の筋活動を低下させることが可能であった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：田頭 悟志，橋本 雅至，木下 和昭，高嶋 厚史，福本 貴典，大槻 伸吾
128.一般ランナーと非運動者の足部アーチアライメントおよび足部の既往等に関するアンケート調査の比較	－	令和2年11月	第31回日本臨床スポーツ医学会学術集会（神戸）(Web開催)	対象はマラソン大会に出場した39名(女性12名)，平均41.7歳と日常的に運動習慣がない者111名(女性31名)，平均年齢41.7歳、両群の足部アーチ高比（足背高/切頂足長），身長，体重，BMI，足部の既往歴と既往歴による歩行困難感の有無を比較した。結果、非運動群に比べR群のアーチ高比は左右とも高く，足の既往および歩行障害の経験の割合が高いことがわかった. 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：中尾 英俊，森藤 武，濱田 太朗，橋本 雅至
129.ジュニア体操競技選手における Sever 病が発生する身体因子	－	令和2年12月	JOSKAS/JOSSM2020	ジュニア体操競技選手におけるSever病が発生する身体因子を検討した。結果、足アーチ高率が低い選手ほどsever病が発生しやすいことが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，横田尚子，橋本雅至，西澤勇

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				一郎，星野祐一
130.男子小学陸上競技選手における足趾把持筋力と100m走記録の関係	―	令和3年10月	第32回日本臨床スポーツ医学会学術集会（東京）	足趾把持筋力（TGS）は、静止立位および前傾姿勢の安定性や転倒などに関連している。TGSと100m走の関係について検討した．結果、TGSと100mの関係は、4年および5年において有意な相関が認められた。TGSは走行時の蹴り出しに関与しており、小学陸上競技選手を対象とした場合でもTGSは100m走に影響する可能性を示した。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：濱口幹太，露口亮太，橋本雅至，中西康人，仲田秀臣，宮本忠吉，大槻伸吾
131.高校生中・長距離選手の足部評価と走タイムの関係性について	―	令和4年2月	第36回日本体力医学会近畿地方会(神戸)	足部を評価する方法であるArch height index（AHI）と走タイムの関係性について検討した。結果、男性では、アーチが低いほど、3000mの走タイムが速い結果が示された。女性においては、足趾把持筋力が高いほど1500mが速い結果であった。よって、足部評価と走タイムの間には関係を示す可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：濱口幹太、露口亮太、橋本雅至、仲田秀臣、宮本忠吉、大槻伸吾
132.小学生における足部機能と身体機能の関連　足アーチと足趾把持筋力に着目して	―	令和4年8月	第69回日本教育医学会大会（大阪　オンライン開催）	本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：濱口 幹太，露口 亮太，吉田 平，橋本雅至，仲田 秀臣，大槻 伸吾
133.男子小学生の陸上競技経験の有無における足趾把持筋力と走速度の関係について	―	令和4年10月	第33回　日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：濱口 幹太，露口 亮太，吉田 平，橋本雅至，仲田 秀臣，大槻 伸吾
134.高校生中・長距離選手の足部評価と走タイムの関係性について	―	令和4年10月	第77回　日本体力医学会（栃木　オンライン開催）	本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察 研究指導 共同発表者：濱口幹太、露口亮太、橋本雅至、仲田秀臣、宮本忠吉、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（研究会、その他）				
28. 高校男子サッカー選手における関節弛緩性とその特徴	－	平成25年6月	第23回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	運動量が多い高校サッカー選手の関節弛緩性について調査した。成長期の高校生において関節の安定性や不安定性はスポーツ障害の要因になることが考えられ、個人差が多い成長段階にあるスポーツ選手の特徴を考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：山崎岳志，橋本雅至，井上直人，古川博章，吉川晋也，石東友輝
29. ハンドヘルドダイナモメーターを用いた体幹機能評価方法の信頼性と妥当性	－	平成25年6月	第23回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	体幹筋の筋力測定にハンドヘルドダイナモメータを用いた測定に関してその再現性について級内相関係数を用いて検討を行った。再現性のある方法として課題が残り、方法のさらなる検討を必要とする。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，米田勇貴，中雄太，北西秀行，大八木博貴，柴沼均
30. Trunk Righting Test と体幹機能の関係性	－	平成26年6月	第24回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	体幹機能評価として考案したTrunk Righting Testと体幹筋の持久性と協調性を見るブリッジテストとの関連性から、体幹筋の評価方法について検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，北西秀行，井上直人，植田篤志
31. 足部横アーチ変化の測定方法の検討	－	平成26年6月	第24回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	外見の形状では測定が困難である足部横アーチの客観的な測定方法について考案し、その方法の有用性について検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，藤竹俊輔，来田晃幸，岸本恵一，橋本雅至，大槻伸吾，大久保衛，熊井司，田中康仁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				熊井司，田中康仁
32. 高校部活動に対するフィジカルサポート	―	平成27年6月	第25回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	縦断的に行っている高校サッカー選手へのフィジカルサポートについて具体的に紹介した。今まで行ってきた経験から得た課題について考察を加えた。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志、新谷健、福本貴典、板矢悠祐、高嶋厚史、幸田康宏、林孝明、橋本雅至
33. 大学サッカー選手の人工芝グラウンドにおけるスポーツ傷害の経時的変化-人工芝グラウンドに対するゴムチップ補充の影響-	―	平成27年6月	第25回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	サッカー競技中に発生する外傷や障害を引き起こす要因は，選手が使用しているグラウンドサーフェイスも一要因になると報告されている。今回，長期経過した人工芝グラウンドに特殊珪砂やゴムチップを補充したことによる，スポーツ傷害発生への影響を検討した．結果、人工芝グラウンドでは年数が経過するとともに下肢捻挫発生率が増加し，ゴムチップの補充後では下肢肉離れの発生率が有意に減少した． 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，藤竹俊輔，来田晃幸，岸本恵一，橋本雅至，大槻伸吾，大久保衛，熊井司，田中康仁
34. 腰椎分離症者のスポーツ復帰期間による腰椎前弯角と腰椎椎間可動域の違い	―	平成28年6月	第26回 関西臨床スポーツ医科学研究会（大阪）	腰椎矢状面上のアライメント評価は、分離症のストレス要因の特徴を見出すうえで重要な項目であると考えられる。今回、スポーツ復帰までの期間を急性期と亜急性期との境界である4週経過を基準とし、X線撮影による腰椎前弯角と腰椎椎間可動域について検討した。結果、腰椎（L1-S）前弯角は、最大屈曲時、4週未満群に対し、4週以上群は低値を示し、最大伸展時では、4週未満群に対し4週以上群は高値を示した。腰椎椎間可動域は、4週未満群に対し、4週以上群は低値を示した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊、稲葉孝洋、木下和昭、森藤武、橋本雅至、大槻伸吾
35. 姿勢保持の難度別に分けたCore stability testの保持時間についての検討	―	平成29年6月	第27回 関西臨床スポーツ医科学研究会（大阪）	我々は、体幹や股関節周囲筋の総合的な筋機能を反映するBridge活動を利用したSide Bridge(SB)とFront Bridge(FB)をCore stabilityの評価として用いている。客観的な指標として姿勢の保持時間を用いて評価してきたが、多様な対象者に対する評価として課題があった。そこで今回、姿勢保持の難度に着目することが必要であると考え、SBとFBの姿勢を難度に分けて階層別に評価する方法としてCore stability test(CST)を考案した。結果、SBとFBの両姿勢においてB、C、D順に姿勢保持時間が有意に長くなっていた。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋厚史、橋本雅至、田頭悟志、新谷健、福本貴典、板矢悠佑、木下和昭、大槻伸吾

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和５年３月31日

氏名　山形　力生

研究分野	研究内容のキーワード
日常生活援助技術 高齢者支援 臨床教育技術	福祉用具（自助具）、住宅改造、障害と日常生活、 高齢に伴う機能低下に対する援助、生活環境への援助

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1）講義資料の作成	平成18年 ～ 平成31年	姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科 科目名「福祉機器特論、チーム医療特論、身体障害作業療法治療学、作業療法理論特論」講義内容によって多くの専門書等から資料を集め授業資料を作成した。
	令和元年 ～ 令和４年	奈良学園大学リハビリテーション学科作業療法専攻 科目名「作業療法概論、身体障害作業療法治療学、日常生活活動学、生活環境学等」講義内容によって多くの専門書等から資料を集め授業資料を作成した。
2)パソコンを利用した視聴覚教材の作成	平成18年 ～ 平成31年	姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科 科目名「福祉機器特論、チーム医療特論、身体障害作業療法治療学、作業療法理論特論」講義内容によって、できるだけイメージできるように写真スライドの作成・提示、アニメーションによる図表を多く取り入れた。
	令和元年 ～ 令和４年	奈良学園大学リハビリテーション学科作業療法専攻 科目名「作業療法概論、身体障害作業療法治療学、日常生活活動学、生活環境学等」講義内容によって、できるだけイメージできるように写真スライドの作成・提示、アニメーションによる図表を多く取り入れた。
3)演習問題の提示	平成18年 ～ 平成31年	姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科 科目名「身体障害作業療法治療学」前期、後期のそれぞれ中期および後半の時期に演習問題を提示し、学習内容がどの程度身に付いているかを学生自ら点検してもらう機会とした。また、これにより学生が適切に学期末試験の準備ができるように配慮した。
	令和元年 ～ 令和４年	奈良学園大学リハビリテーション学科作業療法専攻 科目名「作業療法概論、身体障害作業療法治療学、日常生活活動学、生活環境学等」講義内容によって、前期、後期のそれぞれ中期および後半の時期に演習問題を提示し、学習内容がどの程度身に付いているかを学生自ら点検してもらう機会とした。また、これにより学生が適切に学期末試験の準備ができるように配慮した。
4)学期末試験の工夫	平成18年 ～ 平成31年	姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科 「身体障害作業療法治療学」出題形式を客観テストと記述試験をバランス良く作成した。客観テストでは国家試験を意識した回答方法を盛り込んだ。これにより学生が国家試験の回答方法に慣れるようにした。記述試験は、文章表現等の表現力の育成をねらいとし、作成に工夫をこらした。

	令和元年 ～ 令和４年	奈良学園大学リハビリテーション学科作業療法専攻 科目名「作業療法概論、身体障害作業療法治療学、日常生活活動学、生活環境学等」出題形式を客観テストと記述試験をバランス良く作成した。客観テストでは国家試験を意識した回答方法を盛り込んだ。これにより学生が国家試験の回答方法に慣れるようにした。記述試験は、文章表現等の表現力の育成をねらいとし、作成に工夫をこらした。
5)学年担任およびチューター活動	平成 20 年 ～ 令和４年	入学より卒業までを継続して担当している。定期的に学生個人面談を行い、各学生の課題の確認と指導、学科教員への周知に努めている。担当学生が１回生時には、学習面に加え学校生活全般の状況把握を行い、２回生時は学習面を重点的に指導・助言を行った。3 回生からは臨床実習時の状況把握と必要な指導を行っている。
6)臨床実習訪問指導	平成 20 年 ～ 平成 31 年	2 回生時および 3 回生時の臨床実習実施中に、実習施設に訪問し、学生の問題や今後の実習の目標について、実習指導者と協議する。毎年、各学年延べ 20 施設程度の実習訪問指導を行った。
7)臨床現場技術指導	平成 23 年 ～ 平成 31 年	卒業生を対象に週１回、近隣のリハビリテーションの臨床現場において技術指導を行っている。在校生の臨床実習指導を担当する指導者の養成も兼ねている。
２　作成した教科書，教材 1)教科書「作業療法士が選ぶ自助具・生活機器」	平成 22 年 ～ 平成 31 年	臨床でよく使われる自助具・生活機器について紹介し、必要な材料、制作方法、適応事例などについて紹介した。（255 頁） 頸髄損傷などの四肢麻痺に対するコンピューター機器に対する自助具についての項を解説した。(P. 124～P. 126) 後に、姫路獨協大学で「福祉機器特論、身体障害作業療法学」の資料として使用した。
2)教科書「生活支援技術・介護過程」（黎明書房）	平成 22 年 ～ 平成 31 年	居住環境の整備や身じたく、移動、食事、入浴、排泄、睡眠等における実践的な介護の方法と、介護過程の意義から実例をふまえた介護の実践的展開やチームアプローチまでを、初めて学ぶ人でも分かるようイラストや図を交え解説した。 第２章 自立へ向けた居住環境の整備を担当　(P24-P40) ヘルパーを対象にした講習において教科書として使用した。
3) 教科書「老年看護学」（ピラールプレス）	平成 22 年 ～ 平成 31 年	高齢者の身体的・心理的特徴を十分把握したうえで、高齢者のQOLの向上を目指した看護実践を意識的に取り上げた、老年看護の実践に向けての質の評価への取り組みを盛り込んだ看護学生向けのテキストとして使用した。
4)教科書「介護実習入門」（黎明書房）	平成 24 年	介護福祉士の養成科目のテキストとして作成、使用した。高等教育に向けた豊かな専門性と人間性の構築という主旨を踏まえたうえで、介護の専門援助に焦点を当て、その内容・方法を具体的に示した。
5)「身体障害作業療法学実習」の補助教材	平成 22 年 ～ 平成 31 年	PBL(問題解決型学習)のために、学生の主体的なグループワークにより進められるが、その臨床症例を実際の症例から選択し、教材用に修正し作成した。学生はこの教材を基に、グループワークを行った。

6)OSCE（客観的臨床能力試験）のための模擬患者症例プロフィール資料	平成 22 年 ～ 平成 31 年	学生が受ける試験の模擬患者のプロフィールを実際の臨床例に照らし合わせ作成した。症例は、脳卒中などの内科系と骨折などの整形外科の 2 症例作成した。4 回生の総合臨床実習前の客観的臨床能力試験の学生提示資料として使用した。
7)実体験型課題「動作分析のフローシート」の作成	平成 22 年 ～ 平成 31 年	「日常生活活動学」において日常の動作の分析を学習する際に、実際の動作分析を教材として行う。初学者の学生でも動作分析が身につくように、動作分析のフローシートを作成した。このシートに書き込むことで動作の分析が段階的に学習できるように工夫した。 食事・更衣・トイレ・整容・入浴の 5 種類の動作につい
8)演習問題の作成	平成 22 年 ～ 平成 31 年	「日常生活活動学、身体障害作業療法学」のそれぞれの中期および後半の時期に演習問題を分野ごとに 20 問程度作成した（合計 80 問）。学習内容がどの程度身に付いているかを学生自ら点検してもらうために使用した。
9)国家試験模擬試験の作成	平成 25 年 ～ 平成 31 年	実際の国家試験の出題傾向に合せ、3 回分の模擬試験問題を作成した。4 回生時の演習の中で使用した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1)姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科学生による授業評価	平成 19 年 ～ 平成 28 年	科目：「福祉機器特論、チーム医療特論、身体障害作業療法学、作業療法理論特論」点検・評価の結果：長所としては、今回の調査による得点は平均を上回っており、授業目標は達成されていると理解した。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 1)奈良県介護支援専門員　現職者講習　講師	平成 15 年 ～ 平成 28 年	奈良県の現職者介護支援専門員に対象に「福祉用具・住宅改修」の実際について講義指導した。平成１５年より毎年１回担当、現在に至る。
2)文部科学省教員免許更新講習　講師	平成 25 年 ～ 平成 31 年	教員免許更新講習において「障害支援（福祉機器領域）論」（平 25-30501-56332 号）講師として年 2 回担当する（1 回 6 時間）
５　その他 （講演） 1)姫路市シニアオープンカレッジ「介護に役立つ福祉用具の基礎知識」	平成 24 年 8 月 5 日～ 平成 24 年 8 月 31 日	姫路市の依頼により、姫路市民を対象にした姫路市シニアオープンカレッジ「介護に役立つ福祉用具の基礎知識」について企画した。また、5 回の講座の講師を担当した。

2)姫路市立生涯学習大学校公演「地域の活動を支える」	平成 25 年 12 月	「地域の活動を支える」の第３回として「介護に役立つ福祉用具の基礎知識」について公演する。歳を重ねても、地域で生き生きと暮らしていくために役立つ福祉用具について紹介し、介護保険制度での金銭的補助も含めて、地域生活における介護活動への利用について述べた。
3)姫路市立生涯学習大学校講座 「暮らしに役立つ福祉用具について」	平成 28 年 12 月	健康生活コースの受講生を対象に「暮らしに役立つ福祉用具について」３回の講座の講師を担当した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
看護士免許	昭和 58 年 3 月	（厚生省第 4985 号）
作業療法士免許	昭和 63 年 4 月	（厚生省第 13239 号）
福祉用具プランナー	平成 10 年 3 月	財団法人テクノエイド協会（第 9-0100 号）
認定作業療法士	平成 16 年 4 月	社団法人日本作業療法士協会
臨床実習指導者研修修了認定	平成 31 年 2 月	社団法人日本作業療法士協会（認定番号 1790）
2　特許等 特になし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 特になし		
4　その他 奈良県介護実習・普及センター　運営委員会委員	平成 21 年 4 月 ～ 現在に至る	運営委員長および学識経験者の委員として運営委員会に出席（奈良県知事より嘱託）。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

	著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名	頁	概　　要
	（著書）						
1	生活支援技術・介護過程	共著	2010	黎明書房	守本とも子、星野政明	24-40	（第２章　自立へ向けた居住環境の整備を担当）
2	老年看護学	共著	2012	黎明書房	川野雅資、守本とも子	258-266	（高齢者を介護する家族への援助を担当）
3	介護実習入門	共著	2012	黎明書房	守本とも子、星野政明	106-134	（第３節　整容の介助を担当）
	（学術論文）						

3	原著　作業療法評価技術学実習におけるStudent Assistantの効果−上級生の視点から−	共著	2016.3	リハビリテーション教育研究第21号	◎山形力生，石浦佑一，沼田景三	416-421	本学作業療法学科では、３年生が教員の補助（Student Assistant：以下，SA）として2年生の作業療法評価学実習の授業に入り、実技指導する科目を採用している。今回、SAの効果について調査、検討した。作業療法学科3回生40名を対象として、SAに関する質問紙を参考に作成し調査を実施した。内容は、授業の満足度、2年生および教員とのコミュニケーション、授業後の学習意欲の変化、自己の知識･技術の認職度、4年生臨床実習の準備などについて調査した．調査後、項目間の相関を調べた。尚、相関係数は5％未満を有意とした。その結果、講義を通じて学んだことして、説明のスキル(90％)、専門知識技術の確認（75％）、CS（60％）を挙げた。授業の満足度は92.5％と高く、知識技術は62％が確認できたと回答した。成果として92.5％が実習の準備となり、95％が今後の学習意欲が高まったと回答した。教科書等での事前学習も十分に行い指導に望んだ学生は、対象学生に分かりやすく説明でき、実技指導もうまくできたと評価した。SAの経験は既習技術の再確認となり、4年生実習の準備の機会となると考えられ、さらなる学習意欲を高め、授業の満足度も高くなると考えられた。一方、授業準備が十分でなかった学生は、思ったよりも成果は上げられず、授業前の準備学習を確認させる工夫が今後の課題と考えられた。また、説明のスキルに関して、2年生にうまく説明しきれず、困惑する様子もみられ、状況に応じて教員が介入する必要性も考えられた。 ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。
4	教員免許更新講習における福祉用具講習の導入について	共著	2016.3	兵庫県作業療法士会機関誌第5巻1号	◎山形力生，田中優子	P12-P19	本学では大学地域貢献事業の一環として教員免許状更新研修を行っている。今回、この更新研修の一科目として福祉用具に関する科目を実施し、受講者に意識調査を実施した。調査の目的は、現場に従事する教員の福祉用具に関する講習の実態や効果および課題点を検討することにある。平成26年および平成27年に受講した教員119名を対象に、講習を選択した動機、従事する現場の詳細などの背景のほか、講習で扱った用具に対する認知度、講習の理解度、用具の現場における必要度などについて調査した．講座選択の動機から現場での用具の必要性を主とする実践群と教養として選択した非実践群に大別された。調査の結果は、用具の種類により違いがあり、実践群か否かによっても違いがみられた。講座の理解度は高く、講習の内容の構成や難易度は概ね妥当と考えられた。また、用具の適応や判定の中で作業療法士の専門性や役割について触れ、教員の作業療法士に対する認識を高めることに寄与できたと考えられた。 ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。

5	作業療法評価学実習において Student Assistant導入が学生におよぼす効果	共著	2016.3	兵庫県作業療法士会機関誌第5巻1号	石浦佑一，◎山形力生，眞々部仁美，沼田景三	p3-p7	現在、本学科の2年生は作業療法評価学実習において、3年生が教員の補助（Student Assistant：以下、SA）として2年生に実技指導を行う授業形態を導入している。SA導入の目的は、3年生から指導を受けることで、評価に関する身近な自己到達目標が設定でき、学習意欲の向上を図る，評価の重要性を具体的に学ぶ、コミュニケーションスキルの向上などである。今回、2年生の作業療法評価学実習におけるSA導入の効果を調査、検討した。本学科2年生51名を対象にSAに関する質問紙により実施した。質問項目は、3年生の指導方法、3年生との関係性、実習後の学習意欲の変化や満足度、習熟度、教員との関係性に関してであった。調査後、質問項目間の相関を調べた。3年生の指導方法や3年生との関係性、学習意欲の変化や満足度、習熟度、教員との関係性においてはポジティブな回答が多かった。 質問項目間の相関について、学習意欲は、3年生の指導方法や3年生との関係性、教員とのコミュニケーションで相関を認めた。また満足度は、3年生の指導方法、3年生への声かけや相談で相関を認めた。習熟度は、3年生の指導方法、教員への相談、3年生への声かけや相談で相関を認めた。これらの結果よりSA導入は本学科2年生にとって有効であることが示唆された。また、学習意欲、満足度、習熟度と3年生の指導方法や3年生との関係性、教員とのコミュニケーションで相関を認めたことから、3年生と2年生との関係性をいかに良好に保つか、3年生が評価技術を適切に指導できるよう教員がどのように調整していくかが重要であり、今後の課題となった。 ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。
6	原著　作業療法実習における学生のレジリエンスとストレスの関係について	共著	2017.3	リハビリテーション教育研究第22号	◎山形力生，櫻井秀雄	280-284	臨床実習は学生にとってストレス状況であり，その状況に適応し乗り越えることが要求される．ストレス状況に直面し，乗り越えるためにはレジリエンス（精神的回復力）が左右するものと考えられる．この研究の目的はレジリエンスと実習ストレスとの関連について検討をすることとした．対象および方法は，作業療法学生4年生69名を対象とし，総合臨床実習の終了時にレジリエンス尺度を実施した．また実習場面のストレスおよびストレスによる心理的落ち込みを測定し、レジリエンスとの関連を検討した．その結果，実習ストレスの内容としては，「対象者の評価・治療が上手くいかない」，「睡眠時間の減少」，「レポートが進まない」の順に得点が高かった．また，各尺度得点の相関を求めたところ，実習ストレスと落ち込み得点は正の相関を示し，レジリエンスと落ち込み得点は負の相関を示した．したがって，実習ストレスの高いものほど落ち込み得点は高い傾向にあり，レジリエンスの高いものほど落ち込み得点は低い傾向を示した．次にレジリエンスおよび実習ストレスの得点の夫々について高得点群（高群）と低得点群（低群）に分け，落ち込み得点について比較した．その結果，実習ストレスの高群において，レジリエンスの高群の落ち込み得点は，レジリエンスの低群に比べ群有意に低値を示した（p<.01）． したがって，レジリエンスの高い学生は同じストレスを受けてもレジリエンスの低い学生に比べ精神的立ち直りは早く，ダメージは小さいと考えられた． ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。
7	脳梗塞によりapathyを呈した一例への介入 ～ADL自立と楽しみ活動の再獲得を目指して～	共著	2017.3	兵庫県作業療法士会機関誌第6巻	岩﨑智子、◎山形力生	16-21	脳血管性apathyは最近注目されてきた病態である.今回apathyを発症し,難渋した一例に対し,“意欲には淡蒼球の活性が重要である”とする池谷の理論を参考に作業療法を行った.介入を通して,意欲の向上が見られ,ADLの自立度も向上した.ひいては,退院後継続して実施可能な楽しみ活動の再獲得に繋げることができたことは,70歳代前半という若さで,施設に退院することが決まっている症例にとって,QOLに関わる大切な事柄であったと考える. ［担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した.

8	手を使用する行動戦略（Transfer Package）により上肢機能が改善した頚髄症の事例	共著	2017.3	兵庫県作業療法士会機関誌第6巻	塩見健太，◎山形力生，和田由美子，石田茜 ，上田徹	27-32	頚髄症により感覚障害が著明にあり，上肢使用頻度が減少していた患者に対し，脳卒中患者に実施されるConstraint-induced movement therapy （CI療法）のコンセプトであるTransfer Package(以下TP)を行った. CI療法で併用されるTPではあるが，今回報告する頚髄症患者では，患者自ら改善方法を探索できるようにTPの手法を導入したところ，ADLでの両上肢の使用頻度が向上する効果が得られた．その経過を報告するとともに頚髄症に対するTP活用の可能性について考察した．頚髄症の患者にも有効であったことから，脳卒中以外の疾患でのリハビリテーションで併用が効果的であると推察された. ［担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した.
9	原著　作業療法実習における学生のレジリエンスとストレスの関係について ～ストレスコーピングからの分析	共著	2018.3	リハビリテーション教育研究第24号	◎山形力生，櫻井秀雄	226-231	臨床実習は学生にとってストレス状況であり，その状況に適応し乗り越えることが要求される．学生は実習場面において様々なストレス状況にさらされることになるが，ストレス状況に直面し，乗り越えるためにはレジリエンス（精神的回復力）が左右するものと考えられる．作業療法学生４年生に対してレジリエンス尺度（小塩ら，2002）を実施し，総合臨床実習の終了時に実習場面のストレスと実習中のストレスコーピングについて調査した．調査は2014～2016年において，研究内容を説明し同意を得られた84名（男性32名，女性52名）を分析対象とした．ストレスは，川村ら（2008）の臨床実習中のストレスに関する因子分析の結果を参考に作成した質問紙と神村ら（1995）のストレスへの対処方略尺度(以下TAC-24）によって測定した．ストレスによる心理的落ち込みの測定には堀野ら（1991）の落ち込み尺度を用いた．レジリエンス（以下RES）とストレスの得点（以下STR）は負の相関を示した．落ち込みと問題回避の得点に有意な正の相関がみられた．RESとCP_F2には負の相関がみとめられたまた，TAC-24の8下位尺度の各得点ついて，クラスター分析を行った．その結果，Ⅰ型「問題回避・情動調整型」，Ⅱ型「対処少・非情動調整型」，Ⅲ型「問題解決・非問題回避型」の３つのクラスターが得られた．次に，３型について落ち込み得点およびレジリエンス得点の分散分析を行ったところ，レジリエンス得点はⅢ型が有意に高く，Ⅰ型が有意に低くかった．実習等の指導においては「問題回避・情動調整型」のコーピングを行うものの指導が重要と考えられ，問題の回避や責任転嫁をしやすい学生ととらえ指導に当たる必要があると考えた. ［担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した.
10	コロナ禍で変わる臨床実習	共著	令和3年4	作業療法ジャー	中島大貴，坪内善仁，池田耕二，◎山形力生，大浦智子，辻下守弘	373-374	コロナ禍は医療教育のあり方も変えようとしている2020年の新型コロナウイルス感染症拡大により．多くの謎成校は臨床実習の中止を余儀なくされた．学生が患者と実際に接して学ぶ臨床実習．この貴重な機会をどう確保するか.そこで試みられたのがオンラインシステムの活用等である．この頁では、2020年に奈良学園大学の早期体験実習（1年次）,地域作業療法実習（2年次）において代替の学内実習プログラムを紹介するとともに,オンラインシステムなどを活用した学内実習の効果や問題点について報告した. ［本人担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した.

11	作業療法学生のコミュニケーション・スキルの経時的変化について（査読付き）	単著	令和4年3月	医療福祉情報行動科学研究，vol.9	◎山形力生	65-71	″作業療法士は対象者の身体的側面だけでなく，心理的，社会的な側面にも関わり，幅広い対人関係能力が求められる。作業療法学生にとって対人関係能力を含む社会的スキルを獲得することは重要といえる。そこで社会的スキルの基礎的構造を成すコミュニケーション・スキル（以下CS）について，その特徴を明らかにするため，コミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）を用いて調査した。調査は4年制大学作業療法士養成課程の学生を対象に3年次評価実習の前後，4年次総合実習後について縦断的に行った。その結果，ENDCOREsの得点（以下CS得点）は，評価実習の後に有意に低下する傾向がみられ，総合実習後では評価実習後と有意な変化はみられなかった。また， ENDCOREsを構成する下位尺度から管理系スキル，表出系スキル，反応系スキルについても算出し，比較した。その結果では表出系スキルが他の2系のスキルに比較し低値となる傾向がみられた。経時的変化ではCS得点と同様に評価実習後に低値となる傾向がみられ，管理系スキルと表出系スキルは有意な低下がみとめられた。評価実習後のCS得点の低下は，初めての本格的な実習の経験により，普段のコミュニケーション場面とは異なる対象者や実習指導者との関わりにおいて，自身のCSについて再認識したことによると推測され，スキルの特徴として表出系スキルの自己評価が低くなる傾向があると考えられた。学生指導の観点からは，実習後の振り返りの支援が必要と考えられ，その要点としては，CSに対する気づきを実践の中で高めること，表出面のスキルを高める支援が必要と考えた。 ［本人担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した.
12	コロナ禍における理学・作業療法士養成課程の早期体験実習―学内実習後の学生アンケート調査による検証―（査読付き）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究，vol.9	前田吉樹、中島大貴、伊藤健一、野中紘士、阿波邦彦、藤田信子、岩崎　智子、橋本雅至、◎山形力生、池田耕二″	55-63	【目的】本学リハビリテーション学科の早期体験実習では，1年次の学生が複数の病院を見学し，療法士の役割や自己の適性について学ぶ。しかながら令和2年度および3年度は，新型コロナウイルスの感染拡大をうけ当実習を学内実習として実施した。当実習を履修した学生の 【方法】早期体験実習は理学および作業療法学専攻の1年次生の前期配当科目（1単位）であり，1週間にわたり実施した。実習を構成する上で①ホームページを活用した予習・復習、②映像資料やライブ中継の活用、③朝礼やロールプレイ等を通じた緊張感、④グループワークによる学びの４点を重視した。令和 2 年度・3 年度の履修学生に対し、実習終了後に学内実習に関するアンケート調査を実施した。 【結果】アンケートの結果、両年度とも実習内容については約90%が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答した。反面，「2年次以降の学外実習に向けた不安」については、令和2年度で約45%，令和3年度で58.9～76.7%が「不安」「非常に不安」と回答した。自由記述では「教員が近くにいる分質問などがしやすかった」、「疑問をすぐに先生に質問することができた」という意見のほか，「自分が知らなかった分野にも興味が持てた」という意見もみられた。 【考察】学内実習で臨地での学びを完全に再現することは困難だが、早期体験実習の本来の目的を達成する上で学内実習は必ずしも不利な点ばかりではない。今回の学内実習を通じて得た経験を、コロナ禍終息後の臨床実習で活かしていくことが重要である。 ［本人担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した.
13	作業を通して自信と士気の回復を図り，畑仕事の再開を目指した一例	共著	令和4年3月	医療福祉情報行動科学研究，vol.9	岩崎智子、◎山形力生	19-30	小脳梗塞により，自信を無くし，不安・恐怖の訴えが続いていた症例に対し，本人にとって意味のある作業である水彩画と畑仕事を用い介入した．加えて生活行為向上マネジメント（MTDLP）を取り入れ，対象者を取り巻く人的・物理的環境へのアプローチを含め介入を行った．

	ー生活行為向上マネジメント（MTDLP）を活用した作業療法介入ー（査読付）						限られた期間で合意目標の達成に向けて，畑仕事の再開を目指すことができたのは，症例自身が自分の進歩を肯定的に捉えることで自信や士気を回復し，漠然とした未来の希望が，自分自身が主体的に達成するべき具体的な目標と変化したことが大きい．その要因として，本人を取り巻く家族や多職種との連携により，心理的側面への作業活動の治療効果がより高められたことや，生活場面での自主練習の時間が十分に確保できたこと，実際場面での畑仕事の練習を繰り返し行うことで，症例自身が着実に成果を積み重ねている実感を持てたことが大きく，MTDLPを用いた作業療法介入の有効性が確認された． ［本人担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した．
14	地域在住成人における実行機能質問紙の利用可能性の検討ー客観的行動評価との関連ー	共著	令和5年3月	医療福祉情報行動科学研究，vol.10	岩﨑智子，中田修，◎山形力生，中島大貴，大西 久男	17-27	実行機能は神経心理学検査によって評価されるが，これらは検査に時間を要する等の不便さもあるため，簡便に行える質問紙検査の作成が試みられている。本研究の目的は，実行機能質問紙の得点と神経心理学的検査の成績との関連を明らかにし，前者の利用可能性を検討することである。 実行機能の主観的評価として実行機能質問紙（EFQ・J-BES），客観的評価として神経心理学検査（TMT-J・新ストループ検査Ⅱ・D-CAT）を実施した。年齢と認知機能成績（MoCA-J）別に参加者を各2群に分け，基本情報を比較した。各2群について実行機能質問紙の得点と，神経心理学検査の成績との関連を検討した。 実行機能質問紙において，年齢Low群，MoCA-J高成績群において有意な相関のある項目を多く認め，利用可能性が比較的高いことが示唆された。対象者側の要因（年齢や全般的な認知機能の程度）と使用する質問紙検査側の要因（測定したい実行機能の要素）を考慮することで，実行機能質問紙を客観的行動評価のスクリーニングとして利用できる可能性があると考えた。 ［本人担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した．

（その他）学会発表				
70 臨床実習における作業療法学生のコミュニケーション・スキルと実習成績との関連について	－	平成 25 年 6 月	第 47 回日本作業療法学会（大阪）	作業療法学生（以下 OTS）にとって対人関係能力を含む社会的スキルを獲得することは重要といえる。今回、社会的スキルの基礎的構造を成すコミュニケーション・スキルについて、その能力と臨床実習の実習成績との関連について検討をおこなった。H 大学 OTS4 年生 27 名について、総合臨床実習（7 週間）の終了時にコミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）を実施し，臨床実習の成績との関連を検討した。調査後、 ENDCOREs の因子と実習成績領域間相互の相関係数を求めた。「自己主張」や「表現力」の因子は、「医療従事者としての行動様式」以外の 4 領域に相関をみとめた。「他者受容」は「医療従事者としての行動様式」のみに相関がみられた。「他者受容」の因子は入力系のスキルであり、他者からのサインを敏感に読みとるなどの能力が問われるものと考えられる。「医療従事者としての行動様式」は状況を把握したうえで慎重な判断が要求される項目であることから、「他者受容」との関連がみられたと考えた．。 ［共同発表者］ 山形力生、眞々部仁美、櫻井秀雄
71 早期の学外活動が学生にあたえたもの	－	平成 25 年 6 月	第 47 回日本作業療法学会（大阪）	現代学生の特徴として真面目で素直な性格である長所をもつ反面、対人関係能力の未熟さや主体性の乏しさ等が指摘されている。本作業療法学科においても積極的に欠ける、指導者や対象者と適切な距離をとることができない等の理由により臨床実習でつまずく学生も多い。このような状況に対応するため、3 年前より 1 年生を対象に早期からの学外活動「地域連携・貢献活動」を必須科目として実施している。今回、学外活動により学生が学んだことを明らかにし、活動のあり方を検討するために実践内容を整理したので報告する。本学科学生 31 名を対象とし、自由記述による質問紙法を実施した。「学外活動により学んだこと」について、１ラベルにつき 1 つの内容を、思い浮かばなくなるまで書き出すように求めた。その後、記述内容を質的研究手法に基づき著者らで関連性のあるものに分類、空間配置図を作成した後に解釈結果を叙述化した。作成された 205 のラベルを整理し、見出された最終カテゴリは［対象者への関わり方（72）］［施設の性質や現場を知る（51）］［対象者の理解（22）］［基礎的な対人関係スキル（20）］［プログラム遂行の難しさと取組の姿勢（18）］［自分自身に対する気付き（14）］［学習面への効用（8）］の 7 つであった。目的としていた能動的な行動や対人関係スキルの向上については体得してきている学生がいることが明らかになった。専門的知識を持たないまま関わることで経験した見て学ぶ姿勢や、

				継続して参加することにより成された行動変容やそれによる成功体験が，学生の能動性を喚起したのではないかと思われる。［共同発表者］梅本静香、眞々部仁美、山形力生
72 臨床実習成績の分析ー評価および治療計画から探るー	－	平成 25 年 6 月	第 47 回日本作業療法学会（大阪）	作業療法士養成課程の最終年次で実施される臨床実習は、学内で学習した知識や技術を実際の臨床現場で統合する機会であり、卒前教育として最終的かつ最重要な段階であるとされている。本学 4 年生は、作業療法学総合実習 1 の科目を履修し、単位を修得しなければ臨床実習に臨めない。この科目は本学科独自が導入している客観的臨床能力試験（以下 OSCE）であり、作業遂行障害の模擬クライエントについて、作業療法プロセスの一部（作業遂行障害の評価・分析の実施）を体験的に学習することを授業目的としている。本研究の目的は、昨年と同様の結果が得られた大項目の一つである「評価および治療計画」の小項目を分析し、関連性を明らかにすることとした。4 年生 27 名を対象とし、OSCE 結果及び臨床実習成績を研究に使用する旨を説明し、同意を得た。OSCE の結果は、合格者 19 名、不合格者 8 名であり、再試験では全員が合格となった。総合実習前期において、OSCE 合格群と再試験群に有意な差が認められたのは、1．3．5 の 3 項目であり、総合実習後期では 1．2．3．5．6．7 の 6 項目と増えた。前後期を通じて有意な差を認めたのは、1：他職種からの情報収集、3：評価法の実施，5：長期目標の設定であった。総合実習前期から後期にかけ、有意な差を認めた項目が増えたことから、実習期間中の学び方に違いがあると考えられ、低学年時から総合実習を意識した授業態度や学習方法を確認し、主体的に行動および学習できる勉強方法を身につける必要があると考える。 ［共同発表者］ 眞々部仁美 、 山形力生、梅本静香
73 実習指導内容評価スケールの検討（２報）ー指導者による自己評価との比較ー	－	平成 25 年 8 月	日本リハビリテーション学校協会第 26 回教育研究大会（大阪）	現在の大学教育では教授内容の改善や質の向上のため、学生による授業評価が行われている。しかし、実習科目については評価を受けることは少ない。筆者らは昨年の研究大会において、学生主体の実習指導内容評価スケールについて報告した。今回は、指導者による自己評価を実施し、学生による評価と比較検討し報告した。作業療法学科 4 年生 39 名を対象として、総合臨床実習終了後、実習指導内容を評価する実習指導内容評価スケールに記入してもらった。調査協力の得られた 32 名の実習指導者による自己評価を実施した。評価結果は、スケールの下位の 9 項目とも学生の評価得点が上回る傾向がみられた。また、全項目の合計得点について学生得点と指導者得点の相関係数（Spearman の順位相関）を求めたところ、正の相関がみられた。各下位の項目とも学生の評価得点が上回る傾向がみられた。学生の得点が上回ったことということは指導者の指導に対して概ね満足しているものと考えられ、

				正の相関を示したことから指導内容評価スケールは指導内容を評価するに妥当なものと考えた。［共同発表者］山形力生、眞々部仁美、櫻井秀雄
74 作業療法学生の OSCE の成績とコミュニケーション能力の関連について	－	平成 25 年 8 月	日本リハビリテーション学校協会第 26 回教育研究大会（大阪）	本学科では 4 年次総合実習前に客観的臨床能力試験（以下 OSCE）を実施してきているが、その成果を見るかぎり CS が重要な要素であるという印象をもたざるを得なかった。そこで今回は、学生の CS と OSCE の成績との関連について検討し報告した。作業療法学科 4 年生 50 名を対象とした。CS の評価にコミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）を用い、ENDCOREs の点数と OSCE の成績の関連を検討した。OSCE は総合臨床実習の約 1 カ月前に、面接と検査測定の 2 課題を実施した。分析は、OSCE 合格群と不合格群の ENDCOREs 得点について比較検討した。OSCE 合格者は 29 名、不合格者は 21 名であった。ENDCOREs 総合得点は合格群 93.90±15.03、不合格群 73.38±18.46 と合格群の方が有意に高かった。 ENDCOREs による CS が高い学生は OSCE でも良好な成績を修めており、特に面接課題の成績でその傾向が認められた。CS は作業療法の面接や検査測定などの評価場面に限らずあらゆる場面で求められる能力ではあるが、特に会話場面における行動と密接に関連した個人特性であるため、会話に重点がおかれた面接課題にて ENDCOREs 得点に差が生じたと考える。学生の幅広い能力を育てていくことが今後の課題であると考えられた。 ［共同発表者］ 梅本静香、山形力生、眞々部仁美、櫻井秀雄
75 コミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs の紹介	－	平成 25 年 9 月	第 33 回近畿作業療法学会（兵庫）	作業療法士は人間関係を基盤としクライエントを援助する医療職であり、人と相互作用を持ちながら問題解決していく能力が求められる。作業療法学生（以下 OTS）にとって対人関係能力を含む社会的スキルを獲得することは重要課題といえる。今回、コミュニケーション・スキル（以下 CS）尺度 ENDCOREs を紹介するとともに、調査・研究でよく用いられている KiSS18 と比較検討した。臨床実習を終了した作業療法学生のうち同意を得られた 44 名を対象として、ENDCOREs（藤本ら，2007）および KiSS18 （菊池，1988）により CS を測定した。調査後、ENDCOREs と KiSS18 得点の相関を調べた。その結果、ENDCOREs の総得点と KiSS18 得点には有意な相関がみられた。一方、ENDCOREs の下位の因子「他者受容」とは関連が低い傾向がみられた。これは、KiSS18 が総合的な社会的スキルをみる尺度に対し、ENDCOREs が ENDCOREs 開発以前の CS に関する既存尺度の内容を包括的に検討し、整理、分類した上で作成されたものであることによると考えた。 ［共同発表者］ 山形力生、 眞々部仁美、櫻井秀雄
76 脳梗塞により右手指機能障害と感覚障害を呈した	－	平成 25 年 9 月	第 33 回近畿作業療法学会（兵庫）	脳梗塞により右片麻痺を呈し、約 1 カ月経過した症例（以下 A 氏）を担当した。重度であった失語症や上下肢の麻痺は顕著な回復を見

一例一食事動作における質の向上を目指して一				せている反面、手指の麻痺と感覚障害は残存し、利き手である右手の実用手としての使用は難しい状態である。夫の死去後3日後に上記疾患を発症したにも関わらず「今はこの手をよくするために頑張りたい」と前向きな姿勢をもってﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝに臨むA氏に対し、「右手で上手にご飯を食べたい」というﾃﾞﾏﾝﾄﾞに沿えるよう作業療法を行った。介入を通し麻痺側使用による箸操作が可能となり、食事動作における質の向上へと繋がった経過と考察を報告した。 ［共同発表者］ 岩﨑智子、山形力生
77 作業療法評価学実習における Student Assistant の効果−上級生の視点から−	−	平成26年8月	日本リハビリテーション学校協会第27回教育研究大会（岡山）	本学作業療法学科では3年生が教員の補助（Student Assistant：以下，SA）として2年生の作業療法評価学実習の授業に入り、実技指導する科目を採用している。授業の目的はSAとして3年生が2年生へ実技指導を通し、それまでに修得した知識・技術を対象者に合わせて指導するスキル及び必要なコミュニケーションスキル（CS）を向上させることにある。今回、SAの効果について調査、検討した。 作業療法学科3年生40名を対象として、SAに関する質問紙を参考に作成し、研究目的を説明し同意を得た上で調査を実施した。その結果、講義を通じて学んだこととして、説明のスキル(90%)、専門知識技術の確認（75%）、CS（60%）を挙げた（回収率100%）。授業の満足度は92.5%と高く、知識技術は62%が確認できたと回答した。成果として92.5%が実習の準備となり、95%が今後の学習意欲が高まったと回答した。SAの経験は既習技術の再確認となり、4年生実習の準備の機会となると考えられ、さらなる学習意欲を高め、授業の満足度も高くなると考えられた。 ［共同発表者］ 山形力生、石浦佑一、沼田景三
78 作業療法評価学実習における Student Assistant の効果−下級生の視点から−	−	平成26年8月	日本リハビリテーション学校協会第27回教育研究大会（岡山）	現在、本学科の2年生は作業療法評価学実習において，3年生が教員の補助（Student Assistant：以下，SA）として2年生に実技指導を行う授業形態を導入している。SA導入の目的は、3年生から指導を受けることで、評価に関する身近な自己到達目標が設定でき、学習意欲の向上を図る、評価の重要性を具体的に学ぶ、コミュニケーションスキルの向上などである。今回、2年生の作業療法評価学実習におけるSA導入の効果を調査、検討した。質問項目は、3年生の指導方法、3年生との関係性、実習後の学習意欲の変化や満足度、習熟度、教員との関係性に関してであった。調査後、質問項目間の相関を調べた。その結果、3年生の指導方法や3年生との関係性、学習意欲の変化や満足度、習熟度、教員との関係性においてはポジティブな回答が多かった。質問項目間の相関について、学習意欲は、3年生の指導方法や3年生との関係性、教

				員とのコミュニケーションで相関を認めた。また満足度は、3 年生の指導方法、3 年生への声かけや相談で相関を認めた。習熟度は、3 年生の指導方法、教員への相談、3 年生への声かけや相談で相関を認めた。SA 導入は 2 年生にとって有効であることが示唆された。また、学習意欲、満足度、習熟度と 3 年生の指導方法や 3 年生との関係性、教員とのコミュニケーションで相関を認めたことから、3 年生と 2 年生との関係性をいかに良好に保つか、3 年生が評価技術を適切に指導できるよう教員がどのように調整していくかが、今後の課題となった。 ［共同発表者］石浦佑一、山形力生、沼田景三
79 作業療法実習における学生のレジリエンスとストレスの関係について	－	平成 27 年 6 月	第 49 回日本作業療法学会（神戸）ポスター発表	【はじめに】臨床実習は学生にとってストレス状況であり、その状況に適応し乗り越えることが要求される。学生は実習場面において様々なストレス状況にさらされることになるが、ストレス状況に直面し、乗り越えるためにはレジリエンス（精神的回復力）が左右するものと考えられる。この研究の目的はレジリエンスと実習ストレスとの関連について検討をすることである。【対象および方法】4 年制大学作業療法学生 4 年生に対して総合臨床実習（7 週間）の終了時にレジリエンス尺度（小塩ら，2002）を実施し、実習場面のストレスとの関連を検討した。調査は,平成 24 年～平成 26 年において、研究内容を説明し同意を得られた 71 名（男性 25 名，女性 46 名）を対象とした。ストレスは、川村ら（2008）の臨床実習中のストレスに関する因子分析の結果を参考に作成した質問紙（17 項目，５件法）によって測定した。また、ストレスによる心理的落ち込みの測定には堀野ら（1991）の落ち込み尺度（24 項目，４件法）を用いた。【結果】レジリエンスの得点（以下 RES）は中央値 69 点、ストレスの得点（以下 STR）は中央値 42 点を示した。また、落ち込み尺度得点（以下 DEP）は中央値 72 点を示した。各尺度得点の相関を求めたところ、STR と DEP は正の相関を示し、RES と DEP は負の相関を示した。次に RES および STR の得点の夫々について中央値以上と未満の 2 群に分け、DEP 値について比較した。その結果、ストレスの高い群（以下 STR_H）において、RES の低い群（以下 RES_L）が 82.3 点を示したのに対し、RES の高い群（以下 RES_H）は 65.9 点と低値を示し、Mann-Whitney の U 検定の結果，有意であった（p<.01）。【考察】RES の高い学生は同じストレスを受けても RES の低い学生に比べ精神的立ち直りは早く、ダメージは小さいと考えられ、RES_H 群が RES_L 群に比べ DEP が低値となった理由と考えた。さらに、ストレスの低い STR_L 群では RES の高低群とも DEP に差がみられず、レジリエンスはある程度の高いストレスに発揮されることを示すと捉えた。［共同発表者］山形力生、櫻井秀雄、眞々部仁美

80 脳梗塞により apathy を呈した一例への介入ーADL 自立と楽しみ活動の再獲得を目指してー	-	平成 27 年 6 月	第 49 回日本作業療法学会（神戸）ポスター発表	血栓性脳梗塞により apathy を呈した症例を担当した.病棟生活では無気力で臥床し,全 ADL に介助を要する状態であった.今後の退院先が施設となる症例にとって,自立して行える ADL を 1 つでも増やし,他者に依存した生活ではなく,意欲と自信・楽しいと思える生活を取り戻すことが重要であると考え,作業療法を行った.介入方法として,“意欲には淡蒼球の活性が重要である”とする池谷の理論を参考に意欲向上訓練を取り入れ実施した.介入を通して,意欲・発動性の向上が見られ,ADL 能力の向上,楽しみ活動の再獲得が成された.［共同発表者］岩﨑智子、山形力生
81 教員免許更新講習における福祉用具講習の導入について	-	平成 27 年 6 月	第 49 回日本作業療法学会（神戸）ポスター発表	本学では大学地域貢献事業の一環として教員免許状更新研修を行っている。今回、この更新研修の一科目として福祉用具に関する科目を実施し、受講者に意識調査を実施した。調査の目的は、現場に従事する教員の福祉用具に関する講習の実態や効果および課題点を検討することにある。平成 26 年および平成 27 年に受講した教員 119 名を対象に、講習を選択した動機、従事する現場の詳細などの背景のほか、講習で扱った用具に対する認知度、講習の理解度、用具の現場における必要度などについて調査した. 講座選択の動機から現場での用具の必要性を主とする実践群と教養として選択した非実践群に大別された。調査の結果は、用具の種類により違いがあり、実践群か否かによっても違いがみられた。講座の理解度は高く、講習の内容の構成や難易度は概ね妥当と考えられた。また、用具の適応や判定の中で作業療法士の専門性や役割について触れ、教員の作業療法士に対する認識を高めることに寄与できたと考えられた。 ［共同発表者］ 田中優子、山形力生
82 活動経験と社会的スキル、活動の志向の関連について	-	平成 27 年 6 月	第 49 回日本作業療法学会（神戸）ポスター発表	【はじめに】活動への集団または個別での取り組みは、取り組む対象者に対し身体、心理、社会面などさまざまな面に影響を与える。今回、学生のサークル活動の集団・個別の種目選択が、日常生活の社会的スキルへの影響、日常の集団・個別作業の種目選択の志向に関連があるか、ということについて検討したので報告する。【対象および方法】対象は 4 年制大学生 172 名（男性 100 名、女性 72 名）で、これまでのサークル活動の経験種目、日常生活社会的スキル尺度（以下 LSS）、日常の集団・個別作業の種目選択について質問紙により調査した。尚、調査は研究の目的を説明し同意を得られたものに実施した。【結果】サークル活動の経験種目は、運動系集団競技（A 群 67 名）、運動系個人競技（B 群 57 名）、文化系（C 群 25 名）、その他（23 名）に大別された。経験年数は、2 年未満が 59 名

				（34.7%）、2 年以上が 111 名（65.3%）であった。LSS により対人スキル（以下 RS）および個人スキル（以下 PS）を求めた。両スキルとも経験 2 年以上では、年数の増加と共に上昇する傾向がみられ、有意な相関がみられた（p<.05）。また、RS、PS の値について経験種目の３群を比較した。その結果、C 群より A,B 群が高い傾向がみられたが、分散分析では有意ではなかった（p<.05）。また、LSS を構成する 8 因子についての 3 群間の比較では、第 2 因子（対人スキル：リーダーシップ）に差をみとめた（F(2, 145)=3.7, p<.05）。さらに多重比較では、A 群が C 群より有意に高いことがわかった。 【考察】島本ら（2010）の先行研究では、LSS は、スポーツ群で他の文化系群に対し有意に高くなることが確認されている。また、対人、個人スキルについても同様の傾向にあるとされている。集団競技の経験者は個人競技の経験者に対し対人スキル（RS）が高くなると予想していた。しかし差がみられなかった理由として、今回の調査対象が学生のサークルであり、スポーツ活動体験としては文化系より差がみられても、競技の個別か、集団かの要素にまで差がみられるレベルの体験ではなかったのではないかと考えた。 ［共同発表者］山田怜奈、岩切知美、<u>山形力生</u>
83 Student Assistant の効果と作業療法評価における実技試験との関係について	－	平成 27 年 8 月	日本リハビリテーション学校協会第 28 回教育研究大会（仙台） ポスター発表	目的：本学科の作業療法評価学実習では，3 年生が教員の補助（Student Assistant：以下，SA）として 2 年生に実技指導を行う授業形態を導入して 3 年になる．我々は先行研究にて，SA を導入した 2 年生を対象にアンケート調査を実施し，3 年生や教員とのコミュニケーションが学習意欲や習熟度，満足度と関係があったことを報告した．今回は，作業療法評価の実技試験の得点とアンケート結果との関係を調査し，SA において学生のどのような能力に着目していけば実技能力の向上に結びつくか検討することを目的とした．対象及び方法：平成 24 年度～平成 26 年年度の本学科２年生 79 名を対象に，SA に関するアンケートを作成し，研究目的を説明し同意を得た上で調査を実施した．アンケートは３年生や教員との関係性，実習後の学習意欲の変化や満足度，習熟度に関して 5 件法で回答してもらった．さらに 3 以上の回答をポジティブな群、2 以下をネガティブな群とし、実技試験の得点についてこの 2 群を比較した。結果：全ての質問項目においてポジティブな回答が多数を占めていた．質問項目ごとに 2 群による実技試験の得点を比較していくと，学習意欲と教員へのコミュニケーションに関する項目でポジティブな回答をした群は有意に実技試験の得点が高い結果となった．考察：3 年間の SA 導入によるアンケート結果から，本学科 2 年生にとって SA は有効的な授業形態であることが示された．さらに実技試験の得点との関係において，学習意欲と教員へのコミュニケーションの項目でポジティブな回答をした群は有意に得点が高かった．先行研究において，学習意欲は 3 年生

				とのコミュニケーションが関係しており，実技能力の向上にはコミュニケーション能力が重要となることが示唆された．［共同発表者］石浦佑一、眞々部仁美、梅本静香、山形力生沼田景三、友國由美子
84 作業療法評価学実習における Student Assistant の効果ー上級生と下級生のアンケート結果の比較ー	-	平成 27 年 8 月	日本リハビリテーション学校協会第 28 回教育研究大会（仙台） ポスター発表	本学作業療法学科では，3 年生が教員の補助（Student Assistant：以下，SA）として２年生の作業療法評価学実習の授業に入り，実技指導する科目を採用している．今回，SA の効果について調査，検討した．作業療法学科 3 年生 40 名を対象として，授業の満足度，2 年生および教員とのコミュニケーション，授業後の学習意欲の変化，自己の知識･技術の認職度，4 年生臨床実習の準備などについて調査した．調査後，項目間の相関を調べた．その結果，講義を通じて学んだことして，説明のスキル(90%)，専門知識技術の確認（75%），CS（60%）を挙げた．授業の満足度は 92.5%と高く，知識技術は 62%が確認できたと回答した．成果として 92.5%が実習の準備となり， 95%が今後の学習意欲が高まったと回答した．教科書等での事前学習も十分に行い指導に望んだ学生は，対象学生に分かりやすく説明でき，実技指導もうまくできたと評価した．SA の経験は既習技術の再確認となり，４年生実習の準備の機会となると考えられ，さらなる学習意欲を高め，授業の満足度も高くなると考えられた．一方、授業準備が十分でなかった学生は，思ったよりも成果は上げられず，授業前の準備学習を確認させる工夫が今後の課題と考えられた．また，説明のスキルに関して，２年生にうまく説明しきれず，困惑する様子もみられ，状況に応じて教員が介入する必要性も考えられた． ［共同発表者］ 山形力生、石浦佑一、沼田景三
85 学生のコミュニケーション参与スタイルとグループ学習における役割行動の関係について	-	平成 28 年 8 月	日本リハビリテーション学校協会第 29 回教育研究大会（高松） ポスター発表	筆者らの作業療法学科では、3 年次の評価実習を経験した後に、PBL によるグループ学習を中心とした授業を導入している。今回、学生のコミュニケーション参与スタイル（PS）とグループ学習内での役割行動の関係について検討した。それは、2 者の関連性を検討することにより学生がグループの中で取る役割を予測できれば、より効果的なグループ編成を考える資料となるのではないかと考えた。対象は、2013 年～2015 年に作業療法学科の授業を受講した３年生 68 名を対象とした。あらかじめコミュニケーションに参与する傾向をコミュニケーション参与スタイル尺度（以下 COMPASS）によって調べ、グループ学習後、実際にグループの中で各自がどのような役割行動を取ることが多かったかをグループメンバーに評価してもらい、両者の関係を調べた。グループ中での役割行動は、想定される 7 つの役割（リーダーなど）について 5 件法により点数化し、さらに COMPASS から得られる４要素（因子得点）との関連性を検討した。その結果、「リーダーの役割」および「自分の意見を言う役割」は

				COMPASS の「能動的参与」および「会話マネジメント」と有意な相関を示し、「消極的参与」と逆相関を示した。「全体を調整する役割」も同様の傾向がみられたが、「受動的参与」の因子に軽度な相関を示すという違いがみられた。「状況を見守る役割」は、「能動的参与」および「会話マネジメント」とは逆相関し、「消極的参与」と軽い相関を示す特徴がみられた。「能動的参与」や「会話マネジメント」は、コミュニケーション・スキルの表出系の側面と相関する（2008、藤本ら）ことが確認されており、相関がみられた役割の特徴と一致すると考えた。これらにより、学生の PS の傾向からグループ学習内での役割行動を推測できる可能性が示唆された。
86 臨床に従事する作業療法士のコミュニケーション・スキルについて	－	平成 28 年 9 月	第 50 回日本作業療法学会（札幌） ポスター発表	作業療法学生(OTS)にとって対人関係能力を含む社会的スキルを獲得することは重要といえる．OTS の目標と考えられる臨床家の作業療法士を対象にコミュニケーション･スキル尺度（ENDCOREs）を用いて検討を行った.また,臨床現場での他職種との関係を測定するために,鈴木らの臨床活動での質を測定する尺度（以下 QOE）を改変し用いた.臨床経験群間の比較では,臨床経験とともにコミュニケーション･スキル(以下 CS)が成長し充実していく傾向にあることが示唆された.QOE_F3（他の職員と関係を維持する行動）は ENDCOREs の得点と相関したことから,CS が現場における仕事上のコミュニケーション活動全般の要素となっていることを示唆すると考えた.経験年数に伴う CS の充実には,END_F2(表現力)や END_F4(自己主張)の因子が影響するものと考えられた.これら 2 因子のスキルの成長が CS や臨床活動の基盤になっている可能性が考えられた．［共同発表者］岩﨑智子、山形力生、櫻井秀雄
87 手を使用する行動戦略（Transfer Package）により上肢機能が改善した頚髄症の事例	－	平成 28 年 9 月	第 23 回兵庫県作業療法学会（兵庫）	頚髄症により感覚障害が著明にあり、上肢使用頻度が減少していた症例に対し、CI 療法に併用される Transfer Package（以下 TP）を行った。 TP 導入までは ADL 上での上肢の使用に消極的であったが、TP の要素である両手の使用状況の報告を義務付け、OTR と症例が議論をするきっかけを増やし、症例自身で問題解決を促した。その結果、ADL での両上肢の使用頻度が向上した症例の経過と考察を報告した。 ［共同発表者］ 塩見健太、上田徹、山形力生
88 学生のコミュニケーション・スキルの経時的変化と臨床実習の影響について		平成 29 年 9 月	日本リハビリテーション学校協会 第 30 回教育研究大会（新潟）	【目的】学生のコミュニケーション・スキル（以下 CS）は様々な経験を元に成長していくものと考えられる．特に実習経験は大きなものと考えられる．今回，この実習体験前後での CS の変化を縦断的に調査し，その変化に影響した背景との関連を検討した．【方法】2013 年～2016 年に作業療法学科の評価実習を経験し，研究趣旨に同意を得た学生 86 名を対象とした．実習前後において CS 尺度 ENDCOREs により CS の程度を比較検討した．さらに追跡できた 39 名を対象に変化に影響したと思われる内容について調査した．調査はその変化

				の理由となる項目を学生に列挙させ，その項目について５件法（思わない：１点～思う：５点）にて回答を求めた．【結果】CS 得点は評価実習後で増加したのが 37.2%（32 名）に対し，67.8%（54 名）が減少する傾向がみられた．Wilcoxon の符号付順位検定の結果，評価実習前が 25.1±3.7 だったのに対し，評価実習後 24.1±3.8 と有意に減少することが確認された（p<.01）．また，CS の変化に影響した理由について「臨床評価実習の経験が影響したと思うか？」に 4 点以上の学生は 71.8%であった．主な理由として，4 点以上の学生が多かったものは「実習での自分の説明力などから（79.5%）」，「SV の指導内容による影響（76.9%）」「実習での対象者との関わり（61.5%）」，「実習でのいろんな人々との関わり（59.0%）」だった．【考察】CS 得点の評価実習前後での減少傾向は，スキルの低下を意味するのではなく，むしろ実習による自己認識が高まった結果であると考えた．評価実習前の状況では，自己の CS 能力について認識する経験の機会は少なく漠然とした評価と考えられ，実習による指導者や対象者の関わりの中で，自己の能力に対して改めて気づき，厳しい評価に結びついたのではないかと考えた．
89 作業療法実習における学生のレジリエンスとストレスの関係について～ストレスコーピングからの分析	－	平成 29 年 9 月	第 51 回日本作業療法学会（東京）ポスター発表	作業療法実習における学生のレジリエンスとストレスの関係について～ストレスコーピングからの分析　平成 29 年９月 第 51 回日本作業療法学会 （東京）ポスター発表 臨床実習は学生にとってストレス状況であり，その状況に適応し乗り越えることが要求される．学生は実習場面において様々なストレス状況にさらされることになるが，ストレス状況に直面し，乗り越えるためにはレジリエンス（精神的回復力）が左右するものと考えられる．本学作業療法学生４年生に対してレジリエンス尺度（小塩ら，2002）を実施し，総合臨床実習の終了時に実習場面のストレスと実習中のストレスコーピングについて調査した．調査は 2014～2016 年において，研究内容を説明し同意を得られた 84 名（男性 32 名，女性 52 名）を分析対象とした．ストレスは，川村ら（2008）の臨床実習中のストレスに関する因子分析の結果を参考に作成した質問紙と神村ら（1995）のストレスへの対処方略尺度(以下 TAC-24）によって測定した．ストレスによる心理的落ち込みの測定には堀野ら（1991）の落ち込み尺度を用いた．レジリエンス（以下 RES）とストレスの得点（以下 STR）は負の相関を示した．落ち込みと問題回避の得点に有意な正の相関がみられた．RES と CP_F2 には負の相関がみとめられたまた，TAC-24 の 8 下位尺度の各得点ついて，クラスター分析を行った．その結果，Ⅰ型「問題回避・情動調整型」，Ⅱ型「対処少・非情動調整型」，Ⅲ型「対処少・非情動調整型」の３つのクラスターが得られた．次に，３型について落ち込み得点およびレジリエンス得点の分散分析を行ったところ，レジリエンス得点はⅢ型が有意に高く，Ⅰ型が有意に低くかった．実習等の指導においては「問題回避・情動調整型」のコーピングを行う

				ものの指導が重要と考えられ，問題の回避や責任転嫁をしやすい学生ととらえ指導に当たる必要があると考えた．［共同発表者］山形力生、櫻井秀雄
90 作業療法士の職業経験とその質について		平成 29 年 9 月	第 51 回日本作業療法学会（東京）ポスター発表	臨床に従事する作業療法士は,様々な経験を重ね,臨床実践に関わる能力を獲得し,キャリアを成長させることが期待されている.今回,現場に従事する作業療法士を対象に職業経験の質の一側面を調査するとともにどのような傾向があるのかについて分析した.方法として,鈴木らの臨床活動での質を測定する尺度（以下 QOE）を改変し用い,また自己効力感（以下 SE）についても合わせて調べた.臨床経験毎の比較では,QOE 合計得点は上昇する傾向にあり,臨床経験とともにその職業経験の質は充実していく傾向にあることが示唆された.さらに職業経験の質の高さは自己効力感の高さにも影響すると考えられた.一方経験年数の浅い G1 群において,自己効力感の高低によって職業経験の質に差があることが確認された．特に QOE_F（実践力を獲得し,多様な役割を果たす行動）に差がみられたことから，役割を意識できることが重要と考えられ，新人 OTR に対する卒後教育などでは留意すべき点と考えた.［共同発表者］岩﨑智子,山形力生
91　作業療法学生と臨床従事者とのコミュニケーション・スキルの比較		平成 30 年 9 月	第 52 回日本作業療法学会（名古屋）	【はじめに】作業療法士は対象者の身体的側面だけでなく,心理的,社会的な側面にも関わり,幅広い対人関係能力が求められる．作業療法学生（以下 OTS）にとって対人関係能力を含む社会的スキルを獲得することは重要といえる．今回,社会的スキルの基礎的構造を成すコミュニケーション・スキル（以下 CS）について,作業療法学生と臨床実務に従事する作業療法士との比較をおこなったので報告する．目的はそれぞれの特徴や共通点,相違点を検討することにより,学生にとって育成すべき CS 教育の方向性を明らかにすることにある. 【対象および方法】本学作業療法学生 3 年生に対してコミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）を実施した.調査は 2014～2016 年において,臨床評価実習（3 週間の 2 施設実施）の終了後に行い,研究内容を説明し同意を得られた 108 名（男性 43 名,女性 65 名）を分析対象とした．また,臨床現場に従事する臨床経験 4 年以上の作業療法士 118 名（男性 51 名,女性 67 名,平均 31.7±5.3 歳,臨床経験平均 8.5±4.7 年）に対しても同意を得て ENDCOREs を実施し,学生(以下 OTS 群)と比較した.ENDCOREs は,「自己統制」(以下 END_F1),「表現力」（以下 END_F2）,「解読力」（以下 END_F3）,「自己主張」（以下 END_F4）,「他者受容」（以下 END_F5）,「関係調整（以下 END_F6）」の６種類の下位スキルが測定できる．尚,本研究は本学生命倫理審査委員会の承認（姫獨生 17-02）を得て行なわれた.統計学的検討には Mann-Whitney の U 検定を用い,5%以下を有意とした. 【結果】ENDCOREs 合計得点は現場の作業療法士(以下 OTR 群)が中央値 124 点を示したのに対し,OTS 群が 96 点と有意に低値を示し

				た.ENDCOREs の下位 6 因子の比較では,どの因子も OTS 群が低値の傾向がみられた.特に END_F1,END_F4 では有意に OTS 群が低くかった.また,CS の 3 系（管理系スキル,表出系スキル,反応系スキル）の比較においても OTS 群が低値の傾向がみられ,反応系スキル(END_F3 および END_F5）をのぞき表出系スキル,反応系スキルにそれぞれ有意差がみられた. 【考察】学生の CS に関する自己評価は,臨床実習などの経験により変化する.今回は自己認識が高まったと考えられる評価実習を経験した学生群を対象とした（2017,山形）.ENDCOREs 値は OTR 群と比較して低値傾向にあることが確認された.CS を構成する 6 因子の比較では,特に「自己主張」のスキルの因子の低値が学生の特徴と考えられた.さらに表出系スキル（END_F2 および END_F4）が有意に低かったことから,CS 教育のプログラムにおいては表出面のスキルに重点をおいて検討することがあらためて確認された.OTR 群においてはこれら表出系スキルが臨床活動の基盤になっている可能性も指摘されており（2016,岩崎）,将来の臨床活動の観点からも重要と考えた.［発表者］山形力生
92　DRIVE を用いた反復促通療法と SIXPAD 併用により中枢性重度麻痺に効果がみられた一症例		平成 30 年 9 月	第 52 回日本作業療法学会（名古屋）	【はじめに】脳卒中後のリハビリテーションにおいて電気刺激は脳卒中ガイドライン 2015 で勧められている(グレード B).一方で重度上肢麻痺に対する介入方法についての報告は少ない．今回，弛緩性麻痺の症例に対し，DRIVE(デンケン社製)で促通筋と拮抗筋を交互に電気刺激しながら徒手での反復促通し，作業療法後に SIXPAD(Body Fit：MTG 社製)を使用することで改善した一例を経験したので考察を加えて報告する．尚，本報告に際し，本人の同意を書面で得，当院の倫理審査委員会の承認を得ている．【対象】30 歳代男性．親夫婦と娘 4 人暮らし．家事の分担，仕事に行くなど活動的な生活をしていた．もやもや病による被殻出血と診断され，同日，開頭血腫除去術と間接血行再建術を施行．発症後 26 病日に当院回復期病院に転院．左片麻痺．Brunnstrom Recovery Stage(以下 BRS)は上肢Ⅰ，手指Ⅰ，下肢Ⅲ．感覚軽度鈍麻．FIM57 点．認知機能は MMSE28 点.【方法】SIXPAD とは筋力増強を目的としたコードレスの電気刺激機器を指し，DRIVE とはスイッチ操作で 2 つの筋を同時，もしくは別々に電気刺激が可能な機器である.40 病日で病棟セルフケアは軽介助から見守りとなった．しかし，BRS においては左上肢・手指ともに変化を認めなかったため，上肢神経促通の頻度を増やし麻痺側上肢の肩屈曲・肘屈曲・手背屈の運動に対して DRIVE での反復促通療法を開始した．具体的には関節運動の誘導しながら運動開始を指示し，症例が肩屈曲を起こそうと努力したタイミングで三角筋前部繊維，戻す際に三角筋後部繊維にスイッチで電気刺激を入れて関節運動を実現した．電気刺激の電極は各運動の目的筋に貼付し，刺激条件は周波数 100Hz，刺激強度は筋が強縮して関節運動が

				起こる運動閾値以上とした．期間は 28 日とし，回数は各運動パターン 50 回×2 を毎日とした．さらにリハビリ後に SIXPAD を三角筋に対し貼付し，電気刺激条件は筋収縮する程度とし 23 分間，毎日実施した．評価項目は BRS，Fugl-Meyer Assessment(以下 FMA)，Wolf Motor Function Test(以下 WMFT),改訂 Ashworth scale(以下 MAS)とした．【結果】（→は 40 病日から 68 病日の変化を示す）BRS：上肢（Ⅰ→Ⅲ),手指（Ⅰ→Ⅲ),下肢(Ⅳ→Ⅴ).FMA(0/66→30/66).WMFT(中央値 120 秒→50.7 秒　FAS0→3.1)．MAS：肘関節屈筋群(0→1)，手関節屈筋群(0→1)．68 病日以降は HANDS 療法・CI 療法を実施し，159 病日には左上肢は実用手レベルまで改善し，職場復帰が可能になり，自宅退院となった．【考察】　脳卒中発症 1 か月の時点で測定できるだけの握力がない場合は機能的予後が悪い(Sunderland A,1989)とされ，症例は 40 病日の時点で上肢運動機能は BRS 上肢Ⅰ，手指Ⅰと，旧来の予後予測法では廃用手と判断されるレベルであった．脳卒中発症から 13～38 日の対象者の FMA の臨床における意味のある最小変化量を 9～10 点と報告(Feys ら,1998)しており本症例の電気刺激を用いた反復促通療法と自主練習での SIXPAD を実施したことは自然回復の影響を受ける回復期であっても，意味のある改善を示したことが示唆された．痙性麻痺筋の拮抗筋に対する電気刺激では痙縮麻痺筋の痙縮が抑制される(鈴木ら,2009)としている．さらに電気刺激は身体不活動状態にある抗重力筋に電気刺激を与えると筋萎縮が予防できる(浜田ら,2002)としている．今回，廃用が進んでおり，DRIVE で屈筋と伸筋の二筋を交互に電気刺激しながら反復促通を実施し，作業療法後に SIXPAD 実施したことで屈筋の痙縮を抑制しながら麻痺筋の随意性を向上することが可能になり，その後の CI 療法も痙縮の影響を大きく受けることなく実用手になったと推察される．以上より，電気刺激を用いた反復促通療法と SIXPAD を実施した結果，上肢機能が向上し，退院時には実用手に至るまで改善できた．今回は症例検討による知見であり，さらに症例数を増やし統計的な検討が課題と考える．［共同発表者］塩見健太，山形力生，上田徹
93 学生の臨床実習における職業的モデルとの出会いとその影響に関する検討		平成 31 年 8 月	第 32 回教育研究大会（岐阜）	【目的】臨床実習は現場を体験する貴重な経験であり，特に自分が目指す理想像を体現するモデルともいうべき職業的モデル（以下 VM）となるセラピストの出会いは職業的アイデンティティに影響を与えると考えられる．今回，臨床実習において，このような VM との出会いがあったか，またその VM はどのような要素を持っていたか，また学生のセラピスト観や作業療法観との関連について調査，分析したので報告する．【方法】対象は，2014 年～2018 年に作業療法養成大学において総合実習を経験した学生 89 名を対象とした．総合実習終了後，VM（OT モデル）の出会いの有無について調査し，出会いがあった場合は，藤井らの VM 特性に関する質問紙によって回答を求めた．また，学生のセラピスト観や OT 観への影響の有無につい

				てあわせて調査した．尚、調査は目的等を説明し同意を得て実施した．【結果】1 期では，79.8%，2 期では，79.6%が OT モデルと出会ったと回答した．OT モデルと出会った学生の VM 特性の 4 因子の得点では，患者への医療を大切にする作業療法士（以下 OTR）の因子が最も高く，次いで臨床への熱意を持っている OTR，学生への誠意ある態度を持つ OTR，専門家としての力量を持った OTR の順であった．次に「この施設での実習は，作業療法観に影響を与えたか」，「この施設での実習は，セラピスト像に影響を与えたか」について 5 段階にて回答を求めた．さらに，4 以上を「あり」群と 3 以下を「なし」群とに分け，モデルに出会えた群と出会えなかった群のクロス集計を行った．χ2 検定の結果，モデルに出会えた群は，それぞれに影響が「あり」の群が有意に多かった（P<.05）．【考察】モデルとの出会いは，学生の OT 観やセラピスト観に影響していると考えられ．モデルのもつ要素としては，モデルとなった指導者の「患者への医療的な対応」や「臨床への熱意」といった側面が学生に影響を与えている可能性が示唆された．
94　臨床実習における作業療法学生のコミュニケーション・スキルと対人ストレスとの関連について		平成 31 年 9 月	第 53 回日本作業療法学会（福岡）	【はじめに】作業療法士は対象者の身体的側面だけでなく，心理的，社会的な側面にも関わり，幅広い対人関係能力が求められる．作業療法学生にとって対人関係能力を含むコミュニケーション・スキル（以下 CS）を獲得することは重要といえる．今回，臨床実習場面において学生が感じる対人ストレスイベントと学生の CS のレベルとの関係について検討をおこなったので報告する．目的はこれらの検討により，実習指導上の留意点を知ることと，育成すべき CS 教育の方向性を明らかにすることにある． 【対象および方法】4 年制大学作業療法養成校の 4 年生を対象とし，総合臨床実習（7 週間）開始前に後述のコミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）を実施し，実習の終了後，実習中の対人場面を想起してもらい対人ストレスについて質問紙による調査を行った．調査は 2015～2017 年において，研究内容を説明し同意を得られた学生 57 名（男性 23 名，女性 34 名）を分析対象とした．ENDCOREs は，「自己統制」（以下 END_F1），「表現力」（以下 END_F2），「解読力」（以下 END_F3），「自己主張」（以下 END_F4），「他者受容」（以下 END_F5），「関係調整」（以下 END_F6）の 6 種類の下位スキルが測定できる．また，臨床実習中の対人ストレスの測定には，橋本ら（2000）の対人ストレススイベント尺度を一部修正して使用した．この尺度は対人関係上のストレスを感じた事項について 24 項目により測定され，「対人葛藤」（以下 IP_F1），「対人劣等」（以下 IP_F2），「対人摩耗」（以下 IP_F3）の 3 因子によって説明できる．合計点数が高いほど対人ストレスイベントの頻度が高かったことを示す．統計学的検討には speaman の順位相関を用い，5%以下を有意とした． 【結果】対人ストレスの因子得点の平均点数は，IP_F2 が最も高く（18.5 点），IP_F3（9.8 点），IP_F1（13.0 点）の順に高かった．分散分析

				の結果,有意であり,多重比較では IP_F2 が他の 2 群に対し有意に高かった. 相関係数を求めたところ,IP_F2 と表出系スキル (END_F2 および END_F4) との間に有意な逆相関(rs=-.43)がみられた. 【考察】「対人劣等」の因子は, 対人関係において劣等感を触発する事態やスキルの欠如などに関するものと解釈されており,主として主体側の要因に起因するもの,すなわち学生側のスキルの要因によるストレスイベントと捉えられる.また,「自己主張」や「表現力」の 2 因子は ENDCORE モデルの中の表出系スキルを示す. これら 2 因子と「対人劣等」の因子に逆相関をみとめたことは,表出系スキルの未熟な学生は指導者への意思の伝達がうまくいかず,ストレスになりやすい可能性を示唆するものと考えた.「対人葛藤」の因子は主に他者の行動に起因する顕在的な対人葛藤に関するものであり,これは実習指導者の要因によるものと考えられる.臨床実習指導に当たっては,学生に十分な配慮を講じていたとしても,CS に乏しいと自覚している学生は,対人ストレスイベントを多く経験している可能性があると考えられ,このような学生への認識と対処に留意する必要性が改めて確認された.
95 近赤外分光法 (NIRS) による手工芸の基礎的研究：健常若年者を対象とする予備的研究		令和 3 年 9 月	第 55 回 日本作業療法学会（仙台）	紙細工の認知的治療効果について, 健常若年者を対象に近赤外分光法(NIRS)を用いて検証した. あわせて,ワーキングメモリと実行機能との関連も検討した. 紙細工活動はペーパーブロックとロールピクチャーを使用し, 実験課題は,パーツを「折る (巻く) 」課題と「構成する」課題で,対照課題は用紙を無目的に折る－開く動作とした. 関心領域は左右の背外側前頭前野(DLPFC),左右の外側前頭極(外側 FP),内側前頭極(内側 FP)の 5 か所に設定した. 分散分析の結果では,課題ごとの 5 領域での Δoxy-Hb については,統計的差異は認められなかったが,部位と検査間の関連性の検討で,両活動において,ワーキングメモリや実行機能を反映する指標とされる TMT B・TMT(B-A)と, 「構成する」課題で左 DLPFC との間に有意な負の相関がみられた (所要時間が短いほど左 DLPFC の Δoxy-Hb が大きい傾向を示した) こと等いくつかの示唆的結果を得た. ［共同発表者］岩崎智子, 大西久男, 山形力生, 中田修, 中島大貴
96 奈良学園大学リハビリテーション学科におけるコロナ禍の学内実習の紹介②― 早期体験実習の概要と学生アンケート調査―	共著	令和 3 年 10 月	第 34 回教育研究大会・教員研修会	本学の早期体験実習 (1 年次) について, 令和 2 年度は, 新型コロナウィルス感染拡大を受け, 当実習を学内実習として実施した. 今回の実習では, ①予習は臨床実習専用ホームページ (HP) に予習用教材を配置し, Web フォームから課題を提出させた. ②学内実習では, 療法士の役割や疾患・障がいの理解を促すために写真や動画, 現場からのライブ配信等の視覚教材を活用した. 学生は 10 名程度の小グループに分かれ, 専任教員のファシリテートのもと意見を出し合い, 学習内容の定着を図った. また③復習においても同様に HP から復習を促すと共に, アンケートに回答させた. 実習内容については約 90%が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答していた. 反面, 「2 年次以降の学外実習に向けた学習面の不安」については約 45%が「不安」「非常に不安」と回答した. また印象に残ったコンテンツとして「病院からのライブ配

				信」「脳血管障害（高次脳機能障害）」を挙げた学生が約 50%いた．自由記述では「教員と話ができた」「指導してもらえた」ことが良かったという意見のほか，「自分が知らなかった分野に興味が持てた」という意見もみられた．コロナ情勢下においては，従来のような多人数での見学実習は困難となる．今回は，現状における早期実習の一つのモデルを示すことができたと考える． ［共同発表者］前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩﨑智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二
97　手工芸が健常成人の脳活動に及ぼす効果：実行機能の個人差に着目した fNIRS 研究	共著	令和 4 年 9 月	第 56 回 日本作業療法学会（京都）口述発表	作業療法で治療の手段として用いる手工芸の認知的効果について健常成人を対象に NIRS を用いて検証した．あわせて，実行機能の個人差との関連も検討した．手工芸として紙細工活動であるペーパーブロックとロールピクチャーを用い，実験課題は，「パーツ作成課題」と「構成課題」課題で，対照課題は用紙を無目的に折る－開く動作とした．関心領域は左右の DLPFC，内側 FP の 3 か所に設定した． 実行機能 Low 群と High 群で Δoxy-Hb の総量を比較した分析の結果，両活動とも，Low 群＞High 群となった．難易度が低い課題では，高齢になるほど神経資源を多く動員する必要があり，今回の両活動においても，2 群間には年齢差があったことから Low 群の方が脳賦活が高くなったと考えられた．課題毎に 3 領域の脳賦活を分析した結果，また，High 群ではより選択的に DLPFC が賦活されており，Low 群では領域全般にわたり賦活される傾向があった．さらに，High 群では両活動において，右側の DLPFC の脳賦活が高かったことが特徴的であり，視覚・空間的処理の要素が影響したと考えられた．Low 群ではペーパーブロックの構成課題でのみ左右 DLPFC が選択的に賦活されている点，ロールピクチャーの構成課題にでは 3 領域において High 群より有意に賦活している点等が特徴的であり，課題の難易度と認知的負荷が関連していると考えた． 以上により，紙細工活動を治療として選択する際には，個人の実行機能に適した活動を選択することで，より効果的な治療として活用できる可能性があると考えた． ［共同発表者］岩崎智子，大西久男，山形力生，中田修

「国際学会」				
1 Correlation between students' Resilience and communication skills in occupational therapy practice （作業療法学生の臨床実習におけるレジリエンスとコミュニケーション能力の関連について）	–	平成 26 年 6 月	WFOT（第 16 回世界作業療法士連盟大会・横浜）	臨床実習は学生にとってストレス状況であり、その状況に適応し乗り越えることが要求される。この研究の目的はレジリエンスとコミュニケーション能力の関連について検討をすることである。臨床実習を終了した作業療法学生のうち同意を得られた 29 名を対象として、レジリエンスの質問紙（小塩ら，2002）を実施した。さらに、ENDCOREs（藤本ら，2007）によりコミュニケーション・スキルを測定した。調査後、それぞれの構成因子間の相関係数を調べた。その結果、レジリエンスと ENDCOREs の得点には有意な相関がみられた。これらからコミュニケーション能力の高い学生ほど困難な状況を乗り越える精神的回復力は高い傾向にあることが示唆された。ENDCOREs の「他者受容」や「解読力」の因子と相関がみられたことから、これらの反応系のスキルを高めることが安定したレジリエンスをもたらすものと考えた。 ［共同発表者］ 山形力生、櫻井秀雄、眞々部仁美

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　5 年　3 月　31 日

氏名　藤田　信子

研究分野	研究内容のキーワード
加齢運動制御　痛みにおける脳血流動態	姿勢調節　高齢者　認知機能　前頭前野血流動態　線維筋痛症

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
大阪行岡医療大学 「復習テストの実施」	平成 25 年度 ～30 年度	「神経障害評価法」 基礎知識の理解度を確認するために授業内で国家試験問題を用いたり、授業開始毎に復習小テストを行った。
「グループによる検査技術の実技演習」		検査技術ではグループによる実技練習を行わせた後に発表形式で意見交換を実施した。
「実技テストの実施」		授業評価は筆記試験、およびオスキーを基本とした実技テストを実施し、知識と検査技能の総合評価を行った
「身体の姿勢と動作についての講義」		「運動学」 解剖学を基盤に身体の姿勢および動作を理解することを目的に、各関節の制御機構や動きに関わる筋肉の働き、歩行分析や姿勢の分析についてエビデンスに基づき講義した。
「歩行周期カードの作成とアクティビティの実施」		特に、歩行に必要とされる関節運動や筋収縮について興味を持ち理解を進めるため歩行周期カードを作成、学生同士でカードを組み合わせるアクティビティを取り入れた。
「グループで動作観察」		「臨床運動学」 疾患を持つ患者の異常な姿勢や動作のメカニズムを、運動学的考察に加え、運動力学的考察や姿勢反射的考察など多角的な側面から理解することを目的に、グループで行う動作観察や床反力計等を用いた測定実習を授業に取り入れた。
「床反力計による計測・結果の考察レポート作成」		具体的には立ち上がり動作や立位、ジャンプ動作を筋電図、床反力計等の機器で計測を行わせ、その結果と考察をレポート作成させ、学生に能動的な学習習慣を定着できるよう工夫した。
「視聴覚教材を用いた病態・障害の説明」		「中枢神経障害理学療法」 活字で理解が困難な疾患のイメージを視覚的に捉えることで理解度を高めることを目的に視聴覚教材を用いて病態の理解を深めたり、動作観察のレポート作成を行った。
「ペーパーペイシェントを対象に障害を把握し、グループ間で発表・討議」		講座の後半ではペーパーペイシェントを対象に障害を把握するための手技やプログラムの立案をグループで行った。学生が能動的に脳血管障害患者の問題に取り組む姿勢や態度を学ぶために、学生同士の発表会や討論会も実施した。

「研究手法と発表レジメの作成の指導」		「卒業ゼミ」 研究の目的や方法、論文の読み方を講義し、研究手法や結果のまとめ方の実際を体験させた。担当グループの研究テーマは以下の通りである。一期生「椎間板ヘルニア症例の分析」、二期生「高齢者の転倒の内的要因と転倒予防対策に関する文献調査」、三期生「二重課題動作時の運動課題の速度の違いが前頭前野の脳血流量に及ぼす影響」、四期生「スマホ操作がステップ動作の premotor time に与える影響について」、五期生「n-back 課題介入が疼痛抑制と脳活動に与える影響」「健常若年者に対する心的回転課題の介入が踏み出し動作反応時間に及ぼす影響」。
「ゼミ生の学会発表の指導」		なお、五期生の「n-back 課題介入が疼痛抑制と脳活動に与える影響」は、ゼミの代表者が保健医療学学会第 9 回学術集会で発表を行い、学会奨励賞を受賞した。
「実習前・中・後の学生面談と指導」		「臨床体験実習」「臨床評価実習」「臨床総合実習Ⅰ」「臨床総合実習Ⅱ」 実習前、実習期間中、実習終了時に少なくとも 3 回以上の学生面談を実施し、常に学生の実習に対する不安や悩み、心配事の相談を受けた。また実習前、および実習中に実習地に訪問し、実習指導者と少なくとも 2 回以上の面談を行い、実習の様子や学生が直面している問題など情報収集を行った。
「実習地への訪問と指導者との情報共有」	平成 31 年度 ～現在に至る	学生と実習指導者がスムーズな人間関係を形成し良好なコミュニケーションが取れるよう心がけ、学生が臨床現場で十分な知識と技術が体得し有意義な実習が実現できるよう努めた。
「実習終了後の発表会の開催」		実習終了後は、実習中に学生が実際に行った評価および治療プログラム作成をレジュメ作成し、発表会を開催して発表し、また他の学生の発表を通じて、理学療法の基礎知識と実践をまとめあげた。
奈良学園大学 「研究手法の基本と論文抄読、概要、発表の指導」		「基礎ゼミⅡ」 1 年生が大学の学習に慣れ、4 年間の大学生活を有意義に送るための基礎を学ぶ。基本的には自分の興味ある論文を収集しまとめ発表するという流れであるが、その中で講義ノートの取り方、文献資料の検索方法、論文の読み方、効果的な発表の仕方を学んでいく。グループの中でディスカッションやグループの中で発表会も行い、発表の聞き方、質疑応答などのアクティビティも学びに含めた。
「神経学的評価方法の講義」		「神経障害評価学」 脳卒中片麻痺患者の障害像理解と問題点の抽出に不可欠となる神経学的評価方法を学生が相互に模擬症例となり評価のシミュレーションを行い、ICF の考え方に従い理学療法の評価の流れを学ぶことを目標とする。講義では検査を行うためには検査の意義目的を把握することが重要であり、そのためこれまで学修してきた解剖学、生理学、運動学の知識を復習しながら実技を並行して行っている
「毎回の復習テスト実施」「オスキー実技テスト」		成績評価は毎回の講義前に行われる復習小テスト、前期定期試験、オスキーをもとにした実技テストの総合点で

		判断し、理論・実技両面からバランスよく学修できるよう工夫している。
「中枢神経障害患者の理学療法の講義」		「中枢神経障害理学療法学Ⅰ（総論）」 前半では、これまで習得した脳血管障害における障害像や評価技術の知識を基に、脳血管障害の病態、脳の可塑性のメカニズムと運動療法の適用、各病期における脳卒中リハビリテーションの理論について講義し、脳卒中片麻痺患者に対するリハビリテーションの基礎知識の学習を行った。
「視聴覚教材を用いた解説」		後半では、具体的な評価の方法やトレーニング方法の立案と実施のために、臨床現場における患者の動作、歩行を視聴覚教材を用いて解説し、実際の患者に対する運動療法を視覚で学ぶとともに、脳卒中片麻痺患者に対する運動療法の基本原理と治療体系リハビリテーションを具体的な方法をもって習得できるよう工夫した。
「脳卒中患者理学療法の基礎を再学習」		「中枢神経障害理学療法学Ⅱ（各論）」 前半では画像から読み取る障害と予後予測、リスク管理の方法、評価方法、病気における理学療法の目的と方法などを再学習した。
「ペーパーペイシェントを対象に情報の収集と臨床推論」		その後、ペーパーペイシェントを対象に情報収集、臨床推論、ICF の作成、治療の目標と立案まで行えることを目的に授業を進めた。患者の実像を理解しやすくするために、ペーパーペイシェントと似通った患者の映像を視聴させたり、最先端の治療の様子を視聴覚教材を用いて説明を行った。
「脳卒中片麻痺患者さんを招き、実例をもとに動作観察と問題点の抽出、実際の評価の見学を実施する」		後半では脳卒中片麻痺患者を招聘し、動作の観察方法、考察、問題点の抽出、実際の評価などが能動的にできるよう指導を行った。
「障害の把握と解釈を目的とした学修」		「理学療法評価学」 理学療法の一連の過程の中で情報収集、観察、測定の概要を学び、患者の障害像を相対的に把握するために、これらを統合と解釈し治療の目的およびプログラムを決定することを学修する。
「面接技能の習得」		面接方法の講義では実際の患者と治療者の会話を学生同士が行うことでよりよいコミュニケ―ションの方法を体得している。
「患者の機能障害についてグループ討論とレポート作成」		また、患者の障害像を想像しながら日常生活動作において、どのような機能障害が問題となるのかグループ討論を交えて考える機会を与えている。成績評価は小テスト、グループでまとめたレポートを評価対象としている。
「動作分析の学修を目的とした小テストとレポート課題」		「臨床運動学」 四肢と体幹・脊柱の関節の構造と筋肉の生理的機能、力学的視点について学修し、これらに基づき寝返りや起き上がり、立ち上がり、歩行などの動作分析を学ぶ。成績評価は小テスト、グループでまとめたレポートを評価対象としている。

「理学療法部門を見学し実地で学ぶことで、理学療法士の役割と自己の適性を確認させ、レポートでまとめさせる」		「早期体験実習（理学療法）」 リハビリテーション病院や施設における各部門を見学することによって、まず疾病や障がいを持つ者の問題を認識することで理学療法士を目指すにあたり自己の適性を確認させる。また、理学療法部門を観察することでリハビリテーションの中で理学療法の役割と位置付けをレポートにまとめ学修する。
「リモートによる患者の観察と地域システムの理解」「グループワークと討論」「経験談を交えた講義」		「地域理学療法実習」 地域に在住している障碍者や障碍者を取り巻く社会環境を含めた包括的な社会的リハビリテーションを学修する。リモートによる学びでは、システムである関連諸制度や地域連携、物的および人的社会資源などを学び、対象者の捉えかたや理学療法の知識の活用をグループワークで事例検討をしたりして地域理学療法のあり方を学修する。実習における学生担当者としては、リアルな臨床においても学生が十分な知識と技術が体得し有意義な実習が実現できるよう経験談を交えた講義なども行う。
「担当した科目について再度、講義」		「客観的臨床能力演習」 これまで学んだ評価テストについて、その目的、技能、結果の解釈などを総合的に体得できるよう学修し、最終的にオスキーテストを実施し、その能力を評価する。
「模擬テスト実施で個別に教授」		学生は教科書をもとにペアで演習を行い、教員は担当した講義科目（申請者は神経系評価）に従い、順次、重要ポイントの講義を行い、オスキーテスト前には模擬テストを実施し、学生の評価検査に不十分な点を個別に教授する。
「BMI、CI 療法、r-TMS、ロボット治療、装具療法など、脳卒中片麻痺患者を対象とした最新の応用技術を用いた理学療法技術についての講義」		「理学療法技術特論」 理学療法士として必要な知識・技術についてより専門的な事項について学修する。本授業は 4 人のオムニバス授業であり、その中で「脳血管障害と老年期障害に関する最新の理学療法技術」について講義をおこなった。
「卒業研究ゼミ生に対する研究指導」		「卒業研究」 論文抄読、研究計画書作成、倫理審査申請書作成、実験実施、データー解析、研究発表資料作成、プレゼンテーション、研究論文作成に至るまでの指導を実施。 ○令和 4 年の研究テーマ 「マスク着用による表情認知からわかる背外側前頭前野の脳血流量変化の違い」
2　作成した教科書，教材 「プリント授業教材の作成」 「プリント授業教材の作成」 「プリント授業教材の作成」	平成 23 年度～24 年度 平成 25 年度～30 年度 平成 31 年度～現在に至る	「神経障害評価学」「日常生活活動学」 「運動学」「臨床運動学」「神経障害評価学」「中枢神経障害理学療法」 「基礎ゼミⅡ」「理学療法評価学」「神経障害評価学」「中枢神経障害理学療法学Ⅰ（総論）」「中枢神経障害理学療法学Ⅱ（各論）」「臨床運動学」「客観的臨床能力演習」「理学療法技術特論」
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		

「市民公開講座（大阪行岡医療大学にて）」	平成 28 年度	タイトル「運動で認知機能の向上！認知症予防！最新の知見と運動の方法」茨木市の市民に対する公開講座を行った。
5　その他 「科目担当実績」	平成 25 年度～平成 30 年度 平成 31 年度～現在に至る	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科授業担当：「神経系障害評価法」、「運動学」、「臨床運動学」、「理学療法研究論」、「理学療法概論」、「卒業研究」、「臨床体験実習」、「臨床評価実習」、「中枢神経障害理学療法学Ⅰ」「臨床総合実習Ⅰ」、「臨床総合実習Ⅱ」 奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科理学療法学専攻授業担当：「理学療法評価学」「神経障害評価学」「中枢神経障害理学療法学Ⅰ（総論）」「卒業研究」「運動学」「臨床運動学」「日常生活活動学」「中枢神経障害理学療法学Ⅱ（各論）」「理学療法技術特論」「基礎ゼミⅡ」「客観的臨床能力演習」「早期体験実習（理学療法）」「地域理学療法実習」「理学療法評価実習」「理学療法総合実習Ⅰ・Ⅱ」

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
理学療法士免許（厚生労働省）	昭和 60 年 4 月	第 13798 号
学士（文学）	平成 12 年 3 月	佛教大学（第 51336 号）
修士（学術）	平成 20 年 9 月	神戸大学大学院人間発達環境学研究科（第 871 号）
博士（学術）	平成 24 年 3 月	神戸大学大学院人間発達環境学研究科（第 981 号）
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項	平成 28 年 4 月～	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究 C（課題番号 16K09002）研究課題「線維筋痛症患者に対する運動療法の効果の検証：脳内ネットワークの変化を指標として」 研究代表者：藤田信子、研究概要：線維筋痛症患者に運動療法を行い、日常生活での活動量を増やすことが、鎮痛や抗うつに効果があることが注目されている。この効果についての科学的検証とメカニズムの検討は未だ十分でない。本研究では、線維筋痛症患者に 3 週間の入院による有酸素運動を中心とした運動療法を行い、日常生活活動量や睡眠の変化をモニター、また質問紙による「痛み」「うつ」「睡眠」の評価を行った。また、脳機能変化の指標として、fNIRS の計測と fMRI の撮像により脳内のネットワークの変化と運動療法の関連性を明らかにすることを目的とした。令和 3 年 3 月までに 16 名の患者に対して 3 週間の運動療法の効果を検証するために、治療介入前後において、MRI 撮像、運動能力、生活 QOL、fNIRS の計測、心理面でのアンケート等を実施した。研究の成果や報告については、日本ペインリハビリテーション学会、線維筋痛症学会で発表、また日本臨床と理学療法科学でも論文発表した。また令和 2 年度から新たに運動療法介入後の治療持続効果を確認するため退院後の患者の痛みに関するアンケートや活動量の計測、インタビューなどを 3 か月ごとに行っている。
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（学術論文） 1.Age-related differences in postural control associated with progression from a dynamic to a static during serial stepping in dual-task condition（二重課題を伴う連続ステップ動作時の高齢者が示す動的から静的姿勢制御） （査読付） （筆頭論文）	共著（筆頭）	平成26年3月	大阪行岡医療大学紀要第1号 pp19-24	注意要求課題を伴って動から静への漸心的動作を行う時の高齢者の姿勢調節を若年者と比較検討した。高齢者は二重課題を課されたとき、ステップ開始し加速するときの速度が減速し、ステップ終了後にはCOP総軌跡長が減少した。これらのことから、高齢者は姿勢調節がより難しくなる場面において注意の容量が増加すると、若年者とは異なるバランスの適応戦略を利用することが明らかになった。 著者：◎ Nobuko Harada(Fujita), Shuichi Okada
2. 二重課題を伴った階段降下動作が高齢者の姿勢調節に及ぼす影響 （査読付） （筆頭論文）	共著（筆頭）	平成26年10月	日本職業災害医学学会誌 第62巻 5号 pp348-355	階段降下動作において二重課題動作を行う時の高齢者の立位姿勢調節を若年者と比較検討した。高齢者は二重課題動作時に階段降下時間を延長させ、また最終段の床面着地時には下腿筋の筋活動量を少なくし、共同収縮率を低くした。また、階段着地後には高齢者のCOP動揺が増加した。このことから、高齢者が階段降下動作で最も注意配分の影響を受けるのは連続動作から停止するときであることが示唆された。 著者：◎原田（藤田）信子、大澤傑、岡田修一
3. 地域在住高齢者における6か月間のウォーキングプログラムが体力と閉眼時の歩行に与える影響	共著	平成28年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 5(4) pp191-197	地域在住高齢者を対象に、継続的なウォーキングプログラムが体力と閉眼時の歩行に与える影響を検討した。結果は6か月間でSit-to-Stand testの有意な短縮を認め、閉眼時の歩行にも改善が見られた。また、ロンベルグ率の変化と両脚支持期間の変化率に有意な相関関係を認めた。6か月間のウォーキングプログラムは体力と閉眼時の歩行能力を向上させる可能性が示唆された。 著者：国宗翔、原田（藤田）信子、岡田修一
4.近赤外分光法の研究動向 （査読付）	共著	平成29年3月	大阪行岡医療大学 紀要 (4)pp 25-31	総説。近赤外分光法(NIRS)の研究動向やその原理・特性について述べるとともに、特にNIRSが医療（小児、精神科）の診断方法や治療の効果判定（リハビリテーション、循環器系）に実施されている現状について紹介するとともに、現在のNIRSの臨床上における課題についても述べている。現在進められている小型化や軽量化に伴う今後の脳神経科学の観点でのエビデンス構築の可能性を論じ、今後の発展性についてまとめた。 著者：松野悟之 藤田信子

5. Effect of wearing fingers rings on the behavioral and psychological symptoms of dementia: An exploratory study （認知症者のBPSDに対する指輪の効果：探索的研究） (査読付)	共著	平成29年8月	Sage Open Medicine 5 1-11	女性認知症患者の示す BPSD に対する指輪の効果を検証するため、老人ホーム入居の 7 名の認知症患者の BPSD の場面、指輪の関心、自己認識能、全体像を用いた。その結果、指輪自体が介護者らから引き出した魔法の言葉「綺麗ね」が、対象者の自尊心を高め、「易怒性/不安定性」を軽減させる効果が見られた。 著者：Teruo Yokoi, H Okamura, T Yamamoto, K Watanabe, S Yokoi, H Atae, M Ueda, T Kuwayama, S Sakamoto, S Tomino, H Fujii, T Honda, T Morita, T Yukawa, **Nobuko Harada(Fujita)**
6.線維筋痛症の運動療法―その効果と奏効メカニズム	共著（筆頭）	平成30年6月	日本臨床 76(11) pp2023-2029	線維筋痛症の非薬物的アプローチである運動療法の有用性について海外のガイドライン、システマティックレビューの概要を紹介。また、運動療法が奏効する脳メカニズムに関する最新の研究とニューロンを活性化し鎮痛に働くカギを握る慢性疼痛患者の生活習慣についても言及した。 著者：◎**藤田信子**　仙波恵美子
7. 高齢線維筋痛症2症例の3 週間入院運動プログラムの効果について－痛みと身体・注意機能、包括的 QOL、および背外側前頭前野の血流動態への影響―	共著（筆頭）	令和元年12月	理学療法科学 34(6) pp839-846	高齢線維筋痛症患者の3週間入院運動プログラムを行い、痛み、身体・注意機能、包括的 QOL、背外側前頭前野(DLPFC)の機能に与える影響の検討を行った。2 症例ともに抑うつ自己効力感の改善が大きく見られ、これらが身体機能や包括的 QOL の改善に関与したことが推測された。DLPFC の機能の改善は 1 症例のみに見られた。高齢者の脳機能については加齢に伴う機能異常の影響も考えられ、今後さらに検討する必要性が考えられた。 著者：◎**藤田信子**　池田耕二　高井範子　金子基史　松野悟之　三木健司　仙波恵美子
8. 健常成人男性における家庭用体組成計を用いた部位別筋肉量と重心動揺検査における足圧中心動揺および Functional Rearch Test との関連性	共著	令和2年4月	理学療法科学 35(2) pp165-169	家庭用体組成計を用いて部位別筋肉量と重心動揺検査における足圧中心動揺指標・Functional Rearch Test との関連性を検討した。部位別筋肉量と各足圧中心動揺指標は有意な相関は認められなかったが、体幹筋肉量と FRT とは有意な中等度の正の相関が認められた。このことより、体幹筋肉量とバランスの関連について、家庭用体組成計を用いる臨床的意義があると考えられた。 著者：松野悟之　幸田利敬　**藤田信子**

9. Contribution of dorsolateral prefrontal cortex, ankle muscle activities, and coactivation during dual-task to Postural balance: A pilot study	共著（筆頭）	令和２年７月	Journal of Physical Therapy Science 32(7) pp467-472	若年者を対象に、二重課題実施時の前頭前野の働きと足関節の筋活動、および足関節の同時収縮の関連性について検討を行った。その結果、二重課題時において左前頭前野の酸素化ヘモグロビンの増加がみられ、また重心動揺の少なかったグループは前脛骨筋の活動が上昇し、同時収縮率も高くなった。これらのことから、若年者においては、二重課題時には左前頭前野の活動が増加することは明らかであり、重心動揺の大きさは足関節同時収縮のストラテジーに関連することが示唆された。 著者：◎藤田信子　国宗翔　岡田修一
10. Stroop テスト遂行時における高齢者の前頭前野領域血流動態と年齢との関連	単著	令和２年 12 月	奈良学園大学紀要第 13 集 pp55-60	前頭前野を３領域に分け脳賦活反応性を NIRS を用いて評価し、前頭前野の脳機能と高齢者の年齢の関連を検討した。その結果、高次の認知課題を実施するとき、左 DLPFC と前頭極の酸素化ヘモグロビン値は高齢者の年齢と有意な負の相関を示したが、右 DLPFC は年齢との相関がみられなかった。これらのことから両側の半球はそれぞれ異なった機能を持っているが、片側の半球が加齢のため生理的機能が退行した場合、それを半球間で代償する可能性が示唆された。
11. ワーキングメモリ作業負荷が与える脳活動および主観的難易度と疼痛抑制効果の関連性	共著	令和３年３月	医療福祉情報行動科学研究 第８巻 pp47-53	ワーキングメモリ課題遂行時における作業負荷レベルが及ぼす前頭前野の脳活動および主観的難易度と疼痛抑制効果の関連性について検討を行った。その結果、疼痛抑制効果は左背外側前頭前野と有意な正の相関関係を示し、主観的難易度とは負の相関関係を示した。これらのことから、作業負荷を引き上げることで左背外側前頭前野の活動は高くなり、この脳活動の活性化が疼痛抑制効果に関与することが示唆された。また、主観的難易度においては作業負荷が高くなるにつれ、難しいと感じるほど疼痛抑制効果が下がることが示唆された。 本人担当部分：論文執筆、研究統括 共著者：◎藤田信子、林英典、林弘規、木村晋太郎、大槻嵐志、松野悟之 （査読付） （筆頭論文）

12. 線維筋痛症患者の自律神経機能と運動療法	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要 第14集 pp139-148	線維筋痛症に対する非薬物療法として，段階的有酸素運動や抵抗運動などが推奨されており，線維筋痛症の主症状である「痛み」をはじめ，「運動関連のQOL」や「精神機能（うつや不安）」の改善が認められている．一方で，「睡眠障害」「慢性的な疲労」など，線維筋痛症の自律神経機能の変調に対する運動の効果については，いまだ十分な議論がされていない．本稿では，線維筋痛症患者の自律神経機能，およびその変調に対する運動介入の効果についてこれまでの研究の動向を紹介するとともに，FM患者の自律神経機能障害に対する運動介入の今後の展望について述べている。 本人担当部分：論文テーマ構想　論文執筆 共著者：◎藤田信子、仙波恵美子 （筆頭論文）
13. 線維筋痛症患者の語りから見いだされた疼痛の背景・疼痛抑制要因および今後の治療二望まれること	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要 第14集 pp91-101	FM患者12名を対象とした3週間入院で運動プログラムの介入前後に行った半構造化面接から、痛みの背景にある精神的ストレス要因、およびFM患者の痛みの状況や疼痛抑制要因に関する語りを取り上げた。痛みがあっても運動や歩くことなど身体を動かすことによって逆に痛みが軽減すること、専心・没頭時には痛みが軽減し、忘れていること、セルフマッサージも有効であった。規則正しい生活習慣や寝る前にリラックスする等が良好な睡眠につながり、また辛さに共感して傾聴してくれる他者の存在が精神面に大きく影響することが示唆された。 本人担当部分：論文作成の計画、研究統括 共著者：高井範子、池田耕二、藤田信子、三木健司、高橋紀代、仙波恵美子
14. 3週間入院運動プログラムによる線維筋痛症患者の心身の変化−心理面談により明らかになった理学療法士の対応の重要性−	共著	令和4年2月	理学療法科学 37(1) pp45-58	3週間入院運動プログラムによる介入前後の心身の変化を調査し、理学療法士の適切な対応を明らかにすることを目的とした。J介入前後において、日本語版線維筋痛症質問票や日本語版ベック抑うつ質問票、SF-8 で改善がみられた。また患者の語りからは患者の痛みや辛さに寄り添う姿勢等、理学療法士の対応が患者にとって重要であることが示唆された。 本人担当部分：論文作成の計画、研究統括 共著者：高井範子、藤田信子、池田耕二、金子基史、丸山伸廣、中原理、三木健司、高橋紀代、仙波恵美子 （査読付き）

15. コロナ禍における理学・作業療法士養成課程の早期体験実習 ―学内実習後の学生アンケート調査による検証－ （査読付）	共著	令和４年２月	医療福祉情報行動科学研究 vol.9, pp55-63	令和２年度および令和３年度，新型コロナウイルスの感染拡大をうけ早期体験実習を学内実習として実施した。学生アンケートの結果から，学内実習の意義や課題を明確にした。アンケートの結果，両年度とも実習内容については多くの学生が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答した反面，「2年次以降の学外実習に向けた不安」を訴える学生が多かった。自由記述では「教員が近くにいる分質問などがしやすかった」，「疑問をすぐに先生に質問することができた」という意見のほか，「自分が知らなかった分野にも興味が持てた」という意見もみられた。学内実習で医療施設での学びを完全に再現することは困難だが，早期体験実習の本来の目的を達成する上で，学内実習は必ずしも不利な点ばかりではない。 本人担当部分：論文作成の計画 共著者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，**藤田信子**，岩﨑智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二 （査読付き）
16. 線維筋痛症患者の入院・外来運動療法	共著	令和４年10月	ペインクリニック Vol.43(10), pp1076-1083	「痛覚変調性疼痛として考える線維筋痛症」の特集の一つとして「線維筋痛症患者の入院・外来運動療法」をテーマに執筆。脳機能イメージングの発達により線維筋痛症の発症に中枢性感作が起因することが明らかとなり、運動療法が線維筋痛症の症状を改善できるとともに脳機能にも変化を与えると考えられている。本論文では、執筆者が取り組んだ線維筋痛症患者に対する運動介入により患者の心身機能とADL改善効果について述べるとともに、海外における線維筋痛症患者への運動介入の効果について最近の研究を紹介した。本人担当部分：論文テーマ構想　論文執筆 共著者：**◎藤田信子**、仙波恵美子，山野宏章，松野悟之 （招待あり） （筆頭著者）
17. 数量化Ⅲ類分析による線維筋痛症女性患者の症状改善の類型化―3 週間入院プログラムにおける症状変化を通して－	共著	令和４年12月	理学療法科学 37(6) pp593-599	3週間入院プログラムにおける線維筋痛症患者の症状改善傾向を数量化Ⅲ類分析を行い、症状改善傾向を４つに分類した。その結果、①睡眠時間、熟睡度、疲労度②姿勢とPCS③歩数、MCS、睡眠効率④疼痛、楽しさ、体調の４グループに分類でき、運動療法の効果の現れ方が４つに類型化することが可能となった。 本人担当部分：論文作成の計画、研究統括 共著者：池田耕二，**藤田信子**、松野悟之，高井範子，金子基史，三木健司，仙波恵美子 （査読あり）

（学会発表） 1.Toe clearance and walking pattern on responding to unexpected surfaces in dual task; comparison between healthy and young adults （高齢者の二重課題歩行時における足底接地面の違いが Toe clearance および歩容に与える影響） （筆頭演者）		平成 25 年 6 月	2nd Joint World Congress of ISPGR / Gait & Mental Function （秋田県）	歩行時の足底接地面の状況の違いが高齢者の二重課題歩行時の姿勢調節に与える影響を若年者と比較検討した。flat surface や rugged surface 上の二重課題歩行時には高齢者の stride が短縮した。また rugged surface 上の 2 歩目の toe clearance は flat surface 上よりも高かった。これらのことから、高齢者の二重課題歩行時には床面の状況が stride や toe clearance に影響を与えることが示唆された。 演者：Nobuko Harada(Fujita), Shuichi Okada
2.Prefrontal activation during a consecutive calculation related strategies for postural control in human adults; A fNIRS Study （計算課題時の立位姿勢制御に関連する前頭前野の血流動態について：fNIRS 研究）（筆頭演者）		平成 27 年 5 月	World Confederation for Physical Therapy Congress 2015 (Singapore)	健常人の計算課題実施時における立位姿勢制御脳の前頭前野の活動にどのように影響されるのかを検証するために、NIRS を用いた PFC の脳血流動態と床反力計による COP 変位、下肢筋電図による下肢の筋活動との関連性の検討を行った。その結果、計算課題を行うと有意に対象者全員の HbO_2 が増加したが、特に立位の重心動揺が大きい対象者の方が小さい対象者に比べて HbO_2 が増加し、下肢筋の筋収縮が減少していた。これらのことから、二重課題時の立位姿勢制御は戦略的であり、そのことは前頭前野の活動に関連していることが示唆された。 演者：Nobuko Harada(Fujita), Shuichi Okada, Sho Kunimune, T Nishimura
3.線維筋痛症 4 症例に対する 3 週間入院運動療法プログラムの試み～運動療法介入による脳血流量の変化と QOL の改善について～ （筆頭演者）		平成 29 年 9 月	第 22 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会 （兵庫県）	線維筋痛症患者 4 名に対して中等度負荷の運動療法を集中的に行ったところ、前頭前野の血流のバランスが良くなる傾向が NIRS の測定で明らかとなった。期間中に行った運動療法前後の注意機能テスト(TMT)では全員改善が見られたが、二重課題を伴った歩行速度の改善はばらつきが見られた。また QOL(SF8)では全員に身体的健康では改善が見られたが、精神的健康については改善が見られなかった者が一人いた。 演者：藤田信子、池田耕二、高井範子、松野悟之、　小泉優喜、平岡駿典、高橋紀代、三木健司、仙波恵美子
4.線維筋痛症 2 症例に対する 3 週間入院運動療法プログラムの試み　－心理的側面からの検討－		平成 29 年 9 月	第 22 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会 （兵庫県）	線維筋痛症の多くに見られる恐怖回避反応と過活動傾向の忍耐反応のある対極的な２例について、運動療法プログラム介入による効果判定を心理的側面から比較検討した。異なるタイプの患者ではあったが運動療法は両者とも良い効果をもたらしていた。しかし、同じ運動療法を行っても、その体験がもたらす効果は異なっていた。担当理学療法士が患者の身体的、心理的傾向を速い段階で感じ取り、その患者に応じた適切な言葉掛け・アドバイスをすることが、運動療法

				の効果をより高めるものとなることが示唆された。 演者：高井範子、**藤田信子**、池田耕二、丸山伸廣、栗田樹、中原理、高橋紀代、三木健司、仙波恵美子
5.線維筋痛症 2 症例に対する 3 週間入院運動療法プログラムの試み　ー運動が困難な患者に対する介入方法についてー		平成 29 年 9 月	第 22 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会（兵庫県）	線維筋痛症患者 2 症例に 3 週間の集中的運動療法を行い、取り組みにおける難渋した点や工夫した点について紹介した。2 症例とも痛みに囚われ、運動療法を開始するところに難渋したが、可能な自動運動から行い徐々に運動負荷を増加することで、退院時には 2 症例とも身体機能、痛みに改善の傾向を示した。身体の触れ方、痛みの対応、動作方法の提案の仕方、運動のペーシング、自己効力感の確認など、注意と工夫を要した。 演者：小泉優喜、平岡駿典、栗田樹、丸山伸廣、中原理、高橋紀代、**藤田信子**、三木健司、仙波恵美子
6.維筋痛症患者に対する 3 週間入院プログラムの試み～中等度以上の運動負荷が可能であった症例～		平成 29 年 10 月	第 9 回日本線維筋痛症学会学術学会（大阪府）	線維筋痛症患者に中等度以上の運動療法を行うことで疼痛の軽減と運動後の爽快感を認めた例を紹介するとともに、短期集中型運動療法のリスク管理、段階的運動負荷について文献的考察を含めて報告した。 演者：高橋紀代、小泉優喜、谷山ゆりえ、丸山伸廣、中原理、池田耕二、高井範子、**藤田信子**、三木健司、仙波恵美子
7.慢性疼痛に対する運動療法を推進する立場から		平成 29 年 10 月	第 9 回日本線維筋痛症学会学術集シンポジウムⅠ「心理療法・運動療法の立場から考える、慢性痛の再発・再燃の乗り越え方」	運動による鎮痛(EIH: exercise-induced hypoalgesia)のメカニズムについて運動が脳報酬系の要である腹側被蓋野(VTA)におけるドーパミン産生を増やし自発運動量が多いほど産生が増え、疼痛行動が抑えられること、その他背外側被蓋核(LDT)や視床下部外側核などの関与についても紹介し、脳報酬系の活性化が鬱や QOL の改善につながることを紹介した。 演者：仙波恵美子　**藤田信子**
8.線維筋痛症高齢女性 2 症例に対する 3 週間入院運動の試み：前頭前野の血流動態の変化と疼痛、抑うつ、QOL の改善について		平成 30 年 9 月	第 23 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会	FM 高齢女性に対して 3 週間の入院運動プログラムを行い、疼痛、抑うつ、QOL、の改善と NIRS による前頭前野(PFC)の血流動態の変化について報告した。高齢女性の入院プログラムが疼痛、抑うつ、QOL の改善につながり、背側前頭前野(DLPFC)の質的、量的な脳活動変化を伴ったと考えられた。 演者：**藤田信子**　池田耕二　高井範子　松野悟之　金子基史　三木健司　行岡正雄　仙波恵美子

9.線維筋痛症高齢女性 2 症例に対する 3 週間入院運動の試み：患者の心身の変化と理学療法士の関わり方に関する検討		平成 30 年 9 月	第 23 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会	FM高齢女性に対して3週間の入院運動プログラムを行い、BDI-2、JFIQ、インタビューを行った。2 症例とも心身の回復が良好であり、面談からも PT の関わり方が非常に重要であることがわかった。特に患者の不安傾向を踏まえ、運動内容や規則正しい生活リズムをきちんと守らせていたことが功を奏していた。 演者：高井範子　**藤田信子**　池田耕二　金子基史　三木健司　行岡正雄　仙波恵美子
10.n-back 課題の疼痛抑制効果と前頭前野の脳活動との関連性		平成 30 年 12 月	保健医療学学会第 9 回学術集会	背外側前頭前野(DLPFC)の活性化が痛み刺激に対する閾値の関連性を明らかにするため、n-back 課題による疼痛抑制効果の検証を NIRS を用いて行った。その結果、3-back 時に左 DLPFC の活性化が見られ、また NRS は 3-back 時において左 DLPFC および前頭極の血流量と正の相関がみられたが、正答率との間に相関がみられなかった。これらのことから、疼痛抑制を目的に認知課題を与える場合、作業負荷量や患者の主観的難易度に着目することが疼痛抑制と脳の活性化に効果を与えることが示唆された。 演者：林英典　大槻嵐志　林弘規　木村晋太郎　田中大樹　島田大地　松野悟之　**藤田信子**
11.運動療法が痛みに効く基礎医学的機序と線維筋痛症患者に対する集中的入院運動療法の効果		令和元年 10 月	第 11 回日本線維筋痛症学会学術集会　シンポジウム「慢性の痛み政策研究事業からみた集学的診療・運動療法の実態」	運動による鎮痛(EIH: exercise-induced hypoalgesia)のメカニズムの中で、運動による脳報酬系の活性化の重要性について、神経障害性疼痛を起こしたマウスを自発運動させ、疼痛行動の著明な改善とともに脳報酬系におけるドーパミン産生の増加の観察について紹介。慢性疼痛患者の脳報酬系を含む mesocortico-limb system の機能不全、特に側坐核の機能低下がみられるが、運動による側坐核の活性化により側坐核に投射する扁桃体基底外側核(BLA)、内側前頭前野の活性化とともに、痛みに対する恐怖による不動や種々の自律神経反応の発現に関与する扁桃体中心核(CeA)の抑制につながり脳のネットワークの正常化と鎮痛と生活習慣の改善につながることを紹介する。臨床例として、現在、3 週間入院運動プログラムによる痛み、身体・認知機能、包括的 QOL、うつや睡眠の改善について検討し、脳の resting-state functional connectivity の解析による脳機能変化についても紹介した。 演者：仙波恵美子　**藤田信子**

12.線維筋痛症患者への3週間集中運動プログラムにおける効果発現機序の安静時fMRIによる検討		令和2年12月	第 42 回日本疼痛学会シンポジウム「慢性疼痛のイメージとニューロフィードバック」	安静時fMRIを用いて線維筋痛症患者に対する運動プログラムの奏効メカニズムについて検討した。13例ではFM質問紙の得点および不安と恐怖の尺度が運動プログラム終了後に有意に低下し、運動プログラムによる抑うつ傾向の改善は辺縁系の内側前頭前野と右扁桃体の機能的結合の強度の変化と有意に相関していた。これらの結果から、運動プログラムが辺縁系の機能不全を正常化して症状を改善させたことが明らかとなり、動物実験で示された慢性疼痛への運動の奏効メカニズムが線維筋痛症患者でも成り立つことを示唆した。 演者：寒重之　**藤田信子**　仙波恵美子　柴田政彦　三木健司　金子基史　高橋紀代　中原理
13. 近赤外分光法を用いた線維筋痛症患者におけるStroop課題実施中の前頭前野機能局在について－中高年線維筋痛症患者を対象とした一考察－		令和4年7月	第24回一般社団法人日本光脳機能イメージング学会学術集会	線維筋痛症は身体の広範な部位の筋骨格系に生じる慢性疼痛と全身のこわばりを主症状とする。また随伴症状の一つに認知機能の問題があり、FM患者の生活に多大な悪影響を与えている。本研究では NIRS を用い Central Executive Network に関連する背外側前頭前野（DLPFC）と Default Mode Network に関連する前頭極（FP）を関心領域とし、FM患者の前頭前野の機能局在について検討を行った。 演者：**藤田信子**　仙波恵美子

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年　3月　31日

氏名　　城野靖朋

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学、健康・スポーツ科学、神経科学	理学療法学、運動処方と運動療法、臨床神経科学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1)確認テストによる理解度の確認と復習の支援	平成28年4月 ～ 平成28年9月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「運動療法学」（2年次配当　2単位）において実践した。講義の要点を理解できているかを毎回の講義で確認テストを行った。また、その小テストの問題と解答を学内ネットワーク上のフォルダで閲覧可能な状態とし、自主学習を促した。
2)中間テストによる理解度の確認と、理解度の低い学生を対象とした学習支援	平成28年10月 ～ 平成29年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「運動療法学」（1年次配当　1単位）において実践した。本講義は1年生を対象にした専門科目であったので、専門領域の学習に難渋する学生がいることも想定された。そこで、講義内容の理解度を確認するための中間テストを実施し、学生の理解度の把握に努めた。中間テストの得点の低かった半数程度の学生を対象に誤答問題の解説作成を課題とし、個別の添削を通して指導を行った。さらに、特に得点の低かった学生（クラスの1/4程度）には授業時間以外の時間を利用して個別に指導を行った。個別指導を実施した学生の中間試験の平均点（個別指導前）はクラス全体の平均点の40%の得点だったが、終講試験（個別指導後）の平均点はクラス全体の平均点の87%の得点となった。講義内容の理解度が低い学生に対して個別性の高い指導を行うことで、専門科目の学習初期段階における学力の向上に効果的があった。
3)少人数グループでの実習指導	平成28年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門基礎科目「解剖学実習」（2年次配当　1単位）の実習で取り組んだ。学生を10人程度の少人数グループに分け、複数の教員でそれぞれが一グループを担当した。実習では体表解剖のチェック項目を設定し、それを基にを体表から骨指標や筋などの触診を指導し、テスト形式で修得度の確認を行い、学習を支援した。
4)学生による演習内容の実演を中心とした演習授業の実施	平成29年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「運動器障害評価法Ⅱ」（2年次配当　1単位）において実践した。学生の主体的な取り組みを支援する目的で、学生がペアで評価方法を実演する形式をとり、学生の実演する評価方法で不足している内容はその場で指導、訂正を行い、その後全学生で演習を行った。学生ペアと実演する評価内容は事前に学生に伝え、演習の事前学習を促した。実演担当の授業日までに教科書と教科書付属のDVDでの事前学習を課題とした。DVDは全学生が保有していたが、学内にも2ヶ所、学生が視聴できる場所を設けて事前学習を支援した。ほとんど毎日いずれかの学生が演習の予習、復習を行っており、教員にだけでなく学生間でも質問や指導が行われるなど、積極的に学習へ取り組む学生の姿がみられた。

事項	年月日	概　　要
5)授業理解度の聞き取り調査と補講の実施、ならびに講義スライド閲覧による自己学習支援	平成29年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門基礎科目「運動器系解剖学」（1年次配当　4単位）の担当10コマ（上下肢の筋学各論）において実践した。専門的な科目を初めて受講する講義なので、数名の学生から理解が不十分な内容について聞き取り調査を行った。また、その内容に基づいた補講を行い、学習の理解に努めた。また、講義スライドを学内のパソコンやタブレット端末で学生がいつでも閲覧できる状態にし、自主学習を促した。補講後には講義時間以外での質問が増えるなど、分からないことをそのままにしない学習姿勢が身についた。
6)臨床動画の活用	平成29年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「理学療法学総合演習Ⅰ」（3年次配当　1単位）において実践した。理学療法評価のひとつである動作分析について、その基礎的な内容を講義した後に、脳卒中後片麻痺者の理学療法（歩行練習）の動画を視聴して実際の臨床を想定した学習支援を行った。その結果、動画を視聴しながら動作の模倣を行うなど、積極的な学習の姿勢が見られた。
7)暗記カード形式のプリント配布による自己学習支援	令和元年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の専門基礎科目「人体構造学Ⅲ」（1年次配当1単位）において実施した。暗記が中心となる科目なので、記憶の定着を目的に暗記カードを作成できる授業資料を作成した。授業時間外の学習ツールを提供することで反復学習が必要となる暗記学習を支援したが、学生が授業時間外で暗記している場面がみられるなど、学生に自主的な学習姿勢姿勢が見られた。
２　作成した教科書，教材 1)確認テストの作成	平成28年4月 ～ 平成28年9月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「運動療法学」（2年次配当　2単位）において作成し、学生の学習を促した。
2)授業時間外に復習できるスライドの作成	平成29年4月 ～ 平成30年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門基礎科目「運動器系解剖学」」（1年次配当　4単位）の講義スライドを学内のパソコンやタブレット端末で学生がいつでも閲覧できる状態にし、自主学習を促した。
3)ワークブックの作成	平成31年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の専門基礎科目「運動学Ⅰ」（1年次配当　1単位）において作成した。これにより、学習内容を明確にし学生の予習復習を支援することで、学生に自主的な学習姿勢が見られた。
4)オンライン教材の作成	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の専門基礎科目「運動学Ⅰ（総論）」（1年次配当、1単位）、「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」（1年次配当、1単位）、「人体構造学Ⅲ（神経・運動器）」（1年次配当、1単位）、「人体生理機能実習」（2年次配当、2単位）、「人体構造実習」（2年次配当、2単位）、「運動学演習」（2年次配当、1単位）において、学習補助動画、確認テストなど作成した。これにより、授業時間外での学習ツールを提供し学生の自宅学習を促した。

事項	年月日	概　　要
5)OSCE bookの作成	令和3年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の専門科目「客観的臨床能力演習（理学療法）」（3年次配当　2単位）において、自己の能力を客観視する学習システムのツールとして作成した。具体的には、演習のポイントと、動画撮影した自身の演習の様子の自己採点を行う自己採点表から構成される。これを使用することにより、各学生の苦手な点を明確にすることができ、個別性の高い学習を支援した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1)大阪行岡医療大学の授業評価アンケート	平成29年4月 ～ 平成29年9月	大阪行岡医療大学の授業評価アンケート（4段階評価で「4」が最も良い）のうち、一人で担当する「運動器障害評価法Ⅱ」で回収した授業評価アンケートは概ね「4」、もしくは「3」の評価であった。
2)大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成30年8月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科　講師□ 担当授業科目：「運動学Ⅰ（総論）」「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」「人体構造学Ⅲ（神経・運動器）」「基礎ゼミⅡ」「早期体験実習（理学療法）」「人体生理機能実習」「人体構造実習」「運動学演習」「地域理学療法実習」「客観的臨床能力演習（理学療法）」「理学療法評価実習」「総合臨床実習Ⅰ（理学療法）」「総合臨床実習Ⅱ（理学療法）」可と判定□
3)奈良学園大学の授業評価アンケート	令和3年8月	奈良学園大学の授業評価アンケート（5段階評価で「5」が最も良い）のうち、複数の教員で担当する科目の授業評価の「この授業は，総合的にみて満足できるものでしたか。」の項目の得点が人体構造実習で4.45、人体生理機能実習で4.39、運動学演習で4.29と、すべての科目で全体平均の4.27よりも高い得点であった。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)理学療法士養成校から受け入れてた実習生に対する指導	平成20年2月 ～ 平成23年1月	複数の理学療法士養成校から臨床実習生を受け入れており、そのうちの5名の実習生にはケースバイザーとして症例レポートの作成、院内における症例発表の指導までを行った。実習生の学習を支援する目的で以下のような環境設定に取り組んだ。 ・実習指導を統括する責任者と相談し、実習生との信頼関係が構築しやすく、障害像が複雑過ぎない患者を選択し、実習が行えるよう調整 ・実習指導責任者と連携し、実習指導内容の確認や修正を行いながら実習指導を実施 ・医師や他職種からの情報収集を実習生が直接行えるように調整 ・実習の進捗状況によって、疾患の異なる複数の患者（中枢神経疾患の患者と整形外科疾患の患者など）について、理学療法プロセスが経験できるように調整 ・理学療法プロセスの模倣ができるよう、指導者による指導だけでなく、理学療法士や他の実習生の症例発表に参加できるよう調整 ・他の理学療法士や他職種にも実習生が直接指導を受けられる機会を設け、様々な意見や考えを聞けるように調整 ・実習で取り組んだこと、考えたことをまとめて発表する機会を設定（症例発表）

事項	年月日	概　　要
2)病院職員に対する体位変換に関する講習	平成25年9月	病院の職員を対象に、意識レベルが低いなどで自力での寝返りが行えない入院患者に対する体位変換について、静止画での説明と演習の実施を交えた講習を実施した。
3)移乗動作介助に関する講習	平成26年9月	病院の職員を対象に、脳卒中後の機能障害によって自力での移乗が行えない入院患者に対する移乗時の介助方法について、動画による説明と実技演習を交えた講習を実施した。
4)模擬講義の講師	平成28年8月	大阪行岡医療大学のオープンキャンパスの内容のひとつとして「腰痛講座」と題し、実演を交えた日常生活動作指導や運動療法について模擬講義を行った。
5)腰痛予防講の講師	平成30年12月	公立学校共済組合大阪支部が主催する腰痛予防講座事業の講師の一人として、参加者42名に対して講師2名で実演を交えた日常生活動作指導や運動療法について模擬講義を行った。
5　その他 1)奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成29年6月 ～ 平成29年9月	奈良学園大学保健医療学部看護学科における非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「ヘルスプロモーション論」 　奈良学園大学保健医療学部看護学科の非常勤講師として担当の「ヘルスプロモーション論」（選択科目、2年次配当、半期、選択2単位）において、運動学の基礎的な内容と、運動療法で用いられる運動と身体機能への効果について授業を行い、それによって、学生に運動を用いたヘルスプロモーションの方法を理解させる教育効果があった。
2)大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科における教育実績	平成28年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科における専任教員（助教）として、以下のような科目を担当した。
	平成28年4月 ～ 平成29年3月	「運動療法学」 　大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「運動療法学」（専門科目、2年次および1年次配当、半期、必須2単位）において、運動療法を適切に行うための基礎的な知識と運動器や神経系疾患、内部障害など目的に合わせた運動手技について授業を行った。それによって、学生に運動療法の目的と治療計画立案など基礎理論を理解させる教育効果があった。
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「解剖学実習」 　大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「解剖学実習」（専門基礎科目、2年次および1年次配当、半期、必須1単位）において、人体を体表から観察することによる肉眼的構造の理解を促す授業を行い、それによって、学生に具体的実体として人体の構造を理解させる教育効果があった。

事項	年月日	概　　要
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「運動器系解剖学」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「運動器系解剖学」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須4単位）において、運動器を構成する筋に関する内容を担当し、その授業を通して、学生に身体運動を理解する基礎を理解させる教育効果があった。
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「理学療法概論」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「理学療法概論」（専門科目、1年次配当、半期、必須2単位）において、理学療法における筋の知識の重要性に関する内容を担当し、その授業を通して、学生に理学療法への興味・関心を高める教育効果があった。
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「運動器障害評価法Ⅱ」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「運動器障害評価法Ⅱ」（専門科目、2年次配当、半期、必須1単位）において、筋系障害の評価の理論と技術について授業を行い、それによって、学生に筋系の評価と位置づけ、筋力検査の意義を理解させることと、その方法を習得させることの教育効果があった。
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「理学療法学総合演習Ⅰ」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「理学療法学総合演習Ⅰ」（専門科目、4年次配当、半期、必須1単位）において、理学療法の評価過程に必要な情報収集と検査・測定技術の向上を目的に授業を行い、それによって、学生に理学療法評価を理解させることと、理学療法評価の立案と実施方法を習得させる教育効果があった。
	平成29年10月 ～ 平成31年3月	「理学療法学総合演習Ⅱ」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「理学療法学総合演習Ⅱ」（専門科目、4年次配当、半期、必須1単位）において、模擬症例やグループワークを通して理学療法プロセスを経験する授業を行い、それによって、学生に理学療法の目標と治療プログラムの立案と具体的な実施方法を理解させ、実践力を養う教育効果があった。
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「臨床体験実習」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「臨床体験実習」（専門科目、2年次配当、半期、必須1単位）において、学外施設の臨床実習指導者と連携して、理学療法の見学を通して理学療法業務について学び、問診や評価を一部体験するなどの実習を行った。それによって、学生に理学療法の意義と役割の理解させるだけでなく、理学療法士として今後習得しなければならない能力を認識させる教育効果があった。

事項	年月日	概　　要
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「臨床評価実習」 　大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「臨床評価実習」（専門科目、3年次配当、半期、必須3単位）において、学外施設の臨床実習指導者と連携して、症例に応じた基本的な障害評価の方法を経験し、障害の種類や程度を具体的に把握するなどの実習を行った。それによって、学生に理学療法の基本的な評価技術を習得させる教育効果があった。
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「臨床総合実習Ⅰ」 　大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「臨床総合実習Ⅰ」（専門科目、4年次配当、半期、必須6単位）において、学外施設の臨床実習指導者と連携して、理学療法の対象となる代表的な疾患について障害評価から治療計画の立案までの過程の実施と、理学療法の治療の一部を体験するなどの実習を行った。それによって、学生に一連の理学療法プロセスを実施できる能力を向上させる教育効果があった。
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「臨床総合実習Ⅱ」 　大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「臨床総合実習Ⅱ」（専門科目、4年次配当、半期、必須8単位）において、学外施設の臨床実習指導者と連携して、理学療法の対象となる代表的な疾患について障害評価から治療計画の立案までの過程の実施と、理学療法の治療の一部を体験するなどの実習を行った。それによって、学生に一連の理学療法プロセスを実施できる能力を向上させる教育効果があった。
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「卒業研究」 　大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「卒業研究」（専門科目、4年次配当、通年、必須4単位）において、今まで学習してきたことの見直し、文献検索、研究方法の選択や論文の書き方の指導を行った。それによって、学生に具体的なテーマを選択し、自ら研究する姿勢と能力を養う教育効果があった。 ・平成29年度の卒業研究のテーマ 「閉塞性換気障害と拘束性換気障害におけるADL指導の違い」「筋緊張の分類とその特徴、そして治療法、理学療法アプローチについて」「ギラン･バレー症候群と多発性硬化症の比較」 ・平成30年度の卒業研究のテーマ 「トップアスリートへの理学療法的アプローチについて」「整形外科疾患の歩行の特徴について」「パーキンソン病の運動症状の特徴」
3)大阪ハイテクノロジー専門学校柔道整復師学科における教育実績	平成29年4月 ～ 平成31年3月	大阪ハイテクノロジー専門学校柔道整復師学科における非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「リハビリテーション医学」 　大阪ハイテクノロジー専門学校柔道整復師学科の非常勤講師として担当の「リハビリテーション医学」（3年次配当、前期-必須1単位、後期-必須1単位）において、脳や脊髄、運動器、呼吸器などの幅広い疾患による障害と、障害をリハビリテーションの観点から治療することについて授業を行い、それによって、学生にリハビリテーションの意義とリハビリテーションに携わる職種の役割を理解させる教育効果があった。

事項	年月日	概　　要
4)奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科における教育実績	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科における専任教員（講師）として、以下のような科目を担当した。
	平成31年9月 ～ 現在に至る	「運動学Ⅰ（総論）」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「運動学Ⅰ（総論）」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須1単位）をオムニバス形式で5回分の授業を担当した。主に運動の心身への影響と運動学習について授業を行った。それによって、学生に運動をリハビリテーションに応用するための基礎的な理論を理解させる教育効果があった。
	平成31年9月 ～ 現在に至る	「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須1単位）をオムニバス形式で5回分の授業を担当した。主に脳神経系に関する生理機能を系統的に理解できるように授業を行った。それによって、学生に理学療法士・作業療法士にとって動物性機能が必要な意味を理解させる教育効果があった。
	平成31年9月 ～ 現在に至る	「人体構造学Ⅲ（神経・運動器）」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須1単位）をオムニバス形式で5回分の授業を担当した。主に運動の発現とそれを統制・支配する脳神経系の機能解剖を説明できるように授業を行った。それによって、学生に、これらの知識を基に機能解剖や運動学との関連性、臨床面への応用について理解させる教育効果があった。
	平成31年9月 ～ 令和4年3月	「基礎ゼミⅡ」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「基礎ゼミⅡ」（共通教育科目、1年次配当、半期、必須1単位）を少人数のゼミ形式で1年次生が大学の学習に慣れ、4年間の大学生活を有意義に送るための基礎を修得できるよう授業を担当した。最終的には一人一つのテーマを設定し、具体的には、講義ノートの取り方、文献資料の検索、学術的な文章の読み方などについて、ゼミ形式の演習を通じて学修し、最終的には1人1テーマで学習した内容をまとめてプレゼンテーションを行った。それによって、学生に大学における能動的な学びを理解させ、慣れさせる教育効果があった。

事項	年月日	概　　要
	平成31年9月 ～ 令和4年3月	「早期体験実習(理学療法)」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「早期体験実習(理学療法)」（専門科目、1年次配当、半期、必須1単位）を担当した。教員引率による臨地での見学実習、および学内でのセミナーを通して、理学療法の役割と位置付けを学修させ、他職種の専門性と相互の連携を理解させ、理学療法士への動機付けと学習意欲を高める効果があった。なお、令和2年度と3年度は学内にて実習を実施した。臨床のオンライン見学、視聴覚教材を用いたリハビリテーションにおける診療チームの役割を学習することで、理学療法の役割と位置付け、他職種の専門性と相互の連携を理解させる教育効果があった。
	令和2年4月 ～ 現在に至る	「人体生理機能実習」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「人体生理機能実習」（専門基礎科目、2年次配当、半期、必須2単位）を担当した。主に運動がおこる生理機能の理解し、運動の電気生理的評価を行えるように授業を行った。それによって、学生に、1年次で習得した機能学の知識の臨床面への応用について理解させる教育効果があった。
	令和2年4月 ～ 現在に至る	「人体構造実習」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「人体構造実習」（専門基礎科目、2年次配当、半期、必須2単位）を担当した。脳神経系の機能解剖の学習にはコンピューター上でヴァーチャルな人体解剖がおこなえるアプリも導入し、構造を3次元的に理解させた。自己の理解度を確認させるためにスケッチ課題、令和3年からは粘土で脳の一部を作成させるなど、自己理解度の確認を行わせた。それによって、学生に、人体構造への興味を沸かせ、運動学との関連性、臨床面への応用について理解させる教育効果があった。
	令和2年4月 ～ 現在に至る	「運動学演習」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「運動学演習」（専門基礎科目、2年次配当、半期、必須1単位）を担当した。リハビリテーション評価の基礎となる運動の解析が行え、解析結果を解釈できるように授業を行った。それによって、学生に、運動学を臨床へ応用する方法とその重要性を理解させる教育効果があった。
	令和2年9月 ～ 現在に至る	「地域理学療法実習」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「地域理学療法実習」（専門科目、2年次配当、半期、必須2単位）を担当した。令和2年度と3年度は学内にて実習を実施した。地域理学療法の臨床のオンライン見学、事例検討、グループワークを通して、地域に在住し生活している障害児・者と家族を取り巻く社会環境を含めた包括的な社会的リハビリテーションを理解させる効果があった。

事項	年月日	概　　要
	令和3年9月 ～ 現在に至る	「客観的臨床能力演習（理学療法）」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「地域理学療法実習」（専門科目、3年次配当、半期、必須2単位）を担当した。理学療法における臨床能力の演習を体系的に行わせ、学生は本学独自のOSCE bookを用いて自己の演習内容の動画から客観的に自己評価を行わせた。これにより個別性の高い学習を支援するとともに、積極的な演習の取り組みを促す効果があった。
	令和3年9月 ～ 現在に至る	「理学療法評価実習」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「理学療法評価実習」（専門科目、3年次配当、半期、必須3単位）を担当した。臨床実習施設と連携を図り、診療チームの一員として理学療法の経験を積ませ、理学療法評価に基づいたニーズの把握、問題点の設定、治療計画の作成といった一連の理学療法過程の経験学習につながる実習教育を計画、実施した。それによって、学生に理学療法の基本的な評価技術の習得と一連の理学療法過程を理解させる教育効果があった。
	令和4年4月 ～ 現在に至る	「総合臨床実習Ⅰ（理学療法）」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「総合臨床実習Ⅰ（理学療法）」（専門科目、4年次配当、半期、必須8単位）を担当した。臨床実習施設と連携を図り、診療チームの一員として理学療法の経験を積ませ、理学療法の治療の一部の経験を含めた一連の理学療法過程の経験学習につながる実習教育を計画、実施した。それによって、学生に一連の理学療法過程を理解させ、実施能力を向上させる教育効果があった。
	令和4年4月 ～ 現在に至る	「総合臨床実習Ⅱ（理学療法）」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「総合臨床実習Ⅱ（理学療法）」（専門科目、4年次配当、半期、必須8単位）を担当した。臨床実習施設と連携を図り、診療チームの一員として理学療法の経験を積ませ、理学療法の治療経験や管理や各組織との連携を含めた理学療法の経験学習につながる実習教育を計画、実施した。それによって、学生に基礎的な理学療法を広く理解させ、実施能力を向上させる教育効果があった。
5)原著論文の査読	平成28年6月	Journal of Physical Therapy Scienceの原著論文1編の査読を担当した。
	令和元年9月	PLOS ONEの原著論文1編の査読を担当した。
	令和3年8月	PLOS ONEの原著論文1編の査読を担当した。
	令和3年8月 ～ 令和3年11月	総合理学療法学の原著論文1編の査読を担当した。

事項	年月日	概　　要
	令和3年2月 令和4年1月	医療福祉情報行動科学研究の原著論文1編の査読を担当した。 医療福祉情報行動科学研究の原著論文1編の査読を担当した。
6)学術大会演題の査読	平成28年9月 平成29年9月 令和4年6月 令和4年11月	大阪府理学療法士学会三島ブロックの新人症例発表演題2名分の査読担当した。 大阪府理学療法士学会三島ブロックの新人症例発表演題3名分の査読担当した。 第31回奈良県理学療法士学会の発表5名分の査読を担当した。 保健医療学学会第12回学術集会の演題2名分の査読を担当した。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 理学療法士 修士（保健福祉学） 博士（保健学）	 平成19年5月 平成25年3月 平成28年3月	 理学療法士免許登録（第63125号） 県立広島大学　第419号 題名「二重課題訓練の注意に関する指示が姿勢動揺に与える影響」 大阪府立大学　第15号 題名「The effect of tonic contraction of one hand muscle on motor area of tonically contracting another hand muscle 」（訳文：手指筋緊張性収縮が緊張性に収縮する隣接運動野表象へ及ぼす影響）
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1)東浦平成病院理学療法士	平成21年1月 ～ 平成23年1月	回復期病棟に勤務。 回復期病棟の専従理学療法士として、回復期病棟で個別リハビリテーションを行うリハビリテーション専門職種のリーダーとして、回復期リハビリテーション病棟業務に従事した。リハビリテーションプログラムの検討、退院前の在宅訪問評価、退院先の検討など、理学療法士の視点からチーム医療に携わった。 　個別には脳血管疾患をはじめとする中枢神経疾患患者、整形外科疾患をはじめとする運動器疾患患者や肺炎後や外科的術後の廃用症候群の患者などを対象にした理学療法に従事した。

事項	年月日	概　　要
2)白須整形外科クリニック理学療法士	平成23年1月 ～ 平成25年3月	変形関節症、肩関節周囲炎、人工関節置換術後や腱板断裂術後など多くの運動器疾患患者の理学療法に従事した。また、オスグッドシュラッター病、脊椎分離症など若年者の理学療法も実施した。微弱電流治療器という新奇性のある物理療法の実施も行った。
3)大津病院理学療法士	平成25年4月 ～ 平成27年8月	療養病棟での勤務では、慢性期の整形外科疾患、呼吸器疾患、中枢神経疾患の入院患者への理学療法に従事した。 外来リハビリテーションでの勤務では、脳卒中後で片麻痺のある地域在住高齢者の外来での理学療法に従事した。 在宅訪問サービスでの勤務では、地域在住の片麻痺の方や、神経変性疾患の方の理学療法に従事した。
4)ゆきおかデイケアセンター理学療法士	平成28年4月 ～ 平成31年3月	週に1回程度の頻度で、行岡病院の通所リハビリテーションで個別理学療法に従事した。対象は脳血管疾患、脊髄小脳変性症などの中枢神経疾患、変形性膝関節症、人工膝関節術後、腰椎圧迫骨折などの運動器疾患を背景に持つ地域在住の高齢者である。
5)保健医療学学会第8回学術集会準備運営スタッフ	平成29年12月	保健医療学学会第8回学術集会準備運営スタッフとして学会の準備、運営に従事し、保健医療の発展に努めた。
6)大阪大学大学院医学系研究科脳神経機能再生学特任研究員	平成31年5月 ～ 令和3年3月	週に1回程度の頻度で、大阪大学大学院医学系研究科脳神経機能再生学の特任研究員として臨床研究に従事した。アルツハイマー型認知症や神経障害性疼痛を有する対象者への反復経頭蓋磁器刺激による治療の有効性に関する研究に従事した。
7)日本物理療法研究会評議員	令和3年7月 ～ 令和3年7月	日本物理療法研究会評議員として物理療法の発展と普及のため、研究会の活動に貢献した。
8)日本物理療法研究会理事	令和3年7月 ～ 現在に至る	日本物理療法研究会理事として物理療法の発展と普及のため、研究会の活動に貢献した。
9)保健医療学学会第12回学術集会準備委員	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会準備委員として学会の準備、運営に従事し、保健医療の発展に努めた。
10)研究費取得実績	令和元年9月	奈良学園共同研究費助成：学童期から青年期における姿勢の形態学的・運動学的機能面が静的・動的バランス能力に及ぼす影響について-パイロットスタディ（共同研究者-助成額：70万円）
	令和2年6月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成：腱振動刺激中マッチング課題の経時的解析（研究代表者-助成額：22万円）

事項	年月日	概　　要
	令和2年6月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成：創傷被覆材における近赤外線透過率の検証（共同研究者-助成額：22万円）
	令和2年6月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成：リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性システムの構築-臨床実習教育の質向上を目指して-（共同研究者-助成額：22万円）
	令和3年6月	奈良学園共同研究費助成：ICTを活用した幼児に対するリズムとタイミングを強化する遊びが運動能力に及ぼす効果の検証（共同研究者-助成額：27万円-）
	令和3年6月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成：電子角度計を用いた痙縮評価の定量化の試み（研究代表者-助成額：34万円）
	令和3年6月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成：足関節捻挫既者に対する主観的評価質問票と客観的機能評価との関連（共同研究者-助成額：34万円）
	令和4年7月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成：介護を要する高齢者における見かけの可動域制限の実態調査について（研究代表者-助成額：30万円）
4　その他 1)奈良学園大学ハラスメント防止委員会	令和2年4月 ～ 現在に至る	ハラスメント防止委員としてハラスメント防止の啓発活動、調停活動、相談員マニュアルの改訂などに従事し、ハラスメントの防止に努めた。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） なし				
（学術論文） 1 イメージ能力の差がメンタルプラクティスによる筋力増強効果に与える影響 （査読付）	共著	平成24年11月	運動療法と物理療法 23巻3号 pp.302-307	整形外科疾患、中枢神経疾患、また、高齢や廃用症候群によって重度の筋力低下がみられる対象の運動療法の開発を目的として、健常成人を対象にメンタルプラクティスによる膝伸展筋力増強効果を検証した。メンタルプラクティスは等尺性膝伸展筋力を有意に増強させた。イメージする課題中の脳血流量を、近赤外光脳機能イメージング装置で測定したところ、前頭葉領域の脳活動賦活が確認された。したがって、メンタルプラクティスによる筋力増強効果は、脳活動を賦活させることによる神経性要因による可能性が示唆された。 本人担当部分：研究結果の解釈、特に脳機能に関する部分の考察について部分的に担当。 共著者：谷出康士，金井秀作，城野靖朋，後藤拓也
2 高齢者にみられる浮き趾と足趾運動機能および姿勢制御能力について （査読付）	共著	平成25年3月	理学療法の臨床と研究 22号 pp.15-19	浮き趾と足趾運動機能、姿勢制御能力の関連について検証した。足趾が全て接地している対象と比較し、足趾の接地状態が不良な対象では、Functional reach testの距離および足趾荷重量が低値を示し、Center of foot pressure軌跡の後方偏移を認めた。また、これらの対象では足趾筋力が低値を示し、足趾屈曲が困難であった。したがって、浮き趾を有する高齢者では姿勢制御能力や足部機能が低下している可能性が示唆された。このことは、健常高齢者に限らず、リウマチなどの運動器疾患や痙縮などの中枢神経疾患による足趾変形の理学療法評価と関連する知見である。 本人担当部分：研究結果と姿勢制御能力の関係について考察するなど、考察を部分的に担当。 共著者：長谷川正哉，金井秀作，島谷康司，城野靖朋，島田雅史，大塚彰
3 二重課題訓練の注意に関する指示が姿勢動揺に与える影響 （修士論文）	単著	平成25年3月	県立広島大学	注意機能の低下がみられる中枢神経疾患患者や高齢者の理学療法を想定し、健常成人を対象とした運動課題と認知課題の二重課題干渉効果ならびに、二重課題練習における注意に関する指示の影響を検証した。運動課題と認知課題の二重課題干渉効果によって、運動課題パフォーマンスは向上し、認知課題パフォーマンスは低下することが示唆された。また、二重課題練習時の注意に関する指示は与えず、自由に練習させることで、運動課題パフォーマンスが即時的に向上することが示唆された。 A4判　全25頁

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 運動課題と認知課題の二重課題干渉効果 （査読付）	共著	平成25年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 3巻2号 pp.47-51	運動課題にタンデム立位保持課題、認知課題にストループ干渉課題を用いて、各課題パフォーマンスが受ける二重課題干渉効果について検証した。二重課題干渉効果でタンデム立位の重心動揺面積は縮小し、ストループ干渉課題の正当数が減少した。したがって、運動課題と認知課題の二重課題干渉効果によって、運動課題のパフォーマンスは向上し、認知課題のパフォーマンスは低下することが示唆された。このことは、注意機能の低下がみられるような高齢者や中枢神経疾患患者にはより顕著に観察される可能性があり、そのような対象者の理学療法評価で二重課題の干渉を考慮する必要性を示している。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の分析、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：城野靖朋，金井秀作，後藤拓也，原田亮，藤高祐太，谷出康士，長谷川正哉，大塚彰
5 二重課題練習における注意の指示の影響 （査読付）	共著	平成25年8月	理学療法科学 28巻4号 pp.533-537	中枢神経障害や加齢の影響によって注意機能が低下している患者への理学療法では、効率的に運動学習が達成されるための注意の操作は重要な問題である。そこで健常成人を対象に、二重課題練習における注意に関する指示方略の影響を検証した。二重課題練習時に注意の指示を与えない方略による練習で、二重課題の運動課題パフォーマンス、高難易度運動課題パフォーマンスが即時的に向上した。したがって、二重課題練習時の注意に関する指示は与えず、自由に練習させることで、運動課題パフォーマンスが即時的に向上することが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、結果の分析、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：城野靖朋，金井秀作，後藤拓也，原田亮，藤高祐太，谷出康士，長谷川正哉，大塚彰
6 Different corticospinal control between discrete and rhythmic movement of the ankle. （査読付） （足関節背屈の単発運動とリズミカル運動との間における皮質脊髄制御の違い）	共著	平成26年7月	Frontiers in Human Neuroscience Vol. 8 article.578 （訳文：フロンティアイン　ヒューマンニューロサイエンス）	中枢神経障害や運動器障害によって生じる歩行障害の理学療法では連続的な歩行練習と分節的な歩行練習とが行われる。そこでこれらの違いを神経生理学的に明らかにするため、リズミカルな足関節底背屈運動と、1回の足関節底背屈運動における皮質脊髄制御ならびに脊髄制御の違いを検証した。その結果、前脛骨筋の運動誘発電位が、リズミカルな運動の後期で有意に大きかった。このことから、リズミカルな運動の初期と後期で皮質脊髄制御が異なる可能性が示唆された。この結論は、理学療法における歩行練習が連続的もしくは分節的に行うかによって、皮質脊髄制御のレベルで違いがあることを示している。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。運動誘発電位とH反射の結果から，神経的な制御機構に関する考察を行った。 共著者：Goto Y.（後藤夢野），Jono Y.（城野靖朋），Hatanaka R.（畑中良太），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujo Y.（中條雄太），Hiraoka K.（平岡浩一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7 Bimanual coordination of force enhances interhemispheric inhibition between the primary motor cortices. （査読付） （両手間force協調が一次運動野の半球間抑制を強化）	共著	平成26年10月	NeuroReport Vol. 25(15) pp.1203-1207 （訳文：ニューロレポート）	一次運動野の半球間抑制は、中枢神経障害による運動麻痺に影響を及ぼしていると考えられている。その半球間抑制が運動制御に及ぼす影響を明らかにするため、Forceの両手協調が、一次運動野の半球間抑制に与える影響を神経生理学的に検証した。左右の示指外転運動による両側間force調整が不要な課題と比較して、両側間force調整が必要な課題で半球間抑制が増大した。したがって、両側間でforceを調整する運動の協調において一次運動野の活動が抑制されることを示唆した。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察を部分的に担当。 共著者：Hiraoka K.（平岡浩一），Ae M.（阿江実乃里），Ogura N.（小倉奈々），Sano C.（佐野千紗），Shiomi K.（塩見啓悟），Morita Y.（森田祐司），Yokoyama H.（横山遥香），Jono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujo Y.（中條雄太）
8 Asymmetry of anticipatory postural adjustment during gait initiation. （査読付） （歩行開始時の予測的姿勢制御の非対称性）	共著	平成26年10月	Journal of Human Kinetics Vol.42 pp.7-14 （訳文：ジャーナルオブ　ヒューマンキネティクス）	歩行開始時の重心移動は、まず歩行を開始する足側かつ後方へ重心が移動する。これは予測的姿勢制御を反映しているが、パーキンソン病患者の外的合図による歩行開始では、歩行開始足と反対側に最初の重心移動が生じることが多くなる（予測的姿勢制御の誤り）。そこで、歩行開始足の選択プロセスの違いが、歩行開始時の予測的姿勢制御の非対称性へ与える影響を運動学的に検証した。外的な合図による歩行開始時の重心移動は、歩行開始足が右足や自由に選択した足よりも左足の場合に有意に側方へ変移した。本研究結果は外的合図による歩行開始時の予測的姿勢制御の左右非対称性を示唆する。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。結果の解釈、考察を部分ではパーキンソン病のすくみ足に関して臨床的観点から議論を行った。 共著者：Hiraoka K.（平岡浩一），Hatanaka R.（畑中良太），Nikaido Y.（二階堂泰隆），Jono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujyo Y.（中條雄太）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9 The effect of tonic contraction of the finger muscle on the motor cortical representation of the contracting adjacent muscle. （査読付） （手指筋緊張性収縮が収縮中の隣接手指筋運動野表象に与える影響）	共著	平成27年4月	Somatosensory & Motor Research Vol.32(2) pp.114-121 （訳文：ソーマトセンソリー　アンド　モーターリサーチ）	中枢神経疾患の運動障害である共同運動は、活動を意図していない筋に隣接する筋活動からの影響が及んでいる。そこで、隣接筋間の活動の関係性を明らかにするため、手指筋支配運動野表象に隣接手指筋活動が与える影響を神経生理学的に観察した。隣接筋活動の影響により興奮性の重心が運動野内側へ偏移した。隣接筋運動野表象との重複表象の興奮性は変化しなかったが、非重複表象の興奮性は抑制された。非重複表象は重複表象よりも外側に位置していた。したがって、隣接筋活動は非重複表象の興奮性を抑制し、興奮性の重心を偏移させることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：Jono Y.（城野靖朋），Chujo Y.（中條雄太），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Nikaido Y.（二階堂泰隆），Hatanaka R.（畑中良太），Hiraoka K.（平岡浩一）
10 Monaural auditory cue affects the process of choosing the initial swing leg in gait initiation. （査読付） （モノラルな音刺激が歩行開始足の選択過程に与える影響）	共著	平成27年4月	Journal of Motor Behavior Vol.47(6) pp.522-526 （訳文：ジャーナルオブ　モータービヘイバー）	すくみ足のみられるパーキンソン病患者では、歩行開始足の左右の選択にばらつきが生じる。また、音信号は歩行開始時の反応時間や歩幅、予測的姿勢制御などに影響を与えることが知られている。そこで歩行開始足の選択に音信号が与える影響を検証した。開始足に選択しにくい足側からの音信号は、開始足に選択しにくい足を開始足に選択する確率を増大させた。しかし、常時同側から音信号与える実験では、開始足に選択しにくい足を選択する確率を増大させなかった。したがって、選択しにくい足側への音信号は、それが予測できない場合に、選択しやすい足を選択する優先性を弱めることが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案部分ではパーキンソン病のすくみ足に関して臨床的観点から議論を行った。 共著者：Hiraoka K.（平岡浩一），Ae M.（阿江実乃里），Ogura N.（小倉奈々），Sano C.（佐野千紗），Shiomi K.（塩見啓悟），Morita Y.（森田祐司），Yokoyama H.（横山遥香），Iwata Y.（岩田泰幸），Jono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujo Y.（中條雄太）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11 不安定面での姿勢制御能力が地域在住高齢者の転倒に及ぼす影響―不安定面での重心動揺検査における検証― （査読付）	共著	平成27年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 5巻2号， pp.75-79	地域在住高齢者の不安定面での姿勢制御能力が転倒にどう影響するかを運動学的に検証した。過去1年間の転倒歴から転倒群と非転倒群とを分類し、ラバー負荷使用による姿勢制御能力を比較した。その結果、重心動揺面積ならびに軌跡長に有意な差は認められなかったが、ラバー負荷時のロンベルク率で、非転倒群で高値だった。したがって、転倒群の姿勢制御は非転倒群と比べ下肢の体性感覚への依存が少ない可能性が示唆された。このことは地域在住高齢者に対する理学療法のみならず、健康増進、予防理学療法にとって重要な知見である。 本人担当部分：研究結果の解釈、考察の姿勢制御に関する議論を行い、部分的に担当。 共著者：藤高祐太，金井秀作，原田亮，後藤拓也，城野靖朋，田中聡，大塚彰
12 Corticospinal Excitability in the Hand Muscles is Decreased During Eye Movement with Visual Occlusion. （査読付） （視覚遮断下での眼球運動による手内在筋皮質脊髄興奮性の減少）	共著	平成28年2月	Perceptual and motor skills Vol.122(1) pp.238-255 （訳文：パーセプチャル　アンド　モータースキルス）	眼と手の協調的な運動制御を神経生理学的に明らかにするため、眼球運動命令が手指筋支配皮質脊髄路興奮性に及ぼす影響を検証した。眼球運動前と比較して、眼球運動開始から終了を4分割した第3相の手指筋支配皮質脊髄路興奮性が有意に減少した。筋の違い、眼球運動方向および筋が収縮した場合の指運動方向に影響を受けなかった。したがって、眼球運動命令が手指筋への運動命令を生成しなかった。また、抑制は前腕肢位の影響を受けなかったため、視覚的フィードバックが存在しないときに前腕筋の固有受容によって抑制が影響されなかったことを示した。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：Chujyo Y.（中條雄太），Jono Y.（城野靖朋），Tani K.（谷恵介），Nomura Y.（野村佳史），Hiraoka K.（平岡浩一）
13 Corticospinal modulations during bimanual movement with different relative phases （査読付） （異なる相対位相の両側運動中における皮質脊髄変調）	共著	平成28年3月	Frontiers in human neuroscience Vol.10 Artikle.95 （訳文：フロンティアイン　ヒューマンニューロサイエンス）	相対位相の異なる両側性運動を用いて皮質脊髄調整による運動制御への影響を神経生理学的に調べた。難易度の高い相対位相の両側性運動中の皮質脊髄興奮性が高かった。このことは、課題の難易度、半球間相互作用の関与、または運動課題を習得するために費やされる労力が大きいことに起因する可能性がある。また、難易度の高い相対位相の両側性運動中の背景筋活動に対する皮質脊髄興奮性の依存性は低かった。このことは、難易度の高い相対位相の両側性運動に対する皮質脊髄の寄与の小ささを反映し得る。この知見は、両手を用いて行う日常生活動作の難易度によって神経系の関与が異なることも示している。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：Nomura Y.（野村佳史），Jono Y.（城野靖朋），Tani K.（谷恵介），Chujyo Y.（中條雄太），Hiraoka K.（平岡浩一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14 The effect of tonic contraction of one hand muscle on motor area of tonically contracting another hand muscle （博士論文） （手指筋緊張性収縮が緊張性に収縮する隣接筋運動野表象へ及ぼす影響）	単著	平成28年3月	大阪府立大学	隣接する手指筋緊張性収縮が、運動野の興奮性および抑制性に及ぼす影響について検証した。第1実験では、隣接筋活動により運動野興奮性分布が運動野の内側へ偏移した。第2実験では、独立性の高い運動に関連する筋の運動野表象の外側が、独立性の低い運動に関連する筋活動によって興奮性が抑制し、抑制性は脱抑制した。したがって、隣接する手指筋緊張性収縮の影響は筋特異的かつ領域特異的であることが示唆された。このことは、中枢神経障害による運動麻痺のパターンの特徴を電気生理学的に示すことに発展する可能性がある。 A4判　全42頁
15 Time and direction preparation of the long latency stretch reflex （査読付） （長潜時反射の時間と方向の準備）	共著	平成28年6月	Human movement science Vol.47 pp.38-48 （訳文：ヒューマンムーブメント　サイエンス）	運動制御に影響を与える予測、反射、感覚情報といった因子が、外力に対して指の位置を保とうとする際の運動反応の潜時へどのような影響を与えるかを神経生理学的に検証した。長潜時の伸張反射は外力の方向に関わらず誘引されたことから、筋伸張の感覚情報だけでなく、運動方向に関係のない感覚情報によっても誘引されることが示唆された。どちらの外力方向に対しても運動反応の時間予測は長潜時伸張反射を促通した。この変調は筋の伸長に媒介されないと考えられる。また、運動反応の方向予測は、その方向に筋が伸長された場合に長潜時伸張反射と皮質脊髄興奮性を促通した。したがって、これらの変調は脊髄反射に媒介されていると考えられる. 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：Nikaido Y.（二階堂泰隆），Hatanaka R.（畑中良太），Jono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujyo Y.（中條雄太），Hiraoka K.（平岡浩一）
16 The Effect of Monaural Auditory Stimulus on Hand Selection When Reaching （査読付） （モノラルな音刺激がリーチ動作における手の選択へ及ぼす影響）	共著	平成28年8月	Motor control pp.1-23 （訳文：モーターコントロール）	標的物へのリーチ動作に左右どちらの手を選択するかの運動プロセスは、聴覚的な情報処理に関わる脳機能が関係していると推察し、モノラルな聴覚刺激が手選択に及ぼす影響について検証した。右耳への聴覚刺激は右手選択を増大させ、左耳への聴覚刺激は左手選択をわずかに増大させた。手選択が左右均等になる水平視線角度は、右聴覚入力の影響を受けて有意に左へ偏移したが、左聴覚入力の影響を受けなかった。したがって、手選択に対する右聴覚刺激が有意となる効果は、手選択の皮質活動の左右非対称性を示唆する。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：Tani K.（谷恵介），Jono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Chujyo Y.（中條雄太），Hiraoka K.（平岡浩一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
17 Interhemispheric inhibition induced by transcranial magnetic stimulation over primary sensory cortex （査読付） （一次感覚野への経頭蓋磁器刺激による半球間抑制）	共著	平成28年8月	Frontiers in human neuroscience Vol.10 Artikle.438 （訳文：フロンティアイン　ヒューマンニューロサイエンス）	中枢神経障害による運動麻痺に影響を及ぼしていると考えられている半球間抑制は、一次運動野だけでなく一次感覚野においても観察されている。一次感覚野を経頭蓋磁気刺激することによる長潜時半球間抑制が触覚入力によって調節されるのか、この抑制が一次運動野を刺激することによって生じる抑制と異なるのかを神経生理学的に検証した。一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、対側示指への皮膚刺激による体性感覚求心性入力が一次感覚野に到達するタイミングで促通した。一次運動野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、指刺激の影響を受けなかった。したがって、一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、体性感覚経路の活動と関連することが考えられ、また、一次運動野を刺激することによる抑制と異なることが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：Iwata Y.（岩田恭幸），Jono Y.（城野靖朋），Mizusawa H.（水澤裕貴），Kinoshita A.（木下篤），Hiraoka K.（平岡浩一）
18　地域在住高齢者における三次元複数対象追跡課題のトレーニング効果の検証 （査読付）	共著	平成28年10月	理学療法科学 31巻5号 pp.729-732	脳卒中やパーキンソン病などの既往のある方を含む地域在住高齢者を対象に、三次元複数物体追跡課題のトレーニング効果を検証した。トレーニング介入群ではTrail Making Test part Aが介入後に有意に短くなった。介入群においてTrail Making Test part AとTimed Up and Go Testの変化比率の間に有意な正の相関が認められた。地域在住高齢者に対する三次元複数物体追跡課題のトレーニング効果は注意機能および動的バランス能力の向上が期待でき、新しい運動療法として可能性があるだけでなく、健康増進や転倒予防といった予防理学療法に有効であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：城野靖朋，辻下守弘
19 Change in excitability of corticospinal pathway and GABA-Mediated inhibitory circuits of primary motor cortex induced by contraction of adjacent hand muscle （査読付） （隣接する手指筋収縮による皮質脊髄の興奮性回路とGABAが介在する抑制性回路の興奮性変化）	共著	平成28年11月	Brain Topography Vol.29(6) pp.834-846 （訳文：ブレイン　トポグラフィー）	隣接する複数の筋活動の協調性が障害されるような脳卒中後の運動障害には，運動系の興奮性や抑制性の問題が影響していると考えられる。そこで本研究では，隣接する手指筋緊張性収縮が運動野の興奮性および抑制性に及ぼす影響について神経生理学的に検証した。小指外転筋活動の影響によって、運動野外側に位置する小指外転筋の運動野表象周辺の第1背側骨間筋の運動野表象で興奮性が減少し、抑制性は脱抑制した。このことから共同的な示指と小指の運動において、独立性の高い運動に関連する筋が独立性の低い運動に関連する筋の活動の影響を受けることを示唆した。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施，論文作成，論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：Jono Y.（城野靖朋），Iwata Y.（岩田恭幸），Mizusawa H.（水澤裕貴），Hiraoka K.（平岡浩一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
20 Processes of anticipatory postural adjustment and step movement of gait initiation（査読付） （歩行開始のステップ動作と予測的姿勢制御の調整過程）	共著	平成29年4月	Human movement science Vol.52 pp.1-16 （訳文：ヒューマンムーブメント　サイエンス）	歩行開始の予測的姿勢調整（APA）とステップ動作のプロセス間の相互作用を検証した。APAは歩行開始前の圧力中心の変移の第1相（S1）で観察した。S1は振出下肢変更あるいは歩行開始動作を中止した場合でも出現し、歩行のAPAとステップ動作は二重プロセスであることが示唆された。S1の側方振幅と持続時間が、振出下肢変更あるいは動作中止により有意に減少した。歩行開始動作の中止プロセスと振出下肢変更はAPAに対して共通の抑制メカニズムを共有している可能性がある。歩行開始の運動プロセスは、すくみ足のあるパーキンソン病患者で障害されていると考えられており、歩行開始の運動プロセスの解明は、パーキンソン病患者に限らず神経系障害患者の理学療法評価につながる知見である。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案部分ではパーキンソン病のすくみ足に関して臨床的観点から議論を行った。 共著者：Mizusawa H.（水澤裕貴），Jono Y.（城野靖朋），Iwata Y.（岩田恭幸），Kinoshita A.（木下篤），Hiraoka K.（平岡浩一）
21 眼球運動が立位姿勢制御へ及ぼす影響 （査読付）	共著	平成29年4月	理学療法科学 32巻2号 pp.211-214	眼球運動が立位姿勢制御に及ぼす影響を運動学的に検証した。衝動性眼球運動を選択反応課題で行わせた条件の重心動揺総軌跡長は、衝動性眼球運動を単純反応課題で行わせた条件と比較して有意に小さかった。また、滑動性眼球運動を行わせた条件の重心動揺総軌跡長と外周面積は、衝動性眼球運動を選択および単純反応課題で行わせた条件よりも有意に大きかった。したがって、眼球運動による立位姿勢動揺への影響は、眼球運動の反応課題の違いよりも、眼球運動制御の違いによる影響を反映したものと考えられる. 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施，論文作成，論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：城野靖朋，金井秀作
22 大腿四頭筋の運動錯覚を惹起する振動刺激周波数の再現性についての検討 （査読なし）	共著	平成30年3月	大阪行岡医療大学紀要 5号 pp.23-27	大腿四頭筋の運動錯覚を惹起する振動刺激周波数の再現性について検証した。Visual Analog Scaleを用いて50Hz、70Hz、90Hz、120Hzのそれぞれの周波数の振動刺激による運動錯覚の程度を1週間以上の間隔をあけて2回評価した。90Hzの周波数にのみ2回の評価間に有意な正の相関がみられた。また、2回の評価間の誤差の種類はすべての周波数で偶然誤差であった。本研究結果より、90Hzの周波数による振動刺激は大腿四頭筋の運動錯覚を惹起させる方法として有用であることが明らかになった。 本人担当部分：研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：神里巌，城野靖朋，粕渕賢志

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23 異なる負荷値における足関節背屈可動域測定の信頼性 （査読なし）	共著	平成30年3月	大阪行岡医療大学紀要 5号 pp.19-22	低い負荷での足関節背屈可動域測定の信頼性を明らかにする目的で、異なる負荷値における足関節背屈可動域測定の信頼性を検証した。本研究では同一検者による2回の測定を実施した。本研究で用いた25N、50N、75N、100Nすべての負荷におい誤差は偶然誤差で、誤差の範囲は2.74°から3.79°の範囲であった。本研究結果から、負荷値を統一した足関節背屈可動域測定では、低い負荷であっても4°未満の偶然誤差で評価できることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：城野靖朋，神里巌，岡村和典，金井秀作，大塚彰
24 足部内在筋トレーニングの学習における随意運動介助型電気刺激装置の効果　内在筋および外在筋の筋活動からの検討 （査読付）	共著	平成30年10月	物理療法科学 25巻 pp.27-33	本研究ではShort Foot exercise(以下、SFex)の習得を促進する目的で随意運動介助型電気刺激装置(以下、IVES)を利用することの有効性を検討した。その結果、IVESを利用するSFexが、足部外在筋による代償を増加させることなく、従来の方法以上にSFex中の母趾外転筋の筋活動を増加させた。このことから、IVESの利用がSFexの習得の促進に有効であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：岡村和典，城野靖朋，山本征孝，江川晃平，金井秀作
25 The influence of muscular activities in a squat with hands on a table for ″locomotion training″ (テーブルを用いたスクワットによるロコモーショントレーニングが筋活動に与える影響) （査読付）	共著	平成31年3月	人間と科学: 県立広島大学保健福祉学部誌 19巻1号 pp.49-53	椅子上の座位からテーブルに手を添えたスクワット(HOTS)をした際の筋活動を、通常の立位スクワット(SPS)と比較した。HOTSではテーブルの高さを変えた高位HOTSと低位HOTSの2種類で測定した。その結果、大腿直筋、内側広筋および半腱様筋に関しては、SPSによる筋活動の方が高位HOTSよりも有意に大きかった。これらより、下肢筋の筋活動はテーブルを用いたスクワットが通常のスクワットより必ずしも有意に減少するわけでは無いことが明らかとなり、テーブルの高さを調節することで、効果的で安全なスクワットができることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 論文作成，論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：金井秀作，池上あゆみ，岡村和典，城野靖朋，大塚彰

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
26 前腕マッチング課題の信頼性―自作装置による予備的研究― （査読なし）	共著	平成31年3月	大阪行岡医療大学紀要 6号 pp. 11-16	本研究では自作の前腕マッチング課題装置を用いた位置覚評価システムの信頼性を検討し、適切な実験プロトコルを提案することを目的とし、肘関節の屈曲課題と伸展課題においてマッチング課題の信頼性を検討した。その結果、マッチング課題には偶然誤差が認められた。信頼性が優秀となるには屈曲課題で10回、伸展課題で7回の計測が必要であることが示された。これらより、本システムによる位置覚の計測は10回以上の計測が必要であることが示された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：城野靖朋，神里巌
27 理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けて―経験学習研究における理論的枠組みと課題― （査読なし）	共著	平成31年3月	大阪行岡医療大学紀要 6号 pp. 23-33	理学療法士の経験学習プロセスの解明と支援方法の開発に向けて、これまで多くの専門職の経験学習プロセスを明らかにしてきた松尾による経験学習研究の理論的枠組みを要約するとともに、それらによって解明された看護師と保健師の経験学習プロセスについて要約した。これらを踏まえ、我々が計画している理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けた研究的枠組みに関する課題を考察した。 本人担当部分：理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けた研究的枠組みに関する課題の考察に関して、部分的に担当。 共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子
28 本学保健医療学部リハビリテーション学科志望経緯に関する調査 （査読なし）	共著	令和2年12月	奈良学園大学紀要学紀要 第13集 pp. 151-157	本調査では2020年度新入生の志望経緯および本学に対する印象等についてアンケート調査を行った。その結果、理学療法・作業療法いずれの専攻についても、多くの学生は当初の志望を中途変更することはなかった。一方で、中途で変更する学生においては、自身の経験や自身の適性についての内省、さらに作業療法学専攻については、特徴的な技術に魅力を感じたことが契機となっていた。入学前の本学選択においては設備、環境面を魅力と感じており、入学後は教員や教育の質について肯定的な意見が多いことが分かった。 本人担当部分：アンケート内容の作成、結果のまとめ、解釈を部分的に担当。 共著者：飯塚照史，辻下守弘，池田耕二，城野靖朋，中島大貴

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
29 理学療法臨床実習・現場教育を支援する教育的工夫と配慮 （査読なし）	共著	令和2年12月	奈良学園大学紀要学紀要 第13集 pp.1-8	本稿では、臨床実習と現場教育における教育目標の共有、現場のストレスへの認識、チームの形成、感情労働、経験資本の視点から、学生や新人理学療法士の自律性を育成するための教育的工夫や配慮を提案した。現在、日本では理学療法教育や人材育成に関する検討が進んでおり、有効な取り組みやエビデンスの構築が行われている。理学療法専門教育や人材育成は重要な課題であり、今後ますます注目されると考えられる。 本人担当部分：本稿の計画段階、本文の作成過程全般にわたり部分的に担当。 共著者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋
30 理学療法士の経験学習プロセスの解明と支援方法の開発に向けた探索的研究− 熟達理学療法士の成長を促す経験とそこから得る知識や教訓等− （査読付）	共著	令和3年2月	理学療法 1号48巻 pp.19-28	本研究では熟達理学療法士の経験学習プロセスから成長を促す経験と学習内容を明らかにし、そこから理学療法士に対する経験学習支援方法を示唆することを目的とした。熟達理学療法士3名を対象に質的研究の手法と経験学習プロセス解明の枠組みを用いた。熟達理学療法士はキャリアの初期に人とのかかわりや社会・生活に対する実感を、初期～中期に医療の厳しさや基本的理学療法技術の有効性を、中期～後期に自己内省による知識・技術の整理やコミュニケーションを学習していた。このような学習を促す経験を積ませることが、理学療法士の経験学習支援につながると考えられる。 本人担当部分：研究結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子
31 Common motor drive triggers response of prime movers when two fingers simultaneously respond to a cue （査読付） （刺激に反応する2本指の同時反応における主動作筋への共通運動命令）	共著	令和3年5月	Brain Sciences Vol.11(6) Article.700 （訳文：ブレイン　サイエンス）	本研究では指運動の実行過程が、異なる指運動に受ける影響を調べた。本研究から外転の反応時間は、屈曲よりも有意に長く、指の反応の運動実行にかかる時間が運動方向に依存していることが示された。また、反応時間の長い外転運動は異なる指運動の反応時間を延長した。これにより、指運動の反応時間は2本同時に運動することで差が小さくなった。これらの結果は、2本の指が一緒に動いたときに、共通の運動命令が運動を誘発していることを示唆する。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施，論文作成，論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：Jono Y.（城野靖朋），Iwata Y.（岩田恭幸），Kinoshita A.（木下篤），Hiraoka K.（平岡浩一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
32 2021 年度リハビリテーション学科新入生における志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要学紀要 第14集 pp.1-6	学部設置3年目を迎えたリハビリテーション学科においては、定員充足率増加に伴い新入生の進学経緯も多様になっているものと考えられる。そこで本調査では、3期生においてアンケート調査を実施し、2期生との比較を通じてその傾 向について比較検討した。結果、当初における職業選択は変更されることなく、近しい人物への相談を伴ったオー プンキャンパスへの参加、加えて本学近隣環境等への好感を以て進学を決定している経緯があり、 2期生との大き な変化はなかった。一方で、プレゼンスの高まり、教員対応への肯定的意見と捉えられる側面もあり、本学魅力の一端として認識する必要性が示唆された。以上の結果は、今後の広報戦略に資するものであると考えられた。 本人担当部分：アンケート作成や調査に関して部分的に担当。 共著者：飯塚照史，辻下守弘，池田耕二，城野靖朋，中島大貴
33 荷重量と下肢アライメントを規定した足部内側縦アーチ測定法の信頼性（査読付）	共著	令和4年3月	医療福祉情報行動科学研究 第9巻 pp.47-54	成人男性3名6足とし、90%荷重時と10%荷重時の2条件において，MLAを測定し級内相関係数を算出した。また，Bland-Altman分析によって系統誤差の有無を検証した。さらに，高い信頼性を確保するためにはICC≧0.7を満たすことが必要とされているが、その測定回数をSpearman-Brownの公式を用いて算出し，ICC（1，k）を求めた。Bland-Altman分析の結果，系統誤差は認められなかったことから，本測定法の測定値に含まれる誤差は，偶然誤差のみであり，測定を繰り返すことで高い信頼性を期待できることが分かった。また、本測定法は6回繰り返し測定を行うことで，信頼性の高い測定方法となることが分かった。 本人担当部分：研究データの記録，データ解析を部分的に担当。 共著者：野田優希，城野靖朋，藤田信子，橋本雅至

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
34 Work beliefs and experiential learning among proficient physical therapists in Japan: developing a method to support belief formation	共著	令和4年4月	Journal of Physical Therapy Science Vol.34(4) pp.262-268 （訳文：ジャーナルオブフィジカルセラピーサイエンス）	本研究では、日本の理学療法士における仕事に関する信念の内容を明らかにすることを目的とした。参加者は、2017年10月から2019年3月にかけてアンケート調査に参加した50人の理学療法士であり、日常の仕事に関する考えや価値観、理想などを自由に記述するように求められた。これらの内容はコーディングとカテゴリー分類が行われ、階層的クラスター分析（ワード法）が、熟練した理学療法士の個人と信念のカテゴリーを変数として行われた。すべての信念カテゴリーは3つのグループに分類された。これらの3つの仕事に関する信念の理解は、理学療法士のサポートや成長を促進する上で重要です。熟練した理学療法士の持つ3つの仕事に関する信念をさらに明らかにし、その教育効果を検証することを推奨する。 本人担当部分：アンケート調査の準備と実施、データ分析、論文作成を部分的に担当。 共著者：Ikeda K.（池田耕二），Tasaka A.（田坂厚志），Kasubuchi K.（粕渕賢志），Jono Y.（城野靖朋），Matsuda J.（松田淳子）
35 Randomized, sham-controlled, clinical trial of repetitive transcranial magnetic stimulation for patients with Alzheimer’s dementia in Japan	共著	令和4年10月	Frontiers in Aging Neuroscience Article.14 （訳文：フロンティアインエイジングニューロサイエンス）	本研究では日本人アルツハイマー病患者40名を対象とし、4週間の反復経頭蓋磁気刺激（rTMS）の有効性と安全性を検討した。40人の患者をランダムにrTMS の強度120% Resting Motor threshold（120% RMT）、90%RMT、それと偽刺激とに割り付けた。Alzheimer’s Disease Assessment Scale-Japanese Cognitive（ADAS-J cog)の3点以上の改善は、120%RMT群では41.7%、Sham群では0%で有意な差があった。Montreal Cognitive Assessment（MoCA-J)も同様の傾向を示したが、有意差はなかった。ADAS-cogとMoCA-Jに基づくと、有効性は20週目に消失した。介入に関連する重篤な有害事象は発生しなかった。以上のことより、本治療法は安全であり、120%RMT rTMSを用いた重要な臨床試験のターゲットは中等症～軽症のアルツハイマー病患者であると思われる。 本人担当部分：主として研究データの記録を担当。 共著者：Saitoh Y.（齋藤洋一）,Hosomi K.（細見晃一）,Mano T.（眞野智生）Takeya Y.（竹屋泰）,Tagami S.（田上真次）,Mori N.（森信彦）,Matsugi A.（松木明好）,Jono Y.（城野靖朋）,Harada H.（原田秀明）,Yamada T.（山田知美）,Miyake A.（三宅顕光）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
36 The relationship between body sway patterns and motor and attentional functions in early childhood	共著	令和5年2月	Journal of Physical Therapy Science Vol. pp. （訳文：ジャーナルオブフィジカルセラピーサイエンス）	幼少期の体の揺れパターンと運動・注意機能の関係を調査し、4つのパターンに分類しました。身体運動能力テストとインタラクティブメトロノーム（IM）課題との関連を検討し、揺れパターンが幼少期の運動・注意機能の指標となるかを明らかにしました。参加者は24人の男児と26人の女児で、平均年齢は2,148.1±103.7日でした。結果から、揺れパターンは運動機能とわずかに関連していることが示されました。ただし、前後方向の揺れパターンを持つ参加者は、他のパターンを持つ参加者と比較して、タスク平均とSR0%が低く、タイミングや注意機能が低下していることがわかりました。これらの結果から、前後方向の揺れは6歳などの子どもの体の揺れを測定する際に、注意機能を反映する可能性があると示唆されました。 本人担当部分：データ記録の実施、データ分析、論文作成を部分的に担当。 共著者：Tsujishita S.（辻下聡馬）,Jono Y.（城野靖朋）,Tsujishita M（辻下守弘）
37 施設の種類に対応した臨床参加型実習モデルの提案 一施設の特徴を活かした経験の積ませ方一	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要学紀要 第14集 pp.1-14	本稿では、臨床実習が行われる施設を医療施設と介護施設、訪問リハビリテーションに大別しながら、各施設の理学療法の特徴や役割を整理し、臨床実習の内容や方向性を確認した。次に、学生に対する経験の積ませ方を考慮しながら、各施設における臨床参加型実習モデルを構築し、併せて臨床実習におけるキーポイントを提示した。 本人担当部分：本稿の計画段階、本文の作成過程全般にわたり部分的に担当。 共著者：池田耕二，滝本幸治，城野靖朋，吉川義之，野田優希，野中紘士，辻下守弘
38 理学療法士を育む［場］づくりの着想に関する一考察	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要学紀要 第15集 pp.15-20	本稿では、現在の理学療法士の現場教育や人材育成の課題と限界を提示し、理学療法士育成システムにおける新 たな枠組みの必要性を指摘する。筆者らが着想する新たな枠組みとは、理学療法士の発達や成長を後押しする“理 学療法士を育む【場】づくり”である。これは理学療法士の経験学習が促進されやすい【場】（雰囲気や組織風土からなる空間）をつくりあげるというものである。しかし、現在、理学療法士の経験学習を促す【場】の特性や、それを成立させるための条件は明らかになっていない。これらを解明することができれば、理学療法士を育む【場】づくりが可能となり、現場教育や人材育成に貢献できると考える。本枠組みの実現可能性は十分あり、これからの 現場教育、人材育成の課題の一つとなる。 本人担当部分：本稿の計画段階、本文の作成過程全般にわたり部分的に担当。 共著者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋，吉川義之，野田優希

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（その他） 「総説」 1 ユニバーサルデザインと福祉用具の開発研究	共著	平成25年5月	理学療法えひめ	ユニバーサルデザインの概念に基づき，福祉用具の研究・開発を行ってきた。サリドマイド薬禍障害児の電動義手，進行性筋ジストロフィー症児に対するバネ付き装具の開発に始まり，様々な義手，福祉用具の研究・開発に携わってきた。近年では障害を持つヒトの余暇の利用を支援するタンデムチェアスキーや，砂浜歩行研究に基づく砂浜裸足用5本趾履物，介助者の主観的な負担を軽減する寝返り介助用具を開発した。 本人担当部分：砂浜歩行研究に関する研究を中心的に担当。 共同発表者：大塚彰，長谷川正哉，城野靖朋，田中聡，沖貞明
「学会発表」 ＜国際学会＞ 1 Effects of cerebral -blood-flow change during muscle power enhancing training with mental practice. （訳文：メンタルプラクティスによる筋力増強訓練における脳血流量変化の影響）	-	平成25年9月	The 6th WCPT-AWP & 12th ACPT Congress 2013 （於台湾） （訳文：第6回世界理学療法アジア西太平洋地域学会および第12回アジア理学療法学会の合同学会）	メンタルプラクティスによる膝伸展筋力増強効果を検証した。2週間のメンタルプラクティスによる筋力増強効果の評価と、イメージ課題中の脳血流量を測定した。メンタルプラクティスは等尺性膝伸展筋力を有意に増強させた。イメージ課題中は、前頭葉領域の脳活動賦活が確認された。したがって、メンタルプラクティスは脳活動を賦活させることで、神経性要因による筋力増強効果を得ている可能性が示唆された。これは、整形外科疾患、中枢神経疾患、また、高齢や廃用症候群によって重度の筋力低下がみられる対象の運動療法となりうる。 本人担当部分：研究結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：Daniide Y.（谷出康士），Kanai S.（金井秀作），Jono Y.（城野靖朋），Goto T.（後藤拓也）
2 Study of dual-task cost by manipulating the attentional demands of a cognitive and motor task. （訳文：認知課題と運動課題における注意需要量を統制した二重課題コストの研究）	-	平成25年9月	The 6th WCPT-AWP & 12th ACPT Congress 2013 （於台湾） （訳文：第6回世界理学療法アジア西太平洋地域学会および第12回アジア理学療法学会の合同学会）	二重課題によるパフォーマンスの低下（dual-task cost）は、高齢者や中枢神経疾患患者で顕著にみられ、日常生活動作能力へ影響を及ぼす重要な問題である。そこで、注意需要量を統制した運動課題下での認知的負荷によるdual-task costへの影響を検証した。難易度を注意需要量で統制した二重課題条件を設定し、単一運動課題能力の高い群と低い群とでdual-task costを比較した。両群間でdual-task costに有意な差をみとめなかった。したがって、二重課題におけるdual-task costは、単一運動課題能力に影響されない可能性が示唆された。 本人担当部分：研究結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：Goto T.（後藤拓也），Okita K.（沖田一彦），Hasegawa M.（長谷川正哉），Tanaka S.（田中聡），Shimatani K.（島谷康司），Jono Y.（城野靖朋），Daniide Y.（谷出康士），Harada R.（原田亮），Fujitaka Y.（藤高祐太），Kanai S.（金井秀作）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
＜国内学会＞ 1 メンタルプラクティスによる筋力増強効果の検討	－	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会 （於神戸ポートピアホテル）	イメージ課題を用いたメンタルプラクティスによる筋力増強効果を検証した。メンタルプラクティスは等尺性膝伸展筋力を有意に増強させた。等尺性膝伸展筋力測定をイメージする課題中の脳血流量を、近赤外光脳機能イメージング装置で測定したところ、前頭葉領域の脳活動賦活が確認された。したがって、メンタルプラクティスは脳活動を賦活させ、神経性要因による筋力増強効果を得ることが示唆された。 本人担当部分：研究結果の解釈，考察を部分的に担当。 共同発表者：谷出康士，金井秀作，城野靖朋，後藤拓也，島谷康司，長谷川正哉，大塚彰
2 変形性膝関節症に対する微弱電流の効果	－	平成20年8月	第20回日本物理療法学会学術大会 （於佛教大学）	変形性膝関節症患者を対象に，微弱電流の効果を疼痛および歩行の変化から検討した。対象は70歳代の左変形性膝関節症患者1名とし，通常の理学療法に微弱電流治療を追加した。介入一日目に，疼痛の軽減と歩行時の左下肢単脚支持期の延長がみられた。介入二日目以降，治療前後の変化は観察できなかったが，一日目の治療効果は維持できていた。本症例は微弱電流治療の介入一日目に，疼痛緩和による単脚支持期の延長が観察された。 本人担当部分：研究計画の立案から介入の実践，発表資料の作成，発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，堀内賢，岡田裕尚，百々美樹，白須健司
3 運動野表象に対する隣接筋随意収縮の影響	－	平成26年5月	第49 回日本理学療法学術大会 （於パシフィコ横浜）	試験筋随意収縮中に隣接筋を随意収縮させた時に生じる試験筋支配運動野表象分布の変化を観察し、試験筋随意収縮中の隣接筋活動の影響を神経生理学的に検証した。隣接筋活動の影響を受けて、試験筋運動野興奮性分布の重心は内側へ偏移した。試験筋随意収縮中の隣接筋活動は、試験筋運動野表象の興奮性分布を変化させることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、発表資料の作成、発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，中條雄太，谷恵介，野村佳史，二階堂泰隆，畑中良太，平岡浩一

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 外乱予測が筋反応および反応前期の皮質脊髄興奮性に与える影響	－	平成26年5月	第49 回日本理学療法学術大会 （於パシフィコ横浜）	外乱方向および外乱タイミング予測が外乱に対する筋反応と反応前期の皮質脊髄興奮性に与える影響を神経生理学的に検証した。タイミング予測により伸展外乱時のみ反応前期皮質脊髄興奮性が増大した。タイミング予測は筋伸張を予測できないにもかかわらず伸展外乱反応前期のみで皮質脊髄興奮性増大に作用することを示唆した。したがって、タイミング予測による反応前期皮質脊髄興奮性増大に筋伸張求心性インパルスが関与することが示唆された。 本人担当部分：実験の実施、研究結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：二階堂泰隆，畑中良太，城野靖朋，谷恵介，野村佳史，中條雄太，平岡浩一
5 地域在住高齢者における不安定面での姿勢制御能力が転倒にどのように影響を及ぼすか―不安定面での重心動揺検査における検証―	－	平成26年5月	第49 回日本理学療法学術大会 （於パシフィコ横浜）	ラバー負荷重心動揺検査を利用して、地域在住高齢者の不安定面での姿勢制御能力が転倒にどう影響するかを運動学的に検証した。ラバー負荷使用による姿勢制御能力は、転倒と関連しなかった。ラバー負荷時のロンベルク率は、非転倒群で高値を示した。したがって、転倒群の姿勢制御は非転倒群と比べ下肢の体性感覚への依存が少ない可能性が示唆された。 本人担当部分：研究結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：藤高祐太，金井秀作，原田亮，後藤拓也，城野靖朋，田中聡，大塚彰
6 身体軸に対する手指運動方向が手指筋運動野表象に及ぼす影響	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会 （於福岡国際会議場）	身体軸に対する運動方向の違いが手指筋運動野表象に及ぼす影響を検証した。異なる3つの上肢肢位において手指筋運動誘発電位マッピングを行った。運動方向の違いによる手指筋運動野表象の違いはみられなかった。肩関節角度と肘関節角度の違いで、hotspot内側の手指筋運動誘発電位に有意な差がみられた。したがって、中枢関節角度の影響により手指筋運動野表象内側の興奮性が変化することが示唆された。肢全体の関節に共同運動が生じてしまう中枢神経障害の運動障害と関連する知見である可能性がある。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、発表資料の作成、発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，中條雄太，谷恵介，野村佳史，畑中良太，岩田泰幸，水澤裕貴，平岡浩一

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7 両側forceの協調が皮質間抑制に及ぼす影響	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会（於福岡国際会議場）	半球間抑制は中枢神経障害による運動障害と関係していると考えられている。そこで、両側forceの協調が半球間抑制に及ぼす影響を神経生理学的に観察した。半球間抑制は、左右示指同士を直接押し合う協調したforce出力を要する課題において、左右示指間に金属板を挟んだ協調したforce出力を要しない課題と比較して有意に大きくなった。条件刺激と試験刺激の刺激間隔時間の違いが、半球間抑制の大きさに与える影響はみとめなかった。したがって、両側forceの協調は皮質間抑制を促通することが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：平岡浩一，阿江美乃里，小倉奈菜，佐野千紗，塩見啓悟，森田祐司，横山遙香，城野靖朋，野村佳史，谷恵介，中條雄太
8 聴覚刺激が視覚標的リーチ時の手選択に及ぼす影響	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会（於福岡国際会議場）	聴覚刺激が視覚反応リーチ課題時の手選択に及ぼす影響を検証した。右利き者のリーチ側選択が左右均等になる水平視線角度は、右聴覚入力の影響を受けて有意に左へ偏移した。左利き者の水平視線角度は、右聴覚入力の影響を受けて半数で左へ偏移したが、残りの半数では算出できなかった。したがって、右聴覚音は右利き者の視覚標的リーチ時の右手選択確率を増加させるが、左利き者において右利き者と異なる機構の存在が示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：谷恵介，城野靖朋，中條雄太，野村佳史，畑中良太，平岡浩一
9 異なる相対位相の両側リズミカル運動における運動制御	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会（於福岡国際会議場）	相対位相の異なるリズミカルな両側性運動の運動制御を神経生理学的に検証した。難易度の高い相対位相のリズミカル運動で、運動誘発電位が有意に大きくなり、背景筋放電量に対する運動誘発電位の相関が有意に低下した。したがって、高い難易度の両側性運動では皮質脊髄路興奮性は増大するが、筋出力の皮質脊髄制御の依存は小さいことが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：野村佳史，畑中良太，城野靖朋，谷恵介，中條雄太，平岡浩一

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10 視覚入力を伴わない衝動性眼球運動が手指筋皮質脊髄路興奮性に及ぼす影響	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会 （於福岡国際会議場）	視覚入力を伴わない衝動性眼球運動が、手指筋支配皮質脊髄路興奮性に及ぼす影響を神経生理学的に検証した。眼球運動前と比較して、衝動性眼球運動開始から終了を4分割した第3相の運動誘発電位が有意に減少した。前腕肢位及び筋の違いによる影響はみられなかった。衝動性眼球運動は手指筋支配皮質脊髄路の興奮性を抑制するが、その抑制に視覚、前腕固受容器、および共通経路を介した手指運動命令は関与しないことが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：中條雄太，城野靖朋，谷恵介，野村佳史，畑中良太，平岡浩一
11 手指筋の緊張性収縮が隣接筋運動野の興奮性および抑制性回路に与える影響	－	平成27年11月	第45回日本臨床神経生理学会学術大会 （於大阪国際会議場）	手指筋運動野表象の興奮性および抑制性回路に及ぼす隣接筋活動の影響を神経生理学的に検証した。第1背側骨間筋は，小指外転筋と重複していない運動野表象で小指外転筋活動による運動野興奮性および抑制性が抑制された。小指外転筋では第1背側骨間筋活動による運動野興奮性および抑制性は変化しなかった。したがって，隣接筋活動による運動野表象の興奮性変動は筋によって異なることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施，発表資料の作成，発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，岩田恭幸，水澤裕貴，平岡浩一
12 単耳聴覚性歩行開始合図が振出下肢選択におよぼす影響	－	平成27年11月	第45回日本臨床神経生理学会学術大会 （於大阪国際会議場）	単耳聴覚性歩行開始合図が振出下肢選択に及ぼす影響を検証した。聴覚合図側が予想不能なセッションで、自己ペース歩行開始動作における振出下肢に選択しにくい下肢側からの聴覚合図は、聴覚合図側の下肢を振出下肢に選択する確率を増大させた。しかし、聴覚合図側が予想可能なセッションでは、有意な変化は観察されなかった。したがって、選択しにくい振出下肢側への予測不能な聴覚合図は、聴覚合図側の下肢選択確率を増加させる。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：平岡浩一，阿江実乃里，小倉奈々，佐野千紗，塩見啓悟，森田祐司，横山遥香，岩田恭幸，城野靖朋，野村佳史，谷恵介，中條雄太

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
13 一次感覚野への経頭蓋磁気刺激による一次運動野半球間抑制	－	平成27年11月	第45回日本臨床神経生理学会学術大会（於大阪国際会議場）	一次感覚野への経頭蓋磁気刺激による半球間抑制を神経生理学的に観察した。一次感覚野への経頭蓋磁器刺激により感覚減弱が生じた対象者では、刺激後20 msおよび40msで半球間抑制が観察された。このことから、一次感覚野への経頭蓋磁器刺激で長潜時の半球間抑制を誘発可能であることが示唆された。また、この抑制は感覚減弱が生じた対象者で観察されたことから、皮膚知覚経路に関連していると考えられる。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：岩田恭幸，城野靖朋，水澤裕貴，平岡浩一
14 歩行開始時予測的姿勢制御の動作変換または中止による抑制	－	平成27年11月	第45回日本臨床神経生理学会学術大会（於大阪国際会議場）	歩行開始時予測的姿勢制御における、足底移動中心軌跡のS1相に及ぼす動作変換あるいは中止の影響を運動学的に検証した。歩行開始合図により生じたS1の側方振幅とその持続時間が、振出下肢変更あるいは動作中止により有意に減少した。このことは、歩行開始時の予測的姿勢制御は、他の競合する運動プログラムから抑制フィードバックを受けることを示唆する。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：水澤裕貴，城野靖朋，岩田恭幸，平岡浩一
15 高齢者に対する3次元複数物体追跡課題を用いた視覚認知トレーニングの効果	－	平成28年6月	第44回日本バイオフィードバック学会学術集会（於日本大学文理学部百年記念館）	地域在住高齢者を対象に、三次元複数物体追跡課題のトレーニング効果を検証した。トレーニング介入群ではTrail Making Test part Aが介入後に有意に短くなった。介入群においてTrail Making Test part AとTimed Up and Go Testの変化比率の間に有意な正の相関が認められた。地域在住高齢者に対する三次元複数物体追跡課題のトレーニング効果は注意機能および動的バランス能力の向上が期待でき、新しい運動療法としての可能性が示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：辻下守弘，城野靖朋

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
16 異なる手指運動プロセス間の協調	－	平成28年11月	第46回日本臨床神経生理学会学術大会（於ホテルハマツ）	異なる手指運動プロセス間の協調について検証した。示視屈曲時の示指支配筋単純反応時間は小指運動の影響を受けなかったが、小指屈曲時の小指支配筋反応時間は示指運動の影響を受けて有意に延長した。また、示指支配筋と小指支配筋の反応時間差の試行間標準偏差は、示指と小指の同時外転時に最も小さく、同時屈曲時に最も大きかった。したがって、独立性の高い運動を実行する示指の運動プロセスでは他の指運動プロセスとの干渉はないが、独立性の低い小指の屈曲運動プロセスでは他の指運動プロセスの干渉を受ける場合がある。また、指の外転運動は屈曲運動よりも他の指運動との共同性が高いことが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、発表資料の作成、発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，岩田恭幸，木下篤，平岡浩一
17 一次感覚野経頭蓋磁気刺激による半球間抑制の体性感覚経路依存性	－	平成28年11月	第46回日本臨床神経生理学会学術大会（於ホテルハマツ）	対側示指への皮膚刺激が、経頭蓋磁気刺激によって観察される長潜時半球間抑制へ及ぼす効果を神経生理学的に観察した。一次運動野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、対側示指への皮膚刺激の影響を受けなかった。一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、一次感覚野を刺激する20ms前に対側示指へ皮膚刺激を与えると促通した。これは体性感覚求心性入力が一次感覚野に到達した時点で、一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制が促通されることを意味する。したがって、一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、体性感覚経路の活動と関連することが考えられた。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：岩田恭幸，城野靖朋，水澤裕貴，木下篤，平岡浩一
18 リズムフィードバック入力視野がポリリズム両側運動に及ぼす影響	－	平成28年11月	第46回日本臨床神経生理学会学術大会（郡山）	ポリリズム両手運動に対するリズム視覚フィードバックの入力側、刺激位置間距離、およびフィードバックと運動側の一致の影響を検証した。フィードバック入力側が片側の条件におけるポリリズムの周期の長い側の手運動周期が、片手運動と比較して短縮した。フィードバック入力側が両側の条件では片手運動に対する周期の差は観察されず、刺激位置間距離の違いにおいても運動周期の差は観察されなかった。したがって、フィードバックの入力側半球が同一であることに起因して、ポリリズムの周期の長い側の手運動周期が短縮することが考えられた。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：木下篤，城野靖朋，水澤裕貴，岩田恭幸，平岡浩一

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
19 上腕三頭筋腱振動刺激時の肘関節角度の違いが運動錯覚の惹起に及ぼす影響	－	令和元年10月	第27回日本物理療法学会学術大会（東京）	関節角度の違いによる筋長の変化が筋腱振動刺激による運動錯覚の惹起に及ぼす影響を明らかにすることを目的とし、左肘関節屈曲30度、60度、90度の3条件で運動錯覚を評価した。その結果、肘関節屈曲60度と90度において肘関節屈曲の運動錯覚が惹起された。したがって、筋腱振動刺激による運動錯覚の惹起には被刺激筋の長さが影響し、伸長位であることが必要だと考えられた。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、発表資料の作成、発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，神里巌，吉川義之，辻下守弘
20 熟達理学療法士の経験学習能力を支える 仕事に対する信念とは？	－	令和元年11月	第8回日本理学療法教育学会学術大会・第2回日本理学療法士学会管理部門研究会（名古屋）	仕事に対する信念は専門職の経験学習に重要な役割を担い、理学療法士（以下、PT）の育成には信念の形成支援が大切となる．しかし、PTの信念の内容や形成支援方法は明らかにされていない．そこで、本研究では現場の熟達PTの信念を明らかにし、信念の形成支援方法を提案する．熟達PTからは30個の信念カテゴリーが得られたが、それらは実に多様であった．これらを要約すると、熟達PTの信念は人間関係の構築、PTのプライドや責任感、熱意と幅広い実践、治療成果による社会還元等から形成されていた． 本人担当部分：研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子
21 創傷被覆材における近赤外線透過率の検証	－	令和3年2月	第1回物理療法部門研究会（Web） https://2020jspt.wixsite.com/toppage	本研究は、褥瘡治療に用いる近赤外線の創傷被覆材（ドレッシング材）の透過率を、ドレッシング材の状態（乾燥、湿潤）とドレッシング材の種類の要因で検討した。 フィルムドレッシング材については約95%の透過率があったため、フィルムドレッシング材のみであれば十分な近赤外線が創部へ到達すると考えられる。ハイドロコロイドドレッシング材については、水分を吸収することで透過率が減少し、ポリウレタンフォームドレッシング材については水分を吸収することで透過率が増加した。それゆえに、ドレッシング材の種類によって使用時期を変更する必要性があることも示唆された。 本人担当部分：解析の実施、結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：吉川義之，辻下守弘，城野靖朋，滝本幸治

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
22 筋腱振動刺激の圧力の信頼性と圧力値フィードバックの有効性について	-	令和3年2月	第1回物理療法部門研究会（Web） https://2020jspt.wixsite.com/toppage	本研究は筋腱振動刺激の圧力を被刺激部と刺激部の圧力センサーにてそれぞれ記録し、異なる振動周波数における圧力の信頼性について検討した。また、圧力センサーの値をフィードバックし、その効果についても検討した。本研究の結果から、刺激部の圧力は視覚的にフィードバックされており,全ての条件で高い信頼性を示した。しかし、被刺激部の圧力は信頼性が低く、特に振動が加わると信頼性は著しく低下することが明らかになった。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の解釈、考察部分を中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，吉川義之，野田優希，神里巌，辻下守弘
23 筋腱振動刺激圧力の安全性に関する検討	-	令和3年10月	第28回物理療法学会学術大会（Web） https://jseapt28.wixsite.com/jseapt28	本研究は筋腱振動刺激を安全に実施することを目的に、主観的な疼痛閾値以下の最大限の圧力と、それらを繰り返し実施した際の信頼性について検討した。対象は健常成人9名の上腕二頭筋腱とし、2回の連続したセッションを行った。本研究の結果から、振動がある場合のセンサーからの圧力はセッション間で偶然誤差であった。このことから、本研究で用いた方法は、振動刺激を疼痛閾値以下で制御するパラメーターとして有効だと考えられる。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の解釈、考察部分を中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，吉川義之，野田優希，神里巌，辻下守弘
24 奈良学園大学リハビリテーション学科におけるコロナ禍の学内実習の紹介①―実習専用ホームページの開設と運用方法の紹介―	-	令和3年10月	第34回教育研究大会･教員研修会（Web） https://orbit-cs.net/34rehatki/	本研究では臨床実習専用ホームページをコロナ感染拡大下において学内実習へと切り替えた2つの実習（早期体験実習;１年次，地域理学・作業療法実習;2年次）において活用し、それに対して学生に実施したアンケーを実施した。アンケートの結果、本学科の取り組みは個々の学生の学習進捗状況や理解度といった情報が円滑に共有できるだけでなく、すべての項目で半数以上の学生が「とてもよかった」、「まあまあよかった」と回答したことから、学習しやすい良い取り組みだと考えている。 本人担当部分：解析の実施、結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：池田耕二，滝本幸治，飯塚照史，城野靖朋，野田優希，福原啓太，中田修，辻下聡馬，岩﨑智子，辻下守弘

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
25 異なる運動課題が反応時間の学年間の違いに及ぼす影響	-	令和3年12月	第8回 日本地域理学療法学会学術大会（Web） https://56thjsccpt-jsatpt-jspte-jsptm2021.org/	本研究では中高生の神経機能の学年間の違いを明らかにすることを目的とし、サッカー部所属の男子中高生31名（中学1年7名、2年7名、3年9名、高校1年8名）を対象にボタン押し、歩き始め、跳躍の運動課題で反応時間を計測した。その結果、ボタン押しのような焦点的な運動ではなく、歩きはじめや跳躍といった全身運動の反応時間に学年間の有意差がみられた。さらに跳躍でみられた反応時間の学年間の違いは、前運動時間の違いを反映している可能性があり、全身的な運動における動き始めるまでの神経系の情報処理プロセスは、中高生においても発達過程にあることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の解釈、考察部分を中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，野田優希，藤田信子，三笘康之，橋本雅至
26 熟達理学療法士の成長を促す経験における経験学習サイクルを解明する ― 教訓と応用 ―	-	令和3年12月	第4回 日本理学療法管理研究会学術大会（Web） https://56thjsccpt-jsatpt-jspte-jsptm2021.org/	本研究では熟達理学療法士から教訓と応用の内容を解明することを目的とし、臨床歴10年以上、臨床実習指導や非常勤講師等の教育歴、学位取得や学会発表等の研究歴のすべてを有するもの43名を対象にアンケート調査を行った。解析結果の一例として、担当患者の理学療法・関係性に苦悩した経験から、理学療法士としての態度を教訓として学び、丁寧な患者対応へと応用していたことが明らかとなった。このように、成長を促す多様な経験から多様な教訓を得て，次の経験に向けて応用（思考・行動変容)していることが分かった。これら理学療法士支援方法の構築や検証は今後の課題である。 本人担当部分：解析の実施、結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子
27 痙縮に対する筋腱振動刺激の即時的効果	-	令和4年2月	第2回日本物理療法研究会学術大会（Web） https://2021jsbapt.wixsite.com/home	本研究はでは痙縮の治療に有効だと報告されている振動刺激の刺激部位を痙縮筋とその拮抗筋とに実施し、その即自的な効果を観察した。痙縮筋への振動刺激は伸張反射の出現角度を増大させ、拮抗筋への振動刺激では減少させた。また、痙縮筋への振動刺激では運動錯覚が観察されなかったが、拮抗筋では観察された。これらのことから拮抗筋への刺激は筋紡錘を興奮させて即時的に痙縮を減弱させた可能性が考えられた。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の解釈、考察部分を中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，吉川義之，野田優希，神里巌，辻下守弘

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
28 慣性センサーの加速度と角速度を用いて算出した角度の妥当性検証―単軸運動の角速度とセンサー位置の影響―	－	令和4年7月	第31回 奈良県理学療法士学会(Web) https://naragakkai.com/	本研究では、関節角度評価のための慣性センサーを使用した2つの方法（方法Aと方法B）の妥当性を検証しました。等速運動装置を使用して10回の運動試行を行い、異なる速度条件と位置条件で角度を記録しました。方法Aでは加速度から角度を算出し、方法Bでは角速度を積分して角度を算出しました。真の角度との比較に基づき、相関係数（r）とRMSEを評価しました。結果では、方法Bの妥当性が高く、速度が速いほど方法Aの妥当性が低下する傾向が見られました。低速運動では加速度を使用する方法Aが適しており、高速運動では角速度を使用する方法Bが優れていることが示されました。運動解析においては、解析対象の運動と適切な角度算出方法を考慮する必要があります。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の解釈、考察部分を中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，野田優希，前田吉樹，飯塚照史，池田耕二
29 上肢の神経障害性疼痛に対する反復経頭蓋磁気刺激の長期介入試験	－	令和4年11月	第52回日本臨床神経生理学会学術大会（於国立京都国際会館）	この研究は、上肢の神経障害性疼痛に対する反復経頭蓋磁気刺激（rTMS）の有効性と安全性を評価するために、盲検化無作為化プラセボ対照並行群間比較試験を行いました。30人の患者を実刺激群と偽刺激群にランダムに割り付け、8週間の介入を行いました。結果では、実刺激群と偽刺激群の間で明確な有効性の差は見られませんでしたが、長期的なrTMSの実施による有効性の可能性が示唆されました。重大な有害事象は報告されませんでした。この臨床試験では、8週間の実刺激が上肢の神経障害性疼痛患者に対して偽刺激よりも有効であることを明確には示せませんでしたが、長期的なrTMSの有効性が示唆されました。 本人担当部分：主として研究データの記録を担当。 共同発表者：細見晃一，西麻哉，森信彦，三宅顕光，山田知美，林燦碩，松木明好，城野靖朋，董冬，Khoo HuiMing，谷直樹，押野悟，貴島晴彦，齋藤洋一
30 短期的な関節固定による一時的な柔軟性の変化に及ぼす性別の影響	－	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（於奈良学園大学）	本研究では短期間の筋の短縮位固定による一時的な柔軟性の変化と可動域制限などで観察される柔軟性との関係について、性別間の違いがあるかどうかを調べることを目的とした。健常成人18名（男性9名）を対象に、足関節の底屈、背屈の可動範囲を測定し、その後、10分間足関節を底屈10度で固定した後、等速運動装置を用いて繰り返し底背屈運動を行い、受動トルクを計測した。その結果、男女間で可動域が異なることが確認され、男性では女性に比べて短期的な関節固定による柔軟性の低下が大きいことが示された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の解釈、考察部分を補助的に担当。 共同発表者：林咲季，中島瑠維，清水龍助，城野靖朋

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「研究報告書」 1 研究助成報告会 「学童期から青年期における姿勢の形態学的・運動学的機能面が静的・動的バランス能力に及ぼす影響について-パイロットスタディ」	-	令和2年8月	奈良学園	本研究では中高生の神経機能の学年間の違いを明らかにすることを目的とし、サッカー部所属の男子中高生）を対象にボタン押し、歩き始め、跳躍の運動課題で反応時間を計測した。また、アーチの計測、身体組成の計測を行った。学会発表に向け準備中である。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、解析、結果の解釈を中心的に担当。 共同研究者：橋本雅至、城野靖朋，野田優希，藤田信子，三笘康之
2 研究助成報告書 「腱振動刺激中マッチング課題の経時的解析」	-	令和3年5月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成報告書	本研究は筋腱振動刺激の圧力を被刺激部と刺激部の圧力センサーにてそれぞれ記録し、異なる振動周波数における圧力の信頼性について検討した。また、圧力センサーの値をフィードバックし、その効果についても検討した。本研究の結果から、刺激部の圧力は視覚的にフィードバックされており,全ての条件で高い信頼性を示した。しかし、被刺激部の圧力は信頼性が低く、特に振動が加わると信頼性は著しく低下することが明らかになった。以上の内容を第1回物理療法部門研究会（Web）にて令和3年の2月に発表した。引き続き研究は継続して実施している。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の解釈、考察部分を中心的に担当。 共同研究者：城野靖朋，吉川義之，野田優希，神里巌，辻下守弘 A4判　全2頁
3 研究助成報告書 「創傷被覆材における近赤外線透過率の検証」	-	令和3年5月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成報告書	本研究は、褥瘡治療に用いる近赤外線の創傷被覆材（ドレッシング材）の透過率を、ドレッシング材の状態（乾燥、湿潤）とドレッシング材の種類の要因で検討した。 フィルムドレッシング材については約95%の透過率があったため、フィルムドレッシング材のみであれば十分な近赤外線が創部へ到達すると考えられる。ハイドロコロイドドレッシング材については、水分を吸収することで透過率が減少し、ポリウレタンフォームドレッシング材については水分を吸収することで透過率が増加した。それゆえに、ドレッシング材の種類によって使用時期を変更する必要性があることも示唆された。以上の内容を第1回物理療法部門研究会（Web）にて令和3年の2月に発表し、論文投稿の準備中であるる。 本人担当部分：解析の実施、結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同研究者：吉川義之，辻下守弘，城野靖朋，滝本幸治 A4判　全2頁

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 研究助成報告書 「リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性システムの構築-臨床実習教育の質向上を目指して-」	-	令和3年5月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成報告書	本研究では臨床実習管理センターにホームページによる双方向性活用システムを作成し運用し、臨床実習教育施設との密な連携の構築、臨床実習教育の質の向を目的とした。研究デザインは、アクションリサーチとし、その手順は臨床実習教育に関する課題・問題点、解決のための方向性を抽出した（①）。問題点の優先順位を設定した（②）。臨床実習管理センターのホームページを作成し、手順②であげられた問題点の優先順位の高いもの、解決の方向性が示されているものから、解決できるシステムを考案し、作成、導入した（③）。試用を繰り返し、問題点を収集し、システムの修正を行った（④）。手順①～④の繰り返しを行い、本リハ学科臨床実習教育ネットワークを構築した（⑤）。これらの結果を学会発表に向けて準備中である。 本人担当部分：解析の実施、結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同研究者：池田耕二,飯塚照史,城野靖朋,福原啓太,滝本幸治,リハビリテーション学科臨床実習管理センター・教員,辻下守弘 A4判　全4頁

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年　3月　31日
氏名　　滝本　幸治

研究分野	研究内容のキーワード
地域ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学、地域理学療法学、予防理学療法学、老年期理学療法学	健康増進、介護予防、地域包括ケア、歩行、転倒、認知症、フレイル、サルコペニア

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）臨床実習学生教育	平成12年4月 ～ 現在に至る	平成12～平成16年には、理学療法士として臨床業務に携わる傍ら、臨床実習学生の実践的スキルの向上を目的とした教育を行ってきた。 　平成17年からは、土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科 専門分野 「臨床評価実習（2年次）」「臨床総合実習Ⅰ（3年次）」「臨床総合実習Ⅱ（4年次）」において、令和元年からは奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科にて、養成校教員の立場から臨床実習指導者と連携し、特に実習困難な学生の指導方法について相談・指導してきた。同時に、学生教育から資格取得後の新人教育への連携を意識した教育を行ってきた。
2）卒後の学術活動を意識した卒業研究指導	平成17年4月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科 専門分野 「理学療法セミナーⅠ（3年次）」「卒業研究（4年次）」において、各学年6名程度のゼミ生に対し学生1名ごとに研究を指導。文献抄読や研究計画のプレゼンテーションを積極的に行う。学内での研究発表や論文執筆のみならず、在学中の関連学会への演題投稿や学会発表なども積極的に支援。卒後、臨床へのシームレスな学術活動の支援を目的として指導しているため、卒後の臨床研究に活動が継続されている。
3）フィールドワークを通した職業意識の向上にむけた取り組み	平成17年4月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科 専門分野 「地域リハビリテーション演習（3年次）」「理学療法セミナーⅠ（3年次）」において、自治体事業（介護予防事業等）や介護保険サービス事業所（通所介護など）および高齢者の自主運動教室に学生と参加。当事者や職員との関わりから、地域課題や当事者意識に直接触れ、将来理学療法士として学生自身がどのように貢献し得るか考え関心を高める機会となり、学生の感想も貴重な機会であったとする肯定する評価が大半を占めた。
4）臨床実習対策レクチャーの実施	平成17年4月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科 専門分野 「臨床評価実習（2年次）」「臨床総合実習Ⅰ（3年次）」「臨床総合実習Ⅱ（4年次）」に先立って、当該学生を対象に臨床実習に向けた対策レクチャーを開講。主に「姿勢・動作分析」をテーマとして、観察・分析のプロセス、仮説の証明（原因の特定）、治療手段の決定、効果判定について実技を交えて指導。臨床に即した実践的なレクチャーのため、毎年受講希望者が多く、実習で役立ったという声も多い。

5）国家試験対策レクチャーの実施	平成17年10月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科において、国家試験受験を前にした学生に対し、毎年10月～2月に国家試験対策レクチャーを実施。担当領域は主に「生理学」「運動学」「義肢・装具学」であり、国家試験過去問題からその傾向を探り、学生の効率的且つ効果的な学習のために過去問題演習とともにポイント解説を行っている。また、平成28年から新たな国家試験出題基準が適応されたことを受け、それに対応すべく新たな出題傾向について検討するとともに情報収集に努め、学生に情報提供している。 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科においては、国家試験対策ソフトを活用した取り組みや、CBTを反映したワークブックを作成し学生に提供する取り組みを行っている。
6）メーリングリストを利用したレポート添削による効率的な個別学習支援	平成25年10月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科専門分野 「運動分析学（2年次）」において、姿勢・動作の観察・分析方法の指導と演習（レポート作成）を行う。学生は繰り返しレポート提出を行い、それに対して個別にフィードバックを行う必要があるため、学内メーリングリストを利用した課題の提出・返却を実施した。学生は提出期日までの間、昼夜問わずレポートを提出できる利便性があるとともに、添削の際もワープロソフトの校閲機能を用いて効率よく丁寧に実施できる。
7）チューター制度による少人数制の学生生活および学習のサポート	平成26年4月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科および奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科において、学年を問わず、履修中の科目の中で理解が不十分であったり、学生生活で悩みがあったり、将来的な不安などを抱えている学生は少なくない。そこで、学年別に少人数（6名程度）の学生を対象に放課後等の時間を活用してチューター制度を設けた。比較的共通する課題や悩みがあるなどピアとしても機能し仲間意識が高まるなど、きめ細かいフォローが学生にとって有効にはたらいていることを実感する試みである。
8）事前テストの実施による学習目標の明確化	平成27年4月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科専門基礎分野 「人体の機能演習Ⅰ・Ⅱ」「運動学演習Ⅰ・Ⅱ」（ともに1年次）では、初めて専門的な学習を行う学生にとって難易度は高いと思われる。そこで毎回講義の最初に、当日講義で扱う内容で構成された「事前テスト」を講義冒頭で実施（5分程度）。これによりこれから何を学ぶか意識付けするとともに、講義終了後には事前テストの解答を完成させたものを提出させ、理解の確認とともに質問を受け付け、次回講義時にフィードバックするよう努めた。学生評価は非常に高いものであった。
9）臨床における理学療法士・作業療法士に対する教育	令和元年10月 ～ 現在に至る	医療機関（社会医療法人黎明会 北出病院）において、臨床経験の浅い理学療法士・作業療法士に対しては、症例の担当場面に介入して直接的な指導を実施（on the job training）。一方、中堅以上のスタッフに対しては、学術活動や後進育成のための教育・マネジメント、多職種・多事業所連携等に関する相談・指導を実施した。
10）オンライン教育コンテンツを活用した学習支援	令和2年5月 ～ 現在に至る	教員が学生と共有できる教育コンテンツを活用し、講義および講義で課した課題の解説などの動画を掲載することで、学生がいつでもどこでも自己学習できる環境を構築した。また、必要に応じて講義資料（補足、参考資料等）の掲載や演習問題の提供・解説など、講義時間外においても学生が学習できる機会を提供した。

11）地域理学療法・作業療法実習の学内実習の実施	令和2年5月 ～ 現在に至る	コロナ禍により現場での実習が困難となったため、学内にて地域理学療法・作業療法実習を計画し実施した。学内であっても本来の学外実習と遜色がないよう工夫し、現場スタッフの講義や、現場とWeb中継を行って現場の様子やスタッフや患者様の声を聴かせて頂いた。また、グループワークやプレゼンテーションの機会をたくさん設けることで、学生の主体的取り組みを促した。
12）臨床実習および国試対策としてのComputer Based Testing（CBT）の実施	令和3年5月 ～ 現在に至る	臨床実習を受講するために必要な知識の確認及び国家試験対策として、複数回にわたってCBTを実施している。また、CBTに先駆けて、学生が自己学習に取り組むツールとして多肢選択問題を領域別に網羅したCBTワークブックを作成して学生に提供している。さらに、CBTの結果に基づき教員が学生に個別指導を行うことで学習支援を行っている。
２　作成した教科書，教材 3）講義用テキスト作成	平成26年4月	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科で担当している「地域リハビリテーション学」「地域理学療法学Ⅰ」（ともに3年次）において、講義用テキストを作成した。医療・福祉・保健・介護等を取り巻く状況が目まぐるしく変遷するなか、専門職養成に必要な標準的事項は既刊のテキストで補えるが、リアルタイムにトピックス的な話題や状況を反映させるために、教材として50ページ程度のサブテキストを作成し講義で活用している。
4）地域理学療法実習 予習・復習用ホームページ作成	令和2年9月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科で担当している「地域理学療法実習」（2年次配当科目）において、学科HPを活用した取り組みを実施した。より充実した実習期間となるよう実習に先駆けて予習用ページを作成・学生公開するとともに、実習終了後に復習用ページを作成・掲載して実習の振り返るが行えるよう配慮した。
5）CBTワークブックの作成	令和3年6月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻では、3年次配当科目の理学療法評価実習、4年次配当科目の臨床総合実習Ⅰ・Ⅱに先んじて、実習で求められる知識面の確認のためにCBT(computer based testing)を実施する。そこで、学生の学習ツールのひとつとして、学習すべき領域ごとに国家試験形式の問題を取りまとめ、4冊のワークブック（「解剖・運動・生理学編」「一版臨床医学編」「理学療法編１」「理学療法編2」）を作成した。CBT実施の約半年前から順次ワークブックを学生に配布し、必要に応じて教員が取り組み状況を確認しながら学習を促した。
6）国家試験模擬試験 個別返却シート作成	令和4年10月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻では、国家試験受験に向けた模擬試験を実施している。受験後、学生が試験結果を受けてその後の学習に活かせるよう、個々の学生に模擬試験の個別返却シートを作成してフィードバックを行っている。具体的には、問題の出題領域ごとにレーダーチャートにして専攻正答率と自己正答率を示したり、専攻の正答率が高いにも関わらず自分が誤った問題を容易に確認できるなどの工夫をしている。

３　教育上の能力に関する大学等の評価 1）土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科学生による授業評価アンケート結果における評価	平成27年4月	土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科の担当科目である「人体の機能演習Ⅰ・Ⅱ」「運動学演習Ⅰ・Ⅱ」や「地域リハビリテーション学」「地域理学療法学Ⅰ」では、授業評価により得られた結果を講義に反映することで、学生が求める教授方法について再考し、必要に応じて対応した。具体例としては、配布資料に含まれる演習問題について模範解答を付すことや、テキスト掲載の図では分かりにくいものについて他の文献から理解しやすい図をスライドで示したり資料として配布したりするなど対応した。また講義資料作成時に活用した文献・資料等についてのリストも学生に紹介し、希望に応じて提供した。結果、学生の学習意欲の向上や高い満足度が得られた。
2）奈良学園大学における授業評価アンケートにおける評価	令和3年4月 ～ 令和4年2月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での担当科目である「運動学入門」「地域理学療法学」「地域理学療法学演習」「理学療法研究法」「物理療法学Ⅰ」「物理療法学Ⅱ」「福祉用具・生活環境論Ⅱ（各論）」において授業評価が行われ、結果に基づき教授方法を工夫した。概ね、いずれの科目も肯定的な意見であったが、十分に授業外学習に取り組めていない傾向を認めた。そのため、オンラインツールを活用して、講義・解説動画や補足資料を公開したり、授業で扱った内容に関する問題を出題するなどして、学生が授業外学習に取り組みやすい学習環境を提供することにより、総合的に満足度が高い結果が得られた。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 3）島津病院 勉強会　講師	平成26年 5月1日	島津病院リハビリテーション科スタッフを対象に「臨床実習教育再考」というテーマで講演。
4）川田整形外科 勉強会 講師	平成28年 12月9日	川田整形外科リハビリテーション科スタッフを対象に「臨床実習教育について考える」というテーマで講演。
5）同窓会「未来会」勉強会 講師	平成18年 4月15日	土佐リハビリテーションカレッジ同窓会「未来会」にて、現職の理学療法士・作業療法士を対象に「少子化する高齢社会」というテーマで講演。
	平成25年 3月30日	土佐リハビリテーションカレッジ同窓会「未来会」にて、現職の理学療法士・作業療法士を対象に「周期運動の神経メカニズム―タイミングと力制御に関する研究動向とともに」というテーマで講演。
	平成27年 9月29日	土佐リハビリテーションカレッジ同窓会「未来会」にて、現職の理学療法士・作業療法士を対象に「地域包括ケアシステムにおけるリハ専門職の貢献と課題」というテーマで講演。
	令和3年 4月10日	土佐リハビリテーションカレッジ同窓会「未来会」にて，理学療法士・作業療法士を対象に「Motoric Cognitive Risk Syndromeについて考える㊀―高齢者の有害事象を予測する新しい徴候―」というテーマで講演（オンラインにて実施）。

6）高知県香南市地域ケア会議事前研修会 講師	平成27年 2月15日	高知県香南市が平成27年4月より実施する地域ケア個別会議に先立って、事業所職員らを対象とした研修会を実施。 「運動機能アセスメント―測定目的と方法について―」と題して研修会講師を務めた。
7）高知県介護予防強化型サービス事業所育成支援事業研修会 講師	平成29年 8月24日	高知県主催の自立支援機能を強化する介護事業所スタッフの育成支援を目的とした研修会にて、「転ばぬ先の転倒予防」と題して、アセスメント方法や具体的転倒予防策等について講演。
8）高知県芸西村教育委員会スポーツ研修会 講師	平成29年 8月29日	高知県芸西村教育委員会が、競技スポーツを実施する小・中学生の保護者に対して企画した研修会にて、「成長期のスポーツとの付き合い方」というテーマで、実技を交えながら講義を実施。
9）高知県越知町介護予防事業リハ専門職派遣事業講師	平成30年 2月16日	リハ専門職が介入していない自治体を県が抽出し、リハ専門職を派遣する事業の一環。 高知県越知町にて継続されてきた介護予防事業において、参加者減少という課題や介護予防の動機づけのために地域在住高齢者を対象に「健康長寿で生きかた上手」というテーマで講演するとともに体操と体力測定を実施。
10）社医）黎明会 北出病院　勉強会講師	平成30年 8月11日	理学療法士を対象に「加速度センサを用いた歩行解析の基礎―臨床研究への展開を踏まえて」というテーマで講演。実際に歩行時加速度計測およびデータ解析を実演するとともに、これらの臨床研究への展開を想定した具体的提案を試みた。
11）高知県介護予防強化型サービス事業所育成支援事業研修会　講師	平成30年 9月6,10,13日	高知県主催の自立支援機能を強化する介護事業所スタッフの育成支援を目的とした研修会であり、「Healthy Agingを叶えるために―アセスメントに基づく介入方法を考える―」と題して、老年症候群（フレイル）の解説やアセスメント方法、アセスメント結果に基づく具体的介入方法等について講演。高知県下の中央（高知市）・西部（黒潮町）・東部（香美市）にて実施。
12）平成30年度香南市通所介護事業所連絡会　講師	平成30年 9月21日	高知県香南市で年次計画されている通所介護事業所連絡会において、通所介護事業所スタッフ向けに「転ばぬ先の転倒予防体操―老いるショックに陥らないために―」というテーマで講演。
	平成31年 3月15日	高知県香南市で年次計画されている通所介護事業所連絡会において、通所介護事業所スタッフ向けに「根拠に基づく生活支援を考える―効果検証の方法を通じて―」として、事例検討のなどの際に一助となるよう症例研究デザインやアセスメントの重要性について解説した。
13）香南市いきいきクラブ事業研修会　講師	平成30年 9月28日, 10月1日	高知県香南市で実施されている住民主体型運動教室の運営を支援する当該事業において、運動教室のリーダーを対象に「健康体操で生きかた上手―コグニサイズの方法と実践―」というテーマで講演と実技指導を実施。
14）介護予防事業実践報告研修　講師	平成31年 2月24日	高知県リハビリテーション職能三団体協議会の主催による本研修において、PT・OT・STの参加者（50名）を対象に「介護予防の機能強化を支援する活動の報告―地域リハビリテーション活動支援事業を踏まえて―」というテーマで講演した。

15）高知県越知町介護予防事業リハ専門職派遣事業 講師	平成31年 3月4日	高知県越知町のリハビリテーション活動支援事業の一環として、越知町中大平地区の住民に対し「元気よく畑仕事を続けるために―農作業がもたらす健康生活―」というテーマで講演とともに体操および体組成計側等を実施した。
16）奈良市社会福祉協議会（青和地区）講演会 講師	令和元年 10月14日	奈良市社会福祉協議会（青和地区）の主催で開催された地域住民を対象とした講演会で、「Healthy Agingを叶える街づくり―健康長寿を叶えるために―」というテーマで講演とともに参加者とともに体操を行った。
17)和歌山県理学療法士連盟研修会 講師	令和2年 1月12日	和歌山県理学療法士連盟の主催で開催された研修会の講師として「地域包括ケアに貢献する理学療法士になるために－「地域共生社会」の実現に向けて－」というテーマで現職理学療法士を対象に講演とともに住民への体操指導について実技・演習を行った。
18）奈良市社会福祉協議会　講演会　講師	令和2年 2月1日	奈良市社会福祉協議会（青和地区）主催の地域住民を対象とした講演会で、「健康長寿を叶える街づくり―人生100年時代にできること―」というテーマで講演を行い、認知症予防体操や自宅でできる体操などを参加者とともに実施した。
19）奈良県臨床実習指導者講習会　世話人・講師	令和2年 2月8日～9日	第120回臨床実習指導者講習会が白鳳短期大学にて開催され、2日間に渡って80名の参加者に対して講義・演習を担当した。
	令和2年 2月15日～16日	第128回臨床実習指導者講習会が奈良学園大学にて開催され、2日間に渡って78名の参加者に対して講義・演習を担当した。
	令和3年 6月5日～6日	第368回臨床実習指導者講習会が白鳳短期大学にて開催され、2日間に渡って78名の参加者に対して講義・演習を担当した。
	令和3年 6月26日～27日	第378回臨床実習指導者講習会が畿央大学にて開催され、2日間に渡って80名の参加者に対して講義・演習を担当した。
	令和3年 7月31日 ～ 8月1日	第399回臨床実習指導者講習会が白鳳短期大学にて開催され、2日間に渡って80名の参加者に対して講義・演習を担当した。
	令和3年 9月11日～12日	第437回臨床実習指導者講習会が奈良学園大学にて開催され、2日間に渡って74名の参加者に対して講習会の運営に携わった。
	令和3年 11月6日～7日	第515回臨床実習指導者講習会が白鳳短期大学にて開催し、世話人・講師として参加した。2日間に渡って80名の参加者に対して講義・演習を担当した。
	令和3年 11月20日 ～21日	第538回臨床実習指導者講習会が奈良学園大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って48名の参加者に対して講習会の運営に携わった。
	令和4年 2月12日～13日	第646回臨床実習指導者講習会が奈良学園大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って46名の参加者に対して講習会の運営に携わった。
	令和4年 3月5日～6日	第664回臨床実習指導者講習会が畿央大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って47名の参加者に対して講義を担当した。

	令和4年 5月14日～15日	第727回臨床実習指導者講習会が白鳳短期大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って48名の参加者に対して演習を担当した。
	令和4年 7月16日～17日	第776回臨床実習指導者講習会が奈良学園大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って47名の参加者に対して講習会の運営に携わった。
	令和4年 9月10日～11日	第843回臨床実習指導者講習会が奈良学園大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って46名の参加者に対して講習会の運営に携わった。
20）奈良県理学療法士協会　新人教育プログラム講師	令和3年 10月3日	奈良県理学療法士協会の令和3年度第2回新人教育プログラムにおいて、日本理学療法士協会の会員である受講者に対して「臨床実習指導方法論」についてオンライン形式での講義を行った。
21）奈良市二名地域包括支援センター 元気アップなら講座　講師	令和3年 11月26日	奈良市二名地域包括支援センター主催の元気アップなら講座にて、参加者に対して「転ばぬ先の転倒予防」というテーマで講演を行うとともに体力測定を実施し、参加者に対して測定結果のフィードバックを行った。
	令和4年 11月11日	奈良市西福祉センターにて奈良市二名地域包括支援センター主催の元気アップなら講座の講師として「歩行は健康のバロメーター」というテーマで講演を行うとともに体力測定を実施し、参加者に対して測定結果のフィードバックを行った。
	令和4年 11月16日	エクセルハイツ第二学園前集会所にて奈良市二名地域包括支援センター主催の元気アップなら講座の講師として「転ばぬ先の転倒予防」というテーマで講演と健康体操を行った。
	令和4年 12月2日	二名公民館にて奈良市二名地域包括支援センター主催の元気アップなら講座の講師として「転ばぬ先の転倒予防」というテーマで講演を行うとともに体力測定を実施し、参加者に対して測定結果のフィードバックを行った。
22）ひいののオープン記念特別健康講座　講師	令和4年 12月11日	和歌山県旧日高町立比井小学校跡にて、社会医療法人黎明会主催のひいののオープン記念特別健康講座の講師として「生き方上手で健康長寿」というテーマで講演を行うとともに体力測定を行い、参加者約50名に対して測定結果のフィードバックを行った。
５　その他 〈教育実績〉 1)高知大学教育学部 非常勤講師	平成21年10月 ～ 平成28年3月	高知大学 教育学部 共通科目「高齢者スポーツ論」を担当。高齢社会の現状および要因分析とともに、老年医学の知見に基づいた高齢者の心身機能の特徴を概説。健康長寿に向けた生涯スポーツの位置づけや考え方、老年学・公衆衛生学・健康心理学等を踏まえた実践論について教授している。
2)高知県立室戸高校「看護基礎医学2」授業担当	平成20年7月 ～ 平成22年9月	室戸高校 生活福祉系列の２・３年生に対して「リハビリテーション医療の基礎技術について」として看護基礎医学2の授業を担当した。

3) 土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科専任講師	平成17年4月 ～ 平成31年3月	土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科の専任講師として勤務。
4) 土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科非常勤講師	平成31年4月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科の3年生に対して「地域リハビリテーション学」「地域リハビリテーション演習」の講義を担当。
5) 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻　講師	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として勤務。「運動学入門」「基礎ゼミⅡ」「理学療法評価学」「地域理学療法学」「地域理学療法学演習」「物理療法学Ⅰ（総論）」「物理療法学Ⅱ（各論）」「理学療法研究法」「福祉用具・生活環境論Ⅱ（各論）」「客観的臨床能力演習（理学療法）」「早期体験実習（理学療法）」「地域理学療法実習」「理学療法評価実習」の科目を担当。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1)理学療法士免許　取得	平成12年 5月17日	理学療法士名簿登録番号 第35252号
2)修士（教育学）	平成20年3月	高知大学大学院教育学研究科（教修第98号） 論文題目「運動に対する意識と体力の関連 －運動経験・習慣・認識に着目して－」
3)福祉住環境コーディネーター2級　取得	平成20年 7月13日	証書番号20-2-06209
4)介護支援専門員　取得	平成22年 2月2日	登録番号39090079
5)専門理学療法士（生活環境支援理学療法）取得	平成22年 4月1日	登録番号5-138 （公社）日本理学療法士協会が定める制度である。自らの専門性を高め、良質なサービスを提供する臨床能力を備え、理学療法の学問的発展に寄与する研究能力を高めていくことを目的としたものである。
6)地域包括ケア推進リーダー　取得	平成27年 1月18日	（公社）日本理学療法士協会の重点施策の一つである地域包括ケアシステムに関わることのできる人材育成制度を修了。
7)介護予防推進リーダー　取得	平成27年 2月1日	（公社）日本理学療法士協会の重点施策の一つである地域包括ケアシステムに関わることのできる人材育成制度を修了。
8)博士（医学）	平成28年 5月17日	高知大学大学院総合人間自然科学研究科（甲総医博第47号） 論文題目「Comparison of timing and force control of foot tapping between elderly and young subjects（足タッピングのタイミングと力の制御における高齢者と若年者の比較）」

9）都道府県コーディネーター養成研修会　修了	平成29年 3月16日	（公社）日本理学療法士協会の介護予防・健康増進事業であるシルバーリハビリ体操を普及するための研修を茨城県水戸市にて受講し修了した。
10）臨床実習指導者講習会　修了	令和1年 6月23日	（公社）日本理学療法士協会、全国リハビリテーション学校協会の共催であり、各都道府県で今後実施される講習会の世話人・講師を担う者を育成する目的で開催された第10回臨床実習指導者講習会を修了した。
11)フレイル対策推進マネジャー　取得	令和2年 11月30日	（公社）日本理学療法士協会の重点施策の一つである保健事業と介護予防事業の一体的実施に関わることのできる人材育成制度所定の課程を修了した。
12)登録理学療法士　取得	令和4年 4月1日	登録番号:T22-0017244 （公社）日本理学療法士協会が定める制度である。多様な障害像に対応できる能力を有するジェネラリストの育成と目的としたものであり、生涯にわたる知識・技術の維持と亢進を促進し、社会に対する理学療法士の質の担保の証となるものである。
13)専門理学療法士（予防理学療法）取得	令和4年 4月1日	登録番号:S10-0002270 （公社）日本理学療法士協会が定める制度である。自らの専門性を高め、良質なサービスを提供する臨床能力を備え、予防理学療法の学問的発展に寄与する研究能力を高めていくことを目的としたものである。
14)専門理学療法士（地域理学療法）取得	令和4年 4月1日	登録番号:S10-0002070 （公社）日本理学療法士協会が定める制度である。自らの専門性を高め、良質なサービスを提供する臨床能力を備え、地域理学療法の学問的発展に寄与する研究能力を高めていくことを目的としたものである。
15)専門理学療法士（支援工学理学療法）取得	令和4年 4月1日	登録番号:S10-0002470 （公社）日本理学療法士協会が定める制度である。自らの専門性を高め、良質なサービスを提供する臨床能力を備え、支援工学理学療法の学問的発展に寄与する研究能力を高めていくことを目的としたものである。
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 4）平成28年度 公益信託高知新聞・高知放送「生命（いのち）の基金」採択	平成29年3月	研究課題名：歩行動揺計を用いた認知機能検査に関する研究 研究代表者：滝本幸治 助成金額　：507,600円
5）2019年度 一社）日本物理療法学会研究助成 採択	令和1年6月	研究課題名：ヒト皮膚由来線維芽細胞における温度の違いが細胞増殖に与える影響 研究代表者：吉川義之 共同研究者：杉元雅晴，野中紘士，滝本幸治，前重伯壮，植村弥希子 助成金額　：450,000円
6）2020年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成 採択	令和2年5月	研究課題名:山間過疎地域における高齢者の体力特性に関する研究―フレイル調査票を用いた検討― 研究代表者：滝本幸治 共同研究者：伊藤健一，池田耕二，大浦智子，堀内美由紀，井上葉子，椿根純子，阿波邦彦，野中紘士，松村あゆみ，笹野弘美，坪内善仁，中島大貴 助成金額　：220,000円

7）2020年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成 採択	令和2年5月	研究課題名：リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性活用システムの構築―臨床実習教育の質的向上を目指して― 研究代表者：池田耕二 共同研究者：飯塚照史，城野靖朋，福原啓太，滝本幸治，笹野弘美，前田吉樹，野田優希，中田修，坪内善仁，中島大貴，岩﨑智子，辻下聡馬，辻下守弘 助成金額　：220,000円
8）2020年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成 採択	令和2年5月	研究課題名：創傷被覆材における近赤外線透過率の検証 研究代表者：吉川義之 共同研究者：辻下守弘，城野靖朋，滝本幸治 助成金額　：220,000円
9）2020年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成（成果発表）採択	令和2年5月	助成学術大会：第57回日本リハビリテーション医学会学術集会 発表演題　：歩行予備能力は独立して転倒リスクを反映するか？―地域在住高齢者を対象とした検討― 筆頭発表者：滝本幸治 助成金額　：23,000円
10）令和2年度 公益信託高知新聞・高知放送「生命（いのち）の基金」採択	令和3年3月	助成課題名：安全に可能な全身振動刺激療法とバランス能力に関する研究 研究代表者：近藤　寛 共同研究者：竹林秀晃，滝本幸治 助成金額　：350,000円
11）日本学術振興会 科学研究費 若手研究　採択	令和3年4月	研究課題名：Motoric Cognitive Riskが社会参加に与える影響に関する研究 研究代表者：滝本幸治 助成金額　：4,680,000円
12）2021年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成　採択	令和3年6月	助成課題名：COVID-19パンデミックが高齢者の健康及び日常生活に及ぼす影響に関する研究―コロナ禍における遠隔指導を加味した研究― 研究代表者：滝本幸治 共同研究者：池田耕二，大浦智子，吉川義之，笹野弘美，坪内善仁，辻下聡馬 助成金額　：340,000円
13）2021年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成　採択	令和3年6月	助成課題名：地域の特性を活かした高齢者の健康増進に関する研究 研究代表者：笹野弘美 共同研究者：池田耕二，滝本幸治，辻下聡馬，平野孝行，笹野英樹 助成金額　：340,000円
14）2022年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成　採択	令和4年6月	助成課題名：地域の特性を活かしたAging in Placeに関する研究 研究代表者：笹野弘美 共同研究者：池田耕二，滝本幸治，平野孝行，辻下聡馬，笹野英樹 助成金額　：300,000円
（自治体事業） 3)香南市地域ケア会議アドバイザー	平成27年4月 ～ 平成31年3月	高知県香南市がH27年度より開始した地域ケア個別会議において、アドバイザーとして当初より参加。個別事例の課題分析および目標設定、支援内容について助言を行っている。

4)高知市介護認定審査会 委員	平成29年4月 ～ 平成31年3月	高知県高知市の介護認定審査会委員として、介護認定審査にあたる。
5)高知県介護予防強化型サービス事業所育成支援事業　講師	平成29年度 ～ 平成30年度	高知県下の通所介護事業所職員を対象に、生活機能向上支援の知識・技術の習得を支援し、市町村と連携して高齢者の自立支援に向けた介護サービスを提供できる事業所の育成を図るため、研修会講師などを勤め講演等を実施。
6)香南市通所介護事業所連絡会 講師	平成30年度	高知県香南市の地域包括ケアシステム構築のため、地域の通所介護事業所のスタッフ育成及び多職種連携などスキルアップを目指した研修の講師を勤め、アセスメントおよび介護予防手法などについて講演等を実施。
7)奈良市二名地区介護予防事業	令和元年10月 ～ 現在に至る	奈良市二名地域包括支援センターの管轄する地域住民を対象とした介護予防事業に講師として参画。介護予防や健康に関連する講話とともに健康体操の実践指導を実施。
8）奈良県曽爾村 フレイル健診（後期高齢者の質問票）	令和2年度 ～ 現在に至る	奈良県曽爾村において，令和2年度より全国市町村で実施することになったフレイル健診（後期高齢者の質問票）について，曽爾村保健師らとともにフレイル健診の実施及び結果集約，今後の介護予防事業への反映などについて協働。
（理学療法士協会関連業務） 2）日本物理療法学会 選挙管理委員会 委員長	平成20年5月 ～ 現在に至る	日本物理療法学会の選挙管理委員として（H23年5月から委員長）、学会評議員の選出のための選挙告示および選挙を実施している。
3）（公社）高知県理学療法士協会 広報部	平成20年6月 ～ 平成26年6月	（公社）高知県理学療法士協会の広報部員（後に副部長）として、主に協会ホームページの管理や会員向け会誌（県協会ニュース）や一般向け広報誌「ぱわふるとさ！」の編集・発行に携わってきた。
4）日本理学療法学術大会 演題査読委員	平成22年11月 ～ 平成28年11月	（公社）日本理学療法士協会が毎年開催する日本理学療法学術大会の演題査読委員を務めている。
5）日本理学療法士協会グランドデザイン策定委員（予防領域）	平成24年4月 ～ 平成25年3月	（公社）日本理学療法士協会が、国民の保健福祉を支援する理学療法士グランドデザインを策定するためにチームを構成し、「予防領域」の委員としてグランドデザイン策定に携わった。
6）四国理学療法士学会　演題査読委員	平成26年7月 ～ 平成31年3月	四国理学療法士会が毎年開催する四国理学療法士学会の演題査読委員を務めている。

7）（公社）高知県理学療法士協会 事務局次長	平成27年6月 ～ 平成29年6月	（公社）高知県理学療法士協会の事務局次長に就任。高知県の理学療法士の質の向上と社会貢献のための企画総括や会員管理に努めている。
8）高知県理学療法士連盟　事務局長	平成27年6月 ～ 平成31年3月	高知県理学療法士連盟の事務局長に就任。県民や理学療法士の声を受け取り、県もしくは国に届けるためのサポート（講演会の開催など）の活動している。
9）（公社）高知県理学療法士協会　総務部長	平成29年6月 ～ 平成31年3月	（公社）高知県理学療法士協会の総務部長に就任。会員管理や法人運営を担い、理事会および総会の開催・運営を行っている。
10）日本地域理学療法学会学術大会　演題査読委員	平成30年3月 ～ 現在に至る	日本地域理学療法学会学術大会の演題査読委員を務めている。
11）日本予防理学療法学会学術大会　演題査読委員	平成27年2月 ～ 現在に至る	日本予防理学療法学会学術大会の演題査読委員を務めている。
12）奈良県理学療法士養成校協議会　理事	令和2年12月 ～ 現在に至る	奈良県下の理学療法士養成校で組織された協議会理事として，臨床実習指導者養成のための臨床実習指導者講習会の開催計画・運営など担当。
13）日本理学療法教育学会学術大会　演題査読委員	令和3年8月 ～ 現在に至る	日本理学療法教育学会学術大会の演題査読委員を務めている。
14）公社）日本理学療法士協会 指定規則等検証部会（カリキュラム検討作業部会）部会員	令和4年8月 ～ 現在に至る	2018年に理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則が改正されたが、新カリキュラムの適用から5年を目途として、新たな見直しの必要性についての検討を行うことが望まれている。これを受け、当該作業部会において改正された指定規則を検証するとともにカリキュラムの改善などつについて検討を行う。
15）近畿理学療法学術大会　演題査読委員	令和4年9月 ～ 現在に至る	近畿理学療法学術大会の演題査読委員を務めている。
16）保健医療学学会学術集会　演題査読委員	令和4年11月 ～ 現在に至る	保健医療学学会学術集会の演題査読委員を務めている。

17) 日本物理用縫合同学術大会2024　準備委員	令和5年1月 ～ 現在に至る	2024年1月26日（金）・27日（土）に奈良県コンベンションセンターで開催される日本物理療法合同学術大会2024の開催に向けて、準備委員を努めている。
（学術大会 司会・座長）		
7)第25回高知県理学療法士協会新人発表学術集会（座長）	平成27年 3月22日	第25回高知県理学療法士協会 新人発表学術集会にて、ポスター演題「生活環境」の座長を務めた。
8)第44回四国理学療法士学会（座長）	平成27年 11月29日	第44回四国理学療法士学会にて、一般演題Ⅱ-④「運動器・基礎系」の座長を務めた。
9)第72回日本体力医学会大会（座長）	平成29年 9月18日	第72回日本体力医学会大会（愛媛）にて、一般演題「リハビリテーション，運動療法②」の座長を務めた。
10)第47回四国理学療法士（座長）	平成30年 12月2日	第47回四国理学療法士学会（高知）にて、一般演題Ⅳ-③「生活環境支援系」の座長を務めた。
11)第6回日本予防理学療法学会学術大会（座長）	令和元年 10月19日	第6回日本予防理学療法学会学術大会（広島）にて、ポスター演題8（9演題）の座長を務めた。
12)第6回日本地域理学療法学会学術大会（座長）	令和元年 12月15日	第6回日本地域理学療法学会学術大会（京都）にて、一般口述12「訪問・通所3」（6演題）の座長を務めた。
13) 第8回日本地域理学療法学会学術大会（座長）	令和3年 12月5日	第8回日本地域理学療法学会学術大会（Web開催）にて、口述発表「地域⑪」（5演題）の座長を務めた。
14) 保健医療学学会第12回学術集会（座長）	令和4年 12月4日	保健医療学学会第12回学術集会（奈良）にて、口述発表「教育セッション」（2演題）の座長を務めた。
4　その他 1) 第16回日本物理療法学会学術大会 大会準備委員長　（会期：2008.10.4～5）	平成19年6月 ～ 平成20年12月	平成20年10月4日～5日の会期で高知にて開催された第16回日本物理療法学会学術大会の大会準備委員長として、開催の約1年前より大会準備委員会を立ち上げるなどし、大会の運営に携わった。

2）第12回保健医療学学会学術集会 準備委員（会期：2022年12月4日）	令和4年5月 ～ 令和4年12月	令和4年12月4日に奈良学園大学（奈良市）で開催された第12回保健医療学学会学術集会において、集会の準備委員として主に会計について対応し、大会の運営に携わった。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1）高齢者に対する予防的運動介入―実践指導に必要な基礎と技術	共著	令和4年4月	文光堂（東京）	高齢者の運動指導場面において求められる知識や実践的な方法論が網羅的に解説されている。医療・保健・介護関連の施設や事業所、あるいは自治体事業などにおいて活用されることを想定した構成である。 B5判　全202頁 編　者：柳澤幸夫 共著者：井坂昌明，竜田庸平，速見弥央，柳澤幸夫，澤田優子，今岡真和，土居誠治，森　耕平，福岡達之，滝本幸治，大久保吏司，松浦　康，竹林秀晃，近藤　寛，積山和加子，鶯　春夫，近藤慶承，出口憲市，三浦　哉，清水裕子 本人担当部分：第4章 高齢者に使用するスクリーニングおよび体力測定（76-99頁） フレイル、サルコペニアおよび地域で活用できる体力測定項目（各種の歩行能力、筋力、バランステスト）の方法について解説。計測機器を用いなくても計測できる方法や具体的な計測手順・声掛けの例などを示すとともに、測定時の留意事項と判定指標を示すことで、より丁寧かつ正確な測定が叶い、運動指導に役立てることができる構成となっている。
（学術論文） 62）地域在住高齢者における複合的運動機能に対しての注意機能と身体機能の関連性について	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 36：pp106-107，2014	複合的運動機能テストであるTrail Walking Test(TWT)と他の身体機能や注意機能との関連について検討した。結果、TWTは歩行能力や膝伸展筋力、バランス能力や敏捷性、注意機能と有意な相関を認めた。したがってTWTは種々の身体機能や注意機能の総合的指標と成り得る。 ・共著者：榛田彩香，竹林秀晃，滝本幸治，高芝潤，川渕正敬，前田秀博，國澤雅裕 ・本人担当部分：データ計測・解析、論文執筆、資料収集、論文の一部執筆
63）等尺性収縮における内側広筋のトレーニング方法の検討	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 36：pp54-55，2014.	膝伸展作用を有する内側広筋の有効なトレーニング方法について筋電図を用いて検討した。結果、踵セッティングおよび立位での股内転同期セッティングでより内側広筋の活動が賦活することが確認された。 ・共著者：奥田教宏，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，滝本幸治 ・本人担当部分：研究計画、データ計測・解析、資料収集、論文の一部執筆
64）高齢者におけるMental Chronometryの特性と各種身体能力との関係	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 36：pp78-79，2014.	Mental Chronometry（心的時間）による歩行の運動イメージ想起能力と各種身体能力との関連について若年・高齢者を対象に検討した。結果、高齢者の方が実際の歩行と運動イメージとの誤差が大きく、運動イメージ想起能力（誤差）と敏捷性の間に正の相関を認めた。 ・共著者：竹林秀晃，小松祐貴，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 ・本人担当部分：研究計画、データ計測、資料収集、論文の一部執筆

65）加齢により異なる力制御の特性―足タッピング課題を用いた検討―	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 36：pp82-83，2014.	周期的な足タッピング課題を用いて、テンポ速度やテンポ音有無を操作し若年・高齢群間でその特徴を検討した。結果、両群とも遅いテンポで且つテンポ音のない条件下で足タップの精度が低下したが、若年群の精度が高齢群を下回るという興味深い知見を得た。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，椛秀人 ・本人担当部分：研究計画、データ計測・解析、論文執筆、資料収集
66）介護予防に貢献する理学療法士の可能性を考える	共著	平成26年3月	高知県理学療法21：pp25-32，2014.	これまでの介護予防の課題を再認識するとともに、理学療法士がどのような形で介護予防に貢献し得るか事例を紹介。また、老年医学や公衆衛生学など近接領域の知見を取り入れるとともに、健康寿命延伸のためには歩行能力低下を予防する取り組みが重要であることを示した。 ・共著者：滝本幸治，島村千春 ・本人担当部分：論文構成、論文執筆、資料収集
67）Mental Rotation課題における道具使用・物体把持の影響	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 37：pp154-155，2015.	運動イメージの評価・治療手法のひとつであるMental Rotation（MR；心的回転）課題を用いて、道具使用有無下で成績を比較した。結果、道具使用有無間でMR課題の正答率に差を認めなかったが、反応時間は道具を使用した条件下で有意に速かった。 ・共著者：竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 ・本人担当部分：研究計画、データ計測、論文執筆、資料収集、論文の一部執筆
68）足タッピング課題による加齢に伴う力制御能力の特性―異なる力発揮水準を用いた検討―	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 37：pp108-109，2015.	足タッピング課題を用いて異なる力発揮水準による力制御の特性を若年・高齢群間で比較した。その結果、小さい力発揮時に高齢群の力発揮の変動が大きかった。また、力発揮水準が大きいほど若年・高齢群の差が縮小する傾向にあった。 ・共著者：滝本幸治，高橋夏姫，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，椛秀人 ・本人担当部分：研究計画、データ計測・解析、論文執筆、資料収集
69）地域高齢者における転倒因子の検討と各年代における片脚立位時間の変化について	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 37：pp88-89，2015.	地域在住高齢者に対し、転倒と関連のある体力要素を検討した。結果、転倒歴のある高齢者は、開眼・閉眼片脚立位時間が短く膝伸展筋力が弱かった。また、加齢に伴い片脚立位時間は短縮し、転倒歴のある高齢者の方が片脚立位時間は短い傾向にあった。 ・共著者：奥田教宏，竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生 ・本人担当部分：研究計画、データ計測、資料収集、論文の一部執筆
70）加齢による歩行運動イメージの特性 ： 時空間的要素における若年者との比較	共著	平成26年3月	高知県理学療法 22：pp43-47，2015.	歩行の運動イメージ評価に心的時間計測を用いて、若年者と高齢者とを比較した。結果、実際の歩行と運動イメージとの誤差は高齢者で大きく、高齢者では歩行能力が低い者ほど運動イメージの誤差が大きくなる知見を得た。 ・共著者：竹林 秀晃 ，滝本 幸治 ，奥田 教宏 ，宮本 謙三 ，宅間 豊 ，井上 佳和 ，宮本 祥子 ，岡部 孝生 ・本人担当部分：研究計画、データ計測、資料収集、論文の一部執筆
71）成人におけるなわ跳び動作の分析	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 38：pp138-139，2016	発達性協調運動障害を呈する児が縄跳びを上手に跳べない特徴を有することから、縄跳び動作の分析を実施した。結果、上手に縄跳びを跳ぶためには着地がつま先から行われていることや膝が伸展位であることが見いだされた。 ・共著者：森下誠也，滝本幸治 ・本人担当部分：統計解析、論文の一部執筆

72) 複数体肢の同時動作における反応時間からみた運動制御	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌38：pp96-97, 2016.	左右上下肢の複数体肢の同時動作による反応時間特性について検討した。結果、四肢いずれか単肢および両上肢や両下肢で反応するより、同側上下肢や対側上下肢で反応する際に有意に反応時間が遅延することが分かった。 ・共著者：竹林秀晃，前田康介，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 ・本人担当部分：研究計画、データ計測、資料収集、論文の一部執筆
73)Comparison of timing and force control of foot tapping between elderly and young subjects（足タッピングのタイミングと力の制御における高齢者と若年者の比較） （査読付） （博士論文）	共著	平成28年5月	Journal of Physical Therapy Science 28: pp1909-1015,2016.	足タッピング課題を用い、タイミングと力の制御における高齢者と若年者の比較を行った。結果、高齢者の方がタッピングの精度が低かったが、テンポ音に同期してタップすると精度が低くなるという若年者とは異なる新知見を得た。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，椛秀人 ・本人担当部分：論文執筆、研究計画、データ計測・解析、資料収集
74) 二重課題による認知機能評価の有用性―地域在住高齢者を対象とした検討― （査読付）	共著	平成28年12月	土佐リハビリテーションジャーナル10：pp1-8, 2016.	Walking Stroop Carpet(WSC)という新しい二重課題を用いて、地域在住高齢者の認知機能低下の初期スクリーニングとして有用か検討した。結果、多変量解析によりWSCの文字条件が認知機能低下を説明する変数として抽出され、ROC曲線においても判別性能が高いことが示された。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆、研究計画、データ計測・解析，資料収集
75) 上腕骨・前腕両骨骨折(floating elbow)を受傷した症例 （査読付）	共著	平成28年12月	土佐リハビリテーションジャーナル10：pp23-30, 2016.	機能障害が残存しやすく治療に難渋することが多い上腕骨・前腕両骨骨折症例の理学療法効果について検討した。結果、術直後から早期に関節可動域練習と上肢全体に対するアプローチが、疼痛の消失や関節可動域の再獲得に効果をもたらした。 ・共著者：上堀　琢，高橋佑輔，滝本幸治 ・本人担当部分：研究計画，資料収集、論文の一部執筆
76) 異なる二種類の二重課題による転倒リスク評価の検討―Multitarget Stepping Taskの改良版による試み― （査読付）	共著	平成28年12月	土佐リハビリテーションジャーナル10：pp31-36, 2016.	二重課題であるMultitarget Stepping Task(MTST)は、転倒リスク評価としての有用性が知られているが、より感度よく評価するために認知機能負荷を課した改良版MTSTを考案し、高齢者を対象に転倒リスク評価を実施した。結果、改良版MTSTは従来のMTSTより感度や正診率が高く、より有効な転倒リスク評価として活用の可能性が示唆された。 ・共著者：門脇一弘，滝本幸治 ・本人担当部分：研究計画，データ計測・統計解析，資料収集、論文の一部執筆
77) 心理社会的要因による痛み関連脳領域の変化―高社会性げっ歯類を用いた基礎研究―	共著	平成29年3月	四国理学療法士会学会誌39：pp112-113, 2017.	社会環境の変化による痛み関連領域（ペインマトリックス）の変化についてハタネズミを用いて検討した。結果、パートナーの存在有無によりペインマトリックスの活動性が変化し、脊髄後角における痛みシグナリングを減少させていることが示唆された。 ・共著者：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宅間豊，宮本謙三，由利和也 ・本人担当部分：統計解析、論文の一部執筆
78) 自己身体像の視覚外乱刺激は感覚の重みづけを変化させる―身体感覚情報との不一致が及ぼす影響―	共著	平成29年3月	四国理学療法士会学会誌39：pp110-111, 2017	視覚情報を変化させることで身体感覚情報との不一致を作り、姿勢制御への影響を検討した。被験者自身の後方からの映像を回転させて見せ、立位姿勢の重心動揺を評価したところ、回転角度が大きいほど重心動揺が大きくなることが分かった。 ・共著者：竹林秀晃，弘井鈴乃，滝本幸治，宮本謙三，井上佳和，岡部孝生，宮本祥子，宅間豊 ・本人担当部分：研究計画、データ計測、資料収集、論文の一部執筆

79) Dual Taskによる歩行能力と認知機能評価の有用性―Walking Stroop Carpetによる検討―	共著	平成29年3月	四国理学療法士会学会誌39：pp56-57, 2017.	地域在住高齢者を対象に、Walking Stroop Carpetを用いたDual Task歩行による転倒リスクおよび認知機能評価を試みた。結果、過去1年の転倒歴の判別適中率は79.0%、認知機能低下の判別適中率は90.5%であり、Walking Stroop Carpetの有用性が示唆された。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆、研究計画、データ計測・解析、資料収集
80) 高齢者大腿骨近位部骨折術後患者の自宅退院に与える要因―回復期ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ病棟によるFIMを用いた検討―	共著	平成29年3月	高知県理学療法24：pp63-67, 2017.	回復期ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ病棟に入院していた高齢大腿骨近位部骨折術後患者42例を対象に、自宅退院に影響を与える要因について検討した。結果、整容や更衣動作などのセルフケアと移動動作の自立度、認知機能の低下予防が自宅退院に必要な要因であることが考えられた。 ・共著者：奥田教宏，竹林秀晃，滝本幸治，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 ・本人担当部分：研究計画、統計解析、資料収集、論文の一部執筆
81) Walking Stroop Carpetによる転倒リスク評価の有用性 （査読付）	共著	平成29年6月	理学療法学44(3)：pp219-225, 2017.	Walking Stroop Carpet (WSC)課題による転倒リスク評価の有用性について、地域在住高齢者100名を対象に検討した。結果、WSC課題（色条件）は高齢者の転倒歴を有意に説明することが示され、地域在住高齢者の転倒リスク評価ツールとして活用の可能性が示唆された。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆、研究計画、データ計測、統計解析、資料収集
82) 二重課題による認知機能低下および転倒リスク評価の有用性―Walking Stroop Carpetを用いた検討― （査読付）	共著	平成29年12月	土佐リハビリテーションジャーナル11：pp1-8, 2017.	Walking Stroop Carpet (WSC)課題を用いて，認知機能低下と転倒リスクの評価を行い，その有用性について地域在住高齢者113名を対象に検討した。結果、認知機能低下はWSC課題（文字条件）が，転倒リスクはWSC課題（色条件）が有意に説明することが示され、地域在住高齢者の認知機能低下と転倒リスクの簡便な評価ツールとして活用の可能性が示唆された。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，宮本祥子，宅間豊，井上佳和，岡部孝生，岡林　悠，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆、研究計画、データ計測、統計解析、資料収集
83) 急性期脳卒中リハビリテーション （査読付）	共著	平成29年12月	土佐リハビリテーションジャーナル11：pp29-36, 2017.	脳卒中急性期においては，十分な医学的管理の下にできる限りの離床と運動負荷を意識し対応することで，二次的な合併症の予防や有害事象を発生させることなく有効な治療成績が得られる報告が多々存在する。早期リハの必要性を理解するために，安静臥床が及ぼす悪影響を理解したうえで，早期リハが身体の諸機能に及ぼす影響について解説した。 ・共著者：小川真輝，滝本幸治 ・本人担当部分：論文構成，文献収集、論文の一部執筆
84) 心理･社会的ストレスによるペインマトリックスの反応性変化―炎症性疼痛時の脳活動性―	共著	平成30年3月	四国理学療法士会学会誌40：pp98-99, 2018.	高社会性げっ歯類のプレーリーハタネズミを用いて、心理･社会的要因（絆）による痛み関連脳領域（ペインマトリックス）の反応性を検討した。結果、絆を解かれたネズミは側坐核外側のFos蛋白発現が少なく内因性疼痛制御系のドーパミン経路が機能しにくくなり、島ではFos蛋白が多く嫌悪感や恐怖・不安を感じる可能性が示唆された。 ・共著者：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰，宅間豊，宮本謙三，由利和也 ・本人担当部分：統計解析、論文の一部執筆

85）加齢による二重課題条件下での歩行特性―体幹加速度計測による検討―	共著	平成30年3月	四国理学療法士会学会誌40：pp160-161，2018.	加齢による二重課題条件下での歩行を評価するために、若年者と高齢者を対象に体幹加速度計測を行った。結果、二重課題条件下では高齢者の歩行速度低下とともに加速度振幅の指標であるRMSが増大することが確認された。 ・共著者：滝本幸治，山本聖香，浅井剛，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集
86）視覚外乱刺激において周辺環境の有無が姿勢制御に及ぼす影響	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌41：pp54-55，2019.	Head Mounted Displayを用いて映像を回転させることによる視覚外乱刺激を加え、姿勢制御に及ぼす影響について検討した。結果、背景があると重心動揺が増大するとともに、回転角度が大きいとより顕著に重心動揺が増大した。視覚情報が姿勢制御に与える影響が異なることから、トレーニングへの応用が期待できる。 ・共著者：竹林秀晃，藤田雅登，滝本幸治，奥田教宏，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集、論文の一部執筆
87）認知機能低下が歩行パラメータに与える影響―体幹加速度計測による検討―	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌41：pp92-93，2019.	地域在住高齢者を対象に、認知機能低下有無が各種歩行パラメータに与える影響について検討した。結果、歩行時の合成RMS（加速度振幅の大きさ）が健常群より認知機能低下群で有意に増大するとともに 、多変量解析により認知機能低下を説明する変数として抽出された（OR:1.34，95%CI:1.01-1.77，p<0.05）。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，浅井剛，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，岡林悠，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集
88）運動負荷による疼痛域値の変化―自転車エルゴメーター―による比較―	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌41：pp108-109，2019.	自転車エルゴメーター駆動の運動負荷量の違いが疼痛域値に与える影響について、健常若年成人男性30名を対象に検討した。心拍数100拍／分と150拍／分の運動20分実施後、第6頚椎棘突起側方の表在感覚・圧痛域値を計測した結果、いずれの条件も運動前後で比較で、運動後に疼痛域値が上昇した。しかし、条件間では両域値に差を認めなかった。 ・共著者：奥田教宏，中平愛里，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，滝本幸治，渡邊家泰 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集、論文の一部執筆
89）視空間記憶能力と歩行能力および転倒歴との関連―視覚的ワーキングメモリスパンテストを用いた検討―	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌41：pp212-213，2019.	視空間情報の記憶能力と高齢者の歩行能力・転倒との関連について、高齢者15名を対象に検討した。歩行能力検査（10m歩行、TUG）とともに、視覚的ワーキングメモリスパンテスト（VWMST）を実施した結果、非転倒群より転倒群で空間位置情報を記憶する能力（スペース課題）が有意に低下しており、多変量解析によりスペース課題の成績はTUGを説明する変数として抽出された。 ・共著者：橋詰愛里彩，谷脇弘将，山﨑優，滝本幸治 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集、論文の一部執筆
90）外来患者に対する杖適応の判断基準の検討	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌41：pp232-233，2019.	整形外科疾患により外来通院中の患者を対象に、杖使用を決定づける要因について検討した。結果、杖使用群と未使用群間の比較において、有意に杖使用群の10m歩行時間が遅延しており、多変量解析によって歩行時間のみが杖使用有無を決定付ける変数として抽出された。ROC曲線による判別性能はAUC:0.79であり、カットオフ値は7.8秒であった。 ・共著者：土居優仁，山本哲夫，山下亜乃，片岡歩，滝本幸治 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集、論文の一部執筆

91）パーキンソン病症例を対象にした短期集中入院の効果	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌41：pp254-255，2019.	パーキンソン病(PD)専用リハコースに入院するPD症例37名の効果検証を行った。リハ専門職による介入を240分／日×週5回×5週間実施したところ、入院前後比較によりUPDRSのpart1（精神機能、行動及び気分）、part2（ADL）、part（運動機能）は有意に改善したが、part4（治療の合併症）は不変であった。また、抑うつ性(SDS)は有意に低下した。 ・共著者：下川貴大，馬渕勝，岡本和久，武田正和，横瀬崇光，國重裕二，藪田英吾，澤田侑貴，鎌田剛，滝本幸治 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集、論文の一部執筆
92）地域包括ケアに貢献するリハビリテーション専門職―現状と展望―（総説）	共著	平成31年3月	高知県理学療法26：pp83-90，2019.	リハビリテーション専門職が地域包括ケアシステムの構築に向け貢献するためには，地域における現状や課題の把握に努めるとともに，地域包括ケアに関連した枠組み（市町村事業等）や自治体との関係性構築が重要である。本論文では，これまでの取り組みの紹介を通して地域包括ケアに貢献する手段をまとめ，解決すべき課題について解説した。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，井上佳和，萩原賢二，吉村亮子，古谷知佐子，近藤沙綾，和田譲，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集
93）臨床実習評価と帰属要因・Gritとの関連	共著	令和2年3月	高知県理学療法27：pp49-55，2020.	臨床実習成績とその帰属要因との関連について検討するとともに、臨床実習成績とGrit（やり抜く力）の関連について検討した。臨床総合実習を履修した理学療法学生91名を対象とし、質問紙により帰属要因やGritについて調査した。結果、実習成績の帰属要因は、努力と能力が相関関係を示した。また、Gritと努力および実習難度で正の相関を認めたが、Gritと実習成績に関連は認めなかった。 ・共著者：竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，滝本幸治，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 ・本人担当部分：研究計画，質問紙作成・集計，統計解析，資料収集
94）創傷被覆材における近赤外線透過率の検証 （査読付）	共著	令和3年3月	医療福祉情報行動科学研究8：pp11-17，2021.	褥瘡に対する近赤外線療法を実施する場合、褥瘡部分を覆っている創傷被覆材上から近赤外線療法を実施することが推奨される。そのため、ドレッシング材の赤外線透過率を検証した。近赤外線透過率はドレッシング材の種類により異なり、滲出液を吸収した際に透過しやすいドレッシング材や滲出液を吸収する前の方が透過しやすいドレッシング材があった。そのため、ドレッシング材によって照射時期を変える必要であることが確認された。 ・共著者：吉川義之，城野靖朋，滝本幸治，植村弥希子，辻下守弘 ・本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集、論文の一部執筆
95）歩行予備能力は独立して転倒リスクを反映するか―運動習慣を有する高齢者を対象とした横断研究― （査読付）	共著	令和3年3月	医療福祉情報行動科学研究8：pp25-30，2021.	通常歩行時と努力歩行時の歩行能力の差異である歩行予備能力が、既知の歩行能力指標と独立して転倒リスクを反映するか、地域在住高齢者１８５名を対象に検証した。多変量解析の結果、一般的な歩行能力指標（10m歩行時間、TUGなど）と比較して歩行予備能力のみが転倒歴を説明する変数として抽出された。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，矢野まのか，平井絢子 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集

96）二重課題を用いた歩行能力の年代特性―地域在住高齢者を対象とした横断研究― （査読付）	共著	令和3年3月	医療福祉情報行動科学研究8：pp31-37，2021.	高齢者における歩行能力の年代間差異は、二重課題（Walking Stroop Carpet：WSC課題）がより鋭敏に反映するという仮説を検証した。65歳以上高齢者を年代別に3群に分け、3つの年代を目的変数としてロジスティック回帰分析を実施した結果、WSC課題と10m努力歩行が説明変数として抽出されたが、WSC課題の方がオッズ比が高い結果であった。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集
97）超高齢社会を担うﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ専門職が取り組むべき課題に関する論考―現状と展望を踏まえて―	単著	令和3年12月	奈良学園大学紀要第14集：pp115-127，2021.	超高齢社会においてリハビリテーション専門職が地域包括ケアや健康寿命延伸のための予防などに貢献するためには、新たにパラダイム転換が必要である。また、予防活動のターゲットやそれらを展開するための制度・関連事業の概略に触れるとともに、コロナ禍におけるリハビリテーション専門職の貢献についても概説した。 ・著　者：滝本幸治 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・集計，資料収集
98）バーチャルな手のサイズにおける視覚効果が身体性・運動調節に及ぼす影響	共著	令和4年3月	四国理学療法士学会誌43：pp114-115，2022.	Virtual Reality(VR)により自身の手サイズを拡大・縮小させる視覚効果を用いた際の筋力調整能力課題を視標追従課題にて検討した。若年健常成人20名を対象として検討した結果、VRによる手の大きさの主観的感覚は、ノーマル・拡大・縮小サイズ間で有意に異なった。また、主観的感覚の差異の大きさと力量調節誤差の間には有意な相関を認めたが、サイズ間で力量調節誤差に有意差を認めなかった。 発表者名：竹林秀晃，中西未来，繁桝博昭，滝本幸治，奥田教宏，渡辺家泰，近藤寛，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ解析，論文一部執筆，資料収集
99）コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題―学内実習の概要と学生アンケート調査による考察― （査読付）	共著	令和4年3月	医療福祉情報行動科学研究9：pp31-38，2022.	訪問リハビリテーションまたは通所リハビリテーションに関する実習（地域実習）を、コロナ禍の影響を受け、学内にて開講した。履修対象である理学・作業療法学生（2年次生）に対し、2週間の学内実習をICTの活用とともに、学生の能動的学習（ワークブックの活用、グループワークなど）を促し、臨床スタッフによる講義（現地とのオンライン講義含む）などを実施した。受講学生のアンケート結果からは、満足度は高かったものの、次年度以降の臨床実習に対する不安が高い傾向であることが明らかになった。 ・共著者：滝本幸治，池田耕二，吉川義之，坪内善仁，笹野弘美，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生 ・本人担当部分：論文執筆，実習計画・運営，アンケート調査・集計，資料収集
100）ヒト皮膚由来線維芽細胞の培養温度が細胞増殖に与える影響 （査読付）	共著	令和4年8月	物理療法科学29(1)：pp72-76，2022.	ヒト皮膚由来線維芽細胞(HDFs)を異なる温度で培養し、細胞増殖に及ぼす影響を検討した。方法は、HDFsを31,33,35,37,39℃の5条件で培養し、24,48,72時間後に剥離して生細胞数と死細胞数をカウントした。結果、24時間時点の細胞数を基準とした細胞比率は、48,72時間のいずれの時点においても培養温度の高さに依存して高くなった。一方、細胞生存率については有意差を認めなかった。結論として、今回検討した5条件においては、31,33,35℃では37℃よりも細胞増殖が低下し、39℃では37℃に比べ細胞増殖が促進した。 ・共著者：吉川義之，野中紘士，滝本幸治，前重伯壮，植村弥希子，杉元雅晴 ・本人担当部分：研究計画，資料収集

101）安全性を考慮した座位での全身振動刺激トレーニングが身体機能に与える影響	共著	令和5年2月	四国理学療法学会誌44：pp64-65，2023.	立位不可の高齢者でも全身振動（WBV）刺激トレーニングが有効か検討する基礎研究として、若年者21名（平均20.3±0.8歳）を対象に検討した。方法は、立位群と座位群でそれぞれ足底に対してWBV刺激トレーニングを4週実施し、前後でバランス能力、下肢筋力を評価した。結果、立位群はバランスと筋力、座位群はバランスにのみ向上を認めたが、対照群（プラセボ）との比較では差を認めなかった。若年者であったことから十分な能力改善を認めなかったことが考えらる。今後は、高齢者における有効性の検討が必要である。 ・共著者：近藤　寛，竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間　豊，宮本謙三 ・本人担当部分：研究計画，一部論文執筆，資料収集
102）高齢者におけるタイミング一致課題と身体機能との関係	共著	令和5年2月	四国理学療法学会誌44：pp66-67，2023.	高齢者の静的・動的タイミングを一致させる能力と身体機能との関係について検討した。対象は、高齢の転倒群8名、非転倒群22名とした。方法は、タイミング一致課題として5つのランプを0.5秒間隔に順に点灯させ最終ランプの点灯に合わせる静的課題（手元のボタン押し）と動的課題（前方へのジャンプ）とともに、膝伸展筋力、敏捷性、バランス、歩行能力評価を実施した。結果、転倒群において動的タイミングとともに敏捷性、バランスと歩行能力が有意に低下していた。また、動的タイミングと敏捷性と歩行能力に有意な正の相関を認めた。 ・共著者：竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，近藤寛，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間　豊，宮本謙三 ・本人担当部分：研究計画，一部論文執筆，資料収集
103）COVID-19院内クラスターによる影響調査―実践報告を踏まえて―	共著	令和5年2月	四国理学療法学会誌44：pp96-97，2023.	院内クラスター発生時、理学療法が中止された80名（平均81.3歳）に対して簡易式評価表を作成し、中止前と再開後の身体機能および日常生活活動（ADL）評価を実施した。結果、平均中止期間は15.8日であり、再開時に関節可動域制限（57%）、筋力低下（23%）、運動時の息ぎれ・倦怠感（24%）などの廃用を認めた。ADL評価では、移乗や移動に関する項目が低下傾向であった。理学療法再開後も立ち入り制限等があったため、自主運動パンフレットを作成して遠隔運動療法を試みた。今後も、院内の感染レベルに準じた患者に対する介入策を検討する必要がある。 ・共著者：田中健太郎，滝本幸治，前田秀博 本人担当部分：研究計画，図表作成，一部論文執筆，資料収集
104）施設の種類に応じた臨床参加型実習モデルの提案―施設の特徴を活かした経験の積ませ方―	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要第15集：pp1-14，2023.	医療機関以外で理学療法実習が取り組まれるようになりつつある中、各種施設・事業所における理学療法の特徴・役割を整理し、臨床実習のあり方について解説した取りあげた施設は医療施設と介護施設、訪問リハビリテーションであり、臨床参加型実習モデルを示すとともに、臨床実習のキーポイントも提示した。 ・共著者：池田耕二，滝本幸治，城野靖朋，吉川義之，野田優希，野中紘士，辻下守弘 ・本人担当部分：論文構成，論文執筆，表作成，資料収集
105）老年健康科学領域の研究で用いられる統計解析―検定方法の選択基準と手順について―	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要第15集：pp107-120，2023.	老年健康科学領域で用いられる機会の多い統計解析について、目的に応じた検定手法をどのように選択するのか、あるいはどのような手順で検定を進めるとよいか系統的に整理した。差の検定や相関検定はじめ、多変量解析などについて取り上げ、老年健康科学領域で臨床研究に取り組む初学者や若手研究者にも理解できるよう解説した。 ・共著者：滝本幸治，近藤寛，田中健太郎 ・本人担当部分：論文構成，論文執筆，図表作成，資料収集

（その他） （国際学会発表） 7) Effect of various information of sensory modality on the postural control（姿勢制御に対する視覚情報の影響）	—	平成25年6月	2nd Joint World Congress of ISPGR and Gait & Mental Function 2013（Akita, Japan）（Poster Abstracts p29-30.）	リアルタイムに視覚情報を変化させることで身体感覚情報との不一致をつくり、姿勢制御への影響を検討した。結果、自身の立位姿勢をより大きく回転させた映像（135°、180°）を被験者自身に見せた際に、より大きな重心動揺（総軌跡長、矩形面積）を認めた。 発表者名：竹林秀晃，弘井鈴乃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，森岡周 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
8) Characteristics of force- and timing-control in aging: A study of foot-tapping（足タッピングによる加齢に伴う力とタイミング制御の特徴）	—	平成25年6月	2nd Joint World Congress of ISPGR and Gait & Mental Function 2013（Akita, Japan）（Poster Abstracts p26-27.）	異なるテンポ速度で足タッピング課題を実施し、加齢の影響を踏まえて力とタイミングの制御について検討した。本研究の重要な結果として、筋出力の絶対誤差平均は高齢群より若年群の誤差が大きく、加齢による特徴の新たな側面を見出した。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，椛秀人 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
9) Characteristics of motor coordination during concentric and eccentric contractions in the elderly（高齢者の求心性・遠心性収縮による運動制御特性）	—	平成25年9月	WCPT-AWP & ACPT Congress 2013（Taichung, Taiwan）	視標追従課題を膝伸展力発揮の求心性(CON)および遠心性(ECC)収縮により行い、若年・高齢群を対象に検討した。結果、両群ともにCONよりECCでの力制御が困難であり、高齢群でより顕著であることが見いだされた。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，森岡周 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
10) Characteristics of aging on control of timing and force of foot tapping（足タッピング課題を用いたタイミングと力制御の加齢特性）	—	平成25年9月	WCPT-AWP & ACPT Congress 2013（Taichung, Taiwan）	異なるテンポ速度で足タッピング課題を実施し、加齢の影響を踏まえて力とタイミングの制御について検討した。結果、テンポ音の有無にかかわらずタッピング間隔の誤差は若年者より高齢者の方が大きかった。しかしテンポ聴取下での力発揮は若年者の方が誤差は大きくなるという興味深い知見を得た。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，椛秀人 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
11) Usefulness of the walking stroop carpet in evaluation fall risks among the community-dwelling elderly（Walking Stroop Carpetによる地域在住高齢者の転倒リスク評価の有用性）	—	平成27年5月	World Confederation Physical Therapy Congress 2015（Singapore）	地域在住高齢者を対象にWalking Stroop Carpet(WSC)という二重課題による転倒リスク評価の有用性について検討した。その結果、一般的な歩行能力テストであるTUGとともにWSCは転倒歴を説明する変数であり、判別性能が高いことからその有用性が示された。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
12) The association between mental chronometry temporal/spatial conformity and physical ability in the elderly（高齢者の心的時間と時間・空間的適合性と身体能力との関連）	—	平成27年5月	World Confederation Physical Therapy Congress 2015（Singapore）	10m歩行による心的時間(MC)の加齢変化と、MCと身体機能との関連について検討した。結果、MCと実測時間との誤差は若年者より高齢者で高値を示した。また、その誤差は若年・高齢者ともに実測時間よりMCが延長する者が有意に多かった。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成

（国内学会発表） 73）自己身体における視覚情報と身体感覚情報との不一致が姿勢制御に及ぼす影響	—	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会（名古屋）（理学療法学40. Supplement 2: P-A基礎-113）	リアルタイムに視覚情報を変化させることで身体感覚情報との不一致をつくり、姿勢制御への影響を検討した。結果、自身の立位姿勢をより大きく回転させた映像（135°、180°）を被験者自身に見せた際に、より大きな重心動揺（総軌跡長、矩形面積）を認めた。 発表者名：竹林 秀晃，弘井 鈴乃，滝本 幸治，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生 本人担当部分：研究計画，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
74）視標追従課題を用いた下肢の筋出力調節能力の特性-漸増・保持・漸減運動による検討-	—	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会（名古屋）（理学療法学40. Supplement 2: P-A基礎-115）	一側膝関節の等尺性膝伸展力発揮による視標追従課題を用いた力制御特性について検討した。結果、10%MVCより30%MVCの力発揮の方が目標筋力と発揮筋力との誤差が有意に大きかった。また、漸減運動時の方がより誤差が大きい傾向であった。 発表者名：松村 宏樹，上野山 貴士，滝本 幸治 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
75）加齢に伴う筋出力とタイミングの制御特性-足タッピング課題を用いた検討-	—	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会（名古屋）（理学療法学40. Supplement 2: P-A基礎-194）	下肢タッピング課題により力とタイミングの制御特性を見出すとともに加齢の影響について検討した。結果、タッピング間隔誤差は高齢者で大きく、テンポが遅いほど誤差が大きかった。また、力発揮の変動は高齢者で大きかったが、力発揮誤差は若年者が大きかった。 発表者名：滝本 幸治，竹林 秀晃，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生，椛秀人 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
76）視標追従課題を用いた下肢CKC条件下における筋出力調節能力の特性-漸増・保持・漸減運動による検討-	—	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会（名古屋）（理学療法学40. Supplement 2: P-A基礎-210）	下肢CKC条件下での筋出力調節課題(10/20/30%MVC)を行い、その制御特性について検討した。結果、10/30%MVC間で有意差を認め30%MVC時により誤差が大きかった。また、漸減運動時がより誤差が大きい傾向であった。 発表者名：上野山 貴士，松村 宏樹，滝本幸治 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
77）加齢に伴うタイミングと筋出力制御の特性―足タッピング課題を用いた検討―	—	平成25年9月	第68回日本体力医学会大会（東京）（体力科学62: p590, 2013）	一側足関節の周期的な足タッピング課題により、下肢周期運動の特性とともに加齢に伴う影響を検討した。結果、多くの指標においてテンポ音がない条件で且つテンポが遅いほど誤差や変動が大きかった。力制御に関しては高齢者より若年者の誤差が大きいという知見が得られた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，椛秀人 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
78）等尺性収縮における内側広筋のトレーニング方法の検討	—	平成25年11月	第42回四国理学療法士学会（徳島）（プログラム・抄録集p54）	内側広筋において肢位の違いによる筋活動の変化を検討した。結果、踵セッティングおよび立位での股内転同期セッティングでより内側広筋の活動が賦活することが確認された。 発表者名：奥田教宏，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，滝本幸治 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
79）高齢者におけるMental Chronometryの特性と各種身体能力との関係	—	平成25年11月	第42回四国理学療法士学会（徳島）（プログラム・抄録集p68）	歩行動作の心的時間測定（MC）と、高齢者のMCと身体能力との関連性について検討した。結果、高齢者はMCと実際の歩行との誤差が大きく、MCより実際の歩行時間が延長している者が有意に多かった。 発表者名：竹林秀晃，小松祐貴，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成

80）加齢により異なる力制御の特性―足タッピング課題を用いた検討―	―	平成25年11月	第42回四国理学療法士学会（徳島）（プログラム・抄録集p70）	足タッピング課題を実施し、力制御の加齢による特性について検討した。結果、筋出力値の変動は高齢者が有意に大きかったが、目標筋出力値に対する筋出力値の誤差は若年者の方が大きいという特徴的な結果を得た。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，椛秀人 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
81）地域在住高齢者における複合的運動機能に対しての注意機能と身体機能の関連性について	―	平成25年11月	第42回四国理学療法士学会（徳島）（プログラム・抄録集p86）	複合的運動機能テストであるTrail Walking Test(TWT)と身体機能や注意機能との関連について検討した。結果、TWTは歩行能力や筋力、バランスや敏捷性、注意機能と有意な相関を認め、TWTは種々の身体機能や注意機能の総合的指標と成り得る。 発表者名：榛田彩香，竹林秀晃，滝本幸治，高芝潤，川渕正敬，前田秀博，國澤雅裕 本人担当部分：研究計画，資料収集，抄録一部作成
82）高齢者におけるMental Chronometryの時間・空間的一致性と身体能力との関係	―	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（横浜）（理学療法学41. Supplement 2: 0100）	10m歩行による心的時間(MC)の加齢変化と、MCと身体機能との関連について検討した。結果、MCと実測時間との誤差は若年者より高齢者で有意に高値を示した。また、その誤差は若年・高齢者ともに実測時間よりMCが有意に延長する者が多かったが、若年・高齢者間で差は認めなかった。 発表者名：竹林 秀晃，滝本 幸治，奥田 教宏，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生，小松祐貴 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
83）加齢に伴う足タッピングのタイミングと筋出力制御の特徴― 異なる目標発揮筋力による検討 ―	―	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（横浜）（理学療法学41. Supplement 2: 0335）	足タッピング課題を用いて加齢の要因に注目し、異なる力発揮がタイミングと力制御に及ぼす影響について検討した。結果、タッピング間隔の誤差や変動は高齢者が有意に大きく、目標発揮筋力が大きくなるほどその差が縮小する傾向であった。筋出力ピーク値の変動も高齢群で有意に大きかった。 発表者名：滝本 幸治，竹林 秀晃，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生，奥田 教宏，椛 秀人 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
84）肢位の違いによる内側広筋の筋活動特性	―	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（横浜）（理学療法学41. Supplement 2: 1294）	肢位別による内側広筋の筋発揮量の相違について筋電図を用いて検討した。結果、立位同期settingでは筋活動量が最も低く、踵settingでは最も筋活動量が高かった。 発表者名：奥田 教宏，竹林 秀晃，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生，滝本 幸治 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
85）地域高齢者における転倒因子の検討と各年代における片脚立位時間の変化について	―	平成26年11月	第43回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p80）	地域在住高齢者に対し、転倒に関連する因子を検討するとともに各年代の片脚立位時間について検討した。結果、転倒歴のある者はない者と比較して片脚立位時間や膝伸展筋力が有意に低値であり、年代が上がるにつれて片脚立位の保持時間が短縮していた。 発表者名：奥田教宏，竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録一部作成
86）足タッピング課題による加齢に伴う力制御能力の特性―異なる力発揮水準を用いた検討―	―	平成26年11月	第43回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p90）	足タッピングを異なる力発揮水準で行い力制御の特性を若年・高齢群間で比較した。その結果、小さい力発揮時に高齢群の力発揮の変動が大きく、力発揮水準が大きいほど若年・高齢群の差が縮小する傾向にあった。 発表者名：滝本幸治，高橋夏姫，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，椛秀人 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成

87) Mental Rotation課題における道具使用・物体把持の影響	—	平成26年11月	第43回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p113）	運動イメージの評価法のひとつであるMental Rotation（MR；心的回転）課題を用いて、道具使用有無別に成績を比較した。結果、正答率に差を認めなかったが、反応時間は道具を使用した条件下で有意に速かった。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
88) Walking Stroop Carpetによる転倒リスク評価の妥当性	—	平成27年3月	第28回高知県理学療法士学会（高知市）（抄録集p24 ）	Walking Stroop Carpet（WSC)は転倒リスク評価に用いることができるかその妥当性について検討した。結果、転倒歴の有無別群間で、WSC（色条件）の所要時間に有意差を認め、ROC曲線を用いた検討より、転倒歴の判別性能が高いことが確認された。 発表者名：滝本幸治，近森鷹希，竹林秀晃，奥田教宏，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，門田美和，古谷千佐子，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
89) 高齢者の努力歩行がMental Chronometryに及ぼす影響―転倒と運動機能との関連―	—	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会（東京）（理学療法学42 Supplement 2: P2-A-0513）	高齢者の努力歩行における心的時間(MC)に着目し、転倒や運動機能との関連ついて検討した。結果、歩行の実測時間とMCとの誤差は転倒歴のある高齢者で高値を示した。また、時間一致の精度が高い者ほど運動機能が高かった。 発表者名：竹林 秀晃，滝本 幸治，奥田 教宏，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
90) Walking Stroop Carpetによる新しい転倒リスク評価の有用性	—	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会（東京）（理学療法学42 Supplement 2: P3-C-1069）	Walking Stroop Carpet(WSC)という二重課題が転倒リスク者の検出に有効であるか検討した。結果、WSC（色条件）とTimed Up & Go testが転倒歴を説明する変数として抽出されたが、WSCの判別性能がより優れることが分かった。 発表者名：滝本幸治，近森鷹希，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
91) Stroop Walking Taskを用いた転倒リスク評価の有用性	—	平成27年6月	第35回日本リハビリテーション医学会中国・四国地方会（高知）（プログラム・抄録集p54-55 ）	Stroop Walking Task（SWT)という二重課題が転倒リスク者の検出に有効であるか検討した。結果、SWT遂行時のエラー数は転倒歴有無別群間で差は認めなかったが、SWT（色条件）は正診率が74.5%であり、転倒リスク者の検出に有効であることが考えられた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
92) 高齢者における歩行の運動イメージについて―自由歩行と努力歩行のMental Chronometry―	—	平成27年6月	第35回日本リハビリテーション医学会中国・四国地方会（高知）（プログラム・抄録集p56 ）	転倒歴の有無別群間で、歩行の運動イメージ能力をMental Chronometry（MC)により評価し比較・検討した。結果、転倒群の運動イメージは有意に誤差が大きく、それは努力歩行においてより顕著であった。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
93) 複数体肢の同時動作における反応時間からみた運動制御	—	平成27年11月	第44回四国理学療法士会学会（愛媛）（プログラム・抄録集p77）	複数体肢の同時動作の組み合わせによる反応時間の特性について、健常成人を対象に検討した。結果、四肢いずれか単肢および両上肢や両下肢で反応するより、同側上下肢や対側上下肢で反応する際に有意に反応時間が遅延することが分かった。 発表者名：竹林秀晃，前田康介，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録一部作成

94）自治体事業における効率的な認知機能テストの試み―Walking Stroop Carpetを用いた検討―	―	平成28年3月	第29回高知県理学療法学会（香南市）（抄録集p28）	Walking Stroop Carpet(WSC)という二重課題による歩行能力評価は、集団に対する認知機能検査に有用か地域在住高齢者を対象に検討した。結果、認知機能検査(MMSE)が24点未満の者を正診率90.5%で検出できたことから、WSCの認知機能検査としての有用性が確認された。 発表者名：滝本幸治，伊東咲也香，上岡奈津美，川久保優菜，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
95）Walking Stroop Carpetによる認知機能評価の有用性―自治体事業における地域在住高齢者を対象とした検討―	―	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会（札幌）（理学療法学43. Supplement 2: O-YB-01-4）	Walking Stroop Carpet(WSC)が自治体事業等において認知機能障害のスクリーニング検査として有用であるか地域在住高齢者を対象に検討した。重回帰分析などにより検討した結果、WSCは認知機能検査として有用であることが見いだされた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
96）加齢が下肢の視覚誘導性関節運動調節に及ぼす影響	―	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会（札幌）（理学療法学43. Supplement 2: P-KS-29-2）	加齢が下肢の視覚誘導性関節運動調節に及ぼす影響について検討した。結果、関節位置覚再現性の誤差は若年・高齢者間で差を認めなかったが、視覚誘導性関節運動では高齢者において有意に誤差が大きかった。 発表者名：竹林秀晃，田中未優，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
97）高齢者の視覚フィードバックによる関節位置調節課題の制御特性	―	平成28年11月	第78回日本体力医学会中国・四国地方会（山口）（抄録集p36-37）	加齢が下肢の視覚フィードバックによる関節位置調節課題に及ぼす影響について検討した。結果、静的な関節位置覚再現性は高齢・若年者間で差を認めなかったが、動的な条件下では関節位置調節の誤差が高齢群で有意に大きかった。 発表者名：竹林秀晃，田中美優，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，岡部孝生，奥田教宏 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
98）Dual Taskによる歩行能力と認知機能評価の有用性―Walking Stroop Carpetによる検討―	―	平成28年11月	第45回四国理学療法士学会（香川）（プログラム・抄録集p39）	Walking Stroop Carpet(WSC)という新しい二重課題による歩行能力評価により、転倒リスクと認知機能低下の評価を高齢者を対象に試みた。結果、WSCは転倒歴や認知機能障害の判別性能が良好であることが示された。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
99）自己身体像の視覚外乱刺激は感覚の重みづけを変化させる―身体感覚情報との不一致が及ぼす影響―	―	平成28年11月	第45回四国理学療法士学会（香川）（プログラム・抄録集p67）	視覚に自己の背面像が回転する外乱刺激を加えることで身体感覚情報との不一致をつくり、立位保持時の重心動揺に与える影響を検討した。結果、回転角度が大きくなるに従い、視覚より前庭覚や体性感覚が関与することが示唆された。 発表者名：竹林秀晃，弘井鈴乃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
100）心理社会的要因による痛み関連脳領域の変化―高社会性げっ歯類を用いた基礎研究―	―	平成28年11月	第45回四国理学療法士学会（香川）（プログラム・抄録集p68）	プレーレーハタネズミを用いてその社会環境を変化させ、心理･社会的要因により痛み関連脳領域の反応性がどう変化するか検討した。結果、心理･社会的要因による痛みの修飾メカニズムにドーパミンが関与している可能性が示唆された。 発表者名：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，由利和也 本人担当部分：データ解析，資料収集，抄録一部作成

101）視覚フィードバック・負荷の有無が関節位置覚に及ぼす影響―若年者と高齢者の比較―	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	視覚フィードバック（FB）と負荷有無の条件下で、加齢を加味して関節運動制御特性を検討した。結果、高齢者では視覚FBがない条件下で関節位置の変動が大きく、目標関節角度に対して正の誤差が大きくなる特徴が得られた。 発表者名：竹林秀晃，津野沙也加，滝本幸治，奥田教宏，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
102）痛みの社会的修飾メカニズムの一考―一夫一婦制げっ歯類を用いた基礎的研究―	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	高社会性げっ歯類（プレーリーハタネズミ）を用い、社会環境の変化による痛みの修飾メカニズムについて検討した。結果、パートナーの存在が痛刺激に対するペインマトリックスの反応性を高めることが示唆された。 発表者名：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，由利和也 本人担当部分：データ解析，資料収集，抄録一部作成
103）パーキンソン病の姿勢調節障害とは―表面筋電図を用いた検討―	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	パーキンソン病（PD）者の姿勢調節障害に着眼し、立位保持時の足関節周囲筋を筋電図学的に評価し検討した。結果、PDの進行に伴い立位保持時の重心動揺が大きくなり、前脛骨筋の活動が増大すること確認された。 発表者名：下川貴大，横瀬崇光，岡本和久，渡利太，武田正和，竹林秀晃，滝本幸治 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
104）地域在住高齢者に対する二重課題を用いた歩行能力の年代比較―Walking Stroop Carpetによる検討―	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	地域在住高齢者の年代比較をWalking Stroop Carpet（WSC）課題を用いて実施し、加齢による歩行能力の特性を検討した。結果、一般的な歩行能力テストでは検出が困難であったが、WSC課題（文字条件）は、後期高齢者（75歳～）と超高齢者（85歳～）の差異を明らかにした。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
105）腱への振動刺激が筋力・筋出力調節に及ぼす影響	―	平成29年9月	第72回日本体力医学会大会（愛媛）	振動刺激が筋力と筋出力調節能力に及ぼす影響を、膝伸展運動課題を用いて大腿四頭筋腱に対し振動刺激を加えた。結果、再大筋力の増加とともに、膝伸展40%，20%MVC時に筋出力調節能力の精度が向上することが分かった。 発表者名：竹林秀晃，吉川尚輝，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，渡邊家康 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
106）新しい二重課題を用いた地域在住高齢者に対する転倒リスク評価―Walking Stroop Carpet課題による検討―	―	平成29年9月	第72回日本体力医学会大会（愛媛）	地域在住高齢者を対象に、Walking Stroop Carpet（WSC）課題という二重課題による転倒リスク評価を試みた。結果、WSC課題（色条件）は他の一般的な歩行能力指標よりも転倒歴の判別性能に秀でている結果が得られた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家康，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
107）心理･社会的ストレスによるペインマトリックスの反応性変化―炎症性疼痛時の脳活動性―	―	平成29年11月	第46回四国理学療法士学会（徳島）（プログラム・抄録集p73）	高社会性げっ歯類のプレーリーハタネズミを用いて心理･社会的要因による痛み関連領域の反応性を検討した。炎症性疼痛を惹起させ脳を採取した結果、パートナーロス群では内因性疼痛抑制系であるドーパミン回路が機能しにくく、嫌悪感や不安が強かった可能性が示唆された。 発表者名：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰，宅間　豊，宮本謙三，由利和也 本人担当部分：データ解析，資料収集，抄録一部作成

108）加齢による二重課題条件下での歩行特性―体幹加速度計測による検討―	―	平成29年11月	第46回四国理学療法士学会（徳島）（プログラム・抄録集p109）	二重課題（減算課題）歩行時の体幹加速度を計測し、加齢による歩行特性について検討した。結果、加齢とともに二重課題による影響を反映したパラメータは加速度成分(RMS)であり、高齢者のみ単純課題－二重課題間でRMSの増大を認めた。 発表者名：滝本幸治，山本聖香，浅井　剛，竹林秀晃，奥田教宏，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
109）二重課題による身体的フレイル評価の試み―Walking Stroop Carpetを用いた検討―	―	平成30年2月	第3回日本予防理学療法学会サテライト集会（東京）（プログラム集p78）	Walking Stroop Carpet（WSC）という歩行による二重課題を用いて、地域在住高齢者を対象に身体的フレイルの評価を試みた。結果、一般的な歩行能力検査では検出できなかったが、WSC課題（文字条件）はプレフレイルに該当する高齢者を検出することができた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，岡林　悠，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
110）地域在住高齢者の認知機能と歩行能力との関連―体幹加速度計測による検討―	―	平成30年6月	第55回日本リハビリテーション医学会学術集会（福岡）	地域在住高齢者を対象に、認知機能テストとともに歩行を加速度センサで計測し、認知機能と歩行機能との関連を精査した。結果、健常群より認知機能低下群の歩行速度が遅く、歩行時の加速度振幅が大きい特徴を得たが、多変量解析では有意な変数として抽出されなかった。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，浅井　剛，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，岡林　悠，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
111）加齢における選択反応課題のサイモン効果が及ぼす影響	―	平成30年6月	第55回日本リハビリテーション医学会学術集会（福岡）	選択反応課題（ボタン押し課題）における刺激の一致・不一致が加齢とともに反応時間にどう影響するか検討した。結果、若年・高齢者ともに反応時間の遅延を認める共通項も認めたが、刺激と反対方向に反応する不一致課題では高齢者がより遅延した。 発表者名：竹林秀晃，入野哲暢，滝本幸治，奥田教宏，宮本謙三，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
112）Older adult have delayed reaction times to peripheral visual stimuli during exercise （高齢者における運動中の周辺視野刺激に対する反応時間の遅延について）	―	平成30年9月	第73回日本体力医学会大会（福井）（JPFSM Vol.7,2018: p342）	中心及び周辺視野に提示する視覚刺激に対するステッピングの反応時間について、20代以上の成人65名を対象に検討した。結果、50歳代を境に非線形に反応時間は遅延し、反応時間のバラつきが大きくなる結論を得た。 発表者名：竹林秀晃，今西　諒，滝本幸治，奥田教宏，宮本謙三，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
113）認知機能低下が歩行に及ぼす影響―加速度計測による歩行パラメータを用いた検討―	―	平成30年10月	第5回日本予防理学療法学会学術大会（福岡）（プログラム集p149）	一般的な歩行能力検査(10m歩行)時に加速度計測を行い、高齢者の認知機能が歩行パラメータのどのような側面に影響するか検討した。結果、認知機能が低下している者は歩行時の加速度振幅(RMS)が増大するとともに、歩行の円滑性の指標であるHarmonic ratio（前後成分）が低値を示したことから、円滑性に欠く歩行をしている可能性が示唆された。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，浅井　剛，奥田教宏，渡邊家泰，岡林　悠，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成

114）視覚外乱刺激において周辺環境の有無が姿勢制御に及ぼす影響	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p56）	Head Mounted Displayを用いて映像を回転させることによる視覚外乱刺激を加え、姿勢制御に及ぼす影響について検討した。結果、背景があると重心動揺が増大するとともに、回転角度が大きいとより顕著に重心動揺が増大した。視覚情報が姿勢制御に与える影響が異なることから、トレーニングへの応用が期待できる。 発表者名：竹林秀晃，藤田雅登，滝本幸治，奥田教宏，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間　豊，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
115）認知機能低下が歩行パラメータに与える影響―体幹加速度計測による検討―	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p76）	地域在住高齢者を対象に、認知機能低下有無が各種歩行パラメータに与える影響について検討した。結果、歩行時の合成RMS（加速度振幅の大きさ）が健常群より認知機能低下群で有意に増大するとともに 、多変量解析により認知機能低下を説明する変数として抽出された（OR:1.34，95%CI:1.01-1.77，p<0.05）。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，浅井　剛，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，岡林　悠，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
116）運動負荷による疼痛域値の変化―自転車エルゴメーターによる比較―	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p85）	自転車エルゴメーター駆動の運動負荷量の違いが疼痛域値に与える影響について、健常若年成人男性30名を対象に検討した。心拍数100拍／分と150拍／分の運動20分実施後、第6頚椎棘突起側方の表在感覚・圧痛域値を計測した結果、いずれの条件も運動前後で比較で、運動後に疼痛域値が上昇した。しかし、条件間では両域値に差を認めなかった。 発表者名：奥田教宏，中平愛里，竹林秀晃，宮本謙三，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，滝本幸治，渡邊家泰，大迫洋治 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
117）視空間記憶能力と歩行能力および転倒歴との関連―視覚的ワーキングメモリスパンテストを用いた検討―	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p144）	視空間情報の記憶能力と高齢者の歩行能力・転倒との関連について、高齢者15名を対象に検討した。歩行能力検査（10m歩行、TUG）とともに、視覚的ワーキングメモリスパンテスト（VWMST）を実施した結果、非転倒群より転倒群で空間位置情報を記憶する能力（スペース課題）が有意に低下しており、多変量解析によりスペース課題の成績はTUGを説明する変数として抽出された。 発表者名：橋詰愛里彩，谷脇弘将，山﨑　優，滝本幸治 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
118）外来患者に対する杖適応の判断基準の検討	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p154）	整形外科疾患により外来通院中の患者を対象に、杖使用を決定づける要因について検討した。結果、杖使用群と未使用群間の比較において、有意に杖使用群の10m歩行時間が遅延しており、多変量解析によって歩行時間のみが杖使用有無を決定付ける変数として抽出された。ROC曲線による判別性能はAUC:0.79であり、カットオフ値は7.8秒であった。 発表者名：土居優仁，山本哲夫，山下亜乃，片岡歩，中内睦郎，滝本幸治 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
119）パーキンソン病症例を対象にした短期集中入院の効果	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p165）	パーキンソン病(PD)専用リハコースに入院するPD症例37名の効果検証を行った。リハ専門職による介入を240分／日×週5回×5週間実施したところ、入院前後比較によりUPDRSのpart1（精神機能、行動及び気分）、part2（ADL）、part（運動機能）は有意に改善したが、part4（治療の合併症）は不変であった。また、抑うつ性(SDS)は有意に低下した。 発表者名：下川貴大，馬渕　勝，岡本和久，武田正和，横瀬崇光，國重裕二，薮田英吾，澤田侑貴，鎌田　剛，滝本幸治，三ツ井貴夫 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成

120）臨床実習成績の妥当性と原因帰属要因との関連―15年前との比較―	―	平成31年2月	第32回高知県理学療法学会（高知市）（抄録集p27）	学生の臨床実習成績に対する認識について、過去に実施したものと同様のアンケート調査を臨床総合実習後の4年次生（91名、延べ182件）を対象に実施した。結果、過去と同様に成績の帰属要因として努力が反映していたが、今回新たに指導者との相性が最も高く反映しており、過去の報告と異なる特徴的な変化であった。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，岡部孝生，宮本祥子，渡邊家泰，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
121）運動習慣を有する高齢者の骨格筋量及び歩行特性―プレフレイルに注目した検討―	―	令和元年6月	第56回日本リハビリテーション医学会学術集会（神戸）	運動習慣を有する高齢者も長期的には加齢に伴い体力が低下するが、その最初の転機であるプレフレイルの特徴を検討した。高齢者37名（ロバスト18名、プレフレイル19名）を対象に四肢骨格筋量と歩行パラメータを計測し特徴を検出したところ、プレフレイル群の方が四肢骨格筋量が低値を示し、歩行時の加速度振幅（垂直方向）が有意に高値を示した。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，門脇康平，井上優輝，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，浅井剛，岡林遥，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
122）早期退院が可能であった肺炎患者の特徴と要因	―	令和元年6月	第56回日本リハビリテーション医学会学術集会（神戸）	患者の栄養状態に注目し、肺炎患者の早期退院に向けた取り組みを行った。肺炎の診断にて入院しその後自宅退院となった61名の高齢者を対象に、入院時の体格指数(BMI)、栄養評価(SGA)、介護度、FIMなどのを用いて評価した。結果、入院時BMIとともに、SGAが早期退院に影響していることが示された。 発表者名：谷岡寿昭，西田佳祐，蔭山美紀，小松聖偏，市川德和，滝本幸治 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
123）身体的フレイルが歩行に及ぼす影響―運動習慣を有する地域在住高齢者の検討―	―	令和元年9月	第74回日本体力医学会大会（つくば）	身体的フレイルの基準に歩行速度があるが、定期的な運動習慣を有する高齢者における歩行の質的な側面の特徴を検出した。運動習慣を有する高齢者40名を対象に、J-CHSに基づくフレイル判定とともに歩行評価（速度、加速度計測）を実施した。結果、歩行速度はフレイル者がそうでない者より有意に低下し，加速度解析による歩行時の円滑さの指標(harmonic ratio)gaが低値（円滑さに欠く）特徴を検出した。なお、健常者とプレフレイルとの者間で、歩行の差異は認めなかった。 発表者名：滝本幸治，門脇康平，竹林秀晃，浅井剛，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
124）視標追従課題における自他由来波形操作が運動制御に与える影響	―	令和元年11月	第48回四国理学療法士学会（愛媛）	運動学習において運動観察学習の有効性が知られている。本研究では、視標追従力量調節課題による自他のフィードバック(FB)情報が、力量調節の学習に与える影響を検討した。健常成人32名を対象とし、視標追従力量調節課題を実施した結果、他者の課題成績のFBでは、運動主体感の低下を招き力量調節の学習が妨げられた。また、自己の課題成績がFBされたにもかかわらず、それが他者の課題成績であると疑った場合には学習が妨げられた。 発表者名：竹林秀晃，門田涼香，滝本幸治，奥田教宏，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成

125）歩行予備能力は独立して転倒リスクを反映するか？―地域在住高齢者を対象とした検討―	―	令和2年8月	第57回日本リハビリテーション医学会学術集会（京都）	2種の10m歩行所要時間の変化率で表される歩行予備能力は、既知の歩行指標と独立して転倒リスクを反映するか検討した。自立生活を営む地域在住高齢者185名を対象とし、転倒群・非転倒群に分類し種々の歩行能力評価とともに歩行予備能力を算出した。結果、多変量解析により歩行予備能力のみが転倒歴を説明する変数として抽出された。簡便に算出可能な本指標は、自立高齢者の転倒リスクを反映する指標であることが示唆された。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，田井絢子，矢野まのか，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
126）視覚フィードバックの操作による自己身体の変化が身体認知・筋力調節に及ぼす影響	―	令和2年12月	第25回日本基礎理学療法学会学術大会（Web開催）	VRによる視覚フィードバックにより、自己身体サイズを変化させた際の身体認知および筋力調節能力に及ぼす影響について検討した。対象は健常成人20名である。VRにより被検者の手のサイズを拡大・縮小する条件下で、ピンチ力の筋力調節課題を実施した。結果、VRによる手の大きさの主観的感覚は、拡大・縮小により有意差を認めた。しかし、ピンチ力の調節課題における絶対誤差は有意差を認めなかった。 発表者名：竹林秀晃，弘瀬未来，繁枡博昭，滝本幸治，奥田教宏，渡邊家泰，近藤寛 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，プレゼン資料作成
127）創傷被覆材における近赤外線透過率の検証	―	令和3年2月	第1回物理療法部門研究会（Web開催）	創傷被覆材（ドレッシング材）管理下において，赤外線照射の透過率を確認することで，褥瘡治療の補完療法実施時の条件を確認した。結果，フィルムドレッシング材は約94～97%の透過性を有した。一方，ハイドロコロイドドレッシング材，ポリウレタンドレッシング材，ハイドロポリマードレッシング材は，13～96%と透過率に差があり，使用ドレッシング材の透過率を考慮した照射強度の設定が必要であることが示唆された。 発表者名：吉川義之，辻下守弘，城野靖朋，滝本幸治 本人担当部分：研究計画，資料収集，抄録一部作成
128）バーチャルな手のサイズにおける視覚効果が身体性・運動調節に及ぼす影響	―	令和3年10月	第49回四国理学療法士学会in香川（Web開催）	Virtual Reality(VR)を用いて自身の異なる大きさの手を視覚効果として与えた際の筋力調整能力を、視標追従課題により検討した。若年健常成人20名を対象とした結果、VRによる手の大きさの主観的感覚は、ノーマル・拡大・縮小サイズ間で有意に異なった。また、主観的感覚の差異の大きさと力量調節誤差の間には有意な相関を認めたが、サイズ間で力量調節誤差に有意差を認めなかった。 発表者名：竹林秀晃，弘瀬未来，繁枡博昭，滝本幸治，奥田教宏，渡辺家泰，近藤寛，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
129）筋力調節課題における個人内・個人間での運動制御特性	―	令和3年10月	第26回日本基礎理学療法学会学術大会（Web開催）	筋出力が変化する筋力調節課題において、一人で力制御を行う個人内課題と二人の共同行為として行う個人間課題により力制御の運動特性を検討した。結果、個人内および個人間課題の間で力制御の誤差や変動に有意差を認なかった。個人間であっても相手の出力に応じて自己の出力を増減させ補うような相補的側面や同調的側面がみられた。 発表者名：竹林秀晃，西岡拓真，滝本幸治，奥田教宏，渡辺家泰，近藤寛，岡部孝生，宮本祥子，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成

130）地域の特性を考慮した村民の健康増進への取り組みの検討	—	令和4年5月	第7回予防理学療法学会サテライト集会（鹿児島）（ハイブリット開催）	高齢化率の高い山間地域の住民がAging in Placeを実現するため、地域環境の特性や社会資源を調査し、村民の健康増進・介護予防の在り方を検討した。方法は、現地にて行政職員や社会福祉協議会からヒアリングを行い、フレイル対策教室（ロコトレ）等の訪問にて、現状を分析した。結果として、同地域は高齢でも一次産業従事者が多いため元気高齢者が多いと思われる一方、入所施設等が無いため、障害を有した場合の生活継続が困難になる可能性がある。高齢期のみならず、中高年者へのヘルスプロモーションが重要と考えられた。 発表者名：笹野弘美，平野孝行，池田耕二，滝本幸治，辻下聡馬，笹野英樹 本人担当部分：研究計画、抄録作成、ポスター作成
131）運動イメージの時間的要素は転倒に影響する	—	令和4年10月	第20回日本神経理学療法学会学術大会（大阪）	運動イメージ能力評価として心的時間測定（MC）を用いて、高齢者の静的および動的タイミングの一致能力を計測し検討した。高齢者31名（転倒群9名、非転倒群22名）を対象に、MCには10m歩行課題を用いた。また、ランプの点灯にタイミングを合わせる静的・動的課題を実施した。検討した結果、タイミング一致をジャンプ動作で求められる動的課題において、転倒群が有意に誤差が大きかった。また、転倒群でのみMCと動的課題の誤差に有意な正の相関を認めた。結論として、転倒群では、ジャンプ動作など自身の運動能力から運動計画を正しく見積もる能力が低下していることが示唆された。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，近藤寛，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 本人担当部分：研究計画、抄録作成、ポスター作成
132）コロナ禍における生活変化はフレイルに影響するか？―後期高齢者を対象とした質問紙による検討―	—	令和4年11月	第9回日本予防理学療法学会学術大会（東京）	コロナ禍における生活変化がフレイルに影響しているか、奈良県曽爾村の住民健診に参加したの75歳以上の後期高齢者58名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は、過去1年における主観的な生活変化を問うコロナ禍における生活変化の質問票（QCL）、Frailty Screening Index（FSI）等で構成した。結果、QCLうち主観的な脚筋力低下や毎日の移動量、食事量減少などがフレイルと関連していることが示唆された。 発表者名：滝本幸治，池田耕二，笹野弘美，辻下聡馬，椿根純子，小杉宜子 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
133）安全性を考慮した座位での全身振動刺激トレーニングが身体機能に与える影響	—	令和4年11月	第50回四国理学療法士学会（徳島）	立位不可の高齢者でも全身振動（WBV）刺激トレーニングが有効か検討する基礎研究として、若年者21名（平均20.3±0.8歳）を対象に検討した。方法は、立位群と座位群でそれぞれ足底に対してWBV刺激トレーニングを4週実施し、前後でバランス能力、下肢筋力を評価した。結果、立位群はバランスと筋力、座位群はバランスにのみ向上を認めたが、対照群（プラセボ）との比較では差を認めなかった。若年者であったことから十分な能力改善を認めなかったことが考えられ、引き続き高齢者においても検討が必要である。 発表者名：近藤寛，竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，資料収集，抄録・プレゼン資料作成

134）高齢者におけるタイミング一致課題と身体機能との関係	—	令和4年11月	第50回四国理学療法士学会（徳島）	高齢者に対して静的・動的タイミングを合わせる能力と身体機能との関係について検討した。対象は、高齢の転倒群8名、非転倒群22名とした。方法は、タイミング一致課題として5つのランプを0.5秒間隔に順に点灯させ最終ランプの点灯に合わせる静的課題（手元のボタン押し）と動的課題（前方へのジャンプ）とともに、膝伸展筋力、敏捷性、バランス、歩行能力評価を実施した。結果、転倒群において動的タイミングとともに敏捷性、バランスと歩行能力が有意に低下していた。また、動的タイミングと敏捷性と歩行能力に有意な正の相関を認めた。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，近藤寛，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，宅間豊，井上佳和，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
135）COVID-19院内クラスターによる影響調査―実践報告を踏まえて―	—	令和4年11月	第50回四国理学療法士学会（徳島）	院内クラスター発生時、理学療法が中止された80名（平均81.3歳）に対して簡易式評価表を作成し、中止前と再開後の身体機能および日常生活活動（ADL）評価を実施した。結果、平均中止期間は15.8日であり、再開時に関節可動域制限（57%）、筋力低下（23%）、運動時の息ぎれ・倦怠感（24%）などの廃用を認めた。ADL評価では、移乗や移動に関する項目が低下傾向であった。再開後にも病棟単位で立ち入り等制限があったため、自主運動パンフレットを作成し、看護部の協力を得て遠隔運動療法を試みた。今後は、院内の感染レベルに準じて患者の不利益防止に持続可能な介入策を検討する必要がある。 発表者名：田中健太郎，滝本幸治，前田秀博 本人担当部分：研究計画，資料収集，抄録・プレゼン資料作成

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　5年　3月　31日

氏名　野中　紘士

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学	生理学、骨格筋、物理療法

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
1）講義の工夫	平成26年10月1日～平成28年3月31日	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学Ⅰ・IIの講義にはアクティブラーニングを促通する目的で反転授業を取り入れている．具体的には自主制作した e-learning 教材で自宅学習させ，講義時間は演習やディスカッションに活用している．これにより，学生の臨床場面で獲得した知識の応用を習得させる効果があった．
	令和3年9月1日～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻・作業療法学専攻の人体構造学 III（神経・運動器）の運動器部分の講義にアクティブラーニングを促通する目的で反転授業を取り入れている．具体的には制作した e-learning 教材で事前に自主学習させ，講義時間はグループワークにより知識定着を促進し，口頭試問による知識定着度の確認を行っている．これにより，学生の運動器の解剖学的知識の修得を促進させる効果があった．
2）実験・実習の工夫	平成26年10月1日～平成28年3月31日	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学Ⅰ・IIの実習ではロールプレイを導入し，臨床場面で可能な限り近い状況で演習を行っている．学生にロールプレイでプレゼンテーションを行わせ，フィードバックを通じて，必要な知識と治療技術の修得ができるよう講義を展開している．これにより，学生の臨床能力育成に効果があった．
２　作成した教科書，教材		
1)寒冷療法（講義用資料）	平成23年10月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻の物理療法学Ⅰで、寒冷療法の効果とそのメカニズムおよび適応・禁忌について要点をまとめた資料を作成し、寒冷療法を理解させ，実施する能力を習得させる効果があった．
2)水治療法（講義用資料）	平成23年11月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻の物理療法学Ⅰで，水治療法の効果とそのメカニズムおよび適応・禁忌について要点をまとめた資料を作成し、水治療法を理解させ，実施する能力を習得させる効果があった．
3)温熱療法（講義用資料）	平成23年11月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻の物理療法学Ⅰで，温熱療法の効果とそのメカニズムおよび適応・禁忌について要点をまとめた資料を作成し、温熱療法を理解させ，実施する能力を習得させる効果があった。
4)光線療法（講義用資料）	平成24年5月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻の物理療法学 II で，光線療法の効果とそのメカニズムおよび適応・禁忌について要点をまとめた資料を作成し，光線療法を理解させる効果があった．

5)電気刺激療法（講義用資料）	平成 24 年 5 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻の物理療法学 II で，電気刺激療法の効果とそのメカニズムおよび適応・禁忌について要点をまとめた資料を作成し，電気刺激療法を理解させ，実施する能力を習得させる効果があった.
6)牽引療法（講義用資料）	平成 24 年 6 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻の物理療法学 II で，牽引療法の効果とそのメカニズムおよび適応・禁忌について要点をまとめた資料を作成し，牽引療法を理解させ，実施する能力を習得させる効果があった.
7)マッサージ療法（講義用資料）	平成 24 年 7 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻の物理療法学 II で，マッサージ療法の効果とそのメカニズムおよび適応・禁忌について要点をまとめた資料を作成し，マッサージ療法を理解させ、実施する能力を習得させる効果があった.
8)骨格筋（講義用資料）	平成 24 年 11 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部の理学療法学専攻と作業療法学専攻の形態機能学実習で，骨格筋の構造や生理学的特性および収縮のメカニズム，筋電図などについての要点をまとめた資料を作成した．骨格筋の形態機能を理解させる効果があった.
9)呼吸（講義用資料）	平成 24 年 11 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部の理学療法学専攻と作業療法学専攻の形態機能学実習で，呼吸器の構造や生理学的特性およびガス交換のメカニズムなどについての要点をまとめた資料を作成した．呼吸器の形態機能を理解させる効果があった.
10)神経（講義用資料）	平成 24 年 12 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部の理学療法学専攻と作業療法学専攻の形態機能学実習で，神経の構造や生理学的特性および興奮の伝導・伝達のメカニズムなどについての要点をまとめた資料を作成した．神経の形態機能を理解させる効果があった.
11)電気刺激療法（e-learning 用教材）	平成 26 年 5 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学 II で，電気刺激療法の予習・復習用 e-learning 教材を作成し，電気刺激療法の基本的原理とゲートコントロール理論の講義内容を理解させる効果があった.
12)心臓（講義用資料）	平成 27 年 10 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類の理学療法学専攻と作業療法学専攻の形態機能学実習で，心臓の構造や生理学的特性および心臓の収縮メカニズムや心電図などについての要点をまとめた資料を作成した．心臓の形態機能を理解させる効果があった.
13)寒冷療法（e-learning 用教材）	平成 27 年 12 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学 I で，寒冷療法の予習・復習用 e-learning 教材を作成し，寒冷療法の基本的原理と効果の講義内容を理解させる効果があった.
14）温熱療法（e-learning 用教材）	平成 27 年 12 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学 I で，温熱療法の予習・復習用 e-learning 教材を作成し，温熱療法の基本的原理と効果の講義内容を理解させる効果があった.
15）股関節の運動学（講義資料）	平成 30 年 6 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動学演習で，股関節の解剖と運動学などについての要点をまとめた資料を作成した．股関節の運動学を理解させる効果があった.

16）膝関節の運動学（講義資料）	平成 30 年 6 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動学演習で，膝関節の解剖と運動学などについての要点をまとめた資料を作成した．膝関節の運動学を理解させる効果があった．
17）足関節・足部の運動学（講義資料）	平成 30 年 6 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動学演習で，足関節・足部の解剖と運動学などについての要点をまとめた資料を作成した．足関節・足部の運動学を理解させる効果があった．
18）関節リウマチの理学療法（講義資料）	平成 30 年 11 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動器障害系理学療法基礎演習で，関節リウマチの理学療法についての要点をまとめた資料を作成した．関節リウマチの理学療法を理解させる効果があった．
19）上肢の骨折の理学療法（講義資料）	平成 30 年 11 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動器障害系理学療法基礎演習で，上肢の骨折の理学療法についての要点をまとめた資料を作成した上肢の骨折の理学療法を理解させる効果があった．
20）肩関節障害の理学療法（講義資料）	平成 30 年 11 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動器障害系理学療法基礎演習で，肩関節障害の理学療法についての要点をまとめた資料を作成した肩関節障害の理学療法を理解させる効果があった．
21）靭帯損傷の理学療法（講義資料）	平成 30 年 11 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動器障害系理学療法基礎演習で，靭帯損傷の理学療法についての要点をまとめた資料を作成した靭帯損傷の理学療法を理解させる効果があった．
22）姿勢制御（講義資料）	平成 30 年 12 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の臨床運動学演習で，姿勢制御などについての要点をまとめた資料を作成した．姿勢制御の運動学を理解させる効果があった．
23)細胞の構造と膜の興奮（講義用資料）	令和元年 9 月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学 II（動物性機能）で，細胞構造と細胞膜の興奮メカニズムなどについての要点をまとめた資料を作成した．細胞膜の興奮のメカニズムを理解させる効果があった．
24)骨格筋の構造と収縮のメカニズム（講義用資料）	令和元年 9 月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学 II（動物性機能）で，骨格筋の構造と収縮のメカニズムなどについての要点をまとめた資料を作成した．骨格筋の構造と収縮のメカニズムを理解させる効果があった．
25)運動単位，神経支配比，脊髄反射（講義用資料）	令和元年 9 月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学 II（動物性機能）で，骨格筋に関する運動単位，神経支配比，脊髄反射メカニズムなどについての要点をまとめた資料を作成した．運動単位，神経支配比，脊髄反射メカニズムを理解させる効果があった．
26)骨格筋の代謝特性とエネルギー代謝（講義用資料）	令和元年 9 月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学 II（動物性機能）で，骨格筋の代謝特性とエネルギー代謝などについての要点をまとめた資料を作成した．骨格筋の代謝特性とエネルギー代謝を理解させる効果があった．

27)骨の構造と生理（講義用資料）	令和元年9月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学 II（動物性機能）で，骨の構造と生理などについての要点をまとめた資料を作成した．骨の構造と生理を理解させる効果があった．
28)体幹の解剖学（講義用資料）	令和元年10月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体構造学 III（神経・運動器）で，体幹の骨，筋および神経支配や作用，靭帯，周辺の血管などについての要点をまとめた資料を作成した．体幹の解剖を理解させる効果があった．
29)下肢の解剖学（講義用資料）	令和元年10月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体構造学 III（神経・運動器）で，下肢の骨，筋および神経支配や作用，靭帯，周辺の血管などについての要点をまとめた資料を作成した．体幹の解剖を理解させる効果があった．
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1) 大阪府立大学　総合リハビリテーション系長および総合リハビリテーション学研究科長による平成25年度教員業績評価	平成26年12月4日	総合評価S（4段階中最高評価）
2) 大阪府立大学　総合リハビリテーション系長および総合リハビリテーション学研究科長による平成26年度教員業績評価	平成27年12月17日	総合評価S（4段階中最高評価）
3)大阪府立大学　総合リハビリテーション系長および総合リハビリテーション学研究科長による平成27年度教員業績評価	平成28年12月22日	総合評価S（4段階中最高評価）
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)講演について	平成24年6月16日	いずみ健老大学　講師 「腰痛予防」 慢性腰痛について，現在考えられている発生理由とその予防・改善のための運動療法（運動方法）について講演を行った．
	平成26年11月26日	はびきの市民大学　講師 「腰痛予防のための運動」 慢性腰痛について，現在考えられている発生理由とその予防・改善のための運動療法（運動方法）について講演を行った．
2)高大連携　講義について	平成26年10月30日	大阪府立鳳高等学校　模擬講義講師 「理学療法とリハビリテーション」 リハビリテーション職である理学療法士の仕事内容や社会における役割，また他の医療職とのかかわりについての講義を行った．
	平成30年6月14日	西舞鶴高校　講師 「医療」 医療職である理学療法士，作業療法士，臨床検査技師の仕事内容について講義を行った．
	平成30年6月20日	伊吹高校　講師 「医療技術・リハビリ」 医療職である理学療法士，作業療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った．

	平成 30 年 8 月 23 日	花園高校　講師 「理学療法・作業療法」 医療職である理学療法士，作業療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った．
	平成 30 年 9 月 11 日	八日市高校　講師 「医療技術・リハビリ」 医療職である理学療法士，作業療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った．
	平成 30 年 9 月 26 日	甲西高校　講師 「医療技術（リハビリ）」 医療職である理学療法士，作業療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った．
	平成 30 年 9 月 26 日	桂高校　講師 「医療技術」 医療職である理学療法士，作業療法士，臨床検査技師の仕事内容について講義を行った．
	平成 30 年 11 月 12 日	長浜北高校　講師 「医療（理学療法）」 医療職である理学療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った．
	令和 3 円 2 月 13 日	賢明学院高等学校　講師 「理学療法」 医療職である理学療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った．
５　その他 1)大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科学位論文(博士前期課程)審査実績	平成 28 年 2 月	博士前期課程：副査 1 名 「スタチン投与中の運動が骨格筋ミトコンドリアへ及ぼす影響」について学位論文（博士前期課程）の審査を行った．
2)大阪府立大学総合リハビリテーション学部および総合リハビリテーション系における教育実績	平成 21 年 4 月～平成 29 年 3 月	「理学療法早期体験実習」（平成 21 年度から平成 28 年度まで） 理学療法学専攻の 1 年生に講義や病院や介護老人保健施設での実習やディスカッションを行い，理学療法士の役割や業務内容を理解させる教育効果があった． 「理学療法基礎評価学 II」（平成 22 年度から平成 28 年度まで） 　理学療法評価である関節可動域測定の方法について講義を行い，関節可動域測定の習得させた 「形態機能学実習」（平成 23 年から平成 28 年度まで） 　神経，骨格筋，呼吸循環の解剖生理の講義および生理機能に関する実習を行い，学生に解剖生理学の理解を深める教育効果があった． 「物理療法学 I」（平成 23 年から平成 28 年度まで） 　物理療法の歴史や温熱，寒冷，水治療法の生理学的効果や適応，禁忌，実施方法の講義を行い，それら知識と実施方法を習得させた． 「物理療法学 II」（平成 24 年から平成 28 年度まで） 　電気，牽引，マッサージ療法の生理学的効果や適応，禁忌，実施方法の講義を行い，それら知識と実施方法を習得させた．

		「理学療法学総合評価演習」（平成 21 年度から平成 28 年度まで） 　地域のボランティア高齢者の評価を行い，評価技術の研鑽と評価レポート作成の指導を行い，理学療法評価およびレポート作成を総合的に理解，実施できるようにした． 「理学療法学研究法 II」（平成 28 年度） 　卒業論文作成の指導を行い，論文の作成方法およびリサーチマインドを習得せせる教育効果があった． 「理学療法臨床実習 I」（平成 21 年度から平成 28 年度まで） 　病院で臨床現場を見学させることにより，理学療法業務の概要や役割を理解させる教育効果があった． 「理学療法臨床実習 II」（平成 21 年度から平成 28 年度まで） 　理学療法評価に関する実習を行い，各種検査の実施と検査結果をもとに問題点を把握し，理学療法評価技術を習得させる教育効果があった． 「理学療法臨床実習 III」（平成 24 年度から理学療法臨床実習 III・IV に変更 ）（平成 21 年度から平成 28 年度まで） 　理学療法の過程全般を経験させ，理学療法の全体的な業務を遂行させる能力および臨床場面で的確な理学療法を発展させる能力を習得させる教育効果があった． 「理学療法臨床実習 IV」（平成 24 年度から平成 28 年度まで） 　臨床実習 III と同様に理学療法の過程全般を経験させ，理学療法の全体的な業務を遂行させる能力および臨床場面で的確な理学療法を発展させる能力を習得させる教育効果があった．
3)京都橘大学健康科学部における教育実績	平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月	「理学療法技術学入門演習Ⅰ」 　解剖学の知識と触診技術の習得の教育効果があった． 「理学療法技術学入門演習 II」 　筋の解剖学的知識と触診技術の習得の教育効果があった． 「ヘルスプロモーション応用演習」 　地域在住高齢者の体力測定を行い，高齢者の健康増進を実践するための知識や技術の習得の学習効果があった．
	平成 29 年 4 月～平成 31 年 3 月	「理学療法研究法 I」 　研究計画の立案，研究の実施，結果のまとめ方について学習効果があった． 「理学療法研究法 II」 　研究計画の立案，研究の実施，結果のまとめ方について学習効果があった． 「キャリア開発演習」 　新入生に大学での学び方や生活の心構えなどに対して教育効果があった．

4）奈良学園大学保健医療学部における教育実績	平成30年4月～平成31年3月	「運動学演習」 下肢（股関節，膝関節，足関節，足部）の運動学について教授し，理学療法士の基礎となる運動学の知識習得の教育効果があった． 「動作分析学演習」 寝返り，立ち上がりの動作分析について教授し，理学療法士にとって重要な動作分析法の習得の教育効果があった． 「臨床運動学演習」 力学に基づいた関節運動や動作に加え姿勢制御について教授し，理学療法士にとって重要な力学に基づいた関節運動や動作に加え姿勢制御の知識習得の教育効果があった． 「運動器障害系理学療法基礎演習」 関節リウマチ，肩関節障害，上肢の骨折，靭帯損傷の理学療法について教授し，理学療法士にとって重要な運動器障害の理学療法の習得の教育効果があった． 「総合臨床実習Ⅰ」 理学療法の過程全般を経験させ，理学療法の全体的な業務を遂行させる能力および臨床場面で的確な理学療法を発展させる能力を習得させる教育効果があった． 「総合臨床実習Ⅱ」 総合臨床実習Ⅰと同様に理学療法の過程全般を経験させ，理学療法の全体的な業務を遂行させる能力および臨床場面で的確な理学療法を発展させる能力を習得させる教育効果があった．
	平成31年4月～現在に至る	「基礎ゼミⅡ」 講義ノートの取り方，文献資料の検索，学術的な文章の読み方などについて，演習を通じて大学での学習を進める上で必要となる基礎的な知識や技能，学ぶ姿勢を身につける教育効果があった． 「人体構造学Ⅲ（神経・運動器）」 体幹及び下肢の骨や骨格筋，支配神経の解剖についての講義行い，学生に解剖学の理解を深める教育効果があった． 「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」 骨格筋，反射，骨の生理についての講義行い，学生に生理学の理解を深める教育効果があった． 「早期体験実習(理学療法)」 理学療法学専攻の1年生に講義や病院での実習、ディスカッションを行い，理学療法士の役割や業務内容を理解させる教育効果があった．
	令和2年4月～現在に至る	「人体構造実習」 体幹及び下肢の骨や骨格筋，神経の解剖についての講義行いうとともに，体表より触察方法の実習を行うことで，学生に解剖学の理解を深める教育効果があった．

5）奈良学園大学大学院看護学研究科看護学専攻修士課程における教育実績	令和3年4月～現在に至る	「人体生理実習」 血圧，経皮的酸素飽和度，呼吸機能，心電図，筋電図，誘発筋電図，平衡機能の実験実習を通じて，学生に生理学の理解を深める教育効果があった． 「地域実習(理学療法)」 理学療法学専攻の2年生に地域理学療法についての実習やディスカッションを行い，理学療法士の役割や業務内容を理解させる教育効果があった． 「客観的臨床能力演習（理学療法）」 理学療法評価に前に，理学療法評価に関する演習を通じて，理学療法評価技術を習得させる教育効果があった． 「理学療法評価実習」 理学療法評価に関する実習を行い，各種検査の実施と検査結果をもとに問題点を把握し，理学療法評価技術を習得させる教育効果があった．
	令和4年4月～現在に至る	「総合臨床実習Ⅰ(理学療法）」 理学療法評価，治療に関する実習を行い，各種検査の実施と検査結果をもとに問題点を把握し，治療プログラム立案，治療の実施を経験させ，理学療法を実施に関する知識の活用と実践を理解させる教育効果があった． 「総合臨床実習Ⅱ(理学療法）」 総合臨床実習Ⅰ（理学療法）に引き続き，理学療法評価，治療に関する実習を行い，各種検査の実施と検査結果をもとに問題点を把握し，治療プログラム立案，治療の実施を経験させ，理学療法を実施に関する知識の活用と実践する能力向上の教育効果があった． 「チーム医療論演習」 リハビリテーション職種と医療に携わる多職種との連携において，リハビリテーション職の役割を明確にし，多職種を理解することで，多職種との連携のあり方をディスカッションとプレゼンテーションを通して学習させ，チーム医療の実践を理解させる教育効果があった．
	平成31年4月～現在に至る	「フィジカルアセスメント」 代謝性疾患にたいするフィジカルアセスメントの講義と演習を行うことで，学生に代謝性疾患に対するフィジカルアセスメントの理解を深める教育効果があった．
	令和3年4月～現在に至る	「ヘルスプロモーション特論」 サルコペニア，フレイル，ヘルスプロモーションを促進するうえでの身体機能評価、運動の効果についての講義と演習を行うことで，高齢者・子どもの身体機能に関するヘルスプロモーションの理解を深める教育効果があった．

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1)理学療法士免許	平成15	厚生労働省　第44332号
2)修士（保健学）	平成17年3月	吉備国際大学　修第2-14号 論文題目「骨格筋収縮様式の違いによる解糖系酵素変動の検討」

3)博士（保健学） 4)生理学エデュケーター認定	平成 20 年 3 月 平成 28	吉備国際大学　博甲第保-4 号 論文題目「遠心性収縮による持久トレーニング効果についての検討」 日本生理学会　第 160056 号
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 1)医療法人三憲会老人介護保健施設エリシウム柵原理学療法士 2) 医療法人三憲会柵原病院　理学療法士	平成 15 年 4 月～平成 17 年 3 月 平成 17 年 4 月～平成 20 年 10 月	運動器疾患や神経疾患などを既往歴にもつデイケアおよび施設入所の利用者を対象に、日常生活活動や運動機能の維持・改善のための理学療法などにあたった。 回復期から慢性期における運動器疾患および神経系疾患を発症した入院患者に対する日常生活活動動作や運動機能の改善・維持のための理学療法などにあたった。また、運動器疾患や神経疾患を発症した外来患者の疼痛に対する理学療法、運動機能の維持・改善のための理学療法などにあたった。
４　その他 1)受賞歴 2)研究助成獲得実績	平成 22 年 5 月 平成 23 年 4 月 平成 24 年 4 月 平成 24 年 9 月 平成 24 年 9 月 平成 25 年 4 月 平成 25 年 4 月 平成 26 年 4 月	第 43 回日本理学療法学術大会　優秀賞 発表者として第 43 回日本理学療法学術大会優秀賞を受賞した. 大阪ガスグループ福祉財団 「高齢 COPD 患者に対する呼息時低周波電気刺激の臨床効果に関する研究―パイロットスタディ」 研究代表者：伊藤健一　研究分担者：濃添建男，奥田みゆき，野中紘士，堀江淳，川村博文 大阪ガスグループ福祉財団 「転倒のスクリーニングを目的とした加速時計による動作時の身体動揺評価法の確立に関する研究」 研究代表者：山中悠紀　研究分担者：野中紘士 大阪府立大学若手研究者シーズ育成事業 「温熱療法による糖尿病性筋萎縮の予防効果についての研究」 研究代表者：野中紘士 大阪府立大学異分野研究シーズ発掘・連携促進・融合領域創世支援事業 「リハビリ期間短縮を目指した基礎研究」 研究代表者：山地亮一　研究分担者：岩田晃，野中紘士 科学研究費　基盤研究(C) 「障がい児・者の平衡機能を促進するリハビリテーション機器の開発」 研究代表者：米津亮　研究分担者：野中紘士，片岡正教，中川智皓，新谷篤彦 科学研究費　A-Step 探索試験 「障がい児の体幹-足部運動連鎖型補装具の開発のための実証的研究」 研究代表者：米津亮　研究分担者：野中紘士，小栢進也，アブドラマニ・アバス，新谷篤彦，中川智皓，草田駿介，奥田邦晴，伊藤智博 科学研究費　基盤研究(B) 「骨格筋量の性差制御因子の同定と食品成分による発現調節」 研究代表者：山地亮一　研究分担者：野中紘士

	平成26年4月	科学研究費　基盤研究(C) 「COPD患者に対する呼息時電気刺激を用いた呼吸リハビリテーションの実証的研究」 研究代表者：伊藤健一　研究分担者：野中紘士，堀江淳，河村博文
	平成27年6月	御器谷科学財団　国際交流活動 「Heat stress attenuates skeletal muscle atrophy in diabetic rats」 研究代表者：野中紘士
	平成30年4月	科学研究費　基盤研究(C) 「糖尿病による末梢神経の酸化ストレスおよび栄養血管退行に対する運動療法の効果検証」 研究代表者：野中紘士　研究分担者：秋山純一，崎田正博
	平成31年4月	理学療法士協会 大規模臨床研究助成 「地域在住高齢者の虚弱化を予防し健康寿命を延伸する介護予防プログラムの開発と効果検証」 研究代表者：中野英樹　研究分担者：村田伸，堀江淳，兒玉隆之，白岩加代子，安彦鉄平，野中紘士，合田明生
	令和元年7月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成 「マウス由来C2C12筋管細胞に対する活性型ビタミンDの抗炎症作用および筋タンパク分解抑制に関する検討」 研究代表者：野中紘士　研究分担者：秋山純一，畦五月，伊藤健一
	令和元年10月	日本物理療法学会研究助成 「ヒト皮膚由来線維芽細胞における温度の違いが細胞増殖に与える影響」 研究代表者：吉川義之　研究分担者：杉本雅晴，野中紘士，滝本幸治，前重伯壮，植村弥希子
	令和2年5月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成 「高齢者における終末糖化産物と身体機能および身体組成との関連についての検討」 研究代表者：野中紘士　研究分担者：吉川義之，伊藤健一，門條宏宣
3)大阪府立大学総合リハビリテーション学部および総合リハビリテーション系における学内業務実績	平成21年4月～平成29年3月	「広報委員」 平成21年度に広報委員として，広報活動に携わった． 「高大連携教育展開委員」 平成21年度に高大連携教育委員として，地域住民向けの講座や高校生向けの講座の調整などに携わった． 「動物実験倫理委員」 平成22年度から平成28年度まで動物実験倫理委員として倫理審査などに携わった． 「予算委員」 平成27年度から平成28年度まで予算委員として理学療法学専攻の運営予算の配分や管理などに携わった． 「紀要委員」 平成22年度から平成28年度まで紀要委員として雑誌の編集などに携わった．

4)京都橘大学健康科学部における学内業務実績	平成29年4月～平成31年3月	「教育研修センター」 平成29年度から京都橘大学の卒業生を対象とした卒後教育研修の運営に携わっている. 「学科会議運営委員」 平成29年から理学療法学科の会議運営に携わっている.
5)奈良学園大学保健医療学部における学内業務実績	平成31年4月～現在に至る	「教務ワーキンググループ」 平成31年度からリハビリテーション学科の教務関連の運営に携わっている. 「カリキュラム検討委員」 平成31年度からリハビリテーション学科のカリキュラム検討の運営に携わっている.
	令和3年4月～現在に至る	「卒業研究委員」 平成31年度からリハビリテーション学科の卒業研究の実施方法検討に携わっている.
6)学術論文の査読歴	平成26	「Journal of Physical Therapy Science」 「Experimental Physiology」 「Acta Physiologica Hungarica」 「Experimental and Molecular Pathology」 「Archives of Physiology and Biochemistry」 「Current Nutrition and Food Sience」 「FACETS」 「Acta Physiologica」 「ヘルスプロモーション理学療法研究」 「Nutrients」 「保健医療学雑誌」 「Journal of Life Science Research」 「Natural Product Communications」 「医療福祉情報行動科学研究」 「BMC Geriatrics」 「Scientific Reports」

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1PT 入門　イラストでわかる運動器障害理学療法 :	共著	令和 3 年 1 月	医歯薬出版株式会社	運動器疾患に対する理学療法に関する基本的な考え方と各疾患における実践的な理学療法を解説している. A4 版　全 291 頁 監修：上杉雅之 編集：横山茂樹，甲斐義浩 著者：安彦鉄平，井上由里，内田重博，甲斐義浩，木村智子，幸田仁志，篠原博，武内考祐，対馬栄輝，永松隆，根地島誠，野田優希，野中紘士，松井知之，宮崎純弥，宮地諒，横山茂樹 本人担当部分：「第 14 章　関節リウマチ」（P.245-P.266)を単著. 関節リウマチの病態・障害像，診断および治療方針，理学療法評価，治療計画及びプログラムについて解説した.
（学術論文） 1 骨格筋収縮様式の違いによる解糖系酵素変動に関する検討 （修士論文）	単著	平成 17 年 3 月	吉備国際大学大学院	求心性収縮と遠心性収縮の持続的負荷に対するエネルギー代謝系の 1 つである解糖系酵素変動について検討した. ICR 雄性マウスを用い，コントロール群，上り走行（求心性収縮）群，水平走行群，下り走行（遠心性収縮）群にわけ，実験を行った．上り，下りの傾斜角度は±16°とした．4 週間走行負荷を速度 15m/min で行い，走行時間は 1 週目は 20 分とし，1 週間ごとに 10 分延長した．4 週目に上腕三頭筋を摘出し，解糖系酵素であるホスホフルクトキナーゼ活性，乳酸脱水素酵素活性および乳酸脱水素酵素アイソザイムの測定を行った．その結果、求心性収縮と遠心性収縮の持続的負荷により，両者間で解糖系酵素変動が異なることが明らかとなった. A4 版　全 26 頁
2 ヒト皮膚培養線維芽細胞に対する紫外線（UVA)照射が不定期 DNA 合成および Collagen 合成に対する影響に関する検討－年齢別の細胞応答	共著	平成 18 年 5 月	吉備国際大学保健科学部研究紀要 11 号 P.59-P.67	光源別のヒト皮膚透過率を測定し細胞の照射条件とした．若年者と高齢者培養細胞に与える UVA 照射影響の違いを検討するため，若年者由来細胞 3 種と高齢者由来細胞 3 種の皮膚真皮より樹立し，不定期 DNA 合成測定試験と Collagen 合成活性測定試験実験を行った．高齢者細胞に有意な DNA の合成量と Collagen 合成活性の低下が見られ，UVA 照射による不定期 DNA 合成応答も低下していた．若年者細胞には照射後に有意な Collagen 合成の増加応答が見られた. 本人担当部分：形態学的視点より結果を解釈した. 共著者：秋山純一，中嶋正明，平上二九，小幡太志，野中紘士，龍田尚美，速水明香，新藤泰子

3 関節固定の解除および再固定が可能なラット膝関節創外固定法の考案 （査読付）	共著	平成 20 年 3 月	理学療法科学 23 巻 1 号 P.73-P.77	我々は，関節固定期間中に固定の解除と再固定が自由かつ簡便にできるラット膝関節創外固定法を考案した．今回，我々は実験動物としてラットを用い，この関節創外固定法の実験的関節拘縮モデル作成法としての有用性を検証した．5 週間の関節固定負荷の結果，関節固定時に特徴的とされる関節可動域の減少や組織学的所見が確認された．また，浮腫，炎症，鬱血などの副次的作用を排除することができた．この結果より，本関節創外固定法は実験的関節拘縮モデル作成法として有効であることが示された． 本人担当部分：実験の実施および組織の形態学的評価を行った． 共著者：龍田尚美，中嶋正明，秋山純一，野中紘士，祢屋俊昭
4 遠心性収縮による持久トレーニング効果についての検討 （査読付） （博士論文）	共著	平成 20 年 4 月	吉備国際大学大学院 理学療法科学 23 巻 2 号 P.285-P.289	遠心性収縮による持久トレーニングが骨格筋の持久性改善に効果があるかを検討した．ICR 雄マウスをコントロール群(CONT)，上り走行群(求心性収縮，+16°，UR)，水平走行群(0°，LR)，下り走行群(遠心性収縮，-16°，DR)に分けた．5 週間の走行運動後、大腿四頭筋の解糖系酵素は CONT に比べ，UR，LR で上昇し，DR は変化しなかった．酸化系酵素は CONT に比べ，UR，LR，DR で上昇した．遠心性収縮による持久トレーニングは，嫌気的代謝に効果はないが，好気的代謝には効果があることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：野中紘士，秋山純一，中嶋正明
5 MNNG 誘導胃腸発癌に対する 1α(OH)D3 の抑制効果発現過程における血管新生の阻害について	共著	平成 21 年 3 月	吉備国際大学保健科学部研究紀要 19 号 P.11-P.15	ラットを用いて MNNG 誘導胃腸癌の 1α(HO)D3 による抑制モデルを作製し，抑制効果発現過程における血管新生阻害の有無および VEGF の関与について免疫組織化学的に検討した．その結果，1α(OH)D3 は VEGF の発現を抑えることで血管新生を制御し，胃腸癌の発生抑制に働いていることが示唆された． 本人担当部分：実験実施，組織切片作成を行った． 共著者：川浦昭彦，谷田憲俊，泉啓介，秋山純一，水谷雅年，野中紘士，武田英二

6 固定関節に対する異なる頻度の関節可動域運動が関節可動範囲に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成 21 年 6 月	理学療法科学 24 巻 3 号 P.427-P.433	ラットを用いて関節固定期間中に ROM ex 実施頻度の違いが固定関節の関節可動範囲の減少，関節内組織の変性に与える影響を検討した．Wistar 系雄ラット 30 匹を，(1)無処置群，(2)ROM ex なし群，(3)ROM ex 週 1 日群，(4)ROM ex 週 3 日群，(5)ROM ex 週 5 日群の 5 群に分け，関節可動範囲の経時的変化および実験終了後の組織像を評価した．ROM ex の週あたりの実施頻度が多いほど，関節可動範囲の減少が抑制される傾向にあった．組織学的評価では，ROM ex なし群，ROM ex 週 1 日群で関節腔内が結合組織により充填されていた．ROM ex 週 3 日群，ROM ex 週 5 日群では軟骨表面に少量の結合組織の増殖像が確認された． 本人担当部分：実験の実施および組織の形態学的評価を行った． 共著者：龍田尚美，中嶋正明，秋山純一，野中紘士，齋藤圭介，川上照彦
7 Inhibitory effect of 1a-hydroxyvitamin D3 on N-nitrosobis (2-oxopropyl) amine-induced cholangiocarcinogenesis in Syrian hamsters （N-ニトロソビス（2-オキソプロピル)アミン誘導性胆管癌発生に対する 1a ヒドロキシビタミン D3 の効果） （査読付）	共著	平成 23 年 6 月	Acta Medica Okayama vol.65(3) P.193-P.197	1α-hydorxyvitamin D3 [1α(OH)D3]の N-nitrosobis(2-oxopropyl)amine(BOP)誘発性胆管癌に対する効果を検討した．ハムスターに 5 週間 BOP を投与し胆管癌を誘発した．BOP 投与と併せて 1α(OH)D3 を 0.04μg 経口投与した．1α(OH)D3 を投与したハムスターは胆管癌の発生が投与していないハムスターに比べ有意に低値を示した．本研究より，1α(OH)D3 が BOP 誘発性胆管癌を抑制することが示された． 本人担当部分：研究計画立案および実験実施，組織切片作成を行った． 共著者：Kawaura A, Tanida N, Akiyama J, Nonaka K, Mizutani M, Sawada K, Nakagawa K, Tsugawa N, Izumi K, Ii K, Okano T, Takeda E
8 Thermal preconditioning attenuates exercise-induced muscle injury in mice （温熱プレコンディショニングは運動誘発性筋損傷を軽減する） （査読付）	共著	平成 23 年 6 月	Journal of Physical Therapy Science vol.23(3) P.409-P.411	運動前に温熱ストレスを与えることで，その後の運動性筋損傷が予防できるかについて検討した．マウスに温浴(41.5℃)を 20 分間行い温熱ストレスを与え，24 時間後に走行運動を行い，大腿四頭筋に損傷を惹起した．温浴にて温熱ストレスを与えたマウスは温熱ストレスを与えなかったマウスに比べ，大腿四頭筋の Heat shock protein 25 の発現量が増加し，筋損傷の指標である Glucose-6-phoshate dehydrogenase 活性の上昇が抑制された．本研究結果より，運動前に温熱ストレスを与えることで，運動誘発性筋損傷が減弱することが示された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Akiyama J, Tatsuta N, Iwata A

9 Cool water immersion after downhill running suppresses exercise-induced muscle damage in the rat soleus muscle （下り坂走行後の冷水浴はラットヒラメ筋の運動誘発性筋損傷を軽減する） （査読付）	共著	平成 24 年 8 月	Journal of Physical Therapy Science vol.24(7) P.613-P.616	冷水浴による寒冷療法が運動誘発性筋損傷を減弱するかについて検証した．ラットにトレッドミルにてダウンヒル走行運動（傾斜;-16°，速度;16 m/min）を 90 分間行い，ヒラメ筋に損傷を惹起した．運動直後，冷水浴（20℃）を 30 分間行った．冷水浴を行ったラットは運動後のヒラメ筋の損傷筋線維が減少し，筋損傷の指標である Glucose-6-phoshate dehydrogenase 活性の上昇が抑制された．本研究より，運動後の冷水浴が運動後の骨格筋損傷を減弱することが示された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Akiyama J, Tatsuta N, Une S
10 Carbon dioxide-rich water bathing increases mynuclear number and muscle fiber size in regenerating skeletal muscles （高濃度人工炭酸泉浴は再生骨格筋の筋核を増加させ，筋線維径を増加させる） （査読付）	共著	平成 24 年 12 月	Journal of Physical Therapy Science vol.24(12) P.1295-P.1298	炭酸泉浴が筋損傷後の再生を促進させるかどうかについて検討した．Wistar 系雌ラットを用い実験を行った．ラットの左前脛骨筋にブピバカイン塩酸塩により筋損傷を惹起し，損傷の翌日より，炭酸泉（1,000 ppm）を１日に１回，37 度で 30 分間行った．損傷２週間後，左前脛骨筋の筋核数と筋横断面積は炭酸泉浴にて回復が促進されていた．本研究より，炭酸泉は筋損傷後の再生を促進させる可能性があることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Akiyama J, Tatsuta N, Une S, Ito K, Kataoka M, Ogaya S, Iwata A, Okuda K
11 肉離れ損傷筋における基底膜の特徴－ラットを用いた基礎的研究 （査読付）	共著	平成 24 年 12 月	Journal of Rehabilitation and Health Sciences, vol.10 P.7-P.11	打撲と肉離れによる筋損傷時の筋基底膜と形質膜の形態の違いを検証した．Wistar 系雄ラットを打撲群，肉離れ群，コントロール群に分け，損傷 2 日後に被験筋を摘出して損傷筋細胞の基底膜と形質膜を染色した．肉離れ群の筋組織に損傷筋細胞が散在性にみられ，正常筋細胞に比べ基底膜が厚く，波打つような変形を認めた．打撲群では損傷が広範囲で，筋細胞の基底膜が厚くなった部分や基底膜を認めない部分もあった．肉離れ群/コントロール群の基底膜の平均面積は 1430.9/1101.8，基底膜比(%)は 60.1/37.1 であり，基底膜面積と基底膜比で有意差が認められた． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施と組織切片作成・染色を行い形態学的評価を行った． 共著者：岩田晃，野中紘士，上勝也

12 Carbon dioxide water bathing enhances myogenin but not MyoD protein expression after skeletal muscle injury （人工炭酸泉浴は骨格筋損傷後の myogenin を増加させるが MyoD は増加させない） （査読付）	共著	平成 25 年 6 月	Journal of Physical Therapy Science vol.25(6) P.709-P.711	これまでに我々は，人工炭酸泉浴が筋損傷の治癒回復を促進する可能性を見いだした．本研究はその治癒促進のメカニズムを探ることを目的に行った．筋損傷後に人工炭酸泉浴を行うと損傷筋の筋芽細胞増殖に関わる MyoD タンパクの発現に変化は見られないが，筋管形成に関わる myogenin タンパクの発現が増加した．以上より，筋損傷後の人工炭酸泉浴は筋管形成を促進する可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Akiyama J, Tatsuta N, Une S, Ito K, Ogaya S, Kataoka M, Iwata A, Okuda K
13 Changes in antioxidant enzymes and lipid peroxidation in extensor digitorum longus muscles of streptozotocin-diabetic rats may contribute to muscle atrophy （ストレプトゾトシン糖尿病ラット長趾伸筋の抗酸化酵素と過酸化脂質の変化は筋萎縮と関連する） （査読付）	共著	平成 26 年 12 月	Acta Physiologica Hungarica vol.101(4) P.421-P.428	糖尿病時の筋萎縮が酸化ストレスと関連があるかについて検証した．速筋線維優位である長趾伸筋は萎縮し，抗酸化酵素(カタラーゼ，グルタチオンペルオキシダーゼ，スーパーオキサイドジスムターゼ)活性の上昇と TBARS の増加が確認された．一方，赤筋線維優位であるヒラメ筋の萎縮は軽度で，カタラーゼ活性は上昇したが，それ以外の抗酸化酵素活性と TBARS に変化は認められなかった．以上より，糖尿病に伴う酸化ストレスが速筋線維の萎縮を惹起する可能性を示した． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Une S, Tatsuta N, Ito K, Akiyama J
14 Electrical stimulated ventilation feedback improve ventilation pattern in patients with COPD （電気刺激による換気フィードバックは COPD 患者の換気パターンを改善する） （査読付）	共著	平成 27 年 2 月	Journal of Physical Therapy Sciences vol.27(2) P.325-P.330	COPD 患者に対する呼息時電気刺激（PESE）を用いた換気フィードバックの有効性を検証した．24 名の COPD 患者を，プラセボ群と PESE を行う群に割り付けた．対象者には 5 分間のエルゴメータ運動を 2 回行ってもらい，ベースライン（BL）と各介入による換気指標を中心としたデータの測定を行った．BL に対しプラセボ群では，安静時・運動時とも明らかな変化は認められなかったが，PESE 群では安静時・運動時とも有意な換気効率の改善を認め，COPD 患者の換気効率改善に PESE が有効であることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに，測定データの分析を行った． 共著者：Ito K, Nozoe T, Okuda M, Nonaka K, Yamahara J, Horie J, Hayama Y, Kawamura H

15 ラット骨折モデルによる高濃度人工炭酸泉浴の骨折治癒への影響 -TGF-β1の血中濃度変化と組織学的観察による検討	共著	平成27年3月	吉備国際大学保健福祉研究所紀要 16号 P.1-P.6	炭酸泉浴の骨折治癒への影響について検討した．ラットをコントロール群(C群)，さら湯35℃温浴群(I群)，炭酸泉35℃温浴群(II群)に分けた．2週目のTGF-β濃度はII群が，I群と比べて高値を示した．その後は時間経過とともに，TGF-β濃度はII群で下降し，I群では上昇し，8週目には，I群の方が高値を示した．5週目では，II群で治癒の促進が見られた．8週目では，各群とも骨再生が進み，群間での明らかな差は見られなかった． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験を実施した． 共著者：秋山純一，高須賀純一，野中紘士，矢田智大，川浦昭彦，中嶋正明，加納良男，畦五月，龍田尚美，平上二九三
16 Heat stress attenuates skeletal muscle atrophy of extensor digitorum longus in streptozotocin-induced diabetic rats (温熱刺激はストレプトゾトシン誘発性糖尿病ラットの長趾伸筋の萎縮を減弱させる) （査読付）	共著	平成27年9月	Acta Physiologica Hungarica vol.102(3) P.293-P.300	糖尿病による骨格筋萎縮が温熱療法により予防できるかについて検討した．ストレプトゾトシンを投与し糖尿病を誘発したラットに42℃で30分間の温浴を1週間に5回，3週間行った．その結果，温熱療法を行っていないラットに比べ長趾伸筋のHeat shock protein 25，72の発現が増加し，筋線維横断面積の減少が予防された．本研究より，温熱療法が糖尿病による骨格筋萎縮を予防できることを示した． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験の実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K，Une S，Akiyama J
17 健康寿命と細胞の寿命	共著	平成28年3月	吉備国際大学保健福祉研究所紀要 17号 P.11-P.14	突然変異を持つPI3K遺伝子による細胞老化の法則を調べるために，FLAG標識野生型あるいは突然変異型PI3K遺伝子をラット線維芽細胞に導入した．その結果，正常なラット線維芽細胞は約20回分裂すると老化した．しかし，突然変異型PI3K遺伝子を導入したラット線維芽細胞は約26回分裂まで長生きした．さらに我々は，突然変異型PI3K遺伝子をマウスの受精卵に導入して作成したトランスジェニックマウスの寿命を調べたところ約20%の寿命延長が観察された． 本人担当部分：動物実験を実施した． 共著者：秋山純一，平上二九三，野中紘士，川浦昭彦，元田弘敏，井上茂樹，河村顕治，加納良男

18 Surface electromyography activity of the rectus abdominis, internal oblique, and external oblique muscles during forced expiration in healthy adults （健常成人の強制呼気中の腹直筋および内腹斜筋，外腹斜筋の表面筋電活動） （査読付）	共著	平成 28 年 4 月	Journal of Electromyography and Kinesiology vol.28 P.76-P.81	呼気抵抗下（最大呼気の 10%，20%，30%）での腹直筋，内・外腹斜筋の筋活動を筋電図を用いて検証することを目的に研究を行った．その結果，強制呼気の際は腹直筋よりも内・外腹斜筋の筋活動が高いことが明らかになった．また内・外腹斜筋の活動は 10%，20%の抵抗に比べ 30%の抵抗で高値を示した．また，本研究より，呼気筋トレーニングとしては最低 30%の抵抗を必要であることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案および解剖生理学的側面から考察を行った． 共著者：Ito K，Nonaka K，Ogaya S，Ogi A，Matsunaka C，Horie J
19 Electrical stimulation ventilator feedback facilitates maintenance of a prolonged expiration pattern during exercise: a proof of concept study in healthy adults （電気刺激による換気フィードバックは運動時の延長呼息パターンの維持を促進するー健常成人にたいする概念実証研究） （査読付）	共著	平成 28 年 8 月	Physiotherapy Theory and Practice vol. 32(6) P.483-P.488	本研究の目的は，運動中の呼息を促通させるために電気刺激を用いたフィードバック（ESVF）を行い，その効果と安全性を明らかにすることである．健常成人 23 名を ESVF 群と対照群に割り付けた．対象者は呼吸練習において，呼気延長の呼吸パターンを練習し，その呼吸法を運動中も維持するように指導された．運動中と運動後の呼気/吸気時間比において対照群と比較して ESVF 群が有意に高値を示した．また，ESVF による副作用が認められなかったことから ESVF は運動中の呼吸法を習得させるツールになり得ることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案および一部論文執筆を行った． 共著者：Yamahara J，Ito K，Nonaka K
20 Effects of hull scratching, soaking, and boiling on antinutrients in Japanese red sword bean (Canavalia gladiata) （赤なた豆の抗栄養成分に対する皮処理および浸漬，加熱の影響） （査読付）	共著	平成 28 年 10 月	Journal of Food Science vol. 81(10) P.C2398-P.C2404	ナタマメはタチナタマメに類似した学名の豆であり，抗栄養性のレクチンを含有している．餡として使用するためには，その吸水性を上昇させることと，マメに含有されるレクチンを含んだ各種の抗栄養成分の含有量を低下させることが課題となる．そこで，種皮に各種の処理を施したマメについて吸水性と，抗酸化活性，抗栄養成分（レクチン，各種プロテアーゼインヒビター，アミラーゼインヒビター量など）を測定した．その結果，種皮に穴をあけた場合にこれら物質が無処理よりも有意に低下した．餡への利用のためには，皮処置と浸漬処理，加熱の三処理が必須と考えられた． 本人担当部分：抗酸化活性のデータ測定を行った． 共著者：Une S，Nonaka K，Akiyama J

21 Deep heating using microwave diathermy decreases muscle hardness: a randomized, placebo-controlled trial （極超短波を用いた深部加温は筋硬度を返照させる－無作為化，プラセボ対照試験） （査読付）	共著	平成 28 年 12 月	Journal of Rehabilitation and Health Sciences vol.14 P.9-P.13	深部温熱の筋硬度変化に与える影響を極超短波を用いて検証した．20 名の健常大学生をマイクロウェーブ群とプラセボ群に割り付け，介入前後で筋硬度変化を測定した．介入後マイクロウェーブ群では筋硬度が低下した．一方，プラセボ群は筋硬度の変化を認めなかった．本研究より，深部温熱は筋硬度を減少させる効果を持つことが示された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Kataoka M, Ogaya S, Ito K, Akiyama J
22 Co-presence of osteophyte and effusion as a risk factor for knee pain in the community-dwelling elderly （骨棘と浮腫の共存は地域高齢者の膝関節痛のリスクファクターである） （査読付）	共著	平成 29 年 3 月	Topics in Geriatric Rehabilitation Vol. 33(1) P.57-P.61	膝の痛みに関与する要素を検討するため，超音波診断装置を用いて膝関節周囲組織の状態を調べた．その結果，関節浮腫と骨棘の両方を有する高齢者において膝の痛みを有する割合が高いことがわかった． 本人担当部分：データの解析を行った． 共著者：Ogaya S, Iwata A, Nonaka K, Higuchi Y, Fuchioka S
23 エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響 （査読付）	共著	平成 29 年 4 月	理学療法科学 vol.32(2) P.183-P.188	臥床時の呼吸機能に対するエアマットレスの悪影響の有無を明らかにすることである．健常者群 19 名と胸郭コンプライアンス低下群 10 名に対して，エアマットレスと標準マットレスの 2 つの条件下で臥位にて測定された呼吸機能を比較した．測定項目は，一回換気量，分時換気量，死腔換気率，呼吸数，呼気時間，吸気時間，全呼吸時間，呼気平均流量，吸気平均流量，吸気における腹部の隆起が開始するタイミングの 10 項目とした．両群ともにすべての測定項目で，エアマットレス上臥位と標準マットレス上臥位の間に有意な差は認められなかった．エアマットレス導入は呼吸機能へ悪影響を与えないことが明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案および考察の検討を行った． 共著者：井上貴裕，野中紘士，伊藤健一

24 女性高齢者の外反母趾に影響を及ぼす因子の検討 （査読付）	共著	平成 30 年 1 月	ヘルスプロモーション理学療法研究 vol.7(4) P.165-P.169	本研究の目的は，女性高齢者の外反母趾に影響を及ぼす因子について，足部の形態に着目して検討することである．高齢者健康サークルに所属し，体力測定会に参加した地域在住女性高齢者 176 名（平均年齢 73.8±5.7 歳）を対象とした．測定は，外反母趾に影響を及ぼす因子を抽出するため，対象者の年齢，身長，体重，Body Mass Index，および足部・足趾の形態（足長，足幅，母趾角，小趾角，開帳角，足底・足趾の接地状態）につて足圧分布測定器を用いて測定した．さらに，外反母趾と浮き趾の有無を判定した．ステップワイズ重回帰分析の結果，外反母趾に影響を及ぼす因子として抽出されたのは足幅のみであった．足部・足趾の健康を考える場合，足長のみならず足幅も考慮した靴のサイズ選びが重要であることが示唆された． 本人担当分：考察の一部を執筆． 共著者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，内藤紘一，安彦鉄平，白岩加代子，野中紘士，堀江淳
25 Heat stress prevents the decrease in succinate dehydrogenase activity in the extensor digitorum longus of streptozotocin-induced diabetic rats （温熱刺激はストレプトゾトシン誘発性糖尿病ラットの長趾伸筋のコハク酸脱水素酵素活性低下を予防する） （査読付）	共著	平成 30 年 2 月	Physiological Research vol.67(1) P.117-P.126	温熱刺激が糖尿病による骨格筋コハク酸脱水素酵素(SDH)活性低下を予防するかについて検討した．Wistar 系雄ラットを対照群および温熱群，糖尿病群，糖尿病+温熱群に分け，ストレプトゾトシン投与による糖尿病誘発を確認した後，温熱刺激を 3 週間行った。糖尿病群と糖尿病+温熱群では SDH 活性が低下したが，糖尿病+温熱群は糖尿病群に比べ骨格筋 SDH 活性低下が減弱した。本研究より，温熱刺激が糖尿病による骨格筋 SDH 活性低下を予防することが示唆された。 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Une S, Komatsu M, Yamaji R, Akiyama J
26 Lectin isolated from Japanese red sword beans (Canavalia gladiata) as a potential cancer chemopreventive agent （日本産のナタマメから精製したレクチンはガンの化学的予防剤となる可能性がある） （査読付）	共著	平成 30 年 3 月	Journal of Food Science Vol.83(3) P.837-P.834	日本産のナタマメから精製したレクチン（RSB-L）は、アミノ酸分析や部分的なアミノ酸配列によりタチナタマメから精製された ConA と類似した構造をしていた．しかし RSB-L は ConA より耐熱性があり、糖に対する特異性が後者と異なった．マイトジェン活性，NK 活性は有意に RSB-L の方が高く，同時にマウス B16 メラノーマ細胞の増殖を有意に RSB-L は抑制した．一方，中国産のナタマメから得られたレクチンとも異なった生物学的な性質を RSB-L は示した．KSB-L はガン予防作用を有する物質として使用の可能性が示唆された． 本人担当部分：データ測定の一部を行った．加えて，データ解析および方法と結果の一部の執筆を行った． 共著者：Une S, Nonaka K, Akiyama J

27 地域在住女性高齢者の浮き趾と身体機能との関係 （査読付）	共著	平成 30 年 5 月	地域リハビリテーション Vol.13(5) P.383-P.387	本研究の目的は，体力測定会に参加した 65 歳以上の女性高齢者 175 名（平均年齢 73.8±5.7 歳）を対象に浮き趾と身体機能との関係を明らかにすることである．その結果，浮き趾群では足趾把持力（p＝0.002），長座体前屈距離（p＝0.046），身長（p＝0.005）が有意に低い値を示した．その他の身体機能に有意差は認められなかった．効果量は，足趾把持力（d＝0.50）が中等度であり，身長（d＝0.44）と長座体前屈距離（d＝0.32）は小さい効果量が認められた．浮き趾がある女性高齢者は足趾把持力が有意に低下したが，歩行や立位バランスなどの身体機能に有意差は認められず，総合的な身体機能の低下として表在化しがたいことが示唆された． 本人担当部分：考察の一部を担当した． 共著者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，内藤紘一，安彦鉄平，白岩加代子，野中紘士，堀江淳
28 Effect of skeletal muscle and fat mass on muscle strength in the elderly （高齢者の筋力に対する骨格筋と脂肪量の影響） （査読付）	共著	平成 30 年 6 月	Healthcare Vol.6 No.3 pii:E72（計 6 ページ）	本研究は，高齢者の筋力に対する脂肪量と骨格筋量の影響を 192 名の女性高齢者にてステップワイズ法を用いて検証した．その結果，上肢の脂肪量と骨格筋量のどちらも握力に影響していた．下肢は骨格筋量のみが膝伸展筋力に影響しており，脂肪量は影響していなかった．本研究より，筋力に影響する骨格筋量/脂肪量率の閾値が存在する可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および解析を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Murata S, Shiraiwa K, Abiko T, Nakano H, Iwase H, Naito K, Horie J
29 大腿中央前面筋厚・脂肪厚，大腿周径，大腿前面筋硬度測定の再現性および膝伸展筋力との関連 （査読付）	共著	平成 30 年 7 月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.8, No.2 P.85-P.89	本研究は，大腿中央前面筋厚（以下，筋厚）・脂肪厚（以下，脂肪厚），大腿周径，大腿前面筋硬度（以下，筋硬度）測定の検者内・検者間再現性と膝伸展筋力との関連を健常成人 20 名の両下肢計 40 脚を対象として検討した．その結果，筋厚，脂肪厚，大腿周径の再現性は，男女ともに級内相関係数が 0.9 以上と極めて高かったが，筋硬度は検者間で男性が 0.763，女性が 0.787 と低い値を示した．筋力との相関では，男性の大腿周径のみに有意な相関(r＝0.54，p<0.05)が認められた．これらの結果から，筋硬度の測定は測定値の再現性に留意すること，また男性の大腿周径は膝伸展筋力を反映するが，女性の大腿周径の測定値は脂肪厚の影響を考慮する必要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに，実験結果に基づき論文作成を行った． 共著者：小林佐季，乗若あかり，野中紘士，安彦鉄平，白岩加代子，堀江淳，村田伸

30 Physical characteristics vary according to body mass index in Japanese community-dwelling elderly women （日本の地域在住高齢女性において身体的特徴はBMIに応じて変わる） （査読付）	共著	平成30年11月	Geriatrics Vol.3, No.4 87(計8ページ)	本研究は，日本の地域在住高齢女性を対象にBMIに基づき低体重，過体重，肥満群と正常体重の群と身体機能と体組成の比較を行った．その結果，低体重群では正常体重群に比べ，上体起こしの回数が少なく膝伸展筋力が歩行速度と強く正相関した．過体重群では，正常体重群に比べ，骨格筋量は増加したが膝伸展筋力は増加しなかった．肥満群では正常体重群に比べ，片脚立位時間が少なかった．本研究によりBMIにより身体機能や新体組成が変化すること，高齢女性の身体機能の評価や維持・改善のプログラム作成の際，BMIが有益な情報になることを示した． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および解析を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Murata S, Shiraiwa K, Abiko T, Nakano H, Iwase H, Naito K, Horie J
31 高齢者における歩行調整能力の違いによる身体的特徴 （査読付）	共著	平成31年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.8, No.4 P.169-P.173	高齢者の歩行速度調整能力を検討するために，歩行速度を「普通歩行」，「やや速歩き」，「最速歩行」の3段階で実施し，主観的判断による速度変化と身体機能，注意機能，認知機能との関係性について検討した．その結果，「やや速歩き」の速度調整ができない高齢者が39.4%いた．調整可能群は，調整不良群より，やや速歩きと最速歩行が有意に速い結果を示した．群間比較において，身体機能，注意機能，認知機能には有意な違いを示さなかったことから，調整不良群は，歩行速度を調整する際に，筋力，バランス能力などの機能が十分に活用できていない可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータ測定を行った． 共著者：白岩加代子，村田伸，安彦鉄平，野中紘士，中野英樹，岩瀬弘明，内藤紘一，堀江淳
32 要介護高齢者における大腿四頭筋筋力と大腿前面筋厚・脂肪厚，大腿周径，大腿前面筋硬度との関連 （査読付）	共著	平成31年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.8, No.4 P.181-P.185	本研究では，要介護高齢者（男性23人，女性37人）を対象に，大腿四頭筋筋力と大腿前面筋厚（以下，筋厚）・脂肪厚，大腿周径，大腿前面筋硬度との関連を検討した．単相関解析の結果，男性では大腿周径が，女性では筋厚と大腿周径が，大腿四頭筋筋力との間に有意な相関を示した．また重回帰分析の結果，男性では大腿周径が大きいほど，女性では筋厚が厚いほど，大腿四頭筋筋力が強かった．これらのことから，要介護高齢者において，男性では大腿周径が，女性では筋厚が，大腿四頭筋筋力を反映することが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータ測定を行った． 共著者：合田明生，村田伸，谷川加奈子，藤井伶衣奈，吉岡弓佳，野中紘士，中野英樹，安福祐一，白岩加代子

33 地域在住高齢者におけるプレサルコペニアの身体・認知・心理機能特性 （査読付）	共著	平成 31 年 2 月	健康支援 Vol.21, No.1 P.11-P.17	本研究は，地域在住の女性高齢者を対象に，正常な筋肉量の高齢者と比較することで，筋肉量低下を生じたプレサルコペニア高齢者の身体・認知・心理機能の特性を明らかにすることを目的に行われた．その結果，プレサルコペニアに該当する高齢者は，筋肉量の低下に伴い四肢・体幹の筋力低下を認めることが示唆された．プレサルコペニア高齢者は，筋力以外の身体機能の低下が認められないことから，日常生活に支障をきたさず，自身の筋力低下を自覚していないことが予想された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータ測定を行った． 共著者：森耕平，村田伸，白岩加代子，安彦鉄平，岩瀬弘明，内藤紘一，野中紘士，中野英樹，堀江淳
34 Endurance exercise increases the protein levels of PGC-1α and respiratory chain complexes in mouse skeletal muscle during atorvastatin administration （アトルバスタチン投与中の持久的運動はマウス骨格筋の PGC-1α と呼吸差複合体タンパクを増加させる） （査読付）	共著	平成 31 年 3 月	The Journal of Physiological Sciences Vol.69, No.2 P.327-P.333	本研究は，アトルバスタチン投与中の持久的運動がマウス骨格筋のミトコンドリア順応および筋損傷を起ここすかどうかについて検討した．その結果，アトルバスタチン投与中に運動した群は，アトルバスタチン投与のみの群に比べ，大腿四頭筋の PGC-1α と呼吸差複合体 I-V のタンパクが増加した．また，アトルバスタチン投与中に運動した群の血清クレアチンキナーゼは上昇せず，組織学的にも筋損傷は認められなかった．これらの結果より，アトルバスタチン投与中の持久的運動は骨格筋のミトコンドリア順応を起こすこと，筋損傷は惹起されないことが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Ozaki Y, Ito K, Sakita M,Une S, Akiyama J

35 幼児の重心動揺と歩行パラメータとの関連 （査読付）	共著	平成 31 年 4 月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.9, No.1 P.7-P.11	本研究の目的は，幼児の重心動揺と歩行能力との関連を明らかにすることである．対象児 45 名（男児 16 名，女児 29 名）の重心動揺の測定と歩行分析を行った結果，重心動揺の指標とした総軌跡長と外周面積は，ともに通常歩行時の歩行率（総軌跡長 r＝－0.421，外周面積 r＝－0.347），立脚時間（それぞれ r＝0.474，0.426），両脚支持時間（それぞれ r＝0.398，0.346）の 3 項目と有意な相関が認められ，最速歩行時の歩行速度（それぞれ r＝－0.469，－0.382），歩行率（それぞれ r＝－0.388，－0.351），立脚時間（それぞれ r ＝0.489，0.569），両脚支持時間（それぞれ r＝0.556，0.653）の 4 項目と有意な相関が認められた．これらの結果から，幼児期の重心動揺と歩行は密接に関連しており，幼児に対する重心動揺計を用いた姿勢制御能の評価の重要性が示された．また，幼児の姿勢制御能を高めることで，歩行をはじめとする身体運動の発育支援が効果的に行える可能性が示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：村田伸，安彦鉄平，中野英樹，満丸望，久保温子，八谷瑞紀，古後晴基，野中紘士，松尾大，上城憲司
36 プレサルコペニア高齢者の歩行速度と身体機能・認知機能との関連 （査読付）	共著	令和元年 7 月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.9, No.2 P.53-P.58	本研究の目的は，プレサルコペニア高齢者の歩行速度と身体機能および認知機能との関連を検討することである．対象者を正常筋肉量群（48 名）とプレサルコペニア群（17 名）の 2 群に分類し，歩行速度（通常・最速）と身体機能（膝伸展筋力，上体起こし，開眼片足立ち時間，長座体前屈距離）および認知機能（Mini-Mental State Examination，Trail making test-Part A；TMT-A）との相関分析を行った．その結果，プレサルコペニア群の通常歩行速度と中程度以上の有意な相関が認められたのは，膝伸展筋力（r=0.51）および TMT-A（r=-0.52）であり，最速歩行速度では膝伸展筋力（r=0.74），TMT-A（r=-0.66）および開眼片足立ち時間（r=0.56）であった．一方，正常筋肉量群の歩行速度はいずれの項目とも中程度以上の有意な相関は認められなかった．これらの知見より，プレサルコペニア高齢者は正常筋肉量の高齢者に比べ努力性の高い歩行である可能性が示され，下肢筋力，バランス能力および注意機能のわずかな低下をきっかけに歩行能力低下を生じる可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：森耕平，村田伸，白岩加代子，安彦鉄平，岩瀬弘明，内藤紘一，野中紘士，中野英樹，堀江淳

37 地域在住女性高齢者のヘルスリテラシーと身体機能，心理機能，運動習慣との関連について－傾向スコア法による検証 （査読付）	共著	令和元年７月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.9，No.2 P.59-P.63	地域在住の女性高齢者を対象にヘルスリテラシーと身体機能，心理機能および運動習慣との関連について，傾向スコア法を用いてデータベースを作成し，ロジスティック回帰分析を用いて検討した．解析の結果，ヘルスリテラシーに関連する因子として抽出されたのは，主観的健康感と運動習慣であった．これらのことから，ヘルスリテラシーを高めるためには，主観的健康感を高めるような取り組みと運動習慣を定着させるような取り組みが必要になることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：岩瀬弘明，村田伸，白岩加代子，安彦鉄平，内藤紘一，野中紘士，堀江淳
38 地域在住高齢者における主観的認知機能低下と客観的認知機能低下の関連 （査読付）	共著	令和元年７月	日本早期認知症学会誌 Vol.12，No.1 P.44-P.51	本研究は，地域在住高齢者における主観的認知機能低下（subjective cognitive decline：SCD）と客観的認知機能低下の関連を検討することを目的とした．対象は明らかな認知機能障害がない地域在住高齢者 242 名とした．「基本チェックリスト」の認知機能項目（Kihon-Checklist-Cognitive Function：KCL-CF）を用いて，主観的認知機能低下を測定した．また，Mini-Mental State Examination（MMSE）を用いて，客観的認知機能低下を測定した．対象者を KCL-CF 得点で群分けし，MMSE 得点を比較した結果，SCD を認めた対象者は，「認知症初期症状を反映する MMSE 因子」の得点が有意に低かった（$p<0.05$）．さらに，MMSE 下位項目得点の得点別比率を比較すると，２つの KCL-CF 質問項目（記憶，日付の見当識）において，SCD を認めた対象者が，主に「認知症初期症状を反映する MMSE 因子」項目の得点が有意に低かった（$p<0.05$）．KCL-CF で測定する SCD は，地域在住高齢者の初期認知機能低下を捉えるスクリーニングツールとして有用である可能性が示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：合田明生，村田伸，白岩加代子，野中紘士，中野英樹，安彦鉄平，堀江淳

39 通所介護施設を利用する高齢者の浮き趾と身体特性，身体組成および身体機能との関連 （査読付）	共著	令和元年7月	保健の科学 Vol.61，No.7 p.491-495	通所介護施設を利用する要支援・要介護認定を受けた高齢者の浮き趾(「立位時に足趾が地面に接地していない状態」)と身体特性、身体組成、身体機能との関連を明らかにすることを目的に、滋賀県の通所介護施設1施設に通所中の高齢者57名(男性24名、女性33名、平均年齢80.3±1.0歳、要支援38名、要介護19名)を対象に検討した。浮き趾群(42名)と非浮き趾群(15名)を比較した結果、浮き趾群では非浮き趾群と比べ、身長、骨格筋量、足底接地率がそれぞれ有意に低値を示した。 本人担当部分:研究計画の立案およびデータ測定を行った. 共著者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，野中紘士，中野英樹，白岩加代子
40 要介護女性高齢者におけるロンブステストの再現性と妥当性 （査読付）	共著	令和元年10月	保健医療学雑誌 Vol.10，No.2 P.92-P.98	要介護女性高齢者において，新たな動的バランス評価であるロンブステストの再現性と妥当性を検証した．要介護女性高齢者29名を対象に，ロンブステストと4つの身体パフォーマンス指標（開眼片脚立位時間，Timed Up and Go Test [TUG]，5m最速歩行時間，30-sec chair stand test [CS-30]）を測定した．ロンブステストの再現性を検証するために，20名の対象者に対して，同一測定日に2回目の測定を実施した．その結果，ロンブステストは優れた再現性（ICC 0.96～0.97）を示し，開眼片脚立位時間，TUG，5m最速歩行時間，CS-30との間に中程度の有意な相関（r=|0.42|～|0.59|）を認めた．以上の結果から，ロンブステストは，要介護女性高齢者において，再現性と妥当性のある動的バランス評価法であるとことが示唆された． 本人担当部分:研究計画の立案およびデータ測定を行った. 共著者：合田明生，村田伸，礒谷光，宇野友萌子，影山瑞希，野中紘士，中野英樹，白岩加代子
41 1年後に軽度認知障害を発症した地域高齢者の身体および精神機能の特徴 （査読付）	共著	令和元年10月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.9，No.3 P.119-P.125	本研究は，1年後に軽度認知障害（MCI）を発症した地域在住高齢者における，身体機能・精神機能の特徴を明らかにすることを目的とした．ベースライン時点で認知機能障害のない地域在住高齢者91名を対象とした。1年後にMMSE24‐26点に低下した者をMCI 群，27点以上に保たれた者を非MCI 群に分類し，ベースライン時の身体機能および精神機能を比較した．その結果，MCI 群では，非MCI 群と比較して開眼片脚立位時間が有意に低値を示した（p＜0.05）．以上から，開眼片脚立位時間は，地域在住高齢者の1 年後のMCI 発症を予測する評価として有用である可能性が示された． 本人担当部分:研究計画の立案およびデータ測定を行った. 共著者:合田明生，村田伸，白岩加代子，野中紘士，中野英樹，安彦鉄平，堀江淳

42 小学6年生における足部および足趾に関する実態調査 （査読付）	共著	令和元年10月	体育の科学 Vol.69, No.10 P.767-P.771	本研究は，小学1年生と6年生の足部形態および足部形態以上を調査することで，現代の学童期児童の足部成長状況および浮き趾を主とした足部形態異常の実態を明らかにすることを目的とした．その結果，足部形態異常は，1年生および6年生に共通して浮き趾が認められ，約7割の児童が浮き趾であった．また，6年生では外反母趾が13.3%に認められたが，1年生では認められなかった．その他，内反小趾と回張足は1年生および6年生ともに認められなかった．結果より，1年生から6年生までの間に足部の形態が大きく変化し，靴のサイズが足部の形態に適していない可能性が推察された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，安彦鉄平，中野英樹，野中紘士，松井宏彰
43 Elongation training decreases spinal excitability in healthy human soleus muscle （エロンゲーショントレーニングは健常ヒトヒラメ筋の脊髄の興奮性を減弱させる） （査読付）	共著	令和元年11月	Journal of Asian Rehabilitation Science Vol.2 No.4 P.23-26	本研究は，健常ヒトヒラメ筋の脊髄の興奮性に対するエロンゲーショントレーニング(ELT)の効果について検証した．26名の健常若年男性を無作為にELT群（n=13)と安静対照群（n=13)に分け，介入前，介入の1と30分後にH反射とM波を測定した．その結果，介入前のH-max/M-maxは両群で同レベルであり，介入の1と30分後のH-max/M-maxはELT群のみ低下した．本研究結果より，ELTは脊髄の興奮性を低下させること，その効果は最低でも30分持続することが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案，データ解析および一部考察を行った． 共著者：Miyazaki J, Yurugi R, Ogawa H, Nonaka K, Uematsu A

44 要介護高齢者における踵上げ動作を用いたバランステストの再現性と妥当性 （査読付）	共著	令和元年 12 月	保健の科学 Vol.61, No.12 P.851-P.856	本研究の目的は，要介護高齢者において，踵上げテストの再現性と妥当性を検証することであった．要介護高齢者 57 名を対象に， 踵上げテストと 4 つの身体パフォーマンス指標（Timed Up and Go Test [TUG], 30-sec chair stand test [CS-30], 開眼片脚立位テスト, Functional Reach Test [FRT]）を測定した．また踵上げテストの再現性を検証するため，同一測定日に 2 回目の測定を実施した．その結果， 踵上げテスト は優れた再現性（ICC 0.91）を示し， TUG, CS-30, 開眼片脚立位テスト，FRT との間に有意な相関（rs=|0.32|～|0.60|）を認めた．以上の結果から，踵上げテストは，要介護高齢者において，再現性と妥当性のあるバランス評価法であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：合田明生，村田伸，髙畑咲紀，谷口緩夏，野中紘士，中野英樹，白岩加代子
45.地域在住高齢者における閉じこもり調査－身体機能，身体組成，認知・精神心理機能の特徴 （査読付）	共著	令和 2 年 1 月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第 9 巻第 4 号 pp.195～200	本研究では，体力測定会に参加した地域在住高齢者 245 名（男性 50 名，女性 195 名）を対象に，閉じこもりの有無により，身体機能，身体組成，認知・精神機能に差異がみられるか検討した．その結果，男性では，TUG と歩行速度が閉じこもり群より，非閉じこもり群の方が有意に良好な値を示した（p＜0.05）．身体組成は，筋肉量，体水分量，タンパク質量，骨ミネラル量，基礎代謝量が，閉じこもり群より非閉じこもり群の方が良好な値を示した（p＜0.05）．うつ傾向を示す者が，閉じこもり群の方が非閉じこもり群より有意に多い結果を示した．女性では，身体機能は，握力，TUG，歩行速度が閉じこもり群より非閉じこもり群の方が良好な値を示した（p＜0.05）．その他の項目には 2 群間に有意差は認められなかった．閉じこもりによる影響は，男性と女性では異なることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータ測定を行った． 共著者：白岩加代子，村田伸，安彦鉄平，中野英樹，合田明生，野中紘士，岩瀬弘明，堀江淳

46 Increased time difference between imagined and physical walking in older adults at a high risk of falling. （転倒ハイリスク高齢者におけるイメージ歩行と実歩行の時間的不一致の増大） （査読付）	共著	令和２年５月	Brain Sciences 第 10 巻第 6 号 332（計 8 ページ）	歩行の運動イメージ能力は転倒恐怖感と関連があることが報告されているが，実際の転倒リスクとの関係性については未だ明らかにされていない．本研究は，転倒ハイリスク群と転倒ローリスク群高齢者におけるイメージ歩行と実歩行の時間的不一致を明らかにすることを目的とした．全ての対象者は幅の異なる 3 種類の歩行路におけるイメージ歩行と実歩行に要する時間を測定した．その結果，イメージ歩行と実歩行の時間的不一致は幅が狭くなるにつれて転倒ハイリスク群で有意に増大した．さらに，転倒ハイリスク群では自己の歩行能力の過大評価を示した．本研究により，イメージ歩行と実歩行の時間的不一致は運動イメージに基づく転倒リスク評価として貢献できる可能性を示した． 本人担当部分：データ測定，投稿論文のチェックおよび校正を行った． 共著者：Nakano H, Murata S, Shiraiwa K, Nonaka K
47.Correlations between physical performance and muscle mass, strength, and quality in obese and normal-weight community-dwelling older Japanese women （地域在住日本人高齢女性の肥満者と標準体重者における身体パフォーマンスと骨格筋量および筋力，筋質との関連） （査読付）	共著	令和２年６月	Asian Journal of Gerontology & Geriatrics 第 15 巻第 1 号 pp.17～22	本研究は地域在住日本人高齢女性の肥満者と標準体重者における身体パフォーマンスと骨格筋量および筋力，筋質との関連を調べることを目的とした．170 名の地域在住高齢女性を対象とし，被験者を標準体重群と肥満群に分けた．被験者の膝伸展筋力、下肢骨格筋量，筋質データ，30 秒椅子立ち上がりテスト（CS-30），timed up and go test（TUG）を記録した．膝伸展筋力/体重比と下肢骨格筋量/体重比は標準体重群に比べ肥満群で低かったが、筋質は両群で同程度だった．肥満群では CS-30 や TUG と骨格筋量/体重比との間に有意な相関を認めたが，筋質との有意な相関は認めなかった．標準体重群では，CS-30 や TUG と筋質の間に有意な相関を認めた．これらの結果より，骨格筋量/体重比は肥満の地域在住高齢者の身体パフォーマンスを維持向上させるために重要な要因であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および解析を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Murata S, Shiraiwa K, Abiko T, Goda A, Yasufuku Y, Nakano H, Iwase H, Horie J

48.Changes with aging in skeletal muscle mass, body fat mass, and bone mineral density in adults with cerebral palsy: A pilot cross-sectional study （成人脳性麻痺者の筋肉量，体脂肪量，骨密度の加齢に伴う変化-予備的横断研究） （査読付）	共著	令和２年７月	International Journal on Disability and Human Development 第 19 巻第 2 号 pp.139～144	本研究は，27 名の成人脳性麻痺者を対象に，成人脳性麻痺者の骨格筋量，体脂肪量，骨密度の加齢変化を横断的に検証した．その結果，成人脳性麻痺者の年齢と骨格筋量との間に有意な相関が認められないこと，年齢と体脂肪量に有意な正相関が認められること，年齢と骨密度に有意な負の相関が認められることが確認できた．これらの結果より，成人脳性麻痺者は体脂肪の増加に注意する必要があることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータの解析を行った．また，解析結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Iwase H, Murata S, Kubo A
49.Different patterns in age-related morphometric alteration of myelinated fibers and capillaries of th tibial nerve: a longitudinal study in normal rats （脛骨神経のミエリン化線維と毛細血管の年齢に関連した形態変化におけるパターンの相違） （査読付）	共著	令和２年６月	Journal of Anatomy 第 236 巻第 6 号 pp.1101～1111	有髄線維と毛細血管の退行パターン間の時間的関係はいまだ明らかにされていない．本研究は，有髄線維と毛細血管両者の加齢に伴う形態学的および組織学的変化を解析し，どちらが先行して退行するかを明らかにすることを目的とした．組織学的評価には，20 週齢(若齢群)，70 週齢(中齢群)，および 97 週齢(高齢群)に，それぞれ 7 匹の Wistar 系雄ラットを無作為に選択した．左右の脛骨神経を摘出し，有髄線維と毛細血管を形態学的および組織学的に解析した．軸索の直径とミエリン厚は，若齢群と比較して中齢群で変化は認められなかったが，これらのパラメーターは高齢群において，有意な減少を認めた($P<0.001$)．毛細血管の直径と吻合の数は中齢群で既に有意に減少した($P<0.001$)．これらの結果から，末梢神経の有髄線維が高齢ラットで退行の兆候を示すのに対して，毛細血管は中齢で退行することを示している．脛骨神経の自然老化では，毛細血管は有髄線維の前に退行することを明らかにした． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施した． 共著者：Sakita M, Murakami S, Nonaka K, Sakamoto R, Saito T, Isobe W, Kumagai S

50.1,25-dihydroxyvitamin D3 inhibits lipopolysaccharide-induced interleukin-6 production by C2C12 myotubes （1,25-Dihydroxyvitamin D3 はC2C12 筋菅細胞のリポポリサッカライドによるインターロイキン6産生を抑制する） （査読付）	共著	令和2年9月	Medicina 第56巻第9号 450（計7ページ）	本研究は、マウス由来C2C12 筋菅細胞に対する1,25-dihydroxyvitamin D3 [1,25(OH)2D3]の抗炎症作用と筋タンパク分解抑制作用を検討することを目的に実験を行った．マウス由来のC2C12 筋芽細胞を増殖培地である10%牛血清を含むDulbecco Modified Eagle（DMEM）培地で増殖させた後，培地を分化培地である2%ウマ血清を含むDMEM培地に変更し4日間培養し，筋菅細胞に分化させた．筋菅細胞に分化させた後、0、0.1、1、10nMの1,25(OH)2D3を添加した培地で24時間培養し，その後，炎症を惹起させるため100ng/mlのリポポリサッカライド（LPS）を含む培地で48時間培養した．その結果，LPSは培養液中のinterleukin（IL)-6を増加させた．しかしながらIL-6の濃度は1,25(OH)2D3処理した筋管細胞で処理されていない細胞に比べ，IL-6濃度は有意に低かった．ミオシンやMAFbxとMuRF1は各条件間で有意差は認められなかった．Tumor necrosis factorαの測定は多くのサンプルで検出限界を下回ったため正確な測定ができなかった．本研究結果から，1,25(OH)2D3がLPS刺激による筋菅細胞でのIL-6産生を抑制することが示された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Akiyama J, Yoshikawa Y, Une S, Ito K
51.Association of low bone mass with decreased skeletal muscle mass: A cross-sectional study of community-dwelling older women (骨量低下と骨格筋量低下の関連性：地域在住女性高齢者を対象とした横断的研究) （査読付）	共著	令和2年9月	Healthcare 第8巻第3号 343（計8ページ）	本研究は，地域高齢者を対象に骨量と骨格筋量，筋力そして身体能力の関連性を検討することを目的とした．体力測定会に参加した地域高齢者306名の中から，214名を対象とし，分析を行った．対象者は超音波骨量測定装置により測定された骨量に基づき，正常（T-score>-1)，低値(-2.5<T-score≦-1)，超低値群(T-score≦-2.5)に分けられた．加えて，対象者の骨格筋量，筋力（握力と膝伸展筋力），身体能力[歩行速度とtimed up and go（TUG)]を測定した．上肢，下肢および四肢のSkeletal muscle indexは骨量低値群に比べ骨量超低値群で有意に低かった．握力，膝伸展筋力，歩行速度，TUGは各群間で有意差を認めなかった．これらの結果より，骨量が低い高齢女性は骨格筋量が減少していることが示された． 研究計画を立案するとともに測定実施および統括を行った．また，測定結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Murata S, Nakano H, Anami K, Shiraiwa K, Abiko T, Goda A, Iwase H, Horie J

52.Subjective and objective mental and physical function affects subjective cognitive decline in community-dwelling elderly Japanese people（主観的・客観的な心身機能は地域在住日本人高齢者の主観的認知機能に影響を与える） （査読付）	共著	令和２年９月	Healthcare 第８巻第３号 343（計８ページ）	主観的認知機能低下（SCD）は複雑であり，特に日本人においてはよく理解されていない．本研究では，日本人の地域在住高齢者を対象に，主観的および客観的な心身機能と SCD との関係を明らかにすることを目的とした．SCD は、基本チェックリストの認知機能項目を用いて評価した．SCD 以外の客観的精神機能については，Mini-Mental State Examination（MMSE）と Geriatric Depression Scale（GDS-5）の５項目版を用いて評価した．客観的な身体機能については，TUG（Timed Up-and-Go Test）と膝伸展筋力を用い，主観的な精神・身体機能については，健康関連 QOL 尺度の８項目短縮版の Mental Component Summary（MCS）と Physical Component Summary（PCS）を用いて評価した．その結果，MMSE，GDS-5，TUG，膝伸展筋力，MCS は SCD 群で有意に悪化した．また、ロジスティック回帰分析の結果，GDS-5，MCS は SCD 発症と関連していた．以上のことから，日本人の地域在住高齢者における SCD の発症には，抑うつ症状と主観的精神機能の低下が関係していることが示唆された．これらの結果は，日本人高齢者の認知症予防や介入プログラムを計画する上で有用である． 本人担当部分：データ測定と整理および論文の校正を行った． 共著者：Goda A，Murata S，Nakano H，Shiraiwa K，Abiko T，Nonaka K，Iwase H，Anami K，Horie J
53.The association between health literacy and gait speed in community-dwelling older adults （地域在住高齢者のヘルスリテラシーと歩行速度との関連） （査読付）	共著	令和２年９月	Healthcare 第８巻第４号 349（計 10 ページ）	本研究は，地域在住高齢者を対象にヘルスリテラシーと歩行速度との関連を検討することを目的とした．測定会に参加した地域在住高齢者 240 名に対し，通常歩行速度，ヘルスリテラシー，各種身体機能，認知機能等を測定した．ヘルスリテラシーは CCHL を使用した．対象者は、通常歩行速度に基づいて、速い（速度≥1.3m/s）と遅い（<1.3m/s）の２つのグループに分けられ，歩行速度を従属変数とするロジスティック回帰分析を行った．その結果，CCHL は独立して歩行速度に影響を与えることが明らかとなった． 本人担当部分：データ測定と整理および論文の校正を行った． 共著者：Anami K，Murata S，Nakano H，Nonaka K，Iwase H，Shiraiwa K，Abiko T，Horie J

53. 地域在住女性高齢者における異なる立ち上がりテストと身体機能との関連 （査読付）	共著	令和2年10月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第10巻第3号 pp.105-110	本研究の目的は，自立生活を営む地域在住女性高齢者154名を対象に，30秒椅子立ち上がりテスト（30-sec Chair Stand test；CS-30）と虚弱高齢者用10秒椅子立ち上がりテスト（10-sec Chair Stand test for Frail Elderly；Frail CS-10）を併せて行い，上下肢・体幹の筋力，柔軟性、静的・動的立位バランスとの関連から，地域在住女性高齢者に適した簡易下肢機能評価法を検討した．重回帰分析の結果，CS-30とFrail CS-10はともに大腿四頭筋筋力，上体起こし回数，Timed Up Go Testの3項目と独立して関連することが示された．これらの結果から，特別な機器を必要とせず，簡便に実施できるCS-30とFrail CS-10は，地域在住女性高齢者の下肢筋力や動的バランス評価として有用であることが示された．とくにFrail CS-10は，自立生活を営む地域在住女性高齢者を対象としても，簡易下肢機能評価法として汎用性の高いテストであることが示唆された． 本人担当部分：データ測定と整理および論文の校正を行った． 共著者： 村田伸，合田明生，白岩加代子，安彦鉄平，中野英樹，岩瀬弘明，野中紘士，阿波邦彦，松本典久，堀江淳
54.地域在住高齢女性における1年後の軽度認知機能障害の発現を予測する身体機能指標 -傾向スコアマッチング法を用いた検証 （査読付）	共著	令和2年10月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第10巻第3号 pp.117-123	本研究の目的は，1年後に軽度認知障害(mild cognitive impairment: MCI)を発現する地域在住高齢女性における身体機能を明らかにすることであった．ベースライン時点で認知機能障害のない地域在住高齢女性201名を対象とした．1年後にMini-Mental State Examination(MMSE)24－26点に低下した者をMCI群36名，27点以上に保たれた非MCI群165名に分類した．その後，傾向スコアを用いて認知機能低下に影響する交絡因子をコントロールして両群36名ずつにマッチングし，両群のベースライン時の身体機能を比較した．その結果，MCI群では，非MCI群と比較して開眼片脚立位時間が有意に短く，Timed Up and Go Testと5m最速歩行の所要時間が有意に長かった．以上から，バランス能力と歩行能力の評価は，地域在住高齢女性の1年後のMCI発現を予測するために有用なスクリーニング指標である可能性が示された． 本人担当部分：データ測定と整理および論文の校正を行った． 共著者： 合田明生，村田 伸，白岩加代子，中野英樹，安彦鉄平，野中紘士，岩瀬弘明，阿波邦彦，堀江 淳

55. The Relationship between Subjective Cognitive Decline and Health Literacy in Healthy Community-Dwelling Older Adults ［健康な地域在住高齢者における主観的認知機能低下とヘルスリテラシーの関係］ （査読付）	共著	令和２年12月	Healthcare 第８巻４号 567（計10ページ）	健康な地域在住高齢者を対象に、ヘルスリテラシーと主観的認知機能低下（Subjective Cognitive Decline; SCD）の関係を調査した。ロジスティック回帰分析の結果、SCDの発生は年齢だけでなく、ヘルスリテラシーの低さや抑うつの重症度と関連していた。この結果は、健康な地域在住高齢者において、ヘルスリテラシーの低さがSCDの罹患率と関連していることを示唆しており、この集団に対する認知症予防や介入プログラムを計画する際に有用であることを示唆するものである。 本人担当部分：データ測定および論文の校正を行った. 共著者：Goda A, Murata S, Nakano H, Nonaka K, Iwase H, Shiraiwa K, Abiko T, Anami K, Horie J
56. 児童のロコモティブシンドローム発生と運動イメージ想起能力との関連 （査読付）	共著	令和３年１月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.10, No.4 P.183-P.188	本研究の目的は児童のロコモティブシンドローム（以下，ロコモ）発生と運動イメージ想起能力との関連を明らかにすることである．対象は小学生の児童212名とした．ロコモ判定には運動器機能不全チェック項目，運動イメージ想起能力の測定にはメンタルローテーション課題を用いた．ロコモ判定の結果から，対象者を陽性群38名と陰性群174名の２群に分けた．２群比較の結果，ロコモ陽性群では，有意に男児が多く，年齢，身長，体重，ローレル指数が高く，メンタルローテーション課題の成績が不良であった．性別，年齢，体格を調整したロジスティック回帰分析の結果，メンタルローテーション課題の成績は，ロコモ判定結果に対する有意な説明変数であった．以上から運動イメージ想起能力は，児童におけるロコモ発生に影響する因子であることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画立案およびデータ測定を行った. 共著者：合田明生，安彦鉄平，村田 伸，久保温子，田中真一，満丸 望，野中紘士，岩瀬弘明，甲斐義浩，宮地 諒，大野真悠，宮崎純弥

57. Physical performance in relation to preserved ratio impaired spirometry: a cross-sectional study of community-dwelling older Japanese adults （preserved ratio impaired spirometry に関連する身体能力：日本の地域在住高齢者を対象とした横断的研究） （査読付）	共著	令和３年８月	Scientific Reports Vol.11, 17411（計９ページ）	PRISm（Preserved ratio impaired spirometry）は死亡率の上昇と関連しているが，日本ではその特徴が明確に示されていない．地域在住高齢者 668 人を調査した結果，PRISm の有病率は 12%，閉塞性肺障害の有病率は 6.9%であった．傾向スコアマッチングを用いて，PRISm 群（n=80）と健常高齢者群（n=80）を比較した．PRISm 群は予測比肺活量(%FVC)，体幹筋持久力が低く，片足立ちの持続時間が長かった．多変量ロジスティック回帰では，%FVC の低下と片脚立ちの増加が PRISm 状態の独立した予測因子であった．日本における地域在住高齢者の PRISm の有病率は，閉塞性肺障害の有病率を上回り，%FVC の低下やバランステストの成績向上と関連していた． 本人担当部分：データ測定と整理を担当した． 共著者： Kunihiko Anami, Shin Murata, Hideki Nakano, Koji Nonaka, Hiroaki Iwase, Kayoko Shiraiwa, Teppei Abiko, Akio Goda, Jun Horie
58. Factors Influencing the Development of Mild Cognitive Impairment in Community-Dwelling People Aged 75 Years and Older （75 歳以上の地域居住者における軽度認知障害の発症に影響を与える要因） （査読付）	共著	令和３年 10 月	Geriatrics Vol.6, 104（計 10 ページ）	75 歳以上の地域在住高齢者 291 名を対象に，身体的および心理的な状態が，軽度認知障害（MCI）の発症と関連を検討した．研究対象者を，Mini-Mental State Examination のスコアを基準に，非 MCI 群（28 点以上）と MCI 群（28 点未満かつ 24 点以上）に分けた．さらに，病気による受診状況，抑うつ症状の重症度，各種身体機能，体組成を評価した．MCI 群の対象者は，教育歴が有意に短く，高血圧による受診率が高く，バランス能力も低かった．この結果から，これらの指標は 75 歳以上の高齢者の MCI を発見するためのスクリーニング指標と考えることができ，この集団に対する介入プログラムを計画する際に有用であると考えられる． 本人担当部分：データ測定と整理を担当した． 共著者：Akio Goda, Shin Murata, Kayoko Shiraiwa, Teppei Abiko, Hideki Nakano, Koji Nonaka, Hiroaki Iwase, Kunihiko Anami, Yuki Kikuchi, Jun Horie

59. コロナ禍における理学・作業療法士養成課程の早期体験実習 ―学内実習後の学生アンケート調査による検証－ （査読付）	共著	令和４年２月	医療福祉情報行動科学研究 vol.9, P.55-P.63	令和２年度および令和３年度，新型コロナウイルスの感染拡大をうけ早期体験実習を学内実習として実施した．学生アンケートの結果から，学内実習の意義や課題を明確にした。アンケートの結果，両年度とも実習内容については多くの学生が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答した反面，「2年次以降の学外実習に向けた不安」を訴える学生が多かった．自由記述では「教員が近くにいる分質問などがしやすかった」，「疑問をすぐに先生に質問することができた」という意見のほか，「自分が知らなかった分野にも興味が持てた」という意見もみられた．学内実習で医療施設での学びを完全に再現することは困難だが，早期体験実習の本来の目的を達成する上で，学内実習は必ずしも不利な点ばかりではない． 本人担当部分：データの集計および論文の校正を行った． 共著者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩﨑智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二
60. 線維芽細胞の増殖，遊走およびAkt活性化に対する微弱電流刺激の効果 （査読付）	共著	令和４年２月	医療福祉情報行動科学研究 vol.9, P.73-P.79	本研究では，微弱電流刺激にAktの活性化が関与していると仮説を立て、微弱電流刺激による線維芽細胞の増殖，遊走，Akt活性化に対する効果を調べることを目的とした．ヒト皮膚線維芽細胞に微弱電流刺激を電流200μA，周波数2Hzで1時間実施し，細胞増殖，遊走およびAkt活性化を調べた。1日1回の微弱電流刺激を3回実施した結果，線維芽細胞は微弱電流刺激により有意に減少した．微弱電流刺激による遊走を検証するためスクラッチアッセイを実施した結果，微弱電流刺激により創傷治癒率は促進されなかった．また，微弱電流刺激によるAkt活性化を調べたが，微弱電流刺激による線維芽細胞のAkt活性化は認められなかった．本研究結果より，微弱電流刺激は刺激条件により線維芽細胞の増殖や遊走の促進は見られず，細胞数を減少させる可能性があることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験の実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：野中紘士，吉川義之

61 Relationship Between Age-Related Changes in Skeletal Muscle Mass and Physical Function: A Cross-Sectional Study of an Elderly Japanese Population （骨格筋量の加齢変化と身体機能との関係：高齢日本人集団の横断研究） （査読付）	共著	令和４年４月	Cureus Vol.14, No.4 e24260（計７ページ）	本研究は，日本の地域在住高齢者において部位別骨格筋量の年齢階級による変化を明らかにし，部位別骨格筋量の年齢による変化と身体機能との関係を明らかにすることを目的とした．参加者は５歳刻みの年齢群（65-69 歳、70-74 歳、75-79 歳、80 歳以上）に分けられ，さらに性差で分類された．上肢，下肢，体幹の骨格筋量は，多周波生体電気インピーダンス分析装置を用いて測定した．身体機能評価として，握力，大腿四頭筋力，座位回数，座位・リーチ距離，開眼片足立ち時間を測定し，Timed Up and Go テストを行った。その結果，すべての測定部位において，性別に関係なく加齢とともに骨格筋量が減少していることが明らかになった．さらに，年齢，体質，運動習慣の有無を調整した偏相関分析では，すべての部位で骨格筋量と握力との間に最も高い相関があることが明らかになった．このことから，日本人においても握力の測定は全身の骨格筋量の代表的な指標として利用できる可能性がある． 本人担当部分：データ測定と整理，論文の最終校正を担当した． 共著者：Iwase S, Murata S, Nakano H, Abiko T, Goda A, Nonaka K, Anami K, Horie J
62 ヒト皮膚由来線維芽細胞の培養温度が細胞増殖に与える影響 （査読付）	共著	令和４年８月	物理療法科学 Vol.29 P.72-P.76	本研究ではヒト皮膚由来線維芽細胞（HDFs）を異なる温度で培養し，細胞増殖に及 ぼす影響を検討した．HDFs を５×104 cells/dish の濃度で 35-mm dish に播種し，31， 33，35，37，39℃の５ 条件で培養した．HDFs は 24，48，72 時間後に剥離し，血球計 算板を使用して生細胞数と死細胞数をカウントした．解析には，37℃で培養した 24 時 間時点での細胞数を基準とした細胞比率を用いた．また，それぞれの温度における細胞 生存率を算出した．統計学的検討は温度と時間については二元配置分散分析を用い，細 胞生存率については一元配置分散分析を行った．分散分析にて有意差がみられた際には Bonferroni の多重比較検定を行った．結果は二元配置分散分析にて主効果，交互作用と もに有意差を認めた（p＜0.01）．インキュベーター設定温度の違いによる細胞比率は， 48，72 時間のいずれの時点においても培養温度の高さに依存して高い結果となった．細 胞生存率については有意差はみられなかった．以上のことから，今回検討した５ 条件に おいては，31，33，35° C では 37℃よりも細胞増殖が低下し，39° C では 37℃に比べ細胞 増殖が促進した． 本人担当部分：研究計画立案，データ測定と整理，論文の校正を担当した． 共著者：吉川義之，野中紘士，滝本幸治，前重伯壮，植村弥希子，杉元雅晴

63 Comparison of Physical Function among Elderly Japanese Women with and without Low Bone Mass and Low Muscle Mass: A Cross-Sectional Study of Older Women Who Engage in Regular Physical Activity （低骨量・低筋量の日本人高齢女性における身体機能の比較：定期的な身体活動を行う高齢女性の横断的研究） （査読付） :	共著	令和４年９月	Geriatrics Vol.7, No.5 98（計９ページ）	骨量と筋肉量の両方が低下した高齢者では，身体機能の低下が一般的である．本研究の目的は，定期的に運動している異なる年齢層の高齢女性において，低い骨量と筋肉量と身体機能の関係を調査することである．解析対象は，299 名の高齢女性でとした．低骨量はＴスコア-2.5 以下，低筋量は骨格筋量指数 5.7kg/m2 未満で判定した．身体機能として，握力，膝伸展力，起立力，歩行機能，バランス機能を測定した．骨量と筋肉量により４群に分け（健常群，低骨量群，低筋量群，低骨・筋肉量群），身体機能を比較した．その結果，低骨量・筋肉量群と健常者群の間で身体機能に統計的に有意な差は見られなかった．また，後期高齢者（75 歳以上）においても４群間で身体機能に統計的に有意な差は見られなかった．定期的に運動している高齢女性は骨量や筋肉量が減少しても身体機能が低下しにくいことが確認され． 本人担当部分：研究計画の立案，データ測定および論文内容の精査・修正を行った． 共著者：Katsurasako T Murata S Goda A, Nakano H Shiraiwa K, Horie J, Nonaka K
（その他） 「文献抄録」 １定期的な身体運動活動を実施している透析患者の不安と抑うつの状態－予備研究 「報告書」	単著	平成 30 年２月	理学療法ジャーナル 52 巻２号 P.184	Dziubek らの論文"The level of anxiety and depression in dialysis patients undertaking regular physical exercise training: A preliminary study. Kidney Blood Press Res 41: 86-98, 2016"の文献抄録作成を行った．報告内容は以下の内容であった．透析中に末期腎不全患者が定期的な身体活動を行うことは不安感や抑うつを減弱することができる．レジスタンス運動と持久運動のどちらも抑うつを改善するが，持久運動のみ不安感も減少させる．透析中の定期的な身体運動プログラムは高齢患者や，身体運動プログラム開始時に抑うつと不安感が高い患者に対し最も効果がある．

1 高齢COPD患者に対する呼息時低周波電気刺激の臨床効果に関する研究 ーパイロットスタディ	共著	平成24年6月	大阪ガスグループ福祉財団　調査・研究報告集 25巻 P.9-P.14	本研究の目的は，我々が開発してきた低周波電気刺激装置を用い，呼息時に対する低周波電気刺激の効果を検証することである。対象は高齢慢性閉塞性肺疾患患者12名である。対象者はプラシーボ介入群（対照群）と呼息時低周波電気刺激介入群（介入群）に割り付けられた．これらの対象者に対し介入前後の安静時および運動時の換気機能、酸素飽和度、自覚的運動強度を測定した．介入群において換気パラメータの平均値において改善が認められた．しかし、その結果は有意差を伴うものではなかった．今回の研究では換気パラメータの有意差を伴った改善が認められなかった．しかし、平均値の改善傾向と標準偏差のばらつきが認められていることから，対象者数を増やすことで有意差を伴った改善効果が期待できるものと推察された．今回の研究結果より，呼息時低周波電気刺激の効果が示唆されたとともに，本研究の継続意義が明らかとなった。 本人担当部分：研究計画立案およびデータ解析を行った． 共著者：伊藤健一，濃添建男，奥田みゆき，野中紘士，堀江淳，川村博文
2 転倒のスクリーニングを目的とした加速度計による身体動揺評価法の確立に関する研究	共著	平成25年6月	大阪ガスグループ福祉財団　調査・研究報告集 26巻 P.93-P.97	本研究では健常男子大学生6名(年齢20.8±0.4歳)を対象として，静止立位保持および片脚着地課題における身体動揺を腰部正中後面に装着した小型9軸ワイヤレスモーションセンサーで評価し，3次元動作解析装置で測定した身体重心(COG)や床反力(GRF)と加速度波形の時間積分から推定したCOG変位(COGacc)や運動方程式から推定したGRF(GRFacc)との比較から加速度計で評価した身体動揺評価指標の特徴について分析した．その結果，静止立位では前後(AP)成分の実効値(RMS)，最大振幅(PTP)が有意に低値を示し，COG とCOGacc の振幅が異なる可能性が示されたが，非線形解析ではCOGacc はCOG と同様にカオス性を示した．着地動作ではAP成分の単位時間軌跡長(NPL)が有意に高値を示した． 本人担当部分：研究計画立案およびデータ解析を行った． 共著者：山中悠紀，野中紘士
「国際学会発表」				
1 The inhibitory effect of carbon dioxide-enriched water bathing on spinal motor neuron (高濃度人工炭酸泉による脊髄運動神経抑制効果)	-	平成20年8月	10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy（千葉）	炭酸泉浴が脊髄運動ニューロンの興奮性に与える影響についてM波とH反射を測定し検証した．その結果，炭酸泉浴がH/M raito を低下させ，脊髄運動ニューロンの興奮性を抑制することが確認された． 本人担当部分：神経生理学的実験の実施および発表を行った． 共同発表者：Nonaka K, Nakajima M, Akiyama J, Tatsuta N

2 Study of exercise-induced damage to skeletal muscle under the environment of various concentration of oxygen in rats （ラットを用いた各種酸素濃度環境下における運動誘発性筋損傷に関する研究）	-	平成 20 年 8 月	10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy（千葉）	異なる酸素濃度環境下(10%, 20%, 50%)での運動が運動誘発性筋損傷に及ぼす影響を検証した．その結果，酸素濃度が10%の場合に，20%，50%の場合に比べ，運動誘発性筋損傷が高くなることが確認された．本研究より，低酸素環境下では運動誘発性筋損傷が惹起されやすいことが示された． 本人担当部分：研究計画の立案および実験の実施，発表内容の検討を行った． 共同発表者：Kurata K, Nonaka K, Nakajima M, Akiyama J
3 Primary study of optimal load condition on ROM-exercise to prevent joint contracture development by joint immobilization （不動による関節拘縮予防のための ROM 運動に対する適切な負荷条件に関する予備研究）	-	平成 20 年 8 月	10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy（千葉）	1 日 5 回の関節可動域運動を 5 回/週の頻度で実施した場合，関節拘縮を予防できるかについてラットを用いて検証した．その結果，関節可動域運動をしない場合に比べ，関節拘縮の進行は遅延させることができるが，完全に予防することはできないことが示された． 本人担当部分：実験を実施した． 共同発表者：Tatsuta N, Nakajima M, Akiyama J, Nonaka K, Kawakami T
4 Carbon dioxide-rich water bathing promotes cutaneous wound healing in experimental animal model （高濃度人工炭酸泉は実験動物モデルの皮膚損傷治癒を促進させる）	-	平成 20 年 8 月	10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy（千葉）	人工炭酸泉浴が創傷治癒を促進するかをラット創傷モデルにて用いて検討した．その結果，人工炭酸泉浴がラットの創傷治癒を促進することが明らかになった． 本人担当部分：実験を実施し，組織の形態学的評価を行った． 共同発表者：Nakajima M, Hayamizu S, Nonaka K, Tatuta N, Akiyama J
5 A modified quadriceps femoris muscle setting with co-contraction of the hamstrings （ハムストリングスの同時収縮を伴った改良型大腿四頭筋セッティング）	-	平成 20 年 11 月	XXX World Congress of Sports Medicine（バルセロナ）	我々は大腿四頭筋セッティングの際，反対側下肢を挙上させ，ハムストリングスの同時収縮を伴う大腿四頭筋セッティング(MQS)を開発した．そこで本研究は健常人と ACL 損傷患者を対象に通常の大腿四頭筋セッティング(NQS)と MQS の筋活動を筋電図学的に検証した．その結果，健常人では NQS に比べ，MQS はハムストリングスの同時収縮が確認された．また，ACL 損傷患者では NQS に比べ MQS で外側広筋の高い筋活動が確認できた．本研究結果より，MQS は ACL 損傷患者の大腿四頭筋筋力強化に安全で有効な方法であることが示された． 本人担当部分：実験結果の解析を行った． 共同発表者：Nakajima M, Abeno E, Nonaka K, Tatsuta N, Akiyama J
6 The range of motion (ROM) exercise load condition required for preventing joint contracture development （関節拘縮進行予防のために必要となる関節可動域運動条件）	-	平成 20 年 11 月	XXX World Congress of Sports Medicine（バルセロナ）	1 日 5 回の関節可動域運動を 5 回/週の頻度で実施した場合，関節拘縮を予防できるかについてラットを用いて検証した．その結果，関節可動域運動をしない場合に比べ，関節拘縮の進行は遅延させることができるが，完全に予防することはできないことが示された． 本人担当部分：実験の実施および組織の形態学的評価を行った． 共同発表者：Tatsuta N, Nakajima M, Akiyama J, Nonaka K, Kawakami T

7 The study of functional and morphological changes on peripheral nerve in rat developed disuse atrophy（廃用性筋萎縮を起こした末梢神経の機能的、形態学的変化についての研究）	-	平成 20 年 11 月	XXX World Congress of Sports Medicine（バルセロナ）	廃用性筋萎縮モデルラットの運動神経伝導速度と神経組織の変化を検証した．その結果，廃用性筋萎縮モデルラットの運動神経伝導速度は低下することが確認された．さらに軸索の萎縮が観察された．本研究より，廃用時は筋萎縮だけでなく軸索の萎縮と運動神経伝導速度が低下することが明らかになった． 本人担当部分：実験の実施および組織の形態学的評価を行った． 共同発表者：Akiyama J, Nakajima M, Nonaka K, Tatsuta N, Kurata K
8 The analysis of abdominal muscle activity during trunk curl up exercise based on Pilates method（ピラティスメソッドに基づいた体幹腹筋運動中の腹筋活動の解析）	-	平成 20 年 11 月	XXX World Congress of Sports Medicine（バルセロナ）	ピラティスによる体幹屈曲運動時の腹部筋活動様式の特徴を健常成人 19 名を対象に筋電図学的に解析した．その結果，通常の体幹屈曲運動に比べピラティスによる体幹屈曲運動では内腹斜筋の筋活動が高いことが確認された．また，ピラティスによる体幹屈曲運動は通常の体幹屈曲運動に比べ内腹斜筋/腹直筋の割合が高値を示した．本研究により，ピラティスによる体幹屈曲運動は通常の体幹屈曲運動より腹斜筋の活動の割合が大きいことが示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：Nonaka K, Nakajima M, Tatsuta N, Akiyama J
9 Carbon dioxide-rich water bathing increases myogenin protein expression in rat injured skeletal muscle（高濃度人工炭酸泉は損傷骨格筋の myogenin 蛋白発現を増加させる）	-	平成 23 年 6 月	16th International WCPT Congress（アムステルダム）	炭酸泉が筋損傷後の MyoD と myogenin のタンパク発現に与える影響について検証した．ラットを非損傷群(NI 群)，損傷群(IC 群)，損傷＋淡水浴群(FW 群)，損傷＋人工炭酸泉浴群(CO2 群)に分け，IC 群，FW 群，CO2 群のラット左前脛骨筋に筋損傷を誘発させた．損傷 1 日後から IC 群，CO2 群のラットは水温 37℃で 30 分間，淡水浴または炭酸泉浴を 1 日 1 回，3 日間，負荷された．その結果，CO2 群では FW 群に比べ損傷筋の myogenin タンパク量が高値を示した．結果より，炭酸泉浴は筋損傷後の再生を促進する可能性を示した． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：Nonaka K, Mori J, Tatsuta N, Akiyama J, Yonetsu R, Iwata A
10 The characteristics of sit-to stand movement in infants aged 1 year: a preliminary study（1 歳児の立ち上がり動作の特徴－予備研究）	-	平成 24 年 7 月	XIXth Congress of the International Society of Electrophysiology & Kinesiology（ブリスベン）	新生児の立ち上がり動作の特徴を明らかにすることを目的に研究を行った．その結果，新生児の立ち上がりは成人に比べ，体幹の前傾が少なく，足関節の背屈が大きくなるという特徴が明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案と結果の解釈を行った． 共同発表者：Yonetsu R, Sakita H, Yamashita N, Miki Y, Nonaka K, Iwata A, Kawarai Y, Shimizu J

11 The development of a force plate focused on infants' movements: an experimental study of reliability for measuremen（小児動作に着目したフォースプレートの開発－計測信頼性の実験的検証）	-	平成 24 年 7 月	XIXth Congress of the International Society of Electrophysiology & Kinesiology（ブリスベン）	我々が新たに開発したフォースプレートの正確性を検証した．その結果，従来のフォースプレートに比べ，より小さい値からの計測ができることを確認した．この新しいフォースプレートは体重の軽い小児の動作分析に有用で可能性を示した． 本人担当部分：研究計画の立案と実験を実施した 共同発表者：Yonetsu R, Arakawa S, Shintani A, Yoshioka M, Shimizu J, Iwata A, Nonaka K, Nakagawa C
12 How many days per week should the range of motion exercise is performed to prevent the development of the joint contracture?（関節拘縮発生を予防するためには週に何日関節可動域訓練を実施すればよいか？）	-	平成 24 年 9 月	XXXII World Congress of Sports Medicine（ローマ）	関節可動域運動を 1 週間に何日行うと関節拘縮が予防できるかについて，ラットを用いて検証した．1 週間に 1 日，3 日,5 日の関節可動域運動を行った結果，5 日行った場合が最も関節拘縮の予防が可能であった．しかしながら，週 5 日の関節可動域運動では完全に関節拘縮の発生を予防することができないことが明らかになった． 本人担当部分：実験を実施した。 共同発表者：Tatsuta N, Nonaka K, Akiyama J, Nakajima M
13 The study of artificial carbon dioxide-rich water bathing effect on experimental acute arthritis（人工炭酸泉浴の実験的関節炎に対する効果についての研究）	-	平成 24 年 9 月	XXXII World Congress of Sports Medicine（ローマ）	各種温度（10℃，20℃，35℃）の人工炭酸泉浴が急性炎症に与える影響をラット関節炎モデルにて検証した．その結果 10℃，20℃の人工炭酸泉浴は水道水に比べ皮膚温の上昇が低かった．また，35℃の人工炭酸泉浴は水道水での寒冷浴と同等の抗炎症効果があることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案および結果の解釈を行った． 共同発表者：Akiyama J, Fujiwara Y, Tatsuta N, Nonaka K, Une S, Nakajima M
14 The effect of carbon dioxide rich water bathing on the MyoD family proteins after muscle injury（筋損傷後の高濃度人工炭酸泉浴の MyoD ファミリータンパクに対する効果）	-	平成 24 年 9 月	XXXII World Congress of Sports Medicine（ローマ）	筋損傷後の人工炭酸泉浴が MyoD ファミリーのタンパク質発現に及ぼす影響を検証した．その結果，筋損傷後に人工炭酸泉浴を行うと損傷 4 日後に myogenin の発現が上昇することが確認できた．MyoD の発現に関しては変化がなかった．本研究結果より，人工炭酸泉が一部の MyoD ファミリータンパク質発現を増加させ，筋損傷治癒を促進させている可能性を示した． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った 共同発表者：Nonaka K, Akiyama J, Tatsuta N, Une S

15 Effects of phasic electrical stimulation during expiration in elderly chronic obstructive pulmonary disease: a pilot study（高齢慢性閉塞性肺疾患患者の呼気中に同調させた電気刺激の効果について－予備研究）	－	平成 24 年 12 月	17th Congress of the Asian Pacific Society of Respirology（香港）	24 名の高齢 COPD 患者を対照群と呼息時低周波電気刺激群に割り付け，安静時および運動時の換気機能について，呼息時低周波電気刺激の効果を検証した．結果より呼息時低周波電気刺激は換気機能を有意に改善することが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案および結果の解析を行った． 共同発表者：Ito K, Nozoe T, Okuda M, Nonaka K, Horie J, Kawamura H.
16 Role of muscle coactivation and reaction time in postural perturbation in the elderly（高齢者の姿勢動揺での筋協働活動と反応時間の役割について）	－	平成 26 年 6-7 月	2014 International Society for Posture & Gait Research World Congress（バンクーバー）	筋骨格シミュレーションモデルを用いて筋の同時収縮が外乱刺激後の姿勢制御にどのように影響するかを調べた．外乱刺激後の反応時間が遅い場合のみ，同時収縮が外乱を抑えるのに有効であることがわかった． 本人担当部分：研究結果の解析を行った． 共同発表者：Ogaya S, Nagai K, Okita Y, Nonaka K, Iwata A, Higuchi Y, Fuchioka S
17 A preliminary study of the effect of trunk position on strategies for lower limb function during forward reaching movements（前方リーチ動作時の下腿機能ストラテジーに対する体幹位置の効果についての予備的研究）	－	平成 26 年 7 月	The XX Congress of the International Society of Electrophysiology and Kinesiology（ローマ）	前方リーチ動作の際の体幹ポジションの違いが下肢機能に及ぼす影響について検証した．その結果，体幹ポジションの違いが床反力やハムストリングスと前脛骨筋の筋活動に影響を及ぼすことが示された． 本人担当部分：研究の立案および発表を行った． 共同発表者：Nonaka K, Yonetsu R, Taniguchi F, Ueno S, Shintani A, Nakagawa C, Kataoka M, Ito T
18 Heat stress attenuates skeletal muscle fiber atrophy in diabetic rats（温熱刺激は糖尿病ラットの骨格筋線維萎縮を減弱する）	－	平成 27 年 6 月	9th World Congress of the International Society of Physical and Rehabilitation Medicine（ベルリン）	糖尿病による筋萎縮が温熱療法で減弱するかについて検討した．ストレプトゾトシンを投与し糖尿病を誘発したラットに温浴(42℃)を 30 分間，1 週間に 5 日，3 週間行った．温浴を行ったラットは温浴を行っていないラット比べ長趾伸筋の筋横断面積の減少が予防された．本研究より，温熱療法が糖尿病による筋萎縮を予防することが示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：Nonaka K, Iwata A, Une S, Akiyama J

19 Electromyography activity of the rectus abdominis, internal oblique, and external oblique muscles during forced expiration in healthy adults （健常成人の強制呼気中の腹直筋および内腹斜筋，外腹斜筋の筋活動）	–	平成 27 年 9 月	European Respiratory Society Annual Congress 2015（アムステルダム）	呼気筋の筋活動パターンを筋電図を用いて呼気抵抗別に検討した．10%PEmax，20%PEmax，30%PEmax の抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋，外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち，最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし，その活動量は 30%PEmax の負荷であっても 20%MVC 以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは 30%PEmax 程度の負荷が推奨されるが，生理学的な視点でみた場合，その負荷は弱すぎることが示唆された． 本人担当部分：研究の立案および解剖生理学的視点より結果の解釈をした． 共同発表者：Ito K，Nonaka K，Ogaya S，Horie J
20 Effectiveness of back school versus brain school for elderly with chronic low back pain （慢性腰痛の高齢者に対する腰背教室と脳教室の効果）	–	令和元年６月	13th World Congress of the International Society of Physical and Rehabilitation Medicine（神戸）	慢性腰痛を有する高齢者にバイオメカニクスに基づいた腰背部教室と神経科学的教育に基づいた脳教室の効果について検証した．慢性腰痛のある高齢者を対象に，腰背部教室群（n=16）と脳教室群（n=20）に分け、3 か月間に 6 回の介入を行った．その結果，両群とも介入後に疼痛の軽減が認められた．脳教室の対象者は腰背部教室の対象者に比べ，Pain Catastrophizing Score，Fear-Avoidance Beliefs Questionnaire が有意に改善した．これらの結果より，慢性腰痛の高齢者に対して，神経科学教育に基づいた脳教室は腰背部教室に比べ効果的であること，神経科学的教育は心理面へ良好な効果があることが分かった． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：Abiko T，Iwase H，Anami K，Madoba K，Nonaka K，Murata S
「国内学会発表」				
1 股関節外旋位での Straight Leg Raise exercise が下肢筋活動に及ぼす影響	–	平成 15 年 5 月	第 39 回日本理学療法学術大会（仙台）	下肢挙上運動(SLRex)実施時における挙上下肢股関節外旋角度と大腿四頭筋活動の関係について検討した．被験者は挙上下肢股関節外旋 0，20，40 度で SLRex を行った．その結果，膝伸展の単関節筋である内側広筋，外側広筋の筋活動は外旋角度が拡大するにつれて低下しているが，二関節筋である大腿直筋では変化がなかった．大腿四頭筋筋力強化法として SLRex を用いる場合，股関節を外旋させずに行うことの重要性が示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，中嶋正明，秋山純一，祢屋俊昭

2 走行面の傾斜角度の違いによるトレーニングがエネルギー代謝系に及ぼす影響	–	平成 15 年 9 月	第 58 回日本体力医学会大会（静岡）	マウスを用い持久的トレーニング時の運動肢位の違いによる，臓器等の乳酸脱水素酵素(LDH)活性の変化を検討した．その結果，筋組織では走行面の傾斜角度の違いによる LDH 活性の変化がみられた．水平走行群に比べ，下り走行群で心臓に活性の低下が確認された．このことから，走行面の傾斜角度の違いにより，運動負荷量や循環動態等が変化し，LDH 活性の変化に影響することが示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，秋山純一，中嶋正明，祢屋俊昭
3 人工炭酸泉浴が神経伝導速度に及ぼす影響	–	平成 16 年 5 月	第 39 回日本理学療法学術大会（仙台）	炭酸泉浴が神経伝導速度に及ぼす影響について検討し，深部組織酸素飽和度との関係も含めて考察した．被験者は健常成人 7 名とした．浴水温度は不感温度 36℃とした．5 分間の左大腿部の阻血を行った．神経伝導速度(MCV)測定には脛骨神経を選択し，阻血前後，入浴後に測定を行った．その結果，炭酸泉浴はさら湯に比べ深部組織酸素飽和度と神経伝導速度の回復が速かった．これらの結果から，神経機能低下が原因となる疾患への人工炭酸泉適用の可能性も示唆された． 本人担当部分：神経伝導速度の測定を行った． 共同発表者：吉田巳有紀，道菅聖子，野中紘士，秋山純一，中嶋正明，祢屋俊昭，Poffenberger Chikako Kawakami
4 人工炭酸泉浴の血管内皮細胞増殖因子濃度に及ぼす影響-ラット実験的末梢循環障害モデルを用いた検討	–	平成 16 年 9 月	第 59 回日本体力医学会大会（大宮）	炭酸泉浴の側副血行路形成促進効果を評価した．ラットの左大腿動脈を結紮し，末梢循環障害モデルを作成した．処置後ラットは 36℃水道水と 36℃炭酸泉への入浴負荷が 5 日間行われ，血中と筋組織中の血管内皮細胞増殖因子(VEGF)が測定された．炭酸泉浴は入浴負荷前と比べ VEGF を低下させた．筋組織中の VEGF は炭酸泉浴により対照側と比べ結紮側が低値を示した．炭酸泉浴の側副血行路形成促進効果が VEGF の直接の作用とは異なる機序で作用し，VEGF に対する negativefeedback の存在を示唆すると考えられた． 本人担当部分：実験の実施と VEGF の測定を行った． 共同発表者：中嶋正明，秋山純一，野中紘士，祢屋俊昭

5 トレーニング走行面の傾斜角度の違いによる筋組織中のLDH活性,PFK活性変動に関する検討	-	平成16年9月	第59回日本体力医学会大会（大宮）	角度可変型トレッドミを用いて，骨格筋の乳酸脱水素酵素(LDH)活性とホスホフルクトキナーゼ(PFK)活性について検討した．マウスをコントロール群(CONT)，上り走行群(UR群)，水平走行群(LR群)，下り走行群(DR群)に分け，4週走行負荷を行った．その結果，骨格筋のLDH活性はLR群，DR群で低下する傾向を示し，DR群がCONT，UR群と比較し有意に低下した．走行角度が上方になるほど乳酸代謝が低下し，上方になるほど解糖系代謝が増加することが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，秋山純一，中嶋正明，祢屋俊昭
6 創外固定によるラット実験的膝関節拘縮モデルの作成	-	平成17年5月	第40回日本理学療法学術大会（大阪）	関節拘縮に対する効果的な理学療法を検討していくため，ラット実験的関節拘縮モデルの作成を行い，組織学的に検討を行った．関節拘縮の作成法は，右大腿骨および脛骨の膝関節から離れた位置にそれぞれ2本のキルシュナー鋼線を前額一水平軸に沿って貫通させ，各キルシュナー鋼線を接合し膝関節を屈曲90°に固定した．その結果，伸展角度変化と組織学的検証からこのモデルが実験的関節拘縮モデルの作成法として有用であつた． 本人担当部分：実験を実施し，組織の形態学的評価を行った． 共同発表者：龍田尚美，秋山純一，中嶋正明，野中紘士，祢屋俊昭
7 人工炭酸泉浴による血管内皮増殖因子と乳酸脱水素酵素変動に関する検討	-	平成17年5月	第40回日本理学療法学術大会（大阪）	炭酸泉浴による血管新生因子の1つである血管内皮増殖因子(VEGF)と乳酸脱水素酵素(LDH)活性を測定し，人工炭酸泉浴の生体反応について検討した．マウスをコントロール群，さら湯群，炭酸泉群に分けた．入浴は3週間行われた．3週間の入浴終了後，マウス血液と腓腹筋を採取し，VEGF測定に用いた．加えて，腓腹筋のLDH活性を測定した．炭酸泉群ではコントロール群，さら湯群と比べ炭酸泉群で低下傾向であった．人工炭酸泉によるLDH活性の低下は乳酸産生を抑制する効果があることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，秋山純一，中嶋正明，龍田尚美，祢屋俊昭

8 糖尿病合併症に関連したおもに閉塞性動脈硬化症に関するAmerican Sunflowerエキス有用性の検討	–	平成17年9月	第60回日本体力医学会大会（岡山）	糖尿病と閉塞性動脈硬化症に予防・治療効果のある薬用成分としAmericanSunflower(A.S.)の検討を行った．マウスまたはラットにA.S.抽出エキス溶液を経口投与し，1)糖負荷血糖値抑制効果に関する検討，2)血液動態に関する検討，3)血流阻害部位に対する皮膚温に関する検討，4)血流阻害動物の血管内皮細胞増殖因子に関する検討，5)培養細胞を用いた血管増殖因子に関する検討を行った．A.S.エキスに優れた血糖値抑制効果と閉塞性動脈硬化症の予防・治療に効果が期待できる，血流促進作用，組織血液量および酸素飽和度増加作用が見られた． 本人担当部分：実験を実施した． 共同発表者：秋山純一，中嶋正明，野中紘士，龍田尚美，速水明香，祢屋俊昭
9 ラット膝関節運動負荷試験装置の試作	–	平成18年5月	第41回日本理学療法学術大会（群馬）	ラット膝関節創外固定モデルに対応した，屈曲伸展運動において，目標軌道の高精度な追従制御が行え，再現性があり，目標トルク抵抗を感知した時点で関節運動を停止し反対方向への関節運動を開始する関節運動負荷試験装置を製作した．製作した膝関節運動負荷試験装置はその屈曲伸展運動をコンピュータで制御したことにより様々な制御が可能であり，さらに，タイミングベルトを用いたことにより，その関節運動の制御が正確に安定して実行された． 本人担当部分：実験を実施した． 共同発表者：龍田尚美，門林義幸，西村一郎，渡辺正憲，中嶋正明，秋山純一，野中紘士，祢屋俊昭
10 ラット膝関節障害モデルを用いた大腿四頭筋機能が関節・筋組織変化に与える影響の実験的検討	–	平成18年5月	第41回日本理学療法学術大会（前橋）	ラット膝関節障害モデルを用いて，大腿四頭筋の機能不全が軟骨変性と筋組織の変化に与える影響について検討を行った．大腿四頭筋を切除したラットは関節面の評価点法であるMankin score値の有意な増加が認められた．更に術後3週から軟骨表面の不整化に加えて，細胞の集塊化や分裂像が認められた．大腿四頭筋の機能不全を伴う場合，関節軟骨の退行変性が進行しやすい可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案し，実験を実施するとともに組織の形態学的評価を行った． 共同発表者：丸水ちえみ，山口博子，秋山純一，龍田尚美，野中紘士，中嶋正明

11 ラットを用いた人工炭酸泉(寒浴)の急性膝関節炎に対する効果の実験的検討	-	平成 18 年 5 月	第 41 回日本理学療法学術大会（前橋）	急性炎症に対して，炭酸泉の寒冷療法への適用について実験的に検討した．ラットをコントロール群，淡水浴群，炭酸泉浴群に分けた．ラットの左膝関節に関節炎を惹起させ，炭酸泉浴または淡水浴を行った．その結果，表面・深部温度ともに炭酸泉浴群の方が淡水群に比べ入浴前後の温度低下が小さい傾向が認められた．炭酸泉浴群は平均最大幅の変化率が淡水浴群に比べ小さい傾向が認められた．これらより，炭酸泉の寒浴は，急性炎症に対して有効な治療法であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案と組織の形態学的評価を行った． 共同発表者：山口博子，丸水ちえみ，中嶋正明，野中紘士，龍田尚美，秋山純一
12 グルタチオン添加飼料長期投与による寿命に関するマウスを用いた実験的検討	-	平成 18 年 9 月	第 61 回日本体力医学会大会（神戸）	グルタチオン(GSH)の摂取が生体の寿命に関してどのように作用するか検討した．マウスを GSH 添加飼料終身投与群，GSH 成人期以降投与群，メチオニン減量飼料投与群および通常飼育繁殖用飼料投与群に分け，寿命について検討を加えた．その結果，GSH 投与群間の比較では GSH 成人期以降投与群の雌に寿命が長い傾向がみられた．本研究結果より，GSH の寿命の延長に対する効果は確認されず，逆に働く可能性も示唆された． 本人担当部分：実験と生化学検査を実施した． 共同発表者：速水明香，秋山純一，中嶋正明，野中紘士，龍田尚美
13 関節拘縮予防のための至適関節運動負荷条件の検討	-	平成 18 年 9 月	第 61 回日本体力医学会大会（神戸）	ラットを用いて 1 日に 1 度,1 度に 5 回の関節可動域運動を週に 5 日行うことで関節拘縮の発生が予防されるのかを実験的に検証した．関節固定群，関節運動群に分けた．関節運動群は 1 日に関節可動域の往復運動 5 回 1 セットを 4 週間負荷した．関節固定から 5 週間後，膝関節の関節可動域を測定した．その結果，週 5 日，1 度に 5 回の関節運動を実施することで関節拘縮の発生を予防することはできないことが明らかとなった． 本人担当部分：実験を実施した． 共同発表者：龍田尚美，秋山純一，野中紘士，中嶋正明

14 人工炭酸泉浴の創傷治癒促進効果	–	平成 19 年 5 月	第 42 回日本理学療法学術大会（新潟）	人工炭酸泉浴の創傷治癒促進効果の基礎的検討を目的とし，人工炭酸泉浴の適用による創傷治癒の促進効果についてラット創傷モデルを作成し検討した．人工炭酸泉水は湯浴群に比べ創部の完治に要した日数が 67.2%にまで短縮した．創傷面積の縮小率は人工炭酸泉浴群で有意に促進された．VEGF や bFGF などの強力な血管新生因子の発現が促されるため難治性外傷に対してもかなりの治癒促進効果を発揮することが示唆された． 本人担当部分：実験を実施した． 共同発表者：中嶋正明，速水明香，野中紘士，龍田尚美，秋山純一
15 クーリングダウンによる運動誘発性筋損傷抑制効果の検討	–	平成 19 年 5 月	第 42 回日本理学療法学術大会（新潟）	運動後のクーリングダウンが運動誘発性筋損傷を抑制するかどうかを実験的に検討した．ラットにトレッドミルで下り坂走行を負荷し，筋損傷を誘発した．EX+C 群は 20℃の淡水に 30 分間浸し，クーリングダウンを行った．EX 群と EX+C 群の比較では，24，48，72 時間後のいずれもクーリングダウン群で組織学的に筋損傷が少なく G6PD 活性が低値を示した．運動後のクーリングダウンは筋損傷抑制に効果があることが示唆された． 本人担当部分：共同研究につき担当部分抽出は不可能 共同発表者：野中紘士，速水明香，秋山純一，龍田尚美，中嶋正明
16 運動前の温熱負荷が運動後の筋損傷抑制に及ぼす効果	–	平成 19 年 5 月	第 42 回日本理学療法学術大会（新潟）	運動前の温熱負荷が運動後のラットヒラメ筋損傷の抑制に及ぼす効果の検討を目的として，形態学的観察および酵素化学的測定により検討した．運動群と温熱負荷+運動群において，筋組織の変性と組織内に貧食細胞の出現を認め温熱負荷+運動群の方が運動群に比べ，貧食細胞の浸潤が少ないことが確認された．筋損傷のマーカーとされる筋組織内の G6PD 活性は温熱負荷+運動群が運動群に比べ低下傾向がみられた．運動前の温熱負荷が運動後の筋損傷の発生を抑制することが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表内容の検討を行った． 共同発表者：上田康博，野中紘士，秋山純一，中嶋正明
17 関節拘縮予防のための関節運動負荷条件の検討	–	平成 19 年 5 月	第 42 回日本理学療法学術大会（新潟）	関節拘縮の予防の根拠を示す科学的研究として，1 日に 1 度，1 度に 5 回の関節可動域運動を週に 5 日行うことで，関節不動による関節拘縮の発生を予防することができるのかをラットを用いて実験的に検証した．その結果，1 日に 1 度，1 度に 5 回の全可動域に及ぶ関節可動域運動を週に 5 日行う条件では関節拘縮の発生を予防できないことが明らかとなった． 本人担当部分：実験を実施した． 共同発表者：龍田尚美，秋山純一，野中紘士，速水明香，中嶋正明

18 ラットの骨欠損モデルを用いた低周波治療が骨再生に及ぼす影響－サイトカインの変動と組織形態学的変化による検討	-	平成 19 年 5 月	第 42 回日本理学療法学術大会（新潟）	低周波治療の骨折治癒への有効性をラット骨欠損モデルにて検討した．組織学的検討と血清中の TGF-β1，オステオカルシン濃度の測定した．組織形態学的な比較検討では，低周波治療には，骨芽細胞・骨細胞の出現を促進させる効果があるという結果が示された．また，サイトカインの測定の結果では，低周波治療により初期の TGF-β1 濃度が高値を示し，オステオカルシン濃度も上昇する傾向がみられた．低周波治療は骨再生に有効な治療であるということが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案および組織の形態学的評価，発表内容の検討を行った． 共同発表者：吉谷睦美，秋山純一，中嶋正明，野中紘士，龍田尚美，速水明香
19 各種酸素濃度環境が皮膚欠損創治癒に与える影響の実験的検討－治癒率の測定と組織学的検討	-	平成 19 年 5 月	第 42 回日本理学療法学術大会（新潟）	高圧酸素療法のような大がかりな装置を用いず，常圧の各種酸素濃度環境下での難治性潰瘍の治癒促進効果について二種の動物を用いて実験を行い，臨床適用の可能性についてラットとマウスを用いて検討した．ラットでは 10%群では治癒率は有意に抑制された．完治するまでの日数の比較では，30%群は通常空気群に比べて約 80%に治癒期間が短縮された．しかし，マウスでは効果が見られず重当たりの換気量や酸素消費率であることに関し，抗酸化系酵素保有の違いなどが起因すると考えられた． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った． 共同発表者：速水明香，秋山純一，野中紘士，中嶋正明
20 運動前の温熱負荷による運動誘発性筋損傷予防効果についての検討	-	平成 20 年 5 月	第 43 回日本理学療法学術大会（福岡）	運動前の温熱負荷がマウスの運動誘発性筋損傷を予防するか，生化学的および形態学的に検討した．温熱負荷を施行したマウス大腿四頭筋には Heat shock protein 70(HSP70)が温熱負荷しないものに比べ多くみられた．筋損傷のマーカーとされる筋組織内の G6PD 活性は温熱負荷+運動群が運動群に比べ低かった．組織像において温熱負荷+運動群の方が運動群に比べ，損傷線維が少ないことが確認された．運動前の温熱負荷が HSP70 を発現させ，運動誘発性筋損傷を予防することが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，秋山純一，中嶋正明，龍田尚美

21 低酸素，高酸素中での過運動負荷による筋損傷の変化に関する研究－組織形態学観察およびG-6-PDH活性測定による検討	-	平成20年5月	第43回日本理学療法学術大会（福岡）	通常酸素から低酸素及び高酸素チャンバー内に暴露され，運動療法またはトレーニングを実施した場合，酸素濃度によって筋損傷の発生にどのような変化が生じるかを，形態的観察および酵素化学的測定により検討した．組織学的検討では10%酸素濃度で20%酸素濃度に比べ損傷線維が少ない傾向にあった．50%酸素濃度は20%酸素濃度と比べ差はなかった．G6PDH活性は各酸素濃度間で差はなかった．本研究より，低酸素環境下で運動療法を実施した場合，筋損傷を抑制できる可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案と組織の形態学的評価，G6PDH活性の測定，発表内容の検討を行った． 共同発表者：倉田和範，中嶋正明，野中紘士，都能槙二，迎山昇平，秋山純一
22 ラット膝関節運動負荷試験装置の試作（第2報）	-	平成20年5月	第43回日本理学療法学術大会（福岡）	ラット膝関節の可動域測定，関節運動を高い再現性のもとに正確に負荷できる装置を制作した．本装置のラットの体幹および下腿の固定性は，十分に満足できるものであった．ゆえにラットの膝関節にかかる抵抗値が0.049Nmに達すると関節運動方向は反転し，スムーズな屈曲伸展運動を繰り返すことができた．本装置を使うことで様々な関節運動負荷条件の下で，すべてのラットに高い再現性の元に同条件で関節運動を負荷することが可能となった． 本人担当部分：実験を実施した． 共同発表者：中嶋正明，大久保康，龍田尚美，秋山純一，野中紘士，山本浩司
23 関節拘縮予防を目的とした温熱療法(温水負荷)の効果－ラット関節固定モデルを用いた実験的研究	-	平成20年5月	第43回日本理学療法学術大会（福岡）	温水負荷による温熱療法が関節拘縮の発生予防に効果があるのかを検討した．対照群，温熱療法群のどちらも膝関節を屈曲90°で固定し，温熱療法群は41℃の温水水で15分間温熱療法を行った．4，6週後の関節可動域は対照群に比べ温熱療法群で大きかった．本研究で，温熱療法によって関節不動による関節可動域の減少が抑制されることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画を立案し，実験を実施した． 共同発表者：都能槙二，中嶋正明，倉田和範，迎山昇平，龍田尚美，野中紘士，秋山純一

24 関節可動域運動による関節拘縮の発生予防効果(第2報)－ラット関節拘縮モデルを用いた実験的検討	－	平成20年5月	第43回日本理学療法学術大会（福岡）	関節運動の週あたりの実施日数と関節拘縮予防効果の関連を検証した．ラットを対照群，持続関節固定群，週1日関節運動群，週3日関節運動群，週5日関節運動群の5群で実験を行った．結果として，関節可動域は関節運動実施頻度が多いほど維持された．形態学的には持続固定群と1日関節運動群の関節腔内に多量の結合組織の増殖と癒着が確認されたが，3日，5日関節運動群は関節腔内の結合組織の増殖は見られなかった．本研究より，関節可動域の実施頻度の違いによる拘縮予防効果との関連が明らかになった． 本人担当部分：実験を実施し，組織の形態学的評価を行った． 共同発表者：龍田尚美，中嶋正明，秋山純一，野中紘士，川上照彦
25 ハムストリングスの同時収縮を伴う等尺性収縮大腿四頭筋筋力増強運動の考案－筋電図学的検証	－	平成20年5月	第43回日本理学療法学術大会（福岡）	ハムストリングスの収縮を伴う等尺性収縮を用いた大腿四頭筋筋力増強運動を考案し，筋電図学的に検証した．健常男子学生15名を対象とし，背臥位にて優位側の股関節，膝関節を90度屈曲位で固定し，等尺性収縮による各種角度で蹴り出しを行った．大腿四頭筋の筋活動は-60度から45度にかけて増加するのに対し，ハムストリングスの筋活動は減少した．ハムストリングス/大腿四頭筋割合(H/Q ratio)は-60度から45度にかけて減少した．本研究より，骨盤に対する蹴り出し方向によりH/Q ratioのコントロールが可能であることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った 共同発表者：江木翔平， 柳田恵美， 森本訓代， 野中紘士， 中嶋正明
26 ピラティスによる体幹屈曲運動時の腹部筋活動様式の筋電図学的解析	－	平成20年9月	第63回日本体力医学会大会大会（大分）	ピラティスによる体幹屈曲運動時の腹部筋活動様式の特徴を筋電図学的に解析した．健常成人11名に通常の体幹屈曲運動とピラティスによる体幹屈曲運動を実施させ，右側腹直筋(RA)，内腹斜筋(IO)の積分筋電図を測定した．通常の体幹屈曲運動に比べピラティスによる体幹屈曲運動ではIOの筋活動が高いことが認められた．加えて，ピラティスによる体幹屈曲運動は通常の体幹屈曲運動に比べIO/RA ratioが高値を示した．本研究により，ピラティスによる体幹屈曲運動は通常の体幹屈曲運動よりIO活動の割合が大きいことが示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，中嶋正明，龍田尚美，秋山純一

27 床励振を受ける立位姿勢人体の筋張力に関する検討	–	平成 23 年 3 月	日本機械学会関西支部第 86 期定時総会講演会（京都）	立位姿勢にある人体の床励振に対する応答と安定性の基本的な現象について検討した．その結果，以下が明らかになった．(1)若年者では足首まわりの筋肉群に負担がかかりやすく，高齢者では腰や膝まわりの筋肉群に負担がかかりやすい．(2)高齢者の重心位置の移動範囲は若年者に比べて小さくなる．(3)高齢者の方が若年者に比べ，筋肉への負担が大きい傾向にある．(4)電車のブレーキ等の加速度外乱を受けると，高齢者では若年者の 2 倍の負担がかる場合もある． 本人担当部分：モーションキャプチャーによる動作解析を行った． 共同発表者：杉本太志，伊藤智博，新谷篤彦，中川智皓，奥田邦晴，野中紘士
28 ヒト立ち上がり動作支援に関する基礎検討	–	平成 23 年 3 月	日本機械学会関西支部第 86 期定時総会講演会（京都）	ジャイロセンサと本研究で製作した床反力計を用い，立ち上がり実験を行った．実験により，座面高さの異なる椅子から立ち上がる際のヒトの挙動を把握し，単純化したヒトの解析モデルを構築して，立ち上がり挙動を分析した．実験データから，立ち上がり動作中の角度や各速度を算出した．さらに椅子の座面高さによる立ち上がり挙動の有意な違いについて考察を行った．また，ラグランジュ方程式を用いて得られた運動方程式に，角度等の実験データを代入し，時々刻々の関節トルク等を逆解析により得た． 本人担当部分：モーションキャプチャーによる動作解析を行った． 共同発表者：高井飛鳥，伊藤智博，新谷篤彦，中川智皓，奥田邦晴，野中紘士
29 人工炭酸泉浴による損傷骨格筋の再生促進効果についての検討	–	平成 23 年 5 月	第 46 回日本理学療法学術大会（宮崎）	炭酸泉浴による損傷骨格筋の再生促進効果について検討した．ラットを非損傷群(NI)，損傷コントロール群(IC)，損傷温浴群(FW)，損傷炭酸泉群(CO2)に分け，IC 群，FW 群，CO2 群のラット左前脛骨筋に損傷を誘発し，損傷 1 日後から，FW 群，CO2 群のラットに 37℃で 30 分間，温浴または炭酸泉浴を 1 日 1 回，週 5 日行った．その結果，損傷の 2 週間後，炭酸泉浴により損傷前脛骨筋の筋核数と筋線維横断面積の回復が促進することがわかった． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，井東あゆみ，森潤一，龍田尚美，秋山純一，岩田晃

30 人工炭酸泉浴による損傷骨格筋の再生促進効果の可能性についての検討	–	平成 23 年 9 月	第 66 回体力医学会大会（山口）	本研究は，炭酸泉浴による損傷骨格筋の再生促進効果を検討した．ラットを非損傷群（NI 群），損傷群（IC 群），損傷＋淡水浴群（FW 群），損傷＋人工炭酸泉浴群（CO2 群）に分けた．IC 群，FW 群，CO2 群のラット左前脛骨筋に筋損傷を誘発させた．筋損傷誘発の 1 日後から IC 群，CO2 群のラットは 37℃で 30 分間のそれぞれ，淡水浴または炭酸泉浴を 1 日 1 回，3 日間，負荷された．その結果，損傷筋の Myogenin および M-cadherin は CO2 群で IC 群，FW 群に比べて高値を示した．結果より，人工炭酸泉浴は損傷骨格筋の再生を促進する可能性を示した． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，秋山純一，龍田尚美，岩田晃
31 アキレス腱損傷動物実験モデルを用いた人工炭酸泉浴の腱組織治癒に与える影響の検討	–	平成 23 年 9 月	第 66 回体力医学会大会（山口）	炭酸泉浴の損傷腱組織の修復に対する治癒効果について検討した．人工炭酸泉群，さら湯群，コントロール群に 3 群に分けアキレス腱損傷モデルを作成した．人工炭酸泉群，さら湯群のラットは 35 度の人工炭酸泉浴，さら湯浴を各々1 日 1 回行った．その結果，人工炭酸泉群では，結合組織の再生亢進が観察され，加えて腱組織再生修復の亢進が観察された．本研究より，人工炭酸泉浴が腱組織の損傷治癒を促進することが確認された． 本人担当部分：研究計画の立案し，実験を実施した．また発表内容の検討を行った． 共同発表者：森潤一，秋山純一，野中紘士，龍田尚美，中嶋正明
32 立位時の足部接地位置に着目した重心可動域の基礎実測	–	平成 24 年 3 月	日本機械学会関西支部第 87 期定時総会講演会（吹田）	本研究では立位時の足部接地位置による重心可動域の変化について，実測データに基づき考察した．その結果，足間隔を広げると重心可動域が広がることを定量的に示した．後方よりも前方の重心可動域の方が広いことが分かった． 本人担当部分：モーションキャプチャーによる動作解析を行った． 共同発表者：中川智皓，新谷篤彦，伊藤智博，奥田邦晴，野中紘士
33 可搬型計量床反力系の開発	–	平成 24 年 5 月	第 47 回日本理学療法学術大会（兵庫）	乳幼児の立ち上がりや歩行等を測定することを目的とした，g 単位の荷重を計測可能となる床反力計を開発し，その計測精度について検討した．その結果，開発した可搬式計量床反力計は g 単位の荷重の記録をより正確に計測できることが可能であった． 本人担当部分：研究計画を立案し，実験を実施した． 共同発表者：米津亮，野中紘士，清水順市，崎田博之，岩田晃，瓦井義広，山下典子，吉岡学，奥田邦晴

34 ラットの骨折モデルを用いた人工炭酸泉浴の骨折治癒に与える影響－TGF-β濃度の変動と組織形態学的変化による検討	-	平成 24 年 5 月	第 47 回日本理学療法学術大会（兵庫）	本研究はラットを用いて脛骨骨折モデルを作成し，人工炭酸泉浴の骨折に対する治癒促進効果について検討した．その結果，人工炭酸泉浴には骨折後早期のTGF-β濃度の上昇作用と，骨芽細胞分化促進作用があり，優れた骨折治癒促進効果を有することを示した． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験を実施した． 共同発表者：高須賀純一，矢田智大，森潤一，野中紘士，龍田尚美，秋山純一
35 ラット肉離れモデルにおける筋形質膜，基底膜の組織学的検討	-	平成 24 年 5 月	第 47 回日本理学療法学術大会（兵庫）	本研究では打撲と肉離れという異なる筋損傷を誘発した場合の，筋形質膜，基底膜の損傷について検証した．その結果打撲では筋形質膜は破壊され，基底膜は残存していた．肉離れ損傷も打撲と同様の組織像を示した．本研究より，打撲と肉離による筋損傷は筋形質膜と基底膜の損傷の特徴が似ていることが示された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施と組織切片作成・染色を行い形態学的評価を行った． 共同発表者：岩田晃，野中紘士
36 運動時換気および呼吸時間に対する呼息時低周波電気刺激の効果－健常人による予備的検討	-	平成 24 年 11 月	第 22 回日本呼吸器ケア・リハビリテーション学会学術集会（福井）	本研究の目的は，運動中の呼息を促通させるために電気刺激を用いたフィードバック（ESVF）を行い，その効果と安全性を明らかにすることである．健常成人 23 名を ESVF 群と対照群に割り付けた．対象者は呼吸練習において，呼気延長の呼吸パターンを練習し，その呼吸法を運動中も維持するように指導された．運動中と運動後の呼気/吸気時間比において対照群と比較して ESVF 群が有意に高値を示した．また，ESVF による副作用が認められなかったことから ESVF は運動中の呼吸法を習得させるツールになり得ることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容を行った。 共同発表者：山原純，野中紘士，藤川薫，小川和哉，伊藤健一
37 高齢 COPD 患者に対する呼息時低周波電気刺激の効果	-	平成 24 年 11 月	第 22 回日本呼吸器ケア・リハビリテーション学会学術集会（福井）	24 名の高齢 COPD 患者を対照群と呼息時低周波電気刺激群に割り付け，安静時および運動時の換気機能の変化から，呼息時低周波電気刺激の効果を検証した．結果より呼息時低周波電気刺激は換気機能を有意に改善することが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ解析を行った． 共同発表者：伊藤健一，野中紘士，濃添建男，奥田みゆき

38 赤なた豆からのレクチンの精製とその性質	–	平成 25 年 5 月	日本家政学会第 65 回大会（東京）	赤なた豆からレクチンを精製し，その化学的性質を ConA と比較した．赤なた豆からの精製レクチンは電気泳動で均一なバンドを示した．両レクチンのこのバンドの位置は近似しており，太いバンドからなる分子量 1 万前後の A 鎖と B 鎖の 2 種類のレクチンで構成されていたので，A，B 鎖のタンパク質配列を N 末端から 20 配列まで分析した結果，両者は同一の配列をしていた．さらに，なた豆レクチンは ConA と極めて類似したアミノ酸組成をしていた．以上の結果より，なた豆レクチンは ConA と類似した化学組成を持つレクチンと推定された． 本人担当部分：電気泳動およびタンパク質配列測定の一部を担当した． 共同発表者：畦五月，野中紘士，秋山純一
39 高齢 COPD 患者に対する呼息時低周波電気刺激の効果	–	平成 25 年 5 月	第 48 回日本理学療法学術大会（名古屋）	高齢 COPD 患者に対して呼息時低周波電気刺激（PESE）を用い，その効果を，安静時および運動時の換気機能や酸素摂取量に着目し検討した．本研究の結果より PESE が安静時および運動時の換気効率を改善することが明らかとなった．また，その際には PESE が仕事量増大の指標になり得る VO2／W の増大を誘発しないことが証明された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ解析を行った． 共同発表者：伊藤健一，野中紘士，濃添建男，奥田みゆき，川村博文
40 倒立振子型車両乗車時の筋負担の定量評価に関する基礎検討	–	平成 25 年 9 月	日本機械学会 2013 年度次大会（岡山）	倒立振子型車両乗車時の筋負担について実験的評価を行った．乗車することで上肢の筋負担が増加していることがわかった．また，6 ケ所の筋肉群に関して筋負担が大きいことがわかった．さらに，車両と人間モデルの連成モデルを構築し，実験と同様の条件で数値解析を行った．その結果，胴体の筋負担の評価についてさらなる検討が必要であることがわかった． 本人担当部分：モーションキャプチャーによる動作解析を行った． 共同発表者：山下雄人，中川智皓，野中紘士，　新谷篤彦，伊藤智博

41 気相中の高濃度炭酸ガスが褥瘡治癒に与える影響ーラットを用いた難治性創傷モデルによる検討	-	平成 26 年 5 月	第 49 回日本理学療法学術大会（横浜）	気相中の高濃度炭酸ガスが難治性創傷モデルに与える影響について検討した．ラットをコントロール群， 0.5%CO2 群， 2%CO2 群に分け，全ラットに難治性創傷を作成した．0.5%CO2 群，2%CO2 群に対し，1 日 1 回 40 分，週 5 回の頻度で 8 週間，高濃度炭酸ガス暴露を行った．その結果，2%CO2 群は治癒の促進が認められた．TGF-β1 はコントロール群と比較して 2%CO2 群 4 日目において高値を示した．真皮結合組織形成は 2% CO2 群で促進した．本研究より，気相中の高濃度炭酸ガスが難治性創傷の治癒を促進することが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った． 共同発表者：前川美幸，中村友貴，矢代梓，野中紘士，森潤一，秋山純一
42 マウスを用いたビタミン D3 の経口投与による学習能力に与える影響ー受動的回避試験と脳内のセロトニン濃度測定による検討	-	平成 26 年 5 月	第 49 回日本理学療法学術大会（横浜）	マウスにビタミン D3 の経口投与を行い，受動的回避試験による学習効果と明暗弁別回避学習の習得や空間記憶に関与するとされる脳内セロトニン濃度の変動について検討を行った．その結果，ビタミン D3 投与は 学習効果を高めた．脳内のセロトニン濃度はビタミン D3 投与で高値を示した．以上より，ビタミン D3 が学習能力に有意性を与えることが確認された． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った． 共同発表者：中村友貴，前川美幸，矢代梓，野中紘士，森潤一，秋山純一
43 脳性まひ児への新しい短下肢装具の開発を目的とした異分野研究の試み	-	平成 26 年 5 月	第 49 回日本理学療法学術大会（横浜）	脳性まひ児がより効率的な運動を実施できる短下肢装具の開発するため，リハビリテーション学的知見と工学的知見を融合させた異分野研究に取り組んだ．その結果，脳性まひ児の動作をコンピュータ上で再現できる人間モデルを構築することで，試作したいと考える短下肢装具の設計を容易に考案できるようになった． 本人担当部分：研究計画の立案を行った． 共同発表者：米津亮，草田俊介，中川智皓，新谷篤彦，崎田博之，三木由紀子，瓦井義広，Abbas Abdorahmani，野中紘士，谷口芙紗子，伊藤智博，奥田邦晴

44 小型3軸加速時計を用いた静止立位時の重心動揺評価	-	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（横浜）	面に装着した小型3軸加速度計を用いて静止立位時の身体重心加速度（COGacc）を推定し，3次元動作解析装置で求めたCOGとの比較からその有用性を検討した．その結果，COGとCOGaccの実効値，最大振幅ML成分に有意な差は認められず，非線形解析ではカオス性が確認されたが，AP成分に有意な差が認められCOGacc とCOG で振幅が異なる可能性が示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ解析を行った． 共同発表者：山中悠紀，野中紘士，山本洋之，村上仁之，石井禎基
45 室内有酸素運動における映像の効果	-	平成26年9月	第33回日本臨床運動療法学会学術集会（大阪）	トレッドミルを用いた屋内有酸素運動中の「映像視聴」が及ぼす身体への影響について検討した．24名の健常女子大学生を映像視聴「あり」群と「なし」群の２群に割り付けトレドミル歩行を行い，疲労指標や呼吸代謝指標，換気能力指標を測定した．身体的疲労感と精神的疲労感はともに2群間で有意な差は認められなかった．一方でVO2,METS,EEについては，いずれも「あり」群が「なし」群に比べ有意に高い値を示した．本研究結果から，運動中の映像視聴は映像「なし」での運動と変わらぬ疲労感で効率の良い運動が可能となることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案し，生理学的視点から結果を解釈し，発表内容の検討を行った． 共同発表者：小西隆幸，杉山友香，谷口結子，藤井愛美，野中紘士，伊藤健一
46 エアマットレスは臥床時の「換気」を制限するか－健常者による基礎的研究	-	平成26年10月	第24回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（奈良）	健常者を対象に，エアマットレスが臥床中の呼吸機能に与える影響を明らかにした．対象者にはエアマットレスと標準マットレス上にて臥位を取らせ，一回換気量，呼吸数などの呼吸機能を測定し比較した．エアマットレス上臥位と標準マットレス上臥位の間で呼吸機能に有意差は認められなかった．胸郭のコンプライアンスの良い者についてはエアマットレスを使用しても，呼吸機能に変化を及ぼさないことが明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った． 共同発表者：井上貴裕，伊藤健一，野中紘士

47 各種植物レクチンのマウス脾細胞を使用したマイトジェン活性と NK 活性	–	平成 27 年 5 月	日本家政学会第 67 回大会（岩手）	サトイモレクチン，ナタマネレクチン，キントキマメレクチンを生成し，それぞれのレクチンのマイトジェン活性と NK 活性を ConA レクチンと比較した．ConA と比べサトイモレクチン，ナタマメレクチンに強いマイトジェン活性を認めたが，キントキマメレクチンのそれは低かった．4 種類のレクチンの羊赤血球を指標とした凝集活性は，サトイモレクチンが最も弱い結果であったこれらレクチンを加熱した場合には，凝集活性は認められるもののマイトジェン活性が消失したレクチンもあった 一部レクチンには NK 活性も認められ，一部のレクチンは免疫活性化に関与する可能性が考えられた． 本人担当部分：NK 活性の測定を行った． 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士
48 強制呼気筋の強度別筋活動パターンの解明－無作為割付，シングルブラインドによる検討	–	平成 27 年 6 月	第 50 回日本理学療法学術大会（東京）	呼吸リハビリテーションにおける呼吸筋トレーニングを効率良く実施するために，強度別筋活動パターンを検討した．10%PEmax，20%PEmax，30%PEmax の抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋，外腹斜筋の活動量を評価した．3 つの筋のうち，最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし，その活動量は 30%PEmax の負荷であっても 20%MVC 以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは 30%PEmax 程度の負荷が推奨されるが，生理学的な視点でみた場合，その負荷は弱すぎることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った． 共同発表者：大木敦司，松中千明，野中紘士，伊藤健一
49 加熱による各種植物性食品中のレクチンの変性	–	平成 28 年 5 月	日本家政学会第 68 回大会（名古屋）	ボイルした食品からレクチンを精製し，生のレクチンとの比較を試みた．金時マメとサトイモの試料においては，生と加熱した状態では精製にあたってカラム樹脂の種類が異なった．また電気泳動によるバンドの位置から生とは異種のタンパク質に変性している可能性が推測された．また，調理条件のわずかな違いによりレクチンが熱変性していった可能性が示唆された．ブロッコリーレクチンについては，生ではマウス血球で全く活性が検出されなかったが，加熱により HA 活性を示し，その分子量は 200 万付近の高分子になっていた． 本人担当部分：電気泳動による測定を担当した． 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士

50 マスクを用いたスパイロメトリの妥当性と再現性	-	平成 28 年 10 月	第 26 回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（横浜）	マスクを用いたスパイロメトリの妥当性と再現性を検証した．健常大学生 48 名の対象者に対し，マウスピース（MS）とマスク（FS）を用いたスパイロメトリを実施した．計測項目は肺活量，一回換気量，最大吸気量，1 秒量，1 秒率である．今回計測した全ての項目において MS と FS とで高い相関が認められた．同様に全ての項目の 1 回目データ と 2 回目データとで高い級内相関が認められた．本研究結果より，スパイロメトリの際にマウスピースの代わりにマスクを用いることが可能であることが明らかとなった． 本人担当部分：結果解析および発表内容の検討を行った． 共同発表者：伊藤健一，野中紘士，武田匠平，西川剛史，奥田みゆき
51 加熱調理したキントキマメレクチンのマウス細胞への影響	-	平成 29 年 5 月	一般社団法人日本家政学会第69回大会(奈良)	本研究は，加熱したキントキマメに含有されるレクチンの生体への影響を検討することを目的とした．加熱試料から得られたレクチンは，画分ごとに異なった阻害糖を示し，この糖は生試料から生成されたレクチンとは異種であった．生レクチンの耐酵素性は認められたが，加熱試料の画分ごとの耐性は異なった．生レクチンは B16 細胞に対する成長阻害を示したが，同濃度で細胞に添加した加熱レクチンは増殖作用を示した． 本人担当部分：B16 細胞の成長阻害効果の測定および結果の解析を行った． 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士，森秀治，豊村隆男，渡邊政博，中田理恵子
52 ラット高齢期低強度運動による末梢神経の修復・再生に対する促進効果 -血清と末梢神経組織の脳由来神経栄養因子（BDNF）・BDNF 受容体（NTRK2）発現量解析に着目して	-	平成 30 年 3 月	第 19 回日本健康支援学会年次学術大会（京都）	本研究では，高齢ラットに継続的な低強度運動を実施し，血清と末梢神経組織の BDNF および NTRK2 発現量解析により血中から末梢神経組織への輸送が生じているかを検討した．また，末梢神経組織の BDNF および NTRK2 量が増加した場合，有髄線維の修復促進作用によって有髄線維の形態が改善するか組織学的に検討した．その結果、高齢ラットの 2 週間の低強度運動実施から，血中 BDNF と NTRK2 の一部は末梢神経組織に輸送されることが明らかとなった．また，末梢神経組織の BDNF と NTRK2 の増加によりシュワン細胞と軸索の修復シグナル伝達が促進され，有髄線維の形態を改善させることが考えられた． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：崎田正博，村上慎一郎，村田伸，野中紘士，栗山みちる，小山梨穂，斉藤彩夏，中田明里，齊藤貴文，磯部航，熊谷秋三

53 女性高齢者の浮き趾と身体機能との関係	-	平成 30 年 3 月	第 19 回日本健康支援学会年次学術大会（京都）	本研究は，足底圧分布測定器を用いて浮き趾の有無を判定し，上下肢筋力，全身柔軟性，立位バランス，歩行などの身体機能と浮き趾との関連を検討した．体力測定会に参加した 65 歳以上の女性高齢者 199 名を対象に浮き趾の有無，握力，足趾把持力，大腿四頭筋力，長座体前屈距離，開眼片脚立位時間，30 秒椅子立ち上がりテスト(CS-30)，Timed Up & Go Test(TUG)，5m最速歩行時間(5MWT)を測定した．その結果，浮き趾がある女性高齢者は足趾把持力が有意に低下したが，歩行などの身体機能との関連は認められなかった．また，浮き趾群では非浮き趾群に比べ柔軟性が低下し，身長が低い結果となり，高齢者特有の姿勢異常が関与している可能性が予測された． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，内藤紘一，安彦鉄平，白岩加代子，野中紘士，堀江淳
54 地域在住高齢者におけるプレサルコペニアの身体・認知・心理機能特性	-	平成 30 年 3 月	第 19 回日本健康支援学会年次学術大会（京都）	本研究は、地域在住の女性高齢者を対象に、正常な筋肉量を有する高齢者と比較することで、筋肉量低下を生じたプレサルコペニア高齢者の身体・認知・心理機能の特性を明らかにすることを目的とした。対象とした 199 名の女性高齢者のうち、正常筋肉量群は 142 名（71.4%）、プレサルコペニア群が 49 名（24.6%）であった。サルコペニアの判定項目および身体機能の比較では、プレサルコペニア群で SMI（$p<0.01$）、握力（$p<0.01$）、膝伸展筋力（$p<0.01$）、上体起こし（$p<0.01$）は有意に低値を示した。一方、通常歩行速度、最速歩行速度、長座体前屈距離、開眼片足立ち時間、CS-30、TUG においては、両群間に有意な差を認めなかった。また、認知機能および心理機能においても、すべての項目で両群間に有意な差を認めなかった。本研究結果より、サルコペニアの予防には、高齢者の早期の筋力低下を把握することは重要であり、筋肉量の測定がその重要な指標となる可能性が示された。 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：森耕平，村田伸，白岩加代子，安彦鉄平，岩瀬弘明，内藤紘一，野中紘士，中野英樹，堀江淳

56 加熱調理したサトイモレクチンが免疫細胞へ与える影響	-	平成 31 年 5 月	一般社団法人日本家政学会第71回大会(徳島)	本研究では，生及び加熱したサトイモから精製した糖阻害，酵素耐性，さらには，生体に与える影響を免疫に関する遺伝子を指標に検討した．その結果，加熱試料から得られたれクチン（加熱レクチン）の阻害糖の種類は，活性のある文革では同一種類の糖であったが，その阻害濃度は分画ごとに異なった．また，生試料から精製されたレクチン（生レクチン）と加熱レクチンとは阻害糖の種類は若干異なった．また，生レクチンの耐酵素性は認められたが，加熱試料のクロマトグラフィー分画ごとのその耐性は異なった．さらに，マウス腹腔マクロファージを生レクチン，および加熱レクチンで処理した結果，LPS 誘導による炎症反応が抑制されることが明らかとなった． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士，森秀治，豊村隆男，渡邊正博，中田理恵子
57 低学年の児童における運動イメージ想起能力と身体特性および運動能力との関連	-	令和 2 年 3 月	第 21 回日本健康支援学会年次学術大会（那覇）	本研究は，低学年の児童を対象に，運動イメージ想起能力が良好な児童と不良な児童の身体特性および運動能力を比較し，運動イメージ想起能力の運動能力への関与について検討した．その結果，メンタルローテーション課題の正答率は全体 57.4±24.1%（174 名），良好群 89.6±7.6%（50 名），不良群 24.1±7.4%（43 名）であった．不良群と比較して良好群では握力，上体起こし回数，体支持時間，立ち幅跳び距離が有意に高い値であり，両足飛び越し時間が有意に低い値であった．一方，月齢，身長，体重，ローレル指数，性別，骨格筋量，長座体前屈距離に有意差は認められなかった．本研究結果より，低学年では運動イメージ想起能力の高い児童は，低い児童と比較して運動体力および運動技能が高いことが示された．これらの結果から，運動イメージ想起能力は子どもの運動能力に影響する因子であることが示された． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：安彦鉄平，大野真悠，村田伸，兒玉隆之，甲斐義浩，宮﨑純弥，宮地諒，野中紘士，久保温子，満丸望，田中真一

58 地域在住高齢者における歩行速度とヘルスリテラシーの関連	-	令和２年３月	第 21 回日本健康支援学会年次学術大会（那覇）	本研究は，地域在住高齢者の歩行速度とヘルスリテラシー，年齢や身体機能との関連を検証することを目的に行った．歩行速度で２群に分けた結果，1.3m/sec 以上群は 206 名，1.3m/sec 未満群は 49 名であった。有意差を認めた指標は，年齢，身長，教育歴，CCHL，握力，体重比膝伸展筋力，足趾把持力，長座体前屈，片足立ち保持時間，CS-30 であった．これらを独立変数，歩行速度を従属変数とし，ロジスティック回帰分析を実施した結果，歩行速度に影響する要因として，年齢（OR:0.940，95%CI：0.884-1.000），身長（OR：1.055，95%CI：1.004-1.109），CCHL（OR：1.174，95%CI：1.025-1.344），CS-30（OR：1.151，95%CI：1.060-1.250）が抽出され，判別的中率は 83.5％であった．歩行速度に影響する要因に年齢，身長，CCHL，CS-30 が抽出された．歩行速度に年齢や身長，身体機能だけでなく，ヘルスリテラシーが独立して影響することが示唆された． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：阿波邦彦，村田伸，岩瀬弘明，白岩加代子，安彦鉄平，合田明生，中野英樹，野中紘士，堀江淳
59 加熱した白花豆からのレクチンの精製とその性質	-	令和２年５月	日本家政学会第 72 回大会（高崎）	本研究では加熱後の白花豆からレクチンを精製し，その生物学的な性質を特にレクチンの機能性に着目して研究した．豆を乾熱と湿熱の条件で加熱した後，含有されるレクチンをマウス赤血球凝集活性を指標にしてアフィニティーカラムにて精製した．マウス脾細胞を使用してマイトジェン活性を，さらにマウス B16 メラノーマ細胞を使用して細胞増殖抑制効果を測定した． 白花豆に含有されているレクチンは，湿熱及び乾熱の双方の条件でも加熱時間に関わらず失活は認められなかった．生と加熱を施した豆からそれぞれ同一のアフィニティーカラムクロマトでレクチンを精製した結果，溶出状態に差が認められた．この結果は熱処理により何等かの構造変化がタンパク質であるレクチンに起こったことを示唆している．金時豆レクチンに認められた B16 メラノーマ細胞に対する増殖抑制作用が，同様に生の白花豆レクチンにも認められた． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士，中田理恵子

60 地域在住高齢者における主観的認知機能低下とヘルスリテラシーの関連	-	令和2年10月	日本ヘルスプロモーション理学療法学会第10回学術集会（京都）	本研究の目的は，認知機能低下のない地域在住高齢者499名を対象に，主観的認知機能低下（Subjective cognitive decline：SCD）とヘルスリテラシーの関連を明らかにすることである．測定項目は，SCD（Kihon check list-cognitive function：KCL-CF），ヘルスリテラシー（Communicative and Critical Health Literacy），認知機能（Mini Mental State Examination），注意機能（Trail Making Test）抑うつ（5-item version of the Geriatric Depression Scale）とし，年齢と教育歴を聴取した．KCL-CF 1点以上をSCDあり（184名），0点をSCDなし（315名）とした．群間比較の結果，ヘルスリテラシー，認知機能，抑うつ，年齢，教育歴に有意差が認められた。続いてSCDの有無を従属変数，有意な群間差があった項目を説明変数としたロジスティック回帰分析（強制投入法）を行った結果，ヘルスリテラシー，抑うつ，年齢が有意な説明変数であった．この結果から，地域在住高齢者におけるSCD発症には，加齢，抑うつ症状の他に，ヘルスリテラシーの低さが関連することが示唆された．ヘルスリテラシーの向上がSCD発症予防，ひいては認知機能低下予防につながる可能性が考えられる． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：合田明生，村田伸，白岩加代子，中野英樹，安彦鉄平，野中紘士，岩瀬弘明，阿波邦彦，堀江淳

61 加熱調理したサトイモからのレクチンの細胞に与える影響	-	令和3年5月	日本家政学会第 73 回大会（神戸）	レクチンは動植物界に広く分布する(糖)タンパク質である．レクチンに糖を認識する特異的な性質があるため，ガン細胞を認識し，ガン細胞を特異的にアポトーシスに導くことも知られている．生の試料から得られたレクチンの研究はされているが，本研究では，調理した状態で得たサトイモレクチンがガン細胞や，免疫細胞に与える影響について検討した．冷凍サトイモを一定時間加熱後，カラムクロマトグフィーにより赤血球凝集活性を示す画分を採集し，凍結乾燥し試料とした．対照として生のサトイモからもレクチンを精製し，加熱後の試料から採取した加熱後レクチンと比較した．細胞はガン細胞（マウスメラノーマ細胞，LM8 細胞，Hela 細胞）を使用して増殖抑制作用を測定した．マウス腹腔内からマクロファージを採取し，炎症性サイトカイン発現量から免疫賦活作用を検討した．サトイモレクチンは，無加熱と加熱試料ともに，マウスメラノーマ細胞には特異性を示さず，LM8 と Hela 細胞に有意に増殖抑制を示す画分があった．マウスマクファージを使用して免疫賦活作用を測定した結果，粗抽出レクチンと精製レクチン双方で，生イモ，加熱イモ双方とも共通に IL-6，IL-1βなどのサイトカインを有意に低下させた．加熱した状態のイモに含まれるレクチンが，生活習慣病予防に有効に作用する結果が示唆された． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：畦五月，野中紘士，中田理恵子
62 ヒト皮膚由来線維芽細胞における温度の違いが細胞増殖に与える影響	-	令和3年10月	日本物理療法学会（WEB）	高齢者は低体温であり、皮膚温も低めである。しかし、培養細胞の環境は37℃で設定されているため、高齢者の体温を反映されていないと考えられる。そのため、ヒト皮膚由来線維芽細胞を温度環境の違う状況で培養し増殖を確認した。その結果、コントロール群に比べ39℃で有意に増殖し、31・33・35℃で有意に増殖が抑制された。これらの結果から体温低下は創傷治癒を抑制する影響があり、皮膚温の管理が創傷治癒を高める可能性が考えられた。 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：吉川義之、野中紘士、滝本幸治、杉元雅晴、前重伯壮、植村弥希子

63 近赤外線照射はヒト皮膚由来線維芽細胞増殖に影響を及ぼさない	-	令和４年２月	日本物理療法研究会（WEB）	近赤外線照射療法は日本褥瘡学会ガイドラインにおいて推奨されている治療方法であるため、創傷治癒機序を検証するために行った研究である。その結果、近赤外線照射による線維芽細胞の細胞増殖はみられなかったため、他の因子が治癒を促進していることが示唆された。もしくは波長や強度による違いが示唆された。本研究結果からは創傷治癒機序を解明できなかったため、継続した研究の必要性が示唆された。 担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共同演者：吉川義之、野中紘士
64 生及び加熱処理した白花豆からのレクチンの分画とガン細胞への影響	-	令和４年５月	日本家政学会第 73 回大会（佐賀）	本研究では，加熱した白花豆からレクチンを含む画分を分画し，その機能性をガン細胞増殖抑制作用を指標に評価することを目的とした．北海道産の白花豆を用い，加熱条件を湿式加熱と乾式加熱の 2 本立てとし，水抽出により試料液を得た．赤血球凝集活性はマウス赤血球を用いて測定した．細胞増殖抑制活性にはマウス B16 メラノーマ細胞，ヒト子宮ガン Hela 細胞，ヒト肝臓ガン HepG2 細胞を使用した．豆の加熱の有無，あるいは加熱条件の相違による凝集活性及びガン細胞の増殖抑制作用を MTT 法で検討した．100℃，60 分加熱で両方の処理豆中に凝集活性は存在したため，両方の処理豆からアフィニティークロマトグラフィーによりレクチンを分画した．三種の細胞に対して，生豆からと加熱処理豆からの分画画分双方において，有意に抑制活性が存在した細胞もみられた，本結果は，レクチンを含有する加熱豆を食用とした場合，食薬として抗ガン作用を示す可能性が示唆された． 担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共同演者：畦五月，野中紘士，中田理恵子

65 培養線維芽細胞における電気刺激が増殖に与える影響 :	-	令和４年８月	第 31 回奈良県理学療法士学会（奈良）	本研究では臨床で褥瘡の治癒を促進している電気刺激条件（直流パルス電流刺激，強度 200μA，周波数 2Hz，電流時間率 50%）を用いた培養細胞実験を実施し，細胞増殖に及ぼす影響を確認することを目的とした．細胞培養プレート 6well にヒト皮膚由来線維芽細胞を播種し 10%牛血清（FBS）を含む Dulbecco Modified Eagle 培地（DMEM）で培養し，播種の 24h 後に 1%FBS および 10%FBS に培地交換を実施した。その後、電流刺激を 1 時間実施した．細胞数の測定は播種 72 時間後に測定した。細胞数は、10%FBS の培地ではコントロール群が(17.6±1.1)×104 cells/well，電気刺激群が(12.5±0.4)×104 cells/well であり，細胞数はコントロール群で有意に多かった（p<0.05）．1%FBS の培地では、コントロール群が(10.4±0.2)×104 cells/well、電気刺激群が(10.2±0.2)×104 cells/well であり，有意差は認められなかった．これらのことから，直流パルス電流刺激、強度 200μA、周波数 2Hz，電流時間率 50%の電気刺激は細胞増殖を促進せず，細胞増殖を抑制することが示唆された． 担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共同演者：吉川義之，野中紘士

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年3月31日

氏名　福原啓太

研究分野	研究内容のキーワード
精神科リハビリテーション 精神医学 心理学	精神科リハビリテーション　社会的認知　感情 障害者就労支援　統合失調症

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1)作業療法士国家試験対策として自身の勉強方法の提示	平成23年5月16日	国家試験受験生である大阪府立大学総合リハビリテーション学部の4年生を対象に国家試験対策の講義をティーチングアシスタントとして実施した．国家試験の効率的な勉強方法を，実施者が実際に使用したテキストや教科書，その使い方などを伝達した．具体的には，有名参考書を2回解き，その際，設問毎に考え得る周辺知識をそのテキストに書き込む．1つの情報を他の類似する情報と紐づけることにより，知識の増大化を図り，自身で作る国家試験対策用の参考書を持つように促した．最後に，国家試験対策用のPC問題集で反復的に問題を解き，自身の苦手領域を把握し対策を取るように促した．その年の国家試験合格率は94.4％であった。
2)プレゼンテーションの導入	平成27年11月4日・11日 平成28年11月2日・9日 平成29年11月1日・8日	大阪府立大学地域保健学域の学部生を対象にティーチングアシスタントとして，「精神医学Ⅱ」の科目内で「統合失調症の社会的認知の障害と支援の方策」という題で合計2日間講義を実施した．対象は2年生である．プレゼンテーション（Power Pointの使用）により，授業を効率的に実施することができた．学生は，準備されたプレゼンテーション資料を見ながら，必要に応じて，講義実施者の口頭説明をそれに書きこむことができ，確実に授業内容を把握することができた．また，プレゼンテーションでの提示とその資料配布により，学生の集中力低下による授業理解の遅れを是正に努めた．
3)臨床的視点の強化を目的とした自験例の提示	平成27年11月4日・11日 平成28年11月2日・9日 平成29年11月1日・8日	大阪府立大学地域保健学域の学部生を対象にティーチングアシスタントとして，「精神医学Ⅱ」の科目内で「統合失調症の社会的認知の障害と支援の方策」という題で合計2日間講義を実施した．対象は2年生である．講義内で教科書的な定義や知識の理解を促すだけでは，臨床経験がほぼ皆無の学生にとって想像や理解が困難となる．そのため，できるだけ，詳細に自験例を提示し，学生に覚えてもらいたい知識を実際の患者に結びつけて理解できるように工夫している．自験例は症例レベルから臨床研究レベルまで幅広く提示している．

事項	年月日	概　　要
4)学外，臨床現場での実践的な臨床指導・教育の実践	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として大阪府立大学学部生を対象に臨床教育を実施している．これまでに，臨床講師として4年生2名，1年生4名を教育指導した。4年生には，特定の患者をケースとして持たせ，6週間評価・治療方法を教育・指導した．1年生には2日間の実習で，主に精神科患者との交流を促した．教科書からの勉強だけでは理解し得ない，生身の患者を前にして実際の臨床現場を体感してもらい，普段の患者の様子を観察・評価・治療の一連，または一部を経験できるよう促した．
5)医療分野における社会人としてのマナー教育	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として大阪府立大学学部生を対象に臨床教育を実施している．これまでに，臨床講師として4年生2名（各6週間），1年生4名（各2日間）を教育指導した。臨床現場における社会人として，患者への対応，職員への対応を教育した．学生には，「常に明るく」「笑顔で接する」「元気に挨拶」「対象者を敬う」といった基本的な接遇・マナーを具体的に伝え徹底させた．またそれが患者にとって安心につながる支援になるということも教育した．
6)臨床教育に沿った医学文献を学生に提供し，要約文・感想文を書かせることによる臨床と研究を架橋する能力の指導	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．その際，臨床現場で実際に起こる問題や疑問に対して，学術論文や著書を提供し，それを読ませ課題として要約文・感想文を提出させた．これは，臨床現場にて疑問が生じた際，迅速に適切な文献をレビューし臨床疑問を解決する能力を育むために実施した．その際，臨床疑問と提供した文献の趣旨が学生の中で一致するように具体的に「文献を読んで〇〇について述べよ」と課題を提示し指導した．
7)自己の臨床研究・症例報告の自験例を学生が模倣できるように指導	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．その際，臨床現場で実際に起こる患者の問題や疑問において，臨床講師の臨床研究・症例報告の自験例をまとめた文献とその実際の患者を提示した．それにより学生が，より臨床的で実践的な技術を磨くことができるよう，また臨床講師の技術を他の患者でも模倣できるよう指導した．
8)学外，病院外において，患者の生活活動範囲でのフィールドワークの導入	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．臨床教育は病院の精神科デイケア内で実施するため，患者の実生活を垣間見ることができない．そのため，積極的に，患者と学生を病院外に連れ出し，学生に患者の社会生活の実際を観察させた．例えば，患者の生活範囲や職業訓練所への順路に患者，学生，臨床講師の3者で出向き，患者の様子を観察させた．このフィールドワーク導入により，学生に精神科患者の病院外での生活の一部を把握させた。

事項	年月日	概　　要
9)他職種連携・チーム医療の実践的指導	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．臨床教育の場は病院の精神科デイケアであったため，他職種との連携が重要である．学生には，他職種の職能や実務について説明し，各職種と必要に応じた関わり方が持てるように場面設定した．具体的には，患者の情報を作業療法士以外の他職種から得るために，学生には質問事項をまとめさせ，目的となる他職種職員に学生の質問に答えてもらう時間を作ってもらった．それにより，学生が他職種連携の実践的経験を得ることができた．
10)レポート課題提出における電子媒体の利用	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．学生のレポート課題提出において，電子媒体（Word）の提出を試みた．臨床実習では，通常レポートの書き直しが頻回に起きるため，Wordでの課題提出と添削後の返却により，時間と紙代費用削減に成功した．時間的削減により，効率化が進むため，結果的に，より情報量の多い教育・指導を学生に提供することができた．また学生は紙の量が増えずにすむため，情報の整理を容易にすることができた．
11)症例報告会の実施	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．学生には，6週間の症例検討から得られた臨床的経験を文書化し適切な症例報告とその報告書作成をできるようにするため，また学生レベルに留まらず臨床家としても一定レベルが確保された症例報告を実施するため，質の高い症例報告となるように教育・指導した．具体的には，患者の評価において質的評価・量的評価の重要性を説き，主観的・客観的の両側面から報告できるように教育した．
12)学生による臨床講師への指導に関する評価の活用	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として大阪府立大学学部生を対象に臨床教育を実施している．これまでに，臨床講師として4年生2名，1年生4名を教育指導した． 全ての学生に，臨床実習終了後にお礼状とは別に臨床講師宛に教育方針・方法の感想を用意した書面にて記載してもらった．これにより，臨床講師は自己の教育方法を振り返ることができ，かつ，次期学生教育に役立てることができた．具体的な評価として「全ての疑問に答えてくれてありがたかった」とのポジティブ意見と「もう少し時間をかけて指導して欲しかった」などのネガティブな意見があった．これに対してはその都度教育方針の訂正ができている．
13)授業外早期体験講義の実施	令和1年6月14日	単位外（授業外）にて、奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻学部1年生に対して、「精神科作業療法の実践」について1時間講義を実施した。学部1年生は、精神医学領域の作業療法を学ぶ経験がなく、その予備知識もない。精神科作業療法に関して学ぶのは2年生前期である。また精神医学領域という特性上、学部生にはイメージしにくい領域である。そのため、一症例の紹介を通して、精神科における作業療法の実践を早期体験講義形式で伝達した。

事項	年月日	概　　要
14)新型コロナウイルス禍に対応した遠隔講義と対面講義のハイブリット授業の展開	令和2年4月 ～ 令和3年9月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の2年生を対象に、作業療法評価学Ⅱ（精神）、作業療法評価学演習Ⅱ（精神）において、各15回（合計30回）の遠隔講義を実施した。ZOOMとGoogleClassroomを駆使し、学生に最大限不利益が生じないように、レジュメの配布、レジュメと表示資料の対応などを考慮した。さらに、できる限りスムーズな学習がはかれるように、数回の対面授業を実施した。
15)eラーニングを用いた授業展開	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の3年生を対象に、医学映像教育センターが提供しているスマコクforPT/OTというeラーニングサービスを使用して授業を展開した。eラーニングによる国試対策により、平常の授業と国家試験問題を結びつけ、理解促進を図った。
16)eラーニングを用いた国家試験対策の展開	令和2年2月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科では国家試験対策を1年次生より導入している。医学映像教育センターが提供しているスマコクforPT/OTというeラーニングサービスを使用して、2月に複数回にわたり国家試験問題を1・2年生学部生に触れさせ、その後、確認テストを実施している。
17)医療現場における各主義同士の模擬的討論の実践	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の2年生を対象に、作業療法評価学演習Ⅱ（精神）において、各種主義やモデルの使用を各学生に割り振り、自分自身の主張を通しながらディスカッションをすることで、一つの主義に固執することのデメリットの理解を体験する授業を展開した。
18)授業内容展開のためのeラーニングの展開	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の2年生を対象に、作業療法評価学Ⅱ（精神）の授業科目において授業内容・配布資料・教科書に沿って、適切に迅速に授業の復習ができるようにGoogleClassroomとGoogleFormsを使用しオリジナルの復習問題を作成した。設問は資料を確認しながら解くように指示し、何度も繰り返し解答できるように設定した。全問正解または規定の点数以上がとれると課題達成となるようにしたため、学生は意欲的に効率よく学習することが可能となった。成果としては全学生が9割以上が繰り返し解答し満点をとるまで実施した。
19)グループ模擬症例検討の実施	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の2年生を対象に、作業療法評価学Ⅱ（精神）の授業科目において模擬症例を提示し、4～5人一組の学生グループに患者評価について検討をしてもらう授業を展開した。各学生が自身の意見を言い合い相互の主張を理解する機会を提供した。
20)授業外相談の個別対応(精神科身体拘束について)	令和3年4月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の作業療法評価学Ⅱ（精神）受講学生（2年生）個別対応。ある学生がネット記事（精神障害者の身体拘束が日本で多いことについて）に興味を示し、教員の意見が聞きたいと問い合わせがあった。学生が日常で精神科領域に触れる機会が少ないことからこの問い合わせは学生にとって貴重な学習機会と考え、応じた。授業時間外で日本の精神科と諸外国の精神科を対比しながら日本の身体拘束が多い理由を解説しながらディスカッションを交え学生の興味を引き出し理解を深める機会を提供した。

事項	年月日	概　　要
21)社会生活技能訓練(SST)の実技演習	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の2年生を対象に、精神障害作業療法学Ⅰ（総論）の授業科目において精神科作業療法の治療法の1つにあげられるSSTを実演した。教員が作業療法士（治療者）役に学生を患者役にみたて、学生の実際の困りごとに対する対処方法を習得するように実践的な演習を行った。教員のモデリング学習を経て次の段階として学生にも治療者役をしてもらいさらなる学習を深めた。
22)認知矯正療法(NEAR)の実技演習	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の3年生を対象に、精神障害作業療法学Ⅰ（総論）の授業科目において精神科作業療法の治療法の1つにあげられるNEARを実演した。教員が認知矯正療法士役に学生を患者役に見立て、NEARを実践した。PCゲームが認知機能改善の治療方法になることについて実演を通して理解を深める機会を提供した。
23)メタ認知トレーニング(MCT)の実技演習	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の3年生を対象に、精神障害作業療法学Ⅰ（総論）の授業科目において精神科作業療法の治療法の1つにあげられるMCTを実演した。教員が治療者役に学生を患者役に見立て、MCTを実践した。PowerPointスライドを集団で見ながらクイズ形式の治療構成がメタ認知改善の治療方法になることについて実演を通して理解を深める機会を提供した。
24)治療プログラム立案とフィードバック	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の3年生を対象に、精神障害作業療法学Ⅰ（総論）の授業科目において精神科作業療法の治療プログラムについて、対象、方法、効果、リスク管理など全般的な治療プログラム計画を学生に立案させ、それぞれのプログラムについてフィードバックを行った。精神科作業療法において患者の治療を見据えた実践的な演習を行うことで学生の治療計画立案能力向上に資する講義展開ができた。
25)メンタルヘルス・リテラシー教育(学内実習)	令和3年8月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻・作業療法学専攻の1年生を対象に、早期体験実習(コロナ禍による学内実習)において 学生の実習に向けた不安の対処法ならびに療法士として必要とされる自身のメンタルヘルスセルフヘルプの意識づけを目的とした心理学的自習教育を実践した。「自分の不安を知ること」「不安を表現すること」「不安の対処方法を分析すること」の講義と学生間によるディスカッションを通して、自身のメンタルヘルスや不安と向き合いながら臨床・実習に臨めるよう実習教育を行った。
26)検査・測定実習（学内実習）	令和3年8月	作業療法学専攻3年次生対象の検査・測定実習はコロナ禍の影響により学内実習に切り替わった。そのため、学内で学外で学習する内容と同等の教育、学習機会を設けることが必要となり、そのコーディネータとして業務に従事した。5日間の実習を身体障害基礎、脳卒中運動機能、脳卒中高次脳機能、整形外科、身体障碍臨床の5領域に分け各専門の教員や臨床の作業療法士（非常勤講師）に業務を振り分け学生が総合的に検査・測定実習を経験できるよう采配した。

事項	年月日	概　　要
２　作成した教科書，教材 1)講義における配布資料の工夫	平成27年11月 4日・11日 平成28年11月 2日・9日 平成29年11月 1日・8日	大阪府立大学地域保健学域の2年生を対象にティーチングアシスタントとして，「精神医学Ⅱ」の科目内で「統合失調症の社会的認知の障害と支援の方策」という題で合計2日間講義を実施した．その際に使用するレジュメ講義資料としてプレゼンテーション（Power Point）の全スライドを学生に配布している．本講義で解説している領域について，その資料だけでおおよその全体像から細部まで把握できるように，つまりハンドブック的に使用することを想定して作成している．
2)穴埋め式の教材	平成27年11月 4日・11日 平成28年11月 2日・9日 平成29年11月 1日・8日	大阪府立大学地域保健学域の2年生を対象にティーチングアシスタントとして，「精神医学Ⅱ」の科目内で「統合失調症の社会的認知の障害と支援の方策」という題で合計2日間講義を実施した．その際に配布するレジュメ講義資料（教材）は穴埋め式となるように作成している．穴埋め式にすることで，学生が授業に集中して取り組めるように工夫している．また，穴埋め式文章は，受動的な受講スタイルではなく，自ら考える時間を確保することによる能動的な受講スタイルとなるという利点もある．
3）授業オリジナル教材	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の学生の必修科目である2年生前期「作業療法評価学Ⅱ（精神）」、2年生後期「作業療法評価学演習Ⅱ（精神）」、3年生前期「精神障害作業療法学Ⅰ（総論）」、3年生後期「精神障害作業療法学Ⅱ（各論）」の計4科目（合計2年間）は精神科作業療法、精神科リハビリテーションについて、一連の流れの中で学ぶことができるように計画されている。評価、治療、演習、ディスカッション、症例検討、国家試験対策など幅広く学習できるように、してい教科書と連動しながら学習が勧められるように、全てオリジナルのPowerPoint資料を作成し、配布している。
4）科目担当実績「基礎ゼミⅡ」	令和元年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻1年生を対象に、基礎ゼミⅡを展開している。社会人としてのマナー、ビジネスメール、学術論文の選び方、学術論文の読み方、学術論文のまとめ方、学術的発表の指導、など学部1年生が身に付けるべき素養を教育・指導している。講義・演習形式で実施している。（年間15コマ）
5）科目担当実績「作業療法評価学Ⅱ（精神）」	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻2年生を対象に、精神科作業療法の評価学の授業を展開している。精神医学をベースとした精神科特有の作業療法の評価のあり方について、幅広い視点から適宜必要に応じて評価の方法論を選択できるように教育・指導している。主に講義形式で実施している。（年間15コマ）

事項	年月日	概　　要
6）科目担当実績「作業療法評価学演習Ⅱ（精神）」	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻2年生を対象に、精神科作業療法の評価学演習の授業を展開している。精神科作業療法評価学で学んだ知識をベースとした精神科特有の作業療法の評価のあり方について、幅広い視点から適宜必要に応じて評価の方法論を学生が実際に選択したり扱えるように教育・指導している。主に講義・演習形式、事例検討などディスカッションで実施している。（年間15コマ）
7）科目担当実績「精神障害作業療法学Ⅰ（総論）」	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻3年生を対象に、精神科作業療法の治療学の授業を展開している。精神科作業療法評価学・評価学演習で学んだ知識をベースとした精神科特有の作業療法の治療のあり方について、幅広い視点から適宜必要に応じて治療の方法論を学生が実際に選択したり扱えるように教育・指導している。主に講義・演習形式で実施している。（年間15コマ、内完全独立での講義は10コマ）
8）科目担当実績「精神障害作業療法学Ⅱ（各論）」	令和3年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻3年生を対象に、精神科作業療法の治療学演習の授業を展開している。精神科作業療法評価学・評価学演習、治療学で学んだ知識をベースとした精神科特有の作業療法の治療のあり方について、幅広い視点から適宜必要に応じて治療の方法論を学生が実際に選択したり扱えるように教育・指導している。主に講義・演習形式、事例検討などディスカッションで実施、そして学生自身が治療方法について検討し実演できるように指導している。（年間15コマ）
9）科目担当実績「作業療法特論Ⅱ(精神)」	令和3年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻3年生を対象に、精神科作業療法の評価学・評価学演習、治療学・治療学演習で学んだ知識をベースに、4年次の臨床実習に向けた知識の拡充を図る講義を展開している。臨床で必要なトピックスを提示したり、良質な国家試験問題を通して臨床実習や臨床現場の実際について教育・指導している。（年間8コマ）
10）科目担当実績「作業療法臨床実習Ⅳ特別講義」	令和2年5月 ～ 令和2年6月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類作業療法学専攻の学生4年生に対して実施。新型コロナウイルス感染拡大の影響で臨床実習が学内に切り替わったことにより、臨床経験者として「臨床で必要なインテーク面接時の心得」を教育指導した。その際、講師（福原）は患者役を演じ、面接演習を実施し適宜学生に面接の方法について解説指導した。 実施コマ数：4コマ
11）科目担当実績「精神障害作業療法学Ⅱ」	令和2年7月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類作業療法学専攻の学生3年生に対し臨床経験者として「臨床で必要なインテーク面接時の心得」を教育指導した。その際、講師（福原）は患者役を演じ、面接演習を実施し適宜学生に面接の方法について解説指導した。 実施コマ数：2コマ

事項	年月日	概　　要
12）科目担当実績「作業療法ゼミナールⅡ」	令和2年12月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類作業療法学専攻の学生に対し「作業療法士の精神科におけるキャリア形成」という題材で、作業療法士として精神科領域の道を選択した場合におけるキャリアの積み上げ方や精神科領域のなかでも細分化する専門性について解説した。 実施コマ数：2コマ
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1)大阪府立大学教員（助教）による評価	平成27年 6月20日	大阪府立大学地域保健学域助教の教員による推薦で，第49回日本作業療法学会のシンポジウム7精神科作業療法がなすべきこと～作業療法の効果を示すための臨床研究～のシンポジストに選任された.
2)大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科研究科長による評価	平成27年 8月29日	大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科研究科長による推薦により、第3回全国作業療法学系大学院ゼミナール in Osakaにおいて，研究報告会第2座の座長に選任された．4人の研究者の発表（内1名は欠席）について座長としての責務を果たした.
3)大阪府立大学教員（教授）による評価	平成27年11月 4日・11日 平成28年11月 2日・9日 平成29年11月 1日・8日	大阪府立大学地域保健学域教授の教員による推薦で，年に2日間，講義を実施している．ティーチングアシスタントとしての推薦であるが，2コマ分を完全に1人で授業を実施している．内容は，自身の研究領域である「統合失調症の社会的認知機能の障害と支援の方策」がテーマである．本講義では学生に馴染みのない精神科患者について最新の知見を交え，詳細に病態について教育している．最初の推薦以来，3年連続で推薦して頂いている.
4)大阪府立大学学長による評価	平成28年6月 ～ 平成29年3月 平成29年5月 ～ 平成30年3月 平成30年8月1日 ～ 平成31年3月31日	大阪府立大学学長より大阪府立大学地域保健学域臨床講師の称号を左記の期間付与されている．称号の付与には臨床経験，大阪府立大学学部生への臨床実習指導経験と履歴書が考慮されている.

事項	年月日	概　　要
5)大学設置・学校法人審査議会の教員組織審査結果	平成31年4月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション作業療法学専攻設置時における福原啓太の職位は「講師」として認定された。 「作業療法評価学Ⅱ（精神）」、 「作業療法評価学演習Ⅱ（精神）」、 「精神障害作業療法学Ⅰ(総論)」、 「精神障害作業療法学Ⅱ(各論)」、 「作業療法特論Ⅱ(精神)」、 「客観的臨床能力演習（作業療法）」、 「チーム医療論演習」、 「作業療法卒業研究」、「基礎ゼミⅡ」、 「早期体験実習（作業療法）」、「地域作業療法実習」、 「検査・測定実習」、「作業療法評価実習」、 「総合臨床実習Ⅰ（作業療法）」、 「総合臨床実習Ⅱ（作業療法）」
6)学生による授業評価アンケートの結果	令和3年11月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻対象の講義・演習・実習の学生による授業アンケート結果は以下の通りである。 ・作業療法評価学Ⅱ（精神）：「授業のわかりやすさ」の平均点が4.29点／5点満点、「教員の熱心さ」の平均点は4.79点／5点満点、「満足度」の平均点は4.5点／5点満点 ・作業療法評価学演習Ⅱ（精神）：「説明のわかりやすさ」の平均点は4.2点／5点満点、「教員の話し方」の平均点は4.47点／5点満点、「資料のわかりやすさ」の平均点は4.2点／5点満点 ・精神障害作業療法学Ⅰ（総論）：「授業のわかりやすさ」の平均点が4.6点／5点満点、 「教員の熱心さ」の平均点は5点／5点満点、「満足度」の平均点は4.8点／5点満点 ・精神障害作業療法学Ⅱ（各論）：「説明のわかりやすさ」の平均点は4.8点／5点満点、「教員の話し方」の平均点は5点／5点満点、「資料のわかりやすさ」の平均点は5点／5点満点 ・作業療法特論Ⅱ（精神障害）：「説明のわかりやすさ」の平均点は4.8点／5点満点、「教員の話し方」の平均点は4.8点／5点満点、「資料のわかりやすさ」の平均点は5点／5点満点

事項	年月日	概　　要
４　実務の経験を有する者について特記事項 （実習指導） 1)大学から受け入れた実習生に対する実習指導（作業療法臨床実習など）	平成25年 8月6日～ 平成31年3月	四条畷学園大学リハビリテーション学部の臨床実習指導者として，臨地見学実習ⅠおよびⅡにおいて四条畷学園大学作業療法学専攻学部生11名に対しそれぞれ2日間の臨床指導・教育を実施した．大阪府立大学の臨床実習指導者・臨床講師として，「作業療法臨床実習Ⅰ」および「作業療法臨床実習Ⅳ」において，大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類作業療法学専攻の学生8名に対して，28日間（うち4名は2日間）の臨床指導・教育を実施した． 受け入れに際して，以下のことに留意した． ・実際の精神科の臨床現場（精神科デイケア）において，精神科患者に対する評価・治療についてを，患者との関りを通して指導した． ・患者と関わる経験の乏しい学生に対して，指導者による患者へのコミュニケーション，評価，治療の一連を間近で観察させた． ・必要に応じて指導者・臨床講師の指導のもと学生にそれら一連を実践させた． ・学生を患者の中に放置するのではなく，患者と適切な交流が持てるように，学生と患者が自然に会話を開始できるように会話開始時には指導者が両者をつなぎあわせた． ・事前に担当教員から学生の情報を聞き，特性を踏まえて患者との関りを援助した．例えば，内気な学生には手厚く患者と話ができるようサポートした． ・事前に学生自身から自己PRを聞き，もし，特技があるなら，患者の前で披露させ，患者との関り初めが容易になるようにサポートした． ・他職種連携の経験ができるようにするため，デイケア内の作業療法士以外の職種にも相互に声をかけさせ，さらに，デイケア外の職種（医師，精神保健福祉士，訪問看護師）との関りも持てるように場面を設定した． ・学生の実習中に湧き出た疑問全てに答えられるようにするため，時間の許す限り，学生に対するフィードバックを行った． ・学生が体調不良に陥らぬよう，睡眠時間の確認とその確保，休憩の促しとその都度の課題量の調節を行った． これらにより，通常授業によって得ることのできない実践的教育指導を学生に提供することができた．

事項	年月日	概　　要
（講演依頼） 1)製薬会社からの講演依頼	平成27年 3月14日	ヤンセンファーマ株式会社主催のXeplion Patient Focus Meeting（於ホテル日航大阪）より依頼を受け講演を実施した．演題名は「ゼプリオンに対する当事者評価　デイケアスタッフ（作業療法士）からみた変化～薬物療法と非薬物療法の効果～」とし，2事例を挙げて薬物療法と非薬物療法（作業療法）の相乗的な効果についての講演を実施した． 講演にはPowerPointスライドを用い、薬物療法と非薬物療法（作業療法など）が患者の治療において両輪の関係であるというモデルを提示し、製薬会社職員、聴衆（医師、薬剤師など）に、非薬物療法の重要性について説明した。また、実際の活動中の患者の写真や動画をスライド内で用い、 活動量の変化を視覚的に提示した。その時の、座長（医師）や製薬会社職員からは、患者の活動の変化を引き出したこと、スライドの説得力について好評を得た。
2)北摂四医師会からの講演依頼	平成28年 10月20日	第19回北摂四医師会神経性氏に学研究会（共催：大日本住友製薬株式会社）（於大阪医科大学）より依頼を受け演題発表を実施した．演題名は「精神科デイケアにおける，複数疾患に対するメタ認知トレーニング（MCT）の実践」とし，6名の患者（統合失調症，うつ病，強迫性障害，発達障害）を介入実施前後での比較し検討した結果を報告した．MCTは複数の疾患に対して効果があることが示唆された． 講演はPowerPointスライドを用いて実施した。多職種の聴衆（医師、看護師、臨床心理士、精神保健福祉士、作業療法士など）にわかりやすく伝えるために、患者の客観的データによる変化と一人一人の変化について細かく端的に、メタ認知トレーニングの効果を説明した．
3)学校法人ミスパリ学園　ミス・パリ　エステティック専門学校　大阪校からの講演依頼	令和2年 12月26日	ミス・パリエステティック専門学校より講演依頼を受け、「精神障害・発達障害の実態や対応について」という演題で講演を行った。当該専門学校のみならず、多くの学校教育現場において、精神障害または発達障害の学生あるいはスムーズな学習が困難な学生が在籍している。医学、リハビリテーション学、障害学などに精通していない高等教育現場は多く、適切な対応や合理的配慮の方法に苦慮しているところである。当該専門学校ではそのような事案にいち早く対応できるよう、精神障害、発達障害に精通した本申請者に依頼し、当該専門学校の教員・事務員向けに講演会を実施した。申請者はそれに応えるべく、スムーズな学習が困難な学生に対する対応方法について講演を行った。
（企業内教育） 1)病院内職員の教育・接遇・育成を図るための研修	平成27年 8月12日	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタル教育接遇委員会から講師依頼を受け，全職員対象に「統合失調症の社会的認知機能障害」について講義した．精神科病院内において，統合失調症患者の奇異な行動に対し，しばしば病院職員は理解を示すことができない．それにより患者の病状を適切に解釈することができず，対応に戸惑いが生じてしまう．その様な奇異な行動が出現するメカニズムを社会的認知機能障害の観点から最新の知見を交え解説した．これにより，受講職員の統合失調症患者の行動に対する洞察力を高めることに努め

事項	年月日	概　　要
		めた．
2)病院精神科デイケア職員に対するチーム医療・連携・相互理解を図るための研修	平成29年 2月22日	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタル精神科デイケア内職員向けに，チーム医療・連携・相互理解を高めるための講義を実施した．他職種のそろう精神科デイケアは患者を多面的に支援する利点はあるが，反対に職種とその考え方の違いによる職員間・職種間の不理解がしばしば生じる．それぞれの医療に対する主義が対立するとき，各々に多大なるストレスが生じそれは間接的に患者の不利益につながる可能性がある．そこで，「方法論的自覚と多元主義」というテーマで，各職種や各個人が独自に持つ主義は無意識の間に教育と自己の経験の中で確立されたものであることを説き，自己の主義の方法論やその限界について自覚すること，さらに他職種もまた各々の中で確立されたものであることを共通認識とし，患者の問題に対し，その都度，どの主義が最もその問題に対応し得るかを話し合うことが良い，とされる多元主義の考え方について講義した．その成果として，各職員は自己の方法論について自覚を持ち始め，さらに他職種の方法論に対して興味を持ち始め相互理解が高まった．
3)病院内職員の教育・接遇・育成を図るための研修	平成29年 6月8日	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタル教育接遇委員会から講師依頼を受け，全職員対象に「精神科リハビリテーションにおける作業療法」について講義した．精神科における医療は他職種による関りが多く，職能の相互理解が良好なほど患者に利益をもたらと推測される．そのため，精神科領域で作業療法士が患者に「していること」を知ってもらうことは患者にとっても，他職種にとっても，我々作業療法士にとっても意義がある．しかし，他職種らは作業療法がの目的や効果を適切に説明できる者は少ない．そのため，他職種でもわかりやすいように，身近な例から一般的な解釈，学術的な解釈などあらゆる方面から作業療法について解説・講義をした．これにより，作業療法士への他職種からの理解を高めることに努めた．

事項	年月日	概　　要
５　その他		
1)臨床現場の後輩への学術的指導	平成27年10月	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタルにおいて作業療法士後輩職員に対し，学会での学術発表を行えるように，その全般（執筆・発表）を教育・指導した．※以下の学会発表欄「人と人をつなぐことを目的としたプログラムの有効性―同性集団活動による対人関係の変化―：第20回日本デイケア学会」
2)臨床現場の後輩への学術的指導	平成27年12月	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタルにおいて作業療法士後輩職員に対し，学会での学術発表を行えるように，その全般（執筆・発表）を教育・指導した．※以下の学会発表欄「長期入院患者が街に出た！！～退院促進プログラムの取り組みより～：第23回日本精神障害者リハビリテーション学会高知大会」
3)臨床現場の作業療法士への学術的・臨床的指導	令和3年3月	社会福祉法人天心会小阪病院精神科急性期病棟担当の作業療法士より臨床指導の依頼を受けたため、PowerPointスライドを作成し、精神科作業療法における急性期治療について学術的知見を交えながら臨床指導を行った。
3)臨床現場の作業療法士への学術的指導	令和3年11月	南勢病院の作業療法士より臨床指導の依頼を受けたため、対象患者に対するアプローチの具体的な方策の指示、支援、教育、指導を当該作業療法士に行い、症例報告として学会発表に至るまでの一連を指導した。

事項	年月日	概　　要
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 作業療法士免許（国家資格） 修士（保健学） 博士（保健学） 公認心理師免許（国家資格）		 大阪府立大学 論文題目「統合失調症における心の理論・語用論的能力と社会的行動に対する判断障害の関連」 大阪府立大学 論文題目「慢性期統合失調症患者の非形式言語の理解及び表現能力に関する研究」
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1)作業療法士の臨床歴及び実務歴	平成23年4月 ～ 平成25年3月	医療法人達磨会東加古川病院作業療法室において作業療法臨床業務に従事 平成23年度は急性期病棟および慢性期解放病棟を担当 平成24年度は慢性期閉鎖病棟および認知症病棟を担当 各病棟において、病期・疾患に合わせた精神科作業療法を入院患者に提供。精神科作業療法内容として、創作活動、身体活動、音楽療法、レクレーション活動、映画鑑賞、外出訓練などを実施。 精神疾患の患者で特に長期入院患者は、活動性が乏しく、中には病院内で生涯を過ごす患者もいる。そのような患者に対して、精神科の作業療法士は何ができるのかを常に考えながら業務に従事した。できる限り、精神疾患を抱えながらまた、精神的、身体的、社会的に制限を受けながらもその人らしく前向きに生活ができるように支援をしてきた。
	平成25年4月 ～ 平成31年3月	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタル精神科デイケアにおいて臨床業務に従事 病院運営として禁煙委員会委員長，広報委員会委員長を兼任 平成29年10月より精神科デイケア主任・リハビリテーション科主任として臨床業務・管理業務に従事 精神科デイケア内にて、対象患者に対し、社会的認知機能訓練、神経認知機能訓練、社会技能訓練、創作活動、日常生活訓練、リラクゼーション活動、レクレーション活動、外出訓練などを提供。地域で生活する精神科科患者が自分らしく生きながら、生活の幅、人生の豊かさを感じられるように関りを継続した。 また、主任業務として、リハビリテーション科全体の職員の業務マネジメント、心理的支援、職員・患者の安全配慮、治療行為におけるリスク管理を実施してきた。 委員会活動として、病院広報誌作成、精神科デイケアホームページ作成、敷地内全面禁煙活動の推進、敷地内外の巡回と清掃活動の指揮などを実施。
	令和2年9月 ～ 現在に至る	株式会社ハーティケア　訪問看護ステーションこころ　にて、作業療法士として訪問看護業務に従事している。頻度は週1回 これまで、8名の利用者を担当し、そのうち6名を主担当として従事した。

事項	年月日	概　　要
2)精神科OT研究会の運営	平成24年12月 ～ 現在に至る	精神科領域に勤務する作業療法士が有志で集まり，作業療法士として相互に研鑽するために精神科OT研究会を発足した．立案初期メンバーである．2ヶ月に1回の頻度で研究会の集会を執り行い，メンバーによる講義や症例報告を実施している．平成28年4月1日より運営強化を目的に常任理事を設定し，その中で副理事長に就任し，現在に至る．これまでに臨床に従事する作業療法士に向けて4回講義や症例報告をしている． 平成31年4月より令和2年12月に至るまで理事長に就任した。
3)臨床指導および臨床活動継続の実施	平成31年4月 ～ 令和元年3月	大学教員として大学に勤務する傍ら、週1日程度、前職場である医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタルリハビリテーション科にて臨床指導を行った。精神科一般病棟、精神科急性期病棟、認知症治療病棟、精神科デイ・ケアにて、勤務する作業療法士に臨床指導、教育を行った。また、申請者自身も臨床活動実践を継続した。
（研究員） １）大阪府立大学　客員研究員	平成30年4月 ～ 現在に至る	大阪府立大学大学院　総合リハビリテーション学研究科において、客員研究員に任命されている。客員研究員として大阪府立大学大学院田中寛之研究室に所属し研究を継続している。
（学会活動） 1）第34回大阪府作業療法学会　座長	令和1年12月8日	第34回大阪府作業療法学会の一般演題4において3演題について、座長として学会を取り仕切った。
2）第34回大阪府作業療法学会　運営委員	令和1年12月8日	第34回大阪府作業療法学会の運営委員として、学会運営に従事した。
3）第34回大阪府作業療法学会　当日演題審査員	令和1年12月8日	第34回大阪府作業療法学会において、演題賞を選定する審査員をした。
4)研究助成	平成26年 4月1日 ～ 平成29年 3月31日	大阪府作業療法士会にて「統合失調症セルフエフィカシー研究会」の研究員として年間10万円（3年間で合計30万円）の研究助成を受けた. 研究代表者：小川泰弘 研究員：福原啓太，長池将太，梅田錬 平成26年度：「統合失調症者のセルフエフィカシーに関する文献レビュー」（学会報告として） 「統合失調症者セルフエフィカシー研究会活動報告」（報告書として） 平成27年度：「統合失調症者の就労に関する自己効力感尺度「Work - Related Self - Efficacy Scale」の作成」（学会報告として） 「統合失調症者セルフエフィカシー研究会平成27年度活動報告」（報告書として） 平成28年度：「就労関連自己効力感尺度 Work-related self-efficacy scale WSES日本語版の信頼性・妥当性の検討」（学会報告として） 「表題：精神障害者の就労関連自己効力感尺度日本語版（WSS-J）作成の試み」（報告書兼学術誌短報）

事項	年月日	概　　要
5)研究助成	平成28年 4月1日 ～ 平成31年 3月31日	大阪府作業療法士会にて「生体医工学的指標・生活研究会」の研究代表者として年間10万円（3年間で合計30万円）の研究助成を受けた. 研究代表者：福原啓太 研究員：小川泰弘，森泰祐 平成28年度：「精神疾患患者を対象とした，生体医工学技術を用いた客観的指標の検討」（学会報告として） 「精神科生体医工学的指標・生活研究会平成28年度活動報告」（報告書として） 平成29年度：「精神科生体医工学的指標・生活研究会　H29年度研究報告」（学会報告として） 「精神科生体医工学的指標・生活研究会　平成29年度　活動報告」（報告書として） 平成30年度：「：統合失調症の情動表出能力について～精神科生体医工学的指標・生活研究会　H30年度研究報告～」（学会報告として） 「精神科生体医工学的指標・生活研究会　平成30年度　活動報告」（報告書として）
6)日本学生支援機構理事長からの認定証の授与	平成25年 5月31日	大阪府立大学大学院博士前期課程在学中に第一種奨学金を借り受けしていたが，特に優れた成績を挙げたと認定され，奨学金の返還を一部免除された.
7)大阪府高槻市立図書館との連携	平成25年	これまで，大阪府高槻市の市立図書館では，その貸出可能利用者を高槻市に在住，在勤，在学の者，または高槻市内に入院する患者のみを対象としてきた．そこで，美喜和会オレンジホスピタルと高槻市立阿武山図書館を通して高槻市中央図書館館長と間接的に交渉することにより，高槻市外に在住する精神科デイケア利用患者も図書貸出可能という許可をもらうことができた．これにより，デイケアを利用する高槻市外在住の患者も図書館にて図書と触れ合うことができるようになり，社会生活の幅をひろげることができた.
8)日本学生支援機構理事長からの認定証の授与	平成28年 5月31日	大学院博士後期課程在学中に第一種奨学金を借り受けしていたが，特に優れた成績を挙げたと認定され，奨学金の返還を一部免除された.

事項	年月日	概　　要
9)科学研究費　基盤研究（C）（共同研究者）	平成31年4月 ～ 令和5年3月	研究課題/領域番号：19K11421 認知症高齢者における重症度・居住形態別ADLリハビリテーション戦略の構築 概要：認知症者のADL障害の背景因子として，認知機能障害，行動心理学的症候，身体活動量など様々な要因が指摘されている。先行研究の多くは，交絡因子の調整が不十分であること，重症度に合わせた適切な評価指標が用いられていないこと，など限界を有していた。しかし，重症度に応じた評価指標を導入することによって，ADL障害の背景要因が重症度によって異なることを明らかにできると考えている。本研究では,重症度別の検討に加えて，在宅・入院・入所と居住形態をも層別化してADL障害に関連する要因を明らかにし，得られた知見に基づいて重症度別・居住形態別のADL障害へのリハビリテーション戦略を構築する。 助成額：4,420千円
10)2019年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成	令和元年4月 ～ 令和2年3月	課題名：統合失調症患者のVocal Expression Abnormalitiesにおける障害の同定と精神症状と生活機能との関連に着目して 助成額：347千円
11)2019年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成	令和元年4月 ～ 令和2年3月	課題名：要介護高齢者ケア従事者の健康に関する研究：パイロット調査（共同研究者） 助成額：347千円
12)科学研究費　若手研究（研究代表者）	令和2年4月 ～ 令和5年3月	研究課題/領域番号：20K19122 統合失調症の感情表現障害が対人交流に与える影響の調査および治療技法開発の研究 概要：統合失調症はおおよそ100人に1人が発症し、感情の「理解」と「表現」の障害を含む多彩な症状により社会参加に制限をきたすことがある精神障害である。本患者が、円滑に社会参加、対人交流をするために感情の理解と表現の障害を改善することは重要である。本研究では、主に感情の表現についてとりあつかい、本邦における統合失調症患者の感情表現（音声と表情）における障害特性を明らかにする。また、社会参加に重要である対人交流技能を評価し感情表現能力との関連性を検証する。さらに、感情表現障害に対する治療可能性について確認する。 助成額：4,160千円
13)2020年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成	令和2年4月 ～ 令和3年3月	課題名：精神障害者の雇用継続における促進・阻害要因における実態調査～企業に向けたインタビューによる質的研究～ 助成額：220千円
14)2020年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成	令和2年4月 ～ 令和3年3月	課題名：リハビリテーション学科臨床実習管理センターによる双方向性活用システムの構築　－臨床実習教育の質的向上を目指して－ 助成額：220千円

事項	年月日	概　　要
４　その他 (奈良学園大学　大学内業務)		
1)実習部会【作業】評価／検査測手実習・総合臨床実習	平成31年4月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻の学部生3年生4年生を対象とした、評価／検査測定実習・総合臨床実習について、実習の手引き（要綱）作成、実習資料の作成や実習候補地開拓を行っている。
2)実習ワーキンググループ	平成31年4月 ～ 現在に至る	保健医療学部リハビリテーション学科の１～4年生の学部生を対象にした実習全般における作業を行っている。臨床実習指導者会議における出欠状況を管理している。
3)学生生活部会　国家試験対策	平成31年4月 ～ 現在に至る	学生が受験する理学療法・作業療法国家試験の対策委員として、実働している。内容は国家試験対策用書籍の購入と管理、学生向けガイダンス、保護者向けガイダンス、模擬試験の設定、国家試験対策eラーニングソフト（スマコク）の管理、年度予算の管理をしている。国家試験関連の模擬試験の管理や試験監督を実施している。
4)図書委員	平成31年4月 ～ 現在に至る	教員図書委員として、推薦図書、専攻別推薦図書の管理をしている。
5)保護者懇談会　国家試験対策委員のガイダンス	令和1年6月22日 令和2年6月20日	保護者にむけて、奈良学園大学の学生向け国家試験対策についてのビジョンを説明した。
6)国家試験対策専用ソフト（スマコク）説明会	令和1年6月26日	国家試験対策ソフト（スマコク）を学生が使用できるように教員がソフトの中身を把握することを目的とした説明会に出席した。
7)奈良学園大学オープンキャンパス　ミニ講義担当	令和1年7月13日	次年度の奈良学園大学の入学希望者に向けたオープンキャンパスにて、高校生に向けて「認知機能と生活とリハビリテーションの世界」という題目でミニ講義を実施した。
8)FD・SD委員会主催研修会（シラバス・ハラスメント）出席	令和1年8月28日	シラバス作成についての注意事項、ハラスメントについてのワールドカフェ形式での研修会に出席し、シラバスとハラスメントについての知識を深めた。
9)奈良学園大学　入学試験　面接官　試験官	令和1年9月28日 令和2年1月25日 令和2年3月14日 令和2年10月31日 令和2年11月23日 令和3年2月4日 令和3年9月25日 令和3年11月14日 令和3年12月4日 令和3年12月18日	奈良学園大学入試面接官の実施
10)ハラスメント相談員　就任	令和元年10月 ～ 現在に至る	奈良学園大学のハラスメント相談員に就任し、学生、教職員からのハラスメントの相談窓口を担当することになった。 令和3年より公認心理師国家資格を習得したことによりより専門的な対応が可能となった。

事項	年月日	概　　要
11)奈良学園大学オープンキャンパス　ミニ講義担当	令和元年12月22日	次年度の奈良学園大学の入学希望者に向けたオープンキャンパスにて、高校生に向けて「人の気持ちに寄り添う作業療法」という題目でミニ講義を実施した。
12)高校生対象大学ガイダンス　ミニ講義	令和2年2月15日 令和2年2月19日 令和2年10月15日 令和3年2月17日	高校生向けにリハビリテーション職（理学療法士・作業療法士）の職業について説明をした。
10)高校訪問大学説明	令和2年7月7日	関西大倉高等学校進路指導室担当者に本学リハビリテーション学科の特色について説明した。
11)学部3年次生担任業務	令和3年4月 ～	奈良学園大学作業療法学専攻3年次生の担任業務(副担任)担当。専門科目増加、臨床実習開始、学内演習増加など学部生が作業療法士・社会人になるための意識づけが必要となる業務を実施し、学生の全般的な生活・学習をサポートしている。
12)キャンパス見学会	令和3年7月	高校3年生と保護者一組に対し、キャンパス見学会を実施した。個別対応、作業療法士教育の相談、作業療法士についての説明、キャンパス内施設見学説明を2時間実施した。
13)卒業研究教務部会	令和3年4月 ～ 現在に至る	大学学部教育における卒業研究について取りまとめを行う卒業研究教務部会の担当者として当該業務を実施している。
14)卒業研究　倫理委員	令和3年4月 ～ 現在に至る	学部卒業研究の倫理委員に所属し、当該業務を実施している。
15)評価実習（作業療法）部会	令和3年4月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻学部3年次生後期科目である評価実習のコーディネータとして実習配置や実習内容についての業務を実施している。
16)総合臨床実習（作業療法）部会	令和3年4月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻学部4年次生前期科目である総合実習のコーディネータとして実習配置や実習内容についての業務を実施している。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） なし （学術論文） 1　統合失調症における心の理論・語用論的能力と社会的行動に対する判断障害の関連 （修士論文）	単著		大阪府立大学	近年，統合失調症患者の心の理論能力と共に語用論的言語の理解能力が注目されている．本研究では，地域に住む慢性期統合失調症患者28人と健常者28人を対象に比喩・皮肉理解の能力とToM能力，社会常識テストを実施した．その結果，我が国においても統合失調症患者は語用論的言語の理解能力が障害されていた．また統合失調症患者において，比喩理解能力と基本的な認知機能に関連があり，心の理論の障害や皮肉を文字通りに解釈する傾向は非社会的行動への認識の低下と関連していることが示唆された． A4判　全60頁
2　重度認知症者のための認知機能検査 － ‘Severe Cognitive Impairment Rating Scale’日本語版の臨床的有用性の検討 － （査読付）	共著	平成25年10月	「老年精神医学雑誌」 第24巻第10号 P.1037～P.1046	重度認知症患者にとって既存の認知機能検査は難易度が高く，残存する認知機能を詳細に把握することが困難である．海外では，重度認知症患者の認知機能検査として，Severe Cognitive Impairment Rating Scale (SCIRS)が開発されている．本研究では，SCIRSの日本語版を作成し，臨床的有用性を検討した．その結果，既存の検査では床効果を示した患者に対しても，SCIRSを用いてより詳細に認知機能を判別できた．以上より，日本語版SCIRSは重度認知症者の残存する認知機能を詳細に幅広く測定可能な検査であると考えられた． 共著者：田中寛之，植松正保，永田優馬，福原啓太，内藤泰男，大西久男，西川隆 本人担当部分：認知機能検査の検査者としての実施，データ収集
3　認知症患者における認知機能，ADL，BPSDの関連性 重度認知症患者に着目して （査読付）	共著	平成26年3月	「老年精神医学雑誌」 第25巻第3号 P.316～P.323	認知症患者の認知機能，日常生活活動（ADL），周辺症状（BPSD）の関連性を明らかにするため，94人の入院患者を対象に認知機能検査，ADL検査そしてBPSDの検査を実施した．その結果，入院中の認知症患者において，ADLが高ければ認知機能障害が軽度であり，移動能力が高い程，BPSDが増悪していることが明らかになった．また，重度認知症患者においては，認知機能検査，ADL検査において，いくつかの床効果を示した．そのため，重度認知症患者向けの各検査が必要であると思われた． 共著者：田中寛之，植松正保，小城遼太，永田優馬，福原啓太，内藤泰男，大西久男，西川隆 本人担当部分：認知機能検査の検査者としての実施，データ収集
4　リハビリテーション医療系学生の抑うつ状況について：学習性無気力の観点から （査読付）	共著	平成26年3月	「四条畷学園大学リハビリテーション学部紀要」 第9号 P.27～P.34	リハビリテーション系学生は，授業や課題の多さ，長期実習，国家試験など多くのストレッサーが長期に継続する特徴がある．それらが学生の「学習性無気力」の状況と関連すると考え，学生の抑うつ傾向，心理的状況を調査した．その結果，抑うつ傾向・ストレス反応が高くまた自尊感情は低かった．また家庭内に相談できる人物が多いこと，睡眠・休養・食事の生活リズムが確立していることが，抑うつ傾向を抑えることが示された．学生生活や精神状態について家族と情報を共有すること，また生活リズムの確立に向けた援助が，教員として必要であると考えられた． 共著者：西田斉二，橋本世奈，福原啓太，田丸佳希，杉原勝美，北山淳 本人担当部分：学生に関する客観的意見の提言

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　Development of the Cognitive Test for Severe Dementia （重度認知症のための認知機能テストの開発） （査読付）	共著	平成27年6月	「Dement Geriatr Cogn Disord」40(1-2) P.94～P.106	中等度から重度の認知症患者に対して既存の認知機能検査は床効果を示し，特に重度認知症者に対しては残存する認知機能を測定することができない．我々は，7つの認知機能の領域をカバーする13項目からなる重度認知症患者向けの認知機能テスト（the Cognitive Test for Severe Dementia; CTSD）を開発し，その信頼性と妥当性を検討した．CTSDは床効果を示さず， また信頼性と妥当性も確認できた．CTSDは他の認知機能検査と比較して重度認知症患者の残存する認知機能を鋭敏に測定することができた． 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Takebayashi T, Hanada K, Inokawa M,Fukuhara K, Ogawa Y, Haga D, Kakegawa Y, Nishikawa T（他1名） 本人担当部分：認知機能検査開発に対する提言，認知機能検査の検査者として評価，データ収集
6　重度認知症に対する従来のQOL尺度の限界 （査読付）	共著	平成28年4月	「老年精神医学雑誌」第27巻第4号 P.429～P.437	重度認知症者のQOL（quality of life）評価には，軽度～中等度認知症用のQOL尺度が用いられてきたが，近年，そのQOL概念の枠組みは異なると示唆されている．本研究では，36人の重度認知症者を対象に，軽度～中等度認知症用のQOL尺度を用いて，重度認知症者に対する適応性を検討した．QOL評価には，自己評点式尺度と代理評点式尺度をそれぞれ2種類使用した．適応性の検定の結果，4尺度の内の1尺度内における2項目のみ適合基準を満たした．以上より，重度認知症者に対する従来のQOL尺度の適応性には限界があると考えられた． 共著者：永田優馬，田中寛之，石丸大貴，植松正保，福原啓太，小川泰弘，内藤泰男，西川隆 本人担当部分：研究計画立案時の提言
7　リハビリテーション医療系大学1年生の日本語能力と科目成績の関連性についての検討 （査読付）	共著	平成29年8月	「第30回教育研究大会・教員研修会誌」	近年，大学生の学力低下，特に「国語能力」の低下が大きな問題となっている．本研究では，医療系大学1年生28名を対象に，日本語能力（語彙・文法能力）と，主要必須科目成績との関連性について検討した．その結果，前期GPAが日本語能力を有意に説明でき，また比較的強い正の相関を示した．つまり，日本語能力が1年生前期の総合的な学力に影響することが示唆された．そのため，入学前後に語彙や文法を学習することは学生の大学における学業適応に有効であると考える． 共著者：西田斉二，福原啓太，田丸佳希，杉原勝美 本人担当部分：研究計画立案時の提言，学生に関する客観的意見の提言

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8　Impaired Interpretation of Others' Behavior is Associated with Difficulties in Recognizing Pragmatic Language in Patients with Schizophrenia （統合失調症において他者の行動の理解障害は語用論的言語理解障害と関連している） （査読付）	共著	平成29年10月	「Journal of Psycholinguistic Research」 vol.46(5) P.1309～P.1318	近年，統合失調症患者の語用論的言語理解能力が注目されている．我々は統合失調症患者34人と健常者34人に対して，心の理論課題，比喩皮肉文課題，社会常識テストを実施した．その結果，全ての課題において，患者群は健常群よりも有意に障害されていた．また患者群内において比喩理解能力と正常行動理解能力，皮肉理解能力と異常行動理解能力の間に有意な相関がみられた．統合失調症患者の社会的認知機能障害はこれら2つの語用論的要因を含んでいることが示唆された。 共著者：Fukuhara K，Ogawa Y，Tanaka H，Nagata Y，Nishida S，Haga D，Nishikawa T 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
9　精神障害者の就労関連自己効力感尺度日本語版（WSS-J)作成の試み （査読付）	共著	平成30年1月	「大阪府作業療法ジャーナル」第31巻第2号 P.148～P.152	精神疾患を有する患者を対象とした課題特異的な自己効力感尺度はいくつか開発されているが，就労に関連する日本語の自己効力感尺度は見当たらない．そこで諸外国で既に用いられている就労関連自己効力感尺度（Work-related self-efficacy scaleの日本語版；WSS-J）の作成を試みた．本尺度は精神科患者自身による使用を想定しているため，文章の理解のしやすさが求められた．本研究では，プレテストの実施，文章の精度を整えた後，逆翻訳と原文との比較も実施した．今後，本尺度の信頼性・妥当性の検討が必要である． 共著者：小川泰弘，福原啓太，長池将太，梅田錬，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆補助，データ収集・分析）
10　慢性期統合失調症患者の非形式言語の理解及び表出能力に関する研究 （博士論文）	単著		大阪府立大学	近年，統合失調症の非形式的言語の理解・表出の障害が注目されている．第Ⅰ章では統合失調症患者の非形式言語の理解面に着目し，語用論的言語理解の障害があることを確認した．またその障害は社会的行動の理解障害と関連していた．第Ⅱ章ではその表出面である，プロソディと会話量をコンピュータで分析した．その結果，患者群にプロソディの一部と会話量の障害が認められ，会話量と生活機能は関連していた．第Ⅲ章では患者のプロソディと会話量の障害に対し治療介入を実施した．その結果プロソディの一部は改善が認められたが，会話量の改善は認められなかった． A4判　全79頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11　Clinical Utility of the Cognitive Test for Severe Dementia: Factor Analysis, Minimal Detectable Change, and Longitudinal Changes. （査読付） （重度認知症向けの認知機能検査［CTSD］の有用性について：因子分析と最小可検変化量、そして縦断的変化）	共著	平成30年6月	Dementia and geriatric cognitive disorders extra　8(2) 214-225	本研究は、COSMINのチェックリストを用いて、十分なアウトカム尺度を開発するために、Cognitive Test for Severe Dementia (CTSD)をさらに分析した。研究では、以下の方法を行った。（１）構成概念妥当性を評価するために因子分析を用いた。（２）測定誤差 (SEM)と最小化検変化量について信頼性と解釈可能性を評価した。（３）反応性を評価するために縦断的変化を評価した。その結果、CTSDの因子分析は2要因から説明され、各項目の通過率により2分化された。我々はそれぞれSEMは1.6ポイント、MDCは3.6ポイントと計算した。我々の結果は、CTSDは、重度認知症患者に対する信頼できるアウトカム指標を提供するということを示している。 Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Nishikawa T 本人担当部分：データ収集
12　Distraction技能獲得により不安の軽減と自己効力感ならびに社会生活活動の改善がみられた一例 ： 事例報告 （査読付）	共著	平成31年1月	大阪作業療法ジャーナル 32(2) 135-142	不安を根底にもつ強迫症/強迫性障害には、一般的に薬物療法や認知行動療法(CBT)が適用される。一方で作業療法を用いた明確な治療的介入方法はあまり見当たらない。本稿では、作業活動をCBTの一技法であるdistractionとして応用させることで、不安や強迫観念により社会生活に制限のあった患者の不安、自己効力感そして社会生活の改善が認められたため、その報告をする。最後に、Distractionは不安や認知の歪みを根本的に解決する手段というよりも、即時的に不安や強迫観念から脱却し充実した社会生活を送れるようになることの一手段として有用であるということを提唱したい。 福原啓太, 田中宏明, 西田斉二, 小川泰弘, 森泰祐, 西川隆 本人担当部分：論文執筆、データ整理、対象者介入を含む研究の全工程
13　Insight Into Illness and Defense Styles in Schizophrenia. （査読付） （統合失調症の病識と防衛スタイル）	共著	令和元年10月	The Journal of Nervous and Mental Disease 207(10) 815-819	心理学的な否認のモデルは乏しい洞察（insight)は防衛機制の結果であると主張しているが、その二つの直接的な関係性は、明らかにされていない。本研究の目的は、認知機能障害を考慮しながら、洞察と防衛機制の関係性を調査することである。38人の統合失調症患者に対して、洞察、防衛機制、神経認知機能、精神症状について評価した。神経認知機能と精神症状を制御して洞察レベルの返送間分析を行ったところ、「病気の認識」が未熟な防衛スタイルと正の偏相関をして、成熟した防衛スタイルとは負の偏相関がみられた。ステップワイズの回帰分析では、「病気の認識」は有意に未熟な防衛機制を予測することが明らかになった。我々の結果は、未熟な防衛スタイルを使用する傾向にある患者は、自分自身の精神病を受け入れている傾向にあることを示唆している。 Ogawa Y, Fukuhara K, Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Nishikawa T. 本人担当部分：論文構成補助、データ解析補助、研究デザイン補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14　統合失調症患者の声による情動表出能力について～予備的研究～ （査読付）	共著	令和2年1月	大阪作業療法ジャーナル 33(2) 117-122	近年、統合失調症の陰性症状、特に情動表出について改めて注目されている。本研究は予備的段階として、本邦の統合失調症患者の声の側面に着目し、情動表出の減少について調査した。DSM-5により統合失調症または統合失調感情障害と診断された入院患者23名と、年齢と性別をマッチさせた健常者23名に対して、声による情動表出を引き出す課題（紙芝居音読課題と4感情表出課題）を実施した。それにより得られた音声サンプルをデジタル評価ならびにアナログ評価を用いて、両群を比較した。その結果、患者群は健常群と比較して、プロソディスコアが減少しており、さらに怒りと幸せの感情について正確に表現できていなかった。今後は、より明確な知見を得るためにさらなる調査が必要である。 福原啓太、小川泰弘、森泰祐、田中寛之、西川隆 本人担当部分：論文執筆、データ収集、データ解析、研究デザイン立案を含む研究全般
15　Clinical factors associated with Activities of Daily Living and their decline in patients with severe dementia （査読付） （重度認知症患者のADLとその減少に関連する臨床要因について）	共著	令和元年12月	Psychogeriatrics 20(3) 327-336	認知症患者においてベースライン時と6ヶ月後の間の変化に影響を与える臨床的要因を探索した。参加者は131名の認知症患者であった。重度認知症の参加者のベースライン時においてADL尺度であるPSMSスコアはCTSD、CCI、MNA-SF、CSDDのスコアと有意に関連していた。縦断的な分析に置いて、CTSDスコアのみが6ヶ月後のPSMSスコアと有意に関連していた。重度の認知症の参加者にとって、6ヶ月後のADLに関連する要因としてCTSDで評価される認知機能は注目に値する。 Hiroyuki Tanaka, Yuma Nagata, Daiki Ishimar2, Yasuhiro Ogawa, Keita Fukuhara, Takashi Nishikawa 本人担当部分：執筆補助、データ解釈
16　Impact of Disturbed Rest-activity Rhythms on Activities of Daily Living in Moderate and Severe Dementia Patients （査読付） （中等度及び重度認知症患者における休息活動リズムが日常生活活動に与える影響について）	共著	令和2年12月	Alzheimer Dis Assoc Disord.35(2):135-140	認知症患者において休息-活動リズムの乱れや睡眠時間の延長が問題になっている。しかし、これらの問題が中等度及び重度の認知症患者の臨床的問題に及ぼす影響については、ほとんど知られていない。本研究では、安静時活動リズムの乱れ及び睡眠時間の延長とADLとの関連を検討した。その結果、中等度及び重度の認知症患者における案政治活動リズムと睡眠時間の異常は、ADLに影響を及ぼす可能性が示唆された。 Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Ogawa Y, Fukuhara K, Takabatake S, Nishikawa T. 本人担当部分：データ解釈、執筆補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17 Possibility of Cognitive Improvement in Severe Dementia: A Case Series Assessed by Cognitive Test for Severe Dementia （査読付） （重度認知症における認知機能の改善可能性について～重度認知症向けの認知機能テストを用いて評価したケースシリーズ）	共著	令和3年4月	INTERNATIONAL JOURNAL OF GERONTOLOGY 15(2) 174-176	重度認知症患者の認知機能の改善は使用している検査が鋭敏でなければ見過ごされてしまうかもしれない。我々が開発したCTSDはそのような変化にも敏感である。ここではCTSDで評価した結果認知機能が改善した4人の重度認知症患者について報告する。臨床的に有意な認知機能の改善は重度の認知症であっても、介入方法や結果の測定方法を工夫することで、定量化することができることが示唆された。 Hiroyuki Tanaka, Yuma Nagata, Daiki Ishimaru, Yasuhiro Ogawa, Keita Fukuhara, Takashi Nishikawa 本人担当部分：執筆補助、データ解釈
18 Insight Into Illness and Psychological Defense Attitudes in People With Chronic Schizophrenia Using Markova's Insight Scale （査読付） （慢性期統合失調症患者の病識と心理的防衛機制について～マルコバのインサイトスケールを用いて～）	共著	令和3年7月	The Journal of Nervous and Mental Disease 209(12):879-883	統合失調症の病識は多次元的な現象であり様々な評価法がある。我々はMarkovaのInsight Scale（IS）に着目し統合失調症患者38名に病識、心理的防衛スタイル、神経認知機能の関連を検討した。今回の結果は、ISで評価された洞察力の高さが未熟な防衛機制を反映している可能性が高いことを示している。 Ogawa Y, Fukuhara K, Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Urakawa M, Nishikawa T. 本人担当部分：データ解釈、執筆補助
19 Factors influencing the quality of life in patients with severe dementia. （査読付き） （重度認知症患者の生活の質に影響を与える要因）	共著	令和4年1月	Psychogeriatrics 22(1):49-54	重度認知症患者に適した評価尺度を使用してQOLに寄与する要因を特定するために、105人の対象者を評価した。その結果、認知症と痛みの行動的および心理的症状が、重度の認知症患者のQOLに影響を与える要因であることが示された。 Nagata Y, Nishikawa T, Tanaka H, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Shigenobu K, Ikeda M. 本人担当部分：データ解釈、執筆補助
20 Clinical utility of an assessment scale for engagement in activities for patients with moderate-to-severe dementia: additional analysis （査読付き） （中等度から重度の認知症患者向けの活動への取り組み評価尺度の臨床的有用性について：追加分析）	共著	令和4年4月	Psychogeriatrics. 2022 Jul;22(4):433-444	中等度から重度の認知症患者の治療活動時の患者の活動への取り組み（エンゲージメント）について定量化する評価ツール（ASEA）を開発した。その信頼性と実行可能性について追加の分析をしたため報告する。この分析により、ASEAの各データは感情と有意に相関していた。 重度認知症に特有のいくつかの評価方法の中でもASEAは治療活動への取り組みの状態を定量化し評価するための有用なツールであることが示された。 Hiroyuki Tanaka, Ren Umeda, Tatsunari Kurogi, Yuma Nagata, Daiki Ishimaru, Keita Fukuhara, Shunsuke Nakai, Masahiro Tenjin, Takashi Nishikawa 本人担当分：感情分析とデータ解釈、執筆補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 「総説」 1　統合失調症患者における語用論的言語（比喩・皮肉）の理解能力について（査読付）	共著	平成28年12月	「Journal of Rehabilitation and Health Sciences」 14巻 P.15～P.25	統合失調症患者の症状は，陽性症状，陰性症状，認知機能障害の3つに大別される．そしてこれらは社会生活，社会的関係，コミュニケーション，そして言語的な理解に影響を与え，その疾患を特徴づけている．本稿では，語用論の定義や統合失調症患者の言語使用に関する学術的背景を述べた後に，統合失調症患者の比喩・皮肉理解における障害についてレビューしている．病期や類型，他の認知機能との関連，比喩と皮肉の理解プロセスの違いにも言及し，統合失調症患者の語用論的障害について詳細にまとめている．最後に，言語的観点からの支援方法や今後の展望について提言している． 共著者：福原啓太，田中寛之，小川泰弘，永田優馬，田中宏明，大西久男，西川隆 本人担当部分：執筆，文献レビュー，分析
「依頼原稿」 1　学会・研修会印象記　第32回近畿作業療法学会	単著	平成25年1月	「作業療法ジャーナル」 47巻第1号 P.95	平成24年10月に2日間にわたり大阪国際交流センターで開催された第32回近畿作業療法学会についての印象記執筆の依頼原稿である．著者は作業療法士（臨床）および大学院生（研究者）2年目であったため，新人作業療法士としての視点から，学会発表を見聞きし，当日に参加できた者，できなかった者が学会参加の意義を再確認できるよう執筆した．文章内で高畑進一学会長の「作業療法士がより脳の機能を理解することが作業療法の幅を広げる」という言葉を代弁するする形で，作業療法の学術意義について述べている．
2　第16回WFOT大会を終えて（その1）精神科セッション	単著	平成26年7月	「日本作業療法協会誌」 第28号 P.38～P.39	平成26年6月に4日間にわたりパシフィコ横浜で開催された16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists（WFOT）における精神科セッションについての印象記執筆の依頼原稿である．過去最大級の作業療法の国際会議・学会が我が国で開催されたため，本邦での作業療法士の取り組みを概観し集団を対象にした研究から単症例を対象にした症例報告までいくつかを紹介した．一方で海外の作業療法士の研究の特徴，つまりグループ活動や行政的取り組み，啓発的取り組みが目立った様子を，読者にわかりやすく対比して執筆した．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　特集：0からの研究「精神科に従事する作業療法士が臨床研究に取り組むことの意義」	共著	平成28年1月	「大阪府作業療法ジャーナル」29巻2号 P.73～P.80	精神科領域において作業療法のエビデンスが求められている．われわれ作業療法士の実践の効果を形あるものにし，対象者，他職種，第三者が理解できるように示す必要がある．研究は，様々な形で臨床に活き，臨床を深める手段となる．しかし，精神科の作業療法領域において，研究をすることは容易ではない．本稿では精神科の社会情勢を知ることで作業慮法の社会的位置づけを確認し，そして，著者の臨床研究の経験を通して，精神科の臨床の作業療法士が臨床研究に取り組むことの意義と研究の難しさに対する対応について述べている． 共著者：福原啓太，西川隆 本人担当部分：執筆，情報収集，分析
4　登録事例の紹介	単著	平成28年3月	「日本作業療法協会誌」第48号 P.42～P.43	該当教員が同協会学術委員会事例登録班員として執筆している．日本作業療法協会の教育的活動の一環である「事例登録システム」において精神科部門で「精神障害×認知（機能）」に沿ったテーマを2事例（「楽手教材を使った統合失調症患者へのアプローチ」，「認知ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝを実践した双極性感情障害の一例」）を紹介した．これらを通して「対象者の特性」「生活能力」「作業能力」「認知機能」などと言った評価視点の重要性を読者に説いている．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「研究報告書」 1　統合失調症者セルフエフィカシー研究会活動報告	共著	平成27年7月	「大阪作業療法ジャーナル」 第29巻第1号 P.55	平成26年度における「統合失調症者セルフエフィカシー研究会」の大阪府作業療法士会に提出した活動報告である．統合失調症患者に対する医療では，症状や認知機能障害などの客観的指標だけでなく，「患者自身がどのように感じているのか」という主観的側面の指標が重要視されている．その中でも本研究会は統合失調症患者のセルフエフィカシーに焦点を当て，文献レビューを実施した．海外では比較対象研究や相関研究など関連性についての研究が半数を超えていた．一方で国内では介入研究やケーススタディなど実践的な報告が多かった．また本邦では，入院時から退院後の社会参加促進をターゲットとするセルフエフィカシー尺度が少ないという問題が抽出された． 共著者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，福原啓太 本人担当部分：執筆補助，海外文献レビュー
2　統合失調症者セルフエフィカシー研究会平成27年度活動報告	共著	平成29年1月	「大阪作業療法ジャーナル」 第30巻第2号 P.146～P.147	平成27年度における「統合失調症者セルフエフィカシー研究会」の大阪府作業療法士会に提出した活動報告である．前年度に抽出された「本邦において社会参加に関するセルフエフィカシー尺度が少ない」という問題点をカバーするために，海外で開発された「就労関連自己効力感尺度 Work-related self-efficacy scale (WSES)」の原著者に許可を得て日本語版作成を実施した．研究員4名で原文を日本の精度や文化的背景に合うように複数回議論し，修正を重ねて仮尺度へと翻訳した．専門業者にも逆翻訳を依頼し，日本語版を完成させた．今後は信頼性・妥当性の検討へと進めていく予定である． 共著者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，福原啓太 本人担当部分：執筆補助，尺度翻訳，データ収集，データ分析
3　統合失調症者セルフエフィカシー研究会 平成28年度 活動報告	共著	平成29年7月	「大阪作業療法ジャーナル」 第31巻第1号 P.66～P.66	精神保健福祉領域において「患者自身がどのように感じているか」という主観的側面，とりわけ自己効力感が重要視されていると考えられる．本研究では，精神障害者の社会参加に関連する自己効力感尺度の作成を目的としている．そこで，就労関連自己効力感尺度（Work-related self-efficacy scale；WSS-J）の翻訳作業を原著者の許可を得て実施した．外来・入院患者併せて53名の精神障害者の協力を得ることができた．今後は，協力者を増やし，信頼性・妥当性の検証を行うこととする． 共著者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，福原啓太 本人担当部分：執筆補助，尺度翻訳，データ収集，データ分析

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4　精神科生体医工学的指標・生活研究会 平成28年度活動報告	共著	平成29年7月	「大阪作業療法ジャーナル」 第31巻第1号 P.72～P.73	統合失調症患者の感情表出障害の一つにプロソディの障害が挙げられている．さらに海外ではその評価に音声のコンピュータ分析を用いた生体医工学的指標がしばしば使用されている．本研究の目的は日本の統合失調症患者のプロソディの調査である．本報告書では，研究計画とデータ蓄積中である旨について中間報告をしている．患者群に対する評価としてプロソディの評価，精神症状評価，行動評価を実施した． 共同発表者：福原啓太，小川泰弘，森泰祐 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
「学会発表」 〈国際会議〉 1　Relationship among pragmatic function, ToM function and judgment of abnormal social behavior in patient with schizophrenia. （統合失調症患者における語用論的機能，心の理論能力および社会的異常行動に対する判断能力の関連）	―	平成26年6月	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists（於パシフィコ横浜）	統合失調症患者28人，健常者28人に対し，比喩・皮肉文テスト，心の理論課題，社会常識テストを実施した．どの課題においても統合失調症群のほうに有意な成績低下を認めた．また，患者群を課題の成績順に群わけすると，皮肉理解と心の理論に障害がなければ，社会常識テストの成績は良く，皮肉理解と心の理論に障害があれば，成績が低下していることがわかり，社会的認知機能の一部は社会常識の程度にある程度影響を与えることが示唆された． 共同発表者：Keita Fukuhara, Yasuhiro Ogawa, Goro Nishio, Hiroyuki Tanaka, Takashi Nishikawa 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
2　What are Effective Ways to Maintain Cognitive Abilities of People with Severe Dementia? Results of a One-Year Follow-Up Using the Cognitive Test for Severe Dementia （重度認知症の人々の認知機能を維持する効果的な方法は何か？CTSD［重度認知症患者用認知機能検査］を用いた1年間のフォローアップの結果）	―	令和元年6月	13th International Society of Physical and Rehabilitation Medicine World Congress（ISPRM 2019）（於　神戸コンベンションセンター）	我々は、重度認知症患者に対し、CTSDにより1年間の得点の変化を追った。我々は、CTSD上で、意味のある最小の変化（4ポイント上昇）が見られた患者のグループを発見した。161人のデータを集めたが、1年後に再テストできたのは40人であった。その中で、我々は4人のCTSDの得点が上昇した参加者を発見した。しかし、その患者らはMMSEの得点に変化はみられなかった。彼らは、脳血管性認知症と診断されていた。この結果は、CTSDによって、評価することで、重度認知症の認知機能改善が明らかにできる群がいることを示唆した。 Hiroyuki Tanaka, Yuma Nagata, Daiki Ishimaru, Keita Fukuhara, Yasuhiro Ogawa, Takashi Nishikawa 本人担当部分：データ収集、研究デザイン補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 Comprehensive Social Cognition in Schizophrenia from the Social Common Sense Ability Perspective （統合失調症における包括的な社会的認知昨日について、社会常識的能力の観点から）	―	令和元年6月	13th International Society of Physical and Rehabilitation Medicine World Congress（ISPRM 2019） （於　神戸コンベンションセンター）	近年、多くの研究は統合失調症の社会的認知と社会的機能障害の関係について注目している。これまで社会的認知はいくつかの方法で別々に調査されてきた。したがって、統合失調症の社会的認知を包括的に評価する方法はあまりない。本研究では統合失調症の包括的な社会的認知を社会的常識能力の観点から調査した。統合失調症34人と健常者34人が研究に参加した。Dewey Stry Testを用いて社会的常識能力を評価した。正常行動と異常行動のそれぞれの合計得点について2群で優位さがみられた。本研究は、2群において、人間の行動に対する認識に差異があることを示し、また、このようなギャップが患者の社会的機能に影響を及ぼすということを示唆している。 Keita Fukuhara, Hiroyuki Tanaka, Yasuhiro Ogawa, Yuma Nagata, Saiji Nishida, Taisuke Mori, Takashi Nishikawa 本人探訪分：研究全般（論文執筆、研究デザイン立案、データ収集、データ解析）
〈国内会議〉				
1　重度認知症者の認知機能検査に関する研究(第2報)-本版SMMSE, SCIRSの信頼性に関する検討-	―	平成24年6月	第27回日本老年精神医学会（於大宮ソニックシティ）	現在あるMMSE, HDS-Rなどの認知機能検査は重度認知症にとって「床効果を示す」「集中力が続かない」などの問題点が指摘されており，残存している認知機能を評価することが難しい．そこで，海外で重度認知症向けに開発されたSevere Mini Mental State Examination (SMMSE), Severe Cognitive Impairment Rating Scale (SCIRS)の臨床的有用性を示すことを目的に検査―再検査信頼性と評価者間信頼性を検討した．その結果，SMMSEとSCIRSは既存の検査のMMSE, HDS-Rと比較して，重度認知症者の残存する認知機能をより詳細に評価でき，信頼性・妥当性にたる検査であることが示唆された． 共同発表者：田中寛之，植松正保，福原啓太，大西久男，西川隆 本人担当部分：検査実施を担当
2　統合失調症者における語用論的能力と社会常識理解の関連	―	平成25年4月	第8回日本統合失調症学会（於浦河町総合文化会館）	地域に住む慢性期の統合失調症患者28人に対して比喩・皮肉文テスト（metaphor and sarcasm scenario test; MSST），MMSE，社会常識テストを実施した．比喩理解能力はMMSE得点と有意な相関関係を示し，皮肉誤答回避得点（皮肉を文字通りにとらえてしまう傾向）は社会常識テストにおける社会常識総点と有意に相関していた．比喩・皮肉のような語用論的言語理解能力は，全般的知能，または他者の正常または異常の行動を理解するような高度な社会的能力と関連があることが示唆された． 共同発表者：福原啓太，芳賀大輔，西尾五郎，小川泰弘，内藤泰男，西川智子，大西久男，田中宏明，田中寛之，西川隆「他3名」 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　統合失調症者における語用論理解障害の一側面―一症例にみられた特徴的な思考様式―	―	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（於大阪国際会議場）	日常生活で，多数の声主から命令的な幻聴に悩まされる地域に住む慢性期の統合失調症患者1人についての症例報告である．本患者は悪意ある幻聴からの命令に対しても，「自分の為を思って言ってくれている」と解釈していた．3人からの声主（幻聴）に敬意を持っている本患者は，相反する声主からの要求に耳を傾け，行動停止に陥るといった著しい行動制限に陥っていた．皮肉文テストでは成績低下を認めた．このことから悪意ある発言に対して，他者の悪意を「悪意」と捉えることへの困難さが伺われた． 共同発表者：福原啓太，小川泰弘，芳賀大輔，田中寛之，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
4　精神科デイケア利用者への図書館利用の斡旋～社会生活の広がりに向けて～	―	平成25年11月	第21回日本精神障害者リハビリテーション学会沖縄大会（於沖縄コンベンションセンター）	精神科リハビリテーションのうち，社会参加の一環として，デイケア利用患者を地域の図書館へ引率するプログラムとその前後に実施したアンケート調査について報告した．精神科患者は，地域の図書館に興味はありつつも，多くの患者は利用していなかった．実際に図書館へ引率し，図書館の利用方法を患者とともに経験するなかで，参加した患者らは地域の行き場所として図書館の利用を始めた．精神疾患患者を地域の社会資源に結び付けるには，支援者が共に経験することで不安や抵抗感を消失させることが有効であると考えられる． 共同発表者：福原啓太，小川泰弘，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
5　プログラム「図書館ツアー」により生活の認識や行動に変化が見られた一症例	―	平成26年3月	第9回日本統合失調症学会（於京都テルサ）	精神科デイケア利用患者である統合失調症患者1人についての事例報告である．以前より，生活するグループホームの世話人から図書館の利用を促されていたが，一度も行くことのなかった患者を図書館へ引率した．そこで，本患者は趣味である音楽関連のCDや本を借りることができると知り，毎週末に図書館を利用するようになった．支援者と共に図書館を利用することで初めて本患者は図書館の利用価値を知ることができた．言葉による促しのみではなく，実際の体験があったからこそ，その人が利用価値を見出せ日常生活に汎化したものと考えられる． 共同発表者：福原啓太，小川泰弘，田中寛之，永田優馬，多和田卓也，石井幾子，園田むつみ，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
6　デイケア喫茶での役割を持つことで日常的な行動に変化が見られた，後期高齢の統合失調症患者の一症例	―	平成26年11月	第22回日本精神障害者リハビリテーション学会いわて大会（於いわて県民情報交流センターアイーナ）	認知症を伴わない高齢の精神疾患患者は，自宅生活科デイケアなどの施設に通所することが多く，このような患者は今後増加すると予測される．そこで，働きたいという希望を持ち，またそれが現実検討できていない状態として評価される後期高齢の地域在住の統合失調症患者一事例に対し，デイケアでの喫茶活動のマスターという役割を仕事実技プログラムの一環として提供したと．その結果，精神症状（意欲向上，自閉の消失，情動表出の改善），活動面（活動量の増加），社会的交流面（会話量の増加）に変化が認められた． 共同発表者：福原啓太，小川泰弘，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　統合失調症者のセルフエフィカシーに関する文献レビュー	―	平成26年11月	第29回大阪府作業療法学会（於大阪保健医療大学）	統合失調症とセルフエフィカシー（自己効力感）に関する文献を国内外問わず，レビューし，これまでの研究動向を調査した．結果は，海外の文献数のほうが多く，海外は比較対照研究・介入研究の評価として使用されることが多かった．国内では介入研究・ケーススタディが主に多かった．セルフエフィカシー研究の文献レビューにより，今後は，社会参加に向けた自己効力感の尺度に注目した研究やその尺度開発が必要であることがわかった． 共同発表者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，福原啓太 本人担当部分：英語文献のレビューとそのまとめ作業
8　退院後の地域包括的支援が成功した要因の検討～長期入院後の高齢統合失調症患者一事例を通して～	―	平成27年3月	第10回日本統合失調症学会（於都市センターホテル）	長期入院を経た，高齢の統合失調症患者一事例が地域包括的支援により社会生活が安定した要因について検討した事例報告である．対象者は，退院後夫と二人暮らしになったが，外来通院に加え，デイケアと訪問看護によるチームアプローチにより，精神症状の安定，活動量の増加，対人交流の増加，QOLの向上が認められた．地域で生活することをチームで支えることで，精神症状が活発な患者であっても十分に地域生活できるケースが確認された． 共同発表者：福原啓太，藤林幸代，山西亜弥，前川公祐，小川泰弘，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
9　統合失調症を発症したジャズドラマーが発症前の自分を取り戻すまでの道のり	―	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（於神戸ポートピアホテル）	20年もの間，無為自閉で自宅生活を送っていた，元プロのジャズドラマーにおける事例報告である．対象者は本人が希望したデイケアでのバンド活動（作業療法）を通して，精神症状の安定，活動量の増加，対人交流の増加，QOLの向上が認められた．対象者のニーズを引き出すことで，本人が希望としたバンド活動が目的にも手段にもなり，社会生活が改善した．本人は，「昔の自分に戻れた」「意欲が出てきた」と発言し，リカバリーが達成された． 共同発表者：福原啓太，大尾充剛，森葉子，小川泰弘，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
10　人と人をつなぐことを目的としたプログラムの有効性―同性集団活動による対人関係の変化―	―	平成27年10月	第20回日本デイケア学会（於大阪府立国際会議場）	対人交流を活性化し，上手な人付き合い，仲間作りを目的にした介入についての実践報告である．デイケアプログラムの治療的効果の一つに，作業を共にすることによる「友人作り」が挙げられる．また同質グループはメンバー相互の共感が得られやすく集団としての凝集性も高くなりやすいといわれている．今回デイケアで実施した，同性（特に女性）同士のみで構成されたプログラムは，日常の男女混合のプログラムにはない凝集性が生まれやすくなることが確認された． 共同発表者：山西亜弥，山﨑勢津子,和田卓也，福原啓太 本人担当部分：研究計画指導，執筆指導，発表指導，データ収集，データ分析指導

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11　統合失調症者の就労に関する自己効力感尺度「Work - Related Self - Efficacy Scale」の作成	―	平成27年11月	第30回大阪府作業療法学会（於大阪国際交流センター）	就労に関する自己効力感尺度（Work - Related Self - Efficacy Scale; WSES）は海外で作成された評価尺度である．しかし，このような就労における自己効力感に関する評価尺度は本邦では見当たらない．そこで，WSES作成者に連絡をとり，日本語版WSESを作成の許可を得た．日本語翻訳をしたWSESを精神疾患を有する患者28人に対し実施し，日本語の分かりにくい箇所を指摘してもらった．さらにそれを修正した．今後はバックトランスレーション研究に移行していく予定である． 共同発表者：梅田錬．小川泰弘．長池将太，福原啓太 本人担当部分：研究計画，データ収集，データ分析，執筆指導，発表指導
12　長期入院患者が街に出た！！～退院促進プログラムの取り組みより～	―	平成27年12月	第23回日本精神障害者リハビリテーション学会高知大会（於高知市文化プラザかるぽーと）	長期入院中で病棟からの外出を拒否する統合失調症患者に退院促進プログラムとして，外出プログラムを導入した．自己効力感の先行要因（成功体験，代理体験，言語的説得，生理的情緒的高揚）に基づき，介入した結果，対象者は1人で，または病棟の友人と外出し買い物をするようになった．依然退院には結びついていないものの，退院促進プログラムによって，病院外への外出回数が増加し，社会生活における行動範囲の拡大が認められた． 共同発表者：前川公祐，福原啓太 本人担当部分：研究計画指導，執筆指導，発表指導
13　統合失調症の軽症事例に対するデイケア治療のみによる変化-事例報告 -	―	平成28年3月	第11回日本統合失調症学会（於ベイシア文化ホール）	統合失調症と診断された20代の対象者が，効果を実感できなかった薬物療法を拒否したため，デイケア治療のみで対応したところ，デイケアプログラムによる問題解決能力向上訓練を通して，他者交流が増加し，慢性的に持続していた対人面の不安感が消失した．また安心感の獲得により不安感や病的体験の減少が認められた．このような薬物療法がうまく適合しないケースでもデイケアのような心理社会的治療により社会機能が改善することが確認された． 共同発表者：福原啓太，藤林幸代，山西亜弥，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
14　強迫性障害患者の不安に対するdistraction技能獲得のための支援―事例報告―	―	平成28年9月	第50回日本作業療法学会（於ロイトン札幌）	不安を根底に持つ神経性障害には，一般的に薬物療法や認知行動療法などが適用される．認知行動療法の中でも，行動を伴う注意の転換（distraction）は強迫観念や不安の抑制に効果がある．事例報告では，20代女性，強迫性障害の患者に対し，distractionを支援した．具体的には，不安が増大する場面に対して本人がしうる対処行動をリスト化した．不安場面で，そのリストを見ることにより落ち着いて不安への対処行動を実行していくよう支援した．その結果，対処行動の強化，不安の軽減，地域生活に対する自己効力感の向上，社会生活の改善が認められた． 共同発表者：福原啓太，田中宏明，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15　統合失調症における病識と神経認知機能の関連	―	平成28年9月	第50回日本作業療法学会（於ロイトン札幌）	病識の低下は統合失調症の主要な特徴のひとつであり，治療コンプライアンスや再入院率などの因子と関連が示されていることから，臨床的にも重要な指標である．また病識の低下は，神経認知機能障害と関連していることが報告されている．本研究では，「狭義の病識」，「障害認識」と神経認知機能の関連について調査した．その結果，「狭義の病識」の低下には認知機能障害が影響している可能性が示唆された．一方「障害認識」は神経認知機能に依存していない可能性が示唆された． 共同発表者：小川泰弘，福原啓太，梅田錬，西川隆 本人担当部分：研究計画への提言，考察部分への提言，発表方法への提言
16　精神疾患患者を対象とした，生体医工学技術を用いた客観的指標の検討	―	平成28年10月	第31回大阪府作業療法学会（於大阪国際交流センター）	2013年にDSM-5が公表された．統合失調症の診断基準では，DSM-Ⅳ-TRで“affective flattening”とあった記載が，この改定で，“diminished emotional expression”へと変更された．これは，必ずしも統合失調症患者が感情体験に障害があるのではなく，むしろ表出にのみ障害が生じる場合があることを示したものである．本研究では，その感情表出のうち声の抑揚（prosody）の客観的評価に注目している．具体的な評価方法は主観的バイアスを排除したもので，被験者の声をデジタル録音し，コンピュータ分析により客観的評価として非常に精度の高いものとなっている．本報告では，本研究の有用性と研究経過について報告した． 共同発表者：福原啓太，小川泰弘，森泰祐 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
17　就労関連自己効力感尺度 Work-related self-efficacy scale WSES 日本語版の信頼性・妥当性の検討	―	平成28年10月	第31回大阪府作業療法学会（於大阪国際交流センター）	指針疾患患者に対する評価では，客観的指標だけでなく，「患者自身がどのように感じているか」という主観的側面の評価が重要視されている．主観的側面における評価指標の一つとしてセルフエフィカシーがある．本研究では，諸外国で用いられている「仕事関連自己効力感尺度 Work-related self-efficacy scale（WSES）」の原著者に許可を得て，日本語版を作成し，その信頼性・妥当性を検討している．WSESは就労についての患者の主観的側面を評価できることから，治療計画立案のための指標としてだけではなく，介入の効果指標としても有効であると思われる． 共同発表者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，福原啓太 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆援助，データ収集・データ分析）
18　就労意欲が表面化していない精神科デイケア患者に対する短期就労体験プログラムの効果	―	平成29年9月	第51回日本作業療法学会（於東京国際フォーラム）	精神障害者の就職件数はこの10年で増加の一途をたどっているが，就労意欲が表面化しづらく就労へのニーズが潜在化している患者に対しては十分な支援が行き届いていない．そこでわれわれは，そのような患者8名に対し意欲を引き出すことを目的に病院内での短期就労体験プログラムを実施した．その結果，就労の継続を希望した者，ハローワークに通いだした者が認められた．たとえ対象者の就労意欲が表面化していなくとも，潜在的にそれを有している可能性があることが示唆された． 共同発表者：小川泰弘，田口功，高結花，福原啓太，西川隆 本人担当部分：研究計画，執筆補助，結果の解釈への提言

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19　精神科生体医工学的指標・生活研究会H29年度研究報告	―	平成29年12月	第32回大阪府作業療法学会（於大阪国際交流センター）	統合失調症の症状は陽性症状，陰性症状，認知機能障害が主に挙げられるが，バイオマーカーのような客観的かつ定量的に評価されることは稀である．本研究では，陰性症状のうち情動表出の減少をプロソディと会話量の観点からコンピュータをもちいて分析した．また陽性・陰性症状，日常生活活動も評価し，それらとの関連性を検討した．その結果，一部のプロソディと会話量は統合失調症患者において障害が確認され，会話量は陰性症状と日常生活活動と関連した．会話量は他者との関りにおいて重要であることが示唆される． 共同発表者：福原啓太，小川泰弘，森泰祐 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
20　統合失調症における会話量と精神症状，活動量との関連について	―	平成30年7月	第38回近畿作業療法学会（於大阪国際交流センター）	統合失調症の言語表出能力が注目されている。その中でも本研究は会話量に着目した。統合失調症患者の会話量と精神症状、行動評価に関して関連性を分析したところ、ポジティブな刺激に対する発話時間と陰性症状は有意な負の相関を示し、ニュートラルな刺激に対する発話時間においても陰性症状と有意な負の相関を示し、そして行動評価とも有意な負の相関を示した。ネガティブな刺激に対する発話時間は陰性症状と有意な負の相関を示し、また行動評価とも有意な負の相関を示した。一方で、インタビュー時の発話時間は陽性症状と正の相関を示した。統合失調症の発話量は課題設定や状況により、異なるタイプの精神症状や行動と関連することが明らかとなった。 福原啓太、大尾充剛、森泰祐、小川泰弘、西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画、執筆、データ収集・分析）
21　統合失調症の情動表出能力について～精神科生体医工学的指標・生活研究会H30年度研究報告～	―	平成30年12月	第33回大阪府作業療法学会（於藍野大学）	統合失調症の「情動表出の減少」が注目されている。平成30年度は統合失調症と健常者を対象として、情動表出について評価者の耳による判断を用いて評価した。評価方法はPutnam(2007)の方法を採用している。研究進捗について、本学会で結果と考察を交え発表した。 福原啓太、 小川泰弘、森泰祐 本人担当部分：研究全般（研究計画、執筆、データ収集・分析）
22　引換券を用いることで予測障害を減少させ、活動範囲の拡大に至った慢性期統合失調症の患者について一事例報告一	―	平成30年12月	日本精神障害者リハビリテーション学会　第26回東京大会（於早稲田大学国際会議場）	将来のことに対して予測することが困難となり、活動の範囲が狭小化していた慢性期病棟に入院している統合失調症患者に対し、将来の活動を示した紙（引換券）を用いて、プログラム活動へ誘導した結果、次の行動（活動）に対して予測が可能となり、活動範囲の拡大に至った事例について報告した。 森泰祐、李真吾、稲富宏之、福原啓太、日垣一男 本人担当部分：執筆補助、介入補助、対象者評価

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
23　病院内売店実習と尺度を用いた振り返りにより就労への自己効力感が向上・適正化した事例について 就労関連自己効力感尺度を用いて	―	令和元年9月	第53回日本作業療法学会（於福岡国際会議場）	我々の研究グループが海外から輸入し、日本語版について作成した就労関連自己効力感尺度を持ちて、就労支援を実施した。対象者には売店実習（店員補助）を活動として提供し、その振り返りを就労関連事故効力感尺度を用いて実施した結果、対象者は、自身の弱点を振り返ることがでい、支援者に指摘されるのではなく、能動的に自身の弱点を克服するための行動をとることができた事例について報告した。 福原啓太，小川泰弘，長池将太，梅田錬，田中寛之 本人担当部分：研究全般（研究計画、執筆、データ収集・分析）
24　複数の精神科デイケアを巡回式に利用する事の可能性についての一考察　－事例報告－	―	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	問題行動を起こしてしまう精神科デイケアに通所する対象者に対し、複数の精神科デイケアが協同して、対象者を巡回式に支援した。その結果、対象者は適度な緊張感を保ちながら、問題行動を起こすことなく、各精神科デイケアで過ごすことができた。この画期的な方法について事例報告を行った。 森岡知久、谷上美奈子、福原啓太 本人担当部分：執筆補助、介入、データ整理補助
25　就労関連自己効力感Work-related self-efficacy scale日本語版（WSS-J）の作成　～信頼性・妥当性の検討～	―	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	我々の研究グループは海外から就労関連自己効力感尺度を輸入し、日本語版を作製した。本研究では、本尺度の日本語版について、信頼性と妥当性を検討した結果、十分な信頼性と妥当性が示された。 梅田錬、長池将太、小川泰弘、福原啓太 本人担当部分：研究計画、執筆補助、データ収集、データ解析
26　精神科デイケアにおける多元主義の応用について	―	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	精神医学において、現在、多元主義を用いた考え方が推奨されている。精神科デイケアにおいても多元主義の考え方は非常に有用である。その有用性について、事例を交えて報告した。 福原啓太、田中寛之、小川泰弘、西川隆 本人担当部分：執筆、事例介入
27　就労訓練によって自己効力感に変化の見られた一事例　～WSS-JとGSESの比較～	―	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	精神科デイケアでの支援においては，「患者自身がどのように感じているか」という主観的側面，とりわけ自己効力感が重要な指標のひとつと考えられる．自己効力感には，具体的な課題や状況に依存せず，個人が日常生活の中で示す「一般性自己効力感」と，具体的な課題や領域に対する「課題特異的自己効力感」の2つの水準があることが知られている．今回の発表では，病院内就労体験と就労移行支援通所によって自己効力感に変化のみられた症例を報告し，就労に関連する課題特異的自己効力感尺度を臨床で使用する意義について述べることを目的として発表した． 小川泰弘、長池将太、福原啓太、梅田錬、西川隆 本人担当部分：執筆補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28　精神障がい者の就労に関する自己効力感尺度 Work-Related Self-efficacy Scale日本語版作成の試み　～因子構造の検討～	―	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	我々の研究グループは海外から就労関連自己効力感尺度を輸入し、日本語版を作製した。本研究では、本尺度の日本語版について、因子構造について検討した。119人の精神障害者を対象に就労関連自己効力感尺度を実施し、因子分析を行った。その結果、原版と同様に日本語版も4因子であることが確認された。 長池将太、福原啓太、梅田錬、小川泰弘 本人担当部分：研究計画、執筆補助、データ収集、データ解析
29　病院で働くリハビリテーション専門職の仕事不満足に関する要因	―	令和2年9月	第54回日本作業療法学会（於Web開催）	リハ専門職は増加傾向にある。一方、職場管理の観点から離職は問題の一つに挙げられる。本研究では病院で働くリハ専門職の仕事への不満足感に関連する要因を探索した。その結果、リハ専門職の仕事不満足感には人間関係の不満足が関連していた。 大浦智子、福原啓太、佐藤英人、加藤美樹、藤堂恵美子 本人担当部分：データ解析、執筆補助
30　アクチグラフを用いた生活リズムの可視化 ―就労に対する適切な行動へとつながった双極性障害の一症例―	―	令和2年9月	第54回日本作業療法学会（於Web開催）	精神科デイケア利用者において、睡眠の乱れや不規則な生活リズムはしばしば観察される。生活リズムの評価は、聞き取り調査や質問紙などの主観的なものが用いられるが、近年アクチグラフが注目されている。今回、アクチグラフを用いて生活リズムを評価し、その評価をかしかし共有した症例に生活リズムの改善の行動変容が認められたため、報告する。 小川泰弘、田中寛之、福原啓太、石丸大貴、西川隆 本人担当部分：内容の妥当性の担保、執筆補助、データ解釈補助
31　認知症患者の活動に対する取り組み方評価尺度の開発　Assessment Scale of Engagement to Activities と感情AIとの客観的妥当性	―	令和3年9月	第55回日本作業療法学会（於Web開催）	我々が開発した、認知症患者の集団作業療法活動に対する取り組み方を評価できるAssessment Scale of Engagement to Activities（ASEA）について、感情分析ソフトを用いてその妥当性を検証した。妥当性の検証には相関分析を用いた。その結果、ASEAの総合点と各領域の感情値には有意な相関が認められた。つまり、ASEAの感情領域や香料領域における妥当性を確認することができた。 田中寛之，永田優馬，石丸大貴，梅田錬，福原啓太 本人担当分：評価方法の検証、感情解析結果の解釈の指示
32　無為自閉が強い統合失調症患者が、就労プログラムを通して対人交流、活動量の増加に至った一事例	―	令和3年11月	日本デイケア学会第26回年次大会 （於Web開催） http://www.daycare.gr.jp/26th/outline.html	精神科デイケアを利用する無為・自閉、陰性症状が顕著な慢性期統合失調症患者に対し、自己効力感の観点から就労支援プログラムを提供した。本人が出来得る活動提供と積極的な声掛け、環境設定により就労意欲が高まり日常生活行動においても社会性が向上する般化が見られた。 麻野梨沙、福原啓太 本人担当部分：評価治療指示、評価治療支援、介入方針の指示、執筆補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
33　統合失調症の病識と心理防衛的傾向,神経認知機能病識は抑うつや心理的苦痛へとつながるか?	―	令和4年9月	第55回日本作業療法学会（於Web開催）	病識の低下は統合失調症の特徴の一つであり、服薬アドヒアランスや再入院率などの臨床的に重要な変数と関連が示されている。そこで、我々は、病識は心理防衛的傾向と関連があるのか、病識の高さは抑うつや心理的苦痛と関連があるのかについて調査した。その結果、未熟な防衛傾向をもつ統合失調症患者ほど、病識が高いことを示す一見矛盾した結果を得た。つまり、未熟な防衛をもつものは、自分はせいしんしっかんであるというラベルを用意に受け入れてしまう可能性が示唆された。また、その未熟な防衛の結果としての病識は、抑うつや心理的苦痛として当事者を苦しめてしまう可能性も示唆された。 小川泰弘，早川智美，浦川瑞生，福原啓太，西川隆 本人担当部分：内容の妥当性の担保、執筆補助、データ解釈補助
「シンポジウム」 1　臨床に従事する精神科OTが研究することの意義	―	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（於神戸ポートピアホテル）	臨床に従事しながらの研究は，労力と時間がかかり決して楽ではない．作業療法士が特に精神科領域において研究を続ける際，多くの困難と向き合う必要がある．発表者自身の臨床研究の経験を通し，臨床で芽生えた疑問を研究疑問に発展させ，臨床研究に結びつける過程を聴衆（臨床家）に対して教育的観点からわかりやすく説明している．エビデンスに基づいた評価・治療を患者に提供できるよう，全国学会の場で，精神科領域に従事する作業療法士に呼び掛けている．
2　「作業療法って何？」を伝える．考える．精神分野の作業療法士の役割	―	平成27年11月	第4回大阪府立大学作業療法大会（於大阪府立大学）	大阪府立大学学部生を対象に，精神分野における作業療法士の役割について教育的，学術的，臨床的観点から講演した．臨床現場に触れる機会が少ない学部生に精神障害をわかりやすく伝え，精神障害者の困難を社会機能の観点から解説し，演者が経験した症例を挙げ，臨床現場における作業療法士の役割，支援方法を提示した．その際，患者の生活と学生自身の生活を対比させ，患者が求める，あるいは社会的に求められる生活に向けたリハビリテーション・作業療法を提言した．

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　５年　５月　　１２日

氏名　　前田 吉樹

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学　境界医学　脳科学	疼痛　恐怖条件付け　非侵襲脳計測　リハビリテーション 生理反応

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1)実験形式の授業とレポートの提出・添削	平成22年4月 ～現在に至る	ハーベスト医療福祉専門学校　理学療法学科 「生理学実習」 1年次学生を対象に、血圧・スパイロメータ・筋電図・心電図・コキガス分析装置・感覚検査・バイオフィードバック・誘発電位などを用いた実験の指導と、実験レポートの作成法を指導。1グループ4-5名のグループに分かれ実験し、その内容をレポートとして提出させた。レポートについては個別に添削をおこない、授業中盤で実例を交えながらレポート作成時の注意点を再度説明した。
2)プレゼンテーションの導入、小テスト形式	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科　「内部障害学Ⅱ」 2年次学生を対象に、内臓疾患、内分泌・代謝疾患の講義を担当。該当する箇所について定期試験を作成・実施した。テスト対策として国家試験の問題を改変して小テストを作成・実施し、理解力向上の一助とした。
	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科　「理学療法総合演習」 国家試験対策として、「内分泌・代謝疾患」、「バイオメカニクス」「統計学・研究法」の分野に対し講義を実施。小テスト形式で添削をおこない回答力の向上を図った。
	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　教養科目「現実をみるG」 他学部の1年次・2年次学生を対象とした、健康科学関連の教養科目を担当。「痛みを知り痛みと向き合う」「女性が抱える痛みについて」「リハビリテーションの実際（脳卒中）」の3回を担当し、講義をおこなった。授業の終わりには理解確認のための小テストをこない、成績評価の一部とした。
	令和元年4月 ～現在に至る	奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科 「痛み学概論」 1年次学生を対象に、痛みを通じて医療を学ぶことを目的とした講義を担当。「痛みを測る」「痛みの行動科学」「痛みの心理」「痛みの情動」「身近な痛み」を担当。スマートフォンを用いたオンライン回答システム「スマコク」を用いて知識確認を実施した。

事項	年月日	概　　要
	令和元年4月 ～現在に至る	甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科 「理学療法行動科学」 3年次学生を対象とした講義において、行動科学の基礎や応用行動分析、バイオフィードバック、リハビリテーションへの応用について解説した。また、慢性痛の病態や認知行動療法についても講義を行い、「スマコク」を用いた小テストにて成績評価を行った。
	令和3年4月 ～現在に至る	奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科 「疼痛リハビリテーション学」 3年次学生を対象に、痛みの病態を理解する上で重要な現象「恐怖条件付け」「オフセット鎮痛」「運動誘発性鎮痛」「ラバーハンドイリュージョン」について実技形式の講義をおこなった。
3)プレゼンテーションの導入、小テスト形式、実践・体験型学習・実技試験	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科　「筋骨格理学療法学Ⅰ」 2年次学生を対象に、「下肢の骨折（１）」、「脊椎疾患（１）」を担当。疾患の基礎知識の復習として講義を行った後、実技形式でストレッチ・筋力増強運動の手技や各種治療機器の使用方法について説明、学生どうしで模倣・練習させ、適宜個別指導によって指導した。その次の授業では小テストをおこない、理解力向上の一助とした。定期考査では筆記試験の他、実技試験も実施した。
	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「運動機能障害診断学Ⅰ」 2年次学生を対象に、整形外科学的検査手技についての説明と、実技指導をおこなった。模擬患者を想定し、どのような検査が適当かを考えさせるグループワークもおこなった。定期考査として実技試験をおこなった。
4）模擬患者を用いた実習、ビデオ撮影による振り返り、実践・体験型学習、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「理学療法計画論」 3年次学生を対象に、「中枢疾患に対する理学療法評価」の実習を担当。1グループ3名で模擬患者の理学療法評価をおこない、症例レポートを作成させる。レポートは個別で添削をおこなう。その後発表レジュメを作成させ、5～6名のグループで症例発表をさせる。最後に、模擬患者評価の模様をビデオ撮影したものを編集し、患者に対応する上での危険な場面、失礼に値する行動がなかったかを指摘、講義を行った。
5）実験形式、マニュアルによる自己学習、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「運動学演習」 2年次学生を対象に、「筋力と関節角度や角速度の関係」に関する実習項目を担当した。バイオデックスを用いた筋力の測定実習に対してレポートを作成させた。実習は機器の使用方法を記載したマニュアルを読ませることで、学生自身で問題を解決させながら進めるよう実施した。レポートはグループにつき１つを提出するようにし、添削もグループ単位でおこなった。実習の終わりには、実験した内容についての発表会を行わせた。

事項	年月日	概　　要
	令和2年4月 ～現在に至る	奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科 「運動学演習」 2年次学生を対象に、「3次元動作解析装置を用いた関節モーメントの推定」に関する実習項目を担当した。Optitrackを用いた運動学データの取得、フォースプレートを用いた力学データの取得、さらに両社から関節モーメントの算出までの過程を説明。学生には、得られた結果をグラフで図示・考察させた。レポートは各自1部ずつ提出させ、オンラインでの返信・添削をおこなった。
6)動物を用いた実験、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「人体の生理機能演習Ⅱ」（補助） 2年次学生を対象に、ウシガエルを用いた動物実験で、機器の使用法や結果の解釈の仕方などを学生に指導した。実験は1グループ５～６名でおこない、事前学習によって実験の結果予測したものを発表させ、入念に実験方法を学習させてから解剖を行わせた。
7)ゼミ活動	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」 1年次学生を対象としたゼミで、勉強の仕方やプレゼンテーションのまとめ方など、学生の基礎スキル向上を目的とした指導をおこなった。
	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「卒業研究」 配属された学生（3年・4年次学生）に対して、研究計画の立て方や、データを解釈し論文にまとめるまでの過程を指導。ゼミ内での論文抄読や予備実験、実験スケジュールの作成など行わせた。指導した卒論テーマは「運動誘発性鎮痛と身体感覚不一致感の関連についての研究」、「4肢位のマンスリービクス実施による月経随伴症状軽減効果の違いについての研究」であった。
	令和元年4月 ～現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部 リハビリテーション学科　「基礎ゼミⅡ」 1年次学生を対象としたゼミで、研究論文の読み方やまとめ方、プレゼンテーションの方法などを指導した上で、学生に文献レビューを行わせた。
２　作成した教科書，教材 パワーポイント資料、動画、 実験システム		パワーポイント資料、動画、心理生理・心理物理 実験システム、３次元動作解析マニュアル動画
３　教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
４　実務の経験を有する者についての特記事項 「勉強会・研修会」 1）「高齢者の慢性疼痛管理」	平成29年12月	奈良学園大学公開講座 登美ヶ丘カレッジ 「最新の痛みのリハビリテーション　～痛みの病態に応じたケアを考える～」

事項	年月日	概　　要
2)「恐怖条件付けの理論と臨床実践」	平成30年10月	平成30年度 厚生労働省 慢性疼痛診療体制構築モデル事業 理学療法士・作業療法士合同研修会
5　その他 大阪大学 グローバルCOEプログラム 「認知脳理解に基づく機械工学創成」　リサーチ・アシスタント	平成22年4月 ～平成26年3月	大阪大学の実施するGCOEプログラムで、医学・工学・人間科学の学生・研究者が集まり、学際的な融合研究の創成を目指すプログラムでRAとなり、セミナーやシンポジウムで討論や発表をおこなった。
ハーベスト医療福祉専門学校	平成22年4月 ～現在に至る	科目担当：生理学実習
甲南女子大学	平成27年1月 ～28年3月	科目担当：内部障害学Ⅱ、理学療法総合演習、現実をみるG、筋骨格理学療法学Ⅰ、運動機能障害診断学Ⅰ、理学療法計画論、運動学演習、人体の生理機能演習Ⅱ、基礎ゼミⅠ・Ⅱ、卒業研究
	令和元年4月 ～現在に至る	科目担当：理学療法行動科学
奈良学園大学	平成31年4月 ～現在に至る	科目担当：痛み学概論、疼痛リハビリテーション学、運動学演習、基礎ゼミⅡ

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 理学療法士免許取得 修士（医科学）	平成16年5月7日 平成21年3月23日	登録番号:第48466 神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程　第439号 論文題名「立位リーチ動作反復による学習の汎化について：三次元動作解析器を用いた検討」
博士（医学）	平成31年3月25日	大阪大学大学院医学系研究科外科系臨床医学専攻博第30571号 論文題名「Verbal instruction can induce extinction of fear of movement-related pain」
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 奈良学園大学保健医療学部共同研究費	平成29年度	研究題名：痛みと運動知覚の恐怖条件付け研究 研究助成金：200千円 共同代表者：前田吉樹
日本学術振興会 科学研究費助成事業（若手研究）	令和2年度～ 現在に至る	研究題名：恐怖条件付け実験系を用いた慢性痛の病態と治療効果の客観的評価の試み 研究助成金：29,000千円 研究者代表者：前田吉樹
4　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1）痛みのケア	共著	平成29年3月	ピラールプレス	本書は看護職が患者への最善の痛みケアを提供できるよう，第Ⅰ部で「痛みと人間」をテーマに「痛みと性」，「痛みの意味」，「痛みと倫理」「痛みと医療」について述べ，人間と痛みの関係を理解する。そして第Ⅱ部5章～８章で「痛み理論」を紹介し，痛みに関する理論をもとに痛みについての理解を深める・第Ⅲ部では「痛みと看護」をテーマに「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」，「検査に伴う痛みの看護」，「治療に伴う痛みの看護」「ターミナルケアと緩和医療」といった臨床の場面を想定した痛みのケアを学ぶ。そして，第Ⅳ部では「痛みケアにおける看護実践例」として，術後疼痛，癌性疼痛，急性・慢性疼痛，出産に関連した痛みの看護，小児に関連した痛みの看護といった主な疾患や状況における痛みケアの展開事例を紹介する。 B5判・全180頁 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，池辺寧，辻下守弘，前田吉樹，篠原百合子，棚橋千弥子，田中登美，梶村郁子，立川茂樹，新谷奈苗，小池恵理子，澤田京子，横山美菜，室津史子，高垣麻衣 本人担当部分： 「第7章　痛みの心理と情動」 P48－P57を単著 痛みに深く関わる「心理」として不安・抑うつ，「情動」として社会的痛み，痛みの恐怖について解説。非侵襲的脳機能計測の発達により，目に見えない心を情動として観察し，その働きを推察することが少しずつ可能になってきている。情動から心理への因果関係や，それらのベースとなる共通の神経機構を理解することは，痛みの心理的・情動的側面を分析するうえでの一助となる。
2）高齢者のための疼痛ケア	共著	平成30年3月	三恵社	科学研究費助成事業「高齢者入居施設における疼痛管理教育プログラムの開発」の一環として、高齢者入居施設に勤務する看護職対象の疼痛管理教育テキストを作成した。「高齢者入居施設に勤務する看護職が受講したいと考えている教育内容」のアンケートに基づき、内容を構成した。 B5判・全33頁 編者：田中和奈 共著者：田中和奈，百瀬由美子，溝尾朗，前田吉樹，高橋晶 本人担当部分： 「第１章 高齢者の痛みとその特徴」 P2-P10を共著 痛みの定義や種類の説明、さらには高齢者の抱える疼痛の問題点について概説した。 共著者：田中和奈，百瀬由美子，高橋晶，前田吉樹 「第３章　理学療法的観点からの疼痛管理」 P25-27を単著 理学療法士の立場から、高齢者の痛みのマネジメントに重要な点と、効果的な運動療法の実施方法を中心に解説した。
（学術論文）				

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
1）中年女性に出現する肩こりと腰痛の重複症状の実態とその関連要因に関する研究	共著	平成27年3月	甲南女子大学紀要 看護学・リハビリテーション学編 vol.10 pp1-8	パソコン操作を主体とした作業に従事する中年女性従業員335 名を対象として，肩こりと腰痛の重複症状が出現する実態を明らかにするとともに，その身体的，心理的，社会的な要因との関連性について検討した。229名を対象とし、年齢，勤務年数，体格，運動態度，食行動，K6，情緒的サポートの程度，クッパーマン指数，そして肩こりと腰痛とした。結果、有訴者率は肩こりが73.8%，腰痛が53.3%であり，両者重複は47.6%であった。年齢，運動態度，食行動，K6，クッパーマン指数に有訴との有意な関連があった。肩こりと腰痛の両者重複者は、身体的、心理的に不健康な状態にあり、それらを改善させるアプローチの必要性が示唆された。 共著者：辻下守弘，永田昌美，芝寿実子，前田吉樹，川村博文，小貫睦巳 本人担当部分：データの計測・解析
2）低侵襲腰椎後方椎体間固定術後1年の能力障害を予測する術前および術後早期の心理的要因の検討 （査読付）	共著	平成29年9月	日本運動器疼痛学会誌 No.9(2)，2017 pp308-313	腰椎後方椎体間固定術は脊柱管狭窄症や腰椎すべり症に対して有効である一方、改善の乏しい症例も報告されている。そこで術前・術後の破局的思考・運動恐怖とが術後の能力障害に与える影響を検証した。結果、術前ではなく術後早期の運動恐怖が術後の長期的な能力障害に影響を及ぼすことが明らかとなった。 共著者：田村典子，西上智彦，前田吉樹，加賀威浩，和田治，田所浩 本人担当部分：論文の執筆、データの解析
3）局所皮下麻酔と圧刺激による筋の痛みの心理物理学 （査読付）	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究 vol.5，2018 pp19-25	麻酔薬の皮下注により皮膚の痛みを除去し、筋のみに持続的な機械的痛み刺激を与える方法を用いて、被験者の主観的な痛みの強さと刺激圧と関係性を回帰モデルにあてはめた。健常成人13名を対象とし全員に「麻酔なし」と「麻酔あり」条件で、デジタル圧痛計による圧刺激を与え、痛みの強さをNRSで報告させた。結果、麻酔の有無にかかわらず線形モデルよりも非線形モデルの方が決定係数が高くなった。先行研究では熱刺激による皮膚の痛みの回帰モデルがべき関数で表されることが報告されているが、圧刺激による筋の痛みも同様に回帰できることを示している。 共著者：前田吉樹，大城宜哲，小山哲男，植松弘進，柴田政彦 本人担当部分：研究計画、データの計測・解析、論文執筆
4）足関節内反捻挫後のスポーツ動作開始時期に関連する因子の検討 -交絡因子を考慮した多変量解析による検討- （査読付）	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究 vol.5，2018 pp11-17	復帰時期を予測しながらリハビリテーションを進めていくための評価指標として、片脚負荷テスト（OLL-Test）を考案した。本研究では、OLL-Testと圧痛部位ならびに年齢や性別・筋力等の行楽因子が復帰時期に与える影響を検証した。202名を対象とし、交絡因子を投入して多変量解析を行った結果，スポーツ動作開始時期を予測する変数としてOLL-Testの判定結果と圧痛部位が選択された。さらに交互作用項（OLL-Testの判定結果×圧痛部位）を多変量解析に投入した結果でも，OLL-Testの判定結果と圧痛部位，交互作用項が有意な変数として選択されたことから，OLL-Testの判定結果と圧痛部位は互いに影響し合ってスポーツ動作開始時期を調整することが分かった。 （共著者：野田優希，柿花 宏信，前田吉樹，古川裕之，松本 晋太朗，小松稔，内田智也，佃美智留，藤田健司） 本人担当部分：データの解析、論文の執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5) Verbal instruction can induce extinction of fear of movement-related pain （教示は運動への痛み関連恐怖の消去を促す） （査読付） （博士論文）	共著	平成30年4月	The Journal of Pain, 19(9) 2018 pp1063-1073	「動かしたら痛い」という患者の恐怖（運動恐怖）が形成される過程と、その治療に繋がる心理過程を実験的に検証した基礎研究。運動時に痛み刺激が提示される過程を繰り返すことによって運動恐怖を形成し（恐怖条件付け）、その後の条件付けの消去の手続き（痛み刺激が伴わない運動の反復）によって運動恐怖が消失するかを検証した。さらに患者を安心させる声かけのように「動かしても痛み刺激がこない」という教示が条件付けの消去に影響するかを併せて検証した。結果、教示を与えて消去の手続きをおこなった群は恐怖を反映した皮膚電気活動が即座に消失し、教示を与えなかった群は皮膚電気活動の有意な減少がみられなかった。運動と痛みの恐怖が結びつくという現象の証明から、その消去、さらには教示が与える影響までと、自身の研究テーマである「運動と痛みの恐怖条件付け」の集大成として発表した。 （共著者：Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Yuji Fujino, Masahiko Shibata） 本人担当部分: 研究計画、データ測定・解析、論文の執筆
6) コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題―学内実習の概要と学生アンケート調査による考察― （査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 vol.9, 2022 pp31-38	訪問リハビリテーションまたは通所リハビリテーションに関する実習（以下、地域実習）を令和2年度・3年度において学内にて実習を行うこととなった。履修学生のアンケート調査より学内実習の課題と可能性について検討した。回答率は、令和2年度95.7%、令和3年度94.7%であった。アンケート調査の結果、両年度ともに類似した回答傾向であり、地域実習で扱ったテーマについては77.5 – 97.2%が理解できたと回答した。訪問・通所事業所のライブ中継については、94.4 – 100%で高い評価結果であった。一方、3年次以降の臨床実習に関する質問では、36.4 – 85.9%の学生が「不安」という回答であった。自由記載では、「地域リハビリテーションに関する関心や意識が向上した」という感想がある一方、「現場に行きたかった」「実技の時間が欲しい」などの意見もみられた。学内実習となった地域実習は、学生にとって充実した学修機会であったと思われる。 (共著者：滝本幸治，池田耕二，吉川義之，坪内善仁，笹野弘美，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生) 本人担当部分: 研究計画、データ測定・解析
7) コロナ禍における理学・作業療法士養成課程の早期体験実習―学内実習後の学生アンケート調査による検証－ （査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 vol.9, 2022 pp55-63	令和2年度および令和3年度，新型コロナウイルスの感染拡大をうけ早期体験実習を学内実習として実施した。学生アンケートの結果から，学内実習の意義や課題を明確にした。アンケートの結果，両年度とも実習内容については多くの学生が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答した反面，「2年次以降の学外実習に向けた不安」を訴える学生が多かった。自由記述では「教員が近くにいる分質問などがしやすかった」，「疑問をすぐに先生に質問することができた」という意見のほか，「自分が知らなかった分野にも興味が持てた」という意見もみられた。学内実習で医療施設での学びを完全に再現することは困難だが，早期体験実習の本来の目的を達成する上で，学内実習は必ずしも不利な点ばかりではない。 共著者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩﨑智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二 本人担当部分：研究計画、データの集計・解析、論文の執筆
（その他） 「総説」				

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
1）痛みの恐怖条件付け	共著	平成26年11月	Monthly Book Medical Rehabilitation No. 177 （11月号） pp25～30	痛みの慢性化には、「動かすと痛い」という一種の恐怖条件付けが重要な基礎として機能する。この考え方を支持する臨床研究、基礎研究を紹介しながら、恐怖を中心とした痛みの認知面の変化に基づき、痛みの慢性化の病態とその治療の考え方を概説している。 共著者：前田吉樹，柴田政彦 本人担当部分：全体の構成、本文執筆
2）慢性痛の問題点と今後の取り組み	共著	平成26年12月	理学療法学 No. 41(8) pp699～705	疫学、認知行動療法、条件付け、運動療法、脳機能画像研究、バイオフィードバックという幅広いテーマから、リハビリテーションにおける慢性痛の位置づけを詳細に解説した。 共著者：柴田政彦，山田恵子，前田吉樹，安達友紀，西上智彦，寒重之 本人担当部分：全体の構成、本文執筆
3）痛みのメカニズムの理解と痛みに対するリハビリテーションの実践	共著	平成29年4月	日本赤十字リハビリテーション協会誌 No.31 pp10-28	「慢性痛と恐怖条件付け」というタイトルで、恐怖条件付けの理論とその臨床応用、研究の方針までを解説した。 共著者：西上智彦，前田吉樹，壬生彰，田中 克宜，萬福允博，山下浩史，田村典子 本人担当部分：全体の構成、本文執筆
4）【疼痛に対する最新の理学療法-治療効果を最大化するための理論と実践】恐怖条件付けの理論と理学療法への応用	単著	令和2年10月	理学療法ジャーナル No.54(10) pp1143-49	恐怖-回避モデルでは,恐怖条件付けとその般化によって痛みが慢性化すると考えられている。恐怖の評価で重要なことは,患者の破局的な考えを聴取し,恐怖の対象を明確化することである。慢性痛に対する「段階的曝露療法」では,課題の段階付けが重要となる。
5）慢性痛の認知行動療法:―入院環境での取り組み―	共著	令和3年11月	リハビリテーション医学 No.58(11) pp1264-69	痛みのために，所見に比べて生活の質や活動性の低下が著しい慢性痛患者には，認知行動療法などの心理的アプローチを導入することで，痛みに対する捉え方を修正し，運動や活動に対する恐怖が軽減する。入院プログラムでは多職種が関与し，各々が認知行動療法的アプローチを行うことで，患者が自分の症状との向き合い方を知り，運動習慣を身につけることを支援している．当院の入院環境における認知行動療法の実際を紹介する． 共著者：高橋 紀代，前田 吉樹，中原 理，那須貴之，柴田 政彦 本人担当部分：本文執筆
「学会発表」 ＜国際学会＞ 1）Fear Conditioning and Extinction Associating Voluntary Movement with Painful Stimulus: Experimental Verification of Fear Avoidance Model Using Skin Potential Response （運動と痛みの恐怖条件づけ：恐怖回避モデルの実験的検証）	―	平成26年10月	15th World Congress of International Assicuation for the Study of Pain (Buenos Aires) 2014.10.6-11	運動と痛みの恐怖が結びつくという現象の証明から、その消去、さらには教示が与える影響までを検証した。 共同発表者：Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Yoshitetsu Oshiro, Satoru Miyauchi, Aya Nakae, Ben Seymour, Hideki Kashioka, Masahiko Shibata 本人担当部分: 研究計画、研究総括 ポスター発表

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2）Psychologigal characteristics related to the acquisition and extention of pain-related fear (痛みに関連する恐怖の獲得と消去に影響する心理的特性の検証)	―	平成28年9月	16th World congress on pain (Yokohama) 2016.9.26-30	運動への恐怖条件づけの獲得、消去における個人差に着目し、各個人の心理特性との関連性を探索的に検討した。消去期におけるSPR振幅値と各心理指標との相関がみられた。本研究の結果は、疼痛の慢性化に性格傾向等の心理要因が関与する可能性を示唆している。 共同発表者：Takatoshi Masaki, Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Masahiko Shibata 本人担当部分: 研究計画、データ測定 ポスター発表
＜国内学会＞ 1）皮膚電位反応を用いた運動と痛みの恐怖条件付けとその消去の検証	―	平成25年12月	第6回日本運動器疼痛学会 （兵庫県）	恐怖条件付けによって結びついた運動と痛みの恐怖を、条件付けの消去によって軽減できるかを実験的に検証した。消去の手続きによって運動に痛み刺激が伴わないことを学習すると、恐怖を反映して出現する皮膚電気活動が減少することを示した。しかし全体としては最後まで皮膚電気活動が出現し続ける傾向にあり、運動に結びついた痛みの恐怖が容易には取り去ることができないことを示唆した。 共同発表者：前田吉樹，寒重之，大城宜哲，宮内哲，圓尾知之，齋藤洋一，柴田政彦 本人担当部分: 研究計画、データ測定・解析、抄録執筆 （口述発表）
2）教示は運動に伴う痛みの恐怖条件付けの消去に強く影響する	―	平成26年6月	第36回日本疼痛学会 （大阪府）	患者を安心させる教示の有効性が条件付けの消去に基づくものかを検証するために、「運動に結びついた痛みの恐怖」の消去に「動かしても刺激がこない」という教示が影響するかを実験的に検証した。結果、教示と経験による消去をおこなった群は恐怖を反映した皮膚電気活動が即座に消失し、経験だけで消去をおこなった群は最後まで皮膚電気活動の有意な減少がみられなかった。 共同発表者：前田吉樹，寒重之，大城宜哲，宮内哲，中江文，Ben Seymour，柏岡秀紀，柴田政彦 本人担当部分: 研究計画、データ測定・解析、抄録執筆 （口述発表）
3）運動への恐怖条件付けに関連する心理尺度	―	平成27年11月	第8回 日本運動器疼痛学会 （愛知県）	運動への恐怖条件づけの獲得、消去における個人差に着目し、各個人の心理特性との関連性を探索的に検討した。消去期におけるSPR振幅値と各心理指標との相関がみられた。本研究の結果は、疼痛の慢性化に性格傾向等の心理要因が関与する可能性を示唆している。 共同発表者：柾木隆寿,前田吉樹，寒重之，柴田政彦 本人担当部分: 研究計画、データ測定 （口述発表）
4）肩甲下筋テスト時の肩関節周囲筋の筋活動の検討	―	平成28年11月	第56回 近畿理学療法学術大会 （和歌山県）	肩甲下筋のテストであるLift off testとしてBelly press testとBelly off signが挙げられる。これら二つのテストの肩関節周囲筋の筋活動の違いを筋電図を用いて明らかにすることを目的とした。結果、BPはBOに比べ大胸筋、大円筋の働きが抑えられ肩甲下筋、三角筋の働きが大きくなることがわかった。 共同発表者：吉村拓実、春名匡史、立花 孝、土山耕南、西川 仁史、前田吉樹 本人担当部分：研究計画、準備 （口述発表）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5）運動恐怖，破局的思考に着目し肩関節痛が寛解した1症例	―	平成30年9月	第23回 日本ペインリハビリテーション学会学術大会（福岡県）	肩関節痛に関連する運動恐怖や破局的思考に着目することで症状が寛解した症例を経験した。痛みの持続因子となる運動恐怖、破局的思考の改善により、徒手的な介入が無くとも症状の寛解に繋がった。 共同発表者：永見達朗、 吉野敦雄、前田吉樹 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）
6）股関節痛の寛解によって生物心理社会モデルへの理解を得られた1症例	―	平成30年12月	第11回 日本運動器疼痛学会（滋賀県）	本症例は重荷に感じていた仕事の終了に伴い股関節の痛みが寛解したため、仕事への不安が痛みに関係しているという気づきが得られた。急性の股関節痛を有する患者において、急に痛みが寛解したり、いつの間にか症状が改善している場合には、認知や環境の変化が影響している可能性がある。 共同発表者：永見達朗、吉野敦雄、前田吉樹 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）
7）入院集学的リハビリテーションにおける恐怖―回避思考への教育介入　―運動恐怖への段階的暴露により機能が改善した慢性腰痛患者の1例―	―	令和1年9月	第24回 日本ペインリハビリテーション学会学術大会（名古屋市）	入院集学的リハビリテーションに、恐怖―回避思考に対する教育介入を導入した症例を報告した。腰痛患者に対し、破局的思考を整理し、腰曲げや座位など各動作への恐怖心を点数化、紙面上に配置してその階層性を示した。「痛みが出現する恐れ」の確信度を確認しながら段階的に暴露した結果、柔軟性や自己効力感、QOLの改善がみられ、臥位時間が大幅に短縮した。特定の動作に強い恐怖を示す症例には、その思考を整理・明確化して暴露することで、入院リハの効果を高めることが可能と考える。 共同発表者：前田吉樹　佐々木樹　島田隆志　中原理 高橋紀代　榎本聖香　柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （口述発表）
8）疼痛教育、痛み日記を活用して股関節痛が緩解した一症例	―	令和1年9月	第24回 日本ペインリハビリテーション学会学術大会（名古屋市）	変形性股関節症、進行期の女性に対し、痛みに対する破局的思考を整理、痛みに応じて活動量を上げるよう指導した。Dual taskによって痛みからの注意を逸らしつつ段階的に介入していくことで、夜間痛も消失した。また他人の過剰な気遣いに対する嫌悪感や、頼まれたことを何でも受け入れてしまう自分への気づきを促した。３か月後、１時間以上の長距離歩行が可能となった。進行期の股関節痛であっても、生物心理社会モデルに基づくアプローチによって痛みの緩解、ＱＯＬの向上が期待できることが示唆された。 共同発表者：永見達朗、吉野敦雄、前田吉樹 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （口述発表）
9）運動恐怖、破局的思考に着目し股関節痛が緩解した一症例	―	令和1年11月	第121回 日本運動器疼痛学会（東京都）	60代女性、左変形性股関節症の患者に対し、外来リハビリ開始。他院で「歩くのは無理しないように」という説明を受けており、坂道に対する恐怖と「趣味の旅行に行けなくなるのでは」、「股関節術後に悪くなった近所の人のようになるのでは」という不安があった。困難な動作を痛みへの注意を逸らしつつ段階的に実施、痛みなくできることを経験させた。その後本人自身による行動の変容がみられ、リハビリ9回目で各動作をほぼ痛みなく行えるようになった。生物・心理・社会モデルの理解が得らて以降、症状の改善と破局的思考の減少に至った。 共同発表者：永見達朗、吉野敦雄、前田吉樹 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
10）集学的治療入院プログラムに対する3週間の漸増的サイクリング運動における痛みと運動の生理的変化	―	令和2年11月	第13回 日本運動器疼痛学会 （オンライン）	痛みの破局化や恐怖，回避などにより，活動性低下・不活動を引き起こしていると，目標とする運動強度まで到達できず，計画通りに治療が進まないことがある。この問題に焦点を当て，慢性痛患者を対象に痛みと運動負荷，自覚的運動強度，心拍数との関係を調べた。実施前に比べ終了時に痛み度が減少し，運動による鎮痛緩和がみられた。しかし運動中の生理的変化は健常者と相違しており，自覚的運動強度が高い傾向が認あられた。今後，症例を重ね慢性痛の病態解明や治療に生かしたい。 中原理、高橋紀代、西下祥子、丸山伸廣、前田吉樹、柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （口述発表）
11）就労希望のある慢性痛患者の就労状況について	―	令和2年11月	第13回 日本運動器疼痛学会 （オンライン）	集学的痛みセンターを受診した初診患者のうち、就労希望のあった患者を対象に、職場復帰群と未復帰群の特徴を検討した。職場復帰群では、9回の外来診療や入院診療を利用することで、職場へ復帰していることが確認できた。 浦澤純一、高橋紀代、中原理、前田吉樹、柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）
12）13年ぶりに就労を再開できた緊張型頭痛の1症例 ―長期的な外来リハビリテーションを通じて―	―	令和3年3月	第50回 日本慢性疼痛学会 （オンライン）	痛みの訴えが多い患者に対して自主練習の記録を指導したことが、痛くても動けることを実感するきっかけとなった。自主練習のペーシングに難渋することもあったが、記録を行うことでペーシングの調整が可能となったと考えられた。長期的なリハビリを通じて活動量も向上していき、就労にも繋がったと推察された。 浦澤純一、前田吉樹、中原理、高橋紀代、榎本聖香、柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （オンデマンド発表）
13）痛みによる過度な安静により独居困難となり、入院リハビリテーション後に独居を再開した後期高齢者の一例	―	令和3年3月	第50回 日本慢性疼痛学会 （オンライン）	痛みによる過度な安静が定着し、独居生活が困難になった症例を担当した。痛みがあっても動けることを自覚してもらうとともに痛みの対処法を指導した。その結果、退院後に独居と余暇活動を再開できた。集中的な入院リハビリテーションにより、自分に合った運動負荷、痛みの対処法を指導することで活動量が向上し、退院後のADL改善に繋がったと考える。 菱田稜介、浦澤純一、中原理、高橋紀代、榎本聖香、前田吉樹、柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （オンデマンド発表）
14）慢性痛患者に対する高強度負荷の有酸素運動における運動前後の痛みの緩和について	―	令和3年6月	第58回 日本リハビリテーション医学会 （国立京都国際会館）	慢性痛患者を対象に痛みと運動負荷，自覚的運動強度，心拍数との関係を調べた。患者は概ね目標心拍数に到達したが、痛みへの効果は個人差が大きかった。 共同発表者：中原理，高橋紀代，西下祥子，丸山伸廣，前田 吉樹，柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （オンデマンド発表）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15）入院集学的リハビリテーション後に職場復帰できた線維筋痛症の一症例	―	令和3年11月	第14回 日本運動器疼痛学会	院集学的リハビリテーション後に趣味を生かした仕事へ就職できた症例について報告する。患者は仕事を「したいことではなかった」「凄いストレス」と訴え、痛みで欠勤が多く入院前に退職したが、復職は考えていなかった。趣味に対しても「嫌いになる」と訴えていた。入院中は集中的に自転車エルゴメーターや屋外歩行に取り組む中で、次第に痛くても動けることを実感していき、自ら楽器を用意して演奏を楽しむこともできた。「趣味の調理を生かした仕事がしたい」と考えるようになり、退院1ヵ月後に調理の仕事へ応募し2ヵ月後に就職した。痛くても動けることを実感していき、趣味活動へ目を向けられるようにもなり、自信を取り戻していった。その結果、やりがいのある仕事への就職目標を持つことができ、就分へ至った。 共同発表者：浦澤純一，中原理，小泉優喜，津田清香，高橋紀代，榎本聖香，前田吉樹，柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （オンデマンド発表）
16）医療者による教育的な関りによってADL・疼痛の著明な改善をもたらした一症例	―	令和4年11月	第15回 日本運動器疼痛学会	痛みの原因が特定できない場合、慢性的な痛みはドクターショッピングや対症療法の繰り返しになりがちである。医療者と患者の間で「痛みを軽減するのではなく、以前の生活に戻る」という考え方を共有するのは難しい。痛みは危険を回避し治癒するための重要なもので、危険な状態でも痛みがなかったり、危険でない状態で強い痛みがあることもある。患者に正しい知識を伝えることが運動療法や認知行動療法に有効。30歳代女性の症例では、痛みへの肯定的な受け入れが運動恐怖の減少と痛みの軽減につながった。 共同発表者：浦澤純一，中原理，前田吉樹，高橋紀代，柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）
17）Virtual Reality はゲーム中断中および終了後でも痛みへの反応を変化させるか？	―	令和4年12月	第12回 保健医療学会学術集会	近年、医療でのVR技術の利用が進んでいる。痛みの軽減効果が注目されているが、一時的な気逸らし効果だけでなく、長期的な効果も検証される必要がある。健康な成人を対象に、VRの効果を痛みの閾値と自律神経反応で検証した結果、ゴーグル装着中は痛みの閾値が変化せず、ゴーグル除去後に有意な上昇が見られた。VRの鎮痛効果は気逸らしの影響が大きいことが示唆された。 共同発表者：増谷結菜，前田吉樹 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）
18）目標設定が曖昧であったが入院リハ中に活動量が向上し、退院後に目標を達成できた後期高齢者の1例	―	令和5年3月	第52回日本慢性疼痛学会	本研究は、後期高齢者のリハビリテーションに関するケーススタディである。入院時には目標が曖昧であったが、リハビリテーション中の活動量の増加により、退院後に目標を達成することができた。目標設定の明確さよりも、積極的な活動とリハビリテーションチームとのコミュニケーションが機能向上に貢献する可能性が示されている。 共同発表者： 菱田稜介，浦澤純一,中原理，島田隆志,高橋紀代，前田吉樹，柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
19）治療に難渋することが予想されたにもかかわらず早期に就労できた慢性腰背部痛の一例	―	令和5年3月	第52回日本慢性疼痛学会	本研究では、慢性腰痛患者が集学的診療の過程で治療が難渋すると予測されていたが、早期就労に至った特異なケースの報告である。 共同発表者： 北純一，浦澤純一,中原理，津田清香，高橋紀代，前田吉樹，柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）
〈依頼原稿〉 1）「プラセボ効果とはどのようなものですか？」	―	平成26年10月	Locomotive Pain Frontier vol. 3 (2) pp42～43	プラセボ効果は、医学研究、とりわけ試薬の研究において本来の治療効果とは異なる「取り去るべき」ものとして捉えられてきた。しかしながら、近年痛みの臨床においてはプラセボ効果も治療の一つとして取り入れようという流れがある。それらプラセボ効果に関する認識の変遷を、具体的な研究報告とともに解説した。 （2頁） （分担執筆者：前田吉樹,柴田政彦）
〈研究助成金〉 1）奈良学園大学保健医療学部共同研究費		平成29年度	奈良学園大学	研究題名：痛みと運動知覚の恐怖条件付け研究 【平成29年度採択課題】 研究助成金：200千円 共同研究者：前田吉樹，辻下守弘，守本とも子
2）科学研究費助成事業（若手研究）		令和2年度～ 現在に至る	日本学術振興会	研究題名：恐怖条件付け実験系を用いた慢性痛の病態と治療効果の客観的評価の試み 【令和2年度採択課題】 研究助成金：29,000千円 研究者代表者：前田吉樹

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　5年　3月　31日

氏名　吉川　義之

研究分野	研究内容のキーワード
リハビリテーション科学 応用健康科学 福祉工学	リハビリテーション医学、理学療法学、障害学、老年学 ヘルスプロモーション

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 １）ワークブック作成・活用による学習意欲の向	令和1年度～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「運動学Ⅰ（総論）」にて実施。 運動学Ⅰ（総論）の講義は幅広く、教科書を読むだけでは学生へは伝わりにくい。そのため、教科書の中から比較的重要度の高い項目を抜き出し、ワークブックを作成した。そうすることで、学生の学習意欲意欲を高めることができた。
２）アクティブラーニング学習による自発性の向	令和1年度～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「基礎ゼミⅡ」にて実施。 基本的な学び方・調べ方の内容を教授したあとは、学生が自らで学び実践し、学生が発表する機会を多く与えた。また、将来学会発表など発信する練習も兼ねた授業を実施している。
３）反転授業による学習効率の向上	令和2年度～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「運動器障害評価学」にて実施。 「運動器障害評価学」では限られた時間内に徒手筋力検査法を覚える必要があるため、学生に対して教科書を確認の上、分からない箇所を授業中に質問させる用に実施した。また、チェックシートを記載させ、どの学生がどの程度理解しているのかを確認しながら実施した。
４）動画を利用した授業による学習意欲の向上 い	令和2年度～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「地域理学療法学演習」にて実施。 訪問・通所リハビリテーションを担当し、実際の臨床現場の動画を使用しながら授業を実施。その後、学生自身が障がいを持ったと仮定して自らの自宅で在宅生活をする体験をしてもらい、その内容をグループごとにディスカッションしてもらい代表者には全体で発表させた。
５）グループワークにより学生間理解の共有	令和2年度～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「日常生活活動演習」にて実施。 日常生活活動の教科書の写真や図の動きを解説しつつ、学生自身にも障害者の動作を体験させ、グループでレポートを作成させた。また、作成したレポートを発表し、学生同士でディスカッションを実施し、知識の共有を図る形式をとった。
６）学内実習による知識および興味・関心の向上	令和2年度～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「早期体験実習・地域理学療法実習」にて実施。 令和2年・3年度の早期体験実習・地域理学療法実習ではコロナ禍であったため、臨地実習ではなく学内実習となった。そのため、現場とのLive中継や現場で働く理学療法士を学内に招いたり、オンラインで繋ぐなどを通して可能な限り現場の雰囲気を学生に伝えられるよう配慮して実施した。学生からもLive中継に関する評価は非常に高かった。
７）最新知見の共有および文献抄読によるグルー	令和2年度～現在に至る	奈良学園大学看護学研究科「在宅看護学特論Ⅰ」にて実施。 褥瘡予防・治療における最新の知見を紹介と失禁ケアやストーマ、スキンテアの最新論文（システマティックレビューなど）の抄読会を実施し、その結果を基にグループワークを実施した。
８）臨床実践方法の違いを他職種で共有すること	令和3年度～現在に至る	奈良学園大学看護学研究科「在宅看護学特論Ⅲ（回復支援）」にて実施。 地域での在宅生活を回復支援する上での基盤となる地域リハビリテーションの理念、ケアに関わる者が果たすべき役割について理解を深めながら、多職種による知識・技術の違いを共有し多職種連携の強化を図った。また、今後現場におけるリーダーとして活躍できるような実践的能力の基礎を学修させた。

事項	年月日	概　　要
2　作成した教科書，教材 1）運動学ワークブック	令和1年度～現在に至る	基礎運動学（教科書）の範囲は幅広く、どの分野が重要なのかが非常に分かりにくいため、担当教員でそれぞれの単元をまとめたワークブックを作成し、その内容を中心に覚えられるように工夫した。 使用大学：奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 共著者名：池田耕二、吉川義之、城野康朋、 本人担当分：姿勢、運動と動作分析①、運動と動作分析②、歩行と走行①、歩行と走行②
2）実習の手引	令和1年度～現在に至る	早期体験実習、地域実習用の実習の手引を作成した。地域実習においては、学生が地域実習を円滑に行えるようにするため、経験項目シートを作成し、大学教員と臨床実習指導者が学生に実習してほしい項目に差が出ないようにする取り組みを行った。 使用大学：奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科
3）日常生活活動演習用課題シート作成	令和2年度～現在に至る	日常生活活動演習を学生が理解しやすくするため、各動作毎に項目分けされた課題シートを作成し、学生自身が課題シートに記入しながら学ぶ教材を作成した。これにより学生の自主性が得られ、学生同士でディスカッションする機会が増えた。 使用大学：奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科
4）実習経験シート作成	令和2年度～現在に至る	実習では実習地により経験できる項目に差が出現する可能性があるため、各学生が経験した項目を把握するために作成した。また、この実習経験シートは次の実習指導者へ申し送りできるため、実習指導者も経験項目と未経験項目を把握しやすくなる。 使用大学：奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科
5）地域理学療法実習用ワークシート作成	令和2年度～現在に至る	地域理学療法実習における学生が経験した項目などをまとめやすくするため、学ぶべき内容を単元ごとにまとめたワークシートを作成した。これを活用することにより学修の整理につながった。 使用大学：奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において、奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科講師として判定	平成30年4-5月	基礎ゼミⅡ、運動学Ⅰ(総論)、職場管理論、客観的臨床能力演習(理学療法)、理学療法卒業研究、運動器障害評価学、物理療法学Ⅰ(総論)、物理療法学Ⅱ(各論)、日常生活動作学演習、地域理学療法学演習、早期体験実習(理学療法)、地域理学療法実習、理学療法評価学実習、総合臨床実習Ⅰ(理学療法)、総合臨床実習Ⅱ(理学療法) の担当可と判定
2）学生による授業評価アンケート （奈良学園大学）	令和1年度～現在に至る	学生の授業評価アンケートは5段階において2.2～4.4点であった。評価の低い項目としては「この授業を理解するのに1週間に授業時間外でどれほど学習を行っていましたか？」に対して、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した学生が半数以上いた。しかし、「この授業に積極的に参加していますか」「教員の説明はわかりやすいですか」「授業の要点はめいかくですか」などに関しては4点以上であった。予習・復習に対しての意識付けに課題がある一方で、授業に関する興味・関心は高いと評価されている。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）臨床実習教育	平成18年度 ～ 平成30年度	神戸大学、畿央大学、神戸学院大学、目白大学、神戸国際大学からの臨床実習指導を担当した。年間約10名の学生に対して、理学療法評価・理学療法実施方法について指導し、レポート作成および症例報告会を実施した。特に物理療法と地域理学療法に関しては大学で学んでいる学生が少なかったため、上記二点を中心に指導した。その結果、実習生は物理療法の効果については特に興味を抱いていた。
2）国家試験対策	平成24年度 ～ 平成26年度	関西総合リハビリテーション専門学校にて国家試験対策の講義を担当した。担当科目は内部障害理学療法と物理療法学であった。内部障害理学療法は心電図の診かたと心疾患の理学療法について国家試験問題を解きながら解説した。物理療法学は概論と物理療法の基礎、実施方法について国家試験問題を解きながら解説した。
3）専門学校記念式典の特別講演	平成27年10月	関西総合リハビリテーション専門学校卒業生として学生・教員・卒業生を対象に15周年記念式典での講演した。講演内容は「セラピストが褥瘡対策チームで発揮できる技術」とし、局所治療としての物理療法と、予防としてのポジショニングの有効性について講演した。

事項	年月日	概　　要
4) 地域セミナー		
1. 加古川市地域セミナー	平成27年11月	加古川市の地域在住高齢者について「認知症予防と運動療法」について講演
2. 明石市大久保町在宅介護支援センター	平成28年7月	明石市大久保町の老人クラブにて「認知症予防と運動療法の必要性」についての講演と自宅でできる運動を実施。
3. 兵庫県健康保険事務所主催「筋萎縮性側索硬化症（ALS）　医療相談会・交流会	平成29年10月	ALS患者・患者家族に対して、神経内科医が「ALSの病態と治療について」、理学療法士が「ALSのリハビリテーション」の講演を行った。その後交流会に参加し、日常生活上で困っている事などについて助言を行った。
4. 加西市生活サポーター＆介護予防リーダー養成講座	平成30年6月	加西市の生活サポーター＆介護予防リーダー養成講座にて、地域の高齢者を対象に「加齢による変化を受入れ、華麗に介護予防を」について講演した。
５　その他		
1) 日本理学療法士協会認定理学療法必須研修会資料作成	平成25年度 ～ 令和3年度	褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会で指導するための教材を作成した。内容は「褥瘡の創面評価、リスク評価について」「褥瘡・創傷ケアに対する電気刺激療法の実際」の資料を作成した。
2) 日本理学療法士協会褥瘡・創傷ケア認定理学療法士認定試験問題作成	平成25年度 ～ 令和3年度	褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の認定試験問題を作成した。
3) 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科	令和1年度 ～ 令和4年度	基礎ゼミⅡ、運動学Ⅰ(総論)、職場管理論、客観的臨床能力演習(理学療法)、理学療法卒業研究、運動器障害評価学、物理療法学Ⅰ(総論)、物理療法学Ⅱ(各論)、日常生活動作学演習、地域理学療法学演習、早期体験実習(理学療法)、地域理学療法実習、理学療法評価学実習の科目を担当した。
3) 奈良学園大学大学院看護学研究科	令和3年度 ～ 令和4年度	在宅看護学特論Ⅰ（在宅看護学）、在宅看護学特論（回復支援）の科目を担当した。

事項	年月日	概　　要
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）理学療法士免許 2）3学会合同呼吸療法認定士 4）修士（保健学） 5）日本褥瘡学会　認定褥瘡理学療法士 6）認定理学療法士（介護予防） 7）認定理学療法士（褥瘡・創傷ケア） 8）専門理学療法士（物理療法） 9）専門理学療法士（生活環境支援系） 10）博士（医療リハビリテーション学）	 平成15年4月30日 平成20年1月1日 平成23年3月 平成23年9月1日 平成24年4月1日 平成25年4月1日 平成25年4月1日 平成25年4月1日 平成29年3月	 免許番号第47993号 登録番号第080806号（日本胸部外科・呼吸器・麻酔科学会） 修第八八号(神戸大学大学院) 修士論文題名：「側臥位における大転子部の体圧分散を配慮したポジショニングの検証」 登録番号第417号（日本褥瘡学会） 登録番号16-120（日本理学療法士協会） 登録番号19-6（日本理学療法士協会） 登録番号2016S-06-000005（日本理学療法士協会） 登録番号2016S-05-000039（日本理学療法士協会） 医リ博甲第四号（神戸大学大学院） 博士論文題名:[Monophasic pulsed microcurrent of 1-8 Hz increases the number of human dermal fibroblasts.」（1-8Hzの単相性パルス微弱電流はヒト皮膚由来線維芽細胞を増殖させる。）
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）理学療法士の活動	平成16年4月 ～ 平成24年8月	平成16年4月～平成17年8月までは、河上整形外科にて整形外科の術後理学療法および外来理学療法を中心に理学療法業務に従事した。木・土曜日は午後が休診であったため、訪問リハビリテーションで維持期の脳梗塞後遺症患者の理学療法を実施していた。平成19年9月～平成24年8月までは、有床診療所の理学療法士として、心疾患患者や呼吸器疾患患者の理学療法を実施した。呼吸療法認定師や心臓リハビリテーション指導士の取得はこの時期に取得し、ケースレポート等もまとめた。また、寝たきり高齢者の理学療法も実施し、褥瘡治療および褥瘡予防のポジショニング等を実施していた。褥瘡の理学療法に関する臨床研究はこの時期に実施していた。平成22年4月より介護保険領域の部署の異動となり、主任として通所リハビリテーションと訪問リハビリテーション業務に従事した。理学療法業務に加え、職員管理、利用者契約などの業務も担当した。
3）株式会社アバンサール	平成24年9月 ～ 平成31年3月	平成24年11月に通所介護施設を開設し、機能訓練指導員として理学療法業務および管理者として運営面全般を実施していた。平成27年4月に訪問看護ステーションを開設し、それ以降は訪問看護ステーションからの訪問リハビリテーション業務に従事していた。平成26年度からは地域で認められた通所介護施設と訪問看護ステーションとなり、明石市介護保険サービス事業者連絡協議会や在宅介護支援センター、兵庫県健康保険事務所より講演依頼をいただき、理学療法業務に加え講演等の職務も実施していた。平成30年度からは地域の神経内科医と共に神経難病患者（ALS、多系統萎縮症、脊髄小脳変性症等）を担当することが多く、褥瘡予防をはじめ、褥瘡治療、神経難病に対する理学療法業務を遂行していた。 また、代表取締役として、会社の経営管理を実施していた。経理・総務は部門分けをして他の役員が担当し、管理運営部門に関してマネジメント業務を中心に実施していた。
4　その他 （学会・論文査読実績） 1）第48回日本理学療法学術大会 2）第26回兵庫県理学療法学術大会 3）第54回近畿理学療法学術大会 4）第50回日本理学療法学術大会 5）第27回兵庫県理学療法学術大会 6）第55回近畿理学療法学術大会	 平成24年11月 平成26年4月 平成26年7月 平成26年11月 平成27年4月 平成27年7月	 一般演題査読 一般演題査読 一般演題査読 一般演題査読 一般演題査読 一般演題査読

事項	年月日	概　　要
7）第51回日本理学療法学術大会	平成27年11月	一般演題査読
8）Journal of Wound Care	平成28年4月20日	投稿論文査読
9）第24回日本物理療法学会学術大会	平成28年7月	一般演題査読
10）第56回近畿理学療法学術大会	平成28年7月	一般演題査読
11）第52回日本理学療法学術大会	平成28年11月	一般演題査読
12）第29回兵庫県理学療法学術大会	平成29年4月	一般演題査読
13）第25回日本物理療法学会学術大会	平成29年7月	一般演題査読
14）第57回近畿理学療法学術大会	平成29年7月	一般演題査読
15）第26回日本物理療法学会学術大会	平成30年7月	一般演題査読
16）第27回日本物理療法学会学術大会	令和1年7月	一般演題査読
17）日本褥瘡学会誌	令和2年9月1日	投稿論文査読
18）第1回日本物理療法研究会学術大会	令和2年12月	一般演題査読
19）医療福祉情報行動科学研究	令和3年2月	投稿論文査読
20）第28回日本物理療法学会学術大会	令和3年7月	一般演題査読
21）第2回日本物理療法研究会学術大会	令和3年12月	一般演題査読
22）医療福祉情報行動科学研究	令和4年1月	投稿論文査読
23）体力科学	令和4年11月	投稿論文査読
24）第2回日本物理療法研究会学術大会	令和4年12月	一般演題査読
25）医療福祉情報行動科学研究	令和5年1月	投稿論文査読
（一般演題座長） 26）第54回近畿理学療法学術大会	平成26年11月3日	第17 セッション 生活環境支援系2 の座長
27）第30回兵庫県理学療法学術大会	平成30年7月1日	第9 セッション の座長
28）第58回近畿理学療法学術大会	平成31年1月20日	第3 セッション 生活環境1　の座長
29）第21回日本褥瘡学会学術集会	令和1年8月23日	リハビリテーション２／機器・用具　の座長
30）第28回日本物理療法学会学術大会	令和1年10月20日	一般口述演題Ｖ　神経・筋制御の座長
（特別講演・教育講演座長） 31）第1回物理療法研究会	令和3年2月20日	教育講演「物理療法最前線」の座長
32）第2回物理療法研究会	令和4年2月19日	教育講演「廃用に伴う骨格筋の可塑的変化のメカニズム ～筋萎縮・拘縮・疼痛に対する新たな物理療法戦略～」の座長
33）第24回日本褥瘡学会	令和4年8月28日	教育講演「教育講演12　物理療法最前線1」の座長
34）第24回日本褥瘡学会	令和4年8月28日	教育講演「教育講演13　物理療法最前線2」の座長
35）日本物理療法合同学術大会2023	令和5年2月18日	学術大会長講演「物理療法の評価と治療」の座長
36）日本物理療法合同学術大会2023	令和5年2月18日	教育講演「褥瘡の評価と治療」の座長
（シンポジウム・パネルディスカッション座長） 37）第28回日本物理療法学会学術大会	令和3年10月23日	シンポジウム「訪問リハビリテーションで物理療法を使いこなす」の座長
（シンポジウム・パネルディスカッション） 38）職種別サテライトシンポジウム （理学療法士） テーマ：新人から見た褥瘡の魅力.	平成23年9月	褥瘡予防・管理に理学療法士としてどのように関わっているのか褥瘡に関わりだした新人セラピストとして、理学療法士が関わる魅力についてシンポジストとして発言した。（第13回日本褥瘡学会）
39）直流微弱電流刺激療法の効果と実践. テーマ：最先端のエビデンスUpdate 褥瘡ケアへの理学療法士の参画.	平成24年5月	臨床で実施している電気刺激療法の実際をシンポジストとして発言した。また、海外で発表されている先行研究との比較も行い、電気刺激療法の必要性について提言した。（第47回日本理学療法学術大会）

事項	年月日	概　　要
40）褥瘡局所治療（down stream)における理学療法技術. テーマ：褥瘡対策チームで発揮できる理学療法技術.	平成26年5月	褥瘡局所治療として電気刺激療法と超音波療法の有効性について、実施している方法と臨床データについてシンポジストとして発言した。（第49回日本理学療法学術大会）
41）日本褥瘡学会認定師によるチーム医療の今後の方向性について	平成27年9月	認定褥瘡理学療法士として褥瘡予防・管理における理学療法士の必要性と可能性についてシンポジストとして発言した。（第17回日本褥瘡学会学術集会）
42）褥瘡ケアにおける多職種協働の取り組み～地域連携の実際.	平成28年3月	褥瘡ケアにおける多職種協働の取り組みを在宅ケアに関わる理学療法士の立場からパネリストとして発言した。（第13回 日本褥瘡学会近畿地方会学術集会）
43）下肢創傷リハと褥瘡リハが実現する創傷リハビリテーションの市民権	令和2年9月	褥瘡リハに関わる立場から理学療法士の必要性と現状の課題をシンポジストとして発言し、討論した。（第22回　日本褥瘡学会学術集会）
44）ベッド・マットレスにおける安全対策	令和2年9月	ベッドおよびマットレスの安全対策を理学療法士の立場から現状の問題点を中心に発言し、討論した。（第22回　日本褥瘡学会学術集会）
45）体圧分散寝具の最新知見	令和3年9月	臨床現場におけるマットレス選択や安全対策について理学療法士の立場から現状の問題点を中心に発言し、討論した。（第23回　日本褥瘡学会学術集会）
（研修会講師）		
46）認定理学療法士必須研修会講師	平成25年9月29日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
47）認定理学療法士必須研修会講師	平成26年6月22日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
48）ハンズオンセミナー講師	平成27年10月24日	第23回日本物理療法学会学術大会にて、褥瘡・創傷ケアの物理療法について実際に物理療法機器を使用してハンズオンセミナーを実施した。
49）認定理学療法士必須研修会講師	平成27年12月6日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
50）第51回日本理学療法士協会全国学術研修大会講師	平成28年10月7日	沖縄県で開催された日本理学療法士協会全国学術研修大会において「褥瘡ケアで理学療法士だからできること～病院・施設・在宅ケア～」のテーマで講演した。
51）認定理学療法士必須研修会講師	平成28年10月30日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
52）兵庫県在宅褥瘡セミナー講師	平成28年12月11日	日本褥瘡学会主催の兵庫県在宅褥瘡セミナーのリハビリテーション分野で講師として、看護師・介護士理学療法士・作業療法士を対象に講義した。
53）富山県理学療法士会研修会講師	平成29年8月20日	褥瘡・創傷ケアの理学療法に関する内容で理学療法士・作業療法士・看護師を対象とした講演を実施した。
54）認定理学療法士必須研修会講師	平成29年10月15日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
55）認定理学療法士必須研修会講師	平成30年9月16日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
56）姿勢・活動ケア研究会「褥瘡セミナー」講師	平成30年12月1日	姿勢・活動ケア研究会主催の褥瘡セミナーにて「褥瘡の評価と物理療法」のテーマで講義した。
57）姿勢・活動ケア研究会「褥瘡セミナー」講師	令和1年5月18日	姿勢・活動ケア研究会主催の褥瘡セミナーにて「褥瘡の評価と物理療法」のテーマで講義した。
58）第21回日本褥瘡学会学術集会　教育講演11	令和1年8月24日	教育講演11（褥瘡患者のリハビリテーション医療）のテーマで講演した。なお、この教育講演は皮膚科領域講習1単位に該当する講演である。
59）認定理学療法士必須研修会講師	令和1年9月7日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
60）認定理学療法士必須研修会講師	令和3年7月17日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。

事項	年月日	概　　要
61）創傷管理の物理療法　基礎から臨床応用	令和3年10月24日	創傷管理の物理療法について、培養細胞実験と臨床研究の結果を紹介し創傷管理の物理療法の発展に関する講演を実施した。
62）日本物理療法合同学術大会　教育講演	令和5年2月18日	「褥瘡の評価と治療」の教育講演で物理療法を使用した褥瘡治療について講演した。
（学会運営） 63）第6回日本褥瘡学会近畿地方会学術集会 準備委員	平成21年3月8日	日本褥瘡学会近畿地方会学術集会準備委員として開催1年前より運営準備に従事した。
64）第11回日本褥瘡学会近畿地方会学術集会 準備委員	平成26年3月2日	日本褥瘡学会近畿地方会学術集会準備委員として開催1年半前より運営準備に従事した。
65）第23回日本物理療法学会学術大会 準備委員	平成26年10月 24・25日	日本物理療法学会学術大会準備委員として開催1年半前より運営準備に従事した。主に演題担当として、演題の査読振り分け、プログラム作成に従事した。
66）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	平成28年5月13日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
67）日本褥瘡学会実態調査委員　協力者	平成28年10月1日	4年に1度の日本褥瘡学会褥瘡患者実態調査の調査委員の協力者として、兵庫県内の病院・施設などに調査依頼を行った。
68）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	平成29年5月12日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
69）日本物理療法学会　法人化担当委員	平成29年8月21日	任意団体であった日本物理療法学会を一般社団法人として法人化するための担当委員として勤めた。8月21日に一般社団法人として認可され、設立時社員として登記された。
70）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	平成30年5月12日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
71）日本褥瘡学会近畿地方会学術大会準備委員長	平成30年3月～ 令和2年3月	日本褥瘡学会近畿地方会の学術大会において準備委員長を拝命された。
72）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	令和2年6月10日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
73）第1回物理療法研究会準備委員	令和2年10月1日～ 令和3年2月20日	第1回物理療法研究会準備委員として開催半年前より運営準備に従事した。
74）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	令和3年6月15日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
75）第2回物理療法研究会準備委員	令和3年3月1日～ 令和4年2月19日	第2回物理療法研究会準備委員として開催1年前より運営準備に従事した。
76）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	令和4年5月17日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
78）保健医療学学会第12回学術集会　準備委員長	令和2年12月15日～ 令和4年12月4日	保健医療学学会第12回学術集会準備委員長として開催1年前より運営準備に従事した。
79）第2回物理療法研究会準備委員	令和4年3月1日～ 令和5年2月19日	日本物理療法合同学術大会2023の準備委員として開催1年前より運営準備に従事した。

事項			年月日	概　　要
研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1.創傷のすべて	共著	平成24年9月	克誠堂	創傷に対する外科療法・保存療法・看護ケア・リハビリテーションの内容をまとめた書籍である。B5判 総頁数403頁 監修：市岡滋編集：安部正敏，溝上祐子，寺師浩人 共著者：市岡滋、安部正敏，溝上祐子，寺師浩人、杉元雅晴，吉川義之、他39名 本人担当部分：第Ⅳ章：創傷に対する治療選択：5. 物理療法 電気刺激療法　pp320，　321（共著；杉元雅晴，吉川義之） 創傷に対する電気刺激療法の実施方法および効果についてまとめた。
2.理学療法から診る廃用症候群	共著	平成26年5月	文光堂	廃用症候群の特徴，発症のメカニズム、経過など，前提となる基礎知識を症状ごとに簡潔に解説した。また、実際の臨床でどう対応すべきか、主な疾患に特有な廃用症候群を想定し、その予防と臨床的介入について具体的に解説した。B5判　総頁数264頁 編集：奈良勲，神戸晃男，山崎俊明，木林勉 共著者：奈良勲，神戸晃男，山崎俊明，木林勉、杉元雅晴，吉川義之，前重伯壮、他23名 本人担当部分：第Ⅱ章：廃用症候群のメカニズム：A局所性廃用症候群のメカニズム 05褥瘡）pp73-85（共著；杉元雅晴，吉川義之，前重伯壮） 廃用症候群に合併する褥瘡について評価と治療について解説した。
3.理学療法士のための在宅療養者の診かた	共著	平成27年5月	文光堂	症例を通して、在宅療養者に対する理学療法の評価からプログラムの立案まで、実際の流れに沿って解説した実践書で、臨床の現場で役立つヒントや工夫はクリニカルヒントとしてまとめた。B5判 総頁数190頁 編集：杉元雅晴 共著者：（杉元雅晴，吉尾雅春，望月久，岩﨑洋，山川友康，平野康之，井澤和大，宮川哲夫，小嶋功，吉川義之，横井輝夫，前重伯壮，舘村卓，田村佳奈美，野口まどか，渡邊光子，松田崇 本人担当分：骨折－糖尿病を合併した下肢骨折 pp 96-102（単著） 糖尿病を合併した下肢骨折の症例を提示し、評価・理学療法プログラムの立案・実施について、リスク管理も含めて解説した。
4.理学療法を活かす褥瘡ケア	共著	平成28年8月	文光堂	理学療法士が褥瘡対策チームの一員として行う理学療法技術（運動療法・物理療法・日常生活活動練習）を豊富な図表を用い平易に解説した。専門職種共通の創の病態評価から予防や局所治療プログラムなど必要な知識が幅広く網羅されている。B5判 総頁数153頁 編集：杉元雅晴 共著者：杉元雅晴，吉川義之，前重伯壮，植村弥希子，井上里英子，西山友貴，岩﨑洋，日髙正巳 本人担当部分：第Ⅱ章：褥瘡患者の評価；2. 褥瘡の手段．第Ⅲ章：褥瘡の局所治療－物理療法；3. 電気刺激療法．第Ⅳ章：予防―姿勢管理・運動療法；1. 臥位姿勢．pp20-34，41-48，62-67（単著） 褥瘡の評価、局所治療（電気刺激療法）、ベッド上のポジショニングについて研究から得られた知見と臨床現場から得た知識を組み合わせて解説した。
5.PT・OT・STのための診療ガイドライン活用法	共著	平成29年5月	医歯薬出版	診療ガイドラインについて理解し、臨床現場での意志決定に活用できる力を身につけることを目的としており、ガイドラインの作成過程や基礎知識、ベースとなるエビデンスへの批判的吟味の方法、実践適用ケースまでをわかりやすく解説している。B5判 総頁数170頁 監修：中山健夫編集：日髙正巳、藤本修平 共著者：荒木浩二郎・有明陽佑・稲富宏之・大浦智子・大寺祥佑・尾川達也・紙谷司・小久保徹・小向佳奈子・今法子・酒井克也・佐々木祥・杉田翔・竹林崇・田中宏明・坪内優太・中村学・芳賀大輔・福岡達之・福谷直人・廣江貴則・吉川義之 本人担当部分：第4章：診療ガイドラインの活用法；3　エビデンスと診療ガイドラインの活用の実際．褥瘡　pp152-155（単著） 日本褥瘡学会のガイドラインから、理学療法士が実施すべき内容について症例を提示して解説した。

事項			年月日	概　　要
6.イラストでわかる物理療法	共著	令和1年6月	医歯薬出版	物理療法の基礎知識から臨床応用までを分かりやすくまとめた教科書である。B5判　総頁数231頁 監修：上杉雅之　編集：杉元雅晴、菅原仁 共著者：安孫子幸子・植村弥希子・大矢暢久・金原一宏・斎藤弘・髙木峰子・中西亮介・平賀篤・太箸俊宏・吉川義之 本人担当部分：第4章：温熱療法（３）超音波療法　pp41-51（単著）、超音波の理論と治療方法・目的および留意点について説明し、疾患別に使用方法などを解説している。 第7章：水治療法　pp77-87（単著）、水の特性、力学的・生理学的作用および治療目的を解説し、実際の臨床場面での使用方法について説明している。
7.最新理学療法学講座物理療法学	共著	令和3年1月	医歯薬出版	物理療法の基礎知識から最新の物理療法までをを分かりやすくまとめた教科書である。B5判　総頁数294頁 編集：烏野大、川村博文 共著者：藤田峰子、森下勝行、久保田雅史、生野公貴、坂口顕、吉田秀樹、菅原仁、岡崎大資、山口智史、田上未来、荻野智之、大矢暢久、中村潤二、吉川義之、栗原靖、山本綾子、松田雅弘、日下隆一 本人担当部分：第14章：物理療法の臨床応用　褥瘡　pp232-236（単著）、褥瘡の物理療法について、電気刺激療法、超音波療法、近赤外赤外線療法、水治療法についての使用方法・目的などを解説している。
8.ハンドセラピィ	共著	令和4年3月	医学書院	ハンドセラピィの初学者にも分かりやすくまとめられた書籍である。ハンドセラピィに関わる上での必須となる知識が盛り込まれている。 編集：斎藤和夫、飯塚照史、下田信明 編集協力：秋山洋輔 共著者：斎藤和夫、粕渕賢志、岡本絵里加、平田久実、山中美季、飯塚照史、児島範明、田中芳美、平田恵介、松木良介、趙吉春、下田信明、吉川義之、車谷洋、谷口しのぶ、渡辺康太、高橋里奈、古田裕之、秋山洋輔、稲垣慶之、内屋純、桝田臣弘 本人担当部分：第3章：治療編 １．物理療法　PP86-93（単著）、ハンドセラピィにおける物理療法の紹介と注意事項、効能効果について解説している。
9. 地域理学療法学	共著	令和4年12月	文光堂	地域理学療法学のアクティブラーニングテキストであり、学部教育向けの書籍となる。 編集：日髙正美 教育編集：有馬慶美、加藤研太郎 共著者：佐藤三矢、小貫睦巳、日髙正巳、加藤研太郎、永野忍、田口孝行、吉田一正、二宮省悟、門條宏宣、吉川義之、岩﨑祐子、三浦祐司、永井宏達、笹川健吾、井上順一朗、三村健、高倉保幸、國澤洋介、金谷佳和、渡邊観世子、藤田博暁、長谷川諒、明日徹、原真子、森明子、大内みふか、須永康代、佐野一成、及川龍彦、渡辺長、鈴木恭平 本人担当部分：第5章：通所施設における理学療法　PP86-96（共著）、通所施設における理学療法士の役割と制度について解説している。
10. エビデンスから身につける物理療法	共著	令和5年3月	羊土社	物理療法についてエビデンスレベルを解説しながら有効性の高い物理療法を学べるテキストとなっている。初学者にも分かりやすく解説されている。 編集：庄本康治 共著者：庄本康治、大住倫弘、瀧口述弘、吉田陽亮、安孫子幸子、椰野浩司、加賀谷善教、竹内伸行、生野公貴、徳田光紀、中村潤二、肥田光正、前重伯壮、吉川義之、箕島佑太 本人担当部分：第2章：治療法各論 10. 圧迫療法　pp287-300（単著）、圧迫療法における注意点・禁忌を解説しながら実施方法を解説している。

事項			年月日	概　　要
（学術論文）				
１．褥瘡部を陰極とした微弱直流電流刺激療法による創の縮小効果 （査読付）	共著	平成25年6月	理学療法学 40：200-206	細胞培養実験にて得られた電気刺激条件を臨床研究にて確認した。刺激条件は褥瘡部を陰極とし、強度を80μAで1時間、週5回通電した。その結果、全症例の創の縮小が加速し、統計学的にも有意な結果となった。また、過去に行われた先行研究よりも週治癒率が高く、褥瘡に対する低強度の電気刺激療法は創の縮小に有用であることが確認された。 本人担当部分：研究計画、実施、統計解析、論文のまとめ 共著者：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，植村弥希子，高尾篤，松田一浩，寺師浩人
２．仙骨部褥瘡患者に対する直流微弱電流刺激療法の試み （査読付）	共著	平成25年10月	褥瘡会誌 14：582-586	仙骨部褥瘡に対して電気刺激療法を実施し、創の縮小効果について検討した。刺激条件は基礎研究のデータを用いて、褥瘡部を陰極、強度80μA、周波数0.1Hz、時間40分、頻度週5回とした。その結果、電気刺激療法の介入後に創の縮小が加速し最終的に治癒に至った。本結果より標準治療に電気刺激療法を併用することにより創の加速的治癒が期待できる。 本人担当部分：研究計画、実施、解析、論文のまとめ 共著者：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，寺師浩人
３．Critical Point Of Direct Microcurrent Stimulation Intensity To Promote Galvanotaxis For Human Dermal Fibroblasts （ヒト真皮線維芽細胞の電気走性を促進する直流微弱電流刺激強度の重要なポイント） （査読付）	共著	平成26年1月	Wound Repair and Regeneration 22(1)：A19	陽極帯電している線維芽細胞の電気走性を促進するため、直流微弱電流刺激を実施した。その結果、コントロール群に比べ200 μA群で線維芽細胞の遊走は促進され、300 μA群で抑制されることが解明された。この結果により、臨床現場で褥瘡治癒を促進するための線維芽細胞遊走に期待する強度は200 μAであることが示唆された。 本人担当部分：解析、論文のまとめ 共著者：Uemura M, Maeshige N, Yoshikawa Y, Terashi H, Usami M, Takata S, Sugimoto M
４．NST対象患者の褥瘡発生に関わる危険因子の検討 （査読付）	共著	平成26年10月	褥瘡会誌　16：520-527	NST対象患者において、褥瘡ハイリスク患者ケア加算判定項目およびK式スケール判定項目と褥瘡発生の関連性を調査し、NST対象患者特有の褥瘡発生因子の解明を目的とした。その結果、褥瘡発生例では「必要カロリーを摂取していない」「褥瘡に関する危険因子があってすでに褥瘡を有するもの」「自力体位変換できない」「病的な骨突出」が有意に高かった。そのためこれらに注意する必要性が示唆された。 本人担当部分：解析、考察、まとめ 共著者：前重伯壮，野口まどか，今井秀人，沖佳祐，吉川義之，寺師浩人，宇佐美眞

事項			年月日	概　　要
5．立ち上がり可能な座面の高さと日常生活活動の関連性について －通所利用者の立ち上がりによる検討－ （査読付）	共著	平成27年3月	神戸学院総合リハビリテーション研究 10：121-127	立ち上がり可能な座面の高さの違いによって日常生活活動との関連性があるかの検討を、通所リハ利用者を対象として実施した。その結果、30cmの高さから立ち上がれる高齢者は日常生活が自立していることが確認された。また、その他のパフォーマンステストとも関連性があり有用な検査であることが確認された。そのため、30cmをカットオフ値する事や30cmからの立ち上がりを目標とする必要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，門條宏宣，小枝允耶，柿花宏信，梶田博之，春藤久人
6．Positioning bedridden patients to reduce interface pressures over the sacrum and great trochanter （寝たきり高齢者の仙骨部と大転子部の体圧分散を配慮したポジショニング） （査読付）	共著	平成27年7月	Journal of Wound Care 4: 319-325	特別養護老人ホームに入所中の高齢者17名を対象に体圧分散可能なポジショニングの検討を行った。方法は30度40度側臥位時にベッドと接する側の股関節を自然位にした場合と内旋位した場合との比較検討を行った。その結果、ベッドと接する側の下肢を内旋位にした方が広い殿筋面で体圧を分散することができ、有用なポジショニングであることが確認された。この結果により、仙骨部および大転子部の褥瘡予防および褥瘡患者の治癒促進に期待できる。 本人担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者：Yoshikawa Y, Maeshige N, Sugimoto M, Uemura M, Noguchi M, Terashi H
7．Monophasic pulsed microcurrent of 1-8 Hz increases the number of human dermal fibroblasts. （1-8Hzの直流パルス電流はヒト皮膚線維芽細胞数を増加させる。） （査読付）	共著	平成28年10月	Progress in Rehabilitation Medicine 1, 20160005	培養線維芽細胞を用いて電気刺激周波数の違いによる細胞増殖を確認した。褥瘡の治癒には線維芽細胞の遊走・増殖・分化が必要であり、本実験では増殖に着目して実験を行った。その結果、強度200μA，1-8Hzの周波数で線維芽細胞の増殖が確認された。中でも周波数2Hzにおいて増殖が大きかった。本研究結果から褥瘡に対して電気刺激療法を実施する場合は周波数を2Hz前後で設定する必要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者：Yoshikawa Y, Sugimoto M, Uemura M, Matsuo M, Maeshige N, Niba ET, Shuntoh H
8．Monophasic pulsed microcurrent of 1-8 Hz increases the number of human dermal fibroblasts. （1-8Hzの直流パルス電流はヒト皮膚線維芽細胞数を増加させる。） （博士論文） （査読付）	単著	平成29年3月	神戸学院大学総合リハビリテーション学研究科	培養線維芽細胞を用いて電気刺激周波数の違いによる細胞増殖を確認した。褥瘡の治癒には線維芽細胞の遊走・増殖・分化が必要であり、本実験では増殖に着目して実験を行った。その結果、強度200μA，1-8Hzの周波数で線維芽細胞の増殖が確認された。中でも周波数2Hzにおいて増殖が大きかった。本研究結果から褥瘡に対して電気刺激療法を実施する場合は周波数を2Hz前後で設定する必要性が示唆された。 （A4判全21頁）
9．直流パルス電流の刺激周波数が線維芽細胞の遊走およびFocal adhesion kinaseに与える影響 （査読付）	共著	平成29年9月	物理療法科学 24: 26-31	培養線維芽細胞の遊走に関する電気刺激の最適周波数を検討した。スクラッチ法にて線維芽細胞の遊走に最適な周波数を求めた結果、2Hz群がコントロール群や10Hz群に比べ有意に遊走していることが確認された。 本人担当部分：細胞培養、実施、まとめ 共著者：植村弥希子，前重伯壮，井上岳人，古賀由華，杉元雅晴，吉川義之，宇佐美眞

事項			年月日	概　　要
10. Weight-bearing stretching of the triceps surae muscle increases the range of motion on ankle dorsiflexion in diabetic patients: an approach to reduce the risk of diabetic foot ulcer development（糖尿病患者に対する自重負荷による下腿三頭筋ストレッチングは足関節背屈可動域を増加させる。：糖尿病性足潰瘍発生リスクを減らすためのアプローチ） （査読付）	共著	平成30年5月	J Jap.WOCM 22(3) 281-286	糖尿病患者に対して自重負荷による下腿三頭筋ストレッチングを実施することで、足関節背屈可動域の増加が確認された。足関節背屈可動域の低下は足底圧が上昇することにより足潰瘍の要因とされている為、本研究結果より糖尿病患者の足潰瘍発生リスクを減らすためのアプローチ方法確立の一助となる。 本人担当部分：研究計画、考察、まとめ。 共著者：Maeshige N, Hirasawa Y, Moriguchi M, Yoshikawa Y, Maruo K, Noguchi M, Terashi H, Fujino H
11. Modulation of plantar pressure and gastrocnemius activity during gait using electrical stimulation of the tibialis anterior in healthy adults（健常成人における前脛骨筋への電気刺激が歩行中の足底圧および腓腹筋活動に及ぼす影響について） （査読付）	共著	平成30年11月	PLoS One 10 e0195309	健常成人の前脛骨筋に電気刺激療法を実施することで拮抗筋である腓腹筋が相反神経抑制され、足底圧が減少する傾向が確認された。今後はこの方法を用いて足底圧が上昇することにより足潰瘍が発生しやすい糖尿病患者に対して実施し、足壊死や切断患者の予防に努めていく。 本人担当部分：研究計画、考察、まとめ。 共著者：Moriguchi M, Maeshige N, Ueno M, Yoshikawa Y, Terashi H, Fujino H.
12. Taking a sitting position within 13 days of subarachnoid hemorrhage onset prevents decline in the ability to perform activities of daily living and shortens hospitalization duration（クモ膜下出血の発症から13日以内に座位をとることは、日常生活の活動能力の低下を防ぎ、入院期間を短縮する） （査読付）	共著	平成30年12月	Int J Disabil Hum Dev 14(4) 517-524	くも膜下出血患者を対象として早期に座位をとった症例と座位をとらなかった症例の日常生活活動レベルと入院期間を検討した。その結果、13日以内に座位をとった群は入院期間が短縮した。そのため、くも膜下出血患者は病状を把握し、神経学的兆候を確認しながら早期に歩行練習する必要性が示唆された。 本人担当部分：計画、考察、まとめ 共著者：Uemura M, Inoue T, Kuwata S, Yoshikawa Y, Matsumoto H, Hirata Y
13. 車椅子乗車時の戸の開閉操作が坐骨結節部へ与える影響 （査読付）	共著	令和2年3月	医療福祉情報行動科学研究 7 25-35	車椅子乗車時における褥瘡好発部位である坐骨結節部位のずれ力と圧力の移動を検討した。平地走行ではなく、日常生活で必要となるドアの開閉動作時に坐骨結節部のずれ力と圧力を測定している。その結果、開き戸に比べ引き戸は前後のずれ力が少ない結果となった。しかし、前左右方向については開き戸も引き戸もずれ力に差がなかった。そのため、坐骨結節に褥瘡発生リスクがある対象者にはドアの開閉操作は極力避けるように促し、必要な場合は引き戸を勧めることが示唆された。 本人担当部分：計画、考察、まとめ 共著者：吉川義之，杉元雅晴，植村弥希子，松下友貴，松本流音

事項			年月日	概　　要
14. 1,25-Dihydroxyvitamin D3 Inhibits Lipopolysaccharide-Induced Interleukin-6 Production by C2C12 Myotubes (1,25-Dihydroxyvitamin D3はC2C12筋菅細胞のリポポリサッカライドによるインターロイキン6産生を抑制する) (査読付)	共著	令和2年9月	Medicina 56(9) 450-457	本研究は、マウス由来C2C12筋菅細胞に対する1,25-dihydroxyvitamin D3 [1,25(OH)2D3]の抗炎症作用と筋タンパク分解抑制作用を検討することを目的に実験を行った．マウス由来のC2C12筋芽細胞を増殖培地である10%牛血清を含むDulbecco Modified Eagle (DMEM) 培地で増殖させた後，培地を分化培地である2%ウマ血清を含むDMEM培地に変更し4日間培養し，筋菅細胞に分化させた．筋菅細胞に分化させた後、0、0.1、1、10nMの1,25(OH)2D3を添加した培地で24時間培養し，その後，炎症を惹起させるため100ng/mlのリポポリサッカライド (LPS) を含む培地で48時間培養した．その結果，LPSは培養液中のinterleukin (IL)-6を増加させた．しかしながらIL-6の濃度は1,25(OH)2D3処理した筋管細胞で処理されていない細胞に比べ，IL-6濃度は有意に低かった．ミオシンやMAFbxとMuRF1は各条件間で有意差は認められなかった．Tumor necrosis factorαの測定は多くのサンプルで検出限界を下回ったため正確な測定ができなかった．本研究結果から，1,25(OH)2D3がLPS刺激による筋菅細胞でのIL-6産生を抑制することが示された． 本人担当部分：実験実施および，実験結果に基づき論文執筆の補助を担当した． 共著者：Nonaka K, Akiyama J, Yoshikawa Y, Une S, Ito K
15. 創傷被覆材における近赤外線透過率の検証	共著	令和3年3月	医療福祉情報行動科学研究 8 11-17	褥瘡に対する近赤外線療法を実施する場合、褥瘡部分を覆っている創傷被覆材上から近赤外線療法を実施することが推奨される。そのため、ドレッシング材の赤外線透過率を検証した。近赤外線透過率はドレッシング材の種類により異なり、滲出液を吸収した際に透過しやすいドレッシング材や滲出液を吸収する前の方が透過しやすいドレッシング材があった。そのため、ドレッシング材によって照射時期を変える必要であることが確認された。 本人担当部分：計画、実施、統計解析、論文執筆 共著者：吉川義之，城野靖朋、滝本幸治、植村弥希子、辻下守弘
16. Monophasic Pulsed Current Stimulation of Duty Cycle 10% Promotes Differentiation of Human Dermal Fibroblasts into Myofibroblasts （デューティサイクル10%の単相パルス電流刺激は、ヒト皮膚線維芽細胞の筋線維芽細胞への分化を促進します） （査読付）	共著	令和3年3月	Phys Ther Res 24: 145-152	本研究は創傷治癒に必要な細胞である線維芽細胞に電気刺激を実施した実験である。線維芽細胞の増殖・分化に対して有効な刺激強度と周波数は過去の研究から証明されつつある。しかし、有効なデューティサイクルと増殖・分化に対する影響は不明である。そのため、本研究では線維芽細胞が分化するために有効なデューティサイクルの検証を実施した。その結果、10%のデューティサイクルにおいてα-平滑筋アクチンおよびトランスフォーミング成長因子のmRNA発現が有意に促進しました。それゆえにデューティサイクルは筋線維芽細胞の分化に影響を与える可能性があり、デューティサイクルが10%の電気刺激は創傷治癒に効果的であると示唆された。 本人担当部分：実験実施および，実験結果に基づき論文執筆の補助を担当した。 共著者：Uemura M, Sugimoto M, Yoshikawa Y, Hiramatsu T, Inoue T

事項			年月日	概　　要
17. The Shift of the Ischial Region during Maneuvering the Standard Wheelchair and the Electric Wheelchair in Healthy Adults （健常成人における標準車椅子および電動車椅子の駆動中の坐骨領域の座圧変化） （査読付）	共著	令和3年7月	International Journal of Clinical Medicine 12(7): 297-305	坐骨部褥瘡は再発が多いため車椅子乗車時の外力の把握が必要です。そのため、健常成人における標準型車椅子と電動車椅子乗車時の坐骨部圧と圧移動の変化を体圧分布装置を用いて測定した。その結果、電動車椅子では圧移動はみられないが、標準型車椅子では圧の移動が確認された。標準型車椅子ではハンドリムを把持して駆動することが必要であり、そこで体幹の前後傾が加わるために圧の移動が示唆された。この結果から、坐骨部に褥瘡発生リスクがある患者および術後の患者に対しては自操式車椅子ではなく電動車椅子の使用が有用であると示唆された。 本人担当部分：研究計画，研究指導，実験結果に基づき論文執筆の補助を担当した. 共著者：Uemura M, Sugimoto M,Shimizu M, Maeshige N,Yoshikawa Y, Fujino H
18. Immediate Effects of Weight-Bearing Calf Stretching on Ankle Dorsiflexion Range of Motion and Plantar Pressure During Gait in Patients with Diabetes Mellitus. （糖尿病患者の歩行中の足関節背屈可動域および足底圧に対する腓腹筋ストレッチングの即時効果） （査読付）	共著	令和3年7月	The international journal of lower extremity wounds 13: 15347346211031318	足底圧の上昇は糖尿病性足潰瘍の危険因子であり、足首背屈可動域（ROM）の制限が高い足底圧を引き起こすことが知られている。またストレッチは、ROMを改善するための非侵襲的で一般的な手段です。しかし、ROMと足底圧に対するストレッチの効果は、糖尿病の患者では明らかにされていない。そのため、本研究では糖尿病患者の歩行中の足首背屈ROMと足底圧に対する断続的な体重負荷ストレッチの効果を研究することを目的とした。その結果、足首背屈ROMは、ストレッチ後に大幅に増加した。ピーク圧と圧力-時間積分は、特に前足部で大幅に減少し、これらも足底表面全体で大幅に減少した。測定接地の持続時間はストレッチ後に減少した。ストレッチは、足首背屈ROMを改善し、歩行中の足底圧を低下させた。これらの結果は、腓腹筋のストレッチが糖尿病性足潰瘍を予防および治療するための効果的な手段である可能性があることを示唆しています。 本人担当部分：研究計画、データ採取，実験結果に基づき論文執筆の補助を担当した. 共著者：Maeshige N, Uemura M, Hirasawa Y, Yoshikawa Y, Moriguchi M, Kawabe N, Fujii M, Terashi H, Fujino H
19. 皮下組織の損傷を超音波画像診断装置にて発見し、除圧を行うことで悪化せずに治癒に至った一症例（査読付）	共著	令和3年9月	物理療法科学 28: 49-53	皮膚の欠損がなく皮下組織が損傷している褥瘡（深部損傷褥瘡：Deep tissue injury)に対して、超音波画像診断装置を用いて早期発見し、除圧および離床時間の延長を実施したことによって褥瘡を悪化させずに治癒に至った症例報告である。Deep tissue injuryは超音波画像診断装置を使用しなければ深部の損傷を把握することができないため、Deep tissue injuryが疑われる際は早期に超音波画像診断装置による評価が必要であることを示唆した論文である。それにより皮膚を損傷させずに深部褥瘡が治癒した新しい視点からの症例報告である。 本人担当部分：論文指導、論文執筆補助 共著者：植村弥希子，北村瑠玲，杉元雅晴，吉川義之，山浦生也，寺師浩人
20. 直流パルス微弱電流刺激療法の電極改良により褥瘡治癒が促進された症例（査読付）	共著	令和3年9月	物理療法科学 28: 54-60	褥瘡部に対して適切に電流が到達するようにした改良電極を用いた電流刺激療法を実施した研究である。医師の指示のもとで電極を改良し電極の安全性を確認して実施した。その結果、停滞していた褥瘡が囲み電極を使用した電気刺激療法によって、創の縮小効果が認められた。また、改良電極を使用したことによる副作用も確認されなかった。 本人担当部分：実施計画、論文指導、論文執筆補助 共著者：出口太紀，杉元雅晴，吉川義之，植村弥希子，平松輝隆，巻渕弘治

事項			年月日	概　　要
21. コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題―学内実習の概要と学生アンケート調査による考察―（査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9 31-38	新型コロナウイルスの感染拡大により本学で実施している地域実習の臨地実習が困難となったため、学内実習を実施した。実習後に学生に対してアンケート調査を実施し学内次週の課題と可能性について検討した。回答率は95%であった。約90%の学生が理解できたと回答していた。また、現地からのライブ中継は100%に機会学生が高い評価であった。一方で臨地実習に行けていないことで40%程度の学生が将来の実習が不安であると回答していた。以上のことから学内実習は学生にとって充実した学習機会であったと思われる一方で、今後の実習に対する不安が高い結果であった。 本人担当部分：アンケート作成、調査、論文執筆補助、まとめ 共著者：滝本幸治，池田耕二，吉川義之，坪内善仁，笹野弘美，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生
22. 線維芽細胞の増殖，遊走およびAkt活性化に対する微弱電流刺激の効果（査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9 73-79	本研究では，微弱電流刺激にAktの活性化が関与していると仮説を立て、微弱電流刺激による線維芽細胞の増殖，遊走，Akt活性化に対する効果を調べることを目的とした．ヒト皮膚線維芽細胞に微弱電流刺激を電流200μA，周波数2Hzで1時間実施し，細胞増殖，遊走およびAkt活性化を調べた。1日1回の微弱電流刺激を3回実施した結果，線維芽細胞は微弱電流刺激により有意に減少した．微弱電流刺激による遊走を検証するためスクラッチアッセイを実施した結果，微弱電流刺激により創傷治癒率は促進されなかった．また，微弱電流刺激によるAkt活性化を調べたが，微弱電流刺激による線維芽細胞のAkt活性化は認められなかった．本研究結果より，微弱電流刺激は刺激条件により線維芽細胞の増殖や遊走の促進は見られず，細胞数を減少させる可能性があることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案、実験の実施および補助を行った． 共著者：野中紘士，吉川義之
23. Prediction of callus and ulcer development in the patients with diabetic peripheral neuropathy by isosceles triangle-forming tuning fork（二等辺三角形形成音叉による糖尿病性末梢神経障害患者の胼胝と潰瘍の発生の予測）（査読付）	共著	令和4年3月	SAGE Open Medicine 10:1-10	健常高齢者と糖尿病性神経障害患者の身体機能を測定し、胼胝の発生予測を実施した。また、糖尿病性神経障害患者に対しては追跡調査を実施し、下肢創傷の有無を確認した。胼胝の発生については改良音叉を用いた振動覚検査により判別が可能であり、検査部位については拇趾末節骨背側での検査が有用であった。また、糖尿病性神経障害の下肢創傷についても拇趾末節骨背側での振動覚検査によって予測することが可能であることが示唆された。そのため、改良音叉を用いて拇趾末節骨背側の振動検査を実施することで、胼胝および下肢創傷の予測が可能であると示唆された。 本人担当部分：研究計画、研究デザイン立案，統計解析、実験結果に基づき論文執筆を担当した． 共著者：Yoshikawa Y, Maeshige N, Uemura M, Tanaka M, Kawabe N, Atomu Yamaguchi, Fujino H, Terashi H
24. ヒト皮膚由来線維芽細胞の培養温度が細胞増殖に与える影響	共著	令和4年8月	物理療法科学 29:720-76	深い褥瘡の治癒には肉芽による修復が必須となる。その肉芽の基盤となるヒト皮膚由来線維芽細胞を温度のみ違う環境で培養した。その結果、体温よりも低い温度（31、33、35℃）では細胞増殖が抑制された。一方、体温よりも高い温度（39℃）では細胞増殖が促進した。そのため、褥瘡治療において創部周辺の温度管理は重要であり、低すぎると治癒に悪影響を及ぼし、体温よりもやや高めであると治癒が促進されることが示唆された。 本人担当部分：研究計画，研究デザイン立案，統計解析，実験，実験結果に基づき論文執筆を担当した． 共著者：吉川義之，野中紘士，滝本幸治，前重伯壮，植村弥希子，杉元雅晴

事項			年月日	概　　要
25. Electrical Shunting Prevents the Decline of Galvanotaxis After Monophasic Pulsed Microcurrent Stimulation in Human Dermal Fibroblasts. （ヒト皮膚由来線維芽細胞における単相性パルス微弱電流刺激後の電気シャントが逆向き電流による細胞遊走を抑制した）	共著	令和4年8月	Eplasty 22 e27	培養線維芽細胞に単相性パルス電流刺激を実施し、放電操作の必要性について検証した。単相性パルス電流刺激では蓄電効果により、そのままにしておくと逆向き電流が発生するため、放電操作が必要と仮説を立てて実施した。その結果、放電操作をすれば陰極側へ遊走し、放電操作をしなければ線維芽細胞が逆向き（陽極）に遊走することが分かった。そのため、臨床で単相性パルス電流刺激を実施する際は放電作業を実施する必要性が示唆された。 本人担当部分：細胞培養、実施、解析、考察、まとめ、論文執筆補助 共著者：Uemura K, Sugimoto M, Yoshikawa Y, Inoue R
26. Efficacy of Low-frequency Monophasic Pulsed Microcurrent Stimulation Therapy in Undermining Pressure Injury: A Double-blind Crossover-controlled Study （褥瘡に対する低周波単相パルス微小電流刺激療法の有効性．二重盲検クロスオーバー対照試験）	共著	令和4年9月	Progress in Rehabilitation Medicine 7 1-10	これまで褥瘡治療のために実施してきた電気刺激の細胞培養研究の結果を基に臨床研究を実施した。研究デザインは電気刺激介入期とプラセボ期を設けたクロスオーバー比較試験であった。実施した結果、電気刺激介入期に褥瘡の創縮小率が有意に促進された。電気刺激以外の項目に差はみられなかった。以上の結果から褥瘡に対する電気刺激は褥瘡の創縮小率を有意に改善し褥瘡治療に有用であることが示唆された。本人担当部分：研究計画，研究総括，解析，考察，論文執筆 共著者：Yoshikawa Y, Hiramatsu T, Sugimoto M, Uemura M, Mori Y, Ichibori R
27. Acute Effects of Combination Therapy by Triceps Surae Stretching and Electrical Stimulation to the Tibialis Anterior on Medial Forefoot Plantar Pressure During Gait in Patients With Diabetes Mellitus. （糖尿病患者における歩行時の前足部内側足底圧に対する下腿三頭筋ストレッチと前脛骨筋への電気刺激併用療法の急性効果）	共著	令和5年1月	The international journal of lower extremity wounds 15347346221148456	糖尿病性足病変の予防のため、ストレッチングと前脛骨筋に対する電気刺激療法の組み合わせが足底圧に及ぼす研究を実施した。対象は糖尿病患者であった。結果としては、糖尿病患者に対してストレッチングと電気刺激療法を併用した群は、何もしない群、ストレッチのみ群、電気刺激療法のみの群に比べ足底圧が有意に低下した。その傾向は糖尿病性足病変を患いやすい足底内側部で著明であった。以上のことから、糖尿病性足病変のリスクのある患者に対してはストレッチングに電気刺激療法を併用することが有用であると示唆された。 本人担当部分：研究データ採取、解析、論文執筆補助 共著者：Maeshige N, Moriguchi M, Fujii M, Kanazawa H, Yoshikawa Y, Kitamura K, Okuno F, Yamaguchi A, Uemura M, Hosomi M, Hara K, Terashi H, Fujino H

事項			年月日	概　　要
（その他） 「総説・依頼原稿」 1. 物理療法技術の継承、こう考える - 臨床の立場から	共著	平成22年7月	日本物理療法学会誌　17:　21-22	臨床の立場から物理療法技術を継承について教育現場・メーカーへの提言をまとめた。 本人担当部分：まとめ 共著者名：前重伯壮，藤原秀太郎，本田寛人，吉川義之，杉元 雅晴
2.最先端のエビデンス Update ： 褥瘡ケアへの理学療法士の参画	共著	平成25年2月	理学療法学 40: 56-58	褥瘡ケアへの理学療法士の参画を促すため，医師から理学療法士に期待する事をまとめていただき、理学療法士の立場から運動療法について、物理療法についての内容を記載した。また、褥瘡・予防ガイドラインの作成委員会からリハビリテーション分野のガイドラインについて解説した。 本人担当部分：電気刺激療法、まとめ 共著者名：杉元雅晴，日高正巳，寺師浩人，吉川義之，前重伯壮，廣瀬秀行
3.慢性創傷に対する理学療法	共著	平成25年4月	理学療法　30(4)：402-410	慢性創傷に対する電気刺激療法と超音波療法の使用方法と研究結果のまとめを総説論文としてまとめた。 本人担当部分：まとめ 共著者名：杉元雅晴，前重伯壮，吉川義之
4. 褥瘡対策チームで発揮できる理学療法技術	共著	平成26年12月	理学療法学第41: 690 - 698	褥瘡対策チームで理学療法士が発揮できる技術について解説した。理学療法士は褥瘡を評価し、さらに動作を評価することにより適切なポジショニングを実施することができる。また、褥瘡部を評価することにより物理療法を用いて治療に参加することもできる。これらの技術で褥瘡対策チームで活躍する事に期待できる。 本人担当部分：電気刺激療法、まとめ 共著者名：前重伯壮，杉元雅晴，吉川義之，植村弥希子，井上里英子，日高正巳
5. 褥瘡に対する物理療法の実践②：直流微弱電流刺激療法	単著	平成27年3月	理学療法magazine 2(3): 54-58	褥瘡に対する物理療法として電気刺激療法の使用方法を解説した。これまでの臨床研究の結果に加え基礎研究で得られたデータも提示し、より治癒効果の高い電気刺激療法を実施して頂けるように解説した総説論文である。
6. 褥瘡ケアで理学療法士だからできること	単著	平成29年4月	理学療法学 44(1): 47-51	褥瘡・創傷ケアについて理学療法士の必要性を解説した。予防や環境調整などのポジショニングだけではなく、物理療法を用いて治療にも関われることを示し、理学療法士が褥瘡・創傷ケアに関わっていくべきという内容を解説した総説論文である。
7. 理学療法士からみた褥瘡予防の問題点とその対応策	共著	平成30年4月	WOC Nursing 6(4)：63-72	理学療法士の視点から褥瘡予防の問題点を解説した。移乗や移動時の注意点、ベッド上のポジショニングや車椅子駆動時における問題点などを他職種にもわかりやすく解説している。 本人担当部分：体位変換・姿勢保持、基本動作における注意点。 共著者：杉元雅晴，吉川義之，植村弥希子
8. 発生と悪化を防ぐための褥瘡予防	単著	令和1年12月	訪問リハビリテーション 9：352-358	褥瘡の発生予防と悪化予防を解説した。褥瘡の発生機序からリハビリテーションが褥瘡に与える影響などを説明し、理学療法や作業療法を実施する際の注意点をまとめた総説論文である。
9. 褥瘡患者のリハビリテーション医療 －褥瘡ケアの理学療法－	単著	令和1年12月	褥瘡会誌22（1）：19-25	これまで理学療法士が褥瘡患者に関わる際にポジショニングやシーティングを中心として関わってきたが、それ以外にも物理療法を用いて治療に参画できることを伝えた。しかし、その際は医師や看護師などの多職種協働が必要であり、褥瘡創面評価の必要性なども含めて解説した。

事項			年月日	概　　要
10. Infection Control Measures For The Use of Electrophysical Agents Devices and Treatment Procedures (物理療法機器における感染対策とICU関連筋力低下に対する物理療法について)	共著	令和2年9月	INTERNATIONAL SOCIETY FOR ELECTROPHYSICAL AGENTS IN PHYSICAL THERAPY	物理療法の使用による感染拡大を防ぐために、物理療法機器における感染対策をまとめている。また、重症化したSARS-CoV-2肺炎に併発する可能性のあるICU関連筋力低下について、近年、運動療法の代替手段として注目されている電気刺激療法に関する知見をまとめている。院内感染の広がりが懸念される中、本ガイドによって適正に感染対策がなされ、かつ少しでも良好な転機を導けるよう物理療法を臨床で活用していただくためにまとめている。 本人担当部分：物理療法の使用による感染対策について 共著者：Ikuno K, Yamaguchi T, Yoshikawa Y, Tokuda M, Nakamura J
11. 坐骨部褥瘡患者へのリハビリテーション医療の原則	共著	令和3年2月	褥瘡会誌23（1）：1-7	褥瘡の好発部位である坐骨褥瘡の予防（再発を含む）に関して解説している。特に、車椅子生活者は坐骨褥瘡を発生させやすいため、日常生活における注意点（圧迫とズレ力）を中心に解説し、理学療法士の関わるべき点なども解説している。また、創をみることでどこにどのような外力が加わっているかについても解説している。 本人担当部分：車椅子上のシーティングについて、まとめ 共著者：杉元雅晴、吉川義之、植村弥希子
12. 仙骨部褥瘡とリハビリテーション医療～仙骨部褥瘡を観て予防する，観て治療する～	共著	令和3年2月	褥瘡会誌23（1）：14-18	本邦の褥瘡患者の特徴は高齢で痩せ型、病的骨突出を有していることがあげられる。また、仰臥位で寝ているため、病的骨突出がある高齢者は容易に褥瘡が発生してしまう。そのため、好発部位である仙骨部分に褥瘡が発生しないように頻回な体位変換や体圧分散寝具の活用が求められる。さらには、定期的に確認して予防する必要がある。この解説論文ではポジショニングを中心に仙骨部褥瘡の予防方法について解説している。 本人担当部分：ベッド上のポジショニングについて、まとめ 共著者：植村弥希子、杉元雅晴、吉川義之
13. 高齢者の褥瘡予防のためのポジショニング	共著	令和3年2月	臨床老年看護28：25-32	加齢に伴い皮膚は脆弱化し、しわやたるみが多くなる。さらに、関節拘縮や変形、筋力低下などで褥瘡発生リスクが高まる。そのため、本解説論文では高齢者の褥瘡予防ケアを実施するにあたり、どのようなポジション具を実践していけばよいか、個人的要因と環境・ケア要因の両方から解説している。 本人担当部分：全体の編集、校正、まとめ 共著者：吉川義之、永吉恭子
14. 座圧の可視化により生まれる支援と責任	共著	令和3年10月	褥瘡会誌23（4）：309-312	坐骨部や尾骨部の褥瘡は座位で発生することが多い。近年は座圧センサーマットが進化し、座圧を可視化することが可能となっている。それゆえに感覚障害や精神障害、意識障害を有する患者に対しても座圧を軽減するための提案が可能になってきている。一方で座圧センサーマットにはセンサーピッチ、圧測定範囲、シートの柔らかさ、圧のドリフトなど管理項目も多々存在する。これらの管理の必要性も大切である。本論文では、センサーシートの特性をふまえたうえで管理の仕方と測定結果の解釈などを解説している。 本人担当部分：座圧センサーマットの項目、座位褥瘡について、まとめ 共著者：前重伯壮、吉川義之、植村弥希子、寺師浩人
15. リハビリテーション専門職からみた基礎知識とアップデート	共著	令和3年10月	WOC Nursing 9(10)：59-65	リハビリテーション専門職からみた褥瘡予防・管理の基礎知識（特にシーティング）を解説した。また、近年トピックスとされているフレイル・サルコペニアについても褥瘡予防・管理に必要な知識として解説した。さらには、褥瘡管理における物理療法の必要性と今後の展望についてまとめ、今後リハビリテーション専門職が褥瘡予防・管理に参画する際の一助となる内容である 本人担当部分：全体の監修、校正、物理療法の項目 共著者：永吉恭子、門條宏宣、吉川義之

事項			年月日	概　　要
16. 【フットケア・足病に大切なリハビリテーション】糖尿病患者の足部・足関節周囲筋に対するストレッチングの効果	共著	令和4年5月	日本フットケア・足病医学会誌 3(2) 71-75	フットケアにおけるストレッチングの必要性と糖尿病性足病変に関わる理学療法士のための介入方法を解説した総説論文である。これまで実施してきた研究データなども加えながら、実施すべき点と注意点なども詳しく解説している。 本人担当部分：評価、これまでの研究データの生理、図、全体の校正 共著者：前重伯壮，吉川義之，植村弥希子，平沢良和，田中雅侑，河辺信秀，藤井美樹，寺師浩人，藤野英己
17. 【訪問のための臨床実習】養成校からみた訪問への臨床実習の実際	共著	令和4年6月	訪問リハビリテーション 12(2) 112-123	臨床実習における訪問リハビリテーションの在り方、関わり方について奈良学園大学での取組、考え方を執筆している。訪問リハビリテーションにもいろいろな種類があるため、表を使用しながら整理している。これにより実習を送り出す教員側も実習を受け入れる現場の理学療法士も双方がどのように関われば良いのかが整理できると考えられる。 本人担当部分：全体の内容整理、表 共著者：池田耕二，吉川義之
18. 物理療法，活かせていますか？	共著	令和4年8月	物理療法科学 29(1) 39-44	物理療法の禁忌・注意点を解説した総説論文となる。これまで禁忌とされてきた内容などについてもカナダで実施された研究論文を読み解き、絶対的禁忌と相対的禁忌の違いなどについても解説している。臨床で物理療法を適切に使用するための具体的な方法などをまとめた論文である。 本人担当部分：全体の内容整理、臨床現場での使用方法、図表 共著者：植村弥希子，杉元雅晴，前重伯壮，吉川義之
19. 局所と全身の相互作用に注目した炎症・修復・免疫と理学療法の展望	共著	令和4年8月	物理療法科学 29(1) 29-32	物理療法が局所だけではなく全身にも影響を与えることが近年の研究で明らかとなってきた。骨格筋に対して物理的刺激を加えることで全人にも影響を与え、逆に全身運動が局所へも良い影響を与えることが明らかとなってきている。これからの理学療法ではこれらを含めた管理が必要であり、今後の展望なども含めた総説論文となっている。 本人担当部分：全体の内容整理、まとめ、 共著者：前重伯壮，吉川義之，植村弥希子，河辺信秀，林久恵，山口亜斗夢，馬暁琪，寺師浩人，藤野英己
20. 創傷管理の物理療法	共著	令和4年8月	物理療法科学 29(1) 26-28	創傷における物理療法の効果と近年発表されたガイドラインに基づいて、本邦で使用可能な物理療法の解説をしている。まだまだエビデンスが足りない領域もあるため、使用方法などについても記載している。 本人担当部分：論文執筆 共著者：吉川義之，前重伯壮，植村弥希子，杉元雅晴

事項			年月日	概　　要
「研究報告書」 1．研究助成報告書 「研究題目：歩行時足底圧を減少させる中周波電気刺激の至適条件と機序の解明」	共著	平成31年3月	日本褥瘡学会	健常成人の前脛骨筋に電気刺激療法を実施することで拮抗筋である腓腹筋が相反神経抑制され、足底圧が減少する傾向が確認された。今後はこの方法を用いて足底圧が上昇することにより足潰瘍が発生しやすい糖尿病患者に対して実施し、足壊死や切断患者の予防に努めていく。 （A4判全6頁） 本人担当部分：研究計画、実施、発表、報告書作成 共著者：吉川義之、前重伯壮、守口舞輝、前重伯壮、寺師浩人、藤野英己
2．研究助成報告書 「研究題目：マウス由来Ｃ２Ｃ１２筋管細胞に対する活性型ビタミンＤの抗炎症作用および筋タンパク分解抑制に関する検討	共著	令和2年4月	奈良学園大学保健医療学部	本研究は、マウス由来C2C12筋菅細胞に対する1,25-dihydroxyvitamin D3 [1,25(OH)2D3]の抗炎症作用と筋タンパク分解抑制作用を検討することを目的に実験を行った．マウス由来のC2C12筋芽細胞を増殖培地である10%牛血清を含むDulbecco Modified Eagle (DMEM) 培地で増殖させた後，培地を分化培地である2%ウマ血清を含むDMEM培地に変更し4日間培養し，筋菅細胞に分化させた．筋菅細胞に分化させた後、0、0.1、1、10nMの1,25(OH)2D3を添加した培地で24時間培養し，その後，炎症を惹起させるため100ng/mlのリポポリサッカライド (LPS) を含む培地で48時間培養した．その結果，LPSは培養液中のinterleukin (IL)-6を増加させた．しかしながらIL-6の濃度は1,25(OH)2D3処理した筋管細胞で処理されていない細胞に比べ，IL-6濃度は有意に低かった．ミオシンやMAFbxとMuRF1は各条件間で有意差は認められなかった．Tumor necrosis factorαの測定は多くのサンプルで検出限界を下回ったため正確な測定ができなかった．本研究結果から，1,25(OH)2D3がLPS刺激による筋菅細胞でのIL-6産生を抑制することが示された． （A4判全2頁） 本人担当部分：実験実施および，実験結果に基づき論文執筆の補助を担当した． 共著者：野中紘士、秋山純一、吉川義之、畦五月、伊藤健一
3．研究助成報告書 「研究題目：ヒト皮膚由来線維芽細胞における温度の違いが細胞増殖に与える影響」	共著	令和3年3月	日本物理療法学会	高齢者は低体温であり、皮膚温も低めである。しかし、培養細胞の環境は37℃で設定されているため、高齢者の体温を反映されていないと考えられる。そのため、ヒト皮膚由来線維芽細胞を温度環境の違う状況で培養し増殖を確認した。その結果、コントロール群に比べ39℃で有意に増殖し、31・33・35℃で有意に増殖が抑制された。これらの結果から体温低下は創傷治癒を抑制する影響があり、皮膚温の管理が創傷治癒を高める可能性が考えられた。 （A4判全4頁） 本人担当部分：研究計画、実施、統計処理、発表、報告書作成 共著者：吉川義之、野中紘士、滝本幸治、杉元雅晴、前重伯壮、植村弥希子
4．研究報告書 「研究題目：創傷被覆材における近赤外線透過率の検証」	共著	令和3年4月	奈良学園大学保健医療学部	褥瘡に対する近赤外線療法を実施する場合、褥瘡部分を覆っている創傷被覆材上から近赤外線療法を実施することが推奨される。そのため、ドレッシング材の赤外線透過率を検証した。近赤外線透過率はドレッシング材の種類により異なり、滲出液を吸収した際に透過しやすいドレッシング材や滲出液を吸収する前の方が透過しやすいドレッシング材があった。そのため、ドレッシング材によって照射時期を変える必要であることが確認された。 （A4判全2頁） 本人担当部分：計画、実施、統計解析、報告書作成 共著者：吉川義之，城野靖朋、滝本幸治、辻下守弘
5．研究報告書 「研究題目：腱振動刺激中マッチング課題の経時的解析」	共著	令和3年4月	奈良学園大学保健医療学部	振動刺激は運動錯覚を起こすことが明らかとされている。この運動錯覚は筋紡錘への刺激により起こるものとされているため、振動刺激による運動錯覚は筋緊張制御に期待できる物理療法手段である。本研究では上腕三頭筋に対して振動刺激を加えることにより肘関節角度に影響を及ぼすかを検討した。その結果、上腕三頭筋への振動刺激は肘関節角度に影響を及ぼし運動錯覚が確認された。今後は脳卒中片麻痺患者の痙性筋に対して実施していくことで臨床応用に期待できる。 （A4判全2頁） 担当部分：実施、評価、まとめ、報告書作成補助 共著者：城野靖朋、神里巌、吉川義之、辻下守弘

事項			年月日	概　　要
「国際学会」 1. Effect of the combined use of ultrasound irradiation and wound dressing on pressure ulcers （褥瘡に対する創傷被覆材と超音波照射の 併用効果）	－	平成22年9月	第11回 Asian Confederation for Physical Therapy （インドネシア）	褥瘡に対する超音波療法の効果について検討した。近年の褥瘡治療は創傷被覆材を使用しているため、補完療法として実施する際には創傷被覆材の上から超音波療法を実施する必要がある。そのため創傷被覆材の超音波透過率を調査し、超音波療法を実施した。その結果、褥瘡面積が縮小し加速的な治癒が認められた。 本人担当部分：解析、まとめ 共同演者：Maeshige N, Fujiwara H, Honda H, Yoshikawa Y, Terashi H, Usami M, Sugimoto M)
2. A new proposal of a better positioning for a bedridden patient. （寝たきり高齢者に対する新しいポジショニングの提案）	－	平成24年9月	第4回 World Union of Wound Healing Societies（神奈川県）	褥瘡ハイリスク者である日常生活自立度Cランクの高齢者を対象に新しいポジショニングを検討した。ポジショニングは30度側臥位を実施した際にベッドと接する側の股関節を内旋させ、殿筋面を広げて体圧分散を試みた。その結果、体圧は分散される結果となった。上記の結果から、30度側臥位を実施する際はベッドと接する側の股関節を内旋させる必要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、解析、発表 共同演者：Yoshikawa Y, Sugimoto M, Maeshige N, Honda H, Madoka Noguchi, Terashi H
3. Clinical Effects of Galvanic Micro-Current Stimulation for Pressure Ulcers （褥瘡に対する直流微弱電流刺激の臨床効果）	－	平成24年9月	第4回 World Union of Wound Healing Societies（神奈川県）	褥瘡を有する高齢者に対して電気刺激療法を実施し、効果を確認した。電気刺激療法は滲出液を吸収したドレッシング材に棒状電極を挿入し、ドレッシング材を関電極として使用した。不関電極は10cm程度離れた健常皮膚部位に貼付した。電流強度は80μAとして、周波数2Hz，極性は褥瘡部陰極として40分，週5日実施した。その結果、前例において創が治癒した。上記の結果から、褥瘡に対する電気刺激療法は褥瘡治癒を促進させる可能性がある。 本人担当部分：研究計画、実施、解析、発表 共同演者：Yoshikawa Y, Sugimoto M, Maeshige N, Honda H, Terashi H
4. Examination of risk factor for falls among the elderly with high physical activity （活動性の高い高齢者の 転倒危険因子の検討）	－	平成25年9月	第6回 WCPT-AWP & 第12回 Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	TUG が11秒以下で身体能力が高いとされる高齢者を対象として転倒因子を検討した。その結果、転倒群と非転倒群において筋力に差はみられなかったが、振動覚の低下と片脚立位時間の低下が転倒因子として有意であった。この結果から、身体能力が高い高齢者に対しては振動覚検査と片脚立位時間で転倒予測を行う必要性がある事が示唆された。 本人担当部分：研究計画、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：Yoshikawa Y, Kajita H, Matsuda K, Uemura M, Koeda M, Sugimoto M, Shuntoh H
5. Case report on wound healing promotion of an intractable pressure ulcer by long irradiation of low-intensity pulse mode ultrasound （低出力超音波の長時間照射によって難治性褥瘡が治癒促進した症例）	－	平成25年9月	第6回 WCPT-AWP & 第12回 Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	褥瘡に対する超音波療法の効果について検討した。超音波は固定式の超音波装置を用いて、褥瘡の洗浄時にフィルムドレッシングの上から照射した。その結果、コントロール期間に比べ有意に創の縮小が確認された。上記の結果から、褥瘡に対する固定式超音波療法は褥瘡の創治癒を促進させる可能性があるため、臨床での積極的に使用する必要性がある。 本人担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者：Maeshige N, Fujiwara H, Honda H, Yoshikawa Y, Terashi H, Usami M, Sugimoto M

事項			年月日	概　　要
6. Greater influence of pain than motor function on the fear of falling (有痛性症例の転倒は運動機能よりも影響が大きい)	―	平成25年9月	第6回 WCPT-AWP & 第12回 Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	大腿骨近位部骨折患者は転倒リスクが高いことが示されている。最近の研究では運動機能が低下することで恐怖感が出現することを報告している。しかし、これらの研究は疼痛との関連性は検討していない。そのため、本研究では疼痛と運動機能が恐怖感に及ぼす影響を調査した。その結果、疼痛が運動機能よりも大きく影響を及ぼしていることが確認された。それゆえに、疼痛の緩和が優先されることが示唆された。 本人担当部分：考察、まとめ 共同演者：Kakihana H, Koeda M, Yamashita T Uemura M, Yoshikawa Y
7. Critical point of direct microcurrent stimulation intensity to promote galvanotaxis for in human dermal fibroblasts (ヒト皮膚線維芽細胞の遊走を促進する刺激強度の重要なポイント)	―	平成25年9月	第6回 WCPT-AWP & 第12回 Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	培養線維芽細胞の電気走性について検討した。これまで、コントロール群よりも100μAで陰極方向へ遊走することを確認してきたが、それ以上の強度について検討していない。本研究は100μA以上の強度を確認することが目的である。その結果、遊走は200μAで最大となり300μAで抑制されることが確認された。そのため、臨床で褥瘡に電気刺激療法を実施する際には200μA前後が望ましいことが推測される。 本人担当部分：細胞培養、実施、考察、まとめ 共同演者：Uemura M, Maeshige N, Yoshikawa Y, Terashi H, Usami M, Takata S, Sugimoto M
8. Effect of living at home on falls self-efficacy to patients with hip fracture (股関節骨折患者の自宅生活における自己効力感低下の影響)	―	平成25年9月	第6回 WCPT-AWP & 第12回 Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	自己効力感は大腿骨近位部骨折患者の転倒恐怖心と関連している。本研究は大腿骨近位部骨折患者の自己効力感に関する研究を実施した。対象を入院訓練群と退院訓練群に分け、比較検討した。その結果、転倒に対する自己効力感は退院訓練群において改善し、入院訓練群では変化がみられなかった。そのため、早期に退院し自宅で理学療法を行うことで自己効力感が改善する可能性が確認された。 本人担当部分：考察、まとめ 共同演者：Koeda M, Kakihana H, Uemura M, Yoshikawa Y, Kajita H, Bishu N
9. The effects of direct micro-current stimulation on proliferation of human dermal fibroblasts (ヒト皮膚線維芽細胞の増殖に対する直流微弱電流刺激の効果)	―	平成27年5月	第17回 World Confederation for Physical Therapy（シンガポール）	培養線維芽細胞に対して周波数を変更した電気刺激療法を実施し、細胞増殖について検討した。その結果、2Hz群で細胞増殖が確認された。また64Hzについては細胞増殖が抑制される結果となった。そのため、臨床で電気刺激療法を実施する際は2Hzで実施するすることで創の治癒が促進される可能性が示唆され、周波数の設定の必要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、細胞培養、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：Yoshikawa Y, Sugimoto M, Uemura M, Matsuo M, Maeshige N, Shuntoh H
10. Early ambulation improves activities of daily living and reduces hospitalization in aneurysmal subarachnoid hemorrhage patients (くも膜下出血後の早期歩行開始は日常生活活動を改善し、入院期間を減少させる)	―	平成27年5月	第17回 World Confederation for Physical Therapy（シンガポール）	脳卒中専門の急性期病院に救急搬送された初発くも膜下出血患者の早期離床とその予後について検討した。その結果、早期離床を促せた患者ほど転帰がよく、早期離床が遅れるほど転帰が悪かったという結果が得られた。そのため、可能な限り早期離床を促してリハビリテーション介入する必要性が示唆された。 本人担当部分：考察、まとめ 共同演者：Uemura M, Kuwata S, Yoshikawa Y, Maeshige N, Inoue T, Natsume S, Yoshida Y, Matsumoto H

事項			年月日	概　　要
（国内発表） 19. 寝たきり患者に対するポジショニング評価方法の検討および評価に基づいた指導による改善 - 第２報 -	－	平成25年7月	第15回日本褥瘡学会（兵庫県神戸市）	褥瘡対策委員会で実施したポジショニングが病棟でどの程度把握し、実施できているかの検討を行った。その結果、胸郭・骨盤の角度設定不足、体圧分散不足、四肢の圧迫管理不足、マットレス管理不足などの問題点があげられた。この結果より、今回不足であった項目に対して再度チェックリストを作成し、より徹底したポジショニング管理ができるように試みる。 本人担当部分：考察、まとめ 共同演者：前重伯壮，上山徹，山本智恵子，大橋郁乃，尾上真俊，橋本弘子，植村弥希子，吉川義之，杉元雅晴，寺師浩人
20. 低出力パルスモード超音波の長時間照射により治癒の停滞が改善した一症例	－	平成25年7月	第15回日本褥瘡学会（兵庫県神戸市）	褥瘡に対する超音波療法を検討した症例報告である。基礎研究で得られた結果を臨床適応させた方法である。低出力パルスモードでSATP強度0.1W/cm2の20％パルスモードで実施した。その結果、停滞していた創収縮が改善され、創の加速的治癒につながった。本研究の結果より、低出力パルス超音波は創の縮小に効果があることを証明した。 本人担当部分：解析、方法、考察、まとめ 共同演者：前重伯壮，上山徹，山本智恵子，大橋郁乃，尾上真俊，吉川義之，植村弥希子，寺師浩人，杉元雅晴
21. シーティングにより、ズレによる圧迫及び食事時のムセが改善された１症例	－	平成25年7月	第15回日本褥瘡学会（兵庫県神戸市）	適切なシーティングを実施する事により嚥下がスムーズとなり活動性が向上しQOLが向上した症例を経験した。理学療法士が介入するまでは普通型車椅子を使用していたが、シーティングが不十分であったため、ティルト・リクライニング型車椅子を導入し適切なシーティングを行うこと改善した症例である。 本人担当部分：研究計画、実施、考察、まとめ 共同演者：原田浩樹，吉川義之
22. 車いす駆動にて戸の開閉時にかかる坐骨部への負担の検証	－	平成26年9月	第16回日本褥瘡学会（愛知県）	車椅子乗車時に戸の開閉動作を実施する事は多くみられる。しかし、その際に坐骨部に加わるずれ力や圧を検討した研究はない現状である。本研究では戸の開閉時に坐骨部に加わるずれ力と圧力について検討した。その結果、引き戸ではずれ力が少なく、開き戸ではずれ力が高くなることが確認された。そのためADL練習を実施する際は開き戸の使用は注意する必要がある。 本人担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者：西山友貴，杉元雅晴，松本流音，藤島里英子，吉川義之

事項			年月日	概　　要
23. ヒト皮膚線維芽細胞増殖における電気刺激周波数の関連性	－	平成26年9月	第16回日本褥瘡学会（愛知県）	褥瘡治癒に必要な線維芽細胞を培養し、電気刺激を実施することでの変化を検討した。異なった周波数で電気刺激を行った結果、64Hzで細胞増殖が抑制され2Hzで細胞増殖が確認された。そのため、褥瘡患者に対して電気刺激を実施する際は周波数64Hzを使用することは勧められず、2Hzを使用することが望ましいと考えられる。 本人担当部分：研究計画、細胞培養、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，植村弥希子，藤島里英子，寺師浩人，春藤久人
24. 平地および坂道での車いす駆動が坐骨部のずれに与える影響	－	平成26年3月	第11回日本褥瘡学会近畿地方会学術集会（兵庫県神戸市）	車椅子を自操で駆動する際の坐骨部へ加わるずれ力について検討した。健常成人を対象として、平地走行と坂道走行を実施した。その結果、坂道走行は平地走行に比べ有意にずれ力が発生した。理由としては体幹の前屈動作が平地走行に比べ大きくなることが考えられた。そのため、車椅子走行を実施する際は体幹の前屈動作に注意する必要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、解析、考察、まとめ 共同演者：山本将之，杉元雅晴，前重伯壮，吉川義之，植村弥希子，桑田真吾，小野くみ子，高田哲，寺師浩人
25. ストレッチングボードを用いた足関節底屈筋群の持続伸張が糖尿病患者の足関節背屈可動域に与える影響と足底圧変化の関連性	－	平成27年5月	第24回日本創傷・オストミー・失禁管理学会（千葉県）	糖尿病性神経障害患者の多くは足関節背屈可動域制限が出現し、足底圧の上昇が確認される。この足底圧上昇は糖尿病性足潰瘍の原因となるため、足関節背屈可動域の維持・拡大が必要である。そのため、ストレッチングボードを用いた持続伸張が背屈可動域改善に効果があるかを検討した。その結果、ストレッチングボードによる持続伸張は背屈可動域を拡大させ、足底の局所圧を低下することが示唆された。 本人担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者：前重伯壮、平沢良和、守口舞輝、吉川義之、丸尾郁、寺師浩人、藤野英己
26. 線維芽細胞の電気走性における直流微弱電流刺激強度と integrin α2β1発現の関連性	－	平成27年9月	第17回日本褥瘡学会（宮城県）	培養線維芽細胞に対して電気刺激を実施し、細胞の電気走性について検討した。線維芽細胞は陰極方向に200μAで遊走が促進され、300μAで抑制されることが確認された。また細胞接着因子であるintegrin α2β1が電気刺激側へ移動していることが確認され、200μAの刺激により線維芽細胞が陰極側へ遊走することが確認された。この結果から臨床で実施する場合は強度を200μAで実施することで治癒効果が促進されることが示唆された。 本人担当部分：細胞培養、解析、考察、まとめ 共同演者：植村弥希子，前重伯壮，古賀由華，吉川義之，藤島里英子，杉元雅晴，青山（石川）倫子，三好真琴，寺師浩人，宇佐美眞

事項			年月日	概　　要
27. 直流パルス電流の刺激周波数が線維芽細胞の遊走およびFocal adhesion kinaseに与える影響	―	平成28年10月	第24回日本物理療法学会（宮城県）	培養線維芽細胞に異なった周波数の電気刺激を実施して、細胞遊走の活性化マーカーであるFAKに与える影響について検討した。その結果、コントロールと10Hz群に比べ2Hz群でFAKが活性化し、2Hz群ではスクラッチ法でも細胞の遊走が確認された。そのため、遊走においても周波数が影響することが示唆され、2Hzが有用であること確認された。 本人担当部分：細胞培養、実施、考察、まとめ 共同演者：植村弥希子，前重伯壮，井上岳人，古賀由華，杉元雅晴，吉川義之，宇佐美眞
28. 直流パルス電流刺激の周波数の違いにより筋線維芽細胞への分化に与える効果	―	平成28年12月	第46回日本創傷治癒学会（東京都）	培養線維芽細胞の遊走に関する電気刺激の最適周波数を検討した。スクラッチ法にて線維芽細胞の遊走に最適な周波数を求めた結果、2Hz群がコントロール群や10Hz群に比べ有意に遊走していることが確認された。 本人担当部分：細胞培養、実施、まとめ 共同演者：植村弥希子，杉元雅晴，吉川義之
29. ヒト皮膚由来線維芽細胞の電気走性における放電操作の有効性	―	平成28年12月	第46回日本創傷治癒学会（東京都）	培養線維芽細胞に直流微弱電流刺激を実施し、放電操作の必要性について検証した。直流電流刺激では蓄電効果により、そのままにしておくと逆向き電流が発生するため、放電操作が必要と仮説を立てて実施した。その結果、放電操作をすれば陰極側へ遊走し、放電操作をしなければ線維芽細胞が逆向き（陽極）に遊走した。 本人担当部分：細胞培養、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，井上里英子，杉元雅晴，植村弥希子
30. 糖尿病患者に対する足関節底屈筋群のストレッチングによる歩行時足底圧の減少	―	平成28年12月	第46回日本創傷治癒学会（東京都）	糖尿病患者は足底圧の上昇により胼胝が形成され、それが足潰瘍になることが示されている。そこで、本研究ではストレッチングをする事で歩行時の足底圧に影響を及ぼすかを検討した。その結果、ストレッチングは歩行時の集中的な足底圧を分散し、圧を減少させることが確認された。 本人担当部分：方法、考察、まとめ 共同演者：前重伯壮，平沢良和，守口 舞輝，吉川義之，寺師 浩人，藤野 英己

事項			年月日	概　　要
31. 糖尿病神経障害患者の胼胝および創傷発生に対する振動覚検査の有用性～3年間の追跡調査による検討～	―	平成29年5月	第9回日本下肢救済・足病学会学術集会（福岡県）	糖尿病神経障害患者の胼胝形成に関与する理学療法評価の調査と3年間追跡調査し、創傷発生者と非発生者を比較検討した。その結果、振動覚の低下、触圧覚閾値の上昇、足関節背屈・母趾伸展可動域の低下などが胼胝形成に影響を及ぼしていた。また、創傷発生者は振動覚の低下が著しく、振動覚の低下は創傷発生の予測因子として有償である事が示唆された。 本人担当部分：計画、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，前重伯壮，渡邊佑，守口舞輝
32. 歩行時足底圧を減少させる経皮的電気刺激療法の至適条件および機序の検討	―	平成29年8月	第18回日本褥瘡学会（岩手県）	糖尿病性神経障害患者は足関節背屈可動域により足底圧が上昇するといわれている。そのため、電気刺激を使用し相反抑制を用いて背屈可動域の改善および筋の伸張性が増加すると考えた。まず、健常成人に対して基礎的研究を実施し、糖尿病性神経障害患者に適応するのが望ましいため、健常成人を対象とした研究を実施した。その結果、電気刺激により相反抑制が働き、H波が有意に抑制され、足底圧の低下が確認された。 本人担当部分：研究計画、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之、守口舞輝、前重伯壮、寺師浩人、藤野英己
33. 疼痛の増悪によりADL制限を呈した関節リウマチ患者に対する振動・温熱・磁気刺激療法の効果	―	平成29年10月	第25回日本物理療法学会（奈良）	疼痛により日常生活活動が低下し、歩行困難となった3症例に対して、温熱・振動・磁気刺激を実施し、疼痛の緩和を試みた。その結果、薬剤や電気刺激療法では疼痛の緩和が図れなかった3症例の疼痛が緩和し、日常生活活動レベルが改善した。その内容をまとめ、学会発表した。 本人担当部分：計画、実施、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之、門條宏宣
34. 褥瘡部の洗浄頻度と創治癒期間の関連性	―	平成29年10月	第25回日本物理療法学会（奈良）	理学療法士は水治療法として褥瘡部の洗浄を実施する事が可能であるが実施されていない現状にある。そのため、訪問リハビリテーション実施中に看護師と共に創部の洗浄を実施した7症例と訪問看護師のみが洗浄を実施した5例を比較検討した。その結果、理学療法士が訪問リハビリテーション中に洗浄を実施した群が有意に治癒日数が早かった。これは単純に洗浄回数が多かったことが要因と考えられた。そのため、理学療法士も洗浄を実施する必要がある事が示唆された。 本人担当部分：計画、実施、評価、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之、杉元雅晴、植村弥希子、前重伯壮、平松輝隆
35. 褥瘡基礎研究の最先端：異分野融合 周波数と通電率による線維芽細胞への影響 褥瘡の加速的治癒を促す電気刺激療法の確立を目指して	―	平成30年9月	第20回日本褥瘡学会（神奈川）	皮膚由来線維芽細胞に対して電気刺激を実施し、周波数依存ではなく通電率による線維芽細胞への影響を検討した。その結果、通電率が高すぎる場合は細胞生存率が低下し、低すぎる場合には細胞遊走や増殖能が低下した結果となり、50%の通電率が最適であることが確認された。 本人担当部分：計画、細胞培養、考察、まとめ 共同演者：植村弥希子、杉元雅晴、吉川義之、平松輝隆

事項			年月日	概　　要
36. ストレッチングと電気刺激療法の併用が糖尿病患者における歩行時の足底圧異常に対して与える是正効果	ー	令和1年6月	第11回日本下肢救済・足病学会学術集会（神戸）	糖尿病患者の足潰瘍は足関節可動域制限による前足部の足底圧の上昇が知られている。これまで我々は健常者に対して、下腿三頭筋へのストレッチングと前脛骨筋に対して電気刺激を実施することで前足部の足底圧を減少させることを確認した。本研究は糖尿病患者に対して実施し、健常者と同様の結果であるかを確認した。その結果、糖尿病患者においても同様の結果が得られ、下腿三頭筋へのストレッチングと前脛骨筋への電気刺激療法は足底圧を減少させることが確認された。 本人担当部分：実施、評価、まとめ 共同演者：守口舞輝、前重伯壮、藤井美樹、金沢星慶、吉川義之、北村和也、奥野史也、細見雅史、原賢太、寺師浩人、藤野英己
37. 膝OA一症例に対する経皮的電気刺激治療の鎮痛効果が日常生活と精神活動に及ぼす影響	ー	令和1年9月	第27回日本物理療法学会（東京）	変形性膝関節症に対する経皮的電気刺激療法（TENS）は鎮痛効果が示されている。本研究は、1症例に対して日常生活上でも装着できる電気刺激治療器を用いて鎮痛効果を検証するとともに日常生活と精神活動を検証した。その結果、鎮痛効果が得られ、日常生活と精神活動にも良い影響を与えていることが示唆された。今後は症例数を増やして検討していく予定である。 本人担当部分：実施、評価、まとめ 共同演者：徳田光紀、庄本康治、吉川義之、瀧口述弘、山口智史
38. 上腕三頭筋腱振動刺激時の肘関節角度の違いが運動錯覚の惹起に及ぼす影響	ー	令和1年9月	第27回日本物理療法学会（東京）	振動刺激は運動錯覚を起こすことが明らかとされている。この運動錯覚は筋紡錘への刺激により起こるものとされているため、振動刺激による運動錯覚は筋緊張制御に期待できる物理療法手段である。本研究では上腕三頭筋に対して振動刺激を加えることにより肘関節角度に影響を及ぼすかを検討した。その結果、上腕三頭筋への振動刺激は肘関節角度に影響を及ぼし運動錯覚が確認された。今後は脳卒中片麻痺患者の痙性筋に対して実施していくことで臨床応用に期待できる。 本人担当部分：実施、評価、まとめ 共同演者：城野靖朋、神里巌、吉川義之、辻下守弘
39. 肉眼的には判別困難な深部損傷褥瘡を超音波検査により確認できた褥瘡の一症例	ー	令和1年9月	第27回日本物理療法学会（東京）	褥瘡は圧迫とずれ力により発生するといわれているが、深い褥瘡については骨側から発生することが知られている。中でも皮膚損傷のない深部褥瘡（DTI)については早期判別が困難であり、皮膚損傷が確認された時には骨まで至る難治性潰瘍となっていることがある。本研究ではDTIの疑いのある紫斑形成された褥瘡に対して超音波画像診断装置を用いて早期よりDTIを確認した。その結果、DTIが確認され早期より介入できたことで皮膚損傷が発生する前に治癒となった症例を経験した。今後は症例数を増やすことで早期介入の効果を検証したいと考えている。　本人担当部分：実施、評価、まとめ 共同演者：植村弥希子、北村瑠玲、杉元雅晴、吉川義之、平松輝隆、山浦生也、寺師浩人
40. 直流パルス微弱電流刺激療法の電極改良により治癒が促進された症例	ー	令和1年9月	第27回日本物理療法学会（東京）	褥瘡に対する電気刺激療法は治癒促進効果が示されている。しかし、創が小さくなるにつれて創部に適切に電流刺激をすることが難しくなる。そこで本研究は改良電極を用いて創の周囲から創部に対して適切に電流刺激が実施できるように実施した。その結果、小さくなった褥瘡に対しても変わらず電流刺激ができ、治癒速度を落とすことなく電気刺激療法が実施できた。今後は症例数を増やして検討していく必要がある。 本人担当部分：実施、評価、まとめ 共同演者：出口太紀、杉元雅晴、植村弥希子、吉川義之、平松輝隆、巻渕弘治

事項			年月日	概　　要
41. 創傷被覆材における近赤外線透過率の検証	ー	令和3年2月	第1回日本物理療法研究会（WEB）	褥瘡に対する近赤外線療法を実施する場合、褥瘡部分を覆っている創傷被覆材上から近赤外線療法を実施することが推奨される。そのため、ドレッシング材の赤外線透過率を検証した。近赤外線透過率はドレッシング材の種類により異なり、滲出液を吸収した際に透過しやすいドレッシング材や滲出液を吸収する前の方が透過しやすいドレッシング材があった。そのため、ドレッシング材によって照射時期を変える必要であることが確認された。 本人担当部分：研究計画、実施、統計処理、発表 共同演者：吉川義之、城野靖朋、滝本幸治、辻下守弘
42. ヒト皮膚由来線維芽細胞における温度の違いが細胞増殖に与える影響	ー	令和3年10月	第28回日本物理療法学会（WEB）	高齢者は低体温であり、皮膚温も低めである。しかし、培養細胞の環境は37℃で設定されているため、高齢者の体温を反映されていないと考えられる。そのため、ヒト皮膚由来線維芽細胞を温度環境の違う状況で培養し増殖を確認した。その結果、コントロール群に比べ39℃で有意に増殖し、31・33・35℃で有意に増殖が抑制された。これらの結果から体温低下は創傷治癒を抑制する影響があり、皮膚温の管理が創傷治癒を高める可能性が考えられた。 本人担当部分：研究計画、実施、統計処理、発表 共同演者：吉川義之、野中紘士、滝本幸治、杉元雅晴、前重伯壮、植村弥希子
43. 近赤外線照射はヒト皮膚由来線維芽細胞増殖に影響を及ぼさない	ー	令和4年2月	第2回日本物理療法研究会（WEB）	近赤外線照射療法は日本褥瘡学会ガイドラインにおいて推奨されている治療方法であるため、創傷治癒機序を検証するために行った研究である。その結果、近赤外線照射による線維芽細胞の細胞増殖はみられなかったため、他の因子が治癒を促進していることが示唆された。もしくは波長や強度による違いが示唆された。本研究結果からは創傷治癒機序を解明できなかったため、継続した研究の必要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、統計処理、発表 共同演者：吉川義之、野中紘士
43. 培養線維芽細胞における電気刺激が増殖に与える影響	ー	令和5年7月	第31回奈良県理学療法士学会（奈良）	褥瘡治癒において必須となる線維芽細胞に対して電気刺激を実施し細胞増殖に最適な刺激周波数を検討した。その結果、単相性パルス電流刺激，強度200μA，周波数2Hz，電流時間率50%の電気刺激は細胞増殖を促進せず，細胞増殖を抑制することが示唆された．一方、筋線維芽細胞への分化は細胞増殖を停止させた状態で起こることが示されているため、上記の刺激条件が筋線維芽細胞への分化を促す可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、統計処理、発表 共同演者：吉川義之、野中紘士
44. 褥瘡に対する単相性パルス微弱電流刺激療法の効果とbody mass indexの関連性	ー	令和5年11月	第52回日本創傷治癒学会（名古屋）	本研究では、治癒が遷延化するポケットを有する褥瘡に対する単相性パルス微弱電流の効果と治癒促進に関わる背景因子を検証した。その結果、単相性パルス微弱電流を実施した際は縮小率は有意に高値であった（$p<0.01$）。また、非刺激縮小率は背景因子に対して有意な相関を示さず、単相性パルス微弱電流の縮小率はBMIに対して正の相関を示した。相対縮小率についてもBMIのみ正の相関を示した。以上のことから、　褥瘡に対する単相性パルス微弱電流は創の縮小を促進し、BMIが高いほど単相性パルス微弱電流の効果が得られやすいことが示唆された。今後創傷周囲の皮下組織厚等との関連性を検証する必要がある。 本人担当部分：研究計画、実施、統計処理、発表 共同演者：吉川義之、前重伯壮、平松輝隆、植村弥希子、寺師浩人

事項			年月日	概　　要
45.車椅子クッションの違いが坐骨部圧に及ぼす影響について	ー	令和5年12月	保健医療学学会第12回学術大会（奈良）	本研究では、本研究では車椅子クッションによる坐骨部圧の違いを比較検討した。使用した車椅子クッションはウレタン，ゲル，エア，ハイブリッドの4つであった。クッションを使用することで坐骨部圧は有意に低下し、素材による違いはウレタンおよびハイブリッドの減圧効果が高かった．坐骨部圧はクッションなしの場合はBMIと坐骨部圧に有意な負の相関を認めたが，クッションを用いることで相関関係は消失した．時間経過による坐骨部圧が変化しにくい素材はゲルであった．以上のことから，車椅子クッションは坐骨部圧の減少に有効ではあるが，それぞれの特徴があるため，車椅子クッション使用時は対象者の特徴に合わせて選ぶ必要があると考えられた。 本人担当部分：研究計画、実施、統計処理、研究責任者 共同演者：瀧田脩斗，青山侑樹，和田哲平，永吉恭子，前重伯壮，吉川義之
「研究大会」 1. 温熱・振動・磁気刺激により疼痛が緩和した一症例	ー	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会　茨城2016（茨城）	坐骨神経痛によりADLが低下した症例に対して温熱・振動・磁気刺激の3つの要素がある物理療法機器を使用した。坐骨神経痛に対して薬物療法や電気刺激療法を実施したが疼痛が緩和しなかったため、温熱・振動・磁気刺激が可能な物理療法機器で緩和を試みた。その結果、疼痛が緩和しADLが改善したため報告した。 本人担当部分：計画、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之、小枝允耶、小枝美由紀
2. 通所介護利用者における2型糖尿病罹患の有無が身体機能に及ぼす影響に関する調査―後ろ向き調査研究―	ー	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会　久留米2017（福岡）	近年、糖尿病は筋力低下の原因や日常生活活動低下の原因とされている。そのため、当通所施設利用中の方を対象を糖尿病群と非糖尿群に分け、過去6ヶ月の身体機能を後ろ向きに調査した。その結果、非糖尿病群は身体機能が向上していたにも関わらず、糖尿病群は能力の維持もしくは低下していた。そのため、糖尿病患者に対する運動療法をより吟味する必要性が示唆された。 本人担当部分：計画、解析、考察、まとめ 共同演者：松本洋平、吉川義之、門條宏宣、吉川絵美、小枝允耶、菅原史帆、岩城一孝、松田美佳、長谷川千紗、小倉敬史、水岡崇、藤井勇太、千田日向子

（様式2-1）

教　育　研　究　業　績　書

2023年　3月　31日

氏名　　笹野 弘美

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学・健康スポーツ科学・社会医学	理学療法学・ヘルスプロモーション・加齢老化・地域保健・多職種連携教育

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）高齢者の体力測定実施	2014年4月 ～ 2018年3月	名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科 高齢者の体力とヘルスプロモーションについて学習し、地域在住高齢者に対し体力測定の企画及び実施、結果のフィードバックを行うことで、高齢者の問題点について考える。体力測定に必要な知識とその結果が意味することを理解し、また、対象者に適切なフィードバックをする必要性を理解することができた。
2）小規模多機能型居宅介護施設でのレクリエーション実習の実施	2014年4月 ～ 2018年3月	名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科 小規模多機能型居宅介護施設におけるレクリエーションの企画、実施し、理学療法士が行うレクリエーションについて学習する。理学療法士がレクリエーションを行う意義、同じ内容であっても対象者の状態に応じた対応の必要性を理解できた。
3）高齢者へ運動指導を実施	2014年4月 ～ 2018年3月	名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科 地域在住高齢者に対し身体的精神的機能の維持を目的とした運動指導を行い、運動習慣をつけていただく方法を検討する。地域で生活する高齢者の特性について理解し、状態に応じて適切な運動を選択し指導する必要性を理解した。
4）多職種連携教育において医学部・薬学部・看護学部とともに行事を企画	2014年4月 ～ 2018年3月	名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科 医学部・薬学部・看護学部の学生とともに地域住民に対し健康に関する行事を企画、実施。各学部の特色、使用する用語の違いなどを理解し、協働で1つの事に対応する必要性と困難さを理解した。
5）多職種連携教育において医学部・薬学部・看護学部とともに地域在住高齢者宅へ訪問を実施	2014年4月 ～ 2018年3月	名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科 医学部・薬学部・看護学部の学生とともに地域在住高齢者宅へ訪問し閉じこもりがちな高齢者を見つけ参加を促すとともに健康面・生活面での問題点を見つけ解決策を検討する。地域在住高齢者の現状を知るとともに、多職種で関わることの必要性を理解した。
6）地域で予防活動に関わる理学療法士の見学及び体験の企画、実施	2016年1月 ～ 2016年3月	名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科 地域で体操教室等の予防活動に関わる理学療法士に同行し見学及び体験をすることで、理学療法士が予防に関わる意義について学習する。理学療法士が予防に関わることの難しさと地域で求められている事について理解した。
7）行政と共同で地域住民の予防活動を企画運営	2017年4月 ～ 2018年3月	名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科 行政の依頼による地域住民の予防活動を企画運営することで、理学療法士と行政との関わり、理学療法士が行政から求められている事について学習するとともに、理学療法士ができる予防活動について検討する。行政、地域在住高齢者それぞれが理学療法士に求めている事、さらに理学療法士が予防活動に関わる必要性について理解した。

8）オンライン講義の実施	2020年5月 ～ 現在	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 理学療法学専攻 新型コロナウイルス感染拡大に伴い、講義および臨床実習をオンラインにて実施。限られた環境の中で最大限の知識と技術が習得できるよう工夫した。
9）学内実習	2020年8月 ～ 現在	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 理学療法学専攻 新型コロナウイルス感染拡大に伴い、医療介護現場での臨床実習の実施が困難になったため、学内において同等の知識や技術が習得できるよう工夫した。
２　作成した教科書，教材		
1）スライド作成	2014年4月 ～ 現在	地域理学療法・ヘルスプロモーション論・地域リハビリテーション演習・日常生活動作学・地域理学療法学・老年期障害理学療法学等において、パワーポイントにてスライドを作成し、講義資料として使用。
2）予防理学療法学要論	2017年1月	予防理学療法を体系化し基礎から応用までを網羅した教科書。
3）標準理学療法学 専門分野 理学療法 臨床実習とケーススタディ　第3版	2020年12月	理学療法士養成課程における「臨床実習」の教科書。
4)理学療法ガイドライン第2版	2021年10月	エビデンスに基づく理学療法によって臨床の質を高めるために、これからの臨床の指針となる一冊であり、学内教育においても教科書として活用できる。
３　当該教員の教育上の能力に関する大学の評価		
	2021年8月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 理学療法学専攻 日常生活動作学（履修者56名、回答率100%） 5段階評価：4.13
	2021年8月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 理学療法学専攻 地域理学療法学（履修者56名、回答率53%） 5段階評価：4.6
	2021年8月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 理学療法学専攻 老年期障害理学療法学（履修者38名、回答率92%） 5段階評価：3.69
	2021年8月	奈良学園大学保健医療学部看護学科 保健医療学概論（履修者89名、回答率73%） 5段階評価：4.25

４　実務を有する者についての特記事項		
「シンポジウム」		
1) AIP社会の実現に向けて	2014年11月	一般の方々に対し、理学療法士について及びAIP（Aging in Place）と理学療法士がAIPに関わる目的について講演。
2) 学生の地域参加によるAIPコミュニティ づくり	2015年2月	一般の方々に対し、なごやかモデルにおける当大学リハビリテーション学部の活動報告と今後の課題について講演。
3) フラダンスによるロコモティブシンドロームの予防	2016年2月	一般の方々に対し、ロコモティブシンドローム及びロコモティブシンドロームとメタボリックシンドローム・認知症とのかかわりについての講演、及び、フラダンス教室の紹介。
4) なごやかモデルにおける活動報告	2017年12月	なごやかモデルにおける名古屋学院大学の取り組みと成果報告について発表。
「講演会」		
1) 腰痛の予防と改善ワンポイントアドバイス	2014年12月	地域住民に対し、腰痛の発生機序と予防・痛みの改善について講演。
2) レッツ！タオルを使って健康体操	2015年5月	地域住民に対し、タオルを利用して簡単にできるストレッチ及び筋力トレーニングを指導。
3) 予防理学療法の基本と実践	2017年7月	理学療法士に対し、健康・AIP（Aging in Place）・予防理学療法の概要についての講演、及び、介護予防の実践例としてフラダンス教室の紹介。
「講座・研修等」		
1) 安全な介助のために	2014年3月	飲食店を開店するにあたり必要な身体的精神的障害者の知識と安全な介助について研修を実施。
2) 日常での運動機能維持及び低下防止について	2015年5月	一般の方々に対し、老化に伴う身体的・精神的変化についての講演、及び、日常生活でできる筋力トレーニングと複合課題を指導。
3) AIPについて（なごやかモデルの紹介）	2015年5月	リハビリテーションスタッフに対し、AIP（Aging in Place）と理学療法士がAIPに関わる目的、及び「なごやかモデル」でのAIPへの取り組みについて講演。
4) 痛みとその対処法について	2016年1月	フラダンスの講師に対し、レッスン時に問題となる肩・腰・膝の痛みについて、出現の原因と疾患、その対処法について講演。
5) 簡単筋トレで老化防止	2016年3月	フラダンスの講師に対し、レッスン時に問題となる肩・腰・膝の痛みについて、出現の原因と疾患、その対処法について講演。
6) 障害者の介助方法について	2016年8月	飲食店従業員に対し、視覚障害者に対する知識の習得と安全な介助方法について研修を実施。
7) 予防理学療法研修会（基礎編）（全2回）	2017年1月 ～ 2017年2月	予防理学療法を教授できる理学療法士を養成するため、予防理学療法の基礎について講義。
8) 日常生活で予防しようフレイルとMCI	2017年3月	地域住民に対し、フレイルとMCIについて概要と予防法について講演、及び、予防のためのストレッチ・筋力トレーニング・複合課題について指導。
9) いつまでも住み慣れた街で暮らすために ～AIPの実現のための予防理学療法～	2017年9月	中部リハビリテーション専門学校同窓会のナイトセミナーにおいて、予防理学療法の基礎と理学療法士の関わり方について講演。
10)予防理学療法研修会（基礎編）（全4回）	2017年12月 ～ 2018年2月	予防理学療法を教授できる理学療法士を養成するため、予防理学療法の基礎について講義。
11)予防理学療法研修会（基礎編）	2018年7月	予防理学療法を教授できる理学療法士を養成するため、予防理学療法の基礎について講義。
12)フラダンスで健康に！	2018年8月	NHK名古屋放送局の情報番組「さらさらサラダ」にてフラダンスの運動効果について解説。
13)予防理学療法研修会（総論）	2019年11月	予防理学療法を教授できる理学療法士を養成するため、予防理学療法の基礎について講義。
14)薬剤師のためのスキルアップセミナー	2019年12月	名古屋市立大学において薬局薬剤師に対し予防理学療法についての講義と健康維持のための体操指導を実施。

15)アロハ　フラダンスで介護予防	2021年7月	日本予防理学療法学会第6回サテライト集会の市民公開講座にて、フラダンスを活用した介護予防プログラムについての、実技を含めた講演を実施。
16)軽度認知障害理学療法ガイドライン・フレイル理学療法ガイドラインの紹介	2021年11月	第8回日本予防理学療法学術大会の特別講演Ⅲにおいて、令和3年10月に発刊した理学療法ガイドライン第2版の中で日本予防理学療法学会が担当した「軽度認知障害理学療法ガイドライン」および「フレイル理学療法ガイドライン」について紹介。
17)理学療法ガイドライン第2版について	2022年3月	予防理学療法セミナーにおいて、理学療法ガイドライン第2版の作成過程から活用方法までを教授。
18)予防理学療法と Aging inPlace～いつまでも住み慣れた街で暮らすために～	2022年9月	福岡県理学療法士会主催の理学療法講習会において、健康と予防理学療法及びAging in Placeと理学療法士が Aging in Placeに関わる目的について講演。
５　その他		
1) 第35回理学療法士・作業療法士養成施設等教員講習会修了	2009年2月	厚生労働省と（財）医療研究推進団との共催。理学療法士・作業療法士養成施設の教員の養成確保を図るため、より高度な知識及び技術を習得させ、合わせてリハビリテーション医療の普及及び向上に資することを目的とする研修。
2) 多職種連携教育	2014年4月 ～ 2018年3月	名古屋市立大学医学部・薬学部・看護学部、名古屋工業大学大学院医療工学との多職種連携教育を担当。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事　項	年月日	概　要
１　資格，免許		
1) 理学療法士免許	1989年5月	登録 第17016号
2) 福祉用具プランナー	2005年2月	登録 第16－30007号
3) 学士（人間科学）	2006年3月	人間総合科学大学
4) 福祉住環境コーディネーター2級	2007年7月	東京商工会議所　登録 第16－2－03666号
5) 専門理学療法士（予防理学療法）	2009年3月	日本理学療法士協会（生活環境支援より移行）
6) 専門理学療法士（地域理学療法）	2009年3月	日本理学療法士協会（生活環境支援より移行）
7) 専門理学療法士（支援工学理学療法）	2009年3月	日本理学療法士協会（生活環境支援より移行）
8) 修士（医療リハビリテーション学）	2012年3月	神戸学院大学大学院
9) 認定理学療法士（学校教育）	2016年3月	日本理学療法士協会
10)Lomi Lomi セラピスト	2018年9月	Aloha Lomi
11) 博士（医療リハビリテーション学）	2019年3月	神戸学院大学大学院
12) フィットネスフラ インストラクター	2022年12月	JWI(JAPAN WELLNESS INNOVATION)
２　特許等		
特になし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 介護認定審査員	2004年4月 ～ 2009年3月	名古屋市中川区
2) 在宅医療・介護連携部会専門委員	2014年6月 ～ 2016年3月	名古屋市緑区
3) 平成26年度在宅医療と介護の連携に関する調査	2014年6月	名古屋市緑区 研究経費：平成26年度　725千円 研究代表者：稲葉静代 研究分担者：姜琪鎬，佐藤貴久，小森敦夫，山口一丸，永田康子，赤津裕康，笹野弘美　他5名

4)サンシティ視察	2014年10月	アメリカ合衆国アリゾナ州マリコパ郡内に位置する国勢調査指定地域サンシティにおてい「豊かに老いを迎え、その人らしく暮らすことのできるコミュニティ」の視察
5) 在宅医療推進多職種連携研修会準備委員	2015年1月 ～ 2016年3月	名古屋市緑区
6) 住民の体力調査	2022年4月 ～ 現在	岡山県真庭郡新庄村 (一社)むらづくり新庄村共催、新庄村役場後援にて実施
４　その他 特になし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月日	発行所、学会雑誌等又は発表学会等名称	概　要
〈著書〉				
1)予防理学療法学要論	共著	2017年1月	医歯薬出版(pp.57～62)	初めての予防理学療法分野の書籍であり、予防理学療法を体系化し、予防理学療法の定義、領域、制度、研究法、予防理学療法の役割などの基礎から栄養学や瀬人間の成長との関わり、メタボリックシンドローム、認知症、スポーツ障害の予防や各疾患の再発予防などの応用までを網羅した教本。 共著者：大渕修一、井上和久、浦辺幸夫、小松泰喜、笹野弘美他 本人担当部分：Ⅱ章５学童期の予防pp.57～62
2) 地域包括ケアと口腔ケア	共著	2017年8月	(一財)口腔保健協会 (pp.36～37、140～144)	歯科医及び歯科衛生士向けの書籍であり、地域包括ケアの基礎知識や医療計画に盛り込むべき5疾病における口腔ケアを解説するとともに、他職種が歯科に望むこと、また歯科が他職種とどのように連携していけばよいかについて、連携に関わる10職種が解説 共著者：渋谷恭之、田村清美、赤津裕康、大原弘隆、笹野弘美他 本人担当部分：第2章2-2脳卒中－口腔ケアの実例pp.36～37、第4章4-7多職種におけるそれぞれの役割と相互理解－理学療法士pp.140～144
3) 標準理学療法学専門分野 理学療法 臨床実習とケーススタディ第3版	共著	2020年12月	医学書院(pp.276～279)	理学療法士養成課程における「臨床実習」の教科書であり、臨床実習を控えた学生に主眼をおきつつ，教員や臨床実習指導者にも役立つ内容。学内実習やOSCE（客観的臨床能力試験）におけるペーパーペイシェント教材としても活用でき、また、新型コロナウイルス感染症とそれに対する学内実習の実際に関する内容も記載 共著者：鶴見隆正、辻下守弘、池田耕二、間瀬教史、笹野弘美他 本人担当部分：第8章4フレイル・サルコペニアに対する予防理学療法pp.276～279
4) 理学療法ガイドライン第2版	共著および編集	2021年10月	医学書院(pp.xiii～xiv)	エビデンスに基づく理学療法によって臨床の質を高めるために、これからの臨床の指針となる一冊。理学療法の現在の立ち位置と進むべき方向を示すため21領域、41疾患・外傷を網羅 共著者：赤坂清和、舟見敬成、日高正巳、池添冬芽、笹野弘美他 本人担当部分：作成資金、利益相反（COI)pp.xiii～xiv 理学療法標準化検討委員会ガイドライン部会員（統括委員）として編集を行った。
〈学術論文〉				

1）介護老人保健施設職員の移乗関連用具に対する認識及び腰痛との関連（兼修士論文）（査読付）	筆頭	2013年6月	理学療法科学28巻3号(pp.329～334)	東海地区の介護老人保健施設3施設の全職員に、移乗関連用具の認知・使用の有無とその理由、腰痛についての調査を実施した。調査結果より、腰痛の出現の有無と移乗関連用具の使用の有無と及び使用方法の理解度に関連があると考えられた。職員の卒前及び卒後教育により移乗関連用具の正しい知識について教育することで、職員の腰痛予防、軽減が可能となると考えられる。 共著者：朝倉(笹野)弘美、備酒伸彦、金谷親好、山田智大
2）フラダンスは介護予防プログラムとして有効か（査読付）	筆頭	2016年3月	名古屋学院大学論集　医学・健康科学・スポーツ科学篇第4巻2号(pp.15～22)	フラダンス未経験の地域在住高齢女性7名に対し、3か月間（計12回）、1回60分のフラダンスレッスンを実施し、実施前後の運動機能・動作能力、E-SAS（Elderly Status Assessment Set）、HDS-R（改定長谷川式簡易知能評価スケール）を比較した。対象者数が少なく全てにおいて統計学的有意差は認められなかったが、運動機能・動作能力6項目中4項目及びE-SAS5項目中3項目に実数として改善傾向が見られた。また3か月で欠席及び辞退者は無かった。介護予防には継続的な運動が重要であり、さらに3か月の実施で改善傾向が見られている事より、フラダンスは有効な手段と考える。今後はさらに対象者を増やし検証していく必要がある。 共著者：笹野弘美、後東尚樹、北村敏乃
3）地域在住高齢者の筋力と骨格筋量及び身体機能と の関連性（査読付）	共著	2016年3月	名古屋学院大学論集　医学・健康科学・スポーツ科学篇第4巻2号(pp.23～33)	地域在住高齢者52名を対象に身体機能検査、体組成測定、E-SAS、MMSEを実施し、筋力と骨格筋量及び身体機能の関連性について検討した。筋力及び骨格筋量は男性に比べ女性に低値であり、骨格筋量は加齢に伴い低下する傾向にあった。筋力と骨格筋量は有意な相関関係にあり特に下肢筋力に比べ握力で相関が強かった。運動機能は筋力との相関を認めたが、骨格筋量との相関は認められなかった。認知機能と筋力及び骨格筋量に相関は認めなかった。今後も同地区にて継続的に測定を実施する予定であり、経年的な経過を検証しながら運動機能向上及び健康増進を目指した地域での取り組みに活かしていきたい。 共著者：平野孝行、笹野弘美
4）多職種連携教育－なごやかモデルの紹介と学生の満足度－（査読付）	筆頭	2017年3月	名古屋学院大学論集　医学・健康科学・スポーツ科学篇第5巻2号(pp.37～47)	「文部科学省　未来医療研究人材養成拠点形成事業　なごやかモデル」で実施している、高齢化率44。1%の団地をフィールドにした3大学協同でのIPEの紹介と、IPEに参加した学生の満足度調査について報告及び課題の検討を実施した。本調査では現在実施しているIPEについては概ね満足しているも、3大学それぞれ独自のカリキュラムがあり、またキャンパスも離れている事より授業内に合同で活動することが困難であった。また単年度参加より複数年度参加した学生の方が肯定的な意見が多いことより、eラーニングやSNSなどの活用により学生同士がより密に連絡を取り合いお互いを理解し共通認識を持つことが必要である。また、各大学でも学生がより学びやすくなるよう時間割の調整や休日利用の検討も必要である。 共著者：笹野弘美、平野孝行

5）フラダンスの運動効果の検証と介護予防プログラムとしての有効性の検討（第1報）（査読付）	筆頭	2018年3月	名古屋学院大学論集　医学・健康科学・スポーツ科学篇第6巻2号(pp. 21～27)	地域在住高齢女性18名に対し、週1回60分のフラダンスレッスンを実施し、レッスン開始前・レッスン開始3か月及び6か月後の運動機能・動作能力等をを比較し、FR、立ち上がりに統計学的有意差が認められた。また有意差は認められなかったが、実数として長座体前屈、片足立ち、反応時間においては半数以上、股外転筋力、TUGにおいては7割以上の対象者に改善が認められた。さらに希望者14名とインストラクターに対し三次元動作解析システムによる動作解析を実施し、レッスン開始後12カ月でインストラクターの動きに近づいてきた。これらより、フラダンスは体幹・股関節周囲筋を多く使い、またステップに応じ個々の筋を選択的に使うため体幹・股関節周囲筋の筋力維持・強化に有効であり,フラダンスは介護予防の有効な手段である。 共著者：笹野弘美、平野孝行、森田良文、佐藤徳孝

6）介護予防におけるフラダンスの有効性の検討(兼博士論文）（査読付）	筆頭	2019年3月	地域リハビリテーション第14巻1号(pp.80～85)	60・70歳代のフラ未経験女性18名に対し、週1回60分のフラレッスンを実施し、最後まで継続できた14名を対象に、レッスン開始前・レッスン開始から3か月毎に３６か月間の運動機能・動作機能・能力を比較し、立ち上がり、FRに統計的有意差が認められた。また、有意差は認められなかったが、片足立ちにおいて改善傾向が見られた。さらにBMI、握力、股外転筋力、TUG、反応時間、つぎ足、E-SAS、MMSEの平均値においては介入前から介入後36カ月まで大きな低下は見られなかった。これらよりフラは体幹・股関節周囲筋の筋力維持・強化に有効であり、介護予防に有効な手段であると考える。さらに、介護予防には運動の継続が重要であるが、18名中14名が36か月継続できていることからもフラは介護予防の有効な手段である。 共著者：笹野弘美、備酒伸彦、平野孝行
7）フラの上達度の可視化と，上達度と身体機能・運動機能との関係について(第1報）（査読付）	筆頭	2021年7月	医療福祉情報行動科学研究　第8巻（pp.91－98）	三次元動作解析のグラフよりフラの上達度の可視化を検討し、リサジュー図形にて可視化が可能であることがわかった。さらにフラを活用した介護予防教室に参加し三次元動作解析を実施した地域在住高齢者より無作為に抽出した3名について、リサジュー図形を用いた上達度と身体機能・運動機能との関係について検証し、長座体前屈とフラの上達度との関係がある可能性が高いことがわかった。しかし、対象者が3名と少ないため、今後、三次元動作解析を実施した残りの6名についても検証することで、フラを用いたより運動効果の高いプログラムの作成が可能となり、高齢者の介護予防に寄与できると考える。 共著者：笹野弘美、平野孝行、森田良文、佐藤徳孝
8）フラの動作に関する研究－介護予防プログラムの検討に向けて－（査読付）	筆頭	2021年12月	中部リハビリテーション雑誌16巻(pp.8－11)	20歳代女性フラダンサー1名に対しフラの6種類の基本ステップ時の体幹及び下肢８筋の表面筋電図を計測し、最大筋力時の筋活動と比較。多裂筋は全てのステップで60%、中殿筋も1つのステップを除いて50%前後の筋活動が見られ、また、各ステップでそれぞれ各筋の活動量に違いがあることが分かった。そのため、多くの種類のステップを組み合わせて運動頻度を多くすることで、多裂筋、中殿筋以外の筋においても高い運動効果を得られる可能性があると考えられる。 共著者：笹野弘美、下野俊哉
8)コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題－学内実習の概要と学生アンケート調査による考察－	共著	2022年2月	医療福祉情報行動科学研究　第9巻（pp.31－38）	指定規則の改正により地域実習を行うこととなったが、新型コロナウイルス感染拡大により令和2・3年度は学内にて実施した。実習開始1か月前に予習課題をHPへ掲載し実習へ向けての自己学習を促した。実習ではライブ中継やグループ討議など能動的に学習する機会を多く作った。学内実習を振り返ることができる王、実習終了後には復習用資料をHPに掲載した。実習後に実施した学生へのアンケートでは、7割以上の学生が実習で扱ったテーマについて理解できたと回答したが、次年度以降の臨床実習に関しては多くの学生が不安を持っていることが分かった。次期実習までにこれらの結果を踏まえた学習の在り方を考える必要がある。 共著者：滝本幸治、池田耕二、吉川義之、坪内善仁、笹野弘美他

<その他> 「学会発表」				
1)フラダンスは介護予防プログラムに利用できるのか！	筆頭	2013年5月	第48回日本理学療法学術大会（名古屋国際会議場）	60歳代・70歳代のフラ未経験女性8名（平均年齢66.1歳）を対象に3か月間（週1回、計12回）のフラレッスンを実施し、実施前後の運動機能・動作能力等を比較。12回のフラレッスンにより、半数以上に筋力、バランス能力、柔軟性、歩行能力の改善が認められたことは特筆すべき。またE-SASにおいても5項目中3項目に改善が認められたことにより、フラは介護予防に有用な手段となり得る。フラは楽しく実施でき、その「楽しさ」が「運動の継続」に繋がる。さらに、人前でダンスを披露することの「満足感・達成感」が、さらなる「運動の継続」に繋がる。介護予防には、定期的な、そして継続的な運動が重要であり、フラはその有効な手段である。
2)多職種連携教育とAIP（Aging in Place）コミュニティ作りについての報告	筆頭	2015年3月	第24回愛知県理学療法学術集会（ウインクあいち）	「文部科学省　未来医療研究人材養成拠点形成事業　なごやかモデル」における多職種連携教育の取り組みと同事業において進めている「学生と住民と協働してAIPコミュニティ作り」について報告。学生がグループで企画運営をする事で職種毎に偏りがちな考え方を知り、お互いに話し合うことで最善の方法を見出すという「チーム」を学内教育で体験する事は重要であり、多くの医療系養成校で取り入れていく必要がある。しかしながら現事業で連携している3大学のうち当大学のみキャンパスが離れており、グループでの活動に参加しづらい状況である。また、多大学で実施する場合はカリキュラムの調整が難しく、テレビ会議システム等を利用した遠隔及び時間差での受講、eラーニング等の検討も必要である。
3)在宅医療・地域包括体制構築に向けた行政、地域、大学連携による調査	共同	2015年6月	第57回日本老年医学会学術集会(パシフィコ横浜)	名古屋市緑区で在宅医療及び介護施設の利用者本人とその家族、各20名、サービスを提供する医師・歯科医師・薬剤師・訪問看護ステーション看護師・療法士・ケアマネージャー（計279名）に対し、地域における在宅、高齢者医療、介護体制の問題点と課題を明確化することを目的にアンケート調査を実施。利用者に対するアンケートは学生実習の一環として医学部学生による聞き取り調査として実施。詳細な内容の解析は改めて報告予定であるが、提供者側の回答率が率直に現在の問題点を反映している可能性が推察される。今回は特に利用者側をある程度抽出した形で進めたが今回の解析を踏まえ、さらに緑区、さらには名古屋市全体の現状・意識調査の展開により在宅医療・地域包括体制構築の糧としたい。
4)介護予防におけるフラダンスの効果について－運動機能・運動能力に着目して－	筆頭	2016年5月	第51回日本理学療法学術大会（札幌コンベンションセンター）	名古屋市在住の60・70歳代の女性18名(平均71.4歳)を対象に週1回のフラレッスンを行い、介入前後の運動機能・能力について比較した。週1回のレッスンにより、10項目のうち3項目において統計学的有意差が認められ、またそれ以外の5項目においても改善傾向が認められた事より、フラは運動機能・能力の維持改善に有用な手段であると考える。また、6か月間の実施において入院による1名を除く17名全員が継続できていることも特筆すべきである。フラは楽しく実施でき、人前で披露することの「満足感・達成感」や普段とは違う化粧による「高揚感」が「運動の継続」に繋がると考える。介護予防には定期的・継続的な運動が重要であり、本研究によりフラはその有効な手段であると考える。今後も経時的変化を追うとともに、その他の検査項目との関連性についても検討したい。

5)多職種連携教育ーなごやかモデルの紹介と学生の満足度ー		2016年11月	第4回日本理学療法教育学会学術集会（国際医療福祉学院ももちホール	「文部科学省　未来医療研究人材養成拠点形成事業　なごやかモデル」における多職種連携教育の取り組みと参加した当大学リハビリテーション学部4年生21名に実施した満足度調査について報告した。ほぼ6割の学生が満足したと回答したが、他職種の理解ができたと回答したのは3割強であった。このプログラムで連携している3大学のうち当大学のみキャンパスが離れており、グループ活動に参加しづらい状況であるため、これが、他の職種を理解できない要因の1つとなっていると考える。
6)介護予防におけるフラダンスの効果についてーフラ基本ステップの動作に着目してー		2017年5月	第52回日本理学療法学術大会（幕張メッセ）	フラインストラクター(48歳)に対しVICONによる動作解析を実施。また60・70歳代の女性18名(平均71.4歳)を対象に週1回のフラレッスンを行い、14名(平均72.4歳)の希望者に対し動作解析を実施。ステップはカオ・カホロの2種とし、フラの独特の動きである骨盤の傾斜に着目した。インストラクターはどのステップでも肩をほぼ水平に保ったまま骨盤を左右に傾斜させているが、高齢者は介入前には肩と骨盤が同じように傾斜し体が傾いた状態であった。介入後6か月では徐々に肩を水平に保つことができるようになり、インストラクターの動きに近づいてきた。フラは体幹・股関節周囲筋を多く使い、またステップに応じて個々に筋を使う。肩をほぼ水平に保ったまま骨盤を左右に傾斜させる場合、これらの筋を必要に応じて個々にコントロールしており、体幹及び体幹・股関節周囲筋の筋力維持・強化に有効であると考える。
7)フラダンスを活用した介護予防プログラムの有効性の検討		2019年10月	第6回日本予防理学療法学会学術大会 第54回日本理学療法学術大会 （広島国際会議場）	フラ未経験高齢女性18名（平均年齢71.4±5.1歳）に週1回のフラレッスンを36か月間実施し、研究期間中継続できた14名（平均年齢70.9±5.2歳）を対象に、介入前及び介入後3か月毎に身体機能・運動機能・能力を検査し比較した。立ち上がり、FRに統計学的に有意な上昇が認められ、片脚立ちに改善傾向が見られた。フラは常に股関節・膝関節屈曲位で体幹を正中位に保持したまま骨盤の回旋・傾斜運動を反復的に行うため、体幹・股関節周囲筋の筋力強化に有効であり、加齢と共に低下が予測される握力等に大きな変化が見られなかった事から、維持的な効果もあると考える。また、音楽に合わせ、歌詞の意味を理解しハンドモーションで相手に伝え、幾つかの基本ステップを組み合わせて踊るため、認知面に対する効果も期待できる。更に18名中14名が36か月に参加の継続ができた。これらよりフラを用いた介護予防プログラムには個人の身体的要素の一部に短期的効果を期待できる。
8）奈良学園大学におけるコロナ禍の学内実習の紹介ー地域理学療法・作業療法実習の概要と学生アンケート調査ー	共同	2021年10月	第34回教育研究大会・教員研修会（福岡WEB開催）	新型コロナウイルス感染拡大に伴い、奈良学園大学では、地域理学療法・作業療法実習を学外実習から学内実習に切り替えて実施した。その実施方法について紹介および実施後の学生へのアンケート調査の結果を報告した。実習であるため、多くのライブ中継にて現場を理解する機会やグループワーク・発表の機会を持ち、学生の能動的学習の機会を多く作った。事後アンケートの結果では実習に対してはおおむね肯定的な意見であったが、今後の実習に対して不安があることが分かった。そのため次期実習に向けた学生の不安要素に対する支援が必要である。
9）地域の特性を考慮した村民の健康増進への取り組みの検討 「研修報告書」	筆頭	2022年5月	第7回日本予防理学療法学会サテライト集会　（国分シビックセンター）	高齢化率40.2％（平成31年1月）である岡山県西北端に位置する真庭郡新庄村においてAging in Placeを実現および継続するために、村民の健康増進および介護予防の方法を検討することを目的に地域の環境や特性・資源を調査した。村民の健康増進、介護予防およびAging in Placeの実現と継続には、自身の健康へ目を向ける機会を増やすとともに、農業による身体への負荷を軽減する動作指導等、高齢者と伴に中高年者へのアプローチが重要であることがわかった。

1) アメリカサンシティ研修報告	単著	2015年3月	名古屋学院大学論集　医学・健康科学・スポーツ科学篇第3巻2号(pp.23～27)	2014年10月、アメリカ・アリゾナ州にあるサンシティへの「文部科学省　未来医療人研究人材養成拠点形成事業『なごやかモデル』」の研修に参加したため報告した。この研修を通して、楽しんで生活をする事の大切さ、人から必要とされることの大切さなど「高齢者の街づくり」に関する多くのヒントを得た。今回得られた知識、情報を『なごやかモデル』の目指す『Aging In Place』に役立てたい。
「調査報告書」				
1)平成26年度在宅医療と介護の連携に関する調査報告書	共著	2015年10月	緑区地域包括ケア推進会議在宅医療・連携部会 緑区在宅医療・介護連携支援センター	平成26年度における在宅医療と介護の現状把握と、課題を抽出し今後の方策を検討するために、医療や介護の受給者および提供者の双方に対する調査を実施した結果の報告書。 本人担当部分：研究計画、調査、データ分析 共著者：稲葉静代、姜琪鎬、佐藤貴久、小森敦夫、山口一丸、永田康子、赤津裕康、笹野弘美他

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年　3月　31日

氏名　坪内　善仁

研究分野	研究内容のキーワード
高齢期作業療法、地域在住高齢者の認知症予防	高齢者、認知症、介護予防、地域、エンパワメント

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類　「在宅リハビリテーション論」 ティーチング・アシスタントとして事例（仮想）を通じた具体的指導の実践	平成29年1月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類3年次のティーチング・アシスタントとして「在宅リハビリテーション論」において、より実践を意識した実技教育とするために、臨床での経験上頻出する事例と困難点・工夫を例示し、直接教示した。そのことで、学生から自主的な質問が増加し、総合臨床実習に向けた予習促進や学生の不安軽減につながる可能性が示唆された。
2）大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類　評価・治療の実技と症例動画を用いた身体障害作業療法学実習「呼吸器の作業療法」講師	平成29年10月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類3年次の学生20名に対し身体障害作業療法学実習(専門科目、3年次配当、半期、1単位・45時間)の「呼吸器の作業療法」と題して、3時間の授業を行った。講義では、授業カリキュラムに則り、はじめに呼吸器の解剖学・生理学の基本的知識を教示した。次に、医学的情報として、臨床で必要な血液ガスやレントゲンの読み取り方を伝えるとともに、フィジカルアセスメントについて実際の臨床につながるように、実技を交えて学習した。最後に、具体的な症例をグループで検討し、目的を持って学習方法、知識と技術の融合を目指した。学生は、机上の勉強だけでは伝わらない部分も、実技や症例、動画を交えることで具体的にイメージできたとの感想が多くきかれた。
3）大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類　評価・治療の実技と症例動画を用いた身体障害作業療法学実習「代謝性疾患の作業療法」講師	平成29年11月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類3年次の学生20名に対し身体障害作業療法学実習(専門科目、3年次配当、半期、1単位・45時間)の「代謝性疾患の作業療法」と題して、3時間の授業を行う。講義では、授業カリキュラムに則り、糖尿病および骨粗鬆症の病態生理から説明を行い、解剖学・生理学の基本的知識を教示する。次に、医学的情報として、臨床で必要な血液検査の読み取り方を伝えるとともに、グループワークを用いて日常生活指導の方法、低血糖への対応方法、セルフトレーニングの指導方法について実践形式で学習する。最後には症例検討を行い、次年度の臨床実習で評価・治療につながるように教示する。加えて、吸引技術についても、マニュアルを作成し伝達するとともに、デモンストレーションを行い、全員が模擬的に経験する。
4）大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類　評価・治療の実技と症例動画を用いた身体障害作業療法学実習「循環器疾患の作業療法」講師	平成30年1月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類3年次の学生20名に対し身体障害作業療法学実習(専門科目、3年次配当、半期、1単位・45時間)の「循環器疾患の作業療法」と題して、3時間の授業を行う。講義では、授業カリキュラムに則り、心不全、心筋梗塞、弁膜症、狭心症など心疾患の病態生理について学ぶ。さらに、心電図の理解と読み取り方について、質疑応答形式で具体的に教示する。ロールプレイとして、心臓の図形模写や日常生活動作の指導・介助方法を行うとともに、患者・家族とのコミュニケーション・情報収集手段について実践を通じて学習する。また、評価から運動療法（有酸素運動・筋力増強訓練・家事動作訓練など）症例検討では、具体的入院事例1例、在宅事例1例を提示し、学生が評価からプログラムを立案する方法を学ぶ。

2　作成した教科書，教材 1）大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類身体障害作業療法学実習「呼吸器の作業療法」授業用教材	平成29年10月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーショ学類3年次　身体障害作業療法学実習(専門科目、3年次配当、半期、1単位・45時間)の「呼吸器の作業療法」で使用する教材として、スライド220枚をオリジナルで作成し、全員に配布した。構成は身体機能作業療法学第2版(医学書院)の流れを参考に、病態生理、解剖の図・表を多く（写真含む）示し、実際のレントゲン画像や血液データを挿入して作成した。また、視診・触診評価では、デモンストレーション動画、臨床の動画集を作成・挿入し、スライド内で提供した。
2）大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類身体障害作業療法学実習「代謝性疾患の作業療法」授業用教材	平成29年11月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーショ学類3年次　身体障害作業療法学実習(専門科目、3年次配当、半期、1単位・45時間)の「代謝性疾患の作業療法」で使用する教材として、スライド120枚をオリジナルで作成し、全員に配布する。構成は、身体機能作業療法学第2版(医学書院)を参考に、糖尿病の病態・運動療法・薬物療法・家族指導について、近年の論文から得られる知見を含み、より実践で重要なポイントを伝達する。吸引実技では、デモンストレーション動画を作成・挿入し、スライド内で提供した。
3）大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類身体障害作業療法学実習「循環器疾患の作業療法」授業用教材	平成30年1月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーショ学類3年次　身体障害作業療法学実習(専門科目、3年次配当、半期、1単位・45時間)の「循環器疾患の作業療法」で使用する教材として、スライド110枚をオリジナルで作成し、全員に配布する。構成は、身体機能作業療法学第2版(医学書院)の流れに沿って、図・表、写真を多く用いて具体的にイメージできるように工夫した。また、作業療法実践に際し、より新しい知見が得られるように、近年の論文をレビューして引用した。臨床場面で遭遇するチアノーゼや頸動脈怒張の視診、具体的評価方法については、実際の動画を挿入し、提供した。
4）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「基礎ゼミⅡ」授業用教材	令和1年9月 ～ 現在に至る	リハビリテーション学科1年生に対して、研究論文の読解や解釈の方法、発表スライドのまとめ方、発表時の注意点等をまとめたスライド30枚をオリジナルで作成した。学生にとって未経験の作業となるため、自身の論文と作成過程の資料も含めて提示・説明を行った。
5）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「地域作業療法学Ⅰ」授業用教材	令和2年4月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻2年生の「地域作業療法学Ⅰ」で使用する教材として、スライド約40枚/回をオリジナルで作成し、全員に配布した。地域の概念、地域包括ケアシステムの概要は言葉で伝わりにくいため、地域作業療法学第3版(医学書院)の内容に加えて仮想の事例や街づくりの企画を用いた演習を組み込んだ資料とした。また、図・表、写真を多く用いて具体的にイメージできるように工夫した。
6）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「早期体験実習」学内実習用教材	令和2年7月 令和3年8月	リハビリテーション学科1年生の早期体験実習が感染症の影響により学内実習となったため、「神経難病のリハビリテーション」について病態やリハビリテーションの流れ，現場で行う実習の注意点、リスクマネジメント等について自らの体験を含めてスライド30枚と動画をオリジナルで作成した。動画では、学生目線で視聴できるように配慮し、メモの取り方や質問の方法、個人情報保護の徹底など、教育目標に沿って現場で経験する事項を出来るだけ含めた資料とした。

7）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「地域作業療法実習」学内実習用教材	令和2年9月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻2年生の地域作業療法実習が感染症の影響により学内実習となったため、医療分野から捉えた地域支援として「生活障害の捉え方」，「退院支援の実際・他職種協働」について自らの体験や厚生労働省の退院支援ガイドラインを参考にスライド100枚をオリジナルで作成した。構成は，入院から退院の流れ，退院後の支援，リハビリテーションの役割，他職種の役割と連携のポイントを仮想事例に沿って説明できるように工夫した。また、実際の臨床場面が想起できるように、教員の協力により患者面接と評価の流れ、カンファレンスの動画を作成し，開示した。
8）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「地域作業療法学Ⅱ」授業用教材	令和2年9月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻2年生の「地域作業療法学Ⅱ」で使用する教材として、スライド約40枚/回をオリジナルで作成し、全員に配布した。地域作業療法学Ⅰで得た地域の概念、地域包括ケアシステムの概要をより具現化するために、教員が過去に実践した内容と効果について資料・動画を作成し、併せて説明に用いた。また、学生が想起した街づくり計画をまとめ、発表できるように資料作成のポイントを説明した資料も作成・配布した。
9）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「作業技術学Ⅱ」授業用教材	令和2年9月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻2年生の「作業技術学Ⅱ」で使用する教材として、作業活動実習マニュアル(医歯薬出版)を参考に機織りと陶芸の目的や効果、患者適用時の注意点に関するスライド約20枚/回をオリジナルで作成した。また、作業の手順は実演動画にまとめ、学生が予習・復習や実施時に適宜視聴できるようにクラスルームに掲示した。
10）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「身体障害作業療法学Ⅲ」授業用教材	令和2年9月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻2年生の「身体障害作業療法学Ⅲ」で使用する教材として、パーキンソン病と脳血管障害に関するスライド約50枚/回をオリジナルで作成し、全員に配布した。身体障害作業療法学Ⅰ・Ⅱで学んだ内容を発展できるように仮想事例による演習や基本情報や医学情報の解釈の実際を詳細に説明し、3年生の総合演習や検査測定実習、作業療法評価実習につながるように留意した。また、オンライン授業が中心であったため、オリジナルの動画を作成し、疾患ごとの症状や病態を学生が具現化できるように努めた。
11）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「老年期作業療法学Ⅰ」授業用教材	令和3年4月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻3年生の「老年期作業療法学Ⅰ」で使用する教材として、高齢期領域の作業療法第2版(中央法規)を参考にスライド約50枚/回をオリジナルで作成した。高齢者の疾病特性から心身の変化、地域在住高齢者の閉じこもりやフレイルの概念と予防の実際、終末期の概念と作業療法支援まで、幅広く老年期を理解できるように工夫した。同時に、老年期とひとくくりに考えるのではなく、高齢者の個別性を重視した思考を養うために事例紹介を含めた資料作成を行った。
11）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「老年期作業療法学Ⅱ」授業用教材	令和3年9月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻3年生の「老年期作業療法学Ⅱ」で使用する教材として、高齢期領域の作業療法第2版(中央法規)を参考にスライド約30枚/回をオリジナルで作成した。老年期作業療法学Ⅰとの関連を意識しつつ、事例や実際の地域支援活動、介護予防について、具体的な内容提示で資料作成を行った。

11）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「作業療法総合演習」授業用教材	令和3年9月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻3年生の「作業療法総合演習」で使用する教材として、脳画像の見方や動作分析の方法について、模擬事例を含めた資料約30枚/回をオリジナルで作成した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1）所属長による評価	平成29年7月	医療法人鴻池会秋津鴻池病院の作業療法士（身体障がい部門）として14年間勤務し、係長として日々の臨床実践に加えて、現場マネジャーや単位の管理、後輩・学生教育など幅広く活躍している。学生教育では豊富な経験から個別性を重視し、それぞれの能力や理解力、性格など個々に合わせた指導法を実践しており、直接指導した学生や後輩だけではなく、他職種、患者とその家族からの信頼も厚い。学生は、総合臨床実習の前後で表情や発言の変化が明確で、学生自身の充実感から、当該職員の卒後教育を求めて入職することも多い。近年は、社会活動や研究活動で得た知識を教育場面で活用し、より学生にとって良い指導となるように研鑽を重ねている。臨床と研究、教育の実務経験からも、教育上の能力を有しているものと評価する。
2）学生による授業評価アンケート結果	令和3年11月	「地域作業療法学Ⅰ」、「地域作業療法学Ⅱ」、「作業技術学Ⅱ」、「老年期障害作業療法学Ⅰ」、「老年期障害作業療法学Ⅱ」、「身体障害作業療法学Ⅲ」、「作業療法総合演習」の授業アンケートにおいて、授業のわかりやすさや資料の見やすさ、話の丁寧さなど、全項目で4点以上(5点満点中)と満足度の高い結果であった。また、昨年度の課題であった自己学習時間は、昨年度は「30分～」が多かったが、今年度は「60分～」が多く、定着している様子であった。以上から、指導内容やペース、授業量など個々の学生に配慮された授業構成になっていると考えられた。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 （院内教育） 1）卒後教育体制構築（スーパーバイザー）	平成19年4月 ～ 平成31年3月	秋津鴻池病院では卒後1～3年目の職員ごとにスーパーバイザーを設定しており、平成19年から1年目の職員について、年1名・合計7名の直接指導を行った。指導内容は、訓練同行による実技（評価・治療）指導、住環境整備・福祉用具指導に加えて、自己研鑽方法指導、年2回の症例報告会のレジュメ作成指導、年1回のリハビリテーション部研究発表会の発表指導（研究計画・発表資料作成）、ストレス対処・体調管理指導を行った。2年目の職員について、継続した臨床指導に加えて、奈良県作業療法士会主催の事例報告会、奈良県作業療法学会での発表指導を4名行った。3年目の職員には、臨床指導・相談に加えて、後輩への指導方法を教示した。また、学会発表や日本作業療法協会の事例登録制度への指導を5名実施した。これら卒後継続指導では、常に相談ができる安心感を得るとともに各世代での目標をバイザーと共有することで、研鑽意欲を保持する点に留意している。 平成23年6月からは、係長として現場マネジャーを担い、各職員の臨床能力・業務処理状況について把握に努めた。また、状況を上司に報告・相談し、担当対象者数、役割、フォローアップについて個別に考慮した。これらは、年1回全職員と個別面談を行い、相違が生じないように留意した。

2）リハビリテーション部研究発表会、 学会発表指導	平成19年10月 ～ 平成31年3月	医療法人鴻池会秋津鴻池病院リハビリテーション部研究発表会において、平成19年10月から指導を務めた。第12回「関わることの難しさを経験した一事例～“かわいそうな私”を表出する症例を通して学んだこと～（平成20年1月）」、第12回「自ら求める感覚刺激に着目した働きかけ（平成20年2月）」、第14回「自宅復帰を目指した家族との協力～お互いの想いを知ることから～（平成22年2月）」、第15回「安全な在宅生活環境の自己選択に至った一事例～「直接的な経験」を考慮して～（平成23年2月）」、第17回「対象者の意思を考慮した排泄動作訓練～転倒リスク軽減を目指して～（平成25年2月）」、第18回「園芸を通して内発的動機づけが向上した事例（平成26年1月）」、第20回「MIにより排泄動作学習が困難となっていた一事例～視覚提示を用いた作業療法介入～（平成27年2月）」、第21回「退院後施設での居場所を獲得した一事例～認知症高齢者の役割感に着目して～（平成28年1月）」、第22回「作業の体験を重視した臨床実習指導～自己効力感向上を認めた学生を通して～（平成29年1月）」の計9演題の指導を行った。 　学会発表では、平成21年4月から、 第3回奈良県作業療法学会「自分らしい生活の再構築を目指したアプローチ～作業バランスの視点から～（平成21年5月）」、第7回奈良県作業療法学会「洗濯物たたみ動作への介入～ワーキングメモリーに着目して～（平成26年6月）」、第8回奈良県作業療法学会「閉じこもりがちな病棟生活が変容した一事例～他者との関わりがもたらす自己有用感の獲得～（平成27年6月）」、第17回日本認知症ケア学会大会「退院後施設での居場所を獲得した一事例～認知症高齢者の役割に着目して～（平成28年6月）」、第32回日本老年精神医学会「認知症高齢者の転帰先に影響する要因の探索的調査（平成29年6月）」、第37回近畿作業療法学会「作業の体験を重視した臨床実習指導（平成29年10月）」の計6演題の共同演者として指導を行った。
3）臨床実習指導：日本作業療法士協会臨床実習指導者研修全課程修了（認定番号298号）	平成21年4月 ～ 平成31年3月	身体障がい領域の臨床実習指導者として、星城大学4年生（8週間）3名（平成21年4月～5月、平成25年6月～8月、平成26年4月～5月）、神戸学院大学4年生（9週間）1名（平成21年8月～10月）、大阪河﨑リハビリテーション大学4年生（9週間）1名（平成22年6月～8月）、関西学研医療福祉学院3年生（7週間）1名（平成24年7月～9月）、関西福祉科学大学3年生（5週間）1名（平成25年9月～11月）、藍野大学4年生（8週間）2名（平成26年6月～8月、平成27年4月～6月）、藍野大学3年生（3週間）2名（平成26年9月～10月、平成27年9月～10月）、大阪府立大学4年生（6週間）2名（平成28年4月～6月、平成29年4月～6月）、計13名の指導を実施した。また、ケースバイザーとして、神戸学院大学4年生（9週間）1名（平成22年8月～10月）、星城大学4年生（8週間）1名（平成23年4月～5月）、四條畷学園大学4年生（8週間）1名（平成28年8月～9月）、計3名の指導を行った。 　平成28年2月には、日本作業療法士協会臨床実習指導者研修全課程修了（認定番号298号）の認定を受けた。 実習指導では、①～⑪に留意した。 ①必ず学生自身で目標立案を行い、実習指導者、責任教員と共有し実現を支援する、②教員と密に情報共有し、実習前の課題と実習の進め方、実習終了後のフォローアップを含めて連携を図る、③対象者に実習の目的や方法を説明し、学生・対象者ともに主体的に取り組めるよう関係を構築する、④評価・治療ともに「見る」「模倣する」「実践する」「助言により修正する」流れを徹底し、不安軽減と学習につなげる、⑤医師・看護師・介護士・理学療法士・言語聴覚士・管理栄養士・医療相談員と情報共有する場を設定し、他職種協業を理解する、⑥始業・終業時間を順守し、自宅での学習時間を確保する、⑦会議や管理業務を含めて、実際の業務に触れ、管理能力を養う、⑧リスク管理下で極力学生が役割を担う、⑨スーパーバイザー・サブバイザー制度により、偏った指導を抑制し、コーチング・ティーチングの使い分けにより学生の動機付けを強化する、⑩対象者

4）リハビリテーション部新人研修会講師	平成25年4月 ～ 平成31年3月	秋津鴻池病院では、リハビリテーション部の新入職の職員（作業療法士・理学療法士・言語聴覚士）を対象に週1回・通年で研修カリキュラムを実施している。その中で、「認知症のひとの理解」（平成26年まで）、「患者心理について」（平成27年以降）の講座を担当し年1回の講義を計5回行った。 両担当講座で重点指導事項として、はじめにひとを対象とした職種であることの理解を促した。研修の具体的内容は、①「倫理的配慮の遵守」として接遇の徹底、個人情報保護、安全管理に触れ、疾患特異性を考慮した関わり（特に意思の表出が困難な対象者との関わり）について説明を行った。次に、②「科学的根拠のある治療の必要性」について、なぜ常に自己研鑽・知識のアップデートが必要かを中心に著書や論文における理論の変遷を提示し、経験に基づく対象者のニーズ（より良い治療方法選択の権利）を合わせて説明を行った。③「対象者の思い」について、経験に基づく具体的事例を提示し、神経心理学的評価の結果と合わせて説明を行った。同時に、グループワークを実施し、自身の推察と他者の考えを比較し、違いを体験することで、対象者主体の考え方につい
5）看護師卒後3年研修講師	平成29年11月	看護師の卒後教育の一環として、他職種協業を目指した「リハビリテーション専門職の役割」に関する講義を行った。 講義内容は、①「リハビリテーション・看護の定義」について、日本理学療法士協会・日本作業療法士協会・日本言語聴覚士協会・看護協会の定義をICFの図を用いて共通する領域および専門性の強い領域について事例提示を用いて説明を行った。次に、②「作業療法士が臨床で使用する評価法」について、当院で日常的に使用する身体機能評価（関節可動域、筋力、感覚など）・神経心理学的評価（認知機能、自己効力感や満足度、うつ度など）の評価目的と結果の解釈方法、目標や治療設定との関連について説明を行った。③「リハビリテーション職と看護師の連携」について、①②の内容から専門性の理解を促した上で、対象者を主体とした目標設定・共有の方法、対象者の強みを日常生活に導入する方法について、どのような工夫が必要か・可能かについてグループワークを行い、実践で活かせるように留意した。
（院外での講演） 6）第20回星城大学リハビリテーション研究会「10年間の軌跡」シンポジスト	平成28年3月	星城大学リハビリテーション学部の学生および卒業生を主体として構成される研究会において、「10年間の軌跡」の題目でシンポジストを務めた。作業療法士として臨床で従事し、10年が経過した今感じることをテーマに、これまでの経験を振り返り、特に病院から地域への働きかけの重要性を語った。また、経験的根拠に基づく福祉機器・自助具の選定から、神経難病患者への評価ポイントなど教科書や論文にあまり述べられていない事項に留意して、若手作業療法士に取り組みを紹介した。
7）医療法人弘仁会南和病院看護師研修「認知症をもつ人の支援」講師	平成28年7月	医療法人弘仁会南和病院看護師研修会において、講師を務めた。療養病院である南和病院では、入院患者の大半を高齢者が占め、認知症をもつ人も少なからず存在する。そんな現場で働く看護師の困りごととして、抜針や介護拒否、徘徊など認知症の行動・心理症状への対応が挙げられ、行動観察法の紹介から具体的な対応方法について作業療法士の視点から考え方を説明した。講義内容は、①出来ないことだけではなく出来ること（強み）の把握、②行動の捉え方・評価方法、③変性・進行疾患の特徴を中心に、前半は講義、後半は事例を用いたグループワークを行った。認知症の支援ではなく、認知症をもつ人の支援であることを強調し、生活歴の解釈や、意味ある作業の支援方法、抑制ではなく共同するための心理コントロールについて説明した結果、グループワークでは、強み（作業）を活かしたケア実践につながる考えや意見が多くみられた。

8）奈良県吉野郡大淀町介護予防教室 「いきいきふれあい教室」講師	平成28年8月	奈良県吉野郡大淀町の地域住民を対象に、2ヶ所の介護予防教室で「認知症・高齢期うつ病の理解と予防」の題目で講師を務めた。認知症や高齢期うつ病の啓発を目的に、①加齢と認知症の違い、②予防のための生活習慣、③早期診断・早期治療の重要性について教授した。同時に、地域で見守りを強化し、気付いたら相談することを依頼し、相談方法と相談場所の確認を役場職員とともに行った。
9）奈良県御所市介護予防講座 「認知症の理解と予防」講師	平成28年9月	奈良県御所市の地域住民を対象とした介護予防講座において講師を務めた。市内では、認知症カフェやサロンが行われているが、参加者数が少なく周知出来ていない現状があった。そのため、あらためて認知症の理解と予防の重要性について啓発することを目的とした。具体的な内容は、①認知症と加齢性もの忘れの違い、②早期診断・早期治療の重要性、③日常生活で実践できる予防方法、④地域での取り組み紹介とした。理解につながるように、説明時の言葉選びに配慮し、予防に重要な運動や活動を体験しながら学習を図った。一緒に参加した保健師からも、講座後に参加者から地域の取り組みについて問い合わせがあった旨が伝えられ、一時的にでも関心が高まっているとの報告を受けた。
10）奈良県吉野郡大淀町介護予防リーダー養成講座「レクリエーションの考え方」講義資料提供	平成28年10月	奈良県吉野郡大淀町介護予防リーダー養成講座において、講義資料提供を行った。講座内容は、①全員が楽しむ方法、②二重課題・多重課題の導入ポイント、③集団場面の注意点を中心に、レクリエーション考案・進行を介護予防リーダーが実践できるよう配慮した。前半は講座、後半はレクリエーション計画のグループワークを設定し、他参加者に披露することで学習強化を図った。
11）奈良県吉野郡大淀町地域住民への認知症啓発事業「やすらぎカフェ」講師ファシリテーター	平成28年11月	奈良県吉野郡大淀町の地域住民および認知症家族を対象に、「やすらぎカフェ」をいう名前の認知症啓発事業を実施し、講師・ファシリテーターを務めた。講座では、認知症をもつ人とその家族を地域で支えるをテーマに、実際に介護を経験した家族介護者による講演の後に①認知症は特別な病気ではないこと、②家族介護者を支援するためのコミュニケーション方法、③気付いた時の相談窓口について教授した。その後、カフェタイムにはグループワークで認知症介護の困りごとと支援方法について話し合い、様々な意見が出るように各グループにファシリテーターを配置したことで、活発な意見交換が行われた。
12）奈良県吉野郡吉野町サロン交流会 「認知症の理解と予防」講師	平成29年2月	奈良県吉野郡吉野町のサロン（地域住民主体の取り組み）の各リーダーが集まり、年1回開催される交流会において、講師を務めた。目的は、それぞれのサロン活動報告への助言と、認知症予防を町全体で実現していく為には、各サロン活動に予防の考えを取り入れる必要がある事を教授した。具体的には、認知的アプローチの説明と実践効果について説明し、特別なことではなく日常のサロン活動を工夫することが重要であると説明した。後半はグループワークで、サロン活動の困りごとと目標（1年）を考え共有を図った。また、平成29年度に認知症予防として作業療法士の支援を希望するサロンを募集し（3サロン）、月1回・1年間の支援したい旨を伝えた。

13）奈良県橿原市認知症予防講座 「運動を取り入れた認知症予防と認知症初期集中支援事業について」講師	平成29年10月 ～令和2年2月	奈良県橿原市の地域住民主体サロンで年3-4ヶ所「運動を取り入れた認知症予防と認知症初期集中支援事業について」の題目で講師を務めた。住民主体の介護予防活動が推進される中で、多くのサロンでは運動やレクリエーションなど既成のプログラムが継続して行われ、参加者も減少傾向になるなど、慣れによる参加率低下が問題となっていた。そこで、習慣化された運動の中に楽しみの要素と多重課題による認知症予防方法を重点的かつ具体的に教示した。また、難易度調整の考え方を同時に伝えることで、慣れによる参加者数低下予防を図った。次に、認知症早期診断・早期対応のために、近隣住民だから出来ることとして、気付きから認知症初期集中支援事業に至るまでの相談窓口と具体例を提示し、理解と協力を依頼した。行政・専門職だけ、住民だけではなく、互いに協力し合う街づくりの実現に向けて積極的に協力していく旨の感想が聞かれた。
14）奈良県立大淀高等学校医療・看護コース 「認知症サポーター養成講座」講師 ファシリテーター	平成29年11月 平成30年11月 令和1年11月	奈良県立大淀高校　医療・看護コースの1年生40名を対象に、「認知症サポーター養成講座」を実施し、講師およびグループワークのファシリテーターを務めた。認知症サポーター養成講座のカリキュラムに則って解説を行うとともに、地域の高校生が認知症に関する知識をもち、積極的に地域活動に参加することの意味について教示する。また、グループワークを通じて認知症をもつ人への支援方法を検討し、主体的な取り組みにつながるように配慮する。
15）認知症の人と家族の会奈良県支部特別講演 「知ってほしい、作業療法士の仕事」講師	令和1年10月	平成30年度から認知症の人と家族の会との連携が開始され、認知症の当事者と家族に対し、作業療法士の視点からお手伝いできること、一緒に取り組めることをテーマに講演を行った。
5　その他 1）奈良学園大学保健医療学部 リハビリテーション学科　授業担当	平成31年4月 ～　現在	基礎ゼミⅡ、地域作業療法学Ⅰ、地域作業療法学Ⅱ、作業技術学Ⅱ、老年期障害作業療法学Ⅰ、老年期作業療法学Ⅱ、身体障害作業療法学Ⅲ、作業療法総合演習、早期体験実習、地域作業療法学実習、作業療法評価実習、総合臨床実習Ⅰ、総合臨床実習Ⅱの計13科目で授業資料作成および学生への講義を行った。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
①作業療法士免許	平成18年4月	第39301号
②認定作業療法士取得	平成26年3月	認定番号1790
③修士（保健学）	平成29年3月	大阪府立大学第145号 論文題目「地域在住高齢者における計画を重視した集団調理介入の効果」
④博士（保健学）	令和5年3月	大阪府立大学第61号 論文題目「入院高齢患者のためのエンパワメント尺度日本語版の作成」

2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 （作業療法実践業務） 1）医療法人鴻池会秋津鴻池病院 リハビリテーション部作業療法士	平成18年3月 ～ 平成31年3月	内科（亜急性期病棟、回復期リハビリテーション病棟、療養病棟）、精神科（一般棟）に勤務。 　脳卒中、大腿骨骨折、肺炎など中枢疾患や整形疾患、内科疾患を中心に身体障害領域の作業療法に従事した。亜急性期から回復期では自宅・施設ともに退院先で必要なADL・IADL獲得に向けて身体機能訓練・生活機能訓練を中心に支援を行った。特に、退院先の環境調査・調整を積極的に実施し、退院後の生活を想起した訓練を早期より病棟生活に導入できるよう、医師、看護師、介護職員との連携を重点的に行った。療養病棟では、看取りに関わることも多く、終末期の作業療法について研修会等に積極的に参加し、支援を行った。また、当院では精神科一般棟においても、上記身体疾患に伴い必要に応じた作業療法を実施している。そのため、認知症や統合失調症を有す対象者の、身体機能とともに精神機能・認知機能を考慮した支援の実践を行った。院内では、月2回症例検討会が開催されており、平成18-22年度の間に年1-3回、合計10回の症例報告を実施した。
2）医療法人鴻池会秋津鴻池病院 リハビリテーション部研究発表会演題発表	平成19年2月 平成21年2月 平成25年2月	毎年1月～2月に3日間の日程で行われるリハビリテーション研究発表会において、3演題発表を行った。 第11回「療養棟におけるチームコミュニケーション　病棟別検討会議を通じて（平成19年2月）」では、療養棟の看護師とリハ職で月1回の会議を開始し、問題点や工夫点について話し合った。本会議の実施前後において病棟スタッフ23名にアンケート調査を行った結果、リハ職とのコミュニケーションが図りやすくなったと約80%が答えた。しかし、約30%は検討会議の内容理解が難しいことがあると答えた。他職種会議を積極的に行う上で相互理解可能な表現・内容に留意する必要がある。 第13回「超高齢者の閉じこもり生活からの脱却を目指した症例（平成21年2月）」では、高齢者の役割獲得が活動量に与える影響を明らかにすることを目的とした。100歳代の慢性心不全を有し、自宅で閉じこもり生活を送っていた高齢者に対し、役割獲得モデルを用いて病院内・デイサービス・自宅での役割再獲得を目指した。結果、長老・大黒柱など役割の認識的側面に変化が生じ、閉じこもり生活からの脱却を図れた。年齢・環境に応じた役割を対象者・家族・サービススタッフが認識・共有して支援することで、高齢者においても活動量は向上すると考えられた。 第17回「MSA患者への注意機能を中心とした治療介入の経験～脳神経ネットワークに着目して～（平成25年2月）」では、MSAを有す患者の認知機能と身体図式の歪みを捉えることと、介入による変化を捉えることであった。注意機能や身体後方の運動イメージに歪みが生じた事例に、視覚・体性感覚情報の顕在化を図り、段階的に口頭指示や代償を減らし潜在化を図った。結果、身体描画など改善し、便座や車椅子への移乗動作は介助量が軽減した。MSAをもつ対象者にも認知機能に着目した訓練を行うことは重要であったと考えられた。
3）医療法人鴻池会秋津鴻池病院 リハビリテーション部レクリエーション委員会委員長	平成21年4月 ～ 平成25年3月	総勢約100名のリハビリテーション部の歓・送迎会や忘年会、スポーツ大会、季節ごとのイベント、他職種との交流会を主催・運営し、スタッフ間交流を促すとともに、心理的ケアを目的にイベント開催を担い、企画・運営・広報・全体の統括を行った。

4）医療法人鴻池会秋津鴻池病院 リハビリテーション部主任	平成22年6月 ～ 平成23年5月	主任として1年間、内科の亜急性期病棟、療養病棟の現場統括を担った。特に、療養病棟において、除圧や関節可動域、身体活動量の維持に向け、職種間で介助方法における相違を減らすようにデモンストレーションの方法を看護師、介護職員と連携してマニュアル化した。
5）医療法人鴻池会秋津鴻池病院 リハビリテーション部係長	平成23年6月 ～ 平成31年3月	係長として6年間、精神科における身体障害合併症におけるリハビリテーション（作業療法・理学療法・言語療法）を統括した。他院や他施設にて対応が難しいと判断され、行動・心理症状の軽減と身体機能向上の双方を目指す必要があり、認知機能低下を有す際の身体機能向上過程に生じる転倒リスクへの対応、活動制限の軽減に取り組んだ。 また、精神科医や精神科看護師に対し、勉強会を行い早期より身体機能訓練の必要性を啓発した。 また、認知症を有す場合には、自宅への退院が困難となるケースも多く、家族へ個別での介護方法指導や負担感の傾聴、出来ることへの理解を促し、可能な限り住み慣れた自宅への退院促進に取り組んだ。 内科、精神科に関わらず、身体リハビリテーションが実施されている全対象者で、必ず月1度・各対象者10分程度、医師・看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・医療相談員・管理栄養士が集まりカンファレンスを実施している。このカンファレンスの総括を担い、各部門の現状報告に加えて、身体機能やADL、生活の予後予測における客観性の確保、目標の確認と円滑な退院促進に向けた連携指導・情報の整理に努めた。同様に、地域包括ケア病棟（旧亜急性期病棟）の入院時カンファレンスや各病棟の退院前カンファレンスでは司会を務め、当事者、家族、介護保険サービス（ケアマネジャー、施設スタッフ）が相互に意見を出し合う雰囲気作りと情報の整理に努めた。 当法人では、住宅改修・福祉機器導入に際し、病院・介護老人保健施設のスタッフが集まる環境調整カンファレンスで必ず承認を受ける必要がある。平成24年度より当カンファレンスでの総括を担い、①対象者・家族の意向を反映しているか、②動作と処方案が合致しているか、③実用性・将来性が確保されているかを吟味し判断を行った。 また、家族や医師への説明において、理解が得られにくい場合や業者・ケアマネジャーへの処方案説明において、責任者として同行し追加説明を行った。
6）医療法人鴻池会秋津鴻池病院 リハビリテーション部研究発表会実行委員長	平成25年3月 ～ 平成27年2月	当院では、年1回リハビリテーション部主催で、他職種合同による研究発表会を開催している。当研究発表会の実行委員長として、2年間企画・広報・抄録作成・予算管理・運営・司会業務にあたるとともに、実行委員長として全体の統括を行った。
7）医療法人鴻池会秋津鴻池病院新規事業企画会議「できること検討委員会」委員	平成28年4月 ～ 平成31年3月	当院における新規事業を考え、企画書を作成し、委員長（リハビリテーション部部長）が理事会にて提案を行う。具体的内容は、①医療・介護連携の取り組み、②地域連携の取り組み、③利用しやすい病院作り、④働きやすい環境の整備を中心に新規事業の検討・立案を行った。会議は1～2月に1度行われ、現在までに院内デジタルサイネージ・リーフレットの設置や介護相談教室の開催、フットサルコートの建設企画を行った。

（講演・教育活動） 8）奈良県作業療法士会教育部部員活動	平成19年4月 ～ 平成25年5月	奈良県作業療法士会教育部の活動として、約6年間部員を務めた。主に、奈良県内の作業療法士を対象とした現職者共通研修・教育部研修会の年間スケジュール立案、講師依頼、会場調整、案内文の作成、広報、受講者管理、司会を担い、期間中スケジュール通りに研修の運営が行えていた。
9）奈良県作業療法士会主催症例発表交流会	平成23年6月	奈良県作業療法士会が主催する、症例発表会において「Pusher syndromを呈した症例～失禁ゼロを目指して～」の題で発表を行った。左被殻出血後の後遺症として、Pusher syndromと注意障害を呈し回復期リハビリテーション病棟に入院した症例に対して、身体図式再構築を目的とした感覚促通訓練に加えて、実際の環境にて視覚的cueを用いた立位姿勢の安定、病棟連携による定時での排泄リズム確立を図った。結果、排泄は軽介助となり、失禁は消失したという内容の発表であった。
10）日本作業療法士協会「事例報告登録システム」事例登録	平成23年10月 ～ 令和3年6月	日本作業療法士協会が作業療法の質担保を目的に推進する事例報告・登録制度で、「回復期リハ病棟における超高齢事例への「参加」に対する働きかけ～役割獲得に着目して～」、「園芸を通じ内発的動機づけの向上を認めた一事例」、「認知症高齢患者における退院後の閉じこもり脱却を目指した集団交流プログラムの実践」、「認知症作業療法における家族介護者の思いを重視した終末期ケアプログラム実践」、「せん妄後に抑うつを呈した認知症患者の役割再獲得を目指した作業療法」の5事例が審査で合格し、事例集に公開されている。
11）第31回近畿作業療法学会学会運営委員	平成23年10月	奈良県で開催された近畿6県の作業療法士を対象とした第31回近畿作業療法士学会において、3回の運営委員会議と当日の運営スタッフを担った。当日の役割として、受付業務の管理を担い、円滑な受付運営に努めた。金銭・時間管理など大きな問題なく終えることが出来た。
12）奈良県作業療法士会事業部副部長	平成25年6月 ～ 令和3年6月	奈良県作業療法士会事業部の活動として、約4年間副部長を務めた。年度始めには、年間12本の事業部スキルアップセミナーと年間3本の事業部研修会を企画し、日程・講師の選定・打診（連絡は部長が実施）、会場予約、各講師への依頼文作成、宿泊・懇親会設定、講師料の準備、ホームページ更新と他府県への案内依頼、参加者の管理を行った。また、当日は司会と参加者案内、総括を担った。企画では、参加者が興味を持ち、積極的に参加したいと思える内容に留意し、毎回50名程度の参加者に研修会希望を聴取し、出来るだけ奈良県作業療法士会員の意見を集約し、開催した。 研修以外で、パーキンソン病やALSなど奈良県内で在宅支援が不十分であると考えられたため、パーキンソン病家族の会や奈良県神経難病支援センターに直接作業療法士の活動内容を説明に伺い、同意のもと支援体制の構築に努めた。結果、地域保健師および家族会より徐々に依頼があり、在宅支援の一員として活動の実施に至った。特に、作業療法士はその専門性が周知されていないことが多く、専門性を伝えられるよう努力した。その結果であると考えられた。

13）奈良県吉野郡下北山村への在宅アウトリーチ支援	平成25年6月	奈良県作業療法士会事業部として、吉野保健所の依頼を受けて奈良県吉野郡下北山村への在宅アウトリーチ支援を3事例実施した。訪問の目的は、①生活機能評価、②福祉機器・環境調整支援、③身体機能維持訓練の指導、④家族への介助指導とした。訪問した地域は、山間部にあり、在宅サービスが整備されていない状況であった。具体的な支援では、内服状況の確認と自主訓練の指導、オーバーフレームのリース、緊急警報ベルの紹介、園芸環境の整備など多岐であった。共通点として、対象者が望む生活の継続支援に向けた助言で、評価結果と支援内容は紙面とともに保健師、主治医へ報告を行った。
14）NPO法人SMILECHAIN主催セミナー「中枢神経系障害の捉え方」講師	平成25年7月 平成25年8月 平成25年11月 平成25年12月 平成26年3月	作業療法士・理学療法士・言語聴覚士向けの研修会を主催・運営するSMILECHAINの研修依頼を受け、「中枢神経系障害の捉え方」について講師を務めた。名古屋、大阪、東京、福岡で計5回開催され、受講者は約50～80名であった。講義内容は、脳画像所見の解釈から脳機能解剖および病態生理の説明を中心に実施した。詳細には、立位姿勢制御と感覚処理、筋緊張亢進と錐体外路系の制御機構、姿勢反射障害のメカニズム、大脳皮質－基底核ループについて、歩行実行系に必要な神経ネットワーク・CPGの関与について説明した。また、高次脳機能障害では、症状のみを捉えたアプローチではなく、中枢神経障害として機能局在と神経ネットワークを捉えて根拠に基づく予後予測・治療、ADL環境の調整につなげることを重点的に説明した。講座の中では、治療動画や画像・事例を用いて、臨床場面で活かせるように留意した。研修後は、同名性半盲事例への評価方法や姿勢調整障害の捉え方について質問を受け、アンケートでは「実例が多く含まれていたことで理解しやすかった」との意見があった。
15）奈良県作業療法士会認知症支援委員会委員	平成26年3月 ～ 現在に至る	奈良県作業療法士会認知症支援委員として、約3年間支援委員の統括役と積極的な実践に務めた。具体的には、各市町村の認知症予防教室への参画や啓発事業、認知症カフェの企画支援、認知症サポーター養成講座の支援、認知症家族教室のアドバイザーとして依頼を受けて実施した。また、奈良県内の各市町村と作業療法士の協業体制について情報を集約し、広報誌への掲載を年3回実施した。平成30年度から多くの市町村で開始される認知症初期集中支援チームへの作業療法士参画を目的に役場を訪問し、作業療法士の専門性について啓発・説明を行った。現在、南和地域では5市町村で連携を図っており、今後さらに拡大していくように啓発に努める。同時に、奈良県作業療法士会員の認知症支援技術向上を目的に企画を検討していく。
16）第7回奈良県作業療法学会運営委員	平成26年3月 ～ 平成26年6月	本学会の運営委員を担い、平成26年3月から3回の会議に参加し、当日は受付業務を担当した。受付係の配置と会場設営に配慮し、学会では大きな問題なく無事に終えることができた。

17）第7回奈良県作業療法学会ランチョンセミナー「認知症初期集中支援チームの概要」講師	平成26年6月	第7回奈良県作業療法学会のランチョンセミナーにおいて、講師を務めた。講演内容は、①認知症初期集中支援チームとは、②支援チームにおける作業療法士の役割、③啓発活動の重要性であった。認知症初期集中支援チームは、自律生活のサポートを行うことが目的であり、チーム員が優先度を判断し初回訪問から6ヶ月の介入支援を行う点を説明した。また、評価ではエピソードや経過の他にMMSE、DASCやDBD13、Zarit8、身体機能・ADL評価を行うこと（各評価の概要とともに）を説明した。作業療法士は、評価の解釈をもとに医療・介護の専門職間における伝達役でもあり、生活機能を調整する中核的役割を担うことを強調した。加えて、支援の実際では、信頼関係の構築が不可欠であり疾患の特性からも難しさがあることも申し添えた。
18）奈良県作業療法士会事業部研修会「認知症における作業療法実践」講師	平成26年8月 平成27年6月 平成28年1月	奈良県作業療法士会主催の事業部研修会において平成26年から3年間継続して「認知症における作業療法実践」の講師を務めた。研修内容は、①認知症の病態生理、②認知症の行動心理症状の捉え方、③事例紹介、④認知症に関する最新の知見紹介を中心に紹介した。特に認知症は脳の変性であると同時に、日常生活で遭遇する症状が中枢症状か環境・個人因子に伴う症状か、つまり可塑性があるか否かについて、客観的評価と解釈の方法を示した。また、早期に病態を捉え、生活におけるADL・福祉機器の工夫、環境調整、強みの理解と家族支援を実施することの重要性を客観的根拠を示しながら説明した。平成27年度の講座からは、認知症における終末期の捉え方を含めて、病院から在宅で働く作業療法士が予防から終末期まで包括的に認知症をもつ人の支援を実践できるよう配慮した。
19）奈良県神経難病患者アウトリーチ支援	平成26年10月	奈良県作業療法士会事業部として、奈良県香芝市の保健師からの依頼を受けて、ALS患者1事例への在宅アウトリーチ支援を実施した。訪問の目的は、①コミュニケーション評価と残存機能で活用可能なツールの紹介、②排泄動作環境・福祉機器の評価、③家族支援（介助指導含む）であった。事例のディマンドはパソコンを使用したメール・コミュニケーションの継続であり、手指の筋力・巧緻性低下がみられたものの、スイッチ操作は可能であったことからスイッチの適応評価と伝の心やハーティラダーなどツールの紹介を行った。また、下肢機能の残存を評価し、車いす操作やトイレ内介助方法について実際に家族指導を行った。保健師とともに、妻の思いの聴取と、吸引機など必要となる医療機器について説明した。特に注意した点として、対象者の認識と客観的状況に乖離が生じていたため、心理面には十分に配慮した。これら評価と支援した内容については、紙面とともに主治医への報告を実施し、地域の訪問看護スタッフへ継続フォローを依頼した。
20）日本作業療法士協会主催第55回作業療法全国研修会奈良会場運営委員	平成26年12月	本研修会において、当日の受付業務を担った。全国から受講者が参加する大規模な研修であったため、事前登録を含め会計の不一致が生じないよう留意した。大きな問題はなく、受付業務を終えることが出来た。

21）第8回奈良県作業療法学会座長	平成27年6月	学会では、身体障がい領域の発表4演題の座長を務た。座長業務の中では、発表者の意図と目的の理解に努めるとともに、聴講者特に若手作業療法士が内容を理解し、質問がしやすいように配慮した。結果、受講者から積極的な質問があり、発表者にとってもさらに研究を進展させる一助になった。
22）奈良県作業療法士会主催　現職者共通研修「作業療法における協業・後輩育成」講師	平成27年8月 平成28年11月	本研修会は日本作業療法士協会の定める生涯教育制度にある基礎研修で、若手作業療法士の育成を目的とした研修である。平成27年から年1回計2回講座を担当した。
23）第11回日本作業療法研究学会学術大会運営委員	平成28年5月 ～ 平成29年7月	学会では、近畿圏内の各施設・大学で働く作業療法士が実行委員として参加したため、5回の会議の他、情報共有にDropBoxを用いて、効率化を図った。役割として、会計および受付業務、備品準備、生涯教育基礎ポイント管理、特別講演・教育講演講師との連絡係を担い、想定した予算内で学会の全工程を終了することが出来た。また、受付においても大きな混乱なく、円滑に終えることが出来た。少数スタッフでの運営であったが、頻回な会議による交通費・会議費の増加を抑えたことで、予算内で効率的に実施出来、滞りない運営に至った。
24）日本作業療法士協会認知症推進委員	平成28年8月 ～ 令和1年3月	奈良県作業療法士会会長の推薦により、日本作業療法士協会の認知症推進委員に奈良県作業療法士会を代表して参加した。平成28年11月に開催された年1回の都道府県推進委員会会議の出席と、会議で得た情報の奈良県作業療法士会員への伝達、奈良県内における認知症支援状況の集約と日本作業療法士協会への報告がこれまでの主な役割として実施した。
25）日本作業療法士協会・奈良県作業療法士会共催「認知症アップデート研修会」講師	平成29年2月 令和2年12月	日本作業療法士協会・奈良県作業療法士会共催で、認知症支援においてすべての領域の作業療法士が参画出来るように人材育成を目的とした研修会の講師を担った。講義内容は、①日本・世界の認知症、②認知症の病態生理、③認知症の行動・心理症状、④認知症をもつ人の生活支援の実際、⑤事例のまとめ方、⑥奈良県の認知症施策であった。座学を中心に、平成28年度は51名の参加があり、研修会後には認知症支援委員として新たに11名が支援委員への参画を希望した。平成29年度以降も継続し、全会員の受講を目指していく方針とした。
26）ウェルネスコンシェルジュ協会主催研修会「認知症をもつ人の支援」講師	平成29年2月	株式会社ケアプラスに所属する訪問医療マッサージ師30名を対象に、「認知症をもつ人の支援」の講師を務めた。講座内容は、①認知症の病態生理、②認知症の行動・心理症状の捉え方、③認知症をもつ人の理解であった。特に、受講者は在宅医療領域が中心であったため、在宅生活での評価のポイントとして身体機能・認知機能を含めて、出来ている事と難しくなった事の整理、家族の思いの傾聴方法について説明した。また、進行や症状変化のポイントをまとめ、変化を認めた際の相談・報告・連携の方法について確認した。研修会後は、徘徊や被害妄想時の対応方法、その人らしさを大切にするためのポイントについて質問が

27）奈良県作業療法士会事業部研修会 「肩関節機能障害へのアプローチ」講師	平成29年3月	奈良県作業療法士会主催の事業部研修会において「肩関節機能障害へのアプローチ」の講師を務めた。本研修会では、作業療法士にとって重点的に行われる肩関節の評価・治療に着目し、講座前半では①肩関節の解剖・基礎知識、②肩関節機能障害の評価（中枢疾患・整形疾患）、③肩関節機能障害へのアプローチについて座学にて説明し、後半では受講者2名ずつデモンストレーションを行いながら個別に実技指導を実施した。特に、肩関節の評価では、同一の筋であっても姿位によって作用が異なる点の理解に留意し、視診・触診から基本評価方法と解釈・アプローチへの一連の流れを教授した。講座後は多くの質問があり、日頃の臨床で実技を学ぶ場の少なさと継続教育の必要性が示された。
28）バリアフリー2017作業療法ブース担当	平成29年4月	バリアフリー2017の作業療法ブースにて、相談業務・福祉用具・支援機器の展示説明（身体障がい者用）を担当した。相談業務では、グループホーム入所者への生活機能維持方法や運動麻痺の軽減・介助方法について相談を受けた。また、機器展示では、食具選定に関する質問や使用方法、洗体補助具作成について質問があった。
29）第15回IT機器レンタル事業 「作業療法士が行うIT活用支援説明会」 日本作業療法士協会・奈良県作業療法士会共催研修会運営スタッフ	平成29年5月	研修は、日本作業療法士協会と奈良県作業療法士会の共催であり、運営スタッフとして受付、会場設営、昼食手配、懇親会設定、会場案内を務めた。参加者数は24名で、受付および会場運営において問題なく終えた。
30）第37回近畿作業療法学会運営委員	平成29年10月	第37回近畿作業療法学会の運営スタッフとして受付、会場誘導係を務めた。参加者数は460名で、受付および会場運営において問題なく終えた。
31）大阪府堺ブロックPetit学会教育講演 「認知症をもつ人の作業療法：食事・排泄の評価と支援」講師	令和1年6月	大阪府作業療法士会堺ブロック学会にて、教育講演の講師を務めた。参加者は大阪府作業療法学会に所属する作業療法士であった。講演では、認知症のある高齢患者の排泄と食事に焦点をあて、評価から支援の実際について経験と研究をもとに報告した。協力頂いたスタッフからも、理解が深まった旨の感想がきかれた。
32）臨床実習指導者講習会　講師	令和1年9月 令和2年1月 令和3年5月 令和3年9月 令和3年12月 令和4年8月 令和5年1月	臨床現場で働く作業療法士約70名/回に対し、厚生労働省の指導要領に基づき、臨床実習の進め方や留意点等について、演習を通じて教示を行った。
33）奈良県作業療法士会主催現職者共通研修 「実践における作業療法研究」講師	平成30年10月 令和1年9月 令和3年2月 令和4年3月 令和5年1月	臨床現場で働く若手作業療法士約15名/回に対し、作業療法士に必要な研究の基本的知識と臨床疑問から研究実践に結びつける方法について、演習を通じて教示した。
34）奈良県作業療法士会　事業部研修会 「排泄機能障害の作業療法」講師	令和1年11月	奈良県作業療法士会の会員約30名に対し、作業療法士の専門である日常生活動作、特に排泄に特化し、評価から支援について講演を行った。
35）奈良県作業療法士会主催現職者選択研修 「老年期のトピックス」講師	令和1年12月	日本作業療法士協会の会員約70名に対し、老年期疾患の最新の治療方針や知見、研究動向を共有し、日常の作業療法展開の発展に向けた根拠を教示した。

36）奈良県作業療法士会主催現職者共通研修 「事例検討・事例報告」講師	平成29年2月 令和3年3月 令和3年8月 令和4年9月	臨床現場で働く若手作業療法士に対し、症例発表をもとに評価結果から治療を導く手順、考察とまとめ方について、演習を通じて教示した。
37）第13回奈良県作業療法学会　セミナーⅡ 「認知症の予防とこれからの支援」講師	令和3年6月	学会参加者にオンデマンド研修として、世界の認知症予防の進化とIoTやAIを駆使した最新の研究・ケアの方法を共有し、自らの研究内容を含めて作業療法士が知っておくべき知見を教示した。
38）奈良県作業療法士会　理事・事業局長	令和3年6月 ～ 現在に至る	理事・事業局長となり、奈良県作業療法士会会員の質的向上を目的に、教育・研究活動の推進、会員同士のつながり改善、社会貢献の発展に努めている。
39）奈良県作業療法士会　現職者選択研修 「身体障害領域の基礎知識」講師	令和3年10月 令和4年10月	医療・保健・福祉全ての領域で必要になる身体障害の作業療法について、法制度や理論の変遷から実践知まで多角的な内容のオンライン講義を行った。
40）愛知県作業療法士会主催現職者選択研修 「老年期のトピックス」講師	令和5年2月	日本作業療法士協会の会員13名に対し、老年期疾患の最新の治療方針や知見、研究動向を共有し、日常の作業療法展開の発展に向けた根拠を教示した。
41）第43回近畿作業療法学会　実行委員	令和4年10月 ～ 令和5年6月	第43回近畿作業療法学会の演題査読委員、会場・オンライン管理として学会運営に携わった。
4　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） なし				
（学術論文） 1.「スタッフ間の連携を考える」	共　著	平成19年4月	日本療養病床協会機関誌 第15巻1号p54-p59	本報告では，秋津鴻池病院の医療療養病床における多職種連携の実際について概説し，スタッフのアンケート結果をもとにその重要性と効果について考察した。特に，病棟ADLの改善には，デモンストレーションを交えた介護方法の共有が重要であり，排泄成功確率の増加や介助量軽減といった効果を示した。 本人担当部分：研究実施、論文執筆（一部） 共著者：西田宗幹，田中美香，山田悠， 坪内善仁，森本麻紗子
2.「地域在住高齢者における計画を重視した集団調理介入の効果」 （修士論文）	単　著	平成29年3月	大阪府立大学	本研究の目的は，調理計画を重視した集団調理介入が地域在住高齢者の認知機能に及ぼす効果と在宅生活に汎化し調理頻度が増加するかについて調査することであった．対象は地域在住高齢者54名で，調理計画群23名(計画を重視した集団調理プログラム)，調理実施群18名(調理実践プログラム)，対照群13名(調理以外のプログラム)に週1回6ヶ月間プログラムを実施し，介入前後での認知機能，心理機能，社会行動の効果について比較検討した．結果，調理計画群は介入によって認知機能が有意に改善し，介入後は他群に比べ抑うつ傾向が低く，交流頻度が多い結果であった．これらのことから，調理計画を重視した集団調理介入は，対象者の認知機能を高め，認知症予防の一助になり得ると考えられた．また，対象者同士のコミュニケーションや主体的な役割遂行が促され，抑うつ傾向改善の可能性が示唆された．（頁数：A4 29枚）

3.「認知症作業療法における家族介護者の思いを重視した終末期ケアプログラムの実践」 (査読付)	共　著	平成30年2月	作業療法ジャーナル 第52巻2号p190-p194	本報告では，家族介護者の思いを重視した終末期ケアプログラムを実践し，終末期の認知症の人（A氏）と家族（妻）への支援のあり方について考察することを目的とした．作業療法では，①身体機能の維持，②馴染みのある作業の継続を行い，多職種連携にて③妻の身体的ケア参加，④自宅への外出を支援した．結果，A氏は入院16週目に死亡退院となったが，妻は希望であった身体的ケア参加や自宅への外出を果たした．また，終末期ケア移行期，病棟ケア参加期，自宅への外出期の妻への評価では，介護負担感尺度は，57点，53点，42点と，幸福感尺度は，1点，3点，8点と，うつ尺度は，3点，3点，1点と改善傾向を示した．今回，認知症の終末期ケアにおいて，家族介護者の語りを促し，その思いに沿った支援が家族の心残りと不全感を軽減した．このことは，後に家族が前向きな生活を再獲得する一助になり得たと考えられた． 本人担当部分：研究計画、研究実施、論文執筆 共著者：坪内善仁，東條秀則
4.「身体合併症を有す重度認知症患者の死亡転帰に関連する入院時情報の特徴；作業療法評価を含めた探索的調査」 (査読付)	共　著	平成30年3月	老年精神医学雑誌 第29巻3号p301-p309	本研究では，当院精神科病床に入院した身体合併症を有す重度認知症患者について，入院時情報から死亡転帰に関連する要因を探索的に調査した．調査項目は，基本情報，医学的情報，作業療法評価情報に分け，自宅または施設退院患者73名(生存退院群)と死亡退院患者39名(死亡退院群)の間で,各変数について単変量解析，ロジスティック回帰分析を行った．結果，嚥下障害の有無，認知症の重症度，併存疾患指数，認知機能評価，認知症分類が死亡転帰の主な影響要因であることが示された．このことから，他職種が連携し，入院時から幅広く評価情報を共有し，早期から個別性を重視した支援に取り組む必要があると考えた． 本人担当部分：研究計画、データ収集と分析、論文執筆 共著者：坪内善仁，宝田イオリ，石橋雄介，大西和弘，東條秀則，洪基朝
5.「身体合併症を有す認知症患者の地域退院に関連する入院時情報の特徴」 (査読付)	共　著	平成30年7月	日本認知症ケア学会誌 第17巻2号p423-p430	本研究の目的は，身体合併症を有し精神科病床に入院する認知症患者の自宅または施設退院(地域退院)に関連する入院時情報の特徴を明らかにすることとした．方法は，地域退院患者73名(地域退院群)と入院継続患者87名(入院継続群)の基本情報，医学的情報，作業療法評価情報について，単変量解析，多変量解析で比較・分析した．結果，入院前の生活場所，家族介護者の有無，Barthel Indexの合計・移乗・食事・排尿・排便コントロールで有意差を認め，地域退院の主な関連要因として家族介護者あり，排尿コントロールが良好であることが示された．結果から，身体合併症を有す認知症患者の地域退院支援において，OTは他職種・家族と連携し入院後早期に環境情報やADLを把握するとともに，個別性を考慮した排泄形態・介助方法を検討し排泄機能改善に取り組む必要がある． 本人担当部分：研究計画、データ収集と分析、論文執筆 共著者：坪内善仁，宝田イオリ，石橋雄介，大西和弘，東條秀則
6.「身体疾患を合併する精神疾患患者の自宅退院に関連する因子の検討」 (査読付)	共　著	平成30年10月	理学療法学 第45巻6号p366-p372	本研究は，身体疾患を合併した精神科入院患者において，自宅退院が可能であった患者の特徴を明らかにすることを目的とした．2012年1月～2016年6月の間に理学療法(以下，PT)を実施した統合失調症および気分障害を有す患者108例を対象に，PT終了時の転帰を自宅群と非自宅群に群分けし，自宅退院に影響を及ぼす因子を検討した．結果，自宅退院に影響を及ぼす因子として，身体疾患発症時の生活場所が自宅，終了時のBarthel Index65点以上，終了時のGlobal Assessment Functioning51点以上，同居家族ありが抽出された． 本人担当部分：研究構想と計画、データ収集、論文監修 共著者：石橋雄介，林久恵，坪内善仁，福田浩巳，洪基朝，西田宗幹

7.「住民自主運営による認知症予防プログラム実践を目指した2年間の効果：作業療法士と介護職員，異なるファシリテーター2職種による介入効果への影響」 (査読付)	共　著	平成30年11月	Journal of Rehabilitation and Health Science 第15巻p17-p24	本研究では，計画・実行・振り返りを重視した認知症予防プログラムを週に1回・2年間実践し，専門職から住民運営に移行した後の効果を検証するとともに，ファシリテーター(職種)の違いがもたらす効果と特徴を明らかにすることを目的とした．結果は，集団式松井単語記憶検査の即時再生1回目(p=0.021)，2回目(p=0.013)，山口漢字符号変換テスト(p=0.020)，交流頻度(p<0.001)，認知症予防を意識した行動(p<0.001)で改善を認め，住民自主運営への移行後も効果は持続した．また，ファシリテーターの違いによって，集団式松井単語記憶検査の即時再生1回目(p=0.033)，外出頻度(p=0.040)，認知症発症への不安(p=0.020)で差を認めた．このことから，認知症予防における地域住民・他職種との連携では，認知症の危険因子を共有し，認知機能，心理機能，生活習慣の総合評価をもとに支援を実践する必要がある． 本人担当部分：研究計画、データ収集と分析、論文執筆 共著者：坪内善仁，山中美里，安田圭志，東條秀則，内藤泰男
8.「地域在住女性高齢者の献立立案から取り組む集団調理プログラムの効果」 (査読付)	共　著	平成31年4月	作業療法 第38巻2号p187-p196	本研究の目的は，献立立案から取り組む集団調理プログラムが地域在住女性高齢者の認知機能と自宅での調理頻度に及ぼす効果を調査することであった．対象は地域在住女性高齢者39名で，献立立案-調理群20名，調理実施群19名に週1度・6ヶ月間プログラムを実施し，介入前後で認知機能，心理機能，社会的活動量の変化を比較検討した．結果，認知機能項目で測定時期による主効果を認めたが，交互作用はなかった．また，調理頻度の変化も両群で有意差は示されなかった． 今回の結果から，調理活動自体の認知機能改善への効果は示唆されたが，献立立案課題単独の認知機能・調理頻度への効果は乏しく，介入手法についてさらなる検討が必要である． 本人担当部分：研究計画、データ収集と分析、論文執筆 共著者：坪内善仁，安田圭志，山中美里，東條秀則，内藤泰男
9.「認知症高齢患者における退院後の閉じこもり脱却を目指した集団交流プログラムの実践」 (査読付)	共　著	令和2年9月	認知症ケア事例ジャーナル 第13巻2号p75-p80	超高齢社会を迎え，認知症高齢者の閉じこもり予防が国の重要課題となっている．今回，入院前から閉じこもりを呈した認知症高齢患者に対して，院内でグループ回想法を用いた集団交流プログラムを実践した結果，交流を媒介に日常生活活動量が向上し，退院後には閉じこもりを脱却した．この結果から，認知症高齢者の集団交流プログラムの実践は，外出への動機付けを強化し，閉じこもり脱却の一助になると考えられた． 本人担当部分：研究計画、調査・介入実施、論文執筆 共著者：坪内善仁，東出美紀

10.「肺炎を罹患した当院精神科病棟入院患者の死亡転帰に関連する因子の検討」 (査読付)	共　著	令和2年12月	理学療法学 第47巻6号p593-p599	研究の目的は，肺炎罹患により，理学療法（Physical Therapy；以下，PT）を実施した精神科病棟入院患者の死亡転帰にかかわる因子を検討すること．方法は，対象が2015 年1 月～2018 年11 月の間に，医療・介護関連肺炎（Nursing and Healthcare associated Pneumonia：以下，NHCAP）を発症し，PT を実施した精神科病棟入院患者とした．PT 開始から120 日の観察期間中に，死亡した患者を死亡群，生存した患者を生存群とし，Cox 比例ハザード分析を用いて，死亡転帰にかかわる因子を検討した．結果，解析対象は81 名，観察期間中の死亡者は31名（38.3%）であった．Cox 比例ハザード分析では，年齢と発症時Body Mass Index（以下，BMI）が採択された．以上より，NHCAP を罹患した当院精神科病棟入院患者の死亡転帰は，年齢と発症時BMI に影響されることが示唆された． 本人担当部分：研究構想と計画、データ収集、論文監修 共著者：神田孝祐，<u>坪内善仁</u>，福田浩巳，石橋雄介，洪基朝，西田宗幹
11.「Premature oral pre-shaping for feeding in elderly population with risk of aspiration pneumonia.」 (誤嚥性肺炎リスクがある高齢者の摂食における口腔内準備の未熟さ) (査読付)	共　著	令和3年1月	PloS one 第16巻2号	本研究の目的は，誤嚥性肺炎のリスクが高い高齢者において，実際に食事のために嚥下する前の手と口の異常行動を明らかにすることである．誤嚥性肺炎の診断を受けた高齢者（EAP）10名，健常高齢者（HE）15名，若年成人（YA）21名を登録した．自己摂食時と補助摂食時の摂食時間と上唇と下唇の距離が最大になるタイミングをモーションアナライザーを用いて抽出した．その結果，EAPの摂食時間は，自己摂食および補助摂食において，他の群に比べて有意に長かった．また，自力摂食時には，EAP群の口の準備のタイミングが他の群よりも有意に早く，逆に，補助摂食時には，EAP群のタイミングが有意に遅れていた．この結果から，誤嚥性肺炎の経験がある高齢者では，自力・介助ともに、実際に飲み込む前の口の形の準備や手の動きの時間に異常がある可能性が示唆された． 本人担当部分：研究構想と計画、データ収集、論文監修 共著者：Yoshiki Tamaru, Akiyoshi Matsugi, Shinzo Masaki, <u>Yoshihito Tsubouchi</u>, Akiyoshi Yanagawa
12.「認知症高齢患者のせん妄後の抑うつに対するFettermanの3ステップアプローチ適用の効果」 (査読付)	共　著	令和3年1月	認知症ケア学会誌 第19巻4号p701-p708	せん妄の再発を予防するためには，入院中からエンパワメントを促進し，積極的な社会参加や家庭内役割継続に向けた支援が不可欠である．今回，せん妄後の抑うつから自宅退院に消極的であった認知症高齢患者に対して，Fetterman の3 ステップアプローチを適用して介入し，退院後の家庭内役割の再獲得を目指した．結果，料理という家庭内役割を獲得したことで，退院後生活への不安感や抑うつは軽減し，自宅退院を実現した．このことから，入院中の3 ステップアプローチによるエンパワメント促進は，せん妄後の抑うつを軽減し，安心・納得した自宅退院の実現に貢献すると考えられた． 本人担当部分：研究計画、介入実施と調査、論文執筆 共著者：<u>坪内善仁</u>，中島大貴，田丸佳希

13.「地域在住高齢者におけるテレビコマーシャルメッセージの時間を活用した身体活動促進プログラムの予備的研究」 (査読付)	共　著	令和3年4月	健康支援 第23巻2号p195-p200	本研究は，高齢者においてCM中の歩行または足踏みを促す身体活動プログラムの効果と実行可能性を明らかにすることを目的とした。対象は健常高齢者20名（平均年齢75.0歳）とした．介入方法は、CM中の歩行または足踏みとした．歩数と歩行時間の測定は3軸加速度計を使用し，通常通りの日常生活を送る週（以下，通常週）とCM中の歩行または足踏みを促す週（以下，介入週）の計14日間の測定を実施した結果，通常週に歩数および歩行時間は有意に増加した． 本人担当部分：研究構想と計画、データ収集、論文監修 共著者：中島大貴，伊藤健一，<u>坪内善仁</u>，藤井啓介，田畑泉
14.「シリーズ ポストコロナ社会を考える；変わるもの、変わらないものコロナ禍で変わる臨床実習」	共　著	令和3年4月	作業療法ジャーナル 第55巻4号p373-p374	2020年度は，COVID-19の影響により，各大学での臨床実習が学内実習によって代替された．本報告では，奈良学園大学で実施した「早期体験実習」および「地域実習」に関する実施方法や学生によるアンケート結果を記述した．特に本学独自で実施した臨床現場のライブ中継は非常に有意義であり，学生からも一定の評価が得られていた．（総説・依頼原稿） 本人担当部分：研究構想と実施、論文執筆、論文監修 共著者：中島大貴，<u>坪内善仁</u>，池田耕二，山形力生，大浦智子，辻下守弘
15.「Cognitive and Physical Assessment in the Elderly while Maintaining Social Distance Using A Web Conference System: A Pilot Study」 (Web会議システムにより社会的距離を保持した高齢者の認知・身体機能評価：予備研究) (査読付)	共　著	令和3年5月	International Journal of Nursing & Clinical Practices 第8巻p1-p5	Covid-19の影響により、感染対策を目的に介護予防指導や評価を直接行うことが難しくなっている．本研究では，認知機能評価をオンラインで実施し，直接評価の結果と関連を調査することで，オンライン評価の有効性を検証することを目的とした予備的研究である．結果は、オンライン評価と直接評価には有意な相関が認められたことから，今後の実用化に向けてさらなる検証が必要である． 本人担当部分：研究構想と計画、調査実施、データ分析、論文監修 共著者：Noboru Hasegawa, Takako Yamada, Miyako Mochizuki, <u>Yoshihito Tsubouchi</u>, Nobuyuki Honda, Nobuko Shimizu
16.「軽度認知障害が疑われる地域在住女性高齢者の個人的特徴と1年後の認知機能低下に影響する因子：エンパワメント評価を含めた後ろ向き観察研究」 (査読付)	共　著	令和3年8月	医療福祉情報行動科学研究 第8巻p133-p142	認知症予防では，積極的な社会参加により予防のための生活習慣を獲得することが重要である．本研究の目的は，軽度認知障害のある地域在住女性高齢者を対象に，基本属性，心理機能，生活機能の各変数が1年後の認知機能低下に影響するかを検証することである．方法は，まず初回調査から1年後の認知機能変化量で低下(低下群)・維持(維持群)・向上(向上群)に分け，初回調査時の各変数を比較した．次に，認知機能の変化量を従属変数，生活機能の各項目を独立変数として関連を調査した．その結果，低下群では初回調査時のエンパワメントが低下し，外出頻度と健康上の相談相手が少ないことが示された．また，認知機能変化との関連では，健康上の相談相手の有無と交流頻度が有意であった．本研究の結果から，認知症予防では，高齢者のエンパワメントを強化し，積極的に外出，交流，相談できる地域づくりが重要であると考えられた． 本人担当部分：研究計画、データ収集と分析、論文執筆 共著者：<u>坪内善仁</u>，中島大貴，田丸佳希，内藤泰男

17.「A conceptual analysis of older adults' empowerment in contemporary Japanese culture」 (査読付)	共　著	令和3年12月	BMC geriatrics Vol.21, No1, p672	本研究の目的は，現代日本における高齢者エンパワメントの概念がもつ構成要素を明らかにし，概念の定義を再構築することである． 概念分析では，Rodgers進化論的手法を用いた．5つのデータソースを用いて、「エンパワメント，参加」，「高齢者，高齢患者」，「日本，日本人」で検索した．2000年から2020年の間に発表された8811本の論文のうち，目的に合致した61本を選定した．分析の結果，7つの先行要件，6つの属性，6つの結果が明らかになった．現代日本における高齢者のエンパワメントとは，"作業・他者・地域とのつながりにおいて自己を開示し，自身の存在と課題を意識化し，意思決定に基づく協働目標および新たな作業に対して自らの行動を適用させていく過程"と定義された．この概念は，日本だけでなく世界的な高齢化においても，自助や互助を基盤とした地域づくり，高齢者支援の実践，教育，研究に有用である． 本人担当部分：研究計画、データ収集と分析、論文執筆 共著者：Yoshihito Tsubouchi, Kyosuke Yorozuya, Akiyoshi Tainosho, Yasuo Naito
18.「地域における健康高齢者の重要な生活行為：SCATによる分析」 (査読付)	共　著	令和4年3月	佛教大学保健医療技術学部論集 第16号p53-p68	2018 年にタイ農村地域の高齢者に焦点を当てた「生きがい」や「老いる」とはどのような意味を持つかについて調査したところ，「今，楽しみにしていることは何か」の問いに，ほぼ全員が「人の役に立っていること」と回答している．今回，日本国内の「地方」と「都会」の高齢者にインタビューした．インタビューには Canadian Occupational Performance Measure（カナダ作業遂行測定，以下 COPM）を使って，「重要度」「遂行度」「満足度」の 3 つのキーワードから生活を語ってもらったが，継続して同一人物をフォローすることができないという研究構成上の問題もあってインタビュー内容を，Steps for coding Theorization（以下 SCAT）を使って分析した．その結果，日本ではタイのように「人の役に立つこと」を重要な生活行為として自覚していないことが明らかになった．が，実際の生活行為としては「都会」の高齢者は「人のために役立つ生活行為」を実践している傾向が強かった． 本人担当部分：研究計画、データ収集と分析 共著者：山田恭子，清水暢子，長谷川昇，望月美也子，坪内善仁
19.「Association between Serum Vitamin D Levels and Muscle Weight of Adult Day-Care Center Clients in Three Different Latitude Areas of Japan」 (査読付)	共　著	令和4年3月	International Journal of Nursing & Clinical Practices 第9巻p1-p5	3つの異なる緯度の地域で、緯度が25OHDレベルと筋肉重量に及ぼす影響について研究した結果、25OHDの不足・充足比は緯度と有意に関連した（$\chi 2$ = 7.919, p= 0.019, ϕ= 2）。3地域の緯度の程度と25OHD欠乏症の有病率の間に正の相関が認められた（γ= 0.981）。25OHDは四肢および体幹の骨格筋と弱い相関があった。DEX処理のみでは筋管ATPは有意に減少した。25OHDはDEXの存在下で細胞内ATP濃度の上昇を用量反応的に誘導した。結論 これらの事実は、サルコペニアを予防するために、特に冬季や高緯度に位置する施設において、デイケアサービスでの積極的な日光浴を採用する必要性を示している 本人担当部分：研究計画、データ収集と分析 共著者：Noboru Hasegawa, Nobuko Shimizu, Takako Yamada, Yoshihito Tsubouchi, Miyako Mochizuki, Mayumi Kato, Masashi Yoshitake, Ayako Yokota

20.「閉じこもり傾向にある高齢患者の意味のある作業獲得を目指した作業療法：能力の自己認識に基づく課題の段階付けにより自己効力感が改善した一事例」 （査読付）	共　著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9(9) 3-10	心身機能やできるADLが改善した後も能力の自己認識低下が残存し，閉じこもり傾向を示した対象者に対して，能力の自己認識とOTR評価との差を共有，段階的な課題設定，実践の繰り返しによる認識修正を図った。結果，自己効力感が改善し，意味のある作業の獲得，主体的活動への行動変容につながった。一方で，QOLの観点では先行研究で示されるような効果は見出せなかった。病院という限られた環境では，真のニードを満たすことが出来なかったが，医療・介護連携の重要性が示唆された。能力の自己認識と課題設定の段階付けに着目した作業療法実践は意味のある作業の獲得，および退院後の閉じこもり脱却に向けて効果がある可能性が示された。 本人担当部分：研究計画、データ分析、論文一部執筆と監修 共著者：後呂智成，<u>坪内善仁</u>
21.「コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題」 （査読付）	共　著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9(9) 31-38	指定規則の変更により、地域理学療法・作業療法実習が必須となった。コロナウイルスの影響により学内実習となり、ICTを駆使した実習の成果について受講した学生へのアンケートから振り返った。その結果、訪問・通所事業所のライブ中継の満足度が高く、「地域リハビリテーションに関する関心や意識が向上した」と高い評価を得た。一方で、現地実習への不安が残りる結果であった。ICT利用により学生にとって充実した学修機会であった一方で、不安に配慮した実習内容をさらに検討する必要がある。 本人担当部分：研究計画、データ収集と分析 共著者：滝本幸治，池田耕二，吉川義之，<u>坪内善仁</u>，笹野弘美，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生
22.「Reliability and Validation of the Japanese Version of the Patient Empowerment Scale」 （査読付）	共　著	令和4年6月	Healthcare 10(6) 1151	入院高齢患者のエンパワメント尺度であるPatient Empowerment Scaleを邦訳し、日本語版の妥当性と信頼性を検証した。調査対象は151名(81.75±7.15歳)で、天井・床効果の確認および探索的因子分析の結果、6因子37項目で構成されるPES-Jが完成した．また、PES日本語版は高い信頼性と妥当性が示され、日本の入院高齢患者における統計学的有用性が確認された。 本人担当部分：研究計画、データ収集と分析、論文執筆 共著者：<u>Yoshihito Tsubouchi</u>, Akiyoshi Tainosho, Koudai Shimomura, Kyosuke Yorozuya, Motoasa Kou, Rie Tsubouchi, Hiroyuki Tanaka, Yasuo Naito
23.「重度・終末期認知症の人と家族への支援：居住環境の特徴に沿った作業療法士の役割」 （依頼論文）	共　著	令和4年8月	大阪作業療法ジャーナル 36(1) 23-29	認知症が進行すると、嚥下障害や身体疾患を合併する危険性が高まり、当事者の生活機能や居住環境は急激に変化する。同時に、当事者の意思決定が徐々に困難となることで、家族は居住環境や優先すべきケアの選択に強い不安やストレスを感じることがある。そのため、作業療法士は居住環境に沿った緩和ケア計画を立案し、入院・入所施設では家族による意思決定の尊重とケア参加への支援が重要になる。また、地域生活では家族への労いと精神的ケア、適切な介護指導とマネジメントが必要である。そして、いずれの居住環境においても、最期まで当事者と家族による作業の協働を支援し、家族の不安や心残りを軽減することが作業療法士の重要な役割となる。 本人担当部分：研究計画、データ収集と分析、論文執筆 共著者：<u>坪内善仁</u>，山本江吏子，田結荘秋嘉

24.「医療・介護関連肺炎を呈した精神科病棟患者における歩行獲得者の特徴と予後予測の検証」 （査読付）	共　著	令和4年10月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌 30(3)	本研究では、肺炎の罹患により，理学療法（PT）を実施した精神科病棟入院患者の歩行獲得に関わる因子を抽出し，予後予測能の検証を行った。対象は医療・介護関連肺炎（NHCAP）を発症し，PTを実施した当院精神科病棟入院患者としたで、PT終了時の移動状況から歩行獲得群と非獲得群に分類し，診療記録をもとに，群間比較とROC曲線分析を行った。結果、群間比較にて抽出された項目のカットオフ値と曲線下面積（AUC）は，PT開始時のFIM運動項目が21点、認知項目が14点、安静臥床期間が12日であった。NHCAPを罹患した精神科病棟入院患者の歩行獲得には，PT開始時の運動・認知項目の点数と安静臥床期間が関連しており，歩行獲得の可否の判断に必要な項目であることが示唆された。 共著者：神田孝祐，石橋雄介，福田浩巳， 坪内善仁，西田宗幹，洪基朝
25.「Effect of a multimodal non-pharmacological intervention on older people with dementia: a single-case experimental design study」 （査読付）	共　著	令和4年11月	BMC geriatrics 22(1) 906	本研究の目的は、マルチモーダルな非薬理学的介入（MNPI）が、介護老人保健施設(NH)に入所する認知症高齢者(PWD)における全体的な認知機能、BPSD、および ADL の維持と改善に有効かどうか検証することであった。シングルケースABデザインを使用し、NHの3人で実施された。評価は、ABC認知症スケール（ADL［「A」］、BPSD［「B」］、および認知機能［「C」］を同時に評価する）が使用された。結果は3人のうち1人で認知症の重症度、全体的な認知機能、ADL、 BPSDの改善を示した。しかし、他の2人は改善を示さなかった。以上より、MNPIは改善の余地があるが、NHsのPWDにおける認知機能、ADL、BPSD の維持・改善に有効である可能性がある。 本人担当部分：研究計画、データ分析、論文一部執筆 共著者：Kyosuke Yorozuya, Yoshihito Tsubouchi, Yuta Kubo, Yoshihiro Asaoka, Hiroyuki Hayashi, Takashi Fujita, Hideaki Hanaoka
26.「A Novel Method to Predict Cognitive and Physical Function, Muscle Weight and Quality of Life in Japanese Elderly Using Deep Learning 」 （査読付）	共　著	令和4年12月	International Journal of Nursing & Clinical Practices 9 366	加齢に伴い、生活の質（QOL）に影響を及ぼす認知機能障害と身体機能障害、およびうつ病が蔓延している。本研究は高齢者サロンに参加する65歳以上の健康高齢者155名を対象に、5つのベースラインデータセット（年齢、性別、体格指数（BMI）、体脂肪率（%Fat）、血清25OHD（VitD））から、深層学習フレームワークTensorFlow（予測システム）を用いて、MMSEとMoCA-J、WHO-QOL、握力および骨格筋指数（SMI）の予測を行った。結果、70%以上の精度を達成し、SMIは92.1%, MMSEは78.9%の正解率であった。つまり、深層学習技術により，認知機能，身体機能，筋肉重量，QOLを効果的に予測できることが示された。 本人担当部分：研究計画、データ収集と分析 共著者：Noboru Hasegawa, Seiji Tsuchiya, Yoshihito Tsubouchi, Takako Yamada, Nobuko Shimizu, Mayumi Kato, Miyako Mochizuki
27.「Relationship between Empowerment and Functioning and Disability in Older Japanese Patients: A Covariance Structure Analysis 」 （査読付）	共　著	令和5年1月	Healthcare 11(1) 44	本研究は、高齢患者のエンパワメントと生活機能との関連および構造を明らかにすることを目的とした。対象は回復期病棟に入院する65歳以上の高齢患者で、高齢患者のエンパワメントと生活機能との関連および構造の検証では、共分散構造分析を用いてモデル適合度を検証した。結果、エンパワメントは身体活動量、心身機能に影響することが示され、モデル適合度も統計学的に許容範囲であった。このことから、高齢患者のエンパワメント促進は年齢や世帯構成の影響を考慮し、役割の認識や心身機能の向上を目指した支援が重要である。 本人担当部分：研究計画、データ収集と分析、論文執筆 共著者：Yoshihito Tsubouchi, Akiyoshi Tainosho, Koudai Shimomura, Motoasa Kou, Kyosuke Yorozuya, Daiki Nakashima, Yasuo Naito

28.「Patient Empowerment Scale日本語版の反応性・解釈可能性の検証」 （査読付）	共　著	令和5年3月	医療福祉情報行動科学研究 10 29-36	本研究では、65歳以上の高齢患者を対象にPatient Empowerment Scale Japanese version (PES-J)の反応性と解釈可能性を検証した。 反応性の検証では、ΔPES-JとSE、SOC-13、PGCの変化量でそれぞれ有意な相関を認めた。解釈可能性の検証では、ΔPES-Jと入院期間、PES-JとFIMの変化率でそれぞれ相関を認めた。FIM改善に対するΔPES-Jのカットオフ値は15点であった。今回、PES-Jが高齢患者のエンパワメントを縦断的に測定可能であること、日常生活活動の自立度改善にはPES-Jで15点以上の向上が必要であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、データ収集と分析、論文執筆 共著者：坪内善仁，田結荘秋嘉，下村広大，萬屋京典，洪基朝，中島大貴，内藤泰男
29.「チームビルディングを基盤とした全学合同新入生研修の試み」	共　著	令和5年3月	奈良学園大学紀要（15）225-232	本研究では、人間教育学部と保健医療学部（看護学科・リハビリテーション学科）の2学部3学科で合同の新入生研修を開催し，学部・学科を越えた仲間づくりを目指した。研修はチームビルディングを基盤に、謎解きゲームを行った。結果，学生は「いろいろと話せた」，「楽しい」と感じており，目標が達成できた。さらに，「楽しみ」と「不安」のアンビバレンツな感情を抱きつつも，「頑張る」という前向きな気持ちを抱いていることが確認でき，研修で一定の効果が得られたと考えられた。 本人担当部分：研究計画、介入とデータ収集、 共著者：服部律子，松岡克典，阿波邦彦，安東雅訓，川端咲子，松浦尚子，荻布優子，嶋田理博，高橋寿奈，坪内善仁，辻井直幸
30.「Relationship between Empowerment and Functioning and Disability in Older Japanese Patients: A Covariance Structure Analysis 」 （博士論文）	単　著	令和5年3月	2022年度大阪府立大学博士論文集	日本の高齢者のエンパワメントについて定義及び概念構造を検証し、エンパワメント測定尺度であるPatient Empowerment Scale日本語版(PES Japanese version: PES-J)の妥当性(構造的妥当性，基準関連妥当性)と信頼性(内的整合性，検査ー再検査信頼性)、生態学的妥当性を検証した。結果、概念分析では7つの先行要件、6つの属性、6つの帰結が示され、新たな定義が再構築された。また、PES-Jは6因子・37項目が妥当な構造で、高齢患者を対象に高い妥当性と信頼性が示された。さらに、PES-Jへの影響因子として役割と家族構成が示され、PES-Jは身体活動量、心身機能・能力に影響することが明らかとなった。これら一連の検証結果は，日本の高齢者におけるエンパワメント概念を的確かつ広範に浸透させる一助になると思われる。
31.「アクティブシニアの健康増進・フレイル対策における血清ビタミンDの役割」 （依頼論文）	共　著	令和5年3月	Geriatric Medicine 61(3) 207-210	意欲的で健康意識が高いアクティブシニアの健康寿命の延伸には，Web 会議システムを活用して身体機能や認知機能を把握し，機能維持のための個別支援を行うことが有効である．地域在住高齢者の健康増進のためには，フレイルを経由する過程を回避することが必要となり，栄養，運動，社会的活動の介入を行う前提として，筋肉量を維持することが必要である．ビタミンD は認知機能，身体機能を向上させ筋肉量の維持に有効であることから，看護師としてのフレイル予防には，運動を伴う外気浴の推進，ビタミンD を多く含む食品摂取の指導に心掛け，必要に応じてサプリメントによる介入が 有用である． 本人担当部分：調査・介入実践、論文修正確認 共著者：長谷川昇，山田恭子，清水暢子，坪内善仁，望月美也子

（その他） 「学会発表（筆頭）」 1.「一般社団法人奈良県作業療法士会による認知症予防サロンへの取り組み報告」	－	平成27年11月	日本プライマリ・ケア連合学会第29回近畿地方会（於奈良県社会福祉総合センター）	当学会では、奈良県作業療法士会の推薦により、認知症施策に関する作業療法士活動状況を他職種に共有することを目的とした。奈良県吉野郡吉野町在住の高齢者地域サロンの参加者を対象に、認知的手法を用いた介入を週1回1年間実施した。結果、注意機能やうつ傾向の有意な改善、交流頻度の増加を認めた。しかし、他地域で報告されている記憶の自己効力感では有意な変化はなかった。このことから、認知的手法を用いた介入は、認知症予防に影響する可能性があるが、自己効力感向上にはプログラム設定に検討が必要と考えられた。また、認知症の当事者および家族を対象としたカフェでは、参加者が集まらず、開催が困難であった。このことは、地域特性を考慮し、参加しやすい場の設定を再検討する必要があると考えられた。
2.「認知症高齢者の最期の外出支援－“家”に込めた妻の想い－」	－	平成28年6月	第17回日本認知症ケア学会大会（於神戸国際展示場）	精神科一般棟においても高齢化が著名であり、従来の身体的治療・認知的ケアに加えて、終末期ケアが重視されている。本報告では、脳血管性認知症を有し、脳梗塞後に重度意識障害・嚥下障害を呈し終末期と告知された対象者とその家族に対し、配偶者のケア参加と自宅への外出を他職種で支援した。結果、家族の介護負担感や抑うつ傾向は軽減し、対象者の死後も配偶者は前向きな生活を再獲得できた。職人であった対象者にとって、家は自ら建て家族が集える大切な居場所であり、配偶者は家に連れて帰れなかった後悔の思いを強く感じていた。この点から、対象者の思いを実現することは、対象者への支援であると同時に家族介護者にとっても重要な支援であると考えられた。
3.「認知症予防サロン（介護予防普及啓発事業）における他職種連携を目指した取り組み－作業療法士と介護職員による介入効果の比較から－」	－	平成28年9月	第50回日本作業療法学会（於札幌市教育文化会館）	奈良県吉野郡吉野町において、認知症予防サロン“スマイルくらぶ”の活動支援を実施した。スマイルくらぶは週2回水曜日と金曜日に開催され、参加者は水曜日・金曜日のどちらかを自主選択（曜日は1年間固定）した。内容と進行は両曜日とも同じとなるよう徹底し、毎回担当者間で進行状況を確認した。認知的手法を柱に、調理・創作・講話・回想法・体操を行った。本報告では、同一プログラムを6ヶ月間作業療法士（水曜日）・介護職員（金曜日）が分担し参画した結果、ファシリテーターの違いによって、効果に差異が生じるかを明らかにすることとした。結果は、両群間で開始時・6ヶ月後で有意差は認めず、健康意識行動の増加を認めた。この結果から、プログラム内容や目的を共有することで、地域における認知症予防活動は他職種連携が可能であると考えられた。
4.「地域高齢者の“計画・実行・振り返り”を重視した集団での調理プログラムの効果」	－	平成30年9月	第52回日本作業療法学会（於名古屋国際会議場）	地域在住高齢者58名を対象に、計画・実行・振り返りを重要視したプログラムの認知機能・生活機能への介入効果を検証した。検証では、調理計画群24名、調理実施群19名、非介入群15名の3群で6ヶ月間の前後で群間比較を行った。結果、記憶機能や注意機能で調理計画群のみ有意な改善を認めた。このことから、計画・実行・振り返りを意識した調理活動は、認知症予防の一助になると考えられた。
5.「せん妄再発への不安軽減により自宅退院を実現した1事例：認知症高齢者のエンパワーメントを目指した取り組	－	令和1年5月	第20回日本認知症ケア学会大会（於国立京都国際会館）	感染症により精神科一般棟に入院し、せん妄と抑うつを呈した認知症高齢患者において、エンパワメント促進を目標に日常生活場面で自己選択・自己決定を支援した。その結果、せん妄の消失に加え、せん妄再発や退院後の生活への不安が軽減し、自律した生活の再獲得に至った。このことから、認知症のある高齢患者においても、自己選択・自己決定を重要視し、本人らしい生活再獲得に向けた作業療法支援が重要であると考えられた。

6.「回復期リハビリテーション病棟から自宅退院した大腿骨近位部骨折患者の特徴 ：認知症合併の有無に着目して 」	―	令和1年9月	第53回日本作業療法学会（於福岡国際会議場）	近年、回復期リハビリテーション病院の入院患者においても認知症を合併する割合が増加している。そこで、回復期リハビリテーション病棟に入院した大腿骨頸部骨折患者148名を対象に、認知症合併の有無が転帰や日常生活動作の回復に影響するかについて検証を行った。結果、認知症を合併した患者の特徴として、高齢で入院日数が長く、主介護者は子供の割合が高かった。また、日常生活動作は入院時・退院時ともに有意な低下を示した。以上より、自宅退院を目指した支援では、日常生活動作に加えて、主介護者など環境への配慮・支援が重要である。
7.「認知症高齢者の終末期における経口摂取実現を目指した多職種協働」	―	令和3年6月	第22回日本認知症ケア学会大会（オンライン学会）	認知症の終末期では，本人の思いに沿った支援に難渋することがある．今回，レビー小体型認知症高齢者(A氏)の「口から食べたい」という言葉の背景にある思いを把握し，チームで支援した結果，最期まで経口摂取継続を実現した．A氏が望む経口摂取とは，娘を安心させるための手段であったと考えられ，今回の経口摂取支援はA氏の母親としての思いを実現する一助になったと考えられた．
8.「高齢患者の不活動予防を目指した就寝前自己選択プログラムの効果」	―	令和3年9月	第55回日本作業療法学会（オンライン学会）	認知症の終末期では，本人の思いに沿った支援に難渋することがある．今回，レビー小体型認知症高齢者(A氏)の「口から食べたい」という言葉の背景にある思いを把握し，チームで支援した結果，最期まで経口摂取継続を実現した．A氏が望む経口摂取とは，娘を安心させるための手段であったと考えられ，今回の経口摂取支援はA氏の母親としての思いを実現する一助になったと考えられた．
9.「回復期リハビリテーション病棟における認知症患者の学習性無力感に影響する要因の検討」	―	令和4年6月	第23回日本認知症ケア学会大会（オンライン）	本研究では、認知症患者の学習性無力感に影響する要因を解明した。結果、学習性無力感の有無による2群比較では年齢とFIM，RSES，HLC，PGC，SESに有意差を認め，RSESとHLCが主な影響要因であった。高齢認知症患者の学習性無力感を予防するためには、日常生活能力の改善に加えて、交流や作業の失敗を防ぐことで自尊感情を保ち、行動の自己統制意識を高める支援と環境調整が重要である。
10.「A Concept Analysis of Elderly Empowerment in Contemporary Japan」	―	令和4年8月	18TH World Federation of Occupational Therapists Congress（in Paris）	本研究は、現代日本における高齢者エンパワメントの概念がもつ構成要素を明らかにし、概念の定義を再構築した。結果、7つの先行要件，6つの属性，6つの結果が明らかとなり、″作業・他者・地域とのつながりにおいて自己を開示し，自身の存在と課題を意識化し，意思決定に基づく協働目標および新たな作業に対して自らの行動を適用させていく過程″と定義された。
11.「Patient Empowerment Scale 日本語版の開発」	―	令和4年9月	第56回日本作業療法学会（於 京都）	高齢患者に適用可能なPatient Empowerment Scale(PES)を邦訳し，妥当性と信頼性を検証した。結果、37項目PES-Jは妥当性と信頼性のある尺度であることが確認され、高齢患者に適用可能と判断された。本研究で高齢患者のエンパワメント測定が可能になったことは、高齢患者のエンパワメントへの影響因子の解明など研究発展の一助になると考えられた。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　　5年　　3月　　31日

氏名　中島　大貴

研究分野	研究内容のキーワード
地域在住高齢者の健康増進	身体活動量，身体および精神心理機能

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1）動画資料，病院とのライブ中継による講義の実施	令和1年8月 ～ 令和4年9月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 令和元年度は「早期体験実習」を臨地で実施したが，令和2年度および3年度は「早期体験実習」「地域作業療法実習」が学内実習となった．学内実習においては，協会の動画資料を用いた作業療法士の役割の説明，病院とのライブ中継や映像資料を用いた講義，多職種連携に関する講義，介護予防事業や地域づくりに関する講義を担当した．両実習共に学生から「満足した」との評価が得られた．
2）演習（高齢者との関りなど）による講義の実施	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 「地域作業療法学Ⅱ」では，高齢者の健康増進事業に参加し，学生が考えたプログラムを高齢者とともに実践することで，高齢者との関わり方や健康増進事業の展開方法を学修できるよう努めている．「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「日常生活支援学Ⅱ」では，作業活動の実践やADL指導方法について学生同士での演習や道具・福祉用具の使用法に関する体験を通して実践力を育成できるよう努めている．授業アンケートの「講義内容のわかりやすさ」，「講義の要点の明確さ」においても4.0/5.0以上の評価を得られた．
3）国家試験対策も取り入れた講義の実施	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 「身体障害作業療法Ⅱ（運動器・難病）」「地域作業療法学Ⅱ」「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「日常生活支援学Ⅱ（各論）」では，講義資料に国家試験で頻出する問題と関連する内容も含め，国家試験問題を小テストとして提示した．国家試験の出題傾向を理解できた等の評価を得られた．
4）症例検討を踏まえた講義の実施	令和3年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 「作業療法総合演習」では，整形外科疾患（大腿骨頸部骨折または脊椎圧迫骨折）の症例検討を行い，作業療法における臨床思考過程を教授している．また，学生間での意見交換の機会を作り，他学生の意見を聞くことでより多面的な検討ができるよう促している．授業アンケートの「講義内容のわかりやすさ」においては4.8/5.0と高い評価が得られ，学生の理解度向上につながった．
２　作成した教科書，教材 1）講義で使用するパワーポイントの作成	令和1年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 「基礎ゼミⅡ」「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「作業療法総合演習」「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」「日常生活支援学Ⅱ（各論）」「地域作業療法学Ⅱ（各論）」において講義で使用する資料を作成した．講義資料に掲載に同意の得られた実際の症例の映像などを用いることで，授業アンケートの「講義資料のわかりやすさ」では，4.2/5.0以上の評価が得られた．
2）国家試験問題問題等の小テストの作成	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」「日常生活支援学Ⅱ（各論）」「地域作業療法学Ⅱ（各論）」において，講義範囲に関係する国家試験問題を提示し，理解度を確認した．国家試験の出題傾向を理解できた等の評価を得られた．

事項	年月日	概　　要
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）東海記念病院リハビリテーション部 作業療法科 係長による評価	平成29年12月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において約6年勤務し，回復期リハビリテーション，認知症サポート委員，がんリハビリテーション委員，介護予防事業等多岐にわたる分野で活躍をしていた.各領域に関する知識等はその都度自身で積極的に学習し，患者様への還元が行えていた.また，そのような姿勢が部内の後輩の模範となるだけでなく，多職種からも信頼されており院内勉強会や医師会での講師や発表の経験も豊富である.研究活動に関しては自身の研究活動以外に後輩の研究活動へのアドバイザーとして協力しており部内の教育活動にも貢献していた.臨床・研究・教育のいずれの観点からみても教育上の能力を十分に有していると評価する.
2）文部科学省　教員審査結果	平成30年4月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において，奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科専任助教の判定を得た．また，「基礎ゼミⅡ」「チーム医療論演習」「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「作業療法卒業研究」「客観的臨床能力演習（作業療法）」「作業療法総合演習」「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」「日常生活支援学Ⅱ（各論）」「地域作業療法学Ⅱ（各論）」「早期体験実習（作業療法）」「地域作業療法実習」「検査・測定実習」「作業療法評価実習」「総合臨床実習Ⅰ（作業療法）」「総合臨床実習Ⅱ（作業療法）」の科目判定で「可」を得た.
3）授業アンケートの評価	令和1年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 「基礎ゼミⅡ」「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「作業療法総合演習」「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」「日常生活支援学Ⅱ（各論）」「地域作業療法学Ⅱ（各論）」のを担当した．令和3年度に実施された授業アンケートでは.すべての科目において「講義内容のわかりやすさ」で4.0/5.0以上の評価を得られた．また，「講義資料のわかりやすさ」では，4.2/5.0以上の評価が得られた.
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（半日見学実習）	平成24年8月 ～ 平成29年8月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，中部大学作業療法学科1年生の病院見学の引率を行った.
2）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成25年6月 ～ 平成25年8月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，中部大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った（ケースバイザー）．内容は症例に対する評価・治療に関する助言やレポートの指導である.
3）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成26年7月 ～ 平成26年8月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，名古屋大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った（ケースバイザー）．内容は症例に対する評価・治療に関する助言やレポートの指導である.
4）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成27年6月 ～ 平成27年8月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，中部大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った（スーパーバイザー）．内容は症例に対する評価・治療に関する助言やレポートの指導である.
5）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成28年6月 ～ 平成28年8月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，星城大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った（スーパーバイザー）．内容は症例に対する評価・治療に関する助言やレポートの指導である.
6）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成29年1月 ～ 平成29年2月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，日本福祉大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った（スーパーバイザー）．内容は症例に対する評価に関しての助言やレポートの指導である.
7）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成29年9月 ～ 平成29年10月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，平成医療短期大学作業療法学科3年生の臨床実習指導を行った（ケースバイザー）．内容は症例の評価・治療に関する助言やレポートの指導である.
8）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（見学実習）	平成29年9月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，中部大学作業療法学科2年生の見学実習の引率とレポート指導を行った.

事項	年月日	概　　要
9）地域在住高齢者（サロン参加者）に対しての認知症予防に関する講演 （岐阜県下呂市社会福祉協議会下呂支部）	平成28年4月 ～ 平成28年12月	岐阜県下呂市社会福祉協議会が運営する「いきいきサロン」に講師として参加．地域在住高齢者を対象に認知症予防に関する講演を行った．講演は9ヶ所で実施した．
10）地域在住高齢者に対しての認知症ケアに関する講演（岐阜県下呂市　本光坊）	平成28年6月	岐阜県下呂市にある寺院本光坊が主催する高齢者の集いに講師として参加．地域在住高齢者を対象に認知症予防に関する講演を行った．
11）認知症患者の介護者に対しての認知症ケアに関する講演 （岐阜県下呂市社会福祉協議会下呂支部）	平成28年7月	岐阜県下呂市社会福祉協議会が主催する「認知症介護者の集い」に講師として参加．認知症患者の介護者を対象に認知症ケアに関する講演を行った．
12）地域在住の中高齢者に対しての認知症ケアに関する講話 （愛知県春日井市一次予防事業）	平成28年8月	愛知県春日井市にある医療法人社団喜峰会東海記念病院において実施されている，介護予防事業「さぼてんクラブ」が主催している健康講話の講師として参加．地域在住の中高齢者に対して，自宅での認知症ケアに関して講話を行った．
13）地域在住の男性高齢者に対しての健康講話と運動指導	平成29年9月	愛知県海部郡大治町の保健センターが主催する一次介護予防事業である「じぃじ体操クラブ」に講師として参加．地域在住の男性高齢者に対して，健康講話と運動指導を行った．
14）登美ヶ丘カレッジ	平成30年10月	奈良学園大学が主催する市民公開講座「登美ヶ丘カレッジ」において，「住み慣れた環境で安心・安全で暮らすために」というテーマで講演を行った．加えて新設されるリハビリテーション学科や作業療法士の説明をした．
15）地域在住高齢者に対する健康講話	平成31年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「POUTO」において，認知症予防に関する健康講話と運動指導を行った．
16）地域在住高齢者に対する運動指導	平成31年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「ローレル会健康体操」において，認知症予防の運動「マットス」を紹介し，指導及び実施をした．
17）地域在住高齢者に対する健康講話	平成31年4月	アップル学園前およびローレル会が主催する高齢者を対象にした勉強会において，「認知症と身体活動」というテーマで講演および運動指導を行った．
18）自立支援型地域ケア会議への出席	平成31年4月 ～ 令和2年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「自立支援型地域ケア会議」に出席し，作業療法士の視点からケアプランへの助言を行っている．
19）社会福祉協議会職員および地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年6月	登美ヶ丘地区社会福祉協議会が主催する登美ヶ丘地区社会福祉協議会総会において，「介護予防-いつまでも元気でいられるように今から心掛けておくこと-」という内容で講演を行った．
20）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年6月	（公財）奈良市生涯学習財団登美ヶ丘公民館が主催する「ひとみ学級」において，「健康寿命を延ばすために」という内容で講演を行った．
21）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年7月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「元気アップなら講座」において，「認知症と身体活動」というテーマで講演を行った．
22）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年7月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「ちょこっとサロン」において，「認知症と身体活動」というテーマで講演を行った．
23）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年8月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「登美ヶ丘地区元気いきいき講座」において，「認知症予防における身体活動・運動の重要性」というテーマで健康講話と運動指導を行った．
24）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年9月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「POUTO」において，「認知症と身体活動」というテーマで健康講話と運動指導を行った．

事項	年月日	概　　要
25）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年9月	東登美ヶ丘地区民生児童委員および登美ヶ丘地区社会福祉協議会が主催する「とみの里ふれあいサロン」において，「介護予防と運動について」というテーマで健康講話と運動指導を行った．
26）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年10月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「ふれあい広場」において，「運動の大切さについて」というテーマで健康講話と運動指導を行った．
27）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年10月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「POUTO」の参加者を対象に，大学内見学および交流会を実施した．
28）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年10月 ～ 令和2年3月	奈良市二名包括支援センターが主催する「奈良市一般介護予防事業」において，介護予防に関する講話と運動指導を行っている．
29）地域在住の若年者から高齢者に対する講演	令和1年12月	（公財）奈良市生涯学習財団登美ヶ丘南公民館が主催する「登美ヶ丘南公民館まつり」において，「楽しい健康づくり・コグニサイズ入門」というテーマで講演を行った．
30）地域在住高齢者に対する健康講話	令和2年1月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「POUTO」において，「腰痛予防」というテーマで健康講話と運動指導を行った．
31）地域在住高齢者に対する健康講話	令和2年2月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「ローレル会健康体操」において，「膝関節痛の予防」というテーマで健康講話と運動指導を行った．
32）自立支援型地域ケア会議への出席	令和2年4月 ～ 令和3年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「自立支援型地域ケア会議」に出席し，作業療法士の視点からケアプランへの助言を行った．
33）自立支援型地域ケア会議への出席	令和3年4月 ～ 令和4年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「自立支援型地域ケア会議」に出席し，作業療法士の視点からケアプランへの助言を行っている．
34）登美ヶ丘公民館「ひだまり体操」での講師	令和3年7月 ～ 令和4年3月	登美ヶ丘公民館が主催する「ひだまり体操」において，運動方法の指導を行っている．また，必要に応じて健康講話も行っている．
35）地域在住高齢者に対する健康講話	令和3年7月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「ローレル会健康体操」において，「フレイルについて」というテーマで健康講話と運動指導を行った．
36）自立支援・重度化防止事業での講演	令和3年7月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「自立支援・重度化防止事業」において，「作業療法士から見た自立と自律」というテーマで，介護支援専門員や介護保険事業所職員に向けて講演を行った．
37）オレンジカフェの助言と参加	令和3年8月 ～ 令和4年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「オレンジカフェ」に対する助言をするとともに，本事業に参加し，当事者・家族の相談を受ける，集団活動を実施する等の活動を行っている．
38）地域在住高齢者に対する健康講話	令和4年2月	地域在住高齢者の自主グループであるAAA・Kネットワーク主催の「第3回ながらウォーキング」において，「歩行に関する豆知識」というテーマで健康講話と運動指導を行った．
39）自立支援型地域ケア会議への出席	令和4年4月 ～ 令和5年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「自立支援型地域ケア会議」に出席し，作業療法士の視点からケアプランへの助言を行っている．
40）登美ヶ丘公民館「ひだまり体操」での講師	令和4年6月 ～ 令和5年3月	登美ヶ丘公民館が主催する「ひだまり体操」において，運動方法の指導を行っている．また，必要に応じて健康講話も行っている．

事項	年月日	概　　要
41）登美ヶ丘わいわいフェスタ2022への参加	令和4年10月	登美ヶ丘地区社会福祉協議会が主催する「登美ヶ丘わいわいフェスタ」に作業療法学専攻の代表として出店し，地域住民との交流を図った．また，学生も参加することで社会貢献活動の体験の場とした．
42）登美ヶ丘合同サロンの講師	令和4年11月	住民同士のつながりの拡充を目的に奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催した「登美ヶ丘合同サロン」で介護予防と運動に関する講話と運動指導を行った．
43）登美ヶ丘地区での体力測定会の実施	令和4年11月 令和5年3月	登美ヶ丘地区在住の高齢者を対象とした体力測定会を実施した．本件は奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターや登美ヶ丘公民館の依頼のもと実施した．
5　その他		
1）星城大学リハビリテーション研究会の企画と運営	平成24年4月 ～ 平成27年3月	学校法人石田学園星城大学リハビリテーション学部卒業生を対象に，卒後教育，自己研鑽となることを目的とし，年2回の研究会をしている．これらのことにより，経験年数の短い後輩の新人セラピストに対し教員および経験年数の長い先輩のセラピストが指導する場となり，臨床現場への意欲の維持・向上を目的として、臨床現場の問題点に関するディスカッションや問題の明確化を行った．
2）4年制大学での科目担当	令和1年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 講義または演習科目として，「基礎ゼミⅡ」「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「作業療法総合演習」「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」「日常生活支援学Ⅱ（各論）」「地域作業療法学Ⅱ（各論）」を担当している．

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
作業療法士免許	平成24年4月	作業療法士名簿登録番号　第68464号
認知症対応向上研修　修了	平成26年7月	第14-363号
がんのリハビリテーション研修　修了	平成26年11月	厚後援26年5-124号
修士（リハビリテーション学）	平成30年3月	中部大学 論文題目「季節変動が寒冷地域在住高齢者の身体活動量に及ぼす影響」
マットスインストラクター	平成31年12月	I000096
2　特許等		
なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）身体障害領域，老年期障害領域・地域領域における臨床業務 （医療法人社団喜峰会東海記念病院）	平成24年4月 ～ 平成29年12月	医療法人社団喜峰会 東海記念病院において，身体障害・老年期障害領域（一般病棟，外来リハビリ，地域包括ケア病棟，回復期病棟）の臨床を行った．また，作業療法科リーダーとして，病棟でのカンファレンス，がんリハビリテーションチームや認知症対応チームでの活動にも参加した．
2）病院の認知症対応力向上事業での取り組み内容の報告	平成27年2月 ～ 平成29年2月	愛知県が取り組んでいる「病院の認知症対応向上事業」の活動報告会において，東海記念病院認知症サポートチームの取り組み状況を報告した．
3）第23回愛知県作業療法学会運営委員	平成27年5月	一般社団法人愛知県作業療法学会が主催の学術大会に運営スタッフとして参加し，学術大会の準備・運営業務に従事した．
4）奈良学園大学保健医療学部 リハビリテーション学科の申請準備	平成30年1月 ～ 平成31年3月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の文部科学省への設置申請に向けて，病院訪問や書類作成業務を行った．
5）近畿作業療法学会の査読委員	令和3年1月	第41回近畿作業療法学会の査読委員として，一般演題の査読を行った．
6）日本作業療法士協会　教育部	令和4年12月 ～ 令和5年3月	日本作業療法士協会の教育部部員として，指定規則の改訂に関するWGに関わり，会議やアンケートの集計等を行った．

事項	年月日	概　　要
４　その他		
1）奈良学園大学保健医療学部 リハビリテーション学科での委員会業務等	平成31年4月 ～ 令和2年3月	実習部会（早期体験・地域実習，総合臨床実習，評価/検査測定実習），協会関連の対応，AC対応，共通教育委員会の業務を行った．
2）奈良学園大学保健医療学部 リハビリテーション学科での委員会業務等	令和2年4月 ～ 令和3年3月	実習部会（早期体験・地域実習，総合臨床実習，評価/検査測定実習，実習管理センター），入試広報部会（入試広報対策），協会関連の対応，AC対応，地域交流WG，共通教育委員会の業務を行った．
3）奈良学園大学保健医療学部 リハビリテーション学科での委員会業務等	令和3年4月 ～ 令和4年3月	教務部会（卒業研究），実習部会（早期体験・地域実習，総合臨床実習，評価/検査測定実習，実習管理センター），入試広報部会（入試広報対策），大学院設置準備WG，学科予算WG，協会関連の対応，AC対応，地域交流WG，広報委員会の業務を行った．
4）奈良学園大学保健医療学部 リハビリテーション学科での委員会業務等	令和4年4月 ～ 令和5年3月	教務部会（卒業研究），実習部会（早期体験・地域実習，総合臨床実習，評価/検査測定実習，実習管理センター），4年生学年担任，大学院設置準備WG，学科予算WG，登美ヶ丘自治会連携WG，広報委員会の業務を行った．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） なし				
（学術論文） 1. Factors affecting the discharge destination on hip fracture patients who live alone and have been admitted to an inpatient rehabilitation unit （独居の大腿骨近位部骨折患者の転帰先に影響を及ぼす要因） （査読付）	共著	平成28年4月	Journal of Physical Therapy Science, 28 (4) p.1228-p.1232	本研究の目的は，機能的評価と退院先との関係，大腿骨頸部骨折患者のリハビリ後の自宅退院におけるカットオフポイントの特定であった．多重ロジスティック回帰分析の結果，FIMの認知スコアが退院先に影響する重要な変数であった．また，ROC曲線分析において，認知スコア23.5点が自宅退院のカットオフポイントであることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集 共著者：Hayashi Hiroyuki, Iwai Midori, Matsuoka Hiroka, Nakashima Daiki, Nakamura Shugo, Kubo Ayumi, Tomiyama Naoki
2. Exploring the factor on sensory motor function of upper limb associated with executive function in community-dwelling older adults （地域在宅高齢者の遂行機能に関連する上肢の感覚運動機能） （査読付）	共著	平成28年8月	Nagoya Journal of Medical Science, 78 (3) p.285-p.291	本研究では，地域在住高齢者における上肢の感覚・運動機能と遂行機能の関連性を評価することを目的とした．重回帰分析の結果，非利き手の手指巧緻性が遂行機能と関連付けていることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集 共著者：Hayashi Hiroyuki, Nakashima Daiki, Matsuoka Hiroka, Iwai Midori, Nakamura Shugo, Kubo Ayumi, Tomiyama Naoki
3. ボールローリングエクササイズは非利き手の手指巧緻動作と箸操作困難感を改善する：健常若年者を対象とした実験研究 （査読付）	共著	平成28年10月	日本作業療法士協会学術誌「作業療法」，35 (5) p.462-p.469	本研究では，健常若年者を対象にボールローリングエクササイズを行い，上肢機能やADL動作への効果を明らかにした．その結果，ボールローリングエクササイズが手指巧緻動作と箸操作困難感の改善に寄与することが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文添削（修正案の提示） 共著者：中村守吾，中島大貴，川浦真未子，林浩之
4. 大腿骨近位部骨折患者における精神心理機能に関する研究：地域在住高齢者との比較 （査読付）	共著	平成29年4月	日本作業療法士協会学術誌「作業療法」，36 (1) p.35-p.41	本研究では，大腿骨頸部骨折患者の精神心理機能を明らかにするために，地域在住高齢者と比較した．大腿骨頸部骨折患者群は，MMSE, WHO-5が有意に低く，GDS-15は有意に高く，Delta TMTは異常値を示した． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文添削（修正案の提示） 共著者：岩井緑，林浩之，中島大貴，中村守吾，松岡紘佳，窪優太，久保歩，冨山直輝
5. 活動遂行における母指指節間関節と示指および中指近位指節間関節の可動域 （査読付）	共著	平成29年6月	日本作業療法士協会学術誌「作業療法」，36 (3) p.291-p.298	本研究では，健常者若年者を対象に母指IP関節と示指・中指PIP関節の機能的可動域を明らかにした．その結果，活動遂行に要する角度は，母指IP関節が44°/13°，示指PIP関節が74°/-3°，中指PIP関節が78°/-12°であった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文執筆 共著者：中島大貴，中村守吾，川浦真未子，林浩之
6. Upper-limb motor and sensory function in patients with hip fracture: Comparison with community-dwelling adults （股関節骨折患者における上肢運動および感覚機能：地域在住高齢者との比較） （査読付）	共著	平成29年6月	Journal of Back and Musculoskeletal Rehabilitation, 30 (6) p.1231-p.1236	本研究では，股関節骨折患者32名と地域在住高齢者32名の上肢機能を比較し，股関節骨折患者の上肢機能を評価することを目的とした．その結果，股関節骨折患者は握力，ピンチ力，手指巧緻性，包括的な手機能が著名に低下していることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集 共著者：Hayashi Hiroyuki, Nakashima Daiki, Matsuoka Hiroka, Iwai Midori, Nakamura Shugo, Kubo Ayumi, Tomiyama Naoki

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. 回復期リハビリテーション病棟入院の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する集団料理活動の効果 （査読付）	共著	平成29年8月	日本老年精神医学会学術誌「老年精神医学雑誌」，28（8） p.899-p.903	本研究では，認知症高齢者の抑うつ・アパシー改善を目的に集団での料理活動を実施した．介入の結果，対照群と比較して介入群では介入期間中に抑うつの有意な改善が認められたが，介入終了後の持続効果はなかった．一方，アパシー，QOLは有意な改善は認められなかった． 本人担当部分：研究計画，介入，論文添削（修正案の提示） 共著者：窪優太，中澤僚一，各務真菜，加藤美樹，中島大貴，岡村英俊，長谷川慧，竹田徳則
8. 季節変動が寒冷地域在住高齢者の身体活動量に及ぼす影響 （修士論文）	単著	平成30年3月	中部大学大学院	本研究では，寒冷地域在住高齢者を対象に，①季節による身体活動量の変動と②季節による生活活動内容の変化を検討した．多重比較検定の結果，Lifecorderで測定した歩数や低強度の活動時間は冬季に減少し，春季や夏季に増加することが明らかになった．一方で総エネルギー消費量や中強度以上の活動時間に季節変動は認められなかった．Physical activity scale for the elderlyを用いて評価した生活活動は，「屋外での園芸」のみ冬季に減少することが明らかとなった．（A4判用紙，全58頁）
9. 心理的介入により脳卒中後のapathyに改善を認め，ADLの回復へと繋がった一例 （査読付）	共著	令和1年6月	「脳神経内科」，90（6） p.701-p.704	本研究では，脳血管障害後のApathyを呈した症例に対して，認知症のApathyで有効とされる心理的アプローチを実施し，その効果を報告した．心理的介入を継続的に実施した結果，Apathyは改善し，ADLの改善に繋がった．そのため，心理的介入は脳血管障害後のApathyに対して有効であることが考えられた． 本人担当部分：研究計画，介入への助言，論文添削（一部執筆，修正案の提示） 共著者：舩戸敦，中島大貴，窪優太
10. Influence of seasonal variations on physical activity in older people living in mountainous agricultural areas （山間地域在住高齢者の身体活動に対する季節変動の影響） （査読付）	共著	令和1年11月	「Journal of Rural Medicine」，14（2） p.165-p.175	本研究では，地域在住高齢者を対象に，①季節による身体活動量の変動と②季節による生活活動内容の変化を検討した．多重比較検定の結果，加速度計で測定した歩数や低強度の活動時間は冬季に減少し，春季や夏季に増加することが明らかになった．Physical activity scale for the elderlyを用いて評価した生活活動は，「屋外での園芸」のみ冬季に減少することが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文執筆 共著者：Daiki Nakashima,Daisuke Kimura,Hidehiro Watanabe,Fumihiko Goto, Miki Kato,Keisuke Fujii,Eri Kasuya,Naoki Tomiyama,Ryuichi Hasegawa
11. 介護予防事業における集団ゴムバンド運動が軽度認知障害を有する女性高齢者の認知機能に及ぼす影響 （査読付）	共著	令和2年10月	「認知症ケア学会誌」，19（3） p.557-p.563	本研究では，軽度認知障害を有する地域在住女性高齢者を対象に，介護予防事業における運動教室が認 知機能に及ぼす効果を検討した．11週間の集団ゴムバンド運動教室参加者を介入群，11週間通常どおりの生活を送るよう求めた参加者を対照群とした．介入の効果を検討するために二要因共分散分析を用いて分析を行った結果，両群における日本語版Montreal Cognitive Assessment（合計）の変化に有意な交互作用は認められなかった(F = 0.008, p = 0.931). 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文添削（修正案の提示） 共著者：渡邉英弘，冨山直輝，後藤文彦，中島大貴，木村大介，井戸尚則，岡山直樹，長谷川龍一
12. 本学保健医療学部リハビリテーション学科志望経緯に関する調査	共著	令和2年12月	「奈良学園大学紀要」，13 p.149-p.156	本研究は，新入生の志望動機と経緯に関するアンケート調査を行い，今後の広報活動について検討することを目的とした．本研究では，2020年度の新入生を対象に，奈良学園大学を志望した経緯と大学に対する印象等を質問紙で調査した．その結果，PT・OTの両専攻において，多くの学生は当初の志望を中途変更しないことが明らかとなった．また，入学後の教育については肯定的な意見が多かった． 本人担当部分：研究計画，論文添削（修正案の提示） 共著者：飯塚照史，辻下守弘，池田耕二，城野靖朋，中島大貴

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13. 認知症高齢患者のせん妄後の抑うつに対するFettermanの3ステップアプローチ適用の効果 （査読付）	共著	令和3年1月	「認知症ケア学会誌」，19（4） p.701-p.708	本研究では，せん妄後の抑うつから自宅退院に消極的であった認知症高齢患者に対して，Fettermanの3ステップアプローチを適用して介入し，退院後の家庭内役割の再獲得を目指した．その結果，料理という家庭内役割を再獲得したことで，退院後生活への不安感や抑うつは軽減し，生活機能も改善し，自宅退院を実現した．このことから，入院中の3ステップアプローチによるエンパワメント促進は，せん妄後の抑うつを軽減し，安心した自宅退院の実現に貢献すると考えられた． 本人担当部分：研究計画，介入の助言，論文添削（修正案の提示） 共著者：坪内善仁，中島大貴，田丸佳希
14. Relationship between nutritional status and phase angle as a noninvasive method to predict malnutrition by sex in older inpatients （高齢入院患者における栄養障害を性ごとで予測するための栄養状態と非侵襲法であるPhase angleの関係） （査読付）	共著	令和3年1月	「Nagoya Journal of Medical Science」，83（1） p.31-p.41	本研究の目的は，Phase angleと低栄養の関係を明らかにし，性別に応じて，高齢入院患者のPhase angleによる低栄養状態のカットオフ値を算出することであった．男性59（平均年齢76.5歳）と女性101名（平均年齢78.8歳）を対象にPhase angleとGNRIを測定した．その結果，Phase angleは男性・女性の低栄養状態に関連することが明らかとなった．また，ROC曲線により算出したカットオフ値は，男性4.03度（感度：87.0%．特異性：75.9%），女性3.65度（感度：78.6%，特異性：60.5%）であった． 本人担当部分：研究計画，論文添削（修正案の提示） 共著者：Yuta Kubo, Kento Noritake, Daiki Nakashima, Keisuke Fujii, Kazumasa Yamada
15. 地域在住高齢者におけるテレビコマーシャルメッセージの時間を活用した身体活動促進プログラムの予備的研究 （査読付）	共著	令和3年4月	「健康支援」，23(2) p.195-p.200	本予備的研究では，高齢者においてCM中の歩行または足踏みを促す身体活動プログラムの効果と実行可能性を明らかにすることを目的とした。対象は健常高齢者20名（平均年齢75.0歳）とした．介入方法は、CM中の歩行または足踏みとした．歩数と歩行時間の測定は3軸加速度計を使用し，通常通りの日常生活を送る週（以下，通常週）とCM中の歩行または足踏みを促す週（以下，介入週）の計14日間の測定を実施した結果，通常週に歩数および歩行時間は有意に増加した（p < 0.01）． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文執筆 共著者：中島大貴，伊藤健一，坪内善仁，藤井啓介，田畑泉
16. 軽度認知障害が疑われる地域在住女性高齢者の個人的特徴と1年後の認知機能低下に影響する因子：エンパワメント評価を含めた後ろ向き観察研究 （査読付）	共著	令和3年8月	「医療福祉情報行動科学研究」，8 p.133-p.142	本研究の目的は,地域在住女性高齢者を対象に,MCIが疑われる者の特徴と1年後の認知機能低下に影響する因子を明らかにすることであった．初回調査時(初期)の MoCA-Jを用いて,26 点以上(健常群)と 25 点以下(MCI群)で,基本属性,精神心理機能,生活機能を Mann-Whitney の検定と Fisher の正確確率検定で比較した．さらに,MCI群について,1年後のMoCA-Jの変化量をもとに低下群・維持群・向上群に分け,一元配置分散分析および Fisherの正確確率検定で1年間の認知機能低下に関連する因子を検証した．その結果,MCI群の中でも低下群は教育年数が短く,エンパワメントの相互作用による問題の意識化で低下を認めた． 本人担当部分：研究計画，データ分析の助言，論文添削（修正案の提示） 共著者：坪内善仁，中島大貴，田丸佳希，内藤泰男
17. 介護予防を目的とした高齢者主体で運営される自主グループによるソーシャルサポート・ネットワークの変化 （査読付）	共著	令和3年8月	「理学療法科学」，36(4)， p.481-p.489	本研究は，運動教室後に継続して自主グループに参加した高齢者のソーシャルサポート・ネットワークを明らかにすることを目的とした．対象は，従来型運動教室に参加した30名と，自主グループ設立を目的とした運動教室に参加し，自主グループに継続して参加できた26名とした．ソーシャルサポート・ネットワークの評価にはLSNS- 6を用い，運動教室の前後とフォローアップ3か月後の計3時点で評価した．LSNS- 6の下位項目の交互作用は，友人で認められたが，家族では認められなかった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文添削（修正案の提示） 共著者：後藤文彦，渡邉英弘，中島大貴，井戸尚則，岡山直樹，冨山直輝，木村大介，長谷川龍一
18. 2021年度リハビリテーション学科新入生における志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	「奈良学園大学紀要」，14 p.1-p.6	本研究では，奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の3期生に志望経緯に関するアンケート調査を実施し，2期生と比較することで傾向を分析した．その結果，当初における職業選択は変更することなく，オープンキャンパスへの参加，加えて本学の近隣環境等への交換を以って進学した経緯があることが分かり，2期生との大きな変化はなかった．一方で，プレゼンスの高まり，教員対応への肯定的意見と捉えられる結果もあり，本学魅力の一端として認識する必要性が示唆された． 本人担当部部分：研究計画，論文添削（修正案の提示） 共著者：飯塚照史，辻下守弘，池田耕二，城野靖朋，中島大貴

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19. コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題 ―学内実習の概要と学生アンケート調査による考察― （査読付）	共著	令和4年2月	「医療福祉情報行動科学研究」，9 p.31-p.38	本研究では，令和2年度・3年度に実施した学内での地域実習の構成について触れ，履修学生のアンケート調査より学内実習の課題と可能性について検討した．学内での地域実習は2 週間にわたり実施した．学内実習は，①予習，②学内実習，③復習で構成した．令和2年度・3年度の履修学生に対し，実習終了後にアンケート調査を実施した．回答率は，令和2年度95.7%，令和3年度94.7%であった．アンケートの結果，両年度ともに類似した回答傾向であり、地域実習については 70%以上が理解できたと回答した．一方で，3年次以降の臨床実習については，36.4-85.9%の学生が「不安」と回答した． 本人担当部分：調査データの収集，論文添削（修正案の提示） 共著者：滝本幸治，池田耕二，吉川義之，坪内善仁，笹野弘美，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生
20. コロナ禍における理学・作業療法士養成課程の早期体験実習 ―学内実習後の学生アンケート調査による検証― （査読付）	共著	令和4年2月	「医療福祉情報行動科学研究」，9 p.55-p.63	本研究では，令和2年度・3年度に実施した学内での早期体験実習実習を履修した学生のアンケート結果から，学内実習の意義や課題について考察した．早期体験実習は，1週間にわたり実施した．実習は①予習・復習，②映像資料やライブ中継の活用，③朝礼やロールプレイ，④グループワークによる学びの4点を重視した．実習終了後に実施したアンケートの結果，両年度とも実習内容については約90%が「理解できた」と回答した．一方で，2年次以降の学外実習に向けた不安については、令和2年度で約45%，令和3年度で50%以上が「不安」「非常に不安」と回答した． 本人担当部分：研究計画，データ収集，論文添削（修正案の提示） 共著者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩崎智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二
21. Frail older adults without occupational dysfunction maintain good subjective well-being: A cross-sectional study （作業機能障害を有さない虚弱高齢者は良好な主観的幸福感を維持している-横断的研究-） （査読付）	共著	令和4年9月	「Healthcare」，10(10) p.1922	本研究の目的では，フレイル/職業機能障害(OD) の有無と地域在住高齢者の主観的な幸福感との関係を明らかにした．対象は2,308名の高齢者とし，フレイルの有無と主観的幸福感を調査した．参加者をフレイルとODの程度で6グループに分類した．フレイル/ODと主観的幸福度の関係を調べるために，分散分析を行った．その結果，高齢者のフレイル/ODと主観的幸福の有無との間に有意な関連性が示された． 本人担当部部分：研究計画，論文添削（修正案の提示） 共著者：Keisuke Fujii, Yuya Fujii, Yuta Kubo, Korin Tateoka, Jue Liu, Koki Nagata, Daiki Nakashima, Tomohiro Okura
22. Relationship between Empowerment and Functioning and Disability in Older Japanese Patients: A Covariance Structure Analysis （日本人高齢患者におけるエンパワーメントと機能・障害との関連：共分散構造分析） （査読付）	共著	令和4年12月	「Healthcare」，11(11) p.44	本研究では，構造方程式モデリング（SEM）を使用して，エンパワメントと状況要因，機能・障害の関連を調査した．分析には，151名の患者が含まれた．SEM 解析の結果，役割の存在(β=0.45, $p<0.01$)と家族構造(β=0.18, $p=0.02$)がエンパワメントに影響することを示した．さらに，患者のエンパワメントが身体活動(β=0.25, $p<0.01$)および心身機能と能力(β=0.36, $p<0.01$) にプラスの影響を与えることを示した．なお，本研究で仮説を立てたモデルの適合度は優れていた． 本人担当部部分：研究計画，論文添削（修正案の提示） 共著者：Yoshihito Tsubouchi, Akiyoshi Tainosho, Koudai Shimomura, Motoasa Kou, Kyosuke Yorozuya, Daiki Nakashima, Yasuo Naito
23. Effect of acute high-intensity intermittent exercise on serum brain-derived neurotrophic factor concentrations （急性高強度間欠的運動による血清脳由来神経栄養因子への影響） （査読付）	共著	令和5年2月	J Sports Med Phys Fitness, 63(6) ※Online ahead of print	本研究では，疲労困憊に至るHIIEと疲労困憊に至らないHIIE後の血清BDNF濃度の変化を比較することを目的とした．対象は健常大学生8名とした．参加者は170%VO_2maxの負荷で20秒の運動と10秒の休息を繰り返すHIIEを2条件（疲労困憊に至る：6-7set，疲労困憊に至らない：5set）で実施し，安静時・運動前・運動後複数回（直後，5分後，10分後，30分後,60分後，90分後）で血清BDNF濃度を測定した．その結果，両条件ともに運動後に血清BDNF濃度は上昇したが，疲労困憊に至るHIIEでは血清BDNF濃度上昇の持続時間が長いことが分かった． 本人担当部部分：研究計画，データ解析，論文執筆 共著者：Daiki Nakashima, Shumpei Fujie, Masanari Togo, Shunsuke Takeshita, Keiji Hasegawa, Izumi Tabata

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
24.Patient Empowerment Scale 日本語版の反応性・解釈可能性の検証 （査読付）	共著	令和5年3月	「医療福祉情報行動科学研究」，10 p.29-p.36	本研究では,PES-Jの反応性と解釈可能性を検証した．高齢患者151名を対象に,反応性では,SE，SOC-13，PGCの変化量とΔPES-Jとの関連を検証した．解釈可能性では，ΔPES-J と年齢,教育年数との関連,性別や入院契機となった疾患,既往歴の違いによるΔPES-Jの差を検証した．また，FIMとPES-Jの変化率の関連を検証した後,FIM 改善に対するΔPES-J のカットオフ値を算出した．反応性の検証では,ΔPES-JとSE,SOC-13,PGCの変化量で有意な相関を認めた．解釈可能性の検証では,ΔPES-Jと入院期間，PES-JとFIMの変化率で相関を認めた．FIM改善に対するΔPES-Jのカットオフ値は15点で，AUCは 0.70であった. 本人担当部部分：研究計画，論文添削（修正案の提示） 共著者：坪内善仁，田結荘秋嘉，下村広大，萬屋京典，洪基朝，中島大貴，内藤泰男
25.地域在住成人における実行機能質問紙の利用可能性の検討-客観的行動評価との関連- （査読付）	共著	令和5年3月	「医療福祉情報行動科学研究」，10 p.17-p.27	本研究の目的は，実行機能質問紙の得点と神経心理学的検査の成績との関連を明らかにし，前者の利用可能性を検討することである．実行機能の主観的評価としてEFQ・J-BES，客観的評価としてTMT-J・新ストループ検査Ⅱ・D-CATを実施した．年齢と認知機能成績別に参加者を各2群に分け，実行機能質問紙の得点と，神経心理学検査の成績との関連を検討した．実行機能質問紙において，年齢Low群，MoCA-J高成績群において有意な相関のある項目を多く認め，利用可能性が比較的高いことが示唆された。 本人担当部分：研究計画，データ収集の補助，論文添削（修正案の提示） 共同発表者：岩﨑智子，中田修，山形力生，中島大貴，大西久男
（その他） 「総説・依頼原稿」 1. コロナ禍で変わる臨床実習（奈良学園大学リハビリテーション学科）	共著	令和3年4月	作業療法ジャーナル，55(4) p.373-p.374	2020年度は，COVID-19の影響により，各大学での臨床実習が学内実習によって代替された．本報告では，奈良学園大学で実施した「早期体験実習」および「地域実習」に関する実施方法や学生によるアンケート結果を記述した．特に本学独自で実施した臨床現場のライブ中継は非常に有意義であり，学生からも一定の評価が得られていた. 本人分担分：実習担当，依頼論文の執筆 共著者：中島大貴，坪内善仁，池田耕二，山形力生，大浦智子，辻下守弘
「国際学会」 1. Ball Rolling Exercise Improves Finger Dexterity and Chopstick Operability of the Non-Dominant Hand in Healthy Young Adults （ボールローリングエクササイズは非利き手の手指巧緻動作と箸操作困難感を改善する）	-	平成26年6月	第16回世界作業療法士連盟大会 第48回日本作業療法学会（パシフィコ横浜）	本研究では，健常若年者を対象にボールローリングエクササイズを行い，上肢機能やADL動作への効果を明らかにした．その結果，ボールローリングエクササイズが手指巧緻動作と箸操作困難感の改善に寄与することが明らかになった. 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料添削 共同発表者：中村守吾，中島大貴，川浦真未子，林浩之
2. Physical, psychological, and cognitive factors that have higher influences on physical activity in community-dwelling oldest-old women （地域在住高齢者における身体活動量に影響を与える身体的，精神的，認知的要因）	-	平成29年7月	Occupational Therapy Australia 27th National Conference and Exhibition 2017 （Australia, Perth Convention and Exhibition Center）	本研究では，超高齢女性（85歳以上）の身体活動量に影響を与える要因を明らかにすることを目的とした．重回帰分析の結果，GDS-15のスコア（抑うつ）が，超高齢女性の身体活動量に影響を与える可能性が示唆された. 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：Nakashima Daiki, Watanabe Hidehiro, Goto Fumihiko,Kimura Daisuke, Tomiyama Naoki, Islam Mohammod Monirul

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. Effects of group-based resistance exercise on social networking and mental depression in older adults (集団で行う抵抗運動が高齢者のソーシャルネットワークと抑うつ状態に及ぼす影響)	-	平成29年7月	Occupational Therapy Australia 27th National Conference and Exhibition 2017 (Australia, Perth Convention and Exhibition Center)	本研究では，地域で高齢者の集団に運動介入を行い，地域交流のある高齢者群と地域交流のない高齢者群で，ソーシャルネットワークと精神機能にどのような効果を示すか明らかにした．介入の結果，地域交流のない群の方がソーシャルネットワークと精神機能が有意に拡大した． 本人担当部分：発表資料添削 共同発表者：Fumihiko Goto, Hidehiro Watanabe, Daiki Nakashima, Mohammod Monirul Islam, Ryuichi Hasegawa
4. Effects of elastic band-based resistance exercises on impaired cognition in community-dwelling older adults having mild cognitive impairment (軽度認知障害を有する地域在住高齢者における認知障害に対するゴムバンド運動の効果)	-	平成29年7月	Occupational Therapy Australia 27th National Conference and Exhibition 2017 (Australia, Perth Convention and Exhibition Center)	本研究は，地域在住の軽度認知症高齢者を対象に，認知機能に対するゴムバンド運動の効果を明らかにした．ゴムバンド運動の介入前後で，The Japanese version of Montreal Cognitive Assesmentの得点が有意に改善することが明らかになった． 本人担当部分：調査データの収集，発表資料添削 共同発表者：Hidehiro Watanabe, Fumihiko Goto, Daiki Nakashima, Mohammod Monirul Islam, Ryuichi Hasegawa
「国内学会」 1. 活動遂行における母指指節間関節と示指および中指近位指節間関節の可動域	-	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪国際会議場）	本研究は，健常者若年者を対象に母指IP関節と示指・中指PIP関節の機能的可動域を明らかにした．その結果，活動遂行に要する角度は，母指IP関節が44°/13°，示指PIP関節が74°/-3°，中指PIP関節が78°/-12°であった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：中島大貴，中村守吾，川浦真未子，林浩之
2. 地域在住高齢者の注意機能に関連する上肢機能の探索的研究	-	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸ポートピアホテル，神戸国際会議場）	本研究では，地域在住高齢者における上肢の感覚・運動機能と遂行機能の関連性を評価することを目的とした．重回帰分析の結果，非利き手の手指巧緻性が遂行機能と関連付けていることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：中島大貴，林浩之，金田（松岡）紘佳，市川（久保）歩，冨山直樹
3. 大腿骨近位部骨折患者における精神心理機能に関する研究：地域在住高齢者との比較	-	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸ポートピアホテル，神戸国際会議場）	本研究では，大腿骨頸部骨折患者の精神心理機能を明らかすることを目的に，地域在住高齢者との比較行った．大腿骨頸部骨折患者群は，MMSE，WHO-5が有意に低く，GDS-15は有意に高く，Delta TMTは異常値を示した． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料添削 共同発表者：岩井緑，林浩之，中島大貴，中村守吾，金田（松岡）紘佳

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 大腿骨近位部骨折患者の上肢機能に関する基礎的研究：地域在住高齢者との比較	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸ポートピアホテル，神戸国際会議場）	本研究は，大腿骨近位部骨折患者の上肢機能が地域在住高齢者と比較し，どの程度であるかを把握するために行った．その結果，大腿骨近位部骨折患者は，筋力，Jebsen-Taylor Hand function testのスコア，知覚機能が有意に低下していることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集 共同発表者：中村守吾，林浩之，中島大貴，金田（松岡）紘佳，岩井緑
5. 独居の大腿骨近位部骨折患者の転帰先を分けるFIM得点に関するパイロットスタディ	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸ポートピアホテル，神戸国際会議場）	本研究の目的は，大腿骨頸部骨折患者のリハビリ後の自宅退院におけるカットオフポイントの特定であった．多重ロジスティック回帰分析の結果，FIMの認知スコアが退院先に影響する重要な変数であった．また，ROC曲線分析において，認知スコア23.5点が自宅退院のカットオフポイントであることが明らかになった． 本人担当部分：調査データの収集 共同発表者：林浩之，岩井緑，金田（松岡）紘佳，中島大貴，市川（久保）歩
6. 地域在住高齢者の生活機能に影響を及ぼす上肢機能に関する予備的研究	－	平成27年11月	第74回日本公衆衛生学会（長崎ブリックホール）	本研究の目的は，高次生活機能に影響を与える上肢機能を明らかにすることであった．共分散構造分析の結果，手指巧緻性と知覚機能が高次生活機能に影響を及ぼす要因であることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 発表者：中島大貴
7. 抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する集団料理活動の効果の検討-回復期リハビリテーション病棟における取り組み 第一報-	－	平成28年4月	第17回日本認知症ケア学会大会（神戸国際展示場）	本研究では，回復期リハビリテーション病棟入院中の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対して実施した，集団料理活動の効果の検討を目的とした．その結果，介入群は抑うつ・アパシー・QOLの改善が認められた．集団での活動を通じた受容体験と賞賛による自己効力感の向上が抑うつ・アパシー・QOLの改善につながったと考えられた． 本人担当部分：研究計画，介入 共同発表者：窪優太，加藤美樹，中島大貴，岡村英俊，中澤僚一，長谷川慧，各務真奈，竹田徳則
8. 回復期リハビリテーション病棟入院の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する集団料理活動の持続効果の検討	－	平成28年9月	第6回日本認知症予防学会学術集会（東北大学百周年記念会館）	本研究では，回復期リハビリテーション病棟に入院中の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に集団料理活動を実施し，その持続効果を検討することを目的とした．その結果，料理活動後の持続効果は一部認められたが，抑うつには改善の持続は認められず，活動終了後のフォローアップの必要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画，介入 共同発表者：窪優太，加藤美樹，中島大貴，岡村英俊，中澤僚一，長谷川慧，各務真奈，竹田徳則

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9. 地域在住高齢者におけるPhysical activity scale for the elderlyと加速度計からみた身体活動量の関連	－	平成29年10月	第66回日本農村医学会（沖縄コンベンションセンター）	本研究の目的は，Physical activity scale for the elderly（PASE）と加速度計を用いて高齢者の身体活動量を測定し，その関連を検討することとした。その結果，PASEと総エネルギー消費量の間に有意な相関が認められたが，中高強度の活動時間との間には関連を認めなかった。 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 発表者：中島大貴
10. 集団によるゴムバンド運動が軽度認知障害者の認知機能に与える効果	－	平成29年11月	第76回日本公衆衛生学会（鹿児島県民交流センター）	本研究は，集団ゴムバンド運動実施群（介入群）と対照群を設定し，集団ゴムバンド運動の認知機能への効果を検討した．二元配置分散分析の結果，交互作用は認めなかった．しかし，The Japanese version of Montreal Cognitive Assesmentの得点がカット値以上に改善した者の割合は，介入群で有意に多いことが明らかになった．. 本人担当部分：調査データの収集 共同発表者：渡邉英弘，中島大貴，藤井啓介
11. 季節変動が寒冷地域在住高齢者の身体活動量に及ぼす影響	－	平成30年9月	第73回日本体力医学会（アオッサ・ハピリン）	本研究では，地域在住高齢者を対象に，①季節による身体活動量の変動と②季節による生活活動内容の変化を検討した．多重比較検定の結果，Lifecorderで測定した歩数や低強度の活動時間は冬季に減少し，春季や夏季に増加することが明らかになった．一方で総エネルギー消費量や中強度以上の活動時間に季節変動は認められなかった．Physical activity scale for the elderlyを用いて評価した生活活動は，「屋外での園芸」のみ冬季に減少することが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：中島大貴，渡邉英弘，後藤文彦，加藤美樹，木村大介，冨山直輝，長谷川龍一
12. 入院超高齢患者の抑うつの有無による栄養状態，体組成，認知機能，日常生活動作能力の比較.	－	平成31年2月	回復期リハビリテーション病棟協会第33回研究大会 in 舞浜・千葉（東京ディズニーシー・ホテルミラコスタ）	本研究では，入院超高齢患者の抑うつの有無による栄養状態，体組成，認知機能，ADL能力について比較し，抑うつを有する入院超高齢患者の特徴を明らかにすることとした．その結果，抑うつ群は，チャールソン併存疾患指数が有意に高く，ADL能力の評価指標であるFunctional Independence Measure得点は有意に低かった．その他の項目は，いずれも統計的有意差を認めなかった． 本人担当部分：研究計画，発表資料作成 共同発表者：窪優太，則竹賢人，中島大貴，山田和政
13. 高齢骨折患者におけるPhase angleを用いた栄養状態の評価	－	令和元年11月	第3回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会（静岡県コンベンションアーツセンターグランシップ）	本研究では，高齢骨折患者におけるPAと栄養状態の関係を調査し，PAにおける栄養状態のカットオフ値を算出することを目的とした．解析の結果，PAは栄養障害と有意に関連し（OR: 2.73，95%CI: 1.31-5.67），PAにおける栄養障害のカットオフ値は3.74度（AUC: 0.69，p = 0.004）であることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画，発表資料の作成 共同発表者：窪優太，則竹賢人，中島大貴，藤井啓介，山田和政

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14. 地域在住高齢者におけるコマーシャルメッセージ時間を活用した身体活動促進プログラムの検討	－	令和2年9月	第75回日本体力医学会（https://jspfsm75.society-web.jp/）	本研究では，高齢者においてCM中の歩行または足踏みを促す身体活動プログラムの効果と実行可能性を明らかにすることを目的とした．通常通りの日常生活を送る週（以下，通常週）とCM中の歩行または足踏みを促す週（以下，介入週）の計14日間の測定を実施した結果，通常週に歩数および歩行時間は有意に増加した（p＜0.01）． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共著者：中島大貴，伊藤健一，坪内善仁，藤井啓介，田畑泉
15. 地域在住高齢者の孤独感と作業機能障害の関連性：横断研究	－	令和3年9月	第55回日本作業療法学会（https://www.c-linkage.co.jp/ot55/index.html）	本研究では，高齢者を対象として作業機能障害と孤独の関連性を検討した．孤独の測定には日本語版UCLA孤独感尺度を使用し，作業機能障害の測定にはCAODを使用した．また，孤独に関連する性別や学歴，家族構成等の交絡因子を調査した．共分散分析を行った結果，孤独に関連する交絡因子を調整した後でも，作業機能障害と孤独の関連性が確認された． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：中島大貴，藤井啓介
16. 近赤外分光法（NIRS）による手工芸の基礎的研究：健常若年者を対象とする予備的研究	－	令和3年9月	第55回日本作業療法学会（https://www.c-linkage.co.jp/ot55/index.html）	本研究では，近赤外線分光法を用いて，紙細工活動中の大脳半球前頭部の血流動態を検証した．その結果，ペーパーブロックとロールピクチャの両課題において，TMT partB・ΔTMTと「構成する課題」で左DLPFCとの間に負の相関がみられた（机上課題の遂行時間が短いほど左DLPFCのΔoxy-Hbが増加する傾向を示した）． 本人担当部分：研究計画，発表資料の作成 共同発表者：岩崎智子，大西久男，山形力生，中田修，中島大貴
17. 奈良学園大学におけるコロナ禍の学内実習の紹介② ― 早期体験実習の概要と学生アンケート調査－	－	令和3年10月	第34回教育研究大会・教員研修会（https://orbit-cs.net/34rehatki/registration.html）	本報告では，奈良学園大学で実施した早期体験実習の学内実習の概要と，学生対象のアンケート結果を報告した．早期体験実習は①動画資料等を用いた予習，②動画資料や病院からのライブ中継，③復習という構成とした．実習後のアンケートでは，多くの学生が実習内容を「よく理解した」と回答した．一方で，2年次以降の学外実習に向けた学習面の不安についておよそ半数が「不安」「非常に不安」と回答した． 本人担当部分：研究計画，データ収集，発表資料の作成 共同発表者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩崎智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二
18. 奈良学園大学におけるコロナ禍の学内実習の紹介③ ―地域理学療法・作業療法実習の概要と学生アンケート調査－	－	令和3年10月	第34回教育研究大会・教員研修会（https://orbit-cs.net/34rehatki/registration.html）	本報告では，奈良学園大学で実施した地域実習の学内実習概要とともに学生アンケート結果を報告した．地域実習では，①予習，②学内実習，③復習で構成した．実習後のアンケートでは，地域実習で扱ったテーマについては約90%の学生が理解できたと回答した．訪問・通所事業所のライブ中継は，実際の業務を見学するとともにスタッフ・サービス利用者に質問する機会があり，学生の95%が高く評価した．一方で，3年次以降の臨床実習に関する質問では，「不安」という回答が約50%を占めた． 本人担当部分：調査データの収集，発表資料の作成 共同発表者：滝本幸治，池田耕二，吉川義之，坪内善仁，笹野弘美，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「研究会」 1. 回復期リハビリテーション病棟における認知症を伴う高齢者を対象とした集団活動に関する効果の検討	－	平成27年11月	第12回東海記念病院リハビリテーション研究会（東海記念病院）	本研究では，回復期リハビリテーション病棟入院中の抑うつ・アパシーを呈した認知症高齢者に対する，集団作業活動の紹介と効果を検討した．集団活動実施群（介入群）と集団活動非実施群（対照群）で比較した結果，介入群に抑うつ・アパシーに対する即時的改善が認められたが，持続効果に一定した見解は得られなかった． 本人担当部分：研究計画，介入 共同発表者：窪優太，加藤美樹，中島大貴，岡村英俊，中澤僚一，長谷川慧，各務真菜，竹田徳則
2. 院内デイケアの活動内容と結果報告	－	平成28年11月	第13回東海記念病院リハビリテーション研究会（東海記念病院）	本研究では，東海記念病院で実施されている認知症高齢者を対象にした院内デイケアが，参加者の認知機能に与える影響を明らかにした．介入前後の比較を行った結果，Neuropsychiatric Inventoryに有意な改善が認められ，Mini-Mental State Examinationが維持されていたことから，認知機能の維持，BPSDの改善に有用であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：中島大貴，窪優太，土屋智歩，船戸敦，岡村英俊，加藤美樹
3. 脳血管疾患患者に対する上肢機能訓練について	－	平成29年10月	第14回東海記念病院リハビリテーション研究会（東海記念病院）	本研究では，脳建艦疾患患者の上肢機能訓練に関して最新の知見を文献レビューした．また，東海記念病院で実施されている上肢機能訓練の効果を運動麻痺や上肢筋力の改善から検討した．文献レビューの結果，Bio feedback，電気刺激，課題指向型訓練などが有用であり，これらを取り入れた東海記念病院における介入でも上肢機能訓練が有意に改善していることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成 共同発表者：神村美帆，酒井美幸，長谷川慧，中島大貴

教　育　研　究　業　績　書

令和３年　５月　２１日

氏名　中田　修

研究分野	研究内容のキーワード
高次脳機能障害、身体障害、認知症	脳損傷、在宅生活、テクノロジー

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1）動画を用いた効果的な授業	平成23年10月 ～ 令和2年1月	「高次脳機能障害作業療法学」は高次脳機能障害の基礎知識を学ぶものである。この授業では実際の症状を理解しやすいように，市販されている症状に関する動画や学内に保管されている患者の動画を見ながら解説を加え患者の症状理解が進むように指導を行う。
2）患者に来校してもらい実際の評価の過程を体験	平成23年10月 ～ 令和2年1月	専門科目「日常生活活動」の授業後半では、評価実習を数か月後に控え、より実践的な作業療法手法を学ぶことを目的として3名の脊髄損傷患者に来校していただく。学生はあらかじめADLを中心とした評価項目を検討し評価計画を立て評価手技を練習する。こうすることで実践的な手技が身に付くだけでなく，評価実習に向けた心構えの形成に寄与する。また対象者との接し方や声のかけ方を学ぶことができる。
3）作業療法についての文章や書籍を予め読んでまとめ授業当日グループディスカッションと発表	平成26年4月 ～ 平成27年1月	専門科目「作業療法特論Ⅰ」では、作業療法への理解を深めることを目的に、30名の学生に対してグループディスカッションを主体とした授業を行う。担当教員が指定した書籍の1単元や1人の対象者について書かれたレビューを予め読んでまとめさせておく。授業時間では当日抽選で決まった5～6人を1グループとして30分間書いてあった内容や得た知識、感想や調べても理解できなかったことなどについてディスカッションを行う。最後にグループごとに発表を行う。作業療法についてさまざまな知識が得られるだけでなく、1年生時にすべての学生が自由に討議する機会を提供することで、クラスの凝集性が高まりその後の友人関係の形成に役立ったとの感想が学生から聞かれた。また発表者や書記・司会者も抽選でランダムに決定されるので、全ての学生に何らかの役割が常に与えられるようになっており、自ら主体的に他者と関わる機会にもなったとの感想もきかれた。
4）作業療法に関する文献を抄読し自らレビューを書いて他の学生に解説	平成27年4月 ～ 平成27年7月	専門科目「作業療法特論Ⅱ」では、1，2年生各4～5名が一組となり近隣の介護老人保健施設で、通所している高齢者に対して午後からのレクレーションを企画運営する形式で演習を実施している。担当教員は事前準備や企画書のチェックを行い、当日はリスク管理と終了後のフィードバックを行う。この演習を通して対象者との実践的な関わり方を学ぶだけでなく、１年生は2年生の行動や言動を見ることで今後の具体的な目標設定の一助となり、2年生はリハーサルや当日の進行の中で下級生にも配慮する必要性から自らの上級生としての在り方を自覚することが可能となる。このような学年間の相互作用が作業療法士を目指す学生の成長に貢献すると考える。
5）自らの実習での体験を学会形式で発表	平成27年11月 ～ 令和元年11月	専門科目「作業療法概論Ⅱ」の中で、研究法について教授する。この時期学生は臨床実習で少なくとも1名の患者を対象として治療を体験しているので、シングルケースとして7分のパワーポイントを作成し学会形式で発表会を授業の中で開催した。担当教員は各自の発表終了後1枚ずつのスライドについて、見せ方や、色の使い方、文字数などを細かく指導し、今後の学会発表に寄与するように心がけた。

事項	年月日	概　　要
２　作成した教科書，教材 1）講義用補助教材	平成23年4月 ～ 令和2年2月	「身体障害作業療法Ⅱ」で使用したスライドをカッコ抜きの問題形式に再編成し配布した。学生には授業中に得た知識の自宅での確認が可能との意見が聞かれた。
2）実習に役立つ補助教材	平成27年10月 ～ 令和2年2月	「高次脳機能障害作業療法学」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）で複数の授業の中で取り上げた「代表的な簡易評価バッテリー」の得点の解釈についてまとめたプリントを配布した。学生からは実習でバッテリー結果から患者の状態をどのように解釈すればよいかを判断する際に大いに役立ったとの意見が聞かれた。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）「第2回真庭市高次脳機能障害家族の集い」にて講演会講師	平成23年 3月1日	地域の住民に対する高次脳機能障害への啓蒙活動の一貫として実施された講演会で、「障害のある人の生活上の困難さを楽にしてくれる道具の可能性」というテーマで講演を行った。
2）大阪高次脳機能研究会にて講演	平成24年 3月8日	地域の住民に対する高次脳機能障害への啓蒙活動の一貫として実施された講演会で、高次脳機能障害者に対するテクノロジー支援について講演を行った。
3）大津赤十字病院地域支援病院研修会にて講義の講師	平成24年 11月5日	大津赤十字病院が地域の病院職員や自院の職員を対象として定期的に開催している研修会において講師を務めた。高次脳機能障害者の生活に関して講義を行い、受講者からの質疑に答えた。
4）神戸協同病院院内勉強会にて講師	平成26年 3月10日	院内勉強会に招かれて、注意障害とリハビリテーションというテーマで講義を行った。
5）高次脳機能障害作業療法研究会第36回大会において発表者として講演	平成27年 11月15日	頭部外傷により高次脳機能障害をきたし、在宅生活のさまざまな場面で家族の促しが必要であった症例に対するITを使った介入というテーマで講演し、受講者と議論した。
6）兵庫県活動分析研究会－ＡＤＬ勉強会において講義の講師	平成28年 8月12日	第一線で活躍する作業療法士の集まりである兵庫県活動分析研究会に講師として招かれ、高次脳機能障害について講演を行った。高次脳機能障害を抱える患者の問題点に関して活発な意見交換を行った。
7）2017年度第二回兵庫県作業療法士会 丹波北播磨ブロック勉強会の講師	平成28年 9月20日	兵庫県作業療法士協会が主催する丹波北播磨ブロック勉強会において「前頭前野と高次脳機能障害」というテーマで講義を行った。
8）2018年度第一回兵庫県作業療法士会 丹波北播磨ブロック勉強会の講師	平成29年 8月4日	兵庫県作業療法士協会が主催する丹波北播磨ブロック勉強会において「頭頂連合野のはたらき」というテーマで講義を行った。
9）2019年度第一回兵庫県作業療法士会 但馬ブロック勉強会の講師	平成30年 8月24日	兵庫県作業療法士協会が主催する但馬ブロック勉強会において前頭前野に関してで講義を行った。
10）2019年度第二回兵庫県作業療法士会 丹波北播磨ブロック勉強会の講師	平成30年 9月4日	兵庫県作業療法士協会が主催する丹波北播磨ブロック勉強会において「各脳葉と高次脳機能障害」というテーマで講義を行った。

事項	年月日	概　　要
５　その他 1）神戸総合医療専門学校作業療法士科における教育実績	平成23年4月 ～ 令和2年3月	神戸総合医療専門学校作業療法士科専任教員として以下のような科目を担当した。
「解剖学実習Ⅰ」	平成23年4月 ～ 平成29年7月	「解剖学実習Ⅰ」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、下肢の解剖生理について講義および演習を実施した。人体模型を用いた実践的な講義を行い、個別に口頭試問を行うことで患者の体の構造を理解させる教育効果があった。
「運動学実習」	平成23年4月 ～ 平成23年7月	「運動学実習」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、運動学の基礎的用語について講義し、実際の体の動きや反応をについて講義および演習を実施した。1回ごとに実験テーマや運動課題を与え動作分析や姿勢分析の方法を指導した。健常者と運動の仕組みを理解することで、それと比較した患者の障害を理解させる教育効果があった。
「身体障害作業療法Ⅱ」	平成23年4月 ～ 令和元年7月	「身体障害作業療法Ⅱ」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、脊髄損傷・関節リウマチ・ＡＬＳ等の神経筋疾患について講義を行った。各疾患の特性と作業療法における治療的介入について最新の知見を取り入れながら講義を行うことで、実習だけでなく免許取得後も実践において役に立つ教育を心がけた。
「解剖学実習Ⅱ」	平成23年10月 ～ 令和2年1月	「解剖学実習Ⅱ」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、大脳の解剖生理について講義および演習を実施した。実物大の脳模型を用いた実践的な講義を行い、大脳の構造及び機能が理解しやすいようにスライドでは図表を多用し、患者の大脳の構造および機能を理解させる教育効果があった。
「高次脳機能障害作業療法学」	平成23年10月 ～ 令和2年1月	「高次脳機能障害作業療法学」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、高次脳機能障害の基礎知識から作業療法における治療的介入までを教授した。自らの研究成果や学会で得た知識を積極的に取り入れながら講義を行ったことで、高次脳機能障害に対する幅広い知識を理解させる教育効果があった。
「日常生活活動」	平成23年10月 ～ 令和2年1月	「日常生活活動」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、ＡＤＬの概念や障害との関連について教授した。授業の後半では脊髄損傷の当事者3名に来校していただきＡＤＬ評価を体験する機会を提供した。この授業を通して知識だけでなく実践力を身につけるという教育効果があった。
「作業療法概論Ⅱ」	平成23年6月 ～ 令和元年11月	「作業療法概論Ⅱ」（専門科目、３年次配当、6月、8月、11月に集中講義として開催、必修2単位）において、研究法ならびに管理運営について講義した。管理運営については教科書を中心とした制度的な基礎知識を教授した。研究法については、作業療法における研究の意義と方法論を具体的に指導するだけでなく、学会発表を想定した模擬発表会を行った。このように将来の研究機会に備えた実践的な演習を通して作業療法の発展に寄与できる人材の育成を行った。
「作業療法特論Ⅰ」	平成26年4月 ～ 平成27年1月	「作業療法特論Ⅰ」（専門科目、1年次配当、通年、必修４単位）において、作業療法の基礎知識、ノートの取り方や具体的な学習方法について教授した。また早期臨床体験として近隣の老人保健施設や養護施設に出向き障害のある対象者と関わる機会を得た。このように学校生活に対する細かな指導や実際の現場を体験することで、早期から作業療法士を目指す学生としての自覚を促すことができ、専門学校での積極的な学びを実践するという効果があっ

事項	年月日	概　　要
「作業療法特論Ⅱ」	平成27年4月 ～ 平成28年1月	「作業療法特論Ⅱ」（専門科目、2年次配当、通年、必修４単位）において、作業療法の文献抄読や、過去の事例報告の再検討、自らの実習体験の報告などを行った。授業は3～4人のグループ単位でディスカッションしたのち全体での討議を行うという形式をとり、各学生が他の学生の発言を参考にしながら自らの考えを述べる機会が持てるように心がけた。また近隣の老人保健施設で1年生と合同で4～5人１組でレクリエーションを企画実施した。このような取り組みを通して、徐々に作業療法に対する
「作業療法特論Ⅲ」	平成28年4月 ～ 令和2年1月	「作業療法特論Ⅲ」（専門科目、3年次配当、通年、必修４単位）において、実習準備と実習後のフォローアップを行った。また臨床実習報告会や、実習地で得た知識や技能をお互いに開示しあう勉強会なども定期的に開催した。またこの授業では国家試験対策も実施し、講師からの講義だけでなく、自分たちで小グループを組んでの過去問題の解答集作成や、国試新規問題の作成会を開催した。講師からは新規問題や過去問など実践的な小テストを1週間に数回開催するとともに、週に1回の面談を実施することで学生の進度に合わせたきめ細やかな指導が行われた。そのような指導を通して全国平均を上回る国家試験合格率を達成できた。
２）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻における教育実績	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻助教として以下のような科目を担当。
「作業療法評価学Ⅰ（身体）」	令和2年4月 ～ 現在に至る	「作業療法評価学Ⅰ（身体）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、身体障害分野における作業療法評価の理論的側面を教授した。この授業を通して知識だけでなく対象者との良好な関係を築くための心得を身につけるという教育効果があった。
「作業療法評価学演習Ⅰ（身体）」	令和2年9月 ～ 現在に至る	「作業療法評価学演習Ⅰ（身体）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、身体障碍分野における作業療法評価の実践指導を実技を交えて教授した。学生に対して実技試験を実施しその場でフィードバックを行うことで、より実践力を養うという教育効果があった。
「高次脳機能障害作業療法（総論）」	令和3年4月 ～ 現在に至る	「高次脳機能障害作業療法（総論）」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）において、作業療法士として関わる高次脳機能障害の基礎知識を教授した。高次脳機能障害の一般的な特徴と患者への対応を円滑に行う上で基礎となる各症状の基本的な特性、各疾患と病態に対する適切な評価と援助の実践に関する理解を深める。事例などを視聴覚教材で示すことで、より具体的な障害像を理解するという教
「高次脳機能障害作業療法学Ⅱ（各論）」	令和3年9月 ～ 現在に至る	「高次脳機能障害作業療法学Ⅱ（各論）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において脳血管障害や頭部外傷などによる高次脳機能障害の各種検査の具体的方法を学ぶと共に、評価や結果の解釈とその思考の流れ等を学ぶ。高次脳機能障害作業療法学Ⅰ（総論）で修得した知識を基盤として、具体的な高次脳機能障害の評価方法や結果の解釈に関して、グループごとの検討会を通してより理解を深め
「作業療法特論Ⅴ（高次脳機能障害）」	令和3年9月 ～ 現在に至る	「作業療法特論Ⅴ（高次脳機能障害）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、高次脳機能障害領域の作業療法における最新の知見や臨床現場で用いられる治療・支援方法など、作業療法実践で注目されているテーマを紹介して知見を広げるために、具体的な症例を介して1人の対象者に対する総合的な見方ができるようになることを目指した。いくつかの症例を通してより実践力を養うとい
「日常生活支援学Ⅱ（各論）」	令和3年9月 ～ 現在に至る	「日常生活支援学Ⅱ（各論）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、対象者の日常生活活動の向上に向けた支援が検討できるよう、一般的な日常生活動作の各種実践方法と分析技能について演習を交えて教授した。作成した視聴覚教材を用いて分析を行いながら実践することで、より効果的な動作解析のプロセスを学ぶという教育効果があった。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 1）修士（理学）	平成8年3月	金沢大学第170251号 「修士論文名：昆虫インスリン様遺伝子の探索」
2）作業療法士免許	平成13年4月	名簿登録番号第24842号
3）博士（保健学）	平成29年3月	神戸大学第226号 「博士論文題名：Extraction and Classification of Difficulties Faced by Patients with Brain Injury Living at Home While Using Everyday Technology」 「和名：在宅生活をおくる脳損傷者が日常生活機器使用時に直面する困難さの抽出と分類」
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 なし		

事項	年月日	概　　要
４　その他 なし		

事項			年月日	概　　要
研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） なし				
（学術論文） １）認知症の人に優しい家電テレビのリモコン使用が混乱しないように(査読付)	共著	平成26年4月	福祉介護　テクノプラス 7 ， 4 ， pp14-17	認知症者のEveryday technology（ET）使用状況調査を行ったところ，テレビのリモコンは使用頻度が高くリモコン操作に何らかの問題を抱えている認知症者が多いことが明らかとなった．さらにその困難さの質的内容を分析するとボタンの多さが問題で起こる間違いがみられた．そこでわれわれはボタン数が少なく形状が単純であるリモコンを用いて，さらに作成したリモコンカバーをこれに装着し（改良型リモコン），認知症者7名に約2週間使用してもらった．その結果改良型リモコンはボタン押し間違いが減少し利用に混乱が生じないことが確かめられた． A4判 全4頁 本人担当分：共同して在宅調査を行い，リモコンカバー作成過程の議論に参加した． 共著者：長尾徹、種村留美、野田和惠、中田修、相良二朗
２）Extraction and Classification of Difficulties Faced by Patients with Brain Injury Living at Home While Using Everyday Technology（在宅生活をおくる脳損傷者が日常生活機器使用時に直面する困難さの抽出と分類）（博士論文)(査読付)	共著	平成29年3月	Bulletin of Health Sciences Kobe,32,pp17-29,2017 （神戸大学）	脳損傷者の日常生活機器（以下ET）使用の困難さの特徴を明らかにするために脳損傷者と健常者各25名を対象としET使用困難さを抽出した。得られた困難さから質的分析手法に基づき分類表を作成した。得られたカテゴリーは脳機能との関連で理解可能であった。ABI者特有なカテゴリーは遂行機能と関連している一方で、注意関連のカテゴリーは健常者でもみられた。本分類表により、脳損傷者のET使用困難を具体的に理解でき、脳機能と関連させることが可能となる。 A4判 全13頁 本人担当分：調査及び結果の分析と論文執筆 共著者：OSAMU NAKATA 、RUMI TANEMURA 、KAZUE NODA、TORU NAGAO
３）Everyday technology use among older adults in Sweden and Japan: A comparative study. （スウェーデンと日本の高齢者間での日常生活機器使用の比較研究） （査読付）	共著	平成29年4月	Scandinavian Journal of Occupational Therapy. Vol. 27 P.1-P.11	日常生活機器の使用状況を調査する質問紙であるEveryday Technology Use Questionnaire（ETUQ）を用いて、日常生活機器使用のさまざまな側面をスウェーデンと日本の高齢者で比較検討した。統計学的分析によってＥＴを使う挑戦のレベルは両群で同じであったが、グループレベルの関連性はスウェーデンの高齢者の方が幾分か高く、ＥＴ使用に対する自覚的能力はスウェーデンの高齢者の方が有意に高かった。スウェーデンと日本の高齢者におけるＥＴ使用の違いや共通性はＥＴＵＱを使って明らかにすることができる。 本人担当分：日本の在宅高齢者の自宅での調査およびデータの入力と取りまとめを行った。 共著者：Malinowsky C, Nygård L, Tanemura R, Nagao T, Noda K, Nakata O, Sagara J, Rosenberg L, Asaba E, Kottorp A
４）Difficulties in Everyday Technology use of the people with acquired brain injury living at home comparing controls （在宅生活をおくる頭部外傷者の日常生活機器使用での困難さの対照群との比較）	共著	平成31年1月	Asian Journal of Occupational Therapy.Vol.15 P63-P68	日常生活機器は現代の生活の中心になっているが、その使用は認知障のある人に課題をもたらす。そこで本研究では、後天性脳機能障害を持つ人々が日常生活機器を使用する際に知覚される困難のレベルを説明しようと試みた。自覚的な困難のレベルと認知障害との相関関係を評価したところ、後天的脳機能障害を持つ対象者22人は使用している機器の比率と神経心理検査結果の間に負の相関の傾向が観察され、特に遂行機能障害の度合いと支援を必要としている機器の割合との間に強い負の相関が確認された。 本人担当分：調査及び結果の分析と論文執筆。 共著者：OSAMU NAKATA 、RUMI TANEMURA 、TORU NAGAO、KAZUE NODA、JIRO SAGARA.
５）The Characteristics of Perceived Difficulties in Everyday Technology Use among Individuals with Acquired Brain Injury Compared to That among Controls.（対照群と比較した脳損傷者の日常生活機器使用の特徴）	共著	令和2年10月	Journal of Behavioral and Brain Science, 10, 410-419.	脳損傷者は日常生活での機器使用時にさまざまな問題を抱えている。そこで本研究では機器使用時の困難さの特徴を対照群との比較において明らかにしようとした。脳損傷者は対照群と比較して使用している機器の使用は優位に少なく、さまざまな困難が生じたとき、彼らはETを独立して管理することができず、介護者の支援を必要としていることが明らかになった。 本人担当分：調査及び結果の分析と論文執筆。 共著者：Nakata, O. , Tanemura, R. , Nagao, T. , Noda, K. and Sagara, J.
６）在宅で生活する重度の高次脳機能障害者に対するAssistive Technology支援	共著	令和3年3月	医療福祉情報行動科学研究，第8巻、pp39-46	脳損傷者が抱える生活上の困難さを、シングルケースを通して明らかとし、テクノロジーを使ってそれらの困難さに対応することで、良好な効果を得たことを報告した。本研究では対象者の困難さが軽減されただけでなく、介護する家族の負担も軽減することが確認された。 共著者：中田　修，種村　留美，相良　二朗，野田　和恵，長尾　徹
７)外傷性脳損傷者の遂行機能障害とEveryday Technologyの使用状況との関連,(原著)	共著	令和4年3月	医療福祉情報行動科学研究，第8巻、pp39-46	外傷性脳損傷者は日常生活機器の使用にさまざまな困難さを抱えていることが知られている。外傷性脳損傷者において障害されることが多く、日常生活との関連が指摘されている遂行機能と日常生活機器使用児の困難さの傾向について報告した。調査の結果、遂行機能障害が重度の場合、困難さを感じずに使用できる日常生活機器が少なくなり、その対応の仕方は家族からの支援に頼っていることが明らかとなった。 共著者：中田　修，種村　留美，相良　二朗，野田　和恵，長尾　徹

事項			年月日	概　　要
８）Livelihood support by assistive technology based on a home visit survey（訪問調査に基づくAssistive Technologyを用いた支援）	共著	令和4年4月	Studies in Psychology, Volume 43, Issue 1 Pages 206-226	日本は今や超高齢化社会にあり、2025年までに4～5人に1人が75歳以上になると見込まれてる。テクノロジーは高齢者を中心に絶えず進歩しており、認知機能の低い高齢者は対応できていない。本研究ではこれらの問題を在宅生活を送る人々への調査を通して明らかにしたうえで、テクノロジーを用いた対応について具体例を挙げながら論じている。 Toru Nagaoa ,Rumi Tanemura,Kazue Noda,Jiro Sagara & Osamu Nakata
９）地域在住成人における実行機能質問紙の利用可能性の検討－客観的行動評価との関連－	共著	令和5年3月	医療福祉情報行動科学研究,vol.10,pp17-27	実行機能は神経心理学検査によって評価されるが，これらは検査に時間を要する等の不便さもあるため，簡便に行える質問紙検査の作成が試みられている。実行機能質問紙において，年齢Low群，MoCA-J高成績群において有意な相関のある項目を多く認め，利用可能性が比較的高いことが示唆された。対象者側の要因（年齢や全般的な認知機能の程度）と使用する質問紙検査側の要因を考慮することで，実行機能質問紙を客観的行動評価のスクリーニングとして利用できる可能性があると考えた。 共著者：岩﨑智子，中田修，山形力生，中島大貴，大西 久男

事項			年月日	概　　要
（その他） 「報告書」 1）認知に問題を有する高齢者のテクノロジーを用いた在宅生活継続の検討	共著	平成23年4月	ユニベール財団研究助成金報告書　2009	現代生活においてはあらゆる場面で日常生活機器（Everyday Technology：ET）の使用は欠かすことができず，新たなETの開発も日々行われている．今回の調査ではさまざまな認知機能の低下に伴って，多くのETの使用に困難さをきたすことが明らかになった．それら使用の困難さへの対応として今回の場合には，①使いにくくなったETに対してシールやメモを貼り付けるあるいはマスクしてしまうなどで操作手順を視覚的に示しながらそのまま使い続ける，②より簡便に使えそうなETに買い換える，③新たなATを使って使いにくさを援助するという３つに大きく分けられた． A4判　全20頁 共著者：中田修、種村留美、野田和惠、長尾徹、相良二郎
「国際学会」 1）Difficulties in Everyday Technology use after brain injury: assessment using the Everyday Technology Use Questionnaire（ETUQ）（脳損傷後のEveryday Technology（ＥＴ）使用の困難さ―Everyday Technology Use Questionnaire（ＥＴＵＱ）を用いた調査）	―	平成23年6月	6th the International Society of Physical and Rehabilitation Medicine World Congress- （San Juan）	頭部外傷受傷後在宅生活を送っている高次脳機能障害のあるケース10名について、日常生活において日常生活機器（ET）使用時にどのような困難さがあるかを明らかにすることを目的とする。各種の神経心理検査を実施しETの使用状況調査は自宅でEveryday Technology Use Questionnaire（Rosenberg et al,2009）の日本版（ETUQ-Japan）を使って実施した。ETUQ-Japan全101アイテムのうちで使用しているものは29～36アイテムであった。日常生活場面での問題点の原因を、展望記憶障害（洗濯機からの出し忘れ等）、注意障害（トイレの水の流し忘れ等）、遂行機能障害（リモコンの操作手順が判らない等）、等に分類可能であった。 共著者：Osamu Nakata, Jiro Sagara, Peter Bonjtje, Kazue Noda, Toru Nagao, Jun Tanemura, Rumi Tanemura
2）The comparison of everyday technology（ET）usage according to the severity of executive dysfunction（遂行機能障害の重症度に基づいたEveryday Technology（ＥＴ）使用の困難さの比較）	―	平成26年6月	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists Congress 2014 - （Yokohama）	遂行機能障害とET使用状況との関連を明らかにすることを目的として，高次脳機能障害者を遂行機能障害の重症度で2群に分け，それぞれのET使用状況を比較した．使用ET数の平均はA群38.6±7.6品目,B群30.8±7.4品目（ｔ検定，ｐ<0.05），困難有りET数の平均は各13.9±6.4品目,15.1±4.8品目（n.s.）であった．さらに困難ありETを，独力使用 と援助使用とに分けると，A群とB群の各独力使用割合はA群78.3%/B群31.1%，各援助使用割合は A群21.7%/B群69.6%であった．A群がB群より有意に使用ET数が少なかったことから，ET使用数と遂行機能障害の重症度との関連が示唆された． 共著者：Osamu Nakata, Rumi Tanemura, Toru Nagao, Kazue Noda, Jiro Sagara
3）Comparison of everyday technology use between persons with dementia and cognitive impairment.（認知症者と高次脳機能障害者とのeveryday technology使用の比較）	―	平成29年10月	ASEAN Conference on Health Ageing - （Kuching）	認知症者と高次脳機能障害者のEveryday Technology （ET）使用状況をETUQを用いて調査し比較検討を行った。平均使用ET数は認知症者が28.4±8.9、高次脳機能障害者の35.1±8.2よりも有意に少なかった。困難がありながら使っているETの割合は認知症者が15.5%に対して高次脳機能障害者は40.2%と有意に高かった。使わなくなったETの平均数は認知症者が13.4個に対して高次脳機能障害者は1.4個だった。このことから,高次脳機能障害群は困難さがありながらもtry and errorで何とか使い続けられるのに対して,認知症群では認知機能の低下により今まで使えていたETが徐々に使えなくなり、困難となった場合には使うことを止めてしまったと考えられる。 共著者：Osamu Nakata, Rumi Tanemura, Toru Nagao, Kazue Noda, Jiro Sagara

事項			年月日	概　　要
「国内学会」 １）記憶障害例の日常生活における困りごと	—	平成23年6月	第45回日本作業療法学会ー（埼玉） 日本作業療法学会抄録集 45：272	受傷後約16年間高次脳機能障害に対するリハビリテーションを受けていなかった自宅生活を営む男性を対象に，日常生活機器（Everyday Technology 以下ET）に焦点をあててその使用状況の調査を行った．さらにそこで明らかになった日常生活での困りごとのなかで記憶障害が原因と考えられるものを抽出し，家族のニードを踏まえて支援方法をとして鍵や携帯電話の「置き忘れ」に対して探し物リモコンを提供した。さらに職場までバス利用が不安との家族の訴えに対して、バス会社に患者の顔写真を提供しどの運転手でも対応してもらえるようにすることで、安定した通勤が可能となった。 共著者：中田修、生方志浦、種村留美
２）高次脳機能障害者のEveryday Technology （ET）使用時の困難さとその支援の検討	—	平成23年11月	第35回日本高次脳機能障害学会学術総会ー（鹿児島） 日本高次脳機能障害学会学術総会プログラム・講演抄録　35：223	ポスター優秀賞受賞 頭部外傷受傷後在宅生活を送っている高次脳機能障害のあるケース10名について，神経心理学的検査所見と日常生活において問題なく使用できるアイテムの数との関連性を検討した．高次脳機能障害者のET使用では，手順が複雑でET操作が困難な場合もあるが，操作そのものは可能だが「し忘れ」による失敗（照明器具のスイッチやトイレの水を流すなど）もみられた．これらの中で介護者の促しによって可能な場合，個々にカスタマイズされたETによる支援を行う必要がある． 共著者：中田修、種村留美、長尾徹、野田和惠、種村純
３）高次脳機能障害者と認知症者における日常生活機器（Everyday Technology）の使用状況の比較	ー	平成24年6月	第46回日本作業療法学会ー（宮崎） 日本作業療法学会抄録集 46：661	Everyday Technology （ET）の使用状況を，在宅生活を送っている高次脳機能障害者（15名）と認知症者（28名）で比較しその差を検討した．使用頻度の高いETは高次脳機能障害群と認知症群で共通していたが，認知症群では困難さがありながら使っているETの数が高次脳機能障害症群に比べて少ないが，使用を中止しているETは高次脳機能障害群より多くなっている．このことから，高次脳機能障害群は困難さがありながらもtry and errorで何とか使い続けられるのに対して,認知症群では認知機能の低下により今まで使えていたETが徐々に使えなくなり，困難となった場合には使うことを止めてしまったことが伺える． 共著者：中田修，種村留美，長尾徹，野田和惠，相良二朗
４）高次脳機能障害者の在宅生活でのEveryday Technology（ET）使用における困りごとの分類	ー	平成24年11月	第36回日本高次脳機能障害学会学術総会ー（宇都宮） 日本高次脳機能障害学会学術総会プログラム・講演抄録　36：272	高次脳機能障害者の在宅生活における困難さへの介入の一助となることを目的に，在宅生活を送る高次脳機能障害者24名に対しEveryday Technology（ET）使用時の困難さを聴取し抽出された困りごとを質的に分類した．得られた第一次カテゴリーは，「うっかりし忘れる」，「本人が必要性を感じていない」，「途中で他のことをすると忘れる」など56種類であった。第二次カテゴリーでは、「判断を誤ったり，思考がうまく働かない」，「忘れる」，「同じことをし続ける」，「うっかりし間違う」，「注意がそれてうまくいかない」，「操作をし間違う」など 10項目に分類することが可能であった． 共著者：中田修、種村留美
５）　高次脳機能障害者におけるEveryday Technology（ET）の使用状況	ー	平成25年6月	第47回日本作業療法学会ー（大阪） 日本作業療法学会抄録集 47：683 -683	日々の暮らしにおいてEveryday Technology(ET)はごくありふれたものであり，それらのおかげで我々の生活は便利になったが，ほとんどのETは障害のない人を対象に制作されている．在宅生活を営む高次脳機能障害者25人を対象にETの使用状況と使用の際の困難さを，健常者25名との比較を通して検討した．患者群の使用ET数はcontrol群に比べて少なく，さらにその少ないETを使用する際にもcontrol群と比較して困難さが多い．ETを使用する機会が少なく使用する際に困難さが多いことは日常生活での様々な制約となると考えられる 共著者：中田修，野田和惠，長尾徹，種村留美
６）高次脳機能障害者のトイレの流し忘れに対する促しトイレシステムによる支援	ー	平成25年11月	第37回日本高次脳機能障害学会学術総会ー（松江） 日本高次脳機能障害学会学術総会プログラム・講演抄録　37：280	在宅生活を送る高次脳機能障害者は，健常者と比較してEveryday Technology（以下ET）使用に様々な困難がある．またET操作そのものは可能だが記憶や注意などの障害から家族の促しが必要な場合があり，そのことが家族の介護負担感を増加させることがある．今回記憶と遂行機能に重度の障害を有する高次脳機能障害者の在宅調査から得たトイレの流し忘れという問題に着目し「促しトイレシステム」を導入することで，機能障害は持続しながらトイレの水の流し忘れが改善し家族の介護負担感が軽減させることが可能となった 共著者：中田修、種村留美、相良二朗

事項			年月日	概　　要
７）高次脳機能障害者と認知症者と健常者の日常生活機器（Everyday Technology）の使用状況の比較	ー	平成27年9月	第49回日本作業療法学会ー（神戸） 日本作業療法学会抄録集(CD-ROM)、 49th、ROMBUNNO.P2463G	ETの使用状況を,在宅生活を送っている健常群及び高次脳機能障害群と認知症群で比較しその差を検討した．日常生活において高次脳機能障害者は健常者に比べて使用ET数が少なく，認知症者のそれはさらに少なかった．認知症者は金銭管理，移動関連，テレコミュニケーションに含まれるすべてのETの使用数が有意に少くこのことは認知症者の社会参加の低さを示している．また高次脳機能障害者は，使用時に困難なET数が他の群より多い一方，使用を中止したETが他群より少ないことから，認知症者のように困難さを感じてET使用を止めるのではなく，困難さがありながらもETをなんとか使い続けていると考えられる． 共著者：中田修、種村留美、長尾徹、野田和惠
８）自閉スペクトラム症児に対する馬介在療法の効果	ー	令和3年3月	日本看護研究学会第34回近畿・北陸地方会学術集会	医師により自閉スペクトラム症と診断された5名に対して馬介在療法がその心理的側面に及ぼす効果を検討した。POMS2下位尺度の怒り-敵意、活気-活力、およびTMD（総合的気分状態得点）で有意差が認められた。POMS2マニュアルによれば、TMD得点が高い場合「現在，情緒機能に関する問題を抱えている」とされる。従ってTMD得点が馬介在療法後に有意に低下しているということは、自閉スペクトラム症児の情緒機能の改善に馬介在療法が効果的であったことを示唆している。ASDの中核症状は社会性の障害であり、リハビリテーション場面だけでなく、日常生活において対人関係や情緒面でストレスを抱えやすいとされ、馬介在療法は自閉スペクトラム症児の社会性の改善の一助になる可能性がある。 共著者：中田修、笹井久嗣
10）近赤外分光法（NIRS）による手工芸の基礎的研究：健常若年者を対象とする予備的研究	ー	令和3年9月	第55回 日本作業療法学会	紙細工の認知的治療効果について，健常若年者を対象に近赤外分光法(NIRS)を用いて検証した．あわせて，ワーキングメモリと実行機能との関連も検討した．分散分析の結果では，課題ごとの5領域でのΔoxy-Hbについては，統計的差異は認められなかったが，部位と検査間の関連性の検討で，両活動において，ワーキングメモリや実行機能を反映する指標とされるTMT B・TMT(B-A)と，「構成する」課題で左DLPFCとの間に有意な負の相関がみられた． 共著者：岩崎智子，大西久男，山形力生，中田修，中島大貴
11）奈良学園大学リハビリテーション学科におけるコロナ禍の学内実習の紹介①―実習専用ホームページの開設と運用方法の紹介―	ー	令和3年10月	第34回教育研究大会・教員研修会	令和2年度のコロナ感染拡大下において，学内実習へと切り替えた2つの実習に関して、各実習を円滑・有意義に進めるため臨床実習専用ホームページ（以下，HP）を開設し運用した効果を考察した。保護者向けの説明や、学生向けコンテンツを作成したことに対して、学生へのアンケートを実施した結果、学生からは良好な感想を得た。学内実習では同じ教材・内容を用いるので個々の学生の学習進捗状況や理解度を把握する上でHPを通じた学習指導は有用と感じられた。
12)手工芸が健常成人の脳活動に及ぼす効果：実行機能の個人差に着目したfNIRS研究	ー	令和4年9月	第56回 日本作業療法学会（京都）	作業療法で治療の手段として用いる手工芸の認知的効果について健常成人を対象に NIRSを用いて検証した．実行機能Low群とHigh群でΔoxy-Hbの総量を比較した分析の結果，両活動とも，Low群＞High群となった．Low群ではペーパーブロックの構成課題でのみ左右DLPFCが選択的に賦活されている点，ロールピクチャーの構成課題にでは3領域においてHigh群より有意に賦活している点等が特徴的であり，課題の難易度と認知的負荷が関連していると考えた．紙細工活動を治療として選択する際には，個人の実行機能に適した活動を選択することで，より効果的な治療として活用できる可能性があると考えられる。 共同発表：岩崎智子，大西久男，山形力生，中田修

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和 5 年　3月　31日

氏名　野田　優希

研究分野	研究内容のキーワード
スポーツリハビリテーション、運動器系理学療法	スポーツリハビリテーション、足関節、競技復帰

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 (1) 講義の工夫	令和元年4月 ～ 現在に至る	講義では可能な限りイラストやビデオを多用し，分かりやすいように工夫している．また様々な資料等で出てくる単語の統一にも気を配り，学生が混乱しないように努めている． さらに，教科書的な内容の教授の後には，実際の症例に重ね合わせ，机上での勉強と臨床でのギャップを極力少なくするように努めている．また，国家試験対策も盛り込んでいる．
(2) 実験・実習の工夫	令和元年4月 ～ 現在に至る	基礎技術の習得には可能な限り時間を掛け，その後，習得した知識をどのように臨床応用するかイメージしやすいように、実際に臨床で経験した患者を例に挙げ実習している。また、エコーや骨模型を用いることで、軟部組織の動きや関節運動がイメージしやすいよう工夫している。
２　作成した教科書，教材 1）頭蓋療法を含むファンクショナルポジショナルリリースと促通位リリースのアプローチ（翻訳）（ポジショナルリリーステクニック）	平成30年9月25日	翻訳にあたって、できるだけ原文に忠実に翻訳した。また専門的な表現や特殊な言い回し、分かりにくい表現の場合は、可能な限り読者に伝わりやすいよう言葉を選び翻訳した。
2）教科書にはない敏腕PTのテクニック　臨床実践　スポーツ傷害膝の理学療法	令和2年12月10日	執筆にあたって、臨床で有用なテクニックや評価法等を自分の臨床経験を踏まえ記載した。多くの実際の患者さんの写真や治療場面の写真を含めることで、臨床に応用するイメージが湧きやすいよう工夫した。
3）PT入門　イラストでわかる運動器障害理学療法	令和3年1月25日	足関節捻挫に関する章を執筆した。執筆にあたって、現在のゴールドスタンダードとされる評価法や最新の情報を海外文献を引用して多く盛り込んだ。また、イメージしやすいよう多くの図や写真を掲載した。
4）シンプル理学療法学シリーズ　運動器障害理学療法学テキスト　改定第３版	令和3年8月15日	筋・軟部組織性障害の概論について執筆した。執筆にあたっては、臨床において担当することの多い疾患を中心に、基本的な病態と評価、治療プログラムを記載した。学生から新人にも理解しやすいようできるだけ図や写真を多くし、明瞭な記載を心がけた。
5）実践リハ評価マニュアルシリーズ　症例動画から学ぶ臨床姿勢分析　～姿勢・運動連鎖・形態の評価法	令和4年1月1日	足関節から上行性運動連鎖による膝への影響について臨床症例をイメージし執筆した。実際の症例の画像を多く含め、また運動連鎖についても丁寧に説明することで、二次的な障害が生じるメカニズムについて理解しやすいよう記述した。

3　教育上の能力に関する大学等の評価	平成30年8月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において 奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション科 助教 担当授業科目：「早期体験実習」「基礎ゼミⅡ」「スポーツ医学」「運動学演習」「スポーツ障害理学療法学」「筋骨格障害理学療法学Ⅱ（各論）」「理学療法計画論」「理学療法評価実習」「総合臨床実習Ⅰ（理学療法）」「総合臨床実習Ⅱ（理学療法）」「客観的臨床能力演習（理学療法）」「理学療法卒業研究」可と判定
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）富士通９人制バレーボールチームトレーナー	平成21年7月 ～ 現在に至る	富士通9人制バレーボールチームのトレーナーとして、週１回練習に帯同し、全国大会・近畿大会などの試合は計100回以上帯同した。選手のテーピングやウォーミングアップ、トレーニング指導およびアスレティックリハビリテーションを担当した。
2）実習指導実績	平成21年4月1～平成30年3月31日	藤田整形外科スポーツクリニック・リハビリテーション部において、毎年２～３名の専門学校生や大学生の評価実習・長期実習指導を担当した。患者さんとのコミュニケーションをとることを積極的に促し、机上の知識と臨床での現象をいかに分かりやすく結びつけるかを重要視して指導を行った。

5　その他 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科における教育実績	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科における専任教員（助教）として、以下のような科目を担当した。
	令和元年9月 ～ 現在に至る	「スポーツ医学」 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の助教として「スポーツ医学」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須1単位）を担当した。講義では可能な限りイラストや実際の患者さんの写真またはビデオを多用し,分かりやすいように工夫している．また専門的な言葉や表現については分かりやすいよう説明を加え、学生の理解の向上に努めている． 教科書的な内容を実際の症例に重ね合わせ，机上での勉強と臨床でのギャップを極力少なくするように努めている．実技を含む講義に関しては、教科書的な内容に加え、臨床において役立つコツや工夫についても経験をふまえ伝えるようにしている。
	令和元年9月 ～ 現在に至る	「基礎ゼミⅡ」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の助教として「基礎ゼミⅡ」（共通教育科目、1年次配当、半期、必須1単位）を担当した。少人数のゼミ形式で1年次生が大学の学習に慣れ、4年間の大学生活を有意義に送るための基礎を修得できるよう授業を組み立てた。最終的には一人一つのテーマを設定し、講義ノートの取り方、文献資料の検索、学術的な文章の読み方などについて、ゼミ形式の演習を通じて学修し、最終的には1人1テーマで学習した内容をまとめてプレゼンテーションを行った。それによって、学生に大学における能動的な学びを理解させ、慣れさせる教育効果があった。
	令和元年9月 ～ 現在に至る	「早期体験実習(理学療法)」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の助教として担当の「早期体験実習(理学療法)」（専門科目、1年次配当、半期、必須1単位）を担当した。教員引率による臨地での見学実習、および学内でのセミナーを通して、理学療法の役割と位置付けを学修させ、他職種の専門性と相互の連携を理解させ、理学療法士への動機付けと学習意欲を高める効果があった。 なお、令和2年度と3年度は学内にて実習を実施した。臨床のオンライン見学、視聴覚教材を用いたリハビリテーションにおける診療チームの役割を学習することで、理学療法の役割と位置付け、他職種の専門性と相互の連携を理解させる教育効果があった。
	令和2年4月 ～ 現在に至る	「運動学演習」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の助教として担当の「運動学演習」（専門基礎科目、2年次配当、半期、必須1単位）を担当した。リハビリテーション評価の基礎となる運動の解析が行え、解析結果を解釈できるように授業を行った。それによって、学生に、運動学を臨床へ応用する方法とその重要性を理解させる教育効果があった。

	令和3年9月 ～ 現在に至る	「客観的臨床能力演習（理学療法）」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「客観的臨床能力演習（理学療法）」（専門科目、3年次配当、半期、必須2単位）を担当した。演習では学生同士で行う患者役、療法士役を担う演習内容の動画撮影を行った。巡回指導による細やかな指導と、学生間でのフィードバック、動画を振り返ることによる自己評価を通して、今まで学習してきた理学療法学を実践力として養わせた。これによって、学生に、理学療法学と実践の理学療法を結びつける効果、自己の苦手部分の理解と克服の効果があった。
	令和3年9月 ～ 現在に至る	「理学療法計画論」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の助教として「理学療法計画論」（専門科目、3年次配当、半期、必須2単位）をオムニバス形式で5回分の授業を担当した。講義では、実習でよく担当するであろう疾患を中心にとりあげ、実習に出た際に活用できる知識となることを意識させた資料作成を学生へ指導した。
	令和3年9月 ～ 現在に至る	「スポーツ障害理学療法学」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の助教として「スポーツ障害理学療法学」（専門科目、3年次配当、半期、必須1単位）をオムニバス形式で7回分の授業を担当した。講義では、スポーツ障害が生じるメカニズム、個人要因、環境要因に分け多面的な視点で評価する必要性について講義した。また、テーピングの実技も取り入れ実践を意識した内容とした。
	令和3年9月 ～ 現在に至る	「筋骨格障害理学療法学Ⅱ（各論）」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の助教として「スポーツ障害理学療法学」（専門科目、3年次配当、半期、必須1単位）をオムニバス形式で5回分の授業を担当した。講義では、教科書的な知識だけでなく実際のエピソードや臨床でのコツなどを交え、机上の知識と臨床像が繋がるよう意識した。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 1）理学療法士免許	平成19年5月10日～ 現在に至る	第65175号：厚生労働省
2）認定理学療法士（スポーツ理学療法）	平成27年4月1日～ 令和2年3月31日	第9-80号：日本理学療法士協会
3）認定理学療法士（スポーツ理学療法）更新	令和2年4月1日～現在に至る	第9-560号：日本理学療法士協会
4)臨床実習指導者講習会修了	令和3年6月6日～現在に至る	第2021-368-044：厚生労働省
5)日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー	令和3年10月1日～ 現在に至る	登録番号：0446174：公益財団法人　日本スポーツ協会
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1)藤田整形外科スポーツクリニック　理学療法士	平成21年4月 ～ 令和元年3月	常勤スタッフとして、10年間勤務した。整形外科疾患を有する小学生から高齢者まで幅広い年齢層を対象にリハビリテーション業務に従事した。週末は、トレーナー契約を結んでいる実業団チームへ帯同し、選手のコンディショニング、アスレティックリハビリテーション、トレーニング業務に従事した。

４　座長・司会・シンポジウム等 1)第９回日本運動器理学療法学術大会	令和３年９月	ミニシンポジウムにて、「急性足関節捻挫に対する重症度評価指標と復帰時期との関連」というテーマで講演を行った。
2)第３１回 奈良県理学療法士学会	令和４年７月	教育講演6にて、畿央大学の福本貴彦先生を講師にむかえ司会を行った。
3)第１０回日本運動器理学療法学術大会	令和４年９月	ポスター演題、一般演題8「膝関節2」にて座長を担当した。
4)第３３回日本臨床スポーツ医学会学術集会	令和４年１１月	日本スポーツ理学療法学会共催シンポジウム 「足関節靱帯損傷の予防に向けた機能評価」にて「足関節外側捻挫後の関節機能評価」というテーマで講演を行った。
5)保健医療学学会第１２回学術集会	令和４年１２月	「学生演題発表」にて座長を担当した。
6)第9回日本スポーツ理学療法学会学術大会	令和４年１２月	シンポジウム４「Performance Enhancement」にて「慣性センサを用いた片足連続ホッピング時のReactive Strength Index （RSI）測定の試み」というテーマで講演を行った。
５　その他 1)JWBAウェイクボード全日本選手権 in 芦屋　コンディショニングスタッフ	令和元年11月3日	大会に、コンディショニングスタッフとして参加し、選手のパフォーマンス向上および傷害予防を目的にコンディショニングの指導を行った。
2)臨床実習指導者講習会　世話人	令和3年11月4日～5日	講習会のファシリテーターとして業務に従事した（白鳳短期大学開催）
3)臨床実習指導者講習会　世話人	令和3年11月20日～21日	講習会のファシリテーターとして業務に従事した（奈良学園大学主催 WEB開催）
4)臨床実習指導者講習会　世話人	令和4年3月5日～6日	講習会のファシリテーターとして業務に従事した（畿央大学主催 WEB開催）
5)臨床実習指導者講習会　世話人	令和4年10月15日～16日	講習会のファシリテーターおよび講師として業務に従事した（白鳳短期大学大学主催 WEB開催）
6)臨床実習指導者講習会　講師	令和4年10月15日～16日	講習会の講義5の講師として業務に従事した（白鳳短期大学大学主催 WEB開催）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・	発行又は	発行所，発表雑誌等	概　　要
（著書） 1)頭蓋療法を含むファンクショナルポジショナルリリースと促通位リリースのアプローチ（翻訳）（ポジショナルリリーステクニック）	共著	平成30年9月	ガイアブックス	「頭蓋療法を含むファンクショナルポジショナルリリースと促通位リリースのアプローチ」 　翻訳にあたって、できるだけ原文に忠実に翻訳した。また専門的な表現や特殊な言い回し、分かりにくい表現の場合は、可能な限り読者に伝わりやすいよう言葉を選び翻訳した。 第1版　全頁253頁、 監訳者　森　彩子、小幡　太志 共著者　横山　茂樹、◎野田　優希 本人担当部分121-150頁
2)教科書にはない敏腕PTのテクニック　臨床実践　スポーツ傷害膝の理学療法	共著	令和2年12月	文光堂	「膝関節のオーバーユース障害の要因を評価し改善に導く」 　執筆にあたって、臨床で有用なテクニックや評価法等を自分の臨床経験を踏まえ記載した。多くの実際の患者さんの写真や治療場面の写真を含めることで、臨床に応用するイメージが湧きやすいよう工夫した。 第1版　全頁200頁 監修者　松尾　善美 編集者　橋本　雅至 共著者　橋本　雅至、◎野田　優希 本人担当部分124-140頁
3)PT入門　イラストでわかる運動器障害理学療法	単著	令和3年1月	医歯薬出版株式会社	「足関節の運動器障害 － 足関節外側靭帯損傷」 　足関節捻挫に関する章を執筆した。執筆にあたって、現在のゴールドスタンダードとされる評価法や最新の情報を海外文献を引用して多く盛り込んだ。また、イメージしやすいよう多くの図や写真を掲載した。 第1版　全頁291頁 監修者　上杉　雅之 編集者　横山　茂樹 単著　◎野田　優希 本人担当部分229-244頁
4)シンプル理学療法学シリーズ 運動器障害理学療法学テキスト	共著	令和3年8月	株式会社　南江堂	「筋・軟部組織性障害の概論」 　執筆にあたっては、臨床において担当することの多い疾患を中心に、基本的な病態と評価、治療プログラムを記載した。学生から新人にも理解しやすいようできるだけ図や写真を多くし、明瞭な記載を心がけた。 改訂第3版　全頁369頁 監修者　細田　多穂 編集者　高柳　清美 共著者　橋本　雅至、◎野田　優希、三谷　保弘 本人担当部分207-216頁
5)実践リハ評価マニュアルシリーズ　症例動画から学ぶ臨床姿勢分析　～姿勢・運動連鎖・形態の評価法	単著	令和4年1月1日	ヒューマン・プレス	足関節から上行性運動連鎖による膝への影響について臨床症例をイメージし執筆した。実際の症例の画像を多く含め、また運動連鎖についても丁寧に説明することで、二次的な障害が生じるメカニズムについて理解しやすいよう記述した。 第１版　全頁217頁 編集者　吉田　一也 単著　　◎野田　優希 本人担当部分188-199頁

（学術論文） 1）中学野球選手における Functional Movement Screenと投球障害の関係（査読付）	共著	平成28年4月	「体力科学」第65巻第2号 P.237-P.242	兵庫県内の中学生に対し，Functional Movement Screenを実施し，そのScoreと投球障害の関係を分析した．投球障害を経験している者はScoreが低く，投球障害の経験のない者はScoreが高い結果となった． 共著者：内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，◎野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，中山 良太，武田 雄大，平川 理映子，武藤 貢平，大久保 吏司，古川 裕之，藤田 健司 （本人担当部分：測定とデータ分析）
2）Single Leg Up Downテストと体重支持指数（Weight Bearing Index）の関連（査読付）	共著	平成28年12月	「理学療法科学」第31巻第6号 P.791-P.794	中学野球選手202名に我々が考案したSingle Leg Up Downテスト(以下SLUDテスト)と体重支持指数(以下WBI)の関連について検討した．20cm台からのSLUDテスト遂行の可否が下肢筋力のスクリーニングテストとして有用であることが示された． 共著者：内田 智也，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，◎野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，大久保 吏司，藤田 健司（本人担当部分：測定）
3）足関節内反捻挫受傷後の初診時における片脚負荷テストと圧痛部位，スポーツ復帰時期の関連性（査読付）	共著	平成29年1月	「日本臨床スポーツ医学会誌」第25巻第1号 P.59-P.63	足関節捻挫後の復帰時期を予測するために片脚負荷テスト(OLLT)を実施した．OLLTは片脚立ち，片脚カーフレイズ，片脚ホップを実施した．受傷後早期にどの動作が可能かによって復帰時期に有意な差がみられた．OLLTのレベルによりスポーツ復帰時期を予測できることが分かった． 共著者：◎野田 優希，古川 裕之，松本 晋太朗，小松　稔，内田 智也，石田 美弥，佃 美智留，横山 茂樹，藤田 健司（本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）
4）　性差によるバレーボールの傷害発生の特徴（査読付）	共著	平成29年1月	「日本ヘルスプロモーション理学療法」第6巻第4号 P.197-P.200	バレーボールの傷害調査を行い，男女間の傷害発生の傾向を分析した．バレーボールでは足部，腰部，肩関節，下腿において発生する傷害が男女で異なっており，コンディショニング指導の際は性差による傷害発生の特徴を考慮する必要性が示された． 共著者：◎野田 優希，古川 裕之，松本 晋太朗，小松　稔，内田 智也，石田 美弥，佃 美智留，藤田 健司（本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）
5）投球動作のEarly Cocking期における軸足股関節の運動学・運動力学的特徴（査読付）	共著	平成29年1月	「日本臨床スポーツ医学会誌」第25巻第1号 P.16-P.23	中学野球選手51名を対象に，良好なEarly Cocking期の体重移動における軸足下肢運動の運動学的及び運動力学的な特徴を明らかにすることを目的とした．Early Cocking期の良好な体重移動を遂行するには軸足股関節屈曲位を保持するべく股関節伸展筋群の活動を意識することが重要だと考えられた． 共著者：内田 智也，大久保 吏司，松本 晋太朗，小松 稔,◎野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，古川 裕之，藤田 健司（本人担当部分：測定）

6）中学野球選手の投球動作におけるEarly Cocking期の下肢関節・体幹動作の不良と上肢関節トルクの関係（査読付）	共著	平成29年8月	「日本臨床スポーツ医学会誌　」第25巻第3号 P.333-P.338	良好な投球動作を遂行するには，Early Cocking期（以下，E.C.期）の良好な下肢関節・体幹動作が重要とされる．そこで本研究はE.C.期の下肢関節・体幹動作の良否が上肢関節トルクに及ぼす影響を検討した．E.C.期の下肢関節・体幹動作の不良は，上肢関節へのストレスを増大させる一因になると考えられ，運動力学的にも障害発生リスクの高い投球動作であることが示唆された． 共著者：内田 智也，大久保 吏司，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，◎野田 優希，石田 美弥，佃美 智留，藤田 健司（本人担当部分：対象の測定）
7）投球動作におけるフットコンタクト時の軸足股関節屈曲角度と骨盤回旋の関係（査読付）	共著	平成29年8月	「日本臨床スポーツ医学会誌　」第25巻第3号 P.339-P.345	不良な投球動作の一つに「投球方向への早期の骨盤回旋」が挙げられ，その動作はFoot Contact(FC)での軸足股関節屈曲角度と関係があると考えられている．そこで，本研究はFCの軸足股関節屈曲角度と骨盤回旋との関係を検討することを目的とした．不良な投球動作の典型例である投球方向への骨盤の早期回旋を修正するにはFCにおける軸足股関節屈曲角度に着目することが重要であると考えられた． 共著者：内田 智也，大久保 吏司，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，◎野田 優希，石田　美弥，佃 美智留，藤田 健司（本人担当部分：対象の測定）
8）女性バレーボール競技者の　ポジションによる 傷害発生の特徴　―スパイカー,セッター,レシーバーの3つのポジションによる検討―（査読付）	共著	平成29年10月	「理学療法科学」第32巻第5号 P. 621-P.625	30歳未満の女性バレーボール競技者 290人 638 件を対象にバレーボールのポシ゛ションによる傷害発生の特徴を明らかにし，傷害予防やコンディショニング指導の一助とすることを目的とした.疾患はポジションにより特徴がみられた.傷害予防やコンディショニング指導の際には,ポジションによる傷害発 生の特徴を考慮する必要性が示唆された. 共著者：◎野田 優希，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，内田 智也，石田 美弥，佃 美智留，藤田 健司（本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）
9）足関節内がえし捻挫受傷後の圧痛部位を考慮した片脚負荷テストとスポーツ動作開始時期の関連性（査読付）	共著	平成30年1月	「日本臨床スポーツ医学会誌」第26巻第1号 P.54-P.59	足関節外側靭帯損傷と診断され，練習完全復帰までフォロー可能であった202名を対象に，圧痛部位を考慮した片脚負荷テスト（以下，OLL-Test）とスポーツ動作開始時期との関連性を検証した．圧痛部位を考慮したOLL-Testにより，足関節の荷重機能の障害度とスポーツ動作開始時期の関連性をより詳細に把握できる可能性を示唆した． 共著者：◎野田 優希，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，内田 智也，石田 美弥，佃 美智留，横山茂樹，藤田健司（本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）

10）足関節内反捻挫後のスポーツ動作開始時期に関連する因子の検討　−交絡因子を考慮した多変量解析による検討−（査読付）	共著	平成30年2月	「医療福祉情報行動科学」第5巻 P.11-P.17	練習完全復帰までフォロー可能であった202名，209足を対象とした．交絡因子を投入して多変量解析を行った結果，スポーツ動作開始時期を予測する変数として，片脚負荷テスト（以下，OLL-Test）の判定結果と圧痛部位が選択された．よって，OLL-Testの判定結果と圧痛部位は独立してスポーツ動作開始時期の予測に重要であることが分かった．さらに，交互作用項（OLL-Testの判定結果×圧痛部位）を多変量解析に投入した結果，OLL-Testの判定結果と圧痛部位，交互作用項が有意な変数として選択されたことから，OLL-Testの判定結果と圧痛部位は互いに影響し合ってスポーツ動作開始時期を調整することが分かった．　　共著者：◎野田 優希，柿花 宏信，前田 吉樹，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，内田 智也，佃 美智留，藤田 健司（本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）
11）Quick and simple test to evaluate severity of acute lateral ankle sprain（査読付）	共著	令和3年7月	Asia-Pacific Journal of Sports Medicine, Arthroscopy, Rehabilitation and Technology 25 P.30-P.34	我々は、足関節捻挫受傷後早期にどれだけ荷重できるかがスポーツ動作開始時期に影響すると考え、独自の機能テスト（以下、片脚負荷テスト）を実施し、スポーツ復帰時期の目安としている。しかしながら、本テストが足関節捻挫後の状態を適切に反映しているかどうかは不明のため、靭帯損傷の程度および他のスコアリングスケールとの関連性について検討した。受傷後３日以内に当院を受診した足関節外側靭帯I度又はII度損傷と診断された50名（年齢15.6±3.0歳）に対し、片脚負荷テストを施行し、超音波検査による前距腓靭帯の損傷タイプ、客観的・主観的評価質問票との関連性について検討した。片脚負荷テストは、靭帯損傷の程度および他のスコアリングスケールと有意な相関を認め、足関節捻挫後の状態を簡便に調べる機能テストとして使用可能であることが示唆された。 ◎野田 優希，堀部 秀二，平松 久仁彦，高尾 理樹夫，藤田 健司 （本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）

12）荷重量と下肢アライメントを規定した足部内側縦アーチ測定法の信頼性（査読付）	共著	令和4年3月	医療福祉情報行動科学研究，第9巻P.47-P.54	足部内側縦アーチ（MLA）の評価は傷害発生を予防するうえで非常に重要である。スポーツ時は片脚荷重と非荷重が繰り返されることから、これらの条件を反映したMLAの評価が重要であるといえる。本研究の目的は，新たな測定方法の信頼性を検証することである。対象は，健常成人男性３名６足とし、90%荷重時と10%荷重時の2条件において，MLAを測定し級内相関係数を算出した。また，Bland-Altman分析によって系統誤差の有無を検証した。さらに，高い信頼性を確保するためにはICC≧0.7を満たすことが必要とされているが、その測定回数をSpearman-Brownの公式を用いて算出し，ICC（1，k）を求めた。Bland-Altman分析の結果，系統誤差は認められなかったことから，本測定法の測定値に含まれる誤差は，偶然誤差のみであり，測定を繰り返すことで高い信頼性を期待できることが分かった。また、本測定法は6回繰り返し測定を行うことで，信頼性の高い測定方法となることが分かった。 ◎野田 優希，城野 靖朋，藤田 信子，橋本 雅至 （本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）
13）Single-leg loading test performed after acute lateral ankle sprain in competitive athletes（博士論文）	単著	令和4年3月	大阪府立大学	足関節外側捻挫受傷後3日以内の240名を対象とし、独自の足関節機能テストである片脚負荷テスト（以下、SLL test）の有用性について検討した。SLL testは、片脚立位、片脚ヒールレイズ、片脚ホップから構成されており、それぞれの課題動作の可不可によって４つのレベルに分類するものである。本テストは、各種スコア、および超音波検査による靭帯評価と有意な相関を認め、かつ重回帰分析においても本テストが有意な変数として選択されたことから、足関節外側捻挫後の簡易的なスクリーニングテストとして使用できることが分かった。また、本テストを用いることでジョギング開始時期およびスポーツ復帰時期のを予測可能であることも明らかとなった。A4判　全20頁
14)理学療法士を育む【場】づくりの着想に関する一考察	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要，第15集P.15-P.20	現在の理学療法士の現場教育や人材育成の課題と限界を提示し、新たな枠組みの必要性を指摘する。筆者らが着想する新たな枠組みとは、理学療法士の発達や成長を後押しする“理学療法士を育む【場】づくり”である。これは理学療法士の経験学習が促進されやすい【場】（雰囲気や組織風土からなる空間）をつくりあげるというものである。しかし、現在、理学療法士の経験学習を促す【場】の特性や、それを成立させるための条件は明らかになっていない。これらを解明することができれば、理学療法士を育む【場】づくりが可能となり、現場教育や人材育成に貢献できると考える。本枠組みの実現可能性は十分あり、これからの現場教育、人材育成の課題の一つとなる。 共著者：池田 耕二，田坂 厚志，城野 靖朋，吉川 義之，野田 優希 （本人担当部分：論文作成を行った）

15)各施設における臨床参加型臨床実習モデルの提案ー施設の特徴を活かした経験の積ませ方ー	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要，第15集 P.1-P.14	臨床実習が行われる医療施設と介護施設、訪問リハビリテーションに大別しながら、各施設の理学療法の特徴や役割を整理し、臨床実習の内容や方向性を確認した。次に、学生に対する経験の積ませ方を考慮しながら、各施設における臨床参加型臨床実習モデルを構築し、併せて臨床実習におけるキーポイントを提示した。 共著者：池田 耕二，滝本 幸治，城野 靖朋，吉川 義之，野田 優希，野中 紘士，辻下 守弘（本人担当部分：論文作成を行った）
「解説」				
1）慢性足関節不安定性(Chronic Ankle Instability; CAI)に対する固有感覚トレーニングの有効性とその課題	共著	平成28年9月	「Sportsmedicine」第183巻 P.9-P.14	慢性足関節不安定症について固有感覚に対する文献のレビューおよびその課題について述べた．また臨床で実践可能な評価トレーニングについても記載した． 共著者：◎野田 優希，竹之下秀樹，横山 茂樹（本人担当部分：本文作成，資料収集）
2）動作・運動計測機器の活用法　下肢荷重検査	共著	平成30年4月	医療と検査機器・試薬 第41巻P.83-P.88	下肢荷重検査の臨床における活用法について説明した．重心と足圧中心の違いについて説明した．また，実際の患者を症例として提示し，身体機能評価と重心動揺・足圧分布から患者の機能低下を推察する臨床思考について述べた． 共著者：◎野田 優希，瀬戸川 大(本人担当部分：本文作成，資料収集)
「国内学会発表」				
1）バレーボール競技者の傷害調査(第2報)傷害発生率と性差について	―	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会（愛知）	2007年4月から2011年10月までに当院を受診したバレーボール競技者の傷害調査を行い，男女間で傷害発生部位が異なるか否か，また各部位ごとの発生傷害に違いがみられるかについて傷害発生率をもとに検討した．肩関節，腰部，足部において男女間で違いがみられた．試合の流れの違いが，今回の疾患別傷害発生率に男女間の違いとなって表れたのではないかと考えられた． 発表者：◎野田 優希，古川 裕之，福岡 ゆかり，松本 晋太朗，小松 稔，内田 智也，藤田 健司（本人担当部分：データ分析，学会発表）
2）当院における足関節靭帯損傷の復帰傾向　初診時の足関節機能テストからジョグ開始時期・練習完全復帰時期は予測可能か	―	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（神奈川）	当院で行っている初診時の足関節機能テスト（Ankle Functional Test：AFT）とジョグ開始時期,練習完全復帰時期の関係,およびAFTにおけるレベル別のジョグ開始時期と練習完全復帰時期の相関関係を分析した．足関節捻挫後にAFTを実施することである程度の復帰時期を予測できることが示された． 発表者：◎野田 優希，内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，石田 美弥，佃 美智留，古川 裕之，藤田 健司（本人担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
3）SLUDテストと体重支持指数(Weight Bearing Index)の関連について	―	平成26年10月	第25回日本臨床スポーツ医学会学術集会（東京）	投球動作は運動連鎖に基づく全身運動であり，下肢筋力不足による投球フォームの乱れは投球障害発生の一因となる．下肢筋力の評価法としてSLUDテストを考案した．SLUDテストが競技特性を踏まえた投球障害のスクリーニングテストとなる可能が示唆された． 発表者：内田 智也，小松 稔，松本 晋太朗，◎野田 優希，石田 美弥，大久保 吏司，古川 裕之，藤田 健司（本人担当部分：測定）

4）当院における足関節靭帯損傷後の復帰傾向	—	平成26年10月	第25回日本臨床スポーツ医学会学術集会（東京）	足関節靭帯損傷後，内側に圧痛を認める選手は外側のみの選手よりも重症であり復帰が遅れる印象がある．受傷後早期の足関節機能と圧痛部位から復帰時期を分析した．ジョグ開始時期，練習復帰時期は全ての群間で有意な差があり受傷後早期の足関節機能により復帰時期に差が生じることが示された．圧痛部位では復帰時期に有意な差がなかったことから，復帰時期を考える際足関節機能が重要であることが示唆された． 発表者：◎野田 優希，内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，石田 美弥，佃美知留，古川 裕之，藤田 健司（本人担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
5）Early cocking期の動作不良がその後の投球動作に及ぼす運動力学的影響	—	平成27年10月	第26回日本臨床スポーツ医学会学術集会（兵庫）	良好な投球動作を遂行するためにはEalry cocking期（E.C期）の軸足股関節を使った体重移動が重要となる．体重移動の可否により対象を良好群と不良群に分けた．不良群は球速の増大に伴い肩関節内旋トルク及び肘関節内反トルクが増大した．よって，E.C期の体重移動において股関節屈曲を意識させることが重要だと考えられた． 発表者：内田 智也，小松 稔，松本 晋太朗，◎野田 優希，石田 美弥，古川 裕之，大久保 吏司，藤田 健司（本人担当部分：対象の測定）
6）当院における肩関節前方脱臼に対する治療成績	—	平成27年10月	第26回日本臨床スポーツ医学会学術集会（兵庫）	肩関節前方脱臼に対して鏡視下Bankart法と鏡視下Bankart & open Bristow法を行った症例の治療経過，競技復帰について術式による違いを検討した．両術式ともに同様の回復過程を示し，競技復帰時期に術式の違いは認められなかった． 発表者：古川 裕之，松本 晋太朗，◎野田 優希，小松 稔，内田 智也，石田 美弥，佃 美智留，藤田 健司（本人担当部分：対象の治療，測定）
7）投球動作におけるステップ側の下肢筋力と膝関節動作及び肩関節・肘関節トルクとの関係	—	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会（北海道）	投球動作は軸足による並進運動及びステップ足を軸とした回転運動によって構成され，良好な投球動作を獲 得するためには，安定した下肢・体幹動作が重要となる．投球動作におけるステップ側の下肢筋力と膝関節 動作及び肩関節・肘関節トルクの関係を検討した．ステップ足の膝伸展筋力の筋力不足はフットプラント以降のスムーズな膝関節屈曲動作を阻害し，上肢に過 剰なストレスを与える投球動作に繋がることが示唆された． 発表者：内田　智也，松本　晋太朗，小松　稔，◎野田 優希，石田　美弥，佃　美智留，古川　裕之，大久保　吏司，藤田　健司（本人担当部分：測定）

8）当院における上腕骨小頭OCDに対するMosaicplastyの治療成績	—	平成28年10月	第27回日本臨床スポーツ医学会学術集会（千葉）	OCDの診断を受けMosaicplastyを施行し練習復帰までフォロー可能だった男性20例を対象とした．Mosaicplasty後の練習復帰は，諸家の報告と比べ早期に可能だった．また，今回の結果では特に屈曲可動域について有意な改善が見られた．術後急性期は愛護的な可動域訓練を行うが，術後3ヶ月までに積極的な可動域訓練を行うことで改善が可能だったと考えられる． 発表者：小松 稔，松本 晋太朗，内田 智也，◎野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，古川 裕之，藤田 健司（本人担当部分：対象者の治療とデータ入力）
9）足関節内反捻挫受傷後における初診時の片脚負荷テストとスポーツ復帰時期の関連性	—	平成29年1月	第22回スポーツ傷害フォーラム（大阪）	当院で行っている初診時の片脚負荷テスト(One Leg Loading Test: OLL-Test)とジョギング開始時期,スポーツ復帰時期の関係を分析した．OLL-Testは足関節障害の重症度とスポーツ動作再開時期の関連性を把握できる有用なテストであることが示唆された． 発表者：◎野田 優希，内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，石田 美弥，佃美知留，古川 裕之，藤田 健司（本人担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
10）投球動作におけるステップ側下肢筋力と身体重心速度および肩関節内旋トルクの関係	—	平成29年1月	第22回スポーツ傷害フォーラム（大阪）	上肢優位の不良な投球動作の一例に「膝の縦割れ」というステップ動作が挙げられ，大腿四頭筋の筋力不足はその一因であると考えられる．そこで，本研究はその根拠を示すべく，ステップ側下肢筋力と身体重心加速度および肩関節内旋トルク（SIRT）との関係を定量的に検討した．ステップ側下肢筋力不足は「膝の縦割れ」と表現される投球動作に繋がり，投球障害のリスクファクターになり得ることが示された． 発表者：内田 智也，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，◎野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，大久保 吏司，藤田 健司（本人担当部分：対象の測定）
11）投球動作における“体の開き”の評価基準の検討	—	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	早期に骨盤・体幹の回転運動が開始する動作，いわゆる“体の開き”は不良な投球動作であるが統一した基準はない．そこで，本研究はその評価基準を統一化する一助となるべく，いわゆる“体の開き”に関連があるとされるEarly Cocking期（E.C.期）の軸足動作と骨盤回旋のタイミング（TPR）との関連を検討した．軸足股関節屈曲角度と骨盤回旋のタイミングを評価することで“体の開き”を評価することが出来る可能性があ示唆された． 発表者：内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，◎野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，古川 裕之，大久保 吏司，藤田 健司（本人担当部分：対象の測定）

12）投球動作におけるステップ脚膝関節の力学的仕事量と肩関節トルクの関係	―	平成29年5月	第9回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会（北海道）	投球中の肩関節ストレスの軽減には，良好な下肢関節動作が重要となる．そこで，本研究はFoot Contact(FC)以降のステップ脚膝関節の力学的仕事量と肩関節トルクの関係について検討した．ステップ脚膝関節伸展筋力は良好な投球動作獲得に寄与し，FC以降の不十分な大腿四頭筋の遠心性筋発揮は肩関節ストレスを増大すると考えられた. 発表者：内田 智也，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，◎野田 優希，藤田 健司（本人担当部分：対象の測定）
13） 足関節捻挫受傷後に実施した片脚負荷テストの妥当性の検証	―	令和元年10月	第30回日本臨床スポーツ医学会学術集会（神奈川）	我々は、足関節捻挫症例に対し、独自の機能テスト（以下、片脚負荷テスト）を実施し、スポーツ復帰時期の目安としている。本テストと靭帯損傷の程度および他のスコアリングスケールとの関連性について検討した。片脚負荷テストは、靭帯損傷の程度および他のスコアリングスケールと有意な相関を認め、足関節捻挫後の状態を簡便に調べる機能テストとして使用可能であることが示唆された。 発表者：◎野田 優希,藤田 健司,古川 裕之,松本 晋太朗,小松 稔,内田 智也,佃 美智留,土定 寛之,平松 久仁彦,堀部 秀二（本人担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
14）足関節外側捻挫後の片脚負荷テスト　捻挫既往との関連	―	令和2年10月	第31回日本臨床スポーツ医学会学術集会（オンライン開催）	我々は、足関節捻挫受傷後早期に重症度判定のため、独自の機能テスト（以下、片脚負荷テスト）を実施しており、本テストと靭帯損傷の性状、客観的・主観的評価質問票と関連していたことを報告した。しかしながら、片脚負荷テストと捻挫既往との関連は不明である。片脚負荷テストは、初回群、既往群共に靭帯損傷の性状、客観的・主観的評価質問票と関連があり、捻挫の既往に関係なく使用可能なスクリーニングテストであることが示された。 発表者：◎野田 優希,藤田 健司,古川 裕之,松本 晋太朗,小松 稔,内田 智也,佃 美智留,土定 寛之,平松 久仁彦,堀部 秀二（本人担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
15） 筋腱振動刺激の圧力の信頼性と圧力値フィードバックの有効性について	―	令和3年2月	第1回物理療法部門研究会（Web）	本研究は筋腱振動刺激の圧力を被刺激部と刺激部の圧力センサーにてそれぞれ記録し、異なる振動周波数における圧力の信頼性について検討した。また、圧力センサーの値をフィードバックし、その効果についても検討した。本研究の結果から、刺激部の圧力は視覚的にフィードバックされており,全ての条件で高い信頼性を示した。しかし、被刺激部の圧力は信頼性が低く、特に振動が加わると信頼性は著しく低下することが明らかになった。 発表者：城野靖朋，吉川義之，◎野田 優希，神里巌，辻下守弘(本人担当部分：対象の測定)

16）筋腱振動刺激圧力の安全性に関する検討	—	令和3年10月	第28回物理療法学会学術大会（Web）	本研究は筋腱振動刺激を安全に実施することを目的に、主観的な疼痛閾値以下の最大限の圧力と、それらを繰り返し実施した際の信頼性について検討した。対象は健常成人9名の上腕二頭筋腱とし、2回の連続したセッションを行った。本研究の結果から、振動がある場合のセンサーからの圧力はセッション間で偶然誤差であった。このことから、本研究で用いた方法は、振動刺激を疼痛閾値以下で制御するパラメーターとして有効だと考えられる。 発表者：城野 靖朋，吉川 義之，◎野田 優希，神里 巌，辻下 守弘(本人担当部分：対象の測定)
17）足関節外側捻挫後の片脚負荷テスト −ジョギング開始時期およびスポーツ復帰時期との関連−	—	令和3年11月	第32回日本臨床スポーツ医学会学術集会（オンライン開催）	我々は、足関節捻挫受傷後早期に重症度判定のため、独自の機能テストを実施している。本研究では、片脚負荷テストとジョギング開始時期およびスポーツ復帰時期との関連性について検討した。対象は、受傷後3日以内に当院を受診し、足関節外側靭帯損傷と診断された244名（平均年齢15.3±2.5歳）に対し、初診時に片脚負荷テストを実施した。初診時の片脚負荷テストのレベルによるジョギング開始時期およびスポーツ復帰時期の差を、Steel-Dwassの多重比較法を用いて検討した。多重比較検定の結果、ジョギング開始時期およびスポーツ復帰時期は片脚負荷テストのレベル間で有意な差がみられ、レベルが上がるほどジョギング開始時期、スポーツ復帰時期は早かった。受傷後早期に実施した片脚負荷テストのレベル判定結果が、ジョギング開始時期、スポーツ復帰時期のひとつの指標となる可能性が示唆された。 発表者：◎野田 優希,藤田 健司,古川 裕之,松本 晋太朗,小松 稔,平松 久仁彦,堀部 秀二（本人担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
18）異なる運動課題が反応時間の学年間の違いに及ぼす影響	—	令和3年12月	第8回 日本地域理学療法学会学術大会（Web）	本研究では中高生の神経機能の学年間の違いを明らかにすることを目的し、サッカー部所属の男子中高生31名（中学1年7名、2年7名、3年9名、高校1年8名）を対象にボタン押し、歩き始め、跳躍の運動課題で反応時間を計測した。その結果、ボタン押しのような焦点的な運動ではなく、歩きはじめや跳躍といった全身運動の反応時間に学年間の有意差がみられた。さらに跳躍でみられた反応時間の学年間の違いは、前運動時間の違いを反映している可能性があり、全身的な運動における動き始めるまでの神経系の情報処理プロセスは、中高生においても発達過程にあることが示唆された。 発表者：城野 靖朋，◎野田 優希，藤田 信子，三笘 康之，橋本 雅至 (本人担当部分：対象の測定)

19) 足関節外側捻挫の既往がステップ動作のpremotor timeに与える影響	—	令和4年7月	第31回 奈良県理学療法士学会（Web）	足関節外側捻挫後，姿勢制御能の低下や，腓骨筋の反応時間の遅延などによりパフォーマンスの低下が生じることが報告されている．本研究の目的は，足関節外側捻挫の既往がサイドステップ（以下，SS）とクロスオーバーステップ（以下，CS）のpremotor time（以下，PMT）に与える影響を検討することである．対象は，本学園サッカー部所属の男子中高生35名とし、足関節外側捻挫の既往を有する者（以下，既往群）と，足関節外側捻挫の既往の無い者（以下，コントロール群）に分類した．全身反応時間の課題はSSとCSとし，全身反応時間課題のPMTは，Fz成分について課題開始信号の直前500msec区間の平均値を基準とし，LEDライト点灯から3SD以上変位したタイミングとした．7回のPMTの平均値を算出した．既往群においてSS時のPMTが遅延しており、足関節外側捻挫の既往者によりSSの情報処理に中枢性の変容が生じている可能性が示唆された． 発表者：野田 優希，城野 靖朋 （本人担当部分：対象の測定，データ分析，学会発表）
19)中高一貫校の軟式野球部のコンディショニングに対する意識向上を目的とした アクションリサーチの実践	—	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（奈良）	アクションリサーチを用いたスポーツ現場の障害予防を実践した報告は見当たらない。そこで、本手法を用いて、コンディショニングに対する意識の向上を目的とした。対象は対象は奈良学園登美ヶ丘中学校・高等学校の軟式野球部の部員21名および監督とした。チームのコンディショニングに対する意識についてアンケート調査し、その結果を受けてウォーミングアップの提供および指導を行った。介入による意識や行動の変化を捉えるためにアクションリサーチの手法を用いて分析した。コンディショニングに対する生徒の意識は、介入により一旦低下したが、介入方法を修正することで再び向上した。介入に際しては、メニューの目的をしっかり伝えること、チームの練習時間によってメニュー変更可能であるものにすること、さらに習得度に合わせ段階的に提供することでコンディショニングに対する取り組みを促すことができることが示唆された。 発表者：野田優希、寄能彩未、寺岡舞、橋本晃樹、池田耕二 （本人担当部分：介入の実施，データ分析，学会発表）

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年　3月　31日

氏名　　岩﨑　智子

研究分野	研究内容のキーワード
健康科学　人間医工学　心理学	作業療法学　脳高次機能学　リハビリテーション科学 健康福祉工学　認知脳科学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
(1)早期体験実習における臨地での指導	令和元年8月	奈良学園大学リハビリテーション学科 授業科目：早期体験実習（1年次 理学療法・作業療法） 本実習は外部の医療施設に赴き見学を通して学習を深めるものでり,その準備・運営の補助に携わった．学生は約20グループに分かれ,奈良県総合リハビリテーションセンターを含む3施設を見学する．当該施設には,本学教員が実習期間中常駐し,施設内での指導を行う．当施設内にて,県営福祉パークを担当し,福祉用具・機器について説明と指導を担当した．学生に対し臨床的な実践を踏まえた指導を行い理解を深めることができた．
(2)オンデマンド・ライブ配信を用いた学内 見学実習の補助	令和2年8月 令和3年8月 令和4年8月	奈良学園大学リハビリテーション学科 授業科目：早期体験実習（1年次 理学療法・作業療法） 本実習は本来外部の医療施設に赴き見学を通して学習を深めるものであるが，令和2年度からは新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて,動画教材やライブ配信を活用した学内実習となった．新たな準備(遠隔講義用機器や環境の整備)の他,運営,講義・演習中のファシリテーターの補助,事前・事後セミナーの補助を行った．
(3)オンデマンド・ライブ配信を用いた学内 地域理学療法実習・作業療法実習の補助	令和2年9月 令和3年9月 令和4年9月	奈良学園大学リハビリテーション学科 授業科目：地域理学療法実習・作業療法実習（2年次 理学療法・作業療法） 本実習は本来外部の介護保険施設等に赴き見学を通して学習を深めるものであるが，新型コロナウイルス感染症拡大により,動画教材やライブ配信を活用した学内実習となった．その準備(遠隔講義用機器や環境の整備)・運営(遠隔実習中のオンラインツールの管理等),講義・演習中のファシリテーターの補助,事前・事後セミナーの補助を行った．
(4)臨床の作業療法士や疾患を持つ対象者を招いた学内 検査・測定実習の補助	令和3年8月	奈良学園大学リハビリテーション学科 授業科目：検査・測定実習（3年次 作業療法） 本実習は本来外部の医療施設に赴き，検査・測定を通して学習を深めるものであるが，新型コロナウイルス感染症拡大により,学内実習となった．臨地での従来の実習に近づけるため，臨床の作業療法士（講師）による演習や，疾患を持つ方を対象にした実技を通し学習を深めた，その準備・運営，実技指導，講義・演習中のファシリテーターの補助,事前・事後セミナーの補助等を行った．
(5)臨地での実習を想定した症例を通して実技・指導を行った学内 評価実習	令和4年8月	奈良学園大学リハビリテーション学科 授業科目：評価実習（3年次 作業療法） 本実習は本来外部の医療施設に赴き評価・治療計画の立案等を通して学習を深めるものである．新型コロナウイルス感染症拡大により,学内・学外実習を並行することとなり，その準備,事前・事後セミナーの補助等を行った．また学内実習学生について,臨地での実習を想定した症例を提供し,実技を含めた指導を行うことで理解を深めた．

(6)学外実習（検査・測定実習、評価実習、総合実習）の補助	令和4年4月～8月	奈良学園大学リハビリテーション学科 授業科目：総合実習（3年次 作業療法） 本実習は外部の医療・介護施設に赴き評価・計画・治療を通して学習を深めるものである．その準備，事前・事後セミナーの補助等を行った．
	令和4年8月	奈良学園大学リハビリテーション学科 授業科目：検査・測定実習（3年次 作業療法） 本実習は外部の医療施設に赴き検査・測定を通して学習を深めるものである．その準備，事前・事後セミナーの補助等を行った．
	令和5年2月	奈良学園大学リハビリテーション学科 授業科目：評価実習（3年次 作業療法） 本実習は外部の医療・介護施設に赴き検査・測定を通して学習を深めるものである．その準備，事前・事後セミナーの補助等を行った．
(7)専門技術を活かし，個々の学生に応じた作業活動実技指導	令和2年10月～11月， 令和3年10月～11月	奈良学園大学リハビリテーション学科 授業科目：作業技術学Ⅱ（3年次 作業療法） 本演習は作業療法で実際に使う作業活動について実技や作業分析を行うこととでその意味や効果を学ぶものである．作業活動(陶芸)において，実技の準備(窯の使用準備,粘土や釉薬の準備)と指導を行った．土練り,成型,高台削り,素焼き,施釉の各段階において,実演を踏まえて説明し,詳細については各学生の進度や理解度に応じて個々に指導を行った．
(8)OSCE(客観的臨床能力演習)における実技指導や課題作成・運営の補助	令和3年4月～12月， 令和4年4月～12月	奈良学園大学リハビリテーション学科 授業科目：客観的臨床能力演習;OSCE（3年次 作業療法） 本演習では臨床で必要な評価を実施できるよう1年間を通して約20項目の講義・演習を行う．その中で,提出物の確認,試験実施・運営の補助,実技指導,試験の課題作成の補助等を行った．
(9)自助具作成における個々の学生に応じた実技指導	令和3年11月， 令和4年11月～12月	奈良学園大学リハビリテーション学科 授業科目：生活環境整備論（3年次 作業療法） 本演習では,障害を持つ人のニーズに合った自助具を作成できるようになることを目的に,奈良県「自助具の会」の方をゲストスピーカーに招き,万能カフやペンホルダー,片手用爪切り等の自助具を,専門的な工具を用いて作成する．実習の際の個々の学生に応じた実技指導やリスク管理,準備・運営の補助を行った．
(10)ICTを活用したアクティブラーニングによる講義の実践	令和4年5月	奈良学園大学リハビリテーション学科 授業科目：理学療法概論；ゲストスピーカー（1年次 理学療法） 本講義は理学療法の定義や歴史，評価や治療等について総合的に学修するものである．その中で「他職種の為の作業療法入門」として，関連職種である作業療法についての講義を行った．「作業」の意味や理学療法との違い等についてリアルタイムアンケートツールを活用し個々の意見をアウトプットさせたり,ICFに基いた評価・計画・治療について,漫画教材を用いて考えてもらったり,臨床現場のPT・OTのインタビューを用いてフィードバックする等,ICTを用いたアクティブラーニングを実施しし，理解を深めた．

	令和4年6月	奈良学園大学リハビリテーション学科 オープンキャンパスでの講義「趣味を活かしたリハビリテーション～認知の予備力から考える～」 奈良学園大学のオープンキャンパスにて,高校生と保護者対象に講義を行った．脳機能と趣味との関連や,趣味をどのようにリハビリテーションに活かせるかについて,リアルタイムアンケートツールを活用したり,実際に手工芸を体験してもらったりして双方向の講義となるよう工夫した．また実際にその場でNIRS（近赤外分光法）を使用し,紙細工活動中の脳賦活の計測を実践し，賦活部位と認知機能の関連についてグラフやトポグラフィを示すことで理解を深めた．来場者から直接，または講義後のアンケートから多数「面白かった」という声が聞かれた．
	令和5年5月 （予定）	奈良学園大学リハビリテーション学科 担当授業科目：リハビリテーション概論（1年次 理学療法・作業療法） 本講義はリハビリテーションの理念や役割等について総合的に学修するものである．その中で「リハビリテーションにおける作業療法士の役割」「リハビリテーションにおける作業療法士と理学療法士との連携と協働」を担当する予定である．
2　作成した教科書,教材		
（1）演習用補助教材の作成	令和2年10月～11月, 令和3年10月～11月	奈良学園大学作業療法学専攻の作業技術学Ⅱ（2年次 専門科目）において使用した．作業活動(陶芸)において，教科書に十分に記載されていない内容について，各段階（成形・素焼き・釉掛け・本焼き）の陶器を作成し提示しながら，方法や手順・ポイントについて教示し理解を深めた．
（2）講義用動画教材の作成	令和4年5月	奈良学園大学リハビリテーション学科において,理学療法概論（1年次 理学療法専攻学生対象専門科目）にて作成し使用した．作業療法のICFに基いた評価・計画・治療について,漫画教材を用いて考えてもらい,そのフィードバックには，実際の臨床現場の理学療法士・作業療法士に評価・治療方法をインタビューするとともに，一例を実践してもらった動画教材を作成し提示して，講義の理解を深めた．
	令和4年6月	奈良学園大学のオープンキャンパスにて，高校生と保護者対象の講義において使用した．脳機能と趣味との関連について，実際に手工芸を行っている際の脳血流を，NIRS（近赤外分光法）を使用して測定し，グラフやトポグラフィを利用して脳賦活の様相を視覚的にわかりやすく提示した動画教材を作成し活用することで講義の理解を深めた．
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
(1)アクティビティ(作業活動)サークル顧問	令和2年11月 ～令和5年3月	奈良学園大学リハビリテーション学科において,作業療法専攻学生を中心に,作業療法で治療として用いる作業活動(革細工・陶芸・編み物・レジン等)を行うサークルの顧問を担当した．作業活動の実技指導,コロナ渦での実施の際の感染対策の指導,材料の購入手順の指導,作業活動を使った地域活動への参加等を行った．
5　その他		

(1)リハビリテーション学科開設時の実習業務	平成31年4月 ～8月	奈良学園大学リハビリテーション学科において,開設年度（令和元年）の実習について,施設利用手続きや,実習地との連絡,accessへの実習地情報入力,実習関係の必要物品の購入,実習地の資料の作成,依頼文等の作成,必要書類の印刷等,円滑に実習開始できるよう,準備に関わる業務を行った.
(2)学科教授会等の陪席,議事録の作成	平成31年4月 ～現在に至る	奈良学園大学リハビリテーション学科において,毎月の学科教授会・連絡調整会議,リハビリテーション学科会議に陪席し,議事録を作成している．また,資料の配布や参集の際の連絡,令和2年度以降のコロナ渦でのWeb会議では,オンラインツールでの会議の管理の補助等も行っている.
(3)作業療法専攻会議での議事録の作成	平成31年4月 ～令和2年3月	奈良学園大学リハビリテーション学科において,毎月(2週に1回)実施される作業慮法専攻会議の議事録を作成した.
(4)教員会	平成31年4月 ～現在に至る	奈良学園大学リハビリテーション学科において,学科の教員会を担当し,教員の冠婚葬祭時の慶弔費等(花代・電報など)の準備や管理を行っている.
(5)保護者懇談会の運営の補助	令和元年6月 令和2年8月 令和3年5・6月 令和4年5・6月	奈良学園大学リハビリテーション学科において,毎年行われる学科の保護者懇談会において,必要物品の準備や会場設営,誘導や受付業務などの運営の補助を行っている.
(6)物品・器材室管理	平成31年4月～ 現在に至る	奈良学園大学リハビリテーション学科において,学科・専攻運営に必要な備品の発注・購入,納品後の管理等に携わっている．令和2年度～3年度には,学生が学習しやすい環境を整備するために,各実習室に掃除用具等の購入・搬入を行った．また指定規則で指定されている備品の確認,授業等で用いる必要備品のリストアップ,納品後の備品シールの貼付・整理作業等を行っている.
(7)非常勤講師の講義のコーディネーター	平成31年4月 ～令和5年7月	奈良学園大学リハビリテーション学科において,非常勤講師の講義のコーディネーターとして,対面講義の際は電子黒板・プロジェクター等の準備,資料の印刷,電話・メール対応等行っている．遠隔講義のの際は,オンラインツールを利用した講義コンテンツの配信,学生に対する講義内容や課題のアナウンス,出欠管理,課題提出の確認等を行った.
(8)実習管理センター設置に関する準備業務	令和元年8～9月	奈良学園大学リハビリテーション学科では,実習業務が円滑に行えるよう,令和元年10月から実習管理センターが設置された．設置に当たり,机や椅子,棚等の環境整備,ファックス等の必要備品,文房具等の消耗品の購入・整備を行った。
(9)実習管理センター業務	令和元年10月 ～現在に至る	奈良学園大学リハビリテーション学科において,新規実習施設追加に伴う依頼書・契約書・原議書等の各公文書の作成,発送業務を行っている．また,実習や実習後セミナー,SV会議等の実習に関わる書類作成,必要物品(遠隔開催用PC関連用品や文房具等)の発注等を行っている. 実習管理センターの担当においては,電話・FAX・メール等の対応,アンケート・調査票の管理,accessへの情報入力,名刺,実習地訪問の際の書類の準備や発送,手土産の管理,新規施設への開拓のための電話等を行っている.
(10)作業療法専攻の広報関連業務	令和元年12月	奈良学園大学リハビリテーション学科において,作業療法の学生獲得に向けての次年度計画について各教員から出たアイデア(OTのパンフレット作成,SNS,学園祭・オープンキャンパスでの作業療法体験・展示,作業療法についての漫画の配布等)を整理し,会議用資料を作成した．OTパンフレットについては案を作成し,作業療法体験については必要備品を購入し実施の準備を進めた.

(11)オープンキャンパスでの各実習室の看板・のぼり作成	令和元年12月～令和2年7月	奈良学園大学のオープンキャンパスにおいて,リハビリテーション学科の各実習室を紹介するため,各実習室前に設置する看板を作成した．それぞれの実習室での学習内容に合うイラスト・キャッチコピーを入れてillustratorを用いデザインした．令和2年度には,さらに参加者に見やすいよう,看板をもとにのぼりを作成し,設置した.
(12)オープンキャンパスでの作業療法体験コーナーの実施	令和元年12月	奈良学園大学のオープンキャンパスにて,高校生を対象に,在学生ボランティアとともに,作業体験として革細工体験ブースを設置し運営した。作業体験を通して,作業療法を紹介し興味を持ってもらうとともに,本学に対する質問や,学校生生活についての質問などを気軽にできる交流の場としても活用できた.
(13)入学前教育での高校生指導	令和2年1月	奈良学園大学では,入学試験合格者に対し,大学生活に対する不安や疑問を解決し,4月からの大学生活が円滑に行えるようにするために入学前教育を行っている約10グループ(1グループ10名強)に分かれ,Visible Bodyの体験や,運動学の演習を体験する．その中でグループを担当し,指導に携わった.
(14)学科の実習ホームページ作成の補助	令和2年4月～令和3年3月	奈良学園大学リハビリテーション学科では,実習を円滑に行うために,学科のホームページを作成している．その内容を充実させるために,ホームページのデザインや,キャラクターのデザイン作成等,ホームページ作成の補助を行った.
(15)オープンキャンパス用の実習室紹介の動画作成	令和3年8月	奈良学園大学では,コロナ渦において,オープンキャンパスに来校できない学生のために,各実習室の紹介動画を作成し,遠隔で参加する対象者に活用する取り組みが成された．その中で,金工・木工・陶工実習室の紹介動画の作成を担当した．電気釜棟の実習室内の設備を紹介するとともに,陶芸や革細工を通して,手工芸の身体的・心理的治療効果について易しく紹介し,高校生に興味を持ってもらえるように作成した.
(16)臨床実習（検査・測定実習，評価実習，総合実習）の準備業務	令和4年1月～現在に至る	奈良学園大学リハビリテーション学科において,臨床実習において，実習地獲得のための施設への連絡，依頼状や承認申請書，特殊書式等の書類の作成・発送などの準備作業を行っている.
(17)大学ホームページ用の実習室紹介のYouTube動画作成	令和4年3月	奈良学園大学ホームページにて,リハビリテーション学科の施設・設備・実習室をYouTubeで紹介する取り組みの中で,本学作業療法専攻をPRするため,金工・木工・陶工実習室の紹介動画の作成を担当した．実習室で行う陶芸や革細工等の手工芸の実演を通して,作業の身体的・心理的治療効果について易しく紹介し,実習室だけでなく作業療法そのものについて高校生に興味を持ってもらえるように作成した.
(18)作業療法PR動画・ポスター・広告の企画・作成	令和4年5～8月	奈良学園大学リハビリテーション学科において,学科の広報の一環として,作業療法の内容を一般向けに紹介する広報物（動画・ポスター・チラシ）の企画・作成を行った.領域別（精神・身体・発達・手の外科・福祉用具・地域）に作業療法実施場面の動画・写真を撮影し一般向けに分かりやすい説明を加え,音楽やエフェクトで高校生・学生にも親しみやすいよう編集した。オープンキャンパス等での使用にて,専攻希望未定の高校生が作業療法専攻に決めるといった効果があった.

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格,免許		
(1)教育 学士	平成13年3月	高知大学 8678号
(2)高等学校教諭一種免許状（美術）	平成13年3月	平12高1第475号
(3)高等学校教諭一種免許状（工芸）	平成13年3月	平12高1第476号
(4)中学校教諭一種免許状（美術）	平成13年3月	平12中1第285号

(5)医療保健学 学士	平成23年3月	姫路獨協大学 医第10064号
(6)作業療法士免許状	平成23年4月	64784号(厚生労働省)
(7)作業療法士臨床実習指導者研修 修了	平成28年3月	認定番号169号
(8)認知症作業療法士アップデート研修　修了	平成29年10月	修了番号 280279(兵庫県作業療法士会)
(9)生活行為向上マネジメント研修 修了	平成30年9月	NO.4948(日本作業療法士協会)
(10)保健学　修士	令和4年3月	大阪府立大学大学院 第219号
(11)認定作業療法士	令和4年6月	認定番号2655(日本作業療法士協会)
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
(1)医療法人内海慈仁会　姫路北病院 作業療法士	平成23年4月～ 平成24年3月	精神科病院（急性期・一般・療養・認知症）の療養病棟を担当．統合失調症などの精神障害,躁うつ病などの気分障害,認知症などの患者様を対象に,手工芸,コーラス,料理などの集団作業療法を通して精神面の安定と回復を支援した.
(2)医療法人社団みどりの会　酒井病院 作業療法士	平成24年4月～ 平成27年10月	一般病院（急性期・回復期・療養・外来のケアミックス型）の病院に勤務．身体障害領域（脳血管疾患,整形疾は回復期の専従として,在宅復帰や社会復帰に向けて患者様の支援を行うともに,セラピスト・他職種間の連携の中心を担う役割をした．また回復期リハビリテーション病棟としての質の向上を図るため,地域のシームレス会議に参加し,取り組みの発表や他院との意見交換等を行った.
(3)院内学会「認知症患者に対する作業療法～関わり方を通して～」	平成25年5月	医療法人社団みどりの会酒井病院において，院内学会で他職種向けに,認知症の概要と評価,基本的な関わり方と作業療法について発表した. ［担当部分］ 発表の企画,構成,プレゼンテーションの作成
(4)酒井病院 回復期リハビリテーションでの臨床実習指導(長期実習)	平成26年9月～ 11月	平成リハビリテーション専門学校総合実習Ⅱ(長期実習)として,8週間,作業療法士3年次学生のケースバイザーを担当し,症例の評価・治療やレポート作成等の指導を行った.
(5) 院内勉強会「作業は人を元気にする」	平成27年2月	酒井病院 院内勉強会にて，“作業は人を元気にする”をテーマに,院内で行っている作業療法を通して，治療効果が表れ,元気になった症例を介するとともに,人にとって大切で意味のある作業,元気になれる作業とは何かを考え.院内の他職種に向けて,作業療法を啓発した. [担当部分]発表の企画,構成,プレゼンテーションの作成，ムービーの作成
(6)障害支援（福祉機器領域）論 (教員免許状更新講習)の講師	平成27年8月 平成28年8月 平成29年8月 平成30年8月	平成27年～30年の計4回(各2日間),姫路獨協大学教員免許状更新講習において,現職の教員向けに障害支援についての講議を行った．福祉用具概論,車椅子と移動・移乗用具,住宅改修,自助具等について解説・講義した. [担当部分] 車椅子と移動・移乗用具,車椅子の基礎知識・シーティングについての講義
(7)医療法人社団 六心会 恒生病院 作業療法士	平成28年4月～ 平成31年3月	脳神経外科,整形外科疾患を中心とした急性期・回復期病院にて,回復期リハビリテーション病棟に勤務．在宅復帰に向けて上肢機能や高次脳機能,ADL,IADL等にアプローチするとともに,社会復帰に向けて職業練習を実施するなど,患者様のデマンドに応じた作業療法を実施した.
(8)院内リハビリテーション課勉強会「生活行為向上マネジメント（MTDLP）」	平成28年10月	恒生病院にて,理学療法・作業療法勉強会で,生活行為向上マネジメント（MTDLP）について発表した.概要の説明,演習シートを使用したグループワーク,事例発表を通してMTDLPの考え方を教示した. [担当部分] 発表の企画,構成,プレゼンテーションの作成,発表
(9)恒生病院 回復期リハビリテーションでの臨床実習指導(評価実習)	平成30年1月～ 2月	大阪医療福祉専門学校 臨床実習(評価実習)として,5週間,作業療法士3年次学生のスーパーバイザーを担当し,症例の評価・目標設定・治療計画の立案やレポート作成等の指導を行った.

(10)恒生病院 回復期リハビリテーションでの臨床実習指導(長期実習)	平成30年9月～10月	関西総合リハビリテーション専門学校 臨床実習Ⅲ(長期実習)として,8週間,作業療法士3年次学生のスーパーバイザーを担当し,症例の評価・治療やレポート作成等の指導を行った.
(11)医療法人 博愛会 松倉病院 作業療法士	令和元年9月～現在に至る	整形外科疾患を中心とした回復期リハビリテーション病棟に勤務し,ADLやIADLを中心にした作業療法を実施. あわせて若年セラピストの指導も実施している.
(12)臨床実習指導者講習会ファシリテーター(奈良県作業療法士会)	令和元年9月	奈良県作業療法士会の臨床実習指導者講習会において,ファシリテーターを行った.
(13)「ローレルスクエア登美ヶ丘 健康教室」への参加	令和2年7月,10月	奈良学園大学近隣地域(中登美ヶ丘)の健康教室(ローレルスクエア登美ヶ丘)に参加し,運営の補助や,ストレッチ指導等を行った.
(14)「とみの里ふれあいまつり」への参加	令和2年11月	奈良学園大学近隣地域(東登美ヶ丘)のとみの里ふれあい会館で行われる健康フェア・文化祭「とみの里ふれあいまつり」へ参加し,体力測定の補助や,健康体操・講演の補助等,運営の補助を行った.
(15)「登美ヶ丘わいわいフェスタ2021」への参加,革細工体験の運営	令和3年10月,令和4年10月	奈良学園大学リハビリテーション学科作業療法専攻として,登美ヶ丘地区社会福祉協議会が主催する「登美ヶ丘わいわいフェスタ2021」にボランティア学生とともに参加し,作業体験(革細工)を運営した. 本イベントは,住みよい明るい街づくりを目標に,登美ヶ丘地域の各種団体が連携・協力して出店・出演する催しである. 90名程度の参加者に対し,キーホルダー,コースター等の製作体験を提供するとともに,本学作業療法専攻の啓発を行った.
(16)「若者と家族の会」での講演 題目：当事者を取り巻く「昨今」の様相	令和4年9月	頭部外傷や病気による後遺症をもつ「若者と家族の会」総会において,当事者を取り巻く医療・福祉制度, 高次脳機能障害等について講演を行った. 大西久男（講師）,岩﨑智子 [担当部分]介護保険制度,高次脳機能障害者の福祉制度
(17)招聘による講師・指導助言 奈良県福祉フェア 第５回福祉機器展 in 奈良2022 出展依頼（奈良県社会福祉事業団） 「近赤外光を用いた脳血流の変化を計測と作業療法研究での応用」	令和4年11月	奈良学園大学リハビリテーション学科として,社会福祉法人 奈良県社会福祉事業団が主催する「奈良県福祉フェア 福祉機器展 in 奈良」に参加した. 本イベントは障がいのある人の社会参加と自立の促進のため,福祉用具の展示や体験を通して,県民に福祉用具の普及啓発を図る催しである. 参加内容として「光イメージング脳機能測定装置NIRS」を出展し、実際に紙細工などの作業を行っている時の脳活動の様子を一般の来訪者に体験してもらった. これによりリハビリテーション学科および作業療法専攻への紹介に繋げる広報活動とした.
４　その他(研究助成)		
(1)奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和元年度	研究題名「近赤外分光法（NIRS）による手工芸の基礎的研究」,配分額347千円, 研究代表者：岩﨑智子
(2)奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和2年度	研究題名「リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性活用システムの構築－臨床実習教育の質的向上を目指して－」,配分額220千円, 研究代表者：池田耕二 共同研究者：飯塚照史,城野靖朋,福原啓太,滝本幸治,笹野弘美,前田吉樹,野田優希,中田修,坪内善仁,中島大貴,岩﨑智子,辻下聡馬,辻下守弘
(3)奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和2年度	研究題名「高機能自閉症スペクトラム障がい者に対する乗馬セラピーが心理的および生理的側面に及ぼす効果の検討」,配分額220千円, 研究代表者：中田修 共同研究者：山形力生,岩﨑智子,笹井久嗣

(4)奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和3年度	研究題名「手工芸による認知的効果の基礎的研究：課題遂行時の脳活動の分析」,配分額300千円,研究代表者：岩﨑智子
(4)奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和4年度	研究題名「実行機能検査時のfNIRSによる脳賦活の比較」,配分額300千円,研究代表者：岩﨑智子
その他(研修受講等)		
(1)専門作業療法士(高次脳機能障害)に関わる研修の受講	令和元年10月 ～ 現在に至る	専門作業療法士資格取得のため,高次脳機能障害専門基礎研修「専門基礎Ⅰ」「専門基礎Ⅲ」「専門基礎Ⅳ」を受講している.

研究業績等に関する事項

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1				
(学術論文)				
(1)脳梗塞によりapathyを呈した一例への介入 ～ADL自立と楽しみ活動の再獲得を目指して～ (査読付)	共著	平成29年3月	兵庫県作業療法士会機関誌,vol.6,pp16-21.	脳血管性apathyは,リハビリテーションにおける阻害因子となることが挙げられているものの,治療に関する報告は少ない. apathyを発症し,難渋した一例に対し,“意欲には淡蒼球の活性が重要である”とする池谷の理論を参考に作業療法を行った. 介入を通して,意欲の向上が見られ,ADLの自立度も向上した. ひいては,退院後継続して実施可能な楽しみ活動の再獲得に繋げることができた. 本報告は第49回日本作業療法学会における演題発表をもとに加筆し,再構成したものである. ［共著者］◎岩﨑智子（筆頭）,山形力生 ［担当部分］研究計画,介入・評価,考察,論文執筆
(2)作業を通して自信と士気の回復を図り,畑仕事の再開を目指した一例 －生活行為向上マネジメント（MTDLP）を活用した作業療法介入－ (査読付)	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 ,vol.9,pp19-30,2022.	小脳梗塞により,自信を無くし,不安・恐怖の訴えが続いていた症例に対し,本人にとって意味のある作業である水彩画と畑仕事を用い介入した. 加えて生活行為向上マネジメント（MTDLP）を取り入れ,対象者を取り巻く人的・物理的環境へのアプローチを含め介入を行った. 限られた期間で合意目標の達成に向けて,畑仕事の再開を目指すことができたのは,症例自身が自分の進歩を肯定的に捉えることで自信や士気を回復し,漠然とした未来の希望が,自分自身が主体的に達成するべき具体的な目標と変化したことが大きい. その要因として,本人を取り巻く家族や多職種との連携により,心理的側面への作業活動の治療効果がより高められたことや,生活場面での自主練習の時間が十分に確保できたこと,実際場面での畑仕事の練習を繰り返し行うことで,症例自身が着実に成果を積み重ねている実感を持てたことが大きく,MTDLPを用いた作業療法介入の有効性が確認された. ［共著者］◎岩﨑智子（筆頭）,山形力生 ［担当部分］研究計画,介入・評価,考察,論文執筆
(3)コロナ禍における理学・作業療法士養成課程の早期体験実習 －学内実習後の学生アンケート調査による検証－ (査読付)	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 ,vol.9,pp55-63,2022.	令和2年度および令和3年度,新型コロナウイルスの感染拡大をうけ早期体験実習を学内実習として実施した。学生アンケートの結果から,学内実習の意義や課題を明確にした. アンケートの結果,両年度とも実習内容については多くの学生が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答した反面,「2年次以降の学外実習に向けた不安」を訴える学生が多かった. 自由記述では「教員が近くにいる分質問などがしやすかった」,「疑問をすぐに先生に質問することができた」という意見のほか,「自分が知らなかった分野にも興味が持てた」という意見もみられた. 学内実習で医療施設での学びを完全に再現することは困難だが,早期体験実習の本来の目的を達成する上で,学内実習は必ずしも不利な点ばかりではない. ［共著者］◎前田吉樹,中島大貴,伊藤健一,野中紘士,阿波邦彦,藤田信子,岩﨑智子,橋本雅至,山形力生,池田耕二 ［担当部分］研究計画,論文の添削と修正案の提示

(4)手工芸活動と実行機能の個人差が健常成人の脳活動に及ぼす効果：fNIRSによる基礎的研究 （修士論文）	単著	令和4年2月	大阪府立大学大学院 総合リハビリテーション学研究科	作業療法で治療の手段として用いることがある紙細工の認知的治療効果について,健常成人を対象に近赤外分光法(NIRS)を用いて検証した．あわせて,実行機能の個人差との関連も検討した．紙細工活動はペーパーブロックとロールピクチャーを使用し,実験課題は,「パーツ作成課題」と「構成課題」課題で,対照課題は用紙を無目的に折る－開く動作とした．関心領域は左右のDLPFC,内側FPの3か所に設定した． 両活動において,脳賦活はLow群の方がHigh群より高かった．実行機能は加齢により低下すると言われ,実行機能の高低で2群に分けた際には,年齢差が反映されたと考える．難易度が低い課題では,同じ課題を遂行した際に,高齢になるほど脳賦活が高いとされており,今回の両活動においても,同様の結果が得られた．また,High群ではより選択的にDLPFCが賦活されており,Low群では領域全般にわたり賦活される傾向があった．さらに,High群では両活動において,右側のDLPFCの脳賦活が高かったことが特徴的であり,視覚・空間的処理の要素が影響したと考えられた．Low群ではペーパーブロックの構成課題でのみ左右DLPFCが選択的に賦活されている点,ロールピクチャーの構成課題にでは3領域においてHigh群より有意に賦活している点等が特徴的であり,課題の難易度と認知的負荷が関連していると考えた．紙細工活動を治療として選択していく際には,個人の実行機能に適した活動を選択することで,より効果的な治療として活用できる可能性があると考えた． （A4 全55頁）
(5)地域在住成人における実行機能質問紙の利用可能性の検討－客観的行動評価との関連－	共著	令和5年3月 （採択済）	医療福祉情報行動科学研究,vol.10,pp17-27,2023.	実行機能は神経心理学検査によって評価されるが，これらは検査に時間を要する等の不便さもあるため，簡便に行える質問紙検査の作成が試みられている。本研究の目的は，実行機能質問紙の得点と神経心理学的検査の成績との関連を明らかにし，前者の利用可能性を検討することである。 実行機能の主観的評価として実行機能質問紙（EFQ・J-BES），客観的評価として神経心理学検査（TMT-J・新ストループ検査Ⅱ・D-CAT）を実施した。年齢と認知機能成績（MoCA-J）別に参加者を各2群に分け，基本情報を比較した。各2群について実行機能質問紙の得点と，神経心理学検査の成績との関連を検討した。 実行機能質問紙において，年齢Low群，MoCA-J高成績群において有意な相関のある項目を比較的多く認め，利用可能性が比較的高いことが示唆された。対象者側の要因（年齢や全般的な認知機能の程度）と使用する質問紙検査側の要因（測定したい実行機能の要素）を考慮することで，実行機能質問紙を客観的行動評価のスクリーニングとして利用できる可能性があると考えた。 ［共著者］◎岩﨑智子（筆頭）,中田修，山形力生，中島大貴，大西 久男 ［担当部分］研究計画,実施・評価,考察,論文執筆
（その他）学会発表				
(1)「右手で上手にご飯を食べたい」 ～Demandsに添えるOTとは～	―	平成25年9月	第33回 近畿作業療法学会（兵庫）	脳梗塞により右片麻痺を呈した症例を担当した．上下肢の麻痺は顕著な回復を見せている反面,手指の麻痺と感覚障害は残存し,利き手である右手の実用手としての使用は難しい状態であった症例にとって,「右手で上手にご飯を食べる」ことは,自身のプライドと尊厳に関わる重要な問題であると考え,Demandsに沿えるよう作業療法を行った．介入を通し麻痺側使用による箸操作が可能となり,症例にとって納得ができる結果が得られた．Demandsに添うOTとは,患者自身にとって,そのdemandsがどういう意味を持つか考え,患者自身から内発的動機が生まれるよう支援することが重要である． ［共同発表者］◎岩﨑智子（筆頭）,山形力生 ［担当部分］研究計画,介入・評価,考察,論文執筆

(2)脳梗塞によりapathyを呈した一例への介入 ～ADL自立と楽しみ活動の再獲得を目指して～	—	平成27年6月	第49回 日本作業療法学会（兵庫）	血栓性脳梗塞によりapathyを呈した症例を担当した．病棟生活では無気力で臥床し,全ADLに介助を要する状態であった．今後の退院先が施設となる症例にとって,自立して行えるADLを1つでも増やし,他者に依存した生活ではなく,意欲と自信・楽しいと思える生活を取り戻すことが重要であると考え,作業療法を行った．介入方法として,“意欲には淡蒼球の活性が重要である”とする池谷の理論を参考に意欲向上訓練を取り入れ実施した．介入を通して,意欲・発動性の向上が見られ,ADL能力の向上,楽しみ活動の再獲得が成された． ［共同発表者］◎岩崎智子（筆頭）,山形力生 ［担当部分］研究計画,介入・評価,考察,論文執筆
(3)臨床に従事する作業療法士のコミュニケーション・スキルについて	—	平成28年9月	第50回 日本作業療法学会（北海道）	作業療法学生(OTS)にとって対人関係能力を含む社会的スキルを獲得することは重要といえる．OTSの目標と考えられる臨床家の作業療法士を対象にコミュニケーション･スキル尺度（ENDCOREs）を用いて検討を行った．また,臨床現場での他職種との関係を測定するために,鈴木らの臨床活動での質を測定する尺度（以下QOE）を改変し用いた．臨床経験群間の比較では,臨床経験とともにコミュニケーション･スキル(以下CS)が成長し充実していく傾向にあることが示唆された．QOE_F3（他の職員と関係を維持する行動）はENDCOREsの得点と相関したことから,CSが現場における仕事上のコミュニケーション活動全般の要素となっていることを示唆すると考えた．経験年数に伴うCSの充実には,END_F2(表現力)やEND_F4(自己主張)の因子が影響するものと考えられた．これら2因子のスキルの成長がCSや臨床活動の基盤になっている可能性が考えられた． ［共同発表者］◎岩崎智子（筆頭）,山形力生,櫻井秀雄 ［担当部分］データ収集・解析,抄録執筆,発表資料作成,発表
(4)作業療法士の職業経験とその質について	—	平成29年9月	第51回 日本作業療法学会（東京）	臨床に従事する作業療法士は,様々な経験を重ね,臨床実践に関わる能力を獲得し,キャリアを成長させることが期待されている．今回,現場に従事する作業療法士を対象に職業経験の質の一側面を調査するとともにどのような傾向があるのかについて分析した．方法として,鈴木らの臨床活動での質を測定する尺度（以下QOE）を改変し用い,また自己効力感（以下SE）についても合わせて調べた．臨床経験毎の比較では,QOE合計得点は上昇する傾向にあり,臨床経験とともにその職業経験の質は充実していく傾向にあることが示唆された．さらに職業経験の質の高さは自己効力感の高さにも影響すると考えられた．一方経験年数の浅いG1群において,自己効力感の高低によって職業経験の質に差があることが確認された．特にQOE_F（実践力を獲得し,多様な役割を果たす行動）に差がみられたことから,役割を意識できることが重要と考えられ,新人OTRに対する卒後教育などでは留意すべき点と考えた． ［共同発表者］◎岩崎智子（筆頭）,山形力生 ［担当部分］研究計画,データ収集・抄録執筆,発表資料作成,発表
(5)作業を通して士気と自信の回復を図り,畑仕事の再開を目指した脳梗塞の一例	—	令和元年9月	第53回 日本作業療法学会（福岡）	本人の趣味と仕事に関わる作業（水彩画・畑仕事）を取り入れ,士気と自信の回復を図り,デマンドである畑仕事の再開に繋げた経過と考察を報告した．水彩画を通して,徐々に上手く描けるようになったことや,他者から認められる機会が増えたこと,フロー体験が積み重ねらたことで,不安や落ち込みの軽減が図られ,ひいては病棟ADLへの意欲の一助となったと考える．畑仕事では,病前のようには難しいとしても,どのようにすれば継続していくことが可能か,MTDLPを実践することで現実的に考え,他職種や家族とともに実現を目指していくことができた．院内の畑での成功体験を積み重ね,家族の協力を得て実際に自宅で行ったことで,課題や目標が明確となり,意欲を向上させたと考える．また援助を得ながらでも,実際に現地で実施できたことは,本人にとって自信となり,士気を再獲得する最大の要因となったと考える． ［担当部分］研究を計画立案・実施し,報告した（単著）

(6)調理活動の再獲得を目指した高次脳機能障害の一例	—	令和2年9月	第54回 日本作業療法学会（新潟）	脳梗塞により,高次脳機能障害を呈した事例を担当し,回復期病棟で作業療法を実施した．事例は調理の再開を希望したが,火や刃物の取扱い等に危険が伴う現状に,「調理は禁止すればよい」との意見もあった．OTでは,調理を本人にとって意味のある作業であると考え,その実現性を模索した．実動作の経験を通して,現実的な調理活動の再獲得に至った経過に考察を加え,報告した． ［担当部分］研究を計画立案・実施し,報告した（単著）
(7)健常成人に対する手工芸活動の認知的効果： 課題間の脳活動の分析	—	令和3年8月	第8回全国作業療法学系大学院ゼミナール（大阪）	作業療法で治療の手段として用いることがある紙細工の認知的治療効果について,健常成人を対象に近赤外分光法(NIRS)を用いて検証した．あわせて,ワーキングメモリと実行機能との関連も検討した．紙細工活動はペーパーブロックとロールピクチャーを使用し,実験課題は,パーツを「折る（巻く）」課題と「構成する」課題で,対照課題は用紙を無目的に折る－開く動作とした．関心領域は左右の背外側前頭前野(DLPFC),内側前頭極(内側FP)の3か所に設定した． 二元配置分散分析の結果では,両活動とも,3課題×3領域のΔoxy-Hbについて,課題と領域の主効果に有意差を認めた．対照活動と「折る(巻く)」課題に比べ,構成課題では有意に賦活が減少していたことから,活動・課題（間）の難易度との関係や脳疲労の関与について今後検討していく必要がある．また,内側FPよりも左右DLPFCの賦活が有意に高かったことから,紙細工活動時は,実行機能に関連する領域を活用していることが示唆された． ［共同発表者］◎岩崎智子（筆頭）,大西久男 ［担当部分］研究計画,データ測定・解析,抄録執筆,発表資料作成,発表
(8)近赤外分光法（NIRS）による手工芸の基礎的研究：健常若年者を対象とする予備的研究	—	令和3年9月	第55回 日本作業療法学会（仙台）	紙細工の認知的治療効果について,健常若年者を対象に近赤外分光法(NIRS)を用いて検証した．あわせて,ワーキングメモリと実行機能との関連も検討した．紙細工活動はペーパーブロックとロールピクチャーを使用し,実験課題は,パーツを「折る（巻く）」課題と「構成する」課題で,対照課題は用紙を無目的に折る－開く動作とした．関心領域は左右の背外側前頭前野(DLPFC),左右の外側前頭極(外側FP),内側前頭極(内側FP)の5か所に設定した．分散分析の結果では,課題ごとの5領域でのΔoxy-Hbについては,統計的差異は認められなかったが,部位と検査間の関連性の検討で,両活動において,ワーキングメモリや実行機能を反映する指標とされるTMT B・TMT(B-A)と,「構成する」課題で左DLPFCとの間に有意な負の相関がみられた（所要時間が短いほど左DLPFCのΔoxy-Hbが大きい傾向を示した）こと等いくつかの示唆的結果を得た． ［共同発表者］◎岩崎智子（筆頭）,大西久男,山形力生,中田修,中島大貴 ［担当部分］研究計画,データ測定・解析,抄録執筆,発表資料作成
(9)奈良学園大学リハビリテーション学科におけるコロナ禍の学内実習の紹介①―実習専用ホームページの開設と運用方法の紹介―	—	令和3年10月	第34回教育研究大会・教員研修会	本学では,臨床実習を円滑・有意義に進めるため臨床専用HPを開設し運用している．今回の2つの学内実習では,保護者向けページで学内実習へ切り替えた経緯と実習の目標や内容について説明し,学生向けページでは実習の基本的枠組みである①予習,②学内実習,③復習ができるコンテンツを配置し,学習の方向性を示すと共に学習進捗状況も確認できるようにした．実習後,各実習に対して学生からHPの運用に関するアンケートを実施した．HP活用に際して保護者からの問い合わせはなかった．実習終了後のアンケート結果は早期体験実習（1年次理学・作業75名,回答率92．0％：69名）,地域理学・作業療法実習（2年次理学38名・作業18名,回答率95．7％：44名）いずれにおいても,学生の印象は良かったと思われる．学内実習では同じ教材・内容を用いるので個々の学生の学習進捗状況や理解度を把握する上でHPを通じた学習指導は有用と感じられた． ［共同発表者］◎池田耕二,滝本幸治,飯塚照史,城野靖朋,野田優希,福原啓太,中田修,辻下聡馬,岩崎智子,辻下守弘 ［担当部分］研究計画,発表資料作成

(10)奈良学園大学リハビリテーション学科におけるコロナ禍の学内実習の紹介②―早期体験実習の概要と学生アンケート調査―	―	令和3年10月	第34回教育研究大会・教員研修会	本学の早期体験実習（1年次）について,令和2年度は,新型コロナウィルス感染拡大を受け,当実習を学内実習として実施した．今回の実習では,①予習は臨床実習専用ホームページ（HP）に予習用教材を配置し,Webフォームから課題を提出させた．②学内実習では,療法士の役割や疾患・障がいの理解を促すために写真や動画,現場からのライブ配信等の視覚教材を活用した．学生は10名程度の小グループに分かれ,専任教員のファシリテートのもと意見を出し合い,学習内容の定着を図った．また③復習においても同様にHPから復習を促すと共に,アンケートに回答させた．実習内容については約90%が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答していた．反面,「2年次以降の学外実習に向けた学習面の不安」については約45%が「不安」「非常に不安」と回答した．また印象に残ったコンテンツとして「病院からのライブ配信」「脳血管障害（高次脳機能障害）」を挙げた学生が約50%いた．自由記述では「教員と話ができた」「指導してもらえた」ことが良かったという意見のほか,「自分が知らなかった分野に興味が持てた」という意見もみられた．コロナ情勢下においては,従来のような多人数での見学実習は困難となる．今回は,現状における早期実習の一つのモデルを示すことができたと考える． ［共同発表者］◎前田吉樹,中島大貴,伊藤健一,野中紘士,阿波邦彦,藤田信子,岩﨑智子,橋本雅至,山形力生,池田耕二 ［担当部分］研究計画,発表資料作成
(11)在宅生活を送る遷延性意識障害者・児の家族のレスパイトについて：アンケート「自由記述」欄の計量テキスト分析による検討	―	令和4年7月	第30回日本意識障害学会（東京）	24時間・365日の介護が必要とされる遷延性意識障害者・児の当事者を在宅でケアしている家族介護者の身体的負担・精神的負担は想像を絶するものである．しかしながら,多くの家族は,当事者の生命・生活を守るためには,極度の負担感があっても休むことができない現状がある．当事者を自宅で介護している家族が普段介護を休むこと（レスパイト）についてどのように思っているかをアンケート調査の自由記述文から検討することが本研究の目的である．大西・原田（2019）のレスパイトに関するアンケート調査の自由記述部分「介護者の考える『レスパイト』について」を分析対象テキストとした．フリーソフトウェアのKH Coder を用い,①頻出単語,②共起性,および③多次元尺度法からの分析を行った．①100 回以上出現した頻出語は,「介護」（284 回）,「思う」（192 回）,「レスパイト」（177 回）,「時間」（149 回）,「自分」（144 回）,「利用」（135 回）,「病院」（117 回）の 7 語であった．②「介護」を検索語とした時,共起関係の高い語としては「思う,レスパイト,時間,自分,家族,病院,入院,利用,必要,考える」であった．一方,「レスパイト」を検索語とした時は,「介護,時間,家族,入院,病院」が共起関係の高い語であった．③多次元尺度法では,7 つの尺度（グループ）の存在が明らかになり,「介護,レスパイト,思う,時間,病院,自分,家族」が第 1 グループで,それぞれが近い距離に位置していた．今回の分析の中で,「レスパイト」を検索語とした際の共起性の分析でのみ,「自分」が出現せず,この事は主介護者自身は介護の中心ではあるが,レスパイト（休息）の中心ではないことを示しているのかもしれない． ［共同発表者］◎大西久男,原田菜摘,岡田海渡,中村優奈,岩崎智子 ［担当部分］計量テキスト分析（テキストマイニング）の考察

(12)手工芸が健常成人の脳活動に及ぼす効果：実行機能の個人差に着目したfNIRS研究	—	令和4年9月	第56回 日本作業療法学会（京都）	作業療法で治療の手段として用いる手工芸の認知的効果について健常成人を対象に NIRSを用いて検証し,あわせて実行機能の個人差との関連も検討した．手工芸として紙細工活動であるペーパーブロックとロールピクチャーを用い,実験課題は,「パーツ作成課題」と「構成課題」課題で,対照課題は用紙を無目的に折る－開く動作とした．関心領域は左右のDLPFC,内側FPの3か所に設定した. 実行機能Low群とHigh群でΔoxy-Hbの総量を比較した分析の結果,両活動とも,Low群＞High群となった．難易度が低い課題では,高齢になるほど神経資源を多く動員する必要があり,今回の両活動においても,2群間には年齢差があったことからLow群の方が脳賦活が高くなったと考えられた. 課題毎に3領域の脳賦活を分析した結果,High群ではより選択的にDLPFCが賦活されており,Low群では領域全般にわたり賦活される傾向があった．さらに,High群では両活動において,右側のDLPFCの脳賦活が高かったことが特徴的であり,視空間的処理の要素が影響したと考えられた．Low群ではペーパーブロックの構成課題でのみ左右DLPFCが選択的に賦活されている点,ロールピクチャーの構成課題にでは3領域においてHigh群より有意に賦活している点等が特徴的であり,課題の難易度と認知的負荷が関連していると考えた．以上により,紙細工活動を治療として選択する際には,個人の実行機能に適した活動を選択することで,より効果的な治療として活用できる可能性があると考えた. ［共同発表者］◎岩崎智子（筆頭）,大西久男,山形力生,中田修 ［担当部分］研究計画,データ測定・解析,抄録執筆,発表資料作成
(13)地域在住成人の実行機能における主観的評価と客観的評価との関係－実行機能質問紙の利用可能性の検討－	—	令和5年6月 （発表予定）	第43回 近畿作業療法学会（奈良）口述発表 (演題採択済)	実行機能を評価する神経心理学検査には時間を要する等の不便さがあり，簡便に行える質問紙検査の作成が試みられている．本研究では，実行機能質問紙の得点と神経心理学的検査の成績との関連を明らかにし，前者の利用可能性を検討した. 　実行機能の主観的評価として実行機能質問紙（EFQ・J-BES），客観的評価として神経心理学検査（TMT-J・新ストループ検査Ⅱ・D-CAT）を実施した。年齢と認知機能成績（MoCA-J）別に参加者を各2群に分け，実行機能質問紙の得点と，神経心理学検査の成績との関連を検討した. 　年齢Low群，MoCA-J高成績群において有意な相関のある項目を比較的多く認め，実行機能質問紙において利用可能性が比較的高いことが示唆された．対象者側の要因（年齢や全般的な認知機能の程度）と使用する質問紙検査側の要因（測定したい実行機能の要素）を考慮することで，実行機能質問紙を客観的行動評価のスクリーニングとして利用できる可能性があると考えた. ［共同発表者］◎岩崎智子（筆頭）,中田修，山形力生，中島大貴，大西久男 ［担当部分］研究計画,データ測定・解析,抄録執筆,発表資料作成

（注）

１ 最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。
２「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。
３「研究活動」については、下記の点に留意すること。
①著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。
②著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。
③　共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。
④　最近１０年間に著書･論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。
⑤　芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。